『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～　前編

黒神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～　前編

【Ｎコード】
Ｎ２９５８Ｉ

【作者名】
黒神

【あらすじ】
『リリカル銀魂』のまさかのもう１つの最終章！この小説は，『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～白夜叉鎮魂歌～』のもう１つの物語であり，赤夜叉さんの許可をもらって作った僕のオリジナル参考小説！お気に入りである赤夜叉さんの小説を参考にし，銀さんとフェイトを初めとした愉快な仲間達の友情・努力・そして愛の物語です！

ゾーマとの激戦を終えて数ヵ月後、伝説の白夜叉こと坂田銀時は，暇つぶしにとフェイトの世界に向かう。そこで狂乱の貴公子こと桂小太郎をはじめ、神楽、エリザベス、月詠と共に源外の転送装置でフェイトの世界に向かうのであるが、とあるトラブルによって間違えて１０年後の世界に飛ばされるのであった。そこで銀時は火事の中，１人の少女に出会い、救助する。その少女はスバル・ナカジマ。後に銀時に憧れ、侍の強さを知り、銀時に追いつくために刀を持ち、剣術を学びだす魔剣士少女。そして裏の舞台で、かつて攘夷戦争で銀時と桂と共に天人の侵入を阻止する為に侍の国を守る為に共に戦った友。そして攘夷戦争の中で最も過激で危険な男であり、武装集団『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋助。江戸の世界を潰す為，高杉はある男と手を組み，フェイト達の世界を潰す計画を進める。銀時が戦ってきたかつての強敵が続々と復活。そして・・・恩師の死にかかわるあの人物も・・・。銀時の過去の因縁を断ち切る為にフェイト達も立ち上がる。過去の因縁との決着，そして世界を守る為の，『リリカル銀魂』もう１つの大激戦，『攘夷戦争』が再び始まる！！

ここは序盤と中盤が中心でありますので、終盤は『『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～　後編』で。

第一訓：物語にだって二種類のパターンがある（前書き）

黒神「と言う訳で，赤夜叉さんの許可を貰って，この僕，黒神が「リリカル銀魂」のもう1つの小説を作ることになりました。」

銀時「ほぉ，それは赤夜叉の太っ腹に大感謝だな。・・・で，どういう内容なんだ？」

黒神「残念ですが，ネタばらしはできません。」

銀時「おいおい，せめて軽く教えてやったって良いんじゃ――」

黒神「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』。始まります！」

銀時「オイィィ！！無視しなくたって良いんじゃない？え・・・銀さん泣いちゃいますよ！」

第一訓：物語にだって二種類のパターンがある

とある戦隊舟。

深夜の中，そこには４人の人間と１人の天人（あまんと）がいた。

「本当にやるでござるか、晋助？」

っと、ヘッドホンで曲を聞きながら言いだしたのは鬼兵隊の一員，河上万斉。

「今更何を言っているのです？この春雨の科学者が作った移動装置で坂田銀時達が行った異世界に行けば、我らの目的が果たせるかもしれないのですよ？」

万斉にそう言ったのは、武市変平太。

鬼兵隊の謀略家。ちなみに本人はフェミニストと言っているが、ロリコンの疑いがある。

「先輩の言うとおりっす。晋助様の目的を果たす為にもこの計画はぜったいじゃないっすか！」

武市に続いて言いだしたのは金髪で赤い着物姿の女性。

来島また子。

「紅い弾丸」と恐れられる拳銃使いである。

「くくく・・・いよいよド派手な祭りが出来そうだ。この腐った世界を潰す為の最大の血祭りになりそうだ」

不気味な笑いをして男は楽しみに待っていた。
雲に隠れていた月が出てきた。
月明りが男の顔を照らした。
左目に包帯を巻き、派手な着物を着ている。
譲夷浪士の中で最も過激で危険な男。武装集団『鬼兵隊』のリーダー。
高杉晋助。
黒き獣を内に飼い、世界の破壊を望む男。

「・・・・・・で、お前さんはどう思うんだい？」

煙管（きせる）を加えたまま高杉は後ろにいる天人に声をかける。
炎をイメージした派手な着物に顔に包帯が巻かれていて、得物として１つの長刀を持っている天人。
全てを憎むその瞳で高杉を見つめて質問する。

「良いのか？俺は春雨でも敵対されているんだぞ？それはお前達「鬼兵隊」の敵に回るはず・・・・・なのに何故？」

敵に手を貸すような行動に驚く天人は不思議そうに高杉に声をかけると。煙管を離して、ふーっと煙を吐いた。

「お前さんの計画に乗れば、この腐った世界を潰せるからな・・・・・せいぜい仲良くしようぜ」

獲物を睨みつけるその恐怖の瞳に、天人は人間とは思えない高杉の怒りに少し恐怖した。

「ふ…間違えて君を敵に回さなくて良かったぜ」

想像するだけで恐怖してしまうほど、高杉が危険な男であると天人は確信すると，高杉は夜を照らし出す満月を見て，くくくっと不気味に笑う。

「さぁ……世界の終焉をかけた祭りと行こうじゃねぇか」

ある天人と手を組んだ『鬼兵隊』の新たな計画。
闇は静かに動き出した。

江戸のかぶき町。
万事屋のオーナー・坂田銀時と宇宙最強の戦闘種族『夜兎族』の神楽は、暇を持て余していた。
ゾーマとの闘いから数カ月。平和な毎日を過ごしている。相変わらず依頼はあんまり来ないが、装置を使ってたまにフェイト達が遊びに来る。
銀時はため息をついた。

「暇だな…」
「そうアル…」

ボソッと小さく呟いた。
今部屋には銀時しかいない。地味な存在でツッコミ役である新八は人気絶頂のアイドル寺門通のライブがあるとかと理由で，『寺門通親衛隊』をつれて大江戸ドームに行っている。
再び銀時と神楽はため息をついた。
どうしたものかと考えた。
そこで思いついた。

「銀ちゃん、私達がなのはちゃん達の世界に行けば良いアル！！」

「おおー、そうだよそれだよ！何故それに気付かなかったんだ！？」

銀時は椅子から立ち上がり，ジャンプを片手に歩きだした。そして神楽も傘を持ち出す。

玄関を出て，目指すは源外の工場。

※

「む…銀時とリーダーではないか」

源外の工場へ向かう途中、後ろから声をかけられた。

銀時は立ち止まって、振り返った。

そこにいたのは，攘夷志士の集団の１人であり，『狂乱の貴公子』桂小太郎とペット（！？）のエリザベスだった。

「あ…ヅラとエリー」

「ヅラじゃない桂だ」

神楽にヅラ呼ばわりされて突っ込む桂。そして銀時に話しかける。

「銀時、これから何処に向かうんだ？」

「ああ、ちょいと暇だからフェイト達の世界に向かうんだよ」

っと銀時は軽く答えると……。

「なら……俺とエリザベスも連れて行ってくれないか？」

「は？」

銀時は片眉を上げた。

「向こうの世界に行けば、しばらくの間は真選組の追っ手から身を隠す事ができるからな」

などと言う桂らしい理由に、断ってもしつこくついて行くだろうな。
断るのメンド癖さくなったのかか、動向を許す。
まぁ居ても邪魔になるわけでもないし。
桂とエリザベスを加え，源外の工場へ向かう。
すると、

「月詠？」
「銀時」

銀時達の前に、一人の女性が現れた。
顔に傷があり、口に煙管をくわえていて、黒い着物を着ている。地下都市『吉原』の自警団『百華』の頭・月詠である。

「偶然アル！！どうしたあるか、こんな所で？」
「いや、日輪に”少しは外で休んできたら”と言われてな」
「ああ、そう」

確かに月詠は、ほとんど休まず吉原を見回っている。
日輪が月詠に休みを与えるのもわかる。
銀時がそんな事を思っていると、月詠は桂とエリザベスに気付いた。

「そっちの男と天人は誰だ？」
「俺の知り合いのヅラとエリザベスだ」
「ヅラじゃない桂だ」

桂が銀時の言葉を訂正する。

「わっちは月詠でありんす。以後よしなに」

「俺は桂小太郎。好物はそばだ」

「なんでいちいち好物を言うアルか！！」

好物を言い出す桂に神楽の突っ込みの拳が炸裂して，桂は血を吐いて倒れる。

苦い顔で哀れみする月詠にエリザベスがプラカードを出して挨拶する。

『初めまして、エリザベスです』

「……ああ、こちらもよろしく」

不気味そうにエリザベスを見て挨拶する月読。月詠との挨拶を済ませ、桂は銀時に小さく声をかけた。

「銀時，貴様も随分と罪な男になったものだ。フェイト殿達以外にもこんな可憐な娘と付き合って…」

「オーイ。誤解を招く発言はやめてくれ、ヅラ君」

「ヅラ君じゃない桂だ」

＊

四人と一匹は源外の工場の前に到着した。なんやかんやで、月詠も一緒に来る事になった。中には、何やら機械を弄ってる老人がいる。

「おーい、じーさん」

「生きているあるか，老いぼれ」

銀時と神楽が老人を呼んだ。

「ん？」

老人が振り返った。
赤いゴーグルを付け、白髭をたくわえた老人は、平賀源外。江戸一番の機械技師であるが、ある事件を起こして今は指名手配されている。

「ちょいと装置動かしてくんねーか？」
「なのはちゃん達に久し振りに会いたいアル」
「そりゃ構わねーが……」

源外は桂とエリザベスと月詠を見た。
銀時が源外に近づいて、小声で話し掛けた。

「ヅラとエリザベスはじーさんと同じ指名手配犯だから安心しな」
「そうか？まぁそれならいいんだが、あの娘っ子は誰だ？また別品連れてきたな」

月詠を見ながら言った。
顔に傷があるとは言え、月詠はなかなかの美人である。

「まさか銀の字、お前の…」
「違ーよ」

即座に銀時は否定した。

「んな事より、とっとと装置動かしてくれ」
「わかったよ」

源外は移動した。
銀時、神楽、桂、エリザベス、月詠の四人と一匹は装置の中に入った。
初めて装置の中に入った月詠は、珍しそうに中を見ている。
向こうに行くのは久しぶりだな。
銀時がそう思っていると、装置の中が赤くなった。
すると、スピーカーから源外の声が聞こえた。

「銀の字。装置の中に赤いボタンがあるだろ?そのボタンを押すと」

銀時は嫌な予感がした。
そして予感は的中した。何も知らない月詠が、ボタンを押した。

「装置の出力が最大になって制御出来なくなる。絶対に押すな」
「ジジー!そっちを先に言えェエエ!!それに何でオメーがボタン押してんだ!?」

源外に向かって怒鳴った後、月詠にも怒鳴った。

「いや、すまん……気になってしまって…」

月詠は素直に謝った。

「つーかこんなボタン、前までなかったぞ!第二章にもなかったぞ!これ,『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～白夜叉鎮魂歌～』と同じ展開になってしまったじゃねぇか!!」

銀時が怒鳴っていると、装置内の赤い色は濃くなり、電気がビリビリする。

「まぁ行き先は、なのはの世界だから大丈夫だろ」

装置の外にいる源外は、呑気にそう言った。

「ヘルペス！ヘルペスミーシー！！」

神楽が頭を抱えて叫ぶ。

「ヘルプミーだよ神楽」

神楽に突っ込む銀時。

「武士たる者どんな状況でアレ，常に冷静でなければならぬ」

『うむ，その通り！』

「慌てても何にも起きぬから落ち着け」

桂、エリザベス、月詠は冷静だった。

『『落ち着けるかァアアア！！！』』

ありったけの声で、銀時と神楽は怒鳴った。

直後、赤い光は強くなり、バチッと強烈な閃光を放った。

光が収まり、源外は装置の扉を開けて中を見た。四人と一匹の姿はなかった。

「まぁ銀の字なら大丈夫だろ」

＊

００７１年４月２９日。
ミッドチルダ臨海第８空港。
ロストロギアによる大火災が起こっていた。オレンジ色の炎が空港を包み込む。消防隊が消火活動をしているが、炎が収まる気配はない。

「ダメだ！これ以上は無理だ！引き上げよう！」

一人の消防隊が叫んだ。

「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！！」

仲間に振返りながら、消防隊が叫んだ。

＊

目の前に広がるのは、赤い空。
――アレ？なんだコレ？空が真っ赤だ。
彼は床に倒れていて、うっすらと開けた片目で、真っ赤な空を見ている。
――アレ？なんか蒸し暑くねぇ？
彼の周りの風景には火に包まれている壁や窓，つまり火事の光景である。
――アレ？何で俺、こんなことになってんだっけ？アレ？こんなん第一章の時も、やらなかったっけ？アレ？

＊

「ん……？」

銀時は両目を開けて、ゆっくりと上体を起こした。
頭を、くしゃくしゃと掻く。
銀時は周りを見回した。どこかの建物の中のようだ。しかも炎に囲まれていて、幾つか柱が倒れて、壁も崩れて道を塞いでいる。

「何だ？火事か？つーか、どこだ此処？」

銀時は記憶を辿る。
確か源外の転送装置に乗って、変な赤いボタンを月詠が押して，そしたら訳分からなく転送して……気がついたら此処にいた。

「よっこいしょう。」

とりあえず、銀時は立ち上がった。
座って考えていても、何もわからないし、解決策も思いつかない。

「神楽ー、ヅラー、エリザベスー、月詠ー、おーい。・・・・・・・いねぇのかよ。とりあえず此処から出るか。このまま此処にいたら、丸焼きになっちまうからな」

銀時は出口を求めて、適当に歩き出した。

＊

出口を求めて、炎が燃え盛る建物の中を歩き回る。炎の勢いが増していき、建物内の暑さが増していく。大量の汗を流しながら、取りで通路を進んでいく。

「そろそろ出口、見つけねーと……マジでヤバイんだけど……」

危険な状況にすると、途中で銀時は足を止めた。キョロキョロと周りを見る。すると・・・

「!?・・・今、声が聞こえたような……」

銀時は、声がしたと思われる方へ歩き出す。
少し歩くと、広い場所に出た。その中心辺りにある石像の前に、女の子がいた。顔を俯きながら、泣いている。

「お父さん…お姉ちゃん…!」

泣きながら父親と姉を呼ぶ女の子。
顔や服は、すすで所々黒くなっている。炎の熱さで大量の汗をかき、息苦しそうになっている。

「親とはぐれたのか?」

銀時が呟いた時だった。

「…痛いよ……恐いよ……こんなの嫌だよ……帰りたいよ……」

顔を俯きながら、泣き続ける。
その時、女の子の後ろにある石像にヒビが入った。ヒビは広がり、僅かに石像が前にズレた。

女の子は後ろを振り返った。
石像が、女の子に向かって前に倒れる。

「ちっ！」

軽く舌打ちをして、銀時は走り出す。
女の子は振り返って、自分に向かって倒れてくる石像に気付く。

「ひぃ……！！」

女の子は短い悲鳴を上げて、目を硬く閉じて頭を抱えた。
もう助からない。女の子が、そう思った時だった。

「待て待て待て待て待て待てェエエエ！！」

銀時が叫びながら、全速力で女の子の元へ向かう。
石像が落ちる直前で、銀時は木刀を抜いて素早く振り、豪傑な一撃で石像を粉々に砕きだす。

「おい、お前…大丈夫か？」

銀時が、女の子に声をかけた。
声を聞いて女の子は、ゆっくりと目を開けて顔を上げる。緑色の瞳をしている女の子は、銀時の顔を見た。

「……おじさん……誰……？」
「おじ……！？」

おじさん、と呼ばれて銀時はショックを受けた。
銀時は自分の右腕の匂いを嗅いだ。

女の子は、不思議そうな顔で銀時を見つめている。

「あのさ……俺、加齢臭とかする？」

右腕から顔を離して、やや落ち込みぎみに女の子に尋ねた。
すると女の子は突然、驚愕の表情を浮かべる。

「・・・・・あのさ、『おじさん』って呼ぶのやめてくんない？
せめて『お兄さん』って呼んでくんない」

真顔で銀時が言った。
銀時の年齢は、まだ二十代前半……いや、二十代後半……あれ？どっちだっけ？まぁとりあえず二十代なので、おじさんと呼ばれるのは、まだ早い。
おじさんと呼ばれるのが納得いかず、小さくブツブツ文句を呟きながら、銀時は、再び女の子を抱き上げた。

銀時は周りを見回して、どこか外に出れそうな通路を探す。どこの通路も瓦礫の山に塞がれているが、銀時は一箇所の通路に目を付けた。その通路も瓦礫の山に塞がれているが、周りに比べたら軽い方だった。
ソコから出る事に決めて、銀時は女の子に顔を向けた。

「今からあそこを蹴破って、外に出る。しっかり俺につかまってろ」

女の子は頷くと、銀時の体を強く抱いた。
自分につかまったのを確認して、銀時は右手に木刀を強く握って通路に向かって走り出す。勢いを落とさずに瓦礫の山に迫る。

「うおりゃァアアア！！」

力強く床を蹴り、瓦礫の山を木刀を一振りでバラバラに吹飛ばす。
通路の先に、出口と思われる穴を見つけて、銀時は走る。
炎の中を駆け抜け、建物の外へと出た。

「ふぅ……どうやら外に出れたみてェだな」

外に出たのを確認して、銀時は女の子を床に降ろして木刀を左脇に納める。

「お兄さん。助けてくれて、ありがとう！」
「おお」

女の子のお礼に、銀時は短く応えた。
火災はおさまってないので、二人は建物から離れた。
離れた所から見て、燃えているのが空港である事がわかった。
銀時は、これからどうするか、ぽりぽりと頭を掻きながら考える。
すると、銀時を見つめながら女の子が言った。

「……お兄さん、凄いなァ」
「ん？」

銀時は考えを中断して、女の子に顔を向けた。

「私……弱虫で……ずっと泣いてばっかで……何にもできなかった……」

自分の情けなさと悔しさで、女の子は泣き出す。
泣いてる女の子を見て、銀時は溜め息をついた。

「んなことねェよ」
「え？」

女の子は、涙を流しながら銀時を見る。

「オメーは家族見つける為に、あの炎の中を歩き回ったんだろ？」

言うと銀時は、女の子の頭に手を乗せた。

「泣きながらでもいい。ボロボロでみっともなくても、諦めねェで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ」

銀時は優しく微笑んだ。
女の子は、いつの間にか涙が止まっていた。

「オメーの家族も、きっと無事さ」
「お兄さん……」

また女の子は、涙を流す。
今度は悔しさや情けなさからではなく、嬉しさで涙が出てくる。

「私、スバル・ナカジマって言うんだよ。お兄さんの名前は？」

少女の名はスバルと言い、銀時も自分の名を言い出す。

「俺は坂田銀時、『侍』だ。」
「侍？」

二人が話で話し合っていると，空に誰かの声が聞こえたのか，スバルが振り向いて空を見上げた。

こちらに向かってくる、白い点を見つけた。段々近づいてきて、白い点が人である事がわかった。杖を持って、白い衣装に身を包んでいる。

「お兄さん！助けが来たよ！」

女の子は後ろを振り返った。

「……あれ？」

だが、そこに銀時の姿はなかった。

今さっきまで居たのに、忽然と消えてしまった。辺りを見回すが、やはりいない。

スバルは、少し淋しげな表情になるが、すぐにそれは消えた。そして決心する。

私も、あの銀髪のお兄さんのように、強くて誰かを助けられる人になる。

そして４年後に銀時とスバルは再会することになる。

第一訓：物語にだって二種類のパターンがある（後書き）

ついに動きだす高杉！

フェイト達の世界に向かう銀時・神楽・桂・エリザベス・月詠！

そしてまさかの展開に！

黒神「と言う訳で，赤夜叉さんの許可を貰って，僕の大好きな『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』のもう１つの物語を作りました！これからもよろしく♪」

銀時「次回，『物語の始まりには大抵バトル的な展開が起こる』テイクオン・・・いや，間違えた。テイクオフ。」

第二訓：物語の始まりには大抵バトル的な展開が起こる（前書き）

少女・スバルを助ける銀時。

銀時に尊敬心を抱くスバルは大切な物を守る強さを目指す。

そして新たな舞台に銀時は向かう。

銀魂「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぜ」

第二訓：物語の始まりには大抵バトル的な展開が起こる

００７５年。５月。
ミッドチルダ。第３起動高層ビル。

そこで数多くのガジェット達が大暴れしているという奇妙な事件が発生している。幸いにも閉店してあった為か誰１人もいなかった。
そんな中でツインヘアーの栗色の髪の女性が多くのガジェットと戦っている。
高町なのは。１９歳。機動六課の教導官を務めている。
レイジングハートを構えて、そこから大量の魔力を収束して一気に放つ。

「ディバイン・バスター！！！！」

桜色の閃光が放たれ、無数のガジェットたちが一斉に消えた。これで大抵数多くのガジェット達を倒したにもかかわら、まだ山ほど存在する中，もう3時間近く戦っている為、魔力の限界を感じた。
そしてパスを通してフェイトに援護要求を求める。

≪フェイトちゃん、そっちはどう？≫

なのははフェイトにパスを通して話しかけると，フェイトのほうも苦しそうな状況であった。

≪ダメ、こっちのほうのガジェットたちも異常なまでの多さに苦戦している！シグナル達とフォワード部隊の皆で戦っているから、もう少し時間がかかる！それまで辛抱して≫
≪うん、わかった≫

パスを終え、フェイト達のほうも苦しい状況に追い込まれている。
ガジェットたちが襲来して来たのは2ヶ月前であり，それまでは大した数は無かった上にそんなに強いわけじゃなかった。しかし，今回のガジェットの数は異常なまでに多かった。一体何が起こっているのかわからないまま、なのはは悩む。

「…こんなとき、銀さん達がいてくれたら…」

なのはは銀時の名を言い出す。この世界では銀時の存在は世界的に有名である。

坂田銀時。

『ジュエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を魔法を使わず、剣だけで解決した男。
その鬼神の如き強さから『白夜叉』と呼ばれ，管理局内でも有名で，知らない人は殆どいない。
魔導師としてのランクで言えば，間違いなくなのは達と同じくS＋は入る。
そしてゾーマを剣の腕だけで倒した銀時はまさに世界を救った英雄的な武神であった。
だが、実際に銀時の戦いの様子を見た者は、当時の事件の関係者やアースラの局員と、極僅かな人数である。だから本当に銀時がそんなに凄い人なのか、まだ信じられない人が多い。
だが、フェイト・シグナム・リィンフォースからはゾーマと戦った銀時の鬼神の戦いっぷりの話を聞かされ，もしかすればなのはでも勝ってしまうのでないかと思ってしまうほどである。

「フェイトちゃん、アルフさん、シグナムさん、リインフォースさんの４人は銀さんの強さを知っているから…どんだけ強いんだろう？」

何故か銀時の事を考え出すなのは。

魔術が使えないのにも関わらずにその鬼神のごときの強さを持った武人が想像できないため，その眼で確かめたい気持ちであった。

シュルルルルルルル！！

「何！？」

奇妙な音に，なのはは後ろを向くと，そこから数多くの紫色の触手がなのはを襲う。魔力が半端じゃなく付きかけて反応が遅く魔法を唱える事ができなかった。そして・・・・

「きゃあああああああああああああ！！！！」

無数の触手に体全体を巻かれて捕まり，その奥に引き込まれてしまうのである。

＊

「……あれ？…ここは？スバル？」

突如，またもや景色が変わった事で驚きだす銀時。周りの光景は何やら見慣れない町の景色を高速ビルの屋上から見えるのであった。一体どうしてなのか頭の中で混乱する中、神楽、桂、エリザベス、月詠が銀時に駆けつける。

「銀ちゃん！いつの間に来てたアルか！？」

神楽は心配したのか銀時に駆けつけると，銀時は神楽の姿を見て安心するかのうな表情で叫ぶ。

「神楽、無事だったか！…それに、ヅラ、エリザベス、月詠！！」
「ヅラじゃない桂だ！」

相変わらずヅラ呼ばわりされて突っ込む桂を尻目に，銀時はこの状況が一体何なのかを考える。

「ま、何とか無事に面子は揃ったわけだし…とりあえずこの状況が一体なんなのか考えようか。」
「わっちらはあの転送装置によってこの異世界に来たようで，ここが何処だか分からん。」

桂と月詠は無事にメンバーが揃った事で安心しているが、訳の分からない場所に飛ばされて不自然に感じている。

「銀ちゃん！ここ海鳴町じゃないアル！？」
「え…マジで！？」

神楽は不安げに銀時に言うと，銀時は驚きだして周りを見てみる。確かにそこはビルがばっかり立っており、海鳴町とは全然雰囲気が

違う。

一体どうしてこんな場所に付いたのか、本当にここがフェイト達の世界なのか理解できない銀時に、エリザベスがボートを出す。

『まぁ…無事に揃ったから良いんじゃない？』

「うっさいネ！！何どうでもいいような言い方するアルか！？」

「おいおい，まさかこれもしかしたらまた別のアニメか漫画の――
―」

ドォォォォォォォォォォォォォォォォォォンン！！

「！！？？」

突如の大爆発で5人は驚きだす。それはビルから何かが大暴れしている感じで暴れていているようであった。

「な…なんじゃゃ、今の爆発は！？」

月詠が驚く中，床から突如，ドデカイ物体が何本か現れると、それはミミズのような化け物が銀時達を囲んだのである。

「別の世界どころが自分の世界の何処かの場所に転送してしまったんですけどーー！？」

っと銀時は大きく叫ぶと，その異生物体がなんなのかは分かった。そして神楽は驚愕した。

「銀ちゃん、こいつら寄生型えいりあんアル！」

神楽は警戒しながらも傘を取り出して構え，月詠もクナイを構えだす。

「まさか…これが銀時とリーダーが言っていた侵略型天人……えいりあんなのか!?」

「つうか何でえいりあんがいるんだよ!あのバカなのか、またあのバカ皇子が何かやらかしたのか!?」

以前に神楽の父・星海坊主と以前にターミナルを寄生した寄生型えいりあんと闘った事があるが、今回のはそれ以上の脅威を感じるのである。その時の原因は、馬鹿・・・・・もどいハタ皇子にあった。

「何はともあれ、江戸の平和を乱すものは誰であろうと、この『狂乱の貴公子』桂小太郎が天誅を下す!」

『お仕置き開始じゃ!』

桂はそう言いながら刀を抜いて構え、エリザベスがプラカードを構える。

「いや・・・ここが江戸であるかどうかもわかんねぇよ。つうか、新小説が始まっていきなりバトル展開かよ」

っとうじうじと文句言いながら銀時は、腰に差している『洞爺湖』と彫られている木刀『幼刀・星砕』を抜いて構える。

「ちょうど良いアル、最近運動不足だったから相手をしてやるネ」

神楽も両手をボキボキと鳴らしてやる気満々であった。

「来るぞ！」

月詠が叫ぶと、えいりあん達は一斉に銀時達を襲い掛かる。

※

ミッドチルダ臨海第７空港

そこではフェイト達が大群のガジェット達の破壊をしていた。そしてようやく全てのガジェットは壊滅し，ツインヘアーの金髪の女性『フェイト・テスタロッサ』は陸に降り、四人の男女がフェイトに駆けつけた。

「皆、大丈夫!?」

「はい！」

フェイトの心配の声に、三人の男女が応えた。

オレンジ髪のツインテールの少女。ティアナ・ランスター。１６歳。赤髪の男の子。エリオ・モンディアル。１０歳。

ピンク色の髪の女の子。キャロ・ル・ルシェ。１０歳。

ちなみにキャロの隣には、使役竜フリードリヒ。通称フリードという小さな竜がいる。

三人とも機動六課の新人フォワード部隊である。

そして，赤い衣装を着たハンマーを持った少女ヴィータと、剣を持ったピンク色のポニーテールの女性シグナムが駆けつけてきた。

「ヴィータ、シグナム！」

フェイトは安心したかのような顔で2人の名を呼ぶ。しかし，数が多すぎたのかさすがの2人も魔力を使い果たして，もう飛ぶことが出来ない状況になっている。

「こっちのほうも何とか片付いた」
「だが・・・さすがに数が多すぎた・・・今までの3倍・・・いや4倍はあった。一体何がどうなって・・・・・・」

突如の急激なガジェットの増幅に理解できないヴィータとシグナムだが，最優先すべき事ははなのはの援護である。

「ここも無事に解決したし、後はなのはの援護に向かうよ」
「はい！」

フェイトは急いでなのはの援護に向かう報告をするが，パスを通じても全然返事が来なかった。

（返事が無い！？…一体なのは何が…）
「た…大変ですー！」

っと，空からヘリが現れ，その中にはシャマルがいた。
何やら慌てている様子であり，フェイトはシャマルに聞き出す。

「シャマル、どうしたの！？一体何が……」
「第3起動高層ビルに、意味不明の異種生命体が突如ビルに寄生するかのように現れたそうです！」
「！？」

そこは、なのはが大量のガジェットと1人で戦っている高層ビルである。なのはとのパスが通らないのも、そこでなのはに何かが起こった事である。

「なのは！」

フェイトは驚愕してなのはの名を呼んで叫んだ。

「ちぃ…なのはに何かあったのかもしれない！」

ヴィータは嫌な予感が嫌というほど想像する。

「フェイトさん！」

「早く，なのはさんの救出を！」

っとエリオとキャロがフェイトに言うと，迷いも無くなのはの救出に向かう。

フェイト達はヘリに乗って、なのはのいる第3起動高層ビルに向かっている。早く向かっても大抵は1時間までかかる。

フェイトは飛んで一足先になのはを助けたいが，魔力がもうほとんど無い為，今はせめて体力の回復をするしかなかった。

そしてシャマルはモニターをだすと，そこには第3起動高層ビルに強大な異種生命体が映し出されているのが分かる。

それを見たフェイト達は信じられないような表情をする。

しかも，魔導師達のデバイスによる魔法攻撃もびくともせずに，さらに拡大し続けてミミズのような触手の化け物が続々と生えてくる。

そして、数多くの魔導士達が返り討ちされて叩き落されたり捕まって体の一部にされてしまうっと言う恐ろしい光景を眼にする。

「ヒィ、ひ……人がァ！」

魔導士が異種生命体に飲み込まれる恐ろしい光景を見て怯えるリィン。

「こ……こんな化け物染みた生命体がいたなんて……」

っとティアナは恐ろしく感じる。見たこともない生命体に拡大し続ける為、まさに化け物しか言いようがない。

「なのは…無事なら良いんだが…」

「ヴィータ、なのはを信じろ。そう簡単にはやられないはずだ…」

と心配するウィータにシグナムは支える。フェイト、シグナム、ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロは残り少ない魔力で未知の化け物に勝てるのか心配になってきた。

だが、その時シャマルはモニターを見てある異変に気づいた。

それは、突如異種生命体から生えてくるミミズの触手が次々と真っ二つに斬られて弱まってくる事である。

「え…いきなり異種生命体の触手が次々と切り落とされていく！？」

シャマルがそう言うと、フェイト達も驚きだしてモニターに注目する。

確かに誰かが異種生命体の体を踏み台扱いとして接近戦で戦っている所が映し出されている。

「一体誰がこんな無謀な事を・・・・・・まさか！」

シグナムはある人物に気が付く。

それは，魔力を持たなくても鬼神の如くの強さを持った伝説の『白夜叉』の存在であった。

＊

「てぇやあああああああああああああ！！！！」

銀時は木刀をエーリアンに向けて何度も大きく振り，次々とえいりあんのような触手を真っ二つに斬る。

「はいぃイイイ！次ぃイイイ！！」

銀時は首が飛ばされたえいりあんの頭を踏み台としてえいりあんの中に飛び込みながら、さらに木刀を振るった。

えいりあんの首は次々と斬っていく。

「おおォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

桂も銀時に劣らない剣技を炸裂させ，えいりあんを真っ二つに両断した。

休まず刀を横薙ぎに振るって数多くのえいりあんの首と胴体を次々と切り離す。伊達に銀時と共に攘夷戦争に参加してなかったの様な強さを炸裂させる。

「ほぁちゃあァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

神楽は、傘を振り回してえいりあんの首を一斉に切り落とす。時々時には、拳で殴ってエーリアンを粉砕し、傘からマシンガンのように弾を発射して蜂の巣にする。

『うおりゃあああああ！！』

そうかかれたボードを振り回してエリザベスもエーリアンを粉砕し、時には口からキャノン砲を出して攻撃し、数多くのえいりあんを吹飛ばす。

「後ろがガラ空きじゃ」

エーリアンの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。

クナイはえいりあんの後頭部を貫き、エーリアンは破裂する。接近戦では2つの小刀で素早いスピードで一瞬で2匹のえいりあんを斬る。

『白夜叉』・『狂乱の貴公子』・『夜兎族』・『宇宙生物』・『死神太夫』

まさに銀魂の5大超戦士とも言えるようなメンバーの人離れした戦いぶりは、エーリアンをも勝っていて次々とエーリアンを倒す。

＊

「す・・・すごい・・・・！」

鬼神の如き強さで暴れ回る5人の姿を見て、ティアナは思わず口に出す。

ハッキリ言って、フェイト達が到着する前にすでに解決しそうである。

そして，モニターに映し出されている銀時の姿を見てフェイトは…。

「銀…時…？」

フェイトが口を開いた。

眼をこすってもう一度モニターを良く見ると、間違いなく銀時の姿が映し出されていた。

「やっぱり銀時だ！」

「マジかよ！それに、神楽・桂・エリザベスもいるぞ！」

「やはり銀時か！」

間違いなく銀時達の姿である事にフェイト・シグナム・ヴィータが驚きだす。

銀時だけじゃなく神楽、桂、エリザベスの3人の強さはあいも変わらずであり、始めてみる月詠の実力はもかなりの手練だとフェイト達は思った。

シャマルも銀時がまさかこの世界に来ていたことに驚きを隠せなかった。

一方のフォワード隊のティアナ・エリオ・キャロの3人は銀時の名を聞き，驚きを隠せなかった。

「ふ…フェイト隊長，銀時って……まさか，あの武神・坂田銀時ですか？」

っとティアナは質問すると、フェイトは縦に頷く。

「『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』で、魔法を使わずに剣だけで解決し、さらにはその強さはなのは隊長とフェイトさんに匹敵するS＋級に入る剣豪。そして世界を救った英雄で、人々からは『白夜叉』・『白い剣聖』・『エース・オブ・シルバーサムライ』とも呼ばれる伝説の武神」

銀時の噂を聞かされたことを改めて言い出すエリオ。

「魔法を使わずに活躍したって噂は、本当だったんですね」

キャロは、改めて銀時達が凄い人であると認識した。

＊

容赦なく暴れだす銀時達は、疲れ知らずでえいりあんを多く倒していく。

そして銀時と桂は次々とエーリアンを斬り倒すと、背中を合わせる。

「よぉ…くたばってねぇか，ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ。伊達にお前と共に譲夷戦争に生き残ってはいない」

と、桂は息切れしそうで溜息を吐くと、窓側に向く。そこには大量

の触手で固まられたえいりあんの壁と化していた。

「あそこに穴を空く。その隙に中に侵入して寄生型えいりあんの核を潰すぞ。……エリザベス、あれを！！」

『了解！』

っと書かれたボートでエーリアンを次々と粉砕しながら向かってくるエリザベス。

そして口から鋼鉄のスケッチ2つと、いつも桂が持っている爆弾の5倍の大きさを持つ爆弾を出す。

「お前、エリザベスにこんな物騒な物を持たせたのかよ！？」

下手したらエリザベスの中でその爆弾が大爆発してとんでもない事が起こると銀時は突っ込むが、「ぐずぐずしている暇はない！」っと言いながら銀時に1つのスケッチを渡すと，2人はスケッチを構える。

「えいりあん共、見るが良い！！！！」

「これが本当の……」

銀時と桂は一斉同時にスケッチをタイミングよく振り，2人のスケッチが巨大爆弾に直撃する。

『『ゲートボールじゃ～～～～～～～～～～～～！！！！』』

飛ばされた巨大爆弾は、大量の触手で固まられたえいりあんの壁と化していた窓側に向かう。そして直撃した後、巨大爆弾は大爆発して出口のように穴が開かれた。

「銀時、桂、ここはわっち等が食い止める！だから主等は先に行け！」

「銀ちゃん、ヅラ、行くヨロシ！！」

『どうか、ご無事で！！』

神楽、エリザベス、月詠の3人は銀時と桂にえいりあんの核の破壊をたくし、外にいるエーリアンを次々と倒していく。

「行くぜ、ヅラ！」

「ヅラじゃない桂だ！」

『『オオォォォ

第二訓：物語の始まりには大抵バトル的な展開が起こる（後書き）

突如、再び銀時の前に現れた寄生型えいりあん！

白夜叉、再び戦場に立つ！

えいりあんに捕まったなのはの運命は！

そして、ついにあの人物と銀時が再会！

フェイト「次回、「存在的に似ているような事があるがそれは気にしないのが一番」。テイクオフ」

第三訓：存在的に似ているような事があるがそれは気にしないのが一番（前書き

ティアナ「第二訓を見たけど・・・何でスバルがいないのよ！？」

黒神「これにはある理由がありまして、今回の第三話で明らかになります。」

スバル「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるよ♪」

第三訓：存在的に似ているような事があるがそれは気にしないのが一番

突如現れた寄生型えいりあんに侵略された第3起動高層ビルの中に侵入する銀時と桂は、元を立つ為に核を破壊しに行く。次々と現れるミミズのようなえいりあんを次々を斬り倒していきながら2人は下に向かっている。

「どけェェェ！！！！」

「小便かけるぞ、このやろォォォォ！！」

2人の侍の力により、次々とえいりあんが斬り倒されていく。天人との戦いに慣れている2人にとっては朝飯前のような存在である。

眼の前に見えた扉は何やら頑丈に固まっており、さらには人型えいりあんとミミズの触手が続々と囲んでいる。

「ちぃ・・・・まだいやがるか！」

「だが、先ほどまでとは違うあの守りの塊から考えれば間違いなくあそこに核があるはずだ！一気に行くぞ！」

銀時と桂は刀を構えて強行突破しようとするが、突如2人の後ろから走っているかの様な足音が聞こえる。

『『！？』』

2人は後ろを向くと、1人の少女が居合の構えをしながら刀を持って素早く駆けつける。

「はぁあああああああああああ！！！！」

少女はえいりあんに飛び込むと、神速の速さで抜刀して、そこから神速居合剣技を炸裂させて次々とえいりあんを切り倒す。
さらには刹那の瞬間移動で遠く離れたえいりあんにも一瞬に近づいて神速に斬りまくる。
その剣速はまさに神速と言う名に恥じない速さであり、真選組一番隊隊長であり真選組最強と言われる沖田総悟や名家・柳生家の次期当主である柳生九兵衛に匹敵する程の華麗なる剣技を炸裂させ、１人で全てのえいりあんを全滅させた。

「な・・・・・１人でえいりあん共を全て斬りやがった!?しかもメッチャ速ェ!!」
「大した剣術だ、まさに侍の魂を感じ取らせる戦いぶり…この世界にも侍が存在したか!!」

予想外の事に驚く銀時と先ほどの剣技に感動する桂。
そして、少女は刀を鞘に納めて後ろを振り向く。

「やっぱりまだ逃げ遅れがいたんだ。良かった、無事に見つか・・・・・て・・・・・・・?」

少女は銀時の顔を見て唖然とする。
少女の容姿は青い髪でショートカットのボーイッシュな少女で、頭に白い鉢巻をかけていて、何やら白いロングコートを着ていて緑色の瞳をしている。

「まさか・・・・・銀時さん!?」

少女が、銀時の名を言い出すと、銀時は思わず驚きだす。

「お前、何で俺の名前を?」

銀時が少女に尋ねると、少女は嬉しそうに銀時に抱き抱える。

「やっぱり銀時さんだ〜〜!!」

「のぁ〜〜!!ちょ・・・・・・ちょっとまてぇ〜〜〜〜!!何でお前が俺の名前を知っていやがんだァ〜〜!!??／／／」

大胆に抱かれて慌ててしまう銀時。彼の胸元には少女の大きな胸が押しかかれてしまい、動揺を隠せない。

それを見た桂はニヤニヤと笑い出す。

こいつ、絶対に後でぶっ飛ばす!っと銀時はその時そう思った。

しかし、少女のほうを良く見ると、どこかで見たような感じで見る。

「あれ?ちょっと待って……何か見覚えがあんだけどォ……どこかで会ったっけ?」

首を傾げる。

そして少女は銀時に名を言い出す。

「お久し振りです、銀時さん!私です、スバル・ナカジマです!」

少女がスバル・ナカジマと名乗ると・・・銀時はしばらく唖然とする中、我に返ってスバルの名を叫ぶ。

「・・・・・・え・・・・・・・嘘・・・・・・・・・スバルゥウウウ!?」

銀時の大声に、スバルはビクッと体を震わせた.

「え・・・あ・・・はい」

マジでかァアア！？
銀時は頭を抱えて、今は真っ暗なビル内を仰ぐ。

（え・・・いや、さっき会ったスバルは、まだ小学生位じゃなかったんじゃ！？てぇええ！？）

何がなんだか分からない銀時に、スバルは嬉しそうに声をかける。

「本当にお久し振りです。まさかここで４年ぶりの再会が出来て私、感激です」
「４年ぶり？」

スバルの『４年ぶり』っという台詞に銀時はあの光景がなんなのか分かった。

（オイィ～～～！！まさかあれは４年前の光景だったの！？え・・・銀さんだけタイムスリップしちゃったの！？）

っと銀時は慌てる中、原因は装置の制御不能により、銀時だけ４年前の世界に飛ばされ、そして何故か予想外にすぐに神楽達の場所に飛ばされたのである。
スバルは桂を見ると、驚きだしてはしゃぎだす。

「ああー！！『狂乱の貴公子』桂小太郎さんだ！」

っと尊敬するかのような叫びにスバルは桂を見ると・・・

「む・・・俺の事も知っているのか」

桂も、この世界では有名な存在である。

桂小太郎

『闇の書・ゾーマ事件』で銀時と同じく魔法を使わずに剣と爆弾で解決して活躍した侍。
かなりのクールボケで、しかも人妻好きと言うかなり変なところが印象的に大きいが、その強さは銀時に引けをとらない強さを持っており、剣の腕もかなり高く、爆弾の使い手でもある。
しかも『んまい棒混捕駄呪(コーン・ポタージュ)』や『んまい棒鎖羅魅(サラミ)』などデバイスではない特殊な道具を使いこなす戦いぶりは、「狂乱の貴公子」・または「狂乱の騎士」とも呼ばれる。

「はい、何せあの時空管理局遺失物管理部機動六課のはやて課長が最も信頼する、ヴィータさん、シグナムさん、シャマルさん、ザフィーラさんと同じ、5人目の騎士とも言われた伝説の侍と聞いています！」
「はやて・・・八神殿の事か！？」
「スバル・・・まさか、この世界にフェイト達がいるって事か！？」

スバルがはやて、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの名を言い出すと、銀時と桂はこの世界は間違いなくフェイト達の世界であると確信した。
そしてスバルは2人の質問に正直に答える。

「はい・・・フェイトさんの事は知っていますけど？」

っとスバルは答えだすと、2人は間違いなくこの世界がフェイト達

の世界であると確信する。

「何はともあれ、今はこの状況を何とかしないとな。スバル殿、お主はこのビルに侵略している生物が寄生型えいりあんである事を知っているか？」

「え・・・えいりあん！？えいりあんってあの宇宙の何処かの惑星に存在する・・・あのエーリアンですか！？」

この奇妙な異種生命体の正体がえいりあん、しかも寄生型であるとは驚く。銀時と桂はスバルにこのえいりあんの事を話し出す。

＊

「じゃあ、このえいりあんは元々は銀時さんの世界にいた危険生命体なんですか！？」

以前に銀時の世界でターミナルに寄生して、そのエネルギーで拡大した巨大えいりあんと銀時が闘った事があると聞いて驚くスバル。今回のこのえいりあんもこのビルの電力エネルギーと何か特殊な力を寄生して拡大した姿である。

「とにかく、元である核を破壊すりゃ……この寄生型えいりあんも一気に壊滅よォ！」

「スバル殿、会ったばかりですまないが協力を頼む。早くしないとこのビルだけでなくこの町自体がえいりあんに寄生されて取り返しのつかない事になってしまう！」

桂はスバルに強力を頼む。

先ほどの剣技からすれば、スバルも相当な実力の持ち主であると確信し、銀時もスバルの剣の腕はもしかすれば、シグナムのわずか上に行く強さを持っているではないかと考える。
しかし、よくよく考えればスバルも巻き込まれた側である事は承知の上である。
だが、スバルは・・・・

「分かりました。私も銀時さんと桂さんの力になりますので、核破壊にご協力します！」

っとスバルは助太刀の要求を受け入れる。

「おお、スバル殿かたじけない！」
「じゃ、派手に暴れてやろうぜ」

3人は協力し合って、えいりあんの核を探して破壊することを決意すると、銀時はスバルの姿を見てある人物に似ていると考える。

「ていうかスバル。お前のその格好と存在感……なんか「スト●●○・フ△△△ー」っとか言うゲームの、あの「サ●○」に似てねェ？」
「誰ですか、その人！？」

知らない人物に似ているとスバルは驚きだす。

「まぁ、気にしないほうが言いと思うよ…うん」
「いや、気になりますよ～～！！」

スバルの突っ込みを尻目に、銀時は扉を蹴りだして豪快に開けると、

その目の前には無数の触手によって繭のように固まっているのが見えた。

「な・・・なんですかあれは!?」

スバルは繭の塊のような触手に驚きだすと、桂はこう確信する。

「核ではなさそうだが、おそらくあれがこの寄生型えいりあんの力の源!あれを何とかすればえいりあんの力は弱まる」

桂がそう言うと、銀時は木刀を握って駆けつける。

「じゃ、その力の源も…斬ってやろうかァァァァ!」

そう叫んで繭の塊である触手に飛びつき、木刀を大きく振ると、繭の塊である触手は綺麗に斬られ、その中から1人の白い魔導服を着た女性が現れて、銀時の前に落ちてくる。

「お・・・女!?」

銀時は慌てて落ちてくる女性をキャッチしてお姫様抱っこして着地する。

「まさか、力の源が1人の女性魔導士であったとは・・・」

それは相当の魔力の持ち主であると桂は考えると、スバルはどこかで見たような顔に考える。

「この人・・・どこかで見たような・・・」

そして銀時は抱き抱えている女性が無事なのか声をかける。

「おい、大丈夫か!?返事をしろ!!」

「・・・・・う・・・うぅ・・・?」

女性はゆっくりと眼を開けると、銀時の姿が眼に映ると・・・なのはは少し驚いたような表情で銀時の名を言い出す。

「銀・・・さん?」

見知らない女性に名を呼ばれて、銀時はポカンとしてる。

「あの…どちら様で?」

と、銀時は目の前の女性が、銀時も良く知っている人物であると気付かずに言った。

だが、ジッと見ていると何か気になる。

「あれ?ちょっと待って……何か見覚えがあんだよな……どこかで会ったっけ?」

首を傾げる。

しかし、女性の持っているデバイスを良く見ると、ボロボロに壊れかけていてもはっきりと分かる「レイジングハート」である。

そして銀時は気付いた。

「お前っ!まさか…なのはか!?」

驚きながら銀時は言った。

「・・・ああ、やっぱり銀さんだ！」

なのはも銀時である事にはっきりとわかって銀時の名を言いだす。

「えっ！？ちょっ…マジでか！？」

驚いた銀時は、マジマジとなのはを見つめた。

「私、１９歳になりました！」

「１９！！？」

銀時は更に驚いた。

確かに今のなのはは、大人だ。元々可愛かったが、大きくなって大人の魅力的なモノもあって綺麗だ。

「あらら～、すっかり大きくなっちゃって……ってちょっと待てェエエエ！！」

急に立ち上がって、銀時は叫んだ。

後ろにいる桂とスバルも驚いて、体を震わせた。

「おかしい！絶対おかしい！！だって…お前この前まで、まだ小学生……えええっ！？何これ？どうなってんだ！？」

目の前の事が信じられず、銀時は混乱した。

「落ち着いてください、銀さん！・・・・・・それに、まさか銀さんにお姫様抱っこされるとは思わなかったです／／／」

「え？」

なのはの言葉にピタリと混乱を止める銀時は良く見ると、自分は今なのはにお姫様抱っこをしている事に気づく。

「のぁあああああ!!」

っと銀時は叫んでなのはを話すと、土下座する。

「悪ぃ!別にわざとじゃないんだ!けして・・・だから、フェイトやアルフ、それにシグナムには言わないで!」

っと何度も謝る銀時に、なのはは顔を真っ赤に染めながらも銀時に言い出す。

「え・・・いや、大丈夫だよ!銀さんだってワザとじゃないって事は分かっているし／／／」

っと、なのは自身は気にしていないが・・・やはりお姫様抱っこされる事が凄く恥ずかしかったようである。
スバルはなのはの存在である事を知って驚きだす。

(え・・・なのはさんってあの『機動六課』の隊長の1人であり,『エースオブエース』の異名を持っているあの高町なのはさん?)

まさかの人物に会ったスバルは内心に驚き出している。
そして桂も一緒であった。

「高町殿!?・・・いつの間にそこまで・・・」
「桂さん、お久し振りです」

桂に気が付くと、なのはは親しそうに桂に挨拶する。

「うーむ、随分と大きくなったな。おこづかいに五十円あげよう」
「あ…いえ、結構です」

なのははは、やんわりと断った。
そして、隣にいるスバルに気が付く。

「え・・・とう・・・・君は？」

っとなのははスバルに名を訪ねると、スバルは名乗りだす。

「あ…私、スバル・ナカジマと言います」

名のりだすと、なのはは驚きだす。

「え・・・スバル・ナカジマって・・・まさか時空管理局陸士１０８部隊長、ゲンヤ・ナカジマさんの娘!?」

なのははスバルにそう聞き出す。

実はスバルには、魔導士達でもちょっと有名な新人魔導士。
４年前の事件でスバルは銀時に助けられ、その後父であるゲンヤに銀時の事の存在を知らされた。
魔法が使えない代わりに剣だけで鬼神の如くの強さを持った武神であることを聞かされる。
銀時の存在を知ったスバルは、その一週間後に剣術を習い始める。
銀時のように力のある剣技を身に付けられない代わりに、自分なりの剣技を身につける事を決意する。
銀時のように誰かを護れる武神になりたいと言う一心で、人一倍・・

・いや人十倍的な努力で、魔法に匹敵するような神速の剣技を得た。
他にも、姉のギンガにも、もしもの為に武術を学んでいた。
その翌年に時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入学すると、魔導士としては良い線を行くという程度だが、鍛え上げられたその神速の剣技は誰よりも注目を浴び、さらには魔法と剣技を合わせた『魔法剣技』は、シグナムに近い強さであると評価され、優秀な魔導士とも評価されていた。
さらにスバルは剣術を中心に鍛え上げられている為、魔法をあんまり使わないのにも関わらず、理解不能的に、自然に魔力が上がって行く。
その為、スバルの魔力は自分自身でも予想外の事にランクは陸戦ＡＡ＋となっている。
数多くの難関なミッションをも持ち前の剣技、体術、そして魔法を重ね供え、将来は父の後を継ぐ時空管理局陸士１０８部隊長になるであろうと上からも期待されまくりだった。
だが、スバルの魔法を頼らず剣術のみを鍛錬する行為は、他の訓練生と訓練教師には最悪な評判であり、独自の行動には好きになれなかったのである。
その為、スバルは訓練校達に卒業と言う名で無理やり訓練校を追い出された。
しかもわずか1年で。
訓練校卒業後にスバルは『大切な人を守る為にもっと修行を重ねて強くなりたい』っと言う理由で1人旅を出た。
最初は姉のギンガに反対されたが、銀時のような心強い人間になりたいと言う理由で父・ゲンヤは納得して許した。

「・・・え・・・スバルって、俺を目的にそれほどスゲェ成績を残したの？やべぇよ、なんかメッチャ照れるんだけど？どうすればいいんだ、ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ。・・・しかし、魔導士とは思えないやり方だが、スバル殿のやり方はまさに侍の魂を持った魔導士とも言えよう。君のその信念に感動した。そんなスバル殿には攘夷志士タオルを上げよう」

っと桂は何処から出したのか、攘夷と書かれたタオルをスバルに渡す。

「あ・・・ありがとうございます」

苦笑しながらも、スバルは攘夷志士タオルを受け取る。

「ミッドチルダ北部第四陸士訓練校の卒業後に、どこかで修行していると聞いたから、ギンガさんは心配していたよ。何でスバルがここに？」

姿を消したはずのスバルがどうしてこの第3起動高層ビルにいるのか、なのはは質問する。

「実は、ここに美味しいアイスクリーム屋があると言う噂を聞いて、それでここに到着したら・・・なんか閉店しているらしくて諦めて再び山に戻ろうと思ったんですけど、突然数多くのガジェットに襲われて、何とか全て倒して安心して逃げようとしたら…その次に変な異種生命体に襲われて……もしかしたら誰かが逃げ遅れたかなっと思って、次々と倒しながら上に向かってたら…そこで銀時さんと桂さんに合流しました」

アイスクリーム屋に通うためにこのビルに入ったと言うスバルの単純な理由で、銀時、桂、なのはは呆れる。

「それより・・・まさか銀時さんや桂さんだけじゃなく、あの高町なのはさんとこうして会えるなんて・・・変な事件に巻き込まれて損したと思えば、凄く得した感じです」

なのはの存在もスバルは知っている。

時空管理局武装隊、『スターズ分隊』隊長であり、魔導師ランク・空戦Ｓ＋の強さを持つ『エースオブエース』、『誰もが認める無敵のエース』と呼ばれる現段階の最強の魔導士であるからだ。

「まぁ、何はともあれ…このビル内にいるのは俺たち４人だけだ」

銀時は現段階にビルにいるのが銀時４人だけであると確信する。

「だが油断は出来ない。一刻も早く寄生型えいりあんの核を破壊しない限り安心は出来ぬ」

「ふぇ？・・・えいりあん！？」

『えいりあん』と言う言葉に唖然と驚くなのは。

この奇妙な異種生命体の正体を銀時達はなのはに説明すると、信じられないかのように驚くなのはだが、銀時の世界にある天人（あまんと）を考えれば納得が出来る。

「じゃあ、その寄生型えいりあんの核を破壊すれば何とかなるんだね」

っと、なのはは理解すると自分も核破壊を手伝う事を決意する。

「おうよ、とりあえず・・・この気色悪い生き物の心臓を破壊してさっさとここを出よ――」

ドカァアアアアアアアアアアアン！！！！

「！？」

突如、前の壁が大爆発して４人は驚きだすと、そこにはさっきまでのよりはでかい、無数のミミズのような触手と巨大な赤い球体である寄生型えいりあんの核が現れた。

第三訓：存在的に似ているような事があるがそれは気にしないのが一番（後書き）

ティアナ「なんかスバルが原作と全く違う設定なんだけど！？」

黒神に突っ込むティアナ。なんかメッチャ怒っている用であり、今でも大爆発しそうである。

黒神「いやー、なんかこうなっちゃって、つい」

ティアナ「ついじゃないでしょ！そもそも、原作とは全く違うデバイスを使っているわよ！何で刀のデバイスなの！？何でマッハ・キャリバーとリボルバーナックルじゃないのよ！」

っと、クロスミラージュを黒神に構えると、黒神はその理由を聞き出す。

黒神「実は、今回スバルが憧れたのはなのはじゃなく銀時のため、なのはに憧れて「ディバイン・バスター」を覚えた事を参考にし、今作のスバルは原作とデバイスを変えて、銀時に憧れて武器は日本刀型のデバイスにしたわけです。そしてついでに強さ設定を変えました。剣の腕だけならシグナムと双璧で銀時の次に強いって言う感じですね」

ティアナ「いや、おかしいでしょ！ＡＡＡ＋ってヴィータ副隊長じゃない！」

黒神「そんな原作強さ設定はオリジナルのスバルの日本刀型デバイスの名は次回で明らかになります。まぁ、ティアナの原作どおりですけどね。」

ブチィ！

ティアナ「クロスファイヤーシュート！！（怒）」

額に血管を浮かべて怒り任せに必殺魔法を放ち、それが全て黒神に直撃する。

黒神「ぎょえええええええええええええ！！」

『白夜叉』銀時の強さを、なのはの眼に焼きつかれる！

『狂乱の貴公子』桂の新型『んまい棒』が炸裂！

スバルの魔導剣技が炸裂！

えいりあん戦、ついに完結！

桂「・・・次回、「原作を元にした小説は大抵は設定が大幅に変えるのが多い。」刮目せよ！あっ間違えた、テイクオフ！」

第四訓：原作を元にした小説は大抵は設定が大幅に変えるのが多い（前書き）

フェイト「ねぇ・・・この小説もう４話突破したというのに、どうしてまだ銀時に会えないの？」

シグナム「我々に何か恨みがあるのか、黒神？」

２人はデバイスを構えだすと、後ろから怒りの化身が見えるかのような雰囲気を表す。

黒神「いや・・・これにはわけがありまして・・・そのう・・・」

フェイト・シグナム「問答無用！」

黒神「ぎゃあああああああああああ！！！！」

なのは「あ・・・あはは・・・『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第四訓：原作を元にした小説は大抵は設定が大幅に変えるのが多い

銀時と桂は、寄生型えいりあんに侵略された第3起動高層ビルに侵略し、一気に核を破壊しようと向かうのだが、そこで新人魔導士少女であり、銀時に憧れ侍の魂を持ったスバル・ナカジマと１０年後の高町なのはと合流する。

そんな時、突如巨大な心臓のような形をした寄生型えいりあんの核が現れた。
さらに数多くの人型えいりあんとミミズのような巨大触手が無数に出てくる。
そして核自体は以前に、銀時がターミナルで見た寄生型えいりあんの核よりも2倍の大きさはある。

「おいおい、随分と派手に登場すると思いきや、ようやくラスボス登場って奴かこのヤロー。」

っと銀時は言いながら木刀を構えると、なのはは来るしながらもゆっくりと立ち上がりだす。

「この核を倒せば・・・全てが解決するんだね。」

なのははレイジングハートを構えるが、相当魔力を吸収されたため、残りの魔力はかなり少ない。

「今の私じゃ、役立たずかもしれないけど・・・せめて・・・銀さん達のサポートぐらいは・・・」

せめて、銀時達の援護でもしようとなのはも戦おうとするが、なの

はの弱弱しい声に、銀時は振り向かずになのはに話しかける。

「馬鹿言ってんじゃねぇよ…立てるのがやっとのお前が無茶しても、むしろ足でまといなだけじゃねぇか」

「でも・・・」

分かってても、見過ごす事ができない。

それでもなのはの協力を拒否した銀時。

桂もスバルも、今のなのはに戦わせたら命の危険性があると確信し、銀時の意見に賛成する。

「お前が死んじまったら、フェイト達が悲しむだろ？」

「！？」

自分が死んだら、フェイト達はどれぐらい悲しむのか想像しなかったなのはは、自分が今しようとしている事は無謀な自殺行為であると分かった。

「まぁ見とけ」

銀時は木刀を構え、桂とスバルも鞘から刀を抜く。

「美しく死を覚悟をする暇があるなら、最後まで美しく生きようじゃねぇか」

銀時は後ろにいるなのはにそう言うと、えいりあんの核と人型えいりあんの軍勢、そして無数にある巨大なミミズの触手を睨みつける。

すると、なのはの眼には一瞬だけ、銀時の姿の衣装が全く違う感じに見えた。

白い侍の衣装を着ており、木刀ではなく刀を握っている。

だが、そう見えたのは一瞬だけであり、眼をこすっても銀時の姿がいつもどおりに戻った。

「行くぜ、ヅラ、スバル」
「はい！」
「ヅラじゃない・・・桂だ」

3人は戦闘態勢に入り、刀を構える。
スバルは蒼い日本刀型のデバイスを見る。
その日本刀型のデバイスには鍔が無く、その部分に水色の宝玉が埋まっており、刀身は蒼く輝いている。

「行くよ、ティルヴィングエア」
≪Ｙｅｓ，Ｉ ａｍ ｉｍｐｏｒｔａｎｔ≫

――この時、私は初めて知った。フェイトちゃん達が尊敬し、愛した人の存在を。

銀時の後姿をみて、なのはは確信する。

――その男、銀色の髪に血を浴び

「うぉおおお

「てやぁあああああああああああああああ！！」

嵐のような剣技で次々とえいりあんを間っ二つに斬る。その銀髪に斬ったえいりあんの緑色の血を浴びる。

ー戦場を狩る姿は正しく

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！」

大きく回転して下斜め右から一斉に大きく振り、一気に五匹の人型えいりあんを横一列に間っ二つに斬る。

ー夜叉

「おおおおおおおおおおおお！！」

さらに動きを止めず、銀時が嵐のような剣技で次々とえいりあんを斬り倒すと、さらに触手に向かって駆け出し、木刀を大きく横に振るうと3本の触手を一斉に斬り落とす。

「ぬぉあああああああああああああああああ！！」

桂も続くかのように、剣を素早く振り、次々とえいりあんのミミズのような触手を斬りおとし、それを踏み台にして大きく跳び、懐から『んまい棒』をだす。

「対真選組用に作り上げた、新作『んまい棒』の威力を見よ！」

そのんまい棒は烈火のように赤かった。

「んまい棒、『敵焼鬼業火（テリヤキバーガ）』！！」

んまい棒を人型えいりあん側に投げると、そこから大量の炎が発生して人型えいりあんを１０匹ぐらい焼き焦がす。

「はぁあああああああああああああああ！！」

スバルは銀時と桂とは全く違う鮮やかで神速居合剣技を炸裂させ、次々とえいりあんを間っ二つに斬る。
魔法を頼らずとも剣で戦うスバルの強さは、剣の腕だけならばわずかにシグナムの上に行く。
接近してくる５本のミミズのような触手も、刹那の瞬間移動ですぐに触手の後ろに移動し、スバルが刀を鞘に納めると……いつの間にか５本の触手はバラバラに斬られている。
そしてスバルの位地から蒼い魔法陣が現れ、そこから青白く輝く日本刀の形をした魔力剣が１０個現れると、回転して魔力を高める。

「ブルーエッジストーム！」

魔力剣はミサイル弾丸のように放たれ、数多くの触手と人型えいりあんを貫通して、１本当たり２・３体を倒す。
次々とえいりあんを倒していく中、特に銀時が桂とスバルよりも数多く倒しているのが分かる。

（す・・・すごい・・・間近で見ると、銀さんってこんなに強かったんだ。）

初めて間近で見る銀時の戦いっぷりになのはは驚きを隠せなかった。

（銀さんだけじゃない！桂さんの剣技とデバイスとは違う特殊な道

具や、それに劣らずスバルの居合を中心とした神速の如くの剣技と刀をイメージした魔法攻撃・・・けど何よりも銀さんが凄い！剣術の『型』がないって言うよりも・・・『型』が変化する剣技だ！）

あの魔導生物兵器『ゾーマ』を剣だけで倒し、変化自在の豪快なる剣を振るうＳＳランク級の実力を誇る英雄こと、『白夜叉』坂田銀時。

それに劣らない剣術と特殊道具の連係を炸裂させ、まさに『狂乱』の名に恥じない様な敵を翻弄させる戦いをする英雄こと『狂乱の貴公子』桂小太郎。

剣技と魔法をあわせた『魔法剣技』を炸裂させ、さらには刹那の瞬間移動術の人間離れした速さを合わせた剣術で敵を斬りまくるスバル・ナカジマ。

三人の強さに、なのはは驚く事しかできず、あっという間に残りは核のみになった。

しかし、その後ろから巨大なミミズのような触手が2本現れ、その口からは桜色の魔力光が大量に収束されると、なのははヤバイと感じた。

「銀さん、桂さん、スバル！あのえいりあんは私の魔力を吸収したから私の魔法が使えるの！」

っと、なのはが言うと銀時は舌打ちをする。

「ち・・・じゃあ、あれはディバイン・バスターかスターライト・

ブレイカー級の砲撃を放つって訳かい」
「この狭い空間では交わすことが出来ぬ！どうすれば・・・」
なのはの魔力はもうそんなには無く、逃げようとしてももう間に合わない。
「私に任せてください！！」
スバルがそう言うと『ティルヴィングエマ』を右手持ちに持ち替えて、ある魔法を放つ。
「ウィングロード！！」
すると、スバルの周りから2つの水色の道を宙に作られ、柱が核のところまで届く。
「銀時さんと桂さんはこの「ウィングロード」を使って核に突撃して破壊してください！あの魔導砲は私が止めます！ティルヴィングエア！カートリッジロード！！」
≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫
ガシュン×7
カートリッジを7発ロードすると、『ティルヴィングエマ』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋を描くかのように刀身を包み、超高速回転をする。
まるで風がティルヴィングエアの刀身へと集まっていくかのような勢いであり、暴風が起こって魔力の螺旋回転の出力が最大になる。
「おいィイイ！なんかお前、すっごい取って置きを持っていねェ！

？それで核を破壊してほしいんだけどォォォォ！？」
「いや・・・そんなことをすればその前にあの魔導砲に私達がやられそうなんですけど？」
スバルが苦笑して突っ込む。
そしてそれを見たなのはは、信じられないような顔でスバルを見る。
（カートリッジを7発も発動！？私とフェイトちゃんでさえも6発が限界なのに、この子は7発も発動するなんて・・・！？それほど強力な砲撃魔法を持っている！？）
もしかすれば、間違いなくなのはの『スターライト・ブレイカー』に匹敵する威力ではないかと考える。
「良し・・・援護を頼む、スバル殿！」
「じゃ・・・クライマックスと、行ってみようかァァ！！」
銀時と桂は、スバルの作った『ウィングロード』を渡って走る。
そのまま核に突撃しようとするが、巨大なミミズのような2本の触手の口からピンク色の桜色の閃光『ディバイン・バスター』が同時に放たれた。
『スターライト・ブレイカー』には劣るが、それでも喰らえば唯ではすまない。
その閃光が2人を襲う前に、スバルの砲撃魔法が放たれる。
「エア・アルテマ・ギガブレイカー！！」

最大限に溜められた魔力を収束したデバイスを突き出すと、そこから巨大な螺旋に渦巻く蒼い閃光が放たれ、凄まじい勢いで2つの『ディバイン・バスター』を押し上げると、2つの巨大なミミズの触手を跡形も無く消滅させる。
その威力は間違いなくなのはの『スターライト・ブレイカー』に匹敵する程である。
その隙に銀時と桂が核に向かってどびだす。

「行くぜ、ヅラ！」
「ヅラじゃない桂だ！」

2人が叫ぶと同時に、木刀と刀で核を突き刺すと、その勢いで衝撃が貫通して核を破壊する。
そして核は破壊されてビル内に寄生して広げられたえいりあんが次々と破裂して破壊されていく。

＊

「何アルか！？」

外で戦っていた神楽・エリザベス・月詠の3人もエーリアンの異変に気づき、足場が崩れ始めていると確信して、急いで窓ガラスに飛びつき、蹴りだして豪快に窓を割ると3人はビル内に無事非難した。
そして、踏み台とされていたえいりあんの触手の塊が次々と落ちて行く。

「どうやら、銀時と桂は無事に核を破壊したようじゃな」

煙管（きせる）を加えて口から煙を放つ月詠は少し笑って安心する。

『さすが桂さん』

っとエリザベスはそう書かれたボートを出す。

「とにかく、銀ちゃんとヅラも無事って事ね。早く2人を迎えにいくアル。」

『そうだった！』

神楽・エリザベス・月詠の3人は急いで2人を探しに行こうとするが、突如巨大なヘリの音が聞こえ出す。

3人はその音の方向を振り向くと、そこにはフェイト・ヴィータ・シグナム・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロがいた。

「おおーい、神楽ー、エリザベスー！」

ヴィータが嬉しそうに声をかけると、神楽も返事をするかのように叫ぶ。

「おおー、シグナム・ヴィータ・シャマルある！元気だったアルか！」

見慣れた3人の姿を見て神楽は喜びだす。

そしてフェイトがヘリから降りてバリアジャケットの衣装に変身して神楽に近づく。

「神楽、エリザベス、久し振り！」

10年後の姿のフェイトであるとは知らず、神楽とエリザベスはポ

カンとする。

「・・・誰アルか？」

っと神楽はそう言うと、エリザベスはフェイトの持っている『バルディッシュ』である事を気づく。

『あれって、バルディッシュじゃない？』

そうか狩れたボートを神楽に見せるエリザベスに、神楽は「あ・・・本当ネ。」っと言い出す。そして2人は10年後のフェイトが自分達の知っているフェイトであることを確信する。

「まさか・・・フェイトアルか！？」

『え・・・マジ！？』

2人がフェイトであることを驚きだし、フェイトは苦笑して顔を頷く。

＊

「ってて・・・おぉーい、大丈夫かァ……ヅラ・スバル・なのは」

「ヅラじゃない桂だ」

っと銀時は3人が無事であるかと確認すると、3人は無事のようであるが・・・スバルは苦しそうだが笑って返事をする。

「あ・・・ははは・・・何とか・・・」

どうやら、先ほどの砲撃魔法に相当の負担をかかっている。
それと先ほどと衣装が違っており、おそらくはバリアジャケットを解除して通常の和服になっているようである。
ちなみに首にはミニチュアサイズの日本刀が首飾りのようにかけられている。

「凄かったよ、スバル。さっきの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』だっけ？あんな凄い魔法を見たの初めてだよ」

スバルが最後に発動した砲撃魔法『エア・アルテマ・ギガブレイカー』は間違いなくＳ＋級はあるとなのはも認めるほどである。
しかしスバル自身は使うのはまだなれていないようである。

「実はあれ、万が一の為に覚えた魔法で・・・その・・・使えば全ての魔力を使い切ってしまう『諸刃の剣』見たいな感じなんです。」

と苦笑してスバルは説明すると、納得がいくかのように桂は確信する。

「なるほど・・・、強力な力ほど負担がかかりやすい事はまさにこの事であるか。だが・・・それでもお主は我々を守る為に危険であると承知でその力を使った訳だな」

桂がそう言うと、銀時が少し笑ってスバルに言い出す。

「銀時さん？」
「強くなったな、スバル」

銀時がそう言うと、スバルは晴れたかのような顔で嬉しく感じた。

「何かを守る為にここまで強くなれるなんて、大したもんじゃねぇか。その信念に胸にはってもっと強くなれよ……そうすりゃ、さっきのでけぇ大砲みたいな魔法がジャンジャンと撃てっからよォ」

「・・・はい！」

憧れた人物にも認められ、スバルは嬉しさで一杯だった。

「・・・あ・・・あのう・・・・・・銀さん／／／」

突如、なのはは顔を真っ赤にして銀時を見つめると、銀時はなのはの顔に振り向く。

「その・・・えっとう・・・ありがとうございます／／／」

テレながらも助けてくれた事に礼を言うなのはに、銀時は意外そうな顔で少し驚くが、すぐに笑い出す。

「おいおい、さっきまでのきつそうな顔よりも、綺麗な笑顔で笑っているじゃねぇか。そっちの方が似合ってやがる」

「ふぇ？／／／」

綺麗といわれてドキッとなったなのは。

桂は銀時にまた女が出来るのではないかと笑い出し、スバルは何やらなのはの反応に意外そうに見る。

突如、隣から数多くの足音が聞こえてきて、銀時はその音が聞こえる方法を見て見ると、１人の金髪の女性と顔合わせすると、女性は思わず銀時の名を口にする。

「銀・・・時・・・？」

名前を言われて思わずポカンとなる銀時だが、女性の髪形に持っているデバイス『バルディッシュ』を見ると、その女性がある人物である事を分かった。

「お前……まさかフェイトか！？」

「あぁ！！」

銀時に名を呼ばれて喜びだすフェイトは嬉しくなり、思わず『バルディッシュ』を落として銀時に駆けつける。

「銀時ー！！」

フェイトは銀時に飛びかかって、銀時の胸の中に飛び込んだ。銀時は思わずフェイトを抱いた。

「お…おい、フェイト…」

フェイトが突如抱きついてきて、銀時が戸惑っていた。

「クス・・・銀時・・・会いたかったよ…」

フェイトは腕に力を入れて、銀時を強く抱いた。

銀時は物凄く動揺している。子供の頃のフェイトならそうでもないが、今のフェイトは大人だ。

大きくなった胸が背中に当たる。さすがの銀時も、これには動揺を隠せない。

「ちょ・・・フェイト・・・！！」

一体どうすれば良いのか分からないまま戸惑う銀時に、シグナムが現れた。

「銀時・・・なのか・・・。」

名前を呼ばれて銀時はシグナムを見ると、少しヤバイ表情をする。
この状況をシグナムに見られたら間違いなく殺されると恐怖を感じたからだ。

「シ・・・シグナム!?・・・ひ・・・久し振りだな・・・その・・・あれだ・・・何と言うか・・・」
「銀時ぃいい!」

シグナムも思わず駆けつけて銀時に立ちついてくる。

「お前もかいぃいいい!!」

フェイトに続いてシグナムまで銀時に抱きついてきて、腕に力を入れて抱きつく。

「会いたかった」

シグナムは頬を赤く染める。
大きな胸が銀時に当たる。
フェイトとシグナム、2人の大きな胸に押しつぶされそうな感じで銀時は顔を真っ赤にして大量の汗を出す。
なのはとスバルは顔を赤くし、桂はニヤリとからかいがいがありそうな笑みを浮かべだす。

「ま…待て待て、フェイト、シグナム!と・・・とりあえず何がど

うなっているのかを説明してぇえええ！！」

予想外の展開に銀時は、動揺を抑えられなかった。
銀時のいた世界には、見た目は綺麗だが、中身が強暴だったり性格に問題がある者ばかりで、まともな女性がいない。

だがフェイトやシグナムは、見た目も綺麗で中身も普通の本当に綺麗な女性だから、こんな事をされると余計に銀時は動揺してしまうのだ。
そんな様子を、後から来た神楽は不機嫌そうな顔をして、エリザベスと月詠は興味深そうに三人を見ていた。

そして、ヴィータ・シャマル・ティアナ・エリオ・キャロはなのはとスバルと同じく、顔を赤くしていた。

スバルはティアナの姿を見て何かやばそうな顔をした。
そしてヴィータとシャマルは桂の姿を見て驚く。

「ああー、ヅラだ！」
「ヅラじゃない桂だ」

ヴィータにヅラ呼ばわりされて突っ込む桂に、ヴィータとシャマルが駆けつける。

「お久し振りです！まさか貴方もいつの間にかこの世界に来ていたなんて・・・。」
「ヴィータ殿にシャマル殿、お主らも元気そうで何よりだ。」

久し振りのヴィータとシャマルとの再会に桂も笑い出す。
かつては共に、『闇の書』の蒐集に強力をしあった仲間同士であり、

桂にとっても掛け替えのない仲間である。

「はやてもヴラと会ってないから悲しそうな顔をしていたぞ。せっかくだから会いに来てやれよ。」

ヴィータは桂にはやてに会わせる事を言いだす。
はやてにとって、桂も自分の為に力を貸してくれた恩人の1人であり、最も信頼する人物であった。

「ウム、八神殿もさぞかし成長をしているから、お小遣いに５０円をやらなければな。」
「やらんで良いわぁあ！！」

ドカ！

「ごふぉおお！！」

桂のクールボケに、ヴィータがグラーフアイゼンで桂の頭を叩いた。

「落ち着いて、ヴィータちゃん！」
『暴力はよくない！』

怒り任せのヴィータを抑えるエリザベスとシャマルだか、モロにグラーフアイゼンを喰らったのか、桂の頭からは大量の血を出していた。
ティアナ、エリオ、キャロの新人フォアード隊は見慣れない光景に苦笑して呆れるしかなかった。
そんな中、ティアナは後ろでこっそりと退場しようとするスバルの姿を見てスバルを呼ぶ。

「スバル？・・・アンタ、スバルなの！？」
「ギク！？」

ティアナに呼ばれて驚きだすスバル。
フェイト、シグナム、ヴィータ、シャマル、エリオ、キャロもスバルの方を注目すると、スバルはやっちゃったかのような顔で苦笑いする。

「あちゃ～、ばれちゃった・・・かな？」
「スバル！どうして、アンタがここにいるのよ！？」

まさかの再会にスバルもティアナも驚きを隠せなかった。

第四訓：原作を元にした小説は大抵は設定が大幅に変えるのが多い（後書き）

黒神「今回は、この小説のスバルが使用するオリジナルデバイス『ティルヴィングエア』の紹介をします。」

ティルヴィングエア　日本刀型のデバイス（使用者『スバル・ナカジマ』）

スバルが使用する日本刀型のアームドデバイスで、通常『風の魔剣』と呼ばれ、最速のスピードを誇る。『ベルカ式カートリッジシステムを搭載し、シグナムの『レヴァンティン』と対極になる性能を持った。刀身は青く染まっており、鍔がない代わりにその部分には青白く輝いている宝玉が埋まっている。ベルカ式カートリッジシステムで、手動での直接装填であり、一度の最大装填数は7発が可能。しかし、一度にカートリッジを7発ロードをするとスバル自身の魔力が全て使いきってしまうという諸刃の剣の性能を持っている。ちなみに鞘自身にもベルカ式カートリッジシステムが付いており、一度の最大装填数は４発が可能。

待機フォルム

ミニチュアの日本刀の形状。柄の先から鎖で繋いで、首に掛けている。

ティルメギ・ツインセイバーフォルム

『ティルヴィングエア』の鞘が、大刀に変わりだして、外見が『レヴァンティン』の様な銀色の剣に変わり、スバルの二刀流が炸裂する。カードリッジ二個を消費する事で使用可能。これは銀時がゾーマと闘った時に銀時が木刀と『レヴァンティン』で戦う所を再現した形体であり、スピードは劣るが、パワーとスピードが共にバランスが取れた剣術の型が可能になる。

ティルミド・ギガエアードテンペストフォルム

「ティルヴィングエア」の柄に刀を納める鞘を合わせて、蒼く輝く超大型剣となる。刀と鞘のカードリッジをそれぞれ二個を消費する事で出来る。攻撃力は絶大に誇り斬撃は高威力であるぶん、非常に重くて扱いづらく、スピードがもろに堕ちてしまうという欠点がある。だが、一度に振れば烈風の如くの風圧と斬撃が同時に放つ事ができる。これは、フェイトの『バルディッシュ』の超大型剣の≪ライオットザンバー・カラミティ≫を参考にした超攻撃型となる。だが、神速の剣技の戦いを中心とする為、滅多な事には使われない。

エヌマ・ティルテンペスト・ギガフォルム

『ティルヴィングエア』の最大の攻撃形態。カートリッジを7発ロードすることで、一度に己の中にある魔力を全て出し切る事ができる『ティルヴィングエア』の最強形体。これはスバルの禁断魔法にして最強の『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を発動する為の形体である。

名前の由来は、北欧神話に出てくる魔剣『ティルヴィング』である。

シグナム「なんと言うか・・・とても新人が使用するようなデバイスだな」
黒神「おそらくはスバルがシャーリーに頼んで作らせたものでしょう」
シグナム「そんなんで作れるものなのか？」
黒神「そうかもしれませんね。あ・・・そろそろ次回予告」

シグナム「まぁ良い・・・次回『巻き込まれてしまった状況を回避する為にやったことなのに、時には有名な事にされている事がある』テイクオフ」

第五訓：巻き込まれてしまった状況を回避する為にやったことなのに、時には有効な場合もある

黒神「どうでした？久し振りのフェイトとシグナムの再会は？」

銀時「いやー、シグナムは変わっておらず、フェイトはかなり変わっていたな。まさか、あそこまで美人になっていたとはなぁ」

黒神「我等がヒーロー、銀さんも超ビックリ。そして、『両手に花』って言うのはまさにこのことですね！」

銀時「おーい、やめてくれない？人を二股しているという言い方」

黒神「いやー、すみませんね。しかし、今回は二股以上になるかもしれませんね？」

銀時「おーい、それはどういう意味だ？」

黒神「と言う訳で、『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります！」

銀時「だから、無視するなって言ってんだろーがー！！」

黒神「ごふぇらばあああ！！」

銀時の飛び蹴りが作者に炸裂した。

第五訓：巻き込まれてしまった状況を回避する為にやったことなのに、時には有効な場合もある。

機動六課部隊長オフィス。
デスクに座っているのは、部隊長の八神はやて。１９歳。
隣にはリインフォースがいる。
ドアが開かれ、銀時、フェイト、桂、シグナム、なのは、シグナム、スバルが入ってきた。

「桂さん、銀ちゃん！ホンマに桂さんと銀ちゃんや！」

銀時の姿を見たはやては、思わず立ち上がった。

「銀時！」

リインフォースも銀時を見た。会えた嬉しさで笑顔になる。

「おお、八神殿ではないか！随分と大きくなって・・・お小遣いに６０円をやろう」
「いちいちやらんで良い！」
「それとなんで１０円増えているの？」

早速の桂のクールボケにフェイトとシグナムは突っ込みだす。

『桂さん・・・せめて１００円に上げてあげましょうよ』

とエリザベスはボートを出すと・・・

「増えれば良いって問題じゃない（よ）！」

2人の声がピッタリに会い、突っ込みだす。
銀時はリインフォースを見て久し振りに声をかける。
「リインフォースは変わってねーな」
「私は、年はとりませんから」
リインフォースは笑顔で返事をした。
すると、
「わあ！銀さんと桂さんです！」
三十センチくらいの小さな少女が、銀時と桂の前に現れた。長い水色の髪で、見た目はリインフォースにそっくりだ。
「うおっ！なんだコイツ！？リインフォース！？ちっさいリインフォースだ！」
「何と！？」
小さなリインフォースを見て、銀時と桂は驚いた。
「その子は『リインフォース・ツヴァイ』って言うてな。リインフォースの妹や」
はやてが銀時に教えた。
「え？妹？マジでか！？」
リインフォースを見ながら、銀時は尋ねた。

リインフォースは、少し照れた感じで頷いた。

「よろしくです、銀さん！桂さん！」

無邪気な笑顔で、リインフォース・ツヴァイは挨拶した。

「お…おお」

「うむ、こちらもよろしく頼む」

少し戸惑いながら、銀時は返事をし、桂はしっかりとした態度で返事をする。

リインフォースの妹？性格が全然違うんですけど。めっちゃ明るいんですけど。

まじまじとリインフォース・ツヴァイを見つめる。

「その子の事は”リイン”って呼んであげてな」

はやてが言った。

二人がごっちゃにならないためか。て事はリインフォースの方は、そのままリインフォースでいいワケか。

銀時は納得して頷いた。

「まぁ立ち話もなんやし、座ろうか」

はやてが、デスクの前にある来客用のソファーに座るよう促した。

銀時達はソファーに座った。

「それにしても、桂さんと銀ちゃん全然変わっとらんな」

ソファーに座りながら、はやてが言った。

「銀時達は過去から来たみたいなんだ」

フェイトが答えた。

「過去から？」

「装置が制御不能になったみたいで、誤ってこの時代に来ちゃったみたいなの」

今度はなのはが説明した。

なるほど、とはやては頷いた。

「それにしても八神殿、此処は何処か教えてもらいたいのだが？」

桂は、来たときから疑問に思っていた事を聞いた。

フェイト達が制服を着ているところから推測すると、管理局か何かの部隊みたいだ。

「ここは古代遺物管理部　『機動六課』。ロストロギア関連の危険な任務を扱う部隊や」

はやてが答えた。

「はやてが立ち上げたんだよ」

「えっ！？はやてが！？」

フェイトの言葉に銀時は驚いた。

「って事は、お前が一番偉かったりすんのか？」

「うちは機動六課の部隊長や」

はやてが胸を張って言った。
銀時は驚いた。まさかはやてが隊長とは。世の中わからないものだ。

「おお、それは大した者だ！八神殿の努力と仲間の力が合わさった結果というわけか！」

感心したかのように驚く桂に、はやては少し顔を真っ赤になる。

「ふふ・・・おおきに、桂さん／／／」

凄く嬉しそうな顔をするはやてに、フェイトとなのははポカンとなる。
そして銀時はシグナムに小さな声で話しかける。

「おいおい、はやてってもしかすればヅラの事を・・・（ニヤリ）」

ニヤニヤと笑い出して話し出す銀時にシグナムは、

「ああ、銀時の考えているどおりだ。主は『闇の書・ゾーマ事件』以来、桂に対する思いが恩人以上になっている。最も、人妻好きである桂に、ヴィータ・シャマル・ザフィーラは知らないだろうがな」

シグナムはどうやら桂に対するはやての思いを気づいたようである。
しかし、桂自身は気づいてはいないようだ。

「知っちまったら…3人はヅラに何かするかもしれないかもな……とりあえずヅラ達には内緒にしちゃおうぜ」
「そうだな……特にヴィータが知ってしまったら桂が恐ろしい目に合うかもしれないな」

２人は、はやてが桂に好意を持っている事を誰にも言わないことを決意する。

「それよりスバル……私の方からも聞きたい事があるんだけどええか」

さっきまでとは違って真剣な表情ではやてはスバル声をかけた。

「あ…はい！」

思わず返事をするスバル。

「なのはちゃんから聞いたんやが・・・相当の活躍をしたようやな。それに、ゲンヤさんからもスバルの噂は聞いとるよ」

「お父さんから！？」

はやてが自分の父の知り合いである事に驚きだすスバル。

ゲンヤ・ナカジマ
スバルの父で陸士１０８部隊部隊長。
元ははやての師匠であり、逆転した現在でも「信頼できる師匠」として慕われている。
その為、個人的な関係もあって、部下を機動六課（カルタスとギンガ）の捜査協力にあてることになる。
実は先祖が地球の日本出身で、日系人であり、魔力は０である。

「剣術も魔術もとても新人魔道士とは思えへんほどの強さを持って

いて、しかも魔法術式・古代ベルカ式／魔導師ランク・陸戦ＡＡＡ＋ってほぼ副隊長レベルは行っている。訓練校を終えた後は1人で山に篭って剣術の修行を励んどるってね」

新人魔道士でも？1の実力を持つと言う噂は聞いたことがあるが、スバルのずば抜けた戦闘力は噂以上である。

はやて自身も正直驚いていた。

「せやけどな・・・何で勝手にガジェット達と異性生命体と戦ってたんや？」

はやてがそう言うと、スバルは慌てた表情をする。

「そ・・・それは、なんか美味しいアイスクリーム屋があると聞いて、第3起動高層ビル向かったんですけど、まさか閉店だとは思わなかったので・・・山に戻ろうとしたら突然ガジェットたちに襲われて撃退しながら逃げようと思ったんですけど・・・なんかえいりあんと言う異性生命体に襲われて、出口が見つからなかったので、出口を探しながらえいりあんと戦ってたら偶然にも銀時さんと桂さんと合流しました。」

正直に話すスバルに、はやてはジッとスバルの眼を見つめる。

そしてスバルが嘘を言っていない事を確信する。

「事情は分かった。せやけどさすがにデバイスの無許可使用はやばいし・・・本来だったらスバルは逮捕されるんやで？」

「えええぇぇぇ！そうなんですか！？」

絶叫して青ざめるスバルだが、はやてはニコリを笑ってスバルに話しかける。

「せやから・・・もし良かったら　フォワード部隊に入らへん？」
「え？」
まさかのスカウトにスバルは唖然とする。
「もちろん、ただ訓練を受けるだけじゃなく、ウチのフォワード部隊の新人達の起爆剤として欲しいんや」
「スバルさんのようにスバ抜けた実力者がいれば、他の人たちも負けられない勢いで成長しますしね♪」
はやてとリインはそう言う考えでスバルにフォワード部隊に入ることを進める。
フェイト・シグナム・なのはも賛成のようであり、スバルは迷わずに賛成する。
「分かりました・・・私でよければ入らせていただきます。」
こうして、スバルはフォワード部隊にはいる事を決意した。
＊
食堂。
ティアナ達フォワードメンバー、ヴィータ、シャマル、神楽、月詠は一緒に食事をしていた。
既に互いの自己紹介は済んでいる。
「神楽さんって、銀時さんと一緒に『ジュエルシード事件』と『闇

の書・ゾーマ事件』を解決した、あの神楽ですか！？」

神楽の名前を聞いたエリオは驚いた。

「そうアル。」

っと、神楽は軽く返事をして山盛りのご飯ををおかわりした。

「す・・・凄い人なんですね」

キャロも驚いてる。

過去のジュエルシード事件と闇の書・ゾーマ事件の話で、ティアナ達は盛り上がっていた。

神楽は話しながらも大量のご飯を頂いていた。その量は半端なく１０人前は軽く超えている。

一体どんだけ食えるのであるかとティアナ達は疑う。

みんなが楽しんで話していると、銀時達がやってきた。

「みんな、事件解決お疲れ様。明日の訓練も頑張ってな」

「はい！」

はやての言葉に、フォワードの三人が応えた。そして、新しく仲間に入る銀時達を紹介した。

「今後、ウチらの仲間になる新しい新人と、知ってのとおりうち等の世界を救った英雄を改めて紹介するな」

「どーも。坂田銀時です。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

緊張した様子もなく、ダラけた声で自己紹介する。
次に桂が挨拶する。

「俺は桂小太郎。好物はそばだ」
「だからいちいち好物をいうんじゃねぇ（ないアル）！！」

神楽とヴィータが、桂の顔面に飛び蹴りを食らわせた。
ティアナ・エリオ・キャロの3人は銀時のだらけた挨拶と桂のクールボケに自分達の中の英雄のイメージが崩れ落ちていく。
そして最後にスバルが挨拶する。

「わ・・・私、スバル・ナカジマです！新しくフォワード部隊に入りましたので、これからもよろしくお願いします！」

銀時と桂とは違って丁寧に挨拶をするスバルに、エリオとキャロも挨拶する。

「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします！」
「わ・・・私はキャロ・ル・ルシエです！こちらは使役竜のフリードです！」
「きゅいい。」

そして最後にティアナが立ち上がって、挨拶をする。

「ティアナ・ランスターです。どうぞよろしくお願いします。」

普通に挨拶をすると、はやては銀時達に3人の新人フォアード隊の説明をする。

「桂さん、銀ちゃん、スバルに言っておくな。この3人もスバルに劣らない優秀な新人なんやで。エリオはまだ１０歳にも関わらずに魔導師ランクは陸戦Ｂで、階級は三等陸士。使用デバイスは槍型のアームドデバイス『ストラーダ』。そんでキャロも階級は3等陸士。使用デバイスはグローブ型のブーストデバイス『ケリュケイオン』。レアスキル『竜召喚』を持つ召喚魔導師なんや」

キャロの竜召喚に驚きだす銀時。

「マジでか!?え・・・何、キャロって竜を召喚できるの!?」

「は・・・はい」

竜を召喚する事ができるキャロに、銀時はある頼みをする。

「お願い、キャロ!今すぐ竜召喚で「ドラ○ンボール」の「○龍」を召喚して!そうすれば「かめ○め波」が撃てる願いが叶える!」

「えぇー!?」

突如、無茶な頼みに驚きだすキャロに、ティアナが立ち上がる。

「なんですか、その「○龍」って!?それより「かめ○め波」ってなんなんですか!?」

訳分からないティアナは銀時につっこみだす。キャロは銀時の無茶なお願いに戸惑っている。

その光景をなのは達は唖然とし、なのは達は苦笑するしかなかった。

「それは良いね!私も卵がけご飯を１００杯は食べたいアル」

「まだ食べる気か!」

今度は神楽にティアナが突っ込みだすと、続く桂が話に参加する。

「ちなみに俺は最高級のそばを頂きたい。」

「どんだけそばが大好物なのよ！！！！」

ティアナは額に血管を浮かべて、ツッコミだす。

『定春に負けないようにもっと目立ちたい』

「アンタもいちいち願い事を言うな！」

ティアナは怒鳴った。それ以前にエリザベスの存在に突っ込みたくなりそうだったが、あえて関わらないほうが良いと考えた。

「わっちは金剛石で作られた超最高級の煙管を頼んで見たいもんじゃ」

「それもはや煙管の常識を破っているじゃないの！！」

とてもボケキャラとは思えない月詠のボケに反応するかのように怒鳴って突っ込むティアナ。

５回も突っ込んだ事でティアナは息切れしている。

笑いながらも、はやてはティアナの紹介をする。

「そんでティアナの階級は二等陸士で、使用デバイスは拳銃型のインテリジェントデバイス『クロスミラージュ』。陸士訓練校での成績は首席卒業をしておるんや」

「は・・・首席卒業って何？」

なにやら首席卒業の事を知らない銀時に、桂が説明する。

「なんだ銀時。首席卒業の事も分からぬのか？首席卒業というのは

成績が誰よりも優秀であり、頂点に立った生徒が卒業する事だ」

桂は銀時に首席卒業の意味を教える。
そしてはやて、リインフォース、リインは初めて見る月詠に近づいて挨拶する。

「はじめまして。機動六課部隊長、八神はやてです」
「部隊長補佐のリインフォースです」
「リインフォース・ツヴァイです！」

三人が自己紹介した。

「わっちは月詠じゃ」

月詠も自己紹介した。
そしてエリオは何か話したい事があるのか銀時に近づく。

「あの、銀時さん！」
「ん？」
「少し…いいですか？」

遠慮がちに銀時に聞いた。

＊

銀時とエリオは外に出た。

「銀時さん、貴方の噂はフェイト隊長から聞いています！」

「噂？」

一体どんな噂なのか銀時は聞いて見ると、エリオはその噂を銀時に言った。

「魔法が使えないけど、『ジュエルシード事件』、『闇の書・ゾーマ事件』を剣だけで解決し、その剣術は稲妻の如く変化して相手を翻弄し、その鬼神の如き強さから『白夜叉』・『白い剣聖』・『エース・オブ・シルバーサムライ』と呼ばれ、管理局内でも有名で知らない人は殆どいない、伝説の武神。」

「え？何？俺ってそんなに有名なの？」

真剣に説明するエリオに、銀時が尋ねた。

「はい！なにせあのオーバーSランクを超える強さを誇ったゾーマを倒して、世界を救った英雄ですから！」

興奮しながらエリオは答えた。

両拳を握って、興奮を抑えられないでいる。そんでもって、銀時に尊敬にも似た眼差しを向けている。

銀時に尊敬の眼差しを向ける者が、この世にいたとは驚きである。

「え？マジで？ちょっ…その目やめてくんない？あんまり見つめられると、照れちゃうから」

銀時は嬉しいような困ったような、複雑な表情を浮かべた。

「それに、銀時さんの強さは先ほどの『えいりあん』と言う奇妙な異性生命体との戦いで見させていただきました。銀時さんだけじゃなく、桂さんに神楽さん、エリザベスさんにあの月詠さんって言う

女性も魔法なしであんだけ凄い戦いっぷりをしましたから、今度いつか銀時さんの世界に行って見たいです。」

もしかすれば、銀時の世界に行けば真の強さとはなんなのかを理解できると確信してなのか、銀時の世界に少し憧れを持つエリオ。

だが、銀時はそれは辞めた方が良いと考える。

「エリオ君、確かに俺の世界の人物は曲者ぞろいが多いかもしれないけど・・・でも時にはおっかねぇ人物が山ほどいるんだぞ。例えば、地味メガネで突っ込みだけは超一流で、アイドルオタクになっているムッツリスケベのダメガネ。卵で『ダークマター』と呼ばれる『可愛そうな卵』を作れる殺人料理人の極悪女。料理にマヨネーズをかける異常な味覚を持ったニコチンマヨラー。警官なのにしつこく女にストーカーをするゴリラストーカー。相手が困っているのにそれをどす黒く楽しむドS。何度職業を取ろうと、落とされるもしくはクビにされ続けるマダオ。しつこく名前を間違えて何度も仕事をサボる大ボケ馬鹿。さらには家賃払え払えっとしつこく言ってきて常識を超えた身体能力を持つスナックババァなど・・・他にも常識を破った人物だって俺の世界じゃ当たり前のようにいるんだぞ」

「そ…それは凄いですね…」

銀時達の世界の説明を聞くエリオは、銀時の世界が予想以上に凄いって事に苦笑する。

「でも・・・なんだか楽しそうな感じですね」

「そうか？」

普段、色々と巻き込まれてトラブルを起こされる上、酷い目に何度も合ったため、それが楽しそうである事に不思議に思う銀時。

むしろ辛いとしか言いようがないのである。

「・・・それと・・・僕は銀時さんに話しておきたい事があるんです。」

ちょっと悲しそうな表情をするエリオは銀時に重大な事を話し出す。

「なんだ、話したい事があるなら言ってみろ。」

銀時は聞くだけ聞いてみようと考えるが、それはとんでもない事である事に気が付く。

「・・・実は僕、フェイトさんと同じプロジェクトFによって生み出された人造生命体なんです。」

「な…!?」

銀時は目を見開いて驚愕した。額から汗が流れる。

フェイト以外にも、人造的に作られた生命体が存在したなんて事に。

エリオの話からすれば、モンディアル家の病死した一人息子のクローンである。

。ある時両親と引き離されたが、その際に事実を突きつけられた途端に両親が抵抗をやめてしまったこと、また研究施設での非人道的な扱いから一時期重度の人間不信に陥っていた。

その為、当時のエリオは誰も信頼することができず、自分自身も信じることが出来なかった。

誰にも信頼することができなくなったエリオの前に現れたのが、フェイトだった。

フェイトによって救い出され管理局の保護を受けてからも荒みきっ

ていたが、魔法を行使して暴れるエリオに対して行ったフェイトの体を張っての真摯な説得と献身をきっかけに急速に立ち直っていく。
そして、フェイトから銀時の話を何度も聞かされた。
自分が最も愛した男であり、『プロジェクトF．A．T．E』の前者の方の産物として生み出されたクローンである自分でも、命を張ってまで守ってくれて、自分だけじゃなく母・プレシアをも救ってくれた恩人である事を。
そして自分自身も銀時に尊敬する気持ちを持ったのであり、一度会ってみたくなったのである。

「だから、僕も銀時さんみたいに、大事なモンを護るという信念を持って強くなりたいです。クローンとしてじゃなく、1人のエリオとして。」

真実を話したエリオ。
当時は自分自身をも信じることが出来なかったが、それでもフェイトに出会ったことで人間のような心を取り戻したエリオを見て、銀時はエリオならその思いが出来ることを確信した。

「出来るさ、お前なら。」

銀時は軽くエリオの頭に右手を乗せ、笑いながら言い出す。

「エリオもフェイトがいたから、誰かを信じる気持ちを取り返して強くなっているんじゃねぇか。・・・だから、誰かや自分も信じる気持ちさえ失わなければ、絶対にテメェ自身の大事なモンを護れると思うぜ」
「・・・・・銀時さん」

「それによ・・・俺の知り合いであるチンピラ警察共の中に、1人お前と同じ思いをした奴がいるんだぜ」

当時のエリオは誰も信じられない事を聞いて、銀時はある人物を思い出してエリオに話し出す。

伊東鴨太郎（いとうかもたろう）

真選組に入隊してからまだ浅いが、文武両道で能力的にかなり優れているため参謀の地位を任されており、北辰一刀流免許皆伝の凄腕剣剛であり、その実力は土方に匹敵する程の実力を持っている。
近藤をはじめ真撰組の約半分は『先生』と呼ばれている。
だが鬼兵隊と手を組んで新撰組を乗っ取る計画をしていたが、その真の目的は自分を認めてもらう為である。『理解されない』事であると考えており、真撰組に入ったのは自分の『器』を人々から認めてもらう為であった。
そして本当に欲しかったものは、仲間と一緒にいられる『絆（いと）』であるのだが、それをも忘れていた。
それは幼少時代、学問・剣術も見事で『神童』とも呼ばれていたが、双子の兄の病ばかりに関わっていた両親からは構ってもらえず、誰にも認めてもらえなかった。
それでも誰かが自分を認めてもらえると信じ、ひたすら努力をし続けていたのだが、そんな鴨太郎の気持ちを周囲の者達は理解するどころか、ますます鴨太郎に逆恨みに等しい妬みを抱くばかりであった。
このトラウマから、『孤独』と『一人』を嫌うようになり、自分や誰にも信じることが出来なかった。
それは、別の意味でエリオに似ている感じであった。

その為、近藤と土方を暗殺するために『鬼兵隊』と手を組んだが、真選組を壊滅させる為の捨て駒として利用されたのである。
だが裏切ってもなお、己に救いの手を差し伸べる近藤達の姿を目の当たりにした事で、本当に欲しかった『絆(いと)』の事を思い出す。
だが死の寸前まで追い込まれ、土方との決闘により倒され、裏切り者ではなく真選組の隊士として、後悔も無くこの世を去る。

「結局そいつは死んじまったけど、結果的には孤独に死ぬことは無かったわけだ。それに比べりゃ、エリオはまだ幸せ者だと思うぜ。」
空を見上げてエリオは伊東と比べてまだマシであると良い出す。

「大きな事件を起こす前にフェイトに会ったお陰で、今もこうして立派に生きているしよ。・・・だから、お前はお前自身として頑張って生きろよ。」

エリオにそう言い、中に向かうなか、エリオは銀時の後ろ姿を見て銀時の名を叫ぶ。

「銀時さん！」

エリオに呼ばれて足を止める銀時。

「僕、頑張ります。その伊東さんの分まで生きて、大事な人を護れるぐらいに強くなります！」

エリオはそう言うと、銀時は笑って振り向かずに手を振るいながら去っていく。そしてエリオの中で、また1つ強くなる目的ができた

のであった。

＊

中に戻った銀時は、フェイトに部屋へ案内された。
泊まるアテがないので、銀時達は機動六課の隊舎に泊まる事になった。
そしてフェイトは案内を終えた後、自分の部屋に入ると、そこにはベットに座っているなのはがいた。

「なのは、どうしたの？」

いつもと様子が違うなのはにフェイトは声をかける。
ちょっと顔を真っ赤に染まっている為、何か様子がおかしくなったようである。

「フェイトちゃんに、どうしても話しておきたいことがあるんだ／／／」

顔を真っ赤にしながらもなのははフェイトにどうしても話しておきたいことがある。

「銀さんの事なんだけど・・・／／／」
「銀時がどうしたの？」

なのはが銀時の事で話がある事に珍しく感じるフェイトだが、なのはの口からとんでもない事を聞き出す。

「私・・・銀さんの事を・・・好きになっちゃったみたいなの／／／」
「・・・・・・・え？」

今、なのはの口からとんでもない事を聞き出すフェイトはしばらく唖然とする。
そして十秒後に頭の中で大爆発するかのような驚きを表す。

「えええぇぇぇ

その為、なのはを始め、銀時の『白夜叉』としての強さを知らないものは数多い。

しかし、なのははあの寄生型エーリアン戦で見た白夜叉と化した銀時の姿を見てようやく分かった。
それ以来、なのはの頭の中には銀時のことしか浮かばなかった。

「でも・・・・・なのはにはユーノがいるんじゃ？」

フェイトはユーノの事をなのはに聞き出す。

かつて、なのはのパートナーとしてなのはのサポートに入った少年、ユーノ・スクライア。
遺跡の発掘を生業とするスクライア一族の出身で、自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によって散らばってしまったことに責任を感じ、独自にその回収を行っていた。封印に失敗して重傷を負ったところをなのはと出会い、一命を取り留める。
その後の成り行きから彼女に協力を申し出、「レイジングハート」を託した。
なのはを魔導士として導かせた張本人である。

そんな彼は、今ではなのはを1人の女性として愛しているようだ。
だが、なのは自身は親しい友人程度であった。

「ユーノ君は大切な仲間で友達なんだけど・・・別に好きって程じゃないかな？」

とんでもなく残酷な事を無意識に言い出すなのはに、フェイトはユーノがそれを聞けばどれだけのショックを受けるのだろうか想像できなかった。

（ユーノには・・・黙っておこう）

「だから・・・今日からライバルって事だね／／／」

その意味は、なのはも銀時争奪戦に入ってしまう意味である。

まさか、なのはが銀時に好意を持つ事は予想できなかったフェイトはどういえば良いのか、分からないままであるが・・・彼女の口からは思わず・・・

「わ・・・私だって負けないもん」

その言葉しか口にだせなかった。

＊

翌日、訓練場。

沢山のビルが並ぶ所に、ティアナ達はいた。

訓練の内容は、自律行動型のロボット『ガジェットドローン』をフォワードの三人で倒すというものだ。

ティアナは銃型のデバイス『クロスミラージュ』で狙い撃ちする。

キャロは、錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止める。エリオの槍型デバイス『ストラーダ』がガジェットを貫く。フリードも炎を吐いてガジェットを攻撃する。

フォワードの三人は、それぞれの魔法を駆使してガジェットを破壊していく。
銀時達は、なのは達と一緒に屋上から訓練の様子を見ている。
スバルも、新人としてティアナ達はどんな訓練を受けているのかをまずは見学している。
やがて銀時が口を開いた。

「うん。これ魔法じゃねーな」

神楽、桂、エリザベス、月詠以外の全員が、思わずコケそうになった。

「えっと…一応魔法なんですけど」

ハハハ、と苦笑しながらなのはが言った。

「いや機械使っているアル。あれ見ても，魔法ですって言われてもピンとこないネ。」

呆れた表情で神楽が言った。
すると桂がカメラ目線になり、

「次回から『機動少女メカニックなのは』スタート。皆、刮目せよ」

キリッとした顔で言った。

「いや、勝手にタイトルを変えたらマズイだろう」
「それにカメラはねぇよ」

月詠とヴィータがツッコんだ。

なのは達は力無く笑った。

「そうだ！」

なのはが何かを思いついた。

みんなの注目がなのはに集まる。

「銀さん達も訓練してみませんか？」

「は？」

なのはの提案に、銀時達は片眉を上げた。

第五訓：巻き込まれてしまった状況を回避する為にやったことなのに、時には有効な場合もある

訓練を受ける銀時達。

スバルがあの人物と対戦！

そして、なのはの思いが銀時に広げられる。

スバル「次回、『同じタイプを持った同士での関係では、片方は対抗心を燃やしやすい』テイクオフだよ♪」

第六訓：同じタイプを持った同士での関係では、片方は対抗心を燃やしやすい

銀八「３年Ｚ組ー！」

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。ホームルームをやる前に、転校生を紹介する」

スバル「は・・・始めまして！スバル・ナカジマです！」

ティアナ「ティアナ・ランスターです。どうぞよろしく。」

エリオ「エリオ・モンディアルです！皆さんよろしくお願いします！」

キャル「わ・・・私はキャロ・ル・ルシエです！こちらは使役竜のフリードです！」

フリード「きゅいい。」

銀八「それじゃあ四人と一匹は適当に席に着け。今回は紹介だけであり、別に何もなし！以上！！」

フェイト「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。』

第六訓：同じタイプを持った同士での関係では、片方は対抗心を燃やしやすい

銀時はイザという時には頼りになるが、普段はやる気の欠片も見せない男である。
だから、なのはに『訓練をしてみませんか？』と言われた銀時は、

「んなメンドくせー事やってられっかよ」

と心底メンドくさそうに断った。
だが、銀時の性格を知っているなのは達は、これくらいでは諦めなかった。
ちゃんと奥の手を用意してある。
なのはがフェイトに目配せし、フェイトは頷いた。

「ねぇ銀時」

フェイトが声をかけた。

「何だ？」

銀時は、絶対に訓練なんてやらねーぞ、というような顔をする。

「訓練してくれたら、私がチョコレートパフェを好きなだけ奢ってあげるよ」
「テメーらァ！俺達の活躍、目に焼き付けとけ！」

と、わずか一秒で銀時は心変わりした。
桂、神楽、エリザベス、月詠は呆れてため息をついた。

「武士たる者他人の誘惑に負けるとは・・・・銀時、貴様も堕ちたな」

桂は銀時の誘惑の弱さに強い呆れ感を持った。
そんな桂の前にはやてが言う。

「まぁまぁ。桂さんも訓練してくれたら、うちがそばを好きなだけ奢ってあげるし」
「魔導士達よ！武士の魂、その眼で刮目せよ！」

銀時に負けない誘惑の弱さで、わずか一秒で心変わりした。
3人は銀時と桂の誘惑につられたその姿に強く呆れた。

フォワード一同の訓練を終わりにし、銀時達もガジェットを倒す訓練をする事になった。

＊

スバル達は、なのは達と一緒に屋上に来ている。
スバルは内心わくわくしていた。これから、あの憧れの銀時の訓練が見られるのだ。

「楽しみだな！」

スバルは、本当に楽しそうな笑みを浮かべてる。
実際、スバルはあのエーリアン戦で銀時と桂と共に戦っていたが、そんなにその眼に活黙しておらず、ちゃんとこの眼で見て見たいと思っている。

エリオとキャロも、銀時達の訓練がどのような者なのか楽しみにしていた。
一方ティアナは、それほどテンションは高くはなかった。

下にいる銀時達は、なのはからの開始合図を待っていた。

「何故わっちまで、訓練に参加しなければならんのじゃ？」

月詠は一人納得がいかなかった。

「ままま。いいじゃねーか。訓練すればチョコレートパフェが食えて、みんなが幸せになれんじゃねーか」
「うむ、そばも食い放題となれば、まさに極楽の幸せの瞬間であろう」
「それは、ぬしらしか幸せになっとらんぞ」

銀時と桂を睨みながら、月詠がツッコんだ。

「でも見ているだけじゃつまんないアル。私も付き合ってやるね」
『たまには運動するのも良いですし』
神楽も拳をボキボキと鳴らし、エリザベスは桂の隣でボートを構える。

「みなさーん。準備はいいですか？」

屋上にいるなのはが聞いてきた。

「いつでもいいぜ」

「かかってくるアル」
「こちらの準備は万全だ」
『ＯＫ！』
「不本意だが、まぁよかろう」

五人は返事をした。
すると、五人の前に四十体のガジェットが現れた。

「襲い掛かるガジェットを１０分以内に破壊。それじゃ、ミッションスタート！」

なのはが開始の合図をする。
四十体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。
三体のガジェットが銀時に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放った。
銀時はガジェットの前から消えた。

「遅せぇ」

一瞬でガジェットの横に移り、木刀『洞爺湖』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。
三体のガジェットは一瞬で横真っ二つに斬られた。
すかさず銀時は、近くにいるガジェットを縦に斬った。

「早い！？」

フォアード部隊達は驚いた。
動きが素早く、ガジェットを木刀だけで切り裂いているのだから。

「はいぃイイ！次ぃイイ！！」

銀時は次々とガジェットを破壊していく。

「動きが鈍い！」

『なめとんのかゴルァア！！』

桂もガジェットの攻撃を避け、銀時に続くかのように複数のガジェットを次々と斬り、その隣でエリザベスもボートで剣を振り回すかのような勢いで桂に遅れないようにガジェットを破壊する。

「ほぁちゃあああああああああああああ！！」

その反対側に、神楽は傘を豪快に振り回してガジェットを粉砕し、時には殴ったり蹴ったりとしてガジェットを破壊し続ける。

そしてガジェットを踏み台にして高くジャンプし、落下加速を利用して傘を大きく振るうと、一気に五体のガジェットを押しつぶすかのように破壊する。

月詠は複数のクナイを五体のガジェットに向けて放った。ガジェットは障壁を張ってクナイを防ぐ。

「後ろがガラ空きじゃ」

ガジェットの後ろから、月詠の声が聞こえ、同時にクナイが放たれた。

クナイは障壁が張られていないガジェット達の背中を貫き、中の動力炉を破壊した。

銀時と桂が三体のガジェットを斬り、その反対側に神楽、エリザベス、月詠がガジェットを5体破壊する。

訓練が始まって一分も経過しない内に、四十体のガジェットは全て破壊された。

訓練の様子を見ていたスバル達は呆然となる。
銀時達は武器をしまった。

「チョコレートパフェゲットだな」

銀時は満足そうに笑っている。

「私も後でなのはちゃん達にすこんぶを奢ってもらうアル」

後ですこんぶを奢らせようと神楽は考える。

「えいりあんに比べればガジェットもたいした事はないな」
『全くです』

桂とエリザベスは物足りないと言った感じである。

「だからわっちは乗り気じゃなかったんじゃ」

月詠は再び煙管を口にくわえる。
五人とも、まだまだ全然余裕である。

「やっぱり、これくらいじゃ簡単すぎたね」

なのはが言った。

「銀時と神楽の強さは相変わらずだね」
「桂さんの剣術も良え腕やったな」
「ああ、にしてもエリザベスって、あんなに強いんだな」
「それに、以前の『えいりあん』と言う異種生命体との戦いで見せ

た月詠という女性の実力、やはりかなりの手練だ」
「5人とも凄いです」

フェイト、はやて、ヴィータ、シグナム、リインも、それぞれの感想を言った。

「あの！」

エリオが声を上げた。

「銀時さん達が攻撃した時、『ＡＭＦ』が効いてなかったみたいなんですけど…」

『ＡＭＦ』とは、攻撃魔法を掻き消すシールドみたいなものである。

「銀時達は魔法を使ってないんだ。だから『ＡＭＦ』は、銀時達には何の効果もないんだよ」
「えっ！？そうなんですか！？」

キャロが驚きの声を上げる。
一分もかからずに、四十体のガジェットを倒したのも驚きだが、魔法を全く使っていない事にも驚いた。

「銀さん、スゴイ！」

スバルは興奮してはしゃいでいる。
みんなが銀時達の強さに騒いでる中、リインがスバルに言い出す。

「次は、スバルさんの番です」
「はい！」

リインの言葉にスバルは返事をして、訓練所に向かう。
今度は、ティアナ達と一緒にガジェット破壊のチームワークの訓練をするかと思いきや、スバルの受ける訓練は思わぬものであった。

「待て、スバル。お前の実力は銀時達から聞いている。今回お前の受けてもらう訓練はガジェット撃退ではない。」

シグナムの思わぬ言葉にスバルはシグナムに振り向くと、シグナムはすでにバリアジャケットを展開している。

「スバルに受けてもらう訓練は、私と模擬戦だ」
「ええぇーーーー!?」

新人としての訓練がチームワークを固める訓練じゃなく副隊長との模擬戦であった。
スバルだけじゃなく、なのは達も驚いていた。
はっきり言って、スバル自身はシグナムとの模擬戦を勤められるほどの実力は備えていないと考える。

「いきなり副隊長との模擬戦!?え・・・私、一応フォワード部隊に新しく入った新人なんですけど!?ガジェット撃退の訓練は?チームワークをとる訓練は!?」
「その前に実力を教えてもらう」

シグナムにはっきり言われ、スバルはどうすれば良いのか分からない状況であり、そんな彼女の後ろから銀時が現れた。

「まぁ受けてやっても良いんじゃないか?」

銀時の声に、スバルは反応して銀時に振り向く。

「ぎ・・・銀さん？」

「用は、シグナム達はお前の強さを試したいだけだから・・・そう固まらずに自然に模擬戦をやれば良いだけだろ」

スバルの緊張を落とすかのように言い出す銀時はスバルの頭を軽く叩く。

「俺やヅラになのはに見せたお前の強さ、今度はフェイト達に見せてやりな」

エーリアン戦でのスバルの戦いを今度はフェイト達に見せる事を銀時に言われたスバルは、さっきまでの緊張は途切れ、笑顔で返事をする。

「はい、分かりました」

嬉しそうな表情を表すスバル。

フェイトとなのははムスゥーっとした表情で少し妬く。

そしてはやて、ヴィータ、リインの3人は何か怖がるような感じでシグナムを見た。

シグナムからとてつもない怒気を感じており、顔は笑っているが本心では笑っていない。

正直、普通に怒るより怖いのであった。

「スバル、・・・一つ言っておこう」

シグナムに忠告があるようなので、スバルはシグナムに振り向くと・・・そこには怒りの化身に支配されたシグナム・・・もどい完全に

嫉妬しているシグナムの姿があった。

「模擬戦とは言え、実戦的に行うから・・・少しでも手を抜けば命はないと思え」

「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

とてもそれは模擬戦とは言えなく、スバルは絶叫してしまうのであった。

「え・・・何？何でシグナム、怒っているの？・・・え・・・ちょっと、怖すぎなんですけど？」

「お前だからな。シグナムのスイッチ入れたの」

何がどうなっているのか分からない銀時に、呆れた表情でヴィータは銀時に言う。

＊

そしてスバルとシグナムの模擬戦が始まるのであった。

スバルも訓練服からバリアジャケットに展開する。

そしてスバルはシグナムに恐れながら頭の中で文字が浮かんだ。

負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！負けたら殺られる！

スバルにとって、この模擬戦はまさに生死をかけた勝負であった。

（フォアード部隊に入ったばかりなのに、どうしていきなり副隊長との真剣勝負なの？これ、絶対に新人が受ける訓練じゃないよぉー！）

泣きたい気持ちで心の奥から叫ぶスバル。

そんなスバルに動揺したのかフェイトやなのはもスバルがかわいそうに感じた。

「・・・スバルも、災難だね」

「うん、そうだね」

苦笑しながらも、せめて生きて帰ってこれるように祈りだすフェイトとなのは。

ティアナ、エリオ、キャロ、フリードはシグナムの異常なまでの殺気にガクガクぶるぶると震えている。

こんなにも怒りを表しているシグナムを見たことが無いのである。

銀時、桂、はやて、ヴィータ、リインはシグナムが間違えてもスバルを殺さないでほしいと祈るしかなかった。

神楽、エリザベス、月詠は銀時と桂も認めるスバルの実力がどれ程なのか楽しみに待っていた。

スバルは刀から鞘を抜いて構えると、シグナムも剣を構える。

「ちなみに機動六課の隊長・副隊長クラスは全員「能力限定」の魔力リミッターがかけられているが、主に頼んでリミッターを解除してある」

「何で模擬戦でリミッターを解除する必要があるんですか！？私、

まだシグナムさん達のように実戦の経験がないんですよ！？」

完全にスバルに対するシグナムの嫉妬であるとスバルは知る由も無いが、それでもスバルは負けたらとんでもない事になる事を確信した。

「では・・・逝(い)こうか？」

「字が間違ってますよー！！」

大量の汗を出してツッコむスバルに問答無用な感じで、シグナムは常人とは思えない速さで迫ってくる。

シグナムは剣を大きく振り、スバルも刀を素早く振り、二つの剣がぶつかり合い火花が散る。

使用するデバイスで比べて見ると、力でははっきり言ってシグナムの方が断然に上である。

そしてスバルは後ろにバックしてシグナムの攻撃を受け流すと、シグナムは攻撃を受けてはいけないと後方に大きくバックするが……

シュウン！！

「！？」

突如、スバルが消えた事でシグナムは驚きだす。

これぞスバルの刹那の瞬間移動術であり、刹那と思わせる目にも見えない速さでダッシュしているのである。

「ちぃ！！」

ガキィン！！

剣士としての感でスバルの神速居合の一撃を防ぐシグナム。
いつの間にかスバルが『ティルヴィングエア』でシグナムを襲いだした事には誰もが驚く。（銀時、桂、なのはの3人は除いて）
それだけで終わらず、スバルの連続剣は続いてシグナムに襲う。

「はぁあああああああああ！！」

スバルの神速の速さの剣技が炸裂し、横振り、なぎ払い、突き、面、逆胴など様々な連係剣技を炸裂させ、神速の連激を炸裂させる。
純粋な剣技であるだけなのに、余りのスピードにシグナムも防ぐしかなかった。

「く・・・伊達に剣術を鍛えたわけじゃないな・・・・だが！」

スバルの剣撃を防ぐと、シグナムはなぎ払うかのように押し返し、スバルも跳躍して体を回転させて着地する。
すると、シグナムは・・・

「レヴァンティン！カートリッジロード！！」

ガチャン

カートリッジを1つロードする。
直後、レヴァンティンの刀身が炎に包まれた。

「やば！」

スバルもあれを喰らえばひとたまりも無いと確信する。

「紫電一閃！！！」

高速でスバルに接近し、炎を纏ったレヴァンティンを振り下ろした。
スバルにその攻撃が当たる直前、スバルは魔力をティルヴィングエアに収束させると、『紫電一閃』を受け流した。

「何！」

攻撃を受け流されたシグナムは驚きを隠せなかった。

「うぉおおおおおおお！！」

そしてスバルはその直後に回転して刀を下斜め左から振り上げようとする。
しかし、シグナムは大きくジャンプして回避すると、スバルから１０ｍ離れた場所で着地すると、右腕のシャツに斬れた後が残された。
もし今のは下手をすれば右腕を失ってたかもしれない。

そしてスバルは反撃するかのように、精製された魔力の剣を２０本だす。
その魔力の剣はビリビリと電力に包まれており、かなり強力そうであった。

「エクスキュート・ザ・ソードブリッツ！」

２本ずつ２０本の魔力の剣が一斉に放たれ、稲光の閃光の如くの速さでシグナムを襲う。
シグナムは素早く回避して、回避できない魔力の剣は『レヴァンティン』で斬りおとす。
そしていつの間にかスバルは宙に浮いており、刀を両手に持って大きく振り落とすと、シグナムも同時にジャンプして剣を振り応戦す

る。

「てやぁあああああああああ！！」
「おおおおおおおおおおおおおお！！」

ガチィン！

2人の剣はぶつかり、スバルとシグナムは互いにバックしてはなれて着地すると、スバルは『ティルヴィングエア』を右手に持ち替えて上斜め右に持ち上げると、刀身が蒼く光だす。

「これは！？」

スバルの刀を見てシグナムは驚きだすと、スバルが素早く『ティルヴィングエア』を振り下ろす。

「蒼波一閃（そうはいっせん）！！」

振り下ろされた後、蒼く輝く魔力の斬撃が神速の速さでシグナムを襲うと、回避出来ないと確信し、シグナムもガートリッジを1つロードして・・・

「陣風！！」

刀身から衝撃波を放って防いでとめるが、衝撃波が破壊されてその斬撃を『レヴァンティン』で防ぎ、何とか受け止めた。
そして素早く、スバルに攻めて来たシグナムが剣を振るう。
連続に振るい続けるシグナムの剣を、スバルは受け流し続ける。
そして、シグナムの攻撃を防ぎ終わると、今度はスバルが神速の速

さでを振るうと、シグナムは・・・

「くっ！」

紙一重で剣撃をかわし、今度は右横にダッシュして避ける。
しかしそれをスバルは逃がさず、刹那の瞬間移動でシグナムの手前まで移動し、素早く『ティルヴィングエア』を振るう。

ガキィン！！

「くぅ！！」

シグナムも『レヴァンティン』でスバルの一撃を防ぐ。
ぶつかり合う2つの剣から火花が出る。
そして互いに薙ぎ払うかのように剣を振り、相手から離れる。

「マジかよ、シグナムが追い込まれていやがる！？」

信じられないような表情でヴィータは驚く。
そしてはやては感心するかのような感じでスバルを高く評価する。

「大した子や。スピードだけはシグナムを上回るし、それに魔法剣技と剣をイメージした魔法をも使いこなしとるな」

スバルの見たことが無い魔法にはやてだけじゃなく、神楽、月詠もスバルの強さに感心する。

「うぉはー！スバル、凄いアル！」

「かなりの鍛錬を包んでおるから、魔法なしでもかなりの実力じゃ。」

そして、フォアード部隊はシグナムと互角に戦っているスバルの強さに唖然と驚いている。
特に驚くべきはスバルの刹那のごとくの瞬間移動であった。
あれも魔法の一種だと最初はだれもが思ったが、実は刹那の瞬間移動術には魔力を感じないのである。

それはつまり、スバルの刹那の瞬間移動は魔法ではなく独自の運動神経と身体能力によるものである。
純粋な剣の腕だけならシグナムの上は行く。

だがシグナムの剣にもスバルにはない豪傑なる力ある威力を持ち、魔法の威力もスバルのわずか上は行く。

すなわち、総合的な強さを合わせれば互いに互角である。

「そろそろ決着をつけましょう……シグナム副隊長」
「良いだろう……全力で行くぞ！」

シグナムはカートリッジを取り出して、それを『レヴァンティン』に装填すると、すぐさまにカートリッジロードを1つ使用すると、『レヴァンティン』の刀身が炎に包まれた。

「紫電一閃ですか・・・だったらこっちも・・・ティルヴィングエア、カートリッジロード！」

ガチャン

スバルもカートリッジロードを1つ使用すると、『ティルヴィングエア』の刀身が蒼い風に包まれた。

「これで勝負が決まるな」
「ああ、お互いに次の一撃で決めるつもりであろう」

銀時と桂は、これで勝負が決まると確信する。
しばらく間が開き、互いに両手で剣を握って相手を睨む。
そして、二十秒後・・・

「はぁあああああああああああああ！！」
「おおおおおおおおおおおおおおお！！」

同時に地面を強く蹴り、高速の速さで接近してきて、必殺魔法剣を炸裂させる。

「蒼風・・・」
「紫電・・・」

「一閃！！！！」

風の魔剣と炎の魔剣を振るうと、相手に当たる直前に1人は寸止めした。
スバルの『ティルヴィングエア』はシグナムの頭の真ん中の手前にギリギリに寸止めし、シグナムの『レヴァンティン』はスバルの右脇の手前にギリギリに寸止めした。

結果的に相打ちになる所であった。

互いに剣を鞘に収めて握手した。

「大した者だ。私とここまで互角に渡り合えるなんてな」
「いや・・・そ・・・・それほどでは」

副隊長に認められて照れるスバル。
先ほどのシグナムの嫉妬感は完全になくなってしまった。

「またいつか、お前と手合わせしたいな」
「え？・・・いや、その時はお手柔らかに」

苦笑いしてスバルは返事した。
正直言って、シグナムに勝てる自身が彼女にはないからだ。

銀時・フェイト・桂・なのは・はやて・神楽・エリザベス・月詠・ヴィータ・リインはスバルの予想以上の実力に感心する。
エリオとキャロはシグナムと互角に渡り合えたスバルの実力に驚きだしていた。

「す・・・凄いですよ、スバルさん！」

スバルの見たことが無い魔法剣技と魔法に感心したエリオ。
新人魔導士？1と言われたスバルの実力を改めて知ったのである。

「唯さえ、リミッターをかけられているシグナムさんとさえ対等に渡り合える魔導士はそうはいないのに、リミッター解除状態であるシグナムさんと互角に渡り合えるなんて・・・」

キャロも驚きを隠せないまま感心すると、エリオはある事を思い出した。

（そう言えば、スバルさんは４年前に銀時さんに助けられて、憧れを抱いて剣術を鍛え続けたと聞きましたけど・・・僕もスバルさんを見習って魔法だけじゃなく・・・槍術を鍛えないと・・・。）

エリオもスバルを見習って、自分のデバイスの特徴である槍を磨く事を決意する。
エリオとキャロがスバルの強さに騒いでる中、ティアナは複雑な顔をしていた。
同じ訓練校の卒業生なのに自分との強さの差がはっきり言って遠すぎる。
ティアナは拳を強く握った。

＊

訓練が終わって夕食の時間。
食堂に集まって、みんなで夕食を食べている。
銀時は、デザートのチョコレートパフェを食べていた。

「銀時。今日の訓練、お疲れ様」
「お疲れ様です！」
「おお」

フェイトとスバルの言葉に、銀時は短く答えた。

「そういや、フェイト。アルフとプレシアはどうしてんだ？」
「母さんは、本局で働いてるんだ。アルフは母さんの仕事の手伝い」
「そうか。二人とも元気か？」

パフェを口に運びながら、銀時は尋ねた。

「うん。元気だよ。銀時の事を教えたら、二人とも嬉しそうだったよ」

「そうか」

銀時はパフェを食べ終えた。

おかわりのパフェを頼もうとした時、

「銀時ぃ！！」

声と共に背中に衝撃が走った。

「おわっ！」

ビックリした銀時は後ろを見た。

そこには、

「アルフ！」

人型の姿になってるアルフがいた。

「銀時ぃ、久しぶり！会いたかったよ！」

アルフは、銀時に抱き付いた。

周囲の注目が銀時達に集まる。

「ちょっ…離れろ、バカ犬！」

「素直じゃないな♪」

嬉しそうな顔をしてるアルフは、なかなか離れない。

「つーか何でおめェが此処にいるんだ？本局でプレシアの手伝いしてたんじゃねーのかよ？」

「銀時に会いたくて来たんだよ♪」

フェイトからの知らせを聞いて、本局から来たらしい。

「とりあえず離れろ！」

銀時が叫んだ。

一方の桂は、はやてと二人っきりでそばを食べていた。

エリザベスとリインは桂とはやての関係に気づいて、2人っきりにさせる為に銀時達と食事をしていた。

「全く、銀時も随分と罪な男になったものだ」

笑いながら桂はそう言うと、はやても面白がって笑い出す。

「そうやな。銀ちゃん、あの調子だとジャンジャンと女に好意を持たされるかもな」

「ふ・・・違いない」

何やら二人っきりで言い雰囲気で話す桂とはやて。

そしてはやてはフォワード部隊の事を桂に聞き出す。

「そう言えば、桂さん。桂さんから見て、新人達の訓練はどうや？

もちろんスバルは除くけどな」

「・・・そうだな・・・エリオ殿とキャロ殿ははっきり言って相性が良い相方同士だ。おそらく、２人の力は今後の成長しだいで大きくなるであろう」

桂から見て、スバルと比べれば２人はまだ未熟だが、チームワークとしてはそこら辺よりはかなり良い。

コンビネーション的な実力は間違いなく副隊長級は良くであろう。

「だが・・・訓練と言えば・・・ティアナ殿には不自然な感じがする」

桂がそう言い、ティアナのほうを向くと、ティアナはあんまり食事を進んでおらず、銀時とスバルを複雑そうな顔で見つめる。

「やっぱりそう思うか？」

「ああ、実力は単独的にはエリオ殿とキャロ殿より上である事は分かる。だが・・・何か無理をしているようだ。・・・まるで・・・自分の体を壊すかのような行為のようなその様な・・・」

２人と比べてティアナには何か不自然を感じる桂だが、１つだけ確信した事がある。

「いずれにせよ、今のティアナ殿のやり方では、成長する事はないだろう。」

現実的に言う桂だが、今は放っておいた方が良いと確信する。

＊

夕食を食べ終え、みんなそれぞれの部屋に戻り、眠っていた。ちなみにアルフは、フェイトの部屋で一緒に寝ている。
銀時はベッドに横になっている。食堂では怒鳴ってばっかだったが、元気なアルフの姿が見れて、銀時は安心した。
だが、銀時の中には少し不安があった。
前に新八達と一緒に『A's編』を見た。
そして物語にゾーマが出ていない事に気付いた。プレシアの時もそうだったが、どうやら銀時達が介入した事で、原作のストーリーとは違う展開になっているようだ。
だとしたら、今回も違う展開になる可能性がある。
まぁ原作の内容は知らねーけどな。
銀時はため息をついた。
何も問題が起こらなきゃいいが。
すると、扉がノックされた。

「開いてるぞ」

軽く返事をする。

「お・・・オジャマ・・・します。」

声がした後、扉が開かれた。
入ってきたのはなのはだった。
銀時は起き上がって、なのはに体を向けた。

「んで?何の用だ?」

銀時が尋ねた。

「あの……その……／／／」

なのはは顔を赤くし、銀時から目をそらしながら呟く。

え・・・あれ？この展開、どっかで見たような感じがするんだけど？

なのはの顔ってこんなに赤かったっけ？

あれ、これって・・・いや・・・それはあり得ない・・・。だって、

なのはにはユーノがいるんじゃ・・・・

「銀さん！・・・わ・・・私・・・／／／」

これ以上ないくらい顔を真っ赤にし、なのははついに銀時に告白をする。

「私・・・銀さんの事が好きです／／／」

銀時の予想が当たり、なのははついに銀時に告白をした。

１０年前の『闇の書・ゾーマ事件』以来、心の奥底で芽生えた初めての思い。

それは銀時に恋をしたなのはの初恋であった。

「……マジでか？」

沈黙を破って、銀時が尋ねた。

「・・・・・・・・・はい・・・／／／」

小さな声で返事をしながらも顔を真っ赤に染めてなのはは言う。

告白した事で吹っ切れたのか、なのはは歩き出し、銀時に抱き付いた。

なのはの豊満で柔らかい胸が、銀時に当たる。
なのはもまた、１０年たって魅力ある女性へと成長したので、胸もかなりでかいのである。
銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。
こういう状況に慣れていない銀時は、どうしたらいいかわからず、首を左右に振りながら動揺する。

（おいいいいいいいいい！！何これぇえええ！！え？何？俺ってこんなにも罪な男だっけ！？マジでどうすんの！？ユーノは？ユーノはどうするの！？つうか銀さんとんでもない事をしちゃったんだけどぉおお！！）

自分が一体何をしたのかっと考える銀時。
一体何処でなのはは自分にほれてしまったのか考える中・・・

「・・・・・銀さん／／／」

なのはは両手を銀時の顔に添えた。
そしてゆっくりと顔を近づけ、自分の唇を銀時の唇に重ねた。
なのはにキスされ、銀時の体は固まった。

「・・・・ん／／／」

甘ったるい声を出して、シグナムの時と同じで、長い時間キスをした。
銀時が女性とキスをするのはこれで三度目になるであろう。
人生は何が起こるかわからない事はまさにこの事であった。
なのはは、銀時から唇を離した。

「にゃはは・・・昨日、助けてくれたお礼だよ。このファーストキスは／／／」

なのはは、嬉しそうな笑みを浮かべた。
一方銀時は、キスをされて呆然としている。以前にフェイトやシグナムにもキスされたが、なのはのキスは、２人とはまた違った感触のキスだった。

「フェイトちゃんにもシグナムさんにも負けないもん。・・・これからもよろしくね、銀さん／／／」

こうしてまた１人、銀さん争奪戦に参加する女性が増え、なのはは部屋を出て行った。
残された銀時は、呆然と立ち尽くした。

「……何でこうなるの？」

小さく呟いた。

「フェイトにファーストキスを上げたわ、シグナムのファーストキスを奪うわ、そんで他人の女のファーストキスを奪うわ……俺はどうすればいいんだ？」

この時、銀時はどうすれば良いのか分からなく、かなり悩んだ。

「教えてくれェエ！レイジング・ハァァァァァァァトォォォォォォォ！！」

窓を開けて、空に向かって銀時は叫んだ。

第六訓：同じタイプを持った同士での関係では、片方は対抗心を燃やしやすい

なのはとスバルが覚醒！？

ホテル・アグスタでの任務！

そして、ツッコミ役の勤め！

なのは「次回、『調味料を取りすぎると味覚がおかしくなる』テイクオフ♪」

第七訓：調味料を取りすぎると味覚がおかしくなる（前書き）

「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～」がかなりの大評価！

思った以上に感想が多くて嬉しいです！

では、こんな感じで始めます！

エリザベス『『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まるぞ』

ボートで『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の開始宣言をするエリザベスであった。

第七訓：調味料を取りすぎると味覚がおかしくなる

翌朝。
スバルが新しく加わって、フォワードのみんなは個別訓練を受ける事になった。
ちなみに、スバルはティアナと同じくなのはのスターズ分隊に入り、実力がすでに副隊長急に入っているため、フォワード部隊の中で唯一シグナムとヴィータと同じく、『能力限定』の魔力リミッターがかかっているが、それでも強さはフォワード部隊の中でも一番強いってぐらいである。
それぞれの個性を活かすための訓練に、スバル達は頑張る。
ヴィータがいつもどおりに新人を鍛える中、シグナムもまたエリオの訓練に付き合っている。
いつもなら、シグナムが新人の訓練には参加しないのだが、エリオが「銀時さん見たいに大事なものを護れるほど強くなりたい」っと言う信念に興味を持って、エリオの特訓を付き合っている。
銀時の様な強い男になれるのかその眼で確かめたいからである。
銀時達は訓練の様子を見守っている。
そこへアルフがやってきた。

「ここにいたんだ」
「ああ。暇だからな。つーかお前は仕事しなくていいのかよ？」

答えた後、銀時はアルフに言った。

「ちゃんとプレシアからは、休みを貰ってるもーん」

気軽にアルフは答えた。

「ふむ。アルフは天人に似ているな」

アルフを見ながら、月詠が言った。
一方の桂は真剣な眼差しでティアナを見ると、隣にいるエリザベスに話しかける。

「エリザベス。エリザベスから見て、ティアナ殿はどう見る？」
『そうだね・・・何か無理をしている感じがします。時々だけどムキになっているような、なんか分からないけど』

桂は昨日、はやてに新人フォワード部隊の様子を聞かされて以来、ティアナの慌てっぷりを気になっていた。

『なんか、強さだけを求めているようにしか見えない』
そう書かれたボートをだしてエリザベスは感想を言い出す。
「やはりそうか。・・・武士であろうと魔導士であろうと・・・人はみな、強さだけを求めても・・・『真の強さ』は得られぬ」
「同感じゃ。」

桂がエリザベスと話していると、隣で煙管を加えて口から煙を吐く月詠が話しかけてきた。

「月詠殿」
「桂の言う通り、ティアナの今の行為は強くなる為じゃなく、強さだけを求めて抗っている行為にしか見えぬ。あれではいくら訓練を続けても強くはなれぬ」
「うむ、・・・このままでは、ティアナ殿の体はいずれ内部から崩壊してしまうであろう」

どうすれば良いか迷ってしまう桂、エリザベス、月詠の3人。

「よーし。午前の訓練は終わりだ！」

ヴィータがスバル達に告げた。

訓練を終えたスバル達は、それぞれストレッチをした。

「こんな訓練毎日やんのか。大変だな？」

ジャンプを持ちながら、銀時は他人事のように言った。

＊

昼食を食べるため、銀時達は食堂にいた。

そこでティアナ達は顔をしかめていた。原因は銀時とフェイトにある。

二人は、真っ白いご飯の上に『ある物』をかけているのだ。

意を決して、エリオが聞いてみた。

「あの……お二人とも何をかけてるんですか…？」

「これか？」

銀時はエリオに顔を向けた。

片手で丼を掴み、顔の前まで持ち上げた。

「小豆テンコ盛り『宇治銀時丼』だ」

ご飯に小豆を乗せるという、銀時特製の宇治銀時丼。

ティアナ達は顔を歪め、嫌悪感を露にする。

宇治銀時丼自体にも驚いたが、更に驚きなのが、隣に座ってるフェイトがそれを美味しそうに食べているのだ。

フェイトの意外な食の好みに、ティアナ達はア然とした。
シグナム、ヴィータ、リインフォースは、宇治銀時丼を始めて見るが、とても好きにはなれないと思った。

「食うか？」

銀時がスバル達に尋ねた。

「え…遠慮しときます！」

慌ててティアナ達は断った。
だが、スバルは・・・

「じゃあ・・・一口だけ頂いてみます」

っと箸を掴んで宇治銀時丼を近づいた。
それを見たなのはも・・・

「私も・・・試しに・・・。」
「なのはさん！？」

なのはも試そうと箸を掴むとティアナは驚く。
以前、「ジュエルシード事件」の解決時に宴会をやって、フェイトから宇治銀時丼を差し伸べられたが、何やら不気味に感じて断った。
だが、好きになった銀時の好物を知る為に、試して見ようとする。
スバルとなのははゆっくりと宇治銀時丼に箸を伸ばし、少し摘んで口の中に入れた。
もぐもぐ、と口の中で噛んで飲み込んだ。
そして・・・・2人が口にした感想は・・・

「あ・・・凄く美味しいです！」
「ほんとだ！これ、全然いけるよ！」

一発で気に入ったようである。
2人の予想外の感想にティアナ達は・・・

「えええええええええええええええええええええええ！！？？」

大声を出して驚きを表した。
小豆が乗っているご飯が見ただけで気味が悪いのにもかかわらず、
2人は気に入ってしまったのだ。

「おお、マジでか！？」
「ほんと！？なのは、スバル！」

銀時は少し身を乗り出す。

「はい！凄くおいしいです！」
「全く新しい珍味だよ、銀さん！フェイトちゃん！」

スバルとなのはは目を輝かせている。
銀時とフェイトはリンディ以外の同志が見つかって大喜びした。
それを見たティアナ達の口からは・・・・・・

「な・・・なんだそりゃーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

だった。

「あんなのを好きになれる者がおるなんて・・・」
「世の中は広いネ」

神楽と月詠の2人も、銀時の宇治銀時丼を気に入る者はそうはいないと考えてたが、フェイトだけじゃなくスバルとなのはも気に入った事に不思議に感じた。

一方の桂とエリザベスは、はやてとリインと一緒にそばを頂いていた。

「おい、ヅラ。朝食ぐらいそば以外の物を食べる気が無いのか？」

ヴィータは桂に話しかけると、桂はヴィータにそばの良さを話しかける。

「ヅラじゃない桂だ。それにそばは血圧を下げる効力を持っているぞ。・・・ヴィータ殿も是非試食すると良い」
「それはつまり私が血圧高いと言いたいのかぁあああ！！」

ヴィータは額に血管を浮かべて怒鳴りながらツッコみ、ハンマーを出して桂を襲おうとするが、シグナムとリインフォースに抑えられる。
そして銀時は桂に近づいて話しかける。

「それよりヅラ」
「ヅラじゃない、桂だ。・・・なんだ銀時？」
「俺達はそろそろ、アレを育てなきゃならねェ」
「アレ？」

銀時の言葉に、はやては首を傾げた。
アレとは一体何だろうか？
はやてが疑問に思っていると、桂はそれが分かりだし、銀時が答えた。

「新八に代わる”ツッコミ役”だ」

＊

戦隊舟の中

そこには、何やら赤紫色に輝く数多くのカプセルの中にはある凶悪な兵器が眠っている。
それを不気味に笑い出す高杉と1人の大男が話している。

「おおー、これが高杉が言っていた例の機械兵器（からくり）か」
「ああ。すでに1本は完成されているからそいつは俺の部下にやったさ。いずれお前さんの部下にも使わせてやるよ」

高杉はククク・・・と不気味な笑い方をすると、男も面白そうに笑い出す。

「ふはははははは！人間が作ったとは言え、ふれた瞬間に凶器を感じるわ！我等天人と手を組んでまで世界を潰すと聞いた事があるが・・・本当にその様だな？」

愉快そうに笑い出す大男に、高杉の顔は獣を狩る脅威の笑顔を浮かぶ。

「ああ、だからアンタの計画に手を貸してやったんだ。異次元だろうと元の世界だろうと・・・俺は全てを壊してやるのさ」

世界の全てを憎み、この手で破壊すると誓った黒い獣の脅威は収まることはない。

大男は高杉が宇宙海賊『春雨』より脅威の人物であると改めて知る。

「『春雨』と手を組んだのも、世界を潰す為の利用って訳か」

「まぁな。世界を壊す為なら、『春雨』だろうがなんだろうが邪魔するものを殺すだけさ。・・・そんなことより、お前さんの例の件は実行できたようじゃねぇか」

煙管を加えて高杉は大男に聞くと、男は愉快そうに笑い出す。

「ああ、いつでも準備は完了だ」

「そいつは何よりだ。だがその前に、実は数日後に、ホテル・アグスタで骨董オーディションが行われる。その為、機動六課がそのホテルの警備をするらしく、お前達は大量のガジェットを襲わせるつもりだろ。そいつ等を実験台にさせて例の機械兵器（からくり）の威力、その眼で確かめて見るといいぜ」

高杉はその兵器を部下に使わせて計画の為に溜めさせる。

「元は実験用とはいえ、あれもかなり凶悪な代物だろ?」

「ククク・・・ああ、もしかすればあんな駄作品でも機動六課を全滅させる力はあるだろ?」

強力な兵器を駄作品扱いする程まで、高杉の計画している兵器はとんでもなく凶器ともいえるであろう。

「ククク・・・さぁ、祭りの始まりだ」

高杉の中に眠る黒い獣の闇が今、動き出す。

＊

銀時達はヘリに乗って、ホテル・アグスタに向かっていた。
そこで行われる骨董オークションに出る、取引出品許可されているロストロギアをレリックと間違えてガジェットが現れる可能性があるので、機動六課が警備に呼ばれたのだ。
現場には昨夜から、シグナムとヴィータが既に警備している。
銀時、桂、フェイト、なのは、はやては、建物の中の警備をする。
最初は嫌がった銀時と桂だが、ビッグサンダーチョコレートパフェ三つ＆amp;最高級特上天ぷら蕎麦（そば）という条件で引き受けた。
そして只今ヘリの中では、

「機動六課ツッコミ育成計画！」

なんて事が始まっていた。
銀時の隣に座ってる桂、神楽、エリザベス、月詠が、パチパチと小さな拍手をしている。

「ツ…ツッコミ育成計画…？」

スバル達フォワードメンバーは戸惑った。
今回の警備に対する話し合いがされると思ったら、全然関係ない”ツッコミ”の話だった。

「あの…これは一体どういう事なんですか？」

キャロが当然の質問をした。
すると銀時はこう答えた。

「今回、江戸一番のツッコミ使い志村新八が不在だから、お前らにツッコミ役をやってもらう」
「何で私達が、ツッコミなんかしなきゃいけないんですか！？」

ティアナが銀時に叫んだ。

「ツッコミがなきゃ、ギャグが成立しねーからだ」

冷静に銀時は答えた。
そして、ここから銀時によるツッコミ講座みたいなものが始まった。

「さっきも言ったが、ギャグはボケだけではなく、ツッコミもあって初めて成立する。ただし、ただツッコめばいいと言う訳じゃねェ」

真顔で銀時は説明する。
諦めたスバル達は、黙って銀時の説明を聞いている。
同乗している、なのは達やシャマル、アルフは苦笑し、獣姿のザフィーラはため息をついている。

「『ツッコミ』というのは『ボケ』のおかしな点をわかりやすく教

える役目を担っている。だから丁寧過ぎるツッコミは冷めるし、逆に適当過ぎても冷めます」

右手の人差し指を立て、どっかの講師のように教える。

「つまり…ただ説明すればいいって訳じゃないんですね？」

手を挙げながら、エリオが発言した。

「その通りだ。エリオ十三等兵」

早速銀時がボケた。
ちなみに十三等兵など存在しない。

「あの…僕、三等陸士なんですけど…」

やんわりとエリオはツッコんだ。

「まぁ最初そんな感じでいいだろう。これからは、もっと勢いよくツッコむように」

「は…はい！」

反射的にエリオは返事をした。

「そう言えば銀時。俺達の中でのリーダーを決めていないぞ」

桂が言った。

「そうだな。じゃあまず、リーダーを決める方法を考えるリーダーを決めよう」

と、銀時。

「リーダーだけじゃつまんないアル。せめて副リーダーを決めるね」

神楽は副リーダーを決める事を提案する。

『じゃあ、リーダーと副リーダーを決めるリーダーと副リーダーをきめましょう』

そう書かれたボートを出すエリザベス。

「いや待て。それならまず、リーダーと副リーダーを決める方法を考えるリーダーと副リーダーを決めるリーダーと副リーダーを考え…」

と月詠が言いかけた時、

「いつまで経っても終わんないわよ！このままじゃ全員リーダーと副リーダーじゃない！！」

ティアナが、額に青筋を浮かべてツッコんだ。

「よし！その調子だ、もっとツッコめ！」

「その勢いだティアナ殿！お主なら、もっとツッコみを極められるはずだ」

銀時と桂が言った。

どうやら五人は、ティアナ達にツッコミをやらせるために、ワザとボケたらしい。

「黙れボケ共！！」

ティアナは怒鳴った。

危うくクロスミラージュを撃つトコだった。

「あの…シャマル先生。その荷物は何ですか？」

キャロは、シャマルの隣に置いてある五つのカバンを指差した。

「ああ、これ？隊長達と銀さんと桂さんのお仕事着♪」

ニッコリ笑いながら、シャマルは答えた。

キャロ達は首を傾げた。

ついでに銀時と桂も、意味がわからず首を傾げた。

＊

ホテル・アグスタ。

到着したスバル達は警備を始めた。

オークションが行われる会場の入口では、チケットを受付の男に見せて次々と人が入っていく。

一人の女性がチケットではなく、機動六課の身分証を見せた。

「あっ！」

身分証を見た受付の男は驚いた。

「こんにちは。機動六課です」

はやて、フェイト、なのはが綺麗なドレス姿で受付前に立っている。
その三人の後ろには、

「何で俺達まで、こんな恰好なんだ？」
「仕方がないであろう。これを引き受けなければ、銀時はビッグサンダーチョコレートパフェを食べられないんだぞ？それに俺も最高級特上天ぷらそばを見過ごす事になる」

スーツ姿の銀時と桂が愚痴っていた。
普段の着物を脱ぎ、黒いスーツを着ている。
ちなみに銀時の木刀と桂の刀はシャマルに預かってもらっている。

「よく似合ってるよ、銀時」
「ぐっと来るよ、銀さん」

フェイトとなのははニコッと微笑んだ。

「いやー、ほんま両手に花って言うのはまさにこの事やな」

銀時、フェイト、なのはを見ながら、はやてが言った。

「も、もう、はやて！／／／」
「からかわないでよ、はやてちゃん！／／／」

二人は頬を赤くした。

「・・・ど・・・どう、銀さん？わたしとフェイトちゃんのドレス姿は？／／／」

なのはが銀時に尋ねた。
銀時はドレス姿のフェイトとなのはを見つめた。色っぽい黒のドレスと綺麗なピンクのドレス。大人になったフェイトとなのはの魅力をさらに上げている。
銀時に見つめられ、二人の顔がみるみる赤くなっていく。

「よく似合ってんじゃん。綺麗だよ」

銀時は見た感想を言った。

「うん、ありがとう／／／」
「にゃはは／／／」

フェイトとなのはは嬉しそうに微笑んだ。
三人の姿を見て、桂とはやてはニヤニヤと笑い出す。

「銀時も大変だろうな・・・この先に待ち構える試練を受けねばならぬ事を知らぬ用だしな」
「それもそうやな」

この先に待ち構える試練。
それは口にしないで想像しながら楽しむ2人。
そしてはやてはテレながらも桂を見る。

「そ・・・それと桂さん・・・・その・・・私はどうかな?／／／」

顔を赤く染めながらはやては桂に訪ねる。

美しき水のドレス。はやてもまた、フェイトとなのはにひけをとら

ないほどの魅力が上がっていた。

「見事に似合っている。美しくなったな、八神殿」

桂も見た感想を言い出す。

「うふふ、ありがとな桂さん／／／」

はやても嬉しそうに笑い出すと、はやては桂の右腕を自分の絡めさせる。

それを見たフェイトとなのはも銀時の腕に自分達の腕を絡めさせる。

五人を見て、周りの男性から殺気を当てられた。

銀時は気にしたら面倒な事になると確信して無視する事にした。

桂は周りの殺気に気づく事は無かった。

五人は、危うく任務中である事を忘れそうになった。

第七訓：調味料を取りすぎると味覚がおかしくなる（後書き）

ついに動き出す黒い獣の野望。

あの人物も登場。

そして、悪魔の力が復活！

それが機動六科を襲う

はやて「次回、「自分の劣等感を抑えなければ慌ててしまうことが多い」、テイクオフな。」

第八訓：自分の劣等感を抑えなければ慌ててしまうことが多い（前書き）

黒神「脱字や文章間違いが最近多くて悲しくなってきました。」

銀時「おーい、ちゃんとしてくれよ。せっかくの読者に嫌われても仕方が無いぞ？」

黒神「はい。一体、どうすれば脱字をつける癖をなくせるでしょうかね？」

フェイト「あはは・・・『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第八訓：自分の劣等感を抑えなければ慌ててしまうことが多い

銀時達がホテル・アグスタの中を監視する中、神楽、エリザベス、月詠の３人はスバル達と共に、ホテルの周辺を警備していた。
今回はなのは、フェイト、はやての３人の部隊長と、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ護騎士団全員集合である。
以前、ティアナはスバルから父・ゲンヤと姉・ギンガから聞いたことぐらいの事を話されたことを思い出す。
はやてが使ってるデバイス、魔導書型の『夜天の書』。
シャマルとザフィーラははやて個人が保有してる特別戦力。
それにリインフォースとリインさんを合わせて七人揃えば、無敵の戦力とも言われる。

そう思い出すと、ティアナはある事を考えていた。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。
魔法は使えないけど、優れた身体能力だけでオーバーＳランクを超える強さを誇ったゾーマを倒し、その実力は間違いなくオーバーＳ級は行く『白夜叉』坂田銀時。
坂田銀時に勝るとも劣らない戦闘能力を誇り、剣だけじゃなく爆弾やデバイスとは全く違う特殊な道具を使いこなす『狂乱の貴公子』桂小太郎。
宇宙最強戦闘種族『夜兎族』っと言う胡散臭い種族だが、戦闘力だけなら機動六科を含めても最強を誇る神楽。
桂のペットだが、桂に劣らない戦闘力を誇り、特殊な武装を使いこなすエリザベス。

クナイと言う飛び道具を使いこなし、素早い動きで相手を翻弄する月詠。
さらに隊長格全員がオーバーS、副隊長でもニアSランク。
他の隊員達だって、前線から管制官まで未来のエリート達ばっかり。
あの年で、もうBランクを取ってるエリオと、レアで竜召喚士のキャロ。
そして最も凄いのが、潜在能力と可能性の塊で、剣術と魔術はすでにAAA＋級の実力を持ち、剣術を中心としたとてつもない速さを誇る新しく入ってきたフォワード部隊のスバル。

やっぱり…うちの部隊で凡人は私だけか……。

ティアナは静かに目を閉じる。
でも、そんなの関係ない。
しばらくして、ゆっくりと目を開けた。
私は、立ち止まるワケにはいかないんだ。
ティアナが改めて決意した時、不気味な光景を見た。

それは、何処から出したのか突っ込みたくなるような刀を地面に付け、頭に『打倒・ガジェット』っと書かれた鉢巻をかけているエリザベスであった。

「・・・あのう・・・随分と張り切っていま・・・」

シュン！！

「きゃあああああ！！」

突如、エリザベスが刀を回転に振りだし、ティアナは思わず叫んでギリギリに避けて、地面に尻をつけて転ぶ。
後少し、反応が遅れていたら間違いなく斬られていた。

「何するんですか！？」

ティアナが怒鳴ると、エリザベスは鉢巻に『エリゴ１３』と書かれており、葉巻をくわえたまま目付きをかの「ゴル〇」の様にして、

『俺の後に立つな』

そうか書かれたボートを出す。

「うっさいわ！！どっちが前だか後ろだかわからない体をしているくせに！！」

ティアナが、額に青筋を浮かべて怒鳴りながらツッコんだ。

＊

ホテルを囲む森。
森の中を走る集団があった。
ホテルへ向かって、真っ直ぐに森の中を移動してるのは、ガジェッ

トの集団だった。
屋上で警備をしているシャマルのクラールヴィントが反応した。

「シャーリー！」

シャマルが叫んだ。

「はい！」

管制室にいるロングアーチのメンバーのシャリオ・フィニーノ、通称シャーリーが返事をした。
管制室でも、ホテルに接近しているガジェットを感知した。

ティアナがシャマルの近くまで駆け上がった。

「シャマル先生！私も状況を見たいんです。前線のモニターもらえませんか？」

「了解。クロスミラージュに直結するわ」

シャマルはモニターを回した。
モニターをもらったティアナは、エリザベスの所に戻った。
だが、エリザベスは、ガジェットがいる方へ向かって走り出した。

『ここは任せた！』

「ちょっ…エリザベスさん！？」

そう書かれたボートをティアナに見せて、エリザベスはティアナに勝手にホテルの守備を任させた。

エリザベスは森の中に入っていった。
スバル、神楽、月詠、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの６人が迎撃に向かう。あと勝手に動いてるエリザベスも。

「おおー、でかいアル！めっちゃ倒しがいがアルね」

神楽は傘を構えて大型と対峙する。
そして神楽は素早く突撃して、傘を豪快に振り回しながら小型ガジェットを次々と破壊していく。

「ほわちゃぁあああああああああああああ！！」

隙が出来たと確信し、大きくジャンプする。
そして体を回転させて大型に手刀を炸裂させ、大型ガジェットは押しつぶされて大爆発した。

「左側は私が何とかする。スバルは右側を」
「はい！」

シグナムとスバルは数多くのガジェット達を左右に分けて倒す事に決めた。

「行くよ、ティルヴィングエア！！」

スバルは刀を鞘から抜き、凄まじい勢いでガジェット達に向かって飛び出した。
神速の剣技を炸裂させ、一気に４体以上のガジェットを斬った。続

けて周りにいるガジェットを次々と斬り捨てていく。
魔法を全く使わず、純粋な剣術だけで戦っている。

「レヴァンティン！」

シグナムが叫んだ直後、レヴァンティンは連結刃形態『シュランゲフォルム』となった。
スバルに続くかのように、スバルの反対側にいるガジェット達を連結刃で攻撃した。
連結刃は蛇のように動き、次々とガジェット達を斬る。

「行くぞアイゼン！」

空中にいるヴィータは、八個の鉄球を出した。

「まとめて、ぶち抜けェエエ！！」

グラーフアイゼンを振り、八個の鉄球を打ち放った。
全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。

ザフィーラの前にもガジェットが居て、光線を放つが、ザフィーラは防御フィールドで防ぐ。

「ここは通さん！！」

ザフィーラの声の後に、地面から光の柱が現れ、ガジェット達を貫いた。
エリザベスは偶然にも月詠と合流して、２人でガジェットの撃墜をしていた。

『チェストーーーーーー！！』

そう書かれた鉢巻を頭にかけているエリザベスは、刀を上段に振り、豪快にガジェット達を次々と一刀両断する。遠距離で攻めてくるガジェット達には口からキャノン砲を出して攻撃し、ガジェット達を吹飛ばす。

「動きが鈍すぎじゃ！」

月詠は大量のクナイを一斉に放ち、１０体以上のガジェット達を串刺しにし、ガジェット達は大爆発する。

＊

ティアナは、モニターで戦いの様子を見ている。

「これで、能力リミッター付き……神楽さん、エリザベスさん、月詠さんも、まだまだ本気じゃない……」

ティアナは自然と強く拳を握った。

焦りと苛立ちが生まれる。

＊

中にいる銀時はトイレにいた。用を足し終えて、手を洗っている。

ガジェットが来たみてーだが…あいつら大丈夫か？
なんやかんやで、スバル達の心配をしてる銀時。

「まぁ神楽、エリザベス。月詠の3人がいれば、大丈夫だろ」

手を拭いて、トイレから出ようとした。
その時、トイレに入ってきた人と肩がぶつかった。

「おっと悪ぃ」
「いえ、こちらこそ…」

二人は互いに顔を見た。
すると銀時にぶつかった男は目を見開いた。

「ぎ…銀さん!?」

男は銀時の名を叫んだ。

「…どこかで会ったか？」

銀時は首を傾げた。

「僕ですよ!ユーノ!ユーノ・スクライアです!」

自分を指差しながら、男は名乗った。
名前を聞いて銀時は思い出した。

「ユーノ!?えっ？マジでユーノ!?」

思い出した銀時は驚いた。

ユーノは長い髪を後ろに束ねていて、少し面影が残っている。

「マジでビックリしたぜ。え？お前、今何やってんの？」

「今は考古学者で、無限書庫の司書長をしてます」

「お前も偉くなったな」

１０年でみんな見間違える程に変わったな。変わってねーのは俺だけか。

何か先を越されたと言うか、置いてかれたみたいで、銀時は軽く落ち込んだ。

そして、この再会が新たな反乱の開幕である事を知らずにいた。

＊

桂とはやては会場内でのデート・・・もとい監視をし続ける中、桂の頭の中から不自然な気を感じた。

「！？」

当たりを見回すと、何も変わった状況は無かった。

おそらくはエリザベス達に何かあったのではないかと確信する。

「どうしたん？桂さん」

突如の桂の変化に心配そうに声をかけるはやてに桂は、

「すまぬが俺は皆の様子を見て来る。」

そう言い残して桂は走ってこの場を去って外でガジェットと戦っている仲間の下に向かう。

「ちょ・・・桂さん!?」

＊

「召喚・・・来ます!」

キャロが敵召喚師の召喚を察知して紫色の四角い魔法陣が４つ現れ中から1型9と3型一つが出て来る

「迎撃いくわよ!」

「はい!」

ティアナの言葉にエリオ達が応えた。

ティアナは、ガジェット達にクロスミラージュを向ける。

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して、私はそれでいつだってやってきた。

バン!　バン!

魔力弾を撃つがＡＭＦのせいで当たりが浅い。更に撃つが有人操作に成ったらしく私の攻撃は避けられてしまう。

「ちっ!」

ガジェットがミサイルを撃つと、ティアナは冷静に全て撃ち落とす。

「ティアナさん！」

キャロが叫ぶ。

すると、ガジェット1型が光線を私に撃って来て、ティアナはジャンプして回避する木を盾にしてガジェットの様子を見る。

（防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！）

シャマルが念話で、スバル達に伝えた。

ティアナの表情が険しくなる。

「守ってばっかじゃ行き詰まります！ちゃんと全部倒します！」

（ちょっと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！）

「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージュを構える。

ティアナは、エリオに顔を向けた。

「エリオ、ガジェット達の注意を引き付けて！その隙に私が一気に破壊する！」

「は、はい！」

言われた通り、エリオは素早い動きでガジェット達の注意を引き付ける。

その隙にティアナは、カートリッジを四発もロードした。

証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくたって…どんなに危険

な戦いだって。
ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。
「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだって！」
クロスミラージュを構える。
「クロスファイヤーーー」
エリオは、ガジェット達の攻撃を避け続ける。
「シュート！！」
オレンジ色の魔力弾が、一斉にガジェット達に迫る。
次々とガジェット達に魔力弾が当たり、倒していく。
だが、魔力弾が一発反れて、エリオに迫る。
「エリオ君！！」
キャロが叫びながら走り出す。
「えっ！？」
エリオが振り返るが、今からでは避けられない。
魔力弾がエリオに当たるかと思われた時、赤い人影が現れ、持っているハンマーで魔力弾を弾いた。
「ヴィータ副隊長！？」
突然現れたヴィータに、エリオは驚いてる。

ヴィータはティアナを睨んだ。

「ティアナ！この馬鹿！！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！」

怒鳴られたティアナは、魔法陣を展開させたまま唖然としてる。

「なんで私が来るまで待てず、あんな無茶な事をしやがった！！」

ヴィータはティアナの無謀な攻めに怒っていた。
下手をすればエリオが撃たれていたかも知れないからだ。

「違うんです！ヴィータ副隊長！今のは・・・・」
「うるせェ、馬鹿ども！！」

エリオが言い訳をするが、ヴィータが怒鳴った。

「もういい…後はアタシがやる！三人まとめてすっこんでろ！！」

怒鳴られた3人は、唖然とした。
その時、突然上空から何かが落下し、地面に激突した。

「な…何だ！？」

辺りに砂埃が立ち込めた。
ヴィータや、周りの者に怪我はない。
砂埃がなくなってきて、落下してきたモノが見えてきた。
それは人間であり、被り笠をはいており、何やら黒い着物を着た人物であり、刀を持っている。
その人間は刀から鞘をゆっくりと抜くと，

「な…！？」

ヴィータは我が目を疑った。
凄まじい勢いで剣を振り続け、残ったガジェット達全てを斬り捨てて行く。
その剣術は、銀時のような力強い剣でも無く、桂のような戦い慣れした剣でもなく、スバルのような神速の剣でもない。
殺意に満ちた狂剣その者であった。

「ふふふ・・・これはこれは斬りがいがありそうな連中ばかりじゃねぇか。機動六科の連中って言うのは？」

狂気に満ちた男の殺意に、ヴィータ、ティアナ、エリオ、キャロの４人は顔を青ざめ、体が震えている。

「そう怯える事はないだろ？・・・戦場に出れば、死を覚悟するのも当たり前のことなんだしよ」

男は刀を嘗めて、今でも斬りかかって来そうな雰囲気を表している。

「まぁとりあえず、俺にも魔導士って奴の実力がどれ程の者なのか教えてくれよ。この『人斬り鍬死楼（くわしろう）』と」

第八訓：自分の劣等感を抑えなければ慌ててしまうことが多い（後書き）

まさかの人斬りが襲来！

ヴィータ達が大ピンチ！

あの兵器が蘇った！

桂は間に合うのか！？

ティアナ「次回、「刃物は危ないから人に向けてはいけない」テイクオフ」

第九訓：刃物は危ないから人に向けてはいけない（前書き）

あの兵器がまさかの復活！

果たしてヴィータ達の運命は！

そして、鍬死楼の正体も明かされる！

桂「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』刮目せよ！！」

第九訓：刃物は危ないから人に向けてはいけない

男から放たれる憎悪の殺意。

人を殺したい。

復讐をしたい。

気に入らないものを消したい。

それとは違う殺意であった。

男の殺意は全てを壊したいと言う狂気である。

その男は自分の事を『人斬り鍬死楼』と名乗った。

危険な気を感じたヴィータ達は大量の冷汗を流す。

足が震えて立っているのもやっとだ。たまに呼吸する事を忘れそうになる。

鍬死楼は禍々しい殺意を放ちながら、ジッと立っている。

ヴィータは武器を構えたままを男を睨んでいた。

鍬死楼と呼ばれる男の殺気とプレッシャーに圧されないよう、必死に耐えている。

ヴィータはティアナ達を見た。

コイツの事を考えるのは後だ。今はティアナ達を逃がすのが先決だ。

「逃げろ！お前らの敵う相手じゃねェエ！！」

ティアナ達に向かって、ヴィータが叫んだ。
ヴィータの声を聞いたティアナ達は、ビクッと体を大きく震わせて反応した。

「は…はい！」

エリオとキャロが応えた直後、

「人の心配をしている暇はあるかな？」

鍬死楼がそう言うと、ヴィータの目の前まで飛び出している。
ヴィータは振り向くと、避けられず、障壁を張る暇もなく、鍬死楼が振るう凶剣にモロに直撃して斬られてしまい、落下して地に落ちた。

「ヴィータ副隊長！！」

ティアナ、エリオ、キャロは絶叫してヴィータを呼ぶ。
ヴィータの腹の部分からは血が溢れてしまっており、体が動かなくなってきている。
それを見たフォアード部隊は恐怖で体が動けず、鍬死楼の刀にはヴィータの血が染み付いている。

「戦場では油断したら死ぬもんだぜ？・・・そこのボーヤとお譲ちゃん2人も理解できたかい？」

殺気がティアナ達3人に向けられるとティアナ達は体を震わせ、涙目で怯えた表情で鍬死楼を見た。

「まぁ良い。とりあえず今すぐにあの世で副隊長さんに会わせてや

るよ。」

鍬死楼は不気味な笑顔で笑い、素早い動きでティアナ達に迫ってくる。

3人は必死にすくんだ足を動かそうとするが，恐怖の余りに動けなかった。

鍬死楼が刀を横に振ったその時だった。

ガキィイン!!

鍬死楼の剣がティアナ達に届く前に、その刀は他の刀と直撃して防がれた。

ティアナ達の目の前には、スーツ姿の桂がいた。

「か・・・桂さん!」

エリオとキャロが桂の名を呼び出すと、桂は自分が先ほど感じた不自然な気が的中したと考える。

「我ながら勘の鋭いと言うべきか。この世界にも刀を振るう者が存在するとは・・・」

おそらくは自分と同じく『次元漂流者』であると確信する。

男の服は自分と同じ着物であり，間違いなく修羅の道を進んだ狂気の武士であると判明する。

そして鍬死楼は桂の顔を見て驚きと同時に笑い出す。

「ふふふ・・・小さな動物を狩り来たが，こんな所でアンタと会え

るとは思えなかったよ」

男は一度バックして離れると、被り笠を取り出すと、眼は鋭い眼つきををしており、烈火の短髪に右頬に爪痕の様な刀傷が付いている。
その男の顔を見て桂は驚きだす。

ホテル内。
銀時とユーノは、トイレから出た後も話をしていた。

「そういや、お前まだフェレットになれんの？」
「はい。なれますけど？」

ユーノは首を傾げながら答えた。

「フェレット姿で、まだ女湯覗いてたりすんのか？」

ニヤニヤ笑いながら、銀時は聞いた。

「だから！それは誤解ですってば！」

ユーノが必死に弁解する。

「銀時！」

そこへフェイト達がやってきた。
銀時はフェイト達を見た。
何だか様子がおかしい。外で何かあったか？

「銀ちゃん！なんか桂さんが急に出ていったんや！」
「ヅラが？」
「なんか様子がおかしくなって、何かあったんかな？」

桂が出て行った事に銀時も驚く。
何やら様子がおかしかったようである。

「桂さんもこの世界に来てたんだ…」

ユーノが叫んだ。

「ユーノ君！？」

そこでなのは達は、初めてユーノに気付いた。
一体、桂は何に気づいたのか気になる銀時は・・・

「お前らは中の警備続けてろ」

銀時は走り出した。

「銀時！！」

フェイトが呼び止めた。
銀時は振り返って、フェイトを見た。

「気をつけて…」
「ああ」

銀時は走り出した。
フェイト達は、走っていく銀時の背中を見つめた。

フェイトは銀時の無事を祈った。

＊

銀時は、ホテルの出入口に着いた。ドアを開けて、外に出る。
ホテルの前にヴィータ達の姿はなく、地面が抉れ、木が何本も折れていたり、戦いの跡だけが残っていた。

「銀時！」
「銀時さん！」

スバルと狼形態のアルフがやってきた。スバルの手には、銀時の木刀を握っている。

「スバル、アルフ！ヅラに何があった？」
「それが、何か真剣な表情で急いでいた用で、シャマル先生に頼んで刀を取り出して森の奥に走っていっちゃったそうです！！」

スバルとアルフも桂の様子が気になっていた。
そしてスバルは銀時に木刀を銀時に渡した。

「とりあえず、２人ともあたしの背中に乗りな！」

銀時とスバルはアルフの背中に乗った。

「久しぶりに頼むぜ、アルフ！」
「はいよ！しっかり捕まってな！」
「はい！」

銀時とスバルを乗せて、アルフは走り出し

一方の桂は、鍬死楼と名乗る男と顔合わせすると、鍬死楼の顔を見て驚きの表情を出す。

「ば・・・馬鹿な！貴様は・・・元・真選組諸士調役兼監察、大威(おおい)四鍬死楼(しくわしろう)！！」

桂は男の顔を知っていた。
その男は元・真選組であり、剣術でも指折りの実力を誇る武将であったが、同時に最も危険な人物でもある。

「幕府を護る真選組の１人でありながら、数多くの幕府側の人間と天人を合計１００人以上斬り殺し、真選組から追放されて指名手配犯されている人斬りが・・・何故こんな場所に！？」

行方不明であると聞いたが、まさかこの世界に飛ばされた事には驚きを隠せなかった。

「何、俺はある人物にこの刀を渡されて、試す用に頼まれただけだ」
「ある人物だと？」

おそらくは鍬死楼は真選組を抜けて逃亡した後、ある組織と手を組んだ用である。

「しかし嬉しいね。こんな所であの桂小太郎に会えるとは・・・も

しかすれば伝説の『白夜叉』もいるって訳か」

桂がいる事は、銀時も存在する事を確信する鍬死楼は愉快そうに笑い出す。

そんな桂は鋭い目つきで鍬死楼に剣を向ける。

「貴様の目的がなんなのかは知らぬが・・・俺の仲間に危害を加えたからには、この『狂乱の貴公子』桂小太郎が天誅を下す！ティアナ殿、エリオ殿、キャロ殿！ヴィータ殿を頼む！この男は俺が何とかする！」

「は・・・はい！」

ティアナ達3人は桂の言う通り、重傷して倒れているヴィータをつれてこの場を去る。

「ふふふ・・・かつては攘夷志士でも国の為に天人と幕府を潰す為に数多くのテロ行為をした狂乱の貴公子様も随分と丸くなったな。しかも自分の国以外の為に戦うとはな？」

「少なくとも、目の前にいる貴様のような下衆な者を見過ごすほど、この桂小太郎は甘くはない！貴様の目的が何なのか、思う存分聞かせてもらう！」

桂は刀を構えて鍬死楼に目的を全て吐かせようとすると、鍬死楼は愉快そうに笑い出す。

「ふふふ・・・良いねぇ。殺しがいがあるよ。だがあいにく、俺には最高の兵器があるがな」

「兵器だと？」

鍬死楼が兵器を持っていることに桂は驚くが、鍬死楼には兵器らし

き物は持っていない。
だが、鍬死楼の刀を良く見て見ると・・・何やら一瞬だけピンク色に光った。

「まさか，その刀は――」

桂がそう言いだそうとした瞬間、とてつもない速さで鍬死楼は桂を襲いだして刀を縦に振るう。

「てぃあああああああああ！」

ガキィン！

「ぐぅ！」

男の予想外の速さに桂はギリギリに防ぐが、その動きは人間の常識を超えていた。

「チィ！」

桂は鍬死楼の刀を受け流して横に振るうが、鍬死楼はジャンプして裂けて、そのまま桂に向かって刀を振るうが、桂はバックして交した。

「あーっはっはっはっはっは！」

鍬死楼は笑いながら刀を豪快に振り続ける。
その剣速は異常なまでも早く、力がある。
桂はその剣を受け流すので精一杯だが、冷静な考えで男の剣を見切っていた。

（この威力と人間の常識を超えた動き・・・間違いない！）

鍬死楼の持っている刀はとても常識を超えたものであり、どうしてその刀を持っているのかを正直分からないが、このままでは後が続かないと桂は確信し、鍬死楼から離れてポケットに手を入れ、そこから『んまい棒』を取り出す。

「んまい棒、混捕駄呪（コーン・ポタージュ）！！」

んまい棒を地面に投げ、辺りが煙に包まれた。煙の中で鍬死楼は混乱してる。

「こんな小細工で俺の動きを防げると思ったかぁ！？」

鍬死楼は大きく叫ぶと刀を大きく振り、その剣圧によって煙は一掃されて消える。

その隙に、桂が鍬死楼の背後を取り、刀を上段に構える。

「おおぉおおおおおおおおおおおお！！！！」

桂は刀を力を込めて振るう。

そして・・・・・・

ガキィン！！

鍬死楼の刀は間っ二つに折れてしまい、刀身は地面に落ちる。

（刀を折るのが目的だったか！）

桂の思わぬ策略に驚く鍬士郎。

「あいにく、その刀の強さは一度体験している身でな。二度目の敗北をする訳には行かない」

桂は刀を鍬死楼に向ける。

刀をなくした鍬死楼はもはや戦闘不能だが、不気味に笑う。

「ふふふ・・・まさかこの刀を折ることを狙っていたとは・・・だがこいつは模造品でね・・・それに一本だけじゃないんだよ」

「何だと！？」

桂が驚く中、鍬死楼は懐に手を入れ、そこから煙玉を投げると辺りは煙に包まれる。

「ぐ！？」

桂は刀を振り回すが、そこに鍬死楼の姿はいない。

【今回はこのまま引いておこう。だが次に会った時には、模造品じゃなく完成品で相手をしよう。再会を楽しみに待っているぜ！！】

「待て、鍬死楼！！」

しばらくの間、辺りの煙が消える中、そこには鍬死楼の姿はいなくなった。

桂の眼に映ったのは、折れた刀であった。

その刀を拾って良く見ると・・・やはり桂の思ったとおりであった。

そしてちょうど良いタイミングで銀時、スバル、アルフの3人がやってきた。

「ヅラァ！無事かー！？」
「ヅラじゃない、桂だ！・・・それより、ヴィータ殿の様子はどうだ？」

桂はヴィータのほうを聞きだすと、アルフがヴィータの事を言い出す。

「酷い傷だったけど、幸いにも浅かったからシャマルの治療魔法で何とか無事に回復したよ！フォワード隊が早くシャマルのところに運んでくれたおかげだよ！」
「そうか・・・それは何よりだ」

アルフの報告を聞いて安心する桂に、スバルが話しかける。

「それより桂さん、一体何があったのですか？」

スバルが訪ねると桂は深刻な顔になる。

「とても信じられないが、銀時には話しておこう」

桂は、鍬死楼の襲来を銀時とアルフに話しだす。

＊

「じゃあ・・・その鍬死楼って男は銀時達の世界の人物で、元・真選組の一員だったって訳!?」

アルフは驚きだし、銀時もアルフよりはそんなに驚いていないが、元・真選組の1人が奇襲してきた事には驚きを隠せなかった。

「真撰組って、あの銀時さんと一緒に『ジュエルシード事件』を解決した、近藤勲さん、土方十四郎さん、沖田総悟さんの3人の事ですか!?」

スバルは真選組の事を桂に聞くと、桂は頷く。
最も、桂は真選組もこの世界に来てた事は初耳のようである。

「あのチンピラ警察どもの・・・」
「他の攘夷志士達から『人斬り鍬死楼』の事を聞かされてな。局長・副長・一番隊組長には劣るがその剣の腕は真選組でも指折りの実力を持つそうだ。だが、狂気に満たされた奴の剣は俺や銀時に比べればたいした事はないが、問題は奴が使用していた刀だ」

桂は、自ら折った鍬死楼の刀を銀時、スバル、アルフに見せる。
その折れた先には、わずかだが何やら機械装置のような物が見える。

「なんですか、この刀?桂さんが使用している刀とは違って、鉄じゃなく機械で作られら様な感じがする」

不思議そうにスバルは言い出すが、銀時は以前にどこかで見た事がありそうな感じで刀を見る。

「おいおい、まるで機械(カラクリ)技術で作られた刀じゃねぇか・・・どうしてこの世界に?」

銀時も不気味悪く見るが、桂はこの刀の正体を口に出す。

「おそらくこの刀は・・・・・・紅桜(べにざくら)だ」

桂がその名を言い出すと、銀時はあり得ないかのような表情を表して驚く。

「紅桜(べにざくら)!?・・・紅桜(べにざくら)ってあの・・・妖刀『紅桜(べにざくら)』か!?」

信じられないような表情を表す銀時が桂にそう言うと、桂は目を瞑って縦に顔を頷く。

「おい!?ちょっとまて!あれはお前が全て破壊したんじゃ!?」

「俺自身も信じられない。だが、鉄ではなく機械(からくり)で作られた刀は間違いなく紅桜だ」

鉄じゃなく機械(からくり)作られている為、間違いなく紅桜(べにざくら)である。

紅桜は桂の手によって全て破壊されたはずである。

銀時自身も、『人斬り似蔵』との死闘で完膚なきまでに破壊した。

桂自身も正直、信じられなかったようである。

「しかもこれは模造品であり、これ一本ではないようだ」

「一本だけじゃないのかよ!?」

この紅桜が模造品の上に一本だけじゃない事にあり得ない程驚く。

紅桜だけじゃない、えいりあんや元・真戦組である鍬死楼の存在。

どれも銀時の世界の存在であり、フェイト達の世界では存在しないはず。

「銀時、桂、その刀の事を知っているのかい!?それに・・・妖刀って」

アルフは2人に紅桜の事を聞き出そうとする。
スバルも気になっている。
そして桂は深刻な顔でアルフに紅桜とある事を話す。

「昔、俺達の世界で、宇宙から来た異人、天人との戦『譲夷戦争』が起こった。俺達攘夷志士は天人から江戸を守る為に死闘を繰り広げた。そしてかつての仲間が作り上げ、現在では幕府を潰す為に復興させた武装集団『鬼兵隊(きへいたい)』が存在する」

「鬼兵隊・・・」

鬼兵隊の事を話す桂は、それがどういう集団かをスバルとアルフに説明する。

「強力な武器や兵器を数多く作り上げ、それを使いこなして敵を抹殺する。文字通り鬼の様な強さを持った集団。その中でも、やつ等が生み出した兵器の中でも最も恐ろしいのが、この妖刀『紅桜』だ」

銀時と桂も、「鬼兵隊」が使ってきた兵器の中でも最も恐ろしかったのが、この紅桜であると言う。

「紅桜・・・本来は江戸随一の刀匠・村田仁鉄(むらたじんてつ)が作り上げた名刀だが、その跡継ぎである　村田鉄矢(むらたてつや)によって機械と融合させて、紅桜は兵器と化した。」

桂自身も、以前は『人斬り似蔵』辻斬りによって、紅桜の恐ろしさを体験している。

「『電魄(でんぱく)』と呼ばれる人工知能を有し、使用者に寄生することでその体をも操るばかりでなく、戦闘の経緯をデータ化し、学習を積むことでその能力を向上させていく。・・・紅桜とは、対戦艦用機械機動兵器(たいせんかんようからくりきどうへいき)に改造された悪魔の兵器の事だ」

桂の説明を聞くと、スバルとアルフは驚きす。

「え・・・対戦艦用機械機動兵器(たいせんかんようからくりきどうへいき)!?」

刀で戦艦と対極するなんて絶対に予想できない事である。
だが、実際に使用した似蔵も攘夷志士達の襲来で、戦艦を二隻破壊したのである。

「紅桜は使いこなせば一振りで戦艦十隻もの戦闘力に発揮する。・・・あの生物型ロストロギアである、魔導生物兵器『ゾーマ』をも匹敵する力に」

「あのゾーマに匹敵!?」

アルフは驚いた。
銀時でも死闘の果てまでに苦戦したあのゾーマに匹敵する強さを兵器1つで身につけられるなら、それはまさに悪魔の兵器としか言いようが無い。

「そんなのが1本だけじゃなく、何本も作られたら・・・取り返しの付かない事になりますよ!」

想像するだけで恐ろしくぞっとするスバル。
そして桂はある事を確信する。

「一体何故この刀が存在するのか知らぬが・・・言える事はただ1

つ」

桂は深刻な顔から怒りの表情を表す。
銀時もその意味を理解する。

「ヅラ、まさかアイツが・・・」
「ああ、あの男がこの世界に来ているのは間違いない！」

手を握って、桂はある人物を思い出す。
かつての仲間であり、次に会った時には斬ると誓った。
攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男であり、銀時と桂の因縁の男。

「鬼兵隊のリーダーであり、幕府を潰す為に天人と手を組んだ・・・
高杉晋助（たかすぎしんすけ）が！」

＊

人気のない所で、ティアナは1人落ち込んでいた。
証明出来なかったからである。
あの時、ヴィータがいなければエリオに直撃していたのであり、鍬死楼と名乗る男の狂気に怯えて何も出来ず、結局桂に助けられて、自分は逃げる事しかできなかった。

「ううううっ！　私・・・は」

ティアナの眼から、涙が大量に出る。

「うあぁぁぁぁぁぁ！」

堪らなく悔しかった。
自分のミスショットが許せなかった。
何度も悔やみ、何度も泣き叫び、ティアナはそのくり返しをする事しか出来なかった。

第九訓：刃物は危ないから人に向けてはいけない（後書き）

ユーノ、真実を知る！

桂のライバル（！？）登場！！

そして、力を欲するティアナの心が揺さぶる！

ヴィータ「次回、「告白するなら勇気を出して言うべし！」テイクオフ！」

第十訓：告白するなら勇気を出して言うべし！（前書き）

桂のライバルっと言うより桂を嫌う人物が登場！

ユーノ、真実を知る！

そして、ティアナの心は！

ユーノ「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります。」

第十訓：告白するなら勇気を出して言うべし！

桂はエリザベスと一緒にはやてと合流し、ホテルアグスタのとある店の中で鍬死楼と紅桜の事を全て話した。
桂とエリザベスは茶を飲み、はやてはコーヒーを飲んでいた。
はやてはとても信じられないような驚きをする。

「じゃあ、その鍬死楼って男がヴィータ達を襲ってきた人物で、元は桂さん達の世界の世界の人物ってわけやな」
「ああ、俺も正直言って信じられない。だが現実に起こった事をこの眼で見てきた。奴自身も危険だが・・・・・」
「それ以上に紅桜とか言う対戦艦用機械機動兵器が厄介かぁ。」

はやても最初に刀で戦艦を倒せる威力を持つなんて信じられなかったが，桂も鬼兵隊との対決で見たあの凄まじい威力は今でも忘れたくても忘れられなかった。
おそらくは刀匠とカラクリ師が力を合わせて作ったのに違いないと考える。
だが、それほどまでの危険な技術を一体何処で、しかもここはフェイト達の世界の為、何処で紅桜の存在を知ったか不明である。

「いずれにしろ，八神殿も気をつけたほうが良い。人斬りの中には『辻斬り』と言う突如襲って斬り殺す連中も存在するからな」
『夜の出歩きは控えめに』
「了解や」

桂の忠告を聞いてはやては返事をする。
すると1人の男が後ろからやってくる。
緑色のロングヘアーでその長さは桂の長髪とそっくりである。

「おや、はやてじゃないか。」

男の声にはやては振り向くと，見覚えのある顔を見て・・・

「ロッサ！」

まさかの再会に驚き、その名を言い出すはやて。

彼は「ヴェロッサ・アコース」時空管理局・本局査察部所属の査察官でカリム・グラシアの義弟。
はやてにとっては兄的な存在である。

「久し振りや！こんな所で何してたん？まさかまたお仕事ほったらかしといて遊んでるんとちゃいますか？」
「酷いな・・・こっちも仕事中だよ。それより部隊、上手く行っているみたいだね。」

アコースは機動六課の事を話し出すと、はやても今の様子を見る。

「うん・・・ロッサのお義姉さん、カリムが守っておるお陰や」
「うむ、僕も何か手伝えたら良いけどね」
「ロッサも遅刻とサボりは上等やけど、基本的には急がしいんや」
「酷いや・・・」

ニコニコと笑うはやてだが厳しく言い、ヴェロッサは苦笑する。

「カリムも心配しとるんよ？可愛いロッサのいろんな意味で。」
「心配はお相子だよ。はやてだって僕とカリムにとっては・・・妹みたいな者だし」

そう、はやてにとってもヴェロッサとカリムは兄と姉みたいな存在だった。
そしてはやてはある事を思い出した。

「そう言えば、ロッサ。ユーノ君とお友達やったん？」
「ああ，僕が無限書庫に調べに行った時、彼が直々に案内してくださったんでね。つい最近の事だよ」
「ふーん」

はやての質問に答えると、ヴェロッサは桂に顔を向く。

「君があの『狂乱の貴公子』桂小太郎で、隣がエリザベスだね。」
「む？俺の事を知っているか？」

初対面である者に、自分の存在が知られている事に驚く。

「知っているも何も、君は小さい頃のはやてを『ヴォルケンリッター』達と共に守ってくれた上はやてにとってもかけがえのない恩人であり、あの『異種生命体事件』を解決してくれた英雄の２人だからね」

『異種生命体事件』，それは初めて銀時達が来た時に突如現れた寄生型えいりあんの事である。
ここの世界の人物はえいりあんの事は異種生命体と呼んでいる。
そして桂とエリザベスは『闇の書・ゾーマ事件』だけじゃなく『異種生命体事件』をも解決した英雄的な存在である。
思い出したかのようにはやてがヴェロッサの紹介をする。

「紹介をするな。こちらは時空管理局・本局査察部所属の査察官で

あるヴェロッサ・アコースや。私の兄みたいな存在や」
はやてが自己紹介をすると、桂はヴェロッサに挨拶する。
「ほぉー、八神殿のか。改めて紹介しようヴェロッサ殿。俺は桂小太郎。好物はそばだ」
「え？何で好物も言う必要あるの？」
桂の好物紹介に苦笑するヴェロッサ。
そして桂に続いてエリザベスがボートを出して自己紹介する。
『どうも、エリザベスです。』
「君達の事ははやてから聞いている。いつもはやて達がお世話になっている」
ニコリと笑うヴェロッサに、桂も笑って話し出す。
「いや、むしろこちらがお世話になっている側だ」
「それもそうかもね。まぁ、今後もよろしくね」
ヴェロッサは手を差し伸べると、桂もその手を掴んで握手する。
・・・・が
（あれ？）
何やらヴェロッサの手に圧力を感じて、気づけば力強く握られている。
（なんか、凄く痛いんですけど？それより、気のせいかヴェロッサ

殿から凄まじい殺気を感じるんだが？）

青ざめて桂はそう思う。

気のせいではなく、ヴェロッサは間違いなく桂に強い殺気を放っている。

それはまるで妹の彼氏に嫉妬心を抱くシスコンの兄みたいな感じで。

（テメェなんかにうちのはやてはやらねぇよ！この人妻好き野郎が！！）

ヴェロッサは桂の事が気に食わなかった。

はやてから何度も桂の事を聞かされて、実ははやては桂に好意を持っていると感づくが、その思いは的中した。

ヴェロッサの殺気にエリザベスは怖がり、殺気を向けられている桂と隣にいるはやては気づかなかった。

ガジェットとの激戦を終え、現場では調査班が現場検証をしていた。

フェイト達も現場検証の手伝いをしている。

ティアナは、エリオ達から少し離れた所で、なのはと話をしていた。

ガジェットとの戦いでのミスショットの事で、なのはに少し怒られた。

話が終わり、ティアナはゆっくりとした足取りで、スバルの所へ向かった。

神楽と月詠は事後処理をキャロとエリオとやっている。

キャロは銀時、フェイト、アルフ、ユーノと話しているのを見て神楽に聞く。

「神楽さん、フェイトさんと話している人って考古学者のユーノ先

生ですよね？」
「ん？たしか無限なんたらのリーダーぽくて、なのはちゃん達の幼なじみね。淫獣だからキャロは近づいちゃダメね。エリオもあんな大人になっちゃダメアルよ」
「はい？」
「わ・・・分かりました」
「きゅくー！」

エリオ、キャロ、フリードは神楽の説明に納得して返事をする

「ちょっと待て！今の説明はなんじゃ！？特に最後！！」

月詠が呆れてツッコミをすると、神楽は呆れたような表情でユーノの事を言い出す。

「ユーノは以前、子供の時になのは達の裸をフェレットの姿で見た野蛮な男だったね！自覚はないとは言え、女の敵アル」

神楽はそう言いだす。
以前、海鳴温泉でフェレット姿でなのはと一緒に女湯を入った事がある。
それがきっかけで、フェレット姿の話をされるといつもそのネタでからかわれてしまう事が多いのである。
そして銀時とフェイトに呼ばれて、神楽達は向こうに行く。
なのはがティアナとの話しを終え、銀時達に駆けつけ、銀時、フェイト、アルフは、ユーノの護衛をなのはに変えてこの場を去る。

「ユーノも大人になったし・・・そろそろなのはに告白すんじゃねェ？」

銀時はニヤニヤと笑いながら面白そうに言い出すが、フェイトは苦笑して銀時に話し出す。

「そんなことをすれば・・・ユーノは心を痛むかもね」

苦笑してフェイトはそう言うと、その意味を理解した銀時は、「あ！」っと叫んで思い出した。
なのはは銀時に好意を持っていてユーノには友達としか見ていないことに。
神楽、月詠、アルフ、エリオ、キャロは銀時の叫びに驚きだす。

「ヤベーよ、そんな事になっちまったら俺、ユーノに殺されそうだよ！？どうしよう！！」

ガクガクと震える銀時に、フェイトは銀時の片腕を両腕で掴む。

「大丈夫だよ。何かが会った時には私が銀時を守るから♪／／／」

顔を真っ赤に染めて銀時にそう言うフェイト。
腕にフェイトの胸の谷間が少し挟んでいる事で、銀時は物凄く動揺している。
２人の光景に神楽とアルフは不機嫌そうな顔をして、月詠は興味深そうに二人を見て、エリオとキャロにいたっては顔を真っ赤に染めている。

＊

なのははユーノと久しぶりに話す。
やっぱり友達と話すのは楽しいようであった。
そしてユーノが真剣な表情をする。

「なのは、君に言いたい伝えたい事があるんだ！」
「ふぇ！？なっ何をですか？」

なのははユーノの真剣な表情に驚くと、ユーノは顔を真っ赤にしてなのはに伝える。
１０年間のなのはに対する思いを今こそ彼女に伝える為に。

「なのは！僕は君が好きだ！／／／」
「・・・・・ふえーー！？」

突如の告白になのはは驚くと、ユーノはさらに言い出す。

「僕と付き合ってください！／／／」

恋人として付き合う事をなのはに伝える。
全て言い切ったから彼は、なのはの返事を待つが・・・

「・・・・・ユーノ君・・・告白はうれしいんだけど・・・ごめんなさい！／／／」

ガーン！！

その返事を却下するなのはにユーノは振られてしまったことに絶望する。

「実は私、１０年前から銀さんの事が気になってて、今は銀さんの事が好きになちゃったみたいなの／／／」

「ええー！？」

なのはの告白に驚きを隠せなかったユーノは驚きを隠せなかった。なのはが銀時の事を思っていたなんて知らなかった。

「ぎ・・・銀さんだって！？だって、銀さんにはフェイトにアルフ、それにシグナムだって・・・」

「分かっているよ！・・・でも・・・あの『闇の書・ゾーマ事件』以来、銀さんの事が気になって気持ちがもやもやしていたんだ／／／」

気持ちを抑えられないなのはは銀時の事が好きであった事を知り、以前に告白したのである。

「だから・・・ユーノ君、ごめんなさい！！」

もう一度頭を下げて誤るなのはに、ユーノは・・・

「い・・・いや、そのう・・・大丈夫だよ！自分の気持ちを伝えられたからそれで十分だよ」

苦笑しながらもユーノはなのはにそう言った。

どんなに足掻いても振られた事には変わりはないのである。

「じゃ・・・じゃあ、僕はそろそろ行くね」

ユーノ君は建物に向かうと・・・

「ユーノ君！」

なのはが呼ぶと振り向き私は笑顔で言う

「私達はこれからもずっと友達だから！だから、ユーノ君も頑張ってね！」

ユーノも笑顔でなのはに手を振り建物の中に入った。

その後、なのはに振られた事に強いショックを受けてかなり落ち込んでしまった事には言うまでもない。

＊

ホテルアグスタから帰って来たところだ

「じゃあ今日はもう解散」

「しっかり休んで今日の疲れを取ってね」

『『はい！』』

俺となのは達は隊舎にフォワード達は宿舎に戻って行く。ちなみにはやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リィンはヴィータの看病をするために病院に行った。幸いにもそんなに重傷ではない為、明日には退院できるようである。

「銀時さん、ちょっと言いかな？」

スバルが話したい事があると言いスバルの部屋に向かう銀時。
桂、神楽、エリザベス、月詠、リィンフォースも銀時について行く事になった。

＊

そこは、スバルとティアナが寝泊りする部屋。
全員椅子に座り、スバルはティアナの事を話し出す。

「実は、ティアナの事で話があって呼んだんだ。」
「ティアナ殿の事か？教導の時も時々だが、ティアナ殿は無茶する事が多い・・・力を求めるのは珍しくはないが……ティアナ殿のは度が過ぎてる事が多い」
「一体ティアナに何があったと言うんじゃ？」

桂と月詠はティアナの無茶な行動に、もう言われずにはおれなかった。
銀時、神楽、エリザベスも、同じ気持ちである。
リィンフォースも同じく気になっていた。
スバルは顔を暗くしてある局員のプロフィールを出す。

出たのはティアナの兄、ティーダ・ランスター。

首都航空隊所属の一等空尉で執務官志望のエリート魔導師だったが、ティアナが１０歳の時に殉職している。享年２１。
スバルは彼の経歴を話し、彼が違法魔導師に手傷を負わせけど逃がしてそして殉職した事を話し顔を更に辛そうにする。

「その時ね、心無い上司が死んでも捕まえるべきだった・・最後に役たたずで無意味って言ったんだ」

そう言うと銀時、桂、月詠、リインフォースは無言に黙りこむ。

「酷いアル！命をかけてまで真剣に戦った部下に対する台詞じゃないね！」

『全くだ！』

神楽とエリザベスは怒りを表している。

「その時ティアはまだ１０歳、沢山傷付いて、沢山悲しんだ・・・」

話しは終わり銀時達もそれぞれの場所へ行く。

話を聞いた銀時はスバルを連れてティアナの所に向かう。

＊

ティアナは一人訓練をやっていた。

すでに４時間もやっていた。

ティアナは訓練を続けていた。辺りはすっかり暗くなり、夜空には綺麗な星が輝いている。

途中でティアナは息が荒くなり、地面に膝をついた。

汗を拭いて呼吸を整え、立ち上がった時、

「いや～、精が出んなぁ」

のんびりとした声が聞こえた。

後ろを見ると、そこにはニヤニヤと笑っている銀時とスバルがいた。

「銀時さん！スバル！」

ティアナは驚いた。

「い…いつから見てたんですか？」

「い・・・いや、さっき来たばかりだよ！あ・・・あはは！！」

「それより、ここら辺で終わりにすりゃどうだ？」

私の事を心配して？

ティアナは少し戸惑った。

「だ、大丈夫です。まだもう少し続けます！」

慌てて銀時とスバルから顔をそらす。

「ヅラ達から聞いたぜ。俺がいねぇ間に、なんかいろいろ大変だったそうじゃねぇか」

「……」

ティアナは、少し顔を俯いた。

「ミスショットがそんなにショックか？」

銀時が尋ねた。

ティアナは黙ったまま答えない。銀時とスバルに背を向けて、クロスミラージュを構えて訓練を再開する。

「朝晩の訓練を見てて思ったんだが、ティアナは無理してる感じが

ありまくりだぜ？」

訓練してるティアナを見つめながら、銀時は言った。
ティアナは動きを止めた。

「訓練の様子…見てたんですか？」

少し驚いた感じでティアナは尋ねた。

「たまにだがな」

欠伸をかきながら、銀時は答えた。

「お前の無茶な特訓はヴラ達も知ってやがるぜ。無茶してまで強くなりたいんかよ？」
「…詰め込んで練習しないと上手くなんないんです。凡人なもので」

そう答えて、ティアナは訓練を再開した。

「俺から見りゃ、魔法が使えるってだけで凄ェと思うがよォ」

少し羨ましそうに銀時は言った。
もし、銀時が魔法を使えればかめはめ波を撃てると考えている。
ティアナは再び動きを止めた。

「ただ魔法が使えるだけじゃ…ダメなのよ……」

背を向けたまま、ティアナは言った。

「私には……スバル達みたいな才能もないし…キャロみたいなレア

スキルもない…」
「ティア・・・・・・」
クロスミラージュを握る手に力が入る。
銀時は黙って、ティアナの話を聞いてる。
「だから私は…少しぐらい無理をしないと、強くなれないんです！！」
ティアナの大きな声が庭に響いた。
ティアナの様子を見て、銀時はため息をついた。
「お前の兄貴の事は、スバルから聞いたぜ？」
「！？」
兄の事を口に出す銀時に、ティアナは後ろを振り向く。
何故、兄の事を銀時が話し出すのかを聞こうとする前に、銀時は話し出す。
「災難だったな。残酷な上官に無能扱いされた上に亡くなっちまったなんざ、二重の悲しみを背負ってしまったもんじゃねぇか」
「・・・何が・・・言いたいんですか？」
深刻な顔でティアナは銀時を睨みつける。
「まぁ、他人の事は言えた義理じゃねぇが・・・俺もお前と一緒で家族がいねぇんだよ」
「え？」
睨みつける事を辞めて、ティアナは驚きだす。

スバルも銀時に家族がいないことを始めて知った。
銀時は少し自分の過去を話し出す。

「俺がまだガキの頃、戦争が繰り返され、両親は死んじまった。親の顔はろくに覚えていねぇで、どう生きれば良いのか分からなくてよォ・・・んで、命を落とした者の所有物をはぎ取りながら生活するしかなかった訳だ」

初めて聞かされる銀時の過去にスバルとティアナは黙って聞くしかなかった。
小さい頃でも、銀時は屍を食う鬼として恐れられており、生きていく為にはこれ以外の方法しかなかった。

「まぁ、それでもお前さんの兄貴にゃあ関係ねぇ事だが・・・俺が言える事はただ一つ。・・・お前の兄貴、ティーダは望んでんのはお前が強くなる事や立派な魔導士なる事じゃねぇ」
「それは、どういう事ですか!?」

兄・ティーダが望んでいるのが妹であるティアナが強くなる事と立派な魔導士になることでもない事にティアナは銀時にそれがどういう意味かを聞きだすと、銀時ははっきりと言いだす。

「てめェ自身の幸せだ」
「!?」

銀時がそう言うとティアナは何かを打ち遂げたかのような感じで深刻な顔を消す。

「無茶して苦しんでまで強くなるなんざ、兄は求めているのか?いくらお前が強くったって、兄は戻っては来れねぇんだぜ?」

「でも・・・私は！」
「分かってりゃ！兄の魔法の強さを証明してぇんだろ？」
ティアナの言いたい事を銀時は理解している。
「確かにお前の兄貴の上司は無能であると言っちまっが、現にここにいるスバルやお前の上司であるフェイト達はそう思っていんのか？」
「！？」
銀時の言葉にティアナはスバルを見る。
スバル自身はティアナの兄が無能であるとは一度も思ってはいなかった。
「確かにお前には家族はいねぇ・・・けど現に家族の絆と同じぐらいの固い絆で結ばれている仲間がいるだろ？」
銀時はそう言いながらスバルの頭に手を載せると、スバルは少し顔を真っ赤に染める。
「俺が言いてぇ事わかるか？」
銀時はティアナに尋ねた。
ティアナは黙って考えた。
少し考えて、ティアナは銀時に顔を向けた。
「…自分を心配してくれてる人がいるって事ですか？」
「その通り」
今度はティアナの頭を撫でると、ティアナは恥ずかしがる。

「人間ってのは脆い生き物なもんだ、誰かに支えられてやらねぇと行けねェもんだ……それがマヨラーでも」

銀時のそのマヨラーの事は、真選組の『鬼の副長』である土方十四郎の事であった。

銀時の話を聞いて、ティアナは考えた。

私が傷つけば、心配したり悲しむ人がいる。なのはさんやスバル、他にも沢山の人が。

「……」

私は悔しかった。兄さんが教えてくれた魔法は役立たずじゃない。それを証明したくて。兄さんの執務官になる夢を叶えたかった。でも、銀時さんの話を聞いて、スバルや皆に心配させてまで、仲間を危険な目に遭わせてまでする事じゃない気がする。

「あの…銀時さん……」

「あァ？」

「ごめんなさい！私…自分勝手で…銀時さんやスバル、みんなに心配ばかりかけて……」

目を固く閉じて、大きな声で銀時に謝った。

銀時さんの言葉で気がついたのだ。

私は一人じゃない。私の事を想ってくれる人達がいる。

「どうやら分かったようだな……それによぉ、現にお前の事を心配してくれてる仲間は、目の前にいるぜ？」

銀時がそう言うと、スバルの方を向く。

「ティア」

スバルは優しい声でティアナの名を呼ぶ。
そしてティアナはゆっくりとスバルに近づいてきて抱きつく。

「スバル・・・ご免・・・心配かけて本当にご免ね」

ティアナは、涙を流しながらスバルに謝罪する。
そしてスバルはそんなティアナを優しく撫でて励ます。

そう、ティアはもう1人じゃない。
銀時とスバルを始め、なのは達がいる。
仲間がいるからこそ強くなれるのだ。

安心したかのように銀時は・・・

「お前はもう1人じゃねぇんだ」

ティアナの頭を撫でながらそう言うとティアナがくすぐったそうに目を細めた。
ティアナは安心感と同時に何やら顔を真っ赤に染めていた。

「それと・・・今更言うのもなんだが、俺の事は『銀時さん』じゃなく、『銀さん』って呼んでくれても良いぜ」

「はい」

銀時がそう言いだすと、スバルは答える。
ティアナは銀時を見て顔を赤くして何かもじもじすると、ある事を言い出す。

「あの・・・銀さん・・・もし宜しければ・・・兄さんって呼んでいいですか？」
「・・・・・・・は？」
「へ？」

銀時とスバルは豆鉄砲食らったような表情をする。
そして銀時は頭を右手でごしごしとこすって・・・・・・

「まぁ、別に良いけど？」

そう答えるとティアナは嬉しく感じて銀時に抱きつく。
その様子を見てスバルは羨ましそうにティアナを見る。

「んじゃ、一件落着と言う事だし、帰るぞ」
『『はい！』』

2人は力強く返事をする。
寮に帰ろうと3人は歩き出す。
だが、すぐに銀時が足を止める。スバルとティアナは銀時の顔を見る。銀時は驚いた顔で目を見開いていた。
スバルとティアナは銀時の視線の先を見た。

一人の男が銀時達に背を向けて道の先に立っていた。

派手な着物を着て、腰に刀を差している。
口にくわえている煙管を離し、フーッと白い煙を吐いた。夜風に吹かれて、白い煙は消えていった。
そして男は顔を上げた。

「この世界にも随分と、デケー月が出てるな」

夜空に輝く月を見上げて、男が言った。
後ろに誰かいると分かっていながら、不気味な雰囲気すら漂う。

「かぐや姫でも降りてきそうな夜だと思ったが…随分と懐かしい奴が降りてきたな」

男はゆっくりとこちらを振り返った。
振り返った男は左目を包帯で覆い、口にはキセルをくわえている。

「高杉…！？」

銀時が目を見開いて驚く。

「よぉ。久しぶりだな銀時ィ」

口元を歪めて不敵に笑う。
世界を救った英雄、『白夜叉』坂田銀時と、攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、高杉晋助の再会の瞬間であった。

第十訓：告白するなら勇気を出して言うべし！（後書き）

白夜叉と黒き獣の再会！

因縁の相手に揺さぶる銀時！

そして、あの人物がまさかの復活！

アルフ「次回、『死んだら化けずに成仏すべし』！テイクオフ！」

第十一訓：死んだら化けずに成仏すべし（前書き）

桂「ふはははははははははは！俺とエリザベスの出番がこれほどまでに多いとは、随分と素晴らしい小説ではないか！」

黒神「（うわぁ～なんかメッチャ喜んでいるな。まぁ，今回の小説では桂も重要人物だからな。）」

桂「田舎者のエセ警官の『真選組』の時代も終わった！これからは攘夷志士の時代だ！脇役の真選組などこの小説には必要ない！はーっはっはっはっはっはっは！」

黒神「（まぁ，逆に言えば桂の言う通り、『真選組』は今回脇役扱いかもな。・・・あのキャラ以外は・・・）」

リィン「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』，始まります。」

第十一訓：死んだら化けずに成仏すべし

ティアナの過去の苦しみを解放した銀時とスバルは寮に戻ろうとするが，そこに銀時は思わぬ人物と再会する。
攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男、武装集団『鬼兵隊（きへいたい）』のリーダー、高杉晋助。
かつて銀時と桂と共に攘夷戦争で天人と戦った仲間だが、憎しみで変わり果ててしまった今、銀時と桂の因縁の相手である。

（高杉？・・・まさか，この人が桂さんが言っていた『鬼兵隊』のリーダーで，かつては銀さんと桂さんと一緒に『攘夷戦争』て言う戦争で戦った高杉晋介！？）

以前，桂から紅桜の事で話をされ，最後に聞かされたのが高杉晋介。攘夷浪士でも最も危険な人物であると聞かされたので、どれ程恐ろしい人物なのかを想像していたが、それは予想以上だった。

『ティア・・・この人』
『分かっている。・・・この男・・・ヤバイ！とてつもなく危険な存在だわ！』

スバルとティアナも念話で話をする。
この男……危険な感じがする。
二人は、そう直感した。
エーリアンと言う奇妙な異種生命体や鍬死楼と言う男を見てきた。
だが目の前にいる男は、それがちっぽけに思える程の危険な感じを放っていた。
分かっている事はただ１つ。

高杉と呼ばれるその男は銀時の因縁の関係であるようである。

「…何でテメーがこんな所にいやがる？」

銀時が敵意をむき出して高杉に聞く。

これほどまでに敵意をむき出しにした銀時をスバルとティアナは初めて見た。

「おいおい、そんな物騒な怖い顔をするなよ。そこの2人の譲ちゃんが怖がっているぜ？」

「譲ちゃんじゃない」

高杉後ろから、声が聞こえた。

声を聞いた高杉は、笑いを止める。

この声は……！

高杉は後ろから1人の人の気配を感じた。

鬱陶しい黒い長髪に着物姿。右手に刀を握っていて高杉に向ける。

「桂だ」

高杉を見据えながら、桂小太郎が名乗った。

『『桂さん！！？』』

桂の登場にスバルとティアナが桂の名を呼ぶ。

「ククク……ヅラも随分と久し振りだな」

高杉の声を聞き、桂は高杉に睨みつける。

「やはり、貴様もこの世界に来ていたか…何で貴様がここにいる！」
桂も銀時と同じく敵意をむき出して高杉に聞く。
「何…数カ月前、攘夷浪士の間で妙な噂が流れてな。その噂が”桂小太郎がアニメの世界に行った”っていう事でよ。いてもたってもいられなくなって来ちまったよ」
「！！」
スバルとティアナが驚く。
自分達の世界がアニメの世界であると言う事に。
高杉は煙管を加える。
「俺達はその噂の真相を調べた。そしてあの、源外ってじーさんに辿り着いた。あのじーさんが作った装置で、別の世界に行くとは…ククク。お前等相変わらず馬鹿やってるなァ」
可笑しそうに高杉は笑った。
「だが、同じ仕組みの装置を作って、この世界に来た俺も馬鹿かもな」
高杉は自分自身の行動にもおかしく感じて笑い出す。
「実はなぁ、鬼兵隊と手を組んでる宇宙海賊『春雨』に，『獅子魔族』と言う天人である獅子王剣煉と言う裏切り者がいてよぉ、俺はそいつと手を組んで異世界の派手な祭りに参加したわけだ」
「春雨の裏切り者？」

高杉が春雨の裏切り者と手を組んだと言って驚く銀時。
鬼兵隊は世界を潰す為に、宇宙海賊”春雨”と手を組んだ。
しかし、まさかその裏切り者まで手を組むとは、それほどまでに高杉は世界に対する憎しみが大きい事である。

「そして、そいつの部下にじーさんが作ったのと同じ装置を作らせたわけだ」

煙管を口から離して煙を出す。

「馬鹿な話だろ?だが俺はその装置を使ってこの世界に来たんだよ」

銀時達は黙って高杉の話を聞いてる。

「そしたら本当に俺達のいた世界とは全く違う世界に来ちまった。せっかくだからよォ、この異世界で派手な祭りを開催させてもらったぜェ?」

高杉の説明に銀時と桂はある事を確信する。

「やはり、あの寄生型えいりあんの乱入も，鍬士郎の持っていた紅桜も・・・」

「全部テメェの仕業だったって事かい!」

さらに敵意をむき出して高杉に質問する2人。
同様せずに高杉はその質問に答える。

「くくく・・・銀時、以前ターミナルであの星海坊主と一緒にえいりあんと戦ったそうじゃねぇか。それでな、俺の部下達にこっそりとその寄生型えいりあんの死体の一部を回収させてもらい、サンプ

ルとして研究し続けたわけだ。そして剣煉の部下にそのサンプルを元に，『生体兵器』として作らせたわけよ」

「『生体兵器』！？」

『鬼兵隊』が武装や兵器を開発する事は聞いたが、まさか『生体兵器』まで作らせるとは驚きを隠せなかった。

「そんで鍬死楼は『真選組』でありながらも、幕府に強い失望感を持ち、家族も幕府に殺されてよ・・・そんで怒り任せで天人、幕府側の人間、仲間である『真選組』も皆殺しって訳だ」

「そして貴様は鍬死楼を『鬼兵隊』に入らせたわけか！」

「ククク，まぁな。そんでそいつに『紅桜』の模造品を持たせたわけだ。最も本物には到底及ばないがな」

そして高杉は、以前に紅桜の工場を破壊されたことを桂に話し出す。

「ヅラ，以前にお前が紅桜の工場に大量の爆弾を仕掛けて破壊したことを覚えているだろ？実はな，お前がしくじってくれたお陰で、一本だけだが残ったんだよ」

「ぐ！」

まさか全て破壊し切れなかったことに悔やむ桂。

「本物をベースに，『鬼兵隊』と剣煉の部下達に『紅桜』を大量に作らせたわけだ」

全ての元凶は高杉にあった。

銀時は今でも木刀を抜き出すような怒気を放っている。

「まさかアニメの世界で、テメェと会うことになるとはなァ」

「貴様の野望も、ここで沈ませてもらう！」

銀時と桂は高杉にそう言うが、高杉はククククっと笑いだす。

「銀時、ヅラ、お前等本当にこの世界の事を誤解してるな」

「誤解だと？」

桂が目を細めた。

「この世界は、アニメの世界なんかじゃねェ」

高杉が衝撃の一言を言った。

銀時、桂、スバル、ティアナの４人は、驚愕な表情を浮かべた。

「考えてみろ。どうして三次元の世界で生きてる俺達が、二次元の世界に行ける？」

「何って、源外のジーさんの装置で…」

「そこだよ」

高杉が銀時の声を遮った。

「そもそもじーさんが作った装置は、二次元の世界に行く為の装置じゃねェ。あくまで別の場所へ移動する装置だ。二次元の…架空の世界に行くなんざ不可能だ。ならこの世界は何なのか？答は簡単だ。ここは架空の世界なんかじゃなく、実在する本物の世界なんだよ」

高杉の言う事に間違いはない。

確かに源外が作った装置は、二次元へ移動する為の装置ではない。

高杉は説明を続ける。

「いわゆる『並行世界』ってヤツだ。様々な可能性の世界。この世界も、その無数の可能性の中の一つ。装置が『リリカルなのは』のＤＶＤの内容を読み取り、俺達は『リリカルなのは』と酷似したこの世界へ移動した。こういう事だ」

説明を終えて、高杉は煙管を離して煙を吐いた。
銀時達は、動揺を隠せなかった。今まで、フェイト達は架空の存在で、この世界も架空の世界だと思っていた。だが真実は違った。
フェイト達もこの世界も、実在する一つの世界。
ここにいるスバルもティアナも実際に存在するのである。

「それにしても、異次元の世界でも銀時とヅラも有名人になったらしいじゃねぇか」

再び口に煙管をくわえる。

「まぁ攘夷戦争で『白夜叉』と恐れられた銀時なら、ゾーマって言う化け物に勝つのも当たり前なわけだな」
「攘夷戦争？」

高杉の言葉にスバルがひっかかる。
先ほどの桂から『攘夷戦争』の事は聞いたが、銀時が『白夜叉』と呼ばれてたのはずっと前であった事は知らなかった。

「『白夜叉』って、兄さんがゾーマを倒すほどの強さを持ったから、そのあだ名がつけられたんじゃないの！？」

ティアナが高杉に話しかけると高杉は煙管を口から放して煙を吐く。

「おいおい，譲ちゃん達は銀時の『白夜叉』の異名をそんなちっぽ

けなモンだと思ってたのか？」
「ちっぽけ？」

銀時がゾーマを倒した事で『白夜叉』と呼んだ事がちっぽけである事を高杉が言い出す。

「その様子だと、話してねェようだな銀時？」

銀時はなにも返さない。

「『攘夷戦争』の事は銀時かヅラに聞いた事があるだろ？宇宙から来た天人との戦において鬼神の如き働きをやってのけ、敵はおろか味方からも恐れられた伝説の武神。それが『白夜叉』と呼ばれた男，坂田銀時だ」

スバルとティアナが驚いた顔で銀時を見る。
自分達の知っている「白夜叉」とは全く違う本当の「白夜叉」の意味を始めて知った。

「さて、お喋りはここまでだ。銀時とヅラに再会したい男を連れてきたぜ？」
「俺と銀時に？」

高杉の言葉に意味不明さを感じる桂だが、突如後ろからとてつもない殺気を感じて後ろを振り向くと、思わず刀を振り出すが、相手の攻撃とぶつかってしまうのである。

「おやおや、以前は上手く行ったと言うのに、今度はそうは行かなかったようだな」

男の顔を見て、銀時と桂は驚きを隠せなかった。
右手には鍔のない刀を持っていて、左手にはその鞘を持っている。
さらにグラサンをかけていて、眼は盲目のようである。
その男は死んだと思われたが、現に桂の目の前にいた。

「ば・・・馬鹿な！お前は・・・」
「人斬り・・・似蔵！」

その男は『人斬り似蔵』こと　岡田似蔵（おかだにぞう）であった。
『鬼兵隊』の一員であり、以前は『紅桜』の暴走で銀時と対決したが、あえなく敗北。
その後は行方不明とされており，死んだかどうか分からない。

そんな男が何故ここにいるのか知らないが、桂は似蔵の刀を防いでバックすると、銀時に駆けつける。

「随分と久し振りだねぇ。『白夜叉』坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎。一度に会いたい人物と一気に会えるなんて嬉しくて笑いだすねぇ」

ふふふっと笑い出す似蔵に、スバルとティアナも似蔵から危険性を感じた。

「銀さん、桂さん！あの男を知っているのですか！？」

スバルは似蔵の事を聞き出す。

「奴は・・・岡田似蔵！『人斬り似蔵』と恐れられた『鬼兵隊』の一員。以前，『紅桜』を使って俺や銀時に襲ってきたが、『鬼兵隊』との戦いで行方不明になったはずだが・・・まさか生きていたとは」

厄介な人物が生きていた事に驚く桂。
だが、似蔵の一言で驚きの真実を知る。

「ふふふ・・・確かに俺は行方不明扱いはされたが・・・実は一度死んでいるんだよ」
『『!?』』

一度死んだ事に似蔵は言い出すと、銀時達は驚きだす。
つまり似蔵は生き返ったことになる。

「馬鹿な!死者が生き返る事などありえぬ!!」

信じられないような顔に桂は叫ぶ。

「くくく・・・・・それがあり得たんだよ。失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』でな」
「アルハザード!?」

高杉がアルハザードの事を口にして驚きだした。
以前に銀時はプレシアと共にアルハザードに向かった事がある。
そこでプレシアの不死の病は治ったが、『死者の蘇生』は出来ないと『アルハザード』から聞いた事がある。

「その様子じゃ、銀時…お前も『アルハザード』に行った事があるみてぇだな。死者を蘇らせる事など不可能だと言ってやがったが…実はあったんだよ。その方法が」

高杉は愉快そうに不気味な笑いをする。

「これ以上のネタばらしは言わないでおくか。後の事はお前に任せるぜ、似蔵」
「ふふふ・・・了解。」
似蔵は笑いながら刀を鞘に収めて居合いの構えをする。
「高杉！！」
銀時が叫ぶと高杉が足を止める。
「…銀時、ヅラ。次に会ったら俺をブッた斬るって言ったよな」
銀時と桂に振り返る。
「残念だったな。俺をブッた斬れなくて」
「……！」
銀時と桂は歯噛みする。
「お前らがこの世界でどこまであがけるか楽しみにしてるぜ」
そう言って高杉は歩きだし、闇の中へと消えていった。

第十一訓：死んだら化けずに成仏すべし（後書き）

パワーアップして生還を果たした仁蔵！

脅威の居合い斬りが炸裂！

意外な人物も登場！

高杉「ククク・・・・・・次回「眼が見えない事は大変すぎる」、テイクオフだ」

第十二訓：眼が見えない事は大変すぎる（前書き）

銀時「『銀魂』と・・・」

フェイト「『魔法少女　リリカルなのは』の・・・」

銀時・フェイト「祝・映画化ーーーーーー！！」

黒神「おめでとうございます。ついに銀魂も映画化決定して来年には2作とも映画が見られるそうで面白そうですね。」

銀魂「映画化も決まって、これでついに『銀魂』もジャンプの人気漫画の仲間入りだな。『魔法少女　リリカルなのは』も同じく並べた感じだ。」

フェイト「本当におめでとう！これで私達はまた一歩深い関係に縮まったね♪」

銀時「おうよ！」

黒神「んじゃ，そろそろ始めるますか。はい、せーの！」

銀時・フェイト・黒神「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります！」

第十二訓：眼が見えない事は大変すぎる

「待ちやがれ高杉！！」
「このまま逃がすかぁ！」

銀時と桂が走り出す。だが、

「あんた等の相手は俺だぜぇ！！」

似蔵が素早い動きでいつの間にか2人の前に現れると，素早く居合い斬りをする。
2人はギリギリで避けてバックすると、お構いなしに似蔵が素早く銀時を襲ってくる。

「速い！！」

スバルとティアナも思わず叫んでしまう。そして銀時に居合い斬りをするが、銀時も木刀を居合い並みの速さで振るう。
銀時の木刀と似蔵の刀がぶつかる。
以前は仁蔵の刀を目にも写らない速さで折ったが、今回は折れなかった。

「！？」
「ふふふ・・・驚いたかい？今回の刀は以前に使った安っぽい刀でもなく『紅桜』でもないんだよ。ちょっくらとある名刀を奪ってきたのさ」

似蔵がそう言うと、その刀は何やら刀身は炎のような乱れ刃で、柄も何やら黒い。

「名刀の自慢をしている暇はないぞ！」

桂が後ろから仁蔵に向けて刀を振るが、似蔵の素早い動きでかわされた。

「避けた！？」

交された以上に予想以上の速さで驚く桂。

そして後ろから気配を感じて振り向くと、素早い居合いで桂に攻撃しようとする似蔵の姿が浮かび上がり、桂は刀でその居合いを防ぐが、

「ぐぁああ！！」

衝撃に押されて吹飛ばされる。

「ヅラぁああ！」

「桂さん！」

銀時、スバル、ティアナの3人は桂の名を呼ぶ。

そして似蔵は更なる素早い動きで銀時に急接近して居合いを炸裂する。

銀時は危機感を感じで左横に避けるが、右脇を少し切られた。

「ちぃ！」

左手で右脇を抑えると、以前にはない似蔵の人間の常識を超えた速さに驚きだす。

（なんだこの速さは！いや、速さだけじゃねぇ！力も速さも以前とはけた違いだ！）

その強さは、以前に『紅桜』で急激に強化されたのと違い、まるで別人とも思わせるような強さである。

「ふふふ・・・おかしいねぇ。スピードではこっちが上なのに、上手く仕留められないねぇ」

「おかしいねぇ。お前さんはただの雑魚助のはずなのに、全然おっかねぇ奴になっているじゃねぇか」

苦笑しながら銀時は言い返すが、人間の常識を超えた似蔵の居合い切りは以前よりも強くなっている事が感じた。

「そろそろ見たい物だねぇ。アンタの魂が消える瞬か・・・」

ガチィン！

突如、刀と刀がぶつかり合う鈍い音が聞こえ出す。

それは素早く何かが近づいてくるのを感じた似蔵が居合いを振るったところ、スバルの居合いが似蔵に襲い掛かった光景であった。

スバルの衣装はすでにバリアジャケットになっている。

「スバル！」

銀時とティアナは思わずスバルの名を呼ぶ。

似蔵は押すかのように刀を振るい、押し負けたスバルは中で逆回転をして着地する。

（ぐ・・・なんて力なの！魔法なしなのに人の常識を超えている！）

とても人間とは思えない強さにスバルは驚きだす。

「おやぁ？譲ちゃんのほうは魔導士のはずだったねぇ？」

スバルの剣を受けて似蔵は不思議がる。

「匂う、何かとてつもなく白夜叉と同じ匂いがする。魔導士だからって剣を使わないとは限らない、だからって何で魔導士である譲ちゃんから侍の匂いが香って来るだろうね？」

似蔵にとって、スバルが魔導士であるよりも侍に近い存在を感じる。だが、考えるのがめんどくさくなった似蔵は不気味に笑い出す。

「まぁ良いや。譲ちゃんも白夜叉と一緒に仲良く斬ってあげるよ」

そう言った瞬間に似蔵の神速の動きでスバルに襲い掛かるが、スバルも素早い動きで『ティルヴィングエア』を振るう。

「はぁあああああああああああ！！」

「はーっはっはっはっはっはっは！！」

似蔵は一撃では倒せないと確信したのか、神速の連続居合いを炸裂させる。

対するスバルも似蔵と同じく神速の連続居合いで対抗する。

スピードは全くの互角だが、パワーはわずかに似蔵の方が上である。

「大した譲ちゃんじゃないか！俺の速さについていけるなんてねぇ！」

「ぐ・・・パワーじゃやっぱり勝てないか・・・銀さん！」

「よっしゃ任せろぃ！」

スバルがバックして下がると、後ろから銀時が飛翔して木刀を上段に振るいだすが、ギリギリに似蔵は避ける。

「二人掛りで俺を攻めるつもりかい？」

「二人じゃない！」

すると、似蔵は背後に人の気配を感じると、後ろを振り向いた瞬間、刀が振り下ろされて似蔵を襲うが似蔵は素早く交わす。

「桂だ！」

そこには、頭に血が流れている桂の姿があった。

すると、似蔵の右肩が斬られ、そこから血が溢れた。

「桂さん！ご無事ですか！？」

「この程度の輩にやられるほど、この桂小太郎は甘くない……それより、スバル殿！奴に間合いを取らせるな！奴は居合い斬りの達人…しかも『アルハザード』とやらの力で生還を果たしたのか以前より急激に強くなっている！」

「だったら三人同時にかかってボコボコにしてやりゃ！」

「はい！」

3人は刀を構えて似蔵に睨みつける。

「行くぜ！！スバル、ヅラ！」

「ヅラじゃない桂だ！」

三人は同時に似蔵に襲い掛かるが、銀時と桂の連係攻撃は素早く交

わされ、その隙に似蔵の居合い斬りが炸裂するが、スバルが『ティルヴィングエア』で防ぐ。そしてバックを取って魔法を唱える。

スバルは『ティルヴィングエア』を右手に持ち替えて上斜め右に持ち上げると、刀身が蒼く光だし、スバルは素早く『ティルヴィングエア』を振り下ろす。

「蒼波一閃(そうはいっせん)！！」

振り下ろされた後、蒼く輝く魔力の斬撃が神速の速さで似蔵を襲うが、

「こいつが魔法って奴かい？」

そう言いだすと、素早い神速の居合い斬りで魔力の斬撃を真っ二つにする。

それを見てスバルは驚くと同時に、今度は桂が爆弾を取り出す。

「食らうが良い！」

そい言い出して爆弾を似蔵に向けて投げ出すが、似蔵は素早く神速居合い斬りでその爆弾を真っ二つにする。

そして2つに分かれた爆弾はそのまま似蔵の後ろに転がって大爆発した。

「ふふふ・・・ふはははははははははははははははは！」

高笑いする似蔵は素早く銀時を襲いだし、連続居合い斬りを炸裂し、銀時は防ぐしかなかった。

（つ・・・強い・・・強すぎる！）

ティアナは似蔵の驚異的な強さに驚いた。
銀時、桂、スバルの3人掛りに、たった1人で互角に戦っているのだからである。
しかも状況は圧倒的に銀時達が不利である。

（このままじゃ・・・兄さん達が・・・）

全滅してしまうのである。
ティアナは3人が戦っているのにどうして自分だけ見ているのかと確信する。
仲間がピンチだって言うのにこのまま見過ごす事はできない。
そう確信し、ティアナはバリアジャケット衣装に変える。

（お願い、クロスミラージュ！）

ティアナはクロスミラージュを構え、一気にカートリッジを四発もロードした。
ようやく見つけた絆をこんな所で失いたくない！だから守りたい！
私の大切な仲間を！・・・自分の持てる力を全て出し切ってまで！
そしてティアナの回りから，オレンジ色の魔力弾が程形成される。
その数は先ほどの2倍近くは大量にある。

「兄さん、桂さん、スバル、下がって！」

ティアナが叫ぶと銀時達は似蔵から離れる。
異変に気づいた似蔵はティアナに顔を向けると・・・

「クロスファイヤーシュート！！」

オレンジ色の魔力弾が、一斉に似蔵を襲いだす。
威力のほうも通常の2倍近くはある。
ティアナの誰かを護りたい気持ちがティアナの魔法を強くさせたのである。
似蔵は危機を感じて素早く避ける。
避けきれない場合は神速の連続居合いで魔力弾を斬る。
それでもその衝撃は似蔵を襲いだす。

「ぐぅう！」

何とか全て回避した似蔵は安心すると、目の前に銀時と桂が現れ、

「てやぁあああああああああああ！」
「おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

銀時は居合いの構えで思いっきり木刀を振り、桂も銀時とは反対側に刀を振り、似蔵に炸裂させる。

「ぐぉおおお！！」

2人の剣撃を直撃した似蔵は宙に浮かぶが、回転して倒れずに着地する。
胸元に刀傷がつけられてしまい、血がドクドクと出ているが、似蔵は痛がる表情をしない。

「ふふふ・・・一番小さいオレンジ色の魂を持った譲ちゃんはたいした事がないと思えば・・・随分とおっかないもんだねぇ。やっぱり4人相手じゃ部が悪すぎたかねぇ？」
「五人いるぞ」

突如、１人の女の声が聞こえる。
銀時達はその声が聞こえたほうを向くと、そこには黒い髪の毛を後ろに束ね、左目に眼帯を付けている。

「九兵衛！？」

銀時が思わず大声を出してその名を言い出す。
桂、スバル、ティアナも九兵衛の存在に驚きだしている。

「おやおや、まさかあの先祖代々将軍家に仕えてきた名家・柳生家の次期当主も来ているとは驚いたもんだ」
「それはこっちの台詞だ。まさかあの人斬り似蔵もここに来ていたとはな・・・しかもその刀を持っているとは・・・」

九兵衛自身も似蔵の存在に驚きを隠せなかった。

「ふふふ・・・どうやら随分と賑やかになってきたねぇ。でも部が悪すぎるから今回はこれで退かせてもらうとするよ」

そう言いだして似蔵は懐から煙玉を投げ出し、周りは煙玉に包まれると、銀時は木刀を振り回しながら似蔵に向かうが、すでに似蔵の姿はいなかった。

「ちぃ、逃げられちまった！」

銀時は舌打ちする。

「だが奴は再び我々の前に現れる。その時は二度と蘇らぬ様に奈落に落とせば良い。」

桂はそう言いだして刀を鞘に納める。
すると、ティアナは銀時に駆けつける。

「兄さん！」

心配そうに駆けつけるティアナに銀時は右手でティアナの頭を撫でる。

「へへ、ティアナ・・・・・・オメーはやればできる子だと信じてたぜ」

先ほどのティアナの援護魔法攻撃がなかったらかなり危険であった。
銀時に褒められてティアナは顔を真っ赤に染めて嬉しがる。
桂は九兵衛に近づいて話しかける。

「にしても九兵衛殿。お主までこの世界に来ていたとは」
「桂小太郎か…その様子だとこの世界の事を知っているようだな。宜しければ詳しく教えてくれないか？」
「・・・・・・・・・・」

桂は少し沈黙に黙ったが，九兵衛に全てを話すことにした。
この世界は『リリカルなのは』の世界であり、しかも１０年後である事に。
しかもアニメの世界と言う架空の世界ではなく、実際にある本物の世界であった事を。

さすがの九兵衛も驚きを隠せなかったのか信じられない表情をする。

「つまり、この世界は実際に存在する世界であり、しかも僕達だけ

じゃなくなのはの世界とは全く違う世界であると？」
「信じられないようだが、実際は現実どおりだ」
桂が嘘を言っていないと確信して九兵衛は信じる事にした。
「それよりも、どうしてお主がこの世界に？」
不思議そうに桂は言い出す。
「実は妙ちゃんに銀時と神楽殿が行方不明と訊いて…源外の転送装置を使いなのは達の世界に行ったと考え、僕は源外の所に行ったんだ。所が装置は何者かに破壊されていて…修理にかなり時間が掛かると言われ、仕方なく一旦道場に戻ろうと思い、その帰り道で変な光に包まれてしまってな。気付い時には既にこの場所に飛ばされていたんだ。」
「光にだと！？」
九兵衛が光に包まれてこの世界に飛ばされた事を聞いて驚く桂。
この世界は転送装置がなければこれないのではないかと考える。
「とにかく、俺は今回の事と九兵衛殿の事を八神殿に話してくる。
九兵衛殿、すまぬが一緒に来てくれぬか？」
「承知した。僕自身も話しておかねばならないことが多いからな」
桂と九兵衛はこの場を去って、はやて達がいるミッドチルダ病院に向かった。
２人の後姿をスバルは見終えると、銀時に話しかけた。
「銀さん・・・あの九兵衛さんって、もしかしてあの『闇の書・ゾーマ事件』を銀さん達と一緒に解決したあの柳生九兵衛ですか？」

「んん？・・・ああ、そうだが？」

銀時自身も、九兵衛がこの世界に飛ばされた事に驚く。
こうして色々と大変な事が起こった一日は終わるのであった。

※

翌朝

銀時はぐっすりと寝ている。
その笑顔は何やらいい夢を見ているかの様な感じであるが、眼を覚ます時には不幸が起こることになる事を、この時まだ知らない。

「それじゃあ銀さんを起こそうか！」
「うん！」

なのはとフェイトは友達関係である以上に銀時をめぐる恋のライバル関係でもあるが、２人仲良く銀時を起こす事にした。
そして、銀時のいる部屋に入る。

「銀さん、朝だよ・・・！？」
「一緒に朝食た・・・・！？」

なのはとフェイトは時が止まりだすかのように凍りつく。２人の眼に映った物は信じられない表情であった。

「んだよぉ？もうちょっと寝かせてく・・・・」

銀時は寝起きは悪いので、すぐに起き上がらないが、

「何か殺気を感じるんだけどぉー！！！」

眠気が一瞬で消え失せた。

部屋の入口の所でなのはとフェイトが無言、無表情でこちらを睨んでいた。

あれは憎しみ、又は視線で人を殺れる。

（何で二人とも怒ってんの！？銀さん何かしたぁー！？）

銀時は2人に何をしたのかを考える中、周りを良く見て見るとある事が分かった。

それは、銀時の隣にスバルとティアナが左右に銀時の隣で寝ている事であった。

実は昨晩、スバルとティアナは銀時の部屋にこっそりと侵入してベットに潜り込んで来たのである。

2人はまだ寝ている。

それはもう、幸せそうに。

「・・・・・ふぇっフェイトさん、なのはさん！違うんだよ！これはねぇ、その2人がさぁ！？」

銀時は誤解をされないように2人に説明をする。

「・・・・・・・・・」

無言で目が単色で銀時を見つめる二人。
銀時の顔が青ざめており、大量の汗が流れている。

「うーん」

スバルとティアナが起き・・・てなかった。
そして寝転がって銀時に近づき・・・・

「銀さん、大好きです。スウ～」
「兄さん、大好き。スウ～」

2人は寝言を言ってギュッて銀時を抱き付く。

ブチィィィ！！

「銀時（銀さん）の馬鹿ぁーーーーーーーーーーーーーーー！！」

2人は『レイジング・ハート』と『バルディッシュ』から極大な桜色の閃光と極大な金色の閃光を銀時に向けて放つ。

「あああああああ

第十二訓：眼が見えない事は大変すぎる（後書き）

黒神「と言う訳で、「魔法少女　リリカルなのは」に続いて「銀魂」もついに映画化決定！その記念として『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の人気投票を応募開始します！ルールは簡単！１人５票まで投票することが出来、１キャラ３票まで投票できます！これは僕の小説の『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～譲夷戦争鎮魂歌～』だけじゃなく赤夜叉さんの『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～白夜叉鎮魂歌～』に出てきたオリキャラ達も出来ます」

銀時「ほぉー、人気投票ねぇ。何かワクワクしてくるじゃねぇか！」

黒神「投票するさいは一言コメントに書き、そのキャラに対する感想を書いてください。期限は１１月１０までです！たくさんの応募をお待ちしております！」

九兵衛「次回、「好きな人と一緒にいるのは幸せの瞬間」テイクオフだ」

第十三訓：好きな人と一緒にいるのは幸せの瞬間（前書き）

黒神「人気投票も絶好調！考えてみればこれは僕自身も投票できますので，せっかくだから柱に3票、フェイトと月詠に1票ずつ入れます。そして妙に一１５票、新八と寺門通に一１０票じゃー！」

銀時「おいぃぃー！！作者自身が投票するのってどういう事！？何でヅラに3票なんだよ！？何、その一って！？ダークカブトさんの一ネタを参考にか！？」

黒神「まぁいいじゃないですか！」

銀魂「良くねぇだろー！」

黒神「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります！」

第十三訓：好きな人と一緒にいるのは幸せの瞬間

朝からドタバタと騒ぎ出した中、新しく入ってきた九兵衛とユーノとフォワード隊の挨拶は終わり、それが嘘のように銀時達は朝食をしていた。

「～♪。」

銀時の左右にフェイトとなのはが抱き付いていた。
さっきまでの怒り（嫉妬心全開）が嘘のようになくなっていた。
フェイトならともかく，いつの間にかなのはにもここまで懐かれた事に月詠が意外そうに驚き，銀時に話し出す。

「銀時…主はいつの間にか、なのはにも好意を持たれたんじゃな」
「・・・まぁな」

銀時はげんなりと答えた。
月詠は続いて銀時にフォアード隊の事を聞き出す。

「フォワード達との訓練どうじゃ？」
「良い感じに強くなってるぜ。特にティアナが気持ちに余裕が出来てんのか今フォワードの中で一番伸びてんだとよォ…スバルとのコンビネーションも相性良いみてぇだぜ」

っと銀時は安心したかのように説明すると、

「あ～ん♪」

なのはとフェイトが「あ～ん♪」として来た。

銀時はこれ以上刺激したく無いので素直に応じる。

「あ～ん」

フェイトとなのはの差し入れを口にしてゆっくりと噛む。
少し照れくさいなのか顔を少し真っ赤に知る。
実際こう言う事はされた事がないからだ。
フェイトとなのはは凄く幸せそうな顔で笑顔たっぷりである。

後ろのスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースが、何かブツブツと言って黒い憎悪を放っているがそれは気にしなかった。

＊

一方のスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースの５人が、何やらとてつもないどす黒い気を放っている。
神楽と九兵衛はそんな５人に恐怖の余り、青ざめてガタガタ震えている。

（な・・・なんかスバル達が怖いアル！！）
（こ・・・これが修羅場って言う物なのか！？この僕が怯えるなんて！！）

エリオとキャロとフリードも今にも泣き出しそうに恐がっている。
エリザベスとリィンは５人に恐怖して抱き合うかのように体をガタ

ガタ震える。
シャマルとザフィーラも無闇に声をかけたら行けないと恐れている。

「ずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよずるいよ・・・・・・・」
「許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない・・・・・・」
「いつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬るいつか斬る・・・・・・・」
「卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者卑怯者・・・・・・」
「私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって私だって・・・・・・」

「お前等！いい加減にそのどす黒い気を抑えーーー」

ギロリ×5

ヴィータが5人に忠告するが，睨みつけるだけで殺せそうな勢いのある5人の殺気に臆したのか青ざめて・・・・・

「・・・いや、なんでもない」

ヴィータも臆してしまい、走ってシャマルに抱きついて涙を流す。

一方の桂とはやては一緒に朝食を頂き、銀時争奪戦が大きくなる事に面白がりながら笑っていた。
ユーノはそんな銀時を羨ましそうに睨んでいた。

＊

訓練場では凄い事になっていた。
フェイト、なのは、スバル、ティア、シグナム、アルフの6人の戦争・・・・・もどい模擬戦らしきもので激しい展開になっていた。
なのはの『ディバイン・バスター』を連発、フェイトが『バルディッシュ』を『ライオットザンバー・カラミティ』と言う大剣で接近してきてスバルも『ティルヴィングエア』を『ティルミド・ギガエアードテンペストフォルム』と言う水色の大型魔導剣で対抗し，シグナムとアルフもその2人を一気に倒すかのように接近し、ティアナはすかさず『クロスファイヤーシュート』を連発。

「二度と銀時に近づけないようにしてやる！」
「にゃははは、身の程を知れなの！」
「隊長だからってやって良い事と悪い事がありますよ！」
「兄さんを汚すな！」
「敵は一人残らず斬る！」
「一気にお邪魔虫を蹴散らしてやる！」

などと銀時をめぐった争奪戦が始まっていた。
それを見た銀時はどうすれば良いのかわかんなかった。
桂は面白がり、月詠にシャマルとザフィーラは呆れている。
神楽，エリザベス，ヴィータ，ウィン，エリオ，キャロ，フリードは6人の異常な暴れっぷりに怖がっている。

「何でこうなるの？」

自分がどうすればこうなるのかと唖然して考える。
後ろからはユーノの嫉妬心を篭った眼線が銀時を突く。
そんな中，桂は面白そうに笑い出す。

「はっはっはっはっはっは！銀時、お前本当に罪な男になったな？
どうせ罪になるなら今こそ攘夷志士になると・・・・」
「お前は黙ってろォォォォ！！」

銀時は額に青筋を浮かべて怒り任せに桂にとび蹴りをする。

「ごふぁーー！！」

吹飛ばされて倒れる桂。
そして九兵衛が銀時に話しかける。

「安心しろ。君がそのつもりで女を落した事は承知している」
「何？その落すって？何か誤解されそうな言い方しないでくれねェ！？」
「だが、そんな君に同じ武士として１つ言っておこう」

何やら真剣な眼差しで銀時を見て何かを伝えようとする九兵衛。
銀時はそれは武士の事で関係しているのではないかと思・・・・・・

「女の価値は胸の大きさではない事だー！」

ったが、思いっきり予想外な一言に銀時は思わずずっこける。

「おいー！ちょっとおかしくないィィィ！？何でお前の口からそんな言葉が出てくるのォ！？何，その武士にメッチャ関係ない台詞！？お前そう言うキャラじゃねぇだろォ！！」

胸の大きさなんてどうでもいいと思われていた九兵衛。
だが実際は気にしていたようである。
あの貧乳ヒロインの１人である妙並の胸の小ささであり、この世界での１０年後のなのは、フェイト、はやての成長した巨乳を見て凄く強いコンプレックスを抱く。
そして九兵衛はその一言を言い切った後、

「ふ・・・ひぐ・・・だって・・・だってここの世界の女達がずるいんだも～ん」

右眼から大量の涙を滝のように流し、さらには鼻水も少したれている。

「おいー！！なんか九ちゃんのキャラ設定が崩壊しかかっているゥ！！救急車ー、救急車何処ォォ！？」

「何をやっとるんじゃあやつらは？」
「ツッキー，あんまり気にしないほうが良いね」

煙管を加えて呆れる月詠と呆れる神楽。
そして２人は、先ほどから少し顔を真っ赤に染めて神楽と月詠を見ていたエリオの姿に気づく。

「どうした、エリオ？わっちらの顔に何かついておるのか？」
「い・・・いえ！そうではありません！ただ・・・／／／」
「ただ？」

もじもじとエリオは両手の指をくっ付けながら神楽と月詠を見る。

「・・・神楽さんと月詠さんって魔法を使わなくても凄く強いし…それに…神楽さんは時々酷い事を言う事があるけど…本当は優しくて可愛いし…月詠さんは顔に傷があるけど闘う姿は月の様に美しくて…それに普段の姿も綺麗だし、美人だなぁって思っちゃって。／／／」

エリオに思わぬことを言われて照れる２人の女性。
実際、以前の銀魂の第二回人気結果でベスト１０以内に入ったのも，女性キャラの中ではこの２人だけであった。
エリオの周りにも美人な女性、可愛い女性など数多く存在するが，神楽と月詠のような見たこと無い容姿と魔法を使わなくても美しい女を見た事が無いからである。

「そ・・・そう言われると照れるね／／／」
「ふふ」

神楽ら顔を赤くし、月詠は少し笑い出してエリオを見る。
顔がトマトのように赤くなるエリオに、キャロはムッと来てエリオの頬っぺたを引張る。

「あいたたたたたたたたたたたたたた！！」

いきなり引張られて驚くエリオはかなり痛がる。
キャロは頬っぺたを掴みながらエリオを引っ張り出して神楽と月詠

から離れる。

＊

ひとまず、まだ戦いを続けているフェイト達を放って置いて、今日の訓練は中断し、銀時は部隊長オフィスに呼び出されたのだ。

「何か用か？」

目の前のはやてに尋ねた。

「実は、銀ちゃんの能力アップをしたいと思っとるんや」

「能力アップ？」

はやての言葉に銀時は片眉を上げた。

「昨日、桂さんから似蔵とか言う男が恐ろしく強うなって生き返った訊いてな。もしかしたら、その似蔵はゾーマ並の実力かもしれん」

ゾーマ並みの実力者。

確かに銀時から見ても、昨晩の似蔵のあの強さは尋常ではなく、もしかしたら一対一でゾーマと戦えば勝てるのではないかと考える。

しかもその男に対戦艦用機械機動兵器である『紅桜』を使わせたら間違いなくゾーマ以上の強敵となる。

そうなると今のままでは正直キツい。

「そこで、銀ちゃんの能力アップをやろうと言う事になったんや」

はやてが右手の人差し指を立てながら言った。

「具体的にどうすんだ？」

本当にそんな事が出来るなら、やらない訳にはいかない。

「詳しい事はシャーリーが教えてくれるから、デバイスルームに行ってな」

はやてに言われ、銀時は部隊長オフィスを出て、デバイスルームへ向かった。

＊

廊下を歩き、銀時はデバイスルームの前に着いた。扉を開けて部屋の中に入った。

「あっ。銀さん」

部屋の中にシャーリーと、

「来ましたか」

リインフォースがいた。

「何でリインフォースもいんだ？」

「銀さんの能力アップに、リインフォースさんが必要なんです」

リインフォースの代わりに、シャーリーが答えた。

「どういう事だ？」

自分の能力アップに、何でリインフォースが必要なのかわからない。

「リインフォースさんは、『融合型デバイス』なんです」

「『融合型デバイス』？」

シャーリーの言葉に銀時は片眉を上げた。

「その名の通り、他者と融合するデバイスです。適合率の高い者と融合する事で、飛躍的に能力を向上させるん事ができるんです」

シャーリーが説明した。

「おいおい！ドラゴン○ールのフュージョンみてーじゃねェか！ヤベッ。テンション上がってきちゃったよ！」

シャーリーの説明を聞いた銀時は興奮した。

「ただし、適合率が低いと融合事故が起こる可能性があるので、気をつけてくださいね」

シャーリーは、テンションが上がってる銀時に注意した。

銀時は不安げにシャーリーを見た。

「それって……デブになったり、ガリガリになったりすんのか？」

銀時はゴクリと唾を飲み込んだ。

「まぁ外見に変化が現れたり、能力がおかしくなったりいろいろだと思います」
「思いますって…」

急に銀時は不安になった。
だが他に方法がないのなら、ユニゾンとやらをやるしかない。
諦めたように、銀時はため息をついた。

「それじゃあ、早速始めましょう。リインフォースさん、お願いします」
「はい」

シャーリーに言われ、リインフォースは銀時に近寄った。
リインフォースの胸が銀時に当たる。銀時は少し戸惑った。

「では銀時。これからユニゾンをします。ジッとしててください」

そう言って、リインフォースは目を閉じた。

「ユニゾン・イン！」

リインフォースが叫んだ直後、二人は白い光に包まれた。
光の強さに、シャーリーは目を閉じた。数秒の輝きの後、光は消えておさまった。
シャーリーはゆっくりと目を開けた。目に入ったのは銀時だった。
リインフォースの姿はない。銀時とユニゾン出来たみたいだ。
シャーリーは銀時を観察した。瞳が蒼くなっている所以外、特に外見に変化は見られない。どうやら一応ユニゾンは成功のようだ。

「あの…どうですか銀さん？」

ユニゾンした感じを尋ねてみた。

銀時はシャーリーには答えず、手足を動かして自分の体を見ている。

すると突然、銀時は驚愕の表情をした。

「おおおっ！何だこいつァ！？体の中から力が溢れ出てくるみてェだァアア！！」

両手で拳を握って、銀時は興奮した声を出す。

【シャーリー。銀時とのユニゾンに成功しました】

銀時の中にいるリインフォースが、シャーリーに報告した。

「よかった」

シャーリーはユニゾン成功に一安心した。

一方、銀時は内側から漲る力にまだ興奮していた。

おいおいおい、マジでか。これヤバイよ。どれぐらいヤバイかって言うと、マジヤバイ。

今ならあの夜王鳳仙と一対一で闘り合っても勝てる気がする。かめ○め波が出せる気がする。

最初はフュージョンの失敗版みたいな、デブやガリガリにならないか不安だったが、そんな不安は完全に消えていた。

「リインフォースさんとユニゾンしている状態なら、魔法を使う事も可能だと思います」

「マジでか！？」

シャーリーの言葉に銀時は更に興奮する。
試しに手を前に出して、障壁を張ってみる事にした。フェイト達が出してるような障壁をイメージする。
すると手の前に、銀色の障壁が展開した。

「うぉおおお！！」

銀時は驚きと興奮の声を上げた。

【見事です、銀時】

リインフォースが褒めた。
銀時は障壁を消した。
マジでスゴくね？それじゃあ空とかも飛べんのか。
タイトル『魔法侍リリカル銀ちゃん』に変更するか？
なんて事を考えていると、

【ああ……銀時の中……気持ちいい…】

リインフォースが艶かしい声を出した。

【何言ってんのお前？気持ち悪いんだけど…】

銀時は若干引いた。

【好きな人と一体化するのが、こんなに気持ちいいとは……】

「え…？」

今のリインフォースの言葉に、銀時は目を細めた。

「お前、今何て言った？」
【ですから、好きな人と一体化……あっ！！／／／】
リインフォースは、しまったと言うような声を出した。
「えええええええ！！？」
銀時の叫び声が、デバイスルームに響いた。
「おま…お前まで俺の事……！？えええええ！！」
銀時は動揺がおさまらない。
リインフォースは黙ってしまう。
「あの…どうかしたんですか？」
シャーリーが心配そうに尋ねた。
どうやら今の会話は、聞かれてなかったみたいだ。
「いやいやいや！何も問題ねーぞ！うん、問題なし！」
動揺しまくりながら、銀時は答えた。
「そ…それじゃあユニゾン解くか！」
銀時の声に応えるように、体から光が発した。
光はおさまり、銀時の前にリインフォースが現れた。
リインフォースは、顔を真っ赤にして俯いている。
「リインフォースさん。大丈夫ですか？」

シャーリーが尋ねた。

「ああ！じゃあ俺が医務室まで連れてくわ！」

そう言って銀時は、リインフォースの腕を掴み、急いでデバイスルームを出た。

シャーリーは不思議そうに首を傾げた。

＊

デバイスルームを出た銀時とリインフォースは、屋上にいた。

「リインフォース。お前さっき言った言葉、マジなの？」

急いで屋上に来たので、銀時は肩で息をしている。

リインフォースの顔は赤いままである。

顔が真っ赤で反応なし。

う～ん。こいつァマジか？

と、銀時は思った。

両者口を閉じたまま沈黙が続いた。

銀時が頭を掻いた時、

「…十年前、貴方は私に言いました」

リインフォースが口を開いた。

銀時は頭を掻くのを止め、リインフォースの話を聞いた。

「『笑ったお前の顔も見てみてーし』。人にあんな言葉を言われた

のは初めてでした」

懐かしむようにリインフォースは語った。

「嬉しかった。その時まで、私は道具としてしか扱われなかった」

リインフォースは、胸に手を当てた。

「あの時から、私の心の中には銀時がいた。貴方の事を考えると、胸が熱く、苦しくなる」

俯いてた顔を上げる。

赤い瞳が真っ直ぐに銀時を見つめる。

思わず銀時は唾を飲み込んだ。

この緊張感、何度目？

リインフォースがゆっくり歩み出す。そっと銀時に抱き付く。

「銀時。貴方が好きです」

リインフォースは頬を赤くして、銀時に告白した。

銀時は、体が固まって動けなくなっていた。

フェイトやシグナム達からも告白されたが、やっぱり慣れない。

「銀時」

リインフォースが顔を上げて、銀時を見つめた。

「フェイト達には負けません」

銀時を見つめながら、リインフォースはハッキリと言った。

「貴方のユニゾンのパートナーとなり、貴方を護ります」

決意と想いを銀時に伝える。

護られてばかりでなく、私も銀時を護りたい。

愛する貴方の力になりたい。

「…リインフォース」

銀時はリインフォースの両肩を掴んだ。

リインフォースの顔が更に赤くなった。

「この先、ゾーマ以上にヤベー敵が現れるかもしれねェ。もしかしたら、俺一人じゃ手に負えねェようなヤベー敵が」

真剣な表情でリインフォースに語る。

「だから、そん時は…俺に力を貸してくれ」

銀時がそう言った瞬間、リインフォースの顔が明るくなった。

「はい。喜んで」

頬を赤くし、リインフォースは嬉しそうに頷いた。

銀時は『ユニゾン』という新たな力を手に入れた。

リインフォースの心もゲットした。心の方は、十年前に既にゲットしてるんだけど。

「では戻りましょう、銀時」

リインフォースは銀時と腕組をした。

「何で腕組？」

銀時が尋ねるが、リインフォースは気にせず嬉しそうに腕を組んだまま、銀時と屋上を出た。

銀時はため息をついた。まさかリインフォースからも告白されるとは。

フェイト、スバル、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リインフォース。銀時に好意を持った女性は、さらに増えた。

これからどうするか、銀時は悩んだ。

＊

一方の訓練所では、なのは達は魔力が空っぽになってしまい、バリアジャケットを解除して倒れていた。

「も・・・模擬戦はこれで・・・終了なの・・・」

なのはがそう言いきると、全員気絶してしまった。

回りには激戦の余りか数多くの破壊されたビル、灰になった森、など破壊の爪あとが残っていた。

第十三訓：好きな人と一緒にいるのは幸せの瞬間（後書き）

銀時をめぐる7人の美少女たち！

ユーノの嫉妬心が増幅！

新たなる展開が迫り来る！

リィンフォース「次回「乙女の大切な所はちゃんと取っておくべし！」テイクオフ！」

第十四訓：乙女の大切な所はちゃんと取っておくべし！（前書き）

黒神「人気投票も順調に進んでいます！明後日で終了です！」

キャロ「私に投票、私に投票、私に投票、私に投票、私に投票、私に投票、私に投票・・・・・・（ブツブツ）」

神楽「私に投票ね、私に投票ね、私に投票ね、私に投票ね、私に投票ね、私に投票ね、私に投票ね・・・・・・（ブツブツ）」

ヴィータ「私にはねぇのか、私にはねぇのか、私にはねぇのか、私にはねぇのか、私にはねぇのか・・・・・・（ブツブツ）」

黒神「こ・・・怖いので、ここらへんでスタート！」

月詠「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ」

第十四訓：乙女の大切な所はちゃんと取っておくべし！

機動六課の食堂。
引きつった顔で席についてるのは銀時。その銀時の右側にフェイトとなのは、左側にシグナムとアルフ、その前にスバル、ティアナ、リインフォースが座っていた。
七人とも、なんかこう…負のオーラ的なモノを放っていて、近寄り難い雰囲気が出来ている。実際、フェイト達が座ってる席に近寄ろうとする者はいなかった。
そんな負のオーラの中心に座ってる銀時は、冷汗をダラダラ流している。
気のせいか、胃が痛くなってきた気がする。
実は銀時とリィンフォースの事をフェイト達の耳にも入り、こんなことになっていた。
原因は偶然にその様を見ていた桂とはやてがフェイト達にその時の様子を話していた。

腹の辺りを摩りながら、銀時は思った。
周りの人達は、フェイト達が放つ負のオーラに当てられて、食があんまり進んでいない。
そんな中、桂とはやてだけは笑みを浮かべて、楽しそうに様子を見ている。

「はやて、ヅラ・・・アレ、何とかしなくていいのか？」

桂の隣に座ってるヴィータが、フェイト達を指差しながら小さな声で言った。

「これも銀時の罪深さが原因だ。ほうっておけ」

「銀ちゃんがあんなに女たらしになるメッチャおもろいからな、そうっとしとき♪」
「お前ら、何か楽しんでいないか！？」
心底今の状況を楽しんでる桂とはやてに、ヴィータは怒鳴った。
エリザベス、シャマル、ザフィーラ、リィンは戦場では感じられない修羅場に恐怖を感じていた。
「銀ちゃん、もしかしたらとんでもない事に巻き込まれているアル」
「いや，いや、既になっているぞ」
平然な顔で言う神楽にツッコム九兵衛。
「銀さんもなのは達にズタボロにされればいいんだ。」
ボソリとユーノも銀時に負の感情を込めた言葉を言い出す。
エリオとキャロも、銀時の心配をしていた。
「月詠さん。銀さん達……あのままにして、いいんですか？」
「下手に手を出したら火傷するだけじゃ。放っておけばよい」
月詠は気にせず食事を続けた。
＊
「まさかリインフォースさんまで、銀時が好きだったなんて予想外でした」

フェイトが沈黙を破った。

「言っておきますが、銀時は私のモノです。譲る気はありません」

毅然とした態度で、リインフォースは言った。

「いや…俺、お前のモノでも誰のモノでもないから…」

銀時が少し弱々しく言った。やはり、いつもの勢いはない。

「悪いがリインフォース。私も譲る気はない。銀時とユニゾンが出来るからと言って、調子に乗ってもらっては困る」

銀時の言葉をスルーし、シグナムは目を鋭くして言った。

「銀時との付き合いは、あたしとフェイトの方が長いんだ！つまり銀時は、あたしのモノだ！！」

大声でアルフが言った。

銀時は顔をしかめた。

コイツら俺の話、聞いちゃいねェ。

「アルフ。私の事、忘れてるよ？」

ニッコリと、フェイトは黒い笑みを浮かべた。

「悪いけどフェイトちゃん！銀さんは渡さないよ」

なのはは笑いながらそう言いだすと、眼だけは笑っていなかった。

「なのはさんだって、兄さんに手は出させないよ！」

ティアナも上司関係なくなのはにつっかかる。

「そうだよ！銀さんは誰にも渡しませんよ！」

スバルがそう言いだすとティアナはスバルに睨みつける。

「スバル！それはつまり私も含まれている訳！？」

「そうだよ！ティアにも渡さないんだから！」

以前，仲が良くなったばかりの2人もここだけは互いに譲れなかった。

互いににらみ合っている2人を見て銀時は2人を止めようとする。

「いや、だから…お前等までそう睨み合わなく…」

「銀時は私の男だ！誰にも渡さんぞ！」

銀時の言葉を遮って、シグナムが六人に言った。

七人の口論はヒートアップし、ギャーギャー騒ぎ始めた。

銀時はため息をついた。

何で俺の周りにいる女は、みんな人の話を聞かないんだ？

俺、何か悪い事したか？

「あ…あの～、なんか俺邪魔みたいだから～、向こう行ってようか…？」

ゆっくりと席を立ちながら、恐る恐る七人に聞いてみた。

すると、

「逃げないで銀時！」
「銀さんがいないとダメなの！」
「銀さんの事で話しているんですよ！」
「兄さんもちゃんといて！」
「お前もここにいろ！」
「あたしを置いて行かないで！」
「銀時と合体したい！」

七人は銀時に向かって叫び、無理矢理イスに座らせた。
歴戦の侍『白夜叉』も、七人の修羅には勝てなかった。
再び七人の白熱した口論が始まる。
諦めた銀時は、黙って見守る事にした。
ふと桂とはやての方を見る。銀時の困ってる様子を笑いを堪えながら楽しそうに見てる。
あのバカップル共。いつかヤキ入れてやる。
2人を睨みながら、銀時はそう思った。

「銀時は私のだよ！」
「私のだよ！」
「私のです！」
「私の兄さんだよ！」
「いや、私の男だ！」
「あたしのだ！」
「私のモノです！」

七人の口論は続く。
なかなか終わらない口論に終止符を打つため、フェイトが勝負に出た。

「私は小さい頃に、銀時に裸を見られた事があるんだよ！」

フェイトが爆弾発言した直後、周りのみんなが口から飲み物やら食べ物を噴いた。

「おいィイイイ!!何言っちゃってんのお前!?」

慌てて銀時は叫んだ。

「は…裸を……!?」

「小さい頃の・・・フェイトさんの・・・・・・・!?」

エリオとキャロは顔を赤くした。

神楽と九兵衛も顔を真っ赤に染めている。

しかもシグナムは火に油を

「甘いな、テスタロッサ。お前も見ていただろ?銀時は私の胸の谷間に顔を埋め、しかも手で胸を揉んだ」

少し誇らしげにシグナムは語った。

「お前も何言っちゃってんのォオオオ!!?」

テーブルを叩きながら銀時が叫んだ。

「む…胸を揉んだ…!!?」

リインフォースの顔が赤くなっていく。

「シグナム、何で他人の前でそれ軽々しくいえるんだ!?／／／」

あり得ないとヴィータは大きく怒鳴りだす。

「わっち以外にもそんなことをしたのか銀時？」

煙管を加えて呆れる月詠。

実際に月詠も，偶然とは言え銀時に胸を2回も揉まれたことがある。

「テメーらァ！何、昔の恥ずかしい出来事語ってんだ！？」

マズイ。

銀時は思った。

このまま二人を放っておいたら、大変な事になる。

「私は裸を見られただけじゃなくて、銀時の手料理を食べたり、一緒に寝たりしました！」

トドメとばかりに、フェイトが言い放った。

「て…手料理！？」

「い…一緒に寝たァ！？」

スバルとティアナは、ショックを受けて愕然とした。

二人は力無くうなだれた。

銀時は口を大きく開けて固まった。

「あたしも混浴で、一緒に温泉に入ったー！」

手を挙げながらアルフが言った。

「こ・・・混浴!?」

リィンフォースもショックを受け、テーブルに突っ伏した。

「ちょーっとまってぇーーーーーー!!」

さらに状況が悪化して青ざめていく銀時だが、なのはがこの中でとんでもない事を言い出す。

「みんな小さすぎるよ!」

銀時達はなのはのほうに注目すると、銀時は嫌な予感をしてしまう。

「私なんか銀さんに自分のファーストキスを授けたんだよ!／／／」

今までの衝撃的に誰もが大爆発するかのような衝撃を受け，口に入れていた飲み物と食べ物を噴射するように吐きだす。

ある者は鼻血を出したり、ある者は大ショックを受けたり、ある者は「うそだぁーー!!」っと叫びだす。

「言っちゃったよこの子ぉーーーーーーーーー!!他人の前ではいえない恥ずかしい事を言っちゃったよー!」

「な・・・なのはの・・・・・・」

「ファーストキスぅうううう!?」

スバル、ティアナ、アルフ、リィンフォースは驚きだした。

ユーノは衝撃のあまり白目を剥いている。

しかし、フェイトとシグナムは平然としている。

「己のファーストキスをだと?・・・そんなの１０年前に私もして

いるぞ！／／／」

シグナムの火に油をかけるような発言をしてさらに衝撃的に知る。

「シグナムぅー！お前もやったんかいーーーーーー！！／／／」

ヴィータは顔を真っ赤に染めて突っ込みだす。

はやて、シャマル、ザフィーラ、ウィンの４人はシグナムの大胆さに顔を真っ赤に染める。

なのははシグナムに驚きだしているが、フェイトは平然としている。

なぜなら彼女が先に・・・・・・

「ふふふ・・・まだまだ甘いわね、シグナム」

「何？」

シグナムはフェイトを睨みつけると、フェイトがここ一番的な衝撃発言を言い出す。

「私なんかシグナム達が来る前に銀時に授けたんだよ！」

さらに上が行くかのようにフェイトは大胆に言い出す。

「何だとぉおお！？」

シグナムも驚くかのように驚きだす。それはつまり・・・・・・

「私は銀時にファーストキスを授けただけじゃなく・・・銀時のファーストキスを頂いたんだよ！／／／」

のはや暴走としかいえない大胆すぎた発言に誰もが（特に男性）が信じられない衝撃が襲いだす。

「ぎ・・・・銀時（銀さん）（兄さん）のファーストキスぅーーーーー!?」

なのは、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースの6人は衝撃的に驚きだし・・・そして。

「そ・・・そんなぁあああああああああ!!」

6人はショックを受け、テーブルに突っ伏した。

「だァアアア!!お前大胆すぎるのも，程がありすぎるだろぉ!!」

怒鳴った後、銀時はチラッと周りを見た。

周りのみんなは、軽蔑の眼差しを銀時に向けていた。

小さな女の子の裸を見て、一緒に寝た。しかもシグナムの胸を揉んだり、アルフと一緒に温泉に入ったりした。さらにはフェイト、なのは、シグナムのファーストキスを奪った。みんなの頭の中で、銀時はロリコン、エロオヤジであると認識された。

「銀ちゃん、マジで最悪アル。新八（じみ）よりメッチャ女の敵ね。しばらく私に声をかけるなアル」

『七股はやばすぎでしょ?』

「銀時・・・いくらなんでもそれはやりすぎじゃろ?」

神楽は軽蔑し，エリザベスと月詠は呆れる。

エリオ、キャロ、リィンは苦笑しながら銀時から下がっていく。

「テメェがそんな男とは思わなかったよ」
「銀さん・・・シグナムとリィンフォースだけじゃなく他の女にも手を出すなんて・・・」
「同じ男として恥を感じる」

ヴィータ、シャマル、ザフィーラも銀時を鋭い眼線で見る。

「あんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしにあんな女たらしに・・・・・・（ブツブツ）」

ブツブツと言いながら負の感情をさらに大きくするユーノ。

「ちょ待てよ……その目、やめてくんない？心がスゲー痛むから」

銀時は必死にやめるよう訴えるが、軽蔑の眼差しはなくならない。
本当に俺、何か悪い事した？
ヤベッ。前が霞んで見えねェ。
銀時は手で涙を拭いた。

その時だった。

「貴様はそれでも侍かーーーーー！？／／／」

まさかの九兵衛が顔を真っ赤に染めながらドロップキックを炸裂。

「あらぐふぁあああああああ！！？？」

銀時に見事クリティカルヒットした。
桂とはやては面白そうに笑い出す。

＊

訓練所

「何でこうなるんじゃあああああ！！」

朝っぱらから銀時は大急ぎで逃げている。
原因は模擬戦で１００人の男性魔導士が銀時を襲っているからである。
原因は昨夜のフェイト達の言い争いで男性魔導士達が強い嫉妬心を燃やしたのである。
中にはフェイト達の美貌に惚れて入った者もいたり中にはフェイト達に憧れて入った者も至り，フェイト達のファンクラブを作っている者もいる為，もの凄い嫉妬心を燃やした男達の醜い怒りにに触れたことで銀時は今でも逃げながら、少しずつ魔導士達を木刀で叩き落している。

「ふはははははははは！この世界に来てから随分と面白い事が起こりまくっているな！」
「あはははははははは！ほんまや！桂さん達が来てから毎日はおもろすぎるな！」

桂とはやてはそんな様子を面白そうに笑いだす。
そんな２人の様子をなのは達は２人の事を「腹黒コンビ」と確信す

る。

そして2時間後

ようやく１００人の魔導士達を倒した銀時は1人どっかの森の中で休んで気に持たれていた。

「ゼェ・・・ゼェ・・・ゼェ・・・一体何が俺をこうさせているんだ!?」

大量の汗を出しながら銀時は一体自分が何をどうすればこうなるのか考える。
そしてそれとは別にある事を決意した。

「・・・・・とりあえず、この世界でも万事屋すっか」

今，フェイト達の世界で万事屋が再開される。

第十四訓：乙女の大切な所はちゃんと取っておくべし！（後書き）

万事屋再開！

新展開突入！

そして銀魂メンバーとリリカルなのはメンバーによるチーム戦！

ザフィーラ「次回、「ゲームは1人でやるより皆でやるほうが面白い！」テイクオフ」

第十五訓：ゲームは1人でやるより皆でやるほうが面白い！（前書き）

ついに始まる銀魂風！

まずはあの幻のゲーム機が再び蘇る！

店長「それでは、『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』開始ー！」

第十五訓：ゲームは1人でやるより皆でやるほうが面白い！

夢を見た。
何も無い荒れ地。そこに人がいた。
人といっても、山のように転がっている屍と化した死人である。
そんな屍の山に、1人の刀を背負った少年がいた。
少年は天然パーマであり握り飯を食べていた。

どうしてこんな所にいるのか理解しずらいが，そんな少年に1人の男が少年の頭に手を載せる。
少年はゆっくりと男を見上げると男は話しかける。

「屍(かばね)を食らう鬼が出ると聞いてきてみれば・・・君がそう？」

何やら笑っている様子で言い出す男は話を進める。

「また随分と、可愛い鬼がいた者ですね」

男が言い終わると少年は男の手をはじき後ろに下がる。それは何もかもに怯える目であり、誰も信じないような瞳である。
少年は男を睨みつけながらゆっくりと刀を鞘から抜く。
その刀は、攘夷戦争で命を落とした者の所有物をはぎ取った者で、刀身は少しボロボロで血が染み付いている。

「それも屍(かばね)からはぎ取ったのですか？わらし1人で屍(かばね)の身ぐるみを履き、そうして自分の身を守ってきたのですか」

まだ子供とは思えない修羅の生き様に感心する。

「大したもんじゃないですか。・・・・・・だけど、そんな剣もう要りません」

男の話を全く聞く気も無く少年は男を睨みつけて刀を構える。

「人に怯え、自分を守るための剣なんて・・・・・・もう捨てちゃいなさい」

男はそう言い，自分の脇に差している刀を鞘から抜くのではなく、鞘ごと取り出して少年に投げ渡す。

「ああ・・・ぐ…ああ！！」

少年は男の思わぬ行動に驚きだし、投げられた刀を掴むと体がバックしてコケそうになった。

以上に自分の得物を他人に渡すなんて大胆な行動に唖然とする。

そして少年は男の方を向くと、

「くれてあげますよ、私の剣」

男は少年に自分の剣を渡すと、振り向いてこの場をゆっくりと去りながら少年に言い出す。

「そいつの本当の使い方を知りたきゃ、ついてくると良い」

少年は渡された剣を見て、そして男の背中を見つめると、その男の背中がとてつもなく大きく，同時に安心に感じた。

＊

窓から差し込む太陽の光に当たり、フェイトが目を覚ます。フェイトはゆっくりと起き上がって壁にもたれかかって床に座ってる。

「…夢…？」

フェイトが眠い目をこする。

夢で見た光景を思い出す。

（今のって、もしかして小さい頃の銀時？それに、あの男は一体？）

何やら銀時の世界のような人物が来ている服装のようである。

おそらくは銀時と恩師の最初の出会いの頃の夢であろうとフェイトは考える。

しかし何故、他人の過去のような夢を見るのかを不思議に思っている。

さらに驚くべきなのがフェイトだけじゃなく、なのはやスバルなどリリカル組全員がフェイトが見た夢と同じである事だった。

フェイトは銀時に自分が見た夢の事を話そうと考えたが、本当とは確信できないため話はしなかった。

だが、この夢は実際に銀時の幼児の頃の夢であり、あの夢に出てきた男こそ、銀時と桂の恩師である吉田松陽（よしだしょうよう）である事をフェイト達はまだ知らない。

＊

んで、何故か銀時達はミットチルダの何処かのゲーム屋にいるわけである。
そこには銀時の世界のものであり、発売中止になったはずの『弁天堂　ＯＷｅｅ（オヴェェ）』である。
そして舞台の外側には数多くのゲームオタク達がいる。
さらには舞台側には銀時達の他にも、いつどやのゲーム屋の店長にそっくりな赤いシルクハットを被っており，右眼に眼帯をかけている店長である。

「ぶぁーっはっはっはっはっはっはっは!!お前等ー!!ついにこの時が来たぞー!超人気ゲームソフト『弁天堂　ＯＷｅｅ（オヴェェ）』がついに手に入れるときが来たのだー!」

店長がそう言いだすとお宅達は興奮して叫びだす。

「だったらゲームで勝ち取れ!ほしい物はゲームで手に入れろ!それが真のゲーマーっと言う者だー!!」

店長はそう叫ぶと銀時達を紹介し始める。

「今回は何と、あの『白夜叉』こと坂田銀時をはじめ、万事屋メンバーと機動六課メンバーが特別ゲストに来てくださいました!!」

店長が特別ゲストを紹介すると、ゲーマー達はさらに興奮して叫びだす。

「・・・・何でこうなるのかな?」

苦笑してフェイトは口に出す。
何でこんなことになったかと言うと・・・実は昨日，銀時が『この

世界で万事屋をやりたい』と言い出すと、はやてが『面白そうなのでＯＫ』っとあっさり許可を貰っちゃったわけ。そしたらフォワード部隊はフォワード万事屋に変わり、エリオとキャロはさすがに唖然としてしまったわ。だけどスバルとティアナは凄く喜んでいる。原因は銀時と一緒にいられるだからって、何か無性に納得できないけど？

まぁそんな感じで万事屋復興の最初の依頼人が以外にもゲーム屋の店長で、何かイベントの為に特別ゲストとして万事屋だけじゃなく機動六課全員来て欲しいと言う事だけど・・・・・・原因がこれって訳ね。

「なのは・・・まさかこんな事になるなんて思いも寄らなかったよ」
「あ・・・あははは・・・・そうかもね」

なのはも苦笑してフェイトの話を聞く。
機動六課でまさかのゲーム仕事は予想外だからである。
アルフ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リインフォース、、ユーノ、リィンもどうしてこうなるのか呆れていた。
しかし、はやては機動六課の部長として仕事があるため、行きたくても行けないようである。

機動六課の部長とある者が仕事をほったらかしてまで遊びたいようである。
部長の仕事がどれほどまで辛いのかはやてとリィンから伝わってくる。

「ティア、凄く楽しそうなイベントが起こりそうだね♪」
「あんたさぁ、こんなときにガジェット達が襲来して来たらヤバイのに、なんで呑気に遊ばなきゃいけないの？」

「これも立派な仕事だよ♪」
「ほとんどは遊びじゃないの！」

無邪気なスバルに、額に血管を浮かべてツッコミをするティア。
エリオとキャロはこの状況をどう対処すればいいのか分からないのであった。

「何でわっちまで来ねばならんのじゃ？」

煙管を加えて納得がいかない様子である月詠は呆れている。

「ツッキー、人生って言うのは自覚なくてもノリに乗ってしまう事が多いね」
「じゃからってわっちまでここに来る必要はないだろ！」

呆れてツッコむ月詠。
そんな彼女の眼には、何故か『マリオ』の格好らしき姿をした桂・・・じゃなくカツオと『ルイージ』の格好をしたエリザベスがいた。

「桂・・・エリザベス・・・いくらゲーム関係だからって、主らがゲームキャラのコスプレをせんでもいいだろ！！」

月詠が呆れて2人に言うが・・・

「コスプレじゃない、カツオだ」
『そして私はエリージです』

そう言いだすと月詠はもうどういえば良いのか分からなくなってきた。

「一体何が主らをそうさせたんじゃ？」

桂のクールボケについていけなくなったようである。

「まぁ、ヅラとエリーもいつもはこんな感じネ」

「ヅラじゃない桂だ・・・あ、間違えた。カツオだ」

なんやかんやと４人は話し合っていると、九兵衛は銀時に話し出す。

「しかし、確か『弁天堂　ＯＷｅｅ（オヴェェ）』は僕達の世界にあった物のはずなのに・・・どうしてこの世界に？」

「んなもん、俺だって知りてェよ。発売中止になったもんが一体どうしてこの世界に、しかも人気に売れてるのも」

以前、銀時は自分の世界で『ＯＷｅｅ（オヴェェ）』をめぐった真選組との対戦で数多くのゲーマー達をボコボコにしてしまった為、それが決め手となって『ＯＷｅｅ（オヴェェ）』は発売中止になった。

だが不思議にもこの世界にも存在していた。

「今回この特別ゲスト達を呼んだのは、今から彼等にそれぞれ４チームに分かれてゲーム勝負をしてもらうためである！」

「ゲーム！？」

「なるほどね。その為に私達を呼んだって訳だね」

以来がチームに分けてゲーム勝負である事に驚くザフィーラと納得するフェイト。

「もちろん勝ったチームには『ＯＷｅｅ（オヴェェ）』をただで差し上げるだけじゃなく、副賞として１００万円を差し上げよう」

『ＯＷ（オヴェェ）ｅｅ』をただでゲットだけじゃなく賞金が１００万円ゲットなどと太っ腹な店長に驚く銀時達。

「ええ！？」
「マジで！？」

リィンフォースとアルフが本当かを店長に訊くと、

「君達は選ばれた者達だ。当然の権利だ。・・・・・そして皆さん達には皆さん達にはその４チームでどちらか勝つのか賭けてもらう。掛け金は１人５０００円である！そして勝利チームに賭けたものには！」

店長はマントを羽ばたくかのように『ＯＷ（オヴェェ）ｅｅ』を出す。

「その者にもこの『ＯＷ（オヴェェ）ｅｅ』をただで差し上げよう！」

『ＯＷ（オヴェェ）ｅｅ』が唯で手に入るとゲーマー達は大興奮して笑い出す。
エリオとキャロみたいな子供にはまだこんな光景に離れていない為少し怖がる。
スバルは何やらイベントらしく感じて笑い出す。

「ティア、なんか凄くワクワクするね！すっごく楽しみになってきたよ♪」
「え・・・ええ・・・そうだね」
（ゲーム勝負ってこんなに盛り上がるんだ。意外だったな）

ワクワクしているスバルに対してティアナは意外そうに感じた。
なのは達はゲーマー達の興奮に苦笑し呆れていた。
だが，銀時、桂、神楽、月詠の、４人はと言うと・・・・・・

「よっしゃー！！１００万円ゲットだ！このゲーム勝負に勝って必ずパフェ食いまくってやるぜェェ！」
「いな、武士としての魂を今こそ見せつけ、そばを食べまくるぞ！」
「１００万円もあればすこんぶ食べ放題ネ！この私が頂くアル！」
「そろそろ新しい煙管が欲しかったどころじゃ・・・・・・悪いがここだけは譲れんぞ！」

４人は互いに、睨み合いながら譲れない視線を放ち、かつて無い闘志を燃やしていた。
４人のプレッシャーになのは達は何を言えば良いのか分からないのであった。
間違いなく４チームのリーダーはこの４人で決まりであると確信した中・・・・・・

リィンがある事を言い出す。

「あのう・・・皆さん?私は皆さんと違って体は小さいですし・・・ゲームはできませんけど」
「・・・・・・あ！」

全員が忘れてしまったーと言う感じで驚く。
そうなれば１９人となって１人足りなくなる。
その場合は仕方が無く店長が余りを埋めるかのように１人足りないチームに助太刀すると言おうとした瞬間・・・・・・

「にゃ～っはっはっはっ

っはっは！」

1人の女性の高笑いが聞こえた。
何処から聞こえたのか銀時は周りを見渡す中、その女性は言い出す。

「人数が1人足りない？だったらこんなときこそ私の出番やな！」

何やら乱入してくる様子であると確信する中、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィンの6人は呆れだす。

「ゲームは1人でも多くやるほうが面白いのように，イベントもまた1人でも多い方が面白い！」

そして銀時は声が聞こえた方である扉のほうを向く。

「そして人生の中には必ずやイベントが突如現れる！いや、イベントそのものにこそ、人生の全てがつまってるんや！」

そして扉が派手に開かれ，その中から・・・・・ピンク色のドレスを身につけて女王の冠を頭にかぶせて水色の傘を持っているはやての姿がいた。

「な・・・貴様は！」

九兵衛は驚きだしてはやてに質問する。

「ふふ、単なる『配管工の女王』や。」

少し笑ってはやては『配管工の女王』と言い出す。

「これは何と言う事だー！突如現れた『配管工の女王』と名乗りだす謎の美女の登場だー！一体何者なんだ彼女はー！！」

店長が大きく解説する中、観客席にいるゲーマー達が驚きだす。

「なんなんだ、あの女！」

「オ・・・オイ！あのピンク色のドレスに金の女王の冠、それに手に持っている水色の傘！あれはひょっとして世界一有名な配管工ヒロインの、ピー・・・」

「ピーチや無い。ハヤ――」

「アホかぁあああああああ！！」

「ごふぁあああ！！」

全力全開的なヴィータのグラーフアイゼンのツッコミが炸裂し、はやての頭に直撃する。

なのは、フェイト、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アルフ、リィンフォース、ユーノ、九兵衛もこれはないだろっと言うぐらいに呆れだす。

そして今でも暴走が止められないヴィータを、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リィンが体を張ってとめる。

「放せー！とにかく放せー！！」

「お・・・落ち着け、ヴィータ！」

「気持ち的にはわからんわけでもないが・・・」

「いくらなんでもやりすぎだよ、ヴィータちゃん！」

「ヴィータさん、落ち着くんです！」

「放せぇーーーーーーーーーーーー！！！！」

額に大量の青筋を浮かべて怒り任せに暴走するヴィータ。
銀時と神楽は呆れてはやてに近づく。

「はやて、お前一体何しに来たネ？仕事どーしたアルカ？」
「あいたたた・・・いやー、何か私も行きたくなって仕事をサボっちゃいました♪」
「お前、本当に機動六課の部隊長かェ！？」

大量の血を頭から出しながらはやては起き上がりだす。何やら桂に似てきたような感じがしてきたと確信し、月詠は桂に話しかける。

「桂…主、はやてに何かしたか？」
「いや、別に何もしていないが？」

自分がはやてに何をしたのか分からない桂。

「それにな、何でもこのゲーム勝負に勝てば、ファミコンとディスクシステムが一体化した『ツインファミコン』を手に入れられるそうやし♪」
「色々待てー！！！！！」

大量の汗を出て銀時、神楽、月詠は大きくツッコみだす。

「何でお前がその事を知っているんだ！？つうかもらえるのは『ツインファミコン』じゃなく『ＯＷ（オヴェェ）ｅｅ』！！」
「そんなモンの為にこの勝負にわざわざ乱入したのか主はァ！！」
「それにそんな古いモンもう何処にも売ってないネ！もう絶対手に入らないヨ！！」

3人のツッコミみに衝撃のショックを受けるはやては悲しげな表情を出す。

「そ…そんな!?じゃあ私は再びマリオとピーチに会う事ができへんのか!?」

「再びどころか何十回も生き返ってるよ!あのバカップルは!!」

マリオとピーチの事を説明する銀時に桂が後ろから説明する。

「うむ、それにあのコンプレックスの塊である弟のほうも健在だそうだ」

「ほんまか!?あの背が高いのに頼りなさそうな弟さんもか!?」

「いやな事を言うんじゃねぇよ!」

「お前等にルイージの何が分かるアルか!」

「2人ともルイージに謝らんかい!!」

ぎゃあぎゃあと話し合う銀時達の姿を見て、なのは達は苦笑して亜全する。

「は・・・はやてって最近、銀時達に似てきているね?」

「うん・・・10年前より変わりすぎている・・・・・・というより、もう別人みたい」

友達であったとしても、はやての変貌振りはフェイトとなのはよりかなり大きかった。

それ以上にフォワード万事屋は、自分達のはやてのイメージが思いっきり変わっていくように唖然としていた。

そして『ＯＷ(オヴェェ)ｅｅ』と100万円をかけた、4チームのバトルコロ

シアムが今始まった。

おまけ！

銀八「ええ，今回からこちらも「教えて銀八先生コーナー」をしますので、質問したことがあればジャンジャンと応募してください。後、明日で人気投票結果発表だぞ。それでは、次回が来るまで読者全員、廊下に立っていなさい！」

第十五訓：ゲームは1人でやるより皆でやるほうが面白い！（後書き）

店長「さて皆さん、人気ゲーム機『弁天堂　ＯＷｅｅ（オヴェエ）』と賞金１００万円をかけた熱き侍と魔導士達がそれぞれ４チームに分かれてゲーム勝負を開始した！果たしてこの勝負に制覇して『弁天堂　ＯＷ（オヴ）ｅｅ（エエ）』と賞金１００万円を手にするのは、どのチームなのか？・・・・・・それでは次回『得意ゲームがあれば不得意ゲームもある』をテイクオフして、第一試合，『三国無能（さんごくむのう）』対決、始めーーーーー！！！」

第一回　『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズ人気結果発表！！

パッパパカーン♪

妙「こんにちわ、みなさん。今回は銀さんと神楽ちゃんがいないので、代わりに銀魂一の人気ヒロインである私、志村妙（しむらたえ）が特別ゲストとして来ました♪」

星海坊主「自分の事を銀魂一の美少女だと言っちゃったよこの人・・・・同じく神楽ちゃんの父でもあり、宇宙最強の掃除屋をやっている星海坊主（うみぼうず）だ。」

妙「あら？貴方が神楽ちゃんが言っていたハゲですか？」

星海坊主「誰がハゲじゃー！！！！」

２人がにらみ合っている間、銀魂の中でもヘタレで地味な変態アイドルオタクの新八が現れた。

新八「っておおーい！？何この酷い紹介のしかた！！つうかなんで僕だけ本編では出てないんですか！？なんか赤夜叉よりメチャクチャ酷い扱いされているよ！・・・・・まぁいい、この人気投票で僕がどれだけファンを持っているかを分からせてギャフンと言わせて上げますからね！」

うわぁ，めちゃくちゃ自惚れているよこのダメガネ。

新八「ダメガネとはなんだぁー！！」

星海坊主「おい、何処にいるか分からない作者と口喧嘩してもキリがないぞ？」

新八「うっさいよ、このハゲ！」

星海坊主「誰がハゲじゃー！！」

『ハゲ』と言われて怒鳴って新八を殴る。

新八「ぐふぁあ！！」

妙「では、銀魂一の美少女であるこの私、志村妙が今回の企画を説明します。」

新八「あ・・・姉上・・・いくらなんでも無理があるよ？」

小さな声で新八がツッコム。

妙「今回の計画はこの通りであります。」

アニメ『銀魂』＆『魔法少女リリカルなのは』映画化記念

第一回　『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』シリーズ人気結果発表

新八「いやー、凄いですね！銀魂だけじゃなくなのはちゃん達の世界でも映画化かぁ～」

妙「２つの人気アニメが映画化なんて凄い事だわ！これで愚民共に私の魅力を分からせる良い機会だわ！」

星海坊主「いや、２つの映画に出るのは無理があるんじゃ？」

妙「ハゲの言葉は放って置いて・・・・・・」

星海坊主「だからハゲ言うなー！！」

新八「ああー、星海坊主さん落ち着いてくださいー！！」

暴走しそうな星海坊主を必死に止める新八。
それをどうでも良いかのように妙は話を進める。

妙「今回は同じ投票数の人物がかなり多いので，その場合は同じ順位ではなく作者の気に入っているキャラの順位に並べたいと思います。たとえば私と新ちゃんが同じ投票数である場合は，作者は新ちゃんより私の方が好きなため私が新ちゃんより順位が上がるって感じです」

新八「姉上ー！何で僕と姉上を比べたのですか～～！！」

妙「それではまずは１０位から８位までの発表です♪」

新八「人の話を聞こうよ～！」

星海坊主「では！」

新・妙・星「カウント・ダウン！！！」

第１０位　『「リリカルなのは」の４期の新・主人公』ヴィヴィオ　２票

第９位　『烈火の将』シグナム　２票

第８位　『エースオブエース』高町なのは　２票

新八「・・・あれ？何かなのはさんの順位が思った以上に低すぎるんですけど？何でなのはさんが下級の順位なんですか？」

なのはの事が好きな新八にとってはとても納得が出来ない様子である。

妙「うふふ、やっぱりまだ子供だから私には及ばなかったようだね♪じゃあ次は７位と６位の発表です♪」

新・妙・星「カウント・ダウン！！！」

第7位　『金髪の雷光魔導士』フェイト・テスタロッサ　2票
第6位　『双銃使いの魔導士』ティアナ・ランスター　3票

新八「うわぁ!!何てことだ!『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズでもヒロイン的存在のフェイトちゃんが7位って!これなのはちゃんとフェイトちゃんが見たら2人とも暴走しちゃいますよ!」

星海坊主「そんなに怖いのか?」

新八「怖いですよぉーー!!」

以前、「ジュエルシード事件」の宴会でなのはに『スターライト・ブレイカー』を撃たれた事を思い出して恐怖する新八。

妙「続いては，じゃあ次は5位と4位の発表です♪」

新・妙・星「カウント・ダウン!!!」

第5位　『死神太夫』月詠　3票
第4位　『黒い獣』高杉晋助　3票

新八「凄いですよ、月詠さん！美少女集まりの「リリカル組」にも負けず上位の5位になるなんて！！」

妙「で・・・でも私に比べたら及ばないかもね！お・・・おほほほほほほほほ！！」

焦りを表すかのような笑いをする妙を尻目に星海坊主が説明する。

星海坊主「こっからはベスト3に入る者の紹介の為，1人ずつ説明するぞ。次は3位の発表だ。」

新・妙・星「カウント・ダウン！！！」

第3位　『狂乱の貴公子』桂小太郎　3票

新八「き・・・奇跡だ！あのクールボケの人妻好き野朗である桂さんが、まさかの上位のベスト3に！」

妙「新ちゃん、人生って言うのは自分の知らない所で『奇跡』って言うのが起こるんだよ♪」

桂が今でも3位である事に信じられないぐらいに驚く2人に星海坊主は残酷さを感じた。

星海坊主「・・・・・・テメェら、何気なく酷い事を言い出すな」

新八「次は第2位の発表です！そしてこの第2位である者こそが，『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の女性キャラの中でも人気があるキャラです！」

妙「ええ～，私が2位なの？・・・・・まぁいいわ。女性キャラ？1美女の称号だけでも我慢してあげるわ」

納得がいかなくても我慢しようとする妙。

星海坊主「だからなんでお前はそこまで自惚れているんだ？つうか何でお前だと言えるんだ！？」

新八「・・・・・星海坊主さん、姉上はこのような人物なので，大目に見てやってください」

妙「それでは、第2位である私の発表です。」

新・妙・星「カウント・ダウン！！！」

第2位　『蒼き疾風魔導士』スバル・ナカジマ　6票　（女性キャラ人気？1）

妙「そんなーーーーー！！？？私が女性キャラ人気？1じゃなくこんな小娘に！？」

星海坊主「それはつまり神楽ちゃんがベスト１０には入っていない

ことかー！！」

それ所が、神楽と妙には全く投票されていないようです。

妙・星「嘘だぁーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

ショックの余り，失神して倒れる2人。

新八はそれを見て何故か笑ってしまう。

新八「あははははは♪まぁこんな2人は放って置いて、いよいよ第一位の発表をします。まぁ発表しなくても1位はこの僕、江戸一番の人気ツッコミ役の志村新は・・・・・・」

妙・星「テメェが1位な訳ねぇだろーがー！！」

新八「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！」

復活いた2人に強い突っ込みを受ける新八。

これでは第一位の発表ができない為、第一位の発表はこんなときに良く出てきてくれるバ・・・・じゃなくハタ皇子にさせてもらいます。

ハタ「世が第一位の発表か？良いぞ。こんな哀れな負け組みより世がやった方が世の中の為だろ。うんうん。・・・・・・この者が『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズの第一位だ！カウント・ダウン！！！」

第1位　『伝説の白夜叉』坂田銀時　9票

ハタ「と言う訳で、『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』第1位は坂田銀時に決定じゃ。こやつは『銀魂』でも2回連続第1位を採るほどの人気者じゃからな。このぐらいの人気争いでも1位をとっても当たり前ってわけじゃな。まぁ、変って所は山ほどあるとしても，そこらにいる変態オタクの地味めがねにつるっぱしの親バカ，そして人間に最も近い存在のゴリラ天人とは違ってこやつの場合はまだマシな・・・・・・」

突如、青ざめてゆっくりと後ろを向くと・・・・・・そこには殺気を放っていて額に血管を浮かべている3人の姿がいた。

新八「地味はともかくテメェだけには変態呼ばわりされるとはな・・・えぇ，この馬鹿王子!?」

星海坊主「おい、今俺の事をつるっぱしと言ったか?まさか俺の事をハゲと言いたいのか?」

妙「人間じゃない扱いはともかく・・・・・・ゴリラとはどういう意味だ?おい!」

今でも襲い掛かりそうな勢いである3人に大量の汗を出すハタ皇子は恐怖して動けない。

ハタ「お・・・落ち着くんじゃ!!こ・・・ここは話し合いでもして・・・平和的に解決を・・・・・・」

新・妙・星「問答無用！！」

ハタ「あああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

ドカボコドカボコドカボコ

5位　月詠　3票　（作者の好きなキャラ順）

6位　ティアナ・ランスター　3票　（作者の好きなキャラ順）

7位　フェイト・テスタロッサ　2票　（作者の好きなキャラ順）

8位　高町なのは　2票　（作者の好きなキャラ順）

9位　シグナム　2票　（作者の好きなキャラ順）

10位　ヴィヴィオ　2票　（作者の好きなキャラ順）

第一回　『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズ人気結果発表！！（後書

この順位票に納得できない皆さんに，謝っておきます。

ごめんなさい。（土下座）

それでは、次回からまた本編始めます。

第十六訓：得意ゲームがあれば不得意ゲームもある（前書き）

銀時「今回から「教えて、銀八先生コーナー」が始まるぜ」

黒神「皆さんの質問を銀八先生が教えます」

フェイト「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始めます」

第十六訓：得意ゲームがあれば不得意ゲームもある

ピーチ姿のはやてが登場した事により，これで特別ゲストは２０人揃った。
そして銀時達は４人に分かれる為にクジを引いて同じ色同士で組むようにした。

フェイト、なのは、スバル、ティア、シグナム、アルフ、ウィンフォースの7人は銀時と組みたいと言う怨念を込めてクジを引く。
はやては顔を真っ赤に染めて桂を見ながらゆっくりとクジを引き、桂はエリザベスと同じになれるよう祈ってクジを引く。
そしてキャロはエリオが神楽か月詠と一緒にならないで欲しいと強く願っている。

そして，クジの結果発表がこうなった。

『万事屋チーム』

銀時、フェイト、スバル、アルフ、リィンフォース

『歌舞伎町の女王チーム』

神楽、なのは、ティア、シグナム、ユーノ

『攘夷志士チーム』

桂、エリザベス、はやて、エリオ、キャロ

『百華チーム』

月詠、ザフィーラ、シャマル、ヴィータ、九兵衛

そんな感じでチームが決まり、ゲーマー達はどっちが勝つかを予想して５０００円と一緒に賭ける。
そして，チーム結果を見た銀時達はと言うと・・・・・。

『万事屋チーム』側

「銀時、やるからには絶対優勝しよう！」
「私、全力を尽くして頑張ります！」
「また前みたいに力を合わせて勝とうよ！」
「今こそ私と銀時の力を合わせる時です！」

銀時と一緒になれたフェイト、スバル、アルフ、リィンフォースの４人はやる気満々である。
銀時も優勝を目指しているためやる気満々であった。

「テメェら！俺達の強さを見せてやるぞォォォォォ！」
「オオォーーーー！！」

5人のチームワークはまさにピッタリであった。
この中でも優勝しやすいのは『万事屋チーム』であると思わせる雰囲気である。
一方の『歌舞伎町の女王』チームは『万事屋チーム』とは反対側で負の憎悪を放っている。

『歌舞伎町の女王チーム』側

「フェイトちゃん、頭を冷やしてやるんだから♪」
「スバル、少し頭に風穴をあけたいようだね♪」
「どうやら、アルフもリィンフォースも私の剣の錆びになりたいようだな♪」

顔は笑っているけど、眼は全然笑っていない。
圧倒的に3人の嫉妬が混じったどす黒い憎悪にガタガタと震えている神楽は大量の汗を出して、3人を落ち着かせようとする。

「お・・・落ち着くね。私達が優勝をすれば良いだけの事アル」

神楽の言葉を全く聞かず、3人はただ単に殺気を放っていた。

「ユーノもなんか言ってほしいアル！」

神楽はユーノに助けを求めるかのように話しかけるが・・・・・・

「どうせ、なのはは僕の事を男と思ってくれないんだ。そうさ・・・そりゃ僕は銀さん見たいに強いところは全然ないさ・・・・・・（ブツブツ）」
「チェンジプリーズゥゥ！！（泣）」
余りの修羅場的な空気の重さに耐え切れない神楽は思わず叫ぶ。

『攘夷志士チーム』側

「エリザベス！今こそ我等攘夷志士の力を今こそ見せ付ける時だ」
『んじゃ、１００万円を手に入れてそば食いまくりましょうか！』
「応、我等の力で必ず勝利し、賞金を手に入れてみせる！」
銀時に負けずとも気合が入っている桂とエリザベス。
そこにはやても加わってくる。

「うちも桂さんに協力するし、宜しゅうな♪」
「八神殿！なんとも頼もしい事を言ってくれる！是非、俺とエリザベスに力を貸してくれ！」
『お願いします』
「了解や♪」

桂の喜びにはやても嬉しそうに笑う。
３人は力を合わせて優勝しようと考える。
一方のエリオとキャロは何やら取り残された感じで苦笑していた。

「な・・・なんか僕等って余りな感じだね」
「う・・・うん・・・そうだね」

『百華チーム』

「とりあえず、このメンバーのリーダーはわっちがやっとく。まぁ、誰がリーダーをやろうが優勝して１００万円を手に入れればそれで良いんじゃ。どんな手を使ってでも勝つぞ」

いつもと違うやる気を込めた月詠に意外そうに驚くヴィータ、シャマル、ザフィーラの３人。

「月詠殿、何やら気合を込めているようだ」

「そうとう煙管を買いたそうね」

ザフィーラとシャマルは月詠のやる気のある闘志に苦笑する。

いつもの月詠は煙管を加えてクールでいるからだ。

だが、今回みたいにやる気のある月詠を見たことが無いのである。

一方のヴィータは九兵衛が何処にいるのか探している。

先ほどから九兵衛の姿が見えないのである。

「なぁ、九兵衛は見当たらないけど・・・・・・アイツ何処にいるんだ？」

ヴィータが九兵衛の事を聞き出すと，月詠達は九兵衛が何処にいるのか周りを見る。

そして突如はやてが現れた扉の反対側にある扉が開かれ、そこから九兵衛が姿を現した。

「九・・・・・・」

ヴィータが九兵衛の名を言いかけた瞬間，彼女の口が止まりだす。
その原因は九兵衛の姿にある。
九兵衛の姿はいつもと違って、男のような服装を着ておらず、髪型はポニーテイルじゃなくツインヘアーに変わっており、何やらミニスカートをはいている女の子っぽい服装を着ている。
その姿は以前に、キャバクラで着替えさせられた姿と全く同じである。
そして九兵衛は恥を表さずに九兵衛らしくない事を言い出す。

「皆～、お待たせ～♪」

何やらアイドル的な女の子っぽい喋り方をする。

「ゲーマーアイドル、リリカル九兵衛！ただ今、参上だよん♪うふ♪」

左膝を上げて左手の2本指で左眼の眉毛を向け、キラりんとした感じで自己紹介すると・・・・・・

『『なにやっとるんじゃ己はーー！！！！！』』
『誰の真似じゃそれはー！！！！！』

「あああああああ！！

後ろから銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠の、5人の蹴りが九兵衛の後頭部に直撃し、九兵衛は蹴られて思いっきり転びだす。
リリカル組はもちろん唖然とする。

そして銀時達は九兵衛に怒鳴りだす。

「お前、アンだけ嫌がっていたゴスロリ衣装を何でワザワザ着ていやがんだ！？」

「キャラ設定変わりすぎにも程があるぞ！」

銀時と桂の怒鳴りのツッコミに対し、九兵衛は泣き出す。

「だってぇ～～！ここの女キャラ、ずるいんだもん！特に胸がぁ！」

「お前、この世界に来て変わりすぎじゃねぇかァ！！！」

「いっぺん病院に行って元のキャラ設定に戻して来い！！！」

「いやだ、いやだぁ～～～～！！」

九兵衛の余りの変貌すぎに銀時と神楽も呆れてしまうのである。

「全く、わっちらの世界にはろくな連中がおらんな」

『まったくです』

エリザベスと月詠も自分達の世界にいる人物とフェイト達のいる人物達と比べれば、自分達のほうは異常なまでにおかしいと考える。

「とりあえず、全員揃った事だし、さっさと始めようぜ。」

ヴィータは溜息を吐いて、月詠と共に泣きながら自分の胸の小ささに強いコンプレックスを抱く九兵衛を引きずって自分達のチーム側に戻る。

そして店長は一回戦を発表する。

「それでは第一戦目は，『三国無能（さんごくむのう）』！三国時代を舞台とした三国武将達が天下を狙った熱きバトルを繰り広げる戦争ゲーム！先に山

賊の黄菌党兵を１００人倒したほうを，勝利といたします！」

『三国無能（さんごくむのう）』をゲーム勝負とした事でシグナムが驚きだす。

「『三国無能（さんごくむのう）』！？『Ｏｗｅｅ』でもベスト１０に入るほどの大人気ゲームがまさかここでやれるとは！」

「え・・・シグナムってあのゲームが好きなの？」

意外なシグナムのゲーム好きにユーノも意外そうに驚く。

「良し！先手は私が行こう！」

やる気満々のシグナムに，神楽は「行くよろしいね！」っと言い出す。

それを見たリィンフォースは意外そうに感心する。

「シグナムもやる気あるそうだし、ここは私に任せて」

リィンフォースも負けずとやる気を出して銀時に先手を頼みだすと、

「良し、行って来い！シグナムはかなり強（つぇ）ぇが気をつけろよ」

「はい！」

リィンフォースは期待に答える為、絶対に勝つと強く近い、フェイト、スバル、アルフもリィンフォースを応援する。

そして『攘夷志士チーム』はと言うと、

「エリザベス。ここはお前に任せてもらう。勝負事は何事も先手をとった者が有利だ。だからこちらが先に先手を頂けば必ずやこちらが有利になる」

『合点承知！』

桂はエリザベスに先に行かせる事にして、エリザベスも承知した。

「頼んだぞ」

『行ってきます』

エリザベスは桂の先手勝利を託され，Ｏｗｅｅの所に向かう。

はやて、エリオ、キャロはエリザベスがどんな活躍をするのか楽しみにする。

「月詠、ここは僕に行かせてくれ。エリザベスはともかく、僕はシグナムとリィンフォースの胸の大きさだけは絶対に許せないんだ」

「はぁ？」

「頼む。女として・・・・・いや、武士としての頼みだ」

「胸の大きさに嫉妬する女が良く武士と言えるな？」

九兵衛の頼みに呆れる月詠。

まぁやる気あるのは実際に九兵衛だけのようで、月詠は九兵衛に行かせる事にした。

「行きたいんなら言って来い。わっちは知らん」

「すまない」

九兵衛はお礼を言ってＯｗｅｅに向かう。

ヴィータ、シャマル、ザフィーラの３人は九兵衛があんなキャラであったのかを疑いだして呆れる。

そして店長は１つのボックスを取り出す。

「さて皆さん。このボックスの中に入っているのは『三国無能』にでてくる使用キャラの名前が書かれた紙切れです。１人それぞれ１枚だけを引いて、その紙に書かれたキャラを使用させてもらいます。これは『三国無能』最強と言われたキャラである呂奉を簡単に使わせない為です。全て、ランダムで選んでいただきます！」

店長の言うのも確かである。
誰もがいきなり最強キャラを簡単に使ったら勝負がつまんないのである。増してや４人とも同じキャラを使えばそれこそ勝負の楽しさが浮ばないのである。
４人はボックスに手を差し伸べて１枚の紙切れをとってその紙切れに描かれたキャラはこうなった。

リィンフォース　『孫尚匂』　使用武器『弓』

シグナム　『袁小』　使用武器『宝剣』

エリザベス　『超雲』　使用武器『直槍』

九兵衛　『司馬懿』　使用武器『羽扇』

リィンフォースは何やら女キャラでラッキーと感じ，シグナムは不機嫌そうな表情をしている。
エリザベスと九兵衛にいたっては平然としている。
そして４人はＯｗｅｅのコントロールを掴んでゲームを再開する。

すると４つの巨大なモニターが映し出され、４つの画像が映し出され、『三国無能（さんごくむのう）』と描かれたゲームタイトルが映し出される。
４人の使用キャラは先ほどクジで引いたキャラと同じのになっている。
どちらが先に黄菌党兵を１００人倒せるかの対決が始まる。

「それでは，『三国無能』始めぇーーーーーーー！！」

コングが鳴らされ，第一試合が始まった。
そしてすぐさまアクシデントは起こった。

それは・・・

「何だこれはぁーー！！」

突如、シグナムの使用キャラである袁小が多くの敵に囲まれて攻撃を喰らいまくっている。
攻撃で反撃しようとも攻撃速度が遅すぎて動けず、ガードしても後ろから攻撃されて崩される。
そしてあっとう今に体力ゲージがなくなって『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』となった。

「何がどうなっているんだぁーー！？」

最初の脱落者となって納得が出来ないシグナム。
いつの間にか解説者となったリィンはその原因を店長に聞き出す。

「シグナムさんがいきなりの脱落！しかし一体何が起こったのでしょうか！？」

リィンはマイクを店長に向けて説明をさせる。

「脱落原因は間違いなくシグナム選手のくじ運の悪さですね。シグナム選手の使用するキャラである袁小は『三国無能（さんごくむのう）』の隠しキャラの1人ですが、キャラの中でも最弱で上級者向けのキャラなんです。攻撃は遅いし空きは大きい。しかも多くの敵に襲われやすいデメリットを持っています」

「だからってコレはないだろォォォッ！ゲーム開始直後にいきなり『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』はないだろ普通わぁー！！」

ヴィータがあり得ないような感じで叫びだすとまたもや予想外な事が起こった。

「ヴィータ。僕はゲームをやった事がないからどうすればいいのか教えてくれないか？」

っと九兵衛がヴィータにゲームのやり方を説明する。

「はぁ？ゲームをした事がないだと！？・・・しゃあねぇえな。教えてやる……って何だこりゃあァァァァッ！！」

ヴィータが九兵衛側のモニターを良く見て見ると、そこには攻撃され放題されている司馬懿がボコボコにされて倒れてしまい，『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』の画面が映し出されているシーンが描かれている。実は九兵衛は移動コマンドを動かしただけで、それが仇となって敵陣に無闇に突っ込みだしてしまい、攻撃する前にｓｔｏｐボタンを押していなかったのである。

「何で敵陣に無闇に突っ込むんだよー！つぅか、体力無くなるの早すぎだろ！！」

九兵衛は平然とし、ヴィータは納得できないまま突っ込みだす。すると店長が説明する。

「司馬懿は軍師キャラであり、軍師キャラは基本的に防御力が圧倒的に低い。しかも司馬懿はその中でも1、2位を争う程の防御力の低さです」

「だからってわずか5秒で体力が0になるキャラがあるかよー！」

納得できないままヴィータは怒鳴りだす。

そして九兵衛は自分は脱落した事に気づき大ショックを受ける。

「そ・・・そんなぁー！」

ショックを受けて地面に両膝と両手をつける。

ゲームのやり方が知らないとは言え、負けたことにショックを受けていた。

一方のリィンフォースは順境に進んでいた。

「おおー！」

リィンフォースの使用キャラ、孫尚匂の華麗なる矢が放たれ，徐々に黄菌党兵を倒していく。

今の所はこれで25人目である。

「お姉ちゃんの方は順境に進んでいますね」

リィンも嬉しそうに解説する。

ちなみにリィンはリィンフォースの妹的な存在なため、リィンフォースの事は姉と呼ぶ。

「孫尚匂は攻撃力と防御力は一般並ですが、スピードは指折りに入るほど素早いですし、しかも攻撃も早くて隙がありません。」

店長がそう説明すると、『万事屋チーム』は貰った！っと確信する。

「良いぞー、リィンフォース！」

「今の内に一気に攻めてください！」

アルフとスバルもリィンフォースの良い進みに喜びだす。そしてフェイトも勝利をワクワクして銀時に話しかける。

「銀時！行けるよ、この勝負！」

「ああ、シグナムと九兵衛もくじ運悪かったな。残るはヅラチームのエリザベスだけだが…アイツのあの指が無い手じゃろくにコントローラーを使いこ・・・なぁ！！」

銀時はエリザベスを見て驚きだす。

それは連続パンチするかのように超高速なコマンド押しをしているエリザベス。

すると画面には超雲はジャンジャンと敵をなぎ払って飛ばすかのように倒して行き、その数はすでに８０人突破した。

それを見たフェイト達は驚きだしてエリザベスを注目する。

まだ脱落していないリィンフォースですらエリザベスに驚きだす。

「あ・・・エリザベス選手はメッチャ運が良いですね。超雲は『三国無能（さんごくむのう）』でも主人公的な存在で、キャラの中でもバランスが特化しているので初心者向けのキャラなんです。」

「いや、それ以上にエリザベスのあのコントローラー裁きはなんだよ！」

ヴィーターは店長にその質問をすると、店長はその事を説明する。

「おそらく指が無い為、あい言う風に高速に突くかのようにコマンドボタンを押さなきゃ出来ないでしょ」

一言で解決するかのうに店長はめんどくさがって解説を終える。

「そ・・・そんな!!エリザベスのコントローラー裁きが異常なまでに凄すぎる!」

リィンフォースはエリザベスだけには負けないであろうと思っていたが、それは甘かった。
そしてエリザベスはあっという間に１００人目を倒して終了コングがなった。

「決着ー!!勝者、『攘夷志士チーム』エリザベス!!」

店長はエリザベスの左腕を上げて勝利宣言を言い出す。
そしてゲーマー達はエリザベスの熱きゲーム強さに騒ぎ出し、桂達は走ってエリザベスに駆けつける。

「エリザベス!!良くやってくれた!お前こそまさに真(まこと)の攘夷志士だ!」
「すごいでぇ、エリザベス!」
「やりましたね、エリザベスさん!」
「まずは一勝ですよ!」

先手勝利以上に、エリザベスの強さに嬉しく感じた桂はエリザベスに抱きつく。

それに続くかのようにはやて、エリオ、キャロもエリザベスに抱きつく。

『このまま勝ち続けましょ』

そう書かれたボートを出して桂に言い出す。

「おう、次の勝利にも繋いでみせるぞ！」

やる気を出した桂達は2勝目も手に入れることを決意する。

「次は私が行くな」

次に出るのは、はやてのようである。
原因はエリザベスみたいに桂に褒められたいようである。

「そうか、八神殿。我等の強さを見せてやって来い」
「了解や」

承知してはやてはステージに向かう。

（後、今の私は八神殿やない・・・・・・ハヤーチや）

冠の角度調整を直してステージに立つ。

一方の『歌舞伎町の女王チーム』はと言うと・・・

「次・・・私が出るけど良いかな？」

なのははどす黒い闘志を神楽達に向けて笑い出すと、神楽達はガクガクと震えて顔を縦に振るう。
そしてなのはは、はやてのいるステージに向かう。

「銀時、ごめんなさい。・・・・私、負けちゃいました」

申し訳なさそうに誤るリィンフォースだが、銀時はそんなに気にしてはいなかった。

「いや・・・さすがにあれは予想外だったわ…エリザベスがあんな驚異的なゲーム強さなんてマジありえねェと思って…」

銀時も予想外な強さであり、リィンフォースを慰める。
そして次はフェイトが出ようとする。

「次は私が出る。リィンフォースの仇をとってくるね」
「フェイト、ファイトだよ！」

アルフの応援にフェイトは笑って絶対勝つと誓いだす。

「フェイト、次はあのなのはとはやてが出てきやがるから…油断すんなよ」
「うん。じゃあ、行ってくるね」
「フェイト隊長、頑張ってください」

銀時達の応援を受け入れ、フェイトはステージに向かう。

一方百華チームはまだ敗北に落ち込んでいる九兵衛をほったらかしに告ぎは誰が出るかを決めている。

「しゃあないから次は私が出るよ」
「ヴィータが？・・・まぁここは勝っておかないとかなり厳しいからな」

今この場で、ヴィータが出たほうが勝利しやすいとザフィーラは確信して賛成する。月詠とシャマルもザウィーラと同感であった。
そしてヴィータは「んじゃ、行って来る」っと言ってステージに向かった。

「第二試合は来れ、『リリカルカート』！」

ゲーム名を聞いて驚くリリカル組。
そのゲームは自分達がモデルとされた最新ゲームである。

「この機動六課方達をゲームキャラとして扱い、カートで勝負を競い合います！今回のコースは『リリカルカート』でも超難関コース、『歌舞伎町内コース』ですので、本来ならば三週といいたい所ですが，一蹴するのに基礎タイムは5分かかりますので先に早く一周したほうを勝利とします！」
「何でフェイト達の世界のゲームなのに俺達の世界のかぶき町が舞台なんだよ！？しかもコレ完全に『マリオカート』のパクりじゃねぇか！」

怒鳴ってツッコミだす銀時を尻目に、2試合目が始まる。

フェイト、なのは、はやて、ヴィータはそれぞれ自分のキャラを選択し、画面はレースコースに改造された銀時の世界の町、歌舞伎町になっていて、そこにバリアジャケットを着ていてカートに乗っているフェイト達の姿があった。

「まさか私達のゲームが作られたなんて・・・・」
「まぁ、これもやりがいがあるもんな♪」
「まぁ、はやて達には悪いが・・・勝たせてもらうぜ」

3人は勝利する気でいたが・・・・・その勝利する気力も失われるのであった。
『白い悪魔』によって。

「フェイトちゃん、はやてちゃん、ヴィータちゃん・・・・・・」
「!!??」

3人はなのはに向くと、そこにはとてつもない殺気を出している『白い悪魔』もどいなのはがいた。
なのはやにやりと笑って・・・・・・

「この勝負、譲ってくれない?」

＊

そして5分後、なのはは軽く一周して、フェイト、はやて、ヴィータはガクガクと怯えながら動かす事ができなかった。

「しょ・・・勝者、『歌舞伎町の女王チーム』高町なのは!」
「やったー、勝ったよ神楽ちゃん!」

無邪気に喜ぶなのはだが、銀時達とゲーマー達はなのはの余りの怖さに愕然と怖がっていた。

当然、店長もガクガクと震えている。

【おまけ】

銀八「教えて！」

生徒全員「銀八先生！！」

銀八「は～い。読者の『正宗の胃袋』さんから『要望になりますが赤夜叉さんみたいに質問コーナー的なものを作ってください。お願いします。』という、ご意見がありましたので、何か質問があったら評価・感想に書いてください。前書きか本編のおまけか後書きで、銀八先生がズバッとお答えするかもしれません。そして今回のこの『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～譲夷戦争鎮魂歌～』でアシスタントしてくれるのはもちろんこの人です」

フェイト

「こんにちは。アシスタントのフェイトです」

銀八

「はーい。それじゃあ最初の質問。ペンネーム『カラー』さん。『実際後どれくらい銀さんは落とすんでしょう（女性を）？ナンバーズもいるから凄いことになりそう』というものです。はい、ズバリ

お答えしましょ・・・・・・」

フェイト
「そんなの答える必要ありません！ペンネーム『カラー』さん、廊下に立っていなさい！／／／」

何故か顔を真っ赤に染めて怒鳴りだすフェイト。

銀八
「おいいいいいいいいい！！？？何勝手にお答え拒否して廊下に立たせるの！？何、嫉妬しているんだよ！お前、赤夜叉さんの『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～白夜叉鎮魂歌～』で結婚したんだろ！それぐらいはお答えさせても・・・・・」

フェイト
「銀八先生？すぐに次の質問をしましょ♪」

いつの間にかバルディッシュを取り出して銀八先生に向けると、銀八先生は青ざめて次の質問を答えようとする。

銀八
「あ・・・・・あはははは・・・・・・そうだね。じ・・・じゃあ、ペンネーム『烈火竜』さんからの質問。『フォワードチームの中で、下ネタに敏感なのは誰ですか？』はい、ズバリお答えしま

しょう。・・・・・ダントツ的にキャロが疑いあります。あの子、本編の『魔法少女リリカルなのは　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』でも、育ちのせいか羞恥心に欠ける部分があり、エリオと一緒に入浴したり他のメンバーが居る浴場へと強引に連れて行くなど彼を困惑させたらしいぞ」

フェイト
「キ・・・キャロはどんな育て方をされたの？／／／」

キャロの羞恥心が欠けている事をフェイトは恥ずかしがる。

銀八
「全く近頃の若いモンは育て方がなってないな？っと言うわけで、羞恥心に欠けるキャロと『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

フェイト
「いや・・・キャロは立たせなくても良いんじゃ？」

銀八
「はーい、じゃあ最後の質問。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀時の事を好きで好きでたまらない皆さんに質問。銀時と新婚生活が送れるのならどんな生活が送りたいですか？子供は何人欲しいですか？』」

フェイト
「ぎ・・・銀時と私の子供!?／／／・・・え・・・そのう・・・あのう・・・／／／」

フェイトの頭が真っ赤になり、頭から湯煙らしき者が大きく出てきてだんだんとくらくらなってきて、ついには気絶して倒れる。

銀八
「フェイトー!!・・・・・・まぁフェイトは気絶して質問の答えはできませんね。後、なのは、スバル、ティア、アルフ、シグナム、リィンフォースは絶対にこう答えますね。『銀時と愛の絆があればそれで良い』っと。っと言うわけで、『正宗の胃袋』さんは廊下に立って、フェイトは保健室に行きなさい」

オリキャラ紹介

大威四鍬（おおいしくわしろう）死楼

『鬼兵隊』の一員で、元・真選組諸士調役兼監察。
家族である父は攘夷戦争でも数多くの天人を倒した英雄的な侍であるが、天人に寝返りした幕府に無実な罪をつけられて斬首された。
それ以来、幕府に強い憎しみを抱く。
真選組に入って、諸士調役兼監察で活躍をしていたが、裏では誰に

も気づかれずに辻斬り活動をして、１００人以上の幕府の人間と天人を殺した。
それがバレ、真選組にも終われる身になって数多くの真選組を斬り殺して脱走した。
その後、凶悪犯罪者として指名手配されていたが、高杉と偶然会って『鬼兵隊』にスカウトされて迷わず入る。

名前のモデルは、新選組諸士調役兼監察の『大石鍬次郎（おおいしくわじろう）』。

第十六訓：得意ゲームがあれば不得意ゲームもある（後書き）

店長

「前半は『攘夷志士チーム』と『歌舞伎町の女王チーム』が勝利し、残る試合は後３つ。後が無い『万事屋チーム』と『百華チーム』は残りの力を全て出し切る。それでは次回「諦めが悪い奴ほど勝ちにくいが同時になんかウザイ」をテイクオフして、第三試合『バキボキメモリアル』を始めー！」

第十七訓：諦めが悪い奴ほど勝ちにくいが同時になんかウザイ（前書き）

店長『さて皆さん、人気ゲーム機『弁天堂　Ｏｗｅ（オヴェー）』を手にするために熱き魂を持った侍と魔導士達が戦いを繰り広げ，現在は『攘夷志士チーム』と『歌舞伎町の女王』チームが一勝ずつ手にしています。しかしまだ3試合残っており『万事屋チーム』と『百華チーム』も勝機はあります。果たして次はどのような激戦を見せてくれるのか、それでは『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』，始めぇー！！」

第十七訓：諦めが悪い奴ほど勝ちにくいが同時になんかウザイ

「銀時～！怖かったよ～～！！」

先ほどの第二試合でなのはの圧倒的な白い悪魔の威圧感に押されてあえなく敗北したフェイトは銀時に抱きついて泣きつく。
銀時、スバル、アルフ、リィンフォースもあれには絶対勝てないと唖然とする。

「ま・・・まぁ、お前なりに頑張ったから良くやったと思うよ？うんうん」

銀時もフェイトが良く生きて帰ってきた事に褒める。
一方の『攘夷志士チーム』も同じであった。

「桂さ～ん！！マジで怖かったんや～！」

はやても同じく桂に抱きついて泣き出す。
初めて見るなのはの『白い悪魔』の威圧感には桂もエリザベスも恐怖に満ちていた。
エリオとキャロは今でも泣きそうであった。

「八…八神殿、とりあえず良くぞ生きて帰ってきた」
『生きて帰ってきた事だけでも健闘尽くしたと思うよ』

桂とエリザベスも生きて帰ってきたはやてを強く慰める。
一方のヴィータは『百華チーム』の全員に土下座していた。

「すまねぇ！！私としたことが不覚だった！！」

土下座して誤るヴィータに苦笑しながら月詠はヴィータを慰める。

「ま・・・まぁ・・・時には逃げるのも手だから気にするな」

月詠だけじゃなく，シャマルとザフィーラもあれには勝てないと確信する。

九兵衛にいたってはキャラ設定が壊れているのかメッチャ体を丸めてなのはの白い悪魔に怖がっている。

そしてなのはは勝ったので無邪気に喜んでいるが，神楽、ティアナ、シグナム、ユーノは凄く怯えている。

「銀さん！次は私が行きます！」

「良し，行って来い！」

「万事屋チーム」は次はスバルが行くことが決まった。

「ティアナ♪」

「は・・・はい！」

「絶対に勝つんだよ♪」　（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

なのはがそう言うと，白い悪魔の威圧感を放っている。

「りょ・・・了解しましたー！」

軍人体制でティアナは返事をしてスバルと同じく舞台に向かう。

『攘夷志士チーム』からはエリオ，そして『百華チーム』からはザフィーラが行く事に決まった。

そして第三試合が開始される。

「それでは第三試合，ギャルゲー勝負！『バキボキメモリアル』！！」

第三試合がギャルゲー勝負に唖然とする４人。

「このゲームのメインヒロインの１人であるマグ子を先におとしたほうを勝利とします！」

「何でギャルゲー勝負と言う時間のかかるゲームで勝負しなきゃいけないのよ！！」

怒鳴って突っ込むティアナを尻目に店長が説明する。

「それは単なるランダムで決めた事です！」

店長の答えに呆れるティアナは突っ込む気力も伏せた。

そしてスバル達４人はコントローラーを握ってゲーム開始態勢に入る。

「それでは第三試合、ギャルゲー勝負、始めぇーーーーー！！」

コングが鳴らされて一気に試合が開始される。

「あーもう、こんなの適当にやればいいだけよ！」

「おーっとこれは！？」

ティアナが話の設定を読まずに飛ばしている事にリィンは驚きだす。

「ティアナさんは一気に話を進めています！でもこれじゃあ話の内容が分からないです～！！」

「こんなの雰囲気で理解すればいいだけの事よ！」

ティアナはそう言うと，スバルとエリオも続いて飛ばしていくが，
ザフィーラはだけは違う。
話の内容を読み取って安全に進んでいる。

そして主人公であるいさおは急いで走っている。
この展開はパンを加えて走っているヒロインとぶつかってパンツが
見えるのだと確信するスバル、ティアナ、エリオの３人。
しかし，その予想は完全に打ち砕かれるのである。

【きゃあ！！】

いさおはヒロインのマグ子とぶつかって転ぶ。そしてマグ子が口に
くわえているのはパンではなくカジキであった。

【痛た・・・もう、何処見て歩いているのよ？】

「カジキぃーーー！？食パンじゃなくてカジキマグロを加えている
よこのヒロイン！朝食何食べているのよ！？」

とんでもない事に驚きツッコむティアナ。
スバル、エリオ、ザフィーラもリリカル組も予想外な事に驚く。

「こ・・・これは一体どういう事ですか！？」

リィンも理解不能な展開に驚き、店長に訊く。

「『バキボキメモリアル』のヒロインは今までのヒロインとは一味違ってかなりの天然という設定です」

「天然過ぎますよ！いくらなんでもこれはおかしすぎますって！」

エリオも黙ってはおられずに突っ込む。

しかし話を進めるために3人は選択肢を選ぶ。

【A・遅刻覚悟で助けを起こす】

【B・無視して学校を急ぐ】

「答えはA！！」

3人は迷わずにAを選ぶ。

するといさおが助けを起こすのはヒロインじゃなく・・・・・・

【大丈夫かい？】

カジキであった。

『『マグロじゃないィィィィィィィィ！！』』

3人は予想外の結果に突っ込みだす。

「あ・・・これはマグロルートですね」
「何だよそのマグロルートって！！」

額に血管を浮かべてツッコむヴィータに店長が説明する。

「これからマグロになり，３０分何も感じないし動けませんね」
「何でしょっぱなからそんな危険な選択肢があるんだ！？」

ヴィータに続いて額に血管を浮かべてツッコみだすシグナム。

「そ・・・そんな！じゃあ私達は３０分何も出来ないってわけ！？」

ティアナがあり得ない用に驚く。
たかがギャルゲーでこんなにも時間がかかるとは思えなかった。

「ふ、冷静さを失ったその行為が過ちをおかしたのだ。恋愛は何が起こるか分かりはしない」

ザフィーラはふっと笑って言い出す。
この試合は貰ったと確信したからである。

「同じ轍（てつ）は踏まん！一見薄情に見える『Ｂ』が正解だ！」

確信して『Ｂ』を選択したザフィーラ。
だが、

ザク！

【私を捨てるなんて酷いじゃない！！】

マグ子が後ろからカジキでいさおを突き刺し、いさおは倒れる。

「何でよぉーーーーーーーーー！？」

「予測が付かないにも程があるよ！！」

「何でギャルゲーで殺人イベントが起こるんですか！？」

あり得ない結末にツッコミだすティアナ、スバル、エリオの３人に対し、予想外の結果に別の意味で驚くザフィーラ。

「まさかカジキに刺されるとは・・・・やはり恋愛は奥が深い」

恋愛を甘く見すぎた自分が敗因であるとザフィーラは確信する。

「恋愛じゃねぇよこんなもん！」

「何処の世界にあって直ぐにカジキマグロで刺されるラブストーリーがあるんだァァッ！？！？」

ヴィータとシグナムは感心するザフィーラに突っ込みだす。

だがどう言われようと結果的にザフィーラは脱落してしまった。

「さぁ，残り３人となってようやくスタート！スバルさん、ティアナさん、エリオ君は一進一退の互角の戦いです！」

「互角とか言うレベルじゃねぇだろ！」
「まだヒロインの名前が出ていないぞ！」
2人のツッコみに飽きたのか付き合いきれないと確信して店長は指なりをする。
パキィン
すると新たなモニターとＯｗｅｅが現れる。
「時間がかかるので一気に第４試合を始めます。ゲームはこれ、『信長のゲボェ』！」
店長は第四試合用のゲームソフトを出した。
「画面上から泥酔した信長が様々な形のゲボェを吐いて行きます！これを横一列に並べるとゲボェが消えて、敵の信長がゲボェを吐いていきます。先に画面一杯にゲボェで埋もれたら負けになります！」
「それ，ただの最低のテトリスだろうが！！」
「ゲボェって何だ！？それ間違いなくゲロの事だろうが！！」
店長のゲーム説明に怒鳴ってツッコむヴィータとシグナム。
「良し！ここは私が行くね！」
「頑張って，アルフ」
『万事屋チームは』アルフが出る事にした。

（ここで勝って、なのはに良い所を見せ付ける！）

『歌舞伎町の女王チーム』はユーノが出る事にした。

「それじゃあ、ここはキャロにお任せしてもらいましょうか？」

「はい！了解しました！」

『攘夷志士チーム』はキャロが出る事にした。

「シャマル、出番だ」

「え・・・何で私ですか？」

「なんとなくじゃ」

『百華』チームは何故かシャマルが出る事にした。

そしてこの第四試合に参加するのはアルフ、ユーノ、キャロ、シャマルであった。

「おーっと，ここで地味なゲームに影薄に近いユーノさんとシャマルさんも参加しにきました！」

『『余計なお世話　（だ）（よ）！』』

リィンの解説にツッコむユーノよシャマル。

「それではゲームスタート！」

店長が試合開始宣言をすると，突如、信長が口からゲボェをしてくる。

「どぁああ！！汚いよ！誰だよこのゲームを作ったの！？完全に悪ふざけだよ！」

最悪な光景にツッコむアルフだが，とんでもない事が起こっている。
それは一気にユーノとキャロの画面がゲボェで埋められてしまった。

「ちょっとぉーーーーーー！！何でゲーム開始直後にゲボェで埋められちゃったの！？」
「何でゲーム開始直後にゲームオーバーですか！？」

理解できないユーノとキャロだが、アルフも危険な状況であった。

「何でこんなに吐くんだよ！？・・・ってあれ？ちょっとおかしいって！何でシャマルの信長はそんなに吐いていないの！？」

自分の所とは違い，シャマルのだけはチョビチョビと出ている。
その光景はまさに地味である。

「相当飲んでいますねこれは」

リィンもアルフ、ユーノ、キャロの信長が深酒していると確信する。
そして店長がその原因を説明する。

「おそらくアルフ選手、ユーノ選手、キャロ選手の信長は『本能寺の変』で深酒をしたんでしょう」
「んなもん知るかー！！昔の事を引きずってんじゃないわよ！」

アルフは怒鳴ってツッコミだす。

「シャマルさんの信長はそんなに酔っていませんね？」
「桶狭間でしょ。奇跡の勝利の後で気持ちよく飲んだんでしょうね？」

「どっちにしても吐くまで飲んだのには変わりないでしょうが！畜生、この量は裁ききれない！」

アルフの画面はもうすぐゲボェで埋め尽くされそうである。

「アルフ！」

心配そうにアルフの名を呼ぶフェイト。

銀時はヤバイ状況に頭を抱える。

「まずいな・・・アルフの奴、焦りで冷静な判断力を失っている。あれでは消せる列も消せはしない。それに比べてシャマルの方は地味な作業で確実に列を消しに行っている。この勝負、地味な作業を制した方が勝利を手にする。アルフもそれに気づかなければ負けるぜ」

「どうやらアッチの方はシャマルさんが勝ったそうですね。僕のほうも勝負を決めさせていただきます。ティアナさんの方はまだ全然マグ子さんといい関係になっていませんね。まだ仲が悪い状況のままですし」

「ぐ！」

一方のギャルゲー勝負ではエリオが有利でティアナはピンチに追い込まれている。

「こっちはマグ子さんとデートの約束をしました」

自信満々にエリオは言い出すが、スバルが反撃するかのように言い返す。

「親同伴で？それじゃあデートとは言えないよ」

エリオのほうはマグ子とデートする約束したが，何やら親同伴でお母さんと一緒にいる。

「でも、スバルさんのほうはまだ進んでは・・・・」

「したよ，二人っきりで」

「ええ！？」

エリオはスバルのほうを見ていると，そこにはいさおが誰かを待っているかのように公園で立っている。

すると，いさおの所に駆けつけて来たのはマグ子・・・

【いさおく～ん♪】

の姉のイル子であった。

「ってお姉さんのほうですか！？」

「何で姉に近づいているのよ！？」

マグ子じゃなく姉のイル子をおとした事に突っ込むエリオとティアナ。

「ヒロインキャラの中でも最も難関度が高いキャラだから挑戦して

みたんだ♪」
「いや，この勝負落すほうはイル子じゃなくその妹のマグ子なんだよ！？」

スバルの予想外な行動に誰もが呆れだす。
そして画面のいさおはイル子とラブラブである。

（やばい！）
（スバルの姉好きが徒（あだ）となってしまった！！）

リィンフォースとフェイトはスバルの姉好きに予想外な展開に進んで焦りだす。

「まぁいいや、親同伴とは言えこっちはマグ子さんと立派なでぃ・・・と？」

エリオは自分の画面を見て余裕そうな表情が消えてしまった。

マグ子とお母さんはいさおにある壺を押し売りする。

【このツボは『幸せを呼ぶツボ』と言って、今ならたった一千万円で買う事が出来るの】
【安いと思わない？】

「かもられたー！！向うは彼と言うよりただのかもとしか見ていなかったー！！」

【A・ツボを買う】　強制選択
【B・幸せになる】　選択不可能

しかも、壺を買うという選択しかなく，あえなく『GAME　OVER』。
エリオ脱落。
エリオは脱落してしまい，ショックを受ける。
これは本当にギャルゲー勝負なのかなのは達は苦笑して考える。

（危なかったー！エリオが脱落してくれたお陰で勝負はこっちが貰ったも当然！やっとマグ子と友達関係まで仲良くなって後は落すだけ！スバルの方はマグ子には関わる暇も無い！）

勝利を確信したティアナ。
スバルはそれを気にせずゲームを進める。

【いさお君、マグ子とお母さんは私と貴方の関係をどんなに言っても認めてくれないの。私達が幸せに暮らすには、あの邪魔な妹と母を殺すしかしかないわ】

「ちょっ何かサスペンスゲームなっているけど！？」

【私があの2人を崖に誘うから，いさお君が2人を崖から落として】

「へ？・・・・・・・ええーー！？」
「おーっと、ここでお母さんごとマグ子をおとすフラグがでてきたー！」
「落すってそっちの落すだったのー！？てだからなんでギャルゲーに殺人イベントが起こるのよー！？」

ありえないっと言う風な驚きをするティアナ。
そしてスバルがこれを狙っていた事を理解する。

（まさか、スバルはこれを狙って、姉に近づいてきたって訳！？）

ティアナはスバルの方を見ると、スバルはニヤリと笑い出す。

「ティア、恋愛って言うのは何が起こるかわかんないんだよ♪」

スバルがそう言うと、ティアはコントロールから手を離す。

「勝負あったー！！ティアナ選手！コントローラーから手が離れ・・・」
「ぐぬぅうううううう！！」

一方のアルフは根性で絶えるかのようにまだ諦めていなかった。
そんな様子を見たシャマルはニヤ笑いする。

「アルフ・・残念だよ。貴方なら私と同じ境地に立てると思ったよ。でも貴方は原作と違って『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』でもちゃんと出番が多く出ているしね。原作とは違って影薄のように出番が少ない私とは格が違ったんだ」

シャマルが話しているとアルフはシャマルのほうを見る。

「私と貴方じゃ、地味の器が違う」

「う！！」

シャマルの絶対的な台詞にアルフもコントローラーから手が離れる。

「終わったー！これは終わりましたー！アルフ選手，ついにコントローラーから手が離れ・・・」

ぴっぴっぴっぴっぴっぴ

カタカタカタカタカタカタ

何やら奇妙な音が聞こえたので銀時達は何の音かを回りを探しだす。

「な・・・何の音だ？」

店長が一体何なのかを驚と，モニターを見て誰もが衝撃的に驚きを隠せなかった。

「あぁーーーー！！こっこれは、マグ子の乳首が！コマンドを調べるで小刻みに何度も調べられています！そしてこれは、ゲボェが対戦者を仕切る画面を叩きつけられている！彼女等はまだ死んでいなかったー！」

「オオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！」

ティアナとアルフは最後の力を振り絞るかのように叫びだす。

「連打です！とてつもないスピードでマグ子の乳首を突いている！そしてこちらは、定規（じょうぎ）です！定規を叩いた時のずれを利用してコマンドを高速に叩いている！地味です！地味でセコイけど凄い勢いだー！」

店長はテンションを上げてコメントする。

「無駄だよティア！いさおくんがマグ子ちゃんとお母さんを崖から落す前にマグ子ちゃんを落すつもり！？」

「何をやっているのですかアルフ！？無駄ですよ、勝負はもう！！」

「かの織田信長は今川義元が攻め入った時・・・」

「絶対的な劣勢の中でも最後まで諦めずに戦った」

桂と月詠は織田信長の事を語ると，信じられない事が起こった。

マグ子が顔を真っ赤に染めている。

「ええー！？ティアのマグ子が乙女っぽい顔になっているよ！」

そしてシャマルの画面が割れてアルフのゲボェが雪崩のように流れてきている。

「そんなぁ～！！画面の壁が割れて大量のゲボェがこちらに流れてきている！」

「最後まで諦めない折れない根性」
「それが桶狭間の奇跡を呼び起こしたんじゃ」

ティアとアルフは今まさに、信長が起こした『桶狭間の奇跡』の再現をしようとしている。

『『アンタの言う通りよ！』』

ティアとアルフはスバルとシャマルに言い出す。

「恋愛は何が起こるかわからない！」
「私とアンタじゃ地味の器が違う！」

「諦めの悪い者には」
「誰にも勝てぬ」

信長も諦めが悪い男であった為、いくつの修羅を何度も乗り越えたのである。
そしてティアナとアルフも諦めが悪いこそこの奇跡の逆転勝利を起こせる・・・

訳が無かった。

『『まぁ、別にそれと今回の事とは全然関係ないんだけど』』

桂と月詠は声が重なって言い出す。

いさお、猥褻行為で逮捕。

ティアナ，『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』。

アルフ，画面がゲボェで埋め尽くされて『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』。

「第三試合！勝者、『万事屋チーム』スバル・ナカジマ！第四試合！勝者、『百華チーム』シャマル！」

ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！

「やったー！！」

「やりましたー！！」

勝利したスバルとシャマルは喜びだしてはしゃぐ。

「普通に地味に負けた」

「何かメッチャ恥ずかしい」

敗北したティアナとアルフは派手に盛り上げた割りには普通の敗北で恥を知った。

「これでわっち等全員，一勝ずつは手に入れた。」

「この最終試合を制した方が優勝のようだ。」

残る勝負は最後の第５試合。
この勝負に勝ったチームが優勝である。

「さて、作者である黒神頑張っているんだ。そろそろ俺達もこの勝負に決着を付けてやっか」
「雑魚共全員片付けて作者の唯一の小説である『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～譲夷戦争鎮魂歌～』の小説ヒロインはこの私が頂くヨ！！」

銀時と神楽も勝つ気満々でいる。
そして月詠がある事を言い出す。

「銀時、その作者である黒神の小説なんじゃが、この『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～譲夷戦争鎮魂歌～』の外伝、『蒼魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～魔剣士鎮魂歌～』も作っておるようじゃ」
「え・・・そうなの？」

【おまけ】

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！！」

フェイト
「一週間ぶりの最新で遅れてすみませんでした。今から『銀八先生コーナー』をします。」

銀八
「は～いでは最初の質問。ペンネーム『烈火竜』さん。『ナンバーズの中で下ネタに敏感なのは誰ですか?』。はい，ずばりお答えします。そんなもん知りません」

フェイト
「何でいきなりそんな質問ですか!?『烈火竜』さん!廊下に立っていなさい!／／／」

銀八
「気持ちはわかるけどそうカリカリすんなよ。んじゃ次行くぞ。ペンネーム『リュウガ』さんの質問。『銀さんと結婚したら、銀さんの世界か、なのは達の世界のどちらに住みたいですか』。はいお答えします。当然銀さんは銀魂の世界に住みます」

フェイト
「銀時の結婚かぁ～。／／／私はどっちでも良いかも♪」

銀八
「とりあえず『リュウガ』さん、廊下に立っていなさい。んで次行くぞ～。ペンネーム『赤夜叉』さんからの質問。『寒い朝、なかなか布団から抜け出せません。どうしたら、すぐに布団から出れますか』って来れ単なる相談だろうがー!んなもん自分で何とかしろー!赤夜叉!廊下に立っていろ!」

フェイト
「おっ落ち着いて銀八先生！赤夜叉さん，あんまり気にしないでください！それでは次にペンネーム『カラー』さんの質問です！２つあります！」

銀八
「『やっぱゾーマさんは出ませんか？ゾーマ×キャロの組み合わせに血涙するエリオが読みたい。』と『プレシアさんまだ出て来て無いけど、銀時争奪戦には参加するのかな？後プレシアとリンディさんは歳いくつ』・・・・ずばりお答えします。そんなことすれば作者がエリオに殺されてしまいます。プレシアの事は知りませんが，歳を言えば作者がプレシアにも殺されます。っと言う訳でエリオとプレシア、『カラー』さんの代わりに廊下に立っていなさい」

フェイト
「いや、母さんとエリオは立させなくてもいいんじゃ？」

銀八
「良いんだよ。んで次行くぞ～。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからの質問。『銀時にファーストキスを捧げた皆さんに質問です。ファーストキスは、どんな味と感触でしたか？』って、銀時の奴！何女たらししてるんだー！！銀時，『正宗の胃袋』さんの代わりに一生廊下に立っていろー！！』

フェイト
「銀時とキス・・・（ポ～）／／／」

銀八
「たく・・・何でアイツが・・・だー畜生！一気に次ぎ行くぞ！ペンネーム『東方の使者』さんの質問！『ユーノはいつ暗黒面に堕ち

るのでしょうか？いや、仮に堕ちたとして、後々そういうストーリーが出てきて、なのはが「ユーノ君、そんなに私のこと想ってくれてたんだ…」とかいってユーノに鞍替えしてしまうのはちょっと勘弁なんだが…。なのは好きの私としては、なのはにはこれからも銀時一筋でいてほしいです。』・・・・・・ずばりお答えします。・・・それは作者の気分次第です。と言う訳で『東方の使者』さん、廊下に立っていなさい』

第十七訓：諦めが悪い奴ほど勝ちにくいが同時になんかウザイ（後書き）

店長「さて皆さん，四チームとも一勝ずつ手にして、勝負は最後の第５試合に移ります。果たしてこの勝負を制して『弁天堂　Ｏｗｅ（オヴェ）』と賞金１００万円を手にするチームは何処なのか？それでは次回「ゲームは勝ち負け関係なく楽しむべし」とテイクオフして、最終勝負『銀乱闘リリカルブラザーズ』を開始ー！」

第十八訓：ゲームは勝ち負け関係なく楽しむべし（前書き）

店長
「今回で『Ｏｗｅ（オヴェー）編』のクライマックス！互いに一勝ずつ手に入れ，ついに最終決戦が始まる！それでは，『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』，始め～～！！」

第十八訓：ゲームは勝ち負け関係なく楽しむべし

「前回までのあらすじ！」

突如店長は、大きな声で説明をする。

「第１試合は外見では全く想像できないコントローラー操作で圧倒した『攘夷志士チーム』の勝利！」

勝者：エリザベス

「第２試合は相手を脅すのはやめてほしいっと言うぐらいの絶対的な支配力で魔王のような威圧感を放った『歌舞伎町の女王チーム』の勝利！！」

勝者：高町なのは

「第３試合はこれ本当に恋愛対決なのかって言うほど疑ってしまう結末で制覇した『万事屋チーム』の勝利！」

勝者：スバル・ナカジマ

「第４試合はそんな地味なやり方で良いのかと言うような圧倒的な地味な強さで圧倒した『百華チーム』の勝利！」

勝者：シャマル

「そして勝負は最終決戦の第5試合，各チームのリーダー同士のバトルコロシアムでやらせていただきます！」

そのリーダーは，銀時、神楽、桂、月詠の４人であった。
４人は優勝する為に絶対に勝つと自身をつける。

「バトルコロシアム？・・・上等じゃねぇか」
「一気に雑魚供全員倒して優勝ある！」
「貴様等にこの俺に勝てるかな？この『ゲーマーの貴公子』カツオに？」
「主らにわっち等『百華』の恐ろしさを見せてやる」

４人はどちらも譲る気は無かった。
目的は優勝賞金の１００万円と『Ｏｗｅｅ』だけである。
この勝負に制覇した物だけがそれを手にする。
なのは達はそれぞれのリーダーに全てを託すことにした。

「銀時，私は信じているよ！」
「絶対に勝ってください！」
「銀時なら絶対にいけるよ！」
「頑張ってください！」

フェイト、スバル、アルフ、リィンフォースの４人は銀時に全てを託した。

「よっしゃ！テメェら、俺の活躍をその眼に焼き付けとけ！」
『『はい！』』

銀時がそう言うと４人は勢い良く返事をする。

銀時なら絶対に勝てると信じているからである。

「よっしゃー！私、絶対に勝って来・・・・・・」

神楽はなのは達に勝つと約束する途中、青ざめて言葉が止まる。

「うふふふ♪敗者にはお仕置きなの♪」

一方のなのはは『レイジング・ハート』を手に持っており，『白い悪魔』の様な闘志を放ってニコニコと笑っている。
正座で座っているティアナ、シグナム、ユーノの3人はガタガタと怯えている。

「ま・・・待て！早まるな！！」
「あんなの誰だって脱落してしまうよ！」
「ど・・・どうか、命だけはー！」

3人は涙を流しながら許しを求めるが，なのはは天使のような笑顔で・・・・・・

「にゃはははは♪だーめ♪」

そう言って悪魔の裁きを下し，『ディバイン・バスター』を放った。

『『ぎゅあああああああああああああああああ！！！！！』』

桜色の閃光に飲み込まれたティアナ、シグナム、ユーノは真っ黒焦げになって倒れる。

それを見た神楽をはじめ，銀時達とゲーマー達や店長は青ざめている。
そしてゆっくりと神楽のほうを向く。

「神楽ちゃん♪」
「はい！！」

ビクッとして姿勢を正しくする神楽。

「負けたら・・・・・・分かっているよね？」

最後に言い出すと笑いは消えて何やらとてつもない殺気を放って神楽を見ると，神楽は滝のように涙を流す。

「イ・・・イエッサー！！」

また1つ、勝たなきゃいけない理由が増えた神楽であった。

「桂さん、私に良い考えがあるんやけど？」

はやてはニヤニヤと笑いながら桂に言い出す。
そして桂の耳の近くでその事を話すと桂は・・・

「良し、任せたぞ！八神殿！」
「まかしとき！」

はやての作戦に乗る桂は勝てると確信した。

エリザベス、エリオ、キャロの3人は何かやらかしそうであると疑う目で見る。

一方の月詠はかなりのやる気である。
それを見たヴィータ、シャマル、ザフィーラ、九兵衛は今の月詠なら勝てるのではないかと確信する。

（最高級の煙管を手に入れるためにも、わっちはこの勝負に勝たねばならん！悪いが勝負は貰うぞ！）

「月詠殿，かなりのやる気あるな」
「これはいけるかもしれないんじゃねぇ？」

ザフィーラとヴィータも月詠が勝てる見込みは十分あると考える。
そして銀時、神楽、桂、月詠の４人は舞台に進んで最後の試合を受ける。
そして店長は最終試合のゲームを取り出す。

「プレイしていただくのはこちら！『銀乱闘リリカルブラザーズ』！！このゲームも先ほどの『リリカルカート』と同じように坂田銀時の世界に居る人物と機動六課のメンバーをゲームキャラとして使用できるバトルコロシアムです！」
「おいおい，今度はフェイト達だけじゃなく俺達もキャラ化したってわけか？」
「おもしろそうね！私の化身お前等のような雑魚の化身にやられるはずが無いね！一気に勝負を決めさせてもらうね！」

銀時も神楽もやる気満々。
しかし桂にはある秘策がある。
その標的は，月詠であった。

そして銀時、神楽、桂、月詠の４人はコントローラーを握って最終決戦を挑む。
それぞれ自分のキャラを選択すると，舞台はフェイト達の世界である訓練場であった。

「それでは、最終決戦開始ー！」

コングが鳴らされてた瞬間に，銀時は突如肉まんを出す。

「神楽ぁーーーーーー！！」

銀時はそれを神楽に投げつけると神楽はコントローラーから手を離し，思いっきりジャンプして肉まんをキャッチする。

モグ　モグ　モグ

おいしそうに食べ続け，そして両手をぺろぺろと嘗める。

「美味かったアル！おっと，早くゲームに戻・・・・・・」

ろうとした瞬間，銀時、桂、月詠の3人が一斉に神楽に攻撃をし続け，そしてついには神楽の体力ゲージが無くなって神楽脱落。

「あぁぁーーーーーーーーーー！！しまったアルぅーーーーーーーーーー！！」

肉まんに気を取られて勝負を見失ってしまった神楽。
銀時は何やら憎たらしそうな笑いで神楽を見る。

「神楽ちゃん♪」

なのはの声にビクッと驚く神楽。
そして神楽の右肩に強い威圧感があった。
神楽は恐る恐るとゆっくりとその右肩を見ると、自分の右肩になのはの手が乗っている事が判明する。
神楽はガタガタと涙を浮べ、なのははゆっくりと神楽を引きずり出してゆっくりとこの場から去っていく。

そして扉が閉まると、

「ギャアアア

「な！？」
「隙ありィ♪」
はやては両手を構えて前に出すと，はやての両手は月詠の胸に直撃する。
「・・・・・・・・・・・・・」
一体何をされたのか唖然とする月詠。
リリカル組も顔を真っ赤にして唖然とし、はやてはニヤニヤとモミモミする。
「おおぉーーー！ツッキー、めっちゃボインボインや♪これはシグナムに匹敵する巨乳やな♪」
幸せそうに月詠の胸を揉むはやてに，月詠はだんだんと顔が真っ赤に染まる。
「な・・・・・・な・・・・・・！／／／」
そして素早くはやての後ろに下がって両手で、後方から相手の腰に腕を回しクラッチしたまま・・・・・・
「何さらしとんじゃァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！／／／」
思いっきり『ジャーマン・スープレックス』をかけた。
「のぎゃあぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

モロに喰らったはやては完全に白眼となって気絶してしまう。
唖然とする銀時達だが，桂はただ夢中にゲームを進めていた。
そう、これは桂とはやての狙いであった。

「不覚を取ったな。・・・月詠殿」
「何！？」

慌てて画面を見ると，顔面で桂の攻撃をモロに喰らって体力ゲートを失った月詠は倒れてしまう。
今のはやての行動は月詠の隙を作る為の行為であり、その結果月詠はコントロールを放り投げて、その隙に桂にボコボコにされてしまった。

「しまったぁーーーーーーー！」

まさかの不覚に月詠はガクリと膝を地面につけて脱落。ヴィータ、シャマル、ザフィーラは月詠にはやての行為に土下座して謝罪する。
しかし九兵衛だけ自分の胸を触って、月詠の胸を憎たらしそうに睨みつける。

「これで残るは俺と銀時だけだ。どっちが『Ｏｗｅｅ』と１００万円を手にするか、最後の勝負を決めようぞ！」
「上等だごるぁ！喧嘩なら負けねぇぞ！」

そしてこっからは銀時と桂の一対一の最終決戦となった。
互いに攻撃を喰らって防いでなどのくり返しで徐々に体力が減っていく中，桂は勝負に出た。

「ここで一気に決める！我等攘夷志士の力を見るが良いーーーー！！」

すると，ゲーム内の桂は爆弾を取り出して銀時に向かって投げる。
だが銀時は木刀をバットのように構える。

「これで決めてやるぜ！ヅラぁーーーーーーーーーーーーーー！！」
「ヅラじゃない桂だァーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

ゲーム内の銀時は木刀を振って打ち返そうとする。
これで銀時の逆転勝利・・・・・・・にはならず，その衝撃で大爆発して、銀時は当然、桂もその爆風に巻き込まれて吹飛ばされ，互いの体力ゲージは無くなった。

それを見た銀時達は唖然としてしまい、場は静かになると店長が言い出す。

「ええー、大変申し上げにくいのですが、最終試合は全員リタイアしてしまった為、優勝はなしになりました！よってこの賞金１００万円は没収となり，賭けてくれたゲーマー達には詫びとして『Ｏｗｅｅ』をただで差し上げます！」

ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！

店長の一言でゲーマー達は大喜びする。
だが，特別ゲストとして招待された銀時達の一言は・・・・・・

「な・・・・・なんじゃそりゃーーー

フェイト
「こんにちは。今から『銀八先生コーナー』をします。」

銀八
「では行くぞぉ。ペンネーム『烈火竜』さんからの質問。『機動六課の皆さんは、近藤さんがバブルス王女と言う3メートルも超える巨大ゴリラと結婚を挙げてしまう実話を信じるでしょうか?』。ずばり，フェイトさんにお答えしましょう」

フェイト
「え?ゴリラと結婚って・・・・でも，銀時達の世界から見ればあり得るかも・・・・・」

苦笑しながら答えるフェイト。

銀八
「ずばり，機動六課はその話を信じるそうです。と言う訳でペンネーム『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。」

フェイト
「次、行きます。ペンネーム『カラー』さんの質問。『この小説ともうひとつ小説を書いているみたいですが、これからの更新が遅くなるということですか?』ってええー!?この小説以外にも黒神は作っているの!?』

銀八
「まぁな。作者の考えている事は俺達には理解できん。ずばりお答えしましょう。2つあるとしても，この小説を3回最新した後にもう1つの小説を1回最新すると言うペースなので，こっちよりはもう1つのほうの最新はメッチャ遅いです。と言う訳で作者の黒神『

カラー』さんに土下座して廊下に立っていなさい。んで次ぃ。ペンネーム『加藤勇』さんの質問。『この作品には坂本辰馬や陸奥といった快援隊の方々は出るんですか？』」

フェイト
「確か，銀時達と一緒に『攘夷戦争』と戦った仲間だよね？」

銀八
「まぁな。この小説は攘夷戦争に関する事だから，出てくるんじゃねぇ？と言う訳でペンネーム『加藤勇』さん，廊下に立っていなさい。」

フェイト
「次ぎ行きます。ペンネーム『リュウガ』さんの質問。『ヴォルケンリッターの騎士（ヴィータ、シャマル）さんに質問です。誰か好きな人は居るのでしょうか？』・・・・それは秘密のようです」

銀八
「元々作者はこう言うことを考えていないようだったしな。と言う訳で，作者の黒神！『リュウガ』さんに土下座しなさい」

フェイト
「今回は黒神の土下座が多いですね」

銀八
「まぁな。んで最後行くぞ？ペンネーム『正宗の胃袋　』さんの質

問。『地味めがね（新八）って出るんですかね？もしも出るのならフェイトやなのは達に嫌われてほしいです。』。・・・・・・ずばりお答えしましょう。それ，言われなくても作者がしそうですので安心してください」

フェイト
「えぇえええええええええ！？」

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋　』さん、廊下に立っていなさい。」

『ゲーム紹介』

この小説に出てきた『Ｏｗｅ（オヴェー）』のゲームソフト紹介。

『三国無能（さんごくむのう）』

三国伝を舞台にした武将ゲーム。
三国武将をキャラとして使用し，敵をなぎ払うかのように倒す戦争ゲーム。
このゲームの最強キャラは『呂奉（りょぶ）』である。

名前の由来は『三国無双（さんごくむそう）』。

『リリカルカート』

『魔法少女リリカルなのは』シリーズに出てくるキャラがカートに乗ってレース勝負をするレースゲーム。ほとんどのステージが『リリカルなのは』に出てくる舞台だが，超難関コースとして『銀魂』に出てくる歌舞伎町を舞台にしたコースがある。

名前の由来は『マリオカート』

『銀乱闘リリカルブラザーズ』

『リリカルカート』と同じように坂田銀時の世界に居る人物と『魔法少女リリカルなのは』シリーズに出てくる人物をゲームキャラとして４人対戦するバトルコロシアムゲーム。
最後まで残った者が勝利とする。
ステージは『銀魂』の世界と『リリカルなのは』の世界のどちらかでも選べる。
ちなみにまだ発売前の更新型『Ｏｗｅ（オヴェー）』ゲームである。

名前の由来は『大乱闘スマッシュブラザーズ』。

第十八訓：ゲームは勝ち負け関係なく楽しむべし（後書き）

それは突如の事である！

自分の体に異変が発生する！

そして舞台はオンラインへ！？

神楽「次回，『改造する場合は注意すべし』。テイクオフアル」

第十九訓：改造する場合は注意すべし（前書き）

あの事件が再び起こる！

今度のアナログスティック被害はあの人物に！

そして架空の隠しボスの存在！

アルフ「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ！」

第十九訓：改造する場合は注意すべし

銀時、フェイト、スバルの3人は、あるニュースを見ていた。
そのニュースは何やら奇妙な事を放送しているようだ。
そう，それはまるで銀時が以前に見た奇妙なニュースに似ていた。

【これが決定的瞬間です。ご覧ください。何やら1頭の牛の角の部分にドライバーが付いています。】

そう，そのニュースとは牛の角の部分に角じゃなくドライバーがつけられていることである。

【角じゃなくプラスとマイナスのドライバーが付いている牛です！一体誰の噂でしょうか？被害者の話によると，このお宅だけじゃないそうです！】

ニュースキャスターが被害者にマイクを向けると、その人物はこう説明する。

【お隣の畑や豚の牧場もやられたそうだよ？何でも、１０日前から始まって，徐々に地味に被害が増えているそうだよ？そして今日は家のところにも来たそうだね？まぁたいした事はないけど、いったいこれは誰の悪戯かねぇ？】

タバコを吸って，煙を吐く被害者。

【ええー，今の所は大した被害はないようですが，いずれほうって置けばとんでもない事になりかねますので、くれぐれも気をつけて

ください。】

「なんか珍しい事件ですね。牛の角をドライバーに改造するなんて」
「ほんとよね。一体誰の仕業なんだろう？」

珍しそうに見るスバルとフェイト。
だが銀時はこの妙な事件は以前のゲーマー星人によるキャトルミューティレーションによる被害に似ているからである。
以前は銀時の大事なアナログスティックが最悪な形で被害を受けているのである。
そして銀時はあることを思い出して青ざめる。

「ま・・・まさか！！」

銀時は立ち上がって素早くこの部屋を出る。

「銀時！？」
「銀さん！？」

フェイトとスバルは銀時の慌てっぷりに驚く。
そして２０秒後，銀時は安心したかのような感じで戻って来る。
そして彼の口から出た言葉は・・・・・

「…よ…良かった……俺のアナログスティックは今回は無事だ」

の一言だった。

その意味を知らないフェイトとスバルは唖然とする。
以前に自分の大事な部分を改造された事を恥ずかしくていえない銀時はその意味を黙っていくことにした。

「まぁ、気にすんな…それよりお前等，これが天人による仕業であると思うか？」

銀時は2人にこの事件の原因が天人によるものであると質問するが，フェイトとスバルはそれはないだろうと思う。
何せこの世界は銀時達の世界じゃなくフェイト達の世界であるからだ。
だが、銀時の世界を考えてみればそれはあり得るのではないかと考える。
そして何やらテレビの様子がおかしいと銀時は異変に気づく。

「あり？」

銀時はテレビを叩くが、全然変化が出ない。

「おいおいこのテレビ…もしかして壊れかかってんのか？だとしたら修理が必要だなっと言いてェけど、買い換えるのももったいねぇし」
「あ・・・修理するならドライバーあるよ。使う？」

そう言うとフェイトはドライバー…

と一体化してしまった一本の指を銀時に向ける。

「・・・

きだす。

その原因を銀時が話し出す。

銀時の世界でも，以前にゲーマー星人と言う天人にキャトルミューティレーションされて体をドライバーに改造されてしまう事件が大きく広がっていた。

銀時達のその被害にあって体を改造された。（チ●コの改造はあえて言わない。）

結果的にその件は解決したが、どうやって解決されたのかは今だ読者達に明らかにされていない。

だが、もしかしたらこの世界にもゲーマー星人が現れて、フェイトをキャトルミューティレーションして指をドライバーに改造されたのであった。

その事を聞いてフェイトはある事を気づく。

「ま・・・まさか！！」

「フェイト？何か心当たりがあるのか！？」

銀時はフェイトを見て心当たりある事を聞き出す。

それは昨夜の夢の話であった。

＊

そこは暗い空間であった。

フェイトは眼を覚ますと当たりを見渡す。

「・・・ここは・・・一体・・・？」

一体何処なのかを唖然とするフェイト。
着ている服装は機動六課の服と一緒である。
ここが何処なのかは分からないまま混乱する中，1人の声が聞こえる。

？良くぞ来た！？

何やら男の声が聞こえて，フェイトは当たりを見渡す。
そして目の前に光が現れて，その仲から1体の巨大な翼が生えている猿らしき魔獣がフェイトの前に突っ立っている。
その姿にフェイトは驚きだす。
おそらく銀時達の世界に所属する天人または宇宙生命体ではないかと疑う。

「貴方は一体！？」

フェイトはその魔物に名を聞くと、魔物は名乗りだす。

？余は闇の帝王『マスカーク』！！『モンキーハンターオンライン』に所属する隠しボスだ！？
「お・・・オンラインの隠しボス！？」

『モンキーハンター』は聞いた事が無いが，オンラインの隠しボスがどうして自分の前に現れたのか疑う。
まさか自分は三次元から二次元に飛ばされてしまったのかと考える中，マスカークはフェイトに告げる。

？汝は我がいずれ立ちはだかるハンターと見込み，貴様の指の一本

をマイナスドライバーと化してもらった!?
「え?・・・・ええぇーーーーー!?」

マスカークの言葉にフェイトは自分の指を良く見ると、一本だけマイナスドライバーと融合してしまった悲しい指と化した指があった。

「なななななななな!?何でぇーーーー!?」

一体どうして指がマイナスドライバーとなってしまったのか涙が出そうな感じで混乱する。
そしてマスカークは高笑いして最後にこう告げる。

?元の指に戻したければ、「モンキーハンターオンライン」に参加して、余を倒すが良い!我はいつでも汝の挑戦を待っている!?
「って、ちょっと待って!!」

色々とおかしいとフェイトがマスカークに言い出す。

「何でマイナスドライバーなんですか!?何でワザワザ買いに行かずに改造なんかしたの!?」

フェイトがそう言うと、絶対にあり得ない最悪な形の原因をマスカークは言い出す。

?うむ、実は以前に調子がおかしくなったパソコンを修理する為にドライバーをなくしたようで、ついでに改造させてもらった。だがなくなったはずのドライバーがお前を呼ぶ前に見つかって、それで修理を終えてパソコンが直った。それだけの事よ、ぶはははははははは!!!?

そう言って、マスカークは闇の中に消えて姿を消す。

「ふざけるなぁーーーーーーー!!私の指を返せぇーーーーーー!!（怒）」

額に血管を浮かべて怒鳴って叫ぶフェイトだが、もう自分以外誰もいない場所で怒鳴っても何の解決もしないのであった。
そしてそこから意識が途切れてしまう。

＊

全てを思い出したフェイトは額に血管を浮かべて憎らしくマイナスドライバーと化した己の指を見る。
銀時は本当に存在したような驚きをする。
マスカークは以前にゲーマー星人（正確にはゲーマー星人とそっくりなキャラを操作していた土方と沖田）を騙してゲームを辞めさせない為にデタラメにいった隠しボス名である。
自分自身もそんなボスはいないと思っていたが、まさかここにいるとは思いもよらなかった。

「・・・じゃ・・・じゃあまさか、フェイトさんはパソコンの修理の為に指をマイナスドライバーと改造されたんですか・・・・・（ククク）」

笑いを堪えるスバルを見て、フェイトは怒りを爆発させる。

「笑い事じゃないよ!どうするのよこの指!これじゃあ恥ずかしくて出動できないよ!」

この指をなのは達に見せられたら呆れられる上に笑われて恥を感じる。
それだけは避けたいとフェイトはどうすれば良いのか考える中，

「フェイトぉーーーーーーーー！！」

アルフがフェイトの名を叫んで現れる。

「アルフ！大変な事が・・・・・・あ・・・」

フェイトは自分の指がマイナスドライバーと化した指をアルフに説明しようとするが，彼女は信じられないような表情でアルフを見る。

「目が覚めたらこんな姿にされちゃったよ～！！」

泣いて叫ぶアルフ。
その姿は，狼姿である。但し、狼姿っと言っても、いつもとは違う。全体がプラスドライバーと化してしまったのである。

「アルフゥーーーーーーーー！？」

あり得ないような感じで銀時は叫ぶ。

「アルフさん！！一体どうしたんですかその姿！！まさか貴方もマスカークに！？」

スバルも青ざめて原因がマスカークであると質問する中，アルフは無言で頭を縦に振るう。

「そんな！アルフもドライバーにされたなんて！」
「フェイト！？まさかフェイトも！？」

フェイトもマイナスドライバーに改造された指をアルフに見せると，アルフは信じられない表情でフェイトに抱きついて泣き出す。

「フェイトー！！」
「アルフー！！」

2人は抱き合って泣き出す中、銀時とスバルは言った移動してこうなったか考える中，ヴィータが入ってきた。

「そうか・・・・・これは全部そのマスカークが原因か」
「ヴィータ？お前何をし・・・・・・」

銀時はヴィータを見て喋るの止める。
それはヴィータの姿を見て青ざめているからである。

ヴィータの腹の下には・・・・・・・・・・ボックスドライバーが付いている。
それも最悪な位地に。

フェイト、スバル、アルフの3人も顔を真っ赤に染めてヴィータを見る。
銀時にいたっては、ある意味ヴィータが精神的な犠牲者であると考える。

「なぁ、敵がオンラインゲームのキャラなら・・・・・殺しても構わないんだよなぁ？」

（最悪じゃ～～～～～～～！！銀さんの代わりにヴィータに穢（けが）らわしいアナログスティックが付けられているぅ～～～～！！）

まさに史上最悪な被害を受けた者であるヴィータに、以前に銀時が受けた最悪の被害以上な被害であると涙を流すほど悲しむ。

そして銀時は４人にマスカークが存在するかもしれない，あるオンラインゲームを説明する。

『モンキーハンター』

通常『モンハン』

銀河中で大流行のテレビゲーム。
内容は怪物猿が生息する星を舞台に狩猟生活を楽しむというもので，ＰＳＰ版と銀河中のユーザーがプレイ可能なオンライン版が存在する。
以前に銀時達もゲーマー星人に体をドライバーに改造された為、このゲームをやったことがある。
それはゲーマー星人もこのゲームをやった事があるからである。
そして今回の原因はマスカークが原因であるようであり、もし本当にマスカークがこのゲーム内にいる隠しボスならば、それを狩り倒せば元の体に戻るようである。

「良し、じゃあそのマスカークを絶対にぶっ倒そうぜ！乙女にこんな屈辱を味合わせることがどれ程身の程知らずかおしえてやるぁあ！行くぞ！銀時、フェイト、スバル、アルフ　！！」
「うん！」
「はい！」
「おうよ！」

４人はやる気満々だった。
フェイト達は機動六課部隊員オフィスに向かう。
あそこなら山のようにパソコンがあるため、オンラインゲームができる。
スバルは別に改造はされていないが、何やら放って置けないため、皆を助ける事にした。

「しゃーねぇな。なんか今回ヴィータがかなり酷くやられてっから助けてやるか」

と言いながらも４人の後を追う。
そして、フェイト、アルフ、ヴィータの元の体を取り戻す戦いが始まった。

【おまけ】

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生!!」

フェイト
「こんにちは。今日も『銀八先生コーナー』をします。」

銀八
「では行くぞぉ。ペンネーム『カラー』さんの質問。『結構銀さんは銀魂の世界でもモテますけど、もし銀魂の世界で奥さんにするとしたら誰が一番良いですか？　やっぱ胸を揉んでシリアスで良い雰囲気になった月詠？それとも一晩を共にした（？）さっちゃん？なんやかんやで記憶喪失になった銀さんに惚れた妙？教えて下さい♪』。ずばり・・・・お答えできません」

質問に答えられない銀八。
原因は凄い威圧感を放って鋭い眼線を銀八を睨みつけているフェイトにあった。
そんなフェイトに、大量の汗を出して青ざめている銀八はカラーさんに謝罪する。

銀八
「フェイトに殺されそうなので，お答えできなくてすみません。っと言う訳で、『カラー』さん、今回は廊下に立たなくてもいいです」

フェイト
「あら？珍しいですね♪じゃあ次行きます。ペンネーム『烈火竜』さん。『定春はアルフに発情しますか？』ってアルフに!?」

銀八

「ずばりお答えします。・・・・・・同じ犬同士だからするんじゃねぇ？」

フェイト
「いや，アルフは狼だよ？」

苦笑して言い出すフェイト。

銀八
「と言う訳で、『烈火竜　』さん。廊下に立っていなさい。次行くぞ。ペンネーム『風邪気味』さんからの質問。『エリオは幸せになれますか？』・・・ずばりお答えします。・・・・なる確立が結構高いからなるんじゃねぇ？」

フェイト
「『赤夜叉』さんの小説に出ていたエリオが可愛そうに見えたから、幸せになってほしいね」

銀八
「と言うわけだ。その質問の答えは，『幸せになってほしい』っと事です。んで最後にペンネーム『正宗の胃袋』さんからの質問。『銀時を主役にした恋愛ゲームが発売したら買いますか？（ヒロインはリリカル組みのキャラクター）』」

フェイト
「ぎ・・・銀時と私達の恋愛ゲーム！？」

フェイトはそれはどういうゲームなのかを妄想する中，頭の中をパンクしてしまい顔を真っ赤に染めて倒れる。

銀八
「・・・・・フェイトの反応を見たとおりです。・・・・と言う訳で『正宗の胃袋』さん，フェイトを保健室まで連れて行きなさい」

第十九訓：改造する場合は注意すべし（後書き）

己の体を取り戻す為、フェイト達は二次元の世界に向かう！

舞台は『モンハン』のオンライン！

様々な難関が銀時達の前に立ち向かう！

ヴィータ「次回、「二次元になれすぎると三次元の生活は全く堕落してしまう」山猿狩りじゃーーーーーーーーーー！！」

第二十訓：二次元になれすぎると三次元の生活は全く堕落してしまう（前書き）

今，幕を開ける
壮大なるサバイバル
ハンターが信じるのは
己のみ
力でねじ伏せるか！
技で翻弄するか！

『モンキーハンターオンライン』

狩り取れ！
己を賭けて！

第二十訓：二次元になれすぎると三次元の生活は全く堕落してしまう

機動六課部隊員オフィス

そこは隊員が仕事用に使われるパソコンが山のようにある作業場である。

今回は貸切っと書いてフェイト達が使用している。

体をドライバーと改造されたフェイト、アルフ、ヴィータは元凶である『モンキーハンターオンライン』をやり始めてそこにいる隠しボスであるマスカークを見つけ出し倒す。

『打倒・マスカーク』と書かれた鉢巻を頭にかけていて，気合は十分にある。

特にヴィータにいたっては怒りを爆発しそうであった。

そんな感じでまだドライバーに改造されていない銀時とスバルも自分達もやられる前に元を断つ為、フェイト達に協力する。

そして『モンキーハンターオンライン』のホームページを開く。

【モンキーハンターの世界にようこそ。ここは，世界中のハンター達が集まる夢の冒険空間です。くれぐれもネットマナーを守り，誰もが心地良い空間になるようご協力ください。】

フェイトは『にゅーげーむ』を押してゲームをスタートする。

【それでは，この世界での貴方の分身となるキャラクターを作ってください】

「そうか、自分のキャラの設定から始めなきゃいけないんだ・・・・じゃあ」

フェイトは迷いながらキャラ設定を考える。

「じゃあ髪は金髪でヘアーはロングヘアー。・・・・あ、ちょうど私の眼に近いのがあった。そして武器は・・・・・鎌もあるんだ♪なんか楽しくなってきたかな♪服装もバリアジャケットのが良いかな♪」

目的を忘れているのではないかと思わせるほどに楽しんでいるフェイト。

そしてキャラ設定は完了した。

「・・・・名前は・・・・・・・／／／／」

顔を真っ赤に染めながらフェイトはペンネームを『坂田フェイト』と登録した。

名前：『坂田フェイト』

種族：アマゾネス

使用武器：大鎌

ＬＶ：３

ＲＰ：３２０

狩った数：０匹

使用者：『フェイト・テスサロッサ』

＊

『始まりの地　ハンターランド』

そこはハンターが生まれてくる場所であり，初心者であるハンターが多く遭遇する場所である。
そこには数多くのハンター達が肉を焼いたり、鍛冶屋で武器を選んだり、楽しく話したりしている。
そんな光景をフェイトは楽しそうに見ている。

【うわぁー。これ全部このゲームを遊んでいるプレイヤーだよね。凄いよ】

感心するかのように感動するフェイト。
だが、肝心な目的を忘れる訳にはいかない。

きっとここにマスカークの情報を持つ者がいると確信し、とりあえずは銀時達を待つ事にした。
待つこと３０分、そこに少年がフェイトの前に現れる。
その少年は巨大な金槌を持っていて、短髪で騎士のような鎧を身につけている。

【こんにちは、お姉さん。】

「あ・・・子供だ。」

フェイトはその子供を不思議そうに見ると、少年はどうやら仲間探しをしているようである。

【ひょっとしてお姉さんも一人ですか?僕もなんです。良かったら僕と一緒に狩りに行かない?】

少年はフェイトに仲間を誘いだすが、フェイトは迷った。
せっかくの誘いを断る訳には行かないが、こっちにも事情があるためその誘いに乗る事ができない。

【ごめんね。もう先客がいるから】
【そうなんだ。・・・じゃあ、せっかくだからアイテムを1つ上げるよ】

まさかアイテムをも分けてくれるとは思いもよらなかったフェイトは意外そうに驚く。

【良いの?他人にアイテムを軽々しく上げるなんて】
【大丈夫だよ。女にとっていらない物だし♪】

何でそこで『女』の言葉が出てくるのか考える中、少年はフェイトを見て・・・・・

【(ヴィータの声)金玉をつけろ】
「ヴィータぁー!?」

思わずずっこけるフェイトはその少年の正体がヴィータである。

名前：『ヴィーオ』
種族：少年
使用武器：金槌
ＬＶ：２
ＲＰ：２４０
狩った数：０匹
使用者：『ヴィータ』

【ヴィータなの！？何男性キャラに設定しているの！？アナログスティック付けられたからって男にならなくたって良いじゃない！】
【お前にアナログスティックを付けられた私の気持ちなんかわかってたまるかー！！】

涙を流して怒鳴りだすヴィータ。
相当に悲しい屈辱を受けてしまったようである。

【チクショー！お前にも私が受けた恥を思い知らせてやるー！】
【ええぇーーーーー！？】

とヴィータはフェイトに飛びついて襲おうとした。
フェイトはただ単に叫ぶしかなかった。

どうすれば良いかオドオドと考えていく中，ヴィータは突如とんでもなく苦しそうな表情を出す。
それは後ろから女剣士に１つの刀で浣腸されてしまい、あげくに尻を支えて絶叫して転びだす。
その女剣士は銀髪をしていて、２つの刀を左右の脇に装い、中々可愛らしい可憐な少女である。

【大丈夫ですか？】

少女は心配そうにフェイトに安全なのかを訊く。

【は・・・はい！お陰で・・・・】

苦笑してフェイトはお礼を言い出す。

【あ・・・それからこの人は私が何とかします。】
【いや・・・その人は私の知り合いで・・・そのう・・・・（苦笑）】

ヴィータが仲間である事が良いずらく、どうすればいいのか分からないフェイトはくよくよする中、銀髪の少女は・・・・・

【大丈夫ですよ、女のいらないのを狩れば問題解決しますし・・・・・（銀時の声）金玉をな】
「銀時ぃー！？」

またもや思いっきり，ずっこけるフェイト。

名前：『宮本銀子』

種族：女剣士
使用武器：日本刀×２
ＬＶ：４０
ＲＰ：３９２５
狩った数：０匹
使用者：『坂田銀時』

【なんで女キャラにしているの！？】

あり得ないかのような勢いでツッコむフェイト。

【これは奴らを欺くためだ。情報収集にはこう言うのが最適だろ？】

銀時はその為に女キャラを設定したのである。
以前は大刀使いだったが、今回は双剣使いとして選んだのである。

【だからって何、その序盤からのデタラメな強さ！思いっきりゲームを１００時間以上やった人のデータじゃないの！？】
【それはアレだよ。（銀髪の女性の声で）この美貌のおかげで管理人に特別にステータスアップを恵んでくれるのよ】

可愛らしく言う銀子（銀時）だが，フェイトは呆れる。
それはつまり管理人を騙した事になる

【つまり、騙し取ったんだね。それは酷いよ】
【アホか、今回はお前達の体を取り戻す為にやってんだぜ。それに、一刻も早く元の体に戻りてぇんだろ？】

銀時がそう言うと，フェイトは言い返せなかった。
確かに早く元の体に戻りたいのは確かである。

【それにな、こっちも仲間を見つけたんだぜ？】

その女格闘戦士は、犬・・・じゃなく狼の耳を付けた女性であり、軽量の鎧を身につけている。
そしてその人物が誰なのかをフェイトは理解する。

【まさか・・・・・アルフ！？】
【フェイト！やっぱフェイトだ！】

名前：『格闘女王アルフ』

種族：剣闘士

使用武器：篭手

ＬＶ：４

ＲＰ：５１０

狩った数：０匹

使用者：『アルフ』

２人はようやく再開できて喜びだす。
そして互いに抱きつき、ヴィータが起き上がり、メンバーが大抵揃った事で後はスバルを待つ事にした。
だが、スバルだけじゃヤバイので他の仲間を探す事にした。

【そうと決まればさっそく情報収集だ。良いか、できるだけ長い事このゲームをやっている強そうなベテランを探すんだ】

銀時がそう言うと、何処か良いハンターはいないか探していく中、銀時達はあるハンターを見かけた。
そのハンターは女性で、蒼いロングヘアーでかなり可愛らしい美少女である。上半身は戦国武将の鎧を身につけて，下半身には蒼白いミニスカートを見に装い，黒い草履を履いている。背中に背負っている長刀は野太刀であり、かの剣豪である佐々木小次郎の愛刀、『物干し竿』に似ているようである。
そして見た感じかなりの強そうな雰囲気をしている。

【おおー、あれなんか良いんじゃねぇか!?メッチャ強そうだし確実に１００時間以上はやっているぞ!?】
【本当だ。あの人に頼んでみよう】

そう言うと、銀時、フェイト、アルフ、ヴィータの４人はその少女に駆けつける。

【（銀子の声）あのう、すみません。つかぬことおうかがいしますが・・・・・】

銀子の声で銀時はその侍少女に声をかけると、少女は・・・

【すみません。人探しをしているんです。・・・（スバルの声）銀時って言う人を探してまして・・・・・】

【（銀時の声）お前かいぃぃぃ！！】

名前：『佐々木昴（ささきすばる）』

種族：侍

使用武器：長刀

ＬＶ：８５

ＲＰ：８７３６

狩った数：１５匹

使用者：『スバル・ナカジマ』

【あ・・・銀さん！それに、皆さんも集まっていたんですか♪】

ようやく仲間を見つけ出して喜ぶスバルに対してのフェイト達の反応は、

【何でゲーム始めた人のＲＰが８０００以上なの！？何、レベル８

5って!?思いっきり銀時の2倍以上は行っているよ!】
【つうかなんで最初っからそんなに強くなっているんだよ!】

フェイトとアルフもツッコみしなければ抑えられないような感じでツッコみだす。
そして最初っから上級者レベルであるスバルに対し、納得いかないヴィータは怒鳴りだす。

【お前、一体どんな手を使ったんだ!その立派な武器は何処で見つかった!?】
【私はハンターです。だから欲しい物はハントで手に入れるのがハンターですし。】
【ハンターも何も、あたいらはこのゲームを始めたばっかなんだよ!?それにいくら15匹のモンキーを狩ったからって、普通そこまでレベルアップしないんだよ!?】

スバルの説明にアルフはまだ理解できない。
そんな中、豚のような姿をした警備隊が来た。

【あのう・・・すみません】
【あ・・・すみません。私達，パーティを組んでいるのでこれ以上仲間は・・・】

フェイトが説明すると、何やら奇妙な事を聞かされる。

【いえ、私達はこのゲームの管理をしている者なんですが、この先のジャングルの中で10人のエリートハンター集団が1人のハンターに奇襲されて1人残らず殺されて身包みをはがされたと報告が入っているんですが・・・・・何か知りませんか?】

管理者がその事を話していると、フェイトはその事を聞き出す。

【あのう・・・そのエリートハンター集団って相当レベルが高いですか？】

【高いも何も、１人１人のレベルが７０か８０以上がありましたので、あれほどの最強ハンター集団を１人残さずに倒すなんて・・・・一体誰がこんなことを・・・・】

管理人が考える中、スバルがその犯人の名前を言い出す。

【おそらく、『M』が犯人だと思います。】

【M！？】

フェイト、アルフ、ヴィータは唖然と叫ぶと、銀時と管理人はその名を聞いて驚く。

『M』とは伝説のハンターであるコードネーム『M』の事である。世界の全てを狩りつくした男として、ハンターの中でも伝説と言われた最強のハンターである。

確かに『M』ならあり得ると確信し、管理者は銀時達に【ご協力感謝します！】と言ってこの場を去る。

ちなみに『M』の使用者はマダオ（本名：長谷川泰三（はせがわたいぞう））である。

こうして銀時達の冒険はスタートしてジャングルの中に入った。

『始まりの森　スタートジャングル』

森の中に入ってから1分後。
どうしてスバルが『M』の存在を知っているかを尻目に、銀時はスバルに話し出す。

【そう言えば、お前。良くさっきの事を知っていたな。まさかあの『M』がねぇ。モンキーを狩るのを飽きてハンターを狩る事まで堕ちてしまうなんてな・・・】

マダオがそこまでバカな事をする人間とは思えなかった銀時は呆れるが、スバルは正直な事を言い出す。

【いや、実はあれは管理者を騙す為のうそなんです】
【え!?】

スバルが管理者に嘘ついたことに銀時は初め、フェイト達もスバルに注目する。

【・・・ス・・・スバル?・・・貴方、何でそんな嘘を?】
【いや・・・だって・・・】

するとスバルは、何処から出したのは知らぬが、大量の武器やアイテムを出す。

【私が犯人である事がばれちゃいますから。テヘ♪】
【【お前が犯人かいいいいいいい!!!!!】】

銀時、フェイト、アルフ。ヴィータはまるで稲妻が走るかのような衝撃を受けてしまい、ツッコむ。

まさかあのエリートハンター集団の奇襲殺戮の犯人がスバルであった。

【お前、いくらゲームだからって何ハンターを狩っているんだ！？】

【このゲームはモンキーを狩るゲームなの！ハンターを狩るんじゃないんだよ！】

ヴィータとアルフはあり得ないかのような勢いで突っ込みだすとその理由をスバルが言い出す。

【だって、なんかあの集団は自分達はエリート魔導士ハンターの『神戦組（しんせんぐみ）』であると威張ってて弱いハンターをいたぶる最低な集団なんですよ！？だから二度とそれが出来ないかのように一度懲らしめてやったんですよ！】

要するに弱い者イジメをしたから入り残さずに狩ったのである。

だが、その時のスバルのレベルは３であり、余りにも無謀であったが・・・奇襲して２人を落とし穴ではめて、そこで倒し、一気にレベルを２５までアップ。

その後に後ろから１人を辻斬りして４０レベル。

そして気づかれてもワザと逃げて、相手を誘うかのように負わせた隙に罠で徐々に痛めつけて、そして一気に６人倒して８５までレベルアップ。

そして決闘でスバルは圧倒的な強さで相手を瞬殺して全員残らず倒した。

後は、ばれないようにモンキーを５匹程度倒して狩った数の合計を１５にした。

【いや・・・それは何でもやりすぎじゃ・・・（苦笑）】

フェイトもスバルの予想外な行動に呆れだす。
そして銀時は愉快そうに笑っていた。

『神戦組(しんせんぐみ)』の響きが『真選組』と一緒だからである。
実際、銀時にとって真戦組とはライバル関係であるからその『真選組』がやられる想像をするだけで嬉しくてたまらないようである。
実際に、『真選組』が聞いたら不機嫌そうになるが、そこは気にしないでおこうと考える。

【とりあえず、モンキーからとことんハントしよ】
【ハント?】

フェイトがスバルが突如何を言い出すのかと注目する。

【そうです。このゲームは敵を狩る事を楽しむゲームです。そして強いところに行けばそれだけ強いハンターにも会える。それは長時間このゲームを遊んだ、様々な情報を持ったプレイヤーに会えるんです。きっと隠しボスであるマスカークの事を知っているハンターと出会えるかもしれません。】

スバルの言う事も確かに納得する。
長時間やればそれだけ情報を持ったハンターに会えるに違いないようだ。

【なるほどな。そんで出会ったハンター達と仲間にして行き、もしかすればマスカークの情報を知る人物と出会えるわけか】

銀時も納得したかのように感心する。

【はい!だから、まずは仲間を作る事から始めましょ・・・】

スバルが言いかけている中、何かが落下してきた。

【！？】

銀時達は驚いてその落下先を見ると、そこには野生のモンキーが５匹いて銀時を睨みつけている。

【早速お出ましか？】

【とりあえず、一気に倒してあたいらもレベルアップを・・・・・】

使用として戦闘態勢に入るフェイト、アルフ、ヴィータだが、銀時とスバルは素早く動き出してモンキー達に飛びつく。

【てぁあああああああああ！！】

銀時は二刀流の剣技を炸裂させて、一気に２匹のモンキーをバラバラに切り倒す。

そしてスバルははゆっくりと剣を構えた。襲ってくる３匹のモンキーが襲いだして駆けつける轟音の中、静かなる音が響く。

【秘剣・昴返し（すばるがえし）！！！】

声と共にスバルが剣を振る。上段からの一撃、横薙ぎの一閃、払いの一撃、計三つの太刀筋が『同時』に放たれた。

三つの刃を放たれ、３匹のモンキーは全て一刀両断されて即死した。

自分達が動く前に全て解決した事で、フェイト達は・・・・・

【え・・・・・・えぇぇぇぇぇぇぇぇ！？】

口にはそう叫ぶしかなかった。

宮元銀子　ＬＶ４０→４２

【ちょ・・・何でモンキーを倒しただけなのに一気にレベルがすぐに２つ上がるの！？】

フェイトがあり得ないかのようなツッコみをする中、銀時はその訳を言い出す。

【いや、実はさっきの話に続きがあってな、管理人にモンキーを狩る毎にレベルを１つずつ上げるように設定させてもらったんだぜ？】

【それもはやルール違反だよ！ばれたら大変な事になるよ！】

フェイトが銀時と話している中・・・・・

【スバルうぅぅぅぅ！さっきの技はなんだぁーーーー！！】

ヴィータがスバルにさっきの『昴返し』の事を聞き出す。

【何って・・・『昴返し』ですが？】

【『昴返し』って何！？ってかそれ思いっきり、『Ｆ●ｅｔ』にでてくる『アサ●ン』の必殺技である『燕返し』をパクっているでしょう！あんたハンターを奇襲してハントしたあげくに他人の技をパクったんかい！】

アルフもスバルがそう言うことをする人間とは思えなかった。

しかしスバルには自覚ない為、天然的な行動に２人は呆れる。

そしてフェイト、アルフ、ヴィータは自分達は何も出来なく落ち込んでいる。

【何やっているんだ?あいつら】

【フェイト隊長、アルフさーん、ヴィータ副隊長、そんな所にいたらまたモンキーに襲われ・・・・・】

そうになると言い出すと、すでに遅かった。

草むらに隠れていた3匹の巨大な銀色のモンキー【シルバー・レオパオショション】が3人が襲いだす。

【オオオオ

を投げつけ、２つの爆弾は爆発して残り2匹のモンキーは爆死した。

【!?】

銀時達は突如現れたハンターを見て驚きだす。
そのハンターはワイルドな格好をしていて、頭に悪魔の頭蓋骨を被っていて、右手に人の身長の倍はある大刀を持っている。

【おまけ】

銀八
「教えて!」

生徒全員
「銀八先生!!」

フェイト
「こんにちは。今日も『教えて銀八先生』を始めます。」
銀八
「えーじゃあ、行くぞぉ。ペンネーム『カラー』さんの質問。『設定ではフェイトは料理出来ませんが、現在はどうなんでしょうか？後六課の中で料理出来る人いるのかな?』」
フェイト
「あ・・・あの時は私は子供だったもん。今じゃあちゃんとできるもん!・・・・・（小声で）多分」
銀八

「まぁ、機動六課には殺人並に腕の悪いシャマルがいるから大丈夫じゃねぇ？そんでもう1つの質問だ。『フェイト達、ケツノ（漢字忘れた）アナ、結婚申し込まれたらどっちを選ぶ！！因みにフェイト達を選ぶと全員を選んだ（重婚ってこと）ことになります♪どっちを選んでも多分（というか確実に）死ぬと思うけど教えて♪ちゃんと♪良い質問したな俺♪』。ずばり、お答・・・・・・」

フェイト

「サンダー・レイジー！／／／」

顔を真っ赤にしてフェイトは無意味に『バルディッシュ』を取り出して『サンダーレイジー』を炸裂させる。

銀八

「ぎゃあああああああああああああああああああ！！」

ドス！

それをまともに喰らって銀八は倒れる。

フェイト

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・！と・・・とにかく『カラー』さん！廊下に立っていなさい！／／／」

フェイトがそう言うと、黒焦げになっている銀八を無視して続ける。

フェイト

「つ・・・次行きます！ペンネーム『烈火竜』さん。リリカル組は近藤さんと本物のゴリラを見分けることは出きるでしょうか？。（実際にやってみて下さい。）』」

すると、上から近藤とゴリラの写真がフェイトの前に振ってくる。
フェイトはそれを見て写真を見ると・・・・・・

フェイト
「い・・・一瞬だけ近藤さんをゴリラと一緒に見えちゃいました。
（苦笑）っと・・・とにかく『烈火竜』さん、動物園に言ってゴリラに謝ってきてください！・・・・最後に質問。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『銀時の裸体写真集がありますけど、フェイトさん、１０００円で買いませんか？なのは達は鼻血出しながら買いましたけど？』・・・・・・・・・・・・・ブォーーー

第二十訓：二次元になれすぎると三次元の生活は全く堕落してしまう（後書き）

あの人物達もドライバー化！

波乱は倍増！

『M』を超える伝説のハンター降臨！？

リィンフォース「次回、「仲間が増えれば増えるほどパーティは楽しくなる」。私も山猿狩りです！」

第二十一訓：仲間が増えれば増えるほどパーティは楽しくなる（前書き）

前回の最後に現れたハンターはあの人物！

そしてあの人物も登場！？

あの対決がパワーアップして再現！

はやて

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』，始めるな♪」

第二十一訓：仲間が増えれば増えるほどパーティは楽しくなる

銀時、フェイト、スバル、アルフ、ヴィータの5人はマスカークを倒すために「モンキーハンターオンライン」をやり始めた。
そしてモンキーに襲われた瞬間に，突如現れた謎のハンターによって助けられた。
その得物は巨大な大刀であり，絶対的な攻撃力を誇る。
そして男の登場で銀時は喜びだす。

「うっしゃー！来たァァ！ハンター来たぞー！メッチャ強そうじゃねぇか！思いっきり超一流のハンターに違いねぇ！！」

大喜びする銀時は早速助けてくれた礼のコメントを書き込む。

＊

【（銀子の声）あのう、私達の仲間を助けてくれてありがとうございます。お陰手助かりました】

飛び級の笑顔でお礼を言い出す銀時はそのハンターにお礼を言い出す。

【今、僕達仲間を探しているんですよ。（笑）宜しければ一緒に狩

りに行きません？（笑）】

笑いながら仲間を誘うハンターに、銀時達は良いハンターであると確信して喜びだす。
スバルはある事を気にする。

【僕達って事は，仲間がいるんですか？】
【ええ、もうすぐ来ると思いますが（笑）】

ハンターはそう言うと，後ろから1人の女ハンターが現れる。

【あ・・・やっと追いつきました】

ようやく付いてホッとする女ハンター。
そのハンターは水色のショートヘアーで軽量の鎧を身につけて，ミニスカートをはいている。そして何やら無数のナイフを持っている。

【おおー、皆すごく面白そうですね♪私からも是非仲間になる事をお願いします】

そう言って女ハンターは頭を下げてお願いする。
そんなハンターにフェイトは喜んで仲間になろうとする。

【はい、ちょうど私達も仲間を探していました。あ・・・私は坂田フェイトです】
【ヴィーオだ。だけど私は男じゃない。女だぞ？】
【（銀時の声）宮元銀子でーす。（喜）】
【格闘女王アルフだ】
【なんだよ、格闘女王って？何の中二設定？】
【戦いの旅だ。厳しくなるぞ？】

【やめろ、その中二設定は】

アルフの中二設定的な説明に呆れて突っ込む銀時。

【私は佐々木昴です。よろしくお願いします♪】

【何お前は伝説の剣豪風な名前をしているんだ？】

昴の名前設定に呆れるヴィータ。

【あはははははははは。（笑）すみません。（笑）この（笑）は僕の癖でして、ちゃんと感情も書いているんです。（笑）】

（笑いの上に（）も付けている。これは相当良い人そうだわ）

かなり心強い仲間になれた事に喜ぶフェイト。

【以前ネット上で揉め事がありましてね。こうして感情も書き加えているのですよ。（笑）・・・・・・あ、すみません。（謝）自己紹介を遅れました（笑）】

そして2人のハンターは自己紹介をする。

【グレートフルーツポンチ侍です，よろしく（桂）】

【私はグレートフルーツポンチ魔術師（マジシャン）です♪（はやて）】

「（桂）と（はやて）って何ィィィィィィ！？」

「こいつ等思いっきり正体をバラいていやがるよ！いい加減に攘夷行動と機動六課の仕事しろォォォォォォ！！！！」
「か・・・桂さんにはやて！？」

銀時とヴィータは怒鳴ってツッコみ、フェイトは2人もまさか『モンキーハンターオンライン』をやっているとは思ってもいなかった。
これにはスバル、アルフ、ヴィータも驚きだす。

名前：『グレートフルーツポンチ侍』
種族：傭兵
使用武器：大刀&爆弾
ＬＶ：５０
ＲＰ：５０２１
狩った数：３５２４匹
使用者：『桂小太郎』

名前：『グレートフルーツポンチ魔術師（マジシャン）』
種族：暗殺者

使用武器：ナイフ

ＬＶ：３８

ＲＰ：２９５２

狩った数：２３７３匹

使用者：『八神はやて』

【皆さんは普段は一体何をやっているのですか（昼間からゲームをしている連中だからどうせロクな連中じゃないだろうな）】

（おいぃ～～～！！（）の中に書いてはいけない感情を書いているぞ～！）

桂の感情にツッコむヴィータ。

【うちらは普段は仕事をサボらずに真面目にやっているけど、今日は休みなので遊んでいます♪】

（はやてぇー！！お前は何嘘を言っているんだー！普段はサボりまくっているだろうがぁー！）

はやてが嘘付いていると知ってさらにツッコむヴィータ。

そして銀時達は普段何をやっているかを紹介する。

【ただのゲーマーでーす（パイロット）】

（嘘付けー！（）の中に嘘を付くなー！！）

今度は銀時に対して突っ込むヴィータ。

【わ・・・私は機動六課の活動をしています。】

【右に同じだ。】

フェイトとヴィータはせっかくだから普段の生活を教える。

【私は剣術の鍛錬だよ♪】

スバルは会えて剣術の鍛錬をしていると言い出す。

【ただの武者修行さ（但し戦いで強さを求める欲望のままに旅をしている。その為に数多くの敵やモンキーには容赦なく殺すのもいとわない冷血な格闘女王。最強の宿敵、剣闘王ザンフィーラは実は我が従姉弟。ザンフィーラを超える最強の格闘女王を目指している。）】

【何お前は（）の中に中二設定をしているんだー！！】

ヴィータはアルフの中二設定に突っ込みだしてとび蹴りをする。

【グレートフルーツポンチ侍さんは普段は一体を何をなさっているんですか？】

（もう丸分かりだけど念のために言っておくか）

フェイトは桂（グレートフルーツポンチ侍）に質問してみた。

【僕ですか？僕・・・いや、僕達は・・・・・】

【ドライバーをやっています（十）】

機動六課部隊長オフィス。
デスクに座ってパソコンで『モンキーハンターオンライン』をやっているのは、体全体にプラスドライバーに改造された桂とはやてであった。
そしてマイナスドライバーと改造されたエリザベスとリィンは涙を流しながらはやての代わりに機動六課の仕事をしている。

【あんた等もかいぃーーーーーーー!?】

稲妻が走る衝撃を受けて銀時はツッコみだす。

【実は僕達、前日マスカークと言う物にドライバーに改造されてしまいまして、そのマスカークが時々仕事をサボってやっているこのゲームの隠しボスであるという情報があって探しているんです（真剣）】
【皆さんは何かその事を知っていますか?・・・・・ってあれ?】

桂とはやてはマスカークの事を説明すると、銀時達は2人を無視して次の目的を目指す。

【ちょっと皆さーん!?（悲）】

2人は銀時達を追いかける。

【ダメだ。あの2人はほうっておこう】
【何てことなの?私達以外の人物もドライバーに改造された者がいるなんて】

銀時は呆れ、フェイトは深刻な状況になってきたと考える。
後ろからは桂とはやてが追ってきている。

【ちょっと皆さーん!?一緒に狩り・・・】

【おい、ここにはヅラ出すなって行ったはずだぜ?】
【!?】

突如の男の声に驚く銀時達。
そこには巨大な斧剣を持ったトライデントのような兜を被っており,軽量の鎧を身につけたハンターと,何やらムチを持っていて何処かのお姫様の様なドレスを着た少女ハンターがいる。

【来るならその名を捨ててから来てって言ったはずだよ?グレートフルーツポンチ魔導士,グレートフルーツポンチ侍。】

2人の姿を見た桂とはやては怒り出す。

【きっ・・・貴様は・・・・(怒)】
【あっ・・・・アンタは・・・・(怒)】

そして2人は立ち上がって桂とはやてを見る。
そして桂とはやてはその名を言い出す。

【グレートフルーツチ●ポ侍！！】
【グレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）！！】

そして４人は互いに睨め合う。

【貴様・・・まだこのゲーム内にいたのか？そのまぎらわしい名を変えろと何度言ったら分かるんだ！？（怒）】
【名を捨てるのは貴様のほうだ！フルーツの称号は俺達の物だ！】
【それはこっちの台詞や！あんた等にフルーツと名乗る資格はあらへん！】
【どうやら何を言ってもわかんないようだね？だったら長くに渡ったこの因縁の対決、ここで決着を付けさせてもらう！】

４人は己の得物を手にとって構えるとその対決が始まる。

【何やっているんだあいつら？】

ヴィータは呆れてツッコム。

【これ、ハンター同士の戦いってあるんだ】

苦笑して答えるフェイト。

【なんか凄く楽しみ♪】
【全くだよ♪】

４人の対決にワクワクとするスバルとアルフ。

【これ・・・どっかで見たような】

記憶にある戦いの場面に唖然とする銀時。

【【行くぞ!】】

４人は声を合わせて戦闘開始する。

桂の大刀とグレートフルーツチ●ポ侍の巨大な斧剣がぶつかり合い，かなり迫力満点の戦いになっている。

武器同士のぶつかり合う轟音に豪快なる大刀と斧剣の振り合い。

桂とグレートフルーツチ●ポ侍はパワー系のキャラである。

そしてはやては大きく跳んで無数のナイフをグレートフルーツチ●ポ侍に向けて投げると、グレートフルーツチ●ポ魔術師(マジシャン)はかなり長い鞭を振り、全てのナイフをなぎ払う。

【随分とお粗末なナイフの使い方をするね!グレートフルーツポンチ魔術師(マジシャン)!】

グレートフルーツチ●ポ魔術師(マジシャン)はそう言って鞭をはやてに向かって振るうが、はやては素早い動きで交わしだす。

【ふん!アンタこそ全然変化のないお粗末な鞭裁きをするな!グレートフルーツチ●ポ魔術師(マジシャン)!一体何をやっとるんや!?】

はやてはグレートフルーツチ●ポ侍とグレートフルーツチ●ポ魔術師(マジシ)に聞くと2人は・・・・・・

【【ドライバーをやっています】】

そこには，何処かの地下室で『モンキーハンターオンライン』をやっている、全身マイナスドライバーに改造された2人がいた。
1人は銀時の世界の人間で、真選組（しんせんぐみ）の局長をしている近藤勲（こんどういさお）と，ルーテシア・アルピーノと言う少女であった。
後ろには涙を流して2人を見ているのは，体はリィン並の体の大きさを持つアギトと人間大の体と忍者に似た外見をした四つ目の人型召喚獣であるガリューの2人である。

「お前等もかぃーー！！つうか何でゴリラがいるんだー！？」

どうして真撰組の局長がこの世界にいるのかと理解できない銀時だが、もしや九兵衛と同じく変な光に包まれてこの世界に飛ばされたのではないかと考える。

名前：『グレートフルーツチ●ポ侍』

種族：兵士

使用武器：斧剣

ＬＶ：４８

ＲＰ：４７２１

狩った数：３２２４匹

使用者：『近藤勲』

名前：『グレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）』

種族：姫騎士

使用武器：鞭

ＬＶ：４０

ＲＰ：３５６６

狩った数：３０２４匹

使用者：『ルーテシア・アルピーノ』

【何！？チ●ポ侍にチ●ポ魔術師（マジシャン）！（驚）】

【まさか、あんた等も！？】

桂とはやては驚きを隠せなかった。

【!?・・・グレートフルーツポンチ侍にグレートフルーツポンチ魔術師(マジシャン)!】
【そんな!貴方達も!?】

近藤とルーテシアは驚きを隠せない。

【ば・・・・・馬鹿な!まさか俺達以外にも・・・・・・】
【チ●ポ侍が異世界から光に包まれて飛ばされたあげくに、たまたまマイナスドライバーを持っていた私とぶつかって博士が作った瞬間移動装置に入ってしまい,遺伝子レベルでドライバーと融合してしまった人がいるなんてー!!】

「違うよ!ってなんか2人だけ違う事故に巻き込まれているんですけどー!?」

稲妻の如くの衝撃を受けたフェイトはツッコみだす。

【ビックリしたな,あれ(つうか何言っているんだこいつら?)】
【ほんま大変だったな(頭おかしいんちゃうか?)】

(こいつ等、適当に合わせていやがる!)

心の中でツッコむヴィータ。

【とにかくお互いに争う相手は違うようだな】

桂がそう言うと、近藤はある事を気づく。

【ひょっとして、君達も!?】

そう言って近藤は銀時達に話しかける。

【まぁな。とにかくマスカークを潰せば何とかなるし。】

【なんねーよ!】

銀時の適当な解決法にツッコむヴィータ。

【とりあえず、元の改造を取り戻す為に、共に行動しようぜ】

銀時がそう言うと、近藤もルーテシアは銀時について行く事にした。

ついでに桂とはやても仲間になり、次なる町に向かう事にした。

【おまけ】

銀八

「教えて!」

生徒全員

「銀八先生!!」

フェイト

「こんにちは。今日も『教えて銀八先生』を始めます。」

銀八

「んじゃ行くぞ?ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『この物語に主題歌を付けるとしたら、『銀魂』の主題歌ですか、『魔法少女

リリカルなのはシリーズ』の主題歌ですか？』。ずばりお答えしましょう。この小説は赤夜叉さんの許可を貰って作った小説です。赤夜叉さんの『リリカル銀魂』の最終章もリリカル風にしてましたので、こっちは『銀魂風』になります。ですので使用される主題歌は大抵は銀魂の主題歌が多いですね。まぁ時々『魔法少女リリカルなのはシリーズ』の主題歌もでます。』

フェイト

「銀時のアニメの主題歌・・・・・聞いてみたいなぁ♪」

銀八

「それはこの『教えて銀八先生』コーナーを終えた後に。と言う訳で『烈火竜』さん、家に帰ったら『銀魂』の主題歌と、『魔法少女リリカルなのはシリーズ』の主題歌をもう一度聞きなさい」

フェイト

「次の質問を言います。ペンネーム『カラー』さん。『ユーノと１００人の男性魔導士達に聞きたいんですが、あなた達の女神（なのはやフェイト達）の心を奪ってしまった銀さんを謀殺、暗殺するクラブがあったら入りますか？もし、入るとしたらどんなクラブ名がいいですか？』・・・・・・なんか凄い質問ですね。（苦笑）」

銀八

「まぁあれだな。そこまでは考えていないから適当に決めるんじゃない？」

フェイト

「それ答えになっていないよー！！」

銀八

「とにかく，入るとしたら『銀髪天然パーマ狩り』になるな。と言う訳で『カラー』さん。廊下に立っていなさい。んで次行くぞぉ。ペンネーム『虚空』さんの質問。『魔王モードのなのはさんと、銀さん（ノーマル）と戦っかたらどっちが勝ちますか？』ずばり答えます。そんなの魔王モードのなのはに決まっているだろ？白夜叉モードだと間違いなく互角です。」

フェイト
「そこまでは考えていなかった。」
銀八
「っと言う訳で『虚空』さん、廊下に立っていなさい。そんで最後の質問をいくぞぉ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『エリオは月詠か神楽のカップルになるんですかね?むしろなってほしいです。』・・・・・・フェイとはどう思う?」
フェイト
「え・・・いや・・・そのう・・・やっぱり幸せになったほうが良いかなーっと思うよ。赤夜叉さんと烈火竜さんの小説じゃあ酷い扱いされていたし・・・」
銀八
「まぁ気の毒だったしな。・・・・・と言う訳で答えは、エリオは幸せになったほうが良いっと言う事です」

【おまけ　2】

【『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～譲夷戦争鎮魂歌～』の主題歌決定】

黒神
「今回は烈火竜さんの質問に答え，主題歌を決めようと思います。ちなみに今回から２０話ずつにＯＰとＥＤを変えます。そんでこれが２０話まで続いたＯＰ＆ＥＤと今回から流れるＯＰ＆ＥＤです。」

１～２０話までのＯＰとＥＤ

【Ｌｉｇｈｔ　Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ】　『銀魂』の8回目のＯＰ

【雪のツバサ】　『銀魂』の3回目のＥＤ

21話からのＯＰとＥＤ

【Ｔａｋｅ　ａ　ｓｈｏｔ】　『魔法少女リリカルなのは』の12話に出て来た主題歌

【ウォーアイニー】　『銀魂』の第14回目のＥＤ

黒神
「どうですか？お互いのアニメに出てくる主題歌の感想は？銀魂組とリリカル組からそれぞれ5人が代表して好きな歌を選んでください。まずはリリカル組からどうぞ！」

フェイト
「私は・・・『Ｌｉｇｈｔ　Ｉｎｆｅｃｔｉｏｎ』が良いかな。なんか小さい頃の銀時が見られる数少ない曲だし」

なのは
「私は「奇跡」。凄く綺麗だし流れ星のイメージが好き。後、『ウォーアイニー』も女の子がメインって感じが好き♪」

スバル
「私は『曇天』と『修羅』。銀さんと桂さんがすっごくカッコ良いしこの小説の主題歌にピッタリですよ』

ティアナ

「私は『ワンダフルデイズ』。なんかかなり明るい曲だから。」
はやて
「私はスバルと同じく『曇天』と『修羅』な。理由は一緒やし。後、リィンフォースと関わりがある『Ｓｎｏｗ　Ｒａｉｎ』とエリザベスがメインって言う『Ｓｐｅｅｄ　ｏｆ　ｆｌｏｗ』や♪』

黒神
「以上リリカル組の好きな歌紹介でした。次は銀魂組です」

銀時
「そうだな・・・・・・バトル展開的に言えば『ＥＴＥＲＮＡＬ　ＢＬＡＺＥ』と『Ｔａｋｅ　ａ　ｓｈｏｔ』だな。」
桂
「八神と同じくエリザベスが中心の『Ｓｐｅｅｄ　ｏｆ　ｆｌｏｗ』。それから八神殿とリィンフォース殿の絆の証である『Ｓｎｏｗ　Ｒａｉｎ』に感服した」
神楽
「私は「ｉｎｎｏｃｅｎｔ　ｓｔａｒｔｅｒ」アル！リリカルなのはシリーズでもメッチャカッコイイ歌ある」
エリザベス
『私は『ＳＥＣＲＥＴ　ＡＭＢＩＴＩＯＮ』ですね。新しく始まったって感じがしますし。』
月詠
「そうじゃな・・・・・じゃあ個人的に『Ｂｅａｕｔｉｆｕｌ　Ａｍｕｌｅｔ』で。」

黒神
「となぁこんな感じです。４１話目達成したら新しいＯＰとＥＤを

紹介します。では。」

第二十一訓：仲間が増えれば増えるほどパーティは楽しくなる（後書き）

新たな仲間（ドライバーに改造された被害者）が登場！

ハンター王『ナイン』！

そしてついに明らかにされるマスカークの情報！

活黙して待つべし！

近藤「次回、「大切な物を勝手に変えられたら誰だって怒る」テイクオフだ！」

第二十二訓：大切な物を勝手に変えられたら誰だって怒る（前書き）

桂「馬鹿な！真選組もこの小説にでるだと！？あの連中はこの小説では脇役扱いではないのか！？」

黒神「いやー、なんか銀魂の映画【劇場版　銀魂　『新訳紅桜編』】でも脇役扱いである真選組が出てくると聞いて、なんか『紅桜編』を汚すお邪魔虫かもしれないけど、こっちも見習って真選組のメンバーの１人である近藤勲を出す事にしました。それに『モンハン編』でも重要人物だし。」

桂「己ぇ！真選組め！」

近藤「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ！」

第二十二訓：大切な物を勝手に変えられたら誰だって怒る

【赤岩（せきがん）のザフォール】

そこは赤い岩の山の村であり，数多くの建物が赤岩と合成されて建てられた家がある。
その入り口の所で銀時は話し合っている。

【何ー!?グレートフルーツポンチ侍が桂ぁー!?】

近藤は桂がいる事に驚く。
銀時は桂の正体がばれてぞくっとするが桂本人は平気そうである。
そう，自分達がいる世界は銀時の世界じゃなくフェイト達の世界である。
つまり，フェイト達の世界にいる桂は指名手配犯ではなくただの一般人であるっと桂が考えている。
もちろんそんなのは屁理屈な理由の為、本来ならばそんな理由で犯罪を逃れるはずがないのが常識だが・・・

【まぁいい。この世界での桂は指名手配犯じゃないからこの世界にいる限りは多めに見てやろう。】

などと絶対にあり得ない奇跡が起こって、結果的に桂は真撰組からしばらく逃れられると安心した。
銀時は絶対にあり得ない奇跡に驚き，フェイト達は桂が指名手配犯である事に驚く。

【すまぬ、近藤殿（安）。それよりもマスカークを倒さなければ元

の体が取り戻せない。（重）一刻も早くマスカークのありかを集めなければ・・・】

【ちょっとすみません。】

突如，銀時達の前に3人組みの男女が現れた。
そのうちの2人の女性を見て銀時は驚きだす。

【か・・・神楽に月詠ぉー!?】

ゲーム内でも同じ姿である神楽と月詠だが・・・・・・その姿は現実世界とは思いっきり違っていた。
神楽はかなり大人っぽくなっていて，しかもスタイルは抜群になっていた。
月詠は髪を下ろし、露出度がかなり高い黒いくの一の衣装を着ている。

【お前等、何ゲーム世界でも同じ顔でいるんだ!?神楽は成長しすぎ!月詠は破廉恥すぎだろ!?】

ヴィータが女としての悔しさをたっぷり込めたツッコみをする。
フェイト達は神楽達の姿を見て顔を真っ赤にしている。
そして桂と近藤が自分達と同じ世界の人間である神楽と月詠を見て声をかける。

【リーダー!?それに月詠殿!?】
【え・・・チャイナなの!?】
【あ・・・ヅラにゴリラアル】
【ヅラじゃない桂だ!・・・あ間違えたグレートフルーツポンチ侍だ（注）】
【ゴリラは余計だって!】

ヅラ呼ばわりされて呆れる桂とゴリラ呼ばわりされてツッコむ近藤。
そして銀時は神楽と月詠の隣にいる人物が誰であるかを一発で分かりだした。

【お前、エリオだろ？】
【え！？どうして分かったんですか！？】

銀時は後ろにいる人物、ロングヘアーの長髪に背中にトライデント型の二槍を背負ったオレンジ色のロングコートを着た美男がエリオである分かった。

【いや・・・なんとなくそう思って。】

名前：『女王　神楽』
種族：女王
使用武器：傘
ＬＶ：９２
ＲＰ：９４５２
狩った数：１８９３１匹
使用者：『神楽』

名前：『月の忍』

種族：くの一

使用武器：小太刀＆手裏剣など

ＬＶ：７８

ＲＰ：８０２４

狩った数：１２１２８匹

使用者：『月詠』

名前：『衿御（えりお）』

種族：騎士

使用武器：二槍

ＬＶ：８４

ＲＰ：８９８９

狩った数：１５５２４匹
使用者：『エリオ・モンディアル』

【なんか3人とも妙な名前なんですけど！？】

あり得ないような勢いでツッコむスバル。

【得にエリオ！アンタのコードネームは自分の名前を無理やり漢字にしただけじゃない！】

確かにエリオのコードネームは自分の名前を漢字にしただけであった。
そこをアルフはツッコむ。
そしてフェイトはエリオもこのゲームをやっている事に驚きだす。

【え・・・エリオ！？】
【あ・・・フェイト隊長！】
【エリオがこのゲームをやっている事は・・・まさか！】

エリオもドライバーに改造されたのではないかと思ったが、実は違った。

【実は、神楽さんと月詠さんが大変な事になっているんです】
【え・・・それって2人がドライバーに！？】

エリオがそう言うとフェイトは驚いて神楽と月詠を見る。

【そうね。完全にマスカークにやられたアル。】
【あやつだけは絶対に倒さねばならぬ・・・・・・】

【ドライバーに改造されたわっち（私）の煙管（傘）を元に戻す為に】

そこはエリオの部屋である。

神楽と月詠自身には影響はないが、被害は自分が愛用していた傘と煙管がドライバーに改造されてしまったのである。
エリオはその2人のお手伝いをしている。

「お前等自身は平気かいぃーーー！！」

またもや稲妻の如くの衝撃を受けてツッコむ銀時。
フェイト達もさすがにずっこける。

【何そんな理由でマスカークを探しているの！？こっちには己の体をドライバーと化してしまった人物だっているんだぞ！】

銀時の言う通り、実際に自分達（銀時とスバルを除く）は自分の体がドライバーに改造されたのである。
はっきり言って神楽と月詠はまだマシの方であったが、それでも2

人は納得がいかずに怒りを表す。

【ウッサイネ！こっちだってな、戦闘用に愛用していた傘が変なじゃじゃ馬にドライバーに改造されて機嫌がもの凄く悪いアル！】

【知るかぁー！！つうか戦闘用って何だぁ！？】

戦闘用に愛用する神楽にツッコむヴィータ。

月詠も自分の煙管を改造されて怒りを表す。

【そうじゃ！わっちも架空の存在に無理やり煙管をキセルドライバーに無理やり改造されたんじゃぞ！このまま黙って見過ごせるかぁ！】

【キセルドライバーってなにさ！上手いこと言っているつもりだけどぜんぜん上手くないよ！】

月詠の怒りにアルフは呆れてツッコむ。

だが、フェイトがどうしても気になる所が１つだけある。

それは神楽達のレベルが異常なまでに高い事である。

【ねぇ，３人はこのゲームをやり始めたのっていつ？】

【一週間前じゃが？】

【だったらなんでそこまで異常なまでにレベルが高いの？しかもモンキーを狩った数が異常なまでに高いんだけど？】

フェイトがそう言うと、月詠は呆れてその理由を言い出す。

【序盤から『Ｄ－４地区』に飛ばされたのじゃ】

月詠がそう言うと、桂と近藤が驚きだす。

【ば・・・馬鹿な！『Ｄ－４地区』だと！？（驚）】
【異常なまでのモンキーの数があり，一匹一匹が神獣レベルに近いと言われる最凶最悪の死に繋がる地獄のステージじゃないか！そんなの初心者が踏み入れたら死ぬぞ！】

絶対にあり得ないと驚く中、どうしてその危険な場所に行ったのかを神楽が言い出す。

【いやー、あそこならマスカークがいると思って探し回っていたら、ウザイモンキー共が襲ってきたから返り討ちにしてきたアル】

無限に出てくる凶悪モンキーを駆除しながらマスカークを探していたのである。
神楽の無謀さを止めるべくと月詠とエリオも加勢するが、結果的に異常なまでの早さでレベルアップしたのである。
神楽はマスカークが見つからなかった事に残念そうに感じ，エリオと月詠はあんな危険地区で生き残れたと涙を流す。

【凄く大変そうだったんだね】

涙を流す2人に励ますルーテシア。
そして近藤はどうすれば良いのかを考えている。

【しかし、一体どうやってマスカークを見つけるかが問題だ！伝説のハンター『M』を探しても情報がない！それにこのゲームでの架空の存在である隠しボスのマスカークは何処にいるか今だ不明！どう探せば良いんだ？】
【確かにそうだったね】

近藤の言う事にアルフも考える。

すると桂が・・・・・

【1人だけ心当たりがある】

そう言いだすと、全員が注目する。
その途中で1人の女性が姿を現す。

【私もその話に乗せてもらいたい】

その声を聞くと、銀時達は声が聞こえた人物のほうを見る。
その人物を見た銀時は驚きだす。

【お前、シグナムか!?】

銀時がそう言うと、シグナムである事が分かりだす。
ただ、シグナムの容姿はと言うと・・・・・

オレンジ色とルビーが輝くティアラとストレートに伸ばしたロングヘアー。
頭に可愛らしく赤いリボンを結んでいる。
はちきれそうな巨乳の谷間が見え、ひらひらとなびかせる薄いピンク色に小さな光が輝くのドレスを着こなす美しき西洋の国のお姫様だった。

名前：『烈火姫　シム子』

種族：姫

使用武器：ラブ

ＬＶ：３０

ＲＰ：２５００

狩った数：１３２３匹

使用者：『シグナム』

【どうだ？私の分身は？】

シグナムがそう言うと、銀時の反応は・・・・・・

【ちょっと待てぇーーーー！！】

【なんで西洋の国のお姫様なの！？騎士じゃないの！？】

【色々と問題がありますよ！】

【お前も九兵衛と同じくキャラ崩壊アルか！？】

【何ゲーム内では女らしくしておるんじゃ！】

【騎士なら分かるけどただの姫ってどういう事さ！】

【シム子って何だ！？キャラに合わねぇ名前を付けてどうするんだ！？】

【シグナムさん！無理がありすぎますよ！】

銀時、フェイト、スバル、神楽、月詠、アルフ、ヴィータ、エリオの８人の容赦ないツッコミがシグナムに炸裂する。

【・・・何やっているんだ？シグナム殿（呆）】
【シグナムも銀ちゃん達に影響されとるな。】
【え・・・シグナムって・・・フェイト殿から以前に聞いたあのシグナム殿？なんかイメージと全然違うんだけど？】

桂とはやては呆れ、近藤は以前に遊びに来たフェイトから聞いた頭の中で浮んだシグナムのイメージが崩壊していく。

【大体なんなんだよ！使用武器が『ラブ』って！】
【お前、それは烈火竜のネタをパクっているアル！】
【大丈夫だ！作者である黒神が烈火竜に頼んで許可を貰った！】
【そう言う問題じゃないですよ！】

銀時と神楽が他の作者のネタをパクッタ事で驚くが、シグナムは黒神が烈火竜にネタを使用する許可をもらった為にしているが、エリオがとんでもない行動にツッコむ。

【シグナム！まさか貴方も・・・・・】

シグナムもドライバーに改造されたのではないかと考える中、シグナムは悔しそうな顔で言い出す。

【ああ・・・・・私もフェイト達と同じく・・・・・・・】

シグナムもドライバーに改造されたと言い出しそうであると考える銀時達。

【プリンスドライバーに改造された】

そこはシグナムの部屋。
その部屋の中には体全体にドライバーに改造されたシグナムがいた。
しかもただのドライバーではなく、フェイトの世界に発売された，
刃こぼれししずらく，左右にプラスドライバーとマイナスドライバーがついており、高級な素材で作られた最高級のドライバー。
ドライバーの王子とも言える最高傑作のドライバーである。

「ただのドライバーじゃないんかいーーーーー！！」

またもや稲妻の如くの衝撃でツッコむ銀時。

【何無理やりにドライバーにプリンスを付けているんだよ！？完全に烈火竜さんのネタをパクっているぞ！いくら許可を貰ったからってそれはないだろ！？】

ヴィータは額に血管を浮かべてツッコむ。
そしてルーテシアがシグナムに近づく。

【プリンスは王子の意味で、王女ならプリンセスだよ？王子姿なら、わかるけど・・・その姿は自分の意志？】

場の空気が凍りつく。
今のシグナムに言ってはならないことをルーテシアは言い出す。
近藤は慌ててルーテシアを止めて、シグナムから引きずり下がる。
すると、シグナムは涙を流す。
全員は驚く。

【酷い…。そんな言い方しなくても良いでしょ！！】
【あのう…】

銀時はシグナムに声をかけようとしたが、彼女の暴走は止まらない。

【（可愛らしい声に変わり）お姫様に憧れたっていいじゃない！・・・・・女の子なんだもん！】
【おいぃーーーーーー！！！お前そんな事言うキャラじゃねーだろ！？完璧にキャラ壊れてるよ！】
【お前も九兵衛と一緒に病院に行ってこい！】
【お前が女の子と言うのは似合わねぇよ！】

銀時、神楽、ヴィータの3人は容赦なくシグナムにツッコみだすと、フェイトとスバルがそれを止める。

【ギ・・・銀さん！それに皆さんもそう言わなくても・・・】
【そうだよ・・・シグナムだって何かに憧れてもおかしくないんだし？・・・あっそうだ！】

フェイトとスバルは桂の方を振り向く。

【桂さん、心当たりがある人物がいると言っていましたが・・・それはどのような人物で・・・？】

スバルがその事を聞き出すと、桂はその人物を言い出す。

【『ナイン』を探す（燃）】
【賛成な！】
【！？】

桂とはやてがそう言うと、近藤は驚きだす。

【『ナイン』だと!?馬鹿な、あれはただの作り話じゃ!?】

近藤はあり得ないような言い方をすると、はやてはその意見に乗る。

【作り話だろうと、この難関を乗り越えるには『ナイン』を探す以外他ないんや!】

【しかし!】

桂の『ナイン』っと言う台詞で誰もが驚き、ヴィータは質問する。

【なぁ、『ナイン』って誰だ?】

【知らんのか?(馬)】

【勉強不足だとちゃうんか?(馬)】

【(馬)ってなんだ!?馬鹿の事か!?馬鹿の事じゃないだろうな!!】

ヴィータは額に血管を浮かべて怒鳴ってツッコむ。

金槌を持って今でも襲い掛かりそうな勢いあるヴィータに、銀時、フェイト、スバル、アルフは止める。

そして桂とはやてそのハンターが何者なのかを言い出す。

【コードネーム『ナイン』。】

【伝説のハンター『M』を上回る最強のハンター。通常『ハンター王』っと呼ばれているんや。『M』を上回るほどなら、この世界の情報を知っているかも知れへん。確証はないけど、『D-51地区』で『ナイン』らしき人物がいると言う情報を聞いたでぇ】

【『D-51地区』!?超一流ハンターをも逃げ出す神獣共の巣じ

ゃないか！】

そんな危険な場所に『ナイン』がいるとは思えない近藤。
だが今は情報どおりに進むしかない。
かくして、銀時達は『ナイン』を探す為にエリア最大の危険地である【Ｄ－５１地区】に向かうのである。

ちなみに，シグナムに関するネタはちゃんと『烈火竜』さんに許可を貰っています。

【おまけ】

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！！」

なのは
「こんにちは。今日も『教えて銀八先生』を始めます。今回はフェイトちゃんの代わりに私、高町なのはがアシスタントします」
銀八
「最近、出番少ないからフェイトの代わりにするってか？なのはも傲慢になったねぇ？そんな子に育てた覚えはないよ！？」
なのは

「お父さんですか貴方は!?・・・（ゴホン）とにかく質問を答えます」
銀八
「えー、まずはこの人。ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『銀八先生にいくつか質問です。1．黒神先生の好きな声優さんは?。2．オリジナルキャラクター（人斬りくわしろのこと）のCVは誰ですか?。3．これからもオリジナルキャラクターは出ますか?。』では答えます。作者は好きな声優は特にいないと思いますが、間違いなく『スーパーマリオシリーズ』に出てくる主人公のマリオの声優を知りたがっています。そんでCVは池田政典です。さらにオリジナルキャラは中盤から出すようです。」
なのは
「中盤から!?じゃあまだこの小説は序盤なの!?」
銀八
「それほど長い小説だそうだぜ?と言う訳で『烈火竜』さん、次から質問をするときは1つずつにしなさい。んで次ぎ行くぞぉ。ペンネーム『カラー』さんの質問。『質問　前にも書いたんですがこの小説の時系列は地雷亜編と明確に決まってるんですか?人気投票の話が出るみたいなのでいまいちわかりません。個人的には明確にしない方が後付けが出来て良いと思います。』と『銀時が猫になったことがありますが、もしそうなったらフェイトさん達は飼いたいですか?』。1つ目の質問は作者自身はそこまで考えていません。そしてもう1つの質問は、なのはがどうぞ。」
なのは
「銀さんが猫・・・・・それって良いかも♪／／／／」
銀八
「なんか銀時が無性に腹立つ。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。んで最後のほうを行くぞぉ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『どうしてフェイト達は銀時と一緒にお風呂に入らないんですか?正直我慢の限界でしょ?』・・・・え?」

銀八はなのはを見て青ざめている。
そこには己の欲望を解き放ちそうな少し顔を真っ赤に染めて興奮しそうななのはがいる。

なのは
「銀さんと・・・・・銀さんと一緒に・・・・・・ふふふふふ／／／」

銀八
「『正宗の胃袋』さんーーーーーーーーーー！銀時をつれて逃げてぇーーーーーーーーー！！！！（マジ）』

第二十二訓：大切な物を勝手に変えられたら誰だって怒る（後書き）

ハンター王『ナイン』の正体！

ついに見つけ出したしたマスカーク。

最強の闇の帝王に銀時達は挑む！

ルーテシア「次回・・・・・「ラスボスを倒したいんだったら相当なレベルアップが必要」・・・・・テイクオフ」

第二十三訓：ラスボスを倒したいんだったら相当なレベルアップが必要（前書き）

ハンター王，『ナイン』の存在が明らかに！

そして最終ボスであるマスカークとの決戦！

最後のハンターが始まる！

九兵衛「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』，始まります。」

第二十三訓：ラスボスを倒したいんだったら相当なレベルアップが必要

【Ｄ－５１地区】

銀時達はボロボロになりがらもようやく目的地である【Ｄ－５１地区】に到着した。
そこは灰と黒が混色したような悲しき荒野であり，しかも地獄と思わせる息苦しい場所であった。
ここに到着するまで，銀時達のレベルは相当なまでに上がった。

宮本銀子　ＬＶ：１５３　ＲＰ：１３４８２　狩った数：１１３匹

坂田フェイト　ＬＶ：３５　ＲＰ：１６５０　狩った数：２１３４匹

グレートフルーツポンチ侍　ＬＶ：７０　ＲＰ：８１９８　狩った数：９９４６匹

佐々木昴　ＬＶ：９７　ＲＰ：１２７５３　狩った数：７３８５匹

女王神楽　ＬＶ：１０２　ＲＰ：１３１２８　狩った数：２１０８９匹

月の忍　ＬＶ：８７　ＲＰ：９９９７　狩った数：１６８４３匹

グレートフルーツチ●ポ侍　ＬＶ：６８　ＲＰ：８００１　狩った数：９２８７匹

グレートフルーツポンチ魔術師（マジシャン）　ＬＶ：５９　ＲＰ：６９２８　狩った数：７４３３匹

衿御　ＬＶ９３　ＲＰ：１０３０６　狩った数：２００４５匹

烈火姫　シム子　ＬＶ：３０　ＲＰ：２５００　狩った数：１３２３匹

格闘女王　アルフ　ＬＶ：４５　ＲＰ：４２３１　狩った数：２４５５匹

グレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）　ＬＶ：５７　ＲＰ：６５８８　狩った数：８７６６匹

【ここが『Ｄ－５１地区』・・・なんか不気味な感じだね・・・・】

今までのステージとは比べ物にならない絶大な恐怖を感じるフェイ

ト。

【気を付けろ。ここに出てくるモンキーは最強レベルだ。出会っても絶対に戦うな。俺達ではどうにもならん（怖）】

桂もこのステージの怖さを知っていた。

【それにこのステージのモンキーたちは全て１５０ＬＶを超える神獣級だ。このゲームの最高レベルＬＶは３００．一番怖いのはＬＶ２００級のモンキーだ】

近藤もそんな化け物たちとはできれば戦いたくないと考えている。

【こんな場所に人影があるとは思えません。】

【その通りだ。いるのは人外の者だけ。つまり人影があればそれは『ナイン』っと思って間違いない（決）】

エリオの言う事に桂は言いだす。

レベル１５０以上のモンキーが出てくるなんて、フェイト達には考えたくないほどに恐怖する。

そして何の足音が聞こえると，銀時達は恐る恐ると後ろを振り向く。

そこには最強クラスのモンキー【神獣パオシャンロン】がいた。

【で・・・出たぁーーーーーーー！！】

【にげろぉーーーーーーー！！】

銀時達は走ってこの場に逃げ出そうとするが，シグナムだけは違った。

【シ・・・シグナム!?】

【お前、何を！？】

はやてとヴィータは驚きだしてシグナムを見る。
そしてシグナムは襲い掛かってくるパオシャンロンを見てこう宣言した。

【愛の力を見るが良い！】

すると，シグナムは両手を構えて、両手の指でハートの形で指を重ね、必殺攻撃を放つ。

【烈火姫　愛のラブ・ビーム！】

そしてハートの形をしたピンク色の波動が放たれ，それがパオシャンロンの額に直撃すると・・・・・・

ドカァァァ

シグナムのあり得ない倒し方に銀時達全員（近藤とルーテシアを除く）が突っ込み出す。

【お前，今の何だ！】

【『ラブ』だ】

銀時の質問にシグナムは言いだす。

【『ラブ』って何！？】

【それは愛か！？全然愛が感じないぞ！！（突）】

【それ思いっきりおかしいアル！愛を2回言っているネ！】

【あんた本当に大丈夫か！？】

【シグナム副隊長。いっぺん病院に行って来た方が良いですよ！】

【どう考えてもおかしいですって！】

【いっぺん自分を見直して来んかい！】

【ボケにもほどがあるだろ！】

【シグナム，銀ちゃん達の世界に影響受けすぎちゃうんか！？】

フェイト達の容赦ないツッコみにシグナムは悲しくなってしゃがむ。

そんなときだった。

【あのパオシャンロンを倒すとは、大した腕じゃないか。】

女の声が聞こえた。

銀時は声が聞こえたほうを振り向くと，首を失い倒れているパオシャンロンの体に着地し，銀時達にゆっくりと近づく。

【待たせたな・・・・・私が『ナイン』だ。】

現れたのは侍の格好をしておりポニーテイルヘアーで隻眼である・・

・・・つまり九兵衛その者だった。
違う所は九兵衛の胸がフェイト達並に大きい事である。
【お前かいいい

九兵衛の質問に銀時が大きく言い返す。

【何で九兵衛がこのゲームをやっているんだ!?】

【いくらなんでも自分を変えすぎだって!!何さ、種族が『グラビアアイドル』って!?そんなの1つもないよ!】

誰もが九兵衛の存在に突っ込む中、近藤だけは別の意味で驚く。

【ま・・・まさか九兵衛殿!?君もこの世界に!?】

【その声はまさか，真撰組局長の近藤勲!?君もこの世界に!?】

2人がこの世界で再開するとは思いもよらなかった。

【九兵衛殿!君が行方不明になってからお妙さんがメッチャ心配していたぞ!】

【妙ちゃんが!?】

そう、近藤がフェイトの世界に飛ばされたのは一週間前で九兵衛は10日間前である。

九兵衛がフェイトの世界に飛ばされてから3日間，行方不明扱いされて妙は心配で探している。

これを聞いた近藤は真撰組の全総力を上げて九兵衛を探す。

そしてその3日後に近藤も突如現れた光に包まれて姿を消す。

【始めまして。グレートフルーツチ●ポ魔術師(マジシャン)です】

ルーテシアは九兵衛に挨拶すると，九兵衛も挨拶する。

【うむ、柳生九兵衛・・・じゃなくハンター王『ナイン』だ】

コードネームを紹介して九兵衛はルーテシアと握手する。
すると神楽が九兵衛に聞き出す。

【九兵衛！お前いつの間にこのゲームをやってたあるか？】
【そうだな・・・もとの世界でも毎日1時間をしていた。そのため、パスワードデータを覚えていたからそれを使ってそのデータからこのオンラインゲームを再びし始めた訳だ】
【そんなのありアルか！？】

そんな都合の良いのがあるのかっと驚きだす神楽。

＊

九兵衛が仲間に加わり，銀時達は進みながら話をする。

【この一週間に奇妙なハンターが続々と出てきている】

突如，九兵衛は深刻な話をする。

【連中は狩りを楽しむのではなく，ただひたすらに特定のモンキーを探している。そのハンター達が決まって言い出す言葉が・・・・『マスカークを知らないか？』】

九兵衛の一言に全員驚きだす。
そしてフェイトはある事に気づく。

【ま・・・まさか！】

【そうだ。キャトルミューティレーションされたのは君達だけじゃない。ミットチルダ内でも数多くの人々がドライバーと改造されてしまっている】

まさかそこまで被害が広がっているとは思いもよらなかった銀時は驚きだす。

【知らへんかったん？事はメッチャ危険な状況に追い込まれておるんや。そのため、私も桂さんもこのゲームでマスカークってモンキーを狩る為にゲームをしとるんや】

【いや、はやては仕事をサボる為にこのゲームをしていたんじゃねぇのか？】

はやての言う事にヴィータはツッコみ出す。

【だが、情報を手に入れた者も『マスカーク』に挑んだが・・・・いまだにマスカークを打ち倒した物はいない・・・・。それもそのはず・・・・マスカークＬＶは最高クラスであるＬＶ３００だからだ】

【ＬＶ３００だと！？伝説のハンターである『Ｍ』でも達成出来なかった史上最強ＬＶじゃないか！】

【そうだ。僕がハンター王と呼ばれているのも、現段階で『モンキーハンターオンライン』のネットプレイヤーの中でももっとＬＶが高いのは僕であるからだ。いかに僕でも最強ＬＶである３００ＬＶのマスカークを倒す事はできない。そのため，君達の力が必要だ】

九兵衛が立ち止まると目の前には神殿の裏側にある建物がなく、ただの漆黒の扉がある。

【私は数多くのハンター達以外にも村人達に『マスカーク』の居場

所を聞いた。そしてこの漆黒の扉の中にこそ、『マスカーク』がいる。はっきり言って全てのモンキーの頂点に立つ最強のモンキーといわれたモンキーでも，『マスカーク』の前では小者当然だ。だから、この扉を開けた瞬間、命をかける覚悟を決めたほうが良い。どうする？】

九兵衛はそう言うと、銀時達の答えは決まっている。

【覚悟を決めろ？そんなの最初っから決まっているぁ】
【私達は自分の体を取り戻す為にこのゲームをやっているんだよ】
【武士たる者、戦場でる時にはどんな時でも覚悟を決めている】
【皆の為にも絶対に『マスカーク』を倒してみせるよ！】
【私の傘の為にもネ！】
【わっちの煙管を取り戻す為にじゃ！】
【私も覚悟ぐらいは出来ているな！】
【1人じゃ出来なくても、仲間がいれば可能になるしね♪】
【絶対に勝ちましょ！】
【私に屈辱的にアナログスティックを付けたことを後悔させる為に！】
【愛の力で『マスカーク』を狩らせて貰う！】
【これだけの人数が揃えば以下に相手が強敵であろうと勝てる！】
【ルーテシアもお手伝いします】

皆それぞれ覚悟の決意はしている。
それを聞いて安心して笑う九兵衛。

【なら・・・闇の帝王を狩るぞ！】

九兵衛がそう言い，潔く扉を開く。
そして中から黒い霧が勢いよくあふれ出て銀時達を包み込む。

そして銀時達の姿は見当たらなくなった。

＊

【ここは?】

銀時達は気づくと，眼にした風景はさっきまでの荒れ果てた大地ではなく、何処かのどす黒い白の中心部である。
この場所を見てフェイトはある事を気づく。

【ここは・・・マスカークと会っていた場所!?】
【本当だ・・・じゃあここはマスカークのいる城の中って訳!?】

フェイトとアルフは見覚えのある場所を見てここにマスカークがいると考える。
銀時達は武器を手にして構えると、上から大男の声が響きだす。

【良くぞ我が元にたどり着いた!】

すると、天井から一体の超大型モンキーが降りてきた。
背中に翼が生えていて角は王の冠らしく生えていてさらには体中に生えている毛が白い。

【余が闇の帝王マスカークだ!汝等がここにやって事は、さそかし我に体を改造された哀れなハンター共であろう!!】
【んだとごるぁあ!人様の体を勝手に改造しておいて何勝手にほざいていやがる!】

銀時がマスカークの暴言に突っかかり、体を改造されたハンター達（特にヴィータ）は怒り出す。

【乙女に屈辱的な改造を良くもしてくれたな！このかりは命を持って代えさせてもらうぜ！】

【私の傘を返すアル！】

【わっちの煙管をへんな改造をしておいて，ただでは済まさんぞ！】

ヴィータ、神楽、月詠はそれぞれ金槌、傘、小太刀を構える。

そして九兵衛は刀を抜き出してマスカークに言い出す。

【私も貴様の改造のせいで屈辱的な姿になってしまった！気づいた時には・・・もう遅かった】

九兵衛が眼を瞑ってそう言うと・・・全員が九兵衛は一体どこら辺をドライバーと改造されたのかを想像する中、九兵衛は改造された部分を言い出す。

【胸がまな板並みの貧乳に改造されてしまった。】

九兵衛の部屋

そこには、体所が刀にも何にも改造されていない被害を受けていない九兵衛がパソコンで『モンキーハンターオンライン』をしているところであった。

「それ、改造じゃないだろうがぁー！！何自分の貧乳のコンプレックスを改造のせいにしているんだ！」

銀時は呆れて怒鳴ってツッコむ。
フェイト達もそれはないだろうっと呆れだす。

【柳生九兵衛っと言う色気のない男気が無駄に多い可愛らしくない少女に改造されてしまった】
（それ思いっきり自分のことだろ！名門の時期当主である者が今の自分を殺して二次元で新しい自分に生まれるんじゃねぇー！）

心の奥底でさらにツッコむ銀時は九兵衛の一方的な理論に呆れだす。

【何てこった・・・まさか九兵衛のキャラ設定がここまで崩壊していたなんて・・・・】
【ねぇ・・・万事屋。なんか九兵衛殿メッチャ変わっていない？】

近藤が銀時に聞きだすと・・・・銀時は黙って頭を頷く。
その理由を銀時はいずれ近藤にも教えようと考える。

【マスカーク！何で僕の胸をまな板並みに改造した！！】
【いや，余は胸を改造した覚えはないが？】

九兵衛の貧乳としての怒りは一方的にマスカークにぶつけている。

【どうせだったら・・・どうせだったら・・・】

銀時達は九兵衛は【僕の胸を巨乳にしろー！！】っと言うのであると考えるが、それは大違いであった。
九兵衛が口にした言葉は・・・・

【なのは、フェイト、はやての胸を元のまな板に戻せー！！】

だった。

ドカァ！

【戻さんで良いわー！！】

【ああーーーーーーーー！！】

フェイトとはやての見事な突っ込みが炸裂して九兵衛を思いっきり蹴飛ばす！

そして吹飛ばされた九兵衛はそのままマスカークに飛ばされてしまい、そしてマスカークの剛拳が振り下ろされ・・・・・

グシャリ！！

思いっきり殴られて体が存在価値もなく潰された。

マスカークの振り下ろされた剛拳の下には九兵衛のミンチと貸した肉体と血が大量に溢れていた。

『ナイン』

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

【九兵衛～～！！】

まさかの九兵衛の脱落に銀時は叫びだす。

【九兵衛が脱落しちゃった！】
【フェイト隊長！、はやて部長！いくらなんでもやりすぎですよ！】
アルフとエリオも驚きを隠せなかった。
思わずやってしまったフェイトとはやては【しまったー！】っと叫びだす。

【って、どうすんだよ！？このメンバーの中でもレベルがメッチャ高かった九兵衛殿がやられやがったじゃねぇか！？】
動揺して驚くヴィータはこの状況をどうすれば良いのか焦っている。
すると近藤とルーテシアは作戦を実行する。

【俺とグレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）で隙を作る！その間に皆は一斉にマスカークに攻撃を仕掛けてくれ！】
【グレートフルーツチ●ポ侍！】
近藤の囮に桂が驚く。
近藤がルーテシアと共にマスカークに隙を作る事を決意する。

【行くぞ！チ●ポ魔術師（マジシャン）！】
【了解】

近藤はルーテシアと共に姿を消す。
銀時達は一体何処に消えたのかを探す中，マスカークは後ろから気配を感じて後ろを向く。
そこには・・・・裸姿である近藤とマジシャンのような衣装を着ているルーテシアがいた。

【あれ～？ひょっとして先輩じゃないっすか？俺ですよ俺。中学んの時２個下だった】

しばらく沈黙がする中、ルーテシアはある呪文らしき事を言い出す。

【ルーテンテイルス】

【シルフアット。】

ルーテシアに続けて近藤は言い出すと、己の股を開いてマスカークに自分のチ●ポを見せる。

【先輩、これで思い出してく・・・】

ズバァーン！！

突如、フェイトが鎌を振って素早い、動きで近藤とルーテシアの首を斬首する。

フェイトの体には２人の血が染み付いている。

『グレートフルーツチ●ポ侍』

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

『グレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）』

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

【おぃーーー！あのゴリラついにこの世界でやっちゃいけない事をやっちゃったよ！つうかフェイト迷いなくやっちゃったよ！】

銀時は驚いてツッコむ。
エリオは苦笑し、女性組は近藤のあれはなかったと感じてフェイトは良く遣ったと頷く。
そして・・・桂とはやては・・・

【グレートフルーツチ●ポ侍！！（笑）】
【グレートフルーツチ●ポ魔術師（マジシャン）（喜）】

【何で笑っていて喜んでいるんだー！】

銀時は桂とはやての（）の中の感情にツッコむ。

【うぐっグレートフルーツチ●ポ侍！お前の死は無駄にしないぞぉ！（爆）】
【何で爆笑すんだよ！】

さらに怒鳴るかのように銀時はツッコむ。
そしてはやては涙を流しながら2人に感動する。

【あの2人は教えてくれたんや！人は心を裸にしぶつかっていかねばならん事をな！】
【いや、あの2人はただ単に下ネタを使っていただけですが？】

シグナムは呆れてはやての感動にツッコむ。

【こんなところでもさもさとしてられへん！私も自分の正直な気持ちを相手にぶつかって行かせて貰うでぇ！】

そう言ってはやてはマスカークを見つめる。

【聞くんや！マスカーク！】

【ぬ？】

はやては自分の正直な思いをマスカークに言い出す。

【実は私、たまに機動六課の部下達の給料を多少下げてまで自分の給料に加わって上げているんやけど、それって上なら誰だってするよね！！】

そう言って親指を建てて良い笑顔で笑うはやて。

ズバァーン！

彼女の背後から、フェイト、アルフ、シグナム、ヴィータ、エリオの５人が一斉にはやてに攻撃し、桂も巻き込まれる。桂とはやての体は跡形もなくミンチと化した。

『グレートフルーツポンチ侍』

ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ

『グレートフルーツポンチ魔術師（マジシャン）』

GAME　OVER

【おぃーーー！気持ちはわかるけどそこまでする必要はないんじゃない！？大体何ヴラまで巻き込まれているんだ！？】

【銀ちゃん・・・なんかなのはちゃんたちの世界の人物も私達の世界と変わらないアル。全員ボケナスだらけね】

銀時のツッコみに神楽は呆れて言い出す。

【おい、ラスボスが目の前だって言うのに、戦っておらずに何で５人の仲間が一斉に消えてしまうんじゃ？】

【俺だって知りてぇよ！】

月詠の呆れる一言に銀時も同感する。

そして、肝心なマスカークは口を開き・・・・

【遊びはここまでだ！】

そう言ってマスカークは口から紫色のエネルギーを一気に収束する。

その威力はとてつもなく大きく感じ、銀時達を一斉に灰に化すほどはある。

【よもや我がキャトルミューティレーションをとめられまい！我が一撃によって葬り去ってくれるわー！】

【やばい！皆逃げるぞー！】

ヴィータが叫んでそう言いだし、銀時達は逃げ出すがもう間に合わないのである。

マスカークは、口に溜められているエネルギーを放とうとしたその時だった。

【とぉー！】

スバルが大きくジャンプしてマスカークの角のところまでたどり着き・・・・そして・・・

【秘剣・昴返し（すばるがえし）】

上段からの一撃、横薙ぎの一閃、払いの一撃、計三つの太刀筋が『同時』に放たれ、マスカークの王の王冠のような角を斬りおとすと・・・・

【しまった！弱点である我が角を・・・・ぐぁあああああああああ！！】

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！

マスカークの顔は吹飛ばされてしまい、消滅した。

【え・・・・えぇぇぇーーーーーーーーーーー！？】

スバルがマスカークを倒した事に誰もが驚く！

【スバルぅーーーーー！！お前、マスカークを倒したのかよ！】

銀時がスバルに言い出すが、スバルは驚きの余りに唖然としている。

【え・・・やばかったんですか!?】
【やばかったんじゃなく、何でレベルが圧倒的にマスカークより低いお前が一撃でマスカークを倒したんだ!?】

怒鳴ってツッコむヴィータに訳がわからずに怖がるスバル。

【スバル・・・まさかあの角がマスカークの弱点であると知ってて】
【いや、全然知りませんでしたよ?】

フェイトの質問にきっぱりと答えるスバル。

【じゃあ何で角に攻撃したんだ?】

シグナムがそう言うと、スバルは悩む。
すると・・・スバルの次に口にした言葉は・・・・・・

【勘】

だった。
それを聞いた銀時達は・・・・

【な・・・・なんじゃそりゃー!!!!】

っと思いっきり呆れてしまう。

その後，マスカークが消えたことでキャトルミューティレーションに体の一部をドライバーに改造された者は全員元に戻った。
さらに、『モンキーハンターオンライン』でもスバルの存在は闇の帝王マスカークを狩りとった事で、史上最強の伝説のハンターとし

て名が高く呼ばれた。
かくしてドライバーに改造される奇妙な事件である『マスカーク・事件』は無事に幕を下ろした。

『モンキーハンターオンライン・マスカーク編・完』

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！！」

神楽
「んじゃ今から『銀八先生コーナー』を始めるアル。今回のアシスタントは私、神楽がやるアル」

銀八
「リリカルキャラだけとは限らないぞ？んじゃ行くぞ。最初の質問行くぞ。ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『もしもあの模擬戦で、ティアナがなのはに撃墜されそうになったら、銀さんや銀魂キャラクターは助けてくれますか？』・・・まぁ、銀時なら止めますね』

神楽
「仲間が傷つき会うところは見たくないアル！」

銀八
「同感！んで次行くぞ。ペンネーム『虚空』さん。『1「銀さんは、

約８人に恋愛フラグを立ててますが、これはいくつのファンクラブでよかったですよねを敵に回したようなものですか？」・２「なのはさんが銀さんに惚れたのはわかっちゃいますが、なのはさんは銀さんの『どの部分』に惚れたのですか？　読者（我々の視点から）から最初の方を見るとただの憧れや輝いている人に惚れちゃったて言う感じでフェイト達と比べたら・・・・あまりにも味っけのないような気が・・・・そこで本人に直接お答えをお願いしたい（おちゃらけた解答やただ好きになっちゃったという解答には、銀さんとの事を士朗さん達に通報しますので（黒））」、３「嫁候補（笑）達の中で、一気に爆弾投下する人は誰ですか？」』ずばりお答えします。１つは数え切れないほどの数だと思います。２つは銀時がゾーマと戦う姿を想像して、いつの間にか銀さんの事ばかりを思っていたため，それがいつの間にか恋に繋がったそうです。ちなみに報告されたら銀さんが地獄に落とされます。３つはそれは今だ考え中です。」

神楽
「一気に３つも質問なんて欲張りアル。攻めて１回の質問募集に１度だけするネ」

銀八
「まぁ、良いじゃねぇか。んで最後行くぞ。ペンネーム『カラー』さん。『１・フェイト達はさっちゃんと銀時のこと知ってるんですか？
一緒に一夜を共にしたとか、様々なＳＭプレイをしたとか？２・銀時はドＳですがフェイト達はしってんの？知ってたら知ってたらで、銀時に責められるの想像して鼻血吹いてそうだな。』。・・・ずばりお答えします・・今だに知っていませんが知ったら銀さんがとんでもない事になります。んで２つ目はそりゃ鼻血を出すでしょ」

神楽

「なんかそれはなのはちゃん達が変態に見えてくるアル」

銀八
「まぁそう言ってやるなよ。んじゃ、最後にあの一言を言うぞ。せーの！」

銀八・神楽
「っと言う訳で、『烈火竜』さん、『虚空』さん、『カラー』さん、廊下に立っていなさい（アル）！」

第二十三訓：ラスボスを倒したいんだったら相当なレベルアップが必要（後書き）

次回はいよいよクリスマス。

はたして誰がサンタ役となって誰にプレゼントするのか？

エリオ「次回、「プレゼントは大抵は自分が欲しいものじゃなく親の都合によるものが多い」テイクオフです」

第二十四訓：プレゼントは大抵は自分が欲しいものじゃなく親の都合によるもの

黒神
「いやー，なんか思いついちゃったのでせっかくなんでもう1つの小説を進めさせてもらいました。」

銀時
「ってアホかー！」

ドカ！

黒神
「ごふぁ！」

銀時は思いっきり作者を殴る

銀時
「テメェ、前の小説だって無理がありすぎるって言う原因で削除したにもかかわらずにまたやっちゃったのかよ！つうかお前本当に馬鹿作者だな！」

黒神
「誰が馬鹿作者だぁー！」

銀時
「お前のことだろうがぁ！」

作者と銀時が口減価する中，なのはが言い出す。

なのは
「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります。」

第二十四訓：プレゼントは大抵は自分が欲しいものじゃなく親の都合によるもの

そこは訓練所

そこにはリリカル組（スバルを除く）全員が鋭い目つきで青ざめていて大量の汗を出していて土下座している桂とはやてを見つめている。

原因ははやてが全員の給料を格下げにして自分の給料を上げていることが知らされたからである。

そんなはやてになのはが言い出す。

「はやてちゃん・・・まさか私達の給料が異常なまでに少なかったのははやてちゃんが自分の給料に足す為だったの？」（ゴゴゴゴゴ

「どおりで給料の少なさにおかしいと感じたよ」（ゴゴゴゴゴ

「いくらなんでもそれは酷すぎじゃないですか？」（ゴゴゴゴゴ

「僕達が一体どれだけ頑張って任務をこなしてきたにも関わらず，部下の給料を下げてまで自分の給料を上げたかったんですか？」（ゴゴゴゴゴ

「部隊長だからってやって良い事とやってはいけない事がありますよ？」（ゴゴゴゴゴ

「キュイイイ！！」↑怒っている

「少し変わりすぎじゃないかな？」（ゴゴゴゴゴ

「この怒りを君にぶつけても良いんだよね？」（ゴゴゴゴゴ

「はやて・・・まさかお前がそんなことをする奴だとは思わなかったぜ？」（ゴゴゴゴゴ

「これは一体どういう事か・・・・」（ゴゴゴゴゴ

「きっちり放させてもらおうか？主」（ゴゴゴゴゴ

「はやてちゃん・・・少しお仕置きが必要かもね」（ゴゴゴゴゴ

「それも本格的に」（ゴゴゴゴゴ

誰もがとてつもない怒気と殺気を放っていている。
顔は笑っているが、額に大量の血管を浮かべている。
それほどまでにフェイト達の給料は酷かったのである。
フェイト達の異常なまでの殺気にはやては命の危機を感じていた。

「え・・・いや・・・そのう・・・いやー，我ながらやっちゃいましたなーって感じで・・・・あはははははははははは!!!!」

ごまかして笑い出すはやてだが，フェイト達の殺気は増すばかりに収まる気はない。
そして桂が青ざめて何かを言い出す。

「あのう・・・何で自分もこんな事になっているんですか?」

そう言いだすと、なのははニコニコとした顔で「にゃははは・・・・連帯責任なの♪」っと言い出す。
そして、2人を裁くときがやってきた。

2人とも仲良く頭を冷やしてあげてやるなの!というなのはの声を合図に、フェイト、ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、アルフ、ユーノ、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シャマル、リィンフォースが桂とはやてに襲い掛かった。
はやてのバカー!この成金泥棒!金を返せ!見損ないました!サンドバックになりやがれ!この馬鹿主!その根性を叩きなおしてくれるわぁ!アホかお前はー!反省しろー!それでも部隊長かー!っと蹴り、殴り、デバイスが桂とはやてに降り注いだ。

「あああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!」

桂とはやての悲鳴が、訓練場に響き渡った。
銀時、スバル、神楽、エリザベス、月詠、九兵衛、リィンは、静かにその光景を見守る事しかできなかった。

＊

その後の深夜

機動六課部隊長オフィス。
そこにはサンタのような格好をした，半袖で赤いスカートを着ているをしたなのは、フェイト、はやての3人がいる。
但し，はやてだけはボロボロである。
彼女達がそんな格好をしているのは、今日がクリスマス・イブだからである。

「じゃあ，みんなにプレゼントを私達が届けようか。」
「うん。皆、プレゼントを見たら驚くかもね♪」
「そうやな。シグナム達にも渡しておこうか。」

三人はやる気満々で，今でもプレゼントを配る気でいる。

「よ～し、じゃあ全員にプレゼント配り作戦開始なの～」
「おおー」

かくして，なのは、フェイト、はやてのサンタプレゼント作戦は実行されるのである。

ヴィータ、シグナムの部屋

「まずはヴィータやな」

っとはやてはニヤニヤとヴィータのベットに置かれている紙切れを取り出す。
実ははやては、ヴォルケンリッター、フォワード部隊達、銀時達に欲しいクリスマスプレゼントを書かせて１２時になる前に寝させるようにした。
実は以外にも，リリカル組は全員サンタの存在を信じているのである。
そしてこっそりとはやてがヴィータの書かれた紙切れを見る。

「どれどれ？」

はやてだけじゃなくフェイトとなのはもその紙切れを見る・・・

『魅力的な大人の女性になりたい』

っと書かれている。
それを見た３人は額から汗が出て苦笑する。

「ほ・・・欲しい物って言うよりなんかねがい事って感じだね。」
「と・・・とにかく兎の人形でも上げようよ！」

なのはが苦笑してそう言い、フェイトが慌ててプレゼント袋から兎を取り出す。
そしてそっとヴィータの隣に置くと、次は隣のベットで寝ているシグナムの欲しい物が書かれた紙を見る。
そして3人が眼にしたシグナムの欲しい物は・・・・・

『銀時』

だった。
それを見たフェイトとなのはは『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』を取り出して・・・・

「バスターーーーーー!!!!!(怒り)」

怒り任せに巨大な金色の閃光と桜色の閃光を放つ。

「ギャアアアアアアアアアアアア!!!!!」
「何だぁあああああああああああああ!!?!?」

怒り任せの攻撃にシグナムとヴィータは飲み込まれて黒コゲとなって気絶する。(ヴィータは巻き込まれ
ついでにフェイトがヴィータに上げた兎の人形のプレゼントも跡形もなく黒焦げとなる。
無言でこの場を去るフェイトとなのはを見て、青ざめて腰を抜かしているはやては追いかける。

アルフとシャマルの部屋の前には，狼モードで寝ているザフィーラがいる。

「ほんまに寝てくれたんや。何々?どんな願い事を叶えてくれたんやろうな?」

っとはやては言って、３人はザフィーラが欲しい物を書いた紙を取り出して見ると、

『とにかく平和な日常』

っと書かれていた。
それを見た３人は唖然としてしばらく沈黙が続く。
そしてはやては・・・・・

「御免な、ザフィーラ。その願いはかなえられへん。・・・・高級ドックフードを上げるから堪忍な」

謝罪してプレゼント袋から最高級のドックフードをザフィーラの隣に置くと、３人はアルフとシャマルの部屋に入った。

フェイトは寝ているアルフの隣にある紙切れを取り出すと・・・こう書かれていた。

『いつまでも皆と仲良く出来ますように。後，ドックフードを２０個』

っと，書かれたアルフのプレゼントを見てフェイトは笑い、プレゼント袋からドックフードを２０個出してアルフの頭を優しく撫でて、
「これからもよろしくね、アルフ♪」っと言い出す。
一方のなのははシャマルの願い事を見て唖然としている。
彼女の書かれた願いは・・・

『もっと出番を～～！！』

っだった。

（私だってもっと出番欲しいよ～！！）

っと心の奥でなのはは言い出す。

スバルとティアナの部屋。

「さて・・・２人はどんなプレゼントが欲しいんやろうかな～♪」
「もし銀時関係だったらお仕置きだね」
「どうかんなの」

どす黒い気を出しながらフェイトとなのはは言い、はやては苦笑しながらまずはティアナの欲しい物が書かれた紙切れを取り出し、なのはとフェイトもその紙切れを見る。

『とりあえず銀魂コミック全巻とＤＶＤ全巻』

「私だって欲しいよ」

なのはがそう言うと・・・・とりあえずはやては玩具の銃を２つ置く。

「さて・・・スバルの方はどうかな～♪」

はやてはスバルが欲しい物は一体どんな物なのかを見る。
フェイトとなのはもその紙切れを興味ありそうに見る。

『最上大業物１４工の１人，『初代孫六』作の『最上大業物・兼元』が欲しい』

（そんなのプレゼントに出せるかぁーーーー！！）

スバルの１００％不可能なプレゼント募集に３人同時に心の中で叫んでツッコむ。
そしてスバルにはとりあえず玩具の刀をおいて次を目指す。

＊

その後も，3人は次々とみんなのプレゼントを配っていった。
ちなみに書かれたプレゼント募集にはこのように書かれた。

エリオ
『人を守れる強さ』

キャロ
『エリオ君が神楽さんと月詠さんに惚れないほどに私に恋する気持ちを』

リィンフォース
『銀時とラブラブ』

ユーノ
『とりあえず高級メガネ』

九兵衛
『胸を』

月詠
『高級煙管』

エリザベス
『もっと楽しい日常を』

などと実際には用意できない代物募集をばっかりである。
特にキャロのは思いっきり神楽と月詠に対する嫉妬心が篭っている。

そして3人は次に桂の部屋に入る。
そこには眼がメッチャあけているの寝ている桂がいる。

「ど・・・どんな寝方をしているの？」

フェイトがツッコむと、なのはとはやても桂のおかしな部分を感じ取る。
そして3人は桂の願い事がかかれた紙切れを見るとこう書かれている。

『最高級のそば』

桂らしい答えに3人は苦笑する。
そして桂のほしい物が予想していたかのように、はやてはプレゼント袋から最高級のそばを桂の隣に置く。

「うふふ・・・メリークリスマスな。桂さん」

はやてはそう言って、桂の頬っぺたに自分の唇をくっ付ける。

「！？／／／」

それを見たフェイトとなのはは顔を真っ赤にし、はやてはこの部屋を出て次の部屋に向かう。

銀時の部屋

そこにはぐっすりと寝ている銀時と・・・・・何故かコタツがあってその中に寝ている神楽がいる。

「な・・・何で神楽ちゃんがここに?」
「それよりもコタツって・・・・・」
「メッチャ体に悪いやん」

3人は呆れて神楽を見て，書かれた神楽のプレゼント募集の紙を見る。

『肉まんたっぷりネ!』

要するに好物がほしいようである。
神楽の食欲に呆れる3人は，プレゼント袋から肉まんが大量に入った袋をコタツの上に置く。
そして，はやてはニヤニヤとした顔で神楽の寝顔を見て、マジックペンを出した。

「は・・・はやてちゃん?まさか・・・」
「それは辞めた方が良いんじゃ?」

2人は必死に止めようとするが，はやてはニヤニヤとした顔でこう言いだす。

「なんかおもろそうやから、ついいじめたくなったんでな♪」

などと言ってマジックペンで神楽の顔を落書きし始める。
面白くなったのかかなり書き込んで楽しむはやて。

そして書き終えると、神楽の顔はめちゃめちゃになっていた。
それを見たなのは、フェイト、はやての3人は笑いをこらえる。

「よ・・・予想以上におもろくなってきたな」

笑いをこらえながらはやては言うとマジックペンをしまう。

「ぷぷ・・・は・・・はやてちゃん・・・そろそろ銀さんのほうを見てあげようよ」
「そ・・・そうだよ・・・早いところここから出たほうが良いし」
「そうやな・・・ぷぷぷ」

笑いをこらえながら3人は銀時のところに向かう。
はやてが後ろを振り向いたその時であった。

ガシ!

「はい?」

はやてが青ざめて後ろを向くと・・・そこにははやての両足を握っている神楽の姿がいた。

「何やっているアルか?」

神楽はそう言うと勢いよく起き上がると同時にはやての両足を持ち上げて・・・・

「肉まんはどうしたアルー!!」
「のぎゃあああああ!!」

思いっきりはやてを転ばせた。

「は・・・はやてちゃん!?」

「なのは、逃げよう!」

フェイトもなのはも逃げようとしたら、はやては「おいていかないで~!」っと言ってなのはの両足を掴み，なのはは「にゃあ!」っと言って倒れ、それと同時にフェイトの両足を掴んでフェイトは「きゃあ!」っと叫んで倒れる。

「な・・・何で神楽ちゃんが!?」

「どどどどどど・・・どうしよう!?」

「っと言うよりなんで足を掴むの!?」

3人は慌てていてどう対処すればいいのか分からないまま、慌てる中神楽は・・・

「ニィ!」

悪魔のような笑いをした神楽はコタツの中へとはやて達を引きずり出す。

「いぃやあああああああああああああ!」

涙を流してはやては叫ぶ。

「放して、はやてちゃん!」

「なのはも放してよ!」

「いや、そんなことしたら神楽ちゃんに!」

「2人ともおいていかないで!」

「私だって怖いよ！」
「って言うより、助けて銀時ぃー！」

涙を流して3人は必死にこらえるが、ついにはなのは、フェイト、はやてはコタツの中に引きずられ・・・・

「あああああああ

満足そうに笑う神楽。

「んん・・・ふぁあ～！・・・・ああ、よく寝た」

銀時もようやく起き上がってベットから出ようとする。
すると、肉まんを食べている神楽のコタツに目を移すと、とんでもない光景が見えた。

コタツの中からなのは、フェイト、はやての、３人の手が出ており、３人は人差し指で、血の文字で『Ｍｅｒｒｙ　Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ』っと書いている。
それを見た銀時は・・・・

「なんじゃこりゃーーーーーー！？」

っと叫ぶしかなかった。

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！！」

フェイト
「こんにちは。今回はアシスタントは3人でやらせてもらいます。私、フェイト・テスタロッサと・・・」

なのは
「高町なのはと・・・」

スバル
「スバル・ナカジマがやらせていただきます♪」

銀八
「へぇい、んじゃ早速質問行くぞ。ペンネーム『風邪気味さん』さんの質問。『ルーテシアとガリューは初めて会った時近藤のことを人間として判別できましたか?』・・・ルーテシア，どうだった?」

ルーテシア
「・・・一瞬ゴリラと思いました。」

しばらく沈黙が続く中、この沈黙を打ち破る為に銀八が言い出す。

銀八
「っと言う訳で、ルーテシアは最初は近藤の事をゴリラと思ったようです。」

なのは
「子供って残酷な事を軽く言えるよね」

フェイト
「そうだね・・・・」

スバル
「あ・・・あはははははは！・・・じゃあ次行きましょ！ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀時って童貞なんですか？』・・・・・へぇ～♪」

フェイト、なのは、スバルはニヤニヤと銀八を見ると、銀八は怒り出して・・・・

銀八
「『正宗の胃袋』！！廊下に一生立ってろぉ！」

フェイト・なのは・スバル
（あ・・・逃げた）

銀八
「たく・・・・んで次行くぞ。ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『もしも機動六課の皆さんが近藤さんとバブルス王女の結婚式に参加したら、機動六課の皆さんはどう感じるでしょうか？』。」

銀八がそう言って3人を見ると・・・・三人は苦笑してしばらく黙りだす。

銀八
「まぁ3人の反応どおりです。っと言う訳で『烈火竜』さん廊下に立っていなさい。」

なのは
「銀魂は何でもありなんだね・・・・じゃあつぎ行こっか。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問。『もし銀時が女だったらフェイト達

はどうしますか？』・・・・・」

なのはがそう言うと、フェイト、なのは、スバルの３人は何やら笑い出して欲望的な事を考え出す。

銀八
「・・・ええ、『ＳＡＤＳ』さん・・・廊下に立っていなさい。じゃあ最後行くぞぉ。ペンネーム『カラー』さんの質問。『宇治金時丼食べれるのは今のところスバル、フェイト、なのはの３人ですが、シグナム達は挑戦しようとしてるんですか？』」

なのは
「そう言えば・・・最近シグナムさん達もしているよね」

フェイト
「なんか銀時も聞いたら喜びそうだね。」

スバル
「甘い物好きですし♪」

銀八
「っとまぁ挑戦しているようです。んでもう１つの質問『活躍的にスバルが主役（ヒロイン）みたいになってますがやっぱり今のところ銀さんの嫁候補として一番近いのはスバルでしょうか？人気投票で１、２でしたし。』・・・・・」

銀八がそう言うと、突如、とてつもない２つの殺気がスバルに向ける。
そこには顔は笑っているけど眼は笑っていないフェイトとなのはが

いる。

スバル
「へ・・・なのはさん・・・フェイト隊長!?」

なのは
「ふ~ん。そうなんだ。スバルって人気ランクは1位と2位にはいる程の人気者だったんだね♪」

フェイト
「私達なんて7位と8位だったんだよ?それなのにスバルだけちょっとずるくない?」

そう言ってなのはとフェイトはスバルの方を掴み、

なのは・フェイト
「少し・・・頭冷やそうか♪」

そう言ってスバルを引きずり出して教室から出る。
そして扉を閉めると・・・・

スバル
「ぎゃあああああああああああああああああああ!!!!!」

スバルの絶叫が響き渡る。

銀八

「・・・・と言う訳で『カラー』さん。今すぐ救急車を呼びなさい。」

第二十四訓：プレゼントは大抵は自分が欲しいものじゃなく親の都合によるもの

銀時となのはが2人っきり！

怒り出すフェイト達。

そして舞台は『海鳴市』へ。

ルーテシア

「次回、「妹がいる兄は大抵はシスコンである可能性が大きい」。

テイクオフ」

第二十五訓：妹がいる兄は大抵はシスコンである可能性が大きい（前書き）

新編，『高町家編』スタート！

今回はなのはが主役！？

フェイト達の怒りが炸裂！！

ユーノ「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始めます。」

第二十五訓：妹がいる兄は大抵はシスコンである可能性が大きい

いつもの変わらない日常。
平和な感じだが，いつ事件が起こってもおかしくはない状況である中，1人歩き回って何かを探しているフェイトの姿があった。

「銀時ー、何処ぉ？」

いくら探しても見つからく困っている中、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースがフェイト達に集まってくる。

「フェイト隊長」
「あ・・・スバル、皆・・・そっちはどうだった？」
「こっちもダメだよ。一体銀時は何処に行っちゃったのさ？」

アルフも頭を抱えて参っている。

「そう言えば、なのはさんもいませんけど・・・」
「銀時に・・・なのは・・・」

ティアナがそう言ってリィンフォースが2人の名を言い出すと・・・
何やら嫌な予感がしてきたようである。

「あ・・・ありえんだろ!!第一まだ2人が一緒に出かけるなどそんな関係じゃ・・・・・」

シグナムが淡淡らしくそう言いだすと，人型モードであるザフィーラがフェイト達に近づく。

「おお，こんなところにいたのか？」
「ザフィーラ」
ザフィーラの登場にシグナムは思わず驚き出すかのような表情でザフィーラの名を言い出す。
「実はなのはがこれをフェイト達にと」
「私達に？」
するとザフィーラはフェイトに手紙を渡してフェイト。
スバル達もフェイトと一緒に手紙を見ると・・・・その手紙にはこう書かれた。
～～～
にゃはは♪
皆がこの手紙を見ている頃には，なのはも銀さんももうこの世界には居ません。
実は私の元の世界で何やら『緑屋』の事で大変な事になったので、私は銀さんに依頼人として一緒に私の世界に戻る事を依頼しました♪
ってな訳で私は銀さんと二人っきりで一度実家に戻ります。

一週間後には一緒に戻ってきますのでそれまで待っててください。特にフェイトちゃん達はかなり悔しがって怒り出す想像がします♪

後，だからって怒っちゃダメだよ♪

だって勝負はもう始まっているんだもん♪

そして帰ってきた時にはなのはと銀さんは恋人同士になっていると思います♪

じゃあ待っててね♪

な

のはより

～～～

ビリリ！！

『『なのはぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！（怒）』』

「なのはさんずるいよォォォォォ！！！（涙）」

フェイトが手紙を破ると、フェイト達は思いっきりなのはの名を怒鳴って叫びだしてスバルは泣き出す。
ザフィーラは巻き込まれないように，狼モードになって素早くこの場から脱出する。

＊

一方の銀時となのははと言うと・・・

「・・・・・・」

「♪」

そこは『海鳴温泉』。
そこで頭にタオルを置いている銀時と髪を下ろしたなのはとも混浴に入っていた。
なのはは幸せそうに銀時にくっつき出している。

「良いお湯ですね♪疲れが消えそうですね，銀さん。」

「ああ、そうだな」

2人はゆっくりと温泉を満喫していた。

そして銀時は一体何をすればこうなるのか考えている。

（何でこうなるの？）

実はなのはは以前にアルフが銀時と風呂に入った事を聞いて『海鳴温泉』の事を調べてた。
そしてそこに混浴があると聞いてこの機会に銀時と一緒になれるチャンスであると考える。
実家の異変を利用して銀時との関係を一気に縮ませるつもりであった。

「銀さん／／／」

なのはは銀時の腕を自分の胸の谷間に抱える。
胸の感覚に銀時はどうすれば良いのか動揺してしまう。

「私達って，夫婦に見えるかな？／／／」
「ええ・・・いや・・・そのう・・・・み・・・見えるんじゃないか？」
「にゃはは♪・・・それ聞くと嬉しいな♪／／／」

かなり幸せそうななのはに対し，銀時はこの光景をフェイト達に見られたら殺されると考える。
そして2人は今日はこの宿で泊まる事にした。
当然部屋は一緒で銀時はなのはと一緒に同じ部屋で過ごす事にする。

「銀さん、明日は両親の事でドタバタになるけど・・・依頼料は私の給料の半分上げるから・・・ね♪」
「わーったよ。とりあえず明日『翠屋』の所に行けば良いんだろ？」

仕方なく、銀時は了承した。

「うん。ありがとう、銀さん」

そう言って、なのはは銀時にキスをした。

驚いた銀時は、目を見開いた。

「おま…！俺ァ積極的な女は嫌いだぞ！？」

動揺しながらも銀時は、隣の部屋の人達に迷惑かけないように小声で言った。

「でも、私は銀さんが好きだよ？」

「う…！」

銀時は一瞬たじろいだ。

小さい頃の面影はあるものの、なのはは立派な大人だ。着物が少しはだけて下着が見えていて、色っぽい恰好だ。

銀時もフェイト達の気持ちが、わからないでもない。

前の時や昼間の時の争いが起きるのも、本当に本気で銀時の事が好きだからである。

結果、フェイト達は積極的に動くのだ。

考えてみれば、フェイト達は十年も銀時の事を想っているのだ。そんな長い間、一人の人物を想い続ける人なんてそうそういない。

すると銀時はある事に気が付く。

「そう言えばお前、何で俺の事を好きになったんだ？」

今更ながらも銀時はなのはに自分に好意を持った事を聞き出す銀時に，なのははその理由を言いだす。

「フェイトちゃんとシグナムさんに、ゾーマと戦っていた銀さんの事を聞いて・・・・それで，あの事件から毎日銀さんの事ばかりを考えて考えて，１０年ぶりに再会したときには、ようやく銀さんのことが好きになっちゃった事に気づいたの。」

あの事件からのなのはの銀時に対する思い。
それは銀時への恋が芽生えたの気持ちである。

「だから私・・・フェイトちゃん達にも負けないもん。絶対に銀さんをなのはに振り向かせるよ」

なのはもまた、フェイト達と同じく１０年間銀時に思いを込めた１人の恋する乙女である。
銀時は我ながら罪な男であると考える。

「じゃあ、おやすみ銀さん」
「ああ」

明かりを消して、なのはも眠りについた。
一人起きてる銀時は、ぽりぽりと頭を掻いた。
今まで気付かなかったが、俺ァとんでもねェ幸せ者かもしれねェなァ。
そして銀時はなのはの頭を優しく撫でてゆっくりと眠りにつく。

＊

～翠屋～

午前１０：００。
銀時となのはは翠屋の中に入った

「いらっしゃい・・なのは!?」
「にゃはは、ただいまお母さん」

髪を下ろしたなのはそっくりの女性、なのはの母・高町桃子が嬉しそうに来る

「良かった～。きてくれて助かるよ」
「にゃはは。家族の事だから急いで来ちゃったよ♪」

じゃあ何で昨日宿に止まったんだぁ～!!っとツッコみを使用にも出来ない銀時。

「あら？　こちらの人は確か・・・・」

銀時に気づいた桃子は銀時の事を聞きだす。
実際にあった事はあるが知り合いって訳でもない。

「えー，坂田銀時で～す」

銀時が自己紹介をした後，桃子も挨拶をする。

「なのはの母、桃子よ。よろしく」

自己紹介が終わったところで、他の客が居ない為、３人は一緒に席に付いて紅茶を飲む。

すると桃子はある事を聞き出す。

「そう言えば，銀さんはなのはとはどういう関係で♪」

ニヤニヤと桃子は銀時に質問する。
銀時は桃子を見てなのはの母だっと考える。
するとなのはは銀時の関係を言いだす。

「銀さんは私の未来の旦那様だよ♪」
「ぶぅーーーーーーーーーー!!??」

とてつもない衝撃的な発言に銀時は、思わず口にした紅茶を噴射する。

「あら？　そうなの♪」

なのはの母である桃子が好奇心の目で俺を見る。
そして俺はなのはを見て聞き出す。

「おいぃーー!?何普通に嘘ついてんだ!」
「にゃはは、大丈夫だよ♪これから本当になるから♪」
「え?何?銀さんの未来はもう決まっているの!?」

銀時はなのはの勝手に決められた自分の未来に呆れてしまう。
桃子は2人の関係が面白く感じて小悪魔のような笑いをする。

から～ん♪

「「ただいま！！」」

そんな中，高町家の２人の男子が帰ってきた。
なのはの父である高町士郎と兄の高町恭也である。
２人を見たなのはは明るい笑顔で挨拶をする。

「お帰り、お父さん、お兄ちゃん」

なのはの顔を見て２人は嬉しそうに笑い出す。

「なのは！　帰って来たのか！」
「久し振りじゃないか」

恭也は嬉しそうになのはに話し出す。
やはり家族と一緒に話し出すのは嬉しい様である。
士郎は銀時に気づいて久しげに挨拶する。

「貴方は・・・銀時さんじゃないですか？」
「おお、久し振りだな。」

士郎は銀時の事を知っているようである。
詳しくは赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは～魔法少女と銀髪の侍～』の『第三十四訓：引っ越しといえば引っ越しそば』で。
１０年前とは全然変わっていない銀時に不思議がる士郎だが・・・
それは気にしないで置く事にした。

「しかし銀時さんがなのはと一緒にここに来るなんて・・・今日は何様で？」

士郎がそう言うと銀時がその訳を言おうとした瞬間、桃子さんがニヤリと笑う。
銀時はこの時、嫌な予感をしていたがそれが的中する

「あなた、彼はなのはの婚約者だそうだよ♪」

桃子がそう言うと銀時は氷づくのである。

「「何!?」」

士郎と恭也は銀時を睨みつける。
なのはは両手を顔の頬っぺたにつけて顔を真っ赤に染めてニヤける。
青ざめた銀時は桃子を言い出す。

「ちょっと待てぇーー!!何，火に油を付けるような事をするの!?」
「だって、その方が面白そうだ・か・ら♪」

ニッコリ笑う桃子に悪魔のしっぽが見える。

俺はこの時，この女が『白い悪魔』ことなのはの母である事を改めて納得した。
なのは以上に腹黒いよこの女!
そしてなのはの父と兄が殺気が銀さんに突き刺さって来やがる。
何？　この殺気。めっちゃ怖いんですけど!
すると二人はメッチャ早く俺に近づきだして・・・・

「「娘（妹）は、やらないぞ!!」」
（親バカとシスコンがいたー!）

そして2人とも力いっぱいに肩を掴みだす！つぅか痛てぇーよ！ミシミシ言っているんですけどー！
そして2人は俺を引きずり出す。
それを見てなのはは驚きだす。

「お・・・お父さん，お兄ちゃん!?銀さんを何処に連れて行くつもり!?」
「「うちの道場だ！」」

ズルズルと二人に引きずられると、とてつもない殺気を放って銀時を自分達の道場へと引きずり出す。
銀時は無理矢理連れて行かれて「どうしてこうなるんだぁー!?」っと叫ぶ。
そしてなのはは困った顔で銀時を追いかけて桃子は面白そうにニヤニヤと笑う。

＊

～道場～

銀時は恭也と試合をする事になり，銀時は片手で木刀一本を握って構え、恭也は通常の木刀より少し短い木刀を二本持ち、構えている。
なのはは正座して銀時が無事に勝つ事を決意する。
兄、恭也は思いっきりシスコンの嫉妬モードになっている。
そして銀時の型を見て士郎は不思議がる。

「あの男。何やら型がなっていないな。ひょっとして我流なのか?」

父、士郎は銀時のデタラメな構えに変わっているように見て同時に呆れる。
あれでは恭也には絶対に勝てないと思う。

（たくぅ・・・何でこんなめんどくさい事になっているんだ?大体良い歳こいてシスコンはないだろ?）

銀時は恭也のシスコンぶりに呆れているが銀時は恭也の隙のない構えに油断しないでいる。
おそらくは相当の腕であることは確かであろうと確信する中、銀時は恭也に挑発するかのように言い出す。

「そっちから誘ってきたんだ。さっさと来いよ」
「なら・・・遠慮なく行かせて貰うぞ!」

恭也は素早く動いて右の木刀を袈裟に振るうと・・・・

ブゥウ!

銀時は軽くかわしだす。

（何!?）

いつでもかわせるかのように交わされて驚く恭也だが、そのまま左の木刀を俺の首にめがけて振るう。

「せぇい!」

ブゥウ!

だが、銀時はそれも軽く交わしだす。
それでも恭也は連続攻撃をして銀時を責めるが、銀時は軽く交わして木刀で防ぐ。
恭也の剣術『小太刀二刀御神流』はかなり強力で，しかも恭也は超一流の剣術家でもあり、おそらくは世界でも指よりの実力者である事は確かである。
しかも先ほどからの連激は無駄な動きもなくかわす所が防ぐことでも難関なはずなのに、銀時は軽くかわしたり捌いたりする。

（この男、デタラメな我流なのに全く隙がない！仕方がない！）

恭也は銀時から後ろにバックし、・・・本気で銀時を倒す事を決意する。

「御神流・『斬』！」

先ほどとは比べ物にならない速さで、右手の木刀が銀時の首元に追い込むと・・・

「ちぃ！」

銀時は素早く左にダッシュするかのように避ける。

「何！？」
「これは！！」

まさか『御神流』の１つである『斬』を初見でかわした銀時に恭也だけじゃなく士郎も驚きだす。

（馬鹿な！基本動作の中の初歩技とは言え、御神流の１つをも交わ

すとは・・・・！！）

これで恭也は理解した。
銀時の身体能力は異常なまでに高い事を。
それでも恭也は引けずに銀時を攻める。

「ならば！御神流・『虎乱』！」

御神流の技の１つ。二刀から放つ連撃が炸裂するが銀時はさすがにかわせられないが全てを木刀で防ぎだす。

「うわぁ・・・やっぱり銀さんは凄いや。お兄ちゃんの剣をことごとく交わして防いでいる」

銀時の強さはなのは自身も知っているが・・・何度見ても驚きだす。
オーバーSランクのゾーマを倒した実力は伊達じゃない。

「どうした？お兄さんよぉ。もうばてたか？」

憎たらしそうに笑う銀時に、恭也は銀時を睨みつける。

「いい気になるなよ！」

すると恭也は思いっきり先ほどとは違う大きな構えをする。

「小太刀二刀御神流・奥義之極み　閃！　……お前を殺す！」
「ちょっ！？なんかさりげなく『殺す』っと言っていない！？っえ，何！？銀さん死亡ブラフ立てちゃったの！？」

青ざめてツッコむ銀時を尻目に、突如恭也の姿が消えた。

いや、余りの速さに眼が移らないのである。
そして神速の領域の速さで銀時に気づかれないと判断して素早く2つの木刀を同時に神速の速さで振るう。

が

カゴォオン！

「なん・・・だと・・・？」

奥義を放った恭也自身は驚いた。
2つの木刀は同時に振ったが、銀時は両手で木刀を持って2つの木刀を防いだのである。

「まさか・・・小太刀二刀御神流・奥義之極み『閃』を防いだのか！？」

これにはさすがの士郎も驚きを隠せないであろう。
そして銀時はにやりと笑って。

「お兄さんよぉ・・・・・・シスコン卒業しやがれこのヤロー！」

そう叫ぶと銀時は2つの木刀を放すように力強く振り返すと恭也はその衝撃に後ろに思わずバックすると、その隙に銀時が片手で木刀を持って居合いの構えをし、責めてきて反撃する。
豪快なる力ある剛剣に予想しずらい素早い動き、そして何よりも稲妻の如くに変化する剣術である。

とても我流とは思えないデタラメな強さに恭也は反撃できずにただ防ぐしかなかった。

（何だこの剣術は！？威力が半端じゃない上に剣速が早い！しかも変化自在だから読めない！）

そして銀時は木刀を大きく振ると恭也は2つの木刀で防ぐが、守りが崩れてその隙に銀時が素早く木刀を付くと、それが恭也の腹に直撃して恭也は吹飛ばされる。

「ぐはぁ！」

恭也は倒れる。
それを見た士郎は恭也が負けた事が信じられない以上に、銀時の我流剣術に驚きだす。

「剣術で俺を倒したければ、成金ドロボーの不良警察官の一番隊組長や名門・柳生家の祖父、そんでスバル並みの神速剣術使い並の剣の腕っぷしでかかって来な」
「銀さん凄～い♪」

なのはが銀時に褒めると、それが聞こえたかの様に恭也が起き上がり、殺気が増大する。

「命の欠片も残さん！！！！」
「どんだけシスコンだぁー！？」

さらに勢いを増して恭也の連激が銀時を襲う。
先ほどよりは威力があるが動きにムラが出てきた。
荒っぽいがかなり厄介な為銀時も思わず舌打ちする。

銀時はそろそろ軽く気絶させるぐらいで終わらせようと考えるが・・・勢い任せで恭也はついには禁句を口に出す。

「貴様に妹は渡さん！ましてやる気がなく死んだ魚のような眼・・・そしてくだらぬ天然パーマをした男には尚更だ！」

プチィン

何かが切れる音が聞こえたが、恭也は気にせずに攻撃をすると・・・

バキィイン！！

バキィイン！！

突如、恭也の２つの木刀の刀身が木っ端微塵に砕けた。
その光景を恭也だけじゃなく、なのはや士郎も今までとは違う驚きを表す。
一体なんで木刀が突然砕けたのか・・・それは銀時が原因である。

なぜなら、銀時は神速の領域を超えた超神速の剛なる剣速を２回振り、恭也の木刀を完膚なきまでに粉砕したのである。
この剣速は間違いなく白夜叉として目覚めた銀時の強さそのものであるが・・・白夜叉には目覚めていなかった。
なら何故、潜在能力を解放したのか・・・・・・それもそのはず、恭也が禁句を言ってしまったのである。

「・・・このシスコン野朗は・・・言いやがった。・・・・言って

はならない事を言ってしまった。」

銀時からとてつもない怒気が放たれ、銀時は右手の木刀を強く握りだす。

「やる気のないや死んだ魚のような眼はまだ許せる・・・・だが・・・テメェは言ってしまった」

顔中が額に血管を浮かべている。

銀時が起こっているのは自分のヘアースタイルである天然パーマである。

「自分自身の体の部分の中でも最も気にしている天然パーマ!その天然パーマを憎み、その設定をした「銀魂」の原作者を恨んでまで、その苦しみを絶え続けてまで『銀魂』の主人公として頑張ってきた俺の生き様を・・・・」

そしてゆっくりと血管を浮かべている右手で強く握った木刀を居合いの構えをして・・・・

「シスコンごときにわかってたまるかぁーーーーーーーーーー!!」

ガコォォォォォォォォォォンン!!

「ごふぁあああああああ!!!!」

超神速の速さで思いっきり木刀を振り、攻撃が綺麗に決って恭也は吹飛ばされて壁に衝突し、地面に倒れて気絶する。

さすがのなのはと士郎も唖然として黙りだす。

「銀魂なめんなよ?」

銀時が気絶して倒れている恭也に大してそう言うと、士郎は銀時に興味を持つかのように笑い出して言い出す。

「恭也に勝つとは・・・大した腕だ。」

そう言って、士郎が立ち上がる。

「どうだい?今度は僕とやってみないか?」

「ってまだつづくんかい!?」

怒り任せになのはの兄、恭也に勝った銀時は今度は父・士郎と戦うハメになる。

銀八

「教えて!」

生徒全員

「銀八先生!!」

ティアナ

「こんにちは・・・今回は私、ティアナ・ランスターがアシスタントします」

銀八
「ええー、んじゃ行くぞぉ。まず最初のお便りはこの人の質問。ペンネーム『リュウガ』さん。『もしも銀時の命が残りわずかな時、あなた達はどうしますか？』。」

ティアナ
「に・・・兄さんの命が！？・・・何くだらない冗談を言っているのよ！『リュウガ』さん、廊下に立っていなさい！」

銀八
「ティアナの反応どおり、おそらくフェイト達も聞けばこうなります。続いてぇ・・・ペンネーム『カラー』さん。『フェイト、シグナム、月詠は酒飲むと壊れますが、他の方達は（特に銀時に惚れた方々）？みんなで銀時食べちゃいそう、勿論性的な意味で。』」

ティアナ
「兄さんを汚すなぁーーー！！」

するとクロスミラージュを出して魔力の弾丸を無数に無差別に発射する。

銀八
「あぁぁあああああああああああ！！」

何発か喰らって銀八は吹飛ばされて倒れる。

ティアナ
「ゼェ・・・ゼェ・・・ゼェ・・・『カラー』さん！廊下に立っていなさい！」

ティアナがそう言うと銀八が起き上がる。

銀八
「じ・・・じゃあ次・・・行くぞぉ・・・ペンネーム『烈火竜』さんの質問・・・・『もしも銀さんの隠し子騒動になのは、フェイト、スバル、ティアナ、シグナム、リインフォース、アルフがいたらどんな　反応を示しますか?』。」

ティアナ
「お兄ちゃんに隠し子・・・ふぅ～ん?」

ティアナからとてつもない殺気が溢れて銀八は青ざめる。

銀八
「・・・・と・・・・と言う訳で『烈火竜』さん，今すぐに逃げなさい。・・・・んでぇ最後行くぞぉ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『どうして銀時に夜這いをかけないんですか?正直我慢の限界でしょ?』・・・・・」

銀八がそう言うと、ティアナの眼が光出す。
その眼は得物を狩る眼であり、不気味に笑い出す。

銀八
「・・・・まぁ，ティアナの反応どおりです。・・・っと言う訳で『正宗の胃袋』さん・・・廊下に立っていなさい」

第二十五訓：妹がいる兄は大抵はシスコンである可能性が大きい（後書き）

銀時ＶＳ士郎！

高町家の依頼が明かされる！

そして内容はケーキ！？

士郎「次回、「念の為に物をチェックしないとおかしな所が見当たらない」テイクオフ」

第二十六訓：念の為に物をチェックしないとおかしな所が見当たらない（前書き）

銀時と士郎の決闘にまさかの展開が！

『笑顔の魔神』降臨！？

そして桂達が登場！

月詠「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』・・・始まるぞ」

第二十六訓：念の為に物をチェックしないとおかしな所が見当たらない

恭也を倒した銀時は仕方がなく士郎と手合わせする事を決意する。
先ほどの嫉妬心はなく、純粋に1人の男として銀時の強さに興味を持ち始めたのである。
銀時は「やれやれ」っと呆れると、なのはが何処からか出したのかっと言うツッコみをさせない様な感じで木刀を渡す。

「はい、お父さん」
「おお、すまないねぇなのは」

士郎はその木刀を受け取ると、構えだす。
そして銀時は木刀を居合いに構えて真剣な眼差しで士郎を見る。

「銀時さん・・・恭也を倒すほどの実力を持つなんて・・・おそらくは何処かの戦争に参加したようですね」

それを聞いた銀時は少し深刻な顔をする。
士郎の言う通り、銀時は自分の世界で『攘夷戦争』っと言う天人との戦争で鬼神の如く活躍を見せた武神ごと『白夜叉』である。
なのははまだ『攘夷戦争』の存在は知らない為、銀時の強さの秘訣をまだ知らされていない。
そして士郎の質問に銀時は・・・

「・・・そうかもな・・・・」

なにやら悲しげな眼で答えだす。
攘夷戦争で数え切れないほどに亡くなった仲間と亡き恩師である吉田松陽の面影、そしてあの戦争で変わり果てたかつての仲間である

高杉を思いだす。
銀時にとっては大切な思い出でもあり、同時に悲しい過去でもある。
銀時は今でもこの世の人間の中でも、最も世界を憎んでいるが、それに耐えている。
家族も無く、恩師も存在せず、仲間の死の数々。
その苦しみが銀時の中で今でも眠っている。

だが、銀時はそれでもこの世界で生きて行ける。

フェイトや神楽に桂など数え切れない仲間がいつの間にか出来たのであるからだ。

（全てなくしたつもりが・・・いつの間にかまた沢山出来てしまったな）
「んじゃ、いっちょ行くか」
「いざ！」

銀時と士郎は一歩飛び出して木刀を振ろうとする。
だが、士郎が木刀を上段に構えた瞬間、木刀は折れてしまって刀身が後ろに飛ぶ。

「あれ？・・・あれぇぇぇぇぇぇ！？」

木刀が折れてしまったことに驚きだす士郎。

「ちょっと待って！？先っちょがぁ」

バコォン

「ねぇえええええええええ！！！」

銀時は容赦なく木刀を振り、それが士郎に直撃して士郎は吹飛ばされてしまって派手に転びだす。
そして士郎が気絶すると銀時は呆れた眼でなのはを見ると、なのはに悪魔の尻尾が生えているのが見える。

「なのは・・・まさかあの木刀に・・・・・」
「にゃはは♪大きく振るだけで折れるように削っておいたんだよ♪」

突如、木刀が折れたのはなのはの細工であった。
銀時はなのはが以前より変わってしまったことに溜息を吐く。

＊

そしてなのはの実家のリビングで銀時、なのは、桃子、士郎の４人はテーブルに座る。
桃子は銀時に一家の問題の内容を言い出す。

「実は・・・翠屋の目の前に新しいケーキ屋が出来たの」
「ケーキ屋？もしかしてあの『翡翠屋（ひすいや）』っと言うケーキ屋の事か？」

思い出してみれば、銀時となのはも見た通り、あの店には長蛇の列が出来ていて、『翠屋』には客が全然いなかった。

「何でも２ヶ月前に建てられてしまってね・・・しかも出されるケーキは世界中に出てくるケーキばかりで種類も半端じゃなく多いんだ」
「それもパフェもたくさんあるの。それでかなり人気があってとて

もうちじゃ太刀打ちできないわ」

士郎も桃子も困っているようである。
そして士郎と桃子は銀時の両手をつかみ出す。

「そこで銀さん！私達に力を貸してくれ！」
「え・・・何？銀さんは何をどうしろっと言うんだ？」
「何でも銀さんは甘い物には詳しいとなのは聞いたから，もしかすれば『翡翠屋』を潰せるほどの凄いケーキをアレンジしてくれると思って頼んでみました！」
「おぃー！潰すの！？もしかして依頼内容はライバル店を潰す依頼なのぉー！？」

士郎と桃子のメチャクチャな依頼に銀時は呆れだす。
一方のなのははここまでムキになっている桃子を始めてみた為、その店の事を聞き出す。

「お母さん！その店と一体何があったの？」

なのはがそう言うと、桃子は深刻な顔をして自分の過去のことを話し出す。

「実はあそこの店長（マスター）は、かつての小学生と中学生と同級生だった吉田守子（しだもりこ）って女に散々と馬鹿にされた屈辱があるからよ（よ）！」

桃子は過去の屈辱を思い出して額に血管を浮かべている。
銀時はおろがなのはと士郎もここまで怒りを表す桃子を見たことはない。

「あの女は散々と私に関わってきていつも私のすることを真似する

かのようにやる上、私より優秀な成績を出して来たんだよ！そして何よりも一番許せなかったのが中学の頃に入ったケーキ部！2年間基礎鍛錬をした私をあざ笑うかのように3年目になって突然入ってきたのよ！？そして・・・全国中学ケーキ大会に代表を決める為にケーキ部で代表決定大会が行われたある日の事だったわ！」

＊

それは桃子がまだ中学生の頃であった。
調理室でケーキを一生懸命に作っている桃子は全国大会に出ることに集中していた。
対する金髪でコギャル系の女である守子はめんどくさそうにケーキを作っている。
これは桃子と守子の対決であった。
部員の誰もがこの勝負は桃子が勝つと確信していた。

そして30分後

「出来ました！」

桃子は完成して、ナイフで1人分に切り分けて皿に乗せる。
そして審査員のケーキ部の担任に味見させてもらう。
見た目は普通のショートケーキだが、味のほうは評判受けられた。

「おーここまで完璧にショートケーキを作れるとは・・・努力したな。これなら大会に出てもおかしくはないだろう」

評判良くしてくれたことで喜ぶ桃子。
そしてそれと同時に守子もケーキが完成した。

「先生ー。出来ちゃいましたって感じですよ～」

やる気のない声で守子は言い出すが・・・出来上がったケーキを見た瞬間に誰もが驚く。

守子のケーキはまるで神殿の聖域を思わせるような巨大なケーキであった。

「何これ～～！？」

彼女のケーキと比べると、自分のケーキはしょぼい石の塊のようにしか見えなかった。

そして守子は形を崩さないで綺麗に切って皿に乗せる。

そして優しく担任に差し入れすると、その見た目は桃子を圧倒するほどであり、味のほうも・・・・

「す・・・凄い！とても中学レベルとは思えない！」

「嘘ぉーーーーーー！！」

大きな評判に桃子は叫びだす。

そして・・・その結果は。

「代表は、吉田守子（よしだもりこ）に決定！」

担任だけじゃなく、部員も守子のケーキ職人としての才能を認めて拍手する。

そして敗北した桃子は無様に膝をつく。

「そんな・・・私は2年間基礎を学んだのに守子はサボってばっかなのにどうして・・・・」

絶対的な才能の存在に認めたくない桃子はどうして負けたのな納得できない。
そんな桃子に近づく守子はニヤニヤと笑い・・・・

「悪いわね♪・・・アンタの分まで大会頑張るから応援してね♪」

憎たらしい笑顔で桃子を見下してこの場を去る。
それと同時に桃子が作ったケーキにわざとぶつかってそのケーキは地面に落とし、さらにわざとらしく踏んでグジャグジャにしてこの場を去る。
その光景を桃子はハンカチを間で涙を流して悔しがるが、部員と担任は気にせずに守子のケーキを美味しく頂いている。
いわゆる眼中になしであった。

その後、守子はめんどくさくても大会で活躍し・・・全国制覇した。

＊

「ざけんなァ、コギャル女ァ！！」

桃子は涙を流して思いっきりテーブルを殴るとそのテーブルは間っ二つに割る。

「やる気ない人間でしかもコギャル系のガキんちょがプロ並みのケーキを作れるのよ！だからって全国制覇を普通に軽々しく出来る！？出来るんだよ！あの女はやる気がないのに万能的な才能を持っているのよ！それが悔しくていつも努力しているんだけど、途中から割り込んでいて他人の縄張りを横取りするかのように私の努力を愚弄し続けているのよ！だから私は守子に負けたくない一心で世界中

を回って修行して『翠屋』を作ったのよ！それなのに・・・・・それなのにまたあの女はぁーーーーー！！（泣）」

初めて見る桃子の怒りに恐れる士郎に青ざめる銀時。
そしてなのはは今でも大爆発するかのような状況で笑いをこらえる。

「なのはぁ？お母さんがもの凄く困っているのに何を笑い出しそうにしているの？」（ゴゴゴゴゴゴゴ！
「え！？・・・い・・・いや・・・それはぁ～・・・」

桃子は凄い威圧感を放ってなのはに近づき、なのはの顔まで近づくと・・・なのはは青ざめる。
桃子はメッチャニコニコしているが、顔中に血管が大量に出ているため、メッチャ怒っている。
『白い悪魔』も母親には勝てないのであった。
なのはが『白い悪魔』なら桃子は『笑顔の魔神』であった。
そしてその怒りが大爆発して・・・・

「少し・・・・頭冷やそうか♪」

なのはを襲いだす。

「にゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」
「何で俺までえええええええええええええええええええええええええ！？」

銀時まで巻き込まれて、桃子の怒り任せな行為にボコボコにされる２人。

「お母さん！落ち着いてって！銀さんも巻き込んでいるって！」

青ざめている士郎は必死で桃子を止めようとするが・・・桃子の暴走は止まる余地もなかった。

＊

そこは喫茶店『翠屋』。

ボロボロにされた銀時となのはは、店の前で目の前に行列で埋め尽くされている『翡翠屋』を見る。

「とりあえず・・・調査でもするか」

「そうだね・・・でもあの列だと最低でも3時間以上はかかるよ。それに営業時間ももうすぐ終わりそうだし」

なのはの言う通り、今更並んだとしてもまともに店の中には入れない。

とりあえずは明日にした方が良いと考えた瞬間だった。

「おい・・・店の中に・・・」

銀時が指を刺すとそこにはまさかの人物がいた。

＊

「あれは・・・・」

「すみませーん。アイスパフェをおかわりお願いします♪」

店員にアイスパフェをおかわりするのはもちろんこの人スバル・ナカジマである。

スバルだけじゃない。

桂、エリザベス、ティアナ、神楽、エリオ、月詠、リィンフォースの7人が同じ席に座っている。

桂と月詠は抹茶だけを頂き、エリザベスはみたらし団子を口に入れている。

神楽とエリオは大量のケーキをたらふく頂いており、ティアナとリィンフォースはホットケーキを頂いている。

何故スバル達がここにいるかと言うと、実は銀時となのはが2人っきりで出かけたという情報を聞いて、仕事で動かれないはやてに様子を見て来て欲しいと頼まれた桂がエリザベスと一緒になのはの世界に向かうのである。

桂がなのはの世界に向かうと聞いたスバルとティアナそしてリィンフォースは、なのはを1人締めにさせないとして仕事をサボってまでついて行くことにした。

そしてエリオはなのはの世界に興味を持ち、神楽と月詠を誘ってついて行くことにした。

「本当にいけるじゃない。ここのお菓子」

「美味しいですぅ。こんなに美味しいお菓子を食べたの生まれて初めてですよ」

ティアナとリィンフォースも満足そうにホットケーキを頂いている。

世界からのお菓子が大量にあり、しかも超一流の美味である為、ティアナの舌もうならせる。

「ふぉんとふぅわういうぁる。なぅんふぉうぇもういげるうぁる（本当に美味いアル。何個でも行けるアル）」
「ふぁい、ふぉうでぅでぃすね（はい、そうですね）」
口にケーキを大量につめている神楽とエリオは幸せそうに笑い出す。
『まさに世界がつまった店って感じですね』
エリザベスはボートを出して店の雰囲気とお菓子の味を高く評判する。
「って、わっち等は銀時を探す為にこの世界に来たのに関わらず・・・何でこんな場所でくつろいでおる？しかもここはなのはの家族の店の前に立てられた店じゃろ！？」
「まぁ月詠殿・・・武士はいかなる状況でもたまには休憩も必要だ。幸いリーダー達は旅の疲労でグタグタだ。ここは余儀なく餡蜜で疲れを取って休まさなければ・・・」
「じゃからってこの店に入ったらなのはに見られたら唯じゃ・・・」
「にゃははは・・・もうおそいなの」・・・え・・・？」
月詠が青ざめて振り向くと・・・そこには『レイジング・ハート』を強く握っている白い悪魔ごとなのはがいた。
後ろには苦笑して青ざめている銀時がいて・・・神楽達はなのはの威圧感に押されて大量の汗を出している。
銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！！」

シグナム
「今回は私、シグナムがアシスタントを勤める。さぁ、質問を答えるとしようか」

銀八
「んじゃ行くぞぉ。まずはこの人、ペンネーム『F．N』さんの質問。『1つ，なのはたちがにせザベス（エリザベスのパチモン）を見たらどんな反応しますか。2つ，銀さんにそっくりの白血球王を見たらなのはたちはどんな反応をしますか？あと白血球王はこの作品に出ますか？3つ、銀さんが風邪をひいたら誰が看病しますか？誰が汗でぬれた体をふきますか？誰がお粥を食べさせるんですか？それをこのお話に出したら面白いと思います。』・・・ずばり答えましょう。ではシグナムお願いします。』

シグナム
「エリザベスの偽物？・・・見たことないから想像してもどう反応すれば良いのか分からん。2つ眼はその時はさすがに驚く。後出るかは作者事態だ。3つ目は風を治るまで全力で看病するまでだ」

銀八
「シグナムの反応は以下の通りです。っと言う訳で『F．N』さん。次に質問する時には1つずつにしなさい」

シグナム
「（いっぺんに答える銀八先生に言われてもな・・・）次を行く。

ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんはパフェが大好きです。自分に好意を抱いているなのは達をパフェに例えたら、どんなパフェですか?』・・・・ふ・・・私は烈火をイメージした紅いパフェだ。!」

銀八
「まぁそう言うことですね。っと言う訳で『烈火竜』さん・・・帰りにパフェでも食いに行きなさい。んでぇ次行くぞぉ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問・・・・『銀時に真面目に質問です。銀時は結局、童貞なんですか?真面目に教えてください。』ってまたこれかよー!!」

怒鳴って質問はがきを叩き落す銀八。

シグナム
「私やフェイトになのはと接吻したんだ!童貞な分けないだろ!?／／／」

真っ赤に染めて言い出すシグナム。

銀八「・・・っと言う訳で『正義の胃袋』さん・・・・銀さんは童貞じゃないそうです。・・・んで次ぃ。ペンネーム『カラー』さん。『今回はなのはさんが主役ですが、何処までするんですか(なのはの欲望的な意味で)?いっそ既成事実作っちゃうえば。』・・・・」

銀八がそう言うとシグナムがとてつもない殺気を放っていて、銀八は青ざめている!

銀八「『カラー』さーん!御免ね!!それは答えられないから廊下に立たなくて良いよねー!!んでぇ次で最後だぁ!!ペンネーム『

虚空』さんの質問。『銀さんが夜這い（事故で、しかもフラグを立てていない女性の部屋に）したら・・・・次の日に彼女達にバレた場合、どんなオシオキが実行されますか？それぞれのパターンをお願いします。』・・・・へ？』

銀八がそう言うと、シグナムは『レヴァンティン』を取り出して・・・

シグナム
「銀時ぃーーーーー！！」

大暴れする。

銀八
「あんぎゃあああああああああああああああ！！！」

今回もアシスタントの暴走に巻き込まれた哀れな銀八であった。

第二十六訓：念の為に物をチェックしないとおかしな所が見当たらない（後書き）

勝負はショートケーキ勝負。

桃子と守子の因縁の対決。

そして我等が銀さん達が出動！

桃子「次回、『食べ過ぎたら胃が痛むので要注意』テイクオフ♪」

第二十七訓：食べ過ぎたら胃が痛むので要注意（前書き）

『翠屋』ＶＳ『翡翠屋』！

ケーキ対決の幕が上がる！

そしてあの人物も登場！

士郎「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第二十七訓：食べ過ぎたら胃が痛むので要注意

銀時となのはは、『翡翠屋』で偶然にも桂、スバル、神楽、エリザベス、月詠、ティアナ、エリオ、リィンフォースを見つけ、なのはが驚異的な魔王の威圧感を放ち、強引に店から連れ出す。（ちゃんと御代は払いました。）

そして桂達は「翠屋」の前で正座をし、ニコニコと笑いながらも『白い悪魔』ごとなのはは質問する。

「桂さん達がこの世界に来たのは知っているよ。はやてちゃんでしょ？私と銀さんの関係を調べる為に調べに来たでしょ♪」

なのはがそう言うと、桂達は頷く。
ちなみにフェイト達の世界ではフェイト、シグナム、アルフの3人はなのはの抜け駆けで思いっきり怒りを表している。
今頃フェイト達が悔しがっているであろうとなのはは想像する。
そしてなのはは次の一言で魔王化が増幅する。

「でもねぇ・・・何でお母さんの敵の店である『翡翠屋』にいたの？」

とてつもない殺気が放たれ，桂達は大量の汗を出して青ざめる。
顔は笑っているのに内密は怒り満タンであった。
銀時もなのはには逆らえないようである。

（殺される！魔王の怒りに触れたら殺される！）

全員がそう思った。

なのはの怒りは半端じゃなく怖いので，怒りには触れたくない。

「い・・・いやぁ，実は銀さんとなのはさんを探していたら、偶然にも凄い人気があるスイーツの店を見つけて、そこで休憩をしていたんですよ」

「ま・・・まさかその店がなのはさんのお母さんの敵の店だったとは知らずに・・・・あ・・・あはははは！！！！」

スバルとティアナは必死でなのはに説明するが，なのはの怒りは増幅するばかり。

（なんか夜兎よりメッチャおっかないアル！）

（これ・・・下手したら僕達墓標送りされますよ！）

神楽とエリオもなのはの怖さがいやっと言うほど知っている。

月詠でさえもなのはの魔王としての威嚇は圧巻されている。

下手したら殺されるっと思ったその時であった。

リィンフォースが何かを思い出してあるチラシをだす。

「じ・・・実はこう言うのがありまして・・・あ・・・あははははは！」

そのチラシをなのはに見せると、チラシにはこう書かれた。

第1回　ケーキ職人対決！

『翡翠屋』ＶＳ『翠屋』

舞台は海鳴温泉。

ルールは多くケーキを渡した店の勝利。

ケーキ内容はシンプルにショートケーキ。

負けた方の店は廃墟とされる。

審査員は観客としてきてくれた貴方。

貴方がどれだけケーキを食してくれるかで勝負は決まります。

「なんか勝手にこの店に翡翠屋が一方的に勝負を挑んできて、それで一気に翠屋を潰す気でいるそうなんです。でももし私達が協力して『翠屋』のケーキを食べつくせば『翠屋』が救えるんじゃ？」

リィンフォースがそう言うと、銀時はある事を気づく。

「なぁ、リィンフォース」

「はい？」

銀時がそのチラシを見てこう思う。

「それってさぁ・・・・ケーキ食い放題って訳じゃねぇ？」

銀時がそう言うと、スバル、神楽、エリオが眼を輝かせるような希望を持ち始める。

＊

そこは海鳴温泉。

そこではある大会が行われる。
それは『翡翠屋』と『翠屋』のケーキバトルコロシアムが始まるのである。
『翠屋』では桃子、士郎、恭也、美由希がいて、たくさんのケーキを並んでいる。
しかし，なぜか行列はなかった。
そして一方の『翡翠屋』には緑色のショートヘアーをしている『吉田守子』を率いるケーキ職人5人がいる。
しかもケーキは見たことがない珍味のケーキばかりで行列がたくさん出ている。

守子は勝ち誇ったかのように高笑いする。

「おーっほっほっほ！桃子さん！貴方のケーキもどうやら飽きてしまわれましたわねぇ♪」

その言葉に桃子の額に血管が浮かび上がる。

「まぁ，今日はあれですわ。攻めての最後の情けに貴方の店を守る最後のチャンスを上げましたし，敵に塩を送るとはまさにこの事ですわ♪」

さらに桃子を見下す言葉に桃子は怒り出す。

「でも，貴方のような二流のケーキに私の一流のケーキに叶えるとは・・・相当思えませんは♪せいぜい最後まで醜く抗うと良いですわ。おーっほっほっほっほっほ！」

言いたい放題の守子に桃子の額には大量の血管が浮んでくる。
恭也と美由希も殴りかかりそうな感じで怒り出しており、士郎はそれ以上に桃子の怒りに恐怖している。

「兄さん・・・私やっぱり・・・」
「絶えろ美由希・・・お兄ちゃんだって・・・お兄ちゃんだって・・・」

相当なまでに答えている2人も我慢の限界である。
桃子はなんとしてもこの勝負は絶対に負けられないのである。
だが、肝心な客が1人もいないのであれば・・・勝負にはならない。

「守子様・・・『翠屋』の所には列が無いどころか1人もいませんね」

部下らしき者が守子と話して『翠屋』を見縊っている。

「ふふふ・・・この勝負は桃子の人生を完膚なきまでに破壊するための儀式なもの。しかしこうも圧倒的な差があると、これはもう勝負が始まる前に勝ったのも当ぜ・・・・」

守子がそう言うと、目の前には奇妙な連中が眼に映った。
その連中とは、銀時、桂、なのは、スバル、神楽、エリザベス、月

詠、ティアナ、エリオ、リィンフォースがいた。
全員それぞれ頭に糖分とかかれた鉢巻を駆けている。
そして銀時達はゆっくりと『翠屋』に向かう。

「あんな時代遅れのケーキ屋に向かうなんて・・・大した食卓ね」

守子がそう言うと、銀時達は『翠屋』の目の前に立つ。

「銀時さん・・・」
「マジでタダだろうな」
「ああ、色々と世話になったからねぇ・・・思う存分食べてくれ」

士郎がそう言うと、銀時、スバル、神楽、エリオは眼を強く光らせる。

「えー，それでは第1回『ケーキ職人対決!』を始めたいと思います!実況はこの俺、真撰組局長!近藤勲と・・・」
「自分の暗い生活を変えたい少女、ルーテシア・アルピーノ」
「そして大爆笑的な面白イベントを強く求める男，ジェイル・スカリエッティ」

「俺（私）達が勤めさせていただきます」

『『色々ちょっと待てぇーーーーーーーーーーーーー!!!!!』』

3人の実況に銀時達がツッコミ出す。

「お前、何当たり前のように出ていやがんだよ!!つうかなんで実況をしていんだ!?」

銀時の怒鳴りに近藤が銀時の存在に気づく。

「おお、万事屋達か。こんなところで会うとは偶然だな」

近藤も銀時達がこの世界にいるとは驚きだす。

「うむ、それにしてもお主達とこうもめぐり合わせるとは・・・何やらの縁があるようだ。して、近藤殿はどうしてここに?」

「いやー、実はルー殿とスカ殿が高町殿の世界にある海鳴でも新しく出来た店で大会らしき物が始まると聞いて,2人が興味を持って司会者を勤めさせようと来ちゃって、ついでに俺も司会者として勤めさせてもらった訳!」

「お前,本当に真撰組の局長アルか?仕事を思いっきりサボる為に来たのと一緒ネ!」

桂の質問に近藤が答えると、神楽は毒舌で近藤に呆れる。

「まぁともあれ、ここで君達と会えるのは偶然だか、思いっきり楽しむと良いさ」

「まぁ,そうさせてもらうわ・・・って言うよりなんでアンタがここにいる!?」

スカリエッティの存在にティアナがツッコミだす。

「貴方確か広域次元指名手配犯じゃないですか!何この世界で普通に実況をしているんですか!?」

リィンフォースがスカリエッティにどうしてここにいるのかを聞き出す。

「うむ、実はこの世界で面白いイベントが起こりそうな気をしてみれば、この大会の実況を頼まれてな・・・せっかくだからやってみたのだ。」

面白そうに笑うスカリエッティに銀時達は呆れる。

「て、貴方確か『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』ではボスキャラじゃなかったの？何でタダのボケキャラとして登場しているの？」

「なんか中途半端な悪役には飽きたから最初からボケキャラの方が楽で良いしね」

「おぃいいいいいいいい！言っちゃったよ！この人自分のことボケキャラと言っちゃったよ！もう悪役の欠片も全然ないよ！」

もはやスカリエッティは悪役の欠片がなく、ティアナはツッコむしかなかった。

なんやかんやで銀時達は翠屋のほうに戻り、ルーテシアはコングを鳴らす。

「さぁ、始まりました！試合開始です！」

近藤がそう言いだすと、『翡翠屋』に並んでいた客が一斉に『翡翠屋』のショートケーキを取り出してきた。

「『翡翠屋』の客が殺到！！次々と皿がなくなっていきます！」

さっそく『翡翠屋』のほうに客が寄せ集まっていく事に近藤は驚く。

客が次々と皿を取り出して行き、だんだんと翡翠屋のショートケーキが無くなって行く。

「一方の『翠屋』は・・・・あああああああああ！！！」

近藤は銀時達を見ると、その眼には銀時、なのは、桂、神楽、スバル、エリザベス、月詠、ティアナ、エリオ、リィンフォースが凄い勢いでケーキを食べているのが移っている。
そのスピードは異常なまでにも速く、次々と『翡翠屋』の皿を上回るのである。

「早ぁあああああああああ！めっちゃ早っ！！たった１０人で『翡翠屋』を対抗している！」
「なのは！銀さん！みんな！」

士郎は驚きだす。

「テメーらァァァ！三日は何も食わなくて良い位にたらふく食っとけぇぇ！」
「はいいい

予想外の展開に面白くなってきたスカリエッティはそう言うと、面白く笑う。

「もうこっちのケーキは良いや！あっちのケーキを頂くぞ！」

「おーっとここで『翡翠屋』の客がどんどんと『翠屋』に向かっていく！」

近藤もこれは『翠屋』の勝利になると確信した・・・その時だった。

「坂田家の食卓に・・・・」

「手を出さないでぇ！」

銀時となのはが回転蹴りをして観客達を蹴飛ばす。

「おいいいいいいいいぃ！！何やっているのぉ！！」

士郎が思わず叫びだす。

桃子、恭也、美由希も眼を開くかのように驚きだした。

「何やっているんだぁぁぁぁぁぁ！せっかくの客が来たんだよ！何追い返しているの！？」

近藤も思わずツッコミだす。

その原因を銀時となのはが言い出す。

「ここはウチの食卓だぁぁぁ！」

「何人たりとも入らせないよ！」

「食卓宣言かよォォォォォォ！？つうかこれ皿の数が多い人の勝ち

なんだよ！あんた等の食卓用じゃないんだよぉぉぉぉぉぉぉ！？」

2人の言い分に近藤がツッコミだす。

「なのは！銀時さん！今はそんなことを言っている暇はないって！」

美由希が2人にそう言いだすと、ある不自然な事に気づく。

「銀ちゃああん！ご飯とも合うヨォこれェェェェェ！」

「本当です！一度試してみてくださいィィィィィ！」

神楽とエリオは何故かケーキとご飯を一緒に食べている。

「色々待てェェ！主らなんでケーキと一緒にご飯を食っておるんじゃ！！」

月詠があり得ないような感じでツッコみだす。

「白米食べないとご飯食べた気がしないネ！」

「欧米食なんかクソ喰らえです！」

「おぬし等の味覚はどうかしとるわァァァァァァ！！！！」

「だからこれ飯を食わせる大会じゃないって！」

神楽とエリオのボケにツッコみを入れる月詠と近藤。

「リーダーよ！いくらなんでもケーキにご飯は合わないと思う！」

『その通り！』

桂とエリザベスがそう言うが、

「そう言う貴方達こそ何をしているんですかぁ！」

リィンフォースがツッコミだす。

実は桂とエリザベスが何故か、かけそばの中にケーキを入れて一緒に食べていたからである。

「武士たるとも、甘ったるい物だけを食しては心が腐ってしまう！」

『常に心を強く！』

「それ以前に理性を腐らしているでしょうがァァァァァァァァ！」

「見ているだけで吐き気するわァァァァァァ！！！」

額に血管を浮かべてツッコミだして怒鳴るリィンフォース。

「あんた達、いくらなんでもおかしいでしょ！炭水化物と炭水化物を一緒にとるなんてありえないでしょ！」

「そう言うあんたは何タッパーにつめこんでテイクアウトしているんだぁぁ！？」

神楽達の食べ方に呆れるティアナに近藤はティアナにツッコミだす。

それはティアナが無数のケーキをタッパーにつめこんでいるのである。

「冷蔵庫に保存すればいつでも食べられるでしょ！」

「今食えェェェェェェェェ！！！！そんなことすればケーキが腐るって！なんだそのビンボーくせー発想！」

実は、はやての給料の安さにまともに食事を取っていなかったティアナだからこそ発想できる事である。

さっきからツッコミばかりしている近藤は疲れてルーテシアとスカリエッティのところに戻る。

そして徐々に皿の数が『翠屋』のほうが多くなって徐々に大きな差を広げていく中、守子が動く。

「まさかこんな展開になるなんて・・・だけど手は打っているわ！」

守子がそう言うと、突如後ろから何かか近づいてくる。

「はい、どいたどいたー！」

後ろから客を押してどかすのは、５人の力士であった。

「おおーっとあれは、力士だ！力士が現れたぞー！突如現われた力士の集団が人ごみを押しのけテーブルを占領！」

そしてケーキを取り出して一斉に食べ始める。

「凄まじい勢いでケーキを食べつくしていく！まるでケーキが小さな苺に見える！怪物！まさに怪物だぁ！」

「『翡翠屋』は５００皿で、『翠屋』は４５０皿。『翡翠屋』がリード。」

このままではヤバイと士郎、桃子、恭也、美由希の４人は慌てる。

そんな４人に銀時が言い出す。

「そんな顔をすんな・・・ここまでは腹ごしらえだ」

っと言うが、銀時はお腹一杯で桂、エリザベス、月詠、ティアナ、リィンフォースの５人は限界が来て倒れている。

なのはももうお腹一杯である。

「って、もうダメダメモードじゃん！」

恭也がそう言うと、銀時となのはは立ち上がる。

「銀さん、なのはさん、いつでも良いですよ！」

「カモーン、前菜の時間はおしまいだヨ」

「準備完了です！」

スバル、神楽、エリオは銀時となのはから少し離れた場所で立っている。

そして・・・・

「なのはァァァァァァァ！」

「はいィィィィィィィィィ！」

なのはは大量のケーキを銀時の左手に持っている大きな皿に移し変え、そして銀時がスバル達に投げる。

「たらふく食いやがれェェェェ！」

そして投げられたケーキはスバル、神楽、エリオの口に入り込む。

「なんじゃこりゃあああああああああ！？１人は多くのケーキを１つの大皿に乗せ、１人がそれを絶妙のコントロール果断なく少女達の口の中に放り込んでいく！つうかスゲェよ！ある意味スゲェコンビネーションじゃん！メッチャとんでもねぇ速さだよ！」

近藤がそう解説すると、それを聞いたかのように力士達が負けじと食べるスピードを速める。

両陣営一歩も引けをとらないせめぎ合いになった！

「特に凄いのが万事屋達だ！夜兎族であるチャイナの胃袋はとんでもなく化け物並みで空腹が大きい！それに負けじとあの青髪の少女と赤紙の少年もチャイナに引けをとらない食欲をしている！力士を軽々しく超えている・・・ってあぁ！！」

今度は、神楽とエリオが白米を食べながらケーキを食べているのと、スバルはアイスを食べながらケーキを食べている。

「何やっているんだァ！？ケーキと一緒にご飯とアイスを食べるのはおかしいだろ！」

「欧米流なんてクソくらえじゃ（ですぅ）！！！！」

近藤のツッコミに3人は言い返す。

しかしなんやかんやで力士は限界に来て次々と倒れていく。

このままではヤバイと知った守子は最終手段としてしょうが汁入りの水鉄砲を2つ出した。

「そうはさせないわよ！」

そして2つの水鉄砲を同時に3発放ち、絶妙なコントロールでスバル、神楽、エリオの両目に的中させる。

「うぁあああああああ！」

「眼が・・・眼がァァァァァ！」

「眼にタレがァァァァァ！」

「スバルゥ、神楽ァ、エリオォ！」

「大丈夫！？」

銀時となのははは思わず倒れている3人に駆けつける。

「おおーっと、眼にタレがはいったァ！！これは痛い！」

スカリエッティが白熱して解説した。

「ちぃ！このままじゃ時間切れで敗北してしまう！どう何すれば・・・！」

銀時は何かないのかっと考える中、なのはが観客気分で見ている客達に振り向く。
それも白い悪魔モードで。

「ねぇ・・・・皆・・・・・」

なのはが客達に声をかけると、とてつもないプレッシャーが客達を襲う。

「見ている暇があるんだったら・・・・ウチの店のケーキ、食べてあげようよ♪」

強烈な魔王モードに誰もが殺気を感じ、逆らえば殺されると知り・・・一斉に翠屋のほうに走りだす。
そして急激なケーキの無くなりに桃子達が驚く。
守子も驚きだして負けじと力士に合図する。

「な・・・何やっているの！早く食べなさい！」

「う・・・う・・・ケ・・・ケーキ見ただけで吐きそうだ・・・」

それを聞いて驚く守子。

そう、飽きが来たのである。
これで守子は万事休すになってしまった。
一方の近藤、ルーテシア、スカリエッティの3人はなのはの白い悪魔の気迫に押し出されて体をガタガタを震わせて青ざめる。

そして・・・・

ピィ～～～

「終了～～」

ルーテシアが終了合図をすると、スカリエッティが皿の数の発表をする。

「結果を発表します。『翡翠屋』は５５０皿。そして『翠屋』は６００皿。」
「よってこの勝負！『翠屋』の勝利ぃ～～～！」

近藤の勝利宣言に誰もが騒ぎ出す。
特に士郎、恭也、美由希の3人は大はしゃぎして大喜びする。

「やったぞー！」
「これで『翠屋』は守られたよ！」
「僕達の居場所が守られたんだよ、母さん！・・・・母さん！？」

桃子の姿が見あらずに探し回ると，桃子はゆっくりと守子のほうに向かう。
守子と他の４人のケーキ職人はまさかの敗北にショックを受ける。
そんな彼女の目の前に、ニコニコとしているが、とてつもない殺気を放って守子の髪を引っ張り出す。

「いたた・・・も・・・桃子!?」
「さぁ，守子さん・・・逝きましょうか♪」（ゴゴゴゴゴ！

そして桃子は無理やり守子の髪を引っ張り出して、この場を去っていく。
なのはをも上回る桃子の異常なまでの殺気にだれもが怯える。
銀時に関しても、あれはゾーマをも上回る・・・いや、下手すれば夜王並の威圧感はあったのかもしれない。
それからしばらくして、海鳴温泉から遠く離れた森の奥深くでボコボコにされている守子が見つかり・・・大会から二日後、『翡翠屋』は閉店されて『翠屋』に客が戻ってきた。
そして守子は2度と桃子達の前に現われる事は無かった。

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生！」

月詠
「ええ・・・何やら高町編もまだ続くが次回で終わりそうな感じで進んでいる所で『銀八先生コーナー』を始めるぞ。今回はわっちがアシスタントをする」

銀八
「んじゃ行くぞー。まずはこの人から。ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『黒神先生はどうして誤字ばかり書くのですか?』・・・・

ずばり答えます。作者は大抵は夜遅くまで小説を作りますので、終わる頃には間違いなくメッチャ遅いため、誤字の確認をする暇もありません。だから，読者に誤字が何処にあるのかを注意されながらもその注意を受けながら、誤字を直して書いていっていています。」

月詠
「それこそが読者の盲点って奴じゃな。」

銀八
「そう言うこと・・・っと言う訳で作者の黒神先生。『烈火竜』さんにお礼を言って謝りなさい！・・・んでぇ次ぎ行くぞぉー。ペンネーム『カラー』さん。『その1，さっちゃんが作った等身大雪ダルマ銀時ならぬ、等身大チョコ銀時があったらフェイト達はどこから食べますか♪というか何する♪その2，もしも、銀さんがロリコンになってしまって、ヴィータと駆け落ちしたらどうします皆さん？特に銀時ラブの方々♪』・・・ずばり答えます。1つ目は●●××△△からです。」

月詠
「何でそんなセクハラ言葉を出すんじゃ！／／／」

月詠が顔を真っ赤にしてツッコむ。

銀八
「んで次は・・・・そんなことすれば、銀さんフェイト達に殺されます。・・・・と言う訳で『カラー』さん，廊下に立っていなさい」

月詠
「なんちゅう質問コーナーじゃ。んで次ぎ行くぞ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからじゃ。『銀時となのはは、海鳴温泉で一夜を共

にしたって事は・・・銀時は、なのはのいろんな穴を見たり突いたりしたんですよね?なのはは、銀時の下半身のもう一人の銀時も見たって事ですよね?』・・・』

月詠はあきれて銀八から離れる。すると銀八は・・・

銀八

「ちがぁーう!銀時はまだなのはに手を出してはいねぇ!むしろ手を出されたほうだぁー!『正宗の胃袋』、次からもっとマシな質問を出しやがれぇー!」

月詠

「まぁ・・・なのはの欲望に銀時も巻き込まれたんじゃろ。次行くぞ。ペンネーム『武士堂』さんからじゃ。『作者さんは『とらハ3』をやってるんですか?』」

銀八

「おそらくしていませんね。作者は『リリカルなのは』の存在を知った1年後に『トラは3』を知っているので、つまりやった事はありません。でも何で技を知っているかと言うと、それは『アニメ・ゲーム・特撮・必殺技辞典』っと言う（ホームページ『ｈｔｔｐ：／／ｓｅｎｋｉ．ｋｕｓａｋａｇｅ．ｃｏｍ／ｉｎｄｅｘ．ｈｔｍ』）を調べているので、おそらく技の存在はそこで調べているでしょ」

月詠

「なるほど。だから恭也の技を知り尽くしていたわけか」

銀八

「と言う訳で『武士堂』さん，キャラクターの技を知りたければ『

アニメ・ゲーム・特撮・必殺技辞典』に行くのがお進めです！んで最後の質問。ペンネーム『鷹』さん。『この作品に新八（じみ）が出る予定は無いのでしょうか？銀さん達を突っ込み続けたあの最強のツッコミの名手がいないのは意外と寂しい感もありますが・・・』ずばり答えます。」

月詠
「そう言えばそうじゃな。何かの理由があるんじゃな」

銀八
「ああ・・・とても重要な理由だ。それは・・・・」

月詠
「（ゴク）・・・・そ・・・それは・・・」

緊張感を出して、思わず息を呑む月詠。
その理由を銀八が言い出す。

銀八
「単に作者が新八（じみ）のアイドルオタクと変態メガネにウザク感じて出番をワザと飛ばしているそうです」

月詠
「単に嫌っておるだけかぁ！！それに何処が重要じゃー！！」

額に血管を浮かべてツッコむ月詠。
それを尻目に銀八は言い出す。

銀八

「っと言う訳で『鷹』さん。作者は新八のアイドルオタク振りにウザさを感じているので出番はメッチャないと思います。ですのであんまり期待しないほうがお進めです！」

第二十七訓：食べ過ぎたら胃が痛むので要注意（後書き）

『翡翠屋』に勝利した桃子はご機嫌良し。

銀時が『翠屋』の跡取りに!?

そしてフェイト、シグナム、アルフの怒りが爆発!

恭也「次回、「親は子の恋を応援したがる以上に関わりたくなる性質がある」・・・お兄ちゃんは認めないぞー!!」

第二十八訓：親は子の恋を応援したがる以上に関わりたくなる性質がある（前書

銀時、デバイスをゲット！？

銀魂風のケーキは絶品！

そしてミッドチルダの帰還！

美由希「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります。」

第二十八訓：親は子の恋を応援したがる以上に関わりたくなる性質がある

大会後、スカリエッティは銀時と2人で話があると言い出し海鳴公園で話をすることにした。

「坂田銀時君・・・私が君に話したいこと分かるであろう」

「・・・・高杉の事か？」

銀時は真剣な表情でかつての同士の事を言い出す。

スカリエッティの話の内容はまさにその通りであった。

「察しが良いね。・・・君も知っていると思うが・・・ガジェットは私が生み出した機械兵器だが・・・実はその事である覚えのない罪を着せられちゃってね。ホテル・アグスタにガジェットが襲ってきたのを知っているだろう？」

「ああ・・・」

そしてそこへ、新しく入ってきた元・真撰組の鍬死楼が模造品とは言え驚異的な強さを持った『紅桜』で攻めてきたが、桂によって阻止されて逃亡。

「実はそのガジェットは、私のではなく鬼兵隊が作り上げた物だ」

「な！？」

衝撃の余りに驚きだす銀時。

スカリエッティが嘘を言っているのか、本当の事を言っているのかは知らない。

だが、特殊な武装を作りだす『鬼兵隊』ならあり得るであろうと銀時は考える。

「あの時に襲ってきたガジェット達はまだ模造品のようだ。なぜなら我々の予想を超えた技術力で作られた『鬼兵隊』のガジェットは私のガジェットよりも戦闘力を上回り、我等のアジトを襲ってきた」

「高杉が・・・・」

タダさえ恐ろしい兵器を作り出す鬼兵隊にガジェットの技術力を加わればとんでもない強さを誇るであろう。

「その後、『鬼兵隊』の襲撃に襲われた私達は何とか返り討ちにしたが・・・相当なまでに酷い負かでをおってしまった。しかもわずか4機のガジェットに、私が作ったガジェット達は9割が破壊されてしまった。もし『鬼兵隊』があのガジェットを何千機・・・いや何万機も作り上げられたら・・・ミットチルダだけじゃなく君の世界にも恐ろしい影響を齎(もたら)すであろう」

まさか高杉がそこまでの技術を作り上げたとは思いもよらなかった銀時。

だが銀時もスカリエッティも『鬼兵隊』にはガジェットよりも恐ろしい兵器を開発しているのを知っている。

それは・・・・。

「確かにガジェットの大群は厄介だけど、アイツ等の恐ろしさはあんなポンコツなんかじゃねぇ・・・・」

「『紅桜』か・・・あれには私も驚かされた。鍬死楼っとか言う男がどれほどまでに強いかは知らない・・・だが，妖刀の名に恥じない狂的な力はあの機動六課の副隊長であるヴィータをも重傷させてしまうほどに厄介だ」

スカリエッティはそう言いながらポケットからある者を出す。

そしてそれは右手用の手袋で黒く、真ん中に機械仕掛けのような装置が付けられている。

「『紅桜』の恐ろしさはある人物から聞いた」

「ある人物だと？」

「その人物に協力を求めて君様のデバイスを完成させた。・・・これを受け取ると良い」

銀時はその手袋を受け取ると不思議そうに見る。

「何だそれは？」

「・・・これこそ対『紅桜』様に作られた君だけのデバイス。『【銀】の魔導書』・・・通称『ブレイシルバー』だ。」

「何なんだよ『ブレイシルバー』って！これ、思いっきり『●レイブルー』のパクリをやってんじゃねぇか！」

デバイス名に呆れてツッコむ銀時。

そしてスカリエッティがその使い方を教える。

「起動させるときにはこう叫ぶんだ。『第６６６拘束機関解放、次元干虚数法陣展開。ブレイシルバー，起動』っと」

「おいィィィィィィィィィィィィィィィ！完全にパクっちゃいましたよこの人ー！いくら俺の声の声優が『●レイブルー』の主人公である『●グナ』と一緒だからってそれはないでしょぉぉぉぉぉ！！」

別の意味で大量の汗を出して驚く銀時。

そしてスカリエッティは高笑いしてこの場を去ろうとする。

「では、私は近藤君と一緒にそろそろ元の世界に戻るとしよう。・・・所でエリオ・モンディアルは元気そうだね。その様子だと・・・

フェイト・テスタロッサも元気でいるだろう」
「お前・・・何であの2人の事を・・・」

どうして2人の事をスカリエッティは言い出すのかを銀時は説明すると、スカリエッティは全ての事を言い出す。
自分がプロジェクトFのベースとなる、基礎論理を構築した人物である事を。
ある組織がスカリエッティの研究に興味を持ってプロジェクトFを任せられたのである。
それにはさすがの銀時も驚きを隠せなかった。
まさかスカリエッティが2人の生みの親とは思いも知らずに・・・
しかしスカリエッティは強く後悔をしているようであった。

「あの時の私はどうかしていたようだ。己の能力に自惚れてしまったのか悪い誘いを受けてプロジェクトFのベースを作り上げてしまった。命を作って弄ぶ事はかなり残酷さを感じる。・・・だが、それでも私の罪は消えることはないであろう・・・私はプロジェクトFのベースを真の目的を知り、ガジェット達を生み出して組織に反乱を起こし、残りのプロジェクトFのベースを奪い上げた。どこかでアジトを作り上げて身を潜めさせてもらっている」
「お前・・・・」
「とにかく、今の『鬼兵隊』は君が思っている以上に恐ろしい軍勢になっている。必ずそのデバイスが役に立つから受け取ってくれ。そしてフェイトとエリオが必ず君の力になるだろう。ではこれで」

スカリエッティはそう言って後ろを振り向いてこの場を去ろうとすると・・・ある事を気づいてニヤニヤした顔で銀時を見る。

「それと，他の女といちゃイチャするのも結構だが、フェイトに間違えても殺されないように気を付ける事だ」

それを聞いて銀時は青ざめる。
今頃はフェイト、シグナム、アルフの3人が今頃、嫉妬心を出して怒り出している頃であると考えて恐怖する。
面白そうに高笑いするスカリエッティは手を振ってこの場を立ち去る。

＊

次の日

銀時はなのはと共に『翠屋』で士郎、桃子、美由希と話し合いをする。
歌舞伎町とミットチルダが一体どういう場所かを説明する。
士郎、桃子、美由希は今度行って見たいと思い込む。

ちなみに神楽達は海鳴温泉に泊まって銀時達を待っている。
今日でミットチルダに帰るからである。

「それにしてもなのは・・・貴方に好きな人が出来たなんてねぇ。お姉ちゃん驚いちゃった」
「むぅー、私だって好きな人が出来るのは一度や二度もあるよ～」
「いや・・・二度はヤバイと思うけど・・・」

ぷくーを膨らむなのははムッとして言い出すと、美由希は苦笑してツッコむ。

「それにしても・・・剣の腕は恭也を打ち倒すだけじゃなく・・・

・ケーキ作りも出来るとは・・・・」

驚くかのように言い出す士郎が眼にしたのは、エプロンをしていて頭にバンダナをかけていて、本格的にケーキを作っている銀時であった・。

ちなみに彼が作っているケーキは『銀魂特製～ショコラ・ランド～』というチョコをメインとしたケーキである。

スポンジはココアパウダーをタップリ入れており、中にはトロリと蕩けるショコラソースがタップリ。

しかも外側もチョコレートクリームタップリを付けて最後はケーキの外側を半分にスライスした苺を付けて、そして上にはアーモンドを駆けて、キャラメルソースで絵を描くかのように乗せて、しかもバナナを一口サイズにスライスした物を2つのせ，そして最後に木の形をしたチョコを4つ乗せて家の形をしたチョコを乗せて、ど真ん中に銀時の使用している木刀の形をしたチョコレートを突き刺せば完成。

「いやー、一日甘い物を食べないと落ち着かないもんで」

そう言って銀時は1人用にスライスせずにそのままフォークに刺して食べ始める。

興味を持ったなのは達が近づく。

「銀さん、良かったら私達も一口良いですか？」

「ん？食って見るか？」

銀時は許可を出し、なのは、士郎、桃子、美由希はフォークで銀時の『銀魂特製～ショコラ・ランド～』を一口頂く。

その味の評価は・・・

「にゃふぅ。美味しいよ♪」
「おお、これはもしかすれば新メニューとして店に出せるよ」
「凄いわ♪こんな美味しいケーキは食べた事ないわ♪」
「銀時さんすご～い」

かなりの評価の良さであった。
実際に銀時は新八（ヘタレメガネ）と最初にあった時にケーキを作ってたり、フェイト達に手料理を作った事がある。
つまり銀時はどんな料理でも作ろうと思えば作れる。
それは、『万事屋やめてケーキ職人になれよ』っとツッコみたくなるぐらいである。
すると、桃子は何かを思い出して台所からある物を取り出す。
それは『弟子用スイーツレシピ』と書かれたノートが描かれている。

「これ・・・宜しければ上げます♪是非参考してみてください♪」
「良いのか？・・・んじゃ報酬代わりに頂くぜ」

甘いの大好物な銀時はありがたく受けとる。
そして桃子は、なのはを連れて2人っきりで話し合う。
一方の士郎と美由希は剣の達人であり一流のケーキ職人である銀時にある事を託そうとする。

「銀時さん、貴方ならこの店を任せられる。是非とも翠屋を継いでくれ！」
「前は反対したくせに、何その変わりよう！」
「私からもお願いします！お義兄さん！」
「いつから俺はお前の兄になったァ！？」

急な変わりように銀時はツッコみだす。

一方のなのはと桃子は銀時の事で話し合う。

「なのは・・・銀さんって他の女性にもたくさん好かれているでしょ♪」

「うん・・・でも私、絶対に負けないもん。好きな人を必ず掴んで見せるんだから♪」

「その意気よ♪」

それは必ず銀時を我が物としてなのはと結ばれる為の親子の会議みたいな感じだった。

ふと気づくとなのははニヤニヤとして桃子と話し出す。

「にゃはは・・・所でさぁ・・・私が銀さんと結ばれたら・・・・一緒にやっちゃう♪」

「あらあら・・・・それは良いかも知れない♪」

それは親子仲良く銀時を襲いだすような女の欲望的な話である。

2人の欲望の眼線に銀時はぞっとして寒気を感じる。

それはあの変態ドMメガネの眼線とは比べ物にならないハンターに狙われた眼線であった。

「なのはぁー！お兄ちゃんは認めないぞぉー！」

突如、恭也が飛び出してなのはに言い出すと、なのははは恭也に呆れて、「お兄ちゃんはいい加減にして！」っと頭にかかと落としをしてツッコみだし、恭也は涙を流して気絶して倒れる。

ちなみにさっきの親子丼的な内容は聞かれていないようである。

そして銀時となのはは『翠屋』を後にしてスバル達のいる『海鳴温泉』に向かう。
なのははご機嫌斜めで銀時の左腕を抱きつくかのようにくっ付きあう。
その光景に、桂とエリザベスは面白がり、スバル、ティアナ、リィンフォースはどす黒い、負の感情を表し、神楽、エリオ、月詠はその3人に青ざめる。

＊

ミッドチルダに帰ってきた銀時は青ざめて正座していた。
その目の前には怒りの化身ごとフェイト、シグナム、アルフの3人がいるのである。

「銀時、今回の事はどういう事か・・・・」
「決定的に話させてもらおうか！」
「今回はやりすぎだと思うんだけど！」

三人に逆らえない銀時は大量の汗を出して説明する。

「ちょ…ちょっと待ってくれない？これには訳が……」

青ざめて大量の汗を流す銀時は言い訳を考えて話し出すと、3人の怒りは限界に達成し・・・

「問答無用！！！！」
「あああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああ！！」

３人の怒りの猛攻に銀時はボコボコにされる。
隣にはニヤニヤとして両手で頬っぺたを触るなのはがいて，後ろには後ろに隠れていて銀時を羨ましがるユーノと３人の怒りに恐怖を感じたザフィーラがいた。

＊

訓練場

そこには憤怒の化身ごと、キャロと巨大化されているフリードに真竜・ヴォルテールが存在する。
ニヤニヤと笑っているが、顔中に青筋が大量に立っており、どす黒い負の感情を出してエリオを見る。

「ねぇ・・・どうして神楽さんと月詠さんと一緒になのはさんの世界に行ったの？何で私を呼んでくれなかったの？」

完全なる嫉妬心でエリオに言い出す。。
その威圧感は『白い悪魔』ごとなのはに匹敵するほどである。
半泣き状態のエリオはこの状況を如何すれば良いのかわかんなかった。

「え・・・そ・・・そのう・・・それには訳が合って・・・」

もはや良いわけが出来ない中、キャロの裁きが下される。

「少し・・・反省しよっか♪」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！

「あんぎゃあああああああああああああああああああ！！」

フリードは口から火炎砲を放ち、ヴォルテールは翼の部分から極大な魔力の波動砲を放ち、エリオはそれに直撃して無事なのかって言うぐらい問答無用に攻撃される。

【高町家編・完】

桂

「教えて！」

生徒全員

「桂先輩！」

桂

「はぁ～い、っと言う訳で今回の銀八先生は少し無茶しすぎてお休みな為、今回はこの俺、桂小太郎が勤めさせてもらいます。今回から『教えて銀八先生コーナー』を改めて『教えて桂コーナー』を主くりします。そしてアシスタントは・・・・」

はやて

「はいは～い♪・・・機動六課部長ごと八神はやてです♪」

桂

「え～では最初の質問を受けさせてもらいます。ペンネーム『烈火竜』さんの質問，『もしも、機動六課の隊長が八神はやてではなく、同じ腹黒く怖い志村妙さんだったらどうなるでしょうか？』・・・・ずばり、八神殿に答えさせます」

はやて

「・・・そんなん悪夢の実現や～～！！」

頭を抱えて恐怖するはやて。

以前に妙の暗黒物質（ダーク・マター）ごと卵焼きを見て恐怖し始めるはやて。

完全なるトラウマのようである。

桂

「・・・・・えーっと言う訳で『烈火竜』さん、卵焼きを作る場合はちゃんと焦がさないで作るように。っでは次の質問。ペンネーム『カラー』さんの質問。『真面目な質問、似蔵はアルハザードの力で復活しましたが、もし、人を生き返させるとしたら銀時は誰に会いたいですか？』・・・・アイツが合いたい人物は・・・・他でもない・・・」

桂は、銀時が合いたい人物と思えば・・・・間違いなく恩師である松陽であると確信する。

銀時自身もアルハザードの力で死者を蘇らせることが出来るなら、必ず松陽を蘇らせたいであろう。

はやて

「桂さん？」

桂
「あ・・・いや・・・あははは・・・・その質問の真実は、ネタバレしてしまうのでご勘弁を！ではもう１つの質問！『銀時のＳＭ仲間、Ｍに開発されたさっちゃんは出てくるんですか？後あの時さっちゃんとはどんなプレイを楽しんだんですか♪』・・・・それは作者の気分次第であろう」

はやて
「っと言う訳で『カラー』さん、真実を知りたきゃ最後までこの小説を読むように！次ぎ行くな、ペンネーム『アグ二』さんの質問な。『バルディッシュやレイジング・ハート等のデバイス達に質問です。ガジェットなどよりも身内に攻撃する事の方が多いですが、その事についてどう思いますか？』・・・・ってデバイスに質問とは驚いたわ」

はやてはデバイスの質問に意外そうに驚く。すると・・・何処からか現れたのかって言うツッコみがきそうな感じに『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』がセットオンモードで現れると質問に答える。

バルディッシュ
『主の怒りが怖い』

レイジング・ハート
『逆らったら形残らずに破壊される』

などと逆らえないデバイスに動揺して涙を流す桂とはやて。
確かに２人が怒り出したら怖い。とにかく怖すぎるのである。

はやて

「っと言う訳で『アグ二』さん、2人の怒りを感じたらすぐさま逃げるようにするんやで・・・（涙）」

桂

「次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問！『1．真撰組の沖田と土方（どSとマヨラー）の2人は後で出てきますか。2．この小説はある意味銀魂の最終章的な感じですか。』・・・ずばり言おう！1つは近藤以外の真撰組の出番はまず期待できないほどすくない！」

はやて

「そうなん？」

はやては真撰組の存在を知らない為、本当でありそうな気がして驚きだす。

桂

「そしてもう1つは・・・まぁ最終章だと思えば最終章じゃない？」

はやて

「軽っ！・・・まぁとりあえず、『ＳＡＤＳ』さん、真撰組の活躍はそんなに期待できへんようやし、真撰組の出番は期待せんとき。次ぎ行くな。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからや。『もういっその事なのはと桃子を一緒に親子丼として食べちゃえば？（もちろん性的な意味で！）』・・・・」

桂とはやてはニヤニヤとした感じで銀時の事を語りだす。

桂

「ははは、銀時の罪はさらに大きくなったな」

はやて
「ふふふ、そうやな・・・ってな訳で『正宗の胃袋』さん、あの親子が銀ちゃんを襲っちゃうのを創造しながら大爆笑してやろうな♪」

桂
「まだまだ続くぞ。ペンネーム『加藤勇』さんの質問、『今現在、駄めがね（新八）に最も近いツッコミキャラは（リリカル組のメンバーで）』」

はやて
「ああ、そうやな・・・っと言うより新八って誰だっけ？」

存在すら知らないはやての言葉に桂は思わずズッコける。

桂
「や・・・八神殿・・・以前にお主も高町殿の世界で新八君と会っているはずだが？」

はやて
「・・・ああ！確か地味で桂さん、銀ちゃん、神楽ちゃん、エリザベス、九兵衛さん、東城さん、妙さんとは比べ物にならないほど頼りになら無そうな眼鏡をかけた影の薄い地味な人の事かいな♪」

なりげなく酷い事を言うはやてをスルーして、桂ははやての質問を聞く。

はやて
「ツッコみキャラだったら、間違いなくヴィータとティアナやな。せやけど影が薄いとは言えないほど出番が多かったし・・・影薄

キャラだったらシャマルが最も近いかな♪」

桂

「なんで影薄キャラを言い出すの！？っていうよりシャマル殿に聞かれたらヤバイであろう！」

はやて

「大丈夫や！今回はおらへんし！・・・と言う訳で『加藤勇』さん、なんかおもろかったし今回は廊下に立たへんでええよ♪」

桂

「（シャマル殿には黙っておこう。）次を行こう。ペンネーム『リュウガ』さんの質問。『銀さんに妹（仮）が居て、銀さんが重度のシスコンだったら、正直惹かれていましたか？』・・・まぁそうなるではないかな」

銀時のシツコン振りを想像して笑いをこらえる桂とはやて。

桂

「っと言う訳で『リュウガ』さん、銀時がシスコンだったらどうなるのかを想像してみてください。って次が最後だ」

はやて

「ペンネーム『赤夜叉』さんからや。『ぶっちゃけ、美女に囲まれてる銀さんが羨ましいですか？　ついでに、なのは達の中で、銀八先生は誰が好きですか？　もちろん銀魂キャラからでもいいですよ。長々と失礼しました。これからも頑張ってください！』」

桂

「それは俺が変わりに答えよう！ずばり答えは・・・」

銀八
「何勝手に質問を答えているんだァ！」

ドカァン！

桂・はやて
「あ～れ～！！！！！」

突如現れた銀八先生はとび蹴りをして桂とはやてを吹飛ばし、二人は遠くに飛ばされ星となった。

銀八
「あのバカップル共め！よくも俺の出番を奪いやがったな！まぁいい、最後の質問は俺が答えてやるぜ。・・・・そんなもん・・・・メッチャ羨ましいに決まっているだろうが～！！」

大きく叫んで銀八は言い出す。

銀八
「何でアイツばっかモテルんだよ！つうかアイツ、今回の『高町家編』で凄い事になっちゃっているし！つうかズリーよアイツ！今度あったら、アイツのアナログスティックを・・・・八つ裂きにしてやる！」

銀時のモテっぷりに怒り出す銀八。
それが消えるかのように、もう１つの質問を受ける。

銀八
「ちなみに俺の好みは胸が大きく優しくて、そして何よりも気品が

あって陰が薄くない女性です。っと言う訳で『赤夜叉』さん、次の新作小説を作る場合は必ず『銀魂』のクロスオーバータイプにしてください！」

第二十八訓：親は子の恋を応援したがる以上に関わりたくなる性質がある（後書）

黒神
「っと言う訳で、今回で今年の『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～譲夷戦争鎮魂歌～』は終了です。次回は来年になります」

銀時
「ちなみに今回で最終回じゃないからな。作者のまどろっこしい言い方に問題があるだけだ」

フェイト
「今年は色々と会ったね」

なのは
「にゃははは。今回のシリーズは凄く良い感じだったからなのはは満足だよ♪」

フェイト
「なのは・・・それはどういう意味？」（ゴゴゴゴゴゴ

スバル
「ふぇ・・・フェイトさん！落ち着いてください！銀さんも止めて！」

銀時
「では、次回は来年始めますので、良いお年をォ」

スバル
「銀さ～ん！！」

黒神

「では次回、「黒く足が多い生き物は、大抵は誰でもメッチャ怖がる」！良いお年を！」

第二十九訓：黒く足が多い生き物は、大抵は誰でもメッチャ怖がる（前書き）

黒神
「あけまして・・・・」

銀時・フェイト・桂・なのは・スバル・ティアナ・神楽
「おめでとうございます！」

銀時
「いやー、今日から新年スタートって言う訳だから・・・『リリカル銀魂』も新シリーズの始まりだぜ」

フェイト
「たった今調べた所、総合評価がまさかの２００ｐｔ　越えです！」

スバル
「これも皆さんの応援のお陰だと思います」

銀時
「いやー，銀魂風にしたのはある意味正解だったかもな。」

なのは
「そうだね。リリカル風だとここまで爆笑的な事が出来ないしね」

桂
「まぁ、俺はこの小説がリリカル風だろうが銀魂風だろうが・・・どっちでも良い。この桂小太郎が思う存分に活躍できるからな。」

銀時
「黙ってろ、ヅラ」

桂
「ヅラじゃない桂だ」

神楽
「銀ちゃんとヅラは相変わらずアル」

桂

「だからヅラじゃない桂だ」
スバル
「だけど作者の誤字癖がなきゃ・・・」
ティアナ
「完璧なのに・・・・」
銀時・フェイト・桂・なのは・スバル・ティアナ・神楽
「もったいない（アル）」
黒神
「言わんでいいこと言わなくて宜しい！」
銀時
「ま・・・リリカル銀魂もまだまだ序盤だしな・・・ジャンジャンと進んでいこうぜ！」
スバル
「そのつもりです♪」
桂
「では，諸君！今年も『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』を勝つ黙せよ！」
黒神「では・・・せーの！」
黒神・銀時・フェイト・桂・なのは・スバル・ティアナ・神楽
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始ま（るぞ）（ります）（るアル）」

第二十九訓：黒く足が多い生き物は、大抵は誰でもメッチャ怖がる

「いやぁあああああああああああああああ！！」
「ごごご

「はぁ？お前等さぁ・・・魔導士であろう者がゴキブリごときで逃げてどうすんの？これを機に敵のスパイがゴキブリ関係の兵器を開発したらそれこそ機動六課の壊滅は間違いないぜ？」

「そんな兵器は絶対いや（アルゥウゥウゥウゥウゥウゥ）ァァァァァァ！！！！」

５人の少女は絶叫して叫ぶ。
女にとってもゴキブリは最大の天敵である。
とりあえず銀時は殺虫剤を出すが、ある事を思い出す。

（あれ・・・この展開ってどっかで見たような・・・・）
「なぁ・・・一つ聞くが・・・・そのゴキブリの大きさって・・・・・もしかして人間並みか？」

嫌な汗を出して銀時は言い出すが・・・・

「人間並みの大きさ？そんなゴキブリいるわけないよ」

呆れたかのようにアルフは言い出す。

「兄さん、いくらなんでも人間並みの大きさを持つゴキブリなんてこの世にいるわけないじゃない」
「そうですよ。そんなのいたらまさに悪夢の現実化ですよ」

呆れて言い出すティアナとスバル。
銀魂の世界では肉食怪虫ゴキブーリって言う存在が知らないから言えることである。
フェイトやアルフもそんなゴキブリがこの余にいるとは思えない。

しかし、銀時と神楽はその存在に知っている。
実際にこの眼で見たことがあるからである。

「まぁ・・・つまんねぇ質問して悪かったな・・・・とりあえずゴキブリぐらいは何とかして見るから安心・・・・」

言いかけの途中で銀時は扉の方に存在する『ある物体』を見ると・・・・

「ああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!!」

銀時達は絶叫して部屋から逃げ出す。
そして逃げ出した場所が・・・・

※

「って、お前等はゴキブリが怖くて逃げ出した訳か!?」
「貴様ら・・・それでも起動六課の一員か?」

呆れるかのように言い出すのはシグナムとヴィータである。
銀時は青ざめて、フェイト、スバル、神楽、ティアナ、アルフの5人は涙を流している。

「あのな・・・・人はどんな建物に住んだって、そりゃ気づかないうちにゴキブリと一緒に暮らしているもんなんだぜ?」

「もう子供じゃないんだ。ゴキブリぐらいで騒ぐな。」

いや、あんた等は平気か！？って言うツッコミをしない銀時達。
そしてヴィータとシグナムはデバイスをセットアップして衣装はバリアジャケットに変身した。
ちなみにヴィータは殺虫剤を持っている。

「じゃあ，私たちがそのゴキブリを倒してやるから」
「いい加減にシャキッとしろ」

2人はゴキブリもたいした事はないと考えて潰しに行こうと考える中、銀時達は2人の背中の背中を見て青ざめる。

「おい・・・シグナム、ヴィータ、後ろ」

銀時の声にシグナムとヴィータは後ろを向くと・・・・そこには人間並みの大きさをしているゴキブリ、肉食怪虫ゴキブーリが1匹ずつ二人の背中にくっ付いている。

「いんぎゃあアアア

そしてそこは桂の部屋。
そこには桂、エリザベス、はやて、月詠、エリオ、ザフィーラも存在して青ざめている。
原因は自分達もさっきゴキブーリが存在して慌てて逃げて思わず桂の部屋に向かった。
そこにはゴキブーリが一匹も存在せず、銀時は扉を強くしまっている。

「な・・・何やったんや、今の巨大なゴキブリ！」
「通常のゴキブリってあんなにまで大きくなるもんなんですか！？」
「そんな訳あるか！実際のゴキブリは大きくても人間の手ぐらいの大きさだぞ！あんな巨大なゴキブリはあり得ん！」

はやて、エリオ、ザフィーラの3人は一体何なのかを理解できないが，銀時、神楽は特にあのゴキブリは嫌って言うほど知っている。

「クソ・・・まさか肉食怪虫ゴキブーリまで出てくるとは・・・いくらこの小説が銀魂風だからってそれはねぇだろ？」
「もし死んだら私、馬鹿作者の黒神を呪い殺してやるネ！」

銀時と神楽はゴキブーリの存在に驚きだしている。
ティアナとアルフは知っていそうで聞いて見る。

「兄さん、神楽さん・・・2人はまさかあのゴキブリが何なのか知っているんですか！？」
「そうだよ、もしかして銀時達の世界の虫かい！？」

銀時と神楽はあんまりも言いたくようだが、代わりに桂が答えだす。

「あれは・・・『肉食怪虫ゴキブーリ』・・・・俺達の世界の・・・

異星の何処からか生み出された肉食昆虫だ」
「な・・・何やって!?」
「地球産じゃないって訳なのか!?」

はやてもザフィーラも桂の言う事に驚きを隠せなかった。
それを続くかのようにエリザベスがボートを出す。

『もし・・・あれをほうっておいたら・・・・大変な事が起こる』
「た・・・大変な事ってなんなんですか?」

エリザベスのかかれたボートにエリオが聞き出す。
そして銀時は信じられないような表情で説明する。

「あの虫共がどうしてここにいるのかは知らないが・・・・おそらくはこのミッドチルド内に女王がいるからだ。やつ等は全て一匹の雌から生まれた兄弟。女王が星に巣食いそこで大量の卵を生み、それを繰り返して幾つもの星を食い尽くしてきた恐ろしい種族だ。女王がいる限り、奴らは際限なく増え続く」
「もしこのままほうっておけば、ミッドチルダは何もない土の塊の星となり・・・・滅んでしまう。・・・・ミッドチルダの，壊滅だ!」

銀時の説明の後、桂が大量の汗を流してそう言いだすと・・・・フェイト達は青ざめて大量の汗をだす。
それも人類所がミッドチルダの壊滅危機に迫られたのであるからだ。

「そ・・・それじゃあ一番ヤバイじゃないですか!」
「ミッドチルダが壊滅したら、私達だけじゃなく世界中の生き物がとんでもない事になってしまうわよ!」

スバルとティアナは絶叫して言い出す。
シグナムもどうしてそんなゴキブリがこの世界にいるのか理解できない。

「何でそんな危険な生物がこの世界に!?」
「分からん。・・・だが，さらに悪い情報によれば・・・その女王の大きさは通常のゴキブリ並のようだ」
「そんな!それじゃ万事休すや!このままじゃうち等が完全にやられてしまう!」

桂の言う事にはやて自身も絶体絶命的なピンチに追い込まれる中、銀時は以前、万事屋に入り込んできた宇宙怪虫ゴキブーリに襲われた事を言いだす。

「以前、俺たちの前に現れた女王の背中に『五朗』っと書かれたゴキブリがいて・・・そいつが何やらとんでもない馬鹿天人のペットらしく、はぐれてしまったあげくに俺達の万事屋に巣を作ってしまったようだ。はた迷惑だが、そいつの特徴で何とか生まれた虫共も餓え死してくれた・・・だけど・・・・」
「そんな都合良く、背中に『五朗』っと書かれた女王はいないネ。一体如何すれば良いアルか?」
「なんちゅう展開になってしまったんじゃ・・・」

銀時と神楽も迷っている。
しかしこの難関を越えるにはこれしかないようであるため、特徴が全然ない女王を見つけるのも難関なのに時間が過ぎてしまえば機動六課が壊滅してしまう恐れもある。

ピンチに追い込まれたその時、桂がある事を思い出した。

「そう言えば・・・・その女王は何やら体全体が赤かったような・・・」

桂がそう言うと、フェイトが何かを気づいて指を刺す。

「ねぇ・・・・あのゴキブリって、なんか赤いけど？」

フェイトがそう言うと、銀時達はフェイトの指を刺した所に注目する。

そこには背中に『五朗』っと書かれてはいないが、全体が赤い奇妙なゴキブリがいた。

そして、銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠は眼を光らせて素早く飛び出す。

「そこかー！」

木刀、傘、刀、ボード、クナイを同時に投げるが、女王は素早く飛んで隙間の穴から入り込んで逃げ出す。

「さっきのが女王だー！にがすんじゃねぞー！」

「ぶっ殺してミッドチルダを守るアルー！」

「オオォォォォォォォォォォォォォォ！」

銀時達は扉を開けて隣に逃げ込んだ女王を追うかのようにこの部屋を後にした。

しかしこのときの銀時達はまだ気づかなかった。

それはヴィータがいつの間にかいなくなっていた事である。

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生ー！」

銀八
「ええ，新年明けましておめでとう。今年も『銀八先生コーナー』をやります。そしてアシスタントはもちろんこの人、フェイト・テスタロッサです！」

フェイト
「こんにちは皆さん今年もよろしくお願いします」

銀八
「んで最初の質問するぞ。ペンネーム『アグニ』さんからの質問。『神楽の番傘から出るマシンガンや、エリザベスのキャノン砲は俗に言う質量兵器ではないでしょうか。そんな物を持っている人が機動六課に所属（？）していて大丈夫なのでしょうか？』・・・ずばり、これはフェイトにお答えさせていただきます」

フェイト
「まぁ・・・大丈夫じゃないかなぁ？（苦笑）」

銀八
「っと言う答えです。と言う訳で、『アグニ』さん。以前名前を間違えて悪かったな。だから廊下に立たなくて良いぞ？んで次ぎ行く

ぞぉ。ペンネーム『カラー』さん。『ヴィータ達スタイルが可哀想な人達に、もし、なのは達みたいなスタイルの良い人達と体型を入れ替える装置、薬があったら買いますか？』・・・・そりゃ九兵衛があんだけ胸の大きさに嫉妬しているから買うだろう？」

フェイト
「まぁ・・・そうかもね（苦笑）」

銀八
「と言う訳で、『カラー』さん。全国の貧乳娘に謝りなさい。次ぎぃ。ペンネーム『虚空』さん。『銀さんが、もしキャロにまで傷もの（●い的に）（笑）にしたらどんなことが予想されますか？』・・・ずば」

フェイト
「プラズマ・スマッシャー！！！」

銀八
「りっぎゃあああああああああああああああああ！！」

金色の閃光に飲み込まれた銀時は黒こげになる。

フェイト
「『虚空』さん、永遠に廊下に立っていなさい！！！／／／／」

顔を真っ赤に染めて怒鳴るフェイト。

フェイト
「・・・・じゃあ、最後の質問です。ペンネーム『正宗の胃袋』

さんの質問。『銀時が「今夜は寝かせないぜ？」って言われたらどうします？』・・・・・」

質問聞いた後、フェイトは黙り込む。
何かを妄想して顔を真っ赤にしていき・・・・

フェイト
「ぶぉおおお

第二十九訓：黒く足が多い生き物は、大抵は誰でもメッチャ怖がる（後書き）

最恐の宇宙生物、再臨！

フェイト達、絶叫の連発！

そして意外な真実が明らかに！

銀時

「次回！『生き物は皆、無闇に殺してはいけない！』！今年も新しく向かってテイクオフじゃあああ！」

第三十訓：生き物は皆、無闇に殺してはいけない！（前書き）

最凶の天敵に乙女達は絶叫。

そしてヴィータの行方は！

意外な人物が登場！

キャロ「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』、始まります。」

第三十訓：生き物は皆、無闇に殺してはいけない！

突如現れた肉食怪虫ゴキブーリが現れて銀時達は大ピンチ。

彼等が残された手段はただ１つ。

それは元である通常のゴキブリ並の大きさをしている女王を削除する事である。

一刻も早くしなければ地球の崩壊危機になる。

銀時達は一時、女王を探す為に数多くの部屋を探している中、地獄のような悪夢が繰り広げられるのである。

「ぎゃあああああああああああああ！！！」
「来るなァァァァァァァァ！！！」
「ヘルプミーーーーーーーーーー！！！」

フェイト、アルフ、神楽は全力疾走で涙を流しながら追いかけてくるゴキブーリから逃げている。

「いやぁあああああああああああああああああああ！！！」
「こっちにこないでエエエエエエエエエエエエエエ！！！」
「誰か助けてエエエエエエエエエエエエエエエエ！！！」

違う場所でもスバル、ティアナ、シグナムも全力疾走で涙を流しながら追いかけてくるゴキブーリから逃げている。

これこそまさにフェイト達が今までの突如のアクシデントの中でも悪夢的な事件であった。

ゴキブリになれていない以上に女はとにかくゴキブリが大の苦手であった。

これだけは何処の世界に言っても同じである。

しかし、巨大ゴキブリに恐れずにエリオとザフィーラはゴキブーリを返り討ちにしている。

「邪魔だぁーーーーー！」
「どけぇーーーーーー！」

2人とも女王を探すのに必死であった。
しかしゴキブーリを殺してはいない。
なぜなら銀時と神楽の情報では、ゴキブーリは肉食であり、人を襲いだすこともあるが、殺すと仲間を呼ぶと言う大変な事が起こるのである。
だから2人はあくまで殺さず吹飛ばして気絶させる程度にしている。

「ザフィーラさん！そっちは！？」
「だめだ！全然見つからない！とりあえず二手に分かれよう！」
「はい！」

2人は左右に分かれて女王を探すのである。

＊

一方の桂とエリザベスは一匹のゴキブーリを攻撃しまくっている。
刀やデバイスを使っているが、魔法攻撃はしないで打撃攻撃をしまくっている。
それは殺してはいけないと言う理由があるからである。

「邪魔だー！」
『どけやボケがァ！』

桂の峰打ちとエリザベスのボートによる攻撃が炸裂してゴキブーリを吹飛ばす。
そしてバリアジャケット状態のはやてが桂とエリザベスに近づく。

「桂さん！エリー！無事ですか！？」
「八神殿、心配及ばぬ。気絶させているだけだ。だが、妙な事に先ほどからヴィータ殿が見当たらない」
『まさか・・・・すでにゴキブーリに？』
「だ・・・大丈夫や・・・ヴィータはそう簡単にはしなへんし・・・それにいくらなんでも・・・」

ベエェ！

すると気絶しているゴキブーリは口からゲロと共にヴィータが頭に付けているバリアジャケットの帽子を吐き出す。
これを見た桂、エリザベス、はやての3人は・・・・・・

「ヴィータァァァァァ！」
「天誅を下す！」
『出せェェェェェェェ！！てめっ出せゴラァァ！！』

3人は思いっきり刀、ボート、杖で思いっきり攻撃をしまくって殺しだす。
ゴキブーリは悲鳴を上げてしまって絶叫して息絶える。

「思い知ったかゴキブーリめ！」
「ヴィータ・・・仇は捕ったよ」

桂は刀をしまい、はやては涙を吹き出す。
そしてエリザベスがしまったと言う顔でボートを出す。

『あのう・・・殺してしまって良いのですか？』
「あ・・・」

思わず声が出て2人の声が重なりあう。
そして後ろを恐れながらゆっくりと見ると・・・そこには大量の地面が見えないほどに埋め尽くされたゴキブーリの群れが桂達に近づいてきている。

＊

「っと言う訳だ」
「うち等とした事がついかっとなってしまって・・・本当に御免な」
『イヤー、やっちゃいました』
「どアホーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！（激怒）」

謝罪する三人に銀時、スバル、神楽、ティアナ、月詠、アルフ、シグナム、エリオ、ザフィーラ、そしてヴィータは涙を流して怒鳴りだす。
実はヴィータはゴキブーリに食べられてはいない。
たんに帽子を落として単独行動をしていただけであった。
あの帽子は偶然にもゴキブーリに飲み込まれただけである。

「何てことをしてくれたんですか！」
「そのせいで女王を探すどころじゃなくなったじゃない！」

スバルとフェイトは額に青筋を浮かべて怒鳴りだす。
銀時達は機動六課部隊長オフィスで一度に集まって大勢のゴキブーリを駆除している。
銀時、フェイト、桂、スバル、シグナム、エリオ3人は木刀、『バルディィッシュ』、日本刀、『ティルヴィングエア』、『レヴァンティン』、『ストラーダ』などで次々と斬り倒す。
月詠はクナイをひたすら投げ続けて串刺しにする。
神楽、エリザベス、ヴィータは傘、ボート、『グラーフアイゼン』を振って吹飛ばして砕く。
アルフ、ザフィーラは人型になって思いっきり殴り飛ばす。
はやては『氷結の息吹き（アーテム・デス・アイセス）』でゴキブーリを氷付けにして粉々にさせる。

「ちぃ・・・倒してもキリがない！」
「女王を探したいのは山々だが、この数では探しようがない！」

シグナムとザフィーラも次々と増えてきているゴキブーリに苦戦する中、左側の壁が大爆発する。

「！！！！」

銀時達も注目してその爆破した後を見ると・・・・

「にゃあああああああああああああああああ！！！！！」
「ゴキブリいやですぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！」
「誰かぁあああああああああああああああ！！！！！」

そこからは、涙を流しながら逃げているなのは、リィンフォース、リィン、キャロ、フリード、シャマル、ユーノ、九兵衛がいた。

「な・・・なのは!?」

フェイトはなのは達に気づくとその名を言い出し、なのは達は銀時達に走って駆けつけるとなのはとリィンフォースが銀時に抱きついてくる。

「ふぇえええん!銀さぁ～ん!」

「銀時ィィィィ!ゴキブリ怖いよぉ～～～～!」

どさくさにまぎれて銀時に甘える2人に銀時は顔を真っ赤にして動揺し、フェイト、スバル、ティアナ、シグナム、アルフはそんな2人を銀時から引きずりはなす。

「銀時!何でゴキブーリがこの世界に!?」

九兵衛もあり得ないほどに青ざめて説明する。

以下に男として育てられたとは言え、女である為ゴキブリは苦手である。

「わからねぇ!唯言える事はどっかの馬鹿がゴキブーリの女王をつれてきたようだ!見つけたら唯じゃおかねぇが、その前にこの状況を何とかしねぇえと・・・・ああ!」

銀時の眼にはさらに勢い良く多く現れたゴキブーリが共食いし始めた光景である。

「いゃあああああああああ!!とととと・・・・共食いィィィ

ィィィ！？」

リィンフォースは絶叫して気絶して倒れる。
それに続くかのように、なのは、ティアナ、リィン、キャロ、シャマルは気絶して倒れる。

「なのはさん！ティア！皆ァァァ！」

スバルは倒れた失神して倒れたなのは達に驚きだす。

「あ・・・あかん・・・もう魔力が！」

はやても魔力の限界が来て倒れるところ、桂にもたれつく。

「八神殿！？大丈夫か？」
『無理したらヤバイですよ！』
「私・・・もう限界な」

はやてはリタイヤしてしまった。
そして次々とゴキブーリを倒していくシグナム、アルフ、ヴィータ、ザフィーラ、九兵衛、ユーノは囲まれた。

「多すぎてきりがねぇ！魔力も限界に近づいてきている！」
「むしろ敵が多く増えているようだ！」
「倒してもきりがなさ過ぎるよ！」
「いくらなんでもここまで多いとは？」
「く・・・ここまでなのか！？」
「こんな所で・・・」

体力の消耗が激しく、６人は今でも倒れ掛かりそうである。

一方の神楽、月詠、エリオの3人もゴキブーリに囲まれた。
神楽の傘に装填された弾丸も尽きて月詠のクナイもなくなりだした。
弾のない傘と2つの小刀を構えているが、2人の体力も限界に来ていた。

「ツッキー。大丈夫アルか？」
「そうじゃないようじゃ・・・・そろそろ体力の限界も来ている・・・？」

限界に近づいてきている2人に5匹のゴキブーリが襲い掛かる中、エリオが『ストラーダ』を構えだす。

「ルフトメッサー！」

エリオは自身の魔力を用いて周辺の空気を圧縮・加速させ、『ストラーダ』を何度も振り、空気の刃として飛ばすと襲い掛かるゴキブーリを全て切り裂く。

「エリオ！」

神楽と月詠はエリオの名を言い出すと、エリオはゴキブーリを睨みつける。

「二人には近づけさせない！神楽さんも月詠さんも、僕の手で守ってみせる！」
「！？／／／」

そう言うと神楽と月詠が顔を真っ赤に染める。
だが、今のをキャロに聞かれたら絶対にエリオは地獄を見るようで

ある。
そのため、それを見たフリードはエリオの為にキャロには黙っておく。

銀時、フェイト、スバルは次々と襲ってくるゴキブーリを斬り倒していく。

「くそぉ！次々と出てきてキリがねぇ！」
「もう１０００匹以上は倒したのに・・・・」
「全く減らないですよぉ！」

次々と増えてくるゴキブーリに弱音を吐き始める銀時達。
先ほどよりゴキブーリがぞくぞくと増えているからだ。

「ちぃ・・・如何すれば良いんだ！」

徐々に絶望に近づいてきたその瞬間であった。
突如、ゴキブーリが息絶えてきた。
次々と死んでいくゴキブーリに銀時達は唖然とする中、１人の男が現れた。

「いやー、まさかこんな大事になっていたとはのう・・・じゃが安心せい！女王はワシが駆除しといたぜよ」

その男はボサボサした髪に洋服にサングラス、下駄を身に付けている気軽そうな男であった。右手には女王を串刺しにしたナイフを握っている。その男を見て銀時と桂は驚きだす。

「お・・・お前は！」

「辰馬!?辰馬じゃないか!」

銀時と桂は辰馬を見て驚きだす。

2人を見た辰馬は懐かしそうに銀時と桂を見る。

「おおー、金時にヅラァ!こんな所で会うとは思いもよらなかった!」

辰馬は両手を2回叩いて愉快そうに言い出す。

「酒じゃあ!酒をたっぷりと持ってこ・・・・」

言いかけた途中で銀時と桂に思いっきりぶん殴られて倒れる。

「だからぁ、いつも言っているだろうがー!金時じゃなく銀時だ!」

「それにヅラじゃない桂だぁ!」

辰馬をボコボコにしている銀時と桂を見てフェイト達は唖然とし、神楽とエリザベスは辰馬のボケっぷりに呆れだす。

そしてスバルは恐る恐ると聞き出す。

「あのう・・・銀さん、この人の知り合いですか?」

「ただの腐れ縁だ!・・・・この馬鹿は坂本辰馬(さかもとたつま)!大富豪の息子で、現在は星間貿易業『快援隊』を営みながら、気ままに大宇宙を渡り歩いている馬鹿で・・・俺達と同じ攘夷志士の1人だ」

銀時がそう言うと、フェイト達は「えええぇ〜〜〜〜〜〜!!」っと驚きだす。

「いやー、それにしてもこんなにも大勢の別嬪さんが大勢おるとわ

なぁ・・・ここはどこの惑星じゃ？」
「そう言えば、辰馬はこの世界の存在を知らないようだな・・・・
実はな・・・・」
桂は辰馬にここがどの世界であるかを言い出す。
『魔法少女リリカルなのは』の世界であり、しかも二次元ではなく
『リリカルなのは』と全く同じ存在である実際に存在する世界であ
った。
始めはなのは達も自分達はアニメキャラであると思っていたが、ま
さか実際の人物である事に驚きだす。
そして、高杉もこの世界に来ていることには驚きを隠せなかった辰
馬。
「なるほどの～・・・・高杉が・・・・よっしゃ！ここであったの
も何かの縁じゃ！わしも力の限り金時達のちからになったる！」
「だから銀時だと言っているだろうがー！」
ドカァ！
「ごるふぇあああ！！」
銀時は額に青筋を浮かべて木刀を負って辰馬を吹飛ばす。
怒り出している銀時にフェイトは抑える。
「ぎ・・・銀時・・・いくらなんでもそこまでは・・・・・」
「あ・・・辰馬さんがここにいるって事は・・・・辰馬さんも光に
飲み込まれてこの世界に？」
はやてがそう言うと、辰馬がどうしてここに来たのかを思いだす。
九兵衛やスカリエッティに保護されている近藤もその光に飲み込ま

れてこの世界に来たのだから。

「そうじゃったー！わしもなんかゴキブーリに襲われてのう・・・・激戦の中に女王を見つけたもんやし殺虫剤で駆除したろうと思ったんじゃが、ゴキブーリの女王をかごの中に入れて捕獲したんじゃ。そのまま一気に殺虫剤をかけてやろうと思ったんやが、なんか変な光が現れて興味を持って入り込んだらこの世界に飛ばされてのう・・・・んでうっかり女王をかごから出して・・・・そんで探していたら偶然にもこの場所に迷い込んで女王が見つかり、今度はナイフで串刺してやったまでよ。あっはっはっはっはっはっはっは！」

「あんた、今何つった？」

「いや・・・じゃからわしもゴキブーリに襲われ・・・・あ」

言ってはならない事を言ってしまった辰馬は我を帰って振り向くと、そこには怒気と殺気が大量に放っている銀時達に囲まれている。青ざめて大量の汗をたらしている辰馬は「あ・・・あはははははははははは！！」っと笑うしかなかった。

「いっぺん地獄に堕ちろやァァァァァァァ！！」

「オオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

銀時達は一斉に襲い掛かって辰馬をフルボコにする。

「あらァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

ボロボロになった機動六課オフィス内に辰馬の悲鳴が響き渡るのである。

銀八
「教えて！」

生徒全員
「銀八先生ー！」

ヴィータ
「えー、今回のアシスタントは私がするぞ。貧乳言ったらそくぶっ飛ばす！」

銀八
「えー、じゃあ行くぞー。最初の質問はこの人。ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『黒神先生は定春とフリード、どっちが好きなんですか？』ずばり答えます。出番が全然ない定春を考えてみれば、間違いなくフリードが好きでしょう」

ヴィータ「お前・・・なんて答え方をするんだ？」

銀八
「っと言う訳で、『烈火竜』さん、最近定春はイラだっているので、教われたら全力疾走するように！んでぇ。次ぎいくぞぉ。ペンネーム『アグニ』さん。『ルーテシアにとって、近藤に出会ってプラスになったこととマイナスになったことはなんですか？』・・・・では、ルーテシアさん、どうぞ。」

ルーテシア
「どちらでもない・・・。」

ルーテシアがそう言うとしばらく沈黙になる。

銀八
「っと言う訳で『アグニ』さん、ルーテシアにとってゴリラはプラスやマイナスでもないようです！次行こう。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『今年も銀時はリリカルの世界でいろんな女性を調きょ・・・もとい何人の女性を口説いたり墜とすのですか？』」

ヴィータ
「アイツ・・・まだ女を落すのかよ・・・・まぁ、その時はそのときじゃねぇの？」

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい。」

ヴィータ
「次ぎ行くぞ？ペンネーム『カラー』さんからの質問。『最近空気なフェイトさんとスバルさんに質問。なのはさんはお母さんと美味しく？頂くみたいですが、プレシア、ギンガが銀さんに惚れたら、譲りますか？奪いますか？それとも一緒に美味しく？頂きますか？ちなみに譲るとなるとフェイトはお父さん、スバルはお兄さんになるわけですがそこんとこはどうでしょう？』ってどういう質問の仕方をするんだー！！／／／」

銀八
「なぜ俺ぇ～～～～～～！！」

ヴィータは思わずグラーフアイゼンで銀八の頭を叩いた。

ヴィータ
「・・・まぁ、なのはがそうするからフェイトやスバルもそうするんじゃねぇか？つぅ訳で『カラー』さん、廊下に立っていろ！」

銀八
「あいたたた・・・次ぃ。ペンネーム『加藤勇』さん。『銀魂組、リリカル組に質問みんなはとらいあんぐるハート3を知っていますか？』」

ヴィータ
「いや、知らない」

銀八
「即答かよ!?・・・と言う訳で『加藤勇』さん、廊下に立っていなさい。次も行くぞ。ペンネーム『虚空』さんの質問。『ティアナとスバルに、銀さんの数々のラッキースケベシーンを見せたらどうなります？』って間違いなくど突かれるだろ！」

ヴィータ
「お前も即答じゃねぇか！・・・まぁ良い。と言う訳だ。『虚空』さん、廊下に立っていな。」

銀八
「最後の質問。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さんからの質問。『１．土方のマヨラーぶりをなのは達が見ればみんな引きますか？２．新八のアイドルオタクぶりをなのは達が見れば絶対引きますよね？』・・・どっちとも引くだろ？絶対？」

ヴィータ
「ってな訳だ。『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていろ！」

第三十訓：生き物は皆、無闇に殺してはいけない！（後書き）

坂本辰馬が新たな仲間に！

ご馳走に寿司！？

またもや反乱が起こる！？

ユーノ「次回、「寿司を握るんだったらちゃんと手を洗うべし！」テイクオフ！」

第三十一訓：寿司を握るんだったらちゃんと手を洗うべし！（前書き）

舞台はすし屋！

久し振りの依頼。

スバル、エリザベス、月詠、はやてが大活躍！？

辰馬

「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まるぜよ」

第三十一訓：寿司を握るんだったらちゃんと手を洗うべし！

坂本辰馬がミッドチルダに来てから2日間が経った。
機動六課は元に戻って，早速万事屋の依頼が来た。
その依頼人は寿司職人であるそうである。

そして場所はミッドチルダのとある回転寿司。

そこに銀時、フェイト、桂、スバル、神楽、月詠、アルフ、ティアナ、はやて、エリザベス、エリオ、リィンフォース、ヴィータ、辰馬が客席に座っていた。
そして店長はサングラスを賭けていて髪が白髪である。
その人物こそが、今回の依頼人の関口宗汰（せきぐちしゅうた）である。

「イヤー、わざわざ来てくれてありがたいねぇ。依頼は言うまでも無くつい最近客が少なくなってて・・・何が原因なのか分からなくて・・・」
「って，今回は客を寄せ集めてきてこの店を行列にするほど人気店にして欲しいって訳か？・・・まぁ良いぜ。とりあえずまずはアンタの寿司がどんなのかを見せてもらおうじゃねぇか」
「確かに，店は綺麗だしちゃんとしっかりとしている。っとなると問題は寿司か・・・・」

銀時とフェイトは問題は寿司にあると考える。
それには桂達も同感である。

「同感だな。店長殿、すまぬがお主の寿司にどのような物か見せてもらおう」
「確かに見た眼が良くても味に問題ある料理や美味しくても見た眼

が悪すぎる料理もありますしね」
「そやな。ウチはこう見えても味覚には結構な自信があるんやで♪」
「それに、回転すしは時間が経つと美味しくなくなるのもあるし、人気店にするには相当に難しいと思うわ」
『味と見た目にバランスあり！』
桂、スバル、はやて、ティアナ、エリザベスも銀時とフェイトの意見に賛成する。
「それに、久し振りの寿司だしね。ジャンジャンと食べられるチャンスだしね♪」
「もう、アルフったらはしたないですよ」
アルフに注意するリィンフォース。
神楽は大喜びである。
「きゃほー！久し振りの寿司ある！ジャンジャン食いまくるね！エリオも遠慮なく食うと良いね！」
「はい♪」
「主ら・・・依頼である事を完全に忘れておるんな」
ワクワクして楽しむ神楽とエリオに月詠がツッコみだす。
「あはははははははは！わいも寿司を食うのも久し振りさかい・・・ジャンジャンと持ってくるぜよ！」
「お前は気楽ていいよな」
鋭い眼線でヴィータは辰馬を見る。
実は辰馬だけが銀時達の依頼仕事に勝手について来ているのであった。

そして回転寿司が回りこんできた。

「あ・・・カッパ寿司」

「ふーん、まずは前菜って感じだね？」

スバルとティアナはそう言うと、はやてとヴィータはカッパ寿司を取って食べ始める。

「う～ん、普通って感じやな？」

「きつすぎる訳でもなく、凄すぎる訳でもない・・・どっちかと言うと美味くも無くて不味くもないって奴かな？」

味の感想を言い出す2人に月詠とリィンフォースはジーっと見つめる。

「形に問題はありません。むしろ綺麗に切られて食べやすくしています」

「確かに，形だけはちゃんとしているようじゃ」

見た目は合格点である。

「まぁカッパ寿司は大丈夫として，次はぁ・・・・」

良く見ると、さっきからカッパ寿司しか回ってこない。

いくら待っても現れるのはカッパ寿司だけであった。

「沙悟浄かァァァァァァァァ俺（私）（僕）達はァァ！？（激怒）」

『なめてんのか、ごるァァァ！！！！』

怒り出した銀時に続いて、フェイト、桂、スバル、ティアナ、はやて、アルフ、エリザベス、エリオ、ヴィータが怒り出して宗汰にど突きだす。
月詠、リィンフォース、辰馬は唖然として突っ立っている。

「カッパ巻きがガンダーラまで続くってどういう事ですか！」

普段は滅多に怒らないフェイトでもこればかりは我慢ならなかった為、額に青筋が浮んでいる。

「何ケチっているんですか！」
「トロ出せェ！ウニ出せェ！」

エリオも神楽も怒りが大爆発である。

「何のためにあんたの依頼を受けたと思っているの！？まさか私達に嫌がらせする為じゃないでしょうね！」

倒れている宗汰に『クロスミラージュ』を構えているティアナ。
そして涙を流しながら宗汰は言い出す。

「カッパしか・・・握れねぇーんだ・・・俺・・・本当はまだ寿司は握れねーんだよ」
「はぁ！？」

宗汰は本当の事を話し出す。
実は自分は店長ではなくて唯の店員であった。
本当の店長は病で入院中だが明日にかえって来るそうである。
客に問題は無かったが、問題は寿司マシーンって言う機械があったのだが、昨日間違えて地面に強く叩きつけるかのように落としてし

まい、壊れてしまったのである。

「もうすぐ開店の時間だって言うのに・・・このままじゃここは、まるでダメなお寿司屋、通称『マダオ』になってしまう！本当の依頼は2つあるんじゃが・・・・」

「1つはその機械の修理じゃのう？そんでもう1つの依頼って・・・もしや・・・・」

辰馬は本当の依頼が何なのか理解する。

「そう・・・もう1つの依頼って言うのは・・・・・今日一日，俺と一緒に寿司を作ってくれぇ！」

「何ィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！？」

＊

調理場

そこには宗汰と店員の衣装を着ている銀時、フェイト、スバル、ティアナ、神楽、月詠、はやて、アルフ、エリザベス、エリオ、リィンフォースがいた。

しかし桂だけは何やらレストランの店員のような衣装を着ている。

辰馬とヴィータは何故か店員役をしていた。

ちなみに月詠は煙管を加えていなかった。

さすがに調理場で煙はヤバイと確信したのである。

「まぁ、回転寿司に誰もそこまで完成度もとめてねーし、上にネタが乗ってて形さえ取り繕ってりゃなんとかごまかせるしよ」
「確かにそうやな」
「ここは直接客の前で握る訳じゃないからごまかせられるし・・・素人の私達も何とかなるんじゃない？」
宗汰の言う事にはやてとアルフも感心する。

「宗汰さん、すみませんけど最低限だけでもシャリの握り方教えてください」
「カッパ寿司しか握れなくても、形だけは親方さんを見て知っていそうですし」
フェイトとリィンフォースは寿司の握り方を教えてもらう事を要求する。

「よっしゃ！見よう見マネだが・・・見ててくれ！」
そう言うと宗汰はシャリを握りだす。

「まずシャリを取る。この時あまり取り過ぎないように気をつけてくれ。強すぎず弱すぎない加減で片手で空気を含むように握るのがポイントだ」
そして宗汰はもう片方の手でわさびを付け、次にネタであるマグロを乗せる。

「わさびを付け、ネタを乗せる。ひと握り。」
握りだして完成したのは、マグロ寿司・・・・ではなくカッパ巻き

であった。

「完成だ」

「何でだよォォォォォォォォォォォ！！」

思いっきりあり得ない感じで銀時はツッコみだす。

「何であそこからカッパ巻きが完成するのよ！」

「今カットの間に何があったのですか！？」

ティアナとリィンフォースは額に血管を浮かべてツッコみだすと、宗汰はしゃがみだす。

「ダメだ・・・俺、やっぱりカッパ巻きしか作れねぇ！！」

「今，思いっきりマグロを乗せていたじゃない！何できゅうりに変わっているのよ！！！！」

どうしてマグロがきゅうりに変わったのか理解できないティアナ。

スバルはこう感じた。

「もしかして先祖が河童を殺して呪われたりして・・・・」

苦笑して言い出すと誰もがそう感じる。

それとは別に宗汰のやり方を見てアルフは寿司の握り方を覚える。

「でも雰囲気だけは伝わったよ。形だけなら何とかで競う出し」

そう言ってアルフはシャリを握り始める。

「空気を含むように握り、わさびを付ける。ネタを乗せて一握り」

わさびを付けて、マグロのネタを乗せた後に一握りし、そして完成したのは・・・・グジャグジャとなったマグロとシャリであった。
マグロはネギトロ状態である。

「・・・あれ？」
「あれじゃないでしょうがァァァァァァァ！！なんで一握りしただけでこんなにもミンチ状態になるんですか！？ドンだけ力を入れたんですか！？」

さらにツッコみだすティアナにどうしてこんなになったのかを疑うアルフは唖然とする。

「テメェら、素人のくせに色気づきすぎなんだよ」
「我等は不味くても形さえ繕えば良い」

そう言って銀時と桂はシャリを握ってわさびを付けてネタを載せて一握りすると・・・何故かパフェとかけそばになった。

「ほら」
「形を守れェェェェ！」

さらにティアナがツッコみだす。

「これほとんど寿司じゃないわよ！兄さんも桂さんも完全にやる気ないでしょ！完全にサイドメニューじゃない！」

あり得ないばかりにツッコむティアナに銀時と桂は言い出す。

「文句を言う前にまず食べてみてください」

「同じことを言えるでしょうか？」
「食べないわよ！何パティシエ試験みたいなカンジかもしているのよ！」

銀時と桂のパティシエボケに呆れてツッコむティアナ。

「じゃあ、桂さんのかけそばと銀ちゃんのパフェはサイドメニューに回すとしよっか♪」
「肝心な寿司は如何するの！？」

はやてがそう言いだすとフェイトがツッコみだす。
そして神楽とエリオが何かを作っているかのようにしている。

「神楽、エリオ・・・何をしているのじゃ？」

月詠が聞き出すと、神楽とエリオは振り向く。

「ん？エリオと一緒に寿司を作っているネ」
「どうでしょうか？」

2人が作ったのは、まさに立派な寿司であった。

「おおー、こいつは見事な寿司じゃ！」
「すごいじゃないか2人とも！これどう見ても寿司じゃないか！」
「見た目も良いし凄くおいしそうですよ！」

月詠、アルフ。リィンフォースは感心するかのように言い出す。
その寿司は通常の大きさではなく・・・・・調理場の場を大きく埋め尽くしそうなカンジにある寿司である。

「これなら行けそうやないか♪」
「いや、デカ過ぎでしょ！！」

額に血管を浮かべて怒鳴りだしてツッコむティアナ。

「え・・・エリオ、神楽・・・こんな大きいマグロの切り身をどこから持ってきたの？」
「前からの夢だったんです」
「でかい寿司をかぶりつくのネ」
「あんた等の為に作っているんじゃないのよ！こんなの食べられる人はどこの世界にもいないんだよ！」

苦笑しながらフェイトが質問すると、神楽とエリオがそう答えてティアナが大きくツッコみだす。
その後も、フェイト、ティアナ、リィンフォースもやったが、何故か不器用なのか形になれずに完成する時間もかなりかかる。
己の無力さにショックを受けるフェイト達に、辰馬の声が上がった。

「えー、大トロ、エビ、鯛、そんで蛸が入ったぜよ！」

そう聞くと宗汰は慌て始める。

「どうすんだよ！まだカッパ巻きにチョコパフェ、そしてかけそばしか出来てねぇよ！」
「あのサイドメニューも出す気なの！？」

宗汰の言う事にツッコむティアナ。
すると・・・・

「あのう、今度は私がやって良いでしょうか？」

『自分もやります』
「まぁ、仕方がないか」
「こんなときこそウチの出番や！」

スバル、エリザベス、月詠、はやてが手を上げる。
はやては料理を作れるからわかるが、フェイト達は最初はスバル、エリザベス、月詠の3人が寿司を作れるのか疑っている。
しかし、銀時と桂はエリザベスならできそうな気がする。
戦闘力だけじゃなく器用であるため、もしかすれば寿司も作れるかも知れないと考える。

「まぁ、4人とも作ってみな」
「はい」

銀時がそう言うとスバルは返事をし、4人は台所に立つ。
すると、・・・スバルは眼にも映らない神速の速さで一瞬にマグロを作り出し、エリザベスは口から人間の両手を出し、寿司を握ってエビを完成させ、月詠とはやては2人と違って平凡的でそんなに早くないが、丁寧に握りだし・・・それぞれ鯛と蛸を作る。

「完成しました」
『出来ました』
「一応・・・こんなカンジじゃ」
「完成や」

「色々ちょっと待てエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

立派な寿司を完成させたスバル、エリザベス、月詠にフェイト、ティアナ、アルフ、リィンフォース、エリオがツッコみだす。

「スバル、何でアンタがこんな立派な寿司を握りだすのよ！？」
「いくら神速の剣術が得意からってそれはないでしょ！」
ティアナとフェイトはスバルのあり得ない器用さに言い出す。
「いやぁ、なんかもっと美味しい物を食べたいと言う思いで料理を習ったんですけど・・・以外にも慣れれば誰だって出来ますよ♪」
「屈辱的な事を言わないでよ！料理をまともに出来ない人が聞くと涙が出てくるよ！」
フェイトは涙を流しながらそう言う。
どうやらまだ出来ていないようである。
そしてさらに驚くべき事を聞き出してエリオが言い出す。
「ってエリザベスさんの口から人の腕が出てきましたよ！」
そう、エリザベスが口から人間らしき両手が出てきたことに驚いているのである。
これにはフェイト達が黙っていられない。
「これ思いっきり人形を被った人じゃないですか！完全に動物じゃないよ！」
「人じゃないエリザベスだ」
「絶対人ですよ！よくよく考えてみればそんな生き物絶対にいませんって！時々見えてくるおっさんらしき足は幻覚だったのかと思いきや、やっぱり人じゃないですか！」
「それは見間違いだ！」
「何でそこまで言えるんですか！」
フェイト、アルフ、リィンフォースは桂にエリザベスは実は人では

ないかっと疑いだす。
そして銀時と神楽は意外そうに月詠を見る。

「お前、寿司とか握れたっけ？」
「ツッキーもキャラ設定の崩壊アルか？」
「おい・・・まさか主らはわっちが料理できないとでも思ったか？・・・まぁわっちも最初は出来ぬ女じゃったが、日輪に料理の作り方を教わって、それで多少はできるようになったんじゃが・・・」
「多少ってレベルじゃないアル」

確かに月詠の寿司もスバル、エリザベスと並べられるほどの出来の良さであった。

「まぁ、見た目は良さそうだし・・・とりあえず出させてもらうぜ。オメェらもしっかり作ってろよ」

銀時はスバル、エリザベス、月詠、はやての４人にそう言うと、客席沿いに設置されたチェーンコンベアの上に４人の寿司を乗せる。

＊

そして客室には何故か、『●味しんぼ』に出てくる山●似と海●似がスバルの作ったマグロ寿司を取る。
そして１人で１つずつ取って、寿司を口に入れて食べる。
するとその味の感想は・・・・

「美味い！！！！」

2人をうならせた。

「何だここ新食感！今まで食べた事がない味だ！」
「ネタとシャリが絡み合うかのようにとろけて一心同体の如くの旨みを引き出し、力強い濃くさとあっさりとした味わい！何だこれは！？」
「寿司の革命だァ！」

予想以上の評判の良さであった。

さらにエリザベスのエビ寿司、月詠の鯛寿司、はやての蛸寿司も中々の評判であった。

「おい！俺にもそれをくれ！」
「自分も！」
「私も！」

客から予想以上の客からの注文にカウンターにいる辰馬とヴィータは驚きだす。

「な・・・なんだいきなり！？」
「あはははははは！どうやら金時達がなにかやらかしたようやのう♪」

＊

「奇跡ネ・・・・」
「奇跡が起こりました・・」

裏方の出口から神楽とエリオはそれを見て唖然とそう言う。
同じく銀時と宗汰は予想外の展開に唖然と驚く。
そして一世一代のチャンスに宗汰は希望を持った。

「いける！これはいけるぞ！姉ちゃん達、ジャンジャンと作れぇ！遠慮なく作れぇ！」
「はいィィィィィィィィィィィィィィ！！」
『合点承知！』
「この際、どんと来いじゃァ！」
「やったるわ！」

スバル、エリザベス、月詠、はやての４人はさらに寿司を握って作り出す。
特にスバルは、剣術で鍛え上げた神速の速さで次々と寿司を握り出す。
エリザベス、月詠、はやてはスバルについて行くかのように作り出す。

隣では、フェイト、ティアナ、アルフ、リィンフォースの４人が女としての敗北を味わって落ち込む。
桂とエリオはどう声をかければ良いのか苦笑しながら考える。

「おおー、飛ぶように皿がさばけられているぞ！」
「店の前も長蛇の列ネ！」
「来たァァァァァ！これ来たァァァァァァァァァァァァァァァ！」

結果は大成功だと思いきや・・・・

「大変だ！余りの客足に材料がつきかけているぞ！」
「何ィ！？」

桂がそう言うと、宗汰は壁を思いっきり殴って悔やむ。

「チクショウ！一世一代の大チャンスなのに・・・俺は所詮、まるでダメなお寿司職人・・・マダオなのか！？」
「行けよ」

宗汰に銀時が声をかける。

「アンタは何としてても、材料をかき集めて来い。それまで俺達がこの場をもたせてみせる」

銀時がそう言うと、落ち込んでいたフェイト、ティアナ、アルフ、リィンフォースの４人は立ち上がる。
桂、スバル、神楽、月詠、はやて、エリオも銀時も宗汰を見て任せるように見る。

「早く、行けェェ！」
「・・・・頼んだぜ！」

銀時達にこの場を任せた宗汰は走って店を出て食材集めに行く。
そして銀時は如何すれば良いのかを考える中・・・

コンコン

誰かが扉を叩く音が聞こえ、フェイトはその扉を開くと・・・・

「どうもこんにちは！親方様のご依頼の品物を届けてきました！」

「へ？」

何やら品を届けに来た漁師達であった。
そして車からマグロ、鯛、蛸、エビなど様々な海の幸のネタが着ていた。
それを見た銀時達は・・・・

「え・・・何このオチ？」

っと言うしかなかった。
実はこれは入院中のこの店の親方がもうすぐネタが切れると思って注文した物ばかりであった。
もちろんお金は先払いしており、銀時達はとりあえずこれで何とかすると作業に戻る。
銀時、桂、はやては魚をさばいて寿司が握れるようなカンジで切り出す。
それを、スバル、エリザベス、月詠は握りだして、神楽とエリオはその寿司が載せられた皿をチェーンコンベアに乗せる。

かくして無事に見せも閉まり、無事に依頼を為し遂げられた。
フェイト、ティアナ、アルフ、リィンフォースの４人は今回は役に立てなかった事に強いショックを受ける。
そんな４人に如何声をかければ良いのか銀時達は苦笑して考える中、辰馬が突然・・・・

「なに・・・外見が良くても中身はヤバイような存在は誰だっておるから、そんなに落ち込まな・・・・・」

ドカカカカカカカカカ！　グシャ！　ボキィイイイイ！

４人の逆鱗を触れてフルボコにされる始末であった・・・・

＊

「ウォオオオオオオオ！！！」

宗汰はイカダに乗って銛を握り、海から跳ねている黒マグロに飛び込む。

「待っていろ皆！今すぐに行くゥ！」

銀八
「教えて・・・・」

生徒達
「銀八先生！」

スバル
「こんにちは♪今回は私、スバル・ナカジマです♪今回はアシスタントをさせてもらいます♪」

銀八
「えー、じゃあ行かせて貰うぜぇ。最初の質問はこの人・・・・ペ

ンネーム『烈火竜』さんから。『黒神先生は騎士姿（いつもの姿）のシグナムとお姫様姿のシグナム（シグ子）。どっちが好みですか？』・・・ずばり答えます。この小説を作る作者の行動を考えて見ると、笑い的にまちがいなくシム子を選びますね」

スバル
「あれはあり得ないかったですよ」

銀八
「っと言う訳で、『烈火竜』さん廊下に立っていなさい。って次の質問。ペンネーム『アグニ』さん、『フェイトとなのは、スバルとティアナの友情は銀時が絡むのと絡まないのとではどのくらい違いますか？』・・・ずばり、スバルにお答えさせていただきます」

スバル
「えー？・・・そんなの・・・邪魔な存在は斬るような感じですよ♪」

銀八
「なんかさりげなくメッチャ怖いことを言っているんですけどー！『アグニ』さん、廊下に立たなくて良いから逃げてください！」

スバル
「じゃあ次行くよ♪ペンネーム『カラー』さんの質問。『なのはに出し抜かれたみなさんは、何か作戦とか考えてるですか？夜這いかけるなり、襲ったり、闇討ちしたり。』・・・それ良いかも／／／」

顔を真っ赤に染めて言い出すスバルに銀八は何故か銀時に憎たらしく感じる。

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に一生立っていろ」

スバル
「えー!?何でですか!?」

スバルの質問を無視して銀八は質問の答えを続ける。

銀八
「次ぃ。ペンネーム『ザクス＝ブレイク』さん。『銀さんらに質問です。ゴキブーリと屁怒呂様がいらしゃったらどちらの方が恐ろしいですか?』っと『屁怒呂様に質問です。ゴキブーリを駆除した銀さんらと共食いをしたゴキブーリら、どっち（または、両方）を「殺生は、いけない」と注意して差し上げますか?』・・・ずばりお答えします。間違いなく屁怒呂さんですね。そんで屁怒呂さんは間違いなくそう言います」

スバル
「先生、屁怒呂さんってどんな人物ですか?」

銀八
「いずれ分かる・・・っと言う訳で『ザクス＝ブレイク』さん、廊下に立っていなさい。んで次が最後ぉ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『腐れ天パの銀八先生は、ちん○は童貞なんですか?』・・・・・って答えるかぁーーーーーーー!」

銀八先生は怒りだして思いっきり質問を地面に叩きつける。
それを見たスバルは唖然として呆れてしまって黙りだす。

銀八
「『正宗の胃袋』、永久に廊下に立っていろぉー！」

第三十一訓：寿司を握るんだったらちゃんと手を洗うべし！（後書き）

ある特殊な大会が開催された。

その名も『魔導競争大会』。

優勝を目指す為になのは達が立ち上がる！

ザフィーラ

「次回、「優勝賞金が出れば大抵の参加者はやる気が出る」、テイクオフ」

第三十二訓：優勝賞金が出れば大抵の参加者はやる気が出る（前書き）

最新編開催！

ナンバーズ、聖王教会、プレシア、ゲンヤ登場！

そして機動六課とナンバーズが大会に！？

近藤「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まるぞ！」

第三十二訓：優勝賞金が出れば大抵の参加者はやる気が出る

聖王教会の前

そこには金髪の女性が中心に立っていた。
その人物こそ，聖王教会の騎士カリム・グラシアである。

そしてカリムの前に、銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠、九兵衛、辰馬、機動六課のメンバーはもちろん、真撰組局長ごと近藤勲、指名手配半にされているはずのスカリエッティにルーテシアにアギト。
そしてナンバーズ達が来ている、

「おい・・・なんで私達がこの場所にいるんだ?何で初登場がこんな敵の奇襲とはほど遠い存在なんだ?」

何で自分達がこの場所に存在するのかと考えている、戦闘スーツを着た赤髪の少女、ノーヴェが言い出す。

「仕方がないですよ～。なんかこの小説の作者が私達を悪役扱いするのがめんどくささそうに言い出すから、なんか犯罪者扱いされていないですようですよ」

っと、眼鏡をかけた女性であるクアットロが言い出す。

「はぁ?何を考えているんだあの馬鹿作者は?」
「まぁ、それもしょうがない。作者も色々と考えているんだろう。」

呆れて言うのは他のナンバーズとは違って衣装が隊長服のような雰

囲気をしているウーノ。
ナンバーズの姉的な存在である。

「それに・・・妹達もあの様子だしね」

ウーノはそう言うと、隣に顔を向く。
そこには銀時達に近づいて尊敬する眼で見るセイン、セッテ、ウィンディ、ディードは銀時と話をしていた。
チンクは隠れながら遠くから顔を真っ赤にして銀時を見ていた。

「本物の坂田銀時だぁ！」
「すごいっす！まさか本当に会えるなんて！」
「魔法を使わずに剣だけで、数多くの事件を解決は本当ですか？」
「是非、その剣の実力見せてください！」

メッチャ尊敬しているようである。
彼女達の尊敬する眼線に銀時は少し照れて如何すれば良いのか戸惑っている。

「え・・・何この歓迎？マジ・・・ちょ・・・嬉しいのか恥ずかしいのかどっちなんだろう？」

自分がいた世界とは大違いな歓迎振りに銀時は慣れていないのか如何すればいいのか分からないのである。
自分はただの万事屋だが、この世界の人物から見れば銀時はオーバーSランクであるゾーマを倒した英雄的な存在である。
その光景に、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースはどす黒い殺気・・・じゃなく嫉妬心を燃やしていた。

「また銀時につきまとう害虫が増えたわね・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「敵じゃなかったら駆除してやるんだから・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「斬りがいがありますね・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「脳にでっかい穴を開けてやろうかしら・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「甘ったれた顔面を殴り飛ばしてやろうかい・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「命の欠片も残さん・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「銀時と合体できるの私だけですから・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「ちょ、何だあの七人!?」
「怖ァァァ!!」

ノーヴェとクアットロはフェイト達のどす黒い嫉妬心に恐怖を感じた。
他のナンバーズはもちろん、隣にいる神楽、月詠、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィン、ユーノ、九兵衛、辰馬もガタガタと震えて怖がっていた。
しかし桂とはやてだけは笑っていた。

「なぁ・・・2人はどうして笑っていられるんだ?あの7人の何が面白いんだ?」

長身で他のナンバーズよりも頭一つ分大きいナンバーズの1人であるトーレは桂とはやてに聞き出す。

「うむ、より争奪戦が大きくなるようで面白いからな」
「それに銀ちゃんがこの後大変な事になるしな・・・想像するだけでワクワクしてしまうんや♪」
「お前達2人は最悪だな、オイ！」

2人の腹黒さにツッコむトーレ。

「近藤・・・どうしてあの人達は怒っているの？」

ルーテシアは近藤にフェイト達の怒りの原因を聞きだす。
近藤は左手をルーテシアの頭に乗せて、涙を流しながら言い出す。

「ルー殿・・・大人になれば分かる事だ」

ルーテシアはそれがどういう意味なのか分からないが、アギトは7人を見てこう思った。

「もし・・・このまま敵に回っていたら私達とんでもない眼に合っていたような・・・・」

アギトは想像しただけで自分はルーテシア、ナンバーズとスカリエッティが血まみれになって倒れてるのしか思い浮かばずに青ざめる。
スカリエッティはカリムにどうして自分達をここに招待したのかを聞き出す。

「ちょっと良いかね？」
「なんですか？」

「私達は・・・一応、広域次元指名手配犯であって君達の敵にあたいする存在だが・・・どうして逮捕せずに呼んだんだ？」

呆れてスカリエッティはその理由を聞き出すと、カリムが笑顔で理由を聞き出す。

「なんか今までの事件の黒幕が『鬼兵隊』である事があって、全て貴方のせいじゃないと管理局達が理解して、貴方はもうすでに広域次元指名手配犯から解放されたそうなんですよ♪」

「何、その都合の良い理由！？そんなんで広域次元指名手配犯から解放されるの！？」

「さぁ・・・作者の都合じゃないでしょうか？」

奇跡的な事で自分は指名手配犯から解放されて呆れるスカリエッティ。

だが『鬼兵隊』がとんでもない集団とほうっておく訳にはいかないという事は確かである。

それとは別にスカリエッティは今回呼んだ理由はなんなのかを聞き出す前に、辰馬がカリムに飛びつく。

「そこの金髪の別嬪さん！一緒にお茶でもしませ・・・・」

「フン！」

ドカァァァァ！

「あら～～～！！」

突如飛び込んできた辰馬を蹴り返して吹飛ばすのは、カリムの秘書をしているシャッハ・ヌエラである。

「たく！・・・あの人はどうしてこうも女性に飛びつくんですか！？」

呆れて言い出すシャッハ。

実は、辰馬は聖王教会に何度も顔をだしておりカリムに近づき、そんでいつもシャッハにどかされている。

「そう言えばあいつ、寿司屋の件でも女に飛びついていたな・・・」

呆れてそう言いだすヴィータ。

その時は辰馬をとめるのが大変だったようでヴィータは溜息を吐く。

「そう言えばスカ殿！山崎とディエチ殿は？」

「ん？・・・ああ、２人なら後で来るとか言っていたね？」

近藤とスカリエッティの話に銀時、神楽、桂が驚きだす。

「おいゴリラ。山崎ってあの新八と双璧となる地味さを誇り、真選組の監察方であるあの山崎なのか？」

「あの地味キャラが出て来るアルか？こりゃ新八（じみめがね）の出番が遠くなるネ」

銀時と神楽も驚きだした。

もしかすれば九兵衛、近藤、辰馬と同じく謎の光に飲み込まれてこの世界に飛ばされたのかもしれない人物であると考える。

「ああ、桂の事は山崎にも話しているから、桂も安心してくれ！」

「そうか・・・それはかたじけない」

安心したかのように桂は近藤にお礼を言い出す。

別世界とは言え、桂は手配犯であるが、それは銀時の世界である事の話であり、この世界では英雄なため犯罪者ではないのである。

「いやぁー、やっとついた」
「・・・・遅れて申し訳ございません」

突如、後ろから2人の男女がようやくついたかのように言い出す。
男の方は、近藤と同じく真撰組の衣装を着ていて刀を持っている山崎退(ざきさがる)であり、女の方は・・・何やら他のナンバーズ達とは違って女の子らしい服装を着ている頭に赤いリボンがついている少女・・・もどいナンバーズの1人であるディエチっである。
黒と白をメインとしたマルチボーダーセーターにレギンス付の黒いスカートに靴はダークブラウン。
どこにでもいる可愛らしい少女の姿であった。

「ちょっと待てエエエエエエエエエエエエ！」

ウーノ、トーレ、チンク、オットー、ノーヴェが怒鳴ってツッコみだす。
スカリエッティとクアットロは唖然としていた。

「ディエチ！なんなんだよその格好！何でいつもの戦闘スーツにならないんだよ！」
「その服は如何した！？」

チンクとオットーは理由を聞き出す。
どうしてこのような格好をしているのかを聞かれたディエチはその理由を聞き出す。

「じ・・・実は・・・山崎さんがせっかくだからっと私の為に可愛

らしい服装を選んでくれて・・・この格好をみんなに見せようかなっと思って・・・似合う?／／／」

「うん・・・女の子っぽくて可愛いわ・・・・ってそんな理由で遅れてきたんかいィィィィィィィィィ!!」

ディエチの理由に噴火するかのような怒りを表して額に血管を浮ばせてツッコむウーノ。

「まぁ良いじゃない?彼氏に買ってもらった服し♪・・・それに、似合っているじゃない♪」

ウーノの後ろからそう言いだすのは、ドゥーエであった。

ニヤニヤとディエチを見ると、ディエチは顔を真っ赤に染めてしまう。

「おい、山崎!テメェ、ディエチになんて格好をさせてたんだ!」

ノーヴェは怒鳴って山崎の服を引張り上げて理由を聞き出す。

「あ・・・いや・・・そのう・・・なんかディエチが羨ましそうに女の子の服を見ていたから・・・何とかしてあげたいと思って今日ここに来る前に買って上げたんです!」

「余計なお世話するんじゃねェェェェ!!!!!」

ドカァ!!

「あらぶぁあああああ!!」

ノーヴェは思いっきり殴って山崎を吹飛ばす。

「の・・・ノーヴェ！山崎さんにそこまでしなくても！」

暴れているノーヴェを抑えるディエチ。
そして倒れている山崎を起こす銀時、神楽、桂は興味ぶかそうに山崎を見る。

「あ・・・旦那・・・まさか貴方とここで会うとは思いもよりませんでした」
「まぁな・・・それに何？お前いつの間に彼女とか出来たの？」
「え！？／／／」

銀時が憎たらしい顔で山崎にそう言うと、山崎は顔を真っ赤にしてどのように何説明すればいいのか分からなくなった。

「とりあえずお前もう地味キャラ卒業ネ。卒業おめでとうアル」
「え・・・なんで！？」
「いや、地味キャラが女出来たらおかしいだろ？だからそう言う奴は強制的に地味は卒業っとなっているの。地味キャラ脱出なの」
「そんな理由ですかぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

銀時と神楽の地味的な存在の卒業理由にツッコむ山崎。
愉快そうに笑う近藤が近づく。

「だぁーはっはっはっはっはっはっはっは！いやー、山崎には先を越されたよ！俺もいつかお妙さんと結ばれたいものだ！」
「ゴリラには無理アル」

山崎に負けじと妙と結ばれたいと考える近藤に対して神楽が毒舌のツッコミをする。

「いやー、それにしても山崎がこの世界に飛ばされた時は最初は俺も驚いちゃったよ！」

それは、『モンハン編』が終わった後の出来事であった。

＊

近藤とルーテシアの体が戻った後、アギトからきついお仕置きを受けている近藤。

「この馬鹿ゴリラがァァァァ！！」

「熱(あち)ゃあああああああ！！」

顔を真っ赤に染めて炎を放っているアギトが近藤に攻撃しまくって、近藤は尻に炎がつけられて地面をごろごろと転がっている。

「お前！ルーテシアになんてコードネームをつけやがったんだ！しかも最後のあれはないだろ！チ●コ丸出しじゃねぇか！」

尻に焼かれた炎を消して近藤がアギトを言い出す。

「アギト殿！娘が軽々しくチ●コとか言っちゃダメだよ！」

「自分のコードネームにチ●ポと名づける奴に言われたくねぇ！」

「あらァァァァァァァァァァ！」

アギトにフルボコにされる近藤にルーテシア、ガリュー、そして偶然近くにいたディエチが止める。

「アギト・・・落ち着いて」
「過ぎた事はやめたほうが良いですよ」

ルーテシアとディエチが止めるがアギトの暴走は止まらない。

「うるせー！こいつのせいでルーテシアには自覚無くてもメッチャ恥をかかされて・・・・」

キィィィィィィィィィィィィンン！！

「「！？」」

突如、空から光の柱が振って来て近藤達の前に下りてきた。

「な・・・なんだぁ！？」

近藤はそう言って驚き、光の柱の方を見る。
そして光の柱は消え、その中から気絶して倒れている山崎がいた。

「や・・・山崎ィ！」

近藤が叫んで山崎のほうを駆けつける。
ルーテシア、アギト、ガリュー、ディエチも駆けつける。

「おい、山崎！如何したんだ！？しっかりしろ！」
「大丈夫か！！」

近藤とアギトは山崎の体を揺らす。

それを見たディエチは・・・・・

「そんなに乱暴にしたら逆に悪いですよ！」

そう言いだし、近藤とアギトは止める。

すると・・・・

「う、うーん…」

山崎が目覚め始める。

「あっ、気がつきましたか？」

ディエチが声をかけると山崎はある事を思い出す。

「あれ・・・ここは・・・」

「おおぉ！山崎、気が付いたか！」

近藤が山崎に心配そうに言い出すと、行方不明の近藤が目の前にいることに驚く山崎。

「局長！どうしてアンタがここに！？ってか今までどこに行っていたのですか！？」

「いやー！なんか変な光に飲み込まれてこの世界に飛ばされちゃったよ！そう言う山崎も同じだろ！」

近藤にそう言われると自分もその様に気を失った事を思い出す。

「・・・・ああー、そう言えば・・・たしか俺は攘夷志士達の密

偵をしていたら・・・変な光に吸い込まれて・・・それで・・・」
「あのう・・・大丈夫ですか？」

思い出すかのように言い出す山崎に心配そうに声をかけるディエチ。
そしてディエチの声に反応した山崎はディエチの方を向いて眼を合わせた瞬間・・・・

「あっ…／／／」

二人は赤くなり、ディエチと山崎は互いに一目惚れする。
近藤、ルーテシア、アギト、ガリューもこの光景に唖然と見る、
その後しばらく、山崎もスカリエッティに保護されてナンバーズと初対面の挨拶となる。
そして近藤から桂の存在を知ったが、この世界にいる限り、桂は指名手配犯ではないと言われ、山崎も納得してこの世界で桂を捕まえる事は止めとくことにした。
ちなみに、ディエチとはこの出会いにきっかけで、かなり親しい以上の関係になった。

＊

「とまぁ、こんな感じだったな！」
「きょ・・・局長！！／／／」

近藤が高笑いしてそう説明すると山崎は顔を真っ赤に染まり、銀時達も笑い出す。

「ぶはははははははははははは！お前、そりゃスゲェラッキーじゃねぇか！」

「彼女ゲットおめでとうネ！黒神が烈火竜さんの許可を貰って作られた設定に感謝するネ！」

「ウム、ここであったのも何かの縁だ。祝いに攘夷タオルを上げよう」

銀時と神楽からはお祝いを言われて桂からは攘夷と書かれたタオルを渡された。

山崎は苦笑して如何すればいいのか分からないままである。

「あ・・・あはははは・・・・でも、こうして俺みたいな（元）地味な男でも女の子と仲良く出来たんだし・・・新八君も出来るんじゃないかな？これでアイドルオタクを卒業したほうが侍らしくなるし」

山崎がそう言うと銀時と神楽は冷たい言葉を言い出す。

「いや・・・それはお前と違って奇跡を起こらないと出来ないようなもんだし、つうか起こって欲しくねぇし」

「そうアル。アイドルオタクだけじゃなくアニメオタクにまで堕ちた新八（メガネサル）に彼女作るしかくないネ！彼女出来たら悪夢ネ。童貞のままでいたほうがいいネ」

「むしろもてなくて女の縁がないほうが新八（じみ）らしいな」

「そうアル♪」

「おいィィィィィィィィィ！！！！なんかメッチャ新八君に対して厳しすぎるんですけどォォォォォォォ！ってかさっき新八と書いてメガネサルとじみとか言っていなかったっけェェェ！」

新八に対する銀時と神楽の非道さに山崎は青ざめてツッコみだす。

一方でカリムは、はやてにニヤニヤと近づいて質問する。

「はやてぇ～、彼があの『狂乱の貴公子』桂小太郎さん？」

「え・・・まぁ・・・そうなんやけど・・・／／／」

顔を真っ赤に染めて言い出すはやて。

両手の人差し指をくっ付けながら返事をする。

「へぇー，中々良いじゃない？でも大丈夫？噂では人妻好きで有名だけど大丈夫？」

「それは知っているんやけど・・・それでも頑張りたいんや／／／」

人妻好きな事は以前にシグナム達から聞いたのである。

でもはやての思いは変わらなかった。

そんな彼女に姉として応援するカリム。

「頑張りなさい。私も応援するから♪」

「ありがとな／／／」

応戦してくれるカリムにお礼を言い出すはやて。

「所で、今回我々を呼んだのは何をするためだ？」

スカリエッティがカリムに呼ばれた理由を聞き出すと、カリムは思い出すかのようにひらめく。

「そうだったわ。忘れる所だった」

そう言って、カリムはどこからか出したかは不明のマスクを取り出し、今回集まってもらった銀時達に説明する。

「それじゃあ、全員揃った事だし・・・今回私が皆を呼んだ理由を教えますね♪皆さんも知っていますが、銀時さんの世界から突如現れた謎の犯罪集団『鬼兵隊』が原因で、エーリアンと呼ばれる異種生命体の奇襲と、『鬼兵隊』の一員である鍬死朗の使用している脅威なる兵器『紅桜』・・・いずれにしてもオーバーSランク以上の危険物質だと思います。そして疑いも晴れたナンバーズと共に機動六課と聖王教会は力を合わせて『鬼兵隊』を打ち倒します。・・・ですが銀時さんと桂さんから聞くと、『鬼兵隊』は特殊な兵器を数多く開発していて、次に現れた時にも、見た事がない兵器で私達の前に現れるでしょう」

確かに、『鬼兵隊』の使用する特殊な兵器は異常なまでに強力だった。

対戦艦用機械機動兵器の『紅桜』にエーリアンのＤＮＡを利用して大量のクローンを生み出した生命兵器など・・・さらに聞けばスカリエッティとは別のガジェットをも生み出しているようである。

今までのガジェット達の奇襲は全て『鬼兵隊』にあった。

「そして私達はそれに対抗する為に身体能力を上げたいと思います！」

すると、シャッハは何か書かれた黒板らしき物を運び出す。

その黒板にはこう書かれた。

「題して・・・『第１回　魔導競争大会（まどうきょうぎたいかい）』、開催決定！！！！」

カリムが大会の開催発表をすると・・・銀時達はもちろんの事呆れだす。

特殊訓練だと思いきや運動会など学校でやるような事をどうしてす

るのか理解できない。

「た・・・大会・・・すか？」

「おい、何で大会をしなきゃいけないんだ？」

ウィンディやヴィータはその理由をカリムから聞き出す。

「今回、ナンバーズが仲間になるその記念として、真面目にやるのもめんどくさいから楽しくする為に考えた私の企画です！」

「散々と真面目な事を話しておいて大会をするんかい！」

理由を言い出すカリムにティアナは怒鳴りだしてツッコむ。

「真面目にやるとつまんないからでしょ！」

「アンタ、本当に聖王教会・教会騎士団所属の騎士ですか！？」

ディードは呆れてツッコむ。

これにはさすがのシャッハも恥を知る。

銀時はフェイトに近づいて小声で聞き出す。

「おい、なんかあのカリムって女、初対面なのになんですらりとボケちゃっているの？」

「あ・・・あははは・・・たしかはやての姉的な存在だから・・・・もしかしたらはやての影響でボケやすくなったのかなぁ？」

「そんなんありかよ？」

そんな理由でボケるとなればそれはもはや風邪をうつされたようなのと一緒であると銀時は思う。

「あ・・・あのう・・・これって完全なる訓練じゃなく遊びじゃな

いですか？」
「エリオ・・・時には流れについて行くことも必要じゃ・・・・じゃが何でこうなるかは、わっちだって知りたいわ」
エリオと月詠もカリムのボケ計画に呆れるのであった。
そしてこの大会の事を説明するカリム。
「なお、この大会はもちろんただの大会じゃありません！デバイスを持っている魔道士は必ずデバイスの使用をしてください。もちろん隊長や副隊長級の皆さんのリミッターも外させてもらいます。これはめっちゃハードですから！」
「ハードって・・・どういう意味だ？」
シグナムはそのハードはどれだけ厳しいかを質問する。
「何せ、この大会はバトルコロシアム！つまり場合によっては命を賭けさせてもらうほどハードだからです！」
「ちょっとまてぇぇぇぇ！」
「おかしい！命を賭けろって言うのがおかしい！」
「力を合わせるどころが殺し合いさせるつもりですか！」
「何もかもメチャクチャだー！」
銀時、山崎、ティアナ、ヴィータが頭に血管を浮かべてツッコみだす。
それを尻目にカリムは説明する。
「なお、この大会はたった今からさせてもらいます！もちろん優勝したがたにはご褒美があります」
「ご褒美ですか？」

カリムのご褒美にスバルはそれはどう言う物なのかを聞き出す。

「そうですねぇ・・・・優勝した人には好きな人と、マリンガーデンのチケット（約2名分）するってのはどうでしょう？好きな人とデートするには最適です！副賞としてバイキング食べ放題チケットもありますしね♪」

それを聴いた瞬間、この場にいる役半分以上の人々達に火がついた。

バイキング食べ放題側

「バイキング・・・食べ放題・・・・・」

「それはつまり好きな料理をたらふく食べられる絶好のチャンスネ」

銀時と神楽は何かに火がついたかのように闘志を燃やす。

これもはやての安月給による食欲の欲望によって生み出された闘志ともいえる。

「ふ・・・そばもついているのであれば必ず優勝せねばならぬな？」

『狙うは勝利のみ！』

桂とエリザベスも優勝を目指す気でいた。

そして互いににらみ合う。

「Ｏｗｅｅ編以来の対決になるようだな」

「優勝はこの『歌舞伎町の女王』である私のものアル！」

「貴様等全員地獄を見せてやろう」

『今回はマジで行かせて貰いますよ？』

４人の闘志は異常なまでに高くなった。

今再び銀魂伝説が開始されるのであった・・・本当かよ！？

「まぁ、まともな食事を取っていないから優勝を狙ってバイキングを頂くとしよう」

ザフィーラも優勝を狙えば満腹にいただけるチャンスにバイキングを狙う。

マリンガーデンのデートチケット

「マリンガーデンのデートチケットって事は・・・・」

「それはつまり銀さんと・・・・」

「デートできるって事ぉ！？」

フェイトとなのはがそう言いだすと、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードは眼を光らせる。

「銀さんと・・・・デートって・・・／／／」

「兄さんを独り占めできるって事・・・／／／」

「銀時と・・・一緒に・・・／／／」

「一日中・・・共にできる・・・てことか・・・／／／」

「はわぁ～、合体した気分になれそうです～・・・／／／」

機動六課側は銀時と一緒にデートするのを妄想すると・・・・顔が真っ赤に染める。

そしてフェイト、なのは、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースはお互いににらめあう。

「皆には悪いけど、優勝は私がもらうよ！」

「にゃはは、そうはいかないよ。優勝は私が貰うから！」

「銀さんと一緒にいられる絶好にチャンスを見逃す訳には行きません！」

「妹としてお兄ちゃんは絶対に渡さない！」

「邪魔するんだったら誰であろうと容赦はしない！」

「私だって銀時と一緒にいたいんだよ！」

「いんや！絶対に私が優勝させてもらいます！」

のはや7人の闘志は仲間も敵も関係なく恋のライバル関係になってしまった。

一方のチンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードもこれには驚きを隠せなかったが、もし優勝すれば憧れである『白夜叉』こと坂田銀時と、一日中一緒に過ごせるチャンスである事を知る。

そして5人の中から感情が芽生えて闘志が浮き上がるのである。

「優勝は私がいただく！」

「いや、私がいただくよ！」

「ちがう！私が勝つ！」

「自分だって坂田銀時と一緒にいたいっす！」

「いや私が！」

いつの間にか銀時に女が増えている事を知らず、女の戦いが始まる

のである。

「私が優勝すれば・・・・桂さんと一緒かぁ～／／／」

顔を真っ赤に染めてはやてはこれはどうしても優勝を狙うチャンスであると考える。

「それって、僕達も優勝すれば一緒に行けるってことかな？／／／」

「そう・・・かもしれない／／／」

山崎とディエチは顔を真っ赤に染めてそう言いだす。

「お妙さ～ん！この近藤勲！貴方の為に優勝を狙いますぞ～！！」

近藤はこの世界に居ない妙に愛のメッセージを伝えて優勝を目指す。

（妙ちゃんと一緒にデート・・・良いかも／／／）

「目的は優勝のみ！」

九兵衛も優勝を目指す闘志が芽生えるのである。

「なのはと一緒にいられるチャンス！絶対に負けられない！」

ユーノも銀時からなのはを取り返す絶好のチャンスであると考える。

「なんか・・・すっごくカオスな展開になっているような・・・」

苦笑してもうあり得ない展開になってきた事にツッコむエリオ。

しかしある事を気づく。

（あ・・・でもそれって僕が優勝すれば・・・神楽さんか月詠さんと一緒にマリンガーデンに・・・・／／／）

顔を真っ赤にして憧れの女性と一緒にいられるチャンスであるとエリオは考える。

「・・・・優勝を目指すのも悪くないかもしれません・・・／／／」

こんな感じでエリオも優勝を目指す気になった。
ちなみに女の勘で何かを感じたキャロはエリオと神楽に優勝をさせる訳にはいかないと確信した。
そんなこんなで魔導競争大会が始まるのであった。

＊

機動六課の訓練場

そこで運動会をすることになった。
ちなみに参加者は以下の通りである。

銀時、フェイト、桂、なのは、スバル、ティアナ、神楽、エリザベス、エリオ、はやて、シグナム、アルフ、ヴィータ、ザフィーラ、リィンフォース、キャロ、九兵衛、近藤、辰馬、山崎、ドゥーエ、トーレ、チンク、セイン、セッテ、オットー、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ、ディード、シャッハ、ユーノ。
以上３２名であった。

なお、審査員はシャマル、カリム、スカリエッティ、ウーノ、クアットロ、ルーテシア、リィン、アギト・・・そしてフェイトの母ごとプレシア・テスタロッサとスバルの義父であるゲンヤ・ナカジマである。
月詠は煙管を加えて見学するだけにした。

「って、初登場がこのイベントの審査員のお任せって訳？」

っと呆れてツッコむプレシアは自分の初登場に強く呆れるのであった。

「まぁ良いじゃないか？出番がないよりは良いし」

っとこの状況を受けるしかないスバルの父、ゲンヤは軽く言い出す。実は2人ともたまたま仕事を終えて休日をもらったのだが、その隙を突かれるかのようにカリムに無理やりこのような企画の審査員を勤められさせられた。

（全く、久し振りに銀時に会えたから良いものの・・・よりにもよってこんな事の為に呼ばれるなんてね・・・）

「それにしても、機動六課はいつもこんなことをするの？」

「・・・はい・・・最近の機動六課はカオス的な展開になっていますので・・・」

プレシアはリィンに質問するとリィンは苦笑してお答えする。
ヴィータとトーレは他の者が取り返しのつかないように止める為に参加しているだけであった。
銀時はゲンヤを見てスバルに質問する。

「なぁ、あの隊長服を着ているおっさんって、もしかしてスバルの親父さんかい？」
「はい。今回はカリムさんに無理矢理呼ばれてきたっと呆れた顔で言っていましたけど・・・でもギン姉は別の用事が出来てこれないそうです」

少し残念そうに言い出すスバル。
そしてプレシアを見て桂はフェイトに質問する。

「フェイト殿・・・もしやあの者がフェイト殿の母方、プレシア殿でござるか？」
「え・・・そうですけど？」
「ウム・・・もし俺が優勝すれば、プレシア殿にマリンガーデンにお誘いしてみよう」
「人のお母さんに手を出すつもりですか！？っていうより、どんだけ人妻好きなんですか！？」

額に青筋を浮かべて怒鳴ってツッコむフェイト。
しかもそれははやてのピンチであった。

（あかん！桂さんがプレシアさんに取られてしまう！）

はやても桂がプレシアと仲良くなってしまうピンチに追い込まれてしまう。
カリムもこれはプレシアを呼んだのは失敗であったと「あちゃー」っと言い出す

「それにしても、あの銀髪の天然パーマがいつもスバルが言っていた坂田銀時かい？」
「はい。何せ『ジュエルシード事件』に『闇の書・ゾーマ事件』を

剣だけで解決した伝説の武神『白夜叉』です」
「やる気がなさそうに見えても、何かを感じるな。それも鬼神の如くの闘志が眠っているかの様な・・・・」
リィンから質問を聞いて不思議にそう思うゲンヤは戦う時の姿は全くの別人であると考える。
そしてカリムが機動六課魔導士大会の説明をする。
「それでは第一回戦は、『風船割りゲーム』！！」
などと運動会とは思えない対決内容が言い渡された。
「その名の通り、これから1組4人で組んでもらい、風船の割り合いをさせてもらいます。風船の数は1つだけであり最後まで残った2名が2回勝に残ります！これは何かを守りながら敵と戦う為の訓練だと思ってください！」
「つまり、守りと攻めを強化する為のようなものか」
チンクは理解してそう言う。
そしてカリムはクジの入った箱を取り出す。
銀時達はそれぞれ1人ずつクジを引き当てるのであった。
そして対戦組み合わせはこうなったのである。
1組
フェイト、辰馬、ディード、シャッハ
2組

なのは、アルフ、九兵衛、チンク

3組

スバル、ドゥーエ、トーレ、ノーヴェ

4組

神楽、エリオ、セイン、ウェンディ

5組

桂、はやて、近藤勲、ザフィーラ

6組

エリザベス、ユーノ、オットー、リィンフォース

7組

キャロ、山崎、ヴィータ、セッテ

8組

銀時、シグナム、ティアナ、デイエチ

「それでは！第一組からどうぞー！」

カリムがそう言うと、フェイト、辰馬、ディード、シャッハが訓練場に上がりこむ。
かくしてのはやカオス的な展開に進められた機動六課のまさかの大会が開催されるのであった。

銀八
「教えて」

生徒
「銀八先生！」

エリオ
「こんにちは、今回は僕、エリオ・モンディアルがアシスタントします」

銀八
「まぁ、たまには男も出ることが多いので。では最初の質問。ペンネーム『神威　恭夜』さんの質問。『なのはやフェイトらが過去の万事屋（金丸や池沢）の写真を見たらどんな反応をするのでしょうか？ついでに茨木君は、登場予定はありますか？』・・・ずばり答えましょう。おそらくは大驚きすると思います。後登場するかは作者の気分次第だと思います。」

エリオ
「うわぁ～なんとも凄い手抜き感を感じるお答え」

銀八
「っと言う訳で『神威　恭夜』さん、廊下に立っていなさい。では次ぃ。ペンネーム『アグニ』さん。『ナンバーズの中で誰か銀時に惚れさせる予定はありますか?』・・・ずばり答える必要はありません。今回の本編で見て通り、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードです」

エリオ
「銀さん・・・間違えてもフェイトさんの怒りでしなきゃ良いですが?」

銀八
「お前もいずれそうなるから気を付けろよ?っと言う訳で『アグニ』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ
「次行きます。ペンネーム『カラー』さん。『銀時ではなく銀八先生に質問です、自分の担当クラスの女子で嫁にするなら誰?』」

銀八
「そうですねぇ・・・『魔法少女リリカルなのは』見たいな可愛い子はいないので分かりません」

エリオ
「酷っ!」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『加藤勇』さん。『今敵側にはオリキャラは出ていますが

味方側からオリキャラは出ないんですか？』おそらく作者のことですから出るかもしれません」

エリオ
「本当ですか？」

銀八
「っと言う訳で『加藤勇』さん、そのオリキャラを期待して待っていなさい。」

エリオ
「じゃあ次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『フェイト達は自分の下半身の処女を銀時に捧げる準備をスタンバイできていますか？』・・・ってなんですかこの質問！！明らかにセクハラですよ！！／／／」

あり得ない質問に顔を真っ赤になるエリオ。

銀八
「あの様子なら出来ています」

エリオ
「何軽々しく質問していますか！？／／／」

質問に答える銀八にエリオはツッコむ。

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ

「噂には聞いていたけど、とんでもない質問も出てくるよ・・・次はペンネーム『ゼルガー』さんの質問。『中の人が『倒してもいいよね?答えは聞いてない』的なドSはいつ出るんでしょうか?後、うちのドSでチートの塊で元神の神な主人公が「そっちの連中をいつか弄りながら地獄の修行をやらせてみたいぜ…ククク」とドSで邪悪な笑みを浮かべてそっちに転移しようとしてますが、どうしましょうか?』・・・・ってなんなんですかこの質問!」

銀八

「(ドSと言えば絶対にサディスティック星から来たと噂されるアイツを想像しちまうな)まぁ、出るなら出るんじゃないか?っと言う訳で『ゼルガー』さん転送は良いです」

第三十二訓：優勝賞金が出れば大抵の参加者はやる気が出る（後書き）

ついに始まった新シリーズ『魔導競争大会編』。

過酷な勝負にフェイト達が戦う！

デバイスの久し振りの登場！

果たして優勝は誰の手に！

ドゥーエ「次回「女の怒りは本当に怖い！」テイクオフ」

第三十三訓：女の怒りはメッチャ怖い！（前書き）

黒神
「なんか調子乗って長く書いちゃったので、今回は二話を一気に最新させました」

スカリエッティ
「それにしては銀魂風だからって無理がありすぎではないかね？」

フェイト
「スカリエッティ・・・作者はこう言う人なのよ・・・諦めて」

呆れてツッコむスカリエッティにフェイトは言う。

銀時
「ま・・・とりあえず新シリーズ『魔導競技大会編』もスタートしたから張り切っていくぞ」

神楽
「やるなら優勝狙うアル」

スバル
「そうだね♪」

スカリエッティ
「・・・とりあえず始めるか。『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒ Ｓ』、始まりだ」

第三十三訓：女の怒りはメッチャ怖い！

対戦組み合わせ：フェイト、辰馬、ディード、シャッハ

「どうも・・・お手やらわかに」

フェイトがそう言うと辰馬はフェイト美形とディードの可愛らしさに一目惚れし、シャッハは辰馬がまたやらかすと呆れる。

すると、フェイト達の上に風船らしき物が現れる。

「この風船は立体映像ですので、相手が触れるだけで破裂してしまうのでご注意してください。それではレディ、ファイト！」

カーン！

カリムが鐘を鳴らすとフェイトはバルディッシュを構える

「行くよ、バルディッシュ！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ！≫

すると、バルディッシュは通常の近接戦闘に用いる鎌型の『ハーケンフォーム』になる

対するディードは赤い光を刀身とする双剣『ツインブレイズ』を構えだし、フェイトとディーバはにらみ合う。

「さぁ、銀時に近づくお邪魔虫を駆除させてもらおうかしら？」

「機動六課隊長の実力を見せてもらいますよ？」

互いに恋愛の敵であると確信され、真剣である。
ちなみにフェイトはもちろん、なのは達隊長級や副隊長級のリミッターは、はやてによって解除された。

「はぁぁぁ

額に青筋を浮かべたフェイトとシャッハは『バルディッシュ』と『ヴィンデルシャフト』で辰馬を吹飛ばす。
それがきっかけで辰馬の風船が割れる。
この光景に呆れた銀時達はどう思えば良いのかわかんないまま唖然とする。

「とりあえず・・・・二回戦進出はフェイトさんとシャッハで・・・・」

盛り下がった声で言い出すカリムに対し、気絶している辰馬を片手で引張って引きずり出すシャッハと、気絶しているディードを両手で抱えるフェイトは訓練場からさった。

「こんなんで二回戦進出はおかしいと思う気がする」
≪Ｉ　ｔｈｉｎｋ　ｓｏ，　ｔｏｏ≫

第一組　勝者：『フェイト・テスタロッサ』『シャッハ・ヌエラ』

「あのう・・・あの辰馬さんって本当に兄さんと桂さんと同じ攘夷志士ですか？」

疑うような言い方で銀時と桂に言い出すティアナ。

「まぁな・・・普段のあの馬鹿の姿を見れば誰だってそう思うだろ？けどな・・・・アイツは攘夷戦争で活躍していた時には鬼の様に強かったんだぜ」
「しかもその数は銀時や俺にも驚かされるほどの成果を誇り、味方からも恐れられた鬼神その者だ」

銀時と桂が真剣に説明しても、ティアナはやはり信じられなかった。
そして第二試合が始まる。

対戦組み合わせ：なのは、アルフ、九兵衛、チンク

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

チンクは大きくジャンプして投げナイフ型の固有武装『スティンガー』を投げまくると、九兵衛はスバルに劣らない神速の剣技で滑れ切り返す。だが、斬られた『スティンガー』は大爆発するが、九兵衛は勘で爆破する前から交わしてチンクに近づく。

「おおぉぉぉぉぉぉぉ！！」

そして神速の速さと剣速でチンクに攻撃するが、すぐさまにチンクはバックして交わしながら回転して1つの『スティンガー』を九兵衛に向かって投げる。
しかし九兵衛はすぐに交わすと、外されたナイフは大爆発する。

「おおォォォォォォォォ！」
「はァァァァァァァ！」

チンクは両手に3本ずつナイフを指にくわえて構え、九兵衛に接近戦を挑む。
そして2人の攻撃がぶつかり合って互いに前に進むと相手の背後に止まる。
そしてお互いの頬っぺたに刃物で切れたかすり傷が付く。

2人のハイレベルな戦いに誰もが黙り込んで注目する。（なのはと

アルフを除く）

「さすがあの『ゾーマ事件』を解決させた剣術使い、柳生九兵衛ことだけはある」

「貴様も大したナイフ裁きだ。だがその破廉恥な名前を名乗っているのでは名乗り親に相当な恨みを持っているであろう、チ●コ殿」

ドカァ！

「ごふァァァ！？」

「チ●コじゃないチンクだぁ！！／／／」

思いっきり顔面を蹴られて吹飛ばされる九兵衛。

銀時、神楽、月詠、起動六課のメンバー、ナンバーズ、カリム、シャッハ、プレシア、ゲンヤは苦笑し、近藤、山崎、ナンバーズはチンクがその名で呼ばれたことに強く動揺する。

桂とエリザベスは名前を間違われたチンクの怒りを理解し、スカリエッティはチンクにもうちょっとマシな名前を付ければよかったと反省していた。

最悪な名前のまちがわれ方に怒り出すチンクは言い返す。

「唯さえ気にしている紛らわしい名前に憎しみを持っているのに、よくも堂々と間違えて呼んでくれたな！この餓鬼がぁ、この世の地獄を見せてや・・・・」

スパァーン！

暴走のツッコみをするチンクだが・・・素早く左背後にジャンプして、九兵衛の剣撃を交わす。

すると、さっきいたチンクの背後にあった岩がまっ二つに斬られて

いた。

「餓鬼じゃない・・・・柳生九兵衛だ」

冷静に言い出すが、額に血管を浮かべている九兵衛。
相当子供扱いされたのがご立腹だった。

「やはり君は、最初から会った時から気に入らない存在であると思ったが・・・」
「これほどまでに気に入らないとは思わなかったよ」

同じ隻眼少女同士の存在にキャラ被りしてしまった。
これでは対抗心が燃やすのも当たり前であった。

「この失われた左目はある人を守る為になくした名誉の傷だ。貴様の隻眼とは比べ物にならないほど大きな思いがつまっている」
「こっちも数多くの任務を遂行して任務を達成させたが、その時につけられた名誉の傷なんだ。貴様みたいな一回だけの戦いで失われた眼の痛みの重さは違うのだ」

お互いに片目の眼線から相手を睨みつけて火花を散らす。
これまで相手に対抗心を燃やすチンクの姿をみてナンバーズは唖然とする。

「ねぇ、あの子ってあんなに他人に対抗心を燃やす子だったっけ？」
「さぁ、存在感がかぶっているからじゃないですか？」

ドゥーエの質問にオットーはチンクの対抗心の理由はそうではないかと言い出す。

「あんなチンク姉を見たのは初めてっす」
「わ・・・私も」

ウェンディとクアットロもチンクの見たことない姿に驚きだす。

「刀ではなく小刀しか扱えぬ君など、剣術を一から学びなおして『似非六爪流』を会得するが良い！」
「そう言う英語が喋れない貴様など、英語を一から学んで歌舞伎町を率いる英語ペラペラの偽戦国武将『似非独眼竜』を目指すが良い！」

それはもはやとあるゲームの主人公を意味する事である。

「どうやら、君とは決着を付けなければならない。」
「望む所だ・・・」

「Ｌｅｔｓ　Ｐａｒｔｙ！！」

２人が大きな声でそう叫ぶと、２人は相手に向かって飛び込む。
だが・・・・

「二人まとめてお眠(ねん)ねしよっか♪」
「へ？」
≪Ｄｉｓｃｈａｒｇｅ≫

突如、悪魔の・・・じゃなくなのはと『レイジング・ハート』の声が聞こえた２人は声が聞こえた方を振り向いた瞬間、桜色の極大な閃光に飲み込まれる。

「アアアア

「うん・・・そうだね」

さすがの大魔導師ごとプレシアもなのはの『白い悪魔』には敵わなかったようである。
フェイトも涙を流して答える。

なんやかんやで第三試合が始まる。

対戦組み合わせ：スバル、ドゥーエ、トーレ、ノーヴェ

「行くぞぉおらァァァァ！」

すると、ノーヴェは突如、スバルと同じ、黄色の『ウィング・ロード』を発動させる。
これにはさすがのスバルも少しは驚く。
ナックルスピナーを備えたローラーブーツ『ジェットエッジ』で猛スピードに走り出す。
標的はもちろん・・・・

「スバル・ナカジマ、覚悟ぉ！」

もちろんスバルであった。
しかしスバルは日本刀のデバイス『ティルヴィングエア』を居合いの構えをするだけで魔法を発動させる気は全くない。
それでも構わずノーヴェはスバルに突進する。

「喰らえぇぇぇ！」

一気にスバルに突進して篭手『ガンナックル』に魔力を大量に込め

て剛拳を炸裂させるが、その時にはスバルの姿はいない。

「な・・・に・・・？」

スバルの姿が消えたことで驚くノーヴェだが、消えたのではなく神速の速さでいつの間にかノーヴェの背後に立っている。
少し刀の刀身を鞘から抜いているが、再びしまうと・・・・

スパァーン！！！！

いつの間にかノーヴェの『ガンナックル』、『ジェットエッジ』は魔っ二つに斬られて、上にある風船も斬られて破裂する。

「何だとぉぉぉぉ！？」

デバイスだけじゃなく風船も斬られた事に驚くノーヴェ。
これには辰馬、スカリエッティ、ルーテシア、アギト、カリム、シャッハ、プレシア、ナンバーズも動揺して驚きだす。
近藤、山崎もスバルの神速の剣技には注目する。

「攻めるのも良いけど、守りも堅めなちゃすぐにやられるよ♪」

「ぐ・・・ちくしょう！」

スバルに忠告されるとノーヴェは地面を強く叩いて悔やむ。
そしてスバルはゆっくりとノーヴェから離れて歩くと、隣からトーレが攻めてきた。

カキィィィン！

トーレの羽に似たエネルギー翼『インパルスブレード』が刃のよう

にスバルを襲ったが、スバルは『ティルヴィングエア』で受け止める。
攻撃を防がれたトーレ自身は驚く。
その理由は彼女の高速移動能力『ライドインパルス』は通常の人の二倍か三倍の速さで動けるため、一般の魔導士では見切られないのである。
だがスバルは一発で見切られたのである。

（馬鹿な・・・ナンバーズでも最速を誇る私が・・・止められただと？）

焦りだしたがすぐさま追加攻撃をするかのようにスバルを攻めだす。
蹴り、殴り、インパルスブレードのくり返しによる高速連撃。
だが、神速を極めたスバルから見ればそれは少しスローしているかのように見えて、全ての攻撃を日本刀型のデバイス『ティルヴィングエア』を右片手だけでもって、神速の速さでトーレの攻撃を全て受け流している。

（以下に高速の速さを持ったとしても・・・神速には敵わないよ）

神速の領域に立っているスバルだからこそ出来る高速の受け流し。
その神速に対抗できるのは銀時、桂、沖田、九兵衛ぐらいしかいないであろう。
トーレの攻撃をここまでか！って言わせるほどのスバルの守りの堅さと神速の速さに翻弄されるばかりである。
そしてトーレの攻めが荒くなった所でスバルは終止符と打つ。

「そろそろ終わりにしますよ」
「なぁ！？」

スバルがそう言うと、突如姿を消してトーレに一閃を喰らわせる。

「がはぁ！？」

神速の剣をモロに喰らったトーレは気絶して倒れ、トーレの風船も割れた。

勝者：『スバル・ナカジマ』・『ドゥーエ』

「と・・・とんでもない子だわ・・・・まともにやりあったら勝てない・・・」

すると，影の薄そうな人物がドゥーエとなった。

実は彼女のインヒーレントスキルと言うデバイスとは違う個人の特殊なる能力の１つである『偽りの仮面（ライアーズマスク）』によって変装していたのである。

本来ならば隙を突いてスバルの風船を割ろうと狙っていたが、そんなことをすれば逆に自分がやられていたと判断してじっとしていた。

「お疲れ、『ティルヴィングエア』」

≪Ｙｅｓ，Ｉ ａｍ ｉｍｐｏｒｔａｎｔ≫

スバルはニコリと笑って、『ティルヴィングエア』を鞘にしまう。

トーレとノーヴェの敗北にナンバーズも信じられない表情であった。

何せスバルは魔法どころが魔力の一滴も使っていないのである。

「な・・・なんですかあの子！？ひょっとして剣の達人・・・・いやもしかしたら沖田隊長に匹敵かそれ以上じゃないですか！」

山崎はスバルの神速の剣技はまちがいなく真撰組最強にして一番隊

隊長の沖田総悟に勝るかもしれないと驚きだす。

「いやー機動六課の新人達にも粋の良いのがいますなー！！・・・てあれ？確かこの世界の住人って魔導士ばかりなはず・・・それなのになんであの少女は剣だけで戦ったの？」

近藤はスバルの戦い方のスタイルに驚く近藤。
スバルは剣術をも使うがあくまで侍じゃなく魔導士である。
なのにどうして魔法を使わないのか不思議がる中、ゲンヤがその理由を聞き出す。

「スバルは、４年前に坂田銀時に命を救われて、それ以来剣術をばかり学んでいたんです」
「銀時に？・・・そう言えば聞いたことはあるわ。４年前、銀時が現れて幼い少女の命を救ったって・・・まさかその少女が貴方の娘さんだったなんて・・・・」

プレシアもスバルが４年前に銀時に救われた少女の正体である事を驚く。
４年間剣術の鍛錬を汲み重ねただけであれほどの剣の腕を持つことには近藤と山崎も感服した。

一方のカリムとシャッハは機動六課のフォワード部隊とは思えない身体能力の高さに唖然と驚く中、ナンバーズはスバルの強さに驚きだす。

「トーレにノーヴェが手も足も出なかったなんて・・・・あの女・・・何者なの？」
「魔法も使わずに剣だけで２人を倒すなんて・・・」

セッテとディエチもスバルの強さじゃなく戦い方に驚いている様子。
そしてなのはが近づいて、スバルの正体を言い出す。

「スバルは・・・確かにフォワード部隊に入ったばかりの新人だが・・・その中でも新人魔道士?1の実力を持つ少女で・・・・しかもその魔力は副隊長級にまで達成できるほどなんだよ」
「マジっすか!?」

なのはの説明にウェンディは驚く。
そして気絶して倒れているトーレを抱えてながら戻ってくるノーヴェは悔しがる。

「畜生!次は絶対に勝ってやる!」

この敗北でいつかスバルにリベンジ戦を挑む気であった。
一方のスバルは・・・・

「銀さん、ただいま戻ってきました」
「スバル・・・・お前なんか以前より強くなっていない?」

少し驚いて銀時は言い出す。
まぁ、俺やヅラから見てもスバルの剣術は以前よりも一回り大きくなっているし、もしかすれば隊長級と良い勝負ではないんじゃないか?そしてスバルは・・・

「日頃鍛えていますから・・・まぁ剣術だけですが・・・」

いや十分スゲーって、その剣術に魔法を加えたらあんたとんでもなく強くなれるって。
もしかしたら夜兎族に匹敵する戦闘力を身につけられるんじゃねぇ

の？
まぁそんなことすればスバルはまちがいなく神楽の兄貴に狙われるわ、メッチャ狙われるわ！

「よっしゃー！次は私達の出番ネ！エリオ、準備できているアルか！？」
「はい！」

いよいよ出番が出た神楽とエリオは準備は宜しいようである。
神楽は両手をボキボキと鳴らせて、エリオは『ストラーダ』を出して戦闘準備は満々であったが、突如事故が発生した。

「ぐぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
「お・・・お腹がぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

突如、セインとウェンディはお腹を押さえて苦しむ。

「ど・・・どうしたんだ2人とも！」

スカリエッティも心配して2人に駆けつける。
ナンバーズはもちろんの事心配し、銀時達も駆けつける。

「どうしたんですか2人とも！何か変なものを食べたんですか！？」
「へ・・・変な物？・・・・ってのぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

山崎が2人に原因を聞きだすと、更なるお腹の激痛に足られず腹を両手で押さえるセイン。

「変な物とは失礼ですよ！ただ2人がお腹がすいたっと言い出すから、おにぎりの差し入れを上げただけです！」

シャマルが怒って差し入れをしたと言い出すと、はやて、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィンフォース、リィンの6人はシャマルに驚く眼線で見る。

「シャ・・・シャマル！あんた一体何を渡したんや！？」
「まさかまたとんでもない失敗作じゃないだろうな？」
「何でそこまで言う必要があるんですか！？あの2人に渡したのはこのおにぎりです！」

はやてとザフィーラのツッコみにシャマルは怒鳴りしてセインとウェンディに出したおにぎりを出す。
見た目はごく普通のおにぎりであり、見た目は問題なかった。
しかし、はやて、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィンフォース、リィンはシャマルの凶悪的な料理の下手さに疑いを持ち、そのおにぎりの1つを持って割ると、具は何やら赤黒い茸のようである。

「何ですかこれ？キノコ類の用に見えますが？」

リィンフォースはその茸に疑いを持つ中、シャマルはそのキノコの説明を言い出す。

「これはですね・・・そこらへんに生えたおいしそうな茸でしたから、拾ったものです♪」
「アホかぁぁぁぁぁぁ！」
「ごふぇあらばぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

完全なる拾い物を・・・それも知らない茸を拾った事に銀時、神楽、桂、エリザベス、月詠、近藤、山崎、シグナム、ヴィータ、ザフィーラが思いっきりシャマルを蹴り吹飛ばす。

「何でそこらへんに生えてきているキノコを拾ったんだよ！」
「それ思いっきり毒キノコじゃないか！」
額に血管を浮かべてツッコむ銀時と月詠。
「なんで毒と疑わずに握り飯の具にしたんだ！」
「あ痛たた・・・ちゃんと綺麗に洗って醤油で味付けしましたよ！それに香りも凄くおいしそうだから問題ないですよ！」
「そう言う問題じゃないんです！」
シグナムの怒鳴りにシャマルはちゃんと調理はした事を言うが、思いっきりリィンが怒鳴ってツッコむ。
そしてスカリエッティ、プレシア、ゲンヤはおにぎりに入っていた茸を良く見て見ると信じられないような表情で驚く。
「信じがたいことだが・・・これはもしや『マズタケ』ではないか？」
青ざめてスカリエッティがそう言うと、プレシアとゲンヤの2人は驚きだす。
「『マズタケ』って、ミッドチルダしか生えてこなくしかも滅多に見つからなくて貴重な上に味も香りも最高級であるだけど・・・口にしたら一週間はお腹の激痛に苦しまれ、さらには3日後には激痛を下痢と吐き気がする猛毒キノコじゃない！」
「猛毒キノコ！？」
プレシアが言いだした『猛毒茸』っと言う言葉に銀時達は驚きだす。
『マヅタケ』はとある一部のものしか知らず、しかも食べればすぐ

には治らないと言う大変危険なキノコである。

「いわゆる陸に生えてくる『フグ』みたいな者だ。だが人の命を奪うほどはないが，その苦しみは生き地獄とも言われるからな・・・・とりあえず2人を病院に連れて行こう」

そう言って、ゲンヤは携帯で救急車を呼んだ。
シャマルは責任を持って2人の治療をした。
10分後に救急車は来て、応急処置程度に済み、しかも大抵は回復したが、念のためセインとウェンディは病院に運ばれ、スカリエッティとウーノ、そしてクアロットの3人はついて行くことにした。

その後、シャマルは思いっきり、銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、リィンフォースにフルボコされるのであり、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、はやて、アルフ、エリオ、キャロ、ユーノ、リィン、カリム、シャッハはナンバーズに深く謝罪するが、ナンバーズは即座に許した。
シャマルがワザとやった訳ではない事は分かっていたが、その後シャマルが調理場に立つことが1ヶ月間禁止された事は言うまでもない。
そして第4試合はどうなるのかと考え行く中、カリムが言い出す。

「えーっとう、とりあえずセインさんとウェンディさんはドクターストップと言う形で・・・神楽ちゃんとエリオ君は2回戦進出決定と言う事で♪」
「なんじゃそりゃー！」
「そんなんありですかー！？」

勝者：『神楽』：『エリオ・モンディアル』

そして第5試合が始まり、桂、はやて、近藤、ザフィーラが舞台に立つ。

「だぁーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！！桂ぁ！この世界での貴様は確かに犯罪者じゃない！だがこれは勝負！手加減はしないぞ！」

近藤はそう叫んで刀を抜き、ザフィーラも人型になって拳を構えている。
すると桂はある作戦を実行するとはやてを向く。

「八神殿！」
「承知や！あれやな！」

すると、はやては猛スピードで逃げるようにこの場から離れる。
銀時達は一体何をするのかを唖然とする中、桂は懐から『んまい棒』をだす。

「んまい棒、『火爆鐘器（かばやき）』！」

すると桂はそのんまい棒を軽くザフィーラと近藤の間に向けて投げて素早く逃げる。
近藤とザフィーラはそれがなんなのか不思議に思った瞬間だった。

ドカァァァ

った近藤とザフィーラは・・・・「え・・・・・何この兵器？」といった瞬間に共倒れした。
当然の事、２人についていた立体映像の風船は跡形も無く消えた。

銀時、神楽、月詠、機動六課のメンバー、山崎、ナンバーズ、シャッハ、プレシア、ゲンヤはもの凄く衝撃的なあまりに衝撃過ぎたのか唖然とする。
そしてエリザベス、カリム、ルーテシア、アギトは・・・・

『お見事、桂さん！』
「まぁ・・・凄い威力」
「すっげー！最上級魔法級の威力を持っていやがる」
「うん・・・凄い」

などと桂の『んまい棒』の威力に驚く。
実はこれはこの世界の技術力を生かしてはやてと共にこっそりと開発した究極の『んまい棒』である。

「見よ、これぞ新たなるんまい棒、『火爆鐘器（かばやき）』の威力だ！」
「『鬼兵隊』対策に作ったうちらの最新兵器や！」
「ってそこまでするかァァァァァァ！」

自慢する桂とはやてにツッコむヴィータ。
ティアナも続けて言い出す。

「なにやっているんですか！これ思いっきりやりすぎでしょ！いくら対戦だからってそこまでしますかー！？」

理解できないティアナは額に血管を浮かべてツッコむのに対し、２人は・・・・

「武士たるとも、時にはどんな手を使ってても勝たなければならない」
「それが相手が味方であろうともな・・・」
「テメー等に武士を名乗る資格ないわー！」
「って言うよりはやて部長は武士じゃないでしょう！」

桂と八神のメチャクチャな武士説明に怒鳴ってツッコむヴィータとティアナ。
山崎が「局長ー！」っと叫んで、シグナムは「大丈夫かザフィーラ！」っと言って駆けつける。
ナンバーズは桂とはやてがとんでもないコンビであるを思い、プレシアとゲンヤは2人の異常なまでの行動に呆れていた。

「はやても・・・桂小太郎と再会して変わったなぁ」
「いや・・・変わりすぎでしょ？」

はやての変わりようにゲンヤは苦笑し、プレシアは呆れてツッコむ。

勝者：『桂小太郎』＆『八神はやて』

「それでは、残る試合も後3試合となりましたのでジャンジャン盛り上げたいと思います♪」
「別の意味で盛り上がっているぞ！しかもおかしいところばかりが！」

カリムが笑顔でそう言うと、ヴィータがまたもや怒鳴ってツッコむ。
そして第6試合の開幕。

（なのはの為にも、この勝負は絶対に勝つ！そのためにも、この中で最も戦闘力が高そうな・・・・エリザベスを最初に倒す！）

ユーノは『チェーンバインド』を炸裂させて、魔力の鎖がエリザベスに向けて放つが・・・・

『ぬるいわー！』

そう書かれたプラカードで大量に襲ってきた魔力の鎖を砕き返した。

「そんな！」

魔法も使わずにプラカードだけで防がれた事に驚くユーノ。
その隙にオットーがエリザベスに攻めだす。

「隙あり・・・」

思いっきり『レイストーム』を放つと、手のひらから発する帯状のエネルギーで構成された球体からエメラルド色のエネルギーをビーム状にして複数同時に放ち、全てがエリザベスに向かって放たれる。

『やっかましいわー！！』

そう書かれたブラカードで全てのエネルギービームを打ち返す。

「！？」

「オットーの『レイストーム』を打ち返した！？」

これには放った本人だけじゃなくノーヴェも驚きだす。
そして跳ね返されたエネルギービームは・・・・リィンフォースに向けられていた。

「え・・・嘘ー！？」

リィンフォースは慌てていたが、急いでオットーの『スレイプニール』で翼を広げて全てのエネルギービームを交わす。
このままでは勝てないと思ったユーノとオットーは互いに目を合わせて協力し合ってエリザベスを倒す事を決意する。

「チェーンバインド！」
「レイストーム！」

2人は一斉同時に魔法を放ってエリザベスに集中攻撃すると、エリザベスは・・・・

『こんなんで・・・・』
『捕らえたつもりかぁー！』

そう書かれた2つのボートを取り出して体を超高速回転をして『チェーンバインド』と『レイストーム』を全て打ち返された。

「えええぇ～～～！？」

これには2人も驚きだす。
エリザベスを中心に2人が連係攻撃した後にあった。
突如現れた、長い触手を持つワームタイプの巨大な竜が2人の背後から、触手で風船を割った。
実はこれはリィンフォースの『赤竜招喚』であった。

「ああ！」
「しまった！もう1人忘れていた！」

風船を割られた2人はリィンフォースの存在を忘れてしまい、あいえなく脱落。
そしてそして長い触手を持つワームタイプの巨大な竜は姿を消した。

「2人とも背後が隙だらけですよ？」

空を飛びながら笑ってそう言いだすリィンフォース。

勝者：『エリザベス』：『リィンフォース』

「何つうか・・・エリザベスって外見とは裏腹にメッチャ強いなぁ？」
「っと言うより存在自体が謎だ」

ヴィータとシグナムはエリザベスは本当に何者なのかを疑ってしまう。

「桂さん・・・確かエリーって辰馬さんが桂さんに贈った正体不明の宇宙生物だったんやね？」
「うむ、しかも文字の覚えは早くて戦闘力も抜群・・・さらにはプロ顔負けの絵を描いたり、鶴を折ったり、かなり器用など、エリザベスは究極の万能生物なのさ」
「それって凄いなぁ」

桂の説明にはやてもエリザベスは凄い存在であると驚きだす。
リィンフォースも正直言って、エリザベスの存在は驚かされている。
以前にゲームでのコントローラーさばきや寿司を握れるなど、確かに今思えば桂の言う通り万能的な存在であると思い込む。

「お姉ちゃんも二回戦進出おめでとう」
「ありがとう、リィン」

妹の励ましにリィンフォースはお礼を言う。

一方のキャロは不満を抱えていた。
相手は副隊長であるヴィータに有名な真撰組の一員である山崎、そして戦闘力は他の人物をも長けているセッテであった。
以下にレアスキルを持つ自分でも、戦闘力はフォワード部隊の中でもダントツに低い。
如何すればいいのかをエリオに聞こうとする。

「エリオ君・・・私如何すれ・・・ば・・・」

キャロの口から声が止まりだした。
彼女の眼にしたのは信じがたい光景だった。

＊

神楽は巨大なおにぎりを幸せそうに食べている。
隣にいるエリオは唖然と驚いている。
一体どこからそんなにもでかいおにぎりを出したのか不思議である。

「神楽さん・・・て、凄い食欲ですね・・・・」
「ん？・・・『腹が減っては行動が出来ぬ』っと言うアル♪」（モグモグ
「それ・・・『腹が減っては戦が出来ない』の間違いじゃ？」
すると、神楽はどこからか出したもう1つの巨大なおにぎりをエリオに上げる。
「良かったら一緒に食うと良いね♪」
「え！？／／／」
まさかの誘いに戸惑うエリオ。
普通そんなに食べられるのかって言うぐらいのツッコミはしそうだが、それ以前に女に誘われたエリオは顔を真っ赤に染めて・・・
「じ・・・じゃあ・・・頂きます・・・／／／」
エリオは顔を真っ赤に染めて巨大なおにぎりをいただく。
ちょうどお腹が減ってきたから良かったであろう。
ちなみにそのおにぎりにはシャマルのように間違った狂気的な具は入っておらず、何もは入っていない白米と海苔だけのおにぎりであった。
動揺が残っているのかエリオはまともにかむことに集中できないまま・・・・
「うう！？」
「エリオ！どうしたアルか！？しっかりするネ！」
飲み込める事ができなかった。
苦しむエリオに呆れて月詠が水をエリオに渡す。

「とりあえずこれを飲むんじゃ」

エリオはその水を受け取って飲み、飲み乾した後、息を大きく吐く。

「はぁ～、助かりました月詠さん。神楽さんも驚かせてすみませんでした」

「いやいや、エリオが無事なら良いネ・・・」

「ん・・・頬っぺたに米がついておるぞ？」

月詠がそう言うとエリオは自分の頬っぺたについている米粒を見て慌てる。

月詠はエリオのほっぺたについている米粒を取って口に入れる。

「あ・・・どうも／／／」

「おやおや？エリオも赤いアル。どうしたネ？」

「え・・・いや大丈夫・・・ですよ／／／」

顔を真っ赤になるエリオに笑いながらからかう神楽に、煙管を加えたまま少し笑う月詠。

なんやかんやで3人とも仲が良くて良い感じであった。

＊

そして第七試合が始まるが、キャロは何やらどす黒い邪気を放っていて、ヴィータ、山崎、セッテはもちろん、銀時達も怯えている。

（あれ・・・なんかキャロが怖く感じるんだけど？）

ヴィータは異常なまでのキャロの存在に驚く。
キャロの異常なまでの怒りに青ざめていた。
そう、それはまるでなのはの『白い悪魔』に匹敵するかのように・・・

「あのう・・・気のせいかあの子からとてつもない邪気が放っているのは・・・・俺の気のせい？」
「残念だけど・・・気のせいじゃないよ？」

山崎はセッテに質問すると、セッテは青ざめて答える。
恐れ恐れとヴィータはキャロに質問する。

「・・・キャロ？どうしてお前はそんなに怒っているんだ？」
「・・・・・」
「おぃ！返事ぐらいしろよ！なんかメッチャ怖いから頼むからそんな威圧感を放ちながらだんまりするの止めてくれよ！」

ヴィータは冷や汗を大量に流してキャロを呼ぶが・・・・

「五月蝿い・・・・」
「へ？」

口に出すとは思えないキャロの重い台詞が開かれた後、足元と背後にピンク色の魔法陣が展開された。
しかもその魔法陣は異常なまでに大きい。

「・・・『暗黒龍騎召喚・ディスバール』・・・・」

背後の巨大魔法陣から、巨体の漆黒の竜が召喚された。
姿はその名も通り漆黒の体つきで鱗は刺のように小さく生えており、翼は6枚生えていて、眼は血の様に赤く、爪と牙は金色に輝いて剣のようにとがっている。
大きさはあの『ヴォルテール』に匹敵する。
しかも、何やら凶暴そうに咆哮を放っていて、圧倒的な闘志は3人を圧巻する。

「・・・・え・・・・何この死亡ブラフ？」

3人は色々とあり得ない事が起こった事でどう対処すれば良いのか分からなかった。
『ディスバール』の存在にルーテシアとアギトは驚きだす。

「『ディスバール』！？」
「って、生物型ロストロギアである『ゾーマ』に匹敵すると言われる伝説の暗黒竜じゃねぇか！？つぅかなんで召喚できるんだぁ！？」
「えええぇー！？」

フェイトもキャロが召喚した竜に驚かされたが、まさかゾーマに匹敵する事を知って驚く。
確かに『ディスバール』から放たれる暗黒の魔力は軽くオーバーSランクを超えている。
召喚したキャロも凄いが一体何が彼女をそうさせたのかは理解できないのである。

「こんな運命なんか・・・・こんな運命なんかぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「え・・・キャロ・・・落ち着いて！！何があったの！？」

暴走の爆発がしそうなキャロになのははは止めようとするが、『ディスバール』は顎を開き、そこからとてつもない魔力を練りこんだ黒い炎を収束すると・・・・

「なくなっちゃえば良いんだぁーーーーーーーーーーー！！」

バァァァァァァァァァァァァァァン！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

キャロの叫び声と共に、『ディスバール』の極大な黒い炎の砲撃が放たれ、３人を飲み込み、３人の絶叫が響き渡る。
そして炎は消えて自然的に消えると、『ディスバール』は姿を消す。
そして黒漕げとなったヴィータ、山崎、セッテは沈黙して倒れる。

「ヴィータァァァァァァァァ！！」
「山崎ィィィィィィィィィィ！！」
「山崎さーん、セッテー！！」

シグナム、近藤、ディエチの３人は思いっきりかけつける。
一方の銀時達はキャロの怒りの爆破に恐怖しだす。
え・・・何この怒り？竜の逆鱗が触れられたの？ってか、あれ思いっきりゾーマより怖いんですけど？ってか倒せそうなんですけど？
などと怯えながらそう考えるなか、シグナムと近藤は一体何が起こったのかキャロのほうを向き、ディエチはキャロを睨む。

「キャロ！一体なんでこんなことを！」
「お譲ちゃん！いくらなんでもやりすぎじゃないか！」
「貴方、そこまでする必要があったのですか！？」

「あぁ？・・・貴方達も裁き受けたいんですか？」

「すみませんでしたーーー！！！！」

キャロの鋭い眼線と凶悪的な殺気に、シグナム、近藤、ディエチは逆らえずに土下座した。

「ヅラ・・・女の怒りはおっかないな」

「ヅラじゃない桂だ。キャロ殿の怒りはもしかすれば高町殿並におっかないかも知れぬ」

「いや・・・もしかすればゾーマをも殺せそうな気がしてきた」

銀時は桂にキャロの竜の逆鱗の如くの怒りは要注意であると話、はやてはもしかすればあのゾーマも倒せそうであると考える。

そしてプレシアとシャマルは回復呪文で3人を癒し、念のためゲンヤは救急車を呼んで3人を運ぶ。

ディエチは山崎が心配でついて行くことにした。

勝者：『キャロ・ル・ルシエ』

「キャロ・・・一体何が君をそこまで・・・・・」

「おっかなすぎて怖いアル」

「ある意味、鳳仙よりおっかなすぎじゃ・・」

原因を作ったエリオ、神楽、月詠はキャロの怒りに恐怖する。

そしてカリムが緊急報告する。

「えー、第8試合は銀時さん、シグナムさん、ティアナさん、ディエチさんの組み合わせですが・・・ディエチさんは抜けて第7試合はキャロさんだけでしたので・・・・銀時さん、シグナムさん、ティアナさんはこのまま2回戦進出決定にします♪」
「なんじゃそりゃあああああああああ!!」

戦わずにして2回戦進出は誰もが納得しなかった。

「おかしいだろ!つうかおかしいって!」
「敗者復活戦はないんですか!?戦わないで2回戦進出はおかしいですよ!」

ノーヴェとユーノは訴えるが・・・

「2回戦進出だってよぉ」
「思わぬ収穫が得たな」
「これで優勝が狙えそうな気がする♪」

銀時、シグナム、ティアナは大喜びだった。

「薄情者ォォォォォォォォ!!」

3人の喜びにノーヴェとユーノは叫ぶ。
そして2回戦が始まるのであった。

第三十三訓：女の怒りはメッチャ怖い！（後書き）

2回戦に勝ち残った強豪魔導士と侍達（！？）！

2回戦はさらに過酷な勝負になる。

銀時暴れる！

スバルの剣技炸裂！

なのはの魔王化！

激戦は広がる！

プレシア

「次回、「勝負は迫力があるほど面白い」・・・・テイクオフ」

第三十四訓：勝負は迫力があるほど面白い（前書き）

白熱する魔導競技大会！

脱落者が続々！

笑いありかなしかの侍と魔導士の対決！

山崎

「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります」

第三十四訓：勝負は迫力があるほど面白い

２回戦に残ったのは以下の通り。

銀時、フェイト、桂、なのは、スバル、ティアナ、神楽、アルフ、エリザベス、エリオ、キャロ、シグナム、リィンフォース、ドゥーエ、シャッハ

そんな感じで敗北した九兵衛、近藤、辰馬、ザフィーラ、ユーノ、トーレ、ノーヴェ、チンク、オットー、ディードは見学。
そして二回戦の内容をカリムは言い出す。

「それでは２回戦は・・・・『ガジェット連続破壊対決』！」

テンション上げてカリムは対決名を言い出す。

「ルールは簡単！もう一度４人で組んでももらい、より多くガジェットの破壊数が多い、２名が準々決勝に進みます！」
「また４人の組み合わせアルか？」

カリムの説明に神楽が質問する。

「はい！なお、制限時間は５分！それと使用できる魔法はＡＡランク級までです！ＡＡＡランク以上使えば即失格ですよ！」

そして、カリムは指鳴らしをすると、訓練場があっという間に市街地に変化した。

「のぁ！いつの間にか町に変わりやがった！」

「凄いアル！この世界は何でもありネ！」
「なるほど、この風景の方が広くてガジェット達の襲来がしやすいわけか」
『凄いですね』

銀時、神楽、桂、エリザベスの４人は初めて見る訓練場の変化に驚く。
九兵衛、近藤、辰馬もこれには予想外に驚く。

「凄いな・・・ここの技術は僕達の世界をはるかに超えている」

九兵衛も感心するかのように言い出す。

「いやー、一体どういうカラクリで出来ているのか今度是非教えてもらいたいですなぁー！」
「全くぜよ、あはははははははははははははは！」

愉快そうに笑う近藤と辰馬はどういう技術で作られたか興味深く言い出す。

そして対戦組み合わせは以下の通り。

第一組

銀時、神楽、アルフ、キャロ

第二組

フェイト、スバル、シャッハ、リィンフォース

第三組

桂、エリザベス、ティアナ、はやて

第四組

なのは、エリオ、シグナム、ドゥーエ、

「では、第一組から始めます！」

そして銀時、神楽、アルフ、キャロ、フリードは市街地の舞台に立つ。

「それでは、バトルスタート！」

カリムが開始の合図をする。

すると、天空から２０体のガジェットが、一斉に銀時達に襲い掛かる。

三体のガジェットが銀時に向かって、中心にある黄色いレンズから光線を放とうとしたが・・・

「てゃあああああああ！！」

一瞬でガジェットの間合いに移り、居合いの構えで木刀『洞爺湖』をガジェットに向かって、横薙ぎに振りぬく。

三体のガジェットは一瞬で横真っ二つに斬られた。

そしてすぐにその内1体を踏み台にして空にいるガジェットに向かってジャンプする。

「邪魔だァァァァァァァァ！」

大きく叫んで高速に木刀をふってガジェットをさらに4体真っ二つに斬る。

その隙にガジェット達が黄色いレンズから光線を放つが、木刀を振り回して全て打ち返して反射してきた光線は7体のガジェットの物体を貫通し、ガジェットは大爆発する。

「すげぇ！」

「一気に10体以上のガジェットを！」

ノーヴェやトーレも驚きだす。

初めて見る銀時の戦いぶりは予想を超える。

「ふぉわちゃー！」

神楽も負けじと傘を暴風の如くに振り回してガジェットを粉砕する。

1振りで2・3体は破壊している上、傘についているマシンガンを連射して空中にいるガジェットを相殺していく。

しかも接近してくるガジェットはけり返したり殴ったりして粉々にするなど少女とは思えないデタラメな身体能力の高さを披露する。

「な・・・傘一本でガジェットを次々と破壊だと？」

「それに・・・なんかあの子、さっき殴ってガジェットを破壊していなかった！？」

チンクやディードなど、神楽の人間離れした戦闘力に驚きを隠せな

かったのである。
その強さは自分達のような戦闘機人とは比べ物にならないほどの強さであった。

何せ神楽は，宇宙最強の戦闘種族『夜兎族』であるから、機械化しなくてもメッチャクチャ怖いほど強い。

一方のアルフやキャロも魔力を使ってガジェットと戦っていた。
アルフは思いっきりガジェットを殴って破壊する。
キャロは『竜魂召還』でフリードを真の姿である『白銀の竜（飛竜）』にさせて、フリードは一気にブラストフレアを放ってガジェットを2体焼き尽くす。
予想以上に苦戦しているアルフとキャロ。
実は今回の訓練場のガジェットはカリムが3日前、電話でスカリエッティに訓練用に作るのを頼まれて作ったスカリエッティ作のガジェットなため，訓練用のガジェットよりかなり厄介である。

「くぅ！メッチャ厄介じゃない！」
「魔法防衛が強くなっている上，戦闘力もかなり高くなっています！・・・それなのに・・・銀時さんと神楽さん・・・凄い・・・」

キャロの眼には、あるビルの屋上で嵐の如くの暴れっぷりをする銀時と神楽が移っていた。
パワーアップしていようと、魔法を使わずに身体能力だけで戦う銀時と神楽には関係なかった。
銀時と神楽ばかりに異常なまでの数で攻めてくるガジェットだが、斬ったり破壊したりとくり返しされるばかりであった。

「どけェェェェェ！クズ共ォォォォォォォォ！」

「ほぁちゃあああああああああああああ！」

銀時と神楽の連係的な、木刀と傘の振り回しで次々とガジェットが破壊されていく。

「神楽ァァァァ！今回は何体もガジェットを粉砕してもかまいやしねぇ！全部破壊する気でやれぇぇぇぇぇ！」

「うっす！」

さらに動きが上がって来た事でジャンジャンとガジェットの相殺していく中、さらに天空からガジェットの大群が現れた。

2人は気づき、互いに眼を合わせて合図する。

「神楽ァァァァァァァァァァ！」

銀時が猛スピードで神楽に駆けつけ、大きくジャンプすると、神楽は傘を構えて・・・・・

「行っけエエエエエエエエエ！銀ちゃァァァァァァァァァァァァァん！！」

そのままゴルフクラブのように振り回し、銀時はその瞬間を踏み台にすると、神楽は銀時を天空から襲ってきているガジェットの大群に向かって吹っ飛ばす。

「オオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！」

思いっきり天空を飛翔した銀時は閃光の如くにガジェットの大群を突破して飛び上がると、突如無数のガジェットが斬りおとされた。

その爆風に巻き込まれたガジェットも次々と連係するように爆発し

て一気に４５体以上のガジェットが破壊された。
残ったガジャットは銀時に向かって光線を放つが、銀時は体をガジェット達に向けて、木刀を振り回し、さらに跳ね返すと、その光線はガジェットの物体を貫通しただけじゃなく地上に残っているガジェットに何体か直撃して破壊している。

一方の神楽は猛ダッシュしながら、傘を振り回して次々とガジェットを破壊していく。
そしてビルの屋上からジャンプして・・・・

「ほあちゃあああああああ！！」

隕石の如くの落下でガジェットをチョップで一刀両断して破壊した。

ピーーーーーー！！

「しゅ・・・終了～～！」

終了タイムが鳴り、ガジェット達が次々と撤退していく。

銀時は「あー、先の事考えていなかったーーー！！」っと叫んでビルの屋上に落下するが、着地する。
しかしその衝撃で足に内部の痛みが来ると、しばらく動けなくなって痛みを我慢する。
そして痛みが治まって「マジで死ぬかと思った！」っと口に出す。

銀時と神楽の異常な戦いっぷりにカリム、シャッハ、ゲンヤ、ナンバーズは唖然とする。

完全に銀時と神楽の圧勝だが、一体どれだけ破壊したのか想像できない。

「ウ・・・噂には聞いていたけど・・・・」

「まさか、これほどとは思いもしませんでした」

カリムとシャッハも予想を超えた銀時と神楽の身体能力は圧巻された。

但し、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、エリオ、はやて、シグナム、ユーノ、プレシアは間違いなく銀時と神楽が勝つと確信していた。

「そ・・・・それでは・・・・結果発表です」

カリムは動揺を抑えられないまま結果発表をすると、空にモニターが映し出された。

そこにガジェットを破壊した成績が書かれている。

銀時　１６５体

神楽　１３８体

アルフ　８７体

キャロ　２１体

勝者：『坂田銀時』：『神楽』

「よっしゃー！」
「おほほ～い！圧勝ある～～～！！」
銀時と神楽は勝利を確信して大喜びする。
「って、銀時に神楽強すぎだよ！」
異常なまでもない2人の強さに圧倒されたアルフ。
「やっぱり2人は凄いですね・・・神楽さんは憎たらしいけど」
キャロはさりげなく神楽に関して怖いことを言い出す。
「さすがね・・・銀時に神楽」
少し笑って言い出すプレシアにゲンヤは初めて見る銀時の戦いっぷりに感動したようである。
「いやー凄いなぁ。侍の強さを感じさせる戦いぶりだった」
それもダントツ1位で勝ちあがった銀時の強さを見て、スバルが憧れるからそれなりはデタラメ的に強いと思ったが、ゲンヤの予想をはるかに超えていた。
「あいつら・・・マジで人間か？」
「いや・・・人間だが強さが常識をはるかに超えている」
「いずれにしてもオーバーSSランク以上は行く」

ノーヴェ、トーレ、オットーの3人は銀時と神楽は起動六課以上の戦闘力を持っていると考える。
チンクとディードは噂以上の銀時の強さに尊敬する眼で銀時を見ていた。

＊

「それでは、第二試合を始めます！」

フェイト、スバル、シャッハ、リィンフォースは訓練所のところに上がる。
シャッハはスバルを見つめている。
以前、スバルはシグナムと一対一の模擬戦でシグナムに互角以上に戦いをした事をシグナムから聞かされた。
だが最初は信じられなかったが、先ほどの一回戦でのスバルの戦いを見て、剣の腕は本物であるを確信する。

（魔法どころが魔力をも使わないで剣術のみの戦いをするなんて・・・・魔導士としては変わっているけど・・・シグナムが苦戦するのも分かる気がする・・・）

シャッハはスバルの剣術はおそらく速さだけならシグナム以上であると考える。
シグナムの剣が剛の如くの力強さなら、スバルの剣は静の如くの神速を誇る。

一方のスバルはどのようにガジェットを一層するかを考える。

（うーん、とりあえずそろそろ魔法を使ってみるかな？こう言うときこそ『ウィングロード』が役に立つし）

などと『ウィングロード』の使用を考える。

「それでは、バトルスタート！」

カリムが開始の合図をする。

「・・・ウィング・ロード！」

すると、スバルは自身の魔力で魔力の橋を生成させる。
しかも変化自在にしやすいようにコントロールしているのである。

「それじゃあ、先に行きます！」

スバルは『ウィングロード』に乗って走り出す。

「あ・・・スバル！そんなに先走っちゃ・・・」

「来ます！」

フェイトがスバルを呼ぼうとするがリィンフォースは空を見上げてると数多くのガジェットがこっちに襲ってきている。

「バルディッシュ！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ≫

すると、フェイトは『バルディッシュ』を鎌状態に変化させて『アークセイバー』を放つと２・３体のガジェットが相殺される。

「ヴィンデルシャフト！」
≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ≫
すると，『ヴィンデルシャフト』はカードリッジをロードした状態で回転させてから対象とすれ違いざまに一閃を炸裂させる。
「レップウイチジン！！」
そしてガジェットを次々と倒していく。
「シュヴァルツェ・ヴィルクング！」
するとリィンフォースは魔力を付与した拳を繰り出す打撃魔法を炸裂させ、次々と破壊していく。
だがリィンフォースにはそれ以上に強力な魔法は山ほどあるが、どれもがＡＡＡ以上行く為、ルールにより使用できない。
（やばい！これじゃあ圧倒的に不利だ！ＡＡランク以下の遠距離魔法も覚えていないし、しかもガジェットは訓練用とは違って強い！）
するとガジェットの2体はリィンフォースに光線を放つが、リィンフォースは避ける。
「こんなことなら魔法の基礎を学べばよかった！」
半泣きで言い出す。
次々とガジェットを倒していくフェイト、シャッハ、リィンフォースの３人。

「やっぱ、フェイトちゃん相手にスバルは厳しかったかな？」

なのははそう言う。

以下にスバルが強くてもまだ新人魔道士、隊長と副隊長級の実力を誇るフェイト達にはまだ及ばないと思うのも無理はない。

「スバルったら、１人で先に行っちゃって、一体どこにいるの？」

ティアナも呆れてモニターを見てスバルを探す。

一方のスバルは。

「オオォォォォォォォォォォォォォォォ！」

『ウィングロード』の柱で素早く走り、神速の剣技を炸裂させて凄まじい勢いで次々とガジェットを切断する。

それはフェイト達をも上回るぐらいに、次々と斬破する。

そして背後からガジェットの大群が現れ、スバルは体を後ろに向いて動きを止めると、『ティルヴィングエア』を鞘に収め・・・

「斬蒼（ざんそう）！」

神速の居合いを炸裂させて無数の刃がガジェットの大群の８割を切り刻む。

そしてすぐさまにダッシュして次々と切り倒す。

ガジェットの大群を全て斬って突破した後、下にいる６体のガジェットが攻めてきていると知り、上に持ち上げると、刀身が蒼く光だす。

「蒼波二閃（そうはにせん）！」

左右に刀を振ると、蒼く輝く魔力の斬撃が下にいる6体のガジェットに向けて放たれると、1つの斬撃は3体のガジェットを斬り裂いて破壊する。
そしてビルの屋上に止まり、『ティルヴィングエア』を鞘に収める。
目の前にはさらに迫ってくるガジェットの大群が見える。

「うわぁ、かなりいる。じゃあ大技で一気にいきますか・・・」
≪Ｐｏｗｅｒ　ｂｏｏｓｔ，　ｃａｎｃｅｌｌａｔｉｏｎ≫
スバルの回りから水色の魔法陣が現れ、自らの魔力を『ティルヴィングエア』に流し込んで収束させる。
実はこれは『ティルヴィングエア』の強度と切れ味を上げる魔法『ブレイド・フォース』である。
ランクはB級だが、スバルにとってはまさに最優の魔法とも言える。
≪Ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ，　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ≫

『ティルヴィングエア』がそう言うと、スバルは迫ってきたガジェットの大群を目の前に『ウィングロード』を発動し、ガジェットの大群を囲むかのように橋が作られる。

「一騎当千剣技・・・・」

スバルは眼を瞑ってゆっくりと柄を掴んだ。

「無刃（むじん）・疾風静激（しっぷうせいげき）！」

眼を一気に開いた瞬間、スバルは高速移動しながら神速の連激剣舞

を炸裂させる。
竜巻のような剣速と剣圧が次々とガジェットをバラバラに切断して掃滅していく。
その太刀筋が眼にも映す事は不可能と思わせる。

しかも『ウィングロード』で囲んでいる為、無数の刃の竜巻と思わせるような容赦ない斬撃が繰り替えられる。

その光景を空に飛びながら見て驚くフェイト。

「凄い・・・スバルったらいつの間にそこまで強くなっているんだ・・・」

魔法の成長はそこそこでも、剣技は異常なまでの成長力を感じさせる。
そして終了タイムが鳴り、ガジェット達が次々と撤退していく。
終了と分かったスバルは再び『ティルヴィングエア』を鞘に収める。

シャッハとリィンフォースも数は手ごたえありと確信する中、結果を待つ。

「それでは結果発表です！」

すると空にモニターが映し出され、その結果発表が映し出される。
それはシャッハとリィンフォースの予想外な結果になった。

フェイト　１４３体

スバル　１５０体

リィンフォース　１３３体
シャッハ　１１８体
勝者：『フェイト・テスタロッサ』：『スバル・ナカジマ』

「やったぁ！準々決勝勝ち抜けだー！」
「あぶなかったぁ・・・」

スバルは大はしゃいで大喜びしてフェイトは何とか勝ち上がって一安心する。

「そんなー！たった１０体の差で敗北なんて・・・」

わずかの差で敗北に悔やむリィンフォースに対し、シャッハは自分がビリである事に悔やむ。

「そんな・・・私がビリだったなんて」

かなり落ち込むシャッハ。
だが他のものから見ればかなりのハイレベルな戦いである事には変わりなしであった。

「スバル・・・また強くなってんじゃないか？」
「ええ，フェイトだけじゃなく、あのリィンフォース相手に互角以上の結果を残しているわね」

スバルの剣技の強さは父・ゲンヤとプレシアも驚きを隠せなかった。

そしてもしかすれば剣術はSランクは行くと確信する。

「いやー、フェイトの実力は相変わらずでスバルの剣技は相変わらずだなぁ。まちがいなく互角だろう」

「ほんとネ、リィンフォースもあの2人相手じゃなかったら準々決勝勝ちぬけネ」

銀時と神楽は思ったどおりの感想を言い出す。

「シャッハさん・・・凄く落ち込んでいるね」

「そうですね・・・」

シャマルとなのはも落ち込んでいるシャッハが気の毒そうに見る。

それを無視するかのように次の第三試合が始まる。

すると桂は・・・

「突然だが・・・俺は棄権させてもらう」

「はァァァァァァァァァァァ！！」

突如の桂の棄権に誰もが驚きだす。

原因は今回の組み合わせにあった。

「いかに勝負事とは言え、エリザベスとは敵対する訳には行かぬ。それに八神殿には色々と世話となっている」

『桂さん・・・』

「桂さん・・・」

エリザベスとはやては自分の為に棄権してくれる桂に強い感謝を抱く。

そして桂は訓練場から出て銀時の元に向かう。
そして、エリザベス、はやて、ティアナの3人による対決が始まる。
「それでは、バトルスタート！」
カリムの開始宣言直後、エリザベスは武装化して数多くのマシンガン、ショットガン、ロケットランチャーなど戦場に行く軍兵の格好になった。
そしてマシンガンやショットガンなど片方の手だけで襲ってきているガジェットを次々と破壊していく。
「って、エリザベスさん！いつの間にそんな武装をしているんですか！？ってかメッチャ強っ！」
「言うてる場合やない！完全に遅れをとってもうた！」
エリザベスの行動に驚く2人は、我に返って自分達も対抗する。
はやては魔力弾を無数に放ってティアナは『クロスファイヤーシュート』を連続に炸裂させる。
だがエリザベスは接近戦も長けている為、接近してきたガジェットには『うおりゃあああああああああ！！』っと書かれたプラカードで次々と破壊していき、空に浮んでいるガジェットには口からキャノン砲を出して打ち出し、次々と破壊していく。
そのため、ティアナとはやてよりも多く破壊しまくっている。
そして終了タイムが鳴って結果発表が出される。
桂　棄権

エリザベス　１４２体
はやて　１１５体
ティアナ　９８体
勝者：『エリザベス』：『八神はやて』

『うっしゃー！！』
「うち等の勝利～～！！」
「ま・・・負けたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

勝利したエリザベスとはやての喜びと敗北したティアナの悲しみが混じり合う。

「凄いですね・・・・エリザベスって」
「うん・・・そうですね」

シャッハとカリムも外見では予想できないエリザベスの強さには予想外に苦笑する。

「それでは最後の試合が始まります」
「ようやく私の出番が来たようだな♪」

シグナムも準備万端（じゅんびばんたん）であり、『レヴァンティン』を構えだすと・・・・

「にゃはは、シグナムさ～ん」

ご機嫌斜めになのはがシグナムを呼ぶ。
シグナムはなのはに振り向くと・・・・・

ドカァ！

「ぐぅ！？」

突如、誰も見えないようにシグナムの腹にボディナックルを喰らわせて、シグナムは気絶して倒れる。

「し・・・・シグナム！？」

はやて、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィンはシグナムに駆けつけると、なのはは愉快そうな顔でこう言い出す。

「なんかシグナムさんが気絶して倒れているそうだから・・・これはドクターストップかな？」

白い悪魔のオーラを放ちながら説明すると、はやて達は逆らう事ができずに言い返せなかった。
するとドゥーエは・・・・

「ちょっと待ったぁぁ！おかしい！何かメッチャおかしいよ！さっきその人が・・・・」
「え・・・私が何？」

笑顔で笑っているが、すんごい威圧感を放っている。

「棄権させてもらいますぅぅぅぅ！」

ドゥーエは逆らえず、土下座して棄権した。
ナンバーズはそれを見て、「白い悪魔ーー！！」っと叫んで涙を流した。

シグナム　ドクターストップ

ドゥーエ　棄権

勝者『高町なのは』：『エリオ・モンディアル』

愉快そうに笑うなのはにエリオはガタガタと震えている。
もしこのまま試合していたらまちがいなく、なのはに『ディバイン・バスター』か『スターライト・ブレイカー』を放たれるどころであった。
銀時達はなのはに逆らったら死んでしまうと確信して、できるだけなのはを怒らせないようにすると誓った。
でなければ殺されるからだ。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

山崎

「それでは、今回のアシスタントを務めるのは真撰組の監察方、山崎退が勤めさせていただきます」

銀八
「よろしく山差君」

山崎
「山崎です！」

銀八
「えー、まずはこの質問。『虚空』さんの質問。『六課のデバイス達（レイジングハートやクロスミラージュ等）の出番が『シャマル』以上にないようなのですが何故ですか？』・・・そりゃバトル展開が無かったからだと思います」

山崎
「ああ。確かに魔法対決がないとデバイスは必要ないかもしれませんしね」

銀八
「そう言うこと。っと言う訳で『虚空』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『なんで黒神さんは赤夜叉さんの「リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ」の小説を描こうと思いましたか？』・・・それは作者が銀魂が好きで、銀魂とリリカルなのはのクロスオーバー系がメッチャ斬新に見えたからでしょう」

山崎
「確かに赤夜叉さんの『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』はメッチャ面白かったですね」

銀八
「ああ、終わったのが惜しいぐらいに・・・っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。」

山崎
「次行きます。ペンネーム『藍莉』さんからの質問です。『銀さんは、高杉と桂、辰馬との過去の話をなのはたちに言わないんですか？それと、いつになったら桂とはやてはラブラブになるんですか？銀さんは誰が好きなんですか？』」

銀八
「おそらくは、話す機会があると思います。今回の最重要なポイントですし」

山崎
「確かに赤夜叉さんの『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』は旦那の『白夜叉』の異名が重要で、こっちのは旦那や高杉の因縁と過去が重要ポイントですしね」

銀八
「まぁな。それに桂とはやての関係もあり得るかもな」

山崎
「たしかに、人妻好きなのは知っていましたが、桂ももったいないですね。はやてさんのような綺麗な人の好意に気づかないなんて」

銀八
「まぁ気づく事もあるだろ？・・・最後のはムカつくので言いません」

山崎
「なんで～～！？」

銀八
「っと言う訳で『藍莉』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『アグニ』さんの質問。『1．はやてによって給料を減らされた時、どうしてスバルは怒らなかったのですか？2．前々回の予告では焼肉の話だったはずなのにどうして変えたのですか？3．月詠はショタになっちゃいますか？』。はい、す張り答えます。1つ目は、スバルはおそらく給料だけじゃなく父・ゲンヤか姉のギンガにお小遣いを貰っている可能性があると思われます。2つめはデバイスの出番が最近出て中立ったので、焼肉じゃデバイスの出番がないとと思って、無理矢理でも変えてしまったそうです。3つ眼は月詠はシャタかは知りませんが、面倒見が良いのは確かだと思います」

山崎
「なんか色々と個性的がある質問ですね」

銀八
「まぁ、中にはおっかねぇのも入っているがな。っと言う訳で『アグニ』さん、廊下に立っていなさい。」

山崎
「では次行きます。『烈火竜』さんの質問。1つは『美少女が多いこの物語に、パンチラやポロリが無いのはなんでですか？』・・・ってこれ思いっきりセクハラ質問じゃないですか！」

銀八
「まぁそうなるかな。それにあるったらあるかもしれないが・・・ギャクを中心にするためそんなにはないかもしれません」

山崎
「・・・まぁ質問だからいっか。もう1つの質問。『キャロの召喚したドラゴンはオリジナルですか？』・・・ぎゃぁぁぁ

ださい」

山崎
「お前がめんどくさいだけだろー！っまぁいい！次行きます！ペンネーム『神威　恭夜』さんの質問。『神威の妹に質問です。なのはやフェイトらが銀さんの妻になったら銀魂ヒロインの座が奪われる可能性がありますけど、銀魂ヒロインの座を守るため闘いますか？』・・・ああ、あのチャイナか」

銀八
「どうですか、神楽」

銀八先生がそう言うと、神楽が立ち上がる。

神楽
「ふざけんじゃないアル！ヒロインの座は渡さないアル！」

そう言って、何故か山崎を蹴り出す。

山崎
「何故俺ぇぇぇ！？」

蹴り終ると、神楽は席に戻る。

銀八
「っと言う訳で『神威　恭夜』さん、神楽さんはヒロインの座を守る為に戦う様です。もう１つの質問。『神威（春雨繋がりで）、ヴィヴィオ、ギンガ、プレシア、クロノの登場予定は、ありますか？是非クロノ以外、出して下さい。』・・・まぁプレシアは出たから

出るんじゃない」

すると、銀八は神威、ヴィヴィオ、ギンガ、プレシア、クロノの写真を出して黒板に貼り、マジックペンを出す。
そして神威（春雨繋がりで）、ヴィヴィオ、ギンガ、プレシアの写真の顔に丸をつける。

銀八
「見ての通り、作者が出す予定の新キャラです。まぁヴィヴィオとギンガはもったいないがこの小説ではそんなに目立った所はでないが出せるとして、神威が出てくる可能性はあるので、プレシア以外のこの3人も出る可能性があります」

山崎
「おい！1人は入っていないぞ！クロノか！？クロノなのか！？」

山崎の質問をスルーして銀八はクロノの写真をマジックペンで塗りつぶす。

銀八
「まぁ、こんな感じかな？」

山崎
「ああァァァァァァ！！クロノも入れてやってくれよ！」

すると銀八はマジックペンを机に置き、クロノの写真を取り出して・・・

銀八
「っと言う訳で『神威　恭夜』さん、クロノ以外の人物は確実に出

るので安心してください！」

潔くクロノの写真を破る。

山崎
「クロノォォォ

はあるそうです」

山崎
「ああ、そう言えばあの三人、メッチャ仲が良かったですね。キャロさんには悪いけど、これは恋が来そうですね・・・」

銀八
「あ・・・キャロだ」

山崎
「ぎゃあああああ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

銀八
「（随分とトラウマだな・・・）っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい」

第三十四訓：勝負は迫力があるほど面白い（後書き）

ついに残ったのは８人！

１対１の真剣勝負！

『魔導競技大会』の最大の対決が始まる！

ゲンヤ

「次回、「大会編の中にはたまに意外な人物が優勝してしまうオチと予想外な展開が起こる事が多い」テイクオフ」

第三十五訓：大会編の中にはたまに意外な人物が優勝してしまうオチと予想外な

『魔導競技大会編』いよいよクライマックス！

果たして優勝は誰の手に！

本格的な魔導対決はあるのか！？

プレシア

「『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』・・・始まるわよ」

第三十五訓：大会編の中にはたまに意外な人物が優勝してしまうオチと予想外な

「一世一代のチャンスが・・・」
「こんな所で負けるなんて・・・」
「兄さんとのデートが・・・」
「不覚・・・」

2回戦で敗北したアルフ、リィンフォース、ティアナ、シグナムはもの凄く落ち込んでいた。
それを尻目に、いよいよ残った勝ち抜けはたった8人。

銀時、フェイト、なのは、スバル、神楽、エリザベス、エリオ、はやて。

以下の8人が優勝を争うバトル展開に追い込まれた。

「さぁ、『魔導競技大会』も、あとわずか！こっからは一対一のバトルを行わせます！準々決勝、準決勝、そして決勝はそのまま『魔導決闘』で行わせます！」

白熱したカリムは一気に勝者を決めようと残りの試合は一対一で決めさせようと考える。

「一対一？つまりガチンコ勝負って奴だな？」
「そんなの私の専門ネ！よりいっそう優勝しやすくなったアル！」

優勝が見えてきた銀時と神楽はやる気満々である。

そしてカリムはゲンヤとプレシアに質問する。

「所で、ゲンヤさんとプレシアさんはこの8人の中でどの人が優勝すると思います？」
「そうだなー」
ゲンヤは悩んで見るとある人物を思い浮かべる。
「やっぱ坂田銀時だろ？二回戦でもトップの成績で勝ち上がってきたし」
「まぁ、母親としてフェイトって言いたいけど・・・銀時なら優勝あり得るしね」
などと2人は銀時が優勝するのであると思い込む。
そして気のせいかさっきからなのはの眼線がスバルを睨んでいる。
スバルは青ざめているがそれは気にしないで置く事にした。
どうしてスバルばっかりを睨みつけていたのかは知らないが・・・
言える事はただ一つ。
これまでのなのはの魔王っぷりは異常なまでに恐怖を与え、対戦相手を翻弄し続けた。
このままほうっておいたら危険と判断したのか・・・・
「なんかもういろいろやばいんで退場！」
っと叫んで作者である黒神が言い出す。
「バスターーーーーーーーー！！！！！」
「ギャアアアアアアアアアアアア！！！！！」
なのはは極大な桜色の魔導砲を放ち、作者を吹飛ばす。

「作者ァァァァァァァァァァァ！！」

銀時は大きく叫びだす。
そして本戦が始まるのであった。

「それでは第一試合は・・・・なのはさんとはやてさん♪」

カリムがそう言い、なのはとはやては訓練所に移動する。

「それでは、バトルスタート！」

カーン！

カリムの対決始まり宣言でコングが鳴らされる。
この勝負、はっきり言ってなのはが有利であると誰もが思うが、はやては絶対に勝てると確信する。
なぜなら・・・なのはが最も厄介と確信して内緒でなのはにリミッターをかけたのである。

（はっきり言ってなのはちゃんと本気で戦っても、絶対に勝てへん！せやからこっそりとリミッターをかけ・・・）
「ねぇ、はやてちゃん？まさかとは思うけど・・・私にリミッターをかけていないよね？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！
（ギク！）

図星を突かれたはやては青ざめて大量の汗を出す。

「な・・何のことや？お・・・おほほほほほ・・・（焦り）」
「今なら、まだ許してあげるよ・・・私にかけたリミッターを解除

して棄権するか・・・それともこの場で私にすんごく頭冷やさせるか・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

強烈なまでの『白い悪魔』のオーラを放つ。

「棄権させてもらいます～～！！」

あっけなくはやては涙を流してリタイアした。

勝者　『高町なのは』

「ふぇ～ん！桂さ～ん！」

涙を流して桂に飛び込むはやて。

「や・・・八神殿・・・生きていれば良い事は絶対に起こる。必ずだ」

桂もなのはの絶対的な魔王の威圧感に恐怖して青ざめる。

そして飛び込んできたはやてを慰める。

一方の辰馬はなのはの魔王っぷりに青ざめて銀時に話しかける。

「き・・・金時・・・あの娘さんって別嬪さんだけどメッチャ怖いぜよ」

「ああ・・・だから無闇にナンパしないほうが良い。砲撃魔法の餌食になるから」

銀時の注意を聞きだす辰馬。

近藤も小さい頃のなのはは知っているが、ここまで怒ると怖い人物であるとは思いもよらなかった。

「万事屋・・・高町殿ってあんなに怖かったっけ？」
「ゴリラも気をつけろ・・・もしかすれば妙並におっかない人物だ」

銀時の言う事はもっともである。
ティアナ、エリオ、キャロ、アルフ、シャマル、ユーノ、シャッハ、ルーテシア、アギト、ナンバーズは涙を流して怯えており、スバル、月詠、シグナム、九兵衛もさえも逆らう事ができないほどガタガタと震えている。
ゲンヤやプレシアでさえもなのはの『白い悪魔』はさすがに恐怖を隠せなかった。
神楽にいたっては体を丸めて『怖いアル怖いアル怖いアル』っと何度も言っている。

「あ・・・あははは・・・では次の対決は・・・銀時さんとフェイトさん！」
「お、俺か」
「私と銀時が？」

まさかの銀時との対決にフェイトは驚く。
そして2人は訓練場に上がりだす。
この2人の関係は誰もが知っている。

『ジュエルシード事件』で銀時が最初に出会ったのがフェイトとアルフである。
そしてこの世界を知らない銀時はマンションに泊めてくれた礼としてジュエルシードを集める強力をした。
その時の銀時の強さは魔導士をも圧倒するほどの身体能力を誇っており、フェイトも信頼するほどであった。

ゆえに銀時と最もかかわりがあるのがフェイトである事になる。
そんな2人がまさか戦う日が来るとは思いもよらなかった。

一方のフェイトは今の自分は銀時に勝てるかどうかは知らない。
相手はあのゾーマをも倒した最強の武神であるゆえに、魔法なしでも剣だけで解決させてきた男。
以下に魔力がSS＋である自分でも歯が立たないかもしれない。
だがフェイトには銀時用の対策をもっていた・・・それは・・・

「銀時」
「どうした？」

おそらくは棄権して欲しいとフェイトが言いそうだが、フェイトの言った事は思わぬことである。

「棄権してくれたら、チョコレートケーキを好きなだけ奢ってあげるよ」
「棄権します」

ズゴーン！

あっけなく棄権した銀時に、この場の誰もがずっこける。

「なんだそれはー！」
「甘い物で釣るなんて、アンタそれでも機動六課の隊長かぁー！」

チンクとディードも額に青筋を浮かべて大きくツッコむ。
それと同時に銀時が甘い物が好きな事を知ったのである。
機動六課全員はフェイトの意外な一面を見て唖然とする。

「ふぇ・・・フェイトも随分とやるようになってきたわね」
プレシアも手段を選ばないフェイトのやり方に苦笑するしかなかった。
「な・・・なんで銀時は棄権したんだ？」
突如の棄権にゲンヤは意味不明に唖然とする。
その原因をプレシアが言い出す。
「銀時は大の甘党なのよ」
「マジかよ！？」
甘い物に釣られた為に棄権した理由でゲンヤは唖然とする。
伝説の白夜叉と言えども、好物には目が無いのであった。
勝者：『フェイト・テスタロッサ』
「さぁ、ジャンジャンと盛り上がってきた所で第三試合が始まります！」
「ほとんど棄権ばかりじゃないですか！」
明るく言い出すカリムにシャッハは怒鳴ってツッコむ。
「では次はスバルさんとエリオ君、舞台に立ってください」
呼ばれた2人は訓練場に立つ。
そしてデバイスの『ティルヴィングエア』と『ストラーダ』を構え、
フォワード隊同士の対決が始まる。

「まさか仲間と戦うなんて思わなかった・・・・」
「そうですね・・・いやそれ以前にまともに戦えるのはこれが初めてな感じがします・・・・」

そう、エリオにとっては本当の意味で始めての対決である。
一回戦はセインとウィンディがシャマルの猛毒キノコ入りおにぎりのせいでドクターストップ。
二回戦はなのはの魔王の威圧感でシグナムとドゥーエが棄権。
全て実力ではなくトラブルによる勝ち抜け。

そしてようやくまともに実力発揮できそうである。
しかし相手はフォワード部隊でもダントツ的な実力の持ち主で、隊長と副隊長と同じくリミッターを賭けられるほどの強力な魔力の持ち主。
そしてオーバーSランク以上並の神速の剣術を誇るスバルである。
魔法には滅多に頼らない分、はっきり言ってある意味ではなのはやフェイトより厄介な相手であると思うが、それでもエリオは臆せずスバルに勝負を挑む。

「エリオー！」

神楽が後ろからエリオを呼び出す。
エリオは神楽のほうを振り向くと・・・

「特訓の成果を今こそ見せる時アル！」

などと言い出すと、エリオは迷いも無く。

「はい！」

返事をして『ストラーダ』を構える。

「それでは、バトルスタート！」

カーン！

カリムがコングを鳴らすと・・・・

「ティルヴィングエア、カートリッジロード！」

≪Ａｇｒｅｅｍｅｎｔ！≫

ガシャン！

「ストラーダ、こっちもカートリッジロード！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ！≫

ガシャン！　ガシャン！

スバルは『ティルヴィングエア』を鞘から抜き出し、すぐにカートリッジロードを1つ使用する。

薬莢（ケース）が『ティルヴィングエア』の柄の先から排出され、『ティルヴィングエア』の刀身が蒼い風に包まれる。

エリオもカートリッジロードを2つ使用すると、薬莢（ケース）が穂中の部分から排出される。

そして『ストラーダ』の槍の先から稲妻が充電するかのようにあふれ出す。

「はぁあああああああああああああ！！」

「おぉおおおおおおおおおおおお！！」

スバルとエリオが凄まじい勢いで突進するとお互いに魔法剣技と魔法槍技を炸裂させる。

「蒼風一閃(そうふういっせん)！」

「サンダーレイジー！」

スバルの風の魔剣とエリオの雷の魔槍が激突して爆発する。

スバルとエリオはすぐさまにバックした為、無傷である。

だが驚くべきなのはエリオの放った『サンダーレイジ』である。

以前のは、フェイトのに比べれば威力は無かった。

だが今回のは以前よりも威力がアップした為、シグナムの『紫電一閃』と双璧とするスバルの『蒼風一閃』と互角に渡合えた。

剣と槍でマジあわせたスバルもエリオはパワーアップしていると確信していた。

「おおー、エリオの奴以前より強くなっているじゃねぇか？」

「うん。カートリッジロード数が上回っているとは言え、さっきの『サンダーレイジ』は前のよりパワーアップしている！」

銀時とフェイトもエリオの成長には感心する。

そしてスバルはお得意の神速剣技を炸裂させ、エリオは魔法で対抗・・・ではなく『ストラーダ』の特徴である槍術でスバルに対抗する。

さっきの『サンダーレイジ』だけじゃなく動きも早くスバルの神速剣技を裁いたり避けたりはする・・・が、完全に交わせない為、何回かは受けてしまう。

しかしこれはあくまで対決で敵の戦いではない為、全て峰打ちである。

「さすがにやりますね・・・だけど、今度はこっちの番です！スタールメッサー！」
≪Ｃｈａｒｇｅ　ｕｐ！≫
エリオはそう言うと、『ストラーダ』の穂先の部分を魔力刃に変化させる。
これにより攻撃範囲が長くなったことで、ダッシュして高速の連続突きを炸裂させてスバルに攻撃する。
だがスバルは、その高速のつきを神速の剣速で全て受け流すが、魔力刃によって攻撃力が上がっているため一発一発が重い。
そしてエリオは柄を地面に強く叩きつけて大きくジャンプすると・・・
「おおおおおおおおおおおお！」
体を回転させて、右斜めから槍をスバルに向けて振り下ろす。
これにはスバルも交わすのは難しく、『ティルヴィングエア』で受ける。
「ぐ！」
思った以上の威力があるので裁くのは難しく、スバルは仕方が無く魔法を使用する。
そして精製された魔力の剣を２０本が現れる。
エリオはすぐさまにスバルの『ティルヴィングエア』を踏み台にして大きくジャンプしてバックするが。
「エクスキュート・ザ・ソードブリッツ！」

魔力の剣は稲妻に包まれ、一斉に放たれた。
稲光の閃光の如くの速さでエリオに襲いだすが、エリオは槍を円を描くかのように片手で回し、それをたて代わりとしてスバルの『エクスキュート・ザ・ソードブリッツ』を全て防いで粉々に破壊する。
そして着地して『ストラーダ』を構えてスバルに構える。

「やるじゃん、エリオ。いつの間にそこまで強くなったんだ♪」

スバルは思わず驚きの感想を言い出す。
そしてエリオはその理由を言い出す。

「はい、神楽さんと月詠さんから訓練に付き合ってくれたお陰でここまで強くなれました」

エリオがそう言うと、銀時達は驚きの眼で神楽と月詠に注目する。

「か・・・神楽ちゃんに月詠さん・・・もしかして2人がエリオを鍛えたの!?」

なのはは驚きながら2人に質問すると、神楽と月詠は・・・・

「そうアル」
「まぁ、頼まれていたからな」

素直に答える。

話によると、エリオは鍬死朗の件で己の未熟さを思い知らされて、誰かを守る為に強くなりたいと決心した。
そこで、戦闘力は機動六課を含めても最強を誇る神楽とクナイを使

いこなす月詠に特訓に協力してもらうように頼んだのである。
神楽は気合を入れて、エリオを以前よりパワーアップさせる事を決心させた。
まずは気合を込めて素手で巨大な岩を真っ二つに割る所を見せて、魔法なしで『その槍で一気に割るアル！』っと言うメチャクチャな訓練を受けさせた。
その分、異常なまでに厳しい訓練なので絶え続けたエリオはそれを達成させたのである。
次に魔法なしで神楽との模擬戦のくり返し。
これはもしも魔法が使えなくなったときに、己の身体能力だけで戦えるように『ストラーダ』を使わずに棒で神楽との模擬戦を行う。
しかし手加減してもエリオは今だに勝った事はない。時には全力の一撃で何度も吹飛ばされて失神した事もあった。
それでも異常なまでに身体能力も高くなった事は変わりない。
月詠からはクナイの連射でそれを全て魔法なしで打ち落とす為の訓練である。
真正面だけじゃなくどこからか投げてくるのかも予測させない勢いでクナイを投げる。
何度も突き刺さって死に掛けた事はあるが、結果的に飛び道具対策用の防御術も身につけられたのである。
他にも山ほどの鍛錬は繰り返されたが、結果的にエリオは魔力こそは上がっていないが以前よりもパワーアップしたのである。

「なるほど、リーダーと月詠殿の強力があったこそエリオ殿はあそこまで・・・・」
『凄いね』
理由を聞いた桂とエリザベスは感心するかのように頷く。

「最も、神楽の特訓はデタラメじゃったから止めようとは何度もしたんじゃが、あれを耐え抜いて訓練を受けたエリオはまちがいなくは強くなっておるはずじゃ」

煙管を加えてエリオのパワーアップは確信している月詠はそう言いだす。

フェイトやシグナムも、神楽の強さはまちがいなく銀時と双璧となる事は知っている。

そしてエリオは勝負を決める為に次の一撃で決める事にした。

「スバルさん！そろそろ勝負を決めさせてもらいますよ！」

「・・・ＯＫ、望む所だよ！」

そしてエリオは『ストラーダ』を大きく構えると、エリオの回りからレモンイレローの魔法陣が浮かび上がる。

『ストラーダ』の槍先から強力なまでにエリオの魔力を収束させられ、充電するかのような勢いで稲妻が溢れるように溜められる。

「エリオの魔力が急激に上がってきただと！？」

「凄い魔力だ・・・まるで周囲の熱を根こそぎ奪ってる感じだ！」

シグナムとザフィーラも突如の魔力変化には驚きを隠せなかった。

神楽はそれを見た瞬間、エリオは何をするのか分かった。

「これは私が教えたエリオの新必殺技アル！」

「何ィ！？新必殺技だと！？」

神楽の言葉に近藤は驚く。

「正確には・・・神楽がアドバイスを言った事をエリオが再現させ

たっと言ったほうが正しいがな」
「神楽、お前エリオに何を教えた？」

月詠の言葉に銀時は神楽に質問すると・・・神楽はこう答える。

「『ありったけの魔力を槍に収束させて一気に砲撃を放つかのように相手に突くアル！』っとネ！」
「それだけかよ！」

単純な一言だけの神楽に銀時はツッコむ。

「ラクディル・レールス・ルーバルト、雷光なりし天よりの裁き、この槍は邪悪なる闇を打ち消す雷槍となりて、闇を光に飲み込まん。スラダト・デュエウ・ロンギアス」

詠唱を唱えているエリオを見て、スバルは何か異変を感じて水色の魔法陣を自分の周りから浮かべ上げ、詠唱を唱える。

「ハルティス・エアブレイド・サンクチュラ、蒼天を天駆ける神風よ、聖なる守護霊となりて汝を守り抜け。アルテス・バルリハ・エンダルト」

すると、スバルの回りから蒼い風が集まってくるかのように収束される。
おそらくはエリオの新必殺技に対する。
そして2人の魔法剣技と魔法槍技が放たれる。

「レールガン・ゲイボルト！」
「ガーディアン・ブルーストーム！」

エリオは超高速の進発力を炸裂させて凄まじい速さで突進し、超強力な電磁石を用いて砲弾の如くの勢いでスバルに向かって稲妻の雷槍を炸裂させる。
それに対してスバルは体を華麗にくるっと回ってその勢いに落下するかのように『ティルヴィングエア』を地面に突き刺すと，スバルの回りから蒼い暴風が天に昇るかのように放つ。

全てを貫く超電磁石の雷槍『レールガン・ゲイボルト』と全てを守護する蒼き暴風壁『ガーディアン・ブルーストーム』

エリオの最強の攻撃魔法とスバルの最強の防御魔法が激突し、その衝撃から放たれる衝撃波は突風と化して銀時をも圧倒させる。

「のぁあああ！凄い衝撃だ！」

近藤は思わず叫びだし、シグナムはスバルとエリオの魔法に驚きだす。

「なんて威力だ・・・・ＡＡＡランク・・・いやＳランク級は行くぞ！」
。
エリオの急激な成長と対決が思わぬ展開になった事が混ざり合って驚きが倍増である。

「おおォォォォォォォォォォォォ！！！！！」
「はあァァァァァァァァァ！！！！！」

最強の魔法の対決に、お互いに魔力を全て出し切っている。
だが魔力ではスバルの方が高く、エリオの魔力はもうすぐなくなりかけ、エリオの魔力が消えかかってきている。

そして・・・・

「うわぁぁぁぁぁぁぁ！」

結果的にエリオの魔力は尽きてしまい、吹飛ばされてしまう。

「エリオ！」

神楽と月詠は思わずエリオの名を叫ぶ。
そしてエリオは地面に転びだして倒れる。

勝者：『スバル・ナカジマ』

「エリオ、大丈夫！？」

スバルは『ティルヴィングエア』を抜き取って鞘に収め、倒れているエリオに駆けつける。。

「あ・・・あははは・・・やっぱりスバルさんは強いですね・・・」

「・・・エリオも強かったよ・・・」

苦笑して言い合うエリオとスバル。
そしてエリオはゆっくりと立ち上がってスバルと共に銀時達に向かって歩く。

スバルには、「お前魔法も全然強ぇじゃねぇか！」、「防御魔法をも覚えていたなんてね」、「剣術だけじゃなく魔法の鍛錬も欠かし

ていないようだな」っと褒められまくりである。

「神楽さん・・・月詠さん・・・負けちゃいました」
「いや、エリオも懸命に戦ったアル！」
「まだその幼い身であれだけ強くなったんじゃ。主は良くやったさ」

申し訳なさそうに言い出すエリオに、神楽と月詠が褒めまくる。
エリオはそれが嬉しく感じた。
この光景を見てキャロはどす黒い嫉妬を放ち、近藤、辰馬、ルーテシア、アギトは青ざめていた。

「貴方の娘も中々やるじゃない」
「いやー、スバルの成長は予想以上だね。だけどエリオって少年も良い感じじゃないか？」
「ええ、あの年頃で魔力はBランクは言っているし、フェイトも良い部下を持ったわね」

プレシアとゲンヤも、スバルとエリオの実力に感心した。

そしていよいよ第四試合、残った神楽とエリザベスの対決であった。
神楽は戦闘力だけなら機動六課最強と呼ばれ、エリザベスは外見とは思えない強さに無数の武器使い。
つまり実力は互角であると誰もが思う。

すると神楽は肉まんらしきものを出してエリザベスに出した。

「肉まん食う宜しいね♪」

神楽がにこりと笑ってエリザベスに肉まんを渡す。

『良いの？』

エリザベスはプラカードを出して神楽に言い出す。

「腹が減っては戦が出来ないネ、それに私はさっき食ったアル♪」

『じゃあ、頂きます』

にこりと笑って神楽が言い出すと、エリザベスはその肉まんを一口で丸のみして食べだす。

それが神楽の狙いである事を知らずに。

（食ったアルね、愚かなエリザベス）

心の中では腹黒く笑っていた。

（敵から無闇に飯を頂くなど愚かにもほどがアルネ。それは肉まんではなくババネロたっぷりの特製カグラマンネ。一口下だけでも余りの辛さに炎が火炎放射の如く吐き出・・・・）

『辛ァァァァァァァァ！』

ボォォォ

ら激しく走り回る。
予想外な事に銀時達は驚きだす。
そして数秒後、神楽を包んだ炎は消えたが黒焦げとなって気絶。
エリザベスは『む・・・無念』っと書かれたプラカードを出して気絶。

「エリザベスウウウウウウウウウウ！」
「神楽さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

青ざめて猛スピードで駆けつけてきた桂とエリオがエリザベスと神楽の体を支える。
この状況をどう把握すればいいのか分からない銀時だが、神楽がやられた光景を見てキャロが酷薄な笑みを見せていた気がするが気のせいだろうか・・・銀時達はスルーした。

「・・・と・・・とりあえず・・・2人ともドクターストップってことで・・・準決勝に移ります！」

苦笑しながらカリムがそう言うと3つのクジを出す。

「ここに2つだけ先っちょが赤色に染めています。それを引いた者同士で準決勝で戦い合ってもらいます♪そんで何の色もないクジを引いた人はそのまま決勝進出で♪」

もはや魔導競技大会とは思えない手抜きな設定を説明するカリム。
そしてフェイト、なのは、スバルの3人はカリムの持つクジを取り出すと、赤いクジを引いたのはこの2人。

『高町なのは』ＶＳ『スバル・ナカジマ』

（最も戦いたくない人と当たってしまったァァァァァァァ！）

出来れば敵に回したくない人物と対決してしまうハメになったスバルは心の中で泣き叫ぶ。

フェイトはそんなスバルがお気の毒そうに、無事に帰ってこれるようにと祈りだす。

ガタガタと震えながら、スバルはなのはと共に訓練所に向かう。

先ほどからなのはから放たれている絶大な殺気が異常なまでに高く、如何すれば良いのか分からなくなったのである。

「そ・・・それではバトルスタート！」

カーン！

カリムはコングを鳴らすとすぐに猛スピードで非難するかのように走り出す。

どうやら巻き込まれたら唯じゃすまないと把握したのであるようだ。

「ねぇ・・・スバル」

重いプレッシャーをかけるかのようになのはスバルに話し出す。

「な・・・何でしょうか！？」

スバルは思わずなのはの質問に返事をする。

なのははあいも変わらずニコニコと笑っているが、『白い悪魔』から放たれる禍々しい闘志は異常なまでに大きい。

「貴方に2つの選択を選ばせてあげる。1つは棄権して、明日から毎日地獄の訓練を受けて生き地獄を味わうか、棄権しないでこの場で一瞬だけでも『永遠に眠るほどにすんごく頭を冷やす』かだよ？」
「どっちも嫌ァァァァァァァァァァァァァァァ！」

どうやら、なのははスバルにだけは棄権させないために言っているようである。
すると、なのはは『レイジング・ハート』を構える。

「リミッター解除・・・レイジング・ハート、最大魔力放出全開」
≪Ａｐｏｗｅｒ ｆｕｌｌｙ ｏｐｅｎｉｎｇ ｍｏｄｅ ｓｈｉｆｔｓ！≫

ガシャン×6

するとなのはは、カートリッジロードを6回使用する。
そして桜色の魔力が『レイジング・ハート』の前に集まり、集束され、巨大な桜色の魔力弾が生成される。

「ねぇ・・・あれってもしかして『スターライト・ブレイカー』じゃないの？」
「うん・・・そうだね・・・信じられないけど、さっきなのはカートリッジロードを6回使用した・・・・」

銀時とフェイトは青ざめて話し合う。

「それってつまり・・・・」

九兵衛が冷や汗を出して、一言言い出すと・・・・

「このままだとナカジマ殿（あの娘）が高町殿（あの女）に殺されるぞォォォォォォォォォ（ぜよォォォォォォォォォォォォォ）！！」

近藤と辰馬が大量の汗を出しながら、声を合わせて叫びだす。
それには銀時達はもちろん、さすがのプレシアとゲンヤも慌てだす。

「ちょっとォォォォォ！なんで隊長が部下にそこまでする必要があるのォォォォォォォォ！？」
「スバルゥ！逃げろー！まちがいなくあの世行きにされてしまうぞォォォォォォォォ！！」
「なのはァァァァァァァァ！早まるなァァァァァァァ！」
「踏み越えてはいけない線を、越えようとしているんだよォォォォォォォォ！」

プレシア、ゲンヤ、銀時、フェイトの４人は、青ざめて叫びだす。
どうしてこんな状況になったのか分からないスバルはなのはに言い出す。

「ちょ・・・なのはさん！どうしたんですか一体！？私、貴方に何をしたっと言うのですか！？」

冷や汗を出してスバルはなのはに質問すると・・・

「にゃはははははは・・・・このままスバルばかりに輝かせる訳にはいかないからだよ♪」
「どういう事ですか！？」

訳の分からない事を言い出したなのはにスバルはその意味を聞き出す。

「この小説の虚空さんの1部の感想を見たんだよ。その感想にはこう書かれた・・・『フェイトの方が主人公でヒロインだからねぇ、あと、スバルも赤夜叉さんのところよりもずっとヒロインぽいし・・・なのはさんの場合、4人よりも絡ませるネタが限られているからかな?』って」

そう言いだすと、先ほどよりとんでもない殺気を放つ。

「フェイトちゃんはまだ許せるよ。けどスバル・・・貴方が輝きすぎたから、今ここですんごく頭を冷やさせてあげてやるなの!」

「そんな理由で怒っているんですかァァァァァァァ!」

ありったけの大きな叫びでスバルはツッコむ。

そしてなのはの『スターライト・ブレイカー』が放たれたら、いくら『ガーディアン・ブルーストーム』でも防げない。

スバルが生き残る為には・・・もうあれしかなかった。

「出来ればこの魔法だけは使いたくなかったんだけど・・・『ティルヴィングエア』!カートリッジロード!」

≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ!≫

ガシャン×7

覚悟を決めたスバルは、カートリッジを7発ロードする。

すると、『ティルヴィングエマ』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋を描くかのように刀身を包み、螺旋を描くかのように超高速回転して暴風を引き出す。

さらにスバルの魔力が水色から蒼色に変わり始めた。

月詠、九兵衛、近藤、辰馬など銀魂組はもちろん、フェイト、ティアナ、エリオ、キャロ、はやて、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィン、カリム、シャッハ、ナンバーズ、プレシア、ゲンヤなどリリカル組も眼が開く程に驚く。
ガジェットロードを7発など見たことがない上、スバルの魔力が急激に上がってきた。

「な・・・何やあれ!?カートリッジを7発もロードするなんて!」

なのはやフェイトでさえも6発が限度に関わらず、スバルは7発を使用したのである。
それ以上にスバルの魔力が徐々に上がってきている。
それはまちがいなく『スターライト・ブレイカー』級の砲撃魔法を発動させるのには十分すぎる条件であった。
そして銀時、桂、なのはの3人は、スバルのカートリッジを7発ロードした事にスバルが使用する魔法がなんなのかを理解した。

「おい・・・あれって寄生型エーリアンの件で見せたスバルの取っておきの切り札じゃねぇか!」
「取って置きの切り札!?」

銀時がそう言うと、フェイトはスバルにそんなのがある事に驚く。

「なるほど・・・確かにあれなら高町殿のあの砲撃に対抗し合えるだろう」

桂も理解したかのように言い出す。

そう、スバルが発動させる魔法は威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』と双璧となるほどの威力を誇る最強の砲撃魔法だが、

使えば全ての魔力がからになる諸刃の剣ごと『エア・アルテマ・ギガブレイカー』。
正直言ってスバルにとっては禁断の魔法だが、なのはの『スターライト・ブレイカー』を防ぐにはこれしかない。
いわゆる『攻撃は最大の防御』である。
そしてスバルとなのはの最強の魔法が同時に放たれる。
「エア・アルテマー」
『ティルヴィングエア』を包み込む螺旋の魔力の出力が上がる。
「スターライトー」
『レイジング・ハート』の先に集まってきた魔力の球体がさらに大きくなる。
「ギガブレイカー！！！！」
巨大な螺旋に渦巻く蒼い閃光が放たれる。
「ブレイカー！！！！」
巨大な桜色の閃光が放たれる。
最強の砲撃魔法が同時に放たれ、２つの巨大な閃光は凄まじい勢いでスバルとなのはに襲いだす。
地をえぐり、砂埃が激しく現れ、無数の木を吹き飛ばす。
放たれた二つの閃光がぶつかると、風を起こし、光を発し、周囲を

巻き込みながら二つの最大の砲撃魔法が激突する。
やがて光は消え、風がおさまる。
銀時達は伏せていた顔を上げた。

そこには、黒焦げとなって倒れていて、両目が螺旋を描くかのように回っているスバルとなのはの2人であった。

「う～～、どうしてこうなるのぉ～？」
「こ・・・こんなはずじゃないなのぉ～」

結果は完全なる相打ちであった。
これを見た銀時達は唖然とした。

「なのはは自業自得だが・・・・スバルは災難だったな」
「・・・ああ、まったくだ」

スバルは災難として、なのはのは自業自得であった。
シグナムもザフィーラも哀れみに感じている。
プレシアとシャマルは呆れて、スバルとなのはに治療魔法をかける。
傷は治ったが、まだ気絶しているようである。
ナンバーズ、シャッハ、ルーテシア、アギトは予想外の展開に口をパクパクと開いている。

「あらら～、まさかの相打ちで2人ともリタイアですね。・・・・っと言う事で♪」

カリムはニコニコと笑いながらフェイトの右手を上げる。

「優勝はフェイト・テスタロッサに決定ですぅぅぅぅ♪」
「えええぇぇぇ

フェイトとカリム以外の人達が誰もが驚く。
フェイトは唖然として今の状況についていけなくなっている。
そしてしばらく立つと・・・・

「や・・・やったぁぁぁ

2人はバイキングで大量に食べまくっているようである。
そして、フェイトは銀時と一緒にマリンガーデンでデートをする。
フェイトは嬉しそうで銀時は顔を真っ赤に染めているが、無意識に笑っている。
2人っきりになるのも久し振りであり、2人は楽しんでいた。

観覧車の中

「久し振りだね、こうして2人っきりに慣れたの」
「・・・ああ、そうだな」

思えば銀時と2人っきりで一緒にいられたのは10年前だった。
シグナムにアルフだけじゃなく、スバル、なのは、ティアナ、リィンフォースなど、さらにはナンバーズの内5人も好意を持ち始めたのである。
いつの間にかのライバル増幅はフェイトも驚きを隠せなかった。
だけど今は、誰よりも銀時と関わりがある者として一緒にいられて嬉しく感じるのである。
そしてフェイトは銀時の隣に座りだし、体を銀時の隣に寄せ付ける。

「お・・・おいフェイト！／／／」
「銀時・・・観覧車が一周するまでこのままこうさせて・・・／／／」

互いに顔を真っ赤に染めて、銀時は左ほほを指で掻いて、窓の風景を見上げる。
そしてフェイトは両目を瞑って、嬉しそうに笑い出す。

その後、2人がなのは、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースに鉄槌を下され、スバルからは羨ましそうな眼で見られたのは言うまでも無かった。

≪魔導競技大会編・完≫

銀八
「教えて・・・・」

生徒全員
「銀八先生!」

アルフ
「はいよ、今回は私、フェイトの使い魔ごとアルフがアシスタントするよ♪」

銀八
「では行くぞ~。ペンネーム『神威　恭夜』さんの質問。『キャロは、銀さんらを利用して月詠や神楽を亡き者にしようと思わないんですか?銀さんらは、黒キャロに逆らえなさそうなのに。エリザベスの正体がオッサンだと思った方達、オッサンが口から大砲を出したり何処からともなく無限にボードを出せますか?』・・・まぁ、いくらキャロでもなのは相手には対抗できないじゃない?」

アルフ

「そうだね。それにエリザベスの事は驚いたよ・・・ってか人間の口から大砲は無理でしょ！なんかいろんな起動兵器を持っていそうだし！どこからボートを出しているかも知りたいし！」

銀八
「まぁ、謎の生物だから良いんじゃない？っと言う訳で『神威　恭夜』さん、今後の『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』のマスコットキャラはエリザベスだと思ってください！次行くぞぉ。ペンネーム『カラー』さん。『その１、予告にした焼き肉、鍋の話はしないんですか？その２、次の人気投票はいつ頃やるんですか？キャラも読者も増えたから前回のよりかなり変動すると思うのですが。』１つは次回やる予定で、焼肉じゃなくすき焼きです。２つはおそらく長編の第５回目の連載中の途中で始めるつもりです。」

アルフ
「思いっきりネタ晴らしじゃないか！」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、楽しみに待ってください！次行くぞぉ、ペンネーム『夜来華』さん、『この作中の中で一番のドジッ子キャラって誰ですか？？もし居なければギン姉を（ぁ』・・・ずばり、ギンガ以外は出る予定です！」

アルフ
「なんでギンガじゃないの！？」

銀八
「と言う訳で『夜来華』さん、廊下に立っていなさい！次行きましょう！！ペンネーム『烈火竜』さんの質問！『黒神先生にとって、強く恐ろしく腹黒い女性は誰ですか？』・・・ずばり、作者的に考

えればキャロだと思います！」

アルフ
「ああ・・・今回、キャロが神楽が倒れたときには凄く喜んでいたような・・・・・」

銀八
「・・・アルフ、御免・・・・怖いこと思い出させちゃって・・・・もう1つあるぞ『銀さんと神楽は新八に対して酷いこと言ってましたね。特に彼女のことで。もし、新八に彼女が出来るようなことがあったら、……銀さんと神楽が引き裂こうとしますか？』・・・・おそらくはしますね」

アルフ
「どうしてするのさ!?どんだけ・・・・えっとう・・・・メガネ男に恨みあるんだ!?」

銀八
「新八の存在を忘れかかっているな?無理もないさ・・・あいつは地味でムッツリスケベで童貞だから・・・っと言う訳で『烈火竜』さん、地味な人間は忘れやすいので要注意してください！」

アルフ
「何て質問の答え方だ・・・・次はペンネーム『武士堂 』さんの質問だね。『鳳仙出ないんですか？』・・・・鳳仙って銀時の世界の人物？」

銀八
「まぁな。おそらくは出る予定です。っと言う訳で『武士堂 』さん、楽しみに待ってください。最後の質問・・・ペンネーム『ｃｈ

ａｒｌｅｙ』さん。『スカリエッティとナンバーズの皆さん（ディエチを除く）に質問です。烈火竜さんの作品に続き、この作品でもディエチとジミー（山崎）がカップルとなりましたが、皆さんは二人の交際を許せますか？』・・・おそらくノーヴェ以外の人物は賛成すると思います」

アルフ
「まぁ、確かにそうだね」

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

第三十五訓：大会編の中にはたまに意外な人物が優勝してしまうオチと予想外な

久し振りのすき焼き。

銀時達の肉争奪戦が繰り返される！

果たして鍋奉行は誰の手に！

アルフ

「次回、「結局煮込んでしまえば豚肉も牛肉も美味いんじゃない？」

テイクオフ」

第三十六訓：結局煮込んでしまえば豚肉も牛肉も美味いんじゃない？（前書き）

セレブな食材、松坂牛！

すき焼きをかけた銀時達の戦いが始まる！

果たして鍋将軍は誰の手に！

神楽

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるネ！」

第三十六訓・結局煮込んでしまえば豚肉も牛肉も美味いんじゃない？

今回でいよいよ第三十六訓目。
しかもまだまだ序盤と思われそうなマイペースに誰もが呆れる中、
このミッドチルダで異世界から来た侍・坂田銀時を初めとした愉快な仲間達（！？）がボケあり、ツッコみあり、そして大暴れありなど破天荒な活躍で物語を進めている。
そして彼等は、ある意味最も過酷なる戦いを挑むのである！

題して・・・・・

『銀魂×リリカルなのは　超猛烈、鍋将軍決定・・・じゃなかった肉争奪バトル　すき焼き編』

冬で寒くなっている中、銀時の部屋である事をやっていた。
その部屋に銀時はもちろん、フェイト、桂、なのは、スバル、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、エリオ、フリード、はやて、シグナム、アルフ、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィン、ユーノ、九兵衛、辰馬がコタツの中に入って、コタツの中心部にある、２つのすき焼きを鋭い眼線で見ていた。
ここのところのはやての給料が異常なまでに少なく、すき焼きと言うセレブな物を頂いていなかった。
実は肉はゲンヤからの最高級の松坂牛で野菜はプレシアからのミッドチルダでも高級な取れたて新鮮野菜ばかりである。
そこで銀時とスバルはすき焼きを作って、たらふく食べる予定であ

ったが、フェイト達に気づかれて結局全員肉の争奪戦に参加するのである。

後、どうして食堂でしないのかはツッコまないでください。
面倒なので。

「ねぇ・・・何で機動六課全メンバーが俺の部屋にいるの？つうか良く全員は入れたなこん畜生」

哀れみでそう言いだす銀時。

「食堂だと更なる社員達が狙われそうだからね・・・だから銀時の部屋で食事する事にしたの」

フェイトはそう言うが、本心では他の者に肉を欲張らせない為であった。

「まぁ良いじゃないですか♪鍋は皆で食べたほうが楽しいし」

無邪気にそう言いだすスバル。

「にゃはははは、そうだね」
「これだけ賑やかに出来るのも良い事だしね♪」

嬉しそうに言い出すなのはとティアナ。

「しかしまぁ、これだけ大勢に食事するのも久し振りだな」
『そうだね』

桂とエリザベスも大勢の食事をするのも懐かしそうに感じる。

「そうネ。私達がこの世界に来てからいろんな事があったネ」
「今回は『鬼兵隊』の事は忘れてジャンジャンと食べまくりましょ」
「・・・そうじゃな」

神楽、エリオ、月詠の3人は気楽に言っている。
ちなみに月詠はこの場合はさすがに食事の雰囲気を壊させない為に煙管は置いてある。

「そうですね、食事は楽しく頂いたほうが美味しいし」
「キュイイ～♪」
「そうだね。平和的が特に理想郷だしね♪」

キャロ、フリード、アルフも笑っている。
何やら以前とは違って機嫌が良いようである。

「まぁ、久し振りの肉だしな♪」
「こんなセレブな物をいただけるのもいつ以来か」
「もうお腹ぺこぺこです」
「良い具合に煮込んできたようだ」

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラは嬉しそうに言い出す。
はやての安月給でまともな食事をしていないのである。

「せやけど、松坂牛て言う高級な肉や最高級の野菜を送ってきてくれたゲンヤさんとプレシアさんには凄い感謝や」
「はぁ～、良い匂いする～」
「太っ腹ですぅ～」

幸せそうに笑うはやて、リィンフォース、リィンは顔がとろけるよ

うに言い出す。

「鍋の基本はまず野菜からだ。野菜を後にさせて肉の旨みをしみこませてから頂く方法もあるが、それでは野菜本来の味が味わえない」

「あっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは」

鍋奉行的なことを言い出す九兵衛に対し、辰馬は笑い出すしかなかった。

「さて、とりあえず今日は、俺ら22人を集め、万事屋と機動六課でドーンと頂くか」

「そうだね♪皆も今まで頑張ってきたし、これからももっと頑張る為に精を付けないとね♪」

銀時となのははは笑い出しながら説明すると、アルフとザフィーラは鼻が良いため、すき焼きの香りですんごい幸せそうな顔をしている。

「ああ、肉と野菜が煮込むこの香り・・・・」

「日本の伝統を感じ取れる風味だ・・・・」

顔がすっごくとろけていて狼モードにうかつになる。

こんなに幸せそうなアルフとザフィーラを見た事がないフェイト達は唖然と驚く。

「狼の嗅覚は犬並みのようや、アルフやザフィーラはウチ等より匂いが聞くしな・・・・」

「空腹を感じやすいって訳じゃな?」

はやてと月詠はそう確信する。

「フリードも凄く楽しみにしていますよ。肉が食べられるのを♪」
「きゅいぃ♪」

キャロとフリードもワクワクしながら笑っているが、口からは少しよだれがたれている。
そんなに肉が食べたいようである。

なんやかんやで楽しそうに話し出す銀時達。
そしてテレビについている紅白歌合戦に集中する銀時、神楽、エリオ、月詠の3人。

「あ、カトケンサンバアル」
「なんでこのでかいにカトケンサンバがあるんだよ?」

本来、銀時達の世界に存在する裏がどうしてこのミッドチルダにあるのか不思議に思う銀時と神楽。
ちなみに歌っているのはアニメに登場した『加藤健(かとうけん)』ではなく、その人物にそっくりな人である。
苦笑しながらなのはが言い出す。

「にゃ・・・ははは・・・もしかして、その歌っている人も光に飲み込まれて飛ばされたり・・・してね!!!!」

そう言って勢い良く箸をすき焼きの方に伸ばす。
続くかのようにキャロ、ユーノも続いて端を伸ばしてフリードにいたっては突進してきた。

(取った!)

4人は勝利を頂いたと確信したその瞬間!

ドカァーン！！

「にゃあぁぁぁ

シグナムとヴィータはその後に肉を頂く中、アルフとザフィーラそして辰馬が飛びつく。
だが・・・・

「甘い！」

九兵衛は、どこからか出したのかは知らない巨大なバットでシグナム、ヴィータ、アルフ、ザフィーラ、辰馬、ついでに影が薄いシャマルを吹飛ばす。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「あらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
「私はついでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

先ほど穴が空けられたシグナム、ヴィータ、辰馬、シャマル、ザフィーラは吹飛ばされ、アルフは壁に衝突して倒れる。
だがすぐに目を覚ますが起き上がれない。

シグナム、ヴィータ、坂本辰馬（さかもとたつま）、ザフィーラ、ついでにシャマル
リタイア

そして九兵衛はすぐに箸を取って神速の速さですき焼きに向けて手を伸ばす。

（もらった！）

確信した九兵衛だが、自分の箸に刺さっていたのはすき焼きではなく白いご飯であった。

「何！？」

すき焼きじゃなくご飯に摩り替わっている事に驚く九兵衛。

（馬鹿な、神速と疑われた剣術使いである僕を気づかさせずに入れ返らせただと！？）

驚く九兵衛は理解できないが、ある事を思い出す。

それは・・・・

「あれぇ～？火が弱くなっていませんか？」

（な・・・！？）

それは、スバルが素早く鍋ごと神速の速さですき焼きを自分に近づけさせた。

そう、スバルも神速の剣術使いで、九兵衛に匹敵する剣速を持っている。

舌打ちをした九兵衛は、もう片方の鍋を見ると・・・すでに銀時が確保している。

「こっちも火がおかしくなっていねぇか？」

そう言った後、銀時はフェイトとリィンフォースを見て、スバルはティアナとリィンを見る。

そして・・・・

「うぉおおおおおおおおおおおおおお！！」

銀時、フェイト、スバル、ティアナ、リィンフォース、リィンは勢い良く箸を伸ばす。
実は銀時達は手を組んで、連係戦術ですき焼きを頂く狙いであった。

（鍋将軍は・・・）
（私達だァァァァァァ！）

心の叫びをする銀時、フェイト、スバル、ティアナ、リィンフォース、リィンの６人だが・・・・

パチィィィ

完全に3人の存在を忘れていたフェイト。
そして3人は勢い良く箸を伸ばす。
これで鍋将軍は自分等の物・・・と思われた瞬間・・・・

「ヘブジッ!!」

勢い良く良く神楽とエリオが1つずつ、すき焼きの鍋にクシャミする。
それと同時に3人の箸を吹飛ばす。
これには桂、エリザベス、はやての3人だけじゃなく、銀時達も驚く。

「あっごめんアル」
「うっかり、クシャミしました」

謝る2人に対し・・・・

(なっなにィィィィィィィィィ!?)

予想外な展開に驚くのである。
手、端、刀、デバイスを使わずにクシャミだけで、第一手を決めたのである。
しかも、2つの鍋はもはや神楽とエリオしかいただけなくなり、誰も食べる気はしない。

(そ・・・そんな馬鹿な!)
(まさか、こんな手があったなんて!)

銀時とスバルがあり得ない展開に驚く。

そして神楽とエリオはおいしそうにすき焼きを頂いている。
そんな様子に思わずよだれをたらす物が何人もいる。

（無邪気・・・・無垢なる心が導いた勝利とでも言うのか・・・・）

九兵衛がそう考える中、銀時達は2人の姿を見て驚く。

（いや・・・違う！）
（この二人がそう考えるとは思えへん！）

フェイトとはやては2人の顔を見てある事を思いだす。

（この2人は・・・！）

桂も2人を見て確信する。
それは神楽とエリオが憎たらしそうな勝ち誇った表情を見て確信する。

（ククク）
（鍋将軍は僕達のものです）

まさにどす黒い信念が生み出した信念勝利である。

（この2人）
（無垢なんかじゃない！）
（はなっから狙っていたんや！）
（神楽、エリオ、恐ろしい子！）
『ガクガク！』

リィン、リィンフォース、はやて、桂、エリザベスは2人の恐ろし

さに恐怖する。
しかも・・・・良く見れば月詠のさらには一人前分の肉と野菜がある。

（月詠さん！貴方いつの間に！？）

ティアナが驚いた眼で月詠を見る。
実は月詠は気づかれないように少しずつ眼にも映らない素早い速さで肉と野菜を取っていた。

（ふふふ・・・・主らの愚かさには呆れてしまったなぁ）

憎たらしい顔で勝ち誇って笑う月詠。

（何いいいいいいい！）
（月詠殿のキャラ崩壊だとォォォォォォォ！）
（しかも黒！）
『うそぉ～ん！！』

銀時、桂、九兵衛、エリザベスは絶叫して驚く。

（今頃気づいても遅すぎじゃ。主らがあらとっている間に、わっちは主らに気づかれないように自分用に十分すぎるほどに2つのすき焼きから少しずつとっておったんじゃ）
（哀れにもほどがあるなぁ、ボーヤと小娘達？その間に私とエリオはだんまりしてテレビに集中する。全て計画通りの芝居。ケツの青いボーヤと小娘達を油断させ、鍋将軍になる為の布石だったということに・・・）
（そこで指をくわえて見ているが良いです。貴方達の愛する牛肉が、僕達に蹂躙されるザマを）

そして神楽とエリオはそれぞれすき焼き鍋を両手で持ち出し、月詠はすき焼き一人前が入った皿を持ち、にやりっと笑い出す。

「がぁぁぁぁ！！」

そして神楽とエリオは一気にかぶりついて食べ・・・いや飲み乾す。

（エエェェェェェェェェェェェェェェ！？）

（一気飲みだってエェェェェェェェェェェェェェェ！？）

スバルとティアナは絶叫して心の中で叫ぶ。

（この2人の胃袋は化け物や！）

（それに月詠さんもワザとあわせるように肉を一気飲みしようとしている！）

はやてとフェイトも3人の容赦ない勝利宣告に驚く。

リィンフォースとリィンは涙を流して見つめている。

「に・・・肉がァァァァァァァァァァァァァ！」

「野菜がァァァァァァァァァァァァァ！」

もはや悲しみが混ざりこんだ絶叫である。

そんな中、扉が開かれてカリムとシャッハが入り込む。

「こんにちは」

「遅くなりました」

挨拶して言い出す。

（ふふふ、今頃来たのかいこ娘共）
（今更来た所で松坂牛は全て僕達が頂きました）
（主らは白いご飯だけでも食っておるが良いわ）

勝ち誇って言い出す神楽、エリオ、月詠の3人。
口の中でモグモグとしながら笑い出す。
それがとんでもない罠（トラップ）だと知らずに。

「って、なんですかこの肉！」
「何で松坂牛じゃなく安い豚肉ですか！」

「！！？？」

衝撃の余りに思わず飲み乾す3人。

「新生機動六課の誕生記念になんでワザワザ安い豚肉とスーパーで買った野菜ですき焼きしているのですか！？」
「悲しいからやめたほうが良いよ」

哀れみて言い出すカリムとシャッハ。

（ぶ・・・豚肉とスーパーで買ってきた野菜だとォォォォォォォォォォォォ（じゃとォォォォォォォォォォォォ）！？）

まさかの展開に3人は稲妻を受けた衝撃な驚きをしてしまい、フェイト、ティアナ、桂、エリザベス、アルフ、九兵衛も驚く。

（そ・・・そんな馬鹿な事が・・・・ぶ・・・豚肉だったなんて・・・）

（あ・・・ありえない！確かにあれは牛肉の風味じゃった！）
（時々出てくるメニューにでてくる牛丼とかで食べているあの牛肉の・・・・・）

誰もが衝撃的に驚く。
今まで信じていた牛肉と野菜がまさか安い豚肉とスーパーで買ってきた野菜だったなんて信じられない中、銀時とスバルは平然としている。

（まさか！）

神楽、月詠、エリオはそんな2人を見て理由が分かった。

（そうさ・・・テメェらが勝ち誇って食べていた松坂牛と最高級野菜は全て・・・）
（松坂牛の牛脂（ヘット）で鍋全体に染み込ませる様にしてぬらし、じっくり煮込んだ私と銀さん特製の・・・・）
（『偽すき焼き～松坂牛風の牛油タップリの安い豚肉と安い野菜煮込み～』だったのさ）
（おおォォォ

全て銀時とスバルの予想通りの展開であった。

（私はこの時自分の足元が崩れ去るような良い知れぬ不安を感じた）
（もう僕は誰も信じない。信ジラレナイ。豚（ブタ）がアイツでアイツが豚（ブタ）で、ウワァァァァァァァ！！）
（ギャアアアアアアア！！）
（主ら、あの世に行ったら永久に呪い殺してやるんじゃァァァァァァァァ！！）

そして、神楽、エリオ、月詠の3人は気絶して倒れ・・・・脱落した。

神楽、エリオ・モンディアル　、月詠
リタイア

（最も恐れる最大の敵は消えた）
（これで残る敵も半分）

そして2つの鍋は綺麗に現れ、乾かした所で火を通して2つの鍋に牛脂（ヘット）を全体に塗るかのように通すカリムとシャッハ。

＊

そして10分後。
2つの松坂牛と最高級野菜タップリのすき焼き（本物）が完成した。

「ああ、凄くおいしそうですね」
「ええ、ゲンヤさんとプレシアさんには感謝しないと」

嬉しそうに言い出すカリムとシャッハ。
しかし勝負はここからである。

（ようやく邪魔者が消えた。フェイト、アルフ、リィンフォース！思いっきり食いまくるぞ！）
（ええ！）
（了解！）
（チャンスは一度だけです！）

銀時、フェイト、アルフ、リィンフォースの3人は戦闘準備に入る。

（スバル！こっちも連係食戦術で行くわよ！）
（OK、ティア！）

スバルとティアナも準備万全であった。

（この桂小太郎！伊達に『狂乱の貴公子』と呼ばれてはいない！狂乱の戦場で駆け抜けてきた今の俺にはこの程度は問題ない。エリザベス、八神殿、リィン殿、行くぞ！）
『はい！』
（肉食べて久し振りのお腹一杯や！）
（本気行きますよ）

桂、エリザベス、はやて、リィンは準備満タンである。

（この僕を忘れては困る。神速と疑われたこの柳生九兵衛を！）

九兵衛はいつも以上に真剣である。

（このすき焼き聖杯を制するのは・・・・）

（俺だ！）
（私！）
（私だ！）
（私です！）
（私だよ！）
（私よ！）
（俺だ！）
『私です！』
（私や！）
（リィンです！）
（僕だ！）

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンン！

「どぁあああああああああああああああ！」
「のあぁあああああああああああああああ！」
「きゃあああああああああああああああ！」

突如、大爆発的な衝撃を受けて吹飛ばされる銀時達。
その影響でリィンフォース、リィン、九兵衛は頭にぶつかって気絶する。

リィンフォース、リィン、柳生九兵衛

リタイア

「馬鹿な！何が起こった！」
「私達以外でこんな・・・・！」
「あ・・・あれ見て！」
「何・・・あれ！？」
「そんな！」
「馬鹿な！」
『あ・・・あれは！』
「嘘やろ！？」

銀時、フェイト、スバル、ティアナ、アルフ、桂、エリザベス、はやての８人は、目の前で起こっている光景に驚く。
それはカリムとシャッハが眼を光らせてすき焼きを食べている光景であった。

（ば・・・馬鹿な！）
（こんなことが！）

銀時とフェイトはまさかの展開に驚く。
しかし銀時、フェイト、スバル、ティアナ、アルフが連係して鍋に箸を伸ばそうとしてもカリムが回し蹴りをして５人を吹飛ばす。
桂、エリザベス、はやてがせめてもシャッハに肘で顔面を殴られて吹飛ばす。

（に・・・肉所が・・・・）
（鍋にも・・・）

（届かない！）
（ぎゃあ！）

圧倒的な2人の前に誰もがやられる。

（だかここで！）
「負ける訳には！！」

8人一斉に飛び掛る。
それでも・・・・

ドカ！
ドカ！
ドカ！
ドカ！
ドカ！
ドカ！
ドカ！
ドカ！

「げふぉ！」
「きゃあ！」
「なぁ！」

「ふぇえ！」
「ああ！」
「ぐふぅ！」
『ひでぶ！』
「のぉお！」

絶対的な支配力と爆発的な強さで返り討ちにする。

「やあああああああああああ！」

さらに目にも止まらない速さで何度も鍋に箸を刺すかのように肉を取って食べるカリムとシャッハ。
その姿は鍋将軍どころではない・・・言うなれば『皇帝鍋レオン』である。
そして桂、エリザベス、はやて、アルフは力尽きてリタイアである。

桂小太郎、エリザベス、八神はやて、アルフ

リタイア

（桁が違う！鍋が遠い！届かない！）
（この２人、外見とは裏腹になんていう欲張りなの！？）
（私達の今までの戦いはなんだったの？）
（所詮井の中の蛙、互いに傷つけあったあの悲しい戦いに何の意味もなかったと言うの！？）

銀時、フェイト、スバル、ティアナは諦めかけたその時だった。

（いや・・・違う！）

そして勢い良く、銀時とフェイトはカリム、そしてスバルとティアナはシャッハの箸を箸で掴んで止める。

「だからこそ！」
「あの戦いを無駄にしないためにも！」

銀時、フェイト、スバル、ティアナは最後の力を振り絞ってカリムとシャッハを吹飛ばす。
その瞬間、神楽、エリオ、月詠が復活し・・・・

「負ける！」
「訳には！」
「行かないんじゃあああああああ！」

月詠は両手で二刀流の箸で2つの鍋から肉と野菜を一気に大量に取り、神楽とエリオは互いに鍋を掴む。

「行けェェェェェェェェェェ！」
「神楽ァァァァ！月詠ォォォォォ！エリオォォォォォォ！」
「鍋レオンに！」
「なれェェェェェ！」

最後の希望を3人に託す銀時、フェイト、スバル、ティアナ。
そして月詠は一気に両手で持っている箸で掴んでいる肉と野菜を一気に口に入れてモグモグと噛み、神楽とエリオは一気に飲み干す。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

カリムとシャッハは絶叫する。
そして全て飲み乾した神楽、月詠、エリオの3人は小さなゲップをして、鍋と箸をおく。
その感想は・・・・

「なんか乳臭さが残っていてイマイチネ」
「野菜も生臭さが残っていたようじゃ」
「銀さんとスバルさんに作らせたすき焼き（偽者）ほうがもっと美味しかったですよ？」

などとカリムとシャッハのすき焼きの不味さの評判をする3人。
それを見た、銀時、フェイト、スバル、ティアナ、カリム、シャッハは黙り込み・・・・。

「テメェらァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
「ナメているのォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！」
「出せェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！」
「今すぐに出せェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！」
「不味いってどういう意味ですかァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
「聞き捨てにはならないわよォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！」

などと暴れまくっている銀時達。
その光景を、穴が開いた壁から今頃来た近藤、スカリエッティ、ルーテシアの3人は哀れみで見ている。

「ルー殿・・・スカ殿・・・・人間の争いごとは虚しすぎますなぁ」
「・・・・・・うん」
「・・・・・・そうだな」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

神楽
「こんにちわアル。今回は久し振りに私がアシスタントネ。」

銀八
「じゃあ行くぞぉ。まず最初の質問はこの人、ペンネーム『神威恭夜』さん。『黒神さんの思う銀魂五大超戦士は、だれですか？自分的には、銀時、神威、桂、屁怒呂、エリザベスです。』・・・・そうですね。作者の考えでは・・・現代に生きている人物で、強さで評価すれば『銀時（白夜叉モード）、星海坊主、神威、屁怒呂、桂』ですかねぇ。って、今回の重要メンバー的な存在で言えば、『銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠』の５人です。っと言う訳で、『神威　恭夜』さん。次は『リリカルなのは五大超魔導師』を想像してみてください！」

神楽
「次いくアル。ペンネーム『烈火竜』さんからネ。『銀八先生に質

問です。同じく地味なシャマルさんに恋人ができたら、……銀さんと神楽が引き裂こうとしますか？』・・・・いや、影薄だけど一応女だからそうまではしないネ」

銀八
「っと言う訳で、『烈火竜』さん、シャマルさんの恋の応援をしてやってください。次ぃ、『ＳＡＤＳ』さん。『１．この小説は１００話以上続きますか？２．この小説のヒロインてスバルとフェイトですか？』」

神楽
「おそらく続くアル。それに活躍的にはこの２人がヒロインネ」

銀八
「フェイトは女主人公でヒロイン、そんでスバルがヒロインって奴だな。っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。」

神楽
「次行くね。ペンネーム『カラー』さん。『ギンガさんは目立たないみたいですが、黒神さんはギンガのことが嫌い何ですか？新八同様。
』・・・・いや、ギンガの出番はおそらく新八より早いネ。なぜなら次の新編で初登場させる予定だからネ」

銀八
「ま・・・そう言うことだ。と言う訳で『カラー』さん、ギンガの活躍を楽しみに待ってください。次、行くぞォ。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん、『なのはがもうヒロインではないように見えるのですがどうなんでしょうか？僕にはもう笑いを提供するギャグキャラクターにしか見えないのですがどうですか？教えてくださ

い。』・・・・」

神楽
「ぬぉあああああああああああ！！」

突如青ざめて体を丸める神楽。

銀八
「神楽、どうした！？」

神楽
「魔王が来るね！血も涙もない魔王が・・・白い魔王がぁぁぁぁぁ！」

何やらトラウマになっている。

銀八
「・・・質問に答えればなのはも一応、フェイトとスバルに続くヒロインの1人です。ただ2人より目立てないだけで・・・っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、白い悪魔が来たら速攻に逃げてください。次ぃ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、『シャリオ、グリフィス、アルト、ヴァイスといった機動六課ロングアーチの皆さんが全く登場していないというか、存在そのものを消されている感じがしますが、彼らは今後も登場予定はないのですか？まぁＳｔｒｉｋｅｒｓ本編では、新八並みに鬱陶しい奴ら（特にヴァイスが）だったので別に登場しなくていいのですが…』。・・・ずばり答えます。おそらく4人の出番はまだ先だと思います。っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。廊下に立っていなさい」

神楽
「やっと落ち着いたアル。次行くネ。ペンネーム『加藤勇』さん、『1　山崎とディエチがカップルになりましたが土方と沖田がこれを知ったらどんな反応をしますか?やっぱり引き裂こうとしますか?2　なのは達がパー子とヅラ子を見たらどんな反応をしますか?また、この二人はこの小説に出ますか?』」

銀八
「ずばり答えます。1つ目は山崎は真撰組でも最も酷い扱いをしているため、おそらく2人はそうしそうですね。んで二つ目は創造できませんのでお答えできません」

神楽
「いっつもこれあるネ。」

銀八
「っと言う訳で『加藤勇』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん、『フェイトと銀時は観覧車乗ったって事は観覧車の中でキスをしたって事ですよね?(観覧車はキスをするために作られたって沖田が言ってました。)』って答えられるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

手紙を破って怒り出す銀八に呆れだす神楽。

銀八
「『正宗の胃袋』、永久に廊下に立っていろぉぉぉ!」

神楽
「男の嫉妬は醜いネ。次の質問アル。ペンネーム『F・N』さん、『質問です銀さん達の服は一着しか着ていないので他の着替えはあ

りません一体どうしてるんですか？』」

銀八

「大丈夫です。銀時は同じ服装をフェイトの世界で何着もありますので。っと言う訳で『F．N』さん、安心してください。次で最後ォ、ペンネーム『虚空』さん、『魔王なのはさんを止める方法はありますか？』・・・それは星海坊主、鳳仙、屁怒呂、神威、もしくは母である桃子を呼ぶしかないですね」

神楽

「パピーがいてくれれば安心アル」

銀八

「っと言う訳で『虚空』さん、廊下に立っていなさい」

第三十六訓：結局煮込んでしまえば豚肉も牛肉も美味いんじゃない？（後書き）

影がどうしようも無く薄いシャマル。

女としての価値が薄さを感じて大悩み。

そこで、桂とはやてが一肌脱ぐ！

シャッハ

「次回、「試験前にはカツ丼食べて勝つ気で行く」テイクオフ。」

第三十七訓：試験前にはカツ丼食べて勝つ気で行く（前書き）

存在のないシャマルのための企画！

その名も『プロジェクトＫＨ計画』！

ハチャメチャな試験にシャマルが挑戦！

ザフィーラ

「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』、始まるぞ」

第三十七訓：試験前にはカツ丼食べて勝つ気で行く

機動六課とナンバーズが同盟を結んでから二日間、銀時達はいつものような日々が過ごしていた。
スバルとティアナが銀時の部屋で布団の中に入り込む事や、フェイト、シグナム、アルフの3人が銀時と一緒に風呂を入り込んできたりとかなのはとリィンフォースが銀時の腕を抱き抱えるかのように掴むなど、銀時の日常は知らぬ間にハーレム化になっていた。
そして訓練所では・・・・

「坂田銀時、ゆるさーん！」
「俺達の憧れを汚しやがってぇー！」
「女神達の様な存在である隊長達が奪われた俺達の屈辱を味あわせてやる！」
「生きて返さん！」

数多くの機動六課の男性魔導士達が嫉妬心を抱えて一斉に銀時を襲いだす。

「またかよォォォ

練を手伝う事であった。
辰馬にも加わらせる予定だったが、シャッハの話によれば聖王教会でカリムに良くナンパして来ていると言う事である。
ユーノはクロノとヴェロッサの2人と、鬼兵隊の事で話をしていた。

桂は銀時に劣らない身体能力の高さと剣術、さらには爆弾と『んまい棒』を使いこなしてリミッター解除状態のヴィータの模擬戦相手をすることにした。
それはヴィータの魔法の強さ上げと無駄のない動きを身につける為であった。
神楽はエリオだけじゃなくキャロの模擬戦の対戦相手である。
ただしエリオだけは魔法使用を禁止している。それはエリオの槍術を鍛える為である。
キャロはサポートの連係を上げる為の戦術であった。途中で神楽とエリオが良い雰囲気になって、『真竜・ヴォルテール』を召喚して「2人とも黒焦げになっちゃえば良いんだァァァァァァ！」っと叫んで神楽とエリオを焼き尽くして黒焦げにするのを何度も繰り返しているのは言うまでもない。
エリザベスはアルフとザフィーラの模擬戦相手。
アルフとザフィーラもリミッター解除しているが、圧倒的なエリザベスの身体能力の高さに何度もボコボコにされて返り討ちにされている。
そして月詠はティアナの訓練相手をしていた。
クナイを一斉に投げて全てなぎ払わせる鍛錬であった。
しかも威力だけじゃなくコントロールもアップさせる鍛錬である。
さらに2つの小刀で接近してきて、ティアナの逆転である接近戦の弱さを教え、さらに接近戦でも戦えるように体術も教えている。
九兵衛はリミッター解除状態のシグナムの模擬戦相手である。
シグナムの剣術を上げる為であった。
リィンフォースは『魔導競技大会（まどうきょうぎたいかい）』で自分の魔法鍛錬不足を感じて

魔法の基礎練習をしている。

そしてフォワード部隊の中で最も新人でありながらも実力は最強であるスバルはフェイトとリミッター付き状態の模擬戦である。
『魔導競技大会』で最も成績を残したスバルはまちがいなく隊長級にまで達成している為，更なる訓練を強化された。
フェイトは『バルディッシュ』の『ライオットザンバー・カラミティ』モードで超大型剣でスバルを攻める。
本来スバルはいつもなら、神速までに鍛え上げられた剣術で対抗するが、何故か魔法で対抗していた。
実はこれはスバルの魔法を強化するための特訓であった。
原因は剣術の成長が急激に上がっているが、その分だけ魔法の成長がフォワード部隊の中でもダントツ的に遅いのである。
それはスバルの致命的な弱点でもある。しかもリミッター付きとなれば、スバルの魔力はＡＡＡ級からＡまで下がる。
今までの魔法不足を補っていた剣術が使えないとすれば、スバルは副隊長級にはまず勝てない。
それでもフォワード部隊の中ではまだ一番強いほうである。

ちなみにあの『魔導競技大会』でスバルの魔力はシニアＳに上がって、エリオも神楽と月詠の訓練のお陰で一気にＡランクに上がった。
なのははフォワード部隊とヴィータとシグナムの訓練を見守っている。
そこへ、はやてがなのはに駆けつける。

「どうしたのはやてちゃん、深刻な顔をして？」
「うん・・・実はシャマルの事で・・・・なんかぱっとしないんや」
「ぱっとなの？」

それはつまりシャマルが地味であると言う事である。
はやての台詞に苦笑するなのは。

「うん、シャマルも一応女やし・・・・・」
「一応って、そんな言い方はないんでは？」
「そこで、私は桂さんとある計画を立てたんや！」
「ある計画！？」

自信満々に胸張って言い出すはやてになのはが聞き出す。
何故か嫌な予感しかしないようである。

「その名も・・・・・『プロジェクトＫＨ計画』！」

はやての背景に爆発するようなシーンが浮かび上がったのは気のせいか、何かやらかしてくるような感じしかしないなのはは苦笑するしかなかった。

＊

そこは、機動六課のとある会場である。
そこには、シャマルだけじゃなく、自分の存在にぱっとしない隊員達数名が席についていた。
後ろにはエリザベス、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィン、リィンフォースがカンニングさせないように監視している。
会場の前には桂とはやてが立っていた。

（何でいきなり試験んんんんんんんんんんん！？）

訳も分からない状況で試験に参加すること担ったシャマル。
しかも意味不明にバリアジャケットを着ている。
これにはシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィン、リィンフォースの5人もシャマルの無理矢理参加させられた試験に動揺する。

「シャマル副隊長。貴方も最近影の薄さに困っていたんですね。自分もです。だからこの機会をどれだけ待っていたかワクワクしていました」
（しかもこの意味不明の試験を期待して待っている者もいるしィィィィィ！今日の昼ご飯が私だけカツ丼なのはこう言うことだったのォォォォォ！？）

あり得ない限り心の奥底でツッコむ。
そして桂は両手を軽く叩く。

「はいはい静かに～。じゃあこれから『影薄存在脱出資格試験』を始めます」
（影薄とはどういう事だごるァァァァァァァァァァァァァ！（怒））

桂の試験の言い出しに怒りを表すシャマル。
実はこれははやてが桂と話して考えた影薄脱出計画、『プロジェクトKH計画』である。
単純に言えば試験に合格すれば脇役を脱出できて重要人物として活躍させることが出来る企画であった。
桂は面白そうに思い込み、今回の企画の為にはやてに協力した。
さらに言うと『K』は、桂の意味で『H』は、はやての意味である。

「ハイ教科書しまう～」
「今更つめこんだところでもうおそいんや」

（教科書って何!?って桂さんと再会してからはやてちゃんが変な方向にだんだんと進んじゃっているわよ!）
「日頃から予習練習している奴には敵わないの」
（予習練習って何よ!何を予習練習しろって言うの!?）

桂とはやての台詞に心の中でツッコむシャマル。
そしてはやてが棒をスクリーンに刺す。

「皆、これ見てみぃ。今からこのスクリーンに問題が一問ずつ出るしな。皆は手元のパネルを使ってその問題に答えていくんや。回答時間は一問に付き3分や。問題が終わり次第、正解を発表するな」
「なお、後ろで試験管が見張っているので、くれぐれもカンニングや魔法によるイカサマはしないように。各々ベスト尽くして頑張ってください」

はやてと桂の説明が終わると、2人は同時に声を出して・・・・

「それでは、試験開始　（や）!!」

試験が始まる。

「まずは国語の問題」

＊

問一

次の漢字の名前を読み仮名を書きなさい。

【真撰組『』】

＊

（何よこれェェェ？簡単じゃない！・・・は、そうかこれは常識を測る試験だったんだ。これならいける！答えは（しんせんぐみ）っと！）

シャマルは『しんせんぐみ』と答えを書く。

「はい、時間切れな」

「正解はこれ。」

＊

答え

【真撰組『カス』】

＊

（どこの世界の常識ィィィィィィィィィィィ！？）

あり得ない答えに心の中で絶叫するシャマル。

他の『ヴォルケンリッター』メンバーもあり得ないと驚きだす。

「えー我々攘夷志士の間では常識だな」
「他にも、『バカ』、『クズ』、『無駄に映画に出てくるな』っと言う答えも特別正解や」
「しゃあ！」
「よっしゃ！」
「ヅラ、テメェは真撰組をそんな風に見ていたのかぁ！？」
「って言うよりなんで正解者出ている！？」

桂とはやてのあり得ない答え発表と正解者の存在に、ツッコむヴィータとシグナム。

「ち・・・引っ掛けかよ？」

シャマルの隣にいる受験生の答えは『しん・・・・ヘタレ』っと書かれている。

（アンタは普通に間違っているでしょうがァァァァァ！）

「では続いての問題」

＊

問二

次の人物の漢字の名前を読み仮名を書きなさい。

【将軍『』】

＊

（普通に考えてみればただの将軍だけど・・・・はやてちゃんと桂さんの考えを考えてみれば、・・・・答えは『ちんかす』だ！）

パターンを掴んで答えるが・・・・

＊

答え

【将軍『松平健』】

＊

（なんで漢字の中で漢字を読んでいるのォォォォォォォォォォ！？）

またもや心の奥で大きなツッコみをする。

「まぁ、桂さんとこの攘夷志士の常識を考えてみればこれが当たり前かな？」

「他にも『暴れん坊』、『大地真央の元旦那』なども正解だ」

「うっしゃ！」

（この人達どういう脳ミソをしているの！？）

あり得ないとツッコむシャマル。

それを尻目にさらに問題が進みだす。

＊

問三

次の言葉を漢字で書きなさい。

【ミッキー・マウス『』】

＊

（もはや受験の目的も関係ないわよ！ミッキー！？わかんないわよ、ってか漢字あるの！？）

＊

答え

【ミッキー・マウス『耳』】

＊

（それあんた達がミッキーマウスの耳を気にしているだけでしょォォォォォォォォォォォォ！！）

「まぁ、我々攘夷志士の間では常識だな」

（私達は攘夷志士じゃないわよ！あくまで魔導士だよ！）

「他にも、『キングダム†ハーツ』、『ディズニー・ランド』など

も特別に正解しとくしな」
（もはや漢字じゃないわよ！なんでゲーム関係と遊園地関係な事を言っているの！？）
桂とはやての答え発表がのはやメチャクチャな為、あり得ないと叫びたいほど心の奥底で叫びだすシャマル。
「なぁ、なんかまるでシャマルのキャラ設定を崩壊させる為にはやてとヅラがコンビでやっているように見えないのは気のせい？」
「さぁな。我々には理解できん」
ヴィータの質問にザフィーラは言い出す。
「ここまでは国語だ。次からは数学の問題に入る」
桂がそう言うと問四がスクリーンに映し出される。
＊
問四
ガジェット１０体、魔導士６人が道端で鉢合わせしました。襲い掛かってくるガジェットに魔導士は３人やられました。負けじと魔導士もガジェットを２体破壊しました。混戦の中、ガジェットはさらに２体痛手をおいましたが、加勢に６体入り、魔導士は２人やられました。
ミッキーの耳は何個でしょう。

＊

（2個に決まっているでしょう！ミッキーどんだけ引っ張っているのよ！？戦いのくだり丸々いらないわよ！）

噴火するかのようなツッコミをして心の中で叫ぶシャマル。

「この問題はメッチャ難しいから時間を多めに取るな」

「一時間良く考えてください」

（そんなにいるかァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！）

ツッコむ中、ある事を思いだす。

（ちょっと待って！？今まで散々とひねくれた問題が出てきたもの！もしミッキーがこの戦いの中にいたとしたら・・・もし突如、刃物系のデバイスを使う魔導士達に、ミッキーの耳が斬られたとしたら！！）

シャマルはそう確信して思いっきり答えを0と書く。

＊

答え

【2個】

＊

ズコっとコケたのはシャマルだけじゃなく、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィン、リィンフォースの6人であった。

（完全に引っかかったー！！）

引っかけ問題に悔やむ中、シャマルの隣にいる隊員の答えを見てみると・・・答えは１３４個と書かれている。

「く・・・また引っかけか」

（貴方はいったい何に引っかかったのですかァァァァァァァ！？）

「えー、数学の問題はこの一門で終了」

「どこが数学の問題だ！」

桂に対して強くツッコむシグナム。

「次は外来語問題や」

＊

問五

次の長文を訳しなさい。

／ａ／　／ｉ／　／ｕ／　／ｅ／　／ｏ／／ａ／　／ｉ／　／ｕ／　／ｅ／　／ｏ／ｙｉｙｅ／ｊ／　＊１ｗａｗｉｗｅｗｏ／ｗ／ｗ　ｙａｗｙｕｗｙｏ）　／ｗｊ／　ｋｙｉｋｙｅ／ｋｊ／　ｇｙｉｇ

y y w / / / 2 ? w 3 / 2 w e w a u e i o f t / / z z a y
e i o f t / / z z t o / i v v r p j v n y y / g e
) r p j v n y y / y k w y e y w / a y e t c e w /
y w / a y e t c e / j e u v e b v i t i h y s i g
e b v i t i h y s t k / w ∗ o / / w v i n y t e o y g j
/ / w v i n y t e o y y w o v / n r a y v y o u / a w /
n r a y v y o u / a o / g / y v j, j, a u) / z s g
j, j, b v v e) / / ? z s y w e / b v v / / ? j y w k
b v v / / ? j y v g i / v w y e t t / / u e w
w y e t t / / u y w g w y f ? l e u v j / ∗ g a
? l e u v j / / e a y y o y / j b ∗ o / / j s 3 w k
/ j b ∗ o / / j s 3 v g e a / a / w v / n d e w s o w
/ w v / n d e w s y w / w e f f o y v j, d i i y s w
f o y v j, d i i y o i g y / y a d / e / y d / e s g k
a d / e / y d / s e / g j u u f y b v a u ? w s v w
f y b v a u ? w s v u / w / ∗ i e w y f ? / e y j u
i e w y f ? / e y j y o 2 d / o y / d / t o / k
f d / o y / d / t o / / k) / f f y / a y d s / w
f y / a y d s / d w y y e o m v f f u / a / s p e
e o m v f f u / a / s p / a i e f y j y a d t s j w k
f y j y a d t s j w k / y f o / i / u f y t s w / w
o / i / u f y t s w / t w w e y / d m ∗ i e y i / s o
/ d m / ∗ i e y i / s y i j / o f j y p 2 d a) t z z i
f j y p 2 d a) t z z i a) k / j / / / e w f f y s w y / /
/ / e w f f y) s w y / w / f / a y e o s e e a s k
/ a y e f o e e a s u k j v n m p e f t t z / w
v n m p e f t t z / t k y ∗ / a y j w f o / y s y /
a y j w f o / y s y y w i 1 v i / e y / d u o / u z
v i / e y / d u o / u z ∗ i ∗ k y a y v y y w / / / 2 ? w 3 / w

?wt ch ed wsa ta ⁽ta⁾ ⁽ts⁾ ⁽ts⁾ ⁽ts

２ｔｙｅｔｙｏ　／ｔｊ／　ｄｙａ　ｄｙｕｄｙｅｄｙｏ　／ｄｊ／　ｎｙｉｎｙｅ）　／ｎｊ，　？／　ｆａｆｉ　ｆｅｆｏ／ｆ／　ｖａｖｉｖｕｖｅｖｏ／ｖ／　ｆｙａｆｙｕ＊２ｆｙｅｆｆｙｏ／ｆｊ／　ｖｙａｖｙｕ＊ｖｙｅｖｙｏ／ｖｊ／　ｐｗａｐｗｅｐｗｏｐｗｂｗａ　ｂｗｅｂｗｏ／ｂｗ／　ｍｙｉｍｙｅ／ｍｊ／ｒｙｉｒｙｅ／ｒｊ，　ｌｊ／　ｄｙｅｄｙｏ　／ｄｊ／　ｎｙｉｎｙｅ）　／ｎｊ，　？／　ｆａｆｉ　ｆｅｆｏ／ｆ／　ｖａｖｉｖｕｖｅｖｏ／ｖ／　ｆｙａｆｙｕ＊２ｆｙｅｆｆｙｏ／ｆｊ／　ｖｙａｖｙｙｕ＊

＊

（何これぇぇ！？英語！？英語なの！？っと言うより作者の適当さを感じるんですけどォォォォォォ！？）

あり得ないと叫ぶシャマルだが、スクリーンに映し出されている２人の挿し絵を見て注目する。

１人は軍人の軍曹らしき人物で倒れていて片手に写真を持っている。

もう１人は軍曹を抱える兵士である。

もしかすればと自分の勘を信じて約してみると、こう書き出す。

＊

シャマルの答え

～

戦場によって火の海と化したジャングルの森の中、重傷を負った軍曹を抱える僕は戦場の怖さより隊長が死ぬ事に恐怖を抱いている。

そんな兵士に隊長が力を振り絞って言い出す。
「俺の事は良い早く逃げろクソ虫」
僕の腕の中で軍曹の身体はみるみると冷たくなっていく。あれほど恐ろしく、あれほど憎たらしかった鬼軍曹の顔が優しく見えた。
「上官の命令が聞けねぇのかクソ虫！クソ虫が、俺をクソ虫と言ってみろ！」
「教官！私はクソ虫であります！クソ虫のごとくに親に捨てられ生きてきました！私のようなクソ虫が死のうと悲しむ者はいません！どうかすきにさせてください！」
「奇遇だなクソ虫！俺も武器を取るとき家族を捨てた。悲しむ者などどこにもいない」
そういうと軍曹はおもむろに内ポケットから血の付いた写真をとり出した。
「だがお前は違う。悲しむ者が・・・・ここにいる」
そこには若かりし頃まだ元気だった頃の僕の母その隣には赤ん坊を抱えた軍曹の姿があった。
「俺をクソ虫と言え・・・・息子よ」
「教官は・・・クソ虫であります！クソ虫の・・・・・・・大切な・・・クソ親父であります！！」
教官は一度フッと笑うとそのまま動かなくなった。

～

＊

これが正解であるとシャマルは確信する。

「えー時間切れです」
「正解はこれや」

＊

答え

〜

ミッキー、やっぱ耳がでかくて可愛くねぇ？

〜

＊

ドカァァァ！

「ミッキーの写真かァァァァァァ！」

「ごふァァァァァァ！」

「のぎゃあああああああ！」

怒り任せのツッコミ鉄拳を炸裂させる、額に血管が浮んでいるシャマルは桂とはやてを吹飛ばす。

「なんでミッキーの耳を表現するのにどんだけ無駄に長い文章使わなきゃならないのよ！」

倒れている桂とはやてに襲い出すかのように怒り出すシャマルを抑える隊員達。

そしてザフィーラがシャマルに近づき、シャマルの答えの感想を言

い出す。

「間違っていたけど感動したぞ」

ドカァァァ！

「人の答え見るなメッチャ恥ずかしいわよォォォォォォォォ！！」

怒り任せでツッコむシャマルはザフィーラに怒りの鉄拳を炸裂させて吹飛ばし、ザフィーラは気絶する。

エリザベス、シグナム、ヴィータ、リィン、リィンフォースは青ざめてザフィーラを起こす。

そして桂とはやてが起き上がって最後の問題を言い出す。

「そ・・・それでは、次で最終問題です」

（もう最後！？ほとんどミッキーの問題しか出てないわよ！）

＊

問六

ディズニィ語で貴方の思いを書きなさい。

＊

「えええええええええええええ！？ディズニィ語って何！？」

「なんだよそれ！？ほとんど間違い確立１００％じゃねぇか！」

さすがの担任達もこれはないであろうと言い出す。

「えー、これは今までの問題の中でも一番難しい為、時間は１０分にします。正解すればこれ一問で合格だ」

（もう・・・こんな事の為に私は参加した訳？もう良いよ、適当に書いて保健室に戻るわ）

諦めかけて適当に違う種類のミッキーの絵を文字のように書くシャマル。

＊

１０分後

「えー、正解者が１人でました。その正解者はシャマル！」

桂が正解者がシャマルであると言い出すと、シャマルはもちろん隊員までもが驚きだす。

「まじでか！？」

「主と桂のデタラメな問題を解くとは！」

「まさに奇跡だ！」

「凄いですシャマルさん！」

「やりました！」

『よっお見事！！』

シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、リィン、リィンフォース、エリ

ザベスも盛大な感想を言い出す。

「おめでとうな、シャマル」

グっと親指を出して言い出すはやてにシャマルは思わず喜びの感情を表す。

「や・・・やったァァァァァァァァァァァァァ！！これで影薄卒業だァァァァァァァァァァァァァ！」

喜びだすシャマルに、桂がシャマルの答えをスクリーンに表す。

「え～正解例としてシャマルの答案を見てみよう・・・・まぁ訳すとだな・・・・」

桂はシャマルの思いが書かれたディズニィ語を訳す。

「『何でヴォルケンリッター一の美女がである私が、同じヴォルケンリッターであるシグナム、ヴィータに比べて出番が少ない訳？同じヴォルケンリッターと言えどもあんな小物２人とでは、格が違うわ。だからシグナムとヴィータのような小物は指をくわえて私の活躍を影のような薄い存在で見ていれば良いわ』・・・」

桂が訳すと場の空気が氷ずく。

そしてシャマルは自分の答えを聞いて大量の冷や汗を出すと、

「シャマル、どういう事かゆっくりと聞かせてもらおうか」

「テメェがそんな奴とは思わなかったよ」

シグナムとヴィータがバリアジャケットを身に付け、左右にシャマルの肩を強く掴んで引っ張り出す。
3人が出て行った後、

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

シャマルの絶叫の悲鳴が聞こえたのは言うまでも無かった。
そしてシグナムとヴィータはシャマルの誤解を解いたのは数日間はかかったのである。

銀八
「教えて・・・・・」

生徒全員
「銀八先生！」

ザフィーラ
「今回も銀八先生コーナーをするぞ。今回は俺がアシスタントをする」

銀八
「はい、では最初の質問。ペンネーム『アグニ』さんの質問『ゼストは出ますか？』・・・・うーむ、分かりません！」

ザフィーラ

「作者の気分的にか？」

銀八
「そうかもしれませんね。っと言う訳で『アグニ』さん、ゼクトの活躍を楽しみに待ってなさい。んで次行くぞぉ。ペンネーム『神威　恭夜　』さん、『なのは達は、銀時に肉を食べさせて好感度アップしようと思わなかったのですか？』まぁ、おそらくは狙っていたと思います」

ザフィーラ
「だろうな」

銀八
「っと言う訳で『神威　恭夜　』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「次を行こう。ペンネーム『カラー』さん。『質問、良くフェイト達は銀時を物で釣りますが、給料が少ないのに買えるんですか？質問2、プレシアが銀時に好意を持っていることを知ってる人はいるんですか？また、それについてフェイトはどう思いますか？』・・・・2つともフェイト関係だな」

銀八
「ずばり答えます。1つ目は、フェイトはいつもプレシアからお小遣い貰っているのでお金には困っていません。2つ目はおそらくはいないと思います。フェイトが知ったら驚くでしょう」

ザフィーラ
「なるほど・・・・」

納得いくかのように頷くザフィーラ。

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『１．ルーテシアさんに質問です。メガーヌさんには会えましたか？２．もし銀時がショタだったらフェイト達はどうしますか？』ってもう１つのほうはお答えできるかァァァァァァァ！」

怒り出して答える銀八。
呆れたザフィールがルーテシアを呼ぶ。

ザフィーラ
「そのメガーヌ殿と会ったか？ルーテシア殿」

ルーテシア
「・・・・まだ」

ルーテシアはそう答えると席に戻る。

ザフィーラ
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、親子の再会を楽しみに待ってくれ」

銀八
「たくぅ、・・・んで次ぃ。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問。『？魔王なのはを見て銀時は幻滅しないのですか？？なのはさんは人ですか？もはや魔王という化け物のカテゴリーの人になりつつあるのですがどうですか？』・・・まぁ１つはしたら後が怖いのでしないと思います。二つ目は・・・ってか命知らずだなおい

！人に決まっているだろ！？まぁこの作者のなのはは赤夜叉さん以上に怖いですね」

ザフィーラ
「銀八、お前も命知らずだと思うが？」

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、命がけの質問、ワザワザありがとうございましたぁ！」

ザフィーラ
「次質問。ペンネームの『ｃｈａｒｌｅｙ』さんからだ。『美女揃いのミッドチルダにやってきた辰馬ですが、カリムやディード以外に飛びかかった（もとい撃退された）なのはキャラはいますか？また、カリムに飛びかかる度に辰馬を撃退するシャッハはどことなく辰馬のお気に入りキャバ嬢　おりょうに（雰囲気的に）似ていますが、シャッハは辰馬の好みのタイプではないのですか？』・・・・銀八、質問を」

銀八
「１つはいると思いますが、今だに明らかにされていません。もう１つはシャッハは確かにおりょうに似ているので辰馬の好みのタイプだと思います。っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「最後の質問だ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀八先生はどうして下半身や童貞質問をすると怒るのですか？詳しく教えてください。』」

銀八
「なんとなくムカつくからだ！」

ザフィーラ
「それだけか！？」

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていろォォォォォォ！」

第三十七訓：試験前にはカツ丼食べて勝つ気で行く（後書き）

緊急報告！

このたび、『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～譲夷戦争鎮魂歌～』は笑いを中心に進めてきましたが・・・ここでまさかの展開が発生！

謎の集団『カリバン』が銀時に襲い掛かる！

実力はゾーマ越えの銀時級！？

スバルの存在を知る新たな敵、『魔導剣士』アーサァが立ちはだかる！

そしてスカリエッティから、スバルの正体と『ティルヴィングエア』の正体が明らかにされる！

新シリアス、『スバル編』が始まる！

銀八

「次回、「特別な存在の訳にはそれなりの秘密がある」テイクオフ」

第三十八訓：特別な存在の訳にはそれなりの秘密がある（前書き）

黒神
「ええー、このたび私、黒神は２６日から風を引いてしばらく休んでいましたので、今日から連載再開させていただきます。ご迷惑おかけして申し訳ございません。ではどうぞ」

スカリエッティ
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まるぞ」

第三十八訓：特別な存在の訳にはそれなりの秘密がある

それは、１０年前の事であった。

スバル・ナカジマ　５歳

「・・・ヒ・・・ヒグ・・・・ウウ・・・・！」

スバルは人気のいない所で、泣いている。
父の部下である者同士が話しているのを聞いて自分の存在を知ったからである。
自分はある研究によって生み出された『タイプゼロ』と言う人造生命体。
信じられなかった自分は、ただ涙を流すしかなかった。

「私とギン姉・・・人間じゃない・・・人の手によって生み出された作られた化け物・・・」

自分は人間じゃなく人造生命体である事が信じられないのであった。
強い失望と悲しみが混じりこんで彼女の悲しみは倍増していた。
だが、そんな自分を慰めてくれてくれたのが、自分が最も親しい仲である親友であった。

「何をめそめそ泣いているの？スバル？」

誰よりも自分には優しくて実の姉のように慕っていた１人の少女。
金髪の長髪で翡翠色の瞳をしていて、誰にでも優しい純粋な少女。
スバルはその少女の名を言い出す。

「・・・あ・・・アーサァ」

スバルはその少女の名を言い出す。

「・・・アーサァ・・・・私・・・・」

「人造生命体って自分で分かったんだね・・・でも、だからなに？」

「え？」

「人造生命体だからって、スバルが化け物って私が思う？スバルは1人の人間として生きているじゃない。何よりも、私が最も親しい友として仲良くやっているでしょ♪」

スバルを励ますように言い出すアーサァ。

「それにね・・・・昨日知ったことなんだけど・・・・実は私もスバルと同じかもしれないんだ」

「え？」

自分もスバルと同じ存在であると聞いて驚くスバル。

話によればその少女も自分と同じく人造生命体によって生み出された1人である。

そのため、誰からも嫌われて化け物呼ばわりされたようである。

だが自分はそれを知った上で、人造生命体でも人間じゃない存在でも・・・1人の自分っと言う存在で生きていく事を誓っている。

「だから、スバルが人間じゃなかろうと人造生命体だろうと・・・・私の最も親しい親友である事は確かだから・・・・それは覚えといて♪」

そしてアーサァはそんな自分に優しい笑顔で笑う。

「・・・ありがとう・・・アーサァ」

アーサァの笑顔を見てスバルは嬉しそうに笑って返事をする。
そんな少女の笑顔が大好きであり、自分も安心する。

「だから、私達はこれからも仲良しだよ♪スバル♪」
「うん、そうだね。アーサァ」

スバルとアーザァは指きりをして信頼を誓いだす。

「指きりげんまい嘘つかないっと♪・・・あはははははははは！」

2人は笑いだす。
互いに信頼して中を深めていき、お互いに笑顔を見せ合って安心させる。
そしてアーサァのその笑顔を見るのがその日で最後だった事を、その時の自分はまだ知らなかった。

＊

「・・・・アーサァ・・・・」

その名を口に出したスバルはゆっくりと起き上がって眼を少しこする。
周りを見渡すと、そこはいつもと変わらない銀時の部屋であった。
ベットの隣には銀時とティアナが気持ち良さそうに寝ていた。

（夢かぁ・・・小さい頃の夢を見るなんて・・・）

今更どうして過去の夢を見る事になったのかを不思議に感じるスバル。
そして窓を開いて青い空を見上げて友であったアーサァを思いだす。

「アーサァ、今頃どうしているんだろうかな？」

アーサァがどこかに引っ越した事を知ったときは最初は泣き出した。
次第に置き付いて、いつか再会できることを信じている。
最初はアーサァに守られてばかりだったが、銀時と出会って人を守る強さがどれ程までに強いかを知り、いつかこの手でアーサァを守りたいと思うようになった。

＊

訓練所では、いつもどおりフェイト、なのは、ティアナ、アルフ、シグナム、ヴィータ、リィンフォース、エリオ、キャロは、朝練をする事になった。
しかし、スバルは今回は用事があるため何やら午前の特訓を休んでいた。
よほどの事情があるための理由でフェイト達に許しを貰ったのである。
銀時は何やらスカリエッティから重要な話があると聞かされてスカリエッティのアジトに向かっていき、桂、神楽、エリザベス、月詠も共に向かうことにした。
そして九兵衛と辰馬は機動六課の訓練の見物をする事にした。
そんな中、陸士１０８部隊から１人、フォワード部隊の新人としてやってきた１人の女性が挨拶する。

その人物こそ、スバルの姉であるギンガ・ナカジマであった。

「ギンガさん!?どうしてここに!?」

まさかのギンガがいる存在に驚きを隠せなかったティアナ。

「今日から私もフォワードメンバーの1人としてここに出向した訳。はやてさんの依頼で」

「はやて隊長から?」

実は、はやてはスバルとギンガの父、ゲンヤに依頼を申し込んでギンガだけじゃなくマリエル・アテンザを出向する事になった。

「それよりティアナ、久し振りだね」

「あ・・・はい!お久し振りです!」

ティアナもギンガの存在を知っている。

陸士訓練校の頃、何度か顔見知りになったのであるからだ。

エリオとキャロはフェイトに質問する。

「フェイトさん。ギンガさんって、あの時空管理局・陸士108部隊所属の捜査官で・・・・」

「スバルさんのお姉さんである・・・・あのギンガ・ナカジマですか?」

「ええ、母であるクイント・ナカジマの意志と格闘技法『シューティングアーツ』、そして形見である篭手型のデバイス『リボルバーナックル』を受け継いだんだって。ってその強さは魔法術式・近代ベルカ式/魔導師ランク・陸戦Aだそうだよ」

フェイトの質問に納得するエリオとキャロ。

スバルが銀時に憧れて剣術を学んだように、ギンガも母の意志を受け継いで体術を習ったのと一緒である。
ちなみにスバルはギンガに体術を多少は学んでいる為、ギンガはスバルの体術の師とも言えるであろう。

「それにしても、スバルは1人で剣術の修行をする為に1人旅をしていたとは聞いていたけど・・・まさか『機動六課』に入っていたなんて・・・」

スバルは大切な妹の為、ギンガは最初はスバルが1人旅に出るのは猛反対していた。
だがスバルの意志が本物と見抜いたゲンヤに許可をもらった為、反対できなかった。
そのスバルがまさか『機動六課』に所属していたとはさすがに驚いていた。

「うっし、じゃあとりあえず新しくメンバーが加わった所だし、いつもどおりに訓練するぞ」
「はい！」

ヴィータが張り切って言い出すとフォワード部隊ははっきりと返事をする。

「フェイトさん。スバルは一体どこに？」
「それが・・・何か調べなければならないことがあるって・・・・」

ギンガはスバルはどこにいるのかを聞くと、フェイトはその理由を言い出す。
午前のスバルの様子がおかしかった。

少し元気がない上に剣術の鍛錬は休まないはずなのに、休んでまで調べたい事があることはよほどの事情があるやも知れない。

＊

スカリエッティのアジト

アジトの外は、瓦礫と化した大量のガジェットのスクラッチであった。

『鬼兵隊』の作り上げた最新ガジェットによる奇襲攻めが原因であった。

だが何とか追い出せたがいつ襲ってくるのかまた分からない為厳重に見回りをしている。

中は沢山の生体ポッドが壁際にズラリと並んでいて、ポッドの中には裸の女性が一人ずつ入っていた。

原因によれば、最高評議会という連中が戦闘兵器用に作り上げた人造生命体のサンプル達と作りかけでであった。

スカリエッティはそれを良しとせずにそのデーターを全て奪って自分で作り出し、彼女達を1人の人間のように生まれさせようとしたのである。

それは銀時の世界の幕府の裏の連中がやる行動と同じな為、銀時はスカリエッティのやり方に納得するのであった。

銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠の5人はスカリエッティから話がある為、この場に来た。

一方のナンバーズは外の警備をしていた。

チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードは銀時が来たこと

には喜んでいる。
クワットロは銀時の身体能力の高さを調べる絶好のチャンスだとどす黒い感情で笑っている。

そして、銀時達はスカリエッティの部屋に入りだす。
そこにはスカリエッティはもちろん、近藤に山崎、それに機動六課のメンバーであるシャーリーとギンガと同じく機動六課に出向したマリエル・アテンザ、愛称はマリー、そしてスバルとギンガの父であるゲンヤもいる。
時空管理局本局メンテナンススタッフと自称『メカニックデザイナー』、さらには陸士１０８部隊部隊長までもを呼ぶ事は何やら重要な事があるかもしれないと確信する。

「今日ここに集まってもらった君達にはどうしても話しておかなければならないのさ。特に異世界から来た銀時達と陸士１０８部隊部隊長であるゲンヤ殿には」

スカリエッティのいつものニヤけた表情はなく、真剣な表情である。

「銀時達は構わないが、何で俺まで聞かなきゃいけないんだ？」
「それは、今回話しておく事は、君の娘であるスバルに関わるスバルの事であるからさ」
「スバルだと？」

なぜ、スバルの事で話があるのかをゲンヤは驚きだす。
銀時達もなぜスカリエッティがスバルの事で話があるのかを聞き出す。

「おいおい、何でお前がスバルの事で話をすんだ？」
「その理由は、話せば分かる事だ。今回話す事は二つ。１つはスバ

ルのことだが・・・その事はゲンヤ殿は知っているだろう」

スカリエッティがそう言うと、ゲンヤのほうを振り向く。

「ゲンヤ殿、君の娘は銀時達にお世話になっている。だから父親として、銀時達には話しておくべきたど私は思うが・・・」

「・・・・分かった」

スカリエッティがそう言うと、ゲンヤは父として話すことを決意する。

「スカ殿、スバルってあの刀を使うお譲ちゃんの事か?」

「あの子が一体なんなんですか?確かに身体能力は新人とは思えないほどの高さで、剣術も沖田隊長に勝るかもしれないのですが・・・・あの子に何が・・・」

近藤も山崎も理由を聞きだすと・・・・

「実は・・・スバルは、私の本当の娘じゃないんだよ」

ゲンヤの衝撃的な一言に銀魂組とシャーリーは驚きだす。

スカリエッティは、やはりと思ってあんまり驚かない。

「ゲンヤ殿の娘じゃないだと?」

『マジで!?』

桂とエリザベスはその真実に驚く。

「じゃあ、スバルは一体誰の子じゃと言うんだ?それにどうして突然その事を・・・・」

月詠もその理由を詳しく聞こうとする。

「スカリエッティの周りにいるナンバーズが戦闘機人である事は知っているだろ。スバルは彼女等と同じ戦闘機人、『タイプゼロ』と呼ばれた人造生命体だ」

「なぁ！？」

「何ィィィィィィィ！？」

「スバル殿が人造生命体！？」

ゲンヤの口から出されたスバルの正体に驚きを隠せなかった銀時、近藤、桂。

それはフェイトとエリオのように『プロジェクトF．A．T．E』で生み出されたクローンと同じ存在である人造生命体であった。

ゲンヤの話によれば、スバルは姉のギンガ共々クイント・ナカジマの遺伝子から生み出された人造生命体。クイントが生前に追っていた戦闘機人事件の捜査過程でギンガと共に発見・保護され、その後子供の出来なかったナカジマ家に2人揃って引き取られたようである。

「スバルが・・・人造生命体だったなんて・・・・」

『そんなことが』

「正直言って信じられないな・・・・」

神楽、エリザベス、山崎も今でも信じられなかった。

人間のように元気で明るいスバルが、まさかの人造生命体だったとは・・・

「じゃあ、スバルちゃんの異常なまでの強さはナンバーズと同じ戦闘機人だから・・・副隊長級並に強い訳ですか？」

「いや、違う」

シャーリーはそう言うと、スカリエッティはそれは違うと考える。

「もしそうだとすればスバルの魔力は確かにかなり高いが、それでも剣術など魔法を頼らない戦法を得意とはしない。むしろそうだとしても剣術じゃなくクイントの遺伝子どおりに体術を学ぶはず。それはつまり、遺伝子どおりじゃなくスバル自身の選択で選んだ事だ」

あくまでスバル自身で会得した強さであるとスカリエッティは断言する。

確かにスバルは銀時に４年前に助けられて剣術を学ぶ事を決意した。銀時の守る強さと侍の強さに強い尊敬を抱きだした、人間としての感情がスバルに剣術を導かせたのである。

「唯さえスバルはデバイスなしでも十分に強いさ。剣術を学ぶのであればわざわざ刀型のデバイスを使わなくても良いぐらいだ。・・・だが，そのスバルのデバイスがもう１つの話の内容だ」

スバルのデバイス。

それは日本刀の刀である『ティルヴィングエア』であった。

風属性の魔力を込められている為、『風の魔剣』とも呼ばれた刀。

「あの刀がどうしたというんだ?確かにあの刀は強力な魔法の威力を持つ上に刀自体も相当な業物だった。それが一体」

「その『ティルヴィングエア』を、『デバイスマイスター』であるシャーリーと時空管理局本局メンテナンススタッフのマリーと共に調べてみた」

スバルの使用するデバイスの話に意外そうに驚く桂にそのデバイス

のデータを調べたスカリエッティ。

「確かに凄いデバイスでした。魔法性能が高い上に刀身自体も相当な硬度や切れ味も異常なまでに高いです」

「一体どんな風に作られたか想像できないですよ！」

『ティルヴィングエア』の性能の良さに驚くマリーとどのような作業で作られたか興味津々のシャーリー。

「ゲンヤ殿、シャーリー、マリーには知っていると思うが、デバイスには魔導師が魔法の使用の補助として用いる機械であり、『インテリジェントデバイス』『アームドデバイス』『ストレージデバイス』『ユニゾンデバイス』、そして『ブーストデバイス』の５種類がある。まずはその事を説明しよう」

スカリエッティはデバイスの説明をする。

『インテリジェントデバイス』

ＡＩを搭載する事によって意思を持った機種。

デバイスに判断力と行動力を持たせる事で単独での魔法発動を可能とし、精神面からも所有者を支える。しかし所有者が未熟だと逆に振り回されてしまうため、上級魔導師向けである。

ある意味で、人間の『相棒』を得る事と同様の利点と欠点を持つ。

『ストレージデバイス』

最も広く扱われている機種。
デバイスにはＡＩを積まず、純粋な道具として所有魔導師が魔法を扱う媒介となる。
俊敏な応答性と引き換えに機能が少ない事が多いが、中にはある程度の自己判断機能を備え、オーバーＳランクの魔法を発動する高級品も存在する。
簡素なだけに使用者の実力がそのまま能力に反映されることになる。
またアマチュアの自作品も存在しており、完成度の低い簡易品は『簡易ストレージデバイス』と呼ばれる。

『アームドデバイス』

ベルカ式魔法に準じた仕様をとる機種。
その名の通り、何らかの武器の形状をとる物が多い。
ＡＩを搭載した人格型と、搭載していない非人格型の2種が存在する。
他のデバイスとは異なり、魔法の発動は主に機体の変形や能力強化によって果たされる。ごく一部の例外を除き、ほとんどの機種がベルカ式カートリッジシステムを搭載しているが、それがデフォルトなのかはいまだに解明されていない。

『ユニゾンデバイス』

『融合型デバイス』『融合騎』とも呼ばれる。

所有者と融合を果たすことによって驚異的な能力向上を果たす機能を有する。
しかし所有者にも融合に適した素養が求められ、素養も無く融合する（或いは融合に失敗する）と『融合事故』を起こし、最悪の場合周囲を巻き込んで破滅する可能性もある。
姿は通常の人間型、もしくは飛行能力を有した小さな人型（約３０ｃｍ）をとる。
通常サイズが人間大のユニゾンデバイスは小人型のユニゾンデバイスよりも扱いが難しく、暴走事故を引き起こしやすい。
デバイスであるが生物的な要素を得るらしく、物理的な行動は勿論、飲食や投薬も可能で、また独自に魔法や別のデバイスを使う事も出来る。
小人型のユニゾンデバイスにとって通常の人間サイズは燃費が良くないらしく、『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』ではほとんど常に小さな姿を取っていた。
デバイスの外観は成長しないが、精神の方は作成直後は子供並であり、そちらは人間のように育つ。
尚、融合すると所有者のバリアジャケットや瞳など容姿が変化し、デバイス側の支配権が強いほどデバイスの姿が色濃く反映されることになる。

『ブーストデバイス』

数年前に新たに登場した機種。
魔力射出・射出魔力制御の補助という特性を持つデバイス。
それによりブースト系魔法とは相性が良い。
だが，つい最近開発された為，その数は他のデバイスよりはかなり少ない。

これらの情報は全て『ウィキペディア　フリー百科事典』で。

スカリエッティの話が終わると銀時達はデバイスの奥の深さに唖然とする。

確かに今まで見てきたデバイスにもいろんな種類はあったが、まさかそんなに意味深いことであるとは重いもよらなかった。

「なるほど・・・デバイスには5種類のパターンがあるって訳かい」

沈黙を破るかのように銀時は納得して言い出す。

「デバイスの性能は、持ち主の魔力の高さと性能の良さで決まる物だが、中には使用するだけで一気に魔力ランクが大幅に上がる異常なまでの強力なデバイスも存在する。高町なのはの『レイジング・ハート』やフェイト・テスタロッサの『バルディッシュ』もそれだ」

スカリエッティの説明に誰もが納得する。

確かに隊長となれば使用するデバイスも相当な強さもあるようである。

「なるほど。刀で言う業物って見たい奴ですな！するとあれですな」

「スバルのデバイスは『アームドデバイス』って言う訳じゃな？」

スバルの『ティルヴィングエア』は『アームドデバイス』であると思う近藤と月詠。

しかし・・・・

「それは違う」
「何でアル？」

意外そうに驚く神楽。
その理由を説明しようとするマリー。

「もし本当なら、スバルさんの『ティルヴィングエア』は全て機械で作られているはずですが・・・」

不思議がるかのように言い出すと、小型パソコンを出してテーブルに置く。
そこにはスバルの『ティルヴィングエア』の画像と使用者であるスバルの顔が映っており、データも細かく表している。
銀時達は注目してそのデータを見る。
そして良く見るとある事が分かった。

「なんだこりゃ？何やら機械じゃなく鉄のような物も含まれていやがる？」
「どっちかと言うと、砂に近いようじゃ？土の成分か？」

銀時と月詠は不思議がるように見ると、桂はある物であると知って驚く。

「これは・・・まさか『砂鉄（さてつ）』？日本刀の材料の１つではないか？」
「えええぇぇぇぇぇぇぇ！？」

桂がそう言うと、スカリエッティ以外の人物は誰もが驚く。

「ああ、シグナム副隊長の『レヴァンティン』やシャッハ・ヌエラの『ヴィンデルシャフト』の様な剣とデバイスが合成したかのような機械で作られた剣も存在するが、・・・この『ティルヴィングエア』は、正真正銘に剣とデバイスが合成されて作られたデバイス、略して言うなれば『カヴェゼシェンデバイス』だ」

「なるほど。確かに以前に魔導競技大会で見せてもらったスバルのデバイス、本物の刀にそっくりであったとは思っていたが・・・・まさか本物の刀とデバイスが合成されていたとは・・・・」

スカリエッティがそう言うと、ゲンヤも納得がする。

ちなみに『カヴェゼシェン』とは日本語で『合成』の意味である。

これで話は終わりであると思ったが、この話にはまだ奥があった。

「いわば、銀時達が言う『鬼兵隊』の『対戦艦用機械機動兵器』である『紅桜』と同類に当たる存在だが・・・私独自で『ティルヴィングエア』を調べた結果、あることが分かった」

「あることですか？」

その正体を知ったスカリエッティに山崎が聞き出す。

それは余りにも衝撃的な事であった。

「スバルの『ティルヴィングエア』の正体は、『七星神刀』の１つだそうだ」

「『七星神刀』？」

何やら神話的な武器の名前に銀時が片眉を上げた。

シャーリーとマリーは驚きを表して言い出す。

「ししししし・・・・・『七星神刀』！？」

「神話とも呼ばれる伝説の７つのデバイスじゃないですか！」

「伝説の7つのデバイス？」

興奮するシャーリーと伝説のデバイスの存在に驚く桂。

『七星神刀（しちせいしんとう）』の存在にはさすがのゲンヤも驚きだす。

「・・・た・・・確か５０００年前のミッドチルダに、ある異世界の人物が現れて、デバイスの開発者に拾われ、そこでデバイスの勢作技術を学んで、作られた7つのデバイスを意味する事だったよな？」

「その通り。その7つのデバイスは、この言い伝えが存在する。蒼天の風を切り裂く刃、竜王の意志を持つ大刀、天を導く大太刀、閃光に突き刺す魔剣、戦場を舞う双剣、稲妻を宿す妖刀、そして勝利を導く聖剣。いずれにしても、どのデバイスも『ティルヴィングエア』と同じく刀剣と合成された『カフェゼシェンデバイス』だ。この七星神刀（しちせいしんとう）にはまだ話があるようだが・・・残念ながら知っているのはここまでだ」

どれもこれも通常のデバイスでは考えられない幻のデバイス。

いずれにしろスバルのデバイスはまちがいなく『七星神刀（しちせいしんとう）』である事が明らかにされた。

「ただ・・・私が知っている事は、この7つのデバイスを作った人物の名は・・・・梅館妙寿（うめたちみょうじゅ）と言う人物らしい」

「梅館妙寿（うめたちみょうじゅ）！？」

スカリエッティが、『七星神刀（しちせいしんとう）』の製作者を言い出すと桂と近藤が驚きだす。

「あんた等、もしかして知っているのか？」

ゲンヤが2人に質問すると・・・・

「知っているも何も、俺ら武士でも知らぬ者はいないといわれる伝説の刀匠だよ！江戸一番の刀匠である江戸随一の刀匠である村田仁鉄と双璧となると言われる程に！」

「１０年前に、突如行方不明になったとは聞いたが・・・・もしや九兵衛殿や近藤、それに山崎殿と辰馬と同じくに妙な光に飲まれて、このミッドチルダの過去に飛ばされたようだな・・・」

となればデバイス勢作は機械技術と一緒な為、仁鉄の息子である村田鉄矢が『紅桜』に機械技術で機械と合成させて、『対戦艦用機械機動兵器』にさせたように、妙寿も同じく自分が打った刀をデバイスと合成させて作ったのであろう。

スカリエッティ、ゲンヤ、シャーリー、マリーの４人が、伝説の『七星神刀』を作った人物がまさか銀時の世界にいた人物であるとは思いもよらなかった。

そして神楽がある事を気が付く。

「ねぇ銀ちゃん」

「なんだ神楽？」

「その『てぃるうぉんくえヴぁー』って５０００年前の神話的なデバイスだったら、何でスバルが持っているネ？」

「『ティルヴィングエア』な・・・・って、そう考えてみれば・・・・」

銀時が不思議がると誰もが不思議がっていた。

そんな貴重なデバイスだったら、スバルに渡る前にフェイト達や管理官などがすでに知っているはず。

だがそれが今まで知られずにスバルの手に持っていた。

一体どこでスバルは『ティルヴィングエア』を手にしたのか不思議

に感じる中・・・・ゲンヤがある事を思い出した。

「まさか・・・あの娘が・・・」

「心当たりがあるようじゃな」

ゲンヤの思いついた表情を見て月詠が聞き出す。

ゲンヤはこの際に言っておくべきかと考える。

「実は・・・スバルには１０年前までに１人の友人がいたんだ。その友人も同じく『タイプゼロ』の戦闘機人の人造生命体の１人で・・・スバルと良く遊んでいて、突如の事情があってスバルと分かれることになったんだ。その娘は再会を信じてあるネックレスをスバルにプレゼントした。もしかすればそのペンダントが・・・」

「その娘とは・・・・」

近藤がゲンヤに娘の名を聞きだし、ゲンヤはその娘の名を言い出す。

＊

一方のスバルは・・・・・

「う～、あ～、どうしよう～！」

戸惑っていて悩んでいた。

目の前には新作のアイスクリームを販売しているアイスクリーム屋が存在し、買おうか買わないか迷っていた。

そろそろ戻らないとフェイト達に叱られるが、ここで見逃せば二度とアイスクリーム屋にはいけないなど、迷っていた。

「・・・ああああああああああ！どうすれば良いの～！？」

頭を抱えて困りだすスバルに、

「ふふふ、相変わらずアイスクリームには眼が無いですね。・・・・スバル♪」

後ろから1人の女の声が聞こえた。
女の声を聞いてスバルはピクリと止まりだす。
その声は、どこか懐かしくて優しく、温もり感を感じさせる。
スバルはその声を聞いてゆっくりと後ろを向く。

その眼には1人の女性がいた。
外見はスバルと同じ年であり、さらさらとした長い金髪に翡翠色に輝く瞳。
衣装は紅いジャケットワンピースを着ている。
その女を見てスバルはある人物の名を口に出す。

「・・・・アーサァ・・・・？」

そう、スバルの１０年前の親友であり、最も慕っていた友とのまさかの１０年ぶりの再会。

「お久し振りです。元気でしたか、スバル」
「・・・・アーサァ！！」

嬉しそうに笑うアーサァ。
スバルは会いたかった親友との再会で喜びだしてアーサァに抱きつく。

そして、この再会が・・・・後にとんでもない事件の幕を開ける引き金になる事を、スバルはまだ知らない。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

リィンフォース
「はいは～い♪今回はこの私、リィンフォースがアシスタントさせてもらいます♪」

銀八
「はい、よろしく。んで最初の質問はこいつだ。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問。１つは『』『なのはをどう思っていますか？正直にお答えしてください。大丈夫です。正直に答えても僕が代りに殺されるので』・・・・作者の考えによれば、『なんか赤夜叉さんの小説でのなのはが余りにもかわいそうだったから、この際出番を増やしておこう』っと考えました」

リィンフォース
「ああ、確かにあそこのなのはさんって哀れに感じましたね」

銀八
「お前さぁ、いくらなのはがいないからってそれはヤバイでしょ？っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、新小説頑張ってください

！」

リィンフォース
「次いきま・・・ってあれ？っちょっと待って！確かもう１つの質問があったんじゃ・・・・」

銀八
「それがさ、余りにもやばいからカットさせたわけ。とりあえず見てみるか？」

っと銀時はリィンフォースにもう１つの質問を見せる。
するとリィンフォースは顔を真っ赤にして、

リィンフォース
「こんな質問、セクハラだから答えたくありません！／／／」

銀八
「だよなぁ」

リィンフォース
「次行きます。ペンネーム『カラー』さんの質問。『あの渋くて格好良いドラえもん（猫）、ホウイチは出てきますか？ついでにさっちゃんは？』ホウイチとさっちゃんって？」

銀八
「ああ、２人とも銀魂の世界に住む人物さ。深く気にするな。それに出ると思えば出るんじゃないか？作者の気分しだいで」

リィンフォース
「ふぅーん。もう１つ『銀時はリリカル世界では、英雄みたいです

けど、フェイト達みたくファンクラブとか無いんですか？顔も整ってるほうだからフェイト達以外の一般の女性職員にもモテると思うんですが。』って答えられるかぁー！」

怒り出したリィンフォースは手紙を破る。

銀八

「あーあ、やっちゃった。っと言う訳で『カラー』さん、あんまり女に刺激を与えないでください。次ィ、ペンネーム『烈火竜』さん『どうしてルーテシアさんはコードネームに『チ○ポ』を使われたのになんで無反応なんですか？』・・・・おそらく感情があんまり表に現さないため、あんまり気にしていないようです」

リィンフォース

「いや、だからってあのコードネームはないでしょ？」

銀八

「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

リィンフォース

「次、行きます。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『柳生編のラストで近藤が巨大ゴリラ　バブルス王女と結婚式を挙げる羽目となり、危うく交尾をさせられそうになった出来事がありましたね？この時銀さん達は特に助けようとしませんでしたが、もしルーテシアやスカリエッティ、ナンバーズといった面々が同じ場面に遭遇した場合、近藤を助けようとしますか？』・・・・・」

呆れて沈黙に黙るリィンフォース。

銀八

「おそらく呆れて見捨てると思いますが、ディエチは山崎の頼みで助けると思います。っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞォ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『スバルとティアナは銀時の部屋に布団の中に入り込んだって事は銀時の下半身が立っていることは知っているんですか？』・・・・ずば・・・・・」

リィンフォース
「バカァァァァァァァァァァァ！！」

リィンフォースは突如叫んでディバイン・バスターを放つ。

銀八
「アアァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

銀八は飲み込まれて黒焦げとなる。

リィンフォース
「・・・・と・・・・とりあえず、『正宗の胃袋』さん！廊下に立っていなさい！」

銀八
「あいたたた・・・・・んじゃ次ぃ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問。『１．アギト（ＡＧＩＴΩ）さんに質問です。銀時にはどおゆう印象をもっていますか。２．ナンバーズの皆さんに質問です。最近のスカリエッティはどう思いますか』。」

銀時が質問の内容を言い出すと、アギトは言い出す。

アギト
「そうだな・・・女だらしで天然パーマだが・・・実力は確かにデタラメ的に強いな」

アギトがそう言うと、次はナンバーズが言い出す。

ナンバーズ
「なんか最近丸くなった感じ（だわ）（だ）（です）」

ナンバーズがそう言うと、リィンフォースは苦笑する。

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、質問の答えはこの通りでした。最後行くぞぉ。ペンネーム『アクセル』さん。『銀魂関係の話はどれくらいやるんでしょうか?』ええ、これからも続かせてもらう予定です」

リィンフォース
「だから安心してください。」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、これからも『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』をよろしく!」

第三十八訓：特別な存在の訳にはそれなりの秘密がある（後書き）

アーサァとの再会。

喜ぶスバル。

衝撃な真実を話す。

そしてＳＳ級の緊急事件発生！

ゾーマを超える最強の敵が銀時達の目の前に現れる！？

ゲンヤ

「次回「剣は銃より強しっと言う者はたまにいる」テイクオフ」

第三十九訓：剣は銃より強しっと言う者はたまにいる（前書き）

ついに起こった最大の事件！

実力はゾーマ越え！？

『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』最大の事件が発生！

リィン

「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります」

第三十九訓：剣は銃より強しっと言う者はたまにいる

スカリエッティの話が終わった後、銀時達は別々の行動をしていた。

近藤と山崎はスカリエッティのアジトで待機していた。

さらにゲンヤ、シャーリー、マリーはスカリエッティに『七星神刀（しちせいしんとう）』の事をさらに詳しく話をしていた。

桂、エリザベスは瓦礫と化したガジェットの破片を集めていた。

新たな爆弾を作る為に。

神楽と月詠はせっかくだからとナンバーズと話をしていた。

そして銀時は単独行動で散歩をしていた。

「人造生命体ねぇ・・・・人間のように明るく性格をしたスバルがなぁ・・・・」

とても想像できない銀時。

ナンバーズが戦闘機人である事は以前にナンバーズから聞いた事があるが、まさかスバルも戦闘機人であることは想像できなかった。

「世の中物騒な事ばかり・・・・ん？」

銀時が不思議そうに感じて散歩をしている間、ある2人の人物を眼にした。

1人は金髪の少女でスバルと同じ年ぐらいに見える親友のアーサァ。

そしてもう1人は、アーサァと親しそうに話しているスバルがいた。

あの少女はおそらくスバルの親友であると考える銀時。

「そうですか。それで『機動六課』に入ったんですね♪」

「ははははは、そうだよ。それで数多くの皆と出会えて・・・・」
楽しそうに話し出すスバルとアーサァ。
そこに銀時が話しかける。
「おいおい…こんな所で何やっていんだ、スバル」
「あ、銀さん」
銀時に呼ばれて気づくスバル。
アーサァはスバルに声をかけた銀時に不思議そうにみる。
「お前、『機動六課』の訓練はどうした?ここで油売っててフェイト達に叱られても知んねぇぞ?」
「・・・あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!そうだった~!」
スバルは本来の目的を思い出して叫びだす。
自分はある調べ物を見つけて帰る途中でアイスクリーム屋を見つけてアイスを頂くか頂かないか迷っていた所であった。
「そちらの方は?」
アーサァは不思議そうに銀時は誰なのかをスバルに聞き出すと、スバルが紹介する。
「紹介するね、アーサァ。この人は坂田銀時さん。ゾーマを倒して世界を救ってくれた英雄だよ」
「どうも、坂田銀時でーす」
スバルの紹介に軽く挨拶する銀時。
銀時の名を聞いてアーサァは驚きだす。

「坂田銀時!?・・・剣だけで世界を救った伝説の武神と言われた・・・あの坂田銀時!?」

アーサァの驚きを見てこう思った銀時。
この世界では自分は有名人なのに、自分の世界はただの一般人扱い。

「・・・・・・一瞬俺はこの世界にずっといようと思っちまった」

自分の世界での扱われ方とこの世界の扱われ方が大幅に違うからである。
銀時の紹介を終わったスバルはアーサァの紹介をする。

「銀さん、この人は私の親友のアーサァですよ」
「始めまして。アーサァ・K(キング)・ソルドゥナイトです。」

丁寧に挨拶するアーサァに、その名を聞いて驚く銀時。

（アーサァ?・・・・確かその名前は・・・・）

そう、つい最近ゲンヤに聞かされた名前でスバルの１０年前の親友である。
まさかここで会えるとは思いもよらなかったが、時間を思い出してアーサァは思い出したかのような顔をする。

「もうこんな時間ですか。申し訳ないがスバル、もう行かなければ行かないようです」
「行くって・・・どこに?」

せっかく会えたのにもう行かなければならないとアーサァが去ろう

としてスバルが少し悲しむ。

「心配入りません。すぐにまた会えると思います。それでは失礼します。」

「うん。アーサァも気をつけてね」

互いに握手する。そしてアーサァは手を振りながらこの場を去っていく。

＊

アーサァから分かれてから数秒後、銀時とスバルはアイスクリームを買って人気のない所の公園で、ベンチに座りながら一緒にアイスクリームを食べていた。

これはスバルの完全なるサボりになってしまった。

アイスを食べ終えると銀時はスバルに話をした。

父親であるゲンヤから聞かされたスバルの正体と、使用するデバイスの『ティルヴィングエア』の正体を・・・・

「そうでしたか。・・・・いずれは銀さんには言っておこうと思いましたけど・・・・もう知っちゃったんですね」

「まぁな。けど最初はさすがに驚いたがな」

「あははは・・・・・それもそうですね。誰だって自分が人間じゃなく人造生命体であると知ったら驚きますよ」

苦笑して言い出すスバル。

そして日本刀のネックレスを持ち上げると、青く光りだして『ティルヴィングエア』を取り出すと、柄を握ってスゥーっと刀身を抜き

出す。

「お父さんから聞いたかもしれませんが、この『ティルヴィングエア』はアーサァから貰ったものです。これがデバイスであることを知ったのは……剣術を学びだしてから1ヶ月後でした。最初はお守りだと思いましたけど、まさかデバイスだったなんて思いもよりませんでした」

「だろうな……で、そいつが『七星神刀（しちせいしんとう）』の1つである事は……」

「知っていました……3年前にデバイスの自書を調べていたら、『ティルヴィングエア』らしき物を見つけて…それが『七星神刀』の伝説が書かれていた本であった事は最初は驚きましたけど」

その時は驚きを隠せなかったが、流石にこの事がばれたらただ事じゃ起きないようであるとスバルは思って今まで黙っていた。

「けどシャーリーさんにマリーさん、それにスカリエッティさんの3人で調べられたらバレちゃいましたか・・・・あははははは・・・・」

少し力なく笑うスバル。

「・・・・そんなに自分が人造生命体である事に不満を感じていんのか？」

「え？」

銀時はスバルの横でそう言った。

この際話しておくべきだと考えたからだ。

「お前も、笑ったり怒ったり拗ねたり、フェイトの様に『人間』として生きている事は変わんねェよ」

銀時は、思った事をそのままスバルに言った。
そんな銀時の言葉に、スバルはアーサァの言われた事と重なって見えた。
あの時アーサァが言った事も同じであった。
自分も人間と変わらない。造られた命でも人間として生きていると。

「・・・そうでしたね」

スバルは明るさを取り戻したかのように笑いこむと、『ティルヴィングエア』のセットオフをして、日本刀のネックレスに戻して立ち上がる。
そしてベンチに座っている銀時の前を向く。

「銀さん、ありがとうございます。さっきより明るくなれました」
「そうかい」

そう言って、銀時も微笑んだ。
私は今も自分自身として生きている。
銀さんやアーサァに助けられたお陰で今も生きている。
アーサァからは自分自身としての生き方を教えられ、銀さんは人を守る強さを教えられた。
2人がいるから、今の私はここにいるんだ。

そうしてスバルは顔を真っ赤に染めて銀時に近づく。

「・・・・銀さん／／／」
「ん？・・・・どうしたスバ・・・・」

チュッ

上半身をしゃがんで銀時の顔を近づけると、スバルは自分の唇を銀時の唇にくっつけだす。
突如の接吻に銀時は眼を大きく開いて驚きだす。
シグナムとなのはの時と同じぐらいの長いキスであった。
そしてスバルはゆっくりと銀時から唇を離す。

「って、ちょっ！／／／」
「・・・・これからもよろしくお願いします、銀さん／／／」

顔を真っ赤に染める銀時にスバルは今後のお世話もよろしく頼もうと言い出す。

＊

機動四課

そこは、はやてと同じくエリート魔導師達が新設した部隊。
ロストロギアの探索・調査・確保を任務とする部署。その任務上、選りすぐりの優秀な魔導師が所属するエリート部署の１つである。
その強さは機動六課には及ばないが、数多くの成績を誇っている。

そんな機動四課の隊員は銀時達の話をしていた。

「なぁ、機動六課の連中にあの坂田銀時がいるって噂があったが本当か？」
「ああ。しかもそれだけじゃなく桂小太郎、神楽、エリザベス、柳

生九兵衛など『ゾーマ事件』を解決した伝説の人物もいるそうだぜ！」

銀時達の噂は正にミッドチルダでは知らぬものはいないと言われる程である。
しかしその半分が銀時の噂を信じない者も存在する。

「けど俺達、魔導士は魔法を使って戦うのが当たり前なのに、魔法を使わずに剣だけで対決したなんてあり得ねぇだろ普通？」
「そうそう。それに魔法を使えないくせに良くもまぁ英雄気取りができた者だ」
「俺達、魔導士にとっては気に食わない存在だ」

魔法使えないのにオーバーSランク級の実力を誇る銀時の存在を気に食わないのであった。
表の感情があれば裏の感情もそんざいする。
人間には言わば綺麗な心と汚い心が存在する。
どの世界でもそれは変わりはないのであった。

「本当に、時空管理局の裏の連中は嫌になりますね」

1人の少女の声が聞こえて隊員達がその声のほうを振り向くと、一瞬にして6人の魔導士達が真っ二つに斬られて、上半身の胴体がドスっと倒れてしまう。
そして大量の血が噴射するかのようにあふれ出ると、6人の下半身の後ろには、ドラゴンの仮面をかけた赤い大刀を持っている1人の少女がいた。

「う・・・うわぁあああああああああ！」
「敵襲だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

誰もが恐れて悲鳴を上げる。
そしてデバイスを出して魔法で追撃しようとした瞬間、眼にも止まらない速さで少女が大刀を超高速に振り出すと、持ち上げた大刀を思いっきり下に向けてふると、一瞬にして４５人の魔導士達が斬り殺されてしまった。

「ば・・・馬鹿な！」
「剣技だけで、一瞬で４０人以上を・・・・」

恐怖を絶望が混ざりきった感じで言い出し、誰もが少女の強さを恐れる。

「悪いが、今日限りで機動四課は壊滅させてもらう・・・・・『ペンドラゴブレイド』！」
≪Ｉ ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ ｉｔ. Ｉ ｓｈｉｆｔ ｔｏ ａ ｂａｔｔｌｅ ｍｏｄｅ ｔｈａｎ ｔｈｉｓ.≫

そして『ペンドラゴブレイド』という大刀のデバイスを持った魔導士は人間の常識を超えた速さで大地を蹴り飛ばすかのように素早く機動四課の隊員達に突進した。

＊

３０分後

訓練所

ピー　ピー　ピー　ピー

突如、緊急警報が鳴り始め、訓練中であったなのは達が驚きだす。

「緊急警報!?」

「一体何があったんだ?」

フェイトとシグナムは不思議そうにそう言いだす。

「どうやら、ただ事じゃないぜよ」

辰馬がいつもとは違った真剣な表情で言い出す。

空にモニターが映し出され、そこにはシャマルが写っていた。

【大変です!緊急事件が発生しました!】

「緊急事件!?」

「一体何があった!」

シャマルの異常な慌てようにフェイトとヴィータが言い出す。

「どうしたの?何か様子が変だけど大丈夫!?」

なのはがシャマルの慌てように、その訳を聞き出す。

【そ・・・それが、機動四課に侵入者が現れて大量殺人事件が発生したんです!】

「ええ!?」

「何ですって!?」

大量殺人事件の発生に驚くエリオとギンガ。
フェイト達も驚きを隠せなかった。

【敵は1人でまだ少女ですが・・・見たことがない剣を持ってい
て、しかも異常なまでに強すぎです！このままじゃ機動四課が壊滅
してしまうぐらいに・・・他の機動部隊も応援してきますので機
動六課もすぐに出動をお願いします！】

シャマルが状況確認と出動要望をすると、なのはとフェイトがフォ
ワード部隊に言い出す。

「皆、訓練は一旦中止！すぐに出動するよ！」
「敵は1人だけだけど、かなり手強いそうだから気を抜けないで！」
「はい！」

2人の隊長が言い出すと、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガの4
人は力強く返事をする。

「僕達もほうっておく訳にはいかなくなったようだ」
「あははははははは！全くぜよ！」

九兵衛と辰馬もこの事件の解決の為に共に行く事を決意する。

「シャマル！お前はすぐにスバルを呼べ！」
「一刻も争う状況だ！」
【は・・・はい！】

ヴィータとシグナムにスバルを呼ぶように頼まれたシャマル。
そして機動六課はすぐに出動した。

＊

ヘリコプター内

その中にはバリアジャケット状態のティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、シャマル、リィンと九兵衛もいた。
辰馬は、乗り物酔いで横になっている。
パイロットはヴァイス・グランセニックと言う青年である。
そして出動してから5分がたった。

「それにしてもたった1人で機動四課に喧嘩売るなんて・・・自殺行為にもほどがあるだろ？」

ヴァイスが信じられないような事を言い出すと、リィンはあり得ないような感じの顔をする。

「そ・・・それが・・・信じられないことに、機動四課がもう壊滅状態まで追い込まれているそうです」
「機動四課の壊滅状態！？」

まさかあの機動四課が壊滅まで追い込まれているとは思いもよらなかった。
エリオは思わず大叫びする。
さらに信じられない事をリィンは言い出す。

「しかも、他の機動部隊の援護でも次々と返り討ちにされて・・・・１５００人以上の死者が出ています！」

「な・・・何よそれ!?思いっきりヤバイじゃない!」
「敵が・・・・よほどの手誰であると考えるべきですね」
あり得ないと大きな声で言い出すティアナに冷静に判断するキャロ。
「それで、敵の特徴的な事はなんだ?」
九兵衛が敵はどういう人物なのかを聞き出すと・・・・
「敵は、使用するデバイスは唾の部分が竜の頭で口から刀身を出しているかの様な紅い紅く輝く大刀、さらには金髪の長髪で竜の仮面をかけているそうです!」
敵の特徴を聞いて、相手は剣で戦う魔導士であると分かったフォワード部隊。
「あ・・・あははは・・・・それって、今こっちにもの凄い勢いで飛んできていて迫ってきている・・・・あの娘さんの事かい?」
「え?」
苦しそうな表情で辰馬が窓ガラスに指を刺してリィンは不思議そうにその窓ガラスを見ると、そこには凄まじい勢いで襲ってきている1人の魔導士が分かる。
その紅い竜の大刀と紅い竜の仮面はまちがいなく機動四課を襲ってきた殺人犯であった。
そしてヘリに凄まじい勢いで思いっきり剣を振り出し、驚異の剣がヘリに襲ってくる。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

リィン
「は～い、こんにちは♪今回この私、リィンフォース・ツヴァイがアシスタントします♪」

銀八
「それじゃあ行くぞォ、ペンネーム『烈火竜』さんの質問。『『魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄ』のコミックスが発売されましたけど、黒神先生は買いますか？』・・・ずばり答えます。おそらくお金があれば買うと思います」

リィン
「そうですね、こっちの小説ではまだヴィヴィオが出てないのにヴィヴィオ関係が出ましたか」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、ヴィヴィオは出ますので楽しみに待ってください。次行くぞォ。ペンネーム『ビチャード・オン』さん。『フェイトやシグナム、なのは達はファーストキスを銀さんに捧げているのですが、銀さんに惚れた他の女性陣は銀さんにファーストキスを捧げないのですか？』・・・ってふざけんなァァァァァァァァァァァァァァァ！」

銀八は怒り出して手紙を破りだす。

リィン
「どうしたんですか一体ィィィィィィィ！！？？」

銀八
「『ビチャード・オン』さん、廊下に立っていろォォォォォォォォォォ！」

リィン
「（先生は何を怒っているんでしょう？）次で最後です。ペンネーム『カラー』さんからの質問です♪『スバルとティアはまた銀さんの布団に潜り込んだみたいですが、他の方達は潜入しないんですか？それとも、スバル、ティアは添い寝、フェイト、アルフ、シグナムは風呂、なのは、リインフォースは抱き着きとそれぞれ決まってるんですか、女性陣お答え下さい。後、銀さんは諦めてるんですか？それとも慣れた？』・・・・皆さんはどうしていますか？」

リィンはそう言うと、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォースが言い出す。

フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース
「他にも色々としてい（るぞ）（ます）（るわ）（るよ）／／／」

顔を真っ赤にして答える7人。

銀八
「なんか聞いててムカついてきた。・・・銀さんの場合はおそらくまだ分からないようです。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい」

第三十九訓：剣は銃より強しっと言う者はたまにいる（後書き）

フォワード部隊を襲う脅威の一撃！

次々とやられる仲間！

脅威の『ペンドラゴブレイド』が紅く光る！

フェイト

「次回「剣から炎が出ればそれは紛れもない『壱の秘剣　焔霊』級に当たる」テイクオフ」

第四十訓：剣から炎が出ればそれは紛れもない『壱の秘剣　焔霊』級に当たる

仮面少女のデバイス『ペルドラゴブレイク』が全てを圧倒する。

フェイト達は苦戦。

そして『鬼兵隊』も関わりがある？

なのは

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります♪」

第四十訓：剣から炎が出ればそれは紛れもない『壱の秘剣　焔霊』級に当たる

銀時とスバルは一緒に機動六課に戻っている最中であった。
スバルはご機嫌良く笑っているが、銀時はさっきから顔が真っ赤に染まっていた。
先ほどの接吻が、かなり動揺しているのかスバルと眼を合わせるだけでも動揺を隠せなかったのである。
スバルを見るだけでどうしてこうも落ち着かないのか今の銀時には分からない。
そんな中、スバルの携帯が鳴り、スバルは携帯を撮り出す。

「はい、もしもし」
≪スバル！大変なの！≫
「シャマル副隊長！どうしたんですか一体！？」
≪そ・・・それが機動四課が何者かに襲撃されて今でも壊滅状態なの！≫
「ええ！？」

まさかの事件に驚くスバル。
どうして機動四課が突如襲われたか理解できないが、ただ事じゃないようなのは確かである。

≪機動六課も応戦しに来たからスバルも急いで！銀さんにも後で連絡するから急いで！≫
「分かりました！今、銀さんと一緒にいるので機動四課に応戦しに行きます！」
≪お願い！≫

そして携帯を切り、スバルは銀時を振り向く。

何やら事件が起こったようであると銀時も思い込む。

「銀さん！機動四課が何者かに襲撃されて今、壊滅状態に追い込まれています！」

「機動四課？おいおい、それって機動六課以外にも機動部隊が存在すんのかよ？」

「それは・・・たしか機動部隊はそれぞれ、一課、二課、三課、四課、五課、六課の六部隊があった様な・・・ってそれより早く機動四課を助けないと！銀さん！」

「了解！」

銀時とスバルは急いで走り出し、機動四課に向かう

＊

一方のフォワード部隊を乗せたヘリコプターに1人の大刀を持った魔導士が襲い掛かってきた。

その剣はヘリコプターを思いっきり魔っ二つに一刀両断しようと大刀を振るうが・・・・・

ガチィン！

振り下ろされた大刀はヘリコプターに直撃せず、シグナムの『レヴァンティン』に防がれた。

「ぐぅうううううう！！」

何とか防いだシグナムだが，少女の一撃は予想以上に大きかったのである。さらに使用するデバイスも他のデバイスとは全く違う雰囲気を表している。シグナムは剣を構えて少女を見る。

「シグナム副隊長！」

ティアナがシグナムの名を叫びだす。いつの間にか現れた敵の奇襲攻撃を防いでくれなかったら、今頃自分達はやられていた。

「危なかったです～！」

「ああ、もしシグナムの助けが無かったら今頃僕達は・・・・」

リィンと九兵衛も命の危険を感じていた。

そしてシグナムに続くかのようにフェイト、なのは、ヴィータ、アルフが増援してきた。

「みんな！ここは私達があの子を止める！」

「ティアナ達は機動四課の救出をお願い！」

「はい！」

フェイトとなのはは機動四課の救出をフォワード部隊に託してティアナ、エリオ、キャロ、ギンガは大きき返事する。

「よし、お前等も無茶すんなよ！」

ヴァイスはフェイト達にそう言い、ヘリコプターは機動四課に向かいだす。

仮面の少女は大刀を構え、フェイト、なのは、シグナム、ヴィータ、アルフの5人を睨みつける。

少女から放たれる威嚇が異常なまでに高く、フェイト達をも圧倒する。

≪フェイトちゃん、シグナムさん、ヴィータちゃん≫
≪うん、分かっている・・・・強い殺気を感じる・・・・しかも魔力のほうも相当高い≫

パスを通して話し合うなのは達。
彼女から見てもとんでもない人物である事は確かである。

≪この魔力は・・・・ＡＡＡ・・・Ｓ・・・・ＳＳランクだと！？≫
≪え・・・・それってつまり私となのはと同じ魔力を持っていること！？≫
≪ちょ・・・・それマジ！？≫

デタラメ的な魔力の高さはなのはとフェイトと双璧となる程であった。
しかも魔力が高い上にベルガ式の魔法と剣術を使用してくるため、もしかすればゾーマ級に危険人物であると考えられる。

≪だとしたら、リミッターを解除するしかない！主！≫
≪了解や！シグナム達の限定解除するしな！≫

シグナムははやてにパスを通して限定解除の許可を貰う。
ちなみにはやてはフォワード部隊より早く機動四課の救出をしている。
そしてなのは達の限定解除されて魔力が大幅に上がった。

「貴方が何者かは知らないけど、大量殺人の現行犯で逮捕します！」

フェイトは『バルディッシュ』を構え、なのは、シグナム、ヴィータも『レイジング・ハート』、『レヴァンティン』、『グラーフアイゼン』を少女に向ける。
すると・・・・

「どうやらこっちも本気を出したほうが良いようですね」

少女がそう言うと、一瞬にして姿を消した。
フェイト達はどこに言ったのかを探すと、シグナムは背後からの気配を感じて後ろを向くと、そこにはすぐさまに素早く大刀を振るう少女がいた。
シグナムは驚いてその攻撃を防ぐが、その一撃が半端じゃなく重い。

「ぐぅううう！」

シグナムは斬撃自体は防いだが、吹飛ばされてしまう。

「シグナム！」

思わずヴィータは叫びだし、その後に少女を睨みだす。

「てめぇぇぇぇぇぇ！」

『グラーフアイゼン』を強く握って少女に飛び掛る。

「ラケーテンハンマー！」

そのまま高速回転しながら少女に接近し、一気に撃ち抜こうとするが・・・・

「遅い！」

少女はただ大刀を振り回すだけでヴィータの『グラーフアイゼン』に直撃するが、信じられないことにヴィータの『ラケーテンハンマー』を防いだのである。
それ所がヴィータは押し返されて吹飛ばされる。

「うわぁあああああああああああ！」
「ヴィータ！」

シグナムと反対側の方に吹飛ばされたヴィータに向かってアルフは叫びだす。
あのヴィータが力負け、それも相手は魔法を使わずに純粋な力だけで・・・・。
信じられない光景だが、フェイトは迷わずに追撃する。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

フェイトは『アークセイバー』を炸裂させ、三日月型の刃が少女を襲う。
それに対して少女は・・・・・・

「『ペンドラゴブレイド』！」

大声で自分のデバイスの名を叫びだすと、『ペンドラゴブレイド』は刀身に炎が包まれる。
それはまるでシグナムの『紫電一閃』のように。
違うのはシグナムのとは違って炎の放射が大きくて烈火と言うよりも真紅に近い輝きである。

「クリムゾン・ブレイク！」

そして『ペンドラゴブレイド』をそのまま振って、『アークセイバー』を真っ二つにした。

だが、そこにはフェイトの姿は存在せずに姿を消したと一瞬思った。

すぐに気配を感じて真上を見上げれば・・・・

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そこにはフェイトとアルフが凄まじいスピードで少女に接近してくるのが見えた。

フェイトは『バルディッシュ』を思いっきり振り、アルフは剛拳を炸裂させるが・・・少女は瞬間移動的な速さで2人の攻撃に直撃する寸前に交わした。

これには流石のフェイトとアルフも驚きを隠せなかった。

そして少し離れた2人の背後に少女は回り、そのまま2人を斬ろうとした時であった。

「レイジングハート！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ≫

突如なのはが、『ディバインシューター』を5発同時に発射した。

桜色の光球はミサイルのように少女を襲うが、刀身に真紅の炎が纏った『ペンドラゴブレイド』を凄まじい速さで振り、５つの光球を全て斬った。

「はぁあああああああああ！」

すぐ様にフェイトが接近してきた。『バルディッシュ』は超大型剣

『ライオットザンバー・カラミティ』となり、フェイトは巨大な金色の刃で少女を斬り付けようとするが・・・・・

「カラミティ・フレイム！」

少女は『ペンドラゴブレイド』を大きく振り、放たれた真紅の斬撃は巨大な炎の波のようにフェイトを襲い掛かる。

「フェイト！」

アルフはすぐにフェイトの隣に立って、フェイトとアルフは障壁を出して炎の波を防ぐ。
何とか防いだが、それでも異常なまでの灼熱の熱さに2人は苦しい表情であった。

「フェイトちゃん、アルフさん、下がって！」

なのはがそう言うと、フェイトとアルフは下がる。
少女はなのはに振り向いた瞬間、そこには大量の魔力を収束させているなのはがいた。

「レイジングハート！エクセリオンモード！！」

レイジングハートの形が変形する。
カートリッジロードをする。レイジングハートから桜色の翼が出て、少女に向けて構える。

「エクセリオンバスター！！」

先端に桜色の魔力が溜まる。

「ブレイク・シュート！！！」

桜色の閃光を放ち、それが少女に急接近するが・・・・
突如、少女も『ペンドラゴブレイド』にカートリッジロードを3つ使用し、少女の足元に真紅色の魔法陣を展開する。

「ボルジャック・ストーム！」

すると少女『ペンドラゴブレイド』を右手に持ち、左手を魔法陣に触れると、少女の周りから巨大な真紅に輝く炎の竜巻が発生する。
そしてなのはの『エクセリオンバスター』は炎の竜巻に直撃するが、貫通は出来ずに炎の竜巻にそのまま打ち消されてしまった。

「そ・・・そんな！」
「嘘・・・・でしょ？」

『エクセリオンバスター』を放ったなのはは信じられないかのように驚きだし、アルフは思わずその光景に唖然としていた。
限定解除モードのなのはの『エクセリオンバスター』を防げるなど、どんな魔導士でも不可能に近いほどだからである。
フェイトも思わず驚きの表情を出している。
それと同時に少女の異常なまでの強さは心がいなく以上であると考えられる。

「だったらこいつでどーだぁ！」
「ヴィータちゃん！？」

突如現れたヴィータに驚きだすなのは。
その反対側からもシグナムが急接近してきた。

「ヴィータ！一気に攻め込むぞ！」
「分かった！」

撃鉄を起こし、グラーフアイゼンは巨大なハンマーになる。
そしてシグナムの『レヴァンティン』も連結刃形態『シュランゲフォルム』となり、連結刃の刃に紫色の炎纏わせた。

「轟天爆砕！！ギガント・シュラァアアク！！！」
「飛竜一閃！！！！！」

巨大ハンマーと炎を纏った連結刃が同時に振り上げる。
2人の最強の一撃が少女に襲い掛かるが少女は動揺しない。
それ所が、少女は左手を急接近してくるヴィータに向けると・・・・

「ボルティックス・ドラゴカノン」

左手から巨大な真紅の火球が放たれる。

「な！？」

そして真紅の火球はヴィータに直撃して大爆発する。

ドカァァァァァァァァァァァァァァァン！！

「ヴィータちゃん！」

巨大な爆発になのはは叫びだす。
さらに少女は右手に持っている『ペンドラゴブレイド』を右斜め下から左斜め上へと素早く大きく振り、凄まじい勢いで真紅の炎に包

まれた斬撃が放たれ、斬撃の一閃が炎を纏った連結刃を次々と切断する。

「何!?」

そのまま炎に斬撃はシグナムに襲うが、シグナムは間一髪で交わす。
しかし右肩が斬られて、血が大量に溢れてきた。

「ぐぁあああ!」
「シグナム!」

シグナムは切り傷と火傷を同時に負った事で絶叫する。
フェイトとアルフが思わずその光景に絶叫する。
そして先ほど爆発が発生した場所から、爆煙が徐々に薄れて・・・・
そこからヴィータが落ちてきた。

「ヴィータ!」

アルフは素早くヴィータに駆けつけると、ヴィータを抱える。
だがヴィータの容態は最悪であった。
攻撃の途中で火球が襲ってきたのか守りに入る事ができず、魔法防御をすることが出来なかった。
そのせいか、体中がボロボロで酷い火傷である。
しかも『グラーフアイゼン』の頭部が溶けており、おそらくはヴィータは『グラーフアイゼン』を無理矢理盾代わりしたようである。
もしそうしなければ今頃自分の身がグニャグニャに溶けていたのであろう。

「・・・く・・・しょう・・・・・」
「ヴィータ!大丈夫かい!?」

「・・・ちく・・・・しょう・・・・・・アイツ・・・・デタラメ的に強ぇ・・・・」

悔しそうにヴぃータは言い出す。

右肩を左手で押さえ、折れた『レヴァンティン』を右手で強く握りっているシグナムも少女の強さに恐れている。

フェイトやなのはでさえもとんでもない魔導士であると考える。

その強さはゾーマと双璧・・・いやそれ以上であるかもしれない。

少女は『ペンドラゴブレイド』を構えると、突如彼女の脳内にパスが通された。

「マスター？」

少女が突如喋りだすと、フェイトとなのはは誰かとパスを通していると考えられる。

そして一瞬だけだが何やら信じられないような表情をするが、すぐに無表情な態度になる。

「了解しました・・・・直ちに向かいます」

そう言って、瞬間移動したかのように素早く消え去った。

残されたフェイト、なのは、アルフ、シグナム、ヴィータは唖然としたまま止まっており、一体何があったのか理解できない。

だが少女の強さと『ペンドラゴブレイド』と言うデバイスは自分達よりはるかに上回っている事は確かである。

「ゾーマをも上回る強さを持った魔導士がいたなんて・・・まさか、あの子は銀時達が言っていた例の『鬼兵隊』の1人じゃ！？」

「それはないと思うけど・・・私達じゃ歯が立たなかったのは確かだよね・・・・」

フェイトとなのはも、少女の強さはＳＳランク・・・・いやもしかすればＳＳＳランクは行くのではないかと考える。

「だとすれば、今の我々じゃ歯が立たない！」

悔しがってシグナムは言い出す。

だがこれは単なる始まりの準備運動でしかならない。

本当の最悪な展開は、もうすぐ始まる事をフェイト達はまだ知らない。

＊

とある戦艦

そこには気分良く煙管を加えている高杉と、後ろにはサングラスとヘッドホンをかぶっていて背中に三味線を背負っている河上万斉がいた。

「晋介、ウゼルが動いたようでござるな」

万斉は高杉にウゼルって言う人物を言い出すと、高杉は煙管を口にくわえるのやめて煙を吐くと、不気味に笑い出す。

「ククク、そうらしいな。現に機動四課が壊滅状態まで深手を負ったようじゃねぇか。俺達『鬼兵隊』の力を借りなくても１人で十分に目的をなしとけるんじゃねぇのか？」

「それでも拙者達『鬼兵隊』の作り出した最新機械兵器(からくり)を使うでござろ？似蔵も鍬死朗も早く自分達の出番が来ないか楽しみにしておる」

2人の異常な落ち着きの無さに呆れる万斉。

「良いんじゃねぇのか？祭りを楽しむ事は良い事だしよ・・・それに今回の企画はあの2人にも思いっきり手伝ってもらうしよ。例の人物と一緒に大暴れさせて野朗じゃねぇか」

あの連中が今回の出来事に参加したらどんな血の宴が見れるのか想像しながら笑い出す高杉。

「いかに白夜叉といえども、今回の敵にどう立ち向かうでござろうか？」

「まぁそうなるだろうな。あんな化け物に勝つ事は不可能に近いだろうな・・・」

ククククっと不気味に笑い出して高杉は笑い出す。

その化け物とはフェイト達を襲った仮面の少女であった。

「それにしても、奴の『ソード・マスター計画』って奴はぁ・・・どんな計画だろうなぁ？」

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生！」

スバル
「こんにちは、今回は私、スバル・ナカジマがアシスタントします。」

銀八
「では質問行くぞ。最初はこの人、ペンネーム『カラー』さん。『前々回のファンクラブの質問で答えられないとのことですが、仮に銀時のファンクラブが存在したり、フェイト達以外の一般職員にデートとか誘われたりなどがあったらどうします？』・・・・早速答えたくない質問来たが、今回は答えてやるかこのヤロー」

スバル
「いや・・・答える為の質問コーナーじゃ？（苦笑）」

銀八
「まーずばり答えてやりましょうかこんヤロー。フェイト達にしばかれるのが怖いのか、何かの理由を聞いて断るか、おそらくはフェイト達に怒り任せに半殺しされそうな展開になります」

スバル
「いや・・・それはないんじゃ・・・多分」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『ビチャード・オン』さん。『辰馬さんは本編では銃を使っていたのですが、この小説で再び刀を使い、大活躍する日は来るのですか？』・・・良い質問だ。今回の話の流れで行けばそうなりますね」

スバル
「辰馬さんの剣で戦う姿かぁ。見て見たいかも」

銀八
「っと言う訳で『ビチャード・オン　』さん、楽しみに待っていなさい」

スバル
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問です。『?銀時がスカリエッティから貰ったものが一向に出てこないんですけどいったいどうなったのですか??なのは（魔王状態）ＶＳ屁怒絽さまどっちが強いですか?』」

銀八
「ずばり答えます。１つは銀時はよほどな時でしか使わないので滅多に出番がないだけです」

スバル
「そうなんですか」

銀八
「もう１つは、・・・・まちがいなく屁怒絽さまが勝ちます」

スバル
「ええェェーー!?そうなんですか!?」

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、屁怒絽さまとなのは（魔王状態）には要注意!次行くぞぉ。ペンネーム『烈火竜』さん。『『魔法戦記リリカルなのはＦｏｒｃｅ』も発売されました。これ

もお金があったら買いますか？』・・・・おそらく買う予定です。」

スバル
「へぇー」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

スバル
「次行きます・・・ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『スバルは銀時にキスしましたけどどんな味でしたか？真面目に教えてください。』・・・・ってえええええええええええええ！？／／／」

その質問にスバルが大声で叫びだして顔を真っ赤に染める。

銀八
「ムカつくから答えなくても良いが・・・今回は答えても良いぜ？（怒）」

スバル
「そ・・・それは・・・・・そのう・・・・／／／」

顔を真っ赤に染めてスバルはもじもじとする。

スバル
「・・・・あ・・・・・甘い味・・・・・でした／／／」

答えるとさっきより顔を真っ赤に染める。

銀八

「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん・・・・こう言う質問は控えてください！・・・・次ぃ、ペンネーム『ヤマトノオロチ　』さん。『リリカルなのはのキャラクターでもし「マユゾン」になるとしたらどのキャラが最悪ですか？』・・・・そんなのなのはに決まっています。」

スバル
「あのう・・・『マユゾン』ってなんですか？」

銀八
「知らないためが良いときもある・・・っと言う訳で『ヤマトノオロチ　』さん、今後もよろしくお願いします。そんで次行くぞぉ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目　銀さんはフェイト達の中で誰から夜這いされるのが一番嬉しいですか？二つ目　もし銀さんの目の前に『リリカルなのは』の１８禁同人誌があったら、銀さんは読んでみたいと思いますか？』。・・・・どっちも答えられるかァァァァァァァ！」

スバル
「ええェェェェェェェェェェ！？」

突如銀八が怒りだして質問を破り去り、スバルは驚きの余り叫びだす。

銀八
「『ｃｈａｒｌｅｙ』、一生廊下に立っていろォォォォ！」

スバル
「・・・・つ・・・・次行きます。ペンネーム『神威　恭夜』さん。『この作品を書いていて後悔しませんか？』」

銀八
「おそらく、作者はこの作品を書いて後悔はないと思います。っと言う訳で『神威　恭夜』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『アクセル』さんの質問。『ミッドチルダや管理局で銀時や桂、月詠といった銀魂世界の住人のファンクラブとかが存在するんでしょうか？特に銀時のファンクラブなんてあったらなのはやフェイトといった銀時命の連中は物理的に潰しにかかると思うのですが実際どうなんでしょう？』・・・まぁ、桂と月詠のファンクラブはあると考え、・・・銀時のファンクラブは間違いなくフェイト達なら潰しにかかりますね。間違いなく。」

スバル
「まぁ・・・確かにそうなりますね・・・私もなんか嫌だし・・・」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい」

スバル
「次行きます。ペンネーム『武士堂』さんの質問。『神威が機動六課に来たら、まず目を付けるのは誰だと思いますか？』・・・神威って誰ですか？」

銀八
「おそらく銀魂の中でもおっかねぇ人物だ。そんで眼をつけられるのはフェイト、なのは、そしてスバルの３人でしょう？」

スバル
「嘘ォォォォォォォォォォ！？私もですかァァァァァァ！？」

銀八
「っと言う訳で『武士党』さん、廊下に立っていなさい。最後の質問。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『1．ナンバーズのディエチ除く皆さんに質問です。山崎さんとディエチさんのカップルをどう思いますか。2．チンクさんに質問です。同じ眼帯貧乳キャラの九兵衛とはいい関係になれそうですか？』・・・ずばり答えます。ナンバーズはディエチがどうして山崎と仲良くやっているかは知らないが、もしディエチを泣かせられたら山崎はナンバーズに殺されます。そしてもう1つは、チンクは絶対に九兵衛と敵対しますね」

スバル
「ああ、魔導競技大会でも2人とも対抗心燃やしていたそうですね」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい」

第四十訓：剣から炎が出ればそれは紛れもない『壱の秘剣　焔霊』級に当たる

黒神
「っと言う訳で今回でようやく４０話突破！ですのでここで第二回目の『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の人気投票を行います」

銀時
「おお、それは良いなぁ。読者も2回目やって欲しいって言われたから読者も待ち望んでいたぞ？」

黒神
「今回の投票数は1人１０票ありますので、投票するキャラの数は何人でもＯＫです。ただし、1人5票までですよ。そして応募方法は今回はメッセージボックスで応募してください。これは絶対です。後好きな様にまだ登場していないキャラ限定で自分の嫌いなキャラにマイナス投票をしてやってください。ちなみに1人5票までです。」

銀時
「おお、こいつは面白くなりそうだな」

作者
「ちなみに、作者である僕は１５０票まで投票できますので。しかも1キャラに最大１５票までしますので♪」

銀時
「おいィィィィィィィ！なんで作者だけ１５０票なの！？それってずるいじゃないの！？」

黒神
「作者は自分の作る小説内では神だからだぁー！」

銀時
「メッチャずるぅー！」

ちなみに投票期限は2月10日まで。

フェイト
「次回、「ペンドラゴンは『竜王』と意味する」テイクオフ」

第四十一訓：ペンドラゴンは『竜王』と意味する（前書き）

地獄と化した機動四課！

救出に向かう機動六課！

そして仮面の少女の正体が明らかに！

アーサァ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第四十一訓：ペンドラゴンは『竜王』と意味する

機動四課

そこは地獄の光景へと変化していた。
炎に包まれているかの様な崩壊していく基地。
数多くのバラバラに斬られた死体に、重傷で倒れている魔導士もいた。
火事の消火活動や怪我人の治療など数え切れないしなければならない事が山ほど存在する。
そこにははやて、ザフィーラ、リィンフォースの3人も救助活動を手伝っていた。それほどまでに人手が足りないのである。
到着したフォワード部隊のティアナ、エリオ、キャロ、フリード、ギンガ、それにリィン、シャマル、ヴァイス、九兵衛、辰馬はむごい光景に残酷さを感じた。

「何・・・・これ？」
「こんな事が・・・・起こるなんて・・・・・」
「酷い・・・・」

ティアナ、エリオ、キャロの3人もあり得ないと思えるほどの信じられない表情をする。
こんな酷い事を・・・・しかも１０００以上の機動四課の魔導士達を全て1人で倒した事が尚更信じられないのである。
九兵衛は地獄のような光景に苦しそうな表情をするが、辰馬は悲しそうな眼でその光景を見る。
そう、それはかつての攘夷戦争で数多くの仲間が死んでいった戦場の光景と重なるのであった。

「なにしとるんや・・・・主ら・・・・・？」

辰馬が全員に言い出す。
ティアナ達は辰馬に振り向くと・・・・そこにはいつもの辰馬とは思えない真剣な雰囲気を表している。

「じっとしている暇があるなら、早よ助けてに行くぜよ」
「は・・・・はい！」
「そ・・・そうだったな」

静けさに真剣な声で言い出す辰馬。
そしてティアナ達は急いで救助活動をした。
ヴァイスも流石に見過ごせないのか参加する。
ティアナ、エリオ、キャロ、フリード、九兵衛、辰馬は基地内にまだ取り残されている人の救助に向かい、シャマルは怪我人達を治癒魔法で治すのであった。
リィンはシャマルとユニゾンしてシャマルの治癒魔法の効力を上げていた。

「一体、誰がこんなことを・・・・」

誰がこんな酷い事をしたのかは、怪我人を運びながらヴァイスは考える。
そして安全なところまで運び出すとこう思い込んだ。
1人でこれほどの被害を出すこと以前にどうしてこんな卑劣な事をしたのかを考える。

「分からんが、言える事は山ほどあるぜよ」

そんなヴァイズに辰馬が言い出す。

「死体を見て調べた所・・・約7割の死体が刃物による切傷と体が切断されているのが多い。そして3割は炎で身が焦がされておる。つまりそれは相手が剣を使う魔導士である事は間違いないようじゃけん」

「マジかよ?」

辰馬の予想にヴァイスが驚きだす。

だとすれば相手は剣の達人な上に相当な魔力を持っているのに違いないであろうと考える。

「それより・・・・どうやらさらに厄介のがくるぜよ」

辰馬が空を見上げてそう言うと、そこには数多くのガジェットがこの機動四課に襲って来ている。

そのガジェットは新型である。人型をしていて剣を持っている。

おそらくあれは『鬼兵隊』の作った最新兵器のガジェットであり、戦闘力はかなり高そうであった。

機動四課の隊員達は怯えだして体を震わせている。

無理もない、唯さえ壊滅状態に追い込まれたあげくにさらにガジェットによる襲来は、今の機動四課では戦力にならない。

辰馬は銃を取り出して戦闘モードに入る。

「本当は戦いたくないんじゃが・・・・これ以上の犠牲が出てもうたらヤバイからのう」

「・・・・辰馬の旦那、俺も加勢するぜ!」

ヴァイスはそう言って、狙撃銃のデバイス『ストームレイダー』を撮り出す。

実はヴァイスはヘリパイロットを勤める青年で，ヘリ操縦士としては最高位のA級ライセンスを保有している。
しかし過去に武装隊に所属しており，スナイパーとしての腕も確かであった。
だが立て篭もり犯を狙撃する任務でミスショットし、人質であった妹ラグナの左目を潰したことがトラウマとなり武装隊を辞めた過去を持つ。
今回はこれ以上の被害を食い止めるために自分もヘリパイロットではなく元武装隊のメンバーとしてガジェットの排除をすることにした。

＊

一方の銀時とスバルは急いで走って機動四課の基地に向かって走っている。
一般人は幸い非難している為，誰もいない。
だがもうすぐ到着する中、ガジェットが機動四課に襲ってきているのが分かる。

「おい、なんかガジェットがジャンジャン襲ってきていねぇか?」
「ヤバイですよ!早く到着しないと!」

大急ぎで機動四課の基地に向かう2人。
だが、銀時とスバルはある気配を感じて横を振り向いた瞬間・・・・・

「!!??」

紅い大刀を持った仮面をかけた少女が、もの凄いスピードでこちらに襲ってきている。
銀時とスバルは流石に驚きだしている。
そして少女はそのまま大刀を大きく素早く振ると、

ガキィン！

そのままスバルに振り下ろされた。
だがスバルはすぐに衣装をバリアジャケットに変え、『ティルヴィングエア』を少し抜いて、そのわずかに鞘から出ている刀身で、一太刀を受け止める。

「スバル！」

銀時はスバルの名を叫びだす。

「ぐぅう！」

しかしその一太刀は異常なまでに重かったが、苦しみながらもスバルは『ティルヴィングエア』を鞘から全開に抜き出し、そのまま大きく振るうと少女は押し返されて、宙に飛ばされるが逆回転して陸に着地した。
銀時は木刀を抜いて片手で強く握って構える。
そのまま少女を見るが、銀時はある事を気づく。
とてつもない威圧感に強い闘志。
こいつは只者じゃないって言うものじゃない。

強い修羅。

とてつもない血の匂いと絶対的な覇気は夜兎族（やとぞく）や茶吉尼族（だきみぞく）、そして

辰羅族（しんらぞく）にも匹敵する強い気を感じるのであった。
ただの人間じゃない、もしくはスバルとナンバーズと同じ戦闘機人。
いずれにしても銀時はその少女がゾーマ以上に危険な人物である事を確信する。
一方のスバルは只者じゃないとは知っているが、何やら親しい雰囲気を表しているのは気のせいかと思い込む。

「テメー、いきなり斬りかかって来るなんてどういう神経をしているんだ？戦闘機人ですかこのヤロー」

喧嘩を売るかのような挑発口を言い出す銀時だが、少女は反応しない。
そして少女は喋りだす。

「まさか、この手で殺してまで捕獲しなくちゃいけない相手が、スバルだったなんて・・・・思いもよりませんでした。」

少女が喋りだすと、スバルは信じられない表情をして驚きだす。
どうして少女がスバルの名を知っているのか？
それに少女の声はスバルが誰よりも知っている声である。

「・・・・どうして・・・・・・どうして私の名前を・・・・いや、それよりもその声は・・・・まさか・・・・」

信じられないかのような表情をするスバルは眼を大きく開けて恐る恐ると少女に聞き出す。
そして少女は赤い竜の仮面を撮り出す。
その顔は、さらさらとした長い金髪に翡翠色に輝く瞳。
その姿は美しくて何よりも騎士の魂が篭っていると思わせるその存在感。

銀時も驚いた表情をしており、スバルは信じられないかのようにその名を言い出す。

「・・・・アーサァ・・・・・」

仮面の少女の正体は、スバルにとっては信じられない人物であった。
スバルの親友であり、同じ人造生命体である最も親しい人物。
その名はアーサァ・K(キング)・ソルドゥナイト。
誰よりも優しくて心が綺麗な女性であり、スバルにとっても大切な人である。

そんな人物がどうしていきなりスバルに斬りかかって来たのか理解できない銀時とスバル。
それよりも、アーサァの持っている大刀は異常なまでに強力なデバイスであるを考えられる。

「・・・・何で・・・・・何でアーサァが・・・・それにどうしてここに・・・・・」

頭の中が混乱していくスバルはどう判断すればいいのか分からない。

「・・・先ほど、『機動四課』の所に襲撃して数多くの魔導士達を斬り倒してきた所です」
「な!?」
「!!」

アーサァの質問の答えに銀時は驚きだして額に汗を流し、スバルはアーサァの衝撃な発言に信じられない表情をする。
あんなにも優しくて天使のような存在であったアーサァがまさか人を殺めるなんて・・・・そんなのスバルには信じられなかった・・・

・いや信じたくはなかった。

「機動部隊は幹部と同じく裏の部分があった。そのせいで私達の知らない所で人々は苦しんでいて数多くの者が亡くなった。そんな連中は生きていく価値はなく、『機動四課』を壊滅させようとした。それだけの事です」

「嘘だ！」

アーサァの説明にスバルが叫びだす。

「アーサァが・・・人を殺めたなんて嘘だよ！誰よりも優しくて心が綺麗だったアーサァがどんな理由でも人を殺める事は・・・・・」

悲しそうな表情でスバルは感情的に言い出すが・・・

「甘いですね、スバル。貴方も知っている通り、私も戦闘機人である『タイプゼロ』。つまり造られた人造生命体です。それにこの機動四課の壊滅はマスターの命令による物です」

現実的にアーサァは言い出す。

「そのマスターの命令の為なら、人を殺すのもためらわねぇって訳か？」

銀時が睨みつけてアーサァに質問すると・・・アーサァは答えだす。

「ええ、その通りです。今回マスターが私に命じた任務（ミッション）は『機動四課』の壊滅。そして先ほどに最も重要な任務（ミッション）を与えられました。それは・・・『ソードマスター計画』の重要パーツであるスバル・

ナカジマの捕獲です。」
「！！！！」
アーサァがスバルを捕獲すると言う任務（ミッション）を告げられて驚くスバル。
その理由をアーサァが言い出す。
「マスターから話を聞けば・・・・スバル、貴方の中に眠っている神秘の力『ラグナロク・ブルーヴィング』が必要だそうです」
「『ラグナロク・ブルーヴィング』？」
自分にそんな力があったのか知らないスバル。
アーサァはそんなスバルを見てスバルは自分の力がまだ知っていない事を知る。
「話はここまでにして任務（ミッション）を遂行したい所ですが・・・・如何に私といえどもあの坂田銀時とシニアSランク級の魔力を持つスバルのコンビ相手には苦戦します。・・・・ならば確実に1人を仕留める為に1対1で戦うのみ！」
するとアーサァは左手を地面に触れると、そこから真紅に輝く魔法陣が浮かび上がる。
それはスバルとアーサァだけを囲みだし、銀時はその魔法陣が広がると、まるで入ってはいけないかのように特殊な透明な壁に押されて吹飛ばされる。
「どわぁあああ！」
「銀さん！？」
その広場は闘技場並みの広さであり、一対一で戦うには申し分ない広さである。

すぐに銀時は起き上がる。

「おい、スバルをどうする気だ！？」

銀時はその魔法陣に入ろうとするが、特殊な透明な壁が防いで銀時を入らせないでいる。
銀時は木刀を振ってその壁を破ろうとするが、見えない壁が木刀を防ぐ。

「ワンウォーコロシアム。一対一で戦う為の結界魔法。坂田銀時はそこで見ているが良い。私とスバルの殺し合いを・・・・」

アーサァはそう言って『ペンドラゴブレイド』を構えだす。
一方のスバルはこの状況が受け入れなかった。
どうして親友であるアーサァと戦わなきゃいけないのか・・・・そしてアーサァがどうして敵なのかを・・・・。

「アーサァ・・・・やめてよ・・・・私は・・・・アーサァとは・・・・」

「問答無用です・・・・行くぞ、スバル！」

すると凄まじい勢いで飛び掛ってアーサァは『ペンドラゴブレイド』を大きく振り、スバルを襲う。

（く！・・・・やるしかない！）

スバルはその一太刀を受け流す。
そしてそのまま体を回転させて『ティルヴィングエア』を峰のほうに構えて神速の速さでアーサァの後頭部を狙って振るう。
だが・・・・

「甘い！」

アーサァも神速の速さで移動してスバルの一太刀を交わす。
スバルは驚きだして、背後の気配を感じて後ろを向くと・・・・そこには跳躍していて『ペンドラゴブレイド』を構えているアーサァの姿があった。

「はぁあああああああ！」

アーサァはスバルほどじゃないが神速の一太刀を炸裂させるが、スバルはそれを防ぐ。
だがパワーは圧倒的にアーサァが上回っている為・・・・

「うぁあああああああああああああああ！」

スバルはその衝撃で押されて吹飛ばされる。
そして地面に大きく転びだす。

「スバル！・・・おいおい、どうしやがったんだ？いつものスバルとは思えねぇ切れのない動きと剣裁きが出来ていねぇぞ？」

いつものスバルとは調子が違うと確信する銀時。
無理もない。相手はスバルが最も慕っている親友。
そんな人物が敵だ何てスバルには信じられずに心が迷っている。
つまり今のスバルはいつもより力がは入っていない。

このままじゃまずいと銀時は判断してスカリエッティから貰ったデバイスを使用する事を決意する。
だが突如、銀時の後ろから大量のガジェットが現れた。

「!?・・・・こいつ等!」

突如現れたガジェットに銀時は驚きだす。
しかも最新型であり，剣を持った人型のガジェットである。
おそらくはスカリエッティが言っていた『鬼兵隊』が作り上げたガジェットのようである。
そのガジェットが銀時を襲いだし、銀時は仕方がなく対抗するかのように木刀を強く握ってガジェットの軍勢に飛び掛る。

一方のスバルはアーサァの圧倒的な強さ以上に自分の留まっている心の揺れに苦戦している。
今でもアーサァが敵であることが信じられないのである。
どうすればいいのか分からないまま、苦しながらも立ち上がると・・・・眼にしたのは数多くのガジェットと戦っている銀時の姿であった。

「銀・・・・さん・・・・・」

スバルは思わず銀時の名を言い出す。
いつもの銀時とは様子が違う。
えいりあん戦や訓練で見せた銀時とは全く違うと思わせる銀時の剣裁きに気づく。
それはスバルを一刻も早く助ける為に邪魔なガジェットを倒しているのである。

そしてスバルはこう思った。

自分の為に銀時があんなに必死になっているにもかかわらず、自分は何を迷っているのかを。

自分は何をすれば良いのか。
何をすればアーサァの為になるのか。
持っている剣は何のためにあるのか。
そして何のために強くなったのか。

さっきまで忘れていた自分の強さは何の為にあるのかを思い出す。
そんなスバルに容赦なく『ペンドラゴブレイド』を振り出す。

ガキィン！

「！？」

スバルはアーサァの一太刀を『ティルヴィングエア』で防ぎ、アーサァは驚きの表情を出す。
何やら『ティルヴィングエア』に水色の闘志が放っている。
それはスバルの魔力が『ティルヴィングエア』に吸収させているのである。

≪Ｉ　ｐｏｗｅｒｅｄ　ｉｔ　ｕｐ　ａｎｄ　ｗａｓ　ｃｏｍｐｌ

ｅｔｅｄ≫

スバルは『ティルヴィングエア』を大きく振り、アーサァは後ろに飛ばされるが体を逆回転して地に着地する。
先ほどの力なき弱弱しい剣筋と違い、本来のスバルの強さが戻ってきたのである。
それはスバルの迷いが完全になくなった証である。

そしてスバルはアーサァを見て、ある事を決意して剣をアーサァに向ける。

「どうしてアーサァがこんな事をするのかは知らない。だけど、これ以上アーサァが人を殺めない為にも・・・私がアーサァを止める！」

親しき親友の為、そして自分の為に必死に戦ってくれている銀時の為にもスバルはアーサァを止めることを決意する。
そして２人の魔導剣士少女の戦いが始まる。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

黒神
「どうも。今回はこの僕、『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　攘夷戦争鎮魂歌』の作者である黒神がアシスタントします」

銀八
「まぁ、作者の質問が最近増えているからな。じゃあ行くぞ。まずはこの人ペンネーム『カラー』さんの質問。『この小説では、銀さんに好意を寄せるのは基本的にリリカル勢だけですか?銀魂勢のさっちゃんや月詠は参戦しないんでしょうか?個人的に銀×月に期待しています』」

黒神
「もちろんやる予定です」

銀八
「やるのかよ!?っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ・・・・ペンネーム『アグニ』さん。『フォワードの中でティアナだけがパッとしないのはなぜでしょう?』」

黒神
「まぁ、出番が一番少ないからじゃないですか?」

銀八
「酷!?・・・・っと言う訳で『アグニ』さん。今度からティアナの出番を増やすように作者に努力させます!」

黒神
「悪いね。じゃあ次行こうか。ペンネーム『神威　銀時』さんからの質問だね。『お妙は、ゴリラがいなくて喜んでいますか?それとも九兵衛がいなくて泣いていますか?どっちですか?』」

銀八
「両方だと思います」

黒神
「だよね」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞォ。ペンネーム『リュウガ』さん『？銀さん達はガン〇ムとかはお好きですか？？もしも、銀八先生が本編に二人目の銀さんとして出たら、フェイトさん達はどうしますか？？銀さんに好意を抱いている人たちに質問です。ディエチと山崎がキスしているところを目撃したらどうしますか？』・・・ずばり答えます。？は分かりません。？は混乱は間違いないでしょう。？はフェイトさん達に答えてもらいます」

突如、フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードは立ち上がって顔を真っ赤に染めながら言い出す。

フェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード
「オ・・・・驚きます・・・・／／／」

全員同じ答えを言い出す。

黒神
「っと言う訳で『リュウガ』さん、廊下に立っていなさい」

銀八
「ってお前が言うのかよ！？・・・・まぁ良い・・・・次はペンネ

ーム『クアンタ』さんの質問。『地雷亜は出るのでしょうか。』」

黒神
「それは分かりません」

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん・・・・廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『ヤマタノオロチ』さん。『銀さんは偶然にも月詠にパフパフしたことがありましたがスバル達にはしないのですか？』」

黒神
「おそらくはさせる予定です」

銀八
「予定かよ!?・・・・っと言う訳で『ヤマタノオロチ』さん、廊下に立っていなさい」

黒神
「次は『アクセル』さんの質問です。『質問です。劇場版なのははもう観たのでしょうか?』・・・・僕の近くでもやっていないので観れないでしょう。つまり観ていません。」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、ＤＶＤが出たらレンタルもしくは買って観るのをお進めします!次はこいつかぁ?ペンネーム『夜来華』さん。『そのまんま謎の少女はＦａ○ｅのセイバーさんをイメージした少女ですか?』」

黒神

「はい、Ｆａ○ｅのセイバーさんをイメージした少女です。しかも魔法なしで強さは間違いなくゾーマ以上です」

銀八
「っと言う訳で『夜来華』さん、少女の正体は今回の話を観ればわかります。次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『第三十四訓の質問コーナーで銀さんはクロノの存在を消したがっていたようですが、銀さんのクロノに対するその異常なまでの憎しみの源はなんなのですか?』」

黒神
「そうですね・・・・影が薄いくせに偉そうでウザイですからさせました。ですので銀八にそうさせるように僕の思いを込めて書かせていただきました」

銀八
「黒ぉ!作者、クロウに対して冷てぇよメッチャ厳しいよ!・・・・っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、作者の意外な一面を見せてすみませんでした!」

黒神
「名前が黒神だからね。最後の質問のようです。その質問はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからです。『?銀時はリリカル組と多くのフラグを立てていますが，銀魂組とフラグが立つときは来るのですか??新八は，本当に出てこないんですか?僕が一番好きなキャラなんですけどね・・・?屁怒絽さまも登場しないんでしょうか?』」

銀八
「ずばり答えます。?は作者の言う通り、立つ予定かと思います。

?は単に出番が遠いだけです。?は新八より早く登場させる予定です。」

黒神
「じゃあ、行きますか」

銀八
「良いぜェ」

黒神・銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、廊下に立っていなさい」

第四十一訓：ペンドラゴンは『竜王』と意味する（後書き）

魔導剣士の対決！

スバルＶＳアーサァ！

侍魂と騎士魂が激突する！

そして最悪な結末が待っていた！

スバルの運命はいかに！？

アーサァ

「次回、『刀は武士の魂と言えるなら剣も騎士の魂と言えるではないか？』・・・・テイクオフ」

なのは
「にゃはははは、リィンフォース・・・良くも言ってくれたね」
（ゴゴゴゴゴゴ

ニコニコと笑いながらなのはは憎悪の怒りを放っている。

リィンフォース
「な・・・なのは！ご勘弁を～！」

リィンフォースは怯えてガクガクと震えている。

なのは
「問答無用なのぉー！」

そしてなのはは『スターライト・ブレイカー』をそのまま大きくはなった。

リィンフォース
「ぎゃあああああああ

第四十二訓：刀は武士の魂と言えるなら剣も騎士の魂と言えるではないか？

「はぁあああああああああああああ！！！！！」
「てぁあああああああああああああ！！！！！」

真紅の魔法陣の中で2人の魔法少女が剣と剣をぶつかり合って戦っている。
侍の意志を持つスバルと騎士の意志を持つアーサァ。
竜巻が起こっていると思わせるほどの剣のぶつかり合いで起こる大きな衝撃の圧力は異常なまでも大きかった。
しかもお互いに剣を眼にも映らないほどの速さで素早く降り続いている。

ガキキキキキキキキキキキキキキ　ガキャキキン　ガキャアアン！

「いやぁあああああああああああああ！」

スバルの神速剣技による連続攻撃は容赦なくアーサァに炸裂する。
だがアーサァはそれを『ペンドラゴブレイド』で防ぎだし、ときには瞬間移動の動きで交わしだす。

「はぁあああああああああああああ！」

アーサァが後ろから『ペンドラゴブレイド』を左斜め上から振り下ろすが、スバルは気配を感じで地面を強く蹴るかのように右横に避ける。
そして振り下ろされた『ペンドラゴブレイド』は大地が大きく砕けてしまった。
スバルはさらに地面を強く蹴り出すかのような瞬発力の高いダッシ

ュで、猛スピードでアーサァに突撃する。

「てぇえええええええええええええええ！」

「うぉおおおおおおおおおおおおおおお！」

スバルの神速の一太刀に対するアーサァの凄まじい一太刀がぶつかり合う！

ガキィイイイ

≪Ｍａｇｉｃａｌ　ｐｏｗｅｒ　ｃｏｎｖｅｒｇｅｎｃｅ，　ｃｏｍｐｌｅｔｉｏｎ≫

『ティルヴィングエア』に自らの魔力を収束させて、鞘に納めると、鞘が蒼く光だす。

≪Ｉ　ｓｔａｒｔ　ａｔｔａｃｋ　ｍａｇｉｃ≫

一方のアーサァも『ペンドラゴブレイド』に己の魔力を収束させ、『ペンドラゴブレイド』を包むかのように無数の真紅の球体が現れる。

「疾風空間（しっぷうくうかん）！」

「メガ・プロミネンス！」

お互いの魔法剣技が炸裂する。

スバルは６回ぐらい居合い切りをし、アーサァは『ペンドラゴブレイド』を大きく横になぎ払うかのように豪快に振るう。

『ペンドラゴブレイド』に包まれた無数の真紅の魔力弾は一斉にスバルに向けて放たれるが、スバルに届く前にその無数の魔力弾の周囲の空間が６回切り裂く。

これにより魔力弾は全て爆発して消え去った。

「『ペンドラゴブレイド』、カートリッジロード！」

ガシャン×２

すると『ペンドラゴブレイド』はカートリッジを２回ロードする。

すると『ペンドラゴブレイド』の先から真紅の火球が生み出され、徐々に大きくなっていく。

「『ティルヴィングエア』！カートリッジロード！」

ガシャン×３

『ティルヴィングエア』のほうもカートリッジロードを３回ロードする。

そして『ティルヴィングエア』の刀身が蒼く光だし、水色の稲妻が発生して刀身を包み込む。

「蒼波滅閃！」

「ボルティックス・ドラゴカノン！」

スバルは神速の素振りをして、アーサァは剣を大きく突き出して、魔法剣技を炸裂させる。

『蒼波一閃』と一緒だが、それの５倍以上に大きい蒼い斬撃が大地を割るかのように走り出す。

一方、アーサァの『ボルティックス・ドラゴカノン』は先ほどヴィータに放った巨大な火球だが、今回は剣から放った。

それもそのはず、腕からより剣から放ったほうが威力と速さが違う。

お互いの魔法がぶつかり合って、大爆発する。

その爆風が魔法陣内を全て包み込む。

「はぁあ！」

アーサァは『ペンドラゴブレイド』を大きく振り回して爆風を消すかのように散らす。

爆風が消えるとスバルの姿がなかった。

だがアーサァはどこにいるのか把握していた。
それはスバルが大きく飛翔していて、『ティルヴィングエア』を右手で強く握って構えているからである。
アーサァも対抗するかのようにスバルのほうに飛翔する。
そしてスバルもアーサァのほうに落下して行き・・・・・

「あああああああああああああああああ！」
「うぉおおおおおおおおおおおおおおお！」

ガキィィィィィィィィィィン！

互いに剣を振るうと、『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』がぶつかり合う轟音が響き渡る。
そして互いに体をしゃがんで陸に着地すると、スバルの左肩が少し斬られて血が少し出ていて、アーサァの右腕の部分も浅く斬られた。
そして互いに起き上がると振り向いて見届ける。

「なるほど、この１０年間で随分と見違えるほど強くなりましたね。剣術の腕も魔力もまず隊長級は言っても良いでしょう。・・・・・・ですが貴方が私に勝つ事は不可能です」
「そんな事は関係ない！私は私の大切なものを守る為に戦う！この力はその為の力！そしてそれを今ここで、アーサァを救う為に発揮する！」
「ですが私と貴方の力の差は今では遠い存在です。その理由は２つありますが、その内１つは『七星神刀（しちせいしんとう）』の１つである『ティルヴィングエア』を持っている貴方なら、私の『ペンドラゴブレイド』の正体を知っているはずです」

アーサァがそう言うと、スバルは無言になる。
その訳はアーサァの言っている事が当たっているのである。

「なぜなら、我が『ペンドラゴブレイド』も梅館妙寿作の『七星神刀』の1つだからだ。性能が同じでも、貴方が『ティルヴィングエア』の使用経験と私の『ペンドラゴブレイド』との使用経験では圧倒的に違う！」

力強くアーサァは言い出す。

スバルが『ティルヴィングエア』を使用するようになったのは、時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入学してから一週間ぐらいであった。

一方のアーサァが『ペンドラゴブレイド』を使い始めたのはスバルと別れた翌日である。

剣の腕が同じでも、使用するデバイスの経験が圧倒的にアーサァが勝っている。

しかも、スバルがアーサァに勝てない理由はそれだけではなかった。

「そしてもう1つの理由こそが最大の決定的な理由だ。それはマスターの行っている研究の1つである『プロジェクトＤＮＡ』」

「『プロジェクトＤＮＡ』！？」

効いた事がない特殊な研究に驚くスバル。

その研究は恐ろしいものであった。

「『プロジェクトＤＮＡ』・・・それは戦闘機人のＤＮＡと他人のＤＮＡと合成させて、戦闘力を急激に増す戦闘機人強化研究の事です」

「え！？」

そんな事が出来るのかっと言うばかりに驚くスバル。

つまりアーサァはその研究によって大幅に強くなったとスバルは考

えるが、そんな甘い程度じゃなかった。

「戦闘機人を特殊な生体ポッドの中にいれ、他人の血液をその戦闘機人の体内に注入させ、そのまま一ヶ月ぐらい眠らせるだけで、急激に戦闘力を上げられます。その研究の実験台になった戦闘機人は１０００人。ですがその内、成功したものは私１人。他の９９９人の戦闘機人はその研究に耐え切れなく息絶えて亡くなった」

「ひ・・・酷い！」

まさに命を玩具のように扱ってまでの残酷な研究である。

スバルはそんな残酷な研究の結果にスバルは思わず叫ぶ。

どうしてアーサァだけが研究に成功したのかをアーサァは言い出す。

「何故私以外の戦闘機人が研究に耐え切れずに死んだのかを、研究の実験台として成功させた私にマスターが教えてくれた。成功させるに合成させるべきＤＮＡの持ち主は、魔力の高い者や頭が冴える者のＤＮＡではない。人間の常識をはるかに超えた潜在能力が高い者のＤＮＡでなければ研究が成功しない。それもあの生物型ロストロギアである魔導生物兵器『ゾーマ』をも上回る潜在能力の持ち主のＤＮＡが・・・・」

アーサァが研究の失敗原因を言い出すと、スバルは驚きと信じられない衝撃が交じり合ったかのような表情をする。

ゾーマを上回る身体能力の持ち主。すなわち魔法なしでゾーマを倒せる実力者。

「そう、『プロジェクトＤＮＡ』の研究でマスターが私のＤＮＡに合成させたＤＮＡの持ち主は・・・・貴方に守る強さを教えた尊敬すべき人物・・・『白夜叉』坂田銀時のＤＮＡだ！」

「銀さんのＤＮＡ！？」

まさかの衝撃的な真実。
信じられないことだが、だとすればスバルはまちがいなくアーサァには勝てない。
銀時の潜在能力の高さはＳＳ＋級に当たり、そんなのを合成させればアーサァはまちがいなくゾーマをも上回る。
ただ、一つになる事は銀時のＤＮＡと合成させた事である。
銀時のＤＮＡって事は、銀時の血液などを利用した事になる。
だとすれば、一体どこで銀時の血液を手に入れたのかは不自然に思うスバル。

「話はここまでだ。マスターの為、今ここで私は貴方を討つ！」

アーサァはそう言って、カートリッジの弾丸を『ペンドラゴブレイド』に２発装填させると、

「ペンドラゴブレイド、カートリッジロード！」
≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫

ガシュン×９

アーサァはカートリッジを９発ロードする。
それはスバルが『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を発動させる条件をはるかに超えるロード回数である。
すると、『ペンドラゴブレイド』の刀身から、真紅の炎が大きく溢れ出る。
とても異常なまでと言えるほどに炎が凄まじい勢いで燃え上がっている。
おそらくはアーサァの最大魔法であると確信したスバルは、自分も急いでカートリッジを３発『ティルヴィングエア』に装填させると、

≪はやて隊長！≫
≪スバル！？スバルか？≫
スバルははやてにパスを通して報告する。
≪今、大量殺人犯と合戦中！敵はＳＳ＋級の魔力の持ち主です≫
≪な・・・なんやって！？≫
≪だから私の限定解除をお願いします！はやて隊長！≫
スバルは限定解除を求めてはやてに頼む。
≪分かった！今こっちもガジェットとの戦いで苦戦しているから、スバルのリミッターを解除するな！≫
援護できない代わりにスバルのリミッター解除をした。
これにより、スバルの魔力は最大限となって上級魔法が使えるようになった。
スバルがこの場で使用する魔法はただ１つ。
「ティルヴィングエア！カートリッジロード！！」
≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫
ガシュン×７
カートリッジを７発ロードすると、『ティルヴィングエマ』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋

を描くかのように刀身を包み、超高速回転をして爆風を起こす。
スバルの最強にして禁断の魔法『エア・アルテマ・ギガブレイカー』の発射準備であった。

「てゃあああああああああああ！」

ズバァーン！

一方の銀時は大急ぎでガジェットを破壊した。

「ちぃ、何とか片付いたか！」

今ので最後の一体であり、全てのガジェットを破壊した銀時はスバルの救出に向かおうとするが、そこには魔力を最大限に収束しているスバルとアーサァがいた。

「……スバルの奴、あの禁断魔法を！！」

銀時は『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を発動させるスバルに驚いた。
一方のアーサァもとてつもない魔法を発動するのではないかと思い出す。

蒼き風と紅き炎！

最強の魔法が同時に放たれる。

「エア・アルテマ・ギガブレイカー！！！！！」
「ペンドラゴ・カリバーン！！！！！」

『ティルヴィングエア』から巨大な螺旋に渦巻く蒼い閃光が放たれ、『ペンドラゴブレイド』からは全てを焼き尽くすかのような業火が包まれた極大な紅き閃光が放たれる。
その二つの光がぶつかり、風を起こし、光を発し、周囲を巻き込みながら二つの究極魔法剣が激突する。
アーサァの放った『ワンウォーコロシアム』でさえもあっという間に粉々に破壊されて大爆発する。
やがて爆風は消え、風がおさまる。銀時が伏せていた顔を上げた。

スバルは無事だった。
だが全ての魔力を使い果たした為、立っているのがやっとであった。
しかもスバルは軽い程度だが、全身に火傷を負い煙が出ている。
それはアーサァの『ペンドラゴ・カリバーン』がスバルの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を上回っていたからである。
なぜなら・・・アーサァの『ペンドラゴ・カリバーン』はなのはの『スターライト・ブレイカー』をも上回る究極の魔法剣。
その魔力ランクは最高ランクであるＳＳＳを行く。
とりあえず銀時は急いでスバルに駆けつけるが・・・・

「驚きました。まさか、我が『ペンドラゴ・カリバーン』を受けてまでまだ立っていられるとは・・・・」

いつの間にかアーサァがスバルの前にいる。
そして・・・・・

「ですが、やはり私に勝つ事は不可能でしたね」

『ペンドラゴブレイド』を思いっきり振るう。
その一太刀がスバルに直撃して、スバルは大量の血が溢れてしまった。
遠さかって行く意識に、スバルの眼に銀時が写り・・・

「・・・・銀・・・・・さ・・・・・・・」

銀時の名を呼び、ゆっくりとスバルは倒れていった。
スバルの体から血が出てゆっくりと出て地面に染み込んでいく。

「スバルーー！！！」

スバルの姿を見て銀時は叫んだ。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

桂
「諸君。今回はこの俺、桂小太郎と・・・・

エリザベス
『私、エリザベスと・・・』

はやて
「私、八神はやてがアシスタントするな。」

銀八
「じゃあ行くぞ。まずはこの人の質問。ペンネーム『烈火竜』さん。『質問です。キャロの魔王オーラはいつから成長していたのでですか？』」

桂
「おそらく、エリオ殿がリーダーと月詠殿と親しくなった時からだな」

はやて
「なんかキャロの怒りが怖かったわ。なのはちゃん並みにおっかないし」

エリザベス
『まったくです』

銀八
「っと言う訳で、『烈火竜』さん、キャロの怒りには要注意してください」

桂
「次を行こう。ペンネーム『神威　銀時』さんの質問だ。『質問です。ペット紹介の話をするとしたら銀時は、次の誰をペットとして紹介しますか？1アルフ、2ザフィーラ、3フリード』」

銀八
「ずばり答えます。親しい仲と言えばまちがいなくアルフです」

はやて
「やっぱりそう思うか」

エリザベス
『ですがヒロインとしてはいけますが、ペットにするには無理があります』

銀八
「対抗心燃やしているよエリザベス！っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問。『？人気投票の結果はいつ出るのですか？』・・・・ずばりお答えします。締め切りは2月10日ですので、つまり今日までです。」

はやて
「そんで明日で結果発表するんやな」

桂
「結果が楽しみになって気だな。」

エリザベス
『早く見たい！』

銀八
「そう言えば『ウッソ・エヴィン』さんはこの質問で面白くする為に小説書いているようだぜ」

はやて
「ほんまかいな！」

エリザベス
『確か、『ウッソとリリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』と言いますね』

はやて
「なんかメッチャ面白そう！」

銀八
「そんでもう１つ。『なのはさんに質問です。やはりあなたはこの小説でも影が薄く，ギャグキャラクターにしか見えないんですが・・・大丈夫ですか？と心配します。』

はやて
「ああ、確かにシャマルとは違って重要人物の１人であるけど、はっきり言ってその中でも影が薄い！」

桂
「以前に高町殿に対する質問に答えたリィンフォース殿の感想も分かる気がする」

エリザベス
『っと言うより、なんかなのはさんらしい』

桂
「おそらく高町殿はヒロイン立場では、テスタロッサ殿とナカジマ

殿に強い嫉妬心を燃やしているのでは？」

はやて
「あり得る！」

エリザベス
『たしかに！』

はやて
「なんやかんやで、フェイトちゃんやスバルに比べたらヒロインの素質が足りないような気がするわ」

桂
「もし銀時が最初に会っていたのがテスタロッサ殿じゃなく高町殿なら・・・・」

エリザベス
『なのはさんが重要ヒロインだったのに・・・』

桂・はやて
「もったいない（わ）」

エリザベス
『哀れとしか見えない』

銀八
「テメェら、『白い悪魔』に殺されても知らなねぇぞ？」

銀八は3人の感想でなのはに殺されないように祈りだす。

ちなみにもう1つ質問があった。それは『桂とはやての関係はまだ発展しないんですか?』だった。
もの凄く怒って、あえて読まないでいた。

銀八
「っと言う訳で、『ウッソ・エヴィン』さん、なのはに対する質問は控えたほうが良いと思います!」

エリザベス
『次行きます。』

はやて
「ペンネーム『カラー』さんからや。『もし、銀時がホストだったらどれぐらいの割合で足を運びますか?また、銀時が金時バージョンで夜に誘われたらどうしますか?女性陣お答え下さい。』」

銀八
「んなもん答えられるかぁーー!」

銀八がはやてから質問を取り上げて破りだす。
そんな銀八の姿に桂、エリザベス、はやては呆れる。

銀八
「っと言う訳で『カラー』、一生廊下に立っていろー!」

桂
「・・・・えー、次行きます。ペンネーム『クアンタ』さん。『?定春は出るのですか。?屁怒絽様が二人いて(そのうち一人は外見どうりの性格で)、機動六課&ナンバーズが戦ったらどちらが勝ちますか?』」

銀八
「ずばり答えます。定春はまだ出すか出さないかを考え中です。もう1つは間違いなく屁怒絽様が勝ちます」

はやて
「そんなに強いの、屁怒絽って？」

銀八
「はい、強いです。っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

エリザベス
『次は『ｃｈａｒｌｅｙ』さんの質問。『銀さんが今「第二の新八」の称号を与えるにふさわしいツッコミ役だと思うキャラは誰ですか？』』

銀八
「そうですね。影の薄さで言えばユーノとシャマルだが，ツッコミ役ならティアナとヴィータですね」

はやて
「確かに、影が薄い存在ならユーノとシャマルの右に出るものはおらへん」

銀八
「そしてもう1つは・・・ムカつくので言えません」

桂・はやて
「またかぁ！」

エリザベス
『大人気ない！』

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

はやて
「次行くな。ペンネーム『風花』さん。『黒神さんは、物語をいつ、どこで考えているんですか？』」

銀八
「作者はいつも面白い事ばかりを創造しているので、それを偶然に思いついて書いていると思います」

桂
「つまり、考える事と言うより偶然にも思いつきやすい作者って訳だな」

銀八
「まぁ、作者はこのシリアスが終わった後の話も思いついているらしいぜ？っと言う訳で『風花』さん、廊下に立っていなさい」

桂
「では次の質問を答えよう。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『第二十六訓で桃子の悲しい学生時代を暴露したのにどうしてなのは、笑いをこらえていたのですか？』」

銀八
「分かりませんが関わるとろくでもないことになります」

はやて
「その通りや！」

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい。次最後ォ、ペンネーム『ヤマトノオロチ』さん。『スタンド温泉編でスタンドに取り付かれて閣下なることがありました。もしフェイト達が閣下化した時どんな言い方をしますか？もう一つ新八やマダオみたいに何かを欠けると存在感がなくなるリリカルなのはキャラは何ですか？』・・・ずばり答えます。まちがいなく取り付かれた新八達と同じ言い方になります」

はやて
「そうなんかいな」

桂
「うむ、しかも取り付かれるそう簡単に元に戻れないようだ」

はやて
「なんか怖いわ」

銀八
「そんでもう1つは・・・そうだな・・・ユーノとシャマルか？」

はやて
「ああ、なんかメッチャ納得いくような質問や」

桂

「2人が聞いたら泣くだろうな」

エリザベス
『そうですね』

銀八
「っと言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい」

第四十二訓：刀は武士の魂と言えるなら剣も騎士の魂と言えるではないか？（後

圧倒的なるアーサァの力の前にスバル敗北！

銀時、怒りで白夜叉に覚醒！

桂達も駆けつける！

スバルの運命はいかに！

ギンガ

「次回、「人間の怒りは爆発するとすぐに収まらない」テイクオフ」

第二回　『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』シリーズ人気結果発表！！

ここはとある教会。
そこには2人の男がいた。
1人は侍の衣装を身につけた作者・黒神ともう1人はこの小説の主人公である坂田銀時である。

黒神
「いやー、なんか凄い事になりましたね。クロスオーバー小説『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』もいよいよ４０話越えですね」

銀時
「まぁな。そんで感想もなんと３００通も到達したらしいぜ。作者が赤夜叉に許可を貰って作った小説がまさかここまで続くとは思いも寄らなかったぜ」

黒神
「ある意味、銀魂風に進んだのが正解だったようですね」

銀時
「っと言うわけで、今回はこんな感じでいくぞォ」

『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』　３００件突破＆４０話以上突破記念

第二回　『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』シリーズ人気結果発表

黒神
「さぁ！２回目の『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の人気結果発表もいよいよやってきました！」

テンション上げて言い出す作者。

黒神
「１回目は投票数が少なかったのですが、今回はメッチャ多いですよ。なにせ今回の投票数は合計２１０票ありますし」

銀特
「おぉー、こいつはスゲェよメッチャスゲェよ！」

以前とは比べ物にならないほどの投票数に驚く銀時。

黒神
「しかも今回は自分の嫌いなキャラに一投票してもらいました。後、今回も前回と同じく、同じ投票数の人物が多いため、同じ順位ではなく作者の気に入っているキャラの順位に並べていきます」

作者の説明に銀時は呆れる。

銀時
「っと言う訳で一投票は最後に発表しますので、まずは投票された

キャラの順位を発表します・・・・それでは！」

銀時・黒神
「カウントダウン！」

第２７位　リィンフォース・ツヴァイ　１票（前回：ランク外→）

第２６位　キャロ・ル・ルシエ　１票（前回：ランク外→）

第２５位　ノーヴェ　１票（初登場）

第２４位　ペンドラゴン　１票（初登場）

第２３位　近藤勲　１票（初登場）

ノーヴェ・リィン・キャロ
「このバカ作者ァァァァァァァァァァァ！！！！」

黒神
「ぐぇえええ！」

突如、ノーヴェ・リィン・キャロが怒りだして作者にとび蹴りした。

ノーヴェ
「テメェ！何で俺の投票数がこんなにも低いんだ！」

リィン

「これも作者の私達に対する手抜きのせいです！」

キャロ
「地獄を見せてやるです！」

黒神
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

そしてそのまま作者をフルボコにする。
この地獄のような光景に銀時は呆れる。
そしてゆっくりと近藤が現れる。

近藤
「おお、万事屋！今回で2回目の人気投票のようだなぁ！」

銀時
「よぉ、ゴリラ。お前、良く作者に気に入られているな？1票だけ投票されただけの中でも上位に入るぞ？」

近藤
「いやぁ、なんか作者が俺の存在が笑えて面白いだそうだ！」

愉快そうに笑う近藤。
なぜなら、近藤にとっては人気の多さよりも一刻も早く妙に会いたいからである。

銀時
「まぁ、作者は今の所はボコボコにされているから、代わりにゴリラがアシスタントやってくれ」

近藤
「おお、人手不足か！ここであったのも何かの縁だから協力しよう！それでは！」

銀時・近藤
「カウントダウン！」

第２２位　ジャスタウェイ　２票（未登場）

第２１位　屁怒絽さま　２票（未登場）

第２０位　山崎退　２票（初登場）

第１９位　ディエチ　２票（初登場）

第１８位　ヴィヴィオ　３票（前回：第１０位　←）

山崎
「あ、局長も来ていたのですか」

ディエチ
「こんにちは」

山崎とディエチが仲が良さそうなカップルと思われそうな形で登場した。
山崎は私服の格好で、ディエチは以前に山崎に買ってもらった服を着ている。
よほど気に入っているようであるようだ。

近藤
「おお、お二人も来たか！今日も相変わらず仲の良い恋人同士だなぁ！」

山崎
「きょ・・・・局長！！／／／」

ディエチ
「からかわないでくださいよぉ！／／／」

愉快そうに笑う近藤に山崎とディエチは顔を真っ赤にする。
ちなみに黒神はようやくノーヴェ、リィン、キャロの地獄のしばきから開放された。

黒神
「し・・・・死ぬかと思った」

銀時
「ご愁傷様だ。じゃ、気を取り直して次ぃ！」

銀時・黒神
「カウントダウン！」

第１７位　銀八　５票（前回：ランク外　→）

第１６位　リインフォース　５票（前回：ランク外　→）

第１５位　アルフ　５票（前回：ランク外　→）

第１４位　八神はやて　６票（前回：ランク外　→）

第１３位　高町なのは　６票（前回：第８位　←）

なのは
「銀さん」

アルフ・リィンフォース
「銀時」

すると、なのは、アルフ、リィンフォースが銀時の前に現れる。
不機嫌そうな銀八と愉快そうに笑うはやても後から来た。

銀時
「おお、お前達も来てたのか」

なのは
「にゃはははははは♪今回は２回目の人気結果発表記念だから来たんだよ♪・・・・・思った以上の順位の低さは憎たらしいけど」

笑いながら銀時と話すが、最後の言葉は笑顔を消して言い出す。

はやて
「え・・・なのはちゃん、今メッチャ怖い事を言っていなかった!?」

アルフ
「それも殺意を込めながら・・・・」

リィンフォース
「なんか怖かったような・・・・」

はやて、アルフ、リィンフォースは青ざめてなのはに効くが・・・・

なのは
「何が言った?」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

はやて・アルフ・リィンフォース
「何も言っていません!」

なのはの魔王的な殺気に3人は土下座する。

銀八
「おいおい、お前この小説の主人公だからって女にモテすぎるんじゃねぇか?ハーレム企画を狙っているんですかこのやろ~!」

銀時
「なんだテメェ!?そう言うお前こそ『銀八先生コーナー』ではまともに質問に答えねぇことが多いじゃねぇか?人気のなさに嫉妬ですかこのヤロ~!」

銀八
「なんだテメェ！やる気か天然パーマ野朗！」

銀時
「お前に言われたくねぇ！」

銀八は銀時と口喧嘩をする。
作者はそれを無視して人気結果発表の続きをする。

黒神
「それでは、第１２位と第１１位の発表です！カウントダウン！」

第１２位　黒神　７票（初登場）

第１１位　シグナム　８票（前回：第９位　←）

なのは・はやて・アルフ・リィンフォース・銀八・ノーヴェ・リィン・キャロ
「バカ作者ぁぁぁ

「ごふぇあああああ！」

黒神より順位が低い乙女達＋銀八が飛び蹴りをする。

何で作者が私より人気あるわけ！？納得いかへん！卑怯者！作者の横暴だ！永久に廊下に立っていろ！今ぶっ殺す！最低ですぅ！この世界なんか消えちゃえばいいんだぁ！

などと嫉妬心丸出しで作者に蹴ったり殴ったりとしまくって、作者の悲鳴が響き渡るのであった。

そんな光景を見てシグナムは苦笑して現れる。

シグナム
「これは・・・なんとも醜い光景なんだ・・・・」

近藤
「まったくだ。」

シグナムの一言に近藤も強く納得できる。

シグナム
「しかし、私ももっと活躍できればもっと順位が上がっているのに・・・・」

残念そうに言い出すシグナム。
しかし、シグナムを中心とした話を作る予定がある事は、本人はまず知らない。

銀時
「では、いよいよベスト１０の発表です！、カウントダウン！」

第１０位：『赤髪の雷槍使い』エリオ・モンディアル　８票（前回：ランク外　→）

第９位：『歌舞伎町の女王』神楽　１０票（前回：ランク外　→）

第８位：『双銃使いの魔導士』ティアナ・ランスター　１１票（前回：６位　←）

神楽
「ふはははははははははははははは！ついに私の時代が来たアル！ひれ尽くすが良い愚民共！」

エリオ
「皆さん、こんにちは」

ちょうどその頃、女王らしく高笑いする神楽とエリオが登場した。

銀時
「おお、ちょうど良かった！お前ら、ギリギリにベスト１０に入れたぞ。スゲェなぁ、おい！」

エリオ
「ええ！？本当ですか！？」

銀時に自分の順位を聞かされて喜ぶエリオ。

エリオ
「神楽さん、凄いですよ！僕達ベスト１０の人気を誇っていますよ！」

神楽
「ふはははははははははははははははははは！女王が本気を出せばこんなの朝飯前アル！」

嬉しそうに笑う神楽とエリオ。
そんな２人に強いどす黒い感情を表すキャロ。

ティアナ
「に・・・・兄さん・・・・／／／」

２人に続くかのように、ティアナが現れた。
ティアナは顔を真っ赤にして銀時に近づく。

ティアナ
「順位・・・・下がっちゃったけど何とかベスト１０に残れたよ・・・・／／／」

銀時
「ほぉ～、大したもんだなティアナ！これからも活躍すればもっと人気が伸びるぞ」

そう言って銀時は軽くティアナの頭をナデナデすると、ティアナは幸せそうに受け止めると、なのは、シグナム、アルフ、リィンフォースからとてつもない嫉妬心が溢れている。

これには近藤、銀八も恐怖する。

神楽
「じゃあ、次は第７位と第６位の発表アル！」

エリオ
「第７位と第６位はこの人です！」

神楽・エリオ
「カウントダウン！」

第７位：『過激派の危険な黒い獣』高杉晋助　１１票（前回：第４位　←）

第６位：『謎の超人宇宙生物』エリザベス　１２票（前回：ランク外　→）

銀時
「って、第６位はエリザベスかい！」

思わぬ人物が第６位に入ったことに驚く銀時。
そしてエリザベスが現れた。

エリザベス
『ふふふ、私の時代が来ましたな』

そう書かれたプラカードを出す。

リィン
「エリザベスさん！すごいですよ、そんなに人気者だったなんて！」

リィンはエリザベスの人気の高さに驚く。
それもそのはず、エリザベスは『銀魂』でも人気的なマスコットキャラである。
それは定春をも上回るほどであった。
リィンに言われてエリザベスは強く誇って、『えっへん！』っと書かれたプラカードを出す。

銀時
「それでは、ここからはベスト５位の発表です」

黒神
「まずは第５位です！」

銀時・黒神
「カウントダウン！」

第５位：『美しき月華の死神太夫』月詠　１６票（前回：第５位↓）

月詠
「全く、急なイベントがあると言われたから来てみれば・・・・人気結果発表じゃ？」

呆れながら月詠が現れる。

神楽
「ツッキーアル！」

エリオ
「凄い！月詠さんがベスト5位に入っている！」

神楽とエリオは歓迎するかのように叫びだす。

月詠
「ん、どうしたんじゃ？」

煙管を持ちながら月詠は駆けつけてきた神楽とエリオに気づく。

神楽
「ツッキー凄いアルよ！2回連続ベスト5位入りアル！」

エリオ
「本当に凄いです！」

神楽は月詠に抱きついて、エリオは月詠を尊敬する眼で見る。

月詠
「わっちはこう言うのは興味ないんじゃ。じゃから人気のあるなしはわっちにはどうでも良い。・・・・それに、主等も良くベスト１０に入ったな。大したもんじゃ」

月詠はそう言って笑い出すと、神楽とエリオの頭を撫でる。
神楽は嬉しそうに笑い出し、エリオは顔を真っ赤に染める。

キャロ
「興味ないのに・・・・・第５位の人気を誇るなんて・・・・・」

なのは
「これは・・・・いくらなんでも腹が立つよねぇ」

月詠に頭に撫でられているエリオを見て怒るキャロ。
そして人気に興味ない月詠に頭に来たなのは、ティアナ、アルフ、リィンフォース、はやて、シグナム、リィン、ノーヴェ。

その光景に青ざめる銀時は・・・・

銀時
「で・・・では次行きましょう！第４位はこいつだぁ！カウントダウン！」

第４位：『戦場を狂乱に導く侍の貴公子』桂小太郎　１６票（前回：３位　←）

桂
「諸君！人気投票に感謝しよう！俺は桂小太郎、好物はそばだ」

銀時
「黙っていろ、ヅラ」

突如現れた桂の紹介にツッコむ銀時。

桂
「ヅラじゃない桂だ」

ヅラ呼ばわりされてツッコむ桂。

銀時
「しかしヅラがまさか第４位だとはなぁ・・・・世の中分かったもんじゃないな」

桂
「黙れ銀時。・・・しかし、以前より順位が落ちてしまった。我ながら不覚だ」

銀時
「いや、ベスト５に入れば十分凄いって」

はやて
「か・・・・桂さん／／／」

そんな桂にはやてが駆けつける。

はやて
「・・・・べ・・・・・ベスト5に入れるなんて凄いなぁ／／／」

桂
「そうか。それは嬉しい事を言ってくれる」

はやてに言われて喜ぶ桂。
はやての好意に気づかずに・・・・

神楽
「では、そろそろ第3位の発表アル！」

エリオ
「第3位はこの人です！」

神楽・エリオ
「カウントダウン！」

第3位『金髪の可憐なる雷光魔導士』フェイト・テスタロッサ　1
8票（前回：7位　→）

フェイト
「銀時～」

突如、フェイトが嬉しそうに現れて銀時に抱きついてきた。

銀時
「おま・・・・フェイト！どうした突然！」

フェイト
「銀時！私、以前より人気が上がったよ！凄く嬉しいよ♪」

かなりはしゃいで大喜びであるフェイト。
それもそのはず、前回第7位であったフェイトが一気に第3位まで上がったのである。

銀時
「そうか・・・大した者じゃないか、フェイト」

フェイト
「えへ♪」

嬉しさ一杯で笑うフェイト。
銀時は抱きついているフェイトの頭を撫でるとフェイトは嬉しく笑い出す。
そんなフェイトになのは達は・・・・・

なのは
「フェイトちゃん・・・・後でゆっくりと頭冷やしてやるんだから・・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

はやて
「フェイトちゃんは私達を裏切ったからお仕置き決定や」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

シグナム
「決着を付けるべきだな」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ティアナ
「なんかメッチャ納得できません」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

アルフ
「今回ばかりはいただけないよ、フェイト」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

リィンフォース
「さっさと銀時から離れるですぅ～」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

完全に嫉妬モード全開である。
近藤、山崎、ディエチ、神楽、エリオ、月詠、キャロ、ノーヴェ、リィン、銀八は青ざめている。

銀時

「それでは、第2位の発表です！」

フェイト

「今回の第2位はこの人です！」

銀時・フェイト

「カウントダウン！」

第2位　『侍の魂を持つ蒼き疾風魔導士』スバル・ナカジマ　19票　（前回：第2位　↓）

女性の誰もが氷づいた。（フェイト、神楽、月詠、ディエチを除く）

第2位は前回と同じくスバルである。

スバル

「皆さん、遅くなりました」

タイミング悪く、スバルが現れた。

スバル

「あ・・・人気投票をありがとうござ――――」

なのは・シグナム・アルフ・リィンフォース

「スバルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

叫びながら、なのは、アルフ、シグナム、リィンフォースは走り出

した。

なのは・シグナム・アルフ・リィンフォース

「何でスバルが2位なのォォォォォォ（なんだァァァァ）！！」

スバル

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！」

襲い掛かってくる4人に絶叫するスバルはフルボコにされる。

ティアナ

「スバル・・・・・せめて生きて還ってくる事を祈っているわ」

ティアナはせめてスバルが死なない事を祈るのであった。

フェイト

「では、いよいよ第1位を発表します」

ティアナ

「今回の第1位は誰もが知っているこの人物！」

フェイト・ティアナ

「カウントダウン！」

第1位　『戦場を駆け抜けた伝説の白夜叉』坂田銀時　31票（前回：第1位　↓）

銀時
「よっしゃー！俺が1位だぁぁぁ

「凄いよ兄さん！」

はやて
「銀ちゃんも罪におけへんなぁ♪」

なのは、桂、エリザベス、ティアナ、はやては銀時の人気の高さに感服した。

神楽
「やっぱ銀ちゃんらしいアル！」

エリオ
「やっぱり主人公は違いますね！」

月詠
「ここは素直に祝っておこう」

シグナム
「流石私が見込んだ男だ」

アルフ
「銀時凄いよ！」

リィンフォース
「流石だよ♪」

リィン
「お見事です～」

キャロ

「本当に凄いです」

神楽、エリオ、月詠、シグナム、アルフ、リィンフォース、リィン、キャロも銀時の偉大さを改めて知る。

近藤
「おお、万事屋が1位か！良し、じゃあここで胴上げでもしてやろ！」

山崎
「それは良いですね！」

ディエチ
「せっかくのイベントですから」

ノーヴェ
「ちぇ・・・仕方がねぇな／／／」

近藤、山崎、ディエチは胴上げする事を考え、ノーヴェは顔を真っ赤にしながらその企画に賛成する。
そしてそれをフェイト達に言い出して、フェイト達は1位となった銀時に胴上げをしていた。

銀八
「なんだろう・・・この異常なまでに納得いかない結果・・・」

1人落ち込む銀八に、黒神が軽く方を触る。

黒神
「まぁ、誰だって悔やむ事はあるさ・・・・とりあえず一投票された人達の紹介もしておこっか」

銀八
「・・・・そうだな・・・・腹いせにしてやるか！」

黒神
「そんでこの人達が一投票された哀れな人物達！」

黒神・銀八
「カウントダウン！」

一投票された哀れな人物

土方十四郎　－３票

志村新八　－４票

沖田総悟　－５票

志村妙　－５票

クロノ・ハラオウン　－５票

黒神
「ぶはははははははははは！なんか可愛そう！特にクロノは思いっきり情けなく感じるじゃねぇか！所詮、口だけお坊ちゃまって奴か？あはははははははははははは！」

銀八
「・・・最悪だな・・・お前・・・」

クロノに対する黒神の暴言に銀八は呆れるのであった。

ベスト１０に入った人物紹介！

第１位　坂田銀時　３１票

第２位　スバル・ナカジマ　１９票

第３位　フェイト・テスタロッサ　１８票

第４位　桂小太郎　１６票　（作者の好きなキャラ順）

第５位　月詠　１６票　（作者の好きなキャラ順）

第６位　エリザベス　１２票

第７位　高杉晋介　１１票　（作者の好きなキャラ順）

第８位　ティアナ・ランスター　１１票　（作者の好きなキャラ順）

第９位　神楽　１０票

第１０位　エリオ　８票　（作者の好きなキャラ順）

読者の皆さん、沢山の投票ありがとうございました！

お陰で第２回目の『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』人気発表決定は無事終わりました。

しかし！

彼等はまだ気づいていなかった！

この人気結果発表が新たなバトルの火種になった事に！

第四十三訓：人間の怒りは爆発するとすぐに収まらない（前書き）

怒れる銀時は白夜叉へと覚醒！

謎の黒幕、ウゼルが登場！

蘇る高杉との思い出！

ティアナ

「『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第四十三訓：人間の怒りは爆発するとすぐに収まらない

「ようやく任務終了ですね」

アーサァは倒れているスバルにゆっくりと近づく。

「作戦終了（ミッションコンプリート）・・・・これよりターゲットを捕獲します」

その手でスバルを触れようとすると・・・・

ブシュ！

突如、左手に木刀が刺さりだした。
アーサァは後ろを振り向くと・・・・

「オイ」

背後から声が聞こえた。
その声の持ち主は銀時であった。

「・・・・・その手で・・・・・触んじゃねぇ」

相当な怒気を放っており、それはアーサァをも圧倒する。

「その綺麗に見えそうな薄汚く染まった手で、スバルに触んじゃねェ」

「あ・・・貴方は・・・・！？」

今の銀時はいつもの銀時じゃなかった。

怒りによって覚醒した伝説の白夜叉そのものであった。
そして左手を突き刺した木刀を抜き、アーサァの左手から血があふれ出て来ると・・・・
直後、大きな打撃音と共にアーサァが吹き飛んだ。

「ぐはぁああっ！！」

アーサァは、十数メートル先まで吹き飛ばされる。
銀時は倒れているスバルを抱き支える。

「スバル！しっかりしろ！おいっ！！」
「ギ・・・・銀・・・・さ・・・・ん・・・・・！？」

アーサァが、頭を押さえながら起き上がった。
頭には血が溢れていて、相当な一撃を喰らったのである。
動揺しながら震える足で、何とか立ち上がった。
その時、

「テメェ・・・・今、自分がやった事を分かっていんのか？」

銀時のドスの効いた声が聞こえた。
アーサァは銀時を見た。その瞬間、銀時から凄まじい怒気を感じ、
アーサァは恐怖を感じながらも警戒する。

「テメェの事を大切であると思って……テメェを慕っていた親友を、
テメェはその手で斬りやがったな」

親友であるにもかかわらずにためらいもなくスバルを斬ったアーサァの事を、銀時は許せなかったのである。
スバルを斬ったアーサァが、かつての戦友であった高杉と重なり合

ったからである。

「それがどれ程までに、とんでもねぇ事であるかを・・・・分かっていやがるのか？」

今でも斬りかかりそうな銀時の怒り。
それは正に獲物を狩る獣の眼をしている夜叉その者である。
銀時と双璧の実力を持ったアーサァと言えども、今の状況では銀時に勝てるかどうか分からない。
いや、万全な状況でも、白夜叉として覚醒した銀時と戦う事が無謀である。
このままでは殺されると思ったその時であった。

「これはこれは・・・・あの有名な『白夜叉』にお眼を合わせることが出来るとは・・・・・・」

突如、アーサァの後ろから1人の男が現れた。
アーサァと同じく長髪で金髪だが、アーサァに比べれば白っぽい。
そして真紅の瞳をしていて、何やら騎士の鎧を身につけている。

「マ・・・・マスター！」

アーサァはその男を見て、『マスター』と言い出す。
それを聞いた銀時は、この男がアーサァが言う『マスター』である事を知る。
そして男は銀時に礼儀正しく挨拶をする。

「始めまして、銀時君。私はウゼル・K（キング）・ソルドゥナイトと申す。以後、お初めに申す」
「・・・・テメェか・・・・アーサァにスバルの回収と機動四課の

壊滅の命を出しやがったのは・・・・・」

怒りに睨みつける銀時はアーサァに聞きだすと・・・・アーサァは素直に答えだす。

「もちろん。機動四課には少し恨みを持っていたからね。・・・・それより如何かな?私の作り出した作品を?」

「作品?」

アーサァの『最高傑作』って言葉に銀時は片眉を上げた。

「この『タイプゼロ・ファースト』と君が抱き抱えている『タイプゼロ・サード』の事だ」

「テメェ、何でスバルが『タイプゼロ』の事を知っていんだ?それになんなんだ『ファースト』や『サード』って!?野球の守備ポジションかァ?」

目を鋭くして、ウゼルを睨む。

アーサァが『タイプゼロ』の人造生命体である事は、ゲンヤから聞いたから銀時も知っている。

アーサァから『マスター』と呼ばれるからウゼルがアーサァの正体を知らないはずがない。

だがどうしてスバルが『タイプゼロ』の人造生命体の事を知っているのかは不思議である。

「・・・・その様子ならまだ知らないようだな。・・・・なら教えてやろう。私の『タイプゼロ・ファースト』と君の『タイプゼロ・サード』である2つの『タイプゼロ』は、『プロジェクトF』に対抗するために現れた『タイプSK』と言う研究で、私が生み出したのだよ」

「な…！？」

銀時は驚愕した。

スカリエッティの『プロジェクトF』以外にも別の組織で『タイプゼロ』の戦闘機人であるスバルが生み出されたとは知っていたが、まさかウゼルの作り上げたとは思いも寄らなかった。

「その時の私はまだ管理官の為に働いていた者でね。『タイプ・フアースト』のアーサァは、私の妻であるマーリン・K（キング）・ソルドゥナイトの遺伝子で作り上げた最高傑作だ。そしてそこの『タイプ・サード』は『タイプ・セカンド』と共にクイント・ナカジマと言う人物の遺伝子で作られた作品だ。その中でも最高傑作がこの私の『タイプ・ファースト』だ。魔力はSSにまで達成する上に、私の『プロジェクトDNA』にも成功させた唯一の実験台だ」

「『プロジェクトDNA』」

『プロジェクトDNA』の事を説明するウゼル。

それは戦闘機人のDNAと他人のDNAと合成させて、戦闘力を急激に増す戦闘機人強化研究。

戦闘機人を特殊な生体ポッドの中にいれ、他人の血液をその戦闘機人の体内に注入させ、そのまま一ヶ月ぐらい眠らせるだけで、急激に戦闘力を上げられる究極の戦闘強化研究である。

魔力の高さだけじゃなく、アーサァの戦闘力の高さの秘密はその研究にあった。

しかもその合成させたDNAが銀時である事は銀時自身も驚く。

「以前、君が倒したゾーマの遺体はアースラに回収されて、本局に着いたら焼却処分された事は知っているだろう。実は、そのゾーマの死体についてる君の血液を誰にも気づかれずに回収させてもらい、その血を実験に利用させてもらったのさ。そのお陰でこの『タイプ

ゼロ・ファースト』は最高の戦闘機人となったわけだ」

回収した血液を使い、ウゼルの研究所でアーサァの戦闘力を大幅アップさせたのである。

だがウゼルは別の意味で驚いた事がある。

それは，スバルの戦闘力にあった。

「しかし、そこの『タイプゼロ・サード』には驚かされるね。『プロジェクトＤＮＡ』を受けていないのにも関わらずに『タイプゼロ・ファースト』と互角に渡り合えるとは・・・作者として誇り高いよ」

スバルの身体能力に興味深そうにウゼルは言って笑みを浮かべた。

その時、ウゼルは凄まじい怒気を感じた。

スバルから目を離し、目の前にいる銀時を見た。

怒気を放ちながら、銀時はスバルを睨んでいる。

「……テメェがスバルとアーサァを作品なんて呼ぶんじゃねェ」

凄みの加わった声で、銀時が言った。

ウゼルは、銀時の怒気に怯む事なく、真っ直ぐに銀時を見ている。

「確かにスバルとアーサァは、テメーの論理が基になってる技術で生まれた。けどな、この2人は俺達と変わらねェ、『人』として生きてんだ」

「銀…さん……」

「……」

ウゼルは、黙って銀時の話を聞いている。

「コイツらを物扱いする野郎は、俺が許さねェ」
「同感だ！」

銀時の背後から1人の男の声が現れる。
その男はすぐにウゼルに斬りかかるが、アーサァが『ペンドラゴブレイド』でその男の一太刀を防ぐ。
だが、右手だけじゃその男の一撃は防ぎきれずに後ろに吹飛ばされるが着地する。

「ヅラ、いつの間に！」
「ヅラじゃない桂だ！」

その男、桂小太郎が現れたのであった。
だが桂の様子が全く違うと銀時は理解した。
表情では表していないが眼を見ただけで桂の怒りが伝わってきている。

「これはこれは『白夜叉』に続いて、あの『狂乱の貴公子』ごと桂小太郎に会えるとは・・・・」

大物にこうも会える事にウゼルは喜びだす。

「スバル殿の事はナカジマ殿から聞かされたが・・・・まさか生みの親が貴様のような下種な男であったとは・・・・」

ウゼルの様な人の命をなんとも思わない人物によってスバルが生み出された事に呆れる桂。
それと同時にウゼルに対する怒りを表している。

「作品だろうが人造人間だろうが・・・・貴様はその娘の父親であ

ろうに、作品扱いするなど・・・・人の命を作品扱いした貴様をこの桂小太郎が天誅を下す！」

刀をウゼルに向けて構える桂。

「銀時・・・・スバル殿のほうは無事か？」

「ああ、だけど早いところ治療を受けねぇと！」

「銀さん・・・・桂さん・・・・」

弱弱しくスバルが2人に声をかけて・・・・2人に声をかける。

「私は・・・大丈夫・・・・です・・・・それ・・・・より、あ・・・・アーサァ・・・を・・・・」

「スバル、喋るな！傷が開くぞ！」

心配そうにスバルに声をかける銀時。

一方のウゼルは・・・・

「帰るぞ、アーサァ。いかにお前でも白夜叉と桂小太郎相手には厳しいであろう。『タイプゼロ・サード』の回収はまた別の機会にするとしよう」

「・・・・・了解しました、マスター」

そしてアーサァは真紅の魔法陣を自分とウゼルを囲むように陸に放ち、その中に入り込んで2人は姿を消す。

だが、銀時と桂はすぐにそれを追わずに重傷であるスバルを心配する。

「銀ちゃんんんんん！！」

後ろから、神楽が駆けつけてきた。
神楽だけじゃない。エリザベス、月詠、近藤、山崎、スカリエッティ、ルーテシア、ナンバーズが駆けつける。

「銀時、桂、大丈夫か！」
「怪我はないか！？」

月詠とチンクが心配そうに声をかけると・・・・

「俺と銀時は大丈夫だ」
「それより、スバルが！」

銀時と桂はスバルの事を心配していた。
傷はかなり重傷で一刻も早く手当てが必要である。

「なぁ！スバル殿！！」
「大変ッス！早く治療をしないと！」

近藤やウェンディもスバルの酷い怪我に驚きを隠せなかった。
その後も機動六課もすぐに援護に来たが、スバルの重傷に驚きを隠せなかった。
特にティアナとギンガは涙が流れそうな程、心配していた。

※

聖王病院の一室。
窓際にベッドが一つ。その上に、蒼い髪でショートカットのボーイッシュな少女、スバルが眠っていた。

スバルは意識を取り戻し、目を覚ました。
目に入ったのは白い天井。

「・・・ここは・・・・？」
「気づいたか、スバル」

横から声をかけられ、その声がしたほうを振り向くと・・・そこには銀時とティアナがいた。
後ろには桂とエリザベスもいる。

「銀さん・・・ティア・・・桂さん・・・エリザベスさん・・・」
「スバル・・・何でアンタが死に掛けていたのよ！・・・・心配したんだよ・・・凄く心配したんだよ・・・」

スバルが眼を覚ました事に安心するティアナは同時に涙を流す。
銀時もスバルの意識が取り戻した事に安心感を感じた。

「すまねぇ」
「え？」

突如、銀時の謝罪に驚きだすスバル。
どうやら今回の件に大きな責任を持っているようである。
ガジェットの邪魔が入ったとは言え、スバルがこんなにも重傷を負ったのは自分のせいであると考える。

「あの時、もっと手っ取り早くガジェットを倒していりゃ・・・・お前をこんなにも重傷を負わせる事は・・・・」
「い・・・良いんです！・・・銀さんのせいじゃないですし！」
「そうだよ！兄さんが自分自身を責めることはないよ！」

責任を感じる銀時に、スバルとティアナは銀時を慰める。

「それ以上に敵の実力が相当なまでに高かった。だからスバル殿は無傷でいられなかった。それだけのことだ」

『そうですね』

桂もエリザベスもスバルの実力は知っていた。

スバルの強さは侍と魔導士が超融合したかのような存在であり、隊長級には入る実力の持ち主。

剣術だけでも強いのに魔力も高い。

そんなスバルをも負かす相手は相当な手誰であると桂とエリザベスは考える。

「それに・・・・」

「それに？」

「銀さんが、私の事をここまで心配してくれて、凄く嬉しいですから」

自分の為だけにここまで心配してくれる銀時にスバルは嬉しく感じてくれた。

しかしその喜びもすぐに消える。

なぜなら、１０年ぶりに再会したにもかかわらず・・・・敵としてスバルの前に現れた親友のアーサァの事が悔やんでいる。

親友の変わり果てた悲しさは銀時も痛いほど分かる。

かつての親友であった高杉晋介も、世界に対する憎しみで変わり果ててしまったのである。

「・・・・しかしまさか、スバルの友人が高杉の野朗と一緒になってしまったとはなぁ」

「高杉・・・あの、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介ですか？」

高杉の名にスバルとティアナは驚きだす。

今までの事件の黒幕であり、銀時と桂の因縁の相手である『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋介。

以前にその姿を見たことがあるが、とても異常なまでに危険な人物であった。

強いとか言う次元ではない。憎悪、憎しみ、憤怒など数え切れないほどの大量の負の感情が1つの塊となった人間の姿をした黒い獣その者であった。

「兄さん、桂さん、あの高杉って人と知り合いだったけど・・・一体どういう人物ですか？」

「・・・・・」

ティアナが銀時にそう言うと、銀時は黙り込む。

「……世界に喧嘩を売った大馬鹿野郎さ」

「え？」

銀時がそう言うとスバルとティアナは驚きだす。

「以前、俺やヅラに辰馬が高杉と友に攘夷戦争で天人と戦った事を知っているよな？」

スバルとティアナは小さく頷いた。

「その攘夷戦争で、俺達は大事な人を失った……最も尊敬する恩師を」

過去の記憶を思い出しながら、銀時と桂は語った。

「護る事が出来なかった……その後、俺も仲間と一緒に戦に出た。そこで、また大事な仲間を失っちまった……その戦で、変わっちまった奴もいる……その1人が高杉だ」

恩師である松陽の姿、かつての仲間達の姿、高杉の姿が頭に思い浮かんだ。

「その恩師は俺とヅラや高杉にとってもかけがえのない人で、剣術を教えてくれた人だ。だけど、幕府によって江戸送致されて死刑されちまった。それが始まりとなって、高杉は変わってしまったかも知れねぇ」

高杉が変わってしまった原因を銀時は言い出す。

銀時は自分達の事を他人に話さない。それをスバルとティアナに話したことを桂は流石に驚いている。

「その高杉とアーサァが重なってしまったんだよ」

「え？」

高杉の世界に対する憎しみと、戦闘機人としての本能で主の命だけで人を殺めるアーサァの存在が一緒である。

「この思いは誰にもさせるわけにはいかなかった・・・けど、結局スバルにもさせてしまった」

あの時、容赦なくスバルを斬りかかったアーサァの姿が世界を憎しむ黒い獣に変わった高杉と同じに見えたのである。

「だから・・・スバルに俺と同じ思いはさせたウゼルの野朗だけは絶対に許せねェ」

ウゼルに対する怒りが芽生えた銀時。
桂やエリザベス、そしてティアナもウゼルの卑劣なやり方を許す訳には行かなかった。
そしてスバルは、銀時達にアーサァの強さの秘訣を教える。

「・・・銀さん、話さなきゃいけない事があります」

スバルはアーサァの使用するデバイス『ペンドラゴブレイド』と自分が使用する『ティルヴィングエア』の正体を・・・・

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!」

ティアナ
「こんにちは。今回は私、坂田銀時の妹ごとティアナ・ランスターがアシスタントします」

銀八
「へーい、じゃあ行くぞォ。まずはこの人、ペンネーム『ウッソ・

エヴィン』さんから。『？こっちの小説でウッソ（僕）がリリカル組（特になのは）と戦うこと（喧嘩）が多くなっています。生き残るすべを教えてください．いくらニュータイプでも限界があります・・・？前回（第四十二訓）の質問の答えのせいで桂，はやて，エリザベスはなのはに処刑されないのですか？』・・・ずばり言います。とりあえず気迫で持ちこたえて。後、新八が迷惑かけてすまねぇな」

ティアナ
「新八って、確か兄さんが『銀魂』の始まり直後に最初に出会った人物だよね？」

銀八
「そうだな・・・地味で剣術はイマイチ、実力は銀魂重要キャラの中でも最弱。そんで存在感は薄い。何よりもアイドルオタクだ」

ティアナ
「うわぁ・・・全然頼りなさそう・・・・」

銀八
「そんで何よりもなぁ。アイツ、アイドルオタクである上に以前に怪盗キャッツイアーとであって。そんでラブホテルで・・・・」

銀八はティアナの耳元でコソコソと話し出す。
ティアナは顔を真っ赤にして慌てだす。

ティアナ
「ちょ！新八ってそう言う人物だったの！？／／／」

銀八

「そうなんだぜ。地味なくせにカッコづけな分、ムッツリスケベなんだぜ？赤夜叉さんの『リリカル銀魂』の連載直後のＤＶＤで見たなのはの姿を見た瞬間に、ロリコンに目覚めたんだぜ？」

ティアナ
「・・・・うわぁ・・・・最低・・・・・／／／／」

銀八
「そんでもう１つは・・・・あの３バカはなのはに処刑されます。いや、処刑されても文句なしです」

ティアナ
「・・・桂さんにエリザベスさん・・・・そしてはやて隊長がなのはさんに何を・・・・」

銀八はティアナに以前の『ウッソ・エヴィン』の感想を答えた桂、エリザベス、はやてのコメントを見る。
そして顔を青ざめる。

ティアナ
「ちょ！なんて言う命知らずな発言なの！？」

銀八
「全く、なのはにはもうバレているからしょうがないな・・・・後、なのはから抗議文が出てな。作者はもう見たが、ティアナも見てみるか？」

銀八はティアナになのはの抗議文を見せた。

『私、高町　なのは　は黒神に以下のことを要求します。

?:私を女の子として扱うこと。
?:私の出番を良くすること。
?:私が坂田　銀時さんと結婚。』

ティアナ
「ふざけるなぁーーーーーーーーー！！／／／」

ティアナは抗議文を破り捨てて怒り出す。

ティアナ
「いくらなんでもおかしいでしょう！欲張りにもほどがあるわよ！特に?は許せるはずがないでしょう！」

銀八
「お前本当にブラコ・・・・・」

ティアナ
「クロス・ファイヤー・シュート！！（怒）／／／」

銀八
「ぎゃあああああああああああ！！」

ティアナは額に青筋を浮かべて無差別に魔法を放ち、銀八に全て直撃する。

ティアナ
「ゼェ・・・・ゼェ・・・・ゼェ・・・・なのはさん！貴方は一生廊下に立っていなさい！」

怒鳴りながらティアナは言い出す。
ちなみに作者はこの３つの内、最低１つだけでも叶えようと考えている。

銀八
「ああ～、死ぬかと思った・・・次はペンネーム『烈火竜』さん。『アーサァーの声は誰ですか？』・・・ずばり答えます。声優は川澄綾子です」

ティアナ
「完全に○イバーキャラだ・・・・・」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ』を一度プレイしてみてください」

ティアナ
「次の質問です。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問。『１．高杉が本気を出せば時空管理局は崩壊しますか？２．はやてさんに質問です桂（ズラ）のどこが好きですか？３．黒神さんはなのは、銀魂、遊戯王のほかにどんなアニメを知っていますか？』」

銀八
「ずばり答えます・・・・１つ目はそうなりますが、現在は紅桜を中心とした企画を立てているのでまだ出番はありません。２つ目はムカつきますがお答えします。現在の所は分かりません。そんで３つ目は、『戦国ＢＡＳＡＲＡ』、『ＦＦ７』、『レンタルマギカ』、『ロザリオとバンパイア』、『Ｆａｅｔ』、『ゼロの使い魔』など山ほどありますね」

ティアナ
「なるほど・・・・って2つ目の質問の答えは何!?」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『神威　銀時』さん。『銀さんは、ＪＵＭＰは、どうしてるんですか?赤夜叉さんの方では、源外に頼んで転送して貰ってましたけど』・・・ずばり答えます。源外の転送は今壊れていますので、ジャンプは呼んでいないと思います」

ティアナ
「兄さんが夢中になる本かぁ・・・・一度呼んでみたいなぁ」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい」

ティアナ
「次はペンネーム『クアンタ』さんの質問です。『質問です。山崎に彼女ができたことを土方や沖田、真撰組のみなさんが知ったらどんな反応をしますか。』」

銀八
「おそらくヤキモチ抱いて卑劣な手で避けようと考えています」

ティアナ
「何それ!?っと言う訳で『クアンタ』さん、真撰組の連中に一発しばきだしてください!」

銀八

「男共の嫉妬は醜いからなぁ。次ィ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀時と銀八先生は同じ天パと死んだ魚のような目をしているのにどうして銀八先生はもてないんですか？』・・・・・テメェーーーー！舐めているのかぁあああああああ！」

銀八は怒り出して破った。

ティアナ
「あぁぁーーーーーーー！！何しているのですか、せっかくの質問を！」

銀八
「しるかぁー！『正宗の胃袋』、一生廊下に立っていろ！」

ティアナ
「はぁ・・・次は『カラー』さんの質問。『銀八先生は同じ職場の月詠先生とどういった関係なのでしょうか？良く2人で居るの見るんですが。』」

銀八
「ああ、確か銀魂の新ＥＤで月詠は教師をやっていた事が分かったな・・・ずばり答えます。それは秘密です」

ティアナ
「これ、本当に質問コーナー！？」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、申し訳ございません。」

ティアナ

「いや、誤るぐらいならちゃんと教えてやっても良いでしょ！？・・・次はペンネーム『月光閃火』さんの質問『なのはの活躍や恋愛模様がこの所ぞんざいな気がして憐れでなりません。何とか救う手立ては無いのでしょうか？』・・・って答えられるかぁ！」

ティアナは怒り出して質問を破り去った。

銀八
「おいいいいいいいいいいいい！お前も何やっているんだぁ！」

ティアナ
「うるさい！『月光閃火』さん！廊下に立っていなさい！」

銀八
「たくぅ、・・・じゃあ次行くぞォ。ペンネーム『流狼人』さん。『1・原作・白夜叉鎮魂歌でも不幸な最後を遂げたレジアス中将は、生き残れるのですか？できれば悪役でもいいので生かしてください〜土下座〜　2・オリ章・オリキャラがどんどん出てきましたが、オリキャラ募集見たいのはしないのでしょうか？」以上よろしくお願いします。』ずばり答えます。そうですね、レジアスの死は自業自得ですので・・・まぁできるかどうか分かりません。2つ目はは・・・そうですね・・・いつかやってみます」

ティアナ
「オリキャラの募集かぁ・・・確かに『銀魂』の連載でも読者のオリキャラが乗った事があるわね」

銀八
「っと言う訳で、『流狼人』さん、廊下に立っていなさい。最後はこの人、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『銀さんに質問。ク

ロノと土方、どっちが嫌いですか?銀八先生に質問。自分のここなら銀さんより勝っていると言える部分（性格、行動、容姿問わず）はありますか?』・・・・1つはおそらくどっちも嫌いだと思います。」

ティアナ
「それ、質問の答えになってないでしょ!?」

銀八
「そんでもう1つは・・・・俺は教師である所です」

ティアナ
「それだけ!?」

銀八
「それだけでも十分なの!っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい!」

第四十三訓：人間の怒りは爆発するとすぐに収まらない（後書き）

アーサァの正体を語るスバル！

そして『七星神刀（しちせいしんとう）』の新たな情報！

あの2人が現れる！？

スカリエッティ

「次回、『狭い部屋で数多くの人が入るとさらに狭くなる』テイクオフ」

第四十四訓：狭い部屋で数多くの人が入るとさらに狭くなる（前書き）

あの人物がまさかの登場！

そしてギンガが銀時と遭遇！

ハチャメチャな展開がおき始める！

源外

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ」

第四十四訓：狭い部屋で数多くの人が入るとさらに狭くなる

スバルは全てを話した。
自分の使用するデバイスとアーサァの使用するデバイスが『七星神刀』である事を。
そしてアーサァのあの強さが銀時のＤＮＡを使って急激に強くされた『プロジェクトＤＮＡ』の研究を。

『プロジェクトＤＮＡ』の事はウゼルから聞かされたが、アーサァの『ペンドラゴブレイド』がスバルの『ティルヴィングエア』と同じく『七星神刀』である事に驚きだす。
桂、エリザベス、そしてティアナは信じられないというぐらいに驚く。
戦闘機人の戦闘力を急激にアップさせる『プロジェクトＤＮＡ』とアーサァの使用するデバイスがスバルと同じ『七星神刀』である事と，魔力がなのは、フェイト、はやてに匹敵するＳＳランク級がある事に。
ティアナはスバルの使用するデバイスが伝説の『七星神刀』である事に驚きだす。

「じゃあ，スバルのその『ティルヴィングエア』があの『七星神刀』の１つって訳！？」

初めて知った真実にティアナは驚きを隠せない。
銀時が握っている日本刀のネックレスに指をかける。
そしてそのままスバルに返した。

「まさか敵もスバル殿と同じ『七星神刀』の使い手とは・・・・しかも敵が、かつての友・・・」

『皮肉すぎる！』

桂やエリザベスも信じられないかのような言い方をする。

「うん、しかも同じ『七星神刀』の使い手でも、アーサァの方が『七星神刀』の使い方が長けている。はっきり言って今の自分じゃ・・・」

スバルは今の自分じゃアーサァには及ばないを己の力不足に悔やむ。

親友を止めたいにも自分じゃ何も出来ない。

銀時はある事を思い出す。

「そう言やぁ、アーサァが言っていた『ソードマスター計画』ってなんなんだ？それにお前の中に眠る『ラグナロク・ブルーヴィング』て一体？」

「それは私にも分かりません・・・それに私の中にそんな物があるなんて・・・・」

アーサァの謎の言葉に銀時とスバルは頭を悩まされる。

そんな時だった。

ドォン！

「スバル！」

突如扉が大きく開かれ、銀時、桂、ティアナ、エリザベスは扉のほうを振り向くとある人物がスバルに駆けつけて抱きつく。

その人物こそがスバルの姉であるギンガ・ナカジマであった。

「ぎ・・・ギン姉！？」

突如現れたギンガにスバルは驚きだす。
ギンガの眼には涙が流れていた。

「良かった・・・スバルが無事で・・・・本当に良かった・・・・！」

姉としてかなり心配していたらしい。
心配かけた姉に深く申し訳なさそうに思うスバルは優しくギンガの頭を撫でる。
その光景に銀時、桂、エリザベスは唖然としている。
現場でも会ったがギンガがまさかスバルの姉である事には驚いた。
良く見ればスバルとギンガは何か顔の雰囲気が似ている。
ここで、機動六課のメンバーとナンバーズのメンバーが現れた。

フェイト達もスバルの事が心配でお見舞いに来たのである。
幸い，シャマルの治療魔法によって傷は治っており，一週間後には退院できるようである。

※

「いつも妹がお世話になっています。私はスバルの姉であるギンガ・ナカジマです」

丁寧に挨拶するギンガ。
ゲンヤからスバルには姉がいると聞いたが、まさかギンガであると

は思いもよらなかった。

「どうも、坂田銀時で～す。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してます」

あいも変わらずのだらけた挨拶にギンガは唖然とする。

「俺は桂小太郎。好物はソ・・・ぶぁふぁあああああ！」

「だからいちいち好物言う必要があるかぁ！」

ヴィータは思わず桂にとび蹴りをする。

ヴィータのツッコミに思わず驚くギンガ。

普段のヴィータとは思えない行動に見られないのである。

『始めまして、エリザベスです』

そう書かれたボートを出すエリザベスに気味悪く苦笑するギンガ。

「あ・・・あははは・・・・それにしても、あの有名な『白夜叉』こと坂田銀時に『狂乱の貴公子』桂小太郎が本当に会えるなんて・・・・」

本物の英雄に会えた事は凄くが、イメージが全く違う事に驚く。

一方のスバルは、今回の事件の親友であり同じ戦闘機人、アーサァである事を伝える。

さらにアーサァのあの強さの正体をフェイト達に伝える。

銀時のＤＮＡを使った特殊な研究で、急激に戦闘力を上げる『プロジェクトＤＮＡ』。

ＳＳランクも魔力。
使用するデバイスが『七星神刀（しちせいしんとう）』の１つである『ペンドラゴブレイド』である事。

そんなデタラメなスキルを持った戦闘機人は機動六課はもちろん、ナンバーズも驚きを隠せなかった。
だとすればアーサァは正真正銘にゾーマ以上に恐ろしい敵である事は間違いない。

「それってまるで戦闘機人版の夜兎族ネ」
「通りで私達が一斉にかかっても勝てなかった訳か・・・・」

神楽でさえもアーサァの強さは夜兎に匹敵する実力の持ち主であると考えられる。
シグナムでさえもアーサァの鬼神の如くの強さの理由を納得した。
銀時のＤＮＡを使って戦闘機人の戦闘力を急激に上げる『プロジェクトＤＮＡ』。
確かにその研究を受ければ、どの戦闘機人も銀時のようにゾーマを上回る戦闘力を誇るであろう。
ナンバーズはそんな研究があったなんて驚きを隠せなかった。
クアットロに関してはその研究がどのようなものか興味を持っている。

だが何より驚いた事が、スバルの『ティルヴィングエア』とアーサァに『ペンドラゴブレイド』が伝説の７つのデバイス『七星神刀（しちせいしんとう）』であった事には驚く。

「まさか七星神刀（しちせいしんとう）が本当に実在していたなんて・・・・」
「通りで私の『グラーフアイゼン』やシグナムの『レヴァンティン』も・・・・」

神話とも言われる架空のデバイスがまさか存在していた事に驚くなのはと自分の愛用デバイスがこうも簡単に破壊された事に悔やんでいるヴィータ。
ヴィータとシグナムのデバイスはシャーリーとマリーが修正している。
それでも伝説といわれたデバイスに勝てるかどうかは保障できない。

「それ以上に問題なのはそのウゼルって男だな」

チンクはウゼルの名を口にする。

「確かに、今回アーサァに機動四課の命令を出したのもウゼルって男のようだね。彼は一体・・・・」

ウーノはウゼルが何者なのかは知らないが、考える事はただ1つ。
ウゼルも間違いなくかなり危険な人物である事は確かである。

「なるほど・・・・ウゼルが黒幕って奴か」

突如、後ろから1人の声が聞こえて銀時達は振り向く。
そこにはゲンヤがいた。

「お父さん！」

スバルとギンガはゲンヤがいたことに驚く。
そしてゲンヤはウゼルの存在を知っているようである。

「まさかまだ生きているとはなぁ・・・だとすれば機動四課を壊滅させた理由も分かる気がするかもな・・・」
「・・・何か知っているようじゃのう」
「ゲンヤ殿、もし良ければ我々に詳しい事を教えてくれないか？」

辰馬と近藤はゲンヤに話を聞いてみると・・・ゲンヤはウゼルの事を話してみる。

話によれば、２０年前にウゼルは元・機動四課の研究員として働いていた事が分かっていた。
ウゼルは魔力があるため魔導士を目指していたが、成績はなくてどんな努力を持ったとしても強くはなれずに仕方がなく研究員としての才能を生かす活動をしていた。
デバイスの発明や治療法など山のように成績を残したが、機動四課の魔導士達から見れば魔導士になれなかった落ちこぼれとしか見えなかった。
そしてその2年後に妻のマーリンが事故によって亡くなった。
妻を亡くしたウゼルに対して、機動四課は全員マーリンの死を愚弄しまくった。
ウゼルと関わった女は哀れな死に方をすると。
その愚弄が火種となってウゼルは機動四課を辞めて、ある研究に参加したのである。

それが『タイプＳＫ』。

研究員達はウゼルに大歓迎をして研究の参加を認め、ウゼルはマーリンの遺伝子とクイントの遺伝子を使って、３人の人造生命体を生み出した。
それがスバル、ギンガ、アーサァの３人である。

『タイプゼロ・ファースト』はアーサァ、『タイプゼロ・セカンド』はギンガのことである。
アーサァとギンガが生まれてから2年後に『タイプゼロ・サード』としてスバルが生まれた。
3人を中心にウゼルは数多くの１０００以上の戦闘機人を生み出したが、やがて戦闘機人事件が起こり、研究員達は数多くなくなったが、ウゼルはアーサァをつれて逃げ延びたのである。
その後、戦闘機人事件の捜査過程でスバルとギンガはクイントに発見・保護されてクイントとゲンヤの養子となる。

「なるほど・・・それで機動四課の壊滅をねェ」
「マジ、頭くるぜ！」

機動四課の壊滅を命じた理由を理解した銀時と機動四課の卑劣な行為に怒りを感じたノーヴェ。
だとすればこの事件は間違いなく機動部隊が起こしたものとして責任を感じる機動六課達。

「何をそう責任を感じているの？」

セッテは呆れてフェイト達に言い出す。

「今私達がやらなきゃいけない事は、事件を起こしたきっかけを作った責任を感じる事じゃない」
「やるべき事はウゼルを止めることでしょ？」

オットーとディードも今すべき事をフェイト達に言いつける。
ナンバーズの言う事に眼が覚めたかのようにフェイト達は決意する。
まずはこれ以上の被害を出さないためにもウゼルの逮捕を目指す。

「ディエチちゃん・・・・僕達もこれは動かなきゃいけないようだね」
「はい」

山崎とディエチも今回の機動四課襲撃事件は残酷と言っても良いほどに方っては置けない。
このままではそれ以上の被害が出るやも知れないからである。
その時、

「今回の敵もかなり厄介なようだな」

扉の外から声が聞こえてきた。
銀時達には聞き覚えのある声。
扉が開いて、ゴーグルをかけた老人が入ってきた。
平賀源外である。

「じーさん！」

銀時は驚きの声を上げた。

「あ・・・老いぼれアル！」
「源外殿！？」
『何故ここに！？』
「主もここの世界におるとは・・・」

神楽、桂、エリザベス、月詠も驚きを隠せなかった。
そう、源外こそ銀時達にこの世界を飛ばした原因人物の1人である。

「よォ。元気か野朗共？」

源外が挨拶した。

「俺達はな・・・でもここにいる奴らは・・・・」

「分かっている。随分と派手にやられたもんだな・・・・それにしてもデバイスっと言うカラクリ技術自体をゲンヤやスカリエッティから聞いて驚いたが、まさか刀鍛冶技術と機械技術を合わせてデバイスを作った破天荒な刀匠がいたとはなぁ・・・」

どうやら『七星神刀』の話を聞かされたようである。

「今回の事で役に立てるかは知らないが、『七星神刀』の事である重大な情報が分かった」

「本当か？」

「それは一体！」

源外の言葉にザフィーラとトーレはその事を注目する。

そしてゲンヤは七星神刀の話をする。

「野朗共は知っていると思うが、伝説のデバイスとも言われる『七星神刀』を作ったのは梅館妙寿と言う野朗だ。そいつは銀の字は知っているかも知れねぇが元々は俺達の世界にいた人物だ」

伝説の『七星神刀』の生みの親とも言われる梅館妙寿が銀時達の世界の住人である事に驚くリリカル組達。

確かに名前から見れば銀時の世界の住人である事も納得する。

「俺達の世界じゃ１０年前に行方不明になったんだが・・・妙寿はこの世界の５０年前に飛ばされたようだ。元の世界に戻れないかと考えいると、妙寿はデバイスの性能に見惚れた。そこで奴は己の打つ刀とデバイスの機械技術を合わせて自分だけのオリジナルデバ

イスを作れるではないかと考えた。そんで作り上げたのが7つのデバイスだ」

「そんなデバイスがあったとは・・・・・」

源外の説明に九兵衛が驚きだす。

「だがその7つのデバイスの名前は次々と忘れられてしまい・・・・今では知る者はいないと言うぐらいだ。だが、ある情報を元に『七星神刀』の秘密が分かった」

「七星神刀の秘密？」

興味ありそうに言い出すはやて。

源外はそのデバイスの名を口に出す。

「『七星神刀』は元々完成されたデバイスは6つだけのようだ」

「！？」

あり得ないという程の衝撃な真実に銀時は驚きだす。

「正確に言えば、最後の『七星神刀』は完成される前に妙寿が死んでしまい、言わば未完成であるという事だ」

「マジかよ・・・」

「じゃあ元々『七星神刀』は元々『六星神刀』って言うべきだったんですか！？」

ノーヴェやエリオも真実を知ってしまい、あり得ないと考えられる。

「そんで、未完成のままの最後の七星神刀はロストロギア級に値する部品として管理官に保管されたんだが・・・・１０年前に奪われたそうじゃ」

「１０年前・・・・まさか」

最後のデバイスが奪われたのが１０年前であると聞き、その未完成品のデバイスを奪った犯人が誰なのかを銀時は理解した。

「銀の字、お前の感が正しければ間違いなく奪った犯人はウゼルかもしれない」

「ウゼルが！？・・・・どうして！」

「そこまでは分からん。ワシが知った情報はここまでだ」

ウゼルがそのデバイスを奪った犯人である事に驚くフェイト。

源外の知っている情報はここまでのようである。

「それにしても爺さん・・・・どこでその情報を・・・・」

「何・・・・俺と同じくこの世界に飛ばされたたくの一に頼んでもらい、調べさせてもらっただけよ！」

くの一って台詞に銀時は呆れる。

銀時が思い当たる自分の世界のくの一の存在は間違いなくあの人物である。

そして・・・・

パリィーン

「銀さ～ん！」

その人物が窓を破って現れた。

そして思いっきり銀時にタックルするかのように抱きつく。

「ごふぁあああああ！」

銀時は吹飛ばされそうだったが何とか持ちこたえる。
突如の襲撃に誰もが驚く。
特にフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードは銀時にある人物が抱きついてきた事に驚く。
その人物は女性で、ロングヘアで眼鏡をかけているなかなかの美人。
女性を見て、銀時は苦い顔をした。

「げっ！お前……！」
「ついに見つけたよ銀さん！こうして会えるなんて正に結ばれた愛の運命だわ！」
「結ばれていねぇよ！」

銀時に抱きついているのは猿飛あやめ。通称さっちゃん。
元お庭番衆のくの一で、現在は始末屋をやっている。
銀時に惚れているストーカー女である。

「照れなくても良いじゃない！私達、ＳＭプレイを一緒に楽しんできた仲じゃない！」
「ＳＭプレイなんてした覚えはねーよ！！」

勝手な事を言うさっちゃんに、怒鳴る銀時。
体から離そうとしているが、中々離れない。
幸せそうに抱きつくさっちゃんだが・・・

ガジ！

フェイトとなのはに、力強く背中を握られる。
そして・・・・

『『うぉりゃあああああああああああああああああ！』』
「あぁぁぁ

正に女修羅に哀れに迷い込んだ銀時。
フェイト達の恐るべきな殺気・・・じゃなく嫉妬に青ざめるギンガ。

「ちょ・・・フェイトさん達が異常なまでに怖いんだけど!?」
「ギンガ・・・あれがいつものあの娘達の姿だ・・・・」

ゲンヤは呆れてギンガに言い出す。
魔導競技大会で銀時が女性と親しく話していただけで凄い嫉妬心を燃やしていたのであった。
女の怒りがどれ程恐ろしいのか分かっている証拠である。
神楽、月詠、エリオ、キャロ、フリード、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、源外、九兵衛、近藤、辰馬、ゲンヤ、ギンガ、山崎、リィン、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ディエチ、ノーヴェ、ルーテシア、アギトは巻き込まれる前に病室から脱出する。
桂、エリザベス、はやての3人は面白そうな為ここで待避する。

「ち・・・違う、誤解するなよ。こいつはただの納豆臭い変態ストーカー女で俺はストーカー被害にあってる被害者だ」

銀時がフェイト達にそう言うと、フェイト達は安心する。

「良かったぁ!」
「安心したぁ!」

嬉しそうに銀時に抱きつくフェイトとなのは。
そんな2人にティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースがツッコミだそうとするが・・・・

「貴女等も何を土壇場でやっているのぉ！」

思いっきり猿飛はフェイトとなのはにドロップキックをする。

「うぁあああああああああああ！」

「にゃあああああああああああ！」

猿飛のドロップキックを喰らったフェイトとなのはは吹飛ばされて気絶する！

そして猿飛はティアナ達に忠告する。

「貴女達、銀さんとはどういう関係か知らないけど、アナタ達なんかに銀さんは渡さないわ！！貴女達なんかより、私の方が銀さんのメ○豚に相応しいんだから！銀さんのおち○ち○は私のも…」

「ふざけんな、このストーカー！」

突如、ティアナとアルフが2人係で猿飛にラリアットを炸裂させて、首を強くはさみこんで強烈に直撃する。

「ぐはぁあああああああああ！」

バタリ！

これには流石の猿飛も答えて倒れる。

「ゲホッゲホッゲホッ！・・・やってくれたわね、小娘共！」

「やかましいわ！あんたのような変態女が銀時に近づくな！」

「兄さんを汚すなストーカー！」

額に青筋を浮かべて怒り出す猿飛、アルフ、ティアナ。

「上等じゃない！まずは邪魔虫である貴女達を駆除してやる！」
「それはこっちの台詞だぁ！」

そして3人は飛びかかって銀時を賭けた戦いが始まる。

「おいいいいいいいいいいいいいいい！何病室で騒いでいるんだ！？」
「いかん！このままでは遅れをとってしまう！」
「私も負けられません！」

シグナムとリィンフォースも乱戦してきた。
銀時は止めようにもまさかのシグナムとリィンフォースの乱入に唖然とする銀時。
そして『金色の死神』と『白い悪魔』が眼を覚まして、とてつもない殺気を放ってデバイスを構える。

「ふふふふふふ・・・・・やってくれたわね！」
「にゃはははは・・・・・愚か者には裁きなのぉ！」

そして2人は飛びかかってティアナ達の乱戦に入り込む。

「まずい！このままでは私達は余り扱いされてしまう！」
「こうなればいくしかない！」
「その通りだ！」
「じゃあ私達も行くっす！」
「負ける訳には行かない！」

そしてナンバーズごとチンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードが乱戦。

１２人の驚異的なバトルは異常なまでに大きく、もはや銀時では止めることはできない。

「み・・・みんな！何もそこまでして戦わなくても・・・・！」

スバルはオドオドと止めようとするが・・・・

「グルラァアアアアア！」

扉が勢いよく開かれ、誰かが怒鳴りながら入ってきた。

全員の注目が扉に集まった。入ってきたのは聖王病院の婦長。見た目は『銀魂』の婦長にそっくり。額に青筋を立てて、眼鏡を光らせて怒っている。

「あんた達ぃぃぃぃ！！何病院で大喧嘩しているんだぁぁぁぁぁぁ！！」

怒気を放つ婦長が鬼神の如く襲ってきた。

鉄拳、蹴り、頭突き、目潰し、枕、タライと婦長の嵐のような攻撃が全員に襲い掛かった。

もちろん銀時にも。

『『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！』』

「何で俺までェエエエエ！？」

病室、いや病院全体に銀時達の悲鳴が響渡った。

血祭りの如く暴れだす部長に青ざめてぶるぶると震えるスバルはこの部長だけは逆らわない事を誓う。

※

そこはある研究上。
かなり広くて無数の剣型のデバイスがざら理と並んでいる。
その中心部にウゼルとアーサァがいた。
ウゼルは愛しそうに，大きな赤いカプセルを眺めている。
そのカプセルを繋ぐ無数のコードは別の装置と繋がっていた。
それは装置に突き刺し立っているアーサァの『ペンドラゴブレイド』であった。
『ペンドラゴブレイド』から何やら特殊な魔力を装置に流し込むかのように注入し，しかもその魔力がコードに流れてカプセルの中に入り込む。

「まさか、白夜叉と狂乱の貴公子がこの世界に来ていたとは・・・しかもサードのあの強さ・・・・ファーストが予想以上に深手を負ったのも分かるねぇ」
「はい、マスターが来てくれなければおそらくは私は白夜叉に・・・・」
「しかし、サードには驚かされたよ。セカンドと共に出来損ないの不良品であると思いきや私のファーストと互角近くにまで対抗に交えるとは・・・・まぁ良い。すぐに破壊された固有武装も、もうすぐ治る頃だ」

申し訳なさそうに言い出すアーサァに対してウゼルは愉快そうに言い出す。
アーサァの固有武装、それは真紅の炎を自在に放つことが出来る篭手『竜王の手（ペンドラゴ・ハンド）』である。
両手用にあるが、左手は先ほど銀時によって破壊されて左手も重傷

を負っていた。
だが左手はすぐに特殊な治療によって修正された。左手用の『竜王(ペンドラゴ・ハンド)の手』も，もうすぐ修正完了する。

「それに結果的に機動四課は壊滅状態。そのお陰でついに例の品物が今回で完成する！ファーストのＩＳ，『魔力を喰らう殺戮(スキル・フォース・ジェノサイド)』のお陰で！」

そう、『ペンドラゴブレイド』から流れているのはアーサァの『インヒューレントスキル』と呼ばれる能力，通常『ＩＳ』。

ＩＳとは戦闘機人が有する、魔力以外の力を原動力とした特殊技能の総称。そのためにＡＭＦの影響を受けずに発動出来る。
戦闘機人１人ずつに異なるものが与えられており、それぞれが特定の分野に特化されている。
その多くは固有武装を用いる事によって発動するが，アーサァのＩＳは珍しく相手の魔力反応によって初めて発生する。

それが『魔力を喰らう殺戮(スキル・フォース・ジェノサイド)』

使用するデバイスと固有武装で殺めた魔導士の魔力をデバイスに吸収させる魔法吸収能力。
欠点はその魔力を自分の体内に吸収できない事だが，使用するデバイスと固有武装の強化にはかなり役立つ。
本来はその為のＩＳだが、アーサァはこれまで殺めた魔導士の魔力を吸収させて己の『ペンドラゴブレイド』に強化させたことはない。
全てはあるデバイスの完成の為に使用しているのである。

そして・・・・・・

プシューーーーーーーーーーーーーー!!

突如、カプセルから煙が大量に出て、カプセルの扉が開きだす。
すると黄金の光が放たれて2人を包み込む。

「お・・・・おおぉーー」

ウゼルはその光に見惚れるかのように声を上げる。
アーサァもその光だす物体に驚きを隠せない。
そして・・・光が収まると・・・・そこには美しく輝く聖剣があった。
刀身は黄金っぽい色をしていて，その聖剣から魅力的な美しさと恐ろしいほどの強さが交じり合っている。
そしてウゼルはその聖剣にゆっくりと近づき・・・・恐る恐るとその聖剣の柄を握る。
そして聖剣を抜いて天に昇せるかのようにウゼルは高笑いする。

「ふふふ・・・・はははははは・・・・・ふはははははははははははははははははは!」

勝利するかのような高笑いをするウゼル。
そう、ウゼルはこの聖剣を完成させる事が最大の目的であった。

「手に入れた・・・・ついに手に入れたぞマリーン!これでお前の無念を晴らせるぞ!」

亡き妻の名を叫んでまで喜びだしている。

「梅館妙寿の刀鍛冶データとデバイス合成研究データ，そして『七星神刀』データを元に，２０年間の時のはてについに完成した私の最高傑作！そして妙寿でさえ完成させる事ができなかった『七星神刀』の最後のデバイス！勝利の聖剣『エクスキャリバー』を！」

長年の時を経て完成した最強のデバイス。
その完成に喜ぶウゼルをアーサァは黙って見ているだけであった。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

近藤
「おお、諸君！今回はこの俺、真撰組局長ごと近藤勲がアシスタントをしよう！」

銀八
「えええ、じゃあ行くぞ。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん。『質問です。銀時とクロノの声が同じであることに機動六課の人は、気付いている人は、いますか？ちなみにクロノは、なんかウザイので出さなくていいです。別のキャラの出番を増やして上げて下さい。』・・・おそらく気づいている人はいないと思います」

近藤

「ってか、なんか『神威　銀時』さん！クロノ殿に対して冷た！」

銀八
「まぁな。っと言う訳で『神威　銀時』さん。クロノの悪口をありがとう！」

近藤
「何でお礼言うの！？・・・まぁ良い！次はこの方の質問だ！ペンネーム『虚空』さん！『？　なのはさんの件で色々と感想内で騒がれてますが・・・そろそろ白黒付けたらいいのでは？　彼女がある種哀れで見てられません。こう言った背景でお答えをください。？　もし魔王なのはさんを封印させるようなトラウマをなのはさんに刻み付けるとしたらどうしますか？私の解答は、ウッソさんのところの感想でネタとして送っております。悪魔と罵られようが・・・・彼女にもう哀れな姿を見せたくないのです。』・・・確かに同感だな」

近藤はなのはの悪魔っぷりを思い出して青ざめる。

銀八
「そうだな・・・？は承知しました。？はそれは名案ですね。っと言うより用はなのはを止めれば良いだろ？っと言う訳で『虚空』さん、廊下に立っていなさい。んで次ぃペンネーム『カラー』さん。『質問烈火竜さんの小説では、オーリスが銀時の股間見て惚れますが、この小説ではどうなるんでしょう？出てきて見て惚れるんですか？』」

近藤
「こ・・・股間に見惚れてて惚れるぅー！！それはつまり俺も股間をお妙さんに見せれば見惚れてくれ・・・・」

銀八
「ない上にぶっ飛ばされるぞ？そうだな。質問の答えはないと思う。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい」

近藤
「次行こう！ペンネーム『風花』さん。『時々、なのはに対してものすごいことを質問する人がいるんですが死にたいんですか？ちなみに私は死にたくありません。』」

銀八
「ずばり答えます。ウッソ・エヴィンさんはこの小説と自分の小説を面白くさせるために命がけの質問をしています」

近藤
「そ・・・そうだったの！？知らなかったー！」

銀八
「っと言う訳で『風花』さん、一度ウッソ・エヴィンさんの小説を見てやってください！次ぃ、ペンネーム『ヤマタノオロチ』さん。『質問です一つ目はお妙の料理は暗黒物質〔ダークマター〕と呼ばれていますがシャマルは何物質なりますか？二つ目チンクと九兵衛、山崎とシャマルはけっこうキャラが被っていますがほかに誰か被っているキャラはいますでしょうか？』。１つ目は以前に猛毒キノコで握り飯の具をした事がありますよね。おそらくは猛毒物質となるでしょう。２つ目は分かりませんね・・・かぶると言えばメガネキャラとしてさっちゃんとクアットロみたいな感じですね」

近藤
「今度のはシャマル殿に関係する質問が多いな」

銀八
「まぁな。・・・っと言う訳で『ヤマタノオロチ』さん・・・・廊下に立っていなさい」

近藤
「次行こう！ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん・・・・って来たぁ！例の『ウッソ・エヴィン』さん！」

『ウッソ・エヴィン』さんの登場に驚く近藤。

近藤
「じゃあ、読むぞ。『質問です。？銀さんは今年，チョコは何個貰いましたか？？気迫で持ちこたえてと言いますが，そんなんで生き残れるほど甘くない相手なんでちゃんとすべを教えてほしいです．』」

銀八
「？は答えなくても良いぞ？」

機嫌悪そうに銀八は言うが・・・・

近藤
「いやいや、せめて言ってやらないと困るようだし・・・ずばりお答えしよう！？はフェイト殿、なのは殿、スバル殿、ティアナ殿、シグナム殿、アルフ殿、リィンフォース殿から貰った上、テレながらもチンク殿、セイン殿、セッテ殿、ウィンディ殿、そしてディード殿からチョコを貰って合計１２個！しかも万事屋に惚れたり憧れたりしている女性からも何個かもらっているそうだぞ！」

銀八
「あんにゃろー！いつかしばく！そんで？は・・・そうだな、そちらの小説で感想書かれた『神威　銀時』さんの参考どおり、『銀時の写真もしくは、銀魂のグッズを渡す。眼鏡を盾にする。親衛隊隊長を生け贄にする。地味なツッコミに歌を歌わせるなどして怒りの矛先を変える。
』にした方が良いと思います。特に俺は眼鏡を盾にするのと親衛隊隊長を生け贄にするを希望します」

近藤
「おい！新八君をどうする気だ！？」

銀八
「黙ってろゴリラ！後、嘘でも良いから『銀時はなのはの事をいつまでも愛しているよ』っと言ってやれば蕩けます」

近藤
「そんな偽りの台詞で乙女の心をいたぶるのかよ！」

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん・・・・一度お試しください！特に眼鏡を盾にするのを希望します！」

近藤
「だからなんで新八君を！？」

銀八
「次行くぞ。ペンネーム『烈火竜』さん。『近藤さんはスカリエッティのアジトで緊張のあまりに脱糞しちゃいましたか？』」

近藤
「失礼な!俺は脱糞していないぞ!」

銀八
「(あ・・・したな)っと言う訳で『烈火竜』さん、このゴリラの言った事を反対の意味で受け入れてやった方が正解です」

近藤
「だからしていないって!」

銀八
「次行こう、ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀時に好意を寄せる皆さんへ、バレンタイデーに自分自身をチョコレートを塗って「私を食・べ・て(はあと)」ってするんですか?真面目に答えてください。』・・・・さぁな。そこまではしないと思うぜ。あの変態ストーカー女と違って」

近藤
「先生、この質問は『黄色いのなにか』の質問のはず。何で『正宗の胃袋』さんなんだ?」

銀八
「実はな・・・自分のパスが分からなくてログインが出来ず、メールがパスが来ず、仕方が無いから弟のアドレスでやっているそうだぜ?」

近藤
「そうなの!?それはメッチャ大変じゃねぇか!」

銀八

「そうだな。っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、復旧を目指して頑張ってください！」

近藤
「次はペンネーム『クアンタ』さんからだ！『沖田（ドS化）なら、魔王化したなのはを調教できますか』・・・・」

この質問を見て銀八と近藤が青ざめる。

銀八
「お・・・沖田なら・・・・ありえるんじゃないか？」

近藤
「確かに・・・総悟ならやりかねん」

銀八
「っと・・・と言う訳で『クアンタ』さん・・・・あ・・・・あり得ると思います・・・・」

近藤
「じ・・・・じゃあ最後の質問行ってみよう！」

銀八
「そうだな。最後はこの人・・・・ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目・本家銀魂でも恒例な「名作アニメパロディネタ」はこの作品ではやらないのですか？二つ目・晴れて銀さんにも認められるツッコミ役の地位を確立したヴィータとティアナですが、銀さん達『ボケる側』の方々はどちらのツッコミが好きですか？』・・・・１つ目は使うと思います。２つ目は人それぞれだと思います」

近藤
「なんか答えになっていないような・・・・」

銀八
「そこは気にしないでおこう！・・・・っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい！」

オリキャラ紹介

アーサァ・Ｋ（キング）・ソルドゥナイト　声優：川澄綾子

スバルの親友であり、最も親しい仲である。年齢は１７歳。
外見は美しく華奢な少女だが、剣の腕はシグナムをも上回る上に魔力はなのは並に高い。
１０年前にスバルが人造生命体である事を知ってないていた所、スバルを人造生命体ではなく１人のスバルである事をしっかりと分からせて慰める。
実は彼女もスバル、ギンガと同じ戦闘機人『タイプゼロ』で、ある人物の遺伝子から生み出された人造生命体である。
だがその強さは異常なまでもないほどの高さでゾーマ以上の戦闘力を持っており、リミッター解除をしたシグナムやヴィータをも圧倒してなのはの全力全開の『エクセリオンバスター』を防げるほどで、１人で『機動四課』を壊滅させるほどの強さを持っている。
接近戦はもちろん、魔法攻撃による遠距離攻撃も長けており、銀時と双璧と思わせるほどなど、デタラメじみた強さを持つ。

正に魔導士をも上回る最強の戦闘機人の『タイプゼロ』である。
銀時からも宇宙最強の種族と言われる三種の天人である夜兎族、茶吉尼族、辰羅族に匹敵すると恐れられるほどである。
剣術は騎士と思わせるほどの力強くてはやい。
使用する魔法は竜をイメージしたものとシグナムと同様に炎を使用する使うものが多い。魔力光は真紅。
魔法術式・古代ベルカ式／魔導師ランク・空戦ＳＳ＋。
使用デバイスは『七星神刀（しちせいしんとう）』の１つであり、大刀のデバイス、竜王の魔剣『ペンドラゴブレイド』。
固有武装は、真紅の炎を自在に放つことが出来る篭手『竜王の手（ペンドラゴ・ハンド）』で、ＩＳは使用するデバイスと固有武装で殺めた魔導士の魔力をデバイスに吸収させる『魔力を喰らう殺戮（スキル・フォース・ジェノサイド）』。
バリアジャケットのモチーフは騎士。
紅いジャケットワンピースに騎士の鎧の３・４割ぐらい装着している。（モデルはＦａｔｅのセイバーの戦闘衣装）
性格は実直で生真面目で、誰よりも優しい。
だがマスターであるウゼルの命となれば、どんな残酷な事をしても人を殺める事など平気で行う。
スバルの事は１０年ぶりに敵として再会した今でも、大切な親友であると思っている。
１０年前にスバルにお守り代わりとして、『七星神刀（しちせいしんとう）』の１つである『ティルヴィングエア』を渡した。
実はその強さの最大の秘訣は、ウゼルが行っている研究、戦闘機人のＤＮＡを他人のＤＮＡと合成させて戦闘力を急激に増す『プロジェクトＤＮＡ』の１０００人目の実験台になり、銀時のＤＮＡを自分のＤＮＡを合成させられて、急激なまでの超人的な強さを身につけた唯一の成功された実験体である。
そのため、その強さは『白夜叉』ごと銀時に匹敵する戦闘力を誇る。
名前のモデルは世界的に有名なイングランドの伝説的英雄、『アーサー王』。

第四十四訓：狭い部屋で数多くの人が入るとさらに狭くなる（後書き）

ウゼルの正体を知った銀時達。

スカリエッティのアジトでウゼルとの関係を言い出すスカリエッティ。

そしてウゼルの宣誓予告。

猿飛

「次回、『かつての同級生の中には変わっている者も多く入る』テイクオフよ」

第四十五訓：かつての同級生の中には変わっている者も多く入る（前書き）

高杉の野望を知った源外と猿飛。

ウゼルの起こした事件の解決のために銀時達は決意する。

ウゼルの過去を語るスカリエッティ。

スカリエッティ

「『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まりだ。」

第四十五訓：かつての同級生の中には変わっている者も多く入る

猿飛の参戦に、フェイト、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードはある意味では最大の恋のライバルが現れたと考える。
桂、神楽、エリザベス、月詠、九兵衛、近藤、辰馬は源外にどうしてこの世界に飛ばされたかを聞き出す。
源外からの話によると、まず自分は事故で故障した転送装置の修理をしている間に変な光に飲み込まれてこの世界に飛ばされた。
そこで同時に飛ばされた猿飛と一緒にスカリエッティのアジトでしばらくスカリエッティ達の厄介になる事にした。

さらに源外は猿飛からどうしてこの世界に飛ばされたかを聞くと、猿飛もまた始末屋の仕事を終えた後、新八達から銀時達が行方不明になっていると言う情報を聞き入れた。
そして猿飛は必死に銀時を探していた。愛する者が行方不明である事に凄く死ぬほど心配していたのである。
眼鏡を落として探していて、見つけた途端に変な光に包まれてしまい、この世界に飛ばされたようだ。

「銀さんがいなくなってかなり心配したから必死に追い続けていたのよ！・・・・あでも、カレー忍者がいなくなってから攘夷志士達はかなり困ってたわ。ゴリラストーカーや（元）地味もいなくなって真撰組も大慌てだわ」
「誰がカレー忍者だ！」
「ゴリラ言うな！後、俺はストーカーではないぞぉ！」
「（元）をつけるなら地味言うな！」

猿飛の発言に桂、近藤、山崎が、額に血管を浮かべてツッコム。

カレー忍者とは、以前エリザベスが捕まったって猿飛に助太刀の手伝いをさせる為に忍者の変装をして、勝手に猿飛にあだ名をつけられた桂の忍者ネーム。
ゴリラストーカーとは、ゴリラのような存在で妙にストーカーをする近藤の事。
地味は言うまでもなく元地味の山崎。

「貴女もいなくなって、吉原の遊女達と『百華』はかなり心配していたわよ？」
「・・・・・・そうか」

猿飛にそう言われたら、月詠は吉原に残していった日輪と晴太、そして吉原自警団『百華』や遊女達を思い出す。
自分がいなくなってからどれ程経ったのかを。
桂とエリザベスも攘夷志士達は今頃どうしているのか考え、近藤も山崎も真撰組の連中はどうしているかを心配している。
特に土方と沖田はどうしているのか心配である。なぜなら2人の喧嘩を止められる者はそうはいないからだ。
九兵衛も柳生道場では皆どうしているかを考えていた。
特に東城などは暑苦しく涙を流しているようである。
辰馬も流石に快援隊の連中は無事なのかを心配する。

そして神楽も元の世界に残していった星海坊主、定春、妙、お登勢、たま、ついでにキャサリンなど様々な仲間の心配をする。
あ・・・新八もいたな。

フェイト達は、そんな桂達を見て、いつも助けてばかりなのに銀時達の力になれないことに強く責任感を感じる。
だが・・・・

「だが、今すぐにもとの世界に戻れるとしても・・・・我々はこの世界でやらなければならないことが山ほどある」
『その通り！』

桂とエリザベスは自分のやることがなんなのかは最初っから決まっていた。

「桂さん」
「エリザベスさん」

はやてとリィンは唖然とした表情で2人の名を言い出す。

「桂の言う通りだ。元の世界に戻れたとしても今の状況をほうっておく訳には行かん！」
「そんなことをすれば戻ったとしても副長に怒鳴られるだけですからね」
「散々世話になった身じゃ」
「また攘夷戦争級の戦争で仲間が死んでいくのは見たくないぜよ」
「お妙ちゃんには早く会いたいけど・・・・この状況を黙ってみておく訳には行かないからな」
「助け合うのが仲間アル！」

近藤、山崎、月詠、辰馬、九兵衛、神楽も元の世界に変える前に、まずはウゼルの起こした事件を解決する事を決意する。

「私には関係ない事だけど・・・・ウゼルのやっている事を見逃せば外道そのもの。外道を始末するのは同じ外道を進んだもの役目。ここで会ったのも何かの縁だから私も手伝うわ」

フェイト達は恋の宿敵だが、高杉やウゼルのような過激な行動は猿

飛から見れば外道そのものである。
始末屋としてこの件の事件解決に協力する事を決意した。

「皆・・・・・」
「・・・・恩にきる」

アルフとシグナムは自分達の世界の為に戦う事を決めた神楽達に強い感謝をする。
2人だけじゃない、機動六課やナンバーズもそうである。

「良いのか、銀の字？」

源外はそれで良いのかを銀時に言い出す。
そして銀時は・・・・・

「別に良いんじゃねぇの？もし戻れなくてもその時はその時だ……それにウゼルの事だけじゃねぇ。この世界には高杉もいやがる」
「あの男が？」

源外は高杉の名を聞いて驚く。
そう、高杉は源外とはある知り合いであり、正確に言えば源外の息子が鬼兵隊の一員であったのである。

平賀三郎（ひらが さぶろう）

江戸一番の発明家・平賀源外の息子であり父に劣らずかなりのカラクリ好きであった。
だが天人の襲来に、源外のカラクリに対する姿勢に反発して家を飛

び出し、鬼兵隊に入る。
剣の腕はそれ程でもないが、機械の扱いには長けていた。
幕府により粛清され、その首は江戸の川原に晒され、それを見た源外の復讐の火種になる。

「野朗が行方不明になっていると聞いたが、まさかこの世界に……」
「ああ、このままほうっておいたらミッドチルダはとんでもねぇ事になっちしまう」

世界を憎む高杉にとってはミッドチルダも破壊する対象としか見えない。
松陽を失った悲しみが、高杉を破壊を繰り返す黒い獣と変貌させたのである。

※

そこはスカリエッティのアジト。
スカリエッティはシャーリーとマリーと協力し合ってシグナムとヴィータのデバイスを修正し終えたのである。
しかも予想以上に早く完了しただけじゃなく、源外の協力によって以前よりパワーアップしているのが分かる。
銀時と源外は今回の件がスカリエッティと同じ研究者である事をスカリエッティに話しておこうと考える。
ティアナは銀時が無茶しないように監視するためについて来ていて、シャーリーとマリーは修正した二つのデバイスをシグナムとヴィータに急いで届けに行った。

そしてスカリエッティの部屋で、銀時、ティアナ、源外、スカリエッティの４人は今回の事件の事で話し合う。

「なるほど、・・・・ウゼルが・・・・随分とまた無茶な研究を続けていたようだ・・・・」

「スカリエッティ、お前・・・・」

何やらウゼルとは知り合いのようであるスカリエッティに話しかける。

「ウゼルのことをご存知なの？」

ティアナは驚きながら聞き出す。

「うむ、同じ研究者仲間だった頃に会ってね。最後に会った日は忘れたが・・・半年前にウゼルがある集団を作り上げた情報を耳にした」

「ある集団？」

ウゼルの作り出した集団に源外か聞き出す。

「人造魔導剣士集団『カリバン』。ウゼルによって生み出された『タイプゼロ』型の戦闘機人の集団。その戦闘機人はスバルとアーサァとか言う少女と同様、魔法と剣術が優れているようだ。大した活動はしていないが、問題はそのアーサァと言う戦闘機人がゾーマ以上に強いと言う噂だ。私もそんなに信じていないが、まさか本当だったとは・・・・しかも銀時並みの剣の腕に魔力がＳＳ＋ランク、さらに使用デバイスが『七星神刀（しちせいしんとう）』・・・・おそらく銀時でもタイマンになればそう簡単には倒せないだろう」

「だろうな、ウゼルの『プロジェクトＤＮＡ』とか言う奴で、俺の

ＤＮＡを使ってアーサァを夜兎族並の戦闘力を身につけやがったからな」

銀時もアーサァのあの強さは認める。

スバルとアーサァの対決は見ていないが、現に最初に会った時の驚異的な威圧感と覇気は間違いなくゾーマ以上であった。

「・・・12年前だったな・・・彼と最初に会ったのは。昔から気が合わなくて口喧嘩を何度もしていたねぇ。だけど研究者としての成功率や信念、そして研究に対する熱心は私と双璧になるぐらいだ。だけど私達の進める研究は全く違う」

懐かしそうに話すスカリエッティはウゼルとの関係を話し出す。

「私の研究は戦闘機人や人造生命体を生み出す研究ではなく、その生命体に人間としての生きる希望を導くことや人間にも聞く治癒研究をしている。そしてガジェットはこのアジトをあくまで守る為に作ったんだが、鬼兵隊に真似されて覚えのない罪を着せられた。君達が見たカプセルにいる者達は事故で意識を失ったもの達とある組織によって戦闘用に作られた戦闘機人と人造生命体だ。その中にはウゼルによって作られた者もいる」

スカリエッティの衝撃的な発言に銀時、ティアナ、源外は驚く。

「対するウゼルは亡き妻の死を愚弄した機動四課だけじゃなく、その機動四課を生み出した管理官に復讐する為に驚異的な戦闘力を持った脅威なる戦闘機人。その戦闘機人はすべて他人の遺伝子によって生み出された人造生命体ばかりだ。まるで自分の娘を蘇らせたいかのように・・・」

「娘だと？」

スカリエッティの台詞に源外が突っかかる。

「まさか・・・・」

「ああ、そのまさかだ。ウゼルの妻、マリーンは子を孕んでいたようだ。その子は女のようで、娘ができた事に喜びを表していたようだ・・・だが、その娘は生まれる前に・・・・・」

スカリエッティがそう言うと銀時、ティアナ、源外が黙り込む。

「だからウゼルは『タイプＳＫ』に参加したのか」

「まぁそうなる。愛する妻を失っただけじゃなくその見知らぬ自分の娘をも奪われたのだからな。だがどんだけ妻の遺伝子で人造生命体を生み出したとしても、顔も知らない娘の変わりには出来ない。余りにも皮肉なものだ」

少し動揺する源外とスカリエッティ。

源外も自分の息子が幕府に殺されてしまった悲しい経験を持っている。

「くだらねぇ」

そんなウゼルの悲しい過去を踏みいじるかのように言い出す銀時。

「娘さん欲しいなら再婚して毎日腰振ってりゃいいだろ」

「に・・・兄さん!!／／／」

「ガハハハハハハハ！ちげぇーねェ！」

銀時のさりげない一言にティアナは顔を真っ赤にしてツッコミ、源外は高笑いする。

「まぁ人の執念って言うのは一度作ってしまえば簡単には消えないものだ。確かに戦闘機人として生まれた人造生命体は戦いを中心に優れる事が多い・・・だが少なくとも私はウゼルと違って人造生命体を道具のように扱うつもりはない。」

あくまで仲間として見ているスカリエッティ。
原作ではラスボス級だが、銀時がフェイト達の世界に来てからアニメの進み方が変わったのである。

「だが妻を亡くす前のウゼルは人造生命体所が生き物その物を道具に扱う連中を嫌っていたが、今は違う。妻の死がウゼルを変えた。『タイプＳＫ』に参加した時にウゼルが妻のマーリンの遺伝子とゲンヤ殿の妻、クイントの遺伝子を使って最初の戦闘機人を作り出すときに、２人の人造生命体が誕生した。そしてマーリンの遺伝子で造られた人造生命体にウゼルは自分の娘に名づけるはずだった名を与えた」
「それが、アーサァですね」
「以下にも・・・・」

スカリエッティの説明にティアナがアーサァの名を言い出す。

「なるほど、つまりこう言う事か?野朗の真の目的・・・・それは死んだ妻の仇を自分だけじゃなく娘にも取らせる為か」

源外がはっきりとそう言うと、スカリエッティは何も言わなくなった。
つまりあたりのようである。
そんな話を聞いていると、銀時は複雑な表情をする。

「ウゼルが最初に生み出した人造生命体、『タイプゼロ・ファースト』アーサァ・Ｋ（キング）・ソルドゥナイトはその為だけに造られた人造生命体。いわば、偽りの娘って奴だろう。ウゼルに剣術を学ばせたのはおそらく、『プロジェクトＤＮＡ』で銀時のＤＮＡで銀時並みの戦闘力を持ったアーサァが最大限に引き出しやすいからだろう。復讐の為に作られた娘の化身として。ウゼルに関して知っているのはここまでだ」

スカリエッティは説明を終えるとティアナは複雑そうな表情をする。事件を起こした引き金となったのは機動四課と管理官、そしてその『タイプＳＺ』を作り上げた研究員達なのに、家族を失ったウゼルを事件の黒幕として倒さなければならないのだからだ。

「事故による死を愚弄された嫁のために無念を晴らし、生まれてこなかった娘のために無理矢理蘇らせるかのように嫁の遺伝子で人造生命体を、妻のために機動四課の壊滅を、そんで次は家族を失われた自分のために何かを企んでいるって訳か・・・・・」

「神楽が言っていただろ？親父は娘に弱いっと」

「そうだな」

以前、機械反乱（からくり）事件で神楽が言った言葉を思い出す銀時と源外。

それにはティアナとスカリエッティも同感である。

そして突如、明かりが消えてなくなった。停電である。

「あり？」

「どうした、何があった？」

「ドクター、」

停電で慌てる銀時達に、慌てて走ってこっちに駆けつけてくるウーノ。

「ウーノさん、一体何があったんですか?」

ティアナがウーノに聞くと・・・

「それが、このアジト所が町全体に停電が発生して・・・人々がパニックになっています!」

「なっ!・・・何故その様なことが!?」

スカリエッティとウーノは突如の停電事故に不自然に感じる中・・・

・突如、モニターが現れた。

そのモニターには剣を持っているウゼルに、後ろには数多くの『鬼兵隊』作のガジェットとウゼル作の戦闘機人が存在する。

≪ミッドチルダに住む者たちよ、聞くが良い。これよりミッドチルダは我々『カリバン』の手によって支配される≫

それはウゼルの宣誓布告であった。

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!」

猿飛び

「こんにちは、始末屋さっちゃんです。今回は私がアシスタントす

るわ」

銀八
「じゃあ行くぞぉ。えー、ペンネーム『神威　銀時』さんの質問。『ストーカーゴリラに質問。ストーカーゴリラがいない間に総一郎くんが派手に取り締まりをしていたらストーカーゴリラは、どうやって責任をとりますか？出来れば悪辣なキャバ女に薙刀どグサリと逝かれますか？それとも黒い卵焼きを食べて逝かれますか？なのは達に質問、ヴィヴィオが登場したら多分、銀時の事をパパと呼ぶでしょうから誰がママと呼ばれるんですか？平和的に全員がママと呼ばれると良いんでしょうけど・・・・・・』」

猿飛
「そうね、確かにあのゴリラは上から相当な罰を受けるわね」

銀八
「たしかにな。そんで次はなのはに対する質問。・・・・・おそらくそこは予想できません」

猿飛
「そんなの私だけに決まっているでしょ？銀さんの子は私の子でもあるんだから！」

銀八
「なのはの質問なのに言っちゃったよこの人！・・・・と言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『烈火竜』さん。『銀さんはなのは世界のアダルトＤＶＤを所持してますか？』」

猿飛

「そんな～！銀さんは私と言う者がいながら～！っあ、でもむしろ持っていると考えればメガネ君の可能性が高いわ。何せあの子が銀さん達を『リリカルなのは』の世界に導かせた原因だし、それにムッツリスケベだから」

銀八
「むしろ持っていたら銀時がメッチャ殺される事が多いと考えられるな。っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

猿飛
「次、行くわよ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『１．以前質問しましたが、土方と沖田（ドＳとマヨラー）は本当に出番がありますか。２．九兵衛のキャラの崩壊を知ったらお妙はショックを受けますか。』」

銀八
「ずばりお答えします。１は、後半に出す予定です。原因は第二回の人気投票で２人の人気が一に達成していましたので。２は分かりません。むしろ喜ぶ可能性もあります。っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、真撰組の活躍はあんまり期待しないほうが良いです」

猿飛
「次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問よ。『？新八が「黒神さんを盾にスンぞ」って怒っていました．何か言ってあげてください．？桂さんたちはいつごろ白い悪魔様に消されますか？？なのはさん以外の人達に質問です．僕が生き残るために銀さんグッズ（写真集や漫画やフィギュアなど）をなのはさんだけにあげたら怒りますか？ちなみに攻撃してきたらたまさんのビームバズーカを打ち込みます．』・・・・・？は答えます。・・・・いくら出番が

少なくて、作者に八つ当たりするんじゃねぇよメガネザル？つうか今回は小説に出てくるな。むしろ死んでください、醜いから」

銀八
「おいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！そこまで言う必要はないんじゃない！？・・・まぁストーカー女であるお前より哀れな存在だからな・・・・そんで?は、そちらの第5話ではやてが消された後になります！？はみんなに答えさせてもらいます」

フェイト、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、猿飛
「そんなの許せるかぁーーーーーーーーーーーーーーーー！（怒）」

スバル
「ずるいですよ〜！」

などと女性達のツッコミが響き渡る。

銀八
「・・・・・っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、早く第5話を完成させてください！作者はメッチャ見ただがっています！次ぃ、ペンネーム『クアンタ』さん、『?.銀時達に質問、他のアニメやゲーム、漫画の技か能力を1つだけ使えるとしたら何を使いたいですか。?モンキーハンターでの月読の格好て、もしかして戦国BASARAのかすがですか。』・・・・俺は自分が女にモテテ、かめはめ波を打てる漫画を描きたい」

猿飛
「私は銀さんとラブラブな漫画を描きたい！・・・でもう１つは、どっちかと言えば、『ＤＥＡＤ　ＯＲ　ＡＬＩＶＥ』シリーズのかすみの『忍装束（青）　ロングヘアーＶｅｒ．』の黒色版ね？【ＤＥＡＤ　ＯＲ　ＡＬＩＶＥ　３　コスチューム一覧】で調べさせてもらったわ」

銀八
「つうかエロ！とんでもないわメッチャ抱いたんだわ！あ・・・でもロングヘアーって事は、月詠の髪はロングエアーじゃないから、髪を下ろした状態ってわけだね」

猿飛
「そう言うこと！っと言う訳で『クアンタ』さん、そんな月詠の衣装を妄想してみてください！きっと興奮します！」

銀八
「次ぃ、ペンネーム『カラー』さん『さっちゃん登場で銀時に好意を寄せる女性が１３人になったわけですが、月詠は争奪戦に参加（？）するみたいですがギンガや他のナンバーズ等、最終的に銀時は何人くらい好かれるんですか？予定で良いんで答えて下さい。後、その中にオリキャラは入りますか？』・・・ってこっちが聞きたいわー！（怒）」

猿飛
「そんなの認めない！銀さんは・・・銀さんは私のもの！何人こようが始末してくれるわ！」

銀八

「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていろー！」

怒鳴りだして言い出す銀八。

猿飛
「たく・・・じゃあ次行くわよ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『銀時に好意を寄せる皆さんは、銀時の部屋に忍び込んで銀時のお○んち○をファイナルヒュージョンしないんですか？』・・・・私はするわ！」

銀八
「すんなよ！・・・と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『アクセル』さん。『今回、さっちゃんが銀時争奪戦に加わりましたがまだ増えていくのでしょうか？そろそろ痺れを切らして銀時に夜這いとかかける娘が出てもおかしくないんですが？』」

猿飛
「次行くわ。ペンネーム『風花』さん。『前回ウッソ・エヴィンさんが銀さんは何個チョコをもらったかと聞きましたが黒神さん自身はもらいましたか？』。調べた所、作者もチョコを貰ったそうよ？」

銀八
「あのクソ作者ー！（怒）」

猿飛の答えに作者に怒り出す銀八。

猿飛
「っと言う訳で『風花』さん、チョコは見た目より愛情が大事です！」

銀八
「ちくしょう！もうこーなったらジャンジャン行くぞ、ゴルァ！・・・・っと言う訳で次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さんの質問。『スバル、フェイト、ティアナ（ついでになのは…）など現在大勢の美女に囲まれ、且つ様々なアプローチを受けている銀さんですが、その際にちょっと調子に乗って抱いてやろうと考えたり、嫌らしい想像を思い浮かべた事はありますか？』」

猿飛
「銀さぁーーーーーーーーーーーーーーん！！私と言う者がありながらぁ！」

銀八
「まぁそれはないだろ？自分の世界での存在を考えれいるからフェイトの世界にいる自分の存在が正反対だと分かっているか・・・・むしろやったらさらに激しくなるだろう？・・・・っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。そんで最後の質問、ペンネーム『虚空』さん。『気になったのですが銀八先生から見て、感想で魔王なのはさんを恐れない質問してくるあるいは、恐れない発言をしてくる人は何人ほど（私を含めて）いますか？」』・・・・・そうだな、作者の知っている限りでは『ウッソ・エヴィン』さんを含めて２人かなぁ」

猿飛
「確かにそうなるわね・・・・私も登場してからこの小説を見たんだけど・・・・なのは、怖っ！」

銀八
「っと言う訳で『虚空』さん、久し振りの感想をありがとうござい

ました！」

第四十五訓：かつての同級生の中には変わっている者も多く入る（後書き）

ついにウゼルとの決戦が始まる！

ついに『アルハザード』によって生還された第二の刺客が登場！

そしてスバルに異変が！

ウーノ
「次回、「人にはそれぞれ自分自身のこだわりを強く持っている」
テイクオフ」

第四十六訓：人にはそれぞれ自分自身のこだわりを強く持っている（前書き）

黒神
「おお、ティアナか」

ティアナ
「作者・・・貴方も来ていたんだ」

黒神
「ああ、なんかここにくるようになのはに言われてねぇ。ひょっとしてあんたもか？」

ティアナ
「なんかニコニコと笑ってて殺気も感じなかったけど・・・かえって怖いような・・・って何アレ？」

ティアナは空に浮んでいる流星らしき物に注目する。

黒神
「なんか大きくなっていますね・・・・桜色の流星なんて初めて・・・桜色？」

何か不自然な流星であると考えていると・・・・

黒神
「ちょ・・・・あれって！」

しかし気づくのが遅かった。

ドカァアアアアアアアアアアアアアアン！

黒神＆ティアナ
「あぁぁぁ

青ざめて心配する2人は作者とティアナに駆けつけようとすると・・・・

なのは
「にゃはははははははははは♪愚か者には裁きをしてやったの♪」
（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

聞き覚えのある声を聞いて青ざめる桂とエリザベスは・・・・ゆっくりと後ろを振り向くと・・・・・そこには『白い悪魔』ごとなのはがいた。

桂
「た・・・高町・・・殿？」

エリザベス
『いつの間に！？』

大量の冷や汗を流し込む2人。じつは『第四十二訓：刀は武士の魂と言えるなら剣も騎士の魂と言えるではないか？』の質問コーナーでなのははウッソ・エヴィンさんの感想に答えた2人を知ったのである。当然の事、魔王の逆鱗を触れてしまった2人である。そして、なのはの魔王の裁きが下される。

桂
「逃げるぞ、エリザベス！」

エリザベス

『合点承知！』

2人は早く走って逃げるが・・・・・

なのは
「スターライト・ブレイカー！」

極大な桜色の閃光が容赦なく放たれ・・・・・

桂
「あぁぁぁ

銀八
「いやぁ、実はさぁ。『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の第５話の事でちょっと・・・・」

銀八はなのはに真実を話した。
するとなのはは黒神に強い殺気を放つと、もう黒神は逃げていた。
だが・・・・

なのは
「にゃはははははは、逃がさないのぉ♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

そう言って素早く飛行して姿を消した。

銀八
「・・・・ふぁ～い、じゃあ『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』・・・・始めるぞぉ」

第四十六訓：人にはそれぞれ自分自身のこだわりを強く持っている

突如の停電に驚きだし、さらにはテレビやモニターにウゼルが映し出されたことで驚いたのは銀時だけじゃない。
聖王病院にいるスバルや、機動六課に待機していたフェイト達もである。

≪我々『カリバン』の手により，ミッドチルダは支配されるのだ。君達に残された手段はただ1つ。我々に従って我々と共に生を受けるか、反抗を起こして死を受け入れるか・・・2つに1つだ≫

忠告の言葉を言い出すウゼルは，右手に持っている黄金の聖剣の首飾りを握って前に向ける。
それは『エクスキャリバー』の待機フォルムである。

≪この腐りきったミッドチルダは我々の手によって全てを受け止める楽園と化すのである。今ここに、我等が聖剣の完成し・・・さらに神からさずかった神剣が全て、我等『カリバン』の元にたどり着く時・・・我等はミッドチルダの王に・・・いや神に等しき存在となる！この我等に勝利を導く神剣により！≫

そう言いだすと、ウゼルの聖剣の首飾りが光りだすと、握っていた首飾りは黄金に輝く聖剣と化す。
それを見たスカリエッティは驚きだす。

「黄金の・・・剣？」

ティアナが思わずその名を言い出すと・・・

「おいおい、何かと思えば単なる黄金で作られた宝剣の自慢か？…
…と言ってもウゼルがそんなくだらねぇ事をするはずでもねぇ・・・
・となればありゃ一体？」

銀時もウゼルの持っている剣は何やらデバイスである物と見るが，
今まで見てきた剣よりもかなり黄金に輝く。
源外もただの剣ではないとお見受けする。・・・そしてスカリエ
ッティはしばらく見ると、信じられない表情でその聖剣の名を口に
する。

「……まさか……『エクスキャリバー』！」
「エクスキャリバー？」

スカリエッティの一言に銀時は片眉を上げた。

「埋忠明寿作の最後のデバイス。『七星神刀（しちせいしんとう）』の1つで唯一完成さ
れなかった聖剣のデバイスだ」
「さ・・・最後の七星神刀（しちせいしんとう）！？」

ティアナは驚きを出して叫びだす。
最後の七星神刀（しちせいしんとう）は未完成のままで本来は存在しないはずの幻の剣。
だがスカリエッティはウゼルの持つ剣が間違いなく『七星神刀（しちせいしんとう）』最
後の一刀である。

「そうか・・・奴の真の目的は埋忠明寿の最後の遺産である未完
成状況の『エクスキャリバー』を完成させる為だった訳か。確かに
噂では妙寿が作り出す予定の最後の剣は、『七星神刀（しちせいしんとう）』の中でも最
強の剣であると言われていたようじゃ」
「なぁ！」

「『七星神刀』の中でも最強の剣！？」

『七星神刀』の中でも最強であると聞いて驚く銀時とティアナ。
スバルの『ティルヴィングエア』とアーサァの『ペンドラゴブレイド』でもオーバーSランクは行くのに，ウゼルの持つ『エクスキャリバー』は『七星神刀』の中でも頂点に立つといわれるほどである。

≪最も、ミッドチルダを蝕む幹部官どもは我々にたて突くだろうが、その時ミッドチルダは血塗られてしまうであろう。ふはははははははははははははは！≫

ウゼルがそう言い終わると、

「こいつはぁ、名指しで喧嘩を売られたもんだな」
「上等よ、『エクスキャリバー』だかなんだか知らないけど・・・・これ以上あの男の好き勝手にはさせないわ」

銀時は木刀を握り、ティアナはすぐにバリアジャケットに衣装を変え、『クロスミラージュ』を構える。
すると、モニターが映し出されると・・・・そこにはセインとウィンディが映し出されている。

≪ドクター、大変っす！数多くの謎の飛行物体がこっちに向かってきています！≫

ウィンディが慌しい表情で言い出すと，指を刺して言い出す。
指を刺した場所には天空を舞う城らしき超大型飛行要塞を中心に数多くの巨大な飛行要塞が空に浮んでいる。
そこから無数のガジェットがこちらに向かってきているのが分かる。

≪きっとあれはウゼルの飛行要塞です！おそらくウゼルは無関係な一般人ごとミッドチルダに攻撃しかけて来ます！≫
≪やばいっすよ！ウゼルは本気でやるつもりっす！≫

セインとウィンディはどうすれば良いのか慌てている中・・・・・

「ナンバーズに伝える、機動六課と共に『カリバン』の侵入を阻止して全て撃墜せよ！我々はこれから銀時と共に敵の本局に向かう！」
≪りょ・・・了解　（っす）！≫

モニターが消えると、スカリエッティは準備を始める。

「ウーノはここで機動六課とナンバーズのサポートを頼む！」
「了解しました、ドクター！」

スカリエッティはウーノに機動六課とナンバーズのサポートを命じる。
彼女はナンバーズでもリーダー格である。実務指揮を執るがその戦闘力は低い。
だが彼女の持つＩＳ『不可触の秘書（フローレス・セクレタリー）』はセンサー類の探知を回避するステルス能力と、知能加速・情報処理能力を向上・チューンさせる能力である。

「銀時、源外殿、ティアナ、一刻を争う状況になってきた。ガジェットと戦闘機人は仲間達が何とかしてくれる。その間に我々は敵本陣に突入する」
「だけどどうやって行く？」

スカリエッティは４人と共にウゼルの本拠地に突入しようと考えるが、どうやって行くのか質問する銀時。

そんな銀時に源外が胸を張って言い出す。

「安心しろ銀の字。こんなときじゃからこそ、この江戸随一の発明家であるこの俺の出番だろ？スカリエッティ！今こそあれのお披露目だ！」

「もちろんだとも！」

「あれ？」

源外とスカリエッティはやる気満々で言い出すと、銀時とティアナはあれとは一体なんなのかを気にする。

＊

聖王病院

そこでは大慌てになっている。

病院の医者や看護婦は患者を1人残らずに非難させようとしている。

もうすぐこのミッドチルダ全域が戦場と化すのであるからだ。

そんな中、スバルは1人屋上で空に浮んでいる数多くの飛行要塞を見て悲しそうに眼にする。

「あそこにアーサァがいる。だけど・・・今行った所で私は・・・」

フェイトの足手まといになるだけであった。それ以上に今の自分はアーサァの足元にも及ばない。

剣も魔法もアーサァの方が圧倒的に勝っている。

それでも自分は歯がゆかった。自分のこの力は大切な物を守る為に

身につけたものなのに、今の自分はただ黙って見守るしか出来ない。
日本刀のネックレスを強く握って己の今の存在に強く悔やむ。

「アーサァを救いたい・・・・だけど今の私じゃ・・・・・」

一体どうすればいいのか分からないまま悩む中・・・・

≪Ｉｔ　ｉｓ　ｔｉｍｅ　ｔｏ　ｂｅ　ｗｏｋｅｎ　ｕｐ.　Ａｍａｓｔｅｒ≫

突如、『ティルヴィングエア』は日本刀の形となり、スバルは突如の変形に少し驚きだす。

「・・・・ティルウィング・・・・・・エア・・・・・？」

自分の持っているデバイスの名を言い出すと思い出す。
アーサァに自分自身の存在として生きていく事を教えられて凄く慕われた思いと・・・・銀時に救われて大切な物を守る強さがどれだけ強いかを・・・・
そしてスバルの眼から涙が流れだす。

「・・・・だよ・・・・ね・・・・・・このまま・・・・・黙って・・・・・立ち止まる訳には・・・・・行かないよね・・・・・」

≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ≫

スバルは右手で涙をふき取り、空に浮んでいる飛行要塞を見る。
すると、スバルの体は蒼い光に包まれていく。
そして光が消えると、スバルの衣装はバリアジャケットに変わる。

「アーサァが言っていた私の中に眠る神秘の力・・・・それは私に

も分からない。だけど・・・・今なら分かる。この力は戦闘機人としてでも『タイプゼロ』としてでもない・・・・自分自身だけの力！」

そしてスバルの足元から魔法陣が現れるが、それはいつもの水色の魔法陣ではない。
その魔法陣の色が徐々に濃く染まっていく。その色は蒼くて姉のギンガのより濃い色である。
そしてスバルの体から蒼い魔力が少しずつ溢れ出る。

「もう私は迷わない。本当に大切なものを、この手で守ってみせる。だから・・・・私に力を貸して、『ティルヴィングエア』！！」
≪Ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ≫

そしてスバルの体から蒼い光が放たれる。
その光は周りを全て包み込むかのように強く光り出す。
そして光が消えると・・・・そこにはスバルの姿はいない。

＊

一方のフェイト達は大激戦である。
数多くのガジェットと戦闘機人が山のように襲ってきていることが分かっている。
ガジェットは『鬼兵隊』の作り上げた最新兵器であり、
さらに天空からは数多くの飛行要塞同士が戦っている。
機動六課やナンバーズだけじゃなく、陸士１０８部隊や他の機動部

隊（機動四課は除く）、Ｌ級次元航行船『アースラ』を含めた数多くの戦艦も戦っていた。
地では魔導士達が、そして天では戦艦が戦っていた。
もちろん銀魂メンバーも一緒である。
それぞれバラバラに分かれて戦い、数多くのガジェットと戦闘機人と戦っていた。

ミッドチルダ　第４起動高層ビル

そこにはいまだ逃げ遅れていた人々が数多く存在する。
人々は怯えて慌てて逃げている。
そんな中，２人の少女が５体のガジェットに教われいく中・・・・

「はぁあああああああああ！」

突如、三日月型の金色の刃が５体のガジェットを切り裂く。
そう、ガジェットを破壊したのは他でもない、フェイトだった。

「ここは私達に任せて！早く逃げてください！」

フェイトがそう言い出すと、少女は安全なほうに逃げ出す。
そしてフェイトは、ガジェットと戦闘機人の軍勢を睨みつける。

「うりゃあああああああああああああ！」

アルフも加勢して戦闘機人を次々と破壊する。時には変身して狼となってガジェットを次々と噛み砕いていく。

「ほぉわちゃーーーーーーーーーー！」

神楽は傘を大きく振り回して次々とガジェットを破壊して戦闘機人をも撃破する。その数は誰よりも多いのである。
機動六課最強の名は伊達ではなかった。

「このミッドチルダは『歌舞伎町の女王』である私がいる限り傷つけさせないアル！」

傘を敵軍勢に向け、神楽が言い放った。
それを無視して恐れず神楽を襲いだす戦闘機人とガジェットだが・・・

「サンダー・レイジー！！」

エリオは『ストラーダ』を構え、思いっきりサンダー・レイジーを放った。これにより数多くのガジェット達は破壊される。

「エリオ！」

神楽は援護してきたエリオの名を嬉しそうに呼ぶ。

「神楽さんには指一歩も触れさせはしない！一緒に戦いましょう！」
「追うアル！」

そして神楽とエリオの傘と槍の連携攻撃により、さらに次々と破壊されていく。

「綺麗な薔薇には・・・・」

「棘があるわよー！」

月詠と猿飛は互いに数多くのクナイを一斉に放って数十体のガジェットを破壊し、接近してくる戦闘機人には月詠の小刀と猿飛の体術が連係して返り討ちにする。

「流石は元お庭番衆。以前に出合ったあの忍びに衰えない素早い動きをする」

月詠は猿飛の強さを、以前に地雷亜の件で助けてくれた全蔵と双璧となる実力であると認める。

「貴方に褒められても嬉しくないし、どうせだったら銀さんに褒められたいぐらいよ！むしろ、汚されてみたい！」

M的な発言をする猿飛に少し青ざめる月詠。

「・・・けど今回は貴方とは協力しなくちゃ解決できないようね。あのフェイトって女はまちがいなく私の最大の恋愛敵。それでも始末屋として目の前にいる外道な輩を見過ごす訳には行かない」

猿飛は今回のウゼルの起こした悪党な事件を許す訳には行かなかった。

弱き者を苦しめる外道な輩を退治するためなら自らも外道の道を進むのが始末屋。

例えそれが守るものがフェイト達であろうと外道を倒すのが月詠である。

「弱き者を救う為、自ら外道の道を進むのがこの私、始末屋さっちゃん！」

そう言いながら猿飛はクナイで接近して戦闘機人を破壊し、時には納豆で戦闘機人の顔にぶっ掛けさせて気絶させる。

「たとえそれが恋愛敵でも、私が汚れて誰かを救えるというなら、喜んでこの手を地に染めるわ！」

そして戦闘機人1体を踏み台として猿飛はクナイをさらに大量に放ってガジェットを破壊する。

「お主のやり方には同感じゃ！わっちも日輪を守る為に女を捨て、修羅の道を選んだ身じゃ！今回のウゼルのやり方はわっちも見過ごせぬ！」

外道を進んで民を守る為悪党を始末する猿飛と動揺に、月詠も女を捨てて日輪と吉原を守る番人となった。
月詠も援護してさらにクナイを放って戦闘機人を串刺しにする。

「貴方とはこう言う事は案外気が合うわね・・・・だったら目の前にいる敵は1人も残さず始末しまくるわよ！」

2人の美しき女が共鳴し合うかのようにさらに暴れまくり、次々と敵をなぎ倒していく。

「フリード！」

キャロは『竜魂召還』で、詠唱と共にフリードリヒをチビ竜から真の姿『白銀の竜（飛竜）』に召喚が召喚される。
そしてフリードは口からブラストフレアを放って次々とガジェットと戦闘機人を破壊していく。

「同じ戦闘機人でも！」
「容赦はしない！」

トーレとディードは『インパルスブレード』と赤い光の双剣で、戦闘機人を切り裂いていく。

「はぁあああああああああああああ！」
「おりゃあああああああああああああ！」

ギンガとノーヴェは連係しあって『ウィング・ロード』を放って『ブリッツキャリバー』と『ジェットエッジ』で滑り出し、次々とガジェットを破壊していく。
隠れていたところに2人の戦闘機人が奇襲攻撃でフェイト達を攻めようとするが、

ザクリ！

1人の戦闘機人が突如、後ろから何者かに突き刺されてからだが貫通される。
実はその正体は姿を変える変装能力「＞ＲＵＢＹ＜＞ＲＢ＜偽りの仮面＞ＲＴ＜ライアーズ・マスク＞／ＲＵＢＹ＜」で変装していたドゥーエであった。

「悪いけど、貴方達『カリバン』の思う通りにはさせないわ」

そう言ってドゥーエは血に染まった『ピアッシングネイル』を構え、フェイト達の加勢に向かう。

＊

聖王教会

この教会には数多くの避難民が地下に非難していた。
クアットロ、アギト、カリムは逃げ遅れた避難民を教会に連れて救助している。
クアットロは流石に今回のウゼルのやり方が気に食わない為、救助活動を手伝っている。
幻想でスカリエッティ作のガジェットで戦闘機人とガジェットの注意を払ってその隙に避難民を連れて逃げている事が多い。
そして数多くのガジェットが中心となって襲ってきているが・・・・

「ディバイン・バスター！」

なのはが『レイジング・ハート』から桜色の魔導砲を放ち、１０体以上のガジェットを破壊する。

「チェーン・バインド！」

そこでユーノが大量の魔力の鎖を放って数多くのガジェットの動きを封じる実はようやく機動六課にタイミングよく戻ってきて、それでなのは達の援護をした。

「まとめてぶちこんでやるぁあああああああああ！」

ヴィータは８つの鉄球を出し、グラーフアイゼンを振って全てを打ち放った。全ての鉄球は命中し、ガジェットを破壊した。シグナム

と九兵衛は互いに行きピッタリにガジェットを次々と切り倒す。

「『レヴァンティン』！」

シグナムは『レヴァンティン』を連結刃形態『シュランゲフォルム』と変形させ、ヘビのような動きで次々と切り倒す。

「貴様等の好きにはさせない！」

九兵衛もスバルに勝らない神速の剣技で次々とガジェットを斬る。
そしてガジェットは左右から大砲を表し、一気にレーザー光線を放つが・・・・

「そうはさせん！」
「風の護盾！」

ザフィーラは方向を上げ、地面から光の柱が現れる。シャマルも大量の防壁を展開させる。
2つの壁が全てのレーザー光線を防ぐと・・・・

「今だ、セッテ、ウィンディ！」
「了解！」
「分かっているッス！」

ガジェットの大群の背後からセイン、ウィンディ、セッテが現れる。
セインのディープダイバーで、地面の中を移動してガジェットの大群の背後の地面から出たのだ。
セッテが、ガジェットに目掛けて『ブーメランブレード』を放つ。
高速で飛来してくる『ブーメランブレード』が次々とガジェットを一閃して破壊する。

そして『ブーメランブレード』は、セッテのＩＳ『スローターアームズ』で軌道を変えてセッテの元には戻らずにそのまま追撃してガジェットをさらに多く破壊する。
ウェンディは『ライディングボード』の砲身からエネルギー砲を放ち、一気にガジェットは数体も破壊する。

「行って」

ルーテシアがそう一言を言うと、召喚されたガリューは素早い動きで腕から伸びる長大な爪で次々とガジェットを破壊していく。

「全てを駆除する！」

シャッハは『ヴィンデルシャフト』を振り回し、次々と撃墜していく。

全てのガジェットの破壊が成功したら、次のガジェットの大群が現れる。
だが・・・・・

「消えなさい！！」

紫色の極大な雷が無数にガジェットの前に落ちた。
その威力は間違いなくなのはの『スターライト・ブレイカー』も引けをとらない威力であった。
そしてなのは達は声が聞こえた方向に振り向くと・・・・、そこには杖を持ったプレシアがいた。

「プレシアさん！」

なのはは驚いて大きく呼ぶ。

「うひゃー！流石、大魔導師！」

「頼もしい助っ人が来たっす！」

セインもウィンディもプレシアの圧倒的な強さに驚きを隠せなかった。

もちろんセッテも同感である。

「フェイトから聞いたわ。この状況をほうっておく訳には行かないから助太刀するわ・・・・さぁ、1人残らず返り討ちにするわよ！」

「はい！」

プレシアの活を入れるかのような一言で全員返事をする。

＊

ミッドチルダ　臨海第2空港

空港の外には数多くの戦闘機人が桂、エリザベス、はやて、リィン、辰馬、近藤を囲んでいる。

「ふ・・・この程度で我々を囲んだつもりか？」

桂は懐に手を忍ばせた。そして『んまい棒』を取り出した。

そして辰馬もいつもとは違う雰囲気を表している。下駄を脱ぎ捨ててサングラスを取り外し、ポケットに入れると・・・・

「エリザベス、刀はあるじゃろ？ワシに貸してくれんかのう？」
『ＯＫ』
すると、エリザベスは口から刀を取り出して辰馬に渡す。
その様子に桂が意外そうに驚く。
「お前が剣を握る日が再び来るとはな・・・・・」
「もう戦がごめんじゃから捨てた・・・じゃけんのう、これ以上のウゼルのやり方を・・・黙ってみておく訳にはいかんぜよ」
「同感だ・・・ならば行くぞ！」
桂が大きく言い出すと、はやて達は頷く。
「んまい棒、鎖羅魅（サラミ）！！」
んまい棒を床に投げ、屋上は煙に包まれた。
突然煙に包まれ、戦闘機人達は混乱する。
すると丸い玉のような物が戦闘機人達の前に投げられ、玉に表示されている数字がゼロになった瞬間、
ドカァアアアアアアアアアアン！！
玉は大爆発を起こし、戦闘機人達は吹き飛んだ。
爆発で煙も消え、そこから桂と近藤が戦闘で斬りかかる。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」
桂は銀時に衰えない剣裁きで次々と戦闘機人を斬り倒し、近藤も力ある剛剣で戦闘機人を一刀両断する勢いで斬り倒す。２人とも敵対

関係とは思えない息の合ったコンビネーションを披露する。

「桂ァァァァァァァァァァァ！！！」
「なんだ近藤ォォォォォォォォ！」
「またお前と共に戦うとは思いもよらなかったァァァァァァァァァァ！」

何かを叫びながら次々と切り倒していく桂と近藤。
その数は2人を合わせてもう５０は達成する。

「何も恐れる事はない！！」
「俺達はこの世界を守るただのハンター！」

そして互いに一歩大きく地を踏み入れ・・・・

「（グレートフルーツポンチ侍）（グレートフルーツチ●ポ侍）だ！！」

大きくダッシュして互いに大きく一振りをすると、２つの太刀から放たれる衝撃は斬るだけじゃなく数多くの戦闘機人達を吹飛ばす。

『おるぁあああああああああああああああああ！』

そうか狩れたプラカードを豪快に剣のように振り回しながら、エリザベスも続くかのように次々と戦闘機人を破壊していく。
後ろからの奇襲も回転蹴りをお見舞いして返り討ちにする。

「リィン、私達も行くで！」
「はい、はやてちゃん！」

リインは、はやての目の前に移動した。

「ユニゾン・イン！！」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。
やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現した。ユニゾンによって、髪の色が少し薄くなっている。
そしてはやて前に魔方陣が出現する。

「ラグナロク！」

その魔法陣から強大な魔導砲が放たれると、一気に数多くの戦闘機人を倒す。
そしてリィンフォースも反対側から魔法を放つ。

「デアボリック・エミッション、闇に、染まれ！」

掲げた手の上に球状の魔力を発生させ、それを一気に巨大化させて範囲内を魔力爆撃する。
その威力はかなり大きく、一気に３０人以上の戦闘機人が破壊された。

このメンバーだけでも一気に解決できそうだが、何より驚くのは辰馬だった。

「久し振りの大暴れじゃァァァ！」

大きく飛翔して身を回転させながら一気に兜割りのように戦闘機人を一刀両断する。
さらに隙を与えずにすぐに目の前にいる戦闘機人を２・３人は斬る。

そしてそのままダッシュして次々と戦闘機人を斬りまくっていく。
腕はなまっている為かその剣は銀時と桂にわずかに衰えている。
それでも鬼神のごとくの戦いぶりは戦闘機人達に恐怖を言わせるばかりぐらいに暴れまくる。

「かぁー、辰馬の旦那やってくれるぜぇ！っしゃ、俺も行くぞぉ！」

ヴァイスはかなり離れた場所から『ストームレイダー』を打ちまくり、次々と戦闘機人の頭をぶち抜いた。

「哀れな戦闘機人達だ。せめて安らかに眠ると良い」

オットーはそう言い、『レイストーム』を問答無用に放って次々と戦闘機人を倒しまくる。
その隣ではディエチが『イノーメスカノン』からエネルギーを収束するしている間に１０人以上の戦闘機人が襲い掛かってきた。
オットーが返り討ちにしようとするが・・・

「てやぁあああああああああああああああああああああああああ！！」

突如、山崎が飛びかかって二刀流を炸裂させ、デタラメに振り回すが力が入っていて、襲ってきた全ての戦闘機人達をなぎ払うかの様に吹飛ばす。
両手に持っているのは、右手にミントンラケットを持っていて左手には刀を持っている。

「何でミントンラケット？」

オットーは哀れみにツッコム。

だが今の山崎の強さは土方と沖田に次ぐほどの力を発揮していた。

「山崎さん！」

ディエチは山崎に助けられた事で驚きだす。
普段の山崎は戦いに関してはナンバーズよりかなり衰えており、そんなに強くはないと思っていたが・・・・今の山崎の姿は全くの別人に思えた。

「ディエチちゃん・・・・俺はこう見えても頼りがない地味な男だよ・・・・けど、そんな僕でも侍だ」

山崎はミントンラケットと刀を強く握りだす。

「侍は、普段では一般人と変わりはない。でも、大切なものを・・・・ましてや大切な女の為に戦う為ならば・・・・・たとえ地味野朗でも、１００倍以上に強くなれるんじゃぁあああああああああああ！」

そう叫びだすと山崎はミントンラケットと刀を構えて、素早い動きで次々と戦闘機人を吹飛ばす。
本来山崎は一刀流で普段は二刀流は出来ない。だがディエチと言う女と出会い、お互いに一目惚れになった。
それと同時に山崎の中に新たな力が芽生えた。（言うなれば愛の力？）
次々と戦闘機人を倒しまくる。

山崎の魂の叫びを聞いたディエチは少し顔を真っ赤になり、オットーは唖然としていた。

「・・・なるほど、侍は強しって感じだな・・・・で、その侍に守られている人が何ボーっとしている？」

オットーにそう言われると、ディエチは我に返ってディエチは『イノーメスカノン』を構えて撃つ。

「ターゲットロックオン・・・・発射！」

そして『イノーメスカノン』から巨大なエネルギー砲が放たれた。その威力はなのはの『エクセリオンバスター』と互角であり、３０体以上の数多くの戦闘機人が吹飛ばされて行く。

＊

皆それぞれ戦っている中、銀時、ティアナ、源外、スカリエッティはと言うと・・・・

「どきやがれ、ガラクタ共ぉ！」

源外が荒っぽく言い出すと、何やら飛行物体を運転していて次々とガジェットをひき当て破壊していく。

実はこれこそが源外とスカリエッティが開発した新型飛行ガジェット、『ガジェット・スカイバード』である。

戦闘機のような形でレーザー光線はもちろんミサイルも８発分は付いている。そしてさらにはその速度は通常の戦闘機より５倍速いのである。

しかも陸戦様としてもキャタピラーが付いている。

「ははははははははははははははは！見たか鬼兵隊よ！君達の技術で作られたガジェットなど、私達のガジェットにかかれば一撃粉砕さ！」

「要塞・大砲・キャタピラ・・・・これが男の機械（からくり）じゃあああああああ！」

愉快そうに笑い出す源外とスカリエッティに対し・・・・

「ジジイ共ォォォォォォォ！男の機械（からくり）は結構だがもうちょっとデリケートな運転できねぇのか！？」

「落ちる落ちる落ちるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

源外の荒っぽい運転に銀時とティアナは落ちそうになっている。

「安全な運転で命が助かるなら最初からそうしているさ！でも今回ばかりは一刻も争うのだよ！だから危険を冒してまでやらなきゃ行けない事もあるのさ！」

「前にも言ったが機械（からくり）の扱いは喧嘩と同じよ！ナメられたら終めーだ！」

2人がそう言うと前から鬼兵隊作のガジェットが無数に現れるが、レーザー光線を放って返り討ちにする。

そして後ろからも現れると・・・・

「銀の字！少しお前の木刀を改良させてもらった！その木刀の柄を押せェェェェ！」

「おい、まさかまた醤油じゃねぇだろうな！」

「良いから押せェェェェェェ！」

源外に大きく命令され、銀時は「しゃあねぇ！」っと言って立ち上がり、木刀をガジェット達に向けて柄を押すと・・・・

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

ぴゅう！

木刀の先から黒い液体が出る。

銀時はもちろんティアナも唖然とする。

「砂糖醤油が出る」

「やっぱり醤油かい！」

怒鳴ってツッコム銀時は八つ当たりにガジェットを全てなぎ払う。

「何で醤油！？これただの醤油出る棒といっしょじゃない！」

額に青筋を浮かべて怒鳴りだすティアナ。

「時間がなかったんだ。それになぁ、銀の字は甘いものが好きだからあえて砂糖醤油にしたんじゃ。改造してやっただけでもありがたく思え」

「ありがたくねーよ！好物を利用された気分で最悪な悪戯だろうがァ！」

源外の改造に銀時が怒鳴る。

そして目の前にはウゼルがいる超大型飛行要塞の門の前が見える。

本当の戦いはここから始まるのであった。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

九兵衛
「巨乳より貧乳を愛する諸君、待たせたな。今回はこの柳生九兵衛がアシスタントをしよう」

銀八
「お前、早速キャラ崩壊しかかっているなぁ！・・・・まぁ良い。じゃあまずはこの人の質問だ、ペンネーム『カラー』さん『以前ファンクラブの質問をしましたが、フェイト達自身でファンクラブを立ち上げたりしないんですか?また、誰がどういった役職につくか教えて下さい。（例…フェイトが会長とか）』・・・・いや、フェイト達は立てないと思います。なぜなら独り占めするつもりですので」

九兵衛
「あの男も罪になったものだ」

銀八
「まったくだ！・・・っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『神威　銀時』さん。『質問です。その1、『SOS学園』と言うカオスな学園ものを投稿しているんですがそこで銀時となのはの関係をリリカル組＋猿飛がみたらどんな反応しますか?その2、ユーノは無限書庫の仕事の方は、どうしてるんですか?クビになったんですか?』1は次回、その返事が来ますのでお楽しみ。2はユーノの話だとちゃんとしているようです」

九兵衛
「ほう、それは次回が楽しみだ」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、次回をお楽しみ」

九兵衛
「次は、『ウッソ・エヴィン』さんの質問『？黒神さん，ティアナさんに向かった放たれた「スターライトブレイカー」ですが当たりましたか？？なのはさんに「銀時さんが『なのは・・・俺はお前の事をいつまでも愛そう』って言っていましたよ！！！」って言ってしまいました．銀時さん．嘘にならないようになのはさんに言ってあげてください。（他の人にばれないようにお願いします．じゃないと写真まで上げたのでフェイトさんたちに殺されかねないので）』」

銀八
「ずばり答えます・・・？もう当たりました。？は・・・・・実はそうさせないために俺がなのはに真実をばらしています」

九兵衛
「最悪だな、君は！・・・・まぁ、この小説にまだ出ていない新は・・・メガネザルよりはマシか。（微笑）」

銀八
「おいィィィ

で安心してください」

眼鏡に対しては相変わらず冷たい態度を取る九兵衛。

九兵衛
「次行こう、ペンネーム『武士堂』さん。『本気を出したアーサァとスバルが鳳仙と戦って勝てる確率はどれくらいでしょうか？』」

銀八
「そうだな・・・・まぁはっきり言って鳳仙の勝利する確立が高いな・・・・」

九兵衛
「そんなに強い相手か・・・・っと言う訳で『武士堂』さん、鳳仙の出番を待っててください」

銀八
「んじゃ次ぃ、ペンネーム『風花』さん。『？私の小説であなたのなのはさんやフェイトさんを出してもよろしいでしょうか？？銀さんはよく下ネタをいっているんですがなのはたちにきらわれたりしないんですか？』・・・・1つは別に良いですよ？ただ、そっちの小説は銀時は出ないんでなのはとフェイトを出しても変わらないんじゃねぇの？そんでもう1つはそんなに言わないので滅多には嫌われません」

九兵衛
「滅多にって・・・言うこと事態が問題じゃ？」

銀八
「大丈夫だろ？っと言う訳で『風花』さん、これからも頑張ってく

ださい！じゃあ次ぃ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『１．Ｓｔｒｉｋｅｒｓの終盤に出てきたゆりかごは出しますか２．ヴィヴィオはだす予定はありますか３．なのはさん以外に質問ですなのはの弱点は知っていますか。』・・・１つは分かりません。２は出すつもりです。３は知っていたらすでにやっています。つまり彼女等は知りません」

九兵衛
「なるほど」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい」

九兵衛
「次も行くぞ。ペンネーム『クアンタ』さんの質問。『本気になったアーサァと神威がやり合ったらどちらが勝ちますか。』・・・・銀八先生はどう思う？」

銀八
「どっちかと言うと、２人とも互角なので分かりません。っと言う訳で『クアンタ』さん、どっちが強いかは想像してみてください！次ぃ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目　『スバル編』は本家銀魂でいう『芙蓉篇』のオマージュとして考えたものですか？二つ目　以前レジアスを生存させてほしいというリクエストがありましたね？彼の生存は無理だと思いますがオーリスはどうなのですか？『白夜叉鎮魂歌』では父親と共に悲惨な最期を遂げましたがこの作品ではなんとか生き残ってほしいものです。』・・・・１つは『芙蓉篇』を参考にして書いていますが、それは７割で３割は『月詠編』をオマージュしていると思います。そんでもう１つ、オーリスは死なないと思います。っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、

廊下に立っていなさい」

九兵衛
「次はこの者だ。ペンネーム『烈火竜』さん。『ナンバーズに質問です。近藤さんが脱糞した時、皆さんはどうしましたか？』」

銀八
「おそらく軽蔑しましたでしょう」

九兵衛
「確かに・・・・・」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、ゴリラ見たいにはならないでください。次行くぞぉ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『銀八先生のおちん○んをファイナルヒュージョンしてくれる女性はいるんですか？』・・・・ってふざけんなぁ！」

怒り出して質問を破る銀八に九兵衛は唖然とする。

銀八
「『正宗の胃袋』！一生廊下に立っていろぉ！」

九兵衛
「全くなさけない・・・次が最後、ペンネーム『アクセル』さん。『この小説に結野衆の皆さんは出るんでしょうか？特に結野アナが出たらフェイト達はとんでもない危機感を感じると思います。』」

銀八
「そうだなぁ・・・ある特定の人物は出す予定です」

九兵衛
「ある特定の人物？」

銀八
「まぁ、いずれ分かるさ。っと言う訳で『アクセル』さん、その時までお楽しみ！」

第四十六訓：人にはそれぞれ自分自身のこだわりを強く持っている（後書き）

黒神
「ああ、酷い目にあった。そろそろ次回予告を・・・・」

作者は背後からとてつもない殺気を感じ取ると・・・・そこには白い悪魔ごとなのはがいた。

なのは
「にゃはははははは・・・・みぃ～つけたぁ～」

黒神
「あ・・・あのう・・・・なのは・・・さん？・・・・今日はどういう条件で？」

なのは
「銀八先生から聞いたよ？・・・・よくも私の乙女心を弄んでくれたわね？」

するとなのはの『レイジング・ハート』からとてつもない魔力が収束されている。
気のせいかその魔力は桜色から徐々に黒と真紅の混色となる漆黒の魔力と化している・・・・・・

黒神
「あ・・・あのう・・・・なんかパワーアップしていません？」

なのは
「にゃはははははは！今回はウッソ・エヴィンさんにはお仕置きは

しないよ・・・代わりその分だけ作者には『永遠にすんごく頭を冷やしてあげるの』♪」

黒神
「うそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

黒神は慌てて逃げようとするが・・・・・
もう遅かった。

なのは
「デスペレード・デモンブレイカー！」

漆黒の魔導砲は『スターライト・ブレイカー』の3倍はあると思わせるほどの威力を持ち・・・・・

黒神
「あぁぁぁ

第四十七訓：やる気を起こしたい場合はお気に入りのＢＧＭを流すのが一番（並

フェイト・アルフ
「作者ー！」

ドカァ！

黒神
「ごふぇあああああああ！」

突如、フェイトとアルフのダブルドロップキックが炸裂して作者を吹飛ばす。

黒神
「いきなり何！？」

フェイト
「いきなり何・・・じゃないよ！貴方のせいで神威　銀時さんが『ＳＯＳ学園』でとんでもないストーリーを作ったのよ！」

黒神
「神威　銀時さんが？・・・ああ、なんだっけ？」

ティアナ
「何で兄さんとなのはさんが恋人設定なのよ！？どういうわけかきっちり聞かせてもらうよ！」

黒神
「いや、その設定作ったのは神威　銀時さんで僕には全然関係は・・

・・）

シグナム
「あるわー！貴様がなのはの扱い方が原因で神威　銀時さんがその設定を作っただろうがぁ！」

ティアナやシグナムも怒りの頂点に達しており、後ろにはリィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、猿飛が固有武装やクナイを構えている。

リィンフォース
「さぁ～くぅ～しゃぁあああああああああ！！」

チンク
「死刑決定だ」

セイン
「生き地獄を見せてやるよ」

セッテ
「肉片の一欠けらも残さない」

ウィンディ
「マジムカついたっす」

ディード
「思いっきり切り裂いてやる」

猿飛
「ターゲットの始末を開始する」

黒神
「ま・・・まって！とりあえず落ち着こう！ね・・・ね！」

フェイト達の異常な殺気に怯える黒神だが・・・・・

フェイト・アルフ・ティアナ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛
「問答無用じゃぁあああああああああああああああああ！」

黒神
「あああぁぁぁ

ユーノ
「黒神、ぶっ殺す！神威　銀時もマジぶっ殺してやるぅ！（怒）」
怒気を放って叫びだすユーノも黒神のところに駆けつけてボコボコにする。

銀時
「おいィィィィィィィィィィィィ！ユーノが暴走しちゃったよ！なのはぁ！何とか止めてぇ！」

なのは
「にゃはははははははははは♪『リリカル銀なの』始まります♪／／／」

銀時
「なのはぁあああああ！」

第四十七訓：やる気を起こしたい場合はお気に入りのＢＧＭを流すのが一番

ついに銀時達はウゼルのいる超大型飛行要塞の門にたどり着いた。
『ガジェット・スカイバード』の前についている大砲から砲弾が発射され、門を無理矢理に穴を開ける。
そしてその穴から銀時達は侵入した。要塞内は正に機械で作られたと思わせる雰囲気である。

襲い掛かってきているガジェットもそんなに多くはないため、銀時が木刀でなぎ払い、ティアナが『クロスミラージュ』で魔力弾を打つ。

「ガハハハハハハハハハハハ！かかってきやがれ！雑魚ガジャットなど一毛打順よ！ここはどうやら近道だろう！要塞内は警備が手薄のようだ！たとえ敵が出てきてもそれほど厄介な相手はいな・・・」

愉快そうに言い出す源外だが・・・・

「源外さぁぁぁぁぁぁぁぁん！？」

ティアナが大きく叫びだすと、後ろから巨大なガジェットが現れた。
そのガジェットは人型で何やら殿方の和服を身につけている。その大きさはカラクリ家政婦の参丸七號，通常『ウドちゃん』並である。

「どこが近道よ！って言うより何あのデカ物！？」

青ざめてツッコムティアナに対し、スカリエッティは巨大ガジェットを見て驚く。

「あれは・・・対戦艦用に以前に私が作ろうとしたが、作るのを中断したはずの『トヨトミ・ガジェット』通常『ＢＡＳＡＲＡ覇王』。オーバーＳランク級の魔法攻撃をも防げる『ＡＭＦ』を装備されている上にその強さは超大型戦艦をも破壊できる破壊魔神だ」

「何『戦国●ＡＳＡＲＡ』にでてくる人物をイメージして作ろうとしてんだぁ！つうか何で豊臣秀吉を知っている！？」

「まさかとは思うが，あれは『鬼兵隊』が作り上げたガジェット！？・・・まさかここまでガジェット技術が進んでいるとは・・・・」

スカリエッティは『鬼兵隊』のガジェット技術に驚きだす中、『トヨトミ・ガジェット』が大暴れする如くに銀時達を襲いだす。

「いぃぃやぁあああああああああああああああああ！源外さん何とかしてぇ！」

絶叫して叫びだすティアナ。

そして源外は・・・・・

「妹の字！『クロスミラージュ』の×のマークを押せ！」

っとティアナに叫びだす。ちなみに『妹の字』とはティアナの事を意味している。

実はティアナの『クロスミラージュ』にも興味を持って少し改造したのである。

「ちょ・・・まさか私のほうも」

「安心しろ！お前さんのは醤油が出るのじゃねぇ！もっと面白いものだ！」

その言葉を少し信じてティアナは『トヨトミ・ガジェット』に向けて『クロスミラージュ』を構えて×のマークを押す。

「ウォオオオオオオオ！」

ぴゅう！

出て来たのは確かに醤油じゃない。何故かオレンジジュースであった。

「オレンジジュースが出る」

「何でオレンジジュースゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！？」

青筋を浮かべて怒鳴りだすティアナ。

「だってお前さんって魔力って言うもんの色はオレンジだろう？だからオレンジジュースが好きかと思って・・・・」

「別に好きじゃないわよ！何の役に立つって言うのよ！これさっさと戻してよ！」

怒鳴りだして源外に『クロスミラージュ』を向けるティアナ。

「良いなぁ。俺なんかただの『醤油が出る棒』なんだぜ？なぁ爺さん。今度イチゴ牛乳がでる木刀とか作ってくれねぇか？」

「兄さん、それ絶対におかしいから止めたほうが良いよ！」

銀時達がギャーギャー騒いでいるうちに『トヨトミ・ガジェット』が襲い掛かってくる。

「スカリエッティ！」

「承知した！」

スカリエッティはＤＶＤらしき物を取り出してＣＤにセットする。
すると銀時とティアナの後ろからガジェットが現れる。

「おおぉ、コイツはまさか！」

そのガジェットから特殊なレーザー光線を放つと銀時は一瞬思った・
・・・が・・・・

パン　パッパパパン　パパパッパパカン
パン　パッパパパン　パパパッパパカン
パッパパパ　パパ　パパーカーン
ドゥルルルー　ドゥルルルー
ドゥルルルル　ドゥルルルル　ドゥッドゥルルルー
ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥ　ドゥルルルー

「って、またロッキーかいぃ！！！！」

額に血管を浮かべて怒鳴る銀時に唖然と呆れるティアナ。

「ねぇ兄さん。源外さんってこう言う人なの？」

「・・・ああ、江戸随一のカラクリ師だが発明するのは大抵はどうでも良いもんばかりだ。つうかなんでまたロッキー？」

銀時が源外に聞いてみると・・・・

「聞いているだけでやる気が出てくるだろ？」

「これただの音楽再生機じゃない！！」

ティアナが額に血管を浮んで怒鳴りだすと・・・・

≪フェニス～もんじゃ～！フェニス～もんじゃ～≫

「しかもこのガジェットは歌うだけぇ！？うろ覚えじゃないのよ！何フェニスって！？」

「なんか腹立つだけで全然戦意昂揚しないんだけど！！」

歌うガジェットにツッコむティアナと怒り出す銀時。

そんな間に徐々に『トヨトミ・ガジェット』が近づき、そして一気に剛拳を振り下ろそうとするが・・・・

ガシャアアアアアアアアアアアアアアアンン！

「！？」

突如『トヨトミ・ガジェット』の背後から蒼い閃光が貫通してきて、『トヨトミ・ガジェット』は大爆発する。

そして蒼い閃光はそのままものすごいスピードで銀時達を抜いて先に敵本局に進む。

銀時達は一体何があったのか驚きだす。

「に・・・兄さん・・・・今のって・・・・・」

ティアナは驚いた表情で銀時に聞きだすが・・・・

「わかんねぇ。だが今の魔力はどっかで感じたような・・・・」

身を覚えのある銀時だが上手く思い出せない。

「いずれにしても危機は去った。じゃがここから先はかなり危険だそうだ。覚悟を決めろよ！」

源外がそう言うと，銀時達は先ほどの蒼い閃光を追うかのように前へと進みだす。

＊

ミッドチルダ　第４起動高層ビル

一方の桂達は鬼神の如くの強さで次々と現れてくる戦闘機人を破壊していく。その敵の数は後わずかであり，このまま行けば全滅であると思ったそんなときであった。

ドォォォ

「あ・・・・アイツはまさか鬼獅子!?」

驚いた表情で近藤は叫びだす。

「知っているのか、近藤!?」

「ああ・・・・奴は煉獄関と言う裏の闘技場で俺達新撰組が捕まえた重罪違法人物の1人!以前に斬首されて死んだはずなのに・・・・何で!?」

死んだはずなのに生きている?

そんな馬鹿な話があるはずがない!

っと誰もが思ったその時だった。

(もしや!)

桂はある事を思い出した。

それは以前に死んだはずの似蔵が生き返った理由を高杉から言われたことである。

~~~

「くくく・・・・・それがあり得たんだよ。失われた秘法を用いる約束の地『アルハザード』でな」

~~~

そう、高杉から言われた死者を蘇らせる秘法によって似蔵が生還した事を。
もしかすれば鬼獅子って人物も・・・・

「どこにいる・・・・どこにいる白夜叉ぁーーーーーーーーーー!!」

鬼の如くに怒気をつめて叫びだす鬼獅子。
その咆哮は全てを圧倒するかのように威圧感を放ち、桂達を圧倒する。
臆しながらも機動部隊の隊員たちは・・・・

「う・・・・撃てぇ!」

デバイスから魔法を放つ。
無数の魔力弾が一斉に鬼獅子を襲いだすが・・・・

「がぁあああああああああああ!」

金棒を豪快に振り回してその衝撃が全ての魔力弾を打ち返し、魔導士達に直撃する。

「ぐぁあああああああああああああああああああ!」

次々とやられていく魔導士達を見てはやては・・・・

「みんな!・・・・うそやろ・・・・立った一振りで・・・・・」

あり得ないっと驚きだすはやて。

そして次々と魔導士達を鬼の金棒で吹飛ばして倒していく鬼獅子。
これ以上の鬼獅子の攻撃を防ごうと辰馬が・・・・

「そこまでじゃあ！」

思いっきり飛翔して剣を縦一閃に振るう。
鬼獅子は危機を為し遂げてその攻撃をかわしだす。

「がぁあああああああああああ！」

怒り出す鬼獅子は金棒を豪快に横に振るうが、辰馬は交わして後ろにバックする。

「侍めぇ・・・・1人残らずこの手で殺してくれるわぁ！」

鬼の如く、さらに吼える鬼獅子。
桂は刀を構えて攻めようとするが・・・・

「桂！1人では危険だ！ここは一斉にかかったほうが良い！どうして生き返ったかは知らないが・・・・奴はあの宇宙三大傭兵種族の一角、『茶吉尼（だきみ）』！夜兎族と並ぶ強豪種族だぞ！」
「なぁ！？」

それはつまり，神楽のようなデタラメな戦闘力を持っている上に『アルハザード』の力で生還された為パワーアップしている。それはゾーマ級の実力を考えても良いと思い込む。

「だからここは力を合わせて戦うしかない！」
「承知した・・・・八神殿！俺と近藤、そして辰馬の3人がかりであの者を引き止める。八神殿は強大な魔法を奴にぶつける準備を頼

む！」
「了解や！」

桂と近藤は一斉に鬼獅子に突撃すると、一斉に飛びかかって刀を振るう。
いかに夜兎族に匹敵する茶吉尼族と言えども2人の強力な一撃には返り討ちには出来ず、防ぐしかなかった。
山崎、ディエチ、オットーも加勢したいが戦闘機人が邪魔で助太刀が出来ない。
辰馬も背後から剣を振り、鬼獅子の背中を狙い斬ろうと考えるが・・・攻撃は交わされる。

「あああああああああああああああ！」

金棒を豪快に振るうと、その衝撃が辰馬を襲うが辰馬は交わして桂が爆弾を投げるが金棒で打ち返され、近藤に向かって来るが近藤は一刀両断に斬り、2つに割れた爆弾は後ろで大爆発する。

「おおぉおおおおおおおおおおおおおおおお！」

桂、近藤、辰馬は一気に鬼獅子を攻め込む。
3人と互角に戦う中、突如奇襲攻撃に気づいた鬼獅子は攻撃を交わすようにバックすると、魔力弾が振ってきた。
実はこれはヴァイスの『ストームレイダー』で撃った魔力弾であった。
魔導士達も魔力弾を撃とうとするが・・・撃てば桂達に当たる。
そしてその隙にはやてはありったけの魔力を溜める。

≪はやてさん、今です！≫
「了解や！」

『ラグナロク』をうとうとした瞬間、鬼獅子は桂、近藤、辰馬を金棒で大きく振り払って吹飛ばす。

「桂さん、近藤さん、辰馬さん！」

はやては絶叫して三人の名を叫ぶ。
そして戦闘機人と共に，そのままはやてに突撃する。

「八神殿！」

桂が無理矢理体を起こし、走り出しながら懐から『んまい棒』を取り出して投げる。

「んまい棒、縄津闘雨（なっとう）！」

桂が思いっきり鬼獅子に新作『んまい棒』を投げつけると、そのんまい棒は爆破するかのように納豆のようなねばねばな糸を放ち、鬼獅子の体を巻きついて身動きを止める。

「な・・・なんだこれは！？」

もがこうとするが中々身動きが取れない。隣にいる戦闘機人もそうであった。

「今だ、八神殿！」
「ラグナロク」

桂が叫びだすと、はやては魔法陣から再び強大な魔導砲を放った。
しかもさっきより魔力を込めた為、その威力はなのはの『スターラ

イト・ブレイカー』に匹敵する。これを喰らえばいくら鬼獅子といってもひとたまりもない。
・・・だが

「ちぃ！」

鬼獅子は近くにいる戦闘機人3人を金棒でボールの用に打ち、迫ってくる魔導砲に吹飛ばす。
これには桂、はやて、近藤、辰馬、ヴァイスは驚きを隠せなかった。
そしてその魔導砲に直撃すると・・・・

ドカァアアアアアアアアアン！

魔導砲は誘爆して消え去った。
そして盾代わりとなった戦闘機人は残酷な傷跡を残してで黒漕げとなった。

「仲間を・・・・盾にしただと？」

ヴァイスはあり得ないというばかりに驚く中、はやては鬼獅子に言い出す。

「何でや・・・・何で仲間を盾にしたんや！その人達はアンタの仲間なはずや！？」
「仲間・・・可笑しな事を言い出す娘だ・・・」

呆れたように鬼獅子は溜息を吐く。

「俺は高杉とか言う人間に機動六課の追撃を命じられただけだ。そこに白夜叉がいると聞いてやってきた。この戦闘機人と言う者は、

ウゼルと言う者が機械技術（からくり）で生み出された・・・・哀れなる生きた道具に他はない！」

「！？」

鬼獅子の卑劣な発言に・・・

「あんたぁ！」

「貴様ぁ！一度は死んだ実でありながらも命の重さを軽く言い出すとは・・・・許せん！」

「お前さん・・・・根元が腐ってるぜよ・・・・・」

はやて、近藤、辰馬も怒り出して鬼獅子を睨みつける。

先ほどの爆破で自分も少し火傷を負ったが、それが幸いとなって粘々な糸が消えて動ける。

「アイツ・・・・もう生かしておけねぇ！」

ヴァイズもご立腹で怒りだし、『ストームレイダー』を構えて鬼獅子の頭を狙おうとするが・・・・ある人物の異変に気づいて撃つのを止め、驚きだす。

「さっきは良くもやってくれたな・・・・貴様等には死んでもらおうか！」

金棒を構えて戦闘態勢に入るが・・・・

ズバァーン！

何やら刀が振るう音速が聞こえだす。すると鬼獅子の両腕がないのであった。

正確にはないのではなく、刀で斬られて金棒を握っている両腕が天空に舞い上がっている。
そして金棒が地に落ちると、鬼獅子の斬られた両腕から血が噴射する。

プュウウウウウウウウウウウウウウウウ！

「ぐぁあああああああああああああああ！！」

突如の激痛と腕を切断された驚きに叫びだす鬼獅子。
はやて、近藤、辰馬、ヴァイスは突如の光景に驚きだす。
そんな鬼獅子の眼に映ったのは・・・・静かなる怒りを表した桂小太郎である。
そして右手に持っている刀を構え・・・・

スパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパ！！！！

眼にも見えない神速の乱れ振りを炸裂させる。
その力は銀時と双璧となり、その速さはスバルと双璧となる剣速。
神速の連続剣撃を終えると、刀を上右に上げてそのままっすぐに振り下ろす。
そして桂は鬼獅子に忠告する。

「黄泉に再び旅立つ前に、２つだけ言っておこう」

刀を鞘に納めようとしながら言いだす。

「１つ、二度とこの世に蘇ぬ事。２つ、命の重さを軽々しく扱わぬ事」

そして、完全に刀を鞘に納めると・・・・

カキィン

ズバァアーーーーーーーン！

鬼獅子の体がバラバラとなって、体内にあった血が花火のように爆破してあふれ出す。

「この禁、犯した時はこの桂小太郎が・・・・死よりも恐れる天誅を下す」

殺意を満ちた眼をして、鬼獅子の血を浴びるその姿は・・・・鬼獅子よりも恐ろしい『鬼』その者である。

銀八
「教えて・・・・」

生徒全員
「銀八先生！」

フェイト
「皆さんお久し振りです。今回は久し振りに私、フェイト・テスタロッサがアシスタントします」

銀八
「では行きましょう。まずはこの人、ペンネーム『風花』さん。『もし黒神さんが銀さんと誰かを結婚させるとした時（例えばなのはさんとか）赤夜叉さんの時みたく一話の中に簡単に書くのか、それともまたそのことで事件を起こしたりして数話にして書くのどちらにしますか？
『・・・・・」

質問に答えようとすると・・・・突如、とてつもないプレッシャーを放つフェイトがニコニコと言い出す。
彼女を刺激するような質問は避けるべきだと銀八は考え・・・・

銀八
「そ・・・それは・・・・フェイトの可能性が高いと思います（ガタガタ」

フェイト
「良かったぁ♪／／／」

嬉しそうに喜ぶフェイトは顔を真っ赤に染める。

銀八
「っと言う訳で『風花』さん、女をからかうと後が怖いので控えてください。っでぇ次ぃ。ペンネーム『神威　銀時』さん。『リンディとエイミィと金丸を登場しますか？。クロノは別にいいです。ユーノは、なのはに振り向いてもらうため努力していますか？ちなみに後ろから声をかけて振り返ると言うのは、ダメですよ』・・・・おそらくは登場させる予定です。ユーノのほうは努力していると思いますが・・・結果は全然出ません」

フェイト
「なんかユーノが可愛そうに見えてきたような・・・・」

銀八
「奇遇だな、俺もだ。っと言う訳で『神威　銀時』さん、少しはユーノを優しくしてやってください」

フェイト
「次、行きます。ペンネーム『カラー』さんの質問。『後書きで、なのはが新技出しましたがアレはスバルに対抗する為に覚えたんですか?』・・・ひょっとして作者に放った『デスペレード・デモンブレイカー』・・・の事かな?」

青ざめて銀八に聞きだすと・・・

銀八
「大抵はそうなりますね。実際にはあり得ますが真意は分かりません。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『アクセル』さん。『質問です。この小説の中では、なのはが重傷を負ったあの事件はあったのでしょうか?原作と違いティアナの撃墜イベントがなかったので少し気になりました。』・・・出すかは予定です」

フェイト
「確かにこの小説は原作を無視して銀魂風に作者オリジナルと銀魂の原作を合成させたストーリーだよね・・・・」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。次はペ

ンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからだ」

フェイト
「ああ・・・確かここの質問コーナーを中心に話を進める小説だよね？」

銀八
「そう言えばフェイトは初めてだったな。じゃあその小説でまだ出番がないメガネザ・・・新八になのは。そんでウッソの好きなはやてが出ている。ついでに貧にゅ・・・じゃなくゴリラ女王と呼ばれるお妙も」

フェイト
「今、新八君の事をメガネザルって言おうとしたよね！後，妙さんの事を貧乳よりも酷い呼びか足していたよね！？いくら作者が妙さんが好きじゃないだからってそれはないよ！」

銀八
「ちなみに作者は寺門通の事は大嫌いだそうです。作者から聞けば・・・『『リリカルなのは』に出てくる女に比べれば全然可愛くないし、神楽と月詠に比べれば脇役程度、そんで歌う音楽は下品で最悪。そんな『寺門通親衛隊』がキモイ、むしろ消えて欲しいっと作者は強く望んでいるようだ。特に作者は銀魂の長編の中で『トッシー』編が最低作と考えている。トッシーが嫌いではない。お下品アイドルであるお通がメインとして出ているのが気に食わないからである。むしろトッシーはもっと出ても良いと思っている。なぜなら結構好きだからである。後、お妙はゴリラのような人間じゃなく正真正銘ブスゴリラと見ている。』・・・だそうです」

フェイト

「ちょっとー！！色々ヤバイことを言っているよ黒神さーん！特に最後のってお妙さんに対するコメントだよね！メスゴリラじゃなくブスゴリラはないよー！」

フェイトは最悪な状況に進んでいる作者に青ざめてツッコム。
こんなの新八やお妙、そしてお通に聞かれたらまちがいなく黒神と銀八・・・そして自分も何故か知らないが殺される。

銀八
「後、フェイトお前は間違えて『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』に出なくて良かったな。出たらお前間違いなくなのはやはやてにシャマル、特にお妙に殺されるから」

フェイト
「え？」

そう言って銀八はフェイトに『第二回　『リリカル銀魂　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』シリーズ人気結果発表！！』を見せた。そこには、フェイトが第３位。なのは、はやては１３位で１４位。シャマルは投票なし。そしてお妙は哀れにも－５票されたのがある。

銀八
「あのゴリラ女はな、自分より人気のある女にはためらいなく殺す達なんでな・・・それがこの証」

銀八はフェイトに『銀魂』３１巻を見せる。
そしてフェイトは３１巻を見ると・・・さらにと言うばかりに青ざめる。

フェイト

「あ・・・あはははは・・・・・はははははははははははははははは！！」

フェイトは涙を流して体をガタガタと振るわせる。
銀八はフェイトに軽く肩を叩く。

銀八
「ちなみにスバルに対してもお妙は容赦ないです。では質問。『質問です．？こんだけスバルが活躍すると残りのヒロインの人達よりもスバルが強く（魔術師としてとヒロインとして銀時のパートナーとして）なりますがなのはやフェイトはどう思いますか？？桂さんは幾松（？）さん（銀魂7巻で桂をかくまった人）のことが好きなんではないんですか？原作ではそのような雰囲気があったんですが？そして，はやてはそんな幾松さんに対してどう対処しますか？』」

フェイト
「ううう・・・す・・・凄くヤバイかもしれない」

フェイトはヒロインとしての立場の危うさを感じた。

銀八
「そんで？は好きかどうかは分からないが、桂にとっても親しい関係っと言う事は変わりないな。？に関しては間違いなくはやては、幾松に対しては恋のライバル関係になります」

フェイト
「確かにそうなるかも」

銀八

「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、そちらの次回はうちの馬鹿作者がお世話になります！」

フェイト
「では次行きます。ペンネーム『クアンタ』さん。『質問です。？全蔵と星坊主は登場しますか。』」

銀八
「さぁな・・・・少なくとも『スバル編』には出てこないが出す予定はあるらしいぜ？」

フェイト
「もう1つの質問、『？銀さんに質問、結野アナに結婚しましょうと言われたら銀さんはそれを承諾しますか。』・・・・・サンダー・レイジー！／／／（怒）」

銀八
「何で俺エエエエ

フェイト
「次、行きます。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目・今回『愛の力』を得てミントンラケット&刀という独自の二刀流を得た山崎ですが、実力では真選組隊士の中だとどれくらい強くなりましたか?沖田には及ばなくとも近藤や土方くらいにはパワーアップした気がしますが…二つ目・この話に松平のとっつあんは出るんですか?三つ目・近藤はミッドに来てから愛する妙に求愛（もといストーカー）できないから性欲的に不満が溜まっていたりしますか？』」

フェイトが言うと、銀八がゆっくりと起き上がる。

銀八
「そ・・・そうだな・・・・1つ目はおそらくは近藤と双璧になれると思います。そんで2つ目はまちがいなく最終回に近いぐらいの感じで後から出番が来ます。3つ目は不満は溜まっています」

フェイト
「し・・・質問の答え方が単純すぎる・・・・」

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次、行くぞォ。ペンネーム『ビチャード・オン』さん。『ヴィヴィオの母親を決めるときフェイト達の他、ナンバーズ達も戦いに参加するのですか?それともみんな纏めてヴィヴィオの母親になるのですか?』」

フェイト
「母親の役目は私だよ」

銀八

「え・・・でもこれはナンバーズが参加す（フェイト「私だよ」）・・・・・」

フェイトからとてつもないプレッシャーに銀八は負け・・・・

銀八
「っと・・・と言う訳で『ビチャード・オン』さん・・・・結果を楽しみに待ってくださよ・・・・（ガクガク）」

フェイト
「最後の質問です。ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『銀八先生はバレンタイデーにチョコ何個貰いましたか？』」

フェイトがシド眼で銀八を見つめると・・・・

銀八
「何でそんな質問をするんだぁーーーーーーーー！！（怒）」

銀八が怒鳴って叫びだす。

フェイト
「（あ・・・やっぱ貰っていないんだ）」

銀八
「『正宗の胃袋』！一生廊下に立っていろぉー！」

※

新ＯＰと新ＥＤの紹介

黒神
「それでは４２話のＯＰとＥＤを消して、４１話から流れる本当の新たなＯＰとＥＤの紹介をします。今回のは新シリーズ『スバル編』から流れるように3話早く紹介します。ＯＰとＥＤは以下の通りです！」

新ＯＰ
第３８話～
『蒼ーｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』　『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』の主題歌

新ＥＤ
第３８話～４１話・４３話～
『断罪の花　？Ｇｕｉｌｔｙ　Ｓｋｙ？』　『ＣＬＡＹＭＯＲＥ』のＥＤ

４２話のみ
『空色の約束』　『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の第８話に挿入歌

黒神
「以上ですね。『蒼ーｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』は『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』で流れた最初ＯＰであり、『断罪の花　？Ｇｕｉｌｔｙ　Ｓｋｙ？』は『ＣＬＡＹＭＯＲＥ』のＥＤで、どちらも僕の好きな曲の１つであり、『空色の約束』は『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の第８話に挿入歌として流れた曲で、なんかスバルをイメージされた曲のようです。今はスバル中心のシリアスで進んでいるのでちょうど良いかと選びました」

フェイト・なのは・シグナム・ティアナ・アルフ・リィンフォース
「ちょっと待てエエエエエエエエ！」

突如、フェイト、なのは、シグナム、ティアナ、アルフ、リィンフォースの６人が叫びだす。

黒神
「おや？皆さん今回はどうしたのですか？」

ティアナ
「どうしたのですか・・・じゃないでしょ！」

アルフ
「今回の『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のシリアスは確かにスバル中心だから分かるけど、『空色の約束』　は納得してなんでＯＰとＥＤ違うアニメのテーマソングなんだい！？」

フェイト
「詳しく話してもらうわよ！後なんで今回のシリアスがスバル中心！？」

新ＯＰと新ＥＤの事と今回の『スバル編』（スバル中心のシリアス）に納得できていないフェイト達。
その理由を黒神は言い出す。

黒神
「イヤー、実は今回のスバル編ではスバル中心で話を書いているので、ちょうど新ＯＰを考えている中、スバルの髪の色と使用デバイスである『ティルヴィングエア』の色が『蒼』ですので・・・・それがイメージカラーが『蒼』で有名な『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』の『蒼ー ｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ 』なんですよ。そんでＥＤのほうも『ＣＬＡＹＭＯＲＥ』でクレアとテレサがいるでしょ？なんか２人の存在がこの小説のスバルとアーサァと重なっているからつい・・・・」

なのは
「そんな理由で他のゲームとアニメのＯＰとＥＤを選んだ訳！？」

黒神
「だって、戦いスタイルと存在がこの小説のスバルと重なっていますし・・・それに，『スバル編』は思いついちゃったから書いただけですよ！」

シグナム
「そんな単純な理由で書いたのか！？」

黒神
「だってさぁ、スバルがこの小説のヒロインであると思っちゃっている読者がいるから、ここらへんでそろそろスバル中心のシリアスを考えようと・・・・・ってあり？」

黒神が振り向くと、そこにはバリアジャケットの衣装に変身したフェイト達がデバイスを構えている。
もの凄く笑顔だが、かな～り殺気を放っている。

フェイト
「それ、遺言と思って良いんだよね♪」

黒神
「え・・・・ちょ・・・・皆落ち着い・・・・・・」

フェイト、なのは、シグナム、ティアナ、アルフ、リィンフォース
「問答無用！」

黒神
「あんぎゃあああああああああああああああああああ！！！！」

第四十七訓：やる気を起こしたい場合はお気に入りのＢＧＭを流すのが一番（後編）

あの時に教えてもらった大切なものを守る強さ。

そしてあの時に教えてもらった自分自身の存在。

尊敬する人と親しい友（銀時）（アーサァ）に出会えたからこそ、今の自分はいる。

そして今、大切なものを守り、そして救う為に少女が再び立ち上がる。

スバルＶＳアーサァ

『タイプゼロ』として生まれた戦闘機人同士の対決が再び始まる！

蒼き侍魂と紅き騎士魂がぶつかり合う！

かつ黙して待て！

スバル

「次回、「人は目的の為ならどんな試練にも立ち向かう」テイクオフ」

第四十八訓：人は目的の為ならどんな試練にも立ち向かう（前書き）

最強の戦闘機人、アーサァの前に再び現れるスバル。

スバルの変化にアーサァも本気をだす。

史上最大の戦闘機人同士の対決が始まる。

スバル・アーサァ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第四十八訓：人は目的の為ならどんな試練にも立ち向かう

戦隊舟

そのとある和室に高杉と似蔵が話し合っていた。
出撃命令をしたにもかかわらずにどうして似蔵はここにいるのか高杉が聞き出すと・・・・

「悪いが、今はまだ時じゃないんでねぇ？」
「ほう？それはどういう意味だ？」
「簡単なこった。鍬死楼とあの鬼獅子っとか言う俺と同じく『アルハザード』とやらの秘法で蘇った天人・・・そいつ等の匂いを嗅ぎついたら見えてしまったんでねぇ・・・鍬死楼は機動六課の壊滅より別の目的があるようで，それに鬼獅子とか言う天人・・・あの輩から死相が見えてしまったんだよ・・・どうやら今出ても返り討ちになるだけだ・・・・」
「・・・似蔵・・・お前には一度聞いてみたかったことがある。」

出動しない似蔵の理由を聞いて高杉は別の質問を言い出す。

「お前のその眼は『アルハザード』の力で盲目は直せるはず・・・・なのに何故，生還を果たしたときにそれを望まなかった？」

煙管を加えながら似蔵に聞いてみると・・・

「くくく・・・確かに第二の生を受けたならばそれも叶えられるであろう。・・・けど，あいにくそんなことをすれば見えるものも見えなくなってしまうのさ・・・魂や生命、そして人の考え・・

・・今の俺には見える。あんたの中に眠っている・・・・とんでもなく凶暴な黒い獣が・・・・」

不気味に笑い出す似蔵に，黙って聞き出す高杉。

「しかも『アルハザード』とか言うやらの影響か、以前より見えてしまってねぇ。他人の死相や遠く離れた存在・・・・そう、たとえば今扉を開けようとしている者の存在も・・・・」

似蔵が扉に向かって指を刺し、そう言うと扉が開かれてそこから万斉が現れる。

「晋介，たった今ウゼルから報告が入ったでござる。鬼獅子が桂に殺されたそうだ」

その報告を聞くと、高杉は煙管を外して口から煙を吐くと、不気味に笑い出す。似蔵も同じく不気味に笑い出した。

「くくく・・・・・そうか・・・・ヅラもついに牙を放ったか。相手があの茶吉尼族にも関わらず瞬殺って訳か」

「そいつはもう一度斬りがいがあるようだねぇ」

持っている刀を見ながらニヤニヤと殺気を放つ似蔵。
いつかこの手で桂を殺す日を待ち望んでいるかのように。

「・・・主があの舞台に出なかったのはもしかすれば正解だったかも知れぬな、似蔵。ウゼルが何を企んでいるかは知らぬが・・・・あの程度の戦力では主が出ても返り討ちなだけ・・・いずれ相応しい舞台が来るのを待つだけでござろう」

「それもそうだな・・・・そうそう，１つ言っておきたいことが

あったんだ。確かぁ・・・・スバルって小娘だったな」

似蔵はスバルの事を高杉と万斉に話しだす。

「銀時と一緒にいた嬢ちゃんの事か？あの嬢ちゃんがどうした？」

「いやぁ・・・以前に剣を交えた時に不思議なものがみえてねぇ・・・侍の魂と・・・とてつもない蒼いエネルギーの塊が・・・・」

「ほう、・・・・つまりそれはヒヨっ子から鷹に成長しそうな感じなのか？」

「さぁ・・・・だが次ぎあった時には・・・・おそらくはとんでもない化け物になるだろうねぇ・・・・」

＊

そこは，巨大な闘技場コロシアム。

全て石で作られているため，まるで古代の遺物のような雰囲気を出している。

そこに1人，『ペンドラゴブレイド』を地面に突き刺し，柄の先に両手を乗せているアーサァがいた。

≪どうやら，白夜叉がここに来るそうだ。奴は最重要素材として捕獲しろ。場合によれば殺しても構わん≫

「・・・・了解、マスター。」

パスを通じてウゼルの命を従うアーサァ。

白夜叉ごと銀時の強さはアーサァは分かっていた。

銀時の怒りの一撃を受けた時に伝わってきた鬼神の如くの闘志。あ

れは間違いなくわずかだが自分をも上回る潜在能力の塊である。
銀時の対策を考えている中，目の前にある巨大な門から何かとてつもない魔力を感じ取る。
だがその魔力はアーサァ自身が知っている。
自分と剣を交えて魔力も上位魔導師並を誇るかつての親友。

ドォオオオオオオオオオオオオオオオンンンン！！

門が大爆発して，巨大な穴が開く。それと同時に蒼い光が空を浮んで輝きだす。
その魔力はとてつもなく高く，自分と同じＳＳランクは達成する。
そして蒼い光が消えていくと・・・・その光の中から思わぬ人物が現れる。

「スバル！」

アーサァは驚きの表情でかつての親友、スバルの名を言い出す。
スバルの右肩に魔力によって生み出された蒼く輝く天使の片翼が生えており、左手には蒼く光りだす『ティルヴィングエア』を握っている。

「・・・・アーサァ」

スバルはその眼でアーサァを見て名を口にする。
かつての親友の再会に彼女はどう見ているかはアーサァには分からなかった。

「何故，貴方がここに・・・・いや，それよりもようやく貴方の中

に眠っていた神秘の力を解放したようですね。他の戦闘機人にはない究極のＩＳ，『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーヴィング）』を。」

そう，これこそがアーサァが言い出すスバルの中に眠る神秘の力。言うなればこれはスバルのＩＳである。しかしスバルのＩＳは他の戦闘機人とは違う特殊な力を宿している。

「アーサァ、これがアーサァが言っていた私の中に眠るＩＳなんだね」

「ええ、貴方のＩＳはそこら辺の戦闘機人にはない特殊な力を持っています。そして・・・私もそこらの戦闘機人とは違う」

すると，アーサァの足元から真紅の魔法陣が現れ，そこから炎の柱が発生する。

そしてその中からアーサァは右手で『ペンドラゴブレイド』を豪快に横一線に振るうと炎の柱は消える。

アーサァの右肩に真紅の片翼が生えており、空に浮んでいる。

その片翼は竜の翼と一緒であった。

「アーサァ！その姿は！」

「私の潜在能力を１００パーセント引き出せる強化魔法、『竜王（ペンドラゴ・レッドウィング）の紅翼』。この姿になることにより、潜在能力は全開になり、通常よりも魔法の威力は上がります。そしてスバル・・・・貴方の『神々（ラグナロク・ブルーヴィング）の蒼翼』も」

真紅の片翼を羽ばたかせるアーサァと蒼き片翼を羽ばたかせるスバル。

互いに眼を合わせて、１０年前の事を思い出す。

「貴方の眼は懐かしき光を放つ。私には見えます。１０年前、私を

実の姉のように慕っていた幼き貴方の姿が」
「私も見える。アーサァと楽しく遊んでいた１０年前の光景か」

互いに１０年前の事を思い出す。進む道が違えても過去に一緒にいた事実は変わりはない。
１人は大切なものを守るために戦う道を進んだ少女、そしてもう１人は中世の為に戦う道を選んだ少女。

「この私の力は、アーサァと銀さんから教えられ、貴女達から頂いた力。私はそう想い、自分の信じた道を進んできた」
「ええ、１０年前とは全く別人のように思わせるほどの成長を果たしましたね」
「・・・・１０年・・・・人が変わるには十分すぎるほどの時だよね」

２人はあの頃から変わり始めた。
お互いに自分で選んだ道を進み、そして変わり果てた。

「確かに、私も・・・・スバルもあの頃から変わり始めましたね。貴方は管理官の為に戦う道を・・・・そして私はマスターの為に戦う道を」
「違う！・・・・私は管理官の為に戦うんじゃない！・・・・言い方は悪いけど、ミッドチルダや管理官がどうしようと関係ない。・・・・私が本当に守りたいものは、自分自身が守りたいと思ったものだけ！・・・・それこそが，５年前に『白夜叉』坂田銀時から教えられた侍の魂！！！！」

銀時をはじめ、ティアナ、桂など機動六課とナンバーズのメンバー、そして親友であるアーサァこそがスバルが守り通したい大切な存在、そして仲間である。

5年前に銀時に助けられ、守る強さを教えられたからこそ分かった侍の強さである。

「・・・・・・・」

アーサァは黙り込んで考えると、右手に持っている『ペンドラゴブレイド』とスバルのほうに向けて構えだす。

「ならば、その侍の魂で・・・・我が騎士の魂を打ち破って見せろ！」

騎士としての闘志を放って竜の咆哮の如く叫びだすアーサァに対し、スバルは『ティルヴィングエア』の柄を握り、刀身をスゥーっと鞘から抜き出し、アーサァに向けて構える。

「私はもう迷わない。・・・・だから、今度こそアーサァをここで止める！」

そしてとてつもない速さでスバルとアーサァはダッシュし、互いに剣を大きく振るう。

「はぁあああああああああああああ！」

ガキィン！

神速の域を達成した2人の一撃はぶつかり合い、とてつもない衝撃を放つ。
そしてすぐに互いに離れるとまた神速の突撃でぶつかり合う。

互いの剣撃の速さはもはや神速に達成しており、眼にも映らない速

さでぶつけ合う。
しかもその１つ１つの剣撃が威力も半端じゃなく高い。かすっただけでも相当な痛手になりそうな勢いで。

「はぁあああああああああああああああ！」
「てぁあああああああああああああああ！」

空中での剣撃対決は魔法の領域や剣戟の領域でもなく、ただの２人の中に眠る侍魂と騎士魂のぶつかり合いであった。
さらに電光石火の如くの神速の速さで、蒼い閃光と紅い閃光が大竜巻のようにぶつけ合っている。
完全なるＳＳ＋級の強さで、下手をすれば夜兎族以上の戦闘力を誇るかもしれない。

互いに１ｍ以上離れて、剣を構えて魔法を唱える。

「はぁああ！！」

シュ　シュ　シュ　シュ　シュ

≪Ｉ　ｏｐｅｒａｔｅ　ｂｙ　ｍａｇｉｃ　ａｔｔａｃｋ！≫

スバルは『ティルヴィングエア』を振り回し、その後アーサァに向けて構えると、足元から蒼い魔法陣が現れる。
そして回りから大量に精製された蒼い魔力刀が次々と現れ、その数は５００本以上は作られる。
これはクロノの『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト』に似ているが、スバルのは威力も数も５倍はある。

「ぬぅうう！！」

ブゥーン！

≪Ｉｔ　ｉｓ　ｍｏｖｅｍｅｎｔ　ｉｎ　ａ　ｐｕｒｓｕｉｔ　ｍａｇｉｃ　ｍｏｄｅ！≫

アーサァも『ペンドラゴブレイド』を大きく振って上斜めに向けて構えると、その回りから3つの巨大な炎の刃が現れる。
その姿はまるで竜が爪を構えて腕を上げているような姿である。

「エアスティンガー・エクスキュードブレイド！」
「ドラゴニュード・ヴォルガニックスロウ！」

数多くの魔力刀が蒼い閃光の雨のように放たれ、振り下ろされた3つの炎の刃から炎に包まれた巨大な3つの斬撃が放たれる。
そしてその炎は次々と魔力刀を浄化させるが、異常なまでの数に全てを消すことが出来ず、互いの魔法は相打ちという結果に終わった。
アーサァは追撃しようと思ったが、スバルの姿が見当たらない。
上を向けはそこには『ティルヴィングエア』を構えておりスバルの姿があった。

「蒼波一閃！」

蒼く輝く魔力の斬撃が神速の速さでアーサァを襲うが、間一髪でアーサァは瞬間移動の速さで交わしだす。
そしてすぐにスバルの後ろに移動して『ペンドラゴブレイド』を大きく構える。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そのまま力を込めて『ペンドラゴブレイド』を振るうが、背後からアーサァの気配を感じたスバルは素早く交わす。
しかし振られた先から地が大きく割れている。宙に浮んでいるのにそこから放たれた斬撃は半端じゃなく高い。
さらに追撃するように・・・・

「ボルティックス・ドラゴカノン！」

左手から巨大な真紅の火球が放たれると、スバルは『ティルヴィングエア』を鞘に収めて居合いの構えをすると・・・・

スパーン！！

神速の居合い切りで真紅の火球を一刀両断する。
そしてゆっくりと鞘に納めると背後にある真紅の火球は大爆発して消滅する。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！」
「おおぉおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そしてさらに攻める。攻めて攻めて、さらに攻め合って剣を交える。
閃光の如くの神速の速さで2人がぶつかり合うごとに火花が散る。
先手を打つかのようにスバルの『ティルヴィングエア』から蒼い風が包まれ、

「蒼風一閃！」

ガキィーン！

シグナムの『紫電一閃』に対抗する魔法剣技を炸裂すると、アーサ

ァは『ペンドラゴブレイド』でその一撃を防ぐが、先ほど剣を交えた時よりも重い一撃となっている。

「ぐぅ！」

後ろに飛ばされながらも持ちこたえて体制を立て直して地に着地して剣を構える。

だがアーサァは先ほどから力が一段と増しているスバルの剣の太刀筋に動揺している。

（さっきまでのスバルは、私と双璧となる剣の腕はありましたが・・・今はその迷いがない。いくら・・・迷ってしまえば、私が殺られる！）

アーサァは『ペンドラゴブレイド』両手に握りだし、スバルを睨みつける。

スバルも翼を羽ばたかせてゆっくりと地に下りると、『ティルヴィングエア』を居合いの構えをして、アーサァを見る。

「一騎当千剣技・・・・」

「極地激蓮剣舞・・・・・」

「無刃（むじん）・疾風静激（しっぷうせいげき）！」

「バルキリ・アルテマブレイカー！」

スバルは超高速の速さでダッシュすると神速の連激剣舞を炸裂させ、アーサァも豪快だが神速の連続剣舞を炸裂させ、２人の激剣がぶつかり合う。

銀八

「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

山崎
「皆さんこんにちは。今回はこの俺、山崎退と

ディエチ
「ディエチがアシスタントします」

銀八
「ではまずかこの人の質問。ペンネーム『神威　銀時』さん。『ロリコンアイドルオタクの眼鏡猿は、寺門通と声優が同じキャロに手を出しますか？』」

山崎
「って何だこの質問！？早速新八君に対する嫌がらせ！？」

ディエチ
「し・・・新八さんって山崎さんの友達関係でしたよね・・・・実際どんな人なんですか？」

銀八
「そうだな。とりあえず新八がどういう奴かを教えてやる。後、山崎も知っておいたほうが良いな」

銀八は2人に新八がどういう人物かを説明すると・・・・山崎は青ざめてディエチは新八を軽蔑する。

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん。絶対に新八みたいな男にはならないように」

山崎
「・・・・・じ・・・・・じゃあ・・・・次行きます」

ディエチ
「ペンネーム『カラー』さん。『1，銀時が結野ファンということフェイト達は知っているんですか?2，銀時が結野家に婿入りしようとしたことはフェイト達は知っているんですか?3，結野アナとフェイト達が殺りあったらどうなりますか?（勝敗と状況）』」

銀八
「1はまだ知らないでしょう?って言うより知ったら結野一族の壊滅危機になります。2はまだ知りません。それを知ったら銀時が殺されます。3は、フェイト達の圧勝ですね」

山崎
「なんかとんでもない質問ばっか来るんだけど!こればれたらとんでもない事になりますよ!」

ディエチ
「た・・・確かに・・・・・」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい」

山崎
「では次ぎ行きます。ペンネーム『風花』さんの質問。『前回と似た質問をします。銀さんを結婚させる時例えばなのはだったら士朗や恭也、フェイトだったらプレシアのように誰か肉親が結婚を邪魔したりしますか?ちなみに私はフェイトを応援します。なのはさんへ今の言葉で怒って魔力弾をもし撃つのでしたらやめておいた方がいいと思います。理由はこちらにはスターライトブレイカーくらいなら防ぐ事が可能な人がいますので。では失礼します』・・・・てなんじゃこの質問はぁ!」

『風花』さんの質問にツッコム山崎を尻目に銀八が答える。

銀八
「ええ、なのはの場合は恭也が邪魔する可能性は１００%でフェイトの場合は確立は知りません。・・・っと言う訳で『風花』さん、勇敢な質問をありがとうございました!」

山崎
「自殺行為の質問の間違いだろうがぁ!」

ディエチ
「や・・・山崎さん、落ち着いて!」

山崎のツッコミを抑えるディエチ。

銀八
「次ぃ、ペンネーム『ユーリー』さん。『ゲームのなのはに出ていたマテリアルたちは出ますか?　(子供ではなく大人の姿で)星光と雷刃は銀さんに、闇王は桂さんに求愛しそうなんですがどうなんでしょう?』・・・・さぁ、そこまでは知りません。作者はゲーム

版は知らないようですので。っと言う訳で『ユーリー』さん、馬鹿な作者で申し訳ございませんでした」

山崎
「まともな質問に対しては適当に感じるのは俺の気のせい？」

銀八
「気のせい気のせい。次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『1．銀八先生はどの質問が嫌い（答えたくない）ですか教えてください？2．なのはさん以外にに質問です。もしなのはが銀時の唇を奪ったらどうしますか？』」

山崎
「おいいいいいいいいいいいいいいい！！なんか二つ目の質問さりげなく凄くねぇか！？」

ディエチ
「き・・・キスゥウウウウウウウウウウウウ！？／／／／」

山崎はあり得ないっとツッコミだし、ディエチは顔を真っ赤に染める。

銀八
「そうだな・・・・1は、俺に対する侮辱質問や銀時の野朗のハーレム質問や幸せ一杯かこのヤローってような質問。他にも俺が気に入らない奴があれば質問は一切しねぇ」

山崎
「それ・・・思いっきりメチャクチャじゃないですか！」

銀八
「つまり2目の質問は答えられるかぁ！」

ビリリリリリリリリリ！

山崎
「メッチャ大人げねぇ！」

ちなみに2の答えはおそらくその時は銀時はフェイト達から怒りの鉄槌を受けるハメになるでしょう。

山崎
「ナレーションが答えるんかい！」

銀八
「と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『七織』さん。『本気の桂と銀時ってどっちの方が強いんですか?後、源外が桂の刀を改造したら出るのはめんつゆですか?』・・・それは間違いなく銀時でしょう?あと間違いなくめんつゆですね」

山崎
「今度は即答かよ！旦那の事は気に食わないんじゃないのかい！」

銀八
「バッキャロー！！ここでヅラが銀時より強い事になれば俺より強いとなってしまうじゃねぇか！そんなの認めねぇぞ！」

山崎
「やっかましいぃ！俺も今のアンタが先生であることを認めねぇ！」

ディエチ
「落ち着いて！銀八先生のペースに飲み込まれていますよ！」

暴走のツッコミをする山崎を止めるディエチをみて抑える山崎。

銀八
「っと言う訳で『七織』さん、ヅラが銀時より強い事はまずあり得ません！・・・で次はペンネーム『烈火竜』さん。『山崎とディエチに質問です。結婚式する時は洋式(ウエディングドレス)ですか和式（着物）ですか？』」

山崎・ディエチ
「えぇ！？／／／」

とんでもない質問に2人は顔を真っ赤にする。

山崎
「・・・・む・・・・結ばれるなら・・・・どこでも良いよ・・・・ね」

ディエチ
「・・・・わ・・・・私も・・・・・」

銀八
「何これ、メッチャムカつくんだけど！？（怒）」

（元）地味な山崎まで彼女を持っているのに銀八は怒り出す。

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん」

山崎
「ああ、確かここの質問の答えを小説にして書いてくれている作者だよね」

ディエチ
「そこで新八さんがお世話になっていますね。最近では姉の妙って人も・・・」

銀八
「まぁな。山崎と違って現役地味キャラである新八が出ている小説の作者だぜ?」

山崎
「おいいいいいいいいいいいいいいい!また新八君イジメ!」

銀八
「しょうがねぇだろ?俺も作者もあのメガネサルのオタクっぷりには呆れているんだよ・・・なぁ、お前もせっかく地味を卒業された身だからこの際、影が濃いツッコミキャラとして活躍してみるか?」

山崎
「いや、それはティアナちゃんとヴィータさんのポジションじゃ?」

銀八

「別に良いって。・・・人数が多くいてもそう変わらないだろ？あ・・・その分新八の出番は減るかもな」

山崎
「じゃあ良いです！」

さりげないとんでもない発言にツッコむ山崎。

ディエチ
「とりあえず質問を見てあげませんか？」

銀八
「そうだな・・・質問はこの内容だ。『なのはさんは今後『デスペレード・デモンブレイカー』を使うことはあるんですか？』・・・・ずばりある予定です」

山崎
「なんか・・・気のせいか『スターライト・ブレイカー』よりおっかないような気がしたような・・・・」

銀八
「察しが良いな。威力はその3倍はあるそうだぜ？まぁここの本番では出ないかもしれないが・・・まだわかんないようだ。どうだ、その威力を新八（サル）を体験してみるか？」

山崎
「それは結構です！ってかどんだけ新八くんに冷たいの！？」

ディエチ
「それより今、新八さんの事を新八と書いて『サル』って言わなか

ったですか?せめて『メガネザル』にしてやっても良いじゃないですか！」

銀八
「まぁ良いじゃねぇの?次は『こちらの小説で新八さんがお通になっちゃうようになってしまったんですがどう思いますか?（リリカル組の人に返答をお願いします）』・・・・2人はどう思いますか」

山崎
「・・・・・新八君・・・・・いくらお通ちゃんファンだからってそれはないよ・・・・本人が見たら軽蔑されるよ?」

ディエチ
「山崎さんの親友にしては・・・・・軽蔑しました」

青ざめて言い出す山崎と新八を変態猿のように思えてきたディエチ。

銀八
「うんうん、2人とも分かってきたじゃねぇの。そんで最後『最近キャロの影が薄いような気がします．キャロ，生きていますか?』」

山崎
「ぎゃあああああああ

キャロの名を聞いて絶叫する2人は体を丸めて怯える。

銀八
「落ち着け！一体何があったぁ！？」

山崎
「ドラゴンがぁ！ドラゴンの炎がぁあああああああああ！ぎゃあああああああああああああ！！こっちにこないでぇ！」

ディエチ
「あの睨みだけで人を殺せるような眼つきで見ないでぇ！私が悪かったからぁあああああああああああああああ！」

銀八
「おいいいいいいいいいいいいい！なんかトラウマになっていねぇか！？落ち着け、キャロはここにいないって！・・・と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん！キャロはそちらの小説に出さないほうが良いと思います！」

青ざめて言い出す銀八。
しかも2人はもはやアシスタント所じゃなかった。

銀八
「だめだ、シャあねぇからここからは俺1人でやるぞ。・・・次はペンネーム『リュウガ』さん。『？「銀さんの理想の女性を例えるなら、誰がいいですか？結野アナがいいですか？それとも、なのはさんか、フェイトさんですか？スバルもボーイッシュで可愛いですし・・・」

？「銀さんを思っている人に質問です。もしも、銀さんが男趣味に目覚めたらどうしますか？』ってまたアイツに対する質問かいぃ！」

銀八は怒り出して手紙を破る。ちなみに1は言ったらとんでもない事になるので言いませんが、2はあり得ないし、何よりフェイト達の鉄槌を喰らいます。

銀八

「っと言う訳で『リュウガ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ぃ、ペンネーム『クアンタ』さん。『質問です。桂とはやて、山崎とディエチの用に銀魂キャラとリリカルキャラを他にもCPさせる予定はありますか。あるんでしたら沖田にもお願いします。』・・・そうですね、おそらく分かりません。作者の気分しだいです！っと言う訳で『クアンタ』さん。廊下に立っていなさい。」

質問を終えると次の質問を答える。

銀八

「次ぃ、ペンネーム『アクセル』さん。『原作の銀魂では月詠は銀時に気があるような感じですが、この話の中ではどういう感じなんでしょうか？仮に争奪戦に加わったらさっちゃん辺りが暴走しそうですが…。』・・・あると思います。ムカつくがな！」

銀八は怒鳴って質問を破る。

銀八

「っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。次も行くぞ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『ユーノに質問です。ユーノは近藤に弟子入りとかしないんですか？近藤に弟子入りすればな

のはに振り向いてくれますよ。』・・・て，それじゃあ逆効果だろうがぁ！」

手紙を投げ飛ばしてゴミ箱に入れる。

銀八

「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、そんなことをすれば逆効果です！次ぃ・・・ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目。ティアナのクロスミラージュにはオレンジジュース発射機能を追加しましたが、レイジングハートやバルディッシュなどに発射機能をつけるとしたら何を発射させたいですか？二つ目。スカリエッティが、源外の数ある発明の中で一番気にいった作品は何ですか？』・・・・・そうだな・・・１つは『レイジングハート』だったら『イチゴおれ』かな。そんで『バルディッシュ』は『Ｃ・Ｃ・レモン』。２つ目はおそらく共に作り上げた『ガジェット・スカイバード』だろう。と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。最後の質問、ペンネーム『Ｆ．Ｎ』さん。『ゾーマもアルハザードの力でパワーアップして生き返るのですか？』」

ゾーマが生還すると聞いて悩む銀八。

するとその答えは・・・・

銀八

「さぁ、おそらく出てくんじゃねぇ？っと言う訳で『Ｆ．Ｎ』さん、廊下に立っていなさい」

第四十八訓：人は目的の為ならどんな試練にも立ち向かう（後書き）

剣と魔法のクロスオーバータイプの超激戦！

本気を出したアーサァがついに最強の魔法をしよう！

そしてスバルも対抗するかのように・・・・！

次回、ついに決着！

銀時

「次回、『神速を越えるって事は超神速の領域に立つ意味であり、それってつまり『天翔龍閃』を出そうと思えばだせるんじゃねぇ？』テイクオフ」

第四十九訓：神速を越えるって事は超神速の領域に立つ意味であり、それってつまり

ついにスバルとアーサァの決着が付く。

蒼い刀と紅い剣のぶつかり合い。

果たして勝利するのは一体！

なのは

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第四十九訓：神速を越えるって事は超神速の領域に立つ意味であり、それってつまり

突如現れた蒼い閃光の後を追っている銀時達は急いでウゼルのところに向かう。
そんな中，源外が穴が開かれている門を見つけた。

「銀の字、あの先にある門の中心部にドでかい穴が開いておる！おそらくさっきの光が無理矢理こじ開けたようじゃ！」
「その光はおそらく魔導師の・・・とにかく急いだほうが良い」

源外とスカリエッティがそう言うと、、『ガジェット・スカイバード』は穴がこじ開けられた門に入りだす。
そして門の先には大きな闘技場が見えた。
銀時達はここに誰かがいると考えると、下のほうから何やら轟音が何度も聞こえだす。

「こいつは……」

源外が驚いた表情で見つめると，そこにはスバルとアーサァが互いの剣をぶつけ合っている光景があった。

「スバル！どうしてここに！？」

何故ここにスバルがいるのか驚きだすティアナ。
しかもスバルの背中から蒼い天使の片翼が生えている為，まるで天使と化したかのように思える。
アーサァにも真紅に輝く竜の片翼が生えていた。
だが銀時はある事を思い出した。

（ひょっとして，あれがスバルの中に眠っていた神秘の力って奴か！？）

銀時はそう思い込む。

そしてスバルの剣技『無刃（むじん）・疾風静激（しっぷうせいげき）』とアーサァの剣技『バルキリ・アルテマブレイカー』。

竜巻のように炸裂する無数の蒼紅の剣撃がぶつかり合い、激剣が繰り返される。

「うぉおおお

ガシャン×2

すると、『ティルヴィングエア』の鞘の先から薬莢（ケース）が二つ出ると、鞘が大刀に変わりだして刀身が魔力で現れた蒼く輝く刃と化す。
見た目はシグナムの『レヴァンティン』である。
実はこれはスバルの二刀流剣術であり，パワーは以前より上がったがスピードがその分に落ちてしまった。
そしてスバルは蒼い閃光と化して凄まじい速さでアーサァに突撃すると，アーサァも対抗するかのように紅い閃光と化して凄まじい速さでスバルに対抗する。
まるで嵐と思わせるような閃光のぶつかり合いは銀時達も巻き込まれたら無事ではすまない。

「蒼龍天舞（そうりゅうてんぶ）！」

スバルの魔法剣技が炸裂し、嵐のように蒼い閃光がアーサァを囲むように神速の速さで刀を振り回す。
神速の速さが加わった連続攻撃の故、アーサァも『ペンドラゴブレイド』だけでは防げず、真紅の障壁で防いでいる。
全ての攻撃を苦戦しながら防ぐと、アーサァは『ペンドラゴブレイド』を右斜め上に大きく構えると。

「はぁあああああああ！」

大きく振り回すと真紅の炎が発生して波のように襲いだすが、そこにはスバルの姿がいない。

「！？」

アーサァが上に気配を感じて見上げると，そこには翼を広げて2つの剣を持っているスバルの姿がいた。
そして大剣を鞘に戻すと、

「ティルミド・ギガエアードテンペストフォルム！！」
《Ｉ　ｍａｋｅ　ａ　ｓｕｐｅｒｓｉｚｅｄ　ｓｗｏｒｄ　ｍｏｄｅ，ｍｏｖｅｍｅｎｔ．》

ガシャン×４

『ティルヴィングエア』と鞘から2つずつカートリッジをロードをして柄の先と鞘の先をぶつけ合うと、刀と鞘は超大型剣に変わりだす。
蒼く輝きだす巨大な刃はフェイトの『バルディッシュ』の超大型剣の『ライオットザンバー・カラミティ』と同じぐらいの大きさを誇る。

「ガルディ・バルファム・ラバヴァルガァ。破壊を求める刃よ、全ての魔を無に化すまで滅せよ。ザムヴァル・ガンザヴォラヴァ」

蒼き超大型剣を片手で握りだして上げて構えると、翼を広げて蒼い刃がさらに大きく輝きだす。

「魔を射殺す剣撃の蒼殺（ブルーライブス　ブレイカワークス）！」

翼を広げてアーサァに向かって落下するかのように突撃すると、神速の連続斬撃が放たれる。

ドカァアアア

１５回の斬撃が一気に炸裂する。その威力は半端じゃなく闘技場の五分の一が破壊された。
しかし負担はあってスバルは少し右腕を痛めだす。
いくらなんでも今のでアーサァも無事ではすまないと思うが、

「！？」

アーサァは瞬間移動の速さでスバルの後ろにいた。
スバルは後ろをすぐに振り向くと、アーサァは剣を大きく構えだす。

「クリムゾン・ボルティクストーム！」

下左斜めから『ペンドラゴブレイド』を大きく振り出すと、そこから巨大な真紅に輝く炎の渦が発生する。
それが徐々に大きくなってスバルを襲いだす。
大剣で防ぎだすが、その威力は半端じゃないほど高く、下手すれば『ディバイン・バスター』の倍は行くであろう。

「ぐぅ……うぉおおおおおおおおおおおおおおおお！」

それでもスバルは大剣を大きく押し返すかのように炎の竜巻を打ち消す。
しかしそれでも無傷とは行かなかったが、痛みを気にせずにそのまま常人とは思えない速さで迫い、

「いやぁあああああああああああああああああああああ！」

大剣をそのまま大きく振り出す。

ガキィン！

「ぐぅぅう！」

その剣撃を防ぐが、その威力は巨大なハンマーを生身で受けるような衝撃で体が押し出されるが、体制を崩さずにアーサァは耐え抜く。
互いに激しい激戦を長く続いており、息が荒くなってきている。
スバルの『ティルヴィングエア』は元の形に戻り、使用した分だけカート・リッジを剣と鞘に装填させる。
対するアーサァは『ペンドラゴブレイド』を地面に突き刺して倒れそうな体を無理矢理抑える。

一方の銀時達は魔導師の常識所が領域をも上回る激戦に驚きを隠せなかった。

「す…すごい……」

ティアナは瞬きがする暇がないほどにまで2人の対決に注目し、驚きを隠せなかった。

「……これが、『七星神刀（しちせいしんとう）』を持つ者同士の戦い・・・まるで暴風のぶつけ合いだな」

源外も圧倒されるほどの戦いは、入り込んだら巻き込まれて唯じゃ起きないと思わせる。
スカリエッティも2人の強さは戦闘機人どころがゾーマをも瞬殺出来るほどに達成していると考える。
3人がそう考える中、銀時はこの戦いを見て・・・

「…似ていやがるな……あの２人の戦いは。」

銀時は確信したかのように何かを言い出す。

「え、似ているって何がなの？」

「あの２人の戦いを見て思いだしきまった。１０年前、なのはの世界で全てのジュエルシードを賭けて戦い抜いたフェイトとなのはの姿を」

「なのはさんとフェイト隊長に？」

『ジュエルシード事件』でフェイトとなのはは、海鳴臨海公園で互いの信じる思いをぶつけ合い戦った。

スバルとアーサァの決闘はまさに１０年前のフェイトとなのはの決闘そのものであった。

２人の戦いを見て銀時の頭の中には１０年前の２人の少女の決闘を思い出す。

「……こんな……ことが…」

一度は倒したスバルにここまで苦戦させられている事に戸惑っているアーサァ。

（いくらＩＳの能力でパワーアップしたとは言え、私も『竜王の紅翼（ペンドラゴ　レッド　ウィング）』により…白夜叉のＤＮＡを受け継ぎ、白夜叉の力を最大限にまで出し切っているはず。それなのに、スバルのこの強さ……白夜叉に匹敵するだと？）

スバルの底知れない強さに戸惑い始めるアーサァ。
一体彼女のこの強さはなんなのか理解できないが……1つ分かった事があった。

（殺らなければ…殺られる！）

地面に突き刺した『ペンドラゴブレイド』を抜き出して構える。
そして翼を広げ、

「ペンドラゴブレイド、カートリッジロード！」
≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ！≫

ガシュン×９

アーサァはカートリッジを９発ロードすると、『ペンドラゴブレイド』の刀身から、真紅の炎が大きく溢れ出る。
とても異常なまでと言えるほどに炎が凄まじい勢いで燃え上がっている。

「カートリッジを９発？…まさか！」

カートリッジを９発ロードしたアーサァを見ると、銀時はある事を思い出す。
それはアーサァの最強の魔法を炸裂させる条件である事を。
アーサァからあふれ出す強大な魔力にスカリエッティはあり得ないと驚く。

「この魔力は……ＳＳ……いやＳＳＳ級に達成する！」
「ＳＳＳ！？」

それは機動六課の隊長であるフェイト、なのは、はやてでさえも届かない魔力数値である。
それはつまりなのはの『スターライト・ブレイカー』を上回る威力を起こる魔法を放つ合図でもあった。
そうなればスバルの最強の禁断魔法である『エア・アルテマ・ギガブレイカー』も上回る事である。

銀時は助太刀をしなければと下りようとするが、アーサァの究極魔法の前に臆しないスバルを見てここは手出しはしない事を決断する。

「スバル！」

ティアナはこのままではまずいと、スバルを助太刀する為に『クロスミラージュ』を握って向かおうとするが、銀時が左手を伸ばしてティアナを止める。

「兄さん！」
「ティアナ、コイツはスバルの戦いだ。アイツはアーサァを助ける為に戦っていやがる。だから手出しはするんじゃねぇ」
「手出しするなって、兄さんも分かっているはずよ！カートリッジを9発ロードするって事は、なのはさんの『スターライト・ブレイカー』をも上回る魔法を放つことなんだよ！ほうっておけばスバルが……」
「スバルを見てみろ！！！！」

銀時がスバルのほうを指を刺すと、ティアナはスバルの様子を見る。
スバルの眼はまだ諦めていない眼である。
それはまだ希望を捨てていない証拠である。

「アイツの眼はまだ諦めちゃいねぇ……だからこそ、見守ってやり

やいけねぇ」

銀時がそう言うと源外もティアナに言い出す。

「銀の字の言う通りだ。妹の字、お前さんの気持ちは銀の字も知っている。だから・・・仲間を・・・あの娘を信じてやりな」

源外にそう言われると、ティアナは言う通りにしてスバルを見届ける事にした。

「スバル……」

一方のスバルはアーサァがこれから放つ魔法の正体を知っていた。全てを無にかすかのように焼き尽くすアーサァの最強の魔法『ペンドラゴ・カリバーン』。

その威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』をも上回るとんでもない一撃である。

だがそれでもスバルはけして臆せず、『ティルヴィングエア』を前に向けて刀身を抜く構えをする。

「正気ですか、スバル？今から放つ魔法は貴方の最大魔法をも勝る一撃です。それでも貴方は諦めないのですか？」

「私だって分かっているよ。その魔法がＳＳＳランクに達成するほどの魔力を込めていても・・・もう私は絶対に逃げない！」

「何故です！以前にも言ったはずです！私の力は『プロジェクトＤＮＡ』により白夜叉のＤＮＡを受け継ぎ、その力は白夜叉と双璧にあたる！いくら貴方でも……」

「それは違うよ、アーサァ」

アーサァが言う事をはっきりと断言して言い出すスバル。

「本当にアーサァが銀さんと同じぐらい強いんだったら……すでに私は負けているはず！だから、アーサァのその強さは銀さんそのものじゃない！ただの偽りの強さ！」

スバルの言う事にアーサァは少し驚いた表情をする。

「アーサァが『プロジェクトＤＮＡ』で銀さんの力を得たんなら、確かにゾーマをも倒せる力を得ても……それはアーサァ、自分自身として存在していない事と一緒だよ！」

スバルの言葉を聞いて、アーサァは顔をしかめた。

「何をたわげた事を……それで私の力を偽りの強さだと言うのか？」

鋭い目つきでアーサァはスバルに言い出す。

「本当に銀さんの意志を受け継ぐのは、剣術でも強さでもない。……誇り高い侍の魂」

それは、スバルが銀時の強さを本当に分かっているからこそ言える事である。

「泣きながらでもいい。ボロボロでみっともなくても、諦めないで進み続ける。……だから」

スバルはその眼でアーサァを見つめる。

「この勝負だけは、絶対に負けない！必ず勝ってアーサァを救ってみせる！」

絶対に負けられないアーサァとの対決。
スバルはけして諦めないその意志でアーサァと対抗にわたり合う。

「・・・ならば，その魂ごと倒すまでだ！」

すると『ペンドラゴブレイド』の刀身を包む真紅の炎がさらに巨大に大きくなる。
それは以前にスバルに放った『ペンドラゴカリバーン』をもはるかに上回る程である。

（凄い熱気と魔力だ。あれはもう『エア・アルテマ・ギガブレイカー』でも耐用できない……だったらもうあれしかない）

「ティルヴィングエア…カートリッジロード」

≪Ｉ ｏｐｅｒａｔｅ ｉｎ ｂｒａｉｄ ｆｏｒｃｅ，ａ ｆｕｌｌ ｐｏｗｅｒ．≫

ガシャン×１１

するとあろうことか、スバルは刀から7発のカートリッジをロードしただけでなく鞘からも４発のカートリッジをロードした。
するとスバルの足元から蒼く輝きだす魔法陣がいつもの3倍は大きく浮かび上がる。
だがカートリッジを多くロードする事は、それほど強大な魔法を発動することだが負担が異常なまでにかかる。
アーサァは臆せずに、

「我が究極の一撃を受けてみろ！」

竜王の如くの気迫で叫びだし、『ペンドラゴブレイド』を大きく構えだし、

「ペンドラゴ・カリバーン！！！！」

そのまま大きく振るう。

全てを焼き尽くすかのような業火が包まれた超極大な紅き閃光が放たれる。

しかも『竜王の紅翼（ペンドラゴ レッドウィング）』によりアーサァの潜在能力は１００パーセント引き出されており、その威力は正に竜が強大な炎を放つかのような勢いであり、完全に以前に放ったのより2倍近くはある。

「スバル！」

ティアナは思わずスバルの名を口にする。

源外もスカリエッティもアーサァが放ったとんでもない魔法に驚きを隠せなかった。

「魔法ごとぶった斬れぇ！スバルーー！！！！」

銀時がありったけの大声で叫びだすと……

（……銀さん）

銀時の声が聞こえたかのように銀時を思い込む。

そして眼を瞑ってゆっくりと『ティルヴィングエア』の柄を握りだす。

そして、

「絶蒼」

スバルの姿が消える。
姿を消すと、信じられない事に超極大な紅き閃光が大量の蒼い斬撃によりバラバラに切断される。

「馬鹿な！」

あり得ない光景にアーサァは信じられないと驚きだす。
これには銀時、ティアナ、スカリエッティ、源外も驚きを隠せなかった。
それどころが次から次えと信じられない速さでアーサァの回りから蒼い斬撃が繰り返されている。
襲ってくる斬撃にアーサァは真紅の障壁で防ぐが防ぎきれずにその障壁もバラバラに斬られる。
しかもスバルの姿が眼にも映らずに攻撃の範囲が全く分からない。

（この速さは、今までの神速の剣技とは全く違う！速さだけじゃなくパワーも魔力も格段に上がっている！……まさか！）

アーサァはこの速さがなんなのかを理解した。目にも止まらぬ速さが神速と呼ばれるので眼にも映らない速さならこれはもう神速どころではない。神速の領域を超えた、超神速の領域である。

（まさか１１発のカートリッジをロードしたのは、ただ単に強化魔力で己の身体能力を大幅に上げて超神速を可能にする為の！）

あの最大限のカートリッジロードがそうとしか考えられない。
ただの強化魔法でも大量の魔力を込めれた超人的な強さを発揮する。
誰でもそうは出来るがそれだけではそれを制御することはできない。
魔法だけじゃなく剣術の鍛錬と基礎特訓のくり返しによりその制御できる強い精神が得られる。
魔法と剣術を組み合わせた魔法剣術を得意とするスバルだからこそ出来る究極の魔法剣技である。

そして蒼い斬撃が無数にアーサァを囲むかのように斬りこまれ、背中の片翼も切断される。
正に蒼い絶技。

「ぐぅう…がはぁあ！」

何度も『ペンドラゴブレイド』で防いでいるが、余りの数に防ぎきれずに何度も何度も斬りこまれる。

「ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

容赦ない超神速の連続剣撃を喰らうアーサァは絶叫する。
体から容赦なく血があふれ出てついに限界が来たのか倒れる。
そして倒れたアーサァの後ろからスバルの姿が現れ、やたら格好良く納刀する。

「……」

背中の蒼い片翼は消え、スバルは黙り込んでただその場を突っ立っているだけである。

「……なんて剣技だ……完全にＳＳＳは達成している」

「ああ、侍の剣術と魔導師の魔法とやらが合体したからこそ出来る技だ」

スカリエッティと源外はスバルの『絶蒼』に感心すると、ティアナは余りにもデタラメ的な強さに黙り込んでお驚き出す。

銀時はそれ以上にスバルが勝った事に安心する。

そして『ガジェット・スカイバード』はゆっくりと着地すると、スバルはゆっくりと倒れてしまう。

「スバル！」

ティアナが走り出して倒れたスバルに駆けつけて体を抑える。

どうやらその技は体の負担が相当にかかるようであり，しばらくは自由に動けないようである。

「……ティ……ティア…どうしてここに？」

「馬鹿……そんなの……そんなのこっちの台詞だよ……どうしてスバルがここにいるのよ…」

涙を流してティアナはスバルを強く抱きつく。

銀時も安心してスバルの頭を撫でる。

「……銀……さん……」

「本当に良く戦ったなぁ…自分の信じた強さで本当に勝っちまたんだ……胸を張って誇っても良い」

銀時の言葉に安心そうに少し笑うスバル。
その光景に微笑む源外とスカリエッティ。

「う……うう……」

突如、アーサァが苦しそうに声を出す。
それに気づいた銀時とティアナが木刀と『クロスミラージュ』を構えるが、

「もう良いよ……銀さん……ティア……」

スバルがそう言うと2人はスバルの方を振り向く。
するとスバルは苦しそうにも関わらずに、『ティルヴィングエア』を杖代わりとして体を強引に起き上がる。
歩くだけでも酷い疲労を感じるのにも関わらずにスバルはアーサァに近づく。
そんな近づいてくるスバルにアーサァは、

「……どうやら……私の完全なる敗北ですね……」

スバルに敗北したのを受け入れた……いや、スバルの想いがようやく気づいたのである。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

シグナム
「とりあえず今回は私、シグナムがアシスタントをしよう」

銀八
「へーい、じゃあ始めるぞ。ペンネーム『アグニ』さん『1．最近本編よりも質問コーナーの方が長いように思うのは気のせいでしょうか？2．スカリエッティが仲間になったけど、ヴィヴィオはどのようにして出すつもりですか？3．もしヴィヴィオが銀時のことを“パパ”と呼んだら母親はだれかとフェイト達は争いますか？』・・・・とりあえず答えるぞ。1つはそれは作者はちびちびと質問を答えるのがめんどい用で一気に答える事があります。そのため時には質問コーナーの方が多くなります。2はまだ先ですが必ず出すつもりです。3は……それはシグナムが答えます」

シグナム
「当然、争うな？」

『レヴァンティン』を握って絶対に勝つ事を決心するシグナム。
その姿に恐怖する銀八。

銀八
「と・・・・とりあえず『アグニ』さん・・・・廊下に立っていなさい！」

シグナム
「次を行こう。ペンネーム『カラー』さん『神威銀時さんのSOS学園でなのはと銀時が付き合い（しかも、超ラブラブ）ますが、フ

ェイト達はどう思ってますか?多分もう夫婦以上のことしてると思うですが。例　膝枕、手作り弁当　銀時に「おまえは俺の女だ!」っと言われて抱かれるなど。』・・・・ってあの白い悪魔ァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!」

怒り出して咆哮を放つシグナム。
その光景に恐怖する銀八

シグナム
「もし私も『SOS学園』に入った証は必ず銀時を取り戻す!」

銀八
「あ・・・あはははははは・・・・そうなんだ・・・・そんでもう1つの質問。『あっちで良い思いをするぶんこっちではなのはの扱いは変わらないのか?』・・・・まぁ変わらないかもな。・・・・っと言う訳で『カラー』さん、なのはを怒らせないように気をつけてください。んで次の質問。ペンネーム『武士堂』さん『新八のカッコいい所が見たいです。そんなに新八の活躍を期待するのが悪い事なのでしょうか?そこんとこ、銀八先生の考えを聞かせて下さい。ふざけるのは無しです。真面目に答えて下さい。他の人が答えるのは無しです。必ず銀八先生が答えて下さい。』・・・・コイツは驚いた。あのメガネの出番を出して欲しいと言う読者がいるなんて」

シグナム
「確かに冴えない上に剣術も一般的。地味な上にそこまで強くはない。特に歌が最悪的に音痴だ。だが確かにそろそろ出しても良いぐらいだな?」

銀八
「おい、お前も何気なく酷い事を言っているぞ!特にどうして新八

が歌が下手くそである事を知っている!?・・・・まぁとりあえず、『武士堂』さんの言う事もおっしゃるどおりだ。オレや作者は新八に対しては酷い扱いをしているが、あえて新八の存在を後半戦に出したほうが良いと思います。なぜなら、最近のアニメや漫画って言うのは進めば進むたびに『なんか前の方が良くねぇ?』って思ってしまうことがあるだろ?」

シグナム
「ほぉ、確かにそうだな。」

銀八
「それに新八のツッコミが重要な事はないがそこそこいける事はある事は分かっている。だからあえて後半に出す予定にしたのは新八の地味なツッコミで面白くするためだからな。それに後半に出すのは作者にはある狙いがあるから。『武士堂』さん、新八の出番は必ずでます。後、番外編も作る時には必ず新八は出ますので安心してください。次ぃ。ペンネーム『烈火竜』さん。『シグナムさんに質問です。着用下着は実はフンドシですか?』」

シグナム
「烈火竜・・・・セクハラ発言で斬っても良いか?」

シグナムは怒り出して『レヴァンティン』を構える。ちなみに原作同様にフンドシじゃなく普通の女性用のパンツのようです。

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立たなくて良いですので命は粗末に扱わないように!・・・んでぇ、次ぃ。ペンネーム『神威　銀時』さん『寿司屋の話でなのは等、登場しなかったキャラは料理は出来るんですか?』」

銀八がそう言うと、シグナムは苦しそうに黙り込む。
少なくともシグナムは出来ないようである。

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、少なくともシグナムは出来ないようです。」

シグナム
「ぐ・・・・反抗できん・・・・・」

銀八
「んで次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『?今回の話でなのはやフェイトが出ていませんけど，スバルってほとんど出てますよね．この調子でいくとスバルがメインヒロインですか?？スバルの扱いが優遇されすぎと思うのですが，作者さんはスバルが一番好きなんですか?？そして人から離れているなのはさんやキャロの存在が薄く感じます．（特にキャロ）このままだと闇に染まりそうなのはさんやキャロは暗黒面に落ちないんですか?』っておいおい、ついに?の質問で来ちゃったよ」

シグナム
「そう言えば最近スバルの出番が異常なまでに多いと感じる。作者がもしや・・・・」

銀八
「作者がこう言う質問が来ることを予想していたからその質問が来た時の為に、俺だけに教えたことがあるんだ。ずばり、お答えします。その前に?からね。そうですね。メインヒロインは1人とは限りません」

シグナム
「まぁ、なのははは哀れとして、ともかくフェイトもスバルに負けてもしょうがないな・・・ってそれでは私もスバルに遅れをとってしまうではないかぁ！」

銀八
「何盛り上がっているのぉ！？つうかそれ2人が聞いたら裁かれるぞ！」

青ざめてツッコム銀八。

銀八
「なお、今回は『スバル編』な為にスバルが主役です。つまり彼女がメインヒロインに感じるのは今回の『スバル編』でフェイトとなのはの出番が少ないからです。そんで？はお答えします」

何やら銀八の表情が真剣になった。

銀八
「実は赤夜叉さんの『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』での銀時に助けられたスバルの影響が面白かった為，もう1つの『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』を作る際、作者は銀時に助けられたスバルの影響を強くしようと考えてスバルのオリジナルデバイスをも考えたようです。オリジナルデバイスである『七星神刀（しちせいしんとう）』の1つ、日本刀のデバイス『ティルヴィングエア』は銀時に憧れたと同時に侍としての強さを知ったスバルを書いてみたいと思ったそうです」

シグナム
「なるほど。確かにこっちの方がスバルが銀時に憧れる影響が大き

いな」

銀八
「それだけならスバルの出番はこれほどまでに多くないが、何か作者がせっかく考えたオリジナルデバイスをもっと活躍させたいと考えて書いているから、スバルの出番が増えている訳」

シグナム
「ぐ・・・オリジナル設定にはかなわないって訳か！」

銀八
「まぁ、でもその分シグナムにも考えているようだぜ？」

シグナム
「本当か！？」

嬉しそうに喜ぶシグナム。

銀八
「そんで？は、なのはは無いと思いますが・・・キャロは可能性があります」

シグナム
「作者は鬼かぁあああああああああ！」

さっきのありがたみを忘れてツッコムシグナム。

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、作者は早く貴方の小説の最新話を見たがっている以上に応援しています」

シグナム
「何て作者だ・・・とりあえず次の質問だ！ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『ズラに質問あなたは断崖絶壁の上に立っています。目の前には、はやてとエリザベスがそれぞれ崖の端に？まって今にも落ちそうになっていて、２人の間には崖の端ギリギリに置かれて今にも落ちそうになっている高級そばがあります。この場合あなたならどれから優先して救出しようとしますか？銀時に質問。上の桂への質問と同様の状況で落ちそうになっている人物をフェイト、スバル、なのはの３人に置き換えます。この場合あなたなら誰から優先して救出しようとしますか？』」

銀八
「ずばり答えます。ヅラの場合はエリザベスとはやてを助けます。いつも世話になっているからな。そんで銀時なら３人とも同時に助けると思います。簡単に言えば２人は仲間を見捨てないからです」

シグナム
「ふ・・・流石だな」

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、大切な仲間がピンチになったら助けるように！そんで次の質問。ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。銀魂の原作で２９４訓にさっちゃんのニセ結婚報告が機動六課とナンバーズにも届けられてたら、フェイト達はさっちゃんを殺しに行きますか。』・・・・て何『レヴァンディン』を構えているの？」

凄まじい殺気を放って額に血管を浮んでいるシグナムに青ざめて質問する銀八。

シグナム
「何、今すぐにあの女に裁きをしてくるだけだ」

ニヤリと笑って言っているが言っていることが怖い。

銀八
「落ち着け！なんか怖いんだけど！？っと言う訳で『クアンタ』さん、刺激する質問は控えめに！次に質問ペンネーム『ユーリー』さん『前回の質問を機に作者はゲーム版のなのはを買いましたか』」

シグナム
「残念だが、作者は金の余裕が無いから買えていないようだ。」

さっきまでの怒りが消えて謝罪するように答えるシグナム。

銀八
「っと言う訳で『ユーリー』さん、そのゲームを持っていたら作者の分まで楽しんでやってください。次ィ、ペンネーム『風花』さん。『？スバルですが他と比べて八つ当たり、銀時を狙う女(やから)を攻撃する事が少ないんですが取られてもいいんですか？？キャロに質問というより提案なんですが男を取り戻したかったら『何で私だけ見てくれないの！？』とひとけのない所に連れて行き上目づかいでちょっと涙目で言ってみたらどうですか』」

シグナム
「？は私が答えよう・・・良いわけないだろう！スバルの行動は私達の眼の範囲に離れているからそれに気づかなかっただけだぁ！」

スバルに対して怒りを表すシグナム。

銀八
「（うわぁ～、スバルも後が大変だこりゃ）・・・・？の方は・・・・それをやる機会はあるかもしれません。っと言う訳で『風花』さん、廊下に立っていなさい」

シグナム
「次だ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん。『1．もし新八がここでの扱いが酷いと知ったら、切れますか。2．フェイトさんに質問です。もし銀時が「髪型変えたら可愛いと思うよ」と言ったら変えますか。』・・・・1は確かに切れるな」

銀八
「確かに・・・・そんで2だと変えるな」

シグナム
「わ・・・私だって変えるさ／／／」

対抗するかのように言い出して顔を真っ赤に染めるシグナム。

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞォ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん。『残りの七星神刀を出す予定はありますか？』・・・・即答で言います。出す予定です」

シグナム
「確かに，今まで出てきた七星神刀（しちせいしんとう）の数は3つ。この様子ならば残り4つも出るであろう。」

銀八

「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、楽しみにしてください。最後にペンネーム『F．N』さん『鬼兵隊もミッドチルダの存在を知ったように天道衆も存在を知ってミッドチルダを乗っ取ろうとしますか？』おそらくはそうすると思いますが、今だ存在は知られていないのでそれは無いと思います」

シグナム
「もしそうなれば私達が追い返すまでだ！」

銀八
「そうだな・・・っと言う訳で『F．N』さん、廊下に立っていなさい」

第四十九訓：神速を越えるって事は超神速の領域に立つ意味であり、それってつまり

スバルの思いがアーサァに伝わった。

だがここでついにウゼルが動き出す。

ついに最終決戦が始まる。

ティアナ

「次回「子は親の道具じゃない」。テイクオフ」

第五十訓：子は親の道具じゃない（前書き）

黒神
「いやー、ついに５０順目突破しました♪」

銀時
「ほぉー『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』も５０順まで行ったか」

フェイト
「こんだけ続いているにもかかわらずにまだ序盤なのが信じられないほどだよ」

黒神
「確かにこんだけ進むのもなんとも言いがたい事だし、これからもジャンジャン進みたいと思います！」

スバル
「それは凄い事だよ！私も最もこの小説は進んで欲しいし！」

銀時
「原作やアニメが終わろうが、この小説はもっと続いて貰うからな？」

黒神
「ご安心を！少なくともこの小説は１００話以上は続かせる予定です！」

なのは
「そんなに♪」

桂
「それは見ごたえがあるではないか！」

黒神
「でしょでしょ？まだまだ知らないシリアスと話を頭の中で創造しちゃっているし♪」

フェイト
「これからも頑張らないとね、銀時」

銀時
「そうだな……んじゃ、最後に一言」

黒神・銀時・フェイト・スバル・なのは・桂
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります！！」

第五十訓：子は親の道具じゃない

激戦のゆえに敗北したアーサァは体中から血が溢れていて立ち上がる力はない。
１m先にある地面に突き刺さっているアーサァの愛剣『ペンドラゴブレイド』を見つめ、スバルに言い出す。

「本当に守りたいもの……その為だけに貴方はこれほどまでに強くなったんですね……」

敗北によって理解したスバルのこの強さ。
自分の大切なものを守れる為ならどんな相手であろうと打ち勝つ強い心。
銀時とスバルにはあり、アーサァにはなかった強さ。

「貴方の言う通り……私のこの力は白夜叉の力を真似した偽りの力……どんなに強くなろうとも……消して私は貴方と白夜叉には敵わない……今ようやく気づきました」

スバルの言う事がもっともであったと理解したアーサァは右手を強く握り締め、己の心の弱さに悔やみだす。
それは人造生命体としてでもないアーサァ自信の感情である。
スバルはゆっくりとアーサァの右手を両手で優しく掴むと、スバルの背中からまたもや蒼き片翼『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーウィング）』が現れる。
すると，スバルとアーサァの回りから蒼い魔法陣が現れると、アーサァの体が徐々に回復していく。
アーサァはもちろん、銀時、ティアナ、源外、スカリエッティも驚きを隠せなかった。

「これは……治癒魔法？……まさか……」
「『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーウィング）』はただ単に私の潜在能力を上げたり飛行能力を上げるだけじゃない。自分には出来ないけど、相手に癒しを与えてくれるんだよ」
「そこまでのＩＳを持っていたとは……」

同じ戦闘機人とは思えない異種のＩＳにはアーサァも驚きだす。
そしてアーサァは何とか立ち上がれる事は出来たがまだ本調子じゃない。
スカリエッティに眼線を向けて話し出す。

「ジェイル・スカリエッティ……その様子では貴方もスバルのＩＳにはご存じないようですね」
「ああ、全くだ。私もこう見えて数多くの戦闘機人を見てきたが、本当に彼女は今までの戦闘機人とは全く違う……違うと言ってもＩＳの能力やその戦闘力の高さでもない。……数多くの戦闘機人よりも……スバルは人間らしい存在な事だ。それは君自身が一番知っているだろう」

スカリエッティはアーサァに訪ねると、アーサァも少し縦に顔を振るう。

「それに、私もスバルのように心が強ければもっと早くウゼルを……」

ウゼルとは気が合わない存在だが、それでも友としてウゼルを止められたかもしれない。
そう考えれば少しスバルを羨ましく感じるスカリエッティである。

「スカリエッティ、やはりお前さんも……」

源外はスカリエッティの顔を見るとかつて、林流山の事を思い出す。
そんなときであった。

「!?」

銀時とスバルが何かを感じて、後ろを振り向く。
そしてスバルは……

「アーサァ!」
「!!」

スバルはアーサァを前に押すと、突如後ろから強大な黄金の波動が現れてスバルは蒼い障壁で防ぐが、とても防ぎきれずに吹飛ばされる。

「スバルー!!」

ティアナは思わず叫びだす。
そして『ティルヴィングエア』は銀時の目の前に落ちてくる。

「これは驚いた。まさか私の最高傑作である『タイプゼロ・ファースト』が『タイプゼロ・サード』にやられるとは……これが侍の力と言う訳か」

聞き覚えのある声に銀時とスカリエッティは声が聞こえた方を向く。
そこにはさっき放たれた黄金の波動によって大きな穴があけられ、右手に『エクスキャリバー』を握っているウゼルであった。

「ウゼル……」

「ほぉー、こんな所で会えるとは思いもよらなかったよ。スカリエッティ」

まさかかつての同じ研究員とここで会えるとは思ってもいなかったウゼル。

「ウゼル、君がミッドチルダの管理局から受けた屈辱は私の耳にも届いている。気持ち的にはわからない訳じゃないが……まさか君がここまでするような男だとは思いもよらなかったよ。しかも『鬼兵隊』作のガジェットまで手を借りるとは……」

「ふふふ、それがどうした。管理官によって腐りきったミッドチルダの革命の為ならば多少の犠牲も止むを得ないであろう？」

「多少の犠牲……ミッドチルダに住む全ての無関係な一般人も巻き込んでしまっているから大勢の犠牲の言い間違いではないか？」

ウゼルは以前の顔見知りであるスカリエッティを見て、以前とは全く別人であるかのように思わせる変わり果てを見て意外そうに驚く。

「もう良いはずだ。結果的に機動四課は壊滅危機に追い込まれるほどまでに痛手を受けた。機動四課が君に与えた屈辱はすでに機動四課の生き残りに伝わっているはず。これ以上の破壊のくり返しをしてもマーリンは喜ばないはずだ」

マーリンの名を聞きだすが、ウゼルは平然としている。

「だからどうした？」

「何？」

「たとえ今のやり方がマーリンが喜ばなくても、前に比べればマシなほうだ……マーリンが死んだのは私の考えが甘かった事さ……だからその為に私は『カリバン』を作り上げた。全ては腐りきったミ

ッドチルダを一度破壊し、正当なるミットチルダとして再生する為にだ！だがその為には全ての『七星神刀』を手にして『ソードマスター計画』を達成させる！」

「『ソードマスター計画』！？」

それは、最初にアーサァがスバルに言ったウゼルの計画の1つである。

どうやら『七星神刀』に関わりがあるようであった。

「今この場にあるのは私の『エクスキャリバー』にファーストの『ペンドラゴブレイド』、そしてサードの『ティルヴィングエア』の3つだけだ。残り4つの七星神刀は何処かにあるはずだが、『エクスキャリバー』の敵ではない！すぐに我が元にわたるだろう！そしてその七星神刀は私の作品達に使わせ、究極の戦闘部隊を完成させる！そして世界は私の自由自在になるのさ！あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

全ての七星神刀を自分の作った戦闘機人に使わせて最強の魔導部隊を作らせ、この世界を支配する。

それこそがウゼルの最大の目的である。

アーサァはウゼルを今見ると、苦しそうな表情をする。

「それはつまり、テメェは自分の計画の為だけに七星神刀を自分の戦闘機人に使わせて道具のように操る訳か」

殺気を込めた眼つきでウゼルを見つめる銀時。

「貴方によって生み出された戦闘機人は、貴方の子と代わりがないはず！それなのに自分の目的の為だけに道具に扱うなんて酷すぎる！」

「ウゼル……外道に堕ちたな」

ティアナはウゼルの残酷さに怒りを感じ、スカリエッティは悲しそうな眼でウゼルを見つめる。

「何とでも言うと良い。とりあえずファーストは用済みだ。サードは回収させてもらおう」

ウゼルがそう言うと、銀時はスバルのほうを振り向く。
そこには1体のガジェットが気を失っているスバルを抱えている。
そのガジェットはウゼルの前に近づく。

「スバル！」
「テメェ！スバルをどうするつもりだ！」

アーサァはスバルの名を言いだすと、銀時は怒鳴りだしてウゼルに言いだす。

「もちろん彼女にも『プロジェクトＤＮＡ』を受けさせてもらうのさ。銀時君、君の血を利用してね。最上階にまで待っている。そこで君1人で来ると良い。はーっはっはっはっはっはっはっはっは！」

すると、ウゼルはスバルとガジェットと共にテレポートしてこの場から消える。
おそらくは最上階で銀時を待ち伏せするのであろう。

そしていつの間にか回りから数多くのガジェットと戦闘機人が囲んで来た。
その数はかなり多くて対抗できるかどうか分からない。

だがどうしてスバルを回収してアーサァを回収しなかったのかは不思議に考える中……アーサァが銀時に言い出す。

「白夜叉……いえ、銀時……マスターはおそらく私の代わりにスバルを新たな『カリバン』の忠誠なる戦闘機人をさせるつもりです。『プロジェクトＤＮＡ』を受けずにあれだけの力をもっているんです。マスターは、そのスバルに貴方のＤＮＡを受けさせたらどれだけ強くなれるかを興味を持ち始めたんでしょう」

それを聞いて銀時は眼を大きく開いて驚きだす。
それと同時に何かの感情が表す。

「なるほど……そうなってしまえば取り返しの付かない事になってしまう。ウゼルは己の興味のある者のためならばどんな犠牲を払ってでもやるつもりか」

源外がウゼルがそう言う男であると言い出すと……

「スバルを取り戻し……そしてウゼルの計画を止める方法を教えてやろうか？」

銀時がその問題解決法を言い出す。

「ウゼルをぶっ殺すんだよ」
「に……兄さん？」

突如雰囲気が思いっきり変わりだした銀時を見てティアナが一瞬だが恐怖を感じた。
ティアナだけでなく、スカリエッティやアーサァも一緒である。

そして数多くのガジェットと戦闘機人が武器を構えて一斉に銀時達を襲いだすと。

ドゴォォォ

ティアナは止めようとするが、木刀を握っている銀時の右手の震えを見て言うのやめる。

「……兄……さん？」

いつもと様子が違う銀時にティアナは額に汗を流す。

「……気にいらねェ」

銀時の中からとてつもない怒りが現れ、それと同時に小さい頃の自分を思い出す。

「全くもって、気にいらねぇ」

剣道の特訓をして、その銀時を見守るかのように剣道の稽古に付き合う父のような存在である松陽の姿を。

「ヤローだけは……死んでも思い通りにはさせねェ」

その眼は戦場に立つ伝説の侍、『白夜叉』その者であった。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

なのは

「こんにちは。今回は私、高町なのはがアシスタントします。ジャンジャン質問してください」

銀八
「ではまずはこの質問。ペンネーム『神威　銀時』さん。『なんでモンハンで神楽のキャラがカグーラ＝ジャスアントじゃなかったんですか？』」

なのは
「何その中二設定！？」

あり得ないペンネームにツッコむなのは。

銀八
「ずばり答えます。作者がタダ単に忘れていただけで、神楽のあの時の姿は『金魂』の神楽にそっくりでしたのであえて名前を違うのにしたようです。っと言う訳で『神威　銀時』さん、一度『金魂』を見てやってください」

なのは
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん……さて、今回はどんな質問なのかな～♪質問自体では地獄落ちの半殺し死刑なの～♪」

とてつもない殺気に恐怖する銀八は、慌てて質問を言い出す。

銀八
「で・・・・・では行きます！『？スバルがここまで強いとなのはさんや銀時よりもう強いんじゃないんですか？？キャロが暗黒面に落ちるみたいなこと言いましたけどそれって敵になるんですか？』

って、なのはァァァァァァ！」

とてつもない殺気になのははウッソ・エヴィンさんを殺す事を決意しそうである。

なのは
「ふぅ～ん、そうなんだ。ウッソ君は私はスバル以下と思っているんだ～？」

今度スバルに会ったら半殺し以上に死ぬより辛い地獄を見せる事を決意するなのは。

銀八
「あ……あはははははは……？はまだ銀時には及ばないですが……？は敵にはならないかもしれません……と言う訳で」

なのは
「先生？まだ１つ質問がありますけど？」

正気に戻ったなのはは質問を取り上げて読み出す。

銀八
「ちょ……なのは早ま」

なのは
「何々？『？なのはさんが魔王として世界に君臨する日は来るのですか？』……」

突如、衣装はバリアジャケットに代わり、『レイジング・ハート』からからとてつもない魔力が収束されている。

気のせいかその魔力は桜色から徐々に黒と真紅の混色となる漆黒の魔力と化している。

銀八
「ちょっとまって!?……なのはそれってあの新必殺技の……（焦り）」

なのは
「デスペレード・デモンブレイカー！」

銀八
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

漆黒の魔導砲は銀八を飲み込んで黒こげにした。

なのは
「にゃはははは……ウッソ君？後でゆっくりと頭冷やそうか♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

とてつもない殺気を放つなのは。
だがすぐに正気を取り戻して質問をする。

なのは
「次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さんからの質問です。『1．銀時の世界になのはの映画はやっていますか。2．これから登場する銀魂、なのはキャラを教えてください3．なのはキャラを銀魂にたとえるなら誰ですか？』そうですね。1は銀さんから聞いた話じゃやっていると思います。そして2はまだ登場予定ですが、ヒントはスカリエッティが銀さんに上げたデバイスに関係する人です。3はユーノ

君とシャマルさんは新八君に当てはまります。何せ最近かげ薄いから♪後は作者は考えていないので分からないようです。てなわけで『ＳＡＤＳ』さん、これからも応援よろしくお願いします」

なのはは丁寧に挨拶すると次の質問をする。

なのは
「次はペンネーム『カラー』さん。『質問ＲＹＯ－？（マユゾン）ウィルス又はそれに類する話しはでますか？質問2フェイト達で料理出来るのと出来ないをどんな感じになりますか？（シャマル、妙は除いて）』」

なのはが質問を読むとゆっくりと立ち上がって銀八が答える。

銀八
「ず・・・ずばり言おう。1つは出ないかもしれません。その予定は立てていないので」

なのは
「二つ目はフェイトちゃんから聞いたんだけど、『ヒロインとして悔しいよ』っと言っていたよ？」

銀八
「フェイト……動揺するぜ。と言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。」

なのは
「にゃはは……次はペンネーム『クアンタ』さんの質問だよ。『すっかり山崎とディエチのトラウマになっているキャロとディスバールですが、ヴィータ、セッテ、シグナム、近藤も同じようにトラウ

マになっているんですか。』」

銀八
「ずばりお答えします。……なっていますね」

青ざめて言い出す銀八に、なのはも納得して頷く。

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、キャロには気をつけてください。んで次ぃ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目　スバル編以外に考えているオリジナル長編はありますか？二つ目　本家ＳｔｒｉｋｅｒＳとは全く違う経路に進んできた本編ですが、スバル編は本家ＳｔｒｉｋｅｒＳの時間枠でいえば何話辺りに相当するのですか？三つ目　アニメ銀魂１８５話の『土方のマヨネーズ工場編』のような有名映画のパロディ話とかはやらないのですか？』・・・・ずばり答えます。１つ目は『スバル編』以外にも『高町家編』や『魔導競技大会編』もオリジナルをやっていますので、これから先もやると思います」

なのは
「にゃはははははは……それは面白いね♪」

銀八
「２つ目はおそらく１０話から１６話分は進んでいます。ですが本当はどれぐらい良くか分かりません。そんで３つ目はそれは作者が考える事ですね」

なのは
「本編の『銀魂』と『リリカルなのは』とは全く違う次元に進んでいますので私もわかんないかな？」

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、これからもジャンジャン小説書きますんで。」

なのは
「にゃはははは。次行くよ、ペンネーム『サトッチ』さん『１つ、真撰組のどＳ男は出るんですか？　？もし出たら赤夜叉さんの小説みたいにティアナとの恋愛はありますか？２つ、銀さんは機動６課の方々中で今のところ誰が好きですか？』・・・・にゃはははははは♪」

またもや魔王のプレッシャーを放つなのはに大量の汗を出して恐怖する銀八。

銀八
「ずばり言おう！１つはＳ男は確実に出ますが、赤夜叉さんみたいにはならないと思います！２つ目はなのはの可能性が一番高いです！だってほらぁ！『ＳＯＳ学園』で銀時となのは、ラブラブだったもん！」

なのは
「にゃはは～／／／」

銀八の答えに顔を真っ赤に染めるなのは。

銀八
「っと言う訳で『サトッチ』さん！Ｓ男の出番を楽しみに待ってください！」

なのは
「次行きます。ペンネーム『風花』さん『？現在ウッソさんが鍋パーティーに黒神さんを誘おうとしているのですが黒神さんだったら何を食べたいですか？以前なのはが黒魔法を出したんですがフェイト達も黒魔法を使いますか？？山崎さんは現在恋人がいますが残りの銀魂メンバー（銀さん除く）で恋人を作る人はいるのでしょうか？』……」

？の質問に青ざめるなのは。
ウッソさんの鍋パーティはなのはも参加するからだ。
なぜならその鍋パーティはお妙さんの『暗黒物質（ダークマター）』、シャマルさんの『毒物物質（ポイズンマター）』、姫路さんの『化学兵器』が合体した究極の極悪不味料理であるからだ。

銀八
「コイツは動揺するぜ……ずばり言おう、？はとにかく美味いものです！？は使う可能性はあります！？はいると思います！っと言う訳で『風花』さん、卵焼きを作る場合は『可愛そうな卵』だけは作らないように！……次ぃ……ペンネーム『アクセル』さん『妙のダークマターとシャマルの物体X、この世にこの二つしか食べる物がなかったら銀時達はどうしますか？３択です。１つだけ選びなさい。

？　ダークマターを食べて昇天する。
？　物体Xを食べて黄泉路を渡る。
？　両方食べてくたばる。現実は非情である。

ちなみに両方食べないという答えは自動的に？になります』……」

銀八・なのは
「どっちもいやァァァァァァァァァァァァァァァ！」

銀八となのははは質問を蹴り飛ばす。
つまりこれは自動的に？になったのであった。

銀八
「なんで世の中が地獄の食材ばかりになるんだ！これ絶対に死んでと言っているのと同じじゃねぇか！」

なのは
「『アクセル』さん……少し頭冷やそっか？」

殺気を放つなのは。
今回はなのはが正しいと銀八は頷く。

なのは
「次はペンネーム『ユーリー』さん『この作品ではフェイトは料理が苦手とされていますが、ｖｉｖｉｄじゃデザートを作ったり、パンを焼いたりしていました。これから上手になっていくのですか？』」

銀八
「ずばり答えます。おそらく上手になる可能性は大です！」

なのは
「なるほど、っと言う訳で『ユーリー』さん、フェイトちゃんを見守ってください」

銀八
「次ぃ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『銀八先生に質問です。質

問コーナーではフェイト達に攻撃されて体がもうボロボロでしょ？いっその事限界を超えてみませんか？』……ずばり答えます……限界は超える為にあるって言うけど……そんなことしたら俺死ぬだろ！」

なのは
「にゃはははははははははははは！それは面白いかも♪」

銀八
「ねぇよ！つぅ訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい！最後！ペンネーム『F．N』さん『銀魂メンバーをトラウマにおとしいれた沖田のデビルボイス（てこ入れの話でやったあれ）をなのはたちにきかせたら間違いなくトラウマになりますか？』……なるだろ？」

銀八がそう答えると、何やら目の前にデビルボイズと書かれたテレビがあった。

なのは
「ふぇ？これはなんだろう？」

銀八
「待てェェ！押すな、なのはー！」

銀八は叫びだすがすでに遅く、そこから流されたドSのデビルボイスが映し出される。
そして30秒後、2人は青ざめて体を震わせてしまった。
それ以来トラウマと化してしまう。

第五十訓：子は親の道具じゃない（後書き）

黒神

「とにかく次回予告を！次回「人は怒りだすと誰でも怖い」テイクオフ！」

第五十一訓：人は怒りだすと誰でも怖い（前書き）

黒神
「ああ～死ぬかと思った」

フェイト
「うう～、酷い目に会ったよ……」

黒神とフェイトはげっそりとして涙を流しながら帰ってきた。
なのは、桂、はやて、エリザベスも後から続くかのように帰ってきた。
そんなフェイト達を見て銀時とスバルは来なくて良かったと考える。

銀時
「いやー、災難だったな。お前等」

スバル
「み……皆さん……大丈夫ですか？」

黒神・フェイト・なのは・桂・はやて
「大丈夫な訳……ないわぁあああああああああああ！」

エリザベス
『テメーらも地獄を見て来い！』

6人は怒り出して2人に向かって走り出す。
手に持っているのは地獄の闇鍋の残り物が入った椀である。
それを一気に銀時とスバルの口に入れる。

銀時・スバル
「ガガガ

第五十一訓：人は怒りだすと誰でも怖い

そこはある研究上。
かなり広くて無数の剣型のデバイスがざら理と並んでいて，その中心部には『エクスキャリバー』を眺めるウゼルと特殊な水色の液体が入っているカプセルの中に入っているスバルがいた。
ウゼルは興味深そうにスバルを見つめる。

「にしてもまさかサードがあのファーストに勝る戦闘能力を誇っていたとは……出来損ないのセカンドとは違ってなんとも興味深い事だ」
≪……≫
「まぁ良い……いずれにしろ、もうすぐ白夜叉はここに来る。我が聖剣、『エクスキャリバー』の切れ味を彼で溜めさせてもらうとしよう。そして……その死体から数多くのＤＮＡを抜き取り、究極の戦闘機人集団は完成される……サード，君を初めとしてね！」

ウゼルはカプセルの中に入っているスバルを見つめて言い出す。
確かに銀時の血でスバルを初めとした戦闘機人に『プロジェクトＤＮＡ』に受けさせれば一気に最強の戦闘集団が完成する。
それはまるで何百人の銀時がいる戦闘集団と一緒であった。

「しかも君はその『プロジェクトＤＮＡ』を受けている訳でもなく、あのファーストに勝った。神秘の力ともいえるＩＳである『神々の蒼翼（ブルーヴィング）』と七星神刀（しちせいしんとう）である『ティルヴィングエア』を完全に使いこなしている。君は間違いなく私の最高傑作である戦闘機人になるだろう……ふはははははははははははははははは！」
狂わせた笑いをするウゼル。

外道に満ちた欲望の塊となったウゼルを見て、スバルは悲しそうな眼で見る。
その眼に映っているのは、ウゼルの怒りと欲望だけではない……全てを失った悲しみに染まった黒い魂が見えていた。
どんだけウゼルが卑劣な行為を使用ともスバルはウゼルの悲しみがいやと言うほど理解する。

「さて、そろそろ彼が来る頃だな……」

ウゼルはもうすぐ銀時がここに来る事を確信する。
すると、

ドカァアアン！！

飛びたが豪快に蹴り飛ばされて開けられる。
現れたのは，1人の侍……いや、攘夷戦争でも伝説の武神として名を高め，世界を救った英雄『白夜叉』ごと坂田銀時であった。

≪銀さん！≫

カプセルの中でスバルは銀時の名を叫びだす。
だが、様子がおかしく感じる。
ウゼルには分かっていない様だが、銀時からは静かな怒りを感じとる。

「良くぞここまで来た……ワザワザ私に殺される為だけに来た事に感謝しよう」
「……」

ご丁寧に挨拶するウゼルだが、銀時はただ単に黙り込むだけであった。

「いや、言い方を変えよう。君の存在には凄く感謝している。あのオーバーSランクであるゾーマをも上回るその身体能力のお陰で私の『プロジェクトＤＮＡ』は成功し、『ソード・マスター計画』を立てなくても理想の究極戦闘集団を作れる。そして……その計画の為には君は死んで貰わなければならない」

ウゼルは笑いを止められず、ゆっくりと『エクスキャリバー』を構えだし……

「全ては、君をこの手で殺せば住む事だ！」

その剣先を銀時のほうに向ける。

ウゼルから見ても銀時はもはや最重要なサンプルしか見えなくなった。

「……時は来た。これより『プロジェクトＤＮＡ』の最終段階に移行する……究極の戦闘機人を作り出すために！」

全ては己の復讐の為、そして己の理想の為、ウゼルはこの手で銀時を倒し、その後は後で『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』を回収する事を考えている。

「てめェがどこで復讐しようが構いはしねェ。機動四課だろうが管理官だろうがどうぞどうぞ好きにやりゃ良い……」

ただ単に冷静に口を出して言い出す銀時に少し意外そうな表情をす

るウゼル。

「だがその手で作り出した戦闘機人共は全ててめェの子に変わりはねェじゃねぇか？それにも関わらずに……てめェ……子を道具扱いしやがったな」

ウゼルの狂った活動原因がどうであろうと、銀時にとっては許せない光景である。

「娘の代わりとは言え、お前によって生み出されたアーサァ（アイツ）を……てめェ…見捨てたな」

物心を付いた時にはすでに親は亡くなり、戦場の中で自分を拾ってくれた恩師、松陽を思い出す。

「そんなもん……父とは呼べねェ……そんなもん、親子とは呼ばねぇ……」

絶対に認められないウゼルのやり方……そして絶対に許せないウゼルの非道さ。

「……消えろ」

怒りを込めた一言を口にする銀時。

「俺とスバルの前から……さっさと消えろってんだ腐れ外道」

鋭い目つきからはとてつもない殺気が放たれている。それを見たウゼルは思わず驚きだす。

（凄まじい殺気だ……！）

銀時の殺気は、最初に出会った時に放たれた殺気とは比べ物にならない程に大きい。

（なるほど、戦う前から分かる！おそらくファーストが白夜叉と戦っても確実に負けるやも知れぬ）

さらに異変に気づいたかのようにウゼルは回りに刺さっている剣を見ると、剣がちょくちょくと震えだす。

（剣が……震えている？……何かの衝撃でもなく、この要塞が震えているでもない……何かに共鳴されるかのように剣自身が震え上がっている）

その異変は全て銀時の放った殺気にある。
絶対的な強大な修羅を通った銀時だからこそ放てる圧倒的な殺意の闘志。
得物を狩る獣の眼。そして白く染まった鬼神の如く眼。

（あれは……あの眼は）

ウゼルはそれがなんなのかを考える中、幻想なのか……銀時の後ろから大きな白い獣の姿が見えた。
その獣は狼の姿をした夜叉（おに）のようであった。

「！！」

これはウゼルも驚きを隠せなかった。
それは銀時の殺気と闘志が重なり合って生み出された幻想である。

一方のスバルも異常なまでの怒りを表す銀時を見て驚きだす。

（凄い闘志と殺気を感じる……怒っている……銀さんが本当に怒っている……ウゼルのやり方に本当に銀さんが怒りだしているんだ）

スバルですら見た事がない銀時の絶大な殺意に満ちた怒り。

これこそがスバルが憧れた銀時のもう1つの姿、伝説の白夜叉である。

（これが……銀さんが白夜叉と呼ばれた姿……）

今になれば分かる。

本気を出した銀時の強さは自分やアーサァをはるかに上回る強さを発揮する。

「……ウゼル……殺されるのはてめェの方だ。」

そしてその殺意に満ちた目ついでウゼルを見つめる。

「俺の中に眠る白い獣の逆鱗を触れたからには……楽に死ねると思うな」

そして銀時は居合いの構えで木刀を握り、

「薄汚い血をぶち撒いて、くたばりやがれ！」

白夜叉の怒りは最大限に達成しており、ウゼルは一瞬この化け物に殺されると恐怖を感じた。

だがその後に『エクスキャリバー』を構えだす。

「ふ……それが白夜叉と呼ばれた君の本当の姿か……面白い！」

そして尋常とは思えない速さで銀時の突撃する。

「ますます君に興味を持った。その身を、『プロジェクトＤＮＡ』のサンプルとなるが良い！」

そして振り下ろされる剣は銀時を襲うが、銀時はなぎ払うかのように木刀を振ってウゼルは吹飛ばされるが体を逆回転させて着地すると、黄金の魔法陣が浮かび上がって無数の魔力剣が現れて銀時を襲う。

それはクロノの『スティンガーブレイド・エクスキューションシフト』に匹敵する。

しかし、銀時はスバルに匹敵……いやスバル以上の神速の速さで全ての魔力剣を打ち砕く。

「小細工はなしか……だが『エクスキャリバー』の力はこんなものではない！」

そしてウゼルはもう突進して銀時をおどい出す。

黄金の聖剣を豪快にだが、竜巻のような素早い連続攻撃を炸裂させる。しかもその一撃一撃がかなり重い。

対する銀時もその剣撃を木刀で防ぐのではなく叩き返す。

剣をぶつかり合う2人だが、おかしな部分が1つある。

それはウゼルは元々研究員で魔導師としての強さもCランク程度である。

そんな人物が銀時に、しかも白夜叉と化した銀時に勝つどころが対抗ですらも不可能。

全ては『エクスキャリバー』の能力にあった。

「これぞ妙樹が完成させるべき彼の最高傑作である『エクスキャリバー』の威力だ！使用者の身体能力を急激に上げて魔力も増幅させる……いわばデバイスの神技なのだよ！私のような軟弱魔導師もこの『エクスキャリバー』によりＳＳＳ＋ランクにまで急激にパワーアップしたのだ！正に，これこそ究極のデバイス！勝利を導く聖剣なのだ！」

勝ち誇ったかのように言い出すウゼルはさらに黄金の剣を振り続けだす。

「以下に白夜叉といえども『エクスキャリバー』を倒す事は不可能！戦いが続けば続くほど、君の大量は無駄に消耗――」

ドカァ！

「ずぅ！」

顔面に木刀の一撃を受けて吹飛ばされて壁に衝突するウゼル。
衝突した壁から辺りには砂埃が立っている。
『エクスキャリバー』の性能を聞いても、どうでも良さそうにウゼルを見つめる銀時。

「だからなんだ？」

その一言だけを言い出す。
そして砂埃が晴れてウゼルは立ち上がる。

「ぐ……なるほど、あのゾーマもやられるわけだ！だが私の研究結果はこんな程度ではない！」

ウゼルは『エクスキャリバー』を天に向けて構えると、そのまま素早く振り下ろすと黄金の極光砲がはなたれる。
それはなのはの『スターライト・ブレイカー』やスバルの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』に匹敵する威力を持っている。
銀時は黄金の極光砲を見つめ、木刀を持ち替えて、居合いに似た構えを再び炸裂する。黄金の極光砲が当たる直前、銀時は木刀を振り抜き、黄金の極光砲は切り裂かれた。二つに割れた黄金の極光砲は、銀時の後ろで消滅する。

「なんと！」

いくらなんでもあり得ない光景であった。
本来の銀時では不可能な行動だが、白夜叉と化したことで全ての潜在能力を３０％から１００％にまで引き出しているため、木刀でもＳＳ＋ランク級の魔法を切り裂く事が可能になったのである。

≪……す……凄い……≫

スバルは銀時の強さに圧倒された以上に見惚れていた。
銀時の強さはえーりあんの戦いや似蔵との戦い、そして魔導競技大会の時でも注目していたが、それとは比べ物にならないと思えるほどの銀時の強さに驚きだす。
そして銀時は突き刺さっている1本の剣を抜き出してウゼルに向けて思いっきり投げる。

「ぬぅ！」

対するウゼルは『エクスキャリバー』を振り、その剣を織り出す。
白夜叉とは思えない小細工に銀時を見ると、いつの間にか目の前に

いた。
なぜなら銀時は剣を投げた瞬間に人間ではあり得ない速度でダッシュして走り出し、走りながらもう1度剣を抜き出したのである。

ザク！

「ぐ！……剣を……」

左手に持っている剣をウゼルの左足に串刺しする。
そして銀時はウゼルを見て、

「つ～かまえた」

その一言を言い出すと、

ドゴオオオオオオオ！！！！

右手で木刀を強く握り、怒りと殺意を満ちた木刀の一太刀を浴びせる。
その一撃は下手すれば人を簡単に殺せるほどの威力を持っていた。

「さァ、拷問死刑の時間だ……たっぷりと生き地獄を見せてやるよ」

銀八
「教えて」
生徒全員

「銀八先生！」

神楽
「今回はこの歌舞伎町の女王ごと神楽様がアシスタントしてやるから、ありがたく思うアル」

銀八
「何様！？……まぁ良い。とりあえず質問するか」

そう言って銀八は質問を言い出す。

銀八
「まずはこの人、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん、『？最近のジャンプで次郎長が白夜叉状態の銀時さんに対して「おいらたちの時はお前ぐらいの奴はごろごろいた」と言って銀時がやられてしまったんですが，銀時さんは攘夷戦争初期に戦っていた人にくらべて弱いと作者は考えていますか？？また敵として出てきたらなのはさんは一瞬で遣られるのではないですか？？なのはは本編で「デスペレード・デモンブレイカー！」を使うのですか？あと・・・もう人じゃないですよね！！
』・・・・ずばり言います。？はでは作者は思ってはいないと思います。？はあり得ると思います。銀時をも勝る強さを持っていますので」

神楽
「ババァ……」

神楽は少し悲しそうにお登勢の事を思い出す。

銀八
「そんで?は……作者ー!絶対に本編でなのはに『デスペレード・デモンブレイカー』を使わせないでぇーー!」

どうやら出すようである。

神楽
「にしても『ウッソ・エヴィン』さんってたしかこっちの銀八コーナーを元に小説書いている作者ネ。面白いから良いけど、だからって新八を無駄に出す事はないと思うネ」

銀八
「まぁ大目に見てやれよ。そのお陰であっちが多い分、こっちは安心して新八の出番を遅くできるしよ」

神楽
「おおー、そう考えればそうアル!それに新八(ジミ)には感謝しなきゃいけないネ」

神楽が新八に大して感謝することがあった。
銀八は珍しそうにその理由を言い出す。

神楽
「元々『リリカル銀魂』が始まったのは新八(ジミ)が『魔法少女リリカルなのは』のDVDを見て移っていたなのはちゃんを見てロリコンに目覚めたお陰ネ。あの変態行動に感謝するとは思えなかったアル♪」

銀八
「分かっているじゃねぇか。流石『歌舞伎町の女王』と呼ばれる事

はある」

神楽
「当然ネ！」

胸を張って威張る神楽

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、最新話を見させていただきました。そして馬鹿作者とフェイトがお世話になりました。」

神楽
「次はペンネーム『ＮＡＮＯ』さんの質問ネ。『、？「もし、フェイトたちからチョコパフェを毎日おごるから結婚してくださいといわれたらどんな反応しますか？やっぱり悩みますかね？」？「なのはが魔王化したあとに銀さんが俺はお前を愛してる。といって抱きしめたら止まりますか？それともかえって暴走しますか？」』」

銀八
「ずばり答えます。？は即答に結婚を受けると思います。？は暴走が収まってなのはは顔を真っ赤になりますね」

神楽
「銀ちゃん……メッチャ女の敵アル。軽蔑ネ」

銀八
「俺もメッチャムカつく……っと言う訳で『ＮＡＮＯ』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『神威　銀時』さん。『？なのはらの親友のすずかやアリサは銀時らと再会しますか？？ユーノがゴリラの弟子なったらなのはは、妙や『ＳＯＳ学園』のように撃

退しますか？』……答えます。その可能性は高いです」

神楽
「すずかちゃんとアリサちゃんの成長した姿、見て見たいアル♪」

銀八
「そんで？は……その可能性が高いですね」

神楽
「ゴリラの弟子にまで堕ちたアルか……やっぱりユーノは淫獣だったネ」

呆れてユーのに対して冷たいコメントを言い出す神楽。

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん。廊下に立っていなさい。次ぎ行くぞォ、ペンネーム『クアンタ』さん『屁怒絽様となのは（魔王化）とキャロ（黒化）で誰が一番怖いですか。』……」

質問を見て2人は固まりだして黙り込む。
そして2人は3人を想像して恐怖する。

銀八
「ずばり答えます……」

銀八・神楽
「どっちも怖いわァ！」

一斉に涙を流して怒鳴りだす。

銀八
「なんちゅう命知らずな質問だ！……『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい！」

神楽
「とりあえず次行くネ。ペンネーム『サトッチ』さん，『？銀さんに質問です。機動６課の女子の方々およびお妙さんと神楽崖から落ちそうになっています２人犠牲にして助けられるとしたら誰を、切り捨てますか？（ちなみに皆さん“魔王化”状態でみなさん銀さんに助けられなかったら己が持つ最大魔法（または攻撃）をしてきます。）ＰＳ“銀さんは全員助ける”又は“この質問には答えられません”てきな趣旨を、回答すると自動的に？“みなさんを見捨てて世界１最高級パフェ（これは全員を見捨てなければ手に入りません）と現金１兆５千万円（これも…以下同文）を助ける”選択することになります。（＾∋＾）ゞウッシッシ』」

銀八
「ずばり答えます。？銀さんはサトッチさんがどう言おうとも自分のルールを守る為に全員助ける気で行きます」

神楽
「あれ…この質問って以前にも来たことがあるネ」

銀八
「そう言われてみれば……そんでもう１つ『？これは機動６課のみなさんおよび銀さんに質問です。“ウッソさんの開催するなべ料理（というなの食に対する冒涜と言う名の物質）パーティー（犠牲者増加中）の鍋料理を１日で１０個完食したら好きなもの１つ叶えます。”っていうお誘いが来たらたべますか？　なお１日気絶せずお一人様１０個というルールで、気絶したら、食べた数がリセットさ

れます。それにお妙さんシャマルさん姫路さんが管理局内では有名の○●悪魔に変身する一歩手前の表情でみなさんを監視していますよ…ほらみなさんの後ろで・・・』……あいつらならやりかねます」

神楽
「私なら何とか達成できるアル……たぶん！」

銀八
「多分かい！」

神楽の最後の一言でツッコム銀八。

銀八
「っと言う訳で『サトッチ』さん，廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『風花』さん『？前回、黒神さんは鍋で美味いものを食べたいと言いましたがもし、すべて暗黒物質（ダークマター）でしたら食べますか？？私が書いている小説では酒にものすごく弱い人がいるんですがそちらのリリなのキャラで酒に弱い人はいますか？』……ずばり答えます。？は絶対にお断りして逃げ出します」

神楽
「まぁ、姉御から逃げられるとは思えないネ」

銀八
「そうだな……そんでもう1つは月詠以外と言えば……フェイトとシグナムは確実です」

神楽
「詳しくは赤夜叉さんの『『銀魂×魔法少女リリカルなのは』？魔法少女と銀髪の侍？』の第五十六訓を見るアル」

銀八
「と言う訳で『風花』さん、廊下に立っていなさい」

神楽
「では次行きます。ペンネーム『カラー』さんからアル。『質問最近の銀魂原作に出てる地球側の面々を見て感じたんですが、銀魂側（地球人）がミッドチルダに攻めたら壊滅するんじゃないですか？質問２銀時がフェイト達彼女候補の数だけ増えたら平和になりますか？簡単に言うと銀時が１３人に増えるみたいな。それとも、独り占めして逆ハーレムを目指しますか。フェイトさん達お答え下さい』」

銀八
「では答えます。一つ目は確かにあり得ますね。魔法がある分、火力が思いっきり違います。そんで２つ目は……答えられるかー！」

怒り出して、神楽から質問を取り上げて破りだす銀八。

神楽
「男の嫉妬は醜いネ」

銀八
「余計なお世話だ！『カラー』さん、廊下に立っていろー！」

神楽
「次行くアル。ペンネーム『２４９』さんからネ。『一つ目、黒紳はもし新八を出したら誰と繋げますか？二つ目、スバルのＩＳ、神々の蒼羽はもしかして、ＢＬＡＺＢＬＵＥのラグナの蒼の魔導書からとったんですか？（この質問はこの前の４１からＢＬＡＺＢＬＵ

Eのテーマを使っていたからそう思いました）』」

銀八
「ずばり答えます。１つ目は繋げるつもりはないです。たく、何で俺よりあんな新八（メガネザル）を……」

神楽
「ほんとネ。地味卒業は元地味のジミーだけで十分アル」

銀八
「全くだ。そんで２つ目はそうですね。それもそうですが、もう１つは『ＦＦ〇』の〇フィロスをネタもあります」

神楽
「おお、確かにあの姿のスバルは正に蒼い天使だったネ」

銀八
「っと言う訳で『２４９』さん、これからも応援よろしくお願いします。んで次ィ、ペンネーム『アクセル』さん『赤夜叉さんの作品みたいに機動六課の面々が江戸を散策する事はないんでしょうか？爺さんとスカリエッティが組めば転送装置とか作れそうな気もするんですが？』……ずばり答えます。源外のジーさんから聞けば、元々転送装置で『リリカルなのは』の世界にこれたのも新八（ロリコン）が『魔法少女リリカルなのは』のＤＶＤを持って転送装置に入ったからこそ可能になった事です。しかしフェイト達の世界には『銀魂』のＤＶＤ所が存在すらない。よってそれは不可能に近いと思われます」

神楽
「じゃあどうやって帰れるかも時間かかりそうアル」

銀八
「まぁな。と言う訳で『アクセル』さん。銀さん達がどう帰れるかを期待して楽しみにしてください」

神楽
「次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからネ。『銀時好きな人に質問です。銀時の綺麗な天パの触った感想を聞かせてください。言わなかったら銀八先生のチン○を去勢させます。』」

銀八
「セクハラ系の喧嘩売りかぁ～～～～～～～～！！！！（怒）」

またもや質問を取り上げて、破り捨てる銀八。

銀八
「『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていろぉー！」

神楽
「やれやれアル。次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目・黒神さんから見て一番キャラ設定が崩壊したと思えるキャラは誰ですか。二つ目・銀八先生が今までの質問コーナーで最も癪に障った質問はなんですか？』」

銀八
「ずばり答えます。１つ目は当然九兵衛だと思います。彼女の胸の小ささのコンプレックスは以上とも言えます」

神楽
「確かにあれはないアル。特に第十六順の『得意ゲームがあれば不得意ゲームもある』での九兵衛のあれはなかったアル」

銀八
「後、シグナムの第二十二順の『大切な物を勝手に変えられたら誰だって怒る』とキャロの第三十三順の『女の怒りはメッチャ怖い！』もヤバイと思った」

神楽
「全くその通りアル。そんで次は……」

銀八
「俺に対する侮辱質問とあの天然パーマのハーレム質問だこん畜生！！！！（怒）」

今そう思えば怒り出す銀八である。

銀八
「……と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『虚空』さん、『１　銀八先生に聞きたいことです、ハーレム状態となり最早、色魔状態である銀時をヤリに行ってヨシと言われたら銀八先生も一緒に来ます？（妨害者なのはさん達のお相手は、任されて・・・・目にもの見せてやりますよ（黒））２　リリカルなのはの世界に銀時世界の江戸お天気大戦（ケツノ編ともいいのか？）時の銀さんの数々の発言がバレちゃいました。銀さんの運命はどうなりますか？（テープを一緒に入れとくので参考としておいてくださいな）』……では答えます。１つ目は是非、お願いします！」

神楽
「ほんと醜いアル」

銀八
「そんで2つ目はまちがいなくもの凄いお仕置きが待っています。後、そうなれば結野アナもフェイト達に殺されます……と言う訳で『虚空』さん、いつかお願いします」

神楽
「次はペンネーム『幽霊道化師』さんからネ。『質問です!!銀さんを愛する機動六課メンバーに聞きます・・・?子供は何人欲しいですか?次はＹＥＳかＮＯで答えて頂きたいです・・・?実はもう子供の名前を考えている』」

銀八
「答え……」

神楽
「ほあちゃあああああああああああああああああーー!」

ドカァ!

銀八
「るぐぁあああああああああああああああ!」

神楽の飛び蹴りが炸裂して銀八は吹き飛び、気絶する。

神楽
「もううっとうしいアル!ここからは私1人で質問に答えるネ!…てな訳でお答えします。1はなのはちゃん達は銀ちゃんと結ばれれば何人でも構わないようです。そんで2つ目はまだ決めていないようアル。てな訳で『幽霊道化師』さん、これからも質問よろしくお願いアル。んで次行くネ」

神楽は質問をおいて新たな質問を見る。

神楽
「ペンネーム『F．N』さんからアル。『?式神の好物でスナック感覚で食べるパンデモニウムですがアルフ達使い魔もパンデモニウムを食べることができますか?結婚したいアニメキャラランキング2009で銀さんが花婿にしたいランキングで2位とりました銀さんが好きなフェイト達はどう思いますか?』・・・・・・?はアルフ達は使い魔といっても式神じゃないから無理ネ。そんで?は銀ちゃんがそんなランキングで2位を取れるなんて奇跡以上に驚いたネ。そんでなのはちゃん達から見れば数多くのライバルにヤバイと思うネっと言う訳で『F．N』さん、いつもありがとうございます」

銀八
「痛てててて……んじゃ最後行くぞォ」

ようやく目が覚めて立ち上がる銀八。

銀八
「最後はこの人、ペンネーム『武士堂』さん『1、質問です。敵は最強の武器である『エクスキャリバー』を持っている訳ですが、こっちも木刀と『ティルヴィングエア』か『ベンドラゴブレイド』の二刀流で対抗するのはどうでしょうか?2、黒神先生と銀八先生に質問。もし手に入れられるなら『ティルヴィングエア』か『ベンドラゴブレイド』、どちらが欲しいですか? 出来れば理由もお願いします。ちなみに自分は『ティルヴィングエア』です。スバル並みの瞬速の動きと強さが欲しいからです。』」

神楽

「？はまずどちらもないと思うね。銀ちゃんはウゼルに向かう途中、『ティルヴィングエア』は老いぼれに預けて、『ペンドラゴブレイド』はアーサァが使用しているネ」

銀八
「確かにな……そんでもう1つは、ずばり『ティルヴィングエア』だと思います。作者が侍好きなので日本刀の『ティルヴィングエア』を欲しがっています」

神楽
「こっちのスバルはまさにヒロインアル。私もまけられないネ」

銀八
「確かに『スバル編』でヒロインらしくなったな。と言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい」

第五十一訓：人は怒りだすと誰でも怖い（後書き）

ついに始まった最終決戦！

銀時ＶＳウゼル！

最強の七星神刀（しちせいしんとう）、『エクスキャリバー』の真の力が発揮する。

そして、ついに銀時は……

山崎

「次回、「何か三次元に出てくる架空のキャラの衣装に似ている服を着る事は、コスプレと一緒のようなもの」テイクオフ」

第五十二訓：何か三次元に出てくる架空のキャラの衣装に似ている服を着る事は大抵ロクな事にならない

白夜叉の猛攻が炸裂！

しかしウゼルにはある秘密が！

そしてついにあのデバイスが披露される！

ティアナ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第五十二訓：何か三次元に出てくる架空のキャラの衣装に似ている服を着る事は恥ずかしい

銀時とウゼルの対決が始まっている中、ティアナ、源外、スカリエッティ、アーサァの４人は銀時の足止めをする為に戦闘機人とガジェットを次々と倒していく。

「クロス・ファイヤー・シュート！」

無数のオレンジ色の魔力弾を放つティアナ。
以前より数や威力も上がっていて，次々と戦闘機人に直撃して倒していく。

「はぁあああああああああああああああ！」

アーサァはスバルの『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーウィング）』によって傷も癒されて，スバルと対極になる豪快なる剣技で次々と戦闘機人とガジェットを切り倒す。

「喰らいやがれー！」

源外は『ガジェット・スカイバード』を大暴れさせながら，大砲を次々と放って戦闘機人を吹飛ばし，体当たりで次々とガジェットを破壊する。

「今回ばかりは，流石の私も容赦はしない」

一緒に『ガジェット・スカイバード』に乗っているスカリエッティも右腕を覆うように装備されているデバイスでＡＭＦに近い特性を持ったエネルギー糸を発生させ、ガジェットを捕縛して切断する。

『鬼兵隊』のガジェットによって今まで数多くの自分作のガジェットを破壊された無念を晴らすかのように。

そしてティアナとアーサァは背中を合わせて周りの敵を睨む。

「油断するな！魔力はそれ程にないが，マスターの作り上げた戦闘機人はＢランク級の戦闘力を誇っている！」

「分かっているわよ！」

ティアナは『クロスミラージュ』を次々と乱射して，オレンジ色の魔力弾を次々と炸裂する。

そしてアーサァも剣技だけじゃなく，真紅の炎を放って戦闘機人を撃破する。

「今頃，兄さんはウゼルの所についているはず。そこで一気にウゼルを倒せば……」

ティアナは銀時ならウゼルを倒せると信じるが……

「ですが，マスターには『エクスキャリバー』が存在する。あれはただのデバイスじゃないんです。何故あれが『七星神刀（しちせいしんとう）』の中でも最強と言われるのか教えます。『エクスキャリバー』を使用すれば急激な身体能力をアップするだけじゃなく魔導師の魔力を大幅に上げる究極の聖剣なんです」

「何それ！？」

デタラメ的なデバイスの性能にティアナは驚きだす。

「それに，マスターには更なる秘密があるんです……いくら白夜叉でも苦戦は……」

「心配しなくても良い」

アーサァの心配に、突如スカリエッティがガジェットを切断しながら2人に近づく。

「確かにウゼルが『エクスキャリバー』を持っていたことには驚きだしたがね。だが、そんな事もあろうかと私はあるデバイスを銀時に渡したのさ」

「兄さんに？」

スカリエッティが銀時にデバイスを渡した事を聞いて驚くティアナ。

そのデバイスは元々、対『紅桜』様に作ったものだがもしかすれば『エクスキャリバー』にも対抗できる。

＊

剣(そいつ)の本当の使い方をしりたきゃ付いてくるといい

敵を斬るためではない

弱き己を斬るために

己を護るためではない

己の魂を守るために

銀時の頭の中に思い出す、最初にであった時に松陽が言い出した言葉を思い出しながら、ウゼルを容赦なく攻撃する。
木刀による連続攻撃が炸裂し、全てがウゼルに直撃する。

「おおおお

すると目の前には、急激の速さで傷が回復されていき、何もなかったかのように立ち上がるウゼルの姿がいた。

「ふふふ……流石は白夜叉。まさかこうも簡単にエクスキャリバーによって戦闘力がＳＳＳ級まで上げられた私を、一度瀕死にさせるとは……」

「な……傷が癒されやがった！？」

≪一瞬で回復するなんて……あれは治療魔法でもない……もしかしたらエクスキャリバーの持つ超再生能力！？≫

銀時やスバルは復活したウゼルを信じられないように見る。

どうして傷が完全に治療されて身動き取れるのかを言い出すウゼル。

「ふふふ……いかに白夜叉でもこのような光景は見たことないであろう？ちなみにこれは『エクスキャリバー』の能力ではない。自らの体を戦闘機人に改造した研究成果にあるんだよ」

「自分の肉体を戦闘機人に改造！？」

それは、人間を辞めた証でもあった。

だがいくら戦闘機人に改造したからとは良い，それだけで異常なまでの治療能力が得るとは限らない。

増してやウゼルはＩＳを持ってはいない。

「だが、私はそこらの戦闘機人とは全く違う。冥土の土産にこの治療能力を教えよう。それは私の体の中に入っているロストロギアを埋め込んだ事で，初めてこの不死の力を得られる。９個のジュエルシードによって！」

「ジュエルシードだと！？」

≪ジュエルシードって、たしか！≫

ウゼルの体の中には9個のジュエルシードが入っていることに驚く銀時。
以前、ユーノが発掘し、その後の事故で海鳴市周辺に漂流する。
『ジュエルシード事件』を起こしたロストロギアであり，9個が失われている。
残り12個が時空管理局に保管されている。
しかし何故、失われた9個のジュエルシードがウゼルが持っているかに疑問を持つ。

「この9個のジュエルシードは、2ヶ月前に『鬼兵隊』が忘れられし都『アルハザード』で全て発見された。そこで，万斉という男にその全てのジュエルシードを渡された」
「あのヘッドホン野朗が……」
「そして私はこれを機会に，9個のジュエルシードを治癒能力様のロストロギアに改造し，全てこの身に移植した。その結果……私の体は不死身となった訳なんだよ！」
≪そんな！≫
「ちぃ，つまり簡単に言えばゾンビ野朗になった訳かい！！」

舌打ちして言い出す銀時。
だとすればこれはかなり厄介な事になる。
以下に銀時がウゼルを何度も倒そうとも，そのくり返しが銀時に疲労が襲いだし，下手をすればウゼルに殺される。
ある意味今まで戦ってきた敵の中でも厄介かもしれない存在である。

「さぁ、どこまで足掻けるかを見せてみると良い！」

ウゼルはそう言うと，背後から黄金の魔法陣が現れる。
そしてそこから数多くの黄金に輝く魔力剣が現れて一斉に放たれる。

「ちぃ！なめんじゃねぇぞ！」

銀時は木刀を神速に振り回し、全ての魔力剣を打ち砕く。
そして、そのまま素早いダッシュでウゼルの顔面に、木刀で渾身の一撃を炸裂させる。
鈍い音が出て、１８０℃に首が曲がってしまった。いくらなんでもこれならっと思った瞬間であった。

ゴキゴキっと鳴らしながらウゼルは折れ曲がった首を回してゆっくりとその首を直す。

「いやー、今のは危なかった。少し余裕をこいていたら油断してもろに受けてしま……たよ！」

首を直しながらそのまま『エクスキャリバー』を降り出すと、銀時は急いでバックしてその攻撃をかわす。
だが，遅すぎたのか左脇から血が出ている。

≪銀さん！≫

スバルは思わず銀時の名を叫ぶ。
下手をすれば胴体を真っ二つにされていた。

「はーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

ウゼルは愉快そうに高笑いだす。そのまま人間の常識を超えた速さで銀時に襲いだし、銀時に容赦ない豪快に剣を振り回す。
日本剣術とは全く違う洋風の剣術だが、その速さはスバルや沖田、それに九兵衛の神速に近い。
さっきの一撃が聞いたのか、銀時の剣裁きがわずかに鈍くなってい

る。
その為、何度も斬られて血が少しずつあふれ出ている。

（ちぃ！エクスキャリバーだけでも厄介だと言うのにゾンビ並みの生命力かよ！！だからって、それだけで……）

「俺を倒せると思ったら大間違いだ、クソ野朗がぁー！」

木刀を大きく振り，そのまま『エクスキャリバー』をなぎ払う。
大きく体を少し吹飛ばされたウゼルに、容赦なく銀時は木刀を神速に突き出し、ウゼルの頭を突きだすとウゼルはまたもや吹飛ばされて倒れる。
これは下手をすれば脳に影響的なダメージを与える。いくら不死の体でも脳は別であろうと思ったからこそである。
しかし……

「これは流石に死ぬ所であったが，残念ながら我が肉体だけでなく、脳も不死再生能力つきであったようだ」

頭から大量の血があふれ出ているが、すぐに再生されて癒される。
そしてウゼルは、そのまま不気味な笑いをして立ち上がる。

≪脳も再生するなんて……≫

「こんなんありかよ……」

全体が再生可能な不死の肉体を持ったウゼルに驚く銀時とスバル。

「サァ，これでも食らうが良い！」

するとウゼルは聖剣を振り回し、黄金の極光砲を再び放つ。

「同じ手を食らうかよ！」

銀時は再び居合いに似た構えをして、そのまま木刀を振り抜き、黄金の極光砲は切り裂く。

だが目の前には『エクスキャリバー』を構えるウゼルがいて、ウゼルはそのまま『エクスキャリバー』を振るう。

ザク！

「ぐぉおおおおおお！」

左斜め上から大きく振りだし、銀時に直撃してさらに血があふれ出す。

銀時は吹飛ばされて、木刀も落としてしまう。

「以下に身体能力が高くても、不死には勝てないのさ！もはや君が残された道はただ一つ！この場で殺されて我が研究のサンプルとなるが良い！」

勝ち誇って『エクスキャリバー』を銀時に向ける。

≪嘘……銀さんでも歯が立たないなんて……≫

信じられなさそうに言い出すスバル。

確かに不死の肉体にはいくらなんでも対様できないが、それでも銀時はゆっくりと起き上がり……

「うるせーよ」

「何？」

「さっきからサンプルになれサンプルになれってうるせーんだよ！」

足に力を込め、傷口から血を流しながら立ち上がる。

「人間を辞めて戦闘機人に改造し、そして七星神刀（しちせいしんとう）やロストロギアの力に頼っているテメェだけには……ぜってぇーに負けられねぇ！！」

力強い目でウゼルを見る。

「ふはははははははははは！流石は白夜叉！ますます持って興味深くなったよ！しかしいくら貴様の強さがＳＳＳ＋ランクに入ろうが，私の不死の力やこの『エクスキャリバー』の前では無力！絶対的な力の差にまだ気づかないのか？」

確かに不死の肉体を持った相手とは今まで闘ったことはなかった銀時。

しかしそれはよくよくと考えてみれば、それは９個のジュエルシードによる影響であると銀時は確信した。

その不死の元凶となるジュエルシードを全て取り除けば、ウゼルは不死の力を失うことになる。

木刀もウゼルの目の前に落としてしまい、回りに刺さっている剣も役には立たない。

もはや銀時に残された手段は、スカリエッティから貰ったデバイスを使用するしかなかった。

「終わりだ、『白夜叉』坂田銀時。攘夷戦争によってあの世に行った仲間達に再会すると良い」

「悪（わり）ぃが、てめェの様な下衆野朗にやる命は俺には持っていねぇよ」

そして、懐からスカリエッティから貰ったデバイスを取り出す。

真ん中に機械仕掛けのような装置が付けられている右手用の黒い手袋である。
それを右手につける。

「しゃーねぇな……。使いたくなかったんだが……」

銀時は決意して、デバイスを発動する。

「第６６６拘束機関解放、次元干渉数法陣展開……」

右手につけてある手袋を自分の右眼の前に上げると、手袋の真ん中についている機械仕掛けの装置が起動して，赤く光りだす。

「うおおお

そして銀色の魔力は消えて、目の前には銀時の姿が現れた。
右手に持っているのは、通常の日本刀より少し長くて全てが銀色に輝く長刀であり、唾は卍の形をしていて柄頭に途切れた鎖がついている。って言うよりか正確に言えば『●ＬＥＡＣＨ』に出てくる『天●斬月』の野太刀版である。
腰にはその刀の鞘と『●ＬＡＺＢＬＵＥ』の『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』の使用する大剣を背負っている。
そして肝心なバリアジャケットは、黒のシャツの上から銀色のコートを羽織り、袴のような黒いズボン。
つまりこれは完全なる『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』が着ている衣装であった。

「……てこれ、バリアジャケットじゃなくタダのコスプレじゃねぇかぁーーーーー！」

自分のバリアジャケットを見てツッコム銀時。
これには流石のスバルやウゼルも呆れている。

「どうして俺が良い歳こいてコスプレしなきゃいけないんだよ！？大体武器も『●グナ』の剣だけじゃなく『●ＬＥＡＣＨ』の『黒崎●護』の使用する『天●斬月』だしぃ！何か色々と言われるじゃねぇかぁーーーーーーーーー！」

取り乱してツッコミまくる銀時。
そして数秒後、銀時はウゼルを見上げて言い出す。

「しゃあねぇ！コイツで一気にてめぇをぶっ倒おしてやるよ！」

こうなればやけであると銀時は考えてウゼルを倒す事を決意する。
ついに最終決戦が始まる。

銀時
「教えて」

生徒全員
「銀八先生。」

エリオ
「こんにちは。今回は僕、エリオがアシスタントします」

銀八「んじゃ行くぞ。まずはこの人、ペンネーム『神威　銀時』さんからの質問。一つは『銀時の中の白い獣は、猫になった銀時でしょうか？』んでもう１つが『キャロはエリオと結ばれるため、なのはらのように何かしていますか？『ＳＯＳ学園』で銀時となのはが結婚しましたけど銀八は誰と結婚したいですか？』」

エリオ
「え！？キャロが僕と！？／／／」

キャロの大胆な告白にエリオは顔を真っ赤に染める。
そんなエリオに少しムカついた銀八。

銀八
「ムカつくけど言い出すか。１つ目は……どっちかと言えば鬼と狼が合成したような魔獣みたいなものですね。んでもう１つは……神楽と月詠の弱点を探しています」

エリオ

「キャロ～～～～！何しているのぉ～！（焦）」

キャロのやり方にツッコむエリオ。

銀八
「そんで結婚の話では俺は、ナイスバディで美人、そんで優しい女と結婚したいです」

エリオ
「いや、それ人じゃなくタイプの答えじゃないですか！」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。んで次の質問、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『質問です？なのはさんとフェイトさんの声がしばらくの間変わっていたと思うのですが（理由は『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の第９話で）そのときのみんなの反応を教えてください（代わりにだれかが一気に答えるのはしないでください）？銀時さん，スバルさん，山崎さん，ディエチさんに質問です．必殺料理人の料理のお味はどうでしたか？？キャロちゃんが再び空気になっています．本当に生きていますか？あとヴィーダさんも生きてますか？』」

エリオ
「なんか……？はキャロが聞いたらまずいような気がします」

銀八
「同感だ。んで質問はと言うと……？は……それほどまでにあの鍋が極悪的にクソ不味いっと言う訳が分かりました」

エリオ

「確かに……あれだけは口にしたくない」

もし食べたらとんでもないことになるとエリオは考える。

銀八
「んで？は４人から聞いてみたんですが……『一瞬、お花畑が見えました』だとよ……」

エリオ
「ってそれ死に掛けているじゃないですか！（焦）」

大量の汗を流して叫びだすエリオ。

銀八
「そのせいでフェイトも死に掛けていたんだぜ？お前は行かなくて良かったなぁ？んで？は……答えない代わりに言います。……キャロが聞いたら、俺たち殺されます……」

その一言で，しばらく重い空気が２人を気まずくさせる。

エリオ
「あ……あははははは……つ……次行きましょうか！」

銀八
「お……おお……そうだな。次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん。『一つ目：前回の質問とは反対に、今度は銀八先生が今までの質問コーナーで一番嬉しかった質問は何ですか？二つ目：数多くのキャラをアシスタントにしてきた銀八先生ですが、一番一緒に居て疲れたアシスタントは誰ですか？また、もうアシスタントにはしたくないキャラとかはいるんですか？』ずばり答えます。１つ目は…

…ありません！」

エリオ
「ないんですか！？」

今までの質問を思い出す銀八は、はっきりと言い出す。

銀八
「だって色々と俺に対する質問が酷すぎるから悲しいだろ？んでもう1つは疲れたアシスタントは山ほどいますので答えられませんが……もうアシスタントにはしたくないキャラを言ったら，その人に殺されます」

銀八の答えに青ざめるエリオ。

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ
「次はペンネーム『クアンタ』さんからです。『？モンハン編で出ていなかったなのは達もドライバーに改造されていたんですか。また改造されていたらどこをドライバーにされていたんですか。？モンハン編で出ていなかった人達がモンハンをやっていたらどんなキャラになっているんですか。』」

銀八
「ずばり答えます。そうですね、？なのは達の中にもいましたが……どこにドライバーを改造されたかは答えてくれませんでした。んで？は、魔法が存在しないので、なのはは大砲使いでティアナは銃使い、そんでキャロは凛刀つかいでザフィーラは素手。んでついで

にユーノとシャマルは影薄でしょ？」

エリオ
「何でついで！？ってそれ武器じゃなく特徴ですよ！？」

銀八
「そんなもんだ。っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。へーい次ィ、ペンネーム『２４９』さん『一つ目は、いつも銀八先生は良く銀さんをひがんでますが、銀八先生はもしなのは勢の中で付き合うとしたら誰？二つ目は、銀八先生に質問です、もし一つ目に聞いた銀八先生が好きな人とストロベリーサンデーの山、銀八先生はどちらを選びますか？』……ずばり答えます。一つ目は……とりあえず考えた事がないのでいないって事で」

エリオ
「何ですか、それ！？」

銀八
「あ……だろうな。んでもう１つは当然ストロベリーサンデーの山です」

エリオ
「しかもストロベリーサンデーの山かい！」

銀八
「っと言う訳で『２４９』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ
「次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問です。『1．銀時×フェイト達、桂×はやて、山崎×ディエチなど色々なカップルが出てき

ましたが、これからも出来ますか？2．沖田くん（ドS）にカップルは出来る予定ですか？3．スバルに質問です。もし銀さんと一日デートできるなら何がしたいのですか？』」

銀八
「ずばり答えます。1は出る予定だと思います。2は分かりませんね。んで3もムカつくから却下。」

エリオ
「いやいや，ちゃんと答えてあげましょうよ！特に最後！」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ。ペンネーム『ＮＡＮＯ』さん。『銀さんに質問です「もし、あと1日で地球が滅ぶことになったら何をしますか？」』……ずばり答えます。チョコパフェを食いまくります」

エリオ
「なんですかそれェ！？」

そんな事をしたいかって言いたいぐらいエリオはツッコム。

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。んで次はこいつかァ？ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問銀時好きに質問です。銀時に夜這いをかけようとする時に特に誰と鉢合わせが多いんですか？黒神さんにお願いがあります。前回の質問コーナーで、僕の質問を答えてくれなかった銀八先生をチン○を去勢してください。お願いします。』・・・・ってふざけんなー！」

エリオ
「何か付いていけなくなった気がします」

銀八
「……しゃあねぇ。答えてやるか。1つは多いかもしれません。そんでもう1つは……俺を侮辱しているのかー！？」

ちなみに作者の返事は『ＯＫ』だそうです。

銀八
「あのクソ作者ー！（怒り）」

エリオ
「あ…あはははは……と言う訳で『正宗の胃袋』さん、下ネタ質問はお控えめに……次の質問を行きます。ペンネーム『烈火竜』さん。『フェイト様に質問です。フェイト様もやはり原作と同じパンツですか？また、『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』のフェイト様がフンドシを着用している事に関してどう思いますか？』……ってなんですかこれ！？／／／」

破廉恥な質問に顔を真っ赤に染めるエリオ。

銀八
「ずばり答えます。フェイトの話によれば、原作と同じパンツでシグナムがフンドシをしていると知ったら意外そうに驚いていました」

エリオ
「それ、女性が軽々しく言えない事では？」

銀八

「まぁ大人の自称ってモンだ。ってな訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ
「次行きます。ペンネーム『風花』さん。『はい、どーも。作者が書いている小説に出てくる久遠寺　森羅でっす。今回は俺が質問させてもらおうか。？実は作者がまるで黒神さんみたいにスバルに刀を持たせようとしているがどう思うか？？もしこっちのなのはの待遇（以外に乙女キャラ）が良すぎたらそっちのなのははどう思うか？？最後に…銀八ぃぃ…サインくれ！！んじゃな』ってこれ『風花』さんじゃなく久遠寺　森羅の質問じゃないですか！」

エリオがツッコミ出すと……

銀八
「久遠寺森羅！ブラボー！」

エリオ
「ぎ……銀八さん！？」

突如のわけ分からない叫びにエリオは唖然。

銀八
「よっしゃー！？の答えはもちろんサインしてやるぜ！待ってろよ！……後、？はそれで良いんじゃねぇ？作者が面白そうだし。んで？は彼女等は見習いますね」

エリオ
「？と？は手抜きじゃないですか！？」

銀八
「っとうわけで『久遠寺森羅』様！ありがとうございましたー！」

エリオ
「いや、これ『風花』さんからですよ！……ってまっいいか」

銀八
「いやー、今まで一番愉快な質問だったぜ。んで次の質問。ペンネーム『武士堂』さん『1、銀八先生に質問です。『エクスキャリバー』は使用者の強さを引き上げる武器ですが、これって肉体を乗っ取られる危険性の無い『紅桜』という考えで良いんでしょうか？2、鍬死郎は誰と戦わせますか？自分的に、スバルとの戦いの中で本当の強さを知ったアーサァと戦ってほしいです。』……ずばり言います。1つは正にその通りですね。しかも『紅桜』と違って魔法攻撃も可能ですし、下手をすれば史上最強のデバイスとも言えます」

エリオ
「確かにおっかないですね」

銀八
「そんで2は、それはネタばらしになるのでお答えできません。っと言う訳で『武士堂』さん、鍬死楼が誰と戦うかを楽しみに待ってくださいー」

エリオ
「では次行きます。ペンネーム『カラー』さん『質問ヴィヴィオは赤夜叉さんのほうでも、銀時を狙ってるような感じでしたが、もし出てきて、変身魔法で大人板ヴィヴィオになって銀時を誘惑したら、ママさん達はどうしますか？』……なんて質問ですかこれ！？」

銀八
「ずばり答えます。まちがいなく強敵と思いますね」

エリオ
「しかも恋愛的になるんですか！？」

カオス的な質問に答える銀八にツッコむエリオ。

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。んでこれが最後の質問です」

エリオ
「ペンネーム『F．N』さん『背中に侍と書かれた革ジャンを見てフェイト達からみてどう思いますか？　あと、ポチ（天使とヤクザが同棲している生物）を見たらどんなリアクションをとりますか？』……なんですかこの天使とヤクザが同棲している生物って？」

銀八
「まぁ最後に答えてやるよ。そんで革シャンを見て、フェイト達は呆れますね。そんで２つ目は……とりあえずこれを見ろ」

銀八はエリオに、『銀魂』の第５巻に乗っている『第三十九順：カワイイ顔には必ず何かが隠れている』を見せた。
するとエリオの反応は……

エリオ
「天使と地獄が一体化になっているぅぅぅぅぅぅ！！」

銀八

「……ってな訳でフェイト達もこんな感じでリアクションすると思います。っと言う訳で『F．N』さん、廊下に立っていなさい」

第五十二訓：何か三次元に出てくる架空のキャラの衣装に似ている服を着る事は多い

『銀の魔導書（ブレイシルバー）』ついに機動！

その力は正に最強！

銀の魔剣と黄金の聖剣がぶつかり合う！

不死の力にどう対抗するか！

ついに最終決戦が始まる！

ウゼル

「次回、「本当に大切なものを護る力は何よりも強い」テイクオフ！」

第五十三訓：本当に大切なものを護る力は何よりも強い（前書き）

ついに魔導師に目覚めた銀時！

その強さは正に最強！

最強の魔導侍と最恐の不死の魔導師の最終決戦！

勝つ黙せよ！

スバル

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』……始まります」

第五十三訓：本当に大切なものを護る力は何よりも強い

ついにスカリエッティから貰った銀時専用デバイス『銀の魔導書（ブレイシルバー）』を発動させた銀時。
衣装がバリアジャケットっと言うよりもコスプレに近いため，最初は大きくツッコミ，呆れだす。
だがすぐに冷静になれば自分の体の変化に気づく。

（スゲェ……体の中から力が溢れ出てくるみてェだ……これはリィンフォースとユニオンした時と同じ……）

リィンフォースの合体の時と同じく、銀時の身体能力が上がってくる。
それだけではない、魔力もついていることで完全なる魔導剣士と化していた。
その魔力は間違いなくなのはとフェイトを上回っており、ウゼルは銀時には魔導師としての素質が高まっていたと驚きだす。

「まさか……君が魔導師に目覚めるとはねぇ……ならば私も本気を出そうではないか！」

すると，ウゼルの足元から黄金の魔法陣が現れ，そこから極光の柱が現れてウゼルを包みこむ。
そしてその光の柱の中から現れたのは……背中に黄金の双翼が生えていて，さらに黄金に輝く『エクスキャリバー』を握っているウゼルである。
おそらくは『エクスキャリバー』の力を最大限に引き出しているようである。

「そいつがエクスキャリバーの本当の力って訳かい」
「その通りだ！だがあいにく私は正式な魔導師ではないため、この力の扱い方は知らぬが……それは君も同じ条件の事！だが私にはそれ以上に何度も再生する不死の肉体を得た！以下に魔法の力でパワーアップした君でも敵いはしないのさ！」

聖なる輝きを出しても、ウゼルのよどんだ心は醜くなっている。
復讐と憎しみにより、もはや彼には何も見えていない。
そのウゼルが持っている『エクスキャリバー』を見て、銀時はある事を思い出す。

＊

それは以前、スバルの正体と『ティルヴィングエア』が七星神刀（しちせいしんとう）の１つである事を教えられ、銀時が機動六課に戻る寸前、アジトの入り口でスカリエッティが銀時に話しかけた時であった。

「銀時君。機動六課に戻るのであれば君に１つ話しておかなければならないことがある」
「ん？なんだ話って？」
「伝説の七星神刀（しちせいしんとう）を作った刀匠、梅太刀妙寿（うめたちみょうじゅ）がどうして七星神刀（しちせいしんとう）を作りだしたかをだ」

スカリエッティがそう言うと、銀時は少し興味あるのか話だけでも聞こうとする。

「妙寿はこの世界に飛ばされて、もう二度と元の世界に返れないと確信し、自分ができる事をこの世界でする事をしたそれが……」

「七星神刀を作り上げるって事か」

確かに、刀匠として出来る事は刀を作ることである。
しかも妙寿の打つ刀は正に名刀の中の名刀と言っても良いぐらいであり，それがデバイスと合体すれば正に最強のデバイスを作り上げる事も可能であろう。

「七星神刀を作る前に妙寿は、デバイス製作者に自分の打った刀を渡した結果、その製作者は妙寿の打った名刀を我が物にしたいと条件に、妙寿にデバイスを作ることを許した。そして自分の打った刀とそのデバイス性能を合成する為に作り上げた7つのデバイスが七星神刀。1つ1つが妙寿の魂が宿った剣なんだよ」

「魂が込められた……デバイス」

確かにデバイスを作るために魂を込めれば、それだけ強力なデバイスが完成するであろうと銀時は思う。
そしてスカリエッティははっきりと言い出す。

「君は、どうして妙寿が七星神刀を作ったかを知っているか？」

「……自分の作った刀とデバイスを合成させたデバイスの性能が、通常のデバイスよりも性能が高いことを証明し、自分の名を広める為じゃねぇのか？」

「ふはははははは！確かに妙寿は自分の作った刀こそが最強である事を証明したかったであろう。だが、それ以上に妙寿にはある信念があったようだ」

「信念？」

妙寿はどのような想いで七星神刀を作ったのかをスカリエッティは言い出す。

「伝説によれば、妙寿は最初の七星神刀（しちせいしんとう）を作り出す時に言っていた」

刀は所詮人斬り包丁。
好敵手である仁鉄がよく言っていたことよ。
コイツはどんなに魂を込めて打っても変わりはしねぇ。
そう考えれば、どんな名刀でも鈍刀と同じく人斬りの道具そのものだ。
だがだからと言って、俺は鎚を止める訳にはいかねェよ。おまんま食いっぱぐれちまう。
いやいや、それだけじゃねェ。俺が作るのは武器だ。
だからこそ打って打って打ちまくらなきゃいけねぇ。
鉄じゃねー、てめーの魂だ。
鉄を叩きながら俺は自分自身の魂を叩きあげてやるよ。
優しく清廉な人になり、美しく生きてやりゃ。

元の世界に戻れないんじゃ、もう仁鉄と競えあえねぇ。
なら……俺がこの世界にしてやれる事は刀を打つことだ。

タダの刀じゃねェ。
デバイスとやらの機械技術（からくり）と俺の刀工技術を合わせた究極の機械刀（からくりとう）を作り上げる事よ！

そしてそのデバイスは大切なものを護るための刀になるだろう。
俺はァ、そのつもりで刀を作るまでだ。

この俺を受け入れてくれたこの世界を、護る為の剣をよォ。

「……そう言いながら妙寿は七星神刀の1つを完成させた。彼は元の世界に戻れないと知ったからこそ、この世界を護る為に七星神刀を作り出したのだよ」

「なるほどな……けどよォ、その七星神刀が悪用に使われてしまえば、妙寿もあの世で苦しむんじゃねぇ？」

「ふはははは……それは言えている」

そんな想いを込めながら妙寿が七星神刀を作り上げた事を知った銀時は、その1つである『ティルヴィングエア』が，スバルの力と化していると思い込む。

それと同時に、かつて紅桜の事件で紅桜に対抗するために刀を打った村田仁鉄の娘、村田鉄子を思い出す。

＊

何も護る物がなく、ただ力に溺れた欲望に満ちたウゼルが使用するとなれば、銀時はウゼルでは『エクスキャリバー』を完全に使いこなせないと確信した。

「……んじゃ、と言う訳だ……一気に終わらせてもらうとしますか！」

そして一歩大きく踏み出した銀時は、以前の倍以上の速さでウゼルに突撃すると、剣を素早く降り出すとウゼルも『エクスキャリバー』で止める。

「ぬぅ！」

≪速い！≫

そして銀色の刀と黄金の聖剣がぶつかり合い、互いに素早く連続に降り出す。
だが完全に銀時の方が速さも力も上回っていてウゼルは攻められずに護るのが精一杯である。
スバルは、以前とは比べ物にならない銀時のスピードに驚きだす。

（ぐ！なんて速さとパワーだ！先ほども大した強さを持っているが……デバイスの影響で白夜叉に魔力が加わり……その魔力が白夜叉をさらにパワーアップさせているだと！？）

タダさえスバル同様に、魔法なしでも十分強い銀時。
だがそんな銀時が魔法も使用可能になれば正に天下統一の強さを誇る。
今の銀時は間違いなく、かつて今まで戦ってきた敵の中でも最強とも言える夜兎の頂点に立った男、夜王鳳仙並の実力を誇る。
そして銀時の銀刀から銀色の魔力が大量に収束されると一気に放たれる。

「月牙銀翔（げつがぎんしょう）！！！！」

銀時は大きくブレイシルバーを降り出すと、銀色の斬撃そのものを巨大化させて飛ばし、ウゼルを襲いだす。

「ぐぅうううう！」

その巨大な魔力の斬撃を伏せながらも吹飛ばされるウゼル。
その威力は完全になのはの『スターライト・ブレイカー』に匹敵する。

大きく転びだすものの、すぐにジュエルシードの能力により不死再生効果を得る。
ウゼルが立ち上がると、銀時の足元には凄まじい勢いで銀時が襲い掛かる。

「カーネージ・ドライブ！」

凄まじい速さで突進しながら刀を突き出すと、刀はウゼルの体内に貫通する。
そのまま腰に背負っている銀色の大剣を振り回して、そのまま魔力を纏わせた刀をバットのように振るって敵を吹き飛ばすと、ウゼルは中に浮んで飛ばされると同時に、体内に埋められていた9個のジュエルシードのうち2つがウゼルの体内から吐き出されるように現れる。

「がはぁあああああ！」

大きく地面に衝突して落下すると、ジュエルシードが減ってしまった影響なのか、さっきより痛みが広がってきた。
すぐに再生はするが、ジュエルシードが減ってしまったことでその治癒再生のスピードが落ちてしまった。

「やっぱジュエルシードによる不死能力か。そいつをお前の体内から全て取り除けば、テメェは不死じゃねぇ」
「ぐ！」
≪そうか！ウゼルの不死再生能力の源はジュエルシード！その9個のジュエルシードを取り除けば！≫

スバルもウゼルの弱点を見つけて確信する。
苦しみの表情で銀時を睨みつけるウゼルはそのまま翼を羽ばたいて

飛翔し、聖剣を振って並のような黄金に輝く衝撃が放たれ、それと同時に翼から黄金の魔力弾が流星のように大量に放たれる。
銀時は対抗するかのように腰に背負っている大刀を左手で取り出し、そのまま降り出す。

「デットスパーダー！」

大剣を振り上げると共に、地面から銀色の化物が現れ、口を大きく開いて黄金の斬撃と魔力弾を一気に飲み込む。

「ぐぅ！」

ウゼルは何とか交わした。
だがその隙に銀時が更なる魔法を放つ。

「デモン・シルバーウィング！」

銀時の足元に銀色の魔法陣が現れ、右肩に銀色に輝く悪魔のような片翼が生えてきた。
それはスバルの『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルー・ウィング）』と同じく飛行能力を持つ。
そしてそのまま一歩大きく踏み出して凄まじい速さでウゼルに突進して来る。

「うぉおおおおおおおおおお！」

ガキィン！

そのまま大刀を大きく振り、ウゼルはその大刀を大きく振りだすと、ウゼルは『エクスキャリバー』で防ぐ。
銀時は追撃に右手に持っている刀を振るとウゼルは交わすが、左腕

から血が出る。
そのまま銀時は二刀流を炸裂させて連続剣を炸裂させてウゼルを責める。
ウゼルも対抗するかのように『エクスキャリバー』を振り続ける。
銀色に輝く長刀と大剣、そして黄金に輝く聖剣のぶつかり合いであった。

だがウゼルの剣は銀時には当たらず、それ所が一方的に銀時の剣だけがウゼルに直撃する。
再生能力があるとは言え、疲労と苦痛のくり返しで一方的に追い込まれているウゼル。
それ所が、銀時は魔法を使うのがこれが初めてとは思えないほどの剣技・魔法の連係が上手く繰り返されている。

「いくら性能で一気にパワーアップしようが、戦いの経験の浅いてめェが勝てると思ったかァ！」

そして銀時は回転してウゼルを思いっきり蹴ると、刀を腰に身につけている鞘に納刀すると、大剣を大きく構えだす。

≪Ｉｔ　ｉｓ　ｍｏｖｅｍｅｎｔ　ｗｉｔｈ　ａ　ｄｅａｔｈ　ｓｉｚｅ　ｍｏｄｅ≫

そして大剣は突如、柄が長い死神が持つ大鎌に変化し、銀時は大鎌を振るう。

「デスサイズ・デモンフォース！」

大きく降り出した大鎌から銀色の斬撃が現れるが放たれてはいない。
そしてその銀色の斬撃から引き込まれるかのようにウゼルの体が引

力によって引き出されてしまう。

「ぐ！……させん！」

ウゼルは『エクスキャリバー』を振るうと、その黄金の斬撃が引力を放つ銀色の斬撃と直撃して打ち消す。

だが目の前には神速並の速さでウゼルの位置にダッシュしてきた銀時がいて、銀時は大鎌から元に戻った大剣を降り出し、ウゼルの胴体を右斜めに切り裂くと、そこからさらに、１つのジュエルシードが現れる。

「がはぁあ！」

ウゼルは地面に落下してその衝撃が体内を響かせる。

そしてすぐには立ち上がれなかったが、『エクスキャリバー』を地面に突かせて豪快に立ち上がると口から血を吐く。

ジュエルシードがさらに減って治癒能力がさらに弱まる中、銀時を睨みつける。

「己ぇぇぇ！まさか侍が魔法の力を使うとは……ならばこの場で君を確実に削除させてもらおう！……『エクスキャリバー』！」

≪ｅｘｅｒｃｉｓｅ　ａｎ　ｕｌｔｉｍａｔｅ　ｓａｃｒｅｄ　ｓｗｏｒｄ≫

ガシャン×１２

一気に十二個のカートリッジロードをすると、『エクスキャリバー』の刀身がさらに黄金色に輝きだす。

そしてウゼルの足元から黄金の魔法陣が現れる。その大きさはさっきまでの５倍である。

そしてその魔法陣を囲むように巨大な黄金の魔力剣が宙に浮んで現れる。

「我が魔力を持って、一気に君をこの場で削除してやろう！」

「我が魔力だァ……？人の事は言えねェがそいつは元々エクスキャリバーによって急激に上げられた魔力だろうよ？扱いきれてねェのに良く言えるもんだ！」

「何とでも言え！君はこれで終わりだ！食らうが良い！」

ウゼルは『エクスキャリバー』を天に昇せるように構えだし……

「エクス・アヴァロン！」

大きく聖剣を振り出し、そこから極光の黄金の魔力砲が放たれ、さらに無数の巨大な魔力剣が追撃するかのようにあ　銀時を襲う。

もはやこればかりは避けようがないが、銀時は大剣を背負い、そのまま居合いの構えをせずに刀を抜刀すると……

スパパパ

正に史上最強の魔導師の誕生であるとスバルは確信する。
実はこれぞ銀時の使用デバイスである『銀の魔導書（ブレイシルバー）』の最大の特徴。
いっぺん外見は他の一般的な武器と変わりはないが、その2つの剣と右手の手袋には銀時の強大な魔力が凝縮されている。
その為、その攻撃力はもちろん半端じゃなく高くて、剣も一振りだけで神速に達成可能である。
その強さは正に七星神刀（しちせいしんとう）に匹敵する強さを持っている。

そして刀を地面に突き刺し、右手が赤き血の爪が生えている悪魔の腕と化し、それが伸ばされてウゼルを捕らえてつかみ出し、自分の元に引っ張り出す。

「なぁ！？」

更なる能力に驚きだすウゼルに、銀時は鋭い目つきでウゼルを睨みつける。

「不死の再生能力も……体内に入っているジュエルシードを全てテメーの中から取り出せば不死じゃなくなるんだろ？」
「な……何をする気だ！？」
「こうすんだよ！」

銀時はウゼルを掴んでいる赤き悪魔の腕を上げてると、足元には銀色の魔法陣が現れる。

「テメェのそのうす汚ねェ欲望と共に……」

そしてそこから一気に今の銀時が放てる最強の魔法が放たれる。

「魔法に食われろ！」

銀色の魔法陣から銀色に輝く魔力が一斉に放射されてまるでウゼルを銀色に染めるかのように，ウゼルも体を容赦なく切り裂く。

「あああ！」

体中から大量の血が放射される。

正に残酷的な光景にスバルも思わず少し恐怖する。

それと同時にウゼルの体内に入っているジュエルシードも破壊こそは出来なかったが全てウゼルの体からあふれ出る。

そして銀時はウゼルを地面に叩きつけるかのように放り投げる。

「……コイツが魔法の力……かぁ……」

確かにかなり強力だが、それは同時に危険であるため、銀時は無闇に使わないでおこうと考える。

そして地面に突き刺さっている刀を抜いて鞘に納刀し、落ちている愛用の木刀を拾いだす。

すると……

「な……何故だ……」

ウゼルが強引に立ち上がっている。

体中から大量の血があふれ出て、致命傷を数多く受けている。

異常なまでの苦痛よりもウゼルはどうして一方的にやられているのか理解できなかった。

「聖剣『エクスキャリバー』！七星神刀（しちせいしんとう）の中でも最強と呼ばれるデバイスは完成されている！」

あり得ないばかりに言い出す。

『エクスキャリバー』の性能は完成されており、ウゼルの強さは銀時に匹敵しているはず。

なのにどうして倒せないのか理解できない。

「一体何が欠けていると言うんだ！」

「まだわかんねぇのか？」

あり得ないと叫びだすウゼルに銀時が言い出す。

「七星神刀（しちせいしんとう）は大切なものを護る為の剣……そして妙寿の想いが込められた魂が宿った剣」

以前、スカリエッティに妙寿が七星神刀（しちせいしんとう）をどのような思いで作り上げたのかを聞かされたことをウゼルに言い出す。

「その護りてぇ大切なものが……てめェにはねェ！」

銀時がウゼルに指を刺して言い出す。

「ぬかせぇ！」

ウゼルは『エクスキャリバー』をカプセルに閉じ込められているスバルに向ける。

スバルはその眼に恐怖に染められずに銀時を見つめる。

「……もう……悪夢の時間は終（し）めぇだ……すぐ解放してやるよ……」

銀時はゆっくりとスバルに近づく。
もはやウゼルに眼中がないように。

「近づけばこの女を！」

殺すつもりだが、銀時は木刀を投げ捨てる。
その意外な光景にウゼルは一瞬唖然とすると、

「はぁ！」

銀時は右手から血のように赤い爪が生えている悪魔の腕を伸ばしてウゼルを吹飛ばし、スバルから引き離す。

「ああ！」

その衝撃でウゼルは『エクスキャリバー』を手放してしまう。
そしてそのまま銀時は神速の移動でウゼルに近づくと、刀を抜いて残り全ての魔力を刀に全て凝縮し、そして思いっきり……

「地獄に落ちろやァ！」

っと叫んでウゼルの腹を突き刺す。

「ぐぁあああああ！」

ウゼルは口から大量の血を吐く。
そして銀時はその刀をウゼルの胴体から抜き出し、素早くスバルのほうに瞬間移動してカプセルを破壊する。
そしてそこから、液体が噴射してあふれ出て、カプセルに閉じ込め

られたスバルを銀時はお姫様抱っこでキャッチする。

「ぐ…ぐう…ア…アアアアア……アアアア

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

プレシア
「えー、今回は私プレシアがアシスタントをさせていただくわ」

銀八
「では質問です。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『獅子王さん（高杉に協力している天人）は、今何をしているのですか？』」

プレシア
「ああ、確か今回鬼兵隊がミッドチルダにやってきた原因を作った重要人物の天人だよね」

プレシアが意外そうに言い出す。

銀八
「ずばり答えます。おそらくは紅桜を初めとした鬼兵隊の兵器作りの手伝いだと思います。ってな訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。んで次を行きます。ペンネーム『カラー』さん『フェイト達はクリスマスに銀時にプレゼントを渡しましたか？まさか、さっちゃんみたく自分をプレゼントとかしないですよね？』」

プレシア
「って何変な質問をしているの！？／／／」

『カラー』の質問に顔を真っ赤に染めてツッコむプレシア。

銀八
「ずばり答えます。おそらく渡していると思います。てな訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。次生きますペンネーム『２４９』さん『一つ目、銀さんがＢＬＡＺＢＬＵＥのネタを使うのはラグナの声が杉田さんだからですよね。

二つ目、もし、ＢＬＡＺＢＬＵＥの顔無しさんとヤンデレ小佐がなのはの世界に行ったら銀さんはどうなりますか？

三つ目、銀さんの銀の魔導書で魔王様に勝てますか？』」

プレシア
「確かに銀時がデバイスを使って魔導師に目覚めたのは驚いたけど……だからって何で『●レイブルー』ネタ！？」

呆れてツッコむプレシアに銀八は質問を答える。

銀八
「ずばり答えます。１つはおっしゃるどおり、ラグナの声が銀時と一緒だからです。２つ目は間違いなく狙われます。３つ目は……」

しばらく黙り込む銀八。

プレシア
「ちょっとー！！何で黙り込むの！？え、何！？まさかわかんないんじゃないの！？」

青ざめて叫びだすプレシアはメッチャ気になっている。

銀八
「……なんか勝てない気がしてきました」

プレシア
「やっぱりかい！」

銀八
「っと言う訳で『２４９』さん、廊下に立っていなさい」

プレシア
「噂以上に疲れるわ。……で次はペンネーム『烈火竜』さん『黒神先生自身は『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』でのフェイトとシグナムのフンドシ着用をどう思いますか？』……ってさっきからろくな質問がないじゃないのー！」

もう何が何もかもメチャクチャであるとプレシアは言い出す。

銀八
「まぁ慣れれば付いていけるはずだ。んで答えます。作者は『ネタ的に面白い』っだそうです。っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。んで次行くぞォ、ペンネーム『クアンタ』さん『？松平のとっつあんが山崎に恋人がいると知ったらどんな反応をしますか。
？ディエチさんに質問です。原作２４３訓で山崎のあんパン生活を見たらディエチさんはどうしますか。ディエチさんも同じように山崎と一緒にあんパン生活をしますか、それとも弁当を作って山崎に差し入れしますか。ちなみにディエチが山崎に弁当を差し入れしている所を土方が見たら妨害しますか。』……ずばりお答えします。
１つは父親のように見守ります」

プレシア
「だよね。流石に他人の恋路を邪魔するような事は……」

銀八
「但しマヨラーとドSが邪魔したいとなれば邪魔するのを手伝います」

プレシア
「なんでー！？」

銀八
「んで？はまちがいなく弁当を差し入れして生活をします。そんでそれを見たマヨラーは妨害します」

プレシア
「真撰組って……ろくな連中はいないわね」

銀八
「だろぉ？ってな訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

プレシア
「次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからの質問ですってあら？確かこの人ってこの小説の感想を元に小説を作ってくれてる人だよね？」

っとプレシアは意外そうに言い出す。

銀八
「ああ、何か新八（じみ）と妙（ゴリラ女）がお世話になっているようだぜ？まぁあいつ

らこっちの小説じゃあ出番少ねぇし」

プレシア
「何それ？小説イジメ！？ってアンタさっき何気なく酷い事を言っていない！？」

銀八
「気にしない気にしない」

銀八は軽く言い出すと、プレシアは作者と銀八は新八に対しては冷たすぎると疑問を抱く。

銀八
「質問はなぁ……『？今後かわいそうになる（やられキャラになる）キャラは誰ですか？（なのは，キャロ以外で）

？物質兵器が禁止されているミッドチルダですが，もしこっちの小説に出てくるＶ２ガンダムでミッドチルダを襲ったら滅ぼすことができますか？（実際にやらないので安心してください）

？お願いなんですが，次回から誰がアシスタントで来るのか教えてください』」

プレシア
「何か？が残酷すぎるんだけどぉ！？」

ウッソの質問にも残酷感を感じるプレシア。

銀八
「そうだなぁ。？はエリオの可能性が高いな。キャロの件で」

プレシア
「そう言えば……高町家編のクライマックスの最後に酷い仕打ちを受けたそうだけど？」

銀八
「後、近藤やヴィータ、ついでにシャマルとユーノもだな」

プレシア
「ついで！？いくら影薄でもそれはないでょ！？」

シャマルとユーノを次いで扱いとした銀八にツッコむプレシア。

銀八
「？は分かりません。なのはが魔王化してしまうかもしれません。後、覚醒したスバルに魔導師に目覚めた銀時もいますんで。？は了解しました。っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、今回から次回登場するアシスタントの紹介を質問コーナーの最後にします！」

プレシア
「はぁ……んじゃ次行くわよ。ペンネーム『ＮＡＮＯ』さんの質問ね。『銀さんにとって二度、思い出したくない出来事（この小説内）ってなんですか？』」

銀八
「ずばり答えます。山ほどありますが、特にと言えば『第十九訓：改造する場合は注意すべし』でヴィータが薄汚いアナログスティックをつけられたことですね。自分だけじゃなく他人にも屈辱的な思いをさせたことが何よりも悲しいって」

プレシア
「確かに動揺するわ」

銀八
「っと言う訳で『ＮＡＮＯ』さん、廊下に立っていなさい。次行きます。ペンネーム『風花』さん『今回は私と前回質問した森羅の双子咲夜が質問します
咲夜
「よろしくね～」

？今現在、まだ半分にいってないと言っていますがヴィヴィオは後半に出てくるんですか？？例えば銀さんが旅に出るとしたらフェイトかなのはかパフェのどれと一緒に旅に出ますか？森羅に～サインをあげたみたいだけど～渡す事ができて嬉しかった～？あとお礼に私が作ったおにぎりをあげるわ～次のアシスタントさんと一緒に食べてね～』って、次回のアシスタントが犠牲者になるじゃねぇかぁ！」

っとツッコム銀八。
プレシアも、フェイトから咲夜の作るおにぎりは地獄の兵器並みに不味いということである。

プレシア
「よかった、ギリギリセーフだわ」

銀八
「ほんとよかったな、あんた……」

涙を流して動揺する銀八。

銀八
「では答えます。？は中盤ぐらいから出ます。スバル編が終われば序盤は終わって中盤が始まりますね。まぁ中盤の中盤って所に登場する可能性が高いです。？はメッチャ嬉しいです！……てな訳で咲夜、森羅によろしく」

プレシア
「次行きます。ペンネーム『武士堂』さん『質問です。『紅桜』は使い込むと戦艦十隻に匹敵する強さですが、『エクスキャリバー』の強さは時空管理局の艦船、何隻分に相当しますか？』」

銀八
「ずばり答えます。間違いなく戦艦ニ十隻分の戦闘力を誇ります」

プレシア
「それってメッチャ恐ろしいじゃない……」

銀八
「最強の七星神刀（しちせいしんとう）は伊達じゃないって訳だ。っと言う訳で『武士堂』さん、『エクスキャリバー』はメッチャ怖いので要注意！んで次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問、銀時に質問です。銀魂の世界での万事屋でエロ本を隠してましたけど、機動六課ではエロ本をどこに隠しているのですか？』」

プレシア
「またあっち系の質問！？／／／しかも銀時は何しているのぉ！／／／」

銀八
「ずばり答えます。おそらく隠しているどころが買っていないと思

います。原因はそうすればフェイトとなのはに殺されるからそうです」

プレシア
「……銀時……あんたも苦労しているんだね」

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、物を隠す場合は見つかりにくい場所を探してください。んで次はペンネーム『F．N』さん『ジャスタウェイをたくさん量産できそうなのは誰ですか?失敗して工場長に怒られそうなのは誰ですか?ＰＳ　銀八先生へくだらない質問を紹介してくれてありがとう応援しています。』・・・・・いやー、動いたしまして♪」

ニヤニヤとうれしがる銀八に気味悪くするプレシア。

銀八
「ずばり答えます。それは今だ改名されていません。失敗して起こられそうなのは新八かもしれません」

プレシア
「アンタ、あのメガ……新八をいじめて何が楽しいの?」

銀八
「なんとなく……と言う訳で『F．N』さん、これからもよろしくお願いします」

プレシア
「次が最後よ。ペンネーム『アクセル』さん『この話では、なのはとキャロが怒りや嫉妬といった負の感情でパワーアップしたり新技

を身に付けたりしてますが、この二人みたいにマイナス方向にパワーアップするキャラは出てきますか?今回のスバルは正当派のパワーアップなので除外という事で。』……って最後の最後におかしすぎる質問が来たぁ！」

一番おっかない質問にプレシアは驚きだす。
ここ一番のリアクションであった。

銀八
「ずばり答えます。おそらく最も近いのはユーノとギンガの可能性が一番高いです。原因は皆さんの想像でお任せします。っと言う訳で『アクセル』さん、質問したあなた自身も想像してみてください」

プレシア
「はぁ……まったくまともな質問が少ない気分だわ。……とりあえず『ウッソ・エヴィン』さんのリクエスト質問により、次回のアシスタントを紹介します」

銀八
「次回は、とりあえずルーテシア・アルピーノがアシスタントします。では……次回もお楽しみ」

第五十三訓：本当に大切なものを護る力は何よりも強い（後書き）

ついにウゼルを倒した銀時。

スバルの救出成功。

一件落着と思いきや、思わぬ緊急事態が発生。

最悪の状況にどう立ち向かうかを考える銀時達に、アーサァは。

次回、ついに『スバル編』が完結する！

アーサァ

「次回、「遠く離れても強い絆は消して消えない」テイクオフ」

第五十四訓：遠く離れても強い絆は消して消えない（前書き）

ウゼルを倒した銀時。

これ見て一件落着と思いきや……思わぬハプニングが！

『スバル編』ついに完結！

スバル＆アーサァ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第五十四訓：遠く離れても強い絆は消して消えない

ミッドチルダ　第４起動高層ビル

突如、ガジェット達が逃げ去っていくように一匹残らず退場していく。
これにはフェイト達も異変に気づく。

「ガジェット達が……逃げていく！？」
「って事は、銀時達はやったんだね！」

突如の異変に驚くフェイトと喜びだすアルフは、銀時達がウゼルの野望を止めたと考える。
その証拠にパスを通じてなのはとはやてが緊急報告をする。

≪フェイトちゃん！ガジェット達が次々と撤退していくよ！≫
≪こっちも戦闘機人が次々と動きが止まっていて戦闘不能になってきているよ！銀ちゃん達がやってくれたんや！≫

２人とも嬉しそうにはしゃぎだす。
その証拠に敵陣の飛行要塞が全て停止して次々と味方の戦艦の攻撃を受けている。

「よっしゃー！私達の勝利アル！」
「やりましたー！」

神楽とエリオも大はしゃぎで喜びだしており、キャロ、フリード、ディード、ノーヴェ、ギンガ、その他の機動六課のメンバーも喜びだしてはしゃぎだす。

トーレとドゥーエは安堵した。

「ああぁ、銀さんがやってくれたんだね。流石は私の銀さんだわ」

「それ、フェイト達に聞かれたら殺されるぞ？」

銀時の事を思って自分のものと言い出す猿飛に呆れてツッコむ月詠。

だが銀時が無事にいることに安心する月詠は口に煙管をくわえる。

＊

一方のティアナ達も逃げ去っていくガジェットと停止して動かなくなった戦闘機人達に驚きだす。

その様子にアーサァはある事を確信する。

「どうやら、銀時がマスターを倒したようです。これで『カリバン』の恐怖は消えました」

「兄さん！」

アーサァの言葉を聴いてティアナは喜びだす。

源外やスカリエッティも安心してホッとする。

「どうやら、ウゼルの野望は食い止められたようじゃな」

「ああ、これでミッドチルダの平和も護られただろう」

「うぃーす、戻ってきたぞ～」

2人が安心して言い出すと、スバルをお姫様抱っこしている銀時が現れる。

銀時の姿はいつもの白い着物で木刀を脇にしまっていて右手には『ブレイシルバー』をつけている。

「兄さん、スバル！」

ティアナは走って銀時とスバルに駆けつける。
銀時はスバルを降ろすと、ティアナは銀時とスバルに抱きつく。

「ティア……」
「……良かった……2人とも無事でよかった……」

銀時とスバルが無事でいて、ティアナの眼から涙があふれ出る。
そんなティアナに2人は頭をナデナデする。

「その様子では……ウゼルは死んだようだな……」

スカリエッティはウゼルの事を銀時に聞き出すと、銀時は「あぁぁ……最後まで外道な奴だった」っと言い出す。
それを聞いて、スカリエッティは複雑そうな表情をする。

（ウゼル……馬鹿な男だ……）

自分とは割が合わない仲だったが、かつては研究仲間同士であったウゼルの死を知ると少し悲しそうな顔をする。
銀時と源外はスカリエッティのその気持ちを理解していた。

「ほれ。これはお前さんのだろう？」

源外は『ティルヴィングエア』をスバルに渡すと、スバルは「ありがとうございます」っと礼を言って『ティルヴィングエア』を受け

取る。

「それよりさぁ……」

「ん？」

「……この馬鹿博士がぁあああああああああああ！」

ドカァ！

「ぐぉおお！」

突如、銀時の怒りの鉄槌を受けたスカリエッティは倒れる。

その光景にスバル、ティアナ、源外、アーサァは唖然とする。

「い……痛いではないか……一体私が何をしたと？」

「やかましいわボケェ！てめェが俺に渡したデバイス！使用したら何かバリアジャケットが『●レイブルー』出てくる●グナの衣装そのものじゃねぇか！しかも武器も●グナの剣だけじゃなく『●ＬＥＡＣＨ』に出てくる『天●斬月』もあるじゃねぇか！●グナなら分かるけど何で斬●刀もなの！？」

他人のコスプレをした気分で銀時はご立腹である。

スバルは確かにあれはないと苦笑し、ティアナ、源外、アーサァは銀時のバリアジャケットがコスプレに近いと言う事で唖然とする。

一体スカリエッティはどんなデバイスを銀時に渡したのかを創造する。

「い……いや……確か銀時君は月牙●翔を放ちたいと言うデータがあったからサービスしたのさ。それに何か君って●グナと雰囲気にているから……」

「やかましいわぁーーーー！！！！（怒）」

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

さらに銀時の怒りを大きくさせてボコボコにされるスカリエッティ。
スバルは苦笑し、ティアナと源外は哀れみで銀時とスカリエッティを見る。

「これが……貴方の仲間なんですね、スバル」
「アーサァ？」

アーサァが羨ましそうにスバルに言い出す。

「……私は……これからどうすれば良いのか迷っています。マスターも死んで、友であるスバルをこの手で傷つけ、さらにはマスターの命令とは言え数多くの人々の命を奪ってしまった」

悲しそうにウゼルの死と自分の過ちを悔やむアーサァ。

「……これで……良かったんでしょうか？……私は……これからどうすれば良いんですか？」

もう居場所がなくなったように苦しそうに言い出す。

「胸が苦しい……悲しみの感情しか表せません……どうすれば、この苦しみの感情が消えるんですか？」
「……苦しいほど悲しむのは、人間の感情なんだよ……アーサァ」

悲しそうに怯えるアーサァに、心優しく声をかけるスバル。

「アーサァがウゼルがいなくなって悲しんでいるのは、それこそ人間としての感情が芽生えているからだよ」

「人間の……感情？」

「ウゼルは私達にとっては敵でしかなかったけど、アーサァにとってはかけがえのないたった1人の父親的な存在。たとえウゼルがアーサァ自身を愛してくれなくても、アーサァ自身はウゼルを父のように愛していたんだよ。自分自身がそれに気づかずに……」

戦闘機人として生まれた人造生命体とは言え、アーサァもスバルと同様に人間として生きている。

銀時、ティアナ、源外、スカリエッティもアーサァの苦しみを理解する。

アーサァはウゼルの忠実な戦闘機人ではない。スバルの大切な友達である事を。

「だからその苦しみの中には大切なものが入っている事を忘れてはダメ。誰だってめんどくさい物を背負って生きているんだよ。それでも涙が流れる事があれば、好きなだけ流せば良いよ」

スバルの言う事を聞くと、アーサァの眼から涙が溢れてくる。

「それでも止まらない時には、私達がその悲しみを抑えてあげるよ」

アーサァの後ろに銀時とティアナが笑って立つと、ティアナはハンカチをアーサァに渡してそれをアーサァが受け取る。

「…がとう……ありがとう……みんな……」

涙が止まらなくてもアーサァはスバル達に自分を受け止めてくれることに強い感謝を抱く。

その光景を微笑むように見る源外とスカリエッティ。

特に源外はこの光景を見覚えがある。

かつて流山が死んでたまが人間としての感情で悲しむ中、銀時達がたまの悲しみを受け止める光景であった。
スバルを見ていると、スバルの中に眠る銀時と同じ侍としての意思が見えてくる。

ドカァーーーーーーンン！

「！？」

突如、大爆発が起こって驚きだす銀時達。
次々と大爆発が起こって何があったのか驚きだす銀時達。

「なんだ！？」

突如の爆発に驚きだす銀時。

「少し暴れすぎたようだ。ウゼルが死んだ事で、主を失ったこの要塞を中心とした『カリバン』の要塞を動かしていたエネルギーが暴発しかけている」

スカリエッティがそう言うと、アーサァが信じられないように驚きだす。

「暴発だと！？これだけの要塞を動かすにはそれ相当の大量のエネルギーが必要不可欠なはず！そのエネルギーが暴発すれば、全ての『カリバン』の要塞もろとも大爆発して……ミッドチルダが吹っ飛んでしまいます」

「えええええええええええええええええええ！？」

アーサァがそう言うとスバルは絶叫する。

「ちょっそれヤバイじゃないの！？一体どうすれば良いの！？」

「そうだ！地下の要塞の地下にエネルギーを制御する装置があるはずです！あそこに行けばエネルギーの暴発を止めれます！」

「野朗共！さっさと乗れ！すぐに地下に潜るぞ！」

銀時達は『ガジェット・スカイバード』に乗ると、急いで地下に向かう。

そこは要塞のエネルギー制御室。

場所的な雰囲気はまるでターミナルの地下に似ている。

『ガジェット・スカイバード』はゆっくりと地に下りて、銀時達は急いで制御装置に走って向かうが、あたりがエネルギーの暴発によってエネルギーが地を走りまくって囲んでいる。

「ちぃ、これではうかつに近づけねぇ！」

「どうすれば良いの！？あそこに言って暴発を防がなきゃいけないのに！」

銀時とティアナも万事休すにまで追い込まれる。

するとスカリエッティが決心して『ガジェット・スカイバード』に下りる。

「諸君は『ガジェット・スカイバード』に乗って逃げるんだ！」

「スカリエッティさん！」

どうやらスカリエッティは自分が制御システムを起動させるつもり

である。
その周りはエネルギーの暴発でうかつに近づけば肉体がボロボロになって最悪の場合は消えてなくなる。
それでもスカリエッティはこの暴発を止める責任を感じている。

「研究者が起こした事態だ。研究者が何とかしなきゃいけないだろう？」
「無茶言わないでよ！制御装置付近は危なくて近づけないわよ！」

必死に止めるティアナに死を覚悟を元に制御装置に向かうスカリエッティだが……

ドカーン！

「！？」

銀時達の目の前の柱が大爆発する。
すると爆破後には柱が遠く離れてしまうほど割れてしまった。
一体どうしてなのかを目の前を見ると、そこには自分たちとは別の場所にいるアーサァがいた。

「あ……アーサァ！」

スバルは驚いてアーサァの名を言い出す。

「マスターが引き起こした事態です。僕（しもべ）が何とかしなきゃならないんですよ……」

そう言いだすとアーサァは笑って、スバルに『ペンドラゴブレイド』を投げ渡す。

そして『ペンドラゴブレイド』は大剣から竜の首飾りとなる。

「スバル、それは貴方に渡します。それとスカリエッティ、これを」

アーサァは懐から無線機らしき物を取り出すとスカリエッティに投げ渡す。

「無線機です。指示をお願いします」

そう言って後ろを振り向く。

「ちょっと待って！何をする気なの！？アーサァ！」

スバルは駆けつけようとすると、銀時とティアナは黙ってスバルの肩を掴んで止める。

「銀さん！ティア！」

スバルは2人の名を言い出すと、銀時とティアナは黙りこむ。

そして銀時達は『ガジェット・スカイバード』に乗り込む。

「銀時、ティアナ、源外、スカリエッティ、貴方達に最初で最後のお願いがあります。私の代わりにスバルを……私の大切な友を護ってください……」

「……ああ」

銀時達にスバルを護って欲しいと頼みだすアーサァ。

その頼みを銀時は聞き入れると同時に『スカイバード』が動き出す。

「やだよ！離して銀さん！ティア！……アーサァァァァァ！」

涙を流してスバルはアーサァの名を呼ぶ。
そして『ガジェット・スカイバード』はこの場を脱出する。

「護りたい気持ちは人を強くさせる。それは人間でも人造生命体でも変わりはしない。マスターの戦闘機人として生まれた私には理解できなかった事ですが……スバルのお陰で理解しました」

無線機を通じてアーサァは喋りながら制御装置に向かうが、エネルギーの暴発に触れて徐々に衣装がボロボロになって行き、肉体も削り取ってしまいボロボロとなる。

「私も護りたいものがあったんです」

無線機を通じて銀時達はアーサァの最後の遺言を聞きだす。
無線機を持っているスバルは涙を流しながらも、アーサァの最後の台詞を聞き逃さないでいる。

「何度改造されても、実験によって体を変えられても、この身を滅ぼうと忘れない……だから」

アーサァは笑いながら制御装置を起動させてシステムを作動させる。
するとさらに体中がボロボロとなって内部も骨も削られていく。

「だから……スバルも…私…のこと…忘…れない…で…くだ…さい」

涙を流しながらアーサァはスバルに言い出す。

「そうすれば……私の魂は……」

悲しみながらアーサァは１０年前までのスバルとの思い出、そして再会した後の話し合いと戦いを思い浮かべる。
タダの戦闘機人として生まれた自分でも、人間としての思い出があったと理解した。

「ずっと、貴方の中で……生き続けますから」

「アーサァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

涙をあふれ出し、悲しみながらもスバルは親友の名を叫びだす。
無線機から親友の声を聞いて、最後のシステムを押して起動させると、徐々に下半身から体が削られるように消えて行き、もう身動きは取れない。

「……ス…バル……私…達の…絆…は…貴方と……共に……」

最後に笑顔で笑いながらそう言いだすと、エネルギーに完全に飲み込まれたアーサァは跡形もなく消滅する。
それと同時にエネルギーの暴発は止まりだした。

かくして、『カリバン』との決戦は幕を閉じて事件も解決した。

＊

一方の鬼兵隊の戦艦では、高杉の前に鍬死楼が愉快そうに笑い出しながら姿を現した。

「鍬死楼……随分と遅く帰ってきたそうじゃねぇか？しかも何やら面白い剣を持っているようで……」

煙管を口から話して煙を吐く高杉は、鍬死楼を向くと、鍬死楼は何故かその手には『エクスキャリバー』と9のジュエルシードを持っている。

「まさかとは思うが、お前ウゼルを利用して初めから七星神刀（しちせいしんとう）を奪うつもりだったのか？」

「ああ、腐りきった世界を今更支配するような輩の手など貸すつもりはなかったさ。聞けばあの茶吉尼族である鬼獅子も桂にあっけなくぶっ殺されたそうじゃねぇか？」

持っている『エクスキャリバー』と9個のジュエルシードを高杉に渡す鍬死楼。

実は銀時とウゼルの対決を気づかれないように観察しており、銀時とスバルがその場を出て行った後、そのまま『エクスキャリバー』と9個のジュエルシードを取り出してその場を退散したのである。

「しかし茶吉尼族もたいした事はなかったなぁ？それとも桂の戦闘力は宇宙三大傭兵種族に匹敵するとか……まぁいずれにしろ俺は最初からウゼルに力を貸すつもりはなかったわけだ」

「くくくくく……お前も随分と俺に似てきたなぁ？まぁ俺も同じさ。誰がどうしようと俺には関係ねぇ。『カリバン』もこの腐った世界を潰す為の駒にしかすぎねぇからよ」

不気味に笑い出す高杉。

世界を壊す為なら『春雨』だろうと『カリバン』だろうと利用する。
鍬士郎はある事を思い出して高杉に言い出す。

「おうそうだ……アンタに話しておかなきゃいけない事があった。
何やら白夜叉も魔導師に目覚めたようだぜ？」
「何？」

ピクリと高杉は表情を変える。
銀時が魔導師に目覚めた？侍であるあの男がどうして魔導師に？
高杉は鍬死楼からその話を詳しく聞くのであった。

＊

ミッドチルダ第４墓場

そこは緑が包まれた草原に建てられている墓場。
そこに１人、スバルが悲しそうに１つの墓を見つめる。
その墓場はアーサァの墓であり、親友の墓場をスバルはただ見つめるしかなかった。

あれから『カリバン』の要塞はアースラによって破壊された。
そして生き残った戦闘機人達を管理局が削除する為に破壊しようとしたが、その前にスカリエッティが１人残らずアジトに連れて行き、戦闘機人ではなく人間として生きる道を知ってもらう為に連れ出した。

「ここにいたか、スバル」

聞き覚えのある声にスバルは振り向くと、銀時とフェイトがいた。
銀時は申し訳なさそうな表情でスバルを見る。
あの時、アーサァを止めようとしたスバルを止めた結果、結局アーサァは死んでしまったからである。
そしてフェイトがスバルに話しかける。

「銀時から話は聞いたよ……ずいぶんと辛い目にあったんだね。アーサァの事はお気の毒に……」
「……結局……私は何も出来ませんでした……」

スバルは悲しそうに言い出す。

「アーサァを助けられず……アーサァは死んでしまった。絶対に助けると決めたのに……私は……」

アーサァの死で悔やむスバルに銀時が言い出す。

「馬鹿言ってんじゃねぇよ、スバル」
「銀さん……」
「アーサァはお前が護れなかったから死んだんじゃねぇ……お前を護る為に死んだんだ」

銀時がそう言うと、スバルは少し晴れた表情をする。

「お前の想いがアーサァに通じたから、アーサァは俺達を……スバルを護ったんだ」
「アーサァが……私を？」
「それにそれ」

銀時は、スバルの首に飾ってある日本刀の首飾りと隣にある紅い竜の首飾りに指を刺す。

「そいつはアーサァの魂が宿ったデバイスだ。親友であるお前を護る為に託したんだぜ」

竜の首飾りを見てアーサァを思い出すスバル。
そんなスバルの肩を右手に乗せるフェイト。

「スバル……私はアーサァって人は知らない。けど、アーサァの魂は貴方の中で行き続けている。だから、アーサァの分まで生き続けて……アーサァもそれを望んでいる」

フェイトがそう言うと、スバルは涙を流してアーサァの分まで生きることを決意する。

「銀さん……フェイトさん……」

スバルは涙を拭いて、笑い出すとある事を言い出す。

「私、アーサァの分まで生きます。仲間と一緒に」

悲しみを乗り越えて、スバルは笑顔で笑って銀時達と一緒に生きることを決意する。
スバルの笑顔を見て銀時はフッと笑う。

「……良い女になれるよ…お前」

「えへ」

銀時にそう言われて嬉しく笑うスバル。

「んじゃ、せっかくだから管理局から大量の褒美の金を貰った事だし、フェイトとスバルにソフトクリームを奢ってやるよ」

そう言って銀時は振り向いて歩き出す。

「帰るぞ、フェイト、スバル」

「うん」

「はい」

フェイトとスバルは銀時について行き、この場を去る。

そして小さな風がスバルを包み込むかのように、スバルの耳からある言葉が聞こえる。

「私達の絆は……貴方と共に」

≪スバル編・完≫

銀八

「教えて……」

生徒全員
「銀八先生！」

ルーテシア
「……今日は、ルーテシアがアシスタントする……」

銀八
「ってテンション低いなおい！？おうそうだ。何か前回、咲夜がおにぎりを作ったんだが？食ってみるか？」

そう言うと、銀八は咲夜がおにぎりをルーテシアに渡す。
海苔からはみ出てる部分のお米が紫を不思議そうに見るルーテシアは覚悟して口にすると……

１秒後に口から大量の泡を出し、青ざめて倒れる。

３０分後

ルーテシア
「ぐはぁ！……はぁ！はぁ！」

息を荒くして復活するルーテシア。
相当不味かったようである。

ルーテシア
「こ……この世のものとは思えない食べ物だった……」

銀八
「だよなぁ？んで質問行くぞぉ。まずはこの人、ペンネーム『神威　銀時』さん『質問です。コスプレ銀さんがリインフォースとユニゾンをしたら戦艦何隻分に相当しますか？』ずばり答えます。銀さんは生身でもＳＳ＋級の実力を誇ります。さらにデバイスの使用時とリィンフィースのユニオンにより、さらに2倍。それを同時に行えば合計４倍の戦闘力を誇り、戦艦２０隻分の強さを誇ると思います（多分）」

ルーテシア
「正に最強……」

銀八
「んでもう1つの質問は『『ＳＯＳ学園』で黒神さんから銀時となのはの接吻のリクエストがありましたけどそれをフェイトらが知ったらどうなりますか？黒神さんのためにもこの質問はフェイトらに見せないで下さい』……おそらく作者はフェイト達に殺されます」

ルーテシア
「自業自得……」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい」

ルーテシア
「次……ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『前回の銀八先生のコーナーで僕の質問（アニメ銀魂終了に関する質問）がありませんでしたが、あれは単に黒神さんが忘れていたからなのですか？それとも何か質問に不適切な表現でもありましたか？

もし忘れていたのなら今回の質問と合わせて今度こそ答えてください。

それでは今回の質問。

今作ではルーテシアの保護者的な存在でもある近藤ですが、ルーテシア、ガリュー、アギトが近藤が引き起こした数々の羞恥的騒動（妙へのストーキング、ジェットコースターで脱糞した一件、トイレで紙やすりを使って尻を拭いた一件、厠革命時に沖田が用意したナニを入れる穴からチ○コが抜けなくなった一件、新八の文通に「ムラムラします」と書いた一件、その他諸々）を知ったらどんな反応をしますか？』」

銀八

「ずばり答えます。前回のは完全に忘れていました。申し訳ございません。その質問はこうですね『一つ目

ついにアニメ銀魂が本当に終了する事となりましたが、其れに対して今の銀さん達の心境はどうですか？

二つ目

黒神さんはアニメと原作どっちの銀魂が好きですか？

また、その中で一番好きな話はどれですか？

三つ目

この『アニメ銀魂終了』という一大事をネタに、なにかギャグ短編を作る予定はありますか？

』１つは銀時達はメッチャ悲しんでいましたが、４月5日に始まる『よりぬき銀魂さん』で悲しみが吹っ切れました。」

ルーテシア
「銀魂のアニメの総集編番組」

銀八
「２つ目はどっちも好きであり、好きな話では紅桜編です。３つ目はおそらく予定があります。んで今回の質問の答えをします。ここはルーテシアにお任せします」

ルーテシア
「近藤もそうだけど……あんなぺったんこゴリラ似女のどこに惚れたんだろう？同じゴリラ似だから？」

銀八
「おいいいいいいいいいいいいいいいいいい！それあの女の前では言わないでね！お妙には絶対に言わないでねぇ！」

さりげない妙に対する一言にツッコム銀八。

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、忘れてしまってすみませんでした！……次ィ、ペンネーム『武士堂』さん『もしスバルやアーサァが銀魂の世界の攘夷戦争当時、攘夷側に参戦していたら攘夷側は天人・幕府に勝てたと思いますか？』……確かにメッチャ頼もしい助太刀になります。覚醒状態のスバルと本気を出したアーサァの戦闘力は戦艦２０隻分はありますが、それだけで勝てるほど攘夷戦争は甘くないようです。」

ルーテシア

「確かに……」

銀八
「っと言う訳で『武士堂』さん、戦争の厳しさはおそらく貴方が思っている以上に厳しい物です！」

ルーテシア
「次……ペンネーム『烈火竜』さん『銀八先生に質問です。この世界のヴァイスもゴリラと結婚させられますか？（笑）』」

銀八
「何かヴァイスに恨みあるの烈火竜さん～～～！……まぁ良い。ずばり答えるとこうなります。それはないと思います。っと言う訳で『烈火竜』さん、ヴァイスに少し優しくしてやってください」

ルーテシア
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん。『ウッソ「ウッソです．お願いを聞きいれてありがとうございます」

こなた
「今回は『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のレギュラー．泉　こなたが質問するよ～

？ルーテシアさんは近藤さんと仲がいいけど実際ルーテシアさんにとって近藤さんはどういう存在ですか？
？ルーテシアさんも影が薄いけど大丈夫ですか？てかナンバーズ全員が薄いかもしれないね

後，この間鍋に参加してなかった『攘夷戦争鎮魂歌』に出ている人にプレゼントです．姫路さんのワッフルが全員分ありますのでプレ

ゼントします．食べてください。
ちなみに食べないとなのはさんが「デスペレード・デモンブレイカー」を撃ち込むって言ってたよ～」

ウッソ
「こなた・・・それはルーテシアさんにとどめをさす気かい？これからもがんばってください」』」

銀八
「おいいいいいいいいいいいいいいいい！それはルーテシアに死ねって言いたいのかよ！しゃあねぇ！とりあえずそいつは全部俺が処分……って」

処分しようとしたが、ルーテシアが覚悟を決めて銀八と近藤に山崎、そしてナンバーズの分までワッフルをムリヤリ全部食った。

銀八
「何無理しちゃっているのォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」

銀八は絶叫して、ルーテシアに言い出すと、

ルーテシア
「ご…めん……後は…まかせ……ごふぁああ！」

バタン！

血を吐いて倒れて気絶するルーテシア。

銀八

「ルーテシアぁぁぁぁぁぁぁ！」

もはや質問を答える暇がなかった。
ちなみに答えは、？ルーテシアはゴリラ似のお父さんに様に見ている。？は結構気にしているようである。
その後、ルーテシアはダウンして保健室に運ばれる。

銀八
「なんてこったぁ！ルーテシアがここで倒れるとは……しゃあねぇから1人で質問するか。次はペンネーム『クアンタ』さん『機動六課と夜王鳳仙が戦ったら機動六課の勝率は何%くらいですか。また、ナンバーズが加わったら勝率は何%ぐらいあがりますか。』。ずばり答えます。それは銀さんたちメンバーが存在せず、スバルも原作どおりだった場合はこうなります。まちがいなくほぼ0に近いです。ナンバーズを加えてもほぼ1以下です」

どんだけ鳳仙強いんだって言うツッコミを入れたいぐらいに質問する銀八。

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん。廊下に立っていなさい。次はペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『もし、銀さんがドラゴン●ールを見つけたら何を願いますか？（ちなみに願いは3つまでです。それ以上するとなのｈゲフン、ゲフン。ではなく白い魔王さまと邪神龍をもれなくプレゼント。）」……そうですね、1つは●めはめ波を打てる事。2つめは卍解ができる事。3つめはさらさらヘアーにしたい事。そんなモンですね」

まるで自分の事の用に言い出す銀八。

銀八
「っと言う訳で『ＮＡＮＯ』さん。廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『ディワールド』さん『質問１です。
僕が書いてるディケイドＶＳ世界なんですが多分、この話の主人公門矢士なら白い魔王に勝てる気がしますが沖田と同じドＳ野郎なので、あ、でも沖田は笑ったりしますが士は笑わない人なので沖田より怖いかもしれません。
質問２
ディケイドＶＳ世界の主役士からなのはに質問。
最近なのはがデモンブレイカーとか放って前より化け物見たいな感じになってますが、なのは本当に人間ですかー？ちなみになのは、俺に砲撃放っても無駄だから、俺はどんな物も全てぶっ壊すし。打ち返すから。
質問３
同じく士から。
銀八先生、俺の女の知り合いであんたと結婚してもいいよって言う奴が要るけど紹介しようか？
なのはやフェイトに並ぶ美人だ。』……ずばり答えます。１はそうかもしれませんね。２は気持ち的にはわかりますがそう言う質問は控えめに。んで３つは……是非、お願いします！」

頭を下げてお願いする銀八。
メッチャ哀れな。

銀八
「っと言う訳で『ディワールド』さん、これからも小説作り頑張ってください。次ィ、ペンネーム『サトッチ』さん『蒼妃さん（玄武の使者様）の小説に出てくる管理局の姿をみてどう思いますか？（似たような答えはなしの方向で。）
はやてさん、なのはさん、キャロさん、ティアナさん、ありささん、

すずかさん、プレシアさん、フェイトさんに質問です。
蒼妃さんの小説（魔法少女リリカルなのは？聖騎士と黒騎士？と魔法少女リリカルなのは？新たな冥府の炎王？）での自分自身をみてどう思いますか？なおティアナさんとキャロさんは聖騎士と黒騎士のみを見てお答えください。（理由冥府の炎にまだ出ていないから。）そのほかの方々は両方みてお答えください。なお銀八（銀時）の代理回答はお控えください。
最後に銀八先生に質問です。』……作者は玄武の使者さんの小説を見ていないので、その質問をどう答えれば良いのか分からないようです。同じく分からないので却下。そんで最後のほう『はやてさん、ヅラに質問です。
んまい棒は今現在何種類ありますか？そして解説と実践をしてください（ミッドチルダのゴリラを実験台にして。）』……2人が言うからには少なくとも５０種類は軽く超えているようです。っと言う訳で『サトッチ』さん、次からは分かりやすい質問をお願いします。
次ィ、ペンネーム『十河』さん『こちらも小説を書いてます仮面ライダーWの小説ですが銀さんは誰とWに変身したいですか？そしてライバルの仮面ライダーアクセルは誰がイメージにしっくりきますか？』・・・・・ずばり答えます。1人は当然、結野アナと合体したいようです。２つ目はマヨラーだと思います。っと言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい。んで次が最後」

銀八は最後の質問を読む。

銀八
「ペンネーム『正宗の胃袋』さん『銀時好きの人達にお願いがあります。アニメ銀魂が終わってしまいました、この原因は銀八先生が銀時の人気を嫉妬して無理矢理終わりにしたと思われます。フェイト達の皆さん、銀八先生の抹殺してください』……ってするかぁあああああああ！！！！」

完全に自分に対する嫌がらせの質問であると銀八は怒鳴りだして質問を破る。

銀八
「なんでまた俺イジメ!?俺なんかしたぁ!?っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていろう!」

完全なるイジメ質問に銀八は怒り出すが、それも収まって次回のアシスタントを言い出す。

銀八
「んじゃ次回のアシスタントは、月詠にお願いしてもらうか。次回もお楽しみ～」

第五十四訓：遠く離れても強い絆は消して消えない（後書き）

黒神
「ここで、作者のお願いがあります。最近、追加質問が多くなっているので，答えるこっちも大変だそうです。ですので、多く質問する場合は一気にお願いします。１回の質問を出すのは最大３つで。では、お願いします。」

虫歯となったフェイトとなのは。

歯医者とは思えないグロテクスな恐怖。

シグナムの絶叫？

銀時
「次回、『虫歯になるのは甘い物を食べ過ぎるのが原因なのかもしれない』テイクオフ」

第五十五訓：虫歯になるのは甘い物を食べ過ぎるのが原因なのかもしれない（前

銀時
「……」

桂
「……」

神楽
「……」

エリザベス
「……」

月詠
「……」

スバル
「あ・・・あのう……どうしたんですか？銀さん」

銀時
「いや……終わっちゃったんだよね。アニメ『銀魂』」

桂
「何も為し遂げていないのにこんな終わり方、悲しすぎるではないか……」

銀時と桂も絶望している。

どうやらアニメ終了がメッチャ悲しいようである。

神楽
「私の活躍もコレで終わりアル」

エリザベス
『メッチャ悲しい』

月詠
「終わりはいずれ来ると覚悟しておったが……流石に答える」

神楽、エリザベス、月詠もショックを受けている。

スバル
「いや！でもまだ映画があるじゃないですか！『劇場版銀魂　新訳紅桜編』！私絶対に見に行きますから！それにほら、実は新たな情報が見つけたんですよ！」

スバルが慌しく銀時達を励ますと、銀時が言い出す。

スバル
「４月５日から再放送の『よりぬき銀魂さん』が始まるんですよ」

銀時
「え！？」

桂
「何！？」

神楽

「マジでか！？」

エリザベス
『嘘！？』

月詠
「それは本当か！？」

銀時だけじゃなく、桂、神楽、エリザベス、月詠も反応してスバルを振り向く。

スバル
「え……ええ……作者があるサイトを見て確認したそうです」

銀時
「よっしゃー！銀魂がまだまだ続くぞぉ！」

銀時は大喜びに叫びだし、桂、神楽、エリザベス、月詠も大喜びである。

スバル
「そんな感じで、『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』もまだまだ続き、今日から中盤編を始めます。」

第五十五訓：虫歯になるのは甘い物を食べ過ぎるのが原因なのかもしれない

チク　チク　チク　チク

時計の音が鳴り続けると共に、フェイトは苦しそうな表情で汗を流している。

（早くしてよ……頼むから早くして……）

心の奥底でかなり焦っている。

（お願いだから早く……私に止めを刺してよ……）

死を覚悟したように思い出すフェイト。

（どうせ・・・私はもう助からないんでしょ。もう二度とここから出てこれないでしょ？何故一思いに止めを刺さないの！？何故時間を稼ぐの？）

むしろ時の悪戯がフェイトを苦しめているように思える。

「殺してよォォォォォォォ！殺すなら一思いにやってよ！人を弄んでそんなに楽しいの貴方達！？」

もはや限界が来て叫びだすフェイト。

「頼むよォォォォォォォォォォォ！こうしてただ黙って忍び寄る死を待つのは辛すぎるんだよ！・・・気がおかしくなっちゃいそうなんだよ！ねェお願い！早く…早く私を殺してよォォォォォォォォ

オオオオオオ！！」

生きていくだけでも苦しいフェイトは死んで楽になりたいと叫びだす。

「……あのォ、フェイトさん？」

呆れ眼で看護婦はフェイトに話しかける。

「すみませんけど静かにしてもらえません？他の患者が迷惑なんで」

「……すみません」

看護婦に注意されたフェイトは謝罪すると席に座る。

その光景に親子が呆れてフェイトを見つめる。

実はフェイトは昨日、スイーツの店でケーキを頂き、今日の朝に虫歯になってしまった。

少し右ホッペが晴れていて、これをみんなに・・・特に銀時には見せられないのである。

（ふぇ～ん、歯医者はやだよ～！（泣））

しかもフェイトは大の歯医者が苦手である。

奥底から聞こえてくるドリル音に死刑執行を待つようなこの待ち時間。

（嫌だよ～帰りたいよ～！今すぐ帰って銀時に甘えたいよ～！でも

歯は痛いし、でも治療は怖いし）

何もかも投げ捨てたくなるほど恐怖に染まっている。

（……もう何順目？こんなことを考えるの？頼むからさっさと止めを刺してよ！もう余計な事を考えたくないから……）

フェイトはいっそ楽になりたい死を求めている。

（そもそも、こんなの銀時達に見せられたら笑われちゃう！確かに甘い物を食べると虫歯になりやすいと言うけど、だからってケーキ１つで虫歯はないよぉ！それに最近すっかり甘い物を食べていなかったのに、何でケーキ１つでいきなり虫歯の展開になる訳！？）

もう神のいたずらでしか考えられなかった。

（絶対に削られるような絶対ドリル口につっこまれるのはイヤだよ！ドリルなんて普通口につっこむ物じゃないよ！一番つっこんじゃいけないんだよ！医者のやって良い事じゃないんだよ！）

嫌な汗を大量に流すフェイト。

（どうしよう…もしドリルつっこまれる時にクシャミとかしたら死ぬのかな？私死ぬのかな？）

フェイトの頭の中には怖い想像しか浮ばない。

（どうしようもし削りカス吸い込むあの機械に舌とかまきこまれたら死ぬのかな？私死んじゃうのかなぁ？……いやぁあああああああああああああああ！銀時ィ！助けてよぉおおおおおお

おおおおおおおおお！）

絶望に染まってフェイトは心の中で叫ぶと……

「ふぇ……フェイト……ちゃん……？」

聞き覚えのある声が聞こえ、後ろを振り向くと……そこには左ホッペが赤くはれているなのはがいた。

「え……なのは？」

まさかなのはも虫歯になっていたとは思いもよらなかったフェイト。

「ふぇえ！？フェイトちゃんも虫歯なの！？」

「そう言うなのはも虫歯に！？」

まさかここで大親友であるなのはと遭遇するとは思いもよらなかったフェイト。

そしてなのはは黙ってフェイトの隣に座る。

（……今最も関わりたくない人と関わっちゃったよ～）

（よりにもよって、お互いに虫歯になっているなんて……）

（平静を装わなければ……）

（ここで惨めな姿を見せられない……）

なのはとフェイトはそれぞれヤバイ様に考える。

（いい年こいて歯医者が苦手なんて知られたくないよ～）

そこだけは知られたくないっとフェイトとなのはは思いやると、２

人はお互いに話し合うことを決意する。

「ね・・・ねぇなのは？ひょっとして、なのはって歯医者苦手なの？」

「ふぇえ？…べ…別にそんなんじゃないよぉ。それに……フェイトちゃんこそさっきから嫌な汗を流しているけど……大丈夫？」

互いに固まって話し出す。

自分の弱みを握られない為に。

「歯医者が怖いって人は大抵ドリルの音が苦手って言うじゃない？でも私は大丈夫だよ？むしろ毎週ドリルつっこんでほしいぐらいな定期的に歯石とかとりにきたい位だし」

「あれ？なのははやっていないの？私なんかはもう三日に一度にドリってもらえるんだけどね？口の中気持ち悪いし。しょうがないよねドリらないと」

互いに意地を張って話し合うと、お互いに信じられない一言を言い出す。

「あーそうなんだ。私は自宅にマイドリルがあるから通う必要はないよ。ドリラーだし」

「へ…へぇー、なのはもドリラーなんだ……奇遇だね。今度アレだったら一緒にドリルコンテストでも出てみない？」

「う・・・うん、そうだね。休日が合えばね？まァあけるようにしとくね」

フェイトとなのははあんまり驚かずに話し出すが、内心では信じられないぐらい驚きだしていた。

（ドリラぁぁ！？何ドリラーって！？なんでマイドリルなんて持っているの！？なのは半端じゃなくドリルにビビッていないよぉ！）
（ドリルコンテストぉぉぉ！？イヤだァァァァ！出たくないよそんな大会！フェイトちゃんそんな大会に出ているの！？凄く怖いよぉ！）

「おや？テスタロッサに高町ではないか？奇遇だな」

1人の女性が2人に声をかける。
その女性のほうを2人は振り向くと、そこにはシグナムがいた。

「シグナム」
「シグナムさんの来ていたんだ」
「うむ、実は以前に主からキャラメルを頂いてな……それで歯がやられてしまった。2人もそうなのか？」

シグナムは質問をすると、フェイトとなのはは苦笑して質問に答える。

「え……ええ、まぁ何とか……」
「にゃ…にゃはははは…何とか……」

2人は汗を流すと、シグナムはどうしてここにいるのかを言い出す。

「うむ、実は治療中にお手洗いに行って抜けてきたところだが、少し参っているんだ」

シグナムは困ったような表情で言い出す。

「…ここの歯医者……すごく痛いぞ？」

その一言でフェイトとなのはに絶対的な恐怖が染まってしまった。

「治療が早い分、痛みもかなりのものだ。下手をすれば戦場による痛手の数倍はイヤと言うほどに効く。まぁアレで声をあげないのは私ぐらいだがな？」

「シグナムさん、まだですかァ？」

治療室で看護婦がシグナムを呼ぶ。

「すまない、今行く。……では、２人もそれ相当の覚悟を決めたほうが良いぞ？」

そう言ってシグナムは治療室に向かう。

「……」

「……」

シグナムの言葉に２人はただ黙りこむだけであった。

タダさえ普通の歯医者でも怖がるフェイトとなのはが来た歯医者は、よりにもよってメッチャ痛い歯医者であった。

「そ……そうか～凄く痛いんだ、ここの歯医者って？」

「で……でも歯医者ってそんなんじゃないのかなぁ？痛いのは当たり前って感じで？」

フェイトとなのはは話し合って恐怖を抑える。

「ねぇ……なのはの顔色、悪くない？」

「ええ？全然だよ？」

話を進める中、

「ああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

「！？」

突如、治療室でシグナムの絶叫が響き渡る。

2人はびくりとして驚きだす中、

ガリ　ガリ　ガリ　ズゴゴゴゴゴゴ

「シグナムさん、あんまり暴れないでください。危ないですから」

「花中さんちょっとシグナムさん押さえつけて、ベルトで椅子を縛りつけて……ああそうそんなカンジ」

「ぎょおああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

ゴキ　バキ　バキ

イヤと響き渡るシグナムの絶叫。

これはもはや治療による痛みでとは考えられない。

何かの拷問による悲鳴の響きでしか聞こえない。

（……なんか尋常じゃないぐらい苦しんでいるよォ！）

（一体どんな治療を受けているのォ！？）

「あんぎゃああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

ブシャアアアアア

とても歯の治療とは思えない恐怖の悲鳴ばかりが響く。

ピー

「先生！シグナムさんの脈が！」

「花中さん、心臓マッサージをして。アレだったら電気ショックを与えて…ああそうそんなカンジで」

（電気ショック！？何で歯医者でそんなものが必要なの！？）

電気ショックの存在にツッコムなのは。

「先生！脈が戻りましたけど、まだ虫歯が取れません！」

「んじゃ、チェーンソーで斬るか」

（チェーンソー！？何で口にそんな物を入れるの？ってかどうしてあるの！？）

あり得ない道具にフェイトはツッコム。

とても荒治療とは思えない行動にどんな治療されているのかを想像するが、それ自体がイヤになってきた。

「ぐぁああァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

さらに響くシグナムの絶叫。

「何とか虫歯も取れたようだしね。ついでにあれも？花中さん、とりあえずパーツ用に保存してやって」

（パーツ！？パーツって何！？っと言うよりアレって何！？）

「先生。なんかこれならビームサーベルを持ったほうが似合いそう

ですよ」
（ビームサーベル？ガンプラ作りやっているの！？花中さんコレガンプラだよね！？）
さらに怪しくなってきた治療中の話にフェイトとなのはは青ざめる。
「よし……じゃあコレで大体終わりかな」
（終わりなの！？ガンプラ話で終わっちゃったよ！）
「どうですか？シグナムさん」
「おお……嘘みたいに歯の痛みが消えてなくなった」
（痛みどころがなんか人体の一部が取れたらしいよ！ガンプラのパーツ扱いされてしまったんだよ）
あり得ないというばかりに嫌な方向に思い浮かべる2人。
「痛かったでしょう？ご免なさいね。でもこれで以前のように何でも食べられますから」
「すまない、恩に着る先生」
「朝晩だけじゃなく食後には必ず歯磨きするように心がけてくださいね。コレ痛み止めと特別にうちで作った歯ブラシをつけときますから。ではお大事に、歯を大事に～」
「うむ、感謝する」
歯医者に礼を言い出してシグナムが現れる。
「うーむ、すっきりと直してもらったぞ。メチャメチャ痛かったが、中々良い歯医者だったぞ。しかも歯ブラシもつけてもらった」
満足そうにシグナムはフェイトとなのはに歯ブラシを見せる。
その歯ブラシは……何故か左腕と一体化されていた。

（つけとくってどこにィィィィィィ！？）

あり得ないばかりに突っ込むフェイトとなのは。

なんでシグナムの腕が歯ブラシと一体化されていたのかを疑問に抱く。

（ちょっとまってぇ！つけるって……）

（そう言う意味でエエエエエエエエ！？）

完全なる違反改造である。

歯が治った代わりに大切なものがもっていかれた。

これは等価交換どころではなくなった。

「歯ブラシがバサバサになったらまた取り替えに来てください」

「すまないが聞きたい事がある」

看護婦にシグナムが尋ねる。

（そうよ言って！クレームつけて！）

（コレ明らかに違法治療だよ！）

本来であればまちがいなくこの場で逮捕するべきであるが……

「私歯ブラシって毛質かためじゃないと磨いた気にはなれんだが？」

（そこじゃないよぉぉぉぉぉ！）

シグナムの的外れの言葉にツッコむフェイトとなのは。

「大丈夫です。それは魔力によって強化すれば固められます」

（魔力で!?え?まさかあれ歯ブラシ型デバイス!?）
（なんだ・・・じゃあシグナムさんはデバイスで腕を歯ブラシと一体化したんだァ）
安心して言い出すフェイトとなのは。
すると、
「アレ?フェイトになのはじゃないか」
突如現れたのはアルフであった。
「アルフ?貴方も虫歯を……」
「いやー、中々良い歯医者だったよ?すっかり直してもらったよ!おまけに特別に電動歯ブラシもつけてもらったし♪これでこれからは手を使わなくても歯がみがけるよ♪」
愉快そうに言い出すアルフの額には……シグナムの腕がついていた。
（電動歯ブラシって……）
（それただのシグナムさんの手だよぉぉぉぉぉ!）
フェイトとなのははカオス的な展開についてこれなくなった。
「やっぱ電動歯ブラシって使えるよね?コレって」
（だからそれシグナムの手だよ!）
「どうだろうか?何でも機械に頼るやり方は私は好きじゃないな。やっぱり歯ぐらいは自分の手でみがかないと」
（いやそれがシグナムさんの手だよ!っと言うよりどうして疑わないの!?どうしてアルフさんとシグナムさんは疑わないの!?）

あり得ないばかりに混乱するフェイトとなのはの前で愉快そうに話し出すアルフとシグナム。

「シグ……電動歯ブラシが腐ったら来てください」
（今シグナムさんの腕って言いかけたよね！？）

看護婦の台詞にフェイトは疑いだす。

「でも何かこの電動歯ブラシイマイチ口元に届かないんだけど大丈夫？」
「大丈夫です。とどかなかったら自分の手で歯ブラシを持って自分で磨いてください」
（だったらなんでつけたの！？タダの嫌がらせじゃない！）

アルフに説明する看護婦にツッコムなのは。
そしてアルフとシグナムはこの場をさる。

「では2人とも、お大事に～。」
（お大事にじゃないよ！）
（貴方達が患者を大事にしてよ～！）

あり得ない歯の治療の結果に2人はどうすれば良いのか分からなくなった。

（……っ！どうなっているのこの歯医者！）
（歯直すどころがあんなのただの改造手術じゃない！）

（ヤバイ……この歯医者……ヤバ過ぎる！！）

先ほどのシグナムとアルフの光景に怯えたほかの患者は全員恐怖し

て走り去って逃げ出す。
しばらく嫌な汗ばかりが流れる2人はただ沈黙に黙り込む。

「じゃあ次の患者さん、入ってきてください。2人ずつ」

お医者に呼ばれたフェイトとなのはは立ち上がる。

（……え、ウソ……ウソでしょ？）
（本当に行くの？）

無意識に立ち上がる自分に疑う2人は口に思ってもいない事を言い出す。

「今回のドリルはどこまで私の中をえぐり込んでくるかなぁ？」
（いやだァァァァ！！行きたくないィィィィィィ！！何で私の口からこんな意味不明な言葉が出てくるのぉ！？）
「人は何故、穴を掘り進めるのか……そこにドリルがあるからかな？」
（何それェェェェェェ！？何でここで意味不明な事を言い出すの！？なんかの意地で動いちゃっているけど、もう良いからさっさと逃げてよォォ！）

フェイトとなのはは、お互いに歯医者が苦手って知られたくない分、間違った選択に進んでしまうのである。

（だれかァァァァァァァァァァァァァ！！！！誰か私達を止めてェェェェェェェェェェェェェェェェェッェェェェ！！）

＊

「どうも、覇美牙鬼病院(はみがきびょういん)の無柴(むしば)です。えーと、フェイトさんとなのはさんね。よろしくお願いしますね」

スキンヘッドの白髪ヒゲが生えている眼鏡をかけた老人が挨拶する。

「ははは、そんなにかたくしないで楽にしてください。痛くしませんから。」

気楽そうに笑う無柴。

「まァ、気楽にかけてかけて」

それが今の2人には出来ない。

何故なら、辺りはメッチャ血まみれに染まっている。

（さ……殺人現場？）

2人は思わずそう思ってしまった。

（……治療室って……こんなに真っ赤だったっけ？もっと白くなかったっけ？もっと清潔なカンジじゃなかった）

（……歯の治療ってこんなに出血したっけ？もっとこじんまりした道具が並んでなかったっけ？チェーンソーっとかおいてあったかっけ？）

そして椅子に座った2人は体を固定させられて身動きが出来なくなった。

（歯医者って、こんなのだったっけェェェェェェェェェェェェ！？）

あり得ないばかりに思い浮かべる2人は絶望の色に染まっていた。

「2人とも何か甘い物食べて虫歯になったそうだね。油断禁物なんだよ、甘い物は虫歯になりやすいって言うし。今度から甘い物を食べる時にはその後に歯磨きするように」

「……は……はい……」

「分かりました……」

もはや元気をなくした2人は覚悟を決めるしかなかった。

「それにしても確かフェイトさんとなのはさんって確かあの機動六課の隊長を務めている……じゃあ早いところを直さなきゃね？とりあえず今回は大サービスってことでスペシャル超神速治療コースを無料にしてあげるから……この2人に歯の治療をさせてもらうね。戦闘妖精シャザール1号さん、戦闘妖精シャザール2号さん。出番だよ」

「了解しました」

「コレより治療モードに入ります」

無柴が呼ぶと、そこには何故か、体が●ンダム的な鎧を身につけており、チェーンソーやドリルに剣や銃など様々な武装を持った看護婦が来た。

右がショートヘアーで左がロングヘアーである。

「お二人はどっちが良い？」

（いやァァァ

ァァァ！！どっちを選んでも殺されちゃうゥゥーーーーーーーーーーーー！）

2人は涙を流して全力で拒否する。（心の中で）

（何で武装しているのォォォォォ！？何で戦闘妖精シャザールが歯医者いるのォォォォォォォォォォ！？）

（っと言うより戦闘妖精シャザールって何ィィィィィィィィィィィィィィ！？）

もはやカオス展開に追い込まれた2人は叫ぶしかなかった。

「では2人は一号か二号のどっちをしま……」

「先生でお願いします！」

フェイトとなのはは声を合わせて先生にやってもらう事を願う。

「私に？イヤー、別嬪さんに頼まれるのって嬉しいですね。ですがこのスペシャル超神速治療コースは一号と二号でしか出来ない究極の治療法なんですよ？まぁとりあえず一号はなのはさんを、んで2号はフェイトさんをお願いします。」

「了解（ラジャー）」

一号と二号は戦闘モードに入るかのように武器を構えてフェイトとなのはを近づく。

チェーンソーのチェーン音が聞こえ、さらにドリルが螺旋して回転する音が響き渡り、それがフェイトとなのはをさらに恐怖を与える。

「では、幸運を祈る」

（幸運を祈るってどういう意味！？）
（それって命がけで直してもらっての意味！？）

逃げ出すように無柴はこの場を去る。

「それでは超神速治療コースによる究極の歯の治療をさせてもらいます」
「なるべく動かないようにしてください。頭が吹っ飛びます」

一号と二号はゆっくりと数多くの武器をフェイトとなのはに近づける。

「いやァァァァァァァァァァァァ！止めてェェェェェェェェェェェェェ！そんなの口に入れたら死んじゃうよォォォォォォォォォォォ！」
「死にたくないよォォォォォォォォォォォ

「いやぁあああアアア！！」

１０分後、２人の歯の治療は完璧に終了したと同時に機動六課の部隊がこの病院に違法な治療をしていると言う噂を聞きつけて囲んだ。特にアルフとシグナムは凄まじい怒りを感じており、先ほどの改造手術のせいで恥をかいたと言う理由で、捕まえた無柴を半殺しでボコボコにする。（ちなみにその時のアルフとシグナムの体はスカリエッティによって元に戻された。）

そしてすんごく死ぬより辛いほど痛い目にあってもなお無事に歯の治療を済ませたフェイトとなのは。

歯の痛みは治ったが、恐怖の荒治療がトラウマと化して一週間は魂が抜けてしまったように静まりだす。

歯医者の恐怖がさらに深まってしまい、二度と歯医者に行かないように虫歯はならないことを誓いだす。

銀八

「教えて……」

生徒全員

「銀八先生！」

月詠
「今回はわっちがアシスタントをする。とりあえず始めるとしよう」

銀八
「んじゃ行くぞォ。ペンネーム『F・N』さん『フェイト達は寿退社しますか?』、ずばりしないと思います」

月詠
「即答じゃな、おい」

銀八
「っと言う訳で『F・N』さん、廊下に立っていなさい。では次ィ、ペンネーム『風花』さん『?月詠はいつも煙管をくわえていますが肺は大丈夫なんでしょうか??前回は失礼しました。そのお詫びといってはなんですが銀八先生、次回のアシスタント、そしてルーテシアにこちらから料理を送らせてもらいます。ご希望の品を決めておいてください。質問ではなく失礼しました』」

月詠
「?はわっちが答えるとしよう。1つは大丈夫じゃ。自分の体の様子は自分自身が知っておる。んで?はどういう意味じゃ?」

銀八
「ああ、実はなぁ」

銀八は、前回アシスタントしたルーテシアが気を失うほど不味いおにぎりを食べて気絶した事を話し出す。
それを聞いた月詠は青ざめる。

銀八
「とりあえず次回はスバルがアシスタントするから、アイスをお願いします。っと言う訳で『風花』さん、アイスを作ってやってください」

月詠
「次を行くぞ?次はこやつからじゃ。ペンネーム『ビチャード・オン』さん『一つ目・アーサァは逝きましたが、再び感動の復活イベントはありますか?二つ目・ルーテシアもキャロのように強力な奴を召喚できますか?』」

銀八
「ずばりお答えします。残念ながらそれはないと思いますが、読者の希望数によって作者は予定を作るようです」

月詠
「確かに、アーサァの死は虚しすぎる」

銀八
「そんでもう1つは、おそらく出来ますが、それは魔王化していないキャロの時の話でしょう」

月詠
「キャロが聞いたら、ただじゃすまないぞ?」

銀八
「っと言う訳で『ビチャード・オン』さん、次回の質問も待っています。次ィ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『1．平成仮面ライダーの主役のライダーに変身する人達を銀魂、なのはキャラで例えると誰ですか。

五代雄介＝
津上翔一＝
城戸真司＝
乾　巧＝
剣崎一真＝
ヒビキ＝
天道総司＝
野上良太郎＝
紅　渡＝
門矢士＝
左　翔太郎＝
フィリップ＝

2．もし銀さんがバトルマニアだったらどうします。

3．アシスタントが答えてください。銀さんがフェイト達にキスしてくれる条件を出したらフェイト達はこの条件を飲みますか。』……ずばりお答えします。1は作者は仮面ライダーシリーズの知識が全然ない為、それをお答えできる事はできないでしょう。まぁそこは『ＳＡＤＳ』さんの想像でお任せします。2はおそらくシグナムとシャッハが相手しまくりますね。3は……次回からそうさせます」

月詠
「最近仮面ライダー系の質問が多いな？」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、作者が仮面ライダーシリーズの知識が全然なくてすみませんでした！」

月詠
「次の質問じゃ。ペンネーム『カラー』さん『質問・アーサァーは復活しますか玉さんみたく？』」

銀八
「ずばりそれはないと思います。作者はその設定を予定していないので。ですが読者の希望数によって作者がリクエストをすると思います」

月詠
「さっきと一緒じゃな？『質問2銀八は最近質問に答えないから「教えて、月詠先生」に変えるべきだと思いますが、どうでしょう』」

銀八
「ふざけんじゃねぇ！何で月詠先生に……っておい！そこ嬉がるなぁ！」

銀八は少しにやける月詠にツッコム。

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい！」

月詠
「次行くぞ？ペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『銀八先生はどうしてモテないのですか？自分的にはかっこいいとおもうのですが・・。』」

銀八
「……俺だって知りてぇよ……」

質問を見て涙を流す銀八を見て呆れる月詠。

銀八
「『ＮＡＮＯ』さん、いつもありがとうございます。次はペンネー

ム『神威　銀時』さんの質問。『原作で銀時が月詠との関係を夫婦と言ったことがありましたけど、なのはらがそのことを知ったらどうなりますか？』」

その質問を聞くと、月詠は青ざめる。
もしこのことがフェイト達にばれれば命の保障はないと思う。

銀八
「まぁ、月詠は銀時と同様にフェイト達の鉄槌を受けるだろ？っと言う訳で『神威　銀時』さん、作者は貴方の小説である『ＳＯＳ学園』をいつも楽しみに見ています」

月詠
「んで次はコイツじゃな？ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん…おお、何かなのは達がいつも世話になっているようじゃな？」

銀八
「ああ，しかも何か物好きなのか新八も出しているようだぜ？あのメガネを出すなんて変わっているなぁ？」

月詠
「……主はメガ……新八に対して冷たいな？」

新八に冷たい銀八にツッコム月詠。

月詠
「大体前から思っておったんじゃが、なんで黒神はメガネ・・・じゃなく新八に冷たいんじゃ？」

銀八

「何か新八のアイドルオタクっぷりがキモイっと言っていました」

月詠
「……まぁ、理由は分からん訳でもないが……」

月詠も新八がアイドルオタクであると聞いて苦笑して少し呆れる。

銀八
「それにお前はどうしてこの小説の元である赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは～魔法少女と銀髪の侍～』が始まったか知っているか？良い機会だからここで教えてやるよ」

っと月詠にこの小説と、赤夜叉さんの『銀魂×魔法少女リリカルなのは～魔法少女と銀髪の侍～』がどうして始まったかを、その原因を言い出す。
その第一順である『？第一章？第一訓：何がキッカケで何を好きになるかわからない』を良く見てみると、始まりのきっかけである新八が寺門親衛隊というアイドルオタクである事を始めて知り、そこで隊員から取り上げた『魔法少女リリカルなのは』を見てアニメオタクに目覚めた事を聞かされた。

月詠
「……コレは……どう言えば良いのか分からん……」

流石の月詠も新八をカバーできなくなった。
イヤ、新八のロリコンぶりに呆れてしまったのである。

銀八
「んじゃ、質問行くぞ？」
かがみ

「このバカこなた!!ルーテシアさんが血を吐いて倒れたじゃない!!」

こなた
「あいた!!かがみ～～痛いよ～～」

かがみ
「うっさい!!前回はすみませんでした．このバカの代わりに謝ります」

ウッソ
「ははは・・・じゃあ今回の質問です．かがみさん．よろしく」

かがみ
「わかったわ．

?ウッソくんが『次はランキング大戦じゃ～ないのかよ～～』って言ってたけどいつぐらいにやるの?

?月詠さんは銀時さんのことをどう思っていますか?・・・その・・異性として・・・

?なのはさんっていつからあんな怖い感じになったのですか?

後，これお詫びにお妙さんがウォッカを買ったのだけど誰も飲まないので月詠さんに上げます」

こなた
「ちょ!!かがみんそれ，まずいって!!」『……って月詠に酒はヤバイだろかがみん!」

月詠
「おい……ルーテシアが一体どうした……」

銀八
「前回、『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』でこなたが送ってきた姫路さんの「化学兵器　ワッフル」が原因でルーテシアが気絶して倒れたそうだ」

月詠
「どんだけ不味いんじゃ！……まぁ良い。質問に答える。？は次回からやるようじゃ。？は……何質問をしとるんじゃー！！！！／／／／」

ウブな月詠はこの質問にクナイを大量に投げつけて串刺しにする。

銀八
「まぁ、反応通りだろ？」

月詠
「何がじゃ～！／／／／……？は……分からん、作者が赤夜叉さんとこのを参考にしてパワーアップさせたんじゃろ？」

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、この質問は是非話しに乗せてください」

月詠
「次行くぞ。ペンネーム『サラマンド』さん『初めまして、ずっと見ていて一度感想書いてみたいと思い、こうして書かせていただき

ました。

では私の書く小説の主人公から質問を言います。

ニール「初めましてだな、俺の名前はニール・ディランディだ。初めてなのに図々しくて悪いが三つ質問がある。

1．銀さんが好きな女性陣に質問です。もし銀さんの着物をコーディネートするなら何色が一番似合うと思いますか？

2．月詠に質問です。月詠はスバルやアーサァのような関係をどう思いますか？

ここまではサラマンド本人からでこっちは俺からだ。

3．銀八先生、いつも大変だな。そんなアンタに俺からなのはの実家の店で買った抹茶のミルクレープ（二人分）をプレゼントだ。月詠にもあげておいてくれ。

…しかし、なのはの扱いがこっちと大違いだ。」『……まぁな。ってか仮面ライダーの次はガンダムキャラ的な質問か。」

月詠

「そうじゃな。そんで質問のほうは答えるぞ。1はおそらくは全員「白銀色」と答えるようじゃ。2はそうじゃな、はっきり言って強い絆で結ばれている。もしコンビで組めばまちがいなく息がピッタリのコンビになっておったじゃろ？じゃがアーサァは亡くなった今、スバルはアーサァの分まで生きていくに違いない」

銀八
「そうだな。んで3は頂きます。」

そう言って銀時はニールから貰った抹茶のミルクレープを月詠に渡して一緒に頂く。
月詠は少しずつ頂き、銀八は嬉しそうにいただく。甘党だから。

そして食べ終えたら銀八はニールにお礼を言い出す。

銀八
「えーっと言う訳でニールさん、クレープありがとうございました。んじゃ次行くぞ。ペンネーム『武士堂』さん『いつになったら鳳仙が復活して、なのはを叩き潰すのですか？　自分は別になのはに撃ち抜かれようとも構いません。その代わりに鳳仙がなのはを倒してくれれば本望です。どうか力を手に入れて調子に乗ってるクソったれな魔砲小娘に、鳳仙の力で世界と言うものを教えてやって下さい。ぜひ、なのはご本人にもお伝えを』」

月詠
「確かに鳳仙の実力ははっきり言って、銀魂の敵キャラの中でも最強と言っても良い。正直言ってなのは1人では勝てぬ相手じゃ。……後、絶対に本人には言えん」

銀八
「同感！っと言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん、『？前回質問した『機動六課と夜王鳳仙が戦ったら機動六課の勝率は何％くらいですか。また、ナンバーズが加わったら勝率は何％ぐらいあがりますか。』ですがスバルがこの小説の設定（スバル編が終わった所）だったら勝率はどれくらいになりますか。

?第二十四訓でなのは達サンタになって皆にプレゼントを配っていましたが、エリオ、キャロ、リィンフォース、ユーノ、九兵衛、月詠、エリザベスにどんなプレゼントを渡したんですか。』」

月詠
「夜王の強さはさっきも言ったように機動六課とナンバーズが組んでも勝てるかどうか分からないが、確かにスバルが加われば，絶望的な強さの差から五分の一の勝率に上がるじゃろ。?はそうじゃな、少なくともわっちは高級煙管を希望させたんじゃが、何故か煙管１００本以上送られた。まぁ今は保存しておるがな?」

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、夜王の登場を作者は予定立てているので楽しみに待ってください」

月詠
「次行くぞ。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからじゃ。『ツッキーは銀時に胸を揉まれたのにどうしてぶちゅっとでぃ～ぷきっすをしないんですか?』……って何のセクハラじゃ～～～～！！！！／／／」

月詠は暴れて銀八に『ジャーマン・スープレックス』をかけた。

銀八
「な……なんで……俺?」

そう言って銀八は気絶して倒れる。

月詠
「『正宗の胃袋』さん、こう言うセクハラ質問はお控えめに……次

はペンネーム『アクセル』さん『スカリエッティが早い段階で銀時達の仲間になってしまいましたが、スカリエッティを造った脳みそ×3はどうなったんでしょう?既にドゥーエが始末したとか…?』……そうじゃな、とりあえずあの連中は今は様子見しておるが、何をやらかすかは油断できんのじゃ。っと言う訳で『アクセル』さん、脳みそ×3にはご注意じゃ。」

月詠も管理局のやり方には油断できないと注意する。

月詠
「次はペンネーム『ディワールド』さん『クロス学園の門矢士から教えて銀八先生に質問です。
質問一こちらの小説でも銀時となのはが付き合っていますが銀さんが好きなフェイト達どう思いますか?
もしフェイト達が銀八先生に八つ当たりすなら質問したこの俺門矢士にしろ、返り討ちにしてやる。
質問二同じくこの俺、門矢士から質問。
なのはが俺に簡単に倒されましたがそちらのなのはと銀さんと銀八先生と黒神先生はどう思いますか?』」

月詠は質問を答えようとする時、銀八が復活して立ち直った。

銀八
「ずばり答えます。1はおそらく怒り出しますね。つうか門矢士ってマジ怖ぇよ!」

銀八は『クロス学園』で死神としての門矢士の強さをイヤと言うほど理解した。

月詠

「2は正直言って驚いた。まさかなのはの上がいるとは…・・・」

鳳仙ほどじゃないが、月詠もなのはの恐怖は理解できている。
そんななのはを返り討ちする門矢士の実力は鳳仙級と確信する。

銀八
「っと言う訳で門矢士さん、なのはが暴れそうになったらそっちで抑えてください」

月詠
「最後はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目
月詠が、もし六課の女性メンバーを百華にスカウトするとしたら誰を選びたいですか？
また、吉原の遊女にしたら誰が一番客受けがいいと思いますか？

二つ目
月詠から見て、なのはキャラの男性陣の中で誰が一番女遊びが好きそうだと思いますか？』……そうじゃな。１つ目ははっきり言ってスバルじゃろ？魔法を頼らなくても剣術だけでもフォワード部隊の中でもダントツ的に戦闘力を誇っておる。百華に入れても１・２を争う戦闘力になるじゃろ。」

銀八
「何かそれってスゲェな？」

月詠
「そんで２つ目は、さぁわっちには分からんのじゃが、はやてから聞いたところ、ヴェロッサっと言う男は女遊びでお調子者のようじゃ」

銀八
「なるほど。っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。んで次回のアシスタントはスバルですので，皆さんも次回はお楽しみ……」

銀八は口をあんぐりして開き、信じられない光景を見る。
それはかがみんが送ってきた妙が買ったウォッカを一口飲んでいる月詠であった。
銀八は慌てて逃げようとするが……

ガシ！

思いっきり月詠に捕まれる。
青ざめて大量の汗を流す銀八はゆっくりと月詠に振り向くと……

月詠
「……けが……ねー……」

銀八
「へ？」

月詠
「酒が足らねーって言っているだろうがぁーーーーーーーーー！」

銀八
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

完全に酔ってしまって大暴れしてしまい、教室内では銀八の悲鳴が

響き渡った。

第五十五訓：虫歯になるのは甘い物を食べ過ぎるのが原因なのかもしれない（後）

２回目の人気投票を終えてから１３順！

ついに人気デモが行った。

九兵衛大暴走！？

ノーヴェ大ピンチ！？

まさかの人気争奪戦編がスタート！！

ノーヴェ

「次回、『人気投票はメッチャ気になるもの』……テイクオフ」

第五十六訓：人気投票はメッチャ気になるもの（前書き）

カリム
「さぁ、裁きを受けてもらいますよ、作者さん」（８１位）

黒神
「え……僕が一体何を!?」（１２位）

カリム
「うふふふふふふ……」（８１位）

黒神
「ぎゃあああああああああああああああああ!!」（１２位）

突如、カリムにボコボコにされる作者。
一体何があったのか!?

それは３０分前に始まった『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の第五十六順によって明らかになる！

第五十六訓：人気投票はメッチャ気になるもの

第２回　『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳシリーズ人気結果発表』で人気投票が行ってから１３順が過ぎた。

コレまで，人気投票をされた順を調べてみると2回目のベスト１０に入ったメンバーはこんなカンジになっていた。

第１位　坂田銀時　（前回：第１位　↓）

第２位　スバル・ナカジマ　（前回：第２位　↓）

第３位　フェイト・テスタロッサ　（前回：第７位　→）

第４位　桂小太郎　（前回：第３位　←）

第５位　月詠　（前回：第５位　↓）

第６位　エリザベス　（前回：ランク外　→）

第７位　高杉晋助　（前回：第４位　←）

第８位　ティアナ・ランスター　（前回：６位　←）

第９位　神楽　（前回：ランク外　→）

第１０位　エリオ・モンディアル　（前回：ランク外　→）

そのほかにも投票された人物も多い。
そしてそんな人気投票が納得いかない哀れな負け……じゃなかったキャラクターによるデモが発生して、ミッドチルダに混乱が導かれるのである。

ミッドチルダ　とあるカフェ

とかく人間とは番付けが好きな生き物で何かと言えば順位を付けたがる。
売り上げランキングしかり、長者番付しかり、ジャンプのアンケート制度しかり。
一時はこの風潮に異を唱え、頑張った人は皆1位だと順位のない運動会などを開く学校などもあったが、現在ではコレもまた見直され番付は集団における己の立ち居地を知り、より高みを目指して向上していくための指標になるではないかという見方をされつつある。

しかし頑張っても頑張っても向上するところもない番付があったらいったいどうすれば良い？

向上心ではなく敗北感しか残らない番付があったとしたら果たしてそれは必要なのか？

人気投票って必要か？

仮に必要だったとしてもそれを人前にさらすのは必要か？

２５位にたち留まったあたしは……必要か？

カフェで１人，コーヒーを右手で持っているノーヴェがいる。
頭の上には『２５位』と表示されている。
そんなノーヴェにリィンが近づく。

「あ……貴方はナンバーズの２５……ノーヴェさんじゃないですか？」（２７位）
「テメー、今私を２５位と言おうとしなかったか！？」（２５位）
「え・・・いや，そんなつもりはないです～！」（２７位）

怒鳴りだすノーヴェにビビリだすリィン。
だがその怒りもすぐに収まって落ち込むノーヴェ。

「……すまねぇ……そう言うあんたは機動六課の……所で今日は八神はやてとは一緒じゃないのか？」（２５位）
「ええ……ちょっとたまには１人で散歩したくなった気分でして……」（２７位）

メッチャ落ち込むリィン。
まちがいなくそれは自分の順位をメッチャ気にしていると考えるノーヴェ。

「そ……そうか……」（２５位）
「……」（２７位）
「……」（２５位）

しばらくして黙り込むノーヴェとリィン。
その沈黙を破るかのようにノーヴェが喋りだす。

「なぁ、あたし達って悪いことした？」（２５位）
「……いや……多分……悪い事も、良い事も、何もやっていないのがダメなんです。ひっかかりっていうですかな？良い意味でも悪い意味でもフックがない人は何も引っかからずに滑り落ちてしまうんです」（２７位）
「フックか……確かにないなあたし達……あ……悪い一緒にしちゃって……」（第２５位）
「あ・・・良いですよ。気にしてませんし」（２７位）

２人は話し合いながらカフェに出ると，散歩しながらも話し合う。
そこは人気のない公園に止まる。

「あたし達、今更何やっても遅いのかな？もうイメージが脇役キャラしか浮ばないし、どう足掻いても輝けないのかな？」（２５位）
「そもそも人気上げたいとか……グッツを出したいとか……私がそんな事を考えていること自体がおかしいですかなみたいなハハ……そのへんがこの人必死だなってバレてんのかなみたいな……引いているのかなみたいな……」（２７位）

元気を感じられない2人の会話はさらに暗くなる。

「ノーヴェさん、25位や27位って、そんなに恥ずかしい事ですかな？」（27位）

「え？」（25位）

「地味キャラなのに票をもらえるって事は、ありがたい事じゃないですか？」（27位）

リィンの言葉にノーヴェがリィンの方に振り向く。

「仮に私達が1位や2位をとったとしてそれは正解ですか？銀さんやフェイトさんやスバルさん、それに私達の周りには華のある人達がたくさんいます。そしてその華を飾る為には土が……踏み台が必要なんです。自分の役割立ち位置で精一杯頑張れば良いんです」（27位）

言われてみれば、この小説である『リリカル銀魂シリーズ』の主人公を務めている銀時とフェイト、それにこの小説に初登場したにもかかわらずにメッチャ活躍しているスバルがいるのに、後から出てきてしかもチョビチョビとしか出ていない自分が出る幕がない。ならば自分などういう存在なのか……それは、スター達を輝かせる踏み台になるしか道がなかった。

「……リィン……アンタは……大人だよ……でもあたしは……」（25位）

「大人じゃないんですよ。私も前は貴方と同じでした……頑張れば何とかなると思っていました。きっと1位になれると……」（27位）

そう言いきると、リィンの眼から涙があふれ出る。

「アレ……おかしいですよぉ。もうずっと前から諦めかけていますのに……なんで今になってこんな……ごめんなさい！」（２７位）

最後は謝罪してこの場を立ち去る。

ノーヴェは悔やんでもなお、現実を見て欲しいと精一杯伝えてくれたリィンに感謝して、アジトに戻ろうとした……その時であった。

「いやあああアアア

…」

「なんだって!?」（２５位）

リィンは最後の力を振り絞ってノーヴェに話し出す。
そして最後の一言を言い出す。

「早……く……２５位だ……けは……数少ない……投……票順……位の……座だけ……は……守り……通し……てくだ……さい」

そしてゆっくりと眼を瞑って気を失う。

「リィ……ン？……（元）２７位のリィンんんんん!」（２５位）

ありったけの力を込めて叫びだすノーヴェ。
そしてすぐにこの場をたちさる。

（バ・・・馬鹿な……！今頃になって人気投票結果を改変するなんて！！……もう結果は出ているんだぞ！？今更そんなことしてなんになるって言うんだよ！）（２５位）

森を一刻も早く抜け出す為に走り出すノーヴェ。

（とにかくみんなに知らせねぇーと皆が標的だ！でも一体誰に！？犯人もわからねぇのに……）（２５位）

一体誰がこんなことをしたのか理解できない。
だが分かった事が犯人は、投票されていない人物である事である。

（犯人はリィンに不細工な豚の身包みを着せて半殺し、その投票を奪ったんだ！まちがいなく投票されていなかった人物だ！）（２５

位）

そう考えると、ノーヴェは投票されなかった人物を全て思い浮かべる。

（畜生、候補が多すぎる！誰を信用すれば良いんだ！？）（２５位）

誰が味方で誰が敵なのか理解できない中、気配を感じて気の後ろに隠れる。

良く見てみると、その眼線には何故かチンクが移っていた。

（あ…アレはチンク姉！なんでこんなところに！？まさかチンク姉が！？）（２５位）

チンクがリィンをやったのではっと疑うが……

「お前だな、人気投票者を狩ってその投票を奪っているのは？」（３０位）

（犯人！？犯人と喋っているのか！？）（２５位）

「見下げ果てた奴だ。そんなことをしてまで上位になりたいのか？」（３０位）

（誰だ！？……一体……だ……）（２５位）

ノーヴェはチンクと話している相手を良く見てみると……

「人聞きの悪い事を言わないでくれ。……それで僕がやった証拠はどこにある？」（新・２７位）

チンクと同じく眼帯をしていて黒いポニーテイルをしていて右脇に刀を身につけている少女、柳生九兵衛がいた。

（あ……あれは柳生九兵衛!?なんでアイツが!?つうか証拠っといったって思いっきり台詞後に（新・２７位）と付いているじゃねぇか!）（２５位）

心の奥底でツッコむノーヴェ。

「とぼけるな。さっきお前が機動六課のリィンをフルボコにして票を奪ったのを目撃させてもらったぞ。それに頭の上に乗っている２７位が何よりも証拠だ!」（３０位）

「コレはさっき拾ったんだよ。リィンは先ほど病院に連絡しておいたから後は大丈夫。だから僕はリィンをボコボコにしていない。それに何か?君は投票を入れられていないからっと言って僕に八つ当たりしているのか?」（２７位）

九兵衛の一言に額に血管を浮かべるチンク。

「まぁ君が票をもらえなかったのはしょうがないだろ?だが君以外のナンバーズにだって票をもらえなかった者も多い。それに妹であるノーヴェとディエチは票をもらえたんだぞ?あ・・・でも君は妹達と違って票をもらえなかったんだなぁ?ああ……そうか……君は妹と違って恵まれていないんだなぁ?」（２７位）

にやけて嫌味っぽく言い出す九兵衛にチンクの顔から次々と血管が浮かび上がる。

チンクの異常なまでの怒りにノーヴェは恐怖している。

「おや?でも君はナンバーズの中でチビ……おっといけなかった背が低いっと言った方が良かったかな?だって君は『チビ』っと思わせるほどに小柄な姉だから!はーっはっはっはっはっはっは!

（笑）」（２７位）

チビの言葉をはっきりと大きく言い、完全なるチンクを見下した九兵衛の台詞にチンクの怒りはは今でも爆破しそうである。だがチンクもこのまま黙っていられるはずはなかった。

「……ま……まぁ、私は戦闘機人として生まれたからこのような体つきになっている訳だ……それに比べてなんだその喋り方？まるで本当に男っぽい台詞じゃないか？」（３０位）

チンクの一言で突如、額に血管を浮びだす九兵衛。

「何か体も大人とは思えないし、しかも胸もまな板のようにぺったんこだ……貧乳？……そうか君は貧乳眼帯だったんだぁ♪確かにあの神楽や月詠に比べれば、君はヒロインっぽくなくてまな板貧乳なんだなぁ♪」（３０位）

貧乳呼ばわりされて、九兵衛の怒りは急激に最大限に上げられた。

（え・・・アレ？チンク姉ってこんな感じだったっけ？ってかさっきから柳生九兵衛の怒りが異常なまでに増幅しているんだけど？）（２５位）

青ざめて大量の汗を流すノーヴェは恐怖に包まれる。

「おい……僕の事を男や男っぽい女やオカマを言う事は我慢してやるが……貧乳呼ばわりするのは止めろ！後，あの上位陣どもの名を軽々しく言うな」（２７位）

「上位陣って、他人から票を奪って順位にランク登録した君と，実力で投票を貰ったあの２人を比べるなんて……ほんと君は敗北を認

められない哀れな醜い貧乳眼帯だなぁ？あーっはっはっはっはっはっはっはっは！」（３０位）

ブチィ

「あああ！？その腐れきった笑顔ごと一刀両断にしてやろうかこのロリ眼帯ィィィィ！」（２７位）

「上等だごるァあああ！返り討ちにしてやるわァ！この貧乳眼帯ィィィィ！」（３０位）

九兵衛は怒り出して刀を抜き、チンクも3本ずつナイフを指にくわえて、お互いに凄まじい勢いで迫りだす。

「うぉおおお

「今はこんなことで争っている場合じゃないですよ?」（８１位）
「２人とも気づいているはずよ。どこかに人気投票された者の人気票を奪って一気に上位に食い込もうとしている不届者がいるわ」（７６位）
（そうだよそれそれ！２人とも大人じゃねぇか！２人の喧嘩を完全に止めやがった！）（２５位）

カリムとギンガの台詞にノーヴェは感動する。

「早急に何やらの対策を練らねば」（９８位）
（そうだそうだ！大丈夫だよな！この中に犯人はいねぇようだな！よっしゃぁ、アタシも仲間に……）（２５位）

入ろうとするが……

「この混乱に乗じて一気に天守閣に攻める！上位陣を討ち取って、一緒に天下を制覇しますよ！」（９８位）

シャッハがとんでもない一言を言い出す。
コレには流石のギンガ達や仲間に入ろうとしたノーヴェも唖然とする。

（な……何言っているんだあの女ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？）（２５位）

完全なるシャッハのあり得ない一言にノーヴェは大きくツッコみだす。

「ちょ……本気で言っているのですか、シャッハ！」（８１位）

カリムは驚きだす中、ギンガはその理由を言い出す。

「だって……私、やっぱりカリムが1位じゃないといやです。後はどうでも良い」（９８位）

（犯人じゃねぇけどほとんど犯人じゃねぇかアイツ！）（２５位）

「戦の基本は先手必勝。幸い上位陣は順位が繰り上がっていない。この騒ぎには気づいていないはずです。虚をつくは今をおいて他にはありません」（９８位）

シャッハの頭の中には，上位陣になった憎たらしい敵を思い浮かべている。

「そんなことをしなくても良いわよシャッハ！１０位以内にはいればそれで良いよ！」（８１位）

（それつまり１０以下の上位陣を殺るつもりじゃねぇか！）（２５位）

カリムのさりげないとんでもない一言にツッコむノーヴェ。

「そうですよ！確かフェイトさんもいることですし！攻めて４位ぐらいまでは潰す感じでいきましょうよ！」（７６位）

（ベスト５に入れる上位ランクじゃねぇか！）（２５位）

ギンガのあり得ない欲張りに驚きだすノーヴェ。

「確かにそうだな。私もベスト１０に入った上位陣には絶対に許せない。特に胸の大きい女は」（２７位）

（どんだけ胸にこだわるんだよ！）（２５位）

「それに姉を差し置いて人気票を手にしているノーヴェとディエチも許せないしな」（３０位）

（チンク姉ェ！何でアタシとディエチも入っているんだ！？）（２５位）

するとシャッハはベスト１０に入っているメンバー１０人を全員に見せる。

「ぐ……坂田銀時と桂小太郎はしょうがないけど、まさか半分以上が異世界から来たメンバーなんて……でもさすがフェイトさん。第３位に入れるなんて、改めて憧れちゃうわ♪」（７６位）

「それに高杉も入っているなんて……悪のカリスマ的な人気も侮れない」（２７位）

ギンガはフェイトの人気の高さに尊敬し、九兵衛も今回の上位陣には侮れない相手であると警戒する。

「何か見ていると憎たらしくなるわね……」（８１位）

カリムは苦笑しながらもとてつもない一言を吐く。

「ですが機動六課のメンバーもいますし、ここは止めた方が良いのでは？」（９８位）

「そうね」（８１位）

シャッハの一言にカリムは上位陣を潰す事を止めようと考える。

ギンガもそれは賛成のように思い込む。

（そうだぜ！今更そんなことをしても何も起こらねぇよ！平和に行こうぜ！）（２５位）

争いが収まると思って安心したノーヴェだが、ここでギンガが不憫な所を見つける。
それは……

「あれ？……この第２位……って……スバル？」（７６位）
「え？スバルって、貴方の妹であるあの機動六課の新人魔道士のスバル・ナカジマ？」（９８位）

ギンガが２位であるスバルを見つけるとシャッハはギンガに尋ねる。

「はい、そうですが……」（７６位）
「あらあら……なんですかこの子、人気ランク２位って、思いっきり女性キャラの中でもダントツ的にトップに行っているじゃないですかぁ？」（８１位）
「ギンガ・ナカジマ、姉であるお前を差し置いてこの女、第２位に入っているぞ？」（３０位）
「……へ……へぇ～～、ああそ……そんなに人気あるんだ……スバルって……まぁまぁやるじゃない」（７６位）
「まぁまぁって、女キャラの中でもダントツ的にトップに入っているぞ？それで良いのか？」（２７位）

カリム、チンク、九兵衛もスバルの人気の高さに驚き、ギンガは慌しくなる。

「調べた結果、この小説である『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ　攘夷戦争鎮魂歌』でリリカル組のキャラで最初に登場したのはスバルだそうです」（９８位）
「何ぃ！？僕なんて１２話で登場しているのにスバルは１話そうそうからだとぉ！？」（２７位）

九兵衛は悔しがるかのように叫びだす。

「へ……へぇ～、じゃあそのインパクトにつられて作者はスバルを投票したんだ……ああそうか、きっとそうに違いないわ」（７６位）

慌しく言い出すギンガ。

（あれ？何かコレ怖くなっていねぇか？）（２５位）

恐怖に包まれ始めるノーヴェ。

「さらに調べた結果、読者の１人である『正宗の胃袋』さんの感想で個人的にリリカル銀魂のヒロインランキングを考えたそうです……その結果がコレです」（９８位）

シャッハは『正宗の胃袋』さんの感想が書かれた紙をカリム達に見せる。

その順位は以下の通りである。

第１位　スバル・ナカジマ

第２位　フェイト・テスタロッサ

第３位　シグナム

第４位　アルフ

第５位　リィンフォース

第６位　ティアナ・ランスター

越えられない壁

第7位　高町なのは

「ヒロインランク第1位だとォ!?フェイトやなのはは第一シリーズに出ているのに対し、スバルは第三シリーズから出ているのにヒロインランキング1位!?僕より遅く出ているのにそれはないだろ～～～～!」（27位）

ヒロインランキングを見て九兵衛がさらに暴走する。

「……へ……へぇ～、ああ……なるほど……ねぇ……だからスバルは私より出番が多いんだ……でもいくらなんでもこれ以上はないよね?だってこれ以上出番が増やせばフェイトさんとなのはさんが黙っていないし……」（76位）

苦笑しながら言い出すギンガだが、その思いは裏腹にとてつもない怒りを表す。

（アレ?何か姉の方が怖くなってきたんだけど?これ逃げた方が良いんじゃない?）（25位）

ノーヴェはこの場から脱出した方が良いと考えている。

「大体いくらなんでもおかしいだろ!?僕たちもこの小説に出てからまともな活躍をしていないし何でスバルだけ輝いているんだ!?」（27位）

「確かにコレはおかしすぎる。でもコレはかえってこれ以上の出番はないと考えても良いだろ?」（30位）

納得できない九兵衛にチンクも賛成する。

「それもそうですね。作者もそろそろ私達を活躍させるべきではないかと考えますが……」（８１位）

カリムもピクピクとしていて苦笑する。

（なんかドロドロとした展開になってきたんだけどぉ～！！つうか止めろォォォ！こんなドロドロ劇これ以上見たくねぇ！）（２５位）

ドロドロとした展開についてこれなくなって叫びだすノーヴェ。

「ちなみに調べた結果、この小説の第３８順から第５４順まではほぼ、スバルの出づっぱりのようです」（９８位）

シャッハがそう言うと、４人からとてつもない殺気が放たれる。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

「へぇ～～～」（８１位）

「じゃあスバルはもう」（７６位）

「これ以上は出なくても」（２７位）

「良いわけだなぁ～～～～」（３０位）

ボキボキと手を鳴らすカリム、ギンガ、九兵衛、チンクの４人。

（チンク姉ェェェェ！ギンガァァァァ！カリムゥゥゥゥ！九兵衛ェェェェ！やめてぇェェェェ！止めてェェェェ，誰かァァァァ！）（２５位）

ノーヴェは涙を流して心の奥底で叫びだす。

「そうか……だが上位陣に対抗するためにはまず仲間を増やさないとな……」（９８位）

シャッハはそう言うと、カリムが動き出す。

「カリム、どこに行くのですか？」（９８位）

「そっちは皆さんにお任せします。私は根本を達に行きます」（８１位）

「根本？」（９８位）

「これ以上、新キャラが登場しないために……はぁ！」（８１位）

カリムは思いっきりジャンプして画面に飛びつくと、二次元から三次元に向かうように……

「１２位の作者を潰して来ます」（８１位）

（作者はダメだァァァァ！この小説が終わってしまうゥゥゥゥ！）（２５位）

ノーヴェは心の奥底でツッコみだし、走って逃げ出す。

「まずいじゃねェェェか！よくよく考えてみれば犯人探し所がどいつもこいつもいつ犯人になってもおかしくないエゴの塊みたいな連中ばかりだ！」（２５位）

もしあの場でチンク達に見つかれば、間違いなく自分は殺される。

（どうする！？どうすれば止められる！？誰が力になってくれる！

？この状況で絶対に犯人になりえない人間は……）（２５位）

ノーヴェは必死に考える。

そして考えた結果が、１位になった人物を思い浮かべる。

（１位だ！１位の坂田銀時に頼るしかねェェェェェ！）（２５位）

そう確信してノーヴェは銀時に助けを求めて駆けつける。

「おやおや？こんな所にいるとは偶然だなぁ？ノーヴェ」（３４位）

「！？」（２５位）

ノーヴェは聞き覚えのある声がした方を振り向く。

そこには、スカリエッティ、ルーテシア、アギト、ガリュー、そしてノーヴェ、チンク、ディエチと同じナンバーズであるウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、セイン、セッテ、オットー、ウェンディ、ディードが固有武装を装着しているのが分かる。

いつもの雰囲気じゃないと理解したノーヴェは青ざめる。

「どうしたノーヴェ？私達に近づかないのか？」（３４位）

プレッシャーを感じさせるスカリエッティの一言に、ノーヴェは……

「い……いやァァァァァァァァァァァァァァァ！」

（２５位）

突如、ローラーブーツ『ジェットエッジ』を発動させて、猛スピードでこの場を逃げ出す。

「あ！逃げたっす！」（３７位）

「待て、ノーヴぇ！我等から逃げられると思ったか！」（６９位）
「思いっきりお仕置きしてやるんだから！」（７２位）

ヴィンディ、トーレ、クアットロはそう言うとルーテシアが……

「ガリュー……アイツを追いかけて」（５０位）

少しどす黒い感情を出してガリューに命令すると、ガリューは猛スピードで走り出してノーヴェに駆けつける。

「誰かァァァァァァァァァ！助けてェェェェェェェェェェェェェェ！」（２５位）

涙を流しながらノーヴェは助けを求める。

銀八
「教えて……」

生徒全員
「銀八先生！」

スバル
「こんにちは皆さん。今回は私、スバル・ナカジマがアシスタントをさせてもらいます♪」

銀八
「では質問、まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん、『「『

SOS学園』の理事長のヴィヴィオです。スバルさんらは、なんでもありの銀魂の世界で新八さんとマダオが眼鏡とグラサンだと言われたら信じますか？」』」

スバル
「ええ！？ヴィヴィオって確か原作ではなのはさんの養子になるまだ子供のあのヴィヴィオですよね！？あっちでは学園の理事長をしているんですか！？」

銀八
「そうだよ？あそこはカオスだから何でもありなの。メッチャありなの」

スバル
「そ……そうですか……質問の方では……流石にそれはないかと……」

苦笑して質問を答えるスバル。

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい！次ィ、ペンネーム『カラー』さん『質問
黒神さんはシリアスとコメディどっちが得意？質問2、今回、フェイトとなのはは改造されなかったこけど、銀時そっくりの人形付けられたらどうします？
』」」

スバル
「1は、作者はとにかく銀魂風に笑えればどっちでも良いそうです。2は嬉しがると思います。何か銀さんと一緒にいられるから。……

私もそれは良いかなぁ……っと思っちゃいました」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『風花』さんの質問。『？スバル達は他の局員に告白される事ってあるんですか？また告白された時、無理やりキスされたらどうしますか？？前回言ったようにアイスを送ります。中身はオレンジを使ったサンシャインアイス。リンゴを使ったムーンライトアイス。３種の味が奇跡の調和を生んだアルティマアイスの３つです。味は保障しますよ』」

スバル
「え…え…とう……たまにありますけど……銀さんがいるから……／／／」

恋の質問に顔を真っ赤に染めるスバル。
男の付き合い方を知らないウブであるスバルは顔を真っ赤に染める。

スバル
「あ……でもアイスもあるんですか？ありがたく頂きます♪」

そう言うと、スバルは『風花』さんから送られた３つのアイスをありがたく頂く。
その間に銀八が質問を進める。

銀八
「『風花』さん、ワザワザ有難うございました。え～、次はペンネーム『ディワールド』さん『質問一、なのはに質問です。もしユーノがチートな能力を貰って銀さんと互角だったらなのははユーノの事どう思いますか？なのは本人が答えてください。質問二、クロス

オーバー学園のモンキーハンターならぬ怪人ハンター編で城戸慎二がすごいツッコミかましてましが新八とどっちが上だと思いますか？質問三、家の飛翔翼ですが銀八先生気に入りましたか？まだ現在では出てきてませんが。』……ずばり答えます。1はなのはに答えてもらいます」

銀八はなのはにその質問を答えさせるとなのははこう答える。

なのは

「ユーノ君もやるんだね♪」

それだけの感想であった。別に惚れ直す意味ではなかったようである。

銀八

「2はそうですね、どっちが上であるかと考えても……互角でしょう？んで3は場合によれば教えて銀八先生コーナーより別の形で早く登場させます。っと言う訳で『ディワールド』さん、廊下に立っていなさい」

アイスを食べ終えたスバルは質問に戻る。

スバル

「次はペンネーム『烈火竜』さん『1．新八をロリコンと言った銀さんですが、幼かったフェイトとキスした銀さんもロリコンですか？。2．今後の小説や将来のことを考えて【漢字検定】を受けるべきと考えてますか？』……って1は何て質問なんですか！？／／／」

銀八

「ずばり答えます。1はそれはないと思います。だってキスしてき

たのは幼かったフェイトからですし……そんで2は作者は受けないと思います。勉強嫌いですし。」

スバル
「いや、それはやばいんじゃ？」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『銀さんに質問です。？「銀さんが現時点で『やっぱこの女の方がいいな』と想う女性はいますか。」？「銀さんが仮にフェイトさんを選んだとします。他の女性はどんな反応しますか？（・・・なおこれの質問のとばっちりを銀八先生に向けるの不味いです。リアルで死んでしまいます。たまには銀さんに）」『１は……」

スバル
「銀さ～ん、（ウルウル）」

スバルは涙を流して悔やむ。

銀八
「って速い速い！それ？の質問に答えてからってしゃあねぇ。？は流石に命が欲しいのでお答えしません。？はスバルの場合はこの反応であり、なのは達はとてつもない嫉妬心を抱きますね……っと言う訳で『ＮＡＮＯ』さん、刺激する質問はお控えめにお願いします」

スバル
「では次行きます」

あっさりとスバルは泣き止む。

スバル
「ペンネーム『ウッソ・エヴィン　』さんの質問です」

銀八
「ああ、なんか今回も長いようだぜ？ええ～っと何々？『ウッソ＆こなた
「あはははははっははははっははは（笑）」

かがみ
「あんたたち笑いすぎよ！！」

こなた
「いや～・・・だって，意地張らなかったらこんなことにならなかったわけだし」

ウッソ
「少し，間抜けって言うか・・・」

こなた
「シグナムさんも含めて・・・」

ウッソ＆こなた
「バカだよね～～～」

かがみ
「次のここのまえがきで制裁くらっても知らないわよ」

こなた
「みゆきさんでも意地張らずに逃げるよ」

かがみ
「ま～そうね・・・」

ウッソ
「では質問です.

?スバルさんはなのはさんやフェイトさんみたいにダークオーラを出すことがないのですが，作者がひいきしているからですか?

?キャロの月詠，神楽に対する反撃はいつから始まりますか?

」

こなた
「次回も楽しみにしてるね～～～」

かがみ
「黒神さん・・・こいつらの制裁のほど・・・よろしくお願いします」』……」

これには銀八とスバルはウッソとこなたの残酷な感想に暗くなって呆れる。

スバル
「これ……フェイトさんとなのはさんが聞いたら……」

銀八
「まちがいなくあの2人は殺される……」

銀八とスバルは青ざめるが……この恐怖を打ち消すようにスバルが質問を答える。

スバル
「ず・・ずばり言います！？はそれは……なんか出せないんです……なぜか……」

どうして自分はそれが出せないのか不思議がるスバル。

スバル
「そして？は……って何て質問をするんですか！？」

銀八
「キャロになんか恨みあんの！？つうかキャロに制裁されてもしらねぇからな！……ちなみに答えは近いうちに出ます。……っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、キャロに対する質問は控えめにお願いします」

スバル
「次行きます。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『1．スバルさんに質問です。もし銀さんと1日デートできるなら、どこに行きたいですか。2．もし高杉がヴィヴィオがゆりかごを動かせるキーだと知ればヴィヴィオを誘拐しますか？』、1は……銀さんと一緒にいられるならどこでも良いです／／／」

嬉しそうにスバルは質問を答える。

銀八

「2はおそらく利用する確率は高いです。っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、ヴィヴィオの登場を楽しみにしてください」

スバル
「次行きます♪ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。銀時に惚れている人達に聞きます。優勝商品が銀時と二人で一週間旅行に行けるチケットのパンデモニウム食い競争があったら参加しますか。
また銀時に惚れている人全員が参加したら誰が優勝しますか。』…私、絶対に参加します♪」

スバルは嬉しそうに参加する事を決意する。
パンデモニウム食いがどれ程恐ろしいのかを知らずに。

銀八
「ちなみに優勝するのかは俺も知りません。っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

スバル
「次はペンネーム『サラマンド』さんからです。『ニール「よう、また来たぜ。なのはとフェイト、シグナム、皆バ…災難だったな。さて、質問させてもらうぜ。

1．銀八に質問です。もしリンカーコアがあってニールのケルディムを借りれるとしたら誰を狙撃したい？

2．なのはに質問です。もし銀時との間に子どもが出来たらどんな名前を付けたいですか？

因みに、こっちのなのはがそっちのなのはの事心配してるぞ。いつヒロインから完全に堕とされないかヒヤヒヤしているし、その上あんなにパワーキャラになって大丈夫なのかってな。」』……たしかに考えればそうなりますね。1は私は銃は使わないので銀八先生に答えさせてもらいます」

銀八
「そうですね。とりあえず銀時とマヨラーで」

スバル
「銀八先生……そこまで銀さんに嫉妬しているんですか……」

スバルは青ざめて言い出す。

銀八
「んで2はなのはさん、お願いします」

なのは
「にゃはははは♪そうだね……男なら銀之巴（ぎんのは）で女なら奈鴇（なとき）で♪」

嬉しそうに答えるなのはは、スバルはムスゥーっとする。

銀八
「っと言う訳で『サラマンド』さん、廊下に立っていなさい。次行きます」

スバル
「ペンネーム『正宗の胃袋』さん『スバルに質問です。スバル偏が終わった後に銀時と一緒にラブホテルに行ったんですか?それとも銀時の部屋で夜伽をしたんですか?』……ってえええーーーー

ーーーーーー！？／／／」

あり得ない質問にスバルはてんぱる。
銀時とは接吻した仲だがまだそんなことまではしていない。

スバル
「わ……わわわわわわわわわわわ私は……その……ぎ……ぎぎぎぎ銀さんとは……あわわわわわわわわわわわわ……／／／」

完全に質問を答える状況じゃなかった。
銀時との関係的な質問にどう答えれば良いのか分からなかった。
そして…

スバル
「はにゃあああああああああああああああ！！／／／」

ボォ～ン！！

顔全体が真っ赤になって頭から煙が噴火するかのように出て気絶して倒れる。

銀八
「……と言う訳で『正宗の胃袋』さん、銀時とはまだそれはしていないようです。次、ペンネーム『皆大好』さん『今までアシスタントを勤めた人達がたくさんいましたが誰が一番、疲れましたか？また逆に、誰が進行する上でやりやすかったですか？』……ずばり答えます。１つ目は死にたくないので言えませんが、もう１つは答えます。スバルがやりやすかったですね。と言う訳で『皆大好』さん、廊下に立っていなさい」

銀八が質問を終えると、スバルが復活して立ち上がる。

スバル
「すみません。取り乱してしまって……すぐに質問します。ペンネーム『アクセル』さん『この前のスバルみたいに一人のキャラが中心になる話は他にも予定しているんでしょうか?ちなみに、予定してるとしたら誰になるんですか?』……そうですね……確かシグナムさんを中心にやるつもりでしたっけ?」

銀八
「ああ、しかも作者はティアナ中心も考えているようだぜ?後、山崎とディエチのラブシーンやザフィーラとの友情も考えているようだ。っと言う訳で『アクセル』さん、まだまだたくさん続きますのでコレからも楽しみに待っててください」

スバル
「次はペンネーム『三月語』さん『初めまして、三月後です。「え、えっと・・・は、初め・・・まして・・・。う、ウィリアです・・・」

第一訓から読んでまして、今回、感想をついに書かせていただきました。
本当に笑えました!銀魂らしくて!

私から一つとウィリアから二つ質問です・・・

まずは私から。

銀さんが好きなみなさんは、もしも銀さんからなにか貰えるとしたら一番嬉しいのは?

以上です。

次にウィリアからですが・・・紙？読んでって？

「・・・／／／／（こくこく）」

えっと、

1　銀さんと銀八先生はぺったんこ派ですか？

2　瑞希さんの料理に耐えられる人はいますか？

・・・実用的な質問をしなさい。

「だ、だってぇ・・・（うるうる）」

すみませんが、ウィリアの質問は答えられれば、お願いします。

では！

「こっ！更新頑張ってくだしゃい！」

Ｏｈ・・・

「・・・（うるうる）」『……なんか最近小説に出てくる人物の質問が多くなりましたね」

銀八

「そうだな。ちなみに答えます。スバルは当然、アイスだろ？」

スバル

「はい♪」

銀八

「他にも人それぞれですが……銀時からもらえるものであればフェ

イト達は喜びます」

スバル
「確かに……それでウィリアちゃんの質問だと……確か銀さんは胸が大きい人が好きだそうです……／／／」

そう言いだすと、スバルは自分の胸を少し触って大きさを見ると、ホッと安心する。

銀八
「何かメッチャムカつく！んでもう1つは……お妙以上じゃなければ耐えられると思います。っと言う訳で『三月語』さんとウィリア！質問有難うございました。……最後行くぞォ。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『ほぼ完全に主役の座を奪っているスバルですが、「元」主役のフェイトや主役（笑）状態のなのはに対しての今の心境はどうですか？申し訳なく思っていますか？それとも「ざまあみろ」などと考えて悦に入ったりしているんですか？』」

スバル
「申し訳ないと思っています！（焦り）」

大きな声で断言するスバル。
もし2人にそう思っていると思われたら確実に殺されるからである。

銀八
「そんでもう1つの質問。『黒神さんと銀さんに質問。なのは、フェイトに面と向かって「この作品はスバルが主役です」と言えますか？』……言えるかァーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

銀八は青ざめて叫びだす。
スバルもそれは同感である。

銀八
「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい！
……はい、今日も無事終わりました。次回の『教えて銀八先生』のアシスタントは答えられませんが，しばらくの間銀八先生と『ブレイブルー』に出てくるキャラクターをも登場させたいと思います。全キャラの中でランダムに９名を登場させます。」

スバル
「ああ、凄いですよ♪なんか『ぶるらじ』ぽく面白くなりそうだよ♪」

銀八
「その代わり、次回は誰が出てくるのかはランダムに決めますのでお答えできません。……では」

銀八・スバル
「次回もお楽しみ～。」

第五十六訓：人気投票はメッチャ気になるもの（後書き）

ノーヴェ
「次回「人気投票は時には重要な事もある」テイクオフってうわぁあ来たァァァァァァ！」（２５位）

ナンバーズから追われながらもノーヴェは次回予告をするのであった。

ノーヴェ
「ってかマジで勘弁してくれェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！」
（２５位）

第五十七訓：人気投票は時には重要な事もある（前書き）

作者、今のところ気絶中。

カリムによる襲撃が原因で。

カリム

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります♪」

第五十七訓：人気投票は時には重要な事もある

「ゼェ……ゼェ……ゼェ……な……何とか逃げられた！」（２５位）

ノーヴェは大量の汗を流してようやく逃げ切れたと安心する。

そこは機動六課の本部内。

そこなら銀時がいると信じてそこまで駆けつけた。

だが……どういうわけか、どの部屋もかなり荒されていて何かに襲撃された後ばかりが残っていた。

（う……ウソだろ！？……遅かったのか！？すでに何者かに襲撃された後だが、アタシの順位が変わっていない事は坂田銀時達達は無事なはず！でも一体誰が！？）（２５位）

誰がこんなことをしたのか疑う中……

「あ……２５位がいる」（６２位）

「本当だ……２５位がいました♪」（７８位）

聞き覚えのある声が聞こえてノーヴェは青ざめる。

（……そうか……誰が犯人とか誰が誰を狙っているとか、そんな事はもう関係ないんだ）（２５位）

ノーヴェは青ざめてゆっくりと声が聞こえた方の後ろを振り向くと……そこにはバリアジャケットを身につけているヴィータとシャマル、それにシャーリーにマリーなど隊員たちがデバイスを握ってノ

ーヴェに近づく。

（アタシ以下及び投票されていない者はもう……皆敵……）（２５位）

「なぁ、……とりあえずここでジッと立っているのもなんだ……ちょっと一緒に来いよ」（６２位）

いつも以上に優しく声をかけるヴィータだが、それ以上にノーヴェは恐怖して青ざめると……

「け……結構だ！」（２５位）

大慌てで魔力を拳に込めて，壁を思いっきり殴って巨大な穴をあけると、『エアライナー』と言う固有能力を炸裂させて、空中にエネルギー状の道を生成させて箸を作ると、それに乗って一気に走り出して逃げ出す。

「あ！逃げたわ！」（７８位）

シャマルがノーヴェが逃げた事に感づくと、

「追えぇエぇぇぇ

（２５位）

涙を流しながら逃げるノーヴェ。
次から次へと追いかけてくる敵に戦って追い払う事は出来ず、恐怖で逃げるしかなかった。

そして数十分後、

「ゼェ…ゼェ…ゼェ…何とか……逃げ切れた……」（２５位）

もはや体力の限界まで来て『エアライナー』は出せなくなった。
ミッドチルダのとある裏町にいる為、ここなら誰もいないと安心するが……

「いたぞ！あっちだァァァァ！」（６２位）

ヴィータにすぐに見つかってしまい、数多くの隊員たちが襲い掛かってくる。

「ダメだ！逃げ切れない！」（２５位）

諦めかけたその時、

「ぐぇえええ！」（２５位）

誰かに背中を引っ張られて引きづり出される。
そして見失ったヴィータは驚く。

「き……消えた……！？探せ！草の根わけても探し出せよテメーら！」（６２位）

「はい！」（９４位・３４１位・４２１位など）

ヴィータの命令に強く返事をする隊員達。
そしてヴィータ達は二手に分かれてノーヴェを探し出す。
ノーヴェが近くにいる事を気づかずに。

「ハァ…ハァ…ハァ…！」（２５位）

一体何があったか知らないが、ここは何処かの倉庫らしき場所である事には違いなかった。

「行ったか」（１位）
「うん、もう大丈夫だよね」（３位）
「にゃはははは。間一髪なのぉ」（１３位）

扉の目の前にいたのは、ノーヴェが今正に助けを最も求めている人物、『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』の人気結果で２回連続１位になった坂田銀時その人であった。そのほかにも、前回より順位が大幅に上がったフェイトに逆に下がったなのはもいた。

「ナレーションさぁ～ん、少し頭冷やそうか？」（１３位）

いえ、良いです。

「坂田銀時！フェイト・テスタロッサ！高町なのは！」（２５位）
「でっけー声出すんじゃねーよ！奴等に気づかれるだろ！」（１位）
「てめェだってデケー声が出ているぞ！」（２５位）

お互いにデケーよ！

「あ、ナレーションのツッコミだ」（３位）

フェイトが反応して言い出す。

「そんなのはどうでも良い！……それより、一体コレはどうなっているんだ？ミッドチルダの連中だけじゃなくナンバーズも襲われたし……」（２５位）

「ノーヴェ殿も見たであろう」（２３位）

突如、聞き覚えのある声が聞こえると、その咆哮に振り向けば２３位の近藤に２０位の山崎に１９位のディエチもいた。

「ゴリラ、山崎、ディエチ、無事だったんだ！」（２５位）

「はい！何とか３人とも無事に逃げられましたが……なんかみんなの様子がおかしくて、俺や局長ならともかく何で同じナンバーズであるディエチも襲われるのか最初は驚きました」（２０位）

「何か人気投票の結果が納得できないかと言うわけで……本当に怖かった（涙）」（１９位）

山崎は一体何があったのか不思議がると、ディエチは恐怖して涙を流す。

「局長、コレってまちがいなく」（２０位）

「ああ、２回目の投票数の少ないっと言うより投票されなかった者の恨みだ……順位を関わらずに投票されなかったものが怒り出して投票された俺達に逆襲しに来たんだ。このままでは全ミッドチルダが俺達の敵になってしまう」（２３位）

近藤は青ざめて言い出すと、ノーヴェもそれを想像するだけで恐怖する。

「で……でもさぁ！それだけの理由でアタシ達に八つ当たりする！？文句を言うなら作者と投票した読者に言えば良いじゃねぇか！」（２５位）

「それができたら苦労はしないんだよ！」（１５位）

「そうよ！」（８位）

「同感です！」（１６位）

っとそこに８位のティアナに１５位のアルフに１６位のリィンフォースが言い出し、そして１１位のシグナムもいた。

４人とも大量の汗を流していた。

「バイクの調整をしていたら突如、他の隊員に襲われてこっちは逃げるしかなかったんだよ！」（８位）

「妹を探していたら、突如ヴィータとシャマルに襲われて……本当に怖かったですよ！」（１６位）

「ああ、しかも異常なまでの殺気だった為、我々もやむ終えずに逃げるしかなかった……本当に怖かった！（涙）」（１１位）

突如の異変に驚きだすティアナとリィンフォースにシグナムは恐怖の余りに涙を流す。

「しかし……だからといって今までともに戦おうとすれば……」（２９位）

「まちがいなくワイらは殺されるぜよ。」（２８位）

「全くだ！いくら同じ投票されなかった側でも、あんな醜いことだけは絶対に出来ねぇよ！」（３１位）

投票されていないが、その嫉妬に醜さを感じる２９位のザフィーラ、２８位の辰馬、３１位のヴァイスも深刻な表情をしていた。

「３人も無事だったんですね。良かったァ。３人まであの連中と同じくデモを起こしていなかったんですね」（２０位）

山崎が安心して言い出すと。

「全くネ！キャロも見習って欲しいアル！」（９位）

９位の神楽に１０位のエリオ、そして５位の月詠もいた。

３人とも何やら青ざめている。

「キャロちゃんって、あの子がどうしたの？確か僕等と同じく投票されたんだよね？」（２０位）

「それなんじゃが……実はわっち等の投票順位が気に食わなくて暴走したそうじゃ（焦）」（５位）

「キャロちゃん、メッチャ怖かったアル（焦）」（９位）

月詠と神楽はキャロの事で恐怖していた。

一体何があったのか山崎は唖然としていて、銀時達も一体何があったのか気になる。

「え……エリオ君……できれば詳しく話してくれない？」（２０位）

「はい……実は３０分前……」

＊

そこはミッドチルダのとある公園。

ブランコに座ってキャロは１人落ち込んでいた。

「はぁ～、何か悲しいよ。いくらザブキャラ扱いだからって……コレはないよォ」（２６位）

自分の順位に悲しんでいた。

こんな中途半端な下級順位じゃ悲しくてやっていけないような感じだった。

そんな時、エリオが散歩しているのが目撃した。

「あ……エリオく……」（２６位）

声をかけて慰めてもらおうとするが……そこに神楽と月詠が現れて親しそうにエリオと話をする。

「おおーエリオ，偶然アルな」（９位）

「神楽さん、月詠さん」（１０位）

嬉しそうにエリオは神楽と月詠の名を言い出す。

「２人で散歩ですか？」（１０位）

「うむ、江戸とは違うミッドチルダの町並みを拝見してみたくてな。江戸と吉原にはないいろんな機械技術（からくり）がたくさんあるそうじゃ」（５位）

興味あるように月詠は散歩をしていたのである。

神楽も月詠と一緒で２人仲良く散歩していたのであった。

「あ……あのう……もし宜しければ僕が案内しましょうか？／／／」（１０位）

顔を真っ赤にして案内をすることを言い出すエリオ。
それを聞いた神楽と月詠は嬉しそうに言い出す。

「本当アルかエリオ？」（９位）
「はい／／／」（１０位）
「有難うネ、エリオ」（９位）
「すまんな、エリオ」（５位）

神楽は笑顔いっぱいでお礼を言い出し、月詠は少し笑ってエリオの頭を撫でる。
エリオは顔を真っ赤にして少し嬉しそうに笑う。

「じゃあ、早速案内をしま……」（１０位）
「えーりおーくぅーん」（２６位）

エリオが案内しようとした瞬間、突如キャロがわざとらしい怪しい声を出してゆっくりと近づく。

「あ、キャロ。ちょうど良かった。今神楽さんと月詠さん……を……」（１０位）

途中で言うのを止めて青ざめるエリオ。
神楽と月詠も青ざめる中……そこにはどこから出したのか、チェーンソーを持っていて怒りの化身と化したキャロがいた。
はっきりってメッチャ怖い！

「あ……あのう……キャロ……いやキャロ様？……一体なんでそんなに怒ってらっしゃるのでしょうか？」（１０位）
「お……落ち着くアル！怒りに支配されては後で取り返しの付かないことに！」（９位）

「そ……そうじゃ！一体何に怒り出しているんじゃお主は！」（５位）

恐怖してガタガタ震えるエリオとキャロの怒りを抑える神楽と月詠。

「……こんな人気投票なんか……こんな人気投票なんかぁあああああああああ！……無くなっちゃえばいいんだぁあああああああ！」（２６位）

キャロは掛け声でチェーンソーを構えてそのまま３人を凄まじい速さで襲い掛かる。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！」（５位・９位・１０位）

３人は恐怖の余りに猛スピードで走り出して逃げ出す。

キャロも負けじと襲いだす。

＊

「ひぃいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！」（５位・９位・１０位）

神楽、月詠、エリオの３人は思い出しただけでも恐怖を表す。

「ってメッチャ怖いんですけどォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」（２０位）

「何でチェーンソー！？ってかキャロがどうして持っているの！？」

（８位）

山崎とティアナはあり得ないと言うばかりに青ざめてツッコみだす。
銀時達もキャロの怒りはメッチャ怖いように想像している。

「……とにかく、ここはなんとしてでも生き延びて騒ぎが収まるのを待つしかないようだね」（８位）
「その希望は当てには出来んぞ、ティアナ殿」（４位）

っとそこに、４位の桂が言い出す。
その隣でも１４位のはやてや６位のエリザベスもいた。
しかし桂とはやてだけ、大量の血が流れている。

「桂さん！はやて隊長！どうしたんですかその傷！？」（８位）

まさか敵にやられたのではないかとティアナが心配する。

「臆病者どもめ、手負いの虎がそんなに怖いか？・・・フッ確かにこんな傷でさえ負っていなければ……」（４位）
「私達は何も恐れられずに戦えるからなァ」（１４位）

桂とはやては負かでをしてしまったことに悔やむ。

「じゃあ、その傷奴等に」（２０位）

山崎がそう言うと桂は負って来た者を恐ろしく感じて思い出す。

「最早誰が敵で誰が味方なのか皆黙見等がつかん」（４位）
「この世にもう安息の地は存在せぇへんのや」（１４位）

桂とはやては、２人で自転車に乗ってサファリパークに行ったことを思い出す。
そこには虎、ライオン、チーターなど肉食動物が山ほど存在する。

「・・・桂、はやてさん、回想がおかしんですけど？」（２０位）
「安息の地って言うか……コレサファリパークじゃない！サファリ自転車で行ってやられただけじゃないの！！」（８位）

呆れながらツッコム山崎と頭に青筋を浮かべてツッコんで怒鳴りだすティアナ。

「はやてちゃん……桂さん……」（１３位）
「いくらなんでも……それはないよ……」（３位）

なのはとフェイトもコレばかりはフォローできない様である。

「やはり肉球を間近で見たいと思ったのが全て悪夢の始まりだった……クッ」（４位）
「同感や、肉球に触れられたいと思った時点で間違いだったんや……クッ」（１４位）
「『クッ』じゃねーだろ！バカだろあんた等！つうかそんなところに行ったら死にかけるのは当たり前だろ！？」（２０位）

悔やむ桂とはやてに容赦なくツッコム山崎。

『人の欲望はいずれ間違いを起こしてしまう。人はなんとも悲しいことやら』（６位）
「テメーもいちいち言うな！」（２５位）

エリザベスの出されているプラカードにツッコむノーヴェ。

「まぁ、とりあえずだ。事がおさまるまでこのパチンコ屋で篭城する。ここの旦那は顔のみ知り合いでな、話はつけてある。その辺の心配はいらねぇ。ほとぼりが冷めるまで動かねぇほうが良い」（1位）

銀時がそう言うと、全員納得して頷く。

「冷める保障は出来ねぇが、人気投票って言うのはたくさんの読者に協力してもらって成立している」（1位）

「つまりそれは我々は自分の順位をどんな事をしてでも護る義務があるって訳だな？」（29位）

「その通り！」（1位）

銀時が説明する中、ザフィーラはその訳を言い出す。

そして銀時は正にそのとおりであると言うばかりで言い出す。

「皆が与えてくれたこの数字を、護る義務があるわけじゃな」（5位）

「確かに金時の言う通りじゃ。わしゃどんな順位でも受け入れるのに、納得できへんからってデモを起こすなんて……馬鹿馬鹿しくてやってられんじゃけん」（28位）

月詠と辰馬の理解して納得する。

「アタシだって、最初は不服だった。人気投票なんかなければいいのにって……でもリィンと約束したんだ」（25位）

ノーヴェはリィンと約束した事を思い出す。

「リィンと？……まさかリィンがやられたんか！？」（１４位）
「そんな……妹が……！」（１６位）

はやてとリィンフォースはリィンがやられた事に悲しむ。
だが、ノーヴェは悲しみを乗り越えて自分に託された使命を為し遂げる事を決意する。

「２５位の数字は、アタシの存在だ……皆で守り通そうぜ！自分の数字を……自分の役割を！」（２５位）
「そうだよ！力を合わせればきっとできるよ！私達なら！」（１５位）

ノーヴェの言葉に感動したのか、アルフも力を合わせて自分の順位を守り通すことを決意する。

「とりあえず、上位陣達は特に狙われるからベスト１０位に入っている奴は特に安全な場所へ……ってちょっと待て！さっきからスバルの姿が見えないんだが？」（１１位）

スバルがいないことに気づくシグナムは言い出す。

「そう言えば、さっきから姿が見えないと思ったら……いないんだ」（１６位）
「確かに変だと思ったら……」（１９位）

リィンフォースとディエチもスバルがいないことに意外そうに驚く。

「銀さん、スバルの順位ってどれくらいか知っている？」（１３位）
「……ああ……確か……何位だったっけ？」（１位）

スバルの順位を聞いてみるなのはに、銀時はスバルの順位を知らないと言い出す。

「銀ちゃん、確かスバルの順位って……銀ちゃんとツッキーと同じく変わってなかったネ」（９位）

神楽がそう言うと、銀時は前回の順位を思い出す。

「ああ、確かアイツ前回は２位をとっていたな。って事は神楽の言う通りで順位が変わっていないという事は……アイツ、今回も２位って訳だな」（１位）

「え……それってつまり……」（３位）

上位陣の１人であるスバルがいないって事はつまり……スバルは格好の餌食になっている可能性が大である。

「ってスバル大ピンチじゃない！」（８位）

「ヤバイ！スバルが下位陣達に殺される！」（１５位）

ティアナとアルフはスバルが大ピンチである事で慌てる。

かくして順位を護る為に下位陣と戦う上位陣の力を合わせた戦争物語は幕を開けたのである。

しかし、なのはとはやてだけは違っていた。

（ふふふ……協力し合えば上位陣はすぐに山ほど集まるね♪）（１３位）

（ふふふ……全て計算どおりや）（１４位）

どす黒い感情でなのはとはやては笑う。

（この反乱を利用して……）（１３位）
（一気に上位陣を突き落として……）（１４位）

（銀さん（桂さん）と一緒に１位２位をキープしてやる（なの）（わ）！）（１３位・１４位）

内部にも、敵は存在していた。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

銀八
「はーい！んじゃ今日から『教えて銀八先生』のアシスタントは『ブレイブルー』に登場するキャラクターにさせてもらいます。今回の今回のアシスタン……」

ラグナ
「ヘルズファング！」

銀八
「げふぁあああ！」

突如、赤いコートを着ていて袴の様な黒いズボンを着ていて大剣を腰に身につけている男、ラグナ＝ザ＝ブラッドエッジが登場した。

ラグナ
「何人様のゲームのネタを使っているんだこの天然パーマ！いくら声が似ているからってアレはないだろ！（怒）」

銀八
「あいたたた……まぁ待て。俺は坂田銀時じゃない……坂田銀八って言うんだ」

ラグナ
「銀八ィ？……ああ、そう言えば確かに似ているが何か雰囲気が違うじゃねぇか。……つうか悪い、間違えたとは言え思いっきり殴ってしまった」

銀八
「まぁ……気にしていないですよ。この怒りは全部あのバカにぶつけたいと思いますし」

ラグナ
「ああ、思いっきり頼む」

相当、『ブレイブルー』のネタを使われたのが苦痛であったようである。

銀八
「んじゃ質問行くぞ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『1．スバルさんにプレゼントですが、ホテル・アグスタのバイキング招待券を2枚あげます銀さんと一緒に行ってきてください。2．銀八先生に質問です。もしなのは達が３Ｚに居たらどんな風になりますか？』……ずばり答えます。１つはスバル、これ受け取っとけ」

っと銀八はスバルにバイキング招待券を2枚渡す。

スバル
「うわぁぁ♪……有難うございます『ＳＡＤＳ』さん♪」

銀八
「んで2つ目は、おそらく銀時の事が好きなリリカル組は銀八先生に恋すると言う風になります」

ラグナ
「お前……さりげなく凄い事を言っているなぁ」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。んで次の質問」

ラグナ
「ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんかぁ？ってか確かここの小説の質問コーナーを元に小説を作っている作者だよな？」

銀八
「ああ、あそこで新八（じみ）がお世話になっています」

ラグナ
「ちょー！おかしいおかしい！お前今、漢字で書いてとんでもない事を言いやがった！確か志村新八って『銀魂』でも地味だが重要人物の1人だったよな！？何でそこまでつめたいの！？」

銀八
「良くぞ言ってくれた！……実はなぁ……」

銀八は、どうして『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』が始まったのかを、そのきっかけを話し出す。
それを聞いたラグナは……

ラグナ
「……つまりアレか？この小説と赤夜叉さんの小説である『リリカル銀魂』シリーズが始まったのも、新八が『リリカルなのは』のＤＶＤを親衛隊の隊員から取り上げて少女の頃のなのはに惚れた事から……この物語が始まった訳か？」

銀八
「そう言うこと。」

ラグナ
「ロリコンに目覚めたメガネの変態ぶりでこの物語は始まったんかよ！」

銀八
「まぁそうなる。んで質問だな。『ウッソ＆こなた
「うぎゃあああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
ウッソとこなたは金色と桜色の光に包まれ，黒こげになって倒れた.
』」

ラグナ
「何があったウッソー！こなたー！」

ラグナは青ざめて言い出す。

原因は前回のウッソ・エヴィンさんの感想で明らかになります。

銀八
「『かがみ
「自業自得よ・・・って黒神さんもかがみんって言うな！！
えっと，質問いくわよ

？『ブレイブルー』ってなに？私全然知らないんですけど？

？キャロちゃん・・・ウッソくんのこと「ぼこってもいいよ」って言われたらする？これは本人から聞きたいわね

？今後ここのアシスタントの人に私たちが出ている『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のこと，どう思うか聞きたいです．今後質問は２つにしますので毎回聞いてください．

さて・・・私はこなたたちの看病しますのでこれからも頑張ってください」』……ずばり答えます。？は、『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』（ブレイブルー）とは、アークシステムワークスが制作・エイエムアイ販売の２Ｄ対戦型格闘ゲームシリーズ。第一作目が２００８年１１月２０日より全国のゲームセンターで稼働開始して現在は第二作目が稼動している。そして作者の小説ネタの１つであり、銀時の使用デバイスである『銀の魔導書（ブレイシルバー）』が誕生させたきっかけのゲームである」

ラグナ
「今思い出すと、アイツいつかぶった斬る！」

ラグナは銀時にギャフンを言わせることを決意する。

銀八
「んで？は……キャロはどうでしょう？」

キャロ
「当然……ボコボコにしてやりますよ♪」

どす黒い覇気を放ってキャロはウッソをボコボコにすることを決意する。

ラグナ
「怖っ！何かあの子怖いんだけどォ！……んで？はだなぁ、そうだな……なのはがとにかく怖い。新八がヘタレすぎる。んで８話の新八が女になるアレは、新八が変態である証だな」

銀八
「さすがラグナ。分かっているじゃねぇか♪っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、作者は最新話を早く見たいほど楽しみに待っています。んじゃ次行くぞ。ペンネーム『虚空』さん『質問
今回からは・・・・自作小説から
刹那＆ａｍｐ；シンヤ「俺たちから質問させてもらう」

０１
刹那「スバルは、どんな流派で剣術を学んだ？・・・・・我流か流派に属しているのかを知りたい」
０２
シンヤ「なのはさん本人に質問だ。　あなたは、何でそこまで『歪んだ』？　歪んだ心は、最悪、あなたを自滅させる・・・・・あなたを歪ませたのがバカらしい嫉妬からなら・・・・もう勝ち目がないと思って諦めたらどうだ？すでに杭は打たれたんだしな」

刹那「うちの作品では作者は、銀時の色魔（しきま）のようなことはやらないと決めている」
シンヤ「それに新八のようなサブキャラの変な批判や中傷もな」

刹那「・・・・・それよりも、作者からこれからもよろしく頼むと言ってきているから・・・・・よろしく頼む」』……？はスバルにお答えしてもらいます。おいスバル」

銀八がスバルを呼ぶと、スバルは立ち上がる。

スバル
「うーん、銀さんって時々居合いの様な形で木刀を構えるから……それを参考にして居合い剣術を我流で習ったんだよ。後、基礎剣術の鍛錬も毎日やっていて、それに……正確に言えば銀さん流の流派剣術かな？」

つまりスバルは我流を８０パーセントで基礎を２０パーセントで剣術を学んだことになる。
それでもそれだけでは神速は得られない。神速を得たのはスバルの異常なまでの努力による結果であった。

ラグナ
「まぁ俺もここの小説は大抵読ませてもらったけど……つうか、お前の強すぎだろ？読者の中から新人魔道士？１どころが機動六課最強と噂されているぞ？」

スバル
「えええぇぇぇぇぇ！？そうなんですか！？」

銀八

「まぁ、こんなかんじで2つ目はなのはにお願いします」

銀八はそう言うと、スバルは席に座ってなのはが立ち上がる。
するととてつもない殺気を放っている。

なのは
「シ～ン～ヤ～ク～ン～？それどういう意味かなぁ～♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

ラグナ
（白い魔王が目の前にいたんですけどォォォォォォォォォォォォ！？
何かアイツ、あのお面野朗とヘビ野朗より数倍怖いんだけどォォォォォォォ！？）

なのはの異常なまでの殺気にラグナは恐怖を感じる。

銀八
「……とりあえず、なのはさん！もう良いですよ！ってな訳で『虚空』さん、暇が出来たら小説を見させてもらいます！」

ラグナ
「んで次行くぞぉ、ペンネーム『クアンタ』さん『？銀時に聞きます転送装置が壊れてジャンプが届かないからジャンプの禁断症状になっているんですか。？なのはとフェイトに聞きます。歯医者の話で、銀時と土方も全く同じ行動とっていたと知ったらどう思いますか。』」

銀八
「ずばり答えます。？はそれはなる予定はありますが、今のところはないと思います。？は……2人にお答えさせてもらいます」

なのは&フェイト
「銀さんも一緒で安心しました♪」

などと答えた。
土方は眼中になしのように。

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『神威　銀時』さん『質問です

神威　銀時
「パー子とヅラ子を見たなのはたちは、どんな反応をしますか」

ヴィヴィオ
「多分、愛があれば気付く思いますが。一目で銀時パパとヅラだと分かりますか？」
』」。ずばり答えます、おそらく意外そうに驚くでしょう」

ラグナ
「単純すぎる答えだな！おい！」

銀八
「そう言うものだよラグ君」

ラグナ
「誰がラグ君だ！？」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞォ、ペンネーム『烈火竜』さん『黒神先生に質問です。

『真・恋姫†無双』は好きですか？』……ずばり答えます。作者は確かに『真・恋姫†無双』にも興味を持っていますが、それ以上に『銀魂』をはじめ、『戦国ＮＡＳＡＲＡ』に『ブレイブルー』が好きだそうです。後『マリオシリーズ』も大好きなようです。」

ラグナ
「何かどっちかと言えば全ての漫画が好きって思えてしまうなぁ？」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、『ブレイブルー』を一度お試し見てください。次はペンネーム『零夢』さん『質問です
原作で銀時は結野アナが好みな様ですが、黒神さんはなのはキャラの中で誰が一番結野アナに近いと思いますか？
』……そうですね……作者は考えた結果、そこまで考えていないので分からないようです」

ラグナ
「わかんねぇのかよ！？」

銀八
「っと言う訳で『零夢』さん、住みませんでした！」

ラグナ
「んじゃ次行くぞォ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
僕は銀八先生を三度飯よりも銀八先生を虐めるのが大好きです。しかし銀八先生を虐める質問や侮辱質問を考える質問がなくなってきました、何かいい侮辱質問や虐める質問とかありませんか？』……」

質問を聞いて唖然とするラグナ……そして……

銀八
「あるかぁーーーーーーーーーーーー！（怒）」

当然、大きく怒鳴りだす。

銀八
「『正宗の胃袋』！一生廊下に立っていろー！」

ラグナ
「あーもう分かったから落ち着け！んじゃ次行くぞ！ペンネーム『十河』さん『1・エリオが神楽や月詠に対して抱いている感情は何ですか？エリオ本人がお答えください。
もし恋愛感情ならキャロはどうするのでしょうか？

ちなみにこの質問の答えをみてキャロが襲撃しようとしてきたら・・。

こっちもディケイドに変身して歪みの壁から龍騎を召喚、リュウキドラグレッダーにＦＦＲして、コンプリートフォームにＦＫＲして龍騎サバイブを召喚します。

2・この騒動（人気投票）に便乗しようとする人はいますか？

3・スバルに質問です。
銀さんとの間に子供が産まれたらどんな名前をつけますか？スバル本人がお答えください。『」」」

銀八
「1はエリオにお答えしてもらいます」

エリオ

「え！？……そ……そのう……2人とも良い人です……神楽さんは可愛くて本当は優くて……月詠さんは美人で綺麗だなーっと……／／／」

エリオが顔を真っ赤に染めながらそう言うと、隣にいるキャロはエリオに近づき……

キャロ
「エリオ君♪……ちょっとお話しようっか♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

エリオ
「え・・・キャ・・・キャロ！？」

とてつもない殺気を放ってエリオを引っ張り出してこの場を去る。するとその後にエリオの悲鳴が聞こえたのはいうまでもなかった。

ラグナ
（メッチャ怖すぎだろ！？なんか兎でも怖がるよ絶対！）

銀八
「んで2つ目はいると思います。3つは……スバル自身がお答えください」

スバル
「えーっとう、じゃあ男なら蒼時（そうとき）で、女なら銀美（ぎんみ）で……／／／」

顔を真っ赤に染めながらスバルが答えると、銀八は無性にムカついている。

ラグナ
「えー『十河』さん、廊下に立っていなさい。そんで次はペンネーム『ヤマトノオロチ』さん『質問です。？なのはさんたちに質問です。ダークマター、ポイズンマター、科学兵器ワッフル、パンデモニウムどっちか一つ食べなければなりません。どっちをとりますか？？スカ博士のアジトはすでに近藤のたま菌に犯されているのでしょうか？ナンバーズの皆さんもたま菌に犯されているのでしょうか？』」

銀八
「1つはなのはに答えてもらいます」

なのは
「どっちもイヤー！（涙）」

あんな不味い料理を確実に1つ食べる事に拒絶するなのは。
気持ちは分からない訳でもない。

銀八
「んで2つ目は今のところはそう言うのはないと思います。と言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『ディワールド　』さん『翼
「やほ～！銀八先生！今回は私、飛翔翼と久崎終と門矢士がそれぞれ質問しまーす！／／／」

士
「嬉しい気持ちは解るが、はっきり言って五月蠅いぞ翼。後でハゲたおっさんのカツラ接客剤でお前の頭につけて逆さに吊るしあげぞ？」

翼
「ハイ、スイマセン。」

終
「いいから質問いこ。」
翼
「じゃあ質問一、銀八先生パフェって一日で何個位食べれますか？私、いくらでも作りますよ？」
士
「どさくさに自己アピールしてんじゃねえよ。テメーの鼻の穴に小型のダイナマイト入れてやろうか？」
終
「お前も五月蠅い、質問二銀八先生、やっぱり同じ顔の坂田銀時ばかりモテテ腹立ちますか？」
翼　士
「でも私は「黙れ」・・・・・ハイ。」
士
「最後は俺だ。ユーノじゃなかったダメガネ二号に質問、もうなのは諦めたらどうだ？この間のユーノがもしチートになったらって質問してもなのはのあの態度だぜ？だから諦めろ。所詮ダメガネだし。」『……1は当然の事……翼さん！ありがとう！」
ラグナ
「メッチャ喜んでいるじゃねぇか！」
銀八の大喜びにラグナも呆れてツッコム。
銀八
「後、２つ眼はメッチャ憎たらしい！」
ラグナ
「そう言えば、お前と銀時って同じ顔なのになんで一方的にお前はもてないんだ？」

銀八
「うっせー！こっちが知りてぇよ！そんで3はやはり士もそう思うか。……っと言う訳で飛翔翼さん、久崎終さん、門矢士さん、質問有難うございました！」

ラグナ
「最後の質問だな。ペンネーム『武士堂』さん『なのはさんに質問です。
ｓｔｒｉｋｅｒｓの第8話の自分を見てどう思います？
私は貴方はなまじ天才だから感覚とかの教えが抽象的過ぎると思いますね。天才には凡人の悩みが分からないって本当だなと思いました。ティアナが可愛そうです。自分は殺されても構いません。その代わり貴方はちゃんと反省して下さい。ぶっちゃけ貴方は力があれば教え子を落としても良いと思ってますか？　一回高杉にやられて自分の無力さを思い知って下さい。』……うわぁ！なんかなのはに対するデモ質問じゃねぇか！」

銀八
「まぁ、気持ち的には分かるぜ。けどなぁ、原因を作ったのはティアナの無茶が原因だと思ったんだろうぜ。おそらくなのはだけじゃなく誰もがティアナに知ってもらいたい用だぜ？無茶をしてまで強くなる事が、最終的にとんでもない結末になる事を……と言う訳で『武士堂』さん、第9話も良く見てください！」

ラグナ
「最後の最後で、まともな答えが出た気がするぜ。……まぁ良い。今日は世話になったな」

銀八

「まぁな。次回からも後7人ぐらいは『ブレイブルー』のキャラクターにアシスタントをさせてもらいます！」

ラグナ
「後7人もかよ……まぁ良い。そん時は頼むわ」

銀八
「ああ、任せな。んじゃ」

銀八&ラグナ
「次回もお楽しみ」

第五十七訓：人気投票は時には重要な事もある（後書き）

行方不明のスバル！

そんなスバルにカリム達の間の手が！

次回も大反乱！

アルフ

「次回！「人気投票結果をあんまり気にしないのは実はメッチャ正しいかもしれない」テイクオフ！」

第五十八訓：人気投票結果をあんまり気にしないのは実はメッチャ正しいかもしれない

黒神

「いやー、合成小説を完成した後、家族旅行があったのですっかり送れちゃいました。申し訳ございません。てな訳で『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります。」

第五十八訓：人気投票結果をあんまり気にしないのは実はメッチャ正しいかもしれない

人気投票による結果に納得できない下位陣のデモ行為に対抗するために銀時達は協力し合って自分の順位を守ることを決意する。
各地それぞれ階を護る事を決意する。

銀時、フェイト、なのはの3人は最上階の6階。

桂、はやて、エリザベスは5階。

神楽、月詠、エリオは3階。

ティアナ、辰馬、ザフィーラは1階。

近藤、山崎、ディエチは2階。

アルフ、リィンフォース、シグナムは4階

そしてノーヴェとヴァイスは屋上。

ちなみに地下は大量のトラップ爆弾を仕掛けたため、そこから潜入すれば何とか全滅できる。

ノーヴェとヴァイスは真剣に最上階から敵は存在しないか、固有武装とデバイスを構えて警戒している。

「何てこった。俺も投票されていないのに命を狙われるハメになる

とは……」（３１位）
「そこは動揺するぜ……だから下位陣との対決はアタシ達の命がかかっている……だからヘマしてしまえば死ぬのと一緒だ」（２５位）
「了解」（３１位）

ノーヴェの言う事はもっともである。
上位陣側についたヴァイスは下位陣側から見れば上位陣に寝返った裏切り者扱いである為、下手すれば死んでしまうのである。

「しかし、さっきから妙だな。今のところは敵の魔力所がその気配も感じ取れない。一体どうして……ってあれは！」（２５位）

ノーヴェはビルの下を見ると、その人気のない道路に誰かが歩いている事を発見した。
それは，頭の上に『２位』と浮んでいて、首に蒼い日本刀のネックレスと紅い竜のネックレスをかけている第２位のスバルが呑気に歩いていた。

「何か今日は変だよ……町中の誰もがいないなんて……」（２位）

不思議にそう思うスバルだが，実は誰もが順位が納得できない為、力を合わせて上位陣を潰すように考えている。
それはつまりスバルは正にその得物と確認されている。
彼女は１人で『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』の２つのデバイスを使いこなす為に１人で特訓し終わり、帰ってきたところである。

「何であんな場所に！？つうか２位って下位陣に狙われている最上級の獲物じゃねぇか！つうかヤバイって！」（３１位）

「てかやべぇ！早くここに呼ばねぇと！ここが安全だしってあれ？」（２５位）

ヴァイスとノーヴェはスバルとここに呼ぼうと行動するが、スバルの背後からわざとらしくカリム、シャッハ、ギンガ、九兵衛、チンクの５人がいた。しかもカリムの頭の上には１２位と浮んでいる。それは作者の順位を奪った証拠である。

「最悪だぁ～～～～～～～！」（２５位）
「なんてタイミングの悪さだ！」（３１位）

２人は最悪のタイミングの悪さに絶叫する。
そしてノーヴェはある事を思い出す。

（ヤベェーーー！確かあの５人はスバル・ナカジマを狙っていたんだった！だとすればアイツ、めっちゃやべぇ！でも呼んだらあの下位陣の猛獣共もここを襲ってくるじゃねぇか！）（２５位）

下位陣の突入を許してまでスバルを助けるか、スバルを犠牲にして下位陣の突入を防ぐか、２つに１つである。
迷っている間に……

「スバル、無事だったんだね」（７６位）

ギンガが姉のように心配するようにスバルに話しかけると、スバルは後ろを向いて５人に気づく。

「ギン姉？どうしてここに？それに九兵衛さんにチンクさんにカリムさんにシャッハさん！」（２位）

5人の存在に気づくスバルは仲間が無事であった事を安心する。

「遅かったァァァァァァ！スバルが下位陣の犠牲にィーーーーーーーーー」（25位）

「待て！よくよく考えてみれば、下位陣の中には姉のギンガ・ナカジマもいる！以下にギンガでも妹のスバルには……」（31位）

いくらなんでも姉が妹に手を出す事はないとヴァイスは考えるが、その考えは甘かった。

一方のスバルは、この状況を5人から話しを聞く。

スバルの頭の上に浮んでいる『2位』だけじゃない。

ギンガの『76位』、カリムの『12位』、シャッハの『96位』、九兵衛の『27位』、チンクの『30位』も、人気投票結果の順位である。

「じゃあ、この静けさはミッドチルダ中の下位陣の人達がデモ行為を行って銀さん達を襲っているから！？」

信じられないかのように驚くスバル。

でもこのあり得ない静けさなら納得もいく。

「だから、この状況を打開する為に貴方に命じます」（12位）

それはデモ行為の阻止であるとスバルは考えるが……

「今すぐに上位陣の確保をお願いします。そうすれば下位陣も納得は出来ますし」（12位）

「えええ！？」（2位）

全くあり得ない命令に大声出して驚くスバル。
それはつまり自分も自主して下位陣の餌食になれと言う事である。

（り……利用するつもりかァァァァ！？）（２５位）

最早カリムは聖王教会の騎士とは思えなくなった。

「ちょっと待ってください！いくら上位陣を捕まえた所で実際の順位は変わらないはずですよ！」（２位）

そんなことをしても何も変わりはないとスバルは慌てて言い出すが、シャッハは言い返すように言い出す。

「では聞きますが……それは貴方の順位が余裕で上位中の上位に入っているから言える事ですか？」（９８位）

「へ？」（２位）

シャッハの突如なる質問にスバルは唖然とする。

「貴方はこの小説でも女性だけで見ればトップに立っているから……私達のように下位の……投票されなかった人の気持ちも分からないでしょうね」（９８位）

「そ……そんなことありませんよ！そんな人を見下したような言い方をしなくても！」（２位）

「だが現に、君は僕達の下克上に反した。それは最早、僕達は夢を見る刺客はないと言うと一緒だ」（２７位）

シャッハに誤解させないとスバルは言い出すが、九兵衛が鋭く言い出す。

「そりゃ、私の１２位だって作者から奪った物だから……やり方は卑劣すぎるけどコレしかないんですよ」（１２位）
「作者から!?何とんでもない事をしているんですか!?」（２位）
「だからだ!上位陣どもを捕まえてその順位を奪えば良いのさ。それこそがこの騒ぎを収める唯一の方法だ」（３０位）

カリムのとんでもない行動にスバルは驚きだす。
チンクもそれしかないと考える。

「でもそれって今度、上位陣が同じように繰り返して同じくやるだけですよ!それじゃ何も解決出来ないんじゃないですか!」（２位）

青ざめて反抗するスバルに下位陣はさらに言いだす。

「ではこの屈辱を受け入れろと!?」（１２位）
「そんなのできれば苦労はしないんですよ!第一貴方だって父・ゲンヤと姉・ギンガを差し置いて２位になっているじゃないですか!娘として、そして妹として申し訳ない気持ちはないんですか!?」（９８位）

カリムとシャッハは納得できないように言い出すとスバルを追い詰める。
スバルはどのように言い出せば良いのか分からない中……

「もう、それぐらいにしてやってください」（７６位）

ギンガが諦めたように言いだす。

「ギ……ギンガ・ナカジマ!しかしコレでは余りにも……」（９８位）

「良いんですよ。スバルだって好きで2位になった訳じゃないんだし」（７６位）
「だけど……」（１２位）

それでも悔やむカリムとシャッハ。
九兵衛とチンクもこの屈辱な現実は受け入れにくいようである。

「御免ね、スバル。随分と迷惑な事を押し付けて」（７６位）
「え……大丈夫だよギン姉！別に気にしていないから……あっあはははははは」（２位）

苦笑して笑うスバルに、ギンガは何でこんな事になったのかをこう思って言いだす。

「私は別に順位を気にしていないし、私は自分が影薄であることを受け入れるよ」（７６位）
「しかし、ギンガ！」（２７位）
「私達のやり方は薄い。……でもそんなことはもうとっくに気づいていた……でもいつか作者が私達を目立てるようなシリアスを考えてくれるんじゃないかなって期待していたら……いつの間にかもう今日で第五十八訓目だわ」（７６位）

ギンガの独り言にカリム、シャッハ、九兵衛、チンクは悔し涙を流す。
己の人気の低さに屈辱を感じているからである。

「けど押し寄せる作者オリジナリティの発明の波には流石に勝てない。私達の時代はもう来ない。そう……これからはスバル、貴方の時代だよ」（７６位）

悲しそうにギンガは今の時代の事を言いだす。

「もう未練は断ち切るしかないわ……だから……私達の分まで頑張ってね」（７６位）

ギンガがそう言って後ろを振り向き、この場を立ち去ろうとする。
それについて行くようにカリム、シャッハ、九兵衛、チンクの４人は涙を流して去っていく。
以外な結末だが、スバルは無事である事を知ってホッとするノーヴェとヴァイス……だが……

「あのう！」（２位）

スバルが慌てて呼ぶと、５人は振り向く。
その光景には、『２位』を持っているスバルが見える。

「コレ……落ちていましたけど……ひょっとして皆さんのじゃないですか？」

っとスバルは汗を流しながら苦笑して、カリムに訪ねる。
それを見た２人は……

（ちぎったァァァァァァァァ！）（２５位）
（スバルが自分の順位をちぎったァァァ！？）（３１位）

コレには２人も驚きだす。

「え……それスバルのじゃ？」（７６位）
「いや、落ちていたよそこに」

スバルは落し物であると言い出すが、頭から血が出ている。

（オィィィィィィ！！そんなやつ等に気ィ使わなくて良いってェ！）（２５位）

ノーヴェが青ざめて心の奥底でツッコム。

そしてカリム達はスバルの持っている『２位』を見て眼を光らせ……

「うぉおおお

すスバル。
2人は自分達が隠れているアジトであるパチンコ屋に入りだす。

「クゥ！逃げられた！」（76位）

2位を奪われなかった事で悔やむギンガ。

「追いますよ！」（12位）

カリムがそう言うと、5人は戦闘モードに入って2人を追い出す。
一方、屋上でそれを確認したノーヴェとヴァイスはこの事を銀時に報告する。

「俺は引き続き、屋上で待避する！だからノーヴェは坂田の旦那に敵侵入の通報を！」（31位）
「分かった！」（25位）

引き受けたノーヴェは急いで6階に向かう。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

銀八
「へーい、んじゃ今回も「ブレイブルー」のキャラクターをアシスタンとさせてもらいます。今回のアシスタントはこの人……」

ジン
「ジン・キサラギだ……こんな茶番の為の為に呼ばれたが……まぁ良い。坂田銀時に興味を持ち始めたどころだ……」

銀八
「っと言うと？」

ジン
「あの男を見ていると……兄さんと同じように……殺したくなるんだよ……」

不気味そうに愉快そうに笑い出すジン。

銀八
「し……質問するぞぉー！（焦）……まずはペンネーム『神威　銀時』さんの質問、『そちらの世界にＪＵＭＰは無いみたいですけどスカリエッティは、どうやってプリーチのことを知ったんですか？』……ずばり答えます、フェイト達の世界に飛ばされた源外が、たまたまジャンプを持っていたので、それを見たスカリエッティはブリーチの天鎖斬月に興味を持ったそうです」

ジン
「なるほど、参考にか」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい！」

ジン
「次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん……ああ、この小説の

質問を元に小説を書いている奴か」

銀八
「んで質問はこんな感じだ。『かがみ
「ウッソくん11話の海の話でキャロちゃん出てくるから頑張りなさいよ」

ウッソ
「ちょ!!かがみんさん!!」

かがみ
「かがみんさん言うな!!」

ウッソ
「質問です.?キャロちゃんVSなのはさん.真のド黒い女対決勝つのはどっちですか?本人から聞きたいです.」

こなた
「あたしからも!!?ヴィータちゃんが哀れに思えるんけどヴィータちゃんはどうなの?あたし的には同じ身長が低い同士頑張ってほしいんだけど.本人から聞きたいな~」

かがみ
「?は前にも言ったけど『G.Strikers』のことどう思うか?アシスタントさんお願いします」『……そうだな?と?は答えます。……1つはおぞましすぎでお答えできません!マジで勘弁してください!」

そう言って銀八は土下座する。

銀八
「んで？は……ヴィータ……お願いします」

ヴィータ
「黒神ーーーーーーーー！私の存在をもっと提供に扱えェェェェェェ！」

涙を流してヴィータは叫びだす。

ジン
（哀れな女だな……）

ジン
「そして？は僕が答える場合のようだな」

ジンは『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の感想をどのように思っているかを考える。

ジン
「まずは笑いを中心としている事だが、まずなんと言ってもあのメガネザルの存在が醜い。侍と言う強さを学んでいるようだが、アイドルオタクである寺門通と言う女の汚いケツに追いかけている時点でダメガネだな？あんな下品な歌を歌う女のどこが良いか分からん。それだけでもダメなのに無能。しかもアニメを見てＤＶＤの『リリカルなのは』に移っていた少女のなのはに一目惚れしたなど……ロリコンにまで落ちるとは……銀魂の恥だ！侍の欠片なしだ！」

とにかく新八の評価を悪く言う。

ジン

「もし、あのメガネザルがオタクじゃなかったら、まちがいなくメガネザルとしてじゃなく1人の侍である新八として、この小説の第一順からすぐに出ていた。黒神がメガネザルを嫌うのも理解できる」

銀八
「分かっているじゃないか、シン君♪」

ジン
「だれがシン君だ?ジン・キサラギだ」

愉快そうに言い出す銀八にツッコむジン。

ジン
「それにお通と言う女の歌は最悪だ。何であんなのが良いのか理解不能だ。あんな無能な歌姫が僕の世界に居たらタダの恥女しかない。胸は貧乳だし所詮は脇役だろう」

銀八
「それ、思いっきり新八に敵対するような一言だな?」

ジン
「……他にはウッソという男は，戦いなれをしているな。特に巨大な起動兵器の扱いに長けている。対『黒い獣』対策に選ばれるだろう。こなたは……謎の存在としか言えない。お妙と言う女は……メスゴリラの進化した姿だな」

次から次へと、感想を言い出すジン。

ジン
「そして……なのはは逆らわない方が良いだろう……いくら僕でも

勝てる気がしない」

メッチャ重い一言を言い出すジン。
コレには銀八も同感する。

銀八
「『ウッソ・エヴィン』さん……キャロにはご注意を……」

ジン
「次はペンネーム『烈火竜』さんの質問だ。『銀八先生に質問です。ティアナのクロスミラージュにオレンジジュースを出せるようになっていました。なのはやフェイトのデバイスも何か出ますか?』」

銀八
「ずばり答えます。……源外に頼めば出ます。っと言う訳で『烈火竜』さん、これからも銀魂とリリカルなのはのクロスオーバー小説を頑張ってください。次はペンネーム『クアンタ』さん『質問です。?スバルに聞きます。前回の質問であったパンデモニウム食い競争ですけど本当に参加するんですかパンデモニウム一匹送っておきますのでもう一度考え直したほうがいいですよ。ちなみにパンデモニウム食い競争で一位が二人以上いたらパンデモニウム大食い競争に移行します。?フェイト達に聞きます。平行世界の銀時が別の女性と結婚していて子供もいるとしたらどうしますか。』……?はスバル、お願いします」

すると、スバルの机にパンデモニウムが現れる。
かなりグロテクスであるため、スバルは青ざめて一歩引く。

スバル
「……む……虫の中でも食べられるものがあるから……大丈夫だよ

……あ……あはははは」

っとスバルは迷わずパンデモニウムを1口かじると……そのまま生ける屍と化した用に気絶する。
その後、スバルは救急車に運ばれて病院で入院。

ジン
「無理するからこうなるだろ……」

ジンはパンデモニウムの存在に青ざめてしまう。

銀八
「?は……聞いたら殺されるので勘弁してください！」

銀八は涙を流して土下座する。

ジン
「……つ……次を行こう。ペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『銀八先生に質問です。「このＳＳのなかで銀八さんの好きな女性はいますか？いるのでしたら思いきって告白してみるのはどうでしょうか？」次、キャロさんに質問です。「もしエリオさんが他の女性と付き合い始めたら、嫌でも阻止しますか？』」

銀八
「ずばり答えます……いたらとっくにしています。もう1つはキャロにお答えしてもらいます」

キャロ
「うふふふふ……そんなの……阻止しますよ♪」

っととてつもない殺気を放つキャロに、思わずジンも恐怖する。

ジン
（な……なんだあの女!?この僕が怯えているだと?……そんな…
…バカな事が……）

ジンは恐怖の余りに『ユキアネサ』を構える。

銀八
「まぁ……そんな感じだ。『ＮＡＮＯ』さん、キャロを刺激するよ
うな事は控えめに！」

っと銀八は青ざめて言い出す。

ジン
「……次の質問だな?ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さんからの質
問だ。『黒神さんに質問

今回の話は人気投票編の他にマユゾン編の要素（銀時達が逃げ込ん
だ先がパチンコ店、桂が一連の騒動とは無関係なところで負傷する）
とかもいれているのですか?
とすればバイオハザード2のゾンビ、リッカーをパロディ（マユゾ
ンとビッグおっさん妙）にしていた本編に対して、今回は狂気に満
ちたヴィータ達をバイオハザード4にでてくるガナード、チェーン
ソーを振りかざすキャロをガナード達のリーダー的存在のチェーン
ソー男のパロディにしているのですか?

山崎に質問

本編での人気投票編では黒幕であったほど順位に固執していました

が、もし愛するディエチの為ならば自分の人気順位を落とすということもできますか？』」

銀八
「ずばりお答えします。はい、入れています。作者はマユゾン編と人気投票編を合成させるのを狙っていますので。んでもう１つの質問は、山崎は間違いなくするでしょう。っと言う訳で、『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『サラマンド』さん『ニール「……なんちゅう争いだ、これは。そっちの世界に居たら武力介入して止めてるぞ？さて、今回の質問だ。１．銀八に質問です。もし、なのはに付き合って下さいと言われたらどうしますか？２．キャロに質問です。もし私の小説のエリオ（ｉｎハレルヤ）に付き合って下さいと言われたらどうしますか？どっちも似たような質問だな…。それと銀八、今度二人で酒飲みに行かねえか？ストレス溜まってるだろ？」』……今度そうさせてもらうわ。んで質問の答え、１つは……もちろん付き合います。……あり得ねぇ事だけどな！」

絶対にあり得ない質問であるとわかって、悔やむ銀八。

ジン
「この質問はキャロと言う女に……」

キャロ
「えへへ～、もちろんＯＫだよ～♪」

先ほどとは違うキャロの態度にジンはオゾッとする。

銀八
「っと言う訳で『サラマンド』さん、ニールに宜しくといっといて

ください。次ィ、ペンネーム『三月語』さん『どうも、三月語です。
「（ぷるぷるぷる・・・）」
雰囲気に怯えきったウィリアとともにお送りします。感想は、熾烈な順位争いが始まりましたね。どうなるか楽しみです。

質問は、

女性陣に質問で、好きな相手にプレゼントするなら？

で、ウィリアからも・・・また紙ですか。どれどれ・・・

1．臆病にならなくするにはどうすればいいですか？

2．強くなるにはどうすればいいですか？

・・・これらも採用できればお願いします・・・
』……ずばり答えます。フェイト達だと好きな人の好みを考えてプレゼントします。」

ジン
「そしてウィリアと言う女の質問……1と2を同士に答えると、そんなの自分で見つけ出せば良い。他人に教えられて理解するなら苦労はしない」

銀八
「ちょー！もうちょっとちゃんと答えてやれよ！1は度胸をつけること！2は護りたいものを見つけること！……と言う訳で『三月語』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『アクセル』さん『原作からかけ離れてしまった方々はもう、後戻り出来ないんでしょーか？

（なのはやキャロが筆頭です）』……ずばり答えます。それは分かりません。っと言う訳で『アクセル』さん、申し訳ございません」

ジン

「次はペンネーム『ディワールド』さんの質問だ。『質問一、リリなのと銀魂キャラを平成ウルトラマンに例えるなら誰ですか？

ウルトラマンティガ＝

ウルトラマンダイナ＝

ウルトラマンガイア＝

ウルトラマンアグル＝

ウルトラマンコスモス＝

ウルトラマンジャスティス＝

ウルトラマンネクサス＝

ウルトラマンマックス＝

ウルトラマンメビウス＝

知ってるやつだけでもいいので答えてください。

質問二、ティアナと同じ声のヴァイスの妹ラグナの声を銀さん達が聞いたらティアナと声同じだって思いますか？銀さん本人答えてください。

質問三、なのはに質問、ウチのクロスオーバー学園ではなのはと銀さんは付き合ってますがまだキスはしてません。早く銀さんとキスさせてほしいですか？なのは本人が答えてください。

後この質問で銀八先生が機嫌悪くしたら翼のチョコパフェ三個ありますのでそれで機嫌を直して下さい。』」

銀八

「ずばり答えます。１は作者はウルトラマンの知識も全然知りません。２は……銀さんだと同じ声であると驚きますね。３は……あんまり言いたくないけど、なのはお答えください」

なのは
「是非とも、お願いします♪」

っとなのはは土下座をする。
銀八は機嫌悪くなったたが、チョコパフェ３つを頂いて機嫌が良くなった。

ジン
「まぁ良い。とりあえず『ディワールド』さん、廊下に立っていろ。次はペンネーム『ヤマタノオロチ』さん『１この小説で一番腹黒くてキャラ崩壊しているなのは、キャロ、はやてがもし閣下した時のしゃべり方はどん言い方になりますか？
「ぶはっはっはっは〇〇を〇〇〇にしてやろうか」

２スバル、フェイト、ティアナ、シグナムに質問です。銀魂の敵キャラの中で鳳仙に続いて強いやつをそれぞれ選んで下さい
１ジライヤ　２林博士　３暗天丸　４お岩〔閣下モード〕　５獏大魔王『……」

銀八
「ずばり答えます。１は三人じゃなくても、閣下した時のしゃべり方は誰だって変わります。２はスバルは入院中なので、３人に聞かせてもらいます」

フェイト
「……とりあえず５で」

ティアナ
「私も……同じく５で」

シグナム
「そうだな……1だろうか？」

3人はそれぞれ答えだす。

銀八
「っと言う訳で『ヤマタノオロチ』さん、廊下に立っていなさい。
次はペンネーム『カラー』さん『質問
今週の銀魂は、好きなキャラが出てテンション上がった。鉄子、狂死郎とか小銭形とかもう出てこないと思ってたので。この小説では出す予定ありますか？ただし、新八、妙テメーらは駄目だ。』」

ジン
「最後はわかっている様だな」

銀八
「全くだ。んで答えます……予定はあります。ってな訳で『カラー』さん、楽しみに待ってください。

ジン
「次だ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問銀八先生は人気投票偏では出ないんですか？まあ、例え出ても銀八先生を味方になってくれる女性キャラクターは一人もいないと思いますけどｗｗ』」

銀八
「なめてんのかー！つうか俺は本編では出られねんだよ！出たくても出られねぇんだよ！」

ジン

「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん……廊下に立っていると良い。くくく」

銀八
「おい！今最後に笑っただろ！？」

ジンの笑いに銀八は怒鳴る。
それを尻目にジンは質問を見る。

ジン
「次を行くぞ」

銀八
「聞けよ、おい！」

ジン
「ペンネーム『十河』さんからの質問だ。『あまりライダーに詳しくない作者さんですが・・。

その１

なのはたちがライダーの力を手にしたら・・どうしますか？

その２

武道大会編でのなのはさんはクウガ・アルティメットフォーム（ブラックアイ）のスペック（パンチ８０ｔ、キック１００ｔ）を持っているように感じましたが・・。
スバルも同じもしくはそれ以上のスペック（パンチ１００ｔ、キック１２０ｔ）を持っているのでしょうか？
（ライジングアルティメット）

その３

銀さんはキバット2世、キバット3世の声も担当しましたが・・結野アナ以外で誰をキバやダークキバにしたいですか？
なのはさんをダークキバにしないでください。
なのはさんをダークキバになったら・・全く手に負えない状況になるのではないかと・・。

ちなみにダークキバのウェイクアップ3は世界を滅ぼせるスペックを持ってます♪
ヅラがビュンビュンとかテンションフォルテッシモ言っているキバ・エンペラーフォームは核爆発にも耐えられる強度を持つ鎧と必殺キックは１５０ｔの威力を持ってます。』」

銀八
「ずばり答えます。……単純に言えばこうなりますね。１はさらにパワーアップ。２は持っているかもしれません。３は作者ははキバットの存在を知りませんのでお答えできません。っと言う訳で『十河』さん、作者はライダー系の質問は期待できるほどの答えは出来ませんのでライダー系質問はご遠慮してください。次はペンネーム『赤夜叉』さん『隼樹「作者に代わって、俺から質問です。銀さんは、フェイト達に隠れてエロＤＶＤを観てたりしてるんですか？持ってたら、どこに隠してるんですか？」』……って何て質問するんだ隼樹！……ずばりお答えします。そんなことをすればフェイト達に鉄槌を食らうため、銀さんは見ていないと思います」

ジン

「欲望より命を大事にするか……確かに賢明な判断だ」

銀八
「っと言う訳で『赤夜叉』さん質問有難うございます」

ジン
「次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『1．以前の質問でスバルにホテル・アグスタのバイキング招待券を2枚あげましたがこのあとどうなりましたか？2．ライダー関係になりますが、もし門矢士達がこの世界に来たらどうなりますか？』」

銀八
「ずばりお答えします。1は2人で仲良くバイキングを頂いたようです。2は、ライダー系は分からないので知りませんが、とんでもない事になる事は確かでしょう。っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、ライダー系の質問は控えめにお願いします」

ジン
「次が最後の質問だな。ペンネーム『武士堂』さん」

最後の質問をジンは言い出す。

ジン
「『なのはさんに質問。まず直接出て来て下さい。話はそれからです。貴方の不人気、及び劣悪な性格などが祟り、今回の人気投票の順位ですが、私には相応だと思いますね。本編でも貴方は第8話で大恥晒しましたし、その後の第9話で言い訳しても遅過ぎです。貴方の順位はこれら全ての貴方矛盾していた行動の結果からなったと思うのですが、貴方の考えはどうですか？どうせ愛想笑いをしながら、スターライトブレイカーでも放って誤魔化す気なのでしょうが、

それはそれで貴方の見苦しい感情を露呈する事にも繋がりますので、返答は慎重にお願い致します。銀八先生も論議に参加して構わないですよ。』……ズバリ答えよう。確かに最初は同感するが、原作の方では遅すぎだというが，その前にティアナと言う女はなのはが無茶をした結果がどうなったかを理解した。だから遅すぎるのではなく言う前に理解されたというのが正しいだろう?」

銀八
「前から思っていたんだが『武士堂』さんってなのはには厳しいよな?」

ジン
「同感だ。それに本人が答えてもまともな返事は来ないから、僕が変わりに答えた。っと言う訳で『武士堂』さん、他人を刺激するような質問は控えた方が良い。出ないと死ぬかもしれないぞ?」

以上もって今回の質問は終了した。

ジン
「銀時に会えなかったのは残念だが……今回は少し楽しませてもらったから良しとしよう」

銀八
「ワザワザ有難うございました。では次回も『ブレイブルー』キャラがアシスタントしますので、どうぞお楽しみ～～」

第五十八訓：人気投票結果をあんまり気にしないのは実はメッチャ正しいかもしれない

上位陣が続々リタイヤ！

下位陣の猛攻が増幅！

果たして最後に生き残るのは？

ヴァイス

「次回、『人気投票結果で大暴れするのは大人気ない』テイクオフ」

第五十九訓：人気投票結果で大暴れするのは大人気ない（前書き）

ついに上位陣と下位陣が激突。

犠牲者が続々と……

助っ人としてあのくの一が登場！

辰馬

「あはははははははははは！『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるぜよ！」

第五十九訓：人気投票結果で大暴れするのは大人気ない

ついに侵入してきた下位陣の猛攻にノーヴェは４階に急いで向かう。
ティアナとヴァイスも念話で緊急事態を報告して全員４階に集合する合図を行う。

その頃，銀時、フェイト、なのはの３人はと言うと……

「……／／／」（３位）
「……／／／」（１３位）

フェイトとなのははお互いに銀時の腕を黙ったまま抱きしめる。
銀時は自分の腕がフェイトとなのはの胸の谷間に挟まれて顔を真っ赤に染まって動揺してしまう。

（アレェェェェェェ！？俺は積極的な女は嫌いだったはずなのに……なにコレ？何か心に変な感情が芽生えそうなんですけど？え……え……なんで女のバインバインの谷間が銀さんの腕に挟まってんの？て……どうなっているのォォォォォォォォ！？）（１位）

銀時は訳も分からない状況に追い込まれた。
この世界に来てから美少女に囲まれた生活を送っているなど，自分の世界ではあり得ない人生を送っていた。
この光景を新八だけには見せてはいけない気がしていた。新八はなのはに一目惚れをしているため，もし見せてしまえば怒り任せに殺されるかもしれない。
実際的には戦っても銀時には及ばないが、怒り出すと手がつけられない。

（何か俺、この世界に来てから女に囲まれやすくなってるような…
…やべーよ、銀さんが魔法少女オタクに堕ちちまうよ。どうしよう
……／／／）

それでは新八のように気色悪いオタクと一緒になってしまうと戸惑
う銀時である。

「銀時……私達から離れないで……／／／」（３位）
「銀さんがいないと寂しいから……／／／」（１３位）

フェイトとなのはの顔は赤く染めた。そしてさらに強く抱きしめ、
その瞳で甘い雰囲気で銀時を見つめる。
銀時はさらに顔を真っ赤に染めるとさらに混乱する。

（ヤベーよ、本当に銀さんの中で何かが目覚めてしまいそうだよ。
つうかどうすれば……／／／）（１位）
「何やっているんだテメェ等ぁーーーーーーーーー！／／／」
（２５位）

ドカ！

「ごふぁあ！」（１位）

突如、ノーヴェが銀時の後頭部を飛び蹴りして吹飛ばす。
フェイトとなのはも驚きだす。

「こっちは真剣に下位陣からの追跡が来ないかを見張っているのに、
何女たらしなプレイをしているんだこのハーレム侍！／／／」（２
５位）
「痛た……」（１位）

顔を真っ赤に染めたノーヴェのツッコミに銀時はゆっくりと立ち上がる。

「一応言っておくが、俺は元の世界ではそんなにモテナイ男だから……」（1位）

「それでもこの世界じゃハーレム生活しているだろうがァァァ！／／／……ってそうだ、大変だ！カリム、シャッハ、ギンガ、九兵衛、チンクの5人の下位陣達がこの店に侵入してきた！」（25位）

我を思い出してノーヴェが報告する。

さらに聞けばスバルも見つかってようやく揃ったと思いきや、最悪なメンバーが襲ってきたことに苦しい表情をする銀時。

「だけど……たった5人なら俺達の方が数が多いだろ？何の問題は……」（1位）

「それがイヤと言うほどあるわよ」

っと、突如天上から1人の女性、猿飛あやねの声が聞こえた。

そして猿飛は飛び降りて着地する。

「な……何か問題があるの？」（13位）

なのはが訪ねて聞いてみると……

「窓の外を御覧なさい？」

猿飛がそう言うと、町の中には誰もが順位を求めて争っているのが見える。

中にはヴィータやシャマルも醜い順位争いをしている。

「ヴィータちゃん!?シャマルさん!?」（13位）
「どうしてあの2人が？」（3位）

なのはとフェイトもこの状況をどう考えれば良いのか分からなかった。
何故2人までもが争っているのか理解できない中，その原因を猿飛は言い出す。

「おそらく順位が納得できない余りに暴走して理性を失っているのよ」
「暴走？」（1位）

ヴィータ達が暴走していると聞いて銀時はピクリとしている。

「己の感情のままに進む余りに周りが見えなくなったせいで、このようなデモ行為が起こり始めた。もしこのまま行けば……あの時と同じ災害になってしまうわ！」

猿飛があの時と同じ災害と言い出すと、銀時は青ざめる。
それは歌舞伎町でも人気投票結果によって醜い争いが起こった悲劇である事を。
まさかもう一度それが再現されてしまうとなると、

「それって今最悪な展開じゃねぇか！」（1位）

っと銀時は汗を流して叫びだす。
ちなみにフェイト、なのは、ノーヴェの3人にも歌舞伎町で起こった人気投票争いを言い出す。
3人は青ざめると、銀時はなんとしても阻止しようと考えるが……

「しかも、この状況を止める術は今のところ見つかっていない。源外って人がそれを納めるワクチン装置を開発しているけど……それがまだ時間が掛かりそうだからなんとしてでも生き残らなきゃいけないのよ！」

猿飛がそう言うと，ノーヴェはある事を気が付く。

「にしてもお前、何でランク外なのにそんなに平然としているんだ？」（２５位）

確かに変であるとフェイトとなのはも気づく。
その原因を猿飛が言い出す。

「ええ、だって私……登場したの２回目の『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳシリーズ』の人気結果が発表された後だし……だから気にしていないわ」

そう言うと、銀時達は「あー、なるほど」っと納得する。

「とりあえず。下にいる桂達を呼んで来てくれ。頼むぜ」（１位）

銀時に「頼む」と言われて顔を真っ赤に染める猿飛。
凄く嬉しそうであった。

「任せて銀さん！銀さんの為にこのさっちゃんも喜んで協力するわ！銀さんのためなら、この身を銀さんの為に授けて、そして銀さんおち○ち○も癒してあ……」

「退場ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！（怒）」（３位・１３位）

っと猿飛のM宣言にフェイトとなのはは怒り出して、巨大な金色の閃光と巨大な桜色の閃光を放つ。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

猿飛は2つの閃光に飲まれて吹飛ばされる。
この光景にノーヴェは青ざめて、銀時は改めて2人だけは怒らせないようにすると改めて誓う。

※

「早くこっちに来るぜよ！」（28位）

っと辰馬が叫びだす。
一方のスバルとティアナはパチンコ店に入り込み、扉を強くロックする。
だがすぐにギンガが青い閃光を放って扉ごと破壊する。
そして侵入してきたカリム、シャッハ、ギンガ、九兵衛、チンクの5人は異常なまでの殺気を放っている。
しかも全員手を組んだのか、全員の順位が12位となっている。

「なんて殺気だ……戦場でもこれほどの殺気を持った敵はそうはいない」（29位）

ザフィーラも5人の殺気には恐怖を感じた。

「ふふふ……上位陣側につく愚か者には裁きをくれてやりますわ♪」（１２位）

っとカリムがニコニコと笑いながらそう言うと、両手をポキポキと鳴らしてニコリと笑い出す。
その威圧感は誰もを圧倒する。

「恐ろしいぜよ。あの金髪の別嬪さんも怒らもうたら、タダじゃおきんじゃけん」（２８位）

っと辰馬はカリムの異常なまでの殺気に青ざめるのである。
その気迫は間違いなく以前の魔導競技大会で見たなのはと同じかそれ以上と考えても間違いはない。

「ティア……カリムさんだけじゃなくシャーリーさんに九兵衛さんにチンク、それにギン姉も怖いよう…」（２位）
「そんなの分かっているわよ！でも今考えるべきはこの状況をどうやって打開するべきかでしょ！」（８位）

ティアナが強くそう言うとカリム達が戦闘態勢に入る。

「私達を差し置いて上位陣に入った者には……それ相当の罰を与えますわ！」（１２位）

カリムがそう言うと、シャッハ、ギンガはデバイスを構え、九兵衛は刀を抜き、チンクは固有武装を構えて、

「うぉおおお

凄まじい勢いで突撃してくる。
スバルは『ティルヴィングエア』を居合いで構え、辰馬とティアナは銃と『クロスミラージュ』を構え、ザフィーラは拳を構えて返り討ちにしようとするが、突如上から大量の手裏剣が振ってきて、それが下位陣を襲いだす。
九兵衛とシャッハは刀とデバイスでそれを打ち返し、カリム、ギンガ、チンクは大きくバックして交わす。
そして後ろを向くと、そこには近藤、山崎、ディエチ、そして先ほどフェイトとなのはの魔力砲を受けて黒焦げにされた猿飛がいた。

「皆、速くこっちに来るのよ！」

猿飛が言うと、スバル達は猿飛達の所に駆けつける。速い所こっちにこないかと動かそうとしているが、

「逃がしませんわ！」（１２位）

カリムが先頭に立って走り出すとそれに後から続く４人。
そんな中、近藤と山崎が真撰組でも良く使う大砲を構え、ディエチも『ノーメスカノン』を構えだす。

「行くぞ！山崎、」（２３位）
「了解！」（２０位）

近藤が叫ぶと、２人とも大砲を発射する。
近藤と山崎の放った２つの弾丸はカリム達の前で爆破し、巨大な煙幕を放って誘導する。
戸惑うカリム達に容赦なくディエチが『ノーメスカノン』を発射しようとする。

「まずい！皆逃げっ！」（１２位）

チンクは気づいて叫ぼうとするが、すでに遅かった。

「発射！」（１９位）

そして『イノーメスカノン』から巨大なエネルギー砲が放たれ、５人を襲いだす。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！」（１２位・２７位・３０位・７６位・９８位）

まちがいなくＳランク以上の魔力砲をもろに喰らった５人。

流石にアレでは無事ではすまないであろう。

「イヤー、相変わらず凄い威力ですな、ディエチ殿」（２３位）

「コレ、もしかすればなのはさんの『エクセリオン・バスター』に匹敵するんじゃ？」（８位）

愉快そうに笑う近藤にその威力に驚くティアナ。

「もしもし、銀さん。今下位陣を始末してきたわ」

猿飛が携帯で安心させるように報告を言い出す。

何はともあれ、コレで下位陣の脅威は消え去ったと安心するスバル達……と思いきや。

「この程度で僕達がやられるとでも？」（１２位）

っと九兵衛の声が聞こえだす。爆発による煙幕が徐々に消えていく中，そこに九兵衛の姿が見えた。
だが、良く見ると……

「過酷な状況の中で芽生える可憐な花。どんな絶望の中でも希望の光を与える美しき姫君……」（１２位）

っと何やら登場シーンで良くありそうな台詞を言い出す。
しかも衣装が、眼帯が花の形をしており髪型もポニーテイルからツインヘアーに変わっていて、何やらミニスカートをはいている女の子っぽい服装を着ている。

「皆大好き♪ゲーマーアイドル、リリカル九兵衛♪ただいま誕生だよん♪うふ♪」（１２位）

アイドルっぽい喋り方で九兵衛は左膝を上げて左手の２本指で左眼の眉毛を向け、キラりんとした感じで自己紹介する。

「えええええええええええええええええええええええええええええ!?」（２０位・２３位）＋さっちゃん

コレには、近藤、山崎、猿飛が思わず叫びだす。
スバル、ティアナ、ザフィーラは呆れだし、辰馬とディエチは唖然とする。

「何アレ!?なんで九兵衛殿が自らコスロリに!?つうか九兵衛殿ってあんなんだっけ!?」（２３位）
「おかしいよね!?あれ九兵衛さんじゃないよね!?なんか性格全然違うし!」（２０位）

近藤と山崎は普段の九兵衛とは思えない存在にあり得ないばかりとツッコム。
猿飛は以前に出会った九兵衛とは別人である為、驚きの余りに黙りだす。
そう言えば今の九兵衛の存在を知らない近藤と山崎、そして猿飛にどうしてこうなったかを理由を言い出す。

「そう言えば近藤さんに山崎さん、それにストーカー女も知らかったようだね。何か兄さんが、九兵衛さんのキャラ崩壊が原因でああ言う風になったって」（８位）

バキィン！

ティアナのその一言で猿飛は思わず携帯を握りつぶす。

「キャラ崩壊！？何それ！？て言うよりこの小説にそんなのありなの！？」
「ああ……そのお陰で九兵衛殿がおかしな方向に進んで、特に胸の大きい女性には強い敵対心を抱いている」（２９位）

猿飛のあり得ないというばかりの叫びにザフィーラは現実的に言い出す。

「それ下手すれば柳生家が混乱するじゃないですか！どうするんですか一体！？」（２０位）

山崎が柳生家が今の九兵衛を見たらとんでもない事になると考える。

「てあれ？でもなんでさっきのディエチ殿の攻撃を受けて、九兵衛殿は平気なの？」（２３位）

不思議そうに近藤が言い出すと、良く見れば……盾代わりにされた黒焦げのギンガが倒れており、無傷であったカリム、シャッハ、チンクはにやりと笑っていた。

「ギン姉ェェェ

「問答無用なのぉ～～！」（１２位）

そう言って、九兵衛は大きく飛び出してジャンプする。

「九ちゃん、リリカル爆裂美少女キィィィィク！」（２７位）

流星の如くの落下速度で思いっきり飛び蹴りをすると、それに直撃した山崎とディエチが吹飛ばされる。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」（１９位・２０位）

キラーン

パチンコ店から空へと吹飛ばされて、２人は２つの星と化した。

山崎退・ディエチ　リタイア

「山崎ィィィィィ！ディエチ殿ォォォォォォォ！」（２１位）

近藤は汗を流して吹飛ばされた２人に叫びだす。

「皆！早く逃げるのよ！これ以上犠牲がでない為にも一刻も早く逃げ出すわよ！」

猿飛が言い出すと、スバル達は非常口に入る。

そして全員は言った所で、ザフィーラが非常口の扉を強く固定する。

その隙にスバルとティアナがエレベーターを動かし、その扉が開く。

「皆、エレベーターが開いたよ！」（2位）

「速くこっちへ！」（8位）

2人がそう言うと、猿飛、辰馬もエレベーターに入り、近藤とザフィーラも向かうが

ドカァーン！

「ごふぁあ！」（27位）

非常口が大爆発するような雰囲気で粉砕されると、その衝撃でザフィーラが吹飛ばされて気絶する。

ザフィーラ　リタイア

「ああ、ザフィーラさんまでもが！」（2位）

スバルはザフィーラのリタイアに悔やむと、非常口の先からゆっくりとニコニコとしたカリムが異常な気を放ってこっちに向かっている。

「て何かカリムさん怖すぎるんだけどォォォォ！？」（8位）

ティアナは思わず青ざめる。

「く……誰かが最低でも1人、この場に残って足止めする必要があ

るわ！」
「だったら俺がその役を引き受ける。」（２１位）

猿飛が悔やむように言い出すと、近藤がその役を引き受けようとする。

「近藤！でもそないしたらお前さんまで……」（２６位）
「だが、全滅よりはマシだ！山崎とディエチ殿が消えた今、ノーヴェ殿達だけでも無事にさせなければならない。皆は万事屋のところに！」
「だ……だけど！」（８位）
「早く！」（２１位）

辰馬とティアナもそれを戸惑うが、近藤の気迫に押し負けたのかこの場を近藤に任せて、エレベーターの扉は閉まってスバル達は最上階に向かう。
近藤は１人、刀を抜いて構えだすと。４人が近藤を睨みつける。

「近藤さん。どうして下位陣である貴方が上位陣に力を貸すんですか？私達と一緒に上位陣を潰せば貴方だって……」（１２位）

カリムが近藤を誘うようにそう言うが、

「悪いがカリム殿、どんな順位でも時には受け入れなければならない。それに俺は元々人気投票なんてどうでも良かったんだ」（２１位）

意外な事を言い出す近藤。
それにはある理由があった。

「俺が求めているのは人気ではない……お妙さんの再会だけだ！」（２１位）

自分が最も愛する者。
そして初恋の相手の再会こそが近藤の求めるもの。

「愛する者がいるから、人は誰だって強くなれる！それを人気の高さだけをこだわっているカリム殿達は、そんな自分の存在に醜いと思わないのか！？」（２１位）
「うう！」（１２位）

近藤の台詞に、カリム、シャッハ、チンクの３人はうっと微動する。
確かに今の自分たちの行動は醜い存在であると考える。
近藤の言う事には一理ありと確信する。

「だから、今からでも遅くはない。こんな醜い争いもここで……」

ゴキィン！

近藤がカリム達を説得する中、突如いつの間にと言うばかりに九兵衛が近藤の後ろに立って、近藤の股間を蹴り出す。
近藤は思わず苦しそうな表情をして、九兵衛は凄まじい殺気を放つ。

「じゃあ何か？……君は人気投票に興味がないのにも関わらずに……この僕を……」（１２位）

九兵衛は顔中に血管を浮かべて怒りを徐々に大きく表し……

「このリリカル九ちゃんを差し置いて、投票されたっと言うのかぁぁぁ

九兵衛の怒りは大爆発し、股間を蹴った足をそのまま振り上げ、近藤を天井に突き刺す。
この光景にはカリムも青ざめる。

近藤勲　リタイア

※

エレベーターに乗ったスバル、ティアナ、辰馬、猿飛の４人は最上階に向かう。

「なんて事なの、カリムさんがあんな風になるなんて……」（８位）

ティアナは今でも信じられない状況であった。

「コレが人気投票戦よ。己の順位の為ならばどんな犠牲を払ってでも上位に上がりこもうとする人間の欲望によって起こった悲劇」

猿飛はあの出来事を恐ろしそうに言い出す。
現に自分もそうであったが、今となれば恐ろしい出来事であると考える。

「しかし、速いこと金時ん所に向かわんと、ワイらも近藤等と同じ目に……」（２５位）

チィーン

っとそこでエレベーターが3階で止まる。

「て誰!?3を押したの!」（8位）

「え……私じゃないよ、ティア!」（2位）

「ワイもちゃう!」（25位）

ティアナが誰であると言い出すと、スバルと辰馬は自分じゃないと言い出す。

「て事は、誰かがエレベーターを待っているから……」

猿飛がそう言いだすと、4人とも青ざめ……

「開けないでエエエ

「うわぁあああ！……て、何だ皆さんでしたか」（１０位）

少し驚いたエリオであった。

「エリオ！ちょうど良かった！今１階で下位陣達が現れて近藤さん、山崎さん、ザフィーラさん、ディエチの４人が……！」（８位）

「ええ！？やられたんですか！？」（１０位）

ティアナの言葉にエリオは驚きだす。

だがこっちも大変である事を思い出す。

「てこっちも大変なんですよ！エリザベスさんが！」（１０位）

エリオが青ざめてそう言うと、後ろにはボロボロとなっているエリザベスの姿がいた。

そのエリザベスを神楽と月詠が抑えている。

「おお！ちょうどエレベーターが来たヨ！」（９位）

「ちょうど良かった。運ぶの手伝ってくれぬか！相当な重傷を負っておるそうじゃ！」（５位）

神楽と月詠もエリザベスの救出の手伝いを要求すると、スバル、ティアナ、辰馬の３人はエレベーターから降りようとする。

しかし……

「ちょっと待って！」

猿飛が大きくそう言いだす。

「ちょ、どうしたネ！」（9位）
「皆、ちょっとおかしいと思わない！？」
「何がじゃ！」（5位）

猿飛の言葉に神楽と月詠が聞き出す。

「確かエリザベスって、桂小太郎と八神はやてと一緒に5階にいるはずじゃ？」

不思議そうに猿飛がそう言うと……

「あ……そう言えば……」（5位・9位・10位）

神楽、月詠、エリオが気づくように言う。じゃあここにいるエリザベスは一体誰なのかと不思議がる中で……ゆっくりとエリザベスの方に振り向く。そこには……

「うふふふ……ばれちゃったぁ～～～♪」（23位）

エリザベスの中から1人の少女が現れた。
顔は笑っているが、眼は殺気を篭った眼線でタップリであり、両手にはチェーンソーを握っているキャロがいた。
そしてスバル、ティア、辰馬、猿飛を乗せたエレベーターはゆっくりと扉が閉まると……

ギャアアア

神楽、月詠、エリオの3人の悲鳴が響き渡るのであった。

神楽・月詠・エリオ　リタイア

「……私達、とんでもない事をしたような……」（2位）

「言うんやない。あの娘達の死を無駄にしちゃならんのじゃ」（2位）

「私達はどんな手を使ってでも生き残る責務があるのよ。」

青ざめるスバルに3人の死を無駄にしないために生き残る事を決意する辰馬と猿飛。

「もう……カオスな展開過ぎるよ……」（7位）

っとティアナは呆れだす。

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!」

銀八

「へーい、んじゃ今回も『ブレイブルー』のキャラクターをアシスタンとさせてもらいます。今回のアシスタントはこの人……」

ノエル

「はぁーい。『ブレイブルー』のヒロインであるノエル・ヴァーミ

リオンです。今回はよろしくお願いします、銀八さん」

銀八
「へぇい。んじゃ早速行くぞ。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『ヴィヴィオ
「人気投票って恐いね」

神威　銀時
「そだね。皆の腹黒さが良く分かるよ」

ヴィヴィオ
「それで質問です。黒神さんは『宇治銀時丼』と『土方スペシャル』どっちを食べてみたいですか」

神威　銀時
「両方食べた自分は『宇治銀時丼』をオススメします」』。ずばり言います。作者はマヨネーズが苦手なので宇治銀時丼を食べてみたいと思います」

ノエル
「あのう……『宇治銀時丼』と『土方スペシャル』ってなんですか？」

銀八はノエルに2つの料理を説明する。
坂田銀時という男が考えた小豆をご飯に賭けるのが『宇治銀時丼』。
そして真撰組副長、土方十四郎と言う男がご飯にマヨネーズをかけている事から言われた『土方スペシャル』。
それを聞いたノエルは少し気持ち悪くなって吐き気をする。

銀八

「っと言う訳で『神威　銀時』さん、作者の味覚は貴方と一緒でした」

ノエル
「異常な漫画じゃないとは聞いていましたけど、変な味覚を持つ限りは確かですね。では次はペンネーム『烈火竜』さんの質問です。『黒神先生に質問です。『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』で出した格闘ゲームを大変評価してくれましたよね。テレビゲームの中で格闘系が好きなんですか？』」

銀八
「ズバリ答えます。もちろん好きです。作者は『ストリート・ファイターズ』シリーズと最近では『ブレイブルー』にもハマっているようです。後、『戦国ＢＡＳＡＲＡ　Ｘ』っと言うゲームも好きだそうです」

ノエル
「なるほど。だからこの小説に『ブレイブルー』に関するネタも入れたんですね」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、『ブレイブルー』も一度試してください。次はペンネーム『ディワールド』さん『紅音也
「よう！俺は仮面ライダーキバのキャラでどんな世界でも世界一偉～い紅音也様だ！今回は俺と・・・。」

セイバー
「偉そうな人ですね。Ｆａｅｔのセイバーが質問します。」

音也
「有り難く思え。」

セイバー

「何を有り難く思うのか知りませんが。では、質問一、アーサアは私、セイバーを元にした様ですが他のサーヴァントを元にしたオリキャラは出ますか？」『……はい，おそらく作者の考えではそうすると考えるでしょう？」

ノエル
「『ブレイブルー』好きの作者なら『ブレイブルー』に登場するキャラクターも考えると思いますね……それでもう1つは『音也

「質問二、坂田銀時！お前はハーレムを作る素質がある！俺の弟子にならないか？後、セイバー、今夜俺と深～い。愛を深めよう！」

セイバー
「遠慮しときます。」

音也
「何！？（ガーン！）」『……」

銀八
「退場ーーーーーーー！」

っと銀八は怒り出して質問を破り捨てる。

ノエル
「ちょっとォーーーー！何しているんですか！？」

銀八
「アイツのハーレム人生を思い出すとマジムカついたから破り捨てたんだよ！」

ノエル
「なんですかそれ！？」

理由を言い出す銀八に呆れて突っ込むノエル。

銀八
「っと言う訳で音也、廊下に立っていろー！後、『ディワールド』さん、翼によろしくと言っておいてください」

ノエル
（変わった人だよ……）

ノエル
「次はペンネーム『虚空』さん『刹那「・・・・・醜いな」
シンヤ「まったくだな」
刹那「俺達が武力介入して、根源を叩いた方がいいか？」
シンヤ「いや、あっちは、あっちでやってもらおうぜ・・・・・最悪、こっちに来たらＡＭＦを全開にして、無力化して叩けばいいんだからな、基本的に向こうは、魔法中心であんだけの戦闘能力発揮しているからな」
刹那「天パ（銀時）は、どうする？」
シンヤ「そりゃ、ヤンデレ化したなのは（過去の感想を参照の事）と隔離してやればいい」
刹那「・・・・・怖いものだな、さて質問だが、二つある。１つは、俺からだ。
ギンガ、こっち（作品）ではヒロインの１人として描くつもりだがいいか？（今回の本編見て、かわいそうなので確認を含めて）ギンガ、本人で回答、頼む」

虚空「もう１つは、私から。なのは本人に。なのはさん、もし殺られるとしたらどっちがいいですか？１．スターライトブレイカー、及びその強化版の欠点を付かれてやられるか（動けないことではなく、魔力砲撃の方の欠点）、２．ウッソさんのところで私があなた

にやられそうになった時に送りつけた『ヤツ』（本編参照の事）にやられたい？」

シンヤ「・・・・・二つ目が、とてつもなく歪んで見えるような・・・・」

虚空「私は、基本的に魔王が嫌いなだけで、なのは本人は、認めている。　ここでも魔王なのは比率が高いからね、今後のためにも楔を打つ」

刹那「・・・・・・こんな作者だが、キャラとの絡みは大事にするから・・・・・シャマル、ギンガ、安心しろ。　じゃあ、またな」

『」……」

とんでもない質問に唖然とするノーヴェ。

銀八

「ズバリ答えます。１は当然ＯＫです。それで虚空さんが面白いと思える小説が作れるなら尚更です。２は……遠慮します。っと言う訳で『虚空』さん、これからも小説作りを頑張ってください。次行きます。ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。

？黒神さんに聞きます。・ｈａｃｋ／／シリーズは好きですか。

？スバルさん入院させてしまい申し訳ありませんお詫びにハーゲンダッツ３ダース程送っておきます。ちなみに種類はスバルの好きな味にしておきます。

それと銀八先生とアシスタントさんにもハーゲンダッツ１ダース送っておきます。

それと銀時には週間少年ジャンプ（転送装置が壊れて届かなくなった号から最新号まで）送っておきます。』……。ズバリ答えます。

作者はアニメしか見ていないので、好きでもないし嫌いでもない」

ノエル
「つまり普通ですね」

銀八
「そう言うこと。そんで2はスバルが喜ぶだろうな」

そう言って、銀八はハーゲンダッツ1ダッツ分をスバルに渡すと、

スバル
「うわぁぁぁぁ！有難うございます、クアンタさん♪」

嬉しそうに喜びだす。

ノエル
（ううう……最近ここの小説でヒロインとして活躍しているスバル・ナカジマ！……胸が大きい！それにスバルだけじゃない。何で『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の女性は全員胸が大きいんですか！？）

悔しそうにそう思うノエル。
まぁ九兵衛よりはマシであるが……

銀八
「ちなみに俺とノエルもありがたく頂くので。ジャンプの件はすでに銀さんは受け取っており、喜んでいます。ってな訳で『クアンタ』さん、ワザワザ有難うございます」

ノエル
「次はペンネーム『風花』さんからの質問です。『？黒神さんは最

近ブレイブルーを出していますがブレイブルーキャラと攘夷戦争鎮魂歌のコラボを考えていますか？攘夷戦争鎮魂歌とイメージをコラボしていたので
？ブレイブルーのゲームが新しく出るらしいですが買いますか？』」

銀八
「ズバリ答えます？はおそらく考えているようですが、キャラクターを出すかどうかは考えているようです。？はお金があれば買うようです」

ノエル
「買ってくれると嬉しいですよ」

銀八
「っと言う訳で『風花』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『十河』さん『1・なんか出る（洞爺湖から醤油とかクロスミラージュからオレンジジュースｅｔｃ）シリーズでもしレイジングハートやバルディッシュ、リボルバーナックルからなんか出るとしたら何が出るんでしょうか？

2・作者さんはロボット系に詳しいですか？
今度Ａ．Ｃ．Ｅ．Ｒが出るんですがなのはたちはどの機体に乗るんでしょうか？

とりあえずは判明している機体を載せておきますので誰がどれに乗るのか決めてください。

アクエリオン（創世のアクエリオン、これだけ3人で。）・・
クロスボーンガンダムＸ1改（機動戦士クロスボーンガンダム）・・
Ｚガンダム（機動戦士Ｚガンダム）・・

デスティニーガンダム（機動戦士ガンダムシードデスティニー）・・
ＶＦ－２５Ｆメサイア（マクロスＦ）・・
ＶＦ－０Ａ（マクロスゼロ）・・
オーガス（超時空世紀オーガス）・・
ランスロットコンクエスター（コードギアス反逆のルルーシュＲ２）・・
ＡＲＸ－７・アーバレスト（フルメタルパニック！）・・
キングゲイナー（オーバーマンキングゲイナー）・・

３・キャロの黒化は止まることを知らないのでしょうか？
もし止める方法があるなら何でしょうか？
やはり・・エリオが神楽や月詠を選ばずキャロを選んだら止まるのでしょうか？まぁ、エリオは神楽を選びそうな感じがします。
共通点もあるし（２人とも大食い）、キャロは共通点はないのでは？』……ズバリ答えます。１は、『レイジング・ハート』は苺ミルク。『バルディッシュ』は『Ｃ・Ｃレモン』。『リボルバーナックル』は辛口のジンジャエールですね」

ノエル
「何で『リボルバーナックル』からはジンジャエールですか？」

銀八
「ジンジャエールは生姜で出来ていると聞いているので、辛口だとナックルされたような痛さが来るほどの痛みが出るほどの辛さができるそうなんだ。だから『リボルバーナックル』のナックルに共通した訳」

ノエル
「何か無理がありませんか！？」

銀八
「まぁそんな感じだ。んで2は多少の事は知っていると思います。
銀魂が出ないとなれば、ズバリこうなりますね。」

『アクエリオン』　なのは，フェイト，はやて

『クロスボーンガンダムX1改』　リィンフォース

『Zガンダム』　アルフ

『デスティニーガンダム』　スバル

『VF－25Fメサイア』　ティアナ

『VF－0A』　ヴァイス

『オーガス』　ユーノ

『ランスロットコンクエスター』　シグナム

『ARX－7・アーバレスト』　ギンガ

『キングゲイナー』　シャッハ

銀八
「んで選んだ理由を言いますと、まずですね……『アクエリオン』

をなのは，フェイト，はやてを選んだのは3機合体と聞いて、仲良しである3人組に雰囲気が似ているから決めた事を選んだ訳。んで『クロスボーンガンダムX1改』をリィンフォースに選んだのは何か外見が悪役が使用しそうな気体に、第二期ではラスボス級に当たる存在であるリィンフォースを選ばせた訳」

ノエル
「『Zガンダム』をアルフに選ばせたのも、変形すると分かってて、人型から狼に変身できるアルフにしたわけですね」

銀八
「そう言うこと、んで『デスティニーガンダム』をスバルに選んだのは、何か主人公じゃないけど主人公角であるスバルだからこそ相応しいんじゃなねぇのって思ったわけ。んで2機のマクロスをティアナとヴァイスを選ばせたのは、2人とも銃のデバイスを使うから」

ノエル
「なるほど……ってなんで『オーガス』をユーノに選んだのですか？」

銀八
「本当はシャマルでも良いんだけど、あいつ機体には乗らなさっぽいしな。んで『オーガス』って見た眼は地味っぽいから同じ地味キャラであるユーノに選ばせた訳」

ノエル
「ちょっとー！そんな理由で選んだんですか！？謝りなさい、今すぐユーノと『超時空世紀オーガス』の製作者に謝りなさい！」

あり得ない理由にノエルはツッコム。

そんなノエルを無視するかのように銀八はさらに残り3機を言い出す。

銀八
「んで『ランスロット』って剣も使えるし騎士っぽいから、シグナムに選ばせて……んで『ＡＲＸ－７・アーバレスト』は格闘技も使えそうな幹事だからギンガにした訳。そして『キングゲイナー』は誰も当てはまらないから適当にシャッハにしてみた」

ノエル
「何か最後の方が手抜きに感じますよ……」

最後の答えにノエルは呆れる。

銀八
「んで3は……俺が知りてぇよ……」

銀八は青ざめて言い出すと、ノエルはここのキャロはどれぐらい怖いか想像するが予想以上である事を確信する。

銀八
「っと言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい」

ノエル
「それでは次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ
「スバルさ～～～～～ん！！あれほどパンデモニウムを食べてはいけないって言ったのに～～～」

こなた

「あれは・・・きついよね・・・」

ウッソ
「しかも僕らは闇鍋の具として食べたしね・・・」

ウッソ&こなた
「ははは・・・はは・・・」

かがみ
「・・・二人がトリップしちゃったから私が質問するわね.
?あまり目立っていないキャラ（リリカル組のみ）に朗報です.『G.ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の１５話あたりからウッソくんは今のメンバーとしばらく別行動になります.なのであと二人追加でこちらに出れます.でたい人いますか?ただし目立っていない人です.本人の声で返事お願いします.

?前と同じ『G.ＳｔｒｉｋｅｒＳ』のことどう思うか?アシスタントさん答えてください.（ただし最近新八くんいじりが多すぎるようなのでそれ以外でお願いします）

これからも頑張ってください」』……ああ、ここの感想を元に小説を書いている作者ですよね」

銀八
「ああ……そんでせっかくだからウッソさんの質問は、今回はお前が答えてやってくれ」

ノエル
「分かりました。１は……誰か出たい人いますか?」

ヴィータ、ユーノ、ギンガ、カリム、シャッハ、ノーヴェ、クロノ、シャーリー、マリー
「（僕）（私）（俺）が出たいです！」
っと候補は多くいたが、

ノエル
「わずかにヴィータさんとギンガさんが速いので、2人に決定します」

ヴィータ・ギンガ
「やったァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

勝利したように叫びだす2人。
選ばれなかった者は悔やむ。

ノエル
「そして？は……新八って言うロリコンオタクに関する事以外なら答えます」

銀八
「おい……さりげなく言っているぞ？」

ノエル
「まずですね……ウッソのガンダムと言う巨大な機動兵器を使いこなすのは感心しました。おそらく対『黒き獣』の採集切り札として選ばれますね。高町なのはは……怖すぎますよ！志村妙はゴリラと思わせるほどの暴れっぷりですね。でもどうしてこの小説で凄く目立っているはずの桂小太郎が出ているのか不思議ですね。はやてさんは準ヒロインですから出ても分かります」

銀八
「おーい、お妙とはやてに殺されても知らねぇぞ？……っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、ヴィータとギンガのほうもよろしくお願いします」

ノエル
「次はペンネーム『アクセル』さんからの質問です。『キャロが以前ディスバールなんて化物を召喚していましたが、これを超える恐怖と絶望を与える怪物を召喚したりできますか？』」

銀八
「ズバリ答えます。キャロの怒りの憎悪的には出来ると思います」

ノエル
「何か怖い答えですけどォォォォォォォォ！？」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『正宗の胃袋』さん、『腐りきった天パをして死ぬ寸前の見苦しい目をした銀八先生は女性にもてなくて人気も大して無いのに1位である銀時にどうして突っかかるんですか？』って俺だって知りたいわぁあああああああああああああああああああああ（怒）！」

銀八はまたもや嫌がらせの質問に怒り出して破りだす。

ノエル
「確かに、坂田銀時と坂田銀八の人気数の差は異常なまでに高いですね」

銀八
「『正宗の胃袋』、一生廊下に立っていろー！」

銀八はそう怒鳴って言いだす。

ノエル
「とりあえず次、行きます。ペンネーム『カラー』さん『質問
今週のＪＵＭＰの新八見て皆さんどう思いましたか？自分は一ォォォォォォォォォォォォ応レギュラーだから一億歩譲って納得しました無理矢理……。』まぁ、一応レギュラーだから無理矢理作者が描いたんじゃないですか？」

銀八
「ズバリ答えます。新八は確かにムッツリスケベで変態でアイドルオタクかもしれませんが、それを除けば銀さんの下で侍道を学んでいる感じです。もし新八のウザいアイドルオタクがなければ間違いなく、作者は新八をこの小説の第一順から出していると思います。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい。んで最後の質問。ペンネーム『白い奇術師』さん『銀さん達はどこで髪を切りにいっているんですか？』……どこって、普通にミッドチルダの散髪屋ですが？」

っと単純に答える銀八。

銀八
「っと言う訳で『白い奇術師』さん、廊下に立っていなさい。そんで以上持ちまして、今回の質問お答えコーナーは終了しました。」

ノエル

「はい、今回はお世話になりました。これからもこの小説が続ける事を健闘祈って応援します」

銀八

「ありがとな、ノエル。んで次回も『ブレイブルー』キャラがアシスタントしますので、どうぞよろしくお願いします」

第五十九訓：人気投票結果で大暴れするのは大人気ない（後書き）

犠牲になっていく仲間達。

上位陣と下位陣の激突がさらに増幅！

そして裏切りあり！？

猿飛

「次回、「人気投票を気にしないと思うのは、大抵上位陣が言う台詞である」テイクオフよ」

第六十訓：人気投票を気にしないと思うのは、大抵上位陣が言う台詞である（前編）

いよいよ最終決戦！

九兵衛とチンクがさらに暴走！？

そして、黒幕は以外にもあの人物！

ユーノ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります」

第六十訓：人気投票を気にしないと思うのは、大抵上位陣が言う台詞である

下位陣の猛攻により、神楽、月詠、エリオ、近藤、山崎、ディエチ、ザフィーラが犠牲となった。
生き残った上位陣であるスバル、桂、ティアナ、エリザベス、はやて、辰馬、猿飛は一気にエレベーターで最上階に向かって、銀時、フェイト、なのは、ノーヴェと合流した。

「何てこった！神楽達が犠牲に！」（1位）

銀時は予想以上の下位陣の猛攻により，犠牲となった仲間達に悲しむ。

「下位陣の猛攻は本当に怖かった……特にカリムさんとキャロが！」（7位）
「同感！」

邪悪なる魔物以上に驚異的な威圧感を放った2人に恐怖するティアナにそれを強く同感する猿飛。
スバルや辰馬も2人は特にと言うばかりで恐怖をした。

「人の欲望は増幅すればするほど恐ろしい悲劇が起こることを、今回の事で我々は思い知らされた」（4位）

歌舞伎町以上な醜い人気争奪戦に恐ろしく感じた桂。

「これ以上の下位陣の暴走を繰り返されない為に，この出来事を終わらせなければならない！」（4位）
『今、良い事言った！』（5位）

下位陣の暴走を止める事を決意する桂にそれをプラカードを出して褒めるエリザベス。

「しかし、このままワイらが反撃しとっても、あ奴等の思う壺ぜよ！」（２２位）

「確かにそうだな……犠牲になった仲間達や正気を失ったナンバーズを元に戻さねーと……」（２５位）

辰馬とノーヴェもこの馬鹿げた出来事を何とかすることを賛成する。

「だけど、相手もかなりの戦力を持っていますし……それにカリムさん達だけじゃなく他の下位陣も攻めてくる恐れもあるから……」（１３位）

「うかつにこっちから攻められないね」（１２位）

「っとなればここは力を合わせて戦うしかないようだ」（８位）

下位陣の数の多さに侮れないと警戒するリィンフォース、アルフ、シグナム。

確かに自分達の戦闘力が優れていても、敵が多ければこっちが不利である。

「それもそうだね……ってあれ？なのはとはやては？」（３位）

「そう言えばいないね？」（１２位）

フェイトとアルフはなのはとはやての２人がいないことに気づく。

２人がそう言うと，銀時達も２人がいないことに気づく。もしかすればすでに下位陣に……

そう思った時であった。

ドカァーーーーーーーーーン！

「あらら～～～～～～～～！」（２２位）

『ぎゃあああああああああああ！』（５位）

突如、扉が爆発して辰馬とエリザベスがその爆発で吹飛ばされて窓ガラスから外に吹飛ばされた。

「エリザベスー！」（４位）

エリザベス、坂本辰馬　リタイア

そして爆破した先から、ゆっくりとカリム、シャッハ、九兵衛、チンク、キャロの５人が現れたのである。

「で……出たァァァァァァァァァ！」（１１位）

アルフは思わずビックリする。

コレはまちがいなく負の感情に出ている憎悪の気である。

銀時達も思わず青ざめて固まりだし、武器を構える。

「このパチンコ店に立てこもる上位陣に告ぐ！すでにここは我等、『カリム・？（ラブ）・ダイヤモンド』が選挙した！」（８位）

シャッハが仕切って思いっきり言い出す。

ドサクサにまぎれて変なパフォーム名を言い出すが、そこは銀時達はツッコまない。

「大人しくその上位の順位を我等に差し出しなさい。さもなければ……潰します」（８位）

カリムがポキポキっと鳴らして異常なまでの闘志を放っている。
それを見た銀時は青ざめて……

「り……『リリカルなのは』版のお妙だァァァァァァァァァァァァァ！（焦）」（1位）

と叫びだす。
確かに今のカリムは正にお妙その者であった。
綺麗な顔を持ちながらも、生活は凶暴でゴリラその者。さらには傲慢で欲張りの凶暴雌そのものであった。
後、最後の凶暴雌で『雌はないだろ』っと言うツッコミは控えて欲しい。

「何かナレーションが変になっているんだけど……ってまずいよ！何か知らないけどカリムさんに勝てる気がしな・・・・・・」（6位）
「カリム達だけじゃないぜ？」（52位）

っとティアナがピンチを感じると、さらに絶望が染まってきた。
銀時達は後ろを振り向くと、突如ボコボコにされたヴァイスが飛んできて、銀時達の前で転んで倒れこむ。

「ヴァイス！（焦）」（7位）

シグナムは驚きを隠せなかった。
そして先を良く振り向くと、そこには殺気を放っているヴィータとシャマルがいた。

「ヴィータ、シャマル！？」（7位）

まさか2人までもが暴走した事に驚くシグナム。
そしてその2人の殺気はシグナムとリィンフォース中心に向けられている。

「しぃ～ぐぅ～なぁ～むぅ～！りぃ～んふぉ～すぅ～！」（６８位）
「私達を差し置いて……上位に入り込んだその罪……覚悟は出来ているだろうな？」（５２位）

っと2人も順位に納得できずにシグナムに強い殺気を放っている。

「何か怖いんだけどォォォォォ！？」（７位）
「ひぃぃぃぃぃぃぃ！」（１２位）

2人の殺気に青ざめるシグナムとリィンフォース。
銀時達も自分達も巻き込まれると考える。
絶対ピンチの中……

「暴走は……」（１０位）
「ここまでなの！」（９位）

っとカリム側の後ろからなのはが、ヴィータ側の後ろからはやてがデバイスを構えて現れた。

「なのは！」（１位）
「八神殿！」（４位）

突如の2人の登場に驚く銀時と桂。
実は万が一の為に下位陣の背後から奇襲する為に2人は隠れていたのである。

「はやて……」（５２位）
「もうコレで終わりにしぃや、ヴィータ、シャマル！」（１０位）
「う！」（６８位）

はやての登場に驚くヴィータにはやてに忠告されて身動き取れなくなったシャマル。

「カリムさん、シャッハさん、九兵衛さん、チンクさん、キャロ、もうここで終わりしよう。どんなに足掻いたって、現実的な順位は変わんないんだよ？」（９位）

現実的な事を言い出すなのは。

「それにこんな事の為だけに作者は犠牲になってもなお、もう５順目に達成されたんだよ。分かるよね、これ以上争ってもこの小説は堕ちるところまで堕ちちゃうんだよ？」（９位）

なのはがそう言うと、九兵衛、チンク、キャロが苦しそうな表情をする。
コレで人気投票争奪戦は終わったっと思われた。

「堕ちるゥ？そんなの……」（８位）
「この小説が始まってから……」（５２位）

「すでに堕ちているわァァァァァァァァァ！」（８位・５２位）

っとカリムとヴィータがなのはとはやてを背負い投げをして吹飛ばす。

「にゃあああああああああ！」（９位）
「のぎゃあああああああああ！」（１０位）

吹飛ばされた２人はそのままぶつけだして倒れる。

「なのはァ！はやてェ！」（３位）

この光景に慌てて叫びだすフェイト。

「貴女達の人気は重要メンバーから見ればただの脇役程度ですよ！同じ上位でも、フェイト・テスタロッサとスバル・ナカジマに比べれば、貴女達など準ヒロインで目立っておらず、小鳥程度なのですよ！ふはははははははははは！」

カリムが２人を見縊った事を言い出し、高笑いする。
それが禁句である事を知らずに……

「…言ってはあかん事を言った……」（１０位）
「カリムさん……言ってはならないことを言った……」（９位）

と、なのはとはやてが凄まじい殺気を放って起き上がる。

「作者の魔王化アイデアによってヒロインとしての地域を薄められた私の苦労」（９位）
「そして原作では同じ重要ヒロインであるにも関わらずになのはちゃんとフェイトちゃんより出番が少ない苦情」（１０位）

「貴女達にわかってたまるかぁあああああ！」（９位・１０位）

2人は叫びだしてとてつもない怒気を放つ。
2人の魔王がここに降臨した。

「はやてちゃん！もう容赦はしないで全力で行くよ！」（9位）
「皆に、私達の実力を味合わせてやるわぁ！」（10位）

額に血管を浮かべて、2人は全力全開で行く。

「まってエエエ！なのはァァァ！はやてエエエ！」（3位）

フェイトは青ざめて言い出すが、なのはとはやては魔力砲を無差別に放つ。

ドカァァァァァァン！

「ぎゃあああああああああああああああ！」（11位）
「いやぁあああああああああああああ！」（7位）
「なんでエエエエエエエエエエエエエ！」（15位）

その魔力砲により、最上階は大爆発してアルフ、シグナム、ノーヴェが吹飛ばされるのである。

アルフ、シグナム、ノーヴェ　リタイア

「アルフゥゥゥゥ！シグナムゥゥゥゥ！ノーヴェエエエエエエ！」（3位）

フェイトは思わず2人の名を言い出す。

はやては怒り任せでヴィータとシャマルに飛びつく。

「てやぁあああああああああ！」（９位）

「なんの！」（５０位）

はやてが杖を振り、ヴィータが『グラーフアイゼン』で防いで、なぎ払うように振り出す。

そしてはやては体を回転させて着地する。

「ヴィータ……シャマル……まさか２人が主である私に反抗するなんてね……」（９位）

「ウルセー！いくらなんでもはやてにこの屈辱がわかって溜まるか！」（５０位）

「そうよ！私達がどれだけ苦しんでいるかを知ってもらうにはコレしかないのよ！」（６６位）

ヴィータとシャマルも順位の納得に行かなかった。

自分たちは下位陣なのに、どうしてはやて、シグナム、リィンフォースは上位陣に入って、そして同じ下位陣であるザフィーラが受け入れられるか納得できなかった。

「私がこの手で、２人を取り押さえるな！覚悟は良い？」（９位）

「上等だァ！」（５０位）

「返り討ちにしてやるわ！」（６６位）

そしてはやて、ヴィータ、シャマルの３人は、一斉に飛び出す。

上位陣と下位陣のぶつかり合いの始まりである。

＊

一方のなのはは、ティアナと一緒にカリムを取り押さえる。

「カリムさん、もう貴方は絶対に許さないよ！全力で頭を冷やさせてあげる！」（８位）

なのはの怒りは増幅していた。
カリムが言ってはならない禁句を言い出したせいでご立腹である。

「今回ばかりはカリムさんのやり方、色々と傲慢すぎるから……ここで貴方を取り押さえます！」（６位）

ティアナもこのままカリムの暴走を放っては置けないと考える。
そして２人は『レイジングハート』と『クロスミラージュ』を構えだす。
以下にカリムでも２人とまともに戦っても勝てるはずがない。そんな２人にカリムはニヤリと笑い出す。

「ふふふ……それで私１人だけを囲んだつもりですか？」（７位）
「それはどういう意味なの！？」（８位）

不自然なカリムの言葉になのはは質問する。
すると後ろから奇妙な気配を感じた。

「なのはぁ～～～」（４５位）
「！？……ユーノ君！」（８位）

っとそこに、背後からメガネをかけた青年、ユーノが現れた。

「なのはぁ～～～！こっちに来てェ～！」（４５位）
「ニャアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

（8位）

ユーノの不気味な登場に、なのはは思わず『スターライト・ブレイカー』を放ち、ユーノを吹飛ばす。

「ふぇえええええ！こ……怖かったァァァァァ」（8位）

「……ユーノさん……哀れだ」（6位）

恐怖するなのはに呆れるティアナ。

だが、それが隙を生み出してしまうのである。

「うふふふ……哀れな小鳥ちゃん♪」（7位）

っとカリムが2人に飛び込むと、なのはとティアナは気づくのが遅く、カリムの鉄拳が2人を襲う。

だが、なのははその鉄拳を左片手で防ぐ。

「え！？」（7位）

「おりゃあああああああああああああああああ！」（8位）

そのままカリムを片手で投げる。

「ウソ！」（7位）

今のを防がれたカリムは驚きだすが、そのまま宙を浮かべながら回転して着地する。

「奇襲攻撃も通じないなんて……さすが『エースオブエース』と呼ばれる事はないですわ」（7位）

「御託は良いよ……そろそろ良い加減に頭を冷やさせてあげる……

行くよ、ティア！」（8位）
「はい！」（6位）
「やれるものならやってみなさい！」（7位）

＊

一方の銀時、フェイト、スバル、桂、リィンフォース、猿飛の6人はシャッハ、九兵衛、チンク、キャロの4人に囲まれている。

「さて、坂田銀時、フェイト・テスタロッサ、スバル・ナカジマ、桂小太郎、リィンフォース、そして上位陣側に入った猿飛あやねの6人は私達が上位になる為にここで消えてもらいます」（7位）
「投票されなかった人々の苦しみを味わって死ぬが良いです」（15位）

シャッハとキャロは武器を構えて攻撃態勢に入る。

「ふざけんな！たかが人気投票のためだけに、てめェらは人を殺める気か！？」（1位）
「そうだよ！それにこんなことをして、読者の投票を無駄にする訳！？」（3位）

その為だけに人を殺めようとする下位陣の暴走が納得できない銀時とフェイト。

「シャッハさん！キャロ！九兵衛さん！チンクさん！こんな事をやっても何も変わらないよ！」（2位）
「黙りなさい！2位である貴方だけには言われたくないです！行きますよ、皆！」（7位）

シャッハの暴走を止めようとするスバルに攻撃態勢に入るシャッハ。

「よーし、ロリ眼帯は『スティンガー』で援護しろ！僕、シャッハ、キャロの3人で上位陣を潰す！」（7位）

九兵衛が命令するかのように言い出すと……

「……ちょっと待て！何でお前が私に命令をするんだ！？」（7位）

「良いからさっさとやるんだ、ロリ眼帯」（7位）

ピク

「だから……なんで命令口なんだ？（怒）……大体、またお前は僕の事をロリ眼帯と言ったな？この貧乳眼帯」（7位）

ピク

「おい……今僕の事を貧乳眼帯って言ったな？だからそれは止めろと言っているのが分からないのか？」（7位）

「少なくとも、お前よりはマシだと思うが？」（7位）

「何だと！貴様のようなロリ系チビには言われたくない！」（7位）

「黙れ、貧兵衛！」（7位）

ブチィ！

「貧兵衛じゃない九兵衛だァァ！（怒）」（7位）

ドカァ！

「ごふぁあああああ！」（7位）

怒り任せで九兵衛はチンクを殴りだす。

「貴様ァァァァ！それは僕が貧乳だから名前を合成して名付けたあだ名かァァァァァ！（怒）」（7位）

「……さ……さっきから黙っておけばァァァァ！（怒）」（7位）

九兵衛は刀を抜き、チンクも対抗するために『スティンガー』を構える。

「大体、貴様の巨乳に対する嫉妬心は前から醜いと思っていたところだ！（怒）」（7位）

「何ォォォ！？そう言う貴様こそ大人びた体をした女性に対して嫉妬心を持たないのかァ！？（怒）」（7位）

「くだらん！貴様と一緒にするな！他人を嫉妬するような静寂な貴様と屈強なる精神を持った私との差は圧倒的に違う！貧兵衛はその貧乳によってまな板のような胸をこじられて消え去れ！（怒）」（7位）

「己ェェェェェェェェェェェェ！もう許さん！そこになおれ！成敗してくれる！（怒）」（7位）

「上等だ！返り討ちにしてやるゥゥゥ！（怒）」（7位）

九兵衛とチンクは完全に怒り任せに喧嘩した。

それを食い止めようと、我に返ったシャッハとキャロは大慌てで2人を止める。

「離せェ！このロリ眼帯だけは絶対に許せない！」（7位）

「それはこっちの台詞だ貧乳眼帯！貴様だけはこの場で仕留めてやるゥ！」（7位）

上位陣に対する嫉妬は完全に消え、２人はキャラ被れによる大喧嘩である。

「ちょ！止めなさい２人とも！」（７位）

「九兵衛さん、チンクさん、落ち着いてください！」（１５位）

シャッハとキャロは必死で止めるが、怒り出した２人の暴走はそう簡単には止まらない。

一方の銀時達はその光景に呆れて見るだけであった。

「あの２人、魔導競技大会では仲の悪かったが、何か最近さらに悪くなっていないか？」（４位）

っと桂は呆れて言いだす。

「これ、間違えてもお妙さんだけは見せられないわ」

猿飛も、コレが志村妙が見たらどれだけショックを受けるか想像する。

「フェイト隊長……」（２位）

「分かっているよ、スバル。流石に２人の仲の悪さは問題だね……」（３位）

スバルとフェイトもただ単にどう解説すれば良いのか分からなかった。

「何かコレ……完全に人気投票による争奪戦をどうでも良い風になっていますね？」（１０位）

「……そうだな」（１位）

何か見ていてどうでも良くなってきたリィンフォースと銀時。
するとリィンフォースは銀時の頭に浮いている順位を見て驚きだす。

「ぎ……銀時！銀時の順位が！」（１０位）
「ん……ってなんだこりゃーーー！？」（１位↓５位↓１３位）

徐々に順位が下がってきている事で驚く銀時。

「銀時の順位が！って私もォォォォォォォォ！？」（１０位↓２４位↓３６位）
「何がどうなっているんだ！？」（３９位↓４１位↓５６位）

リィンフォースの順位も変わりだして驚き、銀時は一体何が起こっているのか慌てて考える。
銀時だけじゃなかった。

「うぁあああああああああああああ！じゅ……順位がぁあああああああ！」（３位↓８位↓１７位）
「フェイトさんの順位が……って私もォ！？」（２位↓６位↓２３位）

フェイトもスバルも驚きだす。

「ば……馬鹿な！順位が変わってきているだと！？……は！まさかこれは何者かによる嫉妬と憎しみによる順位変化！？」（４位↓１８位↓２７位）

この急激な元凶はなんなのか、桂も理解した。

一方のなのは、ティアナ、はやて、キャロ、九兵衛、ヴィータ、シャマル、チンク、カリム、シャッハも順位が下がってきている事に驚きだして慌てる。
一体何があったのか？
コレは余りにも醜い戦いのくり返しによる作者の怒りか？
もしくは何者かによるデモなのか……全ては屋上にあった。

＊

「ふはははははははは！人が……人がゴミのようではないか！」
（最下位）

パチンコ店で人の順位争奪戦をしていて、順位を奪い合っている醜い人間同士の戦いを高笑いして見届けているのは、今回の『リリカル銀魂シリーズ』でも最も順位が最下位である次元航行隊提督のクロノ・ハラオウンであった。
頭の上には『最下位』っと浮んでいる。

「ふふふ……花を飾りつけるには土台となる土がいる。だが花は土台の……土の気持ちなど知ろうとしない。当たり前のように咲いている……土がなければ咲く事はできないのに……」（最下位）

その眼は憎しみが篭っている。
己の順位に納得が出来ず、誰よりも哀れられたその屈辱を受けた怒りであった。
ちなみにリィンをフルボコにして豚の身ぐるみを着せたのも全てクロノであった。
全てはこの人気争奪戦を起こすための……。

「だから、その身で思い知るが良い！土の気持ちを！そして土のあ

りがたみを！」（最下位）

右手を強く握り、怒りの感情をさらに表す。

「そしてこの小説『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』は俺が主人公となるのだ！はーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」（最下位）

勝利を手にしたように笑うクロノ。

しかし……それは自爆するような行動と化してしまう。

「なるほど……全てはてめェの仕業だった訳か」

「！？」（最下位）

クロノは驚きだして後ろを振り向くと……そこには怒り出していて、木刀を抜いている銀時と鋭い目つきでクロノを睨めるリィンフォースの姿であった。２人とも，なぜか頭の上に順位が浮んでいない。実は自力で抜き取ったのである。

「よぉ、久し振りだなァ…クロノ。まさか今回の出来事は全て……てめェが黒幕だったとはなぁ？」

ニヤリと笑っているが、その内心には怒りを表している。

こんなくだらない事を起こしたのは全部、このバカが原因であった事に。

その怒気は凄まじく、クロノもビビッてしまうほどであった。

「な……何を言っているんだ、銀時？それにほら……何の証拠もなく俺をしばいても君達の順位が下が……」（最下位）

「これから拷問処刑される貴方に口にする権利はないんですよ？」

青ざめて慌てて言い出すクロノに鋭く冷たい言葉を言い出すリィンフォース。
このままではまずいとクロノは『デュランダル』を構える。

「き……貴様等に最下位にされた屈辱をわかって溜まるか！１０年間でパワーアップした俺の力を見せてやる！ディランダス！」（最下位）
≪Ｒｏｇｅｒ．　Ｉｔ　ｓｔａｒｔｓ　ｔｈａｎ　ｔｈｉｓ．≫
「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ！」（最下位）

クロノは詠唱を唱え、『ディランダル』を構える。

「喰らえ！エターナルコフィン！」（最下位）

そして周辺の空間内に極低温を発生させる。
銀時とリィンフォースの体は、足から徐々に氷づく。

「永遠の眠りにさ迷え！ふはははははははは！」（最下位）

そう言って、クロノは高笑いをする。
もはや完全なる悪役みたいな存在であった。
しかし銀時とリィンフォースは手をつなげ、

「ユニゾン・イン！」

２人がそう叫びだすと、二人は白い光に包まれた。

「な……なんだ！？」（最下位）

突如の光にクロノは目を閉じた。数秒の輝きの後、光は消えておさまった。
クロノはゆっくりと目を開けた。目に入ったのは銀時だった。リインフォースの姿はない。しかも瞳が変化して蒼くなっている。
それは銀時とリィンフォースのユニゾンであった。

「まさか！合体したのか！？リィンフォースは融合型デバイスだったのか！」

クロノは驚きだす。
しかも銀時の体を氷付けた氷は綺麗に消えた。
そして銀時は木刀をゆっくりと天に上せるように構え、木刀に己の魔力を込める（性格にはリィンフォースのを）。

「ぬぅん！」

そしてそのまま地面を叩くかのように木刀を振るうと、極低温が発生された周辺の空間内が消えて通常の空間に戻る。

「ば……馬鹿な！オーバーSクラスの凍結魔法を！」（最下位）

魔法を打ち消された事に驚くクロノ。
そして最悪な事を知ってしまった。
それは銀時がリィンフォースとユニゾンした事でさらにパワーアップした事である。
タダさえ生身でもあのオーバーSランクのゾーマを倒せるほどの身体能力を持っているにもかかわらず、そんな銀時が魔法の力を手に入れれば、もう自分ではどうしようもならない。

「さぁ～って、そろそろ覚悟は良いか？お坊ちゃんよォ？」

ニヤリと笑って、その眼線はクロノに移すと……クロノは怯えた。
徐々にゆっくりと近づく銀時にクロノは思わず倒れて尻が地面に付く。

「待ってくれ！話し合えれば分かるはずだ！それにほらァ！お互いに『ジュエルシード事件』や『闇の書・ゾーマ事件』を解決した仲間じゃないか！」（最下位）

「それとコレとは話は別だ……それに俺は……お前にだけは絶対に許せない事があるんだぜ？」

居合いの構えをして木刀を握る銀時。
そして鋭い眼線で睨みつけ……

「テメェ、何で俺と同じ声になっているんだァァァァァ！」

【あ……そう言えば一緒だ】

「いや！それは俺も分からないよ！俺だって好きでこんな声になった訳……じゃってぎゃあああああああ

かくして、黒幕であるクロノを倒した銀時とリィンフォースの活躍により、人気投票争奪戦は幕と閉じた。
黒幕であるクロノは銀時に死ぬほど辛い拷問処刑された事でみんなに謝罪する。
コレにはフェイト達も苦笑するしかなかった。
そしてこの事件を起こしたクロノは管理局にすんごく叱られて、数え切れない始末書を送られたのであった。

≪人気争奪戦・完≫

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

銀八
「へーい、んじゃ今回も『ブレイブルー』のキャラクターをアシスタンとさせてもらいます。今回のアシスタントはこの人……」

レイチェル
「この私、レイチェル・アルカードが時期にアシスタントするわよ。まぁ、今回は僕達は留守にさせているけど？所で質問良いかしら？」

銀八
「なんでしょうか？」

レイチェル
「坂田銀時って男、確かにラグナに似ているわね……特に銀の魔導書ごと『ブレイシルバー』……まちがいなく『蒼の魔導書（ブレイブルー）』に匹敵するわね」

銀八
「だろぉ？そんな事より質問答えるぞ」

レイチェル
「ええ……最初はこの人、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威銀時
「キャラ崩壊がスゴいな」

ヴィヴィオ
「特にキャロさんが」

神威　銀時
「マジで恐いよ、それより質問」

ヴィヴィオ
「そうだね。スパウザー（スカウターモドキ）でリリカル組の戦闘力を教えて下さい」

神威　銀時
「色々恐ろしい結果になりそうだけど」』……面白そうね」

とレイチェルはスパウザーをつけて、リリカル組の戦闘力を測る。
結果はこうなった。

フェイト	8974K
スバル	10325K
なのは	9238K
ティアナ	5347K
はやて	8342K
エリオ	5877K
キャロ	1734K
シグナム	8520K
ヴィータ	7166K
シャマル	3244K
ザフィーラ	6899K
アルフ	6434K
ユーノ	2271K
ギンガ	5931K
レイチェル	

「スバルが一番高いようね。……まぁあの子は確か、隊長や副隊長が力を合わせても全く歯が立たなかった敵を1人で倒したから……そうなるでしょ？」

銀八
「倒したと言うより救った方が正しいんじゃねぇ？」

レイチェル
「そうね」

銀八
「と言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい」

レイチェル
「次の質問行くわよ。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん……ってあれ？この読者ってここの小説の感想を小説にしている物好きな読者のようね。」

銀八
「まぁな。けど、笑えるから作者は好きだそうだぜ？んで質問はっと。『かがみ
「いえいえ・・・ってかがみん言うな！！」

ウッソ
「まあまあ，では質問です．

？この質問で新八さんが次回質問したいって言ってますがどうすればいいですか？させてもいいのですか？

？大変失礼なお話です．リリカルなのはのアニメをしっかり見てい

ない僕は，ギンガの武器などの装備がよくわかりません．ギンガさん・・・この場合の対処方法を教えてください．

？は毎回聞いています，『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｓ』についてです．今回はまだ話題に上がっていないたまさんや僕らが関わったエピソード（特に闇鍋）について話を聞かせてください

」

こなた

「これからも頑張ってね～．あとヴィータちゃん今後もよろしく！！応援するからね～」』。ズバリお答えします。？は……後半までお待ちください。この小説はまだ中盤しか進んでいませんので、ご勘弁を。んで？は、この小説のスバルは『リボルバー・ナックル』は全く使用しません。つまり、２つの『リボルバー・ナックル』はギンガが使用し、ローラースケート型のデバイス『ブリッツキャリバー』をも使用します。そんで主に使う魔法は『トライシールド』『ナックルバンカー』『ウイングロード』『ディフェンサー』『リボルバーギムレット』ですね。はっきり言って、妹のスバルに比べたら地味です！」

レイチェル

「同感だわ。姉なのに、原作でも登場がかなり遅れている。しかも活躍はそんなにない。はっきり言って哀れな女性（ひと）だわ」

銀八

「俺が言うのもなんだけど……お前容赦ねぇなぁ！」

っと銀八はレイチェルの容赦のなさに呆れる。

銀八
「そんで？は……よろしくお願いします！」

レイチェル
「とりあえず言っておくわ。まずね……闇鍋は凄かったわね……あんなの食べて良く生きられたって感じだわ。だけどどうしてもあのメガネザルって男は哀れにしか思えないわ。８話を見て、好きな女に変身するなんて……変態以外に他はないわ。大体、侍っと言うものを目指すんだったらアイドルファンを止めるべきね。下品な歌しか歌えない女だったら尚更引くべきよ。たまって女性は、機械（からくり）と言う面白い技術で生み出されたようね。こなたって少女も小説を面白くする為には必要不可欠な存在ね。彼女達はもっと活躍しても良いぐらいよ。メガネザルや姉のメスゴリラなんかよりずっと良いしね。後、シャクティは遠慮しないでヒロインとしてめだってもバチは当たらないわ。あのメガネザルを最初に出さずに後半に出そうと予定を立てる黒神の気持ちも分かるわ」

銀八
「お前、新八と妙に殺されてもしらねぇぞ？」

レイチェル
「あらそう……っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、黒神はこれからも貴方を応援しているわよ」

銀八
「んじゃ次の質問。ペンネーム『クアンタ』さん『リリカル組で土方スペシャル（犬のエサ）（笑）を気に入る人はいるのですか。』」

レイチェル
「あんな犬の餌以下の物を気に入る人はいないわね」

銀八
「即答！……でも正しい。てな訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『月光閃火』さん。『どっせらしょ～い…月光閃火です♪

輝刃「…輝刃だ。」

うはぁ…凄い激しくなってるね～。ま、面白いから良いけど♪

輝刃「…サラッと恐い事言うな…。（汗）」

まぁまぁ…で、質問が二つほど。

1．なのはちゃんに質問…っていうか完璧アドバイスですが、銀さんを振り向かせたいのであるならその嫉妬深い所とブラックになる所を治しゃあ良いんじゃないかと自分は思います。あんまり嫉妬深い女性は、男に嫌われますよ？

2．輝刃「…二つ目はこの俺…輝刃からだ。キャロよ…そんなに寂しい思いをしているなら、俺が構ってやってもいいぞ？俺は子供と接するのは、依頼で孤児院に行く度に構ってやっていたからな。何なら肩車とかもするぞ？言っとくが…『ロリコン』などと言う奴ら…後でボコすからそのつもりで（黒睨）。」

という訳でこれからもよろしくです♪

輝刃「…俺が主人公の小説の方もよろしく頼む。（礼）」『」

レイチェル

「ズバリ答えるわ。1は本人も了解するはずよ。そして2は……何、このロリコン？」

銀八
「いっちゃったよこの人！」

即答にロリコンと言い出すレイチェルにツッコむ銀八。

レイチェル
「これ……思いっきり質問と言うよりもアドバイスと要求ね。っと言う訳で『月光閃火』さん、次からもっと質問らしい質問をしなさい」

銀八
「次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問銀八先生は、今まで生きた人生で女性にもてた試しがありますか？まあないと思いますけどｗｗ』……俺をいじめて楽しいのかァァァ！」

っと銀八はいつものように『正宗の胃袋』さんの質問を破る。
それを見てレイチェルは呆れる。

銀八
「『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていろォ！」

レイチェル
（哀れな人）

レイチェル
「次行くわよ。ペンネーム『アクセル』さんの質問ね。『今回の人

気投票編で完全に修羅として覚醒したキャロと魔王なのはが戦ったらどちらが勝ちますか？ぶっちゃけ今のキャロならＳＬＢをくらっても平然としてそうなのでいい勝負になるのではないかと思います。』」

銀八
「怖ェー質問だな！……ズバリ答えるとするぜ。おそらくは引き分けとなります。だって、どっちが勝つか予想できないし！」

レイチェル
「『アクセル』さん……貴方、廊下に立っていなさい。次行くわよ。
ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
1．Ｆａｔｅ関係ですが、サーヴァントをなのはキャラで例えると誰ですか？
セイバー（剣の騎士）＝
アーチャー（弓の騎士）＝
ランサー（槍の騎士）＝
ライダー（騎乗兵）＝
キャスター（魔術師）＝
バーサーカー（狂戦士）＝
アサシン（暗殺者）＝
2．作者さんに質問です。赤夜叉さんの1作目の「銀魂　銀時ＶＳサーヴァント！聖杯大争奪戦！！！」がありますが、もしリメイクするとしたらどうなりますか？』」

銀八
「ズバリ答えます。そうですねェ……1は強いて言えばこうなります。」

セイバー（剣の騎士）＝シグナム
アーチャー（弓の騎士）＝ティアナ
ランサー（槍の騎士）＝エリオ
ライダー（騎乗兵）＝キャロ
キャスター（魔術師）＝フェイト
バーサーカー（狂戦士）＝なのは
アサシン（暗殺者）＝シャマル

銀八
「原作版だとこうなります。この小説で言うと、それはそちらの想像でお任せします。2はまちがいなく作者は、銀時はセイバーのマスターとなり、2人はラブラブにさせます。さらにアーチャーを登場させます。そしてランサー、ライダー、バーサーカー、イリヤ、桜の出番を増やします。後、アサシンの強さ設定を変えるでしょう。なんか架空の英霊っと言うから、もし架空じゃなく本物の佐々木小次郎だったらセイバーに匹敵するんじゃねぇのって作者も考えています。もちろん、銀時のライバルとして。そんで琴峰も登場させて、ラスボスはギルガメッシュより凶暴そうな英霊にするでしょう。その代わり、士郎と凛の出番は大幅カットなります」

レイチェル
「あら、それは面白そうね。」

銀八
「っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。」

レイチェル
「次行くわよ。ペンネーム『ディワールド』さん『風上光

「どうも、今回は魔法少女リリカルなのはＵＬＴＲＡＭＡＮの主人公、風上光と・・・。」

翼

「久々に来ました！翼です。」

フェイト

「光と同じ作品に出てるフェイト・テスタロッサです。」

光

「では質問一、クロスオーバー学園でなのはさんと銀さんキスしましたけどなのはさん嬉しいですか？なのはさん本人お答えください。」

翼

「銀八先生、怒らないでくださいね！来週のジャンプ代あげますから！私のキスでもいいですけど／／／」

フェイト

「質問二、この小説を見てなのは達が凄く怖いです。後、自分も、なのは達が元に戻る日は来ますか？」

翼

「質問三、黒神さんに質問、リリなのストライカーズでフェイトがクロノにお兄ちゃんって言ってましたけど羨ましいですか？それとも怨めかしいですか？
ちなみにウチの作者は両方です。
さらに殺意も沸いたとか・・・。（実話）」『」

銀八

「ズバリ答えます。1は、……なのはさん、お願いします。」

なのは

「にゃはははははは……凄く嬉しいよ♪／／／」

っとなのはは即答する。

銀八

「ええ、そうなりますね。んで2は、わかりません」

レイチェル

「確かに……あの魔王の如くの威圧感、もしかすれば、あの『黒き獣』にも対抗できるわ」

レイチェルもなのはの魔王化は恐怖を抱いている。

下手すれば殺されるぐらいに。

銀八

「三は別にどっちでもないようです。ただ、作者はクロノの事が嫌いなだけで、それ以上でもそれ以下でもないです」

レイチェル

「っと言う訳で『ディワールド』さん、『クロスオーバー学園』を中心に小説を進めなさい」

銀八

「次ィ、ペンネーム『十河』さん『1・キャロは怒りや憎悪の力でＦＦ7のセフィロスのようにでかい彗星（スーパーノヴァ）が放てそうな感じなんです・・。

ほかにもなんかとんでもないものを放てそうな感じがしますが・・？

2・この小説のキャラでバイオハザードシリーズの人物に当てはめるとしたらどうなりますか？

3・リィンはクロスボーンガンダムに乗ったら海賊流の戦い方を見せてくれるのでしょうか？

クロスボーンガンダムはビームサーベル、ビームザンバー（ビームサーベルよりも高出力でビームシールドも切り裂ける）、スクリューウェッブ（先端が回転するムチ）、ブランドマーカー（手甲部ビームナイフ）といった近接の武器が充実してます。

誰にどの武器を持たせますか？

『……ズバリ答えます。1は、刀がないと無理でしょう？2は……キャロは間違いなくあのチェーンソーを持っている奴ね。3はそこは『十河』さんの想像でお任せします。

レイチェル

「っと言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい。次行くわよ。ペンネーム『風花』さん『質問は三つです

森羅

「？もし銀八が本編の人気投票編に出れるとしたら出たいか？ってか銀時が銀八よりも高いなんてゆるさねぇぞ」

レイン

「我慢しろ森羅。？胸が小さいキャラに聞く。作者の知り合いが言っていたが弓道をすると胸が大きくなるらしいぞ。やってみるか？そういやあ、シグナムのデバイス、レヴァンテインも弓になるから胸が大きいのか？どうでもいいが…」

？最後にこれはお願いなんですが私の書いているＥＴＥＲＥＮＡＬの人気投票でレインや森羅に投票していただけませんか？理由は…

さくら

「黙りなさい☆」

ごめんなさい。さくらが怖くて言えません
お願いです。銀八先生も投票できますので
『」

銀八
「ズバリ答えます。？は……有難う！」

銀八は森羅に強い感謝をする。

レイチェル
「？は……考えても……ってゴホン！／／／……きゅ……九兵衛とヴィータって女なら絶対にやると思うわ。そして？は作者はもう投票したわよ。」

銀八
「っと言う訳で『風花』さん、これからも頑張ってください。次ィ、ペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『今回は銀さんに質問です。「もし銀さんの食事がチョコパフェ等の甘いものだけしか出なくなったら、何日で飽きますか？」』……おそらくあの男だったら商いだろ？」

レイチェル
「確かにそうなるわね？『ＮＡＮＯ』さん、通常の人間は何回も続けば飽きるわよ？」

銀八
「んでこれが最後の質問だ。ペンネーム『ヤマトノオロチ』さんからの質問。『毎日欠かさず読んでいますマユゾンネタとバイオハザードのネタがおもしろいです。
これからも頑張ってください。

質問1　キャロが最近ヤンデレ化しつつあります。「ス〇―ルデイズ」の桂〇葉みたく狂気じみた行為に走らなければいいか心配です。ここまでキャロを放置したのはやっぱりエリオの所為ですか？

質問2　なのはさんに質問です。銀魂総集本に書かれていた2つ名をなのはさんのも考えました。気にいった名を一つ選んでください。

1「傲慢なエ―スオブエ―ス」

2「管理局の白き魔王」

3「機動6課の破壊神」

質問3フェイト、スバル、シグナム、ティアナ、エリオ、キャロ、ヴィ―タに質問です。他の漫画、アニメ、ゲームのキャラの中で戦ってみたい相手を選んでください。

ブレイブルー　ハクメン、

鋼の錬金術師　キングブラットレイ

灼眼のシャナ　シャナ

魔法先生ねぎま　フェイトア―フェルンクス　ジャックラカン

フェイトステイナイト　セイバー　バ―サ―カ

ナルト　カカシ　キラービ
ワンピース　ルフィ　ゾロ
バイオハザード　ウェスカー　タイラント』……ズバリ答えます。
1はそれはないかと思います……多分」

多分かい！

銀八
「いちいちツッコムな、ナレーション。そんで2は……」」

なのは
「それは……私に喧嘩売っているのォォォォォォォォォォ！」

そう言って、なのはは怒り任せに『デスペレード・デモンブレイカー』を放つ。

レイチェル
「て何よ、このデタラメな魔力砲！？それになんで私って……いんぎゃあああああああ

ます」

フェイト
「えーっとう……とりあえず……同じ稲妻使いのカカシで」

スバル
「合成小説で知り合った、セイバーと一度手合わせしてみたいな♪後、ハクメンや三刀流使いのゾロって人も。」

シグナム
「同じ炎の剣士としてシャナを希望する」

ティアナ
「許せない存在としてウェスカー。命を何だと思っているのよ……」

エリオ
「最も強い努力家としてラカンさんを！」

キャロ
「えっとう……どれも勝てそうな人はいませんので特にないです……」

ヴィータ
「パワー勝負なら、バーサーカーかな？」

それぞれ戦いたい相手を希望して言い出す。（キャロを除いて）

銀八
「っと言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい。

以上持ちまして質問終了。んで、今回の質問コーナーどうでした？」

レイチェル
「い……命がけだって事をイヤと思い知らされたわ……」

銀八
「だそうです。次回が『ブレイブルー』キャラをアシスタントさせるのを最後にします。てな訳で、次回もお楽しみ～」

第六十訓：人気投票を気にしないと思うのは、大抵上位陣が言う台詞である（後編）

黒神
「いよいよ６０順目！次回から新ＯＰと新ＥＤを発表します！」

はやて
「次回、『人の進む道はそれぞれ別々にある』！テイクオフ！」

第六十一訓：人の進む道はそれぞれ別々にある（前書き）

銀時がまさかの訓練！？

『ブレイシルバー』の製作者の１人がついに登場！

そしてあの人物があの人物と稽古！

桂

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』活黙せよ！」

第六十一訓：人の進む道はそれぞれ別々にある

そこはスカリエッティのアジトの訓練場。
そこで銀時が1人、訓練をしていたのである。
銀時の容姿は今、白い着物ではなく白銀の『●レイブルー』の『ラグナ』が着ているコスプ……じゃなくバリアジャケットである。
実は、スカリエッティから魔法の鍛錬をした方が良いのではっと誘われ，最初はめんどくさいと言う理由である。
しかし、訓練を受ける度にチョコパフェをおごると言う理由で銀時は、速特訓を受け入れた。
そして初期魔法の使い方を教わり始めたが、銀時の場合は身体能力の高さの故か異常なまでの速さであっという間にミッションをクリアしたのである。
魔法の使い方に剣術と魔法の合成戦術に魔力のコントロールなどほぼ完璧であった。
銀時日頃く、「魔力を使うのって、何か手足を動かす見たいな感じだな」っと言う単純な理由で使いこなしていたのである。
だが、それは銀時の魔力がかなり高いことから言えることである。
なのはやフェイトでも本場の魔導師でも銀時のような急激な成長は不可能である。
それが魔導師に目覚めた瞬間にここまで成長するとなるのは、銀時は侍だけじゃなく魔導師としての素質もあった。

スパパパパパパパパパ！！！！

突如，大量のガジェットが一気に切断されてバラバラになる。
そこは空を飛んでいて、白銀の刀と白い大剣を持っている銀時が大

量のガジェットを切りまくる。
２つの剣をメチャクチャに振っているようだが、その剣速は異常なまでに速くてしかも魔力を込めて斬撃を飛ばして遠距離攻撃も可能にしている。
その為次から次へとガジェットが何度も斬り込まれている。
バラバラに斬ったガジェットを踏み台にしてさらに飛翔しえ飛びあがると、刀を鞘に納めて大剣を腰に背負い、

「コイツで、終(し)めーだ！」

一気に右手から巨大な白銀に輝く魔力弾を放ち、超大型ガジェットに直撃して貫通し、超大型がジェットは大爆発する。
そして銀時は着地すると、

≪ＳＳランクミッションクリア。クリアタイム、００：０１：４５、自己最高記録タイム≫

コンピューターらしきものが銀時の記録を言い出す。
その様子を見た源外とスカリエッティは感心するように笑っている。
ちなみの銀時が魔導師に目覚めた事はスバル、ティアナ、スカリエッティ、源外の４人以外は知られていない。
何故なら知られたくないからである。
その為、機動六課のメンバーは勿論、ナンバーズもこの事は知られていない。

「いやー、さすがは白夜叉だ。もう天下統一並みの実力を持っているな」
「そうかい……」

銀時はゆっくりと訓練所からでると、スカリエッティに話し出す。

「そう言うあんたも大したもんだ。俺みたいな魔法に関係ない人物にここまで強力な魔導師にさせるほどのデバイスを作るなんて……コスプレのようなバリアジャケットは除くがな」

完全に●グナのコスプレである為、もしバリアジャケットがコスプレじゃなければ今頃自分も機動六課の魔導師になれたんだが、良い歳こいてコスプレした姿を誰にも見せられたくなかった。

「それに、魔導師って言うのはデバイスを使いこなすだけで自然的に魔力があふれ出るもんだな……誰にでもなれるって訳か……」

それはつまり、桂や神楽、それにエリザベスや月詠に九兵衛、それに辰馬、近藤、山崎などにも使わせれば魔導師に目覚めるような物である。そんな銀時に源外が言い出す。

「銀の字、その事なんだが……どうやら俺達は魔導師の存在を勘違いしていたようじゃ」

「そいつはどういう事だよ、爺さん」

源外の不自然な言葉に銀時が聞き出す。

「銀時、確かに君には異常なまでの身体能力があるから魔導師になれたかもしれない……だが、だからといって誰でもデバイスを使用すれば魔導師に目覚める訳ではない」

「おいおい、身体能力が高ければ誰でも魔導師に目覚めるんじゃなかったのか？」

以前に言った事とは全く違うスカリエッティに銀時は驚きだす。

「どうやら私達は何やら勘違いしてしまったようだ。その原因は、銀時と比べて身体能力がそんなにもなかったはずの高町なのはがまだ少女だった頃にどうして魔導師に目覚めたのかだ」

スカリエッティがそう言うと、銀時も理解する。

なんで身体能力がそんなに高くないなのはが少女の頃に魔導師に目覚めたのか、身体能力が高くなければ魔導師にはなれないはずなのに、疑うよちもなかった。

「理由は簡単だ。彼女には素質があったから。人間には生まれた時に素質があるかないかの2つのランダムに決められるもんだ。彼女は素質があった。そして君にも素質があった。それだけさ」

スカリエッティが奥深く説明すると、銀時は自分にも魔導師としての素質が最初にあったと驚きだす。

「だが、素質があるからっと言って強大な魔力が得られる訳ではない。……おそらく君のその魔力の異常なまでの高さは、身体能力の高さが起こした急激な魔力の増幅によるものだ。人が何かを鍛える事で成長すると同じように，魔力も人間の一部の為、何かの訓練による影響により、身体能力が上がるたびに魔力が同時に自然的に増幅される……魔力の成長って訳だ」

「……どうりで異常なまでの魔力が得られる訳だ……」

銀時も最初に『銀の魔導書（ブレイシルバー）』を使ったときに不自然に感じた魔力の異常なまでの高さ。

それは全て過去に鍛錬を受けた事で強化され続けた影響による。

「俺の魔力の高さは大抵分かった。……だがそろそろスカリエッティや爺さんに聞きてぇ事がある」

そう言うと、銀時は2つの剣を抜き出して説明する。

「この2つの刀、コイツもスバルの『ティルヴィングエア』と同じカヴェゼシェンデバイスだろ？しかもこの右腕も……」

銀時がそう言うと、源外とスカリエッティが説明する。

「『ブレイシルバー』には知っての通り、1つに3つのフォルムが発動されている。攻守共にバランスが取れており、『ティルヴィングエア』に匹敵する神速剣技を可能にさせ，大量の魔力が収束されている『銀刀・夜叉鎖月（ぎんとう・やしゃさつき）』。破壊的な力を持っており，大剣、大砲、大鎌に変化することが可能な『シルバーエッジ』そして魔力を収束させて、悪魔の腕の如く相手の魔力を吸収することが出来る『ディアボリク・シルバー』。どれもコレも固有武装並みの単体武装で、簡単に説明すれば1つのデバイスに2つのアームデバイスとブーストデバイスが付いているって訳だ。その腕の勢作は勿論私と源外がしといた」

確かに、1つに3つのデバイスが付いていたら正に採用である。

銀時だけのオリジナルデバイスとも言えるだろう。

「デバイス作りにも中々面白いものがあるらしいからな，江戸一番の発明家として気合入れて作らせて貰った。なに，流石にそいつには醤油が出る機能はつけていないから安心しろ」

源外がそう言うと、銀時はゾッとした。

もしまた変な昨日を付けられたらややこしい事ではない。

「しかもこの2つの剣……かなりの業物じゃねぇか……握るだけで

凄い威圧感を感じるぜ」

手に握っただけでも分かる刀の強度。
そしてウゼルとの決戦や訓練での使用で感じた切れ味の良さ。
おそらくは最上級大業物に認定されてもおかしくはない。

「2つとも七星神刀（しちせいしんとう）に引けをとらない威力を持っておるぞ。元々カヴェゼシェンデバイスはデバイス化させるための武器が業物でなければ付くれはしない。以前に蒼娘から借りた『ティルヴィングエア』、妙寿だからこそ作れた伝説の機械刀（からくりとう）じゃ。コレに対抗するには、デバイス化させるための武器が相当の名刀でなければならない」

源外の言う事も納得する銀時。
すると……銀時はある事を理解した。

「ちょっと待て……確かこの『ブレイシルバー』は対『紅桜』用に作られたデバイスだったよな？」
「ああ、そうだが？」

突如の銀時の質問にスカリエッティは意外そうに驚く。

「じゃあ、この2つの刀をデバイス化させたのは爺さんとスカリエッティだよな？」
「そりゃそうさ。2人係で作るのも苦労したんだぜ？感謝しな、銀の字」

愉快そうに笑いながら言い出す源外。
そしてデバイス化させるために作られた業物並の刀。
『ブレイシルバー』を完成させるには刀匠の力も必要である。
源外とスカリエッティは技術者であって刀匠ではない。

そしてこの刀を打てる者は、銀時の知っている人物の中であの人物しかいない。

「2人じゃなく、3人だろ。源外さん」

突如、1人の女性が声をかけて話しかける。
銀時は声が聞こえた方向を振り向くと、そこには銀時が頭の中で浮んでいた人物がいた。
髪の毛は立っているが左側がおろしている雰囲気で、右手には鋼鉄のハンマーを持っている女刀匠、村田鉄子（むらたてつこ）の姿があった。

「鉄子!?」
「久し振り、銀さん。まさか異世界で再会するなんて思ってもいなかったよ」

思わぬ再開に驚く哲子。銀時はそれ以上に驚いている。
話を聞く限り、鉄子は新八に銀時と神楽が行方不明になっていると言う噂を聞き入れ、一緒に探す用に手伝う中、九兵衛達と同じく白い光に飲み込まれて、このアジトに飛ばされた。
源外が行方不明になってから3日後の後のようである。そして源外から聞けば、ここはアニメである『魔法少女リリカルなのは』の世界である事に最初は信じられなかったが、周りを良く見ると、ここは確かに江戸ではないと理解し、納得した。

「にしてもお前、良く『魔法少女リリカルなのは』の存在を知っているな?」
「……ああ、以前に新八っと言う銀さんの仲間から『リリカルなのは』の事を聞かされてな……なんでも『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』の世界に行く為に、何度も『Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』を見て記録し、ストーリーの内容を覚えたそうだ」

「マジかよ！つうかそれじゃあアイツも連れて行けばよかった！肝心な時にいないなんて腹立つんだけど！」

新八もコンサートから引きずり出して連れて行けば良かったと後悔する銀時。

「だが、連れて行った所でその知識は役には立たないようだ」

鉄子は新八が得た原作の知識は役に立たないとはっきりと言い出す。

「おいおい……それはどういう意味だ？」

「そこは私が説明しよう」

っとスカリエッティが説明する。

「鉄子殿の話によれば、原作の私達ナンバーズは味方ではなく敵だそうだ」

「テメェーらが？」

スカリエッティ達が敵になる事を想像できなかった銀時。

それに更なる深刻な事を聞きだす。

「さらに言えば、妙寿の作り上げた伝説のデバイス『七星神刀（しちせいしんとう）』は原作では存在しないようだ」

「おいおい、マジかよ？」

じゃあ、スバルが持っているデバイスはなんなのかと不思議がる銀時。

だが何はともあれ、今回も原作どおりでは進まない事が大抵分かった。

そして鉄子はある事を思い出して銀時に話し出す。

「後、これはあのメガネの少年から聞かされたことだが、何か自慢げに話していたようだった」

「自慢？」

「何でも……『この知識を活かせば、なのはちゃんは僕の事を惚れ直してくれるんじゃないかな～／／／♪そして，志村家に嫁ぐ為に僕と結婚したりしてぇ♪な～んて♪』っと、凄くウザそうに言っていたような……」

鉄子の言葉に、銀時は大量の汗を流して青ざめる。

新八はなのはに強く惚れ込んでいるのであった。

詳しくは赤夜叉さんの『『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～』を。

鉄子はなんで銀時が青ざめているのかを考え、源外とスカリエッティは笑いをこらえる。

「て……鉄子殿……実はな……（ぷぷ）！」

スカリエッティは鉄子に青ざめている銀時の原因を話す。

フェイトをはじめ、スバル、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ヴィンティ、ノーヴェなど１２人の美少女に好意を持たされてハーレム生活をしている。

その為、機動六課の男性隊員達からは強い嫉妬されている。

なのはが銀時に好意を持っていると新八が知れば、まちがいなく銀時はとんでもない事に会うかもしれないと恐れているのである。

銀時のハーレム生活を聞いて鉄子は苦笑して銀時から少し引く。

「何、その顔？」

「い……いや……なんでもないよ……。それと聞いたよ……銀さん

……鬼兵隊と紅桜の事を……」

苦笑顔は止めて、真剣な表情で銀時を見る鉄子。
まさか鬼兵隊も存在していたとは驚きだした。それも破壊したはずの紅桜がまだ存在していた事に。
スカリエッティから騎兵隊の紅桜を聞かされ、紅桜がどれ程危険な存在なのかを教えた。
その結果、スカリエッティに頼まれて源外と共に『ブレイシルバー』を勢作したのである。

「紅桜を復活させて、また悪用に使おうとする鬼兵隊を……私は許せない。だから私は，銀さんが誰かを護る為の剣である『ブレイシルバー』を作るのを協力した」

鉄子のその眼には、紅桜に対する怒りを感じた。
何故なら、その紅桜を作り出したのは元は鉄子の兄であった。

村田鉄矢（むらたてつや）

江戸随一の刀匠・村田仁鉄の息子及び、鉄子の兄である。
父の後を継ぎ、妹の鉄子と共に刀鍛冶を営んでいた。
鉄子の『誰かを護る剣』とは違い、『最強の剣』を作り出すことに強く熱心していた。
剣を強くするためだけに機械（からくり）技術も学んで、父を越えるべく、剣以外のものを捨ててまで、生前父が打った刀『紅桜』を機械と融合させ、対戦艦用機械機動兵器（たいせんかんようからくりきどうへいき）として新たな『紅桜』を開発した。
暴走した似蔵の攻撃から鉄子をかばい、重傷を負って銀時が鉄子の打った剣で『紅桜』を折ったところを眼に焼きつけ、最後は鉄子が良い鍛冶屋になる事を願い、そのままこの世を去った。

今回の黒幕である鬼兵隊に兄が魂を込めて打った刀をまた悪用に使われるのが、刀匠として、そして妹として許せないのである。

「だから……頼む、銀さん。その剣で……紅桜を……兄の心を汚したあの禍々しい剣を破壊してくれ！」

鉄子は土下座して銀時に願う。

そんな鉄子に銀時は「安心しな……紅桜はもう一度、俺がこの剣でぶった斬ってやるよ」っと鉄子の願いを聞き入れる。

＊

シュウウウウウウウウウ！！

パパパパパパパパパパパパァン！

夜の訓練所で響き渡る竹刀が振るう音とぶつかり合う音。

そこにはスバルが桂が剣術の鍛錬をしているのが分かった。

「うわぁ……凄いなぁ」

『マジで真剣勝負みたい』

その様子を驚いて見るはやてと無表現で見るエリザベス。

パァン！

お互いの一太刀がぶつかり合い、一瞬にして互いにバックする。
そして待つ事もなくすぐさまに突撃し、お互いに神速の剣筋で竹刀を振り回す。

バシシシ

2人が何故竹刀を使って戦っているかと言うと……1時間前にスバルが桂に剣術の稽古を付き合って欲しいっと頼まれたのである。
興味を持ったはやてとエリザベスはその稽古を見届けている。
ちなみにスバルの衣装は、バリアジャケットでもなく訓練服でもなく、我服でもない。
機動六課の制服であった。

スパァーン！

スバルが竹刀を振るうと、鋭い太刀筋の余りに石橋が綺麗に斬られてそれが桂に向かって弾丸のように襲うが、

「むぅ！？」

スパァーン！

桂もまた素早く竹刀を振って、綺麗さっぱりと一刀両断に斬った。

（竹刀で石を斬った！？どうすればそれができるんや！？）

はやても驚きを隠せなかった。
そして桂が石を切断した隙にと、スバルが一歩大きく踏み出すと、

「はぁ！」

神速の面打ちを炸裂させるが……

「おおぉ！」

桂が素早く竹刀を神速に振り上げ、

バキィィィィン！

スバルの竹刀を折ったのである。
折られた竹刀の破片は宙に大きく浮び、それがはやてとエリザベスの手前に落ちる。
一方の桂の竹刀もタダではすまなかった、刀身半分がヒビが入っている。
コレではもう使い物にはならない。

「流石です、桂さん……参りました」
「何、こっちの竹刀ももう使い物にはならない。それに真剣での勝負だったらまだ勝負は続いていた所だ」

愉快そうに言い出す桂。
だが内密では予想以上のスバルの剣筋の高さに驚いていた。
眼で見るよりも手合わせすることでスバルの剣術がどれ程高いか改めて知った。
魔法なしでこの強さ……さらに言うと桂から見てスバルは天性の才を持っている事が分かった。
まだ１５で神速と言われるばかりの剣術、まちがいなく神童と言われても良いであろう。

「お疲れ、桂さん」

はやては桂に近づき、タオルを桂に渡す。

「それにしても……また一段と強くなったなぁ、スバル。もう機動六課最強と言われてもええんちゃう？」

そして竹刀とは言え、桂と対抗に渡り合ったスバルに感心するはやては面白そうにそう言いだすと……

「……そんなのどうでも良いです」

最強の称号など、スバルにはどうでも良かった。

「元々剣術を学んだのも、侍の強さをもっと知りたくて必死に死ぬほど努力して剣術を学んだだけです。魔法はついでと言う形で……魔導士なのに侍の剣術を学ぶのっておかしいと思われますけどね……」

そう思うと、自分の存在はおかしいと考えるスバル。

「そんなことはない。魔導士だからとは言え、侍を学ぶ事は恥じるべきじゃない。それに……スバル殿には天性の才を持っている。むしろ誇っても……」

「たとえそれがなくても……銀さんと出会っていればそれでも私は剣術を学んでいましたよ」

桂が自分には才能があると思われても、銀時に追いつくためだけにスバルは剣術を学んでいた。

自分にはなんの称号もいらない。名誉の地位もどうでも良かった。

「それにしても勿体あらへんなぁ。正式に機動六課に配属されなくても、それほどの腕なら隊長とは行かなくても副隊長にはなっているのに……」

「ギン姉を差し置いて、妹である私が姉より上の立場に成るわけには行かないんですよ」

そうすれば姉のギンガに強いコンプレックスを抱かれてしまうようである。

「名誉と地位もいらない。……私が欲しいのはただ1つ」

銀時との出会いで見つけた自分が求めるもの。

「どんな時でも自分の大切なものを、そして己の魂を護れる強さだけですよ」

桂、エリザベス、はやてに笑顔を向けて、スバルははっきりと言い出す。

欲しいのは、銀時のように自分の大切なものを護れる強さと無限の剣術の領域である。

「自分自身を誇っているヒマは私にはない。1つの剣技を会得すると、見えてしまうんです。新たな技を会得するか、もしくはその技を磨くのか……それを追いかけるのが精一杯だよ」

夜の星空を見上げて、スバルはまだ自分が見えていない未知なる領域を想像して思い浮かべる。

「自分の目的と新たなる剣の領域が見えてくるんです。そりゃ、剣術の稽古は魔導士教育訓練よりは辛いけど……その辛さが何故か、夢中になるほど楽しいよ」

「……ふ、それは分かるさ」

稽古が辛いのにそれが楽しく感じるスバルの気持ちが理解する桂。

はやてとエリザベスは、その思いは剣をただ単に極めようとする者にしか分からないことであると考える。

「訓練校に入っても、卒業するまでに剣術稽古をひたすら単独でし続けました。卒業後にギン姉とお父さん達から離れて旅を出ましたけど……イヤと言う程、苦しい経験をしました」

突如、スバルが悲しそうな表情をするが、すぐにそれを打ち消すように笑い出す。

「でも、人は苦しみを乗り越えてこそ人生を進んでいけますしね♪最初は銀さんみたいに、力強い豪なる剣術を学びたかったんだけど……見ての通り私の腕力じゃそれは敵わなくなくて……だから対極的に自分に合う剣術のスタイルである静なる剣術を鍛えたんです。それを時を重ねて続けるだけで、このような結果になったと言う寸法です」

銀時のように力強い剣術は得られなかったのは今思えば悲しい事だが、自分にできる自分なりの侍の剣術を極めようとすることを選んだスバル。その様子を見て桂は、銀時とフェイトを思い浮かべる。

＊

そして桂、エリザベス、はやての3人は和室に戻ろうとする途中で話をする。

「スバル殿とテスタロッサ殿、どことなく似ているな」

『たしかに。』

「桂さんとエリザベスもそう思った？」

桂とエリザベスがスバルとフェイトの存在が似ていると考える。

「同じ人造生命体とではない。銀時から学んだ侍の強さを求め、終わりない剣技を極めて進み続けるスバル殿。命の重さを知り、クローンではなく1人の自分自身の存在として人生を進み続けるテスタロッサ殿。それに……」

スバルとフェイト、どことなく同じ存在であると考える中……桂はスバルの親友であるアーサァを思い出す。

「『カリバン事件』で銀時達から聞かされたスバルとアーサァとの対決。魔導士としてではなく、さらには侍や騎士の存在としてでもなく、自分の意志のぶつかり合いの剣の対決」

2人の強さはまちがいなくSSランク以上の存在であると聞いたが、先ほどのスバルの稽古を見て3人はスバルはまちがいなくさらに強くなると考える。

『一体どんな戦いをしたのか想像できない』

そう書かれたプラカードを出すエリザベス。

「それに……その戦いがフェイトちゃんとなのはちゃんの対決に似ていると銀ちゃんは言っていたな」

はやては以前に、フェイトとなのはから2人ともはやてと出会う前は敵同士であったが、最終的には戦って友達関係となる。

2人が戦った想像をはやては勿論、桂とエリザベスもできなかった。

何せ3人は『ジュエルシード事件』には関わっていない。

「しかも、プレシアさんがフェイトちゃんを虐待していたなんて…私には信じられへん」

はやてから見ても、プレシアとフェイトは仲の良い親子であった。
しかし銀時達に会う前に2人が親子関係の中の悪さであった事に予想できなかった。

「だが結果的に銀時達によって2人の仲は今の通りに良くなった。
もし我々がこの世界に来なかったら、プレシア殿は原作どおりにこの世には存在しないだろう」
『うんうん』

それは原作どおりに進んだ結果である。
原作どおりに進まなかった事にはやては安心してホッとする。

「時に八神殿、魔導競技大会の事を思い出して欲しい。準決勝で高町殿と戦ったスバル殿を」

桂がそう言うと、はやてはあの時のなのはの怒りは怖かったのか青ざめる。
だが桂が思い出して欲しい所はそんなのではなかった。

「スバル殿は高町殿の『スターライト・ブレイカー』に対抗する魔法を使用した。SSランクに統一するどころが『スターライト・ブレイカー』に匹敵する威力を持つほどに……」

桂がそう言うと、エリザベスやはやても思い出す。
自分達が知っているスバルの最強にして禁断の魔法を……

「エア・アルテマ・ギガブレイカーか……」

『凄い威力だったね』

あの魔法は2人も忘れてはいなかった。
とてもフォワード部隊のメンバーが仕える魔法とは思えないぐらいに。

「まだあの若さで剣術の高さにして強力な魔法。もし……これから先にスバル殿が剣術と魔法を鍛え続けてたら……10年……いや5年後には、ミッドチルダ最強の魔導士になっているやもしれぬ」

それは間違いなく自分はおろが銀時をも上回ると考える。
想像するだけでどれだけ強くなったか確信できない。

『まぁ、でも今はまだ見届けるべきですね』
「そうやな」

プラカードを出したエリザベスに、そのプラカードに書かれた文字を見て、はやてはクスクスっと笑う。

侍の力と魔法の力を持ったスバルの存在は奇跡的である。
そして自分のオリジナル(アリシア)の分まで、人間として生きるフェイト。
そのフェイトに出会った銀時。

人にはそれぞれ自分の進むべき道が必ずある。
時に立ちはだかる壁もあるが、苦しい思いをしてそれを乗り越えた

時こそ、その道は進められる。

「さてと、そうと決まれば、明日からスバル以外のフォワードのメンバーの鍛錬を倍にしなくちゃ。今のままやったらスバルだけがダントツ過ぎて差が埋められないしな。ついでにスバルはもう十分すぎるほど強くなっているから、明日からしばらく3日間見学及び単独鍛錬も中止決定や」

はやてが張り切ってそう言いだす。
その姿を見た桂は、はやても自分自身の道に進んでいると確信する。

「……八神殿、お主ならきっと自分の道を進み通せられる」

笑いながらはやての頭を優しく撫でる桂。

「……おおきに桂さん／／／」

顔を真っ赤に染まって嬉しくお礼を言い出すはやて。
桂とはやてを見て、2人の距離が縮まっていると確信するエリザベス。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

銀八

「へーい、じゃあ今回で『ブレイブルー』キャラにアシスタントさせるのを最後にします。最後に選ばれたゲストはこの人」

ツバキ
「こんにちは、統制機構中尉のツバキ・ヤヨイです。最後の最後にアシスタントを選ばれて光栄に思います。鏡はよろしくお願いします。」

銀八
「んじゃ、さっそく行くぞ。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『ハルヒ
「今回はこの涼宮ハルヒ様が質問してやるわ！」

神威　銀時
「お前は英雄王か？」

ハルヒ
「ＳＯＳ学園で銀時となのはを融合させたけどフェイトらは、銀時以外に誰と融合したい？」

神威　銀時
「自分は銀八か白血球王のどちらかと融合させるつもりですけど（出るか分かりませんけど）」『……ズバリ言います。フェイト、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、は銀時と合体できないなら誰ともしないと思います。スバルの場合は銀時以外なら、ティアナか姉のギンガになりますね。」

ツバキ
「『ＳＯＳ学園』には人間同士の合体もあるんだ……」

感心したかのように言い出すツバキ。

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、これからも小説をバンバンと進んでください」

ツバキ
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんの質問です。……確かこの小説の質問を小説として書いている人ですね。」

銀八
「まぁな。んで質問のほうは、『ウッソ
「なのはさんあわれ（笑）」

こなた
「はやてちゃんも（笑）私より目立ってないし（笑）」

かがみ
「あんたたち懲りないわね・・・」

ウッソ
「では質問です.

?:スバルの強さがスパウザーで最強って出ました.なのはさん,フェイトさん,他みなさま・・・許せますか?

?:そんでキャロちゃん・・・やっぱり今回の一件で君のあだ名は『ジェイソン』にするけどそれでいいですよね?本人返答お願いします.
」

かがみ
「?は今回だけ内容を変えるわ．・・・なのはさんとはやてさん，キャロちゃんに質問です・・・ウッソとこなたのこと・・・3人はどう思ってる?本人からお願いするわね」』」

ツバキ
「何この質問!?これほとんどイジメと侮辱が混じっているわよ!」

銀八
「こう言う連中なんだよ。あいつ等は……」

あり得ない質問に驚くツバキに呆れて言い出す銀八

ツバキ
「まぁ良いわ。ズバリ答えます。?は……」

なのは、フェイト、はやて、ティアナ、ヴィータ、シグナム、シャマル、ギンガ
「なんでスバルがそんなに強いんだァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!」

っと納得いかない者が多いが、エリオ、キャロ、ザフィーラ、ユーノは苦笑する。

ツバキ
「何か……スバルって子が大変ね。?は……って何アレ!?」

ツバキがキャロを見ると、そこには怒りの化身と化したキャロがいた。

怒りの余りに怖いため、無言のままスルーした。
銀八もキャロの怒りは余りにも怖かった。

銀八
「えー、最後に?は……ご本人さん、答えをお願いします。」

大量の汗を流しながらも、銀八はなのは、はやて、キャロに質問を答えさせると……

なのは
「ウッソ君……死ぬほど頭冷やそうか?」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

はやて
「こなたちゃん……お仕置き決定や」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

キャロ
「あの2人なんか消えてなくなれば良いんだ……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

3人の答えは銀八の予想通りだったが……やっぱり怖かった。
そしてツバキも涙を流しながら震えている。

ツバキ
「凄く怖すぎなんですけど～～～～～～～～～！（涙）」

銀八

「あ……あははは……『ウッソ・エヴィン』さん、生きている事を祈っています」

しばらく続く沈黙。はっきり言ってかなり怖いぐらいである。

銀八
「つ…次行きます……ペンネーム『カラー』さん『質問今回の投票結果の話でプリシラは出ませんでしたが（間違いならすみません）、本人は結果をどう思ってますか？
質問2
銀時のコスプレ（デバイスの）ですが、本人は嫌いみたいですがスカエリッテに頼んで変えたりするんですか？』……ズバリ答えます。プリシアじゃなくプレシアの間違いでは？彼女はおそらく順位より我が娘のために止めようと同じ下位陣と戦っていましたので、登場するヒマがなかったようです。そして2つ目はスカリエッティに頼んでも、彼は変える気がしないようです」

ツバキ
「まぁ……確かにあの●グナ・ザ・ブラットエッジ並みにあの衣装は似ているね」

銀八
「っと言う訳で『カラー』さん、銀魂の映画がまだ見ていないのであれば一度見に行ってください」

ツバキ
「次はペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
？近藤がお妙にストーカーし始めた話でお妙が近藤から逃れるために銀時のことを、許婚でもうあんな事やこんな事をしたと言っていたのをフェイト達が聞いたらお妙を殺りにいきますか。

？お妙とフェイト、なのは、アルフ、シグナム、リィンフォース、スバル、ティアナが一対一で戦ったらどちらか勝ちますか。』……なんか変で怖いんですけど！？」

思わずツバキはツッコみだす。

銀八
「ズバリ答えます。？は確かに殺りますね。？はなのはかフェイトの可能性が大です。」

ツバキ
「うわぁ……迷わずに答えるなんてある意味凄いよ……」

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ぃ、ペンネーム『烈火竜』さん『『真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌』で、土方にロリコン疑惑のフラグが立ってしまったことを、銀さんはどう思っていますか？』……ぶぁーっはっはっはっはっはっはっはっは！」

なのは
「にゃーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

ティアナ
「あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」

はやて
「なーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは

はっはっは！」

銀八、なのは、ティアナ、はやては大爆笑し……

近藤
「トシぃ～～～～～～～～～～！お前も九兵衛殿と同じキャラ崩壊に落ちたのかぁ～～～～～～～～～～！（涙）」

ルーテシア
「……軽蔑……最低……」

山崎
「……真撰組を辞めようかな……」

ディエチ
「山崎さんの上司なのに……」

ヴィータ
「死ねェ、ロリコン！（怒り）」

キャロ
「……この小説にこないでください。」

涙を流して叫ぶ近藤。
軽蔑するルーテシア、山崎、ディエチ、ヴィータ、キャロ。
ツバキは呆れて声も出せず、銀八は笑いを止める。

銀八

「っと言う訳で『烈火竜』さん、これからももっと、ロリマヨラーのロリコンっぶりを披露してやってください……ププ！」

笑いをこらえ、落ち着いた所で質問コーナーを続ける銀八。

銀八

「次ィ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。

1．またリメイク話になりますが、赤夜叉さんの４作目である「『銀魂×魔法少女リリカルなのは』～魔法少女と銀髪の侍～」をリメイクするとしたらどうなりますか？

２ノーヴェさんにプレゼントです。人気投票編で色々振り回されましたから、銀魂のＤＶＤ全巻と最新のテレビ「４６Ｖ型　地上・ＢＳ・１１０度ＣＳチューナー内蔵　フルハイビジョン液晶テレビ」をあげます。』」

ツバキ

「質問に答えます。黒神の話によれば……『まずは銀時だけが源外の転送装置の実験にされて飛ばされ、なのはと初対面。そして後半戦でなのはじゃなく銀時がフェイトと対決し、銀時が勝利。そしてプレシアが理解してプレシアを道具じゃなく娘としてプレシアに感謝。そして『アルハザード』の使者が現れて、アリシア生還とプレシアの不死の病を治療。その後、なのはとフェイトが２人同時に銀時に好意を持つ。そして銀時は源外の転送装置によって元に戻されるが、なのはが大胆に銀時にキスをしてコレで第一章終わり。第二章は再び銀時だけが飛ばされて『闇の書』の事件と関わり、シグナムと対決。一方、桂とエリザベスも飛ばされてはやてと遭遇。まさかの銀時と桂の対決で魔導士の存在を上回ると思わせるほどの激戦をくり返し、以外にもエリザベスとザフィーラがコンビになる。後半ではやてが桂に好意を持ち、別れの前に接吻する。リィンフォースも消えずに残って桂に好意を持つ。一方の『アースラ』は第二

書に出て、偽善な存在として銀時達にギャフンと言われる。特にクロノは銀時に半殺しされるハメになる。』ってほとんどネタバレじゃないですか！しかも今度は神楽って女の子とメガ……じゃなく新八って地味そうな男が出てないわよ！」

ほぼネタバレにツバキは大声でツッコム。

銀八
「んで2は……ノーヴェさんの反応は以下の通りです」

ノーヴェ
「うっはぁー！気がきくじゃねぇか！マジでありかとな、『ＳＡＤＳ』さん！」

銀八
「っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、これからもノーヴェを見守ってくださいー」

ツバキ
「次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『銀八先生と銀時は正に対極の存在ですよね？（銀時は、綺麗な目とふわふわな髪の毛をして、女性にもてていますし、かたや銀八先生は、うざったい髪の毛でいやらしい目をして女性にはもてないですし）』……」

銀八
「きえぇえええええええええええええええええええええええええええ！」

ツバキは少し銀八の間を空け、銀八は怒り任せで思いっきり質問を

蹴って踏み潰す。

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に一生立っていろー！」

ツバキ
「お……落ち着いて！冷静になりなさい！……ね」

ツバキがそう言うと、銀時は少し冷静になる。

銀八
「……んじゃ次行くぞォ。ペンネーム『風花』さん『今日は。風花です
投票ありがとうございました
それでは質問です
？銀さんは時々、愛刀洞爺湖を折っていますが代えはどうやってなのはの世界に持ってくるんですか？
？胸の大きい人に聞きます。よく胸の大きい人って肩が凝ると言っていますが本当ですか？
それでは』……ズバリ答えます。？は今のところ、『洞爺湖（本名：星砕）』は今のところ折られていません。？は……今回はツバキさんにお願いしま……」

九兵衛・ヴィータ・キャロ
「銀八先生……死にたいですか？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

3人から突如、とてつもない殺気が込められ……

銀八
「すんません！？は答えられません！『風花』さん、死にたくないのでご勘弁を！」

ツバキ
「こ……怖～～～～～～～～～～～～！（涙）」

銀八
「……次行きます。ペンネーム『虚空』さん『質問
シンヤ「クロノ・・・・・」
刹那「ここでバラすな・・・・作者が不味いだろ」
フェルト「それよりも・・・・」

刹那達の視線の先には・・・
虚空「・・・・・（怒）」
刹那「怒り満載だな」
シンヤ「まぁ、クライマックス的になのはの好きなキャラを改変させられたからな」
フェルト「・・・ユーノさんやクロノさんが・・・・・」
シンヤ「おっと、フェルトさんや、それ以上は言わないのが作品を最初から見ている作者のためだ」
刹那「・・・・・質問だ」
刹那「まず俺からだ。なのは、歪みの原因が作者にあるなら作者を駆逐したらどうだ？」
シンヤ「刹那らしい考えだな、次に俺だ。エリオ、色々と面白そうなイベントに巻き込まれているが、誰が好きなんだ？銀時のような事になったらもっと大変なことになるだろ？」
フェルト「最後に私です。近藤さん・・・・・あなたを抹殺しに行ってもいいですか？」

刹那「フェルト！？」
シンヤ「フェルトちゃん、どうしたの！？」
フェルト「ママが言っていた、汚物を振り回すものは、女の子の敵だって」
シンヤ「マレーネさん、娘に何、教えてんの！」
刹那「マレーネって誰だ？」『……ズバリ答えます。……刹那……気持ちは分かるが、そんなことをすればこの小説は終わってしまう。」

銀八も黒神が痛い目に合う所を見届けてたいが、終わる恐れがあるので却下した。

ツバキ
「そしてシンヤさんの質問……は答えられないのでご勘弁をォ～～～～～～～～～～！（涙）」

ツバキは土下座する。
原因はキャロがさっきより強い憎悪を放っているからである。

銀八
「そしてフェルトは……ゴリラの抹殺を許可します。」

近藤
「何でだよォォォォォォォォォ！？」

あり得ないばかりに叫ぶ近藤。
まぁ当然の結果である。

ツバキ
「っと言う訳で『虚空』さん、廊下に立っていなさい」

銀八
「次の質問。ペンネーム『十河』さん『1・ついにキャロがヤンデレ化しちゃいましたが・・その状態で神楽や月詠に勝てますか?というか勝ち目は0に限りなく近いでしょうね。
2・他にもヤンデレ化しそうなキャラはいますか?
可能性としては・・なのはやティアナがそうなりそうな・・。
逆になりそうにないのはスバルですかね?
他にもなりそうにないキャラは誰でしょう?
3・今回の騒動で成長(別の方向も含む)したキャラは誰でしょう?
』」

ツバキ
「さっきから変なのばっかりィィィィィ!」

刺激するばかりの質問にツッコむツバキ。
それを無視して銀八は質問を答える。

銀八
「ズバリ答えます。1はそりゃ勝てるだろ?エリオを含めても3人は絶叫したんだし。2は意外な人物がなりそうな気がします」

ツバキ
「何で普通に答えられるんですか?」

銀八
「ちなみに3はいません」

ツバキ
「いないんかい!」

銀八
「っと言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい」

ツバキ
「はぁ……次が最後ですけど、まともな質問に期待します。ペンネーム『アクセル』さん『黒神さんに質問です。

映画館に紅桜編を観に行きましたか？

自分は銀時達が宣伝の中で別に観なくてもいいとか言ってたし、あまり観る気が出ません。
観るとしてもＤＶＤです。』」

最後の最後でまともな質問でホッとするツバキ。

銀八
「ズバリ答えます。明日、作者は『銀魂』の映画を見に行くそうです」

ツバキ
「あ……私も興味あるからヒマな時に見に行こうかな？」

銀八
「行った方が良いぞ？……っと言う訳で『アクセル』さん、ＤＶＤが出てくるのを楽しみに待ってください。以上持ちまして質問コーナー終了。どうでしたか、ツバキさん」

ツバキ
「何か、色々と大変そうですね……でもなんか面白そうで良いです

ね」

銀八
「でしょ？っと言う訳で次回から通常の『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の登場人物ですので、次はヴィータにさせてもらいます」

ツバキ
「また、作者の都合でまた『ブレイブルー』に登場するキャラがアシスタントする可能性があります。」

銀八
「それでは！」

銀八・ツバキ
「次回もお楽しみ～」

第六十一訓：人の進む道はそれぞれ別々にある（後書き）

黒神
「では新ＯＰと新ＥＤを紹介します！今回のＯＰとＥＤは以下の通り！」

新ＯＰ　６１話～
『Ｒｅａｄｙ　ｇｏ！（『Ｆａｔｅ／タイガーころしあむ』の主題歌）』

新ＥＤ　６１話～
『朝ＡＮＳＷＥＲ（『銀魂』の第１３回目のＥＤ）』

これからもじゃんじゃん進みます。
次回は新シリアスです。

はやて
「次回、『歌はセンスだけじゃない』テイクオフ。」

第六十二訓：歌はセンスだけじゃない（前書き）

ＧＩＮＴＡＭＡ

神楽・新八
「宇宙一馬鹿な侍だこのヤロー！！！！」

主題歌：ＤＯＥＳ　『バクチダンサー』

桂
「いつから違った、俺達の道は」

高杉
「俺は壊すだけだ、この腐った世界を」

コミック累計
３０００万部！！！！

あの人気アニメがついに映画化！

原作：空知　英秋
（週刊　少年ジャンプ連載）

銀時
「てめェの言う余計なモンがどれだけの力を持っているか……しかとその目ん玉焼き付けな」

『劇場版　銀魂　新訳紅桜編』

絶賛上映中！

第六十二訓：歌はセンスだけじゃない

銀時達がフェイト達の世界に来てからまもなく立つ日であった。
銀時の世界では新八達は大慌てであった。
銀時、神楽、桂、エリザベスがいなくなってから、万事屋のメンバーである新八と定春、そして新八の姉である妙も心配であった。
原因は、源外の転送装置が故障してしまって修理するように頼むが……その源外も行方不明になっていた。
さらに妙から聞けば、九兵衛も行方不明になっていてメッチャ心配しており、そこに土方や総悟から近藤とついでに山崎の行方が不明であると聞いて、真撰組も総力をもって探している。
しかもお庭番衆である服部全蔵から猿飛あやねの行方が不明になっていると聞かされ、快援隊でも辰馬が行方不明になっていると言う情報が入っている。
さらに吉原から月詠も行方不明になっていると聞かされて、銀時達の突如の失踪によって歌舞伎町は大混乱。

そして新八にとって最悪な事が起こっていた。
それは新八が誇る人気アイドルであった『寺門通(てらかどつう)』の人気が急激に落ちていて、今ではアイドル引退もやむをえないと思われている。
原因は新曲発表宣言に、つんぽっと呼ばれる音楽プロデューサーが辞めて、他のプロデューサーによって新曲が作られたが結果的に大外れ。
原因は、つんぽと言う偽名を名乗っていた河上万斉が鬼兵隊の活動を中心にするため、最早お通にカマってはいられなくなったのである。
それ以来、寺門通の歌には下品な印象が大きく見られ、今では人気アイドル？1から『不』人気アイドル？1となってしまった。
全てはつんぽと呼ばれるプロデューサーがいたからこそ得られた栄

光であり、それなしでは世間ではダメ押しの無能なアイドルとなった。

そしてついには突如の失踪で世間は騒がせてしまった。親衛隊は続々と消えてファンも地理のように消えてしまったのである。

母親である寺門市（てらかどいち）は大騒ぎで娘の行方を捜していて、父親は脱獄してまで探し回っている。

そして寺門親衛隊のメンバーは次々と辞めてしまい……残ったのはたった2人である。

親衛隊隊長：志村新八

親衛隊一員：高屋八兵衛

彼らは芸能関係新聞を見て怒りを表している。

新人アイドル『コスプ・イショウ』

その可憐な歌に千を越えるコスプレは多くのファンを魅了する。

正に理想のアイドルの中のアイドルとも言い、芸能界歴代最高のアイドルであろう。

寺門通　ファンを裏切り。

つんぽと言う音楽プロデューサーが辞めただけで最近調子が出ないっと言う理由だけで言い訳をし、多くのファンが失望してやむを得ず引退。

その後、謎の失踪で行方不明。
芸能人達も彼女には大きな失望を抱く。

「ふざけやがってェェェェ！（怒）」

新聞を破って怒鳴りだすのは、『銀魂』でも地味な存在だが重要人物の1人である志村新八（しむらしんはち）である。

「新聞記者め！好き放題書きやがって！今すぐ殴り込みをしてぶっ殺してやるゥゥゥゥゥゥゥ！」

そう言って新八は走り出そうとするが……

「まって新ちゃん！」

そこで親衛隊の一員である高屋八兵衛（たかやはちべえ）が怒り任せに暴れる新八を抑える。
そのあだ名は『タカチン』であり、新八の幼馴染である。

「止めるなタカチン！こんなふざけた嘘新聞を作った奴をぶっ殺しに行くんだ！」
「それは分かるよ！俺だって許せねぇよ！でもそんな事をしたってお通ちゃんの尊厳をさらに傷つけてしまうんだぜェ！」
「だけど、このまま黙ってはいられない！いや、黙っていたくない！」

タカチンの言う事を無視してまで怒り任せに暴れる新八。

「だから、俺達もお通ちゃんを探して、今度は俺達がお通ちゃんを助ければいいじゃないか！」

タカチンの言う事に新八の怒りは収まると……

「でも、親衛隊はほとんど辞めて僕とタカチンしか……」

「何言っていやがる！数の問題じゃない！お通ちゃんの為に俺達が助ければ良いじゃねぇか！」

タカチンの言葉に新八は我を思い出したかのように表情をパッとし、今お通の為にできる事をするべきだと立ち上がる。

「そうだね……僕達にだってできる事は絶対にあるはずだ！とりあえず僕達2人だけでもお通ちゃんを救うんだ！」

「そうだよ新ちゃん！そうと決まればお通ちゃんを探すべきだ！行こう、新ちゃん！」

「おう！」

そして2人は走り出す。

自分の中で輝きだすアイドル、お通を見つけて救い出す為に。

（なのはちゃん、僕はなんて罪な男なんだ。アイドルであるお通ちゃんに『リリカルなのは』シリーズでも屈指のヒロインとして輝き続けるなのはちゃん。1人の女性として恋した女が2人もいるなんて……ああ、僕はどっちの婿になればいいんだ?両手に花って言うのは正にこのことだ！でも、やはりお通ちゃんとなのはちゃんに相応しい男はこの僕、志村新八以外に他はない！）

ウザッ！アイドルオタクだけじゃなくロリコン及びアニメオタクに堕ちたせいなのかまちがいなくウザイ存在になっているよ信じられねぇよ！

オタクが憎い！
いくら影薄とは言え新八を堕としたオタクの誘惑が憎い！
新八がオタクじゃなければ間違いなくこの小説の第一順から出ているのに！

＊

一方ミッドチルダでは……

「ハックシュン！」

突如、なのはがクシャミをする。

「風邪ひいたかなァ？」

っとなのはは不思議に感じると、フォワード部隊の訓練を見守る。
いつもどおり、ティアナの『クロスミラージュ』でクローン・ガジェットを撃ち倒し、キャロが錬鉄召喚で鎖を出してガジェットの動きを止め、その隙にフリードが炎を吐いてガジェットを溶かす。
ギンガはスバルと同じ先天魔法『ウイングロード』という水色の道を宙に作り、ローラーブーツ型のデバイス『ブリッツキャリバー』で走って翻弄し、両腕に装着してるデバイス『リボルバーナックル』でガジェットを貫く。
３人ともかなり優秀だが、特に驚くべきなのがエリオである。
エリオが『ストラーダ』でガジェットを何体も切り倒す。しかも最近では時々魔法を使わずに純粋な槍術でガジェットを破壊するとい

うなど、魔法と槍術の合体戦術を得意として、４人の中ではダントツにガジェットを破壊しまくっている。
しかもチームワークも取れていて、今後の成長も期待できる。

「化けたね、エリオも」
「うん、エリオがいつの間にここまで強くなるなんて思ってもいなかった」

エリオの成長振りに驚くアルフとフェイト。
以前からエリオは神楽と月詠に単独訓練を受けてもらっており、特に神楽の異常な特訓についてきたお陰で異常なまでに戦闘力が上がってきた。もしかすればフォワード部隊の中ではスバルに次ぐほどではないかと考える。
実は本当の事を言えば、エリオは神楽と月詠をこの手で護れるぐらい強くなれるだけ強くなりたいと言う気持ちが篭っていて、その成長力を倍加している。

「それに……スバルを参考にしているのか魔法を使わないで槍技だけでガジェットを次々と倒していっているね」

なのはが感心するようエリオの強さを評価する……

「おそらくアレは、僕達の世界の槍術だと考え、槍を使う侍の戦い方を参考にしている思う。それに以前スバルと手合わせした時よりさらに強くなっているから……このまま行けば近いうちにＡＡランクに達成するかもしれない」
「そいつは期待できそうだ」

感心して説明する九兵衛の説明に、ザフィーラもエリオの成長には感心する。

「うぉぉぉぉぉぉぉ！エリオ凄いアル！これなら一緒に訓練を付き合った甲斐があったネ♪」
「うむ、あそこまで成長するとなれば……わっち等も何故か喜びを感じる」
はしゃいで喜ぶ神楽と、煙管を加えて嬉しそうに笑う月詠。
この2人がエリオを成長させた張本人。
「……時に聞くが……スバルはどこにいるぜよ？」
そう質問をする辰馬。
「ああ、スバルなら3日間の休暇を貰って、しばらくはお休みしているアル」
「そうか……じゃが、何でスバルだけなんや？」
スバルの行方を説明する神楽にどうしてスバルだけ休みなのかを不思議がる辰馬。
「スバルは以前より異常なまでに魔力が上がっている上に戦闘力もさらに一段や二段も上がっているから……もう十分すぎるっと言っても良い位だよ」
「それに今度はスバルが他のフォワード部隊の皆を見届けて上げなきゃね。・・・それにどんな訓練をすればお前はそんだけ強くなれるのか聞きたいぐらいだよ」
原因を言い出すアルフと、どうしてそこまで強くなれるか疑うユーノ。

「それに、スバルの休暇ははやてちゃんの命令でしょ。これ以上スバルが強くなれば他のフォワード部隊の強さの差が大きく離れてしまい、チームプレーにも影響が出るし……だから3日間は様子見をしてって訳……」

「なるほどのう……個人的に強くなっても団体戦の狭間が作ってしまう恐れがあると言うわけじゃな？」

なのはが状況を説明する中で、納得して言い出す辰馬。

「それに最近のスバル、以前より数倍剣の鍛錬をしていると銀時から聞いたから……」

「『カリバン事件』の件で大変な事があったからって、アレはやりすぎだよ？このままじゃ以前のティアナみたいになっちゃうかもしれないんだからね？」

フェイトとアルフの言う事はもっともである。

スバルはアーサァから受け取った『ペンドラゴブレイド』で、『ティルヴィングエア』と共に2つの七星神刀（しちせいしんとう）を使いこなす剣術の鍛錬をさらに増やした。神速の居合剣術だけじゃなく『ペンドラゴブレイド』の大太刀剣術に2つのデバイスの2刀剣術など、以前の3倍はしている。

そこへ、桂、エリザベス、はやて、リィンフォース、リィンが近づく。

「調子はどうや？フォワード部隊のメンバーは？」

「さどかし、訓練が倍にされているにも気づかずに苦戦しているだろう？」

ニヤニヤとはやてと桂は言い出す。

そう今回からフォワード部隊の訓練が倍にされていた。
訓練を倍にさせるのは良いが、フォワード部隊の全員に内緒にするなど腹黒い。
2人がとんでもないコンビである事を改めて知ったフェイト達であった。

「全員以前より強くなっているわ。特にエリオはダントツって感じね」

リィンフォースから見てもフォワード部隊の戦力は最初の頃より上がっていることが確信される。

「なんにせよ、いかなる状況でも対抗できるように、強くなれるだけ強くさせるべきだな」
『その通り』

桂とエリザベスはその為にはやてのフォワード部隊の戦闘力アップに協力する。

「スバルは十分すぎるほどに強くなっているから、当然しばらくは休みや」
「最近ここのところのスバルさんは前のティアナさんと同じですから……心を休ませるにはちょうどいいです」

これ以上スバルの鍛錬が続いたら、スバルの体が壊れてしまう恐れがあるからはやてとリィンはスバルにしばらくの休日を命じたのである。

「それに……銀時のほうもあんな感じだからな……」

桂はニヤリと笑って、銀時のほうを振り向くと……

＊

「銀時ィィィィィィィィィィィィ！」

「地獄に堕ちろやぁあああああああああああ！」

嫉妬した隊員達の猛攻が銀時を襲いだす。

今日も銀時は隊員の嫉妬に追われ続けているが……

「しつけェェェ

「全くネ、女ばっかに囲まれているからこんな目に合うアル！そんな子に育てた覚えないヨ！」
「主はお母さんか？」

銀時に呆れる神楽に、親台詞のようなことを言い出す神楽にツッコむ月詠。
魔導士達は魔力弾を流星の如く一斉に放って、銀時を襲うがそれが全て、木刀で打ち返されるのである。

「あんぎゃあああああああああああああ！」

打ち返された魔力弾は全て魔導士に向かって大爆発する。
だがその爆風の中から４人の魔導士が飛びあがって銀時を襲う。

「死ねェェェェェェェェェェェ！」

そのまま銀時に向かって突進する。
銀時は木刀を構えて返り討ちにしようとするが……

「忍法、粘龍弾（ねばりゅうだん）の術！」

っと、そこに龍の形をした大量の納豆が４人の魔導士を飲み込み、動きを止める。

「何これ臭ッ！」
「納豆臭い！」

魔導士達は余りの臭さにもがき苦しんで気絶する。
そして銀時の目の前に現れたのは、毎度おなじみって感じで登場す

る猿飛あやめであった。

「銀さんに手出しする輩は、この始末屋さっちゃんが成敗してくれるぅ！」

っと納豆をかき混ぜながら猿飛は宣言する。
しかも訓練所に納豆が大量に発生した事で、フェイト達は勿論フォワード部隊のリリカル組は納豆臭さに苦しむ。

「何この納豆臭さ！？」
「それよりどうやってアンだけ納豆が出せるんですか！？」

納豆臭さに参るフェイトに、どうやって納豆だしたか不思議がるリィンフォース。
一方の銀魂組は納豆臭さには慣れている為、臭がるより呆れるのであった。

「銀さん！敵がどんだけいようとも、このさっちゃんが絶対に護ってあげるわ！」

愛する銀時の為ならば、どんな敵をも倒すと宣伝するさっちゃん。
いつもなら冷たい言葉を口にする銀時だが……

「あ……ああ……ありがとな……」

っと意外な事を言い出す銀時。
コレには桂、神楽、月詠、辰馬、九兵衛も意外そうに唖然とする。
猿飛にいたってはまさかの言葉に顔を真っ赤にし……

「ああ、凄く嬉しすぎる！嬉しすぎて興奮するんだけどォォォォォ

オオオオオオ！」

っと銀時に飛びつく。
汗を流して驚く銀時は蹴り返そうとすると……

ドカァ！

「星になれエエエ

神、闇を切り裂く閃光と化せ！」

突如、女性の叫び声が聞こえ、空から5枚の札が宙に浮ぶ。その札から光の閃光が放たれて、糸がつながるように他の札とつながり、五芒星と化す。

「迅雷滅如撃（じんらいめつにょげき）！」

五芒星から巨大な稲妻が発生して魔導士に降り注ぐ。

「ぎゃあああああああああああああああ！」

魔導士達の叫びが響き渡って、稲妻が消えると黒コゲとなった魔導士達は倒れる。

ちなみに死んでいません。気絶しているだけです。

「な……何今の雷!?」

「ＡＡＡランク……いやＳランクは行きます！」

ギンガとキャロも思わず驚きだす。

エリオとギンガも思わず注目する。

それだけではない、桂、はやて、月詠、リィン、辰馬、九兵衛、ユーノも敵の襲来かと驚く。

銀時、フェイト、なのは、神楽、アルフ、リィンフォースは女性の声がした方向を向くと、そこには思わぬ人物がいた。

だがティアナにいたってはその女性の存在は知らない。

ショートヘアーで着物を着ており、しかも綺麗な女性である。右手にはお札を何枚か持っている。

銀時と神楽はどうしてここにこの女性がいるか不思議がり、フェイト、なのは、アルフ、リィンフォースは自分達の最大の強敵（恋関

係）が現れたことで震えだす。

「まさかこんな形で貴方と出会えるとは思いませんでした……ですが、今のでも結野家と巳厘野家を救ってくれた恩に比べれば……１００分の１ぐらいですね」

親しそうに銀時に話しかける女性。

その女性の名を銀時はもちろん、フェイト、なのは、神楽、アルフ、リィンフォース言い出す。

「け……結野アナァァァァァ！？」

その女性の名は結野アナ。

本名：結野クリステル。

銀時の大好きなお天気お姉さん。

『お目覚めテレビ』という番組で『結野アナのお天気注意報』と『結野アナのブラック星座占い』というコーナーを持っているほか、ニュースのリポーターも務めている。天気予報は、全て占いで行われており、今まではずれたことはない。

しかしその正体は陰陽師。

お天気お姉さんは朝の顔であり、夜の顔は江戸幕府開闢以来、江戸を守り続けてきた幕府おかかえの陰陽師の大家『結野衆』の陰陽師で、その中でもエリート中のエリートである。

「どどどどどどど、どうして貴方がここに！？」

「なななななな、何でェェェェェェェ！？」

まさか自分の大好きな女性の登場に驚く銀時と最大の敵の登場に驚くフェイト。

そしてある事に気が付く。

「は！まさか貴方も白い光に飲み込まれてこの世界に！？」

銀時は理由はそれであると考える。

実際、この世界に飛ばされた者はみんな光に飲み込まれてワープしてしまった。

九兵衛、近藤、辰馬、山崎、源外、猿飛、鉄子もそうであった。

「はい、二日前にメガネをかけた少年から貴方達の行方が不明になったと聞き、それを知った結野家と巳厘野家は全勢力を持って探している中、私も恩を返す為に探すの手伝いましたが……昨晩に変な光に包まれて……気が付いたらここに……」

「ふぇえええ！？あ……アナさんもですか！？」

結野アナもこの世界に飛ばされた事に驚くなのは。

「それより、坂田銀時さん……ですよね？」

「お……覚えてくれたんですか……それは光栄です／／／」

名前を覚えてくれて喜ぶ銀時にムッとするフェイト、なのは、ティアナ、アルフ、リィンフォースの５人。

実はフェイト、なのは、アルフ、リィンフォースの４人は銀時の世界に来て、ある日銀時が『お目覚めテレビ』を見て、写っていたクリステルに嬉しそうに笑う銀時を見て、フェイト達は、結野アナに対する強い対抗心を抱くのであった。

「実は、この世界に飛ばされたのは私だけじゃないんです」

「結野アナ以外にもこの世界に！？」

っと驚くかのように銀時は言うと、クリステルは後ろを振り向く。

そしてそこから1人の女性が現れた。

「ビックリしちゃった～！まさか結野アナさんが陰陽師だったなんて……驚いちゃったようかんを食せば幸せの気分満喫」

っと最後の言葉に意味不明の言葉を言い出す女。
なのはと同じサニー・ポニーテイルで着物を着ていて、さらにはアイドルっぽい存在をしている。
最初見た時、銀時と神楽は誰で誰なのか不思議がる。
そしてしばらく経つ中で……

「ああ～、寺門通か」
「ちょっ、私のときだけそんなリアクション！？」

銀時と神楽のリアクションにツッコムお通。
予想外の人物と意外な人物の登場に驚きまくる銀時達であった。

＊

とあるミッドチルダの映画館

数多くの観客達が見せにワクワクしながら入ったり感動して満足そうに出てくるなど、人ごみの中でシグナムとヴィータはポカーンとした雰囲気で映画館から出る。
それもそのはず、今ミッドチルダでは大人気映画『劇場版銀魂　新訳紅桜編』で誰もが早く見たいほど注目していたからである。
2人は特に銀時と桂の共存で天人を切りまくるシーンに感動していた。
そしてパスを通してはやてが話しかける。

≪……なんでしょうか、主？≫
≪緊急事態が発生したんや。とりあえず一度機動六課に……ってどうしたんや、２人とも？≫
≪いや、何でもねェよ≫

シグナムとヴィータの様子のおかしさに不思議がるはやて。

≪とりあえず、機動六課に戻ってきて。なんかまた桂さん達の世界の住人がこの世界に飛ばされたようや。何か天人じゃなく人間のようや≫
「……天人？」

『天人』っと言う言葉にシグナムが突如ピクリと止まりだす。
ヴィータも同じく無言で止まりだすと……

ピカーン！

２人の眼が光りだし、紫の閃光と紅色の閃光と化して勢い良く飛翔して飛び出す。

「天人がなんぼだァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
「この国は渡すかァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

額に血管を浮かべて叫びだすシグナムとヴィータ。
完全に映画の雰囲気に飲み込まれていた。

≪ど……どうしたんや！？なんか暴走しておるけど！≫
「侍の底力を見せ付けてやるァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
≪てあんた等、侍じゃなく騎士やろ！？落ち着いてェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！≫

最早2人の暴走は止まらず、2人は暴走して空を飛び出すのであった。

＊

「あかん、完全に暴走しとる」
「暴走？何で2人が？」
「分からん……こっちだって知りたいぐらいや」

2人の暴走に呆れるはやてと、どうして暴走したのか不思議がるリィン。
食堂では、銀時、フェイト、なのは、神楽の4人がクリステルとお通と話し合っている。
桂、ティアナ、はやて、エリザベス、月詠、アルフ、リィンフォース、キャロ、シャマル、リィン、ユーノ、辰馬、ギンガは興味ありそうに覗き見する。
エリオ、ザフィーラ、九兵衛はそんな桂達に呆れてしまう。

「ええ！？結野アナって人ってお天気お姉さんでも大人気で、兄さんもファンになるほどの人物！？」
ティアナは初めて知った銀時が大好きな結野アナの存在。
「そうさ。だから最も手強い敵なんだよ」

「その敵がまさかこの世界に来るなんて……」

アルフとリィンフォースも悔やむように苦しい表情をする。

「しかし、銀さんがファンになるほどの人物がいたなんてね……」

「たしかに……じゃがあの者も只者じゃないようじゃ……しかも陰陽師とは……」

銀時がファンになるほどの人物がいたことに意外そうに驚くシャマルと、その結野アナが陰陽師である事を驚く月詠。

「あのう……あの人も銀さんの世界にいた人物ですけど……ひょっとして魔導士なんですか？」

キャロが不思議そうに質問する中で、リリカル組があっと思い出す。

「確かに……今の稲妻も魔力ランクはSに達成するほどだったし……しかもデバイスなしでって……」

ギンガも感心するように言い出す。

そう考えれば魔力は違いないが、アレは武術とは程遠い存在である。

何かの特殊な力なのかと考える中で……

「そこは私が説明してあげるわ」

そこで、先ほど吹飛ばされた猿飛あやねが現れる。

「さっちゃんさん！」

エリオは驚いて猿飛のあだ名を言い出す。

「彼女が陰陽師の一族であった事は知っていたけど、まさか彼女自身も陰陽師だったとは驚いたわ」
「一体なんなの、その陰陽師って？」
猿飛は結野アナが陰陽師であった事に驚き、アルフはその陰陽師の存在を聞きだす。
「陰陽師！それは古代日本の律令制下に於いて中務省の陰陽寮に属した官職の１つで、陰陽五行の思想に基づいた陰陽道によって占筮（せんぜい）及び地相などを行う方技として配置されている。占術・呪術・祭祀を得意としていて戦う際には札を中心として稲妻は勿論のこと炎、水、風、岩など放つことができる！」
「何それ！？ある意味魔導士より凄い存在じゃない！」
猿飛の説明に驚くティアナは思わず言い出す。
「さらには結界術も得意として、『式神』と呼ばれる魔物……つまり使い魔をも召喚できる術式をも備わっているそうよ」
「護りも可能で……」
「使い魔を召喚可能……」
エリオとキャロはそんなことも可能なのかっていうぐらいに圧倒される。
それはある意味、陰陽師は万能な存在であろうと考えるリリカル組。
「だけど陰陽師のほとんどは私達の世界でも存在せず、私が知っている限り……残っている陰陽師一族は結野衆と巳厘野衆だけのようよ」

どんだけ強い種族でも絶滅かけているのは間違いなしである。
ある意味三大種族並みの存在である。

「じゃあもう1人のお通って女も陰陽師で……」

ザフィーラはそう考えるが……実は違った。

「いえ、あの子は陰陽師じゃないわ。名前は寺門通って言って……なんでもアイドルをやっているようよ？」

「アイドルって、芸能界で輝かせて、人々の人気を集めるあの歌姫？」

猿飛の紹介で、もう1人のお通がただのアイドルである事に唖然とするティアナ。
そんなのがどうして陰陽師と一緒なのか不思議がっていた。

「まぁ何にせよ、あの娘はただの一般人であることだ」
『大して特別な存在じゃないしね』

桂とエリザベスはお通の存在を全く知らないから一般人と呼ぶ。
でも九兵衛、近藤、山崎、辰馬、源外、猿飛、鉄子、そして共に現れたクリステルに比べれば、お通はただ歌を歌うだけで戦力にはまったくならない存在である。
一般人と呼ばれてもおかしくはないであろう。

＊

一方の銀時、フェイト、なのは、神楽の4人はクリステルとお通の話を聞いていた。
クリステルは先ほどから鋭い眼線で見つめているフェイトとなのは

に不思議そうに思っていたが、気にしないでいた。
それが乙女の嫉妬である事を気づかずに。
話の内容と言うと……

「音楽プロデューサーのつんぽって男が辞めてからアイドルの人気がなくなったァ？」

銀時が呆れて言い出す。
確かにつんぽ（本名：万斉）がお通の音楽プロデューサーをしてからお通の人気が上がった。
新曲を作るのに、つんぽが突如の音楽プロデューサーの引退により、混乱して別の音楽プロデューサーに新曲作らせて貰ったが……これが見事に大外れになり、しかも新人アイドル達の続々の登場にお通の存在は徐々に薄くなって、ついには人気アイドルの存在じゃなくなったのである。

「はい、ここ最近のお通ちゃんの歌が全然ヒットしなくなった上、しかもここ最近の新人アイドルの曲が大ヒットしていて凄い人気が増えて、逆にお通ちゃんのここのところの調子が悪くなる一方で、ついには引退の時期も追い込まれているんです」

クリステルはお通の様子がおかしいと考えて、ここ最近のお通の様子を言い出す。

「だから、万事屋の貴方達に力を貸してほしいノスペリンドルップー！」

お通は是非ともアイドルとしての立場を戻したいと強く願うが、神楽はぺっと唾を吐いて嫌がる。

「そんなんなぁ！人の力がなければアイドルとしていけないんだったら……さっさと引退して普通の女にもどれヤンキーはやっぱりメッチャカッコイイとは言え扱いづらいんベルズ！」
「お母さんですかアンタ……つうかなんでお前もお通語？」

母親風にお通語を言い出す神楽に呆れてツッコむ銀時。
神楽の言葉に少しムッとするお通。
一方のフェイトとなのはは苦笑して銀時に話しかける。

「（小声）ねぇ、銀時……結野アナは凄腕の陰陽師として……さっきからお通って言う女の子、最後に変な事を言っているけど？」
「（小声）……ああ……あれね……お通語と言って、最後に変な喋り方をするアイドルイメージで喋っているだけだ」
「（小声）なるほど……銀さん達の人達は個性的が多いけど、お通ちゃんもそんな感じなんだね」
「（小声）そう言うこと……」

銀時、フェイト、なのはの3人は小声でお通語の事を話し出す。
そして銀時はクリステルに喋りだす。

「それで結野アナ、依頼の内容は寺門通の人気を取り戻すように協力して欲しいと？」
「はい……お通ちゃんとは仕事関係で話し合う程度なんですが……以前に私も同じ思いをしたから助けてやりたいんです……」

そう、今のお通はクリステルから見れば以前の自分と同じであるからである。
クリステルは一度結婚しており、結野衆と巳厘野衆の同盟を結ぶ為だけに、巳厘野衆の頭目である巳厘野道満（しりのどうまん）と契約結婚させられた。
しかし、お天気お姉さんを辞めてまで結婚をしてしまった事で苦し

む一方になり、結果的に兄の晴明（せいめい）に無理矢理連れて行かれて離婚をさせられた。
それがきっかけとなってお天気戦争が始まり、巳厘野衆によって何度も天気予報が外れる一方で……ついには引退まで追い込まれる。
だがそんな時、万事屋によって調子を取り戻したクリステルは何とかお天気お姉さんとしての立場が戻り、それ所が結野衆と巳厘野衆の因縁をも断ち切ってくれた。
今度は自分も万事屋と一緒にお通を助けたいのである。

「だから私、ここで立ち止まる訳には行かないの！まだ残っているファンの為にも次の新曲を完成したい！だから、お願いヨン様のドラマはメッチャ最高マックス！」

お通も必死でアイドルとしての立場を戻したいようである。
銀時と神楽も最初はクリステルのお願いを聞こうと考えたが……

「結野アナ……この坂田銀時……貴方の為なら何でも依頼を受けますが……今回ばかりは無理です」

っとクリステルの予想外の銀時の答えにクリステルは勿論、お通も驚く。

「そうね。いくら銀ちゃんの大好きなお天気お姉さんのお願いも……コレばかりは聞けないね」

神楽も強く銀時と同じく拒否する。

「なんで！？どうして協力してくれないの！？」

納得が出来ないお通はその理由を聞き出す。

「気に食わないのさ」
「なぁ！」

銀時の一言にお通はあっと圧倒される。

「つんぽって音楽プロデューサーがいなくなったから他の誰かの力を貸そう何て言う甘ったれた考えをしている時点で、てめェ自信の存在が小さくなっている事を知らない奴に……力を貸したってまた同じくり返しになるだけだ」
「そうネ！他人の力がなければ何にも出来ないと言う時点でおかしいアル！不死鳥のアイドルが聞いて呆れるヨ！」

以前のお通とは全然思えない銀時と神楽は協力したって無理であると確信する。

「そんな事を言う！？貴方達はあのメガネ君のお友達でしょ！？お友達が追っかけているアイドルを手伝ってくれたって良いじゃないインド風の激辛カレー！」

お通の言うメガネ君とは新八の事であった。

「そんな……以前に私を助けてくれたように、どうして彼女にも力を貸してくれないんですか！？」

クリステルもどうしてお通を助けないのか聞き出す。
そこにフェイトとなのはがその理由を聞き出す。

「銀時、助けてあげようよ」
「そうだよ、他人を助けてこそ万事屋でしょ？だったら……」

２人が銀時に協力するように言っても

「フェイト、なのは、そして結野アナ……俺と神楽がどうしてお通のアイドル復帰を拒否するのかを今から説明しよう」

すると銀時と神楽は立ち上がって窓の方にゆっくりと歩く。

「新曲が大外れでしかも新人アイドルの人気の上昇、そのせいで人気が急激に下がる……そんな他人のせいをして自分自身の欠点を見ない奴を助けたって、結局同じくり返しになるだけだ」

「そうね……スカッとするが今のその女は、新八が大好きだった寺門通じゃないね！」

銀時と神楽の容赦ない奥深い言葉にお通はうっと押される。

「特にその娘は人気より最も大切な事を忘れている。だから……申し訳ないが俺達ではどうしようにもならない。もし新八がいたら、奴は絶対に同じ事を言っているだろ」

力になれないと謝罪する銀時。

しかもお通は銀時と神楽が言っている事を素直に受け取れないお通は納得できなかった。

クリステルは事情は分かったが、それでも強力を求めるように依頼量を出す。

「それでもお願いします。これ、依頼料です」

ニコリと笑って銀時に依頼を渡すクリステル。

それは１０枚の紙切れで、その紙にはこう書かれていた。

『ミッドチルダ　バイキング食べ放題チケット』

「この万事屋にお任せください（アル）！」

即座に心変わりするような態度で依頼を受ける銀時と神楽。
そんな2人に思わずズッコケるフェイト、なのは、お通の3人。
そして後ろに隠れていた桂も呆れている。

「ぎ……銀時の誘惑の弱さは大変だね……」
「そ……そうだよね……」

＊

かくして銀時達はお通のアイドルの人気を取り戻す為に協力するのであった。
しかしこの件に興味がない桂、エリザベス、月詠、九兵衛、ザフィーラは、はやての代わりに機動六課の仕事をするのであった。
猿飛も全く興味がなく、源外の仕事を暇つぶしに手伝いに、スカリエッティのアジトに戻る。
そして訓練所で、雰囲気を出すために訓練所がコンサートに変わりだす。
コレにはクリステルとお通も驚きだす。

そしてお通は自分がいつも歌っている音楽をみんなに聞かせる。

「みんな～！今日は着てくれてありがトーストはこんがり焼くと上手いぞォ～～！」
「トーストはこんがり焼くと上手いぞォ～～」

新たなお通語を疲労して言い出すお通にテンションを普通にして言い出す神楽。
しかし銀時は勿論のこと、フェイト達は別にお通のファンじゃない為にテンションは上げない。
銀時の隣には、マグマのような烈火のアフロヘアーで黒いグラサンをかけている肥ったおっさん。

彼の名はマクロウ。

ミッドチルダでも指折りの音楽プロデューサーで、数多くの名作を作ってきた天才音楽家。
その音楽作りのセンスはつんぽ（本名：万斉）に匹敵する。
実は銀時がはやてに頼んで、腕の立つ音楽プロデューサーを探して欲しいと頼まれ、偶然にも銀時に尊敬する音楽プロデューサーが来たのである。

「それにしても、あの白夜叉ごと坂田銀時にお願いされるとは……ワタシとも嬉しい限りだぜ」
「忙しい所すまねぇなマクロウさんよォ」
「何、別に良いって事よ。……それにしてもあの娘さんかい？アイドルにして欲しいじゃなくちょっと見て欲しい娘がいるって言うのは」
「ああ」

実は銀時は最初からお通がアイドルとしての人気を取り戻して欲しいと言う気持ちでマクロウを呼んだわけではなかった。
銀時はマクロウのような腕の立つ音楽プロデューサーに悪い所を見てもらった方が、お通も気づくであろうと考えたのである。

「お……そろそろ始まるそうだな？」

ワクワクとマクロウはお通の歌はどんなものか、確かめようとする。
一方のお通は音楽プロデューサーから注目される事を確信し、コレが上手く行けばあっという間に人気アイドルになれるチャンスである。

「それでは、一曲目を行きまストロベリーマッチィィィィィィィィィ！」

曲が流れ始めた。曲は『お前の母ちゃん○人だ？』

それからお通は熱唱をしている。
いつもどおりに歌い続ける彼女はただ熱心に歌うだけであった。

銀時と神楽は新八どころがお通ファンや一般人よりもメッチャ詳しくないが、1・2度は聞いているのでなんとなく分かっていた。
しかし今の彼女の歌には2人が思ったように何かか欠けていた。

それから曲が終わり……

「皆、私の歌はどうだっタンスに小指をぶつけたら凄く痛……」
「歌を舐めているのかァァァァァァァァァァァ！！（怒）」

ドカァ！

「ぎゃあああああああああああ！」

突如、怒り出したなのは、ティアナが飛び蹴りをする。
原因は、やっぱりはっきり言ってお通の歌には軽々しく口に出してはいけない言葉が何回も歌で出しているからである。
銀時達の世界なら人気を誇っていた曲も、フェイト達の世界では受け入れない曲であった。

フェイト、なのは、はやて、アルフ、リィンフォース、エリオ、キャロ、ギンガ、ユーノ、シャマル、リィンも苦笑している。
銀時と神楽にいたっては当然の結果であって、クリステルもお通の歌を聴いてどうしてこの曲が今まで人気を持っていたか不思議に思った。

「なんなの今の歌!?女が軽々しく言ってはいけない言葉が山のように出していたよ!アンタ、そんなのいつも歌っていた訳!?」

ティアナは、お通の評判の悪さを強く言い出す。

「そんな!私の歌がどうしてダメなんです勝つ気でいくならカツ丼を食え!」
「それをまず自分で分かれェェェェェェェェェェェェェェェェ!(怒)」

お通はどうして歌った歌がダメであったのかを聞こうとするが、ティアナは容赦なく怒鳴る。

「ねぇ……銀時……銀時の世界のアイドルってあんな歌ばかりなの?」

フェイトは青ざめて銀時に聞き出す。

「いや、あれはあの娘が良く歌うだけで、他のは知らねぇよ……。お前等から見れば下品な歌と思うのも仕方がねぇ上、しかもお通が今歌った歌、以前にはあったはずの物の歌にとって大切なものをなくしているぁ。アレじゃ人気が落ちるのも無理はねェよ」

「大切なもの？」

銀時の言う大切な者とは一体なんなのかを不思議に思うフェイト。

一方でお通の怒りが最大限に引き出され……

「何よォ！大体歌もろくに歌っていない素人から言われる筋合いはないんだ溶岩に堕ちて溶け込んじゃ……」

怒り出して止まらないお通だが、突如天空から紫と紅色の流星がお通に向かって振り下りてくる。

ドカァァァァァァァァァァァァァァ！！

「ぎゃあああああああああああああああ！」

お通は吹飛ばされて壁に衝突し、気絶する。

そして空から降ってきたのは、バリアジャケットを着たシグナムヴィータであった。

「シグナム副隊長、ヴィータ副隊長！？」

ティアナが突如の2人の登場に驚く中、

「天人がなんぼだァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

「いや、彼女は天人じゃないですよ！」

「侍舐めんなァァァ

を歌いきれません。歌の内容以前に、あの娘には何か大切なものを持っていません」

「だろうな……音楽プロデューサーなら絶対に今のお通に欠けている物が何なのかを見つけてくれると……」

銀時はマクロウならお通の今欠けているものを見つけてくれると確信し、あえてお通の歌を聞かせたのである。

「銀時さん、まさか最初からあの娘さんをアイドルとしての人気を取り戻させるのではなく、自分自身に欠けていたものを気づかせる為に……」

「そうでもしねぇと、あの女はわかんねぇからな。人気を持つアイドルって言うのは大抵人気の高さにこだわり過ぎてしまう悪い癖があるしよ。そんで人気がなくなれば一気に大切なものまで失くす訳だ」

「いかにも、銀時さんの言う通りだ」

っとマクロウは銀時に1枚の紙切れを渡す。

そこには『不合格』っとお通の音楽成績発表が描かれていた。

「とりあえずコレをあの娘さんに渡してくれ。そして歌にとって彼女に大切なものは、なんなのかを教えてもらってくれ」

「ああ……今日はワザワザすまな……」

2人が話し合っている中で……

「!?」

突如の女の歌声に銀時とマクロウはその歌声が聞こえる方を振り向く。

その歌に銀時とマクロウは驚きだす。

「この歌は……自分の愛しいもしくは親しい相手に自分の思いを伝えたいと言う静かなる綺麗な歌！しかし誰がこの歌を！？」

「それに……この声って……まさか」

銀時とマクロウは歌が聞こえる方向に走って向かう。

そして2人がたどり着いたのは、岩に座って歌いだすスバルの姿がいた。

まさかスバルが歌っていた事には銀時も驚きだす。

歌の素人である銀時から聞いても、綺麗な歌声に思わず感心する。

マクロウにいたってはジックリとスバルを見つめるのであった。

一方のスバルは気まぐれに歌っていた歌を歌い続ける中で、突如、銀時に気づいて歌うの辞めた。

まさか銀時がいる事には思いもよらなかった。

ちなみに歌っていたのは『空色の約束』であった。

「ぎ……銀さん！？いつの間にいたんですか！？」

「あ……ああ、なんか歌声が聞こえたからお前がいた……つうかお前歌えたんだ？」

銀時がそう言うと、スバルは顔を真っ赤に染めてしまう。

まさか暇つぶしに歌っていたのが銀時に聞かれるとは思いもよらなかった。

「え……いや……これは……そのう……／／／」

どうして言えばいいか分からないスバル。
実はこの歌、小さい頃アーサァと一緒に良く歌っていた。
アーサァとの思い出に関わるスバルの大切な歌でもある。
いずれ銀時と2人っきりになった時に聞かせようと考えて練習して歌っていただけであった。
まさかこの土壇場で聞かされるとは、スバルは顔全体が真っ赤であった。

「良い歌だったじゃねぇか」
「え？／／／」

銀時はスバルが歌った曲の感想を思ったまま言い出す。

「別に恥じる事はねぇ。何か自分の思いを伝えたい気持ちが篭った良い曲だったぜ？」

笑いながら銀時はスバルの頭を撫でる。

「……ありがとう、銀さん／／／」

嬉しそうに笑って御礼を言い出すスバル。

ちなみにお通が今かけていたものは、聞く相手に自分の思いを伝えたい気持ちであった。
人気にこだわり過ぎて我を忘れたお通に、スバルの歌を聞かせればそれに気づくのではないかと考える銀時。
一方、マクロウはある事に確信し……

「まさかこんな所で逸材と出会えるとは……」

感心したように言い出すマクロウはスバルに近づく。

「お譲ちゃん！」
「は……はい！」
「ワタシ、名はマクロウ。音楽プロデューサーを勤めている。お譲ちゃんの名は？」
「す……スバル・ナカジマです」

スバルは思わず名を言い出す。
そしてマクロウの口から信じられない言葉が出る。

「どうかね？アイドルになってみないか？」

「……は？」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

ヴィータ
「ウィーす。んじゃ今回も質問コーナーをするぞ。今回は私、ヴィータがアシスタントをさせてもらう」

銀八
「じゃあ行くぞォ。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『超魔法侍　リリカル銀時
「こっちの銀時はＳＳランクくらいか」

神威　銀時
「お前の場合、銀時となのはの超融合だからプラスじゃなくて累乗だからな」

超魔法侍　リリカル銀時
「そうなのか。質問だがエイミィやリンディを差し置いて登場したクロノはどんな罰を受けたんだ？」
『』」

銀八
「ずばり言います。エイミィは知りませんが、リンディからはお尻ペンペンと１００回されたそうです」

ヴィータ
「あのトシでお尻ぺんぺんって……」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、新シリーズ頑張ってください。
」

ヴィータ

「次ぎ行くぞォ、ペンネーム『烈火竜』さん『イクスヴェリアとアギト。どっちがロリ方（土方）と結ばれると思いますか？』……あの鬼ロリコン……（怒）」

土方の存在に怒り出すヴィータ。
銀八は思い出しただけで笑いかけている。

銀八
「ずばり言います。おそらくこの場合はイクスヴェリアと思います」

ヴィータ
「やっぱりロリコンだアイツ！（怒）」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、土方のロリコン披露をもっとやっちゃってください！」

ヴィータ
「次ィ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからの質問だ。……あそこでは私が今度お世話になるからな」

銀八
「質問です。『ウッソ&こなた
「光になるうううううううううううううううううううう」

桜色と白色（間違っていたらごめんなさい）に包まれる

かがみ
「あんたたちは・・・はあ～

質問するわね

？ヴィータちゃんが今度『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』に出るけど，私たちのメンバーでだれと仲良くなりたい？

？ウッソくんが『なのえもん，黒神さん使ってくれませんか？』って言ってたけどなのはさんはどう思ってる？

？『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』についてどう思っているか？ヴィータちゃんお答えください

それにしても・・・この二人・・・懲りないわね・・・」『……全くバカかあいつ等！？」

流石の銀八も呆れだす。

ヴィータ

「とりあえず答えるな。？は……当然こなたかな……いつも応援してくれるし。後、逆に仲良くなりたくない奴は新八。アイツもロリコンだから」

銀八

「どんだけロリコン嫌いなの！？……んで？は……なのはに殺される覚悟があるのなら……」

銀八とヴィータはしばらく青ざめる。

静かな空気が２人を黙らせる。

ヴィータ

「とりあえず？を答えるな……お妙怖っ！何かメッチャ怖いんだけ

ど!?てか桂!はやて泣かしたからいつか殺す!シャマルゥゥゥゥゥ!お前はアレだけ料理は作るなと言っただろォォォォォォ!?……そして……お妙とキャロ、怖ァァァァァァァァァァ!」

ヴィータはそれぞれのキャラの個性を言い出す。
特に2人には恐怖している。

ヴィータ
「後、アイドルオタクがこれほど醜いなんて思いもよらなかった…
…好きな女に変身するなんて……新八には軽蔑した……」

銀八
「……『ウッソ・エヴィン』さん、ヴィータの扱いには好きな様にしてください」

ヴィータ
「次はペンネーム『クアンタ』さんからな。『質問です。人気投票編で屁怒呂様がいたらどうなりますか。』……」

2人はまたもや青ざめる。しかも嫌な汗を大量に出して。

銀八
「……ま……まちがいなく屁怒呂様が勝ちます……『クアンタ』さん、廊下に立たなくて良いです。」

ヴィータ
「あ……あははははは……次行くな。ペンネーム『カラー』さん『質問
作者に質問です。クロノと新八どっちが嫌ですか?

質問2
皆さんに質問、パッチ（という名の新八）というスパリーングをすると自分の望みが叶うサンドバッグが道端で売られたら、どうしますか？』……良くそう言う質問をするな……」

銀八
「ズバリ答えます。1つ目は、黒神はアイドルオタク系を除けばクロノが嫌いです。2はおそらく買うと思います」

ヴィータ
「日頃のストレスを開放できる上に願いがかなえられるなら絶対買うぜ♪」

嬉しそうに言い出す銀八とヴィータ。

銀八
「っと言う訳で、『カラー』さん、今度からサンドバックを新八と思って殴ってみてください。次ィ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
新八は出ないんですか？でたら質問コーナーで銀八先生の虐める質問や侮辱質問を少しだけ新八に回そうかなと思っているのですが？』……おいおい、中々良い質問するじゃねぇか」

ヴィータ
「どこが！？」

銀八
「ズバリ答えます。後半には出す予定なので楽しみに待ってください。んでもう1つ、『質問というよりお願いです。
銀時好きの人達にお願いがあります。僕の住んでいる所では、劇場

版銀魂がやっていません。これは銀八先生が一人でも多くのファンを見せないようにしたに違いありません。銀時好きの人達とブレイブルーの皆さん、銀八先生を抹殺してください』……舐めてんのかァァァァァァ！」

銀八は怒り出して質問を破る！

銀八
「劇場版がないのも俺のせいにするなァァァ！『正宗の胃袋』さん、一生廊下に立っていろォォォォ！」

ヴィータ
「異常なまでに嫌われているな……次はペンネーム『ＮＡＮＯ』さん『「単刀直入で聞きます。キャロさんのことをどう思っていますか？正直にお願いします』」

エリオ
「え……か……可愛いと思いますよ……」

単独にそう言いだすエリオ。
ヴィータは「それだけか！？って言うぐらいツッコミだすが……」

キャロ
「えへへ～～～／／／」

キャロはメッチャ嬉しがっていた。
本当の事を言えばエリオは、キャロは怒らせたら誰よりも怖いと思っているが、あえて言わないでおいた。

銀八

「っと言う訳で『ＮＡＮＯ』さん、廊下に立っていなさい。はい、次ィ、ペンネーム『武士堂』さん『1、銀さんが『魔術回路』を持っていれば、どんな魔術を使いたいですか？ちなみに私は士郎の『投影魔術』を使ってほしいですね。剣をバンバン出せて大活躍です（笑）。2、もし言峰に心の傷を切開されるとしたら、どんな風に切開されると思いますか？出来るだけ詳細にお答え下さい。その時にされると思う銀さんと言峰の会話も出来ればお願いします。』…ズバリ答えます。1つはおっしゃるどおり、銀さんは投影魔術で剣を投影しまくりますね。後、かめはめ波も出すと思います。2は……」

～～

言峰
「時に坂田銀時。君はその天然パーマを憎んでいるようだな？」

銀時
「うるせェ！てめェには関係ないだろ！？」

言峰
「確かに……だが関係ない私でも言える事はただ1つだけある」

言峰ははっきりと言い出し、その言えることを言い出す。

言峰
「天然パーマに一度なれば、二度とさらさらヘアーにはなれない事だ！」

銀時

「ガァーン！」

ガクッと銀時は地面を両手両膝をつける。
メッチャショックを受けていた。

言峰
「まぁ……嘘だがな？（小声）」

銀時を見縊ったように憎たらしい笑いを浮かべる言峰であった

～～

銀八
「……こんな感じかな？」

ヴィータ
「ってこれ、単なるコンプレックスに無理矢理心の傷を切開させただけじゃねぇか！」

ヴィータは呆れるように言い出す。

銀八
「っと言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい。次はペンネーム『風花』さん『あ、あははは…
銀八先生、生きていますように
それでは質問です
？銀さんへ　たまには銀八先生に変装して銀八先生に銀さんのハーレムをあじあわせてください。もししないなら……お仕置きです♪
？キャロですが…どうしてそこまで怒るんですか？可愛く怒ればエリオだって振り向いてくれるはずなのに…本人に理由を聞きたいで

す』……1はメッチャ有難うございます！」

涙を流してお礼を言い出す銀八。
ヴィータはそんな銀八に呆れだす。

ヴィータ
「……？は……私だって知りてぇよォォォォォ！」

ヴィータは叫びだして言い出す。

銀八
「っと言う訳で『風花』さん！味方になってくれて有難うございます！」

ヴィータ
「次行くぞォ、ペンネーム『虚空』さん『質問。

刹那「今回は、ギャグ少な目のいい話だったな」
シンヤ「そうだな、特に鉄子は、俺と気が合いそうだ、職人として」
虚空「そういや、フェルト。　前回、何であんな質問したんだ？」
フェルト「それは・・・・作者さんの質問にも解答がありますよ」
虚空「？まぁ、いいやじゃっ質問にいこうか」
シンヤ「まずは、俺からだ、銀時の新デバイス、ブレイシルバーについて、どんな行程で作ったんだ？あれはからくりや機械が関係していることは分かる（源外さんやスカから）けど、鉄子がいるってことは刀の行程もあるはず・・・・・両方を同時には無理だからな、そこんとこを答えてくれ」
虚空「デバイスマイスターのシンヤらしい質問だな。さて、お次は、俺だな。銀八と言うより黒神さんに質問だ。　銀魂、また秋に新シリーズがやるそうですが、その時、何時にやると思いますか？・・・

・・なるほど」
刹那「何が成る程なんだ？」
虚空「つまり、何時にやるか微妙なんだよ。●●な発言や近藤の●●●の解放があるだろ？それが深夜帯に移す切っ掛けになりやすい。それに映画化しちゃったから余計作品へのノーマルな人も関心わくし」
シンヤ「それならギ●スやガ●ダムシリーズも少し不味くなかったか？」
虚空「ああ、だが、今の時期だからヤバイんだよ。最近、非青年なんたら法の奴で漫画やアニメの物差しが決められようとしている。・・・・これが可決されたら・銀魂や・・・・大半の作品が消えるかもしれないからだ」』」

銀八
「ズバリ答えます。シンヤの質問は……『ブレイシルバー』はおそらく、『銀魂』の機械技術を元に、源外とスカリエッティが鉄子の打った刀と刀の形をした機械を融合させ、さらには魔力を収束させて手足のように動かす感じに好きなだけ魔力を補充させる事が可能な機械の『ブーストデバイス』も合成させた、『カヴェゼシェンデバイス』として造り変えただろう。ただ、『電魄』と呼ばれる人工知能が付いていないから、寄生されて暴走することはないだろう」

ヴィータ
「銀時がデバイスを……今度見て見たいなァ」

銀八
「そして虚空さんの質問だと、……作者は１８：００か１８：３０にやると思っています」

ヴィータ

「『銀魂』のアニメがまたシリーズするのか……良いなァ」

銀八
「と言う訳で虚空さん、廊下に経っていなさい。次はペンネーム『零夢』さんの質問。『銀魂の広告が某新聞の朝刊に8ヶ所載っていました（4コマも）銀時たちはこれをどう思っていますか？』」

銀時
「マジでか！？」

桂
「我々が新聞に！？」

神楽
「しかも4コマも！」

エリザベス
『凄い！』

月詠
「コレはもしかすれば第二作目の映画もあり得る！」

5人は代表として言い出す。
メッチャ嬉しがっていた。

銀八
「っと言う訳で『零夢』さん、これからも『銀魂』を応援してください」

ヴィータ
「何か銀時達が羨ましい……最後の質問な……ペンネーム『白い奇術師』さん『長谷川さんの中に住んでいるハイジがアルハザードの力で実体化したらどうしますか？と言うより勝てますか？』」

銀八
「勝てるかァァァァァァァァァァ！！」

突如、青ざめて大声で言い出す銀八。

ヴィータ
「ど…どうしたんだ！？そんだけ厄介な相手なのか！？」

銀八
「いや……ある意味おっかない相手なので……と言う訳で『白い奇術師』さん、悪夢を思い出させないでください」

ヴィータ
「以上持ちまして……銀八先生質問コーナーは今回で終了だ」

銀八
「次回は寺門通がアシスタントさせてもらいます」

ヴィータ
「それでは……」

銀八・ヴィータ
「次回もお楽しみ～」

第六十二訓：歌はセンスだけじゃない（後書き）

フェイト
「……先生／／／」

なのは
「銀八さん／／／」

スバル
「銀八先生／／／」

ティアナ
「兄さん／／／」

シグナム
「師匠／／／」

アルフ
「銀八ィ／／／」

リィンフォース
「……銀八先生／／／」

銀八
「さぁ、遠慮なく俺に抱きつきな……可愛い子猫達」

銀時の格好をした銀八はフェイト達を優しく抱きしめる。
フェイト達は幸せそうに銀八に抱きつく。
銀八の格好をした銀時はその遠くから悔しがる。

※

黒神
「て言う絵を描いてみたんだけど？」

銀時
「絵なのかよ！？つうか無駄に上手い！俺が言うのもなんだけど少し、銀八に優しくできないのか！？」

黒神
「さぁ、スバルがどうしてアイドルになったかと言うと、実は前からスバルにはある曲を歌ってほしかったからです！」

銀時
「無視すんなよ！」

黒神
「次回もお楽しみィ～～～！」

クリステル
「次回、「何かにこだわると大切なものを忘れてしまう事もある」テイクオフ！」

第六十三訓：何かにこだわると大切なものを忘れてしまう事もある（前書き）

ＧＩＮＴＡＭＡ

神楽・新八
「宇宙一馬鹿な侍だこのヤロー！！！！」

主題歌：ＤＯＥＳ　『バクチダンサー』

観客１
「いやー、本当に白熱しました！」

観客２
「特に最後の銀時と桂の共存がしびれた！思わず鳥肌がたった！」

シグナム
「最高でした！本当にもう！」

ヴィータ
「（ポー）」　感動の余りにボーっとしている。

黒神

「しかと、その目ん玉に焼きつけな♪」

『劇場版　銀魂　新訳紅桜編』

絶賛上映中！

第六十三訓：何かにこだわると大切なものを忘れてしまう事もある

それから3週間後、そこはミッドチルダのミュージョンコンサート。

コンサート会場はかなりの客がいて、これから行う1人の新人アイドルの歌を楽しみに待っている。

そこで1人の司会がマイクを持って騒ぎ出す。

「お待たせしました！ただいまよりミュージョンコンサートの開催が始まります！」

ワアアア

ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！

その名を聞いた会場の観客は騒ぎ出す。
そして舞台に白い煙が噴射するかのように現れ、踏み台の扉が開き、その中からエレベータが動くかのようにスバルが現れた。
スバルの今の容姿は、何故か『●レイブルー』に出てくる『●エル・ヴァーミリオン』の様な衣装であった。
スバルはマイクを持って観客に声をかける。

「あ……あのう……みんなァ、今日は来てくれて有難うございます！」

顔を真っ赤にして恥ずかしながらもスバルは、今日来てくれた観客の全員に感謝を込めてお礼を言い出す。

「今回来てくれた皆を楽しませる為に、二曲だけだけど私も皆と楽しませてもらいます！」

ワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！

さらに熱狂して叫びだす観客にスバルはにこりと笑って曲名を言い出す。

「それじゃあ行きます！『蒼の鼓動』！」

そしてスバルが歌う曲『蒼の鼓動』が流れ始めた。

スバルの声が会場内を包み込むかのように観客を熱心させる。
歌っているスバル自身も何やら楽しくて気持ち良さそうに歌いだす。

そして自然的に自分の歌に合わせながら踊りだす。
リズムに乗り、スバルも自分自身も楽しそうに可憐に歌って踊りだす。
そんなスバルを見てファン達も楽しそうな気分になって喜んで叫びだす。
歌が進む中でさらにテンション上げて熱唱するスバル。
観客の盛り上がりは文句なしであった。
歌っているスバルも楽しみ、歌を聴いている客も盛り上がる。

＊

一方、機動六課では銀時達はスバルのライブを見ていた。
テレビの眼の前のソファー座っている銀時はへ依然としていてフェイトとティアナは唖然としている。

「ねェ、何でこんなことになるんだろう？」
「何でスバルがアイドルになっている訳？」

苦笑するフェイトと呆れるティアナは銀時に訪ねてみる。

「さぁな……スバルが暇つぶしに歌っていた歌がマクロウに目につけられた用で、デビューさせられた訳。そんで乗り込みが人一倍速いスバルはあっという間に人気アイドルの1人になった訳」
「何か……スバルの苦手な物がない気がして来た……」
「俺もだよ」
「使用と思えば何でもできるわけ？」

フェイト、銀時、ティアナは、スバルって弱点はないのかって言うぐらい不思議がっていた。

「あのう……これはなんですか？」

お通は、どうしてスバルがアイドルとしてライブをしているのか不思議がる。

「アレだろ。『ミューディック・ステーション』と言う番組で、今人気沸騰中の新人アイドルスバルの歌う『蒼の鼓動』」

ドカァァァァァァ！

「アイドルさせる相手間違えているでしょうがァァァァァァァァァァァァァァァ！（怒）」

「ゴフゥうううううううううう！」

額に血管を浮かべたお通は怒り出してかかとおとしで銀時の脳天を蹴り出し、銀時は気絶する。

「銀時！？」

「兄さん！？」

フェイトとティアナは慌てて銀時に近づく。

「私は私のアイドルとしての人気を取り戻してって頼んだのに、何他の他人をアイドルさせるわけ！？さらに私の人気アイドルとしての立場が減ってしまうじゃないの！？どうしてくれるのよォォォォォ！」

怒鳴りだして言い出すお通。

実はスバルも最初は断ろうとした。

自分は機動六課の一員なのに、誰にも断りもなくアイドルになる事

はできない。
しかも部隊長であるはやてから許可を貰わなければできない為、スバルには縁のない話……かと思われたが、突如現れた、はやてが事情を聞いて許可をする。
ニヤニヤと笑うはやてに、本当に機動六課の部隊長なのかと疑うスバル。
でも、銀時から「まぁ、アイドルとして活躍するのも良いんじゃねぇ？」と言われ、やる気を出したスバルはマクロウのアイドルの誘いを乗る。
しかもわずか2つ日で曲を完璧に歌いだせ、その曲が入ったCDが見事に大ヒットして、ファンが急激に増えた。
今では期待の新人アイドルの1人として誰よりも活目されている。

「にしてもスバルって歌も上手いアル」
「上手いっと言うよりも、楽しんで歌っておる。アレなら誰からも人気が得るじゃろ？」

神楽と月詠もスバルの楽しそうな演奏を見て笑い、自分達も楽しそうな気持ちがもらえる雰囲気であった。
一方のエリオは、楽しそうに歌っているスバルを見て顔を真っ赤に染まっている。

（あれ……おかしいな……スバルさんが可愛く見える／／／……どうしてなんだろ……アイドルとしての魅力なのかな……なんだろうこの気持ち……）

顔を真っ赤にしてドキドキするエリオ。
そんなエリオの異変に気づいた神楽はエリオに気が付く。

「どうしたアルかエリオ？熱でもあるか？」

神楽はエリオのおでこを自分のおでこをくっつけだす。

「かかかかか……神楽さん！？／／／」

突如の神楽のおでこが自分のおでことくっ付きだす事に驚くエリオ。
下手すればキスする寸前の近さである。

「やっぱり熱があるネ。おでこが熱いアル」
「そうか？どれどれ……」

月詠もエリオが心配そうで、手でおでこを触る。
月詠にも触られて、さらに真っ赤になるエリオ。

「確かに……ちょっとシャマルに見てもらえ」
「そうね。無理したら体に毒ネ」

心配そうにエリオに言い出す月詠と神楽。
エリオはドキドキ鼓動を鳴らせながら2人の言う通りにする。
しかしそこにキャロが笑いながらエリオに近づき、

「あははは♪エリオ君なら大丈夫ですよ♪さっき訓練で疲れているだけですから♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

にこりと笑っているが、とてつもない威圧感を放っているキャロ。
神楽と月詠は青ざめて後ろをバックする。

「あはははははははははははははははは！（怒）」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
「痛たたたたたたたたたたたたたたたたた！」

笑っているが、顔中に血管を浮かべて怒り出しているキャロはエリオの頬っぺたを強くつねる。
エリオは涙を流して痛がる。

「きゃ……キャロが最近怖い……」
「そうだな……」

アルフとザフィーラはキャロの怒りに青ざめて恐怖する。

「にしても、何でスバルにアイドルをさせる許可を得たのですか、主？」

呆れて言い出すシグナムにはやてはニヤニヤと笑う。

「いやぁ、何かめっちゃおもろそうだから♪」
「はやて、なんかおかしすぎじゃないか！？」
「そうですよ！」

ニヤニヤと笑うはやてにツッコむヴィータとリィン。

「それにしても……良い歌だな」
「ああ……相手を楽しませたいと言う思いが伝わってくる」

シグナムとザフィーラは、楽しそうに歌うスバルを見てちゃんと歌の方もやっていると確信する。

「しかし、それではスバルの鍛錬を大幅減らしてしまう事になるぜよ。それで良(え)えんか？」

辰馬は不思議そうに質問をするが……

「良いんや。マクロウさんから聞けば、スバルはちゃんと軽量した鍛錬もしていると言っておるから」

「そうか……それならば問題ない……」

はやての説明に納得したシグナム。

「何呑気に話しているの!?こっちは人気を取り戻すのに必死なんだよ!?勝手に別の話に移さないでヨーグルトはそのまま食べた方が美味いゾンベリックスゥー!」

お通は怒鳴って怒り出す。

たしかにお通のアイドルとしての立場を取り戻すのが目的であるにもかかわらず、肝心な音楽プロデューサーが眼を付けたのがスバルでは意味がなかった。

「それにしても……良いなぁスバル」

「なんか羨ましいよ」

羨ましそうに指を口にくわえて言い出すなのはとリィンフォース。

そして銀時は眼が覚めて、起き上がる。

「あ痛たた……」

頭を抑えて痛がる銀時に、フェイトとティアナは銀時に声をかける。

「銀時、気が付いたんだね」

「ほんと良かったぁ」

2人とも安心してホッとする。
そこになのは、アルフ、シグナム、リィンフォースも銀時に近づく。

「……銀さん、脳内大丈夫？」
「ああ……別にたいした事はない」

心配して言い出すなのはに銀時は返事をする。

「にしても、銀時の世界の住民はいっつもあんな感じでツッコム訳？」
「良く体が持つな？」
「ああ、全くだ」

アルフとシグナムも、銀時の世界のツッコみが激しいと意外そうに驚く。
銀時はいつも苦労していると考える。

「大丈夫です。私と合体すればそのツッコみの察知も可能になりますよ♪」
「そいつは頼もしいな」

リィンフォースのユニゾン能力に感心する銀時。
7人はそれから親しそうに話し続けている。
その様子にユーノは憎たらしそうに銀時を睨みつける。

一方のクリステルは神楽に耳元で話しかける。

「（小声）あのう、銀時さんって今でも私のファンなんですか？」
「そうアルよ」

小声で話し出すクリステルに呆れて答える神楽。

「（小声）そうなんですか！？私が言うのもなんですが……なんか私より綺麗な女性達に囲まれているんですけど！？もしかしてあの人達銀時さんに……」

「そうアル……好意を持っているね。他にもテレビに出ているスバルや5人や私達の世界にいるストーカーくの一1人など、13人に好意をもたらせているネ」

「（小声）嘘ォ！？それってある意味、ギャルゲーに出てくる主人公と一緒じゃないですか！？」

「全くネ！銀ちゃんは女の敵アル！」

13人の女性に行為をもたらせている事に驚くクリステルと銀時の女たらしに呆れる神楽。

「ほんとにいたんだァ……ハーレムな男って……」

銀時のハーレムっぷり感心したかのように言い出すクリステル。

一方の銀時はクリステルがそう思わされていることにまだ気づいていなかった。

「もう良い！私1人でもやって見せるから！全員その場で見ていろ溶岩の噴射は大危険だ！（怒）」

怒り出したお通は、この場から出て行った。

「お通ちゃん！」

クリステルは思わずお通を呼び出す。

一方のフェイト達はコレで良いのかって言うぐらい疑問を抱く。

「銀時……本当に良いの？」
「……あの人、あのまま放って置いたら、取り返しの付かない事になるんじゃ……」
フェイトとティアナは不思議そうに心配すると……
「あの女のためさ……」
銀時はテレビを見ながら言い出す。
「あの女は人気を取りすぎた余りに、歌よりも人気を気にしている。そんなのに人気を求めるようにしても、何にも変わりはしねぇよ」
そう銀時はお通の本当の魅力は、アイドルとしての存在ではなく、歌に対する熱心である事を知っていた。
お通は以前に、とある事件で自身のスキャンダルを機に芸能界で干されてしまった。
しかしその後は女子プロレスに参戦するも、めげずに歌い続けて音楽プロデューサーであるつんぽ（本名：万斉）に見込まれる。
だが、今のお通にはそれが感じ取れない。
突如の急激な人気の下がりに歌に対する熱心を忘れているのである。
その努力した情熱を失ったお通を助けても、銀時と神楽は本人の為にはならないと確信したのであった。
「そうか……確かに歌はアイドルの命だからな。歌が適当じゃ意味ねぇかもな……で桂、エリザベス、九兵衛、シャマル、ギンガの５人は？」
ヴィータは５人の姿が見えないと当たりを見渡すと、

「シャマルさん、ギンガさん、九兵衛さんの3人は何か訓練所にいます」

キャロがヴィータにそう言うと、ヴィータは3人がどうして訓練所にいるのか不自然に感じる。

「それに、桂さんとエリザベスには私が頼んで、監視としてスバルのマネージャーをさせてもらっているし」

はやてがそう言うと、少しヴィータは寂しそうな表情をする。

「そっか、なら良いか」

ヴィータは少し寂しそうな表情でそう言うと、辰馬は笑いながら言い出す。

「あはははははは！おまえさん、ひょっとしてヅラに惚れ取るかァ？」

「んなァ／／／」

辰馬の思わぬ言葉にヴィータは勿論、銀時達も注目する。

「あらあら……これは面白い展開ですね♪」

ニコニコと笑い出すクリステル。

銀時達も興味ありそうにヴィータを見つめる。

「あれれェ～？ヴィータ、そうだったのォ？」（ニヤニヤ）

「ヅラも罪な男になったネ♪」（ニヤニヤ）

銀時と神楽はにやけた表情でヴィータを見ると……

「ち……違う！何で私があんな人妻好きな……／／／」

顔を真っ赤に染めて言い出すヴィータだが、背後から強い殺気を感じた。

顔を青ざめて後ろを振り向くと、そこにはニヤニヤと笑っているが、とてつもない憎悪を放っていてバリアジャケットに姿を変えているはやての姿がいた。

「ほほう～～それはどういう意味か……『きっちり聞かせてもらおうか』♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

自分以外に柱に好意を持つ相手が見つかって憎悪を放つはやて。

そしてそのまま恐怖して涙目で体を震えるヴィータを掴み、そのままゆっくりとこの場を去っていく。

扉が閉まると……

ギャアアア

ます！『蒼一ｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』！」

スバルは続けて2曲目を歌う。

そしてすぐさまに『蒼一ｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』が流れ始めた。

リズムに乗って踊りだすスバルは自分自身の思いを歌に乗せるように歌いだす。

スバルはさらに歌に合わせてテンションが上がりだす。

テンションが上がって客達も大歓喜である。

その後もスバルの歌は盛り上がってライブは見事に大成功。

＊

一方の九兵衛、シャマル、ギンガの3人は丸太を殴りまくって負の感情を放っている。

「何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ何で僕じゃないんだ……」（ブツブツ）

「メッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるいメッチャずるい……」（ブツブツ）

「私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに私は姉なのに……」（ブツブツ）

最近パッとしない女の立場が薄いトリオは、どす黒い感情を出して

丸太を殴りまくる。

＊

一方のお通は、自分は何がいけないのかを知る気もせずに、ギターを弾いて歌い続ける。

元の世界でも大ヒットした曲『お前の母ちゃん××（何人）だ！』、『お前の父ちゃん××（チョメチョメ）』、『お前の兄ちゃん××（ひきこもり）』、『チョメ公なんざクソくらえ』、『放送コードがなんぼのもんじゃい』、『お前の×（ピー）ちゃん飲んだくれ』、『ダイナマイト再開？昼下がりの専業主婦？』、『お前のバーちゃんお前のバッシュー履いてた』など、山ほど歌った。

だが、どの曲でも観客からは注目されず、むしろ下品な歌を歌う恥女として見られる一方である。

何度も場所を変えて歌っても、自分の以前に考えた歌でも観客からは振り向いてくれなかった。

注意されたり、生卵を投げられたりなど……人生最大の屈辱であった。

原因は本人も気づかずに、歌に自分の思いが篭ってなくて相手に伝わっていないのであった。

歌っている時も人気を取り戻す為だけに歌っている。

それではどんな歌を歌っても相手にしてくれないのであった・

そして自分の無力さを思い知らされ、お通は一杯悔やんだ。

ミッドチルダ　第１シティタワー。

そこは、ミッドチルダ一にかなり長いタワーであり、その大きさは銀時達の世界にある『ターミナル』並であった。
その屋上でお通は人気のない場所でいっぱい泣く。

「うぅ…うぅぅぅ！」

自分のちっぽけな存在。そして自分の存在のちっぽけさにイヤと言うほど思い知らされる。

「一度堕ちてしまえば……どんなに足掻いたって立ち上がれない！時代はもう、私を必要としていないんだ！……うぅぅ！」

涙をあふれ出しているお通。
もう引退するべきかと疑問を抱く。
彼女が悔やむ中で……

「まだわかんねぇのか？」
「！？」

突如、男の声が聞こえてお通は振り向く。
後ろを振り向き、彼女の眼の前にいたのは銀時であった。

「その様子じゃ、あっちこっちで歌いまくったようだな。まぁ、今のお前の歌じゃ誰も聞いてくれねぇのも当たり前か」

軽々しく言い出す銀時に、お通は涙を流しながら睨みつける。

「何なのよ！？ワザワザ私の前にノコノコと現れて！良いから私の前から消えて！」

今まで自分を放って置いた銀時に怒りをぶつける。

「笑いに来たの、それとも侮辱しに来たの！？」

悔しさ一杯で、八つ当たりに銀時に怒鳴りだすお通。

「どっちでもねぇよ……ただ……お前が本当に欠けているものは何なのかをそろそろ教えてやらねぇと……今のお前を見たら新八も悲しむだろうしよ」

「本当に欠けているもの？」

銀時と神楽が確信したお通の欠けていたものを、銀時は本人に直接言い出す。

「お前は人気を取り戻す為だけにこだわり、歌に対する情熱をなくしていんだよ」

「！？」

銀時から言われると、お通はあっと驚かされるような表情をする。人気の取りすぎの余り、お通はファンのありがたみを完全に忘れていた。

そして人気の秘訣である音楽プロデューサーのつんぽが辞めてしまったきっかけが始まり、新人アイドルの急激な人気の上がりなど……お通の心が乱されてしまったため、自分自身でも忘れてしまった。

「そんなんで人気を取り戻そうなんざァ……絶対に不可能だ。そんなもん……てめェ自信が良く知っているだろ？」

銀時が説明する中、お通は何も言えなかった。

歌うのは当たり前のことなのに、人気にこだわり過ぎて忘れてしま

った歌に対する情熱。
そんなんじゃ誰も振り向いてくれないのは当たり前であった。

「コイツは新八の事なんだが……ウチの新八がどうしてアンタのファンになったか知っているか？」

銀時は、そろそろお通にどうして新八が寺門親衛隊と言う、お通のファンクラブを作ったのかを説明する。

それは新八が銀時と出会う前であった。

まだ新八がフリーターをやってて、何もやってもダメな新八はいつも店長に怒られてた頃、何もかも嫌になって全部投げ出したいと思った。
そんな時に新八は聞こえたのである。
新八の眼の前で音楽を歌っているまだアイドルじゃないお通の存在を。
新八でさえも最初は何を歌っているのか分からなかった。
客などいないのに、精一杯に歌っているお通を見た新八は、何故か涙を流していた。
そして新八はその時、元気を貰ったのである。
彼はその為だけに寺門親衛隊を作り上げ、お通を支えるファンクラブを作ったのである。
そして新八はお通に恩返しするためなら、何でもするのであった。

銀時の話を聞いたお通は、自分が新八にその様な事をしていたとは、思ってもいなかった。

「アイツがアイドルオタクを止める絶好のチャンスだったが、そんな事をしても新八が新八じゃなくなっちゃうから胸糞悪いしよ。…

…アイドルじゃなくても……その下品満ちた歌を、アイツの為に情熱を込めて歌ってやりな」

そしてお通の眼から涙があふれ出る。
人気が落ちてから、自分自身じゃなくなっていることに気づかずに、何をそう慌てていたのか不思議に思った。
正直言って自分自身が情けなくなった。

「全く、新八のウザイオタクをようやく取り消す機会だったのに…
…無駄あったアルな」

銀時の後ろから神楽が現れる。
神楽だけじゃなかった、フェイト、月詠、エリオ、アルフ、リィンフォース、クリステルも現れる。

「皆……」

涙を流しながらお通は全員を見る。

「でもま、お通ちゃんがアイドルを辞めたら新八が悲しむから……お通ちゃんのアイドルとしての立場を取り戻す手伝いをするアル」
「力になれるから分からないけど……手伝える事は手伝うよ」
「銀時と神楽、それにフェイト達も手伝うと言っておるようじゃし…わっちも付き合うでありんす」
「こうして知り合ったのも何かの縁ですし」
「依頼人を助けるのが万事屋だしね♪」
「そうですよ！」

神楽だけじゃなかった、フェイト、月詠、エリオ、アルフ、リィンフォースもお通自信の足りない物を気づいたお通を助ける事を決意

する。
そしてクリステルがゆっくりとお通に近づく。

「お通ちゃん……」
「結野アナさん……」

優しくお通の名を呼ぶクリステルは、お通を優しく抱き抱える。

「お通ちゃんは一人じゃないんだよ……ここに、貴方を助けてくれる人がたくさんいる。だから……」

クリステルはその眼でお通を見つめる。

「もうこだわりなんか捨てて、他人に頼っても良いんだよ……」

ニコリと、その笑顔をお通に見せる。
そして涙を溢れるばかりに流し、彼女は泣きながらお礼を言い出す。

「……り……がと……ありが……とう……」

泣き出すお通を優しく抱き抱えるクリステル。
その光景に銀時達はフッと笑い出す。
後はもう一度マクロウを呼んで見てもらうだけであると確信した、その時であった。

ガシャーン！

「！？」

突如、ガラス窓から数多くの触手が現れる。

そしてネコネコとした生命体の肉体。

「きゃあああああああ!?何これェェェェェェ!?」

お通は思わず叫びだす。

そして銀時達はコレが何なのかを嫌と確信する。

「銀ちゃん!」

「コイツは!?」

＊

一方のスバル、桂、エリザベスの3人は、マクロウのアイドル教育所で、テレビを見ながらお茶を飲んでいた。

先ほどの『ミューディションコンサート』の後でも、新曲の練習をしていた所で、今休憩中である。

「いや～、歌ってなんか凄くすっきりとしますね」

歌えて満足そうに笑うスバル。

最初はアイドルと言うたいそうな事はできないと思っていたが、案外やってみると楽しいものであった。

「うむ、歌っている時のスバル殿も活き活きとしていた。にしても、本当に大した者だ。わずか3週間でもうそこまで完全に歌い続けられるとは、さどかしあの宴会でマクロウ殿もかなり主を褒めていたそうだ」

『本当に凄いですね』

はやての命でマネージャーをやっている桂とエリザベスも感心して

いる。
しかし桂はコレで良いのかと考える。
アイドル以前に、スバルは機動六課の一員でしかも剣術としての才能もある。
このまま行けば最悪の場合、弱体化してしまう事も考えられる。
やっぱりアイドルを辞めさせるべきなのかと考えるその時であった。

≪番組の途中ですが、臨時ニュースを遅らせてもらいます！≫

テレビの番組が、突如臨時ニュースに変わった。
コレにはスバルと桂も注目する。

≪今、第1シティタワーで突如、バイオテロが起こりました！これは以前に起こった『異種生命体事件』です！≫

ニュースキャスターがそう言うと、テレビ画面から第1シチィタワーで巨大な異種生命体が侵食しているのが分かった。

「！？」

コレを見たスバルと桂は驚きだす。
これは第3起動高層ビルに突如侵略してきた銀時の世界に存在するはずの『えいりあん』である。

＊

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

そして次々と巨大化して行くえいりあんに第1シティタワーの民間人は慌てて逃げ出すのである。

「あーーー見てください皆さん！謎の生命が徐々に巨大化しています！危険、これは危険すぎます！私もさすがに逃げたくなって……」
「ちょっと危ないから、そこをどいて」
ニュースキャスターの背後から、はやてが現れる。
そしてそのほかにもなのはとはやて率いる機動六課が現れた。
「あー機動六課です！我等がミッドチルダの守護者、古代遺物管理部機動六課が駆けつけてくれました！もぉ大丈夫です！これで……」
ニュースキャスターの安心を潰すかのように、はやては拡声器を取り出す。
「えいりあーん、あんたは安全に包囲されておるんやァ！」
「え？ちょ……はやてちゃん！？」
はやての意味不明な言葉になのはが慌てて言い出す。
「故郷のお父さんとお母さんが泣いているよぉ！」
「お父さんとお母さん！？本当に親いるのか！？」
「こんなえいりあんにする為に育てたんじゃないって！」
「絶対に嘘でしょ！明らかにおかしすぎます！」
はやての意味不明な言葉にヴィータとシグナムがツッコム。
「ちょ！何言っているんですかはやて部隊長！？早い所、あの化け物を倒さないととんでもない事になりますよ！」
「そうですよ！？何考えているんですか！？」

ティアナとギンガも呆れて言い出す。
どうしてこんなことを言い出すのかを疑問に抱く。

「お父さんとお母さんもなんか言っちゃってくださいよ！」
「えェ！？」

本当に親がいることになのは達は驚きだす。
そして後ろから現れたのは……エイリアンの気ぐるみを来た辰馬と九兵衛であった。

「エイ男！なんでこんなことをするぜよ！？」
「お父さんとお母さんは悲しいよ！どうしてこんなことを……」

辰馬と九兵衛が涙眼で言い出すが、

「何やっているんだお前等ァ！（怒）」

ドカァ！

「あららァァァ！」
「ゴファアアア！」

額に血管を浮かべてツッコむティアナ、シグナム、ヴィータの3人は2人を蹴り飛ばす。

「何やっているんや！？この2人はあのエイリアンの親なんやでぇ！」
「んなわけないでしょうが！こんなんで事件解決するつもりですか！？（怒）」

「その通りや！」

怒り出すティアナに対して、はやては胸を張って言い出す。

「『その通りや！』じゃないでしょうが、貴方はバカですか！？（怒）」

「バカやないはやてや！」

「だまれボケ部隊長ーーーーーーーーーーーーーーーー！（怒）」

はやてのボケに怒鳴りだすティアナは『クロスミラージュ』を構えるが、危うく撃つところであった。

余りの怒りにシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィン、ギンガ、キャロはティアナを抑える。

そしてはやての後ろから、とてつもない殺気を放っているなのはの姿がいた。

ニコニコと笑っているが……なのははとてつもない威圧感を放っている。

「な……なのは……ちゃん！？」

青ざめるはやてはなのはを振り向くと……

「後で……頭冷やしたい？」（ゴゴゴ

チルダの重要建築物されているから、管理官の許可なく攻撃したらうち等のクビが飛ぶから要注意や！」

「ええエエエエエエエエエエエエ！？」

注意しながらあんな化け物を倒すのが無理がある。
それではラチが明かない為、かなり振りであった。

＊

「お怖っ！アレが以前に『異種生命体事件』を起こした謎の生命体、えいりあんか」

一方のマクロウも自宅でスバルの新曲を作りながらテレビに映っている臨時ニュースを見ていた。
はっきり言って迫力満点であった。

「一体どうなるんだ？ミッドチルダは……」

ミッドチルダの行方が気になるマクロウ。
だがテレビを良く見ると、機動六課の後ろから何かが近づいてきている。

≪あっなんだあれは！？≫

ニュースキャスターが後ろを見て何かに気づく。

≪逃げまどう人々を押し切って、何かがこちらへ！≫

そして徐々に近づいていてこちらに向かうのは2台のスーパースポーツタイプのオートバイ。

1台は蒼い稲妻をイメージしたバイクで、もう1台は漆黒に染まっていて、タイヤが白く輝いていると言う変わったバイク。

＊

「アレは……女？……男……？……いや」

そして徐々に見えてきたその姿は、蒼いバイクに乗ったスバル。
もう1台は黒いバイクを2人のりしている桂とエリザベスであった

「侍と魔導士！？」

そして大きく大ジャンプして、なのは達の前でブレーキをかけて止める2人。

「スバル！？」
「桂さん！エリザベス！」

ティアナとはやては3人の登場に驚きだして名を叫ぶ。

「お前等何……！」

ヴィータがどうしてここに3人が来ているのかを理由を聞こうとするが、その前にスバルがカメラを気づく。

「あ、これカメラ？これカメラですか？」

スバルはカメラに気づくと、何かを思いついて言い出す。

「えーと……アークシステムワークス制作・エイエムアイ販売の2

D対戦型格闘ゲームシリーズ『ＢＬＡＺＢＬＵＥ』の第2弾。『ＢＬＡＺＢＬＵＥ　ＣＯＮＴＩＮＵＵＭ　ＳＨＩＦＴ』7月1日発売発売予定。絶対に買ってください♪」

そう言うと、スバルはオートバイを起動させて走り出す。
それに続くかのように桂とエリザベスもオートバイを動かして後を追う。

「何やっているのスバルゥウウウウウウウウウウウウ！？」

何故ゲームの発売宣言を言ったのか分からなかったなのはは唖然としてツッコム。

「ちょっとォォ！危ないわよ、スバルゥ！桂さん！エリザベスゥウウウ！」

えいりあんに向かって走り出す3人に叫びだすギンガ。
一方、それをテレビで見たマクロウは唖然とし……

「スバル……宣伝が間違っている……この場合は『劇場版銀魂　新訳紅桜編』の宣伝をするべきだ……」

そして3人は恐怖を感じずに3人に襲い掛かるえいりあんのミミズ方の触手軍勢に襲いだす。

「スバル！桂さん！エリザベス！」
「馬鹿な、死ぬ気か！？」

ティアナとシグナムは思わず3人の自殺行為的な行動に驚きだす。

「さぁ、3週間ぶりの大暴れの時だ、スバル殿」
『久し振りに運動した方が良いですしね』

桂とエリザベスも戦闘モード万端であり、刀とプラカードを片手で握って構える。

「今日はどこで剣を振り回しても自由ですね。だったら遠慮なくやらせていただきます！」

スバルも、バリアジャケットに衣装を変えて、右脇に『ティルヴィングエア』を身に付け、背中に『ペンドラゴブレイド』を背負う。
そして『ペンドラゴブレイド』を右手に持って抜き出して強く握る。

「行きますゥゥゥゥ！！」

そして3人はえいりあんに向かって突撃するのであった……のはずが……

それぞれ1台ずつに、目の前ではエイリアンの口内がはっきりと見えていて、

「あり？」
『え？』

スバルと桂は思わず唖然と一言を吐き、エリザベスはそうか書かれたプラカードを出すと……

バクン！！

見事にえいりあんに食われてしまったのであった。

「スバルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

「桂さんん！」

「ヅラァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「エリザベスゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

沈黙に続く間が開き、ティアナとギンガは思わずスバルを、はやてとヴィータは桂を、リィンはエリザベスの名を叫ぶのであった。

「ゑゑゑゑゑゑ！！！！！！！」

訳も分からない声を出して叫びだす機動六課の全メンバー。

「呑み込まれたぁぁ！」

「散々カッコつけて呑み込まれちゃったぞオイィィィィィ！」

「何しに来たんだァァァ！」

ユーノ、シグナム、ザフィーラは大声を出して青ざめてツッコム。

そしてえいりあんとの対決が再び始まる。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

お通
「はぁ～い！こんにちわ！今回は私、人気アイドルの寺門通がアシスタントします♪」

銀八
「（元だがな）はぁ～い。質問行きますゥ。まずはこの人、ペンネーム『月光閃火』さん『輝刃「…輝刃だ。今帰った。」

あ…おかえり～輝刃♪どうだった？

輝刃「…とりあえず、頭ナデナデ地獄をレイチェルにやっておいた。多分今頃、レイチェルは気持ちよさと恥ずかしさの地獄を味わってるだろうな。」

…ある意味凄いね。（苦笑）あ…とりあえず質問行くよ？

1．銀さんに質問です。もし…1日だけですがあの『先生』が蘇って、銀さんと話をする機会が出来たとしたら…どんな事を話したいですか？

輝刃「…なかなかに難しい質問行くな？では俺からも一つ……。」

2．作者に質問だ。この前の後書きでアシスタントとして『ＢＬＡ（ブレ）ＺＢＬＵＥ（イブルー）』のキャラが出ていたが、また出てくる事があるのか？もし出てくるとしてだ…レイチェルが出てくるような事があるならば、一報をくれると重畳の極みだ。（輝刃）

うっは～…行くとこ行くね～♪

輝刃「…まぁな。アイツ（レイチェル）には、まだまだイジり倒し甲斐があるのでな♪（黒笑）」『……ズバリ答えます。１は……銀さんが最も尊敬している人物なので、今まで出会ってきた人物達と話でしょう。しかも嬉しそうに」

お通
「へぇ～どんな人なんだろう」

銀八
「そんで2はおそらく出る予定です。と言う訳で『月光閃火』さん、『ブレイブルー』のキャラのアシスタントを楽しみに待ってください」

お通
「次行く溶岩の大噴火ァ！ペンネーム『烈火竜』さん『近藤さんに質問です。

ＳｔｒｉｋｅｒＳ第八話でなのはがティアナを撃墜しようとしたら、身体を張ってティアナを守りますか？』」

その質問を聞くと、近藤が立ち上がる。

近藤
「ズバリ答えよう！それは高町殿とランスター殿の問題！だから武士じゃなく魔導士であろうと、部外者である俺が出るわけには行かない。魔導士同士であるからこそ分かることだ。それにその時の高町殿はランスター殿の無茶な訓練を受けて、やりすぎだがアレはしつけだろう。上司が部下を叱るのも珍しくはない。俺が言えることはただ一つ……もし体を張ってランスター殿を護った所で、ランスター殿の為にはならずにむしろ高町殿の気持ちをさらに暴走させてしまうだけだ！」

男らしく質問を答える近藤。

銀八
「はい、有難うゴリラ君」

近藤
「ゴリラじゃない近藤勲だ！（怒）」

銀八
「っと言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。次行きます。ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時
「ヴィヴィオより新八が先に登場するとは」

ヴィヴィオ
「神の鉄槌を下そうか・・・・・・ゴッドハンドインパクト！！」

神威　銀時
「・・・・・黒神、早めにヴィヴィオの登場を」

ヴィヴィオ

「質問だよ。こっちの新シリーズでリリカルキャラが登場したけど感想聞かせて下さい」』」

お通
「コレも、皆さんに答えさせた方が良いですね」

お通がそう言うと、フェイト、アルフ、シグナム、ヴィータ、ザフィーラが立ち上がる。

フェイト・シグナム・アルフ・ヴィータ
「私に恨みあるんか神威　銀時！」

ザフィーラ
「神威　銀時は、俺達の事をそう思っていたのか？」

怒り出すフェイト、アルフ、シグナム、ヴィータに呆れるザフィーラ。

お通
「うわぁ、５人中４人の怒りを感じちゃった四段怒りの大噴火。」

銀八
「っと言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『武士堂』さん『質問です。
1、銀さんｖｓプレシア&キャスター。銀八先生が勝つと思うのはどっちでしょうか？
2、銀さん（白夜叉モード）ｖｓアーチャー（肉体を得て魔力十分な状態）がマジで殺し合いしたら、どっちが勝ちますか？
3、ＵＢＷルート後の士郎とゾーマが戦ったら、どっちが勝ちますか？　士郎は凛からの魔力供給を受けて、『無限の剣製』発動可能

です。』」……ズバリ答えます。1は銀さんだと思います。白夜叉モードじゃないのであればプレシア&キャスターが勝ちます。2は白夜叉モードなので銀さんですね。3は『無限の剣勢（アンディミデット・ブレイカー）』がメッチャ強いので、文句なしに士郎です！」

お通
「白夜叉モードか……メッチャ見てみたインドのカレーはメッチャ辛いぞンベリッコス！」

銀八
「っと言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい」

お通
「次行きまスイカはやっぱりスイカ割り！ペンネーム『赤夜叉』さん『質問です。
ミットチルダに着物は無いですよね？　銀時達は、自分の服をどうやって調達してるんですか？』」

銀八
「ズバリ答えます。そうですね、源外とスカリエッティが技術開発で銀時達と同じ服を作っているようですので、銀時達はそれを着ているようです」

お通
「なるほど！」

銀八
「っと言う訳で『赤夜叉』さん、これからも『イメージ』を頑張ってください」

お通
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん……ああ、この人って確かここの小説の質問コーナーを元に、小説を書いている人だよね♪」

銀八
「そうだよ。んで質問は『ウッソ
「偉そうなこと言ってごめんなさい！！」

かがみ
「いきなりそれ！！」

こなた
「今日はあたしからだよ～

？お通ちゃんは新八くんのことどう思ってるの？

？そういえばヴィータちゃん，恋する気ないの？・・・坂本さんに？そしたら出番増えるよ．本人が答えてね．応援してるよ～

？恒例『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』についての印象をアシスタントのお通ちゃん答えてね．特に新八と同じ声のウッソについて話を聞かせてください

」

かがみ
「今回は・・・まだましな質問だったわね・・・銀八先生」』……全くだかがみんち」

一瞬『かがみ「だれがかがみんちだ!?」』っと言うツッコミが聞こえたように感じた銀八であった。

お通
「ズバリ答えます。銀さんから聞いたときまで眼鏡君の事をファンの1人としか見ていなかったけど……改めてファンのありがたみを受け取りました」

銀八
「そうだな……俺も今回の話であのじみ……じゃなく新八を見直したぜ」

銀八は新八がお通の事をアイドルとして惚れているばかりと思ったので軽蔑して、いつも冷たい態度を取っていたが、今回の事でお通を1人の女として愛していると見て見直したのである。
後はオタクを卒業して欲しいと考える。

銀八
「今のが1。んで2は……今回の話でヴィータが桂に恋をしている事が分かりました」

お通
「あのロンゲさんの事？へぇ～♪」

お通はニヤニヤを笑い出す。
アイドルも女の子であった。

お通
「そして最後に…ウッソさんってカッコイイよね♪ガンダムと言う巨大な機械兵器(からくり)を使いこなして護る為に戦うところが凄いよ♪そう

考えるとシャクティさんが凄く羨ましい、私もウッソさんみたいに大切な物を護る男性と付き合ってみたいナスはいろんな料理にすればメッチャ上手いぞー」

銀八
（あ……ウッソが新八に殺されそう）

今ので間違えてもウッソは新八に殺されないように祈る銀八。

銀八
（まぁ……8話からの事は黙っておこう。新八がお通の姿となって胸を揉んだ事を。もしばれれば……）

回想

～～～

新八
「ち…違うんだ！お通ちゃん、けしてわざとじゃ……」

お通
「信じられないい加減な男は大っ嫌い！前言撤回！メガネ君には失望しちゃった溶岩の噴火の如くの怒り（怒り）！！／／／」

パチィィンン！

お通は新八を軽蔑して怒りだし、新八を思いっきりビンダする。
鈍い音が響き、新八は倒れる。
怒り出すお通はこのまま新八から去っていき、二度と自分のライブに行かせない様に考える。

新八
「ううぅ……うわぁあああああああああああああああああああああああああんん！！（涙）」

愛するお通に軽蔑された新八は、生きる希望を失うのであった。

～～～

銀八
（ってなりかねないから黙っておこう！）

マジで黙っておく事にする銀八。
いくら新八がウザイオタクでも、そんなことすればマジで取り返しの付かない事が起こるからである。

新八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、最新話を凄く楽しみに待っています！」

お通
「次行くネクロマンサー！ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。銀時に惚れる人はまだまだ増えるのですか。だいたい２０人くらいですか。』」

銀八
「黒神ーーーーーーーー！俺にもハーレムをよこせェェェェ！（怒）」

怒り出して叫ぶ銀八。

ちなみに作者は考えているようです。

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい！……次ィ、ペンネーム『カラー』さん『質問
新八出てきたけど、しばらく出ませんか？てか、出さないで下さい。
マジで！
出すならまずタカチンが先でしょ。新八の悪行教えて上げて下さい。
彼が一番可哀想です。
質問2
新訳紅桜編を見てヴィータは桂か銀時に惚れましたか？』……ズバリ答えます。1はしばらくでないと思います」

お通
「何か酷っ！」

銀八
「んで2は、今回の事でヴィータは桂に惚れましたね。後銀時にも可能性あり。ってな訳で『カラー』さん、映画見に行ったのでしたら、もう一度見てみるのをお進めします！」

お通
「次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目　お通とキャロで声優ネタとかしないんですか？

二つ目　随分騒がれているようですが黒神さんはどうして新八が嫌いなのですか？
』……ああ、そう言えばあの子って私と同じ声をしている！」

銀八

「ズバリ答えます。１はすると思います。２は別に作者は新八が嫌いな分けないですが、皆さんから見れば黒神は新八には厳しいと思われていますね。ですが本当は、作者は新八をオタクを卒業して欲しいようです。オタクを辞めて本当の侍として目覚めて欲しいようですので。だからオタクとしている新八にはメッチャ冷たい態度を取るようです」

お通

「ええェェェェェェェ!?それじゃあファンが減っちゃいますよ!辞めさせないで四次元ポケットは時空のつながり!」

銀八

「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、久し振りの質問を有難うございました。んで次ィ、ペンネーム『ヤマトノオロチ』さん『質問１　最近なのは第４期の「魔法戦記リリカルなのはＦＯＲＣＥ」を毎月よく読みます。黒神さんもみているでしょうか?この時代のなのはさんはもうおばさんてゆう年頃でしょうか?

質問２銀魂原作で今やっているか「歌舞伎町四天王編」に登場する四天王達をリリカル組のキャラに例えてください。

質問３

スバル、ティアナ、ヴィ―タ、シャマル後ギンガ、チンクに質問します。銀魂の準レギュラーキャラとゲストキャラの男性キャラの中で好感を持つキャラをこの中から一つ選んでください。

１結野清明　２尻野道満
３神威　４中村京次郎
５屁怒路　６狂四朗

7伊東鴨太郎　8黒駒勝男9マダオ〔長谷川さん〕　10星海坊主
11服部全蔵』……ズバリ答えます。1は見ていないようです。
後、それなのはが聞いたら、黒神達がなのはに殺されますので」

お通
「次に2は……四天王ってすごいんだ粘粘納豆」

銀八
「たとえて言うなら、お登勢はカリムであり、西郷特盛は……『リリカルなのは』にはオカマキャラが存在しないのでいません。んで華陀は腹黒さを例えるならリンディであり、泥水次郎長は剣を使うためシグナムと言いたいのですが、男ですので西郷特盛と同様にいません。理由は『リリカルなのは』キャラで次郎長並に強い男性キャラがいませんので！」

お通
「なるほドーナッツは丸くて美味しいもん！」

銀八
「んで3は全員に聞いてもらいます」

スバル
「私は……ごめんなさい！いないって事で！」

ティアナ
「私もスバルと同様」

ヴィータ
「……私もいないって事で（ヴラがいるって言えるかぁ／／／！！）」

シャマル
「えーそうですね～、結野清明さんと神威で♪」

ギンガ
「……ごめんなさい。見知らぬ男ばかりだから」

チンク
「銀時以外の男には興味ない」

などと、シャマル以外は全員いないって事になった。

銀八
「っと言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい」

お通
「次が最後の質問デストロイズブレイカー！ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
下品な歌姫（寺門通）に質問です。下品な歌で不人気アイドルＮｏ１に選ばれた寺門さんは、もういっその事芸能界を引退しちゃえばいいんじゃないでしょうか？人気Ｎｏ１になっただけでも惑星直列して同時に爆発するくらいありえない歌なんですから。』……ふざけんなー！！！！（怒）！」

自分に対する侮辱質問にお通は怒り出して質問を破り、銀八は笑いをこらえる。

銀八
「っと言う訳で『正宗の胃袋』さん、今回は廊下に立たなくていいです……以上持ちまして質問コーナーは終了」

お通
「何か色々とあったね……最後はメッチャムカついたけど（怒）」

銀八
「てな訳で、次回のアシスタントは辰馬にさせてもらいます。それでは次回もお楽しみ～

第六十三訓：何かにこだわると大切なものを忘れてしまう事もある（後書き）

黒神
「いやー、ここのスバルって最近、イメージカラーが水色から蒼になっているから、『ブレイブルー』の『蒼の鼓動』と『蒼ーｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』を一度歌わせたいと思いました♪要するにカラオケかもしれません。しかしここの小説では２つの歌はまだ知られていないようですので、大丈夫でしょ」

銀時
「読者に何言われても知らないぜ？」

黒神
「てな訳で次回もまたエイリアン戦です」

辰馬
「次回、「外見では思えない活躍を見れば誰でも見惚れてしまう」テイクオフぜよ！」

第六十四訓：外見では思えない活躍を見れば誰でも見惚れてしまう（前書き）

黒神
「思えばこの小説を始めたのは言うまでもなく赤夜叉さんの小説『リリカル銀魂』が好きになったからと思って自分の想像したもう１つの『リリカル銀魂』の最終章を作っちゃいました」

銀時
「その割には全然原作どおりに進んでいないけど？」

フェイト
「確かに……笑いを中心にしすぎて原作とはまったく別のルートを進んでいるような……」

黒神の台詞に銀時とフェイトもそこをツッコム。

スバル
「だけどまだまだたくさん続けられるんだったら、これからも見ごたえがあるじゃないですか♪」

フェイト
「あ……言われてみればそうだね」

スバルがそう言うとフェイトもそう考えればまだまだ楽しみである事を確信する。

銀時
「まぁ、これからまだまだ銀魂キャラも登場させる予定だし、これからもこの『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ　攘夷戦争鎮魂歌』を

よろしくお願いします」

黒神

「それ、僕の台詞……まぁ言いや！てな訳で……」

黒神・銀時・フェイト・スバル

「『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！」

第六十四訓：外見では思えない活躍を見れば誰でも見惚れてしまう

スバル、桂、エリザベスの突如の登場後、３人は同時にえいりあんに食われてしまった。
速い所救出しなければいけないと気持ちが焦るが、襲ってくるミミズの触手が邪魔をする。
そんな相手に、なのはは『レイジングハート』から桜色の魔力砲を放つ。
その魔力砲によってミミズのような触手は塵も残さず蒸発する。
一方のユーノも防御魔法で触手の攻撃を防ぎ、『チェーンバインド』で拘束する。
その隙にとティアナも辰馬も、『クロスミラージュ』と銃で撃ちまくり、キャロも『バレットパワー』と言う対象の射撃の弾丸などのサイズをアップさせ強化させて、ティアナの魔法攻撃を強化する。
フリードはキャロの『竜魂召還』によって真の姿『白銀の竜』になり、口からブラストフレアを吐き、エイリアンを次々と焼き尽くす。
ザフィーラも狼モードでミミズの触手を噛み砕いたり、ヴィータも『グラーフアイゼン』を振り回してミミズの触手を砕きまくり、シグナムと九兵衛も剣で次々と触手を切りまくる。
シャマルは『破壊の雷』と言う魔法で、上空から巨大な雷を落として触手を次々と破壊する。
ギンガも先天魔法『ウィングロード』と言う青い道を宙に作り、ローラーブーツ型のデバイス『ブリッツキャリバー』で走って翻弄し、両腕に装着してるデバイス『リボルバーナックル』でえいりあんを次々と粉砕する。
そしてはやてはリィンのユニゾンして、『ラグナロク』を撃ちまくりである。
原因は一刻も早く桂を助けたいばかりである。だがその為にはやての魔力消費が激しい。

「くぅ、数が多すぎる！」

数の多さに苦戦するシグナム。

「だけど早くしないと3人が！」

キャロも慌ただしい表情で言い出す。

スバル、桂、エリザベスに何かあったら……そんな最悪な展開は考えたくもなかった。

「桂さぁん！」

【エリザベスゥ！】

はやてとリィンは一刻も早く桂達を救出したいが、今この場を動く訳には行かなかった。

「テメーら！あの化け物をここから先一歩も進ませるんじゃねぇぞ！」

「なんとしてでもここを守り通すんだ！」

「はい！」

ヴィータとザフィーラの言葉に、フォワード部隊は大きく返事をする。

だが彼女達が気づかないうちに、辰馬と九兵衛の姿がなかった。

＊

一方の第一シティタワーでは、銀時達が取り残されている。

しかも最悪な事に銀時達はバラバラにはぐれてしまっている。
そんな中、銀時とお通は建物内が全てえいりあんに侵略されてしまい、建物は最早エイリアンの肉体の一部と化してしまった。

「チィ……まさか、またえいりあんが出てくるなんてな……また『鬼兵隊』の生物兵器によるテロ行為かよ！」
「せ……生物兵器！？」

そんな兵器が存在した事に驚きを隠せなかったお通。
銀時にいたっては鬼兵隊の誰がこんなことをしたのか考える。
だが今は、寄生型えいりあんとなればどこかに核が存在すると考え、速いところ核を潰してこのふざけたテロ事件を終わらせる事を考える。

「なんでそんな物騒な物があるノッキングパウダー！」
「そんなもん、こっちが知りたいぐれぇだよ……フェイト達、無事だといいが……」

キャアォオオオオオオオオオオオオオオオ！

フェイト達の事を心配する中で、銀時達の前に突如現れる無数のミミズの触手。
かなり大きいのも存在する為、どれが本体なのか全く見分けが付かない。

「ア…アア……！」

お通は完全に怯え立っている。
なれない戦いの戦場に自分がいるからである。
そして圧倒的な恐怖が彼女を包み込む……が

「たくゥ……こんな時こそあのダメガネの出番なのに……本当に無理してでも連れて行くべきだった」

呆れて新八がいないことに悔やむ銀時。

仕方がないと言うばかりに、銀時は木刀をゆっくりと抜く。

「とりあえず、さっさと終わらせてやるから……お前はそこで高みの見物をしていな」

「無茶だよ！あんな化け物相手にどう対抗できると……」

お通は銀時を止めようとするが、えいりあんは容赦なくミミズの触手が一斉に銀時を襲いだす。

だが……

「ぬぅうん！」

木刀を豪快にして素早く振るうと、その一太刀が一気に5・6本の触手をまっ二つに斬りだした。

予想外の光景にお通は喋るのを辞めて唖然とし、驚きだす。

銀時は木刀を右肩に載せて……

「アンタが死ぬと、うちのダメガネが薄汚い涙を流してしまうからよ」

そう言って顔だけをお通に振り向き……

「新八がいない今、アイツの代わりに俺がお前を護ってやるよ」

「！？／／／」

守ってやると言う、1人の武将が姫を助ける為に言い出す言葉のように一瞬胸がドキッとしたお通。
銀時はフッと笑って居合のような構えをしてさらに再生してくるミミズの触手を睨みつける。

「その目ん玉を大きく開いて焼きつけな！」

そして素早くダッシュすると、銀時は木刀を大きく振るうと、先頭に立っていたえいりあんのミミズの触手が一刀両断に切断される。

「凄っ！」

木刀一本でえいりあんを斬る銀時を見て驚くお通。

「はぁあああああああああああああああ！」

さらにと言うばかりに銀時は木刀を振り回してえいりあんを次々と斬りまくる。
自分より体の大きい相手であろうとお構いなしに大暴れしまくる。

「こちとら、えいりあん狩りは2度は経験しているわァァァァ！」

えいりあんとの対決に慣れている銀時はこの程度は平気である。
1度は自分の世界で星海坊主と共に神楽を助ける為に。
そして2度目はこの世界に飛ばされてきた時に即座にである。
しかも銀時にはとっておきとして『銀の魔導書（ブレイシルバー）』が存在する。
ピンチになれば使うつもりでいた。
しかしその必要もないようである。
なぜなら木刀を振り回して次々とえいりあんを斬り倒している。

銀時の異常な暴れっぷりにだただんまりと見るお通。

（……す……凄すぎなんだけど……侍って本当はこんなにも強いんだ……）

今まで知らなかった侍の強さに圧倒されている。
銀時の戦いぶりも凄いが、さらに凄いとなれば真剣じゃなく木刀でえいりあんを次々と斬りまくっているのである。
通常ではあり得ない光景だが、それは銀時が異常なまでに強い証でもあった。
人間の常識を越えた坂田銀時の強さに、お通は見惚れていたのだ。
普段はやる気の無い死んだ魚のような目をし、無気力感を全開している男がこれ程の強さを持っていた事は予想できなかった。

キャァアアアアアアアアアアアアアアア！

お通が銀時に見惚れている中で、背後からミミズの触手が口を大きく開き、お通を襲う。

「！？」

お通は背後の触手の攻めに気づくが、もう遅かった。

「チィ！」

その光景に銀時は、さらに斬ったえいりあんを踏み台にして飛び出し、お通を襲うミミズに突撃する。

「甘（あめ）ェ！」

そのまま木刀を右上斜めに大きく振り、えいりあんを真っ二つに斬る。
そして着地してお通に振り向く。

「大丈夫かァ、お通」
「う…うん……ありが唐辛子より辛いと言えばババネロ」

お通語を使って御礼を言い出すお通。
銀時は苦笑して溜息を吐くが、2人の後ろに2体のミミズの触手が襲い掛かる。

「チィ！」

銀時は木刀を構えて返り討ちにしようとするが……

ゴバァ！

突如、2匹のミミズの触手が破裂して、中からスバル、桂、エリザベスの3人が飛び降りてきた。
そして乗っているバイクを乗り捨てて、そのまま触手の大群に投げ捨てると2台のバイクは大爆発する。

「ぷはぁー！何とか脱出できたァァ！」
「まさかえいりあんに食われるとは……我ながら命の危険を感じた」
『助かった！』

スバル、桂、エリザベスも危うく腹の中で消化されてしまう所だったとホッと安心する。

「スバル、ヅラァ、エリザベス！」

「ヅラじゃない桂だ」
「お前等、どうしてここに！？」
どうして3人がここにいるのか唖然とする銀時とお通。
「何かここでまたえいりあんによるバイオテロが発生したと聞いて、駆けつけて来ましたけど……」
「前のとは全然違うようだ」
以前に倒したえいりあんとはまったく別であると考えるスバルと桂。その原因はこの第一シティタワーにあると考える。
「ミッドチルダの町の電力は大抵ターミナルと同じように特殊なエネルギーで動いている。このえいりあんがここまで成長したのもそのエネルギーを喰らったせいだ」
「しかも、この第一シティタワーの大きさと考えれば……ここは相当なエネルギーの塊みたいな感じだから……ヤバイよ！速く核を破壊しないとさらに成長してくるよ！」
急激な成長の原因を説明する桂と、成長の恐れがあるとヤバイと考えるスバル。
銀時もここは速い所何とかしないといけないと考える中、
ドカァアアアアアアアアアア！
「！？」
突如、窓際が大爆発する。
そしてそこから現れたのは、ミミズ型の触手大群ではなく……上半身がビルと一体化した超巨大な悪魔のようなエイリアンであった。

「はぁあああああ!?寄生型えいりあんって進化も可能かよ!」

ターミナルの時や第3起動高層ビルの時よりもはるかに成長している。

そしてエイリアンの巨大な爪が容赦なく銀時達を襲う。

「どぁあああああああ!」

銀時達は何とか回避できたが……このまま行けばラチが明かない。

「このままじゃやられる!銀さん、桂さん、エリザベスさん!『ウィング・ロード』で足場を作りますので、一気に攻めます!」

「承知した!」

やられる前に魔物並のえいりあんを駆除する事を選択するスバル。

そこに……

「銀時ィィィィィィ!」

「銀ちゃァァァァん!」

後ろからフェイト、神楽、月詠、アルフ、エリオ、リィンフォース、クリステルが銀時達に駆けつけてくる。

「お前等、無事か!」

「何とかね!」

銀時が無事であると確信し，アルフは笑って返事を返す。

「それより、何かやっかいなのがいるじゃないの!」

アルフは目の前にいる巨大な魔物のえいりあんに驚かされる。

「でかすぎる！」

「以前とは全く比べ物にならないですよ！」

リィンフォースとエリオも異常なまでのえいりあんの大きさに圧倒される。

「一体どうすればいいんだい！」

目の前にいる巨大なえいりあんをどう対処すればいいかと考えるアルフ。

しかもえいりあんは口から紫色の魔力を収束する。

「嘘！？あのえいりあんって魔力もあるの！？」

「不味いですよ！今ここでアレを放たれたら！」

えいりあんは魔法も仕えると驚くリィンフォースとエリオ。

そして、えいりあんは口から紫色の魔力弾を放つ。

「たぁあああああああああああああああ！」

銀時は襲ってくる魔力弾を木刀で一気に一刀両断に斬る。

そしてまっ二つにされた魔力弾はそのまま銀時等の左右の所で大爆発する。

「す……凄い……」

クリステルは魔法を斬った銀時に驚きだす。

だがそれ以前にこれ以上長引いてしまえば不利であると思い、銀時は……

「このままじゃ確かにやべぇ！とりあえずあのデカ物は俺、フェイト、スバル、ヅラ、神楽、エリザベス、月詠、リィンフォースで何とかするから、アルフ、エリオ、結野アナはお通の護りを頼む！」

「ＯＫ！」

「分かりました！」

「皆さん、置きをつけて！」

銀時のアイデアどおり、アルフ、エリオ、クリステルは銀時の言われる通り、お通を護る事を決意する。

「あ……あのう……」

お通はどうすればいいのか分からないまま混乱するが……

「安心しなって、私達がちゃんと護ってあげるから……シャキッとしなよ」

お通に心配させまいとアルフは笑顔でそう言ってお通を安心させる。

「それより来ます！」

「ええ！」

エリオは『ストラーダ』を構え、クリステルはお札を何枚も持ち、アルフは拳法の構えをする。

銀時達の後ろには大量のミミズ型の触手が現れている。

「テメーら、準備は出来たか！」
「勿論ＯＫだよ！」
「いつでもいいですよ」
「もう一度あの哀れな天人に天誅を下させる！」
「準備万端アル！」
『戦闘開始！』
「わっちもじゃ」
「皆で力を合わせましょう！」

フェイト、スバル、桂、神楽、エリザベス、月詠、リィンフォースも準備万端であった。
そしてスバルは銀時と同じように前に出て魔法を放つ。

「行きます！ウィング・ロード！」

＊

「シュランゲバイセン・アングリフ！」
「シュワルベフリーゲン！」

シグナムとヴィータは連係しあって次々とえいりあんを倒していく。
『レヴァンティン』を連結刃形態『シュランゲフォルム』に変形させ、連結刃は蛇のように動きで次々と切り裂き、鉄球のような魔力弾を精製し、グラーフアイゼンで打ち付けて飛ばし、その鉄球はえいりあんを貫通させるのであった。

「いかせん！ここから先は一歩も通さん！」
「返り討ちにしてやりゃあああああ！」

シグナムもヴィータも必死であった。

えいりあんと言う奇妙で、以前見たときのよりはるかに凶暴性になっているのが分かるからだ。

「あ～あ～！ヤバイぜよ！完全に第1シティタワーがメチャクチャぜよ！」

「う……確かに……これ責任問題にならないのか！？」

辰馬の一言にザフィーラがどうなるのかと焦りだす。

「そんなの知らない。すべてあのえいりあんが壊した事にすれば良い」

「なるほど、それは名案や！」

さりげなくとんでもない事を言い出す九兵衛とその提案に賛成するはやて。

「テレビの皆さん、聞きましたでしょうか！？我々は今目の前で不正が起こる瞬間を……」

ニュースキャスターがカメラに向かって説明すると、なのはがさりげなく桜色の魔力弾で、ニュースキャスターとカメラマンを気絶程度の威力で攻撃する。

そして2人は黒焦げとなって気絶する。

「何しているんですか、なのはさん！」

ティアナが青ざめてツッコムが……

「え、五月蝿いのを黙らせただけだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ニコニコと笑っているなのはだが、とてつもない白い悪魔ごとのプレッシャーを放っていている。
恐怖したティアナは勿論、誰もが今の行動は黙る事にした。

「ああ！見て、えいりあんが！」

キャロが指を刺して言い出すと、えいりあんが急速にひいていくのが分かる。

「やったァァ！私達の勝ちだァ！」

嬉しそうに言い出すギンガ。だが……

「いや違う」

ザフィーラがそう言うと、突如第1シティタワーの上の会場が大爆発し、そこを中心にミミズ型の触手が次々とそこ一点に集まっているのが分かる。

「なっなんだありゃ！？」

ヴィータが眼にしたのはビルと一体化した強大な魔物のえいりあんであった。
上半身だけが出て、背中には無数の触手が出ていて、徐々に大きくなって成長していく。

「何アレ！？以前見たときにはあんなに成長していなかったわよ！」
「おそらく、あれは寄生型えいりあんが大量のエネルギーを吸収したから成長したんじゃろ？このままじゃ、奴ァもっと成長して取り

返しのつかない化け物になるぜよ」

以前とは全く別物と思わせるえいりあんの進化態に驚くティアナに、進化の原因を説明する辰馬。
だがどうしてえいりあんの無数の触手が上半身の体まで成長したえいりあんに集まっている。

「何が起こっているんだ!?一体あそこに何が!?」

シグナムは原因は何なのかを考える中、巨大なえいりあんを囲むかのように蒼い道が宙に浮かびだす。
その大きさはギンガの倍以上はある上にかなりの硬度がある。

「ウィング・ロード……まさか!」

ギンガは自分以外に『ウィング・ロード』を使う者は誰なのかを確信する。
そしてえいりあんの中心に誰かがいた。

「あそこに誰かいるよ!?えいりあんの中心で…何か叫んでいる!なんか叫んでいるよ!」

なのはは一体誰が何を叫んでいるのか不思議に考える。
そして良く見てみると、そこには次々とえいりあんを斬ったり破壊したりのくり返しをしている銀時、フェイト、スバル、桂、神楽、エリザベス、月詠、リィンフォースがいた。

「兄さん……あれは兄さん達だよ!」

ティアナは銀時達がいることに気が付く。

そして銀時達が次々と破壊していくえいりあん達は徐々に力を弱まる。

「どけェェェ！雑魚共ォォォォォォォ！」

銀時が大きな叫び次々とえいりあんを斬って斬って斬りまくるのであった。

銀八
「教えて……」

生徒全員
「銀八先生！」

辰馬
「あはははははははは！今日はわしがアシスタントするぜよ！せっかくこの小説に出てきたんじゃし、参加させてもらうわ」

銀八
はい，じゃあ早速行きます。まずはこの人、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。１ノーヴェさんに渡しそびれましたが、最新のＤＶＤプレイヤーの「ＤＭＰ－ＢＤＴ９００」をあげます。２シグナムさんに報告です。シグナム編が終わったら渡すプレゼントはノーヴェさんにたくさん使ってしまったためかなりしょぼくなります。３．作者さんに質問です。赤夜叉さんの「銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ」で最終回で銀時とフェイトは結婚しましたが銀時はこの話でも結婚しますか？』……ズバリ答えます。１は、ノーヴェの反応は以下の通りです」

ノーヴェ
「うはぁ！マジでありがとな『ＳＡＤＳ』さん！」
嬉しそうに笑うノーヴェはありがたく『ＤＭＰ－ＢＤＴ９００』を頂いている。

辰馬
「あはははははは！凄く喜んでくれてなによりじゃけんのう！んで２の方は……あのおっぱい姉ちゃんに聞いてみるぜよ」

シグナム
「誰がおっぱい姉ちゃんだ！？／／／（怒）……まぁ構わない。作者が私の出番はもうすぐであるそうだからな」
シグナムは作者が自分の出番が来るのを楽しみに待っていた。

銀八
「んで、３はネタバレの可能性になるのでその質問は却下。っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、次からは見逃さないように気を付けます。んで次ィ、ペンネーム『カラー』さん『質問
銀時みたく桂もハーレム化しますか？

質問２
九ちゃんはもう修正不可能ですか？』……ズバリ答えます。１つ目はそれは分かりません。ただ言える事は桂も銀時と同じく、ミッドチルダでは英雄的な存在ですので，隠れファンクラブは多いと思います」

辰馬

「あはははははは！金時だけじゃなくヅラもかァ！」

銀八

「そんで2は……そこは作者も考えていないので分かりません。っと言う訳で『カラー』さん、廊下に立っていなさい」

辰馬

「次行くぜよ、ペンネーム『神威　銀時』さんからじゃ『神威　銀時「恨みは・・・・・・強いて言うならなのはの恋敵だからです」

唯

「銀魂の映画は三回も見に行ったけど感動したよね」

神威　銀時

「財布が軽くなったけどな。質問なんですけど、なんでなのはの世界に銀魂の映画がやってるんですか？」

唯

「本来ならなのはさんらの世界には銀魂についての知識は無いはず』……ズバリ答えるぜよ！作者の話だと、以前にわし等の世界に興味を持ったミッドチルダの映画監督が、たまたま金時の紅桜事件の存在を知って、作ったようじゃけん！そんでその内容は金時の『劇場版　金魂　新訳紅桜編』と同じ内容かは全くわか……」

ゴカァン！

銀八が突如、顔中に血管を浮かべて辰馬の頭をチョップして、辰馬を黙らせる。

「金魂じゃなく銀魂だろうが！それに銀さんの名前も間違えている

ぞォ！っと言う訳で『神威　銀時』さん、友達の名前は間違えないように！」

辰馬
「あはははは！次はァ、ペンネーム『月光閃火』さんからじゃ！『やっほろほ～い…月光閃火です♪

輝刃「…暇だ…輝刃だ。」

それにしても…出たよ『えいりあん』。っていうか怖ぇえええー！！

輝刃「…確かに、あれは凄まじいの一言だな。」

うん…自分、あの場に居なくて良かった～（汗）。あ…今回も質問あります。

1．お通ちゃんに質問…っていうかアドバイスです。どうせだから次はカバーソングに挑戦してみたらどうかな？例えば米倉千尋さんの『嵐の中でだきしめて』とか同じく米倉千尋さんの『ＷＩＬＬ』とか。ついでに辰馬さんもカバーソングやってみたらどうかな？三木眞一郎さんの『Ｂｉｌｉｅｖｅ　ｉｎ　Ｈｅａｖｅｎ』とか影山ヒロノブさんの『ＥＶＥＲ　ＬＡＳＴ』とか。

輝刃「…大容量でいくな…次は俺からだ。」

2．作者に質問だ。前にやっていたスバルとアーサァの話…あれはかなり感動した。で、質問なんだが…今後アーサァが登場する事があるのか？あるとして、もしひょんな事から『人間』として蘇って

現れたら…スバル達はどんな風になるんだ？

ハハハ…鋭い所をスッパリいくね～♪という訳で…今後も応援していくので、そこんとこよろしくお願いします♪（笑顔）

輝刃「…俺が主人公の小説もまたよろしく頼む。というか…次の話はいつ出すのだ？」

待ってよ～…ほとんど思いつきで書いているんだから、こっちも無い頭捻って絞りだそうとしてるんだよ～…（涙）。

輝刃「…いや…その…すまん。（謝）」『」

銀八
「ズバリ答えます。1はお通はそのつもりでやるそうですが……辰馬さんはどうでしょうか？」

辰馬
「あはははははは！やってみたいんじゃけど、出番が少ないからそんなヒマはないぜよ」

銀八
「だそうです。そして2は……スバル編の評価を有難うございます。あるかは分かりませんが、もしその様な形で再会したら、スバルはまず喜んで、そしてスバルとアーサァは親友関係でコンビになるでしょう。と言う訳で『月光閃火』さん、応援有難うございます。次ィ、ペンネーム『アクセル』さん『質問です。
新八がミッドチルダに来て、銀時のハーレム状態を知ったら新八はどんな感じで暴走するでしょう？』……」

辰馬
「あはははははははは！そうじゃのう……確かあの地味メガネってなのはと言う別嬪さんに惚れ取るじゃろ♪他にもハーレム的な展開も期待しているから、金時のハーレムぶりを見たら、無駄にムキムキとした肉体を膨れ上がらせて暴走するじゃろ♪」

銀八
「なりげなく新八に酷い事を言っていない？つうかまた名前間違えたよね？」

辰馬
「と言う訳じゃし、『アクセル』さん、メガネの嫉妬ぶりを楽しみするぜよ♪」

銀八
「お前、新八に殺されても知らねェぞ！」

とんでもない一言に青ざめる銀八。

銀八
「たくゥ……次ィ、ペンネーム『烈火竜』さん『土方さんに質問です。

なのはがティアナを撃墜したあと、喧嘩両成敗ばかりに
土方
「……下手くそだな。確かにティアナに非はあるが、あんな仕打ちは無いだろ。……理由はありそうだが、あれじゃかえって傷つくぜ、ティアナの嬢ちゃん。優秀な教官さんよ、忠告しておくぜ。いくら優秀だからって、すべての教え子があんたに従うとは限らないぜ。よく覚えておきな」

と説教しそうですがどうですか？。

※これは土方が優秀な副長なのに、一部の者（特に沖田）に反発されている。
という立場を重ねて考えた質問です。』……コレは……マヨラーでも無事じゃすまないから……ノーコメントで」

銀時と辰馬は、なのはを怒らせたらどれだけ怖いかを青ざめて想像する。
マヨラーも無事ではすまないのであった。
しばらく嫌な沈黙が続く中で辰馬が話を進める。

辰馬
「つ……次行くぜよ！ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。沖田がこの世界に来たら最初に誰に目をつけますか。（調教しがいのあるメス豚的な意味で）
またそうだとしたら何人くらいですか。』」

銀八
「ズバリ答えます。沖田の場合は気の強い相手を調教すると思います。つまりヴィータやティアナのような人物。っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。そんで次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目

辰馬が今一番飛びかかりたいなのはキャラは誰ですか？

二つ目

辰馬はなのはの世界にきてからは予想に反して結構おとなしいですが、相変わらず女遊びとかはしているのですか？

三つ目

もし辰馬が銀時やズラのように、なのはキャラの誰かに惚れられたらどうしますか？』」

辰馬

「ズバリ答えるぜよ！1はカリムさんじゃのゥ♪2は当然しておるじゃかいに、反応がおとなしいのはわしはミッドチルダの世界はよう知らんし、飛びまわりたいんじゃが……下手をすれば元の世界に戻れんし、それに高杉のやる事をほうっておけんのじゃ」

何やかんやで、辰馬も高杉のことが心配のようであった。

辰馬

「んで3は嬉しいじゃけん♪特にカリムさんを希望するぜよ♪」

銀八

「っと言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

辰馬

「次ァ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからじゃのう。『新八「ウッソォォォォォォォォォォォォォ！！」

新八がムキムキ状態（戦闘力１００億Ｋ）でウッソに襲いかかってきた.

理由は簡単！！お通の発言が原因である.

ウッソ

「ま！！待ってください！！新八さん．僕はそんなつもりじゃ～」

新八
「言いわけ無用じゃ～～～～～～～～～～～～～！！！」

新八はウッソに鼻フックデストロイヤーファイナルドリームをくらわせた・・・

ウッソ
「ぎゃあああああああああああああああああああああああ！！」『」

銀八
「ウッソォォォおおお

かがみ
「ウッソくん・・・って銀八先生!!かがみんちってなに!!私の家のこと!?」

こなた
「とりあえず質問いくよ～

?魔王　（なのはさん），死神　（フェイトさん），夜天の王　（はやてちゃん）に質問です．その凶暴な性格をもう少し直した方がよくない?そうしたら好きな人との距離が縮むと思うな～本人が答えてね．（ちなみにウッソも同意見だよ）

?作者さんとスバルちゃんに質問!!作者さんはスバルちゃんをかなりひいきしているみたいだけどこっちの小説のお妙さんが「こっちでキャラ壊してやる!!」って言ってたけどどうする?ちなみにスバルちゃんの頭がパンデモニウムになる可能性があるかも・・・本人が答えてほしいな～

?辰馬さん，『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』について感想ください．特にあたしたちやタクトさんたちの話を聞かせてください

」

かがみ
「今回は・・・殺られるわね・・・多分・・・はあ（ため息）」『」

銀八
「ズバリ答えます……3人ともの反応は以下の通りである。」

なのは・フェイト・はやて
「光になれェェェェ！！（怒）」

3人は怒り出して桜色の閃光、金色の閃光、白い閃光を放つ。
原因はこなたの言った魔王，死神，夜天の王に怒り出したのであった。

なのは
「……でも……確かに言われてみれば……」

フェイト
「こなたの言う通りかも知れない……」

はやて
「もうちょっと抑えてよう」

3人は少し抑えてる事を考える。

銀八
「んで2のほうは……スバルと黒神に答えてもらいます」

スバル
「うわァ……お妙さん怖いよォ……（ウルウル）」

お妙に恐怖するスバル。
そして黒神の方は……スバルのキャラ崩壊の事で恐怖していた。

黒神
「……本当にスバルのキャラ崩壊をしたら……とんでもない事が起こる……」

黒神は青ざめてガタガタと震わせていた。
それは3日前の事である。

～～～

黒神
「ってな訳で、闇鍋の一件でこっそりと持ち帰ったこのお妙の暗黒物質（ダークマター）をスバルに食べさせたらどうなるか、確かめたいと思います」

フェイト
「え……それ下手すればスバルが死ぬんじゃ……」

なのは
「にゃはははは♪それは名案なの♪」

黒神の提案に反対するフェイトに対し、なのはは賛成する。
黒神の手には、皿に盛り付けているお妙の暗黒物質（ダークマター）をスバルに食べさせたら、どんな風にキャラ崩壊をするのかと考える黒神となのは。
そこに……

スバル
「作者さん、何の用ですか？」

そこに黒神に呼ばれたスバルがタイミング悪く登場する。
黒神となのはは眼を光らせ……

黒神・なのは
「すきありィィィィィィィ！」

思いっきり暗黒物質（ダークマター）を投げて、スバルの顔面に直撃する。
そしてスバルは気絶して倒れる。

フェイト
「スバルゥウウウウウウウウウウウウ！」

青ざめたフェイトは慌ててスバルに駆けつけると、黒神となのははどんな風になるのか興味津々。
お妙の提案通りにパンデモニウムになるのか、それともっと別のになるのかと考える……が……どちらでもなかった。

フェイト
「す……スバル？」

無事であったかと安心するフェイトだが、その安心もすぐに消え去る。
ゆっくりとスバルが立ち上がり……そのまま蒼い光に包まれてバリアジャケット衣装に変わり、左手に持っている『ティルヴィングエア』と背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』、そして右肩に魔力によって生み出された蒼く輝く天使の片翼ごと『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーヴィング）』が生えている。
それ以上に恐ろしいのはスバルの異常なまでの怒りの憎悪が放っていることであった。

スバル
「あのう……悪ふざけにも程があるんですけど……なんでこんな事をしたのですか？」

スバルから放たれるかつてないプレッシャー。
それは暗黒物質（ダークマター）の様なメッチャ不味い物質を口に入れたせいで、スバルの中に眠るＩＳが暴走し、怒りの感情によって支配されたのであった。
そのプレッシャーはなのはとお妙をも上回るほどであった。

黒神・フェイト・なのは
（え……ええぇーーーーーーーーー！？）

黒神は今正にパンドラの箱を開けてしまったのである。
スバルのキャラ崩壊は、憎悪の化身に変貌してしまう事であった。

黒神
（何これェェェェ！？何か憎悪がぴんぴんと伝わるんだけど！？つうかコレ、『戦国ＢＡＳＡＲＡ３』の石田三成並の憎悪の感情だよ！しかも魔王並にメッチャ怖いし！なのはやお妙より怖ェよ！）
なのは
（ふぇえええええええええええ！どうしよう！今のスバルに勝てる気がしないよぉぉぉぉぉ！）

黒神となのははスバルのキャラ崩壊をした事に強く後悔する。

フェイト
「すっスバル……おと……落ち着いて！これには……」

フェイトも必死でスバルにこの状況を説明するが……

スバル
「蒼い憎悪の癒しは……貴様等全員の生き血に相応しい！」

そう言ってゆっくりと『ティルヴィングエア』の柄を右手で握り、ゆっくりと刀身を少し抜き……

スバル
「恐怖に抱かれて斬り刻んでくれるゥゥゥゥゥゥ！」

黒神・フェイト・なのは
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！」

憎悪に包まれた怒りの感情はさらに爆発し、刹那に斬滅するかのように斬りまくる。
その後何があったかは知らないが、気が付けば黒神、フェイト、なのはの3人は全身包帯巻かれて病院送りにされた。
そしてスバルが暗黒物質（ダークマター）やパンデモニウムなど口にし、ＩＳを暴走させればパンデモニウム似の顔じゃなく、憎悪の化身ごと『蒼い堕天使』に変貌するのであった。
ちなみにスバルはこのことを何にも覚えていなかった。

～～～

青ざめて大量の汗を流す黒神を見て、銀八と辰馬は青ざめる。
きっとスバルのキャラ崩壊はそれほど恐ろしい物であると確信したのであった。

銀八
「……一体何をしたんだ、黒神……とりあえず、3は頼むわ」

辰馬
「承知したぜよ！そうじゃけんのう……ウッソとシャクティは良い関係じゃのう。これからも2人の幸せを見守りたいぜよ。そんでタクトとミルフィールはおもろい夫婦じゃけん、一度話し合ってみたいわ。こなたとかがみっきぃも活躍したらもっとおもろいし、これからも出番が増えるしなぁ」

他にもたまの存在は意外そうであり、新八とお妙など、志村姉弟が哀れに感じるなど……哀れみが大きいのであった。

辰馬
「しかし、ヅラとエリザベスはなのはやはやて、そんでシャマルと違ってこっちでも出番が多いのに……良くあそこで出させてもらったなぁ」

銀八
「まぁ、そのお陰で銀時、フェイト、スバルも納得できなかったようだぜ？っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、スバルのキャラ崩壊はメッチャ危険ですので、キャラ崩壊をさせないようにしてください。出ないと死人が出ます」

辰馬
「次が最後ぜよ。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『辰馬に質問です。辰馬はリリカルの世界で銀時みたいにもてもてになりたいですか？少なくとも僕は銀八先生なんかよりももてそうな気がしますし辰馬は・・・』」

銀八

「ふざけんなァァァ！」

辰馬から質問を取り上げて破る銀八。

辰馬

「あはははははは！わしも正直言って金時のもてもては羨ましいが、フェイト達も金時の何かに釣られて惚れたんじゃろ♪」

納得するかのように笑い出す辰馬。

銀八

「『正宗の胃袋』さん、一生廊下に立っていろー！」

辰馬

「以上……こんなもんか。今回は中々頼ませてもらったぜよ。また呼んでくれるとうれしいんじゃ」

銀八

「たくゥ……と言う訳で今回のアシスタントは坂本辰馬でした。次のアシスタントは九兵衛に行かせて貰いますので……それでは」

銀八・辰馬

「次回もお楽しみ（ぜよ）～」

第六十四訓：外見では思えない活躍を見れば誰でも見惚れてしまう（後書き）

えいりあん相手に大暴れする銀時達。

お通の安全を任されたアルフ、エリオ、クリステル。

そして真犯人と遭遇！

クリステル

「次回、「演技の上手い人は相手を騙しやすいので、悪用すれば詐欺になる事もある」テイクオフです♪」

第六十五訓：演技の上手い人は相手を騙しやすいので、悪用すれば詐欺になる事

えいりあん相手に大暴れする銀時達。

侍の強さをその眼に焼き付けるギンガ。

あの人物がついに登場！

アルフ

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるよ！」

第六十五訓：演技の上手い人は相手を騙しやすいので、悪用すれば詐欺になる事

「てぁあああああああああああああああああ！」

気迫を込めて叫びだす銀時は、木刀を強く握って大きく振り、えいりあんの触手をまっ二つに斬る。

そしてダッシュしながら次々とえいりあんを斬りまくりだす。

後ろから無数の触手が槍のように襲い掛かっても、素早く交わして木刀を連続に振り回して次々と触手を斬りおとすなど、デタラメでも全く隙を見せない。

「バルディッシュ！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ≫

フェイトも『バルディッシュ』を鎌状態に変化し、『アークセイバー』を3発放って三日月型の金色の刃がえいりあんの触手を斬りまくる。

さらにスピードを活かした攻撃を繰り出し、『バルディッシュ』を二刀流の『ライオットザンバー・スティンガー』に変形させて，金色の双剣で次々とえいりあんの触手を斬る。

「はぁあああああああああああああああああ！」

スバルも『ティルヴィングエア』で次々と眼にも映らない神速の剣技を炸裂させて、誰よりも多くえいりあんを斬りまくる。

蒼く光りだす斬撃は余りの速さで、えいりあんでも斬られたかは分からないほどであり、その神速の剣技は華麗にして恐ろしい。

大型のえいりあんには背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』でまっ二つに斬るなど、さらには2つの剣で二刀流を炸裂するなど、

魔法をも使わずに剣術のみでえいりあんを圧倒する。

「おォォォ

月詠はお得のクナイで一気に何十本を投げつけ、１本も無駄に外さずに全てのえいりあんの胴体を串刺し、触手を破裂させる。
接近戦でも小刀２つで素早い動きで切りまくる。
さらに襲ってくる触手の攻撃をジャンプして交わし、素早くクナイを投げて串刺しにする。

「刃もて、血に染めよ。穿て、ブラッディダガー！」

リィンフォースも血の色をした鋼の短剣を幾つも同時に生成して放つ。
その短剣は全てえいりあんの触手に串刺しをして粉々に砕く。
他にも１０年前に闇の書の力でコピーしたなのはとフェイトの魔法を炸裂して発動させるなど、砲撃魔法系もかなり優れている。

フェイトやリィンフォースのように飛べない銀時達でも、スバルの『ウィングロード』が踏み台となっていて、空中戦でも対抗できるのであった。

＊

８人の異常なまでの強さは徐々に巨大な魔物に進化したえいりあんを弱らせていく。
その光景になのは達はあいも変わらずに圧倒される。
特に銀魂組の戦いぶりに始めてその眼をするギンガは誰よりも驚きだしていた。

「あれが『白夜叉』坂田銀時と『狂乱の貴公子』桂小太郎……それに神楽ちゃん、エリザベスさん、月詠さんも……あれじゃどっちが化け物だか分からないわ！」

「ああ……それにスバルの神速の居合剣術と大刀との二刀流……言いたくはないが、速さだけなら名門柳生家の剣術をも勝っている」
「いやいや、フェイトとリィンフォースも負けておらんぜよ」
魔法なしであの強さ、伝説の英雄達の強さを目の当たりにするギンガ。
スバルの神速剣術に感服し、柳生剣術とは全く違う強さを持っていると評価する九兵衛。
フェイトもリィンフォースも他にも遅れをとっていないと笑いながら言い出す辰馬。

「そう言えば、ギンガは銀時達の戦いを見るのも初めてのようだな」
「はい……正直言って魔法なしで数多くの事件を解決したなど信じていませんでしたが……まさか本当だったなんて……」
ギンガが銀時達の異常な戦いぶりを始めてみたと確信するシグナムと疑っていた噂が本当であったと確信するギンガ。

「だけど、あれじゃ無闇にこっちも手が出せない！銀さん達まで巻き込んじゃ……」
うかつに手が出せないと言い出すなのはだが、突如空から巨大な戦艦が現れたことに驚く機動六課のメンバー達。

「あれはL級次元航行船『クラウディア』！」
「クロノや！クロノ提督や！」
ヴィータとはやては、『クラウディア』の登場で驚きだす。
「おそらく『クラウディア』で一気にえいりあんを潰すつもりだ」

「ってそれヤバイよ！そんな事をすれば第一シティタワーも消しかけないわよ！」

ザフィーラとティアナは間違えて第一シティタワーも消すのではないかと青ざめて考える。

＊

「いぃやぁあ！」

さらにというばかりにスバルは神速居合剣術を炸裂させ、次々とえいりあんを斬り、斬られた事にも気づかないえいりあんの胴体はゆっくりと真っ二つに分かれて切断される。そして『ティルヴィングエア』を鞘に納刀し、

≪Ｉ ｒｅｆｉｎｅ ａ ｍａｇｉｃａｌ ｐｏｗｅｒ ｓｗｏｒｄ.≫

スバルの足元から蒼い魔法陣が現れ、精製された蒼い魔力刀が１０個現れ、回転して魔力を高める。

「ブルーエッジストーム！」

魔力剣はミサイル弾丸のように放たれ、数多くの触手を貫通して破裂させる。

「はぁあああああああああ！」

フェイトも『バルディッシュ』の『ライオットフォーム』で高速移動しながら次々とえいりあんを斬りまくる。

「行くよ、バルディッシュ！」
≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ．≫
フェイトの正面に金色の魔法陣が出現され、徐々に魔力が収束されて一気に放たれる。
「サンダースマッシャー！」
そして魔法陣からレーザーが放たれる。
なのはの『ディバイン・バスター』に比べて劣るが、雷を纏っているため直接的な破壊力が特徴。
そして一気に１０本以上の触手を呑み込んで跡形もなく消滅する。
スバルとフェイトは背中を合わせると、空から『クラウディア』が登場したことにようやく気づく。
「何か、今頃次元航行船が来ましたね」
「もうほとんどこっちで片付いているのに……それにしてもスバル……なんか以前より強くなっていない？」
フェイトはスバルを見て，以前よりさらに強くなっていることがわかる。
剣術は勿論、魔力もかなり高まっている。
やはり原因はアーサァの形見である『ペンドラゴブレイド』による影響としか考えられない。
「フェイトさんもリミッターをかけられているのに良く暴れますね」
「スバルだってリミッターをかけられているじゃない……」

そう、２人は魔力の高さと強さが異常なまでに高い上に、はやてによって「能力限定」の魔力リミッターをかけられており、約２．５ランク落ちている。
執務官であるフェイトと、はやてから機動六課最強と思わせるほどの実力を持つスバルだからこそ持てる強さかもしれない。

「それはそうと……どうしてここに来たの？はやてから貴方はしばらく休日を貰っているんじゃ？」
「分からないんですよ……気が付いたら桂さんとエリザベスさんと一緒にここまで来ちゃって……」
「スバル……」

無意識にここまで来たスバルに驚くフェイト。
それはスバルがアイドル歌手としてではなく、１人の機動六課の一員として現場にかけつけたことである。

「安心してください。この事件が解決したらすぐにマクロウさんの所に戻ります。だから死ぬつもりはない…だけど……」

スバルは背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』を抜き出す。

「私の大切な仲間を死なせるつもりはありませんよ」

笑いながらそう言い、右手でしっかりと『ペンドラゴブレイド』を握る。
その言葉を聞いたフェイトはしばらく間を開いて黙りだすと……笑い出す。

「ふふふ……確かにね。スバルを見ていると、何かまだ新人とは思えなくなってきたよ」

部下の成長に喜ぶフェイト。
スバルはフォワード部隊の中でもまだ新人であるが、誰よりも仲間を大切に思っている。

「まぁ、1人じゃ不可能な事は山ほどありますけどね」
「それは言えている」

以下にどれだけ強くても、1人では限界がある。
2人はそう考えると1匹の巨大なミミズの触手が口を大きく開き、2人を襲いだす。

「だけど……」

フェイトとスバルは足を大きく踏み出し、高速移動と瞬間移動をして

「仲間と力を合わせれば可能！」

2人の声がピッタリと重なり合い、フェイトは『バルディッシュ』を大きく振り、触手の胴体を間っ二つにして、スバルは『ペンドラゴブレイド』で触手の頭を一刀両断する。

「だから仲間がピンチなのに、自分だけ休む訳には行かないんですよ！」
「それもそうだったね！」

仲間を放っておけない。それこそがスバルの思い。
それを聞いたフェイトは仲間として喜びを感じだし、右手からビリビリと稲妻が宿っている金色の魔力弾を投げ、それがえいりあんの触手にぶつかって大爆発する。

＊

一方のビル内では、ミミズ型のえいりあんの触手だけじゃなく人型のえいりあんも現れる。
えいりあんの大群が一斉に襲ってくるところ……

「はぁあああああああああああ！」

エリオは『ストラーダ』を高速に回しだし、次々と人型えいりあんを斬りまくる。
さらに『ルフトメッサー』で空気の刃を飛ばして触手を斬りまくる。

「てやあああああああああ！」

アルフも狼形態でえいりあんの触手を次々と噛み砕く。
さらには人形体として殴ったり蹴ったりと人型えいりあんを吹飛ばす。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前」

クリステルも陰陽師としての力を、お通を護る為に力を発揮する。
五芒星の青い光がクリステルの前に浮かび上がり、そこから秘術を発動する。

「氷殺秘法、凍風大波（とうふうおおは）！」

すると強烈な蒼白い冷気の風がえいりあんを包み込むと、えいりあんの触手は次々と氷付けされて、最後には粉々となる。
魔法に匹敵する陰陽術は、エリオとアルフも注目される。

「す……凄すぎルビーの輝き」

お通は人離れした戦いぶりをするエリオ、アルフ、クリステルの３人に驚きだしている。

銀時と言い、この３人と良い……自分では知らない所では凄い戦いを繰り広げているのを知ってしまった。

それと同時に自分の為に戦ってくれている３人を見ていると、さっきまで人気を取り戻す事に意識しすぎた自分がバカらしく思えた。

自分も銀時達を見習ってまた一から歌い始めることを決意した。

出なければ銀時の言うとおり、自分を応援してくれている新八に申し訳がない。

「大体はこっちの方は片付けられたようだね」

全てのえいりあんを駆除したと確信するアルフ。だが油断は出来ない。

寄生型えいりあんは核を破壊しない限りえいりあんは再生する。

その為銀時達の加勢に行きたくても行けない。お通から離れる訳には行かないのである。

「とにかく、ここは銀時さん達に任せて私達はその核を……」

「その必要はねぇ……」

クリステルは核を探しに行こうと考えるが、突如目の前に軍事服を着た男達が４人現れた。

１人はリーダーっぽく頭に黒いバンダナを巻いてグラサンをかけている。

他の３人は覆面をかけている。

「貴方達は一体……」

どうしてここに人がいるのか疑うエリオ。

「機動六課の勢力は噂していたが、まさか異世界から来た英雄達がいるとは思いもよらなかった……だがこれ以上貴様等の好きにはさせぬ！」

リーダーらしき男がマシンガンを構えると、

「まさか……あんた達がこの第一シティタワーにバイオテロを起こしたと言うのかい！？」

アルフは４人に睨みつけて言い出す。

「ああ、俺達はこの第一シティタワーで働いていた乗務員さ」

「だが……安月給で嫌と言うほど働かされて、働きアリ扱いされ続けて１５年！」

「あのクソ社長が、使えなくなったと言うだけで俺達をクビにしやがったんだ！」

「俺達が事故にあい、たった１週間の入院で俺達を捨てやがったんだ！」

こき使われて１５年も無駄に働かせ、しかもたった１週間の入院でクビ。

それが原因でこのバイオテロを起こしたのであった。

しかしエリオ達が聞きたいのはそう言うことではなく、どうしてこのバイオテロを起こしたのかを聞き出す。

「だからって、無関係な人々を巻き込むなんて……」

「それにどうしてこのえいりあんを！？」

お通は過激すぎる男達のやり方に苦い表情をして、アルフはどこでこのえいりあんを連れて来たのかを聞き出す。

そう、元々えいりあんは銀時達の世界に存在する異種生命体。

この世界には存在しない危険生命体でもある。

するとリーダーらしき男からとんでもない事を聞きだす。

「俺達がクビになった次の日に、高杉晋介とか言う奴から『生体兵器』を渡されたんだよ！」

「高杉！？」

高杉の名を聞きだし驚きだすアルフ。

銀時の世界にいる武装集団『鬼兵隊』のリーダーであり、かつて銀時と桂と一緒に戦場を共にかけつけた人物であり、『異種生命体事件』を起こした張本人。

しかも驚くべきところは、このえいりあんが『生体兵器』である事に驚く。

以前に桂から、『鬼兵隊』は強力な武器や兵器を数多く作り上げ、それを使いこなして敵を抹殺する。文字通り鬼の様な強さを持った集団だと聞かされたが、まさか『生体兵器』も作り上げるとは驚いた。

しかも『カリバン事件』で現れた数多くのガジェットも、全て『鬼兵隊』が作り上げた兵器でもあった。

「そして俺達はこの兵器を元にバイオテロを起こした訳だ！」

「全ては俺達の人生を弄んだあのクソ社長に復讐する為に！」

男達の怒りは完全に爆破していた。

気持ち事態は分からない訳でもないが、コレを機動六課としてほう

っておく訳には行かなかった。

「それでも、これ以上の被害を広める訳には行かない！無差別破壊及びバイオテロ行為で、逮捕します！」

エリオは『ストラーダ』を構えだす。
だがリーダーらしき男はある物を取り出す。
何やら携帯のような形をしているスイッチボタンである。

「逮捕……そんなの好きなだけやれよ！俺達は１５年間も無駄に人生を失ったんだ！今更逮捕されるのも怖くねぇ！だが、その前にこの第一シティタワーを完全に破壊してやる！このビル内には数多くの爆弾が仕掛けていて、押せば全て爆発してこのビルは吹き飛ぶ！」
「なぁ！」

そんな事をすれば、自分たちは勿論、外にいる人達も巻き込まれる。

（怒りの感情に支配されて、この人達は死を恐れていない！このままじゃ多くの人が死んじゃう！）

クリステルはそうはさせまいと、懐から五芒星が書かれた紙を取り出す。
それは式神を呼び出す札であった。

「外道丸！出てきて！」
≪了解しやした、クリステル様≫

クリステルは札を地面に置くと、札から大きな煙が現れる。
そしてその煙の中から１人の少女が現れた。

「お待たせしたでござんす」

頭に鬼の角が生えていて、ショートヘアーの黒髪で黒い着物を着ている。
そして瞳は赤く染まっていて、背中に鬼の金棒を背負っていて、両手には大量の花人を持っている。

「式神外道丸ただいま参上つかまりやした」

外道丸の参上にエリオ達は驚く。
陰陽師は召喚術も可能であると思い知らされた。
だが外道丸の様子がおかしいのに気づく。

「……外道丸……なんで悲しんでいるの？」

苦笑して質問するクリステル。

「……おっかさんの……墓参りに行く途中だったのに……無理矢理呼ばれたでありんすから」

悲しめな眼で外道丸はそう言うと、クリステルは勿論……この場にいる全員が重い雰囲気になる。

「ちょっとォォォォォォォォォォ！何か最悪なタイミングで登場したんだけどォォォォォォ！」
「墓参り！？墓参りの最中に呼び出しちゃったんですか！？」

アルフとエリオは思わずクリステルにツッコム。
クリステルも顔から嫌な汗を流している。

「クリステル様から話はうたがっているでござんす。貴方達がこの世界で銀時様方の仲間でありんすか。コレよりあっしは皆さんの為に協力しやすんで、よろしくお願いもうしやす。」

笑っているが悲しみが大きく伝わっている。
式神としての立場でも母親の墓参りが行けない事に悲しみを隠しきれないのであった。

「……あ……あのう……無理しなくてもインドネシア」

お通は外道丸にオドオドと話し出す。

「おっかさんのことはどうか気に病まずに…あっしは気にしていませんから」
「気に病まずにって何!?」
「待ってください!僕達が何かしました!?」

とんでもない言いがかりにツッコむアルフとエリオ。

「大丈夫でござんす。たとえ親の仇であろうとも主に従うのが式神の役目でござんすから」
「人聞きの悪いこと言わないで!私がいつ貴方の母を殺したの!?」

外道丸のとんでもない言いがかりにツッコみだすクリステル。

「大丈夫でござんす。仕事とプライベートは分けるタイプでござんすから」
「そう言う問題じゃないって!」

さらに言うのを辞めない外道丸にクリステルは言い出す。

「本当に大丈夫でござんすから、さあ思う存分こき使っておくんなせ」

そう言って、自分の持っている花を見つめ……

「……おっかさん……今すぐあっしもいくからね……」

「使えるかァァァァ！」

外道丸の悲しみの感情に耐え切れなく、アルフ、エリオ、お通は叫びだす。

「え……何が気に食わないでござんすか？」

「気に食わない以前に、今のアンタを戦わせる訳には行かないじゃないか！」

「コレじゃ貴方がかわいそう過ぎるじゃなインパクトスクラッシュ！」

必死に外道丸を戦わせないように考えるアルフとお通。

クリステルは余りの外道丸の悲しみに唖然と黙り込むのであった。

「俺達でもなんか……戦いづらいよな……」

リーダーらしき男が外道丸に動揺する。

「せめて……その花だけ一旦置いとこう」

「おっかさんの為に探した花を地べたに置くなんて、できないでござんす」

「じゃあ、攻めて俺達が持っておこう！」

リーダーらしき男がそう言うと、外道丸から花を持つ。

「申し訳ないでござんす。この花をよろしくお願いしやす」

「いやいや、今時の娘ながら親思いの優しい娘だ。……俺にもこんな娘がいたらなぁ……」

外道丸の母を羨ましがるリーダーらしき男。

アルフ達も外道丸を慰めてやろうと考える。

だが、

「ハラが……」

「へ？」

「がら空きじゃあああああああああああ！」

ドコォォォ

外道丸が素早く、鬼の金棒を大きく振ってリーダーらしき男を吹飛ばす。
男は宙に高速回転して浮かび上がり、地面に追突するとさらに回転するかのように跳ね続け、壁に衝突するまで止まる事はなく、ついには気絶する。

……ゑ……ゑゑゑ

ドコォォォォォォォォォン！

素早く金棒を大きく振り、男達を吹飛ばして気絶させる。

「外道丸ござんす」

そして金棒を背中に背負う。

「調伏完了」

その一言を言い、クリステル達に向かう。

「か……カッコイイ……」

お通は思わず拍手する。

「しゅ…しゅ…瞬殺したァァァァァァァァ！犯人達をあの可憐な女の子が！！」

「しかもあんなに可憐なのに、とんでもなくど汚い手で！」

アルフとエリオは外見とは大違いな外道丸にツッコミだす。

「お疲れ、外道丸」

「はい……任務完了しやしたクリステル様」

クリステルはにこりと笑い、外道丸はそのまま花を踏み潰す。

「踏んだァァァァァァァァァァァァ！」
「お母さんの墓参り用の花を踏んじゃいましたよォォォォォ！」
アルフとエリオが花を踏んだ外道丸を見て叫びだすと、
「墓参り？そんなもん昨日やっておきやしたよ？全ては芝居でござんす」
「芝居！？」
全てが芝居であることに驚きだすアルフ。
そして外道丸も別の意味で驚いていた。
「……コイツは驚いた。敵をあざむくために芝居をつき合っていると思いやしたが、クリステル様以外は本気で信じておりやしたか」
このさいだと、外道丸はある事を説明する。
「皆様、１つ忠告しておくでござんす。式神護法の類には術者が作り出した根っからの従順な僕と、術者に調伏され従わされている元は悪鬼羅刹の類があるでござんす。あっしは後者、平安時代に大江山で暴れ回っている所を結野衆によって調伏され、以来結野衆につかえておりやすが、しょせんはただの化生の者」
するととてつもない威圧感を放って話し出す。
「貴方達がいかに銀時様の仲間であるとは言え、失望させるのであるのであれば……あっしは容赦なく皆様を地獄に落すでおくんので、あっしや銀時様の期待を裏切らないように気をつけておくんなせ。
……あっしが皆様を常に見ていることをお忘れなく」

外道丸はそう言い、振り向いて「クスクス」っと笑い出して銀時達の元に向かう。
アルフ、エリオ、お通の3人は大量の汗を流し、決して外道丸を怒らせないようにと近い出す。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

九兵衛
「待たせたな。今回のアシスタントはこの僕、柳生九兵衛がアシスタントとしてやろう。どんどん質問来ると良い」

銀八
「それじゃあ行くぞォ。まずはこの人ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん、『1．銀さんに質問です。最近のなのは達はどう思いますか。2．山崎さんに質問です。ディエチさんとは上手くいっていますか？それとこの質問は六十五順のときにしてください。』……ずばり応えます。1は気に食わないけど、最近の銀さんはなのは達に好意を持たれている事に嬉しいのか恥ずかしいのか分からなくなっています。いずれにしても女性に対する扱いも以前とは大違いになっています。2は……山崎の話だと、上手くやっているよです」

九兵衛
「全く……なんであんな胸に体脂肪を膨れ上がっている女に惚れるんだ？武士として情けない」

銀八
「お～い、それ巨乳に対する嫉妬だろ？っと言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「なんかお通も銀時に惚れそうですね」

ヴィヴィオ「銀時パパのハーレムがすごくなりそうだね」

神威　銀時「なのはさん頑張って下さい」

ヴィヴィオ「質問です。六課の食事はどんな料理が出ますか？」

神威　銀時「万事屋の食事との違ってまだマシな食事が出来そうな気がします」』……ズバリ応えます。普通に和食・洋食など好きなのを選べるメニューコースです」

九兵衛
「最も、味は柳生家には及ばないがな」

銀八
「おい……嫌味な自慢は控えめに。と言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい」

九兵衛
「次を行こう。ペンネーム『風花』さん『レイン
「今回は俺も質問する」
どうぞ
レイン
「なら遠慮なく」

？最近作者はエイリアンの姿、形をタコ以外の何者でもないと豪語しているがどう思う？

？九兵衛。お妙でも誰でもいいから胸を揉まれろ。多分、でかくなるぞ？

？銀八に出番を希望する。質問コーナーだけでは寂しかろう

レイン

「こんなところか」

それでは失礼します』……2は僕に対する侮辱なのかァァァァァァァァァァァァァ（怒）！」

銀八

「落ち着けェェェ！刀抜くなァァァ！」

暴れだす九兵衛を抑える銀八は背後から九兵衛の方を触ると……

九兵衛

「うぁあああああああああああああああああああああ！」

銀八

「あらぐぁあああああああああああああ！」

思いっきり投げられた。

銀八

「あ痛たたた……とりあえず2はこんな感じで、1と3を応えるぞ。？はそれは限らない。えいりあんにも色々な姿が存在するんだよ。詳しくはいえないが……？は……有難うございましたァ！と言

う訳で『風花』さん、今日は廊下に立たなくて良いです！……んで次ィペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
今の時点でリリカル組でドSキャラとドMキャラは誰ですか。
またこれから増えますか。』……ズバリ応えます。Mはいませんが、ドSと言えば……何故か知らないけどなのはで……魔王だから」

九兵衛
「なのはに何か言われても知らないぞ？」

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

九兵衛
「次を行こう。ペンネーム『烈火竜』さん『黒神先生に質問です。
自分の書いている小説で、ゲスト出演させたいキャラクター（オリジナル）はいませんか？』」

銀八
「……そうですね……とりあえず真田で。っと言う訳で『烈火竜』さん、いつか真田をゲストに呼んで良いでしょうか？」

九兵衛
「呼ばれると良いがな？次を言ってみるとしよう。ペンネーム『月光閃火』さん『やっふるほ～…月光閃火です♪

輝刃「…俺なら、キャラ崩壊スバルを止めれるかもしれんな…主にナデポで…輝刃だ。」

確かに、輝刃のナデポはそこいらのチートさんと同等かそれ以上ですからね。あ…今回も質問あります。

1．九兵衛ちゃんに質問です。一応自分豊胸薬（効果は適度にEカップくらい）が手元にあるんですけど…欲しいですか？欲しいんでしたらあげますよ。ちなみに、味はイチゴ味です。

輝刃「…そこまで行くか。では一つ俺からも……。」

2．高杉に質問…というかアドバイスだ。いい加減『世界を壊す』とか止めてマトモになれ。んでもって恋人作って尽くしてやれ。その方があの『先生』も喜ぶぞ？ついでに『鬼兵隊』もボランティア集団になって奉公の素晴らしさを知れ。結構気持ちが良いモノだぞ？

またスッパリいくね～輝刃♪まぁ…そのスッパリ感がクールさを引き立たせる訳だけど♪』……1はくださいィィィィィィィィ！」

っと土下座して頼む九兵衛。

銀八

「本当にキャラ崩壊をしているな、こいつ……2は高杉はいませんので無理ですね。っと言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『十河』さん『1・今度はティアナにダークマターを食べさせてみてください。どうなるのか興味津々です。

2・もし・・もしもですよ？銀さん、神楽、月詠が子供（エリオたちぐらい）に戻ってしまったらどうなるのでしょうか？

3・スバルアイドル化計画がもし成功したらなのはたちは喜ぶのでしょうか？

スバル以外にもフェイトもアイドルになれそうですがどう考えてますか？（アイドルになれば時間の融通が利きにくくなりなのはたちにとってはチャンスです）
本人たちがお答えください。』……1は……とりあえず、ティア……食うか？」

銀八はティアナにダークマターを渡す。
するとティアナは……

ティアナ
「何これ？」
銀八
「……お妙特製の卵焼き……通常『暗黒物質（ダークマター）』……食ってみろ」
ティアナ
「食えるかぁあああああああああああ！（怒）」

ティアナは怒鳴りだすが、隙を突いて銀八はティアナにダークマターを無理矢理食わせる。
それを口にしたティアナは……

ティアナ
「△＃＄@@@＊％＃＄＊●●×＊×～～～～～～～～～！！！！」

バタン！

すぐさまに倒れて気絶する。
その後、眼が覚まさずに保健室に運ばれる。

銀八

「1はこんな感じでした」

九兵衛
「酷いことするなオイ？……まぁ良い。2はフェイト達が驚くだろう。3は……僕にもアイドルさせろォォォォォ！」

九兵衛は涙を流して叫びだす。

銀八
「……と言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞォ、ペンネーム『武士堂』さん『銀さんに質問です。
銀さんは今や人間の域を超えた強さですが、『型月』シリーズの死徒二十七祖の『朱い月』やゼルレッチやＯＲＴに勝てる自信はありますか？』……ズバリ応えます。いくら銀さんでも、不死の力を持つ相手に勝つ事は不可能です。仲間の力を合わせてやっと対抗に戦えます。だけど白夜叉化すれば勝てるかもしれません。っと言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい」

九兵衛
「次を行こう。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『こなた
「光になるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

こなたは桜色，金色，白色の閃光に包まれた

かがみ
「自業自得ね・・・ってスバル怖っ！！って私一人で質問か・・・
ウッソくんはまだ再起不能だし・・・」

シャクティ
「かがみさん．今回は私もいますよ」

かがみ
「おお！！シャクティちゃん」

シャクティ
「はい．みなさんいつもありがとうございます．それでは質問です．？以前私となのはさんで書いた抗議文のこと，黒神さん忘れていませんか？ちゃんとなのはさんのためにかなえてあげてくださいね．じゃないとなのはさんと一緒にめっ！！しますよ．

？『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』について九兵衛さん，答えてください．特に仲のいいお妙さんについて聞かせてください

」

かがみ
「そういえば・・・お妙さんでこっちの海の話のときにそっちに全員分のパンデモニウム送りつけてたわよね・・・一人一つ絶対だべるようにウッソくんを脅して・・・あれはどうなったの・・・？なんか・・・みんなキャラ崩壊しそうだけど・・・（これが？の質問です）」

シャクティ
「みなさんの体を心配しますね」』」

銀八
「ズバリ応えます。？は考えています。？は九兵衛君……お願いし

ます」

九兵衛

「とりあえず、僕がいない間に妙ちゃんがそっちで世話をしていることには感謝している。お妙ちゃんとは凄く仲良しさ。今すぐにでもこの小説に来て欲しいぐらいにね。ウッソとシャクティは仲が良さそうだから，これからも仲良くなって欲しいと思う。後あの桂小太郎とエリザベスが羨ましい。『ＺＵＲＡ』に乗ってお妙ちゃんのいる世界にいけるなんて……許さん！」

自分より目立っていて、さらにあそこの世界に行ける桂に羨ましがる九兵衛。

九兵衛

「しかし、新八君のスケベぶりにも強く呆れたものだ。好きな女に変身できるとは……ヘタレ変態である証拠だな。だからあの男は新一じゃなく新八だ。おまけに無能で地味な存在。ってかお妙ちゃんに恥じかかせたら殺す」

銀八

「やっぱり新八には冷たいなオイ！……そんで？は……その前に俺が全て燃えるゴミに捨てました！」

あんなものを誰かに……特にスバルに食べさせたら、とんでもない事になる事は確かである。

銀八達は知らないが、黒神、フェイト、なのはから聞いたところ、キャラ崩壊したスバルは憎悪の化身ごと全てを斬滅させる『蒼い堕天使』に変貌して、なのはやお妙以上の強さを発揮して暴走すると言う、おそろしい存在になるようである。

銀八
「っと言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、黒神は『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の最新話を楽しみに待っています」

九兵衛
「次を行こう。ペンネーム『流狼人』さん『今回は質問・・・というよりも応援を送りたいと思いました。自分も小説を書き始めましたが、長編を作るのにかなりの精神力と思考が必要になりました（時より諦めようとも考えてしまいます）。しかしこの作品は多くのファンが愛読しています。さらにもう六十話を超え未だに中編だと仰っておりました（そうだよね？）故に純粋にこの作品のファンの一人として応援させてもらいます・・・ちなみにお通殿は銀ちゃんに惚れちゃった系すか・・・ならば新８君の精神はどうなるんでしょうね。＜ついでに自分の作品の批評もお願いします。＞』」

銀八
「有難うございます。黒神は貴方の感想に凄く喜んでいます！ちなみにお通の事を知れば新八は暴走して銀時を殺しに行きます」

九兵衛
「それは新八君がどうしようもない変態である証拠だ」

銀八
「と言う訳で『流狼人』さん、貴方も小説を頑張ってください」

九兵衛
「では次を行こう……ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問

貧兵衛さんに質問です。貧兵衛さんは年齢のわりには胸がやばいくらい貧乳ですね、これはもう『九兵衛』から『貧兵衛』に改名にしたほうがいいんじゃないでしょうか？ｗｗ』……よぉーし、今すぐにそのふざけた存在消してやろうか『正宗の胃袋』！！！！（怒）」

九兵衛は刀を抜いて暴走をするが、銀八が九兵衛を抑える。

銀八
「だから、冷静にな……」

九兵衛
「あああああああああああああああ！」

銀八
「またかァァァァ！」

うっかりと九兵衛の体を触れた銀八は、またもや九兵衛に投げられる。
そしてすぐさまに起き上がる。

銀八
「あ痛たた……『質問２
銀時好きの皆さんに質問です。銀時の天パと銀八先生の天パをさわった感触とにおいを教えてください。』……フェイト達、俺の天然パーマを触ってないぜ？だからこの質問は無理です。と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい」

九兵衛
「まったく……なんて不愉快な質問だ！……次を行こう。ペンネー

ム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『お通にまでフラグを立てるとは銀時…貴様はなんて罪深い男なんだ…
…っというわけで完全な色欲魔と化した銀時とキャラ崩壊ばく進中の九兵衛に質問です。

まずは九兵衛へ質問

九兵衛はどうしてそこまで巨胸に固執するのですか？
「貧乳はステータス」なんて言葉もあるように貧乳の方が好印象になることも案外多いんですよ。

次は罪深い男銀時に質問

銀時は巨乳好きですか？
そして今一番揉んでやりたいと思うのは誰の胸ですか？』……1は……リリカル組のメンバーがずるいんだもん！だって、貧乳キャラそんなにいないんだし！巨乳が多いんだけどォォォォ！」

九兵衛は胸の小ささに強いコンプレックスを抱いているから貧乳扱いされると怒り出すのであった。

銀八
「そんで銀時に対する質問……却下ァァァァァァァァ！（怒）」

銀八は質問を破って怒鳴りだす。

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい！（怒）」

九兵衛
「では次を行こう。ペンネーム『アクセル』さん『この話では新八がアニオタ化してますが、銀魂における二次元オタクのカリスマ、教祖にまで登り詰めたトッシーは出るんでしょうか？ただ彼が出るには土方が出ないと駄目なんですよね。やはり終盤ですかね？』……トッシーとは？」

銀八
「マヨラーの双子の弟みたいな存在だ。もういないがな……彼は成仏しているので、もうでてくる事はないかと思います。っと言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。んで次が最後ペンネーム『ギンタマン』さん『フラグを現在進行形で連発している銀さんに諮問です。もし、フェイトたちの中から誰か一人を選べなかったとしたら、その女性全員に告白をするのですか？』……質問に答えたくはねぇが……今回は初質問っと言う事で応えてやるよこん畜生！……おそらくすると思います」

九兵衛
「うぁあああああああああああああああああ！」

突如、九兵衛に投げられる銀八。

銀八
「何で俺ェ！？しかもまだ触っていないのにィィィィィィ！？」

九兵衛
「……『ギンタマン』さん……廊下に立っていなさい！／／／」

九兵衛は顔を真っ赤にして叫びだす。

そして銀八はゆっくりと起き上がる。

銀八
「以上持ちまして質問コーナー終了」

九兵衛
「胸に対するセクハラ質問も多かったがな……」

銀八
「まだ言うか！……てな訳で、次回のアシスタントはスカリエッティにさせてもらいます」

九兵衛
「では……」

銀八・九兵衛
「次回もお楽しみ。」

第六十五訓：演技の上手い人は相手を騙しやすいので、悪用すれば詐欺になる事

いよいよ進化版のえいりあんとの最終決戦！

銀時とリィンフォースのユニゾンが炸裂！

銀時達の戦いを眼に焼き付けたお通は決意をする！

外道丸

「じかい、『他人が頑張っているところを見れば自分も頑張れる気持ちになる』テイクオフでござんす」

第六十六訓：他人が頑張っているところを見れば自分も頑張れる気持ちになる

ついにえいりあん戦との決着！

クロノの暴走ありの……大ピンチ！

プレシア

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるわよ」

第六十六訓・他人が頑張っているところを見れば自分も頑張れる気持ちになる

「『アルカンシェル　Ｒ－？』の発射準備完了！」
「いつでもいけます、クロノ官庁！」

『クラウディア』の局員達は『アルカンシェル　Ｒ－？』と呼ばれる魔力砲で一気にえいりあんを消し去るつもりであった。
『アルカンシェル　Ｒ－？』は『クラウディア』のみが使用する『アルカンシェル』の軽量版魔導砲である。
『アルカンシェル』とは時空管理局が有する、大型艦船用の強力無比な魔導砲。
その強大な威力から普段は艦船に搭載されておらず、必要とされる事が予想される場合にのみ艦船に搭載され、その発動は搭載された艦船の提督に一任される。
その威力は発動地点を中心に、百数十キロメートル範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲。
だが余りにの強力過ぎる為、どんな場所でも使用できるように改造されて作られたのが『アルカンシェル　Ｒ－？』。
ゾーマの様な対生物型ロストロギア用に作られた魔力砲で、威力は『アルカンシェル』の５０分の一だが、それでもＳＳＳ＋ランク級以上の威力を誇る。
コレならば余分な所で、周りを巻き込まずに対象だけを狙える。
通常ならいつでも発射できるが、それが出来ないのである。
何故なら、そのえいりあんには銀時達が戦っている。

「銀時……どうしてあいつ等が？……とにかく通報を」

今すぐにモニターで移して銀時達に報告をしようとするクロノ。
だが、それがある女性に止められる。

「待ちなさい、クロノ」

クロノを止めた女性は、フェイトの母親ごとプレシア・テスタロッサである。

「ここは銀時達を信じましょう」

「だ……だがそれでは……」

「銀時はあんなのにやられはしない。何せあのゾーマを剣だけで倒した男よ？」

プレシアがそう言うと、クロノは勿論のごと隊員達も納得する。

確かにゾーマに比べればえいりあんもたいした事はない。

ここはプレシアの言う通りに銀時を信じて待つ事を決意するクロノ。

一方で、外道丸の活躍でバイオテロを起こした犯人を捕まえた（て言うよりボコボコにして気絶させた）頃，銀時達は今だにえいりあんと戦っている。

徐々に弱まっていく所，魔物と進化したえいりあんの胴体の中心から巨大な心臓らしき物が浮かび上がった。

それこそが寄生型えいりあんの核だが、その大きさは以前よりさらに大きかった。

「デカ！？っつうか何か大きすぎるなんだけど！？」

思わず叫びだす銀時。

それは第一シティタワーのエネルギーを大幅に吸収したため，さらに拡大化したのである。

リィンフォースも銀時に近づき、拡大化したえいりあんの核に驚きだしている。

「あれが……寄生型えいりあんの核なんですね」

「ああ……2度は見たことはあるが、コイツはその中でもかなり厄介だ。しかもあのえいりあんって確か魔力があるから魔力砲なんかを使えるんだったよね？それやばく……ねぇ！？」

突如，えいりあんの背中から無数のミミズ型の触手が現れ，その触手の口から赤い閃光が大量に放たれて銀時達を襲う。

「ぎゃあああああああああああ！何かいっぱい降ってきたァァァァ！」

「ヤバイですよ！このままじゃ私達は勿論下にいる仲間まで巻き込まれますよ！」

2人は雨のように降ってくる赤い閃光を避けながら逃げ回る。

だがその赤い閃光はスバルの放った『ヴィング・ロード』が次々と破壊されてバラバラになり，徐々に道が砕かれてしまい、飛べない銀時達は早くしないと高いところから落下してしまう。

「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

「ふんぬぅうううううううう！」

桂と神楽は、その赤い閃光を刀と傘で打ち返しまくり、その閃光は触手と胴体に打ち返される。

『喰らえやァァァァァァァァァァァ！』

「ふぅ！」

エリザベスも口からキャノン砲を発射しまくり、月詠もクナイを投げて、次々とえいりあんの触手を打ち落とす。

「ファイヤー！」
「ブレード！」

フェイトとスバルも、金色の魔力弾と蒼い魔力の斬撃を放って触手を破壊したり切断する。
しかしいくら触手に攻撃しても全然減らない一方、大量の触手のせいでうかつに核に近づけない。

「ちぃ！このままではこっちがやられてしまう！」
「しかもこのままではさらに成長して、取り返しの付かない事になってしまうぞ！」

桂と月詠も一刻も早く核を破壊しなければならないと考えるが、スバルが放った『ウィング・ロード』も破壊されまくり，このままではこっちが落下してしまうのであった。
一方の銀時とリィンフォースは速攻に核を破壊するために、お互いに力を合わせることを決意する。

「リィンフォース！今こそユニゾンをやるぞ！」
「はい！」

銀時とリィンフォースは手をつなぎだし、ユニゾンを開始する。

「ユニゾン・イン！」

二人は白い光に包まれ、その光にフェイト達が気づく。

「あれは！？」
「銀ちゃんにリィンフォース……２人が光っているネ！」
フェイトと神楽は２人が光っている事に注目する。
それがなんなのかをフェイトは理解した。
「まさか……銀時とリィンフォースのユニゾン！？」
そう，それはリィンフォースのユニゾンデバイス性能が発動した証拠であり，２人は融合している。
そして光が消えると、眼が変化して蒼くなっている銀時の姿がいた。
「リィンフォース殿の姿が消えた！？」
『マジで！？』
桂とエリザベスはリィンフォースが消えたことに驚きだす。
月詠もだんまりだが驚きの余りに唖然としている。
「まさか，銀さんとリィンフォースさんが、ユニゾンを！？」
スバルも驚きの余りにそう言いだす。
よくよく考えれば，以前に銀時が『ブレイシルバー』を使用したときに感じた魔力とは全く違う波長を感じ，それはリィンフォースの魔力がそのまま銀時に移ったと感じても良い。
そして戦闘態勢に入った銀時はえいりあんの睨みつける。
「それじゃ、さっさとこんなバカ騒ぎを終わらせようぜ？」
【はい！】
そして銀時は、魔力で背中に銀色に輝く悪魔の片翼を魔力で構成し

て羽ばたかせて飛び出す。

「飛んだアル！？」

銀時が空を飛んだことに驚く神楽。
それもそのはず，銀時はリィンフォースの魔力を宿して自分もある程度の魔法は使えるようになっているからだ。
そのまま凄まじい速さでえいりあんの触手に突撃する。

「てゃあああああああああ！」

銀時は木刀を振りまくる。
だがその速さはユニゾンした事により以前より，さらに速くなっていてパワーも桁違いになっている。
そして次々と触手が切断されて異常な速さで触手が減ってゆく。

「なんと！？銀時の強さが以前より上がっているとは……！」
『凄い！』

桂もエリザベスも感心して驚きだしている。
魔法の力を合わせれば、コレほどまでに強くなれるとは思いも知らなかった。
フェイトにいたっても魔力を得た銀時がさらに強くなっていることに驚きを隠せなかった。

「たぁあああああああああああ！」

銀時は思いっきり木刀を振り、その一振りで一気に5本の触手を切断する。
さらに撃ってくる赤い閃光も木刀を神速の速さで振り、全て打ち返

して触手に直撃する。
そして魔物と進化したえいりあんの口から大量の魔力が収束され一気に銀時に向かって放たれる。
その魔力砲は、触手から放たれる赤い閃光の数十倍の威力はある。

「銀時！」
「銀さん！」

フェイトとスバルは急いで銀時の援護に向かうが、

「そんなもんで……」
【私達を……】

銀時はバットを握る構えをして、

「倒せると思った（かァァァ）【のですかァァ】！！！！」

思いっきり振った。銀色の閃光が放たれ、えいりあんの魔力砲を直撃する。
銀色の閃光と赤い閃光が、両者の間で衝突した。衝撃は全体に広がり、強烈な烈風が発生する。
しかしそれも長くは続かず、銀色の閃光はそのまま赤い閃光を裂くようにまっ二つにしてそれがえいりあんの胴体に直撃し、えいりあんの胴体は核ごと浄化されるように消えさる。
つまり、寄生型えいりあんの暴走は完全に収まった事になる。
その証拠にえいりあんに寄生されていた第一シティタワー内に生まれたえいりあんの触手も次々と腐食して行き、下にいる機動六課を襲ってきたえいりあんの触手の大群も引いていき腐食する。

「ああ、えいりあんが腐食していきます！」

キャロはえいりあんの異変に気づいて驚きだす。
その光景になのはは見覚えがある。
それは寄生型えいりあんの核が破壊された時、全てのえいりあんの肉体や触手が腐食していく。

「銀さん達が核を破壊してくてたんだ！もう大丈夫だよ！」

なのはがそう言うと、はやて達も勝利を確信して大喜びをする。
『クラウディア』の局員達もこの光景には驚きを隠せなかった。

「ぎ……銀時が魔法を！？」

銀時が魔法を使ったことに驚きを隠せなかったプレシア。
しかも異常なまでに魔力が高い事が遠くから見ても分かりだす。
クロノはどうして銀時が魔法を使えるのかを嫌とわかっていた。
以前に起こした人気投票事件で自分が反抗して銀時を襲ったとき，
リィンフォースとのユニゾンでフルボコにされてしまったのである。

「あれには……もう逆らいたくはないがな……」

クロノは次に銀時と関わったらとんでもないほど酷い目に合うと思っている。

※

一方の銀時達はえいりあんの破壊を食い止めたことを安心し、スバルが放った『ウィング・ロード』が消えかかっているのを確信し、早いところビル内に非難した。
銀時はリィンフォースとのユニゾンを解除して2人に分裂し、銀時

の眼が通常に戻る。
そこでアルフ、エリオ、クリステル、外道丸、お通の合流する。
5人の後ろには今だ気絶しており、バインドで身動きを封じられている犯人がいた。

「どうやら、その様子だと復活したようだな」

銀時は笑ってお通にそう言いだすと、お通も笑って御礼を言い出す。

「あ…あのう、……本当に迷惑をかけて御免ね！……それと……有難う！」

お通は銀時に頭を下げて礼を言い出す。

「皆が戦っているところを見ていたら、勇気がわいてきたよ！だから……私、歌うよ！もう一度思いを込めて歌って見せる！」

ようやく復活したとホッと息を吐いて安心する銀時。
神楽も今のお通は、紛れもなく新八が愛する寺門通であることを確信して笑い出す。
外道丸は久し振りに再会する銀時と神楽に挨拶をする。

「お久し振りでございやす、銀時様、神楽様」
「ああ，久し振りだな外道丸」
「久し振りでアル♪」

親しそうに話し出す銀時達3人。
結野衆と巳厘野衆の一件以来で顔見知り合いとなっている。

「銀時ィ！」

フェイトとアルフが銀時に駆けつけて走り出すと，思いっきり抱きつく。

「お……おい、フェイト、アルフ！？／／／」

突如の2人の抱きつきに驚く銀時。
当然の事に2人の大きな胸が銀時の体を押し付けている。
毎度おなじみだがやっぱり同様を隠し切れない銀時は顔を真っ赤になる。

「良かったァ、無事で本当に良かった」
「良く無事にいてくれたよ銀時」

銀時の無事に安心する2人。
顔を真っ赤になってどうすればいいのか分からない銀時は言葉が出ない。
その光景に神楽とリィンフォースはご機嫌悪そうになり、桂とエリザベスはニヤニヤと笑い出す。
スバルはフェイトとアルフを見て羨ましそうに見つめる。
月詠は興味深そうに見るが、どことなく少し寂しそうに見える。
外道丸にいたっては銀時に親しい女性に興味深そうに見つめる。

「クリステル様、銀時様に抱きついている可憐な女性達は一体誰でござんすか？」
「銀時さんの事が好きな女性だそうだよ」
「ほほぅ～」

クリステルも神楽から銀時はこの世界ではメッチャハーレムな生活をしている程女にモテている事を聞かされている。

それを聞いた外道丸は興味深そうに頷く。
そしてエリオとお通は顔を真っ赤に染まって3人を見つめる。

「ア……そう言えば、まさかリィンフォースが銀時とユニゾンをしたなんて……」
「リィンフォースが『融合型デバイス』とは知っていたけど……まさか銀時とねェ」

フェイトとアルフがそう言うと、誰もがリィンフォースに注目する。
まさか銀時と合体してユニゾンしたなんて誰も思ってもいなかったであろう。
そんな全員（銀時を除く）を見てリィンフォースが自慢げに胸をはる。

「そうです！私のユニゾンは銀時の為！そしてこれが……」

勝ち誇ったかのようにリインフォースは……

「私と銀時の『愛』の力！」

ドコォォォォォォォォォォォォォンンン×2

一体何が起こったのかわからないまま、リィンフォースは気絶して倒れた。
頭には2つのタンコブが出ている。

「……お前等……最近『加減』って言葉忘れていない？」
「忘れていないよ♪」

青ざめて言い出す銀時に対し、フェイトとアルフはニコリと笑って言い出す。
スバル、桂、神楽、エリザベス、月詠、エリオはその光景に見慣れているが、クリステルとお通は青ざめてガクガクと震わせている。
外道丸にいたっては面白そうに「クスクス」っと笑っている。

※

「や……やるようになったわね、あの2人」

プレシアは青ざめて銀時達のやり取りを見ていた。
だがどこかしらいつもどおりにやっていると見て、安心して笑う。
しかしフェイトとアルフが銀時になついているのが少し複雑そうに見えた。

「す……すごい」
「あのオーバーSランクの危険異種生命体を1人で……」

局員達も銀時の活躍を見て驚きを隠せていなかった。
そんな局員達にクロノがゆっくりと近づく。

「コレか？『アルカンシェル　R－？』の発射スイッチは？」
「ええ、ですがあの異種生命体はもう全滅したようですし、『アルカンシェル』の使用は必要な――」

ポチ

局員が言い切る前に、クロノは迷わずに押した。

「…アレ…今押した…嘘…今押したァ！？」

局員は青ざめてクロノに言い出すと、

「いや、何か銀時がフェイトと一緒にいるのが無性に腹が立ったからつい……」

などと言い、『クラウディア』から『アルカンシェル　Ｒ－？』が発動する。

「ゑゑゑゑゑ！？」

プレシアと局員達は青ざめて叫びだす。

「ちょっとォォォォォォォ！何やっているのクロノォォォォォォォォ！」

クロノがそんな小さな理由だけで『アルカンシェル　Ｒ－？』を発動させた事にツッコむプレシア。

「止めろォォォォォォォォォォォォ！」

「無理！もう解除できない！」

止めようにも、発射しようとしている大砲を止める事はもう不可能である。

『クラウディア』から大砲が現れ、そこから魔力が大量に収束されている。

その光景を眼のあたりにした銀時達は嫌な汗を流して青ざめている。

「……え……何アレ？何かこっちに向かって放とうとしているんだけど？」
「ひょっとして……アレって管理官が開発した『アルカンシェル　Ｒ－？』じゃあ？」
どうしてここに向かって大砲が放たれようとしているのか分からない銀時に、アレはもしや例の新兵器である『アルカンシェル　Ｒ－？』ではないかと考えるフェイト。
「え……確か今、『クラウディア』だげ持っている生命型ロストロギア対策の魔力砲ですよね？」
「アレがそうなんだぁ」
唖然として言い出すエリオに、興味ありそうに『アルカンシェル　Ｒ－？』を見るスバル。
「何あるか『あるかぅしえるあーるつぅ』って？」
「『アルカンシェル　Ｒ－？』じゃ」
ちゃんと言い切れない神楽にツッコんで正しい発音を言い出す月詠。
「コレって、逃げた方が良いよね、アルフ」
「たしかに」
フェイトとアルフは今この場から逃げた方が良いと考える。
それはどうしてなのかを銀時が聞き出そうとする中、突如空からモニターが映し出された。
そこには、プレシアが慌しい表情で移っていて、後ろにはプレシアの魔法を（つまりやりすぎによってお仕置きを受けた）クロノが黒こげで倒れている姿が見えた。

≪皆ァァァァァァァァァ！早くそこから逃げてェェェェェェ！≫
「母さん？」
慌しい母の叫びに驚くプレシア。
≪今、クロノが『アルカンシェル　Ｒ－？』を発動したわよ！早くしないとあの世行きよォォォォォォ！≫
「…ゑ…ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ！？」
『アルカンシェル　Ｒ－？』の発動に字が間違えるほどに驚くフェイト、スバル、アルフ、エリオの４人。
銀時はその『アルカンシェル　Ｒ－？』はなんなのかを詳しく聞きだす。
フェイトは急いで銀時達に『アルカンシェル』と『アルカンシェル　Ｒ－？』の説明をする。
それを聞いた銀時達は……
「だ……脱出するぞォォォォォォォォ！」
「ウィング・ロード！」
脱出宣言をする銀時に、窓側から脱出ルートを作るかのように魔力の柱を放つスバル。
全員『ウィング・ロード』に乗って全力で走り出して脱出する。
「ぬぁあああああああああああああああ！何でそんなおっかない大砲を撃つアルかァァァァァァ！？ヅラァ、原因言ってみろォォォォォォォ！」
「ヅラじゃない桂だァァァァァァァァァ！それにそんなのこ

っちだって聞きたいぐらいだァァァァァァァァァ！」
「とにかく逃げる事が先決じゃァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
「はいィィィ

いくらなんでもそれはないと考える銀時だが……

「そう言えば、クロノは私を妹のように扱っていつも相手していたんだけど……以前に他の男が私に近づくだけで怒り任せに、『ディランダル』で相手を氷付けた事が合ったような……」

「当たったァァァァァァァァァ！外道丸の予感が当たったァァァァァ！」

「どんだけシスコンなんだい！」

フェイトはクロノが一方的に兄として構っている事を言い出すフェイト。

クロノのシスコンに呆れた銀時とアルフ。

「そんなことより早くなのはさん達に合流しないと！」

「今は逃げるのを専念すルビーの輝きは宝石級！」

スバルとお通がそう言うと、銀時達は今は逃げるのを専念する。

そしてようやく下にいるなのは達と合流でき、クロノが『アルカンシェル　Ｒ－？』を発射すると言う事を聞かされ……

「待避やァァァァァァァァァァァァ！」

はやてが大声でそう言いだすと、機動六課全員が逃げ出す。

その数十秒後、『アルカンシェル　Ｒ－？』から極大な魔力砲が放たれ、第一シティタワーの最上階から半分ぐらい、跡形もなく消し去った。

そして半分が跡形もなく消されてしまった重要建築物である第一シティタワーがこのようになってしまった為、責任問題もやむをえない。

そこで銀時とフェイトは、無差別に『アルカンシェル　R一？』を撃ったクロノに全ての責任を押し付けるのを提案し、機動六課の全員が文句なしに賛成する。
その後、クロノは管理局にメッチャ怒られたのも言うまでもなかった。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

スカリエッティ
「ふはははははは。いよいよ来たようだな。今回はこの私、ジェイル・スカリエッティがアシスタントをさせてもらおう」

銀八
「んじゃ行くぞォ。まずはこの人、ペンネーム『神威　銀時』さん
『神威　銀時「外道丸！まさに鬼！」

ハルヒ「それに結野アナも綺麗な顔して演技が上手いね」

神威　銀時「これには驚いた」

ハルヒ「オレンジジュースを出せるようになったクロスミラージュについて質問よ」

神威　銀時「オレンジジュースはどうやって補給するんですか」』
……ズバリ応えます。アレからティアナは何度も『クロスミラージ

ュ』の修理を求めている為、補充はしていないようです」

スカリエッティ
「ちなみに補充のしかたは、×マークを押しながら拳銃の穴に直接入れる事で自動的に補充してくれるようだ」

銀八
「ほぉー、それは便利だなァ。っと言う訳で『神威　銀時』さん。廊下に立っていなさい。次行きます。ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
東城が今の九兵衛を見たらどう思いますか。』……ズバリ応えます。女の子らしくなって涙が流れるほど嬉しがると思います」

スカリエッティ
「私なら引くがな……」

銀八
「っと言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

スカリエッティ
「次を行こう。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん……おおぉー！『ウッソ・エヴィン』さんではないか！一度じっくりと話をしてみたかったよ。ガンダムの事について」

銀八
「コイツを推薦させればよかったな……質問はコレだ。『ウッソ「パンデモニウム処理していたみたいだよ・・・」

こなた
「おそらくまた送ると思うよ・・・」

かがみ
「あの人のことだからたぶんね・・・」

ウッソ
「質問にいきましょう.

?スカリエッティさんは科学者として尊敬しています.できればハロを直してほしい（魔王に破壊されたやつです）ですが・・・できますか?

?ガンダニウム合金が余っています.いりますか?またいるとしたら何に使いますか?

?『G.Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の感想お願いします.今回はＶ２ガンダムについて聞かせてください.」

かがみ
「恐ろしくまともね・・・初めになのはさんに喧嘩売っていたけど・・・」』」

スカリエッティ
「ズバリ応えよう。?は当然良いとも♪」

嬉しそうに質問を答えるスカリエッティ。
するとどこからか、壊れたハロを修理する為に特殊な装置を重ね合わせ、徐々に修正していく。

３０分後、

スカリエッティ
「完成だ！」

ハロ
「ハロ、フッカツ！アリガトウ、スカリエッティ！」

銀八
「おぁ！もう直しやがった！」

スカリエッティ
「ふふふ……修理のついでに飛行能力も＋しといたから、すぐにウッソの元に戻ると良い。それからウッソによろしくと」

ハロ
「ワカッタ！ハロ、ウッソニヨロシクトイッテオク」

すると、ハロは耳の部分を翼のように羽ばたかせて飛び去った。
コレによってウッソの元に戻ったのであった。

スカリエッティ
「では次を行こう。？は……ありがたく貰っておこう！コレを源外殿の転送装置の修理に使えるかも知れん！」

銀八
「おいおい、そんな事もできんのかよ！？……まぁとりあえず？も応えてやれ」

スカリエッティ
「うーむ、やはりなんと言っても様々な武装を身につけているから素晴らしい！正に主人公が扱う機体に相応しい！桂殿のザクも一体

どうやって手入れしたのか興味心身だ！」

銀八
「本当にヴィータとギンガじゃなくお前を推薦すればよかった！…仲良くやっていたのに……てな訳で『ウッソ・エヴィン』さん、『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』を頑張ってください。」

スカリエッティ
「では次を行こう。ペンネーム『月光閃火』さん『たんぐるほ～い…月光閃火です♪

輝刃「…立夏を過ぎても晩は少し冷えるな…輝刃だ。」

それにしても…外道丸、可愛いのに怖いってどうよ…（汗）。

輝刃「…まぁ、俺のナデポだとイチコロかもな。」

うはぁ…自信たっぷりだね～。あ…今回も質問です♪

1．スカリエッティに質問です。とりあえず手元に性別変換薬があるんだけど…要る？欲しかったらあげるけど…っていうか、正直スカリエッティが飲んだらどうなるか気になるです。

輝刃「…確かに、気になると言えば気になるな。では俺も一つ……。」

2．シャーリィことシャリオ・フィニーノに質問だ。最近めっきり話に出てこないが…暇なら俺が話し相手にでもなろうか？少しは気も紛れると思うのだが……。

ハハハ…ホント輝刃ってクールな割にお人好しだよね♪あ…それと前の質問で九兵衛ちゃん自分の豊胸薬が欲しいって言ってたよね？だからあげるよ♪んじゃ…転送（テレポス）♪（そう言いながら、イチゴ味の豊胸薬を九兵衛の下に届くように転送（テレポス）する）

輝刃「…あ…閃火よ。さっき転送したのは、グレードアップ版ではなかったのか？」

あ…そういやそうだった（汗）。確か今さっき転送（テレポス）したの、効果がGカップになるグレードアップ版だった。同じイチゴ味だからすっかり忘れてたよ…ハハハ…（苦笑）。

輝刃「…俺は知らんぞ？（呆）」『……1は遠慮しとこう……変なトラブルに巻き込まれるし」

銀八
「そんでには……シャーリィさん、どうぞぅ」

シャーリー
「是非ともお願いします！影薄の存在にメッチャ悔やんでいますから！（涙）」

と涙を流しながら言い出すシャーリー。

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、しばらくの間シャーリーをよろしくお願いします。んで次ィ、ペンネーム『カラー』さん『質問外道丸は今回も銀時の玉潰すんですか？もしくは、銀八でも良いですけど。

質問2
今の銀時のハーレム状態を外道丸が見たらどうなります？潰されますか玉？』……ズバリ応えます。外道丸は今回銀さんの玉を潰さないようです。2の方は潰すより興味ありそうに見ますね」

スカリエッティ
「ああ言うタイプは怒らせないのが正解だろうね」

銀八
「と言う訳で『カラー』さん、質問有難うございます。次ィ、ペンネーム『アクセル』さん『質問です。

銀魂のキャラがどんどん増えていってリリなのキャラが全然目立たなくなってきてるよーに感じます。
スカリエッティやナンバーズ側がメインの話なんて予定してるんでしょうか？』……ズバリ応えます。おそらくある予定です」

スカリエッティ
「あって欲しいとも」

銀八
「と言う訳で『アクセル』さん、楽しみに待ってください」

スカリエッティ
「次を行こうか、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
前回の僕の質問で銀八先生のにおいと天パを触っていなかったのはフェイト達は気持ち悪いのと臭かったからじゃないでしょうか？認めたくなかったらフェイト達に聞いてみてください。』」

銀八
「ふざけんなァァァァァ！（怒）」

銀八は質問を取り上げて破りだす。
その光景にスカリエッティは呆れだす。

銀八
「『正宗の胃袋』一生廊下に立っていろォォォォォォォォォ！」

スカリエッティ
「……とりあえず次を行こう。ペンネーム『風花』さん『今日は。風花です
今回は私だけで質問させていただきます
？スカリエッティに質問です。あなたはハーレムでも目指していたんですか？ナンバーズがほとんど女なので
？もし銀さんに出会わなかったら犯罪者として捕まっていましたか？スカリエッティさん？
？次の長編で銀八先生の話をぜひ希望します
それでは』……ずばり言おう。？は男の人造生命体は女の人造生命体より生み出されるのが難しいようで、それで女ばかりのようだ。
？はおそらくそうなっていただろう。？は……残念ながら本編では銀八は出られないようだ」

銀八
「何で俺は出られないんだァァァァ！？」

悔しそうに叫びだす銀八。
そんな銀八に動揺するスカリエッティ。

銀八
「でも……何かこんなに自分を思ってくれて嬉しい！っと言う訳で『風花』さん、これからも小説頑張ってください！」

スカリエッティ
「次を行こう。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『スカリエッティ』に質問です。

一つ目
銀時の身体を改造するとしたら、どの部分をどのように改造してやりたいですか？

二つ目
近藤、山崎の二人は普段のあなたのアジトではなにをやっているのですか？

三つ目
銀魂キャラの女性陣の中で誰か気になる人はいますか？』……ズバリお答えしよう。１はとにかく身体能力をアップする為に全体だな」

銀八
「お前、フェイト達に殺されても知らねぇぞ？」

スカリエッティ
「ははは……二の方は……近藤君はルーテシアに江戸はどんな所かを話したり、剣術の鍛錬をしている。山崎君はディエチとデートをしたり模擬戦をしてミントンと刀の二刀流を磨いたりディエチとのコンビネーションを組み合わせているようだ。三はそうだな……美しいと言えば月詠と言う女性だな。顔に傷をつけて女を捨てたとか言っているが、銀魂の中でも上位の人気を誇っているだろう。し

かもここでも2回連続ベスト5入りの人気を誇っている。猿飛とか言う女性も……メガネを外せばかなりの美人だ。コンタクトをすれば良いのに」

銀八
「お妙とか言う女性は？」

スカリエッティ
「まな板で雌ゴリラだから論外。しかも醜い」

銀八
「だろうね。と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『ギンタマン』さん『結野アナと外道丸が登場して、ここから先銀時争奪戦に参加しちゃうのか否か！…まぁ、外道丸は銀さんに懐いてるようなので面白半分で参加しそうなｗｗｗ

結野アナと外道丸に2つ質問です。
お天気戦争が終幕してからも、清明と道満の喧嘩は相変わらずですか？
道満の痔は相変わらずですか？』……ズバリ応えます。結野アナから聞いた所、2人の喧嘩は相変わらずで道満も痔だそうだ。てな訳で『ギンタマン』さん、廊下に立っていなさい」

スカリエッティ
「最後の質問だ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
1．ノーヴェさんに質問です。前回あげた銀魂のＤＶＤで銀魂の人気投票編を見てどう思いましたか？

2作者さんい質問です。銀時はどのぐらいハーレムが出来ますか？
3．銀時質問です。以前新八が「この知識を活かせば、なのはちゃんは僕の事を惚れ直してくれるんじゃないかな～／／／♪そして，志村家に嫁ぐ為に僕と結婚したりしてぇ♪な～んて♪」といっていましたが正直連れて来なくてよかったと思いましたか？』……1はノーヴェ、言ってくみると良い」

ノーヴェ
「まぁ応えるとなれば……山ほどあるが最もと言えばただ1つ……あの妙(メスゴリラ)が怖っ！」

青ざめてそうはっきり言い出すノーヴェ。

銀八
「分かっているじゃねぇか。んで2は作者は、気分しだいでハーレムを広げると思います。3はそうですね……銀さんは別の意味で連れてこなくて良かったと思っています」

もし連れて来たら、銀時は早めに新八に殺されるからであった。

銀八
「と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい……以上で質問終了！どうでしたかスカリエッティ」

スカリエッティ
「いやー、中々楽しかったよ。またいつかして見たいものだ♪」

銀八
「はい、今日は有難うございました。次はそうですね……ザフィーラを言ってみたいと思います」

スカリエッティ
「では……」

銀八・スカリエッティ
「次回もお楽しみィ～～」

第六十六訓：他人が頑張っているところを見れば自分も頑張れる気持ちになる

マクロウにもう一度お願いする銀時。

今度こそ自分の思いを込めて歌うお通。

『アイドル編』ついに完結！

マクロウ

「次回、「どんな歌でも思いを込めれば良い歌になる」テイクオフだ！」

第六十七訓：どんな歌でも思いを込めれば良い歌になる（前書き）

スバル、決意の引退。

お通がついに自分の歌を取り戻す。

不死鳥のアイドルごと寺門通、ここに復活！

お通

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるヨーグルト！」

第六十七訓：どんな歌でも思いを込めれば良い歌になる

『異種生命体事件』の一件で，えいりあんを倒しまくった機動六課の名はさらに大きくなった。
その中でも最も注目されたのが銀時、スバル、桂、神楽、エリザベス、月詠であった。

銀時は魔法を使わずに剣だけで活躍をした為、伝説の英雄の存在は本当であった事を確信する人物も増えた。コレにより剣で戦う魔導士達が刺激されて剣術をさらに磨き上げる物が多くなった。

スバルは元々新人アイドルとして名が高かく、スバルの活躍を見たアイドル達やアイドルファンの人々はスバルに注目し、その実力は機動六課最強と噂されてさらに人気が高まった。

桂は銀時同様、優れた剣術だけじゃなく特殊な爆薬を使いこなすなど、まさに『狂乱の貴公子』としての名に相応しい戦いぶりをした為、誰もが憧れる人物として注目される。

神楽もスバルと同様に潜在能力は機動六課の中でも最強と評価されており、まさに『歌舞伎町の女王』の名に相応しく、『ミッドチルダの女王』として注目を浴びせられた。

エリザベスは外見とは裏腹に、プラカードとキャノン砲を使いこなすと言う桂のペット（！？）に名に恥じない『狂乱の聖獣』として、特に子供達のヒーロー的な人気を持つ。

月詠はクナイと言う飛び道具を自由自在に操ってえいりあんを翻弄する活躍をし、その美しきさに男性は見惚れて数多くの隠れファン

クラブが作られた。

何はともあれ、コレ見て一件落着と言いたい所だが、まだお通の方を解決していない。
銀時はスバルにお通の事情を説明する。それを聞いたスバルは少し考えて、ある決意をする。

＊

スバルはアイドル教育所でマクロウに話をしだす。
その話の内容はマクロウが驚くべき内容であった。

「引退するだとォ！？」
「はい……今回のように急な事件が起こったら救える者も救えないと考えた」

スバルは今回のように急な事件が起こってしまえばアイドル活動をしている暇はないと確信したのであった。
だから引退して機動六課のほうに戻ると決めた。

「だが、新曲はすでに完成されている。何より今回の事件でスバルの活躍がミッドチルダ内でも広まって、ファンが多く増えているんだぞ？それでも良いのか？」

新人アイドルとして人気を上昇中であり、しかもそこで華麗なるスバルの剣術が炸裂し、スバルの人気はさらに5倍ぐらい上昇しているのであった。
このまま続けていれば、スバルは間違いなくトップアイドルとして君臨する。

それでもスバルはアイドルを引退する事を決意する。

「私には……やらなければいけない事があるんです…だから……ごめんなさい！」

スバルは申し訳なさそうに頭を下げて謝る。

彼女の気持ちにマクロウは理解するが、それでも惜しい逸材が消えるのはもったいないとガッカリする。

「その代わりなんですけど……1人の女性にアイドルをさせて欲しいのがいますけど、見てくれませんが？」

スバルがそう言うと、マクロウは興味ありそうにその話に乗る。

すると、突如扉が開いて銀時、クリステル、お通が現れる。

「銀さん、それにアンタは……」

「お願いします！もう一度私の歌を聴いてください！この思いを……私の歌の思いを皆に伝えたいんです！」

その言葉を聴いてマクロウは驚きだした。

以前のお通は歌の内容以前に、歌に情熱がなくて思いが伝わっていなかった。

そんなんではアイドルとしてやっていけないと確信してマクロウは不合格を判断した。

しかし今のお通は、最初に会った時とはまるで別人であると思い込む。

コレならばとマクロウは、お通の歌を再審査をする事を決めた。

「良いだろう！だがスバル、もし彼女がダメだった場合……引退の件はなしだぜ？」

「分かりました」

もしお通の歌がダメであった場合、スバルの引退をなしにする。
スバルがくれたチャンスを無駄にしない為に、お通は絶対に受け、
そして自分の思いを歌に載せる事を決意する。

＊

そしてしばらくして審査としてお通は歌いだす。
歌は以前にマクロウに聞かせた『お前の母ちゃん〇人だ？』である。
歌い終わると、お通は歌いきったように満足する。

一方のクリステルは平然として、銀時は呆れ、スバルにいたっては
唖然と大量の汗を流している。

「ぎ……銀さん……ひょっとして、お通さんって普段はああ言う歌
を歌っているんですか？」
「そうだよ？凄く呆れるだろ？」

スバルの質問に銀時は答えると……

「いや、あれじゃあ落ちますよ！何か色々と言っちゃあヤバイ事を
何度も言っていますし！」
「ああ、そのリアクションとツッコミ、前にティアナが言ったから
良いって！」
「そう言う問題じゃないですよぉ～～～！」

お通の歌の内容にスバルは青ざめて慌てだす。
クリステルは合格を強く願っている。

（お通ちゃん！）

両手を握って祈りだす。

お通の歌を聞いたマクロウは以前にはないお通の歌いきった満足感を感じた。

そして審判の時が下された。

「歌の結果発表をする！」

お通も真剣な表情でマクロウを見つめる。

そしてマクロウが下した判決は……

「歌の内容には問題があり！これではアイドルとしてはやっていけん！」

厳しい評価にお通はひょんとする。

クリステルは苦しい表情をして、銀時とスバルは平然としている。

「……だが、もし普通の歌であったら……お前の才能は少しづつ磨きあがるだろう」

にやりと笑ってマクロウはお通の才能を評価した。

コレはもしやとお通は喜びの笑顔をする。

「結果は……合格だ」

親指を立てて合格宣言をするマクロウ。

「う……受かったァァァァァァァ！」

「やったァァァ！お通ちゃんやったね！」

合格を聞いたお通とクリステルは喜びだす。
銀時とスバルも笑って安心する。

「さて、そうと分かれば今日から忙しくなるぞ?早速、曲作りを始めないとな……しっかり歌って貰うぞ！」
「はい！」

お通は返事をしてマクロウの特訓を受けた。
そして銀時達のところに駆けつけたお通はお礼を言い出す。

「銀時さん、スバル、結野アナさん！私、やりました！」
「……ああ、ようやく寺門通の復活か」

お通の喜びに安心するかのように言い出す銀時。

「私がこうしてまた歌えるのも、皆さんのお陰です！私、また1からやり直して頑張ルックス！」

自分のために協力してくれた銀時達のために、本当のアイドルとしてのスタートを始める。

「頑張ってください、お通さん。マクロウさんと協力し合えば絶対に人気アイドルになれるよ！」
「うん！有難う、スバル！」

スバルの応援に喜ぶお通。
その光景にクリステルは姉のように喜びだしている。
スバルはマクロウのところに駆けつけて今までの世話の礼を言い出す。

「マクロウさん、今まで有難うございました。そして……これからもお通さんをお願いします」
「ああ、彼女の事は任せな。スバルも機動六課の方を頑張れよ」
「はい」

マクロウの言葉に嬉しそうに返事をするスバル。

「銀時さん。私はしばらくの間、お通ちゃんのマネージャーをやって影から見守りたいと思います」
「そうかい……まぁもうないと思うが、お通が暴走してしまったら……止めてやってくれよ」
「勿論です♪」

クリステルがマネージャーをやる事は銀時も賛成であった。
もしもの為にクリステルがお通を支えてやった方が名案であった。
何はともあれ、一件落着と解決したのであった。

「んじゃ…帰るぞォ」
「はい」

銀時とスバルは機動六課のところに帰るため、この場を去ろうとする。
そんな2人にお通は……

「あのう！」

お通は大きな声で2人を呼びだす。
そして強い感謝を込めて言い出す。

「もし、私の初ライブが始まったら……良かったら来てください！思いを込めて歌うから！」

お通がそう言うと、銀時はフッと笑って「ああ」と一言だけを口に出して、スバルと共にこの場を立ち去る。
言い切ったお通は満足そうに笑う。
そんなお通にクリステルが近づく。

「良いんですか？それだけで……本当の事を言わずに……」

ニコニコと言い出すクリステルに、お通は驚く。

「好きになったんでしょ、彼の事……」
「……／／／」

クリステルの言葉にお通は何も言わずに黙って顔を真っ赤に染める。
図星であった。
しかし彼女は自分の思いを銀時には言わないでいた。
正確には言いたくても言えなかった。

「……アイドルだったら、無闇に恋しない方が良いんだヨーグルト。／／／……それにあのメガネ君の想いを裏切りたくないから……」

銀時に恋路を持っても、お通は今だに応援してくれている新八の思いを裏切りたくないのであった。
だが本心では、できれば銀時の隣にいたい事は確かであった。

「そう言う結野アナさんはどうなんですか？銀時さんのコトバンク」

クリステルにも銀時の事をどう思っていたかを聞き出すお通。

「……分かりません……ただ」
「ただ？」
「……私じゃ似合わないと思います。銀時さんには数多くの素敵な人が多くいますから……その人の方が銀時さんを受け入れると思います」
好きか好きじゃないかは分からなくても、自分じゃ銀時に相応しい女性にはなれないと確信するクリステル。
「それでも……ああ言う人のファンを持つ事は……誇りに思えます♪」
「だよねぇ♪」
銀時のようなファンを持った事に誇りを思うクリステルに、それは同感するお通。
「……それでも……出来ればもっと早く、銀時さんと会いたかったですよ……」
「……そうだね」
もっと早く銀時と出会えれば自分達も……しかし今自分達が出来る事は山ほどある事もたしかであった。
こうして新人アイドルとして大きな人気を持ったスバルのアイドル生活は1年どころが1ヶ月も経たないうちに幕を下ろし、ここに新たなアイドルが降臨した。
＊
次の日

とある公園で1人、背中に三味線を背負っていてヘッドホンで歌を聴きながら新聞を読んでいる鬼兵隊所属の剣剛ごと河上万斉がいた。
聴いている曲はお通の曲ではなく、スバルが歌っている『蒼の鼓動』であった。
彼が見ている新聞にはこう書かれていた。

新人アイドル、スバル・ナカジマの速すぎる引退。

引退してでもその人気は上昇であり、幻のアイドルとなった。

それと同時に新たなアイドル・寺門通が登場。

来月に初ライブを予定。

「ほう……まさかあの娘がこの世界にこようとは……音楽プロデューサーを辞めても彼女とは縁がありそうでござる」

お通がこの世界に飛ばされた事に意外そうに驚く万斉。
だが今の万斉はお通には興味がなかった。
彼の眼には新聞に写されているスバルしか写っていなかった。
以前に高杉と似蔵が偶然にも出会った少女だが、似蔵の話によれば彼女は剣を使う魔導士という存在だが、その戦い方が変わっていた。
何でも自分と同じ居合を中心とした剣術を使い、しかも得物がである剣が刀であると……まるで侍みたいな存在であったと聞く。

コレには万斉も最初に聞いたときには驚きだしていた。
実はこの世界に似ている『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』のＤＶＤ全巻と見て、全ての内容を見ていた。
そこには、原作のスバルは刀を使わないどころが、似蔵の言っていたスバルの戦い方とＤＶＤに移っていたスバルの戦い方が全く違っていた。
武器は刀ではなく『リボルバー・ナックル』と『マッハ・キャリバー』とか言う２つのデバイスであった。
だが、この世界はその『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』に似ている架空の世界ではなく、アニメの世界に似ている本物の世界である為、原作どおりに進まないのは承知していた。

「にしても、似蔵が少し興味を持つのも分かるでござる。アニメのこの娘を中心としたフォワード部隊と言う連中の魂は未熟でござる。正確な音を奏でるがその輝きは薄い。たとえて言うのであれば……力に頼る未熟な兵士と言った所でござろう」

要するに万歳が本気で殺そうと思えばいつでも殺せる軟弱な連中である事は理解する。
そこにはギンガを含めて５人は弱いと言う訳である。
だが、この世界のスバルはそれはないと思っている。
少なくとも今聞いているスバルの曲は万斉も認める程であった。

「にしてもこの曲、曲名どおり蒼の鼓動が感じるでござる。歌手を辞めるにはもったいなかろうに……拙者もその娘に会いたくなって来たでござるよ」

スバルに興味を持った万斉は曲を聴きながら新聞を読み続けるのであった。

＊

マクロウとクリステルの強力により、お通の新曲『木刀だからって真剣には引けをとらないぞ』はヒットして少しずつ人気が増えてきている。
お通から手紙が来て、迷惑かけた謝罪と協力してくれたお礼がタップリと書かれて、それを見た桂、エリザベス、はやては笑い出す。

「どうやら、あの娘は歌に大切な事をどうやら理解したようだな」
『本当に良かった』
「うん……色々と会ったかもしれへんけど……無事にスバルも戻ってきて一件落着や♪」

スバルが戻ってきた事に機動六課の部隊長として安心するはやて。
すると桂は、はやてにある質問をする。

「もしやと思うが、八神殿はこの結果を予想して……ワザとスバル殿を歌手にさせたのか？」
『え、マジで？』

初めからコレが狙いであったと驚く桂とエリザベス。
一方のはやてはニヤニヤと笑っている。

「うふふふ……ほんま上手く行って良かったわ」
「はぁ……まったく大した女だ、八神殿は」

まさかの大胆なはやての狙いに天晴れと感じた桂とエリザベス。
何はともあれ全てが一件落着に終わった。

だが、

訓練所ではフェイト達機動六課のメンバーがいつもどおりに訓練所を受けていた。

しかし、フェイト、なのは、ティアナ、シグナム、キャロ、アルフ、リィンフォース、ヴィータ、シャマル、ギンガ、九兵衛がデバイスと刀を構えて、スバルに鋭い眼線で睨みつけており、しかも背後にはと巨大化されているフリードに真竜・ヴォルテールが存在する。

スバルだけアイドルとなっているのに自分達はただ単に戦う機動六課のメンバーとしてしか見られていない。

女としての嫉妬が彼女達に火をつけたのであった。

「さて……準備は良い、スバル？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「ちょっと待ってくださいぃぃぃぃぃぃぃ！何で全員で私1人を攻めようとするんですか！？（焦）」

思い威圧感（プレッシャー）を放つように言い出すフェイトに青ざめて言い出すスバル。

「何でって、スバルが今までやっていなかった鍛錬の遅れを取り戻す模擬戦だよ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

「だったらどうして魔力リミッターを解除する必要があるんですか！？」

なのははあくまで模擬戦と言うが、これはフェイト、なのは、ヴィータ、シグナム、リィンフォースなど強力な魔力を持った魔導師達の魔力が異常なまでに高いのを感じるスバル。

それは完全にリミッター解除をした証である。
しかもスバルだけ魔力リミッターをかけられていてランクはB級に大きく下げられて、デバイスも取り上げられて木刀しか持っていない。

「問答無用！」
「手加減はしないよ、スバル！」

シグナムとティアナが大きな声で叫びだすと、全員デバイスと刀を構えて一斉に攻撃態勢に入る。

「さぁ、皆で全力全開なの！」
「おお！」

全員が一斉にスバルに向かって飛びかかり、

「なんでスバルだけアイドルになっているんだァァァァ！」

本音を出して叫びだすのであった。

「いやァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

スバルはとてつもないしばきを受けるハメになり、訓練所にスバルの悲鳴が響き渡るのであった。
銀時、神楽、月詠、エリオ、リィン、ザフィーラ、辰馬はこの光景を唖然として見る事しか出来なかった。

≪アイドル編・完≫

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

ザフィーラ
「今回は久し振りにヴォルケンリッターの1人、ザフィーラがアシスタントをしよう……しかし、今回もカオス的な質問が来るような気がするが……

銀八
「気にしない着にしない。とりあえず言ってみよう。まずはこの人、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「クロノ暴走しすぎだろ！」

ヴィヴィオ「あそこまでいくと犯罪だよね」

神威　銀時「今回の質問は、クロノはどうして管理局にいられるんですか」

ヴィヴィオ「管理局じゃなくて刑務所にいるべきだね」』ズバリ応えます。それは何やら物語の設定都合として管理局にいられるようです」

ザフィーラ
「そ……それは都合が良いな」

銀八
「と言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『烈火竜』さん『2つ質問です。
1.『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』のようにゴリラの大群は出ますか？
2.『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』のように、ゴリラの一匹がトーレに一目惚れして、ストーキングしますか？
どっちも許可しますけど。』」

ザフィーラ
「なんかそんなことすればトーレが大変な目に合いそうだな」

銀八
「確かに。1は是非とも出そうと出そうと思います。2はそうですね……考えておきます。と言う訳で『烈火竜』さん。マヨラーのロリコンぶりをもっと輝かせてください」

ザフィーラ
「ちょっと待てェェェ！なんだそのロリコンって！？」

ザフィーラは青ざめてツッコみだす。
どうして土方がロリコンと言われているのかを銀八はザフィーラに教えた。

３０分後

ザフィーラ
「……」

ザフィーラは何も言わなくなった。
土方と言う人物に強い失望心を抱いたのからだ。

銀八
「んじゃ、マヨラーの変態ロリコンぶりを知ったザフィーラ君、次行くぞ」

ザフィーラ
「……ああ」

銀八
「ペンネーム『月光閃火』さん『ばんぶるび～ほ～い…月光閃火です♪

輝刃「…少しワクワクモノだ…輝刃だ。」

という訳でさっそくシャーリィさん、いらっしゃ～い♪（三〇風）

シャーリィ「はいは～い♪やっとこっちで影薄脱出♪のシャーリィことシャリオ・フィニーノで～す♪」

輝刃「…良かったな。というか、嬉しさの余りテンションがハイだな？」

よっぽど影薄を脱した事が嬉しかったんでしょうね…あ、これ粗茶ですが輝刃の特製ロールケーキです。（ササッと輝刃特製ロールケ

ーキを出す）

シャーリィ「ありがとね♪〔パクッ♪〕う～ん♪程よい甘さとスポンジ生地のフワフワが美味しい♪」

輝刃「…そう褒められると、少し恥ずかしいな（照）。」

へへっ…♪あ…そういえば、その手にあるのって……

シャーリィ「ええ♪実は今開発中の魔力資質が低い人向けのデバイスの試作品よ♪」

なるほどね～…あ、自分もちょっと見てもいいかな？

シャーリィ「いいわよ…はい♪」（試作品のデバイスを渡す）

輝刃「…あの分だとしばらく時間がかかるな…とりあえず今回の質問は俺から一つだけだ。」

質問：ザフィーラに質問だ。お前は声が少し渋めだが、見た目結構若いよな？何か若々しく保つ秘訣でもあるのか？

輝刃「…こんな所だ。しかし……」

う～ん…こういうのは、このプログラムをこの方式で行けば制御率は結構上がると思うよ？これならレイハ達にも応用出来るし。

シャーリィ「でもそうなると、魔力変換率がちょっと荒くならないかしら？此処をこうした方が……」

でもこれだと、持ち主の身体の負担が少し増えるのがネックになるね。此処をこうしてこういう感じにした方が……

輝刃「…完全にデバイスのプログラム談義に華を咲かせてしまってるな…（汗）。」『……ザフィーラ君、お願いします」

ザフィーラ
「そうだな……我々ヴォルケンリッターは通常の人間とは違ってそんなに老化はしない。まして俺はアルフと同じ使い魔だから、子供に変身したりすることも可能だ。理由は言えないが」

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「では次を行こう。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ハロ
「ハロ！！ウッソ！！」

ウッソ
「やった！！スカリエッティさんありがとうございます！！」

こなた
「本当によろこんでるね～」

かがみ
「そうね～．質問いくわよ

？ザフィーラさんははやてちゃんのことどう思っている？最近ちょっと過激になっているみたいだけど・・・注意とかしないの？

？『Ｇ・Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の感想を今回はそうね・・・はやてちゃんについて話してね

ってあれ・・・あともうひとつは？」

桃香
「それは私からだよ～♪」

こなた
「うお！！恋姫の桃香じゃん！？」

桃香
「そうだよ～今回から携帯で連載している『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』から来たんだよ．最後は私から

？銀時さんに質問です．私たち恋姫の皆さんのことどう思っていますか？本人からお願いね♪

」

ウッソ
「これからも頑張ってください」』

銀八
「最近のウッソさんももう１つの小説を書いているとはなぁ……」

ザフィーラ
「コイツは驚いた。だが２つの小説も、いずれは面白ければそれで良い。それで質問の答えをしよう。まず？は、そうだなぁ……桂と

出会ってから良く笑うようになっていた。最初に会った時よりは良い笑顔で笑えるようになった。そこの所は桂には強い感謝している。?は……とりあえず、主とシャマルが迷惑をかけてすまないと思っている。後、ヴィータのほうもよろしく頼む」

銀八
（コイツ本当にボケないキャラだな！まぁいくら銀魂風でも、キャラクターの中にはザフィーラみたいにボケないキャラもいたほうが良いだろうなぁ）

真面目なザフィーラに銀八はそう考える。

銀八
「んで……銀時に聞かせてもらうか……気にくわねェけど」

?の応えは銀時に応えさせようと考える銀八。
席に座っている銀時はこう答える。

銀時
「そうだなぁ。色々と言いたい事はあるが、単独に言えばまず三国の英雄達が女だった事には驚いた。しかも胸が大きすぎる」

ザフィーラ
「なぁ、三国の英雄達が女だと！？」

銀時の言葉にザフィーラは驚きだす。
三国の英雄は大抵男が多いが、女であったなんて衝撃的に驚きだす。
それが異次元の話であることを知らずに。

銀八

「と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、廊下に立っていなさい。
んで次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
フェイト達（嫉妬で黒化）なら鳳仙や神威、屁怒呂様に勝てますか。
』……て、それで勝てれば苦労しないわァァァァ！」

いくら嫉妬で黒化してでも、あんな化け物並みの強さを持った人物に勝てるとは限らない。

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「次を行こう。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『質問です。

一つ目
完全にとっつあんポジションとなったクロノですが、とっつあんの優先順位は「1：娘の事情・キャバクラ、2：己の保身（家のローンなど）、3：民間人の治安」ですが、彼の優先順位はどのようになっていますか？

二つ目
ザフィーラが長年共に過ごしてきた八神家の中で、今現在昔と比べて一番変わったと思えるのは誰ですか？

三つ目
ヴォルケンリッターを万事屋に例えると誰がどのポジションとなりますか？ちなみにザフィーラは…やっぱり定春ポジションですか？』
……なんだ、この1つ目のクロノに対する愚弄質問は？」

銀八

「いいんじゃねぇの？ズバリ答えよう。一つ目は、彼の場合は「１：フェイトの事情、２：無駄なエリート意識、３：プライドをズタズタにされない事」以上です……多分」

ザフィーラ
「多分なのか！？……まぁ良い二つ目は勿論の事、主だ。桂と再会してから色々とやりたい放題にやっているような気が……三つ目はそうだなぁ……主が銀時役、シグナムとヴィータが神楽役、シャマルがめが……じゃなく……誰だった？」

銀八
「変態アイドルオタクの新八（じみ）の事か？」

ザフィーラ
「ちがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁう！絶対に違う！今、お前は新八と書いて地味と言っただろ……おお、思い出した。シャマルが新八役だな」

銀八
「理由はシャマルは新八並の影薄さだからだろ？」

ザフィーラ
「う……否定できん」

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。次行こう、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問八神家の常識人（狼）のザフィーラに質問です。自分のこだわりのドッグフードやシャンプーとかありますか？』」

ザフィーラ
「……そうだな……とにかくドックフードは普通だが、シャンプーは毛が無駄にぐしゃぐしゃにならないのをこだわっている」

銀八
「なるほどなるほど、と言う訳で『正宗の胃袋』さん、まともな質問を有難うございます。次ィ、ペンネーム『ヤマトノオロチ』さん『久しぶりの感想です。クロノが松平のとっちぁんみたいになりました。爆笑です。

質問1　今からだすキャラにマダオ風なあだ名を考えました。それぞれ感想言ってください。

なのは＝マゴオ〔まるで傲慢な女〕

フェイト＝マオオ〔まるでお母さんな女〕

はやて＝マハオ〔まるで腹黒な女〕

ギンガ＝マジオ〔まるで地味な女〕

チンク＝マチオ〔まるで小さい女〕

クロノ＝マシオ〔まるでシスコンな男〕

質問2

ナンバーズのノ―ベェ、ウェンディに質問です。この中から恐ろし

いキャラを1～3位に順列を付けてください。屁怒絽様、神威、松平片栗粉、沖田、お妙、

質問3　なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロに質問です。ブレイブルーのキャラで興味を持っているあるいは戦ってみたいキャラを一人えらんでください。

『……1は……」

なのは、フェイト、はやて、ギンガ、チンク、クロノ

「ふざけるなァァァァァァ！（怒）」

6人は一斉に飛び出して銀八を襲いだして蹴ったり殴ったりと、ボコボコにした。

銀八

「なんで俺エェェェェェェェェェェェ！！？？」

銀八の叫びが響き渡るのであった。

そして30分後、6人は怒りを納めて席に着く。

銀八はボコボコにされてフラリフラリであり、ザフィーラは大量の汗を流して青ざめていた。

ザフィーラ

「つ……次を行ってみよう。2は2人に聞いてみよう。」

するとノーベェとウェンディが立ち上がって、潔く言い出す。

ノーベェ、ウェンディ

「1位は屁怒絽様！2位はお妙！3位は神威！」

涙を流して答えだすのであった。

ザフィーラ
「3はなのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、スバル、ティアナ、エリオ、キャロに聞いてみよう」

なのは
「にゃはははは……私は興味を持っているのはタタオカかな?可愛いし♪」

フェイト
「私は……レイチェルさんかな?……稲妻を操るのが凄いし……」

シグナム
「戦ってみたいとなればハクメンだな?剣術に興味を持っている」

ヴィータ
「そうだなァ……この中でパワーキャラと言えばディガーだから一度手合わせしてみたいな♪」

スバル
「私はラグナさんで。雰囲気が銀さんと似ているから」

ティアナ
「同じ銃使いとしてノエルには興味深いわ」

エリオ
「槍使いはいないけど……棒使いとしてライネさんで……何か……そのう……綺麗な女性だし……／／／」

キャロ
「錬金術と言う私達とは違った魔法を使うカルル君には興味があります」

それぞれ、興味のあるまたは戦ってみたい相手の名前を言い出す。

銀八
「……と言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「次だな、ペンネーム『カラー』さん『質問
今の話は中盤で、次の次からが終盤の話しでしたっけ?』」

銀八
「ズバリ答えます。まだまだ中盤です。後半はもっと先ですね」

ザフィーラ
「おお、それは面白そうだ!」

銀八
「と言う訳で『カラー』さんこれからも応援よろしくお願いします。
次ィ、ペンネーム『風花』さん『そんな~~!!

森羅
「うるせぇな…そんじゃ、質問いくぜ」

?ザフィーラって…生きてるか?ほんと最近出てきてないから心配なんだが…

?銀八の事で、まずは…ふざけんなーー！！！なんでだよ！？本編で出さなくてもいいけどせめて質問コーナーの待遇良くして上げて！？

?作者が少し前にウッソの所の新しい話『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』の銀時と戦いたいと言ってウッソがこっちの方がいいんじゃないかと言ってたんだ。もし黒神が許可をくれるなら銀時と戦わせて見たいな、なんて…

森羅
「以上だな。それじゃあ、アイドル編最終回楽しみにしているぜ」』」

ザフィーラ
「?は……確かに最近の出番は少ない。だが変な事に巻き込まれるよりはマシな方だ」

銀八
「見習って欲しい！今の言葉、新八、シャマル、ユーノに見習って欲しい！……んで?は……森羅有難う！（涙）」

銀八は涙を流して感激した。

ザフィーラ
「?は……そうだな。それはメールで作者に返事をさせよう」

銀八
「と言う訳で『風花』さん、作者は『魔法少女リリカルなのは　ＥＴＥＲＥＮＡＬ』をこれからも楽しみに待っています。そしてラストォ、ペンネーム『アクセル』さん『質問です。

この話で銀時とリインフォースがユニゾン出来る事がバレてしまった訳ですが、やはり銀時はフェイト達に色々と聞かれるんでしょーか？
ユニゾンって文字通り一心同体なんで嫉妬（お話し）も今までとは比べ物にならないレベルになりそうですね。』」

ザフィーラ
「確かに……あの後、色々と銀時とリィンフォースはフェイト達に色々と言われていたような……」

銀八
「と言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。以上持ちまして本日の質問終了……どうだった、ザフィーラ」

ザフィーラ
「土方と言う男のロリコンぶりには驚いた。（烈火竜さんの『真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ　鬼の子守歌』の方の話）」

銀八
「てな訳で、次回は鉄子にアシスタントさせてもらいます」

ザフィーラ
「では……」

銀八・ザフィーラ
「次回もお楽しみ」

第六十七訓：どんな歌でも思いを込めれば良い歌になる（後書き）

九兵衛、柳生流の秘奥義を会得する為に猛特訓。
その名は『柳生真駆流秘奥義　猛虎滅牙閃（もうこめつがせん）』。

近藤から鬼兵隊の事を聞かされる。

そして……銀時達が思わぬハプニングに！

クリステル
「次回、「怪しい物には無闇に触れてはいけない」テイクオフで～す♪」

総集編って作るとメッチャ時間がかかる（前書き）

黒神

「いやー、もう1週間近く経ちました。てな訳で今回は総集編を行かせて貰います。ゲストキャラも登場しますので、どうぞごらんあれ」

総集編って作るとメッチャ時間がかかる

そこは機動六課の私室で、銀時がいる部屋である。
そこには作者である黒神、銀時、フェイト、スバル、桂、なのは、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、エリオ、はやてがいる。
作者の格好は、黒のシャツの上から真紅色のコートを羽織り、袴のような黒いズボンの衣装を着ていて、その姿は完全なる『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』と一緒。
ただ違うのはただ違う所は、紙が銀色で、眼のオッドアイが黒と銀色である。そして背中には黒い野太刀である『エンアニサ』と呼ばれる魔剣を背負っている。

黒神
「はいはいはぁ～い！！今回は総集編と言う事で、『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の話の内容を進めたいと思います！」

銀時
「物好きだなおい？つーかお前の姿ってなんかラグナ似じゃねぇ！？」

フェイト
「それ、本人が見たら殺されるよ？」

黒神の存在に呆れる銀時とフェイト。

黒神
「別に良いんですよ♪銀時も声が一緒だから」

銀時
「良くねぇよ！……まぁいいや。とりあえず今日ここに呼んだのも、今までの長編を説明する為だろ？」

黒神
「はいそうです♪その為に、銀時、フェイト、スバル、桂、なのは、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、エリオ、はやてを呼びましたので」

エリオ
「なるほど、何か面白そうですね」

納得して楽しむエリオ。

神楽
「キャホー！何か面白そうアル！」

エリザベス
『たしかに』

嬉しそうにはしゃぐ神楽と、そう書かれたプラカードを出すエリザベス。

ティアナ
「それで、今まで多くの長編が続いたけど、どれぐらいあったんだろう？」

なのは
「たしかぁ……『高町家編』を始め、『Ｏｗｅｅ編』、『モンキー

ハンターオンライン・マスカーク編』、『魔導競技大会編』、『スバル編』、『人気争奪戦』、『アイドル編』の7つの長編が進んでいたんだよ♪」

ティアナ
「さりげなく貴方を中心としたシリアスを最初に言ったよこの人！」

なのはを中心としたシリアスを最初に言い出したなのはにツッコむティアナ。

月詠
「他にも作者は色々と長編シリアスを考えているようじゃのう」

黒神
「はい。５０話以上で序盤は終了ですので……下手したらこの小説は１５０話以上は進むと思います。あくまで予定で」

桂
「なるほど。だとすればコレだけ進めてまだ中盤だと言うのもわかる気がする」

はやて
「うち等のシリアスも考えて欲しいわ」

月詠と黒神の言葉に、納得する桂と自分たちのシリアスを作って欲しいと願うはやて。

エリオ
（僕と神楽さん、そして月詠さんと一緒のシリアスも作って欲しいですよ／／／）

顔を真っ赤にしてそう願うエリオ。

月詠
「それに、他にも『教えて銀八先生』でも色々とおかしな質問をやっておるようじゃ」

フェイト
「確かに……色々と大変だったよ……特にお妙さんが怖かった……（涙）」

フェイトは涙を流してお妙に恐怖する。
詳しくは『第四十七訓：やる気を起こしたい場合はお気に入りのＢＧＭを流すのが一番』で。

ティアナ
「私も色々と変な事を聞かされたよ」

桂
「俺は面白かったから良いと思うが？」

エリザベス
『自分も』

はやて
「私もや♪」

ティアナ
「それは貴方達だけ！（怒）」

桂とはやての言葉に、額に血管を浮かべてツッコむティアナ。

黒神
「ま……なにはともあれ、これからもこの小説はじゃんじゃん進むって訳だ」

銀時
「たいしたもんだなぁ……」

黒神がまだまだ続くと言うことに、銀時はそれは確実であると考える。

フェイト
「私ももっと続いて欲しいと思うよ。この小説が面白いと思うし……」

銀時
「そうだな……」

フェイトがもっと続いて欲しいと言うと、銀時もそれは願う。

ティアナ
「それよりも……何をだんまりしているの、スバル？」

スバル
「……／／／」

ティアナは黙りっぱなしのスバルに声をかけると、スバルは黙り込む。

桂
「せっかくの総集編だ。ここは主も喋った方がそんはないぞ？」

エリザベス
『何か言えば？』

桂とエリザベスもスバルにそう進める・・・・・だが

スバル
「……あのう……さっきから皆さんは不自然と思いませんか……なんで……／／／」

スバルは顔を真っ赤に染めながら、はっきりと言い出す。

スバル
「何で私の格好だけ『ブレイブルー』のノエル・ヴァーミリオンの衣装を着ているんですかァァァァァ！！？？／／／」

スバルは自分の着ている衣装に恥を感じた。
スバルが着ている衣装は、アイドル編でスバルがアイドル活動をしているときに来ていたか歌手衣装であった。
蒼い帽子を被っていて、赤いネクタイをかけていて胸の部分は黒くて、背中の部分は肌が見えるセクシーな蒼い軍服衣装（ミニスカ＋ニーソ＋背中ぱっくり）。
つまりコレは『ノエル・ヴァーミリオン』の衣装のコスプレであった。

スバル

「これ、アイドル活動で着ていた衣装と全く同じじゃないですかァ！大体なんで私までコスプレしなきゃいけないんですか！？／／／」

凄く恥ずかしそうにスバルは言い出す。

銀時、フェイト、桂、なのは、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠も同感する。

エリオにいたっては顔を真っ赤にしている。

はやて

「いやぁ～、セクシーで可愛い衣装だったから……作者にお願いしてもう一度着せさて貰ったんや♪」

黒神

「この小説は『ブレイブルー』のネタを使って小説を進ませてもらっているから。だってスバルって水色と言うより蒼が似合いそうだったから、『ブレイブルー』のヒロインであるノエルの衣装を着させてもらいました♪」

黒神とはやてはニヤニヤと笑って言い出す。

スバル

「だからってコレはないですよォォォォォ！／／／なんかスカートも短くて恥ずかしすぎますよォォォォォォ！／／／」

顔を真っ赤にして凄く恥ずかしそうに言い出すスバル。

銀時

（凄く動揺するぜ、スバル）

銀時もスバルのコスプレに凄く動揺する。

自分も強力な切り札である『銀の魔導書（ブレイシルバー）』も、別の意味で滅多に使用しない。
原因はバリアジャケットがラグナ・ザ・ブラッドエッジと一緒であるからだ。

黒神
「所でどうだい、銀さん。スバルのコスプレ衣装は？」

銀時
「え？」

黒神はニヤニヤと銀時にスバルのコスプレを聞いてみる。
銀時から見て、はっきり言って自分と違って似合っている。
しかも本物と違って巨乳であるため、可愛さたっぷりであった。

銀時
「……まぁ……可愛らしさがでて良いんじゃねぇ？／／／」

スバル
「え？／／／」

素直に感想を言い出して指で頬っぺたをこすって顔を真っ赤にする
銀時に、予想外の感想に顔を真っ赤に染めるスバル。
何やら怪しい雰囲気になっていく時だった……

ギュウウウウウウウウウウウウウ！！

銀時・スバル
「あ痛たたたたたたたたたたたたた！」

フェイトとなのはが銀時の、そしてティアナがスバルの頬っぺたを握りだす。
顔は笑っているが顔中に血管を浮かべている。

フェイト・なのは・ティアナ
「何2人だけの雰囲気になっているかなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

その光景に黒神とエリオは恐怖して、神楽と月詠は呆れだし、桂、エリザベス、はやてはニヤニヤと笑い出す。

黒神
「……ま…まぁそんなことだし、今回は3つの小説から特別ゲストを呼ばせてもらいました！」

月詠
「特別ゲスト？」

黒神
「それではまず1人目、どうぞ～！」

黒神が呼び出すと、1人の女が現れだす。
大人しそうでショートヘアーの似合う少女。その名は……

真田
「こんにちは。このたび私をゲストとして呼んでくれて有難うございます。烈火竜さんの小説、『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』の真田幸子です」

真田と言う少女はにこりと笑って挨拶をする。

銀時
「真田幸子って、確かオリキャラの……」

黒神
「そうです。真田幸子、『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』の第七講と第八講で重要人物として活躍させて最後には重要人物らしくびしっと決めてくれた人物です！」

真田
「いや、びしっと程じゃないけど……」

黒神の紹介説明で少し照れる真田。

黒神
「ちなみに彼女の必殺技は『ギガスラッシュ』。竹刀の刀身に稲妻の魔力を込めて流し、それで相手を叩きつける事で、相手の体全身に稲妻が走って全身麻痺状態にさせて地獄の半殺しをさせる彼女の超必さ――」

真田
「ちがぁーーーーーーーーーーう！そんな危険な技じゃないィィィィィィィ！相手の攻撃を交わしてただ単に気迫で叫ぶだけの胴打ちですよ！てか、なんか無駄に凄い設定していませんか！？（焦）」

勝手に凄い創造で説明する黒神に、汗を流してツッコむ真田。

なのは
「にゃ……にゃはははは……黒神さんもボケやすくなったね？」

黒神
「いやぁ、最近『銀魂』のコミックを読み続けていたから、自分もボケやすくなったような……」

エリオ
「だからこの小説を『銀魂』風にしたんですね」

何やかんやで黒神も銀魂風のキャラになっていた。
そして真田は見慣れているなのは、フェイト、スバル、ティアナ、エリオ、はやては知っている。
彼女たちも真田の事は知っている為、軽い挨拶を済ませる。

だが銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠の5人は初対面である。
特に銀時は自分の小説の主人公である銀八とそっくりである事が明らかになった。

黒神
「んで2つ目と3つ目の小説はここの小説の『教えて銀八先生』の質問をネタに小説を書いてくれているウッソ・エヴィンさんの小説『ウッソとリリカル銀魂　G・Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』と、最近ウッソさんが作り上げた新小説『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』からのゲスト！」

黒神がそう言うと、４人が同時に現れた。
その内3人は『ウッソとリリカル銀魂　G・Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』と言う小説から来た人物であり、残り1人は『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』から来た人物。

ウッソ

「久し振り、黒神さん。『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の主人公のウッソ・エヴィンです」

シャクティ
「こんにちわ、『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のヒロインのシャクティ・カリンです」

こなた
「こんちわぁ～『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の重要人物の泉こなただよぉ♪」

３人は自己紹介すると、後１人の胸のでっかい少女も自己紹介する。

桃香
「『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』のヒロインである桃香です♪」

桃香が挨拶すると……

黒神
「あのう……劉備？確かその名前って真名て言う心から信じただったんじゃ？」

桃香
「今回は特別な日ですので、呼んでも良いですよ♪」

などと劉備ごと真名：桃香は言い出す。

ちなみにウッソ、シャクティ、こなたの３人は、フェイト、なのは、桂、エリザベス、はやての５人を知っている。

原因は5人とも『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』に出ているからだ。
桃香も銀時の知り合いであった。
銀時と桃香は『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』で知り合っているからだ。
特にもかくにも，全員話し合う。

ウッソ
「貴方があの坂田銀時さんですね」

シャクティ
「いつも新八君とお妙さん、そしてたまから聞きました」

銀時
「そう言えば……あの3人が厄介になっているな」

ウッソとシャクティが話しかけると、銀時は2人の世界であの3人がお世話になっていると思い出す。

神楽
「姉御とたまは元気あるか？あとめが……新八も？」

ウッソ
「……神楽ちゃん、今新八さんの事をついで扱いしたよね？しかもメガネって良いかけなかった？」

新八の扱いが薄い神楽に苦笑して言い出すウッソ。

こなた

「ああ、あの3人なら元気にしているよ。後、お妙さんから差し入れがあるよ？」

その言葉に銀時と神楽は青ざめる。
すると、どこからか出したのかお弁当箱を取り出して、蓋を開ける。
するとその中には、ぶくぶくとしている漆黒の溶岩と思わせる物質が入っていた。
それを見た銀時達は嫌な汗を流してしまう。

銀時
「……あのう……これはなんですか？」

こなた
「たしかぁ……新しい卵料理に挑戦してみたと言って作ったそうだよ。目玉焼きを」

コレが卵焼き？
ふざけんなァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！
コレどう見たって『可愛そうな卵』以前に『悪霊に取り付かれた卵』じゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁ！
誰もがそう思った。

エリオ
（これは目玉焼きじゃないでしょ！？まるで邪悪なる禍々しいロストロギアじゃないですかァァァァ！）

真田
（どう失敗したらこうなるんですか！？何かぶくぶくと泡立ててる

よ！？）

桃香
（コレが料理って嘘でしょ！？愛紗ちゃん以上に不味そう以前に危険すぎだよォォォォォォ！）

４人は嫌な汗を流しながら言い出す。

こなたは銀時と神楽にお妙特製の『暗黒物質（ダーク・マター）』……もどい『暗黒物質（ダーク・マター）』の進化形体の『悪魔物質（デビル・マター）』を２人に差し伸べる。

銀時
「いやじゃあああああああああああああ！食べたくなぁぁぁぁぁい！」

神楽
「絶対に死ぬアルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

こなた
「ふっふっふ、さぁ大人しく食べるが良い！」

完全に悪役になったこなたは無理矢理でも銀時と神楽に『悪魔物質（デビル・マター）』を口に入れようとするが

黒神
「チェストォォォォォォォォォォ！」

スパァーン！

黒神が背中の野太刀である『エンアニサ』を抜いて素早く振るうと、箱ごと『悪魔物質（デビル・マター）』を切断し、『悪魔物質（デビル・マター）』は黒い炎に包まれて消滅する。

こなた
「ああァァァァァァァァァァァァ！お妙さん特製目玉焼きがァァァァァァ！」

黒神
「そんなもん食ったら死ぬわァァァァァァァァァァァ！うかあの雌ゴリラ、なんてモンを作りやがる！やっぱあの雌の出番を思いっきり減らしてやるぁあああああ！」

黒神は目玉焼きを無駄に不味そうに作り出したお妙に怒り出す。

ウッソ
「黒神さん……知らないからね、お妙さんに殺されても……」

ウッソは、この事がバレたらお妙は黒神を殺すかもしれないと思って黙っている事にした。
それと同時に、ウッソとシャクティはお妙にだけは絶対に料理を作らせないように強く誓う。

真田
「それにしてもビックリしました。まさか銀さんって銀八先生と容姿は同じなのに、全然別人に見えます。ここの小説でも見せてもらいましたけど……はっきり言って銀八先生より断然強そうだし、何より主人公っぽく見えます」

銀時

「そりゃそうさ♪」

銀八とは全くちがって主人公らしさと強さが上であると評価された事に誇る銀時。

真田
「それに……なんか多くの女性に囲まれてハーレム的な生活もして――」

銀時
「グォホン！グォホン！そ……それよりそっちでもフェイト達が出ているけど、こっちのフェイト達とはどんな扱い方が違うんだ？／／／」

顔を真っ赤にしてワザとらしく咳をする銀時。
それを見たこなたがニヤニヤとする。

こなた
「ふっふっふ……そりゃ通常の自分の生活じゃあり得ないような生活をしている事を言われちゃ、恥ずかしいよね銀さん♪」

銀時
「うっせー！？何、面白そうに言っていやがる！／／／」

ニヤニヤと言い出すこなたに対して怒鳴ってツッコム銀時。

こなた
「いやぁ、以前から思っていたんだけど……ここの小説ってなんか銀さんのハーレムストーリーとスバルのオリジナル設定を中心に進んでいるから、何か銀魂なのに、ギャグ小説なのに完全なるギャル

ゲー化していて面白いんだよねェ♪オタクとして見逃せない小説なんだよ♪」

オタクとして、ギャルゲーぽく見えるこの小説にこなたは興味を持つ。

こなた
「もしや、フェイトちゃん達と毎日△△△△や●●●●で、――――をしているぅ！？」

銀時
「おいィィィィィィィィィィィ！それギャルゲーじゃなくてアダルトゲームの話だよね！つぅか年頃の娘が軽々しく言うんじゃねぇ！」

ワクワクと期待しながら言い出すこなたのあり得ない妄想に銀時はツッコみだす。
フェイト、スバル、なのは、ティアナは顔を真っ赤に染めてしまい、エリオ、ウッソ、シャクティ、真田、桃香は銀時がフェイトとその様な事をした妄想をして顔を真っ赤にする。
神楽と月詠は呆れて、黒神、桂、エリザベス、はやてはニヤニヤと笑い出す。

黒神
「いやー、ばれてしまっているなぁ、銀さん♪」

銀時
「人聞きの悪い事を言うなァァァァァ！（怒）」

ドカァ！

黒神
「ごふぁあああああああ！」
顔中に青筋を浮かべた銀時は木刀を思いっきり振り、黒神は壁に衝突して気絶する。

シャクティ
（にしても月詠さんって、綺麗だなぁ。エリオ君が見惚れるのも分かる気がする）

シャクティは月詠の姿を見て、顔に傷がついているとは言え、かなりの美人であるが分かる。
なのはとはやても綺麗な女性だが、月詠のは大人の女性の魅力を感じるのであった。

こなた
「それにしても、スバルちゃんのその格好、予想外に似合っているねぇ♪」

スバル
「ええ！？／／／」

こなたはニヤニヤと、ノエル・ヴァーミリオンの衣装を着ているスバルを見る。
まるで親父的な眼線で。

こなた
「むふふふ、凄く色っぽくて可愛い姿だねぇ。しかも三次元の人物がさらに別の次元の人物のコスプレ……スバルちゃん凄く可愛いよ

ぉ♪」

スバル
「ううぅ……そんなに見つめないでくださいよぉ～／／／」

銀時の後ろに隠れてながらこなたを見て、恥ずかしそうに言い出すスバル。
ウッソもそんなスバルの姿を見て顔を真っ赤に染める。

ウッソ
（た…確かに……マジかで見ると、スバルさんが可愛く見える……しかもそんな彼女がコスプレするのって……なんかドキドキしているんだけど……／／／）

ドカァァァァァァァァァァン！

突如、シャクティが後ろからウッソをジャーマン・スープレックスをする。

ウッソ
「な……何をするんだい……シャク……ティ……」

そう言って、ウッソは気絶する。

シャクティ
「ええ～、何かウッソがさっきからスバルちゃんを見つめてて顔を真っ赤に染まっていたから♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

シャクティは笑っているけど、眼は笑っていなかった。
銀時達はそんなシャクティに恐怖する。

こなた
「ねぇ、もし良かったら写真とって良いィ♪」

スバル
「え、でもォ……」

こなた
「良いから良いから♪」

ティアナ
「辞めぃ！」

オタク行動するこなたに呆れるティアナはチョップを入れる。

こなた
「あ痛たたた……何するんだよ、ティアタン」

ティアナ
「だれがティアタンだ！（怒）さっきからスバルを変な眼で見ているんじゃないわよ！本人恥ずかしがっているでしょ！？」

こなた
「いやぁ、こうして見るとティアタンってやっぱりツンデレキャラだねぇ♪デレっとした表情が最高だねぇ♪」

ティアナ
「親父かアンタは！（怒）」

こなた

「親父じゃないオタクだよ！」

ティアナ
「『ヅラじゃない桂だ』っぽい言い方すんなァァァァ！（怒）」

スバル
「お、落ち着いてよティア！」

エリオ
「落ち着いてください、ティアナさん！」

ティアナはこなたのボケに対してツッコみだして『クロスミラージュ』を取り出す。
スバルとエリオはそんな暴走しかかっているティアナを抑える。
その光景を見たウッソとシャクティはと言うと……

ウッソ
「何か、ティアナさんってかがみみたいだね……」

シャクティ
「うん、そうだね」

こなたにツッコむティアナが、かがみと一緒に見える2人は苦笑する。
ティアナとかがみが出会ったらどんな事になるのか想像しにくい。

月詠
「全く、また騒がしくなったのう」

神楽

「でも、なんか銀魂らしくて面白いね」

はやて
「そうやな♪」

煙管を加えて呆れる月詠に、面白そうに笑う神楽とはやて。

桃香
「それにしても、フェイトさんとなのはさんも、銀時さんの事が好きなんですね♪」

フェイト
「そ……そうだよ／／／」

なのは
「にゃはははは／／／」

桃香は2人を見てそう思った。
フェイトとなのはは思わぬ言葉に顔を真っ赤に染めている。
自分も自分が活躍してる小説を見てたら、銀時の事をもっと知るようになると思い、銀時を見つめる。
そして桃香の眼線に気づいた銀時は桃香に振り向き、眼を合わせると一瞬ドキッとして眼をそらす。

フェイト・なのは
「ああ、それと――」

ガシっと、フェイトとなのはは桃香の肩をつかみ出し、

フェイト・なのは

「（銀時）（銀さん）に手を出したらタダじゃおかないよ♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

2人は笑いながら、とてつもない威圧感を放って桃香に警告する。
そんな2人を見て桃香は涙目をしてガタガタを恐怖する。

桂
「それより、そろそろ総集編を始めないか？」

エリザベス
『話を進めましょう』

桂とエリザベスがそう言うと、黒神が立ち上がる。

黒神
「そうですね……ではそろそろ総集編を始めたいと思います！その前に，この小説『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ　攘夷戦争鎮魂歌』がどんな小説かを説明します」

『『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』　～攘夷戦争鎮魂歌～』

それは作者、黒神が赤夜叉さんの小説『『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～白夜叉鎮魂歌～』を強く気に入って、赤夜叉さん本人に許可を貰って作り出した『リリカル銀魂シリーズ』のもう1つの最終章。
『白夜叉鎮魂歌』は『リリカルなのは』風に坂田銀時の伝説の異名『白夜叉』をイメージして作られたのに対し、こっちは『銀魂』風

に『攘夷戦争』のイメージをイメージして作られている。
その為、かつての攘夷戦争に参加した桂小太郎をはじめ、この小説の重要ボスキャラ及び銀時と桂の因縁の相手、高杉と騎兵隊のメンバーの出番が多く、さらに坂本辰馬も登場している。
他にも銀魂キャラも数多く出ており、しかも原作の『銀魂』で死んだキャラも生還するという大胆なアイデアも考えている。

ちなみに黒神がどうしてこの小説を作りたかったのかと言う理由は、以下の通りであった。

●『『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～白夜叉鎮魂歌～』を見て、勝手に頭の中で創造して思いついたから、書いてみたくなった。
●銀さんのモテモテ＆ハーレム設定を作りたかった。
●銀さんと出会った事で、スバルの設定を原作どおりじゃなく侍の強さを身につけた魔剣士として、剣を使わせたかった。
●銀時に憧れ、刀で戦うスバルの強さが、原作では比べ物にならないほどに異常なまでに高くして見たくなった。
●神楽、桂、エリザベスを重要人物として最初から出したかった。
●月詠はもっと出番増えても良いんじゃねぇっと思った。
●銀時と高杉の因縁を強く表したかった。
●『銀魂風』に進めたかった。
●『七星神刀（しちせいしんとう）』を始めとした、オリジナルデバイスを思いついたから。
●『アルハザード』の死者蘇生秘法に鬼兵隊に利用されたらどうなるかと想像したから。
●もし銀さん達を中心に『銀魂』キャラの一部が魔法を使えたらどうなるのかなァと思って、作りたくなった。
●『ブレイブルー』のネタを使ってみたくなった。
●銀さんにラグナのコスプレさせたかった。

●銀さんに『ブレイブルー』の戦い方をさせたくなった。
●銀さんが『ラグナ』のようになったらと思って考えてみたくなった。

銀時
「て、後半ほとんど『ブレイブルー』関係じゃねぇか！」

フェイト
「銀時に魔法かぁ……」

なのは
「見て見たいかも……」

後半の理由にツッコむ銀時に、銀時の魔法を使う姿を想像するフェイトとなのは。

神楽
「だはぁ♪それは私も魔法を使えればなのはちゃん達と同じ魔法少女になれるアルか♪」

神楽も自分が魔法少女になる希望もあるかもしれないと喜びだす。

桃香
（魔法って、妖術みたいなものかなぁ？）

桃香は魔法の事をそう思い出す。
彼女のように魔法の知識がない者にはそう思ってしまうのであろう。

ウッソ
「黒神さんって、本当に『ブレイブルー』も好きなんですね」

黒神
「そうですよ」

こなた
「それで、その小説での長編シリアスを紹介していくんだよね♪」

黒神
「はい」

こなたが今まで登場した長編シリアスの紹介を求めると、黒神は説明する。

黒神
「『リリカル銀魂』組はご存知のどおり、この小説のシリアスは7つ存在します。まぁ、大抵4話以上続けば長編シリアス扱いですので、それでは紹介行きたいと思います」

『Ｏｗｅｅ編』　第１５～１８順

とあるゲーム店の店長に（銀魂に出てきたゲーマーの店長とそっくり）依頼を頼まれて、銀さん達と機動六課のメンバー全員がゲストとして紹介された。コレにより、４人に分かれてチームを作り、Ｏｗｅｅ編を駆けたゲームバトルをするが、最終的には優勝チームがなしでＯｗｅｅは観客だけに渡すハメになった。

銀時
「あの結末はなかったぜ……」

フェイト
「そうだね……」

銀時とフェイトはあの出来事を思い出して苦笑する。
ティアナと神楽は体を震えだして怯えていた。
原因は……

ティアナ
（あの時のなのはさん……本当に怖かった！）

神楽
（白い魔王を見たネ……本当に怖かったアル！）

原因はなのはのお仕置きにあった。
なのはは「にゃはははははは♪」っと笑っているが、銀時達から見て怖いのであった。

桃香
（あの人怖いよぉ、愛紗ちゃん以上に怖すぎだよォォォォォ！！（涙））

真田
（この小説のなのはさん……何か自分の所以上に怖すぎる！）

桃香は涙を流して怖がり、真田は青ざめて恐怖する。

こなた
「いやぁ～、ヤンデレって言うのもなかな――」
なのは
「何か言った、こなたちゃん♪」
そう言ってなのはは、『レイジング・ハート』をこなたの喉元に突きつける。
こなた
「……ごめんなさい、何でもありません」
こなたは即座に土下座して謝罪した。
桂
「にしてもアレは中々賑やかだったな」
はやて
「そうやなぁ♪特に月詠さんの胸の感しょ――――」
はやてが言い出す中、月詠はクナイをはやての首元に突きつける。
月詠
「少し黙ってもらおうか？」
月詠の鋭い殺気に、言葉を失うはやて。
はやて
「……ハイ、ゴメンナサイ」

はやては裏声で謝罪する。
それを見たウッソとシャクティは、月詠もなのはとは別の意味で怒らせると怖いと考える。

銀時
「今のははやてが悪い」

フェイト
「それ、思いっきりセクハラ的な発言だよ？」

スバル
「あ……あはははははは……」

銀時とフェイトは呆れて溜息を吐き、スバルは苦笑する。

黒神
「じゃあ次は『モンキーハンターオンライン・マスカーク編』です！」

『モンキーハンターオンライン・マスカーク編』　第１９～２３訓

『モンハン編』で銀時が適当に考えた隠しボスである『マスカーフ』によって、フェイト達が体の一部をドライバー化されてしまった。
元の体を取り戻す為に、銀時達は『モンキーハンターオンライン』をやり始め、銀時、フェイト、スバル、アルフ、ヴィータをはじめ、桂、はやて、神楽、月詠、エリオ、シグナム、伝説のハンターと恐れられた『ナイン』ごと九兵衛、そしてこのせかに飛ばされた近藤

がルーテシアと共にドライバーと化した体を元に戻す為に、銀時と遭遇する。
ついにマスカーフとの最終決戦の前に、あり得ないボケの連続で次々と仲間がゲームオーバーとなる予想外の出来事が起こるが、最終的にはスバルが勘でマスカークの弱点である角を破壊して倒した。

なのは
「なぁ～んで、私の出番がなかったのかなァァァァァ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

なのははとてつもない憎悪を放つ。
銀時達は青ざめて怯えている。

ウッソ
「お、落ち着いて！確かこの次のシリアスって確かなのはさん中心のシリアスでしたよね！（焦）」

ウッソがそう言うと、なのはがにやける。

なのは
「にゃはははははは、そうだったねぇ♪／／／」

凄く可愛らしくなのはは笑い出す。
その光景に何故か不愉快になるフェイトとティアナ。

黒神
「では、次は『高町家編』です」

突如、高町家で異変が起こったと知らせが入り、なのはは依頼人として銀時に一緒に実家に来て欲しいと頼む。
それと同時にコレを利用して銀時との仲を深める事を狙っていた。
問題の内容は、『翡翠屋』と言うライバル店の人気が異常なまでに高くて客が減ってしまったことに困っていた。
その店長が桃子の因縁の相手であり、今度『ケーキ職人対決！』で店のプライドをかけた対決をするのであった。
困った２人の前に、スバル、桂、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、エリオ、リィンフォースの援軍により、『翡翠屋』と戦うのであった。
そして、そこで指名手配犯であるスカリエッティが、近藤と共にまさかの登場して、ルーテシアを加えて３人で実況勤める事にした。
大会を制した後、銀時とスカリエッティから、今の『鬼兵隊』の存在がどれ程までに危険なのかを話を聞かされる
そして銀時はスカリエッティから、『紅桜』対策用に開発した銀時専用のデバイス、『銀の魔導書（ブレイシルバー）』を受け取った。

フェイト・ティアナ
「……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

フェイトとティアナは無言でなのはを睨みつける。
にらめつけられている本人は、銀時と一緒に過ごしたあの時を思い出しながらニヤニヤとしていて気にしていなかった。
スバルは、そんななのはを羨ましそうに見つめる。

シャクティ
「銀さん、ちゃんとなのはさんと仲良くしてやってくださいよ」

銀時
「あ……ああ」

シャクティが真剣な表情で銀時にしっかりと、なのはともっと仲良くしておくように注意すると、銀時は思わず返事をする。

真田
「……改めて銀時さんと銀八先生は別人と思いましたよ……」

真田は銀時と銀八とは天地の違いがあると改めて知った。

こなた
「いやぁ、まさか侍である銀さんにデバイスとはねぇ……これは驚いちゃった♪」

ウッソ
「て事は、銀さんはもしかして…なのは達と同じく魔導師に目覚めたって訳？」

ウッソがそう言うと、誰もが（スバルとティアナを除く）銀時に注目する。
銀時はその事を説明すると、一度は使用したがとある理由で余り使いたくないようであった。
どんな理由なのかを興味津々するフェイト達だが、エリオは1人、その後の酷い体験に苦笑する。

桃香
「そう言えば……エリオ君って、最後大変だったんだね……」

エリオ
「……はい、死に掛けました」

そう、実はエリオはあの後嫉妬したキャロにきついお仕置きを受けたのであった。
そんなエリオを見た神楽と月詠は、エリオも大変だなぁと思った。

黒神
「では次のシリアスを紹介します」

『魔導競技大会編』　第３２～３５訓

『鬼兵隊』の存在がロストロギア級に危険な存在であると認定した管理官はスカリエッティに罪はないと確信して、スカリエッティの無罪が判定された。
コレにより、機動六課とナンバーズは同盟を結んで対『鬼兵隊』対策用に共存する。
そこでカリムが、まずは全員の実力を調べる為に『魔導競技大会編』を開いた。
フェイトの母、プレシアとスバルの父、ゲンヤを初めとした管理官のゲストが審判を行う。
優勝者にはマリンガーデンと言う遊園地のデートチケット2名分がもらえる。
誰もが優勝を求めて参加して、激しい激戦を繰り広げる。
準決勝でスバルとなのはのまさかの対決で、互いに最強の魔法の激

突しあう。
結果は引き分けとなり、残ったフェイトが優勝となって……銀時と一緒にデートを満喫したのであった。

フェイト
「えへへ♪／／／」

嬉しそうに笑うフェイト。
銀時を1人締めにしたのが相当嬉しかったのであった。

なのは・ティアナ
「……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

なのはとティアナはそのことを凄く腹立たしく感じた。
メッチャ鋭い眼線で睨めつけている。
そんな2人にメッチャ怖がる銀時達はスルーする。

真田
「スバルさんってなのはさんに匹敵するほど強かったんですか！？」

スバル
「え……いや……たいした事は……」

真田の思わぬ言葉に照れるスバル。

ウッソ
「それにしても……魔法って凄いんだなぁ。僕も使えれば魔導士になれるのに……」

銀時
「何言っちゃっているの？」

羨ましがるウッソに呆れて言い出す銀時。

銀時
「お前だって、ガンダムって言う巨大な機動兵器を自由自在に使えるんだから、大した者じゃないか」

ウッソ
「え、銀さんにそう言われると嬉しいかなぁ」

銀時に褒められたことで嬉しく感じるウッソ。

銀時
「新八（じみ）もウッソを見習ってくれれば良いのになぁ？」

神楽
「そうネ。だからあのダメガネは新一じゃなく新八アル」

黒神
「全くだ」

ウッソ
「ちょっとォォォォォォォォォォォォォォ！何でそんなに新八さんには冷たいのォォォォ！？」

銀時、神楽、黒神の新八に対する冷たさにツッコむウッソ。
せっかくの嬉しさが打ち消されてしまった。

月詠
「じゃが、一番印象に残ったのは……」

桂
「やはりキャロ殿だな」

月詠と桂はキャロの事を思い出した。
あの時のキャロは異常なまでに怖かった。
詳しくは『第三十三順：女の怒りはメッチャ怖い！』で。

桃香
「ふぇえ～、この子、何か怖いよぉ～」

桃香もキャロの異常なまでの怒りは恐怖していた。

エリザベス
『ヴィータ、山崎、セッテ、災難だったね』

はやて
「そうやな」

３人はお気の毒にとエリザベスとはやては感じる。

黒神
「では、次の長編シリアスを紹介します！」

『スバル編』　第３８～５４訓

銀時達はスバルの正体が『タイプゼロ』と呼ばれる人造生命体であ

る事と、使用するデバイス、『ティルヴィングエア』が伝説の『七星神刀』の１つであるとスカリエッティから聞く。
そして、銀時とスバルは再会した後にＳＳランクの事件が起こった。
それは何者が機動四課を襲撃して１０００人以上を斬り殺す事件であった。
その後、スバルの前にその犯人が姿を現す。
その正体は、１０年前に別れたスバルの親友であり、同じ『タイプゼロ』の戦闘機人であるアーサァ・Ｋ・ソルドゥナイトであった。
スバルとアーサァ、侍の魂と騎士の魂を持った魔剣士同士の激戦が始まり、超一流の剣の腕、ＳＳランクの魔力、そして『七星神刀』の１つであるアーサァの実力は、あのゾーマをも上回っており、しかも迷いが完全に打ち消せなかったスバルは彼女に敗北する。
その後、元機動四課の研究員として働いていており、この事件の黒幕であるウゼル・Ｋ・ソルドゥナイトにより、『カリバン事件』が発生した。
ウゼルの野望を止める為に機動六課とナンバーズが力を合わせて対抗する。
一方スバルは、アーサァを『タイプゼロ』としての呪縛を解き放つ為に、戦闘機人が持つＩＳ『神々の蒼翼』をついに発動させ、迷いを捨てて彼女との最終決戦を挑む。
死闘の果てに、スバルは神速を超えた超神速の力『絶蒼』で勝利をもぎ取り、アーサァを救い出す。
だが、そこに七星神刀最強のデバイス『エクスキャリバー』を手にしたウゼルがついに現れ、アーサァを捨ててスバルを捕らえる。
娘代わりとして育てたアーサァを道具の用に捨てたウゼルに怒りを感じた銀時は、ウゼルに最終決戦を挑む。
白夜叉として身体能力を最大限に発揮する銀時の力は『エクスキャリバー』を使いこなせてはいないとは言え、アーサァを圧倒する。
しかし、失われたはずの９個の『ジュエルシード』を体内に埋め込んだウゼルは不死身と化しており、銀時を追い込む。

ある意味、ゾーマ以上に厄介と感じて追い込まれた銀時は、ついに対『紅桜』及びロストロギア用のスカリエッティ作のデバイス、『ブレイシルバー』を発動させる。
バリアジャケットはラグナの衣装である為、かなり不満を持っていたが……魔導士として目覚めた銀時はSSSランク級の強さを発揮し、魔力もなのはとフェイト以上に身につけた。
そして死闘の果てにウゼルを倒し、スバルを取り戻した銀時は、2人を人造生命体としての呪縛を解き放つ。
だが、ウゼルが消えたことで要塞を動かしていたエネルギーが暴発しかかり、何とか止めねばとスカリエッティが命をかけて制御装置に向かうが、その前にアーサァがその役を引き受け、スバルに『ペンドラゴブレイド』と親友であるスバルを助けて欲しいと銀時にお願いをして、最後は『タイプゼロ』の人造生命体としてではなく、スバルの親友としてエネルギーに呑み込まれて消滅した。

今までの長編シリアスの中でもメッチャ長く進んでいた。
なんと言っても見所は、銀時が最強の魔導士と化した所とスバルとアーサァの魔剣士対決であった。
名前通りスバルがメインの長編シリアス。
だが……

スバル
「……アーサァ……」

友の死を思い出して悲しむスバル。
彼女から託された『ペンドラゴブレイド』は、はっきり言ってスバルの『ティルヴィングエア』と双璧となる強さを持っている。
言うなれば、伝説の七星神刀（しちせいしんとう）を2つ手にしたスバルは以前よりさらに強くなっていると考えても良い。

神楽
「どんだけ強くなっても、救いたかった命を救えなかった気持ち…
…私も嫌と分かるヨ」

アーサァを救えなかったスバルの悲しさを理解する神楽。
自分も、兄の神威を救いたくても今の自分では救えないと、己の弱さを悔やむ。

桃香
「悲しすぎるよ……親友同士の殺し合いは……」

2人の対決には桃香も泣きそうな表情で言い出す。
暗い雰囲気に包まれる中……

こなた
「そう言えば、銀さんって魔導士に目覚めたそうだけど……あのバリアジャケットは面白かったねぇ～～～♪」

こなたが笑いながらそう言うと、喰らい雰囲気が打ち消されるように誰も銀時に注目する。
『リリカル銀魂』に関しては、誰もがコスプレと思わせるようなバリアジャケットじゃあ銀時が嫌がるのも理解するであろう。

桂
「……に……にしても……災難だったなぁ……銀時……（笑）」

はやて
「……た……確かに……おもろすぎるわ……（笑）」

エリザベス
『何か哀れ♪』

神楽
「ぶあはははははははははははははは！銀ちゃんも新八（ダメガネ）と一緒にオタクに落ちるとヨロシ！（笑）」

笑いを絶える桂とはやてに、笑いの表情を浮かべるエリザベス。
そして問答無用に笑い出す神楽。

銀時
「うっせぇーーーーーーーーーー！てめェ等に言われたくねぇ！（怒）」

フェイト
「お……落ち着いて、銀時！」

なのは
「気持ちは分かるけど、ここは抑えようよ！」

怒り出す銀時に落ち着かせるフェイトとなのは。
一方の、銀時のバリアジャケットを見て、銀さんが災難に思えるスバルと、スカリエッティから銀時のバリアジャケット衣装を聞かされて呆れるティアナ。
せっかく魔導士に目覚めたのに、バリアジャケットがコスプレじゃあ、銀時もうかつに『ブレイシルバー』を使えない。
ちなみに桃香はどうして銀時はバリアジャケットを嫌がるかと黒神から聞くと、原因は三次元で同じ衣装を着ている人物と重なって、同じ服を着る事はコスプレオタクとして見られてしまい、凄く恥ずかしいからであると、桃香はそれを聞いて納得した。

エリオ
「銀さんが魔導士にかぁ……」

月詠
「なるほど……確かにそれならば銀時もスバルのように魔剣士になれるって訳じゃな？」

銀時の魔導士としての存在に興味を持つエリオと月詠。

ウッソ
「新八さん達には……黙っておこうか」

シャクティ
「うん……そうだね」

2人は、コレが新八とお妙、そしてたまが知れば完全にからかわれると思う。
こなたはコレを喋ってやろうかなぁと考えると……

こなた
「にゃ～っはっはっはっはっはっはっは♪新八達にばらしたら逆に面白……」

そうになるが、シャクティはそんなこなたを笑顔でとてつもないプレッシャーを駆けて見つめる。

シャクティ
「こぉ～なぁ～たぁ～ちゃ～ん」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

こなた
「……調子二乗リスギマシタ、ゴメンナサイ」
裏声を出して謝罪するこなた。

ウッソ
（シャクティって本当に怒らせると怖ぇ～～！）
シャクティを見て、改めてシャクティを怒らせないように誓うウッソ。

真田
「それにしても、『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』でも貴方の噂は聞いていましたけど……何か凄いですね、スバルさん。剣術だけであんなに強くなれるなんて……」

スバル
「え……そ……そんなことないよ／／／」
神速の剣術を得意とするスバルを尊敬するような眼で見る真田。
形は違えども、剣道部としてはスバルの剣術を見習いたいようである。

月詠
（確かに、スバルの強さはわっちから見てもおそらくは夜兎族に匹敵するじゃろ）
月詠自信もスバルは夜兎に匹敵する強さを持っていると認めている。

桂

「さて、次の長編を紹介してもらおうか」

黒神

「そうですね……それでは次はこの長編シリアスです」

『人気争奪戦』　第５６～６０訓

第2回目の『リリカル銀魂シリーズ』の結果に納得できなかった下位陣が上位陣に下克上のデモを起こす。

そして、上位陣とそのデモ行為に反対した下位陣側の連中が力を合わせて、下位陣との人気争奪戦争が発生された。

カリムを中心とした下位陣の猛攻に、次々と仲間がやられていく中で……その黒幕は不人気？１であり、最下位のクロノが起こしたデモであった。

久し振りの再開にかかわらずにクロノの悪ふざけにキレた銀時とリィンフォースはユニゾンして、クロノを成敗する。

コレにより、この事件の幕は無事に終わった。

なのは

「にゃはははは……にしても凄くムカつくよね？特にフェイトちゃんの人気」（ゴゴゴゴゴゴゴ！

はやて

「ほんまや……原作でもうち等はフェイトちゃんと同じやったのに、何でうち等はベスト１０に入られへんかったんやろう？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

フェイトの順位と自分たちの順位に納得できないなのはとはやては、嫉妬と憎悪を放つ。
コレにはフェイトも涙目で銀時に抱き抱えて怯えだす。

スバル
「なのはさん！はやてさん！そんなに気にしなくても……」

ティアナ
「ほ…・・・ほら、また第3回目もやるかもしれ」

なのは・はやて
「何、ベスト１０に入った者の余裕？」

２人は眼を光らせてスバルとティアナを睨みつけ、２人は「御免なさいぃぃぃぃ！」と土下座する。
ちなみにスバルの順位は２位でティアナは８位。

こなた
「まぁ、当然の結果じゃない？」

ウッソ
「２人とも、フェイトさんに比べてヒロインとしての立場が薄……」

なのは・はやて
「バスタァァーーーーーーーーーーーーーー！！！！！（怒）」

なのはとはやては、デバイスを出して怒り任せに桜色の閃光と白い閃光を放ち、ウッソとこなたを吹飛ばす。

ウッソ・こなた
「光になるぅぅぅ

クリステルの登場に、フェイト達は最大の恋愛的が登場したと確信する。
さらに新八の大好きなアイドルである寺門通も登場して、彼女に対するクリステルの依頼を聞く銀時達。
それは今のお通の人気が急激に下がっていて、最悪の場合は引退も追い込まれている。
原因は音楽プロデューサーであるつんぽが引退したからであり、彼女の人気を取り戻して欲しいと頼まれる。
一応依頼を受けた銀時達だが、今のお通に聞いてもらっている相手に想いを伝えたい気持ちを失っている彼女に力を貸しても無意味と確信する。
彼女の協力をしている中で、一方のスバルは暇つぶしにと歌を歌っている中で、音楽プロデューサーであるマクロウに注目をされて、何故かアイドルになる事になった。
スバルがアイドルとなって注目された事で、焦るお通。
そんなお通に、銀時は新八がどうしてお通のファンになったのかを話、それを聞いたお通はファンのありがたみと想いを伝えたい気持ちを思い出して立ち直るが、そこに銀時の世界にしか存在しない寄生型えいりあんが現れてバイオテロが発生するが、銀時達の活躍によって無事に解決。
お通の事情を聞いたスバルは、これを機会にアイドル活動に構ってられずに引退し、お通の最後のチャンスを作る。
思いを伝えたい気持ちを思い出したお通は歌を思いっきり歌いだし、見事に合格してアイドルとして復活をなし遂げる。

なのは
「なんか……スバルだけアイドルになったのが凄く気に入らないんだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

フェイト
「私も同じ気持ちだよ……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ティアナ
「凄く腹正しいんだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

3人の嫉妬する眼線はスバルを睨みつけ、スバルを怯えさせる。

桃香
「アイドルって、歌手みたいなものですか？」

桂
「そんな感じだな」

桃香の質問に桂が即答する。

はやて
「それで、そのコスプレ衣装はアイドルとして活躍したものやなぁ。凄く可愛ぇわ♪」

スバル
「え…そ…そんな……／／／」

顔を真っ赤にしたスバルは、被っている帽子を取り出して、その帽子で口の部分を隠しながら……

スバル
「そんなことないですよぉ……／／／」

恥ずかしそうにそう言いだす。
それを見たウッソとこなたは起き上がり……

ウッソ・こなた
「ヤバイ、凄く萌えたんだけどォォォォォォォォォォォォ！」

男の意志とオタクの意思が反応して叫びだすが、ウッソはシャクティに顔面を殴られ、こなたはティアナに首元をチョップされて気絶する。

桂
「何はともあれ、コレで全ての長編シリアス紹介は終わったな」

エリザベス
『そうですね』

神楽
「これからもじゃんじゃんシリアスが続くとヨロシ」

まだまだ中盤の為、これからも続く可能性が高いと誰もが思った。

神楽
「あ、でもエリオは『真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ　鬼の子守歌』の様なエリオにならない様に気をつけるネ」

エリオ
「は？『真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ　鬼の子守歌』の僕が何か？」

突如、神楽の意味不明な言葉にエリオは唖然とし、フェイトが泣きながらエリオの両肩を掴む。

フェイト
「本当にお願い……エリオはあそこのエリオのように落ちないで……（涙）」

エリオ
「フェイトさんまで！どうしたんですか一体！？」

月詠
「……実は、あそこの主はこうなっておるんじゃ。黒神」

黒神
「あいよ！」

月詠がそう言うと、黒神はケータイからある画像をみせた。
誰もがその画像を見ると、それはロリコンとして目覚めた土方と失恋でオタク化したエリオがヴィヴィオとルーテシアを襲うシーンであった。

エリオ
「コレ僕ウウウウウウウウウ！？」

余りのあり得なさに絶叫するエリオ。
確かにこんなのにはなりたくない。

ウッソ
「あっちのエリオさんも災難だな」

桂
「ああ……心が乱れているのが感じる」

はやて
「何か哀れや」

真田
「『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』のエリオも大丈夫かなぁ？」

誰もが烈火竜さんのエリオを心配し、エリオは神楽とフェイトの言う通り、絶対にそこまで落ちないように誓う。
しかも気になる事はそこだけじゃなかった。
それは真撰組の副長である土方十四郎がヴィヴィオとルーテシアを襲うところであった。

黒神
「腐っている」

ウッソ
「腐っています」

2人は鋭い眼線で写真に写っているいやらしい土方を呆れる。
黒神はこれが、土方じゃなくトッシーである事は分かっていた。

桂
「……落ちたな、真撰組も」

エリザベス
『変態じゃん』

はやて
「ロリコンの副長……いや、鬼のロリ長や」

こなた
「それって私も襲われそうじゃん……あのマヨラーだけには近づきたくない」

シャクティ
「下衆男」

桃香
「ぎ……銀さんと違って変態な男で最低です」

真田
「死ね、ロリ方」

エリオ
「真田さん……抑えてください」

ティアナ
「兄さんの言う通り、最低な男だよ」

それぞれ、土方はロリコンであると認識する。
トシー……いやロリー……哀れだ。

なのは
「銀さんが以前話したとおり、土方……じゃなかったロリ方さんは最低な男だったよ」

フェイト

「１０年前の宴会の時でも、私を襲ってきたから……もうあんまり関わりたくない」

銀時
「あ……ああ……腐っているな」

フェイトとなのはも土方を変態と認識する。
銀時にいたっては予想外な事であった。

銀時
（あれェェェェェェェェェェェェェ！以前適当に言った事が当たっていたァァァァァァ！？確かに以前、『あのマヨラーは幼い少女を見るとチ●コが経って――をしたり●●●●になったり、攘夷志士を駆除する為と偽って相手の女に手を出し、さらにはオタク活動をしている』と勢いづけて言っちゃったけど……あれマジで本当だったんだァァァァァァァァ！）

以前、フェイト達に真撰組はどういう人物かと言い出し、特に土方には自分なりのデマを言い出したが、まさかそれが本当であったと驚きだす

銀時
（烈火竜さん、恐るべし！）

烈火竜さんの斬新なアイデアに驚きを隠せなかった銀時であった。

神楽
「全く、マヨラーがロリラーに変わったことで、ゴリラも『トシィィィィィィィィィィ！なんでロリコンに堕ちたんだァァァァァ！？』と大泣きしていたヨ。後、元ジミーも『真撰組辞めようかな

ぁー』と失望して言ってたり、ルーちゃんも『ロリ方、ぶっ殺す』と怖い顔をしながら良い続けていたネ」

銀時
「ゴリラ、山崎……今回は動揺するぜ」

スバル
「あ……あはははははははははは」

神楽がそう言うと、銀時は2人を動揺し、スバルは苦笑する。

黒神
「まぁ、と言う訳で進んだ結果はこんな感じになりますね。どうでした、改めてみたこっちの長編シリアスの感想は」

黒神がそう言うと、ゲスト達の感想を聞く。

ウッソ
「どれもコレもが銀魂風で笑いがありました。最初の『Ｏｗｅｅ編』は異常なまでのゲーム対決だったなぁ」

シャクティ
「それに、『高町家編』でも第三期に出てこなかったなのはさんの家族が登場していたね。今度あって見たいし♪」

こなた
「私は『スバル編』が白熱した♪銀さんとスバルの大活躍が注目するしね♪後、ついでにギンガも登場しましたって感じが笑えるよねぇエェェ♪」

ウッソ
「ちょーーーーー！それギンガさんに聞かれたら殺されるよ！」

真田
「私は……『アイドル編』。なんか知らないけど、お通ちゃんがこれからも頑張って欲しいと思う」

桃香
「『魔導競技大会（まどうきょうぎたいかい）』が良かったです♪色々とあったけど、魔導士達の戦いには私の世界にはない戦い振りがあって参考になりました」

５人の感想を聞いて、安心するように笑う黒神。

黒神
「と言う訳で、次回から本編を再開します！」

銀時
「まだまだ笑いタップリあるから期待してくれよ」

フェイト
「これからも『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～攘夷戦争鎮魂歌～』をよろしくお願いします」

スバル
「中には読者のリクエストも答えて話に乗せるのもあります」

桂
「武士と魔導士の共存ストーリーを活黙せよ」

なのは

「見てくれないと『スターライト・ブレイカー』を無差別発射だよ♪」

ティアナ
「怖いこと言わないでください、なのはさん！」

神楽
「それと、読者の皆も新八（ダメガネ）のようにオタクに堕ちないとヨロシ」

エリザベス
『マスコットキャラのこの私、エリザベスの活躍もあります』

月詠
「そのほかにもゲストとして『銀魂』や『リリカルなのは』、それにオリキャラも続々登場するぞ」

エリオ
「皆さんの期待に答えて頑張ります」

はやて
「私は、皆と一緒に面白い事が出来ればそれでいいんや♪（特に桂さんと／／／）」

ウッソ
「『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の方を忘れずに」

シャクティ
「この小説で質問してきた事をネタに小説にします」

こなた
「他にもたくさんの作品のクロスオーバーしまぁーす♪」

真田
「烈火竜さん作の『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』も同じく笑いを中心にこれからも続きます」

桃香
「後……ウッソ・エヴィンさんのもう1つの小説『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』もお忘れなく」

全員それぞれ言い出すと、最後に黒神が言い出す。

黒神
「では、今回特別ゲストとして登場してくれた『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のウッソ君、シャクティさん、こなたさんに『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』の真田さん、そして『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』の桃香さん、今回は有難うございました」

ウッソ・シャクティ・こなた・真田・桃香
「こちらこそ」

コレ見て総集編は終了した。

銀時
「ウッソ」

ウッソ
「何ですか、銀さん？」

銀時はウッソを呼び止める。
そして少し真剣な表情でこう伝える。

銀時
「色々とあるかもしれねぇが、これからもあの3人をよろしく頼む」

新八、お妙、たまの3人の仲間がウッソの所で世話している事を安心して、これからもあの3人の世話をよろしくお願いする銀時。
ウッソは当然のように……

ウッソ
「はい、こちらこそあの3人にはお世話になります」

笑って返事をする。

ちなみに、今回は総集編の為、『教えて銀八先生』はお休みです。
ですので今回は質問募集は受け入れません。
次回からの『教えて銀八先生』の終了後にお願いします。

総集編って作るとメッチャ時間がかかる（後書き）

名前：黒神
年齢：２２歳
性別：男
服装：黒のシャツの上から真紅色のコートを羽織り、袴のような黒いズボン。
武器：黒い野太刀である『エンアニサ』。闇属性と炎属性の二種類の力が宿った魔剣。刀身自体はかなり漆黒に染まっている（外見は『ユキアネサ』）
外見：完全なる『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』と一緒。ただ違う所は、髪が銀色で、眼のオッドアイが黒と銀色である。そして背中には長刀を背負っている。
性格：大爆笑な事を強く求めていて、偽善な存在を強く嫌う（たとえば『アースラ』とか）。面白い事があればそれでＯＫ。
好きな物：麺類料理・鍋類料理
嫌いな物：エリート意識を持つ者・口先だけでデカイ態度を取る者（特にクロノ）・自分を特別な存在として扱う者（特にお妙）
趣味：漫画を読むこと（特に銀魂）・小説作り・クロノイジメ・お妙イジメ
戦法：銀時のような居合の構えをした剣の構えと変化自在の我流剣術に、黒い炎を中心とした魔術を使い分ける。

第六十八訓：怪しい物には無闇に触れてはいけない（前書き）

エリオは部屋にこもって、１人で顔を真っ赤にしながら２つのフュギュアを見ていた。
それは『真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ　鬼の子守歌』のティアナから貰った神楽のフィギュアと月詠のフィギュアであった。

エリオ
「何か……こうしていると癒されるなぁ／／／」

キャロ
「何が癒されるの？」

エリオ
「！？」

突如、背後から１人の女の声が聞こえる。
エリオは恐れて後ろを振り向くと、そこにはチェーンソーを持っていてジェイソンの仮面を被っているキャロがいた。

エリオ
「あのう……いつからそこに？」

キャロ
「今さっきから♪」

青ざめて質問するエリオに、キャロは質問に答えてチェーン・ソーを構える。

エリオ
「ゆ……許してキャロォォォォォォォォォ！」

キャロ
「うふふふ……だぁ～め♪」

エリオ
「ぎゃあああああああ

第六十八訓：怪しい物には無闇に触れてはいけない

スカリエッティのアジトの入り口の前で、１人の少女ごと柳生九兵衛が構えを取って木刀を握る。

「はぁあああああああああああ！」

九兵衛は体を大きくしゃがみだして両手で剣を握って大きく構え、持っている木刀に己の気を込める。

「柳生真駆流奥義（やぎゅうしんかけりゅう）、猛虎滅牙閃（もうこめつがせん）！」

そして凄まじい速さで相手を突撃し、神速の速さで岩に向かって強力な突きを炸裂させる。

そして木刀の先が岩にぶつかり、衝撃の余りに岩は砕けて粉々になる。

「……ついに……ついに完成した！」

奥義を会得して喜びだす九兵衛。

そんな彼女に後ろから１人の男が声をかける。

「スゲー、木刀で岩を砕きやがった！」

「いやー、今の一撃は凄まじいなぁ九兵衛殿！」

男の声が聞こえると、九兵衛は後ろを振り向く。

そこには真撰組局長こと近藤勲がいた。

隣には無表情のルーテシアと驚きだしているアギトも一緒にいる。

「近藤……それにルーテシアとスカリエッティ」
「今の技……柳生流の秘伝奥義て訳か？」
興味ありそうに言い出す近藤に、九兵衛が今の技を説明する。
「ああ、正確には柳生流の真意とも言える流派、柳生真駆流（やぎゅうしんかけりゅう）だ」
「真駆流（しんかけりゅう）？……通常の柳生流とは全く違うのか？」
柳生流とは全く違う流派に驚きだす近藤。
それは通常の柳生流とは全く違う剣術流派であり、先ほどの奥義らしき技も次元が違っていた。
魔法とは全く違う威力ある剣である為、いつもの柳生流とは全く違う。
「おじい様の祖父、つまり僕の曾曾おじい様が生み出した柳生家の裏秘伝流。動きは通常の柳生流と一緒で斬る事よりも相手に一撃を入れる事を中心としており、敵の意表をつくが、柳生真駆流（やぎゅうしんかけりゅう）は剣の速さを最大に生かして、静の力を剛の力に変えるようだ」
「確かに……さっきの技は魔法に近い威力を持っている」
さっきの技には感心するルーテシア。
九兵衛の話によれば、『ゾーマ事件』の後、今後のゾーマの様な化け物に打ち勝つ為にここ数ヶ月で全ての技を会得した。
そしてその奥義である猛虎滅牙閃（もうこめつがせん）も、今ようやく完成した。
「前から思っていたんだが……高杉晋介とは一体どういう男なんだ？」
「ああ、確か坂田銀時、桂小太郎、坂本辰馬の知り合いだったよな？どういう人物なんだ？」

九兵衛とアギトは高杉はどういう人物なのかを近藤に聞き出す。

「ああ、そう言えば九兵衛殿は知らなかったようだな」

近藤は高杉がどういう男なのか説明する。

「……攘夷浪士の中で最も過激で最も危険な男、高杉晋介」

真選組や幕府なら誰でも知っている超危険人物。

その恐ろしさは半端じゃなくて、ＳＳＳランクの危険人物になっても仕方がない。

「何でも高杉は、正体は謎に包まれた『人斬り』の異名を持つ剣豪河上万斉。『紅い弾丸』と恐れられる拳銃使い来島また子。『変人謀略家』武市変平太。万斉と同じく『人斬り』の異名を持ち、元『真撰組』であり数多くの幕府側の人間と天人を合計１００人以上斬り殺し、真選組から追放されて指名手配犯されている『闇の狂刃』、大威四鍬死楼。そして最近では行方不明になっていたが再び鬼兵隊に戻ってきた『人斬り』の異名を持つ居合い斬りの達人岡田似蔵」

どれもコレも曲者ぞろいの攘夷浪士。

魔導士でも倒せる相手かわからないほどの手誰である。

「奴等を中心に、あの『鬼兵隊』を活動させている」

「鬼兵隊って、今このミッドチルダに災いをもたらしているＳＳＳランクの凶悪犯罪集団の事か？」

鬼兵隊の存在を聞いて驚きだすアギト。

「だが、かつては攘夷戦争の時に天人から国を護る為に高杉が率い

ていた義勇軍だ。秘密裏に強力な兵器を開発していると言う、文字通り鬼のように強い強かったようだ」

近藤の話を聞くと、ルーテシアは質問する。

「……最近、『えいりあん』と言う生命兵器やドクター以外の破壊ガジェットも全て……」

「まちがいなく、全て高杉が作らせた危険兵器だ」

それを聞いて青ざめるアギト。

あんな恐ろしい兵器を作れるのであれば、あの生物型ロストロギアであるゾーマ級の超危険な兵器も作り上げるかも知れない。

「万事屋と桂の話じゃ、奴はあの宇宙海賊『春雨』の裏切った義勇軍とも手を組み、俺達がこの世界に飛ばされた原因である転送装置を作り出して来たようだ」

「なるほど……だが連中は何のためにこの世界に？」

九兵衛は、どうして高杉がこの世界に来たのか不思議がる。

近藤が考えられる事はただ1つ。

「おそらく、この世界の技術を学んでより強大な武装集団に強化し、ミッドチルダを火の海にした後に元の世界に戻ってクーデターを起こすのが奴等の狙い。九兵衛殿、ルー殿、アギト殿、あの男は危険だ。このまま放っておけば、この世界も……俺達の世界も……」

自分達の予想をはるかに上回る『鬼兵隊』の危険な存在に唖然と驚く3人。

近藤の言う通り、このまま高杉の思い通りにさせてしまえば世界が本当に破滅に導く。

「……わかった。柳生家の次期当主として、『鬼兵隊』の野望を阻止する事を誓おう。世界が滅びてしまえば妙ちゃんも危ない」
「……ルーテシア達も力になります」
「そんな連中のおっかない野望を阻止する前に、ボコボコにしてやろうぜゴリラ！」
「ああ、皆のご協力に感謝する」

九兵衛、ルーテシア、アギトの3人も近藤に強力をする事を決意する。
高杉の野望だけは止めなければ自分達の世界が滅ぶ。
それだけは絶対阻止である。

「……所で九兵衛殿……」

近藤は、素振りを始める九兵衛に言い難そうに質問する。

「……なんで…ゴスロリ衣装で素振りしているの？」

そう、近藤が呆れているのは九兵衛の姿がいつもの格好ではなく、眼帯が花の形をしており髪型もポニーテイルからツインヘアーに変わっていて、何やらミニスカートをはいている女の子っぽい服装であった。
ルーテシアは無表情で九兵衛を見ていて、アギトは呆れている。

※

「でぇ？一体何の様だ？」

一方の銀時は、桂、神楽、エリザベス、月詠の5人と一緒にスカリ

エッティのアジトに着ている。
ある2つのカプセル装置の前にスカリエッティ、源外、鉄子、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードの7人がいた。
その後ろには、顔を真っ赤に染めて銀時を見つめながら隠れているチンクもいる。
5人は銀時がこのアジトにやってきた事に凄く嬉しく感じている。
神楽は鉄子との再会の挨拶を済ませている。

「いや、何やら偶然にも変な装置を見つけてしまって……どうやらコレはロストロギアではないかと考えているんだ」

スカリエッティは後ろにあるカプセル装置に振り向く。
確かに2つとも怪しげな存在たっぷりである。

「おお、確かに面白そうな機械(からくり)ネ」
『タイムカプセルみたい』

神楽とエリザベスも興味ありそうに眼を輝かせる。

「にしても、良くこのような機械(からくり)をみつけたもんだ」

感心するかのように言い出す桂。

「ふふふ……この私を誰だと思っている?」
「友達がいない研究者」

スカリエッティの自慢な笑いを打ち砕くように言い出す銀時。
それを聞いたスカリエッティは落ち込む。

「……銀さん、人の傷口ほじくって楽しいのか?」

鉄子も容赦ない銀時のS発言にツッコム。

「いやいや、憎たらしい自慢の笑顔を見せてくれたお礼にさァ、お礼にスカリエッティの傷口を……」

「ほじくらんで良いわ！」

ニヤニヤと言い出す銀時にツッコむ月詠。

「それで、この装置を我々にどうしろと？」

「勿論、機動六課の連中に預かってほしんだよ。何せ、管理官は何やら裏では怪しげなたくらみをしているからな？」

「怪しげな？」

機動六課に預けてもらおうと考える源外。

原因は管理官には裏が存在するからであると言う。

桂はそれはなんなのかを気になる。

「確かに、噂ではロストロギア級である七星神刀（しちせいしんとう）である『エクスキャリバー』を、今でも管理官の捜索隊が探しているようだ。だが、私にはそれが力を求めているのしか見えないんだが……」

鉄子もそれが怪しく感じる。

彼女からもそれは怪しすぎると考える。

何やら大きな力を求めるかのように探しているとしか見えない。

「それに、ドゥーエ姉さんがとんでもない事を聞かされまして……」

「とんでもない事？」

セッテが、姉のドゥーエから聞かされた事に銀時は聞いてみる事に

する。

「何でも、何やら以前に『異種生命体事件』で危険物質として焼き尽くされたえいりあんの体の死体をサンプルとして研究している様なんだよ？」

「なぁ！？」

「えいりあんのサンプル！？」

セインの衝撃的な言葉に桂と月詠は驚きだす。

銀時達もそんなのを管理官がやっているとは思いもよらなかった。

大きな組織には裏が存在するが、それは鬼兵隊のように生体兵器を作るのと一緒である。

だが話によると、危険と感じたドゥーエは暗躍をして、隙を付いてそのえいりあんのサンプルを一滴残さずに破壊した。

「だから博士（ドクター）は管理官の関わりとしてじゃなく、同盟を結んだ機動六課に頼みを入れたんだよ」

「下手をすれば、管理官はとんでもない事をやらかすかわかったもんじゃないっす！」

セインとウェンディも管理官のやる事はシャレにならないほど疑っている。

2人だけではない。ナンバーズも今だ管理官のやる事は信頼できていない。

「増してや、ロストロギアを管理官の手に回してしまえば……」

「それこそ自分の都合どおりに使われますからね」

セッテとディードの言う事には銀時達も同感である。

おそらく管理官は幕府と同じく国の為と見せかけて自分達の都合ど

おりにしか動かない臆病者であるからだ。

「それで、銀時達の方に預けた方が安心だと博士は判断したんです」
「同盟を結んだから安心っす」

ディードとウィンディもその方が良いと言い出す。

「よっしゃー！私達に任せるネ！」
「共に協力し合う仲だ。断る理由もない」

神楽と桂もその協力をする。
管理官に気づかれる前に、フェイト達にコレを知らせた方が良いと考える。

「それじゃあ、さっさとコイツを運び出そうぜ」

銀時がそう言うと、誰もがカプセルらしき物を運び出そうとすると……

「ちょっと、待てェェェェェ！」

チンクが突如慌てて駆けつけて止める。

「ちょ！どうしたのチンク姉！」

セインは驚いてチンクを呼ぶと、

「コレがもし本当にロストロギアだったら触れた瞬間に変なシステムが機動してしまうことだってあるんだぞ！？」

チンクが叫びだしてそう言いだすと、誰もが触れようとするのを止める。

「ああ、確かにそうだった」
「ギリギリ危なかったッス」

ディードとウィンディもギリギリセーフと言った感じで言い出す。
それで変な事件が起こったらたまったもんじゃない。

「うむ、確かにコレまで妙な機械（からくり）に散々な目に会ってきたからな…
…ここは無闇に触れないのが正論だ」

と桂が言うが、彼の右手にはその装置を思わず触れてしまっており、しかも最悪な事にスイッチを押してしまっている。

「何触れているんだオメェはァァァァァァァァァァァァァ！」

銀時は怒鳴って叫びだすが、すでに遅かった。
突如、２つのカプセルから白い煙が噴射し、扉が開いて触手らしきものが現れる。
その触手は銀時、桂、エリザベス、月詠を縛り付けて４人を引きずり出す。

「なぁあああああああああああああ！」
『あ～れ～！』

４人は叫びだしてカプセルの中に引き込まれた。

「銀ちゃん、ヅラァ、エリー、ツッキー！」

神楽は銀時達を助けようと走り出すが、突如足元に触手が捕まられ、神楽を引きずり出す。

「ンギャ！」

神楽は思いっきりこけて顔面を地面にぶつけて痛がる。
その隙にと触手は神楽を引きづり出してカプセルの中に引き込む。

「ぎゃあああああああああああ！」

そして神楽は銀時達とは別のカプセルに入り困り、そのまま2つのカプセルの扉は閉じる。

「あああああ！皆がァ！」
「ヤバイ！ドクター、早く銀時達を！」

セッテとチンクはヤバイというばかりに驚きだし、スカリエッティと源外は急いでカプセルの制御をしようとするが、扱い方が分からない為にどうすればいいのか分からない。

「早くしないと銀さん達が！」

鉄子はこのままではとんでもない事になると慌てる。
そこでチンクは『スティンガー』を構えて……

「しょうがない、伏せろォォォォォォォ！」

チンクは『スティンガー』を一斉に投げて、投げた『スティンガー』がカプセルに突き刺さると大爆発する。

「どあぁあああああああああああああ！」
「んぎゃあああああああああああああ！」
「うぁあああああああああああああ！」

その爆風に巻き込まれたスカリエッティ達は吹飛ばされる。
実はコレぞチンクのＩＳであり、金属を爆発物に変化させる『ランブルデトネイター』。
突如の爆風に、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェが大慌てでこの場に駆け付ける。

「どうしたんですか、ドクター！」
「まぁ、一体何があったというのですか？」

ウーノとクアットロは慌てて言い出す。
彼女等の眼にしたのは、無傷であるチンクに黒漕げとなっているスカリエッティ、源外、鉄子の３人に黒焦げとなって気絶しているセイン、セッテ、ウィンディ、ディードが見えていた。

「コレはいったいどういう事なんだ！？」
「何が一体どうなっているんですか？」

ノーヴェとオットーも事情を聞かせてもらおうとスカリエッティに聞き出す。

「ああ……それは後で詳しく話して置く。それより銀時達は！？」

スカリエッティは銀時は無事かを確かめる。
爆発して破壊されたロストロギアと思われるカプセルは見事に破壊された。

ロストロギアはそう簡単に壊せる物じゃない為、これはロストロギアではないと判断する。
そして煙の中から5つの人影が映し出された。

「良かったぁ……銀さん達は無事だ……」

鉄子は安心して良い書ける途中、豆鉄砲を喰らった表情で驚きだして喋るのを止める。
煙が晴れて、徐々に銀時達の姿が見えてくる。
だが、その姿はいつもと違って見えた。
そこにいたのは……

「たくゥ、てめェがいつも余計な事をするからとんでもない目に会うんだろうが、ヅラァ！」
「ヅラじゃない桂だ！」
「まぁまぁ、全員無事だからよしとするとヨロシ」
『その通り』
「じゃが、もし一歩間違えればわっち等はえらい目にあっていたぞ」

話しながら出てきたのは、４人の子供と1人の女子高生ぐらいの女性であった。
右から天然パーマの銀髪少年にポニーテイルの黒髪の少年。２人とも着物を着ている。
なのはと通と同じくサイドポニーのオレンジ色の髪をしていて、何故か真撰組の女性用の制服を着ている１５・１６歳の少女。
小さな白いペンギンのような姿で、ショートヘアーで薄い金色の髪と紫の瞳を持つ少女。
一体この5人は誰なのかを誰もが思う中……スカリエッティはオドオドと確かめて名前を聞き出す。

「……もしや…とは思うが……君達は……坂田銀時、桂小太郎、神楽、エリザベス、月詠の5人かね？」

と訪ねると、

「ああ？何言っているんだスカリエ……」

「いつも顔合わせをした中であ……」

「あれ……いつもより高く見えるような気がす……」

『こっちは逆に低く見えてしまいます』

「……何やら雰囲気がかわってい……」

5人はお互いを見て、そして今の自分の姿を見てみると驚きだす。

何故なら、銀時、桂、エリザベス、月詠の4人は子供になっていて、神楽は成長してスバルとティアナと同じ年齢となっている。

ちなみに神楽の姿は初期沖田となっている。

初期沖田については『銀魂』6巻で確かめてください。

お互いに相手の姿を見た銀時達の反応は当然のように、

「何か姿変わっているんだけどォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」

「うぉおおおおおおおおおお！私だけ成長したネ！」

『こりゃビックリ！』

銀時、桂、月詠は青ざめて驚きだしており、神楽は自分の成長した姿に別の意味で驚きだしている。

エリザベスは面白そうに驚きだしていた。

「ゑ……ゑゑゑ

ゑゑゑゑゑ！！？？」

スカリエッティ達は字が間違える程に驚きだして叫びだす。
果たして銀時達は元に戻れるのか？

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

鉄子
「……こんにちは。今回アシスタントさせてもらう村田鉄子です」

銀八
「んじゃ早速行くぞぉ。まずはこの人から、ペンネーム『神威　銀時』さん、『神威　銀時「スバルは殺られても仕方ないな」

ヴィヴィオ「出番多いからね」

神威　銀時「今回の質問は自分が投稿している『ＳＯＳ学園』でも銀時がコスプレしましたけどフェイトらはどう思います？」

ヴィヴィオ「自分もコスプレするとしたらどんなコスプレしたいですか？」』

鉄子
「へぇ。あそこの銀さんもコスプレかァ」

興味ありそうに言い出す鉄子。

銀八
「ズバリ、答えます。フェイト達は意外そうに驚いていますが、それ以上に銀さんと合体したなのはに嫉妬を抱いています」

鉄子
「それ……質問の答えになっていないんじゃ？」

銀八
「と言う訳で神威　銀時』さん。廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『月光閃火』さん『輝刃「…梅雨入りに近づいたからか、汗が止まらん…輝刃だ。」

輝刃「…ちなみに、閃火は未だにシャーリィとデバイス調整談義中だ。という訳なので、今回は俺のみの質問だ。」

1．鉄子に質問だ。刀鍛冶である君だが、ミッドチルダに来てから刀は打ったりしてるのか？
2．そういえば気付いたのだが黒神に質問だ。地雷亜や神威とかのキャラは出る予定はあるのか？ついでに神威が出るならでいいのだが、オリジナルで神威が変な薬で女になる話をやって欲しいのだが…どうだろうか？

輝刃「…といった感じだ。しかし……」

う～ん…形にはなったけど、今度は演算処理能力だよね？

シャーリィ「そうね～…ここまで能力が多彩だと、余白部分が狭くなるんだよね～。」

これは結構大きい課題だね～。（悩）

シャーリィ「だよね～……（深悩）。」

輝刃「…まだ続ける気なのか？（呆）」『」

鉄子

「ズバリ答えます。１は当然打っている。最近ではスカリエッティの協力があって材料はたくさんあるから打ち放題だ。２はおそらくはさらに出てくる予定はあると作者は言っていた」

銀八

「と言う訳で『月光閃火』さん、楽しみに待ってください」

鉄子

「次を行きます。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問『銀八先生に質問です。

1．またＦａｔｅ関係ですが、銀魂キャラをサーヴァントで例えると誰ですか？

セイバー（剣の騎士）＝

アーチャー（弓の騎士）＝

ランサー（槍の騎士）＝

ライダー（騎乗兵）＝

キャスター（魔術師）＝

バーサーカー（狂戦士）＝

アサシン（暗殺者）＝

2．お通ちゃんにプレゼントですが、アイドル編ご苦労さまでした、プレゼントで、家に置いてあるアコギあげます。

3またまたリメイクですが、まだ完結はしていませんが、烈火竜さ

んの小説で「真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌」リメイクするとしたらどうします。』」

銀八
「ずばり言います。セイバーは当然銀さん。アーチャーはクナイを良く飛ばすと言う事で月詠。ランサーはバーサーカ並に強暴だが薙刀を使うことで妙。ライダーは定春に乗る神楽。キャスターはクリステル。バーサーカーは鳳仙か屁怒絽。アサシンは忍びのさっちゃんか全蔵。２はお妙は凄く喜んで受け取っていました。３はそうですねェ……土方のロリ設定は作らずに沖田を最初から出します。そこでお妙と九兵衛の代わりに桂とエリザベスを登場させて、真撰組と協力し合って敵を倒しますね」

鉄子
「なるほど。『ＳＡＤＳ』さん、質問有難うございます。では次を行きますペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
１銀時に聞きます。
リインフォースとユニゾンしデバイスを使った銀時ならこれらの人達と戦って勝てますか。なお一対一で
１ウルキオラ（刀剣解放・第二階層状態）元ネタ　ＢＬＥＡＣＨ
２白蘭　元ネタ　家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ
３セフィロス　元ネタ　ＦＦ７
４織田信長　元ネタ　戦国ＢＡＳＡＲＡ
５豊臣秀吉　元ネタ　戦国ＢＡＳＡＲＡ
６石田三成　元ネタ　戦国ＢＡＳＡＲＡ
７バルバドス　元ネタ　ＴＯＤ２
２上と同じ質問で、機動六課の人達に聞きます。
１から７までの人達と戦ったら勝てますか。なお相手は一人だった

場合と全員だった場合で機動六課は全員です。』」

銀八
「ズバリ答えます。１はギリギリ勝利。２はそんなに手こずらないで余裕の勝利。３は勝利か敗北かの分かれ目。勝利する場合は超ギリギリ勝利。４はかなり苦戦してギリギリ勝利。５はかなりくせんしてギリギリ勝利。６は結構苦戦するが勝利。７はかなり苦戦して勝利。んで２は、そうですねぇ……いくらなんでも敵１人に機動六課全員で責めれば、機動六課が勝ちますよ。実力不足を数で埋め尽くしているし。と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

鉄子
「次行きます。ペンネーム『武士堂』さんの質問です。『質問です。アーチャーがｓｔｓ８話のなのはを見たら何て言うでしょうか？ゲストキャラとして登場してもらい、実際に考えを聞かせてほしいです。』」

銀八
「では、今回アシスタント以外に特別ゲストを呼ばせてもらいます。出てきなさい家政婦英雄」

アーチャー
「その呼び方は辞めて欲しいのだが……（苦）……まぁ良い。今回は黒神の頼みでここに呼ばれて来させてもらった。早速質問を答えよう。見せてもらったところ……確かにティアナは焦っている上に本当の強さは何なのかを分かっていない。しかしなのはと言う女のやり方もやり過ぎる。力で相手を治めつけようとするのは逆に相手

の心を傷つけてしまうであろう。最も、原因を作ったのはティアナだからなのはにそこまで責める必要はない。むしろ、問題を作ったのはティアナなのに、なのはのこの出来事に対して言い続けている『武士堂』さんも、そろそろ抑えた方が言いと私は思う」

銀八
「なるほど。以上アーチャーでしたー！今回は有難うございました！」

アーチャー
「何、礼には及ばない。この小説の健等を祈る」

銀八
「と言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい」

鉄子
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ今回のアシスタントは鉄子さんみたいだよ」

こなた
「ああ～～あの影薄い人」

かがみ
「いや・・・映画に出ていたでしょ・・・薄いって言うなよ・・・」

こなた
「では質問だよ～」

かがみ

「無視かい！！」

こなた
「？高杉って今何してるの？死んだ？影が薄くなってるよ」

かがみ
「あんた・・・けんか売ってるわよ・・・それ」

こなた
「？『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』について答えてね今回は好きに言って良いよ．

後は，愛紗よろしく」

ウッソ
「うわ！！桃香さんに続いて愛紗さんですか」

愛紗
「そうだ．では私から

？前に『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』の感想で銀時殿は自分の格好に不満があったみたいですか，なぜ不満なんですか？私たちと大して変わらないと思うのですが？」

ウッソ
「まあ・・・愛紗さんたちはネタがわからないしな・・・」『……まぁ、ゲストキャラだから影薄は否定しないが」

銀八
「大人だよあんた！新八（メガネザル）とお妙（メスゴリラ）に見習って欲しいぐらいだ！んで質

問の答えはこんな感じだ。？は強力な武装兵器の開発中で死んでいません。原作でもアイツは滅多に登場しないからシリアスのごく一部しか出ないわけ」

鉄子
「？はそうだな……まずウッソのガンダムと言う巨大な機械兵器（からくり）を操縦する所は感心した。シャクティもヒロインらしくてこなたもムードメーカーであろう。しかしメガネは本当に変態としか言いようがない。好きな女に変身するなど、侍としては失格かもしれない。姉のお妙はゴリラと思わせるほどの凶暴性を感じた」

銀八
「んで？は……愛紗、お前はコスプレの存在を知らないからそう言えるんだ。銀さんのあの衣装は三次元に出てくる人物と全く一緒なため、コスプレオタクと思われちゃうから嫌がっているんです。と言う訳でウッソ・エヴィンさん。『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ・ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の最新話を早く完成させてください」

鉄子
「次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
鉄子に質問です。鉄子は源外とスカリエッティと一緒に辰馬や桂や機動六課達の武器を改造とかしないんですか？』……ズバリ答えます。機動六課のメンバーがそれを頼めばそうすると思います。ただ、私の場合は刀鍛冶だから……スバルとシグナムしか出来ないと思う」

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、その時を楽しみに待ってください。んで次ィ、ペンネーム『白い奇術師』さん『１銀さんはスタンド（幽霊）を複数憑依して戦うことができますがユニゾン状態の銀

さんとどっちが強いですか？

2銀さんは神楽、新八、お妙の生霊と複数の幽霊を憑依させました。神楽やお妙だけでも憑依させたらバカ強くなるのになのはやフェイト達の生霊を憑依させたらどれくらい強くなれますか？ちなみにフェイトさん達、憑依したらユニゾンと同じように一心同体になれますよ。

3ザビエルの幽霊が憑依した銀さんにリリなのメンバーは勝てますか？』ズバリ答えます。ユニゾンは魔力を使えるので、おそらくはユニゾン状態が強いと思います。2は例えるなら……魔法が使えてさらに強くなります。後、彼女達が知れば喜ぶと思います。3はザビエルはそんなに強くないので、リリなのメンバーは余裕に勝てます。と言う訳で『白い奇術師』さん、廊下に立っていなさい」

鉄子

「一気に答えたな……では次を行きます。ペンネーム『風花』さん

『レイン

「女の嫉妬、憎しみほど恐ろしく醜いものは無い。それより質問、いくぞ」

？鉄子って誰だ？……ああ、刀鍛冶の女か。お前は誰か好きな奴いるのか？銀時ではないと願いたい

？クロノは前回、嫉妬でアルカンシェルを撃ったがあの嫉妬でエイミィにボコられたか？むしろボコられろ

レイン

「今回はこれだけだな」

うん、ごくろうさま

それでは』？は……いないわぁ！／／／」

鉄子は顔を真っ赤にして質問を叩き落す。

銀八

「？はクロノはあの後、エイミィの代わりに管理局にめちゃめちゃボコられました。と言う訳で『風花』さん、クロノイジメをもっとやっちゃってください」

鉄子

「先生……それは言いすぎじゃ？」

銀八

「いいんだよ。あんなエリート意識だけの糞餓鬼にはちょうど言いしつけなんだよ。そんで次ィ、ペンネーム『ギンタマン』さん『質問です。

アニメのラストにあったクリスマス本当のサンタはうんぬんで銀時を主役にプレゼント（もとい争奪）をするんですか？

次は銀時に惚れている女性全員に質問です。

クリスマスで、でっかい靴下の中に銀時が入っていたら襲いますか？

P．S

もし暇であれば自分の作品も見にきてくれるとうれしいです。』…

…ズバリ答えます。彼女達はそうするでしょう」

銀八がそう答えると、鉄子も顔を真っ赤に染まる。

銀八

「と言う訳で『ギンタマン』さん、小説は読ませてもらいましたの

で安心してください」

鉄子
「では次を行きます。ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんの質問です『質問良いですか？
ユーノも新八と同じで体の９５％が眼鏡で出来ているんですか？』……何、このイジメ質問？」

ユーノに対する酷い質問に鉄子は呆れる。

銀八
「ズバリ答えます。同じ影薄でもユーノの場合はメガネの存在はそんなに大きくないと思います。と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『ディワールド』さん『ディワールド
「マジすいませんでしたあああああああああ！！」

士
「何故いきなり謝る！？」

ディワールド
「いや、この間、銀八先生にクロスオーバー学園を中心にって言われたけどネタが思いつかなくてどう言えば良いか解らなくて、ウルトラマンの小説ばかり進めちゃって・・・・。ホントすいません！」

士
「まあ良い、質問行くぞ。まず最初に・・・・。銀八先生、俺も外伝の話しでなのはとフェイトとフラグ立てちまったん上に二人にキスまでされたんだが、はっきり言ってウゼー。九歳だけどいるか？」

ディワールド
「なのはファンとフェイトファンに殴られるぞお前。」

外伝のなのはとフェイト
「そんな冷たい事言わないでよ！！」

士
「テメー等帰れよ。」

外伝のなのは
「やだもん！士さんと一緒にいたい！！」

外伝のフェイト
「それは私だよ！！」

士
「マジうっとうしいからアンタ新たにフラグ立ててくれや、こいつ等に。」

ディワールド
「別に本気にするかしないかは貴方次第。」

士
「で、次何だけどな。キャロに質問、チェーンソーとかお前のその体格で持つの無理じゃねえか？手を痛めたろ？」

ディワールド
「質問は以上です。次回も楽しみにしています。」『ズバリ答えます。……俺はマヨラーとは違ってロリコンじゃありませんので良いです」

鉄子
「……なんか先生が可愛そうに見えてしまいます」

銀八
「ほっとけェ！んでもう1つのほうは……彼女の場合は嫉妬心で行動しているので、手は痛むのを感じないと思います。と言う訳で『ディワールド』さん、廊下に立っていなさい」

鉄子
「最後の質問です。ペンネーム『山さん』さん『質問この小説の銀さん　ドS度　が足りない気がするけど気のせいですか？

質問2
銀八先生に質問。
廊下に立たせる意外に制裁は加えないんですか？』」

銀八
「ズバリ答えます。1はおそらく気のせいじゃないと思います。銀さんは女性との関わりが大きすぎる為、凄く動揺しまくってドS度が薄くなってきています。ですが完全にドSじゃなくなる訳じゃないので大丈夫だと思います。2はいくらなんでも必要ないと思いますので加えません。と言う訳で『山さん』さん、廊下に立っていなさい。以上で今回の質問は終了。どうでしたか、鉄子」

鉄子
「何か凄い度胸のある質問ばかりで驚きまくった。いつもコレを一気にやるなんて大変だ」

銀八
「全くだ。てな訳で今回は有難うございました。次回はアルフにアシスタントさせてもらいます」

鉄子
「では」

銀八・鉄子
「次回もお楽しみ～」

第六十八訓：怪しい物には無闇に触れてはいけない（後書き）

黒神

「昨日、レンタルした『もののけ姫』を見て感動した。あの続編をやらないかなぁと考えています。いやー、映画は良いですね。『銀魂』の映画も僕も思わず5回行きました。てな訳でこれからもジャンジャン行きますので宜しくお願いします」

クアットロ

「次回、『大人が子供の姿になると、その子が凄く可愛く見える』。テイクオフよ♪」

第六十九訓：大人が子供の姿になると、その子が凄く可愛く見える（前書き）

幼児化した銀時、桂、エリザベス、月詠の４人。

そして少し成長した神楽。

コレを見たフェイト達の反応は……

外道丸

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるでありんす」

第六十九訓：大人が子供の姿になると、その子が凄く可愛く見える

「あはははははははははは！……それで、おんしゃ等はその機械（からくり）のせーで、そげな姿になったがか！？」

機動六課部隊長オフィスで大笑いする辰馬。

フェイト、なのは、はやて、ティアナ、エリオ、キャロ、アルフ、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィン、ギンガ、ユーノ、九兵衛、近藤、ルーテシア、アギトは唖然としている。

彼女等の目の前にいるのは、幼児と化した銀時、桂、エリザベス、月詠の４人と、スバルとティアナと同じぐらいの年齢に成長した神楽がいた。

スカリエッティ、源外、クアットロの３人はどうしてこうなったか説明をする。

「まさかこのような事になるとは思いもよらなかった。だがチンクによって破壊された機動装置を調べた所、それはロストロギアではなくある装置である事を思い出した」

「ある装置？」

スカリエッティの言う事に近藤が反応する。

そしてそれを源外が説明する。

「『スモール・ヒューマイドエボリューション』と『ビック・ヒューマイドエボリューション』。数十年前にミッドチルダ随一の発明家及び数多くの人々を実験台として命を奪った犯罪者のナナオ・スティーモルスが開発した生命体退化装置と生命体成長装置である事が判明した」

「ナナオ・スティーモルスってあの凶悪犯罪者の！？」

ナナオの名を聞いて驚くアルフ。

「確か、８年前にナナオは捕まってその危険装置は全て管理局に処分されたと聞いたんだけど……」

「それがまだ全て見つかっていなかった訳よ」

まだナナオ作の機械装置があった事に驚くフェイトと全て見つかっていないと呆れて言い出すクアットロ。

「おそらく銀の字達が入った『スモール・ヒューマイドエボリューション』は大人専用に作られており、特殊なエネルギーと魔力を体中に圧縮させて埋め尽くすことで、その肉体は無理矢理退化させて子供の頃に戻させてしまうようじゃ。そして神楽の入った『ビック・ヒューマイドエボリューション』によって逆に体を強化されて無理矢理成長したんじゃろ」

「だが『ビック・ヒューマイドエボリューション』は『スモール・ヒューマイドエボリューション』と違って影響力は小さく、２・３年後の姿に成長させるようだ」

源外とスカリエッティの説明に納得するフェイト達。

だが、それよりも聞きたい事があった。

「そげんで、金時達はいつぅ戻るがか？」

辰馬がスカリエッティに質問をするが

「だから金時じゃなく銀時だァァァァァァ！」

ドカァ！

「ごふぁああ！」

幼児となった銀時が辰馬に飛び蹴りを炸裂し、辰馬は壁に衝突する。

「おそらく、かなり古いものだから、銀時達にかすかな魔力とは違うエネルギーを感じ、そのエネルギーが消えれば元の姿に戻るだろう。そして消えるとなれば、せいぜい2つ日間はかかる」

「なるほど」

「とりあえず、しばらくはそのまま放って置いたほうが良えな」

スカリエッティの説明に納得するシグナムとはやて。

「にしても、神楽の場合はラッキーじゃない」

「何がネ？」

どうして自分だけがラッキーなのか分からない神楽は、クアットロにその理由を聞く。

「だって、今の姿って貴方の未来の姿でしょ？だったら貴方は女の子らしく成長しているしね。特に胸が結構大きくなっているし♪」

クアットロが神楽の成長した姿がラッキーであると言う理由を聞き出した神楽は自分の胸を触ってみると、

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！ほんとネ！」

メッチャ凄く喜んでいた。

フェイト達に比べて半分だが、Bカップより大きく膨らんでいるぐらいの大きさである。

「巨乳ほどじゃないけど未来の私は美乳の美少女アル！キャホー！」

はしゃぎながら喜ぶ神楽。

そんな神楽に怒り出す九兵衛、ヴィータ、キャロの3人は、刀、『グラーフアイゼン』、チェーンソーを握って神楽を襲いだそうとするが、九兵衛はシグナム、ヴィータは近藤、キャロはシャマルが抑える。

「離せェェェェェェェェェェェェ！あの裏切り者だけはこの場で成敗してやるんだぁあああああああ！（怒）」

「止めるなァ！今の発言は１０年間まったく変わらない私に対する侮辱だァァァァァァァァァ！（怒）」

「こんな結果なんてなくなっちゃえば良いんだァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！（怒）」

同じ貧乳キャラであった神楽の成長した姿が、胸が結構大きい美乳であり、以前より女の子らしく可愛くなった神楽に怒りの嫉妬を抱く3人は理性を失って暴走している。

「落ち着けェェ！怒りに任せて人を殺めるなぁ！」

「ちょ、気持ち分かるけどとりあえず落ち着いてって！」

「キャロちゃん！フェイトちゃんとエリオ君が怯えているから怒りを抑えて！」

シグナム、近藤、シャマルは青ざめて大量の汗を流しながらも、暴走している3人を抑えるのであった。

「……現実の自分を認められない人間って、哀れな感じがする（笑）」

ニヤけて言い出すルーテシアの言葉に、３人はさらに暴れだして怒りを表す。

「ちょっとー、何火に油を注ぐような言い方するのルー殿！」

近藤は汗を流してツッコむ。

「ルーテシア……何か変わっていない？」

「ふふふ……」

アギトが心配そうに言い出すが、ルーテシアは怖いぐらいに笑い出す。

「キャロ……どうしてこんな事になったんだろう（涙）」

「そうですね」

涙を流すフェイトと青ざめるエリオは、キャロはどうしてこうなったのか考えていた。

「それで、兄さん達がこうなった説明をする為にスカリエッティと源外さんがいるとして…なんであんたがいるの？」

ティアナはシド眼でクアットロに説明をする。

「それはねぇ……」

にやけて言い出すクアットロは、

「魔法を使わなくてもＳＳランクの戦闘力を誇る坂田銀時と桂小太

郎の2人を、徹底的に調べて研究したいから！」

などと、とんでもない発言をする。
その瞬間、フェイト達の空気が冷たくなった。
金色の死神、白い魔王、夜天の王の3人がとてつもない威圧感を放ってゆっくりとクアットロに近づく。

「クアットロ……少し黙っておこうか」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「ねぇ……少し頭を冷やそうか」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「あんた……少しお仕置やな？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

3人の怒りは半端じゃなく大きい。
クアットロは青ざめてバックをする。
触れてはいけない物を無闇に触れてしまった愚かさを知ったからだ。

「じょうだぁ～んよ冗談！変な事をしないからその怒りは押さえ――」

「問答無用　（だよ）（なの）（や）」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

冷たい笑みを浮かべ、三人はデバイスを構える。
そしてクアットロは「待避ィーーーー！」と叫んで逃げ出すが、最早手遅れであった。
三人のデバイスに魔力が溜まり、

「バスターーーーーーーーーーー！！！」

三つの閃光が放たれた。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああ！」

クアットロの絶叫が響き渡り、彼女は哀れにも閃光に飲み込まれた。
黒こげとなった彼女を見て銀時達は青ざめて静まり、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、ヴィータにいたってはクアットロの自業自得であると判断する。

「女子の怒りって言うのは……ほんとぅにおっかなすぎるぜよ」

いつもどおり笑っている辰馬だが表情が青ざめており、あの3人に逆らえば命の保障はないと確信する。

「銀時、あんな変な女に近づいたらダメだよ？でないと本当に元の体に戻れなくなるよ」
「そうだよ」

フェイトとなのははクアットロ見たいな女性に関わってしまえばロクな目に合わないと銀時に心配そうに忠告する。
一方の銀時は、子供と化したのか……2人の姿を見て何故か心がドキドキする。
普段見慣れているのに、子供と化した影響なのか心がドキドキする。

「あ……ああ……わかったよ／／／」

照れながら銀時は返事をする。
そんな銀時を見た2人は何かに目覚めたかのように……

「か……か……」

「？」

２人の様子がおかしいと銀時が心配そうに声を駆けつけようとするが……

「可愛すぎるゥウウウウウウウウウウウウ！！！！」

「ごふぁああ！」

フェイトとなのはが突如、銀時に抱きつく。

子供の姿の銀時が凄く可愛く見えたのであった。

そしてフェイトとなのはの胸が銀時を押し付けてギューギューと様無のであった。

「あー、何て愛らしい姿になっているの！／／／」

「子供の頃の銀さんがこんなに可愛いなんて思ってもいなかったよォ！」

「もぐぁヴぇら、おぢぐくぇ！く……ぐるヴぃーから！（お前等、落ち着け！く……苦しいから）／／／」

銀時は苦しみだしているが、２人は満足そうに愛しく抱きつく。

意識が消え行く中……

「辞めんかぁぁぁぁぁ！」

ドカァ×４

「ぐぁあ！」

「にゃあ！」

突如背後から、アルフとシグナムがフェイトを、ティアナとリィン

フォースがなのはの頭をかかと落としを炸裂させて、２人は気絶する。
この光景には神楽達は２人の自業自得であると考え、ユーノにいたっては自業自得であった。

「全く……この２人は」
「我が主ながら恥ずかしい」

シグナムとアルフは呆れて言い出す。

「兄さん、大丈夫」

ティアナは心配そうに銀時に言いだすと、

「まぁ……大丈夫だ／／／」

テレながらも銀時は言い出す。
そんな銀時の姿を見たティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースの４人はと言うと……

ドキィン×４

心がドキッとして顔を真っ赤にする。
そして思わず……

「兄さん～／／／」
「銀時ぃ～／／／」

迷わずに４人に抱きつかれる。

「お前等もかァァァァァァ！！」

４人に抱かれて動揺して驚く銀時。
そして４人の押しよ付けられる大きな胸に銀時はぴくぴくとして顔を真っ赤に染めて気絶する。

リリカル組はこのとき思った。
よくよく考えてみれば銀時の子供の姿は見た事がない為、見て見たい気持ちもあった事に。
そこに……

「銀さん！」

慌しくスバルがこの場に現れた。
銀時達に何かあったと聞いて急いで駆けつけたのであった。
実は彼女、剣術の鍛錬に夢中になりすぎて銀時達の異常に気づかなかった。
そして彼女の目の前には、幼児となった銀時、桂、エリザベス、月詠の４人と、自分と同じ年に成長した神楽がいた。
最初は驚いたが、事情をスカリエッティと源外から聞いたスバルは納得した。

「それはお気の毒でしたね……銀さん」
「ああ……爺になった経験はあるが、今度は子供とはなぁ」

まさかの幼児化には銀時も予想外であった。
動揺するようにスバルは苦笑する。

「それにしても……」

スバルはじぃーと銀時を見つめる。
子供の頃の銀時が凄く可愛く見えるからであった。

「本当に可愛いですよ、銀さん／／／」

嬉しそうに笑顔で言い出すスバルは銀時の頭を優しく撫でる。
少し恥ずかしそうに顔を真っ赤にするが、この姿で撫でられると…
…恩師である松陽の事を思い出す。

（そう言えば、松陽先生と最初に会った時もこんな感じで優しく撫でてもらったっけ）

恩師の事を思い出す銀時は、懐かしがる。

「にしても幼児になっても銀時は変わらんなぁ」
『以下にも』
「ほんまや」

ニヤニヤと面白そうに言い出す桂、エリザベス、はやて。

「それに、八神殿には色々と迷惑をかけてしまって申し訳ない。このような状況になってしまうとは思っていなかった」
「ええって、それに元に戻るんだったらそれで良いんや♪」

申し訳なさそうに言い出す桂にはやては気にしないでいた。
それ所が、彼女の本心はメッチャ得したと考えている。

（にしても、桂さんの幼児姿ってメッチャ可愛い！／／／）

今この場で抱きつけたいと彼女は思う。

恋する男の幼児姿がコレほどまでに愛らしいとは思いもよらなかった。
そんなはやての考えが手の取るように分かるヴィータ。

（はやて……そこまでしてヅラの事を……にしても……）

ヴィータはテレながらも桂の方をチラチラと見る。
そんなヴィータに桂は気づいて声をかける。

「どうした、ヴィータ殿？」

桂に声をかけられたヴィータはドキッとして驚く。

「べ……別に何でもねぇよ！／／／」

ヴィータはテレながらツンデレ的に大きな声で言いだす。
はやて所がヴィータの好意に気づかない桂は以外に鈍感であった。

「そんで、金時達はこれから2日間は大変じゃろ」
「確かに……この隙に鬼兵隊が責められたらかなりヤバイだろう」

辰馬と近藤はこの2日以内に鬼兵隊が責めてきたらヤバイと考える。
成長した神楽は戦えるが、幼児と化した銀時、桂、エリザベス、月詠の4人ははっきり言って戦力外になる。
コレには銀時、桂、エリザベス、月詠も困った表情をする。
そんな中、

「そんなときの為に、あっし達が来やした」
「そうよ。それに銀さんのピンチだからこそ私がいるじゃない！」

突如、後ろから2人の女性の声が聞こえた。
1人はメガネをかけていてマフラーをかけているロングヘアーの美女、猿飛あやね。
もう1人は、頭に鬼の角が2つ生えていて、背中に金棒を背負っており黒い着物を身につけた外道丸である。

「お前等……どうしてここに!?て言うより、どうして式神であるテメェまでいるんだ外道丸!?」

銀時は外道丸の存在に驚きだしていた。
彼女はクリステルを守る式神のはずなのに、どうして自分達の前にいるのか不思議に考える。

「実はあっしとクリステル様は今回、銀時様がどのような事件に関わっておられるかを調べた所、最近このミッドチルダで事件を起こしている『鬼兵隊』の存在を知り、クリステル様の命によりあっしは今日より銀時様達の力になりやする」
「マジでか!?」

外道丸の協力に感謝するように喜ぶ神楽。

「後、クリステル様はお通のマネージャーとして彼女を見守っておりやする。その為、しばらくの間はあっしの主は銀時様でござんすので、しばらくの間お世話になりやす」
「ああ。協力頼むぜ」

正直言って、今の鬼兵隊は銀時や桂でも知らない間に強力になっている。
原因はこの世界の知識と宇宙海賊『春雨』を裏切った義勇軍の協力によって、強大な兵器を開発しているからだ。

どれもがロストロギア級に当てはまるほどに。

「んで、お前はどうしてここにいるんだ？」

銀時は次に猿飛に質問する。

「源外殿が銀さんに異変が起こったと聞いて飛びついてきたのよ。それで急いでここに来たんだけど……まさか幼児の姿になっていたなんて」

まさか子供の頃の姿になるとは猿飛も驚きだした。

少しショックを受けている様子である。

「大人でたくましい銀さんが、まさかおち○ち○に毛が生えていない子供の頃に戻ってしまうなんて…幼児化のあんちきしょう！」

「ちょっとォォォォォォォォ！女が軽々しく言ってはいけない事を言っているよこのストーカー！」

猿飛の下ネタ発言に青ざめてツッコむティアナ。

「だけど……だけど……」

猿飛は右手の拳を強く握りだし、

「コレはこれで興奮するじゃないのォォォォォォ！小さい銀さんも、凄く愛らしくて抱きたいんだけどォォォォォォォォ！／／／」

そう言って猿飛は顔を真っ赤にして、飛び込んで抱きつこうとするが……

「吹き飛べェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！！（怒）」

フェイトとなのはが、『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』から金色の魔力砲と桜色の魔力砲を放つ。

「塵と化すゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

猿飛は光に呑み込まれて吹飛ばされる。

結局、銀時達の姿が変わっても大騒ぎになるばかりである。

「はぁ……コレから2日間、どうすればいいんだ？」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

アルフ
「はぁ～い！今回は久し振りに、私アルフがアシスタントするよ♪」

銀八
「んじゃ早速行くぞ～。まずはこの人、ペンネーム『ディワールド』さん『土
「おお、銀さん、変態ドクターに対してS発言が・・・・、今度俺とその変態ドクターの傷広げようや。ククク！」

城戸

「怖いから辞めれ、どうも城戸信司言います。」

士
「じゃあ質問一、そちらのエリオがフィギア見て鼻の下伸ばしてたみたいだけどこのままではそちらのエリオもオタク化するんでは無いでしょうか？」

城戸
「質問は以上です。」『ズバリ答えます。いや、彼はオタク化はしないでしょ」

アルフ
「もしなったらフェイトが泣くよ」

銀八
「と言う訳で『ディワールド』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「九兵衛が壊れてる！！」

ルルーシュ「最近出番が無いからな」

神威　銀時「妙が見たらどうな反応するやら。質問なんですがバカ皇子がアルフ、ザフィーラ、ユーノ、フリードを見たら欲しがる優先度を教えて下さい」

ルルーシュ「バカ皇子は俺じゃなくハタ皇子だからな」』」

アルフ
「ええーーーーーー！？私達狙われるの！？」

それもペットとして欲しがられることに驚くアルフ。

銀八
「そうですね。バカ皇子の場合は優先的じゃなく欲張って欲しがりますね」

アルフ
「うそぉぉぉぉぉぉ！？」

銀八
「てな訳で『神威　銀時』さん、作者はルルーシュの事をバカ皇子と思っていないので安心してください」

アルフ
（バカ皇子には関わりたくないな）

アルフ
「では次行くよ。ペンネーム『十河』さんの質問。『質問
1・若がえッてしまった銀さんたちを見て誰が一番暴走しますか？
具体的によろしく！

2・1で答えた人へ。だからと言っておいたが過ぎるようなまねは控えなさいよ？

3・キャロのジェイソンモードが発動しまくりそうなシチュです・・。

キャロ、ほどほどにしないとエリオから振り向いてもらえないよ？

後、エリオと銀さん宛ての贈り物として魔法少女と自称・美少女の

守護霊の主人公・兵頭アキト特製の自家製マスカットビネガージュースを送ります。
程よい酸味が（おもに女難関係で）疲れた体を癒してくれると思います。』」

銀八
「ちなみにそのジュースは2人とも普通に頂いたようで満足しました。それでは質問の答え。アシスタントであるアルフ、代表としてお願いします」

アルフ
「凄く愛らしくて可愛かった！もう弟にしたい気分♪」

銀八
「そして2の質問どおり、抑えておけよ。3は……怖いのでご勘弁を」

アルフ
「なぜ土下座！？気持ちは分からない訳でもないけど！」

銀八の土下座にツッコむアルフ。

銀八
「と言う訳で『十河』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
？シグナムとヴィータ以外のリリカル組に聞きます。アイドル編の後　銀魂の映画を見に行きましたか。ちなみに自分は先週見に行きました。
？機動六課に聞きます。
これらの集団と戦ったら勝てますか。ちなみにスバルはこの小説の

設定でアイドル編終了あたりで全員リミッターは解除してます。
？真６弔花と白蘭（真６弔花のうちＧＨＯＳＴ以外は修羅開匣状態）
元ネタ　家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ
？エスパーダ　（全員刀剣解放状態でウルキオラは刀剣解放・第二階層状態）　元ネタ　ＢＬＥＡＣＨ
？新しい血族とシックス　元ネタ　魔人探偵脳噛ネウロ
？織田軍＋明智光秀と松永久秀　元ネタ　戦国ＢＡＳＡＲＡ
？豊臣軍＋石田三成と大谷吉継　元ネタ　戦国ＢＡＳＡＲＡ』ズバリ答えます。？はアルフ、お願いします」

アルフ
「アイドル編後に、機動六課全員で見に行ったよ。勿論銀時達はお留守番させたけど♪凄く面白かったよ♪特に最後の銀時と桂、メッチャカッコ良かったなぁ。はやても桂の活躍に改めて惚れたようだし♪」

銀八
「とまぁ、こんな感じですね。？はそうですねェ……？は結構苦戦して勝利。？は大決戦して五分五分。？はシックス以外のメンバーがそんなに強くない為、以外に余裕の勝利。？と？は苦戦して、五分五分ですね」

アルフ
「確かに、『エスパーダ』と『戦国ＢＡＳＡＲＡ』って人間離れしているじゃん！」

銀八
「てな訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

アルフ

「次行くよ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問。『輝刃「…梅雨時が近づいて少し冷え込んできたな…輝刃だ。とりあえずまずは俺からだ。」

『アルフに質問というか誘いなんだが…今度そっちに顔を出すんで、その時に一緒に話でもしないか?お互い狼になれる者同士で…な。(微笑)』

輝刃「…とまぁこんな感じだ。」

いや~…なかなかに良い談義となったよ~♪

シャーリィ「私もよ♪よ~し、これで魔法を使えない人達に希望の光が差し込むわ~♪」

輝刃「…終わったようだな。」

うん…今回はホントに楽しい時間をありがとね♪

シャーリィ「ううん…私の方こそ、楽しい談義をありがとね♪」(そういって、お礼代わりと言わんばかりに閃火の頬に軽くキスをする)

えへへ…(照)。

シャーリィ「じゃあね~♪今度はデバイス達も一緒に連れて来るから~♪」(明るく笑いながら手を振りつつ去って行く)

えへへ…(照)。

輝刃「…完全にトリップハイを起こしたな。とりあえず今回は此処

までだ。また質問があればこちらからドンドン出していくのでよろしく頼む。（一礼）」

えへへ…（照）。（未だトリップハイ中）』……うーん、また今度考えておくね。銀時と一緒になら行くけどね」

銀八

「即答したよこの子！まぁ良い……てな訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『風花』さん『今日は。風花です
今回は少し長いですが2つ質問します

？アルフは最近出ていませんがしっかり銀さんにアタックしてますか？してないならクロノをボコってきてください。報酬はドッグパフェ（パフェにドッグフードが混ぜてある）だよ
？交流戦の事なんですが、実は5人まで観客として出そうといますがそれを決められません。そこでクジで決める事にしました
銀さんのかっこいい姿を見たい人は好きな番号（1から20までの）を言って下さい。抽選に当選されましたらきっとさらに銀さんに惚れるぜ

レイン

「何故、かっこよく？」

それでは』」

アルフ

「？はしているさ♪後、していなくてもいくらクロノをボコボコにするのはちょっと……」

銀八
「まぁ良い。んで？はとりあえず引くか？」

アルフ
「引く引く！」

アルフは興奮して、銀八がどこから出したのかと突っ込みたくなるほどに両手に持っている箱の中に手を入れる。
そしてそこからクジを引いて見てみると、その数字には『９』と書かれていた。

ちなみに、残りの１９枚の数字が描かれたクジを引いたのは以下の通りであった。

１：フェイト
２：ティアナ
３：神楽
４：なのは
５：シグナム
６：桂
７：スバル
８：はやて
１０：ウィンディ
１１：猿飛
１２：リィンフォース
１３：セイン
１４：月詠
１５：ディート
１６：エリオ
１７：エリザベス

１８：セッテ
１９：辰馬
２０：ヴァイス

そして今、『９』のクジを引いたアルフを含めて２０人。この中から４分の１の確立で５人が選ばれるのであった。

銀八
「と言う訳で『風花』さん、合流戦の方をよろしくお願いします。そんで次ィ、ペンネーム『サディスト』さん『質問　一はやてとヴィータ、ヅラ、エリザベスで『カツラップ』を歌いますか？

質問　二
アルフは銀さんが好きですが『銀時争奪戦』…勝つ自信ある？

質問　三
神威が出るなら阿伏兎も出る？

質問　四
黒神さんは武市をどう思う？』」

アルフ
「１のカツラップって何？」

『カツラップ』の存在を知らないアルフに銀八は『銀魂』の第１６巻を見せる。
そこに乗っている桂とエリザベスのやり取りを見て呆れる。

銀八
「となわけで、はやてはこのバカコンビと一緒にやると思います。んで2の方は……」

アルフ
「勝つ自信あるさ！」

胸を張って言い出すアルフ。

銀八
「まぁそんな感じだね。んで3はそりゃセットして出るだろ？出ないとおかしいし。四は鬼兵隊の中で存在が小さいから、今週のジャンプで高杉のコスプレをしたんだろ」

アルフ
「何それ！？本当に悪役！？」

銀八
「てな訳で『サディスト』さん、廊下に立っていなさい」

アルフ
「次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さんの質問だよ。『質問です。

一つ目
以前ザフィーラがドッグフードやシャンプーのこだわりについて質問を受けていましたが、アルフはドッグフードやシャンプーに関して何かこだわりはないのですか？

二つ目
定春にアルフやザフィーラのような人間態を持たせるとどんな姿に

なると思いますか？
『……ズバリ答えるね。１つ目は栄養たっぷりのドックフードに髪がさらさらとしやすいシャンプーかな？」

銀八
「んで２はこの様になるな」

銀八は懐から１枚の写真をだす。
その写真に映し出されているのは、定春の身包みを来た人間だった。

アルフ
「コレ、単なる身包みを来た人間じゃん！」

アルフは呆れてツッコム。

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

アルフ
「じゃあ次行くよ。ペンネーム『武士堂』さん『
質問です。
この作品に次郎長と平子は登場しますか？
丁度原作の方でかぶき町戦争編が終わったので、ぜひこの二人の登場を希望します！』」

銀八
「ズバリ答えます。今のところ出す予定はないですが、後半に出てくる可能性が高いです。と言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『ユーリ』さん『初めまして、ユーリと申します。

質問します。

1・黒神さんはテイルズシリーズのゲームを知ってますか？

2・総集編でスバルがノエルのコスプレをしてましたが、ティアナもコスプレしないのでしょうか？

』。ズバリ答えます。作者は『デスティニー』、『シンフォニア』、『リバース』、『アクア』なら知っています。2はそうですねぇ。彼女も銃使いですが、ノエルコスプレネタはスバルにやらしちゃったので……親友と言う共存としてツバキのコスプレをさせますかねぇ」

アルフ
「なるほど」

銀八
「と言う訳で、『ユーリ』さん、廊下に立っていなさい」

アルフ
「次行きます。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ
「ぐは！！」」

こなた
「あ・・・またウッソが倒れた・・・」

かがみ
「『G・Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の更新の遅さのことでしょ・・・黒神さん・・・ウッソ・エヴィンは大学編入で忙しくてＰＣによる小説作成が困難になっているから・・・長い目でみてあげてください・・

・」

こなた
「かがみ・・・すごい・・・」

かがみ
「質問にいくわよ.

?アルフって身長何センチなの?

?今回みんな小さくなってしまったけど,他にだれかなってしまうのかしら?・・・ま～一人だけ変わらなさそうな子もいるけど・・・」

こなた
「うるさいな～」

かがみ
「ふふ（笑）

?は『G.Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』のこと.特にフェイトさんについて聞かせてね」

こなた
「ちなみに愛紗に撃ったバスターは青龍偃月刀で切り裂きました」

かがみ
「うそ!!」』……えええーーーーーーー!?フェイトとなのはの

バスターを青龍刀で切り裂いたの！？」

銀時以外にこのような事が出来る愛紗に驚くアルフ。
気を取り直して質問の答えをする。

銀八
「かがみっちは大人だなぁ。んで質問の答えはと言うと……1は、探しても見つからなかったので、想像でお願いします」

アルフ
「ちなみに、身長は勝ったこと無いけど……大抵は１６８？かな？」

銀八
「なるほど。そんで2は、装置が破壊されたのでもう誰も変化しないと思います。3は、アルフどうぞ」

アルフ
「そうだねぇ。私から見れば、ウッソとシャクティは正しく主人公とヒロインらしいと思うよ。ウッソはガンダムを操って活躍しているし、しかもシャクティはヒロインらしい活躍をしている。こなたはとにかく原作とは違う程に腹黒いよ！かがみも大変だね。……それと、本当にあそこに行かなくて良かった。お妙怖い！」

アルフは、お妙の存在に恐怖を感じていた。
確かに自分と違って出番が女らしくないから、アルフにもとんでもない目に会わすかもしれない。

銀八
「まぁ、ウッソさんも色々あることだろ？と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、これからも無理しないで頑張ってください」

アルフ
「コレが最後の質問だね。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問アルフに質問。銀時と一緒にお風呂入って銀時の裸を見て興奮して襲ったことありますか？』……セクハラかぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！／／／」

アルフは顔を真っ赤にして勢いづけて質問を破りだす。
そしてそれを理解するように頷く銀八。

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、セクハラ系質問も控えめにお願いします。んで今回の質問は以上！どうでした、アルフ」

アルフ
「いろんな質問があった事を改めて思い知らされた」

銀八
「なるほどな。では次回のアシスタントは近藤勲を紹介します」

アルフ
「それでは！」

銀八・アルフ
「次回もお楽しみ～」

第六十九訓：大人が子供の姿になると、その子が凄く可愛く見える（後書き）

幼児化した銀時達に機動六課が大注目。

神楽の成長姿に見惚れるエリオ。

幼児化の桂に可愛がるはやてがお母さん役！？

猿飛

「次回、「母のいない子供は年上の女に親しくなると、その女性の事を母のように思ってしまう」テイクオフよ」

第七十訓：母のいない子供は年上の女に親しくなると、その女性の事を母のように慕う。

幼児化しても食事で賑やかになる。

キャロの怒りが最大限に発揮？

そして桂がはやてに松陽先生の事を話す。

神楽

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるヨ」

第七十訓：母のいない子供は年上の女に親しくなると、その女性の事を母のように思う

銀時達の異変の騒ぎが収まった所で、全員食事をしていた。
銀時の回りにはフェイト、なのは、スバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、猿飛の８人が顔を真っ赤にして銀時を見ていた。
銀時は気にしながらも食事を終えた後、チョコレートパフェを１口食べる。

「あ……いつもより美味(うめ)ェ♪」

何やらいつもの美味さが数倍感じた銀時は思わず喜びの表情をする。
銀時の喜びの表情に思わずニヤけるフェイト達。
特に猿飛は鼻血をたらしている。

「……て、何見てんだ？」

呆れて言い出す銀時。

「え……いや……／／／」
「なんか……銀時の幸せそうな顔を見ていたら……ついな／／／」

フェイトとシグナムは顔を真っ赤にしてその理由を言い出す。

「それに、それいつも銀時が食べているパフェだけど……何が違うんだい？」

アルフは不思議そうに質問する。

「いや、何かこの体だと甘い物が無性に欲しくなるのかわかんねぇんだ。ほら……一口入れるだけで……」

パク

銀時はそう言いながらチョコレートパフェを一口する。
そしてその美味さに思わず。

「（にゃはは）／／／」

凄く幸せそうな表情をする。
その光景にさらに幸せそうに笑う、フェイト、スバル、アルフ。
なのは、ティアナ、シグナム、リィンフォース、猿飛は思わず気絶しそうな幸福を感じた。

神楽は山盛りご飯をいつもどおりに食べているが、その量は半端じゃなくいつもの倍である。

「す・・・・・凄い量だな……神楽」

ヴィータは思わず青ざめて引き出す。
こんなに食べるとなれば、機動六課の食料は大丈夫なのか気になる。

「うーむ、何か成長したらまたご飯がたくさん食べたくなるヨ」

神楽はそう言い、もう２１杯目のおかわりをする。
おかずも焼き魚と肉じゃがなど、米に合うおかずばかりである。

「それに、ここも随分と慣れてきたことだし、そろそろみんなのあだ名を呼ぶことにするネ」
「あだ名？」
ユーノは興味ありそうに神楽に聞きだす。
「スバルはスッチー、ティアナはスッチーの愛称としてティア。エリオはエリィでキャロはジェイソ――」
「あぁ！？」
神楽の言う事に怒りを表すキャロ。
青ざめた神楽は慌てて言いなおす。
「……普通にキャロと呼ぶアル（恐）」
笑いながら青ざめて言い出す神楽と、ニコニコと笑うキャロ。
はっきり言って今のキャロはジェイソンより怖かった。
「キャロちゃん……最近怖すぎだよ……」
「あ……あははははははははは……近頃の娘さんはおっかなすぎじゃ」
シャマルと辰馬もコレは怖すぎであると考える。
「そんで、シグナムはシグー。ヴィータはツンデレでザフィーラはザフィ」
「誰がツンデレだァ！」
ヴォルケンリッターのあだ名も考えて言い出す神楽に、自分のあだ名に怒鳴ってツッコむツンデレ……じゃなかったヴィータ。

「そしてシャマルはマスオに決定ネ♪」
「ちょっと待って！シグナム、ヴィータちゃん、ザフィーラの3人は分かるけど、何か私だけ名前が共通しないあだ名なの！？」
納得いかないシャマルに、神楽はその理由を言い出す。
「イヤー我ながら考えた結果、マスオに決定したヨ。マスオその意味は……『まるで影が薄い女』、略して『マスオ』ね」
シャマルの存在を深く考えて、思いついたあだ名を言い出す神楽。
「ああー、なるほ……」
一瞬納得したが、すぐに怒り出す。
「それ喧嘩売っているのかァァァァァァァ！？（怒）」
理性を失って怒り任せに神楽を襲おうとするが、ヴィータとザフィーラに押さえつけられる。
「ちなみにユーノはマスメガネアル」
「マスメガネ！？……それって『まるで影が薄いメガネ男』の意味！？」
「そうネ」
自信満々に言い出す神楽に、ユーノは悲しむ。
「チャイナ……容赦ねぇ」

近藤は神楽のあだ名のセンスに青ざめる。

「か……神楽ちゃん……いくらなんでもそれはないんじゃ……」

ギンガは苦笑して注意するが、

「いやいや、あだ名って言うのは相手の存在を合わせて言うもんだヨ、ギンガ」

「……あのう……私に対するあだ名は？」

「ないヨ」

はっきりと神楽が言い出し、ギンガは凄いショックを受ける。

「あのう……それでお姉ちゃんは…」

リィンは姉であるリィンフォースのあだ名はなんなのかを興味を持つする。

「リィンフォースはそのままで良いネ」

期待はずれのように少しガックリするリィン。

「後、アルフはアルーで、なのはちゃん、フェイト、はやての3人は考え中ネ」

食事を勧めながらあだ名の話を終わらせる神楽。

「食うか喋るか、どっちかにせぬか」

呆れるように言い出す月詠。

そんな2人のやり取りにエリオはポーっと2人を見つめるのであった。

「どうしたネ？エリィ」

「え……いや……そのう……／／／」

神楽が声をかけてきたことに慌しく驚くエリオ。

そんなエリオに神楽はニヤニヤとする。

「はは～ん♪エリィも男の子ネ。成長した私の姿に見惚れているアルか？」

「（ギクリ！）……え、いや……それは…そのう／／／」

さらに顔を真っ赤に染めるエリオ。

エリオは神楽と月詠ばかりを見つめていたのであった。

スバルとティアナぐらいの歳に成長した神楽は女の子らしくなり、しかも胸も2人ほどじゃないが大きくなっている。

自分より年下っぽい年齢になっている月詠も、可愛らしい姿になっている。

「それとも、この卵焼きが目当てあるか？」

神楽がそう言いだし、卵焼きを橋で掴んでエリオに差し出す。

「エリィ、あ～んネ♪」

「えぇ！？あ…そのう…」

憧れる女にその様な事をされて驚き顔を真っ赤になるエリオ。

迷いながらも神楽の卵焼きにゆっくりと近づく。

「え・・・あ……あ〜……」

そのまま口を開いて卵焼きを食べようとすると、

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！

突如、エリオの左脇から大きな衝撃が襲いだし、エリオは吹き飛んで壁に大きく衝突する。

そして右半身が壁に埋まって気絶するのであった。

コレには銀時達は全員驚きだす。

一体何があったのかと疑う中……青ざめてゆっくりとキャロの方向を向く。

彼女の姿には、まるで正拳を放ったかのような構えをしている。

しかも彼女から異常なまでの殺気が放っており、その存在はメッチャ怖かった。

ギロリ！

キャロの鋭い眼線が、神楽を睨みつける。

「……神楽さん」
「は…はい！」
「あんまり甘えなくても……結構ですよ？」

鋭い眼線が神楽を睨みつける。
その圧倒的な威圧感はなのはをも凌駕するほどであった。
いや、それ所が夜兎、茶吉尼、辰羅に匹敵する闘志を秘めている。

「す……すいませんでしたぁ～～～～～～～～～！！」

即座に神楽は謝罪する
涙が大量にあふれ出るほどメッチャ怖かったらしい。

「ちょーっ何あの子！？メッチャ怖すぎるんだけどォォォォォォォォ！」
「（ガクガクガク）」

涙を流しながら近藤は叫びだし、ルーテシアとアギトにいたっては体を青ざめて震えている。
銀時達もキャロの圧倒的な嫉妬の大きさには青ざめている。
逆らえばただじゃすまないと。

「ふふふ……楽しくなるでありんす」

外道丸は凄く愉快そうに笑い出す。

＊

一方の桂、エリザベス、はやての3人はミッドチルダのとあるデパート。
そこには、桂とはやてが手をつなぎながら一緒に店中を歩いている。
その後ろにエリザベスがついて来ている。
ちなみに、はやての衣装は私服であり、いつもの機動六課の服ではなかった。
彼女は休日を貰い、桂と一緒に買い物をするのである。

「……あのう、八神殿……わざわざ手を繋がなくてもいいのでは？」

少し恥ずかしそうに言い出す桂。

「それはアカンよ、幼児となった桂さんを手放したら、迷子になるかも知れへんし」
「いや、それは流石に……」

今の姿では確かに鬼兵隊の連中に狙われたら返り討ちすることができない。
それに初めて行く場所に迷子になれば、帰りが遅くなるだけじゃすまない。
ここは、はやての言う通りについて行く方が言いと考える。

その後も、3人はデパートのレストランで食事をしたり屋上の町の眺めを見学したり必要な物を買い物するなど、なんやかんやで普通に楽しんでいた。

そして買い物を終えた後、とある公園で休憩をしていた。

「いやー、久し振りに大量の買い物をしたわ♪」
「いくらなんでも、コレは買いすぎじゃ？」

『そうですね』

満足そうに笑うはやてに、桂とエリザベスは山のようにある袋に呆れる。

「にしても、こうして買い物をするとなれば……日頃の機動六課の仕事も大変だと改めて分かる」

「そうなんやで。たまにはこうして息抜きしないと疲れてしょうがないんや」

ベンチにもたれ座ってはやては日ごとの仕事の疲れが癒された気分であった。

そんなはやてを見て、桂はある事を思う。

「……前から思っていたんだが、八神殿は母親の様な存在だ」

『たしかに』

桂とエリザベスは、はやての存在が母のように感じた。

「私が？」

意外な言葉にはやては豆鉄砲を喰らったような表情をする。

「以前、八神殿の家に世話になってた時からヴィータ殿達を実の娘のように世話をしていたことから、まるで母のような優しさを感じたようで……」

１０年前に最初に出会ったときに、はやてが本当の母のように感じた。

そして今も、はやてから母親としての優しさを感じ取るのであった。

まるで自分達を実の子のように。

「私、幼い頃に両親を亡くして……おとんの友人の庇護を受けながら1人で生活していたんや。だからヴィータ達に会う前はいつも孤独で……寂しくて……」

少しずつ悲しそうな表情をするはやて。
それでヴォルケンリッターの事を家族のように親しくしているのであった。
そんなはやてを見て、桂はこう思った。
もし、自分も母親がいたら……今のようにいるんじゃないかと考える。

「……八神殿も、俺と一緒か」
「え？」

桂は、家族がいないはやてが自分と一緒であったと確信する。
そして、攘夷戦争の事と松陽の事を話すことを決めた。

「俺も物心ついたときには家族を亡くし、どうすれば良いのか分からない中で、恩師に出会った」
「恩師？」

桂にその様な人物がいた事に驚くはやて。
エリザベスは、桂は以前に自分に話してくれた事をはやてに言う事に意外そうに驚く。
それは信頼した相手にしか言わない事であった。

「その名は吉田松陽（よしだしょうよう）。俺と銀時、そして高杉に武士としての生きる道を教えてくれたかけがえのない人物」

「桂さんと銀ちゃんの……それに高杉ってあの『鬼兵隊』の？」

桂に銀時、そして今ミッドチルダで数多くの事件を起こしている武装集団『鬼兵隊』のリーダーである高杉までかかわっている事に驚くはやて。

「俺達にとっては父親的な存在な人だった……。仲間も、生き甲斐も、あの人が全て導いてくれた……だが……松陽先生は……」

幕府の手によって死にいたり、自分達が攘夷戦争に参加したきっかけを作った。

そのせいで、仲間も多く死に、そして高杉も黒い獣となり……

天人に侵食され、腐りきった世界に失望した高杉は、世界を破壊しようと武装集団を作り、宇宙海賊『春雨』やその裏切り集団とも手を組んだ。

「高杉は俺達からあの人を奪ったこの世界の全てを憎んでいる。この世界（ミッドチルダ）に来たのも、より強力な兵器と武装集団を作り出すのが奴の狙い。全ては世界の破壊のために」

「そんな……」

とても信じられない出来事だとはやては思う。

しかし自分も誰かに大切なものを奪われたら憎むかもしれない。

「俺も高杉同様、あの世界を更地に変えようと何度も思った。だが……俺にはもう俺達の世界は壊せん。壊すには……ここには大事なものが出来すぎた」

エリザベスとはやてを始め、自分自身にも仲間が出来た。

そして指名手配犯にされながらも大切な物を守るために剣を振るっている。
世界の全てを敵に回られようと、国を護る事が桂の武士道としての道。

そんな桂に、はやては優しく包み込むかのように抱きつく。
これには桂とエリザベスも驚いた。

「辛い思いをしたんだね……桂さんも……」

悲しげな表情で桂を見つめる。
自分の知らない所で桂達がどれだけ悲しい思いと辛い思いをして来たのかいやと言うほどわかってくる。

「桂さんの世界の人達がどう思っていようと、私だけは知っている。誰よりも優しくて、そして武士としての誇り高い魂をもっている事を」

最初に出会った時や１０年ぶりの再会を果たしてから、はやてはずっと桂の事を見ていた。
そう、あの日から……

＊

それは、１０年前の海鳴町で『闇の書・ゾーマ事件』が起こり、銀時達がフェイト達の世界に飛ばされた日であった。

銀時達がヴォルケンリッターと激突すると同時、家で１人はやては

部屋で本を読んでいた。
その本は料理のレシピであり、シグナム達の為に新たな料理を覚えようとしているのであった。

「皆の為に、美味しい料理を覚えておかなきゃな」

ニコリと笑ってはやてはそう言うと、

キィィィ

はやては安心してホッとする。

「……そうか……俺は銀時達と一緒に転送装置に入り、そこで……」

さっきまでの状況を思い出す男。

「あのう……大丈夫ですか？」

「む……そなたは一体？」

桂は不思議がるかのようにはやてに名を尋ねる。

「あ……私は八神はやてって言います。この家の子や」

「俺は桂小太郎……好物はそばだ」

そんな桂の挨拶にはやては唖然とする。

「あのう……なんで好物も紹介したんや？」

「まぁアレだ。なんとなく」

なんとなく言い出す桂にはやては何故か知らないが笑い出す。

「ぷ……あはははははははははははははは！」

自然的に笑い出す自分自身が何故か分からないけど、一緒にいると不思議に面白い気分になる。

そして隣にいるエリザベスも眼を覚まして起き上がる。

「おお、エリザベス。無事であったか。」

『はい、なんとか』

エリザベスは、そう書かれたプラカードを出す。

『そちらの少女は？』

エリザベスははやてに気づくと……

「あ……初めまして、八神はやてと言います」

『こんにちは、エリザベスです』

お互いに丁寧に挨拶する。

そしてコレが、『狂乱の貴公子』ごと桂小太郎&そのペットであるエリザベスと、八神はやての運命的な出会いであった。

＊

「桂さんには色々と助けられたから……今度は私が桂さんの力になるな。だから、遠慮せずに私達を頼っても良(ええ)んやで」

今まで助けられた恩を、今度は自分の手で返したいと考えるはやて。

そんなはやての気持ちに、桂は少し笑って嬉しく感じた。

「……感謝する、八神殿」

心より感謝する桂。

そんな2人のやり取りに、微笑んで見守るエリザベス。

そして桂とはやての関係の距離が縮んだのが確信できる。

それから二日後、銀時達の元は戻りだした。
銀時、桂、エリザベス、月詠の４人はホッと安心するが、神楽は少し残念そうに感じていた。
そして今回の件が桂が原因であった事から、銀時、神楽、月詠の３人は桂とエリザベスにきついお仕置きをしたのは言うまでもなかった。

「ヅラァァァァァ！てめェはいっつもややこしい事をしてくれやがってぇ！（怒）」
「今回はその分のお仕置きアル！反省するとヨロシ！（怒）」
「無数の薔薇の棘に刺されろォ！（怒）」

などと、３人の暴行を受けまくり、

「あぁぁぁ

近藤
「おお、久し振りだな。今回はこの近藤勲がアシスタントをしよう！」

銀八
「へーい、んじゃ質問行くぞ。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「子銀時と子桂モテモテだねぇ」

ルルーシュ「確かに。質問なんだがゴリラはユーノの事をどう思ってる。こっちでスバルとティアナはデバイス職人なんだが二人がデバイスを造るとしたらどんなデバイスを造る？」

神威　銀時「それとフェイトさん、こっちの感想でセイバーがエクスカリバーを放ちましたので逃げてぇ！」』

近藤
「何でゴリラ言うの！？……まぁなんと言うか……愛の情熱が足らないなぁ。万事屋に高町殿を取られて悔やんで嫉妬するのは分かるが、どうしてアタックしないのか不思議だなぁ？」

銀八
「やはりそうか。……そんでもう1つのほうは、スバルの場合は刀に関するデバイスでティアナは銃に関するデバイスでしょう。と言う訳で
『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『サラマンド』さん『こんにちは！

今回、いえ毎回シリアスな場面以外笑わせてもらってます。

幼児化、神楽成長で次回どうなるか楽しみです。

ラーナ「初めまして、今は頭に輪っかを付けたラーナ・シールズです。ニールは最後の戦いに向けてかなり頑張っているから私から質問するね。

1．近藤さんに質問です。よくゴリラと言われてますが、自分で納得しているのですか？

2．エリオに質問です。私の小説ではエリオがアリオスガンダムになるのですが、もしそっちでもなれたらまず何をしますか？

3．なのはに質問です。ニールと模擬戦をやったら勝てますか？

近藤さん、サラマンドが失礼な質問をして本当にごめんなさい…。

因みに、私は銀魂キャラの中で銀さんや沖田さんとシリアスな時の近藤さんがいいかな。でも勘違いしないでね、私が好きなのは飽くまでニールだから…。」

お互い頑張りましょう！』」

近藤

「何かツンデレ的な褒め方で嬉しい！では早速質問だ！1は……納得できるかぁ！」

銀八
「即答だなオイ。んで、エリオぉ。どうなんだぁー」

エリオ
「……ガンダムの操縦してみたいかなぁ」

エリオはあんな巨大な機動兵器を動かせるのをワクワクとしている。

銀八
「3つは……おっかない質問するなぁおい！あの女の場合は……『にゃははははは！全力全開に頭冷やしてやるなの～』と言うだろうが！……てな訳で『サラマンド』さん、久し振りの質問有難うございました」

近藤
「次を行こうペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん！おお、お妙さんと新八君がお世話になっている方か！何々？『こなた
「ところで，九兵衛さん、ヴィータちゃん、キャロちゃんが胸のことで怒ってたけど，大丈夫だよ♪需要はあるからさ」

かがみ
「まえにも言ってたわね」

こなた
「そだよ～『貧乳はステータスだ～！！希少価値だ～！！』なんだよ」

かがみ

「ちなみに質問の？はこのことに関して貧乳として取り上げられてしまった九兵衛さん、ヴィータちゃん、キャロちゃん答えてあげてください．本人お願いね」

ウッソ
「？は近藤さんが本気で戦ったシーン見たことないんですが，近藤さんは桂さん並みに強いのですか？」

こなた
「？は『Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』について，お妙さんに関すること以外でよろ～」

かがみ
「あんた・・・存外鬼畜だわね・・・」『……て何これ！？『貧乳はステータス』て、はっきり言って巨乳に対する嫉妬丸出しじゃないか！」

銀八
「そう言う奴なんだよ、こなたは。んで1は貧乳トリオ、お願いします」

銀八がそう言うと、九兵衛、ヴィータ、キャロの3人は立ち上がる。

九兵衛・ヴィータ・キャロ
「こなた様ぁ～～～～～～～～～～～！有難うございますぅぅぅぅぅぅぅ！（涙）」

凄く嬉しそうに泣き出す3人。

近藤
「ねぇ……これ何か見ているとやばくねぇ？」

銀八
「気にするな。んで2は、ヅラの強さは銀さんに匹敵すると言う疑いがあるため、少なくとも純粋な剣の腕ではヅラの方が上です」

近藤
「何ィ！？そうと聞けば帰ったら剣の鍛錬しなければ！そして？はお妙さんに関する事以外だな……ウッソ殿とシャクティ殿は正に主人公とヒロインの存在と言っても良い。特にウッソ殿はあんな巨大な機械兵器（からくり）を使いこなす上に戦いなれした勇敢さは感服した！こなた殿とかがみ殿のコンビも捨てがたい！見ていると何か笑えるから、小説を面白くする為今後も活躍して貰いたい！後、新八君は散々低い評価をされまくりだったが、俺は知っているぞ！義兄（あに）として義弟（おとうと）の良さは、第7話での侍らしい言葉に染み付いている！まだ未熟かもしれんが、それでも心は立派な武士だ！さすがお妙さんの弟だ！作者も新八君の良い所をもっとちゃんと見たほうが言いと思う！」

銀八
「新八を褒めている言葉を聞くとオゾゲが出んのは気のせいかぁ？……まぁ言い。『ウッソ・エヴィン』さん、これからも質問お願いします」

近藤
「では次行こう！ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問！『質問します
ロリコンの新八が成長したなのはを見たらどうなりますか？
後、何時新八が出ますか？早く新八の断末魔の悲鳴が

聞きたいです』……てなんで新八君イジメの感想!?」

青ざめてあり得ないとばかり驚く近藤。

銀八
「さぁ、小さな地味な男であり、メガネをかけていないから存在自体気づきにくいと思います。と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、お楽しみは後半にやりますので安心してください」
新八の断末魔の悲鳴

近藤
「何かお楽しみと書いて変な事言っていなかったァァァァ!?」

どうしてこんなにも新八の評価が小さいのか理解できない近藤は叫びまくる。

近藤
「とりあえず……次を行くか。ペンネーム『クアンタ』さんからだ。『質問です。
今のところ山崎とディエチの仲を邪魔しようとする人はいるんですか。』……おお!それなら俺が答えよう!ずばり、２人の恋路の邪魔をする者は今のところはいない!」

銀八
（だけど、マヨラーとドＳなら邪魔するかもしれねぇな……）

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、２人の仲をこれからも見守ってください。んで次ィ、ペンネーム『サディスト』さん『劇場場版では

主にモザイクでしか活躍できなかったゴリラに質問。
ミッドチルダで何回くらい人間って認識された？

質問　二
山崎とディエチで合体技とか使う？（パン系の）

質問　三
リリカルキャラのギャグ属性を教えて下さい。
誰が『ボケ』で誰が『ツッコミ』か。
そんで誰が「ボケ・ツッコミ」をこなす『オールマイティー』か。』
」

近藤
「一は何ィ！？俺イジメェ！？ちゃんと人間として認識されているから！」

銀八
（あ、何かゴリラ扱いされて良そう）

銀八
「二はおそらく使えると思います。三は中々興味深い質問だと思います。『ボケ』だったらスバルで『ツッコミ』はティアナ。んで『オールマイティ』はなんとなくシグナムだと思います」

近藤
「え！？シグナム殿が？『ツッコミ』系かと思うがなぜ？」

銀八
「アレだろ、ヅラと同じくクールボケって言うのがありそうだし。
と言う訳で『サディスト』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペ

ンネーム『ヤマトノオロチ』さん『質問１　黒神さんは「スクールデイズ」を知っているいるでしょうか？キャロに質問です。最近の嫉妬深さに目があまります。キャロは月詠と神楽を殺してまでエリオを手にいれようと思っていますか。

質問２　機動６課のみなさんに質問です。バイオハザードに出てくるボスクリ―チャのなかで手強い思うのをこの中から三体選んでください。後理由もお願いします。

バイオハザード０
女王ヒル
バイオハザード１
タイラント
バイオハザード２
G
バイオハザード３
ネメシス
バイオハザード４
エルヒガンテ
サドラ―
デルラゴ
バイオハザード５
ウロボロス　アヘリ　ムコノア―ヴィング
ウェスカ―

質問３　スバル、ティアナ、エリオ、キャロに質問です。もし銀さんの世界に行けたら何処に行きますか？この中から選んで

吉原　仙望境　ターミナル　新撰組屯所　屁怒絽様の家　たまさんの体の中　スナックお都勢　結野家と尻野家の屋敷　妙のキャパクラ『」」

近藤
「1は怖すぎるんだけどォォォォォォォォォォ！？てか何『スクールデイズ』て！作者のキャロの扱いもそうだけど、何でこんなに怖い質問すんのォォォォォォォォ！？」

銀八
「同感！」

青ざめて涙を流す近藤に、汗を流して強く発言する銀八。

銀八
「そして2は、機動六課の全員が話し合って、この3体を選びましたぁ！」

G

ネイシス

ウェスカー

銀八
「原因は『G』と『ネイシス』は怖すぎで、『ウェスカー』は人として捨てた強さであると言うからです。後、3は4人に聞かせてもらいます」

すると、　スバル、ティアナ、エリオ、キャロは立ち上がって行きたい場所を言い出す。

スバル・ティアナ
「銀さんが最も近い居場所であると言う事でスナックお都勢！」

エリオ
「タマクエストが面白そうだからたまさんって人の中で！」

キャロ
「わ……私もエリオ君と一緒でたまさんの中で……」

銀八
「以上！てな訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
ゴリラ・ゴリラ・ゴリラ（近藤）に質問です。
ミッドチルダで何回動物園に移送されましたか？

質問2
黒神さんに質問です。総集編で黒神さんのステータスで機動六課達と一人づつ戦ったら勝てますか？スバルはアイドル編終了後の強さで全員リミッター解除状態です。ちなみになのはは、白い悪魔王状態で必殺技は『デスペレード・デモンブレイカー』が撃てる状態です。
キャロは、チェーンソーを持っていてジェイソンの仮面を被っている状態で暗黒竜『ディスバール』を召喚された状態です。』」

近藤

「1つ目の質問何ぃ!?そんなのされた事ないんだけどォォォォォォ!」

近藤は青ざめて涙眼で言い出す。

銀八
「そんで2つ目は……いや無理だろ?そんなもんどう勝てって言うの?と言う訳で無理です。てな訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい」

近藤
「次ぃ!ペンネーム『月光閃火』さんからの質問!『どぅぶはー!?月光閃火です。(吐血)

輝刃「…おいおい、大丈夫か?輝刃だ。」

うん…ちょっと鼻血の血を飲みすぎちゃって、溜まってたのを吐いちゃったみたい。

輝刃「…あまり無理はするなよ。とりあえず、今回も質問だ。」

じゃあ、まずは自分からだね。

1.近藤さんに質問ってかアドバイスです。近藤さん、そろそろストーカー癖を止めた方がいいと思いますよ?それさえ無ければ、近藤さん結構男前なんですから。

輝刃「…確かに、彼の場合はあの男前の顔がストーカー癖やらなんやらで台無しだからな。次は俺だ。」

2．銀時の事を好いている女性陣にアドバイスだ。いい加減黒化するのは止めておいた方がいい。このままだと、さすがの銀時も…愛想を尽かすぞ？

アハハ…結構鋭い所をいくね～。最後は自分です。

3．黒神さんに質問です。総悟のお姉さんであるミツバさんは出てきたりしますか？また出るとして、銀さん側と敵側のどっちに出てきますか？

輝刃「…確かに、そこの所は気にはなっていた。」『……ておい！だからストーカーじゃないって！強いて言うならハンターです！愛の！」

銀八
「ハンター。そのハンターを引退すれば男前になると言っているから引退しろよ。……んで2はそれができれば黒化は収まらないぜ。そんで3は、作者から聞けば、今のところミツバが出てくることはないでしょう。と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい」

近藤
「次ぃ、ペンネーム『アクセル』さんの質問！『質問1
嫉妬で変わり果てたジェイソンキャロの強さは六課の中ではどれくらいなんでしょうか？
あの体格でチェーンソーを振り回せるという時点でトラウマ物ですが…。
質問2

ゴリラはルーテシアやアギト、ナンバーズとどんな生活をしてるんでしょうか？
あんな女所帯でモザイクなんぞ出してたらトーレやチンクなどに半殺しにされてもおかしくないと思うのですが…。』……て1の質問またぁ！？」

銀八
「そうだなぁ……強さって言うより怖さならおそらく管理局の魔王としてのなのは級でトップだろ？」

近藤
「何それ！？凄く怖いんだけど！？2は……そうだなぁ……ナンバーズの模擬戦に付き合ったり、鬼兵隊の動きに警戒している。そして山崎とディエチ殿の仲を見守っているぞ！」

銀八
「お前はお父さんか！？と言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい」

近藤
「では次を行こう！ペンネーム『風花』さん『今日は。風花です
今回は質問というより抽選結果の発表です
交流戦を観戦することができる人はこの人達です

1　なのはちゃん
4　フェイトちゃん
5　シグナム
9　アルフ

17　エリザベス

になりました
これは私の好きなキャラで決めたわけではなく何も知らない同級生に番号を言って貰った結果です
外れた方、怨んで砲撃を放たないでください
ちなみにはやてちゃんは司会として来て下さいね
最後にゴリ…近藤に質問です
ルーテシアが変わったのは絶対にあなたが原因だよね？
だってゲームの中とはいえ裸になったり……
と、言うわけでゴリラになってくれませんか？

それでは

レイン
「…ゴリラ…作者が失礼したな」最初のは後回しにして……もう1つは、なるかァァァァァ！（怒）』

野獣の如くに怒鳴りながら叫ぶ近藤。

銀八
「では後回しされたほうを言います。選ばれた5人は喜ぶでしょう。選ばれたなかった者の悔しさはこっちで抑えますのでご安心を。と言う訳で『風花』さん、合流戦を楽しみに待っています」

近藤
「最後はこの人！ペンネーム『銀八先生ファイト』さん！『初めての感想を上げるんですが、メッチャ楽しいですねこの作品。
黒神さん、これからも頑張って！！

質問です。
1：なのはに振られたユーノですが、これからどうなっていきますか？（堕ちますか？新しい春見つけますか？）
2：この作品の元になっている、赤夜叉さんの小説のラストではフェイトが妻、アルフはペットとして家族になっていましたよね？
そこで思ったのですが、この作品の設定を使わせてもらうと、銀さんが誰とくっ付いても、
ティアナ＝妹、
リィンフォース＝デバイス
として無条件に家族になれるのでは？
（まぁ、ある意味勝ち組確定な訳ですが他の銀さんｌｏｖｅｒｓには内緒に願います。）』」

銀八
「ズバリ答えます。1は予想で見ると堕ちますね。2は慣れるかもしれません。と言う訳で『銀八先生ファイト』さん、有難うございます。以上、今回の質問コーナ終了。どうだったゴリラ」

近藤
「だからゴリラ言うな！後、どうしてゴリラ呼ばわりされるのか全く納得いかないんだけど！？」

銀八
「思った通りの感想だな。……では次回はヴァイスをアシスタントさせてもらうか」

近藤
「それでは！」

銀八・近藤
「次回もお楽しみ！」

第七十訓：母のいない子供は年上の女に親しくなると、その女性の事を母のように慕う

銀時、新技開発中！？

シグナムが銀時にお願い？

まさかの展開もあり！

『烈火編』開幕！

エリザベス

『次回、「強力な威力ほど危険すぎる」テイクオフ』

第七十一訓：強力な威力ほど危険すぎる（前書き）

銀時、新技完成！？

シグナムに剣の鍛錬を申し込まれる。

悩むシグナム。

源外

「『リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ」

第七十一訓：強力な威力ほど危険すぎる

スカリエッティのアジト　訓練場

そこに銀時、源外、スカリエッティの3人が何かを相談するかのように話し合っていた。
原因は銀時にあった。

「切り札系の新技じゃと？」

源外が意外そうに驚いた。

「まぁな。何かこう……せっかく魔導士になったんだからさぁ……1つや2つぐらい大きな砲撃系魔法を持ったって良いんじゃねぇかなぁっと」
「まぁ……確かにそれは賛成だ。いざと言う時は役に立つかもしれない魔法を1つや2つあっても良いんではないか？」

銀時の意見にスカリエッティは賛成する。

「まぁ、とりあえずその新技って言うもんを見せてもらうぞ。やってみろ、銀の字」

源外はそう言って、スカリエッティと共にこの場を去る。
そして目の前に突如、巨大なガジェットが1台現れる。
銀時は懐から『ブレイシルバー』を取り出して、右手に身につける。

「んじゃ、行くとすっか……。第６６６拘束機関解放、次元干虚数法陣展開……」

右手につけてある手袋を自分の右眼の前に上げると、手袋の真ん中についている機械仕掛けの装置が起動して赤く光りだし、そこから銀色の魔力が大量にあふれ出て，銀時の体を包むかのようにその魔力は銀時の体に魔力を染み込ませる。
右眼は真紅に輝きだし、左眼は翡翠色に輝くと言うオッドアイと化す。

「『銀の魔導書（ブレイシルバー）』……機動……っ！」

そして銀色の魔力は消えて、そこから『●ＬＡＺＢＬＵＥ』の『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』の様な衣装であるバリアジャケットを着た銀時の姿が現れた。
右手に持っている『●ＬＥＡＣＨ』に出てくる『天●斬月』の様な長刀。
腰にはその刀の鞘と●グナの使用する大剣を背負っている。

「んじゃ……試してみっか……『ブレイシルバー』カートリッジロード」
≪Ｒｏｇｅｒ≫

ガシャン×１０

両手で銀色の刀を構え、刀からカートリッジロードを１０発ロードすると、彼を中心に激しい暴風が吹き荒れる。
解き放たれた風は、さながら銀色に輝く暴風の如くであった。
風が収まると、手に持っていた刀が刀身が白銀の光に輝きだす。
白銀に輝く刀は、まさに聖剣とも言える程に相応しく、人の手では生み出せない神々しさが感じられる。

「ほぉー、なんとも美しい輝きじゃ」
「うむ……おそらくアレは『ブレイシルバー』の魔力を最大限に込められている」

源外とスカリエッティは思わずその輝きに見惚れる。
鉄子の打った刀と自分達のデバイス技術が合成された『ブレイシルバー』の美しさがさらに増していたからであった。
銀時も見惚れていた。
この目で見た自分のデバイスは、自分が想像したのよりはるかに美しい美しい物だった。
その美しさは、一瞬、今の状況を忘れさせる程だった。

「極光（きょっくこう）……」

魔力が溜まり、銀時は刀を高く振り上げる。

「銀星翔（ぎんせいしょう）！」

ありったけの力を込めた叫びをしながら、刀を振り下ろした。
極大な白銀の閃光が放たれ、真っ直ぐ巨大なガジェットに向かっていく。
ガジェットも『ＡＭＦ』と言う攻撃魔法を掻き消すシールドを展開した。
巨大なだけあって、下手をすればＳランクの魔法をも打ち消そうな程である。
しかし、銀時の『極光銀星翔（きょっくこうぎんせいしょう）』はそれを上回るどころが、銀時の予想をはるかに上回るほどの威力を持っていた。
何故なら極大な白銀の閃光は、『ＡＭＦ』ごとガジェットを跡形もなく飲み込み、それ所が訓練場の約半分を破壊してしまう。
白銀の閃光は空まで昇るかのように届き、雲をも切り裂いた。

その威力は間違いなくスバルの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』となのはの『スターライト・ブレイカー』を合体させた時よりもはるかに上回る威力である。
いや……それ所がＳＳＳランクの超大型魔法の倍以上はある為、下手すればロストロギア級に入る。

そして綺麗さっぱりと、空まで見える極大な穴が開いた訓練場が約４割破壊された事で、銀時は唖然とする。

「……え……ええェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！？」

銀時は思わず叫びだす。
試しに放った魔法の威力が半端じゃないほどに高かったからである。

「……銀時……いくらなんでもそこまでする必要があるかね？」
「つうかやりすぎじゃろ？」

スカリエッティと源外はそこまでするかと呆れるが、正直言って銀時の新技には驚きを隠せなかった。
魔法と言うより、あれは完全なるロストロギア級の兵器とも言える代物であった。
その証拠に、ここの訓練所はＳＳ＋ランク級の魔法ですら耐え切れるほど頑丈に突くたれているのに関わらず、約半分も破壊されてしまった。
一方の銀時にいたっては混乱中であった。

「おおおおおお……俺ァ知らねェぞ！こここここここ……こんなおっかねぇ威力があるなんざわかんなかったんだぜぇ……だだだ、第一まさかこんなにも魔力が……」

「銀の字……わかった。お前さんも知らずにやったことぐらいは……」

混乱する銀時を落ち着かせるように言い出す源外。
しかし銀時は勿論、2人もこれはいくらなんでも危険すぎるため、限られた時にのみ使用する事を決意する。
銀時は解除して、バリアジャケットの衣装から元の白い着物の衣装に戻って、『ブレイシルバー』を懐に入れる。
そんな中で、近藤、山崎、ルーテシア、アギト、鉄子、ナンバーズがこの場に駆け付ける。

「どうした！一体何があったのですか！？」
「あらまぁ～！訓練所がとんでもない事に……」

一体何があったと聞き出すドゥーエに訓練場が破壊された事に驚くクアットロ。

「うわ！何ですかこれ！？」

あり得ないばかりに驚く山崎。
ナンバーズの訓練で良く使われる訓練でも耐えられる強度の訓練所がここまで破壊された事に、驚きを隠せなかったのである。

「一体何があったんだ？」

ノーヴェはこの状況をどういう訳かを聞く。
スカリエッティと源外は近藤達に原因は『大量の巨大ガジェットの暴走による大爆発』と言う嘘の原因を言い出す。
それには近藤達も納得する。
しかし、破壊された後がまるで爆発によるものよりも、何やら巨大

な砲撃魔法によるものに近いと何人かは疑うが、それには銀時はビクっとする。
全ては銀時が魔導士に目覚めた事をまだ知らせないためである。

ちなみに、何で銀さんは自分が魔導士に目覚めた事をまだ知られたくないのかと言うと、原因はそのバリアジャケットが『●ＬＡＺＢＬＵＥ』の『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』のコスプレに近いからである。
いい歳こいてコスプレな姿を見られたらオタクと思われるため、まだ知られたくなかったのである。

＊

銀時はどうして良いのか迷いながら機動六課に帰ろうとする。
自分が魔導士に目覚めた事を、いつ誰に話そうかを考えている。
今のところ自分が魔導士に目覚めたのを知っているのは、スバル、ティアナ、源外、スカリエッティ、鉄子の５人ぐらいである。
ここは早めに言ったほうが良いのではと考えるが、やはり凄く恥ずかしいから黙っておきたい。
しかも今日初めて使用した新魔法『極光銀星翔（きょくこうぎんせいしょう）』は、今銀時が使用する魔法の中でも最大級は誇り、切り札に相応しいが、それ以前に余りの威力に危険度が高すぎる為、無闇に使用できない。
一体どうすれば良いのかと考える中、シグナムがこっちにやって来る。

「銀時……ちょうど良かった」
「んん？……どうしたァ、シグナム」

何やら様があるようで銀時を探していた様子。
そしてシグナムは銀時にお願いをする。

「これから山篭りして剣の稽古に向かうんだが、もし良ければ付き合ってくれないか？」
「ヤダコワイ、シニタクナイ」
「何故片言？」

あっさり断る事よりも片言で喋る銀時にツッコむシグナム。

「こっちも疲れてダリぃんだよ。マジ勘弁してくれよぉ……」
「報酬、いちごオレ２０個」
「ＯＫ」

と、いちごオレであっさりと釣られてしまった。

ミッドチルダのとある山

山の森の中で銀時とシグナムが木刀の打ち合いをしていた。
剣の鍛錬自身はそんなに珍しい事じゃないが、シグナムにしては珍しいと銀時は考える。
普通は、『レヴァンティン』で剣の鍛錬をするのが普通なのに、今回は何故か銀時と同じように木刀を使用する。
シグナムの剣撃を受け流しながら、銀時は質問する。

「お前ぇ……確かいつもだったら『レヴァンティン』を使って訓練をしているんじゃなかったっけ？」

その質問を聞くと、シグナムが剣戟を止める。

「……ここ最近『レヴァンティン』に頼りすぎている気がして……それでもっと『レヴァンティン』の力を最大限に出し切れるようにと……」

意外な悩みに唖然とする銀時。

バトルマニアとして名が高いシグナムに悩みが出来るなど滅多に無いと思っていた。

しかしその悩みが何故か理解する銀時。

そしてシグナムが構えを取り、銀時も居合の構えをする。

目にも止まらない速さでシグナムが飛び込み、そのまま木刀を振るう。

その太刀筋を銀時は片手持ちの木刀で止める。

「ハァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」

掛け声をかけてシグナムはひたすら剣撃を繰り返す。

通常の剣士の剣よりは速いが、それでも銀時に全て受け止められる。

必死に剣を振るうシグナムに対し、銀時は無言でその剣を受け流している。

シグナムは自分の剣が全て防がれていると分かり、バックして構えを取る。

銀時は構えをといて、シグナムがどうして木刀で鍛錬をするのかを言い出す。

「……アーサァとの戦いで、己自身の力不足を感じてんだろ？」

「！？」

図星を突かれたかのように驚くシグナム。
それは『カリバン事件』に関わる重要人物で機動四課を経った1人で壊滅した魔剣士。
そして何より驚いたのがスバルのかつての親友であった事である。
アーサァの強さは完全にゾーマを上回っており、おそらく剣だけでも勝てる相手でもない。
しかも使用デバイスが七星神刀（しちせいしんとう）の1つである『ペンドラゴブレイド』。
剣・魔力・デバイスも何もかもシグナムを上回っていた。
しかもこっちは5人がかりで魔力リミッターを解除したのに全く歯が立たない。
それどころが、『プロジェクトＤＮＡ』と言う銀時のＤＮＡを注入し、銀時のまがい物の強さに全く歯が立たなかった事を知った時には、己の力不足に思い知らされた。

それ以来、シグナムはひたすら『レヴァンティン』の力を最大限に引き出すのと、以前より使いこなす為に剣の鍛錬をしている。
以前のように何も出来ない無力な結果にならないために。

「まぁ、気持ち的にはわかんない訳でもねぇが……今のままでも十分強いって。騎士の名は安くないんだろ？」
「……それでも、今のままじゃダメなんだ……これから先、ゾーマを上回る敵も出てこないとは言い切れない。だから……騎士の誇りと仲間のためにも、もっと強くなりたい」

生まれて初めて、強さを求めるシグナム。
だが以前のティアナみたいにただ単に己個人のためじゃなく、強大な敵から大切な仲間を護る為に強くなりたいと願っている。
強さだけを求めているのではないかと銀時は一瞬思ったが、そうで

もなかったと確信して安心する。
それと同時に、シグナムの意見もありだと考える。
確かにゾーマ以上の敵、もしくは夜王級となれば、流石の自分もリィンフォースのユニゾンまたは『ブレイシルバー』の使用もやむをえない。

「……とりあえず、もう2時間もたったしよぉ……そろそろ休憩しようぜ」

銀時がそう言うとシグナムも賛成する。

「そうだな。あの先に露天風呂がある。そこで体を癒すとしよう」
「そうかい……んじゃ俺先に入るわ」

シグナムの指差した方向に銀時は向かう。

＊

「はぁ～、メッチャ疲れが取れるわぁ」

極楽そうに風呂に入る銀時。
天然風呂など入った事がない為、その極楽感は普段の3倍は感じている。

「この山奥に天然風呂があったなんてなぁ……」

だとすればちょっとしたラッキーであると考える。
眼を瞑って風呂の湯加減を楽しんでいる中、

「まさかここに温泉があった事は思いもよらなかっただろ？」
「ああ……天然風呂って言うのは思わぬ場所に見つかるもんだぁ…
…て、なんでシグナムの声が聞こえ……」

たのかと銀時は唖然として眼を開けると、目の前には風呂に入って
突っ立っていおり、髪を下ろしたシグナムがいた。
どうしてシグナムがここにいるのかというよりも、銀時の眼には…
…美しい肌が全体に見えているっといより完全に素っ裸状態のシグ
ナムが写っていた。
思わない展開に銀時は……

「だぶぁあああああああああああああ！／／／」

ザヴァァァ

「い……いや……この山は以外にも野生動物がいるから……2人で入ったほうが良いと思って……それに、チャンスがあれば思いっきり行動すべしと主から言われて……／／／」

あんの腹黒女ぁ～～～～～～～！

最近ヅラに似てきたと思えばこんな状況をも作りやがってェェェェェ！

はやての腹黒さに怒り出す銀時。

今度文句を言おうとするが、それ以前に自分は思わぬ光景を見てしまったことに強く動揺してドキドキと心臓を動かす。

（てか、それよりも……はっきりと見ちまったんですけどォォォォォォォォォォ！？生の女の裸をもろに見ちまったんですけどォォォォォ！大きな生乳が完全に眼に焼き付いちまったじゃねぇかァァァァォォォォォォォォォォォ！！）

アルフとなのはの時は、彼女たちはタオルを巻いていたが、ここは山の為、タオルは存在しない。

その為、隠す物は全然ない。

ドキドキと落ち着けない中、銀時にゆっくりと近づくシグナムは銀時の肩に乗せるように顔をくっ付ける。

「ひぃ……ひぃぐぬぁむ！？／／／」

「しばらく……このままで居させてくれないか？／／／」

メッチャ動揺する銀時に甘い雰囲気を表すシグナム。

積極的な女は苦手な銀時だが、何故か断れない。

その後も2人っきりで露天風呂に入っていたが、銀時とシグナムは何も喋らずに心をドキドキし合う。

体を癒される事や極楽の気分になる以前に、動揺を隠せない気持ち

が2人を強くさせるのであった。

そして2人は風呂に上がって、剣の鍛錬を中断して機動六課の戻ってきたのが夜であった。

今回の出来事をフェイト達には黙っていくことにする銀時とシグナム。

ばれたら命が持たないのである。

＊

翌日、そこはとある野球グランド。

そこに1人の男が突っ立っていた。

ドレット頭でグラサンを駆けており、何やら監督服をも着ている。

（野球……それは仲間が意識しあって力を合わせ、勝利を求めて一心同体となる……友情と努力が重なり合う儀式。目的の為だけに、誰もが一緒に熱くなるその思いは……何よりも勝っている）

男は拳を強く握り、強く願う。

（魂が叫びあう鎮魂歌、それを聞き入れるように次々と猛者達が消えていく。全ては頂点を賭けるために！それでも俺達は手に入れる……『コーシカップ』を制覇し、『クリスタルカップ』を手に入れるために！）

頂点の証、『クリスタルカップ』を手に入れるために、闘志を燃やす。

そしてベンチにいる自分のチームに振り向く。

「良し！行くぞテメー等！」

男は気迫を込めて叫びだすが、ベンチで思わぬ光景を眼にする。
そこには、ビール売りをしているような人のカッコをしている銀時、神楽、ティアナが立っていて、ユニフォースを着ている男たちはメッチャ苦しんで腹を押さえている。

男の顔が徐々に汗だらくになり、最悪な状況になっていた。
そしてもう一度良く見ると、まちがいなく自分のチーム全員が苦しんでいるのが見えない。

「ええぇぇ～～～

『神威　銀時「次回からシグナム編か」

ヴィヴィオ「こちらも新しい長編に入ったよ」

アインハルト「今回はヴィヴィオの姉としてＳＯＳ学園に登場したアインハルトが質問します。最近のキャロさんについてフリードさんはどう思っていますか」』……ズバリ、フリードに答えさせてもらいます。犬語翻訳機『わんじゃこりゃああ』」

フリード
「きゅう～」

犬語翻訳機『わんじゃこりゃああ』

銀時が飲み屋で別の客に枝豆と交換してもらった犬語翻訳機。性能は申し分ないのだが、万事屋メンバーには、翻訳した定春の言葉が腹黒いものであったために怒りを買い、捨てられてしまった。どうして銀八が持っているかは不明だが、それ以前に竜であるフリードの翻訳は出来るのかと不思議に思う中、翻訳機から文字が浮びだす。

翻訳機
『なんか……以前の面影がなくなったっす。怖いよ、誰かキャロ様を元の姿に戻して欲しいよ～』

銀八・ヴァイス

「……」

しばらく青ざめて無言になる2人。
そしてフリードをキャロの元に返す。

銀八
「『神威　銀時』さん、今日は廊下に立たなくていいです……」

テンション下がってしまった銀八。

ヴァイス
「ま……まぁまぁ！銀八の旦那！まだまだ質問はあるんだぜ。次、次行こうぜ！」

ヴァイスは暗い空間を打ち消すように次の質問をする。

ヴァイス
「次はこいつだな！ペンネーム『烈火竜』さん『質問です。ティアナとくっ付く事が無くなったヴァイスにお見合いさせましょうか？相手はもちろんあの有名な……（ゲスト出演依頼です）』」

銀八
「遠慮します！」

突如、銀八が叫びだす。

ヴァイス
「え！？どうして！？」

銀八
「お前は聞かなくていい！世の中には知らなくても良いものがあるから！」

青ざめてヴァイスを気にさせないように拙著する銀八。
銀八の様子にただ事じゃない事を知ったヴァイスは頷く。
あっちのヴァイスがゴリラに無理矢理結婚させられた上に、ファーストキスを奪われた事を知ればどれだけ絶叫するか知れたものじゃない。

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい！そんで次ぃ！……ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『起動六課の皆さんに質問です
自分はスパロボの小説を書いているのですが、もし乗れるとしたらどのロボットに乗りたいですか？
（ＯＧ限定で）』

ヴァイス
「そうだな……少なくとも作者……スパロボの知識がないから質問無理じゃねぇ？」

ヴァイスの言葉に、場が一瞬だけ氷付く。

黒神
「メッチャごめんなさい！」

黒神が突如現れて土下座して謝罪する。

銀八
「……と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、こんな作者ですんません。次ぃ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。1．なのはがよく「白い悪魔」や「エースオブエース」と呼ばれるようにＦＷ達にこんな呼び名をあげます。
スバル
＝運命を切り裂く蒼きサムライ
ティアナ
＝すべてを貫く弾丸
エリオ
＝音速騎士
キャロ
＝龍を操る世界の破壊者
です。
2．最近空気気味の人たちに質問です。この気持ち誰にぶつけたいですか、作者以外。』

ヴァイス
「ズバリ答えるぜぇ。1は中々面白そうな呼び名だな。後輩達は喜ぶだろ。スバルの存在は確かにあっているな。けどアイツの呼び名は別にあるなぁ。ティアナとエリオは大抵それで良いかもな。つうかキャロの呼び名は何!?破壊者ってどういう意味!?」

銀八
「ヴァイス……先生さっき言ったよね……世の中には知らないほうが良い事があると」

ヴァイス
「まぁ……そうだな……そんで2は、作者以外だったら目立ってい

るやつ等にぶつけたいんじゃねぇ？」

銀八
「そうだな……と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に立っていなさい」

ヴァイス
「じゃ次行くぜ。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問『さ～らんぷ～…月光閃火です♪

輝刃「…すっかり毛並が生え変わり終えてサッパリしたな…輝刃だ。」

あ…ホントだ。結構サラサラになっているね？と…質問質問。

1．ヴァイスさんに質問です。最近妹さんに会っていますか？多分妹さんもヴァイスさんの事許していると思いますよ？ってか最初から恨んでませんよ。

輝刃「…確かに、兄妹の絆というのはそう簡単には壊れないからな。次は俺だ。」

2．スカリエッティに質問だ。お前の実力なら別に悪さしなくても義肢とかの分野でバッチリ見返せると思うのだが…その時はそうは考えなかったのか？

確かに…そういう道もあったはずだからね～。最後は自分からだよ。

3．黒神さんに質問です。黒神さんって休日とかどうされているんですか？あと、この小説を書いている時の苦労話とかってあります

か？

輝刃「…結構プライベートな事を聞くな？まぁ…俺も気になる事は気になるが……。」……1はそうだな……つい最近会ったばかりで、アイツ……俺がした事を全然気にしていなかったから……』

少しシリアスな雰囲気にするヴァイス。

実は彼は、数年前に立て篭もり犯を狙撃する任務でミスショットし、人質であった妹ラグナの左目を潰したことがトラウマとなり武装隊を辞めた過去を持つ。
その為、ラグナとは気まずい関係になるが、つい最近ラグナと偶然に会って、彼女はヴァイスを責めていないことが明らかとなって、元の仲の良い兄妹になった。

銀八
「……とりあえず……質問の答えを続けるぞ。2は、スカリエッティは考えていなかったようだ。そんで3は、新八とかクロノとか、好きじゃないキャラを中心に書くことかな？と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい」

ヴァイス
「んじゃ次行くか。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ「黒神さ～～～～～～～～～～ん！！」

こなた
「うわ・・・暴発したよ・・・」

かがみ
「毎回巻き込まれてかわいそうに思うわ・・・」

ウッソ
「質問いきます！！
？ヴァイスさんって普段何しているんですか？
？恐怖の４大王に質問です（白い魔王，金色の死神，夜天の王，ジェイソン）この４人の本気で戦ったら誰が生き残りますか？
」
こなた
「なんか・・・みんな人の域越えてるからはっきり言って人間じゃないよね・・・」
かがみ
「またあんたたちは・・・殺られても知らないわよ」
ウッソ
「さて最後の質問は・・・」
鈴々
「鈴々が答えるのだ！！」
こなた
「おお，恋姫の張飛じゃん！！」
鈴々
「？は貧乳のみんなに聞きたいのだ！！巨乳のおっぱい勝ち組に何か一死むくいたいのだ！！そこでこのおっぱいが小さくなるってい

う薬を手に入れたからなのはとフェイト，はやての食べ物に仕込んでほしいのだ！！」

ウッソ&かがみ
「質問でもなければやりすぎだ～～～～～～～～～！！！」『…てか？と？は何！？特に？は何か巨乳に対する嫉妬以上にやばすぎなんだけどォォォォォォォ！」

思わず叫んでツッコむヴァイス。

銀八
「ああ……気にすんな。？は想像するだけで恐ろしいからパスしといて、？じゃ……ややこしい事になる前にその薬は燃やしました」

ヴァイス
「ナイス！」

親指を立てて言い出すヴァイス。
もしそんな薬で3人の巨乳が貧乳に変わったら、3人の怒りが半端じゃないと言うばかりになる。

ヴァイス
「そんで？なぁ……最近は辰馬の旦那と良く酒を飲んだりいろんな事を話をしているぜ。何でも宇宙の惑星の旅の感想を何度も聞かされて……楽しい経験をしていたなぁ」

とヴァイスは愉快そうに笑い出す。

銀八
「友人同士って奴だな。と言う訳で『ウッソ・エヴィン　』さん、

恋姫たちの暴走は控えさせてください。そんで次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
神威と沖田と屁怒絽伯爵とヴィヴィオはいつ登場しますか。
自分てきには沖田を早く登場させて欲しいです。マヨラーはどうでもいいけど（笑）』……ズバリ答えます。この中からは今シリアスで確実に出します。と言う訳で『クアンタ』さん、楽しみに待ってください」

ヴァイス
「誰だろうな……んで次はペンネーム『サディスト』さんからの質問。『銀八先生に質問。
「辰馬」や「ヅラ」、「高杉」はディバイス持つの？

ヴァイスに質問。
めちゃ影薄いし、下手したら「ザキ（原作）」より目立ってないが目立ちたい？

はやて　と　ヴィータに質問。
もしヅラに、
「俺と共に国を変えないか？…俺には君が必要なのだ。」って言われたらどうする？

最後の二つの質問は本人が答えてくれ。さもないと…「パッチ」の刑に処す。
銀八かヴァイスを。

「パッチ」の刑
（パンツ一丁にした後植木蜂に片足を突っ込み、動けなくした状態で顔面を鞘でひたすら殴る行為。１２Ｒあるから）

次、クロノが馬鹿やらかした時、落とし前としてやってくれ。』…俺に対する質問は……それ……結構気にしているんだ……俺だって目立ちてぇよ」

少しショックを受けるヴァイス。

銀八
「本人は目立ちたいようです。そんで『サディスト』さん、「辰馬」や「ヅラ」、「高杉」の中からはデバイスを持たせる予定です。最後のは２人に答えさせます」

銀八がそう言うと、はやてとヴィータの２人は立ち上がって答えだす。

はやて
「勿論、力を化すわ」

ヴィータ
「……ま……まぁ……状況によって考えてやるよ」

銀八
「以上、２人の答えでした。と言う訳で『サディスト』さん、最後のリクエストは受け取りました！」

ヴァイス

「最後のリクエストって……まぁいい！次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『一つ目

ヴァイスは辰馬と仲が良さそうですが、一緒に女遊びとかはしないんですか？

二つ目

ＢＬＡＺＢＬＵＥ好きの黒神さんですが、ヴァイスでハザマネタとかってやらないんですか？

三つ目

だいぶ前に私が本編でのヴァイスを「ウザい」などいろいろ言ってましたが、この作品での彼の扱いはどういったものですか？「地味」というか「端役」的なものでしょうか？だとしたらやっぱりヴァイスは「ウザい」と思います…』……」

だんまりしてショックを受けるヴァイス。

３つ目の質問が聞いたからだ。

銀八

「ズバリ答えます。一はいつもは辰馬が女遊びをしているため、ヴァイスは一緒にしないと思います。２は……なんか立場が全然違うからしないでおこうと思いましたが、考えてみます。３は……すみません、彼ショックを受けているのでご勘弁を……。と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

銀八の質問の終了後に、ヴァイスが立ち上がる。

ヴァイス「では次は、ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問だ！」

銀八
「おい……立ち直り速いな……」

ヴァイス
「『質問
黒神さんに質問。前回の質問で黒神さんのステータスでリリカルの世界と銀魂の世界で誰なら勝てますか？』」

銀八
「ズバリ、作者が答えます」

黒神
「そうですね、少なくとも実力だと銀時とラグナのイメージ通りの実力ですけど、シグナムに匹敵ぐらいですかなぁ……ですので、銀時と桂にここの小説のスバル、それに神楽、エリザベス、フェイト、なのはに勝つにはまず不可能でしょう。」

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、後は大抵自分の想像でお任せします」

ヴァイス
「次行くぜ、ペンネーム『武士堂』さん『質問です。
機動六課からデバイスを取ったら何が残ると思いますか？
もう一つ質問。というかリクエストです。

原作でヴィヴィオを奪われた時のなのはを、言峰をゲストに呼んで批評してもらい弄んでもらい心の傷を抉ってもらって下さい（笑）。』……いや無理だろ!?どんだけなのはに冷たいんだ!?」

リクエストに無茶があるとヴァイスはツッコム。

銀八
「まぁ、リクエストは無理として……質問の答えは……スバル、シグナム、エリオは剣術と槍術があり、ティアナは普通の銃を使えば何とかなります。ザフィーラとアルフは元々デバイスがないから問題なし。しかしそれ以外はかなり戦力がなくなり、ほぼ0になる可能性があります。というわけで『武士堂』さん、リクエストの件はマジですみませんでした」

ヴァイス
「次がラスト。ペンネーム『風花』さん『今日は。風花です
ヴァイスに質問です
？「目標を○○○○○○○！！」○の中に言葉を入れてください？銀さんの『銀の魔導書（ブレイシルバー）』のフォルム、『カオス・メルディア・デスサイズフォルム』ですがこれは例えば、刀が鎌になったりするんですか？それとも魔力で空に大量に出現させるんですか？

（此処からは後でお書きください）
ちなみに、？の問いですが「狙い撃つぜぇ」と言ってしまったらヴァイスは銀さん以上のヲタクということで
それでは』……？は……とりあえず……完全に射撃する……で」

銀八
「いや、無理があるだろ？」

ヴァイスの無理な言葉にツッコむ銀八。

銀八
「ちなみに？は『カオス・メルディア・デスサイズフォルム』は、通常モードはラグナの使用剣のままで、大鎌モードは剣の刀身が鎌の形になって柄が棒のように長くなり、しかも刃のところからさらに白銀の魔力で出来た大鎌になりますね。ちなみに大砲モードは柄の部分が棒のように長くなり、刀身はそのままになり、その刀身から魔力砲を放つと言う事になります。と言う訳で『風花』さん、『銀の魔導書（グレイシルバー）』のパターンは通常のデバイスの3倍以上はあると思ってください。以上、今回の質問終了！どうでした、ヴァイス」

ヴァイス
「俺に対する質問が……結構傷ついた……」

銀八
「だろうな……では次回は……」

ヴァイス
「まった！」

銀八は次回のアシスタント紹介前にヴァイスが止める。

ヴァイス
「前から思っていたんだが……俺の記憶が正しければ……俺より早くこの小説に出たはずのキャロ、シャマル、ユーノ、カリム、シャッハがまだアシスタントされていねぇが……？」

銀八

「それが何？」

ヴァイス
「『それが何？』……じゃなくて出してやれよ！何か恨みがあるのか！？」

ヴァイスの意見も一理ありと、銀八は考える。

銀八
「……そうだなぁ……次回のアシスタントは源外のジーさんにさせてもらうとすっか」

ヴァイス
「全然あいつ等を出す気ねぇな！」

銀八
「では……次回もお楽しみぃ」

ヴァイス
「……どうなってもしらねぇぞ？（呆）」

第七十一訓：強力な威力ほど危険すぎる（後書き）

まさかのアクシデントで銀さん達がベースボール！？

銀時とシグナムを中心とした野球チームが完成！？

友情とボケとありの『コーシカップ』が開催！

シグナム

「次回、「野球は1人では出来ない」テイクオフ」

第七十二訓：野球は1人では出来ない（前書き）

突如のアクシデントを起こした銀時、神楽、ティアナ。

責任持って野球をする事になった。

そしてまずは人集めから。

山崎

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第七十二訓：野球は1人では出来ない

「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉいいい

「違うに決まっているでしょ！それポカリの粉じゃなくフィートライインを作る粉だからぁ！（怒）」

血管を浮かべて怒鳴ってツッコむティアナ。

「原因はお前等かよォォォォォォォォ！」

監督も怒鳴る。

「もうすぐ『コーシカップ』が始まるんだぞ！つうかなんて事してくれたんだよ！どうすれば良いんだよ俺はァァァァァァァ！」

予想外のアクシデントに悔やむ監督。
ひそひそと銀時はティアナに聞き出す。

「ティアぁ、誰だコイツ？」

「ほら、アレだよ……ミッドチルダの野球チームである『イヤンキッス』の監督をしているイテツ・スターよ」

ティアナでも知っている有名な野球監督。
過去の『コーシカップ』に出場する『イヤンキッス』の監督として活躍しており、過去に準優勝2回、ベスト4を5回、ベスト8を4回したと言う有名な監督である。

「あのぉ～、イテツさんよォ…そんな大騒ぎしなくたって良いじゃない。俺なんかアレだよ……8月31日まで夏休みの宿題やってなくたってもぜぇ～んぜん動じなかったよ？」

「それヤバイから！先生に怒られるから！」

銀時の説教に汗を流してツッコむティアナ。

「……それがダメなんだ……今回の『コーシカップ』に優勝しないと……俺は引退しなきゃいけないんだ」

「引退？」

引退の言葉にピクリとする銀時。

「あんた等も知ってのとおり、『コーシカップ』は1年に1度、ミッドチルダ一の野球チームを決める名誉をかけた大会。勿論、魔法は使用禁止で独自の運動神経だけで競い合う。俺はこのチームを過去３０回の出場をした。数多くの強豪チームを打ち倒して勝利を導いたチームの英雄的な監督として注目された」

イテツは今までの経験を銀時達に語る。

「そしてそれ以上に夜の町で美女達を口説きまくり、サポーターからは『夜の監督』、合コンの監督として注目されてきた」

「いや、それおかしいでしょ！？ただ単に見下されているだけだから！」

限りなくおかしい事を言い出すイテツに、呆れるばかりにツッコむティアナ。

「全盛期には数々の伝説を作り出したなぁ……そう、ファンタジスター……」

「おいいいいいいいい！バカでしょアンタ！どんなファンタジーなのよ！」

懐かしがるイテツに怒鳴りだすティアナ。

「そんな俺の監督引退をかけた『コーシカップ』がこんな形でドクターストップだなんて……初戦敗退よりあり得ないじゃねぇか」
「いや……おめぇの経歴がすでにドクターストップな気がすんだけど？」

悔やむイテツに容赦なく言い出す銀時。

「分かっている……でも俺は嫌だ！このまま『イヤンキッス』が優勝できなかったら、俺の監督引退だけじゃなく、この『イヤンキッス』の解散もしなきゃいけねぇんだ！」

イテツの引退だけじゃなく、チームの解散には驚く銀時達。
だとすれば自分たちはとんでもないことをしてしまったようである。

「じゃあ、チームのために『コーシカップ』に？」
「そうだぞ！それをこんな目にしやがって！わかったよ死の！俺が死ねばいいんだろ！今すぐ死の！姉ちゃん、俺にもポカリ大盛りだ！」
「はいアル！」

イテツはどこからかバケツを取り出して、神楽はライン引きを出す。

「ちょっ待ちなさい！別に死ななくても良いじゃない！」

慌てて自殺行為を止めるティアナ。
それを聞いて泣き出すイテツ。

「じゃあああああああ、あんた等どうしてくれるんだ、責任取ってくるのぉ！」

そして銀時の服を掴む。

「人を集めるでも何でも良いよ！とにかく『イヤンキッス』が『コーシカップ』を優勝出来るようにしてくれよ！そうでないとォォォォォォ……『イヤンキッス』がァァァァァァァ……『イヤンキッス』の連中の野球人生がァァァァァァ！」

泣きだすイテツ。
そんなイテツに悩む3人は、とりあえず人集めをすることにする。

「はぁぁ～わぁった、わぁったよ！とりあえず俺が何とかすっから、ちょっと待っててくれぇ」
「兄ちゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！」

大量に涙を流すイテツ。
かくしてチームの解散（ついでにイテツの監督引退）を阻止する為に『コーシカップ』に出ることを決めた銀時、神楽、ティアナ。
とりあえずは人集めから始める。

＊

銀時達は、機動六課に戻ってフェイト達に協力を求めるように野球をしてもらおうとするが、フェイト達の姿がいない。
いるのは銀時を煙たがっているフェイト達のファンクラブ……じゃなく男性機動六課の隊員である。

「たくよぉ……一緒に野球をやってもらおうとしてもよぉ、アイツ等、俺を嫌って協力してくんねぇよ」

「そりゃ、銀ちゃんがフェイト達じゃなく、他の機動六課の女隊員の隠れファンがいるから、きっとそれで男の隊員達は銀ちゃんに協力したくないネ。全く、男の嫉妬も醜いアル」

協力してくれない男の隊員に少し悩む銀時に、男の嫉妬に呆れる神楽。

「それに、何で私も野球をやらなきゃいけないアルか？」

「原因を作った張本人でしょうが！（怒）」

怒鳴ってツッコむティアナ。

「しょうがねぇ……とりあえずスカリエッティのところに行こうぜ。もしかすれば……」

「秘剣・烈火斬舞！」

「！？」

突如の叫び声に驚く3人。

そこは、訓練所の森の奥底で聞こえたようなので、3人はそこに向かって走り出す。

＊

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

そこには、シグナムが『レヴァンティン』を右手で握って、天に昇せるかのように構え、左手は前に突き立てるように伸ばし、一気に剣を振り下ろす。

「秘剣・烈火斬舞！……とぉ！」

気迫を込めた必殺名を叫び、そして剣を振り下ろした後にジャンプしてポーズをとる。

「うーむ、コレではダメだ。魔法なしでもカッコイイ必殺技を会得するには……とりあえずもう一度だ」

そして再び『レヴァンティン』天に昇せるかのように向けて、左手は前に突き立てるように伸ばして構える。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

シグナムはさらに力を込めて、叫びだす。

「秘剣・烈火斬……まぁ！!??」

何かに気づくかのように必殺剣の特訓を中止するシグナム。
左側には、細めでシグナムを見つめる銀時、神楽、ティアナの3人が「何をやっているの？」と言う視線でこっちを見ているのが分かる。
こんな姿を見せられたシグナムは顔を真っ赤にして大量の汗を流す。

＊

銀時、神楽、ティアナの後ろで、顔に手を当てて泣いていながらも付いて来るシグナム。
見られたことが相当ショックだったらしい。
メッチャ気まずい雰囲気に、銀時は慰める

「……だ……大丈夫だ……み……見なかった事にすっから……」
「……うん……すまない……」

シグナムがあんなにも惨めに見えてしまった3人は、今のを見なかったことにする。

「それで、話を変えるけど……とりあえず野球を一緒にしてくれませんか？」

ティアナはシグナムに事情を話す。
野球チームである『イヤンキッス』にとんでもないアクシデントを起こして、責任持って自分達が野球をしなきゃ行けない事に。
当然の事、シグナムは協力する。

「とりあえず、後は最低でも5人は必要だな。」
「そうだなぁ……どっかに運動神経はいないかねぇ……たとえばパワーとかメッチャありそうな奴とかさぁ」

シグナムと銀時はそう言いながら人を探している。
最低でも攻撃的なパワーを持ったバッターも必要である。
すると、声が聞こえる。

「〇ッチュウの！」

と変な声が聞こえるのであった。
銀時達はその声が聞こえた方向に向かう。

そこにいたのは……

「〇ッチュウの！」

バリアジャケットの姿で必死に『〇ッチュウの』を必死に練習しているヴィータがいた。

「いや……こうじゃねぇな。もっと胸を大きくするには発音と合わせて胸に力を入れるべきか？……よし…だっちゅう……のぉ！」

ヴィータは青ざめて銀時達に気づく。
銀時、神楽、ティアナ、シグナムは「何やってるの」と言う視線を送る。

＊

銀時達について行きながらも、ヴィータは顔に手を当てて、泣いていた。
見られたことが相当ショックだったらしい。

「……まぁ……気持ちはわかんないわけでもないから……見なかったことにしておこう」
「……すまねぇ……シグナム……」

強くシグナムに感謝するヴィータ。
野球の事で事情を話した銀時は、ヴィータを仲間に入れて5人。
残り4人を探そうとすると、ヴィータがある事を思い出す。

「そう言えば、スバルが1人部屋で篭っていた様な」

ヴィータがそう言うと、銀時達はすぐさまにスバルの部屋に向かうのであった。

＊

そして銀時達は宿舎に入り、スバルのいる部屋に向かうのであった。

「しかし、今日が休日とは言え部屋で引き篭もるなんて……スバルにしては珍しいな」

シグナムが不思議そうに思う。
いつもなら、剣術の自主練をしているはずなのに、今日に限ってどうしてなのか考える。

「とりあえず、スバルを呼んで……」

おこうとすると、何やらギターの音が聞こえるのを確信するティアナ。
それも何かの曲を弾いている様な。

「何か音楽っぽいのが聞こえるネ」
「この先のようだぜ……」

神楽と銀時は不思議そうにギターの音が聞こえる方に向かうと、そこにはスバルとティアナの部屋の先にある扉のほうから聞こえる。
一体どうしてスバルの部屋からなのか不思議に思うが、ゆっくりと扉を開く。

＊

『『……』』

スバルの部屋に入った瞬間、銀時達は唖然とする。
何せ目の前にいたのは、ギターを弾きながら歌いだしているスバル。
彼女が歌っている曲は、『けいお●』のＥＤ曲である『●ｏｎ'ｔ ｓａｙ ｌａｚｙ』。
つまりカラオケ気分で歌っている。

何やらメッチャかっこ良くギターを弾きまくるスバル。
しかもメッチャ上手い。
ノリに乗ってギターを弾きまくる中、ふと目の前に銀時がいる事に気が付き、歌うの止める。

「あ……銀さん、ティア、それにみなさんも」

気楽そうに笑顔で挨拶するスバル。

「……スバル……お前、ギターを弾けたっけ？それに何で『けいお●』の曲？」
「ああ、何か今、作者が音楽系でもギャク系タイプがあって笑える

アニメとして注目中ですよ」
「自分のプライバシーもネタにすんのかよ！？」

呆れてツッコむ銀時。
それ以上に気になるのは、スバルの持っているギター。
何やら蒼いフェンダー・ジャズベースのようである。

「実はコレ、マクロウさんがアイドルになった時にアイドル誕生祝に貰ったんです。でも結局使われる事はないから、暇つぶしに……」
「暇つぶしに弾いていた訳？その割には随分とアイドル顔負けに上手かったんだけど！？」

あり得ないというばかりに言い出すティアナ。
その理由をスバルは言いだす。

「いやぁ、何か本を見ながら弾くのを練習して……夢中になって弾いていたら、もう軽く曲を弾けるようになったんですよぉ♪」
「前から思っていたんだがよォ、お前メッチャ乗り込み早ぇよ！」

別の意味でスバルの存在に驚く銀時。
後ろでは、何やらスバルがアイドルであった事に思い出して、しゃがんで暗い雰囲気を出すシグナムとヴィータの姿がいた。

「とりあえず、スバルにお願いがあるヨ」
「何ですか？」

神楽のお願いにスバルは軽く返事をする。

「実はなぁ……悪(わり)ぃんだけど一緒に野球をしてくんねぇか？今人集めてしてんだわ」

「野球？」

その理由を説明する銀時。

納得したスバルはメンバーに入る事にした。

「コレで後は最低3人だね」

しかしギリギリだけじゃ厳しい為、せめて出来るだけ多くの仲間を集めたほうが良いと思うティアナ。

その時、神楽がある事を思い出す。

「あ、そう言えば近藤が砂浜にいるのを見かけたような……」

ヴィータがそう言うと、銀時達は急いで砂浜に向かう。

＊

「るんるんる～ん、る～るるっるる～ん♪」

近藤は鼻歌をしながら、おしっこで文字を書きだす

書いてる文字は『真撰組』だった。

しかも何故か全裸でだった。

近藤は空の向こうの白い雲を見つめる。

「あの雲の向こうで…、アイツ等が俺と山崎の帰りを待っているはずだ」

真撰組の連中が自分達の帰りを待っていると信じる近藤。
しかしおしっこも切れて慌てる。

「ああ！中途半端に！ルー殿、大量の水を！」
「了解（ラジャー）」

ルーテシアは近藤のカバンから大きなペットボトルのミネラルウォータを取り出す。
だが、大きな波が来る。

「ハッ！、いかん！」

近藤は波から文字を守る。
しかし、文字は半分波に消され、近藤は『ＮＯ～～～！！！！』と叫ぶ。

「何やってんだァァァァァ！？（怒）」

ドカァ！

「ごふぁああ！」

突如、アギトが近藤を蹴飛ばす。

「あ…アギト殿！何をする！？」
「それはこっちの台詞だぁ！何だあれ！？」

アギトは血管を浮かべて、近藤のおしっこで書かれて並で半分消された指を刺す。

「遠く離れたトシ達に俺達の無事を伝わるようにこの白い砂浜に想いを込めながら名前を…」
「おしっこでかい!?つーかー、よくあんなに出せたな!?てゆーか、そんなんで伝えるなよ!?それでなんで全裸なんだ!?（怒）」
怒り任せにツッコみ、どうして全裸でなのかを聞き出す。
「いやー、全裸の方が出しやすいと思って……てかいや～ん、見ないで!!」
大慌てで股間を隠し、とセクシーポーズで服を求める。
ブチィ！
「キモイわァァァァァァァァ！（怒）」
ドカァァァァァァァァァァァ！
「熱ィィィィィィィィィィィィィィ！」
怒り出したアギトは全力全開で近藤を炎で火だるまにする。
そうとう気持ち悪くて怒り出したのであろう。
怒り出したアギトを止めようとルーテシアは抑える。
そんな様子を、青ざめて見つめる銀時、神楽、スバル、ティアナ、シグナム、ヴィータ。
「あ……あはははははは……本当に近藤さんは変わった人ですね」
「うん……そうだな」

苦笑して変わった人であると考えるスバルと、呆れてしまう銀時。
そこに、

「はぁ……何やっているんですかねぇ、局長は？」
「……あれが……『ジュエルシード事件』を解決した英雄の１人である近藤勲……」

後ろから２人の声が聞こえた。
銀時達は振り向くと、そこにはエリオ、月詠、山崎、ディエチの４人がいた。

「あ……珍しい組み合わせですね。皆さんどうしてここに？」

スバルが聞き出すと、

「山崎さんに、綺麗な砂浜を教えてもらおうとしたんだけど……まさか貴方達がいたなんて以外だった」

ディエチもまさかの銀時達の合流に以外そうに思う。

「僕も月詠さんにここを教えてあげようとして……」
「所で主達は一体何を？」

同じく理由を言い出すエリオとどうしてここにいるのかと聞きだす月詠。
コレを機会にと銀時は理由を説明する。

「あのぉ、悪(わり)ぃんだけど……一緒に野球してくれくんない」
「は？」

訳も分からない誘いに呆れる月詠。
詳しい説明をするティアナ。それを聞いた山崎達は、

「わ……分かりました。旦那達には色々とお世話になっているし」
「私達の力が役立てるなら……その話に乗ります」

山崎とディエチも野球をやる事を決める。

「困った時にはお互い様ですから、僕も皆さんのチームに入ります」
「乗る気はないが……まぁ良いじゃろ」

野球の誘いに乗るエリオと、煙管を加えて野球をすることを決める月詠。

「良し、あそこゴリラ・ルーテシア・アギトを含めて１４人だな」
「え？兄さん、私達を含めて数えたら１３人よ。１人多いけど？」

どうして１人多く入れる銀時に、理由を聞き出すティアナ。
すると銀時は後ろに振り向き、腰に身につけている木刀を掴み、１本の木に向かって投げた。

グサッ

何かに刺さる音がして、木の上からソレは落ちてきた。

「何？何！？」

スバルが慌てて立ち上がり、リリカル組はデバイスを構える。
しかし、銀魂組は全く動じず冷静である。

「いたた…」

落ちてきたのはメガネをかけた美女、猿飛あやねである。
頭には銀時が投げた木刀が刺さっている。

「ちょぉおおおおお!?頭に木刀刺さってるけど大丈夫か!?」

ヴィータが大声で言うと。

「心配ないネ。銀魂の世界じゃ普通アル」

と呆れた表情で神楽が答えた。

「おい、今日からお前も野球選手だ?」

そう言いながら銀時は頭に刺さってる木刀を引き抜くと、猿飛は「あ痛たた」と口に出して血が少し噴射する。

「やめて!触らないで!!」
「触ってねーよ」

女の訴えに銀時は冷ややかに返す。

「アイドル編で登場したから、多少の活躍は期待できると思ったんだけど……出てきたのは本の序盤だけ。散々長いこと放置プレイして久し振り出番が来たと思ったら……野球をやれ?」

地面にもたれ付き、悔やみだす猿飛。

「そんなのって・・・・・そんなのって」

信じられないように体をプルプル震わせ、

「興奮するじゃないのォォォォォォォォ！どれだけ私のツボを心得ているのよぉぉぉぉぉ！」

と言いながら服を脱ぎ捨てて、何故かサッカーユニフォームの姿になっている。

その衣装はワールドカップの日本代表選手が着そうなユニフォームである。

「それ野球じゃなくサッカーをする人の衣装　（でしょう）（だろうが）！」

ドカァァァ！

「あ～れ～！」

ティアナとヴィータの飛び蹴りが炸裂し、猿飛は吹き飛ぶ。

＊

「てな訳で、コレが新生『イヤンキッス』のメンバーだ」

「何かメチャクチャな感じがするじゃねぇか！」

銀時は約束どおりにメンバーを集めたが、イテツは呆れてツッコむ。

「まぁ……とりあえず行くとするか」
「行くって、練習にですか？」

イテツの言葉に山崎が聞き出すと、

「練習？……何言っているの？『コーシカップ』は今日の午後１３：００に始まるんだぞ？」

などと言い出すと、銀時達は固まりだす。
今日が『コーシカップ』開催日？
それを知らなかった銀時達は……

「何ィィィ

「んじゃ、早速お願いしようか。まずはこの人、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時　「ロストロギア級の新技かよ」

ヴィヴィオ
「ちょっと驚きだね。質問なんですが銀時らが動物化したらなんになります？」『ズバリ答えます。それは作者の気分しだいでしょう」

源外
「何か手抜きを感じるのは気のせいか？」

銀八
「気のせい気のせい。と言う訳で『神威　銀時』さん、廊下に立っていなさい。次ぃペンネーム『武士堂』さん『というかシグナムに質問。
ベルカにも剣術ってあったんですかぃ？』」

銀八がそう言うと、シグナムが立ち上がる。

シグナム
「いや、それは残念ながらそれはない。大抵は魔法で大要しているが……」

銀八
「おいおい、魔法に頼りっきりじゃ騎士の名が泣くぜ？」

シグナム
「う！」

図星を疲れて苦しい表情をするシグナム。

銀八
「と言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい」

源外
「がはははははは！じゃあ次行くぞ、ペンネーム『風花』さんからじゃ！『あ、アハハハハ
ヴァイスさん失礼しました

レイン
「最近酷い質問無いな。俺が出してやる」

お断り。今回も私が聞きます
？源外のおじーさんに質問。ブレイシルバーをスカさんと造りましたが三郎は造らないんですか？むしろスカリエッティ用に一つ造ってあげてはどうですか？
？銀八先生に質問です。原作のリリなのキャラで銀八先生があやかりたいなと思う人は誰ですか？答えてくだされればそうですね……こちらのシグナムの写真集でも差し上げますよ（しかも水着）

それでは失礼します

レイン
「？の報酬はシグナムにバレるなよ」』……ああ、三郎か……？は当然作っている。じゃが対『鬼兵隊』作のガジェット対策ように数多く作っておるから、出番はまだ先じゃろ」

銀八
「？はそうですねぇ……前回のシグナムが凄く刺激したのでシグ……」

シグナム
「うぁあああああああああああああああああああ！／／／」

シグナムは顔を真っ赤にして、銀八をアッパーする。

源外
「と言う訳で『風花』さん、とりあえず廊下にたってな」

銀八
「あ痛た……んじゃ次行くか。ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ
「結局・・・あの薬は服用しなかったですね」

こなた
「残念だよ～～。どんな風になるか見てみたかったよ～～」

かがみ
「見てどうするのよ？」

ウッソ&こなた
「なのはさんたちをゲラゲラ指差して笑う！！」

かがみ
「最悪だ！！あんたたち」

ウッソ
「でもここではタブーみたいですし・・・でも貧乳なのはさんやフェイトさん、はやてさんを見てみたい」

こなた
「『G・ＳｔｒｉｋｅｒＳ』でぜひなのはさんを貧乳にしよう！！
ってことで質問だよ。

?源外さんはウッソのＶ２ガンダムをどう思っていますか?

?リインフォースに質問だよ。リインフォースって見た目シグナム
と同じだよね。なんか原作より子供っぽく喋っているけどなんで?
童心に帰っちゃったの?本人が答えてね」

ウッソ
「これからも頑張ってください」『……てどんだけ命知らずなんだ
よ！?」

源外
「がはははははははは！大胆な若者じゃな……じゃあ答えよう。
『Ｖ２ガンダム』はかなり高度な機械(からくり)技術で作られているから、興
味深い！そんで?は、リィンフォースに答えてもらうとしよう」

すると、突如リィンフォースが立ち上がる。

リィンフォース
「原作の自分があんま好きじゃないからですよ！」

などと言い出す。
原作では、第二章の終盤のみしか出ておらず、そんな自分の出番の
少なさに嫌気を刺していた。

銀八
「以外に寂しがりやだったんだなぁ……後、こう言う質問もありま

す『ウッソとこなたがいなくなった後

かがみ
「私から質問です。

?なのはさん、フェイトさん、はやてさんに質問です。ウッソくんとこなたは本気で貧乳にしようとしてるみたいけど・・・どうしますか?本人が答えてね。

それにしてもこんな質問とかしているから黒神さんが巻き込まれるのよね・・・これからも頑張ってください」

』……今思えば、作者って巻き込まれやすいんだったなぁ……」

と銀八は黒神の不吉を同様する中、なのは、フェイト、はやてがデバイスを構えて魔力を大幅に溜め込む。

銀八
「ちょーーーーーー!三大魔導師の怒りが爆破するんだけどォォォォォォォォ!?」

銀八は止めようとするが、もう遅かった。

フェイト・なのは・はやて
「愚かな馬鹿2人に……バスタァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!!(怒)」

3人の極大な魔力砲が一斉に放たれる。
銀八と源外は、ウッソとこなたに向かって『南無』と言い出す。

銀八
「……とりあえず『ウッソ・エヴィン』さん、３人を刺激するような質問は控えたほうが良いです」

源外
「じゃあ、次を行くぞ。ペンネーム『クアンタ』さんからじゃ、『質問です。
サンタを信じてるリリカル組に聞きます。
銀魂の原作第二百九十訓から第二百九十二訓であったサンタクロース決定戦を見てどう思いますか。
またその中で神楽が「お前らサンタは基本子供に夢をというたて前がなければただの不法侵入者のロリコンジジイだという事を忘れるな」という発言についてどう思いますか。』……」

すると、フェイト、なのは、はやての３人はどす黒い憎悪を放っており、他の者は苦笑する。

銀八
「まぁ……こんな感じだ。と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『今回から家のキャラを出します
リュウセイ『宜しく、リュウセイ・ダテと』
こなた『泉こなたが質問します！』

リュウセイ『まず一つ、スバルって銀時に憧れて侍になったと言いますけれど、そんじゃデバイスじゃなくて木刀で戦った方が銀時っぽくないですか？何か木刀１本で暴れまくるスバルを見てみたいっす』

こなた『二つ目行くよぉ！

ＳＡＤＳさんの質問の時うちの作者が廊下に立たされたんだけどあれって何で？
うちの作者何も分からずに廊下に立ってたけど・・・（汗『……じゃあ１つ眼はスバル、お願いします」

すると、スバルが立ち上がって質問を答える。

スバル
「何か、銀さんのように力強い豪傑の剣が出来ないから……だから速さを活かした居合剣術にしたんです。それに木刀のデバイスは今のところはないようで……」

苦笑して答える。もし木刀のデバイスがあったらスバルは木刀も使用していたようである。

銀八
「そんでもう１つの質問、それは作者、黒神の誤字です」

黒神
「『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、御免なさい」

黒神は突如現れて謝罪する。

銀八
「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、作者がややこしい事して住みませんでした」

源外
「次行くぞ。ペンネーム『月光閃火』さん『ぬは～…月光閃火です♪

輝刃「…蒸し暑い…輝刃だ。」

確かに…時期的にも蒸し暑いよね～♪あ…質問いきます。

1．源外のジーさんに質問です♪最近はどんなカラクリを作っていますか？もしかして、ヴィヴィオの玩具とか作ってます？

輝刃「…ふむ…確かに、源外のジジィがカラクリを作っているシーンが見当たらんからな。次は俺だ。」

2．スバルに質問だ。今までたらふく飯を食べてきたはずだが、その中で『さすがにこれは参った』という量はどのくらいなんだ？

あ～…確かにそれは気になるね。自分もさすがに１０人前とか出されたらさすがに堪えるし。最後は自分からです♪

3．ナンバーズの皆（特に背がちっこい娘達）に質問です。此処に背が１７２ｃｍくらいまで伸びてスタイルも抜群になる成長薬（イチゴ牛乳味）があるんだけど…居る？

輝刃「…閃火…その質問はあまりにも冥獄を味わいそうだぞ？（汗）」

いいのいいの♪どうせ無傷だし、何より輝刃のナデポパワーで何とかなるし♪

輝刃「…そこで俺を頼るな…（汗）。」』……そうじゃな……最近ではナンバーズの固有武装と言う特殊な武器の強化にガジェットと三郎、それに俺作デバイスを作っている。まぁ、ヴィヴィオの出番はまだないから玩具はまだじゃな」

銀八
「次にスバル……もう一度頼むわ」

スバル
「はい、確か……あったっけ？」

そんな事があったのか不思議に思うスバル。
つまり無い事である。

銀八
（コイツの胃袋って何で出来てんだぁ！？）

銀八
「……じゃあ3つ目の質問。誰かいるかぁ～？」

チンク
「ください！」

と、真剣に返事をして手を上げるチンク。
相当自分の姿に困っているらしい。

銀八
「……と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい」

源外
「じゃあ次じゃな。ペンネーム『烈火竜』さんからじゃ、『スバルに質問
スバルギャラクシー（ご飯の上にアイスクリーム山盛り）を食べた

いですか？

アギトに質問
『真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌』みたいに、マヨネーズ好きになりますか？

ティアナに質問
『真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌』でドＳになった自分を見て、どう思いますか？

黒神先生に質問
『真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌』の悪役ドクターキュラスをどう思いますか？』じゃあ各自に質問の答えをお願いしよう」

スバル
「スバルギャラクシーが美味しそうだから食べてみたい♪」

アギト
「何であんなのが好きに慣れるのか不自然に思う」

ティアナ
「コレ私ィィィィィィ！？後、ロリ方ウザイ」

黒神
「最初に、スバルギャラクシーと土方スペシャルを無理矢理食べさせられた哀れな姿しか思いつかない」

銀八
「以上です。と言う訳で『烈火竜』さん、次からは質問は３つまでお願いします。次ィペンネーム『サディスト』さん『銀八に質問。

「ハンガー×ハンガー」がまた休載したけど　どう思う？

シグナムに質問。
もし銀時に『お前の心も体も全て　俺にあずけろ！！』って言われたらどうする？

黒神に質問。
来週の「ジャンプ」で偶然プリーチ&ａｍｐ；銀魂で必殺技ネタをやってたらどうする？
『……ズバリ答えます。なんか『ハンガー×ハンガー』の作者のやる気が感じねぇよ。つまんねぇよ、わかんねぇよ。引退する気か？とりあえずつまんないマンガ書くぐらいなら引退しろっと文句を言ってやりたい気分だ。昔の『ハンガー×ハンガー』はもっと面白かったによぉ。そんで次、シグナムお願いします」

シグナム
「メッチャ預けます！／／／」

興奮して嬉しく答えるシグナム。
そんなシグナムに納得できない銀八は不機嫌そうである。

黒神
「そうですねぇ……とりあえずその時に考えます」

銀八
「その時かよ！？まぁいい、と言う訳で『サディスト』さん、廊下に立っていなさい」

源外
「次質問じゃ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
1．もしヴィヴィオが出て銀時がパパと呼ばれるのが１００％ですが、なのは達は「ヴィヴィオにママと呼ばせる戦争」は１００％起きますか？
2．作者さんに質問です。これから出るリリなの、銀魂キャラは誰ですか？
3．山崎さんに質問です。もしディエチさんと1日デートするなら何処へ行きたいですか？』」

1つ目と2つ目の質問に、黒神は答える。

黒神
「1はですね、そりゃ１００％起こりますよ。2はそれはネタバレになるので秘密です」

速攻に答える作者。

銀八
「んじゃ、次は山崎君。どうぞ」

山崎
「そうですね……ディエチちゃんの行きたいところならどこでも良いよ」

凄く嬉しそうに答える山崎。
彼女ができた事で味わえる幸福に銀八は嫌気をさす。

銀八
「何かメッチャムカつく……と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、廊下に

立っていなさい」

源外
「次が最後の質問だな。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問1
源外に質問です。銀時抹殺計画を活動している醜いモブ男達の新兵
器を作っているのは源外とスカリエッティ仕業なんですか？
質問2
源外に質問です。スカリエッティと同じ犯罪者だから仲が良いのです
すか？』……ズバリ答えよう。1つ目はくだらない野暮用で機械(からくり)は
作らんよ……おそらくはやつ等の勝手じゃろ？2つ目は、おそらく
そうじゃろが、それ以前に同じく機械(からくり)を発明する同士から、そうな
るじゃろ？」

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい。どうだ
った源外？」

源外
「いやー、中々面白い質問ばかりで愉快じゃったわい。またお願い
できるか？」

銀八
「OK！……てな訳で次回はここで初登場、ノーヴェにしてもらい
ます」

源外
「それでは……」

銀八・源外
「次回もお楽しみぃ！」

第七十二訓：野球は1人では出来ない（後書き）

新生『イヤンキッス』が誕生。

ミッドチルダの野球大会『コーシカップ』にいきなり出場!?

数多くの猛者達が頂点を挑む！

ディエチ

「次回、『練習をせずに身体能力だけで勝てるほど甘くはない』テイクオフ」

2014

第七十三訓：練習をせずに身体能力だけで勝てるほど甘くはない（前書き）

いきなり本番!?

まさかの展開に慌てだす銀時達。

いよいよ『コーシカップ』開幕。

近藤

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まるぞ!」

2015

第七十三訓：練習をせずに身体能力だけで勝てるほど甘くはない

ミッドチルダ　ベースドーム

その名のどおり、ミッドチルダ最大の野球ドーム。
本来ならばプロ野球チーム同士の野球対決用に使われるのが常識だが、今日は1年に1度の野球大会である『コーシカップ』の為に草野球チームの野球試合も使われるのである。
名誉を賭けた白熱する大会だけあり、その参加チームは半端じゃないほど多い。
ドーム前には数多くの参加チームが存在していた。

それを見た銀時達は青ざめていた。
自分達はたった今、チームとして結成したばかりなのに練習もせずにいきなり本番なんてあり得なかった。
肝心な監督のイテツは、『イヤンキッス』の参加登録をしに行った。

「ちょっとおおおおおおおおおおお！何これ！？いきなり大会ってどういう事！？俺達今チーム達成したばかりだよね！？練習もしないで大会に出て、しかも優勝するなんて奇跡を起こさない限りできないよねコレ！つうか、どうすればいいんだよォォォォォォォ！」

近藤は青ざめて叫びだす。

「落ち着いて、近藤」

ルーテシアが慌てだしている近藤を抑える。

そして山崎はそんな近藤を見て呆れる。

「仕方がないでしょ、局長。今日が本番なんて予想外でしたけど、俺達はイテツさんに頼まれて『イヤンキッス』の本来のメンバーの代わりに、優勝しなきゃいけないんですよ」

「確かに、私達の重大責任かもしれないかもね」

ディエチも納得して頷く。

「何で私達が野球しなきゃいけないネ？」

「だからそれは貴方が原因だからでしょうがァァァ！」

どうしてこうなったかと考える神楽に大きくツッコむティアナ。

「とりあえず、ポディションを決めるとしよう」

シグナムは1枚の紙切れを出す。

そこにはそれぞれの各自の守備ポジションが書かれていた。

銀時　キャッチャー

スバル　サード

ティアナ　センター

シグナム　ファースト

ヴィータ　ライト

近藤　ピッチャー
猿飛　レフト
山崎　セカンド
ディエチ　ショート
余り
神楽
月詠
エリオ
ルーテシア

「先発は、このメンバーか」
ヴィータは納得して言い出す。
「ちょっと待つネ！何で私、ツッキー、エリィ、ルーテシアが余りアルか！？」
「シグナム副隊長、訳を言ってください！」

納得できない神楽とエリオ。
しかし月詠とルーテシアは冷静であった。

「落ち着け。シグナムも何か考えがあっての事じゃろ？ここはシグナムの言う通りにしたほうが良い」
「ツッキー……わかったヨ」

月詠に言われて落ち着く神楽。

「それで、攻撃順はどうする？」

近藤が注目して聞いてみると……

「ふふふ……それは……これだぁ！」

シグナムは守備ポジションの時より自信満々にもう1枚の紙切れを見せる。

1、猿飛
2、近藤
3、スバル
4、シグナム
5、銀時

6、ヴィータ

7、山崎

8、ディエチ

9、ティアナ

「ちょっと待てェェェェェェ！」

突如、慌しく大きくツッコむティアナ。
原因はバッテリー順にあった。

「何で私が9番なんですか！？」
「それは、ティアナは攻撃に期待できないだからだ！」

自信満々に言い出すシグナム。
納得できないティアナだが、ヴィータが抑える。

「ティアナ……すまねぇ……しばらくアイツの好きにやらせてくれ……」

ヴィータが半泣きで言い出すと、ティアナもしぶしぶと大人しくする。

「まぁ良いんじゃねぇ？用は勝てば良いんだし」

銀時が気楽そうに言い出す。

「万事屋の言う通りだ。俺達はまともに練習していないから、頼れるのは俺達の試合ができるだけ後である事を祈るだけだ」
「どうしてですか？」
後の方が効率良いと言い出す近藤に、どうしてなのかを聞き出すスバル。
「そりゃそうよ。他人のチーム同士の試合を見て、それを参考にして野球の仕方を覚られるからよ？」
「なるほど」
猿飛の一言に山崎は納得する。
「後は、私達の身体能力で野球を制覇するだけですね？」
そう思い込んで言い出すディエチ。
実際に自分達が出来る事はコレまでの事。
「よし、とりあえずイテツが戻ってきたら、ポジション設定を報告すんぞ」
と銀時はイテツの帰りを待つ。
「そうね……てあれって……」
突如、ティアナがある人物を眼にして気が付く。
彼女が眼にしたのは、桂、エリザベス、はやての3人組であった。

＊

「よし、ここをこう合わせてやるぞ」
「了解や」

桂とはやてはラップ風の服に着ており、後ろにはエリザベスもいた。

「はい、せーの」

桂は持っているラジカセのスイッチを入れ、桂、エリザベス、はやての３人がラップを踊り出す

「やるなら今しかねー」
「ＺＵＲＡ♪」
「やるなら今しかねー」
「ＺＵＲＡ♪」
「攘夷がＪＯＹ」
「ＪＯＹが攘夷…」

桂とはやてが乗りに乗って歌う。

「はいそこで復唱！」
『攘夷がＪＯＹ』

桂がすぐに言い出すが、エリザベスはプラカードを出す。

「ちぃがう！喋れよ！」
「アンタ、本当は私達が知らない所でべらべら喋っているの知っているんやでぇ」

怒鳴って叱りだす桂とはやて。

「もっかいや！」

「ハイ、ＪＯＹ」

もう一度踊りだすと、

「ＪＯＹいいい

「うるせぇよ！何でラップなんだよ！？野球とどんな関係あるんだよ！」

血管を浮かべてツッコむヴィータ。

「主、桂、いくらなんでもそれはないと思います」

シグナムは呆れて言い出す。

「大体なんでラップとチョイスしているんですか？意味分かりませんよ、頼むから正気に戻ってくださいよ」

ティアナが呆れて言い出すが。

「ラップじゃない」
「カツハヤラップや」

と、2人は息ピッタリに言い出す。

ブチィ

「星になれェェェェェェェ！」

ドカァ！

「ごふぁあああああああ！」
「のぎゃあああああああ！」

怒り出したヴィータは、馬鹿（桂とはやて）コンビをグラーフアイゼンで叩き飛ば

した。

「何か、八神殿って桂に似て来ていねぇ？」

「そうですね……」

近藤と山崎ははやての行動が桂に重なっているように見える。

それ以来、はやては『女版の桂』とも思えるようになった。

＊

そして、開催式が始まった。

その数は異常なまでに多く、参加チームは６４チーム。

つまり６回勝利しなければ優勝できないのである。

大きな大会にメッチャ緊張しているスバル、神楽、ティアナ、エリオ、近藤、山崎、ディエチ。

そしてクジが当たった事により、『イヤンキッス』のキャプテン役となった銀時が選手宣誓となる。

「選手宣誓、『イヤンキッス』主将（キャプテン）、坂田銀時」

銀時の名が聞かされて、会場の誰もが驚きだす。

あのゾーマを倒して、世界を救った英雄として名が高い武神が野球選手としてこの場に現れたからだ。

そして銀時はマイクを取って宣誓する。

「あーあー、ゴホン。……宣誓、我々はぁ……野球の精神にのっとり正々堂々と戦う事を誓いたいんですがァ……」

何やらだるそうに言い出す銀時。

「こっちはよぉ、ウチの馬鹿がとんでもない事をしきまったせいでロクに練習していないのに野球をやるハメになっちゃった訳なんだよ。多少はおふざけありだができんだけ真剣にやりてぇと思いま…」

「余計な事言わんで良いいいいいいいいい！」

ドカァ！

「あらぶぁああ！」

突如、ヴィータが飛び蹴りを炸裂させて銀時を蹴り出す。
倒れた銀時は気絶し、ヴィータは引きずり出す。

会場の誰もが唖然とした。
前代未聞の宣誓であり、あんな男が世界を救った英雄なのか疑問に抱きだす。

「…え――――・・・以上で選手宣誓を終わります…」

＊

「何やっているですかァァァァ！？」
「お陰でややこしい事になったじゃないですか！」

銀時に叫んでツッコむ山崎とディエチ。
原因はさっきの宣誓であった。お陰で自分達も説教を受けるはめになった。
そんな2人に銀時はスルーする。

「それに『ウチの馬鹿』って私の事アルか！？」

血管を浮かべて怒鳴りだす神楽。
そこもスルーする銀時であった。

「まぁ……銀時らしいから百歩譲って許せるが……」

プルプルと震えるシグナム。
原因は……

「何で野球じゃなくサッカーのユニフォームを着ているんだ貴様等ァァァァァ！」

怒りの限界を爆破させる。
スバル、神楽、エリオ、近藤、ルーテシア、猿飛が青いサッカーユニフォームを着ているからである。

「え、だって今年はワールドカップだからと聞いて今、サッカーが暑いと……」
「私達がやるのはサッカーじゃなく野球でしょうが！」

理由を言い出すスバルにツッコむティアナ。

「いやー、以前にこう言うやり取りでサッカーをやった事を思い出

してつい」
「じゃあ今すぐ野球のユニフォームに着替えろ！」
近藤の過去の経験話に怒鳴って言い出すシグナム。
「銀さん、貴方の玉を私に……」
「黙れストーカー！」
猿飛の下ネタに、血管を浮かべてツッコむティアナとシグナム。
「エリオ……ルーテシア……お前等もボケるようになったな？」
「まぁ……ノリに乗ったほうが言いと思って」
「私も……」
2人のボケに呆れるヴィータに、神楽達のやり取りに乗るエリオとルーテシア。
「で……わっち等の試合はいつじゃ？」
「そうだな……今、イテツが調べてっから待とうや」
月詠の質問に気楽に答える銀時。
今の月詠は煙管をしていない。流石に試合中には出来ないであろうと考える。
だが、そんな銀時達の願いは聞かれず……
「おーい！第一試合で早速俺達の試合が始まるぞ！相手は強豪『ロイヤルゼリーズ』のようだ」
と、気合を入れて言い出すイテツだが、銀時達はこの瞬間に優勝は無理だと考えた。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

ノーヴェ
「よぉ、今回はあたし、？9のノーヴェがアシスタントするぜ」

銀八
「へい、じゃあ質問行きます。まずはこの人ペンネーム『神威　銀時』さん『唯「けいおん！の曲はどれも人気高いよね」

神威　銀時「この前も某CDランキングで二期の曲が上位に入っていたからな」

唯「今回の質問はこちらの『SOS学園』で危ない感じになっているリリカルキャラ四人（なのは、キャロ、ルーテシア、ユーノ）についてどう思います？」

神威　銀時「なのはについては銀時とくっ付けているから殺されないと思うけど」』」

ノーヴェ
「そうだな……なんかあの2人（キャロとルーテシア）が怖いんだけど何！？」

銀八

「エリオ……動揺するぜ。と言う訳で『神威　銀時』さん、これからも小説頑張ってください」

ペンネーム『ウッソ・エヴィン　』さん『ウッソ
「いつも同じ手が通じるもんか～～～～！！ガンダムゥゥゥゥゥゥゥ！！」

Ｖ２ガンダム（アサルトバスター装備）に乗ったウッソは光の翼でなのはたちのバスターを防いだ後

ウッソ
「これでも食らえ～～～～～！！」

メガビームライフル，スプレー・ビーム・ポッド，ヴェスバー，メガ・ビーム・キャノンの一斉射撃をした．
そのビームの威力はスターライト・ブレイカーの５倍ぐらいであった．

ウッソ
「どうだ！！」

かがみ
「やりすぎよ～～～～～～！！」

こなた
「いやいや・・・これで十分なんだよかがみんや～」

ウッソ
「普段あの三人やられていないし・・・たまには黒こげになる側も経験すべきです！！」

かがみ
「はぁ・・・後でどうなっても知らないわよ・・・質問です.

？ノーウェさんはナンバーズの中では一番人気みたいだけど・・・人気編から仲間はずれにされていないの？

？『G．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』について聞かせてください」

こなた
「最後は

？貧乳組のみんなに質問だよ．いま多分あの恐怖の３大王が消しすみ状態だから今のうちに薬を口に入れれると思うよ～やってみる？本人が答えてね～」

かがみ
「いい加減にその話題から離れろ！！黒神さん・・・こんな奴らですけど・・・今後ともよろしくお願いしますね・・・あと，こいつらが原因で巻き込まれたら手当てはするから・・・」『……あれ？」

と何かが飛んできた。それはウッソがメガビームライフル，スプレー・ビーム・ポッド，ヴェスバー，メガ・ビーム・キャノンの一斉射撃をした流星のようなレーザーの数であった。
それが自分所に徐々に近づき、ついには……何故か黒神に全て直撃した。

黒神
「あらヴぁあああああああああああああ！」

何故自分に当たったのか理解できなかった黒神は、黒コゲトなって気絶して倒れる。

ノーヴェ
「何で作者アアアアアアアア！？つうか狙っていたのってあの３人だよね！？なんで作者なの！？」

銀八
「……原因は今回のウッソさんの感想に答えた作者を見れば分かる」

暗い表情で銀八は、紙切れにウッソさんの感想を答えた黒神を見る。そこには３人が原因で黒神が受けるハメになっていた。

ノーヴェ
「悪魔、死神、腹黒狸！（涙）」

銀八
「まぁそんな感じだな。？の薬は当然処分しました。後、作者が３大王の生け贄に去れたので無理です。残り２つはどうぞ！」

ノーヴェ
「そう言えばディエチ以外のナンバーズの鋭い眼線は、？が原因だったんだ……（泣）」

ノーヴェ、災難だったな。

ノーヴェ
「そんで？は、あっちもあっちで苦労しているんだな。桂小太郎、高町なのは、エリザベス、八神はやてはいつでもあそこにいけるとして、そして坂田銀時の世界からは志村妙にたまと言う機械（からくり）と言う人造人間（！？）で……後は誰がいたっけ？」

新八の存在を忘れているノーヴェ。
彼の存在はミッドチルダでも銀魂組でも最も薄い存在であり、覚えている人はいるのか不思議に思うぐらいであった。
新八を知らないノーヴェを見て、銀八は笑いをこらえる。

銀八
「（ププ）……と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、小説の進みは自分自身で進めたほうが良いので、作者はいつでも楽しみに待っていますから気楽に進めてください、そんで次ぃ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
1作者さんは、銀魂、リリカルなのはキャラで嫌いなキャラを全員言ってください。
2．なのはさんがときどき放っている「デスペレード・デモンブレイカー」は本編に出ますか？
3．エリオさんに質問です。最近のキャロはどう思いますか？
最後に一言。この小説の主人公はなのはでは無く、スバルだと思います。』。ズバリ答えます……？は知ってのとおり、妙とクロノ！？は予定をしていますが、俺自身は出てほしくありません！？はエリオ、お願いします！」

エリオ

「……暴走しやすいから怖い…」

ノーヴェ
「気持ちは分かるけど、本人の前で言うなよ？」

とノーヴェは言い出す。

銀八
「と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、最後の一言は分かりますが、余りなのはを刺激してやらないでください」

ノーヴェ
「次行くぜ。ペンネーム『ヤマトノオロチ』さんからだ。『質問です。
１チンクの眼帯はなくなるとマダオみたく戦闘力が極端に下がるのでしょうか？
２銀さんに質問です。「恋姫無双」で一番好みのヒロインは誰ですか？やっぱ巨乳キャラですか？

３なのはさん達に質問です。なるとしたらどっちの方がましですか？

１マユゾンになって眉毛がつながりだめなおっさんになる

２スタンドに取りつかれて閣下になって「ＵＮＯ」をする

３ドット絵になる。

４「玉手箱Ｇ」でば―さんになる

4シグナムに質問です。柳生四天王の1人南戸粋が男性器に見えるでしょうか？』……1はそんなんで戦闘力が下がる訳ないだろ？2は坂田銀時だな」

すると、突如どこからかニコニコとフェイトとなのはがもの凄くどす黒い殺気を放ってこっちを見つめている。
ノーヴェは涙を流して青ざめ、銀八はガタガタと震えた。

銀八
「2人が怖いのでご勘弁を！3はなのはさん、お願いします！」

なのは
「3のドット絵かなぁ？」

他の3つははっきり言って嫌であるようだ。
ドット絵のほうが軽いと思ったからであろう。

シグナム
「4は私だな……そうだな……確かに男性器だな」

銀八
「即答！？……と言う訳で『ヤマトノオロチ』さん、廊下に立っていなさい。そんで次ぃ、ペンネーム『ポテトボーイ』さん『1，近藤さんは、この小説では、ルーテシアちゃんと結構一緒にいるけど、仲はいいんですか？　2，これからまた、リリカル組と銀魂組の新しいカップルが、生まれる事が、ありますか？』」

ノーヴェ
「そうだな。1は何かあの2人を見ていると、コンビと言うより父

親と娘な感じかな？」

銀八
「はぁ？ゴリラが父親って、あんな親父なら俺グレるわ」

ノーヴェ
「容赦ねぇなおい……んで2は……なんかありそうな予定だな」

銀八
「だそうです。と言う訳で『ポテトボーイ』さん、質問有難うございます」

ノーヴェ
「次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さんからだな。『ノーヴェに質問

一つ目
ノーヴェから見て、ナンバーズのメンバーで銀時達との交流によって一番変わったと思うのは誰ですか？

二つ目
近藤のアホさと山崎とディエチのラブラブっぷりをどう思っていますか？

三つ目
真選組のメンバーを簡単に説明すると近藤＝ゴリラストーカー、土方＝オタクマヨラー、沖田＝ドS王子となりますが、ナンバーズのメンバー全員を簡単に説明するとそれぞれどういう敬称が付きますか？』……ズバリ答えるな。1は当然、ディエチ。なんかアイツ以前は少しくらい感じだったんだけど……山崎と出会ってから明るく

なったなぁ。そんで2はゴリラに付きまとわれている志村妙の苦労が分かる気がする。3は……考えていなかったのでパス」

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ぃペンネーム『烈火竜』さん『ゲンヤに質問です。ディエチのお父さんになったら、ディエチと山崎との恋路を邪魔しますか？

ディエチに質問です。
山崎が所属する真選組に就職しますか？

トーレに質問です。
『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』でのトーレがゴリラに好かれてしまったことに関してどう思いますか？』……てゲンヤ・ナカジマに対する質問って、これ第三期終了後の話だろうが！」

銀八は呆れて叫びだし、当然飛ばした。
原因はこの時点ではまだ、ゲンヤはディエチの義父ではないからだ。
するとディエチが立ち上がる。

ディエチ
「や……山崎さんと一緒に居られるなら……就職しようかなっと……」

それを聞くと、何故か額に血管を浮かべる銀八とノーヴェ。

ノーヴェ
「なんだろう……この憎たらしい雰囲気は？」

銀八
「ノーヴェ、俺もさ。もう1つはトーレ、お願いします」

突如、トーレが潔く立ち上がり、

トーレ
「悪夢だぁぁぁぁぁぁぁ！」

と涙を流して叫びだす。

ノーヴェ
「……トーレ姉、動揺するぜ」

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、トーレの扱いをもうちょっと良くしてやってください。んで次ィ、ペンネーム『サディスト』さん『黒神に質問。
前の質問。必殺技ネタ見てどう思った？

銀八に質問。
最近の「プリーチ」をどう思う？（俺はグリムジョー　戦（三度目）辺りからつまらなくなったけど）

スバルに真面目な質問。
『刀』を持った以上　「斬る」覚悟も「斬られる」覚悟もあると思うが、
【死合い】をする時に『己の武士道〔ルール〕』を持って『刀』を振るっているか？

人と【殺し合い】を演じる時、相手を「斬れるか」？
スバル自身が真面目に答えてくれ。』……スバルに対する質問はスゲェな。スバルはどうなんだ？」

すると、突如スバルが立ち上がる。

スバル
「……『サディスト』さんの言う通りだよ。……それに」

少し寂しげに日本刀の首飾りを見る。

スバル
「前から思っていた……剣術は所詮は人斬り技術。それはどんなに魂を込めて鍛えたとしても変わりはしない。でもだからって私は剣を持った時から覚悟していた。……己の大切なものを護る為なら、壊される前に斬る事を。それは分かっていた……だけど……」

スバルは少しずつ暗い表情をしている。

スバル
「アーサァから『ペンドラゴブレイド』を渡されたときに改めて覚悟を決めたよ。たとえ人を斬る事になっても護りたいものを護るって」

スバルは真剣な表情で答えだす。

ノーヴェ
「何か……アイツの背負っている物がとてつもなく重たい気がする」

銀八

「それが侍の剣を持つ者の定めって奴だな……んで俺に対する質問は……とにかく最後の月牙天衝が気になるな」

銀八の答えが終わると、三大王の生け贄にされてウッソの攻撃を代わりに受けてしまった黒神が復活して起き上がった。

黒神

「僕はそうですね……前のジャンプで乗っていた銀魂のあの必殺技編ですね。最後は笑えて、あの雌ゴリラが怖っ！」

銀八

「だそうです。と言う訳で『サディスト』さん、今度からはアシスタントに対する質問もちゃんとするように」

ノーヴェ

「そんで次な。ペンネーム『月光閃火』さん『きゃふ～…月光閃火です♪

輝刃「…梅雨は毛並がダレるから少し嫌だな…輝刃だ。」

確かに…輝刃にとっては大変だよね…（汗）。あ…今回も質問あります。

1．ノーヴェに質問…っていうか要望です。一回ノーヴェを肩車したいんだけど…いいかな？

輝刃「…閃火も可愛い娘を可愛がるのか？」

うん…自分も輝刃と同じで姉が居るから、妹を可愛がる形になるんだよね…。

輝刃「…なるほどな…んじゃ、最後は俺だ。」

2．シャマルに質問だ。最近あまり出番が無いようだが…暇なら俺と閃火の所へ遊びに来てくれんか?俺なら料理も教えてやるし、閃火は閃火でお前の事を『好みの女性のタイプにピッタリだ』と称しているしな。

う…輝刃～。それは言わないでよ～…そりゃ好みのタイプだけど、ちょっと気恥ずかしいよ…（照）。』」

ノーヴェ
「質問答えるな……却下だ!／／／」

顔を真っ赤にして答えるノーヴェ。

銀八
「早いな、おい。……んじゃ次はシャマル、お願いします」

シャマル
「お願いします!」

涙を流して土下座するシャマル

銀八
「……と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい」

ノーヴェ
「次いくぞ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからの質問だ。
『リュウセイ「おっす!オラ、リュウセイ。わくわくしてきたぞ!」

こなた「リュウセイさん！幾ら作者が最近『ド○ゴ○ボ○ル』にはまってるからってそれは無いと思うよ（汗」

リュウセイ「そっか？まぁ良いや、そんじゃ質問行くぜぃ！」

こなた「まず私からね『リリカル組みの皆さんに質問します、今ｓｉｂｕｇａｋｉさんの小説で出してるオリジナルキャラクターである『シュヴェルツェ』をどう思いますか？自分なりにかなりドＳっぽく書いたつもりなんですが・・・』って！もうあんなのとは会いたくない（涙」

相当嫌な思い出らしく号泣するこなた

リュウセイ「ははは、災難だったなこなた・・・そんじゃ次は俺が行くぜ！『最近ネタ切れで作者が死に掛けてるんですが・・・どうすれば黒神さんみたく面白いネタが思いつきますか？』って、これ作者の質問じゃねぇか（怒り」

額に血管を浮かべて叫ぶリュウセイ

作者

「すんません！かなり長くなってしまいました（汗）最後に作者から一言、この小説毎回楽しんでます」『……なんか苦労が伝わってくるような」

銀八

「では、最初の答えは……代表として今回のアシスタントであるノーヴェ、お願いします！」

ノーヴェ
「そうだな……何かアイツ人間かぁぁぁぁぁ!?」

青ざめて叫び答えるノーヴェ。

銀八
「確かに……そんでそうだな……黒神、何で思いつけるんだ?」

黒神
「そうだねぇ……僕の場合は大抵は漫画の事ばかりを思い出すと、何か勝手にひらめくんじゃないかなぁ?」

銀八
「前から思ってたんだが、お前の頭はどうなってんの!?」

黒神
「企業秘密」

ノーヴェ
「メッチャ気になんだけどォォォォォォォ!?」

銀八
「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、これからも頑張ってください。次ぃ、ペンネーム『Σ』さん『まぁ、グダグダ言いましたけどね、早速質問させていただきます。もし銀さんが某新宿の種馬みたいなモッコリスケベだったら皆さん（なんかフラグが立っちゃった人）はどんな反応してましたか?ひょっとして女性陣全員に１０ｔハンマーが普及されてますか?』」

すると、そこにはどす黒い殺気をさらに放っているフェイトとなのはがいた。
銀八とノーヴェは青ざめて大量の汗を流す。

銀八
「怖すぎるので却下！マジ勘弁してください！」

ノーヴェ
「2人に殺されるから、どうかぁぁ！」

と銀八とノーヴェは強く土下座する。

銀八
「と言う訳で『Σ』さん、次は銀さん以外に関する質問をお願いします！（泣）

すると、2人の殺気が治まって、銀八とノーヴェはホッとする。

ノーヴェ
「……じゃあ次行くか。ペンネーム『正宗の胃袋』さんからだ。『ノーヴェに質問です。
銀時と銀八先生に突然、後ろから胸を触られたらどうしますか？（出来れば銀時にはあまり酷いことをしないでください。代わりに銀八先生にならぶち殺してもいいですよ』……ぶっ殺す！／／／」

ドカァ！

銀八
「まだ触ってねぇんだけどぉぉぉぉ！？」

突如の攻撃に吹飛ばされる銀八。
ノーヴェは顔を真っ赤にして叫ぶ。

ノーヴェ
「『正宗の胃袋』、セクハラ質問は控えろォォォォォ！／／／」

銀八
「あ痛たた……んじゃ次行くか。ペンネーム『私にいい考えがある』さん『ヴィータとシグナムに質問です。
アイドル編で、劇場版銀魂を見てて思ったのですが・・・その時の同時上映の映画ってリリカル世界でもまさかトーマスの映画もやってたのですか?、それと便座カバー』」

突如、２人が立ち上がって答える。

シグナム
「いや、トーマスっと言う映画はなかった」

ヴィータ
「と言うか同時上映なんてなかったぜ?」

そう答えて座りだす。

銀八
「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていなさい。
はい次ィ、ペンネーム『白米』さん『
銀時Ｌｏｖｅな皆様に質問です。
次の内、直面するならどれがマシですか?
Ａ．銀時の死。

B．屁怒絽様の顔面にアンパンをスパーキング。

なお、最初に選択権を潰しておきますが、
・私に向かって攻撃する、または脅す
・八当たりとして、黒神さんや銀八先生、ノーヴェさんを攻撃する、
または脅す
・「どっちも嫌だ」と答える
・この質問を破り捨てる（魔法で吹き飛ばすのもダメ）
・無解答、黙秘権を使う
は、ダメです。ちゃんと答えてください。

変な質問ですいません（汗）
知りたい事なので・・・。』……何かおっかなすぎなんだけどぉぉおおおおお！」

ノーヴェ
「どういう質問だコレ！？」

銀八とノーヴェは青ざめる。
そしてフェイト、なのは、スバル、ティアナ、アルフ、シグナム、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、猿飛は立ち上がり、答える。

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛
「B．屁怒絽様の顔面にアンパンをスパーキングで！」

銀時の死が考えられない１３人はBがどれ程恐ろしいのか考えられずにBを選択する。

銀八
「まぁ勢い良く答えてくれたな……と言う訳で『白米』さん、廊下に立っていなさい」

ノーヴェ
「これが最後だな。ペンネーム『武士堂』さん『質問。
1、銀さんや桂は西洋剣を扱えますか？
木刀や日本刀と使い方がかなり違うけど、でも色んな意味（ここ重要）で器用な二人だから出来るんじゃないでしょうか？
…ゾーマ戦の時にレヴァンティン使ってたのは除外して下さい。デバイスだし、二刀流でしたから。
ちなみに使うのは、一般的なロングソードで。

2、この作品のスバルとＦａｔｅのアーチャーが戦ったら、どっちが勝ちますか？
出来ればで良いので、アーチャー本人を呼んでもらって詳しい解説をお願いします。』」

銀八
「ズバリ答えます。1はそうですね……おそらく扱えるんじゃねぇ？銀さんは時々、槍やクナイも使えてんし、ヅラも爆弾を良く使うからさぁ。んで2は……」

？？
「それは私が答えよう」

と、突如後ろから1位の男が現れる。
白髪で赤い服を着ている男、『Ｆａｔｅ』のアーチャーであった。

ノーヴェ
「ほ……本物ォォォォォォォ！？」

まさかの本人が来たことに驚きを化していなかった。

銀八
「今回の特別ゲストとして登場させました。では解説おねがいします」

アーチャー
「うむ。スバルは坂田銀時と言う英雄に憧れて剣術を学びだした事は承知した。だが彼女は力を込めた剛なる剣術を求めていたが、それは自分の剣術には合わない為に、速さを活かした抜刀術を中心とした静なる剣術を学びだした。しかしそれが当たり、神速の剣術を会得して、さらには桂小太郎が言った様に彼女には、本人は気づかなくても天性な才を持っている。それにより原作での体術で戦う彼女より数倍強くなり、さらに魔力がそれに反応して彼女の強さに合うかのように自然的に上がってきただろう。おそらく、彼女の剣はセイバーに匹敵する。その為セイバーも、侍の魂が宿った彼女に、騎士の魂を抱いて強い対抗心を持つであろう。つまり、私と言えども本気を出した彼女に対抗するのは難しい為、勝てないとは言わないが私か彼女、どっちが勝つかは分からない」

銀八
「はい、以上アーチャーの解説でした」

銀八が軽く拍手すると、アーチャーは「では、私はコレで」と言って去る。

銀八

「と言う訳で『武士堂』さん、廊下に立っていなさい。以上持ちまして本日の質問は終了」

ノーヴェ
「何か……他のナンバーズに冷たい眼線で見られた理由がわかって、帰りづれぇ……」

銀八
「ノーヴェ……災難だな……では次回のアシスタントは山崎とディエチにさせてもらいます。後、この後あとがきで、作者が重大発表があります」

ノーヴェ
「最後まで見てやってれよな。それじゃ……」

銀八・ノーヴェ
「次回もお楽しみ～」

第七十三訓：練習をせずに身体能力だけで勝てるほど甘くはない（後書き）

黒神
「突然ですが、重大発表をいたします」

作者である黒神は、土下座して重大発表をする。

黒神
「『銀八先生質問コーナー』が本編より長いと言う作者の一部の方が言い出し、確かに中には本編より『銀八先生質問コーナー』の方が長いのが多いと思います。ですので、僕は考えました。」

黒神はある事を決意して言い出す。

黒神
「次回から『銀八先生質問コーナー』を、五話ごとに1回する事を決意しました！当然のように、質問を応募した後の追加質問は当然なしであり、1人の質問は一度に2つまで応募させてもらいたいと思います。何とぞ面倒かもしれませんが、どうぞご協力をお願いします」

そう言って黒神は頭を下げる。

黒神
「では次回、「ホームランだけが打線ではない」テイクオフ」

第七十四訓：ホームランだけが打線ではない（前書き）

黒神
「いやー、ワールドカップも本戦が始まり、日本は見事に予選突破」

銀時
「確かになぁ。今年の日本チームは間違いなく歴代最強と行っても良いだしよぉ。んで作者は日本が勝てると思うか？」

黒神
「さぁ、対戦相手は強豪ですが日本も調子が良いと言うので、分かりませんね。だけど前のワールドカップよりは面白い事は確かですね」

銀時
「そうだな……今回の試合はどのチームも攻撃的で面白いしよぉ、コレなら作者が興味を持つのも分かるわ」

黒神
「でしょう。そんで今日が日本とパラグアイの試合。良い試合である事を祈って期待します」

銀時
「……所でよぉ……ここって確かぁ、野球の話が進んでなかったっけ？何でサッカー話？」

黒神
「……り……『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります！」

銀時
「ごまかしやがったぁあああああああ！」

第七十四訓：ホームランだけが打線ではない

グランドに2チームが9人ずつ並んで整列していた。

1チーム目は『イヤンキッス』。

もう1チームは『ロイヤルゼリーズ』。

はっきり言って『イヤンキッス』に勝ち目はなかった。

何故なら『イヤンキッス』のメンバー、銀時、スバル、ティアナ、ヴィータ、シグナム、近藤、山崎、ディエチ、猿飛は全然野球の練習をしていないからであった。

しかも、イテツからさらに悪い報告があった。

それは『ロイヤルゼリーズ』は昨年の準優勝チームであり、今大会の優勝候補の一角であった。

（最悪だぁぁぁぁぁぁぁ！いきなり優勝候補の強敵チームと試合かよ！こっちはまともに野球をやったことないんだぞォ！どうすんだよ一体ぃぃぃぃぃぃ！）

近藤はもはや終わったと絶望を味わっている。

誰もが優勝は終わったと思った時だった。

「おや、まさか君達までこの大会に参加しているとはな……」

銀時の存在に意外そうに声をかける女性の声が聞こえた。

銀時達はその声が聞こえた方向に向けると、そこには『ロイヤルゼリーズ』のユニフォームを着ている柳生九兵衛の姿があった。

「九兵衛！？何でテメェが！」

銀時は九兵衛の存在に驚きだした。
銀時だけではない。スバル達も敵チームに九兵衛がいた事には驚きを隠せなかった。

「実は、このチームはチーム数が9人しかいなくて、1人は足の骨折で入院し、偶然にも卵焼きを作るために卵を買いに行った時、野球の軟球が降ってきて、思わず斬ってしまったら、その腕を見込まれて助っ人を頼まれた訳だ」

などと説明する九兵衛。

「九兵衛さんが助っ人に入ったんじゃヤバイじゃないですか？九兵衛さんの剣術は神速と謳われている、それをバッティングに活かされちゃ……」

山崎は九兵衛の神速のスイングを考えて例えると、さらに状況が悪くなった。

「九兵衛殿、そろそろベンチに」
「ああ、それじゃあお互いに正々堂々とやろう」

『ロイヤルゼリーズ』の選手が九兵衛に話しかけると、九兵衛はその選手と一緒にベンチに向かって走り出す。

「ティア……なんか一回戦からとんでもない試合になりそうな気がするよ」
「……そうね」

スバルとティアナはこの試合、ちゃんとした形で終わらないと嫌で

も確信してしまった。
先攻は『ロイヤルゼリーズ』であり、銀時率いる『イヤンキッス』は後攻になった。

「プレイボール！」

審判が大きく叫びだすと、試合が始まる。

＊

一方の観客席では、フェイト、なのは、アルフが私服の姿で野球の試合を見ていた。
原因は『コーシカップ』の開催放送で、何故かユニフォームを着ていた銀時の姿がいたからであり、２人は留守をキャロ、シャマル、ユーノに任せてこの野球ドームに来たのである。

「テレビで銀時達が映っていたから何をしていると思ったら……」
「まさか野球のチームに入っていたとは……」

フェイトとなのはは呆れて口に出す。
しかも何故か、『マリンナッツ』では桂、エリザベス、はやて、ザフィーラ、辰馬、ヴァイスの６人が助っ人としていたり、銀時達の対戦相手である『ロイヤルゼリーズ』のチームメンバーに九兵衛がいたりなど、最早機動六課の仕事をサボっているようにしか見えなくなった。

「一体何をやっているんだい、銀時達は……でも、何か面白そうじゃん♪」

「私はなんかまともな試合結果にならないと思うんだけど……」

試合結果を楽しみにするアルフと、とんでもない事が起こりそうな気がするフェイト。

≪一番ピッチャー、柳生九兵衛≫

すると、打席にはヘルメットを被った九兵衛の姿があった。

近藤はさっき山崎が言い出した事を思い出して警戒する。

（まともにやっても打たれる気がする……しかし逃げてはいかん！ここは一気に……投げるべし）

「行くぞ、万事屋！」

「よっしゃ、こいゴリラ！」

近藤と銀時は叫ぶと、近藤はフォームを構え、思いっきり投げた。

速度は１３９ｋｍ／ｈ。

以外に速い投球を投げる近藤だが、

「ふん！」

カキィン！

それを九兵衛が素早く振って打つ。

ボールは地面を強くバウンドする。

「なぁ！」

シグナムがそれを飛び込んで取ろうとするが、打球はそれを軽くぬける。

「何の！」

しかしそれをライトのヴィータが見事に取る。

投げようとするが、すでに九兵衛は二塁ベースにいた。

「セーフ！」

余裕に二塁側に到着した九兵衛はフッと笑ってガッツポーズを取る。

「いきなり二塁側に……まずい、完全にこっちが圧倒的に不利じゃないですか……」

ベンチにいるエリオは心配そうに言い出す。

「神速と謳われているスイングで討ち取るとは……さすが柳生九兵衛といったところか」

イテツは九兵衛のスイングに驚きだす。

近藤にいたっては「やばい！やばすぎなんですけどぉぉぉぉぉぉ！」と、大量の汗を流して青ざめている。

（ヤバイ……ゴリラの奴上がっていやがる。しかも2番からは野球の経験がメッチャある実力者ぞろいの選手じゃねぇか……一体どうすれば……あ、そうだ）

ピンチに追い込まれた銀時はある事を思い出して、「タイム」と言って近藤に近づく。

「おいゴリラ」

「なんだ、万事屋」

銀時はある事を近藤に伝える。

「もし俺達が優勝すれば、お妙にゴリラのエースの活躍ぶり、俺が伝えっから。そうすれば、お妙もゴリラの惚れるかもしんねぇぞ」

銀時のその言葉に、近藤の眼から火が燃え上がってきた。

「ぬぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！この近藤勲！必ず『イヤンキッス』に優勝を導かせるぞぉーーーーー！」

闘志を燃やした近藤は大きく叫び、銀時は狙い通りであるとにやけて、「ま、頑張れよ」と言って捕手側に戻る。

≪2番ファースト、ノダ・フェスト≫

すると、屈強な肉体をしているアフロヘアーの男が打席に立った。

「はっはー！私が一気にホームランを打ち……」

ズコォーン！

ノダは自信満々げに言い出すが、それ以前に近藤の剛速球が炸裂した。

その速さは１５５ｋｍ／ｈ。

はっきり言ってメッチャ速い投球。

「す……ストライーク！」

突如の近藤の速球に唖然と驚いた監督は我を思い出して判定を言い出す。

ノダは突如の変化に唖然としている。

「痛て……コイツはァ、行けるかもしれねぇ」

まさかの近藤の剛速球に銀時は勝機ありと確信する。

その後も、近藤の剛速球によりノダは三振してアウト。

さらに続いて3番と4番もアウトになってチェンジ。

「局長、凄いじゃないですか！」

「一気に相手を三者三振するなんて、しかも速さはプロに近かったですよ！」

「やるネ、ゴリラ！」

山崎、ディエチ、神楽は近藤の意外な活躍に感心している。

「いやー、何かお妙さんの事を思い出したら調子が出て」

「アンタの力の源はお妙って女かよ？」

愉快そうに言い出す近藤に、力の源がお妙である事に呆れるアギト。

「よし、今が勝機！このまま一気に点を取りまくるぞ！」

リーダー的に仕切って言い出すシグナム。

それを見たティアナとヴィータは呆れる。

「シグナム副隊長って、仕切るの好きなんですね」
「……そうだな」

＊

そして『イヤンキッス』の攻撃が始まり、打席に猿飛が立つ。

≪一番レフト、猿飛あやね≫
「銀さんの為、ここは確実にヒットさせてもらうわ！さぁ来なさい！」

猿飛はやる気を表してバットを構える。

「我が柳生家の剣術は神速と謳われる。我が神速のストレートを喰らうが良い！」

いや、コレは剣術関係ないから。
野球ですから。

と思わずツッコみだすと、

「はぁあああああああ！」

九兵衛は思いっきり投げる。
しかし、

「はぁ！」

猿飛は思いっきりバットを振るい、その球を当てる。
しかし高く上がってしまい、その打球はそのまま九兵衛の下に落ちて、九兵衛はその球を取る。

「アウト！」

審判が大きく言い出すと、猿飛は「きいいいいいいいい！」と悔しがる。

≪2番ピッチャー、近藤勲≫
「この近藤勲、お妙さんの為に必ず打つ！」
「いや、お妙はいねぇって」

近藤の近いに呆れてツッコむ銀時。
それを気にせずに近藤は打席に入り、バットを構える。
しかし、

ドゥン！

ドゥン！

ドゥン！

「ストラァーイク！バッタアウト！」
「あれ、……あれェェェェェェェェェェェ！？」

華麗に三振したのであった。

神速の直球（ストレート）を投げる九兵衛の球の速さは１５６ｋｍ／ｈ。
はっきり言ってわずかに近藤より速かった。

≪すごい、さすが『ロイヤルゼリーズ』のエースピッチャー！しかもそのピッチャーはあの『ゾーマ事件』を解決した英雄の１人、柳生九兵衛の速球は見惚れますねぇ！≫

解説者は九兵衛のピッチングを褒めていた。

「何やってんだゴリラ！」
「お前、いくらなんでも三振はないアルヨ！」

近藤の三振に厳しく言い出す銀時と神楽。

「そこまで言わなくても良いんじゃねぇ！？何、さっきのピッチングとは正反対な評価！」

半泣きで近藤は叫びだす。

「落ち着いてください、近藤さん。まだ１回裏ですから」

エリオは近藤を慰めるように言い出す。

「次は……主の番のようじゃな」

月詠はスバルを見て言い出すと、スバルは打席に入った。

≪３番サード、スバル・ナカジマ≫
（うわぁ～、来ちゃったよ私の出番。九兵衛さんの直球（ストレート）速いよぉ）

弱気になったスバルは仕方がなくバットを握るが、妙な違和感を感じたのである。

（何か……両手で刀を持っている時とは違う……それにこの違和感じゃ落ち着かないから……）

そう言って、スバルはバットをバットの握り方じゃなく、刀の握り方に変えてバットを構える。

（スバル・ナカジマ……機動六課最強として謳われる女であり、魔導士でありながらも侍の剣術を学ぶ者か。……だが、いかに彼女でも野球に関しては素人！神速と謳われた僕の直球（ストレート）を打てると思うなぁ！）

そしてスバルはフォームを大きく構え、そのまま大きく振り、素早い直球（ストレート）を放つ。

そこでスバルが……

ブォン！

突如、彼女の両腕とバットが一瞬だけ消えた。

それだけではない、九兵衛の放った球がキャッチャーのグローブに届いていない。

（なに？）

どうして消えたのか不思議がる九兵衛。

球はと言うと……

ガコォーン！

突如、何かがぶつかった轟音が聞こえた。
轟音が聞こえた方光を誰もが振り向くと、ポールにぶつかった打球が見えた。
その光景を誰もが見て騒ぎ出す。

≪な……なんとファールポールに直撃してホームラン！てかスバル選手の腕が一瞬消えたと思いきや、眼にも移らない神速のスイングが炸裂してまさかのホームラン！『イヤンキッス』先手点を取りましたぁ！≫

イヤンキッス　１－０　ロイヤルゼリーズ

「スバル、凄ー！」

まさかのホームランにアルフは驚きだす。

「神速の剣技を元に神速のスイングで打つなんて……これひょっとして銀時達いけるかも！」
「確かに！」

フェイトとアルフも、これなら銀時も勝てるかと考える。
スバルの思わない神速のスイングが一点をもぎ取り、コレに勢い付けられるからである。
２人がそう思った瞬間、なのはがあり得ないばかりに驚く

「スバルに苦手な事はないの？」

とそう一言呟くのであった。

＊

「え……えっとう……」

スバルはあわあわと慌てて、審判に質問する。

「コレって、一周したほうが良いですか？」

そう言い出すと、審判は「何を言っている。ホームランしたらそうするんだろ？さっさと一周しなさい」と言い出し、スバルは苦笑しながらも塁線をゆっくりと走り、ホームを踏んで銀時達の元にかけつける。

「ただいま、皆」

スバルが笑顔で笑い出して言い出すと、

「スゲーじゃねぇか！まさかの先手一点はでかいぞ！」

愉快そうに喜ぶイテツ。

「コレってスゲーんじゃねぇ！？もしかして俺達勝てるんじゃねぇ！」

「行けますよコレ！思わぬ好機じゃないですかぁ！」

近藤と山崎はまさかの1点に喜びだす。
コレには銀時、神楽、ティアナ、ヴィータ、シグナム、エリオ、ルーテシア、ディエチも思わず喜びだす。
勝率の少なさが一気に多くなったからである。

「大したものだわ。今のスイング、あの柳生九兵衛の神速と謳われる程の速さを遥かに上回る神速の速さだわ」

猿飛もスバルのバッティングは高く評価する。
すると月詠はある事を思い出した。
それはスバルのバットの握り方にある。

「そう言えば……スバルは何か刀の握り方のようなバットの握りをしていたようじゃな」

月詠がそう言うと、銀時達はある事を思い出す。

「あ、神速剣術！」
「そうよ、スバルにはそれを野球のバッティングに活かせるんだった！」

エリオをティアナは喜びだして言い出す。

「そうか、スバル殿が刀の握り方でバットを握った事で、神速と化したスイングを可能にしたのか！」
「それってつまりホームランを打ちまくりじゃないか！」

近藤とヴィータは正にスバルはスラッガーとしての素質を持っていると確信する。

「スゲェじゃねぇかスバル！この調子でジャンジャンと点取り捲ってくれよ！」

愉快そうに笑って、銀時はスバルの頭を撫でる。
憧れの人間に期待されて頭を撫でられた事に顔を真っ赤にし、嬉しく笑うスバル。
その光景を嫉妬する眼線で見つめるティアナと猿飛。
月詠にいたっては、銀時が他の女性とかかわっている事に少し複雑な気持ちになる。
そしてシグナムはと言うと……

「良し、次は私だな！」

スバルに負けじと、自分もホームランを狙うのであった。

≪４番ファースト、シグナム≫

シグナムは打席に入り、九兵衛を見つめてバットを構える。

（まさか、この僕の直球（ストレート）が撃たれるなんて……不覚！）

九兵衛はメッチャ悔しがっていた。
それと同時にこれ以上の失点を許しはしないと強く決意した。

「さぁ来るが言い！この『烈火のスラッガー』と呼ばれたシグナムが、追加点を頂こう！」

自信満々にホームラン宣言をするシグナムに、少しムッとする九兵衛。

「僕の球をそう簡単に打てると思うなぁ！」

と叫びだして球を投げる。

「はぁあああああああああああ！」

シグナムは対抗するように豪快に振るう。

コレで2連続ホームラン……と思われたが……

「あり？」

球はシグナムのバットに当たらず、捕手のグローブの中に入っていた。

「ストライク！」

まさかの豪快なる空振り。

これにはシグナム本人だけじゃなく、九兵衛や銀時達など唖然とする。

4番バッターがこうも簡単に空振りなんて、予想はしなかった。

しかしシグナムはわざとらしく咳をして、構えを取る。

「先ほどは失敗したが……今度こそ！」

と自信満々に言い出すが、

ドス！

「ストライク！」

またも空振り。

ドス！

「ストライク！バッターアウト！チェンジ！」

さらに豪快にバットを振るうが、あえなく三振。
コレによってスリーアウトでチェンジ。
シグナムはそのまま黙ってベンチに戻って、

「……すまん、アウトしてしまった……テヘ♪」

ブチィ！

「『テヘ♪』じゃねぇえええええええええええ！」

ガコォーン！

「ごふぁあああああああああああああああ！」

突如、ヴィータのグラーフアイゼンが炸裂してシグナムを吹飛ばす。

「何やってんだぁ！？」
「自信満々に自分を４番にした割になんですかこの結果！？」
「結局、シグーは何をしたいアルかァァァァァ！」

叫びだして怒り出し、額に青筋を浮かべてシグナムをフルボコにするヴィータ、ティアナ、神楽の３人。

「ねぇ、彼女って意外に馬鹿ね？」
「…いや…ひょっとしたらキャラ崩壊かもしれぬが……」

シグナムを見て意外なクールボケであると確信する猿飛と、呆れてしまう月詠。

「なぁ、コレってシグナムのキャラ崩壊なんじゃねぇ？」
「うん、そうですね……」
（クスクス♪）

何か哀れに感じてしまった銀時とエリオに、ルーテシアが面白そうに笑い出す。
イテツにいたっては唖然としていた。

「……シグナムさん」
「……あれが、あれが『烈火の将』と呼ばれたシグナムなのか？」

コレにはなのはとアルフ、そして唖然と固まってパクパクと口を動いているシグナムはメッチャ呆れだす。
最初に出会った時のシグナムとは全然違っていた。

「ま……まぁ、とりあえず１点あれば十分ですし……とにかく行き

ましょう」
「そ……そうだね」
苦笑しながらそう言いだすディエチと山崎。
銀時にいたっては「やれやれ」と呆れて言い出して先にグラントに向かう。

2回表

次は5番のキャッチャー、コマツであった。
かなり正確なバッティングをする為、『ロイヤルゼリーズ』の中ではかなり打撃力はある。

（シグナム殿のあの予想外な三振はどうでもいいとして、ここはスバル殿から貰った援護を無駄にしない為にも……俺が抑える！）

そして近藤の剛速球が炸裂した。
１５５ｋｍ／ｈの剛速球が炸裂するが……

ガキィン！

「あれぇえええええええええ！？」

球は見事に打たれ、近藤は叫びだす。方向はスバルのサードに向かっている。
スバルは慌てずに飛んでくる打球に合わせてグローブを構える。
コレならまずは1アウトは確定であると確信する。

だが、

ヒュ～ン。

その球はスバルのグローブには入らず、そのまますり抜けてレフト前ヒットになった。

「ゑゑゑゑゑゑ！！？？」

誰もが叫びだして、絶叫する。

「えええええ！？どうしよう、ボールのキャッチするの失敗しちゃったぁ！」

完全に予想外なミスで戸惑うスバル。

しかし猿飛が忍者の特徴である素早い移動で球が地面にバウンドした瞬間にグローブでキャッチする。

「何やっているのぉ～～～～～～～！？」

そう叫びだしてファーストにいるシグナムに投げる。

しかも完全に打者は一塁ベースを踏んでセーフである。

「何やっているのよスバル、ちゃんとしなさいよ！」

センターを護っているティアナが怒鳴って忠告する。

「ごめんなさぁ～い！」

半泣きで叫びだして謝罪するスバル。

そして、この瞬間に『ロイヤルゼリーズ』が動いた。
『ロイヤルゼリーズ』側のベンチで監督らしき人物が何やら指示をするように選手に言い出す。
そして6番バッターが打席に着く。

≪6番センター、コノエ≫

アフロヘアーのグルグル眼鏡男がバットを構えて近藤を見つめる。
近藤は構わずに剛速球を投げるが……

カキィーン！

「嘘ォーーーン！」

またもや近藤の剛速球が打たれて、内野ゴロとスバルに向かっている。

「あ……あわわわわわわわ！」

スバルは慌しくなるが、前に出ると豪快に転びだす。
そして球はそのままサードを越えて猿飛が全力疾走でグローブで球を取るが、すでにコマツは二塁側、コノエは一塁につく。

「セーフ！」

監督が叫びだして言い出す。
そして銀時達は確信した。

「ひょっとして……スバルって」
「攻撃が優れている分、守りがド素人並って訳？」

銀時とティアナの思いは的中する。
実はスバル、グローブでボールをキャッチするのがかなり下手。
その為、野球の守りはスバルに全然と言っても良いほど向いていない。

その後も『ロイヤルゼリーズ』はジャンジャンとサードの向かって打ち、一気に3点も取られたが何とかスリーアウトでチェンジになった。

イヤンキッス　1－3　ロイヤルゼリーズ

「一気に3点取られちゃった！？」
「と言うよりスバル、ボールのキャッチが下手すぎる！」

まさかの大逆転に驚くアルフとフェイト。
原因はスバルの守備が他の誰よりも下手であったからだ。

「なんだ、スバルにも欠点はあったんだぁ♪」
「なんで嬉しそうな顔で言うんだい、なのはぁ！」

スバルの欠点に安心するなのはに、あり得ないと言うばかりにツッコむアルフ。
その様子を苦笑してみるフェイト。
こっちはこっちでツッコむのも大変であった。

＊

「本当にご免なさぁ～い！」

土下座して謝罪するスバル。

ここは守備位置を変えたほうが良いと考えるが、イテツが言うからにはこの『コーシカップ』には特別ルールが存在していた。

その１つ、試合中の守備位置交代は禁止されている。

つまり、一度グランドで守備位置に立つと、選手交代は出来ても守備位置はそのままにしなければならないのである。

「気にするな。スバルの守りが不甲斐ない分、この私が点を取れば良いだけの事だ」

「さっき無様に三振した女がでかい自信を持つなぁー！」

自信満々に言い出すシグナムに怒鳴ってツッコむ神楽。

「か……神楽さん、そこまで言わなくても……」

神楽を抑えるように、エリオが苦笑して言い出す。

「んじゃ、俺が行ってくるわ」

バットを持ってヘルメットを被り、銀時は打席に向かう。

≪５番、バッター、坂田銀時≫

すると、観客の誰もが大絶叫する。

伝説の英雄とも言われる銀時の活躍を、その眼で焼き付けられるの

が凄く嬉しいからである。
もはや銀時はミッドチルダでも英雄的な存在であった。

「銀さぁ～ん♪」
「銀時ぃ～♪」

なのは、フェイト、アルフも熱狂して叫びだす。
そして銀時がバットを構えると、九兵衛も真剣な表情で見つめる。

「まさかこのような形で君と再び交えるとは……それでも容赦はしない！」

九兵衛は大きくフォームを構える。
おそらくは先ほど以上に素早く投げるつもりであろう。
銀時も真剣にバットを構えるが、はっきり言って九兵衛の神速の直球（ストレート）を打つ自信はない。
どうすれば良いかと考える中、

「銀時ぃーーーーーーーーーー！」

シグナムが銀時に叫びだし、ある事を言い出す。

「優勝したら、チョコレートパフェを好きなだけ奢ってやるぞォォォォォ！」

彼女の叫びが彼の耳に響きだし、そして九兵衛の投球が炸裂する。
その速さは１５７ｋｍ／ｈと更に速くなっている。

しかし、闘志を燃やした銀時はそれにも臆せず、

「チョコレートパフェーーーーーーーーーー！」

カキィーン！

スバルの神速のスイングとは対極的な豪快なる鋭い速さのスイングで打ち、その打球は外野スタンドを超えて場外した。
コレには九兵衛は唖然とし、観客は大興奮して歓喜に叫びだす。

イヤンキッス　２－３　ロイヤルゼリーズ

≪じょ、場外ホームラン！坂田選手、見事なホームランで『イヤンキッス』に２点目！これぞ正に、英雄の力！≫

解説者も思わず興奮して解説する。

「きゃー、銀時すごぉーい！」
「銀さぁーん！」

フェイト、なのはも叫びだしてアルフも大喜び。
なんやかんやで彼女達も銀時達の応援をしに来たのであった。

＊

一方の銀時は一周してホームイン。
そのままベンチに戻ると、

「銀さぁ～ん！私メッチャ感動したわぁ！だから私が貴方のおチ○チ○を癒し……」

ドカァ！

「ごふぁあああ！」

飛び込む猿飛に、ティアナとシグナムのかかと落としが炸裂して、猿飛の後頭部に直撃する。

彼女は当然気絶し、銀時、神楽、月詠は呆れて、スバル達は青ざめる。

「うっし。んじゃ次頼むわ、ヴィータ」

「任せろ」

勢いづけてヴィータも打席に入る。

しかし……

カキィン！

九兵衛の直球（ストレート）を打つが、それがピッチャーフライとなってアウトとなる。

「畜生ーーーーーー！」

メッチャ悔しがるヴィータ。

コレで1アウトとなって追い詰められる『イヤンキッス』。

≪7番セカンド、山崎退≫

（はぁー、何か勝てる気がしなくなってきた。いくら旦那とスバル

ちゃんの打力が強力とは言え……俺を含めてそれ以外の打力は素人以下。おまけにスバルちゃんの守備不足を突かれて一気に大量失点。もうダメだなぁ）

溜息を吐きながら山崎は諦めかける。

すると……

「山崎ィィィィィィ！」

近藤が大きく叫びだす。

「お前の活躍、ディエチちゃんに見せ付けてやれェェェェ！」

「え、ちょ……近藤さん！？／／／」

突如の近藤の発言にディエチは顔を真っ赤にして戸惑う。

それによって火がついた山崎はバットを強く握りだす。

九兵衛の神速の直球（ストレート）が炸裂するが、

「きぇえええええええええええええええええい！」

カキィーン！

山崎の渾身のスイングが炸裂して、打球は大きく飛ぶ。

そしてその打球はライト側のフェンスに直撃する。

山崎は凄まじい速さで次々と塁を踏んで爆走中。

≪打ったぁーーーーーーー！コレは大きい！豪快なるクリーンヒット！そしていまライトのシンジ選手が今、球を取って三塁側に投げようと……て、あああああ！≫

解説者は山崎を見て驚きだす。
なんと山崎がまさかのホームインに向かって爆走中。
≪なんと山崎選手、今だなお爆走中！まさかのランニングホームラン狙い！≫
ある意味、ホームランよりメッチャ難しい狙いに誰もが驚きを隠せなかった。
そしてライトにシンジは大きくキャッチャーのコマツに投げる。
「ふざけやがってェェェ！」
そう叫びだして強烈な返球が炸裂し、キャッチャの小町がそれをキャッチして山崎にグローブをぶつけようとするが、
「とぉおおおおおおおお！」
山崎がコマツの頭上を飛び越えて体を回転させ、綺麗にホームに着地する。
判定は当然のように、
「セェーフ！」
見事にランニングホームランが達成した。
ワァアアアアアアアアアアアア！
≪な……なんという事でしょう！山崎選手、まさかのランニングホ

ームラン達成！コレで同点です！≫

イヤンキッス　３－３　ロイヤルゼリーズ

「山崎ィィィィィィ！」

近藤がメッチャ喜びだし、山崎に無かって飛び込んで抱きつく。

「スゲーぞ、まさかランニングホームランできるなんて上司として誇り高いぞォォォォ！」

「きょ……局長！苦しいですってばぁ！」

部下の活躍に誰よりも喜ぶ近藤。

しかし普段の山崎ならこのような活躍は出来ないが、ディエチに良い所を見せたいと言う思いが力と化して、点をもぎ取ったのである。

言うなればコレも愛の力と言うべきだろう。

「山崎さん！」

ディエチが山崎に駆けつけると、近藤は邪魔をしないようにベンチに戻る。

「す……凄かったですよ……山崎さんのランニングホームラン……」

「ディエチちゃん……俺、やったよ。仲間のために、そしてディエチちゃんの為に……」

「山崎さん」

「ディエチちゃん」

徐々に甘い雰囲気になる2人。
しかしここは野球場の為、その甘い空気はもろく崩れだす。

「見せびらかしてんじゃねぇーーーーーーー！／／／」

ドカァ！

「ごふぁ！」

ヴィータが飛び蹴りを炸裂させて山崎を吹飛ばす。

「山崎さん！」

ディエチは慌てて山崎に駆けつけるが、山崎は伸びて気絶してしまった。

「ちょっとー、何やっているのヴィータ殿！？2人の恋路を邪魔する事ないでしょ！」
「アホかぁ！私達は今、野球をやってんだぞ！こんな所でいちゃいちゃさせてんじゃねぇ！」

近藤のあり得ないと言うばかりのツッコみを更にツッコみ返すヴィータ。

「いやー、今のザキを新八に見せたら、アイツメッチャ嫉妬するだろうなぁ？」
「確かにそうネ。ディエチといちゃいちゃしているザキの姿を見たぱっつぁんの悔やし顔が浮かび上がるヨ♪」

銀時と神楽は今の山崎を、新八に見せてやりたいと考える。
彼がどれだけの屈辱な嫉妬をするのか眼に浮びだす。

その後も、ディエチの内野ゴロのアウトとティアナの三振でチェンジ。
現在同点のままであるが、果たして勝利の女神はどのチームに微笑むのか？

ちなみに2人がザキと言うのは、山崎の地味な存在が卒業した証として呼んでいるあだ名である。
地味な卒業原因は、『第三十二訓：優勝賞金が出れば大抵の参加者はやる気が出る』で。

第七十四訓：ホームランだけが打線ではない（後書き）

銀八
「おいいいいいいいいいいい！ちょっと待てぇ！」

突如、銀八が現れて黒神にかけつける。

銀八
「何で『質問コーナー』を減らしたんだよ！？コレじゃあ俺の出番がメッチャ少なくな……」

ゴキィーン！

黒神は銀八の『股』を蹴りだし、銀八は口から大量の泡を吐き出して気絶する。

黒神
「では、次回「予想外な勝ち方もたまにはある」テイクオフ♪」

第七十五訓：予想外な勝ち方もたまにはある（前書き）

黒神
「今僕は大学のスクーリングで忙しいですので、小説を書く時間がかなり遅くなっています。ですが、そのスクーリングも明日で最後なので、明後日からはいつものペースになると思います。と言う訳で、これからもよろしくお願いします。」

ルーテシア
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第七十五訓：予想外な勝ち方もたまにはある

その後も、銀時率いる『イヤンキッス』と九兵衛率いる『ロイヤルゼリーズ』の対決は誰もが注目した。
銀時の甘い誘惑の釣られ、スバルの神速、山崎の愛の力、３つの力による強力打線で点を奪いまくっている『イヤンキッス』。
しかしスバルの守備のもろさを突かれても、近藤の剛速球と意外にも守備が結構上手いシグナムが守りまくる。

そして、最終回の９回表。

イヤンキッス　８－８　ロイヤルゼリーズ

ストライク：０

ボール：０

アウト：２

≪４番ライト、オニダチ≫

すると、巨大な大男が打席に入った。
鬼のような角が生えていそうな髪型に強靭な肉体。
はっきり言ってパワースラッカーである。

（どうする？万事屋？）

近藤はどうすべきかと銀時を見つめると、銀時は右手をグローブの下から親指を立てる。
それを見た近藤は頷いてフォームを構える。

「ぬぉおおおおおおおおおお！バナナ・スライダー！」

近藤は思いっきり大きく叫んで言い出す。
すると球がバナナのような形に大きく曲がるような高速スライブとなる。
オニダチはバットを振り、強引に先っぽに当てる。

ガキィン！

鈍い音だが、打った球はそのまま近藤に向かう。
近藤は急いでグローブを構えるが、

ゴキィーン！

「おぉ！」

お約束のように、打球はそのまま近藤の『股』に直撃した。

「ぬぉおおおおおおおおお

≪あーと！近藤選手、コレは痛い！男の弱点的な部分にぶつかってもたれ苦しむ！≫

近藤の苦しみに、銀時、エリオ、山崎、イテツ、そして打ったオニダチを初めとした『ロイヤルゼリーズ』の男子メンバーも痛そうな表情で見つめる。

「この隙に！うぉおおおおおおおおお！」

シグナムはもの凄い速さで走り出し、もがき苦しむ近藤の目の前に落ちているボールをグローブで拾う。
それを見たオニダチは慌てて走りだすが、

「ディエチィィィィィィィ！」

魂の叫びのような大声でファーストに移動したディエチに、思いっきり球を投げる。
その球が通った後から炎が発火したのは気のせいだろうか、とてつもない速さで球はディエチのグローブに直撃……じゃなくキャッチされる。

「アウトォ！チェンジ！」

今の速度は間違いなく近藤と九兵衛の直球（ストレート）をはるかに上回っていた。
そしてオニダチは残念そうに『ロイヤルゼリーズ』側のベンチに戻り、銀時達も自分側のベンチに戻るが、近藤は股間を押さえている。
メッチャ痛いのであった。

「ぬぉおおおおおおおおお！」

「あーもう、野球ボケ展開にあるお約束とはいえ、見苦しいもんを見せんじゃねぇよ！」

苦しむ近藤に容赦なく怒鳴る銀時。

「に……兄さん、そこまで言わなくても……」

「近藤さんも苦しんでますし……」

ティアナとディエチは銀時をおきつかせようと抑える。

「近藤のチ●ポがやられた以上、ここで点を取らないと次の延長戦でやられてしまう」

「おいいいいいいいい！何軽く言っちゃっているのルーテシアちゃん！？」

「軽々しく毛皮らしい事を言うな！／／／」

ルーテシアの発言に青ざめる山崎と顔を真っ赤にして怒鳴ってツッコむティアナ。

「あの子、もしかしたら大物になるかも知れないわ」

「何のじゃ！？」

猿飛の意味不明の言葉にも月詠がツッコむ。

「安心しろ、ルーテシア！我等の打者には、この『烈火のスラッガー』と恐れられたシグぬぁあああああああああ！」

「全打三振の凡打が威張るなぁぁぁぁぁ！」

血管を浮かべてシグナムを飛び蹴りをするヴィータ。

「でもルーテシアの言う通り、このままじゃ俺等に勝ち目は……」
「銀ちゃん……何かおかしいアルヨ」

深刻な表情で起死回生の展開を考える銀時に、神楽がおかしな所があると言いだす。

「なんだぁ、神楽？」
「何か貧兵衛が凄く疲れているね。それにメッチャ大きな汗をかいてるアル」

神楽が不思議そうにマウンドを立っている九兵衛に指を刺すと、そこにはもの凄い疲労で汗だくしている九兵衛が見えた。
コレには不思議そうに思う銀時達。

「本当だ。なんか凄くしんどそうじゃねぇ？」
「一体どうして？」

ヴィータとエリオは不思議そうに考えると、イテツがある事を思い出した。

「そりゃ、ピッチャーて言うのはどのポディションよりも体力が消耗するもんさ。いくら英雄、柳生九兵衛でも、あの小柄な体じゃ相当なまでの大量の消耗には耐え切れずに疲労しているんだろ？」

イテツの説明を聞いて、誰もが納得した。
いくら九兵衛が強いといえども、九兵衛の体力は外見から見れば銀時達より劣っている。

「待てよ、『ロイヤルゼリーズ』のメンバーは九兵衛さんを含めてギリギリ9人。しかも『コーシカップ』の特別ルールにより、試合

中の歩ディションチェンジは禁止されている……て事は！」

山崎はある事を確信する。
その確信に月詠は言い出す。

「一気に、点を取れるサヨナラ逆転チャンス！」

月詠が叫びだすと、誰もが勝利の道が見えたかのように立ち上がる。

「これって凄いチャンスだよ！」
「この勝機を逃さない為にも！」
「一気に叩きます！」

スバル、ティアナ、ディエチは疲労を感じないほどまでの勝利のチャンスに歓喜を満たす。

「絶望の展開から一気に希望の道に変わるなんて！」
「正に絶好の機会！」

エリオとイテツの2人も希望を満ちた笑顔で言い出す。

「うっしゃー！テメェーら、ここまで来たらなんとしてでも勝つぞお！」
「おおぉーーーーー！」

銀時達は全員、手を合わせて叫びだす。
さっきまでのバラバラのチームが心を合わせて友情が芽生える。
それから数秒後、銀時がある事を気づく。

「つうか神楽。お前さっき九兵衛の事を貧兵衛って呼んでただろ？」

「それがどうかしたネ？」
「『それがどうかしたネ』じゃねぇだろ！何なんだよ『貧兵衛』ってぇ！？お前、最近九兵衛のキャラ崩壊で貧乳扱いしたらアイツがとんでもねぇほどに暴走するだろ！？」
「えぇぇー？だって3日前にチンクが『アイツのあだ名を付ける場合は貧兵衛と言うように』と言っていたヨ」

神楽のその一言で、銀時は青ざめる。
どんだけ仲が悪いんだというぐらい呆れる。
しかし自分もマヨラーが気に食わないから言い争っている為他人事ではなかった。

＊

「いよいよ、9回裏だね」
「うん、6番のヴィータからだから、点を取れるチャンスだね」

アルフとフェイトは、この時点で銀時達『イヤンキッス』の勝利は確信した。
しかし九兵衛もタダで終わるとは思えない。

「皆ぁ～！頑張ってねぇ～」

嬉しそうに言い出すなのは。
その後も、ヴィータのライトフライによって1アウトだが、山崎とディエチの連続ヒットで1・2塁は踏みいれるが、それでもかと披露で大量の汗を流しながらも気迫で持ちこたえる九兵衛は、先ほどより速度は落ちているが、神速の直球（ストレート）でティアナを三振してツーア

ウト。

これで後がなくなった銀時達は猿飛に賭ける。
しかしここまで猿飛のヒット数は０でシグナムに次ぐバッティング成績の悪さ。
どうすればいいのかと迷い、とにかく猿飛に全てをかける。

≪１番レフト、猿飛あやね≫

猿飛が打席に入ってバットを構える。
疲労とは言え、九兵衛の直球（ストレート）は今だに神速と謳われる程に早い。
フォームを構えて神速の直球（ストレート）を投げようとした瞬間だった。

「にしても……さっきからこのユニフォーム、小さいからきつすぎるわ。特に胸の部分が苦……」

ドカァアアアアアア！

「しぃ！？」

ドサ！

突如、球が猿飛の左頬っぺたに大きく直撃し、猿飛は吹飛ばされる。
しかもその速さは１５９ｋｍ／ｈと最高速度に近い速球であった。
原因は九兵衛の胸に対するコンプレックスであった。

「で……デットボール！」

青ざめて判定をする審判。
コレにはキャッチャーのコマツは唖然とする。

≪おっとぉー！九兵衛選手、速球１５９ｋｍ／ｈのストレートを炸裂させましたが、惜しくもデットボール！て言うかこれはメッチャ痛いですね、猿飛選手大丈夫でしょうか？≫

「さっちゃんさぁーーーーーん！」
「ストーカー女ぁーーーーーーー！」

エリオとティアナは青ざめて叫びだし、銀時達は急いで倒れた猿飛に駆け付ける。
その後、しばらく猿飛は動かなくなり、保健室に運ばれてエリオを選手交代。
まさかの満塁にピンチに追い込まれる九兵衛。

ちなみに猿飛の気絶で、すんごく愉快そうに笑っているフェイトとなのはを見て、青ざめて少し離れるアルフ。

（く！僕としたことが不覚！まさかあの手で確実なセーフを狙うとは……しかし、何かメッチャ悔しい気がしたから！）

胸に対するコンプレックスはいくらなんでも我慢できなかった用らしい。

「何かぁ……あの雌メガネが可愛そうに思っちまったんだけど？」
「銀ちゃん、私も同じダヨ」

九兵衛のキャラ崩壊によって犠牲となった猿飛を、生まれて初めて可愛そうに思った万事屋の２人であった。

スバル、ティアナ、エリオ、シグナム、ディエチ、月詠、山崎、イテツの7人は青ざめて、ヴィータにいたっては頷くほど理解していた。
しかしルーテシアはコレを見て必勝法を思いついた。

「近藤……」
「どうしたルー殿？」
「1つだけ……実に勝てる方法を思いついた」

ルーテシアが確実な勝利方法を見つけたことを聞いて「何ぃー！？」と叫んで驚く近藤。
ルーテシアは近藤から耳を貸して誰にも聞こえないようにその方法を言い出す。
それを聞いた近藤は青ざめたが、ここで負けるわけには行かなかった為、仕方がなくその方法を賛成する事にした。

≪2番ピッチャー、近藤勲≫

そして覚悟を決めた表情で打席に入り、近藤は九兵衛を見つめると、九兵衛も近藤を睨みつける。

（ここでゴリラストーカーが来たか……ちょうど良い。しつこく付きまとわれた妙ちゃんの怒り、今ここで晴らす！）

殺気を放って、ゴリラを確実な三振で仕留ようとする九兵衛。
そんな九兵衛にゴリラが叫ぶ。

「九兵衛殿！俺は前からアンタに言いたかったことがあります！」

覚悟を決した近藤は、九兵衛に対して禁句を言い出す。

「九兵衛殿の胸は……ぺったんこぉーーーーーーーーー！」

ドカァアアアアアアアアアアアアアアン！

「ごふぁあああああああああああああああ！」

渾身の一球がゴリラの顔面を押しつぶして吹飛ばす。
九兵衛は顔中に血管を浮かべて憤怒を放っている。
しかし、我を思い出して見つめると、そこには気絶して倒れている
今度と、怯えて腰を抜かしているキャッチャーのコマチがいた。
そして判定はもちろんの事……

「デットボール！ゲームセット！」

見事にデットボールである。
しかも満塁の為、確実に3塁にいる山崎はホームイン。
つまり結果は……

イヤンキッス　９－８　ロイヤルゼリーズ

「そんな馬鹿なぁあああああああああああああああああああああ！？」

初戦敗退でメッチャ悔しがる九兵衛はマウンドにひざまつき、マウンドを殴って悔しがってしゃがむ。

≪なんと言うことでしょう！九兵衛選手、まさかに2連続デットボール！そんなに貧乳扱いされたのが悔しかったでしょうか、とにかく試合終了！まさかのサヨナラデットボールにより、『イヤンキッス』昨年度の準優勝チーム『ロイヤルゼリーズ』を打ち破り、見事に2回戦に進出！≫

「ええェ～～～

「お前等は勝てばそれでいいんかい！？そんでルーテシア、「るー」て何だぁ！？」

血管を浮かべて怒鳴りだすヴィータ。
スバル達は唖然として、山崎とディエチに運ばれている気絶した近藤はそのまま保健室に向かった。

「勝てる！お前等なら絶対に勝てる！長年叶えられなかった夢が叶えられる！」

嬉しそうに叫ぶイテツ。
それほどまでに優勝を強く求めていた。

「確かに、引退をかけた試合に本来のメンバーを食中毒で病院送りした我々にも責任がある。イテツの為にも我々に敗北は許されない」

シグナムがそう言いだすと、誰もが敗北は許されない事を思い出す。
特に神楽は忘れかかっていたようだ。原因を作った張本人なのに。

「だけど、何で名監督と言われた貴方が今回の『コーシカップ』で優勝しないと引退なんですか？」

ティアナが不思議そうに質問すると、イテツは深刻な表情をして言い出す。

「……詳しく話して置こう。アレは……三日前の夜だった」

＊

とあるミッドチルダの小さな町の夜。
イテツはメッチャ酔っ払って1人の女にしつこく付きまとっていた。

「ちょ……もう止めてよイテツ！」

その女性は、姫カットの髪形で巨乳の美女。
名はマキコ・スタンダスト。元『イヤンキッス』のマネージャを務めていたが、イテツのセクハラ的な行動に嫌気をさしている。

「ねぇねぇ、そんな事言わずにさぁ、もう一度『イヤンキッス』のマネージャーを務めてくれよぉ。ねぇ良いじゃん」

メッチャ酔っ払っている。
実は彼女がマネージャーを辞めたのはつい最近の事で、その事を思い出したのかヤケ酒で飲みまくり、メッチャ酔っ払う。
そして帰りにフラりフラりと歩き回る中で、偶然にも彼女を見つけた。

「良いからはなれて！もう貴方に関わりたくないから！」
「そんなぁ～、俺の事を見捨てないでくれよぉ～！」

とイテツは酔っ払った勢いで彼女を抱きつくが、

「いやぁあああああああああああああああ！」

バチィン！

「あ痛ぁ～～！」

大きな平手打ちで倒れ、マキコはイテツの痴漢行為に怯えて逃げ去った。
イテツは大泣きして悔しむ。
その次の日、イテツはマキコに見捨てられた悔しさのあげくに、マスコミの前で思わず『次の『コーシカップ』で優勝できなかったら監督を引退して『イヤンキッス』は解散します！』と言ってしまった。

＊

「まさか悔しさの余りに引退宣言をしてしまうとは、俺も焼きが回ったぜ」

「イ～テェ～ツゥ～」

突如、イテツの背後から、銀時、神楽、ティアナ、シグナム、ヴィータの5人がとてつもない殺気を放っている上、バットを強く握っている。

「それってつまり」
「全部貴様が起こした」
「セクハラ的な行動による」
「自業自得の」
「せいだろうがぁーーーーーーーー！」

ガキィーン！

「スイングゥーーーー！」

「あんぎゃあああああああああああああああああああ！」

５人のフルスイングがイテツの尻にぶつけ、イテツはスタンド内に吹飛ばされた。

スバル達もコレはないだろうとイテツには強い呆れを抱いた。

一方のフェイト、なのは、アルフの３人はどうしてイテツがスタンドに吹飛ばされたのかと不思議に感じたが、何やら銀時達がやらかしたと考えれば、凄く苦笑して呆れたのであった。

第七十五訓：予想外な勝ち方もたまにはある（後書き）

銀八
「遅ぇよ黒神！もう6日立っているぞ！？」

黒神
「しょうがないでしょう！こっちは大学のスクーリング中なんだよ！書く時間がねぇよ！」

銀八
「ああ、反抗期かこの野朗！そんなん大学をズル休みしてまで小説書けよボケ作者！」

黒神
「そんなん出来たら苦労できねぇよ馬鹿教師！」

黒神と銀八は言い争って口喧嘩する。

最近、思うどおりに進めなくてイライラしている黒神と出番が急激に減ってイライラしている銀八の言い争いは正直言って醜かった。

シグナム
「と言うわで、次回「人は大抵馬鹿にされると怒り出す」テイクオフ」

第七十六訓：人は大抵馬鹿にされると怒り出す（前書き）

黒神
「いやー、スクーリングも終わって無事に連載再開」

銀八
「そうだなぁ。コレでおれの出番が増えればもっと最高なん――」

黒神
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

銀八
「っておい待てぇ！？何かお前最近、冷たくねぇ！？」

第七十六訓：人は大抵馬鹿にされると怒り出す

「てな訳だ」
「そうネ、自業自得アル！」
「全く、イテツがあのような男だったとは……情けない！」

銀時、神楽、シグナムは観客席で偶然にも見つけたフェイト、なのは、アルフに、自分達がどうして『コーシカップ』に参加したのかを説明する。
原因を聞きだしたフェイト、なのは、アルフは苦笑して、銀時、神楽、シグナムに強い同情を抱く。

「そ……それで銀時達は一体どうするの？」
「くだらねぇ面倒ごとは関わりたくねぇから棄権するわ」

苦笑してこれからどうすべきかをフェイトが聞くと、銀時は即座に棄権することにした。

「にゃははは……でも、『コーシカップ』にせっかく出たから優勝は狙っても……」
「それだとあの変態監督の思うどおりヨ！私あんな奴のために頑張りたくないネ！」
「ええぇ～、もったいないじゃん！」

優勝を狙ってみるべきかと考えるなのはに、神楽はイテツの為に優勝は強く拒否する。
それにはアルフももったいないと感じる。

「まぁ、とりあえずヅラ達の試合が始まるから、それ見たら棄権し

て帰るぞォ」
「同感」

銀時とシグナムは帰る事を考える。
そして桂率いる『マリンナッツ』と対戦相手の『ブルーソックス』の対戦が始まる。

「プレイボール！」

試合が開始され、『マリンナッツ』は守備側に入る。
ポジションは以下の通りであった。

キャプテン・カツーラ　サード
エリザベス　キャッチャー
キャプテン・ハヤーテ　セカンド
ザフィーラ　ファースト
ヴァイス　ピッチャー
辰馬　センター
ミスターロッカーA　ライト
ミスターロッカーB　レフト

ミスターロッカーC　ショート

「何で本名が出ないぃぃぃぃぃぃぃぃ！！大体なんだよミスターロッカーって！いくら一般隊員だからってそれはねぇんじゃねぇのぉ！？」

「というよりキャプテン・カツーラとキャプテン・ハヤーテって何ィィィィィィィィ！？」

銀時とフェイトはあり得ないというばかりに青ざめて叫ぶ。

実はこれは自分が機動六課の仕事をサボって『コーシ・カップ』に出てる事をバレない為の作戦である。

それなら自分達だけじゃなく全員も変装させれば良いのではと言いたいが、原因は衣装が足らなかった。

しかも桂とはやてはただ単に海賊っぽい衣装を着て、エリザベスの似顔絵が描かれた眼帯を左目にかけているだけである。

はやての衣装は、桂の『キャプテンカツーラ』の衣装を、女版の衣装『キャプテン・ハヤーテ』として身につけている。

その証拠に『キャプテン・カツーラ』のように長ズボンじゃなくミニスカートである。

ちなみに『コーシカップ』の特別ルールの1つとして、仮装的な衣装入れ替えは何度もOKである。（但し、他のチームに重なるユニフォームは禁止されている。）

「アレって、どう見たって桂さんとはやてちゃんだよね？」

「何やってんだいあの2人！」

なのはとアルフは、2人のあり得ない変装に呆れだす。

コレでばれないようにと変装しているつもりだろうが、絶対バレる

と思う。
しかし、こんなバレバレな衣装が管理局の眼に入ってもばれる事はなかったと言う奇跡が起こった事は、それはまた別の話で……多分。

「多分かい！？」

ナレーションに無かってツッコむ銀時。
しかしその怒涛はすぐに消え、銀時達の眼に移ったのはヴァイスが三者凡退の結果を出して一気にチェンジをした光景であった。

≪なんと言う事だぁぁぁ！ヴァイス選手、見事なピッチングで一気に三者凡退！特に注目するべきはシンカーと呼ばれる魔球を中心とした奇妙な変化球での抜群な正確なコントロールを誇るアンダースロー！コレにより完全なるピッチングを披露しています！≫

「おおぉー！ヴァイスもやるではないか」

シグナムは感心するかのように言い出す。
実はヴァイスがどうしてコレほどまでにピッチングが良いのかと言うと、スナイパーと言うだけで絶大なコントロールを誇っている。
しかも少年時には野球の経験を持っており、試合前に野球の変化球を必死に覚えようと変化球レピシを何度も読み直し、偶然にもシンカーを見つけて、野球少年時の頃に必死に会得する為に覚えた魔球があったことを思い出して、それを中心としてピッチングしている。

「つうかいくらスナイパーだからって、ピッチングの良すぎはあり得ねぇ！？」
「全くネ。コレはヴァイスのキャラ崩壊の影響アルヨ」
「そこは素直に褒めてやろうよ！」

銀時と神楽の冷たい発言に、アルフはツッコむ。
その後、一番バッターのザフィーラがピッチャー返しでヒットを放つが、ヴァイスは正確なバンドテクニックで見事に内野ゴロのセーフ。
そして……
≪3番サード、キャプテン・カツーラ≫
すると桂……じゃなかったキャプテン・カツーラが打席に入り、バットを構えてピッチャーを睨みつける。
相手ピッチャーは恐れだしてもなお、自慢のカーブを投げ出す。
しかし……
「おおおおおおおおおおお！」
ガキィーン！
見事に強打して大きく飛び、スタンド内に入った。
≪いったー！文句なしのホームラン！『マリンナッツ』、一気に3点を先取点しましたぁ！≫
マリンナッツ　3－0　ブルーソックス
「なぁ！ヅラの奴、一丁前にホームラン打ちやがった！」

「さすが、桂さんだね。……いや、この場合はキャプテン・カツーラと呼ぶべきかな？」

桂のホームランに意外そうに驚く銀時と流石であると評価するなのは。

そしてザフィーラ、ヴァイス、キャプテン・カツーラはホームインを踏んでベンチに戻ると、次にエリザベスが打席に入る。

≪４番キャッチャー、エリザベス≫

エリザベスが打席に入ると

ワァアアア

実はエリザベスは、『第二異種生命体事件』での活躍でミッドチルダ内でも有名な英雄的な存在になり、特に子供達には大人気を誇っている。
今やミッドチルダ内では英雄マスコット的に大人気であり、『エリザベス饅頭』や『エリザベス煎餅』に『エリザベス人形』など、かなりと言っても良いぐらいに子供達のヒーローである。

そしてエリザベスはブラカードを置いてバットを構える。
ピッチャーがもう1つの変化球、ショートを放つが……

ガキィーン！

エリザベスの剛打が炸裂し、球はスタンド内を越えて除外ホームラン。
超特大のホームランが炸裂した。

≪文句なしに行ったぁーーーーーーーーーーーー！さすがエリザベス選手！あの英雄『狂乱の貴公子』桂小太郎の相棒であり、人々から『狂乱の聖獣』として注目されたヒーロー！コレで4点目、『マリンナッツ』徐々に差を広めていきます！≫

マリンナッツ　4－0　ブルーソックス

「エリー、エリー、エリー、エリー！！」

子供達のエリザベスのあだ名『エリー』コールが何度も発生する。
エリザベスは嬉しそうに両手を上げて観客に向けながら手を振るう。

完全なるヒーロー扱いである。

「エリザベス、何か英雄気分になってんだけど！？」
「定春が見たら、凄く怒り出すような気がするネ」

英雄扱いされているエリザベスにツッコむアルフと、定春が見たらエリザベスは殺されるんじゃないかと恐れる神楽。
その後、キャプテン・ハヤーテの長打ヒットが炸裂して一気に2塁安打だが、残りミスターロッカー3人の三者凡退でスリーアウトチェンジとなった。

「ちょ、私の出番コレだけェ！？」

納得できない様に言うはやてであった。

その後も『マリンナッツ』のあり得ないと言うばかりの驚異的な強さによって、強打を誇る『ブルーソックス』が、ヴァイスの超変化球のアンダースロー投法によって翻弄され続け、連続の三者凡退。
一方のキャプテン・カツーラとエリザベスを中心とした代打は2人の連続ホームランが炸裂してジャンジャンと点を取り捲る。
だが……

「とぉおおおお！」

バシ！

「おんりゃあああ！」

バシ！

「あららぁあああああああ！」

バシィ！

辰馬のバッティングは銀時と桂が予想していたどおりの結果で連続三振。

「ストラァーイク！バッタアウト！」

「あ痛た、わしゃ野球ちゅうモンをした事ないきに、やっぱヒットを打つのは無理かもしれんのぅ！」

「じゃあ何で試合に出てんだよアンタ！？」

辰馬の一言に思わずツッコむ『ブルーソックス』のキャッチャーと審判。

『ブルーソックス』はヴァイスのシンカーを中心としたピッチングで当てる事も出来ずに三振の連続であった。

「ぜぇ！ぜぇ！ぜぇ！」

メッチャ息切れしているヴァイス。

正直言って自分がどうして野球の試合をしなきゃいけないのか疑うが、彼は優勝所が一点も奪われちゃいけないのであった。

全ては自分の人生の為に。

そして９回表のツーアウト、ノーヒット。

最後の打順は４番レフトの『サモン』であった。

「畜生！このまま終わってたまるかぁ！」

すでに１８対０の完封負け。
この『コーシカップ』の特別ルールの１つとして、コールドはない。

「後１人、後１人で無事に終わる」

ヴァイスは大量の汗を流してもなお、三振を狙う。
コレにはサモンもカチンときた。

「ふざけんじゃねぇぞ！こっちは真剣に優勝を狙っているんだぞ！？テメェ等見たいなお遊び気分で参加しているチームにだけは舐められたくねぇんだよ！」

怒りの余りに感情的に叫ぶが、

「……ギャアギャアとうるせぇんだよ、このタコスケ！」

突如、目付きが変わって乱暴的に叫びだす。
しかも眼が何かを睨みつけるヘビのような眼になっていた。

「こっちだってなぁ、素人なのに強制的に参加させられてんだよ！事情知らずにうじうじと文句言ってっとその顔面に球ぶつけんぞコラァ！」

強制的に参加させられたのに、遊び気分で参加していると扱うサモンに怒り出してヴァイスは言う。
しかもその喋り方が……

「あれ！？あれェェェェェェェェェ！？」
「何か『●レイブルー』のハザ●化しちゃったんだけどぉ！？」

銀時とフェイトは、ヴァイスのまさかの変貌に驚きを隠しきれずに叫びだす。
怯えだしたハモンは、バットを十分に振るうことが出来ず、あえなく三振でゲームセット。

「こっちだってなぁ、負けられねぇ所が一点も取らせるわけにはいかねぇんだよ……。だから、二度と遊び気分とかふざけた事言うんじゃねぇぜ……このボケがぁ！」

ヴァイスは威嚇を放ってサモンに忠告する。
サモンは「ヒィ！」っと怯えだす。そのヴァイスの変貌振りに辰馬とはやては唖然としている。

「ん？なんじゃぁ？ハザマの奴、別人みたいに凶暴になっちょるが…なんぞあったか？」
「ハザマじゃなくヴァイスや！……まぁ元々は私のせいかなぁ？」

そう、ヴァイスがこれほどまでに変貌したのははやてが原因である。
実は1ヶ月前、はやては『マリンナッツ』の監督に依頼され、交通事故でメンバー全員が病院送りにされたことで、代わりに試合に出て欲しいと頼まれた。
そこで桂、エリザベス、ヴァイス、ザフィーラ、辰馬、それに機動六課の隊員3人と共に野球の特訓を密かにしていたのである。
打線は十分だが、問題は守りをどうすべきかだった。
ここは桂とエリザベスのバッテリーに任せるべきかとはやては考え

た途中で、ヴァイスに眼を付け、はやては強制的にヴァイスをピッチャーをやるべきと言い出す。
ヴァイス本人は最初は断ろうとすると、はやてが機動六課の部隊長として給料を急激になしにすると脅すと、態度を変えて即座にピッチャーをする事を決定した。
そして試合で一点も取られたら、その分だけ給料減少されると聞かされ、必死に投球練習をするのであった。

以上そんな感じで原因の説明が終わると、試合は１８対０と言う、『マリンナッツ』の圧勝である。
コレには誰もが驚きまくる。
キャプテン・カツーラとエリザベスの五本塁打ホームラン。
さらにヴァイスのパーフェクトピッチング。
今回のＭＶＰはなんと言っても、キャプテン・カツーラとヴァイスの２人あったが、ヴァイスはメッチャ嬉しくないようである。

（こっちは給料がかかってんだよぉ！今月金が半端ねぇほど少ねぇし！しかも優勝できなかったら給料３か月分なしってそれはねぇだろ部隊長さんよぉ！）

給料の弱みを握られた結果であるため、正直喜べないのであった。

≪いやー、それにしても凄かったですねぇ。それでは今回のＭＶＰのキャプテン・カツーラさんに感想を聞かせてもらいたいと思います≫

解説者がここでキャプテン・カツーラに感想を聞きだすと、キャプ

テン・カツーラは審判からマイクを渡されて感想を言い出す。

「えー、我々『マリンナッツ』の勝利は当然の事。何故なら我々はこの『コーシカップ』に優勝する為に秘密の猛特訓をしていましたので。特に『イヤンキッス』には絶対的に勝てる自信はあります」

自分達には絶対に勝てると言うキャプテン・カツーラの発言に、銀時、神楽、シグナムの3人はピクリとする。

「あの連中の試合は見せてもらいましたが、はっきり言ってグタグタです。うち等の方が何倍も勝っています。更にキャプテン・ハヤーテからも一言を」

キャプテン・カツーラがそう言い、マイクをキャプテン・ハヤーテに渡す。

「そうやなぁ。まぁ具体的に言うと、スバル選手を除く女性の打線が酷すぎや。あれなら私1人でも十分勝てるんやけど?」

キャプテン・ハヤーテもキャプテン・カツーラに負けない挑発的な事を言い出す。
そして2人は近づいてマイクに向かい、確信したことを言う。

「まぁ、何せよ」
「『イヤンキッス』の優勝は」

「１００％無理　（だな）（やろうな）」

絶対に優勝は不可能であるとはっきり言い出すキャプテンコンビ。

解説者も流石に青ざめて、問題がなければ良いかと祈っていた。

そして、2人のコメントにとてつもない怒りを放っている銀時、神楽、シグナムは額に血管を浮かべている。

フェイト、なのは、アルフは青ざめて少しずつ3人から離れている。

他の観客も銀時達の怒りには恐怖を感じたのか、遠く離れていた。

「……神楽、シグナム」

銀時は怒りを込めて静かに言う。

「……優勝するぞ」

「おお！」

銀時の一言に返事をする神楽とシグナム。

3人は絶対に『マリンナッツ』の打倒を近い、優勝を果たす事を決意する。

馬鹿にされた屈辱の怒りが彼等に火をつけたのであった。

「はやて……桂……間違えても銀時達に殺されないよね？」

「……もう後戻りできないかもね」

「にゃ……にゃはははは……」

フェイト、アルフ、なのはの3人はとにかく青ざめて苦笑する事しかできず、とんでもない事が起こらない事を祈るのであった。

第七十六訓：人は大抵馬鹿にされると怒り出す（後書き）

銀時
「ヅラの奴！好き放題言ってくれやがってぇ！」

神楽
「あいつ等血祭り決定ネ！この世の地獄を見せてやるヨ！」

シグナム
「いくら主でもあの暴言は許さん！」

銀時、神楽、シグナム
「『コーシカップ』、絶対に優勝する（ぞ）（ネ）！」

黒神
「うわぁ……やる気満々だよこの人達……と言う訳で次回は「罰ゲームがあればゲームも盛り上がる事があるけど、負けたら地獄が待っている」テイクオフ」

第七十七訓：罰ゲームがあればゲームも盛り上がる事があるけど、負けたら地獄

黒神
「いやー、祇園祭も楽しんだ事だし、そろそろ連載再開だね」

銀八
「全く、これからはちゃんとしたペースでやれよ？」

黒神
「はいよ、じゃあ本編スタート」

シグナム
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ」

第七十七訓：罰ゲームがあればゲームも盛り上がる事があるけど、負けたら地獄

『マリンナッツ』を率いる桂とはやての挑発的な侮辱。
それを聞いた銀時、神楽、シグナムの3人は怒りだして『マリンナッツ』の打倒を決意して優勝を目指す。
桂とはやての挑発を、『イヤンキッス』に報告したら、全員カチンと来て怒り出した。
特にヴィータにいたってはいくら主であるはやてでも、その暴言は許される物ではなかった。

しかし先ほどの試合で近藤と猿飛は気絶して今でも眼を覚ます様子はないため、ここはシグナムがピッチャーをする事にした。
そして近藤と猿飛の代わりに、神楽とエリオがメンバーに入り、ティアナも月詠と入れ替えられた。
そして新たなポジションがこうなった。

1　エリオ　ファースト
2　山崎　セカンド
3　神楽　サード
4　スバル　レフト
5　銀時　キャッチャー
6　ヴィータ　サード

7　ディエチ　センター
8　月詠　セカンド
9　シグナム　ピッチャー

そのメンバー二回戦に挑むのであった。
そして試合が始まり……

「おおおおおおおおおおおおおおおお！」

カキィーン！

シグナムの豪快なスイングが炸裂し、打球は外野スタンドを入って文句なしのホームラン！

≪行ったぁーーーーー！コレは文句なしのホームラン！≫

解説者は白熱した激しい大声で解説すると、観客も猛興奮して叫びだす。

≪『イヤンキッス』、見事に追加点を奪いましたぁ！しかし先ほどの第一回戦とは大違いであり、シグナム選手のバッティングが大幅に良くなっており、特に今のホームランは気持ちよく入った感じで

しょう！≫

一回戦とは大違いと思えるほどのシグナムのバッティング。
これは銀時とスバルほどじゃないが、十分に良い打者であった。
しかも、彼女の活躍はコレだけではなかった。

「はぁあああああああああああ！」

シグナムの凄まじい剛速球が炸裂し、バッターを三振させた。

「ストラーイク！バッタアウト！ゲームセット！」

イヤンキッス　７－０　ブラックソックス

≪決まりましたー！『イヤンキッス』見事に二回戦突破しました！
銀時選手とスバル選手のバッティングの良さもありましたが、何より注目したのがシグナム選手のバッティングだけではなく、『イヤンキッス』のエースと言っても良い位のピッチィングでした！男性も顔負けの剛速球にキレのあるスライダーを見事に使い分けて打者を翻弄し、見事パーフェクトを果たしました！≫

「銀時ぃ！」

突如、シグナムは嬉しそうに走り出して銀時に抱きつく。

「おわぁ！ちょ、シグナム！？」

突如抱きつかれて驚きだす銀時。
しかもシグナムの柔らかい爆乳が銀時の胸を押し付けて彼をメッチャ動揺させている。

「やったぞぉ！コレで三回戦進出だぁ！」
「ちょ！わーったから！そんで胸が当たってっから！／／／」

自分の大活躍で勝てたあまりの嬉しさに抱きつくシグナム。その行動に顔を真っ赤にして銀時は凄く動揺していた。
一回戦で何も出来なかったのが相当なまでに悔しかったのだろう。
そんなシグナムにティアナはもの凄い嫉妬心で睨みつけ、月詠は複雑な気持ちになり、スバルは羨ましそうに見つめる。

一方の観客席でも、観客の誰もが何かを恐れて怯えていた。
それはフェイト、なのは、アルフの３人がどす黒いオーラを放ってシグナムを睨みつけている。

「シグナム……調子に乗りすぎていないかなぁ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！
「にゃはははははは……後で頭を冷やして上げようかなぁ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！
「すんごく痛い目に合わせてやろうじゃない」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

３人の嫉妬心は異常に怖く、大会後シグナムがどうなったかはまた別の話。

＊

それから程なくして3回戦。
銀時達は思わぬ対戦チーム相手に驚きだす。
そのチーム名とは……

「ああ、やっぱり銀時達ッす！」
「ディエチもいるじゃん！」

聞き覚えのある声に銀時達は唖然として、相手チームのベンチを良く見てみる。
そこには手を振っていて元気そうに声を上げるヴィンディとセインがいた。
さらには監督衣装を着ているスカリエッティと青いユニフォームを着ているウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、チンク、オットー、セッテ、ノーヴェ、ディートも存在する。

「あれぇ？あいつ等も参加してたのかぁ？」
「おおぉ、奇遇ネ。まさかナンバーズも参加していたなんて」

銀時と神楽は思わぬ形でナンバーズに出会った事に意外そうに驚く。
特にディエチと山崎は唖然としていた。

「ドクター、それにウーノ姉様まで！？」
「どうして貴方達がここに！？」
「いやー、実は銀時達が『コーシカップ』に参加すると聞いて、面白そうだから私達も飛び入り参加させてもらった訳だ」
「桂小太郎も参加している事だし……良いデータを取れる良い機械だから参加したんだよ♪」

どうして『コーシカップ』に参加しているのかを不思議がるディエ

チと山崎に対して、銀時達の『コーシカップ』の参加理由を説明するスカリエッティとクアットロ。

「…と言うより何でそっちのチームにいるの、ディエチ」

「え？」

オットーの突如の質問に反応するディエチ。

「アタシ達を無視してまで山崎と一緒にいたいのかよ！？」

「ええ……それはそのう……／／／」

ノーヴェの怒鳴りだす一声に恥ずかしがるディエチ。

ディエチは山崎をチラッと見ると、彼も顔を真っ赤に染める。

その様子を見てニヤけて笑い出す銀時と神楽。

「まさか、銀時と戦う事になるなんて……」

「出来れば銀さんとは……」

「戦いたくないよ……」

チンク、セッテー、ディートの3人は深刻な表情で銀時とは戦いたくないと言い出す。

「そうっすね」

「出来れば応援してやりたいよ……」

ウィンディとセインも3人と同じ気持ちであった。

しかし……

「アホか！たとえ相手が伝説の白夜叉だろうと関係ねぇ！やるからには必ず勝つ！」

「ノーヴェの言う通りだ。たとえお遊戯大会でも我々ナンバーズは軽々しく敗北する訳には行かない」

ノーヴェとトーレがそう言うと、チンク達はしぶしぶとする。

「いやぁ～ん、恋した相手と戦う運命って惨酷すぎるぅ～」

「それほど大げさに言うほどじゃ……というより何か嬉しそうに言っていない？」

面白半分に言い出すクアットロに激しくツッコむドゥーエ。

一方の銀時達も真剣に相手の状況を考えていた。

相手はナンバーズ。戦闘経験だけなさ機動六課に匹敵する。

野球に関しては素人であるとは言え、その身体能力は通常の人間をはるかに上回っている。

おそらくはナンバーズも自分達と同じようにその戦闘能力を利用して勝ち上がってきたであろう。

「おい、銀さん。あいつ等の事を知っているのか？」

イテツは銀時に質問をすると、銀時はナンバーズの事を説明する。

犯罪集団『鬼兵隊』を倒すために機動六課と同盟を結んだ特殊戦闘集団。

1人1人が半端じゃなく強いと聞かされて、イテツは青ざめる。

「ただの野球チームだったら何とかなるけど……」

「相手がナンバーズなら流石に苦戦は免れんじゃろ」

スバルと月詠もナンバーズ相手には苦戦すると考える。

「ディエチ……野球とは言え、仲間とは戦いたくないでしょ？だっ

たら私が代わりに出てあげる」
「ティアナ……お願いします」
ディエチを気遣って代わりに自分が試合に出ることを考えるティアナ。
両チーム、グランドにたって整列をし終えると、
≪ではここで、今回の特別解説者を紹介させてもらいます≫
突如、解説者が自分以外の解説者を紹介する。
≪まず1人目、あの英雄こと白夜叉と同じ世界から現れ、どんな機械も作れて元の世界でも江戸一番の発明家として名が高い平賀源外(ひらがげんがい)さん。もう1人はあの人気アイドル寺門通の美人マネージャとして名が高い結野アナの従姉妹として知られている外道丸(げどうまる)さんです！≫
≪だぁ～っはっはっはっは！諸君、来てやったぞぉ！≫
≪どうも、初めましてでありんす≫
解説者が源外と外道丸を紹介すると、銀時達は予想外の人物に眼を大きく開くように驚く。
「爺さん！外道丸！あいつ等何してんだぁ！？」
どうして解説しているのか呆れる。
というよりどうして式神であるはずの外道丸が結野アナの従姉妹として呼ばれているかと言うと、この世界には式神とか言う存在は余り知られていない。
式神はこの世界で言うと召喚獣みたいな存在であり、もしそれを知られてしまえば魔法無差別仕様違反として結野アナが逮捕されるからである。

それで外道丸が考えた行動は式神としてでなく、従姉妹としている事にした。
挨拶を終えると、源外はマイクを取って説明する。
≪今回の『コーシカップ』とか言う野球大会、勝ちあがってきたどのチームも中々興味深い強さをもっとる！そこで俺達は今回、更なる特別ルールを追加させてもらった！≫
「特別ルール？」
新たな追加ルールに銀時は片眉を上げた。
≪簡単に言うと、これから試合に負けたチームには罰ゲームを受けてもらうぞ。しかも死ぬほど苦しいほどにな≫
「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」
まさかの罰ゲーム報告に誰もが騒ぎ出す。
それではコレまで敗北したチームは、ある意味報われた事になり、今まで勝ち残ったチームはこれから敗北すれば罰ゲームを受けてしまう事になる。
「ちょっと待ちなさいよ！何で『コーシカップ』に罰ゲームルールを加える必要があるの！？第一それ大会開始直前に説明するべきじゃないの！」
≪大会始まってからちょっと経ったほうが面白いと思ってな。わざと黙っておいた訳じゃ≫
「ふざけんなぁーーーーーーーーーーーー！」
源外の面白半分に額に青筋を浮かべて怒鳴りだすティアナ。
≪てな訳で、今回の罰ゲームの紹介をしよう。外道丸！≫

≪了解しやした≫

源外が叫ぶと、外道丸はどこからか巨大なビンに入っている赤黒い液体を出した。
しかも何やらわずかだが、肉がグジャグジャとミンチにされたような物体も少しずつ見える。
まともな飲み物じゃない事は確かである。
誰もが青ざめる中、解説者が苦笑して質問する。

≪……アノウ……ナンデスカソレハ？≫

解説者は思わず片言で喋る。

≪罰ゲーム専用ドリンク、『混汁』じゃ。マムシの生き血、鳥の生肉ミンチ、炭酸水、イカ墨、蛸墨、ハブの生き血、豚の血、マヨネーズ、それに様々な野菜の汁を大量に調合して混ぜ合わせた特製ドリンクじゃ≫

要するに得体の知れない物ばかりを混ぜ合わせた激不味い飲み物である。
それを見た銀時達は青ざめていた。

（なんじゃありゃーーーーーーーーーー!?まるで爺さん版の『暗黒物質（ダーク・マター）』じゃねぇーかー）
（負けたらそれを飲めって言うのか!?あれは絶対に飲めば腹を壊す所ではないぞぉ!?）
（死ぬぅーーーーーーーー!飲んだら絶対死ぬぅーーーーーーーーー!）
（飲みたくない飲みたくない飲みたくない飲みたくない飲みたくな

い飲みたくない飲みたくない）
（絶対嫌アル！あんなの飲むぐらいなら餓死したほうがマシヨ！）
（なんなんじゃあのエグイ飲み物はぁ！？）
（あれ、飲み物なんですか！？猛毒液体の間違いですよぉ！）
（シャマルの『猛毒物質（ポイズン・マター）』並の極悪物質じゃねぇかぁ！）
（さっきマヨネーズも入っているといったよあの爺さん！副長が聞いたら怒るって！）
（あれ飲んだら死ぬんですけどぉぉぉぉぉぉ！？）
（……るー！！！！（震えながら合唱））
（引退所が命の危機に追い込まれてしまっただとぉぉぉぉ！？）

（何をえげつない物を作っているんだ源外君！？）
（我々戦闘機人でも飲めばイチコロじゃない！）
（あれは死ねって言いたいの！？）
（あんなの飲むのは嫌だぁあああああああ！）
（いやぁあああああああ！参加しなきゃ良かったぁあああああ！！）
（飲めって言うのか！？あれを私達に飲めって言うのか！？）
（飲みたくないよぉぉぉぉぉ！）
（飲んだら死にます！だから嫌だぁあああああああ！）
（死亡確率ほぼ１００％……とは行きませんが死より苦しい目にあうのは１００％だ）
（何であんな地獄のように不味そうな液体を飲まなきゃいけねぇんだ！？）
（死にたくないっすぅ！）
（ふぇえええええええええええん！死んじゃうよぉぉぉぉぉぉ！）

『イヤンキッス』や『ナンバーズ』のメンバーもそれぞれ罰ゲーム

に対する恐怖に心の奥底より不の感情を抱く。
観客達は銀時達をお気の毒にと強い同情を抱く。

「……参加……しなくて良かったね」
「……うん……そうだね」

苦笑しながら銀時達の力になって大会に出る事よりも、罰ゲームを逃れる為に大会に出なかった事に得を感じたフェイト、なのは、アルフの3人であった。

（銀時の戦闘データを調べる機会だから参加したのに、コレじゃ優勝しないとあの極悪液体を飲まなきゃ行けないじゃない！）
（コレでは地獄行きは確実！棄権しても無理矢理罰ゲームを受けてしまう！）

クアットロとトーレは優勝以外に生き残る術がないと確信する。
トーレはびしっとした表情でチーム全員に掛け声をする。

「勝つぞ！勝たなければ我々に明日はない！」
「オオォォォォォォォォォォォォォォ！」

勝つ気満々のナンバーズ。
予想外の危機に追い込まれてメッチャ必死になる。
ちなみにチーム名も『ナンバーズ』である。

だが、ここでナンバーズで更なる予想外な事が起こる。
それは……

「やっぱり野球とは言え銀時を敵に回したくない！」

「憧れの英雄を汚したくないよ！」
「うんうん！」
「それにこうして裏切っちゃえば！」
「敵に回さずにすむ上に罰ゲームから回避で一石二鳥！」

いつの間にかと言うばかりに、マネージャーらしいジャージ服を着ているチンク、セイン、セッテ、ヴィンディ、ディートの5人が『イヤンキッス』のベンチにいた。

「……あのう……コレは一体どういう意味？」

ウーノが苦笑して銀時側のベンチにいるチンク達に訪ねる。

「悪いが、我々は銀時に敵に回したくないからチームを抜けさせてもらいました」
「裏切り者ォォォォォォォォォォ！」

悔しさいっぱいにチンク達の裏切りに怒鳴って叫ぶウーノ。

≪何やら『ナンバーズ』のメンバー5人ぐらいが、チームを抜けたそうでござんす≫
≪そうか……そうなれば『ナンバーズ』のメンバーは9人以下になって足らなくなるのぉ≫

外道丸と源外がそう言いだすと、スカリエッティ達は最愛な状況を思い出す。
ディエチやナンバーズ5人が抜けた事はつまり、今この場にいるのは7名。
後2名足らない事で試合は出来ない。よって……

≪えー、『ナンバーズ』のメンバーを数えてみる限り、明らかに9人以下になっとる。よって『ナンバーズ』は失格じゃ！罰ゲーム決定！≫

「NOーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

悪夢を見ているような最悪な表情になったナンバーズ達。
銀時達はそんなナンバーズ達に強い同様を抱く。
逃げようとしても、源外作の『三郎』と呼ばれるロボットに捕まって、そのロボットから無理矢理『混汁』を飲まされてしまった。
そしてその味以前に余りの不味さの為、感想は予想野どおりであった。

うぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！おんぎゃああああああああああああああああああああああ！いやぁあああああああああああああああああああああああああああああ！苦しぃいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！死ぬぅうううううううううううううううううううううううううう！不味ぅぅうううううううううううううううううううううううううううう！マジで助けてぇえええええええええええええええええええええええええええ！

悪夢を味わったナンバーズの絶叫がドームに響き渡り、それは無残にも地獄にさ迷う亡者の如くの苦しみであり、地べたを張って気絶

して倒れる。
ナンバーズの様子を見た源外はやりすぎによる反省をする所が「根気がない連中ばかりじゃ」と呆れている。
三郎達を近くの病院までスカリエッティ、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェを運ばせる。
何とか罰ゲームを免れた銀時達だが、優勝意外にこの悪夢の罰ゲームを逃れる他はない。

「シグナム……優勝しなきゃ行けねぇ理由が1つ出来ちまったな」
「ああ……そうだな」

銀時とシグナムは改めて優勝を誓いだす。
それも桂とはやてのあの暴言を忘れてしまうほどに。

第七十七訓：罰ゲームがあればゲームも盛り上がる事があるけど、負けたら地獄

銀八
「てか、何なんだよあの『混汁』って？『暗黒物質（ダーク・マター）』級にヤベーじゃねぇかよ」

黒神
「いやー、流石に面白そうかなーと思ってやっちゃいました。お陰でナンバーズも災難だねぇ」

銀八
「最悪な作者だな、おい」

黒神
「いやー、ごめんごめん。あ、それから銀八。次回から質問コーナーが始まるから」

銀八
「ええ、マジでぇ!?よッしゃー、久し振りの出番だぁ！」

黒神
「『烈火編』も終盤に入ります！」

月詠
「次回、『何かに集中して途切れると、ほかの事をしたくなる』テイクオフじゃ」

第七十八訓：何かに集中して途切れると、他の事をしたくなる（前書き）

黒神
「はぁ～、何か最近ペースが落ちてしまってるなぁ」

銀八
「調子に乗って書き続けるからそうなるんじゃねぇか？」

黒神
「いやいや、久し振りに『銀八先生コーナー』があるから、全員分の質問を答えるのが大変だったよ」

銀八
「マジでか!?よっしゃー、久し振りの『銀八先生コーナー』だぁー！」

黒神
「あんだけ嬉しがる銀八を初めて見た……」

近藤
「では、『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ！」

第七十八訓：何かに集中して途切れると、他の事をしたくなる

それからも特別解説者として現れた源外の用意した罰ゲーム用の『混汁』は、『コーシカップ』の参加者誰もが恐れ、死んでも飲みたくないというばかりに必死にさせた。
その為、命をかけた試合は凄まじい物であり、勝利したチームは通常の5倍とも言える勢いで大喜びをする。
一方の敗者には悪夢とも言える罰ゲームを受けるハメとなり、コレによって食中毒を起こして病院に運ばれる。
桂率いる『マリンナッツ』もこの極上的な不味い『混汁』から逃れる為に必死に試合に勝ち進みだす。
その中でも必死だったのがヴァイスだった。

「ウロポロス！」

と、叫んで放った魔球は突如ナックルボールのように分裂して、その分裂した球が全てシンカーとして円を描くかのように螺旋の如くに回転する。
それは正に無数の大蛇が襲ってくるかのような威嚇であった。

「うわぁあああああ！」

打者は思わず尻を地面につけて倒れ、球は何とか投手がグローブでギリギリに取る。

「俺は負ける訳にはいかねぇんだよッ！只でさえ給料が賭かってんだ、負けたらその上あんな得体の知れないモン飲まなきゃいけないんだぞ！！確実に地獄行き確定じゃねぇか！！　負けられねぇ！死んでも負けたくねぇッ！」

給料がかかっている上に負けたら死ぬほど不味い飲み物。
追い込まれるプレッシャーが生んだ彼の新魔球『ウロポロス』。
それはナックルとシンカーの2種類の魔球が合成したヴァイスのオリジナル魔球。
当然魔法は使用しておらず、どうやったら投げられるかは自分も知らない。
給料と命がかかった彼の必死な思いが生み出された魔球である。

銀時率いる『イヤンキッス』も銀時とスバルの主砲に、シグナムの剛速球によって勝ち進みだす。

「でやぁあああああああああ！」

カキィーン！

「ほぁちゃあああああああああ！」

カキィーン！

銀時と神楽の豪快なスイングが炸裂し、ホームランが連発。

「はぁあああああああああああ！」

カキィーン！

スバルの神速スイングが続き、打球が眼に映らないほどに鋭く打たれる。

「おぉおおおおおおおおおお！」

シグナムの剛速球とスライダーが炸裂して打者を抑える。
４人を中心とした活躍で、『イヤンキッス』も見事に決勝に進める。
数多くの強敵チームの屍を踏み、そしていよいよ決勝では誰もが予想通りに、『イヤンキッス』ＶＳ『マリンナッツ』となった。

「いよいよ銀さん達と桂さん達の対決だね」
「うん。どっちが勝つのか分からないけど……」

ついに2人を中心とした野球試合が始まる事で、楽しみにワクワクするなのはとフェイト。
しかし負ければ地獄行きの『混汁』を飲むハメになる。
そう考えると、どちらも出来れば負けて欲しくないが……3人が考える限りに確実に勝ってほしいのは、やはり銀時である。

「出来れば、銀時が勝ってほしいよ」
「そうだね。桂さんとはやてちゃんは挑発的な事を言ってたから…
…少し罰が必要よね」
「ほんとだよ。銀時が苦しむ姿は見たくないし」

完全に銀時派に突いた3人だが、予想通りであった。
いくら相手が仲間とは言え、銀時が苦しむ展開を3人は望んでいない。
桂とはやてには悪いが、ここは銀時が無事に勝ってほしいと願う。

＊

「シュート！」
「シュート！」
「シュート！」
「シュート！」
「シュート……」
「シュート！」
「シュートっス！」
「スパイラル・シュート！」

一方の選手室では神楽、エリオ、近藤、猿飛、ルーテシア、セイン、ウィンディ、イテツの8人が、サッカーユニフォームを着てサッカーのシュート練習をしていた。
イテツだけは何やら中二設定的な必殺技でしかも無駄に長く叫び、ルーテシアは他の7人とは大違いにゆるゆるとした蹴りをする。

「て、何をやって（いるの貴方達は）（んだお前等）（るんだアンタ等）ぁ！？」

額に青筋を浮かべて怒鳴りだすティアナ、ヴィータ、山崎のツッコみトリオ。
月詠、ディエチ、チンク、セッテ、ディートは唖然としていて、スバルは苦笑する。
ちなみに近藤と猿飛は、準決勝後に意識を取り戻して復帰するが、銀時達から聞かされた罰ゲームを聞いて青ざめていた。

「何って、サッカーのシュート練習ネ」
「見てわかんないのですか？」
「分かるわぁー！私達がツッコんでいるのは、決勝前なのになんでサッカーのシュート練習をしているかよ！」

神楽とエリオの単純な説明に、どうして野球試合の決勝前なのにサッカー練習をしているのか訳分からなく、怒るティアナ。

「いやー、何か急にサッカーの練習がしたくなってなぁ！」

「……野球で嫌な事を忘れるにはサッカーの練習にかぎる……」

「それ罰ゲームの恐怖による現実逃避をしたいだけだろ！？絶対そうでしょう！？」

現実逃避のためにサッカー練習ボケをする近藤（ゴリラ）とルーテシアに対して、ティアナに引けをとらないツッコみを炸裂させる山崎。

「気分を変えて違う競技の練習をすれば、いやな事を忘れられるからだよ……」

「あたし等は死んだ仲間（ナンバーズ）の為にも絶対に生き残らなきゃいけないっス」

「勝手に殺すなぁーーーーーーーーーー！そんで勝手に裏切ったテメェ等が良くそんな口をたたけるなおい！」

仲間を勝手に裏切っておいて、仲間の死を無駄にしないと喚くセインとウィンディに対して、血管を浮かべてツッコむヴィータ。

「そんなことより、早く銀さんの股を……」

「そこから離れろ変態ストーカー！！」

猿飛の下ネタボケにティアナは更に怒り出してツッコむ。

「うーむ。やっぱ技名はこうしたほうが良いかなぁ？……えーと、ネオスパイラルアレクサンダースクリューアームドスパイラルデストラクションナトルネードバーニングアクアウォールハイパーマグナムジェットストームボルケェートユニットインフィニティサイコブ

レスドラゴニックオーバースパイラルエンドインフェルノカラミティスパイラルウルトラライトニングギガブリッツスピリットスパイラルッバッハハリケーンザアルティ……」

ブチ×3

「長いわぁあああああああああああああああああああああああああ！」

ドカァー！×3

「ごふぁあああああああああ！」

無駄に技名が長い為、ブチ切れてイテツを蹴り飛ばすティアナ、ヴィータ、山崎の3人。

「何かスパイラルって5回言ったようじゃが？」

「気にしたら負けってやつだ。深読みしないほうが良い……」

何故か気になってしまう月詠に深読みしないように忠告するチンク。

「……いつもこうなのか？」

「そうだとすれば……お前も大変だな」

「あ……あははははは……」

いつもこのような生活をしている事で強く動揺をするセッテとディートに、とにかく苦笑するしかないスバル。

するとエリオはある事を思い出した。

「そう言えば月詠さん、銀さんとシグナムさんは？」

「ん？……ああ、何か外で話し合っているようじゃが？」

月詠がそう言いだすと、ティアナ、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディート、猿飛が鋭い眼線で月詠を睨みつける。

「待てぃ！今主達が思っている様なことじゃない！ただ、剣の事での話があるとか言っていただけじゃ！」

慌しく言い出す月詠の説明に、ティアナ達は納得する。

それと同時に、月詠はコレほどまでに恋路をもたらせている銀時は罪な男であると確信し、何故か心がゾワゾワする。

どうしてなのか不思議に感じていた。

＊

「んで、話って何？」

突如、シグナムにドームの外に連れ出されて訳わかんないように考える銀時。

それはシグナムの悩みに対する話であった。

「……お前から見て、私の剣はどれぐらい強くなった？」

「はぁ、シグナムの剣？」

「それでアーサァとの差はどのぐらいある？」

それは突如の質問であった。

それを訊かされた銀時は適当に答えようとするが、シグナムの眼がマジである為、真剣に考える。

考えた評価はと言うと……

「少なくとも最初に会った時よりは強くなってんだが、それでもアーサァに比べりゃパワーも魔法も劣っていらァ」

正直に評判する銀時に、シグナムは少ししょんぼりする。

「……前から思ってたんだが、お前最近剣に対する鍛錬に励んでいるようじゃねぇか。魔法の鍛錬を無視してまで剣の腕を上げようとするなんて……まるでスバルみたいじゃねぇか？」

そう、今のシグナムはまるで機動六課に入ったばかりのスバルと一緒であった。

スバルは最初は剣術を熱心に鍛錬し続けている為、剣の上達がかなり早い。

しかも飲み込みやすい為に、その上達は通常の剣士の2倍とも言える。

しかしそれが仇となっているのか、魔法の訓練を全く受けていない事が多い。

自然的に魔力が上がっているのはどうしてなのか今だ解説不明。

だが魔法の発動速さと正確なコントロールの成長は機動六課の中でも一番遅い。

今のシグナムは正にスバルがやっている剣術を中心とした鍛錬である。

騎士の魂を持ち、剣を極めようとするシグナムなら分かるが、だが最近は魔法を無視しているかのように見える。

「剣を極めようとするのも良いが、魔法も使えるんならバランスとらなきゃ勿体ねぇだろ？」

「以前、ティアナから聞いた。カリバーンの巨大要塞でのスバルと

アーサァとの戦いを」

ティアナから聞かされた2人の魔剣士の対決。
その激戦は、剣術はほぼSS＋ランクでシグナムを圧倒的に上で、魔法もフェイトとなのはを超えていた。
本気を出したアーサァも間違いなく最強の魔導士として恥じぬ強さだったが、何よりシグナムが驚いた事はそのアーサァを倒したスバルであった。
魔力リミッターの解除及び、フェイト、なのは、アルフ、ヴィータと共に攻めたのに、全く歯が立たなかった。
更にはゾーマ以上の強さにSS＋ランクの魔力、そしてスバルの『ティルヴィングエア』と同じ七星神刀（しちせいしんとう）の『ペンドラゴブレイド』など、デタラメ的な存在であった。
しかし、そのアーサァ相手にスバルは、たった1人で互角以上に剣と剣のぶつかり合いをして、打ち倒した。
そんなアーサァをスバル1人で倒したとなれば、銀時達を除けば間違いなく機動六課最強とも呼ばれてもおかしくはないであろう。

そんな部下の成長を副隊長として喜ぶが、それ以上にシグナムの中から嫉妬感が生まれた。
最初は全く言っても良いほど互角なのに、いつの間にか剣も魔法も軽く越えられてしまった。
更に言うと、スバルはアーサァから託された七星神刀（しちせいしんとう）を使いこなそうと鍛錬をして極めようとする為に徐々に上達している。
そのスバルに焦りだしたシグナムは、どうすえば良いのか迷う中、シグナムはひたすら剣の鍛錬をするしかなかった。

「騎士としての魂、剣の腕、魔力の高さ、何もかもアーサァは私を上回っていた。いつか超えるべき相手だと思ったんだが……」
「先にスバルに超されちまったっつー訳か」

シグナムの言う通り、アーサァは何もかもシグナムを上回っていた。
だがそれはアーサァが銀時のＤＮＡを利用した『プロジェクトＤＮＡ』による研究が原因であのような異常なまでの強さを持った。
それがなければ、もしかすればアーサァはゾーマ所やシグナムにも及ばないただの戦闘機人であったかと思う。

それでもシグナムにとってはアーサァは自分がたどり着いていない領域にたどり着く騎士である事は確かであり、同時にそれをはるかに超えて更なる高みである領域に走り向かうスバルに嫉妬をしていた。
その為にも『レヴァンティン』を使いこなす必要があると考えたのであった。

「私が弱いばかりに、テスタロッサ達も危険な目にあわせてしまった……もうあんな失態を起こさない為に。だが、たとえ強くなれたとしても仲間を護れるかどうか……」

もし強くなったとしてもまた仲間が同じ目に合う。
本当にそれで良いのだろうと疑問を抱き、己の弱さに悔やみ、仲間の危機を恐れるシグナム。
そんな彼女に対し、銀時は……

「人の一生は　重き荷を負うて　遠き道を往くが如し」
「？」

突如、何かの意味深そうな言葉を言い出す銀時に、悔やむ雰囲気を吹飛ばされて銀時に振り向くシグナム。

「銀時……その言葉は…」

「……あァ、昔なァ　徳川田信秀というオッサンが言った言葉さ…」
「誰だそのミックス大名！家康公だろ、家康公！」

間違えた名前を言ったのでシグナムにツッコまれる。
でもどうしてシグナムが家康公の事を知っているのかはスルーをする。

「最初にきいた時は何を辛気クセ―ことをなんて思ったが、なかなかどーして年寄りの言うこたァバカにできねーな。誰でも両手に大事に何か抱えてるもんだ。だが抱ついでる時にゃ気づきゃしねー。その重さに気づくのは全部、手元からすべり落ちた時だ」

攘夷戦争で数多くの仲間を失った。
その時は、もはや何も背負うつもりはなかったと何度も思ったが、新八や神楽を始め様々な人物と出会い、そしていつの間にかまた背負う事になった。

「もうこんなモン持たねぇと誰もが思っちまうかもしれねェ。なのに…いつの間にか背負いこんじまう。いっそ捨てちまえば楽になれるんだろうが、どーにもそーゆー気になれねェ」

銀時の言葉を黙って聴くシグナム。
確かに背負うものを全て捨ててしまえばどれだけ楽になるだろうか想像できない。
しかし、もし全てを捨ててしまえば今まで背負ってきた意味がなくなってしまう。

「シグナム…１０年前の【ゾーマ事件】の時…お前らは、はやての命を護る為俺達と戦った。そしてアイツの命を背負いながら最後は俺達と共に事件を解決する為奮闘した。だがあん時…お前らが最後

まで背負いきらなきゃ、はやてやリィンホースを助ける事ァ出来なかったんだ」

その言葉に、背負う意味を改めて思い出すシグナム。
もしこのまま慌ててしまって進んでいたら、背負えるものも背負えなくなってしまう所である。

「だからよぉ……お前はお前で、慌てずに強くなりゃ良いんじゃねーか」

ふと笑って銀時はシグナムの頭を撫でる。
恋した相手に撫でられる感触は凄く気持ちよく感じるようだ。
そしてシグナムはやっと笑いだす。

「銀時」
「あァ？」
「ありがとう、お陰で私は救われた気がする」
「・・・そうかい」

お互いに笑顔を見せ合って笑う。
シグナムの笑顔に、銀時はコレでシグナムは大丈夫であると確信する。
それと同時にシグナムはまた銀時との距離が縮まったような喜びを感じていた。
2人はそろそろ戻ろうとしてスバル達の所に向かうと、

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

2人の目の前には、哀れにも気絶して倒れているスバル達がいた。

しかも回りには黒い液体が散らばっており、スバル達はそれを飲んで倒れている。

「……え？……えええええええええええええええええええええええええ！？」

予想外の展開に絶叫する銀時とシグナム！
突如の最悪なピンチが２人を絶望へと導くのか！？

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

銀八
「えー、今日は久し振りに『銀八先生の質問コーナー』が始まります。５話ぶりなので皆さんは覚えてくれたでしょうか？覚えてくれた皆さんは正に真の銀魂ファンだと思います。そんで今回のアシスタントはこの２人。」

山崎
「どうも、真撰組監察方の山崎退と」

ディエチ

「？１０のディエチです……」

銀八
「あーあ、２人仲良くアシスタントしちゃって、羨ましいったらありゃしねぇ」

山崎
「せ……先生！？／／／」

ディエチ
「からかわないでくださいよ！／／／」

銀八に言われて顔を真っ赤になる２人だが、銀八はからかっているんじゃなくて羨ましくてムカついている。
そんな銀八の嫉妬的な気持ちを２人は分かる事はなかった。

銀八
「たく……まぁとりあえず久し振りだからかなり多いし、行くぞぉ。まずはこの人ペンネーム『ディワールド』さんからの質問。『コウガ「今回はウチの作者が書いてる小説の『牙狼－ＧＡＲＯ－＆リリカルなのは』の主人公、冴島コウガと・・・。」

ザルバ
「コウガの相棒の魔導輪ザルバだ。」

コウガ
「では、感想に行こうか。はやてがまたヅラっぽくなったな。」

ザルバ

「まあ、憧れ、好きな人だから影響されるんだろ。」

コウガ
「俺はその『好き』という気持ちが理解出来ない。」

ザルバ
「その内解るさ。」

コウガ
「それで、銀八とやらに質問何だがアンタはリリなのキャラで誰かと付き合うとしたら誰が良い？」

ザルバ
「次回も楽しみにしてるぜ。」『……とりあえず一番まともそうなフェイトで」

山崎
「無理ですね」

ディエチ
「何か無理そうです……」

銀八
「……てめェら、俺をいじめて楽しいのか？」

山崎とディエチの即答に、銀八は流石に落ち込む。
目から水が溜まっているようだが、すぐに腕で拭く。

「と言う訳で『ディワールド』さん、廊下に立ってください。そんで次ィ、ペンネーム『虚空』さん『質問です。

シンヤ「デバイスあっての話だが、主人達の豹変にデバイス達の感想はどうなんだ？特にお仕置きにこき使われてるレイ（レイジングハート）やバル（バルデッシュ）、その他、銀時ラブの連中のデバイス達、直接聞きたいんだが？」

『……ズバリ答えさせるな」

レイジングハート

≪Ｔｏ　ｂｅ　ｆｒａｎｋ，　ｉｔ　ｉｓ　ｈａｒｄ（正直言ってキツイけど）≫

バルディッシュ

≪Ｂｅｃａｕｓｅ　ｔｈｅ　ｍａｓｔｅｒ　ａｔ　ｔｈａｔ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｆｉｅｒｃｅ，　Ｉ　ｃａｎｎｏｔ　ｄｅｆｙ　ｉｔ（その時の主は怖いから逆らえない）≫

山崎・ディエチ

「ですよねぇ～！」

２つのデバイスの感想に山崎とディエチも強く納得する。

銀八

「……と言う訳で『虚空』さん、次の質問はデバイス関係以外のもお願いします……んじゃ次の質問すっか。ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「確かに今回の原因は神楽にあるけど」

唯「大勢の前で言うことじゃないよね」

神威　銀時「俺なら何言ってんだコイツと思うよ」

唯「さて今回の質問は次の人気投票はいつですか？」

神威　銀時「今度の人気投票も一荒れ来そうですけど」』」

山崎
「そうですね……それは僕も気になっていました。先生、人気投票結果はいつやるんですか？」

銀八
「……それなんだが、実はまだ決めていねぇーんだわ」

山崎
「なんすかそれ！？」

まだ決めていない事に山崎は呆れる。

銀八
「と言う訳で『神威　銀時』さん、その時まで楽しみに待ってください」

ディエチ
「で……では次行きます。ペンネーム『月光閃火』さんからの質問。『ドンドゥルマ～…月光閃火です♪

輝刃「…冷やしラーメン食べたいな…輝刃だ。」

あ～…もうそんな時期だもんね。あ…今回も質問あります。

1.　山崎（地味ントン）とディエチ（山崎（地味ントン）バカ一代）に質問です。この作品で相思相愛な二人だけど、ぶっちゃけ…

ヤった？』……て」

山崎・ディエチ
「なんですかこの質問はぁ！？／／／」

突如の爆発的な質問に2人は顔を真っ赤にする。
これを見た銀八は不愉快そうな表情をしていた。

銀八
「……まぁ、あの様子だとまだヤってねぇなこん畜生めが……それで次の質問『輝刃「…さすがに直球なのはマズイだろ…（汗）。そして俺からだ。

2．シャマルに質問…というかマジな話だ。本気で遊びに来な？俺も料理を教えるし、閃火は閃火でガチで話に乗るそうだ。

ハハハ…ホントに遊びに来てくれると、自分も嬉しいな…（照微笑）。』ずばりシャマルに答えさせます。」

シャマル
「是非、遊びに行かせて貰います！」

とシャマルは猛スピードで『月光閃火』さんの所に走って向かった。
それを哀れみそうに見送りする3人。
絶対にうまくならないと確信しているからだ。

銀八
「……と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立ってください。そんで次ィ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『リュウセイ
「デュナミス！目標を狙い打て！」

こなた
「リュウセイさん、幾ら声優が同じだからってそれは不味いよ、作者００は知らないんだしさぁ」

リュウセイ
「あ、そっか・・・そんじゃ気を取り直して質問行くぜぃ！」

こなた
「まずは私から行くよ『なのはさんの放つディバインバスターやスターライト・ブレイカーが何だかゲッ〇ー〇ームに見えるのは私だけでしょうか？』」

リュウセイ
「次俺行くぜ！『スバルに質問です。何だかこの小説だとスバルは何でもこなせる完璧超人っぽいのですが、何か致命的な弱点とか無いんですか？（例、泳げない等）もしあったら教えてください』」

こなた
「以上です！」

リュウセイ
「これからも応援してるぜ！」『……ズバリ答えます。こなたの質問は作者はゲッ〇ー〇ームの存在を知らないので、貴方の気のせいだと思います。そんでリュウセイの質問ですが、まずは野球のグローブで球をキャッチするのがかなり下手。しかも何故かテレビゲームは下手。他にもあったんだが、詳しくは言えねェがあるらしい」

山崎
「へぇー」

ディエチ
「テレビゲームが下手なんて意外だ」
スバルの意外な弱点を知る山崎とディエチが以外だなぁと思う表情をする。
銀八
「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、廊下に立っていなさい」
山崎
「では次行きます。ペンネーム『烈火竜』さんからの質問です『山崎さんとディエチさんに質問です。
『真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ　鬼の子守歌』で黒夜叉とドゥーエの間に『シルバー』という子供ができました。
……男の子と女の子、どっちが欲しいですか？』……」
大胆な質問に、山崎とディエチは顔を真っ赤に染める。
不機嫌そうな表情で額に血管を浮かべる銀八は2人が答える前に強引に質問を答える。
銀八
「えぇー、愛が出来れば男でも女でも良いそうです。と言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立ってください」
山崎・ディエチ
「あぁぁー！まだ考えているのにィィィィィ！」
強引に質問を答えた銀八に山崎とディエチは絶叫する。
相当に答えたかったようだ。

銀八
「それじゃあ次な、ペンネーム『白米』さん『前回の質問は即答ですか・・・。
それほど皆さん銀時が大好きなんですね。安心しました。

さて、質問です。
1．女性陣全員に質問です。
もし、貴方のベットの中に鬼兵隊の武市変平太がいて「今夜は寝かせませんよ♪」と言って来たらどうします？
A．警察に通報する
B．銀河の彼方へ吹き飛ばす
C．とりあえず、ギロチンの刑に処す

2．銀時Ｌｏｖｅな皆様に、またまた質問です。
次の内、ぜひ体験したいシチュエーションはどれ？一つだけ選んでください。
A．銀時と遊園地でデート（ハート）
B．銀時と添い寝♪
C．銀時と一緒にお買い物☆
D．銀時が「俺にはお前が必要なんだ！頼む、力を貸してくれ！」と肩を掴んで言って来る！

ちゃんと答えてくださいね。八当たり、脅迫、無解答は不可ですよ（黒笑）
『……ええ……まずは1の質問を答えさせます」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンティ・ディート・猿飛

「即Cで！（怒）」

銀時
「早いなおい！しかも全員Cかい！……とりあえず……2の質問も答えてもらおうか……」

フェイト
「Bが良いかなぁ／／／」

なのは
「にゃはははは……勿論Aなの／／／」

スバル
「Cが良いです。一緒にアイスクリームを食べられるから／／／」

ティアナ
「……兄さんと一緒にいたいからBで／／／」

シグナム
「銀時の為ならDで！／／／」

アルフ
「上に同じくさ！／／／」

リィンフォース
「私もぉ！／／／」

チンク
「……Aで・・・／／／」

セイン
「私も銀時と一緒に遊園地行きたいからA！／／／」

セッテ
「Cが良いかなぁ？／／／」

ウィンディ
「Aが良いっす！／／／」

ディート
「どれも迷うけど、特にと言えばDで！／／／」

猿飛
「断然Bだわ！だって（ピ――――――――――）や（ピ――――――）が出来るからぁ！／／／」

銀八
「おいいいいいいいいいいいいいい！最後のほう、凄く軽々しくと言ってはいけない事を言っているよぉ！」

それぞれの答えを聞き、最後の猿飛の質問に青ざめてツッコむ銀八。

山崎
「旦那……なんか大変そうですねぇ」

ディエチ
「私もそう思った」

2人はこれから先、銀時の前に更に過酷な試練が待っていると確信する。

銀八
「と言う訳で『白米』さん、次はたまに違う質問もお願いします。次ィ、ペンネーム『ポテトボーイ』さん『 1．新八君は、銀さんや神楽ちゃんが、いなくなって寂しくないですか？それにお通ちゃんもいなくなって、どん底の気分なのでは、ないでしょうか？ 自分の頭の中の妄想では寂しさのあまり新八 「お通ちゃんが、いなくなって、ファンのみんなが、お通ちゃんの事を忘れてしまうかもしれない。」 「そうならない為にも…」「僕が、お通ちゃんになる。！！」と言って、町中でお通ちゃんのコスプレをして歌っている新八君の姿を思い浮かべてしまいます。 2．山崎さんとディエチちゃんは、付き合う前に、どちらが先に、告白をしましたか？ また告白のセリフは、何ですか？ 後、2人の事は応援しています。これからも、頑張ってください。』」

山崎
「1は何！？何か新八君に対する酷い質問なんだけどォォォォォォォ！何これ、お通ちゃんのコスプレって！いくらオタクファンだからってそれはねぇだろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

ディエチ
「や……山崎さん、落ち着いて！」

ある意味でメチャクチャ恐ろしい質問に山崎は慌てだし、ディエチはその山崎を止める。

銀八

「まぁ、寂しいといっちゃ寂しいだろうよ。ちなみに新八は銀さんもお通ちゃんもいなくなって寂しいようです。ちなみに俺はお通ちゃんのコスプレをした新八が歌舞伎町の連中に変態的な眼線で見られるのも面白いと思います」

山崎
「面白くねぇーーーーー！」

銀八のとんでもない言葉に山崎は青ざめて叫ぶ。

山崎
「それに2つ目は……僕が告白したかな？それで……『会ったばかりで突然ですが……もし良ければ僕とお付き合いしませんか？』……と言って……／／／」

ディエチ
「そ……それで突然の告白だったから……つい／／／」

互いに顔を真っ赤に染めて見つめ合う。

銀八
「ぐぉほん！」

その甘ったれた空気をわざとらしい咳で打ち消す銀八。

銀八
「と言う訳で『ポテトボーイ』さん、これからもこの2人の応援をよろしくお願いします。そんで次行くぞぉ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『かがみ
「黒神さ～～～～～～～～～～～～ん！！」

こなた
「さすがなのはさん・・・外道・・・」

ウッソ
「ところで・・・Ｖ２には自爆装置はついてないはずなんだけど・・・」

かがみ
「じゃ～あのスイッチは？」

こなた
「いまさ・・・ミサイルが飛んで行ったけど・・・」

ウッソ
「しまった！！あれジャスタウェイＤ×１００個分の闇鍋が入ったミサイルだ！！ターゲットは・・・キャロちゃんだったような・・・」

かがみ
「ちょ！！それ，やばいわよ！！」

こなた
「ま～とりあえず質問だよ

？山崎さんとディエチさんはどこまで進んだの？もうＳＥ・・・」

かがみ

「言わせないわよ!!」

こなた
「アハ♪」

ウッソ
「?はキャロちゃん・・・ミサイルはどうなりましたか・・・ついでに記憶が飛んで昔暴言吐いたことを忘れてほしいです．本人答えてください」

かがみ
「あと，黒神さんがぼろぼろになったから気休めだけど痛み止めを送るわ」

こなた
「そうやって人の心配をするかがみ萌え～」

かがみ
「うっさい!!」『……ズバリ答えるぞ。……今所、恋人関係のところまで進みました」

山崎
「そう言えば、こなたは何を言おうとしたんだろう?」

ディエチ
「さぁ?」

山崎とディエチは最後の言葉を気になるが、それはまだ気にしなくても良いのであった。

銀八
「そんでもう1つの質問、キャロはその時『真竜・ヴォルテール』を召喚して返り討ちにしました」

山崎
「キャロちゃん怖っ！」

本当に怖いと思っている山崎。
何故なら以前に彼女からとんでもない目に合ったからである。
詳しくは『第三十三訓：女の怒りはメッチャ怖い！』で。

銀八
「と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、試験が終わった後の『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』を楽しみに待っています。んじゃ次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
山崎とディエチに聞きます。
銀魂世界でデートするならどこに行きますか。
それと銀魂世界でデートしたら１００％近藤以外の真撰組がジャマか抹殺すると思いますが頑張ってください。』」

山崎
「副長達が邪魔！？何でぇ！？」

どうして真撰組の連中が自分達のデートを邪魔するのか訳わかんない山崎。
これは最早質問に答える所ではなかった。

銀八
「まぁぶっちゃけ真撰組が居辛い場所の方が良い用だな。と言う訳で『クアンタ』さん、真撰組の連中がもしその様な行動をしたら軽

蔑してください。んで次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『最近なにかと熱いジミーとディエチの二人に質問。

１つ目　何回か前の質問でスカリエッティが話してましたが（第六十六訓質問コーナー　参照）、二人は普段からデートによく行っているそうですね？
今まで具体的にどんな所へデートしに行ったのですか？

２つ目

二人はお互いのどういうところに惚れたのですか？』」

山崎とディエチは更に顔を真っ赤にした。

山崎
「……い……色々と一緒に行ったけど、ディエチちゃんと一緒にデートをした時が楽しいよ／／／」

ディエチ
「わ……私もです……／／／それに山崎さん、優しそうな方だったから私は……／／／」

山崎
「お……俺もディエチちゃんが可愛いからそれで……／／／」

２人は更にお互いに熱い眼線で見つめ合う。

銀八

「ああーちくしょう！俺だって彼女ほしい！と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、俺にも彼女が出来る方法を教えてください！」

山崎
「では次行きます。ペンネーム『織田上総介信長』さんからの質問。
『こんばんわ～

直接御会いしたのは初めましてでしたっけ……

後、すみませんが突然ながら質問です。

とある質問コーナーを見て思ったんですが……

黒神さん、貴方もＶ２の一斉攻撃を食らって黒焦げ状態で生きてるだけでもう人間離れしてますけど……

一体、貴方は何者なんですかぁぁぁ…（「○」；）

ただの人間なら、木っ端微塵に身体そのものも消え去ってるでしょ…（「○」；）

そんだけの防御力もあったらなのはの技も効かないんじゃないかと

思うんですがそこはどうなんでしょうか！？
『』」

その質問に山崎とディエチも不思議に感じた。

銀八
「ズバリ答えます。黒神がどうしてあんだけ喰らって平気かと言うと、あくまであとがきの話であるからにして、現実ではないからすぐに再生できると思います。ちなみにコレが『銀八先生コーナー』やあとがきでもなければ、間違いなく即死にます。後、このような事はあんまり気にしないのが正しいです。きりがないので」

ディエチ
「た……たしかに」

銀八
「ちなみに作者はその時の攻撃は死ぬほど痛いと言っていました」

山崎
「ですよねぇぇぇぇ！」

銀八
「と言う訳で『織田上総介信長』さん、質問ありがとうございました。次ィ、ペンネーム『私にいい考えがある』さん『なのはさんたちに質問です。
九ちゃんの誕生日の話で、銀さんたちがパーティーに行った時に呼ばれもしないのにのこのこ来たセレブたちが銀さんたちに暴力をし、さらには「貧乏人」と悪口を言っていました
この件についてなのはさんたちはどう思いますでしょうか？。

ちなみにこの質問はブチ切れても良い質問ですので・・・先生の代わりに私をぼこぼこにしてください。』……え?」

銀八が質問を言い終えると、後ろからフェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛の１３人の怒気を感じた。銀八、山崎、ディエチは青ざめて大量の汗を流す。

銀八
「え・・・・・・ええー、フェイト達の怒りが異常なまでに感じます。……は……ははは……と言う訳で『私にいい考えがある』さん、フェイト達を刺激するような質問は控えてください……」

山崎
「つ……次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問。『１．山崎とディエチに質問です。
二人はいつ子作りを始めるのですか?』……て」

山崎・ディエチ
「またぁあああああああああ!?／／／」

大胆な質問に顔を真っ赤にする２人。
そこはまだ考えていなかったようである。

銀八
「はぁー、熱い熱い……んじゃ次いくか。『２．銀時好きに質問です。
銀時と心も身体も一つに繋がりたいのならどこでしたいですか?
１．公園で青○
２．ラブホテルで○Ｍプレイ

3．銀時の部屋でベットイン』……何だろう……この敗北感？」

この質問でフェイト達は正直に答えだす。

フェイト　3

なのは　3

スバル　1

ティアナ　2

アルフ　3

シグナム　3

リィンフォース　1

チンク　2

セイン　3

セッテ　1

ウィンディ　3

ディート　2

猿飛　2

銀八
「セクハラ質問で訴えないかよ！？……しゃあねぇ。と言う訳で『正宗の胃袋』さん、俺にも幸福を分け与えてください。次ィ、ペンネーム『サディスト』さん『ディエチに質問。山崎の何処に惚れたの？　あんな　特に特徴もなく、対した活躍もしてないその辺りに落ちてる「石ころ」の何処に。教えてくれ。

山崎に質問。
原作じゃどんな散々な目にあっても、ほとんど相手にされないし「地味道」を永遠と突き進んでるけど…正直楽しい？
』」

ディエチ
「や・・・・・山崎さんには山崎さんの良い所がありますよ！／／……慕われやすいし優しいし……それにミントの扱いを長けているし……」

山崎
「ディエチちゃん……そうですね……原作じゃ散々な目にあっているから、楽しくないかもしれない。それにオリジナル設定を考えてくれた黒神と僕とディエチちゃんのネタを許可してくれた烈火竜さんに感謝していますし・・・お陰でディエチちゃんと出会えたから／／／」

ディエチ
「・・・・・・山崎さん・・・・・・・／／／」

更に互いに見つめ合う2人についに銀八が切れる！

銀八
「あーもう、いちいち見つめあうな！きりがねぇ！と言う訳で『サディスト』さん、このバカップルを何とかしてくれ！」

山崎・ディエチ
「バカップルはないじゃないですか！」

銀八の言葉に2人が息ピッタリに声を合わせてツッコむ。

銀八
「んじゃ次いくか。ペンネーム『次村陣八』さん『銀さんに質問、お前は原作（赤夜叉さんの）どうりになるんですか（意味分かると思いますｗｗｗ、他の人怒らないで下さい、これあげます（銀さん写真集プレミアム））」

なのはに質問、同じく白い悪魔と呼ばれるアムロと如何してこんなにちかうんですか？
『・・・・・ズバリ答えます。1は正直言って分かりません。作者の小説の進み方になります。2はそうですね・・・・・・なのはの場合は魔法を使い、アムロはガンダムを使いますので、魔法少女と戦士の違いじゃないでしょうか？・・・・・詳しくは分かりません。と言う訳で『次村陣八』さん、これからも小説頑張ってください」

山崎
「では次行きます。ペンネーム『Σ』さんからの質問。『今更思ったことなんですがエリザベスと神楽って質量兵器バカスカ撃ってま

すよね。俺の記憶が確かだったらここ（ミッドチルダ）質量兵器ご法度なんですよね?大丈夫なんですか?管理局的な意味じゃなくて一般市民的な意味で。
また質問、マガジン派の土方に質問です。歴代のマガジンの漫画で一番好きな漫画はなんですか?ちなみに俺はデビルマンです。色々考えさせられました・・・あの漫画には・・・（ちなみに漫画版デビルマンを原作にしたＯＶＡの主人公、不動明の声は星海坊主の声をやっている速水奨さんです。）
最後に、これからも連載頑張ってください』」

銀八
「ズバリ答えます。神楽とエリザベスは管理局の一員じゃないですが、機動六課の協力者として特別に許可を貰っています」

山崎
「なるほど・・・・・・もう1つの質問じゃ、副長は確か『はじめの一歩』を注目しているようです。熱い展開が特に面白いとか・・・・」

銀八
「ほぉー、なるほどねぇ。と言う訳で『Σ』さん、人の好きな漫画は人それぞれによって違うと思います」

ディエチ
「では、次行きます。ペンネーム『漆黒の不死鳥』さんからの質問です。『早速ですが質問です
銀さんは『銀魂』の世界じゃモテないのに何で『なのは』の　世界じゃこれでもかって位モテるんですか?
後銀八先生同情します』」

銀八
「俺だって知りてぇー！（涙）」

突如の銀八の涙に、山崎とディエチも驚く。
相当なまでに銀時が羨ましかったであろうと確信する。

そして３０分後、

銀八
「と言う訳で『漆黒の不死鳥』さん、これからも頑張ってください」

山崎
「切り替え早っ！？・・・・・・まぁいいや。次はペンネーム『アクセル』さん『質問です。

エリオは最近のキャロの事をどう思ってるんでしょうか？
最初の頃はいいお友達だったんだろうけど、今のキャロは機動六課の恐怖の一つと言っても良いくらいに変わり果ててしまいましたからねー。』・・・・・・僕は怒らせたらメッチャ怖いと思う」

ディエチ
「私も・・・・・・」

銀八
「そうだな・・・・・・エリオから聞いたんだけど・・・・・・ジョイソン並に怖いってよ」

銀八の口から聞かれた信じられない言葉に、２人は黙り込む。
今のをもしキャロが聞いたらどれだけ怖いほどに怒りを表すか、想

像したくない。

銀八
「と言う訳で『アクセル』さん、キャロのヤンデレは要注意。次ィペンネーム『武士堂』さん『質問1
最近銀魂が「主人公マンセー漫画」だとかアンチスレで言われてますが違いますよね？　そもそもアンチの戯言をファンが真に受けるのが筋違いですよね？　アンチって根も葉もない出鱈目ばかり言いますもんね？

質問2
最近銀さんの事を「口先ばっかで虚勢ばかり張ってるペテン師」とか「作者（空知先生）の自己投影キャラ」とか「言ってる事が全て白々しい」とか「新八と神楽に感謝や謝罪を全くしない人でなし」とか言うクソったれなアンチ共がいますが、銀さん自身自分の事をどう思っていますか？　私は銀さんが好きなのに、上記のアンチ共の戯言のせいで銀さんを信じられなくなっています。まるで洗脳されていく様で…。どうすれば良いのでしょうか。銀さんの考えを聞かせて下さい。』ズバリ答えます。1は作者的にはそうは思わないと思います。それに真に受け入れないのが正しいと思います。2は・・・・・」

銀時
「そこは俺が答えとくわ」

突如、銀時が銀八の後ろから登場した。

銀八
「のぁ！いつのまに！？」

山崎
「だ、旦那ぁ!?」

ディエチ
「坂田銀時!?

銀時
「そうだなぁ・・・・・そう言うアンチ野朗の戯言なんて気にしちゃいねぇよ。それに『武士堂』さんもそのアンチ連中の戯言を無視したほうが正しいぜ。人っていうのは自分の考えより多くの人間の戯言を聞き流しやすい生き物でよォ、下手すリャ自分もン賀されるようにその連中の一員となってしまうもんさ。だからよォ、『武士堂』さんも他人の事を気にするより、自分の信じた方を見たほうがいいと思うぜ。そうすりゃアンチ共の戯言は気にしなくなるし、何より自分の考えたほうが楽になるぜ」

山崎
「旦那ぁ・・・・・・」

銀時
「そんじゃ、『武士堂』さん、これからもここの馬鹿作者の事よろしく頼むわ」

銀時はそう言ってこの場を去る。

銀八
「以上、銀さんの『武士堂』さんに対するメッセージでした。と言う訳で『武士堂』さん、アンチ共の連中の事は気にせずに三流読者と考え、これからも『銀魂』と銀さんをよろしくお願いします!・・・・・次ィ、ペンネーム『光軍』さん『光軍

「どうも、【黒伸】先生。いつも楽しみにこの小説を読ませてもらってます。最近登録して小説を書き始めた光軍です。こちらの小説も銀魂を元としており、銀さん等の幼少期あたりの話を書いています」

洋基
「ホンマお前は他の先生には腰低：光軍「うるさい！」・・・・・っと俺はオリキャラの浅倉　洋基や本編ではまだ子供やけど今は１７歳設定や」

光軍
「詳しくはこちらの小説を見てください」

洋基
「で、質問有るんとちゃうの？」

光軍
「そうだった！桂さんに質問です。　桂さんは今、んまい棒を何種類携帯していますか？　良かったら僕が考えた烈怒露舞棲焚唖味（レッドロブスター）を使ってください」

光軍・洋基
「「よろしくお願いします（お願いするわ）！！」」『ズバリ答えます。ヅラの話によると、１５１種類はあるそうです」

山崎・ディエチ
「ポケモン並！？」

そんなにあるとは思いもよらなかった山崎とディエチ。

銀八
「と言う訳で『光軍』さん、『烈怒露舞棲焚唖味（レッドロブスター）』のネタ、ありがとうございます」

山崎
「では行きます。ペンネーム『ルシファル』さんの質問『フェイト達に質問　いままで銀さんに夜這いをかけたことは、何回ありますか？』・・・・・・て何だコリャー！？」

ディエチ
「コレ、思いっきりセクハラ質問じゃない！？／／／」

あり得ない質問に叫びだす山崎とディエチ。
この質問を不機嫌そうだけど銀八は答える。

銀八
「そうですねェ・・・・・・何十回はあるそうだ」

山崎・ディエチ
「いちいち答えなくても良い！」

正直に答えだす銀八に山崎とディエチがツッコむ。

銀八
「と言う訳で『ルシファル』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『絶神；肥後魚』さん『
肥後魚
「どうも、はじめまして。

新参者の肥後魚と申します。たったいま初投稿をしました。出来ればこれからもよろしくお願いします。あとついでに粗品ですが、熊本は水が美味しいところです（実話）。阿蘇の天然水を１００？送っときますね。」

次真
「どうも、作者が書いている小説の主人公の片峠次真（かたとうげつぐま）だ、以後お見知りおきを。」

肥後魚
「まあ自己紹介が終わったところで早速質問の方を行きたいと思います。」

次真
「一つ目は俺からだ。？何かと言っては屁怒絽様のネタが出ると相当怖がっているが、そんなに恐ろしいモンなのか？　あと、俺が戦って勝てると思うか？」

肥後魚
「相変わらずずばずばと突っ込むなぁ。二つ目は私から。いや、これはお願いかも・・・。？まだまだ始まったばかりのうちの小説ですが、近いうちにもうひとつ書こうと思っています。こちらはコメディー主体にしようと思っているのですが、そこでです。最近、影が薄くて話しに出てこない方々、その小説に出て見ませんか？　別に目立てるわけじゃあありませんが、その人を軸に書こうと思っていますので、是非ご参加ください。（まあ二名ほど選抜してみてください）二人のゲストのうち一人は出来ればシャマルさんを希望します。』……ズバリ答えます。１ははっきり言って怖いです。後、屁怒絽様に逆らうのは自殺行為なので辞めた方がいいです。２はそうですね……とりあえずユーノと希望のシャマルでお願いします」

山崎
「何だろう……、２人に強い同様を抱く虚しい感覚は？」
影の薄い２人に対して強い同様を抱いた山崎。
ディエチは苦笑いして山崎の肩を触る。

銀八
「と言う訳で『絶神；肥後魚』さん、これからも頑張ってください。次が最後だな」

ディエチ
「やっとですか……今回もかなり長かったですよ」

銀八
「んじゃ行くぞぉ。ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
１．ティアナさんに質問です。最近のスバルをどう思っていますか。シグナムさんに質問です。
これが載っている頃にはもう終わっていると思いますので、シグナムさんのプレゼントは「銀魂ＢＥＳＴ」　とＤＯＥＳの「バクチ・ダンサー」をあげます。
最後に一言、いつか新八君が来たときに新八君に読ませてください。
「新八やましいことを言うから、出番が遅くなるんだよ。第六十一訓参考」』……ズバリ答えます。ティアナ、どうぞ」

ティアナ
「アーサァとの件以来で、剣の鍛錬を更に増やしたそうだから……なんか凄い勢いで強くなっている感じよ……私も、スバルと並べる

ぐらいに強くならなきゃと思わせるぐらいに……アーサァから託された思いを裏切らない為に」

銀八
「はい、ありがとうございました。そんでシグナムのほうは」

シグナム
「はぁ～、「バクチ・ダンサー」はやっぱり良い。魂を感じる」

銀八
「……凄く喜んでいます。と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、新八の忠告をわざわざありがとうございました。以上で質問コーナー終了！」

山崎
「いやー、何か以前より質問が凄く多くなりましたね」

ディエチ
「コレを全部答えるのも大変だ」

山崎とディエチは多くの質問の答えに大変だと思う。
これには銀八も疲れた表情を表す。

銀八
「それにしても、２人も今回のアシスタントお疲れさん」

山崎
「いえいえ、中々楽しめましたので」

ディエチ

「それに、私達に対する質問も多かったですし」

山崎
「……ディエチちゃん……／／／」

ディエチ
「……山崎さん……／／／」

2人はまたもや見つめ合う。
コレにはもう付き合ってられないと反吐が出るほど不愉快そうな表情で銀八は2人から離れる。

銀八
「畜生め……なんで俺には彼女が出来ねぇんだ?……しゃあねぇ。とりあえず次回のアシスタントはノーヴェにやらせてもらいます。ではまた5話後でお会いしましょう」

第七十八訓：何かに集中して途切れると、他の事をしたくなる（後書き）

黒神
「ペースが落ちてしまって皆さんには申し訳ないと思います。ですがこれからもちゃんと続けるつもりなので、これからもよろしくお願いします（土下座）」

銀八
「『銀八先生コーナー』もよろしくお願いします」

ルーテシア
「次回……「どうせ負けるなら、やらないで負けて後悔するよりより潔く負けたほうが後悔しない（多分）」……テイクオフ」

第七十九訓：どうせ負けるなら、やらないで負けて後悔するよりより潔く負けた

黒神
「本当にペースが落ちるのって大変ですねぇ」

銀八
「たくぅ、お前スクーリングが終わったから安心して手抜きしてんじゃねぇのか？」

黒神
「う……否定できないかもしれない……」

苦い表情で銀八に言い返せない黒神。

黒神
「あ、今回はあの人物が登場します。では」

リィンフォース
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第七十九訓：どうせ負けるなら、やらないで負けて後悔するよりより潔く負けた方がいい。

「どぉなってんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!?一体何が起こりやがったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

突如に気絶して倒れてしまった『イヤンキッス』のメンバー達。
何やら青ざめて苦しんでいるかのように気絶しているようだ。
コレでは試合には出られない。

「一体何があったというんだ!?何故このような……ん?」

シグナムも今回ばかりは冷静さを失って大慌てだが、床下にこぼれている黒い水溜りみたいな物を見つける。
しかも何やら悪臭が伝わって、思わずシグナムは鼻をつまむ。

「ぐぅ!……ま……まさか……これは混汁!?」
「あぁ!?何で源外の爺さんが作りやがったえげつない飲み物があんだよ!?」

どうしてコレがココにがあるのか分からないが、スバル達が気絶して倒れたのも原因はこの混汁にあった。

「クソぉ、一体誰がこんなことを!」
「銀時、コレを!」

すると、シグナムは何かを発見した。
何やら手紙らしき物であるが、とりあえず読んでみる事にした。
その内容を見てみると、なんとはやてが書いたメッセージであった。

『

銀ちゃんとシグナムへ。

この手紙を読んでいる頃は間違えなくスバル達は気絶していると思うな。

何故皆が気絶して倒れているかと言うとな、実は私達が源外さんからこっそりと『混汁』を奪って、無理矢理飲ませたんやで♪

いくら私達でもあんなえげつない罰ゲームを受けたくないし、スバル達には犠牲にさせてもらいました♪

コレで私と桂さん達は無事に罰ゲームを受けずに優勝できます♪

だから2人仲良く私達の生け贄になってもらうでぇ。

卑怯は承知してるんやけど、生き残る為にはコレが最優先やから。

だから油断したシグナム達があかんし、かんにんな♪

それでは、冥福を祈ってるね♪

八神はやて

PS：ちなみにこの手紙を皆に見せても無理やで。だって証拠はあらへんもん。（笑）

『

「笑えるかぁあああああああああああああああああああああ！つうかなんて事してくれやがったんだヅラの野朗と狸女ァァァァァァァァァ！」

「やられたァァァァァァァァァァァァァァァ！主と桂に不意打ちとられたァァァァァァァァァァァァァ！」

犯人は桂とはやて。

銀時は思わず手紙を怒り任せで破ってしまった。これでは証拠が完全に消えてしまう事になるのに。

スバル達は突如の2人の奇襲によって『混汁』を無理矢理飲まされた。

コレにより全員再起不能になってしまい、最悪な状況になってしまった。

「待てよ、スバル達がこうなってしまい……残っているのは私と銀時のたった2人……て事は！」

「は！俺等……メンバー不足で失格……」

しばらく思い空気が漂う。

今『イヤンキッス』にいるのは銀時とシグナム。

たった2人だけでは試合にもならない。

つまり、このままでは失格になって罰ゲームを受けるハメになる。

「やばいぞ！このままでは私達あの世に送られてしまうではないかァァァァァァァァ！」

取り乱してしまうシグナム。

超が付くほどの予想外な出来事に人生最大最悪のピンチに追い込まれた。

「だだだ大丈夫だシグナム……こここここんな時はなぁ……たたたたたたたたたたタイムマシンで過去に戻って……」

フルフルと震えて怯えだしている銀時は、頭をゴミ箱の中に突っ込めている。

余りの危機的状況に理性を失ったのである。

「銀時ぃ、お前が落ち着けぇぇぇぇぇぇ！」

青ざめて大量の汗を流しながら叫びだすシグナム。

今更仲間集めをしても間に合わない。

絶体絶命の時に、突如扉が強く開かれた。

「こんな時の為にやってきました！」

「！？」

突如、聞き覚えのある女性の声に2人は振り向くと……『イヤンキッス』のユニフォームを着たリィンフォースがいた。

リィンフォースだけではない。

その後ろにはフェイト、なのは、アルフ、プレシアの4人もいた。

「リィンフォース！それに、フェイト、なのは、アルフ、プレシア！」
「どうしてお前達がここに！？」
「実は、銀時達が『コーシカップ』に出ていると知ってすぐに加勢にやってきました。ですが、主と桂が必ず何かをやらかすのではないかと思い、それで万が一の事を考えて決勝前までずっと隠れていたんです」
「ああ、下手すればお前も犠牲になっていた」
リィンフォースの行動は別の意味で正しいと思うシグナム。
もし最初からいたら、今頃スバル達と一緒に桂とはやての犠牲になっていたのかもしれない。
「突然、リィンフォースに『力を貸してほしい』と言われたから着て見たら……」
「スバル達がこうなってた訳ね……」
呆れてこの状況を考えるプレシアと苦笑するなのはの2人。
特に今の状況を見て取り乱していたのがフェイトであった。
「エリオ、エリオぉーーーーーーーーーーー！」
「落ち着きなって、フェイト！」
気絶して倒れているエリオを抱き抱えて慌しく揺らすフェイト。
そんなフェイトを落ち着かせようとするアルフ。
「最悪な状況に備えて待機していたけど予想通りですね。ですので私は銀時達の為に仲間を早く読んだわけですよ」

自信満々に言い出すリィンフォース。
思わぬ形で最悪な状況をしのげた……と思いきや、ここでプレシアがある事を思い出す。

「ねぇ、ここにいる私達を数えてみたんだけど……数えても7人よ。後2人少ないんだけど……」

その一言で場の空気が氷づく。
今いるのは銀時、フェイト、なのは、アルフ、シグナム、リィンフォース、プレシアの7人。
完全にメンバー不足である。

「あああああああああああああああああ！しまったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

やってしまったっと言う様な表情で、絶叫するリィンフォース。
一気に場の空気が重くなって最悪な展開に戻ってしまった。

「どうすんのよ！これじゃあ私達を呼んだ意味がないじゃない！」
「大体、ユーノ、シャマル、キャロ、ギンガもまだいたのに何で呼んでやらなかったんだい！？」

呼ばれた意味がないと叫ぶプレシアと、どうしてあの4人を呼ばなかったかを訊き出すアルフ。

「影が薄かっ…じゃなくて、探してもいなかったんですよぉ～」
「ちょっとォォォォォォォォォォォォ、今さっき『影が薄かった』と言い掛けてなかったぁ？」

原因は4人の影が薄かったと言い出すのを中断して探してもいなか

ったと原因を変更するリィンフォースに対し、リィンフォースとは思えないボケと結構酷い事を混ざり合わせた発言にツッコむプレシア。

「どどどどどど、どうしよう！これじゃあ銀さんが罰ゲームを受けて……」

最悪な振り出しに戻ってしまい銀時達はオドオドすると、

「……う……うう……」
「……く……一体何が……」
「!?」

突如、混汁を無理矢理飲まされて気絶した神楽と月詠がゆっくりと起き上がる。

「神楽、月詠！」
「2人とも無事だったか!?」
「ん……おお、銀ちゃんとシグーも無事だったアルか！」

まさか2人が起き上がるとは思いもよらなかった銀時とシグナムに対し、2人が無事であったと安心して笑い出す神楽。

「神楽、月詠、無事だったんだね！」
「ああ、エリオのお陰で何とか無事に……」

フェイトは2人が無事であったと知り安心すると、月詠はエリオのお陰で無事ですんだと言う。

「でも、どうして2人だけ?それに、エリオのお陰って……」

「突然、桂とはやてがどこから持ってきたのか無理矢理『混汁』をわっち等に飲ませようとしたんじゃ」
「私とツッキーも無理矢理飲まされるところだったんだけど、エリオが私達を護る為に身代わりに……」
そう、2人が無事なのはエリオが神楽と月詠の盾となって『混汁』の脅威を受けてしまったのであった。
ちなみに2人がどうして気絶していたかと言うと、何やらボールを踏んで滑って転び、頭を強く打ったからである。
「……しかし、ヅラとはやてもやってくれるネ！」
「このまま訴えて反則負けにさせてやろうとしても気が治まらぬ…野球で一泡浴びせさせてやるわぁ！」
いくら勝つためだからとは言え、この様な仕打ちをされては流石に怒りだす2人。
「まぁ、何はともあれ……とりあえずメンバーは揃った事だし……そろそろ……」
「ちょっと待って銀時！」
安心して試合に出られると確信する銀時に対して、まだ何か問題があるように叫ぶアルフ。
「確か『コーシカップ』では、監督不在のチームは失格になるんじゃ……」
アルフのその一言で銀時、シグナム、神楽、月詠は青ざめる。
「イテツゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

「起きろォォォォォォ！頼むから起きてくれェェェェェェェェェェェェ！」

冷静さを一気に失ったかのように、気絶しているイテツの体を揺らす銀時とシグナム。

「最悪ネェェェェェェェェェェェェェェェェ！これじゃあ私達失格だヨ！」

「……」

神楽は頭を抱えて叫びだし、月詠はしゃがんで煙管を持ちながらプルプルと震えている。

「おおおおお落ち着いて銀時！まだ可能性が０じゃないんだし！」

「そそそそそうだよ！今すぐに誰か代理の監督を！」

フェイトとなのはも冷静さを失いかけながらも銀時達を落ち着かせる。

しかし今この場にいるのはたった９名。

誰かが代理監督をしても１人欠ける。

絶対的なピンチの中で、

「それぐらいで慌てんじゃねぇーよ、この天然パーマ！」

１人の女性の声が聞こえた。

銀時達はその声が聞こえた方を振り向くと、黒い着物を着た老婆が１人いた。

その人物は銀時達が知っている人物である。

「ば……ばぁさん!?」
「お登勢さん!?」

銀時とフェイトはあり得ないというばかりに驚きだした。
そう、この方こそが万事屋の1階にあるスナックのママで、万事屋の大家であるお登勢。
かぶき町四天王の一人でもあり、周囲からは『女帝お登勢』という異名で通っている。

「ババァ、何でこんなところに!?」

神楽も意外な人物の登場には驚きを隠せなかった。
九兵衛、近藤、山崎、源外、猿飛、鉄子、クリステル、外道丸、お通に続き、今度はお登勢が来た。

「いやそれがさぁ、何か変な光が突然現れてこの世界に飛ばされちゃったんだよ。そしたらこの世界が、以前に銀時達が言っていたフェイト達の世界で、しかも未来とはねぇ……あの爺さんも変な機械(カラクリ)を作るもんだい」

呆れて頭を抱えるお登勢。
また源外の変な機械が原因かと思っているが、それとは別不明の別次元だった。

「所でアンタ等、監督不在で困ってたんだろ?だったらあたしが代わりにやってやるよ」
「え、良いの!?」

監督代理を引き受けるお登勢に意外そうに驚くプレシア。

「このまま何もせずに負けるぐらいだったら、潔く負けて来いってんだ」
「お登勢……すまない！」
お登勢に強い感謝を抱くシグナム。
かくして、銀時達の失格ピンチは免れ、ついに決勝戦が始まるのであった。

＊

『イヤンキッス』と『マリンナッツ』はグランドで整列に並び、互いに例をする。
だが、桂とはやては予想外の出来事に内心驚いていた。

（そんなぁ！まだ替え玉が残っておったなんて！しかもフェイトちゃんとなのはちゃんが加わったらヤバイんじゃ！）
（ぐ！流石にそう簡単にはつぶれないか！）

心の奥底ではメチャ悔しがっている。
銀時、シグナム、神楽、月詠は2人を容赦なく睨みつけている。
1回戦後の暴言と決勝前の仕打ち、今回ばかりはやりすぎであると懲らしめたいようである。

「あはははははははは！ヅラぁ、はやで、お主ら何かしよったかぁ？」

辰馬はあいも変わらず高笑いして2人に聞く。

「（ヅラじゃない桂だ）（はやでやないはやてや）」

「別に何もしていない」

「そうや、銀ちゃん達の一方的な目線や」

ツッコミながらも2人は何もしていないと言い出す。

そんな2人を見てザフィーラとヴァイスはこう思った。

（絶対に何かやらかした）

（その証拠に坂田の旦那達のメンバーが大幅違うしよ）

絶対に何ややらかしていると確信している2人だが、あえて言わない事にした。

特にヴァイスは給料の危機をはやてに握られているので尚更である。

≪野朗共！良くぞ決勝まで勝ち残った！この試合に勝ったチームが、『第８２回コーシカップ』の優勝チームとして名誉が送られるぞ≫

「その声……あの爺かい！？」

源外もこの世界に飛ばされた事に意外そうに驚くお登勢。

≪このまま今すぐ試合に行きたい所だが、『混汁』が何者かに奪われてしまって罰ゲームを急遽変更させてもらった≫

『混汁』が奪われた事に誰もが信じられないほどに驚く。

無理もない、一滴口にしただけでもすぐに食中毒を起こす地獄の罰ゲーム兵器を奪う者がいるなど信じられないからだ。

犯人の桂とはやては知らない顔をしているため、銀時、シグナム、神楽、月詠の４人は怒気を放っているが少し抑えている。

≪そこでわっち等は新たに別の罰ゲームを用意しやした。別の意味で『混汁』並に厄介ですので死ぬ気で買ってこざんす≫

≪その罰ゲームとは……≫

（まさか、パンデモニウム!?ちょ、マジ勘弁してくれよ!あんなえげつねぇ式神の虫を食べるの、俺ァ絶(ぜっ)てぇやだか……）

銀時は『パンデモニウム』だと確信して絶対に負けられないと改めて誓う。

だが、今回源外と外道丸が用意したのは、

≪『マスモデウス活け漬けの焼酎』を飲ませてもらうぞ≫

と源外が後ろから出したのは巨大なビンであり、その中にはオレンジ色の液体に巨大な毛がもじゃもじゃと生えていて悪魔のような爪が生えている以下にも殺戮的な蜘蛛が酒の煮漬けされたのがあった。しかも生きているので、さっきから8本の足が動いている。

「らァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!」

思いもよらない衝撃的な展開で、思わずパンデモニウム似の顔になる銀時。

「な……なんだあれはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

「ま……マスモディウスって何いいいいいいいいいいいい!?」

シグナムと銀時はマスモディウスの存在に絶望を抱かれる。

ある意味でパンデモニウムの方が１００倍マシであった。

「何あの巨大蜘蛛！？」
「負けたらあれを飲むって言うのぉぉぉぉぉぉぉぉ！？」
「どっから出しだいいいいいいいいいいいい！」

リィンフォース、なのは、アルフもあり得ないというばかりに絶叫する。
こんなんでは『混汁』で一足先に退場になったスバル達がまだ可愛いとも言える。

「あは……はははははははははははははははは！」
「フェイトォォォォォォォォォ！それに神楽に月詠！しっかりしてぇ！」

あり得ない現実に壊れて笑い出したフェイト、神楽、月詠の3人に、プレシアは大慌てしていた。

「馬鹿な！負けたらあれを飲めって言うのか！？」
『嘘でしょおおおおおおおおお！』
「嫌やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！絶対死ぬんやんかぁぁぁぁぁぁ！」

流石の桂、エリザベス、はやての3人も予想外な展開に驚きを隠せない。

「ははははははは！殺せェ！殺せよぉ！そんなに殺したきゃ殺せよ！死んだあかつきには神なんか呪い殺してやるからぁ！（涙）」
「ヴァイスが壊れたぁ！？」

コレでもかって言うぐらいにピンチに追い込まれたヴァイスはついに耐え切れなくなって理性を失って笑い出し、そんなヴァイスを落

ち着かせようとするザフィーラ。

≪式か……じゃなく英雄・坂田銀時の世界で見られる数少ない貴重な虫ですが、かなり凶暴でどんな物でも捕食する殺戮昆虫でございます。食べられるんですがかなり不味くて、上手い具合に調理しないと食べたれない昆虫食材であり、しかも焼酎なんかしたらかなりの悪臭が広まって飲む前でも吐き気がする究極の不味い虫でありんす。うわぁ可哀想、これ絶対最低でも3ヶ月以上の入院は覚悟しなきゃいけないよ≫

（本当に可哀想に思うんだったら最初から出さないでェェェェェェェェ！）

心の奥では絶対に笑っていると確信している銀時。

≪では、どちらかのチームに幸運を祈る≫

最後に源外がその一言を言い出す。

観客達も、あんな巨大な昆虫をどうやって捕獲したのか武気味悪くも考える。

いやそれ以前に、どちらか負ければそのチームはあの巨大蜘蛛の活け漬けの焼酎を飲まなければならないと思えば、お気の毒に思う。

「なんつうもん出してくれんだあのクソ爺！」

流石のお登勢も青ざめて叫びだす。

もし銀時達が負ければ、銀時だけじゃなく自分も飲まされるかもしれないからだ。

避けられないピンチの連鎖に、銀時達は更に勝利を決心する。

「てめェ等、絶対に勝つぞおおお

第七十九訓：どうせ負けるなら、やらないで負けて後悔するよりより潔く負けた

お登勢
「こんのボケ作者ァァァァァァァァァァ！初登場時に最悪なピンチに追い込むんじゃねェェェェェェ！」

黒神
「ぎゃあああああああああああああああああああああ！」

初登場のお登勢にボコボコにされる黒神。
お登勢は相当なまでにあの『マスモディウスの活け漬け焼酎』を飲まなきゃいけないことに恐怖を抱かせた作者にご立腹であったようだ。

銀八
「……とりあえず、次回は『コーシカップ』と『マスモディウス』の紹介をしますんで」

外道丸
「次回、「やられる前にやれ」テイクオフでありんす」

第八十訓：やられる前にやれ（前書き）

コーシ・カップ

ミッドチルダで毎年開かれる野球大会。
プロ野球チームも参加可能だが、主に草野球チームが多く参加する。
当然の事魔法の使用は禁止である。
なお、今回は特別な追加ルールとして負けたチーム全員には（監督も含む）驚異的な罰ゲームを受けなければならない。

通常の野球とは違うルール。

・試合中の守備ポジションチェンジなし。
・監督不在チームは即失格。
・一般人でも途中の助太刀は可能。
・コールドなし。
・コスプレＯＫ。（但し他のチームのユニフォームは禁止）
・５回デットボールをしたピッチャーは即退場。

名前の由来は『甲子園』

マスモディウス

式神界でも知られる巨大肉食蜘蛛。
人間を好物としている。
だが下級生物並みの弱さの為、中級式神なら素早く撃退できる。
食べられるのであるが、はっきり言って人間や式神が食べてもメッチャ不味くて特に悪臭がイヤっと言うほどただよう。
しかい万能薬の材料になる為、死ぬほど不味いがマスモディウスを材料にした薬を飲めば大抵は素早く治る。

名前の由来はソロモン72柱の一角であり、ユダヤ教とキリスト教に伝わる悪魔『アスモデウス』

黒神
「そんなこんなで『烈火編』もいよいよ終盤！どんな結果になるのかお楽しみ♪」

シグナム
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ」

第八十訓：やられる前にやれ

新たにメンバーが変わった為、打順と守備ポジションは大きく変わった。

1　フェイト　セカンド
2　アルフ　ショート
3　なのは　ファースト
4　シグナム　ピッチャー
5　銀時　キャッチャー
6　神楽　サード
7　月詠　レフト
8　リィンフォース　センター
9　プレシア　ライト

「この歳で野球をやることになるなんて……」

プレシアは一言つぶやく。
しかしコレは自分の人生を護る為の真剣勝負であった。
何故なら、負けてしまえば『マスモディウスの活け付け焼酎』と言う飲んだら凄く不味い酒を飲まなきゃいけないからである。

「いいか野郎共ぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！コレはテメぇら全員の命がかかっとるんじゃぁ！生き残りたきゃ何が何でも勝てぇぇぇぇぇ！」
『『はい！』』

お登勢の必死な一言でフェイト達（銀時、神楽、月詠は除く）は返事をする。

「というより、私達女性に野郎はないですよお登勢さん」

フェイトは苦笑してお登勢に言うが、今のお登勢は必死な為にフェイトの言葉は聞こえなかった。

「つうかあんな巨大な蜘蛛をどうやって捕まえたんだぁ？外道丸の野朗もおっかねぇもんを出しやがる」
「あんなもんを口にするぐらいならまだ『混汁』の方がマシネ！苦しむだけですむアル！」

銀時と神楽ははっきり言って『混汁』の方がマシであると思う。
月詠にいたっても『混汁』を上回る極悪な『マスモディウスの活け付け焼酎』は死んでも飲みたくないようである。

「そ……それとお登勢。……1つお願いがあるんだが……いいか？／／／」
「あぁ、なんだい？」

顔を真っ赤に染めるシグナムにお登勢はシグナムのお願いを聞く。

「あ……貴方を、『義母上（ははうえ）』と呼んで良いですか！？／／／」

「……はぁ？」

突如、母呼ばわりされる事に唖然とするお登勢。

銀時、神楽、月詠、プレシアも突如のシグナムの奇妙な願いに唖然とする。

しかし、フェイト、なのは、アルフ、リィンフォースは目を光らせて対抗する。

「あ……だったら私も『お義母様（かあさま）』と呼んで良いでしょうか！？／／／」

「はぁ！？何で私が義母親に！？」

「あ！じゃあ私も呼ばせてもらうね、お義母さん！」

「私も呼ぶね！」

「わ……私だって呼ばせてもらいますよ！／／／」

突如の母呼ばわりにお登勢は唖然としている。

「おィィィィィィィィィ！なんだこりゃァァァァァァ！つうか何で私が母呼ばわりされなきゃ行けねぇんだァァァァ！」

訳も分からないままお登勢は叫びだす。

月詠、プレシアは理由はなんなのかを理解して顔を真っ赤にする。

銀時にいたってはお登勢と同様に理解不能である。

そして神楽がその理由をお登勢に言う。

「ああ、その訳は銀ちゃんに理由があるヨ」

「あぁ、何で銀時に？」

神楽はお登勢の耳元でお登勢しか聞こえないように理由を言い出すと、お登勢は銀時を睨みつけて……

「このクソ天然パーマぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ドカァァァァァァ！

「あらぐぁあああああああああああああああ！」

ドロップキックが炸裂して、見事に銀時にクリティカルヒット。

「お前、この世界で１３人の女を落としたってどういうこったぁぁぁぁ！無責任にも程があるだろうボケがぁぁぁぁぁ！」

「痛たたたたたたたた！マジで痛・・・…てゴファ！」

フェイト、シグナム、なのは、アルフ、リィンフォースだけじゃなく、スバル、ティアナ、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディート、猿飛など美女ばかりを惚れさせた銀時に対して、無責任すぎると判断して怒り出すお登勢は銀時とぼこぼことする。

「お……落ち着いてくれ、義母上！」

「お義母様、その辺にしてください！」

「止めんな！このバカはこうされても仕方がねぇ事をしたんだ！後、私はこの馬鹿の母親じゃネェェェェェェェェェ！」

銀時の母親呼ばわりと銀時のハーレムぷりに額に血管を浮かべて怒鳴りだすお登勢。

月詠とプレシアでも一瞬お登勢を銀時の母親であると思ってしまっ

た。
その後も騒ぎはあった物の、プレイボールが始まった。
≪一番セカンド、フェイト・テスタロッサ≫
打席につき、バットを構えるフェイト。
『マリンナッツ』のエースピッチャー、ヴァイスを強く警戒している。
何故なら、コレまでの彼の成績は一点も取らせて以内所が二塁にも踏ませていないという完全成績である。
しかし、彼はそんな成績はどうでも良かった。
何故なら負けてしまえば『マスモディウスの活け付け焼酎』と言う、一口でも飲んだら死にいたりそうな飲み物を飲まなきゃ行けないからだ。
給料所が自分の人生までかかったこの試合だけは負けられない。
（冗談じゃねぇよ！こっちは八神隊長に給料の弱みで無理矢理参加させられたのに、しかも負ければあんなえげつねぇもんを飲まされるだとぉ！？そんなの絶対に嫌だぁ！）
無事に済ますには、完封勝利で優勝するしかない。
そしてアンダースローのフォームを構えて投球を投げる。
（遅い！けどこれは何かの変化球！？確かヴァイスはシンカーと呼ばれる変化球を……）
ヒュウ！
バシーン！

「ストラーイク！」

突如、球が螺旋を描くように素早く回りだして得物を狩るヘビの様な動きでキャッチャーのグローブに入る。

（嘘！？いつの間に！？）

カーブやスライダーでも一般的に良く使われる変化球は見たことあるが、シンカーと言う特殊な変化球は全く持ってみたことがない。

バシーン！

「ストラーイク！」

またもやシンカーで空振りしたフェイト。

はっきり言ってフェイトはシンカーには慣れていない以前に、今日初めて野球をやり始めたばかりな為、当てる事すら不可能に近い。

（不味い！このままじゃ三振してしまう！……だったらせめて……）

フェイトはバンドで当てて素早く一塁に走ることにする。

シンカーをまともに振っても当たらない事を確信したのか、

ズパァーン！

「！？」

突如、１４０ｋｍ／ｈのストレートが放たれて真ん中直線であった。
バンドの構えをするヒマも無く驚いたフェイトは唖然とする。

「ストラーイク！バッタアウト！」
『ナイスボール』

ストライク判定を叫びだす審判に、ヴァイスのピッチングを褒めるエリザベス。

（しまった！シンカーばかりに気を取られすぎてタイミングが外れた！）

ヴァイスのストレートは近藤、九兵衛、シグナムに比べればはるかに遅いが、変化球と合わせる事で打者のタイミングを狂わせる。
しかもさっきの１４０ｋｍ／ｈストレートは、打者には１５５ｋｍ／ｈに近い投球に思わせる。

そして2番のアルフに対しても、

ズパァーン！

「ストラーイク！バッタアウト！」
「嘘ォォォォォォ！」

信じられないほどにアルフは叫びだす。
ヴァイスがコレほどまでの才能を持っていたことに意外そうに思え

た。

「あの男なかなかやるじゃないかい。才能だけじゃあのピッチングは無理だろうからね」

「どういう事？」

ヴァイスのピッチングの良さは何やら才能だけではないと見抜くお登勢に、プレシアはどうしてなのかを訊き出す。

「ヴァイスって男、おそらく何かに追い込まれてその潜在能力が１００％に強制的に放たれてピッチングに活かされている」

「言われてみれば、三振取ったにも関わらずに何か全然嬉しそうじゃないですね」

「むしろ追い込まれているようじゃ」

ヴァイスの強さの秘訣をお登勢が言い出すと、リィンフォースと月詠はヴァイスを良く見てみる。

良く見るとヴァイスはメッチャ辛そうに青ざめている。

（もし間違えて負けてしまったら……いやいや考えるなヴァイス・グランセニック！要は勝てばいいんだ！一点とられて給料減らされる恐怖は捨てよう！多少の減給は我慢して、勝って生き残るんだヴァイス・グランセニック！）

野球でここまで恐怖するなんて人生であり得ないと思うが、それでもはやてによる給料の減少と罰ゲームを受けて生死をさ迷う恐怖を混ざり合った為、ヴァイスの苦しみの恐怖は隠しきれなかった。

「にゃはははははは、じゃあ私が引導を渡してあげよっか♪」

「な……なのは、ほどほどにね！？」

なのはは黒笑いして打席に向かい、フェイトは苦笑して怯える。

≪3番ファースト、高町なのは≫

打席に立って、ニコニコと笑うなのは。
しかし彼女から放たれる白い悪魔ごときのプレッシャーは異常なまでにヴァイスとキャッチャーを怯えさせる、

（怖ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！やっぱなのは隊長、て怖ぇぇぇぇぇぇぇぇ！）

更に恐怖で怯えだすヴァイス。
しかし、恐怖に負け時とヴァイスはアンダースローで投げ、スライダーを炸裂させる……が

カキィーン！

「何！？」

なんと、いとも簡単に打たれたが、打球は左側のファールゾーンを軽く越えた。

「ファール！」
「にゃはははははは……ちょっと振るうの早かったかなァ？」

愉快そうに笑うなのは。
この時ヴァイスは確信した。このままでは打たれると。
それを阻止する為に、ヴァイスはお得意のシンカーを炸裂させる。

「コイツは流石に打たれねぇだろ！」

ヴァイスは自信満々に思いっきり投げる。
先ほどまでに不気味に変化するヘビの動きの如くは打者を脅威する。
しかし……

カキィーン！

「うそぉおおおおおおん！？」
『なんと！？』

またもや打たれた。
打球はまっすぐに飛ばずに当たっただけで審判の背後にまで飛ばされる。

「ファール！」
≪なんと言うことでしょう！ヴァイス選手のお得意のシンカーがいとも簡単に破られましたー！≫

＊

「なぁ、あの変化球を初球から打てるなんて！」

はやては予想外の展開に驚きだした。
しかも先ほどよりなのはのスイングが鋭くなった為、下手すれば次で完膚なきまでに打たれる。

「た……確かにヤバイ……」

ザフィーラも打たれるんじゃないかと疑う中、桂は安心させるように言い出す。

「心配する必要はない。グランセニック殿には、『あの魔球』がある」

「そ……そうや、桂さんの言う通り！ヴァイスには取って置きがあるんやった！」

桂の言う『あの魔球』を聞いてはやては安心する。

＊

一方のヴァイスは追い込まれていた。
シンカーをいとも簡単に打たれるなんて予想外であった。
更に最悪な事になのはの脅威の笑顔がだんだんと怖くなってきた。

「……」

最早、何かを思う余裕も無くなったヴァイス。
死を覚悟しようとした瞬間だった。

「にゃはははははは！ヴァイスさん……私達の為に、犠牲になってね♪」

などと笑いながら惨酷な事を言い出すなのは。

（なのはぁ、それじゃあ『白い悪魔』と呼ばれても仕方が無いよ～）

青ざめてそう思うフェイト。
確かに負ければ死ぬほど辛い物を飲まなければならないが、いくらなんでもそれは言いすぎだと思う。
すると、ヴァイスに異変が……

「……のっ……まが……」
「ふぇ？」
「……調子に乗ってんじゃねぇぞ、このクソ悪魔がぁ！」

バァーン！

稲妻の如くの衝撃的なヴァイスの異変に誰もが驚いた。

「ええエェえぇえぇえぇ

「ロクに活躍できねぇ女が偉そうにほざいてんじゃねぇよ！いい加減にしねぇと、二度と戦えねぇ体にする為にボールを１００発ぶつけんぞ白い悪魔！」

ブチィ！

テ○ミモード（ようは暴走）のヴァイスの暴言になのはは流石にキレた。

とてつもない殺気がグランド内を包み込み、『マリンナッツ』（ヴァイスを除く）のチームメンバーを恐怖に包み込む。

「……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

『ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！（恐）』

最もなのはの近くにいるエリザベスは青ざめて怯えだしている。

「おいィィィィィィィィィィィ！ヴァイス、言ってはいけない事を言いまくっているぞォォォォォォォ！」

「なのはァァァァァァァァ！早まったらダメだよォォォォォォォォォ！」

シグナムとアルフはヴァイスのとんでもない暴言となのはの脅威な殺気に怯えている。

一体彼等に何をさせれば、ああなるのか予想不可能である。

「……ヴァイスさん……相当なまでに頭冷やしたいんだ……」

（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

大きくバットを構えるなのは。

次打つ打球でヴァイスにぶつけるつもりのようである。

「ヴァイスさんが悪いんだよ……か弱い女である私に散々酷い事を言っているんだし」
「か弱い女ァ……傲慢な悪魔の間違いだろうがァ！」
意外なのはとヴァイスの対面的な空気に、嫌と言うほどの緊張が伝わってくる。
「本当に、痛い目に合わせて反省させてやるんだから」
「やってみろよクソ悪魔……何だったら今すぐにわざとデッドボールしてその調子ぶった顔面をぶつけてやろうかぁ、ああ！」
≪おおーっと、なんと言う事でしょう！突如、ヴァイス選手の暴言が連発してなのは選手がキレたぁぁぁ！つうかメッチャ怖すぎなんだけどォォォォォォォォォ！≫
≪ぐぁーっはっはっはっはっはっは！何、野球ってもんは喧嘩と一緒よ！舐められちゃこっちが負けなんさ！≫
恐怖する解説者に愉快そうに笑う源外。
「……とは言え、こっちは勝たなきゃいけねぇから……そんなラフプレイをしている暇はないって訳。……つまり……」
テ〇ミモードのヴァイスは大きくフォームを構えて……
「さっさと無様に三振しやがれクソ悪魔ァ！ウロボロス！」
アンダースローを炸裂させて、『シンカー』と『ナックル』を合成させたヴァイスオリジナル魔球、『ウロボロス』が炸裂する。

「！？」

全く見た事がない魔球になのはは驚きだす。
無数の球が分裂してその球が螺旋を描くかのようにジャイロボールの高速回転が炸裂し、まるで無数のヘビが渦のように回転する。
その驚異的な球は正に『尾を飲み込む蛇』。

当然の事、大きくバットを振っても球に当たる所がかすることも出来ずに、エリザベスのグローブにその球はキャッチされる。

「……す……ストラーイク！バッタアウト！」

全く見た事がない魔球に驚きを隠せなかった審判は唖然と黙りだすが、キャッチミットに球がぶつかる轟音に我を思い出し、判定する。

≪ぐぁーっはっはっはっはっは！さすが今大会？1ピッチャーと呼ばれる男よ！三者凡退を軽々しく為し遂げた！≫
≪おそらくあれは、あの男の理性が大幅に吹き飛んだ体とおもいやす！その為、余分な考えは消えて球に威圧感を放つことが出来て打者を脅威に押し込んだからでございやす≫

源外と外道丸がそう解説すると、ヴァイスは愉快そうに笑う。

「ひゃーっはっはっはっはっはっはっは！無様だなぁクソ悪魔！『エースオブエース』として呼ばれた詠こうなるエースがこの様な様じゃ、めっちゃ……恥ずかしいんじゃねぇの！？ぎゃーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！」
「ううう……この屈辱は必ず返してあげるなの」

憎たらしく笑い出すヴァイスに憎たらしく睨むなのは。

そして自分のベンチに戻ると……

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！銀さぁ～ん！」

突如、泣き出して銀時に抱きつくなのは。

「私、悔しいよぉぉぉぉぉぉ！うぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇん！」

大勢の前での屈辱を体験したなのはは、メッチャ悔しがっている。
銀時はとりあえず、「あ……安心しろよ……俺が打ってやるから……」と　苦笑いしてなのはの頭を撫でる。
しかし、銀時達は試合後のヴァイスがメッチャ心配になってきた。
例え『マリンナッツ』が勝っても、彼には後から惨酷なる運命しか待っていないと嫌と確信する。

「なんだい……この後、あの男に迫り来る惨酷な運命が待ち構えているような感じは……」
「深く考えるなばぁさん……ラチがあかねぇ」

苦い表情でヴァイスに最悪な惨劇が待ち構えていると感じるお登勢に、深よいしないように言い出す銀時。

＊

1回裏

シグナムも負け時と三振を取り、ザフィーラから三振を奪う。
ヴァイスのシンカーを中心としたアンダースローを攻略する為、一点もやれない。

≪2番サード、ヴァイス・グランセニック≫

ヴァイスが打席に入ってバットを構える。
ヴァイスを見てシグナムは確信する。
打席に振りがあるから軽く三振を取れるが、それでも驚異的なピッチングははっきり言って厄介だ。

（ヴァイスの打力はド素人並だから何とかなるが、投手としての実力はプロ級だ。ここで抑えられても次の二回表であの男から点を取る事は不可能に近い……ならば！）

シグナムは銀時を見つめてサインをすると、銀時は頷く。
そしてシグナムはフォームを構え……

「喰らえ、ヴァイスァァァァァァァァァ！」

超高速の直球（ストレート）が炸裂した。
それが見事に……

ドカァアアアア！

「ほぐらばぁあああああああああああああああ！！」

ヴァイスの顔面に直撃し、そのままヴァイスは宙を浮かべて螺旋の如くに体を回転して地面に強く叩きつけられる。
判定は当然……

「デットボール！」

であった。

ヴァイスは重い投球にもろに直撃し、大量の血を出して気絶していた。
コレではもうドクターストップである。

「ヴァイスゥウウウウウウウウウ！」
『『何　（だとぉおおおおおおおおおおお）（やってぇえええええええええ）！』』
「あはははははははははははははははは！」

ザフィーラはシグナムの奇襲を受けたヴァイスに叫び、桂、エリザベス、はやては予想外のシグナムの行動に驚き、辰馬はとりあえず笑い出す。

「シグナムうううううううううう！アンタ一体何やってんのおおおおおおおおおおお！」

プレシアはツッコまずにはいられないほどに勢い良くツッコみだす。

「これでヴァイスは戦闘不能になった……」

シグナムは勝利を確信したように拳を握る。

「そこまでするかぁ！？確かにその手はアリだけど大抵は悪役が使う手だよそれぇえええ！」
「そこまでして勝ちたいんですかシグナムゥウウウウウウウウウ！」

アルフとリィンフォースもプレシアに続いてシグナムにツッコみだす。

「コレも戦いなのだ！」

『『騎士の魂はどうしたァァァァァァァァァァァ！』』

騎士の魂を感じられないシグナムに2人は呆れだす。
そしてヴァイスはやむ終えずにグランドから去る。
その様子になのはは凄く愉快そうに笑いだし、フェイトはそんななのはを苦笑して見つめるしかなかった。

ヴァイスと言う強力なピッチャーを失った『マリンナッツ』の守備力は大幅に下がりだした。
その後も点の取り合いのように、互いに守りを無視した得点の奪い合いをして打ちまくる。

中には銀時とシグナムがわざとバットを空振りしてサードの桂にぶつけたり、なのはが打った打球がピッチャーの顔面に直撃するなど、攻撃的なラフプレーが炸裂する。

そして、9回裏。

『イヤンキッス』　13－12　『マリンナッツ』

わずかに銀時率いる『イヤンキッス』がリードしている。
状況はツーアウト満塁。
1塁にエリザベス、2塁に桂、そして3塁にザフィーラ。
あと1アウトでゲームセットだが、ヒットされれば確実に一点奪われる状態。
そして、ここでやってくるバッターが……

≪5番セカンド、キャプテン・ハヤーテ≫

すると、はやてが打席に入ってバットを構える。
はっきり言ってはやての打力は桂とエリザベスと違ってはるかに劣っている。
これは止めをさせる貴重なチャンス。

「いいか、てめェ等ぁぁぁ！ここで一気に止めをさせぇ！」

お登勢も勝機であると確信し叫びだす。
銀時達は希望が見えた様な喜びをし、桂達は絶望に追い込まれたような恐怖に怯えている。
このまま一気に勝利をもぎ取りたいシグナムははやてに宣言する。

「主よ、今こそ私は貴方を倒す！あの暴言を口に出された屈辱を晴らす為に！」

どうやら、『マリンナッツ』の1回戦後で桂とはやてが言った『イヤンキッス』に対する侮辱が許せないようだ。

「やれるもんならやってみぃ！こっちだって負ける訳にはいかへん！」

はやても負けじとバットを構える。
シグナムがフォームを構えて球を投げる時であった。

ドカァァァァァァァァァン！

『『！！？？』』

突如、大爆発が発生した。
その爆風は何やら右側の観客席で起こされたようだ。
突如の爆発に観客達は大暴れで悲鳴が響き渡る。

「な……何!?」
「一体何が……」

なのはと桂は一体何が起こったのかと驚きだす。
ここは重要な警備をしていて、管理局関係の護衛がいる為にＡＡＡランクの障害も耐えられるように作られている。
そんな場所で事故が起こるなど、それはおそらくＳランク級の事故であると考えられる。
すると……爆発した所から、１人の男が姿を現した。

「てめェ等、コーシカップも今回限りで終幕だ!」

男はそう叫び、大きくジャンプしてグランドに着地する。
すると、男の衣装は中国の武術士が着そうな者であり、両手に持っているのは太極が埋め込まれている刀身全体が白い刀と刀身全体が黒い刀。
男は剣を剣舞の如くに振り回し、そして叫びだす。

「俺はミツル・ラフレシ!今こそこの『ガンジョバクヤ』で１０年前の復讐を果たしてやる!」

突如のアクシデントに野球所ではなくなった。
そしてミツルの１０年前の復讐とは!?

第八十訓：やられる前にやれ（後書き）

黒神
「いやー、旅行の疲れがようやく無くなって最新もできました」

銀八
「ようやくかよ！？」

シグナム
「もう一週間以上は間を開いているが？」

黒神
「なんとも不甲斐ないです。しかしこれからは出切るだけ早く最新をしたいと思いますので、よろしくお願いします」

シグナム
「まぁ……分かればいいが」

黒神
「ああ、ちなみに新しいＯＰとＥＤは次回発表及び次回で『烈火編』クライマックスですので……では！」

お登勢
「次回「強敵と戦う時に、過去に戦った強敵と比べれば大した事が無いこともある」テイクオフじゃぁぁぁ！」

第八十一訓：強敵と戦う時に、過去に戦った強敵と比べれば大した事が無いこと

００６５年　〇月〇日

今日始めて、兄貴にぶん殴られた。

重い拳だった。

それは己の背中１つで自分の信念を抱き、野球に対する思いを背負って生きてきた漢の拳だった。

自分の拳が酷く小さく見えた。

野球専門学校で不合格となり、野球を辞めてゲームオタクと堕ちコントローラーしか握れなくなった負け犬の拳だった。

「別に上手に生きなくたって良い。堕ちようが呆れられようがいいんだ。生きていけばまだ未知なる可能性だってある」

そう吐き捨て野球の試合に出かけた兄貴の背中は……いつもより大きかった。

今からでも兄貴のようになれるだろうか……野球を辞めて以来、再び兄貴にに興味を持った。

二年ぶりに外に出た。

しぜんと兄貴を追う俺の足。

猛虎のミツル、それが兄貴のもう１つの名。
どんな豪傑な投球の球を打ち出す１００年に１人のエーススラッガー。
彼の顔が見たかった。
真剣に野球をするという事がどういうことなのかを、兄貴が活躍する姿をその目に焼き付けて思い出し、もう一度野球を真剣に取り込もうと思った。

だが……

虎は、『イヤンキッス』の監督であるイテツがわざとらしい転び方で、ドサクサにまぎれてズボンとパンツを脱がされ、全ミッドチルダ中で大恥をかいた。

虎は、わいせつ行為と言う汚名を着せられて野球の永久禁止の処罰を下され、二度とグランドに立たなくなった。

第八十一訓：強敵と戦う時に、過去に戦った強敵と比べれば大した事が無いこともある。

「いやぁあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

滝の様に涙を流しながら、ミツルは息子の日記らしき雑誌を真っ二つに破る。

「前書きを使っての日記解説！？」

あり得ない前書きの使い方に驚くフェイト。

「お前等に分かるかぁぁぁぁぁ！虎の気持ちがぁぁぁぁ！弟の日記にこんな事を書かれたかわいそうな虎の気持ちがぁぁぁ！」

『『て、またイテツがやらかしたんかい！』』

銀時、フェイト、なのは、神楽、シグナム、月詠、アルフ、リィンフォースの８人はツッコみだし、プレシアはその様なあり得ない出来事で野球が出来なくなったミツルを哀れ見る。

「もう少しだったんだ！あと少しで弟の野球魂が復活できたのに、イテツの野郎のせいで俺の野球人生までもがメチャクチャじゃねぇかぁ！お陰で弟はひきこもりオタクからサッカー選手になったんだぞぉぉぉぉぉぉ！」

野球から更に離れてサッカーをやる弟に兄として悔し涙を流す。

「引きこもりから解放できたんだろ？それなら良かったじゃないかい！」

「良くないわぁぁぁぁ！元野球少年が醜きサッカーに奪われてしまったんだぞォォォォォォ！」

お登勢が怒鳴って叫びだすが、さらに怒鳴って叫び返すミツル。

「こっちは全ての人生を野球に捧げたのに、優勝を狙う為だけにイテツの卑劣な行為で泥を塗らされて全てが水の泡になってしまったんだぞ！チームも家族もあっさり俺をポイ捨てだぞぉ！間違っている！こんな世の中間違っている！」

「たしかに……お前の悲劇の大きさが余りにも呆れすぎて間違っているが……」

ミツルが凄く可哀想に思ったザフィーラがそう言う。

「だから俺は破壊する！我が一族に伝わる秘伝のデバイス『七星神刀』の１つ『ガンジョバクヤ』俺の人生を全て奪った醜き『コーシカップ』をぉぉぉぉぉ！そして野球の革命を起こしてやるぜ！」

『『七星神刀！？』』

ミツルの持つデバイスを聞いて驚きだす銀時達。

七星神刀とは、銀時達の世界の人物だが５０００年前のこのミッドチルダに次元転送されて亡くなった伝説の刀匠、梅館妙寿がデバイス製作技術と刀工技術を合わせて作り上げた伝説の７つのデバイス。神話とも言われる伝説のデバイスの存在は、魔導士ならば知らぬ者は１人もいないと思わせるほどである。

スバルの『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』、そしてウゼルの『エクスキャリバー』も妙寿が作り上げた最高傑作であ

る。

そしてその1つなのが、双剣のデバイス『ガンジョバクヤ』。
ミツルの一族に伝わる秘宝。おそらく、家から追い出される前にこっそり奪ったようである。

「アンタがどう思ってるかは知らないけどね、この大会を楽しみにしてる人間やファン達もいるんだ。それを忘れるんじゃないよ」
「五月蝿い、貴様に何が分かる！」

煙草をくわえて呆れるお登勢に、ミツルはくいかかる。
すると、突如後ろから大量のガジェットが現れる。
そのガジェットはスカリエッティのものではなく、なんと『鬼兵隊』の人型ガジェットである。

「鬼兵隊の戦闘ガジェット！？どうしてここに！？」
『嘘ォ！？』

桂とエリザベスは、どうしてミツルが人型ガジェットと一緒にいるか驚きだす。

「高杉と言う男が、『革命を起こすならこいつ等を使ったほうが良い』と言って俺にくれたのだ！」
『『た……高杉！？』』

まさか、鬼兵隊にまで関わっていたとは思わなかった。
銀時達は、もしかすれば高杉が今何をどうしているかを聞きだせるチャンスである。

「さぁ、革命の始まりだ！行けぇ！」

ミツルが『カンショバクヤ』の黒い刀を振り下ろすと、ガジェット達が一斉に飛び出して顔から赤いレーザー光線を放つ。

≪いかん！野朗共、試合は中断だぁ！今すぐにやつ等の暴走を阻止しろ！行くぞ、外道丸≫

≪了解しやした！≫

すると、源外と外道丸は急いでグランドに向かう。

銀時達は戦闘準備に入る。

アルフとザフィーラは狼形体に変化し、エリザベスは口から刀を取り出して辰馬に渡す。

フェイト、なのは、はやて、シグナム、プレシアの５人もセットアップして、衣装をバリアジャケットに替えてデバイスを構える。

「プレシア、アルフ、ザフィーラ、神楽、エリザベス、月詠、婆さんは観客の救助を！俺、フェイト、なのは、ヅラ、シグナム、はやて、辰馬でミツルの野朗をぶっ飛ばすぜ！」

『『（おう）（はい）（りょうかいや）（うっす）！』』

「ヅラじゃない桂だ！」

「『仕方ないのぅ。本当は戦いたくないんじゃが、戦うしか道はないぜよ」

それぞれ攻める側と護る側を分ける銀時。

そして『マリンナッツ』の他の野球メンバーも実は全員機動六課の隊員だったため、バリアジャケットに衣服している。

「ええか？誰一人たりとも死なせたらアカン。皆助けるんや！」

『『了解！』』

部隊長らしく命令をするはやてに、隊員達は大きく返事をする。

「行くぜぇぇぇ！」

そして銀時達は一斉に突撃した。

銀時は木刀、フェイトはバルディッシュ、桂は真剣。そして辰馬は攘夷戦争後一度は捨てた刀で次々とガジェットを斬りまくる。

辰馬が再び剣を取り、刀を振るう姿を見るなんて銀時は思わなかった。だからこそ驚いていた。

彼が今剣を振るう理由はただ一つ。復讐に狩られたかつての仲間、高杉を止める為だ。

なのは、はやて、リィンフォースは魔力弾と魔力砲を放ってガジェット達を塵にする。ちなみに今回はリミッター解除の為、いかに鬼兵隊作のガジェットでもすぐに破壊される。

一方、アルフ、ザフィーラ、神楽、エリザベス、月詠、プレシアは一般人を襲うガジェットを阻止して破壊しまくり、お登勢は逃げ遅れた一般人を安全な場所まで案内してドームから脱出させている。

源外もカラクリの『三郎』達で銀時達の援護をし、外道丸も鬼の金棒を振り回してガジェットを木っ端微塵に破壊しまくる。

だが、ガジェットの数は異常なまでに多くて、倒しても倒してもきりが無い。

「ちぃ、一体どこからウジャウジャと出てきやがるんだ？」

「数が多すぎて、ミツルのところに近づけない！」

キリがなさそうに叫びだす銀時とフェイト。
この数は異常ではなく、どこから現れているのか全く分からない。
一方のミツルは愉快そうに笑い出して、破壊活動を嬉しそうに見つめている。

「良いぞ、もっと破壊しろ！こんな醜い大会など、無くなってしまえば良い！あーっはっはっはっはっはっはっはっは！」
「ミツルぅぅぅぅぅぅぅ！」

突如シグナムが大きく跳んできて、『レヴァンティン』を大きく振り回す。
しかしミツルは『ガンジョバクヤ』の白い刀でその一撃を防ぐ。
攻撃を防がれたシグナムは大きくジャンプしてミツルとの間を広げ、互いに睨み合う。

「ほぉ、まさかあの『烈火の将』ことシグナム様がこの大会に参加してたとは……いやはや、こんな大会でも大物を呼ぶんだなぁ」
「ミツル！全てを失った貴様の気持ち、嫌と言うほど分かる！だがこれ以上の破壊活動を見過ごす訳には行かない！」
「ふん！ならば止めてみろ！貴様のデバイスも中々の物だが、『七星神刀』に比べれば鈍剣にすぎん！」
「吼えたな……烈火の魂を侮辱した事を、後悔させてやろう！」

愛刀『レヴァンティン』を侮辱された事に怒り出したシグナム。
凄まじい速さで突進してきて豪快に剣を振るう。
その剣を軽く受け流すミツル。気にせずシグナムは剣を振り回すが、連続剣を臆しないミツルはそれを軽く『ガンジョバクヤ』で受け流す。伊達に七星神刀を所有するだけはなかった。

「『レヴァンティン』、我等の力をあの男に見せてやろう！」

≪Ｙｅｓ，ｉｔ ｉｓ ｓａｉｄ ａｓ ｉｔ ｉｓ，ａｎｄ Ｉ ｃａｎｎｏｔ ｆａｌｌ ｓｉｌｅｎｔ，ｔｏｏ≫

ガシャン×１

すると、カートリッジロードをして刀身から炎が溢れてくる。
シグナムのお得意の魔法剣がミツルに向けて炸裂する。

「紫電一閃！」

烈火に包まれた炎の魔剣の一撃が炸裂する。
だが……

「甘い、カラミティフォース！」
≪Ｉ ｔａｋｅ ｉｎ ｍａｇｉｃ≫

ミツルは『ガンジョバクヤ』の白刀でシグナムの『紫電一閃』を受け止める。
これはシグナムも驚くが、何より驚いたのは『紫電一閃』を受け止められた事ではない。
『レヴァンティン』を包んでいる炎が『ガンジョバクヤ』の刀身に吸収されているからだ。
シグナムは危険視してバックする。

「魔法を吸収するだと！？」
「これぞ、我がガンジョバクヤの力！白刀は相手の魔法を吸収して己が魔力に変える。そして黒刀で……」

突如、『ガンジョバクヤ』の黒刀が灰色の炎に包まれる。
これはシグナムの『紫電一閃』に良く似ている。

「己の力として放つことが可能になる！」

炎に包まれた黒刀を振るうと、その灰色の炎が斬撃に包まれてシグナムに襲い掛かる。

「く、レヴァンティン！」
≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ！≫

シグナムは再び『レヴァンティン』のガートリッジを１つロードして襲ってくる炎を防ごうとする。

「陣風！！」

刀身から衝撃波を放って炎を防ぐ。
シグナムは剣を構えて反撃しようとするが、彼女の目線からはミツルが写っていない。
すると空から気配を感じて上を見上げると、そこには空を高く飛んでいるミツルがいた。

「はぁぁぁぁ！クロス・カオス・ブレイク！」

ミツルは黒刀をなぎ払い、そして白刀を一直線に振り下ろし、双刀同時の二連撃が炸裂して魔力が包まれた黒い斬撃と白い斬撃が十字架の形となってシグナムを襲う。
その威力はまちがいなくＡランクは達成する為、当たればヤバイとシグナムは『クロス・カオス・ブレイク』を交わすが……

「てりゃあああああああああああああああ！」

そこには双剣を構えながら全力疾走をしているミツルが現れて、彼の連続剣が容赦なくシグナムを襲いだす。

シグナムも対抗して攻撃を炸裂する。

２人の剣がぶつかり合い、衝撃が放たれていく。

「どうした、俺に烈火の魂とやらを見せてくれるんではないのか？」

「くぅ！」

徐々にミツルが責めてきて、追い込まれていくシグナム。

それを見たリィンフォースは危険と判断して援護する。

「シグナム！……インフェルス・エディション、地獄に恐怖せよ！」

手を伸ばしてその手のひらから球状の魔力を発生させて、漆黒の炎の魔力砲が放たれる。

シグナムはリィンフォースの魔力であると確信して素早くミツルから離れる。

リィンフォースの新たなる新魔法であり、Ｓランクは達成する威力を持つ。

コレを受ければミツルと言えどもタダではすまない。

だが……

「甘い、『ガンジョバクヤ』！カオスブレイクフォルム！」

≪Ｔｗｏ　ｓｗｏｒｄｓ，ｔｈｅ　ｆｕｓｉｏｎ　ｒｅｍｏｖａｌ　ｏｆ　ａ　ｂａｎ≫

ガシャン×４

カートリッジを双剣から2つずつロードすると、2つの剣は変形して合体する。
そして2つの剣は、巨大な大刀となる。
白と黒の左右に分けられた柄に対極の紋章が鍔の部分についており、刀身は紫色で大きい諸刃の剣。
見た感じメッチャ重く見えるが、ミツルは軽々しく振り回す。

「はぁあああああああああああああ！」

そして思い切ってなぎ払って振るうと、炎の魔力砲が一刀両断に割れて消滅した。

「そんな！」

自分の新魔法でSランクは達成する砲撃魔法をいとも簡単に消された事で驚きを隠せなかったリィンフォース。
コレこそが『ガンジョバクヤ』の特殊能力。

「見たか、俺のガンジョバクヤの力を！こいつのふたつ名はなぁ……『破魔の双刀』のふたつ名を持ち、その名のどおり魔法を破壊する効力を持っている！」
『『破魔！？』』

魔法を破壊する。
そんなデバイスは見た事がないリリカル組は驚かずにはいられなかった。
様々な特殊デバイスを見てきたが、魔法の破壊を可能にするデバイスは始めてである。

「しかも相手の砲撃魔法を防げるのは勿論！魔力の吸収、さらには魔力結界を紙くずのように切り裂く事が可能！つまりガンジョバクヤは、貴様等魔導士にとって最大最悪の天敵デバイスなのさ！」

「そんな！」

確かに、今の『インフェルス・エディション』はなのはの『エクセリオン・バスター』に匹敵していてかなりの威力を誇る。

しかしその魔法は『ガンジョバクヤ』によって防がれた。

それは正に『ガンジョバクヤ』が魔法の天敵の証である。

だとすれば、なのはの『スターライト・ブレイカー』級の魔法攻撃はミツルには全く効かない事になる。

「なんやその反則なデバイス能力！」

『ずるすぎでしょ！？』

はやてやエリザベスもいくらなんでも強すぎるデバイスに圧倒された。

しかし、伝説の７つのデバイスである七星神刀（しちせいしんとう）ならあり得ない事ではない。

風の魔法や最速の素早さを誇るスバルの『ティルヴィングエア』

圧倒的な攻撃力と炎の魔力、さらには瞬間移動に近い移動術を可能にする『ペンドラゴブレイド』

使用者の力を最大限に上げ、しかも圧倒的な魔力を増幅させる七星神刀（しちせいしんとう）最強の『エクスキャリバー』

通常のデバイスとは全く比べられないその強さは正にデバイス版の最上級大業物。
他のデバイスとは比べ物にならない。

「なるほど、スバル殿以外の七星神刀(しちせいしんとう)をこの眼にしたのは初めてだが、改めで『七星神刀(しちせいしんとう)』の強さを思い知らされたな」

ガジェットを次々と斬りながら納得する桂。
スバルの『ティルヴィングエア』とは全く違う強さに感服している。

「ヤバイ、だったらシグナムもミツルとは相性悪すぎる！助けなきゃ！」

フェイトは助けに行こうとするが……
突如、無言で銀時に止められる。

「銀時！？」
「……悪ぃ、今回ばかりはシグナムに任せてくんねぇか？ここでシグナムを助けちまったら、シグナムのためにもなんねぇ」
「な……何言っているの銀時！？ミツルのデバイス能力を聞いてたの！？」

どうして止められるかを理解できないフェイトは、銀時に訊き出す。

「聞いてたさ。だが、シグナムは魔導士以前に……騎士なんだよ。助けたほうが早ぇが……アイツの眼を見てたら変わっちまった」

シグナムの眼は、銀時から見てもかなり騎士としての闘志が満ちていた。

「騎士だからこそ、アイツ1人でやらせてぇんだ。……アイツはなぁ、アーサァと戦っていた頃の自分を超えようとしてんだよ」
「アーサァと戦った頃のシグナム？」

つまり、七星神刀（しちせいしんとう）の使い手に圧倒的な強さで敗北した自分を超えようとしているシグナム。
己の力不足に敗北したのが相当に屈辱であったようだ。

「もし今ここで俺達が手出ししたら、アイツはこれ以上強くなれねぇ……」

七星神刀（しちせいしんとう）相手に、シグナムは超えようとしている。
それを聞いたフェイトはここはシグナムに任せようとする。

＊

ミツルの『ガンジョバクヤ』は自分達魔導士にとって最大最悪な天敵。
それを承知してでも、シグナムは剣を構える。
その闘志は、かつての自分にはなくて、剣で戦う者としての闘志。

そう、シグナムは魔導士以前に、騎士の魂を持つ剣士である。

「ほぉ、この期におよんでまだ立ちはだかるのか？」
「……」
「まぁいい、この騒ぎで『コーシカップ』は完全に無くなる。我が

目的は達成されたも当然。後は、貴様等の首を鬼兵隊に授ける契約の証として殺すだけだ」

「……」

言いたい事を言いまくるミツルに対し、無口になるシグナム。

ミツルを見て何かを思いついた。

「……どうした、さっきから何を黙っている？」

「いや……私がお前を見ていたら、ある事を確信しただけだ」

「何？」

シグナムがミツルに対する確信したこと、それはミツルの最大の欠点である。

「貴様の剣、確かに剣技の鍛錬を衰えずに剣の腕を磨き上げ、更にデバイスの特製を活かしきっている。魔導士としても剣士としても兼ね備えた逸材だ」

「敵を褒めて油断させるつもりか？その手には乗ら――――」

「だが、だが、貴様は所詮その程度の男だ」

「何？」

褒め言葉から挑発的な言葉に変わった事で、ミツルはシグナムを睨みつける。

確かにミツルは『ガンジョバクヤ』を我が物にする為に、剣術と魔法の鍛錬をして来た。

「私は以前に、貴様以外の七星神刀（しちせいしんとう）を使い出す2人の魔剣士と戦った。2人ともまちがいなく私を上回る剣の腕を持っていた。デバイスの力なしでも剣だけで魔導士を倒せるほどに……だが、貴様はそ

の2人と違ってデバイスを扱う為に剣術を鍛錬し続けた。つまり……」

シグナムは『レヴァンティン』を右手に持ち替え、ミツルに向ける。

「故に貴様の強さは、その程度でしかないんだ！」

以前にシグナムが戦ったスバルとアーサァは、純粋な剣の腕ならはるかにシグナムに勝っていた。

自分も彼女たちに追いつくには、己の使用するデバイスを使いこなす為に剣の腕を上げるべきだと考えたが、ミツルを見てそれは違うと確信する。

剣とは……ただ単に使いこなすだけでは意味が無い。

どんな武器でも相手に勝り、更に己自身を磨き上げる事こそが真なる剣士であると確信した。

「……別に俺は魔導士でも剣士でもない。ただの復讐者だ……だが、1つだけ分かった事がある。それは……貴様は相当なまでに俺に殺されたいと言う事だ！」

『カオスブレイクフォルム』を解除して双剣の通常モードに戻すと、そのままシグナムに突進する。

双剣の一撃が容赦なくシグナムに襲う。

だが……

ガキィン！

「何！？」

突如、最速の一撃がいとも簡単に止められた。

自身ありに剣を振り出したミツルだが、それが先ほどの反応とは全く大違いに素早い反応で攻撃を防いだシグナムに驚きだす。
だが彼もそれをお構いなしに連続剣を炸裂させるが……

ガキキキキキキィ　ガキィン　ガキキキキキキ！

その素早い連激剣を、更なる速さで『レヴァンティン』で受け止めるシグナム。
何より驚くべきは魔法を使わず剣で守り抜いていることである。

「チィ、急に動きが……」
「大した速さだ……だが」

シグナムは目つきを変えて『レヴァンティン』を強く握り……

「スバルの神速居合剣術には及ばん！」

ガキィーン！

「どわぁあ！」

素早く剣を振り上げると、その剣圧に押されたミツルは飛ばされる。
だがすぐに体制を立て直して魔法剣技を炸裂させる。

「ちぃ、ならば次はこいつだ！重力斬（グラビティ・ブレイク）！」

『ガンジョバクヤ』の黒刀が黒いエネルギーに包まれ、それを思いっきり振り出すミツル。

その威力は、かなり重くすることで一振りの負担が大きくなる代わりに絶大なる威力を発揮する破壊の剣。
それがシグナムに無かって振られるが……

「はぁあああああああああああああ！」

そのまま『紫電一閃』で対抗して押し返す。

「何だとぉおおおおお！？」

自分の魔法剣技の中でも、指よりの威力を誇る魔剣が押し返され力負けした事に驚く満。
しかもそのカウンターは重く、『ガンジョバクヤ』を握った手に痺れだ出て力強く握れなくなっている。

「そしてパワーも、アーサァの剛剣には及ばん！」

コレまでの『七星神刀（しちせいしんとう）』を持つ魔剣士との対決経験を思い出すシグナム。
速さではスバル、力ではアーサァ。
その2つを何もかもミツルは劣ろっていた。
屈辱の経験は、同時に己の成長のバネになる事がある。

「シグナム……いつの間にあんなに強くなっているなんて……」

フェイトもその成長は急な物だった為、正直驚いている。
一方の銀時は、ただだんまりとシグナムを見ている。
焦りを無くし、新しい強さに目覚めたシグナムの姿を見て、もうシグナムは大丈夫だと安心感を持つ。

「己ぇぇぇぇ！こうなれば、最終魔法『ニルヴァンナ・ザ・ギガンド』で終わらせてくれる！『ガンジョバクヤ』カートリッジロード！」

≪Ｉ　ｍｏｖｅ　ｔｏ　ａ　ｌａｓｔ　ｍｏｄｅ≫

ガシャン×６

双刀からカートリッジをそれぞれ３つずつロードすると、２つの剣の柄の先がぶつかり合う。

そしてそこから光が発生してその光がミツルを包み込む。

光が消えると、そこには巨大な己剣を持ったミツルが姿を現した。

「『ガンジョバクヤ』の最大攻撃力を誇るこの究極破壊形態で、一気に勝負を決めさせてもらう！」

コレこそがミツルの奥の手である。

以下にも攻撃性能が高くてかなり威力があるといやと言うほどわかる。

一方のシグナムも、それを対抗するために取って置きをだす。

「ならば、私の新たな力で返り討ちにする！レヴァンティン！」

≪Ｔｈｅ　ｃｏｎｓｅｎｔ！≫

ガシャン×５

シグナムも、『レヴァンティン』のカートリッジロードをする。

すると、刀身全体が紫色の炎に包まれる。明らかに『紫電一閃』ではない。

「カートリッジを５つをロード！？」

「シグナムさんの新魔法！？」

ザフィーラとなのはは予想外な事に注目する。
コレまで、シグナムがここまでカートリッジをロードした回数はせいぜい1～2発。
圧倒的にいつものカートリッジロード数をはるかに上回っている。
それはつまり、シグナムの新魔法である。

「今更カートリッジを増やした所で無駄だ！ニルヴァンナ・ザ・ギガンド！」

ミツルは斧剣を豪快に振り回し、そこから巨大な灰色の斬撃が放たれる。
その威力は今までミツルが放った魔法がちっぽけに思えるほどの威力を持つSランク級の魔法。
そんなミツルに臆しないシグナムも『レヴァンティン』を構える。

「輝け、誇り高き烈火の魂よ！」

『レヴァンティン』の刀身に包んでいる炎が更に大きくなって勢いよく燃え上がると、シグナムは『レヴァンティン』を持ち上げて構え（いわゆる示現流の構え）、一気に凄まじい速さで振り下ろす。

「極炎一閃！」

紫色の炎が包まれた極大な斬撃が放たれ、灰色の斬撃をまっ二つにして燃やしだす。
その威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』とスバルの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』と双璧となる。
ミツルはその斬撃に死を覚悟した。

……だが、極炎一閃はミツルの左側を通過して観客席に直撃し、大爆発して紫色の炎の柱が天に昇るように上がる。
それを見たフェイト達は黙り込み、その威力に圧倒された。
銀時もシグナムの予想以上の魔法に驚きを隠せなかった。

ミツルはそれ以前にどうして自分に当たらなかったか理解できなかった。
ガジェット達はミツルの戦闘意識がなくなった事を確認して撤退する。

「何故だ……何故、今の一撃を俺にぶつけなかった！そうすれば俺を倒せていたはず！なのに何故！」

その訳を、シグナムは答える。

「……私は今まで、七星神刀（しちせいしんとう）と言う大きな壁に無意識に超えなければならないと迷っていた。だが、お前と剣を交えてそれは己の迷いが生み出した間違いであると確信した。その為、我が『レヴァンティン』が七星神刀（しちせいしんとう）に劣ってはいないと思い込み、己の弱さが原因だと決め付け……慌てていた。そして、それではまた大事なものを護れなくなる事を思い出した」

そう、シグナムは自分自身と戦っていた。
ミツルを倒す以前に、七星神刀（しちせいしんとう）と言う巨大な壁に無意味に立ち向かおうとする身の程知らずの自分に打ち勝つ為に。

「だから、私が勝ったのは……自分自身にだ」
「……」

シグナムが勝たなきゃいけないのは七星神刀（しちせいしんとう）ではない。
それに『レヴァンティン』に打ち勝とうと考えた自分自身であった。
己の迷いを克服したこそ、シグナムはこの場で『極炎一閃』を会得したのだ。

そんなシグナムを見て、満は『ガンジョバクヤ』を手から離して落としてしまい、両手を伸ばす。

「……アンタを見てたら、自分のやっていることが馬鹿らしくなってきた。……降伏する」

ミツルは自らの敗北を認め、拘束された。

「シグナム……」
「アイツは自分に勝っただけだ。騎士の魂を取り戻し、更なる強さを身につけちまった……それだけの事さ」

シグナムにそんな迷いがあったと気づかなかったフェイトに、ようやくシグナムが本当の意味で強くなった事と同時に彼女の悩みが完全に消えたと安心して、ふっと笑う銀時。

その後、フェイト達はシグナムに駆けつけて神楽とはやてはシグナムの最後の魔法に感動して、ザフィーラもいつものシグナムらしさがあって安心した。
『ガンジョバクヤ』はミツルのせめてもの頼みで、『『ガンジョバクヤ』を管理局に預けず、『機動六課』に預けてほしい』と頼む。
実は彼、管理局のエリート隊員に散々と屈辱を味わわされた為に管理局に敵対心を抱いていた。
それはミツルが機動六課が自分が嫌う管理局とは違って安心できると確信した証拠である。

はやては自分たちが保管していれば管理局に目を付けられると疑いを感じ、源外とスカリエッティに預かってもらう事にした。

今回の事件で大活躍したシグナムの成長を確信した銀時。
そしてシグナム自身も銀時との距離が縮まったと確信して喜びを感じ、銀時に抱きつく。

「銀時ぃぃぃぃぃ／／／／」
「ちょ、おま……！！／／／／」

彼女の豊満な柔らかい胸が再び銀時の体を押し付けて、銀時は顔を真っ赤に染まって動揺する。

そんなシグナムを見てどす黒い嫉妬を放つフェイト、なのは、アルフ、リィンフォースの４人。
月詠とプレシアはもやもやとした気持ちになり、桂、エリザベス、はやて、外道丸の４人は面白そうに笑い出し、神楽とお登勢はどうして銀時がこうも女にもてるのか理解できず、ザフィーラと源外はいつもどうりの事だと思った。

当然の事ながら、シグナムが銀時に抱きつく光景を機動六課の男性隊員は銀時に殺気を放つと同時に嫉妬する。

そして『コーシカップ』はこの事件によって中断とされ、『イヤンキッス』と『マリンナッツ』の罰ゲームは当然なしと言う結果で幕を下ろした。

その次の日。

「にゃはははははは♪さぁ、覚悟はいいよね♪」

機動六課の隊員オフィスには、ニコニコと笑いながらも凄い殺気を放っているなのはにガクガクと震えていて土下座しているシグナム、ヴァイス、イテツがいた。

「……あのう……自分達が何を？」

「何をやったか覚えていないのだが？」

（てか、何この怖さ！？）

青ざめているシグナム、ヴァイス、イテツの3人。

特にイテツはなのはの圧倒的な恐怖に怯えている。

「今回の事件は元はと言えばイテツさんが原因だし、シグナムさんは銀さんにくっ付きすぎ。そして……ヴァイスさんは私に『すんごく酷い事』を言ったから……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

シグナム、イテツ、ヴァイスの行動は凄く腹が立っているなのは。

なのはの両手には、『マスモディウスの活け付け焼酎』が入っている瓶がたくさんある。

『『……あわわわわわわ！！！！！』』

「さぁ、覚悟して……」

涙を流して怯える三人に……

「飲みやがれなのぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

『『ぎゃぁあああああああああああああああああああああああああああ！』』

無理矢理『マスモディウスの活け付け焼酎』を飲ませる。
コレにより、急激な食中毒でシグナム、ヴァイス、イテツは入院決定。
イテツは今回の事件を起こした張本人として野球界を追放されて、『イヤンキッス』も解散。
だが、それと同時にヴァイスのピッチャーとしての活躍がプロ野球監督に何人も注目されて、ヴァイスは後にプロ野球のチームにスカウトされる事は、それは別の話で。

『烈火編・完』

第八十一訓：強敵と戦う時に、過去に戦った強敵と比べれば大した事が無いことも

黒神
「えー、次回からの新ＯＰと新ＥＤは以下の通りです」

第八十二訓からのＯＰ

『風のごとく』（『よりぬき銀さん』の第二弾のＯＰ）

第八十二訓からのＥＤ

『ダイアモンド　クレバス』（『マクロスＦ』の第一弾のＥＤ）

今回はこの２つの曲をします。
前から一度試したかった曲ですので。
では次回もお楽しみ。

黒神
「次回、「見た目が悪いほど美味しいって言う期待はあんまりしないほうが賢明な判断」テイクオフ」

特別編：見た目が悪いほど美味しいって言う期待はあんまりしないほうが賢明な気がする

黒神
「突然ですが、鍋パーティをします♪」

銀時
「いきなりだなおい！」

突如の鍋パーティに銀時はツッコむ。

スバル
「鍋パーティって、まさか『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』でフェイトさん達が体験した……あの闇鍋ですか？」

黒神
「そうですよ」

銀時・スバル
『『最悪だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』』

あの恐怖が自分達も襲い掛かることを考えるだけで絶叫する２人。

フェイト・なのは・はやて
『『あ・・・・・あはははははははは！！！！！！（涙）』』

アルフ
「フェイトおおおお！？何壊れてんのおおおおおお！？」

プレシア
「どれだけ怖いって訳！？」

3人はあの闇鍋の恐怖を思い出して涙を流しながら壊れて笑う。
そして桂とエリザベスもまたあの悪夢の経験を思い出してうなされる。

桂
「ぐ……もう関わりたくない悪夢がまた……」

エリザベス
『絶対に嫌ァァァァァァァァァァァ！』

はやて
「もう勘弁やぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

桂達をも絶叫するほどの闇鍋。
どれ程厄介なのか想像するだけで青ざめていくティアナ、エリオ、キャロ、フリード、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ギンガ、ユーノ、九兵衛、辰馬、近藤、スカリエッティ、ルーテシア、アギト、猿飛、外道丸である。

近藤
「え……なにその闇鍋って」

九兵衛
「少なくともまともじゃないことは確かだな」

近藤と九兵衛はそれは確かであると確信する。

辰馬
「あはははははは、楽しみじゃのぉ～～！」

ザフィーラ
「辰馬……今の状況を見えていないのか？」

ヴィータ
「言っても無駄だ……ぜってぇ見てないから」

状況が全く見えていない辰馬にツッコむザフィーラと呆れるヴィータ。

フェイト
「銀時ぃ～」

銀時
「言うなフェイト……まだ死ぬと決まった訳じゃねぇ」

涙を流して銀時を見つめるフェイトに、まだ希望は存在すると諦めかけていない銀時。

スカリエッティ
「まさか……今日ここに私達を呼んだのも……」

アギト
「全ては闇鍋を無理矢理食わすためじゃ……」

疑うように黒神を見つめる2人。
その眼線を気にしないかのような態度で、黒神は正直に答える。

黒神
「いやー、いろんな人からそうした方が良いと誘われて、つい計画立てちゃいました♪」

近藤・源外・スカリエッティ・アギト
『『ふざけんなァァァァァァァァァァ！（怒）』』

ルーテシア
「るぅーーーーーーーーーー！」

ドカァ！

黒神
「ごふぁ！」

怒り出した近藤・源外・スカリエッティ・アギト・ルーテシアが黒神を殴りだす。

黒神（気絶）

山崎・ディエチ
『『……（ガクガクガクガクガク！）』』

山崎とディエチはこれから来る悪夢の闇鍋に怯えている。

以前に新八から貰った差し入れのワッフルの不味さにトラウマを抱えていた。
ちなみに今回、ディエチ以外のナンバーズは出てこない。
原因は、闇鍋がシャマルに強い関わりがあると言う理由で警戒して誘いを断った。
しかしディエチは山崎をほうっておけずについてきた。

辰馬
「あはははははははははは！わしゃ楽しみにしとるぜよ！」

桂
「坂本、これから起ころうとする悲劇を全く知らないから能天気でいられるんだ」

辰馬の愉快さに呆れて言い出す桂。

キャロ
「だ……大丈夫だよね……」

エリオ
「りょりょりょ……料理で死ぬ事は……」

黒神
「それがあるんだよ……」

希望が全てないわけじゃない事を信じる2人に、現実的に言い出す黒神。
その言葉でエリオとキャロは絶望的に失望する。

フリード
「きゅう～」

失望しているキャロに励まそうと近づくフリード。
自分も地獄を見る事になる事を知らずに。

神楽
「エリィ、キャロ、2人だけじゃないネ。私達も地獄行きネ」

月詠
「アア……」

絶望に包まれている2人を励まそうとする神楽と月詠。

ティアナ
「そう言えば、シャマルさんは？」

ヴィータ
「そう言えばいねぇな？どこ行ったんだアイツ？」

シャマルの存在なさに気づくツッコミ係の2人。
その原因を黒神が、何故か体を震えて説明する。

黒神
「じ……実はシャマルは……調理場にいます」

黒神のその言葉にかつて無い衝撃が全員に伝わった。
銀時、フェイト、スバル、なのは、はやて、桂、エリザベス、リィンフォース、リィン、ユーノ、山崎、ディエチは絶望に包まれて気絶。

神楽、月詠、ザフィーラ、エリオ、キャロ、フリード、近藤、九兵衛、源外は死を覚悟。
ティアナ、ヴィータ、プレシア、スカリエッティ、アギトはどうして調理場に立たせてはいけない人物を動じて調理場に立たせたのか激怒。
辰馬、外道丸、ギンガはその様子を理解できなかった。

ティアナ
「何でシャマルさんに料理させているんですか!?」

ヴィータ
「それは私達に死ねって言いたいのか!?そうなのか!?」

スカリエッティ
「黒神、どういうわけか聞かせてもらおうか?」

3人はとてつもない怒気を放って黒神を聞き出す。
その理由を黒神は言い出す。

黒神
「……実は……彼女が調理場に向かおうとしたのを目撃して僕が止めようとしたんですけど……凄まじいプレッシャーで脅らされて……」

その時の彼女は半端じゃなく怖かった。
思い出すだけで涙を流す黒神。

銀時
「……黒神……誰だって怖ぇもんは1つや2つあってもおかしくはねぇさ」

銀時は今回ばかりは凄く可哀想であると黒神を慰める。

フェイト
「確かに、シャマルはここのところ出番が無かったから……なんか凄くカンカンしていたような……」

フェイトの一言を聞いて、誰もが黒神を睨みつける。
黒神は全員（フェイトとスバルを除く）の殺気に気づき怯えだし、素早く逃げようと選択するが……

銀時
「やっぱテメェのせいかぁー！」

ドカァ！

黒神
「あふぇえええええええ！？」

さっきの慰めが嘘のようにと、銀時の木刀の一振りが黒神に直撃。
その後も全員（フェイトとスバルを除く）にボコられてボロボロになる黒神。
はっきり言って大哀れと同時に自業自得である。

黒神
「あ痛たた……まぁとりあえずゲストを紹介します」

フェイト・スバル
『『立ち直り早っ！』』

黒神
「今回登場するゲストは、『ウッソ・エヴィン』さん作の『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ・ＳｔｒｉｋｅｒＳ』と『真・恋姫†無双　銀色の魂をもつ侍』に出てくるあの人物です！」

その２つの小説の名を聞くと、銀時、フェイト、スバル、桂、なのは、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、はやて、エリオは誰が来るのか理解した。

＊

ウッソ
「こんにちは、黒神さん」

シャクティ
「お久し振りですね」

こなた
「おひさー！久し振りに来たよ！」

かがみん
「ちょっとこなた、他の皆に迷惑かけるんじゃ……てなんで私の上の名前がかがみんになってんのよ！？」

桃香
「銀さん、お久し振り～♪」

現れたのは、『ウッソとリリカル銀魂　Ｇ・ＳｔｒｉｋｅｒＳ』に

登場する主人公のウッソにヒロインのシャクティ、重要キャラの１人であるこなたにツッコみ役及び今回始めてゲストとして呼ばれたかがみんである。

かがみん
「だからかがみん言うなァァァァァァァ！」

ドカぁ！

黒神
「何故僕！？」

何故かかがみんに蹴り飛ばされる黒神。
どうしてなのか理解できなかった。

ウッソ
「大丈夫ですか！？黒神さん！」

黒神
「え……ええ、まぁ」

かがみん
「たくぅ……と言うよりいい加減かがみん止めんかぁぁぁぁぁぁ！！」

大噴火して怒鳴るかがみ。

こなみ
「いやー、今回のかがみんのツッコみは一段と冴えているねぇ♪」

かがみん
「こなたまで言うなぁぁぁぁぁぁ！」

愉快そう笑うこなたに対して大きくツッコむかがみ。
そんなかがみに強く動揺するティアナ。

ティアナ
「貴女も凄く苦労しているんだね」

かがみ
「……ええ」

互いに見つめ合い、その瞳に写るのは見つめる相手の苦労と自分のツッコみの経験。
そして髪型以前に存在の一体感。
この瞬間にティアナとかがみは理解し合える同士である事を知った。

ティアナ
「……私はティアナ・ランスター。宜しくね」

かがみ
「……柊　かがみです。以前にこなたがご迷惑をかけました」

少し暗めにご挨拶する2人。
そんな2人をみてこなたはニヤニヤとする。

こなた
「いやー、ツッコミ役のツンデレが2人揃うのも中々だねぇ」

ティアナ・かがみ

『『ツンデレ言うな！』』

こなたに言われて早速ツッコみだすティアナとかがみ。
似ているのは髪形やツッコみの鋭さだけではない。
最もと言うべきはその存在感である。

こなた
「あ、そうそうスバルぅ♪」

こなたはニヤけた表情でスバルを向けると、その目からは欲望満ちたオタクの思いがつまっていた。

スバル
「な……何、こなた？」

こなた
「以前に着ていた○エルのコスプレはしないの♪」

スバル
「えぇ！？／／／」

突如のコスプレ質問にスバルは顔を真っ赤になる。

こなた
「それに、せっかくの外伝小説ができたんだから……記念にコレ着てみて♪」

と、こなたが出したのは……何やらすんごく破廉恥な裸に近い衣装であった。その衣装こそ、『○レイブルー』の第二段のラスボス、『○－Ｎｏ．１２－』の衣装であった。

スバル
「……アノウ……ナンデスカコレ？」

思わず片言で喋ってしまうスバル。
こなたは当たり前のように説明する。

こなた
「じゃじゃーん♪『蒼魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～魔剣士鎮魂歌～』完成記念にスバルに着せるために手に入れた『〇レイブルー』の『〇ーＮｏ．１２ー』の衣装だよ～ん♪」

スバル
「それを着ろと言うんですかぁぁぁぁぁぁぁ！？／／／」

余りの恥ずかしさにスバルは絶叫する。

シャクティ
「こなたちゃん！いくらなんでもそれはないよ！」

桃香
「それ、凄く恥ずかしい衣装だけど！？／／／」

シャクティと桃香もいくらなんでもそれはないとツッコみだす。

こなた
「オタクに加減はないのだぁ～！さぁ、スバルちゃん！」

スバル
「ちょ……ちょっと待ってくださいいいいいいいいい！／／／」

『〇ー№．１２ー』の衣装をスバルに押し付けながら興奮して言い出すこなた。
そんなこなたに当然……

ティアナ・かがみ
『『止めんかぁぁぁ

「全くだ」

銀時、フェイト、黒神もこなたの暴走には凄く呆れていた。

ウッソ
（なんていうもんを出したんだ、こなたは……あ、でもあの衣装を着たスバルの姿って……）

『〇－Ｎｏ．１２－』の衣装を来たスバルを想像するウッソ。
そんな彼に突如、シャクティの剛拳が炸裂し、

ガコォン！

轟音が響く一撃がヒットし、ウッソは倒れる。

ウッソ
「……しゃ……シャクティ？」

シャクティ
「ウッソぉ～、妄想は控えめにね♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

シャクティの威圧感は半端じゃなく大きく、ウッソだけでなく誰からも怯えだす恐怖の存在となった。

神楽
（怖いアルぅ～～～～～～～！）

近藤
（何あの子、凄く怖すぎなんだけどぉぉぉぉぉぉ！？）

辰馬
「あ……あはははははは……最近の娘さんはおっかなすぎぜよ」
神楽と近藤は勿論の事、辰馬も流石に怯えていて震えていた。

リィン
「お姉さん、怖いよぉぉぉぉぉぉぉぉ（泣）」

リィンフォース
「……」
怖がるリィンに対して余りの恐怖でだんまりとなるリィンフォース。

銀時
「あ……あのう……皆さんすんごく怖がってんので……そのぐらいにしたほうが良いのでは？」

シャクティ
「あらやら、すみません……少しで過ぎちゃったみたいで♪」
さっきまでの威圧感が嘘のように消えてニコッと笑い出すシャクティ。
男性組は女の怒りがメッチャおっかない事を改めて知った。

黒神
「ウ……ウッソさん！大丈夫ですか！？」

ウッソ
「……は……はい……今、お花畑が見える道を進んでしまうところでした……」

臨時体験を受けたウッソ。
シャクティの怖さを嫌と知った黒神であった。

桃香
「あ……あはははは……」

ウッソ
「そう言えば、新八さんから伝言を聞かされまして……」

神楽
「ぱっつぁん元気してたアルか！？」

新八の名を口にしたウッソに対して、嬉しそうに喜ぶ神楽。
なんやかんやで仲間である新八を心配していたようだ。

銀時
「ほぉ～、アイツから伝言ねぇ？んで、一体ぱっつぁんが何言ったんだ？」

ウッソ
「……なんでも……『僕よりメッチャ活躍している銀さんと神楽ちゃんが憎いぃぃぃ！あの馬鹿コンビに天罰ォおおおおおおおおおおおおおお！』と……すんごい迫力に言ってました」

言いにくそうに苦笑してその事を説明するウッソ。
それを聞いた銀時と神楽は怒った。

銀時
「あんにゃろぉーーー！自分だって『ウッソとリリカル銀魂　G・

ＳｔｒｉｋｅｒＳ』で活躍してんだろうが！」

神楽
「ぱっつぁんの分際で調子に乗ってんじゃねぇぞ、あの童貞！」

フェイト
「ぎ……銀時！？」

ティアナ
「兄さん、落ち着いて！」

エリオ
「神楽さん、落ち着いてください！」

ウッソ
「てか、神楽ちゃん！新八さんに対して童貞て呼んだの！？酷すぎじゃないですか！？」

突如、怒鳴って暴れだす銀時と神楽を止めるフェイト、ティアナ、エリオ、ウッソの４人。

山崎
「新八君……なんか可哀想……」

すんごく動揺する山崎。

桃香
「そう言えば、黒神さんの新小説『蒼魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～魔剣士鎮魂歌～』と言う外伝小説がありますけど……スバルさんが主役のようですね」

スバル
「え……は……はい」

桃香が『蒼魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～魔剣士鎮魂歌～』に気づくと、黒神が説明する。

黒神
「はい、この小説は『リリカル銀魂シリーズ』で僕が考えた初めての外伝小説であり、スバルが銀さんとの再会及び機動六課に会う前の頃を中心に書く物語であり、機動六課以外のスバルの仲間が登場します」

シャクティ
「そうなんだ！凄いねスバルちゃん♪主人公になったなんて」

スバル
「え……いや、そのう……／／／」

恥ずかしながら嬉しがるスバル。
そんな彼女に鋭い嫉妬眼線で睨みつけるフェイト、なのは、はやて、シグナム、ティアナ、リィンフォース、ヴィータ、九兵衛。
眼線に気づいたスバルはビクッとしながらも気づかない不利をしていた。

ギンガ
「……いいよね、スバルは……私なんか初登場時はスバル中心のシリアス『スバル編』でついでに登場しましたって感じのインパクトの無さで影薄ヒロインとして登場したんだし……」

スバル
「ギン姉！ギン姉だって良い所はあるからぁ！」

妹の活躍に羨ましがって暗くなるギンガに、慌てながらも慰めるスバル。

かがみ
「でも、なんで外伝小説を書くようになったの？」

黒神
「それは、スバルのオリジナル設定が予想以上に気に入り、その為どうしてここまで彼女が強いかを外伝で明らかにしたくなったからです♪」

こなた
「なるほどなるほど♪」

桂
「それは是非見て見たいものだ」

エリザベス
『私もです』

黒神の説明に納得するかのように頷くこなた、桂、エリザベス。
そうすればスバルの異常な強さもはっきりと理解できる。

ウッソ
「所で、シャマルさんがいないんだけど……まさか……」

シャマルがいないことを知って青ざめるウッソ。

絶対に信じたくない事を予感するが……最悪な事に的中する。

黒神
「はい……今、鍋を作っているようです」

その一言に、ウッソ、シャクティ、こなた、かがみの４人は両膝両手を地面につけて絶望する。
桃香はその意味を全く理解できなかった。何故なら彼女は、シャマルの猛毒物質（ポイズン・マター）の存在がどれ程恐ろしいかを理解できていなかった。

黒神
「更に皆さん、ここで最悪なお知らせがあります」

銀時
「いやじゃあああああああああああああ！聞きたくないいいいいいいいいいいいいい！」

フェイト
「知りたくない！知りたくないいいいいいいいいいいいい！」

スバル
「現実の厳しさを無闇に押し付けないでぇぇぇぇぇぇぇ！」

桂
「いっそ死ねと言ってくれぇぇぇ！」

なのは
「にゃあああああああああああ！死にたくないいいいいいいい！」

はやて

「言わんといてぇぇぇぇぇぇ！」

ウッソ
「あ……あはははははははは！父さん、今行くよ！」

シャクティ
「ここで死ぬなんて……」

こなた
「誰か助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

かがみ
「来るんじゃなかったぁぁぁぁぁぁぁ！」

桃香
「え……えぇぇぇぇぇ！？一体何があるって言うの！？」

銀時達の慌てように桃香は突如に驚きだす。
だがこれから起きる悪夢を、彼女もいやと言うほど理解する。

黒神
「実は……」

シャマル
「お待たせしました～～♪」

黒神が説明しようとする途端に、シャマルが土鍋を持ち出して机に

置く。
その鍋の中身を黒神達が恐る恐ると見ると……何やら蜘蛛の足が何本も入っており、どす黒い液体に肉や野菜だけじゃなく得体の知れない物質もブクブクと煮込まれて入っていた。
更に言えば、何やら一部の食材が魔物が生きているような叫びをしており、ウジョウジョと動いている。

黒神
「……シャマルサン、コレハイッタイナンデスカ？」

シャマル
「えへ、源外さんと外道丸さんが作った『混汁』と『マスモデウス活け漬けの焼酎』を、以前の『闇鍋』の残りに入れて煮込んだ『シャマル鍋』です♪」

ニコッと答えるシャマル。
しかし脅威のシャマル鍋の不味さは見た目だけでも嫌と分かる。

黒神
（いやぁあああああああああああああああああああああ！予想以上に最悪な状況になってしまったぁぁぁぁ！）

銀時
（ぎゃあああああああああああああああ！コーシカップの悪夢が再現したぁぁぁぁぁ！）

フェイト
（悪夢なら覚めてぇぇぇ

スバル
（最も恐れていたことが起こったぁぁぁ

（うふふふ……あれを利用して神楽さんと月詠さんを……）

アルフ
（絶対に食いたくないよあんなの！）

プレシア
（何あれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！どうやって作ったと言うのぉぉぉぉぉぉ！）

シグナム
（それは我々の死を望んでいるのか、シャマル！）

ヴィータ
（何でコイツの料理は一方的に不味くなる方向に進むんだぁぁぁぁぁ！？）

ザフィーラ
（コイツに料理させれば厄介ごとが起こる一方だと言う事を分かっておきながらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！）

リィンフォース
（コレ思いっきりゾーマをも殺せるほどの脅威を感じるんだけドォオオオオオオオオオオ）

リィン
（ロストロギア！？料理でロストロギアを作ったんですか！？）

ギンガ
（機動六課に入るんじゃなかったぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！）

ユーノ
（どうでもいいけど、僕の出番一方的に減っていない！？）

近藤
（最悪だぁぁぁぁぁぁぁぁ！お妙さんと再会する前に死の恐怖が訪れようとはぁぁぁぁぁぁぁ！）

九兵衛
（だ……大丈夫だ……こんなもん、あの頃の死闘に比べればたいした事は……）

ルーテシア
（ルー……ここで死ぬかもしれないの？）

アギト
（神よぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！私達に死ねと言いたいのかぁぁぁ！？）

山崎
（なんじゃこりゃあああああああああああああ！酷すぎる、余りにも酷すぎる！）

ディエチ
（皆、御免……ここでお別れかも知れない……）

ウッソ
（ＮＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！最悪な状況になってしまったァァァァァ！）

シャクティ
（これ闇鍋の時以上の悪夢を感じる……死にたくないよぉ～～）

こなた
（……いやだぁあああああああああああ！食べたら死んじゃうぅぅぅぅぅぅ！パンデモニウムの方がまだマシだったぁぁぁぁ！）

かがみ
（……そうよ。これは夢よ……夢なら覚めるはず……あ……あははははははははははははは！）

桃香
（何コレェェェェェェェェェェェェ！愛紗ちゃんに引けをとらない不味そうな料理、いやそれ以上!?とにかく食べたくない、絶対死ぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！）

などと、シャマルの『シャマル鍋』に誰もが心から騒ぎ出す。
ある物は恐怖し、ある物は泣き出し、ある物はこの世のお別れをし、ある物は利用し、ある物は現実逃避するなど様々。
それよりも最悪なのは、あの『混汁』と『マスモデウス活け漬けの焼酎』が鍋に入っている事である。
ただでさえ死ぬほど不味い『闇鍋』に2つの液体をミックスして混ぜ合わせたら、猛毒から町極悪猛毒料理と化してしまうだけ。
つまりこれは、世界一不味い鍋に認定されてもおかしくはない。

と、シャマルがある事に気が付く。

シャマル

「あれ、源外さんにスカリエッティに辰馬さん、それに外道丸さんが見当たらないですが？」

突如、４人が消えたことに誰もが驚きだす中、机に４枚の紙が置かれていた。

黒神、銀時、山崎、ウッソが代表して1人1枚ずつ拾って読むと、紙にはこう書かれていた。

辰馬

『金時達へ、いくらなんでもワシぁあんなえげつない物を食べるのは勘弁じゃけんのう……悪いんじゃき、一足退散させたし……じゃあまた来世で会うぜよ（笑）』

スカリエッティ

『諸君等え……せめて死ぬ時は安らかに……（笑）』

源外

『ちょうど急な用事を思い出したから……急だが帰らせてもらうぞ（笑）』

外道丸

『皆さん、今度会う時は全員式神に生まれ変わる事を祈ってござんす（ニヤリ）』

黒神・銀時・山崎・ウッソ

『『逃げやがったぁぁぁ

４枚の手紙を読み上げて、怒り出して紙を破りだす４人。

黒神
「源外さぁーん！元はと言えばあなたが作ったもんだろうがぁぁぁぁ！」

銀時
「あんにゃろー！名前を間違えるのはともかく１人だけ逃げやがってぇ！死んだらぜってぇ呪い殺してやるぁ！」

山崎
「逃げるなんて男の形もあったもんじゃねぇ！」

ウッソ
「外道丸ぅぅぅぅぅ！貴女は名前通りの外道な人だぁぁぁ！後、ニヤリって何！？メッチャムカつくんだけどォォォォォォォ！」

４人は逃げた４人に対して怒りと悔しさを叫んでいた。

フェイト
「あはははははははははははは！そうなんだ、もう全員死ぬんだ……あ……あはははははははは」

シャクティ
「うふふふふふふふふふふ、死相が見える。全員見えちゃうよ。うふふふふふふふふふふ」

銀時
「フェイトぉぉぉぉぉぉぉ！？」

ウッソ
「シャクティぃいいいいいい！？」

黒神
「うわぁ！２人が壊れたぁ！？」

もはや食べる前にカオス的な騒ぎとなってしまった。
誰もが絶叫して騒ぎ出す中、シャマルがもの凄い覇気をだして言い出す。

シャマル
「あのう……そろそろ食べてくれませんか、冷めますから♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

問答無用で席に座らされる銀時達。
改めて見ると、すんごく悪意を感じられる『シャマル鍋』。
見るだけでも伝わる吐き気に誰もが橋を伸ばせない。

黒神
「あのう……僕おなかが痛いので、やっぱ後で――」

シャマル
「食え」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

黒神
「頂きます！」

シャマルのとてつもない威圧感に押し付けられた黒神は思わず鍋に橋を伸ばす。

ティアナ、アルフ、ザフィーラ、プレシア、リィンフォース、ギンガ、ユーノ、アギト、山崎、ディエチも黒神に釣られて思わず橋を鍋に伸ばす。
そして適当に食べ物らしき物体を見ずにそのまま眼を瞑って口にする。
その不味さは予想以上に……

ドカァーーーーーーーーーン！

黒神・ティアナ・アルフ・ザフィーラ・プレシア・ギンガ・リィンフォース・ユーノ・アギト・山崎・ディエチ
『『どぃあぶぁふでぃあぶぁーーーーーーーーー

い！ディエチ殿ぉおおおおおおおお！』と必死に叫ぶ必死に叫ぶ。

シャマル
「あらあら、そんなに私の料理が美味しすぎて気絶したんですか♪」

ヴィータ・かがみ
『『んなわけあるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！』』

シャマルのあり得ない一言に必死に怒鳴ってツッコむヴィータとかがみ。

銀時
「シグナム……神楽……行くぞ」

シグナム
「ああ」

神楽
「うっす！」

銀時はシグナムと神楽を見て合図をする。
そして勢い良く茶碗で豪快に鍋をすくい、それを一気に……

銀時・シグナム・神楽
『『喰ら（いやがれぇぇぇぇぇ）（えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ）（やぁぁぁぁぁぁぁぁ）』』

ベチィ！

思いっきり桂、エリザベス、はやてに向けて汁ごと物体を飛ばし、

顔面に直撃する。

桂・エリザベス・はやて
『『らふぶぃあえあぶざしぁ！！』』

ドサァ！

見事に魂が打ち砕かれて倒れるのであった。

ヴィータ
「はやてぇぇぇぇぇぇぇ！ヅラぁぁぁぁぁぁぁ！」

リィン
「エリザベスさぁ～ん！」

ヴィータとリィンは思わず3人の名を叫びだす。
実はこれは、『コーシ・カップ』の件で今まで散々と桂とはやてにやられた銀時達の仕返しであった。

銀時
「うっしゃ！」

シグナム
「リベンジ達成」

神楽
「うほほーい！凄くすっきりしたアル！」

ウッソ
「そこまでするぅーーーー！？」

3人の行動に驚きだすウッソ。

シャマル
「ちょっと！せっかく私が作った鍋をどうしてこのように粗末にするんですかぁぁぁぁぁぁ！（怒）」

シグナム
「ならシャマル。まさかとは思うが、貴様味見をしていないのか？」

まさかとは思うがシグナムはシャマルに質問する。
怒るシグナムに、シャマルははっきりと言い出す。

シャマル
「私、味見をしないタイプよ。味見しなくても色の見分けで分かっちゃう感じの……」

ブチィ！

シグナム
「味見ぐらいしろぉおおおおおお！（怒）」

ベチィ！

シャマル
「どふぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！」

ドサァ！

『シャマル鍋』をもろに喰らって気絶するシャマル。
コレにはシャマルには当然の天罰だと誰もが思った。

桃香
「あ……あのう……何もそこまでしなくてもいいのでは……」

苦笑して口に出す桃香。
いくらなんでもそこまでする必要はないと思う。
そんな彼女がゆっくりと立ち上がると、豊満なる常識破れの胸が揺れまくる。
そんな光景を見た九兵衛は……

九兵衛
「……胸……」

桃香
「はい？」

九兵衛は茶碗で『シャマル鍋』をすくい出すと……

九兵衛
「巨乳は死すべし、巨乳は悪なりぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

ペチィ！

桃香
「ごふぴぃたぶるぅうううううううう！」

ドサァ！

魂を込めた叫びと共に、『シャマル鍋』の煮込み物体を桃香の顔面に投げつける。
当然のようにと、桃香はこの世とは思えない不味さに気絶して倒れる。

九兵衛
「なんで……なんで巨乳の女が大勢いるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！（涙）」

そう叫んで九兵衛は涙を流しながらこの場を走って立ち去る。
胸に対するコンプレックスが丸出しで桃香のような胸の大きい女を見ると悔しがる。
その様子を見た銀時達はそれほどまでなのかと言うほど九兵衛のキャラ崩壊は呆れていた。

ウッソ
「げ……原作の九兵衛さんじゃ考えられない変貌振りだね」

シャクティ
「……そうだね……」

銀時
「てかアイツ、ドサクサにまぎれて逃げやがったぁ！」

残された銀時達は、『シャマル鍋』をどうしようか考える。

月詠
「こんなもんを食べたら無事じゃすまないじゃろ？」

エリオ

「そうですね。下手したら死にますし」

神楽
「じゃあ食べないで逃げようヨ」

月詠
「そうじゃな」

エリオ
「賛成です」

こっそりと逃げ出そうと考える神楽、月詠、エリオの3人。
しかし、そんな3人を逃がさないようにとキャロが『シャマル鍋』が入った茶碗を持ち……

キャロ
「喰らえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

思いっきり3人の顔面に投げつける。

ベチィ

神楽・月詠・エリオ
『『あぐらんばるふぁーーーーーーーーー！』』

ドサァ！

銀時

「神楽ぁぁぁぁぁぁぁ！月詠おおおおおおおおおおおお！」

フェイト
「エリオおおおおおおおおおおおお！」

銀時とフェイトは気絶している3人に駆けつける。
キャロは最初からこのイベントを利用して神楽と月詠に地獄を見せるつもりでいた。
エリオはまさかの巻き込まれだが、最近全然かまってくれない為なのかエリオに対しても怒りを出している。

近藤
「ちょーーーーーーーーーーーーー！？お譲ちゃん、いくらなんでやりすぎでしょう！」

ルーテシア
「キャロ、落ち着いて」

フリード
「きゅいいいいいい！」

近藤、ルーテシア、フリードも、流石に青ざめてキャロの暴走にツッコみだす。
しかし……

キャロ
「逆らうかぁぁぁぁぁぁ！」

逆切れして暴走するキャロ。

追加として『シャマル鍋』一杯分をそれぞれ近藤、ルーテシア、フリードに向けて投げる。

ベチィ！

近藤・ルーテシア
『『ごふべちゅぁ！』』

フリード
「ふりゅぶりぃいいい

「どうかご勘弁をおおおおおおおおおおおぉぉ！」

キャロ
「うふふふふ！喰らえやがれ～♪」

キャロが『シャマル鍋』を2人に向けて投げようとすると、

フェイト
「止めてキャロォォォォォォォォォォォォォォォォ！」

ビチィ！

キャロ
「あんぶれふぁんぶぁーーーーーーーー！」

ドサ！

キャロの暴走を止めようと、フェイトがキャロに『シャマル鍋』を顔面に押し付ける。
キャロはその不味さに気絶した。

なのは
「ふぇ……フェイトちゃん……」

かがみ
「何もそこまでしなくても……」

フェイト

「エグ……だって……これ以上キャロの暴走を見れたれなくて……」

キャロの余りの非道な暴走に絶えられなくなったフェイトは思わず涙を流す。

銀時はフェイトの悲しみを理解し、撫でて慰める。

こなた

「とりあえず……この『シャマル鍋』を捨てようか」

シャクティ

「それしか……無いね……」

こなたがそう言うと、シャクティがその鍋を持ち運びだす。

すると、何かに躓いて転んでしまう。

シャクティ

「きゃああ！」

シャクティが転んでしまうと、『シャマル鍋』が入った鍋が宙に浮びだし、その中身がこぼれだし……銀時とスバルにかかってしまう。

銀時・スバル

『『ゴファギゥム！』』

ドサ！

予想外の展開と、あり得ないほどの不味さに2人は意味不明の叫びをして気絶して倒れる。

フェイト・なのは・シグナム

『『（銀時いいいいいいいいいいいいいい！）（銀さぁぁぁ

「ま……まずい……」

こなた

「スバルだけには、こう言うもんを食べさせちゃいけなかった事を忘れてたぁぁぁぁぁ！」

シャクティ

「え……何々？」

シャクティには理解できなかった。

そう、スバルはもの凄く不味い物を口にすると……暴走する事を。

それも白い悪魔ごとなのはを瞬殺出来るほどに。

かがみ

「とにかく早く逃げ――――」

ドカァーーーーン！

逃げようとすると、突如スバルの体全体から蒼い魔力の柱が天に昇るかのように溢れ出る。

とてつもない魔力の高さ以前にその威圧感は、なのはやフェイトも圧倒する。

なのは

「え……何々！？」

フェイト

「スバルぅ！？」

ヴィータ
「何か……異常なまでに魔力があふれ出てねぇ？」

突如のスバルの変化には誰も驚きだす。
『白い魔王』以上の覇気にＳＳＳランク級は達成する魔力。
そして何よりも恐ろしいのはさっきからスバルから放たれている殺気が異常なまでに高い。
バリアジャケットの衣装に変え、左手にある『ティルヴィングエア』を強く握る。

スバル
「斬首の癒しは……貴様等全員の首に相応しい」

リィン
「く……首いいいいいいいいいい！？」

それはつまり首を切り落とす事を意味し、リィンは青ざめてしまう。

ウッソ
「いんやぁあああああああああああああ！スバルが覇鬼……いや蒼い堕天使に！と言うより……『蒼き凶王』と化してしまったぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ヴィータ
「『蒼き凶王』って何だぁ！？『〇国ＢＡＳＡＲＡ３』の〇田三成かよぉ！？てか怖ぇぇぇぇぇぇぇ！」

最も恐れていた事が起こって大パニックになるウッソに呆れてツッコみ怖がるヴィータ。

シャクティ
「え、何々!?どういう事!?」

こなた
「スバルは異常なまでにまずい物を食べると、凶暴になって暴走しちゃうんだよ!」

フェイト・なのは・シグナム・ヴィータ・リィン・シャクティ
『『『えええぇぇぇぇーーーーーーーーーーーーーーーー!?』』』

それは最も最悪なキャラ崩壊である。
まさかスバルにその様な危険性があったなんて、誰も予想できないであろう。
そしてスバルは鋭い眼線をフェイト達に向けて睨みつける。

スバル
「私を苦しめた物を口にさせたその罪……命を持って償え……」

だんだんと大きくなっていくスバルの異常なまでの殺気が今でも爆発しそうである。
止めようとフェイトが声をかけるが……

フェイト
「す……スバル待って!少し落ち着――――」

スバル
「殺してやるぞおおお

どかぁあああああああああああああああん！

フェイト・なのは・シグナム・ヴィータ・リィン・ウッソ・シャクティ・こなた・かがみ

『『ぎゃあああああああああああああああ

特別編：見た目が悪いほど美味しいって言う期待はあんまりしないほうが賢明な

ウッソ
「うう……酷い目にあった……あれは元祖『凶王』並……いや、それ以上はあった」

黒神
「ウッソさん……マジすんませんでした」

ウッソ
「いえいえ、気にせずに。とりあえず今日はありがとうございます。また黒神さんに会える事を楽しみに待っていますので」

黒神
「こちらこそ」

銀時
「はぁーい、んじゃ次回「レギュラーが活躍するのもいいけど、たまには準レギュラーを活躍させるのもありかもしれない」テイクオフなぁ」

第八十二訓：レギュラーが活躍するのもいいけど、たまには準レギュラーを活躍させるのもいいよね

黒神
「ようやくシリアスや特別編も完成して、第８２話に行きます」

銀時
「一週間分の遅れが原因で忘れかけてしまう所だったぞ？」

黒神
「いやぁ、すみません。こっちにも事情があって……」

銀時
「シャキッとしろやぁ！」

バシィ！

黒神
「ごふぁ！」

フェイト
「あ……あははは……『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第八十二訓：レギュラーが活躍するのもいいけど、たまには準レギュラーを活躍させるのもいいよね。

『コーシ・カップ』から1週間が過ぎた。
逮捕されたミツルは、『七星神刀（しちせいしんとう）』の『ガンジョバクヤ』を管理局に渡る前に機動六課のはやて達に渡し、はやて達はスカリエッティと源外に保存させるようにと頼み、渡した。
スカリエッティはその『ガンジョバクヤ』を鉄子に見せると、デバイス化の為に半分は機械で作られていても、その切れ味と強度は通常の日本刀とは大違いで数百倍はある。
同じ刀匠として改めて妙寿に尊敬し、父のライバルである事を誇りに思う。

一方のミツルは機動六課に高杉の事を全て吐く。
ミツルが高杉と遭遇した場所も聞かされたが、そこには当然の事、高杉はいなかった。
おそらくミツルは、確実に高杉に利用されたのであろう。
七星神刀（しちせいしんとう）の戦闘データを取るのが彼等の狙いかもしれないと誰もが思う。

そして機動六課では、銀時、スバル、桂、神楽、エリザベス、月詠、リィンフォース、辰馬、お登勢、猿飛、外道丸が訓練所にいた。
それはスバルの剣術稽古の見学であった。

丸太5つが横一列に並んでいて、スバルはその丸太を見つめながら抜刀術の構えをする。
長く続く沈黙の中、風が吹く音が止まる瞬間であった。

「烈風居合（れっぷういあい）……」

シュー

スパパパパァ！

刹那の如くの神速の動きで、丸太との距離を詰めながら抜刀し、神速の刃が無数に放たれる音速が響きだす。

一見スバルが素早く移動して『ティルヴィングエア』の刀身を少ししか抜いていない様にしか見えないが、スバルが完全に『ティルヴィングエア』を納刀すると、丸太が刹那の如くバラバラに斬られていた。

そう、神速の抜刀術による目にも映らない速さで丸太を切り刻んでいた。

それをカートリッジ所が魔力も使わずに、純粋な剣の腕で生み出した剣術である。

「速っ！つうか速ぇよ！魔力による強化魔法なしでコレぇ……！？」

「うーむ、また一段と腕を上げたな」

『マジで凄い！』

一段とまた成長したスバルの剣技に驚きだす銀時に、腕が上がったと確信する桂とエリザベス。

「へぇー、この世界の連中は魔法に頼りきった根性なしな連中ばかりと思ったら……骨のある娘もいるもんだねぇ」

スバルの神速抜刀術を見たお登勢も、スバルの剣術には感心して認めている。

まだ１５とは思えない侍顔負けの華麗なる居合の剣術は、腕の立つ侍の中でもそうはいない。

「（ふぅー）……もしわっちが機動六課で『百華』のスカウトをするんじゃったら、まちがいなくスバルじゃろうな」
「魔法で戦うのもいいけど……やっぱり身体能力で戦うのが一番アル」

月詠も神楽も、スバルのように他の機動六課のメンバーが魔法だけじゃなく己の身体能力を鍛えるべきだと思う。
最近ではエリオとシグナムも、スバルを見習って純粋な槍術と剣術を磨き上げている為、以前よりパワーアップしている。
特にとエリオは、このまま行けばＡＡランクに達成できると評価されている。
全ては神楽と月詠が訓練に付き合ってくれたお陰である。
そしてスバルが訓練の休憩を取ると、銀時達に気づいて近づく。

「あ、みなさん見学ですか？」
「まぁ……そんなもんだろうね」
「スバルの訓練は、他の皆とは違って凄いですから」

魔導士であるが純粋な剣術を鍛錬するスバルに興味をもって見に来たお登勢に、スバルの剣術の鍛錬はいったいどのようなものか見て確かめたくなったリィンフォース。

「大した剣速だわ……正直言って大きく評価できるぐらいよ。私達の世界にいる侍達でも貴女程に神速並みの速さで剣を振るえる者はそうはいないわよ」

猿飛でさえ大きく評価するスバルの神速剣術。
いつ知ったのか、スバルは銀時に好意を持っている事を知ってからは恋愛敵を認識した。

しかしその実力は機動六課最強と謳われてもおかしくはない強さ。
魔法以前にその神速抜刀術が彼女の強さの秘訣であり、猿飛でも忍に劣らない素早さであると認めている。

「いやぁ……それほどでも」

テレながら嬉しがるスバル。

「……そういやフェイト達はどうした？」

「あ、フェイトさん達は次元空間任務でロストロギアの回収に向かったそうですよ。九兵衛さんも何か手伝う為に向かったようで……」

フェイト達はどこにいるかと不思議がる銀時に、スバルが説明する。
九兵衛の姿が見当たらないのはその為であった。

「あはははははは！機動六課も大変じゃの～」

「ん？でもちょっと待て。それではなんでスバル殿とリィンフォース殿は共に出動しない？」

辰馬は機動六課の仕事は大変であると思うと、どうしてスバルとリィンフォースは共に出動しないのかを不思議がる柱。

「今回私とリィンフォース副隊長だけ、銀さん達と一緒に機動六課のアジトの留守を頼まれたんです……」

「確かに……今回は全力全開的にやる気を出していますのに……変ですねぇ？」

スバルとリィンフォースはどうしてなのか不思議がる。

「確かに、あっちから見てもスバル様とリィンフォース様は機動六

課のメンバーでも上位に入る戦闘能力はあり、特にスバル様はその機動六課の中でも最も高い戦闘力を持っておりやする。そんな2人をどうして留守番扱いさせやしたかは、あっちも……」

外道丸も不思議がるが、お登勢が理解したように言い出す。

「なるほどねぇ……だから2人を留守番扱いさせたんか」

「ん、何かわかったのか婆さん？」

理解したような雰囲気をするお登勢に訊き出す銀時。

すると月詠がキセルを口に加えて、そしてゆっくりと煙を吐く。

「（ふぅ～）……おそらくあやつ等はスバルやリィンフォース、そしてわっち等の力に頼りすぎていると思ったんじゃろ……じゃからあえてわっち等だけじゃなくスバルとリィンフォースを留守番させたんじゃろ」

その言葉に銀時達は納得する。

確かに銀時達から見ても、自分達を除けば、純粋な戦闘力はまちがいなく機動六課最強で魔導ランクはＳＳランクは確実にあるスバルに、『闇の書』によって生み出されたロストロギア級の強さを持つユニゾンデバイスである上に強力な魔法をも仕えるリィンフォース。

2人は将棋で言う機動六課の飛車と角行見たいな存在である。

フェイト達はおそらく、いつまでも2人を頼りっぱなしにすれば自分達は何にも成長していないと考えたのである。

スバルはフェイト達を心配しながら空を眺めるが、銀時が「まぁ、あいつ等なら大丈夫だろ」と軽くスバルの頭を撫でて安心させる。

＊

シヴァウス

そこはアイスランドとも思わせるほどの氷の世界であり、ミットチルダとは違う異世界の南極。
青い空に見ているだけで寒気を感じるほどの氷の大陸に数多くの氷山。
そこには大量の人型の氷の魔物がウジャウジャとたくさん群れているのが分かる。

その光景を『クラウディア』に乗っている機動六課のメンバー達と九兵衛、そしてクロノは真剣な表情でモニターで見つめている。

「これが……ロストロギアで生み出された氷の魔物の集団って訳やな？」
「ああ、いったい何なのかは分からないが、おそらくはロストロギアで生み出された異種生命体の類に違いない。ほうっておけば取り返しのつかない事に……」

はやては信じられない表情だが冷静に見つめ、クロノは一刻も早く元凶であるロストロギアの回収をしなければいけないと考える。

「確かにこんなの、今まで見た事がない異種生命体だわ」
「見た目的には『えいりあん』とか言う異種生命体には及ばないが……油断は禁物だな」
「ああ……そうだな」

フェイト、シグナム、ザフィーラも未知なる異種生命体には油断せずに警戒態勢を持っている。

「……フェイトぉ……良いのかい？銀時達を置いて行って……」

アルフはフェイトに心配そうに2人の事を言い出す。
今回の事件で銀魂組にスバル、それにリィンフォースを抜けさせるのはフェイトも反対はしていたが、これ以上彼等に頼っていては強くなれないとはやてが言い出したため、フェイトも仕方が無く賛成にした。

「私だって……銀時がいないと正直不安だよ……けど、これ以上銀時達に頼りっぱなしなのはダメな気がする」
「それに……ここ最近の事件はヅラ達が中心に片をついているようだし……このままじゃ私達が足を引っ張るかもしれねぇから……」

全ては銀時達の力になって彼等を支える為にとフェイトとヴィータは考える。
もしもの時、ここだと言う時に彼等の足を引っ張るような事だけは絶対にしたくはない。
けして機動六課の過小評価はされてはいないが、これ以上銀時達に頼って彼等の負担を大きくさせたくないと言う事で、銀時達を機動六課の留守番を頼んだのである。
はっきり言って彼等の戦闘力が異常に高かった。

SSランクの戦闘力を誇る英雄『白夜叉』坂田銀時。
機動六課最強と謳われるフォワード部隊の1人、スバル・ナカジマ。
剣の達人は勿論、特殊な道具と爆弾を使いこなす『狂乱の貴公子』

桂小太郎。

純粋な戦闘力ならスバルと並ぶもう1人の機動六課最強候補、神楽。

剣・銃・爆弾を使いこなす万能生物（!?）のエリザベス。

クナイを使いこなし、可憐な戦いを披露する『死神太夫』月詠。

ロストロギア級のユニゾンデバイスであり、Sランクの魔法を使いこなすリィンフォース。

銀時と桂に劣らない剣の腕を誇る坂本辰馬。

そして豪傑なる金槌を使いこなし、嘘や演技で外道の如く相手を翻弄する外道丸。

これはまちがいなく管理局をも引けをとらない最強集団とも言っても良い。

そんな彼等ばかりに頼りっぱなしにするのは良くないとはやてが考えた。

すると、エリオが少し寂しそうな表情をしていると、キャロは凄く愉快そうに笑っている。

「うふふふふ……」

キャロの愉快そうな笑いは少し不自然と考え、ティアナは恐る恐ると彼女に聞いてみた。

「ねぇ……何でそんなに笑えるの？何がそんな面白いの？」
「ええ～、お邪魔虫（神楽と月詠）が2匹がいない事がこんなにも愉快に感じるなんて……」
「ちょぉーーーーーーーーーー！あんた本当にどうかしているわよ！」

最早最初に出会った頃のキャロの印象が全く無いほどに変わり果てた彼女の理由に青ざめてツッコむティアナ。
フェイトはキャロの変貌に凄く落ち込むが、なのは、アルフ、シグナム、ついでにクロノが慰める。

「ふぇ……フェイトちゃん……」
「……今の内に泣いても良いのだぞ……戦闘中に悲しみで狂ってしまうことがあるし……」
「キャロが……キャロがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

涙をあふれ出すフェイト。
そんな彼女になのは達は慰める。
誰もが苦笑して笑い、ギンガはフェイトのあんな慌てようは見た事が無かった。

「フェイトさん……お気の毒に」

凄く動揺するギンガ。
実は彼女は4年前、あのミッドチルダ臨海第8空港の大火災でフェイトに助けられ、フェイトに対して強い憧れを抱いている。
だが、そんな彼女が銀時に恋をしていると噂を聞き、入院で銀時と初めて出会ったことから、彼に対する嫉妬が芽えてきた。

「んで、まさか九兵衛も来るなんてなぁ……まぁ手助けしてくれるから助かるが……」
「ここ最近、戦いの感覚が鈍ってしまったような気がして……せっかくだから是非手伝わせたいとはやてにお願いしただけさ」
九兵衛もまた、ここ最近自分がまともに機動六課の力になっていないと不甲斐ない気持ちを抱く。
せっかくお世話になっているのに恩を仇で返したくない彼女は、このロストロギア回収任務に参加する。
「それじゃ、皆行くよ！」
『『（おう）（はい）！』』
なのはの掛け声に機動六課は大きく返事をし、転送魔法で現場に向かう。
＊
戦争は始まった。
数多くの氷の魔物は、口から氷弾を放ったり剛拳を炸裂するなど、接近戦や遠距離戦も優れていた。
戦闘力はおそらくCランク程度。
それなら機動六課の敵ではなかった。
「はぁあああああああああ！」
フェイトのアーク・セイバーが炸裂して、三日月型の金色の刃が氷の異種生命体を次々を切りまくる。
「アクセルシューター……シュート！」

なのはも8発の桜色の魔力弾を放ち、一気に8体の異種生命体を打ち砕く。

「ラグナログ！」

はやても、杖から白い魔力砲を放ち、異種生命体を何体も打ち砕く。

3人は早速飛ばすが、魔力リミッターをかけられている為に、彼女達の魔力はＡＡランク程度である。

「行くぜ……グラーフアイゼン！」

≪Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ　ｉｔ！≫

すると、ヴィータの足場から紅い魔法陣が現れて、鉄球のような魔力弾が１０個現れる。

そして『グラーフアイゼン』を構えて……

「まとめてぶち抜けぇぇぇぇぇ！」

１０個の鉄球を打って異種生命体の胴体に穴を開く。

その威力は以前よりパワーアップしている。

以前にアーサァとの敗北で己の力不足を悔やみ、密かに特訓をして鍛え上げたようである。

「おおおおおおおおおおおおおお！」

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ザフィーラとアルフは狼モードになって次々と異種生命体を噛み砕いて破壊する。

さらにはバインドや防壁魔法で攻撃を防ぐなど、攻撃や防御も優れ

ている。

「はぁあああああああああああああ！」

九兵衛もひたすら素早く剣を振るい、神速と謳われているその剣速はまさに最速。

次々と斬られていく異種生命体。

九兵衛の剣の腕はまさに名門・柳生家の時期当主の名に恥じない。

そして異種生命体の軍勢が並んで、一斉に無数の槍型の氷弾を一斉に放つと……

「風よ！」

シャマルが広い範囲に渡って、大量の防壁を展開させる防御魔法『風の護盾』を放ち、氷弾を全て防ぐ。

援護守りとして優れているシャマルだからこそ出来る魔法と言えるだろう。

ユーノは……ただ『チェーン・バウンド』してるだけだった。

「ちょ！？何か僕の扱い酷くない！？」

＊

隊長や副隊長が活躍する中、フォワード部隊も負けていなかった。

「蒼穹を走る白き閃光　我が翼となり天を駆けよ　こよ我が竜フリードリヒ！『竜魂召還』！」

キャロはピンク色の魔力陣を放ち、その魔力陣の光を浴びたフリードは徐々に成長して行き……ついには真の姿『白銀の竜』に召喚する。
キャロはフリードに乗って空からフリードの遠距離攻撃を炸裂させる。

「がぁあああああああああ！」

フリードは口から強力な『ブラストフレア』を吐く。
氷の異種生命体が次々と溶けて消滅していく。

「うぉおおおおおおおおおおおおおおお！」

ティアナも『クロス・ミラージュ』を撃って撃ちまくり、次々と敵を倒しまくる。
彼女の銃の腕はすでに一流に達成している。

「はぁあああああああああああああああああああああああ！」

ギンガも、スバルと同じ先天魔法『ウィング・ロード』で青い道を宙に作り、ローラーブーツ型のデバイス『ブリッツキャリバー』で走って翻弄し、両腕に装着してるデバイス『リボルバーナックル』で次々と異種生命体を吹飛ばす。

「ぐぅ……倒してもキリがないわ！」
「ええ、やっぱり元凶となるロストロギアを行き早く回収しないと」

次からあふれ出てくる氷の異種生命体集団。
おそらくはロストロギアによって無限に生み出された人口異種生命体である事は確信できる。

だが、彼女等はそんな事を気にしないほどに目の前に見える光景に唖然とする。

「……それにしても、あの2人は凄いね……」

「ええ、兄さん達が来てから以前とは比べ物にならないほどに……」

ギンガとティアナが唖然として驚いているのは、次から次へと槍術と剣術を炸裂させて戦うエリオとシグナムの姿である。

誰よりも異種生命体を多く倒しているのはこの2人であり、その動きは無駄がなくて魔法なしでも十分強いと言える。

「てりゃあああああああああああああああああああ！」

エリオの高速連続突きが異種生命体の胴体を貫通させて倒しまくる。

「はぁあああああああああああああああああああ！」

シグナムの剛剣も、異種生命体を一刀両断に次々と切りまくる。

更に驚くべき事は、2人はまだ魔法を使っていない事である。

後半に強大な敵が出てくるのを予想して温存しているのであった。

エリオは神楽と月詠の猛特訓によって以前とは比べ物にならないほどの成長をして、AAランクに近い魔導士として成長し、シグナムもコーシ・カップ事件以来、己を磨き上げて更なる成長をし続ける。

「さすがシグナム副隊長！剣の腕をまた一段と上げましたね！」

「そう言うエリオも大した者だ。機動六課に入った頃のお前とは全く別人と言っていいほどに成長している！」

斬る、そしてまた斬る。

その戦い方はまるで、銀時達侍とスバルの戦い方を参考にしているかのようであり、魔法なしでも武を極めればまだこんなに強くなれると2人は改めて驚きだす。

「エリオ……いつの間にあんなに……」
「シグナムさんも以前より強くなっている……」

フェイトやなのはですら、黙って注目してしまうほどである。
2人がエリオとシグナムを見て驚く中、突如1つの氷山が大爆発する。

『『!?』』

機動六課は驚きだして誰もが注目し、大きな煙の中から青く輝く宝石のような巨大な氷の魔鳥。
眼は黄金に輝いて、羽はサファイヤというべきな輝きをしている。
そしてその額には何やら特殊な装置らしき物がついており……もしかすればそれがロストロギアの可能性が高い。

「何かボスらしきもんが来たようや……皆、一斉攻撃や!」
『『(はい)(おう)!』』

はやての掛け声に、全員が一斉に声を出した。
なのはとティアナの『クロス・ファイヤー・シュート』、ヴィータの『シュワルベフリーゲン』が炸裂するが、桜色とオレンジ色の魔力弾に無数の鉄球は大鳥の翼によって防がれる。
フェイトの『アークセイバー』も放たれて首を切断するのを狙ったが、素早く交わされる。
シグナムも『レヴァンティン』を連結鎖状刃状態にして『シュランゲバイセン』を炸裂させるが、翼を盾代わりとして防がれる。

次にアルフ、ザフィーラ、ユーノのバインドで、氷の大鳥の動きを縛るが……すぐに破壊される。
シャマルも『破壊の雷』と言う魔法を放ち、上空から巨大な雷を落とす。
直撃に成功したが、ビクともせずに全然効いていなかった。
ギンガが『ウィング・ロード』で無数の柱を放ち、巨大な大鳥を囲む。
エリオも『ウィング・ロード』に乗って、ギンガと共に接近攻撃を炸裂させる。
しかし氷の魔鳥は翼を大きく羽ばたき、その突風がエリオとギンガを吹飛ばすが……キャロとフリードによって受け止められる。

「くぅ！かなり厄介相手じゃないか！」
「中途半端な威力の魔法じゃダメだ！全員で一斉的な魔法をアイツにぶつけるしかない！」

全然ビクともしない相手に大鳥を睨むアルフに、強力な魔法をぶつける事を提案するザフィーラ。
なのは、フェイト、はやては一斉に大技を放つ事を決意して頷く。
だがフェイト達のたくらみを知った氷の魔鳥は口から青い閃光を放つ。

「あぶない！」

機動六課全員は何とか交わしたが、その選考は後ろにある氷山にぶつかると……その氷山が跡形もなく消え去る。

「なんて威力だ……確実にオーバーSランクは達成している……」

その威力にヴィータは唖然と驚く。

追撃のように、再び閃光を放とうとする魔鳥。
このままでは大技を出すヒマがないとフェイト達は悔やむ中、

≪フェイトさん、なのはさん、はやて部隊長、アイツは私がおびき寄せます！≫
≪て……ティアナ！？≫

突如、パスを通じで3人に話しかけるティアナ。
それはなんと、彼女が劣りになって魔鳥をおびき寄せる事であった。

≪私の魔法でアイツをおびき寄せますので、フェイトさん達はその隙に！≫
≪……わかった、ティアナも気よつけてね≫
≪ウチも了解や！≫

パスを閉じると、ティアナの足場からオレンジ色の魔法陣が浮かび上がる。
そこで彼女の魔法が炸裂する。

「フェイクシルエット！」

すると、ティアナと同じ姿の幻影を単体か複数体生成される。
この魔法は、相手を惑わして誘導させるミッドチルダ式幻術魔法。
無数のティアナの幻想が魔鳥に無かって、バラバラになって突撃しようとする。

全てを打ち払うかの用に魔鳥は青い閃光を口から放つ。
幻影のティアナは次々と消えていくが、それでも本体が次々と生み出していく。
魔鳥がティアナの幻影に注意を払っていく中、フェイト、なのは、

はやての3人が一斉に魔法を放つ準備をする。

「受けてみて、私達の全力全開の一撃を！」
「魔力リミッター解除や！」

3人の魔力リミッターが解除されると、『レイジング・ハート』・『バルディッシュ』・『夜天の書』から魔力が収束していく。

「全力全壊！！スターライト・・・・・」
「雷光一閃！！プラズマザンバー・・・・・」
「響け終焉の笛！！ラグナログ・・・・・」

『『ブレイカァアアアアアアア！！！』』

一気に放たれた3つの極大な魔力砲。
迫り来る圧倒的な強大な魔法に、魔鳥は対抗するかのように青い閃光を放つが……青い閃光は押し負け、そのまま3つの極大な魔力砲は氷の魔鳥を跡形もなく飲み込んで消滅する。
それにより、氷の異種生命体集団も自然のように塵と化して消滅していく。

『『や……やったぁぁぁぁぁぁぁ！』』

異種生命体の壊滅にティアナ達が喜びだす。
『クラウディア』で見守っていたクロノもホっと安心する。
実は、『クラウディア』が援護すればもっと早く解決できたが、下手すればフェイト達を巻き込んでしまう恐れがある。

「よ……良かったぁ……何とか上手くできた……」

ティアナは安心してホッとする。

そんなティアナにフェイト達はパスを通じる。

≪ティアナ、貴女のサポートのお陰で倒せたよ≫

≪にゃはは……ありがとうなの≫

≪フェイトさん、なのはさん……≫

2人に褒められて嬉しくなるティアナ。

その後、ロストロギアらしき装置は回収されたが……良く調べてみるとタダの機械で作られた特殊装置であった事が判明した。

ただの機械でロストロギア級に任命されるなんて理解できないが、もしかすればこれは『鬼兵隊』の機械兵器（からくり）の可能性が高い。

かくして今回の事件は無事に解決した。

だが、彼女等は気づかなかった。

コレが、実力を測るために試された実験である事に。

とある氷山で、フェイト達の活躍を双眼鏡で見届けている2人がいた。

1人は炎をイメージした派手な着物に顔に包帯が巻かれていて、得物として1つの長刀を持っている天人であり、『春雨』を裏切って『鬼兵隊』と手を組んだ獅子王剣煉（ししおうけんれん）。

もう1人はサングラスをかけて背中に三味線を背負っていてヘッド

ホンで歌を聴きながら新聞を読んでいる鬼兵隊所属の剣剛ごと河上万斉。

実はこの2人こそが今回の事件の元凶。

『鬼兵隊』の最新型機械兵器『氷魔』と言う、その機械を凍らせる事で腎魄と呼ばれる人工知能により、その氷を生き物の肉体のように成長させ、由自在に自分の意志で姿を変える特殊な人工生物兵器である。

「随分と凄まじいものだな、魔法と言う物は。火力的には大きく評価できる……だが……」

「……ああ、それ以外は評価できぬでござる。肝心な身体能力を完全無視しておる。評価できると言うのであれば、槍の少年に長剣の女子ぐらいであろう。それ以外の者は魔法という妖術を除けば何にも出来ぬ無能な連中ばかり」

エリオとシグナム以外の機動六課を低く評価する2人。

「曲のリズムがまとまっておらず、魔法でその穴を無理矢理埋めておる。例えるなら……音声だけに頼った未熟な骨細の幼女でござる」

「ふはははははは！全くだ！」

「しかし……まさかあの柳生家名門の時期当主、柳生九兵衛もこの世界に……これは面白い祭りが出来そうでござる」

九兵衛の存在も確信した万斉。

何やら企みながら笑いを浮かべる。

第八十二訓：レギュラーが活躍するのもいいけど、たまには準レギュラーを活躍させるのもいいよね

黒神
「次回はそろそろ『銀八先生コーナー』をすんので、銀八先生……よろしくお願いします」

銀八
「うっしゃー、出番来たぁぁぁ！」

ティアナ
「えー次回……「男女ペアの町歩きはデートと一緒である」テイクオフ」

第八十三訓：男女ペアの町歩きはデートと一緒である（前書き）

はやて
「うーむ……」

黒神
「どうしたんだ、はやて？」

はやて
「いや、何かウッソ・エヴィンさんの感想を見てな……こなたちゃんの『猫耳セーラースク水』を見て、私も驚いたんや」

黒神
「へぇー。それでどうする？」

はやて
「とりあえず……私のアレンジでそれ参考して見たくなったんや♪」

黒神
「は？」

はやて
「てな訳で『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるな♪」

第八十三訓：男女ペアの町歩きはデートと一緒である

「と言う訳で、今日1日スバルはそのままの格好な」
「『と言う訳で』ての意味が分かりませんけど！と言うより、何ですかこの姿はァァァァァァ！？／／／／」

訓練所で、大きく叫びだすスバル。
はやては愉快そうに笑い出し、スバルは顔を真っ赤にしている。

その理由とは……

彼女の衣装はいつもの訓練服ではなく……猫耳をかけていて両手両足にネコの手と足をつけててネコの尻尾がついているスクール水着であった。そんな姿にスバルはメッチャ恥ずかしく感じ、フェイト、なのは、ティアナ、エリオ、キャロ、九兵衛、リィンは顔を真っ赤にし、神楽、月詠はスバルがお気の毒そうに思い、外道丸は興味深そうに頷く。
しかし、姉のギンガはスバルの可愛らしさに思わず鼻血をたらしているが、顔を抑えて耐えている。

ちなみに桂とエリザベスは2人で、お登勢は単独行動でミッドチルダの町の散歩に出かけていた。
辰馬はどこかで美女をナンパ中（フェイト達にすれば返り討ちにされて痛い目に合うと理由でしていない。）で、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォースは別の任務の為にいない。

「いくら残暑だからって何で私だけスクール水着なんですか！？それに私の訓練服はどこにやったんですか！？／／／」
「いやぁ、何か間違えて燃えるゴミに入れられてなぁ……そんで燃

やされてもうたんや」
「えええぇぇぇぇぇ！」

何と、ゴミと間違えられて燃やされたとあり得ない事に驚くスバル。
実はそれははやての全くの嘘。
彼女は気まぐれで女のスクール水着姿が見たかっただけであった。
しかし今回は海に行く機会があんまないため、そこで腹いせにスバルの訓練服を燃やし、ついでに猫耳、猫手、猫足、猫の尻尾を付け加えて、スバルの『猫耳スクール水着コスプレ』をさせてみたくなったのであった。

「それを１００歩譲ったとしてなんで私だけスク水なんですか！？しかも猫耳って！／／／」
「それは私の趣味やからや！」

はっきりと言い出すはやての発言に、スバルはもう諦めるしかないと絶望した。

「スバル……」
「……凄くお気の毒に……」

フェイトとなのはも流石にはやてに振り回されるスバルがかわいそうに感じた。

「せやけど、明日にはスバル専用の訓練服に新しいバリアジャケットを用意しとくから……あ、それと『にゃ～ん』と言ってみて♪」
「え……なんでで「ええからええから、早く♪」……」

スバルは仕方がなくはやての言う通りにする。
そして顔を真っ赤にして猫らしく……

「にゃ……にゃ～ん……／／／／」

辱めに可愛らしく猫の叫びを言い出す。

その姿は可愛らしく、はやては思わず……

「凄く可愛いいいいいいいいいいいいいい！」

「にゃああ！？／／／／」

抱きついてきた。

スバルの猫叫びは、フェイト、なのは、ティアナ、エリオ、キャロ、ギンガ、リィンも萌えだし（特にギンガは鼻血を噴射）、神楽と月詠ははやての親父キャラに呆れ、九兵衛は何故か対抗心を燃やして外道丸は愉快そうに笑う。

「可愛い！凄く可愛いでスバルぅぅぅぅ！もう食べちゃいたいぐらいに可愛いよぉ！」

「ふぇえええええ！？ちょっとはやて部隊長！止めてくだ……てにゃぁあああああ！／／／／」

抱きつくはやては、おっぱいマニアとしての性格なのか、スバルの胸を両手で揉みだす。

「ちょ……何をして……はにゃぅ！／／／」

「うはぁ！スバルの胸、最初に会った時より大きくなっているぅ……それに気持ち良い程に心地よい柔らかいわぁ♪」

「きゃうぅ！……い……いい加減にして……や……ひぎぅ……やめひぇ……んあぁ……／／／」

だんだんと揉まれて息が荒くなり、変な気分になって新しい扉を開

きそうになるスバル。
欲望的にスバルの胸を揉むはやてに……

『『いい加減にしろぉぉぉぉぉぉぉ！（怒）』』

ドカァ！

「のぎゃあああああああああああああ！」

ティアナとギンガの鉄槌が炸裂して飛ばされるはやて。
2人の少女には、額に青筋を浮かべまくっていた。
スバルは危うくもう1人の自分が生まれそうだとギリギリセーフと思い、ドキドキしながらも自分の胸を押さえた。

「このセクハラ女！ウチの妹にいやらしい事をしてんじゃねぇぇぇぇ！」

「いい加減にしないと、マジでわいせつ行為で訴えますよ！」

姉として、そしてパートナーとしてはやてに強い怒りを表す。
そんな2人に、はやては流石に青ざめた。
目の前には修羅と化した鬼がいた。

「あ……あははは。や、やりすぎたかなぁ……」

大量の汗を流しこむはやて。
これは自業自得であると思うフェイト達（スバルとはやてを除く）。
フェイトとなのははある事を思い出す。

「あれ、そう言えば銀時とアルフは？」
「そう言えば見かけないけど？」

フェイトは、２人の存在に気づいてどこに行ったかを探し回る。
なのは達も２人がどこにいるかは全く知らない。
２人がいないと思うと、徐々に怪しくなってきた。

銀時にその銀時に惚れているアルフ。

そんな２人の姿が全く見えないなんて、銀時好きであるフェイト、
なのは、スバル、ティアナの４人は危機感を感じた。
そして何かに気づいたかのように神楽とはやてが言い出す。

「ああ、あの２人なら朝早く町に出かけたネ。きっとデートアル」
「確かに、あれはデート以外あり得ないわ」

２人で機動六課を出て、町に出かけてデートしに行った。
その衝撃的な事を聞いたフェイト達は……

『『えええぇーーー

銀時とアルフの事が気になった事で訓練は中断し、フェイト、スバル、なのは、はやて、ティアナ、神楽は気になって町の中で2人を必死に探していた。（ちなみにスバルは元の制服の格好。）
フェイト、スバル、なのは、ティアナはどうして銀時とアルフがデートしているか納得できず、はやてと神楽は面白そうだと理由でついて来た。
ついでに月詠は、すごく落ち込んで暗い表情をだしていて機動六課に残っていた。

「アルフったら、いつの間に銀時と一緒に」
「朝から見かけないと思ったら……」

アルフにしてやられたと思うフェイトとなのは。

「それにしても、この町中で銀さんとアルフさんを探すの大変ですよ」

確かにスバルの言う通り、町はかなり広くて銀時とアルフを探すのは一苦労。
だからと言って、任務以外でバリアジャケットに転装して魔導士の力で探すわけにも行かない。
ここか仕方がなく時間かけても探すしかない。

「うん、でも一刻も早く見つからないと取り返しのつかない事に……」
「たとえばどんな事アルカ？」
「た……たとえば……」

フェイトは必死になって2人がこれ以上一緒になるとどうなるか想像してみた。

しかしだんだんと凄い事に進んでしまい、フェイトは顔を真っ赤にして慌てだす。

「うわぁあああああああああ！何を変な事を考えているのぉ！？／／／」

「落ち着いて、フェイトちゃん！」

フェイトの慌てようになのはは彼女を落ち着かせる。

「一緒に探してもなんですし……とりあえず分かれて探してみま――」

「あ……銀ちゃんとアルフだ」

『『ええ！？』』

ティアナが分かれて探す事を提案する中で、はやてがとあるカフェの方を指を指してみる。

するとその指の先には、はやての言う通り銀時とアルフが机で待っていた。

その光景はまるで恋人のように見え、フェイト、なのは、ティアナは凄い嫉妬心をあふれ出してスバルは羨ましそうに見つめる。

「とりあえず尾行するよ！」

「了解なの！」

「アルフさん、貴女の好き勝手にはさせないわ！」

フェイト、なのは、ティアナはどす黒い感情を出してカフェに走って向かう。

慌てだすスバルと、興味深そうにとはやてと神楽がニヤニヤと3人

を追いかける。

＊

カンミ・カフェ

ミットチルダでも人気スポットとして雑誌などに載っているスイーツ店である。
何よりお進めはパフェ系のメニューであって絶品だと評価されている。
銀時とアルフは席に座ってメニューを待っているようである。
フェイト達はグラサンをかけて尾行を開始し、2人の様子を眼を離さずに見つめる。

「いやー、ここを選ぶなんて銀ちゃんとアルフもやるなぁ。ここ恋人同士が良く来るスイーツ店なんやで♪」
「ふぅーん。んじゃ銀ちゃんとアルーはもう恋人アルカ？」

『『かぁ～ぐぅ～らぁ～（ちゃ～ん）（さぁ～ん）？』』（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

フェイト、なのは、ティアナの3人は神楽のその一言で睨みつける。
神楽は思わず「すみませんでしたぁ～～～～～～～～～～！」と青ざめて土下座する。
はやても、（あかん、フェイトちゃん達の怒りに触れたらおしまい

や）と心から確信する。
スバルはそんな2人を羨ましそうに見つめる。

「何か悪ぃな。奢ってもらうなんて」
「良いって、日頃のお世話のお礼もあるし♪」

アルフが奢るようであり、銀時はそんなアルフに感謝する。
しかもスイーツ店である事はつまり、銀時の好きな甘い物が食べられる事である。
銀時はアルフが注文したメニューを待つと、店員がそれを2人のテーブルに置く。

「お待たせしました、『カップル・ザ・ストロベリーワールド・パフェ』でございます」

来たメニューは、約2人分の大きいビックパフェであった。
一番上にさくらんぼが2つあり、ストロベリーソフトクリームがあり、カラフルなチョコチップが綺麗に載せてある。
さらに円を描くようにイチゴが綺麗に並んでて、カップ内には大量のアイスクリームとチョコレートソースがついているなど、正に恋人同士が食べるパフェをイメージしたパフェである。

「恋人同士に食べやすくする為に、今回はサービスさせてもらいました」
「え？何そ――」
「では、ごゆっくりどうぞ」

店員の説明に銀時がおかしな点を見つけたかのようどういう事なのかを訊く前に店員は去っていく。
するとアルフがその原因を説明する。

「いやー、このメニューは恋人同士で食べると言う事で注文すると、半額してくれるからさっきの店員にその様に注文したのさ。だって私達って、恋人同士に思われちゃったから♪／／／」

嬉しそうに原因を言い出すアルフと、アルフの一言で顔を真っ赤にする銀時。
するとフェイト、なのは、ティアナは握っているグラスコップを握りつぶす。

「『恋人同士に思われちゃったから』？……アルフ、それ思いっきり自分が勝手に思っている事じゃないの？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！
「何、この新手の抜けがけ？凄く頭に来たんだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴ！
「この怒りは何ですか？今までにないほど溢れ出てくるんですけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

3人の怒りは今でも爆発しそうであり、はやてと神楽は逃げたくても逃げられない状態になっていた。
スバルは今でも泣きだきそうな表情になっている。

そんなこんなで銀時とアルフは2人仲良く、『カップル・ザ・ストロベリーワールド・パフェ』を食べていた。
その味は通常のパフェの3倍の美味さであった。

「ウメぇ……この絶妙な甘さ加減の完璧さにとろぉ～りした極楽感」
「本当だよ。こんなカフェ、今まで食べた事がないぐらい……あ、銀時♪」

アルフはスプーンにソフトクリームの部分をすくうと、それを銀時

にゆっくり向けて……

「あ～ん♪」

「え……いや、そのう……あ……あ～ん／／／」

銀時は思わず『あ～ん』して口にする。

その光景を見つめたフェイト、なのは、ティアナの3人はテーブルを殴ったり頭突きなど連続に繰り返す、

「何コレ！？何なのこの気持ち！？すごくイライラするんだけど！？」

「どうしたらいいの！？私どうしたらいいの！？」

フェイトとなのはは怒りの余りにはやての顔を押し出す。

「痛たた！痛いから、凄く痛いから止めて！」

はやては凄く苦しそうに止めてほしい事を訴える。

一方のティアナも神楽を殴りだす。

「痛いネ。痛いから止めてアルティア！」

「胸の中に、なんか黒いものがァァァァ！」

「取ってエェェェ！この黒いのとってネェェェェ！」

「落ち着いてティア、神楽さんが痛がっているから！」

ティアナの暴走を止まってほしい事を願う神楽。

スバルはそんなティアナの暴走を止めている。

それから程なくして2人は『カップル・ザ・ストロベリーワールド・パフェ』を全て食べ終えると、アルフは銀時の頬っぺたにクリーム

がついているのを気づく。

「銀時、頬っぺたにクリームがついているよ」
「ん？……ああ、そうだ……な？」

ふとアルフは銀時に近づいて頬っぺたについているクリームをそのまま直接舌で嘗める。
突如の彼女の行為に銀時は一歩下がって驚く。

「おまっ！？何をして……／／／」
「いやぁ～、クリームがついていたから取っただけさ♪」

凄く嬉しそうに笑いながら言い出すアルフ。

『『だからってわざわざ舌で嘗めなくてもいいだろうがァァァァ！』』

額に血管を浮かべて怒りを爆発させたフェイト、なのは、ティアナの3人は、怒り任せにはやてと神楽の首を絞める。

「ぐぇえ～～～～」
「何で私達ぃ～？直接言ってぇ～」

メッチャ苦しむ神楽とはやて。
面白半分でついて来た事を後悔するほどに。
スバルは涙をあふれ出して羨ましそうに銀時とアルフを見つめる。

そして2人はお勘定を済ませて別の所に向かう。
フェイト達も2人の後を追う。

＊

その後も服屋に行ったり、宝石店も通い、人気スポット的な風景を見たりなど……正にデートとしか言いようがない2人の行動にフェイト、なのは、ティアナは怒りが徐々に上がって行く。

そして今、2人がいる場所は『マウンテン・ガーデン』。
そこは山の風景が見えて、数多くの花が咲いてあるスポット。
特に変わったところはないが、子供と恋人同士がけっこう来る場所として有名。
しかし、今回はそんなに人はいない。

「ここがマウンテン・ガーデン」
「そうなんだよ。私ここに咲いている花とここから見る山が好きで♪あ……銀時見てみて、この花！」

子供のようにはしゃぐアルフに、そんな彼女を見て笑う銀時。
一方のフェイト、なのは、ティアナは怒り満タンであり、スバルは羨ましそうな表情。
そして逃げたいけど逃げられない神楽とはやては木の後ろで隠れながら2人を見つめている。

「アルフ……私達がいないと思って……」（ゴゴゴゴゴ！
「いつか頭を冷やしてやるんだから……」（ゴゴゴゴゴ！
「よくも私の兄さんを、絶対に許さない……」（ゴゴゴゴゴ！
「銀さぁ～ん（泣）」

最早怒りと悲しみが交じり合っている空間であった。

このままではアルフに銀時が奪われてしまうと危険視した3人は最終突破として、アルフに嫉妬攻撃を炸裂させようと考える。
そう思った瞬間、

「何だ、その下手糞な絵!?」

1人の男の声が聞こえて、その声が聞こえた方をフェイト達は振り向く。
そこには1人の帽子をかぶった青年を、嫌味な事を言いまくる制服を着ている金髪の男がいた。

「何コレ?学生でも描けそうなお子さま的な絵?そんな絵を描く為にここにきた訳?」

完全に嫌がらせなコメントの連続。
男は悔しさの余りに筆を止めて怒りの余りに手を震えている。

「おやおや、筆が止まっていますが?何ですか?下手糞といわれて怒っていますのですか?え、何その目?やんの?オレ何もしていないけど?と言うよりそんな絵を書くヒマがあったら小学校から習い直すべきじゃねぇのおい?」
「いい加減にしなよ!」

男の嫌味な発言に、アルフが関わってきた。
銀時はめんどくさそうに頭をかぐ。

「何?アンタ等?」
「そんな言い方しなくても良いんじゃないのかい?その人だって上手になる様に、一生懸命に絵を描いているじゃない!なんでそんな言い方をするの!?」

「下手な物を下手と言って何が悪い？何、口答えしないでくれない？」
「アンタぁ！」

男の態度に怒り出すアルフ。
だがそんなアルフを落ち着かせようとする銀時。

「止めとけ、アルフ」
「銀時ぃ……でもさぁ！」

男の態度に納得できないアルフに、銀時は彼女の耳元で話しかける。

「良いか？ああいう他人の話も聞けない奴はな…自分の考えだけが正しいと思ってる馬鹿なの。自分自身がどんだけ恥ずかしい事してるかさえ分からない程頭が可哀想な奴なの。つまりすんごい頭が可哀想な程の馬鹿なんだよ」
「う～ん、確かに銀時の言う事もありだけどさぁ～」
「だからここは華麗にスルーしてアイツ自身に自分がどんだけ恥ずかしい事やってるか、どんだけカッコ悪いか自覚させる必要があんだよ。その方が野郎為にもなるんだからよ」

2人が耳元で聞こえないように話しているが、まる聞こえである。

「おい、メッチャ聞こえているんだけど？何コレ、喧嘩売っているの？」

額に血管を浮かべて怒り出す男。
もう1人の青年も呆れていた。

「いやぁ、何かすいませんね。ややこしくしちまったみたいで…少

し荒っぽいですが同じ画家として注意してるんですよね？」

銀時は謝りながら男に言い出す。

「はぁ？オレは絵を一切描かない主義なんだけど？何、アンタひょっとして勘違いをしてんじゃねぇのか？こんな奴が描く絵はなぁ、こうしてやったほうが良いんだよ！」

男は思いっきり青年の絵を蹴っ飛ばそうとするが……

ビツ！

「しはぐぁあああああああああ！？」

突如、銀時が男の股間の部分のズボンを握って男を持ち上げる。

アルフと絵描きの青年は突如の行動に驚く。

「つまり何かい？　テメェ自身は何一つしてねぇってのに…他人が真剣にやってるモンにいちゃもんつけてた訳かクソガキ？」

「あ……あ……あがぁ」

「何一つしないで勝手に見て下手だの何だの嫌味垂らすのは結構ですけどねぇ…人が一生懸命作ったモンを蹴飛ばすたぁどういう了見だぃ？」

銀時の額から血管が浮んでいて、そうとう頭に来た様であった。

「感想はルーズでもさぁ……人の道理はキッチリしやがれぇぇぇぇぇ！」

「ぎゃぁあああああああああああああ！」

ドコ！

銀時はそのまま持ち上げて男の頭を地面に大きく叩きつける。
これはそうとう痛い。

「オラァァァァ！少しは他人の苦労を知りやがれボケがァァァァ！
！そんで空気位ちゃんと読める様になりやがれェェェェ！！！」

ドサァ！

そのまま大きく更に地面に叩きつける。
そして銀時はそのままアルフに向ける。

「アルフ、殺っちまいな？」
「あいよ……てりゃぁあああああああああああ！」

ドカァ！

「あうぇし！」

その剛拳が顔面にクリティカルヒットし、男の歯は6本折れて、鼻血があふれ出て苦し紛れに倒れこむ。

「最低っ！」

アルフはそんな男を軽蔑して鋭い睨みつけで見ながら言い出す。
そして銀時はゆっくりと青年のほうを振り向くと、

「おおい、大丈夫かぁ？」
「は……はい……すみませんでした……」

青年は立ち上がって銀時にお礼を言い出す。

「散々だったねぇ……こんな自分勝手な嫌味な奴に絡まれちゃって？」

「……いいえ、別に僕は気にしていませんし……それに、タンロもコレで少しは懲りてくれれば……」

「タンロ？コイツの名前か？」

「はい……タンロ・マウティン……俺と同じ学校の生徒で……表向きは優等生ぶっていますが……裏では僕をいじめて、嫌味な事を言い出す卑怯者なんですよ……」

「全くだよ、こんな卑怯者を学園の連中はどうしているんだい？」

タンロの事を聞いたアルフは、腹いせに猛一発殴ってやろうと考える。

「何か、教師達は優等生ばかり見てて僕達のような普通の人間を全く見ないのですよ……そりゃ……タンロの言う通りに僕が描く絵は下手だから……嫌味を言われても……」

青年は悔しそうな表情を表す。

そんな青年に対して銀時は……

「確かにこの絵は雑な所も多いけどよ…それでもお前はこの馬鹿に言われた事を気にしつつも、構わず描き続けてきたんだろ？」

「え」

「周りからどんな評価を点けられようが…お前がコイツに魂込めて描き続けてきた事は何一つ変わりゃしねぇだろ？」

「……」

銀時の言う事に、青年は黙って聞く。

「たとえどんな奴から言われてもよ、自分（テメェ）を信じ、お前自身が考え思った通りに絵にする事が大事なんだ。そこから一歩でもいい…少しずつでもいい。アドバイスや感想…そういう物も受け入れつつ進み続けろ。そうすりゃお前の絵を見て認めてくれる奴等が必ず現れる…俺に言えんのはそんだけだ」

「……ありがとうございます。お陰で気が楽なりました……僕、これからも自分を信じて思ったどおりに描きます」

青年はお礼を良い、振り向いてこの場を去ろうとする。

すると、青年はある事を思い出して2人に振り向く。

「あ、僕はトム・スーランと言います。良かったら2人の名前を……」

「坂田銀時でぇす。趣味は糖分摂取で、キャプテンを志望してまぁす」

「私はアルフだよ」

2人の名を聞いたトムは……

「ええぇーーーーーーー!?坂田銀時ってあの『白夜叉』として名が高い伝説の英雄で、そしてアルフさんもあの機動六課の！」

まさかの大英雄に出会えた事に驚くトム。

銀時はもはや自分の英雄扱いには慣れたのか、そんなに恥ずかしがる事はなかった。

そんな英雄に励まされたのであれば、更にやる気を出し始めたトム。

「……2人に会えて本当に感激です！もし、またいつか出会えられ

るなら……僕の描いた絵を見てくれませんか！」
「ああ……そん時ァ、魂込めたお前の絵、楽しみにしてるぜ」
「楽しみにしているよ」
「はい、では！」

トムはいつか銀時とアルフに、自分が魂を込めて描いた絵を見せる事を誓ってこの場を去る。

「アイツ、きっと良い画家になれそうだな」
「そうだね……で、コイツどうする？」

アルフは後ろで気絶して倒れているタンロをどうすべきか迷っている。
そんな2人に……

「そこは私にお任せや♪」

そこに、2人の後ろから突如……はやてが現れた。
彼女に続くかのように、不安そうにフェイト、なのは、ティアナの3人、羨ましそうにスバル、不機嫌そうに神楽が現れた。
銀時はこの状況を普段なら青ざめているが、何故か今回は青ざめずに意外そうに驚く。
アルフにいたっては「あちゃー」とやられたように頭を抑える。

「この男の着ている制服でどの学校の生徒か分かるしな。この男にはしっかり反省させるように教師達に話しておくし」
「全くネ。マジで見ているだけで腹が立つヨ！」

はやてはタンロに反省させるように、彼が通っている学校の教師にキッチリと話をすることを決意し、神楽はタンロを今でも殴りかか

りそうにする。
すると、フェイトは銀時とアルフにどうして2人でデートしてたかを訊き出す。

「銀時、アルフ……今日2人でデートをしていたの？」
「へぇ！？」

フェイトのとある一言で銀時は顔を真っ赤にする。

「正直に言ってほしいなの」
「それも納得いくように……」

なのはとティアナも鋭い眼線で2人を睨みつける。

「銀さぁ～ん（ウルウル）」

スバルに対しては羨ましそうに見つめている。
対する神楽とはやては興味深そうにワクワクしている。

「付き合っているからでアルカ！？銀ちゃんもうアルフと付き合っているアルカ！？」
「私も聞きたいわ！」

フェイト達の真剣な質問に、銀時とアルフはあるものを取り出す。

「……いや、今回はコイツを買う為にな……」

と銀時は懐から2つのプレゼント箱を取り出して、それをフェイトとなのはに渡す。

「ふぇ？」
「コレって……」
「開けてみなって♪」

アルフは2人に、そのプレゼント箱を開けるのを進める。
2人はアルフの言う通りにあけると、箱の中には何と……天使の羽がついているペンダントであった。

「コレって……まさか2人はコレを買う為に！？」
「いや…まぁ……この世界に来てから散々と世話になっているし…何か礼でもしてやろうかなぁっと思って……」
「それ『エンジェル・ウィングガーディアン』て言って、かなり貴重なお守り用ネックレスだよ♪」

実は、銀時はこの世界に飛ばされてから何やかんやでフェイト達にはお世話になっている。
特にフェイトとなのはには色々と世話になっている為か、彼女等に何かお礼をしたくなったのである。
以前の銀時なら考えられない行動だが、彼なりに変わった証拠である。
そこでアルフがそんな銀時の手伝いをする為に、今日町に出かけたのであった。

「これからも世話になるかもしんねぇしよ……良かったら受け取ってくれねぇか？」

テレながら頭をかぐ銀時。
まさかの銀時からのプレゼントに2人は顔を真っ赤にして……

『『ありがとう（銀時）（銀さん）／／／』』

すんごく嬉しそうにお礼を言い出す。
神楽は銀時の意外な行動に唖然と驚き、スバルとティアナは少し羨ましそうに見るが……何故か安心して微笑む。
はやてもいつかは桂にそんな風にお礼をしてもらいたいと考える。

「んで、神楽さん、はやて部隊長……結局2人がデートであった事は貴方達の勘違いって訳でしたね？」
『『（ギクゥ！）』』

ティアナの鋭い一言に神楽とはやてはビクッとする。
大量の汗を流してゆっくりとティアナに振り向く。

「いやぁ～、まさか銀ちゃんがそんな事をするなんて……私も流石にビックリネぇ～～～～」
「そうやなぁ～……あははははははは」

苦笑して青ざめる神楽とはやて。
ティアナの怒りは限界を突破し……

「神楽ぁぁぁぁ！はやてぇぇぇぇ！ややこしい勘違いをするなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

怒気を放って威圧感と同時に怒鳴りを放ち、顔中に血管を浮かべる。

『『ごめんなさい～～～～～～～～～！』』

神楽とはやては怒りの化身と化したティアナから大急ぎで逃げる。
ティアナもバリアジャケットに転装して『クロスミラージュ』を撃ちまくりながら追いかける。

「ああ、ティア待ってよぉぉぉぉぉ！」

スバルはそんなティアナの暴走を止める為追いかける。
なのはとフェイトもスバルと同じく追いかける。

結局また2人っきりになった銀時とアルフ。
銀時は唖然としててアルフは笑いまくっている。

「あはははははははは！銀時と私が一緒に町を歩いてたら、誰だってデートだと思うよね」
「……まぁ、何とかこっちも痛い目に合わずに助かったぜ……んでアルフ……今日はマジありがとな」
「良いって良いって♪こっちもデート気分で楽しめたし……それに、今からお礼を貰うから♪／／／」
「お礼？……何か欲しいもんで――」

銀時はアルフは何か欲しい物でもあるのかと言い出すと、突如アルフは銀時に近づいてさらに彼の顔に自分の顔を近づけて、その唇を彼の唇に重ねだす。

「！！？？」

それは突如の接吻（キス）であった。
しかしシグナム、なのは、スバルの時とは違ってフェイトの時と同様の長さであった。
そしてゆっくりとアルフは、銀時から離れて笑い出しながら言い出す。

「お礼、ちゃんと貰ったよ♪／／／」

その一言で、彼女は大満足そうに一足先にフェイト達を追いかけようとする。
一方のアルフにキスされた銀時は、顔を真っ赤にしてボーっと突っ立っている。
コレでキスした女性は5人目。いったいどうしてこんなハーレム&ｍｐ;ラブラブ的な展開が自分にも来たのか理解できなかった。
男として喜ぶべきか、恥ずべきか……。

ちなみに、タンロははやてから事情を聞かされた教師達にすんごく怒られて、生徒達からも信頼を失われて停学3ヶ月は言い渡された。
流石にタンロもコレに懲りて反省した。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!」

銀八
ノーヴェ

「へぇ～い。んじゃ久し振りに始めんぞぉ～。とりあえず早速質も
「ちょっと待てェェェェェェ！」……ん、何？」

突如、銀八の最速質問紹介に今回のアシスタントであるノーヴェが
聞きだす。

ノーヴェ
「てめぇ、今アシスタント紹介を忘れただろう！わざとなのか？ぜ
ってぇわざとだろ！？」

銀八
「あ……悪ぃ忘れてた」

ノーヴェ
「忘れんなぁぁぁ！」

忘れていた銀八にノーヴェの鉄拳が炸裂。
クリティカルヒットして倒れる銀八。

銀八
「あ痛た……ええ、とりあえず今回のアシスタントはナンバーズの
ノーヴェです」

ノーヴェ
「さっきまで忘れてたのによく言いやがる……まぁ良い。早速質問
をするぜ。まずはコイツか？ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん
『作者「どうも、最近スランプのせいかスパロボの更新が止まって
る駄目作者です。今回は第１章が終ったので第２章のメインキャラ

クターの」

ゆたか「は、始めまして！私、小早川　ゆたかと言います（ペコリ）それで、隣に居るのが・・・」

Dボウイ「・・・・・」

ゆたか「でぃ、Dボウイさん！自己紹介しないと駄目ですよ！」

Dボウイ「・・・Dボウイだ」

ゆたか「・・・え、ええと・・・それじゃまず私から質問させて貰いますね（汗）この小説にヴィヴィオやゼストは出るのですか？何かこの2人だけはぶられてる気がするのですが？」

作者「ゆたかちゃん・・・結構痛いトコついてくるねぇ（汗」

ゆたか「ご、御免なさい！気を悪くしないで下さい！（ペコリ」

作者「大丈夫だって！この作者は懐が広いからきっと許してくれるからさ！んじゃ次はDボウイ！」

Dボウイ「・・・リリカル大食いキャラにこのラダム獣を送る（簡単に見ると昆虫型エイリアンのようなもの）多分食えると思うから食ってみてくれ！
追伸：捕獲と調理はご自分でおやり下さい。因みにかなり強いですよ！油断してると逆にディナーにされますので注意して下さいね」

作者「おめぇもキャラ崩壊してんじゃねぇか（怒）と、そんじゃ以上です、んじゃまた！」』」

銀八
「ズバリ答えます。作者の気分しだいで出てくる所が変わります」

ノーヴェ
「気分しだい!?気分しだいでヴィヴィオとゼクトを出すのか!?」

銀八
「唯、ヴィヴィオはゼクトより早く出番が来るかもしれません。と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、ヴィヴィオの出番を楽しみに待ってください」

ノーヴェ
「ゼクトも入れろぉ!……しゃあねぇ!次はペンネーム『月光閃火』さんからだ!『だがんばふ～…月光閃火です♪…正直今暑いです…(汗)。

輝刃「…輝刃だ。本気で冷やしラーメンが食いたい…(茹だる)。」

だよね～…あ、シャマルさんいらっしゃ～い♪

シャ「やっほ～♪呼ばれて来ちゃいました～♪」

エヘヘ…大歓迎です♪あ…そうそう、今回も二つ程質問があります。まずは自分から……

1．源外のじっちゃんとジェイルに質問なんだけど、銀さんにデバイス作ってあげたんだから桂のにーサンにも作ってやったらどうですか?案外でけぇリンカーコア隠し持ってるかもですよ?

輝刃「…なるほど、その可能性はなきにしもあらずだな…俺からも二つ目の質問だ。」

2．ノーヴェに質問だ。此処に背丈が年頃くらいまで成長する薬がある…欲しいか?欲しければくれてやるが…。

あ…輝刃いつの間に?

輝刃「…フッ…俺もなまじ知識を蓄える事は怠っとらんよ…（微笑）。」

シャ「凄いわね～。ねぇ輝刃君、閃火君?これから一緒に新薬作りの案を出し合わない?」

へへっ…それいいね♪輝刃も一緒に出し合おう?

輝刃「…フッ…悪くないな。いいだろう…俺の知識を見せてやる。（微笑）」『……1は桂小太郎がデバイスを持って魔導士になるのもあり得るな」

銀八
「俺的にはヴラはこれ以上活躍してくれねぇで欲しいけど」

ノーヴェ
「ヒデェなおい！……んで2つ目の質問は……そんなもんよりもっと出番よこせぇぇぇぇぇぇ！」

銀八
（あ……気にしてたんだ）

ノーヴェの涙の叫びに銀八は、やっぱり彼女も出番が少ない事に強いコンプレックスを抱いていたようだと考える。

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、ノーヴェは成長より出番が欲しいようです！んで次ぃ、ペンネーム『神威　銀時』さん『神威　銀時「久しぶりに銀八先生が登場したねぇ」

唯「こっちでも出番少ないからねぇ」

神威　銀時「出したいんだけど銀時と被るんだよねぇ」

唯「そんな理由で出番少ないんだ。さて銀さんらが元の世界に戻った時、【万事屋　銀ちゃん】が【万事屋　新ちゃん】になっていたらどんな反応をしますか？」
『……俺にも出番をくれェェェェ！」

ノーヴェ
「あんたもかい！……まぁ、そん時は坂田銀時と神楽も黒神に八つ当たりすんだろうよ」

銀八
「ああ、新八の出番を今だ出さない黒神が行けねぇしな」

ノーヴェ
「え、お前最近新八に優しくねぇ？」

銀八
「いや、『ＳＯＳ学園』で思いっきり出番が減っているから、あいつの気持ちが分かっちまって……と言う訳で『神威　銀時』さん、

俺の出番を増やしてくれェェェ！」

涙を流してお願いする銀八。
ノーヴェはそんな銀八を呆れだす。

ノーヴェ
「たく……んじゃ次行くぜ、ペンネーム『白米』さん『武「野球で思い出したが、かつて近藤が隕石にバットで挑んだ事があったよな、原作で」

あー、あれね。妙さんを野球観戦に誘った回。

武「確か、隕石は野球ボール大でも相当な破壊力があったはずだが。失敗したとはいえ、バットで隕石と張り合った近藤はなのはのディバインバスターを打ち返せるんじゃねぇか？」

それを言ったら、それに当たって血が流れる程度で済んだ妙さんは、スターライトブレイカーを受けても死なないと思いますよ？

武「確かに」

では、質問です。

武「最初は俺からだ。上の話で近藤がスタジアムに行くまでに起こったありえない不幸について、ノーヴェはどう思う？」

二つ目は私です。
最近調子に乗っている桂とはやてに訊きます。

次の内、戦うとしたらどれがマシ？
A．巨大イナゴの大群（人食い）
B．ギガ屁怒絽（頭は屁怒絽、体は鳳仙）
C．アスラ（ゾーマをベースに、鳳仙と屁怒絽の顔と腕が付いているアシュ〇マンみたいな姿をした怪物）

答えてくれましたら、選んだ奴を模擬戦相手としてプレゼントします♪
なお、答えなかったら全部送ります。

武「できるのか、そんな事（呆）」

できますとも、黒神さんが望めば。

武「止めろ。望ませるな。世界が終わる」『……あのゴリラ、疫病神に取り付かれていねぇか？」

銀八
「恋の道を進もうとすると、皆誰にも疫病神がついてくんのさ」

ノーヴェ
「いや、ゴリラの場合は酷すぎだろ！？何であそこまで不幸に合う訳！？訳わかんねぇよ！」

いくらなんでも常識を超えているとノーヴェは言い出す。

銀八
「んで２つ眼は……２人にお答えさせてもらいます」

桂・はやて

『『どっちを選んでも死ぬんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！（青）』』

ノーヴェ
「そりゃそうだろうな！と言う訳で『白米』さん、２人は反省しているので許してやってくれ」

銀八
「んじゃ次な、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。？原作のＦＷ陣がこの小説のＦＷ陣を見たらどうおもいますか。？なのは（魔王化）とキャロ（黒化）の二人が織田信長（戦国ＢＡＳＡＲＡ３）と戦ったら勝てますか』……そうだなぁ……まずスバルはこっちのスバルを見たら同じ自分として尊敬するか、圧倒的な実力の差に落ち込むかのどっちか。ティアナはこっちのティアナを応援するかもな。エリオもスバルと同じだろ？そんでキャロは、ヤンデレ化した自分自身がコレほどまでに怖い事であるなんて信じられねぇかもな」

ノーヴェ
「確かに……なんでここのキャロはあそこまで……」

銀八
「作者の思いつきの様らしいぜ」

ノーヴェ
「思いつき！？思いつきであそこまで怖くなるわけか！？……もう良い、関わってもろくな事はねぇ」

銀八
「んでもう１つは……いくらなんでも２対１じゃ２人の方が部があ

るだろ？」

ノーヴェ
「もうまともじゃない以前に怖ぇ質問ばっかだよ……」

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、キャロをあんまり刺激しないように。出ないと彼女の怒りに触れてしまいますから」

ノーヴェ
「それはこっちのキャロの話だろうが！……まぁとりあえず次な、ペンネーム『烈火竜』さん『ルーテシアに質問です。あなたの召喚獣の『地雷王』って、カブトムシに似てますよね。そんな地雷王が、カブトムシを捕まえる為に褌一丁になって、身体全体に蜂蜜を塗りたくった近藤さんに寄り付きますか？（実際にやってみてください）

アギトに質問です。『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』でのアギトは貧乳の悩みを銀八先生に打ち明けていました。そちらのあなたも貧乳が悩みですか？』……なんかコイツ最近アギトイジメしてねぇ！？」

銀八
「まぁ……何か気まぐれそうに見えるんだけどよぉ……とりあえずルーテシア……お願いします」

ルーテシア
「以前、近藤が試しにやってみたんだけど……それが仇となって全

身3ヶ月の入院しちゃったよ」

ルーテシアのその答えに2人はだんまりとなる。

銀八
「……んで2つ目の質問は……」

アギト
「どんちくしょうに決まっているだろうがぁぁぁ！」

アギトが突如現れて、涙を流しながら叫びだす。

銀八
「……と言う訳で『烈火竜』さん、無謀な事を挑戦するのはお控えめに！」

ノーヴェ
「……えー、次行くぜ。ペンネーム『ソウ』さん『1．クロノ、エリオ、ザフィーラ、ヴァイスに質問です。一つだけどんな願いでもかなえてやると言われたら何を願いますか？
2．銀さん大好きな皆さんに質問です。式を挙げるなら、洋式、和式、これ以外のもの、のどれでしょうか？』」

クロノ
「出番を増やして欲しい！」

エリオ
「もっと神楽さんと月詠さんと仲良くなりたい！」

ザフィーラ
「とにかくまともな生活！」

ヴァイス
「もう……出番なしでいいから最悪な目に合いたくねぇ……」

と４人は即座に願いを言い出す。

銀八
「ええー、エリオは努力しだいで出来ると思います。クロノ、ザフィーラ、ヴァイスの願いはこの小説では叶えられませんので」

クロノ・ザフィーラ・ヴァイス
「何いいいいいいいい！？」

まさかの不可能の願いに絶望的に落ち込む３人。
エリオは嬉しそうであった。

銀八
「んで２つ目はと言うと……」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ・シグナム・アルフ・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛『『（銀さん）（銀時）とできるならどこでも！／／／』』

ノーヴェ
「威勢いいなおい！」

銀八
「何かムカつくんだけど？と言う訳で『ソウ』さん、廊下に立っていなさい。……んで次ィ、ペンネーム『武士堂』さん『質問。1、ギルガメッシュ「アーサァと言ったか？　以下にセイバーに似ていようと所詮は似て非なる雑種よ。アレの輝きには到底及ばぬ。そこでこの英雄王自ら、どれだけセイバーの輝きに迫れるか、貴様の実力を計ってやろう。なに座興代わりだ。存分に力を振るうが良い」（要約すると）アーサァとギルガメッシュが戦ったらどっちが勝ちますか？

2、言峰「銀髪の侍よ。貴様も中々に深い業を背負っているようだな。どれ、一度私がその『魂』の在り方を切開してみようと思うのだが如何かね？」（要約すると）言峰が銀さんの心を切開したらどうなりますか？（攘夷戦争とかのシリアス方面で。可能ならセリフ付きで）』……1つ目はギルガメッシュだろ？」

ノーヴェ
「なぁ！最強の戦闘機人があんな傲慢野朗に負けるってわけなのか！？」

銀八
「当たり前だろ？大体よぉ……相手は宝具をジャンジャンとマシンガンのように連射発射する奴だし、ＳＳＳランク以上のロストロギア級の極大砲撃もしてくる野朗で、何より化け物染みてそんな奴に喧嘩売るのがどうかしてんだろうよ！」

ノーヴェ
「何その化け物!?……もうこれ以上関わったらキリがねぇ……そんで2つ目は……怖すぎなので却下!」

銀八
「同感!『武士堂』さん、言峰は怖すぎるのでご勘弁を!」

ノーヴェ
「んじゃ次な……ペンネーム『サディスト』さん『銀時好きに質問。前に銀さんが

「結婚したら…奥さんの事縛るよ。束縛するタイプだから。関白宣言だから。」
「友達と遊ぶとか言って【合コン】とかマジ許さないよ。縛るって言ってんじゃん」

「昔の男に会うのも許さない」
って言ってたんだが正直束縛されたい?
真面目に答えて。
はぐらかすなよ。
(出来ればツッキーとプレシアも)

質問　二
味方に比べて『鬼兵隊』の戦力がえらい少ないんだけどこれから増えるの?

神威《バカ提督》以外で
例えば魔導師でリリカル系の敵。
もしくはは【春雨】の連中。
全蔵は敵側で出てきて、後から味方になってもいいんだし。雇われ忍者だし。

気になるんで教えてくれ。』……」

またもやまともじゃない質問に呆れるノーヴェ。

フェイト
「私、銀時が好きだから束縛されても良いかも♪／／／」

スバル
「わ……私もよければ……／／／」

なのは
「私もＯＫだよ♪／／／」

ティアナ
「に……兄さんが望むなら……／／／」

シグナム
「夫を支えるのは妻の役目。なら尚更だ……／／／」

アルフ
「銀時の妻になれるなら……／／／」

リィンフォース
「はうう……凄く気持ち良さそうだから／／／」

チンク
「……結婚できるなら……構わない……／／／」

セイン
「はぁ……銀時の妻かぁ……出来るならＯＫで♪／／／」

セッテ
「恥ずかしいけど、銀時にされるなら……／／／」

ウィンディ
「勿論良いっす♪／／／」

ディート
「ぎぎぎ……銀時に束縛されるなら……よよよ喜んで……はうう～……／／／」

猿飛
「ああ！良い！銀さんに束縛されるなんて……凄く感じるんですけどぉぉぉぉぉ！／／／」

銀八・ノーヴェ
『『オールＯＫかよ！』』

予想外の結果に驚く２人。
ちなみに月詠とプレシアは恥ずかしさの余りに答えられなかった。

銀八

「……とりあえず2つ目は……『アルハザード』の禁断秘術とやらで以前に倒した敵が復活するのでそれで戦力をあげてんだろう？しかも生体兵器を中心とした最新兵器も出てくるしょぉ……てなわけで『サディスト』さん、『鬼兵隊』がどのような活動をするかをお楽しみ」

ノーヴェ

「次行くぜ。ペンネーム『Σ』さん『それじゃあ早速質問を。インフレ化が進んで存在が危うそうな、なのはとフェイトに、一応俺が考えたデバイスのパワーアップ案があるんですがこんなんどうですか？

まずなのはからレイジングハートを一時的に左腕と同化させて（このときレイジングハートはキャノンみたいな形になる）純粋に火力をアップさせる。さらにリンカーコアを左腕に入れると火力が大幅にアップさせるという案です。（元ネタはビーストウォーズネオでビッグコンボイが使ってたビッグキャノン及びマトリクスバスター）

フェイトのパワーアップ案はまぁぶっちゃけ言わせてもらうと蝙蝠みたいな羽を生やして亜光速？超光速のスピードを出してバルディッシュの形は両刃の大きな斧に、要するに真ゲッター（漫画版）みたいなスペックまでパワーアップさせるという案です。気に食わなかったらすみませんでした。

正直ね、なのはさんはね、あまり前に出ない方がいいと思うんですよ。波動砲ポジションで決定打になる一撃を後方からおみまいするのが一番だと思うんです。（ぶっちゃけね、砲撃の人が前に出るなんて馬鹿が本当の馬鹿がやる事だと思ってます。自分のポジション位解るでしょ？普通）

最後にこれからも執筆頑張ってください。』」

銀八
「ズバリ答えます。確かに面白いですが、作者はそれ以前にすでにフェイトとなのはのパワーアップネタを……これ以上はネタばらしになるのでお答えできませんが、参考にさせてもらいます」

ノーヴェ
「と言う訳で『Σ』さん、楽しみにまってろよ。そして次ぃ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『ノーヴェに質問です。

変人発明家、変態ゴリラ、元地味なバカップルの片割れと、ナンバーズと行動を共にする銀魂サイドのキャラはロクな奴がいませんが、中でも特に貴方をイラつかせているのは誰ですか？

銀八に質問です。

今年は一緒に海に行く女性はいますか？（たぶん銀時はフェイトやスバル達と行くでしょうけど…）
いなければ誰と一緒に行きたいですか？』……ズバリ答えるな。…ゴリラが時々裸で木刀の素振りをしている所！なんで裸になるのか、見ているだけでイラだつ！」

銀八
「何かゴリラが醜いもんみせて悪ぃな。……そんで俺の質問は……とにかく美女と行きてぇーーーーー！」

ノーヴェ
「いや、答えになってねぇだろうが！……しょうがねぇ……『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、次は戦国ＢＡＳＡＲＡキャラの質問も聞き入れますんでこれからもお願いな…」

銀八
「では次ぃ。ペンネーム『私にいい考えがある』さん『黒神さんに質問です。
さっちゃんもリリカル世界に来ていてある話を思い出しました。
エリーが捕まって銀さんたちが忍者になる話ですが、あの話もやるのですか？

銀さんが好きな皆さまに質問です。
もし、銀さんとの間に子供が出来て、
男の子か女の子だったらどんな名前にしたいですか？。
あと、銀さんが女装したパー子の写真をあげます

それと、ズルズルボールをあげます』ズバリ、やる可能性は高いです」

ノーヴェ
「桂小太郎とエリザベスがいるから……たしかになぁ……てかズルズルボールいらねぇよ！」

ノーヴェは怒ってズルズルボールを投げつける。

銀八
「……ええ、訊くまででもねぇが……お答えどうぞ」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ・シグナム・アルフ・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛
『『（銀さん）（銀時）との愛があれば何でも！／／／』』

銀八・ノーヴェ

『『やっぱりなおい！』』

予想通りのお答えに2人は呆れだす。

銀八
「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、もし作者がやるのであれば楽しみに待ってください。んで次ぃ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『八先生に質問です。
1．ヴォルケンリッター達とリインフォースさんとリインフォースⅡさんに質問です。主である八神はやてを今どう思っていますか、一人一人答えてください。
2．黒神さんに質問です。銀時の世界に「リリカルなのはｖｉｖｉｄ」と「リリカルなのはＦｏｒｃｅ」は出ていますか？
最後に一言、やはりこの小説のヒロインはスバルです。
それとリクエストですが、江戸に居る新八や土方や沖田やお妙等など今銀時や近藤さんが居ない状況を描いてください、番外編でいいです。
』……てか最後の一言、フェイト達が聞いたらスバル殺されるだろ！」

ノーヴェ
「羨ましい……」

銀八
「え！？」

ノーヴェの小さな声だが、思わぬ言葉で銀八は驚く。
ノーヴェは慌てるがごまかす。

ノーヴェ

「と……とりあえず答えてもらうぞ！／／／」

ヴィータ
「はやてぇぇぇ！何でそこまで変わっちまったんだァァァ！（涙）」

シグナム
「主よ……柱の影響を受けすぎではないでしょうか？」

ザフィーラ
「もうまともとは良いずらい」

シャマル
「はやてちゃん、正気に戻って！」

リィンフォース
「まぁ……以前より楽しそうだから許せますが……（苦笑）」

リィン
「と言うより私の出番が少なすぎですよぉ～～（涙）」

銀八
「てかリィンの答え関係なくねぇ！？……まぁいい。んでもう1つの質問に対して黒神は、俺達の世界でも「リリカルなのはｖｉｖｉｄ」と「リリカルなのはＦｏｒｃｅ」は出ているそうだぜ？……と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、リクエストはできるだけ頑張ってみます」

ノーヴェ
「次ぃ、ペンネーム『漆黒の不死鳥』さん『美優
「マスモディウスはヤバいでしょ!?」」
薫
「混汁の方がまだましだね」
漆黒
「それはそうと、質問です。なのはって魔王化したら、銀さんの白夜叉見たいに強くなりますか?まあ魔王だし、強くなるよね」
美優
「そう言う事言うの辞めなよ!違う小説の感想でも似たような事言って、スターライトブレイカー喰らったでしょ!それで優也も巻き込んだし」
薫
「美優ちゃん、この人に何を言っても同じだよ。と言うわけで、逝きましょうか」
漆黒
「いっ・・・行くって何処に・・・て言うか漢字が違う!?」
薫
「大丈夫ですよ。これ以上失礼な事を言わない様に、なのはさんに習って、お話をしに逝くだけですから(黒笑)」
漆黒
「また漢字が違う!?あっちょっ!引っ張らないで!?あぁぁぁぁぁぁ!!!」
美優
「・・・え~と、これからも宜しくお願いします」』……こいつ等なのはに殺されたいのか!?」
いくらなんでも青ざめるノーヴェ。
銀八

「まぁ、なれる以前に超える可能性もあります。てなわけで『漆黒の不死鳥　』さん、これからも小説頑張ってください」

ノーヴェ
「んじゃ次いくぜ。ペンネーム『絶神；肥後魚』さん『肥後魚
「悪だ・・・。」

次真
「悪だな・・・。こっちの純情なはやて姉さんからは想像できない・・・。」

肥後魚
「まっ、だから『狸』なんて呼ばれちゃうんだ。」

次真
「（黒神先生のとこのはやてにばれたら殺されるぞ・・・。）ではここで一つ質問。確かなのはは運動が残念だったと思うけど、その点は野球ではどう影響してくるんだ？」

肥後魚
「ご返答をお願いしま～す。」『……そう言えば『烈火編』で高町なのはは野球をやっていたなぁ？」

銀八
「ズバリ答えます。なのははおそらく『白い悪魔』としての力を発揮するから潜在能力も上がったのでしょう」

ノーヴェ
「そんなんあり!?てか怖いけど!?」

銀八
「と言う訳で『絶神；肥後魚』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『風花』さん『なのは
「……にゃははは」

なのはは笑顔で笑っている
それは何故か?もちろん決まっている
ヴァイスの暴言だ
ちなみに風花はというと

風花
「…な、なのはちゃ～ん……来ないで……いやっ！いにゃぁあああああ!!!」

真っ黒コゲになりながらうなされていた

なのは
「にゃはははは!!ヴァイス君……そっちの私をそこまで愚弄するなんて……頭の冷やしがいがあると言う物なの」

怒りのあまりマジで魔力を溜めているなのは
そして……

なのは
「ああ…最後に銀八先生に質問なの。ヴァイス君へ、あなたはスターライト・ブレイカーで光になりたい?それともデスペレード・デモン・ブレイカーで闇に消えたい?どっちか選んでね。それじゃあ

……」

なのははそう言いきると溜めた魔力を空に撃った

なのは

「スターライト・ブレイカー！！」

銀八先生へ、

出番が少なくなっていますがこれからも砲撃に注意して頑張ってください。ちなみに今日の天気は晴れのち星光です』……怖ぇぇぇぇぇ！

」

ノーヴェ

「何やっているんだヴァイスゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

銀八

「……まぁ、一応ヴァイス君……お答えどうぞ」

ヴァイス

「そんなもんどっちも嫌に……てウぎゃぁあああああああああああああああああああ！」

突如振ってきた桜色の魔力砲にヴァイスは黒漕げとなった。

2人は呆れ身でヴァイスらしき者だった黒い物体を見つめ……

銀八

「と言う訳で『風花』さん、なのはの怒りは半端じゃないのでご注意を。んで次行くぞォ、ペンネーム『光軍』さん『前にスバルさんが『人を斬っていいのは人に斬られる覚悟がある奴だけ』という質

問を答えましたが、『例え自らが死んでも確実に相手を殺す感じで来ても例え自らが死んでも確実に人を活かしたまま倒す』という教えがありますがコレに関してスバルさんはどう思いますか？」

洋基
「俺からも質問やで？［管理局やその他の人等に質問やけど俺と闘わんか？因みに俺は剣術では銀先輩やヅラ先輩、杉さん（高杉）には劣るけど、柄の部分に付いとる鈴が鳴る前に相手を斬るほどの速さの剣や！』……はい、スバルどうぞ」

スバル
「……過去にいろんな事を体験したけど……そんな考えもアリと思います……でも戦場ではそれは命取りに……」

銀八
「スバル？」

スバルの意外な答えに銀八は唖然とし、スバルは我に返ってはっと驚く。

スバル
「あ……あはははは！とりあえずありだと思います（苦笑）」

ノーヴェ
「？……まぁ良いや。んでそれ以前に洋基の戦う姿……まだ確認できてねぇから答えられねぇよ」

銀八
「と言う訳で『光軍』さん、それでも無理せずに自分のマイペースどおりに小説を進めてください。そんで次ぃ、ペンネーム『正宗の

胃袋』さん『1．お登勢さんに質問です。昔はあんなに美人だったのにどうして今は妖怪並の容姿なんですか？
2．前回の質問コーナーで銀時と心も身体も一つに繋がりました、しかし繋がった相手が銀時に変装した銀八先生だったらどう処刑しますか？
1．体中見る影もなくボコボコにして海に沈める。
2．己の技を使って死なない程度に痛めつけた後最後に必殺技で殺す。
』……」

お登勢
「誰がババァだごるぁあああああああああ！」

ドカァ！

銀八
「何故おれぇ!?」

突如現れたお登勢に殴られた銀八。
お登勢はかんかんと怒ってそのまま去る。

ノーヴェ
「そうだなぁ……てか2は怖すぎるから却下！乙女の心を弄ぶ質問すんな！」

銀八
「ちなみに以前にフェイト達から聞いたんだけど、機動六課組は1で、ナンバーズと変態女は2を答えたような……」

ノーヴェ
「聞いたんかよ!?……とりあえず『正宗の胃袋』さん、廊下に立っててくれ……」

銀八
「次行くぞぉ、ペンネーム『錬鉄者』さん『銀さんに質問なんですが、今の所フェイト達から貞操は守れてますか?原作ではあまりにも恋愛要素なかったんで、銀さんが慌てふためく姿を想像すると、面白いです。』……ちくしょぉおおおおおおおお!銀時羨ましいいいいいいいい!」

悔し涙を流す銀八。
そんな銀八を呆れだすノーヴェ。

ノーヴェ
「ちなみに……この小説はキスされたらその時点で童貞卒業扱いされてっからもう童貞じゃないようだ……て何言わせてんだぁぁぁ!///」

ドカァ!

銀八
「だからなんで俺ぇ!?」

もう1度殴られてしまう銀八。
それでもすぐに起き上がる。

銀八
「……と言う訳で『錬鉄者』さん、初質問ありがとうございました……んで次ぃ、ペンネーム『スコーピオン』さん『はじめまして、スコーピオンです！
零次「野上零次だ。ここで書いている作品の主人公じゃないぞ？つーか、作者はここで小説を書いちゃいない。」
まぁそうだけど。銀八先生コーナーへ質問などをします！
？　スバルが技をもっと鍛えたいならば、戦国ＢＡＳＡＲＡの石田三成を見本にするのも手じゃありませんか？
零次「？だ。つーかアドバイスだな、スバルへの。
銀さんはいつも「積極的な女は嫌い」と公言しているから、みんなが喧嘩してるときにスバルが銀さんにもっと甘えるようにすれば銀さんを落とせると思うんだが。」
今回の質問でスバル中心の理由？
零次「スコーピオンが、この小説でも原作でも、スバルを一番愛しているからだ！」
ま、更新頑張って下さいッス。』……ズバリ答えます。スバルは『戦国ＢＡＳＡＲＡ』のゲームをやっているので、参考にする可能性はあると思います」

ノーヴェ
「何でスバルばっか……んでもう1つは……アイツならやりかねぇ……」

銀八
「かもな。と言う訳で『スコーピオン』さん……これからもスバルの活躍を見守ってください」

ノーヴェ
「次はペンネーム『三月語』さんからな。『本当にお久しぶりです。
「（レイン）・・・いつぞやの闇鍋再臨・・・」
毒＋毒＋毒＝殺戮兵器・・・
「（レイン）ウィリアとかめちゃくちゃ震えてるし・・・」
あれは『んゴパッ』では済まないですって・・・。それで、何個か質問です。

Q1.『デスペレード・デモン・ブレイカー』を倍の威力で弾き返したレインと戦ってみたいですか？
「（レイン）って待てや！勝てるわけないでしょ！？」
はいはい、次々。

Q2.（女性陣への質問です）知り合いが『つき合い始めた』と言ったとき、素直に祝福できますか？妬みますか？
「（レイン）・・・その問題って・・・」
こちらも二組カップルできましたし。では、更新頑張ってください！』…あんなえげつねぇ極悪魔法をはじき返せる化け物と戦うかぁぁぁぁ！」

銀八

「死ぬからな！あんなもんはじき返せる奴と戦ったら死ぬから！…
…んで２つ目は……もう聞くまでもねぇ。フェイト達なら嫉妬しま
くるな」

ノーヴェ
「銀時の事を考えれば……と言う訳で『三月語』さん、廊下に立っ
ててくれ」

銀八
「次ぃ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ「あ・・・
もう質問のころですか？でしたら

？ヴィヴィオっていったいいつ出るんですか？

？久しぶりになのはさん，キャロちゃんに質問．あなた方最近女の
子らしい行動しましたか？なんか本当に暴れているだけのような気
が・・・

後，腹いせにこの間の闇鍋２ｎｄでひどい目に会わなかった，九ち
ゃんは罰として今週号のジャンプのようにスク水で一週間過ごして
もらいます．後，残りのスカリエッティさんや皆さんにはすでにジ
ャスタウェイＳ（シャマル鍋使用）を投下します」

かがみ
「そこまでやるか・・・」』……んじゃ早速。」

ノーヴェ
「ああ……天誅！」

2人はドコからか『ジャスタウェイS』を取り出して2人に無かって投げる。
それを2人の顔面に直撃すると……

九兵衛・スカリエッティ
『『あヴぁだらぶぁんだりゃあばぁーーーーーー！』』

人間の叫びとは思えない叫びを出し、気絶して倒れる。

ノーヴェ
「すんげぇ威力だな……本当に食べ物じゃなく兵器その物じゃねぇか」

銀八
「こんなもんを食べて地獄の苦しみを味わった黒神達の苦労も嫌と伝わってくりゃぁ……とりあえず2つ目は怖いから却下として……1つ目の答えな。ヴィヴィオの出番はおそらく、そろそろ出てくる頃らしい。」

ノーヴェ
「確かになぁ。長くても次のシリアスが終わった後ぐらいだしな」

銀八
「ああ……てなわけで『ウッソ・エヴィン』さん、ヴィヴィオの登場をお楽しみ。んで次ぃ、ペンネーム『サラマンダ』さん『そろそろ質問コーナーが近いということで、久々に質問します！

黒神さんはＶｉｖｉｄで出てきたキャラで一番好きなのは誰ですか？

ノーヴェに質問です。もしサーシェス（私の小説での設定）と勝負しろと言われたら勝てますか？（無理ならデバイス有りの銀さん）との事です。』……ズバリ答えます。黒神はＶｉｖｉｄはあんまり読まないので、全然知らないので答えられないでしょう」

ノーヴェ
「おいおい……んで小説でみたんだが……何か勝てる気がしねぇ……」

銀八
「てなわけで『サラマンダ』さん、これからも小説作り頑張ってください」

ノーヴェ
「ようやくあと少しか……次はペンネーム『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さんからだ『『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～』おもしろおかしく見ています。
一つ目はキャロちゃんに質問です。
もしも自分が１０代後半の身体になったらエリオにアタックしあの二人をボコにしますか？
二つ目はシャマルさんに質問です。
自分の料理よりも他に取り柄とかありますか。
ＰＳ　銀さんの恋バナはもう十分です（自分としては・・）自分としては桂とはやての恋が気になるほうです。
すぐにＳＲＢを打つ白い魔王？覇王？悪魔？死神？（どっちでもいいや）自分は嫌いです。その性格をもっと抑えてください。
お願いします。』てかあれ？確か３つあったんじゃなかった？」

銀八
「実はなぁ、余りの質問する読者の多さに……作者が一度の質問は2つまでにしたそうなんだとよ」

ノーヴェ
「ああ、なるほどなぁ……んで2人に答えてもらうとぉ……」

キャロ
「むしろ、チェーンソーで切り刻みます！」

シャマル
「料理以上に取り柄はないです！」

ノーヴェ
「即答！そんでキャロの質問怖っ！」

キャロの脅威の質問の答え方に怖がるノーヴェ。
彼女だけは怒らせないように気をつけようと考える。

銀八
「……とりあえず『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さん、ルールにより1つ外しましたので次からは2つずつにお願いします。んで次ぃ、ペンネーム『アクセル』さん『質問です。
ジャンプで九兵衛のあの部分が以外と大きい事が判りましたが、この話でもそれが反映されるんでしょうか？』……」

チンク
「納得できるかぁぁぁぁぁ！（涙）」

チンクは涙を流して叫びだす。
九兵衛は愉快そうに笑っているようである。

ノーヴェ
「チンク姉……どんだけ九兵衛嫌いなんだ？」

銀八
「……と言う訳で『アクセル』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ行くぞぉ、ペンネーム『次村陣八』さん『オス！久しぶりの感想ッス！
銀「ホントに久しぶりだな。小説のほうも…」
ギクッ！それは……そんなことより！もうすぐに銀八先生だから質問！
1、無印、Ａｓ編の人たちに質問：フォルトゥナ、エルレイン、バルバトス５のパーティ（バルバトス、サブノック、ダンダリオン）とマグナ様と戦ったら勝ち目ありますか？（笑）自分はバルサンにはさすがに勝てないと思う（笑）魔法を使ったら殺戮のイービルスフィア、回復しようとすると断罪のエクセキューショナー〉ルナシェイドで絶対に全滅、その後に紳士セリフ（笑）
2、先日きゃぐ漫画日和のマンガを見てたら、魔法少女誕生ってのがあって、中で魔法少女になるはずの人が１８はギリギリＯＫだって言ってましたが、なのはさん達はギリギリでアウトですか（笑）
以上です（爆笑）
銀「お前…殺されても知らないぞ…」
ははぁ！貴様らごときに…！俺は…死なんぞぉ…！（バルさん風）』
」
はやて・シグナム・ヴィータ・ザフィーラ・シャマル・リィンフォース
『『何かありません！』』

ノーヴェ
「うぉ、即答！……まぁ気持ちわかんねぇ訳でもねぇが……2つ目はってうぉあ！」

ノーヴェは、突如怒りの化身ごとに強い憤怒を放っている『白い悪魔』ごと高町なのはに驚きだした。
そして彼女は無言で杖を構えて……

なのは
「デスペレード・デモン・ブレイカーーー！（怒）」

思いっきり赤黒い超極大魔力砲を発射する。
ねらいは当然のごと『次村陣八』さんへ……

銀八
「『次村陣八』さん、逃げてぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

ノーヴェ
「……もうまともに質問を答えた気がしねぇ……んじゃ次最後な。ペンネーム『赤夜叉』さん『どうも。久々に感想を書きます。キャラ崩れや、シグナムとエリオのレベルアップが良いですね。

ゼロ「どうも。『マジックゲーム』の主人公のゼロです。いや？それにしても、キャロが一番怖いよね。あの歳で、あんな腹黒いんだから……キャロ、恐ろしい娘……！」

俺もそう思う。

ゼロ「質問です。銀さん、六課＆ナンバーズ一部の女性陣にモッテ

モテですが、気疲れが凄そうですね。何かストレス発散や、心を癒す事をしてるんですか？」

では、これからも頑張って下さい！』……お、久し振りの赤夜叉さんの質問だ」

銀八

「ほぉ、コイツはコイツは……んじゃ質問するぞ。銀さんはフェイト達と出会う前は女にモテてない天然パーマでしたが……フェイト達の世界に来て予想外のハーレム生活に毎日ドキドキ。今まで送ってきた自分の人生が全くの嘘のように思えているため、ストレスは全くと言って良いほどないようです。しかも甘いもので心を癒されています」

ノーヴェ

「あのハーレム侍も私達の世界に関わる前はただの侍だって事かよ……」

銀八

「そう言う事だ。と言う訳で『赤夜叉』さん、久し振りの感想と質問、そして応援ありがとうございます。以上持って質問コーナー終了。どうでしたか、ノーヴェ」

ノーヴェ

「何か、更に多くなった気がして答えるのも大変だなぁ」

銀八

「ああ、全くだ。でもこんだけ多くの質問をしてくれるのは、答えるのは大変でも同時に嬉しいって訳だ」

ノーヴェ
「そうだな……んじゃそろそろ行くか……」

銀八
「おう、次回のアシスタントはギンガ・ナカジマに決定しました！」

ノーヴェ
「また質問を楽しみに待っているぜ」

銀八・ノーヴェ
『『次回もお楽しみぃ～～～』』

第八十三訓：男女ペアの町歩きはデートと一緒である（後書き）

黒神
「後半になったら、僕は新八を出す予定だが……だがこのままでは新八は半端オタク侍のままで終わってしまう気がする」

銀時
「はぁ？お前何いってんの？ぱっつぁんにアイドルオタクを止めさせる気？止めとけって、アイツ『止めろ』と言われても止めねぇから」

黒神
「分かっている……だがこのままでは僕は新八の扱いをむっつりスケベオタク扱いのままで小説の連載を終わらせてしまう。これじゃあサディストさんの注意を全く無視している事と同じ……それに！」

黒神は辛い表情になって言い出す。

黒神
「新八はオタク以前に見習いでも侍だ！たとえ地味でも強い信念を持てば、見える人には見えてくる！他の誰が言われようと己の信じた道を進み続ければ、真の己となれる！それは銀さんが一番良く知っているはずだ！」

銀時
「……お前……」

黒神
「しかしこの小説はキャラ崩壊と言うをあったことを今さっき思い

出した！そこで、僕は決めた！」

黒神は眼に炎を燃やしてやる気を表す。

黒神
「そのキャラ崩壊を利用して、この小説でパワーアップしているフェイト達を眼に焼き付けさせ、新八をアイドルオタクから……誇り高き魂を輝かせる真の侍に目覚めさせる！」

銀時
「おおぉ！それで、新八自らアイドルオタクを卒業させて侍に目覚めさせるってわけか！」

黒神
「いや……それは新八事態だからオタク卒業は極めてひくいだろ」

銀時
「あらぁ～～！？」

期待を打ち消すかのような黒神の答えに銀時はずっこける。

銀時
「おいいいいいい！散々やる気と期待を出させるような言い方をして結局それはねぇんじゃねぇの！？」

黒神
「でも、新八の成長は確実にする予定です。何せ彼は、後半の切り札ですから♪」

銀時

「それってつまり、後半のインパクト不足を余技なう為にぱっつぁんを最初から出さなかったわけか？」

黒神
「その通り！」

銀時
「そのとおりじゃねぇだろうが！」

黒神
「まぁ、まだ後半は突入しませんが……新八は後半には確実に出ます。そして後半で彼が侍魂を持ったフォワード部隊を見て、自分自身も頑張らなければならないと言う気持ちを引き出して、成長させるつもりですので……てなわけで新八の登場とフォワード部隊の成長もお楽しみ♪」

銀時
「さり気にネタばらしてんじゃねぇぇ！」

ドカぁ！

黒神
「ごふぁあああ！」

黒神は銀時のツッコミの蹴りで吹飛ばされる。
まぁ彼が新八を成長させるのは本当のようである。

ちなみにコレを見て次回から新八が出てくると思った読者の皆さん

に、間際らしい勘違いをさせてしまって申し訳ございません。

新八の出番はまだまだ先です。
もうしばらくお待ちください。

鉄子
「次回、「祭りは派手にやるのが楽しい」テイクオフ」

第八十四訓：祭りは派手にやるのが楽しい（前書き）

黒神
「いよいよ、新シリアス開始です。今回は第好きな祇園祭をネタに『銀園祭編』を開始します」

銀時
「いきなりネタ晴らしかよ！？」

フェイト
「あはは……作者も相変わらずだね」

黒神
「そして今日はあの今週のジャンプでの『銀魂』のあのネタを披露します！」

銀時
「マジで！？」

フェイト
「え、何々！？」

黒神は今週の銀魂でやったネタを披露すると宣言し、銀時は注目してフェイトはなんなのか気になる。

黒神
「それでは、『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！」

第八十四訓：祭りは派手にやるのが楽しい

ミッドチルダのとある工場。
そこは『アンドロイド』と呼ばれる人型の機械（からくり）、が山の用に多い。
しかも完全な人間と思えるほどの人間その者の外見であった。

そんな場所に銀時、フェイト、スバル、ティアナ、神楽、エリオ、月詠、源外、スカリエッティはある依頼人のお手伝いをしている。

「銀さん、そこはあの机に追いといてください」
「ん？……ああ、ここか？」

と銀時は人間の腕らしきアンドロイドの機械腕を机に置く。
そして銀時は、アンドロイドを調整しているボサボサ茶色頭でゴーグルがついててタオルを巻いている発明家である若き青年に近づく。
実はこの青年こそが今回の依頼人である、キクナエ・ストォンである。

「皆さん、今日は依頼とは言えこうも多くの手が借りられて助かりました」
「なぁに！お前さんのアンドロイドと言う人型機械（からくり）技術に興味をもってなぁ。せっかくだから手伝っている訳よ」

源外は若き発明家が作り上げたとは思えない完成度の高い機械（からくり）技術を持つキクナエに強い興味を持っていた。
江戸一番の発明家としての意地があっても、優秀な若き発明家がいる事は嬉しくてたまらないようである。

「ここまで完成度の高いアンドロイドを作れるとは……君はただの

発明家ではなさそうだね」

スカリエッティも源外と同じく『プロジェクトF』と『タイプSK』とは違うが人間と思わせるほどのキクナエのアンドロイド技術は唖然としていた。

それも戦闘機人の様な戦闘用にではなく、明日の祭り用の為に作り出している。

「うほほーい！本物の人間ぽいヨ！」

「はい、コレほどまでに完成度の高いアンドロイドを見たの初めてですよ！」

銀時達がキクナエの手伝いしているのに対して神楽とエリオは、手伝うと言うよりも見学して遊んでいるだけであった。

まだ小さな子供であるのか少年と少女のわくわく感を出しまくりであった。

「たくぅ……あいつ等は気楽で良いなぁ、おい」

「別に良かろう、コレほどまでの機械技術で作られた機械、わっち等の世界でも滅多に見られぬ」

呆れる銀時に2人の無邪気さに微笑む月詠。

全く手伝わない2人の代わりに謝りだすフェイト。

「すみません、2人が全く……」

「別に良いですし……いくらあの機動六課の一員とは言えまだ幼き子ですから、たまに無邪気に心が晴れさせた方があの2人のためですし」

迷惑がっていない所が、2人の喜ぶ姿を見て嬉しそうに笑うキクナ

エ。
そこまで自分が作ったアンドロイドを気にってくれた事が凄く嬉しいようである。

「でも神楽さんとエリオがはしゃぐのも分かるよ……だって機械技術だけでこんなにも完成度高く作れるなんて」
「確かに……もう中には人間のように動いたり喋ったりする事ができるのがあると聞いてたけど……このアンドロイドを見てたらあり得るわ」

キクナエの機械技術の高さを、ここにあるアンドロイドを見て感心するスバルとティアナ。
源外やスカリエッティに認められるなら尚更である。

「にしてもよぉ……こんなにも人間その者を機械技術で作れるとは……どっかのポンコツとはおおち……」

ドカァ！

「が痛ぁ！」
『『（銀時）（銀さん）（兄さん）！？』』

突如、背後から源外作の三郎が銀時の後頭部を殴る。
源外と同様に、キクナエの手伝いをしている様であったが……銀時の暴言にムカついた様であった。

「馬鹿野朗め、確かにこの小僧の機械技術は評価できるが、わしの三郎だってこの人造機械には負けておらぬわい。なぁポンコツ」

ゴ！

「ぶはぁ！」

三郎に殴られて倒れる源外。

「てか君も言っているから源外君。いくらポンコツとは言え自分の作品にそれは――」

ゴキィン！

「なぶらぁ！」

スカリエッティも三郎に殴られて吹飛ばされる。

「アンタも言っているじゃないの！」

呆れてスカリエッティにツッコむティアナ。
フェイトはスカリエッティを見て……プロジェクトFのベースとなる基礎論理を構築し、自分を生み出した人物とは思えないと、苦笑して疑いだす。

「あはははは！本当に愉快な人達ですね」
「いや……唯の馬鹿な連中なだけじゃ……」

楽しそうにと見えて笑うキクナエに呆れだす月詠。

「所でキクナエさん、このアンドロイドってひょっとして刀の扱い方も出来るんですか？」

スバルの質問にキクナエは、わずかだが少し真剣な表情になる。

しかしすぐに笑顔に切り替えて質問に答える。

「勿論です！内部には『電杯（でんはい）』と呼ばれる特殊な機械技術で作られた超高速データ回収装置が付けられていて……それを眼と脳の部分につけさせて瞬間的にデータを図って登録し、人間並に扱えられます。勿論刀だけではなく銃や槍、そして上手くすればデバイスをも扱えるかもしれません」

「凄いですね！」

そんな凄い技術で作られた事に、感動して喜ぶスバル。

「ですが……このアンドロイドには武器を扱うようには設定されていません」

「そりゃそうですね」

「このアンドロイドは戦う為じゃなく明日の祭りイベント用に作られたなら尚更よね」

明日始まる祭り。

それはミッドチルダでも毎年一回は行われる『銀園祭（ぎんおんさい）』。

１０年前に異世界から来た英雄として呼ばれる坂田銀時達の異世界をイメージした和風祭り。

ミッドチルダの誰もが楽しみに待っている大イベントであった。

＊

「とりあえず、後は大丈夫か？」

「はい、皆さんのお陰でほとんど完成しました……後は１人で最終メンテナンスをするだけですし」

どうやら余裕で間に合ったようである。

神楽とエリオははしゃいでわくわくと明日の祭りを楽しみになってきた。

「頑張ってください、キクナエさん」
「もし上手く行けば、主がミッドチルダ一の発明家と呼ばれる日も遠くなかろう」

応援するスバルと、キクナエがミッドチルダ一の発明家として呼ばれるのも遠くはないと確信する月詠。
2人に褒められて照れるキクナエ。

「じゃあまたな」
「お祭り頑張ってください」

銀時とフェイトはそう言い、銀時達は全員この場を去る。
そしてそれぞれ、機動六課とナンバーズのアジトに向かって別れると、スカリエッティが源外に話し出す。

「源外君、彼は大丈夫だろうか？」
「なぁに、確かにまだ若者じゃが腕は確かな物じゃろ」
「いやそうじゃない……確か彼はミッドチルダ随一の天才発明家であるオクティン・ストォンの一人息子で……オクティンは管理局に……」

スカリエッティがキクナエの父の名を言い出すと、源外が深刻な表情を表す。

「スカリエッティよ……若者を成長させるコツはぁ、嫌な事に縛られずに前に進ませるだけよ」

かつて、復讐心に取り付かれた自分を思い出して言い出す源外。
それを聞いたスカリエッティが「違いない」とフッと笑って同感する。

＊

「と言う訳で……俺達は今、源外殿の機械技術のお手伝いをしています」
『『何で説明後ですか！？』』

アジトで近藤が説明口のような言い方をすると、背後から山崎とディエチがツッコミだす。
近藤の行ったとおり、山崎や鉄子にルーテシアとアギト、そしてナンバーズのウーノ、チンク、セイン、セッテ、オットー、ディエチ、ウィンディ、ディートが強制的に源外の機械作業の手伝いをさせられていた。
正確にはさせられているが、原因は源外とスカリエッティの発明家と研究者としての闘志が燃えてきたのが原因である。

「あれ、そう言えばドゥーエ姉、トーレ姉、クア姉、ノーヴェの４人はどこにいるっすか？」
「ほんとだぁ……どこにいるの？」

ウィンディとセインは４人の存在がいなくなった事に気づく。
するとウーノがその訳を言い出す。

「ノーヴェは『ガンジョバクヤ』を我が物にする為に、ドゥーエとトーレと一緒に猛特訓をしているわ。そしてクアットロはそのノー

ヴェの特訓を興味を持って見学中」
「ノーヴェが!?しかも『ガンジョバクヤ』って、たしか以前機動六課が『コーシカップ事件』を起こしたミツルから回収した伝説の七星神刀(しちせいしんとう)の1つじゃ!?」

まさかノーヴェが伝説のデバイスを使いこなす為に猛特訓をしているとは予想外な事に驚くオットー。
実はノーヴェはあの魔導競技大会からかなり変わりだした。
そう、その原因は魔法なしでもＡＡＡランク級の戦闘力を誇るスバルにあった。
彼女の神速抜刀剣術は自分は勿論、ナンバーズ最速と謳われたトーレでさえスピード負けをするほどである。
魔法なしでも神速抜刀剣術で翻弄された事で、ノーヴェの中からスバルのライバル心が燃えて来たのであった。
大会後、彼女は猛特訓をしたがそれでも今の戦い方じゃスバルには対抗できないと思う。

徐々にスバルとの差が広まる中、『コーシカップ事件』後に機動六課の部隊長であるはやてが源外とスカリエッティに七星神刀(しちせいしんとう)の1つである『ガンジョバクヤ』を保管してもらいたい事を頼まれた。
ロストロギア級に値するため管理局より信頼できる同盟関係のナンバーズにと理由であった。
それを一早く気づいたのはノーヴェであった。
七星神刀(しちせいしんとう)の1つである『ガンジョバクヤ』を使いこなせれば……自分もスバルに対抗できると確信してスカリエッティと源外に土下座をしてまで譲ってほしいと頼みだす。

だが2人の返事はノーヴェの予想外の一発ＯＫであった。
原因はスカリエッティと源外は、ノーヴェのスバルに対する対抗心に興味を持って彼女にあっさりと『ガンジョバクヤ』を渡す。

だがノーヴェは基礎剣術を学びながら、それと同時に我流的な二刀流で猛特訓をしていた。
その結果、ノーヴェの成長の早さは2倍となっていく。
ドゥーエとトーレも、彼女の強くなりたいと言う気持ちに答えてそれ以来毎日特訓に付き合っている。

だが問題なのは、今まで固有武装のギンガと同じ『リボルバーナックル』を模して作られた簡素な篭手『ガンナックル』と、『ブリッツキャリバー』を模して作られたナックルスピナーを備えるローラーブーツ『ジェットエッジ』による格闘技を中心に戦っていた。
今更戦い方を変えてはまた弱くなるだけではないかと誰もが疑いだす。

だが、鉄子は違うように思う。

「…確かに今さら彼女が剣術を学ぶのは無謀かもしれない。だけどそれを知りつつ彼女は、もっと強くなる為に今までの戦い方を捨て剣術を学んでいる。スバルに追いつく為に、そして『ガンジョバクヤ』を完全に使いこなし彼女を超えるために。スバルにはもう絶対に負けたくないから…とそう考えてるハズだ」
「なるほど……」

鉄子の理由解説にチンクはノーヴェがそこまで強くなろうとする理由を納得する。

「言うなれば、蒼娘に圧倒的な差で敗北した頃の自分を越えようと闘志が芽生えたのじゃろ?……まぁ人間だろうが人造人間誰だろうが、目的の為なら強くなるもんさ!……そうだろ、山の字」
「え……ま……まぁ」

源外の『山の字』とは山崎の事である。
彼も恋心を抱く恋人（!?）のディエチと出会ってから、彼女を護る為に侍としての魂を燃やし、必死に二刀流（正確にはミントンラケットと刀を使って戦う我流剣術）を磨き上げている。
その為、山崎はこの世界に飛ばされる前より、急激に強くなった。

「彼女の気持ち…俺も分かりますよ。だって俺も目的の為に強くなろうとしてるんですから……／／／」
「や……山崎さん……／／／」

山崎がディエチの眼を見つめると、ディエチも山崎の眼を見つめる。
そしてお互いに顔を真っ赤に染まり、甘い空気が漂う中……

「てそこで自分達だけの世界に入らない！」

ウーノが呆れて2人に注意する。
山崎とディエチが慌しくなって互いに背を向け合う。
それを見たチンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディートの5人は2人を羨ましそうに見る。

（（良いなぁ、私も銀時と一緒にああなりたい（っす）））

心の奥から願いだす。

「だぁ～っははははははは！全く若いのは良いなぁ！俺もいつかお妙さんと一緒に！」

近藤も山崎に続いていつかお妙とあんな関係になりたいと考える。
するとルーテシアとアギトが近藤にある事を聞き出す。

「近藤……前から訊きたかったけど、そのお妙って誰？」
「そう言えば、私も聞きたかったんだよ」

2人の質問に近藤は自信満々に答えだす。

「そうだなぁ……言うなれば婚約者だな」
「えぇ！？」

近藤の答えに思わず山崎が驚きの表情をだす。

「るー！」
「マジでか！？」

近藤にそんな人がいた事にルーテシアとアギトは驚きだす。
それはスカリエッティやナンバーズもであり、源外と鉄子は意外そうに頷く。

「ほぉー、君にその様な女性がいたとは……」
「以外で驚いたわ」
「婚約者って、それ本当！？」
「凄いじゃないごりちん！」
「だとしたら、貴方がいないことにお妙って人も心配していますね」
「人間見た目で判断できないってこの事だね」
「すごいじゃないっすかごりっち！」
「だとしたら早く元の世界に戻れる装置を完成させないとね」

興味深そうに近藤に話しかけるナンバーズ。
ちなみに『ごりちん』はセインの近藤に対するあだ名で、『ごりっち』はウィンディの近藤に対するあだ名。

「だぁーはははははははははははは！いやぁ、何か照れるなぁ！あ、もし良かったら結婚式には呼んであげるからな！／／／」
「うん、ルーも祝います」
「おう！奇跡ってのを拝むのも悪くねぇし！」

話が間違った方向に大きくなる一方で、近藤は愉快そうに笑い出す。
一方の山崎は青ざめている。本当はお妙は近藤の事を完全に嫌っている。
何故なら近藤の毎度のストーカー行為が元凶で彼を嫌と嫌っている。
その為、近藤が言っている事は完全なる嘘であった。

「局長、何言っているんですか！？今のもし姐さんにバレたら――」

山崎が近藤を止めようとすると、ディエチが無言で山崎の肩を掴む。
そんなディエチに気づいて山崎はディエチを振り向くと、ディエチはゆっくりと横に顔を振るう。
すると山崎は呆れる余りに涙を流す。

＊

次の日

ついに迎えた銀園祭の日。
完全なる江戸の祭りをミッドチルダで再現された風景である。
夜の賑やかな風景に誰もが満足そうに楽しんでいる。
その中には管理局の首都防衛隊代表で、事実上の地上本部トップのレジアス・ゲイズ。
そしてレジアスの娘で副官でもあるオーリス・ゲイズも興味を持って見に来ていた。

中でもメインは天才発明家のキクナエのアンドロイドによるカーニバルであった。

管理局側は勿論、機動六課も年に一度の銀園祭で事件を起こさないように要注意に警備しなければならない。

そんな中、フェイトとなのははは……

「……で、2人だけなんで着物？」

と銀時は2人に対して言い出すが、同時に少し見惚れていた。

フェイトのは紫色の無数の金色の蝶が描かれている着物で、なのはのはピンク色で少し紅めの桜の花びらが書かれている着物である。

「だって……こうしたほうが警備しやすいし……／／／」

「それに、銀さんと一緒にいたほうがやりやすいから……／／／」

警備と言うのは表向きだけで、実は2人は今日銀時と一緒に銀園祭を楽しむだけに張り切って着物を買ったのであった。

2人の姿を見た銀時は、いつもとは違う2人の雰囲気と色気ある和風美女とも思える存在に思わず見惚れていた。

なのははフェイトの様に髪を下ろしていた。

「……ま……まぁ、似合ってんじゃねぇか／／／」

顔を真っ赤にして銀時は正直な感想を言い出す。

それを聞いた2人は凄く喜びだす。

「うふふ、ありがとう／／／」

「にゃはは、凄く嬉しいの♪／／／」

フェイトとなのはは、左右に銀時の腕を掴んで抱き、体を寄せる。
いかに積極的な女が嫌いな銀時でも、思わぬ美女に抱きつかれる事に同様を隠せ切れなかった。
そして2人の豊満な胸が銀時の腕を挟んでいるのが分かり、彼は今でも理性を失いそうである。

一方のスバル、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディート、猿飛は2人の積極的を見て強く羨ましがっている。

（（チクョウ！すんごく羨ましいいいいいいいいいいい！））

一心同体なシンクロでそう思い込む。
実は１３人は昨晩、銀時と一緒に銀園祭の祭りを行く予定であったが、機動六課は管理局の仕事が入って警備しなければならない。
それは機動六課の同盟を結んだナンバーズも例外ではなかった。
そこで2人だけが銀時と一緒に行動する権利を持ち、クジで決める事にした。
見事当たりを選んだのがフェイトとなのはであった。
選ばれなかった者は歯を食いしばって悔やむだけであり、特に猿飛にいたっては血の涙を流している。

「なんと言うか……とても信じられない光景だねぇ」

煙草を吸ってフェイトとなのはに好かれて体を寄せられている銀時を見て、お登勢は平然と呆れているが内心ではあり得ない程に驚いていた。
元々銀時は、元の世界でも全然冴えなくてモテない唯の天然パーマ男であったがこの世界では元の世界とは正反対にモテまくっていた。

「いったい、アイツはどんな方法でああなったんだい？」
「……さぁ、わっちは面白そうだから良いでござんすが？」

どうして銀時がモテルのか理解できないお登勢にそれが面白そうに愉快そうに笑う外道丸。

（銀時様、たとえクリステル様に見捨てられてもその乙女達がささえてくれやすから……ふふふ）

いったい誰が銀時の嫁になるのかわくわくしながら笑い浮かべる外道丸。
シャマルとザフィーラは、隣でもの凄い嫉妬心を出しているユーノを見て青ざめていた。

（（今、声かけないほうが良い））

2人の考えはシンクロと言うべきほど一致していた。

「ふ、相変わらず銀時の罪深さが見えてくるな」
「そうやな、コレで更に増えたら面白いと言うのに♪」
「そう言う問題ですか？」

桂とはやてはその様子を面白そうに言い出し、リィンは不自然そうに苦笑する。
ちなみにはやての姿も、水色で緑色の燕の絵文字が書かれている着物を着ている。
フェイトとなのはと並べられる程の和風美女となっていた。

「では、我々も行こう」
「了解や♪さっき見つけた美味しいそば屋を見つけたから」

はやては桂の腕を抱いて、共に祭りを楽し……じゃなく周りの警備を開始する。

「行ってらっしゃい」
『2人とも楽しんでね』

リィンとエリザベスは2人の背中を見守って手を振るう。
一方のヴィータはそんな2人を複雑そうに見る。

「たく、あいつ等機動六課の仕事を忘れてるんじゃねぇか？」

と怠けている2人に呆れている。
しかし本音はどうして桂とはやてがあんなに仲が良いのか納得できなかった。
はやては家族の様な関係の為、大切な仲間。
桂は共に戦った仲間の1人であり、同時に好意を抱いている。
そんな2人の仲が最近徐々に良くなっていくのに、胸がもやもやしそうである。

「……ヴィータ、おんしはヅラと一緒行かんで良ぇんか？」

そんなヴィータに辰馬が話しだす。
実は以外にも、ヴィータが桂に好意を抱いている事を一番最初に知ったのも辰馬であった。

「な……なななな何言っていやがる！？／／／べっ別に私が……」
「今日は祭りじゃき～。楽しまな損ぜよ」
「いや、私達は警備の！」
「ほうか。じゃが、そん為におまんは自分の想い伝えずにそのまま

燻らし続けるんかの？それは辛いだけじゃぞ？」

辰馬の一言でヴィータはだんまりになる。
いくら2人の関係を知ってでも何もしないで終わるのは嫌である。
しかし一体どうすれば良いのかヴィータには分からなかった。

「……とりあえず、もう少し積極的に行動してみるだけでもやってみたらどうじゃ」

「え？」

「恋を成就させるには少しでも好きな人の側におった方が良えんじゃ。その方が効率が上がるからの。じゃから…ヴィータ、おまんも少しでも良ぇからヅラの側におれ。おまん自身の為にものぅ」

辰馬が笑いながらヴィータにそう言うと、ヴィータも辰馬の言う通りに柱となるべく一緒にいる事を決意する。

「言いたい事も言うたし…そこの綺麗なお姉さぁ～ん！わしと一緒にこの祭りを楽しもうぜよ～」

と辰馬が目の前に通ってきた美人な女性に飛びつこうとすると……

ドカァ！

「つーか、てめぇの場合ただ女を見境なくナンパしてるだけじゃねぇかァァァァァァァァァ！！」

「あらぁ～～～～～～～～～～！」

額に青筋を浮かべて『グラーフアイゼン』で辰馬の頭を叩くヴィータ。

せっかくの彼の良い事言った雰囲気が台無しになってしまった。

「ちょ！……やりすぎだよヴィータちゃん！」
「ヴィータ……気持ちは分かるが落ち着け……」
シャマルとザフィーラも、暴れだすヴィータを止める。
「はぁ～……どいつもコイツも」
「うふふふ♪」
お登勢は呆れて溜息を吐き、外道丸は更に愉快そうに笑う。
＊
一方の近藤、ルーテシア、山崎、ディエチ、アギトの5人も警備を行っていた。
と言うより山崎とディエチだけはデート気分で楽しんでおり、近藤、ルーテシア、アギトの3人はそんな2人の関係を見守っていた。
そこに、偶然にもエリオと月詠の2人と合流する。
「あ、皆さんもお祭りですか？」
「おお、エリオ君に月詠殿じゃないか！」
エリオ達は親しげに挨拶をする。
「実は僕達も機動六課の一員として警備をしているのですが……なんか隊長達は警備っと言うより銀さんと桂さんのデートって感じですが……」
「ああ、あの3人ならあり得ますね」
エリオの呆れた表情で山崎も強い同様を抱く。

「それで、わっち等はわっち等の方法で警備をするつもりじゃが…
…どうも管理局のやり方は好かんから、わっちは神楽とエリオと一
緒に祭りの場を回っておこうと思ってな……」

管理局のやり方に不満を感じている月詠。
何故なら管理局の傲慢さと裏のやり取りは、以前にスカリエッティ
から聞かされたのであった。
彼等は己のやり方のためならどんな犠牲を払ってでも目的を達成さ
せ、別の世界に入り込んで己の正義と言うなの偽善な行為で目的を
達成させる。
中には己の間違いを世間に知らせられる前に、都合のよさで被害者
に責任を押し付けさせて打ち消している様である。
そして自分の障害になる物を、都合勝手な理由で問答無用で壊すな
ど管理局の犠牲者は今だ少なくない。
それはある意味、幕府と一緒である。

「……」

幕府を護る為の特殊部隊『真撰組』の局長である近藤にその監察方
の山崎も複雑そうな気持ちを抱く。
管理局はある意味、幕府と一緒であった。
自分の弱さを認められずに侍達を廃墟と化した事は嫌と分かってい
るが、もし幕府に拾われなかったら今の自分たちはいなかった。

「……てあれ？そう言えば神楽ちゃんは？」

沈黙を打ち消すように山崎は神楽の存在に気づく。

「神楽さんは、ちょっとおしゃれしてくると言ってまだ機動六課に

いますが……」
「おまたせー」
とエリオ達の後ろから神楽の声が聞こえた。
ようやく来たかと思ったら……
「オッス……だいぶ待たせたアルナ、エリィ、ツッキー」
神楽は2人に声をかける。
エリオと月詠はやっと来たと安心して、近藤とルーテシアはいつもと雰囲気が違う神楽に「おー」と驚く。
そして山崎、ディエチ、アギトの3人は口があんぐりするほど開いていた。
それは、神楽の雰囲気が違うのではなく……神楽の姿が全く別人と言うべきほど違っていた。
青色の瞳にオレンジのセミロングの髪を両サイドで纏めてぼんぼりで団子状でツインヘアーのヘアースタイル。
紅いチャイナ服に腰に筒のような物で傘を納めて、頭にゴーグルをかけている。
そして夜兎族がいつも被っている様なブーツをかぶって、胸が豊満ともいえるほど大きくなっていた。
つまり簡単に言えば、神楽の姿は『第三百二十四訓：夏休みあければ皆ちょっと大人に見える』で2年後に成長した可憐なる姿であった。
「……／／／」
完全なる美少女化にエリオは思わず見惚れて顔を真っ赤になっていた。

月詠はそれを気にせずに感想を言い出す。

「うむ、女としての魅力が上がっておる。吉原の遊女達にも引けをとらないぐらいに」

「ツッキーに言われると嬉しいね♪」

月詠に褒められて喜ぶ神楽。

近藤も続いて神楽の変わりように感心して驚く。

「いやー、チャイナも別嬪になったじゃないか！お妙さんに匹敵するぐらい！」

「当然ネ♪」

『『誰エエエエエエエエエエエエエエエ！？』』

オシャレと言う次元を超えた全くな別人と言えるほどの存在に山崎、ディエチ、アギトが大叫びによるツッコミを炸裂させる。

「何だよその姿！？オシャレって言うより成長じゃねぇか！完全に『銀魂』原作の第三百二十四訓に出てくる姿だろうが！」

「と言うより昨日までいつもどおりだったのに、どうやってここまで成長したんですか！？」

アギトとディエチは神楽の急激な成長に理解できなかった。

「イヤー、老いぼれとスカが以前に『びっく・ひゅまめいど・えぼりゅしょん』と言う機械（からくり）の改造版が完成したと聞いて、それを知った私は、実験台となって2年後の姿にしてもらったアル♪」

「スカってドクターの事か！？てかそれって『ビック・ヒューマイドエボリューション』の事か！？」

だとしたら、2年後の神楽の姿は完全に美少女という存在となっている。
美しいその未来の姿を、ヴィータ、キャロ、九兵衛が見たら女の嫉妬が溢れ出るであろう。

「なるほど……で、どう思うエリオ君」
「え!?／／／」

山崎に声をかけられて我に返るエリオ。
改めて見ても可憐な美少女として成長した神楽を見て思わず見惚れているが、我を忘れる前に感想を言い出す。

「……凄く可愛くなったと思います……とても、月詠さんと同じく見惚れてしまうぐらい……」
「ほんとアルカ!?オラ、凄く嬉しいヨ!」

と嬉しさの余りにエリオを抱きつく神楽。

「!!!!!／／／／」

神楽に抱きつかれて更に顔を真っ赤になるエリオ。
成長した神楽の大きな胸がエリオの体に押し付けられていた。

(胸がぁぁぁぁ!神楽さんの豊満な胸がぁぁぁぁぁぁ!……でも……凄く心地良いかも……ああ、なんか神楽さん良い匂いがして……)

「よし、じゃあ早速出発ネ!」
「そうじゃな」
「ふぁ……ふぁ～い／／／」

3人揃った事で、そろそろ警備を開始する神楽、月詠、エリオの3人。

「んじゃ、行ってくるアル」
「おお、たくさん楽しんで行けよ！」

神楽と月詠は、それぞれエリオの手を握りだす。
そして3人とも手を繋いだまま祭りの場を歩き出す。

「完全に惚れているな……あのガキ」
「うん……コレの光景がキャロに見られなかっただけでも良かったね」

アギトとルーテシアはこの場にキャロがいなかった事に安心を抱く。
彼女が今のやり取りを見てたらとんでもない事が怒っていたと言う次元では済まされないであろう。
コレには、近藤、山崎、ディエチも同感であった。

「にしても、2年後のチャイナがあそこまで美しくなると言う事は……これはキャロ殿もうかうかしてたらエリオ君が取られてしまうではないか？」
「へぇ～。誰が誰かに誰を取られるですかぁ？」
「いや、キャロ殿がチャイナにエリオ君……おぉ？」

思わず言ってしまった言葉が最も聞かれてはいけない人物に聞かされてしまった事に青ざめる近藤。
恐怖に染まって青ざめ、ゆっくりと振り向くと……両手に『戦国〇ＡＳＡＲＡ3』の立〇が使用する『雷〇』の血の色に近い黒に染まったチェーンソーを2本ずつ持っていて、恐怖の仮面を被っている

バリアジャケット衣装を着ているジェイソ○……ではなくてジェイソ○と化したキャロがいた。
小柄な身から放たれる脅威な殺気に近藤は大量の汗を流す。

（えええええええええええ！？何でいるのぉぉぉぉ！てかあれ、何か『戦国○ＡＳＡＲＡ３』の立○が使用する『雷○』じゃない！？何でキャロ殿が持ってんの！？てかその『雷○』に染み付いている血は何！？メッチャ怖いんだけどぉぉぉぉぉぉ！）

「うふふ……近藤さん、外見はゴリラだけじゃなく面白い事も言うんですねぇ……」

「い……いやー、ゴリラっぽいとは言われますけど……別に面白い事を言った訳では……あ……あはははははははは！」

近藤はどう対処すべきかを考えながらごまかして笑い出す。
徐々に殺気が大きくなる一方で、近藤はルーテシア達に助けを求めるが……ルーテシア、アギト、山崎、ディエチは当然、店の人や一般人もキャロの脅威な殺気に怯えてこの場を逃げ出していた。

「でもねぇ……なんで……なんで……なんであのお邪魔虫（神楽）が無駄な成長をするだろう……第４期でも私全然成長できないのに……そんなまがい物の姿でエリオ君を……エリオ君を……あの悪女がぁぁぁ

正に恐怖の大魔女としかいえない。

「あはははははははははははははははははははははは！壊れろ壊れろ！こんな祭りなんか壊れてしまえばいいんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「お妙さァァァァァァァァァァん！トシィィィィィィィィィィィィィィィィ！総悟ォォォ

第八十四訓：祭りは派手にやるのが楽しい（後書き）

黒神
「いやぁ、まさか神楽の二年後の姿があんな可憐な姿になろうとは……この黒神、思わず見惚れてしまいました」

エリオ
「空知秀秋センセーーーーーーーーーー！ありがとうございましたァァァァァ！」

黒神
「銀さんも見事に天然パーマ卒業だし、（個人的には残念）近藤も雌ゴリラと良い関係になって二年後設定は大正解だと思いますね♪」

九兵衛
「いやァァァァァァァァァァ、妙ちゃんがァァァァァァァァァァァァァ！（血涙）」

近藤
「空知秀秋センセーーーーーーーーーー！俺は凄く幸せですゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

黒神
「と言う訳で新シリアス『銀園祭編』スタートです！」

神楽

「次回、『思わぬ時に再会する時もある』テイクオフアル♪」

第八十五訓：思わぬ時に再会する時もある（前書き）

はやて
「桂さぁ～ん、今日からお姉様と読んで良いでしょうか！？／／／」

桂
「ふふふ、可愛い妹……今日から私の事を『ヅラ子』とお――――」

ヴィータ
「なにオカマになってんだヅラぁぁぁぁぁ！（怒）！」

ドカァ！

桂
「ごふぉおおおおおおおお！」

はやて
「ヅラ子お姉様ぁぁぁぁ！」

エリザベス
『ヅラ子さぁ～ん！』

リィン
「ヅラ子さぁ～ん！」

ヴィータ
「テメェらもわざわざヅラ子と言うんじゃねぇ！（怒）」

ザフィーラ
「……『リリカル銀球Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるぞ」

第八十五訓：思わぬ時に再会する時もある

とある屋台

「うぅ～、フェイトさん、なのはさん、ずるすぎだよぉ～（涙）」

フェイトとなのはの警備命令の利用による銀さんダブルデート行動に、２人を羨ましがるスバル。
そこにキクナエが苦笑して話しかける。

「あはは……随分と好きなんですね。銀時さんの事」
「！？／／／」

突然、銀時に好意を持っていることを言われてキュンと驚くスバル。
実際スバルはすでに銀時と接吻（キス）している。
しかしそれは銀時との２人だけの秘密。憧れから愛する人へと変わっていったのだ。

「そそそそ……そんな！……好きだ何てそう言う……訳じゃ……／／／」
「あはは、顔を真っ赤にしてまで必死で隠そうとするその動揺がその証さ♪」
「うう～／／／」

更に顔を真っ赤になるスバル。
キクナエはスバルの隣に座って酒を飲み始める。

「それにしても、まさかスバルさんがあの陸士１０８部隊部隊長であるゲンヤ・ナカジマさんの娘だったなんて……」

「父さんの事知っているの？」
「はい……僕のアンドロイド技術を最も感動してくれた人で、あの人のお陰で今の僕がいるんです」
父親の知り合いであった事に驚くスバル。
そこに店の店員らしき人物があるものをスバルに差し出す。
「へいお待ち！」
それが出た時、スバルは凄く喜び出す。
「きたー♪」
メッチャ喜んでいる彼女に、キクナエはできる限り顔に出さないようにしていたがそれでも嫌悪感は出てしまう。
何故ならその物体は……丼に入っているご飯の上に、カラフルに大量のアイスが山盛りに乗っている。
恐る恐るにキクナエはスバルに訊く。
「……スバルさん、何ですかコレ？」
「ご飯にアイスクリームタップリ乗った特別メニュー、『スバルギャラクシー』です……食べてみます？」
「い……良いです……」
苦笑しながら断るキクナエ。
それをお構いなしにスバルは『スバルギャラクシー』を美味しく頂く。
キクナエはスバルの味覚がどうなっているかを疑いだす。
＊

そしてスバルが『スバルギャラクシー』を間食した後、スバルはキクナエと話しをする。

「そう言えば、父とはどこで知り合ったんですか？」

「親父はゲンヤさんと親友関係で、そこで８年前に偶然にもゲンヤさんと出逢って様々なことを話してくれました。親父がどれだけ優れた発明家であり、尊敬される人物かを」

「キクナエさんのお父さん？……ひょっとしてあのオクティン・ストォンさんの」

「親父は……僕が尊敬するほど優秀な発明家でした……しかし親父も５年前に事故死で……」

キクナエの父親も事故によって亡くなっている。

スバルは思い出させてはいけないのを思い出させたことに慌てだす。

だがキクナエは暗い雰囲気を打ち消すかのようにスバルにある事を訊く。

「そう言えば、僕ゲンヤさんから貴女の事を聞かされました……何でも時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入ってわずか１年で卒業をされて、あの第６６６魔闘機関の隊長、サナダ・シンゲにスカウトされるほどの逸材であると」

「……」

サナダの名を聞いて少し笑いのない表情になるスバル。

実はスバルには銀時達には隠している事があった。

だがその過去は余りにも血塗られており、他人に言えない程残酷なモノであった。

それは父・ゲンヤや姉・ギンガにも知られていない。

（カウェイン……サナダ隊長……）

かつての仲間を思い出したのか、少し悲しみの表情を出している。

「本当に惜しい人を亡くしたと思うよ……あの人は魔法なしでも戦闘力は魔導ランクＳＳは達していてあの坂田銀時に次ぐ強さを誇っていた……それなのに……1年前のあの事件で……」

「うん…余りにも残酷だった…管理局は私達を捨て駒扱いして敵陣にいた私達もろとも攻撃したんだ…そのせいでみんなは……」

スバルは知っていた。

その事件は管理局でも一部の者にしか知られていない。

信頼した仲間が、管理局によって事故死扱いによって殺されたからだ。

「仲間を失った私は…泣くことしか出来なかった……自分の無力さばかり思い浮かべて何も手につかなかった……でも気付いたんだ。どれだけ後悔して嘆いても誰一人護れやしない。どれだけ無力さを噛みしめても誰一人救えやしないんだって。だから…私はみんなの分まで生きて多くの命を護ろうって誓った。それが死んだ仲間に対して出来る私の最後の【約束】だから」

「仇をとろうとは思いませんか？」

「！？」

突如、仇を討つ事を進めるキクナエに驚くスバル。

「死んでいった中にもかけがえのない者もいたはずでしょ……その人達の為にも管理局を討とうと思った事はありませんか？」

「キクナエさん……貴方は」

「あ、申し訳ございませんが最後の調整があるので……僕はコレで

……」

キクナエはお金を置いて急いでこの店を出る。
しばらくしてスバルもお勘定して店を出て銀時を探そうとすると…
…その瞳に移った人物を見て驚きだす。
その人物も、スバルに気づいて振り向く。
白っぽいピンク色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘアーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー並みの長さをした緋色の如くの瞳。
漆黒ともいえるゴスロリミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せるほどの黒くて長い靴下。
そしてスバルとティアナ並の豊満な胸の大きさ。
スバルはその人物を一瞬見ただけでも誰かを確信した。

彼女もスバルを見てこの場を去ろうとすると、スバルもまた我を忘れて彼女を追いかける。
まさか、このミッドチルダでかつての仲間と再会する事になろうとは思いもよらなかったから。

＊

「おお、ヴァイスの兄ちゃん！」
「ん、お前等か」

ウィンディは鉄砲やの店長がグラサンをかけているヴァイスである事を見抜くと、ヴァイスも着物姿であるチンク、セイン、セッテ、

ウィンディ、ディートに親しく声をかける。

「祭りの店をやっているの？」

「機動六課の一員がこんな所で油売ってて言い訳？」

面白そうに笑うセインに呆れるディート。

「いやいや、こちとらちゃんとした警備だぜ。店の店員の不利をして怪しいやつ等を見つけたら銃で撃ちおとす！」

スナイパーらしき発言を出すヴァイス。

「でも本音は？」

「今月の給料がありえねぇえ程に安すぎたから、ここで金稼ぎなんだよこんチクショーーーーーーーーー！！！！（涙）」

本音を吐いて大泣きするヴァイス。

それを見たチンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディートの５人は彼が本気で可哀想に思えてきた。

「……まぁとりあえず射撃をやっていいか？」

チンクがお金を置いて鉄砲を持つ。

「おうよ！とりあえず何かを当てれば何でもやるから！」

「本当か！？」

ヴァイスの言葉にチンクは眼を輝かせる。

「おうよ、だからジャンジャン撃ってーーー」

パン！

ヴァイスが愉快そうに言い出す中、突如鉄砲が撃たれる音が響きだす。
そしてヴァイスのかけていたグラサンの左側が割れる。

「グラサンを頂こう」

チンクは鉄砲を構えてヴァイスに向かってそう言いだす。

「て、どうしたんすかチンク姉！？」
「思いっきり店員狙っちゃっているけど！？」

ウィンディやセッテもあり得ないと言うばかりに驚く。

「え？ちょっ違……狙うのはあっち……」

パン！

ヴァイスが景品のほうを指差すと、今度は九兵衛がヴァイスの腕時計が鉄砲玉に直撃して破壊される。
鉄砲を撃ったのは、九兵衛であった。

「腕時計を頂こう」

対抗心を燃やしたかのような威圧感を放って、ヴァイスに向かって言う。

「ちょーちょー待て！待てってオイっ！何でもあげるっと言っても

俺のはナシだ！てかおい聞いているかアンタ等！？」

ヴァイスの注意を全く聞かない2人は、対抗心を燃やして睨み合っている。

「おや、こんなところで奇遇だなぁチ●コ？」

ピク！

「チン……おやぁ？そう言う貴様こそ人の名前を間違えるほど頭が老けてきたのか貧兵衛？」

ピク！

「ひん……き……貴様の間違いはわざとらしく感じるが？」

「間違えてやっているのさ貧乳眼帯」

「まだそう言うか？……ロリ眼帯」

互いに鋭い睨め合いをして火花を散らす。

セイン、セッテ、ウィンディ、ディードですらチンクの対抗心には怯えていた。

ここまで相手を睨むチンクの姿が見た事がないからである。

九兵衛もチンクに対する対抗意識が異常なまでに怖かった。

「なんかぁ……俺って邪魔者だからここでぇ～」

と退却しようとするが、ダブル眼帯（九兵衛とチンク）に鉄砲を構えられて容赦なく撃たれる。

パン！

「あた！」
「上着ゲット！」

パン！

「痛ぇ！」
「ドッグタグゲット！」

パン！

「ぎゃふん！」
「ズボンゲット！」

九兵衛とチンクダブル眼帯は意地と意地のぶつかり合いでヴァイスを完全に的扱いしている。
セイン、セッテ、ウィンディ、ディードの4人は自分達では2人を止められないと考え、ただ見守る事しかできなかった。

＊

一方、源外、スカリエッティ、鉄子、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェは機動六課の頼みでレジアス・ゲイズの護衛を任された。
しかしノーヴェは機動六課と力を合わせる事は不安じゃないが管理局の力になる気はない為、気が乗らない。
鉄子は刀鍛冶の途中でナンバーズに誘われた為、せっかくだから参加していた。

一方のクアットロはレジアスがお好み焼きが食べたいと言う理由でお好み焼きを買いに行った。

「たくぅ……なんでアタシ等ナンバーズが管理局の連中の護衛をしなきゃ行けねぇんだよ？」

「しょうがないでしょ、私達は機動六課と同盟を結んだ関係だから機動六課の仕事を一緒にやらなきゃいけないから」

ノーヴェの納得のいかなさにドゥーエが落ち着かせる。

「それにねぇ、ここはあのメインイベントのキクナエ作アンデロイドの美しき舞『百花』が良く見られる特上席みたいな場所だし」

「怠けないでくださいドゥーエ姉様！」

「そうよ……こんな時に鬼兵隊が攻めて来たらとんでもない事が起こるわよ？」

ドゥーエの気楽さに呆れるゴリ……じゃなかったトーレとウーノ。

「ん？今誰か私の事をゴリラ女と言おうとしたものがいた様な？」

「トーレ姉……それは勘違いだよ……」

少しイラっとしたトーレを落ち着かせるオットー。

「しかし、ここの祭りは私の世界と全く同じと思わせる雰囲気が出ている……この世界ではよっぽど銀さんは偉大だったんだ……」

「まぁな。最初は俺も疑ってしまったが、銀の字ならあり得るじゃろ？」

鉄子も源外も銀時の世界をイメージに開催した銀園祭と、銀さんの有名人扱いには驚いた。

確かに彼によって数多くの事件は解決されたから、彼ならやりかねないだろう。
そこに……

「お待たせ～♪」

急いでこっちに走ってくるクアットロ。
両手にはお好み焼きが入っている箱を持っていた。

「遅いぞクアットロ！ちゃんと買ってきたのか！？」

トーレがクアットロの持っているお好み焼きが入った箱を取り上げ、その箱の蓋を開けると……やく半分食べられた状況のお好み焼きがあった。

「御免ねぇ、何かそこの野良犬が飛び込んできてお好み焼きを食い込んできたのよ……この？４のクアットロ、一生の不覚ね♪」

とクアットロは笑って謝罪するが……彼女の口元には大量の青のりが付いている。

「そうか……私はその口元についている青のりの方がが一生の不覚だと思うが？」
「（ギク！？）」

トーレの鋭い眼線で見られ、図星を突かれるクアットロ。

「クアットロォォォォォォォ！」
「この馬鹿者ォォォォォォォ！」
「何頼まれている物を勝手に食ってんだァァァ！？」

ウーノ、トーレ、ノーヴェの3人は激怒してクアットロを容赦なく蹴りだす。

「痛たた！これは違うって！途中で食べた、たこ焼きの青のりよ！」

『『どっちでもいいわぁ！（怒）』』

ドカァ！

「へブゥ！」

クアットロの言い訳でウーノ、トーレ、ノーヴェの3人は怒り出して渾身の蹴りを炸裂させ、クアットロを気絶させる。

「どうするドクタ……てか食っているし！」

ウーノ、トーレ、ノーヴェの3人がクアットロにお仕置きしている中で、源外、スカリエッティ、ドゥーエ、オットーの4人は残りのお好み焼きを食べている。

「別にいいではないか、今日は祭りだから無礼講で行こう」

「そうそう……にしてもこのお好み焼き美味しい♪」

スカリエッティとドゥーエは気楽そうに言い出す。

「それに今日は若僧の機械技術が披露されるイベントもあるそうじゃ。同じ発明家として見届けてやりたいわい」

「だからって、我々は――」

ワァアアアアアアアアア！

観客達が突如、歓喜に叫びだす。
何故なら部隊には数多くの着物を来た女性型アンドロイドが現れて、
その中心部にはキクナエが着物姿で立っている。

「おお、ついに始まるか！」
「あれが天才発明家、キクナエ作のアンドロイド……なんとも美しい、まるで人間そのものだ！」

観客達もかなりの高い評価でキクナエのアンドロイドを褒めまくる。
そしてアンドロイドの踊りが始まる。
人間そのものの動きに連係しあうその華麗な動きは誰もが見惚れてしまう程であった。
そこには、フェイトとなのはも見惚れている。
しかし彼女等は先ほどまで銀時と一緒にいたはずだが、銀時がフェイトとなのはの分を含め、綿菓子を買いに行ったのであった。

「うぁあああ、綺麗な舞だね、フェイトちゃん！」
「うん！アンドロイド技術をここまで上昇させたキクナエさんって凄いよ」

キクナエの予想以上の技術の高さは2人も認めるほどである。
誰もがアンドロイドの舞を見惚れる中、この時まだ知らなかった。
この『銀園祭』が地獄の祭りに変わる事を。

＊

一方の銀時は、綿菓子を買い終えて急いでフェイトとなのはの所に向かう。

「やっと見つけたよ綿菓子売ってるところ……そろそろキクナエの機械（からくり）ショーが始まる頃だなぁ」

今通っている所は人気のない場所である。
誰もがキクナエのアンドロイドの踊りを注目して向かっているため、1人もいないといっても良い。
あと少しでフェイトとなのはの所に到着する中……

「おいおい、せっかくの祭りだってのに随分と寂しい所にいるじゃねぇか？」
「！？」

突如の背後からの一声に銀時は驚きながら後ろを振り向く。
その瞬間に、黒い獣の刃が銀時を襲うが銀時はその斬撃を交わす。
しかしせっかくの綿菓子3つがまっ二つに切れた。

「くくく……良くかわしたなァ？やっぱ『白夜叉』となると反応が違う訳かァ？」

男は不気味な笑いをして銀時を見る。
黒い獣のような鋭い眼線に右手に持っている鍔無き刀。
そして派手な着物に左目の部分に包帯を巻いている。
その男、『鬼兵隊』のリーダーである高杉晋介が銀時の前に再び姿を現した。

「なんでてめェがここにいやがる？」

怒りに篭った眼で高杉を見る銀時。
その覇気は『白夜叉』としての存在に近いほどである。

「せっかくの祭りだから、どんな面白い祭りをしてんのか見に来たら……まさかここでてめぇと再会するとはな」

祭り好きな高杉は、『銀園祭』に強く興味を持っている。
そこでどんな祭りをするのか見に来たら、まさか銀時がいるとは高杉も驚いていた。
だとすれば、桂もいるのではないかと確信する。

「実はな、先日今回の祭りの目玉の機械(からくり)ショーをやるキクナエって奴に会ってよォ…コレがまた粋の良い獣を飼っててな。【牙】を突き立て様と今か今かとのたうち廻ってるじゃねぇか……」
「高杉……まさかテメェ」
「まぁ…黙って観とけ。コレからすこぶる愉しいショーが始まるぜ。父親を管理局に奪われた息子の派手な血の祭りがな」

＊

アンドロイドのカーニバルが終わると、観客から盛大な拍手が送られる。
キクナエはアンドロイドと一緒に頭を下げる。
そして大きな特上席で拍手を送っているレジアスとオーリス、そして他の管理局のお偉い方のほうに団扇を向けると……

「紅桜……機動！」

キクナエの命令にアンドロイドは突如、右腕から巨大な紅色に輝く

巨大な刀が現れる。
それを見たフェイト、なのは、源外、スカリエッティ、鉄子、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、オットー、ノーヴェが驚きの表情を表す。

「狙うは管理局の首なり！」

第八十五訓：思わぬ時に再会する時もある（後書き）

黒神
「と言う訳で今回の『スバルギャラクシー』は烈火竜さんの許可を貰って出させてもらいました。烈火竜さん、ありがとうございました！」

月詠
「次回、「イベント最中のトラブルが発生した場合、どう対処すれば良いのかは冷静で判断しずらい」テイクオフじゃ」

第八十六訓：イベント最中のトラブルが発生した場合、どう対処すれば良いのか？

黒神
「スバル、サディストさんから一言来てるぞ」

スバル
「サディストさんが？」

～～～

サディスト
「お前さん…かなり『辛い経験』をしたみたいだな。
仲間が信じてた人達（管理局の奴ら）に殺されたなんて…

それでも【復讐の道】に走らず、己の【武士道】を貫き歩いてきた事は『誇り』だと思うぞ。

その真っ直ぐな【信念】最後まで貫き通せよ。」

～～～

スバル
「……サディストさぁ～ん！ありがとうございます～！（涙）」

余りの感動に涙を流すスバル。

黒神

「と言う訳で『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！」

第八十六訓：イベント最中のトラブルが発生した場合、どう対処すれば良いのか

突如、アンドロイドの手から現れた紅色の大刀。
観客達はコレで剣舞をするのかと思った。
リリカル組はあんな物をアンドロイドに装着させてた事に驚くが、
源外、スカリエッティ、鉄子の3人だけは違った。
特に鉄子にとってもあり得ないほどの衝撃的でもある。
アンドロイドについている刀、兄の心を汚した忌まわしき刀は忘れ
たくても忘れられない。

「紅桜!?何であれが!?」
「まさか!」

どうして紅桜がここにあるのか理解できない鉄子に、まさか鬼兵隊
と手を組んだのではないかと思い浮かべるスカリエッティ。

「殺れ」

キクナエの一言でアンドロイドが大きく飛び込み、それが一気にレ
ジアスのところまで一気に飛び込んできて、紅桜を振るう。

「!?」

レジアスは突如の奇襲に驚きを表し、オーリスも父を庇おうとする
が……反応が遅すぎて間に合わない。
絶体絶命と思われた瞬間……

ガキィン!

突如、トーレがその前に紅桜を『インパルスブレード』で防ぎだす。
しかし紅桜の力は異常なまでに攻撃力が高く、トーレですら防ぎきれない。

「ぐぅぅ！」

思わず少し吹飛ばされるが、それでもバランスを崩さずに倒れなかった。
そしてトーレはレジアスに向けて逃げる様にと言い出す。

「逃げろ、ここにいては斬り殺されるだけだ！」

トーレの忠告を聞き入れ、本来ならば管理局の首都防衛隊代表であるレジアスに対する命令は頭が高いが、状況は一気に危険な方向に進んでいた。
ここはトーレの言う通り、管理局は素早く逃げ出すようにこの場を去ろうとする。

そしてアンドロイドがゆっくりとステージに下りて来ると、観客たちは恐れだして逃げ出す。
それはもう慌しく理性を失いそうな恐怖であった。

「フェイトちゃん！」
「うん、分かっている……あのアンドロイドについている剣、ただの剣じゃない！とてつもない狂気を感じる！」

なのはとフェイトもバリアジャケットに転装して、『レイジングハート』と『バルディッシュ』を構える。

「フェイト・テスタロッサ、高町なのは！」

そこにスカリエッティが先頭に、源外、鉄子、ウーノ、ドゥーエも2人に近づいてきた。
クアットロとノーヴェはトーレの援護に回っていた。
何やら慌しいようであるが、どうやら急な事件発生だけではないようである。
鉄子はあのアンドロイドの腕についてある剣こそが、鬼兵隊の対戦艦用機械機動兵器である『紅桜』である事を伝えると……

「ふぇえええええええええええ!?あれが銀さん達が言っていた鬼兵隊の……」
「でも、何でキクナエさんが鬼兵隊の兵器を!?」

初めて見る紅桜に驚くなのはと、どうして紅桜を持っているか疑うフェイト。
スカリエッティと源外の脳内には、最悪なシナリオが思い浮かべていた。

「源外殿!」
「ああ、高杉の仕業じゃ!奴め……キクナエの中に眠る憎しみをこじ開けやがった!」

おそらく、キクナエの父親が管理局の手によって殺された事をどこかで知ってキクナエの中に眠る憎しみを起こしたに違いない。
まさかの展開に驚く源外とスカリエッティ。

「もう二度と見たくなかった……あんな禍々しい刀は」

鉄也の心を惑わした忌まわしき妖刀の前に、鉄子は紅桜を敵対してみる。

そして観客がいなくなったと確信したキクナエは更に大勢の紅桜を持っているアンドロイドを呼び出す。

「観客は消えましたか……全員総攻撃開始！」

そして脅威の妖刀がフェイト達に襲い掛かる。
先頭に7体のアンドロイドが飛び込んできてフェイト達を襲い掛かる。
返り討ちにしようとするが……

「おおおお

空から白い魔力砲が放たれて、それがアンドロイドを飲み込んで跡形もなく消滅する。
援護に来た桂、エリザベス、はやて、辰馬がフェイト達と合流する。

「桂、エリザベス！」
「はやてちゃん、辰馬さん！」

まさかの援護にフェイトとなのはは驚く。
今のは正直言って危なかった。

「我ながら間一髪だった」
「遅れて御免なぁ」
『助けに来ました』

桂、はやて、エリザベスの3人も、キクナエのアンドロイドのカーニバルを見に行こうとしていた。
しかし突如の観客が慌てて逃げる所を見かけ、何か事件が起こったと確信して急いで駆けつけた。
辰馬も何やら怪しい感じがしてこの場に駆けつけてきたのである。

そしてアンドロイドの腕についている紅桜を見て辰馬は桂に訊く。

「ヅラァ、あれが高杉が『鬼兵隊』に作らせたっちゅう兵器…【紅桜】か」
「ああ……使用者に寄生し戦闘力を驚異的までに上げ破壊の限りを尽くす悪魔の兵器だ。だが、あれはまだ未完成のようだ……それともう一つだけ言っておく。ヅラじゃない桂だ」

以前に見た似蔵を取り付いた紅桜と比べると、まだ完成度が低かっ

た。
おそらく、アンドロイドの紅桜はまだ戦闘データを持っていない。
叩くなら今のうちだと考える。

「…ほぅか。んならサッさと破壊した方が良さそうじゃの？」

紅桜の恐ろしさを知らない辰馬は、おそらく自分の想像をはるかに超えた脅威な剣……じゃなく兵器だと考える。
ならばとんでもない事が起こる前に破壊したほうが速いと確信して剣を構える。
アンドロイドは次々と紅桜を構えて襲い掛かる。

「来るぞ！」

＊

事件が発生した直後、銀時と高杉は刀を持って睨みあっている。
銀時の眼からは怒りが、そして高杉の眼からは狂気が満ちている。
思えば銀時が歌舞伎町で高杉と再会したのもこの様な感じであった。

「知ってるか銀時？キクナエの父親、オクティン・ストォンの事をよォ」

高杉がキクナエの父親『オクティン』の名を出すが、銀時はその名を知らない為今一ピンとこない。

「魔力は俺達と同じで全くないが、奴の機械（からくり）の扱いと技術は一級品だった。それに目をつけた管理局の連中は奴の技術を利用し、強力な機械（からくり）兵器を造ろうと考え奴に頼み込んだ。だが奴は断った。管理局の傲慢で自分勝手な考えに気付いてな。…だが、そんな男も結局

は管理局に消されちまった。奴らは事故に見せかけてオクティンを始末したのさ。利用できない技術者など必要無いってお題目でな…」

上に逆らえば、敵と見なされて削除される。
確かにキクナエほどの発明家の父親なら強力な兵器を作れるのもおかしくはない。
おそらくそれが敵対象と見られたであろう。

「全く酷い話だぜ。自分達の都合で事故に見せかけて始末した上に、そいつに全ての罪を擦り付ける最悪なデマを流したんだからな？」
「最悪なデマ？」

高杉はオクティンの死に対する真実を言い出した後、更に深刻な情報を銀時に言い出す。

「オクティン・ストォンを調べたら、管理局の上層部を暗殺する計画を立て強力な機械（からくり）を造っていた』ってな。……管理局は自分達の命令を無視し協力しないオクティンを徹底的に犯罪者扱いし、死後も奴の名が犯罪者として残るように汚名を着せ全て罪を奴に擦り付けた。……それを知った息子がどう思ったか想像にかたくねぇよ。」

今でも思い出すキクナエのあの時の憎しみの憎悪。
高杉は愉快そうに不気味に笑い出す。
獣の牙が生えてきた事が、何よりも面白くてたまらない。

「高杉、何でお前がそこまでキクナエの親父さんの事を知ってやがる？」
「以前、てめぇに『アルハザード』の秘術を使い似蔵を蘇らせた事を話たよな…覚えてるか？」

人斬り似蔵の思わぬ再会を思い出す銀時。
それと同時に銀時の奥底から怒りを表す。

「てめぇ……まさかオクティンを！」
「ククク…そうさ…奴の管理局に対する憎悪の記憶だけを残して生き返らせた。奴の復讐心のお陰で未完成だが【紅桜】を大量生産できたしな」
「紅桜を！？」

まさか、紅桜まで作る事ができるとは予想外。
いかにミッドチルダ一の発明家でも刀を作る事は……いや、機械（からくり）と融合したあの忌まわしき兵器なら作れないことはない。

「万が一の為に村田鉄矢が作った制作データを残しておいた。そいつをオクティンに見せたら……本物の紅桜にゃ程遠いが実力の４割は引き出せる兵器が出来ちまった。そいつを大量にキクナエに渡したからな……今頃祭りは面白れぇ事になっ…」

ガキィン！

高杉の言葉の途中で銀時が凄まじい速さで木刀を振るうが、それを脅威の反応で刀で防ぐ高杉。
銀時の眼はいつもの眼ではなく、白夜叉としての眼線であった。

「どけ、高杉……てめェと話し合ってる暇ねぇんだよ……」

凄まじい殺意と威圧感を放っている。
通常なら誰もがそれに答えて気絶するが、高杉は愉快そうに笑う。

「そう慌てんなよ銀時ィ…奴を止めようとしても無駄だぜ。キクナエはすでに手遅れだ。なんせ憎悪と憎しみに取り付かれてた復讐者だからな…今の奴を動かしてるのはその2つ。牙を折らなきゃ止まらねぇよ…そう言やぁてめぇに一つ訊きたい事があったなァ」

ある事を思い出した高杉は、銀時にある事を訊き出す。

「起動六課のフォアード部隊にスバル・ナカジマって小娘がいるだろ？4年前にてめぇに助けられ、てめぇに憧れて侍道を学んだそうじゃねぇか。ククク…魔法をぶっ放すこの世界で俺達の世界の侍道を学ぶたァ随分と酔狂な奴もいたもんだな」

「スバルの事はてめェには関係ねぇだろ」

「クク…確かにな…だが似蔵と万斉もスバルって嬢ちゃんを高く買って認めてたぜ。魔法を使わなくても一流の剣各顔負けの神速抜刀術だってな」

2人の部下から聞かされたスバルの強さ。

確かに魔法に頼る魔導士にしては身体能力が他の魔導士どころが、そこいらの侍より高い事は確かである。

「俺ァ、その嬢ちゃんがどうやってその強さを手に入れたか興味を持った。だから色々調べさせてみた…そしたら面白い事が解ってな。あのガキとんでもねぇ過去を隠してやがったのさ」

「てめぇスバルの過去を調べたのか！！」

「スバルが時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校をわずか1年で卒業させられた事は知ってるかぁ？」

「何！？」

わずか1年でスバルは訓練校を卒業。

そんなのおかしすぎると銀時は思ったが、それが本当ならもしかし

たらとある事を思う。
高杉は銀時の様子を見てニヤリと笑う。

「そう、今てめぇが考えてる通りだ。訓練校の教官達からすれば魔法に頼らないスバルの剣術は、魔法を主体にしている訓練校に泥を塗る行為と考え、スバルを強制的に卒業させた。そしてサナダ・シンゲと言う男に誘われ『第６６６魔闘機関』と言う義勇軍に入った。そしてある特殊部隊が結成されたのさ」
「ある特殊部隊？」

このミッドチルダには様々な部隊が存在すると聞かされたが、その様な部隊はフェイト達から聞かされてはいない。
その特殊部隊の名を高杉は言い出す。

「特殊魔導士部隊『魔剣七勇士』。魔法だけじゃねぇ、純粋な剣術にも優れた７人の魔剣士がオーバーＳランクを遂行する為に作られた特殊部隊。歴代最強の魔導師集団として恐れられた……だがそれが仇になった。それが気に入らない管理局の連中はＳＳランクの任務を遂行していた『魔剣七勇士』と『第６６６魔闘機関』を敵陣ごと大砲でぶっ放し壊滅させた……スバル・ナカジマはその『魔剣七勇士』の生き残りなんだよ」
「なぁ！？」

機動六課に入る前のスバルが、その様な部隊に入ってた事には予想もしなかった。
だとすれば、その様な強力な部隊に所属してたんならスバルのあの急激なる速い成長とフェイト達をも凌駕する実力に納得はいく。
そんな銀時に、更なる衝撃的な事を言い出す高杉。

「ククク…驚いたろ？しかもなァ俺達『鬼兵隊』にも『魔剣七勇士』

の生き残りが、『第６６６魔闘機関』が開発した瞬間移動装置で江戸に瞬間移動し、俺達がこの世界の存在を知る前にミッドチルダを潰す為に入ったのさ。しかもスバルに強い憎しみを抱いてやがった…ククク…面白いだろ」

「スバルと同じ……『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の生き残り？」

「今頃、かつての旧友同士が再会を果たしているだろうよォ……ククク……」

＊

突如、眼を合わせた１人の少女を必死に追いかけるスバル。
辺りは森の中でここはドコなのかはどうでも良かった。
今はただ必死で追いかけるのに集中していた。

「……」

そして少女は回りを見渡すと、ピタリと止まりだす。
そんな少女に反応してスバルも急激に止まりだした。

「はぁ…はぁ…はぁ……」

息が荒くなるほどに必死に走っていたようである。
そんな事は気にしないばかりか、スバルはゆっくりと少女の方を向く。
少女はスバルにゆっくりと振り向く。
その顔を見たスバルは、まさかの再会に驚くのであった。
かつて、自分と同じ部隊に入って共に戦った盟友の１人。
スバルは思わずその少女の名を言い出す。

「……アリマ・ヴァンミリオ……」

『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の生き残りで、スバルにとってもかけがえのない仲間である。
剣の腕も魔法も優れた一流の魔剣士で、さらには仲間思いの心優しき人物。
そんなかつての盟友の再会に思わず喜びだすスバル。

「久し振りねスバル……まさか貴女とここで再会を果たすなんて……」
「私もだよアリマ！もうビックリしちゃったよ、突然走り出すからどうしたかと思って……」

確かに、突如の再会には誰だって驚くであろう。
だからって逃げる事はあり得ない。
アリマは少し笑いながら、どうして突如逃げ出したかを言い出す。

「別に逃げたんじゃないよ……」

すると、左手の掌から翡翠の光が現れて、その光の中から真紅に輝くサーベル型の長剣が現れる。
その長剣の先の刃を、スバルに向ける。
突如、剣を向けられたことに驚くスバルだが、アリマは憎しみを込めて言い出す。

「この場で……貴女を殺す為に貴方を連れてきたの！！私達……魔剣七勇士と第６６６特殊魔闘機営を裏切った管理局の下に就き私達の思いを裏切った貴女を！！！！」
「！？」

仇である管理局側にいるスバルを裏切り者として認定するアリマ。

憎しみを持たない魔剣士（スバル）と憎しみを持つ魔剣士（アリマ）。

今ここに、２人の魔剣士少女の因縁が生み出された。

第八十六訓：イベント最中のトラブルが発生した場合、どう対処すれば良いのか

新キャラ、アリマ。

かつて、スバルと同じ『魔剣七勇士』の1人であり、同時に自分達を裏切った管理局に強い憎しみを抱く。

そしてその憎しむ管理局の下に就くスバルに、裏切り者扱いして因縁の相手として姿を表す。

黒神
「今回はスバルの過去を表しましたが、詳しくは外伝で進めますので」

ティアナ
「それより私の出番を増やせ馬鹿作者～～～～～～～～！」

ドカァ！

黒神
「ごふぁあああああああ！」

ギンガ
「次回、『かつての仲間が敵として現れる事はゲームの中じゃたまにある』テイクオフ……私だって出番ほしいよぉぉぉぉぉぉ！（涙）」

第八十七訓：かつての仲間が敵として現れる事はゲームの中じゃたまにある（並

黒神
「ふぅー、ようやくスクーリング終わったぁ」

フェイト
「大変だったね……今日からまた小説の連載再開だね」

黒神
「はい、このままフェイトの出番なしで終わるのって何かヤバイ事になるから……」

フェイト
「私の出番をなくしたら……お仕置き（殺し）しちゃうよ♪」

黒神
「キモに命じますぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！！！

アルフ
「……『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるよ……」

第八十七訓：かつての仲間が敵として現れる事はゲームの中じゃたまにある

かつてミッドチルダには敵はおろが管理局にも恐れられた最強軍勢が存在した。

『第６６６特殊魔闘機部隊』。

人数は少ないが１人１人がＡランク以上の実力を持っていて、特に剣術も優れた魔導士が多い。

犯罪魔導士を拘束し、Ｂランク以上の犯罪者もしくは犯罪組織に対しての抹殺を許可している最強の殺戮魔導軍。

その軍勢の中でも最も高い７人の魔剣士『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』が存在した。

部隊長、サナダ・シンゲが７人の最強魔剣士と認め将来のエースとして認められ、オーバーＳランクの任務を遂行する特殊魔導士部隊。

だがそんな『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』も、『第６６６魔闘機関』もろとも管理局の裏切りによって壊滅された。

そしてその『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の生き残りの魔剣士同士が再会を果たす。

スバル・ナカジマとアリマ・ヴァーミリオ。

『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』でも１・２を争う実力の持ち主だった。

そんな２人が今、敵同士という形で対面している。

「私が……『第６６６魔闘機関』を裏切った！！？」

「そうよ、機動六課と言う管理局の部隊に就いた事が……貴女が管理局に寝返った証！」

怒りを込めて裏切り者扱いとしてスバルを睨むアリマ。
相当なまでに第６６６特殊魔導機菅に心を思っていた。
いくらなんでもスバルはアリマの勘違いであると確信して言い出す。

「待ってアリマ！私は『第６６６魔闘機関』を裏切っていない！今でも死んでいった仲間達の事は……」
「御託は良い！！……１年前に私達『第６６６魔闘機関』を裏切って壊滅させた管理局に対する怒りを忘れたの！？」
「……確かに管理局のやってきた事は許せない……怒りをぶつけずその仇の下に就いてる自分自身が甘いのも自覚してる……だけど仇を討つ為に私達まで死んでしまったらそれこそ仲間達に対する最大の裏切りだよ！！！！」

管理局に復讐を誓うアリマに対して、スバルが憎しみを持たない理由はそこにある。
確かに自分の中にも憎しみと憎悪、そして復讐心が篭った闇は存在する。
それでも、１人では管理局相手には身が重くて何よりも死んで行った仲間達の分まで生きる誓いも破ってしまう。

「それに……たとえ仇を討ったとしても……みんなはもう…」
「うるさい！！！！」

それでもアリマはスバルの言葉を耳に入れずに怒鳴りだす。
余りの迫力に、スバルは少しずつアリマから離れる。

「だからといって、何故管理局の下に入る必要があるの！？何故機

動六課などという偽善な部隊にいるの!?あそこは貴女のいるべき場所ではないハズ!!!!それなのに…何故スバルが……」

アリマは仲間想いが人一倍強かった。
スバルに対しても強い信頼を抱いていた。
かつては自分と双璧と並べるほどの実力と才能を持っていると気づき、良きライバルとして認め合っていた。
そんなスバルが、自分達を裏切って皆殺しした機動六課という管理局の部隊に入った事が自分達『第６６６魔闘機関』に対する裏切りである為、許せなかったのである。

「スバル、貴女は…貴様は忘れたの!?貴様の相棒だったカウェインが管理局に殺された日の事を!!」
「!!??」

～～

「カウェイン!しっかりしてカウェイン!!」

そこはとある城の部屋の中。
周りは瓦礫の山で崩壊した後の光景ばかりが見えてくる。

そこに、血塗られて倒れていて金髪で眼が真紅色の若き青年魔剣士ごと、カウェイン・ナインブレイカとそんな彼の体を支えている１年前のスバルがいた。
さらには後ろにはボロボロで立っているのがやっとのアリマもいる。
カウェインの体中から血が流れていて息も浅くなっている。
脈も弱まってきて内蔵もボロボロの状況になっている。

これはもう助からない状況であった。

「死んじゃやだよカウェイン！！銀時さんみたいな剣士になるんじゃなかったの！？」

その瞳から涙を流しながら、必死に声をかけるスバル。

生きてほしい！

かけがえのない仲間が眼の前で死ぬ事は耐え切れないスバルはカウェインが死なない事を望んでいた。

「……スバル……」

「……カウェイン！！」

弱弱しいがカウェインは、スバルの名をゆっくりと言い出す。

そして震えながらも右手を伸ばして、彼女の頬っぺたを軽く触れる。

「……お前は……生きろ……どんな事が起ころうと……自分の信じた道を進むん……だ……これから数多くの試練が……お前を待っていようとも……俺は……お前を見届ける……」

「何言っているのカウェイン……？お願いだから生きて！生きてこれからも夢を追いかけようと誓ったでしょ！」

カウェインの最後の遺言を恐れ、そして悲しみの余りに涙を流すスバルは受け切れなかった。

最も信頼する仲間が今ここに終焉を迎えようとしているからだ。

「……俺が……俺達『第６６６魔闘機関』が消えても……生き残ったお前達の中で……俺達の魂は生き続ける……」

徐々に薄れていく光景に消えていく感覚。

もう最後だと確信して、最後の力を振り絞って思いを伝えるカウェイン。

「……スバル……」

カウェインはゆっくりとスバルを振り向き、こう伝える。

「スバル…お前が…俺という剣士が……存在した証だ…」

自分が剣士として生きた証、強くなってきた証、剣士としての全ての証こそが……スバルである事を伝える。

「……私が……カウェインの……」

自分がカウェインの剣士としての証であった事を、今の状況では分からなかったスバル。

カウェインは全てを伝えきり、悔いがないような満足した笑いを浮べ……ゆっくりと眼を閉じる。

そして……カウェイン・ナインブレイカと言う魔剣士は、この世からいなくなった。

「……カウェイン……」

黙り込み、動かなくなったカウェインに気づくスバル。

屍と貸したカウェインを動かしても、彼の眼が開く事はなかった。

「……う……うう……うあぁ……ああ……」

彼女の瞳から更に涙が流れ出す……

パートナーとして共に生きてきたかけがえのない親友の死を、そして護れなかった己の無力さを思い知り……

「アアアア

打ち消すように怒鳴るアリマ。

「……出来れば刃を向けたくなかったけど……裏切り者である貴様だけは、絶対に許さない！」

かつての仲間とは言え、管理局に就くスバルに剣を向けるアリマ。
スバルも出来ればアリマには敵に回したくなかったが、かつての仲間という理由な訳ではない。

アリマの持っている剣、黒と紫色の混色に輝き鍔の中心部に埋め込められている金色の宝石。
スバルの使用する『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』と同じ七星神刀（しちせいしんとう）の１つ、サーベル型の魔剣デバイス『フラガラハ』である。
更にアリマは剣の実力も超一流で１０年に１人の逸材と評価されており、スバルと双璧となる実力の持ち主である。
しかもアリマは珍しく、左利きである事だ。

「剣を抜いて、スバル！」

裏切られた憎しみで憎悪を込めて叫ぶアリマ。
そしてスバルは無言でバリアジャケットに転装する。
頭にかけている鉢巻に白いロングヘアー。
背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』に左手に握っている鞘に納刀されている『ティルヴィングエア』。

すると、スバルはバリアジャケットの衿に突いている小さな蒼いボタンを押し出す。
するとスバルの魔力が大幅上がりだした。
つまりこれはスバルの魔力リミッター解除である。

実ははやてが、万が一ＡＡＡランク以上の強敵に出会った時の為にスバルが独断で魔力リミッター解除が出来るようにとシャーリーとマリーに頼んで作らせた特殊装置である。
それはつまり、スバルの全力全開モードであった。

しかしスバルは魔力リミッターを解除しても、アリマ勝てるのか分からない。
何せアリマは、スバルが『第６６６魔闘機関』だった頃でも互角に渡り合える実力の持ち主であり、剣術も魔法も優れている事から自分にとっても完璧なる魔剣士と思わされた。
剣で交えた回数は数え切れないほどだが、今だ全て引き分け。
それでもその強さは間違いなく自分の上は行っていると思う。

そんなアリマと一年ぶりの再会を果たしても、見ただけで何故かわかった。
アリマがどれだけ強くなったのかを。
自分の想像を超えてもおかしくないぐらいに。

スバルは居合いの構えをしてアリマを見つめる。
しかしその眼はいつもの真剣な眼ではない。寂しげが篭っている眼であった。

「感動の再会ってな訳には行かないよね……」

「そうね」

再開後の会話は終わり、突如の大きなステップで2人の姿は消えた……と思いきや結構離れていた距離なのに、いつの間にか2人の剣はぶつかり合っていた。

スバルの神速の居合いにアリマの閃光と思わせる凄まじい剣速がぶつかり合って、剣がぶつかって引きずり合う音が響きだしていた。

そして2人はなぎ払ってバックし、お互いに剣を構えだしながら……

「ティルヴィングエア」

≪Ａｇｒｅｅｍｅｎｔ≫

「フラガラサ」

≪Ｃｏｎｓｅｎｔ　ａｎｄ　ｍａｉｎ≫

スバルの『ティルヴィングエア』が蒼く光り、アリマの『フラガラサ』も黒紫色に輝く。

「蒼波一閃！」

「レイズスピア！」

『ティルヴィングエア』を神速に振るって蒼い魔力刃を放つスバルの魔法と、『フラガラサ』を素早く突きだすように振るい、黒紫の魔力矢を放つアリマの魔法がぶつかり合う。

そして花火のように砕け散ると、アリマは大きく地面を踏んで高く飛び、スバルをそのまま襲い掛かる。

「天星刃！」

閃光の如くに落下して、その落下速度を利用してスバルを斬りかかるが、斬ったのはスバルがいた場所の地面であった。
スバルは分かっていたようなのか、アリマの必殺剣を交わして左横に瞬間移動した。

「はぁ！」

刀を上斜め右から神速の速さで振り下ろす。
するとアリマの体が突如光りだし、突如姿を消す。
そしてスバルの少し離れた場所から黒紫色の光があふれ出て、その光が消えるとアリマがいた。

これぞアリマの魔剣のデバイス、七星神刀（しちせいしんとう）の１つである『フラガラサ』の能力。
閃光の如くの瞬間移動でレポートが可能になり、さらには光の輝きが大きければ大きいほど切れ味と威力は倍増する。
さらにはそれで幻影を見せる事が可能な剣である。

だがアリマはスバルの動きには感心していた。
自分の『フラガラサ』に引けをとらないスバルの刹那の瞬間移動術は、『ティルヴィングエア』の能力でもなく魔力による強化でもない。
純粋なスバル自身の移動速度の速さであった。
アリマの知っている限りでは、スバルの速さ以前より大幅アップしている。
それだけじゃなく、スバルの背負っている剣は七星神刀（しちせいしんとう）の一角である『ペンドラゴブレイド』であった。
ドコで手に入れたか知らないが、以前より強くなっている事は確かである。

（相変わらず速い……それに以前より動きのキレが増している！……なら！）

「『フラガラサ』、カートリッジロード！」

≪Ｓｐｅｃｉａｌ　ａｔｔａｃｋ　ａｎｄ　ｍｏｂｉｌｉｔｙ≫

ガジャン

『フラガラサ』がカートリッジをすると、アリマの足場から黒紫色の魔法陣があふれ出る。

しかも何故か、アリマの足場だけではなくアリマの周りを囲むように無数の魔法陣が現れる。

「カオス・イリュージョンシャドウ！」

そして魔法陣から黒紫の光があふれ出す。

光が収まって消えると、そこには１１体のアリマがいた。

本来誰もが驚くはずだが、アリマの戦術を知っているスバルには分かっていた。

アリマの『カオス・イリュージョンシャドウ』はティアナの使う魔法の一種のように、幻影タイプの特殊型魔法。

１０体の幻影を生み出し、相手を惑わす。

コレだけならティアナの『フェイクシルエット』のような幻影魔法と一緒だが……違う所と言うより最大の特徴は幻影体も本体の様な意志を持っていて攻撃が可能である。

発動中は他の魔法が使えないのが欠点だが、それでも閃光の如くの速さと連係攻撃は可能である。

「イリュージョン・ソードダンス……アリマのお得意の幻影剣技……」

久し振りに見るアリマのお得意の魔剣技に、警戒するスバル。
そして一気にアリマ本体と１０体のアリマが襲い掛かる。
閃光の如くの突きが５体同時に放つが、スバルは素早くジャンプして交わす。

だが２体のアリマが、前後に同時に『フラガラサ』を素早く振るう。
スバルの神速ほどでは無いが十分速い剣速が容赦なくスバルを襲うが、スバルは神速の居合いで前のアリマ、そして鞘で後ろのアリマの剣撃を防ぎ、そして駒回りの様に回転して剣と鞘をなぎ払うかの様に振るい、２体を吹飛ばす。

しかしピンチはすぐにやってきて、アリマがスバルに向かって飛び込んで『フラガラサ』を構える。
だがスバルもすぐに『ティルヴィングエア』を鞘に納めて居合いの構えをする。

「蓮牙！」
「斬蒼！」

アリマの閃光の如くの連続突きとスバルの神速の連続居合いがぶつかり合う。
連続攻撃による剣と剣の轟音が連続に響きだす。
そして２人の攻撃が終わると、同時に地に着地する。
これ以上の幻影攻撃を繰り返されればアリマが有利。
早く止める為にと、スバルの足元には蒼色の魔法陣が現れる。
そして蒼く輝く２０本の魔力刀が現れる。
その魔力刀は高速回転して電撃を発生させ、一気に放たれようとする。

「エクスキュート・ザ・ソードブリッツ！」

放たれた電力に包まれた魔力刀は一斉にアリマの幻影体達に向かって放たれる。

だが『フラガラサ』でなぎ払って斬る、避けて交わす、魔力障壁で防ぐなど完全に護りに達成した。

そして閃光の如くの速さで、アリマの本人と幻影達はスバルを囲み、『フラガラサ』を構えだす。

『『幻影蓮牙！』』

アリマの剣技『蓮牙』と幻想魔法『カオス・イリュジョシャドウ』の合体魔剣技が炸裂される。

流星とも言える無数の連続突きが容赦なくスバルを襲う。

しかし、始めてみるアリマの魔剣技にそれほどまで驚かないスバルは『ティルヴィングエア』を鞘から抜き、背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』も左手で抜き、２つの剣を構えて二刀剣技を炸裂させる。

「激斬蒼紅！」

蒼く輝く刀と紅く輝く大刀による神速の連続振り。

簡単に言えば『斬蒼』の二刀流版である。

連続攻撃には連続攻撃で対抗するスバル。

全ての突きが終わると、アリマは全く無傷のスバルに驚く。

そしてスバルは『ティルヴィングエア』を鞘に納めて『ペンドラゴブレイド』を構える。

「行くよ、『ペンドラゴブレイド』！」

≪Ｃｏｎｓｅｎｔ≫
「ブレイン・ギガティング！」

何とスバルは『ペンドラゴブレイド』をブーメランのように超高速回転させて投げる。
まさか剣をブーメラン扱いにして投げる大胆な剣技にはアリマも驚く。
アリマ本人と2人のアリマの幻影は大きくジャンプして交わすが、残り8人は余りの速さに交わすのが遅れて横一線に斬られて間っ二つになる。
当然、その中に本体はいない。本体は残り2人の幻影と交わしたからだ。

戻ってきた『ペンドラゴブレイド』を掴むと、刹那の瞬間移動でアリマの前に姿を現すスバル。
右手に『ティルヴィングエア』に左手に『ペンドラゴブレイド』を持っている為、二刀流モードである。
そしてすぐさま神速に2つの剣を振り出し、残り2体の幻影体をまっ二つに斬る。
追加として2つの七星神刀（しちせいしんとう）を同時に振るうスバル。
そんなスバルに対してアリマも『フラガラサ』で『ティルヴィングエア』を、左手に放たれた黒紫の魔力障壁で『ペンドラゴブレイド』を防ぐ。

「驚いたわ……まさか神速の居合剣術だけじゃなく、七星神刀（しちせいしんとう）の神速二刀流を使いこなすなんて……しかも二刀を扱うタイミングにほとんどズレがないわ……」
「そうでもないよ…『ペンドラゴブレイド』の方はつい最近手に入れたから…まだ完全には使いこなせてないから……」

亡き親友のアーサァの形見である『ペンドラゴブレイド』。
アーサァの分まで生きるという事を誓って手にしているデバイス。

「それもそうだね……しかも貴様の『蒼刀術』は更に動きのキレが増している」

スバルの剣術流儀『蒼刀術』に感心して言い出すアリマ。

『蒼刀術』とはスバルが素早く敵を斬る為に生み出した我流剣術。
最大の特徴はその刹那の瞬間移動で相手に気づかれないうちに神速の剣撃（主に居合）で切り裂く最速とも言える優れた機動力と瞬発力。
素早く斬るのを特化しており、たとえパワー不足でもスピードに乗ればその速度によって力が増す。

そしてはじき出されるようにとスバルとアリマは吹飛ばされて地に着地する。

「……その様子だと、機動六課という軟弱部隊に入っても修練は怠らなかった様ね…以前よりも剣の腕が上がっている。私達を裏切っても己のやり方を信じ、剣を極め続けていたんだね」
「この強さはそれだけじゃない！フェイトさん達の魔法基礎の特訓、そして機動六課にいる大切な仲間を護りたいという思いが私をここまで成長させているんだよ！」
「仲間……？」

スバルの言葉にピクリとするアリマ。

「ふざけないで！！！！」

激怒してスバルに対して怒鳴りだす。

「私達から隊長達を奪った管理局の犬共が今の貴様の大切な仲間だと言うの！？あんな虫を殺す事にすらいちいち躊躇し、己の力で戦えない魔法頼りの無能な連中に、一体何を感じた言う訳！！！！」

「…確かに、機動六課は第６６６魔闘機関に比べたら魔法なしじゃ戦力なれないし、現実を見えてない位甘いよ！でも…だけどあそこには銀さんやフェイトさん達がいる！！それに大切な人、大切な事を教えてくれた仲間達がいる！！！私の護るべき人達がいるんだ！！！！！」

自分も最初は様子見たら機動六課を抜け出そうかなぁと思ったら、徐々に過ごすたびに銀時達や機動六課の連中を大切な仲間であると思い込む。

確かに戦力は『第６６６魔闘機関』より大きくは無く、１人１人の強さはそこまで大きくはない。

しかしフォワード部隊と共に活動し、仲間と一緒に戦う事でその力不足を補う事や、自分と同じく大切な仲間を護るという事が伝わり、『第６６６魔闘機関』では学べなかった事を学べるような気がした。

そして『カリバン事件』後にスバルは、心の奥底から銀時達も『機動六課』の仲間達も護る事を強く誓った。

「だからアリマも……」

「もう良い！」

どんなに言ってもスバルには自分の気持ちをわかってくれない事を確信して叫びだすアリマ。

「かつて私が仲間である事を誇りと感じ、共に同じ道を歩めると信じた貴女が…まさかあの汚らわしい管理局の連中同様、偽善者だっ

たなんて…失望したよ…」

ガシャン×7

アリマは『フラガラサ』を七回カートリッジロードをすると、体全体から黒紫色の魔力の闘志にあふれ出し……刀身が黒紫色に異常なまでに輝きだす。

とてつもなく強大な魔力にスバルも、危機感を感じ出して『ペンドラゴブレイド』を背中に背負い……

「『ティルヴィングエア』！」

≪Ｂｏｍｂａｒｄｍｅｎｔ　ｍｏｄｅ　ａｎｄ　ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ≫

ガシャン×7

カートリッジを7回ロードすると、『ティルヴィングエマ』の刀身がさらに蒼く光だし、宝玉から魔力が大量に溢れでて、それが螺旋を描くかのように刀身を包み、超高速回転をする。

最強の禁断魔法『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を放つ最大の合図である。

「エア・アルテマ・ギガブレイカー……スバルの最強の魔法……けど、それを使えば貴様の魔力はティルヴィングエアに根こそぎ奪われてしまう事を忘れたの？」

「それは以前の私！だけど今の私の魔力なら、この魔法の魔力を制御できる！」

以前までは禁断魔法としてかぎられた時しか使わないが、今のスバルなら魔力を全て使わずに魔力の制御が可能になった。

しかしアリマにはそれは関係はない。

「…そう、ようやくその魔法を我が物にしたと言う訳……ならその魔法を打ち消してやる！」

更に刀身に輝く黒紫の光。

お互いの超大型砲撃魔法が放たれる。

「エア・アルテマ――」

「カオス・アルテマ――」

「ギガブレイカー！！！！！」

「デスパニッシャー！！！！！」

極大な蒼い螺旋の閃光に、混沌と思わせる黒紫の閃光が同時に放たれた。

２つの究極魔法剣がぶつかり合った。

地面はえぐれ、強烈な突風が周りに生えている木を次々と根こそぎ取る。

そして２つの砲撃魔法が消えると、スバルとアリマも息を荒く吐いたり吸ったりする。

魔力は残っているが、かなり消耗してしまったようだ。

「『エア・アルテマ・ギガブレイカー』に匹敵する魔法を会得してたなんて……」

「まさか、魔力制御だけじゃなくその魔法自身もパワーアップしてたなんて……」

体力の限界が近づいても、２人は強引に立ち上がる。

アリマは『フラガラサ』をスバルに向けて喋りだす。

「神速の居合剣術だけじゃなく、七星神刀(しちせいんとう)での二刀流。そして鍛え抜かれた魔法と、魔法と剣術を連携させた魔剣技…確かに強くなった事は認めるよ…でもスバルには決定的な弱点がある」
「え！？」
自分に弱点があった事に驚くスバル。
その弱点とはなんなのかを考える中、アリマははっきりと言い出す。
「それは……貴様の『ティルヴィングエア』にある」
「『ティルヴィングエア』？」
自分の最大の弱点が愛用している『ティルヴィングエア』である事に意外そうな表情をするスバル。
その理由はなんなのか全く不自然に感じる。
「そう考える必要はないわ……今すぐに分かるよ……」
アリマは閃光の如くの瞬間移動でスバルを襲う。
そして『フラガラサ』を大きく振るうが、スバルも『ティルヴィングエア』でその攻撃を防ぐ。
素早く神速に剣を連続に振るう。
アリマはそれを『フラガラサ』で防ぐが、何やらわざと振って『ティルヴィングエア』に衝撃を与えている。
そして『ティルヴィングエア』と『フラガラサ』がぶつかると、スバルは背負っている『ペンドラゴブレイド』を抜いてそのまま大きく振るうが、
「舐めないで！」

アリマがそう叫び、スバルの左手を思いっきり蹴る。

「うわぁっ！」

その痛さと衝撃の余りに、『ペンドラゴブレイド』を手放し紅い大刀が宙に浮ぶ。

ブンブンと回って、最後にはスバルとアリマからかなりはなれた場所で突き刺さる。

そしてスバルとアリマの離れた場所で、地面に突き刺さる。

「『ペンドラゴブレイド』！」

「コレで厄介なデバイスは封じた……ここからが本番よ！」

するとアリマ自身が光だし、光が収まると……何とアリマの背中には右肩に天使の、左肩に悪魔の翼が生えている。

これは自分のＩＳ『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーヴィング）』と同じ能力を持った魔法であるとスバルは確信する。

「心無き堕天使……身体能力を大きく上げるだけではなく空中移動や魔力の威力も上げる取って置きの魔法……陸戦魔導士の貴女には空中戦は不利でしょ？『ウィング・ロード』を使ったら？」

確かにコレならば空を飛べないスバルには不利。

勝ち誇るアリマは余裕そうに言い出すが、スバルも自分のＩＳ『神々（ラグナロク・ブルーヴィング）の蒼翼』を発動させ、背中に蒼く輝く天使の翼が生えてきた。

「……そう、以前『タイプゼロ』型の戦闘機人である事は聞かされたけど……それが貴女のＩＳね……」

「『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーヴィング）』……貴女の『心無き堕天使』と同様、己の身体能力を上げて空中移動も可能にし、そして魔法の威力も上がる究極の

ＩＳ……だけど……」
「ええ、ここからは魔法の小細工は不要……純粋な剣のぶつかり合いでもさせてもらう！」
２人の魔導士は、空を飛びだす。
そして蒼い閃光と黒紫の閃光がぶつかり合って、その轟音が空から響きだす。
「はぁあああああああああああああああああああああ！！！！」
「うぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
２人の少女は残りの魔力を強化魔法として剣に込める。
スバルの神速居合が炸裂するが、アリマも閃光の如くの速さで避け続ける。
そして『フラガラサ』を両手に持ち返し、アリマが豪快に責める。
スバルも『ティルヴィングエア』でアリマの剣を受け流し続ける。
一方的に互角の戦いに見えるが、実は徐々にスバルの敗北カウントが進んでいる事をスバル自身はまだ気づいていない。
とても１５と１７の少女の戦いとは思えない魔剣士同士の激戦は続き、そして隕石の如くの勢いで落下して陸に着地するスバルとアリマ。
最早魔力は全然残っておらず、体力の限界も近づいてきた。
『『ハァ・・・ハァ・・・ハァ・・・！』』
コレほどまでに長く剣を交えたのも久し振りだが、いつものように

かなり疲れる2人。
アリマは『フラガラサ』を見て、その後にスバルの『ティルヴィングエア』を見る。
2つを比べて見ると、アリマは勝負あったと確信する。
そして両手で『フラガラサ』強く握って構える。

そんなアリマを見たスバルも、『ティルヴィングエア』を鞘に納めて一撃必殺型の居合、抜刀術の構えをする。

「そろそろ……決着つけよう」
「うん……今の貴女に負けるわけには行かない……必ず勝って、貴女を復讐の呪縛から解放する……」
「うるさい！！！！仇を討つ勇気を持たぬ貴様にだけは言われたくない！！！」

最後の一撃をかけて、互いに相手に向かって走り出す。
残りの力を、すべての力を相手にぶつける為に。

『『はぁあああああああああああああああああああああああああああああ！』』

気迫を込めて叫びだす2人の魔剣士少女。
渾身の力を込めた2つの魔剣がぶつかり合う。

ガギィィィィィィィィン！

今までにない鈍くて大きい轟音。
それは剣のぶつかり合いではなかった。

空中に浮びだす蒼く輝く刃はくるくると回って、地面に突き刺す。
それは折れた刀であり、サファイヤのように輝きを増している。

そう……それはスバルの『ティルヴィングエア』の刃であり、スバルの握っている『ティルヴィングエア』は完全に折れてしまったのであった。

「……」

相棒と言うべきの愛刀が、まさか折れてしまったなんて余りの衝撃で無言のまま、信じられないというばかりに驚くスバル。
しばらく続く沈黙だが、スバル自身がそれを破る。

「……ティルヴィングエアが……折れた？」
≪Ｅｎｃｏｕｎｔｅｒ　……　ｍａｉｎ　……≫

刀身が折れたのか、『ティルヴィングエア』の魔力意識は途切れてしまう。
最悪な状況にスバルは絶望に達してしまうが、襲い掛かる狂気に気づくがすでに遅く。

ザク！

「がはぁ！？」

アリマの『フラガラサ』が、スバルの左腹に勢い良く突き刺す。
そしてそのまま押し切って後ろの木ごと串刺しにされて『ティルヴィングエア』と鞘を落す。
かなり深く突き刺さって、激痛が伝わって血があふれ出てスバルの左肩に生えている『神々の蒼翼（ラグナロク・ブルーヴィング）』も消え去った。

だがスバルはそれよりも、『ティルヴィングエア』が折れた事に驚く。

そしてコレこそがスバルの弱点でもあった。

「その様子じゃあ、まだ『七星神刀』の秘密を全て知らないようね。良いよ、ティルヴィングエアの秘密、冥土の土産に教えてあげる……『七星神刀』の生みの親である梅太刀妙寿が最初に作ったデバイスがティルヴィングエアだけど、それは自分が作る『七星神刀』がどれ程の力を持っているのかを試す為に造られた試作品。そしてティルヴィングエアを始めとして残りの『七星神刀』を作り上げた。……つまり、ティルヴィングエアの性能はわずかだけど他の『七星神刀』に劣っているんだよ。そしてその強度は勿論、そこいらの最上級デバイス並でも他の『七星神刀』に比べればはるかに劣っている」

それこそが、『ティルヴィングエア』が折れた最大の原因。

しかもさらにと言うばかりに最悪な状況を言い出すアリマ。

「更に悪い情報を教えてあげる……『七星神刀』は性能や強度など、そこいらのデバイスとは比べ物にならないけど……他のデバイスにはない決定的な欠点がある…それはいかに魔力を込めようとも修正は不可能な事。元々、刀をデバイス化する技術で作られたから、修正能力は全くと持って無意味……つまり、今ここに『七星神刀』の1つが砕け散ったんだよ」

もはやスバルの耳元には届いているのか分からないが、アリマは容赦なくスバルを責める。

「……スバルは完全に私に負けた……私がスバルより強いのでもなく、スバルが弱いのでもない！！機動六課の甘さがスバルを弱くさ

せたのよ」
「……」
「純粋な剣の腕ならスバルの方が上かもね。初めて剣を交えた時から本物の魔剣士だと確信が持て私は認めた…それなのに……『機動六課』って言う所に入り、スバルの心は弱くなった…その甘さがスバルを堕ちる所まで堕としたんだよ…『機動六課』ではなく私と一緒にいれば、スバルはそこまで堕ちる事はなかった!!」

仲間として強く信頼したスバルに対して、その精神的なもろさを全て機動六課の甘さに押し付ける。

「魔法を強くする?弱いもの同士力を合わせる?…私達『第６６６魔闘機関』にそんなもの必要ない!今の私達に必要なのは管理局に対する怒りと憎しみだ!!…それが分からないならスバルの剣は折れている…これ以上惨めな姿を曝すのであれば…」

アリマは鋭い目線でスバルをにらみつける。

「今ここで、私が貴女を楽にしてあげる!」
「……剣が折れている?……確かに……私の『ティルヴィングエア』は折れた……だけど……」

スバルは絶対的な絶望の中でも、笑い出す。

「剣ならまだあるよ……取って置きの剣……が」
「え!?」

スバルの言葉に、アリマは驚きだす。
すると自動的にか『ペンドラゴブレイド』が勢い良くスバルのほうに飛び込んでくる。

その『ペンドラゴブレイド』をキャッチするスバル。
アリマはまずいと考えて、『フラガラサ』を抜き出して素早く離れようとするが……

ザクゥ！

「ぐはぁ！」

浅いが『ペンドラゴブレイド』の一撃がアリマにヒットした。
右脇に血が少しあふれ出ていて、右手で抑える。
まだこんな力が残っていた事に驚いていた。
スバルは『ペンドラゴブレイド』を杖代わりとして体を無理矢理起こしてアリマを見る。

すると突如、空から無数のクナイがアリマに向かって振ってくる。
アリマはそれを『フラガラサ』で無数に振って打ち返す。
そしてスバルの目の前に、メガネをかけててマフラーをかけている美女、猿飛あやめが現れた。

「さっちゃんさん！？」

まさかの援護に驚くスバル。

「祭り場で貴女だけいないと不思議に思って、調べて探してみたんだけど……まさかこんな場所にいたなんてね……」

猿飛もスバルの不在を不思議に感じて、はやて達からスバルの発見を任された。
彼女が眼にしたのが、スバルとアリマの対決であって、アリマを敵と判断してスバルの援護に入ったのである。

するとアリマは憎しみの眼で猿飛を睨む。

「貴女も機動六課の一員!?邪魔するならその首を跳ねる!!」

「勘違いしないで、私はこの小娘の組織の一員じゃないわ……それに魔力と言う特殊な力が無くなりかけていてその傷の状態で……この始末屋さっちゃんを倒せるとでも?」

素早くアリマを睨みつけて忠告する猿飛。

始末屋は伊達ではないと思わせる威圧感を放っている。

「それに、援護は私だけじゃないわよ?」

猿飛が指を指すと、指した方向から大勢の魔導士達が必死にここに向かっている。

それは、ティアナ、シグナム、ザフィーラ、山崎、チンク、セイン、セッテ、ディエチ、ウィンディ、ディードであった。

「あ……いたっす!」

「敵か?……剣を持っている事はもしかして……!」

スバルの発見で叫ぶウィンディに、魔剣士の存在にもしやと驚くセッテ。

するとザフィーラはスバルの異変に気づく。

「スバルから血の匂いがする!」

「!!?」

ザフィーラの一言にティアナは信じられない表情で、誰よりも早く走ってスバルに駆けつける。

「スバル！！ちょっと大丈夫！？」
「てぃ……ティア……」

心配して声をかけるティアナに対し、スバルはティアナの援護に安心して笑う。
そしてティアナはアリマを睨みつけて『クロスミラージュ』を構える。

「また邪魔が入った……貴女達等管理局の連中はそこまでして私の邪魔をしたいの！」
「それ以上来てみなさいよ！その額に風穴を開けるわよ！！」

アリマに警告をするティアナ。
そんなティアナを援護するかのように、山崎、ディエチ、猿飛の３人が先頭に武器を構え、ザフィーラがスバルとティアナの前へ、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードもアリマを警戒する。
いかにアリマといえども、スバルとの激戦で魔力は激しく消耗してさらには大勢相手では大苦戦する。

「……邪魔が入ったようだけど……スバル、次は必ず貴女を殺す！」

アリマは『フラガラサ』を地面に突き刺し、そこから黒紫色の光が発光する。
その大きな光にティアナ達は思わず眼を瞑るが、猿飛がアリマに向かって飛び込み、クナイで斬ろうとする。
だが斬ったのは空気であってそこにアリマはいなかった。

「逃げられたわ……」
「この状態で一瞬で逃げ出すなんて……それにあの子、間違いなくかなり手強そうだ」

山崎はアリマを一瞬だけ見たが、彼女の強さは底知れずに高いことを嫌と分かる。
だが今はそんな事はどうでも良かった。
問題はスバルの傷がかなり深くて重傷であった事だ。
スバルは安心したか、その身をティアナにもたれつく。

「スバル！ちょっと、しっかりしなさいよ！」

突如、自分の体に押し付けたスバルにティアナは心配しながら叫びだす。
彼女を良く見ると、左脇から血があふれ出ている。
それを見たティアナ達がスバルに集まりだす。

「酷い傷だ……」
「見るからに痛そうっす！」
「速いところシャマルの所に！」

チンクとウィンディは痛そうに見て、ザフィーラは一刻も早くシャマルの治療魔法で回復させるべきだとパスを通じて呼ぶ。

「以前、この小娘の強さを見せてもらったけど……かなりの身体能力を持っていたわ。そんな小娘を負かすなんて……敵が相当な手練れである証よ」
「マジッすか！？」
「スバル以上の手練れって……」

スバルの様子を見て猿飛はアリマの存在を説明すると、山崎とディエチが信じられない程に驚く。

「アンタ、どうしていつもこんなに無茶ばっかりを……」

今にも泣きそうな表情をするティアナ。

そんなティアナを必死に励まそうとするスバルは弱弱しくも彼女の頬っぺたを触れる。

「ティ……ア……いつも……心配かけて……ご免……ね……」

そう言いきると、スバルの意識は途切れてしまう。

「スバル……!?……スバルゥゥーーー

第八十七訓：かつての仲間が敵として現れる事はゲームの中じゃたまにある（後）

黒神
「次回はいよいよ『銀八先生コーナー』です。銀八先生、次回もよろしくお願いします」

銀八
「任せとけぇぇぇぇ！」

久し振りの出番に張り切る銀八先生。

神楽
「次回、『暴走は一度発生したら中々収まりにくい』テイクオフアル」

第八十八訓：暴走は一度発生したら中々収まりにくい（前書き）

黒神
「突然ですが、今回で『銀園祭』の完結です」

銀時
「いきなりだなおい！……というより何か新キャラばっか増えて原作キャラが出てくるのか心配してきたんだけどぉ！？」

黒神
「そこは大丈夫だと思います」

銀時
「おい！！」

神楽（二年後）
「銀ちゃん、この馬鹿作者に文句言っても無駄ネ。『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるネ」

銀時
「お前、いつまでその姿でいるの？もしかして気に入ったの？」

第八十八訓：暴走は一度発生したら中々収まりにくい

一方その頃、銀時と高杉の戦いも始まっていた。
木刀と刀のぶつかり合いは激しく、超一流の剣士同士の戦いの領域をはるかに超えていた。
銀時は睨み、高杉は笑い出しながら剣を振るう。
そして2人の剣がぶつかり合ってにらみ合う。

「要するにアレか…テメェはそのアリマって女の憎しみを利用する為に『鬼兵隊』の一員に入れたって事ったろ？」
「ククク…利用ねぇ…確かに俺ァ、アリマに会った時に誘うつもりだったんだがなァ…意外な事にアイツは『鬼兵隊』の噂を聞きつけ自ら入ってきやがったのさ……おかげで『鬼兵隊』の戦力は増える一方さ…このまま行きゃあ、『春雨』相手に戦争ふっかける事も出来る戦力になるだろうぜ」

不気味に愉快そうに笑い出す高杉。
確かに強力な武装集団の『鬼兵隊』にアリマのような強力な魔導師が加われば、『鬼兵隊』はあの『春雨』と双璧になりかもしれない。

「アリマの中にいる獣はスバルや管理局に対する憎しみによって成長してる……俺はアイツの中の牙を研ぎ澄まし暴れたがっている獣に惚れちまってね…いっそ俺達と一緒に世界相手に暴れてみねぇかと誘っちまった」

初めて会った時から溢れていたアリマの管理局に対する強い憎しみ。
高杉は彼女の中の憎しみに共感し、鬼兵隊に勧誘したのである。
その彼女も高杉の世界に対する憎しみに強く共感し、鬼兵隊の一員

となった。

「なァ銀時……お前もスバルを見て薄々と気付いてたんじゃねぇのか？」

「……」

「甘ったれた空間にいる時は隠れているが…アイツの中にもアリマの様に強い憎しみや憎悪を持った獣が住みついてやがる事によォ？」

高杉の意見も一理ある。

いかに憎しみを捨てようと決意しても、多少思い出せば一気に増幅されて不の感情が湧き上がる。

スバルとは言え、それは例外ではない。

彼女の中にも闇は眠っている。

大切な仲間を奪われ、護れなかった悔やみ。

それが全て解放されればアリマのように復讐鬼となる。

「あのガキもよォ、俺やアリマの様に全てを捨て、感情のままに生きてみたら立派な牙が生えてくると俺ァ思うがな」

「……確かにてめぇの言う通りだ。どんな奴でも自分（テメェ）の中に闇位ぇ持ってる」

高杉の言葉を黙って聞いていた銀時が喋りだす。

「けどよォ……憎しみを持たずに生きてく事を選んだのはスバル自身だ……なら例えてめぇやアリマが復讐の道に引きずり込もうとしても…アイツは自分の武士道（ルール）を貫くハズだぜ？」

いくらスバルを復讐の道に走らせようとしても無駄だと銀時は忠告する。

「仮にスバル自身が復讐に選んだとしても無駄になる……そん時は、俺達がアイツを必ず止めてやっからなァ」

仲間として、そして同じ侍魂を持つ者として銀時はその時のスバルを止めようと決意する。

そんな銀時を見て、高杉は剣を鞘に納めて銀時からゆっくりと離れる。

そして懐から煙管を出して口にくわえる。

「ククク…止めてやるねェ……このまま殺り合うのも良いんだが、あいにく俺の役目はここまででね…てめぇとの会話は単なる暇潰しだ……今頃『機動六課』の連中はキクナエのアンドロイドとかいう人造機械（からくり）に苦戦中だろうしな？」

高杉の言う通り、フェイト達は今頃苦戦しているかもしれない。

速いところ助太刀しなければならないようだ。

そして高杉は口から煙管を外して煙を吐く。

「俺ァここいらで失礼するぜ……生き残れたらまた殺ろうや……」

そう言って高杉は振り向いてこの場をゆっくりと立ち去る。

銀時はそんな高杉を追おうとせずに唯見ているだけだった。

「……世界に喧嘩売った大馬鹿野郎が……」

そう一言吐いて、急いでフェイト達の所に向かう。

＊

バキィ！

突如、刀が折れた鈍い音が聞こえた。
それは近藤の持っている刀がアンドロイドの紅桜に折られたからだ。

「ウソォォォォ！！？名刀虎徹ちゃんがぁぁぁぁぁ！」

信じられないほどに絶叫する近藤。
実はコレが虎鉄の模造品である事を本人はまだ知らない。

「ウソォォォォォォ！ルー殿、アギト殿、これ虎鉄ちゃんが…ウソォォォォォォ！」
「うるせーな！言っている場合かぁ！（怒）」
「近藤、落ち着いて！」
「だってコレまだローンが…ウソォォォォ！！」

愛刀が折られて叫ぶ近藤に対して怒鳴ってツッコむアギトと、近藤を落ちつかせようと抑えるルーテシア。

「チィ、何でこんなにも多くアンドロイドが来るんだよ……アタシ等ナンバーズや機動六課の連中も大苦戦じゃねぇか！」

そう、『紅桜』の脅威は闘えば戦うほど強くなれる生きた刀。
しかもそれだけじゃない。

「ディバインバスター！！」

なのはが『レイジングハート』から巨大な桜色の魔力砲を放つが、
アンドロイドが『紅桜』を盾代わりとしてそれを受け止める。

信じられないことに、『ディバインバスター』がみるみると打ち消されてしまう。

「そんな！！？」

「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

信じられないなのはに、フェイトが一気に『バルディッシュ』の『ライオットザンバー・カラミティ』の大剣を振るうがアンドロイドが紅桜で受け止める。

すると2体のアンドロイドが奇襲でフェイトを攻撃する。

「しまっ……！」

「フェイトちゃん！」

なのはがフェイトに近づいて護ろうとするが、間に合わない。

っと思った瞬間だった。

「おおぉぉぉぉぉぉ！」

「させるかァァァ！」

すると、左右からザフィーラとヴィータが飛び込んできてその攻撃を魔力障壁で防ぐ。

『『ザフィーラ　（さん）、ヴィータ　（ちゃん）！！』』

間一髪でフェイトに襲う凶刃を防ぐ事ができた2人だが、ザフィーラの魔力障壁とヴィータの『グラーフアイゼン』に傷がついてしまった。

ザフィーラの魔力障壁とヴィータの『グラーフアイゼン』はそこまでやわではない。

紅桜の威力が強すぎるのである。
一方の、魔導士達も魔力弾を連続に打つが全て紅桜で防がれる。
ギンガもキャロも賢明に戦うが、紅桜の威力に翻弄されて返り討ちにされる。
２人の魔法も、『紅桜』に打ち消されてしまうからだ。

そう、アンドロイドの『紅桜』は『ＡＭＦ』能力がついている。
対魔導士様にと紅桜に新たに付け加えられた能力。
その為、なのは達のように魔法を中心に戦う魔導士達には天敵と言える存在となる。

ナンバーズにいたっても、『紅桜』で驚異的な戦闘力を持ったアンドロイドに大苦戦。
ドゥーエやトーレでさえ一方的に押されるばかり。
ウーノとクアットロは必死に紅桜の戦闘データを解析している。

「はぁぁぁぁぁぁ！」

ザクゥ！

ノーヴェはつい最近手に入れた『ガンジョバクヤ』を十字架の様に縦横に２つの剣を同時に振るい、アンドロイドの首と紅桜と一体化している右腕を切断して戦闘不能にさせる。
『ガンジョバクヤ』を手に入れてからノーヴェは以前よりは強くなった。
少なくともトーレ級は行っている。
さらには他の戦闘機人にはなく、同時に恥部な所が新たに出来た。
それは、今のノーヴェのバリアジャケットにあった。
生肌が半分だけ見え、半分隠しているシャツに、超ギリギリにパン

ツを隠している短いスカート。
実は彼女が着ているバリアジャケットは、『〇レイブルー』に出てくる『〇コト・ナナヤ』のような衣装であった。

（何で私だけこんな破廉恥な衣装になってんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！あのエロ狸女ぁ！いつかぶっ殺す！！！！／／／）

そう、ノーヴェのバリアジャケットをデザインしたのは八神はやてその人であった。
スカリエッティからノーヴェ用のバリアジャケットを作ってもらう事を頼まれたんだが、はやては面白半分にと考えたのであった。
しかし露出度が高いためか、余分な重さが感じず素早く動ける。

「…それにしても、ようやく1体かよ……コレが村田鉄子が言ってた『紅桜』の脅威か……このままじゃアタシ等が全滅してしまう！」

強くなったとは言え、今だに『ガンジョバクヤ』を使いこなせない己の未熟さ以上に続々と現れるアンドロイドに苦戦する事に悔やむノーヴェ。
このまま全滅かと一瞬思ったが、次の光景にそれが吹っ切れる。

「ごるぁあああああああああああああ！何祭りを妨害してるんだぁ、ボケがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

お登勢がマジ切れして素手でアンドロイドを次々と粉砕する。
怒りの余りか体中から闘志らしきものが溢れている。
その強さは本当に老婆であるかと疑うほどであり、時には素手で紅桜を粉砕していると言う信じられない強さを発揮していた。

「あの人本当に老婆ぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

コレにはノーヴェもツッコみだす。
自分の知っている老婆とは無視するかのような現役なる強さを嫌と眼のあたりにした。

「みんなが楽しみにしとった祭りを台無しにしたんじゃ……わしも久しぶりに機嫌が悪い……おまんら、ぶった斬られても文句は言えんぜよ！！！！」

辰馬もエリザベスからもらった刀で、次々とアンドロイドを切り裂く。
ここ最近辰馬は、刀で戦う事が増えてきていて、徐々にかつての戦いの勘を取り戻し始めていた。銀時や桂、そして高杉に勝るとも劣らない強さを取り戻しつつあった。
やはり攘夷戦争の英雄は伊達じゃなかった。

「はいやぁぁぁぁぁぁぁ！」

そして空を高く飛んで実を回転させ、その回転力と落下速度を利用して一気に刀を振るい……『紅桜』ごとアンドロイドを一刀両断にした。
その数はすでに２０を早く超えたか、次々とその強さを発揮する。

「祭りを台無しにした罪は、重いでありんすので……成敗いたしやす」

外道丸も、金棒を豪快にふるって数多くのアンドロイドを次々と粉砕していく。
クリステルの最強の式神であり、外道の如くの強さは未完成とは言え『紅桜』を圧倒していく。

全てはクリステルの代わりに、銀時達を護る為である。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

九兵衛もスバルに衰えないと思わせる神速と謳われた剣技でアンドロイドを素早く2体を間っ二つに斬る。

名門・柳生家の次期当主として恥じない強さを見せ付けた。

「え…江戸って所に住む住人は化け物ばかりかよ?」

魔法なしで強いという次元をはるかに超え、魔法よりも強い身体能力の高さに圧倒されるノーヴェ。

魔法を頼る事に限界があるんじゃないかとノーヴェは改めて確信した。

「さすが……山崎さんや坂田銀時の世界にいた江戸の住民だ……私達の上を行っている」

ディエチも思わず感心して口に出す。

だがそれが隙を生み出し、3体のアンドロイドがディエチを襲いだす。

「しま……！」

「てりゃあああああああああああああああああ！！」

ピンチの時に、山崎がディエチの前で3体のアンドロイドを返り討ちにした。

右手にミントンラケットと左手に刀による二刀流で吹飛ばし、そして斬り、最後に思いっきり蹴飛ばす。

「大丈夫、ディエチちゃん！」
「は……はい！」

山崎は心配してディエチを呼び、ディエチは顔を真っ赤にして返事をする。
そして４体がそのまま山崎に襲い掛かる。
だが……

「ディエチちゃんには指一本触れさせはしない！！」

大切な女性（ひと）を護る意識を持った山崎の強さは、はっきり言って数段パワーアップしている。
その強さは下手すれば真撰組副長の土方十四郎級かわずかだがその上に行くやもしれない。
いかに紅桜が脅威とは言え、まだ未完成なら対抗できる。
ディエチは『イノーメスカノン』を豪快に振りアンドロイドを奇襲して吹飛ばす。
山崎のサポートである。

「いやー、山崎も男になっているなぁ！局長として鼻が高い！」
「いや、局長のアンタが何もしてないのはどうかと……」

山崎の更なる成長に感心する近藤に、呆れて突っ込むアギト。

「銀時達の戦いを見て参考にし、編み出した新魔法を試すときね！」

するとリィンフォースは右手から白く輝く魔力剣を出し、それを握って素早くダッシュする。

「マナブレイク！」

素早く魔力剣を振るい、次々とアンドロイドを切り裂く。
以下に魔力で形勢したとは言え、その魔力は半端じゃなく紅桜の『ＡＭＦ』でも完全に無力化できない。

「レヴァンティン！」
≪Ｉｔ．．ａｔｔａｃｋ　ｍｏｄｅ．．　ｓｔａｒｔｓ．≫

シグナムも負けじと、『レヴァンティン』を豪快に不利、次々とアンドロイドを斬る。
だが『紅桜』の強さが異常なまでに高くて苦戦する。
しかし一方的に減らないアンドロイドに苦戦しているのも確かである。
そこに……

ドカァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

『『！？』』

突如の大爆発に誰もが驚きだす。
数多くのアンドロイドが一気に破壊されたのである。
そしてガラクタと貸したアンドロイドを踏み、現れたのは……桂、神楽（二年後）、エリザベス、はやて、エリオの５人である。
しかし５人の様子はいつもと違う。
とてつもない殺気と闘志が溢れていた。

「え……エリオ、はやて！！？」
「桂さんに神楽ちゃん、それにエリザベス君もどうしたの！！？てかなんか神楽ちゃんだけ別人のようになってない！？」

５人の様子に青ざめてしまうフェイトとなのは。
ちなみに神楽がスカリエッティと源外の発明で成長した姿になっている事は今だに明らかにされていない。

「祭りを邪魔する奴と……」
「食事を台無しにする愚か者は……」
『『だ～れ～（だ～）（や～）』』
『死ぬ覚悟あるか？』

神楽は楽しみにしていた祭りを潰され、エリオは神楽と月詠との３人でのお出かけ（デート？）を中断させられ、桂とエリザベスは祭りの蕎麦を食べてる所を邪魔され、そしてはやては桂と一緒に楽しむハズだった祭りを台無しにされた事で、怒りのボルテージが最大限を超えていた。

「あっあれは妖怪『祭り囃子』！！祭りを妨害する暴走族をこらしめる古の妖怪！！！！」
「おおー！！」
「……いや、違うと思う」

近藤の『祭り囃子』の説明に感心するルーテシアに、何か違うと思うアギト。

「ふぉあちゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

神楽は豪快に傘を振り回し、アンドロイドをゴミのように散らす感じて次々と吹飛ばして粉砕する。
二年後の姿だけあって、外見だけじゃなく強さも成長していた。

「てぇりゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

桂も大きくジャンプし、刀を抜いてそのまま振りアンドロイド1体を一刀両断にするが、余りの強さに斬撃の衝撃波らしきものが放たれてそれが地を割って走り、一気に5体のアンドロイドを紅桜ごと一刀両断する。

『地獄に堕ちろやぁあああああああああああああああああああ！』

エリザベスはそう書かれたプラカードをハンマーのように振って、一気に7体のアンドロイドを粉砕する。

「ウゥリャあああああああああああああああああああああああ！！！！」

エリオも怒りの余りに潜在能力を最大限に発揮し、『ストラーダ』の柄を剣のように長く掴み、身体を大きく回転させて、剣のように振るいだす。
エリオの超高速回転斬りに次々とアンドロイドがまっ二つに切断される。

「おりゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

はやても魔法を使わず、怒り任せに『夜天の書』の杖を棒術らしき物でアンドロイドを吹飛ばし、時には腕で顔面を粉砕する。

それぞれの楽しみを邪魔された事で、怒り満点の5人の潜在能力は最大限。

未完成版の紅桜では話にならないほどの強さが発揮される。

5人の大活躍によってアンドロイドは一気に減少されてしまう。

「祭りの神が降臨なされたぞォォォォ！勝利は我等の手にありィィィィィィィッ！！」

近藤は5人の大活躍を気に、一気に勝利宣言をした。

一方、後から来た月詠はこの光景に呆れてしまう。

神楽とエリオの気持ちは分からないわけでもないが、ここまで怒った姿を見たのは初めてである。

「まぁ、せっかくの祭りなのに台無しにされたからのう……少しこらしめたほうが良いようじゃな」

月詠も目付きを変えて、クナイを素早くはなってアンドロイドの頭を貫通させ、アンドロイドは大爆発してしまう。

＊

一方のキクナエは、8体のアンドロイドと共に戦いの状況を眺めている。

いかにキクナエでも状況の悪さは理解していた。

だが彼はそれでも抗うかの様に奇襲の開始しようとする。

そんなとき、源外、スカリエッティ、鉄子の3人がキクナエの前に立ちはだかる。

「……源外さんにスカリエッティさん……来てたんですね」

「小僧……自分が今してる事を分かっているのか？」

ゴーグルに隠された悲しめな眼で源外はキクナエを見る。

かつて自分と同じ道を進もうとしているからだ。

「この勝負は小僧の負けだ……以下に最新型機械技術（カラクリ）に『紅桜』を加えても、野朗共の強さはそれを上回っている」

「それに、管理局の連中は逃げている。しかも一般人より早くね」

源外とスカリエッティはキクナエの敗北宣言をする。

これ以上やっても、罪が重くなるだけである事を知らせるために。

「そうですか……でしたら今度は機動六課とナンバーズを壊滅させる為に……」

「もう止めてくれ！！」

キクナエは更に奇襲を開始しようとする中、鉄子が必死に叫び止めようとする。

「もうこんな事したって意味がない！それにその刀で…これ以上人が傷つけられるところは見たくない！！」

刀匠として、そして妹として兄が作った『紅桜』で多くの人が傷付けられるところを見るのを黙って見過ごせない。

源外とスカリエッティは鉄子の気持ちを強く抱き、キクナエはそんな彼女の言葉を戯言扱いして聞かないでいた。

そこで……

「オウオウ、随分と面白い見せもんしてんじゃねぇかァ」

聞き覚えのある声に４人は振り向く。
そこには、余裕の笑顔を浮かべている坂田銀時がいた。

「ヒーローショーか何かか？俺にヒーロー役やらせてくれよ……」
「貴方じゃ役不足です。どいてください」

銀時を睨みつけて言い出すキクナエ。
復讐心に取り付かれた暴走はそう簡単には終わらない。

「しょーもねー脚本書きやがって、役者にケチつけられる義理かテメー。今時敵討ちなんざはやらねーんだよ」

それでも彼に取り付いた復讐心は取り除かなきゃいけない。
銀時派そのつもりでこの場にやってきた。

「親父が泣くぜ…こんなこたァ誰も望んじゃいねー。アンタが一番分かっんじゃねーのか？」

その言葉にキクナエはだんまりとなる。
それと同時に、脳内で父親と過ごした楽しい思いでが浮かび上がる。

「……分かっています……だけど苦しくて仕方ないんですよ。……管理局の都合で罪を擦り付けられ事故に見せかけ殺された父の屈辱感や絶望。それを許せない自分…そんなものばかり背負って生きていたいとは思いません……それに戻らないものばかり眺めて生きていくのは、もう疲れました」

分かっていても認められない結果に悔やみ、もがき、悲しむキクナエ。
管理局が悪いのに、勝手に父親を罪人扱いされた屈辱にもう耐えられなくなったのだ。

「管理局のクビはもうどうでも良い。そして今まで管理局の犠牲となって死んでいった者達にしてやれる事はない事も百の承知……最後は自分の道を進んで死にたいんです……だから、どかないなら貴方とは言え容赦はしません」

死を覚悟したキクナエはもう誰も止められない。
そう思わせるほどにキクナエの覚悟は大きかった。
しかし、それでも銀時は動かない。

「どかねェ……俺にも通さなきゃならねー筋ってモンがある」

銀時は木刀を抜く構えをして、キクナエを睨みつける。
そしてアンドロイドは紅桜を構えて銀時に対抗しようとする。

「行けぇぇぇぇ！！」
「らァァァァ！！」

キクナエが攻撃命令をだすと、銀時が人の常識を超えた素早いダッシュでアンドロイドを襲い掛かる。
アンドロイドはそのまま『紅桜』で返り討ちにしようと誰もが思った。
しかしそこで予想外な事が起こった。
何とアンドロイドが構えを解いて動かなくなった。

『『！！？？』』

銀時達は驚きだし、そのまま銀時が木刀を素早く振るい続ける。
そして一閃の如くの速さで8体のアンドロイドと装着していた紅桜が全て粉砕される。

「……何故？」

どうして動かなくなったか不思議に思う込むキクナエ。
ゆっくりと自分の壊れたアンドロイドに近づく。
キクナエが近づいてきた事に気づいたアンドロイドは、ゆっくりと右手でキクナエの頬っぺたに優しく触れる。

「！！？」

突如の行為に驚くキクナエ。
そして一瞬だがアンドロイドは笑顔を浮べ、完全停止する。

「……アンドロイドが……僕に笑顔を見せるなんて……そんな設定を作った覚えはないはず……なのに何故？」
「決まっている……そいつ等はお前の息子だからだ」

予想外な設定にどうしてなのか謎に深まるキクナエに、源外がその理由を言い出す。

「息子……だって？」
「カラクリ師にとって、精神込めて作りだした機械（からくり）は全て自分の息子のようなもんだ……確かに小僧の機械（からくり）には憎しみが篭ってた……じゃがそれと同時に機械（からくり）に対する愛情もあった訳じゃ……」

「！？」

いくら憎しみを込めて作っても、それと同時に作り出した物の愛情を込めていた事は変わりはない。
そんな事を忘れていた事にキクナエは自分を哀れみ、眼から涙が溢れていた。

「だから、もう憎しみで機械（からくり）を作るのは止めとけ……その技術でこれから作り出す機械（からくり）の……息子の為にも……」

かつての自分と同じ道を進みかけたが、同じカラクリ師であり若きカラクリ師がこれ以上復讐に堕ちるのを黙って見過ごせなかった源外だからこそ言えることである。

「……う…うう……はい……」

涙を流して敵討ちを止める事を決意するキクナエ。
その光景を黙って見届けてふと笑い出す銀時、スカリエッティ、鉄子の3人であった。

＊

スカリエッティのアジト　中心部

「…そうかい…結局キクナエの奴ァＡＡＡランクの技術犯罪者として指名手配されちまった訳か？」
「複雑な結果だけど……今回ばかりは仕方がないよね……」

銀時とフェイトは犯罪者扱いされているキクナエに唖然と驚いている。

当然であった。管理局を殺害しようとアンドロイドにＳＳＳランクの犯罪集団『鬼兵隊』の兵器を装着させ、しかも『鬼兵隊』と関わりだしたという理由で今でも追われている。

だが彼はスカリエッティの整形手術を受けて全くの別人の顔に変えられている。

しばらくは『ナンバーズ』のアジトでかくまい、程なくして時が経てばミッドチルダを離れて、なのはの世界に逃げさせようと考えている。

そうすれば、ミッドチルダに戻らない限りは彼が管理局に捕まる事はないであろう。

「まぁやっちゃったもんは仕方がないな……じゃがあれほどの技術を持った若僧なら海鳴町でも生きていけるじゃろう」

「全くだ……助手としてスカウトしたいが、彼が無事に生きていくにはそれしかないしね」

源外とスカリエッティは、同じカラクリ師と研究者としてキクナエを助けたいと言う気持ちでそう考える。

コレには鉄子も同感であった。

「そうすれば管理局もキクナエの事は、忘れるかもしれない」

「うむ、管理局の邪な考えでこれ以上犠牲者が増えるのも大変だからな」

鉄子の言葉に、スカリエッティはこれ以上管理局の連中の好き勝手にはさせないと強く思う。

今回の事件でキクナエから紅桜のデータの一部を受け取り、全ての紅桜が未完成状態だと言う事が判明した。
あれほど苦戦した兵器が未完成である事をフェイト達は驚きを隠せなかった。
完成版はどれだけ強いのか予想付かない。

ちなみに今回の被害はそこまで大きくなかったが、重傷者も結構いた。

特にスバルは『ティルヴィングエア』が折られた上にかなりの重傷を負わされてしまった。
本来であればかなり復興は先だが、何故か徐々に傷が癒されている。
実はスバルは今、スカリエッティが開発した戦闘機人用の回復装置に入ってその傷を癒している。
だが入ればしばらくは意識は消えるが、ずべての回復が終了した時にはその意識が戻るであろう。

銀時とフェイトも最初は心配したが、無事に回復すると聞いて安心する。
そして銀時はある事を思い出してフェイトに謝罪する。

「すまねぇな、フェイト」
「え？」

突如の謝罪にフェイトは驚く。

「あん時ャあ、俺が高杉に気を取られたせいでお前らを助けに行くのが遅れちまった……そのせいで間に合わなかったら…俺ァ……」

下手すればフェイト達に酷い被害を受けていたかもしれない。

そう考えると銀時は反省する。だがフェイトは笑顔で銀時に言い出す。

「大丈夫だよ、銀時」

「フェイト？」

「こう見えても、私強い事を銀時だって知っているでしょ？……それに……」

フェイトは両手で銀時の右手を優しく掴む。

その優しさに銀時はキュトンとした表情をし、少し顔を真っ赤にする。

「銀時がこんなに心配してくれてる事だけでも、凄く嬉しいよ／／／」

「……そ……そうかよ／／／」

照れくさく銀時は少し別のほうを振り向く。

２人の光景を見て、源外、スカリエッティはニヤリと笑いだし、鉄子に至っては意外そうな表情で驚く。

かくして『銀園祭』の事件は何とか解決した。

だが裏で活動していた高杉晋介にかつてスバルと同じ『第６６６魔闘機関』の生き残りであり管理局に復讐を抱くアリマの２人は、またいつか銀時とスバルの目の前に現れるであろう。

これは終わりではない、始まりでもある。

『銀祇祭編・完』

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！」

銀八
「え～久し振りの『銀八先生コーナー』を開始しまぁ～す。今回のアシスタントは、この小説のメインヒロインとして活躍してるスバル・ナカジマぁ～……の姉でありながら地味で活躍の期待がほぼ０に近いという哀れな存在となっているスバルの姉でぇ～す」

ギンガ
「喧嘩売ってんのかぁぁぁ！！」

ドカァ！

銀八
「あべじ！」

今回のアシスタント、ギンガ・ナカジマの怒りの鉄槌をもろに喰らう銀八であった。

ギンガ
「唯でさえ、私の出番が異常なまでに少ないのを気にしているのに……何なのその喧嘩売っているような紹介！！？」

銀八
「へぇーい、じゃあ質問答えますんで」

ギンガ
「聞けぁーーーー！（怒）」

銀八
「まずはこの人、ペンネーム『烈火竜』さん『（ギンガに質問）
りんごからマンゴーに変わってしまった自分を見てどう思いますか？

（ゲンヤに質問）
松平さんと気が合いそうですか？』」

ギンガ
「そうね……すんごく最悪かしら！！？」

さっきのやり取りで不機嫌状態のギンガは速攻答える。

ゲンヤ
「……ギンガ……良い事あるから抑えてくれ……そうだなぁ……なんかあっちの俺となら松平とは気が気が合いそうだな……けど俺自身は会った事がねぇからわかんないなぁ」

銀八
「はい、ありがとうギンガの親父さん……と言う訳で『烈火竜』さん、廊下にたってなさい！んで次ぃ、ペンネーム『月光閃火』さん『うしゅ～…月光閃火です♪

っていうか、アギトっていっつもコンパクトサイズで居るから別に胸がでかくなっても難しいような…。まぁ…フルサイズで年頃の背格好でなら遜色無いだろうけど…。

輝刃「…そこまで直球にいきますか…（汗）。とりあえず、質問はしておこう…。」

1．ギンガに質問だ。正直言ってもっと出番欲しいか?欲しいなら俺が直々に行っておd…ゲフンゲフン…『お話し』しに行くが…。

アハハ…ほどほどにしてね～。あ…自分からも質問です。

2．高杉に質問…っていうかリクエストです。シャマルの料理食べてスバルの『凶王化』みたいにどんな『○○化』になるか、体を張って体験して欲しいです。

シャ「ちょっと…酷いですよ～（涙）。私の料理はそんなにマズくありませんよ～。」

輝刃「…いや、アレはさすがに常人にはキツい代物だぞ?」

シャ「ふぇえ～ん…酷いです～（泣）。」（そういって、泣き腫らしながらスタタタ…と帰っていく）

あ～あ…さすがにイジメ過ぎちゃったね…。

輝刃「…だがしかし、あの破壊力は凄まじいぞ?」』」

ギンガ
「ほしいです！」

銀八
「即答!?」

素早く即答に答えるギンガ。
相当なまでに出番がほしいようである。

銀八
「んで2はなぁ……無理だろ?高杉相手じゃ……」

その前に殺されると考え青ざめて答える銀八。

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、ちょっとシャマルに料理を上手くなるように協力してやってください」

ギンガ
「次行きます、ペンネーム『神威　銀時』さんからの質問です『唯「どうも、平沢唯です」

リクオ「奴良リクオです」

唯「いや?こっちの銀さんはモテモテだね」

リクオ「将来、女を泣かせると思うよ」

唯「それリクんが言う?」

リクオ「??ところで今の僕のあだ名?」

唯「質問だよ?、ティアナとまた子、どっちが射撃の腕がすごいと思いますか?」

リクオ「こっちの作品に黒神さん、ティアナ、スバル登場してもらう予定ですのであまり期待せずに待ってて下さい」』……そんなのティアナに決まっているよ」

銀八
「ほぉ、やけに自身ありですねぇ」

ギンガ
「2人の銃の腕は互角……だったら決め手は魔法を使えるティアナのほうが有利だわ。魔法を使えないまた子じゃ話にはならないね」

銀八
「何、魔法を使えない人に対する見下し感!……と言う訳で『神威銀時』さん、本当の結果は2人とも互角ってことです」

ギンガ
「ティアナが勝つわよ!……まぁ良いけど、次はペンネーム『私にいい考えがある』さんからの質問『機動六課舞台の皆さまに質問ですが、
もしもミッドチルダにデストロン軍団（初代）が現れたらどうしますか?。
そして神楽に質問。
最近、太ってませんか?。
もしかしたらまたあのダイエットの話同様に太ってしまってるのではありませんか?・・・あっ傘はやめて・・・謝るから!ごめんなs・・ほあああああああ!?
次は新八が登場とは楽しみですwティアナとの突っ込み対決が目に

見えて笑けてきますｗｗ
そして今回はスバルが物凄く可愛かったです
次回も楽しみにしていますｗ。
『……あのエロ部隊長！！！！妹にあんな破廉恥な行為をしやがってぇぇぇぇ！」

怒りを大爆発させるギンガ。
詳しくは『第八十三訓：男女ペアの町歩きはデートと一緒である』で。

銀八
「んじゃ答えるな。作者はデストロンっと言う軍団はなんなのかは知らないので答えられません。そして神楽のほうはと言うと……」」

神楽
「レディに対しての言葉アルカぁ！」

ドカァ！

ギンガ
「ごふぁあ！」

何故かギンガの顔面に神楽の剛拳がクリティカルヒットした。
そして神楽は怒って席に戻る。

銀八
「……と言う訳で『私にいい考えがある』さん、あんまり女を怒らせないほうがいいです」

でないとギンガの二の舞になってしまうと恐れる。

銀八
「んじゃ次行きますか……ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん」
十蔵
「ワシが外伝で開発したマッサージマシーンそっちで使うか？なら使っても良いぞぃ！存分に使ってくれぃ！」『……、問題起こるので却下ー！」

と銀八は青ざめて『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんの質問を破る。
十蔵の発明した機械はろくな物じゃないと確信しているからだ。

銀八
「……と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、十蔵に少しお仕置きしてやってください」

ギンガ
「次行きます」

銀八
「うぉ、ギンガいつの間に！？」

ギンガ
「ペンネーム『三月語』さんからの質問です。『どうもで「（レイン）僕は化け物じゃなーい！」・・・うるさ・・・
「（レイン（プリン♂））そりゃ防御は堅いけどさ！？攻撃は紙なんだよ！？」
（紙とは軟弱・貧弱の意味です。ポケモンではよく使われます）
銀さんとアルフのデート的な話がありましたが・・・、背後からの

『デートさせろ』オーラが痛いです・・・
「（ウィリア）女の恨みは恐ろしいって言うよ？」
ええい、女の妬みは化け物か！？
「（レイン）放置放置ー。スルースルー。」
「（ウィリア）・・・質問、行く？」
「（レイン）だね。質問は・・・

1．（女性陣に）銀時に『（買物に）つき合って欲しい』と言われたとき、どう解釈しますか？（）の中を省いて考えてください）

2．恋敵が現れて、その人が自分より強いと分かっても潰しにかかりますか？」
「（ウィリア）うわぁ・・・」
「（レイン）銀さんも誰か一人に絞ればいいのに・・・」』」

すると、フェイト達は立ち上がって答える。

フェイト
「銀時と一緒なら！／／／」

なのは
「勿論ＯＫなの！／／／」

スバル
「銀さんとお出かけしたい！／／／」

ティアナ
「兄さんなら喜んで！／／／」

アルフ
「デートの気分で行けそうだし！／／／」

シグナム
「そんなの付き合うに決まっている！／／／」

リィンフォース
「はわわぁ～～～／／／」

チンク
「銀時と一緒……勿論いいとも！／／／」

セイン
「銀時と二人っきりだぁ！／／／」

セッテ
「一気に仲を深めるチャンス！／／／」

ウィンディ
「付き合うっす！／／／」

ディード
「わ……私も！／／／」

猿飛
「あぁ～！！銀さんと一緒なら私、大歓迎だわぁぁぁぁぁぁ！／／／」

などと予想通りの質問の答えであった。
そして、もう1つはと言うと……

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛『『誰だろうと、邪魔するなら容赦しない（わ）（よ）（なの）（わよ）（っす）』』（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

銀八
「おぉーい！！？何か凄い事になってんだけどぉぉぉぉぉ！」

ギンガ
「認めないわ！！」

突如、ギンガが大きく叫びだして何かを訴える。

ギンガ
「伝説の英雄や白夜叉かは知らないけど……坂田銀時、あの男にフェイトさんは絶対渡さない！！」

銀八
「黒神ーーーーーーーーー！！？ここのギンガは百合設定！？」

黒神
「いやぁ、そうしないと影の薄いまま終わっちゃうと思って……つい」

銀八
「……と言う訳で三月語』さん、貴方の質問で思わぬことを知りま

した……んで次行くぞォ、ペンネーム『ミクニップ』さん『お初にお目に掛かります。ミクニップと言います。突然ですが質問します。

黒髪さんに対して・・・1，ＮＥＥＤＬＥＳＳって知ってますか？もしよければそれとなのはか銀魂のコラボ見てみたいです。声優さんは銀ちゃんと同じですし。

2，屁怒露さんや松平の野郎は登場するんですか？

3，原作でもあったんですが、お妙のお見合い騒動みたいなのもするんですか？あとたまクエとかも。

ノーヴェに質問・・・1，とりあえず好きな奴とか居るんですか？あと出番無くても頑張れ。

2，何だか他の作品ではチンク命みたいになってるんですが、そこはどうですか？あと毎日頑張ってみてくれ。

3，ギンガやスバルの事どう思ってるんですか？マジで出番勝ち取れるように頑張れ。

ノーヴェ「何故其処まで出番の事を言う1？嫌がらせか！？嫌がらせなのか！？」『……ズバリ答えます。『ＮＥＥＤＬＥＳＳ』も知らないのでカットします。マジすんません」

ノーヴェ

「次はアタシに対する質問……ておい！1は馬鹿にしてんのかごるぁあ！そんな奴いねぇよ！出番の事を言うなぁ！」

顔を真っ赤にして、怒鳴って言い出すノーヴェ。

ノーヴェ

「んで2は……確かにチンク姉は津ごく心配だよってまたそれかい！！」

ノーヴェは呆れてツッコム。

ノーヴェ
「3は、スバルはヒロインとして目立ちすぎ！！……んでギンガは足掻いても無駄って感じが……」

ギンガ
「あぁ！？……やんのか餓鬼が？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

マジギレしてとてつもない威圧感を放つギンガ。
コレにはノーヴェも青ざめて……

ノーヴェ
「すみませんでしたぁ！！！！」

必死に逃げ出す。
銀八はギンガをなるべく怒らせないように誓う。

銀八
「……すんません『ミクニップ』さん、ノーヴェが可哀想なので次からはもっと良いのをお願いします（青ざめ）」

ギンガ
「次はペンネーム『白米』さんからでぇ～す♪」

さっきの威圧感がウソのように消えて質問を言い出すギンガ。

ギンガ

「『武「銀時、今回はかなりいい事言ったな。後、ナイス制裁」
刃「代わりにスバルは悲惨だったな。ここに白米がいたら『スバにゃん、爆誕（笑）』と大笑いしてただろう」
武「確かに、あのバカなら言いかねん（汗）
つか、白米は何処行ったんだ？」
刃「さっき『稲刈りの季節じゃあああああ』と叫びながら出かけて行ったのを見たが？」
武「大変だな、田舎者は・・・・・。
さて、質問と行くか」
刃「白米からメモを受け取っている。是非武に読んでほしい、と」
武「なになに？
『ギンガの好きな男性のタイプは何ですか？よろしければ、うちの武と付き合ってみませんか？（笑）』
白米ィィィィィィィィィ！！！／／／」（顔を真っ赤にしてメモを破り捨てる）
刃「やれやれ。二つ目は拙者からだ。
スバル、白米が付けた『スバにゃん』というあだ名を、銀時に呼ばれたらどう思う？
ま、あの男がそう呼ぶとは到底思えんが。気に入らなければ、白米を斬り殺しても構わん」
武「それについては俺からもよろしく頼む！！
後、黒神さん。これからも頑張ってください」』……そうですねぇ、フェイトさんのような女のように美しい方／／／」

銀八
「それ、思いっきり男には興味ないっと言ってるじゃねぇか！！…
…まぁいい、んでスバルはどうだ？」

スバル

「えぇ！？……銀さんから……スバにゃんって……なんか良いかも／／／」

ギンガ
「あの腐れ天然パーマー！！！！」

銀八
「あーあー、シスコン暴走はいいからいいから！……と言う訳で『白米』さん、まともな答えじゃなくてすみませんでした。次ぃ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『今回は私の小説『リリカルＢＡＳＡＲＡ』より徳川家康が質問します。

家康
「ギンガ殿に質問だ。この作品のみならずｃｈａｒｌｅｙの作品でもメインヒロインとなるなど何かと優遇されている妹　スバルに対してお主は今、どういう感情を抱いているか？」

それともう一つは大友宗麟から質問という宣伝があります。

宗麟
「『リリカル銀魂』の影の薄い者やあまり好運に恵まれない者達へビックニュースですよ～。

『リリカルＢＡＳＡＲＡ』では聖王教改め聖王ザビー教という『愛』を教える素晴らしい宗教がありますが、黒神君が『リリカル銀魂』登場キャラの中でザビー教に入信させたら面白いと思うキャラはいますか～？

もし、ザビー教に入れば貴方の新しい一面を開花させる事もできますし、何よりキャラにインパクトがつきますから影薄などと言われ

る事も無くなります。
さらにザビー様の愛の御加護を受ける事で心も清らかになりますよ。
特に腹黒いなのはさんや影の薄い新八君は入信すべきなのかもしれませんねぇ。

ちなみに、もし銀八先生か銀時君が入信したらもれなく『テンパー坂田』という洗礼名を…
ギンガさんが入信したら『アップルギンガ』という洗礼名をそれぞれ差し上げますよ」

ｃｈａｒｌｅｙ「二つ目は質問になってるか心配ですが、家康と宗麟でした」『」

ギンガ
「舐めてんのか、この糞漏らし将軍！！」

怒りを大爆発させて怒鳴るギンガ。

銀八
「えええぇぇぇ！？ちょっとキャラ崩壊しすぎじゃないこれぇ！！？」

ギンガ
「糞漏らし将軍、てめェうちの妹に手を出したあげくに感情だとぉぉ……！んなもん羨ましいに決まってるじゃねぇか！！テメェだって『戦国ＢＡＳＡＲＡ３』では主人公の一角の癖に、『戦国ＢＡＳＡＲＡ弐』でもおまけ扱いでしか出てねぇ哀れな扱いされているじゃねぇか！主人公辞めろ、『シューティングアーツ』舐めんな！妹とフェイトさんをたぶらかせんなごるぁ！」

銀八
「あーもー、ちょっと暴走しすぎだから！抑えてくれぇぇぇ！」

銀八の必死な掛け声に、ギンガは我に返る。

ギンガ
「あ……あら私ったら、何てはしたない／／／」

今の自分を恥じるギンガ。
さっきまでの暴走がウソのように思える銀八は、ギンガを怒らせない事を誓う。

銀八
「二つ目は……じゃああの白い悪魔に入れ……」

なのは
「デスペレード・デモン・ブレイカー！！！！（怒）」

ドカァーン！

銀八
「うぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！！」

突如、なのはから放たれた漆黒の魔力砲に飲み込まれて黒コゲトなる銀八。

ギンガ
「あ……あはは……てな訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、はしたない所を見せちゃってすみませんでした……次はペンネーム『ソウ』

さんからの質問です。『どうも、こんにちは。
質問に答えていただきありがとうございます。
では、質問です。
1．銀さん大好きな皆さんにまた質問です。自分の中で（恋敵として）手ごわいと感じている人を一人挙げてください。
2．キャロ、いやキャロさんに質問です。エリオの周りにいる人を抹殺、じゃなくて追い払うだけでなくエリオ自身にアタックしているかどうかお答えください。
』」……なんかムカつくけどしょうがないか……」

フェイト・スバル・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛
「高町なのは（だよ）（す）（ね）」

なのは・ティアナ・シグナム
「スバル（だよ）（だな）」

アルフ
「フェイトかなぁ」

銀八
「……なんかすんごく羨ましい」

銀八は銀時のもてっぷりに凄く羨ましそうに言い出す。

銀八
「では、次はキャロどうぞ」

キャロ

「えー？アタックしてもお邪魔虫共のせいで上手くいけないから…（神楽と月詠）…」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

メッチャ怖く言い出すキャロ。
コレには銀八とギンガも青ざめて怯える。

銀八
「『ソウ』さん……しばらくキャロに対する質問を控えてください。次ィ、ペンネーム『生まれ変わった人』さん『幼少のティアナの前で兄のティーダを『役立たず』と罵った上司が機動六課にやって来て、ティアナになんらかの侮辱をしたとき、銀さんの怒りを買ってそいつと勝負。そして外道丸とのタッグバトルで去勢、痔持ちにさせ、仇を討ってくれた銀さんにティアナともキ○させるなんてどうですか？　僕も書こうとしてるのですが、気に入ったらそのストーリーを書いてみてください。』……アイツならそうするな。一応兄だから」

ギンガ
「むぅ……侮れないわ」

銀八
「何対抗心燃やしてんだよ！？……と言う訳で『生まれ変わった人』さん……廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
？機動六課のメンバーが原作第六十六訓の（ヘドロ国王陛下初登場の話）万事屋のポジションでヘドロの森にいたらどう行動しますか。ちなみにアニメ版です。
？ギンガに質問というかアドバイスを出番を増やしたいならキャラ崩壊でもしたらいいと思うよ。少しは出番増えるんじゃないかな。』

……？は答えるだけでもいやじゃあああああああああああ！」

ヘドロの恐怖に青ざめる銀八。

ギンガ
「？ねぇ……そんなんで出番が増えたら苦労はしないわぁぁぁぁぁ！！！！（涙）」

自分に対するまともがない質問に大泣きするギンガ。

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『新八君を強化させるのは、正直賛成です。このまま終わって欲しくないと僕は思っています。

巧「しかし、作者お前まだ俺の小説を一ヶ月以上書いていないじゃねか」

う（汗）

巧「このままどうするんだよ」

いまこれについて悩んでいるんだよ
銀魂とのコラボはやっぱり難しいね、たっくん

巧「だからたっくんと呼ぶな！！」

えーとまあこれは置いといて
質問をしようかたっくん

巧「だからたっくんと呼ぶ・・・てもう居ないか
あーしょうがない銀八先生に質問だ
ゲンヤのおやじに質問だ
1娘であるスバルを今どう思っているんだ
姉であるギンガに質問だ
2前回のスバルの格好（ネコ耳スクール水着）はどうだったってこれ作者の質問じゃ・・・まあいいか
それと最後に一言だ
高町なのはお前少しは周りのことを考えろ銀時に振られるぞじゃな」
（オートバシンに乗って帰った）
『……お父さん、娘さんの感想を聞かせてください」

ゲンヤ
「そうだなぁ……剣術を極めようとしてコレほどまでに成長した事には強い感心した。父として誇れるが……逆に目立ちすぎると高町やテスタロッサにしばかれるんじゃないかと、何か最近変な方法で心配してんだが……」

銀八
「お父さん……その心配は正解だと思います……んでギンガは……」

ギンガ
「そんなの興奮したに決まってるだろうがぁぁぁぁぁ！！！！／／／／（鼻血）」

ゲンヤ
「ギンガ……お前少しはスバルを見習ってくれねぇか？」

銀八

「あーあー、親父さんに言われちゃったよ……と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、新八の成長は肉体的強さじゃなく精神的強さで成長させますんで」

ギンガ
「おっと行けない。次はペンネーム『絶神；肥後魚』さんからの質問です。『肥後魚
「相変わらずこの小説は内容が深くて面白いなぁ。」

次真
「作者と黒神先生の格の違いはものすごいものがあるな…。」

肥後魚
「人が気にしていることを言わないでくれ！　あれが僕の作文力だから、仕方ないの！！」

次真
「…みっともないぞ。さて、今回はゴリラがバレたらあの世逝きの嘘ついたり、神楽がなんか成長してエリオがベタボレたり、キャロがジェ○ソン化したりで大変だったようで…。まあすごい面白かったけど。」

深雪
「そうね。今日は質問をさせて貰うわ。１．スカリエッティに質問。山崎さんとディエチちゃんが付き合ってますが、もしも２人が結婚したとします。まあもちろん『＊＊＊』なことがあって子供ができるけど、あなたは『おじいちゃん』、みたいな感じかしら…。まあとにかくそんな感じになっていく実感はある？　できれば具体的に答えてね♪」

次真
「次は俺から。2．キャロに質問だ。もしもエリオが『僕、実は神楽さんと月詠さんの2人と［＊＊＊（想像に任せる）］な関係なんです！』何で言ったらどうする？　次の選択肢から選んでくれ。

？：エリオをあの世逝きとする。

？：神楽と月詠をあの世逝きとする。

？：？と？の両方。

？エリオを拘束して［＊＊＊（想像に任せる）］なことをする。

？この世は理不尽だからぶっ壊す。

？その他の方法

まあお願いする。」

肥後魚
「これからも楽しみにしてま～す。」『……2は怖いので却下ー！！」

銀八
「同感！」

2人は青ざめて2を取り消しする。
そして1の質問のためにスカリエッティに答えさせる。

スカリエッティ
「そうだなぁ……私も若くはないから……山崎君ならディエチとうまく行けそうだから孫も出来るだろう」

銀八
「お父さんだぁぁぁ！スカリエッティもお父さんになるんだぁ！てな訳で『絶神；肥後魚』さん、２つ目の質問は怖いんでマジ勘弁してください！」

ギンガ
「次はペンネーム『サディスト』さん『今回は質問とアドバイスでもするか。

まずヴィータに質問。

質問。
何時になったら【ヅラ】を名前で呼ぶんだ？

こっちはアドバイスね

はやても未だに【桂さん】呼びしてんだし、せっかくだからヅラじゃなくて【小太郎】って呼んでみたらどうだ？

ついでにヅラに敬称の【殿】を外してって頼んでみな。
一気に【距離感】縮まるから。

恥ずかしがらずに頑張れ。

銀時好きに質問。

もし、自分が風邪をひいて（もちろん熱もある）寒気がした時…銀時に「…寒いのか？寒い時は肌と肌で暖め合うのが一番だ」って言われて上に覆い被られたら、耐えられるか？

全員死にそうだけど（幸せ過ぎて）

それぞれ答えてくれ
（ただしさっちゃんは除く）
（すでに経験してるからな）
ついでにツッキーとプレシアも答えて。

後、ギンガにもアドバイス。

このままじゃ目立たないからディバイスのドリルを強化したらどうだ？

ついでに【グレンラガン】を全話見とけ。（もちろん劇場版も）

多分凄い【必殺技】マスター出来るから。

（銀時、なのは、そしてフェイトが怯えまくり必ず勝てる【超必殺技】がな。ちなみにその技は銀八と土方も駄目だぞ）。

是非ともやってみて。

面白い事になるから（笑）。』……よし、『グレンラガン』を会得

する！」

銀八
「そこまで出番欲しいのかよ？……んでヴィータは」

ヴィータ
「今はまだ出来ねぇから苦戦してるだろうがァァァァ！！！／／／」

ドカァ！

ギンガ
「何で私！？」

ヴィータは顔を真っ赤にして『グラーフアイゼン』を振ってギンガを吹飛ばす。

銀八
「……何かあんま答えたくねぇけど……フェイト達はどうだ？」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛
『『それはすんごく幸せな一時（だよ）（なの）（よ）（だ）（だな）（ですぅ）（っす）（だわ）！！！！／／／／』』

銀八
「速攻かいこのヤロー！！……えーと言う訳で『サディスト』さん、廊下に立っててください」

ギンガ

「あ痛た……次はペンネーム『あああ』さん『作者の黒神さんに質問です。
銀さんに惚れる奴はあと何人出てきますか？』」

銀八・ギンガ
『『んなもん分かるかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（怒）』』

2人は怒り出して踏んだり蹴ったりと質問を妨害する。

黒神
「まぁ、とりあえず答えます。……そうですねぇ……後1人や2人も良いんじゃねぇか？」

銀八
「……『あああ』さん、とりあえず廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『アクセル』さん『質問です。
このままキャロの恐化が続いていったら最終的にはどんな怪物になるんでしょうか？
今の時点でもう誰にも止められない気もしますが…。』……怖すぎて想像できません！」

ギンガ
「同感です！（涙）」

さすがに怪物までは行かないが、はっきり言って怖すぎる。

銀八
「と言う訳で『アクセル』さん、キャロの怒りを楽しみにしないでください……マジ怖いんで……次な、ペンネーム『スコーピオン』さん『質問コーナーへ

質問です。

今のところ僕はスバルが欲しい物（人以外）はなんでも作れます。

スバルは何か欲しい物ある？

それがスバルの恋愛に関係するほど価値が高いです。

一応、『刀につけられる銀さんストラップ』を二つほどあげます。

可動式なので好きなポーズとらせられますよ～

更新頑張って下さい！』」

ギンガ

「余計なお世話じゃあああああああああああああああ！」

突如、怒りの余りに質問を破りだすギンガ。

銀八

「……とりあえず無視して、彼女は『バーゲンダッシュ』１００個のようです。と言う訳で『スコーピオン』さん、これからもスバルの応援よろしくお願いします……次ィ、ペンネーム『漆黒の不死鳥』さん『銀魂勢もリリカル勢もキャラ崩壊が多いが、まさかこいつが！・・・って奴がキャラ崩壊しないのか？例えば高杉とか』……少なくともギンガはなりました」

ギンガ

「う……言い返せない……」

銀八
「と言う訳で『漆黒の不死鳥』さん……更に思わぬ人物のキャラ崩壊もありますので……次ィ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『エリオに質問
2年後の神楽と今の月詠、どっちが好みですか？

ギンガに質問
この小説のギンガさんは本当に影が薄いですね、『ぶっちゃけいてもいなくても誰もわかんなくね？』って思われても仕方なくも無いだと思います。って銀八先生が言ってました。』……2つ目の質問人のせいにされちゃったー！！？」

銀八は青ざめて叫ぶと、背後からとてつもない殺気を感じる。
それは、怒りの化身と化して『リボルバー・ナックル』を装填させたギンガであった。

ギンガ
「ほほ～う？（怒）」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

銀八
「え……ちょ……待って、マジ勘弁……てぎゃあああああああああああああ！！！！！」

怒りの余りにギンガは銀八をフルボコにする。

黒神
「……えーっとう、2人の代わりにエリオ、お願いします」

エリオ
「どっちも好きです！！／／／」

はっきりと告白するエリオ。
しかし『銀八先生コーナー』が終わった後、彼に悲惨な事が起こったのはまた別のお話で。

銀八
「……と……と言う訳で……『正宗の胃袋』さん……廊下に立っててください……次ぃペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『ウッソ「次回は質問コーナーがあるので質問です。

？この前野球編でヴィヴィオを出すみたいなことを言ってたような気がしたんですが・・・一体いつ出るんですか？

？こっち（Ｇ．Ｓｔｒｉｋｅｒｓ）みたいにシャマル鍋を兵器にしないんですか？」

かがみ
「あんなの兵器にしたら最強だと思うけど、非人道的な行為じゃない？」

こなた
「いやいや。殺すまではいかないから大丈夫でしょ」『」

ギンガ
「確か、『銀園祭』が終了した後に出すとか言ってたけど……少なくとも次のシリアス前だと思う……」

銀八
「そうだなぁ……そんでもう1つは確かに、ありかも知れねぇ」

ギンガ
「シャマルさんに怒られますよ！？」」

銀八
「良いんだよ……食べる人の気持ちを知らない奴の作った料理をこうしねぇと分からねぇんだよ」

ギンガ
「たしかに……」

銀八
「と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、『シャマル鍋』の件は申し訳ございませんでした。次ィ、ペンネーム『風花』さん『風花
「どうもお久しぶりです、風花です
スクーリングお疲れ様でした」

レイン
「それより、ティルヴィングエア折れたな」

風花
「うん。やっぱりどんな凄い名刀でも後期に作られた方が強度は高いからね。例外はちらほらあるけど」

レイン
「ああ……っと、今回はそんなことを言いに来たんじゃなかったな。質問だ」

風花
「君から質問するなんて珍しいね。お願い」

レイン
「わかった」

?そっちの世界には『七星神刀』は伝説として残っているんだった
な？　なら裏社会などにその模造品を売っていたらどうする？　冷
やかすか？

?とあることで暴走している奴がいてよく攻撃してくる。もしよか
ったら砲撃でも撃ってくれないか？

風花
「……明らかに二つ目はあれ、だよね？」

レイン
「……仕方ないだろう。あれに対抗するにはこうするしかあるまい」

風花
「えっと……二つ目はもしよかったらでいいです。はい。……それ
では」

レイン
「ティルヴィングエアが直る事を祈っている」』……ずばり答えま
す。？はそれはあるかもしれません、裏社会でも一部は七星神刀（しちせいしんとう）の
伝説を知ってますから。そして？は……なのは、お願いします！」

なのは
「にゃはははは♪デスペレード・デモン・ブレイカー！！！！」

漆黒の極大な魔力砲を容赦なく撃つなのは。
おそらく風花さんの所に向かうであろう。

ギンガ
「ちょっとー！！！！何やっているんですか2人ともぉぉぉぉぉ！
いくら頼まれたってそれはないじゃないですかぁぁぁ！？」

銀八
「という訳で『風花』さん、応援ありがとうございます」

ギンガ
「ギンガ、人の話聞こう！……もう良いわよ……ペンネーム『光軍』
さんの質問『光軍
「スバルにあんな過去があったなんて・・・・・・」

洋基
「そうやな・・・

俺もそんなことあったわ・・・・

あの人等と一緒にあの戦争に出たんや・・・・・

目の前の敵さん、斬って斬って斬りまくった・・・
何も考えずにな迫って来る連中を斬ったんや・・・

来る日も来る日も・・・・敵味方入り混じった中で俺はただひたす
らに斬りまくったんや・・・・

そん時の俺はただ敵を斬るためだけの人形になってたんや・・・・・・

そしたらな・・・・気いついたらなぁんも残ってへんかった・・・・・・

敵も・・・味方も・・・・・大切な人も物も・・・・・・仲間も・・・・・・
・・自分の周りにあったもん全部失ってもうた・・・・・」

光軍
「洋基・・・・・・」

洋基
「・・・・・・そんで、俺は杉さんも止めれんかった。俺があん時気いついとったら良かったんや・・・・・・

・・・せやけど、あの人の気持ちまで理解しようとは言わん。

それでも、あの人を止めれるぐらい俺が強かったらなぁ・・・・力も・・・心も・・・魂も・・・・・」

光軍
「・・・・・・」

洋基
「俺は無力や・・・・・・
いや、俺だけやない。
銀先輩もヅラ先輩も坂もっさんも・・・・みんなあの人を・・・・・・
杉さんを止めれんかった。

何も出来へんかった・・・・・

せやけど・・・・・俺は絶対後ろは振り向かへんってアイツらに誓ったんや

死んでいったアイツらはもう蘇れへん、戻ってこえへん・・・・・

いつまでも未練たらたらでおられへんのや！復讐なんてしても虚しいだけや。

俺は俺らしく前向いて進むって決めたんや！

この魂の芯の芯に・・・・・・・」

光軍

「・・・・・そうだね」

洋基

「せやから、スバルも前向いて行き。立ち止まってたら何も出来へんで？

泣いてたらアカン、涙なんて流してたらアカン！

悲しみなんてもんはお天様がかわりに雨っつー名の涙で流してくれるんや・・・・・・

せやから、スバルはそん代わりに精一杯の笑顔でお天様やみんなに向かったるんや・・・」

光軍

「・・・・・・グスッ、たまには良いこと言うんだね・・・・・」

洋基
「まあな・・・・・
あと、質問や［スバルは侍の魂や剣とかを学んで強うなったけど、魔法も勿論のことこれからどうなりたいんや?剣も魔法も両方極めるんか?もし、そうやったら何をするばええと思うんや?］・・・・・や」

光軍
「それじゃあ僕も・・・・［僕の小説『白夜叉と鈴鳴の鬼』では銀さん、桂、高杉らの幼少期を基とし、そしてこの洋基を加えたお話なのですが。皆さんはこの小説をどう思っていますか?あと、コチラのまだ普通だった高杉を見てどう思いますか?］・・・です」

洋基
「と言うわけで次回も頑張ってや」

『』」

スバル
「私は……勿論魔法も強くするよ。剣術と魔法を極めて大切なものを護れる為なら……」

銀八
「いやー、スバルのその決意は心に響くわぁ……どっかの影薄百合シスコンとは大違いで」

ギンガ
「悪かったわね！（怒）」

銀八
「2つ目は……アイツを呼ぶのをムカつくから、ヅラに答えさせます」

桂
「ヅラじゃない桂だ……そうだなぁ、中々良いではないか。松陽先生と過ごした日々に笑いタップリで注目アリまくりだ。ただエリザベスが出てこないのが残念だが」

銀八
「と言う訳で『光軍』さん、ヅラの感想はこんな感じでしたぁ」

桂
「だからヅラじゃない桂だ」

銀八
「次ぃ、ペンネーム『龍の骨』さん『零斗
「いやぁ〜スバルとアリマのバトルはよかったなぁ〜そうだろ？エリオ」

エリオ
「・・・・・・」

零斗
「どうした？」

エリオ
「スバルにそんな過去があったなんて知らなかったぞ。それにスバルはアリマとの戦いでかなりの重傷を負った、そして剣は折れた。

これは見過ごせないな」

零斗
「そうか、お前にもいい所があるんだな。という訳でスクーリングお疲れ様でした！ここでエリオ（イカロス）からの質問だ！」

エリオ
「ここのそっちの俺とキャロは何時恋人同士になるんだ？もう一つはＢＳＡＡ学園！のキャロが巨乳キャラになっているんだがそっちのキャロはどう思うんだ？（汗）」

零斗
「何汗流してんの？」

エリオ
「いや、そのぉ～そっちのキャロが・・・・・」

零斗
「成る程ね、ジェイソン化したキャロが怖くてそっちのエリオとキャロを肉体関係にさせようっていうのか？」

エリオ
「いや！そういうわけでは・・・」

零斗
「スケベ丸出しのエリオ君の質問に答えてあげてください」

エリオ
「どこがぁーーーーーーーーーーーーー！！！！」

本当にすみません・・・・・』……なんかこっちのエリオとあっちのエリオが全然違うなぁ……1つは神楽と月詠が入る限り不可能に近いです。そんでもう1つは……」

キャロ
「正に理想の私！」

と嬉しそうに激しく言い出す。

銀八
「……と言う訳で『龍の骨』さん、うちん所のキャロはそっちのキャロに羨ましがってます」

ギンガ
「次行きます、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『初めまして！鳴神ソラと言います！黒神さんの小説を最初っから楽しく読ませて貰ってます。

ルイージ「初めまして、作者のツッコミ担当その1のルイージと言います」

フォックス「その2のフォックスだ」

スネーク「その3のスネークだ…しかし今回の話でスバルの色々ときつい出来事が分かったな」

けれどね…裏切り者と言うのはお門違いだよね

マリオ「そうだな…あっ、俺はマリオ、皆からソニックと並んで超鈍感コンビって言われてる。…んで話を戻すけど…アリマ！スバル

を裏切り者扱いするのは間違ってる！と言うか裏切り者はお前だ！
スバルの気持ちを考えずに普通に裏切り者扱いするお前は間違ってる！そう言う奴にはホントの力（心）なんて付く訳ないんだよ！」

ソニック「マリオの言う通りだ、それに、あんたの仲間もそんなあんたを見れば何やってるんだ！って叱責すると思うぜ…遅れたけど俺はソニック、ソニック・ザ・ヘッジホッグ、よろしくな」

自分の刀を折られたスバル…彼女の魂とも言えるティルヴィングエアは復活はするのだろうか！！

スネーク「いや、しなきゃ駄目だろ、話的に」

ルイージ「メタ過ぎる…」

それで質問！

1．新八さんの出番何時になるんでしょうか？…と言うかもっと彼の扱いを良くしてあげてくださいｍ（＿＿）ｍ

フォックス「おい！後半が質問じゃなくて願いになってるぞ！！」

マリオ「俺からも質問、スバルって使う魔法はウイングロードだけど…それ以外に自分的に使いたい魔法ってあるか…なのは（冥王）や他のメンバーの魔法意外な」

おいいいいいいいいい！！！！今なのはと書いて冥王って言ったろお前！？

マリオ「ん？確かそう呼ばれてなかったけ？」

それ別の場所のとある作家の人が書いてるのに出てるなのはだから！！

ルイージ「そんな訳で次回を楽しみにしてます；」『……ちょっと！！！！なのはさんに冥王呼ばわりはヤバイでしょう！」

銀八
「そうだな…1つはもっと先ですが、この小説はかなり長いので後半も長いと思います。そんでもう1つはスバルにお願いします」

スバル
「……特にないです……けど会得したい剣技は1つあります」

銀八
「ほう、それはいったいなんだ？」

スバル
「『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の主人公、○達政宗さんの『Ｗ○Ｒ　ＤＡＮＣＥ』！竜の爪って何かカッコイイから！」

銀八
「おいいいいいいいいいい！いくら魔力刀を作れるからってそれはねぇだろ！石○三成か上杉○信の技を参考にしろぉぉぉぉぉぉ！」

絶対不可能な答えに思わず銀八はツッコむ。

ギンガ
「……と言う訳で『鳴神ソラ』さん、初質問ありがとうございました……次はペンネーム『次村陣八』さん『銀八でする質問をします！

1、最近ＰＣのバイオ４にハマってんですが、なのはさんらはもしもそこに行ったらどうなるでしょう？ビビる？
2、なのはさんたちって最高どれ位飛べるんでしょうか？なんなら酸素ボンベ持ってたら宇宙まで飛べるとか？パンツ大丈夫？
はい！（最後のナシとかはやめといてください）』」

機動六課の全メンバー
『『怖いから嫌だぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！（涙）』』

銀八
「俺だってお断りじゃあああああああああ！そんでもう１つ、確かに可能だがそれじゃあ死ぬだろ！！！！」

メチャクチャな質問に答えながらツッコむ銀八。

ギンガ
「と言う訳で『次村陣八』さん、廊下にたってなさい！」

銀八
「次がラストな……ペンネーム『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さん『「どうも初めまして『俺と恐キャラ家族化計画！』の主人公、柿原　実です。こっちは・・・」
「どうも～不思議な堕天使ラーデで～す」
「はぁ～という訳で作者のかわりの俺達二人が質問します。ラーデ頼む」
「はい、それでは一つ目、キャロちゃんに質問。エリオ君がもしも「今日は君と一緒にいたい」と言われたらどうします？」
「二つ目は俺が・・・なのはさんに質問です。・・・・・・・・自分が白い魔王だって事自覚してますか。皆さんはあなたの事、内心

思っていると思いますが、私ははっきり言います。・・・あんたは白い魔王だぁぁぁ。（笑）っておいぃぃ死ぬ気か作者！」

「白い魔王ですかぁ～いい称号だと思いますけど？」

「ラーデ！変な事言うなって！ちなみにキャロちゃんには飲めば誰でもメロメロになる惚れ薬とジェイソン愛用の鉈を送りますって怖いなある意味…」

ちょっと長かったと思いますが、よろしくお願いします。『……」

キャロ

「勿論一緒にいます！そんで毎日一緒に！！」

すんごく嬉しそうに答えるキャロ。

そこまで嬉しいのかと思わせるぐらいに。

銀八

「……次……なのはさんは……てのぁあああああああああああああああ！！！！」

銀八は、魔王の如くの覇気を放っているなのはを見て怯えだす。

その威圧感は夜王級と言ってもいいだろう。

なのは
「皆……頭冷やそうか……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

ギンガ
「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！？何で私もですかぁぁぁぁ！！？」

銀八
「いいから逃げるぞォォォォォォォォォ！！！！」

銀八とギンガをはじめ、誰もが必死に逃げ出そうとするが……

なのは
「全力全開、デスペレード・デモン・ブレイカー！！！！！！」

放たれたコレまで以上な最大級の『デスペレード・デモン・ブレイカー』は一気にこの場を飲み込んで、焼け野原のクーレターと化した。

黒神
「……まぁ、とりあえずこんなオチで終了します。……次回のアシスタントはとりあえずドゥーエにさせますので……では」

第八十八訓：暴走は一度発生したら中々収まりにくい（後書き）

黒神
「次回はとある特別ゲストを紹介します！アニメを参考にした大爆笑たっぷりのを期待してください！」

銀時
「次回、『たまには本編でもゲストを出したほうが面白い』テイクオフ」

第八十九訓：たまには本編でもゲストを出したほうが面白い（前書き）

ＧＩＮＴＡＭＡ

神楽・新八
「宇宙一馬鹿な侍だこのヤロー！！！！」

主題歌：ＤＯＥＳ　『バクチダンサー』

桂
「いつから違った、俺達の道は」

高杉
「俺は壊すだけだ、この腐った世界を」

コミック累計
３０００万部！！！！

あの人気映画がついにＤＶＤ化！

原作：空知　英秋
（週刊　少年ジャンプ連載）

銀時
「てめェの言う余計なモンがどれだけの力を持っているか……しかとその目ん玉焼き付けな」

『劇場版　銀魂　新訳紅桜編』

１２月１５日　ＤＶＤ発売！

第八十九訓：たまには本編でもゲストを出したほうが面白い

「いやー、何かここまで来たって感じですね」
「そうだなぁ……リリカル銀魂シリーズがここまで続いたのが信じられねぇぐれぇだ……」
「これもこの小説を読み続けてくれた読者のお陰だね」
「しかもまだまだ新キャラ登場の予感なの」

黒神、銀時、フェイト、なのははここまで来た事に感心していた。
読者でも、サブストーリー風、感動、大爆笑、厳しさ、参考、アドバイスも数多くあった。
中には失敗を多くして、ミスもたくさんしてきたが……それでも己の未熟さを背負いながらもここまで書き続けた。

「この喜びの気分を、読者にも与えたいぐらいです……と言う訳で伊達政宗さん、真田幸村さん今回はよろしくお願いします♪」
「Ｄｅｄａｙｏ　ｏｆ　ｗｈａｔ……？……今日はゲストに来いって言うから来てみたらコレかよ……」
「落ち着かれよ政宗殿！！我等は黒神殿からせっかく『げすと』とやらとして呼ばれた身でありますぞ！！」

黒神の後ろにいるのは、ｃｈａｒｌｅｙさんの小説『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～天下分け目の魔法戦記～』のメインキャラとして活躍している奥州筆頭ごと独眼竜、伊達政宗と武田軍若き総大将、真田幸村。
今回はゲストとして登場させてもらっている。

「悪ぃな2人とも、この馬鹿作者の為に来てくれて」
「とんでもござらぬ！むしろ我等を呼んでくださった事に、黒神殿の心の奥深さには強い感謝をしておりまする！！」
銀時の謝罪に大して、今日ゲストとして登場させた事に感謝する幸村。

「そうだな……とりあえず今日俺達を呼んだ理由はなんなのかを聞かせてもらえるか……ｙｏｎ　ｓｅｅ？」
「いやー、何か烈火竜さんの小説『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』の『第三十四講　髪は女の命、髷は武士の命。』で徳川家康と石田三成、ついでに豊臣秀吉（負け猿）も出てたっしょ？」
「おいいいいいいいいいい！！！今、豊臣秀吉をそのままの名前で書いて負け猿と言っていなかったかァ！？」
「しかもついで扱いするなどと、いくらなんでも失礼でござるぅぅぅぅ！！！！」

今のを凶王に聞かれたら斬滅されると青ざめてツッコむ蒼紅武将。
銀時、フェイト、なのはの3人はあいも変わらずな黒神の命知らずなボケに呆れていた。

「そしてもう1つ、2人を呼んだのはこの企画の為です！」

アニメ『戦国ＢＡＳＡＲＡ』映画化＆ついで『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』一周年記念
第1回『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』てこ入れコンテスト大会
！　３話分スペシャル

「Ｗａｏ～！！！！Ｇｏｏｄ　Ｅｖｅｎｔｓじゃねぇか（笑）」
「それはおめでとうでござる黒神殿～～！！！！」

まさかの一周年記念祝いをこの場で遭遇する事に感心する竜虎。

「ああ、まさかここまで来るとは思わなかった」
「凄くおめでたい事なの。２人もアニメの映画化が決まっておめでとう♪」
「ありがたいでござる！！我等の映画化と聞けば、ますますやる気全開でありまする！」

２つの祝いに喜こび合う中、政宗とフェイトはある事を気づく。

「ちょっと待て。記念で祝うのはいいが、何で自分の小説の一周年をついで扱いする？」

「そう言えば、せっかく一年続いたのに少しもったいないよ……」

2人の意見も一理ありだと銀時、なのは、幸村は黒神を振り向く。

「いやー、気にしないでください♪どうせ戦国ＢＡＳＡＲＡの映画化記念を企画して、ついでにもう1年経っちゃったんだなぁっと忘れてたのを思い出しただけですから♪」

『『忘れてたんかいいいいいいいいいいいいい！！！！』』

読者なのに、自分の小説の一周年記念を忘れるなんていくらなんでもあり得ないと2人の主人公がツッコむ。

「まぁ、そんな事より本編を始めます♪」

「そんな事！？……黒神殿、いくらなんでもそれは手抜き過ぎますぞ！！」

などと、幸村のツッコみもスルーして黒神は企画を始める。

「それではルールを始めます！今回は、アニメ『銀魂』が第５０話でやっていた『節目節目で気合を入れ直せ』を参考にして多くのキャラの作り出したてこ入れを見て、３人の審査員に見てもらい、最優秀賞を決めさせてもらいます！審査員は勿論この人、伊達政宗さんと真田幸村さん！」

黒神は白熱した説明をして、審査員をゲスト2人に指名した。

「ちょっと待て……3人って俺ら2人で後1人足んねぇが？」

「ああ、後1人はもうすぐ来ます。この小説のゲストとして相応しい相手を」

後1人は誰なのかと政宗から聞くが、黒神はある人物をゲストとして呼んでいる。
その人物が……いま来た。

「あぁーー、黒神いたぁーーーー♪」

黒神に近づいて来るのは、隻眼の白髪美少女で明るさ満点の正確をしている。
その人物は……

『『ニューーーーーーーーーーーーーー!!?』』

銀時、フェイト、なのははその少女を見て思わず名を叫びながら驚きだす。
政宗と幸村は初対面であって、唖然としている。

「そうです!!3人目のゲストは、『ブレイブルー』シリーズでも重要人物として活躍しているν－Ｎｏ．１３、愛名ニューです！」
「よろしくお願いしまぁ～す♪」

黒神がニューを紹介してニューは愉快に挨拶する。
銀時は思わず黒神に訊き出す。

「何で『ブレイブルー』のキャラが出てくるわけ?他の作者の小説のゲストなのか?」
「いやぁ、この小説『銀魂』と『リリカルなのは』だけじゃなく『

ブレイブルー』のネタも参考にしてますから……それに僕の姿がラグナ・ザ・ブラッドエッジに似てるから、誘ったら一発ＯＫしちゃったんだよ」

確かに黒神の姿なら、ラグナ好きのニューが付いて来るのも理解できる。

「えっとう、蒼い鎧を着ているのが伊達政宗で……紅いのが真田幸村だよね？」

「Ｈａ、まぁそうだな」

「お互いせっかく呼ばれた身であるため、共に真剣に審査員をしましょうぞ！！！」

「はぁ～い♪」

政宗と幸村の挨拶を済ませるニュー。

そして銀時のほうを振り向くと、ニコッと笑い出す。

「銀ちゃ～ん、ニュー頑張るねぇ～♪」

手を振ってニューは銀時に頑張る事を宣言する。

実は、ニューは銀時がラグナと同じ雰囲気を感じた為、気に入ったのである。

銀時は思わず軽く手を振り、フェイトとなのはは少しムッとする。

「あ、そこのヒロインとして器が小さい死神と魔王も宜しくね♪」

ブチィ！

さりげなく口に出した禁句に、死神と魔王はとてつもない覇気を放ち、『バルディッシュ』と『レイジングハート』を取り出す。

「ニュー？……少しお話しようか？」（ゴゴゴゴゴゴゴ！

「ニュ～ちゃ～ん？……少し頭冷やそうか♪」（ゴゴゴゴゴゴゴ！

完全に怒りに支配された死神と魔王。

いままでに体験しなかった恐怖にニューは青ざめる。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！……何々？どうして怒っちゃっているの！？」

「どうしてじゃねぇだろう！！何さりげなく禁句言ってんだぁぁぁ！！？（青ざめ）」

「フェイト殿ぉぉぉぉぉ！なのは殿ぉぉぉぉぉぉ！怒りを納めてくだされぇぇぇぇ！！！！！（青ざめ）」

ニューの禁句にあり得ないというばかりに驚きツッコむ政宗に、２人の怒りを抑える事を強く求める幸村。

「まずい！！！！」

「皆逃げろぉぉぉぉぉ！！！！！」

黒神、銀時、政宗、幸村、ニューの５人はこの場から逃げ出そうとする。

だがすでに遅く……

『『デストロイ・ツインブレイカーぁぁぁぁぁぁ！』』

金色の魔力砲と桜色の魔力砲が同時に放たれ、混ぜ合わせて桜色の巨大な稲妻魔力砲となって5人を飲み込む。

「あんぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

「あ”あ”あ”

「おいおい、大丈夫か？お前この小説の中でもトップ３に入るほどのキャラ崩壊をしてんじゃねぇか？」
「銀時……気持ちは分かるけど……」

銀時は嫌な予感がして大丈夫なのかを訊き出し、フェイトはそれは言いすぎだと青ざめる。

「何、かなりの出来だ。コレを見れば３人も僕が最優秀だと認識するはず」
「Ｈｕｍ、随分と自信あるじゃねぇか？」

九兵衛の自信に感心する政宗。

「さぁ、とくと見よ！」

＊＊＊

ここからは『〇ーラームーン』のＯＰテーマ『ムーンライト伝説』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

それは、とある夜の魔天楼。
その最も大きいビルの最上階で、２人の少女がいた。

お妙
「嫌ぁぁぁぁぁぁぁ！来ないでぇぇぇぇ！」

チ●コ
「ぐへへへへへ、中々良い体つきをしてんじゃねぇか」

そこにいたのは、ベットでいやらしい顔つきでお妙を見つめるチ●コごとチンク。
そしてそんなチンクを怯えているのは、着物が少しずつ破れて涙を流すお妙。

チ●コ
「ふひゃひゃひゃひゃひゃ！！……さぁ、お前のその美しい体、私のものにしてくれるぅぅぅぅ！！」

お妙
「誰かぁぁぁぁぁぁぁ！！！！助けてぇぇぇぇぇぇ！！！！」

お妙が必死に助けを求める中、その声は届きだした。

バカン！！

？？？
「そこまでだ！」

チ●コ・お妙
『『！！？』』

扉が豪快に開けられてその轟音のほうを2人は振り向くと、1人の美少女がいた。

チ●コ
「チィ、誰だ貴様ァ！！！！」
？？？
「変・身！！！」
少女は、ポーズを構えて変身を開始する。
すると虹色の光に包まれて辺りは光で満たされる。
そして光の中から現れたのは……
セーラー九ちゃん
「爆乳美少女、セーラー九ちゃん！！」
ドカァーン！
と背後からピンク色の煙が爆破的にあふれ出て、セーラー服を着た爆乳なツインヘアーの少女、〇ーラームーンの姿をした九兵衛が現れた。
チ●コ
「せ……セーラー九ちゃんだと！！？」
セーラー九ちゃん
「喰らえ、セーラービーム！」
と、九兵衛は『〇ルトラマン』がビームを出すときにするあの構えのようなポーズで白いレーザー光線を出し、チ●コは大爆発してビルから吹飛ばされる。

チ●コ
「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！覚えてろぅ～～～～～～～～！」

捨て台詞をはきながらチ●コは星となる。
そしてセーラー九ちゃんはお妙に近づいてお姫様抱っこをする。

セーラー九ちゃん
「もう大丈夫だよ、美しき姫よ」

お妙
「せ……セーラー九ちゃん様ぁ～／／／」

その美しさにセーラー九兵衛は美しく笑顔を向け、その美貌なる勇敢さにお妙は一目惚れする。

こうしてチ●コは葬った。

しかしこれは始まりに過ぎない。

どこかにまた新たなチ●コの刺客が来るかもしれない。

負けるなセーラー九ちゃん！

頑張れセーラー九ちゃん！

男と女の次元を超えた愛の力で、その試練を乗り越えろ！

『爆乳美少女セーラー九ちゃんＳｔｒｉｋｅｒＳ～消して消えない百合なる愛の絆～』

セーラー九ちゃん
「貧乳に変わってお仕置きよ！！！！」

＊＊＊

「てちょっと待てエエえええええええええええ！！！！」

問題ありまくりのてこ入れに政宗は思わず叫びだす！
幸村やニューもコレはないだろうと唖然とし、黒神と銀時はやっちゃったよこの子と九兵衛に呆れてフェイトやなのはも苦笑しかなかった。

「何なんだよこのＬａｒｇｅ　ｐｒｏｂｌｅｍ的な作品！！これ自分の存在を大幅変えている以前に誰かを変態的な悪者扱いをするイジメじゃねぇか！！！！」

「しかも男の恥部な所を軽々しく出ているから大問題なりぃぃぃぃ！！！！！」

「ニューも、何か胡散臭いてこ入れだから嫌ぁ」

政宗と幸村は、九兵衛のチンクイジメなてこ入れに問題ありと訴える。

ニューもかんなり気に入らないようである。

「それはつまり脱落っと言ってもいいんですね？」

『『異議なし（でござる）！！！！！』』

政宗、幸村、ニューは正直な判定を下す。

「ば……馬鹿な！！？この僕の自信作が脱落だと！？」

「それ以前に、完全にチンクイジメの為に作ってるだろうよ？」

「九兵衛、後でチンクに謝っておいで」

あり得ないと信じられないような表情をする九兵衛に、コレはないだろうと呆れる銀時とフェイト。

しぶしぶとこの場を去っていく九兵衛を尻目に、次の人物を紹介する黒神。

「次はこの人、シグナムぅ！」

と黒神が紹介すると、シグナムが現れた。

しかしシグナムの格好は、何故か『モンキーハンターオンライン・マスカーフ編』で自分の分身を着せさせた衣装である。

オレンジ色とルビーが輝くティアラとストレートに伸ばしたロングヘアー。

頭に可愛らしく赤いリボンを結んでいる。

はちきれそうな巨乳の谷間が見え、ひらひらとなびかせる薄いピンク色に小さな光が輝くのドレスを着こなす美しき姿。
『烈火姫　シム子』であった。

「うむ、最高のてこ入れを用意した」
『『てちょっと待てぇぇぇぇぇ！！！！』』

シグナムの姿に、銀時、フェイト、なのは、政宗が大いにツッコむ。

「お前、それ『モンキーハンターオンライン・マスカーフ編』で自分の分身にさせた姿だろうがぁぁ！！」
「シグナム、貴女はそう言うキャラじゃなかったはずだよね！！？」

銀時とフェイトがあり得ないと言うばかりに、どうしてその様な格好をしてるのかを訊き出す。

「フフフ、今回は『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』の一周年記念として張り切ってこの姿をしてみたのさ」
「いやいや、おかしいよシグナムさん！！それ完全に自分の存在を無視してるから！！」

シグナムのあり得ない姿になのはもとツッコまずには入られなかった。
自分の知っているシグナムはこのような女らしい姿をしないからだ。

「……なぁ、真田幸村……シグナムってあんなＣｈａｒａｃｔｅｒだったっけ？」
「……うむ……某もわかっている……我等の小説のシグナム殿とは大違いすぎでござる」

一方の竜虎は自分たちの知っているシグナムとは大違いに、こっちのシグナムは名に女の子っぽい。
それ所が、騎士としての覇気が全然感じられない。

「では、始めるとしよう♪」

＊＊＊

ある日、学校の庭で1人の美少女『シム子』が1つの虹色の石を見つけたのであった。

シム子
「何コレ？こんなの学校の庭にあったなんて……それに何だろう？この不思議な感じ」

その石はとてつもない力が宿っていて、それを手にしようとある刺客が現れる。

？？
「その石を渡してもらおうか！！！！」

と誇り高く言い出す1人の男っと思わせるほどの巨大女。
マッチョな肉体をした聖王カリムゥンが鍛え上げられた筋肉タップリな腕をムキムキを大きくさせる。

シム子
「きゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

シグ子は悲鳴を上げながら逃げ出す。
だが筋肉女の異常な速さにあっという間に追いつかれる。
絶体絶命と思われる中、突如虹色の石が大きく輝きだす。

ここから先は『しゅご〇ャラ』のＯＰテーマ、『こころのたまご』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

カリムゥン
「ぬ！？」

シム子
「え……何々？……何なのコレ？」

突如の虹色に戸惑うシム子。

その光に包まれたシム子は姿が変わった。
烈火のごとくのコスロリ衣装でミニスカートで太ももまで届く赤白の可愛らしい靴下に魔法少女らしき靴をはいている。
そして黒いリボンが可愛らしく背中を結び、豊満な胸を揺らして右手に魔剣『レヴァンティン』を握る。

今ここに、『魔法の烈火姫　シム子』が誕生したのである。

シム子
「こ……コレは？」

カリムゥン
「んぬぁにぃぃぃぃぃぃぃぃ！？魔法少女に目覚めただとぉぉぉぉ

ぉぉぉ！？しかも……私より可愛いだとぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！認めてたまるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

自分よりも可愛い存在を認めないカリムゥンは巨大な鉄拳を炸裂するが……

シム子
「えぇぇ～い！！！！」

『レヴァンティン』を軽く振るうが、剣先から紫色の火炎放射が放たれてカリムゥンを焼き尽くす。

カリムゥン
「熱ゥーーー！！！！」

焼かれたカリムゥンは黒コゲトなって、髪型もアフロヘアーとなってしまった。

カリムゥン
「うわぁ～ん！！！覚えてろぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！（涙）」

自分の惨めな姿に大泣きして走り出して立ち去るカリムゥン。
こうして不思議な石を護る為に魔法の烈火姫として目覚めたシム子。
だが第二の刺客はすぐに現れる。
何故ならその石は、魔力を莫大に溜める事でどんな願いをかなえる石『レンディミオン』の欠片でしかなかった。

巻き込まれら聖痕戦争に強制参加されたシム子は絶対ピンチ。
そんな中、３人の精霊がシム子の前に仲間として現れる。

マッチョな破壊のハンマー使い　ヴィタ

大いなる聖獣犬　ザフィラ

影の薄い暗殺者　マスオ

１人の烈火姫と3体の精霊が力を合わせてこの聖痕戦争を終わらせる。

『れかキャラ～ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ～』

シム子
「君の心に、アンロック♪」

＊＊＊

『『何してんだァーーーーーーーーーー！！！！』』

ドカァ！

「あんぎゃ！！？」

突如後ろから、ヴィータとシャマルが飛び蹴りを炸裂させてシグナムを吹飛ばす。

「うう……痛いよぉ～、シム子をいじめて楽しいの？」

「やかましいわぁ！！完全に『しゅご○ャラ』と『Ｆ○ｅｔ』の合体てこ入れだろうが！！何この私、マッチョな破壊のハンマーってどういう事だゴルァ！！！」

「マスオって神楽ちゃんが無理矢理私に名付けたあだ名の事でしょ！！！！それは私の嫌がらせ！！！！」

妙に女の子らしい喋り方をするシグナム。

そんなシグナムに怒鳴って文句を言い出すヴィータとシャマル。

自分達の扱いが異常なまでに酷いからである。

「だってぇ、他にアイデア浮ばなかったんだも～ん（ウルウル）」

ブチィ！×２

『『その女の子っぽい喋り方辞めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！』』

「いんやあああああああああああああああああああああ！！！！」

ドカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！！！！

シグナムとは思えない喋り方に、２人はブチ切れてシグナムをボコボコにする。

そしてボロボロとなった彼女を引きずって無言で立ち去る。
コレを見た黒神達は唖然とだんまりとなる。

「……なぁ、いったい何がシグナムをあそこまでＣｈａｒａｃｔｅｒ崩壊させるんだ？」
「さぁ……この小説はそう言うのが当たり前ですかねぇ？」
「いくらなんでも違いすぎでござるが？」

政宗と幸村は全然違うシグナムの扱いに唖然として、黒神はあれが当たり前ではないかと言い出す。

「ニューもあそこまでは変な女にはならないよ？」
「いや、それ本人が聞いたら泣くって……だから黙っててくれ」

シグナムに聞かれてはまずい事を言い出すニューに銀時はそれを黙ってと言い出す。

「まぁ、確かに今のＷｏｒｋも色々とおかしな点がありまくりだな」
「確かに……今のをカリムさんが見たら……」

政宗のおかしな点を聞いたフェイトは、それはカリムであると思い込む。
もし彼女が今のを見たら、シグナムは地獄を見るだけじゃ済まされない。
てかシグナムがカリムの事をその様に思ってたことが以外であった。

「金髪の人のマッチョ……きゃはははははは！！！！おかしいぃ～～～！！！！」

カリムの恐ろしさを知らないニューは面白そうに笑い出す。

「ニュー殿！！！！今のをカリムと言う者がお聞きになれば……シグナム殿所が我等も巻き込まれるやも知れぬぞぉぉ！！！！」（青ざめ）

「同感だ」

幸村の言う事に理解した様に言い出したのは、お茶を飲んでいる桂であった。

その隣にエリザベスもいた。

「ヅラぁ、エリザベス！！？」

「ヅラじゃない桂だ」

「てかいつの間に来たの？」

いつの間にいた事になのはは予想外な事に驚く。

てかどうやって気づかれずに入ってきたのかと疑いだす中、桂は自分が考えたてこ入れを発表する。

「ともあれ、せっかくこの小説のゲストとして登場した3人の為に俺が考えたてこ入れ……しかと見よ！！」

＊＊＊

ここから先は『〇ＡＲＵＴＯ～疾風電～』のＯＰテーマ、『Ｈｅｒｏｅｓ　Ｃｏｍｅ　Ｂａｃｋ！！』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

そこは荒れたアメリカンな町の中心。

数多くの派手な衣装をした不良染みた連中（真撰組の連中）がバットを握って大暴れしだす。

近藤
「うおりゃあああああああああ！！」

バットを振ってヤンキーを吹飛ばす近藤。
それに続いてヤンキー集団は大暴れしてしまう。
総悟がバスーカーを撃ち、周りを無差別に吹飛ばす。

その様子を双眼鏡で遠くから見る桂とはやて。

桂
「己ヤンキー共、不甲斐ない警察官の代わりに我等が天誅を下す！！」

はやて
「行こう、桂さん！」

桂
「うむ！」

2人は懐から白い宝玉を取り出し、その宝玉が光りだす。
そして光が発生した後、2人の姿は消えていた。
一方、今だに好き勝手に暴れだすヤンキー集団の目の前に、2つの物体が落下して来た。

ドカァーン！！！！

ヤンキー集団

『『ぐぁあああああああああああああ！！！！！』』

近藤
「な……何奴！？」

突如の大爆発に近藤は驚き何が起こったのかと疑いだす。
あふれ出る砂煙が徐々に消えていくと、そこには2体のエリザベスがいた。
通常版のエリザベス（桂）と体がピンク色のエリザベス（はやて）がいた。

エリザベス（桂）
『町の平和を乱す愚か者には』

エリザベス（はやて）
『天誅や！！』

2人はそう書かれたプラカードを出して、ヤンキー達を忠告する。

沖田
「ふざけやがってぇ！テメェらやっちゃってくだせぃ！！！！」

土方
「総梧に遅れるなぁ！！押し切れぇぇ！」

ヤンキー集団
『『うぉおおお

だが2体は口から大量の爆弾を放って投げる。

ドカァァァァァ！！！！！

近藤
「ぎゃぁあああああああああああああああああああ！！！！！」

土方
「ウぎゃあああああああああああああああああああ！！！！！」

沖田
「あぁ～～～～～～～～れぇ～～～～～～～～～～～！！！！！」

ヤンキー集団
『『あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』』

ヤンキー集団は吹飛ばされて流星のような星と化して、この場を去った。

かくして待ちの平和は、2体のエリザベスの手によって護られた。

だが、余りの多くの爆弾の大爆発によって破壊されたビルの被害は少なくはない事は言うまでもなかった。

それでもめげずに戦うのがこの2人！！！！

狂乱の如くの戦いで町の平和を護る裏世界のヒーロー！！！！！

『エリザイダーマン』

＊＊＊

「と言うのはどうだ？」

桂は満足そうにてこ入れ紹介を終了させてお茶を飲む。
エリザベスは凄く嬉しそうで大満足である。

「どうだ……じゃねぇだろう！！結局町を乱してんのてめェ等じゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！コレのどこがＨｅｒｏだ！！？（怒）」

「て言うより町を破壊しているから、護った意味がないよ」

いったい何がしたいのかを怒鳴りながらツッコむ政宗に、ニューの言う事もおっしゃる通りである。
暴れて田ヤンキーごと町を破壊する事はヒーローのすべき事ではないと思う。
銀時にいたっては馬鹿の考える事はロクなのじゃないと思い、フェイトとなのはも桂はいったい何がしたいのか呆れる。

「……しかし、某は何かこのてこ入れ自体がまともに見えてしまったでござる」

「ああ……前の２つのＰｒｏｂｌｅｍなてこ入れに比べりゃまだマシかな？」

幸村と政宗は、桂のてこ入れは九兵衛とシグナムのてこ入れに比べりゃまだマシと言い出す。
そして桂とエリザベスはお茶を飲み終えてこの場を去る。

「……まぁ、とりあえず次の方どうぞ」

黒神はそのまま次の参加者を呼ぶ。
そして呼ばれた瞬間にチ●コ、セイン、セッテ、ウィンディ、ディードの５人が現れた。

「ちがぁ～～う！チンクだぁ！！！！（怒）……まぁとりあえず次は私の番だな」
（あれ、今のってさっき見たような……Ｄｅｊａ　ｖｕか？）

このやり取りを、最初に見たような感じをした政宗。
しかも嫌な予感がするのは気のせいだろうかと疑うぐらいに。

「この小説は基本的に銀魂の原作設定ネタと作者の勢い、そしてオリジナリティをメインとして進んでいるようだが……ただ１つ足りないのが１つある！」
「足りない物とは？」

チンクの言う足りない物に幸村が気になって訊こうとする。

「それは……小説自体だけじゃなく読者の魂を燃やす熱き魂だぁぁぁぁぁ！！！！！」

ドカァーン！！！！！

チンクの熱き発言に幸村は「おおぉーーーーーーーーー！！」と叫びだし、ニューも「にゅ～～～～～～！！！！」と何故か叫ぶ。
てかニューの叫びってこんなんだっけ！？
一方の政宗はそんな２人とは大違いに唖然と呆れている。

「なぁ、チンクってあんなんだっけかぁ？」（小声）

銀時はセイン、セッテ、ウィンディ、ディードの４人にチンクの存在を聞きだす。

４人もあんなチンクはつい最近見かけるようになった。

「いやー、流石の私もチンク姉の変貌には驚いちゃったよ」（小声）

「何か以前より明るくなったのは良いっすけど、少し変っス」（小声）

セインとウィンディから言わせれば、以前のチンクは姉らしいっと言うより暗い性格をしていたようだ。

そこで自分達と同じく憧れで恋路を抱くようになった銀時と、そして自分と同じ存在で犬猿の仲である九兵衛と出会って以前とは別人と思えるほど変わっていた。

「それにしたって変わりすぎだよね……」（小声）

「あれじゃないっすか？この小説のキャラ崩壊って奴っすよ」（小声）

「ああ、なるほどなぁ」（小声）

キャラ崩壊が原因でここまで変わったとセッテ、ウィンディ、ディートは確信する。

「にしてもよぉ、以前のチンクってそんなに暗いのか？」（小声）

「暗いも何も、かんなり笑わないって感じだよぉ」（小声）

「今のチンク姉は前に比べリャ、まだマシだと言うぐらいだしね」（小声）

『『うんうん』』（小声）

銀時が以前のチンクの事を訊き出すと、セインとセッテはその通りだと言い切ってウィンディとディードは頷く。

「さぁ、とくと見てくれ！これが熱き魂を込めて作り上げた、我等ナンバーズのてこ入れだ！！！！！」

＊＊＊

世界女子高校格闘技大会

その大会を、全ての美少女を我が物にする為に開催させた組織『ヤギュトル』

百合帝国を作り上げようと野望を持つ『ヤギュトル』の総長『貧兵衛』。

男を嫌い、道具のように扱う女好きの貧乳女のわがままの為だけに、多くの犠牲者が出ている。

そしてそんな貧兵衛の野望を打ち砕くべく、５人の格闘少女が立ち向かう。

チンク

「皆、行くぞ！」

セイン・セッテ・ウィンディ・ディード

『『おう！！』』

ここからは『天元突破〇レンラガン』のＯＰテーマ『空色デイズ』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

さく〇の格好をしたチンク、リュ〇の格好をしたセイン、ケ〇の格好をしたセッテ、春〇の格好をしたウィンディ、ダ〇の格好をしたディード。

格闘技・気功術・中国拳法・テコンドー・柔道などなど、様々な体術を極めた美少女達が『ヤギュル』の手下達（主に柳生家の門下と家臣ばかり）を次々と返り討ちにする。

ドカァ！

ウィンディ
「うぁああっす！！」

突如、敵の攻撃を喰らって吹飛ばされるウィンディ。
そこにチンクが駆けつける。

ウィンディ
「私に構わず行くっス！！」

チンク

「私が必ず護ってみせる！！！」

そして襲い掛かる『ヤギュル』の一員が攻撃してきても、チンクの格闘術が炸裂して返り討ちにする。
そこでまさかの、〇ガの格好をした貧兵衛が現れた。

貧兵衛
「貧乳ショ……」

チンク
「波動拳！！」

バーーン！

貧兵衛
「あんぎゃあああ！！！」

＊

貧兵衛
「貧乳ニープレ……」

チンク
「昇龍拳！！！」

バーーン！

貧兵衛
「おんぎゃあああ！！！」

＊

貧兵衛
「貧乳クラッシ……」

チンク
「竜巻扇風機投げ！！！！」

ドカァ！

貧兵衛
「げふぁあああああああ！！！！」

＊

今年度、最高に燃える熱き魂の作品！！！！

『チンクファイターＳｔｒｉｋｅｒＳ　Ｚ』

＊＊＊

「だから自分の存在を大幅変えている以前に誰かを変態的な悪者扱いをするイジメじゃねぇかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！（怒）」
「しかも最後、ただ扇風機を投げてただけだよ？」

政宗の怒りのツッコみが炸裂して、場が彼の怒鳴りで響きだす。
ニューもおかしいところをツッコみだす。
先ほどの九兵衛と良い勝負であろう。

「読者の魂を熱くさせる事ができるぞ！」
「いや、主は読者の魂を熱くさせる事自体の考えを間違えている気がするのだが？」

チンクの考えている事が間違っていると幸村が考える。

「チンク姉、やっちゃったね」
「そうっすね」

セインとウィンディもやっちゃったねっと呆れてしまう。

「おめェ等、大変だなぁ」
「うん……もう慣れてる」

銀時は４人に強い同様をすると、ディードが答える。
フェイトやなのはも、チンクの存在が九兵衛と重なっているように思えた。

「己、チ●コォォォォォォォォォォォォォォ！！」

と、突如怒り出しながら貧兵衛……じゃなく九兵衛が現れた。

「あ、ナイチチポニーテールだ（笑）」

「誰がナイチチじゃボケぇぇぇ！（怒）」

ニューにナイチチ（つまり貧乳）呼ばわりされた事で怒鳴る九兵衛。

「それよりも、よくもこの僕を侮辱するようなてこ入れをぉぉぉぉぉ！！！！チ●コの分際でやってくれたなぁぁぁ！！！！」

「だから私はチ●コじゃなくてチンクじゃあ！！！！そう言う貧兵衛こそ、私を変態扱いしてくれたなぁァァァ！！」

「誰が貧兵衛だぁ！やはり貴様はここで消しておくべきだぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「上等だボケァ！！死んで後悔しやがれぇぇぇ！！！！」

貧兵衛とチ●コ……じゃなかった九兵衛とチンクは刀と『スティンガ』を抜き取り、喧嘩と言うなの至当を開始する。

激戦する中で黒神は呆れて溜息を吐き、２人に振り向いて合図する。

「フェイト、なのは」

黒神は親指を下に向けると、２人は頷いて『バルディッシュ』と『レイジングハート』を取り出す。

『『退場ーーー

バァーン！！！！

『『あんぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！！』』

２人は、金色の魔力砲と桜色の魔力砲を放った。
この魔力砲に九兵衛とチンクは飲み込まれて吹飛ばされる。
黒神はすっきりとした笑顔を表し、銀時、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、政宗、幸村、ニューは青ざめて震えていた。
目の前には金色の死神と白い魔王がいた。

（おいいいいいいいいいいい！！！なんだこの２人の悪魔はぁ！！？）
（我等のところの高町殿とテスタロッサ殿以上の恐怖を感じるでござる！！）
（ラグナぁぁぁぁ、助けてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！（涙））

特にと言うばかりに、政宗、幸村、ニューの３人は２人の悪意なる鉄槌だけは避けたいと言う気持ちばかりであった。
セイン、セッテ、ウィンディ、ディードの４人は吹飛ばされたチンクの救出の為にこの場を去る。

「では次の方どうぞ！」

黒神はころっと態度を変えて次の参加者を登場させる。
そして現れたのは、この小説でメインヒロインとして活躍しているスバルと最近メッチャおかしく変わっているはやてであった。
ただ、スバルの格好はいつもと違う。

「……うう～／／／」

彼女の姿は、以前に総集編で着ていたノエルのコスプレ衣装であった。
蒼い帽子を被っていて、赤いネクタイをかけていて胸の部分は黒くて、背中の部分は肌が見えるセクシーな蒼い軍服衣装（ミニスカ＋ニーソ＋背中ぱっくり）である。

「Ｈａ？……なんかのＣｏｓｐｌａｙか？」
「ななななななな……なんて破廉恥な格好をしているでござるかスバル殿ぉ！！！／／／」
「ああ……ナイチチ女の着ていた服だぁ♪……でもナイチチと違っておっぱいボンボン♪きゃはははははははは♪」

スバルのコスプレ姿に、政宗は唖然として幸村は顔を真っ赤にして大慌て。
ニューはノエルと同じ衣装を着ているスバルを見て、ノエルと違って胸が大きいと言い出す。

「私だって好きでこのような格好をしていませんよぉ（涙）／／／」

つまりスバルは、はやてに無理矢理着せられたと言う訳であった。
満足そうに笑うはやての笑顔がその証拠である。

「いやぁ、スバルのこのエロくてセクシーな衣装をどうしても着せたくって♪それも胸をモミモミしたくなるぐら……」
「Ｎａｎｄａｙｏ　ｓｏｒｙａ！？何、部下に対するｓｅｘｕａｌをしてんだアンタぁ！！」

はやてのオヤジ的な行動に政宗も思わずツッコみだす。

「スバル……またはやてに……」

「何か、可哀想に見えてきたなの」

はやてのやりすぎな行動で巻き込まれるスバルに、フェイトとなのはは可哀想に思えてきた。

「と言うか、もう傷は大丈夫か？重傷とか言ってたが？」

「ああぁ、それならもう完治されました！源外さんとスカリエッティさんが開発した戦闘機人用の治療ポットのお陰で♪」

アリマとの死闘で負わされた傷も、今では治っていると安心して言い出すスバル。

「ぐぉっほん！……それにしても、我等の所のスバル殿とは違ってここのスバル殿は雰囲気が違いますなぁ」

「おお、ユッキーも気づいたんやな！」

「ここでもユッキーとは……」

幸村が良い所に気づいた事に褒めるはやて。

「うち等のスバルはなぁ、そっちのスバルと違って最初からじゃなく柱さん達が来たときから一緒に機動六課に入ったんやでぇ。何でも柱さんと銀ちゃんの様に刀を使って、神速の剣術を得意としているんやでぇ」

「神速の剣術……軍神以外に神速の剣を使いこなす奴がいたなんてなぁ……しかもこのｃｕｔｅな女とはぁ」

「こっちのスバル殿は刀を使って戦うと徳川殿から聞かされ申したが、本当でござったか」

上杉謙信以外の神速剣術使いがいた事に感心する政宗に、家康の噂が本当であったと知った幸村。

ふとスバルはある事を思い出して言い出す。

「あのう……前から思ってたんですけど……石田三成さんって徳川家康さんに弟子ができた事に強く羨ましがっているんですか？」

「アァ？……なんで石田がそんなんで家康を？」

どうして三成がその様な事で家康を羨ましがるかを不自然に思う政宗。

銀時達は政宗と幸村にその理由を説明する。

徳川家康がそっち側（ＢＡＳＡＲＡ）のスバルの師匠となった事に対して、石田三成もこっち側（銀魂）のスバルの師匠と名乗りだしたのであった。

その為、スバルは凶王の弟子と言う事に認定され『凶王スバル』と呼ばれるのであった。

「Ｉｔ　ｉｓ　ｇｏｏｄ　……　Ｍａｊｉ……つまりあれか？スバルのＨｏｗ　ｔｏ　ｆｉｇｈｔが石田に似てるから、石田はそれに眼をつけて家康に対抗するために……アンタを弟子と呼ぶ事になった訳か」

「……はい」

「確かに、スバル殿の剣術は居合を中心していると噂があるから、石田殿の気持ちも分からない事はないでござる」

まさかスバルが石田の弟子となった事に驚く政宗と幸村。

それと同時に意外な対抗心を持っていた事を明らかに知った。

「そんでなぁ、今回は私がスバルをイメージをしたてこ入れを考えたんや」

「ええ！？まさかその為に今回私も呼んだんですか！？」

「そうや。……本来、私と桂さんの愛のラブストーリーをてこ入れ

したいんだけど、何か没扱いされるから嫌やし……そこでスバルのてこ入れを考えたんや！……こんな感じで」

＊＊＊

やがてこの世界は終わり、また始まるだろ。

かつて人類は突如出現した「黒き獣」との戦いを余儀なくされた。
その圧倒的な力により人類が滅びるのも時間の問題と思われていた。
その時、５人の英傑が現れた。

坂田銀時

桂小太郎

神楽

エリザベス

月詠

古の武術『剣術』・『体術』を身につけて圧倒的な実力を誇っていた

それを学んで強大な身体能力を手にした人類は、五人の英傑と共に黒き獣に対し反撃を開始し、激しい戦いの果て、ついに黒き獣を打ち倒した。

後にこの戦いは「第一次闘魂大戦」と呼ばれ、彼等５人は『五英雄』として語り継がれる存在となった。

それから数十年後、彼等の伝説を気に食わなくなった時代に、人類は古の力「魔術」を人類に伝え、科学の機械技術によって復活させられた事で、『デバイス』と呼ばれる特殊魔導機を手に入れる。
そのデバイスを行使するために大量に作製された「魔道書」を管理する「ミッドチルダ世界情報統制機管理構（統制機構）」通常『管理局』という組織が結成された。
世界は管理局による統治のもと、人類は新たに手に入れた力を用い、あらゆる分野で急激な発展を遂げた。
そうして復興した世界は、大戦前とは大きく様相を変えていた。

統制機構による独裁統治の開始から数十年の時が流れ、魔術主体となった世界は個人の能力による大きな格差を生んだ。

管理局のによる支配によって次々と多くの犠牲者が出てきた。
しかし圧倒的な強さの元に反逆する事は許されなかった。

世界各地の不満はつのり、ついには統制機構からの離反を企てた「ケルカバ連邦」による「第二闘魂大戦（ケルカバ内戦）」が勃発した。これは人類同士による術式を用いた初めての戦争であった。
この内戦はケルカバ連邦を壊滅させたことにより終結し、その結果統制機構は「刃向う者は完膚なきまでに殲滅する」という理念をよ

り世界に知らしめることとなった。
ケルカバ内戦平定から数年後

『白い魔王』ナノハ・アルカァーナ

『金色の死神』フェイト・ステナイトゥ

『夜天の王』カリム・ヤオイ

世界を力で支配するとてつもない魔力を持った管理局歴代最強の三大魔導士の元に、組織は更に大きくなる。
そして2年後、管理局を支配する驚くべき事件が発生する。

一国の軍隊に相当する力を持つとされる『管理局の雷槍』と恐れられた最強戦闘集団『機動六課』が、突如出現した女により、1人残さずに斬滅させられたのである。

ここから先は『〇レイブルー』のOPテーマ、『蒼ーｉｃｏｎｏｃｌａｓｔ』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

「スバル・ザ・ヴァーミリオン」

魔術だけじゃなく日ノ本に伝わる古の武術、『剣術』を組み合わせた神速剣術の使い手。
魔術も剣術も優れた事から、人々は『魔剣士』として恐れられている。
史上最高賞金額として管理局だけじゃなく誰にも狙われる存在でありながらも、世界を支配する『魔力』に対し、たった一人で戦いを挑む者の名である。

「管理局による支配下の時代も……この手で斬滅する。……何故ならあいつ等は、私の大切な家族を奪ったから!!」

神速の蒼き魔剣士

スバル・ザ・ヴァーミリオン

「特殊魔導殺戮部隊……『スターズ』のティアナ・ナナオ!貴方を拘束する!!」

誇り高き幻想双銃士

ティアナ・ナナオ

「許さない……管理局の横暴は絶対に許せない！この世の全てを壊してやる！！！」

全てを破壊尽くす復讐の紅き槍

エリオ・D・ヘルケルズ

「あはははははは！切り裂け切り裂け！人間の肉をグジャグジャに……きゃはははははははははははは！」

血塗られた殺戮少女

キャロ・カラグネェ

「今ここに、俺はこの剣と共に古の武術を復活させる！」

古を復興させる豪傑なる武人

コンドム・ゴリサオ

「私は影、外道なる者を……始末屋アヤネ、参る！」

外道抹殺の美しき暗殺者

アヤネ・モンジャン

「正義の剣、ここにありぃぃぃぃ！」

超熱血なる爆裂美女剣士

シグナム・バクゥス

「勝てると思ったか？我等誇り高き管理局に？」

エリート意識の貧乳英雄

ヒンベー・ヤギュンス

「潰してやるよォ、管理局なんてあっという間になぁ！！！！」

何者にも縛られない小さな破壊魔神

ヴィータ・ティエレブ

「俺が戦うのは機動六課の為でも力のためでもない、ディエチだけだ！！」

愛する者を護る双剣士

ザキー・ティガンベル

「誇り高き狼の魂、我が元に受け継がれてきた……我が拳に喰らわれる覚悟を持ったものだけ掛かって来い！」

満月に照らされる蒼狼の剣闘士

ザフィーラ・フェンミル

スバル

「お前の野望……今ここで斬滅する！」

スバルはナノハに『ティルヴィングエア』を向ける。

ナノハ
「ははは、やってみるなの……返り討ちにしてくれるぅぅぅぅ！」
ナノハの魔力砲激が炸裂するが、スバルは交わしてそのままなのはに向かって刀を振るう。
なのはも『レイジングハート』と呼ばれる杖でスバルの一太刀を受け止める。

繰り返される過酷な運命に立ち向かう者達の物語。

『ブレイブルー・ザ・ソードナイト』

そしておまけとして

スバル
「ぜ……絶対に見てほしいニャン／／／」
スク水の猫耳と猫尻尾、そして両手両足の猫グッツをかぶせたスバニャンのポーズ。

＊＊＊

「てなんなんですか最後おおおおおおおおおおおおおお！！！／／／」
「スバルのサービスシーンや！！」
どうして自分のスクール水着&猫耳姿が最後に映ってたかを訴えるスバル。
はやてはやったぜっとした表情を浮かべる。
「破廉恥でござるぅぅぅぅぅぅ！！！！スバル殿にそのような趣味がぁぁぁぁ！！！！」
「違いますよぉぉぉぉぉぉ！」
幸村の大叫びで、絶対に違うと言い出すスバル。
スバルの猫耳スクール水着姿『スバニャん』ははやてがなんとなく猫耳スクール水着を思いついたネタであり、スバルにさせたのである。
詳しくは『第八十三訓：男女ペアの町歩きはデートと一緒である』で。
「きゃはははははは！スバルエロ～い！！ナイチチもスバルを見習うべきじゃないかな～」
面白く笑い出すニュー。
ナイチチとはノエル・ヴァーミリオンであった。
「いや～、やっぱりスバニャんの女としてのスキルに、エロ萌がつきましたにゃ～♪」
「貴女最近おかしすぎますよぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

「まぁまぁ……あ、そうや」

はやてはある事を思い出して懐からある物を出す。

「今日、マサッチとユッキー、そしてニューちゃんが来てくれた記念に……コレ上げるな♪」

そうと出されたのは、スバルが『ティルヴィングエア』を構えている『スバル・ナカジマ・フィギュア（魔剣士モード）』スバルの猫耳スクール水着姿『スバニャんフィギュア』と、『〇レイブルー』の〇エルが来ていた衣装をスバルが着ている姿『スバル・ヴァーミリオン・フィギュア』であった。

「なんですかそれェェェェェェ！？／／／」

「スバルをモデルとした私の特製フィギュアや！」

顔を真っ赤にしてなんなのかを訊き出すスバルに、はやては正直に答える。

「ははははは……こんな破廉恥なのを我等に渡すでござるかぁぁ！？」

「なははははは！私の手作りフィギュアの中でも完成度が１・２・３を争うリアル的な作品や！！」

「こいつは良い、家康の土産に渡しておくか」

「きゃはははは！じゃあ玩具としていただきまぁ～す♪」

破廉恥だと叫びだす幸村と、土産と玩具としてちょうど良いと思う政宗とニュー。

「いやー、最近のスバルのフィギュアを作るのかおもろくてなぁ♪」

「ふぇ～ん！！銀さぁ～ん！！！！（涙）」

突如、スバルが銀時に抱きついて泣きつく。

「ておいおい！！」

「はやて部隊長がいじめる～～～！！！！（涙）」

「……スバルも大変だなぁ……」

涙を流しながら銀時に抱きつくスバル。

はやての欲望のままにスバルがイジメられてるから可哀想にと銀時はスバルの頭を撫でる。

可哀想過ぎる為、今回だけは許すとフェイトとなのはは苦笑する。

「政宗さぁ～ん、何か言ってやってくださいよぉ～（涙）」

「アァ？何で俺が……」

スバルはウルウルとした眼で政宗を見つめる。

その眼線に政宗は戸惑う。

「お……おい、そんな眼で俺を……」

「うぅ～～」

更にと言うばかりか手を両手で繋いで近づいて見つめる。

少し顔を真っ赤にして動揺する。

「あーわかったからそんな眼で見るなって／／／／……おいはやて、それぐらいに……て何やってんだアンタ？」

政宗ははやてに注意をしようとするが、彼女の手にはビデオカメラが持っている。

そのカメラにコードらしき物がついていて、コンピューターに繋いでいる。

「むふふふふふ……その光景をどうしても見せたい人物がいてなぁ……」

「なんだろう、この嫌な予感？」

なんとなくやな予感がする黒神。

できれば的中して欲しくないほど願っている。

しかし、その願いはかなえられなかった。

モニターらしき物が移りだして、そこには思わぬ人物がいた。

≪だぁてぇまぁさぁむねぇーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！（怒）≫

「い……石田三成！！？」

「だれ？」

そう、この人物こそ戦国ＢＡＳＡＲＡ３で新登場した豊臣秀吉の忠実な部下であり、西軍の総大将として勤めている武将ごと石田三成であった。

「やっぱりだ」

「て言うか、何で凶王が出てるんだァ？」

嫌な予感が的中したと言う事で呆れる黒神と、何で凶王が出てきたかを不自然に思う銀時。

≪貴様ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！アニメで秀吉様を討ったあげくに

我が弟子、凶王スバルに手を出すとは何事だァぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！許さない、貴様だけは絶対に許さない！！！！本編では確実に斬滅してくれるぅうううううううう！！！！≫

「おいいいいいいいいいい！！テメェもＣｈａｒａｃｔｅｒ崩壊かぁぁ！！大体、アニメでは俺が討ったが『３』では家康だっただろ！！？アイツはどうすんだ！！！！」

石田のキャラ崩壊に政宗はあり得ないと言うばかりに青ざめる。

幸村も石田と会った事はあるが、最初に会った時とは全然印象が違うと唖然とする。

そして石田の答えは……

≪あんなウ●コお漏らし将軍など構っているヒマはないわぁぁぁぁぁ！！！！≫

「禁句言うなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！それ家康のＴｒａｕｍａだからぁぁぁぁぁ！！！」

「烈火竜殿の所で『げすと』として呼ばれたが、最悪な改造されてショック受けてるでござるから控えてくだされぇ～～！！！！」

≪んなの知るか……ん？≫

石田は何か妙な音が空から聞こえて来た事と空を見上げると……金、桜、白の三色の魔力砲が降ってきて石田に直撃する。

≪ぎゃあああああ（プッゥーン）……ザァーーーーーーーーーーー≫

そして石田との通信が途切れてしまい、黒神、銀時、スバル、政宗、幸村、ニューは唖然としてしばらくして行く内に青く染まっていく。

「おいいい

とキャロを変に変えているんだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴ！

とてつもない殺気の前にはやては青ざめていて、コレばかりは自業自得であると黒神達は頷く。

『『少し（お話をしようか）（頭を冷やそうか）？』』（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！

死神（フェイト）と魔王（なのは）は、夜天（はやて）の王を引きづり出してこの場を立ち去り、その後『ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！』と、はやてらしき者の悲鳴が響きだす。

しかし関われば自分達の命はないと判断して関わらないようにする。

「そういや、スバルはどうして刀を持っている？俺達の所のスバルでは、家康と同じ素手で戦うＧｉｒｌだが？」

「某も気になっていたでござる……宜しければ聞かせてくだされ」

「ニューも聞きたい♪」

政宗、幸村、ニューの3人は興味津々でスバルが剣術を使う理由を聞きたがっている。

「そうですねぇ……せっかくだから、スバル言ってやってください」

「……はい」

黒神がそう言うと、スバルはその理由を言い出す。

４年前、ミッドチルダ臨海第８空港でロストロギアによる大火災が

起こるという大事件が起こった。
その事件に巻き込まれたスバルは行方不明になっている姉ギンガと父ゲンヤを必死に探していた。
だが突如のアクシデントが襲ってきた途端に、銀時に助けられて見事脱出。
己の無力さを思い知らされたが、銀時からけして諦めない思いと、大切なものを護る侍の強さを教わり、銀時に強い憧れを抱く。
そしてスバルは銀時に近づく為に魔導士としての自覚を捨てて、侍の強さを求めて剣術を極めようとした。
だがそれが認められないギンガに、無理矢理『時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校』を入学させられる。
そこでパートナーであるカウェインとスバルの剣術の師匠とも言えるサナダ・シンゲと言う男と出会い、嫌われ者となった身で魔法よりも剣術を最優先に鍛え上げられた。
そしてカウェインと共に1・2を争うほどの強さと成績を誇った中で、教官達は良しとせずに2人をわずか1年で無理矢理卒業させた。

そこでカウェインと共にシンゲにミッドチルダ最強の特殊殺戮部隊『第６６６魔闘機関』に入れられて、『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の1人として任務を遂行する。
だが突如の『管理局』の裏切りによって数多くの仲間が死んでしまい、パートナーであるカウェインも自分をかばってそして魔剣士として最後まで勇敢に戦って、自分に剣士としての道を進む信念を託して他界した。

己の無力さを、そして大切な中間達を護れなかった弱さを。

それでもスバルは、『第６６６魔闘機関』の数少ない生き残りの1人として、死んでいった仲間たちの分まで生きる事を決意して剣術の修行を励んでいた。

そして数ヶ月前に、銀時と再会してなりきりで機動六課にお世話になっている。
管理局に対する憎しみを持たずに。

話を終えたスバルは悲しい表情をする中、幸村はプルプルと震えている。

「……スバル殿……」
「はい？」
「感動したでござるぅぅぅぅぅぅぅ～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！（豪泣）」

幸村は滝のように涙を流し、感動した。
そんな幸村に思わず一歩引いて驚くスバル。

「まだ少女の身でありながらも、過酷な苦しみの過去を乗り越えて、死んでいった仲間の分まで行き続けて武士としての道を進む主こそ正に武士としての魂を感じまする！この幸村、お主の生き様に感服いたしましたぁぁぁぁぁ！！！！」
「Ｋｏｉｔｓｕ　ｗａｓ　ｓｕｒｐｒｉｓｅｄ……俺もアンタのその考えは良いと思うぜ？無理にＲｅｖｅｎｇｅしに行かねぇで死んでいった仲間の分の魂まで背負って生き続けるなんざ滅多にできねぇ。……小十朗が聞いたらきっとアンタを褒めると思うぜ？」
「侍の生き様ってカッコイイ～～、スバルは立派だよ♪」

「皆さん……ありがとうございます……ううう（泣き）」

自分の生き様に感服して褒める政宗達にスバルは自分を侍として認められた気分で嬉しさ満タンで涙を流す。
銀時は笑ってスバルの頭を撫でる。

「にしても……管理局って奴のやり方は気にくあねぇから今すぐにぶった斬りに行きてぇ程だが……そこはアンタ等の判断で任せたほうが良いかもな。スバルの生き様、俺達の所のスバルも聞かせて参考にさせるべきだ」
「無論！某達が、必ずやスバル殿の事を佐助達に伝えておくでござる！！」

政宗と幸村は、家康達にこの小説でのスバルの生き様を伝えておくとスバルに約束する。
そしてスバルは3人に頭を下げて、この場を立ち去る。

「それにしてもスバル殿をあそこまで武士としての生き様をさせるとは……某、銀時殿の偉大さを知ったでござる！！」

スバルの過去を聞いて、銀時の武士としての偉大さを知った幸村。

「そうかい……俺ァ、ただアイツに自分の行動に恥と考えさせずに誇りだと思わせるために言っただけだ……スバルは自分の武士道（ルール）のままに生きてるだけよ……」
「Ｉｓ　ｉｔ　ｓｏ……でもスバルはアンタの背中を目指して進んでた事は確かだから……武士として誇りに思うだろ？」
「……まぁな」

政宗の言う事も確かであって、フッと笑う銀時。

「では、次の方どうぞ！！」

と黒神は次の参加者を呼ぶと、そこには仮面を被って血塗られた『雷切』を2つもっているジェイソンのような少女が現れた。

「Ｎａａａ

「Ｉｔ ｉｓ，ａｎｄ ｉｓ ｅ ｆｏｒ ａ ｍｏｍｅｎｔ ｉｔ ｉｓ ｐｏｓｓｉｂｌｅ ｔｏ ｗａｉｔ！！！！今『こっそり奪う』とか言いかけただろ！！？機動六課がＴｈｉｅｆな事をして良いのかよ！！」

「えへへ」

「笑ってごまかすなァァァァァァァ！！！！」（青ざめ）

完全に自分所のキャロとは大違いであると青ざめる政宗。

「何故だろう……フェイト殿がここのキャロ殿を見たら大泣きしそうな気がするでござる……」

ここのキャロの姿を、フェイトだけには見せてはいけないと幸村は考える。

「……アイツ等、大丈夫なのか？」

キャロの姿を見て、神楽と月詠の事が心配になってきた銀時。

最悪の場合は殺されるんじゃないかと嫌な方向を考える。

「てこ入れは刺激が大事なんです。刺激は刺激を呼んでそれがてこ入れの原動力となりますし、Ｍの求める宣言、時代はＳを求めていますから♪」

＊＊＊

全米４２州で上映禁止
戦慄のサスペンスホラー

そこはとある地下廊下。
超昂鉄の牢の中で１人、全体を拘束されている１人の凶悪犯がいた。
その凶悪犯にライトをかける。

＊

エリオは急いで機動六課の地下室に戻ると……そこにはとんでもない光景を眼のあたりにする。
切り刻まれ、血塗られて倒れる神楽と月詠。

＊

額に銃の球が貫通して倒れる神楽（二年後モード）。

＊

首だけ跳ねて血塗られたテーブルに置かれている神楽（初期沖田モード）の首。

＊

壁にもたれて背中から血があふれ出て出血死した月詠（幼児姿）。

＊

そして十字架に吊らされてチェーンソーで串刺しにされて惨死するルーテシア。

＊

バシぃ！

エリオ

「ああ！！」

バシィン！

エリオ
「あうぅ！！」

バシャン！

エリオ
「あぁぁ！！」

気持ち良さそうに、鞭で両手両足を高速に縛ってるエリオの背中を叩くキャロ。
その笑顔かかつての可愛らしさが消えて、悪魔の様な表現をしてる。

＊

ゴキブーリに襲われるフェイトとアルフ。

＊

ジェイソンに襲われる近藤。

＊

『ディスバール』の炎で黒焦げとなるヴィータ、山崎、セッテ。

＊

『ジェイソン』仮面を被ったキャロに『雷切』で首を跳ねられて惨死する立花宗茂。

＊

そして拘束された凶悪犯に近づき、その凶悪犯が見せた顔は……

ニヤァ

『KYAROSON～Slaughter girl with whom frenzy is filled～』

2人の死体を見て、ある事に気づいたエリオは振り向くと……

エリオ

「あ”あ”あ”

＊＊＊

『『これてこ入れの次元を超えているんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！？？？』』

黒神、銀時、政宗、幸村、の４人は青ざめてツッコミだす。

「ちょっと待てぇぇぇぇぇ！！！！コレてこ入れじゃなく単なるてめェの狂気満ちた想いがつまった恐怖のＨｏｒｒｏｒ　ｐａｇｅｎｔじゃねぇかぁ！！！！」（青ざめ）

「凄く怖すぎるでござる！！！！別の意味で第六天魔王以上の恐怖を感じたでござるぅぅぅぅぅぅぅ！！！！」（青ざめ）

いくらなんでもコレはないと言い出す竜虎。

ニューも体を丸めて震えている。

相当なまでに怖かったのが分かる。

「それじゃあ、あっちの私にもよろしくお願いします♪」

とキャロは、ジェイソン仮面を被って『雷切』を床に引き摺りながらこの場を去る。

「おいいいいいいいいいい！！！せめてその『雷切』を立花のおっ

さんに返せぇぇぇぇぇ！！！！」

政宗は大きく叫ぶが、渾身の叫びはキャロ（ジェイソン）には届かなかった。

「……なぁ、あの譲ちゃんはいったい何があってああなったんだ？」

政宗はどうしてキャロがあそこまで変貌したかを気にして言い出す。

黒神と銀時は説明する。

神楽と月詠と言う女に、恋路を抱くエリオを惑わされて強い嫉妬心を抱く。

そして彼女たちをギャフンと言わせる為にあそこまでなった。

本場『ジェイソン』をも恐れるジェイソン二世、『恐怖の大魔女』と思わせるぐらいに。

「……真田幸村……女の嫉妬はおっかねぇなぁ……」

「同感でござる」

「（ガクガクフルフル！！！！）」

竜虎は女の怒りを知り、ニューはキャロの存在が怖く思えてきた。

「とりあえず、次の方を登場させます」

黒神がそう呼ぶと、今度はお登勢が現れた。

「なんだい、今回もてこ入れをするのか？」
「ゲェ、お登勢！！」
「銀時、そのリアクションを見てると何だかムカつくから止めてくれないかい？」

銀時のリアクションを見てお登勢は額に血管を浮かべる。
銀時のリアクションの原因は、お登勢のてこ入れにある。

詳しくはアニメ『銀魂』第５０話『節目節目で気合を入れ直せ』で。

「確かにお登勢さんのてこ入れ自体もまともじゃない気がします」
「分かってんじゃねぇか黒神」
「テメェ等、後で覚えてろよ？」

黒神と銀時の話の内容を聞いて、後でしばく事を誓うお登勢。

「それに今回のてこ入れなぁ……せっかくゲストにあの伊達政宗と真田幸村が来てるって言うから２人の関係を考えたてこ入れを作った訳なのさ。そしてコレが私のてこ入れじゃー！！！！」

＊＊＊

ここから先は『ふたりは○リキュア』のＯＰテーマ、『ＤＡＮＺＥＮ！　ふたりはプリキュア』が流れますので、その気分を楽しんでみてください。

政宗
「行くぜ、真田幸村」

幸村
「承知した、政宗殿！」

政宗と幸村は剣と槍を合わせて天に向けて構える。

政宗・幸村
『『変身！』』

2人は光に包まれて変身する。
そして光が収まると、2人は全く別人となってしまった。

政宗の姿は、髪は癖のあるショートカットで大剣を背負っている。
そして右眼に眼帯しているボクっ子の可愛い女の子。『〇願い！ランキング』の『〇ねがいブルー』である。

幸村の姿は、シャンプーハットが無いと髪が洗えなかったり背の低さや華奢な体格でおでこが広い。
金属バット並みに巨大な鉄扇を武器にする少女、『〇花繚乱　ＳＡＭＵＲＡＩ　ＧＩＲＬＳ』の『〇田　幸村』である

○願いブルー
「コレが……僕の新しい姿……」

○田　幸村
「うむ、脳内が大きく広がる気分なのじゃ！！！」

2人は新しい姿に感心する中、織田軍勢が容赦なく2人を襲いだす。

○願いブルー
「行くよ！！！」

○田　幸村
「了解なのじゃ！！！」

戦国に生まれた新たな2人の戦国乙女の戦いが始まる！

『2人はバサキュア　Ｍａｘ　Ｈｅａｒｔ』

＊＊＊

「それ単に俺と幸村が別の人物に変わっただけじゃねぇかァァァァァァァァ（怒）！！！！」
「某が女子になるなど、破廉恥でござるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

怒りの余りに怒鳴る政宗とあり得ないばかりと叫ぶ幸村。
完全にどっかの少女マンガと一緒と扱いにされたのであった。

「あぁ？アンタ等2人ってこう言う感じじゃなかったのかい？」
「違うわぁぁぁ

「勘弁してくだされぇぇぇ！！！某の女子姿など耐え切れぬでござるぅぅぅ！！！！」

コレばかりは納得できない竜虎。
きっと小十朗や佐助も反対するだろう。

「ああ、そういやシャマルがアンタ等に差し入れだとか言ってこんなのを送ってきたけど？」

とお登勢は、ドコからか鍋を出して2人の前に置く。
その鍋は、『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』名物っと言うより最凶兵器、『シャマル鍋』であった。

「Ｎｏｏｏ

『極悪不味』

シャマル鍋　完成！

「ＢＡＳＡＥＡ風の登場！！？……てかこんなもん食えるかァァァァァァ！！ニューも何か言ってや……れ？」

政宗はニューも訴えるべきだと言い出すが、ニューの姿は全く見えなかった。

どこに行ったのか見回すが黒神がある事を思い出して紙切れを渡す。

「ああ、そう言えばニューが２人にコレにと」

黒神は１枚の紙切れを２人に見せる。

そこにはこのように書かれていた。

『ニューは急な用を思い出したので帰ります。じゃあね～♪　ニューより』

「あの女ァァァァァァァァァァァ、逃げやがったァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

「ニュー殿ォォォォォォォォォォォォォ、あんまりでござるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

最大の危機を逃れる為にと逃げ出したニューに怒鳴って叫びだす政宗とそれはあんまりだと叫ぶ幸村。
銀時は2人がすんごく可哀想だと同様する。
自分も『シャマル鍋』の不味さは嫌と体験していた。
そして2人の前には、1つずつ『シャマル鍋』一杯分の椀が並べられていた。

「政宗さん、幸村さん、そんなに食べるの嫌？」

黒神は2人に聞いてみると、2人は凄い勢いで頭を立てに振るう。

「しょうがない……だったら……」

黒神はある事を思いついてニヤリと笑う。

「食べないなら代わりに片倉小十朗と猿飛佐助に食べさせるのもあり……」

黒神が言い終える前に、政宗と幸村は凄い勢いで『シャマル鍋』をがついで食べる。
自分はまだしも家臣や部下にこんな危険なものを食べさせる訳には行かないからだ。
そして……その味は勿論……

『『ごふぁびあずあまじばぁざぁ！！！！』』

ドサァ！！×2

竜虎と言えども、『シャマル鍋』の極悪不味に倒れこむ。
黒神は愉快に笑い出して、銀時、フェイト、なのはの3人はこの時、黒神の黒い感情が見えてきたと青ざめる。
そして2人が、蒼紅に光出すと言う思わぬ展開が起こった。

「これは!?」

黒神は思わず驚きだす中、おそらくスバルや石田のように性格が変わるようにと2人の姿が変わると言う展開だと確信した。
そしてその光が収まると……黒神の思惑通りに2人の姿が変わっていた。

＊

「……うう……俺は一体?」

突如、気絶して倒れた『女性』が起き上がる。
何やら威圧感を感じるが、気にしないで起き上がって黒神達を見つめる。
黒神達はその人物を見つめて信じられない表情をしていた。

「おいおい……なんだおめェ等?そんな顔をして、一体何が……てあれ、何で俺の声が女性になっているんだ?というより何が起こっ……」

自分の声がどうしてか女性っぽく聞こえると疑う中で、黒神はその女に鏡を見せた。

女の容姿は……蒼髪のロングヘアーで右眼に眼帯をしていて、青い武将の鎧を着ているが下半身だけはミニスカート並みの短さである。そして胸の大きさは巨乳でグラビア級、さらにはスタイル抜群。何より左目の瞳に輝いているサファイアと思わせる色取りが綺麗で、はっきり言って美女。

そう、彼女が見ている姿は……女性化改め、美女化してしまった伊達政宗の姿であった。

簡単に言えば政宗が女となってしまった姿である。

「……Ｈａ……Ｈａ……！？Ｈａａａ

「あーあーそうカッカしない。それにさぁ、その姿なら『3』に新登場した女っ気のない頭首にペッタンコ預言者より色々と勝ってるからヒロインとして狙えるよ、おっぱいドラゴンさん」
「誰がおっぱいドラゴンだぁ！！（怒）つぅかてめェ、あの2人をそんな風に見てたのか！！？」

完全に黒神のペースにはめられてる政宗。
銀時、フェイト、なのははあり得ない出来事の連続で苦笑するしかないばかりか、もうテキトーに流す事を決めた。

「まぁまぁ……あれだよ？ヒロインとして活躍するのもアリですよおっぱいドラゴンさん」
「てめェもおっぱいドラゴンと呼ぶなぁ！（怒）」
「おっぱ……政宗さん……いつか戻るから冷静に……（苦笑）」
「アンタ……今さっきおっぱいドラゴンと言いかけただろ？」
「政……おっぱいドラゴン君、人生って予想外な事があるから気にしないでね♪」
「何で言い直した！？完全にわざとおっぱいドラゴンと言いかけただろ！！そんで人生で女になるってどういう人生のおくり方すればそうなるんだ！！！！」

銀時、フェイト、なのはは政宗を落ち着かせようとするが……逆効果であった。

「……うう……何の騒ぎでござるか？」

っと幸村らしき喋り方をする女の声が聞こえた。
黒神達は起き上がる女のほうを振り向く。

女の容姿は、金髪のツインヘアーで眼はルビーの如くに真紅に輝い

ている。
赤い衣を着ていて首飾りと六文銭のペンダントをしている。
政宗（美女化）程じゃないが巨乳を包帯で隠していて、お尻の部分までしか隠していない紅いミニズボンを着ていて、美しい美脚が特徴である。

そう、起き上がったのは当然美少女かしてしまった真田幸村である。

「お前……まさか真田幸村？」
「な……なんで貴殿がそれがしの名を！？と言うより貴殿は何て破廉恥な……」

幸村が破廉恥と言い出す前にと、黒神は鏡を幸村に向けて自分の姿を見せる。
その姿を見た幸村は当然の事……

「……そ……某が女子になっているだとォォォォォォォォォォォォォォ！！！！？」

絶対にあり得ない衝撃的な展開に幸村は青ざめる。
そして政宗はそんな幸村に強く動揺している。
ちなみに幸村は、今目の前にいる美女が政宗である事を信じられないが理解する。

「なななななな……なんて破廉恥な格好をしているでござるか某はぁ！！？この幸村、己の姿に恥を感じるでござるぅぅ！！！！／／／／」
「大丈夫大丈夫、戦国ＢＡＳＡＲＡシリーズに出てくるあの金髪ツンデレくの一よりは人気が出そうだから良いんじゃねぇ？」
「そう言う問題ではござらぬ！！黒神殿ぉぉぉぉぉぉぉ、早く我等

の姿を元に戻してくだされぇぇぇぇ！！！／／／」

自分の女装化を受け入れない幸村は顔を真っ赤にして元の姿に戻りたい事を求める。

一方の銀時、フェイト、なのはの3人はどうして2人がこの様になってしまったかを不思議に思う。

「どうしてこうなったか理解できねぇ」

「にしても、2人とも女になると凄く綺麗で可愛いねぇ」

「でもそれ、男として2人を侮辱しているような事だから言えないよ」

「確かに……しかも何かヴィータちゃんに九兵衛ちゃん、特に暴走状態のキャロが見たら……」

「まちがいなく2人とも嫉妬されて殺されるな……」

「にゃははは……恐ろしいなの」

「キャロはそこまでしないよぉ～（涙）」

もし、今の政宗と幸村の姿を『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』に見せたらどうなるか、想像しずらい。

「まぁ……2人がこうなってニュ一も逃げちゃったから、コレ見てて こ入れ大会終了させて……」

『『ちょっと待ったぁー！！！！』』

終了宣言を言い出す黒神の前に、ティアナ、神楽（二年後モード）、

アルフ、ギンガ、ヴィータ、シャマル、リィンフォース、リィン、近藤、辰馬、ルーテシア、アギト、ドゥーエ、クアットロ、オットー、猿飛、外道丸、お通、ユーノが現れた。
月詠、エリオ、ザフィーラ、ヴァイス、源外、スカリエッティ、ウーノ、トーレ、オットー、山崎、ディエチ、クリステル、プレシア、ゲンヤは呆れて付いてきただけであった。

「ちょっとぉ、せっかくのてこ入れなのに何終了しようとしているの!?まだ私と兄さんの『私の兄はこんなにもカッコ良くて便りになる』が無駄になるじゃない!」
「何抜け駆けしているんですかティア!私だって銀時と『銀魂・ザ・ムービー　一心同体の絆』を発表させるつもりだったんですよ!!」
「私だって銀時と一緒に野生の動物を護る守護ストーリー『ワイルド・ガーディアン』を紹介したいよぉぉぉぉ!!」
「甘いわね、私なんか銀さんをMにして私がSとなる『SACCYAN?』を考えてたのよ!!!」
『『黙れストーカー!!!』』

ティアナ、リィンフォース、アルフ、猿飛は銀時と関係するてこ入れを考えていたらしい。
4人は言い争いになって口喧嘩。

「私だって『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ娘』のリメイク版を考えたアルよ!」

2年後神楽は以前のてこ入れに使った自分の作品をリメイク版様に考えた神楽。
相当な自信を持っていた。

「私だって自分のてこ入れを紹介したいわよぉ。でもそれは発表と同時に教えるつもりだから♪」
「甘いわね、醜い男共を踏み台にして美しき女が主役の究極百合物語、『百合魂』こそがこの小説の人気を伸ばすのよ」
「コレだから影薄は。引っ込んだら？『まるで影が薄い百合シスコン』逆して『マウシ』」
「んだとこのSメガネ！そのメガネ割ってやろうかゴルァ！！」

クアットロとギンガは言い争いだす。
お互いの意見が合わないのかそのせいである。

「わしぁ『お～い辰馬』と言うてこ入れし取ったさかいに、よかぁ見てくれんかいのう！！」
「どうせまともじゃねぇだろ？私が巨乳のてこ入れ『巨乳少女リリカルヴィータ』のほうが……」
「それも無理ちゃうか？」
「ぶっ飛ばすぞ辰馬！！（怒）」

辰馬の正直な答えにヴィータは怒る。

「私だって『美少女ドクター　シャマちゃん』を考えたからぁ！！」
「それ無理あるんじゃない？」
「何ですてぇ！！？」
「そんなのよりこのドゥーエの『ラブリードゥーちゃん　愛らしき影の暗殺者』の方が」
「古くさ」
「暗殺するよ？」

シャマルとドゥーエの意外な因縁が今ここに生まれた。

「俺のお妙さんと一緒に愛し合うラブストーリー『機動部隊　真撰組ＯＯ』を！！」
「私の出番が多くするために『戦闘機人　リリカルノーヴェ』を！！」
「ルー……『魔法少女　リリカルルーちゃんＳｔｒｉｋｅｒＳ』が良い」
「とりあえず私が巨乳のてこ入れを！」
「私もアギトちゃんと同感！！」
「とりあえず出番が少なくても良いっと言うより出番がなくなったって良いからとりあえず俺に被害がでないてこ入れを希望！！」

近藤、ノーヴェ、ルーテシア、アギト、リィン、ヴァイスは己のてこ入れと希望てこ入れを言い出す。

「あっしは面白いのであれば誰のてこ入れでも……ふふふ」
「てこ入れもいいけど、寺門通の新アルバムもヨロシクね♪」

外道丸とお通はてこ入れには関係ないのを宣伝する。

「僕だって、最高のてこ入れを考えたんだよ！それも僕が……」
「淫獣は黙ってるとヨロシ！！どうせ自分の影の薄さを受け入れない余りに自分をかっこ良く見せる為だけのしょうもないてこ入れネ！」
「うぐ……気にしてたのに……」

神楽（二年後）に言われて悔やむユーノ。

「私だっててこ入れ参加したいよ！！」
「今考え中だから待っててなの！！」

どうしても参加したくなったフェイトとなのはも、ついには大騒ぎに参加してしまう。
参加できなかった者達の大騒ぎに政宗と幸村は驚きすぎて声も出なかった。
しかし黒神と銀時も呆れて……

『『うるせェェェ

「あぁ、任せとけ……コイツが俺の答えだ……！正座してみろ！！！」

＊＊＊

ここからは『○国ＢＡＳＡＲＡ』の映画化決定の時のムービーで流れたサウンドが流れますので、その気分を楽しんでみてください。

自分の信じた武士道（ルール）を進み続け、己の大切なものを護る為に剣を振るう侍の魂を持つ魔剣士少女。

『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』　スバル・ナカジマ。

信愛する師から教えられた絆の力を信じて、己の拳と共に大切な仲間と力を合わせて戦う魔拳士少女。

『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』　スバル・ナカジマ。

侍の意志と武将の意志を次ぐ2人の魔導士同士の、究極ミラーマッチ対決がついに実現！

合流戦　制作決定！

完全新作『魔法戦記　銀魂ＢＡＳＡＲＡ～蒼天闘魔鎮魂歌～』

１２月公開予定！

＊＊＊

「……あれ？」

銀時は自分が考えたてこ入れじゃなく、何やらｃｈａｒｌｅｙさんの『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』との合流戦での予告編らしきムービーが流れた事に唖然とする。

コレには銀時達も声が出ないほどあんぐりする。

「何にも始まらない……」

「始まらないっと言うか、なんかｃｈａｒｌｅｙさんの『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』の所のスバルと合流戦の予告のような……」

フェイトとなのははどうしてこのような映画予告のような物がムービーで流れたのは不思議に思う中……

「あーあ、やっぱりばれちゃったか」

と、黒神がやっぱそうなったかと言うような態度で口に出す。

銀時達は思わず黒神に注目する。

「まぁこの予告編もｃｈａｒｌｅｙさんから許可貰ってやった事だし……」

「許可って……おいまさか……」

「はい、僕ん所のスバルとｃｈａｒｌｅｙさんの所のスバルの合流戦、本気で作る気でいます♪」

銀時が何かに気づいたのを黒神も気づいて言い出すと……

『『えええーーー

「と言う訳で『アニメ『戦国ＢＡＳＡＲＡ』映画化＆ついで『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』一周年記念・第１回『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』てこ入れコンテスト大会！　３話分スペシャル』コレ見て終了します。これからも、僕の小説『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』と、ｃｈａｒｌｅｙさんの小説『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～天下分け目の魔法戦記～』をよろしくお願いします♪」

『『その前に（俺）（某）の姿を元に戻　（せぇ）（してくだされぇ）！！！！』』

美女化したまま終わる事を良しとしない政宗と幸村は訴える。

黒神は思い出したと言う表情をするが、少し考えてニヤッとする。

「あ……僕じゃあ元に戻すの無理だから、ｃｈａｒｌｅｙさんにお願いして元に戻してやって♪」

『『Ｎｏｏｏ

第八十九訓：たまには本編でもゲストを出したほうが面白い（後書き）

いやー、一周年過ぎた事を忘れてしまいました。もう１１日立っているのに……あははは……と言う訳でこれからも『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』をよろしくお願いします♪

そして、今回ゲストとして登場したのは、ｃｈａｒｌｅｙさんの小説『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』で活躍する伊達政宗と真田幸村でした。

ｃｈａｒｌｅｙさん、ありがとうございました。

銀時

「次回「パワフルな少女は元気で明るい」テイクオフ」

第九十訓：パワフルな少女は元気で明るい（前書き）

黒神
「いやー、一周年記念後でようやくあの子が登場しました」

銀時
「まだ中盤で一周年ってどんだけ長ぇんだよ？」

黒神
「ファンの皆さん、お待たせしました。じっくり見てください！」

スバル
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第九十訓：パワフルな少女は元気で明るい

ミッドチルダ訓練場

午前０５：３０

そこに１人、坂田銀時は寝不足そうに散歩していた。
原因は偶然にも早起きしていた事であった。

「ふぁ～……ああ、だりぃ～……何かメッチャ早起きしちゃったし。……気が付けばティアの奴またもぐりこんで来やがったし」

そう、彼が眼が覚めたときにはティアナがまた銀時のベットにもぐりこんでいた。
しかも銀時に抱きついていて、コレをフェイト達に見せたら無事じゃすまないと銀時は確信して１人を起こさないようにと、ゆっくりと離れてようやく脱出した。
元の世界からますます遠ざかる生活だが、もう慣れていた。
元の世界の生活がまるでウソのように思えるぐらいに。
ちなみに、スバルはスカリエッティのアジトで治療を受けていた。
体を動かすには十分だが、まだ戦える体まで治りきっていない為に昨日から入院と言う形で治療ポットに入りっぱなしでアジトに泊まっていた。

「こんなに早く起きちまったけど……何か良い事あるんじゃねぇかなぁ？」

体を伸ばして、睡魔を吹飛ばそうとする銀時。
そろそろ部屋に戻ろうとした瞬間、何かに服を引っ張られる感覚を

感じ、後ろを振り向く。
するとそこには金髪でオッドアイをしている少女が銀時を見つめていた。
ボロボロの服を着ていて、左腕には鎖が巻かれていた。その鎖の先には、二つの黒いケースが繋がれていた。

「……」
「……いやナイ、ナイなこれはナイ」
銀時は少女から離れようとするが、
「……パパなの？」
少女は無言で銀時を話さないで入る。
「……いやいやいやいやナイって。それに俺ァ、お嬢ちゃんの父親じゃないって」
少し冷や汗を流して少女から離れようとする銀時。
それでも少女は銀時の足を握って銀時を見つめる。

「パパ！」

少女は嬉しそうに銀時を父と呼ぶ。
コレには銀時も青ざめてしまう。

「ナイナイナイナイナイナイって！！！！だってこれはあれだもん！！勘違いだって！！きっと俺似の父親と俺をこの子は勘違いしてるから！！！！」（青ざめ）

銀時は優しく彼女を放して、急いで歩くように去っていく。
だが……

「……じゃあパピー？」
「だぁから……」

銀時はそれでもかと言うぐらいに追って来る少女に青ざめて叫ぶが、

「朝からガタガタうるせェェェ！！！！」

ドカァ！！

額に血管を浮かべたお登勢の飛び蹴りが炸裂し、銀時に直撃する。

＊

機動六課。
銀時が謎の少女を見つけた事で、機動六課のメンバーは機動六課隊舎に集まった。
最初は銀時の隠し子だと疑ったが、フェイト達の殺気に青ざめた銀時は必死に理由を言い出すと、全員納得してくれた。
更に言うと、少女が持っていた２つの黒いケースの中には何とレリックが入っていた事で、ここは機動六課として保護すべきと判断する。
部隊長オフィス。

「まさかレリックを見つけてくるとは驚きや……しかし……」

はやては鋭い眼線で銀時を見つめる。
桂、エリザベス、お登勢、リィンも同感である。

「腐っている」
『腐っています』
「腐っとるな」
「腐っているね」
「腐っています」

5人ははっきり言って言い出す。
銀時がレリックと一緒に見つけた少女が、銀時の着物を掴んでいた。

「ここ最近の貴様のハーレム生活には面白半分で見ていたが、まさか幼き少女までナンパされるとは」
「おーい、どのように見ればこの子が俺にナンパしたと確信したんだヅラ君?」
「ヅラじゃない桂だ」
「で?このガキどうすんだ?」

銀時がみんなに聞いた。

「此処で保護するに決まってるだろ?そこのお嬢ちゃん、銀時に『パパ』て懐いてるから」

お登勢が当然とばかりに言った。
銀時の中でイヤな予感がした。

「ちょっと待て。え?まさか俺がこのガキの保護者になんのか?」

この流れでいくと確実にそうなる。
何とかそれだけは阻止したい。これ以上の面倒事は、ハッキリ言って御免だ。

「当たり前だろ？拾ったのは貴様だから？」
「と言う訳で、銀ちゃんは今日からその子のパパや！」

責任は銀時にありと桂ははっきりと言い出し、『ビシィ！』と銀時を指差して、はやてが言った。

「やっぱりパパ？」

少女は銀時を見上げながら呟いた。

「じょ…冗談じゃないぜ！俺はガキの面倒なんて見ねェぞ！」

銀時は声を荒げて断った。
すると、少女が銀時の着物を引っ張った。銀時が下を向くと、少女が着物を掴みながら銀時を見上げてる。

「パパ」

上目使いで銀時を見つめる。

「う…」

うるうると潤んでる少女の瞳に、銀時はたじろいだ。

「よ…止せ！そんな無邪気な瞳で俺を見るんじゃねェ！」

上目使いをやめるように言う。
だが少女は、上目使いをやめない。
桂、エリザベス、はやては、少女の上目使いにたじろいでる銀時を見て笑っている。
そして銀時は、少女の上目使い攻撃に耐えられなくなり、

「わかったよ！俺が面倒見ればいいんだろ！？やってやるよコノヤロー！！」

少女の面倒を見る事になった。
少女は嬉しそうに、銀時に抱き付いた。

「決まりやな」
「頑張ってください、銀さん！」

リインが応援した。

「武士たる者、１度決めた事はやり遂げるべしだ」
「これで責任感ってのを覚えとけよこの天然パーマ」

桂とお登勢も、ちゃんと父として面倒見るようにと銀時に忠告する。

「ったく。オイ。お前、名前何て言うんだ？」

銀時は少女に名前を尋ねた。

「ヴィヴィオ」

少女はヴィヴィオと名乗った。

＊

隊舎のロビー。
ヴィヴィオを連れた銀時と、フェイト達が集まっていた。

「ええっ!?銀さんがその子の面倒見るんですか!?」

なのはが驚いた声を出した。
周りのみんなも驚いている。確かに銀時が子育てなんて、想像もできない。

「マジ最悪ネ。少女にまで手を出すなんて侍の欠片も全然ないアル」
「誤解する言い方辞めてくんねェ?手を出したっと言うより出されたから……てかお前いつまでその格好でいんだぁ!?」

誤解する言い方をする神楽に銀時は軽くツッコむ。
と言うより神楽の姿は今だに二年後状態である。

「いやー、あっしも驚いたでありんす。母親はどの様な方でござんすか?(クスクス)」
「おーい、外道丸さん?何俺が出来ちゃった結婚でヴィヴィオの正式な父と思っているんだ?違うよ、あくまでこの子を拾って保護者になっただけだから」

外道丸の興味津々な質問に、銀時は外道丸を睨んだ。

「金時!!わしゃ、おんしあロリコンになるっと事はなかーっと信じてたぜよ!!それなのに……おんしあそこまで堕っちちまったかぁ!?」
「いい加減に聞けぇ!!!!」

ドカァ！

「あらぶぁ！！」

辰馬がエスカレートするような言い方で、銀時は怒り最大限に蹴りだして辰馬を吹飛ばす。
この光景はさすがにと、フェイトがヴィヴィオを目隠しして見せないで入る。

「しかし、ぬし一人に子育てなど出来るのか？」

月詠が銀時に尋ねた。
ちなみに、今は煙管をくわえていない。さすがに小さな女の子の前では煙管は吹かせない。

「大丈夫ですよ。私が一緒に面倒を見ますから」

そう言ったのはフェイトだった。

「何を言っているのフェイトちゃん？ヴィヴィオの面倒は私と銀さんが見るんだよ？」

対抗意識を持って、なのはが言い出す。

「いやいや、大人だからって出来るとはかぎりませんよ？ここは妹である私が兄さんと……」
「妹が兄の妻になるなんてあり得ないから！！」

ティアナがヴィヴィオの母になると言い出すが、リィンフォースが

それを否定する。

「ここは、銀時と一体化できる私こそ……」

「最近出番が少ない人が母親になるなんて、それこそ不可能じゃありませんか？」

「なぁ！！気にしていたのに！！（泣）」

最近妙に出番が少ない事を気にしているのに、それをティアナに鋭く言い出された事でギクゥっとするリィンフォース。

「貴様等では任せられない。ヴィヴィオの面倒は、私と銀時が見る」

腕を組んで、シグナムが言った。

「あたしが銀時と一緒に面倒見る～！」

ハイハイ！と手を挙げてアルフも言った。

「どうすんだ、銀時？」

「ここはお前が決めるべきだと思うが？」

ヴィータとザフィーラは銀時にどうすべきかと言い出す。

銀時は困ったように頭を掻いた。

そこに……

『『ちょっとまったぁぁぁぁ！！！！』』

突如、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、猿飛の６人が現れた。

銀時の妻になるチャンスだと、ヴィヴィオの母親になる事を決意し

た。

「話は聞かせてもらったぁ！！そんな事なら面倒見が良い私がその子の母親に！」

「いやいや、ここは私がやりたい！！」

「何言っているのですか！？育て方なら自身がある私だって……！」

「それは動物の話じゃないっすか！！私が……」

「私だって銀時と一緒に……」

「甘いわね、貴女達なんかより元の世界でも銀さんとずっと一緒にいるこの私こそが相応しいのよ！！」

６人の乱入で更に激戦が広がった。

フェイト、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォースは６人に対しても対抗心を燃やす。

「では、誰がヴィヴィオの母親になるか、勝負しようではないか」

シグナムが提案した。

「受けて立ちます！」

残りの１１人はシグナムの案に乗った。

銀時の妻の座……じゃなくヴィヴィオの母親の座を賭けた１２人の争いが始まろうとしていた。

「外でやれェエエエ！！」

頭痛を覚えながら、銀時が怒鳴った。

「では、訓練場へ行きましょう」

熱き闘志を燃やしながら、１２人は訓練場へ向かった。
１２人は既にデバイスや固有武装、そしてクナイを持っていたり、狼形態になったり戦闘準備万端である。
銀時は１２人が去ったのを見届けると、ダルそうにソファーに座った。

「よし。これで前みたいに、１２人の争いに巻き込まれて俺が被害を受ける、なんて事にはならないはずだ」

銀時はため息をついた。

「銀さん。大丈夫ですか？」

エリオが声をかけた。

「何でアイツらの戦いなのに、俺が疲れなきゃいけないんだ？」

銀時は頭を抱えた。
頭痛薬でも買いに行こうかと考えた。今まで女にモテなかったので、１２人が想いを寄せてくれるのは嬉しい。
だが、その１２人の争いに自分を巻き込まないでほしい。
外から、ドカーン！バコーン！ズガーン！と魔法を撃ち合ってる音が聞こえてくる。どんだけ激しい戦いしてんだよ。

月詠はこのままで良いのかと、戸惑っていた。
何故か銀時の妻の座（！？）争いをしているのに、自分は何もしないで入る事に……

「うむ……コレほどまでに彼女等の心を動かすとは……やはり銀時

は罪なお・・・」

ドカァ！

「どぅ！」

ドサァ！

「黙ってろやぁ、ヅラ」

桂が言い終える前に、銀時が血管を浮かべて木刀で頭を叩き、桂を気絶させる。

「まぁ事はなったが……1つだけ言っておくべきがあるな……」

九兵衛は真剣な表情で銀時に言い出す。

最近の九兵衛のキャラ崩壊を考えれば、まともじゃない事は予想していたが一応聞いて見る事にした。

「チ●コだけは絶対にやめた方『『少女の前で下ネタ言うかぁぁ！！（怒）』』……ゴファアアア！！！」

ドカァ！

銀時、神楽、月詠の3人のとてつもない飛び蹴りでツッコみ、九兵衛を吹飛ばす。

九兵衛の言うチ●コとは、すなわちチンクの事である。

いくらなんでもヴィヴィオの様な少女に下ネタを聞かせるのはヤバイからだ。

「お嬢ちゃん、あの様な下ネタを軽々しく言い出す女にはならない様に気をつけるでござんすよ？」
「下ネタって何？」
「軽々しく言っちゃ行けない言葉でありんすよ」
外道丸がヴィヴィオに注意して言い出す。
てか意外な所あるな外道丸っと銀時は思う。
ふと銀時はある事を思い出し、ヴィヴィオを見た。
「……とりあえず、何でヴィヴィオがあそこまでボロボロになっている上に鎖をかけられたのか知んねぇが……スカリエッティの所に行って見るか。ヴィヴィオ、一緒に来てくれねぇ？」
「うん」
＊
とりあえずと銀時はヴィヴィオをつれてスカリエッティのアジトに向かう。
一応、自分がヴィヴィオの父親として面倒をみる事になったことを説明する。
ヴィヴィオを見たスカリエッティは、信じられない表情をしていた。
「……君は！！」
「え？ヴィヴィオの事を知っているの？」
スカリエッティの驚いた表情を見たヴィヴィオは、自分の事を知っ

ているのではないかと思う。
銀時と源外も、スカリエッティの驚きぶりに少し唖然とする。
だがスカリエッティは我を思い出して、苦笑する。

「あ……ああ、なんでもない。気にしないでくれ……それより、ちょっと君のパパと話がしたいから……ウーノと一緒に待っててくれないかい？」

スカリエッティはごまかしてウーノとヴィヴィオと一緒にいるようにと言い出す。
父である銀時と離れるのが嫌なヴィヴィオは、銀時の着物を強く握る。
そんな銀時は、左手でヴィヴィオの頭を軽く乗せて『悪ぃ、すぐ戻るから待っててくれ』と言い出すとヴィヴィオも『……うん』と頷いて父の言う事を聞く。

＊

そして銀時は、源外とスカリエッティの3人で話し合いをする事であった。
銀時と源外がどうしても気になる事は、スカリエッティの様子がいつもと違うことである。
スカリエッティは鋭い眼線で銀時に質問する。

「銀時君、あの子をドコで拾ったんだね？」
「あぁ？拾ったと言うか、何か突如俺の前っと言うより後ろから現れやがった。けど……なんか不思議な事に、ヴィヴィオがレリックを持っていやがったぜ？」

「やっぱり……」

ヴィヴィオがレリックを持っていたことを聞いて、スカリエッティは確信した。

「スカの字……何か知っているようじゃな」

源外は鋭い眼線でスカリエッティを見つめると、スカリエッティは決意するように説明する。

「……コレから私が言い出すことを信じてくれないかい？」

「……ああ、別に構いやしねぇが？」

「ヴィヴィオは、人造生命体だと考える」

「あぁ？」

人造生命体と言う言葉に銀時は眉を浮かべる。

しかしスカリエッティはヴィヴィオはただの人造生命体ではないと語る。

「勿論唯の人造生命体でもない。フェイト・テスタロッサやエリオ・モンディアルの様なプロジェクトFの人造生命体でもなく、ナンバーズのような戦闘機人でもなく、スバルのような『タイプゼロ』タイプでもない……かなり特殊な人造生命体なんだ」

「特殊な人造生命体？」

全く新しいタイプの人造生命体じゃないかと考える銀時。

だがヴィヴィオの正体は銀時の創造をはるかに超えた存在であった。

「ヴィヴィオの正体は『最後のゆりかごの聖王オリヴィエ』のクローン体『聖王の器』なんだよ」

「『聖王の器』？」
「分かりやすく言えば、あの『生物型ロストロギア』である魔導生物兵器『ゾーマ』と同じ存在とも言える」
「なぁ！！？」

ヴィヴィオが、あの魔導生命兵器であるゾーマと同じ存在な事を聞いて驚く銀時。

「古代ベルカ王族の血を継いでおり、おそらくは固有スキル『聖王の鎧』を保持しているようだ……おそらくレリックを一緒に持っていたのも、何よりもの証拠だ。さっきゲンヤ君から連絡があって、トレーラーの横転事故が発生した情報が入った。その現場で、中身が空っぽの生体ポッドと、何か重い物を引きずっていった痕を発見したようだが……あれは間違いなくヴィヴィオがレリックを運んでいた証拠だ」

ゲンヤから聞かされた報告を元に、スカリエッティはヴィヴィオを見て確信した。

「で、その生体ポッドの中に入っていたのは、ヴィヴィオじゃと？」
「そうらしいなぁ」

まさかヴィヴィオが『聖王の器』な事を聞いて唖然と驚く銀時と源外。

「古代ベルカ王族は自らの体に生体兵器『レリックウェポン』としての力をつけていたようだが……ヴィヴィオが持っていたレリックは間違いなくヴィヴィオを聖王として覚醒させる為だろう」

ヴィヴィオがレリックを持っていたのはその為だとスカリエッティ

は言い出し、徐々に怪しい展開になってきた。

「おいスカリエッティ、それってまさか……」

「そのまさかだ……」

徐々にスカリエッティはある事を確信して、真実を言い出す。

「『最後のゆりかごの聖王オリヴィエ』のクローン体『聖王の器』に2つのレリック……間違いなくヴィヴィオは管理局の野望の為だけに生まれた人造生命体だ」

「管理局の……」

「なるほど、そう言うことか……」

ヴィヴィオが管理局に関わっていることに、さらにと驚く銀時にある事を確信した源外。

「要するに、あの銀の字の娘さんは管理局がロストロギア及びSSランクオーバーの敵に対抗するために生み出された生きた人造生命兵器と言う訳か……」

「それだけではない。管理局の連中はおそらく己の野望の為だけに、何か別の目的があるかもしれない……銀時君、ヴィヴィオを絶対に管理局に渡しては駄目だ。あの子を管理局の生命兵器としてじゃなく、君の娘として護り通すべきだ」

もしヴィヴィオが管理局の手に渡ってしまえば、更に多くの犠牲者が出るだけではなくヴィヴィオを道具として扱われてしまう事になる。

人造生命体とは言え、命を弄ぶ管理局のやり方をスカリエッティは気に食わないでいる。

「俺ぁ面倒ごとはご免だが、管理局ってのはどうも幕府とやってる事が一緒で気にくあねぇ……安心しな、一応父としてヴィヴィオを管理局から護ってやるから」
「ああ、頼む」

管理局の野望を反対するスカリエッティは、ヴィヴィオの事を銀時に託す。
彼なら管理局からヴィヴィオを護れると確信するほど信頼していた。

「所で、スバルの様子はどうだい？」
「蒼の字か？かなり重傷を負っていたが最新技術で作った治療ポットが役立ってるから……3日後になりゃ元気にいつもどおりになるじゃろう」

死ななかったのが不思議だと源外は思う。

「それに……彼女の折られた『ティルヴィングエア』を直す為に鉄子君が必死に刀を打ってくれている筈だ。何せ伝説の七星神刀（しちせいしんとう）が折られた事には流石の私も驚いたよ……」

鉄子が『ティルヴィングエア』を直しているとスカリエッティは言い出す。
だが正確にはスバルの『ティルヴィングエア』を上回る新しい『ティルヴィングエア』を作ろうとしているようだ。
伝説の刀を打ちたいと言う想いが、刀匠としての魂に火をつけた。

また、もう1つの『ペンドラゴブレイド』を鉄子に見せたら『こんな凄い剣は見たことがない』と言わせるほどであった為、かなり時間が掛かるようである。

＊

一方のヴィヴィオはウーノと一緒に、鉄子の刀鍛冶を見学していた。
しかも今回の鉄子はいつもと違う。
まるで自分の意志を鉄にぶつけるようにカナヅチを何度も何度も打ちまくる。
覇気を放つかのような勢いで、鉄を打っている。

彼女が打っている刀は、『ティルヴィングエア』である。
そして打つ度に鉄子は確信する。
おそらくこの刀は今まで自分が打ってきた刀の中でも最高傑作になると。

「ウーノさん……あの人凄いね……」
「ええ、彼女は村田鉄子っと言って刀を作る職人なのよ」
「カタナ？何それ？」

刀というのはなんなのかを聞きたがるヴィヴィオ。

「そうね……近藤から聞けば侍の魂だって」
「あのゴリラっぽいおじさん？」

ヴィヴィオの言うゴリラっぽいおじさんとは近藤勲の事であった。
最初はゴリラと思ったが、近藤の必死な説明でようやく近藤の事を人間だと確信した。

「彼女が作っている刀は、あの子の為なのよ」

ウーノは指を刺して、鉄子の後ろにいる治療ポットの中に入っている餓死状態のスバルのほうに向ける。

ちなみの彼女は全裸である。

「誰？」

「スバル・ナカジマ……貴女のお父さんを最も尊敬している機動六課のメンバーの1人で、私達と同じ戦闘機人なのよ」

ウーノがスバルの説明をしていると、ヴィヴィオは少しずつスバルに近づく。

そして彼女の治療ポットに手を触れると……寂しそうな表情をする。

「……ヴィヴィオ？」

「この人、何か可哀想」

「え？」

突如、ヴィヴィオはスバルの事を可哀想に思えてきた。

「ヴィヴィオもわかんないけど……この人を見ていると何か感じてくるの。……悲しみ、絶望、苦しみ、他にもたくさん背負っているような気がする……とても辛い過去を持っているような気がして……」

スバルを見て、ヴィヴィオは何かをスバルから感じたのである。

ウーノと鉄子は、そんなヴィヴィオの背中をただ見守るだけしかなかった。

するとウーノからスカリエッティの通信が入り、ようやく銀時との話を終えたようだ。

「ヴィヴィオ、お父さんがお話を終えたから一緒に行きましょ」

「はぁ～い」

ようやく銀時が話を終えた事を知って、ヴィヴィオは嬉しそうにウーノに駆けつけて一緒に銀時の所に向かう。
鉄子はそれを見守り、再び鍛冶を再開する。

＊

銀時とヴィヴィオは手を繋いで機動六課に戻る。
幸いにも管理局はまだヴィヴィオの姿を見たことがない為、『聖王の器』の存在を知らない。

そして……訓練場では悲惨な結果になっていた。

「ぎ……銀時……ヴィヴィ……オ……お帰……り……」

メッチャボロボロになっていたフェイトがそう言いだすと、ガクっと倒れる。
そこには、完全に戦場の後と言うほどの荒れた荒野と化した訓練所となっている。
フェイトだけじゃなく、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、チンク、セイン、セッテ、ウィンディ、ディード、猿飛もボロボロになって気絶している。

その光景にやれやれという風に、銀時はため息をついた。
ヴィヴィオも一体どうすればこのようになるのか、冷や汗大量に流して唖然としていた。
そして心の中で、ひそかにこう願った。

――ヴィヴィオが凶暴な女になりませんように。

第九十訓：パワフルな少女は元気で明るい（後書き）

ヴィヴィオ
「前回の一周年記念見たけど……政宗さんと幸村さんって女になると凄く可愛い♪」

黒神
「だろう？これからあの2人の事を『お姉様』っと呼んでやって」

ヴィヴィオ
「うん♪」

銀時
「余計な事教えんじゃねぇ！2人をイジめて楽しいのかぁ！！！？」
（青ざめ

ヴィヴィオ
「次回、「本編もいいけど、時には番外編も必要」テイクオフだよ♪」

第九十一訓：本編もいいけど、時には番外編も必要（前書き）

黒神

「今回は番外編です。その為、あのキャラ達が活躍しますので。ちゃんと番外編できたのか不安をもっていますが、とりあえず始めます：

近藤

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ！」

第九十一訓：本編もいいけど、時には番外編も必要

銀時の前にヴィヴィオが現れたと同時刻。

かぶき町では大変な揉め事になっていた。

キャサリンやたまから聞けば、お登勢もいなくなったようである。

これは何か変だと考えている。

さらには銀時の憧れるお天気お姉さん、結野アナもいなくなった事から結野衆と巳厘野衆が命がけで探している。

特に結野晴明は命がけで探していた。

完全なるシスコンである為。

それだけじゃなく、元人気?1アイドルだった寺門通の行方も不明になってしまい、タカチンが必死に探している。

次々とかぶき町の人々が消えていくのがおかしいと思った新八達は今でも必死に探していた。

歌舞伎町の人々達も協力して行方不明者を探しており、お妙にいたっては九兵衛を必死に探していた。

幕府も真撰組も、近藤勲と山崎退を探している。

＊

そして志村家の庭で、真撰組副長ごとマヨラー……じゃなかったご

免ご免。
とりあえず土方十四郎が勝手に来ていた。

「何かすんごく馬鹿にされた自己紹介さてた気分だけど!?……」

口に煙草をくわえながらイラつく土方。
とりあえず、心配で新八のところに向かった。

なんやかんやでいつも世話になっているから、たまには声をかけてやったほうが良いと思った。

「元気してっか、メガネ」

土方は窓側から新八の部屋に入り込もうとすると……

≪魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ、始まるよ♪≫

と、突如テレビから可愛らしく声を出したのは……『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』に出ている第三期の高町なのは（１９歳）であった。
そんな彼女のバリアジャケット姿を見て、興奮して見ている万事屋のツッコミ担当でありさえない男ごと志村新八であった。
テレビに近づき、寺門親衛隊の衣装を着て蕩けた顔で見ている。

「（ニヤァ～～～）……なのはちゃん、萌えぇ～～～／／／」

それは、ドコにいてもおかしくない引き篭もりオタクの様な男であった。

（何かヤバイ方向になっているんだけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ

！！！？）

信じられないほどの衝撃的な表情で冷や汗を大量に流す土方。
かつてのお通ファンの頃よりすんごく堕落した姿であった。

「何やってんだメガネぇぇぇぇぇ！！！」
「いや～、『リリカルなのは』の第三期に出てくるなのはちゃんの美しく成長した姿に、数多くの美少女達が……って、ギャアアアアアアア！！土方さん！？何で貴方が僕の家に！？」
「こっちは必死にてめェん所の万事屋もついでに探しているってのに、何アニメオタクになってやがんだぁ！？」

いくらなんでもここまで堕落した事にはツッコまずにはいられなかった。
今の新八がトッシーの様に見えてきた。

「おいメガネ、てめーがアニメオタクまで堕ちやがったとは……万事屋が見たらどんだけ軽蔑するんだよ？」
「僕が何しようと勝手だろう！！それに僕はアニメオタクじゃありません！！あんな現実離れした負け犬と一緒にしないでください！！」
「いやいや、どう見たってアニメキャラに惚れ込んでいる時点で……」
「無駄ですでぃ、土方さん。このメガネ、完全に自覚なしにオタク化してやがってますし」

と、聞き覚えのある声が聞こえて土方は新八の隣でゴロゴロと寝転がっている男に振り向く。
目隠しマスクを取り出して、ゆっくりと起き上がるのは真撰組一番隊組長ごと沖田総悟であった。

「総悟テメぇーーーーーーー！！！！何、人ん家で寝転がってやんだゴルァ！！近藤さんや山崎の行方を捜していたんじゃねぇのかよ！！！！！」

「いやー、それにしたって行方も不明ですぜ？情報もなしで探したって、無謀としか良いようがないじゃありやせんか」

「だからって人が必死に探しているのに、てめェは人の家で寝転がってぇ！！！今すぐ打った斬ってやりゃぁあああああああ！！」

土方は血管を浮かべて怒りが最大限となる。

そしてついには刀を抜いて総悟を斬ろうとする。

「ああ、待って土方さん！！人の部屋で血を染めないでくださいよぉ！！」

＊

「あぁ、情報だぁ？」

土方はようやく冷静となって、沖田と共に新八の話を聞く。

彼がどうして『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』のＤＶＤを見ているかをその理由を言い出す。

「はい……なのはちゃん達の役に立つ為に、僕なりのやり方で『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』のアニメ全話を見てどの様な状況や展開を読み取る為に、話の内容を知ればそれを分かると思って……第一期と第二期の時のように情報不足になりたくないから……」

歯がゆそうに言い出す新八。

そう彼は、コレまで『リリカルなのはシリーズ』の第一期と第二期のストーリー体験を銀時達としたからだ。
そして第一期と第二期を見れば、終盤以外はほとんど内容どおりだった。

もし自分がもっと早くＤＶＤを見ていれば、なのは達が危険な眼に合わずにすんだかもしれないと考える。
それ所が、自分は銀時達に比べて全然役立っていないとしか思えなかった。

そして新八は、自分もなのは達の役に立ちたいと言う一心で第三期の『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』のＤＶＤを見て内容全てを覚えようとした。

「この情報が役立てば、僕もなのはちゃん達の役に立てられる！！力だけが人の役立てるとはかぎらないですからね！」

新八を見て、この時土方は自分は勘違いしてたと思う。
新八は新八なりに仲間の為に、わざわざＤＶＤを必死に見て覚えようとしているんだと。

「とか言ってやすが、さっきまでフェイト達の入浴シーンを見たときはすんごく嫌らしい眼で見て興奮してたじゃねぇかい？」
「なぁっ！？／／／」

沖田はサディスト的な笑顔で新八の真実を言い出すと、新八は図星を突かれたような驚きを出す。
それを見た土方はさっきの気持ちが嘘の様に洗い流す。

「メガネ……てめー女の色気に魅力されてしまうほど軟弱になっちまったかよ？見直した気持ちが台無しじゃネェか？」

「んだとゴルァ！！マヨラーにはわかんねぇのか、女の美しい肌を見たら男は誰だって興奮しちまうもんなんだよ！！！！」
「……メガネ、いっぺん精神科病院に行って来い」

今の新八は自分達が知っている新八とは大違いだと見る。

「メガネ、寺門通のアイドル引退の件があるからって……」
「お通ちゃんは必ず帰ってくる！！不死鳥のアイドルとしてよりパワーアップしてね！！」

お通の引退がデマだと頑固に考える新八。
世間がお通をその様に思っているのは、きっとお通の良さを見れない世間の節穴だと新八は思っている。

「それに、この情報が役立てば……なのはちゃんも……」

＊

「新八さぁ～ん！」

なのは（バリアジャケット衣装状態）はゆっくりと走り出して新八に抱きつく。
そんな新八は、顔の表情も髪型もまるで別人と思う顔つきをしながらなのはを優しく抱きつく。

「新八さんのお陰で、楽に事件解決しました。ありがとうございま

す」

「何、仲間を助けるのに理由は要らない……それだけさ」

かっこ良く言い出す新八に、なのはは徐々に顔を真っ赤に染めて……

「新八さん……私、貴方の事が……／／／」

＊

「てなったりしてぇ～～～！！！でへへへへ！！／／／」

妄想で更に蕩けた表情をする新八。

沖田は今の新八を、現実的に見せたらどの様に絶望するかドSに笑い浮かべている。

土方はそんな新八がどうかしてると思って青ざめている。

2人の侍が新八を自分の思っているように見ている中、屋根に登って新八の変わり果てた姿を遠くから見て青ざめている1人の男がいた。

（……え……新八君って、あんなんだっけ？）

新八の変わり果てた姿を信じられないように見ているのは、グラサンをかけたオッサンごとマダオ。

元・入国管理局である長谷川泰三である。

今はグータラ生活をしていて、正真正銘『まるで駄目なオッサン』

まるでマダオとなっている。
そんなマダオは、今日はパチンコいっていつもとは違って大当たりで景品買いまくりだった。
万事屋メンバーがいなくなって寂しいかと、差し入れを持って来たつもりだったが……自分が知っている新八とは大違いのようで驚きの表情を出している。

（何かアニメの事で話しているんだけど……コレじゃあまるで『まるで堕落したアニメオタク』略してマダオじゃねぇ！？俺が思うのもなんか変だが、作者の黒神も俺の出番を出す余裕あったら新八君の扱いをもっと良くしたほうが良いんじゃねぇ？）

もし今の新八の姿を、銀時達に見せたらどれだけ呆れるかを想像しても考えられなかった。

「……銀さん達には……黙っておこう……」

マダオは、今の新八の姿を見なかった事にしてこの場を去る。
そして銀時達には黙っておくべきだと心から誓って喋らないで置く事にした。

一方の新八はマダオの存在を気づかずにべらべらと喋りだす。

「もし、お通ちゃんが魔法少女となればなのはちゃんとツーショットになって、２人は史上最高のアイドルコンビになるの間違いなし！！それにフェイトちゃんも１０年もたてば銀さんの事は忘れ、もしかすれば僕に気を持ってるかと思うしねぇ！はやてちゃんもなのはちゃんに対するセクハラも、それが魅力的で可愛らしいし……ヴィヴィオちゃんもなのはちゃんに匹敵するほど美少女だし……それ

からそれから……」

バァーン！！

「……いい加減にしねぇか……？」

コレには土方さんも流石にブチ切れて怒り出して机を叩く。
新八は驚きだして、沖田も「あらまぁ～」っと口に出す。

「てめぇは少なくとも、あの野朗から侍道を学ぶ為に万事屋に入ったんじゃねぇのか？……『リリカルなのは』に関わるてめェは冴えなくても強い信念は持っていやがる。近藤さんも認める侍として、そして地味でも成長してやがる……だが今はどうだ？こんな三次元人物に注目して醜いオタクと成り下がっていやがる……」

『鬼の副長』としての威圧感を放ち、鋭い眼線で新八を睨みつける土方。
土方は表には出さないが、内心では新八の成長を認めていた。
地味でも地味なりに強くなっていき、さらには侍としての魂が磨きかかっていた事に。

だが今の新八はその様な様子が全く見えない。
『リリカルなのは』に関わったせいかここまで堕落して落ちていた。
今の新八の存在を、腐れ縁でも侍として認めない土方。

「あの野朗が仲間として大切に思っていたてめェが、ここまで堕ち

たとしたらどんだけ悲しむだろうな……情報収集の為や役に立つ為かは知らねぇが……こんなくだらねぇ活動しているヒマがあるなら……」

土方は剣を抜いて新八に向ける。

「武士の志を持って死ぬほど剣の稽古をしやがれぇ！！！」

怒りを大爆発させるような勢いで怒鳴って叫ぶ鬼。
沖田も今回ばかりは土方には大賛成。
しかし全く動揺しない態度を取る新八だが、鬼はそれでも構わず叫びだす。

「アニメを見ている間にも、万事屋達が危険な眼に合ってるかもしんねぇのだぞ！！？そんな事を考えずにてめェは「分かっています、そんな事！！」……何？」

鬼が言い出す途中で、新八が叫びだす。

「分かっています……そんな事ぐらい……僕だって銀さんと神楽ちゃんが心配だよ……今すぐに駆けつけて助けに行きたい。場所はおそらくなのはちゃん達の世界に違いない。だけど、転送装置も壊れて源外さんも行方不明になっているのに……源外さん以上の発明家はいるんですか？」

「……」

新八の言う事を黙って聞く土方。
新八はアニメオタクに堕ちてはいない。
仲間を助けたいと言う気持ちでいっぱいである。
だが別の世界にどう行けば良いと言うのだ？

源外はいない上に転送装置も故障。
源外以上の発明家じゃないと転送装置は作れない。

すると土方は新八の両手を良く見てみると、少し肉刺が出来ているのがわかる。
それは道場剣術の稽古をちゃんとしている証。
いつまでも弱い自分のままでいたくはないからである。

「でも僕は信じます……銀さん達はどんな危険な目に合っても……己の武士道を貫き通して乗り越える事を!!だから、僕達が出来る事は今自分達ができる事をやれるだけやって、源外さんが別の世界で転送装置を作ってこの歌舞伎町に帰ってくる事も……絶対に信じています!!」

新八は誰よりも、銀時達が無事である事を信じている。
誰よりも見続けていた。銀時の、侍の背中を……。
さっきまでのオタク顔が嘘のように思える新八の真剣な表情に、土方は刀を鞘に納める。

「その様子だと……少しは成長しているようだな……精神だけは」

土方は今、初めて新八の成長を褒めだした。
自分の思ってたとは違い、新八は新八なりに成長してた事を今目の前で確信したからだ。
沖田も少しフッと笑う。

「だから、待っててなのはちゃん!!僕が君の世界に来たからには、絶対に僕がどれだけ頼りになる男か理解できるから!!」

窓から上半身出て、自分のたくましさをなのはに証明する事を誓い出す。

（結局はそれぇぇぇぇ～～～～～～！！！！）

涙を流して心の奥底から叫ぶ土方。
沖田は取り合えず、土方の方を軽く叩く。
まぁ何にせよ、新八は銀時達の事を心配している事はまちがいなしだと確信できた。

「まぁまぁ土方さん……あのメガネもいつか夢から覚めやすから、今は妄想に溺れさせてやってくだせぇ（黒笑）」
「総悟……お前、まさかメガネの先を読んで……」
「まぁ大抵、ああ言う己の妄想が正しく進むと思ってやがる哀れな奴ほど、現実を見りゃ……絶望を見やすんで……俺等がどう言って、進む道は変わりやせんけどねぇ？」
「マジ最悪なドSだなお前！！」

サディスト的な笑いを浮べ、土方は改めてドSな総悟の恐ろしさを知った。

「それよか、俺等ぁ第二期に出てきた『リリカルなのは』のメンバーは知らねぇですぜ？一応『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の登場人物に姿が見れやすから、土方さんもどうですか？」
「あぁ、どれどれ？」

沖田は土方に、『ＳｔｒｉｋｅｒＳ』の登場本を渡す。
一応知っておくべきかと土方は受け取って、第二期から登場したメンバーを見る。
シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォースなど

ヴォルケンリッターのメンバーは確信した。
そして、『リリカルなのは』シリーズの３大主人公とも言える３人の重要メンバーである八神はやてを見た瞬間だった。

ドキィ！

（おぉ！？）

突如、彼女の姿を見てドキッとした土方。
可愛らしきショートヘアーに豊満な胸。
そしてなのはとフェイトと並びだす美女で、何よりバリアジャケット姿がまた魅力的だった。
土方はその姿を『夜天の天女』と認識した。

（お……おおおお、女なんて……まままままま魔法少女なんて……）

徐々に顔を真っ赤にしてドキドキと心が破裂しそうに鳴る。
そして土方の心は……

（く……クソありがとうございましたァァァァァァァァ！！！！）

完全にはやてに惚れ込んでしまった。
だが、はやてはすでに、真撰組の宿敵である攘夷志士の桂に好意を抱いている事に土方はまだ知らない。

第九十一訓：本編もいいけど、時には番外編も必要（後書き）

黒神
「と言う訳で新八達は今、このようになっています」

銀時
「つうか新八出てくるのも良いんだけど、何であのマヨラーまで出す必要あるわけ？」

神楽
「全くアル！あのドSも無理矢理出て組んじゃねぇヨ！」

フェイト
「ぎ……銀時、神楽、落ち着いて（苦笑）」

近藤
「万事屋ぁ、チャイナぁ、頼む！あいつ等だって本編に早く出たいと願ってるからさぁ！！（涙）」

ルーテシア
「よしよし、可哀想に」

黒神
「てかルーテシアは近藤のお母さんかい！！」

スバル
「あ……あははは……次回「ゲームの中には、一度壊れた武器は新しくパワーアップして治ってくるパターンもある」テイクオフです」

第九十二訓：ゲームの中には、一度壊れた武器は新しくパワーアップして治って

今ここに、スバルは自分の過去を銀時に話し出す。

フェイトのデバイスもパワーアップされて、更なる力も手にする。

そして……スバルの新たなる刀も……

スバル

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第九十二訓：ゲームの中には、一度壊れた武器は新しくパワーアップして治って

荒れ果てた大地に、数多くの侍の刀が地面に突き刺さっていた。
青い空を隠している灰色の雲。

そんな人気のない場所に、スバルはいた。

数多くの刀を寂しそうな眼で見ていた。
その刀は、戦場で死んでいった侍の剣であり、良く見るとボロボロとなって血塗られている。
その剣が地面が見えないほどに、大地にたくさん突き刺さっていた。

しかしスバルはその光景を見慣れている。
血の匂い、戦場で荒れた大地、そして多くの命が消えてしまった空間。

そんなスバルの前に、1人の着物を来た男が現れた。
スバルはその男のほうを向き、男は話しかける。

「侍の魂を持つ少女が異世界にいると聞き、どんな人物かと見に来れば……君がそう……」

何やら笑っている様子で話しかける男。
スバルはこの男を知っている。
そう、以前に銀時の過去の夢を見たときに現れた男である。（詳しくは『第十五訓：ゲームは1人でやるより皆でやるほうが面白い！』で）

「また随分と、可憐なる侍がいた者ですね」

自分の世界でも剣を持つ女侍はいたが、スバルのような可愛らしい少女の侍は始めてみるかのような言い方をする。
スバルは平然な表情で男の話を聞く。

「己の大切なものを護る為に剣を振るい、侍として魔法と言う特殊な妖術よりも剣術を極めてきたのですか……侍に憧れ、己自身で侍の道を進みだす上……管理局と言う連中に大切な仲間を奪われたあげくに、復讐の魔に負けずに仲間の分まで生きるなど……」

今時の娘とは思えない強い信念に、男は感心する。

「大したもんじゃないですか。私達の世界で侍は徐々に減り続けていますが……異世界で貴女の様な侍が存在していたとは……同じ侍として誇りに思います……。だけど……今の貴女はまだ、過去に縛られている様に見えます」

男はスバルの本心を見抜いていた。
そんな男にスバルは言い返さない。
男の言う事は正しいからだ。今も自分は過去の経験を後悔している。
いかに剣術が優れていても、強力な魔法を会得しても……護りたいものを護れなかった。

「亡くなった仲間の魂に苦しみを背負って生きるのも良いですが……過去の後悔に縛られる必要はありません」

男の言葉にスバルは『ハッ！』とする。
自分は、過去の苦しみに縛られていた。
アーサァを護れなかった己の弱さと、仲間が死んでいった悲しみの

不の感情に。

「己の道を進むため、今の仲間と共に生きて行くため……後悔など捨てちゃいなさい」

男の言葉でスバルは忘れていた。

スバルはかつての仲間『第６６６魔闘機関』やアーサァを失い、アリマにも敵意されたが……スバルはまだ全てを失っていない。

銀時達や『機動六課』のメンバー、それに家族のギンガとゲンヤもいる。

たとえ過去の大切なものが失っても、また新しい護りたいものが出来たのだ。

「スバルとか……言いましたね」

男が自分の名を言い出すと、スバルはゆっくりと頷く。

「己を信じ、未来に進みなさい……。銀時や小太郎も、それを望んでいるはず」

「！？」

男が銀時と桂の名を口に出して、スバルは驚く。

そして同時に男の正体がわかった。

この男こそ、銀時が以前に言っていた恩師である事を。

「そして……銀時の背中に追いかけたいのであれば、彼の意思を継ぐと良い。彼等と同じ修羅の道を進み続けてきた貴女なら出来るでしょう」

そう言い出して、男は後ろに振り向いてこの場を去ろうとする。

白夜叉の意志を継ぐ。

それこそが、侍の強さに憧れを抱き……最も銀時を尊敬するスバルがすべき役目だと男は確信し、スバルなら出来ると信じだす。

そして徐々に遠ざかっていく男の背中を、スバルは黙って見つめる同時に男の最後の言葉を聞き入れる。

「銀時に憧れて彼を目指す為に、ここまで成長した貴女を見て……私は師として彼を誇れます」

その男、吉田松陽は教え子である銀時を誇る。

＊

（……夢？）

スバルは夢から眼を覚めて、周りを見渡すと……そこはいつものスカリエッティのアジト内である。

だがさっきの夢は、夢にしては偶然過ぎる。

銀時の幼き頃の過去の夢に登場した銀時の恩師である松陽が、今度は自分の夢に出て伝えに来たとは……とても偶然の夢とは思えなかった。

（銀さんの意志を継ぐ……かぁ）

あの人の言葉に、今も脳内に印象に残っている。
私は今まで自分は自分自身を信じていなかったかもしれない。
それならアリマに敗北したのも分かる。

こんな自分でも、私はもう一度信じてみようと思う。あの人、銀さんの恩師が言ってみたように……。

それからスバルは、ウーノによって治療ポットから出る。
完全に治療が完了して、いつものように戦える体に戻った。

後は折れた『ティルヴィングエア』をどうすべきかと考える中、ウーノから聞けば『ティルヴィングエア』は源外、スカリエッティ、鉄子の3人の協力でよりパワーアップさせる為に直している所である。
3日たてば完成すると聞き、スバルは機動六課に戻らずしばらく待つ事にした。

＊

3日後

スカリエッティのアジト　研究室

そこでスカリエッティはフェイトと話をしていた。
ヴィヴィオはウーノと一緒に待つ事になっている様である。
今後の『鬼兵隊』はかなり協力になっていく事を。

「正直言って……今の君では厳しい相手になるかもしれない。優れたＳ＋ランクの魔導師である君であっても、鬼兵隊はそれほどまでに強力だからさ」
「確かに、銀時から聞かされた『紅桜』は異常なまでの強さだった……だけどそれ以上に信じられないのはアンドロイドに仕込まれた『紅桜』がまだ未完成だったなんて……」

未完成なのにあれほど手こずった事が信じられなかったフェイト。
しかも強力な『ＡＭＦ』の性能付きに改造されてた事は予想外である。
だとすれば、今の自分達の魔法頼りの戦法は全く無意味である。

「おそらく、魔導士にとっては天敵になりゆる兵器な上、あれが完成するとなれば……間違いなくロストロギア級になりえるだろう。いかに『機動六課』が最強部隊といえども……魔法を封じられてしまえば無意味」

スカリエッティの言う事も最もである。
魔法を封じられた状態で銀魂メンバーを除いてまともに戦えると言えば、身体能力だけはダントツに優れているスバルと、最近身体能力も鍛えているシグナムとエリオ、そしてロストロギアであるリィンフォースだけである。
他のメンバーは魔法を中心に戦っている為か、魔法なしでは圧倒的に弱い。
フェイトは魔法を封じられて未完成状態の『紅桜』相手に、全く歯

が立たなかった事を悔やんでいる。

「だからこそ、君達は身体能力を鍛えなければならない。少しでも『鬼兵隊』に対抗するために……我々『ナンバーズ』も彼等の恐ろしさを知り、カリム・グラシアの意見を乗って君達と同盟を結んだ……そして君に新しい力を託すのも私の役目……」

「私の……新しい力？」

するとスカリエッティは、手をポケットに入れてそこからある物を取り出す。

金色に輝き、稲妻の形をしたペンダント。

それがデバイスである事をフェイトは知る。

「この時の為にと、私が倉庫に保存していた『七星神刀（しちせいしんとう）』の1つ、妖刀『ライキリ』だ」

「七星神刀（しちせいしんとう）！？」

伝説の七星神刀（しちせいしんとう）を渡された事にフェイトは驚く。

いったいどうしてスカリエッティが持っているかとフェイトは聞こうとすると、スカリエッティはその理由を言い出す。

「3年前、管理局の傲慢なやり方に不満を持って私に協力しようと仲間になった元・管理局の魔導士がいて……腕の立つ魔導士だったが、その二週間後に裏切り者として多くの魔導士に一斉攻撃されて……そしてドゥーエがせめて形見として私に『ライキリ』を渡した……」

それを聞いたフェイトは驚愕した。

管理局を辞めただけで裏切り者として処罰された？

そんな理由で人の命を管理局は奪ったのか？

「おそらく、あの『魔剣終焉戦争』の事を知っていたからだろう……」

「『魔剣終焉戦争』？……たしか『インカルガ蓮邦』と言う数多くのロストロギアを使用して罪なき人々を殺害しているＳＳＳ級の史上最大級の極悪犯罪集団と『第６６６魔闘機関』の大戦争で、『第６６６魔闘機関』は小部隊でありながらも後一歩まで追い詰めたけど……『インカルガ蓮邦』の道連れで『第６６６魔闘機関』は壊滅されたと聞いたけど……」

『魔剣終焉戦争』の事を詳しく知っているフェイト。

しかしそれは表の話で、裏の真実は全く違う。

「表ではそう伝えられているが、その裏にはとんでもない真実が隠されている……実際は、『インカルガ蓮邦』の道連れと言う名で、『第６６６魔闘機関』の強さに恐れだした管理局の上層部は『インカルガ蓮邦』ごと『アルカンシェル』を撃ち、２つの軍勢を壊滅させた」

「！？」

さらにと言うばかりにとてつもない真実にフェイトは信じられないほど驚く。

管理局の為に戦ってきた『第６６６魔闘機関』が、『インカルガ蓮邦』ごと爆弾代わりとして壊滅させられた事に。

ここまで傲慢で腐りきった管理局に、フェイトは思い知らされて管理局の信頼を失う。

「酷すぎる……人の命を何だと思って……」

「おそらく……真実を世間にばらされるのを恐れていたのだろう……」

かつて自分は犯罪者扱いされてたが、管理局のほうが犯罪集団じゃないかと今でも思うスカリエッティ。

「でも、仲間の形見を私に渡しちゃって良いの？」

「私では扱えないし、何よりナンバーズは大抵デバイスを使わない上、唯一『七星神刀』を持つノーヴェはすでに『カンショバクヤ』を持っている……それにこの『七星神刀』は『バルディッシュ』と同じ稲妻の能力を持っている。それならば君が使ったほうが良い……何より、『七星神刀』は魔力なしでも普通の武器として戦えて、強度も通常のデバイスの5倍はある」

つまり、フェイトは『ライキリ』を使いこなす為にスバルと同様に魔剣士となるべきだとスカリエッティは言い出す。

それと同時にフェイトはある事を確信する。

「じゃあ、3日前に『バルディッシュ』を強化する為に貸して欲しいって言うのも！」

「『バルディッシュ』を『ライキリ』に匹敵するデバイスにする為さ」

スカリエッティははっきりと真実を言い出す。

『バルディッシュ』を『七星神刀』に匹敵するデバイスに改良すれば、まちがいなくフェイトはパワーアップする。

だがその為にはまず、魔法を頼らず身体能力の強化が必要である。

『七星神刀』が他のデバイスと違うのは、性能の高さと5倍の強度だけではない。

使用者の身体能力によってその力が変化する事である。

つまり身体能力が高ければ高いほど真の力を発揮する。

「とりあえず、セットオンしてみる」

フェイトは『ライキリ』を強く握ると、『ライキリ』は強く光りだす。

金色の光はフェイトを包み込み、光が収まるとフェイトの握っていた『ライキリ』が変化した。

漆黒の『茎』が包みこまれている張り柄巻きに拳形の鍔。

長さも通常の刀と同様である。

簡単に言えば、色の輝きを除けば『ライキリ』は『ティルヴィングエア』と同様に最も日本刀らしい形である。

初めて握る刀に、フェイトは柄を握って漆黒の鞘から刀を抜く。

そして鞘から抜いた瞬間、その刀身が金色に輝く。

峯の部分はわずかにオレンジ色の輝きを混じっていて、刃は金色の輝きそのままである。

そんな『ライキリ』を見て、フェイトは思わず唖然と驚く。

（凄い力を感じる……『バルディッシュ』をはるかに上回る魔力を感じる……）

伝説のデバイスと呼ばれるだけはあり、かなりの強さを感じるフェイト。

≪ＳｔａｒｔＭｙ ｂｅｓｔ ｒｅｇａｒｄｓ ｂｅｃａｕｓｅ ｙｏｕ ａｒｅ ｒｅｃｏｇｎｉｚｅｄ ｃｈｉｅｆｌｙ．．ｍ

y.・today please.≫

「うん、これからも宜しくね『ライキリ』」

と『ライキリ』は主であるフェイトに挨拶し、フェイトもよろしく頼むと挨拶する。

そしてスカリエッティは今まで『ライキリ』の性能を研究してきた為、知っている事を全て言い出す。

「妖刀型のデバイス『ライキリ』……七星神刀（しちせいしんとう）の1つであり切れ味は勿論の事、稲妻の魔力が宿っている。鋭き刃は斬った敵に電撃を遺伝させて麻痺させる能力を持つ上に、使用者が稲妻系の魔法を得意とすればその切れ味と破壊力は増幅する。さらに魔力を『ライキリ』に収束するごとに『ライキリ』による魔法攻撃もパワーアップする……正に稲妻の刀と言うべきだろう」

「そんな凄いデバイスを……『鬼兵隊』の兵器『紅桜』に対抗する為とは言え私に……」

かなりと言っての太っ腹であるとフェイトは思う。

しかしスカリエッティは大事な事をはっきりと言い出す。

「しかし、ライキリは『七星神刀（しちせいしんとう）』の中でも最も恐ろしくて危険なデバイスでもある」

「え、どういう事！？」

『ライキリ』にはとんでもないデメリットがあるとスカリエッティが言い出す。

それを聞いてフェイトはギョッと驚く。

「何故なら、『ライキリ』は使い手の魔力を糧にして力を発揮する。捧げる魔力の量に比例して発揮する力は増大するが、その状態が長

時間続いてしまい、刀に魔力を全てしまった瞬間、今度は血肉そのものに神経、肉体を侵食され、取り込まれてしまう！！そしてそうなれば、使い手の魂は食われ『ライキリ』に支配された生きた屍と化す！！その性能とデメリットを見て、通称『魂を喰らう稲妻の妖刀』と呼ばれている」

「ちょっと待って！！じゃあ私が今もこうして『ライキリ』を握っているとなると……」

「ああ、まちがいなく君の魔力を『ライキリ』の意志で強制的に吸っていると思う」

「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

強制的に使い手の魔力を吸うデバイスなんて初めて聞くフェイト。しかし良く感じてみたら、徐々に自分の魔力が『ライキリ』に吸い取られている感覚を感じる。

「『ライキリ』の魔力吸いは柄を握るのと鞘から刀身全体を抜き取る2つの条件で発生する。だから今すぐに『ライキリ』を鞘に納めるのをお進めする」

スカリエッティの言う通りに、フェイトは『ライキリ』を鞘に納める。

「その分。『ライキリ』にはカートリッジシステムは存在しない。魔力を強制的に吸うのであればそれは必要ないと思うからだ……だがその『ライキリ』の意志と同化し、自由自在に己の魔力を『ライキリ』に吸わすコンロトールを身につけるには……君が『ライキリ』を使いこなすしかないんだよ、フェイト・テスタロッサ」

『ライキリ』を使いこなす事が、フェイトが強くなる最大の条件である。

確かに強化される『バルディッシュ』に七星神刀（しちせいしんとう）の『ライキリ』を同時に扱えれば、フェイトも『紅桜』どころかあのゾーマにも対抗できる強さを得るかもしれない。
そしてフェイトは確信した。
『ライキリ』を使いこなすには、銀時、桂、スバルの様に侍の強さを使いこなす必要がある。

そこで突如、源外と鉄子が入ってきた。

「スカリエッティ、頼まれたの完成したよ」
「ああ、喜べフェイト。『バルディッシュ』のパワーアップの完了じゃ！」

源外と鉄子の協力で、フェイトの『バルディッシュ』のパワーアップが完成した。

「バルディッシュ！！」
≪Ｍｙ　ｍａｉｎ．　ｗａｉｔｅｄ≫

源外から『バルディッシュ』を受け取るフェイトは嬉しがる。
『バルディッシュ』も形はかなり変わったようである。

柄の部分は以前より紫色に輝いており、その横先の部分には死神のような大鎌の刃が突いている上に６連装リボルバー式のカートリッジシステムがそのまま残っている。

「コレがバルディッシュのパワーアップ版、バルディッシュ・デスサイズじゃ！通称『閃光に切り裂く死神の大鎌』と言い、『七星神刀（しちせいしんとう）』の作りからを参考に大鎌をバルディッシュに合成させた全く新しいバルディッシュの新型じゃ。全てのフォルムはいつ者どおりに

可能じゃが、新型フォーム『ライオットザンバー・デスサイズ』や『ライオットザンバー・セイバー』も追加されておる。」

≪Ｐｏｗｅｒ ｇｏｅｓ ｕｐ ｔｈａｎ ｂｅｆｏｒｅ ｂｙ ｔｈｅ ｆａｖｏｒ. Ｓｔｒｏｎｇ ｔｈａｎｋｓ ａｒｅ ｈｅｌｄ ｉｎ ｔｈｒｅｅ ｐｅｏｐｌｅ.≫

『バルディッシュ』のパワーアップと七星神刀（しちせいしんとう）の１つを手にしたフェイト。

後は経験をつんで強くなるだけである。

＊

スカリエッティのアジト　入り口前

そこに、フェイトはヴィヴィオを抱きながら今ここに到着した銀時に向かって歩き出す。

「銀時」

「パパぁ」

フェイトとヴィヴィオは嬉しそうに銀時を呼ぶ。

そして銀時はふと笑って手を振るう。

「よぉ、話し終えたようだなぁ……」

「うん！……あのねパパ、フェイトさんが新しい力を手に入れたって」

「新しい力？」

ヴィヴィオがそう言うと、フェイトは『ライキリ』を銀時に見せる。
そしてそれが伝説の七星神刀（しちせいしんとう）の1つである事を知って驚く。
だがかなり扱いづらい為、相当な鍛錬が必要だとスカリエッティから聞かされた。
更に聞けば『バルディッシュ』も、『バルディッシュ・アサルト』から『バルディッシュ・デスサイズ』に強化された。
2つの強力なデバイスを使いこなせれば、フェイトも『紅桜』に対抗できるだろうと銀時は確信する。

「所で銀時……スバルから話があるとか言ってたけど？」
「……ああ、とにかく大切な事らしいぜ？……そんでタイミング良く来たようだなぁスバル」

銀時がスバルの名を口に出すと、フェイト達は後ろを振り向く。
するとそこにはスバルがいた。

「……銀さん、フェイトさん……あのう」
「とりあえず、話してみろよ……全部聞いてやるから」

銀時がそう言うと、スバルはためらうの辞めて全てを話す事を決意する。
そしてヴィヴィオはフェイトから降りて、スバルに近づく。
ヴィヴィオの存在に気づいたスバルは唖然とする。

「……あのう……誰？」
「初めまして、ヴィヴィオです。ウーノさんからお姉ちゃんの事聞かされたよ」
「ウーノさんから……スバル・ナカジマって言うんだよ。宜しくね♪」

ヴィヴィオとの挨拶を交わしたスバルは、ヴィヴィオの頭を優しく撫でる。
その後、銀時がヴィヴィオの義父としてしばらく面倒みる事になった事を聞かされてスバルは驚いていた。
ついでにヴィヴィオの母親の座をめぐってフェイト達が争っていた事も知り、治療中にそんな事が起こってたなんてフェイト達を羨ましがるスバル。
だが今だ母親役は決まっていないので、スバルは安心する。

「……銀さん、フェイトさん、ヴィヴィオ……全てを話します。私が体験してきた真実を」

そしてスバルは全てを話しだす。

～～～

あの火災の後、自分は銀時を目標にと大切なものを護る為に剣術を学びだした。
休日を無視して己の信念を貫き通す為にひたすら剣術の鍛錬をした。
魔導士としての道を外しているのか、姉のギンガには反対されたがそれでも自分の生きる目標のままに進んで行きたいと、人の数十倍は努力した。

1年後、神速と思わせるほどの居合い剣術を身につけた自分は1人

旅に出かけるつもりだったが、それに反対したギンガによって無理矢理『時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校』に入学させられ、そこでパートナーであるカウェインと『第６６６魔闘機関』部隊長のサナダ・シンゲと出会い、強力な魔剣士として育て上げられた。

訓練校でも１・２を争うほどまでに成長したが、わずか１年で無理矢理卒業させられた。

しかしそれを機会にサナダから『第６６６魔闘機関』にスカウトをされ、そこでアリマと出会う。

そこで更に厳しい訓練を受けた。

『時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校』の訓練の仕方が生易しいと言うぐらいに。

それでも銀時を目的としていた為、カウェインと共に乗り越え、急激な速さで成長し……ついには『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』のメンバーとなる。

だがその２年後に、『魔剣終焉戦争』は起こってしまい、『インカルガ蓮邦』が弱まった所で管理局側は『第６６６魔闘機関』ごと魔導砲を撃ち、『インカルガ蓮邦』ごと『第６６６魔闘機関』は壊滅された。

サナダも、仲間も全て死んでしまい……生き残ったのは自分とカウェインにアリマの３人だけだった。

更に管理局の刺客として多くの魔導士達が自分達を抹殺する為に現れたが、そこでパートナーであるカウェインが自分とアリマを助ける為に、１人だけで管理局側の軍勢に立ち向かった。

そしてカウェインは裏切られた魔導士としてではなく、『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の誇り高き魔剣士としての最後を向かえ……スバルに剣士としての誇りを託して亡くなった。

それから3日後、アリマと別々に生きる事を決意していつかまた生きて再会しようと誓いを立てて分かれだす。
その後、自分はひたすら剣を極める為に旅を行った。

一年後、ミッドチルダに戻って第3起動高層ビルに向かい、鬼兵隊の生体兵器『えいりあん』と遭遇して銀時と4年ぶりの再会を果たし……今この場に存在する。

～～～

スバルは全てを話した。
自分の生きてきた経験と仲間を失った悲しみを……
そしてかつての仲間を管理局に殺された事を。

フェイトは眼から涙が溢れていて、ヴィヴィオは悲しそうな眼でスバルを見る。
そして銀時は、アーサァの件以外でもスバルにこんな辛い過去を背負っていた事が信じられなかった。

「……同じだ……」

銀時は耐えられなく言い出す。

「『時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校』に卒業と言う名で見捨てられちまった事も……『魔剣終焉戦争』で管理局に恩師と仲間を奪われてしまった事も……そしてかつての仲間が復讐

の魔に取り付かれちまった事も……『攘夷戦争』と全く同じじゃねぇか……！」

スバルの背負っている苦しみの過去は、紛れもなく自分達侍が体験した『攘夷戦争』そのものだった。
管理局も幕府と同様に相当に腐っている。
銀時も、コレばかりは流石に怒りを抑えられなかった。

「銀さんのように強い侍を目指したかったばかりに、私はただ強くなるばかりで護りたいものを護れなかった……そんな自分を今でも愚かだと思うよ」
「そんな事ない！！」

自分の進んだ道が愚かだと思うスバルにフェイトは叫びだす。

「その分、スバルは多くの人々だって救ってきたはずだよ！数多くの人々を救ってきたなら立派に生きてきたはずだよ！だから――」
「その為に多くの人を殺めたとしてでもですか？」

「……え？」

今、スバルの口からとんでもない事を聞き出したフェイトは驚愕した。
多くの人を救う為に人を殺めた？
それはつまりスバルは人を殺した事になる。
銀時もスバルの話を聞いて、薄々は気づいていたが……まさかまだこのような少女が人を殺めたなんて……内心では驚いている。
ヴィヴィオも驚きの表情をしていた。

「ご存知の通り、『第６６６魔闘機関』は危険なロストロギアの破壊が任務の集団で……それと同時に、ロストロギアを使って犯罪を犯すＡ級犯罪集団の殺戮処罰もする危険活動も行っていたんです。対ＡＡＡランク級以上の犯罪者殺戮部隊『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』、私はその１人として……人々を殺める多くの犯罪者を斬って来ました」

悲しそうに説明するスバル。

今でも覚えている肉を切る感覚と罪悪感。

最初に人を殺めた時でも、苦しいほど吐いた。

いかに相手が犯罪者だからって、命の重みを身をもって知った。

「痛みと知り、人を殺める覚悟と斬られる覚悟を持たないと生き残れない……サナダ隊長から教えられた言葉なんです……隊長の言う通り、戦場では常識は通じないよ。殺らなきゃこっちが殺られ、仲間も死ぬ……私は、大切な仲間を護るため……そして多くの人を救う為に敵を斬って斬って斬りまくった……それが、護る為ならしょうがないっと思っていた……だけど……」

その右手を強く握りだす。

人を殺めた事が強い後悔であった。

「重かった、自分じゃ背負いきれない人々の命が重すぎた！！それを分かっていながらも……私は大切なものを護る為に多くの人の命を奪ってきた」

それこそが自分の強い後悔。

そして命を奪ってもなお、自分の大切なものを護れなかった。

人の命の重さを知り、同時に今まで自分が奪ってきた命の分まで背

負って生きて行けない覚悟である。

「いかに管理局の奇襲とは言え、私は護りたい仲間を護れなかった……どうせ護れないなら一層の事全てを捨てて楽になりたかった。何度もそう思っていた……だけど、それじゃあ今まで自分が信じた道を進んできた意味がないよ……抗って抗って、そのくり返しをしてきたけど……また銀さんと会えて、機動六課（大切な仲間）ができちゃった……」

銀時、フェイト、ティアナ、数多くの仲間によってスバルの心は光を取り戻せた。

管理局側とは言え、はやての誘いを受けたのも……『機動六課』を絶対に『第６６６魔闘機関』の二の舞にしては行けないと誓ったからだ。

「今までは過去に縛られても機動六課の皆と一緒に生きてきたけど……3日前の夢の中である人が私に伝えてきました」

「夢の中で？」

「『己を信じ、未来に進みなさい』……その言葉を聞き、もう一度自分を信じてみたい。きっとその先に答えがあるから！」

過去の過ち、苦しみ、絶望などに縛られたが……それに縛られるのではなく背負って自分は生きていくことに決めたスバル。

そんなスバルに、銀時は頭を撫でる。

「随分と苦労したもんだなぁおい」

銀時は管理局に対する怒りがすっかり抜けたように気楽に言い出す。

「確かに、命ってのはそう無闇に奪っちゃ行けねぇもんだが……スバルはそれを分かってても、仲間の為に戦い続けてきた。己の修羅

にも負けず、護りたいものを護る為に……」

それでもスバルが護るべきかつての仲間は死んでしまった。

己の未熟さや、弱さを憎んで……

「修羅の道ってのはそうう簡単に進みきれねぇもんだぜ……それをお前が進みきれたのも、さらには管理局に対する憎しみの怨念に打ち勝てたのも……全ては『第６６６魔闘機関』の仲間を思ってたからだと、俺ァそう思うぜ……それによぉ……」

銀時はフェイトとヴィヴィオの方を振り向く。

「お前の護りたいものも……お前の全てを受け止めてくれるぜ」

護るだけではなく、信頼する事もされる事も大事。

銀時はスバルにそう教えると、フェイトとヴィヴィオは笑顔で笑う。

「スバルお姉ちゃんはもう1人じゃないよ？ヴィヴィオ達がいるから」

「私達が、スバルの苦しみの呪縛から護ってあげる。だって、大切な仲間だから」

2人の言葉を聞いて、スバルは眼から少し涙を流す。

「……り……がとう……ありがとう……」

あふれ出る涙を拭くスバル。

自分の苦しみ、過ち、絶望の呪縛が完全に解放させた瞬間であり、

それを受け止めてくれる仲間に出会えた事の強い感謝で涙を流す。

＊

スバルはしばらくアジトに残って、銀時達は先に機動六課に帰る事にした。

「話は終えたようだね」

突如、後ろから1人の男の声が聞こえた。

スバルはその声のしたほうを振り向くと、そこにはスカリエッティがいた。

左手には何故か布に巻かれた長い棒らしき物を持っている。

「スカリエッティさん……その様子だと…やっぱり私の過去を……」

「ああ、全て調べさせてもらった……あの『魔剣終焉戦争』には裏があると不思議に思ってて考えてみたんだが……やはり思ったどおりだったか。最も、1ヶ月前まで知ってしまったがな」

改めて管理局の腐った理念に呆れるスカリエッティ。

しかも誰よりも早くスバルの過去を知っている。

「まさか君があの『第666魔闘機関』の1人とは……最初は驚いたよ。これなら君のその魔導士の常識を破るほどの戦闘力の高さも納得は行く。とは言え、私の口から銀時達に話すわけには行かないからねぇ。コレばかりは、スバル自身が話しておくべきだと思って黙っておいたよ……確かに『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』は数多くの人の命を奪ってきたが、同時に奪った数の数倍以上に人の命を救った……そしてスバル」

その眼で、真剣な眼差しでスバルを見るスカリエッティ。

「その苦しみを持っているのは君だけじゃない……銀時君も『攘夷戦争』で多くの仲間を失い、私自身もアルハザードの技術によって造られた人造生命体である事を理由にされ、管理局によって生み出されてナンバーズと共に利用される身となった」

『!?』

スカリエッティからとんでもない事を聞かされたスバルは驚く。
スカリエッティがヴィヴィオと同じく管理局の野望の為だけに生み出された存在であった事を。

ちなみに銀時やフェイトにもこの事を以前に話していた。
流石の2人も驚きは隠しきれなかった。

「10年前、私は『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』で活躍した銀時君達、侍の存在を調べてみた所……魔法なしで事件を解決した所を見て、私の中から管理局に利用されても己の欲望に抗う気が溢れてきて、やがては管理局の裏の部分から手を引いた……だが、それでも多くの罪を犯してしまった……それでも、銀時君達に会えて私自身は過去に打ち勝てた気分だ」

いかに今の自分が変わった存在としてでも、自分がして来た事は許される事ではない。
今でも己の愚かさを覚えているスカリエッティ。
しかしそれでも過去の過ちの呪縛に負けず、『ナンバーズ』と共に今を生きている。

「君も私と同じ過去の罪を背負って生きるのであれば……その呪縛は解放されるだろう。銀時君やフェイト・テスタロッサを初めとした……侍と魔導士達と出会えた君なら……」

せめて自分がスバルに対して言えることである。
スバルはただの戦闘機人ではない。本物の侍の魂を持つ1人の魔剣士だ。
そしてスバルは決意する。

「私、もう恐れない……自分の未来に進む為、大切なものを護る為……もう過去に恐れない」

自分の過去の苦しみ、過ち、絶望に恐れず、自分の過去に勝つ決意をするスバル。
それを聞いたスカリエッティは、安心して笑い出す。
そしてスカリエッティは、左手に持っている布に包まれた棒から、布を取り出すと長い刀が出てきた。

「君の新しい剣だ」

スカリエッティはその刀をスバルに渡し、スバルは受け取る。
その刀こそ、源外、スカリエッティ、鉄子の3人が力を合わせてパワーアップさせて再製された『ティルヴィングエア』である。
以前より少し長くなっていて長刀となっているが、それでも居合いは可能である。
柄の先に竜の頭の形が付いており、以前と違って水色の『茎』が包みこまれている。
鞘の色も蒼と白が混ざり合った混色。
そして、峰の形は……『●レイブルー』に出てくる『●ン・キサラギ』の使用する剣にそっくりである。その中心部にと水色の結晶が埋まっている。

それを気にせず、スバルは刀を少し抜く。

刀身はスバルのイメージカラーの蒼であり、峰の部分はやや黒が混じっている。
更に言うとその峯の部分だけ、龍の絵柄が白色で描かれていた。
そして、サファイアの宝石で作られたような美しい輝きを放っている。
その美しさにスバルは思わず見惚れてしまう。
以前の『ティルヴィングエア』より更に美しさが磨きあがっているだけではなく、かなりの業物として再現されている事が分かる。

「ティルヴィングエア・ドラグーン……通称『魔を切断する蒼龍の刃』。以前のティルヴィングエアより強度や切れ味もパワーアップしただけでなく、以前のデータも全てその剣に登録されている」
「!?」

スカリエッティの言葉に、スバルは『ティルヴィングエア』を注目する。

≪Ｍａｉｎ　ａｆｔｅｒ　ａ　ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ．．．ｗａｉｔｉｎｇ．．．［ｔａｓｅｓｈｉｍａｓｈｉｔａ］　ｆｏｒ　ａ　ｌｏｎｇ　ｔｉｍｅ≫
「ティルヴィングエア……お帰り」

以前の『ティルヴィングエア』そのままだと嬉しく笑うスバル。
形が違えど、共に戦ってきた相棒の復活に誰よりも喜ぶ。

「我々も君と一緒に戦おう」

改めて共存宣言をするとスカリエッティは自分の部屋に戻る。
それを見届けたスバルは『ティルヴィングエア』を鞘から刀身全体

を抜き、見つめる。
青く輝く刃はまさにサファイアとも言える輝きと美しさを持っていた。
左斜めに自分の肩の高さまで柄を掴んでいる右手を上げ、自分自身に誓いをはたす。

「過去に恐れた今までの自分とは、もうお別れだ」

ブォン！

『ティルヴィングエア』を振り、そして自分が握っている『ティルヴィングエア』を見つめる。

「過去に恐れず、未来に向かって進む……。敵が『鬼兵隊』や『管理局』や何だろうとも……いや、それがアリマであっても……今度こそこの手で護りたい、自分の大切なものを」

過去の呪縛から解放され、そして大切なものを護るために決意を決める。

今この瞬間、本当の意味で機動六課のフォワード部隊の１人、魔剣士・スバルが誕生した。

第九十二訓：ゲームの中には、一度壊れた武器は新しくパワーアップして治って

黒神
「次回から新シリアス『ランスター編』が始まります」

銀時
「何か、あいつを主役にするって訳かい」

黒神
「はい、今こそ目立たせる最大のチャンスですので♪」

スカリエッティ
「次回、『戦う乙女は強くて美しい』テイクオフ」

第九十三訓：戦う乙女は強くて美しい（前書き）

今日から『ランスター編』が始まります。

メインは勿論ティアナです。

ティアナ
「主役、主役、わったしが主役♪」

ですが、その前に……

ティアナ
「え、何があるの！？」

ノーヴェ
「取り合えず、『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まるぞ？」

ティアナ
「なんなのよぉ！！」

第九十三訓：戦う乙女は強くて美しい

―３年前、最初に出会った時のスバルには、凄くムカついていた。
魔法を使わないのにデタラメな強さに、魔法を無視して剣術を中心に極めて強くなろうと言う魔導士に対する侮辱行為。
当時の私は兄さんの噂をデマだと思ってたから、スバルの剣術を極める行為は反吐が出てた。
だけど、スバルの成長が異常なまでに高くて、ついにはＡＡランク試験を合格なんて……私はそれが認められなかった。
しかもパートナーであるカウェインと共に注目の存在となっていた。
その時、私は２人に強い嫉妬を抱いてしまった。
才能がなくても一流の魔導士になる事を正目する私に対し、魔法なしでも強い事を証明する２人にだけは絶対に負けたくないと思って。
特にスバルは、剣術の才だけじゃなく魔力も信じられない速さで上達しているから……悔しくてたまらなかった。
けど、そんな考えも一年後にあり得ない事が起こった事で消えてなくなった。
管理局が絡んで、２人の存在が目障りなのかすぐさま訓練校を追い出すためだけに速攻卒業させた。
つまり、彼等は訓練校だけじゃなく管理局にも見捨てられて生きていく道をなくしてしまったのと同じじゃない。
他の訓練生はせいぜいしたと思っているけど、私は何故か納得できなかった。
何故か、２人がこの様な形で追い出されるなんてまるで……死んだティーダ兄さんと同じに思えた。
どうして平気で去る事ができるのか何故か聞いて見ると、スバルはこう答えたわ―

「ここじゃあ学べない事がたくさんあるから、この機に２人で旅に

出かけるだけだよ」

―そう言ってスバルは、カウェインと共に訓練校から去っていった。
それから3年後、私は機動六課に入って凡才でも超一流の魔導士になってみる事を誓う。
機動六課には言ってから一週間後に、『異種生命体事件』が発生して兄さん達の世界に存在する鬼兵隊の生体兵器ごとえいりあんの暴走で、数多くの魔導士達が犠牲となってしまった。
そこに兄さん達が現れて、この眼ではっきりとその戦いぶりを見て兄さん達の伝説は本物だと確信した。
事件解決後に思わぬ形でスバルと再会し、カウェインの事を思い出してスバルに聞こうと何度も思ったけど、きっと2人はそれぞれ別の道を進む事を決めて別れたんだろうと思って聞かないでいる。
それからスバルと共に機動六課で働く日常を過ごし、そして兄さんから大切な事を教わった事を知って、私は兄さんに恋をして……スバルと分かり合えた。
だけど、鬼兵隊を初めとしたスバルに関係する人物ばかりが敵となってスバルばかりが苦しい目にあっている。
それを見て、私は決意した。
一流の魔導士を目指すんじゃなく、スバルの力になれるような相棒として……強くならなきゃいけないっと―

＊

そして現在

スバルの『ティルヴィングエア』の修正とフェイトの『バルディッシュ』のパワーアップ及び『ライキリ』を手に入れてから１０日間

が経過していた。
機動六課とナンバーズは鬼兵隊対策の為に、より訓練を強化していって強くなってきた。
しかし今いち強くなった気がしていない為悩んでいるばかり。
そんな夜中、訓練場でティアナは自主練でもしてた。

パァン！　パァン！

「……ふぅ」

訓練は遠距離による的当てである。
以前のように無茶な事はしていないが、遠くからでも的を当てる為に『クロスミラージュ』を撃っていた。
原因は銀園祭事件でスバルと戦った魔導士、アリマであった。
スバルの強さは自分も分かっているが、そのスバルを負かすほどの手誰なら隊長であるなのはやフェイトですら苦戦するやもしれない。
そしてパートナーであるスバルばかりが苦しい所を、ただ黙ってみている自分が嫌になってきたらしい。
急激とは行かなくても、せめてスバルの役に立てなければと強くなる事を決意する。

（……あいつ、スバルに相当憎んでいるようだけど……一体どういう関係？）

スバルに憎しみを抱いているアリマはどういう人物かを考える。
分かっている事は、スバルと同じ剣術も優れた魔導士であり因縁の相手なだけである。

（これから先の敵は、自分達を上回る存在かもしれない……もっと鍛えないと。スバルばかり苦しい思いをさせない為に……）

機道六課のロビー

そこでフェイトとスバルは2人っきりで話し合いをしていた。
フェイトは今、スバルの新しくなった魔剣『ティルヴィングエア・ドラグーン』を見つめている。
サファイヤの様な輝きを放つ刀身に峰に書かれた白い竜紋、そして柄の先についている竜の頭。
まさに蒼龍をイメージして作られた魔剣であり、その美しさに見とれていた。

「すごい……以前の『ティルヴィングエア』よりかなりパワーアップされている」

ただのデバイスとは思えない芸術と思わせるほどの完成度の高さ、そして美しさ。
そして『ティルヴィングエア・ドラグーン』を鞘に収めてスバルに返して話を元に戻す。
今まで互いに体験した事や、互いの存在を。

「じゃあフェイトさんは、『プロジェクトF』の研究でアリシアさんと言う人のクローンとして誕生したんですか……それって」
「うん、スバルとアーサァと同じ人造生命体なんだ。しかもスカリエッティから生み出されたクローンとして……」

フェイトが自分と同じ人造生命体やスカリエッティがプロジェクトFのベースとなる、基礎論理を構築した人物である事に驚くスバル。
銀時から聞けば、スカリエッティはその事を後悔しているようである。
元々プロジェクトFは管理局の裏側の連中が考えた計画でスカリエッティは利用されて罪を着せられた様だ。
しかし『鬼兵隊』の対策を優先にした管理局は、スカリエッティは今のところ罪を犯していないと言う理由で無罪としている。
何か裏があるかもしれないようだ。

「それで……アリマって人は、アーサァより強い？」

フェイトはアリマの強さをスバルに訊いてみる。
その質問にスバルは答えだす。

「正直言うと、はっきり言ってアーサァ以上です。魔剣七勇士（まけんしちゆうし）の中でも私と双璧と並ぶ最強の魔剣士と呼んでも過言ではありません」

いかに『ティルヴィングエア』がパワーアップしたとしても、それだけでアリマに勝てるとはかぎらない。
しかもまた現れた時、今度こそ自分を殺すつもりで襲い掛かるだろうと覚悟を決めなければならない。
そしてフェイトはある事を考えて決意する。

「スバル、明日私と模擬戦しない？」
「え、フェイトさんとですか？」

突如の模擬戦誘いにスバルは驚く。

「まだ、ティルヴィングエアとバルディッシュのパワーアップを皆

に知らせていないし……それにパワーアップした『バルディッシュ』と七星神刀（しちせいしんとう）の1つ、ライキリの強さを試してみたいの……良い？」

隊長からの模擬戦誘い。
それは自分の使用デバイスの性能を知る為だけでなく、スバルの魔剣士としての強さを知っておくべきだと考えた結果である。

「……分かりました、私で良ければ」

スバルもその誘いに乗る。

＊

スカリエッティのアジト

銀時はヴィヴィオを連れて、源外とスカリエッティに頼んでおいた注文を受け取りに来た。
それはいつも外出て行くときに乗っている原付である。
この世界にはない為、2人に頼んで作ってもらったのである。

「よう来たな、銀の字」
「おう、んで例の物は？」

源外とスカリエッティの後ろに、布で隠されたバイクらしき物体がある。
これが銀時が頼んでいた2人の傑作である。

「喜べ、銀の字。お前さんの頼んどいたどおり、かなりの出来で完

成しとるぞ」
「しかも以前の倍の速さで加速できるうえに特殊なレアメタル素材で出来ている最高級の物じゃ」
自信満々気に説明する2人。
相当気合を込めて作った証拠である。
「マジでか!?ありがとう2人とも、コレで楽に移動できんじゃん!!」
嬉しそうに喜ぶ銀時。
そろそろ原付が恋しくなったから、相当乗りたがっていた様だ。
「良かったね、パパ」
父の喜びに、ヴィヴィオも嬉しそうに言い出す。
「それで、パパのバイクってどんなの?」
「おうそうじゃった!!銀の字、コレがお前さんの原付じゃ!」
と源外とスカリエッティは布を豪快に取り出すと、1台のバイクが姿を現す。
銀色に輝いていて何やら悪魔の顔が一番手前に付いているツアラータイプのオートバイであった。
「原付じゃねぇんだけどぉぉぉ

「超高速オートバイ式『デットライトニング』。モデルは『●レイブルー』に出てくる『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』の必殺技の1つ『デッ●スパイク』に出てくる……あの闇の化身の顔じゃ」
「何で『●レイブルー』のキャラの必殺技をイメージして作ってんだよ!?何これ、『●面ライダー』に出てくるバイクっぽいよ!?つうかなんでオートバイなの!?俺は原付を頼んだんだぞ!!何勝手に作ってんの!!?」

顔中に血管を浮かべて怒鳴りだす銀時。
原因は想像付くが、一応訊いてみる。そしてスカリエッティが答えたのは勿論……

「君が、『●グナ・ザ・ブラッドエッジ』の声に似ているから……ついい」
「また声優ネタかいィィィィィィィィィィィ!!!!(怒)」

ドカァ!

「ごふァ!!」

怒り出してスカリエッティを蹴り飛ばす銀時。
ヴィヴィオは唖然としており、源外はニヤニヤと笑う。

「作り直せ、今すぐに作り直して!!コレマジでお願い!!!」

怒りながらも源外に作り直して欲しいと言い出す銀時。
しかし源外は……

「別に良いんじゃが、あの事をフェイト達にバラしても良いのなら」
「あの事？」
「そりゃ、銀の字のバリアジャケット姿の事じゃ？文句を言わずにそのままコレを受け取るか、バラされて原付に変えるかの選択じゃが？（ニヤリ）」

＊

「あの糞ジジィ！！脅しつけやがったぁ！！！！」

血管を浮かべながら銀時はヴィヴィオと一緒に、『デットライトニング』に乗って道を走って機動六課に戻る。
その速さは間違いなく原付の倍はあり、乗り心地も最高である。
しかし肝心のバイクは原付じゃなく『●レイブルー』ネタで作られた忌まわしきバイクだった。
ヴィヴィオは、悪魔のようなヘルメットを被って銀時の後ろに座って背中を掴んでいる。

「どんだけ俺を●グナ・ザ・ブラッドエッジ二世にしたい訳ぇぇ！？このまま銀さんは坂田銀時じゃなく、ギントキ・ザ・ブラッドエッジになっちゃうじゃねぇかァァァァ！！！！狙ってるのか、ジジィ共は狙っているのかぁ！！？つうか爺の最後の（ニヤリ）って何！？マジでムカつくんだけどぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」
「怒ってたらラチがないよパパ。今はこうでもいつか良い事は確実に起こるから……ね」

怒りっぱなしの銀時に、ヴィヴィオが何故か励ます。

「あー畜生！！ヴィヴィオ、あの2人のような大人になっちゃぜってぇ駄目だからな！！ろくな人生しか送れねェから！！！」
「はぁ～い」

銀時の注意を聞いて返事するヴィヴィオ。
娘に落ち着かされる父もどうかとは思う。

＊

機動六課の訓練場

屋上で桂、なのは、神楽（二年後）、ティアナ、エリザベス、月詠、はやて、エリオ、キャロ、フリード、アルフ、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィン、九兵衛、近藤、辰馬、ルーテシア、アギト、ガリュー、猿飛、外道丸、山崎、ディエチ、お登勢、そして何故かノーヴェがいた。
リリカル組は全員、バリアジャケットを着ている故に……ノーヴェの『マコト・ナナ●』のコスプレのような露出度高い衣装が目立っている。
とうの本人も凄く死にたいほど恥ずかしがっている。

（何でわざわざバリアジャケットする必要あるんだぁぁぁぁぁ！！？／／／）

ノーヴェは納得いかないほど叫んでいる。
バリアジャケットのデザイン担当であるはやてを見ると、彼女の満足気な笑顔に強い怒りを感じた。

そしていつか仕返しすると誓うのである。

そこで銀時とヴィヴィオが到着して桂達に向かう。

「あ、銀ちゃんにヴィヴィオちゃん！！どこ言っていたアルカ？」

「……源外の爺さん所で注文してたのを貰ってきたっていつまでそんな格好してるんだ神楽ぁ！？」

今だ、二年後の姿のままでいる神楽に驚く銀時。

どうやら『銀園祭』で源外とスカリエッティの『ビック・ヒューマイドエボリューション』が原因で2年後状態になっている。

元に戻るのはまだ先のようである。

「ぬはははははははは！！二年後の姿って良いアル！！胸もバインバインで美少女など勝ち組決……」

言い賭けた途中で、背後から凄まじい殺気を感じて振り向く神楽。

そこには、キャロ、ヴィータ、九兵衛、リィン、アギトは鬼と化した貧乳乙女達がいた。

『『それ、喧嘩売っている（の）（のか）（のですか）？』』

「すんまでしたネェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！」

即座に土下座して誤る神楽。

戦闘力だけなら最強と言われても、鬼乙女と化した彼女等には逆らえなかった。

コレにはヴィヴィオも銀時の後ろに隠れて恐怖し、銀時は青ざめるだけだった。

そこで月詠がキャロ達を注意する。

「まちんやす、主等も一応女子じゃからそんな殺気を放っちゃ……」
『『一応って何ぃ～？それ胸のある者が胸のない者に対する余裕の侮辱ぅ～？』』
「すんませんでしたァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

月詠も即座に恐怖の余り青ざめて土下座する。
彼女達は額に血管を浮かべている為、今の発言に殺意を吹き出した。

（怖ぇぇぇぇぇ！！！！この子達怖すぎるよ、何これぇぇぇぇ！！？）

少女とは思えないとてつもない殺気に山崎は青ざめてツッコむ。

「なんであそこまでとてつもない殺気を放てる訳ぇぇぇぇ！？何があったの！？てか俺達がこの世界に来たせいなのぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

どうしてこうなったか叫びだす山崎に、近藤とディエチが肩を手に乗せる。

「山崎……良いんだ……」
「原因がどうであれ、もう止められませんから……」

2人は青ざめて、諦めさせた。
それを見た銀時は、なんやかんやで山崎は真撰組一のツッコミ使いと確信するがどうでも良い事であった。

「おい、何か俺の思った事を馬鹿にされた気がすんだけど？てかノ

ーヴェ、何その格好？」

銀時はノーヴェの存在を知って哀れ眼で見る。
露出度が高くてとても年頃の女が着る衣装じゃないと考える。

「アタシだって着たくて着てる訳ねぇよ！！何か『ガンジョバクヤ』のバリアジャケットだからしょうがなく……」
『『それがバリアジャケットォォォォォォォォ！？』』

銀時とヴィヴィオは声を合わせて驚きだす。
特に銀時は人一倍驚いている。
何故ならノーヴェが着ているバリアジャケットは、『●レイブルー』に出てくる『マコト・ナナ●』の衣装その物であるコスプレ衣装である。
そして肝心の『ガンジョバクヤ』は腰に×型に身につけている。
確かに以外に似合っているが、本人を無視して無理矢理バリアジャケットを着せられた屈辱に、銀時は強い同様を抱く。
一方のヴィヴィオは銀時の後ろに隠れてノーヴェを警戒する。

「お姉ちゃん、そんな衣装で恥ずかしくないの？」
「恥ずかしいも何も、アタシだって好きで着ている訳じゃあ……」
「とにかくその露出癖を直したほうが良いよ？恥女ツンデレと思われるから」

ドカァーン！！

稲妻の如くの衝撃的なヴィヴィオの発言に、誰もがだんまりしてしまう。
特にノーヴェにいたっては信じられない言葉であった。

「えぇぇーーーーーー!?それ言うのォォォォォォォォ!?てか恥女って言う言葉ドコで知った!?後アタシはツンデレじゃないって!!」

どうしてヴィヴィオにそう言われるのか全く分からないノーヴェはヴィヴィオに質問する。
すると他の連中も哀れ眼で見られる。

「ヴィヴィオ殿の言う通りだ……ノーヴェ殿、その身を弁えておくべきだ」
「ノーヴェちゃん、いくらなんでも破廉恥すぎるよ」
「マジ恥女アル、しばらく私に近づかないでヨロシ!」
『その格好はないんじゃない?』
「……まぁ、それが趣味ならこれ以上は言わんが?」
「その様な恥ずかしい趣味があったなんて、以外ね」
「凄く可愛いけど……言われてみれば……」
「エリオ君に近づくな、変態がぁ!!」
「キュー(恥女な人間だ!)」
「キャロ……少し抑えようよ」
「全く、新しいバリアジャケットを着たほうが良いんではないか?」
「テメー、マジで恥女かよ?」
「それで私の出番を奪うなんて甘いのよ!!」
「シャマル……それは関係ないと思うが……」
「お姉ちゃん、恥所って何?」
「リィン!!貴方は知らなくて良いのよ!!///」
(僕にはなのはがいるのに……なんで興奮するほどドキッとするんだろう?///)
「私的には凄くセクシーだからグッジョプ♪」(親指立て)
「己ぇぇぇぇ!!無駄に胸がでかいとは何事だぁァァ!!!」
「九兵衛殿、ここで胸の事を引っ張るの!?今はそれ関係ないって

！？」

「……ノーヴェ、恥女……」

「恥女でも胸がでかくてセクシーから羨ましいぞコンチクショーーーー！！！」

「あはははははははは！わしゃ、良えと思うがのぅ！！」

「そうねぇ、ツンツン性格だからお尻の所をいじくればMな雌豚に変えられるわ」

「やりがいがありやすね……ふふふ（黒笑）」

「全く、近頃の若い娘は恥ってもんを知らないのかい？」

などと言いたい放題の皆に対し、ノーヴェも黙っていられなかった。

「なんだよぉぉぉぉぉぉ！！そこまで一斉に言わなくたって良いんじゃネェかぁぁぁぁ！！！中には個人的な事も言っている奴もいるけどそれはねぇよぉぉぉぉぉ！ルー嬢に言われると特に傷つくって！！後、そこのメガネマフラ女と金棒娘にいたってはとんでもない事を言ってるんだけどぉぉぉぉ！！！」

完全に恥女扱いされて納得いかないで叫ぶノーヴェ。

そこに山崎とディエチも呆れている。

「ディエチちゃん、ノーヴェのように無理にあんな恥ずかしい衣装を着ないほうが良いよ？変態扱いされるから」

「うん、そうします」

「山崎ィィィィィィィィィ！！それどういう意味じゃァァァァァァァァァァ！！！！（怒）」

ドカァ！！

「ギャハァアア！！」

ノーヴェは怒り任せに山崎を蹴り飛ばす。
それから彼女は怒り任せに山崎を踏み続ける。

「山崎さん！？」

ディエチは驚いてノーヴェの暴走を止める。
それでも彼女は止まろうとしない中、はやても哀れ眼でノーヴェを見る。

「そんな露出度高いエロジャケットを着て恥ずかしくないんか？まぁ私は凄く良いんやけど♪」
「てめェェェェェェ！！！！（怒）元々はこのバリアジャケットをデザインしたのアンタだろう！！！！」

血管を浮かべてはやてに襲い掛かろうとするノーヴェ。（勿論ディエチに止められる）
そして我に帰ってみると、みんなの眼線に気づく。
それはノーヴェをツンデレ恥女として見ている眼であった。

「や……止めろ……そんな目でアタシを見るなァァァァ！！！」

止める事を求めるノーヴェ。
だがみんなの眼線は止めようとしない。

「やめて、アタシをそんな目で見ないで……。あれ、何だろう……。凄く泣けてきたけど……」

ノーヴェは額に手を当てて、涙を流す。
そんなノーヴェを見ていた銀時は、同じ思いをしているノーヴェに、

右手を優しく彼女の肩を乗せる。

「まぁ……なんだ、そのう……分かるよ？そのセクハラされたような扱い。無理矢理着たくない衣装を着せられちゃなぁ」

自分も源外、スカリエッティ、鉄子の３人が作ったデバイス『銀の魔導書（ブレイシルバー）』によるバリアジャケットが●グナの衣装その物だからノーヴェの気持ちが嫌と分かる。

「だからよぉ……その内良い事起こるから気を落とすな……な？」

苦笑しながらもノーヴェを励ます銀時。
そんな銀時に、ノーヴェは涙を流して抱きつこうとする。

「ふぇ～ん！！銀時ぃいいいいいい！！（泣）」

ドカァ！！

『『甘えるなぁぁぁぁ！！！！（怒）』』
「ごふぁ！！」

彼女が銀時に抱きつく前に、なのは、ティアナ、シグナム、アルフ、リィンフォース、猿飛がとてつもない殺気を放ってノーヴェを蹴り飛ばす。
銀時はその光景を青ざめて見るしかなかった。
桂、はやて、エリザベス、辰馬の４人はまた１人、銀時に恋を抱く女性が増えたかっと思ってニヤニヤと笑う。
神楽とお登勢にいたってはどうすれば銀時はこうも女性を落せるのか不思議に思っている。

＊

そして場が納まった所で銀時は今日はどうして皆訓練しないで屋上にいるのか訊き出す。

「そういや、お前等訓練はどうした？バリアジャケットの衣装に変えちゃって何かのチェックか？」

「なんだ知らないのか銀時？今日は何やら、テスタロッサ殿とスバル殿の模擬戦があるそうだぞ」

「フェイトとスバルの！？」

まさかあの2人が模擬戦をするなんて意外である。

だが銀時はその理由を理解した。

それは、おそらく2人のパワーアップしたデバイス性能を確かめてお互いに相手の力を試す為の模擬戦だと。

「今日はフェイトちゃんとスバルに頼まれて、他のメンバーは2人の対決を見学する特別訓練なんだよ」

「でも、どうしてフェイト隊長とスバルが模擬戦を？」

なのはは今回の訓練説明をする中で、ティアナがどうして2人が模擬戦をするのかと不思議に思っている。

「あれじゃない？最近スバルの出番が多い気がしてヒロイン度が危ういと思ったフェイトちゃんがスバルにタイマンを申し込んで、どっちがヒロインかを決める――」

「それはシャマルさんだけでしょう！！」

「てかそんな理由で模擬戦はないだろぉぉぉぉぉ！！！！」

シャマルの答えにティアナと山崎がツッコム。
コレも最近出番が少ないコンプレックスが理由であろう。

「シャマル、お前も変わったな」

ザフィーラは呆れて言い出す。
自分も最近は出番少なくても、シャマルのように出番を求めている訳ではない。
すると、なのは、神楽、シグナム、アルフ、リィンフォース、猿飛がデバイス、傘、拳、クナイを構える

「にゃはははははは、それだったら私がスバルの頭を冷やしてあげるのに♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！
「ヒロインは渡さないアルヨ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！
「そうだな？久し振りに手合わせしてやるのも悪くないからなぁ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！
「フェイトの援護してやろうかい？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

「私なんて出番がほとんどないんですから」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ
「銀さんの隣の座は譲れないわ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

６人の極上の笑顔と同時に、嫉妬が混じった黒い感情が溢れあがる。

「おいィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィィ！！！！この人達、何かすんごく恐ろしい事言ってんだけどォォォォォォォォォォ！！？」
「山崎さん……コレがなのはさん達だから……」

ツッコまずにいられず叫びだす山崎に、ティアナはコレがいつものなのは達だと青ざめて言い出す。
ディエチも黙りこんでなのは達には逆らわない事を強く誓う。

「ヒロインに慣れなかった女の嫉妬……プ♪」
「醜いたらありゃしやせんなぁ……クスクス（ニヤリ）」
「ルー殿ォォォォォ！！外道丸殿ォォォォォォォォォ！！駄目だって、そんな人の弱みを突いて楽しんじゃあ！！！！（青ざめ）」

2人の趣味を青ざめて忠告する近藤。

「でも、スバルがフェイトと模擬戦するって事は……」
「まちがいなくスバルの『ティルヴィングエア』が修整されたんだろう」

ヴィータとザフィーラは、『ティルヴィングエア』が修正された事を確信する。
となればようやくスバルも復帰したと確信して安心する。
それとは関係なく、エリザベスとガリューが何か見つめ合っている。

『『……』』

沈黙の空間に2人は見つめ合って、何かを思い浮かべる。
すると、エリザベスはプラカードをガリューに渡す。
そして……

『コレで喋れなくても、文章で話せる』

そう書かれたプラカードをガリューに見せると、

『なるほど、これは便利だ』

ガリューもそう書かれたプラカードをエリザベスに見せる。

『『……』』

また沈黙の空間に、２人は見つめ合い……そして……

ガシ！！

『『同士！！』』

２人は共存して抱き合い、そう書かれたプラカードを出す。

似たもの同士として友情が芽生えたのだ。

『『何か変な友情が芽生えたんだけどォォォォォォォォォォォォォォ！！』』

銀時、ティアナ、山崎、ノーヴェの４人が盛大にツッコむ。

「うむ、エリザベスも友が出来たようで何よりだ」

「ガリュー、嬉しそう……」

「……良いのかよ、これ？」

桂とルーテシアもペットと召喚獣の友情が芽生えて嬉しく重い、アギトにいたっては呆れる光景であった。

「それより、お二人が来たぞ」
「やっとかい」

ザフィーラとお登勢は下を見てみると、そこにはフェイトとスバルがようやく到着した様子で訓練場に立っていた。
銀時達はようやく始まる模擬戦に注目する。
だが銀時とヴィヴィオだけは知っていた。この模擬戦は2人のパワーアップしたデバイスを試す為だと。

＊

「まさか、模擬戦とは言えフェイトさんと戦う事になるとは思いませんでした」
「私もだよ……だけど言い出したのは私だから、全力で行くよ」

戦う事は思いもよらなかった2人。
だけど互いに己の過去を知り合った中なら、お互いに戦って相手の強さを知っておくべきだと思いだす。
魔導士同士でも人造生命体同士でもなく、仲間として立ち向かう。

そして互いにデバイスを握って、

『『（バルディッシュ、ライキリ）（ティルヴィングエア、ペンドラゴブレイド）、セットオン！！』』

お互いにデバイスにより金色の光と蒼い光に包まれる。
そして、フェイトとスバルの衣装はバリアジャケットになった。
フェイトのバリアジャケットは、かなりと言って良いほど露出度が

高い水着と思わせる黒い衣装、『真・ソニックフォーム』である。
両手に持っている『バルディッシュ』はいつもと違って鎌のような形をしているからパワーアップしてるのが分かり、左脇にベルトで突いているのは、漆黒の刀ごと『ライキリ』である。

そしてスバルの左手には、以前より少し長くなって鍔もついている以前よりパワーアップしている『ティルヴィングエア』に、背中に背負っているのが『ペンドラゴブレイド』。
そしてバリアジャケットもいつもとは違っていた。
いつもの鉢巻はかけておらず、背中の肌が見える背中ぱっくりの蒼いコートに赤いネクタイをかけていて胸の部分は黒くて、背中の部分は肌が見えるセクシーな蒼い軍服衣装（ミニスカ＋ニーソ＋背中ぱっくり）……そう、これは『●レイブルー』の『●ン・キサラギ』のコートと『●エル・ヴァーミリオン』の衣装のコスプレと思わせるバリアジャケットである。
コレにはスバルも……

「な……なななななな、なんですかコレェェェェェェェェ！！？／／／／」

以前より露出度が高くなった以前に、完全に『●レイブルー』のキャラの衣装をミックスしたコスプレでしかなかった。
コレにはフェイトも唖然としていた。
一方の銀時達（桂とはやてを除く）はこれは絶対にはやての仕業だと確信する。
はやてにいたっては満足気な表情をして、銀時とノーヴェは強い同情を抱く。
ギンガにいたってはフェイトとスバルの衣装がセクシーで可愛らしいから鼻血をぼんぼん出して、九兵衛は2人の胸の大きさを表している衣装を見て、強い嫉妬を抱く。

そしてリィンがゆっくりと降りてきて2人に説明する。

「とりあえず、模擬戦の前にルールを説明します。今回は2人の強さを他の皆に見せて、参考にさせるための模擬戦ですので魔力リミッターを解除させてもらっています。全力でぶつかり合ってくださいね」

「その前になんですかこの衣装!?以前のよりすんごく恥ずかしいんですけど!?／／／」

衣装がコスプレ以前に、肌が見えやすくスカートも短い為かスバルはすんゴク恥ずかしがっている。

「それはですねぇ、はやてちゃんが以前に『●レイブルー』と言うゲームをやって『●ン・キサラギ』のコートと『●エル・ヴァーミリオン』の衣装を強く気に入って、それをスバルに着せたら凄くエロくてセクシー……ゴホンゴホン!!と……とにかく凄くかっこよくて可愛いと思って、一週間かけて作り上げた最高傑作のコスプレだそうです」

「今、はっきりとエロくてセクシーと聞こえちゃったから!!最後にいたってはもうはっきりとバリアジャケットじゃなくコスプレと言っているし!!」

「スバルさんにはすみませんが、これは決定した事です。後以前のバリアジャケットは、はやてちゃんの部屋でコスプレとして飾らせてもらっています♪」

「Ｎｏｏｏ

「……スバル、後ではやてに言っておくから（苦笑）」
「……はい、お願いします（泣）」

＊

『『このセクハラ部隊長！！！！（怒）』』

ドカァ！

「のぎゃあああああああああああ！！！」

ティアナ、ギンガ、ノーヴェの3人がはやてを蹴り飛ばす。
原因が分かっている3人は、はやてのセクハラ行動に度が過ぎると怒り任せにボコボコにする。

「たく、ある意味ヴラ以上におかしくなっていねぇか？」
「ヴラじゃない桂だ。……それに八神殿だってスバル殿の事を思ってあの衣装を選んでいるのだぞ？」

呆れて言い出す銀時に、桂が話しかける。

「そうとは思えねぇよ……。つうかヴラ、お前やけにはやてに優しくねぇ？人妻好きなのに」
「ヴラじゃない桂だ。八神殿はスバルを萌っ子魔法少女として極めてあげたいと言う……」
「なんなんだよ萌っ子魔法少女って！！？お前はやてに変な方向に進めたあげくにはやてに変な方向に進められてねぇか！？」

以前の桂なら、スバルのあの衣装をはしたないと言い出す。

しかし今の桂は何やら元々馬鹿なのにはやてに更に変な方向に進められている気がする。

「銀さん……はやてちゃんが変になっていくから機動六課大丈夫かなぁ？」

「わっちも、いくらなんでも心配になってくるんじゃが？」

「……俺もそう思えてきた」

なのはと月詠が機動六課の未来を不安に感じると、銀時もそう思えてきた。

「にしても、２人のデバイスっとやらの得物変わっていないかい？」

ヴィータがそう言うと、確かにフェイトの『バルディッシュ』とスバルの『ティルヴィングエア』も形が変わっている。

フェイトの『バルディッシュ』はより死神の大鎌らしくなって、魔法なしでも十分戦えそうな感じである。しかもフェイトの左脇には刀がついている為、あれは新しいデバイスなのかと誰もが思う。

スバルの『ティルヴィングエア』も以前より長くなって唾も特殊な形のが付いていて柄の先には竜の頭が付いている。

「何か、２人とも使用デバイスがパワーアップしていねぇか」

「そうですね、『バルディッシュ』と『ティルヴィングエア』も以前より強くなったような気がして……」

「それは私が２人のデバイスを強化させたからさ」

ヴィータとエリオが２人のデバイスの感想を言い出すと、突如鉄子が現れた。

全員、鉄子に注目する。

「鉄子、お前も来てたのか？」

銀時は鉄子が来た事に驚いている。

と言うよりいつの間にいたのかと言うツッコみはナシで。

「ああ、何か2人がデバイスの性能を確かめたいと言うから興味を持って来て見たのさ」

「まさか、テスタロッサとスバルのデバイスを強化したのも……お前なのか！？」

「源外とスカリエッティの頼みでね、特に『バルディッシュ』と『ティルヴィングエア』の元になった大鎌と刀は……私が打った物の中でも最高傑作と言っても良いかもしれない」

刀匠として力を込めて作り上げた大鎌と刀、まちがいなく今まで打った中でも最高傑作と言えると鉄子は言い出す。

シグナムも、今度自分の『レヴァンティン』も鉄子にパワーアップさせて貰うかと考える。

「それにフェイトのあの左脇にある刀……あれはスカリエッティがフェイトに渡した七星神刀（しちせいしんとう）の1つ、妖刀のデバイス『ライキリ』だ」

『『えぇーーーーーーーー！？七星神刀（しちせいしんとう）！？』』

フェイトの持っているデバイスが七星神刀（しちせいしんとう）の1つ、『ライキリ』であると聞いて驚くなのは達（銀時、ヴィヴィオを除く）。

「それってフェイトちゃんもスバルと同じく魔剣士になるの？」

「それは分からない……だが、ここ10日間フェイトさんはスカリエッティのアジトのトレーニングルームで1人、木刀を真剣に素振りしていたから……あれは間違いなく『ライキリ』の刀の特製を活

かす為の訓練かもしれないだろう」

なのはの質問に答える鉄子。

なのはもここ１０日間、フェイトが訓練に顔を現さなくなったのも１人剣術を鍛える為だったと思い出す。

「フェイトも魔法ばかり頼るだけじゃ強敵に立ち向かえないから、魔法だけじゃなく身体能力も鍛えるアルカ」

「そいつは同感じゃ、人は元々魔法なしでも己の力だけで強くなっていく生き物じゃから」

神楽と月詠も、フェイトのやり方は賛成である。

それを聞いたギンガは、何やらもやもやした感情を抱きだして右手を強く握る。

「まぁ、私の打った武器を2人がどう使いこなすか……刀匠として見届けたいからな」

「それは良いけど、前から思ってたことだけどね……スバルの『ティルヴィングエア』の鍔の形、ユ●アネ……」

ドカ！

「さぁぁぁぁぁ！！」

突如、鉄子の裏拳をマトモに喰らった銀時は倒れる。

『（銀さん）（銀ちゃん）（銀時）（兄さん）（パパ）！！？』

なのは、神楽、ティアナ、月詠、シグナム、アルフ、リィンフォース、猿飛、ノーヴェ、ヴィヴィオも驚いて叫びだす。

突如の鉄拳をマトモに喰らった銀時だが、鼻を押さえてすぐ様に起き上がる。

「ぐぉおお！！てめェ何しやがるんだ！？」

「ユ●アネサじゃない！！それにちょっと形が似ている鍔だ！」

「てめェ、俺がユ●アネサと言い切る前に自分でユ●アネサと言ったと言う事はァ、自分でもうすうすユ●アネサと思っている証拠じゃねぇか！！」

などと遣り合っている間にも、空にモニターが映し出される。

そこにはフェイトとスバルが写っていた。

そしてリィンが銀時達のところに戻る。

「皆さん、もうすぐ始まりますよ」

そう言いだすと、銀時達はモニターに集中し始める。

＊

一方のフェイトとスバルは、バリアジャケットの件を置いといてそろそろ模擬戦を始めようとする。

そんな中、スバルは背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』を見て。

「ペンドラゴブレイド……ご免、今日はパワーアップした『ティルヴィングエア』を確かめたいから出番ないかもしれないんだ」

≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ≫

スバルの気持ちを理解する『ペンドラゴブレイド』。

アーサァの親友として出なく、スバル自信を主として認めている証

拠である。

「バルディッシュ、おそらく今まで戦う魔導士の中で最強かもしれないから……全力で行こう」

≪Ｙｅｓ　ｓｉｒ≫

「行こう、ティルヴィングエア……。パワーアップしたその切れ味を試そう」

≪Ｓｅｅ　ａｎｄ　ｅｘｉｓｔ≫

互いに主に使用するデバイスを構える。

スバルは居合いの構えをし、フェイトも『バルディッシュ』を構えだす。

金色の魔導士と蒼き魔剣士の対決が今、始まる。

「それでは行きます！レディ……」

リィンが右手を挙げて模擬戦開始宣言をする。

「ゴー！！」

ガキィィィィィィィン！！

その手が振り下ろされた瞬間、とてつもない速さでフェイトとスバルは結構離れている距離から一瞬に接近してきて攻撃がぶつかった。

フェイトの『バルディッシュ』による鎌攻撃とスバルの神速居合い

がぶつかり合う所を見て、銀時達は驚きだす。

（速い！？）

間近で見るスバルの刹那の瞬間移動による神速居合いの速さに驚くフェイト。

彼女の『真・ソニックフォーム』は高速移動形態であり、その為その速さは下手すれば瞬間移動並みの速さになる。

それでもスバルの速さに驚いているのは、自分のように強化魔法を使わず身体能力だけで瞬間移動並みの速さが可能にしている事である。

『第６６６魔闘機関』で身体能力を相当鍛え上げられているから、それが更に鍛えられているとしか言いようがない。

つまり、スバルの速さは間違いなく自分の上を行く。

『バルディッシュ』の柄と『ティルヴィングエア』の刃がぶつかり合ってキリキリと音を立てている。

「驚きました……。いつもは軍服調ようなバリアジャケットを着ているから、今日は違うバリアジャケットを着ているから何か特殊な能力があるんじゃないかと思ったら……」

「『真・ソニックフォーム』と言ってね、高速移動形態だから素早く移動できるんだよ……」

「じゃあ、スピード勝負って所ですね」

素早さを特化した勝負。

それは完全なる魔導士の常識を超えていても過言ではない。

そして互いに後ろを下がり、フェイトの超高速移動とスバルの刹那の瞬間移動術が炸裂すると2人の姿は見えなくなった。

だが一瞬だがわずかに見える刃と刃のぶつかり合いによる火花、そ

して金色の斬撃と蒼い斬撃が次から次へと見えてすぐに消える。
眼に映らないスピードの世界での戦いに、なのは達は圧倒されている。
特に神速と謳われる剣術使いである九兵衛にいたっては眼にも離せない戦いだった。

「は……速すぎで見えない！！」
「２人とも凄いわぁ！！」

リィンフォースとはやては人間の常識を超えた速さに圧倒される。
魔法を使っている訳でもないのにこの速さ。特にスバルはデバイスやバリアジャケットの性能なしでもフェイトの『真・ソニックフォーム』に対抗できるスバルの瞬間移動には驚かされている。

「速ぁ、マジ速すぎなんだけど！！？」
「驚いたでごあんす。２人とも人間とは思えない速さで移動してやす」
「２人とも凄いネ！！」

近藤、外道丸、神楽にいたっては自分でもこんな速く動けるか疑うほどである。

「大した速さだわ、スピードは忍びも顔負けと言っても過言ではないぐらい」

くの一である猿飛も２人の速さは忍びの引けをとらないと認めて評価する。
そしてフェイトは大きく飛翔して空を飛ぶと、

「はぁーーーー！！」

フェイトの『バルディッシュ』の鎌の刃に金色の稲妻が宿る。
そしてそのまま振って、『ハーケンセイバー』が放たれる。
三日月型の金色の刃が容赦なくスバルを襲うが、

スパァーン！

神速の居合いでスバルは、『ハーケンセイバー』を綺麗に真っ二つに切断して斬る。
そしてスバルは空中戦ならと足から魔力の小さな蒼い羽を生やし、空に飛びあがる。

「ええ！？」
「マジ！？」
「スバルが飛んだぁ！？」

まさかのスバルの飛翔に驚くリリカル組。
そうスバルは元々は陸戦魔導士だからだ。
陸戦魔導士は元々は飛べない魔導士の意味を表すが、スバルは空を飛べているのが不思議に思う。
ふとフェイトはある事を思い出す。

「まさか、魔力で刀を精製させるように翼を精製させた！？」
「いつもフェイトさん達の空飛ぶ活躍を見ていますから、もしもの為に覚えておいたんですよ」

魔力で主に刀を精製出来るなら、その感覚を利用して空飛ぶ翼を精製できればとスバルなりに考えた空中戦法。
つまりスバルの空を飛べない陸戦魔導士の弱点は消え去った。

「互いに空も飛べ、魔力も互角で速さはスバルがわずか上、そしてパワーは私がわずか上。ほぼ互角な勝負になるわけね」
「そう言うことですので……行きますよ！」
「ええ！」

2人の強さが互角になった所で戦いが再開された。
金色の閃光と蒼い閃光がとてつもない速さでぶつかり合っている。
まさかの空中戦は誰もが思ってもいなかったが、フェイトの『バルディッシュ』とスバルの『ティルヴィングエア』がぶつかり合う音が響き渡る。
2人は離れて

「ファイヤー！！」
「ブレード！！」

フェイトは『フォトンランサー』を炸裂させて金色の魔力弾を放ち、スバルも『ブルーエッジ・ストーム』で蒼い魔力刀を連続で放つ。
魔力弾と魔力刀がぶつかり合って、消滅していく。
その瞬間に、スバルが地面を蹴るような感じで足に力を一瞬入れて刹那の瞬間移動を炸裂してフェイトの目の前まで移動する。

「！？」

そしてスバルが神速居合いを炸裂させる。
フェイトも『バルディッシュ』でガードする。
だがそれだけではなかった。フェイトの後ろ下からスバルの魔力刀が1本だけ移動して、そこから一気にフェイトに向かって突撃する。
フェイトはそれに気づいてスバルから離れて後ろに素早くダッシュして奇襲を交わす。

だがそれでもスバルの刹那の瞬間移動が捕らえてフェイトに一撃を食らわす。

「はぁあ！」

ガキィン！

「きゃあああああ！」

神速の一閃が襲い掛かるがフェイトはそれを『バルディッシュ』で防ぐ。

しかしバックに交わすためのバックの勢いを利用されて、衝撃で更に吹飛ばされてビルに直撃して、ビル内に入ってしまう。

「うう……」

フェイトは何とか起き上がる。

はっきり言ってスバルの強さは自分の予想を超えていた。

（もう空を飛べていたなんて……だったら、『バルディッシュ』の新しい力で）

「バルディッシュ！」

≪Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．Ｉｔ　ｅｎｔｅｒｓ［ｔｓｕｇｉｇａｔａｔａｉ］ｆｒｏｍ［ｋｏｒｅ］．≫

すると『バルディッシュ』の形が変化して行き、大鎌から漆黒の刀と変わった。

これが『バルディッシュ』の新しい形態『ライオットザンバー・セイバー』。

パワーは『ライオットザンバー・スティンガー』と『ライオットザ

ンバー・カラミティ』に比べたら劣るが、速さは間違いなく最高状態である。

「コレで対抗する！」

フェイトは両手で『バルディッシュ』を握って構える。
そしてビルに侵入したスバルが、刹那の瞬間移動で素早くフェイトの前に現れる。

「はぁあああああああああああああああ！」
「てぁあああああああああああああああ！」

ガキィン！

漆黒の死神の剣と蒼き龍の剣がぶつかり合う。
フェイトは更に早く『バルディッシュ』を振り、スバルも神速の居合いで対抗する。
振って振って、剣と剣がぶつかり合う轟音が響き、更に壁走りを炸裂して柱を踏み台にして大きくダッシュしてぶつかり合う。

「はぁあ！」
「うぅ！」

スバルが更に刀を振るうとフェイトは素早く交わす。
そして柱の後ろまで逃げ出すが、

スパァーン！

柱ごとフェイトに攻撃するように、スバルは柱を輪切りする。

だがフェイトは危機感を覚えて急いで体を転がして回避した。
そしてフェイトは立ち上がってスバルに突撃する。

カキィン！　カキィン！　ガキィイン！！！

２人の剣が更にとぶつかり合い、容赦なく責める。
スバルにいたってはフェイトの攻撃が更に早くなっている事に驚いている。
『バルディッシュ』の『ライオットザンバー・セイバー』はスバルの神速の剣裁きに匹敵するスピードを持っているからだ。

「それが『バルディッシュ』の新しい力ですか」
「まぁね！！」

更に２人は閃光と化してビルから出ると、その勢いなのかビルは崩壊する。
そして別のビルの屋上に着地して、互いに剣を構える。

「そろそろ、この子の力を溜めさせてもらうよ」
≪Ｉｔ　ｗａｉｔｅｄ.　≫

すると、フェイトは左手で『ライキリ』を抜き出す。
金色に輝く刃はフェイトが手に触れて鞘を縫いた瞬間から、彼女の魔力を少しずつ吸いだす。
自分の持っている『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』と双璧となる七星神刀（しちせいしんとう）の１つに注意をするスバル。
そして二刀流の構えでフェイトはすぐさまに魔法を放つ。

「サンダーレイジ！！」

２つの刀を振るい、金色の稲妻が放たれる。
その威力は以前自分が放った『サンダー・レイジ』とは全く違うと言って良いほど威力が違う。
巨大な金色の稲妻が巨大な並みのように放たれているのだ。

「凄い！」
「サンダーレイジがパワーアップした！？」

予想外のパワーアップに、エリオとシグナムは驚きだして思わず叫びだす。
だがスバルはそれでも臆せず、自分の周りに蒼い魔法陣浮かべ上げ、詠唱を唱える。

「ハルティス・エアブレイド・サンクチュラ、蒼天を天駆ける神風よ、聖なる守護霊となりて汝を守り抜け。アルテス・バルリハ・エンダルト」

すると、スバルの回りから蒼い風が集まってくるかのように収束される。

「コレはもしや！」
「魔導競技大会でエリオとの戦いで見せたスバルの防御魔法だよ！」

ザフィーラとアルフはスバルが出そうとする魔法に覚えがある。
それはＳランクにも達成する風の防御魔法。

「ガーディアン・ブルーストーム！！！！」

体を華麗にくるっと回ってその勢いに落下するかのように『ティル

ヴィングエア』を地面に突き刺すと，スバルの回りから蒼い暴風が天に昇るかのように放つ。
フェイトの『サンダーレイジ』も、その渦に飲み込まれたかのように渦の中に入って天に昇り、消えていく。
そして蒼い暴風が消えると、スバルは『ティルヴィングエア』を地面から抜くとフェイトはスバルが瞬間移動をしてくる前に自分も高速移動開始する。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
「おおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

更にぶつかり合う剣。
フェイトの双剣とスバルの居合いがぶつかり合い、更に交わして攻撃し、避ける。
その連続のくり返しである。
だが、２人の剣と剣のぶつかり合いは正に華麗なる剣舞と思わせるほど美しく見えてきた。

＊

「パパ、何か２人とも戦っているより……剣を振りながら美しく踊っている見たいだよ」
「……ああ、女の剣さばきってそう見えんじゃネェ？」

ヴィヴィオは２人の剣舞に見惚れてると、銀時はそう言うが内心でも２人の可憐なる剣舞は美しく思えてきた。

「確かに刀を使う女子は滅多にいないから、女子の剣のぶつかり合

いは尚更滅多に見れぬものだ」
「あはは～！あんな可憐な侍がおんじゃったら、わしゃもう一度剣を持ってみるのも良えかのぅ」
桂と辰馬も、攘夷戦争の時や今にいたっても女同士の剣の対決は見たことはない。
「でも……フェイトちゃんとスバル、なんか凄く楽しそう」
モニターに移っているフェイトとスバルの剣のぶつかり合いを見て、なのはは2人が楽しそうに見えてきた。
「そうなん？」
「言われてみれば、時々2人とも笑っているような気がしますね」
「だけど何が楽しんだ？見ているこっちは本気で斬る勢いで圧倒されてるのに？」
はやて、リィンフォース、ヴィータから見れば間違えて斬り殺してしまうんじゃないかとひやひやとしている。
しかし時々見えてくる2人の笑いの表情。
「私には分かる」
と、シグナムがその一言をはっきりと言い出す。
モニターをじっと見ている彼女だが、今にも乱入したくてウズウズしている様子。
バトルマニアとして、剣士としてか彼女も今すぐ戦いたがっている。
「あの2人は、自分と双璧となる相手と戦える喜びを感じているのさ」

「はぁ？どういう意味だそりゃ？」

シグナムの言っていることが理解できないヴィータ。

「なるほど、要するに好敵手って事ですなぁ？おそらく2人は自覚なくとも、戦いの中で何か自分と同じものを共存して、剣と剣がぶつかり合うたびに喜びと楽しさが浮かび上がるって訳か！」

「そうだ。七星神刀（しちせいしんとう）と愛用のデバイスの2つを使いこなすフェイトに、魔法なしでも純粋な剣術を基本に戦うスバル。おそらく2人の実力は互角かも知れぬ」

近藤が納得したように言い出すと、シグナムは2人の強さは双璧だと確信する。

それを聞いたティアナは改めてスバルを見つめる。

（スバル……アンタ、いつの間にもうそこまで……）

スバルの強さに改めて圧倒されるティアナ。

しかし以前のように嫉妬している訳ではない。

今度は自分も頑張らなきゃいけないという強い思いであった。

自分はスバルの過去を知らない。けどこのままじゃスバルの足を引っ張る事になってしまう。

そうなれば、これからもスバルばかりが苦しむ事に……

ようやく分かり合えた仲間を見逃す訳には行かないが、どうすれば良いのか迷いだす。

（スバル……）

＊

「斬蒼！！」

スバルの必殺剣技が炸裂し、居合から発生する無数の蒼い鎌鼬が神速の速さで炸裂するが、フェイトも『バルディッシュ』と『ライキリ』の２つのデバイスで、連続攻撃を神速に匹敵する速さで防ぐ。
しかし一撃一撃がとてつもなく鋭くて、全て防ぎれなかった。

「ぐぅ！」

その身は斬られていないが、峰が何発が直撃する。
フェイトの動きが弱まった所で、素早く居合いの構えをして、

「烈風居合！！」

追加としてに刹那の瞬間移動でフェイトに向かうと、無数の剣が振るわれる轟音が響き渡る。
しかしすでにフェイトの姿は存在せず、何も斬っていない。
何故ならフェイトはすぐに空を飛んで待避したのだ。
スバルも空を飛んでフェイトに攻撃しかけるが……

「フォトン・エクスブレイカー！」

『ライキリ』を素早く×型に振り、稲妻が宿った金色の２つの刃が凄まじい速さでスバルを襲う。
しかしスバルは素早く交わして、フェイトから離れる。

（やっぱり強い、スバルが『第６６６魔闘機関』にいた頃、どれだけ鍛え上げられたかは知らないけど……）

改めて思い知られる強さ。
コレなら機動六課最強と謳われてもおかしくないとフェイトは確信する。

（これで決める！『フォトンランサー・ファランクスシフト』と『サンダーブレイド』を合体させて編み出したあの新しい魔法で！！）
「バルディッシュ、ライキリ！！」
≪≪Ｉｔ ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ. Ｉｔ ｅｎｔｅｒｓ ｉｎｔｈｅ ｍａｘｉｍｕｍ ａｔｔａｃｋ ｆｏｒｍ≫≫

『バルディッシュ』と『ライキリ』を手だけで回転させ、そして左右に振り下ろすとフェイトの足元から通常の2倍の魔法陣が現れる。

（パワーアップした『ティルヴィングエア』なら、あの魔法もパワーアップしているはず！）
「ティルヴィングエア！」
≪Ｏｐｅｒａｔｅ ｂｙ ｍａｇｉｃ ａｔｔａｃｋ≫

スバルも『ティルヴィングエア』を鞘に納めると、スバルの足元からも通常の2倍の魔法陣が現れる。

「ティルマス、バルティス、メルディマズキ、天空を駆ける疾風、刃と導き撃ちかかれ。バルカス・ハツティル・ラウエイギ」
「アルティム、カンディム、テルミュギティラ、蒼天に輝く刃よ、裂く捌きの元に斬りかかれ。アルバス、チャムティオ・アンディラム」

2人は、呪文を唱えだす。
フェイトの周囲に、無数の金色に輝く稲妻の魔力剣が佇み、スバル

の周囲にも、無数の蒼い魔力刀が佇む。
その数は下手すれば１０００を超える数である。

「何か凄いのが来るぞ！？」

ノーヴェは何か２人の発動する特殊な魔法に注目する。

「コレって、『フォトンランサー・ファランクスシフト』！？いやでも、ちょっと似ているけど何か……」

通常『フォトンランサー・ファランクスシフト』は魔力弾を無数に一斉発射させるフェイトの最強魔法の１つ。
だが今回は魔力弾ではなく、雷の剣となっているので何か違うとアルフは疑う。
おそらくフェイトの新魔法だと考えられる。

「２人とも、ここで勝負を決めるつもりみてぇだな」
「うむ、おそらく互いに最強の魔法をぶつけ合うつもりであろう」
『結果どうなっちゃうんだろう？』

銀時、桂、エリザベスは２人の魔法激突に注目し、ただ見守る。

「フォトンギガブレイク・ファランクスシフト」
「エアツイストスティンガー・カリバーンブレイド」

金色の雷の剣は更に稲妻のエネルギーを大きく発生し、蒼い魔力刀も超高速回転して螺旋のように蒼い風に包まれる。
そして互いに手を空に掲げ、

『『（撃ち砕け、ファイアー）（切り裂け、ブレード）！！』』

お互いに手を相手に向けて振り下ろしたのを合図に、一斉射撃で金色の雷の剣と蒼い魔力刀が放たれる。

ドカカカ

そして2人はゆっくりと屋上に降りると、『ライキリ』と『ティルヴィングエア』を鞘に納める。

「……（クス）フェイトさん、以前より強くなりましたね」

「ええ……パワーアップした『バルディッシュ』と『ライキリ』を使いこなす為に、スバルを見習って剣術を学び始めたんだ」

魔法だけじゃなく、身体能力も鍛えておくべきだとフェイトは思って１０日間、一刀流と二刀流を基本を学んで鍛え続けていた。

「それにしても、スバルの神速剣術と瞬間移動の連係凄かったよ。あれも『第６６６魔闘機関』で覚えたの？」

「ああ、『蒼刀術』ですか……ある知り合いに名付けられた我流剣術で、相手を素早く斬る為に居合いの瞬発力と刹那の瞬間移動による機動力を特化した流儀なんですよ」

「へぇ～」

初めて聞くスバルの『蒼刀術』と言う剣術にフェイトも感心して頷く。

一方、隣の屋上でモニターで2人の戦いを見ていた銀時達は予想外の結果と2人の更なるパワーアップに感心していた。

「うわぁ～～～！！パパぁ、フェイトさんとスバルお姉ちゃんって凄いね！！」

「ああ……大したもんじゃねぇか」

2人の強さに感動するヴィヴィオに素直に2人が更に強くなったと認める銀時。

そしてヴィヴィオはこの時、今度自分も剣術を教えてもらいたいと

強く誓う。
魔剣士としての存在に強い憧れを抱いたからだ。

「フェイトちゃん、いつの間にあんなに強くなってたなんて……」
「凄いですよ！！フェイトさんとスバルさんも！！」

なのはとエリオも模擬戦とは思えない真剣勝負並の戦いに感動した。

「デバイスがパワーアップしているだけじゃなく、２人自身も以前より成長している感じがします」

魔法やデバイスの性能だけじゃなく、身体能力も上がっていると思うキャロ。

「マジ凄いネ、私達も負けていられないヨ！！」
「ああ！！」

神楽とシグナムも、２人の模擬戦を見て闘志を燃やしていた。
特にシグナムにいたっては今すぐに２人と戦いたいと言う思い（バトルマニア魂）が出ている。

「……スゲェんだな、魔剣士って」
「いやー全くだ！！侍も顔負けの剣裁きで感心した！！」
「そうですね……副長や沖田隊長でも勝てるかどうか分からないですね」

ノーヴェ、近藤、山崎も、フェイトとスバルの剣術は強さだけじゃなく美しさも感じだした。
他の皆も今回の模擬戦は参考になったと思うが、九兵衛とギンガは違った。

複雑な表情でスバルを見ていた。

コレほどまでの神速の剣裁きを特化している事と、妹がコレほどまでに強くなっている事と、２人はそう思って右手を強く握りだす。

だがティアナは２人とは違ってスバルがフェイトと対抗に戦える程まで強くなっているのをこの眼で確信する。

以前の自分じゃ強い嫉妬を受けていたが、今は自分ももっと頑張らなきゃ行けないと気持ちを持つ。

（今なら分かる。スバルがあそこまで強くなれるのは、才能がある事や天性の才だけじゅあない……大切なものを護る為の強い信念が原動力となっているんだ！！私も……兄さんやスバルを、大切な仲間を護れるぐらいに強くなりたい！！）

凡才も天才も超えた次元、それが強い信念だとティアナは理解した。

一体どうすれば本当の強さを身に付けられるのか、とりあえず銀時達に聞いてみる事にする。

＊

管理局　地下実験室

そこは何かをロストロギアを中心として、研究している特殊な室。

中心部に巨大なカプセルに入った黒い霧から異変を感じた。

ピーピーピーピー！

突如、警報装置が鳴り始めた。

研究者達は何事かと慌て始める。

「どうした!?一体何があった!!」
「分かりません!突然、3日前に手に入れたロストロギアに異常が発生し……」
ドカァーン!!!!!
『『ぐぁあああああああああああああああああ!!』』
突如、巨大なカプセルが大爆発を起こしだす。
多くの研究員は全員吹飛ばされてしまった。
実験室はメチャクチャとなり、多くの重傷者が出ている。
そしてカプセルの中に入っていた黒い霧は、何やら自分の意志で動いているように周りを見渡す。
「……愚かな連中ばかりだ、己の薄汚れた欲望の為だけに我を生み出すなど……その命で自分の愚かさを思い知……む?」
ふと、黒き霧は何かを感じ上を見上げる。
「……感じる。強さを求める者の気を」
そう言いだし、黒い霧はこの場を去って飛び出す。
銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

銀八
「へぇ～い、どーもぉ。久し振りの銀八先生を始めます。今日のアシスタントはこの人、ナンバーズのドゥーエでぇ～す」

ドゥーエ
「どうもこんにちは♪ようやく私もこのコーナーに出られて本当に嬉しいけど……本編じゃあ滅多に出番が……（涙」

銀八
「……いきなり暗い空間にすんな……とりあえず行くぞォ、まずはこの人ペンネーム『スコーピオン』さん『質問だが、銀時から見て、スバルの印象はどのくらいなった？
具体的には、どのくらい好感を持っている。』……いきなり嫌な質問だなおい？」

ドゥーエ
「でもちゃんと答えなきゃいけないしね。銀時はどう思います」

するとモニターから、銀時が映し出された。
学校なのにモニターがあると言う疑いは控えてください。

銀時
≪そうだなぁ……まぁ可愛いんじゃねぇの？何か最近目立っているからヒロインぽくなってきたし、それに何か恥ずかしがる所なんか

メッチャ女っぽく見えちまうしよォ、うちの世界の女共もスバルを見習って女と言う存在を学んで欲しいくれぇだよ。後、強い気持ちを持ってるから将来良い女になるかも知れねぇな（てか言えねぇ！！！！本当はスバル編で不意打ちにもキスされたから、スバルを見るだけで時々ドキッとしちゃいますて言ったらフェイト達に殺されるぅぅぅぅ！！！）≫

ピィ！

表ではそうコメントするが、本当の事を内心で思って口には出せない銀時だった。

銀八
「……と言う訳で『スコーピオン』さん、廊下にたってなさい。んで次ィ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『スカリエッティ博士に質問、こちらのスカリエッティ博士は十蔵博士に日々苦労させられているぶっちゃけ「苦労人」です。そんな彼に何か一言元気付けるような言葉を掛けてあげて下さい』」

ドゥーエ
「あら、ドクターからね？ドクター、どうなんですか？」

スカリエッティ
「……すまない、何も言えない。だからせめて死なないよう頑張ってくれ」

ドゥーエ
「それだけ！！？」

銀八

「手抜きだなおい！と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、もうちょっとそっちのスカリエッティを優しくしてやってください！！」

ドゥーエ
「次行きます。ペンネーム『三月語』さん『銀さん好きな人にー！銀さんを共有財産にしないのですかー？

（女性陣限定）魔法や武器や能力が全く使えない状況で、２４時間一人ぼっちでプレハブ小屋にいられますか？なお、無理に使用した場合４日銀さんに接触禁止と言われます。』

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛『『勿論絶対します！！』』

ドゥーエ
「どんだけ落としたって言うの坂田銀時は！？」

銀八
「メッチャムカつくので『三月語』さん、廊下に一生立っててください。んで次ィ、ペンネーム『月光閃火』さん『１．キャロに質問…というかアドバイスだ。お前、エリオに構って欲しくてああいう風（ジェイ○ン化）になっているのだろうが…それでは逆効果だぞ？あまり妬きすぎるのは、人に嫌われるからな。そんなにエリオに構って欲しいならば…あの二人（神楽と月詠）に負けないくらいに美人になればいい。俺も微力ながら、力を貸すぞ？

2．さっそくだけどアリマちゃんに質問だよ。管理局に隊の存在と隊長の命を滅せられた君だけど…スバルはスバルで隊長さんの正義を貫いていると自分は思うよ？でも、君は歪んだ正義になっちゃってる…そんな歪んだ正義を持つ君を見て、隊長さんはそんな君をどう思うのかな？自分の憶測からすれば…多分君の歪んだ正義を見て、凄く悲しむと思うよ？あと、ついでに好きな食べ物とか聞けるといいなぁ～♪』、1はキャロお願いします」

キャロ
「はい、頑張ります！！」

キャロは闘志を燃やして2人に負けない美女になる事を決意する。
だが嫉妬を抑えるのは無理だが……

ドゥーエ
「2は……とりあえずモニターで」

ピッ

アリマ
≪私に正義は無用。管理局を初めとしてこの腐った世界を……え、好き嫌い？基本的に好きなものはサナダ隊長が作ってくれる手作り料理と主にあっさりとした料理。嫌いなものは特にない以上≫

プツーン！

ドゥーエ
「と言う訳で『月光閃火』さん、アリマの意外な好き嫌いを聞けま

した♪」

銀八
「何か楽しくやっているなおい……まぁその方がありがてぇんだけどな。次ぃ、ペンネーム『烈火竜』さん『人間姿の近藤さんとゴリラ姿の近藤さん。ルーテシアはどっちが気に入るでしょう？

『覇王』の異名を持つラオウと屁怒呂と秀吉とアインハルト。誰が勝ち残るでしょうか？』」

ルーテシア
「どっちもお父さんぽいから良い」

ドゥーエ
「お父さん!?お父さんぽいって何!?」

変わり果てたルーテシアの答えにドゥーエは思わず青ざめる。

銀八
「んで2つ目は……少なくともアインハルトは即脱落します」

ドゥーエ
「同感!!」

銀八
「てな訳で『烈火竜』さん、ランスター編をお楽しみください。次ぃ、ペンネーム『白米』さん『武「近藤、ユーノ、キャロに質問というか一言。

何時までも過去の想い人の事を引きずるな!!

本当にその人の事を想っているのなら、その人の幸せを願って

手を引く事も大切だ!!それができない奴に恋愛する資格はない!!
もし納得できなければ、キャロ以外は掛かって来い!!鍛え直してやる!!」（拳を鳴らす）

刃「二つ目は拙者からドゥーエからだ。
確か貴様、原作では姉妹達（ナンバーズ）と合流できずに死んでしまったらしいな。
もし良ければ、白米が拙者に撮らせた姉妹達の『マル秘・秘蔵写真』をやるがいるか？」』」

近藤
「何おう!女は愛するより愛されるほうが幸せなんだ!!」

ユーノ
「そうだそうだ!!僕は絶対にあのハーレム天然パーマだけには絶対負けたくないよ!!」

キャロ
「喧嘩売っているのかごるぁあ!!」

ドゥーエ
「勇ましく答えているぅぅぅぅ!!後キャロ怖っ!!」

呆れてツッコみだすドゥーエ。

ドゥーエ
「私に……とりあえずください」

この小説なら自分は死ぬ事はないと安心してなのか『マル秘・秘蔵写真』を受け取ろうとするドゥーエ。
このコーナーが終わった後に読む予定である。

銀八
「と言う訳で『白米』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『私にいい考えがある』さん『黒神さんに質問です。
もしもこの小説にイラストを描いてくださる人が居たら物凄く嬉しいですか？
続いて二つ目は、リィンに質問です
この小説を読み続けてずっと考えてたのですが、リィンはもしかしてエリザベスのことが好きですか？』」

黒神
「そうですネェ、出来ればお願いしたいですね。せっかくオリジナル設定もあるから……」

リィン
「エリザベスさんの事ですか？勿論好きですよ♪凄く気が合うお友達なので」

などと2人は即座に答える。
リィンの答えは全く違う気がするが気にしない事をお進めする。

銀八
「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていなさい」

ドゥーエ
「ペンネーム『肥後魚』さん『当麻「ドゥーエさんに質問だ。・・・ナンバーズのうち、チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディードの五人が銀時の虜になってるよな。そこでだ、もしも銀時がその５人のうちの誰かとくっ付くとしたら誰がいい？　それとも、５人とくっ付くハーレムを望む？」

肥後魚
「ではもう一つ僕から銀八先生に。・・・一度に大量の質問に答えるのって大変ですか？　それとも貴重な出番だから苦にはなりませんか？」』……妹達が惚れた相手なら、一層の事全員任せたいわ。銀八先生はどうですか？」

銀八
「勿論、貴重な出番ですので苦しくありません!!苦しんでいるのウチの馬鹿作者だけですから!!」

ドゥーエ
「あ……あははは（苦笑）……と言う訳で『肥後魚』さん、質問ありがとうございます」

銀八
「へぇ～い、んじゃ次の質問ペンネーム『ミクニップ』さん『管理局に対して

とりあえず、今晩辺り団体で本部潰しに来ますので・・・首洗って待ってろよ？

ノーヴェに対して

もし告白されたらどうしますか？』」

ドゥーエ
「何か1つ目の質問怖いんだけどォォォォォォォ！！！？（青ざめ）
」

1つ目の質問に青ざめるドゥーエ。
まぁ誰だって銀園祭での件での管理局の行動はムカつきますよねぇ。

銀八
「んで2つ目は……」

ノーヴェ
「んなもんあるかぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！／／／／」

ドカァ！

黒神
「何故僕！？」

何故かノーヴェに殴られる黒神。
2人はその光景を呆れてみていた。

銀八
「……と言う訳で『ミクニップ』さん、この様にウチの作者はサンドバック扱いされています。次ィ、ペンネーム『ＡＵ王』さん『質問キャロのステータスをＦａｔｅ風に表示するとどうなりますか？』
……そうだなぁ……こうなるんじゃネェ？」

ライダー　真名：

パラメータ：　筋力：Ｄ　耐久：Ｄ　敏捷：Ｄ　魔力：Ｃ　幸運：Ｂ　宝具：ＡＡＡ＋

宝具：雷斬　ＡＡＡ

『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～天下分け目の魔法戦記～』の立花宗茂からこっそり奪……じゃなかった借りてきた宝具。
主にジェイソン化した時に使用する。稲妻が宿ったチェーンソーで、間違いなく雷を斬る事も可能だろう。

フリードリヒ　Ａ

キャロの使役竜で、通称フリード。
通常は膝程もない小型形態だが、口から吐く火炎は強力でありキャロの指示次第で有効な戦力となる。キャロ自身が卵から孵して育てた。
その真の姿は１０メートルを超える巨体を有する飛竜であり、「白銀の飛竜」とも呼ばれる。

ヴォルテール　　ＡＡＡ＋

キャロが召喚出来るもう一騎の竜で、古くからアルザスに棲む「守護竜」や「真竜」とも謳われる強大な存在。ルシエの長老は「黒竜」と呼んでいた。
キャロはヴォルテールの巫女のようなものであり、その力を借りるのは本当に危険になったときだけとのこと。
その姿は人型であり、竜というよりも竜人といった方が正しく言い表せる。また真の姿となったフリードリヒを遥かに超える巨体を有する。その戦闘力も絶大である。

ディスバール　ＥＸ

キャロが召喚する竜の中でも最強の強さを持つ暗黒魔龍。
その強さは絶大で、まさに悪魔竜というべき存在。
一度召喚されれば目的が消えるまで暴れると言う恐怖の禁断な召喚魔龍。

ステータス

ジェイソン化　ＥＸ

とてつもない嫉妬でヤンデレとなって、身体能力は異常なまでに上

がる。
筋力、　耐久、　敏捷、　魔力を全てＥＸにさせる。

対魔力　Ｂ

魔術発動における詠唱が三節以下のものを無効化する。大魔術、儀礼呪法等を以ってしても、傷つけるのは難しい

騎乗　ＡＡＡ＋

騎乗の才能。獣であるのならば幻獣・神獣・竜種のものまで乗りこなせる。

竜召喚　ＡＡ

キャロの持つレアスキル。
コレにより竜を召喚する事が出来る。

ドゥーエ
「てかなんか変な宝具とステータスあるんだけどぉぉぉぉぉ！？」

青ざめてツッコみだす。

銀八
「コレ、思いっきりキャロは化け物ですと紹介しているのと一緒じゃねぇか！！……と言う訳で『ＡＵ王』さん、廊下に立っていなさい。次ィペンネーム『サディスト』さん『サディスト
「山崎は地味と不幸というキャラクターのアイデンティティーを失ったが…アイツに残ったもとの部分って何かある？」

姫史
「…容赦ないな。貴様」

姫史
「…次は私からだ。ヴィヴィオはこの小説では【聖王】の姿になるのか？」

サディスト
「赤夜叉さんの方はならなかったからな。答えてくれ」』……ズバリ答えます。残っているのは彼女持ちと護る為に強さをはっきりするというアイデンティティーです！」

ドゥーエ
「ややこしくて分からないけど？……んでもう１つの質問は、おそらく作者が考える方向によってなるかならないかどっちかね」

銀八
「と言う訳で『サディスト』さん、次の質問もよろしくお願いします。次ィ、ペンネーム『春夏秋冬』さん『質問　一周年記念の女政宗のモデルってもしかして戦国乙女の政宗ですか？』……いえ、モ

デルはいません。作者の妄想で考えたモデルです」

ドゥーエ
「あの伊達政宗の美女化……凄く美しかったわぁ／／／」

銀八
「と言う訳で『春夏秋冬』さん廊下に立っていなさい。んで次、ペンネーム『銀』さん『質問　銀時は何処に向かっているのですか？』……あの馬鹿の考えている事は銀さんも分かりません」

ドゥーエ
「速っ！？」

銀八
「と言う訳で『銀』さん、できればもうちょっとわかりやすい質問をお願いします。次ィ、ペンネーム『ソウ』さん『よく銀さんは他の隊員に女性をはべらしているせいで襲われていますがエリオ、桂、辰馬、山崎、ザフィーラなどといった他の男性陣は襲われてないのでしょうか？できれば本人がお答えください。

次に銀さんのストライクゾーン（黒神さんが思う年齢層、範囲でもかまいません）を教えてください。
』」

エリオ
「流石に銀さんのようにはないと思います……（苦笑）」

桂
「銀時の日頃の行いが導いた結果だ……あんなハーレム侍と一緒に

しないで貰いたい」

辰馬
「すんごか羨ましいぜよ！！今度ワシにも教えてもらいたかぁ」

山崎
「そうですねぇ……今は襲われていないんですが、真戦組にばれたらおそらく……（青ざめ）」

ザフィーラ
「全く縁がないから問題ない」

銀八
「はい、馬鹿１人を除いてちゃんと答えましたぁ。んでもう１つは……とりあえずあいつは美女なら誰でもＯＫじゃねぇ？おそらく１５歳以上からかもしれません」

ドゥーエ
「と言う訳で『ソウ』さん、廊下に立っていなさい。次行きます、ペンネーム『サトッチ』さん『

質問？自称銀時の妻の皆さんに質問です。銀時の世界では解りませんが江戸時代初期までは大名は側室と正室の２種類の妻をめとっていたらしいのですが自分は何処に入ると思いますか？

質問？私の小説ＩＦ碧陽学園生徒会議事録　を読んでのご感想などを黒神さんにお答えしていただきたく思います。―

』……」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛『『（銀時）（銀さん）と結婚できるならどっちでも構　（わない）（いません）（わないわ）（わないっす）！！！』』

ドゥーエ
「ちゃんと答える気全然ねぇ！！」

コレにはドゥーエも呆れてツッコム。

銀八
「２つ目は、作者は本編が始まればその時に感想をしますので。と言う訳で『サトッチ』さん、小説頑張ってください」

ドゥーエ
「はぁ……次行きますよ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『１．黒神さんに質問です。もし銀時達が来た時間帯が「Ｓｔｒｉｋｅｒｓ」ではなく「ｖｉｖｉｄ」だったらどうなりますか？２．山崎さんに質問です。もしディエチさんと結婚するならばどんな結婚式にしたいですか？』」

黒神
「さぁ、それは想像できませんなぁ。まだ第４期の事全然知らないですし」

銀八
「だめじゃん！！……そんで２つ目は」

山崎
「で……ディエチちゃんと結婚できるなら……彼女の希望通りにやるだけです／／／」

銀八
「かぁー、熱いねぇ。と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、自分達はぱっつぁんがアイドルオタクを卒業させるべきだと思います」

山崎
「何でわざわざ新八君をひっぱるぅぅぅぅぅぅぅ！？」

ドゥーエ
「あ……あはははは。では、次行きます。ペンネーム『正宗の胃袋』さん『質問
1．ヴィヴィオに質問です。銀時と銀八先生のもじゃもじゃ頭はどっちが好きですか？

2．近藤に質問です。ヴィヴィオにゴリラって言われても仕方が無いんじゃないでしょうか？だって実際に人間ぽいゴリラですから。』
」

ヴィヴィオ
「何か一緒だけど、勿論パパの方が好きぃ♪」

銀八
「なんでじゃあああああああああああああああああ！？（涙）」

銀時に劣っている事で悔やむ銀八。
屈辱でいっぱいである。

ヴィヴィオ
「あ、でも近藤さんを最初見た時ゴリラって言っちゃったけど近藤さんの真剣な説明でゴリラじゃないと分かりました♪」

ドゥーエ
（あの時は本当に笑えちゃった……ププ！）

あの時の近藤の慌てっぷりには今思い出しても笑えるドゥーエ。

銀八
「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『黒龍』さん『黒神さんに質問です。

1．内の作品のリリカル銀魂ライダーと黒神さんのリリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳのコラボをそちらでしてくれませんか？

2．銀さん達から見て、ソラの事はどう思いますか？』」

黒神
「そうですネェ、もし機会があればやらせてもらいます。何か面白そうですし。２つ目は銀八先生とドゥーエが代表として答えてください」

銀八
「とにかく新八が見習うべきカッコ良さだな」

黒神
「おいいいいいいいいいいいいいい！！もう新八つながりは良いって！！（青ざめ）」

ドゥーエ
「料理も万全でカリスマ性もあり、おそらくその強さもかなりのものだから、今後も期待できそうだわ♪」

銀八
「以上です。てな訳で『黒龍』さん、初質問ありがとうございました。次ィ、ペンネーム『桜』さん『1・何か新八の扱いが悪くありませんか？
作者は新八の事が嫌いなんですか？

2・作者はリアニメリカルなのはの第一期から第三期の中で一番好きなシリーズは何ですか？』」

黒神
「そうですねぇ、正直言うとアイドルオタク状態の新八が好きじゃありませんネェ。この小説で新八に出番を後回しにしたのも別の目的がありますし。何より、この小説のもう1つの目的は新八のアイドルオタクを卒業させて侍の成長を急激に早める事ですね」

最初は嫌いだった。
だが彼の成長を見てもったいないと思った作者は、あえて新八に酷い扱いをさせて後半で大きく成長させるのが最大の狙い。

黒神
「もう1つは、どっちかと言うと一番好きなと言うのはありません。全部面白いから好きですかねぇ？でも、知識で分かっているのは第一期と第三期ですね」

銀八
「と言う訳で『桜』さん、以上が馬鹿作者の答えでした。次行くぞォ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『

1：七星神刀はスバルを魔剣士にする際に思い付いたんですか？

2：スバルは黒神が知ってる漫画とかゲームの作品群でその中で剣を使って放つ技を魔法で再現したいって言う技はあるか？』……ズバリ答えます。七星神刀（しちせいしんとう）を思いついたのは、スバル編が始まる1つ前ですね。だからこれは作者の頭の想像が回転して急激に思いついたネタとしえ、この小説のキーアイテムとなってしまった訳ね」

ドゥーエ
「確かに、私も1つ欲しいなぁ」

でもドゥーエは基本剣で戦わないほうだから無理があるのは言うまでもない。

ドゥーエ
「…なんか今のナレーションムカついたのは気のせい？（怒）」

銀八
「気のせいじゃねぇ？そんでもう1つはスバルに答えさせてもらいます」

スバル
「……そうですねぇ、じゃあ『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の伊達政宗さんの『ＷＡＲ　ＤＡＮＣＥ』と、『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』のアーチャーさんの『無限の剣製（アンディミデット・ブレイドワークス）』と佐々木小次郎さんの『燕返し』が会得したいです」

銀八
「ほとんど剣術と刀の投影魔法タイプばっかじゃネェか！てか『燕返し』って、それと似たような技『昴返し』を覚えていなかったっけ！？」

スバル
「あれは『モンキーハンターオンライン』だけで、実際はまだ会得できてません……（悲）」

3つとも、ほとんど居合いを無視した技な為か無謀である。

銀八
「……つう訳で『鳴神ソラ』さん、廊下にたっていなさい。次ィペンネーム『ルシファー』さん『ヴィヴィオに質問です
もし銀魂・リリカルメンバーで母親にするなら誰がいいですか？
また兄弟・姉妹にするなら誰がいいですか？』……てかドゥーエに対する質問少ねぇ」

ドゥーエ
「何で！？」

納得行かないで叫ぶドゥーエ。
するとヴィヴィオが答えだす。

ヴィヴィオ
「はぁーい。お母さんなら誰でも良いけど……お姉さんならスバルお姉ちゃんの方が良いかな？何かすぐに仲良くなれそうだし」

銀八

「はい、ありがとうございます。と言う訳で『ルシファー』さん、質問ありがとうございました。

ドゥーエ
「次行きます、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『家康「ワシから質問だ。お前達の奇妙な料理（シャマル鍋）によって女体化した伊達と真田。この作品の男性陣はどちらが好みの女子か？」

もうひとつの質問はその女体化した政宗と幸村から…ってか質問と言うより嘆願かも？

政宗「おい！シャマル鍋を食った連中に聞きたいんだが！あのＵＮＫＮＯＷＮな鍋の効果って何時までもつんだよ？！お前ら食って気絶した時とか次の回でもう復活してたのに俺達だけ一向にこの変な病状（女体化）から治らないんだよ！」

幸村「もう其れがしは限界でござる！黒神殿！どうか治療法を教え下され～！！」『……女性化って？あの一周年記念で特別企画でゲストとして登場した２人の美少女達の事だよね、他の男性達はどう思う？」

桂
「ふん、男の肉体を捨てて女体化するなど侍の欠片も失っている」

エリザベス
『てかこのままで良いんじゃネェ？』

エリオ
「僕は……凄く良いと思います／／／」

ザフィーラ
「2人とも嫌がっているから元に戻してやってくれ」

ヴァイス
「2人が俺以上に不幸じゃねぇかぁ！！」

辰馬
「あはははははは！もうこのままで良えんじゃけんかぁ？」

近藤
「こんなに美しいのに女体化した結果なんて……もったいない」

山崎
「僕はザフィーラに賛成だと思います」

スカリエッティ
「興味深いからこのままにしてやって欲しい♪」

源外
「スカリエッティに同感じゃ」

銀八
「以上が野朗共の答えです。ちなみにその2人が元の姿に戻りてぇって言うから、黒神がようやく完成させたこの治療薬を2人に届ける所だ。コレを飲めば2人は元に……」

と銀八は2つの瓶に入っている紫色の液体を取り出すと……

ドゥーエ
「ちぇえええええええええええええ！！」

パキーン！

ドゥーエが回し蹴りを炸裂させて、治療薬水が入っている2つの瓶を破壊する。

銀八
「オィィィィィィィィィ！！何やってんだァァァァ！！！それ作るのに相当時間掛かるんだぞォ！？」

ドゥーエ
「いやぁ、せっかく美少女になったんだから2人はもっと美少女になった経験をさせてやりたいなぁって♪」

銀八
「……はぁ、と言う訳で政宗さんに幸村さん、ドゥーエのせいで元に戻るのまだ先なので辛抱してやってください」

ドゥーエ
「次行きます♪ペンネーム『漆黒の不死鳥』さん『なのは、お前リリカル側の主人公なのに、フェイトやスバル、その他の奴等に差を付けられ過ぎてるんじゃないか？このままじゃ銀時争奪戦にも差を付けられるぞ。対策は考えているのか？』」

なのは
「喧嘩売っているのかぁぁぁぁぁぁぁ！！（怒）」

バァーン！

黒神
「うぎゃあああああああああああああああああああああ！！！」

なのはの八つ当たりのスターライト・ブレイカーが炸裂し、それが黒神を飲み込んで黒こげにした。

ドゥーエ
「ぎゃあああああああああああ！！作者がぁーーーーーーーー！！！」

銀八
「……と言う訳で『漆黒の不死鳥』さん、なのはに謝ってください。んで次ィペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『質問です.
?ノーヴェ以外，影の薄いナンバーズの皆さんですが生きてますか?
?新八の強化は向こう（歌舞伎町）でやっているんですか?（土方の強制で）』」

ドゥーエ
「生きているわよ！！影が薄い事は気にしているから言わないでよぉぉぉ！！（涙）」

相当気にしていたのか、ドゥーエが代表として涙を流し叫びだす。

銀八

「ドゥーエ、相当気にしてやがったんだなぁ……んで、？はおそらく新八は銀さん達の無事を祈って道場剣術の素振りをしてます。てな訳で『ウッソ・エヴィン』さん、これからも質問待っています」

ドゥーエ
「とうとう、コレが最後の質問となります。ペンネーム『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さん『どうも、『俺と恐キャラ家族化計画！』の主人公柿沢実です。今回は私が代表としてきました。
一つ目はフェイトさんに質問。
キャロちゃんの心に気付かないエリオをどう思いますか？

二つ目はなのはさんに質問。
自分が思う怖いところを教えてください。

あの時の『デスペレード・デモン・ブレイカー』痛かったです。でもこれでわかりました。
あなたは魔王という自覚を持っているってことですね。
またお会いしましょう・・・主人公なのに幸薄の、魔王なのはちゃん。』。フェイトさんお願いします」

フェイト
「エリオぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！キャロの事、構ってあげてエエエエエエエエエエ！！！！（泣）」

ドゥーエ
「うわぁ……相当、答えていますねぇ……そして高町なのは……わぁ！！！」

ドゥーエはなのはの方を振り向くと、そこには黒いオーラに包まれた白い魔王ごと高町なのはがいた。

なのは
「にゃはははは……全員頭を冷やしてなのぉおおおおおお！！！！」

バァーン！！

銀八・ドゥーエ
『『うぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！』』

放たれた『デスペレード・デモン・ブレイカー』により、銀八とドゥーエは逃げ送れて飲み込まれた。

黒神
「うわぁ……2人とも災難。と言う訳で今回の『銀八先生』コーナーは終了。次回のアシスタントはお登勢です。それではまた……」

なのは
「バスタァァァァァァァ！！！」

黒神
「あんぎゃあああ！！！！」

第九十三訓：戦う乙女は強くて美しい（後書き）

ティアナ
「何で私のシリアスなのに私より目立っているんじゃぁぁぁぁぁぁ！！！！！（血涙）」

フェイト・スバル
『『ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！』』

ティアナは怒りの余りに『クロス・ファイヤー・シュート』を連射して2人に攻撃する。

銀時
「と言う訳で、次回「厳しい訓練をするだけじゃ強くなれない」テイクオフ」

第九十四訓：厳しい訓練をするだけじゃ強くなれない（前書き）

黒神

「この小説を書いて一年以上経ちますが、今だに誤字を見つけるのが苦手な自分です。ですので、もし誤字が見つかれば遠慮なく言ってください。言われた度降りに直しますので。では」

ティアナ

「『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第九十四訓：厳しい訓練をするだけじゃ強くなれない

フェイトとスバルの模擬戦から3日。

2人の模擬戦は機動六課全員の闘志を燃やした。

フェイトとスバルのパワーアップは、今後の機動六課でも切り札になると誰もが思った。

中には2人に遅れをとらないと必死に猛特訓をする者もいた。

スカリエッティのアジト　トレーニングルーム

「はぁあああああああああ！！」

「ぬぉおおおおおおおおおお！！」

そこで、九兵衛と近藤が木刀で手合わせをしていた。

九兵衛の神速と謳われる一撃一撃が速いが、近藤はそれを木刀で防ぐ。

一瞬の隙にと渾身の一撃を炸裂して木刀を振るうが、九兵衛はそれを防いで受け流す。

近藤は素早く木刀を持ち変えて構えだし、九兵衛も大きく構える。

「おぉおおおおおおお！！！！！」

「てりゃあああああ！！！！」

パコォーン！！！！

そして2人は同時に木刀を振るうと、渾身の一撃がぶつかり合う。

ピリリリリリリリ！！

何やらタイマーが鳴ると、九兵衛と近藤は木刀を下ろす。

「ふぅー」

少し疲れたような息を吐く九兵衛。
いつもより勢い高く訓練をしていたからだ。

「いやー、精が出ているなぁ九兵衛殿！！」
「ああ、ここ最近剣の稽古を怠けているのではないかと思ってたからな」

近藤が感心して言い出すと、稽古を怠けていないかを心配して言い出す九兵衛。

「しかし、俺達がスカ殿達のアジトに戻ると九兵衛殿から突如、稽古の相手を頼まれてからもう3日。それに最近、九兵衛殿は訓練を頻繁にしているしな」

あの名門柳生家の時期当主から稽古相手されるなんて滅多にない事だから近藤は相手になった。
だがここ最近の九兵衛の稽古は激しいものだった。
実は元の世界にいた時での稽古の時よりも倍以上はしている。
名門家の時期当主だからではないかとは思えるが、近藤にはだいたい理由はわかっていた。

「……やはり、スバル殿の影響か？」
「……」
フェイトとの模擬戦だけじゃない。
第1シティタワーで起こったえいりあんによる『第二異種生命体事件』でえいりあんの触手を魔法所が魔力なしで神速の居合剣術で切り裂くスバルの戦いぶりは、正に神速の領域に入った者だけができるものだった。
その強さに機動六課の全員は勿論、特に九兵衛は注目していた。
神速使いとして意識の強さなのか、九兵衛はスバルの神速剣術を見せ付けられていてもたってもいられなくなったのだろう。
「あの剣術を見せられたら、同じ神速の剣を振るう者として黙ってるわけにもいかなくなったんだ」
神速と謳われる剣術を誇る自分に、神速居合剣術を得意とするスバル。
九兵衛の中に、スバルに対するライバル心が燃やしだしたのだ。
「悔しいが、はっきり言って速さは僕より彼女の方が上だ。彼女の剣を見ていると、僕は自覚なしに神速と謳われた事に奢っていたかもしれない……それと同時に、負けたくないという気持ちが出て……」
速さだけなら柳生家歴代当主の中でも最強と謳われる剣豪、柳生敏木斎級は行くであろう。
一体どうすればスバルは柳生流を上回るスピードを身につけたのか気になって仕方がない。

「ほぉ、つまり九兵衛殿はスバル殿を好敵手と認識した訳だな。だったら九兵衛殿もスバル殿の剣術を参考すれば良いんじゃ？」
「それでは駄目だ……。僕の剣は柳生流、他人を参考にしてしまう事はすなわち柳生家を捨てるのと一緒。だから僕は柳生家の道場剣術で彼女の剣術に引けをとらない事を証明したい！！」
意外に負けず嫌いな九兵衛の感情に、近藤は少し驚いている。
今の九兵衛を見て、近藤は土方の事を思い出す。
そういやぁ、あいつも今の九兵衛殿と一緒で負けず嫌いだったなぁ。
他人には見えない努力家で、いつも剣の事しか考えていなかったし。
「良し、休憩は終了だ。さっさと始めよう」
「おう、良いとも」
＊
機動六課　訓練場
夜になると、ティアナはまた一人訓練をしていた。
衣装はバリアジャケットで、『クロスミラージュ』を構えている。
銃を撃つ遠距離攻撃だけじゃなく、ダガーモードでの接近戦にも必死に鍛えていた。
あの模擬戦以来、フェイトに強い憧れを抱くギンガはフェイトと対抗に渡り合えたスバルを見て、姉としてか負けられずに訓練でも休まずに魔法を鍛え続けている。
『ナンバーズ』のノーヴェも、スカリエッティの頼みで機動六課の一員になっている。

デバイスを使った訓練をするには機動六課の方が良いとスカリエッティが考えた提案である。
ナンバーズも時々、遊びに来る感じでノーヴェの様子を見に来ているようだ。
ギンガは『ライトニング分隊』で、ノーヴェは『スターズ分隊』に入っている。

一方のティアナも今の自分じゃ、予想外な強さを持つ敵に太刀打ちできないと思っている。
だが休憩する時は休憩する。
以前のように無茶な事をやっていれば、あの時の誓いを裏切ってしまうからだ。
だけど今のままでは強くなれない。
どうすれば良いのか全く分からない。
そんな中、後ろから銀時とスバルが現れた。

「一人で訓練していると思ったが、以前より無理してねぇようだな」
「!?兄さん、スバル!!」

いつの間にか2人が隣にいた事に驚くティアナ。
銀時にいたっては何か懐かしい感じがするようだ。

「懐かしいなぁ、こうして3人揃うとミスショットの件を思い出しちまうしよぉ」
「う……人の汚点をくすぐるような言い方しないでよ……」

あの時も、ティアナの無茶な一人訓練で銀時とスバルが本当の大切な事を思い出させて彼女の苦しみを救った事を。
そこへ銀時は高杉と人斬り似蔵に再会し、九兵衛もこの世界にやってきた。

「ティア……なんでまた一人訓練しているの？良かったら教えてくれない」
「……最近、私とスバルの力の差が広がっているような気がして、どうしてこうも力の差が広がっていくんだろうと不安で……」
要するに、ティアナは焦っている。
確かにスバルはフォワード万事屋の一員だが、銀魂組を除けば最強の戦闘力を誇る。
あのフェイトに互角以上に戦える程に、誰もが注目する存在となった。

ちなみに『フォワード万事屋』は『フォワード部隊』の新しい名で、詳しくは『第十五訓：ゲームは１人でやるより皆でやるほうが面白い！』で。

「それに、それ以上に気になって仕方がない事が……銀園祭の件でアリマとか言う魔剣士がどうにも気になって……」
ティアナがアリマの事を口に出すと、銀時とスバルは少し深刻な表情になる。
『第６６６魔闘機関』でも指よりの実力を持つアリマは、スバルのかつての大切な仲間である。
だが今は、敵意を抱かれている復讐の魔剣士。

「スバルとどういう関係があったのかは知らないけど、もし私にもっと力があれば……」

スバルばかりが苦しむ事はない。
ティアナは己の力不足に悔やんで右手を強く握る。

「だから、私はもっと強くなりたい！これ以上大切なものが無くなるのはもう嫌だ！！」

もし最愛の兄である銀時とようやく見つけた親友のスバルが死んでしまえば、どれだけ絶望するかは想像したくない。
ただ頼るだけじゃなく、共に戦えるようにと強くなりたい。

そんなティアナに銀時は頭を撫でる。

「に……兄さん？」
「ティア……お前の気持ちも分かんねぇ訳でもねェ。けどよォ、人が急激に成長する事はまず無ぇ」
「う……」

現実的に言われてティアナはしゅんとする。

「コイツは俺の知り合いのマダオが言ってた言葉だがなぁ、世の中デカいヤマ一発狙おうとか一発で形勢を逆転してやろうとか、そう言う雑な生き方をしている奴は必ず転ぶもんだぜ」

かつて、マダオが言っていた事を銀時は2人に言いだす。
スバルとティアナは頷いている。

「そりゃあ一度ぐれぇ上手くいくこともあるけどよぉ、そう言う奴は調子に乗って同じ大穴にまた代金を賭けちまう悪い癖が出ちまうんだよ。幸運は二度続かねぇ上に気づいた時には素寒貧って訳」

銀時の思い浮かべる光景には、パチンコ店で一度は大当たりをしたが……その後続けて“調子”に乗ってしまったせいでボロ負けしてしまい、ついには金がなくなってしまった。

「いや兄さん？それパチンコ店に負けただけじゃない！！て言うかいつの間にパチンコ店に通ってた訳！！！？」

コレには呆れてツッコむティアナ。
スバルも流石に苦笑してしまう。

「結局、現実に地道にコツコツ努力している奴等には敵いやしねェ。立った一発強くなろうとする連中は所詮何年も何十年も日々地道に鍛錬を繰り返す奴等に勝つ事はできねぇんだよ。ティアナがやっている一人訓練も急激に強くなろうと言う行為は、一発狙いのバクチと一緒です！！」

「う……否定できない……」

確かにティアナは急激に強くなろうとしていた。
それではいつまでたっても強くなれないのと同じである。

「修行ってのは今日始めようとか明日から始めようとかそういうもんじゃねぇ。この世に生まれてきた時からもう始まってる訳」

その言葉にティアナはハッとする。
自分がやっている事はいつものペースを乱してまで強くなろうとする無謀である事だと。

「要するに大上段するもんじゃねぇ。小さなことでも良いからいかに日々の生活の中に溶け込ませ、繰り返しコツコツ続ける事が重要」

銀時は顔を上げて、夜の空に照らし出す月を見上げてある事を思い出す。

「こんな話知ってるか？ある所に不潔な男がいた。不潔な男は小便する時、小便の飛沫が床に飛ぶ事を気にせずにどれだけ飛沫が飛ぼうが立って用を出した」

「……兄さん、それ女に向かって話して良いようなもの？」

「さらには、不潔な男はどんな戦いの場でも平気でお漏らしし、最悪にはその臭いは他人にも伝わってしまうほど……」

「兄さぁーん！？それコツコツと努力する男の話じゃなく、その男に対する悪口になってないィィィ！？」

銀時がおかしな方法で話を進めるため、思わず青ざめてツッコミだすティアナ。

「ごくささいな事だから、誰も気にも止めねぇような」

「いや、普通止めるよね！？絶対に止めるよそれェェェ！！！！」

逆に止めないのがおかしいと更にツッコむティアナ。

「しかぁーし！！それが何十年も積み重なればどうなると思う！！」

「え……その不潔な男はすんごく悪臭に包まれて近寄るだけでもいやになるほどに……」

銀時の問題に、スバルは答える。

「そう、男の股間や肛門だけじゃね！！上半身や下半身もその悪臭に取り込まれたように凄く臭っちまうのさ！！けど男はそれを気にせず、戦場に向かい戦って、臭いを武器にして勝ち続けた！！」

「戦場！？もしかしてコレって戦国武将の話！？」

何処かの戦国武将なのかと驚くティアナ。
そしてとてつもなく衝撃的な展開はここから来る。

「そんな野蛮な行為をし続ける男の結果を、誰が予想した？ワザワザ己の臭いを武器にして戦場に向かう男が、まさか最終的に……」

～～～

家康
「はぁああ！！！！」

と家康が自らの尻を秀吉に向けると、そこから放たれる臭いは秀吉を容赦なく包み込むように放たれ……

秀吉
「臭ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

とてつもない臭いに、鼻から鼻水を噴射して、嫌な汗を大量に流して倒れる秀吉。

～～～

「天下統一を果たした覇王・豊臣秀吉を見事に打ち倒した事になる

なんて。その戦国武将が、後に天下を取った悪臭真拳使いの徳川家康だ」

「ウソつけェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！！！！」

最終的には徳川家康の漏らしネタが炸裂して、大いなるツッコみを炸裂させるティアナ。

「何で結局そうなっちゃう訳!?大体それって実際の豊臣秀吉の死じゃなくて『戦国●ＡＳＡＲＡ３』の豊臣秀吉の死を最悪な形にしたデタラメじゃない！！大体『悪臭真拳』って何!?『ボーボボ』ネタ!?いくら家康は実際、戦場で漏らした事があるってそうでもそれはないでしょおおおおおおおおおおおお！！！！」

「ええ、そうなのティア！！」

「アンタもいちいち信じるなァァァァァ！！！！」

血管を浮かべてツッコみを炸裂させるティアナ。

ここ一番と言う形の盛大なツッコミであった。

「ちなみに覇王の死因は漏らし将軍の悪臭によるショック死になっている。戦国最高軍師である竹中半兵衛もその悪臭によって病が悪化してしちまった」

「なんでよォォォ！！と言うより何でそんな家康の汚点をくすぐるような事をしているの！！！『徳川イジメ祭り』なの?今『徳川イジメ祭り』が流行っているの！！?」

「いやぁ、烈火竜さんの小説でねぇ、何かゲストとして登場した徳川家康の肛門改造手術がメッチャ面白くて……それを参考にして『戦国ＢＡＳＡＲＡ３』風に説明した訳」

「そんな理由!?と言うか兄さん、こんなデマをもし本当に信じてしまう読者が見たら『戦国ＢＡＳＡＲＡ３』での徳川家康の人気に影響するから！！そんな事をすれば重大責任を押し付けられるでし

ょ！！！！」

青ざめてツッコミまくるティアナ。
もしそうなれば簡単に済まされない。

「それなら大丈夫、ある雑誌の情報によれば家康・三成・政宗・幸村の４人主人公の中で、最もあんまり使われていないキャラは家康と聞いてるからその影響はそんなにねぇ！！」
「それあくまで噂話だから！」

ちなみにその雑誌は実際に見たのですが、本当かどうかは知りませんのでデマだと思って笑い流してください。（笑）

「要するに家康は、己の汚点を利用して武器にする為に己を鍛えた訳だ。恐ろしい男だぜ」
「確かに恐ろしいです。別の意味で」
「修行でもなんでもないよこんなの！！汚すぎでしょ！！」

青筋を浮かべて怒鳴りまくるティアナ。
実際の戦国時代などミッドチルダの人々が知るわけでもないが、絶対にウソである事は確かである。

「要するに俺が言いてぇのは、自分の個性を活かしてコツコツと強くなれって訳」
「まさか兄さんは徳川家康の個性が漏らしって言いたいの？本人が聞いたら大泣きするわよ！？……それに、私の個性って銃を扱える事と幻想魔法を使用する事と……それに」
「ツッコみの鋭さにツンデレな生活」
「それ……どういう風に活かせば強くなれるの？」

それで強くなれれば苦労はしない。
己の性格を個性に利用するなんて虫が良すぎる。

「じゃあさぁ、連携で行ってみるのも良いかも」
「連携？」
「戦場では、自分をも上回る圧倒的強さを持った敵に太刀打ちするには数が限るんだよ。それでその数の多さを最大限に活かすのも、連携だよ」

スバルのアイデアに、ティアナは意外なスバルの提案に感心する。

「2人の魔導士が放った魔法が合体してパワーアップするように、私とティアの2人で剣術と銃技を連携しあえば良いだけだよ」
「……そうだったね、まさか馬鹿スバルに教えられるなんて……」
「ティア～、馬鹿はないよぉ」

くすっと笑うティアナ。
確かに信頼しあえる仲間と力を合わせる事がもっとも大事だった。
そんな当たり前な事をどうして気づかなかったのか己の存在を哀れ出して笑い出す。

「それじゃあ、早速思いついた私とティアの連係技を思いついたから試してみようか♪」

そう言って背中からどうやって隠したかと言うツッコミなしでスバルは木刀を出した。

「んで、どんな連係をするんだ？」

銀時も興味を持ってスバルに訊き出す。

「それはですねぇ……ティア、そこに立っていて」
「えぇ、良いけど？」
スバルは言われたどおりにその場に立つ。
するとスバルは木刀を構えて……
「必殺、ティアマグナムシュート！！」
バコォン！！
「んぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」
ドカァァァァ！！
突如、木刀を神速の素振りでティアナを吹飛ばし、遠くに離れた木を的代わりとして見事命中する。
「おいィィィィィィィィィィィ！！！？何やってんのお前ェェェェェ！！！！！」
「いやぁ、最近『ボボボーボ●・ボーボボ』の漫画を読んで『ところてん●グナム』を参考にして編み出しちゃいました」
「編み出さなくても良いって！！あんなの常識破れの世界だから！！！」
青ざめて叫びだす銀時。
いくらなんでも仲間を弾丸の様に撃つのはヤバイからだ。
流石にやりすぎたとスバルも苦笑して反省するが、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

『『！？』』

突如、とてつもない殺気を感じた2人は思わず振り返ると、そこにはゆっくりと立ち上がってとてつもないどす黒い殺気を放っているティアナがいた。
顔中に血管を浮かべていて、鋭い目線はスバルを睨みつけている。

「……スバル」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！
「は、はいィィィィィ！」
「少し、頭を冷やそうか？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

ティアナは『クロスミラージュ』をスバルに向け、足元からとてつもないほどに大きい魔法陣が現れる。
しかも信じられない程に、魔力が大幅に収束されて2つの銃の先からオレンジ色の魔力球があふれ出て、それが徐々に増幅されて大きくなる。
それを見たスバルは信じられない表情で青ざめる。

「スターライトォォォォォォ！！！」
「ええぇぇぇぇぇぇ！？ティア、何でその魔法を！？てか待っ……」
「ブレイカァァァァァァァァァ！！！！」

ドカァーン！！

「てんぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！」

怒りの余りに放たれた『スターライトブレイカー』。
なのは程じゃないが、オーバーSランク以上の魔力を持っている為か巨大なオレンジ色の魔力砲はスバルを飲み込んで黒焦げにする。

「うにゅ～～～～」

バタン

思わず耐え切れずに、倒れてしまうスバル。

「何でだァァァァァァァァァァァ！！何でティアナが『スターライト・ブレイカー』を使えるの！？てかそれってなのはの最強魔法じゃねぇかァァァァァ！！！！（青ざめ）」
「流石にブチ切れたから、思わず使っちゃったわよ……」
（魔王二世が生まれちゃったァァァァァァァァ！！！！）

これは完全なる潜在能力解放。
だが、怒り任せとは言え自分がなのはの最強奥義『スターライト・ブレイカー』を放つ事ができるなんて思いもよらなかったティアナ。

＊

その後、スバルは凄く反省した為ティアナはしぶしぶ許す。

「あはは……まさかティアがなのはさんのスターライト・ブレイカーを使えるなんて、怒りの余りに潜在能力が解放して良かったね、ティア♪」

「仲間に弾扱いに吹飛ばされた事が原因でなんてあり得ないわよ！！もっとまともな方法が良かったわよ！！」
「贅沢は敵だぞ、ティア♪」

ガチャ！

「その頭に風穴、開けられたい♪」

スバルの額に『クロスミラージュ』を向けて構えるティアナ。
黒い殺気を放っていて、極上な笑顔をしている。
しかし顔中には血管が浮んでいてメッチャ怖い。

「ごめんなさぁ～い！！」

涙を流してスバルは土下座する。
こんな調子じゃ先が思いやられると思うが、

「んで、吹っ切れたか？ティア」
「え？」

銀時の言葉に、ティアナは表情が変わる。

「本当に強くなるって事はそれぞれ数多く存在するもんだ。中には余りに強くなりたいと言う余りに自覚なしにあせっちまう事もある。そう言う場合、全てを吹っ切れるようにすればスカーッとしてやる気を取り戻す！実際、心が軽くなっただろ？」
「あ……！」

言われてみれば、先ほどからモヤモヤした感情が無くなりスッキリとした気分となっている。

それ所が、先ほどから体が軽くなった気分である。
おそらくさっきまでのメチャクチャな解説は、わざと自分を怒らせる為の……

「銃を扱える者や幻想魔法を使える魔導士はそうはいねぇ。どんだけ他人が優れていようが、ティアにはティアにしかねぇもんを持っている。それだけは忘れるな」

フッと銀時は笑ってティアナにアドバイスをする。
スバルも笑顔で笑い出し、ティアナにいたっては何やら嬉しさが沸きあがっていく。
銀時は一応、ティアナの義兄の為、義妹にアドバイスをしている。

「……ありがとう兄さん、スバル……」

嬉しさの余りに笑顔で笑うティアナ。
そして頭につけてあるリボンを解いて、髪を下ろしてツインヘアーからさらさらヘアーに変わった。

「私も兄さん達と戦う。たとえまだ小さな力でも、皆となら」

ティアナも1人じゃない。
愛する兄や大切な仲間がいるから戦える。
銀時はそんなティアナをジーと見ている。

「……兄さん、どうしたの？」
「いや……ただ」
「ただ？」
「お前って、髪を下ろしたほうが可愛いんじゃねぇ？」

ドキィ！

「えぇ、そ……そう／／／」

正直な感想を言い出す銀時。
そんな銀時の言葉にティアナはドキッと顔を真っ赤にする。
恋する兄に『可愛い』と言われて、凄く嬉しく同時に恥ずかしがる。

「いいなぁ、ティア。私も髪を伸ばしたいよぉ」

銀時に『可愛い』と言われたティアナに羨ましがるスバル。
なんやかんやで、問題が起こる前に無事に終わった事で一件落着…
…と思いきや、

「ん？」

銀時は何かを気づいて、空を見上げる。
すると、

ドカァーン！

突如黒い閃光が地面に落下する。
銀時達は驚きだして、落下した場所に振り向く。

「何！？」
「何かが空から落ちてきた！？」

スバルとティアナは驚きだして警戒している。
しばらく砂煙が落下した地点を囲む。

そして煙が徐々に薄くなると、そこから1匹の黒き犬が姿を現す。
金色の瞳で、銀時達を見つめる。

「……いる、力を求めて我を目覚めさせた者の気が……」
「何この突然試練イベント？つうかアンタ誰？」

どっかのゲームっぽい急激な設定に銀時は呆れて、黒き犬に名を尋ねる。
というよりも、犬が喋れた事にはあんま驚かない。
原因はアルフかザフィーラのような犬型の使い魔であると確信しているから。（但し、彼等は狼だ）

「……オルトロス、魔導士の力の欲望の化身……」

オルトロスと言う魔犬が名乗り出ると、魔犬の周りにある影が増幅して円を描くように周りを包み込む。
その影から3人は逃れる事は出来ず、大きな影に飲み込まれた。

第九十四訓：厳しい訓練をするだけじゃ強くなれない（後書き）

オルトロスは、烈火竜さんが考えてくれたネタです。

烈火竜さん、ありがとうございます。

ヴィヴィオ
「うふふふふ」

銀時
「ん？ヴィヴィオ、何笑ってんだ？」

ヴィヴィオ
「だって、スバルお姉ちゃんのバリアジャケットって凄く可愛いから、もしｃｈａｒｌｅｙさんの所の石田三成さんが見たら……『あの狸ぃぃぃぃぃぃ！！！私の弟子になんて破廉恥な物を着せるんだぁぁぁぁぁぁ！！！』とか怒鳴って言い出すけど、実際はスバルお姉ちゃんのあのバリアジャケットを見て萌えたんじゃないかなぁっと思って♪」

銀時
「ヴィヴィオちゃぁぁぁぁん！！？それナイ、てかその妄想癖を直したほうが良いって！！」

フェイト
「あ……あははは……（苦笑）次回、「試練は突然やってくる」テイクオフ」

第九十五訓：試練は突然やってくる（前書き）

黒神
「オルトロスは烈火竜さんが考えてくれたネタであり、今回のシリアスの重要的存在となっています。烈火竜さん、ありがとうございます」

アルフ
「……何か、私達も頑張らなきゃ行けないねぇ」

ザフィーラ
「……そうだな」

シャマル
「『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります……というより私に出番をおおおおおお！！！！（泣）」

第九十五訓：試練は突然やってくる

突如現れた黒い犬『オルトロス』が登場して来たすぐさまに、銀時達3人を影で取り囲む。
それからしばらくして、起き上がる。

「……ここは……おい、スバル、ティアナ、大丈夫か!?」

銀時が叫ぶと、スバルとティアナは起き上がる。

「う……あれ?」
「ここは?」

銀時の声で起き上がる2人。
だがスバルは銀時の隣にいて、ティアナは何故か円盤型の巨大な柱の中心部にいた。
しかもそれはまるで闘技場になっていて、銀時とスバルは何やら宙に浮いている黒い霧を足場代わりとなって、空からティアナを見つける。

「確か……私達はオルトロスに突如、影らしきもので飲み込まれて……」
「その通り」

思い出しながら喋ると、突如自分達以外の声を聞こえて驚きだす。
すると、突如ティアナの目の前に紫と黒の混色の穴が地面から現れる。
そこから人並みの大きさの柱が一瞬現れて、その場所からオルトロスが現れた。

「ここは我が影の空間によって作られた魔法陣結界。そして我は、汝の力の欲望によって目の前に現れた」
「私の……力の欲望が？」
まさか自分の力の欲望によって、オルトロスを呼んでしまった事に驚くティアナ。
「だが、今の汝はその欲望が失せている。……多少の魔力も少なからずに力も全くない凡才にも関わらず、なぜ力の欲望を失せた？」
今のティアナには力の欲望を捨てている。
さっきの銀時とスバルに教えられた事を実を知って思ったから。
「確かに、兄さんとスバルに出会う前の私は……力を強く求めていた。凡才でも超一流の魔導士になれる事を証明する為に……。けど……それは愚かな行為だと知ったからだ」
兄が死んだ事も、スバルばかりが苦しんでいたのも、己の力不足が原因だと自分自身を責めていた。
だが、そんな事しても本当に強くなれない事を銀時とスバルから教えられた。
何故なら、本当に強くなる事は力を手に入れることではない……自分と仲間を信じる事だ。
「だから、貴方には悪いけど……私は力はいらない。自分自身を信じ、仲間と共に強くなる。それが『フォワード万事屋』の1人、ティアナ・ランスター……いや、ティアナ・S（坂田）・ランスターとしての決意よ！」

自分の信じた道を、今度こそ進む事を決意するティアナ。
そんなティアナを見て、2人は間違いなくティアナは成長していると確信する。
だが銀時はどうしても気になるのがあった。

「……なぁスバル」
「はい？」
「今さっきティアの奴……どさくさに紛れて俺の姓名を自分の名前に入れなかった？」
「…多分、ティアは銀さんの妹義（自称）だからじゃないかな？」

確かに、ティアナは銀時の事を兄と呼んでいる。
だが、けして本格的な義兄弟姉妹になった訳じゃない。
その為、ティアナが銀時の姓名を名乗るのはおかしいのだが、この際まぁ良いやっと溜息吐いて思う銀時。

「……ならば、その決意とやらを見せてもらおう」

すると、オルトロスはとてつもない魔力を体中から放ちだす。
その魔力は下手すればオーバーSランクは達成して、あのゾーマに匹敵する覇気を放っている。

とても今のティアナでは太刀打ちできない相手である。
自分の魔力ランクはB。
Aランク以上もないのに部隊長であるフェイトやなのは級の魔力を持った相手にどう戦えば良いのか理解できない。
だがここで引き下がってはいけないのだ。
判断だけでは何も変わらない。今から自分は生まれ変わるつもりで行かないと、何も変わらない。

「上等よ！！こっちだってそうやすやすと負けるわけには行かないから！！」

ティアナも『クロスミラージュ』を構えて戦闘態勢にはいる。
銀時とスバルは、本来ならば助けようとするのだが……あえて助けないで見守る事にする。

「銀さん……」
「分かってらァ……コイツはティア自身の戦いだ。手出しはしねぇよ」
「はい、そんな事してもティアは喜ばない。何より、ティアナの決意が嘘になってしまう」

これはティアナが自分の決意を試す為の戦い。
助ければ彼女の決意が嘘になってしまう。
なら自分達が出来る事はただ１つ、彼女の勝利を信じる事だけだ。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ティアナは『クロスミラージュ』を撃ちまくり、オレンジ色の魔力弾がオルトロスを襲う。
だがオルトロスは素早く動いて余裕に避ける。

「この程度では当たらん！！」

そして一瞬の隙を付いてティアナに飛び込んで襲い掛かる。
ティアナも危機を感じて体を右横に転ばしてオルトロスの攻撃を交わす。

「ならコレでどう?ヴァリアブルバレット!!」

ティアナは素早く打ち出すと、オレンジ色の魔力弾が先ほどとは大違いの速さで正確に狙っている。

「甘い!」

だがオルトロスはそれを構わず顎を開いて、魔力弾を噛み砕く。素早い反応速度で魔力弾にぶつかる前に豪快に噛み砕いたのだ。

「だったら、これでどう!?クロスミラージュ!!」

≪Ａｔａｒｇｅｔ ｓｈｏｏｔｉｎｇ ａｎｄ ａ ｃｏｎｓｅｃｕｔｉｖｅ［ｈｉ］ ｌａｕｎｃｈｉｎｇ ｂｅｇｉｎ.≫

ティアナの足元からオレンジ色の魔法陣が浮かび上がる。彼女の得意技であり、最強の十八番。

「クロス・ファイヤー・シュート!!」

一斉に8発の魔力弾を放つ。

原因はカートリッジロードをしていない為、そんなに数は多くはない。

だがその威力と速度はかなり速くて威力もある。

しかもオルトロスを囲むように周りを移動して襲い掛かる。

流石に交わすことは出来ないと思われたが……

ヴィン!

突如、影の中にもぐって姿を消した。

そしてオルトロスのいた場所には影が消え、魔弾も全てその地にぶつかった。

「嘘！？」

コレにはティアナも驚きだす。

まさか影の中に移動できるなんて思いもよらなかった。

一体ドコに逃げたのか周りを見渡すと、何か自分の位置に違和感を感じる。

まさか！

危機感を感じたティアナはすぐさまに自分のいた場所に離れるが……

ドカァ！

「きゃあああ！！」

突如、ティアナの影からオルトロスが体当たりしてティアナを吹飛ばす。

「ティア！！」

「影から影へ移動した！？」

ティアナがオルトロスの攻撃を受けた事に思わず叫ぶスバルに、銀時はあり得ないというばかりに驚く。

だがコレが、オルトロスの能力の１つである。

「なるほど……間合いを囲むように魔弾を撃ち、身動きを封じるのが狙いか。だが、我がシャドーワープの前には無意味。影から影に

移動する事を可能にする」

つまり、オルトロスは影が多ければ多いほど有利に立つ生命体。
それはつまり、ここは影が多い為オルトロスが圧倒的有利。

「まじぃな。ここは奴の影で作られた空間。つ事はつまり……」
「オルトロスは、自由自在に影に移動できるって訳だ」

銀時とスバルは圧倒的有利なオルトロスにティアナがどう対抗できるか考える。

「つまり、我は汝の魔弾攻撃は全く効かない！！」

すると、オルトロスは更に己の影の中に消える。
『シャドーワープ』でさらに空間からワープしてティアナに体当たりする。
何度も喰らう訳にはいかないとティアナは避けるが、更にオルトロスの『シャドーワープ』が炸裂してティアナに体当たりする。
しかもとてつもない速さで何度も何度も。
ティアナは仕方がなくオレンジ色の魔力防壁で防ぐが、あっという間に砕ける。

「うぅ！」

ついにオルトロスの攻撃を受けてしまったティアナ。
その隙にとオルトロスは更に連続攻撃を炸裂させる。

「レイン・オブ・シャドーテンペスト」

更に加速して、『シャドーワープ』を連続に炸裂させる。

そして超高速の連続体当たりがティアナを全て直撃させる。

「きゃあああああああああああ！！！」

容赦ない攻撃にティアナは叫びだす。
そしてティアナはボロボロになって倒れていく。

「影の空間で作られた我が影の結界だからこそ出来る無限移動。そして汝はお得意の魔弾は我に当たらず……屈辱的に我が攻撃を受け続けるのみ」

倒れているティアナの前に、オルトロスは勝利した表情を表す。
圧倒的な天敵に脅威なる実力。
正にオルトロスは『影の魔犬』。
しかしそれでも、ティアナは立ち上がる。

「……ふざけ……ないで……よ！」

強引に立ち上がって、オルトロスを睨みつける。

「確かに、以前の私じゃアンタのような圧倒的実力を持った相手に……恐怖を感じるだけだったかもしれない……けど！！それだけで諦めたら、私は本当に自分自身を変わる事はできないじゃない！！！」

そう、あの時誓いだした意志は嘘じゃない！
兄さんやスバルと助けるんじゃなく、共に戦う事を誓ったあの日を無駄にしない為に、こんな所で負けるわけにはいかない！
ティアナはあの日の強い意志を偽りじゃない事を証明する為にも、オルトロスに負けるわけにはいかないのだ。

「……ならば、我はその意志ごと貴様を砕き噛むのみ！！」

オルトロスは『シャドーワープ』でティアナの背後に移動して、彼女の肩を噛む。

だが……

「ぬぅ！？」

突如、ティアナの姿が消えてしまう。

銀時とスバルもコレには驚きだす中、彼女がどこにいるのか探しまわす。

「まさか、幻想魔法！？」

オルトロスはティアナが放った魔法が幻想魔法であったことを確信する。

これぞティアナの幻想魔法『ファントムハイド』。

相手の攻撃を、自分の分身に代わりに受けさせて回避する幻想魔法。

本体はどこにいるのか不思議に思う中、

ガシャン×４

何やら機械音が聞こえた事で、オルトロスは背後を振り回す。

そこにはカートリッジを４発ロードしたティアナがいた。

彼女の足元には、いつもの倍以上の大きさがあるオレンジ色の魔法陣が浮んでいた。

「まさか、スバルのあのやり取りで会得した魔法を……こんな形に使えるなんてね。行くよクロスミラージュ」

≪Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ.　Ｔｈｅ　ｍａｘｉｍｕｍ　ｂｏｍｂａｒｄｍｅｎｔ　ｍａｇｉｃ　ｉｓ　ｍｏｖｅｄ.≫

管理局の『エース・オブ・エース』高町なのはが最も最強として使用する魔法。

及び本来は、教えられて会得するはずの魔法をスバルの予想外なやり取りで会得した究極奥義。

今、自分が放てる最強の魔法。

「スターライト・ブレイカー！！！！」

放たれるオレンジ色の巨大な魔力砲。

なのはのに比べたら劣るが、オーバーＳランク以上の威力は持っている。

オルトロスは『シャドーワープ』による回避に間に合わず、その魔力砲に飲み込まれて消滅したのであった。

「はぁ、はぁ、はぁ」

何とか勝ったと、安心して両膝を地面に付くティアナ。

ティアナの勝利で大喜びするスバル。

「凄いよティア！！あの『スターライト・ブレイカー』を自分の魔法のように当たり前に使えるようになったなんて！！」

「コレぐらい……当然よ！はぁ、はぁ……というより、あのやり取りがまさか役に立つなんて……思いもよらなかったけど……はぁ、はぁ……」

かなり疲れた表情でティアナは呆れる。

銀時もティアナは良くやったと思ってフッと笑う。

だが……ティアナの背後から違和感を感じた銀時とスバルは思わず……

「!?…まだだァァァ!!!!」

「ティア、後ろォォ!!」

2人の叫びにティアナは思わずビックリする。

後ろを振り向くと、突如オルトロスが飛び込んで……

ドカァ!

「ぐぁあ!!」

ティアナに体当たりして拘束する。

一体どうして、オルトロスは無傷でいたのか理解できないティアナ。

「ど……どうして?」

「驚いた。まさかまだあれほどの魔法を持っていたとは。汝の魔力はBランクにも関わらず、オーバーSランクの魔法を放てるとは…だが我がダークイリュージョンを流石に見ぬけられなかったようだな?」

「ダークイリュージョン?……まさか!」

そう、これはオルトロスの幻想魔法。

しかもティアナ以上の高度の高い幻想。

「闇の力で作り出された幻想であり、我と同じ動きと実体感を持つ闇の化身。最も、シャドーワープを最初に放った時に使わせてもらったがな」

「嘘でしょ?……実体化させる程の強力な幻想魔法を……」

正にオーバーSランク級の強さである。
しかも最悪な事に、ティアナの魔力はわずかじか残っておらず、ティアナは絶体絶命である。
それでも諦めたくないが、どうする事もできない。

「汝は我の期待に答えられる程の強さを持っておらぬ様だな。それでも我を起こした罪は軽くはないぞ？その愚かさを悪夢の世界で償うが良い！」

ガブゥ！

「うぁああ！！」
「ティア！！」

オルトロスは、ティアナの左腕を思いっきり噛む。
余りの激痛にティアナは悲鳴を上げて、スバルも思わず叫びだす。

そしてオルトロスはティアナから離れる。
オルトロスに噛まれた腕を押さえるティアナ。
すると、彼女の脳内から何か浮かび上がる。

＊

「こ……ここは？」

それはミッドチルダの町中であった。
しかも何やら騒がしい様子であり、周りを見渡すと火事になってい

るビルや破壊されているビルもある。

「何これ？一体何が……」

一体どうしてこのような状況になったのかを不思議に思うティアナ。
しかも何やら嫌な予感しかしない。
そんな中、とあるビルの屋上で大爆発が起こった。

「！？」

ティアナはその爆発した所を注目すると、漆黒のマントを着た真紅の銃を持つ魔導士がいた。
重傷を負っているようで、素早く脱出する。

「あいつ……何を？」

一体どうしてこの様な事になったかを不思議に思うと、そのビルの屋上に振り向くと……1人の魔導士が倒れていた。
その魔導士を良く見てみると……

「！？」

ティアナは男を見て眼を大きく開き……信じられない表情をする。
男は、茶色とオレンジが少し混ざった混色の髪で、顔つきはティアナに似ていた。
ボロボロになって血だらけになっており、すでに命を落としている。

「あ……ああ……」

その男は知っている。

ティアナが銀時の前に、兄と呼んでいたたった1人の肉親。

「いやあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

信じられないほどに叫びだすティアナ。

認めたくなくても、現実を押し付けられて悔やむ叫び、その男の名を口に出す。

「ティーダお兄さぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！」

その男、ティーダ・ランスター。

ティアナの血の繋がった兄であり、その死がティアナを苦しめた張本人だった。

第九十五訓：試練は突然やってくる（後書き）

過去の心の傷（トラウマ）。

それはティアナの孤独の戦いの始まり。

及び焦りを生み出す存在。

オルトロス

「次回、「妹を助けるのが兄の役目」テイクオフ」

第九十六訓：妹を助けるのが兄の役目（前書き）

フェイト
「何か、ティアナばっか目立っているのと，さりげなく出ているスバルにムカつくんだけど？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

なのは
「フェイトちゃん、私もなの」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

黒神
「……えー、『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まりま……」

フェイト・なのは
『『早く出番をよこせなのォォォォォォォォォ！！！！』』

バァーン！！

黒神
「すぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

第九十六訓：妹を助けるのが兄の役目

「あああああああああああああああああああああああ！！！！！」

突如、苦しみだして悲鳴を上げるティアナ。
体をしゃがみこんで目がしっかりと開いて倒れても暴れだして頭を両手で押さえている。

「どうしたのティア！？ティアァァ！！」
「ううぁ・・・あ……あああああああああああああああああああ！！！！」

スバルは必死にティアナを呼ぶが、彼女の耳にはスバルの声は届いていない。
ただひたすらもがいて苦しむだけであった。

「オルトロス、てめェティアに何しがやったぁ！！」

銀時は叫んでオルトロスを睨みつける。
ティアナの異常な苦しみは、先ほどにオルトロスがティアナの腕を噛んだ事が原因だと見抜く。
オルトロスは銀時の存在に気づいて、何をしたかを言い出す。

「『ナイトメアファング』、我に噛まれた者を脳神経に闇を注入して悪夢を甦らせる。勿論、その者の心の傷（トラウマ）もな」
『『！？』』

ティアナの心の傷（トラウマ）と言えば、２人はあれしか考えられない。

兄のティーダ・ランスターの死、及びその兄の上司の下表評価。
つまり今のティアナは銀時達と出会う前の状況になっている。

「そして、その闇の悪夢と心の傷（トラウマ）の負の感情に飲み込まれた瞬間、こやつの意識は闇に飲み込まれて永遠の眠りにつく」
「そんなぁ！」

それはつまり、ティアナが死んでしまう事になる。
しかも闇の幻影によって作られた悪夢を永久にさ迷う事になる。
闇の化身であるオルトロスだからこそ出来る最強最悪の幻想技。

幻想と言っても使い手によって強力となってしまい、さらには敵をも幻影だけで抹殺できる威力を持っている。
さらにもっと厄介な事は、他人がどんなに声をかけようとその者の耳には届かずに永久にさ迷い続ける。

つまり、今の銀時とスバルは手助けすることも出来ない。

「ティア……てめェ、また過去の苦しみに縛られるってのかよ！？」

＊

「兄さん……う、兄さぁん……」

兄、ティーダの死で涙を流すティアナ。
コレがオルトロスにかけられた悪夢としてでも、兄の死は妹として辛すぎる。
頭ではコレが幻想と分かっていても、辛すぎる幻想である。

「どうして……どうして兄さんが……」

ゆっくりと、屍となった兄に近づく。

だが突如景色が変わり、何やらインタビュー的な管理局のコメントらしきものが始まった。

そこにはティーダのかつての上司がいて、マスコミやカメラマンも多くいた。

「今回の魔導犯罪者は陸戦魔導士部隊によって何とか無事に逮捕できたが、もし陸戦魔導士部隊がいないときに、さらには相手も空を飛べる魔導士だったら、間違いなく捕まえる事はできなかっただろう！！」

凄まじい迫力で今回の事件のコメントを言い出す上司。

しかし次の一言でティアナの心はさらに傷つく。

「その最悪な状況も考えれば、犯人を追い詰めながら取り逃がすなんて、首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだ！！」

「！？」

マジかで聞く上司の卑劣なるコメント。

それを聞いたティアナは両手を顔で隠して体をフルフルと震わせる。

「あ……あぁ……」

これ以上聞きたくない。これ以上何も言って欲しくない。

ティアナの頭の中は恐怖で満ちて思い出したくない悪夢の扉が開かれようとする。

だが上司のコメントは容赦なく進める。

「大事な任務なのに、それを失敗するとは……とんでもない役立たずな部下だ！！」

「！！」

部下に対する冷たきコメント。

そして容赦ない厳しさ。

「あ……ああ……ああーーーーーーーーーーーーー！！！！」

さらにもがき苦しむティアナ。

この時のティアナは、まだ幼くて上司に対する憎しみを抱きだす。

「任務の一つも満足に遂行できない役立たずは管理局の汚点である！！管理局の正義にドロを塗る所業だ！」

命をかけても賢明に任務を果たそうとして亡くなった部下に対して、その気持ちを理解せずに上司は言いたい放題に言い出す。

さらにマスコミ達もティーダの上司のコメントを訊いて、ティーダに対する下表評価をする。

「おいおい、そこまで役立たずだったのかよ。ティーダ・ランスター一等空尉」

「確かになぁ。犯人を捕まえられたのも陸戦魔導士部隊のお陰だしよぉ」

「如何に優秀でエリートだからって、肝心な時に役に立てられないのは」

「本当、エリート意識を持った魔導士は嫌味な性格をしているからあったもんじゃねぇ」

言いたい放題のマスコミの戯言。
頭では分かっていても、最愛の兄の侮辱だけは我慢できなかったティアナは負の感情に押し負けてしまう。

「ううぅ……うあぁぁぁーーー

もしティアナの本当の兄、ティーダだったらこの状況をどうしてたのか思い浮かべなかった。
だがそんな考えはどうでも良い事である。

～～～

あの・・・銀さん・・・もし宜しければ・・・兄さんって呼んでいいですか？

兄さん、桂さん、あの高杉って人と知り合いだったけど・・・・一体どういう人物ですか？

ねぇ兄さん。源外さんってこう言う人なの？

……良かった……2人とも無事でよかった……

……最近、私とスバルの力の差が広がっているような気がして、どうしてこうも力の差が広がっていくんだろうと不安で……

……ありがとう兄さん、スバル……

私も兄さん達と戦う。たとえまだ小さな力でも、皆となら

私は力はいらない。自分自身を信じ、仲間と共に強くなる。それが『フォワード万事屋』の1人、ティアナ・ランスター……いや、ティアナ・S（坂田）・ランスターとしての決意よ！

〜〜〜

この世界に来て、兄役としてティアナと過ごした日々を思い出す銀時。
ティアナの兄はティーダだけじゃない。
自分も、ティアナの……そしてティーダの義兄である。

「あいつが俺の事を兄と呼んでから、俺も徐々に気づかないうちに変わっちまったかもな」
「……銀さん……」

自分はティアナの血の繋がった兄じゃない。
ティーダと違ってまだティアナの全てを知っている訳でもない。
それなのに、ティアナがこんな形で死んでしまう事が嫌と認められなかった。
何故か治まらないモヤモヤ感に思わず……

「立てエエエエエエエ！！！！立ちあがれティアァァァァァァァァ！！」

突如、銀時が叫びだしてティアナを呼ぶ。
オルトロスやスバルも突如の銀時の叫びに驚きを隠せなかった。

「世間がティーダが役立たずや失態だと喚いていようが関係ねェ！！ランスターの弾丸がこんなやわな事で死んでしまって良い訳ねぇ

だろ！！お前等兄妹の魔法が役立たずじゃない事を今ここで証明して、俺達にその強く輝く魂を見せて見やがれぇぇぇ！！」

侍も魔導士も関係ない。
本当に強さは、身体能力や精神的な強さだけではない。
己の魂をドコまで強く、そして美しく輝かせるかで決まる。

「起きてェ、ティアァァァァ！！ここでティアが死んじゃったら、私達と共に戦う誓いが果たせなくなっちゃうよぉ！！」

スバルも必死に叫び、仲間であるティアナを呼び覚ます。

「お前がこんな所で死んでしまったら、死んでしまったティーダが死ぬほど辛ぇ苦しみを背負っちまうだろうがぁぁ！！お前が本当にティーダの……いや……俺の妹なら、過去の呪縛なんざさっさと解いちまって、あの犬っころに倒しやがれェェェェ！！！立てェェェェェェェ！！！！ティアァァァァァァァァ！！！！」

＊

「！？……兄さん？」

一瞬、銀時の声が聞こえたティアナは我に返る。
そして自分の持っている『クロスミラージュ』を見て、今自分がしようとしていた事を思い出す。

（まさか……怒りに支配されたまま、全員を撃ち殺そうと……）

復讐の魔に取り付かれて、この手で人を殺めようとしてしまう所だった。
そしてティアナは自分を取り戻した。

復讐で相手を殺しても、ティーダは生き返らない。
そしてそれは本当の意味でティーダの為にはならない。
ティアナはそう思うと、もう1人の兄である銀時から言われた事を思い出す。

～～

お前の兄貴、ティーダは望んでんのはお前が強くなる事や立派な魔導士なる事じゃねェ……お前自身の幸せだ

それによぉ、現にお前の事を心配してくれている仲間は目の前にいるぜ？

お前はもう1人じゃねぇんだ

～～

自分のために教えてくれた本当に大切な事。
そして自分が求めた本当の強さ。
1人でも強く生きていこうとする自分を、孤独の苦しみから救って

くれた最愛の兄に心から強く感謝する。

（兄さん、ありがとう）

本当に銀時の声が聞こえたのか知らない。
だが銀時の事を思い出したお陰で、危うく自分は修羅の道を進んでしまうところだった。
そして思い出す。自分は、兄の名誉の為に戦ってきた今までの自分と別れ、仲間と共に戦って生き抜く事を選んだ誓いを。
涙を拭いて、過去の憎悪はすっきりと吹っ切れる。

（ティーダ兄さん……私、ティーダ兄さんの分まで精一杯生きるよ）

そして『クロス・ミラージュ』からカートリッジを装填させて構えだす。

（兄さんやスバル……そして、数多くの仲間と共に……未来へ進む！！）

ティアナの足元から、オレンジ色の魔法陣が浮かび上がる。
その魔法陣は今までティアナが放った魔法陣の中でもダントツ的に大きく輝きだしている。
それは、ティアナ自身の魔導士としての成長の証は勿論……己の魂が輝きだしている証である。

＊

そして黒く染まったティアナの体が大きくオレンジ色に輝きだす。

『ナイトメア・ファング』によって汚染された闇の魔力が一気に浄化されたのだ。

「ぬ！？これは……」

オルトロスも予想外な出来事に驚く。

『ナイトメア・ファング』は圧倒的悪夢を見せる自分の最強の幻想魔法である。

それを打ち破ってまで復活する事はまず、不可能に近い。

しかしそれをティアナが打ち破った。

オルトロスは警戒してティアナから離れだす。

「ティアァァァ！！無事だったんだね！！」

「ふぅ～……たくぅ、ひやひやさせる妹だ事だ」

スバルや銀時も、ティアナの復活に安心した。

そして何より注目するべきは、ティアナの持っている『クロスミラージュ』のダガーモードだった。

いつもはナイフ並の長さだが、その長さは圧倒的に長くて……正に刀その物だった。

言うなれば、これは銃剣と言っても良いだろう。

「……何だそれは？それにこの威圧感は一体？」

オルトロスは、ティアナの発動している魔法は今までの中で脅威としか見えない強さを感じている。

しかもその魔力はＡＡＡランク以上はあり、尽きかけの魔力で一体どうしてこれほどの魔力を出せるのか理解できなかった。

（しかも、先ほどより目付きが変わっている！！この者は一体！？）

「オルトロス……散々と私に嫌な夢を見せてくれたね」

オレンジ色に輝く魔力刃を、オルトロスに向けて構える。

「このお礼は、きっちりと倍以上に返させてもらうわよ！！！！」

第九十六訓：妹を助けるのが兄の役目（後書き）

はやて
「おお、ティアナのパワーアップかぁ……よっしゃ、じゃあもっと萌えるバリアジャケットを」

ヴィータ・シグナム
『『作らんで良い！！！（怒）』』

ドカァ！

はやて
「のぎゃあああああああああああああああああ！！！！」

ザフィーラ
「……次回、『こだわりをすれる事で先に進める事はある』テイクオフ」

第九十七訓：こだわりをすれる事で先に進める事はある（前書き）

今回は『第八十九訓：たまには本編でもゲストを出したほうが面白い』でゲストとして登場させた伊達政宗と真田幸村が美少女かしてしまった姿を紹介します♪

『巨乳筆頭』　伊達政胸（だてまさむね）　声優：後藤麻衣

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の伊達政宗が女体化してしまった姿。
容姿は、蒼髪のロングヘアーで右眼に眼帯をしていて、青い武将の鎧を着ているが下半身だけはミニスカート並みの短さであり、胸の大きさは巨乳でグラビア級、さらにはスタイル抜群。
何より左目の瞳に輝いているサファイアと思わせる色取りが綺麗で、はっきり言って美女の中の美女。
両脇に３本ずつ刀を身につけている。
その美しさの余りに、奥州一の美女として注目されている。
胸の大きさから『おっぱいドラゴン』または『巨乳美女』として言われている。
戦場で振るう一刀流と六爪流での剣舞は美しく、敵も魅力されてしまう事から『青き剣聖龍』とも呼ばれている。
英語もペラペラ喋れて美しく喋りだし、奥州の農民達からも強い信頼を抱いている。

『天女絶美』　真田優希邑（さなだゆきむら）　声優：平野綾

『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の伊達政宗が女体化してしまった姿。
容姿は、髪のツインヘアーで眼はルビーの如くに真紅に輝いており、赤い衣を着ていて首飾りと六文銭のペンダントをしている。
背中には2本の槍を背負っていて、巨乳を包帯で隠していて、お尻の部分までしか隠していない紅いミニズボンを着ていて、美しい美脚が特徴である。
武田軍の誇る可憐なる美女であり、日本一の美少女と注目されており、『可憐なる虎』と言われている。
政胸とは『美の竜虎』と言われる程のライバル関係。
二槍を振るい、体術を組み合わせて戦うその姿は敵をも魅力させてしまう。
しかし、大の恥ずかしがりやでウブな生活をしており、己の胸を触れるだけでも気絶してしまうほど。
明るくて元気な娘であり、甲斐の人々からも親しまれている。

ティアナ
「て、ほとんど中二設定的な説明じゃないの！！こんな嘘紹介を本当に信じてしまう人がいたら取り返しの付かない事になるわよ！！！！」

黒神
「と言う訳で『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

ティアナ
「無視するんかいいいいいい！！！！！」

第九十七訓：こだわりをすれる事で先に進める事はある

オルトロスの幻想魔法を見事に打ち砕いたティアナ。
しかも2つの『クロスミラージュ』の先に、何やらオレンジ色に輝く魔力で精製された刀が出ている。

「……あれは……刀？」

それを見たスバルは、まさかティアナが刀を精製する魔法を使用することに驚いている。
しかも見るからに打撃系の魔法であり、ティアナが使用する魔法にしては珍しい事である。

「今まで射撃魔法を中心に戦っていたティアナが、刀を精製する魔法を使うなんて……」

これにはスバルも以外に驚きだす。
しかしどうしてティアナがその様な魔法を使用するかは、銀時は理解する。

「ティアの奴、オルトロスだけじゃなく過去のトラウマに悩まされた自分に勝つ為、射撃のこだわりを捨てちまいやがった」

それがティアナの決意だと銀時は見抜く。
しかしそれだけじゃなかった。ティアナは今はティーダの妹だけではなく、銀時の妹でもある。
義兄の様な本当の強さを持った侍の強さを参考にして、新たなる魔法を会得したのだ。

「……射撃魔法を捨ててまで精製魔法で魔力剣を生み出すとは……
だが」

オルトロスは影から影に移動して、ティアナの背後を襲い掛かる。

「いかに新たな魔法でも、使いこなせれば不可……！？」

スパァーン！

オルトロスが叫びながら喋っている所、ティアナが『クロス・ミラージュ』を素早く振るう。
速さは侍の剣裁きほどじゃないが、銃剣に比べれば速い。

「ぐぅ！？」

紙一枚で交わしたオルトロス。
だが額にわずかな斬れ後がでている。

（反応しただと？しかもなんだ、今の速さ）
「ついに尻尾を捕まえた！！」

反撃開始と、ティアナは『クロスミラージュ』の魔力刀を振り続ける。
剣術とは言いがたいが、ナイフ裁きのような動きは少しずつオルトロスに直撃している。
オルトロスはただひたすら避けるしかなかったが、全部交わしきれずに少しづつ当たっている。

「ぐ！」

オルトロスは『シャドー・ワープ』で逃げて遠くから離れる。
ティアナは『クロスミラージュ』を遠く離れたオルトロスに向けてトリガーを引くと、

カチャン！

バァーン！

「！？」

突如、オルトロスの手前まで瞬間移動する。
それはまるでスバルの刹那の瞬間移動のように。

「悪いけどこれはただの精製系魔法じゃないの！！どんな物でも切り裂けるのは勿論、魔力刀の刀身の先に向けている遠い相手からも、銃の引き金（トリガー）を引くことで瞬間移動出来る魔法！それが私の……」

ティアナは『クロスミラージュ』を構えて、

「クロス・ファイヤー・セイバーだ！！」

素早く同時に振り出してオルトロスを切り裂く。

「ぐおぉぉぉぉぉぉぉ！！！！」

かなり深く切り裂かれた為、叫びだすオルトロス。

「おおぉ！」
「ついにオルトロスに一撃を喰らわせた！！」

銀時は驚きだしてスバルは喜んで言いだす。
しかも遠距離船の欠点をも埋め込みだす魔法の上に接近戦にも優れている。
ティアナだからこそ出来る魔法だ。

刀のような切れ味を誇る魔力刀に、引き金を引くことで剣先に向けられている人物に向かって瞬間移動を可能にする必殺魔法。
それがティアナの新魔法『クロス・ファイヤー・セイバー』である。

「ぐぅ……まさかここまでやるとは……」

射撃系を得意とするティアナとは思えない戦術。
以前にティアナは月詠から接近戦対策にと訓練を受けた事がある。
その時に使用した魔法が『ダガースラッシュ』である。
そしてその訓練が今、オルトロス対策に役立っている。

「だが！！」

パキィーン！

突如、オルトロスの尻尾が鞭のように長くなってティアナの『クロスミラージュ』の魔力刀を打ち砕く。

「！？」

さらに尻尾をヘビのようにと動き出してティアナの首元に縛り付ける。

「ぐうぅぅぅぅぅ！！」
「まだこんな力を残していたとは……だがこれで終わりだぁ！！」
尻尾を強く引っ張ってティアナを絞め殺そうとする。
いや、そんな生易しいものではない。彼女の首の骨をへし折ってやるつもりでいる。
それでもティアナは最後まで抵抗して『クロスミラージュ』をオルトロスに向ける。
「無駄だ……貴様の魔力はもうないであろう？なら魔力弾は……」
「……まさか……あの改造が……こんな所で……役に立てるなんて……ね！」
するとティアナは親指で『クロスミラージュ』の『X』部分を押すと……
ピュゥー！！
「なっ何ぃ！？」
突如、銃の先からオレンジジュースが出て来てオルトロスの両目に掛かる。
読者の皆なら気づいているだろうか！？
そう、これは『第四十七訓：やる気を起こしたい場合はお気に入りのＢＧＭを流すのが一番』で源外がティアナの『クロスミラージュ』

を改造したオレンジジュース入りの水鉄砲の改造である。

まさかの危機一髪の時に役立てるなんてティアナ自身も思いもよらなかったであろう。

そして尻尾がゆるくなった所で、ティアナはそのまま強引にと、

「これで終わりよ！！」

ドカァ！

「ぐはぁあああああああ！」

『クロスミラージュ』を棒扱いに振ってオルトロスを吹飛ばす。

渾身に振った為か、オルトロスの体は動かなくなった。

『『……え？』』

予想外な勝ち方に銀時とスバルは唖然としている。

ティアナ自身は勝利した事に安心してホッとしている。

しばらく続く沈黙間に、銀時とスバルは我に帰って、

『『……お……オレンジジュースで勝っちゃったんだけどォォォォオオオ

予想外な結果で驚きを表してしまう。

「こんなのってありかよォ！！てか何！？源外の爺さんの役に経たねぇ改造が一番大事なところで役立っちゃったんだけどォォ！！？」
「何でオレンジジュース！？てかデバイスにジュースを出せたっけ！？どうなってんのォォォォ！？」

予想外な展開に2人は驚きを隠し切れなかった。
とりあえず勝ったから良いと2人は考える。

（なんか、全然シリアスっぽくない勝ち方なんだけど！？てか何この気持ち！？）

あまりにもあり得ないというよりも真剣に勝負した気分が水の泡にされた気分のティアナ。
しかしそのお陰でまさか自分の命も助かるとは思いもよらなかったであろう。
すると突如、オルトロスの体が黒い霧となって宙に浮かび上がる。

「そんな！！」

もう魔力がないのにオルトロスはまだ倒れていなかった事に青ざめるティアナ。
銀時とスバルもオルトロスのしぶとさには流石にビックリする、しかしオルトロス自身は戦う気力を失っている。

「どうやら、我は汝を過小評価しすぎた用だ」

ティアナの強さを見縊りすぎたとオルトロスは言う。
その発言にティアナは勿論、銀時とスバルも意外そうな表情をする。

「我はこれまで数多くの魔導士達を見てきた。しかしどの魔導士も愚かな者ばかりでくだらぬ思いしか見えん。本当の強さを知らぬくせに力を求めるなど笑止千万……だが汝は違う。我がナイトメア・ファングの悪夢を自立で打ち砕いた強き精神に強い想い。確かに本物のようだ」

「オルトロス……」

「いずれにしろ、我は汝の強さを認めよう。……その大切な仲間とやらを護りたいなら、我が力を受け取るが良い」

オルトロスはティアナを認め、己の存在全てを魔力と化してティアナを包み込む。

すると徐々にその魔力がティアナに注入されて、彼女の魔力は大幅に上がる。

（凄い力を感じる……そして感じる……オルトロスの闇の力、そしてその膨大な魔力）

オルトロスの全ての魔力を収束すると、ティアナの魔力は大幅に増幅した。

今の彼女の魔力はＡＡＡ級に達成する。

これならば強力な魔法によるデメリットも減少されるだろう。

「……ティアの気持ちが野郎に届いたようだな」

「良かったァ」

何はともあれ、オルトロスがティアナの魔力と化したとなれば……

この空間からも脱出できるだろう。

そして突如、白い光が発生して銀時達を包み込む。

「グォォォ！眼が眩しすぎるゥウ！？」
「目が見えな～い」

余りの眩しさに2人は目を閉じる。
すると、オルトロスによって作られた黒い霧の足場も消えて、銀時達は当然の如く落下する。

『『あァ～れェ～！！』』
「えぇぇぇぇ！？」

ドカァ！！

落下してきた2人が落ちた場所は、ティアナのいる場所であった。

＊

そして3人は元いた訓練場に戻ってきた。
そこにはオルトロスが落下した跡もあり、3人はそこを中心に倒れている。

「……んん」

ティアナは2人より気が付き起き上がろうとする。
だが、自分の唇に違和感を感じで気になって仕方がなく眼をゆっく

りとあけると……

「！！？」

そこには予想外な展開となっていた。

（……急激に落ちてしまったから痛ぇな……てかさっきから銀さんの唇から妙な違和感を感じるけど……これってもしかして……）

少し嫌な予感をした銀時だが、ゆっくりと眼を開けると……目の前には驚きの表情で顔を真っ赤にしているティアナが間近でいる。そしてこの状況を頭の中で思い浮かべたのは、自分の唇がティアナの唇とくっ付いている事であった。

「あららぁぁぁぁぁぁぁ！？わ……悪ぃティア！！まさかのアクシデントで……そのう……」

驚いた銀時は、慌てて起き上がってティアナに強い謝罪を入れる。だがティアナは一瞬ぼっーとして、あとから気が付く。そして顔がトマトのように真っ赤になってしまい……

「あ……あぁぁ！！／／／」

「……あのう、ティア？」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！／／／」

と思わず、『クロスミラージュ』で『スターライト・ブレイカー』（フルパワー）を撃ってしまう。

「あ”あ”あ”

”あ”あ”あ

原因は事故とは言え銀時とのキスにあった。

（やっちゃったァァァァァ！！！兄さんと、兄妹なのに兄さんとキスやっちゃったァァァァ！！！初めてのファーストキスなのに！？）

義兄妹とは言え、兄の銀時と接吻してしまった事に顔を真っ赤に染めてしまうティアナ。

「……お兄……ちゃん／／／」

銀時に対する恋がさらに上がってしまった。

『ランスター編・完』

第九十七訓：こだわりをする事で先に進める事はある（後書き）

とりあえず黒神はさん所の本多忠勝とスバルに家康の誤解を解くために必死に手紙を書いた。
そして今日、２人の返事が来たのであった。

『私、本多忠勝は貴方の言葉で誤解を解けました。今すぐに家康様の所に戻ります』
『やっぱりそうだったんだぁ♪黒神さん、家康さんをあんまりからかわないでくださいね♪それと、そっちの私によろしく言っておいてください』

黒神
「よ……よかったぁ！！あ、と言う訳で次回は『銀八先生コーナー』をします」

桂
「次回、「眠れない時には羊を数えるべし」テイクオフ！！」

第九十八訓：眠れない時には羊を数えるべし（前書き）

黒神
「ついに……ついにきました！！あの銀魂がついに……来年の春に放送再開します！！」

銀時・桂・神楽・エリザベス・月詠
『『何ィィィィィィィ！？』』

放送再開情報を聞いて驚き喜ぶ銀時達。

銀時
「うっしゃーーーーーーーーー！！再放送だぁ！！」

桂
「ついに我等の時代が復活したぁぁぁぁ！！！」

神楽
「うほほーい！！ヒロインの私が大幅目立てるアルゥゥゥゥ！！」

エリザベス
「マジ嬉しい！！」

月詠
「来たんじゃ来たんじゃ来たんじゃーーーーーーーーーー！！！」

マジで喜んでいる銀時達。

そして彼等の伝説は今ここに始まる。

フェイト

「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』始まります」

第九十八訓：眠れない時には羊を数えるべし

機動六課　夜中

それは誰もが寝ている時間である。
そんな中で1人、眠れない少女が1人いた。

彼女はヴィータ。
『ヴォルケンリッター』の1人で、子供っぽい外見だが大人である。

「何か、今すんごく失礼な事を言われてしまったような……」

などと誰かにツッコミを入れるかは置いといて、彼女は今強い悩みを抱えている。
それはここ最近の寝不足である。
以前はぐっすりと眠れたが、ここ最近忙しい為か早く寝る事ができない。

それが原因で元気が徐々に薄れてきている。

そこで一応、桂に相談悩みとして話しておこうとする。

「入るぞヅラァ」

ヴィータは桂の部屋に入る。
すると……

「ぬ”～ぬ”～」

そこにはベットに座りながら目ん玉開いてぐっすりと寝ている桂がいた。

（どんな寝顔してんだコイツゥ～～～～～～～～～！！！？）

いくらなんでもあり得ない寝顔にヴィータは心の奥から盛大にツッコむ。

ちなみにエリザベスは桂の隣のベットで寝ていた。

（何かヤベーよこれ！？瞼半開きは聞いた事はあるけど全開だよ瞳孔が！！眼球カッサカッサじゃねぇかこれぇ！メッチャ見ているんだけど！？私を見ていねぇかこれぇ！！カッサカッサの眼球でメッチャ見られてんだけどォォォォォ！！！）

どうやって寝ればそんな寝顔になれるのか理解できなかったヴィータ。

（つうかなんて紛らわしい寝方してんだコイツ！！）

「まぁ寝ているならまたで直して……」

「ぬ”ーぬ”ー」

さらにいびきが大きくなっていく。

その様子にヴィータは桂の顔を見て青ざめている。

（……あれ？やっぱコレ起きれねぇ？……コレ本当は寝たフリをして起きていねぇ？やっぱ起きてない？）

「……か……桂さぁ～ん？」

「う……うーん？」

ヴィータが呼ぶと、桂は起き上がった様子で眼を少しこする。

「ヴィータ殿か、どうしたこんな夜中に？」
（やっぱ寝てたのかよ！！……まぁいいや）
「……実は、ちょっと悩みを抱えてなぁ……」

＊

ヴィータはここ最近の寝不足に悩んでいた事を桂に話す。
どの様にすればちゃんと睡眠取れるのかを考えていたが、中々思いつかない。
そこで桂に相談しに来たのだ。

「でぇ、お前ならなんか良く眠れやすくなる方法を知っているかと……」
「ぬ”～ぬ”～」

ヴィータが話を進めるが、桂はまた眠っていた。
しかもクラウチングスタートの体制で。

「って、何寝てんだテメェ！！」

コレにはヴィータも流石に怒りだして、額に青筋を浮かべて怒鳴りだす。

「人が悩みを抱えていて話してるってのに何1人で気持ち良さそうに寝てんだ！！と言うよりなんでまた眼球開いて寝てんだ、しかもクラウチングスタートしながらかよぉぉぉぉ！！どんだけクールボケですまれりゃ気がすむんだヴラァァァァァァ！！！！」
「～～ヴラじゃない…桂だ……ぬ”～」
「寝言でまでそう言うか！？つうかどんだけ突っ込ませれば気がす

むんだァァァァ！」

ドカァー！！

『うっせぇーーーーーーーー！！（怒）』

「ごふぇらばぁ～～～～～～～～～～～～！！！！！」

ヴィータの叫びが大きかったのか、不機嫌そうにエリザベスが起き上がってプラカードを大きく振ってヴィータを吹飛ばす。

「……ううん、なんで私がこんな目にぃ～（涙）」

寝不足の上に豪快にツッコまれてさらには損なめに合うことに、ヴィータはどうしてなのかと涙を流すと。

「その悩み、私が解決してするな！！」

と豪快にドアを開けて現れたのは、機動六課の部隊長こととはやてであった。

「はやて！？」

はやてが現れた事に驚くが、それ以前に彼女なら自分の悩みを解決してくれると確信した。

「ここ最近のヴィータの元気のなさは寝不足にあったんやぁ。せやけど寝不足やったらコレが良えで」

とはやてはある物をヴィータに渡す。

それははやて手作りのホットミルクであった。

「噂じゃ暖かいミルクは眠気には最適だそうやで？　しかもヴィータ好みに砂糖を多少入れておいたからな」
「は……はやてェ」
まるで母のような優しさにヴィータは思わず涙を流す。
そしてゆっくりと味わいながらホットミルクを飲む。
「ありがとうな、お陰でゆっくりと眠れるような気がして……」
ぐぎゅ～～～～！！
「おぉ！？」
突如の腹痛に、ヴィータは腹を押さえる。
しかも異常なまでの痛さで苦しさ倍増である。
「ぬぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」
大量の嫌な汗を流しながら青ざめるヴィータは急いでトイレに向かう。
「ヴィータ、どうしたんや一体！？」
はやては突如のヴィータの苦しみに驚き、急いで駆けつけようとしたが、
「八神殿、もしやその牛乳は牛の顔が描かれている瓶入りのでは？」
いつの間にか起きていた桂が、はやてに訊きだす。

「そうやけど……それが何か問題でも……」
「……八神殿…それはもしや、以前に8ヶ月間ほったらかしてしまったから腐っていると部下達に忠告した牛乳ではないのでは？」
「……あぁーーーーー！！」

腐りかけたミルクを飲ませてしまった事にやってしまったと青ざめるはやて。
そして女子トイレには、腐ったミルクで苦しんでいるヴィータの悲鳴が響き渡っていた。

＊

何とか無事に済ませたが、ヴィータの体はかなり痩せ細っている。
コレにははやても土下座して強く謝った。
しかもさっきより眠気がなくなった事で、完全に寝不足になってしまう。

「うーむ、これほどまでに眠りに悩んでいたとは……ならばヴィータ殿に話しておこう」
「え？」

桂はある話を話しべきだとヴィータに聞かせようとする。

「ヴィータ殿は本当に大切な眠りとはなんなのか知っているか？ただ単に体を横にして眼を瞑っているだけで本当の眠りが手に入れると思ったのか？」
「そ……それは」
「そうだろ。眠りの本当の目的とは、己の疲労を打ち消して睡眠を取るだけじゃない。健康に己自身を大切にして、己の身の安全の為

に行う行為にある」
「己の身の安全…」

いつもより真剣に説明する為か、ヴィータは桂の話を聞き入れる。

「そうだ！そしてそのくり返しを行った時、ヴィータ殿は短絡的な睡眠を取っただけではない！そう、明日を生きる為に睡眠をとっているのだ！！」
「！？」

たかが眠りにそんなに意味深い事であった事に驚くヴィータ。
はやても初めて聞く為驚きの表情をして、エリザベスは頷く。

「かつて、真の眠りの意味を知ったこんな男がいた」

～～

チリリリリリリリリ！
目覚まし時計が鳴って、男はゆっくりと起き上がる。

男は高校生。
ごく普通にいつも同じ時間に起きて、いつも同じ時刻で学校に出発し、いつも同じ感じで勉強を励む。
無遅刻無決起。
学校の成績は優秀、絵の描いたような真面目な男だった。
さらに疲労を感じないためか、いつも休まずに勉強して掃除しさらに健康運動も励んでいる。

そして家では夜遅くまで宿題して他の高校生より遅く寝ていた。
それにも関わらずに男は己を無視するかのように朝早く起き上がるなど、はたから見れば感情の持たない人形の様な男であった。
しかし、男はそれを辛いとは思わない。
むしろ、楽と言う存在に気づいていなかった。

それは、寒さ厳しい冬の季節。
男はいつも変える前に健康運動をしていた。
しかし突如、予想の出来ない出来事が起こった。
それは、突如サッカーボールに直撃してしまったからだ。
さらに不運な事か、男は坂から転んで池に落ちてびしょ濡れをしてしまった。

男はそれを気にせずに、自分の不注意のせいだとしてサッカーボールをぶつけてきた男を許した。
家に変えると、流石にびしょ濡れであれば宿題をするよりも先に風呂に入った。
身を暖めて夕食を終えると、今日はいろんな出来事が合った為か強い睡魔が襲ってきて、コレでは宿題が出来ない。
ならばと男は明日の朝に宿題をすれば良いと考え、いつもより早く寝た。

そして男が目を覚ますと、男は起き上がっていつもと違う体の感覚を感じた。
何かの重みを背負っているような辛さは感じずに、むしろ体が軽くなった気分だ。
男は自然的に、窓を開けるとそこには……

青い空に輝きだす美しい太陽であった。

そしてその太陽を眺めて男は知った。
いかに自分がどれ程己を大事にしていなかったか。
いかに自分が己自身として生きていなかったか。

そして男はその日だけ宿題をやらずに教師に叱られた。
だが男はそれを代償として、本当の眠りの大切さを知った。

そう、彼はその時ようやく……明日を生きる為に必要な真の眠りに気づき、真の眠りを手に入れたのだ。

「メェ～～～～」

桂の説明が終えると、男の顔は何故か……羊となっていた

「何でだよぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

最後のナレーションで、ヴィータが怒鳴ってツッコミだす。

～～

「うぉおおおおおおおおおお！！」
『うぉおおおおおおおおおお！！』

はやてとエリザベスにいたっては興奮している。

「おいィィィィィィィィィィ！！そこで感銘受ける所じゃねぇだろォォォォォ！！大体てめェの回想無駄に長ェよ！！つうかなん

で真の眠りを知った男の姿が羊なんだよ!?」
「いやぁー、昨日メガドライブで『獣王記』を徹夜でやってたから」
「理由になってねぇよ!!つうかそんな古ィゲームメーカーよく持ってんなおい!!」

血管を浮かべて怒鳴りだすヴィータ。
彼女もティアナに引けをとらないツッコみ使いである事は間違いないだろう。

「桂さんも!?…実は私も一週間前からにはまってやっとたんや」
「はやてェェ!?ドコでメガドライブ手に入れたの!?てか部隊長がゲームって管理局にバレたらとんでもねェだろ!?」

部隊長なのに仕事ほったらかしてゲームやるなど大問題である。

「せやけど、ラスボスの『●ガ・バン・ベイダー』が中々倒せへんから夢中になって寝不足になってしまうんやけど、それでも諦めきれずに攻略本を探してるんやけど見つからへんのや」
「あのボスか…昨日ようやく俺が倒したぞ?こんど八神殿のゲームでも攻略教えてやろうか?」
『きっと便利になる』
「ほんま、それなら助かるわ♪」

「いい加減にしろよ!!何で真の眠りの話から『獣王記』の話になってんだよ!!私が言いてェのはどうして真の眠りを知った男の姿が羊なのかだよ!!ちゃんと答えろよヴラァ!!」

ヴィータの盛大なツッコみで、3人は我に返って話を戻す。

「いや、チョー眠そうなイメージあるじゃん羊」

「つまり羊を数えて寝ろって言いたいのか！！？だったら最初からそう言えよややこしい！！！！」

＊

と言う訳で桂、エリザベス、はやて、ヴィータの４人は同じ部屋で寝て羊を数えて寝るを実行してみた。

「と言うより八神殿？何でお主もここで？自分の部屋で寝ないのか？」

「せやなぁ……乗りって感じで♪」

わけの分からない理由だが、桂は何故か納得した。
ちなみに桂はベットをはやてとヴィータに譲って、エリザベスと共にドコからか出したか布団で寝ている。

「とりあえず、一緒に数えてみるな。そうすれば眠くなるやろうし」

「ああ」

「承知した」

『はい』

はやての提案に３人は同時に返事をする。
そして明かりを消して、４人は羊を数える。

「ほな行くな」

『『羊が１匹、羊が２匹……』』

桂達はほぼ同時に羊を数える。
これで眠く慣れるとヴィータは安心する。
そして羊を７匹数えてきた所であった、

『羊が８匹、羊が９匹、羊が１０ひ……』

～～

とある高校のグランド。

１人の少女がグランドに体育すわりをして土を見つめている。
目の前にあるサッカーボールをゴールに向かって蹴らずに。

「おい、何やっているの夏子の奴？」
「速く蹴ってよ！！後つっかえてんだからよぉ」

女士達はブーイングをして叫びだす。

「どうした、夏子」
「足でもくじいたんか？」

教師の桂とはやてが急いで走って夏子のところに向かう。
だが夏子の一刺し指には、てんとう虫がいた。

「エへ、てんとう虫いたから」

それを見た２人はホッとして笑う。

「…ったくお前って奴は」

宮松夏子（みやまつなつこ）
御戸治流雫学園（みっどちるだがくえん）のサッカー部のエーススストライカー。
いつだってアイツはそうやって笑っていた。
本当は誰よりも早く走れてゴールを決められるのに、そうやっていつも笑っていた。

そして女子サッカー部を全員体育館に集めた桂とはやて。
レギュラーの選抜を発表していた。

「以上、今回の大会スタメンはこの11人で行く、一回戦はあの優勝候補の一角、名監督坂田銀時率いる銀魂高校（ぎんたまこうこう）だ」
「あんた等3年最後の大会やから、勝っても負けてもくいのない様に頑張ってな」
『『はい！！』』

はっきりと返事をする生徒達。
そのメンバーは明らかに、リリカルなのは組のメンバーそっくりな人物である。

「まさかあの夏子先輩がスタメン落ちとは」
「最近練習に着てないからでしょうか。今日も来ていませんし」
「何か男が出来たようですって」

明らかにシグナム、シャッハ、カリムをモデルとした人物が話し合っている。

「でも良かったんじゃない秋咲先輩。普通にやったって夏子先輩に

敵うはずが……」

「ちょっと、声がデカイわよ！！」

今度はクアットロとウーノらしき人物の戯言である。

福嶋秋咲（ふくしまあきこ）

御戸治流雫学園（みっどちるだがくえん）のサッカー部でも指よりの実力者。

夏子とはライバル関係であり、プロ女子サッカー選手を目指している。

だが夏子の実力と才能に、いつも負けて二番手扱いされている。

その為、エーススストライカー番号の証である『１０』をいつも取れない事を悔やんでいる。

「桂先生、はやて先生、ちょっと話いいですか？」

３人は体育倉庫で話をしていた。

「どういうことですか！？何で夏子がスタメンにいないんですか！！ウチのエーススストライカーでしょ！！」

秋咲は『１０』と書かれたサッカーユニフォームを渡そうとする。

「私、夏子のおこぼれでスタメンのユニフォーム着たって嬉しくありません。コレ返します」

秋咲にとって納得いかない結果。
だが桂はそんな夏子に真実を言い出す。

「退部(やめ)たよ、アイツ」

桂の言葉に、秋咲は驚きを表す。

「夏子(あいつ)のポジションをやれるのはお前しかいない」
「それは3年間夏子と競い合っていたライバルのアンタが一番知っとるやろ」

桂とはやての2人が判断した結果。
それは夏子の思いを全て秋咲に託すことだった。
いや、ライバルの秋咲しかできない事である。

「だからこそ…勝って奪いたかった。親友だからこそ、戦って勝ち取りたかった」

そう言って秋咲は去っていく。

(秋咲…すまないな…)

一方の夏子は雨の中、ヴァイスと思われる人物と話しをしながら道を歩いている。
そんな2人の前に、秋咲が現れて夏子に近づく。

パシィン!

思いっきり彼女の頬っぺたをビンダで叩く。

「あんた何かに、私…負けないから！絶対あんたよりたくさん点数いれて、あんたより活躍して試合に勝ってやるんだから！！」

そう言って秋咲は夏子に向かって言い出すとこの場から去っていく。

（秋咲、……夏子なァ……夏子……お前の身体の事、知っちまったんだよ）

電柱にもたれて心臓を左手で押さえ、苦しみだす秋咲。

彼女は心臓の病気を抱えている。

（本当は夏子、誰よりも何よりも）

「いてて、叩かれちゃった」

夏子は叩かれたところを笑いながら抑えると、その瞳から涙を流す。

（早く、走りたいんだよ）

＊

そして、御戸治流雫学園でのグランドでの試合。

優勝候補銀魂学園の女子サッカー部も来ていた。

しかも今回は御戸治流雫学園の校長であり桂の親友でもあるエリザベス校長も見学しに来た。

だがここで問題が起こった。

「オイ、秋咲はまだか？」
「もうすぐ試合やっと言うのに、何やってんやあの子」
桂とはやてはどうしてこないのかと思う中、突如フェイトとなのはらしき人物が急いでやって来た。
「先生ェェ！秋咲先輩のお母さんから今電話が！！」
「先輩ここに来る途中、倒れて病院運ばれたって！！」
『『！？』』
2人の女子サッカー部からとんでもない事を聞かされて驚く2人。
一方夏子は、それを知ったのか必死に秋咲のいる病院に向かって走り出す。
病室
「…バカ。アンタ…来るトコ間違ってんじゃないの」
ベットの横で弱弱しく言い出す秋咲。
秋咲の手を握る夏子は、ポタポタと涙を流す。
「……間違っていない」
その表情は笑っていても涙を流す悲しさは偽れない。
「ユニフォーム…とりにきただけよ」
「それでいいの」

秋咲は弱弱しくなった体を無理矢理動かしてでも、自らの手で夏子にユニフォームを渡す。

「それでこそ、私の親友（ライバル）」

＊

夏子が去った後、秋咲は自分の本心通りに独り言で言いだす。

「夏子……私…本当はアンタと同じユニフォーム番号を競い合ったこと…後悔しているんだ。私…ホントは…ライバルなんか…そんなのどうでもいいの…」

そして彼女の瞳から涙が流れる。

「…ただ、アンタと…アンタと…一緒に…」

同じコートに立ちたかった…

一方試合開始まで追い込まれた桂とはやての前に、『１０』のユニフォームを着た夏子が決意を持って現れた。

そしてすぐに試合が始まる。

ピィー！！

その夏…本当の優しさを知った夏子（かのじょ）は、誰よりの何よりも……

速く、走った

～～

『『ひ…ひ…ひつじが…１０匹ィィィ！！（涙）』』

涙を滝のように流しだしながら羊を数えていた桂とはやて。
その隣には『か…感動ゥゥゥゥ！！』と書かれたプラカードを持って涙を流すエリザベスもいた。
そしてヴィータも……

「……（ぐす）」

２人の羊数えからナレーションの話に涙を流して感動しているが、それ以上に……

「だから長エよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

気になってしまい、結局朝まで続いた為…寝不足になってしまった。

銀八

「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

銀八
「はいと言う訳で久々にやってきました。お久し振りのみんなの主人公、坂田銀八先生でぇ～す。そんで今回のアシスタントは、歌舞伎町から飛ばされた四天王ごと……」

お登勢
「スナック屋の店長及びあのバカの大家をやってるお登勢だ。めんどくさいけど、アシスタントに選ばれたら、しょうがないからやってやるよ」

銀八
「では早速行きます。まずこの人、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
?戦国ＢＡＳＡＲＡ３の立花とキャロ（ジェイソン化で第八十四訓の方）が戦ったらいったいどちらが勝ちますか。ちなみに二人の武器は雷斬です。
?ヴィヴィオに聞きます。今回の話で悪魔のようなヘルメットを被ってたけど、それを被ることに抵抗はありませんでしたか。』」

お登勢
「噂には聞いてたけど、早速とんでもない質問をやってきたなオイ」

銀八
「てな訳でズバリ答えます。実力以前に恐怖的ならキャロが圧勝し

ますね?ジェイソンだから……」

お登勢
「訳わかんねぇよ!!」

ヴィヴィオ
「うーん、でもあれがパパのかぶるヘルメットだから平気だよ♪」

銀八
「ヴィヴィオちゃん、ありがとう。と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ぃ、質問ペンネーム『桜』さん『質問です。銀さんはなのはやフェイトとコンビネーション技を作ったりしないんですか?後、ストーカーゴリラに惚れる女子は出て来ますか?』……ズバリお答えします。銀さんの戦いのスタイルは主に身体能力のみの戦いですが、フェイトとなのはによれば可能だと思います」

お登勢
「(スゥ〜)…あの天然パーマにあんな可憐な娘さんが恋路を抱くなんて……驚きだねぇ」

と煙草を吸って、口から煙を吐きながらお登勢は呆れて言い出す

銀八
「全く羨ましいぐれぇに悔しいよこんチクショー。んでもう1つの質問は、可能性ほぼ0に近い。てなわけで『桜』さん、廊下に立っていなさい」

お登勢
「次ぃペンネーム『烈火竜』さん『アギト（真選組Ｓｔｒｉｋｅｒｓ）がお登勢さんに質問というより、相談です。
『友達（イクス）が好きになった人（ロリ方）に唇を奪われ、好きになってしまいました。・・・・・友達のために身を引くべきでしょうか、積極的に恋した方が良いでしょうか？』……アギト、アンタさぁ、友達思いも良いけど自分の気持ちに素直になったほうが良いわよ？つうかあのニコチン警官、ロリコンに落ちやがったのか？かぁ～、全く情けないネェ」

銀八
「同感、と言う訳で『烈火竜』さん、ロリ方のロリコンネタは良いと思います。次ィ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『ルイージ「それでまあ…次の銀八先生の時の質問ですけど…はやてちゃんって暇な時どう言うゲームをしてるの？；」

フォックス「俺はティアナに質問だけど…スバルに前した質問と似たので…黒神が知ってる漫画とアニメの作品群で自分で再現したいって思う射撃系統の技はあるか？…ちなみにスバルが答えた作品以外ので」』」

はやて
「私なぁ、ロクヨンの『スーパー●リオ６４』をやっとるんや」

銀八・お登勢
『『古ぃなおい！！』』

はやての答えに呆れてツッコム２人。

ティアナ
「そうねぇ『ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ』のトレイン＝ハートネットの『電磁銃（レールガン）』・『黒爪（ブラック・クロー）』・『黒十字（ブラッククロス）』・『炸裂電磁銃（バースト　レールガン）』。『ブレイブルー』のノエル・ヴァーミリオンの『拾壱式　オプティックバレル』・『壱参式　リボルバーブラスト』・『玖式　マズルフリッター』・『霊銃　フェンリル』・『バレットレイン＞霊銃　トール』・『弐式　ブルームトリガー』・『伍式　アサルトスルー』・『参式　スプリングレイド』・『フラッシュハイダー』・『ヴァルキリーペイル』ぐらいかな」

銀八
「外見とは裏腹に以外に欲張りだよこの子。と言う訳で『鳴神ソラ』さん、廊下に立っていなさい」

お登勢
「次行くよォ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『1．まずザフィーラに質問
こちらで書いてる小説だとザフィーラはアルフに惚れられており、実際「チュー」もされましたがそれを見てどう思いますか？そちらのザフィーラさんの本心でお答え下さい

2．次は銀時に惚れてるリリカルメンバーに質問
もし銀時が「俺のハートが欲しかったら俺に勝って見せろ」と言ってきたら皆さん殺す気でかかりますか？
それとも「無理、戦えない」と涙して逃げますか？
お答え下さい』……どうなんだい、ザフィーラ」

ザフィーラ
「うーむ、まさかあっちの私がアルフと……ならばあっちの私が私

のように周りがキャラ崩壊で暴走されて巻き込まれない事を祈るのみだ」

銀八
「大人だよこの人、シャマルに聞かせてやりたいぐらいだ。んで2つ目は……」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛『『勿論やるつもりで!!』』

お登勢
「本気かよ!てかあのクソパーマはどんだけ落とし立ってんだい!!」

銀八
「はいと言うわけで『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、多くの小説を作るのも結構ですが、今中心に書いている小説も頑張ってください次ィ、ペンネーム『私にいい考えがある』さん『早速質問をします。?まずはフェイトに質問です。
また映画化第二弾が出るようですね、もしも銀さんの映画と同時上映されてたら喜んで銀さんの映画を見に行っちゃいますか?
?続いてヴィータに質問。
ヅラに惚れていたのにはびっくりしましたが、はやてにこっそり質問します・・・ヅラのどこに惚れたのですか?』」

フェイト
「はい、メッチャ喜んで!!」

はっきりと答えるフェイト。

そうとうに願っているからだ。

はやて
「桂さんっておもろい上、真面目な時は凄くカッコイイし、何より私を護ってくれた人やから／／／」

ヴィータ
「まぁ……アイツが現れてからなんやかんやで賑やかになっているし、それに凄い感謝もあるし……て何言わせんだぁ！！」

銀八
「はぁいと言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていなさい」

お登勢
「次ぃ、コレで最後な。ペンネーム『月光閃火』さん『1．お登勢のバァさんに質問だ。リリカルメンバーの中で叱咤激励したいキャラは居るか？ベスト3で選んでくれ。

2．スバルとアリマに質問だ。さっき天界から電話が来て、サナダが手作りの弁当を送ってきた……居るか？』。んじゃ答えるとするか。1位はシャマルだな」

銀八
「うぉ意外！？てか理由は？」

お登勢
「女の癖に人を死に追い込ませるような料理を作ってんじゃねぇよ！！」

シャマル
「酷い、あんまりよぉぉぉぉぉ！！」

お登勢の一言で大泣きするシャマル。

お登勢
「2位はギンガ。女は男に愛されるのが幸せってのに百合好きにも程ほどにしろよ？だから妹のスバルに比べて影薄なんだよ。」

ギンガ
「だって好きなんだもん！！しょうがないもん！！」

ギンガはギンガの悔しさが合って涙を流す。

お登勢
「そんで3位はクアットロ。アンタさぁ、唯で影薄いのにSは控えたほうが良いだろ？」

クアットロ
「止めてぇぇぇ！！Sは攻められるのが弱いからぁぁぁ！！」

訳分からない事を言い出すクアットロはどうでも良いとして、もう1つの質問を見る。

クアットロ
「何か酷くない！？」

銀八
「んで、スバルこれサナダからの差し入れ」

スバル
「サナダ隊長！！ありがとうございますぅぅぅぅ！！（泣）」

凄く嬉しそうに涙を流すスバル。
ちなみにここにはいないが、アリマもサナダの弁当を食べて涙を流している。

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、サナダ・シンゲの事をよろしくお願いします。以上持ちまして、今回は終了します。また5話後の……」

お登勢
「ああ、そうそう銀八に良い知らせがあったんだった」

銀八
「良い知らせ？」

お登勢は煙草を口にくわえて、ある重大発表をする

お登勢
「今日から『銀八先生コーナー』、7人ずつの質問の答えだけど毎回やるそうだよ。良かったわネェ」

銀八
「マジでか！？よっしゃーーーーーーー！！ありがとうババァ、銀時が今までつけてきた家賃、黒神が払ってくれるから！！」

お登勢
「おいィィィィィィィ!!自分じゃないんかい!!しかも作者に払わせるんかい!!」

と言う訳で、『銀八先生コーナー』は毎回やる事になりました。
新ルールは以下の通り。

●質問数は1人3つまで。

●質問が答えるまで追加質問はなし。

●一度の『銀八先生コーナー』の質問は7人までを答えさせてもらいます。

●『銀八先生コーナー』は5話分に1回ではなく、毎回やります。

以上です。

銀八
「ちなみに、次回のアシスタントはフェイトですのでお楽しみィ～」

第九十八訓：眠れない時には羊を数えるべし（後書き）

黒神
「と言う訳で、『銀魂』放送再開記念として、毎回『銀八先生コーナー』をやります」

銀八
「やったやった♪」

黒神
「次回「空腹は最大の調味料と言っても不味いものはやっぱり不味い」テイクオフ」

第九十九訓：空腹は最大の調味料と言っても不味いものはやっぱり不味い（前書

黒神
「今回はゲストが登場し、『ブレイブルー』のネタがどっさりつまっています。是非爆笑しちゃってください」

ルーテシア
「『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』…始まります」

第九十九訓：空腹は最大の調味料と言っても不味いものはやっぱり不味い

スカリエッティのアジト　　スカリエッティの部屋

そこでスカリエッティ、鉄子、近藤、山崎、ナンバーズ、アギト、ガリューそして遊びに着ている九兵衛は周りを暗くして一本のろうそくを持っているクアットロが真剣な表情で話している。
源外はオカルト的な存在にはあんま興味がないような為、不参加。
ルーテシアは小腹空いたのか、1人で焼きそばを食べている。

「あれは今日みたいにすんゴク寒い夜の事だったね。その男、友達の家に泊まって夜遅くまで友達と話し合っていた事だった……窓がガタガタと揺れていた」

そう、彼等は怪談の話合いをしていたのだ。
もう冬の季節なのにそれはないと思うが、暇だった為か結局することにした。
ろうそく一本で明かりを出したのは、怪談の話を盛り上げる為だった。

「風が強いかなっと思って見てみたら、触れただけで窓の揺れは収まった。風がやんだのかっと思って離れてみると……さっきより窓は震えていた。少し怯えて窓をゆっくりと開けてみると……そこには金色の瞳をした黒猫がいた。その時の男は原因は『何だ、猫かァ』っと思って笑いながら窓を閉めた。けどその時の黒猫は、正に不吉と思えるほどの闇が染まった様な漆黒の体で、金色の瞳は人間を飲み込もうとするような闇の光のようだった」

凄みのあるような話かたに、少しずつ恐怖に思った。

「……なんか、怖くなってきたけど…なんで？」
「……人を恐怖を染めるのはクア姉の得意分野だからだよ」
オットーもセインもメッチャ真剣な表情をしてて怖みを表すクアットロに怯えだす。
「そして深夜になってようやく男は寝た…けどその瞬間にまた窓が震えてきた。男はまた猫の悪戯かと窓を勢いつけて開ける。だが、そこには猫所が誰もいなかった……男はどうしてなのか不思議がる中……窓のほうを良く見て見ると……」
そこでクアットロは魔を開けて……
「血塗られた人の手の平の後があったのよ」
はっきりと言い出して全員に怯えさせるクアットロ。
話が進むたびに、誰もが青ざめている。
『『ひぃ～～～～！！』』
「……こ……怖い……」
ウィンディとディードは思わず抱き合い、セッテにいたっても青ざめている。
（こう言うのだけはどうして超一流なのよ！！）
ドゥーエも思わず心の奥底から叫びだす。
ウーノ、トーレにいたっては沈黙の如くだんまりと固まってしまった。

「男は怯えて窓を思わず勢い良く閉めて、腰を抜かしてバックする。
すると窓が今まで以上に……ガタガタガタガタガタっと激しく揺れていました。尋常じゃない揺れに男は青ざめて、友達に助けを求めようと起こそうとすると…突如、窓が勝手に開きました」

ここからが一番のメインだと誰もが確信してゴクッと喉を鳴らせる。

「そして、その窓から1人の女がゆっくりと現れて…男を睨みつけながら」

「ウスターソースが足りないんだけどォォ！！」
『『ぎゃふぁアアア

怪談が水の泡にされてガックリするクアットロに、プラカードで感想を言い出すガリュー。

「ルー殿、せっかくクア殿が怪談の話をしているのに、台無ししちゃ駄目でしょ」

呆れてツッコみだす近藤。
だがソースはそんなに少なくなっておらず、むしろ十分にある。
しかしルーテシアの焼きそばを良く見てみると、何やら黒い液体が焼きそばを包み込んでいるような量であった。

「知らない…ソースが切れちゃったの。買っておいてって言ったのに、焼きそばが台無しだよ」
「もう十分にかかっているってェ!!何それ、もはや焼きそばじゃないし!!ブラック・ソースホールじゃん!!アレ、もしかしてルー殿ってソースラーなの!?」

土方のマヨラーと重なっている。
まさかルーテシアがソースが大好物であった事に驚く近藤。

「局長!!大変です、九兵衛さんがぁ!!」

山崎が叫ぶと、そこには失神して気絶し……最悪な事にお漏らししてしまった九兵衛がいた。

「あれ、九兵衛、九兵衛ェェェ!!」
「大変だ、九兵衛さんがソースで気絶したあげくにお漏らしした!!」
「最悪じゃァァァ!!」

ドゥーエと鉄子は九兵衛が気絶してお漏らしした事に驚き、近藤にいたっては叫びだすほどだった。
その様子を見たチンクは大爆笑しまくった。

＊

ミッドチルダのとあるレストラン町。

そこはレストランが多く、昼食や夕食の時によく人が来る場所である。
近藤、ルーテシア、スカリエッティ、山崎、ディエチ、源外、鉄子の5人で食事をする為に、ある店を発見する。

「おーここか！！ここがあのミッドチルダ一上手い中華料理店『黒龍茶（ヘイロンチャ）』かぁ！」
「ああ。しかもどれもコレも値段が安くて…特に『ミッドフグの山椒辛子美杉』が一番上手いそうだぞ？」
「マジ!?俺、すんごく楽しみになっちゃったんだけどぉ！！」
「局長……はしゃぎすぎですよ。大の大人がみっともない」

子供のようにはしゃぐ近藤に山崎は呆れてツッコむ。

「ドォ、ドォ」
「ルーちゃん!?それ馬を落ち着かせる方法だからって何か最近ルーテシアちゃん局長のお母さん役やっていないィィィィ!?」

ルーテシアの近藤を落ち着かせる間違った方法にもツッコむ山崎。

この調子なら江戸一番のツッコミ使いを越えられる日も遠くはない。

「とりあえず、店の中に入りましょ」

「午前１１時に来たのも、行列が出来る前に早く来る為だったんだね」

ディエチと鉄子がそう言いだすと、

バキィーン！！

「やや！？」

突如、窓が割れて近藤達は驚きだす。

そして割れた窓から猫耳ブーツの少女が現れて逃げ出す。

「逃げるなぁー！！待つネこの悪党！！」

女店員らしき者が逃げた悪党を追いかけようとするが、悪党らしき人物の速さは以上であって追いつくことが出来ない。

ちなみにその悪党は何やら『●レイブルー』に出てくる●オカカに似ている人物であった。

「な……何があったんですか！？」

「とにかく、中に入ってみるぞ！！」

山崎は何が起こったか驚き、事件が起こった店の中に入りこもうと言い出す源外。

＊

店の中には、店長らしき料理人が倒れて気絶している。
そして店の中はメチャクチャ荒れている。

「酷い……誰がこんな事を？」

余りの荒れ果てた姿に鉄子は思わず口に出す。

「誰か、誰かァァァ！！この中に、中華料理が出来る方はいないかぁ！！誰か…誰かァァァ！！！！」

「あ…あのう、店員さん」

「ああ、お客さんネ。…す、すみませんネェ～。今日はもうちょっと待ってくれないアルか？なに分、料理長がこんな事になっているのよ」

店員らしき女性は、神楽のような髪形をしていて、青いチャイナ服を着ている。

「何があったんですか？」

「それがァ、猫耳フードのお客さんが…突然、厨房に乱入したのヨォ。そんでもって…暴れて暴れまくったのネ」

近藤の質問に答える店員。

「猫耳フードォ！？あの人どっかで見たことがあると思えば、やはり『●レイブルー』に出てくる●オカカでは！！」

「局長、『●レイブルー』にハマってんのぉ！！？絶対に違うから、三次元の人物が出てくる事あり得ないからァ！！」

近藤の電波考えをツッコむ山崎。
一応、この小説は『●レイブルー』ネタもある。

「『止めて』て何度もお願いしたんだけど・・・何か、『タオ、タオ、タオ』としか言わないお客さんでェ、全然言う事が通じ無かったのヨォ」
「『タオ』としか言わないじゃと？もしや……」
「まさか！！」

店員の説明を聞いて、源外とスカリエッティはある事を思い出す。

「ドクター……何か思い出した？」
「源外さん？」

ルーテシアと鉄子は2人が何かを思い出したかと気づいて声をかける。

「『タオ』しか言わない猫耳フードなら……犯人は私と源外君が発明した模擬専用機械（からくり）『鍛えてタオちゃん』だと思う」
『『ええぇーーー

『『なぁあああああ！！』』
「テメェ等が原因かァァァァァァ！！！！！」
どこからか出したのか、山崎はミッドで2人を吹飛ばす。
「何で2人の作った機械（カラクリ）が暴走してんだよ！！てかそのせいでこの店にとんでもない迷惑かけただろォォォォ！！！」
「どうすんの！？これ俺達の重大責任だよォォォォ！！！」
山崎の怒りの怒鳴りと近藤の焦りのツッコみのミックス叫びが店内に響きあう。
「ま・・・待て！コレにはわけがあるんだ！！前日私がうっかりコーヒーをこぼしてしまって…それがうっかり『鍛えてタオちゃん』にかけてしまったんだ！！」
「じゃが安心しろ！おそらくそれは暴走モードだから……しばらくすれば停止する事もあるじゃろうからもう他の迷惑は……」
「十分かかっているだろうがァァァァァァ！！！（怒）」
ドカァァァ！！
『『あんぎゃあァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！』』
山崎は怒りを噴火させるような勢いで、バカ研究者＆バカ発明家コンビをボコボコにした。

＊

後ろでボコボコになって倒れている2人をほっといて、店員は当然の事に怒っている。

「どうするアルか！！こんな状況をどう責任とってくれるネェ！！！」

「すんませェェん！！こんな事になるなんてマジ思いもよらなくて！！！！！」

「……ゴメンナサイ」

青ざめて土下座する近藤に、頭を下げて謝罪するルーテシア。
この中にはまともな中華料理を作れられる人はいない。
だがこの状況を作ったのは自分達である。
どう責任を取れば良いのか迷う中……

「こんな時こそ、私の出番！！！」

と店の扉を豪快に開けて現れたのは、何故かコックの衣装に身をよせたシャマルであった。

「しゃ…シャマル殿！？」

「その格好って…」

突如のシャマルの登場に驚く近藤達。
近藤とディエチはシャマルの格好を見て青ざめ、嫌な予感をした。

「店員さん、彼等の代わりに私が料理をします！！」

『『ゲェェェェェェェェェ！！！（青ざめ）』』

シャマルのお料理宣言に、近藤、山崎、ルーテシア、ディエチの４人は最悪な状況になった事と叫びだす。
鉄子にいたっては今だ理解していない。

ちなみに何故彼等がシャマルの料理が極悪的に不味いと知っているかと言うと……詳しくは『第三十三訓：女の怒りはメッチャ怖い！』で。

「ほんとネ、お客さん」
「はい！！」

店員の質問の潔く返事するシャマル。

「それは、助かるヨォ…実は今日、あんまり売り上げが上がっていなかったネェ。このまま店を閉めてしまうと、かなりの痛手だったのヨォ」
（（そこにシャマルの手料理をされたらさらに痛手になるってェェェェ！！！！））

心の奥底で青ざめて叫ぶ近藤達。

「それは大変な時に災難でしたねェ」
「じゃあ私は、料理長を病院に連れて行くネェ。すぐ帰ってくるから…その間、店を宜しくお願いするネェ」
「いや、ちょっと待ってェェェェ！！」

シャマルの極悪料理の存在を知らない店員に近藤は止めようとするが、店員は料理長を病院に連れて速攻に去る。

「さぁ……張り切って作るわよォォォォ！！とりあえず、まずは5人に料理を……」

シャマルは腕を振るうようにやる気満々で調理場に向かう。
彼女の極悪料理だけは避けようと山崎とディエチは頷き……

「あ……俺とディエチはウェイカーとウェイトレスをしますので……3人はお先に…」
「ええェーーーーーー！！山崎、それはないでしょォォォォ！！」
「ああ、それは良いですね！！では早速私達はコレで……」

と山崎とディエチは逃げるようにシャマルの後を追う様にとこの場を去る。

『『Ｎｏ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！』』

絶望に導かれたように叫びだす近藤とルーテシア。
思わず両手両膝を地面につく。

「……あのう……シャマルさんの料理って、そんなに不味いのですか？」
『『……（コク）』』

無言で頭を振るう2人を見て、流石の鉄子も青ざめてしまった。

「……ま…まぁ、空腹は最大の調味料と言いますから……ちょっとやそっとの物が出てきても…きっと美味しくいただけるはずだよ」

確かにそうであるが、シャマルの料理はかなり下手と言う次元をは

るかに超えている。
不味い以前に死にかけるっと言う悪夢もある事を鉄子はまだ知らない。

しかも、この最悪なタイミングでお客さんも来てしまった……

「おう、ここか。ミッドチルダ一に上手い中華料理店は」

そのお客の顔を見て、近藤は驚きだす。

（あ……あれはまさかァァァ！！！！）

近藤はその人物を知っている。
そう龍の骨さんの小説、『ＢＳＡＡ学園！』に出てくる主人公こと北郷零斗である。
しかもその後ろには、赤夜叉さんの『マジックゲームシリーズ』に出てくる主人公とヒロインことゼロとドゥーエであった。

「こっちの私から聞いたんだけど……最高に美味しいらしいよ」
「ひゃっほーーーーー！！久し振りの中華料理だァァァァ！！！！」

最近食べてもいなかった中華料理に喜びだすゼロ。

（えェェェェェェェェェェ！！！！何でこんなタイミングで来るのォォォォ！？イジメなの！？これ作者のイジメなのォォォォ！？）

最早地獄行きは免れないゲスト達に強い同様を抱く近藤。
いかに彼等とて、シャマルの異常なまでの不味い料理を耐えられるはずがない。

最悪な状況を思い浮かべる近藤に……

「ああ、あそこにいるのって近藤勲!?」

ゼロは近藤の存在に気づくと、近藤も汗を流しながら苦笑する。

「よ……良く来てくれたねぇ、皆さん!!ワザワザ『リリカル銀魂』の世界に様こそ!!この近藤勲、代表として歓迎しよう!!」

「おお、今回はよろしくな……てあれ?何か異常なまでに汗を流していねぇか?」

近藤の以上に気づく零斗。

しかし近藤は、『すみません、俺汗かきの体質持ってますので!!』と言って零斗を納得させる。

そして全員、席に座ってメニューを決めようとすると……

「お客様、本日は『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』と言うメニューがお進めとなっています」

「もし良ければ、そちらを選んでみてください」

いつの間にかウェイカーの衣装を着た山崎と、ウェイトレスの衣装を着たディエチが進める。

「あら、ディエチじゃない。貴女この店で働いているの?」

「ええ……まぁ……今日の所……」

「うふふ……まぁせっかく可愛い妹が進めるメニューだし、それにしましょ」

「ドゥーエがそれにするなら、俺も」

ディエチの進める『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』を選ぶドゥー

エとゼロ。

「この展開、何か『●レイブルー』で見たような…まぁ言いか。じゃあ俺も『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』……あんた等もそれで良いだろ」

注文を決める零斗は、近藤達に質問する。
コレには3人はビクッとして何としてでもシャマルの手料理だけはっと阻止する。

「すんません!!自分等、もうお腹一杯なの……」
「じゃあ『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』を合計6人前で」
「人の話を聞こうよ零斗君!!」

勝手に決められたことにツッコむ近藤。
山崎とディエチは『『了解しました』』っと言うだけで、この場から急いで調理場に向かう。

(最悪だあああああああああああああ!!今までの中でも最大のピンチだよコレェェェェ!!!!)
(ルーは死にたくないルーは死にたくないルーは死にたくないルーは死にたくない……(ブツブツ))
(なんだろう、この絶望的な展開……私…兄者のところに行くのかなぁ)

近藤、ルーテシアはシャマルの料理がどれだけ不味いか嫌と理解しており……鉄子に至っては絶望に染まっている。

「……なぁ、あの3人どうしてそこまで絶望に満ちた評定しているんだ?」

「さぁ……私もさっぱり…」

ゼロとドゥーエは、どうしてそこまで絶望満ちた表情をしているのか理解できなかった。
しかしゲスト達は知らないからそう疑うのだ。
何故なら、今回料理を作っているのはあのシャマルだからだ。

「……お…お待たせしましたぁ……」
「『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』でございます」

山崎とディエチが料理を持ってきて、近藤たちの机に並べる。
その料理は……エビチリのような赤いソースにフグの肉のすり身が翔られていたためられ、さらには細かく切ったナスとタケノコも一緒にいたためられている。
コレには近藤、ルーテシアは意外な表情をしていた。

シャマルの料理にしては、見た目はメッチャ上品である。
見るからに美味しそうに盛られている。

「うわぁ、美味そう」
「中々良い感じじゃん」

ゼロと零斗も、『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』を見た眼は評価する。

「ディエチが進めるだけあるね。じゃあ頂こうか♪」

ドゥーエも妹のお進めなだけあってか『ミッドフグの山椒辛子美杉定食』を評価する。
一方の近藤とルーテシアは、シャマルの意外性には驚きだす。

「……え、マジで!?これ、シャマル殿が作ったの!?（小声）」
「ルー、驚いた……（小声）」

2人が驚く中、鉄子がその訳を理解する。

「もしやあのシャマルって子、自分の料理下手を克服する為に……
急激に美味くなったんじゃないかなぁ（小声）」
「マジでか!!と……とにかく助かったぞぉ!!（小声）」

まさかの料理上達は近藤にとって嬉しい事である。
死ぬほど不味い料理は、絶対に食べたくないからだ。

「それじゃあ、皆さん頂きますか!!」
『『はぁーい』』

近藤が頂こうと宣言すると、全員橋を持ち出す。

「では、頂きます!!」
「…頂きます」
「頂こう…」
「頂くぜ」
「頂きます♪」
「頂くわ」

6人同時に『ミッドフグの山椒辛子美杉』を口に入れる。
その味は見た目どおり、とてつもなく美味だと思ったのが……彼等の最大の過ちだった。

ドカァァァ

ご飯や中華スープにもどっさりと。

「ルゥウウウウウウウチャァァァァァァァァァァァンン！！！？」

ソースたっぷりの『ミッドフグの猛毒辛子醜杉定食』を食べるルーテシアに、盛大なツッコミを入れる山崎。

「何それぇぇ！？何でルーちゃんのだけソースタップリ入っているのォォォォ！？」

「この『ミッドフグの山椒辛子美杉』って、ソースに合いそうだと思ってかけちゃいました」

「いつかけたァァァァァァ！？てか良くこんだけ大量のソースをかけられたなァァァァ！！てかもう何もかもメチャクチャじゃねぇかァァァァァァァ！！！！」

などと店内では山崎のツッコみが響き渡っていた。

ディエチは唖然として、ただ見るだけしか出来なかった。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

フェイト
「はい、ついに『銀八先生コーナー』が連続公開が可能になりまし

た。今回のアシスタントは『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』のヒロイン、フェイト・テスタロッサです♪」

銀八
「さりげなくヒロインと宣言しちゃったよこの子ォ！！……まぁ良い。と言う訳で前回からようやく連続公開が可能になった『銀八先生コーナー』、お陰で銀さんは出番増えてすんゴク嬉しいですこのヤロォ」

フェイト
「それでは早速質問答えます。最初の質問はペンネーム『黒龍』さんからの質問です『1．銀さんに質問です。
銀さんは仮面ライダーの中でなんのライダーが好きですか？
答えてくれたら、そのライダーのベルトをプレゼントします。
かっこよく変身してくれたら嬉しいです。

2．黒神さんに質問です。
『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～　が終わったら、その続編として、他のアニメやゲームやマンガの一つをクロスさせて続編を作ると言うのはどうですか？』」

銀八
「ズバリ答えます。銀さんは電王を特に気にっているようです。ですので主人公の仮面ライダー姿が良いんじゃないでしょうか？そんで２つ目は……作者にお願いします」

黒神
「そうですねぇ、続編になるとヴィヴィオを中心とした物語になるから……難しいですねぇ」

フェイト
「あ……あはは……そうですか」

黒神の答えに、フェイトは苦笑する。

銀八
「と言う訳で『黒龍』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『銀』さん『質問、朝目覚めたら銀時の姿、顔がラ○ナそのものになっていたら皆どうなりますか?また、はやてやスバルが某吸血鬼や某猫?の姿になっていたらどうなりますか?』」

銀時
「最悪じゃアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!」

はやて
「狸じゃないだけマシかぁ」

スバル
「それって猫耳スクール水着の事を言いたいんですかぁ!?／／／」

などと3人はそれぞれの答えを言い出す。

銀八「と言う訳で『銀』さん、3人の答えはこのようになってます。次行くぞォ、ペンネーム『ミクニップ』さん『ヴィヴィオに質問‥ヴィータ愛用のうさぎ人形、通称『のろいうさぎ(又はゲボうさ)』‥あれ可愛いと思う?俺には不気味に見えて、何だか夜に見ると夢に出てきそうで怖いんだけど‥。

ノーヴェに質問‥・・後でうちの方のはやてに頼んでとりあえずバリアジャケット作ってもらうから、何か希望でもあるか?もしそっちのはやてが何かしようとしても大丈夫なように強力なプロテクトもかけてもいいけど・・・?スバにゃんはともかく、俺も流石にあのバリアジャケットは無いと思うが・・・』」

ヴィヴィオ
「うーん、微妙かなぁ?」

フェイト
「ヴぃ、ヴィヴィオぉ!!」

ヴィヴィオの答えにフェイトは慌しくなる。
今のをヴィータに聞かされたらどうなるやら……

ノーヴェ
「アタシだって変えたいけど……でもそうしなきゃあ出番が減ってしまうから無理だァァァァァァァァァ(泣)」

滝のように涙を流すノーヴェ。
コレには銀八達も強い同様を抱く。

銀八
「……『ミクニップ』さん、ノーヴェを見守ってください」

フェイト
「……次ぃ、行きます。ペンネーム『ドライバー』さん『質問(スカさん組に)

ゴキブーリはそちらに現れましたか?もし現れてたらどうしました

か？』」

すると、モニターが映し出されてそこからスカリエッティの姿が映し出される。

スカリエッティ
≪うーむ、現れはしなかったが……もし現れたらお手上げだ。あの生き物の増幅には敵わないから≫」

とそう言いだすと、モニターが消える。

銀八
「と言う訳で『ドライバー』さん、ゴキブーリはもう出ませんのであんま期待しないでください。んで次ィ、ペンネーム『白米』さん『質問

1：
お登勢さん。刃ちゃん特製の若返りの薬がありますけどいりますか？これを使えば、一日だけ団子屋の看板娘時代に戻れますよ。
まあ、何で調合したかわからないので味の保障は一切しませんが……。

2：
武「源外とスカリエッティのマッドサイエンティストコンビ、最近貴様らは調子に乗りすぎて且つお仕置きを受けてないだろ。
よって貴様らには特別に、この『武インフェルノ』を食べて貰う。食べなかったら『お仕置き道場』に強制送還だぞ」（丼の上にキムチ、食べるラー油、ハバネロ、七味唐辛子、山椒、コチュジャン等の様々な香辛料を乗せて、火がついた油をかけた究極の激辛丼

を差し出す）
『……ズバリ答えます。ババァは昨日それを試してみました」

フェイト
「「お義母様って、若い頃はあんなに綺麗だったんだぁ……流石に驚いちゃったよ」

銀八
「まぁ、あのババァの若い頃なんてだれでも想像できねぇよ。んで2つ目は……2人は食べ忘れたようです」

フェイト
「ええぇーーーーーーーーーーーー！？（青ざめ）」

それでは、確実に究極のお仕置きが待っている。
最早2人は地獄生きには遠ざけられない。

銀八
「と言う訳で『白米』さん、あのコンビを厳しくお仕置きしてやってください。次ィ、ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『質問1：遠野志貴「【アルティメットバトルクロス】の遠野志貴です。作者とそっちの坂田さんに質問。そっちの新八君は本当に大丈夫なんでしょうか？同じ眼鏡キャラとしては本当に心配です。」
質問2：アルクェイド「【アルティメットバトルクロス】のアルクェイド・ブリュンスダッドよ。そっち天然パーマに質問よ。いい加減付き合いたい女を選んだ方が良いんじゃない（笑）。」
質問3：銀時「【アルティメットバトルクロス】の坂田銀時だ！そっちの俺、助けてくれ。俺とセイバーと恋次の三人で、ネウロに日頃の恨みを晴らそうとしてんだけど、何時も返り討ちにされたり、逆さ吊りにされちまうんだ！あのドS魔人を倒す方法があったら教

えてくれ！」』……ズバリお答えします。今はあんなに変態オタクダメガネに落ちているぱっつぁんですが……これは後半の彼の精神的な成長を大きくさせる為の、作者の狙いです」

フェイト
「たしかに……新八のアレは……ないよね。特に、なのはには見せられないほど……」

銀八
「2つ目、銀時は最近純情（ウブ）となっていますので、そう簡単に決められません」

銀八の答えに、どこか安心してホッとするフェイト。
まだ自分にもチャンスは山ほどある証拠だからだ。

銀八
「そして3つ目は……本人お願いします」

銀時
「……悪ぃけどぉ……こっちかこっちで大変だからそっちで何とかしろぉーい！！」

と一言叫ぶ。

銀八
「と言う訳で『亀鳥虎龍』さん、これからも質問お願いします。んで、次が最後なァ」

フェイト
「最後はペンネームペンネーム『ルシファー』さん『質問

お登勢さんに質問です。この世界で銀時以外で頭を悩ませる人物はいますか？
ヴィヴィオに質問です。パパ（銀時）と今行きたい場所ありますか』
」

お登勢
「そりゃ、チャイナ娘にロンゲ侍、そんで狸女に極悪料理作りの医者。他にもいろいろあって全部言い切れないねぇ」

フェイト
「……お義母様も大変ですね」

お登勢
「後、その『お義母様』呼ばわり止めてくれないかい？アイツの母親と思われちゃ無性に腹立つから……」

お登勢は母親呼ばわりが苦手のようであった。

ヴィヴィオ
「パパと一緒にいられるなら、どこでも良いよ♪」

ヴィヴィオにとって、銀時と一緒にいることが幸せである。

フェイト
「と言う訳で『ルシファー』さん、出来るだけなのはを怒らせるような質問は控えてください！！……以上で、今回の『銀八先生コーナー』は終了します。確かにコレなら、毎日やっても大丈夫な感じがする」

フェイトも毎回『銀八先生コーナー』が出来る理由を納得する。

銀八
「へぇーい。次回のアシスタントはスバル・ナカジマでぇーす』

フェイト
「また『銀八先生コーナー』をよろしくお願いします」

と言う訳で今回登場したゲストは、龍の骨さんの小説、『ＢＳＡＡ学園！』の主人公

北郷零斗

赤夜叉さんの小説シリーズ『マジックゲームシリーズ』に出てくる主人公とヒロイン

ゼロ

ドゥーエ

以上この３名でしたぁ！！

龍の骨さん、赤夜叉さん、どうもありがとうございましたぁ。

第九十九訓：空腹は最大の調味料と言っても不味いものはやっぱり不味い（後書き）

それは、１つの大当たりから始まったシリアス。

「次元旅行１０名様ァァァァァァ！！？」

「こ……工場長ォォォォォォォォォ！！！」

いざ、楽しい次元旅行へ。

だがそこに、テロ事件発生！！

「これより、この飛行船は我等革命組織『萌えるロリ根性』が乗っ取ったァァ」

テロ組織のハイジャック。

過酷な事件にあの男がお騒がせ。

「あはははははははは！そう言うパターンで来たかぁ！！」

「『あはははははははは！』じゃねぇよ！！」

『『あ〝あ〝あ〝

辰馬
「次回、「時が経つごとに人は少しずつ変わっていく」テイクオフじゃ！！」

第百訓：時が経つごとに人は少しずつ変わっていく（前書き）

黒神
「いつも使っているパソコンが不十分になって使えなくなりましたが、両親の使用しているパソコンを借りています。ですが連載は少し遅くなりますが、それでも頑張って進めたいと思います。と言うわけで今日で見事１００話突破記念として、新シリアス『狂乱編』を始めます！！」

エリザベス
『『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ』、始まります』

第百訓：時が経つごとに人は少しずつ変わっていく

チリィーン、チリィーン！！

「にやぁ？」

「うをぉぉぉ！！出たァァァ！！おめでとーございます！！一等ですゥ！！」

はやては、とある町でクジをしていたら、一等が出た。

この出来事が、後に桂とはやてに待ち構える最大の危機が迫っている事にまだ気づく事はない。

＊

スカリエッティのアジト

そこでは何故か、スカリエッティと源外が土下座しておりシャーリーとマリーが怒っている。

「源外さん、スカリエッティさん！！一体どういう事ですか！？何でフェイトさんとスバルのデバイス改造を私達に黙ってやっていたんですか！？」

「私だってレイジングハートとバルディッシュの強化改修も担当していますよ！！2人だけあんな凄いデバイスに強化できるなんてずるすぎますよ！！」

そう、2人は機動六課のデバイス製作の担当をしている為、『メカニックデザイナー』と『デバイスマイスター』としての誇りを持っている。
2人が怒っている原因は、源外とスカリエッティ2人だけで、『バルディッシュ』が『バルディッシュ・デスサイズ』に、『ティルヴィングエア』が『ティルヴィングエア・ドラグーン』にパワーアップしたからだ。
その為、フェイトの『バルディッシュ』とスバルの『ティルヴィングエア』を2人で改造した源外とスカリエッティがずるく思い、2人を責めている。

「いや、コレは流石に緊急的な用事だったから2人を呼ぶ暇はなくて……」
「わし等だけでも十分じゃッたと思ったんじゃ……すまんなお嬢ちゃん達」

スカリエッティは何故か2人が怖く感じて青ざめており、源外はそれを気にせず気楽に笑い出す。

「フェイトさんとスバルのデバイス、私達だって改造してみたかったのにィィィィ!!」
「あんなに凄いデバイスになるまで、どんな改造したんですか!?具体的に教えてもらいますよ!!」

2人にとっても、デバイスの製作・整備の主任者として改造に参加してみたかった。
しかも源外とスカリエッティによって改造された『バルディッシュ』と『ティルヴィングエア』は以前とは比べ物にならない性能を持っている。

シャーリーやマリーですら作れるかどうか疑うほど羨ましい事である。
だからこそ、2人はメッチャ悔しがっている。

自分達だって機動六課隊長であるフェイトの使用するデバイス『バルディッシュ』とスバルの使用する伝説の『七星神刀(しちせいしんとう)』の1つ、『ティルヴィングエア』をこの手でパワーアップさせたかったのであった。

「とにかく次からはちゃんと私達も呼んでくださいね!!」
「次勝手にやったら本当に許しませんよ!!」
「いや、強引にちゃんと呼べと言われても……」

『『何、文句ある?』』（ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!
『『ありませんーーーーーーーーーーーーーー!!』』

シャーリーとマリーのとてつもない怒りに、2人は青ざめて土下座する。
その様子を隠れて見ているウーノと鉄子は、2人の怒りはとんでもないと注意するように決意する。

「スカリエッティ、別の意味で銀の字が魔導士になった事を隠すべきじゃな（小声）」
「同感！（小声）」

2人は銀時の魔導士化をシャーリーとマリーの怒りに恐れて皆に黙ってる事を誓う。
銀時の使用デバイス、『ブレイシルバー』は『七星神刀(しちせいしんとう)』に匹敵する強さを持っていて源外、スカリエッティ、鉄子の3人で作り上げ

た彼専用のデバイス。
もしそれが2人のデバイスマスターであるシャーリーとマリーにばれたらとんでもなく痛い目に合うであろう。

＊

パパパパパパパパパパパパパパパパパパァーン！！

一方の機動六課の訓練所では、スバルと桂が木刀で模擬戦をしていた。
スバルの居合の構えをした神速剣技があいも変わらず桂を襲う。
だが桂もスバルの一撃一撃を全て防いで受け流す。

しまいには桂からも攻撃するが、スバルは木刀で受け流すもしくは刹那の瞬間移動で交わす。

人間の領域をはるかに超えた魔法なしでの真剣勝負並の稽古に、誰もが唖然と驚いていた。
銀時は平然としており、フェイト、ティアナ、エリオは唖然とだんまりしてしまい、神楽、ヴィヴィオ、エリザベスは大注目している。
月詠も流石に、通常の人間ではまずあり得ない剣のぶつかり合いに驚いていた。

ちなみに神楽の姿は『ビック・ヒューマイドエボリューション』の効力がようやく切れて元に戻った。

「前から思ってたんだけど……あいつ等がもし真剣で剣を交えたらマジで死合いになってんじゃねぇ？」
「それはあり得る」
銀時とフェイトは、木刀じゃなく真剣勝負だったらどんだけ緊張感が出ていたかは想像できない。
だが木刀でも稽古ではなく、真剣勝負と思えるような緊張感は十分出ている。
「斬蒼！！」
スバルは木刀を片手に持って居合の構えをし、瞬発的に神速の速さで連続剣を炸裂させるが、
「ぬぅ！！」
桂もその速さに対応して、全ての連激を防いだのである。
その隙にと桂は木刀を素早く横に振りだす。
「はぁ！！」
桂の一撃を、スバルは左手にも誓えて逆手つかみをする。
そして桂の一太刀を防ぎ、その瞬間に剣技を炸裂させる。
「蒼鏡居合！！」
刹那の瞬間に神速の動きで体を回転させ、桂の木刀を受け流してそのまま右手に持ち替えて居合のような一閃を炸裂するが。

「甘い！！」

パコーン！！

「！？」

何と、桂は素早く体制を立て直してスバルの神速の返し技に対応して木刀で受け止める。
そのまま強引に、

「おォォォォ！！」

バキィーン！！

そのままスバルの持っていた木刀は宙に浮いて折れてしまう。
コレではスバルは戦闘不能である。

「……あーあ、また折れちゃったぁ」

ガックリして口に出すスバル。
しかし始まって二時間以上は続いていた為、かなり良い感じに手合わせできたと桂も感じる。

「だがスバル殿、君の剣のキレと速さはさらに上達している。まだまだ強くなれるから自信を持て」

「はい！」

桂に褒められて嬉しく返事をするスバル。
スバルとは剣を交えたのはコレで二度目だが、一度目の時よりもか

なり上達していると桂も確信できる。

「ヅラもヅラだが、スバルも強くなってやがんなァ」
「ヅラじゃない桂だ」
「スッチー、やっぱスッチーは凄いね。ヅラとここまで対抗に剣を交えるなんてマジ凄くネェ！？」
「ヅラじゃない桂だ」

スバルの上達に感心する銀時と神楽に、『ヅラ』呼ばわりされてツッコむ桂。

「桂、いちいち『ヅラ』呼ばわりされて反応してはキリがないじゃろ？」
「ヅラじゃない桂だ」
「だから反応せんで良い！！」

月詠はとりあえず注意して言い出すが、桂が反応した事で呆れてツッコム。

「あははは……桂さんってクールボケしすぎじゃないですか？いくらそう言うキャラ設定だからって……」
「クールボケじゃない桂だエリオ君」
「クールボケにも反応しちゃったよこの人ォォォォ！！」

あり得ないばかりに叫びだすエリオ。
一体桂はどんな事を考えているのか全く知る余地もない。

「お兄ちゃん、桂さん相手だと相当疲れるね……」
「全くだ、ティア」

いつも、桂のクールボケにつき合わせられる銀時の苦労を、ティアナは嫌と理解する。
ちなみにティアナの銀時に対する兄呼ばわりが変わったとフェイト達が分かった時には、誰もが驚く。
最初はフェイト達にすんごく怖いほど攻められた銀時だが、徐々になじんでいった事で次第に許されていく。

「フェイトさん、スバルお姉ちゃんだんだん強くなっていくね」
「うん、最初に出会った時もとても新人とは思えない強さを発揮していたけど、今もさらに強くなってきてる」

ヴィヴィオもフェイトも、さらに強くなってきているスバルに強い関心を抱く。
流石は元『第６６６魔闘機関』の１人で『魔剣七勇士（まけんしちゆうし）』の一角に入るだけはあり、戦闘力は銀魂組を除けば間違いなく最強である。
スバルの過去を知っているのは銀時、フェイト、ヴィヴィオ、そしてスカリエッティの４人だけである。
スバルの過去は、スバル自身が話すべきだと４人は思って今も誰にも喋っていない。

何やかんやで賑やかになっている中、

「ひざまずけぃ、愚民共ぉ！！」

突如、はやてが現れて大きな声で叫びだす。

「はやて？どうしたの一体？」
「はやてやない、工場長と呼ぶんやァァ！！」

突如のはやての変貌にフェイトは心配して声をかける。

しかしはやてはそれを拒否する。

「なんですか、はやてさん？また悪い癖が出ていません？」

ティアナは呆れて言い出す。

毎回はやてのやる事にまともな事はないからであった。

「ふっふっふ……今からあんた等におもろい物を見せてやるなぁ」

「面白いもの？」

はやての言う面白いものに、エリオは少し興味を持つ。

「それでなんですか？まさか宝石を買いましたとか言うんじゅあないでしょうね？」

「いや、それはそれで凄い事だけど……」

ティアナの一言にフェイトは苦笑してツッコむ。

そしてはやては、ニヤリっと笑ってポケットからある物をだす。

「たった1枚の紙やけど、宝石より価値ある紙やでぇ」

その紙を銀時達に見せるはやて。

その紙とは……

「次元旅行１０名様ァァァァァァ！！？」

「こ……工場長ォォォォォォォォォ！！！」

銀時とティアナは驚きの余りに叫びだしてしまい、はやてを工場長と認める。

『『工場長、万歳ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！』』

銀時、フェイト、スバル、桂、ティアナ、神楽、エリザベス、エリオ、ヴィヴィオは大歓迎して土下座した。

はやては工場長気分で愉快に笑い出し、月詠はこの光景に呆れるばかりであった。

＊

次の日。　第１０８時空空港

銀時、フェイト、スバル、桂、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、はやて、エリオ、ヴィヴィオ、リィンの１２人は、次元旅行の為に時空空港にいる。

ちなみに１０名専用なのにどうして１１人いるかと言うと、エリザベスは一応桂のペットとしているので本来はペット持込禁止である。だがエリザベスもミッドチルダに知られざる英雄として注目されている為、特別にエリザベスの同行は許可され、しかもチケットなしで無料にしてくれた。

リィンも機動六課のメンバーとして特別に無料に入れる。

留守番を任されたなのは達は、表向きは納得してくれたが……内心では悔しくて泣いていた。

なのはだけじゃない、シグナムやアルフにリィンフォースも銀時と一緒に旅行行きたいからである。

しかし自分達は選ばれなかった為、屈辱の留守番である。

「よーし、じゃあ皆次元の旅に出発やぁ！！」
『『オォーーーーーーーーー！！』』

はやての一言に、銀時、スバル、神楽、エリオ、ヴィヴィオ、リィンの6人は大喜びにはしゃぐ。
後ろでは、桂とエリザベスが笑いながら見守り、フェイトは苦笑して、ティアナと月詠の2人は呆れていた。

「まったく、はやては本当に機動六課の部隊長か疑ってしまうぐらいじゃ」

本当にはやてが機動六課の部隊長なのかを疑う月詠。
ちなみに子供であるヴィヴィオの気遣いと場所が空港の為、流石に煙管は加えていない。

「まぁ、良いではないか月詠殿。八神殿も日頃の仕事の仕事で疲れているから大目に見といてやってくれ」

はやての苦労を何となく強く理解する桂。
最近のはやてはおふざけしすぎているが、裏では誰も知らないところで仕事を懸命にやっている。
それを桂とエリザベスが、彼女のお手伝いをしている。
その為、桂とエリザベスははやては実は結構苦労しているのだとわかっているのだ。

ふとフェイトとティアナは、桂を見て思った。

「桂さん、前から思っていたけど……」
「私も思いますけどねぇ……」

「ん？何だ2人とも？」

2人の質問に、桂は訊きだす。

「最近、桂さんってはやてに甘すぎじゃないですか？」

「……は？」

「『は？』じゃなく、本当に甘いですよ。以前にお兄ちゃんも言っていたから」

ここ最近、桂ははやてには甘いと2人は疑う。

エリザベスも2人のいうことも一理ありだと考える。

この世界に飛ばされてから、エリザベスを除いて桂が最も一緒に行動する人物ははやてである。

彼女の好意に気づいていないとは言え、桂のクールボケとはやての大阪弁風なボケはマッチしている上、しかもコンビネーションが凄く良いほどに良きピッタリである。

しかも彼女の暴走を止めるかのように、桂は彼女をカバーしている一面もある。

銀時だけでなく、フェイトやティアナも疑うよしもわかる。

しかし……

「フェイト殿、ティアナ殿、確かに2人の言いたいこともわかる。だが俺達がこの世界に飛ばされてもう何日立つと思う？」

『もう半年近くかなぁ？』

桂とエリザベスは今思えば、この世界に飛ばされてからのあの日を思い出す。

「俺達と起動六課は確かにかけがえの無い仲間だが、あくまで居候という形で共に過ごしている身だ」
「そ……それは確かに……」
桂の言う事に、フェイトとティアナは理解する。
「唯で我等を起動六課に泊めてくれているから、俺は武士として彼女の恩を返そうと考えている。八神殿に甘いのも……おそらくこれがせめてもの恩返しの一部だと思っているのだろうな」
『私もそう思います』
桂は武士として、はやてに強い恩を抱いていてエリザベスも桂同様に彼女に対して強い感謝を抱く。
そんな2人を見て、ティアナはふと思う。
「だったら、もう1つ前から思っていたことがありますけど……良いでしょうか？」
「なんだ？」
「……ひょっとして桂さん……はやて部隊長の事を好きなんですか？」
『『！？』』
ティアナの突如の質問にフェイト、エリザベス、月詠は驚きを隠せなかった。
一方の桂は……
「わからん……大切な仲間である事はたしかだ……それに……」
「それに？」

「……八神殿はああ見えても、負担な事を自分だけ抱えて無茶する性格だ……彼女を見ていると、なぜか放っておけない」

はやてを見て、桂はそう言い出す。
それを聞いたエリザベスは更に驚きだす。

『桂さん・・・？』

誰よりも桂の隣に居たエリザベスでも、放って置けない女性が居た事に驚きを隠せなかった。
この世界に飛ばされる前の桂は、女性に注目するとすれば人妻の女性であるだけである。
しかしここ最近のはやてとのコンビネーションに一緒に居る行動。
もしかすれば桂自身の思いが、はやてと言う1人の存在によって変わっているんじゃないかとエリザベスは思う。

そこにはやてが桂に駆けつけて、彼の手を繋ぐ。

「桂さん、早く行こう♪」
「はは……そう慌てるな八神殿」

嬉しそうにはしゃぐはやてに笑顔でしゃべりだす桂。
はやては桂の手を引っ張りながら嬉しそうに走り出す。

そんな2人の光景にフェイト、ティアナ、エリザベス、月詠は唖然としている。

「前から思ってたんだけど、はやてって桂さんと一緒に居る時は女の子らしく見えるね」
「と言うより、あんな嬉しそうなはやてさんって見た事無いんです

けど？」
「全く、桂も人妻好きを卒業させたほうが良かろうに」
『それもそうですね』

４人は桂ははやてといっその事、付き合えば良いのではないかと考える。
何やかんやで銀時達の次元旅行の旅が始まった。

しかし、この旅行がこれから起こる事件に立ち向かう事になる事を、銀時達はまだ知らない。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

スバル
「こんにちは、『銀八先生コーナー』を始めます。今回のアシスタントは私、起動六課のフォワード部隊、スバル・ナカジマが努めさせていただきます」

銀八
「最近、メインヒロインの座を持っているかの様な活躍ぶりをしているのも忘れているぞ？」

スバル

「いや、関係ないからね？それフェイトさんとなのはさんが聞いたら殺されますから言わなくて良いですからね！？」

銀八のさりげない一言に、スバルは青ざめてツッコみだす。

銀八
「まぁ、とりあえず質問行くぞぉ。先ずこの人ペンネーム『光軍』さん『

1、コチラの小説で幼少の頃の銀さんが波野咲というオリキャラに惚れまして、（救助活動の為に）銀さんのファーストキスを奪っています。そんな彼女についてどう思いますか？

2、フェイト、ライキリは魔力を常に奪う妖刀らしいけど、使い心地はどうなんや？俺の【鬼斬】もなんやそんな感じがするんは気のせいか？』」

スバル
「1は答えます。ずるすぎですよ波野咲さん！！さりげなくずるすぎですよ！！（涙）」

銀八
「いや、お前だってアイツとキスしたんだろ？」

スバル
「あ、そうでした／／／」

銀時との接吻（キス）を思い出して顔を真っ赤にするスバル。
これには銀八も嫌気をさす。

ちなみにこの質問を聞いたフェイト達（銀時が好きな乙女達）が聞いてとてつもない怒りを発揮したのは言うまでも無かった。

フェイト
「2つ目は答えます……確かに魔力を吸われる不思議な感覚だったけど……でも使いこなす為に鍛錬すれば行けると思う」

銀八
「はい、という訳で『光軍』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『はやてに質問
スバにゃん人形の発売はいつですか?出来ればばください。

スバルに質問
『ティアマグナムシュート』は必殺技として使わないんですか?使えばかなりの強力な技になると思うんですが?』」

スバル
「私に対する質問ですが……ティアナの『スターライト・ブレイカー』をあんまり喰らいたくないから……無闇に使えないよ……」

あの時のティアナの怒りは半端なく怖く、無闇に怒らせてはいけないとスバルは誓っている。

スバル
「後、はやて部隊長に対する質問おかしすぎですけどォォォォォォ!?」

はやて
「まぁ置きつきィ、何か『正宗の胃袋』さんに気に入られもうたからついつい渡してもうたわ（エヘ）」

スバル
「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！」
涙を流して落ち込むスバル。
こればかりは銀八も動揺する。
銀八
「……『正宗の胃袋』さん、せめて大事に扱ってください……んで次ぃ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『質問です.
?なのはさんの出番がめっきり減ってますけど生きてますか?本人さん答えてください
?ティアナさんが最後『お兄ちゃん』って言ってましたけど・・・呼び方が兄さんからお兄ちゃんになるんですか?』」
なのは
「……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！）
銀八
「んぎゃあああああ！！！魔王降臨しちゃったァァァァ！！」
銀八は腰を抜かして怯え出す銀時。
そして白い魔王はゆっくりと『レイジングハート』を構え……
なのは
「デスペレード・デモン・ブレイカー！！！！！」
とてつもない超極大な漆黒の魔力砲が放たれて、『ウッソ・エヴィン』さんに向かって放たれた。

しばらく間が空き、ティアナの質問がでる。

ティアナ
「……ま……まァ、これからお兄ちゃんの事をそう呼ぶから……／／／」

銀八
「既に言っちゃってるよこの子ォォォ！！……という訳で『ウッソ・エヴィン』さん、これからも小説作りをがんばってください」

スバル
「次行きます」

質問が終わると、スバルは復活したように立ち上がる。

スバル
「ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『

大谷「お登勢とやら…お主はそのような老いさらばれて老醜を曝した姿なのに何故水商売などをやっているのだ?貴様の容姿ではあまりに場違いなものであろう?あぁ、貴様ごときに酌を注がれる愚民共はさぞ不幸だろうな?」

毛利「二つ目は我からの質問だ。
我は飲み屋などに興味は無いが…
お登勢とやら、貴様の店には猫耳の使い方を間違えている異国女にカラクリ小娘などと化け物ばかり集っておるが、あれは貴様の趣向なのか?

それとも自身が山姥のような姿であるからせめて同族を集めて気を紛らわせようとでもしているのか？我はわからん」

『

お登勢
「あぁ？……私の店はそう言うもんじゃねぇよこのミイラ男。客人の悩みも聞いてやって、盛り上げて楽しませるのが目的とした店なんだよ。ミイラ巻かれすぎて目でも腐ってきたかこの脇役」

銀八
「うぉ、お登勢の反撃っぽい質問の答えだ！！」

お登勢
「それにオクラ、キャサリンは盗みを辞める為に私の見せで働いてんの。作を考えるのが特異なくせにそんな事も解らんのか？オクラ見たいな頭をしているくせに情けない男だねぇ」

スバル
「あ……あはは……と……とりあえず以上が『ｃｈａｒｉｅｙ』さん、質問有難うございましたぁ」

お登勢の攻撃的な答えに、スバルは苦笑してとりあえず無理やり終わらせた。

銀八
「へぇい、んじゃ次な、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『黒神さんに質問です。
リリカルなのはの第四期（ｖｉｖｉｄとＦｏｒｃｅ）を正直どう思っていますか教えてください。

はやてさんに質問です。
最近ノーヴェのＢＪなど作っていますが他に誰のＢＪを作りたいのですか？』」

黒神
「そうですねぇ。ｖｉｖｉｄは多少見ていますが、Ｆｏｒｃｅは全く見ていませんね。ｖｉｖｉｄはあれはあれで良いですが、もうちょっと笑いが欲しいところですね」

はやて
「そうやなぁ、今のところは考えておらへんけど……おもろいアイデアがあればすぐに……（うへへへ）」

はやては怪しげな笑いを浮かべて良からぬ事を考えている。

銀八
「と言うわけで、『ＳＡＤＳ』さん、これからもこんな感じですが、はやてを見守ってください。次ィ、ペンネーム『龍の骨』さん『ティアナとキャロに質問だ。俺と作者（龍の骨）に亀甲縛りをされて気分はどうだ？』」

ティアナ・キャロ
『『ヒィィィィィィィィィィィ！！！！』』

『龍の骨』さんの質問に、２人はしゃがんで青ざめる。

スバル
「ティア、キャロ！！どうしたの！？」

2人の異常なまでの怯えに、スバルはどうしたのかと不思議に思う。
だが銀八はどうせろくな目にあったのだと思っている。

銀八
「だいぶえれぇ目に合っていやがるな……と言う訳で『龍の骨』さん、2人が世話になりましたぁ」

スバル
「次が最後の質問です。ペンネーム『風花』さん『?.ティアちゃんは初めてのキスはどうでしたか？　嬉しい？　嬉しいよね？（ニヤニヤ）
?ヴィヴィオちゃんは今近くにいる女性でママになって欲しい人って誰?』て、ティアもやっちゃったのォォ!?」

ティアナ
「……（コク）……そう言うあんただってやった訳ね／／／」

スバル
「……はい、やっちゃいました／／／」

2人は、銀時との接吻（キス）を思い出して顔を真っ赤に染める。

ティアナ
「まぁ……そんなに硬くは無かった、それで良いじゃない!!／／／」

顔を真っ赤にして、単独に答えて素直にならないティアナ。

銀八
「何か聞いてて腹正しいだけど？……とりあえずヴィヴィオ、答えどうぞ！！」

ヴィヴィオ
「うーん、そうだねぇ……ヴィヴィオはわかんないけど……スバルお姉ちゃんはママと言うよりお姉ちゃんかなぁ？」

スバル
「え、私がヴィヴィオの姉？」

ヴィヴィオにとって、スバルは姉的存在である。
しかも直ぐに仲良く出来るような感じで。

銀八
「はい有難う。というわけで『風花』さん、この小説のスバルはヴィヴィオの姉的存在になるやも知れません。以上、今回の質問コーナーは終了」

ヴィヴィオ
「お姉ちゃん♪」

スバル
「なぁに、ヴィヴィオぉ♪」

妹のように甘えるヴィヴィオに、姉のようにヴィヴィオの頭を撫でるスバル。

銀八

「マジで姉妹誕生になっちゃうの！？……まぁとりあえず次回のアシスタントは、ヅラに狸女、そんでエリザベスです。次回もお楽しみィ」

第百訓：時が経つごとに人は少しずつ変わっていく（後書き）

黒神
「と言う訳で、今日で１００話目突破！！次回は新ＯＰとＥＤを紹介させてもらいます！！これからも『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』をよろしくお願いします♪」

ヴィヴィオ
「次回、「酔いやすい体質なら酔い止めはちゃんと飲むべし」テイクオフだよ」

第百一訓：酔いやすい体質なら酔い止めはちゃんと飲むべし（前書き）

今回はとてつもなく気持ち悪くなる話ですので、最初に謝っておきます。

吐き気を感じたらマジごめんなさい。

辰馬
「アッハッハッハッ！！『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まりじゃ！！」

第百一訓：酔いやすい体質なら酔い止めはちゃんと飲むべし

「オ〝ボロロロ

『『あーはははははははははははははははははははははは！！！！』』

勝ち誇って笑い出す2人。
しかしその瞬間だった。

『『うぅ！？』』

突如、異変を感じた2人は空袋を出して……

『『オヴォヴォヴォ

ば食事だしね♪」
「いくら太らないからってどんだけ食べりゃ気が済むのよ！！て、めっちゃうらやましいぞこん畜生ーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

スバルの大食に呆れてツッコみだ、同時に太らない体質を持つスバルにめっちゃうらやましく感じるティアナ。
なんかかんやで銀時達が一番盛り上がっていた。

一方の桂、エリザベス、はやて、リィンは銀時達の騒ぎを呆れ笑っていた。

「まったく、騒がしい連中だ。飛行機内ぐらい黙っておれぬのか？」
『そうですね』

桂とエリザベスは銀時達のドンチャ騒ぎにどうして黙っていられないか呆れていた。

「まぁ良えやん♪私は楽しくて良いと思うし」
「うむ……まぁそれもそうだな」

はやての一言に納得する桂。
はやては桂の左手をつかみ出す。

「ん？どうした八神殿？」
「……桂さん、実はお願い事があるんやけど聞いてくれる／／／」

突如、顔を真っ赤にして桂にお願いがあると言い出すはやて。
エリザベスとリィンは急激なるはやての攻め的な恋の展開に注目する。

「俺ができる事なら……」
「じゃ……じゃあ……」
ドキドキと心臓を鳴らすはやて。
緊張はするが、それ以上に自分の思いを伝えたいのである。
「も……もし良ければ、私の事を……はや――」
ピンポーン
≪皆様、よろしければ右側の窓をご覧になってください。あれが次元空間の中で最も美しいと言われる次元惑星、ゴスモスです≫
『『わー、綺麗だ～』』
突如、次元惑星である『ゴスモス』を見つめ、その美しさに見とれる桂とはやて。
「『わー』じゃないですよ!!さっきまでの良い感じを何水に流しているんですかァァァ!!!!」
突如の次元聖地の美しさに見とれて、せっかくの良い雰囲気が台無しにした2人にツッコみだすリィン。
一方の銀時達も『ゴスモス』の美しさに見とれていた。
「ほぉー、何とも綺麗な惑星だこと」
「綺麗……」
「うわぁー、すごく綺麗」
「思わず見とれちゃう」
「パパァ、ヴィヴィオあんなに綺麗な聖地見るの初めてだよ!!」

「きゃほーい、まるで地球のような感じアル！！」
「すごいや」
「うむ、日輪や晴太にも見せてやりたいもんじゃ」

青く美しい聖地みたいな惑星に思わず見とれてしまう銀時達。

「……まぁ、みんなが夢中になるのも分からない事もありませんが……」
『そうだね』

リィンとエリザベスは、『ゴスモス』の美しさに見とれてしまう銀時の気持ちを分からない訳でもなかった。

『それに、綺麗だね』
「はい♪」

2人もまた、『ゴスモス』の美しさに注目する。
誰もが次元惑星『ゴスモス』に注目する中、事件が起こった。

ガチャ

「へ？」

突如、何か機械みたいな音が聞こえたリィンは後ろを振り向くと……

「動くな」

そこには口の周りをハンカチで隠した銃を構えている男がいた。
しかもいつの間にか１２人以上の男達が銃を持って構えている。

「キャアアアアア！！ハイジャックよ、ハイジャックだわぁ！！」
「うるせー騒ぐなァァァ！！」

乗客の騒ぎを怒鳴って黙らせるテロリスト。
突如の大騒ぎに銀時達も気づく。
リーダーらしき男が宣言する。

「これより、この飛行船は我等革命組織『萌えるロリ根性』が乗っ取ったァァ！！」
（『萌えるロリ根性』って何ィィィ！？それ貴方達がロリコンテロリストと言っているもんだからァァァァ！！）

テロリストの組織名に心の奥中でツッコむリィン。

「貴様らの良く先は楽しい観光地から地獄に変わったんだ！！次元旅行などという堕落した遊興にうつつを抜かしおって！！管理局の傲慢な態度によって数多くの人々達が奴らに殺された事を忘れたかァ！！」

テロ集団は管理局を憎む集団であり、機動六課であるリィンは少し複雑な気持ちを抱く。

「この飛行船はこのままミッドチルダへと進路を戻し、罪なき者達が多く死んでいった元凶である管理局のアジトにツッコむ！！我々の血肉は燃え尽きるが憎き管理局に大打撃を加える事ができよう！！その礎となって管理局によって命を落とされた亡き者達に誇られ死んで行け！！」
「そんな！！？それじゃあそっちだって無関係な人々を潰そうとしているじゃないですか！！」
「お兄ちゃん、やばいよこれ！！」

テロリストの恐るべし計画にリィンとティアナもどうすれば良いのか考える。

「ふ…攘夷浪士の中にもこの様なことをする者もいるが、気持ちは分からぬ訳でもない……だが、罪無き乗客達をも巻き込む様な野蛮な行為……黙って見過ごせぬ！！」

そういって桂は懐から『んまい棒混捕駄呪（コーン・ポタージュ）』を取出して立ち上がる。

「おい、何を勝手に立ち上がって……」

「『んまい棒混捕駄呪（コーン・ポタージュ）』！！」

『んまい棒』を床に向けて投げ、辺りが煙に包まれた。

桂の必殺兵器が炸裂して機内は煙に包まれて混乱になってしまった。

「ぐぉおおおお！！」

「周りが見えねェ！！」

テロ集団も桂の『んまい棒』で発生した煙に混乱していた。

その隙にと銀時達は動き出す。

「せっかくの、俺達の旅行を台無しにすんじゃねェーーーーーー！！」

ドカァ！！

『『がふぁあ！！』』

銀時が飛び蹴りしてテロリストを2・3人は吹き飛ばす。

「貴様！！」

テロリストが銀時に銃を向けるが……

「ふぅ！」

ドカァ！

「なぁ！」

横からスバルがテロリストの銃を蹴り上げて、宙に浮かんだ銃はスバルがキャッチすると、

「はぁああ！！」

パパーン！！

『『ぐふぇえええええ！』』

刹那の瞬間移動でテロリスト3人を剣の様に銃を振り回し、叩きつけて気絶させる。

「ティア！」

そしてすぐ様にテロリストが落とした拳銃を拾ってティアナに渡すと、

「銃があれば！！」

パパパパパパーン！

「何ィィ！？」

素早く銃を撃って、その弾丸はすべてテロ集団全員の銃に命中して吹き飛ばす。

これでテロ集団は丸腰になった。

「天誅！！」

『ぶっとべぇ！！』

ドカァ―！！

『『あべふぁ！！！！』』

桂とエリザベスは木刀とプラカードでテロリストを2人吹き飛ばす。

「ふぉわちゃあああああ！！」

「はぁ！！」

「フ！！」

ドカァン！！

『『ぎゃあああああ！！』』

神楽、エリオ、月詠の3人も素早く相手を殴り、蹴飛ばし、手刀で1人ずつ吹き飛ばす。

「はぁあああああああああ！！」

ドカァーン！

「あんぎゃあああああ！！」

フェイトも落ちていた銃を拾って、スバル同様剣の様に振ってテロリストを2人気絶させる。

「ば……化け物だぁ！！」

残り1人のテロリストは銃を捨て、この場から逃げようとするが……

「とぉ！！」

ガコーン！！！！

「あ〝あ〝あ〝

「……ヴィヴィオ、おめェ何ておっかねぇ攻撃をしてんだ？」
「男はチ●コが最大の急所だって、以前スカリエッティさんに万が一の為に教えてもらったから♪」
「何変な事、教わってんだァァァァァ！！？確かに役立てっけどまだ教わるの早すぎだってェ！！！後、年頃の娘が軽々しくそんな言葉言ってはいけません！！せめて『アソコ』と言ってぇ！！」

スカリエッティに男の急所と軽々しく言ってはいけない言葉を教えられたヴィヴィオに銀時は青ざめてツッコみだす。

「あのバカ研究者……帰ってきたら頭冷やしてやろうかなぁ？」
「フェイトォーーーーーーーーーー！！それなのはのセリフだからァーーーーーーーーー！！」

女にとんでもない事を教えたスカリエッティに怒りの憎悪を表すフェイトに、銀時は青ざめて叫びだす。
すると、

ガチャン！

突如、後ろから偶然にも生き残ったテロリスト1人が銃を構える。

「あり？」
「ふざけやがって、死ねェェェェェェェェェェェェ！！」

テロリストが引き金を引こうとした瞬間、

ドン！

「ブ！？」

背後から扉が豪快にあけられ、テロリストは吹き飛ばされて気絶する。

扉を開けたその人物は……

「あ～気持ち悪いの～…酔い止めば飲んでくるの忘れたきー。アッハッハッハッハッ」

グラサンをかけ、下駄をはいている男、坂本辰馬が現れたのだ。

「辰馬！？」

「坂本！？お前もこの飛行船に！？」

「おおぉ、金時にヅラァ！！おんし等もここに……」

ドカァ！！

「いぶあ！！」

『『だから（銀時だと言ってるだろうがァァァァ！！）（ヅラじゃない桂だァァァ！！）』』

2人のダブルツッコみ蹴りが炸裂して辰馬は吹き飛ばされて壁に衝突して気絶する。

これにはフェイト達も呆れていて、ヴィヴィオはフェイトによって両目を防がれて目隠しされている。

ドドォン！！

『『！？』』

「うわァァァ！！爆発だァァァ！！」

突如、爆発音が響きだして誰もが驚く。
すると扉が外れ、煙が大量に浮き上がる。
「大変だァァァ！！操舵室で爆発がァ！操縦者たちも全員負傷！！」
先ほどの爆発は操舵室で発生し、しかも大爆発による影響で全員負傷してしまう最悪な展開が起こった。
「フフ、終わりだよお前ら、管理局に迎合する売国奴どもなど皆死ねばいい！！」
すると飛行船は急激な落下をする。
「キャアアアアアアアアアア！！！！」
銀時達は急激なる落下によって倒れこんでしまう。
「どなたか宇宙船の操縦の経験のある方はいらっしゃいませんかァ！？」
「もうホント誰でも良いから助けてェェ！！」
客達は助けを求める悲鳴を上げると、銀時は辰馬の髪をつかんで無理やり引っ張って走り出す。
「あ痛たたたたたたたた！！何じゃーーー！！」
「テメー船好きだよな！？操縦ぐらいできるだろ！！」
そう言って銀時は辰馬をつれて操舵室に向かう。

＊

「うわあああああ！！もうここだめだァ、逃げろォォォォ！！！！」

船員達は恐怖のあまりに操舵室から逃げ出す。
ボロボロになった爆破ヘアーとなった眼帯艦長は倒れこんで天井を見上げる。

「フフこれまでか。私も艦長だ、船もろとも死のう」

死の覚悟をして決意した艦長は、たった1つの後悔を思い浮かべる。

「ああ…母なる星ミッドチルダよ…もう少しでお前の懐にいぃぃぃ

「銀時、やばい状況になってきたよ」
「みんな念仏を唱えていますよ！！」
「ヴィヴィオ達、大丈夫なの？」

フェイト、リィン、ヴィヴィオが心配してそう言いだす。

「心配いらねーよ。あいつに任しときゃ……」
「昔の馴染みだ、頭はカラだが無類の船好きだ。」

銀時と桂は辰馬の特徴をこの場にいる誰よりも知っている。

「銀河を股にかけて飛び回っている男、坂本辰馬にとっちゃ船動かすなんざ自分の手足動かすようなモンよ」
「……よーし、準備万端じゃ」

その言葉に、辰馬の意外な活躍にリリカル組は彼を見直す出すが……

「行くぜよ！」

すぐにさらに見損なう。
なぜなら辰馬の掴んでいるのは舵じゃなくパイロットの足だった。

「……本当だ、パパの言うとおりあのおじさん頭カラだ」

ヴィヴィオは呆れて口に出す。

＊

「おーい、もう一発行くか？」
「そうすればはっきりとできるだろ？」

銀時と桂は辰馬をつかんで拳を握りだして構える。

「アッハッハッハッハッハッ！こんなデカイ船を動かすん久しぶりじゃき、勝手がわからんち」

ボコボコにされた辰馬は謝罪してしっかりしだす。

「舵はどこにあるぜよ？」
「これじゃない事は確かや！！」
「ちゃんとしてください！！」

はやてとリィンは呆れてツッコみ、注意する。

「銀ちゃん」
「これですか？」

神楽とエリオはパイロットの両手を持ち上げる。

「エリオォォォォォォォォォ！！それ違うからァァァァ！！」
「パイロットから頭離せェェ！！」
「すみません、パイロットさん！！」

フェイトとティアナが2人でダブルツッコみを炸裂させ、スバルがパイロットに謝罪する。
するとヴィヴィオは窓を覗くと、最悪な状況だと驚く。

「パパ、ヤバいよ！このままじゃあの惑星に落ちてしまうよ！！」
「みなさん、コレですコレ！」

リィンはようやく舵を見つけ出す。

「でかしたお嬢ちゃん、あとはワシに任せ……ウェプ！！」

「ギャー！！何吐いているんですかァァァァァ！！」

辰馬のゲロ吐きに、ティアナが叫びだす。

「アンタ船好きじゃなかったんですか！？思いっきり船酔いじゃないですかァ！！」

「イヤ、船は好きじゃけど船に弱くての～」

「何、その複雑な愛憎模様！？」

船好きなのに船酔いしやすいなんておかしすぎるとティアナはツッコみだす。

「分かるよ、辰馬さんも好きで船に酔いやすい訳じゃな、ブァロローーーー！！」

辰馬の気持ちを動揺すると、今度はヴィヴィオもゲロを吐き出す。

これで三度目であった。

「ヴィヴィオォーーーーーーーーー！！！これで3度目だけど大丈夫ゥ！？」

ヴィヴィオの酔い吐きに青ざめて心配するフェイト。

「あ、そうそう辰馬！！てめェが舵に向かうとこけてポッキリ折れてしちまうから絶ってぇ舵に向かっちゃ駄目だからな！？」

「そうネ！あの時はてめェのせいで私と銀ちゃんがどんだけ酷い目にあった事かわかっているアルカァ！！」

銀時と神楽はあの時の事を思い出す。
元いた世界でも、辰馬の思わぬパターンによってどんな恐ろしい体験をしたかを今だ忘れていない。

「アッハッハッハッハッ！！安心せい、次元の中であん時のパターンが起こっちぉたら、ワイ等無事じゃすまっけんのう。よし分かっちゃ、今回は2人の意見に賛……」

辰馬がしゃべりながら後ろに下がると、倒れたパイロットの足につまみ…

「せぁあああああああああああああ！！？」

後ろに倒れて、その勢いのあまりにはいていた片方の下駄を飛ばしてしまう。
そしてその下駄は舵にぶつかって、

ボキィ！！

強い衝撃でポッキリと折れてしまった。
下駄によって舵が折れてしまうなんて、異常なまでの最悪な展開に銀時達は信じられない表情をする。
倒れた辰馬はゆっくりと起き上がり、

「アッハッハッハッ！そう言うパターンで来たかぁハッハッハ！！」
「『アッハッハッハッ！』じゃねぇよ！！」

『『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝

あ〜あ〜あ〜

桂
「では質問を答えよう。まずはペンネーム『あああ』さんからの質問だ『？新八が今のモテモテな銀さんを見たらどう思いますか？？銀園祭でなんで銀さんは高杉と戦ってた時、銀の魔道書を使わなかったんですか？』この２つは銀時に答えてもらおう」

するとモニターから、坂田銀時の姿が映し出された。

銀時
≪どもー、銀時でぇーす。？はさすがに新八（ぱっつぁん）にばれたら殺されそうだから想像したくないわ≫

桂
「まったく、貴様のハーレムぶりには呆れるばかりだ」

はやて
「同感や」

銀時
≪うっせー！！てめェ等にだけは言われたくねぇんだよ！！（怒）≫

呆れる桂とはやてに、モニターの銀時は怒鳴る

銀時
≪２つ目は、まだ自分のコスプレ姿を敵に見せる勇気がなかったし……何より高杉に馬鹿にされそうだから絶てぇやだ≫

銀時がそう言うと、モニターは切れた。

桂
「と言う訳で『あああ』さん、主人公時期の質問の答えでした。次行こう、ペンネーム『サディスト』さん『サディスト
「なのはに質問だ。
ティアナ達の成長と活躍を隊長としてどう思う？
真面目に答えてくれ」

姫史
「ティアナに質問だ。
念願の銀時とキス出来た訳だが妹のままで終わるつもりか？
答えてくれ」』……まったく、あの男は」

はやて
「義理だからって妹に手出すなんて信じられへん」

エリザベス
『まさにシスコン化』

3人は呆れて銀時がティアナとキスしたことに呆れる中、代表としてなのはが答えた。

なのは
「以前とは比べ物にならない程の成長に驚いちゃった。上司として鼻が高いよ♪

部下の成長になのははすごく喜びだす。
一方のティアナも答えだす。

ティアナ
「あああ……当り前よ！！ただのお兄ちゃんの妹だけで終わる訳ないじゃん！！／／／」

桂・エリザベス・はやて
（（あ、ティアナがブラコンだった））

ティアナのツンデレっぽいけど素直に答える反応を見て3人は心からそう思う。

桂
「と言う訳で『サディスト』さん、これからもバカ作者のミスをちゃんと忠告してくれ。こっちでもまいってる」

はやて
「次行くなァ、ペンネーム『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さん『一つ目エリオ君に質問です。
神楽と月詠とキャロ、一番好きなのは誰ですか？
（正直にハッキリと答えてください）」

作者
「はい・・・次は実お前の番だ」

実
「はいはい・・・
それでは二つ目の質問
魔王じゃなくてなのはさんに質問
ティアナが銀さんとついにキスしました！

正直どう思いますか？
（魔法全般無しで！お口で説明、お願いします）」』２つ目怖いので却下ァァァ！！！」

はやては青ざめて２つ目の質問だけを破り捨てる。

桂
「これはさすがに命を無駄に捨てる行為だから無理だ……もう１つの質問を答えるとしよう」

桂は、はやての意見もありという事で１つの質問を却下し、もう１つの質問を答える事にした。
すると、モニターからエリオの姿が見えてきた。

エリオ
≪そ……それはわかりません……ただ、神楽さんと月詠さんの２人もどちらを選ぶなんて僕はま――≫

エリオが質問に答えようとする中、後ろからジェイソ●が……

プツゥン

ザァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！

モニターが切れて、エリオとの通信が途切れてしまった。
桂、エリザベス、はやての３人はいったい何があったのか考えて青

ざめる。

桂

「……『Ｍｉｎｏｓａｗａ』さん、すまぬがもう１つの質問のような質問は銀八先生に答えさせる為にとっておいてくれ……（青ざめ）」

エリザベス

『つ……次はペンネーム『ミクニップ』さん『ティーダ「ティーダと」

クイント「クイントの！」

０２・Ｄゼロ『とりあえず質問放送局？？？。ー野晒し編ー（してた後だったらゴメンなさい）』

ティーダ「さて始まりました『とりあえず質問放送局？？？。ー野晒し編ー』。司会は私、【復活した黒きガンマン】事ティーダ・ランスターと」

クイント「同じく、スバル達と同じくらいの年で復活した【蘇ったストライカー】のクイント・ナカジマがお送り致します♪」

ティーダ「しっかし、今回のティアナのバトルは凄かったですねクイントさん」

クイント「ええ。ノーヴェも、アレ位は活躍してほいしいものです」

ティーダ「そ、そうですか・・・。何気に心配してるんですね」

クイント「クローンとはいえ私の娘達ですから。殆ど活躍が無いと私も心配になって黒髪さんを惨殺してしまいそうで・・・」

ティーダ「そ、そうですか・・・（汗）」

クイント「・・・さて！早速ですが質問にいたします！０２さん達、

お願いします」
０２「分かった、最初の質問はナンバーズに対してだ」

ナンバーズに質問：最近お前たちの出番が無いから心配である。とりあえずナンバーズ編とか作ってほしいとは思っている。

ティーダ「・・・いきなり世知辛い質問ですね」
クイント「本当にあの子達の出番全くありませんからね。とりあえずあの駄目ガネ女以外は出てきてほしいですね」
Ｄゼロ「（アイツに殺された事根に持ってるぞ・・・）さえ、次の質問だが。ほいノーヴェ」

ノーヴェに対して：実は最近、お前の事が好きって言ってた人物が居るらしいが・・・？それはさておき、チンクに対しては何だか別の感情が渦巻いてると聞いたが本当ですか？

ティーダ「・・・本当にうちの奴はノーヴェ須木だよなぁ・・・、何か少し危ないレベルになりそうだが・・・」
クイント「それじゃあ今日はここまで！それではさよなら～～～♪」
『……』

すると、モニターからナンバーズの姿が映り、はっきりと答える。
だがそこには何故かディエチはいない。

ナンバーズ（ディエチを除く）
≪≪もっと私たちに出番を（っす）！！！！≫≫

その一言だけを叫びだし、涙を流す。

桂
「あの者達も苦労しているんだなァ」

はやて
「災難や……もう1つはノーヴェの方はどうや？」

ノーヴェ
≪ええ！？あ……あああ、アタシは別になんでも……それに、別に嬉しくなんかないし……／／／≫

桂・エリザベス・はやて
（（やっぱツンデレだ））

ノーヴェ
≪それに、チンク姉は大切な姉だから別の感情を持つのは当然だろ！？≫

クアットロ
≪じゃあ、私たちは普通の感情って訳ェ？≫

ノーヴェ
≪少なくともアンタに対する感情はない≫

クアットロ
≪酷い、あんまりだァァァ！！！！≫

プツゥーン

質問回答が終わり、モニターは切れた。

桂
「何やかんやで、賑やかな家族みたいなもんだ……『ミクニップ』さん、ああ見えてもナンバーズは仲良くやっているようだ」

はやて
「次行くなァ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『マリオ「『マスモデウス活け漬けの焼酎』を飲みたいから送って欲しい。見た目はともかく美味しそうだと思ってな」

それ質問じゃないよね！お願いだよね！

ソニック「スバルに質問だけど、黒神が知っている漫画やアニメ、ゲームの中で自分的にこの人のやってみたいって言うバトルスタイルはあるか？」

フォックス「銀時やスバル、ノーヴェに質問だけど…3人ともほとんどコスプレなバリアジャケットにされてるけど3人は自分でバリアジャケットを作れるならどう言うバリアジャケットにしたいんだ？」

マリオ「後、銀魂放送再開おめでとう、この小説でもアニメでも頑張れよ！」』と言う訳でスバル、よろしくな」

スバル
「もちろん『銀魂』の銀さんの様な力ある我流剣術！！後、『戦国●ＡＳＡＲＡ』の●達政宗さんの六爪流に……」

はやて
「でもすでに凶王の剣術を会得しているやろ？」

スバル
「あ、そうでした！……後、もう1つは……」
はやて
「つまらへんから却下―！！！」
そういって、はやてはもう1枚の質問を破る。
銀時、スバル、ノーヴェ
『『あぁぁーーーーーーーーーーーーーーー！！！何て事をすんだァァ（するんですかァァ）（するんだよォォ）！！！！』』
スバルはもちろん、モニターから銀時とノーヴェが現れて声を合わせて叫びだす。
けどすぐにモニターが切れた。
桂
「すまんな。と言う訳で『鳴神ソラ』さん、一度『マスモデウス活け漬けの焼酎』を送っといたから試してくれ」
エリザベス
『ペンネーム『ソウ』さん『ここの銀さんが某幻想殺しの一級フラグ建築士に見えてきました。
それでは質問です。
1．この作品の中で不遇ポジションベスト3は誰に当たると思いますか、銀八先生がお答えください。
2．今現在本編に登場している中で一番のいじられキャラになって

いるのは誰でしょうか。』』

桂

「では代わりに教えてやろう。これが不適ポジションベスト3に入る者達だ！！！」

1位：シャマル

2位：ユーノ

3位：ギンガ

はやて

「理由は想像で任せるな。そしてもう1つは私が発表するな。この3人や！！」

1位：ユーノ

2位：ヴァイス

3位：黒神

桂

「まさかバカ作者までもがベスト3位に入るとは……と言う訳で『ソウ』さん、ベスト発表理由は自由に考えてくれ」

はやて

「次が最後や。ペンネーム『月光閃火』さん『1．フェイトに質問だ。もし仙人のイタズラでスカリエッティと身体が入れ替わったらどんな反応をするんだ？

2．スバルとアリマに質問だ。良かったな…サナダの手作り弁当食えてよ？んで、だ…もし望むなら後でサナダと天界電話で会話してもいいが…どうだ？

3．アリマに質問だ。好きな食べ物と嫌いな食べ物を教えちゃくれねぇか？今度俺の特製料理をご馳走してやるからよ♪』」

フェイト

「最悪だァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！（泣）」

フェイトは想像するだけで豪雨のごとくに涙を流す。

スバル

「うそ！？サナダ隊長から！？」

スバルはサナダから渡された弁当を受け取って感激する。

スバル

「ううう……サナダ隊長……ありがとうございます……（涙）」

サナダ手作りの弁当を受け取ってスバルは大感激で涙を流す。

桂
「うむ、部下思いの良い隊長だ……そしてアリマ殿はというと……」

またもやモニターが映しだされ、今度はアリマが映し出された。

アリマ
≪嫌いな食べ物はないよ……また機会があったらお誘いに乗るね≫

アリマが質問に答えると、モニターが切れる。

エリザベス
『本当は良い子なのにね』

はやて
「そうやな……と言う訳で『月光閃火』さん、アリマの活躍を楽しみに待ってください……以上で今回の質問コーナーは終了や」

桂
「次回は高町殿がアシスタントするので、くれぐれも彼女を刺激する質問は控えめに」

エリザベス
『それでは……』

桂・はやて
『『次回もお楽しみ～』』

一方、銀八先生はと言うと

銀八
「ちくしょおおお

第百一訓：酔いやすい体質なら酔い止めはちゃんと飲むべし（後書き）

辰馬のあり得ない出来事でまさかの墜落。

舞台は次元惑星『ゴスモス』。

そこでは今、最大の危機が起こっていた。

「貴方達が本当にあの桂小太郎とエリザベス、そして八神はやてならお願いがある！！」

ゴスモス星人の若き少女　スバキ

「この惑星『ゴスモス』を滅ぼし、私は新たな星を生み出す！！」

『ゴスモス』消滅をたくらむ剣王（けんおう）　コクメン

そして、はやてに最大の危機が……

ザクゥ！

桂
「はやてエエエ

第百二訓：アクシデントは連鎖して起こりやすい（前書き）

黒神
「新年明けましておめでとうございます。新年初の最新を始めたいと思います」

銀時
「その割にはすんゲェ遅かったじゃねぇか？しかももう２０１１年始まってから一週間立つぞ？」

フェイト
「確かに少し遅すぎたようだけど？」

黒神
「マジすんません！」

２人が作者の最新速度の遅さに呆れ、黒神は謝罪する。

黒神
「それとは別に、実は今回初めてアクセス解析して調べて見ました」

銀時
「てか今更！？他の作者はやっているのにてめぇだけ今更かよ！？もうこの小説１００話以上続いてんだぜ！？」

余りにも遅すぎるアクセス解析に銀時は呆れる。

黒神

「そして調べてみたら何と……ＰＶ２３４万以上アクセスでユニークが１８万人以上達成しました」

銀時・フェイト
『『ええエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？』』

まさかの巨大な数字に２人は驚きの余りに叫びだす。
いくら１００話達成したからって１００万どころが２００万のアクセスが達成したのだ。

黒神
「これも皆さんの応援のお陰であります。作者として強く感謝をします。では新年初の『リリカル銀魂ＳｔｒｉｋｅｒＳ～攘夷戦争鎮魂歌～』を始めます」

フェイト
「……今一瞬、宇宙を感じちゃったよ」

銀時
「……俺もだ、フェイト」

第百二訓：アクシデントは連鎖して起こりやすい

自然豊かな緑の草原。

そこには地面に大きく落下して突き刺さっている飛行船があり、外には銀時、フェイト、スバル、ティアナ、神楽、月詠、エリオ、ヴィヴィオ、辰馬がいた。

更には乗客達も外に出ており、中には飛行船に待機している者もいた。

「いやァ、何やかんやでワシ等も無事で良かとゥなァ……アッハッハッハッハッハッハッ」

「良かった訳ねェよ……このバカアフロ」

辰馬の愉快な笑いに対して銀時は呆れて言い出す。

「大体なんで下駄で舵が折れんだよ!?てめェのドジ踏んだせいで危うく死ぬところだった!」

「そうネ、いったいどんだけトラブル起こせば気が済むアルカ!?」

銀時と神楽は辰馬の行動自体がトラブル起こす事ばかりだと呆れる。

辰馬自身も今回はトラブルを起こさないでおこうと気を付けたつもりだが、すべてが裏目であった。

「……まぁ、みんなが無事だったから良いけど……」

「下手したら、ヴィヴィオ達死んでたんだよ?」

フェイトとヴィヴィオに対しても、辰馬の起こしたトラブルは異常であり、シド目で睨み付けている。

奇跡的に死者は1人も存在しなかったから良いものの、下手したら大勢の命が消えていたのやも知れなかった。

「銀さぁ～ん」

そこに、スバルが走って駆け付けてきて銀時に近づく。

「ん、スバル……おめェどうしたんだ」

「少し調べてみたんですけど…数多くの森に自然豊かな緑の草原に青い空……ここ間違いなく『ゴスモス』の惑星ですよ」

自分達がいる惑星は『ゴスモス』であるとスバルは言い出す。

確かに飛行機内でゴスモスの紹介をされて見つめていた中、テロ事件が起こった為か落下先が『ゴスモス』であった。

「じゃあ、救助船が来たらすぐにこの惑星から去ったほうが良いんじゃない？」

「あァ、どういう事だよティア？」

確かに救助船が来たらすぐに救助船に乗るのは当たり前だが、どうしてすぐに去るべきなのかを気になる銀時。

「噂じゃ、『ゴスモス』は大自然の惑星として次元惑星遺産の1つとして認識されて『ゴスモス』に生まれてきた者及び住まう人達の許可なく無闇に入ったら、異次元法律違反として逮捕されると聞いた事があったような……」

ティアナの話を聞いた銀時達は今の自分達の立場を理解した。

自分達は墜落して事後に巻き込まれた側ではなく、無差別侵略違反

者側になっている事に。
それを理解し、誰もが青ざめたが船長の話によれば後5分で救助船が来るらしい。

「何かやばかァ！！テロリストの連中が余計な事しおったせいで、わし等犯罪者扱いされてもうちゃうかァ？」
『『その原因を半分作ったのは（てめェだろうがァァァァ）（アンタでしょうがァァァァ）！！！！』』

ドカァ！！×3

「あららぁーーーーーーーーーーーー！！！！」

辰馬の無責任さにブチ切れた銀時、神楽、ティアナの3人は怒りを込めて辰馬を蹴っ飛ばす。
フェイトはヴィヴィオの眼を隠し、スバルは青ざめて苦笑するしかなかった。

「あ……あははは……まァ、コレで私達も無事に帰れる事だし……」

それで一件落着と安心するスバルだが……

「フェイトさぁーーーーーーーーーーーーん！！！！」

と、そこへ急いで慌しく走り出すエリオと月詠がフェイト達の元に駆けつけた。

「え……エリオ！？それに月詠も……一体どうしたの、そんなに慌てて！？」

フェイトは2人の慌てようと息切れに戸惑っていた。
そしてすぐさまに2人は重大な事をフェイトに話し出す。

「ハァ…ハァ…ハァ…今さっき……探し回ってたんじゃが、全然おらんかった」
「え……いないって誰が！？」

誰かがいないと月詠が言い出すと、そのいない人物をエリオが言い出す。

「桂さん、エリザベスさん、はやて部隊長、リィン副隊長の４人がいません！！」

４人がいないと言い出すと、それを聞いた銀時達は……

『『…え……ゑゑゑ

荒れ果てた山の頂点。

その荒れ果てた位置に球体らしき物体が地面に埋まっていた。

その球体の扉の部分が豪快に開きだす。

「ふぅー、何とか脱出できたか……みんな出てきても良いぞ！！」

桂が安全だと確認してカプセルの中からエリザベス、はやて、リィンの３人が出てくる。

「はぁ～、死ぬかと思ったわァ！」

『マジで良かった』

「奇跡的の生還ですゥ！！」

はやて達も自分達が無事で良かったと安心してホッとする。

なぜ彼らはカプセルの中に存在するかと言うと……

＊

『『あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝！！！！！』』

銀時達は辰馬の起こした『下駄飛ばしによる舵折り』によるトラブルによって体を転がしてしまう。

もはや絶体絶命であると思った中……

「ぬぅあ！！」

桂が壁に強く叩かれるように倒れると、偶然にも彼の左手が『緊急脱出装置』のボタンを押してしまい、桂がもたれつく壁が開いてしまい、さらにはエリザベス、はやて、リィンの3人も桂と一緒にその穴に入る。

『『あああああああああああああああ！！！！』』

4人はその穴の中から通じるゲートに通るように落ちてしまい、最終的にはカプセル型緊急脱出機に入って、そのカプセルだけが飛行船から宇宙に吹き飛ばされる。
そして銀時達が乗っている墜落する飛行船とは別の方向で『ゴスモス』に落下したのであった。

＊

「今思い出せば、坂本のバカと一緒にいるとロクな事が起こらぬ事を分かっていながら……」

辰馬に対する怒りを表す桂。
攘夷戦争で最初に出会った時でも彼にはいろいろ手を焼いていた。

「全くや！！何で下駄で舵が折れるんや！？なんかワザとトラブルを起こしているしか思えへん！！」
『今度、顔見かけたら一発ぶん殴る！！』

辰馬の起こしたトラブルははやてとエリザベスにも怒りを表していた。

それもその筈、下手したらそのせいで自分達は死んでいたかも知れないのだ。

「それよりも今この状況を何とかするですゥゥゥゥ！！！！」

リィンが叫びだすと、桂達はリィンに注目する。

「他の皆さんの無事かどうかどうしてはやてちゃん達は心配しないんですか！？下手したら何かあったかも……」

「それは心配無用だ、リィン殿」

桂は懐、はやてはポケットから特殊な四角い装置を出す。
その装置の中心に粒の様に黄色く輝くのが点々と光っている。

「こんなこともあろうとなァ、源外さんとスカリエッティに発明させてもうた『行先ＤＮＡ監機』を開発させてもうて、データに登録した人物だけの行先と生命力を調べさせる機械を開発させてもうたんやで」

「銀時のいる先は……南の様だ。しかも光の輝きを見る限りでは全員無事のようだ」

「……よ…よかったですゥゥ」

銀時達が無事だと聞いて安心するリィン。

『それで、この状況をどうしましょう？』

エリザベスがそう書かれたプラカードを全員に見せると、桂も悩む。

「ぬ……そうだなァ、銀時達との距離はかなり遠い。出来るだけ急いで……む？」

桂は急いで銀時達のいる場所に向かうべきだと言い出す途中、何かの気配を感じた。
気配を感じた咆哮を振り向いて刀を抜く構えをする。

「桂さん？」
「……何か来る！」

＊

そして桂がいた場所に、空から騎士の鎧を身につけた2人組みが舞い降りて現れた。
水色の騎士の鎧を身につけていて天使のような白い翼が生えている騎士集団のようだ。
手には騎士の剣に仕込み銃が付いている銃剣らしきものを持っている。

「……どうやら気づかれたようだな」
「ああ、おそらく異世界の魔導士の連中が俺達の魔力を感じて逃げ出したようだ……」

2人はおそらく桂達の事を言っている。
確かに魔導士であるはやてにユニゾンデバイスであるリィンなら、魔力で遠くにいる敵を感知できる。
しかしそれ以上に早く、桂が気配で2人を感知したようだ。

「しかしこんな一大事の時にややこしい連中もきやがったそうじゃ

ねぇか」
「まぁ良いんじゃねぇ？もうじきこの惑星『ゴスモス』は消えるんだ……俺達『キザラキ』によって」
「それもそうだな……だが念には念として異世界の魔導士を逃す訳にはいかん！！まだ遠くにはいないはず、探して抹殺するぞ！！」
「おう！！」

2人は翼を広げて、そこからジェット機のエンジンが噴射するかのように勢い良く空を飛ぶ。
2人の気配がなくなった事を確信した事から、岩陰の後ろからリィンが姿を現す。

「何とか去ってくれましたぁ」

リィンは怪しい連中が去ってくれた事に安心するが、先ほどの不自然な会話を聞いて疑惑を抱く。

「それにしても……もうすぐ『ゴスモス』は消えるって一体……」
「うむ、コレはただ事では無い様だ……」

と、桂は2人の騎士らしき連中に怪しげに感じる。
ちなみに桂、エリザベス、はやてはと言うと……

リィンが隠れていた岩の上で、何故か両手に松を握って松をイメージしたポーズをしていた。
さらにエリザベスだけゴル●の様な顔つきをしている。

「て何やっているんですかァァァァァァァァァァァァ！！！桂さんとエリザベスさんはともかく、はやてちゃんまでふざけるのも大概してくださいィィィィィィィィ！！！」

何で隠れずに、しかもバレバレなポーズをしてるのに良く見つからなかったと思いたいが、それ以上に狂乱バカトリオのおふざけにツッコまずにいられなかった。

「桂さんじゃない松だ」
「はやてちゃんやない松や」
『エリザベスさんじゃないエリゴ松13（サーティン）だ』

3人息ピッタリに言い出す。

「いや普通ばれてますよ！！それ『私は怪しい存在です』とアピールしているじゃないですかってよく張れませんでしたね！！後、エリザベスさんだけ何で無駄にゴル●っぽいんですかァァァァァァァァァァ！！！！」

もはや3人は常識を無視した存在としか言いようが無い。
しかもこの瞬間、リィンは狂乱バカトリオのツッコミ担当になってしまう事は言うまでもない。

「何とか無事に撒いたようだが……エリザベス、八神殿、リィン殿、お主達はどう思う？」

桂は真剣な表情になって、先ほどに2人の怪しげな会話の事を聞きだす。

「何やろう……異常なまでの怪しげな計画の事を話してたわ…それに『キザラキ』って？」
『メッチャ危なっかしい連中ですね』

はやてもエリザベスも、２人の騎士の会話は大げさだが怪しげな存在であると思う。

「しかも、この惑星を破壊する事も言ってました」
「この惑星を『ゴスモス』といっ取ったなァ……せやけど『ゴスモス』って確か私の元いた世界の地球の半分ぐらいの大きさっと聞いた事はあったんやけど、せやからって破壊するのは少し大げさちゃうかなァ？」

はやての言う通り。
いかに強力な集団や組織でも、一気に世界を破壊するような事はすぐには出来ない。
だがさっきの騎士達には魔力を感じ、しかも魔導士とは違う魔力を感じた。

（あの２人の魔力、異常じゃあらへん……もしかして『ゴスモス』に住む人達が持つ特殊な魔力の……）

一体この惑星で何が起ころうとしているのか疑惑を抱く中、桂はある決意をする。

「何はともあれ、行くぞ」
「行くって…どこに？」

桂は一体どこに行こうとしているのかはやてが訊き出す。

「さっきも言ったように銀時達と合流する……そして、さっきの連中の事を皆に伝えなくてはならない。もし、あの連中が言っていた事が本当であれば……」

空を見上げて桂は危機感を感じ……

「この世界に住む者達が1人残らず亡くなってしまう」

ミッドチルダ外で起こり始めようとする大事件。
狂乱の貴公子が、『キザラキ』の野望計画に立ちはだかる。

銀八
「あけまして」

生徒全員
『『おめでとう、銀八先生!!』』

銀八
「へぇ～い、皆さん新年あけましておめでとうございます…今年も『銀八先生コーナー』を始めます……新年初のアシスタントを勤めるのはこの人…」

なのは
「にゃはははははは♪みんなのアイドルの『リリカルなのは』のヒロイン、高町なのはでぇす♪」

『自分でヒロインと言っちゃったよ』と言い出したいが、後で酷い目に合うだけだと確信した銀八はあえて言わないでいる。

銀八

「んじゃ、今回も7人ずつの読者の質問を答えたいと思います。まずはこの人、ペンネーム『烈火竜』さん『{神楽に質問}
マリアージュ改０３をお父さんの星海坊主とエリオの連携で倒しました。
お父さんとエリオ、どっちがかっこよかったですか？

{黒神先生に質問}
残念戦隊貧乳レンジャーのリーダーはどの貧乳キャラにぴったりだと思ってますか？

{ヴィータに質問}
『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組銀八先生』で、ナイスバディになれた自分を見て、どう感じましたか？』……1は俺が答えます……あのバカ作者から聞けば、リーダーはヴィータと言いました。原因はツッコみのキレが良いと言う事です」

なのは
「そんな理由!?……でぇ、ヴィータちゃんはどう思う？」

ヴィータ
「マジで最高!!是非ともこの小説でもなって見たい……と言うより後でバカ作者ぶっ殺す!!」

とヴィータは『グラーフアイゼン』を握ってこの場を去っていく。
バカ作者に天誅を下す為に。

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、今年もよろしくお願いします。んで次ィ、ペンネーム『ＳＡＤＳ』さん『銀八先生に質問です。
黒神さんに質問です。

リリカルなのはの第四期（ｖｉｖｉｄとＦｏｒｃｅ）を正直どう思っていますか教えてください。

ヴォルケンリッター達とリインフォースさんとリインフォースⅡさんに質問です。
ズラッち（桂小太郎）のことをどう思っていますか？』……ズバリ答えます。Ｆｏｒｃｅは知らないので『ｖｉｖｉｄ』なら答えます。ヴィヴィオがヒロインとしての活躍が凄く、おそらくロリコン向きの第４期だと思います」

なのは
「にゃははは……それはそれで大変なの……（苦笑）」

銀八
「ちなみに作者はもしかすれば第４期の内容をちゃんと把握すればマヨラーを主人公としてぱっつぁんと総悟を中心にクロスオーバー小説を作ると思います」

なのは
「それってこの小説に出番があんまりない３人に対する作者なりの謝罪ですか？」

銀八
「その通り、んでオメェ等はどう思う？」

銀八はシグナム達に桂に対する感想を言い出す。
ちなみにヴィータはさっき、黒神に天誅をし終えた様子。

ヴィータ
「アイツ、普段はボケまくってるけど……真剣な時のアイツは……

て何言わせんじゃアアアアア！！／／／」

シグナム
「剣の腕ならあのスバルをも勝って銀時に匹敵するとスバルから聞いている。いつか是非とも手合わせしたい」

ザフィーラ
「私から見れば、おそらくアレは我等ヴォルケンリッターのムードメイカーだな。主が親しむのも分かる」

リィンフォース
「カリバン事件での桂の剣の腕、さすが銀時と双璧に並ぶ剣士だと思った」

リィン
「私的にははやてちゃんともっと一緒に居て欲しいです」

などと桂に対する評価を言い出す。
しかし……

シャマル
「それより私にもっと出番をォォォォォォォォォ！！！！」

銀八・なのは
『『関係ない（だろォォ）（でしょう）！！！！』』

シャマルだけは出番の事しか頭にない為、そう言うのであった。

なのは
「……と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、今年もよろしくお願いします。

次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからです。『質問しますずばり聞きます！
ぶっちゃけこの小説のヒロインは誰ですか？

二つ目の質問です
うちのドンパッチがヒロインになるにはどうすれば良いですか？

三つ目の質問です
アニメであった毛が抜ける話はしますか？

以上です』……1は答えます。そんなの、この私に決まっているよ♪」

などとはっきり自分がヒロイン宣言するなのは。
ちなみにメインヒロインは黒神的にはフェイトとスバルの様である。

銀八
「残り2つは俺が答えます。……2つ目は、無理です。そして3つ目は無いと思います」

なのは
「銀八先生、余りにも単純すぎますよォ！」

なのはは青ざめてツッコみだす。

銀八
「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、今年もよろしくお願いします。んで次ィ、ペンネーム『ヤマタノオロチ』さん『ジャンプで屁怒路ファミリー』が登場しました。

なのはは屁怒路ファミリーに勝てるでしょうか?』」

なのは

「無理ィィィィィィィィィィィ!!!無理無理無理

以上が2人の答えです。

黒神
「と言う訳で『クアンタ』さん、今年もよろしくお願いします」

なのは
「次はペンネーム『ルシファー』さんからの質問です。『シャマル・・・ゲストにまでシャマルの料理を・・・
もうシャマルの料理は次元が違いますね

あと銀八先生のコーナー連続公開復活おめでとうございます

次回はあの人か・・・
あの人の話でシリアスになるのか!?

質問1　今お通ちゃんはどれくらい人気になってますか?
てか生きてますか?（笑）

質問2　ヤマトノオロチさんの質問で『なのはは屁怒路ファミリーに勝てるかどうか?』を聞いていましたが、負ける場合どれくらいの戦力があれば勝てるでしょうか?

質問3　ルーテシアに質問
ソースの工場見学の抽選のキャンペーンがあれば、どこかのマヨラーみたいに無理やりナンバーズたちに協力してもらいますか?

次の更新がんばってください』」

銀八
「ズバリ答えます。結野アナから聞けば、寺門通の人気は徐々に上がっているようだ。んで2つ目は……」

なのは
「『アルカンシェル』付きじゃないと勝てる気がしないよォ（涙）」

銀八
「そんなに!?……3つ目はルーテシアにお答えさせてもらいます」

ルーテシア
「絶対に協力させてもらう!!!!」

正にソースラーとして恥じない即断である。

銀八
「と言う訳で『ルシファー』さん、今年もよろしくお願いします。んで次が最後。ペンネーム『サトッチ』さん『聡「いやー今日はヅラのはやての印象をしれてよかったのじゃ。」

優子「それにしてもとうとうティアナもラヴァーズ入りか・・・」

月詠「はやてはんも、見ていると前より性格が逆行しているような気がするわ～」

作「まぁ感想はこのくらいにして
桂に質問です。
アンタは人妻好きとして有名だがはやてと出会ってからは其れは卒業したのか?

はやてに質問です。ヅラの何処が好きですか？」

月・作・優・聡「「「「それではまた次回！」」」」

『……2人にお答えさせてもらいます」

桂

「うむ、八神殿と出会ってから俺自身が変わった気がするのも確かだ……何より原作以上に出番が多いのが嬉しい。後、卒業じゃない桂だ」

ようするに人妻好きは卒業していないのである。

はやて

「何かクールでカッコイイだけじゃなく、私と気が合う上におもろいんや♪」

桂の二枚目的な顔つきにボケによる面白さは、はやてには凄く合うようである。

銀八

「と言う訳で『サトッチ』さん、今年もよろしくお願いします」

なのは

「以上で新年初の『銀八先生コーナー』は終了します。次回のアシスタントはティアナです」

銀八

（……なんだろう、今までの『銀八先生コーナー』の中で一番まともに終われた気がするんだけど？）

自分に被害なしで終われるのは滅多にないので銀八先生は凄く安心している。

銀八
「それでは次回もお楽しみ……そして」

黒神・銀八・なのは
『『今年も『リリカル銀魂Ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』をよろしくお願いします』』

第百二訓：アクシデントは連鎖して起こりやすい（後書き）

謎の組織『キザラキ』。

次元惑星『ゴスモス』に最大の危機が迫る。

果たして組織の目的は？

狂乱の貴公子、桂小太郎が立ちはだかる。

そして、『ゴスモス』の未来を賭けた戦いが始まろうとする。

エリザベス
『次回、「人は大切な人が危機になった場合、体を張ってでも護る」テイクオフだよ』

第百三訓：人は大切な人が危機になった場合、体を張ってでも護る（前書き）

黒神
「ここで銀さんとフェイトに謝っておくことがあります」

フェイト
「え？」

銀時
「何だ、いきなり？」

黒神
「今連載しているシリアス『狂乱編』はしばらく桂とはやてを中心に進めるので、貴方方の出番は結構減ります」

フェイト
「ええェェェェェェェェェェェェェ！？」

銀時
「ちょっと待てェ！！何でヅラと狸女の為に俺達の出番が減ってしまうわけェェ！？」

黒神
「と言うわけで『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！！」

銀時・フェイト
『『無視　（するなァァァァァ）（しないでェェェェ）！！！！』』

第百三訓：人は大切な人が危機になった場合、体を張ってでも護る

出発してから一時間後、桂達は山から無事降りた。
そして今、彼等は森の奥底に入って進んでいる。
桂とエリザベスは、元々身体能力が優れているので体力は万全である。
しかし、はやてとリィンは女性の身なのか体力が桂とエリザベスよりも少なくてバテ始めている。

「桂さぁ～ん、エリィ～……待ってぇ～」

バテだしたはやては、心労そうな表情で桂とエリザベスに待ってと言い出す。

「八神殿、かなり疲労しているようだが……大丈夫か？」
『無理しすぎは体の毒ですよ？』

桂とエリザベスははやてがすごく疲れているのを気づきだす。
彼女が疲れるのも無理はない。
侍である桂と戦いなれているエリザベスと違って、彼女は魔導士以前に唯の女性の身でもある。

リィンもはやて程じゃないが、疲労している。

「…このままでは銀時と合流する前に2人の体力が…ならばここで少し休憩するとしよう」
「賛せェ～」

桂が休憩すると言い出すと、はやては喜んで返事をし……地面にへ

たれ込む。

＊

４人は森の奥底で、座り心地が良い場所に座って色んな事を話していた。
そんな中、リィンはある事を思い出して桂に話し出す。

「そう言えば、桂さんって見た目と違って体力があるんですねェ」

意外そうに言い出すリィン。
リィンから見れば、確かに桂は強いが体力はそれほどまでにない。
人は見た目ではわからないのである。

「幼い頃、恩師によく稽古をされて数多くの事を学んだ…最も、その恩師はもう亡くなってしまったが……」

桂は恩師、吉田松陽（よしだしょうよう）に教わった事を思い出す。
もっとも親愛していた恩師が亡くなった事も思い出して悲しみの表情を表す。
リィンは聞いてはいけない事を聞いてしまったと慌しくなり、はやては以前に桂から聞かされた恩師の事を思い出す。

「ご…ごめんなさい！！そんなつもりでは……」
「いや、こっちが勝手に思い出しただけだ……別にリィン殿には何の責任はない」
『だからあんま気にしないで』

悲しいことを思い出させてしまったとリィンは謝罪する中、桂とエリザベスは責めたりはしないとリィンを励ます。

それから桂も、銀時と高杉と一緒に攘夷戦争に参加した。
そこで辰馬と出会い、数多くの仲間と顔合わせした。

しかし、数多くの仲間の死を見てきて、さらに変わり果てた高杉。
攘夷戦争で得たのは絶望と後悔だけだった。

そんな自分も高杉同様に江戸を破壊する事を決意したが、銀時との再開で本当に大切なことを思い出す。
エリザベスをはじめ、数多くの大切なものをできたのだ。

「……桂さん、前から聞きたがっていたんやけど…その攘夷戦争って、いったいどうして起こってしもうたん？それに……どうして桂さんや銀ちゃんは攘夷戦争に参加したんか？」
「……天人の襲来と、腰抜けな幕府の連中による弱さが生み出した事から始まった……」

桂は攘夷戦争の事を話し出す。

江戸時代末期、天人が襲来し、まもなく地球人と天人との間に十数年にも及ぶ攘夷戦争が勃発。
江戸を守るべく、数多くの侍や攘夷志士が天人との戦いに参加した。
しかし、天人の絶大な力を見て弱腰になっていた幕府は、天人の侵略をあっさりと受け入れ開国してしまう。
そして、幕府は天人による傀儡政権となり、天人達が我が物顔で江戸の街を闊歩するようになった。。

そんな時代に、桂は恩師である松陽に出会う。
松陽を実の父のように慕って尊敬もしていた。
彼から数多くの大切な事を教えてくれた事は今も忘れていない。

そんな松陽も、天人の存在に恐れた幕府側の連中が松陽を捕らえて死刑する。
さらには学舎も炎上してしまい、桂達の居場所は天人と幕府に奪われた。

桂達は松陽の復讐を誓って天人と幕府をつぶす事を決意して攘夷戦争に参加した。

数え切れない程の天人を斬ったが、それ以上に仲間の死は大きかった。

そして、攘夷戦争は終結し…結果は天人と幕府側の勝利。
さらには数多くの侍と攘夷志士達は弱体化した。

それでもあきらめ切れなかった桂は、生き残った侍と攘夷志士達を集めて多くの天人を襲撃した。
結果は爆弾テロと言う汚名を着せられたが、それでも桂は腐った国を叩き直す為なら何でもするつもりでいた。
しかし、銀時との再会で桂は変わり、本当に大切な事は何なのかを知る。

桂の話を聞いたはやてとリィンは信じられない表情を表した。

「なんやそれ!?幕府は桂さん達に数え切れへんほど酷い事したってのに平然と桂さんを犯罪者扱いしてるって訳!?」
「酷すぎます!!幕府の連中は非道な人たちですぅ!!」

当然、幕府の非道さには怒りを表している。
桂の大切な人を奪ったあげく、彼を犯罪者扱いしているのだ。
天人や幕府のやって来てた行為は、桂の爆弾テロに比べればあまりにも薄汚く下衆そのものである。
だがそれでも、国は幕府を責めることはできないのだ。

「幕府は『天導衆』と言う天人の集団が実権を握っている以上、奴らの傀儡となっている。もはや幕府は天人の言いなりしかなれぬ存在だ……だが、俺達は諦めた訳じゃない」
「え?」
「たとえ幕府が国を見捨てようが、江戸に住む者に災いを齎すのであれば……幕府だろうが天人だろうが、この桂小太郎が天誅を下すまで!」
『今、良いこと言った!!』

桂はまだ諦めてはいなかった。
たとえ世間でどっちが悪いかを見極められなくても、桂は桂なりに国を守ろうとしているのだ。
普段はクールボケが売りな桂でも、自分の国に関する事だけは人一倍真面目である。

「……」

はやては、桂を見ていると自分と同じだと思ってしまう。
自分も管理局の裏の連中の非道さは嫌と知っている。

だからこそ、自分なりにミッドチルダを守る為にフェイトとなのはと協力し合って『起動六課』を結成した。
幕府も管理局も、薄汚さなら一緒である。

「ずいぶんと話を進めているようだが……そろそろ今の立場を考えて置くべきじゃないのか？」
『『！？』』

突如、聞きなれない声が聞こえると桂達は声がした方を振り向く。
声が聞こえた方向は空で、そこには1人の翼が生えている鎧騎士の姿があった。
間違いなく『キザラキ』の1人だが、先ほどの2人に比べると色が少し緑色っぽい水色の鎧である。

「『キザラキ』！？」
「ほう…異世界の連中にしては我等の存在を知っているようだな」

どうして『キザラキ』の1人がいるのか驚きだす桂。
さっきは気配で感じて気づくにもかかわらず、今回はまったくの気配を感じ取れなかった。

「ふ……どうやらそこの長髪の男は気配でさっきの2人に気づいたようだが……1つ教えてやろう」

鎧騎士はある事を桂に教えようとする。

「私は『キザラキ』でも上位に立つ男の1人、『ミスティック・ア

ーマー』と言う魔法を使える事により……自らの気配を一時的に消す事ができるのだ……私をあの2人と一緒にしないでおくと良い」

自信満々に男は言い出すと、貝殻のような笛を鳴らす。

ブォ～ン

そして貝殻の笛を捨てるようにポイ捨てする。
右手に持っている騎士の剣を構え、男は戦闘態勢に入る。

「我等『キザラキ』の存在は、異世界に知られてはならぬのでな…
…ここで死ぬが良い！！」

男は翼を広げて素早く奪取し、剣を豪快に振るう。
だが

ガキぃーン！！

「ぬぅ！？」

桂は素早く刀を抜いて男の一撃を受け止める。
そして受け流すように男の剣をなぎ払い……

「はぁ！！」

ザクゥ！！

「ぐぉおおおおおおお！！？」

いとも簡単に男の腹を斬る。

以下に『キザラキ』で上位の強さを誇っても、剣の腕はそこそこな程度である。
傷は結構深いが、死なない程度に力の加減をしてある。

「言え、何故俺達を狙う!?そして貴様等『キザラキ』はいったい何をするつもりだ!!」

桂は剣を鎧騎士に向けると、質問を訊きだす。
エリザベス、はやて、リィンも警戒して鎧騎士を見つめる。

「……我等『キザラキ』、コクメン様の野望をかなえる為に生み出された兵士なり…」

鎧騎士はそう言うだけだった。
すると、

「桂さん、上!!」

はやてが外である異変に気づく。
すると外には数多くの『キザラキ』の騎士団がこっちに向かってきているのがわかる。

「貴様、まさかさっきの貝笛で!!」
「くくく……貴様等はすでに『キザラキ』の敵と認定された……もはや生きて帰れまい!!」

勝ち誇ったように言い出す鎧騎士は、翼を広げて空へ逃げ出す。
そして多くの騎士達が舞い降りて剣を抜き、桂達を囲む!

「我等『キザラキ』、新たな惑星を作り出す創造集団なり!!」

「『キザラキ』に歯向かう愚か者には、裁きを！！」

その数は以上ではなく、数では圧倒的に負けている。
かと言って逃げられる状況ではない為、はやては助太刀する為にリィンを向いて頷く。
するとはやても、『夜天の書』を取り出してセットオンして光に包まれる。
そして光が消えると、そこにはバリアジャケットに衣装を変えたはやての姿がいた。

「いくで、リイン！！」
「はいです！はやてちゃん！！」

リインは、はやての目の前に移動した。

「ユニゾン・イン！！」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。
桂とエリザベスは、僅かに目を細めた。
やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現した。ユニゾンによって、髪の色が少し薄くなっている。

「エリザベス、八神殿、行くぞ！」
「了解や！」
『合点承知！！！』

桂、エリザベス、はやての3人は刀・プラカード・デバイスをそれぞれ構えて鎧騎士団に立ち向かう。

「行けェェェ！！！あの3人の首を取れェェェェェェ！！！」

『『オオォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！』』

騎士達は一斉に桂達に突撃する。
桂も懐から『んまい棒』を取り出して、

「んまい棒、『火爆鐘器（かばやき）』！」

桂はそのんまい棒を鎧騎士達に向けて投げ出す。
それは魔導競技大会で桂が一回戦で炸裂させた切り札の１つ。
対『鬼兵隊』対策に生み出した最強最悪の威力を持つ『んまい棒』である事を知らない鎧騎士達は、その『んまい棒』を剣で間っ二つに斬った瞬間だった。

ドカァァァ

「ぎゃあ！！」
「ぐぇえ！！」
「げふぁ！！」

桂が爆風の中から飛び込んできて、素早く3人の鎧騎士を斬る。
その後も鎧騎士達に向かって駆けつけ、次々と鎧騎士を斬り倒す。

『うぉりゃああ！！』

ガコォーン！！

「ゲファアアア！！」

エリザベスもプラカードを豪快に振り、鎧騎士を吹き飛ばす。
さらには口からキャノン砲を出して、

バァーン！！

ドカァーーーー！！！

『うぎゃあああああああああああ！！！！』

そのキャノン砲が放たれ、弾丸が鎧騎士9人を吹き飛ばす。
さらに追撃するかのようにキャノン砲を撃ちまくる。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」

はやての足元から、白い魔方陣が浮かび上がる
そして魔法陣を中心に6本と、その中心から1本の合計7本の光の槍が現れる。

「石化の槍、ミストルティン！」

はやては一斉に7本の光の槍を放つ。
その7本の槍が鎧騎士達の足に貫通する。

「ぐぁあああああ！！」
「こ……これは！！？」

光の槍を足元に貫通されて痛む鎧騎士達。
すると下半身だけが石化してしまい、動けなくなった。
『ミストルティン』は攻撃力は高くないが、石化能力を持っている魔法である。

この用に、桂、エリザベスは接近、はやては遠距離で鎧騎士の大群に対抗している。
数え切れない程の鎧騎士達は次々とあふれ出てくるが、桂達はけして諦めずに戦い続けている。

スパァーン！！

桂は騎士達に囲まれた瞬間に刀を静のごとくの剣技で振り、斬られた事に気づけなかった5人の騎士は一斉に倒れる。

「つ……強い！！」

「異世界の分際で……我等『キザラキ』にはむかうなど……」

桂達の強さに怯えてきた騎士達。

だが…先ほどの上位の鎧騎士が叫びだす。

「うろたえるな！！どんな手誰でも所詮人間の身！！一斉にかかれェ！！」

上位騎士がそう言い出すと、他の鎧騎士達は剣を構える。

そして翼を広げて空に飛び込んで一斉攻撃を炸裂させる。

「あかん！！」

はやては鎧騎士達が一斉に桂を襲い掛かる事を知り、自分の足元と放射面の2枚の魔法陣を展開する。

「響け終焉の笛、ラグナロク！」

はやての最強魔法が炸裂し、それが天空に浮かぶ鎧騎士達を飲み込む。

だが、地を滑るかのように翼を広げて急接近してくる騎士達までは倒すことはできなかった。

「はぁあああああああああああああ！！」

桂はそんな鎧騎士達を返り討ちにするかのように、桂は剣を振って次々と鎧騎士達を斬る。

『じゃまだゴルァ！！！』

エリザベスもすぐに桂の援護に向かおうとするが、襲ってくる鎧騎士達に邪魔されて合流できない。

『『きえぇえええええええええええええ！！』』

2人の鎧騎士は剣を構えて、同時に桂に向かって剣を振るう。
だが桂はそれを交わし、体を回転させて横一閃に剣を振り間っ二つに斬る。

だが先ほどから桂はどうしても気になってしまう事があった。
それは、鎧騎士達を刀で斬ったにもかかわらずに、その肉体を斬った感覚がない。
その証拠にと、斬られて倒れている鎧騎士達からは血がまったくあふれ出ていない。

（おかしい、こやつ等は先ほどから血が出ていない。それ所が、剣で斬った生身の肉体を感じ取れぬ……もしやこやつ等には生身が無いと言うのか！？）

信じられないことだが、それしか考えられない桂。
一時の迷いが生み出した事なのか、隙だらけの桂に1人の鎧騎士が剣を豪快に振ろうとする。

「隙ありいいいいいいい！」
「！？」

敵の接近を感じた桂は鎧騎士の剣を避け、

グサァ！！

「ぐぉおお！？」

同時に刀を鎧騎士の腹の部分に突き刺して貫通させる。
それと同時に、血がまったく噴射せずに鎧の内部は生身の肉体は存在せずに空間しか感じ取れなかった。
刀を抜こうとした瞬間、鎧騎士は両手で桂の刀の刃を強く掴む。

「な！？」
「わ……我等『キザラキ』に…歯向かう者には……捌きを！！」

すると、桂の隣から鎧騎士1体が剣を構えて桂に接近する。

「しまっ！」
『桂さん！！』

もはや逃げられない騎士の一撃。
桂はこれまでなのかと眼を瞑って覚悟を決める。
死を覚悟した瞬間だった。

「危ない、桂さん！！」
「！？」

突如、はやてが桂の前に立ちはだかって……

ザクゥ！

「がはぁ！！」

騎士の剣が、桂をかばったはやてに直撃する。
そしてゆっくりと倒れてしまい、左脇腹から血があふれ出る。

「！？」

桂はその光景を見て拒絶した。
自分を庇ってくれた女性が地面に倒れ、その血が地面に染み込んでいる。
恐る恐ると体を震えだす桂。
武者震いする中で思わず……

「はやてエエエ

「銀八先生!!」

銀八
「へぇ〜い、んじゃ銀八先生コーナー始めまぁ〜す。今回のアシスタントは最近ブラコン化したティアナ・ランスターでぇす」

ティアナ
「ブラコン言うな!!」

額に青筋を浮かべて怒鳴ってツッコむティアナ。

銀八
「んじゃ早速はじめます。まずはこの人、ペンネーム『次村陣八』さん『質問はこれから‥
1、銀さんラブの方に質問
アニメ銀魂二十訓辺りで、猿が銀さんを騙して結婚しようとしてます、(追手から逃れるためとはいえ)許せませんよね?
2、皆さん、アニメ銀魂復活に何か一言を!
3、黒神さんに、誤字ってどうやって見つけるんですか?よくわかりません』……ずばり答えます。どうですか皆さん?」

フェイト・なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート
『『んなもん許せるかァァァァァァァァァ!!!!』』

スバル
「ずるいですよ猿飛さぁん!!(泣)」

銀時に恋する乙女達は一斉に猿飛に殴りこみする。
そんな中、アシスタントに選ばれたティアナまで言ってしまい、銀八は1人ぼっちになった。

銀八
「おいおい、アシスタントまでいなくなったら俺1人になっちまうだろう?……しゃあねぇから黒神に残り2つを答えさせてもらうか」

黒神
「そうですねェ、2つ目は……めっちゃ最高です!!!」

親指立ててうれしそうに叫ぶ黒神。
相当なまでに銀魂のアニメ復活がうれしかったようだ。

黒神
「3つ目は、主に読者が悪い所で誤字を見つけてくれますし……自分で見つけられる所も探しています。後、誤字が多いのは自分が誤字を見つけるのが下手な為でお恥ずかしい限りです。読者の皆さん、本当にすみません!!」

そう言って、土下座して謝罪する黒神。

銀八
「と言うわけで『次村陣八』さん、廊下に立っていなさい」

1つ目の質問が終えると、ティアナが帰ってきた。

ティアナ

「帰ってきたわよ」

銀八
「おいおい、もうストーカー女をボコボコにしたのかァ？」

ティアナ
「ええ、そうよ！！二度と兄さんに汚させない為にね！！」

相当なまでにティアナは怒っていた。

銀八
「まぁ良いか。次ぃ、ペンネーム『黒龍』さん『1．フェイト以外の銀時の好きな奴に質問だが、お前ら銀時の事は諦めたらどうだ？どうせ、『赤夜叉』さんの所の『リリカル銀魂』では最終的に銀時はフェイトと結婚をしているだろ。だから負け犬になる前に諦めたらどうだ？（黒笑）

2．そもそもキャロもエリオの事は諦めたらどうだ？今のお前は怖すぎて女性として見られてないと思うぞ？このさいキッパリ諦めて六課最強戦士として生きたらどうだ？（黒笑）ああ、後、別にこの質問に対する報服にこようが、返り討ちにするからな」

ソラ「最後は俺が質問するな。これ以上こいつに言わせたら何言うか分からん。
質問だが、山崎とかティアナとかヴィータとかが居る以上新八が出て来ても、ほとんど役に立たないんじゃないか？」』……では、質問を答えます」

なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・

セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛
『『天誅ウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！（怒）』』

スバル
「フェイトさんの馬鹿ァァァァァ！！！（涙）」

フェイト
「嫌ァあああ！！！！！」

抜け駆け行為によって、なのは達にボコボコにされてしまうフェイト。
そして隣には……

キャロ
「諦めません！！あんな小娘共に負けてたまるもんですかぁ！！」

銀八
「小娘って、お前もまだ１０歳の少女な……」

キャロ
「あぁ！？（ギロリ）」

鋭い目線で顔中に血管を浮かべているキャロは銀八を睨み付け、

銀八
「すんません！！！」

銀八は青ざめて土下座するのである。

ティアナ
（キャロ、最近怖すぎる）

ティアナ
「……み……三つ目は、それさすがにヤバイので……作者は後半スタート時には出す予定です。というわけで『黒龍』さん、廊下に立っていなさい」

銀八
「へぇい、次ぃペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『こなた&ウッソ
「久しぶりの光になるゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

かがみ
「ほんと・・・久しぶりよね・・・では質問よ

?ティアナちゃんの超甘えんぼモード（感想でやった～～～だもんとか言ったやつ）は今後本編で見れますか．ウッソ・エヴィンにはすごくつぼに入ったようです．

?なのはさん，はやてさんの強化はいつされる予定ですか?

?キャロが空気になっています生きてる?Ｂｙウッソ

ってウッソ！！えと本人の回答をお願いするわ・・・それではこれからも頑張ってください」』……ずばる答えます」

ティアナ

「……や……やっちゃうかもしれないもん／／／」

銀八
「あれぇ!?何かティアのキャラ崩壊が進んでいるゥ!?……まぁいいや」

銀八は深くかかわらないでおこうと考える。

銀八
「2つ目は、なのはとはやての強化もする予定ですが、それはまだわかりません」

ティアナ
「確かに、フェイトさんの『バルディッシュ』もパワーアップされてるし、スバルと同じく七星神刀（しちせいしんとう）の1つ『ライキリ』も手に入れているから、3人の中じゃフェイトさんが一番強いね」

銀八
「そうですねぇ……そして3つ目は、キャロの怒りを触れたくないのでお答えできません!!（土下座）」

ティアナ
「……まぁ、あれは私も怖すぎだけどね」

2人は●ェイソン化したキャロを想像してぞっとする。

銀八
「というわけで『ウッソ・エヴィン』さん、廊下に立っていなさい。
次ぃペンネーム『サディスト』さん『姫史
「黒神…一言だけいっておくぞ（キリッ）」

サディスト
「…お、今回は真面目そうだな」

姫史
「私は精神病院にはすでに行っているのだ。
我が師に一度病院に行けと言われた時にな」

サディスト
「……は？」

姫史
「その時医者に『貴方はもう色んな意味で手遅れです』と言われたのだ」

サディスト
「それ完全に見捨てられてるよねッ！？
その医者完全にお前に死刑宣告してるよねッ！！」

姫史
「おかげで私は…このザマなのさ」

サディスト
「いや、ロリコンなのは違くね？」

馬鹿にも色んな苦労はあるようです。

はやて&ａｍｐ;ヴィータに質問。

もし今週号の銀時と同じように、自分は裸、しかもヅラが隣で寝てて夜の記憶が曖昧だったらどうする？

今回はシグナムだけに質問。

銀時と二人で飲みに行って、朝起きた時居場所が何故かラブホで隣に銀時が寝てて大気圏突破
（すでに純潔失ってるって意味ね）
してたらどうする？

なんか前の質問読まれそうにないから質問してみた（笑）
『……はぁい、３人ともお答えしてください」

はやて、ヴィータ
『『そんなの絶対ありえ（へん）（ねェ）！！！！！』』

はやてとヴィータは声を合わせて断じてありえないと言い出す。

シグナム
「わわわわわわわ……私が銀時とぉ！！？／／／」

ボォーン!!

シグナムは顔を真っ赤に染めて頭の上から煙が噴火するように現れて、気絶する。

ティアナ
「何か本当にむかつく!!」

銀八
「察してやれ、ティア。と言う訳で『サディスト』さん、廊下に立っていなさい。次ぃ、ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『百話突破おめでとう御座います。

一護
「すげぇ、もう其処までいったんだ!!」

カズキ
「黒神先生!おめでとう御座います!!」

志貴
「それじゃ、早速質問。幽助お願い!!」

幽助
「質問?銀さんに惚れている女性陣全員に質問。銀さん争奪戦をしたら、最初に倒すのは?」

士郎
「質問?銀さんに食べさせたい料理は?以上。」』?はどうですか

？」

フェイト
「……ヒロインとしての存在だったらスバルかなァ」

なのは
「フェイトちゃんにスバル」

スバル
「一番銀さんと一緒にいるフェイトさんとアルフさんで」

ティアナ
「当然スバルとなのはさんね」

アルフ
「やっぱフェイトかなぁ？」

シグナム
「テスタロッサにスバルだな」

リィンフォース
「一番強敵としてシグナムですね」

チンク
「実力的に言えばスバル・ナカジマだな」

セイン
「高町なのはは一番厄介だから……とりあえず弱そうな奴から」

セッテ
「……フェイト・テスタロッサで」

ウィンディ
「みんな強そうだから分かんないっす！！」

ディード
「フェイト・テスタロッサに高町なのは、あとスバル・ナカジマの内1人です」

猿飛
「誰であろうと、銀さんに手を出すメス豚共を成敗するだけよ！！」

銀八
「へぇい。以上が？の答えで、？の答えは何なのかお願いします」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛『『もちろん（銀時）（銀さん）（お兄ちゃん）の好きな物を（っす）！！』』

ここだけは息ピッタリに言い出す。

銀八
「はい、という訳で『亀鳥虎龍』さん、廊下に立っていなさい」

ティアナ
「次は、ペンネーム『正宗の胃袋』さんからよ。『ヴィヴィオに質問です。
お正月は銀時と一緒にどこに行きたいですか？

銀八先生に質問
銀八先生は一人寂しく年を越すのですか？それとも彼女が入るという妄想をしながら年を越すのですか？』……質問の答えをお願いします」

ヴィヴィオ
「ヴィヴィオはパパと一緒にいればどこだって良い♪」

銀八
「それ俺に喧嘩売ってんのかァァァァァァ！！！？（血涙）」

『正宗の胃袋』さんの質問にそれぞれお答えするヴィヴィオと銀八。

ティアナ
「はぁ……と言う訳で『正宗の胃袋』さん、廊下に立っていなさい」

銀八
「次が最後の質問です。ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『今回

は今度連載開始予定の私の新作にて晴れて設定逆輸入&主役化決定したこの二人からあいさつと今回の質問です。

ＮＥＷ政胸「Ｈｅｙ　ｙｏｕ！『巨乳筆頭』こと伊達政胸よ！」

ＮＥＷ優希邑「わ…私は同じく真田優希邑でございまする！」

小十郎「ま…政宗様！？急にいかがなされたか！？」

佐助「大将！？どうしちゃったのさ！？いきなり女口調になっちゃって…」

政胸「Ｎｏ！アタイらはアンタ達の話してる『伊達政宗と真田幸村の女体化した姿』じゃなくて、ｃｈａｒｌｅｙがもうすぐ連載開始する小説で主役を務める『本物』の伊達政胸と真田優希邑なのよ！」

優希邑「そういう事なんです。『向こう』の小十郎さんに佐助さん」

小十郎「こ…小十郎さん！？」

佐助「佐助さん！？」

政胸「それより質問いくわよ！
私達の生みの親とも言える存在であるシャマルに聞きたいんだけどさぁ、アンタの作る鍋ってもしかして女に食わせたら男性化しちゃうの？できるならそれを鶴姫やお市に食わせて男にしちゃいたいんだけど？」

優希邑「わ…私からも！…その…リリカル銀魂の胸の無い方々へ質問します！どうしてそんなに巨乳にこだわってばかりいるのですか

？胸が大きくたって邪魔だし恥ずかしいだけですよ」

小十郎「なんて過激な質問…そういうところは政宗様に似てるな」

佐助「へぇ～…ウブなところは真田の大将と同じなんだ」

改めまして黒神さん。政胸、優希邑の元ネタを考えて下さって本当にありがとうございます。

『……てマジでエエエエエエエ！！？」

ティアナ

「あの２人の女性化を本当にネタに使っちゃったァァァァァ！？」

作者・黒神の思いついたネタがここまで評価してくれた事に驚く２人。

とにもかくにも質問を質問に答えさせてもらう事にした。

シャマル

「そんな事したら私があの２人に殺されちゃいますよォォォォォ！！！！」

涙を流して青ざめるシャマル。

一方の貧乳組はと言うと……

神楽・キャロ・九兵衛・ヴィータ・チンク

『『喧嘩売っているのかァァァァァァァ！！！！！（怒）』』

顔中に血管を浮かべて怒鳴り、殴りこもうとする貧乳組。

銀八とティアナはそんな貧乳組をあきれてみていた。

銀八
「……と言う訳で優希邑、胸のない女性の気持ちもわかってやって下さい」

ティアナ
「いや、そこは『ｃｈａｒｌｅｙ』さんにでしょ！？……まぁこんな感じに今回の『銀八先生コーナー』は終了します」

銀八
「次回はエリオをアシスタントします。では」

銀八・ティアナ
『『次回もお楽しみ～』』

第百三訓：人は大切な人が危機になった場合、体を張ってでも護る（後書き）

神楽
「オォ！！ヅラとはやてがピンチあるゥゥゥ！！これは私の出番が来る予…」

黒神
「ごめん、神楽の出番も減るから」

ブチィ！！

神楽
「出番よこせこの馬鹿作者ァァァァ！！！」

ドカァーン！！

黒神
「あらァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！」

神楽の怒りに触れ、傘で吹き飛ばされてしまった哀れな黒神。

月詠
「ふぅー……次回『ピンチな展開になった時、大抵は新キャラによって助けられる場合が大抵多い』テイクオフじゃ」

第百四訓：ピンチな展開になった時、大抵は新キャラによって助けられる場合が多い

黒神
「そろそろＯＰとＥＤの紹介をしなきゃな」

桂
「ああ、せっかく長編続くんだ……この小説が終わるまで２０話達成ごとに紹介するのが黒神殿の務めであろう」

黒神
「そうですね……じゃああとがきで発表します」

はやて
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるな」

第百四訓：ピンチな展開になった時、大抵は新キャラによって助けられる場合が多い。

恋した相手が危機に迫られた事を知った瞬間、少女はただ無我夢中にその者をかばって敵の刃をもろに受けてしまった。
そしてその身は切り裂かれて、少女は地に倒れ堕ちる。
彼女の体から血があふれ出て、その血が地面に染み込んでしまう。

『狂乱の貴公子』こと桂小太郎は、そんな少女…八神はやてをただ唖然と見ることしかできなかった。

そして彼女の体が光に包まれると、ユニゾンしていたリィンとの融合が解除されてしまった。

「はやてちゃん！！しっかりしてくださいー！！」

顔色が悪くなっていくはやてを、涙を流しながらも必死に声を出すリィン。
かなりひどい傷であり、早く手当てしないと死んでしまうと言う危険な状況である。

「今だァァァァ！！！あの女に止めを刺せェェェェェ！！！！」

1体の鎧騎士がそう叫ぶと、他の鎧騎士達も一斉に突撃する。
リィンは倒れているはやてを体全体で庇い出そうとする。
エリザベスも一刻も早くはやて達の所に向かおうとした瞬間だった。

ドカァーン！！

『『ぎゃあああああああああああああああ！！！！！』』

突如、爆弾が鎧騎士団の中心に投げられて大爆発を起こした。
その爆発に巻き込まれた多くの鎧騎士達は大勢吹き飛んで鎧もバラバラとなる。

その爆弾を投げたのは他でもない…桂である。

「……」
「き……貴様……」

無言で立ち上がる桂は、刀を豪快に上に向けて振るうと串刺しにした鎧騎士を間っ二つに斬る。
ゆっくりと鎧騎士達のほうを振り向き、鋭き目線で睨みつけ、剣を構えて走り出す。

「オオォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！」

ズパァーン！！　ズパァーン！！

「ぎゃあああああああ！！」
「ぐぇえええええええ！！」

素早く剣を二度振って鎧騎士2体を斬り倒す。
続くかのように次々と剣を振ってさらに鎧騎士を次々と斬っていく。
しかも先ほどより剣速と動きが速くなっている。

「な……なんだこいつ！？」

「本当に人間か！？」

圧倒的強さで次々と倒していく桂の姿は、鎧騎士達から見れば戦鬼そのものであった。
桂のその強さ、攘夷戦争の頃の戦いの記憶が蘇ったからこそ発揮できる強さ。
それは銀時の『白夜叉』としての覚醒と一緒である。

一方のリィンはいつもと違う桂を見て唖然と驚いている。

クールボケだが優れた身体能力の持ち主だと今まで見てきた。
しかし今目の前で次々と鎧騎士を切り倒していく桂の姿は『狂乱の貴公子』と言う生易しい存在ではない。
間違いなくゾーマ戦での銀時と同じ強さを持っている。

「そこをどけぇ！！！！」

ズバァ　ズバァ　ズバァ　ズバァ

『『ぎゃあああああああああああああああ！！！』』

圧倒的強さを発揮した桂が連続に剣を振り、鎧騎士を４体斬り飛ばす。
そしてはやての所に駆けつけて、鎧騎士達を睨みつける。
その目線に、鎧騎士達は怯えてしまう。
自分達の目の前にいるのは戦場に立つ鬼神ごと戦鬼そのものであった。

『いい加減通せやァァァァァァ！！！！』

ドカァーン！！

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

エリザベスもそう書かれた巨大なプラカードを大きく振って鎧騎士達を吹き飛ばす。

そして素早く桂のところに移動して、桂の隣に立って口から刀を出す。

その刀を構えて鎧騎士達を睨みつける。

鎧騎士達は恐れてもなお、桂達に襲いかかろうとするが……

「……それ以上近づいてみろ……貴様等全員斬り倒す！！」

『絶対、容赦なしだゴルァ！！』

怒気を放って桂は叫びだすと、鎧騎士達は動けなくなった。

桂から放たれる気迫に押し負けているのである。

彼等の体からこう伝わっている。

少しでも近づいたら本当に殺されると……

とてつもない殺気に恐怖を感じ取る鎧騎士達。

「……お……怯えるな！！たかが少数の人間だ！！一斉にかかれば倒せる！！行けぇぇぇ！！」

『『お……おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！』』

数多くの鎧騎士達は一斉に桂達を襲い掛かる。

桂とエリザベスも覚悟を決めて引き下がらないで武器を構える。

その時だった。

ドカァーン！！

『『ぎゃあああああああああああああああああ！！！！』』

突如、桂達の背後から無数の火炎弾が振ってきて、襲ってきた鎧騎士達に直撃して爆発する。
そして爆発から発生した浮き上がる大きな煙が鎧騎士達を包み込み、混乱させる。
これには桂、エリザベス、リィンも予想外な事に驚く。
いったい何があったのかと驚く中……

「早くこっちに！！！」

姿は見えないが、１人の少女の声が聞こえた桂は、はやてを抱きかかえて声が聞こえた方向に走る。
エリザベスとリィンも桂に続くかのように走り出す。
そしてさらに追加として少女は右手から巨大な火球を放ち……

ドカァァーーーン！！

『『ぎゃあああああああああああああああ！！！！』』

さらに大爆発して鎧騎士達の悲鳴が響き渡る。

状況が悪化していく中、爆発によって放たれた爆煙は容赦なく鎧騎士達を包み込んで混乱させる。
そしてしばらく時間が経ち、煙は収まって消えた。

しかしそこにはもう、桂達の姿はいなかった。

「己ェ、逃げおったか！！」
「探せェ！！奴等が我等の存在を知った今、生きて返す訳にはいかん！！コクメン様の野望を邪魔はさせぬ為に！！」
『『オオォォォォォォォォォォォォォォ！！！』』

かなり仲間が倒されてしまっても、鎧騎士の数は異常なまでに多い。
桂達の姿と特徴は知った今、彼等は彼等『キザラキ』にとっても邪魔な存在である。

＊

そこはとある洞窟。

周りは家事にとって必要な物ばかりが並んでいて、人が住みやすくする為に形が変わっている。
当然のように、布団もあってそこではやては寝ていて、そんな彼女を桂が隣で見守っている。

「……う……うう……」

はやては気がついてゆっくりと眼を覚ます。

「おお、気づいたか！！」

はやての意識が戻った事を知って安心する桂。
桂の姿を見てはやては意外そうな表情をする。

「あれ？桂さん……私、いったい……」
「落ち着け……今動いては傷が開いてしまう」

桂にそう言われると、はやてはすべてを思い出した。
あの鎧騎士の軍勢相手に、逃げ場を失った自分達は戦った。
そして自分は桂に危機が襲って来た事を知り、無我夢中に桂をかばって鎧騎士に斬られてしまった事を。

「痛た……」

右脇から着られた痛みを感じ、思わず抑えるはやて。

「大丈夫か！？」

痛がるはやてに思わず彼女に近づく桂。
彼女の右脇には血が染み付いているが包帯が巻かれている。
そして衣装はいまだにバリアジャケットのままであり、彼女がかぶっている白い帽子は彼女の後ろにある。

そんな彼女を見て桂は申し訳なさそうな表情をする。

「……すまぬ、八神殿」
「え？」

突如の桂の謝罪に、驚くはやて。

「あの時、俺が不覚を取ってしまったせいで……お主がそれほどの深手を……」

桂は自分が不覚をとったせいではやてがこんな目にあったと責任感を持っている。
もし油断しなければはやてがこれほど傷つく事はなかった。
しかしはやては……

「良いんや、桂さん」
「八神殿？」

上半身をゆっくりと起こして、左手で桂の頬をやさしく触る。

「私が勝手にしたことやし、何より桂さんが無事で良かったわ……」

自分はまだ生きている。
そして恋路を抱く相手が無事であった事にはやては安心感に満ちている。

「せやから……あんまり自分を責めないでおいて」

自分自身を攻める桂は、はやてにとっても見たくない。
はやての言葉に桂は何かに助けられたような感覚を抱く。
それと同時に、ある事を決意して自分の顔を触っている彼女の手を右手で優しく掴む。

「……桂…さん……？」

「今ここに、シグナム殿、ヴィータ殿、ザフィーラ殿、リィンフォース殿もいな……あ、1人忘れてたシャマル殿もいない」
「今、完全にシャマルを忘れてたやろ？」

いくらなんでも、これははやても呆れるのであった。

「ヴォルケンリッターがいない今、お主を護れるのは俺とエリザベス、そしてリィン殿の3人……だから誓おう」

真剣な目線ではやてを見つめる桂。
ある決意をはやてに言い出す。

「無事にミッドチルダに帰還するまで、俺がお主を護る」
「！？／／／」

あの時はやてが傷ついて倒れてしまった光景を、もう二度と見たくはない。
なぜかそう思う桂は、シグナム達の分まではやてを護る決意をする。
桂に『護る』と言われたはやては、『ドキ！』として顔を真っ赤にする。
今まで桂と一緒に共にいたが、彼がこれほどまでに真剣に言われた事は始めてである。
そして桂の手をもう片方の手で優しく包み……

「ありがとう……桂さん……」

当然のこと、彼女はすごく嬉しく感じた。
それと同時に、自分も桂と一緒に戦う事を決意する。
そして彼女は、桂にある事を伝える。

「桂さん……1つお願いしても良い？」
「俺ができる事なら……」

彼女はあの時、飛行舟で自分の思いを桂に伝える。

「もし良ければ、私の事を……『はやて』って呼んで」
「……それで良ければ、喜んで……はやて」

はやての言うとおり、桂は彼女の名を優しく呼ぶ。
これにより、桂との距離が縮まったとはやては嬉しくそう思った。

そんな2人の甘い空気が包み込む中……

「えーっとう、お取り込み中悪いけど良いかなァ？」
「！？」

突如、聞きなれない声が聞こえて驚きだすはやて。
声が聞こえた方向を見ると、そこには1人の少女がいた。

少女は赤紫色の紙をしていて、猫耳付きの白い防止をかぶっていて紅色と紫色のオッドアイをしていて、首飾りに天使の片翼をしたペンダントをかけている。
さらには白い半袖上着に紅いシャツに黒いショートパンツを着ている。
そして両足には膝まで届く長さに白と紫が二色シマシマとしている靴下を穿いている。

そんな少女の後ろにはエリザベスもいた。

「あ……あんた一体……」

はじめて見る人物に戸惑うはやて。

「はやて、この娘が俺達を『キザラキ』の軍勢から救ってくれた恩人だ」

「え！？」

まさか自分達をあの鎧騎士集団の襲撃から救ってくれた恩人だと驚くはやて。

そんな彼女にはやては少女にお礼を言い出す。

「あ……ありがとう……私達を助けてくれて……」

「良いって良いって♪」

少女は気楽に言い出す中、はやてのバリアジャケット姿を見つめて思いつく。

「そのバリアジャケット……ひょっとして貴方達ミッドチルダから来た人間！？」

「……まぁはやてとリィン殿はそうだが……俺とエリザベスは違う。とある理由で異世界からミッドチルダに飛ばされて居候している身だ」

「へぇ、ヅラとエリザベスも違う世界からかぁ」

「ヅラじゃない桂だ」

少女にヅラ呼ばわりされてツッコむ桂。

そして少女は自己紹介をし始める。

「あ、貴女にはまだ自己紹介をしていなかったね。私、スバキって言うの…よろしくね♪」

ニッコリと飛びっきりの笑顔で自己紹介をするスバキ。
そんな彼女に思わずはやても挨拶をする。

「私……八神はやてって言うんや」
「はやてって言うのかァ、でもミッドチルダの魔導士がどうしてこの『ゴスモス』に？」

本来であれば、『ゴスモス』に行くには特別許可でなければ行けない。
スバキから見ても、はやて達はそんな許可を貰っている様子はない。
その理由を、桂はため息を吐いて話し出す。

「それには、深い訳があるんだがな……」

桂はすべてを話し出す。
自分達は次元旅行に楽しんでいる中、飛行舟でハイジャック事件が発生してしまい、隙を突いてテロ集団を返り討ちにした。
しかしテロリストの仕掛けた爆弾によって操作不能になってしまったが、そこで知り合いの辰馬に飛行舟の操縦を任せた。
だが辰馬が、下駄を飛ばして舵を折ると言うありえないアクシデントが発生したせいで自分達は『ゴスモス』に落下した。
さらに自分達だけは脱出用カプセル移動通路に偶然にも入ってしまい、仲間達とははぐれてしまうハメになった。

これを聞いたスバキも強く青ざめる。

「そう……貴方達も大変だったんだね」

「まったく、坂本の馬鹿のせいでどんな目にあった事か」
「ははは……あ、そう言えばヅラ達はどうして『キザラキ』に囲まれたの？……何かやらかした訳？」

スバキはどうして桂が『キザラキ』に囲まれていたのかを不思議に思う。
それを聞いた桂はもちろん、エリザベスとはやても深刻な表情をする。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

銀八先生
「へぇ～い、そんじゃあ始めるぞォ。今回のアシスタントは、エリオ君でェ～す」

エリオ
「どうも、お久しぶりです」

銀八
「いやー、よく来たねエリオ君…今だアシスタントに呼ばれていない人達を差し置いてよく出れたもんだ……うんうん」

エリオ
「それ、他の人が聞いたら怒られますからァ！！」

やんわりと、とんでもない事を言い出す銀八にツッコむエリオ。

銀八
「んじゃ、さっそく行くとすっか……まずはこの人ペンネーム『白米』さん『

1．刃「お登勢殿。若返りの薬を使った感想はいかがだっただろうか？お詫びとして吐き気を抑える薬を送る。すまなかった」（汗）

2．武「なのは、キャロに忠告。最近は目立ってないが、もし貴様らのわがままで銀時が傷付くならば、貴様らも『お仕置き道場』行きだから覚悟しとけ。わかったな？」（黒笑）

3．ヴォルケンリッター諸君に質問。
貴方達のあだ名を考えてみましたが、どうでしょうか？感想とツッコミを待ってます。

シグナム：烈火の馬鹿剣将
ヴィータ：必殺・ツッコミハンマー
シャマル：ミッドチルダの死の料理人・ＥＸ
ザフィーラ：忠犬ザフィ公

』」

お登勢

「ああ、あれね……後でろくでない事が起こるから飲んでいないよ……だから気にしなでおいて」

さっそく質問に答えるお登勢。
そしてその隣には、２つ目の質問を見て怒りを表しているなのはとキャロの２人がいた。

銀八
「こ……怖いので２つ目の質問はなしィ！！」

エリオ
「イエス、マイロード！！！！」

大量の汗を流した２人は、３つ目の質問に移動した。

シグナム
「誰が馬鹿剣将じゃあああああああああああ！！！！！（怒）」

ヴィータ
「私だって好きでツッコんでねぇよォォォォォォ！！！！！（涙）」

シャマル
「私の料理にケチつけるなァァァァァァァァァァァ！！！！！（怒）」

ザフィーラ
「……とりあえず、こいつ等を普通の生活に戻してくれ……」

などとヴォルケンリッターの感想であった。

エリオ
「うわぁ…カオスだ」

銀八
「と言うわけで『白米』さん、今まで忘れてごめんなさい（土下座）」

エリオ
「次はペンネーム『桜』さんから『

一つ目の質問はルーテシアは近藤の事をどう思っているんでしょうか、今まで投稿された小説を読み直しましたけど、ルーテシアは近藤に好意を持っている様に見えます。

二つ目の質問はもし銀さんが卍解を使えるとしたならどんな卍解を使いたいですか？
フェイト達も卍解を使えたとしたなら銀さんと同じ卍解を使いますか？
後、銀さんは虚化をしてみたいですか？』……質問の答えをお願いします」

ルーテシア
「ゴリラのペットみたい……だから楽しい」

エリオ
「ゴリラのペットォ！？いくらなんでもそれはないでしょルーテシアァァァ！！（青ざめ）」

ルーテシアの答えにエリオは青ざめてしまう。
一方の銀時は…

銀時
「そうだなぁ……魔導士となって月牙天●を打てたし……でも卍解できるんだったら『●本桜景厳』をしてみてぇな……でも虚化は人間捨てる意味だから嫌だ」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディート・猿飛『『銀時（銀さん）（兄さん）がするなら、私も！！！』』

などと答えだす。

銀八
「相変わらず腹立つなこんチクショーが……と言う訳で『桜』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『黒龍』さん『黒神さんはどうやってデバイスの英語表記をしているんですか？俺は英語表記がうまくできなくて、小説の投稿スピードも考えて日本語表記にしようと思っているんです。それでもし日本ご簡単に英語に変える方法知っているなら教えて下さい。

『……ずばり答えます。黒神は『ｙａｈｏｏ　ｊａｐａｎ』や『ｌｉｖｅｄｏｏｒ』などにある翻訳を使って、そこで英語表記をしています」

エリオ
「なるほど」

銀八
「と言う訳で『黒龍』さん、ぜひとも試してみてください。んで次ィ、ペンネーム『龍の骨』さん『エリオ
「はぁ、これは先が思いやられるな。
零斗から贈り物と質問だ。

まずは、『くの一キャロ』の漫画の二巻だ。これはキャロとスバルが対決し、さらになのはが禁じ手の忍術に触れてしまうというストーリーだ。

そして質問だ。俺が送った『くの一キャロはどうだった?』だそうだ。次回も楽しみにしているぞ」』」

はやて
「何で私が出ないんやァァァァァァァ!!!!」

ドカァーン!!

銀八・エリオ
『『あんぎゃあああああああああああああああああああ!!!!!』』

はやてが怒りだし、無差別に『ラグナロス』を炸裂させる。
それからしばらく時間が経ち、回復した銀八とエリオは立ち上がる。

銀八

「……と言う訳で『龍の骨』さん、次ははやてを登場させてやってください」

エリオ
「……次行きます…ペンネーム『月光閃火』さん『よぉ…月光閃火だ。

しかし…こりゃまたとんでもない事が起きそうだな…。とりあえず…質問行くか。

1．アリマに質問…というか頼みたい事だ。とりあえず、俺の特製幕の内を作ったから送っとくよ。腕にはちょっとした自信があるんだが…とりあえず食べた後で感想を一つ頼む。

輝刃「なるほど…では、次は俺からだ。」

2．なのはとシグナム、それとギンガに質問だ。もし自分のバリアジャケットに入れたいバージョンがあったら、それぞれ次の3つの内どれがいいんだ？
1…『ギルティギアシリーズ』の『ミリア』の1Pコスチューム
2…『スーパーロボット大戦OGシリーズ』の『オウカ・ナギサ』のコスチューム
3…『真・恋姫†無双シリーズ』の『劉備（桃香）』のコスチューム
…おもいっきり声優繋がりねぇー！？あと、オリキャラ…駄目か？』
」

すると、突然モニターからアリマの姿が現れた。
弁当を食べた感想を言い出す。

アリマ
≪味は悪くはなかったよ……ただ量が少ないから満足できないって所かな……でもありがとう……≫

最後はお礼を言い出してモニターが消える。

銀八
「あ、以外にツンデレだ」

エリオ
「え!?これツンデレって言うんですか!?……まぁ良いや……2つ目はお願いします」

なのは
「にゃぁ～～……可愛らしさなら3の桃香ちゃんのかなぁ？」

シグナム
「そうだなぁ……露出度が一番少ない2で／／／」

なのはは可愛らしさで、そしてシグナムは1と3じゃ露出度が高すぎるため、2つに比べて控えめの2を選択する。
ギンガはと言うと……

ギンガ
「はぁ～～／／／……1のミリア衣装を着たフェイトさん……豊満な胸が揺れて下半身は美しく露出した美脚が見られて……2のオウカ衣装だと、まるでお姉様並の美しさが溢れててぇ、そんで3のフェイトさんの桃香衣装は可愛らしくて……うへへへへ／／／」

銀時・エリオ

（（へ……変態百合女が目の前にいたァァァァァァァ！！？））

ギンガの感想は、最早着たい衣装ではなく…フェイトに着せたらどれだけ可愛らしさと美しさを表すかを妄想しているだけのであった。
ちなみに彼女は銀時を目の敵としている。

銀八
「……と言う訳で『月光閃火』さん……ギンガのみっともないところ見せてすみませんでした。次ィ、ペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん『此処で質問です

？

此処だとスバルは銀時に憧れて侍になったそうですがもし他の人に助けられたらどうなるか考えて見ました

・神楽の場合

デバイスは傘になり語尾に「アル」を付けて毒舌になる
更に普段から酢昆布を食べている

・土方の場合

デバイス等は変化無いが過剰なマヨラーになる
そして常に瞳孔開きっぱなしの状態になる
そしてフォローに回る事が多い

・沖田の場合

ドSになる
常に上司の命を狙う（なのは辺り）

・神威の場合

常に笑っているが腹に一物持っている
常に強い相手を探しており見つけたら是が非でも倒したくなる（銀時辺り）
後、気に入らない相手の場合容赦しない

以上です

？

銀時に質問
もし銀時が好きな女性達が「お命頂戴」と言って来た場合どうします？
遭えて気絶させます？
それとも「勘弁して下さい」と言って土下座して謝りますか？

以上です』……1は何ちゅう質問だよおい！！」

エリオ
「す……スバルさんが誰かに助けられて憧れるシーンは十分ネタになりますしね」

銀八
「そうだな……後、ちなみにヅラに助けられた場合は剣術は優れ、爆弾や『んまい棒』も使いこなしてクールボケを炸裂します。後、動物好きにもなります。そして高杉の場合は、管理局のやり方と傲慢さに怒りを感じて世界を壊そうと考えています」

エリオ
「何かすごい設定になっていませんかァ!?」

銀八
「そう言うもんなんだよエリオ君……そして2つ目は……銀さんは間違いなく2つの内ランダムになると思います」

エリオ
「はぁ……」

銀八
「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、スバルが誰かに助けられるシーンネタは小説の序盤でも重要です」

エリオ
「次で最後です。ペンネーム『鳴神ソラ』さん『フォックス「銀時やスバル、ノーヴェに質問だけど…はやてに破られた質問を再びで『3人ともほとんどコスプレなバリアジャケットにされてるけど3人は自分でバリアジャケットを作れるならどう言うバリアジャケットにしたいんだ?』」

ソニック「銀時に質問『黒神が知っている漫画やアニメ、ゲームの中で使ってみたい剣はなんだ?』」

マリオ「なのは（冥王）に質問でソニックと似たのだけど…『黒神が知っている漫画やアニメ、ゲームの中で自分的にやってみたい遠距離攻撃はあるか?』」

『……」

銀時
「さぁな……そんなの思いつきやしねぇ。それにこちとら木刀一本ありゃ十分よ……こいつ一本でどんな野郎だってぶった斬ってやりゃ」

エリオ
「銀さんらしい答えですね……一方なのはさんは……」

なのは
「誰が冥王だァァァァァァァァ！！！！（怒）」

当然のこと、怒りを大爆発させてマリオに向かって『デスペレード・デモン・ブレイカー』を放つ。
関わったらろくな事しか起こらない為、2人はスルーした。
その為、質問をまともに答える機会はなかった。

エリオ
「……と言う訳で『鳴神ソラ』さん……しばらくなのはさんを刺激するような質問は控えめに……」

銀八
「以上持ちまして、今回の『銀八先生コーナー』終了。んでエリオ、最近どうよ？」

エリオ
「何がですか？」

銀八

「あれだよあれ、神楽と月詠との関係は深まったか？」

エリオ
「なぁ！？／／／」

２人の事を言われて顔を真っ赤になるエリオ。

銀八
「『狂乱編』でもよぉ、いつの間にか２人と一緒にいるようになったじゃねぇか？ええ、どうなんだ……んん？」

エリオ
「そ……それはァ／／／」

キャロ
「ふぅ～ん、面白そうな話しているんだね♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

銀八・エリオ
『『え？』』

男同士の話し合いの中で、１人の少女の声が聞こえた。
２人は声がした方を振り向くと、そこにはジェイソ●マスクをかぶっていて……両手に『戦国●ＡＳＡＲＡ３』に出てくる武将の武器『雷●』を２本持っているキャロがいた。
とてつもない殺気に、２人は青ざめて震えている。

キャロ
「ふふふ……くだらないお話しかできない男共なんかァ～……」

銀八
「え?何々!?何をする気!?」

エリオ
「キャロォォォォォォ!!!お願いだからご勘弁をォォォォォォ!!!!」

キャロ
「消えてなくなっちゃえェェェェェェェェェェェェェェェェェェ!!!!!」

銀八・エリオ
『『ギャアアア

ちなみに次回のアシスタントはシグナムです。

第百四訓：ピンチな展開になった時、大抵は新キャラによって助けられる場合が多い

黒神
「新ＯＰと新ＥＤは第百一訓目から始まると思ってください。そしてこれが新しいＯＰとＥＤです」

第１０１話から流れるＯＰ
『陽はまた昇る』

第１０１話から流れるＥＤ
『ワンダフルデイズ』（アニメ『銀魂』の１５回目のＥＤ）

リィン
「と言う訳で次回「どんな真面目な展開でもたまにおふざけもあり」テイクオフですゥ」

第百五訓：どんな真面目な展開でもたまにおふざけもあり（前書き）

黒神
「いやぁ、『よりぬき銀さん』の新ＥＤは良かったァ」

スバル
「侍アニメに出てくる曲って感じですごく良いよ」

黒神
「是非とも何度も聞いてみたいものだ……と言う訳で」

スバル
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるよ」

第百五訓：どんな真面目な展開でもたまにおふざけもあり

スバキの住んでいる洞窟の出口前に、リィンは懸命に水が入っているバケツを運んでいた。
そしてそのバケツをゆっくりと置く。

「ふぅ……ざっとこんなもんですぅ」

仕事を終えたかのような満足感を抱いたリィンは左腕で顔中に流れている汗を拭く。
そして洞窟の中に入ってはやては無事なのかを確認してくる。

（はやてちゃん、まだ目覚めていないからリィンは心配で心配で……大丈夫なんですか？）

とリィンは急いで、はやての所に駆けつける。
そしてはやてのいる部屋に入ろうと扉をゆっくりと開ける。
そこには、とても威圧感的な光景があった。

＊

桂、エリザベス、はやて、スバキの４人はテーブルに置かれているものを真剣に見つめている。
そう、彼等は何故か麻雀をしていた。
絶対に負けられないと言う気迫が４人から伝わるのであった。

すでに桂、エリザベス、はやての３人はリーチをしていてスバキの

絶体絶命。
だがそんなスバキは余裕そうに牌を引き、その牌を見てにやりと笑う。

「ツモォーー♪国士無双、そんで中が2つでドラは發♪そして裏ドラも發でドラ四、ダブル役満♪勝ったァァァ！！！」

スバキの役満上がりに桂、エリザベス、はやては信じられないような表情をする。

「これで全員の点数は私の物ーー！！さっさとよこせ負け犬共めぇ！！にゃーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！」
「黙れェェーーーーーーーーーーーーーー！！！！もう一度我等と勝負しろ！！次は絶対に負けんぞォォォォ！！！」

スバキの勝利宣言に桂は怒りを爆発させるような勢いで再戦を挑む。
実は桂達はさっきからスバキに点を取られまくりで一度も上った事はない。

「いんや無理しないほうがいいよ♪どうせ私の一人勝ちだから、無残に負けるぐらいなら再戦しないほうが身のためだぞ♪」

調子に乗っているスバキの一言に、はやては額に青筋を浮かべる。
エリザベスも青筋のマークが書かれたプラカードを浮かべる。

「麻雀だったやな。せやけど現実と言う場じゃアンタはシリアス限定キャラっと言う存在しかあらへん事を忘れない事や」

はやてのとてつもない厳しい一言にスバキは青ざめてしまう。

「そこまで言う必要ないでしょ！？涙出てくるじゃない！！」
「黙るんや、いくら麻雀で勝てたってゲームキャラのパクリ名前で登場した者がスターになれへん」
『そうだそうだ』
「何をー！！そう言うあんた達だってこの『狂乱編』が始まる前まではまともな活躍できないでいた脇役落ちピンチに追い込まれたくせに！！」
「貴様、そこに直れ！！成敗してくれる！！」
「私達の気にしていた事をよくも軽々しく言ってもうたなァ！！」
『今の取り消せ！！』
「やってみろよ！！そして何度も言ってやる！！お前等はぜんぜん活躍できない哀れな存在だとなぁ！！」

まるで子供の喧嘩としか思えない騒ぎ。
大人気のかけらも何とも感じない哀れな連中である。
たかが麻雀ごときでここまで喧嘩する事はまずありえない。

そんな大人気ない彼等を見て、フルフルと震えるリィンは…

「とう！！」

ドカァーン！！

隕石落下ごとくの勢いで麻雀席を蹴り飛ばし、真っ二つに割った。
麻雀牌は宙に浮かべて雨のように落ちてきた。

「あああああああああああああああああああああ！！！！」

これを見たスバキは絶叫した。
なぜならせっかくの国士無双によるダブル役満が台無しになってしまったからだ。

「何するんだよ！！せっかくの国士無双が……」

涙目でスバキがリィンに言い出すが、それを食い止めるかのようにリィンはスバキの鼻を力強く引っ張り出す。
するとリィンの体からとてつもない怒気と魔力が混ざり合うかのようにあふれ出て、顔中には血管が多く浮かんでいる。
これを見たスバキは青ざめてしまう。

「『何するんだ』じゃありませんよ……こっちははやてちゃんが無事か心配しているって言うのに、何あんた達はのん気で麻雀をしているんですか、えェ！！？」（ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

めっちゃブチ切れたリィン。
正直言ってかなり怖い。
スバキは涙を流して『ひぃ～～』と悲鳴を上げる。

「まぁ待たれよリィン殿。俺達は少しでも明るくする為に麻雀をやっていたもんでな……それだけの目的だったがついつい夢中になって我を忘れていただけだ」
「そうや。せっかく嫌な事を忘れる為にやっとるもんや。隠居な事よりも何事も何かに夢中になる事が大切や！！」

桂とはやてがそう言うと、リィンは力いっぱいスバキの顔面を地面にたたきつける。

「アヴェ！！」

スバキは思わず叫んでしまって気絶する。
鼻からは大量の鼻血を出している。

「知らないですよ！！何でわざわざ麻雀をやる必要があったのかを聞きたいんですよこっちはァァァァァ！！！」

リィンは異常なまでのおふざけをする桂達に怒りだしてツッコんでいる。
桂とはやて、そしてエリザベスまでもが呆れて溜息を吐いている。

「……リィン殿、たった1人でしかも何もしないでジッといる事よりもみんなで麻雀をやって楽しむ方がはるかに良いと思うぞ？」
「そうや。普段、引き篭もってテレビゲームをしている事よりもみんなと楽しんでボートゲームを楽しんだほうがおもろいし、何より夢中になるもんや」
「何でそこから引き篭りの話になるんですか！？そして何で麻雀、何でそんなに夢中になるんですか意味わかりません！！それにさっきから何でわざわざ麻雀をやる必要があったのかを聞いているんですよ！！ちゃんと答えてください！！（怒）」

どうして麻雀をやっていたかをリィンは聞きたいようだ。
すると3人は一斉に

『『やりたかったから（だ）（や）』』

桂とはやては口で言い、エリザベスはそう書かれたプラカードを出す。

ブチィ！！

「頭冷やせェェェェェ！！！！（怒）」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァンンン！！！！！

さすがにブチ切れたリィンは、己の魔力を大爆発するような勢いで放ち、何もかも飲み込んでしまう。

＊

そしてしばらくして状況は収まったが、先ほどの爆発で周りは荒れてしまって、桂、エリザベス、はやて、スバキは黒こげとなっている。

「……あ……改めて紹介するね、スバキです」

スバキはリィンの怒りに触れない為にちゃんと挨拶をする。

そして桂達にちゃんとした質問を言い出す。

「さっそく言うけど……どうしてヅラ達は『キザラキ』に絡まれて

た訳？」
「ヅラじゃない桂だ……さっき坂本の馬鹿のせいでこの惑星に不時着した時から話を進める」
桂は『ゴスモス』に不時着した事から話し出す。

自分達は仲間達を探しに行こうと決意した時、『キザラキ』の鎧騎士が現れて桂達は身を潜めて彼等からとんでもない事を聞きだす。
もうじきこの惑星『ゴスモス』は消えるんだ……俺達『キザラキ』によって。

惑星を消滅させると言う大胆な行動をする『キザラキ』の怪しげな活動を気になった桂達は、まず仲間と合流して『キザラキ』の事を話そうと行動した。
だが結局『キザラキ』に追い込まれて、危うい所まで追い込まれてしまった。

桂達の話を聞いたスバキは深刻な表情である事を考える。

「やっぱりそうだったんだ」
「やっぱりとは……その様子では何か知っている様だが……スバキ殿、できれば詳しく教えてくれぬか？」
『事情を聞かせて？』

桂とエリザベスは、『キザラキ』の存在を知っているスバキに『キザラキ』の存在を教えてもらいたいと尋ねる。

「……知ってしまったんなら、話しておかなきゃな……あいつ等、本当に『ゴスモス』を破滅へと導いて破壊しようとしているんだ」
「ほんまか!?せやけど何でそんなおっかない事を?」
どうしてこの惑星を破壊するのかはやては分からない。
その理由を、スバキでも今だに理解できていない。
「それは分からない……だけど、どうやって『ゴスモス』を破壊できるのかは知っている」
もっとも簡単にこの惑星を破壊する方法があるとスバキは言い出し、説明する。
「やつ等は『ゴスモス』の中心部にある特殊虚空魔玉『ブラック・アテリマ』を取り出そうとしている。それはただの魔法石じゃない、この『ゴスモス』を支えている核(コア)その物だから…それが取り外されるとこの『ゴスモス』のバランスが崩れて徐々に崩壊してしまう」
「何やそれ!?それってヤバイ事やん!!」
「そうか……『ゴスモス』は人口の惑星だった訳か」
もし『ブラック・アテリマ』がこの惑星から取り外された瞬間、『ゴスモス』は崩壊してしまい、自分達はもちろんこの惑星にする人々までもが消滅する。
自分達はもしかすると、最悪のピンチに追い込まれてしまったんではないかとゾッとする。
「ですけど、もしそんな事すれば『キザラキ』の人々も無事じゃすまないんじゃ……」
「あの鎧騎士達の事か?……奴等は人じゃない。魔力宝玉『アテリマ』を鎧と合成させて作り上げた『ジェノバ・ナイト』。肉体を持

たない『生きた鎧』なの」
「そうなんですか！？」

『アテリマ』と言う特殊な魔力宝玉によって生み出された生きた兵器だとスバキが言い出すと、リィンは信じられない程に驚く。

「なるほど……それならば例え次元に飛ばされても肉体を持たず精神だけで生きている為、息が出来ぬ心配はないと言う訳か」
「うん…だけどたとえ『キザラキ』の『ジェノバ・ナイト』が無事でも本当に『ブラック・アテリマ』が取り出されてしまえば……この惑星は崩壊して、全ての人達の命が……」

そう考えるとリィンは恐怖を覚えだす。
『ゴスモス』の崩壊と、『ゴスモス』に住む人達の命が消える瞬間を。
そしてスバキはたまらず土下座をする。

「お願い、『キザラキ』を止める為に力を貸して！！『キザラキ』にはとんでもない連中が存在するの！！」
「それって、『キザラキ』の実力的強さを持った連中って訳？」

はやてがそう言うと、スバキは『キザラキ』でもとんでもない凄腕強さを持った『ジェノバ・ナイト』を言い出す。

「ああ、同じ『ジェノバ・ナイト』でもまったく違う強さを持った5人の騎士……『氷の息吹　フリザガ』・『赤き炎　ファイガ』・『閃光の稲妻　サンダガ』・『烈風の翼　エアロガ』。この4体の騎士達の事を、『ジェノバ・ナイト』達は『キザラキ魔法四天王』と呼んでいる」
「……これ、FFネタですか？」

４人の騎士の名を聞き出したリィンは呆れてツッコむ。

「ヅラ達ならこの４人を倒せると思うけど、後１人とてつもなく厄介なのがいるんだ……それも『キザラキ魔法四天王』の存在が薄いと思えるほどに」

その人物こそが、『キザラキ』を仕切っているリーダーであり、驚異的な戦闘力を誇る『ジェノバ・ナイト』。

「漆黒の魔剣士、剣王（けんおう）コクメン。『キザラキ』のリーダーであり、全ての『ジェノバ・ナイト』を仕切っている最強の『ジェノバ・ナイト』。噂じゃ１０００人以上の魔導士を切り殺したとんでもない程に強いそうなんだ」

「な……何やそれ!?１０００人以上の魔導士って……」

そんなに多くの魔導士を剣で倒したと言うのかと驚くはやて。

桂、エリザベス、リィンも黙っているが、もしスバキの言っている事が本当であれば、それほどの手誰を相手するには相当の苦戦はするんじゃないかと確信する。

「ならば、我等も強化しなければならない」

「そうや!!今私達が強化しなきゃ行けないのはただ１つ!!」

『とっても重要な事』

「ああ、『キザラキ』対策になれるかもしれない」

桂、はやて、エリザベス、スバキの４人は完全に理解しあっていた。

自分達が何をすれば強くなれるかを、そして何をどうすれば対抗できるかを。

「そ……それって一体!?」

一体どう言う強化なのかをリィンは気になる。
はやては、今時分達がすべき事は何なのかをリィンに言い出す。

「それは、リィンフォース・ツヴァイのツッコミ強化ヤァァ!!!!!」

ドカァーン!!

と何かがはやての背後で爆発したようなインパクトがある発言をする。

「アダァァァァ!!!!!」

これにはリィンも派手にずっこける。

「あのう!!!何でツッコミを強化するんですか!!それに何でツッコミで『キザラキ』対策になるんですか!!」

当然のように怒りだしてツッコみだすリィン。
その理由を桂は言い出す。

「今回、ヴォルケンリッター一のツッコミ使いヴィータ殿、真撰組一のツッコミ使い山崎退はミッドチルダに待機中で、フォワード万事屋一のツッコミ使いティアナ殿は銀時達と遭遇中」
「その為、リィンにはその三大ツッコミ使いに引けをとらないツッコミ使い手として強化したい」
『ツッコミ、大事』
「うっせーですゥゥゥゥゥ!!!!!あの人達だって好きでツッコ

んでいないんじゃボケェェェェェェェ！！！！」

桂、スバキ、エリザベスのボケにもさらにツッコミを炸裂するリィンであった。

＊

ゴスモスのとある森の中

「ハックシュン！！」

「うぁ！？ティア、どうしたの！？」

突如ティアナがクシャミした為、スバルが心配そうに声をかける。

＊

起動六課基地内

「ヘーックシュン！！」

「ん？どうしたヴィータ……風邪でもひいたのか？」

ヴィータのクシャミにザフィーラは風邪をひいたのかと思う。

＊

ナンバーズ基地内

「ヘクシュ！！」

「や、山崎さん！？大丈夫ですか！！」

山崎もクシャミをして、ディエチが心配して声をかける。

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生」

シグナム

「おお、さっそく始まったか。今回は私がアシスタントしよう」

久しぶりのアシスタントの為、すごく喜んでいるシグナム。

銀八

（うわぁ、すんげぇ喜んでいやがる）

銀八

「はい、さっそく行くとすっか……まずはペンネーム『ミクニップ』

さんからの質問『
ノーヴェに質問：・・・さっき、ノーヴェを愛してるって子が居たから倉庫の裏に来たらどうですか？
銀時に質問：死ねぇぇぇぇぇ！！この女ったらしがぁぁぁぁぁぁ！！！！
スカリエッティに質問：最近ドゥーエ見ないですけどどうしてますか？・・・あと、幸せな家庭ってほしいですか？
』」

ノーヴェ
「え……エエエエエエエエエエエエエエエ！？そうなのか！！！／／／」

突如の告白に顔を真っ赤にするノーヴェ。
そして頭から噴火するように煙があふれ出て、気絶して倒れる。

銀八
「2つ目は質問じゃなく脅迫ですので……シグナム！！」

シグナム
「銀時に手を出すなら容赦なしだァァァァァァァァ！！！（怒）」

と、『レヴァンティン』を『次元流』の構えをして一気に豪快に振るうと、紫色の炎が包まれた極大な斬撃を放つ最強の大技『極炎一閃』が炸裂した。
それがヴィーオに当たるかどうかは知る予知もない。

銀八

「はい、次はどうなんですかスカリエッティ君！！」

スカリエッティ
「おいおい、ドゥーエはちゃんと生きてい……」

ドゥーエ
「私の出番をもっと増やせーーーーーーーーーー！！！！！（涙）」

ドカァ！！

スカリエッティ
「何故私！？」

と、ドゥーエの八つ当たりで殴り吹き飛ばされたスカリエッティは気絶する。
もう１つの質問を答える状況ではなかった。

銀八
「と言う訳で『ミクニップ』さん、ドゥーエを見守ってください」

シグナム
「次行こう。ペンネーム『真王』さん『真王「どうも。新入りの真王です。
さっそく質問ですが『私にとってこのキャラが萌だ！』というキャラは誰ですか？
あと、桂木弥子（ネウロより）とスバルとギンガでは、どっちが大食いにゆうしょうしますか？』……なんだこの質問」

銀八
「ずばり答えます。それは人個人的な感情でありますが、作者の場合は萌は考えた事はありません。ちなみに、ギンガの場合はフェイトとスバルの露出度の高さとコスプレが鼻血出るほど萌えます」

シグナム
「何でそこでギンガが出てくる？と言うより何で百合設定したんだ！？」

銀八の口からギンガが出てきた事でツッコみだすシグナム。

銀八
「ちなみにこの場合は悪魔のごとくの胃袋を持つ桂木弥子が勝つと思います。と言う訳で『真王』さん、貴方の小説作りの速さはこっちの馬鹿作者にも見習ってほしいです」

シグナム
「次はペンネーム『ジョニー佐々木』さんの質問だ『月詠さんと銀さんに質問です、原作の紅蜘篇で、銀さんはすごく、くさい台詞を言っていましたけど銀さんは月詠さんのことが好きなんですか酒と女は一セットの事です月詠さんもけっこー会っているけどどうですか？お願いします。』……」

すると、シグナムはとてつもない殺気を放つ。
その殺気に銀八は青ざめている。

そして月詠がシグナムの殺気に脅えながらも質問に答える。

月詠
「ぎ……銀時にはあの時、強い感謝をしている……そ……それだけだ！！！」

質問を終える月詠だが、今だにシグナムの嫉妬目線は収まらない。

銀八
「と……と言う訳で『ジョニー佐々木』さん……廊下に立っていなさい」

そして気持ちを切り替えて、次の質問を答える。

銀八
「次ィ、ペンネーム『伽藍碾臣』さん『はやてに質問。短髪なヅラ（紅桜篇）と長髪なヅラ、どっちがカッコイイと思う？』」

はやて
「どっちもカッコ良えけど、短髪の桂さんも見てみたい！！！」

そう希望を持って答えだすはやてであった。

銀八
「と言う訳で『伽藍碾臣』さん、廊下に立っていなさい。んじゃ次ィ行くぞォ、ペンネーム『ルシファー』さん『質問１
今ジャンプで銀さんが一夜の迷いでピンチになってますがその対象のお登勢さん、さっちゃん、九ちゃん、月詠さんはどう思ってますか？

質問2
…上記の人たち以外はどう思ってますか?』……」

シグナム
「1の質問は何の事だ?」

銀八
「シグナムサンハ、知ラナクテ良イデス……」

シグナム
「何で片語!?」

もしシグナムがあの事を知ってしまえば、大暴れするだけである為、それだけは絶対阻止する銀八。

お登勢
「ああ…あれね、あん時ぁめっちゃ笑えたねェ」

猿飛
「銀さんには申し訳なかったけど、すごく満足したわ♪」

九兵衛
「……」（必死に笑いを堪えている）

月詠
「……まぁ、何じゃ……あん時は銀時に申し訳なかった」

銀八

「以上です。ちなみに2は大暴走するので無しでお願いします！！
マジで勘弁！！」

シグナム
「ぬぅー、気になる」

銀八
「という訳で『ルシファー』さん、廊下に立っていなさい」

シグナム
「次はペンネーム『ＳＡＤＳ』さんの質問だな。『銀八先生に質問です。
1．黒神さんは、リリカルなのはｖｉｖｉｄとＦｏｒｃｅの漫画を買う予定はありますか？
2ティアナさんに質問です。最近自分をどう思っていますか？』」

黒神
「うーむ、どっち買おうか今だに悩んでいます」

黒神の質問を終えたところで、ティアナが

ティアナ
「もっと私の出番を増やせエエエ

シグナム
「苦労しているんだな、ティアナ」

銀八
「と言う訳で『ＳＡＤＳ』さん、ティアナの活躍はまだありますので期待して待ってください」

シグナム
「次が最後だ。ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
？スバルとティアナは酒に酔うとどうなりますか。
フェイトやシグナムみたいに脱ぎ性になるんですか。
？機動六課とナンバーズが（この小説の設定でランスター編が終わったとこ）この軍団と戦ったら勝てますか。
１戦国ＢＡＳＡＲＡ連合（戦国ＢＡＳＡＲＡに出てくる武将全員で時代は戦国ＢＡＳＡＲＡ３に出てくる武将は３で残りの武将は英雄外伝です）
２屁怒路様ファミリー
３ボボボーボ・ボーボボに出ている３大変態×２（メンバーはキラリーノ、ライス、サービスマンでそのうち三人はアニメの方で、残りは原作の方です）
？上の質問で上のメンバーでどれが一番なのは達にとってこれには適わないというのはありますか。』」

銀八
「ずばり答えます。正直分かりませんが、予想して見る限りスバル

の場合は凶王化して大暴走、そしてティアナは妹キャラになりきって銀時に甘えます」

シグナム
「なるほど、あの2人ならありえる」

ポンっとシグナムは納得した表情をする。

銀八
「そして2つ目の質問は……代表としてシグナムどうぞ」

シグナム
「全部無理ィィィィィィィィィィィィ！！！！特に2は屁怒路がいるからいやじゃアアアアアアアアアアアアア！！！！（涙）」

銀八
「うわぁ、一気に3も答えたよこの子……というわけで『クアンタ』さん、いくら彼女達でも越えられない壁はありました」

シグナム
「（グォホン）……い……以上もって今回の『銀八先生コーナー』は終了した……また次回も楽しみに待っている」

銀八
「へーい、次回のアシスタントはアルフですので、お楽しみィ」

第百五訓：どんな真面目な展開でもたまにおふざけもあり（後書き）

ヴィータ
「いくらツッコみ役がいねぇからって、リィンにツッコミ役させるのって無理あるんじゃねぇか？」

リィン
「何でやねん！！何でやねん！！何でやねん！！何でや……」

ヴィータ
「もう特訓かよ！？しかもずいぶん古ィ関西弁なツッコミだなおい！！」

リィンのツッコみ特訓にさらにツッコミだすヴィータ。
やはり三大ツッコミの1人に入っている事は伊達じゃない。

ヴィータ
「どんな称号いらねぇよ！！……次回「ツッコミは綺麗に解説すれば良いもんじゃない」テイクオフ」

第百六訓：ツッコミは綺麗に解説すれば良いもんじゃない（前書き）

黒神
「いやーマジですみません。最近絵を描くのに夢中になっていましたので、ようやく完成しました」

銀時・フェイト
『『サボりすぎだぁ！！』』

ドカァ×２

黒神
「あんぎゃあああああああああああ！！！」

サボりすぎたお仕置きとして、銀時とフェイトに木刀と『バルディッシュ』で吹き飛ばされた哀れな作者。

スバル
「あ……あはは……『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百六訓：ツッコミは綺麗に解説すれば良いもんじゃない

「と言う訳で今から、リィンツッコミ強化訓練の開始ィ～♪」

パチパチパチ

はやてが乗り気で叫ぶと、エリザベスとスバキは嬉しそうに拍手する。

その隣にはリィンが唖然とした表情ではやてを見る。

そしてどうして自分がこんな特訓をしなきゃいけないのか納得できない。

「何で……何でリィンがツッコミ特訓をしなきゃいけないのですか？」

「そりゃ、リィンもリィンフォース同様に出番が全然あらへんから、出番増やす為にツッコミをしなあかんちゃう？」

「訴えますよ！！本気でお姉ちゃんに訴えますよはやてちゃん！！」

怒りだして額に青筋を浮かべているリィンは怒鳴る。

「はいそれだめぇ～！怒りだして怒鳴るのとツッコむのとは全然ちゃうんや！！」

（うわぁ～、マジムカついたですぅ～！！！！（怒））

「そんな事より、これ見てみィ」

はやてはホワイトボードに張られているリアルに絵で描かれた何の特徴も無い人間を『シュベルトクロイツ』で指す。

「はいこの人見てみぃ。ごく一般的に近い人物である事は確かやろ

？」

「はぁ、まぁ確かにそうですけど……」

リィンから見ても、ただの一般的な人しか見えない。

一体どうして

「突如やけど、まずはもしこの人物がシルエットだけの存在の事を話しておくな？」

「本当に突如ですね」

「ええか、まずこの人物がやとすると…こうや！！」

はやてはそう言うと、その男のシルエットを取出す。

「ほうら何の特徴もあらへん。たとえ顔に特徴をと一緒にどす黒く塗られておるから、唯一の特徴もまったく見えへん。ただの着物を着た青年としか見えないほど存在感が薄印や！！」

「いい加減にしてくださいはやてちゃん！！さっきから全然関係ないことばかりじゃないですか！！」

「シャラーップ！！最後まで良く聞くんや！！こんな影が薄いどころが存在感薄い人物でも……もしツッコミと言う才能があったらどうなると思うんや！！見た目より大きなツッコミのキレと大胆な活動があるからこそ、漫画の読者を楽しませる重要な役割を果たして、シルエット存在でもそのツッコミの動きとキレの良さで分かるんや！！」

「あぁ！！」

そう、ツッコミと言う『銀魂』見たいな漫画には欠かせないボケの面白さを最大限に広げる才能を持っている。

例えるなら、志村新八の様なツッコミが上手な人がいければ、『銀魂』のボケの面白さを読者に伝わる事はできない。

「分かったやろ！！ツッコミの重要さが！！」
「はい！！」
「じゃあ次や！！」

するとはやては一気に3枚のシルエット絵を出してホワイトボードに張る。
右から近藤、九兵衛、そして桂のシルエットが描かれていた。

「じゃあ全員答えさせてもらうから、名前聞かされた者は返事してぇ」
『『はぁい』』

リィン、スバキ、エリザベスの3人は返事する。

「じゃあスバキ、この人物は誰や？」
「えーっとう確か、この髪型に刀の柄の先を両手で押さえているのが、『ジュエルシード事件』を解決した英雄の1人こと近藤勲」
「次エリザベスや、この人物は？」
『ポニーテールの髪型で体が小型で刀を持っているから、柳生九兵衛』

スバキもエリザベスも素直に答えだす。
当然、正解でもある。

「じゃあリィン、この人物は誰や？」
「誰って、桂さんじゃないですかぁ」

笑いながら答えるリィン。
だが……

「ブッブー、ちゃうわ」
「エェーーーーーーー！！！！どう見たって桂さんじゃないですかァァァ！！」
有り得ないほどに叫びだすリィン。
確かにロングヘアーのような髪型に着物を着た様な形、どう見ても桂としか見えない。
「正解は……」
はやては潔くシルエットの黒い部分を外すと……
「カツィロスや！！」
そう、シルエットに描かれていたのは……黒いロングコートを身にまとい胸部は露出しており、銀色の肩当を当てている。
そして身の丈をはるかに超える長刀を、鞘のように柄を左手で握っている桂であった。
しかも、シルエットとはまったく違う。
「性格には、『F●?』のセフィロ●のコスプレをした桂さんや♪」
とてつもない衝撃的な桂の姿に、リィンは信じられない程の衝撃的表情をして、大量の汗を流す。
「うはぁ！！ヅラの奴がカッコ良くなってんじゃんか！！」
『すごく良いです』

スバキとエリザベスは桂のコスプレ姿に評判良く感想を言い出す。

「いやぁ、我ながら良い感じに描けたわ、うん♪」

はやてにいたっては大満足的な表情である。

愛する者に似合うコスプレをさせたら、ドンだけ輝かせるのか試したくなったのだ。

一方のリィンは声を震えながらも質問をする。

「いや…あのそれ完全にネタパクリの……」

「はぁ？ネタパクリがどうしたんや？」

「いや…え？これ、私のツッコミ強化訓練じゃなかったんですか？」

自分のツッコミ特訓からいきなりコスプレ話題にされて訳が分からなくなってしまったリィン。

と言うより、はやては好きな相手にコスプレさせる趣味があるのかと疑う。

「大体、この物語ってコスプレネタが多い気がしませんか？……スバルさんやノーヴェさんに対するコスプレ的なバリアジャケットに飽き足らずに今度は桂さんにコスプレさせる気ですか？」

信じられないように疑いだして言い出すリィンに、はやては平然と言い出す。

「あれやろ？何かのＢＬ（ボーイズ・ラブ）見たいな感じのネタで女性読者を喜ばすような狙い」

「おぉ！」

『なるほど！』
「何ですかその『アイデア貰った』的なリアクション！！その前にとんでもない物を貰ったんですよォ！！！！」
はやての言葉に納得したスバキとエリザベスはその狙いありな感じで頷く。
そんな2人に怒鳴ってツッコむリィン。
「じゃあ次はボケをする人物に対するシルエット特徴を言うな」
「あのう、何かツッコミ強化に対する話からシルエット話になってませんかぁ！？」
リィンのツッコミを無視するかのようにはやては話を進める。
「良えか？ツッコミの対象とも言えるボケはツッコミが無きゃただの変な言葉しか言えへんけど…逆にボケが無ければツッコミと言うのは何の価値もあらへん！！」
「た……確かに……」
たまにははやてもマトモな事を言い出すと思ったリィン。
「そんで、ボケキャラの中にはインパクトが大きいもんが存在するけど、それはツッコミが薄けりゃインパクトが高いボケキャラはやり過ぎるって事や」
「へぇ」
『そう言われてみれば』
スバキとエリザベスもなんとなく納得する。
「そして、これがボケとるキャラクターのシルエットや」

「いや、何でそこでシルエット話になるんですか？さっきから話のつながりが全然無いんですけど？と言うより本当に私のツッコミ強化をする為の訓練ですかこれ？」

もはや話の内容が滅茶苦茶なのでリィンはさすがに疑いだす。
ちなみにシルエットは４人で、その四人は左からユーノ、ザフィーラ、フェイト、スバルの４人であった。

「まぁとにかく見てみぃ。はいこの人誰だかわかる？」
「犬の耳をしているからザフィーラさん」
「じゃあその次は？」
「ツインテールヘアーで杖を持っているのはフェイトさん」

とりあえずはやての言うとおりに答えだすリィン。

「じゃあこの人誰ェ？」
「あ、前のバリアジャケット衣装を着ているスバルさん」

そう答えるリィンだが…

「ブッブー、違います」
「な！！まさか…今度はスバルさんを！？」
「正解は……」

はやてがシルエットのシールを剥がすと……

「スバニャンや♪」

そう、シルエットに張られていたのは……猫耳をかけていて両手両足にネコの手と足をつけててネコの尻尾がついているスクール水着

を着ているスバルで、その後ろでスバルの胸を両手で揉みだすはやての姿であった。

「正確には、私におっぱいを揉まれとるスバニャンや♪」

「何でですか！！何でまたシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？何でまた引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより何でまたコスプレネタ！？そして何ではやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより何でいちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか何でさっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）」

一気に大噴火する勢いでツッコミを言い出すリィン。

一方のエリザベスとスバキは…

『答え：はやてにセクハラされるスバニャン』

「じゃーん♪」

エリザベスは答えが書かれたプラカードを、そしてスバキは『はやてにセクハラされるスバニャン』と書いた紙をリィンに見せる。

「何引っ掛け問題に答えているんですかァァァ！！嬉しそうな顔をするんじゃないですゥ！！クイズをやっているんじゃないですよォォォォ！！！！」

2人のボケに対してもツッコミを連続に炸裂するリィン。

そんなリィンのツッコミを良く聞くかのように、はやては耳を澄ます。

「よっしゃ♪じゃあ第一回リィンツッコミ強化訓練の成績発表や！」

「えぇ！！まさか今までが訓練！？」

まさかの訓練終了宣言をするはやてに、リィンは予想できなかった。
実はシルエット話とキャラの存在的やツッコミとはどれ程大切なのかは前向きの話であり、本当の目的はリィンのツッコミを計る事である。
さっきまでのおふざけは、リィンをワザとツッコませる事である。

「その前に言っとくけど、ツッコミは地味なキャラかツンデレキャラが大抵やる事が多いんやけどそれは立派なキャラスキルの１つ。
半獣のザフィーラやツインヘアーで魅力されやすいフェイトちゃんに、高校生娘っぽい美少女的なスバル。人にはそれぞれ己だけの特性キャラスキルが存在するんや」

はやてがそう言うと、３人だけを丸を描いて入れ込む。
だが一番左にいるユーノのシルエットだけは入っていない。

「ちょっと、１人入っていませんよ！！ユーノさん！？ユーノさんか！！ユーノさんの事か！？」
「まぁ、大体こんなもんやろ？」

リィンのツッコミをスルーしてユーノのシルエットを消すはやて。

「アアァァァ！！入れてくださいよ！！ユーノさんもせめて入れてやってくださいよ！！」

悪気が無くてもそれはそれで酷いとリィンは言い出す。

「次はそうやなぁ…次はそろそろ結果発表や！！」

ドカァァ！

「ユゥウゥウゥウノォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

完全にユーノを邪魔者扱いするはやてがあまりにも酷すぎであり、リィンは青ざめて悲況な叫びをする。

「知ってのとおり、ギャグと言うのはボケとツッコミがあって初めて成立するもんや」

「あでも…中にはツッコミがなくてひたすらボケてしまう場合が漫画やアニメであるんだけど……」

「ああ、その場合は読者がツッコむ事があるな…」

『笑いがある所に必ずツッコミが存在するしね』

「そう言うこと♪」

はやて、エリザベス、スバキはツッコミとは色々な意味がある事を知り、ツッコミの重要性がどれ程なのか改めて理解する。

「せやけど！！未熟なツッコミ使いの中には、少々やりすぎてしまう者もおるんや！！」

するとはやては、どこからかテレビを取り出して机に置く。

「これを見てみぃ」

『『？』』

するとはやてはテレビをつけると、そのテレビには自分達の後姿が映し出されている。

はやては素早く巻き戻しすると、ちょうど良い具合な所で『再生』ボタンを押す。

そこに映し出されていたのは……

《何でですか！！何でまたシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？何でまた引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより何でまたコスプレネタ！？そして何ではやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより何でいちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか何でさっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）》

一時停止

「このとおり、こう言うツッコミは明らかにやりすぎや」
「これさっき私のやり取りじゃないですかァァ！！！！（怒）」

リィンはまた全然関係ない事と思って怒り任せに叫びだす。
しかしこれこそが、リィンのツッコミ訓練の結果発表である。

「ツッコミと言うのは、ボケのおかしな点を分かりやすく教えてやる役目を担っていますが……」

さらに巻き戻しをして、そして『再生』ボタンを押し出すはやて。

《何でですか！！何でまたシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？何でまた引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより何でまたコスプレネタ！？そして何ではやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより何でいちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか何でさっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）》

一時停止

「こうもおかしな点を丁寧に拾われると逆に冷めるわ」

「う……」

巻き戻し→再生

《何でですか！！何でまたシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？何でまた引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより何でまたコスプレネタ！？そして何ではやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより何でいちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか何でさっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）》

一時停止

「しかもリィンの場合は無駄に長くて何を言っているのか分からんのや。これじゃあツッコミしている側はボケよりタチ悪いんやで？」

「……」

巻き戻し↓再生

《『何で』ですか！！『何で』またシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？『何で』また引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより『何で』またコスプレネタ！？そして『何で』はやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより『何で』いちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか『何で』さっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）》

一時停止

『何で』×7

「ほらぁ、一言で『何で』って七回も言っとるしな」

「やめてエエエエエエエ！！！！何か恥ずかしいからやめてくだ

さいですゥゥゥゥ！！！／／／」

流石に恥ずかしいのかリィンは顔を真っ赤に染めて悲鳴を上げる。

「要するにツッコミはかえって適当のほうが効率良いんや。と言うのは元々おかしさというのは『おかしい』『変だ』という理解不能な部分から来るものでありこの状況はどこかで曖昧な部分を含まねば成立しえないもので、これらを一から十まで説明すると…」

巻き戻し→再生

《何でですか！！何でまたシルエットとはまったく違うのが出てくるんですか！？何でまた引っ掛け問題を出すんですか！？ボケキャラのやりとりは何だったんですか！？と言うより何でまたコスプレネタ！？そして何ではやてちゃんが出てくるんですか！？と言うより何でいちいちセクハラ的なことをする必要あるんですか！？てか何でさっきからツッコミ強化訓練に関係ない事をしているんですか！！！！（怒）》

一時停止

「この様に、あきらかにツッコミとしての役目を失い…むしろ深いな物として受け取られ…」

「や～め～て～よォ！！！！分かりましたよ、殺してくださいよ！！私が死ねば良いんでしょ！！！！／／／」

要するにツッコミとはただ説明をすれば良いわけでもない。
かくしてツッコミ訓練を大恥をかいてしまうほどの失敗をしてしまったリィン。

だけど負けるなリィン。立ち上がれツッコミ。そしてボケを成立せよ！！

リィンのツッコミ使いとしての道乗りは、まだ始まったばかりである。

と、何かナレーション的なものが書かれているプラカードを持っているエリザベス。

ドカァ！！

「喧嘩売っているのかごるぁあああああ！！（怒）」
『ヒデブ！！』

顔中に血管を浮かべているリィンは体をスクリューのように高速回転させてエリザベスを蹴り飛ばす。

「エリザベス！？」
「エリー！！」

はやてとスバキはリィンの怒りを受けたエリザベスが吹き飛ばされた事に驚きだす。
いや、この場合はエリザベスが悪い。
その1分後、ヅラが木刀振りの剣の稽古を終えたのかようやく帰ってきたのは……めんどいから適当で良いや。

「めんどくさがるなぁ！！後、ヅラじゃない桂だァァァ！！！！」

以上で今回はヅラのツッコミがオチでした。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

アルフ
「はぁい、みんな元気ィ？今回はこのアタシ、アルフがアシスタントするよォ？」

銀八
「へぇい、じゃあさっそくいくぞぉ。まずはこの人、ペンネーム『烈火竜』さん『｛黒神先生に質問｝

1聖龍王ヴィヴィオと聖王ヴィヴィオ、どっちが強いと思いますか？

2聖龍王ヴィヴィオの『かめはめ波』と怒りのなのはの『デスペレ

ード・デモン・ブレイカー』、どっちが強力だと思いますか？

〜エリオに質問〜

神楽には、ハゲに敏感な最強の掃除屋の父・星海坊主と『雷槍』と言う異名を持つ兄・神威がいます。
そんな家族を持つ神楽と付き合う自信ありますか？』……ずばり答えます。１つ目はもちろん『かめはめ波』を使えると言う点で聖龍王ヴィヴィオが勝ちます」

アルフ
「まぁ……流石にあれは……一理あり」

以前、銀時から『ドラゴンボー●』のコミックを見せてもらったアルフも、『かめはめ波』がどんだけ恐ろしい威力を持っているかは嫌と分かる。

銀八
「２つ目は……流石にスーパーサイヤ人の『かめはめ波』より劣りますので、この場合はなのはの『デスペレード・デモン・ブレイカー』が強力と思います」

アルフ
「だよねぇ！！」

そして３つ目の質問を答えようとした瞬間……

星海坊主
「この糞餓鬼ガァァァァ！！！うちの娘にむやみに近づいているんじゃねェェェ！！！！（怒）」

エリオ
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と、いつの間にか来た星海坊主に怒りの鉄槌を受けているエリオ。
ちなみにこの3日後で、エリオは『そ……それでも自身を失いたくない……』と言い出し、つまりこれは自身ありと言う判明があった。

アルフ
「うわぁ……とんでもない親馬鹿…」

アルフは止めるべきだと思うが、巻き込まれたくないと言う意識なのかそれを拒む

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい」

アルフ
「次行くよォ、ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さんからの質問『？会話にあったなのはさんの強化案（屁怒路さまと合体）はなのはさん，どう思いますか．てか実行してほしい（ウッソ）

？スバルがヴィヴィオにより姉ポジションに着いちゃったんだけどこれってママにはなれないというフラグなのですか？（こなた）

？このバカ二人を止める方法を教えてください（かがみん）』。？はァ……」

なのは
「絶対イヤァァァァァァァ！！！！（涙）」

そう言うと、なのはは涙を流しながら『デスライト・スタージャッチメント』をウッソ達に向かって放つ。

アルフ
「うわぁ……なのは可哀想…てか？は一番厄介な敵が減ってチャンス到来かも！？」

？に関しては嬉しそうに言い出すアルフ。

銀八
「そして？の答えは……キリが無いので無理ですね？」

アルフ
「そうだね……」

今まであの変態オタクコンビ（ウッソとこなた）は散々痛い目にあったが、それでも全然懲りていないので止めても無駄だと2人は判断した。

銀八
「と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん……かがみんに『ゴメンね♪』と言っといて。次ィペンネーム『サディスト』さん『今回はヴィータに質問。

今回の長編も完全にハブ扱いで全く出番がない上に、はやてにヴラとの仲をまた一歩リードされたけど恋のバトル勝てる自信ある？

エリザベスに質問。

この小説内じゃまだ一度も喋ってないが地声では最後まで喋らないの？』」

質問を見て、ヴィータは今回のシリアスでの桂とはやての関係を見てすんごく置きこんでいた。
それを見た銀八は溜息を吐いて、言い出す。

「？は黒神の小説進みには、桂とヴィータを中心とした話も書こうと考えているようです」

ヴィータ
「だったら大丈夫だぁ！！！」

銀八の言葉に救われたような気分でご機嫌良く叫びだす。

アルフ
「？はアタシも気になってたんだけど……どうなのエリザベス」

エリザベス
『それは軌条秘密です』

そう書かれたプラカードを出すエリザベス。

銀八
「と言う訳で『サディスト』さん、ヴィータの恋を応援してやってください。次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『今回は片倉小十郎と猿飛佐助から質問です。

小十郎「さっそくだが質問だ。
こっちの世界にはザビー教というおかしな団体が育てている野菜『ザビッシュ』ってものがあるのだが…それとそっちが散々不味いと唱えているシャマルの手料理とどっちが不味いんだ？
実際にザビッシュを送るから食べ比べてくれないか？」

佐助「俺様からは九兵衛ちゃんに質問。
来年の最新作の『ス○ートプ○キュア』の主役の子達ってこっちの世界の鶴姫の声に似てる子とアンタの声に似てる子がいるんだけど、もしかしてそれにちなんでプ○キュアネタでコスプレとかしちゃったりしないよね？
もししちゃうんだったらこっちもｃｈａｒｌｅｙが鶴姫出演させて、いつかそっちの作品とのコラボ企画があれば二人にプ○キュアネタやらせようかって考えてるらしいんだけど。どうなの？」
『……てか２つともロクでもねぇ質問だなおい！！」

別の意味で答えにくい質問に銀八は思わずツッコむ。
それでも質問を答えるべきだと答えだす。

アルフ
「小十郎の質問はアタシが答えるよ！……とにかくシャマルの料理は悲劇と絶望しか生み出さないからそっちの『ザビッシュ』と言う野菜はまだマシじゃ！！！」

シャマルの料理以上にまずいものはないと頑固言い出すアルフ。

銀八
「予想通り、おそらく今の九兵衛なら……胸の無さによる嫉妬心が原動力となってやってしまう事もあるな…」

キャラ崩壊した九兵衛ならやりかねないと銀八は有り得ると予想する。

銀八
「と言う訳でユッキー、めっちゃくだらねぇ質問した佐助を殴り飛ばしてやって、そして『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、シャマルの手料理に比べりゃ『ザビッシュ』はまだマシだと思います」

アルフ
「次行くね、ペンネーム『真王』さんからの質問だよ。『ラドン「まずは俺からだ。『銀時ｌｏｖｅｓに質問だ。自分のライバル達を何時か抹殺する気か？』」

ギドラ「我が竜使いの娘に聞く。『主はフリードの存在を忘れてはないか？』」

モスラ「次は私ね。『銀時はブ〇イ〇ルーのラ〇ナ以外にどんな服なら許せるの？』

ゴジラ「最後は我がここの全員に聞く。『貴様らは我と戦って勝てるか？』』」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ、シグナム・アルフ・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ヴィンディ・ディート・猿飛『『『もちろん、抜け駆けするような連中から！！！』』』

何ともまぁはっきりと答える銀時ｌｐｖｅｓ達。

キャロ
「最近忘れてい……いやいや忘れていません！！」
銀八
（酷っ！めっちゃ忘れていやがる！！）
今の反応でガーンとショックを受けるフリード。
そしてキャロの無差別な残酷さに有り得ないとツッコむ銀八。
銀時
「どの道コスプレに変わらんねぇから全部嫌じゃーーーーーーーー！！！！」
コスプレはあんまりだと叫ぶ銀時。
銀八
「代表として言います……本当にあのゴジラなら勝てませんのでマジ勘弁」
銀八は土下座までして質問を答える。
銀八
「と言う訳で『真王』さん、次からは質問は3つまでにお願いします。今回はサービスしますので……。んで次ィ、ペンネーム『鳴神ソラ』さん『
ネス「シグナムさんやリインフォースさんに質問！『もし新しいバリアジャケットを作るならどう言う風にする？』」
リュカ「僕もはやてさんに質問『もし自分もバリアジャケットをコ

スプレにするならどう言うのにしますか？』」

『」

シグナム
「そうだなぁ……是非とも騎士王として『Ｆａｅｔ』のセイバーで！！」

銀八
「いや、騎士王の胸は貧乳だから、巨乳サイズはねぇんじゃねぇの？」

シグナム
「は！！」

銀八に言われてみればそのとおりかもしれない。
シグナムはそう確信した。

アルフ
「いや、それ本人に言っちゃ殺されるでしょ！！」

絶対『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』を食らわせてしまうハメになるとアルフは恐ろしく想像する。

リィンフォース
「私は天使をイメージした感じが良いです！！」

天子の存在に以外にも憧れるリィンフォース。

はやて

「私はぁ……特に無いからええわ♪」

アルフ
「セコっ！！」

銀八
「スバルとノーヴェには散々コスプレさせているのにか！？」

まさに狸部隊長。
セコさは銀魂組にも引けをとらない。

銀八
「と言う訳で『鳴神ソラ』さん……シグナムの騎士王のコスプレをした姿を想像してみてください」

アルフ
「次が最後だよ、ペンネーム『黒龍』さん『黒龍「それじゃあ質問しますが、俺の書いている小説でのフェイトのキャラ崩壊ぶりを見てそっちのフェイトはどう思いますか？」

ソラ「俺からスバルに質問だ。スバルは黒龍の書いている小説の中で、誰と手合わせしてみたいか教えてくれないか？何人でも構わないぞ」

アリス「最後に私だ。超魔王なのはに質問だ。お前は少し恐喝に近い脅しでやりしほうだではないか？少しはこっちのなのはを見習って少しは丸くなったらどうだ？（黒笑）」

黒龍「これからも小説頑張ってください！」』……最初の質問だけど、フェイトあんた飛ばしすぎ！！」

フェイト
「えええぇーーーーーーーーーーーーーーーー!?こんなの私じゃないよォォォォォォォ!!!!!／／／／」

絶対に自分じゃないと否定するフェイト。
だが実際はそんな感じである。

スバル
「私は……以前の赤夜叉さんの合成小説で顔合わせしたセイバーさんか、一度は銀さんかソラさんとも手合わせしてみたいなぁ」

なのは
「うぬぬぬぬ……本当だったら『デスライト・スタージャッチメント』を食らわしてやるつもりだけど……あっちを見習って我慢しなちゃ……」

素直に答えるスバルと、あっちを見習って少し丸くなるなのはであった。

銀八
「と言う訳で『黒龍』さん、廊下に立っていなさい。以上持ちまして今回の『銀八先生コーナー』を終了」

アルフ
「次回はリィンフォースがアシスタントするよ。楽しくなると良いねぇ」

銀八
「同感……というわけで次回もお楽しみ」

第百六訓：ツッコミは綺麗に解説すれば良いもんじゃない（後書き）

次回で明らかになるスバキの正体。

はたして彼女は何者なのか？

そんな彼女に桂達はある決意をする。

黒神

「出来るだけ最新を早くしたいと思います。その前にそろそろ外伝を……」

フェイト・なのは・はやて

『『しなくていい！！』』

ドカァー！！

黒神

「あんぎゃあああああああああああああああああああ！！！！」

などと3人に『アルティメット・ブレイカー』を放たれて吹き飛ばされる黒神であった。

ヴィヴィオ

「次回、「一人でいるよりみんなと一緒にいるほうが楽しい」テイクオフだよ」

第百七訓：一人でいるよりみんなと一緒にいるほうが楽しい（前書き）

黒神
「うーむ、もうすぐ銀魂のアニメ再放送が始まるなァ」

銀時
「早く始まんねぇかなぁ？そして俺の出番も」

黒神
「ああ、今回は桂が主役ですので銀さんの出番はそんなにありません」

銀時
「ふざけんなぁ！！！！（怒）」

ヴィヴィオ
「どぉどぉ……『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百七訓：一人でいるよりみんなと一緒にいるほうが楽しい

「よっしゃ、完成や！！」

なにかを完成して喜びだすはやて。
しかも今だにバリアジャケットの衣装を身につけてたままの状態を忘れるほどに、何かに夢中になっていた。

「はやてちゃん、何しているんですか？」
「ふふふ……リィンの新しい武器を作っていたところ何や」
「私のですか！？」

まさかはやて自身が自分の為に新しい武器を作ってくれたなんて、思いもよらなかったリィン。
最近の彼女は変だが、仲間思いな彼女だからこそリィン専用武器を作れたのだ。

「これが、リィンの新たな力やァァァァ！！！」

とはやてが自信たっぷりとリィンにその武器を見せる。
それは武器と言うより衣装であり、何やら妖精をイメージした翡翠色のシンプルな衣装で、羽が４羽付いている。

「……なんですか、それ？」

リィンは期待が一気に消えたような脱力感を感じ、その衣装は一体何なのかをはやてに聞き出す。

「何って、リィンのサイズに合わせて作ったうちの傑作、妖精の衣

や！！これを着れば、妖精のような魅力が発揮して相手を惑わせやすくするんや！！これでリィンも妖精な美少女、リィンカーベルや！！！！！」

ガコォーン！！！！！！！

「はやてちゃん、いくらキャラ崩壊だからってやりすぎはいけませんよ♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！

「ちょ……調子にのりすぎました……（涙）」

どこからか出したのか知らない巨大なハンマーを持ちながらリィンはニコリと笑って言い出すが……その笑顔の裏にはとてつもない怒気が放っている。

一方のはやてはすんごく痛がって、頭に晴れている大きなたんこぶを支えながら、涙を流してリィンに謝罪する。

＊

そこは洞窟の入り口前。

スバキはしゃがんで目の前に咲いている野薔薇を眺めている。

その表情は、なにやら落ち着かされていて優しい表情をしている。

「……」

ただ無我夢中に野薔薇を眺めているスバキ。
しかもただ野薔薇を見ている訳ではない。

スバキにとって、気が高くて美しく存在する薔薇として見ているのだ。
人の手によって咲かれた花よりも、自然的に野に咲かれた花こそが真の美しさを放っている。

「ほぉ、そこに野薔薇が咲いていたとは」
『意外だね』

とスバキの後ろから桂とエリザベスが興味深そうに言い出す。
スバキは特に驚かずにゆっくりと桂のほうに振り向く。

「うん……野薔薇って滅多に咲かないからね。ここは時々野薔薇を咲く事があるんだ…しかもそこらの薔薇とは比べ物にならないほどに綺麗で……」
「なるほど、確かに人の手よりも自然に咲いた薔薇のほうが美しさを保てる事か」
『自然の魅力は美しいからね』
「そうなんだ……私、野薔薇を眺めるのが好きなんだよ……人の手によって小細工に調和されたような薔薇よりも、野に咲かれても美しさを表す薔薇のほうに魅力を感じたんだ。野薔薇を見ていると、私も野薔薇のように1人でも立派に生きてみたいと思うよ……」

野薔薇の美しさを現すように、スバキも気が高く生き抜きたいのである。
そんな彼女の言葉を聞き、桂はスバキに前から気になっていた事を話しかける。

「スバキ殿、お主はどうしてこの場所で1人で暮らしている？……とは言え無理に話す必要は無いぞ。他人のプライベートをむやみに奥深く関わるつもりは無いからな」
「……うんうん、ヅラ達なら信頼できそうだから話しておくよ」
「ヅラじゃない桂だ」
スバキは桂とエリザベスにどうして1人でいるのかを話す。
共に『キザラキ』と戦う事になる仲間として……。

「あそこに、とてつもなくにぎやかに光り輝いている町があるでしょ？」
スバキは右腕を伸ばすように指を指すと、確かにゴージャスとも思える光り輝く町が見える。
まるでサイバー土地と思えるような機械で作られた町に見える。

「私、小さい頃の記憶があんまり無いんだ……物心が付いた時にはあの町にいて、ただの民間人として普通に暮らしていたんだよ。あの時は本当に楽しかったぐらいに」
過去の事を思い出して喜びを感じるスバキ。
しかし、同時に悲しい悲劇も思いだす。

「だけど10年前……村の人達から化け物呼ばわりされて、村の村長から街から出て行けって言われたんだ。私がジェノバキメラと言う人造生命体であるから」
「ジェノバキメラ？」
「……『キザラキ』が生み出した魔法宝玉アテリマを心臓として、特殊な技術で生み出された戦闘用人造生命体。闘心本能だけでどんな生き物でも全力で殺害する戦闘機人の一種さ」

「戦闘機人だと？」
『それってスバルとナンバーズ達の』
桂とエリザベスは驚きを隠せなかった。
戦闘機人はスカリエッティが管理局の裏側の野望を阻止する為に全て回収したナンバーズ達、そしてスバルとギンガが別の組織によって生み出された『タイプゼロ』。
『ジェノバキメラ』と言うまだ知らない戦闘機人が自分達の目の前に存在した事に驚きを隠せなかった。

「しかも、本来ジェノバキメラは殺戮する為に活動して、食料を生き物を刈ってその肉を食い殺す……いわばゾンビみたいな存在なんだ」
『なんておっかない！！』
「エリーの気持ちもわからない事は無いよ。なんたってジェノバキメラは理性を持たない戦闘機人の中でもかなり危険な存在なんだ……しかも」
「ちょっとまて！それが本当なら、何故スバキ殿は普通に理性をたもてる！？」

もしスバキの言っている事が本当であれば、スバキは今のように理性を保てながら真剣に話す事はできない。
桂達を肉として襲い掛かってきているはずだ。

「それは……私にも分からないよ…でもその証拠に」

スバキは後ろを向いて、自分の首の裏側を桂達に見せる。
なんと、その首には翡翠色の宝玉らしきものが埋め込まれている。

「これは……もしやアテリマ？」

「うん、首の裏側にアテリマが埋め込まれているのが、私がジェノバキメラである証。もしかしたら……いずれジェノバキメラの本能が目覚め、私は人を……」

ジェノバキメラと同じ人食い化け物となってしまうと言う恐ろしい事を思い出すだけで怯えだすスバキ。
その様な化け物になりたくない。そんな気持ちを抱いているからだ。

「だから私は『キザラキ』に襲われている身になっているんだ。今存在しなくなりかけている数少ないジェノバキメラとして」

そう、ジェノバキメラは他の戦闘機人と違ってかなり少なくなっている。
その為『キザラキ』はもちろん、他の組織から見ても『ジェノバキメラ』は貴重な存在である。
なにせそこらの戦闘機人達よりも戦闘力は長けている為、喉が出るほど欲しくなる。

「だから私はこの場所にいるんだ……。ここは人気もあんまり無くて、何より私の存在も知られていない……それに」

スバキは微笑んで野薔薇のほうを見つめる。

「ここなら野薔薇を毎日眺め放題だしね。だから私は1人でも生きていける……」

笑顔で笑い出してスバキは言い出す。
野に美しく咲かれた薔薇を見ているだけで1人でも生きていける勇気が沸いてくる。
スバキは野薔薇に助けられながらも生きていく決意を持っている。

しかし桂とエリザベスは見極めていた。

スバキのその笑顔には、悲しみと孤独の寂しさが見えている。

桂が何か言い出そうとする中……

「そんなんで良えんか？」

と、桂達の後ろからはやての声が聞こえた。

そしてはやての隣にリィンも真剣な表情でスバキを見ていた。

「はやて！」

『リィン？』

桂とエリザベスも2人がいつの間にかいた事に驚きだす。

しかもその真剣な表情は、間違いなくさっきの話を聞いていた。

「悪いけど、話は聞かせてもろうた。スバキが1人でこの場所にいる理由もな」

はやてにとってもスバキが1人でしかいられない理由も分からない訳でもない。

自分がそんな化け物的な存在だったら他人がいれば、いずれか襲ってしまう恐れもある。

「せやけど、スバキは寂しくないんか？人と楽しく話す事も出来ず、一緒にいる事も出来ず、ただ1人で孤独に生きていく事でそれで良えの？」

「そうですよ！1人でいる事よりも、仲間と一緒にいるほうが楽しいです」

はやてとリィンは、一緒にいるほうが楽しいとスバキに言い出す。
さっきみたいに麻雀をやったり、はやての馬鹿げた話にも聞けたのも、1人じゃなくみんなで一緒にいたからこそ出来る事だ。

「……わかっているよ……そんな事……。だけど私は戦闘機人なんだよ!!しかも危険なジェノバキメラの1人、そんな私がどうやって人と一緒にいられるの!!」

スバキの眼から涙があふれ出る。
彼女だって1人でいるのが寂しい。
誰かと一緒にいたい。仲間が欲しい。
だけど無理だ。なぜなら自分は化け物だから。
そんな彼女を見て、桂は声をかける。

「俺達の仲間には、スバキ殿と同じ戦闘機人がいる」
「え!?」

桂の言葉にスバキは泣き止んで、桂に注目する。

「その者たちは貴殿と同じ組織の野望だけで生み出された人工生命体だが、それぞれ戦闘機人以外の者達の仲間と会話し合い、共に活動する事で人間として存在し、行き続けている。中には我々人間と深い絆で結ばれた者も、人間と対抗に渡り合う者もいる」

桂はナンバーズの事を話している。
ディエチが山崎と恋仲を出来たり、チンクが九兵衛とぶつかり合って対抗しあう事も出来る。

それは彼女達が戦闘機人や人間など関係なく、仲間と一緒にいる事で人間と同じ立場でいられるからだ。

「そしてその中には1人、『タイプゼロ』型の戦闘機人の見に関わらずに本物の侍の魂を持った少女もいる」

「侍の魂？」

そして桂は、スバキにスバルの事を話し出す。

「その者は4年前、大火災で坂田銀時に助けられ憧れを抱き、その者のような真の侍になる事を決意した」

「坂田銀時って、10年前に地球と言う異世界で起こった『ジュエルシード事件』や『闇の書・ゾーマ事件』をはじめ、そしてミッドチルダでも数多くの事件を解決した伝説の英雄！！」

銀時の存在は、このゴスモスでも一部は伝わっている。

スバキもまた銀時の伝説を耳に入っている。

「そして彼女は魔法に頼らず剣を極め、魔導士にも屈しない侍の魂を持った魔剣士と成長した。侍の魂は人間しか持ちいれぬ存在。だがその少女は戦闘機人と言う人工生命体でありながら、侍の魂を自らの手で手にした。この意味が分かるか？」

「……その人は、自分が戦闘機人である事を悔やまず、恐れず、人として生きていたから」

「そうだ。そして彼女も今、多くの仲間と共に生きて今でも己自身を鍛え続けている」

時々、スバルに稽古を頼まれている桂。

稽古を申し込まれ、受ける度にスバルは確実に少しずつ強くなっている。

それはまさに、スバルが戦闘機人としてではなく侍と言う強き心を持った人間として生きている証である。

「せやからスバキも、自分を恐れずに仲間を作ったほうが良えんやで。私もかつては1人やったけど、『闇の書・ゾーマ事件』で色んな事が起こったんや。けど同時に大切な仲間が出来て、私を孤独から救ってくれたんや」

桂やエリザベスを始め、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィンなどヴォルケンリッターやフェイトやなのは、そして銀時達など異世界の人物など、さまざまな出会いがあったこそはやても仲間が多く出来た。
はやては今でも、桂達には強い感謝を擁いている。
桂には恋路を抱き、エリザベスも仲の良い親友関係であり、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リィンフォース、リィンの6人は家族のような絆が芽生えている。
そしてフェイト達にも断ち切れない絆の糸がある。

「かつて、志村新八と言う人物から聞かされたんや。江戸と言う国が天人と言う宇宙人に支配されて侍の強さが弱体化し、バイトで仲間も出来ずにこき使われてた所……銀ちゃんに助けられて、それから多くの仲間が出来たんやって」

それは以前、10年前に銀時達の世界、歌舞伎町の万事屋で新八がはやて達に自分の過去を話した事である。
自分と同じく、新八も銀時を初めとしたさまざまな人物と出会い、自分は孤独から救われてそして立派に成長し続けている。

「せやから、スバキも良かったらうちらと一緒に来る?」
「え?」

はやては手を伸ばしてスバキを仲間として誘う。

「もちろん私達は管理局と言う大きな組織の者やけど、スバキを悪用されへんように上には黙っておくし。私達は人としてスバキの仲間になりたいんや」

はやてや新八のように、スバキも桂達に出会った事が運命である。はやてにとっても、ただ彼女を孤独から救い仲間になりたいと言う一心で誘っている。

「仲間に入るかは貴殿自身で判断すると良い。だがここに1人で孤独に生きるよりは、楽しく生きていけるだろう」

『うんうん』

「それに、スバキさんの好きな野薔薇が咲く場所もミッドチルダにはありますよ」

桂、エリザベス、リィンもスバキを孤独から救いたい。

スバキはこんな自分を化け物としてじゃなく、自分自身に誘ってくれる桂達に何か暖かい感情が伝わってくる。

するとスバキの眼から涙があふれ出てきた。

こんな自分にもここまで優しくされた者が目の前にいた事に喜びを感じ取っている。

「……良いの……こんな……私みたいな化け物の一種でも……戦闘機人でも……仲間が出来ても……」

「化け物や戦闘機人など関係あるまい。武士に二言はあるまい」

たとえスバキが化け物であろうと、桂には見抜いていた。

化け物と言う皮を被ったスバキの中にある、人間としての純粋な心

を。

「せやから、共にいような♪」

「……うん！！」

はやての手を両手で包むスバキ。

自分も欲しかった仲間の存在。その温もり。

今、スバキを縛っていた孤独と言う呪縛が解き放たれた。

何はともあれ一件落着と、この時誰もが思った。

「おうおう、ずいぶんと泣かせるじゃねぇか」

銀八

「教えて」

生徒全員
『『銀八先生!!』』

リィンフォース
「ようやく出番が来ました!!今回は私リィンフォースがアシスタントします」

銀八
「何か苦労しているようだねぇ。最近出番が無いからか？」

リィンフォース
「そうなんですよ!!!（涙）」

銀八に言われて涙を流すリィンフォース。
そこは流石に動揺する銀八。

銀八
「じゃあさっそく質問すんぞ。まずはこの人、ペンネーム『白米』さん『さて、質問と行きますか。

1.
刃「銀魂組とリリカル組の女共に質問だ。『ばれんたいんでぃ』にチョコを渡す相手（本命・義理を含めて）は決まっているか？」

武「あー、泥沼になる予感が……」

2.
武「キャロに質問、というか言い忘れた事があった。
お前の場合、エリオに危害を加えても『お仕置き道場』行きだ

から気をつけろよ。後、黒神に銀八、止めんなよ」

刃「大丈夫なのか？」

まあ、対策はしてますし大丈夫です、問題ない。

3.

なのは、フェイト、はやての三人に質問。

貴女達の称号みたいなものを考えてみました。感想・ツッコミをお待ちしております。

なのは：純白の魔砲堕天使
　管理局のアンゴルモア（恐怖の大王）
　八つ当たり大魔王

フェイト：元祖・銀時バカ（猿飛は『銀時のストーカー』です）
　デス・ザ・ライトニング（稲妻の死神）
　金色の露出狂（ソニックフォーム的な意味で）

はやて：ヅラ二号
　妖怪・腹黒セクハラ狸
　コマンダー・オブ・カオス（混沌の隊長。ヅラが『Ｍｒ混沌』なので）』……ずばり答えます。銀時から聞けば、銀時は銀時好きな女共からはもちろん、神楽や月詠にもチョコを貰ったようですこん畜生」

リィンフォース
「当然私だって銀時に渡しました♪後、桂さんは主とヴィータだけじゃなく桂さんファンクラブにも渡され、エリザベスは子供に人気

なのか少女達に渡されました」

銀八
「ヅラとペットに負けたのか俺ぇ！？」

これは流石にショックを受ける銀八。

リィンフォース
「他にも、エリオは神楽と月詠からいつも世話になっているお礼としてもらったり、キャロからは巨大なチョコケーキを渡されたようです。後、近藤勲はルーテシアからお世話になっているお礼として義理チョコを、さらには山崎はディエチから愛のチョコを貰ったそうです」

銀八
「ゴリラまでぇ！！畜生、だれかチョコプリーズ！！！（涙）」

ゴリラのおっさんや元地味な男にまで負けた銀八は屈辱的なショックを受けている。
いつか自分もチョコが欲しいと願うのであった。

キャロ
「いやあああああああああああ！！！絶対に嫌だァァァァ！！！！！」

銀八
（あ、普段は○ェイソン化で暴走しているキャロが珍しくわめき叫んでいる）

いつものキャロとは全然違う反応に銀八は意外そうに思う。

そして3の答えはと言うと……

フェイト・なのは
『『そんなのいやだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』』

はやて
「ヴラ二号はまぁ良えとして……他はどう言う意味やぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

フェイトとなのはは涙を流して叫びだし、はやては怒りを表して叫ぶ。

リィンフォース
「……というわけで『白米』さん、廊下に立ってください」

銀八
「へぇい次行くぞぉ。ペンネーム『月光閃火』さん『

1．アリマに質問だ…正直に言ってくれ。ズバリ！好きな異性のタイプはどんな感じなんだ？

輝刃「直球ストレートで来たか…まぁいいだろう。次は俺だ。」

2．シグナムに質問だ。色んな小説で『バトルマニアだ』・『巨乳ボインちゃんだ』と言われているが、俺は別にそれでも魅力的だと思っている。で、だ…実際問題美の追求はやってたりしてるのか？やってるなら過去にどんなのを経験しているんだ？』っと言うわけで、アリマに答えさせてもらいます」

とモニターからアリマが移された。

アリマ
《な……何をいきなり……！！まぁ、仲間を大切にする心優しき気持ちや、本当の強さと言うのが何なのかを知っている理想の男だよ／／／》

顔を真っ赤にして答えるアリマ。
そしてすぐにモニターが切れる。

リィンフォース
「以外にあっさりと答えてくれましたね……シグナム答えをお願いします」

シグナム
「いや、別にそんなのやっていないが？」

あっさりと答えるシグナム。
それでも美しくいられる事が何よりすごい事だ。

銀時
「と言う訳で『月光閃火』さん、アリマの出番はまだ先ですが楽しみに待ってください」

リィンフォース
「次行きます。ペンネーム『レイガン』さんからの質問『1．黒神さんに質問です。
以前メッセージに投稿した松岡充のソロシングル「W」の歌詞を見

てどう思いましたが？
2．新八のことですが、もう新八の地味キャラやツッコミのポジションはもうないと思いますか？
3．ギンガさんに質問です。
今のポジションにに納得していますか？』」

黒神
「想像したのより良い曲でした。まだ僕の知らない歌の魅力があると知りました」

正直に答える黒神。

銀八
「確かに、彼の地味的な存在とツッコミポジションは今出ているメンバーの中に大抵とられています。ですが黒神はそんな新八を大きく成長させる設定を考えています」

ギンガ
「次は私だけど……マジむかつく！！坂田銀時はフェイトさんと一緒に旅行に行っているなんて、羨ましい！！」

リィンフォース
「関係ないことを喋っているよこの人！！全然答えになっていないよ！！」

何やかんやでギンガは納得しているようである。

銀八
「と言う訳で『レイガン』さん、『青い果実』や『英雄』も試してみてください。んで次ィ、ペンネーム『闇色の月』さん『質問です

?神楽の傘の電磁砲はいつ使用しますか?
?いつになったら屁怒路が出ますか?早く出して下さい
?誰か屁怒路とタイマンして勝てる自信がある人いますか?』……
ずばり答えます。それはいつ使うか予定考え中です」

リィンフォース
「うわぁ、手抜き……?はァ、てか何か怖い質問だけどぉ!!!」

銀八
「作者によれば、このシリアスを終えた後だと思います」

リィンフォース
「ノォォォォォォォォォォォォォォォ!!!!!(涙)」

あの悪夢が来る事を考えて、怯えだすリィンフォース。

銀八
「ちなみに、今のところ屁怒路とタイマンできる者はいません。と言う訳で『闇色の月』さん、嫌味な荒らしに負けないようにこれからも小説作りを楽しくがんばってください」

リィンフォース
「次はペンネーム『夜叉龍』さんの質問です。『質問します。

銀魂の世界は今どこらへんまで進んでいますか。あともし歌舞伎町四天王編まで進んでいるのなら銀時サイドの戦力増強として平子、次郎長、を出してはどうですか。あと新八も早めにだしては。かなり強くなって、芯もしっかりしてると思いますので。』」

銀八

「ずばり答えます。おそらく作者の考えによれば、少なくとも『二年後編』までは進んでいると思います。後、馬鹿作者が何故新八を出さないかと言うと、あえてわざと後半に出させて『リリカル銀魂シリーズ』の新八に忘れかかっている侍魂を思い出させる為です」

リィンフォース
「なるほど、あえて新八の成長を大きくさせるための」

銀八
「そのとおり！！と言う訳で『夜叉龍』さん、馬鹿作者は新八中心のシリアスを作る設計も立てていました」

リィンフォース
「次はペンネーム『ゲンゴ』さんの質問です『桂さんに質問です。桂さんは、恋愛を知っているんですか
次に、桂さんは人妻好きを外すと今度は何好きになるんですか？』
それでは、桂お願い」

桂
「うむ、俺も恋愛と言うのはすでに他人と結ばれた者に出会えても己の思いを貫いて相手に思いを伝えるも……」

銀八・リィンフォース
『『てそれ人妻に対する恋愛じゃねぇかァァァァァァァ！！！！（怒）』』

ドカァ！！×２

桂
「ぬぉおお！？」

２人のツッコミパンチによって吹き飛ばされる桂。
やっぱり人妻以外の恋愛は全然分かっていない。

銀八
「ちなみにこの馬鹿が人妻好きをはずせば唯の動物好きの馬鹿しか残りません……と言うわけで『ゲンゴ』さん、わざわざこの馬鹿に対する質問をありがとうございました」

リィンフォース
「次が最後です。ペンネーム『ＨＡＲＵ』さん『作者の黒神さんに質問しますが、最終回どうなりますか？
後、最終章はどんな感じのストーリーになりますか？
教えてください。』」

黒神
「そうですね……最終回はネタばれになるから分かりませんが、少なくとも最終章シリアスは『劇場版銀魂　新訳紅桜編』風になります」

銀八
「と言う訳で『ＨＡＲＵ』さん、楽しみに待ってください。以上持ちまして今回の質問コーナー終了」

リィンフォース
「次回はザフィーラがアシスタントします。次回も何にも無かったかのように平和でいて欲しい」

銀八
「と言う訳で次回もお楽しみ～」

第百七訓：一人でいるよりみんなと一緒にいるほうが楽しい（後書き）

黒神
「次回は、機動六課でまさかのアクシデントが！！」

フェイト
「ええ！？一体何があるっていうの！？」

黒神
「待て、フェイトは特に知らないほうが身のためだ！！」

フェイト
「ええ！？どうしてぇ！！」

黒神
「次回、「いくら戦隊者だからって正義のヒーローとは限らない」テイクオフ！！」

フェイト
「無視しないでぇぇ～～～～！！！！（青ざめ）」

第百八訓：いくら戦隊者だからって正義のヒーローとは限らない（前書き）

黒神
「今回はシリアスからまたギャグモードになります」

リィン
「何でですかぁ！！！」

黒神
「いやぁ、その方が面白みがあるんじゃないかなぁっと思って」

リィン
「それ大概にしないとやりすぎだといわれるですゥゥゥ！！」

黒神
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百八訓：いくら戦隊者だからって正義のヒーローとは限らない

「な……なんだこりゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」

一方、機動六課ではとんでもない事件が起こっていた。
それは、フェイトの部屋が荒らされている事である。
物がめちゃくちゃにされていて、服も散らばっている。
これにはアルフも叫びだすしかなかった。

「な……何がどうなっているんだい！？と……とにかくみんなに知らせ――」

ドカァ！

「なぎゃあ！！」

ドサァ！

突如後ろから首を手刀で叩かれて気絶するアルフ。
そしてアルフの背後に立っていた人物の正体こそ、フェイトに禁断の恋をしている百合魔導士こと、ギンガ・ナカジマであった。

「ふぅ、危なかったァ～…さてと、証拠消滅っと」

ギンガは素早くフェイトの部屋を綺麗に掃除して何事も無かったのように見えるほど綺麗にした。
気絶したアルフはそのままフェイトの部屋の前においとく。
そして眼が覚ましたアルフはこの事をまったくもって忘れていた。

一方のギンガは急いで自分の部屋に鍵を閉めて部屋に篭る。
彼女の手にしていたのは、なんとフェイトの下着であった。

「ついにこの時がきた……我が美しき女神、フェイトさんのティーバック黒パンツ！！」

憧れで恋路を擁く美しきヒロイン（ギンガにとって）、フェイトの下着を愛しく握る。
そのままゆっくりとフェイトの下着を顔に近づけて匂いを嗅ぐ。

「むふぅ、この甘ったらしい香りに女のフォルモンたっぷりの魅力の雰囲気……これがいつもフェイト様がはかれている下着の匂い／／／」

メッチャ幸せそうに匂いを嗅ぐギンガ。
百合的な生活の為、男よりも女に親しみやすくて男には少し冷たい態度をとっている。

「むふふ……この下着をはいたら私はフェイトさんとお揃い。……そう考えるだけで……そう考えるだけでェ……キャーーーーーーーー、フェイトしゃまぁ～～～～！！／／／」

＊

ゾクゥ！！

一方、ゴスモスの惑星にいるフェイトはとてつもない悪寒を感じて震えだす。
これには銀時も心配して言い出す

「何だ？どうしたフェイト…」
「今……悪寒を感じたような……」

青ざめてそう答えるしかないフェイト。
気のせいだと思い込むが、まさか機動六課でギンガに自分の下着を盗まれた何て想像できなかっただろう。

＊

そして桂達がいる所では、突如ブーツで身を隠した男達がいた。
その男達はただならぬ気迫を放っている。

（どうやら只者じゃない事だけは確かだな……）
「誰だ、貴様等は？」

桂は警戒しながらも謎の人物たちに声をかける。

「貴様等か、先日に我等『キザラキ』に歯向かった者は？」
「『キザラキ』？まさかあんた等も！！」

まさかの『キザラキ』の刺客にはやては驚きだす。

治療は完了して傷も癒されたが、まさかすぐに敵が来たことは予想外の事である。
一体、彼等は何者なのかは知らないが、油断できない事は確かな事である。

「人間の分際で『キザラキ』に歯向かってもなお生き残った事は褒めてやろう」
「だが所詮は下級部隊が相手であった事だ」
「我々は、以前貴様等が遭遇したジェノバ・ナイトとは比べ物にならぬぞ」

ブーツを被ったジェノバ・ナイト達は自分達は唯のジェノバ・ナイトとは違うと言い出す。
その言葉に桂達は警戒して剣を構える。

「我等、『キザラキ』最強の守護者」

リーダーらしきジェノバ・ナイトが言い出すと、全員ブーツを脱ぎ捨てる。

「烈風の翼　エアロガ！！」
「閃光の稲妻　サンダガ！！」
「氷の息吹　フリザガ！！」
「赤き炎　ファイガ！！」

「そして新メンバー、白き波動　ホーリー！！」

5人はそれぞれ独自のポーズをとる。
ホーリーはレイピアのような細い剣を鞘から抜き出す。

「5人そろって……」

『『魔鎧戦隊　キザラキ魔法四天王レンジャー！！！！』』

ドカァーン！！

なにやら戦隊的者が登場して、5人の背後から右から黄色、青、白、赤、緑、の順に煙があふれ出た。

「ちょっとぉぉぉぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！何ですかこれェェェェ！！何かの正義の味方的なもんが出てきたのですけどォォォォォ！！！！」

今までの中で驚くべき登場の仕方をした敵部隊に驚きのあまり叫びだすリィン。

「てか何か『レンジャー』つけるの無理あらへん！？『キザラキ魔法四天王』だけで良えんちゃうか！！」

『しかも5人いるのに『四天王』は無いんじゃない？』

はやてもエリザベスも、敵にしてはメッチャ悪意が感じ取れない5人に呆れていた。

こんな連中がスバキが言っていた『キザラキ』でも上位に立つ『ジェノバ・ナイト』なのかと疑うぐらいに。

「新メンバー？また新しく敵が増えたの！？」

「そうだ！！貴様が我等『キザラキ』の情報を持っている事はすでに知っているのだよ、ジェノバ・キメラ！！」

予想外に敵が増えた事に驚くスバキにホーリーが自慢げに言い出す。

「だから我等『キザラキ』は貴様の知らない新たな戦力を用意した……それが我が『キザラキ魔法四天王』の新メンバー、ホーリーだ！！」

サンダガも自慢げに叫びだす。

そしてファイガが大刀を握って走り出す。

「そして今日が貴様等の最後だぁ！！」

一歩踏み出して大きく大刀を上段振りをする。

それに気づいた桂は、素早く刀を抜いてファイガの一撃を防ぐ。

ガキィン！！

「ぬぅぅぅぅ！！」

『『桂さん（ヅラァ）！！』』

「ほぉ、我が剣を防ぐとは……確かにそこらの人間とは大違いなのは確かだ……。しかし！！」

ファイガは剣をなぎ払って桂をバックさせる。

そして大刀の刀身から炎が包まれる。

「何！？」

「私の『フレア・ソード』で焼き斬ってくれるゥゥゥゥ！！」

ファイガはさらに勢いまして剣を振るい続ける。

その剣は炎が包まれていて、かするだけでもまずい。
桂は攻撃も出来ずにその剣を受け流す事しかできなかった。

（ぐぅ……このままでは！！最終兵器として新開発した『火爆鐘器（かばやき）』も残すところは後2本…しかもここで使えばはやて達を巻き込んでしまう……ここは剣で斬るのみか！！！）

必殺の『んまい棒』を出す余裕も無い桂は剣で斬るしかないようだと確信する。

「援護は私に任せておき！！」

はやては急いで必殺魔法を炸裂させる。
白い魔方陣がはやての真上から浮かび上がって徐々に大きくなる。

「うぉ！何かすごいの来た！！」

とてつもない魔力にスバキも驚きだす。
SSランク級の魔力は伊達じゃない事である。

「天空の雷よ、鎚となって相手を裁け！！」

すると魔方陣から強大な鎚を持った巨人の腕が現れた。
これははやてが新たに生み出した新魔法で、全てがはやての魔力で精製されている。

「打ち砕け、ミョルニル！！」

巨大な魔力の鎚は稲妻に包まれ、その鎚がホーリーとサンダガを襲う。

ホーリーとサンダガは素早く避けるが、鎚は地面をたたきつけると、天から白い雷が振ってきて叩いた地に落雷して地面を抉り破壊する。
そして落雷した後には、大きな穴が出来ていた。

その威力は間違いなくＡＡＡランクは達成する。

「何て魔法だ！！これはこの世界の魔法じゃない……もしやミッドチルダの！！」
「それにあの女……マジでとてつもない魔力を感じる…！あの女には要注意だ！！」

サンダガとホーリーは、はやてのとてつもない魔力に警戒を感じ取っている。
いくら人間だからってＳＳランクの魔力を持っている相手を舐めてしまうのは自殺行為だからだ。

「さて、貴女の相手は私がさせてあげましょう」

エアロガはリィンの目の前にたって剣を構える。

しかも何故か、リィンははやてとユニゾンできていない。
実ははやての体力はまだ回復し切れていないからだ。
如何に戦える状況でも、リィンとのユニゾンに耐え切れる身になっていないのだ。

（くぅ……はやてちゃんの回復はまだ完了していないから、例えユニゾン成功したとしてもすぐにはやてちゃんに負担がぁ！！）
「貴女の存在は知っている。ミッドチルダでも数少ないユニゾンデバイス、リィンフォースツヴァイ……他の者達とユニゾンされては困る為、すぐさま消えてもらいます。この私の究極奥義で」

「究極奥義！？」

いきなりそんな技を炸裂させるのかと言うばかりにリィンは驚く。
するとエアロガは後ろを向いてその尻をリィンに向ける。

「え？」

これは一体何の構えなのかと唖然とするリィン。
すると……

ぶぅ～～～～！！

突如、屁をこいだエアロガ。
だがその屁は煙に包まれた風の波動のように、少し緑色っぽい煙砲がリィンを包み込む。
そして包まれたリィンの反応は……

「ぎょぁあああああああああああああああああああ！！！！！臭アアアアアアアアアアアアアいですゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！！」

とてつもない悪臭に耐え切れず倒れて鼻を抑えて転びだす。

「はっはっはっは！！どうだ、これが我が究極奥義『絶望の煙風』なり！！その臭さは人間が放つ屁の数百倍はあり、今までの人間はもちろん生物は耐え切れなかったのだ！！」

ある意味、相手を苦しめるほどの絶望的な技である。
しかし、ただ異常なまでに屁を放っただけでとても技とはは思えない。
エアロガは剣を抜いて構える。

「さぁ、あの世で永遠の悪臭に包まれるが……」

ドォォォ

「ぬぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」（ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

ドカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ！！！！！！

「もう二度と人に向けてオナラを放ちませェェェェェェェェん！！！！」

悪鬼と化したリィンに、エアロガの断末魔の叫びが響き渡る。
そしてエアロガはミンチとも言える存在に近いグロティクスになるような姿になるまでボコボコにされたのは言うまでも無い。

エアロガ　撃破

一方のエリザベスはフリザガと猛烈なバトルをしていた。
目にも止まらない超高速連続パンチを炸裂するエリザベスに盾でそれを防ぐフリザガ。
さらにフリザガは剣でエリザベスの超高速連続パンチに匹敵する速さを誇る、連続突きを炸裂させる。
しかしエリザベスはそれを交わし続ける。
交わしながら連続パンチを炸裂し続けるエリザベス。
盾で防ぎながら剣での連続突きを炸裂させるフリザガ。

『●ラゴンボール』のような戦い方に近い激しい攻防が続く。

ドカァーン！

「ぐぁあああああ！！」

実力的にはエリザベスが一歩や二歩上を行き、エリザベスの拳がフリザガに直撃する。

フリサガはエリザベスの強さに警戒してバックする。

（こいつ……外見はふざけているのに何て強さだ……ならば我が魔法で……）

「少しは出来るようだ……ならば我雫邪冷呪文（だじゃれじゅもん）を受けるが良い！！」

『雫邪冷呪文（だじゃれじゅもん）！？』

フリザガにそんな力があった事に驚くエリザベス。

そしてフリザガは大きく構えて、

「布団が『吹（ふっと）っ飛ん』だー！！！」

ズコォ！！

と突如、駄洒落を言い出す。

これにはエリザベスも思わずにずっこける。

確かに駄洒落は聞くと寒いと言う言い伝えがあるが……だからって本当に寒くなる事は……

ヒュウウウウウウウウ！！！

『寒ウウウウウウウウウウウウ！！！！』

と、そう書かれたプラカードを出して思いっきり寒がるエリザベス。
その寒さは、まるで南極にいるような寒さである。
そう、これがフリザガの雫邪冷呪文（だじゃれじゅもん）の効果である。

「どうだ！！我が雫邪冷呪文（だじゃれじゅもん）の力は！！！！私は相手を見ながら駄洒落を言い出すと、その者はあまりの寒さに凍えだし、最終的に死ぬのだぁぁ！！」
『なんじゃそりゃ！！』

駄洒落で凍え死ぬなんて馬鹿げている。
しかしこの寒さなら有り得ない事も無い。
このままではエリザベスはフリザガのあまりにも凍え死んでしまう。
フリザガの地獄のような寒いほどメッチャつまんない駄洒落が続く。

「行くぞォォォ！！『アルミ缶』の上に『ある蜜柑』！！」
「『ニューヨーク』で『入浴』！！」
「この『本棚』に入れるものはやっぱり『本だな』」

ヒュウウウウウウウウウウウウ！！

『うぎゃあああああああああああ！！！止めてェェェェェェェェ！！！！』

「まだまだァ！！始めてきた『ハワイ』に着いた時『は、「ワーイ』、ワーイ」と叫んでしまうほど嬉しかった！！」

「『スキー』をやり終えた後のウイ『スキー』は絶品だ！！」

「兄妹で合『コン』をやるなんて、２人はシス『コン』とブラ『コン』だ！！」

『『悪魔』が出現と思ったら『あ、熊』だ！！」

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

『Ｎｏｏｏ

「いい加減そのクソつまんない駄洒落を止めろやァァァァァァァァァ！！」

ドカァーン！！

「うぎゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

ドォーン！！

最後の駄洒落を言い出すとたんに、ブチキレたエリザベスがおっさん的な声を思わず出して口から人間の腕が出る。
そしてその腕による剛拳がフリザガを吹き飛ばして、フリザガは星となって消えてしまった。

『たく、後半の駄洒落は無理がありすぎですよ』

そしてエリザベスはいつもどおりに、プラカードで感想を書く。

フリザガ　撃破

かくして、リィンとエリザベスの大活躍によってエアロガとフリザガの２人を撃破した。
残す敵はサンダガ、ファイガ、ホーリーの３人だけである。
果たして，３人の実力は如何に……！！

キザラキ四天王レンジャーの対決は次回に続くのであった！！

銀八先生
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

銀八
「……へぇい、今回のアシスタントであるザフィーラです」

ザフィーラ
「うむ、久しぶりのアシスタントだな……ちゃんと質問に答えるとしよう」

久しぶりの出番な為、張り切るザフィーラ。

銀八
「では行くぜ、ザっさん！！」

ザフィーラ
「ザっさんって誰だァ！？私はザフィーラだぁ！！」

銀八
「それでは行きます」

ザフィーラ

「しかも無視かよおい！！」

銀八
「ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『？シャマル鍋は再び現れることはあるんですか？

？ナンバーズの出番がないような気がします・・・生きていますか？（Ｂｙウッソ）

？銀さんのアナログスティックは機能果たしてるのですか？（Ｂｙこなた）』……？と？はすぐに答えます。ナンバーズは死んでいません。ちゃんと生きています。そして銀さんのアナログスティックは無事ですので、女がむやみに男のあそこに関わる質問をしないでください」

ザフィーラ
「マトモな質問じゃねぇな。特に？は！！」

？に関しては女がむやみにしてはいけない質問である。

銀八
「そして？は黒神に答えさせてもらいます」

黒神
「そうですねぇ……おそらく出す予定です」

その一言で、銀八とザフィーラは青ざめて大量の汗を流す。

銀八
「……と……というわけで『ウッソ・エヴィン』さん……こなたに

女らしい質問をさせるように注意をお願いします……」

よっぽどあの『シャマル鍋』にトラウマがあるのか、銀八はもちろんザフィーラまでもが震えている。

銀八は気を取り直して質問を続ける。

銀八

「つ……次行きます……ペンネーム『真王』さん『『もし銀時に女幽霊が取り付いていたら銀時ｌｏｖｅｓの皆さんはどうしますか？』」

ネプテューヌ「黒神さんに質問だよ。『よくあとがきにキャラ達からひどい目にあってるよね？その時の心境はどうなの？』それから黒神さんにレインボースターをそっちに渡すよ」

真王「そしてそっちのオリキャラ達に質問だ。『もし戦ってみたいと言うやつがいたらどんな奴ですか？アニメ・ゲーム・漫画、何でもいいです』」『……とりあえず全員に答えさせてもらいます」

銀時ｌｏｖｅｓ

『『悪霊退散（だよ）（なの）（です）！！！！』』

その女幽霊の恐ろしさを知らない銀時ｌｏｖｅｓはそう答えるのであった。

黒神

「そうすね……もう慣れています。あ……レインボースターありがとうございます」

銀八

「そしてオリキャラの代表として答えさせてもらうのは、スバルの因縁の相手ことアリマ・ヴァンミリオとスバキに答えさせてもらいます」

と、２つのモニターからそれぞれアリマとスバキが映ってきた。

アリマ

《そうね……やっぱり『銀魂』の伝説の英雄、坂田銀時に、スバルの剣術に最も近い『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の石田三成と戦ってみたいね》

スバキ

《私は『ブレイブルー』のツバキ・ヤヨイかな？以上だよ》

プツゥーン！！

２人がそう答えると、モニターは切れる。

ザフィーラ

「スバキはともかく、アリマも敵にしては素直に答えてくれる」

銀八

「敵にするにはもったいねぇなぁおい、と言う訳で『真王』さん……廊下に立っていなさい」

ザフィーラ

「次はペンネーム『ジョニー佐々木』さんの質問だ。『ティアナに質問です。銀さんと兄弟になって、良いことはなにかあった？あとリクエストなんですが、今度できたらホワイトデーとかのイベントの話を書いて下さい図々しくてすみません。』……ティアナ，

答えてやってくれ」

ティアナ
「ええ！？／／／わ……私とお兄ちゃんのの関係って……そのう…
…あの時から良くなったかなぁ……／／／」

ティアナは、事故とはいえ義兄妹同士の接吻を思い出して顔を真っ赤にする。

ティアナ
「て、何言わせるのよ！！！／／／」

ドカァ！

銀八
「何故俺ェ！？」

何故かティアナに殴られてしまう銀八であった。

ザフィーラ
「……と言う訳だ『ジョニー佐々木』さん、リクエストはちゃんと答えるように作者に言っておく。次はペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『

毛利
「前回の竜の右目の質問の答えを聞いて思ったのだが…貴様らは『シャマル鍋』なる食物を「悲劇と絶望」の味と申したが、悲劇と絶望の味なら我特製の『日輪粥』も負けてはいないぞ。
実際これは、長曾我部を一度再起不能に追いやった事がある程の味だ。これをそちらに送ってやるから『シャマル鍋』と食べ比べ、ど

ちらが悲劇と絶望の味か身をもってして証明せよ。
もし前回、竜の右目が送ったザビッシュのように実際に食さなかった場合は我が日輪に代わって貴様らを制裁しに向かうぞ」

家康「…実はこっちの作品では魔王モードのなのは殿よりさらに恐ろしくなった最恐の魔王形態『第六天魔王　ノブナノハ』が降臨したんだが、そっちの凶王スバルとどっちが怖いのだろうか？」『」

と、ザフィーラの前に『日輪粥』が現れた。
その粥からはとてつもない不吉を感じ取れるオーラがあふれ出ている。
銀八でさえ、その『日輪粥』には触れたくない。

銀八
「何だろう……平凡に見えっけどとてつもない禍々しい感じは？ああ、悪ぃけど…」

ゴク！　ゴク！

断ろうとした銀時だが、突如ザフィーラが水のように『日輪粥』を飲んだ。

銀八
「て何飲んでんだァァァァァ！！！！」

銀八は青ざめて叫びだすが、ザフィーラは飲み終えて器を机に置く。

ザフィーラ

「……何か中途半端な不味さだな?これなら『シャマル鍋』に比べりゃまだ食えるほうだ……」

正確にザフィーラはそう答える。

銀八
「オィィィィィィィィィ!!!!いくら何でもおかしくねぇ!?いくら『シャマル鍋』の方がまずいからって何『日輪粥』を平気で飲めんだよぉぉぉぉぉ!!!!」

毛利
「そんな馬鹿なァ!!我が『日輪粥』が平然に平らげただとぉ!!」

と、突如2人の後ろから『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の毛利元就が現れた。

銀八
「て、張本人来ちゃったんだけどォ!!」

毛利
「我が『日輪粥』を食べても平然にいられられるはずなど……」

そう言いながら、毛利はどこからか出てきた『シャマル鍋』を取り出して口にする。
すると……

毛利
「がぶぇらがらじゃーーー

この世とは思えないう不味さに、毛利とは思えない叫びが響き渡って毛利は気絶して倒れる。
しかも口から大量の泡を放ちながら。

銀八
「何でじゃーーーーーーーーーー！！！！何自殺行為をしてんだこのオクラ将軍！！？」

ザフィーラ
「……まさか、あのシャマルの手料理を自ら口にする恐れ知らずがいたとは……」

銀八は毛利の自殺行為に呆れ、ザフィーラは自ら『シャマル鍋』を口にした毛利に驚きだす。
そして毛利の体が光りだして、姿が変わりだす。

銀八
「こ……これはぁァァァ！！！！！」

このパターンは、間違いなく『シャマル鍋』を食した者が変身してしまう格好である。
伊達政宗と真田幸村の時は、美少女化。石田三成の時は『ふ○りは○リキュア』のメッ○ル化。
今度は毛利が変身してしまう事になる。
一体どんな姿なのかと2人は考える中、光がおさまった。
そしてそこから現れたのは、オクラの兜をかぶっている丸い眼鏡をかけた緑の雛であった。

銀八・ザフィーラ

『『誰だこいつゥウウウウウウウ！！！！』』

？？？

「我が名はオクラサンデー！！日輪の御使いだピー！！」

そう、これは毛利元就が変身した姿であり……同時に姿だけじゃなく性格もガラリと変わった。

オクラサンデー

「ピーによくもクソ不味いものを食べさせたピネ！！この屈辱は倍にして返してやるだピー！！！！！」

オクラサンデーは小さな輪刀を片手で持って歩いているように見えるが走って銀八達を襲う。

しかしその速さは雛なのか……異常なまでに遅い。

銀八

「ていい加減、本編に帰れヤァァァァァァァァァ！！！！！」

ドカァ！！！

オクラサンデー

「ピーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

キラァーン！！

オクラサンデーこと毛利元就は、光と化して吹き飛ばされた。

ザフィーラ
「……あの男の姿を見たら、『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の連中はどんな反応をするんだ？」

銀八
「知らねぇな……んでもう１つあったけど……通か『ノブナノハ』って何ィィィィ！？何魔王をミックスしてんだァァァァ！！！！」

ザフィーラ
「何で魔王ネタがこうも一方的に大きくなるんだぁ！！！！」

銀八
「……凶王と化したスバルは魔王化なのはより上回り、『ノブナノハ』も魔王化なのはより上を行くので……区別できないほど怖いです！！！！（涙）」

銀八は涙を流しながら答える。

銀八
「…と言うわけで『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、今までで一番長い質問の答えでした」

ザフィータ
「次を行こう……ペンネーム『鳴神ソラ』さんの質問だ。『フォックス「銀時にスバルにノーヴェに以前した質問したけどはやてに切り裂かれた奴をするぞ『自分達でバリアジャケット作るならどんなのが良い？…ちなみに本人達に答えさせなかったら破った奴にそっ

ちが作った××料理以上の内のピーチ姫の××料理をプレゼントするからそこんとこよろしく♪』」

スネーク「メンバーに質問『そっちで作られたマスモデウス活け漬けの焼酎を平気で飲んだ内のリーダーもといマリオを見てどう思う？」

ソニック「Ｈｅｙ，俺からも黒神に質問で『桂もパワーアップするのか？」』」

リィン
「あの３人以外ならリィンが答えるです……流石にあれは嫌です！！リィンカーベルってふざけすぎるのも程があります！！！！」

ザフィーラ
「まぁ……主も流石にやりすぎだとは思うが」

リィンの気持ちを理解するザフィーラ。

リィン
「ちなみに、私が作るなら見た目もかわいくて戦闘向きにする物を作るですぅ！！」

銀八
「はい、答えをありがとうございました……。つうかマリオ、お前マジでスゲェなおい！！……後、ヅラもパワーアップさせる予定があると馬鹿作者は言っていました。と言う訳で『鳴神ソラ』さん、廊下に立っていなさい」

ザフィーラ
「次はペンネーム『月光閃火』さん『1．リィンフォース（ツヴァイじゃない方）に質問だ。次の衣装の内、新たにバリアジャケットとして作るならどれがいい？
？『ギルティギアシリーズ』の『ミリア』の1Pコスチューム
？『ブレイブルーシリーズ』の『ライチ』のコスチューム
？『機動戦士ガンダム００シリーズ』の『ネーナ・トリニティ』のコスチューム

2．作者に質問…というかリクエストだ。もし外伝を書く事があったら、その時は新八をメインにした外伝話を書いてくれないか？どうせだから何か某・世紀末救世主伝説っぽい新八で頼む。（一礼）
』」

リィン
「……どっちもコスプレだから嫌ァァァァ……と言いたいけど……質問コーナー限定なら……？のライチで……／／／」

銀八
「あ、以外にツンデレだ」

リィン
「誰がツンデレですかァ！！」

ツンデレ呼ばわりされて憤怒するリイン。

黒神
「後、リクエストの件は……少し先になりますが考えておきます…
…と言うより外伝よりも先にシリアスメインに書くことがあります」

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい。んで、次が最後だな」

ザフィーラ
「ペンネーム『烈火竜』さん『銀さんに質問
『ロリ方』から『二股のロリ方』に格上げされた土方を見てどう思いますか？』……」

銀八
「……」

2人は『真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ　鬼の子守歌』のマヨラーを見て……哀れ眼で見る。

銀八
「最低だ」

ザフィーラ
「男の恥だ……」

正直に感想を言い出す。

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』の完結をおめでとうございます。以上持ちまして今回の質問コーナーは終了」

ザフィーラ

「今回は色々あったが、まぁ楽しめたから良いとしよう」

銀八

「次回のアシスタントは猿飛あやめです。ではお楽しみィ」

第百八訓：いくら戦隊者だからって正義のヒーローとは限らない（後書き）

黒神
「何か、今回駄洒落を書いたんですけど……書いた僕自身も寒くなったような……（ガクガク）」

銀時
「自業自得だ」

スバル
「あ……あははは（苦笑）……次回「人を化け物呼ばわりする人間の醜い心こそが一番の化け物」テイクオフだよ」

第百九訓：人を化け物呼ばわりする人間の醜い心こそが一番の化け物（前書き）

黒神
「どんな姿でも、人間として生きて行けばちゃんとした人間だ！」

銀時
「うぉ、どうしたんだ一体！？」

黒神
「……いえ、ただ言って見たかっただけさ♪」

銀時
「言いたかっただけかよ！！」

神楽
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるネ」

第百九訓：人を化け物呼ばわりする人間の醜い心こそが一番の化け物

リィンとエリザベスがフリザガとエアロガを倒し、残る『キザラキ四天王レンジャー』も後3人。

スバキはサンダガと戦っていて、サンダガは体中に稲妻を鎧を身に付けるように纏っている。
そしてとてつもない速さでスバキを襲って肉弾戦で戦っている。

「ふはははははは！！！！これが我が『サンダーオーラ』の力よ！！体全体に稲妻の魔力を纏わせ、雷速の速さで相手を襲いだすのだ！！」

そう言いながらもサンダガの電光石火によるパンチ、キックの繰り返し攻撃。
スバキもサンダガのスピードに合わせているのか、全ての攻撃を捌き防いでいる。
だが、全て捌ききれてもスバキは辛そうである。

「くぅ……やはり魔法無しじゃきついか……じゃあ私も行くよ！！」

スバキは後ろにジャンプをしてサンダガと距離を離れてバックすると、左手から魔力を収束させる。
そしてその魔力は黄金の稲妻となってスバキの左手から発生する。
その左手を、自分の胸元に置くとスバキの体全体が稲妻を発生させる。

「雷光の強化ー ライトニング・チャージ！！」

黄金の稲妻を体全体に纏ったスバキ。
デバイス無しで魔法を使える事はかなり珍しい事であり、サンダガも始めてみるかのように驚いている。

「ハァァァァ！！」

スバキが一歩踏み出した瞬間、あまりの速さに彼女も電光石火の如くの速さでサンダガに突進し、兜にパンチする。
その一撃にクリティカルヒットしたサンダガは、驚きだして思わず吹き飛ばされるがすぐに体制を保った。

「ぬぅ……我が『サンダーオーラー』を凌ぐ雷速を可能にする魔法で強化するとは……これがジェノバ・キメラのみが使用できる戦闘機人魔法…術式魔法」

スバキの魔法名を口に出すサンダガ。

これがスバキのジェノバ・キメラ型戦闘機人だけが用いる特殊魔法……『術式魔法』。

何故『ジェノバ・キメラ』が他の戦闘機人より数が少ないかには『術式魔法』にある。
それは『ジェノバ・キメラ』には心臓の代わりに魔法宝玉『アテリマ』が生命活動をしている。
しかし同時に、その『アテリマ』から『ジェノバ・キメラ』の魔力を流し込んでいる事で、『ジェノバ・キメラ』は通常の魔導士のように魔法が使える。
だが『ジェノバ・キメラ』が使える魔法は『術式魔法』と呼ばれるデバイス無しでも自身の力で魔法を放てる理想的な力。
しかし、デバイス無しでの魔法を放つ事は『ジェノバ・キメラ』に

とって危険な事である。

何故なら、『ジェノバ・キメラ』の大抵は理性が保てなく無闇に魔法を使う事が多くて、体の中にある『アテリマ』の魔力制御が出来ないのだ。

その為、『アテリマ』の魔力制御が出来なくなれば……『アテリマ』の魔力は尽きてしまう。

『アテリマ』の魔力は放っておけば自然に元通りになる。

しかし『ジェノバ・キメラ』の中にある『アテリマ』の魔力が一度でも尽きてしまう場合、たとえ『アテリマ』の魔力が戻っても『ジェノバ・キメラ』は死んでしまうのである。

これはいわゆる心臓発作と一緒だが、『ジェノバ・キメラ』の心臓発作による死は１００パーセントである。

だがスバキの様に理性を保てて『アテリマ』の魔力を制御出来れば、中の『アテリマ』の魔力が心臓以外でも他の内部に染み込む。

だがそれは『ジェノバ・キメラ』の中で１００人に１体だけの存在だけであり、大抵は『アテリマ』の魔力尽きによる死亡によって消えてしまった。

その為、『ジェノバ・キメラ』はもうスバキしか存在しないと思ってもおかしくない絶滅しかけの戦闘機人の一種である。

「悪いけど、私こう見えても数種類の魔法を可能にしているよ」

スバキは自分が会得している魔法の数をサンダガに言いだす。

伊達に１人で身を潜めていただけじゃない。

いずれ自分自身も戦うときが来ると思って、『ジェノバ・キメラ』しか使用できない『術式魔法』を無数も会得したのだ。

「ならばその魔法を使わせる前に、貴様を倒すのみ！！」
「術式魔法を止められると思ったら大違いだよ！！」

２人は電光石火と化して驚異的な速さで激しくぶつけ合う。
その速さはスバルの刹那の瞬間移動術並の速さを誇る。

ぶつかってぶつかり、そして更にぶつかり合う。
金色の閃光のぶつかり合いは、まさに稲妻の大嵐である。

「はぁぁぁ！！」

スバキはバックして両手を左右に広げるように伸ばすと、左手から風の魔力を制圧した魔風球を、右手には氷の魔力を制圧した魔氷球が現れる。

「烈風の波動ー サイクロン・バースト！！氷結の弾丸ー アイス・キャノン！！」

２つの魔球を合成させる様に、１つの大きな魔球となってサンダガに向けられる。

「術式合成魔法！！氷結大嵐ー アイス・テンペスト！！」

そして両手から放たれた、氷の弾丸が大量に包まれた大烈風砲。
氷の弾丸付きの嵐がサンダガの身を吹き飛ばす。

「ぐぉおおおおおおおおお！！」

とてつもない圧倒的風圧に体の身動きを封じられ、更にはその大嵐

自体にも寒風であり、体が嫌と言うほど冷やされる。
しかも氷の弾丸が容赦なくサンダガを襲いだして、確実にダメージを与える。
サンダガの体から放たれている雷が徐々に弱まっていき、効力を失いかけている。

「ぬぅぅぅぅ！！なめるなぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

サンダガは叫びだして、強引に体を動かして両手で氷風の波動をまっ二つするように裂けて打ち消す。
しかし相当なダメージを受けている事は変わらず、体がフラついている。
それこそが、大きな隙を生み出すのであった。

「いまだ、はやて！！」
「ぬぅ！？」

スバキはそう叫びだすと、スバキとサンダガの上からはやてが空に浮かんで魔法の呪文を唱えている。
『シュベルトクロイツ』にはとてつもない魔力を込められている。

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック・エミッション！！！！」

漆黒の魔力球を発生させてサンダガの真上から落とされる。
そしてその魔力球は大爆発した。

「ぐぉおおお

げる。
サンダガの鎧を粉々にすることはできなかったが、体は倒れてしまって戦闘不能になってしまった。

「よっしゃ、すごいよはやて！！」

サンダガを倒した事によって大喜びするスバキ。
止めを刺したのははやてだが、彼女もスバキの強さには驚いていた。

デバイス無しでの魔法使用の上、スバキが使用していた魔法は今まで見たことが無いタイプばかりである。
特に最後に使用した魔法なんか、間違いなくＡＡＡランク以上はあった。
これがスバキの『ジェノバ・キメラ』としての強さなのかとはやては思った。

「それにしてもすごいわ……スバキってあんなすごい魔法を使えるなんてなぁ」
「へへへ、すごいでしょ。これが私の術式魔法。貴女達魔導士みたいにデバイス無しでも魔法が使えるんだよ、このアテリマの魔力によって」

スバキは自分の首の後ろについている『アテリマ』をはやてに見せる。
それを見たはやては、異世界にはまだまだ自分の知らない魔法が存在する事を改めて知った。

サンダガ　撃破

一方、桂は今だにファイガとの死闘を続いている。
ファイガの豪快なる剣裁きは本物であり、剣士として一流である。
素早い剣振りに、岩をも間っ二つに斬り、そして無駄に無い動き。

何より厄介なのがファイガが愛用している魔剣『フレア・ソード』が刀身に炎が包まれていて相手を焼き斬る能力を持っている。
炎タイプなのか、攻撃力だけなら『キザラキ四天王レンジャー』の中でも最強と言っても過言ではない。

しかし、それだけで桂に勝てるほど甘くは無かった。

ガキィン!!　ガキィン!!　ガキィン!!

先ほどから、桂は刀でファイガの剛剣を裁き防いでいる。
強度だけならファイガの剣のほうが上で、伏せ続いたら桂の剣は間違いなく折れてしまう。
しかし桂はただ防いでいるのではなく、受け流しているのだ。

（馬鹿な、この私の剣を全て受け流しているだと!?こいつの剣の腕が私のはるか上に行くというのか!?）

ファイガは自分の剣が全て受け流されていると知って信じられない程驚く。

こんな芸当を人間ごときが出来るのかと、『ジェノバ・ナイト』であるファイガは思う。
確かに『ジェノバ・ナイト』からみれば人間はもろい生命体としか見えない。
だがファイガが今戦っている相手は、唯の人間じゃない。

「はぁぁぁぁぁ！！！！」

ズパァーン！

「グォオ！！」

侍と言う、屈強なる魂を持つ人間だ。
わずかな隙にと、桂が素早く剣を振ってファイガの右脇を切る。
その右脇から切れ目が出て、ファイガは思わず桂から離れるように下がる。

（剣の腕は確かに高い……だが銀時とスバル殿に比べたらまだ詰めが甘い！！）

攘夷戦争の時に共に戦った友、銀時。
時に剣の稽古に付き合わされる魔剣士、スバル。
2人の剣の腕を考えてみれば、ファイガの剣はまだまだその強さが浅いと見える。

「ならば……これでも食らうが良い！！」

「！？」

すると。ファイガは『フレア・ソード』の先を桂に向ける。
そしてその先から、火炎砲がレーザー光線のような速さで桂を襲う。
これなら確実に仕留められるとファイガは思ったが……

「甘い！！」

桂は大きく飛び出して、ファイガの火炎砲を交わしだす。

「何ィ！？」

まさか交わされるとは思えなかったファイガ。
桂は落下速度を利用して、剣を上段に構えて…

「天誅！！」

ズバァーーン！！

「グォオオオ！！」

着地と同時に剣を素早く振って、ファイガの胴体を斬る。
この一撃によってファイガは倒れてしまい、戦闘不能になった。

ファイガ　撃破

これで残る敵は後1人、ホーリーだけである。
ホーリーの実力はファイガ、サンダガ、フリザガ、エアロガの4人に引けをとらない。

しかし状況は圧倒的にこっちが不利であり、勝ち目が無くなったと思ったホーリーは……

「ひ……ひぃぃぃぃぃ！！！！化け物ォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！」

そう言って、レイピアをポイ捨てして逃げ出す。

自分達『キザラキ四天王レンジャー』をも上回る戦闘力を持った5人を相手に1人だけで倒すなんて不可能だからだ。

そんなホーリーを逃がさないと桂達は追いかけようとするが……

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ！！！！

『『へ！？』』

突如、空から何かが降ってきているのが分かる。

そして……

「……ァァァァアアア

く人であった。
しかも落下した人物は桂達が良く知っている人物である。

「痛たた……たくぅ、あの爺共もちゃんと瞬間移動させろよなぁ！！」

赤い帽子に小柄な体。
ハンマーを持っている少女、ヴィータがこの場に現れたのである。

『『ヴィータ（殿）（ちゃん）！？』』
「誰ェ！？」

まさか、ヴィータがこの『ゴスモス』に来ていた事に驚きだす桂、エリザベス、はやて、リィン。

「はやて、ヅラァ、エリザベス、リィン！！お前等無事だったのかァ！！！！」
「ヅラじゃない桂だ！！」

ヴィータも桂達と遭遇した事により大喜びする。

「て、ヴィータがどうしてここにいるんや！？」
「どうしてって……て、はやて！！！！何機動六課の仕事をサボって次元旅行に行ってんだぁ！？心配したから源外の爺とスカリエッティに頼んで瞬間移動装置ではやて達のいる場所にワープして来たんだよ！！しかも、いる場所がまさかの次元惑星のゴスモスだったなんて！！」

そう、ヴィータははやてがいない事に心配していたのだ。
そのせいで仕事が溜まってくる一方でまずいと判断し、源外とスカ

リエッティの2人に頼んだのだ。
そこで源外が3日前に完成したと言う瞬間移動装置でヴィータを、はやてのいるゴスモスに瞬間移動に成功したのだ。

「さてと、はやて達も見つかった事だしさっさと機動六課に帰……あ！」

ふと、ヴィータはとてつもない重要なミスに気づいた。
それはこの後どうやって帰るかを考えなかった。

＊

一方、スカリエッティのアジトでもパニックが起こった。
それはヴィータを『ゴスモス』へ転送させたのは良いが、その瞬間移動装置がすぐに壊れてしまったのだ。

「いかん、また壊れてしまったわい！！」

源外はまさか一回の使用で瞬間移動装置が壊れてしまった事に焦りだす。
もしもの為に、歌舞伎町に帰る為にと開発したのだが……まだ何度も使える様にと耐えきれる程に作られていなかった。

「…博士、完全に壊れていますね」
「うーむ、まだ部品が足りなかったのか知らないが……これは完全にだめだ。一からやり直しだね」

ウーノは壊れた瞬間移動を見てもう修復不可能だと判断し、スカリ

エッティは残念そうに言い出す。

「かぁー！！せっかく完成したから野郎共が喜ぶと思ったのに！！」

「いやちょっと待て？」

悔しそうに言い出す源外に、鉄子は何かを思い出した。

「銀さん達のところに行ったのは良いんだけど、どうやって帰ってこれるんだ？」

「……あ」

完全に計算外であった。

＊

「しまったぁ！！！！帰り方を計算していなかったァ！！てか私、やってしまったじゃねぇか！！」

哀れ、ヴィータ。

無事桂達と合流したのは良いが、帰る計算も出来ていなかったようだ。

「まぁ何はともあれ、こんな状態でヴィータが来てくれて本当に心強い」

『仲間、1人でも多いほうが有利』

「はぁ？どう言う事だよそれ？」

ヴィータは、どうして今の状態で自分が来てくれた事が良かったのかを疑問を抱く。

その頃、ホーリーはゆっくりと起き上がって桂達を睨みつけると、

頭の兜が割れて真っ二つとなり地に落ちていく。
桂達はその音に反応してホーリーに注目すると、衝撃的に驚きだす。
なんと、ホーリーの割れた兜から人間の顔が出てきたのだ。

「しまっ！！」
「に……人間やってェ！？」

自分の素顔を見せられた事でホーリーは焦りだし、はやては叫びだす。
スバキはその男の顔を見て誰よりも驚きだしていた。

「そ…そんな……まさか、村長！？」

スバキがそう言い出すと、桂達（ヴィータを除く）は驚きだす。
ホーリーの正体は、以前スバキが住んでいた村の村長であった。
その村長がまさか、『キザラキ四天王レンジャー』のメンバーであった事に信じられない程に衝撃的になっていた。

「ぐぅ……貴様だけはこの姿を見せたくは無かった……」
「村長、これは一体どう言うことですか！？何で村長がジェノバ・ナイトに！？」
「……何でじゃと……」

村長はスバキを憎むように睨みつけ、言い出す。

「全ては、コクメン様の野望の為にやっている事じゃ！！」
「！？」
「どう言うことですか！？」

コクメンの為にやっていると村長が言い出し、スバキは驚いてリィ

ンはどうしてなのかを言い出す。

「貴様がこの村に来る前から、ワシはキザラキの一員となっていたんじゃ。村長としてあの町を管理していた。全てはあの町をブラック・アテリマの発動の儀式をする為に!!」

「儀式!?どう言うことなの!?」

「ふん、貴様のような化け物に知る資格は無いわい!!何せワシは貴様が村に来た瞬間、すでに貴様がジェノバ・キメラである事を知っておったから!!」

「!?」

その言葉を聞いて浮かび上がる驚愕の表情。

自分が『ジェノバ・キメラ』である事を村長は最初から知っていたからだ。

ならどうして自分を村から追い出したのか、そこが分からなかった。

最初から分かっていたなら、村に入れなきゃ良かったはず。

「その様子ならば最初から村に入れなければ良かったはずだと思っているようじゃな?…ならば教えてやろう!!それは、貴様のジェノバ・キメラとしてのデータを調べる為に村に住まわせたのだ!!」

「え!?」

「ジェノバ・キメラの戦闘データは貴重なものでな!!以前貴様の血液を調べさせて貰う時にその血で、キザラキが新しいジェノバ・キメラを作る研究が実行された!!……じゃが、そのせいで…ワシもこのような化け物(ジェノバ・ナイト)担ってしまったワイ!!」

怒りを爆発させるような叫び。

元人間であった自分も、研究材料扱いとされて人口型生命体のジェノバ・ナイトにされてしまった。

「貴様の存在のせいで、ワシは人間からあんな肉体も無い化け物にされてしまった！！貴様さえいなければ、ワシはこんな化け物にならずにすんだんじゃ！！」

その怒りは、スバキに『ジェノバ・キメラ』と言う化け物としてぶつけている。

スバキがいなければ自分がこんな化け物にならずにすんでいた。

しかしそれはあまりにも勝手な考えである。

「貴様のような化け物には分かるまい！！化け物と言う存在にされた人の気持ちなど……」

「天誅ゥゥゥゥ！！！！」

ドカァ！！

「はぶぁ！！」

と、村長が言い出す途中で桂が無言で殴りだす。

とても力を込めて殴ったのか、かなり深く入って村長は口から血を吐いて歯が6本も折れてしまった。

「……幕府並に腐った男だ」

『マジ、頭きた！！』

「他人を化け物呼ばわりするその醜い心を持っとるアンタがよっほど化け物や！！」

「そうです！！スバキさんがどれだけ孤独に生きてきたかを分からずに勝手に言うなですぅ！！」

「何か知らねぇけど……私もこのクソ爺を殴らなきゃ気がすまねぇ！！」

桂、エリザベス、はやて、リィン、ヴィータの5人は、スバキを化け物呼ばわりするホーリーにとてつもない怒りを表した。
仲間を悪く言われる事が何より腹が立ったようだ。
さっきまで追い込まれたような表情をしたスバキだが、自分の為に怒ってくれている5人を見てその重い空気が無くなった。

「……スバキ殿、誰が貴殿をなんと言おうとも……俺達が必ず護ってみせる。だから、そう自分を追い込むような顔をなさるな」

仲間として護ると言い出す桂。
その言葉を聞いてスバキの瞳から涙があふれ出てきた。
一粒一粒と、まるで粒雨のように。

「……ありがとう……ヅラァ、みんなァ」
「ヅラじゃない桂だ」

銀八先生
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

猿飛
「みんな久しぶり、今回は銀さんの奥さんこと猿飛あやめがアシス

タントをす……」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァンンン！！！！

突如降ってきた数多くの魔力砲にヒットした猿飛。
間違いなく銀時が大好きな女性達からの天罰である。

銀八
「……とりあえず、まず嘘でも怒らせないような言い方したほうが良いんじゃねぇ？」

猿飛
「は……はい……」

銀八
「んじゃさっそくハプニング発生しましたが気にせずに行こう。まずはペンネーム『ルシフェル』さんからの質問『はやてに質問ブレイブルーのまだコスプレを作ってないキャラでリリなの、銀魂キャラにコスプレさせたらどのキャラがどのコスプレが似合いますか？
現在使用できるキャラ１８名…ラグナとか現在コスプレを作ったキャラ除いて１５名それぞれ教えて欲しいです
ちょっと手間をかけますがよろしくお願いします
個人的にはライチがシグナム、トリニティがヴィヴィオあたりで（爆）』……ずばり答えさせてもらいます」

はやて
「そうやなぁ、うちはルシフェルさんのとは違ってシグナムはハク

メンかなぁ？何か剣を使って雰囲気が似ておるし」

はやてから見ればそう思えるであろう。

はやて
「ちなみにライチは眼鏡で巨乳と言う共通でさっちゃんに、胸が大きいから無理あるんやけどツインヘアーで雷使いと言う共通でフェイトちゃんがレイチェルな」

銀八
「おおい、何かさりげなくとんでもない事言っているよこのセクハラ狸」

はやて
「後、エリオにはカルルでツッキーはニルヴァーナやな。西友が同じである為ヴァイスがハザマや。んでザフィーラが狼ネタでヴァルケンハイン＝R＝ヘルシングで、刃物系を投げる共通でチンクがニューや」

銀八
「ふぅ～ん」

はやて
「後、いちいち言うのめんどいから以下の説明で発表するな」

銀八
「適当だなおい！！」

はやての適当さに銀八は思わずツッコム。

ジン・キサラギ↓沖田

タオカカ↓ヴィヴィオ

アイアン＝テイガー↓ヘドロ

アラクネ↓ガリュウ

ツバキ＝ヤヨイ↓ギンガ

プラチナ＝ザ＝トリニティ↓ヴィータ

μ－Ｎｏ．１２ｌ↓なのは

銀八
「……とりあえず理由を聞くけど……なんでこうなった？」

はやて
「ジンと沖田君って同じ感じがしてヴィヴィオはあの衣装の方がかわいく見えるんや！！そんでヘドロは最強の巨人のイメージとしてああなって、ガリュウは蟲ネタで決めたんや」

銀八
「最後のほう、何か無理あるんじゃねぇ！！？」

はやて
「そんでツバキはノエルの姉としてのイメージが高いからギンガにしてハンマー使いでヴィータはプラチナや！！μ－Ｎｏ．１２ｌを

なのはに決めたんやけど……理由は聞かないで♪」

原因はなのはの魔王としてのイメージが高いから、破壊の化身であるμ－Ｎｏ．１２－のコスプレをさせたんだと銀八は嫌と確信する。

銀八
「……と言うわけで『ルシフェル』さん、以上が馬鹿作者の考えでした」

猿飛
「あいたた……じゃあ次行くわよ。ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『質問です。　銀さん達や、機動六課のメンバーが、他作品キャラと戦った場合、どっちが勝つのかを対戦カードを作りました。　１．銀さんは『刀語』の鑢七花　２．なのはは『とある魔術の禁書目録』の上条当麻　３．フェイトは『ＯＥＮ　ＰＩＥＣＥ』のモンキー・Ｄ・ルフィ　４．シグナムは『幽☆遊☆白書』の飛影　以上です。』……どんな相手だって銀さんが負けるわけ無いわ！！！！

銀八
「でも『刀語』の鑢七花も強いから勝敗はわかんねぇ。２と３は明らかに天敵な相手の為、間違いなく負けます。４の場合は相手が圧倒的な強さを持っているのでシグナムが負ける可能性が高いと見ました。と言う訳で『亀鳥虎龍』さん、廊下に立っていなさい」

猿飛
「次よ、ペンネーム『黒龍』さん『ソラ「まぁ質問いくか。全員に質問だ。ジュエルシードでマッチョになりなのはと筋肉を愛する男であるケン八に新八が激変したことについてどう思う？」

黒龍「二つ目。ほんとにそっちのなのははヒロインですか?まったくそんな風に見えないんですけど（黒笑）」

銀時「お～い、砲撃がくるぞ」

黒龍「いいのいいの。三つ目。フェイトの物体Xとシャマルの闇鍋はどっちのほうが危険ですか?俺的には同等と考えているんですが。それと、ついでにフェイトの物体Xを贈っておきます。銀八先生とはやてと桂となのははしっかりと食べてください（黒笑）」

ソラ「フェイトにしてみれば、今まで最高のできのハンバーグだそうだ」

銀時「フォークが瞬時に溶ける程の威力だぞ」』……1は、完全に変態だわ」

猿飛は軽蔑した眼で新八を見る。
まさに彼を、変態ロリコンオタク駄目眼鏡として。

銀八
「お妙が見たら、絶対失望して泣くな……2は……本人には内緒で！！」

猿飛
「了解！！」

銀八は青ざめてそう言い出し、猿飛は整列した。
相当なのはの怒りが怖いからだ。

猿飛

「そして3は……2つとも食えるかぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

猿飛は勢いで物体Xとシャマル鍋を黒神に向けて投げた。

黒神
「レインボースター！！」

以前、真王さんから渡されたアイテムで盾代わりに使うが……物体Xとシャマル鍋が『レインボースター』を溶かして黒神にぶっ掛けられる。

黒神
「あがふぁらぼふぁ！！」

あまりの不味さに黒神は気絶して倒れる。

銀八
「……というわけで『黒龍』さん廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『私にいい考えがある』さん『リィンフォースとフェイトに質問です。
?もしも銀さんと自分たちのゆっくりが現れたらどうしますか?
?銀さんはミッドチルダだと英雄ですが、もしかしてグッズとかも売ってあって買ってるんですか?
次にシグナム質問。
いつも髪をポニーテールに結んでいますが、銀さんの前で髪をといたことはありますか?
次にキャロ・・・いえキャロお嬢様に質問です。
チェーンソーとかでやってたらエリオくんに嫌われてしまいますよ?・・・って銀八先生が質問してました！（逃
そして黒神さんに質問です

描いたイラストを挿絵にするというのはだめでしょうか？』」

リィンフォース
「質問に答えます。そんなのゆっくりとデートしたり、色んなお話をしたり、それから××××なんかもしちゃったり、それから……」

べちゃ！！

リィンフォース
「て臭ァァ！！」

ドサァ！！

猿飛に無言で納豆をかけられて、あまりの納豆臭さに倒れるリィン。

猿飛
「調子に乗らないでね？銀さんに手を出すなら容赦しないから」

銀八
「ちなみに？は噂じゃ売っているかもしれません……んでお前らは？」

シグナム
「と……といた事はあるさ！！／／／（とは言え、一緒に風呂を入った時にだとは絶対言えん！！／／／）」

キャロ
「銀八ィィィィィィィィ！！！！！（怒）」

銀八

「ぎゃあああああああああああああああああああああ！！！！」

ジェイソンがチェーンソーを持って銀八に襲い掛かる。
当然、銀八は青ざめて逃げ出す。

猿飛
「作者は気絶中なので答えられないけど、本人はかまわないそうよ。と言う訳で『私にいい考えがある』さん、次からは質問は3つまでよ」

そう言って、猿飛は逃げ出した銀八の変わりに残り3つの質問を答えようとする。

猿飛
「ペンネーム『烈火竜』さん『見本を含めた質問です。
〜山崎とディエチに質問〜
黒夜叉とドゥーエとシルバーの家族を見て、自分達も子供が欲しいなと思いますか？
』」

山崎・ディエチ
『『こ……子供ォォ！！？？／／／』』

衝撃的な質問に叫びだして顔を真っ赤にする2人。
自分達の子供となれば、いったいどんな子が生まれるのか想像してみる。

そして恥ずかしながらも2人は見詰め合う。

山崎
「でぃ……ディエチちゃんとの子供なら、俺……受け入れられるよ…／／／」

ディエチ
「わ……私も、山崎さんとの子供なら…／／／」

と、2人は甘い雰囲気で互いに嬉しそうに見詰め合う。
結婚したら自分達にも子供が恵まれると、まさに恋人同士と思える関係を表していた。

猿飛
「はぁ……私も銀さんと一緒にいつかああなりたいわ……と言う訳で『烈火竜』さん、質問ありがとう……。次はペンネーム『夜叉龍』さんからね『夜叉龍「んじゃ俺が。スカリエッティさんと原外さんに質問。他の銀魂メンバーにデバイスを作る、もしくは装備の強化をする予定はありますか。」

蒼葉「んじゃ次俺。作者さんに質問。星海坊主さんを出す予定ありますか。」』」

源外
「そうじゃなぁ……今のところあいつ等が魔導士としての素質があるかを調べとるから、もし素質あったらそいつ等の専用デバイスをスカの字と共に作るつもりじゃ」

スカリエッティ
「銀時君は間違いなく一流の魔導士としての素質はあったから、そ

の仲間達だってあるかもしれないよ」

2人ははっきりと言い出す。
猿飛も、魔導士としての銀時の姿が見てみたい様子。

猿飛
「作者の話によると、その星海坊主が出てくる可能性は高いわ。と言う訳で『夜叉龍』さん、期待して待っててね。次が最後のようね。ペンネーム『レイガン』さん『銀八先生に質問です。
1．スバル、ティアナ、キャロのキャッチコピーを考えました。

スバル
「蒼き、大食いの侍ガール」

ティアナ
「恋する、ツッコミツンデレガンナー」

キャロ
「恐れる、龍使いの破壊者」
どう思います。

2．黒神さんに質問です。
今まで１００話以上書きましたが、一番書きにくかったエピソードはありますか？

3．銀時達に質問です。
今の状況をどう思いますか？
『……1はね、えーっとう、本編で見る限り全部あっているわ。ちなみに2の答えは、作者から聞けば書きにくいエピソードは何なのかを覚えていないそうよ。つまりほとんど無いって言っても過言じ

ゃないわ」

2つの質問を答える猿飛。
そして3つ目の質問はあの人に答えてもらう事にした。

猿飛
「と言う訳で、3つ目は私の夫の銀さんに答えさせてもら……」

銀時
「俺がいつてめェの夫になったんだぁ!!」

ドカァ!!

猿飛
「あ〜れぇ〜!!!!」

突如現れた銀時に蹴り飛ばされた猿飛。

銀時
「たくぅ……こっちはここ最近マトモに出番がねぇからイラついてんのに、勝手な事を言わないでくれない?……んで3の答えェ?最近出番がない事に腹立っています」

血管を浮かべて答える銀時。
同時に、無駄に出番がある桂に怒りを表す。

猿飛
「あ痛た……と言う訳で『レイガン』さん、廊下に立ってて。以上もって『銀八先生コーナー』は終了。次回は私と銀さんの結婚し……」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！！

猿飛
「きぃやあああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

またもや降ってきた魔力砲に吹き飛ばされる猿飛。
これを見た銀時は青ざめていた。
原因はフェイト達であると。

銀時
「……女って、ほんと怖ェなおい」

ちなみに次回のアシスタントは近藤勲です。

第百九訓：人を化け物呼ばわりする人間の醜い心こそが一番の化け物（後書き）

桂達に強力な助っ人、ヴィータが登場。

今の状況をヴィータに話し、あの人も登場!?

そして『キザラキ』の真の目的が明らかになる!!

その目的とは!!!

ヴィータ

「うっしゃー!!ついに出番来たァ!!」

出番が来たことに大喜びするヴィータ。

それほどまでに嬉しい事である。

源外

「次回「目的は大きければ大きいほど困難である」テイクオフじゃ」

第百十訓：目的は大きければ大きいほど困難である（前書き）

黒神
「いよいよ『狂乱編』も終盤に向かう」

桂
「ホーリーの様な外道な組織、キザラキは必ず天誅を下す！！」

黒神
「でもその前に、知っておくべき真実があります。エリザベス！！」

エリザベス
『『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるよ』

第百十訓：目的は大きければ大きいほど困難である

『キザラキ四天王レンジャー』との対決後、突如やってきたヴィータに今の状況と、どうじて今ここにいるのかの理由を全て話した。
いま『ゴスモス』は『キザラキ』によって破滅の道を進んでいる事と、旅行中にテロ集団に襲撃して辰馬のドジのせいでこの惑星に船が落下してしまった事を。

「じゃあ、お前等こいつらに狙われているって訳かよ!!」
「うむ……我々5人だけでは身が思い相手であるからな……そんな中でお主が来てくれた事に本当に心強いと思っている」
『来てくれてありがとう』

全ての話を聞いたヴィータは驚きだした。
だが同時に自分がそんな状況で助太刀として来てくれた事に感謝している桂とエリザベスの気持ちを聞いて少し照れくさくなった。
ただのクールボケの桂も自分の事をそんなに頼りにしてくれていた事は気づかなかった。

「ヅラァ…そんなに私の事をそう思ってくれていたのか?」
「ヅラじゃない桂だ。それに、ヴィータどのは機動六課でも最大のパワーを持っている上に、魔導士としての強さはある。何より……」
「な……何より?／／／」

桂の真剣な眼にヴィータはドキッとする。
こんなに気になる相手に見られると恥ずかしくてドキドキする。
そして何より乙女心が表していた…

「重要なツッコミ使いの上にツッコミのキレが――」

ブチィ！！

「てツッコミかいィィィィィィ！！！！（怒）」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！

「いぶふぉおおお

かもこの惑星を支えている重要な核（コア）として。なんでそんな物を取り出してこの惑星を壊すような事をするんだ？」

「それは……」

そこまではスバキ自身も分からない。

桂、エリザベス、はやて、リィンもそこを気になっていた。

この『ゴスモス』を破壊してまで『ブラック・アテリマ』を手に入れたい『キザラキ』の最大の目的をも理解しずらい。

《だったら俺が教えてやるよォ》

「！？」

突如、男の声が聞こえて驚きだすはやて達。

桂とエリザベスは特に、この声には聞き覚えがある。

声が聞こえた方向を振り向くと、気絶して倒れているホーリーの兜から光のライトらしきものが放たれている。

そのライトは、空中でモニターを浮かべだしていて、そのモニターに移っていた人物は桂の知っている人物である。

攘夷浪士で最も過激で危険な男、およびミッドチルダの数多の事件の最大の黒幕である男、高杉晋助である。

「……高杉！？」

《くくく……久しぶりだなァ、ヅラァ》

不気味な笑顔で桂に挨拶する高杉。

その声を聞いた桂は警戒的と怒りの表情で睨みつける。

「高杉って、ミッドチルダで数多くの事件を犯した真の黒幕で桂さんと同じ異世界の人物の……あの高杉晋助！？」

「えぇ!?」
「こいつがか!?」

モニターに移っている男が、ミッドチルダでもSSSランクの次元大犯罪者とされている『鬼兵隊』のリーダー、高杉晋助である事にはやて、リィン。ヴィータは驚きだす。
しかもモニターからでも伝わってくる凶気は、危険そのものだとわかる。
エリザベスも警戒して戦いの構えをしている。

「何で貴様がこのモニターに……いや、それ以前にも今度はキザラキと手を組んでいたのか!?」
《ああ、なんか自分の惑星を破壊しようと企んでいる組織がゴスモスと言う星に住んでいると聞いてよぉ……面白そうだからそいつ等に完成した『紅桜』1本を渡してやったさァ》
「完成した紅桜だと!?」

もう『紅桜』が完成したのかっと桂は驚きだす。
それがすでに『キザラキ』の手に渡ってしまえば、『キザラキ四天王レンジャー』など眼じゃない程、凶悪な敵となる。
そして晋介は煙管を加えて、桂達にある事を教える。

《んで、お前等キザラキがどうしてゴスモスを破壊してまでブラック・アテリマとやらを手にいれてェか知りたがってたなァ……》
「何?」
『何と!!』

高杉は『キザラキ』の真の目的は何なのかを桂達に伝えようとする。

《なら教えてやるよぉ…キザラキの真の目的はブラック・アテリマ

を手に入れ、新たな星を作る事さ》
『『!?』』

真相を聞かされた桂達は驚愕した表情をする。
新たな星を作る?
そんな事が可能なのか?

しかしそれを可能にしてしまうのが、『ブラック・アテリマ』らしい。

「新しい、星を作るって、そんな事可能なんか!?」

新しい惑星を作ると言うとてつもない計画の為に、この惑星を破壊しようと大胆な事をする『キザラキ』に驚きだすはやて。
だがどうして『ブラック・アテリマ』で新たな惑星が作り出せるのだろうか?

《ククク…分かりやすく説明するとだなぁ……異次元か宇宙のどこかに放り投げておくことで、ブラック・アテリマから放たれる特殊電波魔法で数多くの星や小さな惑星を吸収し、新しい新惑星を作り出すとんでもない代物だそうだ……。ゴスモスは元々アルハザードの代物で作られたロストロギアの1つでもあった訳だ》
「アルハザード!?」

高杉の口からとんでもない言葉を聞いたスバキは驚きだす。
桂、エリザベス、はやて、ヴィータも同じであった。

《だが欲望に満ちたアルハザードの者が、そのブラック・アテリマを奪って次元空間に逃げ出した。そして…ブラック・アテリマを放り投げ、そのアテリマから放たれる強力な磁力で数多くの屑星や隕

石が吸い寄せられるように集まり続け、やがて合成されてゴスモスと姿を変えたんだとよォ……ククク！》

ゴスモスの誕生の秘密に、アルハザードに関わりがあった事に誰もが驚いた。
しかもゴスモスは『ブラック・アテリマ』の力に魅力されたアルハザーナの者がアルハザーナから奪った結果によって生み出されたなら尚更である。
もしその話が本当であれば、『ブラック・アテリマ』を取り出す事でゴスモスは崩壊する変わりに新たな星が誕生するやも知れぬ。

「そ…そんな、ゴスモスがそんな形で誕生したなんて……」

スバキはあまりの衝撃的な真実に信じられない程の表情を出す。

「せやけど、どうしてアンタがその事を知っとるんや！？」
《キザラキのリーダー、闇王（あんおう）コクメンはそのアルハザーナーの研究結果によって生み出された最強のジェノバ・ナイトだそうだぜェ。真実を知ったコクメンは、その直後にアルハザーナの者を殺害し…自分だけの新たな星を作る為にキザラキを結成したんだとよ。紅桜を渡したお礼にと教えて貰った訳だぁ》

そう、全てはコクメンから聞かされた事である。
高杉はこの惑星を壊そうと企んでいるコクメンを気に入り、それを遂行しやすくする為ロストロギア級の兵器である『紅桜』の完成品を1つ渡したのだ。
そして高杉は口にくわえた煙管を外して口から煙を吐く。

《ふぅー……後、コクメンをマトモに戦り合わないほうが身のためだぜぇ……なんさってアイツも生命型ロストロギアであって、あの

ゾーマ以上の強さを持った化け物出そうだから》
「ゾーマ以上やってェ！？」
「マジかよォ！！」

コクメンの強さが、あのゾーマ以上の強さを持っている事にはやてとヴィータは驚きだす。
それはつまり、コクメンはＳＳランク級の危険ランクに入り、あの星海坊主と夜王鳳仙級に入る。

《ククク……じゃァ、せいぜいあがく事だな……》

最後に高杉が不気味な笑いを浮かべて言い出すと、モニターは消える。

「どうすんだよ！！一刻も早くあいつ等のアジトをみつけねぇと！！」
「かと言って、今コクメンがどこにいるのか分からない上にアジトの存在自体もわからへんし…」

一刻も早く、組織に向かって『キザラキ』の星破壊活動を阻止するべきだとヴィータは言い出すが、スバキの言うとおり今『キザラキ』がどこにいるのかも分からない。

「だからって、見過ごす訳にいかねぇじゃねぇか！！このままじゃ私達ごとこの星は消えてしまうじゃねぇか！！」

確かに、こうしている間にもゴスモスの破滅は近づいてきている。
このままじゃ自分達ごとこの星は消滅する。

「落ち着かれよ、ヴィータ殿……貴殿のあせる気持ちは……っ！！」

すると桂はある事に思い出す。
それはヴィータがさっき言った言葉にあった。

（私達ごと……もしや！！）
「スバキ殿！！」
「な……何！？」
「かつてあの町でお主が住んでいた家は、どこにある！？」

突然、以前の家に住んでいた事を聞かされて驚くスバキ。
はやて達はもちろん、エリザベスでさえ唖然する。

＊

そして桂達は急いでスバキが元いた村に向かう。
桂はエリザベスに乗って、エリザベスは背中についているジェット機の翼を装備してエンジンをかけ空を飛んでいる。
はやて、ヴィータも、そしてリィンははやてとユニゾンして桂達の後を追う。
スバキはバイクで陸に走って桂達を追う。

「どうしたんや桂さん！！いきなりスバキのいた町に向かうなんて！！」

はやては突如、スバキのいた町に向かおうとする桂の行動の意味を分からなかった。

「要するにあの連中は目的の為ならばこの星に住む者全ての犠牲を

払ってもかまわんであろう！！」
《そうですけど、それがどうしたって言うんですかァ！！》
リィンも、すごく気になって桂に聞く。
その理由はさっき、ヴィータが言った言葉にある。
「ヴィータ殿、さっき貴殿は『このままじゃ私達ごとこの星は消えてしまう』と言っていたであろう！！」
「あ……ああ」
「そして村長はキザラキの一員のホーリーであり、その計画の結果を知らぬはずがない！！ならば、ゴスモスが破壊されてしまいこの星に住む者も全て巻き込まれて消えてしまう結果になるのであれば、どうして態々スバキ殿を町から追い出す必要がある！？」
「そ…そりゃ村長がスバキを化け物扱いしたか……あぁ、そうか！！その町でスバキが住んでいた家の地下に、ブラック・アテリマがあるって事やな！！」
そう、『ブラック・アテリマ』はスバキがあの町で住んでいた頃の家のはるか地下に『ブラック・アテリマ』が眠っているのである。
エリザベス、リィン、ヴィータの3人もその真実を知って理解した。
それがスバキにバラされる前にスバキを町から追い出したのであろう。
ジェノバ・キメラと言う『化け物』の汚名を着せて。
「そう言う事だ。スバキ殿のジェノバ・キメラと言う戦闘機人は数が少なく戦闘力が高いのであれば、奴等はすでにスバキ殿をキザラキの戦闘兵器として扱っていたはずだ！！」
「じゃあ、ホーリーがスバキを化け物として恐れた理由で町を追い出したのも…」
「スバキ殿の存在がキザラキの野望の邪魔になる可能性があると言

う恐れでなのかも知れぬ！！」

全ては、『キザラキ』の野望の為にスバキは町から追い出されたのだ。

切れすぎる刃は鞘に納まらないと言う事で、スバキを厄介者扱いとして町を追い出した。

誰もが恐れる化け物として追い出せば、町の連中も理解できるのである。

「ヒデェ…」

《あんまりです！！》

『あのクソ爺をもう1発殴っときゃ良かった！！』

人間や戦闘機人でもなく、真の化け物は己の欲望の為なら何でも犠牲にすると言う人の醜い心である。

「とにかく急ぐぞ！！」

桂は急いで町に向かうべきだと良い、全員フルスピードで飛ばす。

「ヅラァ！！」

「ヅラじゃない桂だ！」

「何や、言いたい事をあるんやったらさっさとしたほうが良えで！！」

『そうだよ！！一刻も争うから！！』

スバキは、桂達に叫びだす。

桂達は今のうちに言ったほうが良いと言い返す。

「じゃあ言うけど……道間違っているよ！！」

『『何ですとォォォォォォォォォォォ！！！！』』

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！！

思わずズッコける勢いで急激に地面へと落下した桂達。

そしていよいよ最終決戦が始まるのであった。

銀八
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生！！』』

近藤
「どうもこんにちわーーーーーー！！この俺、真撰組局長こと近藤勲がアシスタントするぞー！！」

銀八
「うっせーよ!!無駄にテンション高くすんな!!」

近藤
「良いじゃないか!!俺だって久しぶりの出番なんだし、何よりアシスタント何てもう何十話ぶりだか!!」

久しぶりの出番とアシスタントに、近藤は興奮していた。
相手してたら無駄に体力が減るからと、銀八は溜息はいて質問を答えるようにする。

銀八
「えー、まずはこの人…ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
?前回の第百五訓での質問?の勝率はどのくらいですか。

?今の機動六課が肉食怪虫ゴキブーリと戦ったら勝てますか。』…
…ずばり答えます。シグナム達から聞かされた話ですが、ほとんど0に近いようです」

近藤
「つうかあのメンバーに勝とうとするなんて奇跡起こさねぇと無理じゃねぇ?」

銀八
「そして2の答えは……こっちもほぼ0に近いです。女王の大きさは通常のゴキブリ並みの大きさですし、何より彼女達にとってゴキブーリはトラウマですので」

近藤
「なるほど……そいつは災難だなぁ…と言う訳で『クアンタ』さん、次回の質問も待っているぞォ！！」

銀八
「んで次ィ、ペンネーム『白米』さん『質問
1．リインフォースツヴァイへ、
ある日神様が一丁のピストルをプレゼントしてくれました。このピストルは、人を撃っても罪に問われない魔法のピストルです。弾は3発、さて誰に使いますか？

2．武「いや、なにとんでもない質問してやがんだァァァァァァァ！！！！！！
すまんリイン！！！お詫びに苺大福１０個を送る。本当にすまない！！！！」（土下座）

3．刃「モテないことで悩んでいる銀八へ、一応貴様にプレゼントがあるが……
いるか？」』……」

リィン
「気持ちはありがたいですが、流石にいいです」

気持ちだけを受け取るリィン。
近藤はその答えにうなずく。

リィン
「そして苺大福ありがとうですぅ～！！」

銀八
「畜生！！良いなぁ！！そしてプレゼントプリーズ！！」

近藤
「さりげなく質問を速効答えたよこの人！！」

羨ましながらも質問に答える銀八に近藤はツッコム。

銀八
「と言う訳で『白米』さん、プレゼント待っていますので！！」

近藤
「すんげぇ嬉しそうな答えだなァ……じゃあ次行こう！！次はペンネーム『龍の骨』さんの質問だ！！『零斗
「よう！久しぶりだな。さっそく質問、チンクは『ＩＳ（インフィニット・ストラトス）』のラウラに似ているんだけどチンクは彼女の事どう思ってんだ？」』」

チンク・九兵衛
『『眼が見えない訳無いのに眼帯するなァァァァァァァァァァァァ！！！！（怒）』』

近藤
「あれェェェェ！！？何で九兵衛殿までェ！？」

近藤は突如、チンクと共に質問に答えた九兵衛にツッコミだす。

銀八
「というわけで『龍の骨』さん、相当なまでに納得していないようです。んで次ィ……ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『？ギン

ガさんって，シスコンじゃなかったっけ？（かがみ）
？人じゃない人（リインフォースみたいなリンカーコアで生きてる人）に質問です．昔，銀魂でドット化するっていうのがありました．そういうことが自分の身に起こったらどうしますか？できれば一人ずつお答えしてほしいです（ウッソ）
？なのはさんに質問です．いろんな二次小説でもあなたが魔王ないし冥王にされてますけど・・・お気持ちはどうですか？（こなた）』
」

ギンガ
「誰がシスコンじゃァァァァァァァァァ！！！！（怒）」

ドカァ！！

近藤
「何故俺ぇ！？」

と、妹思いのシスコンは怒り任せに近藤を殴りだす。
しかも謝罪せずに。

銀八
「はい、今でもシスコンである証でした。２つ目は……いくらなんでもそれは有り得ないと思います。なぜならリィンフォース」

リィンフォース
「はい……ドット化って私達は機械で作られている訳じゃないのでさすがにそれはァ……」

いくらなんでもそれはないと、リィンフォースは代表として言い出す。

一方、なのはは……

なのは

「誰が魔王じゃァァァァァァァァァァァァ！！！！（怒）」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！

近藤

「だから何で俺ェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！！？？」

と、魔王化して『デスライト・スタージャッチメント』を放った。

しかも近藤は巻き込まれて、黒こげとなって気絶して倒れた。

銀八

「あぁーあ、ゴリラ災難……つう訳で『ウッソ・エヴィン』さん……廊下に立っていなさい」

ルーテシア

「次行きます……ペンネーム『夜叉龍』さん……『蒼葉「それじゃあ俺が。銀さんＬｏｖｅのみなさん。もし銀さんがじいさんになったらどうしますか？」』」

銀八

「ずばり答え……て何でルーテシアが来たァァァァァ！！！！」

突如、近藤の変わりにルーテシアが現れた事に驚きだす銀八。

ちなみに近藤はガリューがミッドチルダ病院に運んで言ったようだ。

ルーテシア
「近藤が気絶したので、代理としてアシスタントします」

銀八
「『教えて銀八先生コーナー』ってアシスタントの代理あったっけエェェェ!?ってまぁ良い!!ずばり答えは……」

銀時Ｌｏｖｅ
『『全力で元に戻す方法を考える!!』』

っと、即答した。
銀八は呆れて、ルーテシアは平然とした。

ルーテシア
「『夜叉龍』さん……質問ありがとうございます」

銀八
「……ええ、次はペンネーム『鳴神ソラ』さん『フォックス「ありゃあ誰だって切れるよな（汗）…俺的に答えて欲しかったんだが…リインに質問『今回の章（狂乱編）で一番苦労したと思うのは何?』」

クッパ「源外とスカリエッティに質問なのだ『趣味で作りたいと思う物はあるか?』」

マリオ「スバルに質問『今回の章（狂乱編）で出た敵はどう思う?』」

リィン
「エアロガにオナラをかけられた事ですよォ！！！！（怒）」

と、リィンは怒りだして答えだす。

源外
「そうじゃな、卵賭けご飯の醤油入れ用の機械（カラクリ）じゃな」

スカリエッティ
「私も醤油要れ用のガジェットを作ってみたい者だねぇ」

銀八
「お前等の頭の中には醤油ネタしかねェのかぁ！！」

醤油関係の答えに銀八は怒鳴る。

スバル
「そうですねぇ……まだ全て出てきていないから今は答えられないよォ」

後半の敵はどんなのかを気になっている様子で、質問には答えられなかったスバル。

銀八
「と言う訳で『鳴神ソラ』さん、答えが知りたきゃ『狂乱編』を終わった後に質問をお願いします！！」

』

ルーテシア
「次、最後……ペンネーム『月光閃火』さん『1．リィンフォース・ツヴァイに質問だ。もし自身の身体がアインスと同じくらいで、胸がシグナムの1．5倍大きくなったらナニがしたい？

…直球どストレートに何言ってんだよ輝刃…（汗）。気を取り直して…次は俺からだ。

2．猿飛あやめに質問だ。もし銀時に惚れてなかったら、銀魂勢の男性キャラの中で誰に惚れた？ちなみに、『それでも銀魂に惚れていた』とかそういうのは無しだ。』」

リィン
「今まで巨乳に誇っていた他の巨乳女共を見返すことですぅぅぅ！！」

銀八
「ええエエエエエエ！！！リィン、お前そんな事をするのぉ！？……まぁそこは置いといて、さっちゃん、お願いします」

猿飛
「それは有り得ない事だわ！！……でも、それだったらSプレイ的な相手が良……」

銀八
「問題発言終了！！！」

ドカァ！！

猿飛
「あぁ～れぇ～！！！！」

キラァーン！！

銀八は青ざめて、猿飛を蹴飛ばすと……彼女は空に飛ばされて星となる。
ちなみに彼女の答えから見れば、沖田あたりになる。

ルーテシア
「と言う訳で『月光閃火』さん……いつもありがとう」

銀八
「……ええ、突然まさかのアシスタント代理と言う事になりましたが、以上持ちまして今回の『銀八先生コーナー』は終了します」

ルーテシア
「次回、ガリューがアシスタントする……」

銀八
「え、そうなの？」

第百十訓：目的は大きければ大きいほど困難である（後書き）

いよいよ最終決戦！！

町には信じられない被害が広がっている！！

多くのジェノバ・ナイトが待ち伏せして桂達を返り討ちにしようと歯向かう。

絶体絶命の中、そこにようやく援護がやってきた。

果たして、ゴスモスの運命は如何に！！

スバキ

「次回、「ピンチな時こそ味方の援護が来る」テイクオフ」

第百十一訓：ピンチな時こそ味方の援護が来る（前書き）

黒神
「今回はいよいよあの連中がやってきます！」

桂
「おお、もしや銀――」

黒神
「ネタばれ阻止ィィィィ！！」

ドカァ！！

桂
「ごふぁああ！！」

はやて・エリザベス・リィン
『『桂さぁん！！』』

スバキ
「ヅラァ！！」

ネタばれ阻止の為に黒神に殴られた桂に、悲鳴的な叫びをするエリザベス達。

ヴィータ
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まるな」

第百十一訓：ピンチな時こそ味方の援護が来る

『キザラキ』の真の目的。

それはアルハバーナが生み出し、ゴスモスの核（コア）として奥深く埋められている『ブラック・アテリマ』を手に入れ、新たな星を作る事である。

その為、スバキが前に住んでいた家のはるか地下にその『ブラック・アテリマ』が埋められている事が明らかになったコクメンは、村長として町の管理をしているホーリーに命じてスバキを町から追い出した。

戦闘力は抜群な戦闘機人『ジェノバ・キメラ』であるスバキは、『キザラキ』の最大目的の障害になる恐れとして。

そしてそれはもうすぐ達成され、ゴスモスの消滅を阻止すべきと桂達は急いで町に向かった。

「そう言えば、ヅラに言いたい事があったんだった」

スバキは何かを思い出して桂に言いたい事を言い出す。

「なぁヅラ」

「ヅラじゃない桂だ……どうしたスバキ殿」

「私がジェノバ・キメラの戦闘機人である事を知られたんなら、言うべきことを言おうかなぁって……」

「言うべき事って何だ？」

ヴィータも気になる様子で話に割り込む。

それはスバキの『ジェノバ・キメラ』としての能力の事である。

「私達、ジェノバ・キメラには人間の魔導士としての素質と魔力を見抜ける能力があるんだ。だから相手に魔導士としての素質があるのか無いのかを調べられる事が確認できる」
「なるほど……それなら素質をある者を魔導士として導く事は可能であり、ない者にも魔導士としての道を無理に進ませるような事もすむか……で、それが何の関係がある？」

魔導士としての素質を見抜けるスバキの能力に、桂は一体何の関係にあるのかを疑問する。
そしてスバキから予想外な言葉が出てきた。

「それがヅラに大関係ありなんだよ……だってヅラにも魔導士としての素質があるから」
『『！？』』

その言葉に、桂はもちろん…エリザベス、はやて、リィン、ヴィータは驚きだした。
特に桂は、自分にも魔導士としての素質があった事に驚きを隠しきれなかった。
それは自分がはやて達のように、魔導士としての強さを得られる事になる。

もし自分も魔導士になれば、スバルのように剣も魔法も優れた魔剣士になれる可能性は極めて高い。

「…それは本当なのかスバキ殿？」
「うん……最初にヅラ達を見かけたとき、多くのジェノバ・ナイト相手に魔法なしで剣だけで対抗する実力を持ったヅラなら、もしかしたらと思って調べてみたら……やっぱり素質があったんだよ」

初めて見かけた時、魔法なしでも剣のみで数多くのジェノバ・ナイトを斬り倒してきた桂の強さ。
これが侍としての信念と力ではないかと思う。

「それが本当なら……ヅラ、お前も魔法の力を手に入れる訳じゃねぇか！！」
『魔剣士・桂小太郎の誕生だ！！』

間違いなく桂のパワーアップは確実だとヴィータとエリザベスは喜びだす。
桂自身も、ここ最近の『鬼兵隊』に対策するには自分もパワーアップする手もある。
しかし、それ以上に桂は悩んだ。
そして桂が下した答えは…

「いや、魔導士になる事は遠慮しておく」

まさかの却下であった。
自分は魔法を使わない侍のままでいる事を選んだのだ。

「何言ってんだよヅラァ！！」
「遠慮するって、どう言うこと！？」
《せっかくの新たな力を拒否するなんて…》

ヴィータとスバキは当然、はやてとユニゾン中のリィンも信じられなかった。
どうして魔導士になる事を却下するのかと桂に言いたい中、その理由を答える。

「怖いんだ……堕ちてしまう事が」
「どう言うこと？」
「確かに、俺が魔導士になればスバル殿のように剣や魔法の２つの力を使える事になる……しかし、そうなれば俺の体の中に眠る力の欲望が目覚めてしまい、幕府や管理局のような連中に落ちてしまうかもしれぬ」

それは、力で支配するような幕府や管理局とまったく同じになってしまう事である。
攘夷志士である桂は、その様な者にはなりたくない。
だからこそ自分は、侍としての自分のままでいたい。

桂の理由を聞いて、エリザベス達は黙っている。
天人に支配されて天人の力で歯向かう者を返り討ちにする幕府も、権力と魔法の力で正義と言う名で世界を支配しようとする管理局も、それは全て桂が魔導士かになって魔法の力を得る事と一緒である。
桂はそう思っている。

「…桂さんの気持ち、わかるわ」
「はやて？」
「私やって、１０年前に管理局のむちゃくちゃな理由で苦しめられた事もあったんやし……」

そう、はやても１０年前の『闇の書・ゾーマ事件』でグレアムの復讐の為にヴィータ達を利用された事でゾーマが召喚された悲劇が起こった。
だからこそ、はやても桂に無理に魔導士にさせるつもりは無かった。
桂、エリザベス、ヴィータは黙りだし、スバキもはやてにも自分が想像しずらい過去を持っていると確信する。

＊

敵の目的を分かった桂達はようやく町に到着した。
だが、桂達が眼にした光景は創造をはるかに超えたものであった。

「こ、これは……！！」
『何と！？』

桂とエリザベスがその光景を眼にし、驚きを表していた。
それもそのはず。町が、人の血に染まって数多く燃やされ、壊された建物が山のように並んでいた。
惨死的な殺され方がいやと言うほど眼に焼き付けてしまう。
おそらく死体はこの村に住んでいた者達だと思う。

「ひ……酷い…！」
「…みんな……殺されている…」

はやては信じられない残酷な光景に両手で口の周りを塞ぎ、スバキは驚愕した表情をする。
一体何が起こったのかは知らない……だがこれだけは理解した。
おそらく、『キザラキ』のジェノバ・ナイトに全員殺されてしまったのであろうと誰もが思った。

「何て事を……キザラキはここまでするのかよ！！」
「信じられへん」

『キザラキ』がどれだけ非道な連中なのか、改めてようやく理解し

たはやてとヴィータ。
どんな手段でも、目的の為なら何でもする冷血なる兵士。
命の重みをなんとも思っていないのである。

『私、これはマジで怒りました！！』
「私もや…本来なら無意味な殺害はしたくないんやけど、こんな残酷なやり方をするんやったら……もう容赦せいへん！」

エリザベスはもちろん、あのはやてまでもがここまで怒りだした。
命を何とも思っていない外道な殺戮集団に、好き勝手やらす訳には行かなくなった。
その為なら、命の保障はしないで置く。

「こいつ等が一体何したって言うんだよ……もう許せねぇ！！『キザラキ』の連中を1人残らずぶっ飛ばしてやる！！」

ヴィータは当然のようにこんな残酷な殺し方をした『キザラキ』に怒りを表す。
今でも何かを破壊してやろうと言う怒気がつたわってくる。
そんな桂達の怒りに反応したのか、崩壊しかかってきた建物の中から多くのジェノバ・ナイトが現れて来た。

「くけけけけ……誰かと思えば我等には向かったおろかな人間どもではないか？」
「この町の者はすべて我等の手で葬った…我等キザラキの野望の儀式の生贄として！！」

完全に命の重さを知らないジェノバ・ナイト達。
それぞれ剣と盾を持って、一気に翼を羽ばたかせて桂達を襲いだす。

「はーははははは!!今度は容赦はしない!!我等の手で葬り……」

スパァーン!!

「だひゃ？」

刹那の瞬間、桂が凄まじい速さの居合でジェノバ・ナイト3・4体を一気に4体も胴体真っ二つに斬る。

その速さはスバルの神速抜刀に引けをとらないほどであった。

スバルの稽古に付き合ってた戦いの経験が、桂にも身に染まったようだ。

「もはや、貴様等は容赦しないで貰いたいようだな……ならば容赦なく天誅を下す!!」

侍の眼でジェノバ・ナイト達を睨みつける桂。

スバキは改めてみる桂の侍としての威圧感と強さに驚きだす。

「や……やっぱりこいつ、化け物だ!!」

「ひるむな!!一斉にかかれぇ!!」

と、ジェノバ・ナイトが一斉に攻撃しかけてきた。

陸と空からの一斉攻撃は、桂だけじゃ身が持たないと…エリザベス、はやて、ヴィータ、スバキがそれぞれ武器、デバイス、武術の構えをする。

ジェノバ・ナイトの大群が桂達に接近するその刹那の瞬間だった。

突如、桂達の前に1人の少女が現れ……

スパパパ

パパパパパパパパパパパン！！

居合の構えをした瞬間に、無数の蒼い鎌鼬が炸裂してジェノバ・ナイトを7・8体をバラバラに斬る。
突如、ジェノバ・ナイトがバラバラにされた事で桂達はもちろん、ジェノバ・ナイトも一体何があったのかを疑いだす。
しかし、目の前にいる少女を良く見ると、蒼いコートを身に付け、背中には竜の紅き大刀を背負っていて、右手には青く輝く刃の刀に左手にはその鞘を持った魔剣士がいた。

「ふぅー、ようやく間に合ったぁ」
『『スバル（殿）（さん）！？』』

機動六課のフォワード万事屋の1人、機動六課でも最強と謳われる剣の腕を誇る魔剣士…スバル・ナカジマがようやく登場した。
今の剣技は、おそらく『斬蒼（ざんそう）』であろう。
『ティルヴィングエア』を鞘に収めると、スバルはヴィータの存在に気づく。

「あれ、ヴィータ副隊長もご一緒で…ヴィータ副隊長も旅行に行きたくなって桂さん達に追いかけたんですか？」
「んな訳ねぇよ！！てめェ等が次元旅行に行ったて言うからワザワザ連れ帰ってきたんだよってか何でスバルがここにいんだ！？」
「まぁまたれよヴィータ殿…それにスバル殿がここにいるって事は……」

桂は確信した。
スバルが自分達の前にいると言う事は、あの連中もいるって事である。

「ヅラァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！（怒）」

ドカァ！！

「オギュアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と、桂を狙うように飛び蹴りを炸裂するが、桂は交わしてその目の前にいたジェノバ・ナイト1体に直撃して吹き飛ばされた。
その人物は、紛れも無く我等が主人公こと坂田銀時であった。

『『銀時　（ちゃんや）（さんですぅ）』』
「うわァァ！！本物の坂田銀時だぁ！！」

銀時の登場に大喜びする桂達と、本物の英雄をこの目で見られた事に感心するスバキ。
しかも銀時だけじゃない。
後ろから金色とオレンジ色の魔力弾、無数の弾丸と無数のクナイが一斉に発射されてジェノバ・ナイトを数多く破壊しまくった。

「はやてェェェェ、桂ァァァァ！！」
「助けに来ましたよ！！」
「ヅラァアアアアア！！！今までどこに行っていたアルカァァァ！！」
「わっち等も助太刀に来たぞォ！！」

先ほどの攻撃は当然、フェイト、ティアナ、神楽、月詠の総攻撃であった。
さらに援護としてエリオ、辰馬が槍と剣を構えてジェノバ・ナイト

を攻撃してきた。
ちなみにヴィヴィオは安全な場所に隠れて全員の無事を祈っていた。

「ヅラァ、さんざんとわし等を心配させとーて申し訳ない気持ちはないだかぁ！？」
「否、元はと言えば貴方が原因でしょうが！！」

桂を心配するかのように言い出す辰馬に、その最大の原因者である辰馬に精一杯ツッコむエリオ。
しかし戦いに集中している彼等は、刀と槍でジェノバ・ナイト達を次々と斬りまくる。

「銀時！みんな！全員無事だったか！！」

桂は銀時達の無事に嬉しそうに喜びだす。
だが銀時はと言うと……

「てめェのせいでこっちは9話分出番なしなんだよ！！どうしてくれるんだこのヤロー！！」
「ヅラァァァ！！さんざん私達より出番が出た分、しばらくの出番無しは覚悟しろヨ！！！」

銀時と神楽は最近の『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』の出番の無さに怒りだしていた。
確かに今回のシリアスは、桂、エリザベス、はやて、リィンを中心とした『狂乱編』である。
銀時と神楽はその怒りをジェノバ・ナイトに向けて、木刀と傘で次々を破壊していく。

「私達もはやて達を探してたら、さっき貴方達がこの町に向かっているのを見かけて急いで追いかけてきたら……」
「何かとんでもない事になっていますよ!!と言うより何なんですかこの人達!!」

フェイトとスバルも、『バルディッシュ（ライオットザンバー・セイバーモード）』と『ライキリ』による二刀流と、『ティルヴィングエア』による神速抜刀剣術により、次々と敵を切りまくる。
銀時の登場で、桂は勝機だと確信して最悪な状況を言い出す。

「みんな聞いてくれ!!この鎧共はキザラキと言う組織によって生み出された生きた鎧騎士、ジェノバ・ナイトと言う!こやつ等はこの星を破壊する恐ろしい計画を立てている!!」
「ええ!?」
「この星を破壊!?」

そんな大胆な計画を聞いて、スバルとティアナは驚きだす。

「そして奴等はこの地下に眠るブラック・アテリマと言うこの星の核を抜き取って新しい星を作るつもりだ!!我々はそれを阻止する為にこの町にやってきた!!」
「敵のアジトは知っとるから、私達はそこに向かうからここは任せるなァ!!」
「お前等もくたばるんじゃねぇぞォ!!」

桂、はやて、ヴィータは叫びだし、この場を銀時達に任せてエリザベスとスバキと一緒に、『キザラキ』の総長、コクメンのいる場所に向かう。

「てかおい待てェ!!ヅラァァァ!!何主人公ぽい活動してんだ

ァ！！」

「銀時ィ、そんな事言っている暇ななないよぉ！！」

桂の行動に納得のいかない銀時は叫びだし、フェイトはツッコム。

「行かせるかァァ！！」

「コクメン様の邪魔はさせない！！」

と大型ジェノバ・ナイト４体が大剣を構えて桂達に歯向かうが…

スパァ！　スパァ！

ドカァ！　ドカァ！

「そこをどけェ！！」

『邪魔だごるァ！！』

桂は素早く刀を振り、エリザベスも豪快にプラカードを振って、２人で２体ずつジェノバ・ナイトを斬り飛ばす。

そのまま２里が先頭に走って、はやて、ヴィータ、スバキも後から追う。

コクメンの野望を阻止する為に。

銀八

「おしえて」

生徒全員
『『銀八先生!!』』

銀八
「へぇい。じゃあ初めっとするか。今回のアシスタントはこの人…
…ガリューさんです」

ガリュー
『おっす、おらガリュー。初めてのアシスタントよろしくな』

何か外見のイメージとは有り得ないしゃべり方を書かれたプラカードを出して挨拶するガリュー。

銀八
「じゃあ行くぞォ…まずはこの人、ペンネーム『真王』さん『フェンリッヒ「よし、質問行くぞ。『そっちに不死身のゴーストが送り込まれたらどうするんだ?』」」

エミーゼル「のっけから危険だなおい!全員に質問。『アニメ・ゲーム・漫画の中で使ってみたい魔法はなんだ?』」

ヴァルバトーゼ「俺もオリキャラ含む全員に質問だ。『健康管理は整っているか?』もし整っていないならイワシを食え!イワシを食えばすべてうまくいく!」

『……ずばり答えます。1つ目は銀時達でもお手上げですね」

ガリュー
『てか勝てねぇじゃん』

即答に答える銀八とガリュー。

銀八
「2つ目は……全員に答えさせてもらいます。今回は機動六課の皆さんだけで」

銀時
「……あぁ？んなもんよりかめはめ波が打ちてぇよ！」

銀八
「さっそく魔法無関係な答えだなおい！！」

フェイト
「そうねぇ……私は『ドラゴンクエスト』のギガデインで」

スバル
「私は……『Ｆａｅｔ』の『無限の剣製（アンディミデット・ブレイク）』で」

桂
「そうだなぁ……残念ながら俺には思いつけない……とりあえず空を飛べるような感じの魔法で……」

銀八
「だからなんなんだよその魔法！？」

なのは
「私は……『ダイの大冒険』の『メラゾーア』かなぁ？」

はやて
「私は『ＦＦシリーズ』の『メテオ』や！」

ティアナ
「……『ＲＡＶＥ（レイヴ）』の『流星雨（メテオリックシャワー）』ぐらいで」

神楽
「私は『スレイヤーズ』の『神滅斬（ラグナブレイド）』が良いネ！！」

月詠
「わっちは特にない」

エリオ
「僕は『魔法先生ネギま！ＭＡＧＩＳＴＥＲ　ＮＥＧＩ　ＭＡＧＩ』の『巨神槍巨神ころし（ティタノクトノン）』！！すごくかっこいいし！！」

キャロ
「うふふ……あのお邪魔虫（神楽と月詠）共をつぶす為に『スレイヤーズ』の『竜破斬（ドラグスレイブ）』で♪」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

銀八
「怖いから止めてェェェェ！！！（青ざめ）」

ヴィータ
「とりあえず『テイルズシリーズ』の『ピコピコハンマー』で」

シグナム
「『ドラゴンクエスト９』の『イオグランデ』で」

シャマル

「『テイルズシリーズ』の『リザレクション』で♪」

ザフィーラ
「『ダイの大冒険』の『マホカンタ』だな」

リィンフォース
「じゃあ……『Ｆａｅｔ』の『宝石魔術』で」

リィン
「リィンもお姉ちゃんと同じ魔法で」

九兵衛
「胸が大きく魔法を！！」

銀八
「だから何なのその魔法！？」

外道丸
「あっしは特に必要ないので別に良いでありやす」

辰馬
「あはははは……とにかく自由になれる魔法が……」

銀八
「ねぇよそんなの！！」

お登勢
「あの馬鹿が借金を返しやすくする魔法が使えりゃ苦労しないけどねぇ？」

銀八
「だからそんな魔法あるの!?てかないよねそれぇ!!」

ユーノ
「僕がもっとカッコ良くなる魔法を!!」

銀八
「気持ち分かるけど、ちゃんと答えてくれぇ!!」

ほぼ半分は正確に答えたが、残りは全然沸け分からない魔法を答えていた。

ガリュー
『ちなみに、さっき調べたらオリキャラのみんなは健康でいるそうだ』

銀八
「そうかい……というわけで『真王』さん、ちゃんと答えられなくてごめんなさい」

ガリュー
『ペンネーム『レイガン』さん『銀八先生に質問です。
1．近藤（ゴリラ）さんに質問です。
リリカルキャラでゴリラっぽい人は誰だと思いますか?
2．ギンガさんに質問です。
フェイトさんをどんだけ好きですか、そして銀時をどう思っていますか?
3．黒神さんに質問です。
もう最終章（最後の長編）辺りのプロトは完成していますか』……』

近藤
「……うーむ、それは考えた事がないなぁ」

銀八
「ちなみに俺的にはトーレが……」

近藤
「ちょー！！それ烈火竜さん所の話だって！！（青ざめ）」

ギンガ
「……あんなハーレム天然パーマにフェイトちゃまは渡すかァァァァァ！！！」

近藤
「どんだけテスタロッサ殿が好きだぁ！？しかも『フェイト様』じゃなく『フェイトちゃま』って何ィィィィ！？」

さっそくツッコミを2連発炸裂する近藤。
以外にも良いツッコミをする。

ガリゥー
『ちなみに最後は黒神に』

黒神
「そうですねぇ……最後のところだけは思いつきましたが、後はどうやって繋げるかですね」

ガリュー
『と言う訳で『レイガン』さん、最終章をお楽しみ』

銀八
「んで次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『質問です。

シャッハ
「そっちの騎士カリムと自分に質問です…こちらの騎士カリムはすっかりザビー教に心酔して、元のキャラが誰だったかわからないくらいバカ騎士になってしまいました。
これを見て貴方達はいかが思いますか？
そしてもう一つ質問ってか相談…
……黒豚ハゲに金髪チビ挙句に騎士『バカリム』に囲まれノイローゼ寸前になってるアタシはどうしたらいいんだぁぁぁぁ！？
誰かぁ、この混沌地獄からアタシを救ってくれぇぇぇ！！」

銀八先生、哀れなシスターに救いを…
』……ずばり、カリムさんお願いします」

カリム
「そっちの私はそっちの私なりに道を進んでいるから、良いんじゃないですか？後、貴女も堕ちれば良いだけですよ♪」

銀八
「何笑顔で見捨てるような発言してんだぁ！？」

ガリュー
『酷っ！！』

これには2人も呆れて叫びだす。

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、シャッハさんを助けてやっ

てください……」

ガリュー
『次なぁ、ペンネーム『私にいい考えがある　』さん『フェイトに質問
Q：銀さんと観覧車に乗ったことがありますが、もしかして中でキスしちゃいましたか？、あんなことやこんなことも？
銀時に質問
Q：ズバリ！貴方のことが好きなリリカル組の人たちの胸の感触はいかがでしたでしょうか？
スバルとティアナ、高町なのはに質問
Q：貴女達は今まで食べた食パンの枚数を覚えているのかしら？』
……絶対やったな』

銀八
「けっ！！」

フェイト
「そ……そんな事は…あるかも／／／」

顔を真っ赤に染めるフェイト。
つまり彼女は銀時とキスしたようだ。

銀八
「２つ目マジでムカつくからやめて良い！？」

ガリュー
『それは無理。では本人おねがいするね』

銀時

「……てか、何回も体に押し付けられちまったから体が強制的に覚え……て何言わせんだこんにゃろーーーーーーーー！！／／／」

ドカァ！

黒神
「何故僕！？」

何故か黒神を殴り、黒神は哀れにも倒れてしまった。

なのは
「ふぇええ！？そんなの覚えていないよぉぉぉ！！！」

ティアナ
「と言うより数えた事が無いから分かる訳ないでしょ！！」

2人は正確な答えを言い出す。
しかしスバルは……

スバル
「たしかぁ……数十万枚…いや数百枚ぐらいかなぁ…」

ティアナ
「分からないなら無理に答えるなぁ！！てか良くそんだけ食べたなおい！！」

とティアナのツッコミが炸裂する。

銀八
「という訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立ってください。

次ィ、ペンネームペンネーム『名無し』さん『＜質問＞
初めてのくせに質問なんてしちゃってますが・・・
皆さん、これを見ての率直な感想をお願いします

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ４７０４８８５

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｊｐ／ｎｉｎｔｅｎｄｏ＿ｓｐｉｒｉｔ６４／２００８０９１７６０４１７０ｂ．ｐｎｇ

ちなみに「ちゃんと」答えて下さい。

・・・アレ？ナンダカサッキヲカンジ・・・

ドゴオオオオオオオオオオオン！！！！
「ギャアアア

銀八
「つうか何これぇ！！なのはイジメ！？これなのはファンに対して見せちゃいけねぇもんだろォォォォ！！しかも無駄に合うしィィィィィ！！！」

2人は絶対に有り得ないなのはの魔王ぶりに恐れていた。
間違いなく他の人が見せたら青ざめて、本人のなのはに見せたらただじゃおきない。

銀八
「と言う訳で『名無し』さん、お気の毒に…」

ガリュー
『ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『質問です。
他作品キャラをツッコミ役にするなら、誰が良いですか？
1.『化物語』の阿良々木暦、
2.『ＯＥＮ　ＰＩＥＣＥ』のウソップ
3.『さよなら絶望先生』の日塔奈美
4.『魔人探偵脳噛ネウロ』の脳噛ネウロ
5.『魔人探偵脳噛ネウロ』の桂木弥子。さあ、誰が良いですか？』
』

銀八
「頑固、2で！！メッチャまともなツッコミしそうだから！！」

ガリュー
『異議なし！！』

他の４人はどう見てもまともじゃないと確信する２人。
特に４ははっきり言って怖いから。

銀八
「と言う訳で『亀鳥虎龍』さん、他の４人はご勘弁を！！」

ガリュー
『次が最後だな。ペンネーム『黒龍』さん『なのはに質問

あなたは最近ホントに出番がなく、その上嫉妬したり気に入らないことがあったら砲撃で解決すると言う、ヒロインから１００万光年離れたあなたは「脇役ヒロイン」と呼ぶに相応しいですが、どうでしょうか？（黒笑）」

ギンガに質問

お前のフェイトに対しての行動は、フェイトの好感度下げるだけにしかならないから、取りあえず身の振り方を改めろ。その内嫌われるぞ。好感度上げる事に専念したらどうだ？」

こっちにフェイトさん子供バージョンと大人バージョン、しかもかなりエロイコスプレ写真集ありますが欲しいですか？もし欲しいならこっちに来て下さい」』』

なのは
「そんなのいやなのォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！（涙）」

豪雨の如くに涙を流すなのは。

ギンガ
「んだとこのクソ黒龍！！！待っていろぉ、今すぐフェイトちゃまのコスプレ写真集を取りに来るからなぁ！！！！（怒）」

怒りの暴走で走り出し、黒龍に殴りこみに言った。
全てはフェイトの写真集を全部奪う為に。

だがその後、ギンガは黒神に止められて『シャマル鍋』をかけられて気絶したのは言うまでも無かった。

銀八
「と言う訳で『黒龍』さん、マジですんませんねぇ。以上持ちまして今回の『銀八先生コーナー』は終了」

ガリュー
『楽しませてもらった』

銀八
「そうかい…んじゃ次回の『銀八先生コーナー』なんだけどぉ…一回休ませてもらいます」

ガリュー
『ちなみに次のアシスタントは月詠です』

銀八
「それでは、次回もお楽しみ～」

と言う訳で次の『銀八先生コーナー』は次の次になります。

第百十一訓：ピンチな時こそ味方の援護が来る（後書き）

ついにコクメンの野望を阻止する為に桂達はやってきた。

だがそこに待ち構えていたのは『鬼兵隊』の究極兵器『紅桜』である。

そしてその『紅桜』を操るのがスバキと同じジェノバ・キメラ。

そして、桂はある決意をする。

シグナム

「次回、「人生の中には超えなければならない過去の壁がある」テイクオフ……て私の出番はまだかァァァァァァ！！！！（涙）」

第百十二訓：人生の中には超えなければならない過去の壁がある（前書き）

決戦の地…関ヶ原！

今…戦国最大の戦いが幕を開ける！！

『劇場版　戦国ＢＡＳＡＲＡ　－Ｔｈｅ　Ｌａｓｔ　Ｐａｒｔｙ－』

６月４日…出陣！！

政胸
「私達も絶対見に行くね♪」

優希邑
「ぜ……是非、見に来てください！！／／／」

蒼髪のロングヘアーで右眼に眼帯をしていて、胸の大きさは巨乳でグラビア級、さらにはスタイル抜群。
何より左目の瞳に輝いているサファイアと思わせる色取りが綺麗で、サファイヤの様な蒼いセクシーなトライアングルビキニ水着を身に着けている伊達政胸。
髪のツインヘアーで眼はルビーの如くに真紅に輝いていて、政胸ほどじゃないが巨乳でルビーのような赤いベアバックとローライズの水着を身に着けている真田優希邑。

政胸は笑い出し、優希邑は恥ずかしながら互いに胸を押し付けあって宣伝する。

黒神
「と言う感じで宣伝してみるのはどうですか？かんなり受けますし♪」

ブチィ×２

政宗・幸村
『『受けるかァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！（怒）』』

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ

ｃｈａｒｌｅｙさん、ありがとうございました。

銀時
「えー、『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百十二訓：人生の中には超えなければならない過去の壁がある

「てやぁあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」
「うぉわちゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

ジェノバ・ナイト相手にたった2人で大暴れして、次々と吹き飛ばして破壊しまくる戦鬼が2人いた。

銀時と神楽である。

銀時は、圧倒的な強さを炸裂させて、銀時は木刀で真剣も顔負けと思わせる切れ味で次々とジェノバ・ナイトを斬りまくる。
しかも人間とは思えない超人的な強さと素早い動きで、その強さは鬼神とも思わせる。

神楽も傘を豪快に振って振って、振りまくってジェノバ・ナイトを粉々に破壊する。
さらに時には素手で殴って粉砕するなど、少女と言えども夜兎としての力はジェノバ・ナイトをも圧倒的に上回る。

フェイト達から見ても、いつもの銀時達とは違うと思える勢いで戦っている。
原因はと言うと……

「神楽ァァァァァァ！！！！散々ヅラの野郎に出番を奪われた怒りを、この鉄くず共に全てぶつけるぞぉおおおおおおおおおおお

おおお！！！！」

「ウッス！！リーダーを差し置いて出番が無駄に多いヅラにも、私メッチャムカついているアルヨォ！！！！！」

原因は、桂の出番が多いのに対して自分達の出番が少ない事である。まぁ『狂乱編』だからそれぐらいの出番の少なさは我慢してって言う言葉は、彼等には通じないのであるようだ。

「ジェノバ・ナイト狩りじゃァァァァァ！！！！」

ドカァァァァァァ！！

『『ぎゃあああああああああああああああああああ！！！！』』

木刀を豪快に振って、眼にも映らない速さで一気に6・7体のジェノバ・ナイトを切りまくる銀時。

「ジェノバ・ナイト狩りじゃァァァァァ！！！！」

ドカァァァァァァ！！

『『あんぎゃあああああああああああああああああああ！！！！』』

傘を横一線に豪快に振って、一気に5体のジェノバ・ナイトを吹き飛ばす神楽。

「な…何だこいつら！？」

「どう考えたって人間じゃねェェェェェ！！！！」

圧倒的な力に、出番の少なさに対する怒りの原動力が追加された今の2人は、ジェノバ・ナイト達から見ても人間の皮を被った化け物しか見えない。
そしてそのまま2人は同時に一歩強く踏み出し、大きくジャンプし……

「ジェノバ！」
「ナイト！」

『『狩りじゃぁァァァァァァァァァ！！！！』』

ドカァァァァァァァァァ

とティアナは思う。

「本当、銀時達って怒り出すと手におえにくいよねェ」

「そうですね…お兄ちゃんも神楽も、少し……」

とフェイトを振り向いたティアナは、言葉を中断して青ざめていた。

それは、今のフェイトが持っている『バルディッシュ』と『ライキリ』が大鎌のようになっていた。

『バルディッシュ』は『ライオットザンバー・デスサイズ』と言う『ライオットザンバー・セイバー』とそっくりな黒刀だが…刀身の先が何故か大鎌のように尖っている。

一方の『ライキリ』も金色の魔力で精製した、刀身の先が稲妻の魔力で造形された大鎌となっている。

これはまさに、『戦国●ＡＳＡＲＡ』の明智●秀と同じ武器である。

「何かどっかのＢＡＳＡＲＡキャラが使っていそうな武器になっちゃっているんですけどぉぉぉぉぉぉ!?」

「ふふふ……でも今回は同感だよ…ここ最近の出番の少なさにヒロインとしての存在の薄さ、唯さえスバルにヒロインとしての株を取られかかっているのに今回のシリアスではやてに奪われかかっているなんてねぇ」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ

いつものフェイトでは有り得ない憎悪があふれ出ている。

しかもその威圧感は、間違いなく白い悪魔おも勝る恐怖が放っている。

「フェイトさぁん!?どうしちゃったんですかァァァ!!」

「フェイト?……それは私の名前?……ふふふふふふふふ」

不気味な笑い方をするフェイト。
しかも先ほどから放たれている憤怒・殺気・闘志はジェノバ・ナイト達はおろかティアナまでもが怯えている。

「そのとおり！……私はフェイト・テスタロッサ……『リリカル銀魂シリーズ』の真なるヒロイン。私からヒロインの座を奪うものを排除する美しき死神……うふふふ……ふふふふ……ふはは！！！！！」

自ら死神と名乗ってしまったフェイトは、真・ソニックフォームとなって凄まじいスピードで次々とジェノバ・ナイトを斬りまくる。
中には首をはねると言う惨殺的な倒し方もし、ジェノバ・ナイト達は一気にフェイトの死神としての存在に空気が恐怖に染まってしまう。

「うぁあああああ、死神が来たァァァァァァ！！」
「金色の閃光がこっちに……うぎゃあああああああああ！！」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ、止めてェェェ！『キザラキ』を辞めるからァァァ！！」

フェイトの圧倒的な威圧感と殺気にジェノバ・ナイト達は悲鳴を上げまくった。
しかもフェイトはかんなりと言って良いほど、メッチャ楽しんでいた。

「Ｎｏｏｏ

涙を流して叫びだすティアナ。
フェイトもまた、銀時と神楽同様に自分よりも出番が多いはやてに強い怒りを抱いていた。
最早、完全なる死神と化してしまっている。

その光景を見たスバル達は、思わず青ざめている。

状況は、圧倒的に銀時、フェイト、神楽の3人によって圧倒的に有利になっていた。
しかし、3人ともとても怖い。

＊

一方の桂達は銀時、フェイト、神楽の3人の怒りを知らずにスバキが前に済んでいた家に到着するも、またもやジェノバ・ナイトの大群が立ちはだかって来た。
しかしそれでもお構い無しに桂達は倒しまくっていた。

スパパパパパ！！

素早い剣さばきで、無数のジェノバ・ナイトを斬りまくる桂。
銀時に引けをとらない強さはやはり健在である。

「爆炎の焔球ーバーニング・ボルド！！」

ドカァーン！！

『『あんぎゃあああああああああああ！！』』

スバキも術式魔法で、右手から巨大な火球を放って4・5体のジェノバ・ナイトを吹き飛ばして粉々にする。
エリザベス、はやて、リィン、ヴィータも2人に負けずにジェノバ・ナイトを次々と倒していた。
そしてようやく全てのジェノバ・ナイトは倒した。

「ふぅ、やっと到着したぁ」

スバキは前に済んでいた家の前で安心して息を吐く。
その家は、何やら江戸の屋敷のような感じであって…まるで銀時達の世界に立てられているような建物と同じである。
それを気にせずにも、ヴィータはスバキが先ほど使っていた術式魔法に驚いていた。
何せデバイス無しで魔法を使える戦闘機人なんて始めてみるからだ。

「にしてもすげーな、お前の術式魔法って。それってジェノバ・キメラ以外でも使用できるもんなのか？」
「そうだよ。本来ならアテリマって言う魔力が込められた宝玉を持たなきゃ使えないんだけど、私達ジェノバ・キメラの場合はアテリマが心臓代わりに埋められているから、何も持たずに使用可能なんだよ」
「なるほど」

そう、この惑星『ゴスモス』に埋め尽くされている特殊魔力砲玉『アテリマ』を身に着ける事で、初めてスバキの術式魔法が使用になる。
その魔法の威力はミッドチルダ式やベルカ式にも引けをとらない。

「今度、ヴィータにも教えてあげようか？」
「おう、すごく強そうだからマジ頼む！」

術式魔法を教えてもらう事を強く要求するヴィータ。
確かにそれを会得すれば、自分も相当強く慣れるんじゃないかと思う。

「それは良えけど、そろそろこの家の中に入ると使用か」
「そうだったね」

はやてのひと言にスバキは思い出して、門を開ける。
門が開くと、家の目の前に大きなカプセルが眼のあたりにする。

「あれは？」
「何や、何かのカプセルのような形やけど？」

桂とはやては不思議がってそのカプセルらしき物に不思議そうに見つめる。
しかし良く見てみると、そのカプセルにはエレベーターの扉らしきものが付いていた。

「これって……まさか、キザラキの地下アジトに繋がる地下エレベーター！？」
「ええ！？」

このカプセルらしき物体が『キザラキ』の地下に繋がるエレベーターである事に驚きだすリィン。
だとすれば、このエレベーターに乗って地下に行けば、コクメンがいる事になる。

「つまり、これで地下に行けば……コクメンの所に行けるわけだ」
「せやけど、さっき高杉が言っていた完成した『紅桜』1本がコクメンの手に渡っているし、ここから先はさっきの様には楽に行けへんのやな」

『キザラキ』の総長にして生命型ロストロギアの1体、コクメン。
『鬼兵隊』の対戦艦用機械機動兵器、紅桜。
間違いなく想像をはるかに超える苦戦をするんではないかと思う。

それでも、ほうっておいたらいずれこの惑星は消えてしまう。
覚悟を決めた桂達は、それでもコクメンの元に向かおうとする。

「でも、それは覚悟の上だ」
「これ以上キザラキの思い通りにはさせないですぅ！！」
「このゴスモスも、そしてここに住む人々達も奴等の野望の為に消す訳にはいかねぇ！！」

スバキ、リィン、ヴィータはコクメンを倒す事に決意している。
それを見た桂、エリザベス、はやては笑い出す。

「うむ、では行こう！」
「一気にコクメンと紅桜を退治や！！」

桂とはやてがそう言い出すと、全員一斉にエレベーターの中に入り込む。
そしてそのエレベーターは地下に向かって下がり、桂達はいよいよコクメンのいるアジトに入り込む。

＊

そしてしばらく時間は経ち、エレベーターの扉が開く。
するとそこから信じられない光景が見えた。
それは、数多くのジェノバ・ナイトが無残なガラクタのように地に倒れている。
その数ざっと千体以上はある。

「な……何やこれ!?」
「一体、何があったって言うんですか!?」

何があったのか不思議に思うはやてとリィン。
桂、エリザベス、ヴィータ、スバキも声は出ないがどうしてこんな無残なジェノバ・ナイトの抜け殻の鎧が倒れているのか不思議に思っている。
するとエリザベスはその死体から何かを見つけた。

『桂さん、あれを!!』

エリザベスはプラカードを持っていない手で伸ばす。
その伸ばしたほうは、無残にも一刀両断に斬られたジェノバ・ナイトであった。
そのジェノバ・ナイトだけじゃない。良く見ると、全てのジェノバ・ナイトが何かに斬られた跡が目立つように見えている。

「なんだ!?こいつ等、全員斬られているじゃねぇか!!」
「まるで、剣みたいなので斬られているみたいだけど?」

ヴィータもスバキも、一体何があったのか分からない。

分かっている事はただ1つ。ここにいるジェノバ・ナイトは全員剣使いな人物に斬られて殺された事だと。
一体誰がと誰もが疑う中、ふと桂は何かとてつもない殺気に気づいてその方向に振り向く。

「ほう、まさかここであの『狂乱の貴公子』こと桂小太郎に出会えるとは…」

その声が聞こえたエリザベスも振り向き、それぞれの武器を構える。
男はジェノバ・ナイトが身に着けているような赤い鎧を軽量に身に着けていて、茶色の短髪に鋭い目つき。
おそらくは『キザラキ』の者かと思える。

だが何より桂はその男の右腕に驚いていた。

そう、その右腕は……紅色に輝く剣と同化していた。

『『紅桜!?』』
「ええ、あれがあの高杉って男が言っていた紅桜か!?」

男の右腕と同化している刀を見て、その名を口に出す桂、エリザベス、はやて、リィン、ヴィータの5人。
そして始めてみる『紅桜』に驚きだすスバキ。

「どうやら、桂とその宇宙生物以外の者達もこの剣の存在を知っているようだね…あ、自己紹介を忘れたね?……僕はアプチ。キザラキの最高幹部を務めている者さ」
「キザラキの最高幹部!?」

キザラキにそんな人物がいた事に予想外に驚くスバキ。

だがあの軽量の鎧を見れば、彼が間違いなくキザラキの1人だと言うことである。

「おいお前、この数多くのジェノバ・ナイトは一体何なんだ!?何でこいつ等斬られて死んでいるんだよ!?」

ヴィータはアプチにその理由を聞き出す。
確かに自分達が来る前にどうしてこんな無残な死に様になっているのか納得できない。
しかし桂はアプチの右腕と同化している紅桜を見て何か分かった。

「貴様、もしやその紅桜で!!」
「あはは、流石は桂小太郎…君の思っているとおりだよ?君も知っているとおり、紅桜は戦えば戦うほど成長し、戦闘データを得られる魔法のような剣。対戦艦用機械機動兵器とは良く言ったもんだ」

まさか本当にここまで『紅桜』が成長するなんて、アプチも使用して驚いていた。
するとはやて達も、この数多くのジェノバ・ナイトの残骸はアプチが原因だと確信した。

「だから、キザラキでもまともな戦力にならないジェノバ・ナイトだけを集めて、少しでもこの剣が成長するか実験してみたんだよ。最も、屑でもこの剣をここまで成長させる事は出来るんだけどね♪」

つまり、味方を実験台にしたと言う訳である。
『紅桜』の切れ味を確かめる為だけに。
それを聞いた桂とエリザベスは、外道な存在としてアプチを睨みつけ、はやて、リィン、スバキは人間とは思えない行動に驚愕する。

「この、下種野郎がぁぁぁ！！」

アプチの残酷ぶりに、ヴィータはついにキレて『グラーフアイゼン』を大きく構えて、宙を跳んでそのまま振り回す。

「ふん！！」

ガキィン！！

しかしそれをアプチは、『紅桜』で受け止める。

それどころが、ビクともせずにまったくの衝撃も伝わらない。

「何ィ！？」

「その程度、何の問題もない！！」

そう言って、アプチはそのまま豪快に剣を振ってヴィータを吹き飛ばす。

「ぐぁあああああ！！」

ドカァーン！

吹き飛ばされたヴィータは、壁に衝突してしまう。

「ヴィータ！！」

はやては悲鳴的な叫びを出す。

それと同時に、アプチの右腕と同化している『紅桜』の脅威な強度に驚きだす。

それは以前の『銀園祭』でキクナエが高杉達から貰った未完成版の

『紅桜』とは比べ物にならないほどである。
あれこそが本当に完成された紅桜の強さ。

桂は今のヴィータの攻撃を防いだアプチの『紅桜』を見て、間違いなく元の世界で見た『妖刀・紅桜』その物である事を確信した。
『ホテル・アグスタ襲撃事件』で以前に鍬死楼が見せた模造品じゃ話にならない強さである。

さらにアプチの紅桜には、あの能力も付いている。

「どうですか？これが君達が『鬼兵隊』でも最も恐れられている剣、完成された紅桜の姿。しかもこの紅桜には対魔法対策として『ＡＭＦ』の性能が付いているんですよ」

アプチは『紅桜』を見せびらかして説明する。
だとすれば、あれは魔法の天敵であり、しかも使用者を寄生して無限に成長する兵器。
刀の常識を生み出した、妖刀そのものである。

「く……しゃあない！リィン！！」
「はいです！はやてちゃん！！」

リインは、はやての目の前に移動した。

「ユニゾン・イン！！」

二人の声が重なり、白い光に包まれる。
アプチは、僅かに目を細めた。
やがて光が収まり、ユニゾンしたはやてが姿を現し、ユニゾンによって髪の色が少し薄くなっている。

「私も行くよ！！」

スバキもはやてを援護するかのように、術式魔法を放つ構えをする。
はやても目の前に白い魔法陣を展開させる。

「彼方より来たれ、やどりぎの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け」

詠唱を唱えてると、魔法陣を中心に6本と、その中心から1本と合計7本の光の槍が現れる。
さらにスバキも魔力で精製した氷の槍と弓を構え、氷の槍を矢のように撃とうとする。

「石化の槍、ミストルティン！」
「氷結の魔夜ーフリザーク・アロー！！」

7本の光の槍、氷の槍が同時に放たれる。
はやてとスバキが放った魔法は、それほどまでに威力はない。
しかし、石化と氷化する能力を持ったこの魔法であれば、いくら『ＡＭＦ』でアプチは護られても体を石化か固体させる事で動きを封じられる。
2人の狙いはそこであった。しかし……

「紅蓮の魔壁ークリムゾン・ウォール！！」

とアプチの周りから灼熱の炎が壁のように現れて光の槍と氷の槍を打ち消した。
これを見た桂達は驚きだした。

「術式魔法！？」

『まじでぇ！？』

そう、アプチが使用した魔法はスバキと同じ術式魔法である。
元々術式魔法は、スバキの様なアテリマが心臓代わりに体内に埋め尽くされた『ジェノバ・キメラ』や、アテリマを身に着けた者しか使用できない。
そして桂はアプチの正体を気づいた。

「もしや、貴様は…！」

「そう、私もそこの娘同様『ジェノバ・キメラ』ですよ。しかもコクメン様自ら生み出したキザラキの『ジェノバ・キメラ』として！！」

そう、アプチも『ジェノバ・キメラ』型戦闘機人である。
しかも『キザラキ』の総力を持って作り上げられた、正真正銘の戦闘向けように。
実は本来ならば、『キザラキ』は数多くの『ジェノバ・キメラ』を作ろうと思えば作れたが、アプチのように理性を保てぬ『ジェノバ・キメラ』ばかりであり、何度作ってもアプチのように理性を保てる『ジェノバ・キメラ』は現れずに次々と体内に埋められている『アテリマ』の魔力が尽きて死んでしまった。
アプチこそが完成された『ジェノバ・キメラ』であり、その強さはスバキの上を行く。

『キザラキ』がスバキを『ジェノバ・キメラ』である事を知ってても戦闘道具用に捕獲しなかったのは、ただ単に『キザラキ』の目的の邪魔になるだけではない。
すでにアプチのような優れた『ジェノバ・キメラ』がいたからだ。
そんなアプチが『紅桜』を持たせたとなれば、最悪な組み合わせで

ある。
デバイス無しでも優れた術式魔法を扱い、驚異的な『紅桜』の力を得て、アプチは間違いなくゾーマ以上の最悪な敵である事は間違いない。

「魔法も使えて、紅桜も扱えるって…そんなん反則やないか！！」

たださえ、『紅桜』だけでも厄介なのに『術式魔法』が使えるアプチはＳＳ級危険ランクに入る。
はやてはそんなアプチにどう倒せば良いのか悩まされる。

「こうなれば……皆、援護頼むわ！！」

はやては桂達に援護を頼むように言い出し、桂達は頷きだす。

「そうはさせませんよ！電撃の放…」
「邪魔はさせん！！」
『助太刀！！』
「私も！」
「やってくれたな、テメェ！！」

邪魔はさせまいと、桂、エリザベス、スバキ、ヴィータの４人がアプチに総攻撃する。
術式魔法を中断し、アプチは紅桜を大きく振るう。
しかしスバキの『大波の防壁ーウォール・ディメンション』が炸裂し、大波が防壁のようにアプチの前に現れる。

だがアプチはそれを無視して『紅桜』を振るい、『ウォール・ディメンション』をまっ二つに斬る。

しかしそこには、桂達は存在しない。

桂達は、大きくジャンプしてアプチの攻撃をかわしたのである。
桂が刀を大きく振るい、アプチはそれを『紅桜』で防ぐ。
その隙にとエリザベスが『食らえやぁぁ！！』と書かれたプラカードを、ヴィータが『グラーフアイゼン』を豪快に振るう。
2人のパワー攻撃を食らえばまずいと、アプチは地を蹴飛ばすようにバックして2人の攻撃を交わす。
だがすぐに桂の剣と、スバキの拳が炸裂するが、それも『紅桜』で防ぐ。

「仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ」
「！？…よし、下がれぇ！！」

はやての詠唱が聞こえ、ヴィータは叫びだす。
すると桂達はアプチから離れだし、アプチははやての魔法を止められなかった事に舌打ちする。
はやての周辺に4個の氷の立方体が発生する。

「氷結の息吹―アーテム・デス・アイセス―！！」

その4個の氷の立方体が放たれ、それぞれ前、後ろ、右、左とアプチの周囲を囲んで一斉に襲いだす。
これなら先ほどの術式魔法でも全て防げず、確実に氷付けで身動きを封じられる。
しかし……

「甘い！！」

スパパパパァァン！

『紅桜』を眼にも映らない凄まじい速さで振り、４個の氷の立方体は消えて消滅した。
はやては信じられない表情をして、『氷結の息吹－アーテム・デス・アイセス－』は不発に終わった。

「無駄だ、私に魔法は通じはしません！紅桜の力を手に入れ、術式魔法を極めた私にはねぇ！！」
「それはどうかな？」

桂の不思議な一声に、アプチは不思議がる。
なぜなら彼の周囲には、何やら４つの赤黄色い棒が転がっていた。
そう、これは桂必殺の『んまい棒』の一種でもある。

「んまい棒、獲備魔預粘巣（エビマヨネーズ）！」

すると、４つのんまい棒は大爆発して、爆発の煙の変わりに赤白い蜘蛛の糸のような物が現れる。
それが全てアプチに襲い掛かり、アプチはなすすべも無く体全体に大量の糸に絡まれる。
しかも強力な粘着が付いていて、身動きが出来ない。

「よし、一気に総攻撃が出来る！！」
「無理だ…あれは元々敵の身動きを封じ、その隙に脱出する為のもの。なぜならあの糸は粘着力だけでなく強力な弾力があって、こちらからの攻撃がビクともしない。それが魔法攻撃であっても」

あくまで身動きを封じる為だけに、開発したんまい棒である。
身動きが出来ないあの糸でもどんな攻撃をも弾き返す鎧と化していて、こっちの攻撃が効かない欠点を持っている。

「しかも、あの様子では後わずかで奴は獲備魔預粘巣（エビマヨネーズ）から脱出する」
「ええ！？」
「じゃあ、何の為にあのんまい棒を使ったんだよ！？」
ヴィータはどうして桂が『獲備魔預粘巣（エビマヨネーズ）』を使ったのかを聞き出す。
エリザベスは、そんな桂を見て何かを思いつく。
『ま、まさか桂さん！？』
「察しが良いな、エリザベス……。貴殿等は先にコクメンの所に向かってくれ…ここは俺が食い止める！！」
『『！？』』
そう、この隙にエリザベス達をコクメンのところに向かわせ、桂は1人でアプチの相手をするのである。
「何やってェ！？」
「ヅラァ、何を無茶な事を言っているんだよ！！」
「ヅラじゃない桂だ！コクメンの強さはおそらくアプチ以上かも知れぬ…だから1人でも多くコクメンの所に行かせたほうが良いやもしれぬ。それに俺には『紅桜』との戦いは経験している身だから、攻略は知っている」
自分なら、『紅桜』を攻略できると言い出す。
それでも無茶な為、はやては反対する。
「そんな！あれは『銀園祭』の時とは全然ちゃうんやで！！いくら桂さんでも1人じゃ…」
「はやて…それでもこの星の破滅の時間は直直に進んでいる……だから我々も一刻も早くコクメンの野望を止めねばならぬ！俺は必ず

後から合流するから、はやて達は今のうちに！！」

侍として、『鬼兵隊』と手を組んだ『キザラキ』の野望を止め、絶対に生きて戻る決意をする桂。
桂の言う事も最もだが、はやては桂1人を放って置く事はやはり出来ない。
はやては今でも涙を流しそうである。

「でも、私は！」
「ヅラを信じてやってくれよ…はやて」

そこで以外にもヴィータがはやてを止める。
ヴィータも桂にひそかに恋路を抱いているにも関わらずに、桂の危険な提案に乗る。
だが彼女だってそんなリスクが高すぎる提案は大反対である。
それでも、桂の言うとおりこの星はこのままでは崩壊する為、一刻も早くコクメンの野望を阻止しなければならない。

「ヴィータ！？」
「私はヅラを信じるよ……いくら紅桜がロストロギア級に危険な兵器でも、ヅラがあんな下衆野郎に負ける訳ねぇから…」
「ヴィータ殿…」

自分が必ず後から追うと信じてくれているヴィータに、桂は安心感を抱く。
そしてヴィータはゆっくりと桂に近づき…

ドカァ！

「ぐふぉ！？」

そのまま桂の腹を殴りだす。
ヴィータの有り得ない行動に誰もが唖然とする。
そしてヴィータは振り向いて、桂の方を向かずに叫びだす。

「だから、絶対に後から来いよ!!死んだら承知しねェから!!」

泣きたくても泣けない表情を隠し、ヴィータは走ってコクメンの場所に向かう。
そんなヴィータを見て、エリザベスも…

ドカァァァ!!

「グハァァァァ!!」

豪快に桂を殴り飛ばす。

「て何やっているんですかァァァ!?」

とはやてが突如光だし、その光の中からはやてとユニゾンを解除したリィンがツッコミながら現れる。

「え…エリザベス?」
『女を悲しませるなんて侍の風上にも置けない』

エリザベスが珍しく桂に叱りだす。
その光景ははやて達でさえも始めてみる。
そしてエリザベスは、振り向いて桂にあるプラカードを見せる。

『だから、必ず無事に後を追いかけてくださいよ』

それを伝えて、エリザベスはヴィータに続いて走り出す。
リィンも、桂を信じてここは彼1人に任せる事に決める。

「リィンも桂さんが追いかけてくるのを信じるです！だから、絶対に死なないでください！！」
「…承知した」

ヴィータやエリザベスに殴られた痛みはまだ響いているが、それでも立ち上がる桂は絶対に死なないとリィンと約束する。
そしてリィンもエリザベスを追いかけるようにこの場を後にした。

「それじゃあ、私も行くね。私だって本当はせっかく出来た仲間を危険な状況で放っておきたくないけど…本当の仲間だったら信じてやらなきゃね」
「すまぬ、スバキ殿」
「あ、だけどこれだけは言ってくね」

スバキは何かを思い出したかのように桂に伝える。

「確かにヅラとエリザベスは侍と言う屈強な魂を持った人間だけど、同時にはやてにとっての大事な家族でもあるんだよ…」
「家族…」
「今、ヴォルケンリッターは烈火の将・剣の騎士シグナム、紅の鉄騎・鉄槌の騎士ヴィータ、風の癒し手・湖の騎士シャマル、蒼き狼・盾の守護獣ザフィーラ、祝福のエール・リインフォース蒼天を行く祝福の風・リィンフォース・ツヴァイ、この6人で有名になっているけど、これだけは忘れないでね」

スバキは桂の今、あるべき存在を言い出す。

「ヅラとエリザベスは、7人目と8人目のヴォルケンリッターのメンバー、屈強の武人・狂乱の騎士　桂小太郎と、白き魔神・狂乱の聖獣エリザベスでもあるんだから」

スバキから見ても、桂とエリザベスは立派なヴォルケンリッターのメンバーである。

魔法が使えるか特別な存在だからではない。

誰よりもはやての隣にいて、彼女を護ってきた桂だからこそ、はやては今もこうしていられるのだ。

「じゃあ、先行って待っているから！！」

スバキは桂に死なない事を願いながら、ヴィータ達を追いかけるように走り出してこの場を去る。

そして徐々に、アプチの身動きを封じていた繭が破れかかっている。

「はやて、お前も早くヴィータ殿のところに！」

「……」

桂が叫んで早く行くように言い出すが、はやてはだんまりとしている。

そして、自分の今思っている事を喋りだす。

「本当に…」

「？」

「本当に、必ず後から来てくれるんか！？」

桂の身に何かあったら、それが心配ではやては桂と離れるのを拒む。

そう考えるだけで、はやての眼から涙があふれ出る。

出来れば一緒にいたい。共に戦いたい。
でも、桂が言っている事は確かである。
分かっている事でも、彼女は桂と離れる事はできない。

そんな彼女を安心させようと桂は笑顔で約束する。

「ならば、今ここで侍として誓う。必ず後から合流すると」
「…本当？」
「……ああ、だからはやても安し――――」

桂が喋っている途中で、突如はやてが桂に近づき、その唇で桂の唇と重なり合う。
突如の接吻に桂はこればかりは驚きだす。
長く唇が重ね合い、その唇にははやての涙が通っている。
そして…接吻を終え、はやてはゆっくりと桂から離れる。

「……はやて、お前…」
「これ、約束の誓いやから……約束護れる用に！」

顔を真っ赤に染めながらも、はやては願う。
愛する人が無事にいる事を信じて願う接吻。
彼女にとって桂はかけがえのない人であり、仲間でもある。

「絶対に来る事を信じているから……桂さんも絶対に死なないで！」

桂の無事を願い走ってこの場を去り、ヴィータ達の所に駆けつける。
一方の桂は、刀を右手で握って左手の指先2本だけで己の唇を触れる。

今、自分の唇にははやての唇と重なった感触がある。

女との接吻は初めてであり、流石の桂も少し顔を真っ赤になって同様を隠しきれなかった。

「……むぅ、まさか女を泣かせるような男になろうとは……銀時のような女たらしではあるまいに」

女を泣かせる事は男としてどうかしていると、桂は自分自身を叱り反省する。

そんな中、アプチを縛り付けていた粘着糸が全て途切れてしまった。

「やってくれたな、桂小太郎!!」

紅桜を豪快に振り、自分をここまでコケにした桂に強い怒りを抱いている。

「キザラキに歯向かうおろかな人間無勢が!!そこまで私に殺されたいようだな!!」

アプチから放たれる殺気は、先ほどとは比べ物にならないほど大きい。

しかし桂は臆せずに、先ほどとは違う眼をしていた。

それは、仲間の為に絶対に生きて帰ってくる侍としての強い誓いを果たした者しか出来ない眼だ。

「良いでしょう!!1人で私を食い止めて、他の仲間達を先に向かわせるのが目的でしょうがあの者は時期にコクメン様自らの手で殺される運命!!貴方だけは私の手で葬ってあげましょう!!」

アプチの言葉を気にせず、桂は刀を強く握る。

「江戸の夜明けとゴスモスの平和の夜明けをこの眼で見るまで死ぬ訳にはいかん。貴様等の様な愚か者共に滅ぼされては、ゴスモスも哀れで無残な最期を送る事になるかろうて」

そしてそのまま刀をアプチの方に向けて刺す。

「野望と果たさず眠るが良い」

今回は『銀八先生コーナー』は休みです。

次回から始まります。

第百十二訓：人生の中には超えなければならない過去の壁がある（後書き）

ヴェロッサ
「は！」

カリム
「どうしました、ロッサ？」

ヴェロッサ
「今、私の大切なものが奪われたような気が！！」

聖王教会で、ヴェロッサは何かを感じた。

＊

土方
「は！」

沖田
「どうしやしたんですかィ、土方さん」

土方
「今、攘夷志士に遅れをとったような気が」

歌舞伎町で行方不明になっている近藤とついでにと山崎を探していた土方も何かを感じた。

2人が絶望する日も遠くはない事を、この時まだ誰も知る予知も無かった。

ザフィーラ
「次回、「大切な人の為に戦うのは何より強い」テイクオフ」

第百十三訓：大切な人の為に戦うのは何より強い（前書き）

黒神
「ついに、今日『銀魂』が再放送しました！！」

銀時
「うっしゃあああ！！」

神楽
「きゃほぉ～～～～！！！！」

桂
「ついにこの時がやってきたぞォ！！」

エリザベス
『めっちゃ嬉しい！！』

月詠
「ふふふ、これでわっちも安心じゃ！」

再放送により代表として大喜びする５人。
そして彼等の新しい戦いも始まるのである。

黒神・銀時・神楽・桂・エリザベス・月詠
『『『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』、始まります！！』』』

第百十三訓：大切な人の為に戦うのは何より強い

桂達の前に現れた『キザラキ』最高管理者のアプチ。

『ジェノバ・キメラ』の1人で術式魔法を使いこなす実力者。
しかも『鬼兵隊』から受け取った『紅桜』を身に宿し、圧倒的な強さで桂達を苦しめる。

こんな相手に手間取れば、例え勝ててもコクメンに勝てるか分からない。
そう考えた桂は、エリザベス達を先にコクメンのところに向かわせ自分は1人でアプチの相手をする事にした。

そして……必ず後を追うと言うはやてとの約束を果たすために、桂は絶対に負けるわけには行かないのである。

「さぁ、これでも食らいなさい！」

アプチは術式魔法を炸裂させ、周りから数多くの光の矢が精製されて現れている。
その数は千本以上。
右腕と同化した紅桜を持ち上げ……

「白光の千矢ーシャイン・サウザンドアローー！！」

アプチが豪快に紅桜を振るうと、千本の光の矢が一斉に桂に襲いだす。
アプチが使用する術式魔法の中でも指よりに入るほど強力な魔法である。
しかも1本1本が強力な貫通力を持っており、間違いなくオーバーSランク以上の威力はある。

だが、

ガキキキ

うに剣を素早く振るう。

ズバァ！

「グゥ！？」

桂の剣は、アプチの左脇を斬る。
一瞬ひるむアプチだが、それでも倒れずに痛みを無視するかのように問答無用で桂を襲って『紅桜』を振り続ける。

「そんな鈍らの剣など、斬り折って上げますよ！！」
「武士の魂を宿したこの刀を、易々と折れると思ってかぁ！？」

桂も刀を振り続けて、アプチの剣とぶつかり合う。
互いの剣のぶつかり合いで発生する轟音が響きあい、両者まったくの互角と見える。
しかしそれは一瞬見ての判断であり、本当は桂がアプチを押し返している。
お互いにとてつもない速さで剣を振り続けているが、少しずつ桂の剣がアプチの身を削るように斬って斬って、斬りまくっている。
アプチの剣は、逆に桂の剣とぶつかっているが桂自身に当たっていない。

これは明らかに、先ほどの桂の実力では有り得ない強さである。
先ほどのがまったくの嘘と思えるほどの、圧倒的な強さがアプチの前で披露される。

（馬鹿な……この男、さっきと動きが違うだと！？一体何がこの男

を急激に強くさせている！！）

突如の急激な成長にアプチは理解できない。
数少ない『ジェノバ・キメラ』の自分でもまるで歯が立たない。
ただ、圧倒的な強さで押し返される。

（これが、『狂乱の貴公子』と呼ばれた男の力か！？）

桂に押されているアプチは、彼から何かを感じ取っている。
人間とは思えないその強さは、『紅桜』でさらにパワーアップされた自分ですら追い込まれる一方である。

「人間ごときが調子に乗らないで頂きたい！！」

アプチは思いっきり『紅桜』を縦一閃振るうが、桂はこれでもかと言うぐらいに刀で受け流してアプチの右足の股の部分を斬る。

「ぐぅ！！」

斬られた部分から血が結構あふれ出て、アプチも思わずガクッと膝を地面に付き下がる。

「調子に乗るな！！爆炎の焔球－バーニング・ボルド！！」

アプチはそのまま左手から巨大な焔球を放つ。
これはスバキが使用する術式魔法の中でも上級に入る威力である。
それが桂に襲い掛かるが、

「はぁ！」

スパァン！

そのまま勢い良く刀を振り、焔球を綺麗に間っ二つにして斬る。
そして斬られた焔球はそのまま桂の背後で左右に爆発する。

「己ェェ！！大地の逆鱗ー グランド・バーサーカー！！」

左手を地面に叩きつけるようぬ付き、桂達の足場が大きく揺れだす。
そして桂の足元から岩柱が現れて、桂を襲うかのように溢れ出て総攻撃をする。
しかし桂も立てにミッドチルダの魔導士達が使用する魔法を見てきたわけでない。
気を集中して魔法の出方を感じで、まるでどこから出てくるのか分かっているかのように次々と交わし続ける。

「何ィ！？」

自分が使用する魔法がこうも防がれるなど有り得ない。
いくらなんでも強すぎる。
桂はアプチの術式魔法を交わしながら、左脇に身に付けている鞘を抜いてそのままアプチに向けて投げ出す。

「ちぃ！」

アプチは『紅桜』で打ち返すように鞘を砕き斬る。
その隙にと、桂は凄まじい速さでアプチの目の前に移動し、

ズバァ！

「グォォォォ！？」

アプチの胴体を斬る。
だがアプチのすぐに反応してバックするが、皮一枚切れて血があふれ出る。

「な……何故急激にそこまで強くなれる!?一体何が貴様をここまで!!」

アプチは先ほどから桂の急激な成長による圧倒的強さが気になってしまう。
確かに桂は銀時同様、攘夷戦争の時の戦いの記憶が体の中で読みがえれば銀時の『白夜叉』としての力に匹敵する強さを発揮する。
それは桂もゾーマを倒そうと思えば倒せる程の力に。
だが今回の桂はそれだけではなかった。

「貴様には分かるまい…確かに人間は貴様等戦闘機人に比べればはるかに衰えるもろい存在……。だが、侍は違う!」

桂は刀をアプチに向けてはっきりと言い出す。
侍としての強さを。

「己の大切なものを護る為なら、その強い信念を己の力に変える武士道を持っている……!異世界に来てずいぶんと経つが……この場でようやく思いついた、己が護るべき大切な存在を!!」

ここ最近、『鬼兵隊』をどう対抗すべきかを考えていた桂。
しかしそのせいか、ミッドチルダに来てすぐに見つけた己の大切なものにまったく気づいていなかった。
それが、はやてである。

この世界で共に過ごした彼女の思い出が、今の桂の中に浮かび上がっている。

そして桂は、彼女を護る為……そして彼女との誓いを果たす為に負ける訳には行かなくなったのである。

「ただ己が欲望の為、仲間を食らい付いてまでその禍々(紅桜)しい力を増幅させようとする貴様に……けして分からぬ！」

「ほざけェェ！！」

激怒し、噴火の如くにアプチの猛攻撃が炸裂する。

『紅桜』を振る度に強い風圧が起こる。地面が砕けて割れる。

そんな剣撃の嵐の中、桂は刀で捌き続ける。

止まることの無い紅桜の攻撃でも、桂はアプチの懐に入る。

体制を低くして、刀を下斜めから大きく振り、アプチの胴体を斬る。

「ぐはぁ！！」

大量にアプチの体から血があふれ出て、桂は一旦離れだす。

あまりの激痛にアプチは倒れて、転びながら斬られた所を押さえ込む。

桂はこの隙にと一気に止めを誘うとするが……

「がぁあああ！！！」

突如、アプチが悲鳴を上げる。

これには桂も驚きだし、何があったか気になりアプチの様子を見る。

「か…体が…！が……ぐ…」

口から涎を垂らし、冷汗を流して苦しむ。
しかもなにやら徐々に体がムキムキとうねるかのように動き出す。

「アアアア

しかもそうなれば、もう取り返しの付かないほどに体が支配されて使用者の人格も支配される。
そして完全に体を侵食された者は、『紅桜』に殺戮魔神として操られ生きた屍人形のように操られてしまう。

それが機械化（からくり）してでも『紅桜』が妖刀として呼ばれる最大の理由である。

今のアプチは、すでにアプチではない。
侵食と言う名で『紅桜』に魂を抜き取られて生きた屍と化し、完全に『紅桜』に侵食された存在である。
そしてそれこそが『紅桜』の完全版であり、究極の剣とも言われる妖刀。

「がぁあああああああああああああああああ！！」

アプチが『紅桜』上に上げて、一気に振り下ろす。
その検圧は地面を大きく割り、離れた桂まで斬撃が届く。

「ちぃ！」

桂はそれを交わすが…

「アアアアアア！！！！！」

アプチが左腕から大量に侵食されたコードを鞭のように振って桂に攻撃する。

「ぐはぁ！！」

そのコードに吹き飛ばされる桂。
完全態の『紅桜』は、遠距離攻撃にも優れるようになる。
頭から血を流しながら桂が立ち上がる。
しかし、今のアプチは『紅桜』に完全に支配された化け物であるが、先ほどよりかなり厄介な相手となった。

「これが、『紅桜』の真の力か！」

こんなのを銀時は相手にしたのかと、桂は驚く。
しかも『鬼兵隊』がこんなのを何本も作る計画を立てているなら…
そうなれば間違いなくミッドチルダはもちろん江戸も火の海と化してしまう。

「ゴォオオオ！！！」

アプチが突如吠えると、桂に向かって突進する。
連続に振るいだす『紅桜』。その一撃一撃が先ほどの比ではないほどの威力と速さを持つ。
それが『紅桜』が完全態となった力の証であり、桂も攻撃をする暇もない。
さらに言えば、全てを交わし捌きだす事もできずにかすり傷程度でも『紅桜』相手ならそれでも血が結構出る程の傷となる。

しかも左手のコードが鞭代わりとなって桂が離れていても遠距離攻撃を可能にする。

その圧倒的強さは、まさに生命型ロストロギアそのものだった。

桂が離れる銀時に紅桜を振る。
刀身を伸ばしてない紅桜では届かないが、桂は自身に迫る殺気を感

じて体を反らした。
直後、桂の頬を見えない何かが掠めた。後ろの壁に音を立てて斬撃の跡が残る。

「ちぃ！！」

さらに左腕の触手のコードを豪快に振って桂を襲うが、桂は飛翔して交わす。

「はぁ！」

そしてそのまま落下速度に乗って刀を振るうが、アプチは『紅桜』でそれを防ぐ。
そのまま弾き返して桂を吹き飛ばすが、桂は倒れずに着地する。
すぐさまアプチを見て突撃しようとするが、

「ガァアアアアアアアアアアアアアアア！！」
「何！？」

アプチの『紅桜』の刃が紅色に光り輝きだして、刀身がさらにと言うばかりに徐々に大きくなる。
その大きさは先ほどの3倍はある。

「馬鹿な！？なぜ完全状態の紅桜がここでさらに成長を……もしや！」

一体どうしてまた強くなったかを不思議がる桂。
しかしその原因が分かった。

「紅桜は、使用者の体だけじゃなくその魔力をも侵食し己が力に変

える事が可能なのか！？」

先ほどから刀身から光っている色、と言うより刀身に包まれている紅色の闘志らしき存在。

その正体は、アプチの体に宿っていた『アテリマ』の魔力であり、『紅桜』の影響でその魔力が紅色になっている。

そう、『紅桜』が侵食していたのはアプチの体だけでなくその魔力である。

その魔力が『紅桜』に更なる栄養として力を増幅し、完全態から更なる上に行く脅威と化した。

もはや妖刀と言う名では生優しい。

あれはスバルが使用する『七星神刀（しちせいしんとう）』と並ぶ魔剣である。

「アアアア

血だらけの桂がいた。

（…俺1人では、勝てぬ相手だったと言うのか……やはりあの『紅桜』相手を足止めしようとするなど……愚かな選択だった訳か……）

『紅桜』が魔力を侵食してさらに強くなると言う事は予想外である。さすがの桂でも、そんな相手に1人では無謀であったのかも知れない。

（どうやら…俺もそろそろ……かつての仲間達の下へ……）

徐々に意識が薄れていき、己の死が迫ってきたと確信する。
元の世界の国を変える事どころが、『キザラキ』の野望を打ち砕けなくなった事には無念だが、自分は精一杯戦った。
後は仲間に任せるしかない。
ゆっくりと眼を瞑って武士としての最後を迎えようとする。

＊＊＊

「絶対に来る事を信じているから……桂さんも絶対に死なないで！！」

＊＊＊

「！！」

頭の中で思い浮かべるはやてのひと言。
そして自分の為に涙を流したはやての悲しみの表情。

桂の頭からそれが突如、思い浮かべだすと刀を地面に付き杖代わりとして…強引でも立ち上がる。

「……ねぬ……」
「グゥ？」

体中からあふれ出る大量の血。
普通の人間なら絶対に起き上がれない状況でも、桂は起き上がる。

「俺は……絶対に死ねぬ！」

彼女との誓いを果たす為、己の武士道を進みだす為に桂は起き上がる。
はやての存在が、桂を人として、そして侍として強くさせている。

「俺には、俺を待っている仲間がいる……その者達の為にも、絶対に死ぬ訳には行かない！」

仲間との絆が、桂を復活させた。
仲間がいるからこそ、桂は立ち上がれるのだ。
侍と魔導士同士でも、信じあえばそこに絆が生まれる。

「紅桜だろうが、ジェノバ・キメラだろうが……」

再び構えだしてアプチを睨みつける。

「己の大切なものを護るならどんな敵でも……斬る！！」
「グォオオオオオオオオオオオオオ！！！」

アプチは『紅桜』を豪快に振るい、魔力が包まれた斬撃を放つ。
しかし桂はそれを交わしてすぐさまに走り出す。
理性を失っても、目の前にいる敵を潰そうとアプチは触手を無数に分けて一斉攻撃をする。
だが桂が目にも止まらぬ速さで素早く刀を振るい、次々と触手を斬る。

重傷を負っているのにもまだこのように動けるのも、侍としての屈強なる魂を持った者だからこそ持てる力。

「ヴヴ……デェアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

アプチは『紅桜』を豪快に振るうが、それでも桂は体制を低くして刀でその攻撃を捌き、そのままアプチの懐まで入る。
そして今持てる力を刀を持っている両手に強く込め……

「天誅ゥウゥウゥウゥウ！！！！」

ズパァーン！！

渾身の力を込めた神速の一太刀がアプチに炸裂し、アプチの胴体は左斜めに斬られてしまった。

「ごふぁあ！！」

斬られた所から大量の血があふれ出ると、アプチの肉体の周りが血の海のようになってしまった。
如何に紅桜と言えども、使用者の肉体がこれではもうどうし様にもならない。
だが万が一の為にと、桂は懐から球型爆弾を取り出した。

「こんな物は存在する訳にはいかん」

そう言って、その爆弾を『紅桜』に向けて投げる。
するとその爆弾は大爆発して、流石の『紅桜』も粉々となってしまい跡形もなく無くなってしまった。

「万が一の為に、はやてに魔力を込めさせて威力を上げたかいがあったか……」

安心感に満ちると、桂はガクッと体制を崩す。
無理もない。桂の今の状況はいつ倒れてもおかしくはない。
このままではと不味い為、桂は懐から新たなんまい棒『穂雌癒（ポーション）』を口にする。

それはミッドチルダ製のんまい棒の一種であり、食べると徐々に傷を癒すいわば回復アイテムである。
特殊な傷止め薬草を何種類も材料にしている為、万能的な緊急治療薬としても使用できる。

薬草の効果なのか、桂の体の傷が少し治りかかって出血も止まった。

「……行かなくては…はやて達が、待っている……」

強引でも桂は刀を杖代わりとして、体を動かしてはやて達の所に向かう。
一刻も早くはやて達と合流して、援護しなければと。
残すは生命型ロストロギア、コクメン1人だけ。

銀八
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生!!』』

銀八
「へぇい、前回は『銀八先生コーナ』はお休みでしたので…今回からちゃんとさせてもらいます。今日のアシスタントはこの人」

月詠

「死神太夫、月詠じゃ」

月詠は煙管を加えながら挨拶をする。

銀八

「久しぶりに彼女も登場しました。まったくヅラの野郎のせいで出番が少ないからヅラの奴がぶっ殺してぇ程にくいだろうなこんチクショー」

月詠

「いや、それ主の思いじゃろうが！！」

登場して、さっそく銀八のボケに対して呆れてツッコむ月詠。

銀八

「んじゃ行くぞぉ、まずはこの人…ペンネーム『月光閃火』さん『1．ヴァイスに質問…っていうかリクエスト。グラハムのモノマネやって♪

2．スバキに質問だ。ぶっちゃけ、『シャマル鍋』を食べたらどうなるんだ？』」

ヴァイス

「未来への水先案内人は、このグラハム・　エーカーが引き受けた！」

さっそくグラハムの命台詞を言い出した。

一応、モノマネっぽくしたようである。

スバキ
「絶対却下！！マジで勘……」

銀八
「チェストー！！」

べちゃ！！

スバキ
「んぎゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

『シャマル鍋』をぶっ掛けられたスバキは気絶して倒れた。
あまりの不味さに絶望的表情が見れるが、特に変化は無かった。

月詠
「……むご過ぎる」

あまりの残酷な光景に月詠は青ざめる。

銀八
「という訳で『月光閃火』さん、廊下に立っていなさい。次ィ、ペンネーム『白米』さん『質問

刃「第百十訓で私の質問に答えてくれた銀八にプレゼントを送ろう
『黒イモリの燻製』と『ハブ酒』だ。受け取れ」

武「ついでに俺から、『サソリの唐揚げ』と『カブトムシの幼虫のエビチリ』を送るぜ」

刃「なお、受け取らなかったり、銀八自身が食べなかった場合は……」

武「即刻『お仕置き道場』行きだから、覚悟して食うように！」『……』

銀八の目の前には、黒イモリの燻製とハブ酒とサソリの唐揚げ、そしてカブトムシの幼虫のエビチリがあった。
どう見たって人間が普段食べない代物である。

月詠
「……あのう」

銀八
「チクショー！！」

銀八は勢い任せに全て食べつくす。
黒イモリの燻製とサソリの唐揚げ、そしてカブトムシの幼虫のエビチリはハブ酒で流し込むように飲み込んでいる。
原因はお仕置きを受けたくないからである。

そして全て食べつくした銀八は、気絶して倒れてしまった。

月詠
「……『白米』さん、そう言うのは控えめに」

月詠は煙管を口から取り出して、煙を吐く。
そしてそのまま次の質問に進める。

月詠
「次は、ペンネーム『烈火竜』さんからじゃ。『〜フェイトに質問〜【真選組ＳｔｒｉｋｅｒＳ】でキャロがゾーマとローションプレイをしたという事実についてどう思いますか？
〜エリオに質問〜
月詠と神楽、どっちとローションプレイをしたいですか？（できればキャロの側で答えてください）
〜なのはに質問〜
『豚町なのは』や『なのはババ』等と言う【ＤＲＡＧＯＮ　ＮＡＩＬ〜竜の爪〜】の光翔竜に対する殺意はどれくらいありますか？』」
フェイト
「Ｎｏｏｏ

キャロ
「エリオくぅぅぅぅぅん」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

エリオ
「あ痛たたたたたたたたたたたたた！！」

キャロはとてつもない殺気を放ってエリオの耳を引っ張りながらこの場から離れていく。
その後、エリオの悲鳴が響きだしたのは言うまでも無かった。

なのは
「光翔竜殺ス光翔竜殺ス光翔竜殺ス

あまりの怖さに、月詠はスルーして『烈火竜』に注意報告をする。

月詠
「次はペンネーム『夜叉龍』さんからじゃ。『銀さん。銀八先生に質問。天パーてつらいですか？自分も天パーですが気にしてません。個性として受け止めたらどうですか？』……」

銀八
「そ……それは俺が代表として答えるぜ」

青ざめながらもゆっくりと立ち上がる銀八。
月詠もようやくかっと呆れて溜息を吐く。

銀八
「原作や数多くのクロスオーバー系小説だと馬鹿にされるのでつらいです。という訳で『夜叉龍』さん、廊下に立っていなさい」

月詠
「やっと起きたか……次はこの者からじゃ。ペンネーム『鳴神ソラ』さん『マリオ「銀時に質問『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神の自分（銀時）のＢＪはどう思う？』」

ルイージ「ヴィータちゃんに質問『自分的にパワーアップするならどう言う感じになると思う？』」

フォックス「なのはに質問『ここん所の自分の出番の少なさにどう思う？』」

『」

銀時
「何かもう、あっちの俺も大変だなぁ」

大変な思いとしか見えない銀時。

ヴィータ
「出来ればナイスバディで巨乳スタイルを！！」

月詠
「いや、それはパワーアップするじゃなく自分の理想の姿じゃろうが！！」

ヴィータのパワーアップイメージにツッコむ月詠。

なのは
「黒神ーーーーー！！出番が少なすぎなのォォォォォォォォォォ！！！（怒）」

黒神
「レインボー・スター！！」

黒神は『レインボー・スター』から放たれる特殊な魔法壁で、なのはのデスペレード・デモンブレイカーを防ぐ。
なのはは不安そうに舌打ちをする。

銀八
「あんな感じですね…というわけで『鳴神ソラ』さん、廊下に立っ

ていなさい。んで次ィペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『？今出番がない人に質問です．何やっているんですか？（ウッソ）
？黒神さんに質問です．『レインボースター』っていったいどこから来たの？（かがみ）
？なのはさんに質問．なのはさんの脳内ってＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩと銀さんのことしかないんですか？（こなた）』」

月詠
「三つのうちはなのはに対する刺激質問じゃけどォォォォ！！！！」

ありえないと言うばかりに月詠は青ざめる。
すると後ろからなのはがとてつもない殺気を放って……

なのは
「にゃはははは……２人とも黒こげになれば言いなのォォォォォ！！！！」

と最凶魔法の『デスライト・スタージャッチメント』が炸裂して、漆黒の極大な魔力砲と無数の桜色の魔力砲が混ざり合って２人のところに向かう。

銀八
「……もう？は答えちゃったよこの子……まぁ言いや。？は月詠が代表としてお願いします」

月詠
「わっちは別に気にしておらぬが、なのはの用に相当怒りを表している者もおる」

銀八

「そうだなぁ……ちなみに黒神もお願いします」

黒神

「これはここの小説に感想してくれた真王さんから貰いました」

とはっきりと答える黒神。

その証拠にと、虹色に輝く星『レインボー・スター』をウッソ・エヴィンさんに見せる。

銀八

「はい、ありがとう。という訳で『ウッソ・エヴィン』さん、これからも質問よろしくね」

月詠

「次が最後じゃ、ペンネーム『クアンタ』さんからの質問『質問です。

？ヴィヴィオに聞きます。今のところ誰かがママだったらいいですか。

？山崎とディエチがデートしていたら、近藤以外の新撰組の人達はどのくらいの規模でデートの邪魔をしますか。将軍の護衛以上の規模ですか。』」

ヴィヴィオ

「うーん、最も親しみやすいスバルお姉ちゃんかなぁ？」

そう答えるヴィヴィオ。

それを聞いた月詠は少し、ショックを受けて落ち込む。

山崎

「ゐゐゐ

第百十三訓：大切な人の為に戦うのは何より強い（後書き）

銀時・神楽
『『てめェは無駄に目立ちすぎじゃアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！』』

ドカァ！！

桂
「がふぁああ！！」

今回の『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』を見た銀時と神楽は、怒り任せに桂を吹き飛ばした。

はやて
「次回、『自分勝手の野望は間違いなく邪魔されやすい』テイクオフや！」

第百十四訓：自分勝手の野望は間違いなく邪魔されやすい（前書き）

この度、ユーザ登録してない読者の荒らしが発生しました。

その読者の名は高山太郎。

他の読者の気を悪くする最低な読者です。

読者の怒りを買うような読者は、読者ではなくただの害虫です。

その為、今回から感想をユーザ限定に設定変更しました。

ユーザなしでも僕の小説に乾燥してくれる皆さんには大変申し訳ございませんが、これも下等な害虫こと高山太郎の荒しを防ぐため、ご協力をお願いします。

黒神

「読者の敵は僕の敵でもあります。と言う訳で『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百十四訓：自分勝手の野望は間違いなく邪魔されやすい

地下中心部

周りは瓦礫のように崩壊しかかっているような建物内。
その中心に開いている巨大な穴の深くには『キザラキ』が求めていたものがあった。

漆黒の球体をしているが、膨大な魔力が感じ取れる魔力砲玉。

それこそがアルハザーナによって生み出されたロストロギア、『ブラック・アテリマ』。
その『ブラック・アテリマ』を見て、コクメンは喜びを感じ取る。

「ついに見つけたぞ……我が望みを適える宝玉よ」

漆黒の鎧に背中に背負っている長刀。
その男こそが生命型ロストロギアの1人、コクメンである。
禍々しいその存在は、魔力が人としての形で存在していると思ってしまうほどとてつもない威圧感を持っている。

そんなコクメンがついに『ブラック・アテリマ』を手にしようとする時だった。

「待て、コクメン！！」

コクメンの背後から、扉が大きく開かれる轟音が響きだした。
その扉の中からツバキが先頭に出てエリザベス、ヴィータ、はやて、

リィンが現れる。
全員、コクメンの背後を見るだけで感じる。

コクメンから放たれる圧倒するかのような威圧感にその闘志。
これはゾーマをはるかに上回る威圧感で、気を抜いたら重圧（プレッシャー）だけでも殺されそうである。

『てか何かアイツ、『ブレ○ブルー』に出てくる○クメンじゃねぇ!?』
「そういやぁそうやなぁ」
『『て、そんなのどうでも良い（わァ）（ですゥ）！！』』

エリザベスとはやてのボケに鋭くツッコむヴィータとリィン。

「コクメン、アンタの野望も砕かれる時が来たのよ！！」
「……ほう、誰かと思えばホーリーが追い出したジェノバ・キメラの娘ではないか。貴様のような小娘が良くここまで来たものだ」

スバキが来る事に予想外だと驚くコクメン。

「それに貴様等も良くぞ我がキザラキのジェノバ・ナイトの軍勢に屈指ずにここまで来れた。人間のみでありながらもその強さは褒めてやろう」
「アンタみたいなとんでもない人に褒められても嬉しくないんや！！」

コクメンの言葉に反抗的に答えるはやて。
今までコクメンがやってきた事を許せないのである。

「だが、貴様等のメンバーを見る限り1人足りないようだが……ど

うやら桂小太郎はアプチと1人で足止めしていると見る」

そう、桂は現在アプチと交戦中である。
仲間達の足止めをする為に1人でアプチと戦っている。

「愚かな、如何に英雄と言えども人間の身でありながらあの禍々しき剣の形をした兵器を使用するアプチ相手に1人など……あの男、仲間の為に犠牲になるつもりか？」
「うっせぇ！！ヅラはあんな下衆野郎に負ける奴じゃねェンだよ！！」

桂の無謀な行為に呆れるコクメンに、ヴィータが怒り出して怒鳴りだす。

「確かにアイツは馬鹿でクールボケで、そんでありえねぇ程の人妻好きなボケ野郎だけどよぉ……銀時と同じ侍の魂を持っている武人でもあるんだぞ！！」
『うちの主を甘く見るなよ、このパクリハクメン野朗』

桂の侍としての本当の強さを誰よりも分かっているヴィータとエリザベス。
はやてとリィンも近くで一緒にいるので分かっていて、スバキも桂の事を信じている。

「それに私達はアンタに聞きたいことがあるんや！！アンタがアルハザーナの人にジェノバ・ナイトとして作られた事を高杉晋介から聞かされたわ！殺した理由は聞かへんけど、何でこの星を滅ぼしてまでブラック・アテリマを欲しがるんや！！」

高杉達から聞かされたコクメンの正体。

そしてその目的である新たな星を作る理由をコクメンから聞き出そうとする。

「黒き獣め、むやみに喋りまくったようだが……まぁ良い」

コクメンは開き直ってその理由を言い出す。

「この星は腐っている。ジェノバ・ナイトもジェノバ・キメラも、かつては人間共と共存して生きていく事を決意した。しかし……人間共は我等を拒絶したのだ。人間の常識を超えた強さに怯えたあげくに、我等を化け物呼ばわりして数多くのジェノバ・ナイトとジェノバ・キメラは『アテリマ』の力を身に付けた人間共によって数多く崩壊された……その中には、ジェノバ・キメラの身でありながらも人間よりも人間らしく生きてきた私が愛した者も……」

怯えていた人間の拒絶により、コクメンは数多くのジェノバ・ナイトやジェノバ・キメラを失った。
中には友として信頼した仲間も、愛した者もそんざいする。
するとコクメンの右手は強く握られていて、人間の生身であれば血が出るほどの力を出している。

「だから我は作り出す!!ジェノバ・ナイトやジェノバ・キメラだけが住む理想の楽園の星を!!その為には『ブラック・アテリマ』が必要なのだ!!」

これはコクメンのゴスモスに対する復讐であり、自分達ジェノバ・ナイトやジェノバ・キメラの理想の楽園を作り出す為の計画である。
コクメンの話を聞いたはやて達は、コクメンも嫌というほどの絶望を味わってきたと動揺して悲しむ。
しかしだからと言い、この星に住む人間や生き物達を道ずれにして

良いとは限らない。

「……アンタの気持ちはわかるよ。私だってジェノバ・キメラの身であったから化け物呼ばわりされた事はすごく辛いと思っている。けど……」

スバキは構えだしてコクメンを睨みつける。

「それでも貴方にこの星は破壊させない！だって今そんな事したらやっと出来た私の大切な仲間が死んでしまうから！！」

コクメンの辛さを理解する以上に、自分の大切な仲間を護りたいスバキはコクメンの野望を阻止する。
はやてとリィンも、ユニゾンして光りだす。
そして光の中からリィンとユニゾンしたはやてが現れる。

「私やってそうや！！魔導士としてでも人間としてでもなく、スバキの仲間としてアンタの好き勝手にはさせへん！！」

スバキの護るものは仲間として一緒に護るはやて。
それはエリザベスやヴィータも一緒である。

『お前の野望ごと砕く』
「これからスバキは幸せになるんだよ……だから、てめェに邪魔させてたまるかぁ！！」

エリザベスは口から刀を出して構え、ヴィータも『グラーフ・アイゼン』を構える。

「面白い、ブラック・アテリマを手に入れる前に儀式の準備運動相

手にさせてもらおうか」

するとコクメンは背中に背負っている長刀を抜き出して構える。
その長刀は赤と黒の混色であり、少し赤色が強いところが刃で黒っぽいのが峰である。

「我は闇、我は虚、我は剣、我は一振りの剣にて全ての的を刈り取り『魔』を滅する！！」

徐々にコクメンの闘志が浮き上がって、魔力も膨大にあふれ出るかのように剣から赤黒いオーラが現れる。
コクメンは己の剣に己自身の魔力を全て剣に注げる。

「我が名はコクメン、押してまいる！」

すると大地を強く蹴って凄まじい速さで突進する。
そして豪快に剣を大きく振るうと、はやて達は急いで交わす。
しかもその剣は斬るというより凄まじい勢いで地面を抉り掘る勢いで、斬撃が地面を走り壁に衝突して大爆発する。
圧倒的な力にはやて達は驚きだす。

「ぐ……雷光の波動ープラズマ・バースト！！」

スバキは右手から稲妻の魔力砲を放つ。
しかしコクメンは刀を豪快に振り、稲島の魔力砲を斬って消滅させる。

「なぁ！」
「この程度の術式魔法など通用せぬわ！！」

コクメンは左手から巨大な赤黒い魔力弾を放つ。
それがスバキに襲いだすが、

「どっせぇぇぇぇぃぃ！！」

ヴィータが豪快に『グラーフ・アイゼン』を振って魔力弾を打ち返した。
しかし今のはＡＡＡランク以上の魔力が篭っているので、打ち返したヴィータも辛そうである。

「ほう」

今のを打ち返したヴィータを少し評価するコクメン。

『チェストォォォォォォ！！』

鉢巻で言葉を表すエリザベスは次元流風に刀を豪快に振るう。
コクメンはそれを交わすが、コクメンのいた背後の岩は一刀両断される。

「うむ、中々やるな」

そう言ってコクメンは刀を素早く振るう。
エリザベスはそれを刀で受けるが、あまりの剣圧に後ろに押されてしまう。
まるでハンマーで叩かれたような衝撃であった。

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック・エミッション！！」

するとはやては球状の魔力を発生させ、それを一気に巨大化させて

コクメンの範囲内に発生させる。
リィンとのユニゾンで、コントロールができる。
後は一気に爆発させるだけだが、

「はぁ！！」

スパァーン！

何と、『デアボリック・エミッション』がまっ二つに斬られて爆発もせずに消滅した。

「何やって！？」

これにははやても驚きを隠しきれない。
コクメンはそのまま剣を構え、

「消えよ！」

剣を横一線に振るい、その斬撃が放たれてはやてを襲う。
はやてを護ろうとスバキが前に出て術式魔法を放つ。

「大地の石壁ーガイア・ガードナー！！」

両手の平を地面に叩きつけると、スバキの目の前にかなり分厚い壁が現れる。
これで防げると思ったら大違いである。

ドカァーン！！

「うぁあああああああ！！」

「きゃあああああああああ！！」
《いやあああああああああ！！》

分厚い石壁が斬撃と直撃して大爆発し、斬撃は消えたがその爆発の衝撃で2人は吹き飛ばされる。
相当なダメージを受けたのに違いない。

「はやてェ、リィン、スバキィ！！」
『これを食らえやァァァァァァァァァァ！！！！』

ヴィータが悲鳴的な叫びをする中、エリザベスが口から大量の球型爆弾をコクメンに向けて吐き出す。
いくら刀で全て防いでも、その爆発は防げない。

ドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカァァァァァァァ！！！

大量の爆弾が一斉に大爆発し、コクメンを包み込む。
ヴィータもやったかと確信する。
流石のコクメンでも、あの大爆発からは逃れる事はできない。

だが、

「小細工はこれで終わりか？」
『馬鹿な！！』

爆炎の中から、豪快に剣を振ってその爆炎を薙ぎ払うかのように消すコクメンの姿が現れた。
多少のダメージは受けているが、致命的というほどではなかった。
そしてコクメンは刀を構えると、

「はァァ！！」

豪快に振って赤黒い斬撃がエリザベスを襲う。
エリザベスは刀でそれを防ぐが、刀は折れてエリザベスは吹き飛ばされた。

ドカァァ！！

「エリザベスゥ！！」

壁と衝突したエリザベスにヴィータは思わず叫びだす。
エリザベスは無事だが、ボロボロとなって鉢巻には『む…無念』と書かれている。

「……てめェ、絶ってぇにゆるさねぇ！！！！」
《Ｉ ａｍ ｉｎ ｔｈｅ ｂｉｇｇｅｓｔ ａｔｔａｃｋ ｆｏｒｍ ａｎｄ ｍｏｖｅ！！》

『グラーフ・アイゼン』がヴィータの怒りに反応し、身の丈の１０倍以上に巨大化する。
これはヴィータの最強の魔法が発動する条件である。

「轟天爆砕！」

ヴィータは思いっきり飛び込んで、巨大化したハンマーを強く握り

締めて構える。
仲間を傷つけたコクメンに対する怒りを込めた一撃が炸裂する。

「ギガントシュラァァァァァァク！！！！！！」

渾身に放たれた一撃は、ヴィータが今まで放った『ギガントシュラーク』の中でも最大級の威力である。
しかし……

「はぁあああああああああああああ！！」

コクメンは己の闘志を刀にさらに加えるように、刀に包まれた闘志が大きくなる。
するとその刀はヴィータの渾身の『ギガントシュラーク』を受け止めてしまう。

「なぁ！？」

ヴィータは信じられない程に驚く。
コクメンの足場は、少し地面に埋もれて回りに小さな石柱が無数に立っている。
そして『ギガントシュラーク』を受け止めた刀を持ち上げるように……

「おおぉぉぉぉ！！」

ガキィーン！！

「ぐぁあああああああああああああ！！」

『グラーフ・アイゼン』ごとヴィータを吹き飛ばす。
しかもその衝撃は『ギガントシュラーク』が跳ね返されたような勢いでヴィータを襲いだす。

「まさか、このような娘ごときがこれほどの魔法を……だがまだ浅い。一滴の怒りの一撃など、長年の憎悪に染まった我にはまったく効かない……」

コクメンにかかれば、一瞬でも本気出せばヴィータなどヒヨッコ当然である。

「所詮は一瞬だけの一撃であったな……哀れな小娘よ、己の弱さを思い知るが良い」

そう言って、コクメンは一気に刀を振り下ろして倒れているヴィータを斬ろうとする。
しかし、

「その一瞬がアンタの命取りや！！」
「！？」

突如、はやてが叫びだしてコクメンは思わず振り向く。
振り向いた先には、目の前に白い魔法陣を展開するはやてと、両手を挙げてそこからとてつもない魔力を収束させているスバキがいた。

「今こそ、究極術式魔法を貴方に放つ！！」

スバキが放とうとしているのは、究極術式魔法と呼ばれる術式魔法の中でも最強と言われる魔法である。

「響け、終焉の笛！！」

はやても魔方陣から莫大な魔力を収束させる。
２人の最強の魔法が、同時に放たれようとする。

「ラグナロク…」
「終焉の極光…」

「ブレイカー！！」
「エンド・アルテマ！！」

白き極大魔力砲と翡翠色の極大魔力砲が同時に放たれる。
スバキが放った究極術式魔法『エンド・アルテマ』も、なのはの『スターライト・ブレイカー』やスバルの『エア・アルテマ・ギガブレイカー』に匹敵する威力を持つ。
コクメンは２つの魔力砲に驚きだき、守りの構えを素早くする。

「ぬぉおおおおおおおおおおおお！！！！」

ドカァァァ

極魔法を食らえば無事ではすまないであろう。

「やったんか！？」

はやてはコクメンはこれで倒せたかと気にする。
爆発による煙が徐々に小さくなる。
そして完全に消えていくと、そこには刀を杖代わりとして立っているコクメンがいた。

「そんな！！」
「私達の最強の魔法でも倒せないって訳！？」

コクメンの頑丈な防御力にはやてとスバキも驚愕の表情を浮かべる。
しかし効いていない訳ではない。
鎧が少しボロボロとなっていて、外見以上にコクメンに与えたダメージも大きい。

それでもコクメンはゆっくりと近づいてきて、刀を強く握りだす。
逃げ出したくても、『キザラキ』のアジトに潜入してからのこれまでの疲労が一気に2人を襲いだし、さらに全ての魔力を使い尽くした2人はもう自由に動けなくなっていた。

「貴様等ごときに、この私が倒されるなど……」

そのままゆっくりと刀を上げて…

「ありえぬわぁぁぁぁ！！」

そのまま大きく振るう。
はやてとスバキは死を覚悟して眼を瞑る。

ガキィーン！！

自分達を襲う刃が、自分達の所に届く前に何か金属と直撃する轟音が響く。
はやてとスバキはその轟音が響いたほうを振り向き、自分達の目の前にいる人物を見て驚きだす。

黒い長髪に血塗られた着物を身に寄せた男が刀を持って、その刀でコクメンの一撃を止めている。

その男を見て、はやて達に希望が見えてきた。

『『桂さん（ヅラァ）！！』』

その男、『狂乱の貴公子』桂小太郎がギリギリの所で間に合った。
コクメンは桂が来た事に信じられない程驚愕する。

「遅くなってしまったが……どうやら間に合ったみたいだな」

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生！！」

山崎
「皆さんこんにちは。今回はこの俺、山崎退がアシスタントさせてもらいます」

銀八
「アンパンパワーで脇役脱出してこの小説の準主役まで昇りあがったこのザキがアシスタントしますので、彼が新八のようにオタクにならない事を祈りましょう」

山崎
「さっそく関係ない新八君にオタクいじめしやがったよこの人！！しかもアンパンパワーって何ィ！？俺全然アンパン好きじゃねェンだけどォォォ！！！！」

関係ない新八の悪口を言い出す銀八に山崎は青ざめてツッコム。
確かに現段階の原作の進みでは、彼はオタクと堕ちてしまい、作者の黒神もこのままじゃ侍としての新八の印象が完全に消えてしまうじゃないかと心配するほどである。

銀八
「だってよぉ、原作じゃ新八は立派に……」

山崎
「触れないでおこう！！それ以上言ったら新八ファンの皆さんに申し訳ないからァァ！！」

さらに叫びだしてツッコミだす山崎のツッコミのキレの良さ。
真撰組一のツッコミ使いとしての名は伊達じゃない。

山崎
「……はぁ、じゃあさっさと行きますよ。まずはペンネーム『エターナル』さん『どうもエターナルです！早速質問！まずはリリカル女性陣に！もしも『ＦＡＴＥ／ＺＥＲＯ』のランサーとバーサーカーが来たら、勝算はありますか？

もう一つの質問！皆さんに質問です！とあるシリーズの中で好きなキャラは何ですか？』

リリカル女性陣
『『勝てない～～～

ードだ。俺からの質問がある
『一つ目、黒神さん白騎士物語をご存知でしょうか。もし銀時達が白騎士のアークを手に入れたら、誰に契約をしますか？俺の場合銀時かスバルがいいと思う。
白騎士のアークを一つプレゼントします本編で使ってください。
後、言いたい事が一つ、新八今すぐ逃げろ、勇者王が向かってる光にされるぞ』」『……レナード、新八（オタク）はもう勇者王にお仕置きされちまったぜ」

山崎
「ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ！！？新八君が何かあったのォ！？」

文字を間違えるほど驚く山崎。
しかしそんな山崎をスルーするかのように銀八が答えだす。

銀八
「質問の答えは、馬鹿作者にお任せします」

黒神
「そうですねぇ、銀時は確かにスバルの方が良いと思います。神楽と月詠はエリオ、桂ははやて、エリザベスはリィン、近藤はゴジラでザキはディエチ。他には……」

山崎
「てちょっと待ってエエエエ！！何で局長だけ動物なんだァァァ！？」

黒神
「そんな感じが良いかなぁと思って」

山崎
「何でぇ！？」

黒神
「という訳で『白騎士君』さん、他は貴方の創造でお任せします」

銀八
「へぇい次ィ、ペンネーム『真王』さん『リリス「そんなわけで質問行くよ。『新しく出た私、リリスとミーニャとアルラはどう思うのかな？』」」

ミーニャ「あたしも質問ニャ。『作者はランキングバトルで銀時達に称号を付けるならどんなのがいいニャ？アリマとスバキとアーサァも言うニャ』」

アルラ「銀時の好きな人たちに質問よ。『こっちの小説で銀時が女性化したことがあるけどそのときの感想はどんな感じ？』」じゃあ答えさせてもらいますか』

黒神
「じゃあ以下が僕に付けたい称号ですね」

銀時　天パの武人、ギントキ・ザ・ブラッドエッジ、ラグナ二号

フェイト　金色の露出死神、美尻露出の変態

スバル　ウブ凶王、準ヒロインの狸娘にセクハラされやすい少女、１５代目飛天御剣流継承者？

桂　狂乱のクールボケ

なのは　準ヒロイン

ティアナ　ツンデレブラコン

神楽　二年後巨乳美少女&酢昆布娘

エリザベス　銀魂のマスコット&ペンギンかぶれ

月詠　月下美女&悪酒女

はやて　準ヒロインの狸娘

ヴィヴィオ　父親甘え

エリオ　美少女好き

キャロ　ジェイソン二号

アルフ　狼気取りのメス犬

シグナム　爆乳だけとりでの女

ヴィータ　ツンデレロリッコ

シャマル　史上最悪の料理人&マスオ

ザフィーラ　まともな環境に恵まれない犬

リィンフォース　妄想娘

リィン　小さなツッコミ魔神

九兵衛　貧乳眼帯

近藤　ゴリラの化身

ルーテシア　小さなボケ魔神

スカリエッティ　変態大ボケ博士

アギト　忘れ去られている存在

辰馬　馬鹿１００％

山崎　元地味キャラの勝ち組

ディエチ　とにかく勝ち組

源外　長大ボケ発明家

猿飛　変態ドＭ

お通　下ネタアイドル

クリステル　ラグナ二号のアイドル

外道丸　外道その者

お登勢　老婆魔神

ヴァイス　災難・事故・被害に愛された男

ウーノ　疲労助手

ドゥーエ　原作の死者

トーレ　ゴリラのアイドル

クアットロ　とにかくサディスト王女

チンク　ロリ眼帯

セイン　少女オブ少女

セッテー　まじめ過ぎてつまらない存在

オットー　男娘

ノーヴェ　ツンデレ露出変態

ヴィンディ　『～っす』魔神

ディード　地味な武器使い

ガリュー　エリザベス二号

プレシア　大親馬鹿

ゲンガ　特に思いつかないけど、普通の人で

銀河　変態百合シスコン

ユーノ　最近存在感と出番０

アーサァ　魔導騎士

スバキ　中ボケ

アウサ　復讐の化身

黒神
「以上ですね」

山崎
「とりあえず…旦那のあだ名は絶対に旦那嫌がりますね」

銀八
「んじゃ、次の質問の答えどうぞ」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ヴィンディ・ディード・猿飛・ヴィヴィオ
『『絶対見たい（っす）（わ）（です）！！』』

やっぱり答えはいつもどおりであった。
銀八はすんごく不安な表情をする。

銀八
「……ええ、『真王』さん、次はもうちょっと楽に答えやすい質問の方が嬉しいです」

山崎
「次行きますペンネーム『夜叉龍』さんからの質問『シオ「あっ、質問。混汁ってどんな味だ?具体的にお願い。だめだったら送って・・」』……何えげつない希望をしているのォォォ!?」

山崎は青ざめて驚愕の表情をする。
『コーシカップ』の件で桂とはやてに無理矢理呑まされたあの不味い液体を知りたいどころが送って欲しいと頼むなどまず有り得ない。

銀八
「ああ、さっき俺が送りましたので自分で調べてください」

山崎
「何やってんのアンタはァァァァァァ!!」

銀八
「という訳で『夜叉龍』さん、『混汁』を間違えて飲まないように。でぇ次ィ、ペンネーム『黒龍』さん『黒龍「じゃ質問いきます。黒神さん、高杉達敵キャラがメインの話を書くと面白いと思いますけど、どうですか?」

アリス「そっちの銀魂メンバーとリリカルメンバーに質問だ。私の事をどう思う?ちなみに私のペットになりたい奴はいないか?」

ソラ「最後に俺だ。銀時は世界が滅ぶのを防ぐために混沌物質(カオスマター)を食

わなければいけなくなったら、食えるか？」

『』」

黒神

「高杉中心の話、いずれは作ります。そして次は……

リリカル銀魂メンバー全員

『『メッチャ怖いです！！』』

アリスの質問は、はっきりと全員そう答える。

銀八

「安心してください。俺達が無理矢理でも食わせますので」

山崎

「旦那……災難だな…と言う訳で『黒龍』さん、次の質問もお願いします」

銀八

「次ィ、ペンネーム『レイガン』さん『質問ですが。

1．もし真王さんのように、リリカルなのは、銀魂他にもう1つコラボさせたいアニメ又は、漫画はありますか？

2．ギンガさんにこれをあげます。

フェイトさんのプライベート写真をあげます。（フェイト本人は知りません。）

3．銀魂メンバーに質問です。

銀時除いて、なのは達のように魔導士になりたいですか？』」

黒神
「そうですねぇ、ブレイブルー、戦国ＢＡＳＡＲＡ、Ｆａｅｔ、けいおん、ＩＳ、遊戯王、恋姫†無双、その他たっぷりありますね」

ギンガ
「それをくださいィィィィィィィィ！！」

黒神はそう答え、ギンガは欲しい程興奮する。
やはり変態百合シスコンである。

神楽
「私はなりたいネ！！そして次回から『魔法少女　リリカル神楽ちゃん』が放送されるヨ！！」

桂
「そうだなぁ、魔導士の力も興味深いが魔法の力に堕ちる訳にはいかんのでな」

エリザベス
『桂さんに同じく』

月詠
「興味無しじゃ」

外道丸
「わっちも」

猿飛
「私には忍術があるから不要ね」

源外
「新しい機械(からくり)が出来るのなら使ってみたいわい！！」

近藤
「俺も桂と同様だ！魔法なしでも人間は強く生きていけるからな！！」

山崎
「俺も局長と同じく」

辰馬
「あはははは！そんなえげつのうないもんを使える様になっとうたらろくな最後が送れんぜよぉ」

お登勢
「魔法無しじゃ強くなれない連中とはなりたくねぇから良らないね」

九兵衛
「胸を大きく出来る魔法をォォォォォォ！！！」

以上が答えである。

銀八
「と言う訳で『レイガン』さん、銀魂のメンバーは魔法無しでも強くなれます」

山崎
「最後の質問を始めます。ペンネーム『私にいい考えがある』さんから、『椛

「今回は、あんまり感想じゃありませんが。質問に入ります、まずは私からアルフさんとザフィーラさんに質問です。
「Q：好きなドッグフードは何ですか？」です。ドッグフードって美味しいですね（パタパタ」

私に（以下略）　　椛
「やっぱ犬だろ、お前「狼ですってばぁ！！」」

ゆっくりまりさ
「じゃあ、二つ目は私が質問するぜ。
スバルに質問
「Q：起動六課には、身体検査ってのはありますか？」」『』」

アルフ・ザフィーラ
『『何か知らんがそんなもんを食うかァァァァァ！！！！』』

と激怒して答える。

山崎
「ですよねぇ（青ざめ）」

銀八
「そしてもう1つの質問は……」

スバル
「えっとう、…はやてさんから聞けばあるそうなんだけどぉ…」

苦笑しながらそう答えるスバル。

銀八
「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていなさい」

山崎
「以上持ちまして、今回の『銀八先生コーナー』は終了です。次回のアシスタントはディエチちゃんにさせてもらいます」

銀八
「それでは、次回もお楽しみィ」

第百十四訓：自分勝手の野望は間違いなく邪魔されやすい（後書き）

ついに桂がコクメンの前に現れる。

さらに思わぬ助っ人が登場する。

コクメンの野望をその刀で断ち切れ。

そして、コクメンの最後の力が発揮する！！

黒神

「次回「ラスボスは大抵二段形態を持っている」テイクオフ！」

第百十五訓：ラスボスは大抵二段形態を持っている（前書き）

いよいよラスボス戦が始まります。

圧倒的不利な状況で桂はどう対抗するのか？

ピンチの中で最強の助っ人登場。

そしてコクメンの真の力が解放される。

黒神

「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』、始まります」

第百十五訓：ラスボスは大抵二段形態を持っている

ついにはやての元に現れた桂。
まだ傷は治りきっていなくても、はやてとの約束を破る訳には行かぬと強い意志で体を無理に動かした結果、危機一髪の所でコクメンの一撃を食い止めた。
そして桂はその刀で受け止めたコクメンの剣をはじき返して後ろに下がる。

「桂さんですぅ！！」

リィンも思わず嬉しがってはやてとのユニオンを解除して桂に飛びかかる。
はやては桂の無事で思わず涙を流し、スバキは大きな安心感に満ちていた。

「良かったぁ、本当に良かったわぁ……」

桂が無事に戻ってきてくれた事に嬉しさのあまりに涙を流しているはやては、両手で涙を拭く。
そして桂は、はやてにゆっくりと近づいてその左手で優しく頭を撫でる。

「ずいぶんと心配させたな、はやて」
「…えへへ」

彼の手から感じる温もりに、思わず笑い出すはやて。
何だか甘い空気が感じ取る中……

ガコォーン！！

「ごふぁ！」

ドサァ！

『『桂さん（ヅラァ）！？』』

と、何やら横から『グラーフ・アイゼン』が投げられて桂に直撃した。

これには驚くはやて、リィン、スバキ。

一体何故『グラーフ・アイゼン』が投げられたかと言うと、投げた本人は言うまでもなくヴィータであった。

「……」

何かむすぅ～っと言うような表情をして小さな青筋を浮かべながら顔を真っ赤に染める。

「ヴィータ、何やっとるんや！？」

『てか何投げているの！？』

「……何か、ムカついたから」

乙女の嫉妬による活動。

いくらハンマー投げるのはやりすぎでも、ヅラの鈍さも哀れとしか言いようがなかった。

「ヅラじゃない桂だ」

などと桂達はいつものやり取りをしている。

そんな中、コクメンは桂の存在がどうしても信じられなかった。

「貴様……何気にお前がここにいる？アプチはどうした？」
「貴様がコクメンか…あいにくアプチは俺が始末しておいた。『紅桜』を放って置けばこの星に住む者にも驚異的な存在になるからな」
「馬鹿な…あの禍々しい兵器で更なる力を得たアプチが人間ごときに殺られるなど」

コクメンはアプチの強さは『キザラキ』の誰よりも知っている。
しかもそんなアプチに『紅桜』とか言う凶悪な破壊力を持った兵器を持たせれば自分と双璧となる強さを身に付けられるはず。
そんなアプチが人間である桂に負けたのである。

「信じるか信じないかは貴様の勝手だ…だがこれ以上俺の仲間を傷つけるのであれば、今この場で天誅を下す！！」

桂は鋭い目線でコクメンを睨みつける。
これだけ仲間を傷つけられて黙っていられる桂ではない。

「ほざけ、たとえアプチを倒したからといってその体ではまともに動く事はできまい」

コクメンの言うとおり。
桂の桂は、先ほど回復用んまい棒を口にして回復したとしてもまだ十分に力を発揮するほどに戦える状況ではない。
ましてや他のメンバーも力を使いこなしてしまってもう戦えない。
万事休すの所で、リィンがある決意をする。

「桂さん！リィンとユニゾンをするですぅ！！」
「ユニゾン？」

リィンのユニゾンの提案に桂は驚く。
銀時がリィンフォースとユニゾンしてパワーアップしたように、桂もリィンとユニゾンすれば本調子以上の力を得てパワーアップするであろう。

「私が桂さんの支えになります、だから……！！」

リィンは今こそ桂とユニゾンするべきだと確信し、自分とユニゾンして欲しいと言い出す。
これにははやて達も驚くが、それしか方法がない事は変わりない。
リィンの覚悟を見た桂は……

「承知した。協力を頼む、リィン殿」

そう言って、リィンの力を借りる事にする桂。
リィンは桂の刀を握っている右手を触れてそのままユニゾンする。
すると桂の周りが光りだして、誰もが眼を瞑る。
そしてユニゾンを終えると、そこには長髪が黒から銀色に変わってしまった桂の姿がいた。

「ほぉ、ユニゾン・デバイスの力でパワーアップしたか」
「ユニゾン・デバイスではないリィンだ。貴様の野望、今ここで打ち砕く！」
「ほざけぇ！！」

そのままコクメンは地を大きく蹴って桂を襲い掛かる。
凄まじい速さで一気に桂の目の前に移動してそのまま剣を豪快に振るう。
だが……

ガキィン！！

「何ィ！？」

それを片手で握った刀で防がれる。
今のは本気の一撃を炸裂したはずなのに、それがビクともしないほど軽く受け止められた。
桂の体中からリィンの魔力があふれ出て、その魔力を桂は己の刀に込めている。

「はぁぁ！！」

そのまま桂は豪快に刀を振ってコクメンを吹き飛ばす。
コクメンは辛うじて地に着地するが、桂は凄まじい速さでコクメンの所に突撃して、刀を振り続ける。

「ハァァァァァァァァァ！！！」

ガキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキン！！

一方的に攻めだす桂の連続剣。
だがコクメンも伊達に『キザラキ』の総長と名乗っている訳ではない。
桂の一撃一撃の剣を剣で防いでいる。

「ほぉ、魔力で強化しているとはいえ人間にしてはなかなかやるなぁ……だが甘い！！」

今度はコクメンが剣を豪快に振り、桂を吹き飛ばすが桂は軽く体を

回転させて綺麗に着地した。

「オオォォォォォォォォォォ！！」

そして魔力を込めた斬撃を放ちだす。
その斬撃は地を割って走り出しながらそのまま桂を襲いだす。
しかし、

《桂さん、ありったけの魔力を刀に！！》

リィンからその言葉を聞き出した桂は、その魔力を刀に込める。
すると刀に魔力のオーラらしきものが溢れ出る。
そして桂はそのまま刀を振るう。

「ふゥ！！」

スパァァァァァァァァァァン！！

コクメンの放たれた斬撃を、桂は綺麗に斬った。
割れた斬撃はそのまま桂達の左右に壁に直撃する。

「すげぇ……コクメンの野郎とまったく互角だ！！」
「行ける、今のヅラならあのコクメンだって！！」

ヴィータとスバキも希望が見え始めた瞬間だった。
その直後に、突如桂が光りだす。
光が消えると、何と桂とリィンのユニゾンが解除されてしまった。
そしてリィンは倒れてしまう。

『『リィン！？』』

桂達は思わず叫びだす。
一体どうして、リィンとのユニゾンが解除されてあげくにリィンが倒れてしまったのか？

「ご…ごめんなさいですぅ～……リィンはもう…限界がぁ…」

そう、リィンはすでにはやてとのユニゾンで大幅の魔力が消費してしまっている。
その為、桂とのユニゾンは5分も持たないのであった。

「ふ、どうやら万策尽きたようだな？」
「くぅ！！」

最後の希望の力がこうも長く続かないとは、己の命運もここまでなのかと思う桂。
コクメンはそのまま一気に刀を振ろうとするが……

ドカァァァァンン！！

「ぐほぉおおお！？」

突如、後ろから木刀が投げられてそれがコクメンに直撃する。
コクメンは思いっきり吹き飛ばされた。
その光景に桂達は唖然と驚く。

そして桂の目の前に落ちてきた木刀を見て、この木刀は誰のかすぐに分かった。

「おいおい、何かおっかねぇボスがいると思ってみりゃ…黒いハク

メンがここにいるなんて聞いてねぇぞ？」

ゆるい態度で喋りだして、ゆっくりと桂に近づく天然パーマの男。
万事屋の坂田銀時が登場した。

『『銀時（銀ちゃん）（銀さん）！？』』
「よぉ、主役の登場だこのヤロー」

ようやく主人公らしく最終決戦に到着した銀時は愉快そうに喋りだす。
だが今回のボスがまさかのブレイブルーに出てくるキャラ似の人物だとは思いもよらなかった。

「よぉ、ヅラぁ……ずいぶんと苦戦してやがるなァ？」
「ヅラじゃない桂だ……それより貴様の方こそどうした？テスタロッサ殿と一緒にジェノバ・ナイトを倒していたのではないのか？」
「ああ、何かフェイトとスバルにヅラ達の援護に向かって欲しいと頼まれてな……あそこはあいつ等に任せて俺はここに来たのさ」

フェイト達のほうも、『ジェノバ・ナイト』の数は少なくなっていき、フェイトとスバルがこの隙にと銀時に桂達の援護を向かって欲しいと頼んだのである。
その援護は正解であった。もし銀時が来なければ今頃桂も危ういところであった。

「すごい……あのコクメンを木剣投げだけであそこまで吹き飛ばすなんて……やっぱり伝説は本物だ！！」

スバキは伝説の英雄の底力に感動する。
桂も人間とは思えない強さを持っているが、銀時もまた別の人間の

常識を超えた強さを持っている事が分かる。
さらにスバキは、銀時に魔導師としての素質がある事に気づく。
なぜなら銀時はすでに専用デバイスを持っているからだ。

銀時が木刀を拾うと、突如コクメンが噴火の如くに立ち上がる。

「やってくれたな、人間の分際でぇぇ！！」

コクメンは怒り出して立ち上がると、さらに体中から魔力を増幅させるような勢いで体中から放つ。
異常なまでのこの殺気に、銀時は見覚えがある。
それはかつて自分が倒したロストロギア、ゾーマである。
だがコクメンの威圧感はゾーマをも上回り、あの夜王鳳仙に近い強さを持っているかもしれない。

「どうやら、今はてめェに文句言っている場合じゃねェなヅラ」
「ヅラじゃない桂だ。それに今の俺1人では奴を倒すことは不可能…力を貸してくれ、銀時」
「……しゃあねぇ、俺もここまでくんの相当苦労したから正直疲れてんだわ……しゃあねぇから協力してやりゃ」

今ここに、白夜叉と狂乱の貴公子がこの最終決戦で再び力を合わせる。

「ほざけぇ！！」

コクメンは凄まじい勢いで飛びかかって豪快に剣を振るう。
だが2人は左右に別れてコクメンの攻撃を避ける。
そしてその一瞬の隙にとお互いに剣を振るい、コクメンの両脇に直撃する。

「ぐぉお！？……己ぇ！！」

コクメンは剣を豪快に横に振るう。
その検圧に右側に遠く離れた岩でも綺麗に切断されてしまう。
だが桂はしゃがみ、銀時は飛翔して交わす。
するとまたもや2人同時に剣を振り続ける。

「はぁぁ！！」
「てやぁあ！！

銀時の変化自在の剣に桂の正確な鋭き剣。
2人の連続剣がコクメンを襲いだす。

しかも全て防ぎ流す事はできず、徐々にコクメンの身を削るかのように当たっている。
一撃一撃は大して大きくないが、確実にコクメンにダメージを与えているのも事実。

「おらどうしたぁ！！キザラキの総長の力はこんなもんかぁ！？」
「如何に貴殿と言えども、我等2人には太刀打ちできまい！！」
「ほざくなァァァァァ！！」

コクメンは吠え出し、その咆哮が2人を吹き飛ばす。

「ぐぉおお！！」
「なぁぁぁ！！」

ドカァーン！！

『『桂さん（ヅラァ）、銀ちゃん（銀時ィ）！！』』

銀時と桂が吹き飛ばされた事にはやて達は叫びだす。
だが2人はすぐに立ち上がってコクメンに突撃しようとするが、

「ハァァァァァァ！！」

ガキィーン！！

「グゥゥゥゥ！！」

コクメンが銀時の懐に素早く移動し、剣を豪快に振りだす。
銀時も木刀でその一撃を防ぎだす。
だがその重さは半端じゃなく、まるで夜王の一撃を食らった衝撃のような感じである。

「くそったれぇ、こいつはあの夜王に近い一撃じゃねぇか！！」

『闇王』の異名は伊達じゃない事である。
コクメンはそのまま力で押しだして銀時の木刀をへし折ろうとする。

「そんな木剣で我が剣を受け止められると思って……ぬぅ！？」
「はぁぁ！！」

コクメンの横から桂が一気に攻撃を仕掛けてくる。
素早く剣を振っても、コクメンは素早く裂けて銀時から離れる。

「無駄だ！如何に侍と言うやらが魔導師より優れた戦闘力を持ったとしても我を倒すことはできぬ！！」
「……それはどうかな？」

「何？」

すると桂は懐から最後の『んまい棒』を出す。
そしてそのまま袋を開けて……

「んまい棒、『火爆鐘器（かばやき）』！！」

最後にして究極のんまい棒をコクメンに向けて投げる桂。
本来ならば対『鬼兵隊』様にとって置くべきだったが、コクメンの強さが半端じゃないほど巨大であるので、使用することにした。

「そんな小細工がどうしたというのだぁ！！」

コクメンは刀を使わずに左手で受け止めずに薙ぎ払うようにたたき出す。
その瞬間であった……

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！

巨大な大爆発が発生して爆炎の柱が天に昇るかのように溢れる。
その威力は間違いなくゾーマおも倒せる威力であり、油断したコクメンはモロに直撃した。
とてつもない大爆発に驚きだす銀時は唖然とし……

「おいいいいいいいい！！そんな取って置きをもってんなら最初から使えよォ！！」

「いや、コクメンははやてとスバキの究極魔法をも絶える程の頑丈さを持っている。だが俺達の攻撃でコクメンの鎧は脆くなっていき、防御力は大幅に下がったはずだから、如何にコクメンでもあの状態

ならば防げまい」

そう、桂はアプチとの戦い、そして銀時は無数の『ジェノバ・ナイト』との戦いで体力が激しく消耗して言っている。
力合わせてもやっと互角で戦えるぐらいである。
そこで桂は銀時と力を合わせてちょくちょくとコクメンの鎧を脆くする様に削り斬っていた。
SSランク以上の魔力砲をも耐え切れるコクメンの鎧も、脆くなれば防御力も下がってしまう。
桂はそこを突きだすように、一気に最終兵器とも言える『火爆鐘器（かばやき）』で一気に勝負を決めた。

「す……すごい、あのコクメンを！！」

侍としての力を発揮しコクメンを倒した銀時と桂に驚きだすスバキ。
あの地道な攻撃は、この一瞬の為の攻撃の為であったのだ。
これならあのコクメンだって倒せる。

「よっしゃ！！」
『見事！』
「これでうち等の完全勝利だぁ！！」

ヴィータ、エリザベス、はやての3人も完全勝利に確信して喜びだす。
疲労で倒れているリィンも安心のあまりに笑い出す。
銀時と桂も勝利を確信した。

が……

「……ァァアアア！！！！！！！」

『『！？』』

転地鳴動の如くのコクメンの叫びが響き渡り、あまりの大きさに爆炎が一瞬のうちに消えてしまう。

コクメンの体がボロボロで鎧も半分壊れかかっている。

一体何があるのかと恐れると、コクメンの体からさらにと言うばかりに魔力があふれ出る。

「な……なんだ！？」

変わりはてるコクメンを見て驚きだす桂。

その魔力は徐々にコクメンを纏うように、４羽の翼に巨大化した剣、そしてコクメンの仮面らしき部分が口のように割れて、中から凶悪な牙が生えてきた。

「てかマジィ!?何それ、第二形態!?ドラゴン●エストに出てくるボスキャラじゃねぇのに!!?」
「いかん!!」

銀時が青ざめてツッコむ中、桂はとてつもない危機感を感じ出す。
さっきまでのコクメンとは違い、さらにパワーアップしているのが分かる。

「貴様等人間如きに、我が負ける筈がナァイイイイイイイイイイイ!!!!!」

するとコクメンは巨大化した刀を大きく構えてそのまま桂に向かって豪快に振るう。

「ヅラァ!!」

スバキが桂に向かって走り出す。
無我夢中で走り出し、桂の目の前に立つ。
だがコクメンの剣は巨大化しており、大きく振った後は桂だけでなく銀時やはやてをも吹き飛ばす。

「ぐぉおおおおおおおおおおおお!!」
「きゃあああああああああああ!!」
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
『うぎゃあああああああああああ!!』

強大な剣圧に全員吹き飛ばされ、さらにコクメンは天井に向かって口から光線を放って天井を砕く。
これなら誰も立ち上がることは出来ないだろうとコクメンは確信し、大きな穴奥にある『ブラック・アテリマ』の所に向かう。

「これで我が野望は果たせる…一刻も早く『ブラック・アテリマ』を」

＊＊＊

「ぐ…うぅ……皆、無事か！？」

銀時が木刀を杖代わりとして起き上がると、桂、エリザベス、が強引にも起き上がってはやてもヴィータとリィンを支えて起き上がった。

桂の刀は折られていて、もう使い物にならない。

先ほどの一撃は間違いなくゾーマをも殺せるぐらいはあり、下手すればこっちも無事じゃすまないだろう。

銀時がそう考える中、桂が信じられない程の驚愕の表情をする。

桂の目の前には……胴体が大きく斬られて、内臓も潰れて大量の血があふれ出ているスバキの姿がいた。

「スバキィィィィィィィィ！！」

桂は一刻も早く急いでスバキの所に駆けつける。

今見えている光景が嘘であるかのように願いながらも、彼女の元に走り出す。

「いやァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」
『そ……そんなぁ！！』

惨死姿へと変わり果てたスバキに、信じられない程に大きな悲鳴を上げるはやて。
そして助かる見込みがないほどに絶望的にへたれ込むエリザベス。

「…？……だろ？……こんな事が……こんな事があってたまっかよオォォォォ！！！」
「スバキさんが…スバキさんがぁ！！……そんなのいやァァァァァァ！！」

涙を流して叫びだすヴィータ。
リィンは信じられない光景に頭を抱え、悪夢なら去って欲しいと願いながら涙を流すしかなかった。

「……くぅ！！」

内臓の半分以上がつぶれて異常なまでに血があふれ出ているスバキの姿を見て、もう助かる見込みはないと悔やみ顔をそらす銀時。
だが何よりもこの光景に信じられないのが、必死にスバキを呼ぶ柱である。

「しっかりしろ、スバキ殿！！」
「……ヅ…ヅラァ……」

すっかり弱りきった声を出すスバキ。
自分の最後が近づいてきた事に感じてきた。

「……ごめん、もう……私…無理……みたい……少…しずつだけ…

ど…体中の感覚…無くなって来てるから……」
「そんな……」

自分の体の状況は自分自身が知っていると言い出すスバキ。

「……す…スバキィ」

涙を流しながらはやてはスバキに近づく。
すると…

「ぐはぁ！！」
「スバキ！！」

スバキは血を吐き出します。
それにびくっとしてはやては走り出す。

「くそぉ！！」

スバキの残酷的な姿に桂は己の無力さを呪う。
その怒りを地面に叩きつけていた。

「俺が、俺がお主等とずっと入ればこんな事にはならなかった！！
俺が無力さと判断の失敗でスバキ殿が！！」

己の判断ミスや無力さを悔やみだす桂は、何度も何度も地面をたたき出す。
その拳には血が出ている程に何度も強く叩きつけていた。

「……何が侍だ…何が攘夷志士だ……何が狂乱の貴公子だ！！俺はまた、大切なものを護れなかったと言うのか！！」

幼児の時も、恩師の松陽先生を目の前に失い、さらに攘夷戦争の時でも数多くの仲間も死んでいった。
そして今度は、仲間として友に生きていくはずのスバキをも護れずである。

「……ヅラァ」

仲間の死を、己の無力さへと悔やむ桂を見ていやと言うほど分かりだす銀時。
自分もかつてはそうであり、仲間が死んでいくのを見たくは無かった。

「……ヅラァ……前にも…言った…よね……ヅラには……魔導師としての……素質…があるって…」

最後の力を振り絞るように、スバキは首飾りにかけていた天使の翼のペンダントを桂に渡しだす。
そのペンダントを桂が受け取ると、ある事を教えだす。

「……コクメンを…止めるには…もう…ヅラが……魔導師になる……しかないん…だよ」

まだ方法はあるとスバキは言い出し、桂に最後の希望を託す。

「だから……だから…ヅラに……やるよ……七星神刀(しちせいしんとう)の…ゼフィロスを」
『『!?』』

スバキの口から出た言葉、『七星神刀(しちせいしんとう)』の名を聞いて驚く銀時達。

スバキが桂に渡したのがスバルの『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』と並ぶあの『七星神刀（しちせいしんとう）』である。

「その刃…で全ての魔を断ち切り…埋め込まれたアテリマで…使用者を……術式魔法が…使える様にする……それがゼフィロスの能りゅ…げふぉ！」

「もう良い！！もう十分分かったから喋るのは！！」

これ以上、スバキが苦しむところを見たくない桂は叫びだす。

桂の眼から潤いが出てきて、今でも涙が流れそうな状態である。

それでも、スバキは黙る事はない。

「さっき……言ってたよね…魔法の力に…堕ちるのが怖い…から魔導師…になる…から……断るって…」

桂が魔導士になる事を遠慮した理由をスバキは言い出す。

「でも、大丈夫……たとえ魔導士に…なったとして…でも、ヅラは……私達が……誇る立派な侍……だから……これか…らは……そのゼフィロスが…私の代わり…にヅラの……力になるからな」

スバキは笑顔で笑いながら言い出す。

これから死ぬにも関わらず、桂達の力になれることばかりを考えて嬉しさいっぱいである。

しかし本当は、自分ももっと生きたかった。

生きて、桂達と…仲間達と一緒に楽しい人時を迎えたかった。

これで、私も人生もお終いかぁ。

ヅラと一緒に、攘夷志士としての活躍をしてみたかったよ。

本当は、私ヅラの事……好きになったんだ。

けど、自分の初恋よりもはやてがヅラと結ばれる所……見届けたかったなぁ。

エリザベスとも最も、仲良くなりたいし……リィンとの漫才も、やってみたかったなぁ。

ヴィータに術式魔法を教える約束……結局果たせなかった事も悔しいよ。

それにようやく、憧れてた伝説の英雄　坂田銀時にも会えて彼と色んなお話がしたかったよ。

本当は……もっと生きたい。

生きて、みんなと楽しく一緒にいたい。

だけど…もう私、死ぬんだよね。

でも……良いんだ。

ようやくできた仲間を……ヅラをこの手で最初の最後で護れた事が、すごく嬉しいから。

それに、ヅラ達が私の事を忘れる事はないし、私の存在はヅラ達の中で生き続ける……だから……

私は、心補いなく……死を受け入れるよ。

「じゃあ……ね……ヅラァ……私……ヅラ……達……と……出……会え……て……良……かっ……」

そしてそのままゆっくりと眼を閉じる。

涙が頬を通って流れ出し、永遠の眠りに付く。

戦闘機人『ジェノバ・キメラ』として生まれて、機動六課に入る予定の新しい仲間、スバキ。

彼女の生涯はここで幕を下ろした。

黒神

「今回は『銀八先生コーナー』を休ませてもらいます。次回からちゃんと銀八先生コーナーをしますので、次回もお楽しみ」

第百十五訓：ラスボスは大抵二段形態を持っている（後書き）

ついに魔導士に目覚めた桂。

白夜叉も『銀の魔導書（ブレイシルバー）』の力を解放する。

最強のロストロギアに、２人の最強の魔剣士が再び立ちはだかる。

はたしてゴスモスの運命は！？

スバキの希望を受け継ぎ、その意思を貫き通せ！！

長く続いた『狂乱編』、今ここに完結する！！

桂

「次回、「託された希望を持って、敵を討て！！」テイクオフ！！」

第百十六訓：託された希望を持って、敵を討て！！（前書き）

託された最後の希望、七星神刀（しちせいしんとう）のゼフィロス。

長刀に備わった魔力とアテリマの力。

白夜叉もついに『銀の魔導書（ブレイシルバー）』の力が解放される。

長きに渡る死闘も狂乱の物語もついに完結する。

その希望を抱いて魔を斬れ！！！

黒神

「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百十六訓：託された希望を持って、敵を討て！！

「ようやくここまで来たか」

長く渡った『キザラキ』の野望も叶おうとしている。
コクメンの目の前には、『ブラック・アテリマ』が目の前で輝きだしているのが分かる。
ダイヤよりも硬い岩に埋め込まれていたのか、掘り出すのに苦労した。

「これで、我等ジェノバ・ナイトの理想の星が……」

ついに目的が達成される。
そう思い『ブラック・アテリマ』に手を伸ばした瞬間だった。

「！？」

何かに気づいたコクメンは上を向くと、そこには漆黒の斬撃がコクメンを襲っている。
コクメンは思わず魔力で形成された翼を広げて飛び、交わしだす。
しかもその漆黒の斬撃は地に落下した後、落下後から割れ跡　が残った。

「これは！？」

一体何が起こったのかと言うと、コクメンはさらに上を良く見る。
そこには思わぬ人物が空からコクメンを見下ろしていた。

その人物の背中の左片側に黒い翼が生えた。
黒いロングコートを身にまとい、これを素肌の上から着用して、胸部は露出している。
コートの淵には赤いラインが付いており、腰部からも左右に2羽ずつ青黒い翼が生えていて、銀色の肩当を当てている。
さらに腕部には悪魔の翼のようなヒレが追加されている。

右手には人間3人分の長さを誇る長刀を握っていて、その長刀のはばきには翡翠色に輝く宝玉が埋め込まれている。

そして、彼の眼は水色と翡翠色が混ぜ合わせた輝きをした色となっている。

そう、その人物こそが『ゼフィロス』を手にし、魔剣士化したバリアジャケットを身に装った桂小太郎の姿である。

《Ｉ　ｂｅｃｏｍｅ　ｙｏｕｒ　ｓｗｏｒｄ　ｔｈａｎ　ｔｈｉｓ　ａｎｄ　ｐｒｏｍｉｓｅ　ｔｈａｔ　Ｉ　ｍａｔｃｈ　ｐｏｗｅｒ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ（これより、私は貴方の刀となり、共に力を合わせる事を誓います）》
「……承知した」

『ゼフィロス』は桂を主である事を認定する。
訳も分からない言葉が理解できる事には驚くべきだが、今はそれ所ではない。

スバキから託された最後の希望を元に、桂はこの力でコクメンを討つ。
仲間の敵を討つ為、そして……彼女が護ろうとしたこの『ゴスモス』をコクメンの手によって破壊させない為に。

「コクメン……今度こそ貴様に天誅を下す……。俺達の大切な仲間を殺めた罪は軽くないぞ！」

コクメンだけは生かしてはならない。
己が欲望の為だけにならどんなものでも犠牲にするような卑劣な輩にこの星を滅ぼされてはならない。
魔剣士として目覚めた桂を見て驚きだしているコクメン。
それと同時にまだ自分には向かう事に腹正しく感じた。

「この死に底ない人間無勢がァァ！！」

怒りを表すように魔力の翼を羽ばたかせ、凄まじい勢いで突進する。
その巨大化した剣で桂に向けて素早く振るうが、

ガキィン！

桂は素早く長刀で防ぐ。
しかも、そのまま強引に剣を薙ぎ払うように振りい、コクメンを吹

き飛ばす。

「ぐぉおお！？」

まさかの力負けにコクメンは驚きだす。
宙で回転して体制を治し、翼を広げる。
だが

「はぁ！！」

桂は素早く長刀を振るい、漆黒の斬撃を放ってコクメンを襲う。

「ちぃ！！」

コクメンはその漆黒の斬撃を防ぐ。
しかしその威力は半端じゃなく高く、その斬撃は下手をすればオーバーSランク以上の魔法でも切断しそうな脅威を感じ出す。
コクメンは強引にその刀を薙ぎ払う。

だが桂が突撃するかのように、長刀を扱う者とは思えないほどの凄まじい速さで連続に剣を振るう。

ガキキキキキキキキキキキキキキキキキキキィィン！！！！

「何ィィィ！？」

驚きながらもコクメンは凄まじい速さで襲いだす雨のように降るかのような斬撃を刀で防ぎだす。
しかしあまりのパワーとスピードの為、全てを防げず鎧が砕けるような感じで斬られまくっている。

（馬鹿な！！いくら魔導士になったとは言え、奴は最早重傷のはず！！しかも先ほどよりも剣筋が高く、一撃一撃が重すぎる！！）

これこそが桂の魔導士となって獲た力であり、侍と魔導士の共存的存在『魔剣士』の強さである。

『ゼフィロス』の力を解放した事により、自然的に魔力が桂の一部となって、弱まっていた桂の力も復帰してきた。

今の桂の強さは魔導士になった銀時と双璧となる。

「ふぅん！！」

ガキィン！！

「ぐぉおおおおおおお！！」

そして大降りでの一閃が炸裂し、コクメンを吹き飛ばす。

コクメンは後ろの壁に衝突してしまう。

空中戦でコクメンと戦って圧倒している桂の強さに驚きだす銀時とヴィータ。

「すげぇ……」

「こいつがヅラの魔導士としての強さって訳かい」

魔導士の力を手に入れただけで強くなった桂。

何せ、魔導士になればすぐに強くなれる訳じゃない。

元々、侍としての強さが十分あった桂にさらに魔法の力を追加した事で半端じゃなく強くなっている。

如何に魔法の素人でも魔力を使って肉体的を強化すれば桂はさらに

強くなれるのだ。

２人が桂の新たなる力に驚いている中で、エリザベス、はやて、リィンはスバキの遺体を見て泣いていた。
大切な仲間の死が今でも信じられずに、嘘であって欲しいからだ。
体験した事がない仲間の死に、悔やみきれない。

そんな彼女達の気持ちを誰よりも理解しているのは銀時である。
自分も桂も、数多くの仲間を失い…大切な恩師も失った。
そんな悲しい思いを他の仲間にも味合わせたくなかった。

すると、コクメンが衝突した壁が大爆発すると…その中からコクメンが姿を現した。

「やってくれたな、人間の分際でぇぇぇ！！」

するとその刀はさらに巨大化して、初期のときより４倍分の太さと長さを持った魔剣となった。
桂は警戒して長刀を両手で握って構える。
しかしあれを防げるのかは分からない。

銀時はこのまま黙ってみている訳には行かないと思い、懐から礼のデバイスを出して、右手に装着する。

「しゃあねぇ、使いたくは無かったけどよぉ……他の奴等には黙ってくれねぇか」
「え？」

訳分からない事を言い出す銀時に、ヴィータは唖然とする。

銀時はもう、バリアジャケットのコスプレ的問題ではないと考えついに起動させる。
究極のデバイス『銀の魔導書（ブレイシルバー）』を。

「第６６６拘束機関解放、次元干虚数法陣展開」

右手につけてある手袋を自分の右眼の前に上げると、手袋の真ん中についている機械仕掛けの装置が起動して，赤く光りだす。

「うおおお

黒のシャツの上から銀色のコートを羽織り、袴のような黒いズボンのバリアジャケット。

その姿こそ、銀時の魔剣士としての姿であった。

「な……何ィィィィィィ!?」

突如、銀時がデバイスらしきもので魔導士になった事に驚きだすヴィータ。

ヴィータだけじゃない、エリザベス、はやて、リィンの3人も銀時の姿を見て驚きだす。

「ぎ……銀ちゃん……アンタ、いつの間に魔導士に!?」

「……その事は、後で話しておくから……ちょっと行ってくりゃ!!」

銀時の足元に銀色の魔法陣が現れ、右肩に魔力で造形し銀色に輝く悪魔のような片翼『デモン・シルバーウィング』が生えてきた。

そして銀時は翼を広げて飛翔し、桂とコクメンのいる場所に飛びかかる。

コクメンは巨大化した剣を構えだし、桂に止めを刺そうとする。

「さぁ、これで終わりだ……我が渾身の一撃を食らうが良い!!」

コクメンは叫びだし、そのまま桂に襲い掛かる。

その威力と脅威は間違いなく先ほどのよりはるかに上回る。

そしてその巨大な剣を大きく振るい、桂を襲い掛かる。

桂は『ゼフィロス』で防ごうとするが……

ガキィン！！

『『！？』』

「ふんぬぅうあああああああああああ！！」

コクメンの一撃を銀時は、『夜叉鎖月（やしゃさつき）』と『シルバーエッジ』の２つの剣で受け止める。

今の一撃を止められた事に驚くコクメンだが、何より驚いているのは桂であった。

いつもと違うその姿はまさに、魔導士が身に纏うバリアジャケットである。

「銀時！？お前、まさか魔導士に！？」

「んな事どうでも良いんだよ！！それよりヅラ、一気に行くぞォ！！」

「ヅラじゃない桂だ！！」

いつものやり取りの様な感じで言い出し、銀時は一気に勝負を決めようと己の魔力を２つの刀に収束させる。

そして２つの刀を強引に振り上げると、コクメンの巨大化した剣がガラスが割れる様に折れてしまった。

「な……なんだと！？」

信じられない光景を見たような驚きをするコクメン。

大幅の魔力を込めた渾身の一撃が止められた事に驚きを隠せなかった。

銀時は誰も知られずに、スカリエッティのアジトで魔剣士としての特訓をし続けていた。

修行嫌いの銀時が何故特訓を受けたかと言うと、スカリエッティが

修行を受ける度にストロベリーパフェを奢るからだ。（つまり甘いもので釣られている）
その為、身体能力も以前より上がっていて魔導士としての基礎も身に付けていて、魔剣士として完成に近い存在となっている。

そして銀時と桂は片翼を広げてコクメンに突進する。

スバキの敵を討つ為に、

『キザラキ』の野望を打ち砕く為に、

そして何より、己が大切な仲間と魂を護る為に、

残り全ての力をコクメンにぶつける。

「コクメェーーーンン！！」
「テメェのそのどす黒い仮面」

『『叩き割ってくれるゥゥゥゥ！！』』

ズパァーーーーーーーーンン！！

２人の渾身の一撃が炸裂する。
桂の長刀がコクメンを一刀両断に斬り、銀時の２つの剣がコクメンの顔を×斬りする。

「……あべ……！？」

今何をされたかも気づけないほどに素早く斬られてしまったコクメン。

―何故、私が人間ごときに……―

それだけがコクメンの頭の中で思い浮かべる言葉で、最後の思念でもある。
そのままコクメンの鎧は地に落ちて、『ブラック・アテリマ』の周りを囲むように落ちる。
如何に生命型ロストロギアとはいえ、元々コクメンは肉体を持たない『ジェノバ・ナイト』の一種である。
血があふれ出ないのもその為であった。

「……終わったな、ヅラァ」
「……ああ…後、ヅラじゃない桂だ」

長き戦いもようやく終わった。
コクメンが討たれた事で、おそらく他の『ジェノバ・ナイト』は機動停止するであろう。

これでゴスモスも救われた……と思った次の瞬間だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！

『『！？』』

突如、空間全体が揺れ始めた。
一体何があったのか分からず、誰もが慌わてだす。

『地震！？』
「な……なんですか一体！！」

エリザベスとリィンは大きく揺れ始めるこの地下全体に何があったのか不思議がる。
そして良く見ると、なにやら砂みたいなのが上から少しずつ降っているのが分かる。

「ちょっと待て……これってこの地下全体が崩壊しかかってるんじゃねェのか！？」

ヴィータの一言に誰もが驚きだした。
何故崩壊しかかっているのか分からない中、『ブレイシルバー』と『ゼフィロス』が言い出す。

《Ｗｅ　ｗｉｌｌ　ｅｘｐｌａｉｎ　ｉｔ（それは私達が説明します）》
「なぁ、ブレイシルバー！？」

突如、『ブレイシルバー』が喋りだした事に驚きだす銀時。

《This space is a special device refined by that life type loss fatty tuna gear, the magical power of body men. The magical power that expectation Lima changes, and supported the neighbor, this whole under the ground disappears, and the atomic energy of the magical power is about to collapse（この空間はあの生命型ロストロギア、コクメンの魔力によって精製された特殊装置です。その魔力の原子力がアテリマが変わり隣、この地下全体を支えていた魔力が無くなり崩壊しかかっています）》

「何と！？」

『ゼフィロス』の説明を聞いて驚く桂。

この地下は全てコクメンの手によって作られた事も。

《In this situation this basement is buried in the earth and sand within back 30 minutes and does it.（このままでは、後30分も経たないうちにこの地下は土砂に埋められてしまいます。）》

《Masters are early, too; the escape of this place（マスター達も早くこの場の脱出を）》

「わぁった！！早く逃げんぞおめェ等！！」

銀時は急いでこの地下を脱出するように、出口に向かって飛びかかる。

『2人とも、私につかまって!!』
「きゃ!」
「ちょ、エリザベス!?」

エリザベスはリィンとヴィータを抱きつくかのように持ち上げ、眠っているように眼を瞑っているスバキを見て、『お前の存在は絶対に忘れない!!』と書かれた鉢巻をかけて、凄まじい速さでこの場をさる。
そして桂はゆっくりとスバキの元に舞い降りると、スバキの頬を触りだす。
自分がコクメンに勝てたのも、スバキから七星神刀(しちせいしんとう)を譲り受けたからである。
彼女が、自分達を護ってくれたから、自分も生きている。

それでも、大切な仲間が死んでしまった事に悔やんでも悔やみきれない。
それは桂だけでなく、はやてもそうである。
初めての仲間の死に、己の無力さに悔やみだして涙を流している。

「スバキ殿……お主から受け取ったこの『ゼフィロス』、大切にさせてもらう」

そう言ってゆっくりと彼女の頬から離れ、その手をはやてに伸ばす。

「行こう、はやて」
「……うん」

涙を流していた眼を拭いたはやては桂の手をつかみ出す。
そして桂ははやてをお姫様抱っこし、翼を広げて飛び出す。
そして眠っているかのように横になっているスバキを見て、こう言い出す。

「……サラバだ、スバキ殿」

涙が出そうな表情を表しながら桂はそう言い出し、そのまま出口を通ってこの地下を脱出する。
そして出口が瓦礫の岩に埋もれてしまう。

＊＊＊

その後、桂達が地下から脱出した後、フェイト達が駆けつけて来た。
今回の事件の真相を話し出すべきだとはやては、これまで起こってきた事を銀時達に話し出す。
『ブラック・アテリマ』というこの星を核となっているロストロギアを取り上げ、『キザラキ』の総長、コクメンがそれを取り上げこの星を消滅させ、『ジェノバ・ナイト』だけの理想の星を作り上げようとした事を。
さらには、『キザラキ』が高杉と手を組んでいた事も、『紅桜』の完成版の圧倒的強さを。
そして、何より辛かったのが本来新しく『機動六課』に入るべき仲

間、スバキの死を。

銀時と桂の魔導士化の件以外を全て話し出すと、フェイト、スバル、ヴィヴィオは涙を流し、神楽、ティアナ、エリオ、月詠、辰馬は悲しみだす。

それからしばらくして、次元空間飛行幾が現れて銀時達は無事に帰還する。

フェイトが母のプレシアに頼んで、プレシアがミッドチルダの次元空間空港の人達を頼んでフェイト達を迎えに行って欲しいと頼んだ。

銀時達が無事に帰れると安心した中、桂とはやては2人で遠ざかっていくゴスモスの惑星を見つめていた。

その星でスバキと出会い、そして数多くの事件に巻き込まれた。

無事に解決すれば、もっと自分達と一緒にいられたはず。

まだ己の無力さを悔やむ中、

「こんなとこぉにいたか、ヅラぁ、かやてぇ」

「坂本？」

突如、辰馬が話しかけてきて桂とはやての所に近づく。

「わし等がおんし等を探しとる間に、ずいぶんと大変な目におぅったなぁ」

「まぁな……俺達は無事にミッドチルダに帰れそうだが……」

「……」

2人はスバキの事を思い出しただけで悲しみだす。
そんな2人に呆れるように溜息を吐く辰馬は……

「ええかげんしとったほうが良えぜよ！」

『『！？』』

突如、大声で言い出す辰馬に桂とはやては驚きだす。

「確かに死んだ仲間は生きかえれへん！悔やんでも悔やみきれないもんじゃ！！せやけどそのスバキっとか言うお嬢ちゃんは死んでもうたんじゃない…おんし等を生きてもらいたかったんぜよ！！」

「坂本……」

「そんなおんし等がいつまでうじうじと暗(くろ)うったままじゃ、スバキちゃんも安心できひん……。だから、おんし等がスバキちゃんにしてやれる事は、生きて行く事じゃ！」

辰馬からの予想外な言葉に桂は唖然とする。
だがそれと同時に攘夷戦争の頃を思い出す。
辰馬は馬鹿でも、時にここだって言うときにはちゃんと言う男である事を。

「せやかし……前に向かって進んでもうたほうが良えじゃきな……。言いたい事ァ、それだけぜよ」

最後に笑って辰馬は言い終えた後、この場を去る辰馬。
確かに辰馬の言うとおりだが、それが出来ないからこそ2人は悩んでいる。

己の無力さを知った桂と、初めて仲間を失う悲しみを知ったはやて。

これから2人はどうすれば良いのか分からない中、桂が首にかけている天使の翼のペンダントとなっているデバイス『ゼフィロス』が話しかける。

《Ａｍａｓｔｅｒ，（主よ）》

「ゼフィロス？」

《Ｉｎ ｍｙ ｍｅｍｏｒｙ，ｔｈｅｒｅ ａｒｅ ｔｈｅ ｄａｔａ ｔｈａｔ Ｓｕｖａ Ｑｕｉｔｏ ｓｅｅｍｓ ｔｏ ｂｅ ｔｈｅ ｌｅｔｔｅｒ ｏｆ ａ ｓａｙｉｎｇ ｇｉｒｌ．（私の記憶メモリーのなかに、スバキト言う少女の手紙らしきデータがあります）》

「え？」

「本当か！？」

《Ｙｅｓ，Ｉ ｓｈｏｗ ｔｈｅ ｉｍａｇｅ ｎｏｗ．（はい、今その画像を見せます）》

すると『ゼフィロス』から光のライトが現れ、それが壁に当たるとそのライトを当てている壁から画像が映し出された。

その画像から、スバキの姿が現れた。

『『スバキ！？』』

2人は思わずスバキの姿を見て、驚きだす。

これはスバキが実際に撮った映像ではなく、スバキの思いが映像となっている画像である。

「ヅラァ、この映像を見ている頃には……私はゴスモスに残ってゴスモスのみんなと平和で暮らしている頃かもな」

にこりと笑い出すスバキ。
これはコクメンとの最終決戦の前にスバキが自分の思いを『ゼフィロス』に登録した記憶のようだ。
彼女は最初からこの『ゼフィロス』を桂に渡す予定である。

「本当は、私もヅラ達と一緒にミッドチルダでワイワイと楽しんだりしたかったよ。英雄の坂田銀時を初めとした異世界の英雄達にも会いたかったし……何より私と同じ戦闘機人達と仲良くしたいし。でも、その前に私……ゴスモスで仲間を作ってみたいんだ」

ずっと孤独であったスバキは、本当は桂達ともっと一緒にいたいのである。
しかしそれではだめじゃないかと時々思う。
他人に頼るだけじゃ、何にも変われないからだ。

「ゴスモスでヅラ達のような仲間を作って、そしてゴスモスがどれだけ良い星かを他の異世界の人達に知ってもらうのが、今私が見つけた目標なんだよ。だから……だから私、今はまだミッドチルダに行けないよ……」

実は彼女は、桂達についていくふりをして黙って星に残ろうとしていた。
本音を言いにくいのか、『ゼフィロス』に全て本音を登録していった。

「後、最後に行っておきたい事があるんだけど……本当は私、ヅラの事が……好きなんだよ」

最後の最後で、彼女は桂に恋の告白をする。

「普段は馬鹿で、何がしたいのか分からないけど……すごく面白い人だなぁって感じるけど……何よりただの人間とは思えない強さに侍と言う誇り高い魂を燃やしているヅラの姿に何度も見とれていたんだ。だから私も、いつかヅラの様な侍になりたいと思っていた。けど……その為にはこの星に残って自分の力を試して仲間を作って生きたいしね」

桂の侍としての存在、仲間を大切にする思い、そんな桂の姿を何度も見てきたスバキは女として桂にいつの間にか恋路を抱いていた。けど……自分じゃだめだと確信する。
桂の隣には、間違いなくはやてじゃないとだめな気がしたから。

せめて自分も恋した人の様な立派な人間として生きて、彼に少しでも追いつきたいと思ったのである。

「だから……今度会うときには、ゴスモスがもっと立派な星になっていると思うよ。それまで……また会おうね、ヅラぁ」

最後に飛びっきりの笑顔で笑い出すスバル。
そして彼女のメッセージが終えると画像も消える。

本来ならば彼女はまだ生きてゴスモスに残っていたのかもしれない。
でも彼女はもう死んだ。

2人の未来を護る為に……

「スバキは、私達より未来を見ていたんやな……自分が幸せになる

先も……」

はやてがそう一言言い出すと、桂は後ろを振り向いて宇宙を見つめている。

「桂さ……」

はやては桂の横顔を一瞬見ると、言葉を途切れる。

一瞬だけ見えたが、桂のその眼から、涙が溢れていた。

「……すまないが……しばらくこのままさせてくれ……」

初めて浮かび上がる感情。

それはただ悲しい事だけじゃない。

死んでもなお、ここまで自分の事を思ってくれている仲間がいる事を知ったからだ。

桂の後姿を見て、はやては彼に寄り添って体をくっつける。

そして頭を彼の背首の部分に当てて、彼と一緒に涙を流す。

そんな2人を、後ろの壁に隠れて見ている銀時。

今はそうっとしておこうと考える。

「……スバキの分まで生きていけよ、ヅラぁ」

こうして、ゴスモスの未来を護る為の『キザラキ』との対決は幕を閉じた。

『ブラック・アテリマ』は『キザラキ』の地下の瓦礫と共に埋もれ、ゴスモスの大地の一部となった。

この事件はミッドチルダに伝わる事はないが、ゴスモスの住民にとっては大きな伝説となった。

『キザラキ』によって壊滅状態にされた村は大きな墓場となり、そこにはスバキがゴスモスを救った英雄として大きな墓標にその名を刻まれる。

同時にゴスモスの人々は、もう1人の英雄の存在を永久に記憶するのである。

その英雄の名は桂小太郎。

侍と言う屈強な魂を持ち、刀1本で数多くの『キザラキ』の勢力に立ち向かう剣豪。

後にこの事件は、『狂乱英雄伝説』としてゴスモスに伝わる神話となるのであった。

『狂乱編・完』

銀八先生
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生!!』』

銀八
「へぇい、じゃあ今回も銀八先生を始めます。今回はこの人、ナンバーズのディエチちゃんです」

ディエチ
「ど……どうも、こんにちは」

ぺこっとディエチは丁寧に挨拶する。
それを見た銀八は、今回は無事に終われると確信してガッツする。

銀八
「じゃあさっそくいくぞぉ、まずはこの人、ペンネーム『支配者』さん『質問ですがコクメンの容姿ってゾーマみたいな怪物なんですか?』ずばり答えます。コクメンは白い部分の色が黒くなったハク

メンの姿その者です」

ディエチ
「てそれパクリじゃないですか！？」

銀八
「別に良いって、どうせ元々この作者の馬鹿な考えの提案だから。後、ハクメンと違うところは彼は悪魔の様なペンダントをかけているのとお面の口部分が悪魔のように開くところです。と言う訳で『支配者』さん、廊下に立っていなさい」

ディエチ
「次はペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『？ヴィヴィオの大人モード（聖王モード）は今後出るんですか？（かがみ）？フェイトさんの死神化は今後なのはさん並みに行われるんですか？だとしたらもう正統派には戻れないですね・・・フェイトさん（ウッソ）？なのはさんが最近，冥王とも言われているけどあなたに次元連結砲でも積んでいるんですか？（こなた）』」

銀八
「ずばり答えます。？は作者の出方により出す予定です。？はフェイト本人に聞いたら巻き込まれますので却下。？は命が消えるので本人には黙っておきます」

ディエチ
「何か？と？が怖いんだけどォォォォォ！！」

ディエチは有り得ないほど青ざめる。

もし2人が聞いたら自分達も巻き込まれてしまいそうな鬼がするからだ。

銀八
「と言う訳で『ウッソ・エヴィン』さん、今後のそう言う攻め質問は控えめに。んで次ィ、ペンネーム『月光閃火』さん『
1．山崎に質問…というか一言言っておく。お前の恋…誰がどう言おうと俺は応援するぞ。もし邪魔する奴が襲ってきたら、俺が完膚なきまでに叩きのめすからな？（漆黒微笑）

2．ヴァイスに質問…というかリクエスト。『ブレイブルー』の『ハザマ』のモノマネやって♪『紳士ｖｅｒ．』と『テルミ顕現ｖｅｒ．』の両方で♪』」

山崎
「そうですねぇ、じゃあマジでお願いします。せっかくの恋をジャマされたくないので。特にロリ長　（土方の事）にはジャマされたくないので」

ディエチ
「……山崎さん／／／」

山崎
「ディエチさん／／／」

何やかんやで2人は甘い雰囲気になる。

銀八
「ぺ！！」

そんな2人をみて黒板に唾を吹き飛ばす銀八。

銀八
「ああー、イライラするぅ!!畜生、こうなりゃ2のリクエスト、本編のシリアスにさせるからなぁ!と言う訳で『月光閃火』さん、その瞬間を楽しみに待ってください!!」

ディエチ
「次はペンネーム『鳴神ソラ』さんの質問です『シャマルに質問』新しい料理は出来てるか?試食なら俺がしても良いぞ☆』」

ルイージ「(良く頼めるな…)黒神さんに質問『鬼巫女ってキャラを知ってる?その鬼巫女の技を兄さんが跳ね返せるって聞いたらどう思う?;』」

フォックス「銀時ＬＯＶＥズに質問『銀時の写真が欲しいか?』…ギンガにフェイトのコスプレ写真集を送って置こう』……ええっとう、1つ目の質問ですが……シャマルさんの新作料理はまだでないそうです」

銀八
「いっそう出ないで!!マジで嫌だから!!」

銀八は青ざめて嫌な汗を出す。
相当なまでに苦しい思いがするから。

黒神
「鬼巫女?……さぁ、あんまり聞いた事がないような……」

黒神はどうやら鬼巫女の存在を知らないようだ。
そして最後の質問は。

銀時ＬＯＶＥズ
『『メッチャ欲しいィ！！』』

ディエチ
「即答！？」

ギンガ
「フェイトしゃまぁ～～！！コスプレ写真集ちょうだいいいいい！！」

ディエチ
「いっぺん、精神科病院に行ってきて！！」

ディエチのツッコミが炸裂する。
そんなディエチを見て、銀八はうなずく。

銀八
「良いツッコミだなぁおい、と言う訳で『鳴神ソラ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『烈火竜』さん『スバルに質問です
原作（アニメ）ではティアナの胸を揉んでいましたが、そちらでは銀さんのタマタマを揉んでいますか？

ティアナに質問です。
オルトロスと融合して、魔力が上がっただけでなく、オルトロスの技も使えますか？『」

スバル
「何かすごいセクハラ質問ですけどォ！？／／／」

スバルは顔を真っ赤にしてしまう。
ティアナの胸は揉んだ事はないとは言えないが、銀時のアナログスティックを揉んだ事はない。

ティアナ
「そうねぇ、オルトロスの技は半端じゃないほど私と相性良いから、魔力が上がった分使えるわ」

自信満々に答えるティアナであった。

ディエチ
「機動六課も徐々に強くなってきていますね……ナンバーズもがんばらなきゃ」

銀八
「と言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『クアンタ』さん『質問です。
？機動六課とナンバーズで（この小説の設定で狂乱編が終わったところ）めだかボックスのマイナス十三組と戦ったら勝てますか。
なお球磨川は「大嘘憑き（オールフィクション）」と「却本作り（ブックメーカー）の２つを使えるものとします。

？ティアナに聞きます。
もしも、めだかボックスの過負荷が自分にも使えるとしたらどれがいいですか。
次の中から選んでください。

1「大嘘憑き（オールフィクション）」
2「却本作り（ブックメーカー）」
3「凍る火柱（アイスファイア）」
4「荒廃した腐花（ラフラフレシア）」
5「不慮の事故（エンカウンター）」
6「致死武器（スカーデッド）」
『ずばり答えます……人間の戦いじゃない事は分かる。けどどっちが勝つかはわかんねぇ」

ティアナ
「どっちも嫌に決まっているでしょォォォ！！！」

呆れて答えだす銀八と、青ざめて叫びだすティアナ。
そんな2人の答えを聞いて苦笑するしかないディエチであった。

銀八
「と言う訳で『クアンタ』さん、廊下に立っていなさい」

ディエチ
「次が最後の質問です」

いよいよ最後かって安心してほっとする銀八。
脅威の最後になるとは知らずに。

ディエチ
「最後はペンネーム『正宗の胃袋』さんの質問です『リィンフォース・ツヴァイに質問
第百八訓でエアロガにオナラを食らって逃げては駄目ですよ。こう

言う時こそ逆に吸い込んで体の適応をしたほうがいいですよ。』……え？」

突如、意味不明の質問に2人は唖然とすると…

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

銀八・ディエチ
『『！？』』

突如、2人は振り向いて見ると……そこにはとてつもない殺気を放ち、さらには顔中に血管を浮かべているリィンがいた。

リィン
「てめぇ！！またリィンにあの嫌な思いをさせたいのかぐぅらぁぁぁぁ！！！！！」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！

銀八
「ひぃ！！ちょ、マジで落ち着いて！！リィンちゃん、いやリィン様！！どうか怒りを抑え……」

だが一度放った猛獣の如くの怒りは収まらず……

リィン
「んぬぉおおお

銀八
「ア゛ア゛ア゛

第百十六訓：託された希望を持って、敵を討て！！（後書き）

狂乱編も終わり、いよいよ次のシリアスで後半に入ります。

後半といってもまだ長いので終わりはまだ遠いです。

ちなみに、新八が出てくるのは次の次の長編になります。

ファンの皆さん、もうちょっとお待ちください。

桂

「次回、「調子良いからって調子に乗り過ぎてはいけない」テイクオフ！！」

第百十七訓：調子良いからって調子に乗り過ぎてはいけない（前書き）

今回から後半スタート。

その前にこれまで登場した七星神刀（しちせいしんとう）の紹介を改めてします。

久しぶりに登場するキャラも続々でます。

黒神

「と言う訳で、『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百十七訓：調子良いからって調子に乗り過ぎてはいけない

パッパパカーン！！

「はぁ～い、おめでとう。黒神」
「ほんまおめでとう♪」

パチパチパチ

突如、始まりの突然に拍手する桂とはやて。
なぜなら、いよいよ中盤も通っていよいよ後半に突入するからだ。

「この小説が始まって、一年半近くは経ち、いよいよ後半も突入マジかだ」
「そんで私達も後半に向かって頑張りたいと思います」

2人がそう言うと、エリザベスも拍手して大喜びしているような表情をする。

「ふふふ……はやて、『狂乱編』で散々と活躍した分、どうやら俺達はまだ後半でも活躍できそうだな」
「むふふふ……桂さん…いよいよ来たんやなぁ、私と桂さんの主人公&ヒロインとしての時代が」
「ああ、そしていよいよこの小説のタイトルの変更も決まった事だし」
「行きましょうか♪」

桂とはやてはある事を思いついて、一気に発表しようとする。

「ええ、本日よりこの小説のタイトルを変える事にしました」
「私と桂さんの新主人公と新ヒロインとしての中心とした話をメインとしたそのタイトルの名は……」

『『リリカル桂魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷志士鎮こ……』』

『『シャラーップ！！！！！！』』

ドカァァァァァァンンン！！

「ごふぁああ！！」
「のぎゃああ！！」

新タイトル発表紹介途中で、銀時、フェイト、なのは、ティアナの４人が怒りを込めた飛び蹴りを炸裂させる。
そしてそれをモロに食らった桂とはやては勢い良く吹き飛ばされてしまう。
ちなみに新タイトル変更はヅラと狸女のまったくの？です。

「いい加減にしろ、この馬鹿コンビ！！」
「こっちは『狂乱編』のせいで思いっきり出番が減ってしまったん

だよ!!大体、新主人公と新ヒロインってまったくの?まる出しじゃない!!」

銀時とフェイトは真の主人公とヒロインとしてなのか、桂とはやての無駄に多い出番が許せなかった。
相当怒っている様子である。
だがそんな2人をはるかに超える怒りを表しているのが1人いた。
それが彼女、白い悪魔モードになっている高町なのはであった。

「私なんて……私なんて『狂乱編』のせいで思いっきり出番をカットされたのぉ～～!!最後に出たのって『ランスター編』の最初の『第九十三訓：戦う乙女は強くて美しい』だしぃ!!」
「私の『ランスター編』はたった5話だけの長編に対して、何『狂乱編』は!?思いっきり『ランスター編』の3倍以上は進んでいるじゃないのコンチクショー!!!!!」
「流石にいくらなんでも酷いよ!!」

悔しさのあまりに叫びだすなのはとティアナに、強く動揺するフェイト。
しかもなのはの出番は、今回を含めてもう24話も出ていない。

「ヅラァ、狸女ァ、散々と出番でまくったから俺達に申しわけねぇと思わねぇのかァァァ!?」
「私の出番を返せなのォォォォ!!」

2人を攻めるように言い出す銀時となのは。

「そうねぇ、返答しだいでは……首撥ねるけど良い?」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!
「私だって、その額に風穴開けますけど?」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ゴゴ！！

そう言ってフェイトとティアナはとてつもない殺気を放って『バルディッシュ・デスサイズ』と『ライキリ』、そして『クロスミラージュ』を構える。
２人に出番を奪われた事が相当なまでに腹正しいようだ。

「ヒィィィィィィィ！！」
『怖ェェェェェェェェェ！！』
「ま、まて皆！！とりあえず、ようやくこの小説も後半もスタートした事だし、そろそろ読者のみんなに紹介すべき事があるのでは！？」
「アァ！？何をだよォ！？」

青ざめて叫びだすはやてとエリザベス。
そして桂は紹介すべきがあると言う言葉に。威圧をかけて叫ぶ銀時。

「この小説のキーパーソンである七星神刀（しちせいしんとう）の事だ！！」

＊＊＊

と言う訳でここは機動六課の説明会ルーム。
そこは本来は作戦会議を開く場所であるが、はやてが特別に許可を出したのである。
大きなスクリーンにはスバル、桂、はやて、源外、そしてスカリエッティが立っている。

椅子には、銀時、フェイト、なのは、ティアナ、神楽、エリザベス、月詠、エリオ、ヴィヴィオ、そして何故か近藤、山崎、ディエチ、ルーテシア、アギト、ガリューも座っていた。

「……あのう、すんませんが何で俺達まで？」

「乗りで付いてきたんじゃねぇ？」

近藤の疑惑をはっきりと返答する銀時。

「それで、七星神刀（しちせいしんとう）が全て登場したって本当なんですか？」

「しかもそれが『鬼兵隊』対策にもなる事にですか」

山崎とディエチは七星神刀（しちせいしんとう）の存在をこの際知っておくべきだと考え、呼ばれたので来た。

「たしかぁ、七星神刀（しちせいしんとう）って俺達の世界じゃ１０年前に行方不明になってんだけどこの世界じゃ５０００年前の過去に飛ばされた伝説の刀匠、梅館妙寿（うめたちみょうじゅ）が刀工技術とデバイス技術を合成させて作り上げた伝説の７つのデバイスだったよなぁ？」

「噂じゃ１本だけでも見つかる事自体が軌跡なのに、良く７本も見つけられたなぁ！」

伝説の刀の存在に近藤とアギトは改めて喋りだし、その存在を知った瞬間に全て見つけられた事に偶然過ぎると思う。

『だけど、それが今７つも見つかったとなれば……』

『これは何かの因縁に導かれているのに違いない』

エリザベスとガリューは７本偶然に見つけるなんて、運命が何かを導いているのに違いないと確信して言い出す。

「7本の伝説の刀かァ」

山崎もちゃんと忘れないようにとメモ帳で記録する為に書く。

「んで、その内4本は私達の身元にあるネ」

神楽の言うとおり、いま自分達が知っている限りで七星神刀（しちせいしんとう）は自分達がその内4本持っているのである。

正確には5本だが。

「ティルヴィングエアとペンドラゴブレイドはスバルさんが、ライキリがフェイトさんが持っているんでしたね」

「そしてカンショバクヤはナンバーズのノーヴェが所有しておる…

…これだけでもかなりの戦力となる訳じゃな」

エリオと月詠の言うとおり、この4本の刀の所有者はスバル、フェイト、ノーヴェの3人である。

「それでスバルお姉ちゃんのティルヴィングエアって、確か源外のおじさん、スカリエッティさん、哲子さんの3人が力を合わして直してもらったんだよね」

ヴィヴィオがそう言うと、スバルは胸もとの刀のペンダントを握りだす。

それが蒼く光って、光の中から『ティルヴィングエア』のパワーアップした姿『ティルヴィングエア・ドラグーン』が現れた。

「使ってみて分かったんだけど、『ティルヴィングエア』の切れ味が以前より鋭く強度もさらに倍となっている。こんなすごい刀にな

るまで直してくれたなんて、源外さんもスカリエッティさん、それに鉄子さんもすごい人達だよ」

スバルは感心して3人のすごさに改めて知った。

江戸随一の発明家

天才とも言える存在の研究者

江戸随一の刀工の血を次ぐ若き刀匠。

3人の力を合わせられたこそ、スバルの『ティルヴィングエア』はパワーアップして修復できたのだ。

「がははははは!!いやぁ、わし等が力を合わせりゃざっとこんなもんじゃろ!!」

「何せ我々はみんなも分かっているだろう!!」

自慢して笑い出す源外とスカリエッティの2人。

そんな2人に……

『『友達がいない可哀想なコンビ』』

と銀時とアギトの2人がはっきりと言い出すと、源外とスカリエッティが笑いを止めて少し黙り込んだ暗い表情となる。

「ちょ～～!!いくらなんでも言いすぎでしょう2人共!!」

と、真撰組一ツッコミ使いの山崎が青ざめてツッコむ。
そんな彼の目線にルーテシアが黒い笑いを浮かべたのを見かけたが……あえて見なかった事にする。
関われればキリがないからだ。

「そういやぁ、鉄子はどうした？」
「刀の事なら、刀匠である鉄子さんの方が詳しいはずじゃないの？」

銀時とティアナはどうして七星神刀（しちせいしんとう）の説明に鉄子がいないか不自然に考える。
すると桂が変わりに答えだす。

「彼女は、新しい刀を打ってもらっている。ゴスモスで俺の刀は……」

そう彼女は今、桂の新しい刀を打っている。
良く見ると桂の脇には刀が差していない。
コクメン戦で折れてしまっているからだ。

そこで桂は鉄子に依頼して新しい刀を打ってもらっている。
如何に七星神刀（しちせいしんとう）の『ゼフィロス』を手に入れたとは言え、むやみに頼るだけではだめであると考えたのか桂は通常の刀で戦う事も忘れずにいる。
まだみんなに正体をばらしたくないからだ。

「で、いつになったら始めるんだ？」

と、突如シグナムが銀時とフェイトの間に現れた。
これには全員驚きだす。

「のわぁ！シグナム！！」
「いつの間に！？」
「いやぁ、何か七星神刀（しちせいしんとう）の説明があるって聞いたから同じ剣を使う者として知っておきたいと思ってな」

銀時とフェイトの驚きにシグナムは冷静に答えていた。
すると良く見ると彼女は少し汗が出ていた事に気づいたなのはは、思わず聞いてみた。

「あのう、シグナムさん……何か少し汗出ていますけど、何があったんですか？」
「いや、単に我々を差し置いて『狂乱編』で活躍したヴィータにお仕置きしただけだが？」

彼女の質問の答えに、誰もが青ざめていた（ルーテシアとガリューを除く。）。
彼女もまた1人の出番を求めていた者である。
スバルが青ざめて苦笑し、強引に始めだす。

「じゃ……じゃあ、そろそろ始めましょうか！」

＊＊＊

七星神刀（しちせいしんとう）について。

「諸君、知ってのとおり先ほど近藤君やアギトが言ったように、七星神刀は伝説のデバイス製作者、及び伝説の刀匠である梅館妙寿が作り上げた伝説の7つのデバイスであり、それを完全に使いこなすものは今５０００年経ってもわずか数人しか存在しない」
「そうなのか！？」
「それはどうしてですか？」

スカリエッティの説明に近藤は驚き、どうしてわずか数人しかいないのかティアナは訊きだす。

「それもそうじゃ。七星神刀は元はデバイス以前に刀でもあった。つまり機械化された刀と言っても良いじゃろう」
「刀は元々侍の魂が篭った剣。それを使いこなせるには、侍の魂を持った者、もしくは優れた剣の腕を持った者じゃなければならない」
「つまり、魔法よりも剣術を中心とされたデバイスって事だな」
「なるほど！」

シグナムの一言にアギトは納得する。

「それに確か、七星神刀ってカヴェゼシェンデバイスと呼ばれる剣とデバイスが合成されたデバイスの事でしたね」
「しかもその強度は他のデバイスをも遥かにしのぐと言いますし」

山崎とディエチの一言に、少し悔しがるシグナム。
以前、アーサァとの対決で自分の愛剣『レヴァンティン』が簡単に折れてしまった事を今でも忘れていない。

「剣も優れて、魔法も使いこなす魔導士の事を魔剣士と言うんです」
「魔剣士？」

スバルの言う魔剣士と言う言葉にヴィヴィオがくい付く。

「そこは、スバル君が説明したほうがいいだろう」
「何せ本場じゃからな」
「はい……魔剣士とは、通常では剣も優れて魔法を使える人の事を言いますが、ミッドチルダではただ単に剣に優れた魔導士ではなく、侍の志を持った魔導士の事を言うんだよ」
「それってつまり、魔法を侍って事アルカ？」
「略せばそうなりますね」

2人の意見を聞き、スバルが説明すると神楽はそう答える。
実際、スバルは魔導士と言うより侍の剣術を中心として戦う侍に最も近い存在の魔剣士である。
さらに、これはスバル、ティアナ、はやて、ヴィータ、エリザベス、リィン、源外、スカリエッティだけしか知られていない事だが銀時と桂もデバイスを持っているので魔剣士である。
それも最上級デバイスとも言える『ブレイシルバー』と『ゼフィロス』の使い手である。

「後、魔剣士はただ剣術を優れているだけじゃだめなの。剣術と同じぐらいに優れるように魔法も相当な鍛錬も必要で、剣と魔法の2つを極められる事で、初めて魔剣士になれるそうなんです」
「ほぉー、じゃあスバル殿って剣だけじゃなく魔法も優れた存在って訳かぁ！！」
「へ？」
「確かにな……わっちの世界の中でも主ほど神速使いはおらぬ。速さだけならあの夜兎族をも上回るじゃろう」

「それにスバルの使う魔法って他の魔導士には真似できないのばかりだし、どんな鍛錬をすればそこまで強く慣れるのか知りたいぐらいですよ」

スバルの魔剣士の説明を聞いた、近藤、月詠、エリオはスバルの強さを改めて感心する。

実は、スバルは元はあのミッドチルダ最強の特殊殺戮部隊の『第６６魔闘機関』の７人の隊長『魔剣七勇士』の１人である。

だがその秘密を知っているのは、銀時、フェイト、ヴィヴィオ、スカリエッティの４人だけであり、今はまだ知られる訳には行かない。

「え……とう、とりあえず七星神刀（しちせいしんとう）はどんな形の刀か紹介しますね」

苦笑しながらもスバルは無理に話を変える。

スクリーンには七星神刀（しちせいしんとう）の名前とどう言うデバイスであるかが書かれている。

蒼天の風を切り裂く刃→刹那に切り裂く蒼龍の刃　日本刀のデバイス　『ティルヴィングエア』→『ティルヴィングエア・ドラグーン』

竜王の意志を持つ大刀　大刀のデバイス『ペンドラゴブレイド』

天を導く長刀　長刀のデバイス『ゼフィロス』

戦場を舞う双剣　　双剣のデバイス『カンショバクヤ』

閃光に突き刺す魔剣　　魔剣のデバイス『フラガラハ』

稲妻を宿す妖刀　　妖刀のデバイス『ライギリ』

勝利を導く聖剣　　聖剣のデバイス『エクスキャリバ』

「七星神刀（しちせいしんとう）はこの様に、名前どおり全部で7つあって、それぞれ違う形をしているよ。それぞれその強さと性能に合わせられた通称が付けられているんだよ」

「へぇー」

スバルの説明に山崎はメモ帳で記録している。

「それで、それら全てはデバイス以前に剣でもあって使いこなすには剣術の性能が高くなきゃいけないの。それを可能にするには、相当な鍛錬と時間が必要だよ」

「通りで、スバルの異常なまでの身体能力とデタラメ的な魔法の強さが高い訳ね」

『七星神刀（しちせいしんとう）』を使いこなすには魔導士としての強さだけでは駄目であり、刀である事の特徴を最大限に活かすために身体能力も鍛える

べきだ。
ティアナはそれを知り、『異種生命体事件』で再会しすぐに機動六課に入った頃のスバルの異常なまでの強さの秘密を理解した。
最初から強いのではなく、魔法だけじゃなく剣術自体も鍛えている。
才能だけで手に入れるほど強さは甘くはない。

「それで、スバルの『ティルヴィングエア』って確か一度折れてしまって源外さん、スカリエッティさん、鉄子さんの3人が力を合わせて直したんですよね」

なのはがスカリエッティと源外にそう言い出すと、2人は青ざめてしまう。

「……まぁ、その…あれだ」
「その後、メッチャ怖い思いもしたんじゃがな」

2人は、スバルの『ティルヴィングエア』のパワーアップ修正の後にすぐシャーリーとマリーにすごく怒られた事を思い出した。
デバイスの製作・整備の主任者として自分達もそのパワーアップ修正に参加したかったのだが、2人の勝手によりそれが叶わず八つ当たりしていた。
それを思い出している2人は青ざめていて、銀時達はそれを知る予知はない。

「……まぁとりあえず…七星神刀（しちせいしんとう）には他のデバイスにはない決定的な弱点があるんだよ。一度折れてしまうと、刀匠とデバイス製作者がいない限り修正は出来ないんだよ」
「そういやぁ、そうじゃなぁ」
「でも……何で？」

月詠は納得してうなずき、ルーテシアはどうしてなのかを気になりだす。

「さっきも言ったように、七星神刀（しちせいしんとう）は刀と合成されたデバイスだから、本格的な刀の材料で作られている分…抜群な強度を誇るけど魔力による再生はほぼ不可能なんだ」

「ふぅーん」

ヴィヴィオも納得したような表情をする。

「じゃあ、まずは私の『ティルヴィングエア』を発表するよ。私の持っている日本刀のデバイス『ティルヴィングエア』は七星神刀（しちせいしんとう）の中でも最もバランスが取れているのデバイスで、風属性の魔法を得意とするんだよ」

確かに、スバルが今まで使用してきた魔法の中にも風属性タイプの魔法はあった。

『蒼波一閃』・『蒼風一閃』・『ガーディアン・ストーム』・『エア・アルテマ・ギガブレイカー』などそうである。

「さらにこのティルヴィングエアには刀自体に7つのカートリッジが装転されていて、鞘自体にも4つのカートリッジが装転されて、合計11発までカートリッジのロードが可能になります」

「なるほど、だがスバル殿の戦い方では11発のカートリッジをロードしておらぬが、それはおそらく負担がかかるからか？」

「はい、確かに一時的には信じられない程の強さを発揮しますが発動後は必ず魔力が全て消耗します」

「つまり、諸刃の剣という訳か」

スバルの『ティルヴィングエア』の最大カートリッジロードはよほ

どの強敵が来ない限り使用しないであろうと桂は思う。

「それまでが以前の『ティルヴィングエア』ですが、ここからはパワーアップされた『ティルヴィングエア・ドラグーン』の紹介です」

以前の『ティルヴィングエア』は唾が無い柄と鞘の部分も青白い刀だったが、『ティルヴィングエア・ドラグーン』の形は『●レイブルー』の『ユキ●ネサ』に似ていて、以前より長くなっている為、長刀となっている。

柄の先は竜の頭の形をしており、鍔の中心部に青い結晶が突いていて、刀身の刃はサファイアの如く美しく輝きを出していて、峰の部分はやや黒が混ざっていて水色の龍紋が峯の部分全体に描かれている。

更に強度も以前の倍以上は上がっていて切れ味も抜群であり、鞘の部分も強度は以前の４倍となっている。

「以前より長い分リーチが高くなって、さらに刀も鞘も以前よりとてつもなく強度が上がっています」

「そうだな、以前のフェイトとの模擬戦で見せてもらったからな」

「以前のも十分強かったけど、その『ティルヴィングエア・ドラグーン』には驚かされたよ」

銀時とフェイトも、スバルの『ティルヴィングエア・ドラグーン』の切れ味は驚いている。

流石最上級大業物の刀にデバイス化しただけはあって、間違いなく最強のデバイスと名に恥じない強さを秘めている。

「そして『ブルーエアブレイド』と言うティルヴィングエアのリミットブレイクフォームが付いていて、４つの形態を持ってその形態変化は瞬時に行われるから臨機応変な戦闘が可能なんだよ」

「それ、私の『バルディッシュ』と一緒だ！！」
「そうなりますね」

フェイトの『バルディッシュ』にも『ティルヴィングエア』と同じリミットブレイクフォームが付いている。

「鞘が大刀に変わりだして二刀流を可能にさせるのが『ブルーエアブレイド・ツイスター』で、刀と鞘を合わせて、魔力で作られた刀身の超大型剣に変えて強大な力による剛剣に変えるのが『ブルーエアブレイド・テンペスト』。刀と鞘を合体させてロングソードとなり、『ブルーエアブレイド・テンペスト』程じゃないけど高い攻撃力と魔法の威力と発動速度を上げる『ブルーエアブレイド・サイクロン』。そして、カートリッジを１１発ロードすることで、一度に己の中にある魔力を全て出し切る事ができ、『ティルヴィングエア』の切れ味も大幅アップする最強形態の『ブルーエアブレイド・アルテマ』。これら４つの内の１つのリミットブレイクフォーム『ブルーエアブレイド・サイクロン』は、『ティルヴィングエア』が『ティルヴィングエア・ドラグーン』としてパワーアップした時に追加されたリミットブレイクフォームだよ」
「うぉぉぉぉぉ！！良くわかんねぇけど凄いネェェェ！」
「分からんのに凄いと言うんかい！！」

スバルの説明をまったく理解できない神楽は凄いと言い出す。
そんな神楽に呆れてツッコむ月詠。
スバルはただ苦笑するしかなかった。

「次に、ペンドラゴブレイドの説明をするね。属性は炎で七星神刀（しちせいしんとう）の中でも最も圧倒的なパワーを誇る大刀のデバイス」
「シグナムのレヴァンティンと同じだけど、かなりのパワーがある上、炎属性の魔法もかなりの威力があったからレヴァンティンより

は……は！！」

フェイトがスバルの『ペンドラゴブレイド』の性能を『レヴァンティン』以上であると言い出すと、シグナムが暗い表情をする。
相当なまでにその一言がショックであった。

「し……シグナム、ごめん！！別にそんな意味で言った訳じゃ！！」
「良いんだ……どうせ私は魔剣士に劣る存在である事は変わりは……」

必死に謝るフェイトに対し、シグナムは暗い表情をし続けている。

「あはは……それで『ペンドラゴブレイド』の名前の由来は外国語で赤い竜王と言う意味があり、妙寿がミッドチルダに伝わる神話に出てくる伝説のドラゴン『サラマンド』と呼ばれる赤き巨竜の牙で作られた剣だそうです」
「何それ！？ミッドチルダって昔そんなおっかねぇドラゴン存在しちゃってるの？」

神話に出てくるドラゴンの牙から作られた事に驚く銀時。
というよりこの世界にも神話が存在していた事自体にも驚いていた。

「まぁ、具体的にはあくまでこの世界の神話ですけど……それでその牙にはサラマンドの炎の魔力が大量に込められ、使用者に力を化す様にか強力な炎系の魔法を使用することを可能にしています。しかも刀自体もかなりの攻撃力がありますので斬るだけじゃなく叩き潰す事も可能になります」
「確かに……あの時のアーサァとの対決で思い知らされちゃったの。スバルのティルヴィングエアと対極に並ぶ高い性能とアーサァの圧倒的強さは」

なのはは、以前『カリバン事件』の始まりとも言えるアーサァとの戦いを思い出す。
彼女の『ペンドラゴブレイド』だけでなく彼女自身の剣の腕と炎の上級魔法はなのはだけじゃなく、フェイト、アルフ、シグナム、ヴィータの5人がかりでも勝る強さを誇っていた。
なぜなら、アーサァは剣の腕だけでも機動四課を壊滅状態まで追い込む手誰の魔剣士である。
そんな彼女にタイマンで勝つスバルを思うと、改めて魔剣士は魔導士より優れた戦闘向け魔導士である事を知る。

すると、スバルがアーサァの名を聞くと……何故か涙を流す。

「……うぅ……」

これにはみんなも驚きだして、慌てだしてしまう。

「ちょ～～!!高町殿、スバル殿の前でアーサァの名を軽々しく言っちゃだめだって!!」
「スバルにとってアーサァは親友であって、そのアーサァが悲しい最後をしてしもうた事を忘れたの!?」

近藤とはやては慌てながらもなのはにツッコム。
それを思い出したなのはは「しまったなのぉ!!」っと叫びだす。

「アーサァ……」

涙を流しまくって、最早説明どころじゃないスバルは涙を流すのであった。

「あーもう、いい加減泣くの止めなさいよ、このバカスバル！！」
「スバルお姉ちゃん、泣かないで！」

そんなスバルにティアナとヴィヴィオが必死に止めようとする。
もはや今の彼女には説明は無理だと思ったスカリエッティが変わりに説明する。

「ここからは私が話そう。ペンドラゴブレイドは確かに攻撃力は最大級でありしかも炎系の魔法もかなり優れている。だがその最大の特徴は、空間転移と呼ばれるテレポートのような移動系特殊魔法を可能にさせる事だ」
『『テレポート！？』』

スカリエッティのテレポートを可能にする魔法を聞いて驚く全員（スバルと源外は除く）。

「元々、サラマンドはその体自体が炎に出来ているから炎のある場所に空間転移して素早く移動する事ができるようだが、その理由は詳しく知らされていない。だがこのペンドラゴブレイドを使い慣れれば自分の記憶にある居場所に瞬間移動を可能にするが、それはあまりにも莫大な魔力が必要だからそう何発も使えない」
「なるほど、アーサァが突如消えたのもあれはペンドラゴブレイドの持つ特殊な魔力によるものだったのか」

『ペンドラゴブレイド』の最大の特徴を理解したシグナムはうなずく。
山崎も必死にメモに書いて記録していた。

「ちなみに、この空間転移はペンドラゴブレイドの使用者のみが使用できる魔法であり、他人を転移させる事は不可能だ」

「以上がペンドラゴブレイドの特性じゃな。次はこれだ、長刀のデバイス『ゼフィロス』。こいつはゴスモスと言う惑星にしかない魔力砲玉アテリマを材料に作られた七星神刀（しちせいしんとう）の１つじゃ」
「ゴスモス！？確か僕達が以前に次元旅行で行ったときテロ事件に巻き込まれて不時着した次元惑星の……」
ゴスモスの存在を思い出したエリオ。
もしあの時不時着でもゴスモスに行かなかったらジェノバ・ナイトの集団キザラキによって壊滅させられたであろう。
「何でも，アテリマを持っているじゃけでデバイス無しでも術式魔法を使いこなせるそうじゃ」
「デバイス無しでも！？」
「マジ！？」
デバイス無しでも魔法が使える事にディエチとアギトは驚く。
「そしてそのアテリマを材料として七星神刀（しちせいしんとう）として作られたゼフィロスは、人間の身長をはるかに上回る長さを持つ野太刀であり、アテリマを埋められとるから圧倒的な攻撃範囲と術式魔法を使用可能にするのじゃ」
まさに刀とデバイスだけじゃなく、『術式魔法』に必要な特殊魔力宝玉のアテリマが合成された長刀とも言える。
他の七星神刀（しちせいしんとう）には無い、３種類の武器が合成されたカヴェゼシェンデバイスである。
「さらに言うと、ゼフィロスは魔力を込めなくてもその余りの切れ味に魔法をも切断する事も可能じゃ」
「マジでか！？」

魔法をも斬る刀の存在に近藤は驚きだす。
魔法対策の能力を持っている刀は魔導士相手にはかなり有利だ。

「じゃが余りの刀身の長さの為、七星神刀(しちせいしんとう)の中でも最も扱いづらいと聞かされとる。なんたってその長さは、『●ングダムハーツ』に出てくる●フィロスの愛刀とも言える『●宗』並の長さじゃからのう」

「結局は●F7ネタかいィィィィィィ!!」

銀時が怒鳴りながら叫びだす。
一方の桂、エリザベス、はやては『ゼフィロス』の説明を聞いて少し悲しげな表情をする。
何せ『ゼフィロス』は使用者は桂であり、スバキが形見として桂に託したスバキの魂が込められた剣である。

「七星神刀(しちせいしんとう)の中でも扱いづらい刀……か」

桂はそれを聞き、明日から内緒で『ゼフィロス』を使いこなす鍛錬をする事を決意する。
スバキの託した『ゼフィロス』をただの代わり刀としてではなく、その特性を最大限に活かす為に強くならなければならない。
それは彼女の託された新たな力を無駄にしない為にだ。

ちなみに皆には、はやてが重要デバイスとして保管していると聞いている。
だが実際には桂が持っている事を、銀時、はやて、エリザベス、ヴィータ、リィンの5人にしか知らない。
そして落ち着き始めたスバルが次の七星神刀(しちせいしんとう)の紹介をする。

「じゃあ、次はノーヴェが持っている双剣のデバイス『カンショバクヤ』を紹介します」
「ああ、確か『コーシカップ事件』を起こした張本人ミツルが一族に伝わる秘宝として使っていたデバイスですね」
「後にコーシカップに対する憎しみが消えた後に管理局に連行される前にと私に渡されたんやけど、管理局が眼に届いて悪用されやすいと考え、ナンバーズに預かってもらったっけ」

山崎とはやてが思い出すように言い出すと、スカリエッティが笑いながら言い出す。

「ああ、それでスバル君に対抗意識を持ったノーヴェが自分が使うを言い出したからどれだけ強くなれるか渡したもんだ」
「え、私に！？」

ノーヴェが自分に対抗意識を持っていたことに驚くスバル。
なぜなら彼女は、あの魔導競技大会でスバルに圧倒的な力の差で大敗北してしまった事でスバルにライバル心を抱く。
それを聞いてスバル自身は意外そうに驚く。

「そう言えば、七星神刀（しちせいしんとう）の説明会なのにノーヴェ殿がいないのも少しでも早く強くなりたいと言って鍛錬を続けていたな」
「うん……かなり張り切っている」

スバルに負けたくないと言う信念が彼女を変えたのか、今激しい鍛錬をし続けて急激に強くなってきている。
フォワード万事屋でもスバルを除けば、彼女もティアナとエリオと同じぐらいの戦力となっている。

「あ…じゃあ説明するよ。カンショバクヤは2つの剣で1つのデバ

イスとして成立されていて、魔導士の天敵とも言える破魔と呼ばれる『ＡＭＦ』並の攻撃魔法を掻き消す装置が付いている魔剣。片方の刀で魔法を打ち消すまたは吸収する事もでき、その吸収した魔力をもう１つの刀で放つ事も可能なんだ」

「じゃあ、それって私の天敵って訳なのかなぁ？」

実際に、おもに魔法メインに戦うなのはにとっては最大の天敵の七星神刀である。

なのはだけじゃなく、はやてやティアナもそうであって対抗が難しい。

「まぁそうなります……それに双剣である独自の二刀流は攻守を優れたバランス型、攻撃の２倍もしくは守備の２倍にも可能になりますから、使用者によって戦い方が変化するそうです」

「なるほど……ノーヴェはどう考えても突撃して戦うタイプだし、しかも格闘術と混じった異種格闘剣術のような戦い方をするから攻撃が２倍になるって分けだね」

「うん、ティアの言うとおり確かに攻撃に優れるけど……その場合は防御が脆くなるから気をつけなきゃ」

ノーヴェの戦い方は剣術と格闘技を合成させた異種異種剣術。

接近戦にはかなり優れている分、守りが薄くなる欠点があるとスバルは考える。

「それで次は魔剣のデバイス『フラガラハ』の説明じゃな」

「これは、さまざまな魔法の威力を増幅させる力を持っていて数多くの魔法剣を生み出すと言われている。しかもこの刀の強度は七星神刀一とも言われるほど硬いようだ」

『マジ！？』

見た目は普通の日本刀よりも少し細めだが強度はかなり高いと聞いて驚くエリザベス。

「さらに言うと、この刀の最大の特徴は幻想魔法系の特性があり、振るうだけで相手に何本の刀身があると惑わせる能力を持っていて幻想魔法を得意とするものが使用すればその効力は倍増じゃ」

「それってつまりティアナには相性抜群の刀じゃねぇ？」

「確かに、ティアナは機動六課でも唯一幻想魔法を扱う魔導士だからピッタリだな」

「いや、私剣じゃなく銃を使うものですけど！？」

銀時とシグナムはティアナなら使いこなせると確信して頷くが、ティアナは無理だとはっきり言い出す。

何故なら彼女は剣じゃなく銃を使用する。

魔剣士でない限り使いこなすのは本人でも無理と分かる。

「さらに『フラガラハ』はサーベルの様な形をしとるのか突きの攻撃が最も強く、カンショバクヤほどじゃないがその突きだけで防御魔法をも打ち消す事も可能だそうだ」

「そんなのありかいな！！」

魔法の威力も上げ強度も七星神刀（しちせいしんとう）一。

さらには幻惑で相手を惑わせ一突きで防御魔法を打ち消すなど、ある意味万能系である。

一方のスバルは『フラガラハ』の説明を見て深刻そうな表情をする。

何故なら、その使用者がスバルのかつての仲間であり、元第６６６魔闘機関の魔剣七勇士の１人、アリマ・ヴァンミリオである。

今の彼女は、管理局に仲間を殺された憎しみで自ら高杉の仲間に入り『鬼兵隊』の一員となった。
彼女の仲間入りによって、『鬼兵隊』は１０００人分の戦力を手に入れたのと同じである。

何故なら、彼女はかつてはスバルと双璧となる第６６６魔闘機関最強候補の１人であり、今ではスバルを凌ぐ強さを持っている。
また幻想魔法のスペシャリストであり、それはティアナをも上回る使い手であり天才とも思わせる剣の才能を持つなど、まさに最強の魔剣士と呼ばれてもおかしくは無い。
そんなアリマを止めるのが、自分の役目じゃないかとスバルは考える。

「なるほど、七星神刀（しちせいしんとう）は刀とデバイスが合成された……いわば魔剣その物であろうに、何故フラガラハだけが魔剣のデバイスとして呼ばれるのかは、フラガラハが最も魔法に関わりがある刀である事だな」
「如何にも、魔法を得意とする魔導士にとってはフラガラハは強化武器と言ってもおかしくは無いね」

桂が納得すると、スカリエッティは『フラガラハ』は魔導士の為にある剣だとはっきりと言い出す。

「次は妖刀のデバイス『ライキリ』じゃな。こいつはスカの字がフェイトに鬼兵隊対策用にと渡した剣じゃな？」
「あ…ええ、そうだよ」

フェイトは、稲妻の形をしたペンダント『ライキリ』を出して見せる。

「そいつは確かに強力な刀の上、フェイトに相性ピッタリじゃろ。ライキリは雷属性の魔法を得意とし、雷系魔法を使いこなすフェイトなら最大限に使いこなせるのじゃが……以前スカの字が言ったように、そいつは七星神刀一に危険な刀でもある」

「たしか、使用者の魔力を吸い取る剣じゃったな」

源外が『ライキリ』は協力の上に危険だと言い出すと、月詠が思い出すように言い出す。

「そうじゃ。鞘を抜き柄を握ったままにしておると、魔力が吸い寄せられてしまい、全ての魔力が吸われしまうと今度は生命力も吸ってしまう諸刃の剣じゃ。じゃがその分、魔力を吸い取れば吸い取るほどライキリの血と肉と化して力を増幅させるのじゃ」

「おお、使い手の力を吸う所から妖刀のデバイスと言われるのですなぁ」

源外の説明に、近藤は紅桜とは違う意味の妖刀であると確信する。実際に、長時間使用し続けると魔力がなくなって生命力も吸われてしまう恐ろしい剣である。

「そして最後は七星神刀最強と言われる聖剣のデバイス『エクスキャリバ』。これは本来なら幻の七本目の七星神刀として完成されなかった剣ですが、管理局が保存していたのをウゼルが奪って研究し続けて完成された刀だそうです」

「あのおっかねぇ剣か」

スバルが『エクスキャリバ』の存在を口に出すと、銀時はウゼルとの激戦を思い出す。

元研究者としての力を全て出し切って完成させた幻のデバイス『エ

クスキャリバ』はウゼルの手によって完成された聖剣。
その性能は銀時をも苦しめるほどの強さを持っていて、侍じゃないどころが魔導士としての素質が無いウゼルでも急激に超人としてのパワーを与えるほどである。

「エクスキャリバを使用する者は魔導士としての素質が弱くても、エクスキャリバからあふれ出る信じられない程の身体能力増幅エネルギーや膨大な魔力によって、使用者を最強の魔剣士と化す事が可能になるんだよ」
「えええ～！？」
「それって反則じゃないですかぁ！！」

驚きの余りに叫びだすヴィヴィオに、余りの反則的強さに叫びだす山崎。

「それって、メッチャ地味で大して強くねぇぱっつぁんでも存在感あって強くなれるって訳あるかぁ！！」
「いや、そのぱっつぁんって人がたとえ弱くても強くはなれますが、存在感が上がるかは分かりませんが……」

神楽の例え方にスバルは苦笑しながらも答えだす。
ちなみにぱっつぁんとは新八の事である事をスバルはまだ知らない。

「けどよぉ……エクスキャリバってそれだけじゃねぇんだろ？」
「はい、詳しくは分かりませんがエクスキャリバにはまだ知られていない能力があるそうで、銀さんが勝てたのもウゼルがエクスキャリバを完全に使いこなせなかったのが理由の１つだと……」

スバルと銀時は、まだ『エクスキャリバ』には隠された力があると疑う。

しかし『エクスキャリバ』はウゼルとの死闘の後、『カリバン』の巨大要塞で管理局が探し続けても行方不明のままである。
それが鍬死楼がこっそりと奪って鬼兵隊の兵器の1つとして保管されていることをまだ知らない。

「何はともあれ、これで全ての七星神刀(しちせいしんとう)の紹介は終えたのも当然じゃ」
「全ての七星神刀(しちせいしんとう)を見ると改めておっかないデバイスや」

はやては改めて『七星神刀(しちせいしんとう)』がなぜ伝説の7つのデバイスと言われているのかとあるかを知る。
さらに魔剣士が魔導士よりもはるかに上回る強さを持っていたかも知ったリリカル組は、魔法だけじゃなく己の身体能力も鍛えなければと考える。

「ルー殿、山崎、ディエチ殿、アギト殿、ガリュー殿、俺達も魔剣士を見習ってまた己自身を鍛えようではないか！」
『『うん（はい）（おう）（承知）！！』』

アジトに戻ったらまた鍛え直そうと考える近藤達。

「さて、我々も鬼兵隊の兵器対策を考えなければ」
「ああ、機械師(からくりし)の腕がなりおるわい」

スカリエッティと源外もやる気を出し始めて、また新しい『鬼兵隊』の兵器対策の機械(からくり)を作ろうと思う。
銀時の『ブレイブルー』だけじゃなく『バルディッシュ』と『ティルヴィングエア』のパワーアップの次に何をすべきかを考え始めた。
今度はシャーリーとマリーと一緒にしなきゃまだ怒鳴られると言う怖い考えもして。

皆それぞれ七星神刀（しちせいしんとう）に負けないぐらい前へ進むとやる気を出す中で、桂、はやて、エリザベスは集まりだしてニヤリと笑う。

「と言う訳で、後半はこんな感じでスタートした訳だ」

「次回から『リリカル桂魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷志士鎮魂歌～』が始まるから」

『これ、絶対なんで』

『『絶対に見て――』』

ドカァァァ

～』の後半もスタートし、後半とは言えまだまだ長く続きますのでこれからもよろしくお願いします。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

銀八
「へぇい、じゃあ今回も『銀八先生コーナー』をはじめまぁす。今回のアシスタントはこの人」

クアットロ
「はぁい、ナンバーズのアイドル、？4のクアットロでぇ～す♪」

いつものクアットロとは違うしゃべり方に銀時は冷たい目線で彼女を見て…

銀八
「……はい、今回の『銀八先生コーナー』は中断としまぁす」

と立ち去る銀八だが、

クアットロ

「ちょちょちょ、待ってぇぇ！！何その扱い！？何そのドSプレイ！！せっかくの初アシスタントだからそんな扱いしなくても良いでしょぉ！！」

マジで大泣きするクアットロ。
実はここ最近の出番の無さに彼女はマジで悲しんでいた。
それがようやく出番が増えた事で、嬉しさのあまりについはしゃいだのである。

銀八
「たくぅ、わぁーったよ！続けりゃ良いんだろ！！だからもうふざけた態度は控え……」

クアットロ
「じゃあいくわよぉ、まずはペンネーム『白米』さんの質問ね」

銀八
「つうか勝手に進んじゃってるし！！」

勝手な行動をするクアットロに銀時は怒鳴って叫びだす。

クアットロ
「「『質問：：

1.
刃「銀八へ。
　第百十三訓の質問で拙者が送ったハブ酒、実はアレ、毒抜きするのを忘れてた。
　死にはしないが、これが読まれた頃には貴様の全身からドリアン臭が出るはずだから注意してくれ……」

2.

武「なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナに質問。
原作で新八がギャルゲーにハマり、ゲームの中のキャラを『彼女』と読んでいた話があったが、
各々、正直な感想を一言で、順番に答えてくれ。
そして、新八は『お仕置き』が必要かどうかも答えてくれ」

『』」

銀八
「て、忘れてたんかいィィィィ！！あん時はマジで死に掛けてたんだぞ！！今更注意したって遅すぎだろぉ！！」

そう、銀八はあの毒入りハブ酒を飲んだ後、数時間しにかけていた上、『銀八先生コーナー』が終わった後にすぐ全身がドリアン臭が放って周りの人達から軽蔑される目線で見られて困っていた。
そんな銀八を見てクアットロはわざとらしく笑いを堪えている。

クアットロ
「はぁ～い、次の答えをお願いしまぁす♪」

スバル・なのは
『『……あ……あははははははははは』』

フェイト
「新八に……そんな趣味があったなんて」

ティアナ
「最っ低！！こんなのがお兄ちゃんの隣に入るの！？」

スバルとなのははただひたすら苦笑し、フェイトは呆れて、ティアナは軽蔑する。

クアットロ
「と言う訳で『白米』さん、これ以上黒神が新八（オタクメガネ）に軽蔑しないように少しお仕置きしちゃってくださぁい♪」

銀八
「明らかにぱっつぁんのお仕置きを希望してんだろお前……じゃあ次はペンネーム『龍の骨』さんの質問『零斗
「お久し振りだぜ、北郷零斗だ。ここで
ユーノに質問。ＢＳＡＡ学園のユーノはシャッハと付き合っているんだが、どう思う？」『」

ユーノ
「ちくしょぉおおおおおおおおおお！！あっちの僕が勝ち組で羨ましい！！」

大泣きして叫びだすユーノはメッチャ悔しがっている。
そんなユーノに対して大爆笑するクアットロ。
流石ドＳである。

銀八
「と言う訳で『龍の骨』さん、これからもそっちのユーノを勝ち組として活躍させてください…んで次ィ、ペンネーム『真王』さん『質問するが、『皆さん召喚するキャラはどんな人がいい？』」

ヴァルバトーゼ「俺様も全員に質問だ。『ＦＦシリーズで気にいったキャラは誰だ？』」『

とりあえず作者の都合によって、機動六課のメンバーだけに答えさせてもらった。

銀時
「そうだなぁ、俺ぁ召喚ならヨウジンボウあたりでＦＦシリーズで気に入った奴ぁ特に思いつかねぇからいねぇ」

フェイト
「じゃあ私はイグシオンが召喚したい。そんでライトニングさんってかっこいいなぁって思う」

スバル
「私はバハムートかリヴァイアサン、もしくは一刀獣。気に入ったと言うより尊敬する人なら魔剣士の白い雲さんかなぁ」

桂
「俺はカーバンクル。そして気に入っていると言えばセフィロスあたりだな」

なのは
「私はセラフィムで、気に入っているのは魔法使いとしてのイメージが高い主人公のティナなの」

ティアナ

「じゃあ私は砲撃獣で気に入っているのは『ＦＦ：Ｕ』と言う漫画の主人公の黒き風かな」

神楽
「私は最も多くの部下を作りたいという意味でナイツオブラウンドネ。そんでエーコ・キャルオルさんとは仲良く出来そうアル」

エリザベス
『私はゴブリン。そして気に入ったキャラはクイナ・クゥエンぐらいですかねぇ』

月詠
「そうじゃな……召喚するとすればサボテンダーで気にいたキャラは特におらぬ」

はやて
「私はゾディアークで、気に入っているのはリュックやな」

エリオ
「僕はオーディンで、気に入っていると言うより尊敬している人ならヲルバ＝ユン・ファングと言う槍使いです」

キャロ
「そうですねぇ……神龍を召喚してあの神楽（ウジムシ共）と月詠を……ふふふ」

とても怖いほど不気味に笑うキャロ。
ちなみに気に入っているキャラは召喚士としてならユウナである。

アルフ
「私は狼関係でフェンリルだよ。そんで気に入っているのは狼の名

を持ったバイクを扱うクラウドかなぁ？」

シグナム
「私はイフリートで、気に入っていると言えばアーロンだが」

ヴィータ
「的としてで繰るならハンマーを使用してくるブラザーズぐれぇかなぁ。後ＦＦってハンマーを使うメインキャラっていたか知らねぇからいねぇかな」

シャマル
「私はコモーグリで、気に入っているキャラはガーネットちゃんかな」

ザフィーラ
「私はケルベロスで、その魔犬の名を持つ銃を扱うヴィンゼントに一目つく」

九兵衛
「僕は……胸が大きくさせる召喚獣を召喚したくて、貧乳キャラを応援したい。巨乳はどうでもいい」

黒神
「いや、なんだよその召喚獣!?聞いた事ねぇよ!!しかもまた胸関係の答えぇ!?」

辰馬
「わしゃ、シヴァと言うきれいなお姉さんを召喚したいもんじゃ。後ォ、ユフィちゃんとは中良ぉしとうたいわ」

外道丸
「わっちは元は式神でやすから召喚したいもんとかは思いつかないんで……しかし気にって入るといえばジェクトぐらいでありやす。子思いの父親としての一面が強いんで」

お登勢
「私はＦＦの事全然知らないから答えようが無いね」

ヴィヴィオ
「ヴィヴィオはコチョコボで、エアリスとは仲良くしたい」

ギンガ
「フェイトしゃまと同じ召喚獣と同じ気に入った人物で！！フェイトしゃまぁ！！」

黒神
「だからちゃんと答えろ、この百合シスコン！！」

ユーノ
「ぼ……僕はセイレーンで気に入ったキャラはティファかなぁ」

以上が機動六課全員の答えであった。

銀八
「やっと終わったかよ。と言う訳で『真王』さん、廊下に立っていなさい」

クアットロ
「次はペンネーム『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さんからよ、『今回はなの

はさん絡みの質問を行きます

まず一つ
こちらで完結した「魔法少女リリカルなのはＤＹＮＡＭＩＣ」で使用させて貰った「デスペレード・デモン・ブレイカー」を見てどう思いましたか？

もう一つ、同小説の中でなのはさんの位置が「管理局の白い魔王」ではなく「白い小悪魔」や「白い女神様」と言う位置づけになってますが其処はどう思いますか？

ではでは』」

銀八
「ずばり答えます。まさか逆ネタで思いついたあの技がシリアスで使われた事には黒神も私も驚いています。と言うのも、元々あれは本編には登場するか分からない魔法であるので」

クアットロ
「じゃあ、次は高町なのはで…」

なのは
「にゃはははは…他のところの作者より扱いはマシなの」

クアットロ
「あれぇ！？」

想像してたのとは違う答えに唖然とするクアットロであった。

銀八

「と言う訳で『ｓｉｂｕｇａｋｉ』さん、小説がんばってください。
んで次ィ、ペンネーム『ｃｈａｒｌｅｙ』さん『質問です。

ザビー
「チントキさんに恋してる皆サ～ン！
貴方達がチントキさんと結バレル為に何カ日々努力してる事はアリマセンカ～？
もしナニもやっていないのナラ、ワッタシとノストラダムスカリムの合同著書…
『グレートティーチャー　ザビー＆カリムの１００％成熟スル恋愛シュミレーション講座ハンドブック』
を差し上げマ～ス！」

慶次
「おいおい…そんな胡散臭い本誰もほしくないだろ…というわけで俺からも質問…
銀時が好きな女性陣は何かそれぞれ得意料理ってのはあるかい？
実際まつ姉ちゃんとかもそうだが、料理の上手い奴っては結構男からモテるもんだぜ。まぁ、そっちには暗黒物質作る奴もいるみたいだけど…」

『』」

銀時
「いるかぁぁぁぁぁぁぁ！！そんなおっかねぇ本を誰が欲しがるんだよ！！大体なんだよチントキってぇ！？わざとなのか！？わざと下ネタで名前を間違えてやがんのか！？アナログスティックネタで間違えてんじゃねえぇよあのクソ紳士！！」

銀時は怒り出して怒鳴りだす。

一方のなのは、スバル、あやね（一応は）にとっては有利だが、
フェイト・ティアナ・アルフ・シグナム・リィンフォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード
『『ま…不味い！！』』
１０人は明日から料理の特訓をしなければと必死に考える。
そんな１０人の負け犬光景をドSに笑い出すクアットロ。

銀八
「と言う訳で『ｃｈａｒｌｅｙ』さん、廊下に立っていなさい」

クアットロ
「ええっとう、次はぁ…ペンネーム『次村陣八』さんの質問ね『質問！
1．ヅラは、ヅラ子になりますか（笑）
2．はやて、ヅラ子をみて如何思いますか？（爆）』」

銀八
「ずばり答えます。それは作者の考え方によって決まりますゆえ、はやてのヅラ子に対する感想は『第八十五訓：思わぬ時に再会する時もある』の前書きで明らかになります」

クアットロ
「と言う訳で『次村陣八』さん確かめてみてねぇ♪」

銀八
「次が最後だなペンネーム『ケン』さん『銀八先生にＨＥＲＯ'ｓＥＰＩＳＯＤＥに出ている主人公である天川　統夜からの質問で

す。

統夜「一つ目は桂・・・アンタは今のはやてと俺の物語でバカテスの翔子や瑞希並のヤンデレに変貌してしまう（予定）はやて・・・どっちが好きですか？」

統夜「二つ目の質問はなのはに質問。御神流と呼ばれている剣術や俺が使う剣術に興味ないか？」『」

桂

「1つ目は俺が答えよう……そんなの今のはやての方が言いに決まっている。キャロ殿のようにヤンデレとなれば取り返しのつかない事になってしまうからな」

はやて

「桂さん…」

そうまで自分の事を思ってくれてる桂に強い感謝を抱くはやて。

『狂乱編』での2人の関係が縮まっていきたので、甘い空気になっている。

銀八

「マジでムカつくんだけど！？」

クアットロ

「まぁまぁ……2つ目は高町なのはへ」

なのは

「うーん、確かに興味はあるけど…私、剣の腕ははっきりと無いから」

クアットロ
「くくく、そうやって坂田銀時と同じく剣で戦うフェイトお姉さまやスバルと言う小娘に遅れをとっても知らな……」

ガシィ！！

と、とてつもない速さでクアットロの顔面を掴むなのは。
笑顔は可愛らしいが、とてつもない殺気を放っている。

なのは
「えぇ、何か言ったかなぁクアットロちゃん？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

クアットロ
「ちょ、マジでごめんなさ……イギャアアア

第百十七訓：調子良いからって調子に乗り過ぎてはいけない（後書き）

銀時達の最大の敵『鬼兵隊』。

その戦力は増幅していくばかり。

世界の破滅の計画を進める高杉。

そして、スバルに憎しみを抱くアリマ。

闇は確実に進んでいる。

スバル

「次回、『悪の日常もたまには知っておくべし』テイクオフ」

第百十八訓：悪の日常もたまには知っておくべし（前書き）

黒神
「今回は久しぶりに鬼兵隊の出番です。……じゃあ、『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始めます！！」

スバル
「前書き終わるの早っ！！」

第百十八訓：悪の日常もたまには知っておくべし

表の光が進むと同時に、裏の闇も進む。

光にある光景も、闇にも似たような光景もある。

人間の中には光もあれば闇もある。

たとえどんなに闇が濃くても光は完全に消す事はできない。

それは、人間だけじゃなく生命体なら誰でもそうであり、ある者は闇と戦い、ある者は闇に飲み込まれ、ある者は闇より醜い存在となる。

そして今回は、絶望と裏切り、そして憎しみによって闇に飲み込まれた1人の魔剣士少女を中心とした話が始まるのであった。

ここは鬼兵隊の戦艦の中心部。

その中心部はある1人の少女のある特殊訓練室である。

白っぽいピンク色で左右にツインヘアーしていて背後にロングヘアーのような背中に届くぐらいのサラサラとしたロングヘアー並みの長さをした緋色の如くの瞳。

漆黒ともいえるゴスロリミニスカートで細長い足を太ももの部分まで隠せるほどの黒くて長い靴下。
ルックスもスタイルも良く、胸も大きいなど美少女としての中の美少女である存在を保つ少女。

左手には愛刀『フラガラハ』を握っている。

その少女とはアリマ・ヴァンミリオ。

裏切り者のスバルを憎み、自分の全てを奪った管理局を憎む魔剣士。

そんな彼女は今、数多くの紅桜（未完成版）を右腕に埋め込んでいる数対のアンドロイドと戦っている。
その地には数多く斬られて動けなくなったアンドロイドがいる。
一方のアリマはまったくの無傷とも言っても良いぐらい平然である。

如何に紅桜が未完成品とは言え、これだけ数多くの紅桜によってＡＡ級は行く戦闘力を誇るアンドロイド相手に1人で戦える事は彼女の戦闘力は高い証拠である。
そして次々とあふれ出てくるアンドロイドが紅桜を構えてアリマを襲い掛かる。

「……おそい」

アリマは凄まじいダッシュで目にも見えない剣裁きで、一気に連続に剣を振りだす。
眼にも見えない剣素振りに、６・７体のアンドロイドは切断されて動けなくなった。
その刹那の瞬間にアリマはさらに目の前のアンドロイドの懐まで移動し、

「天翔斬（てんしょうざん）」

剣を振り上げると同時に大きくジャンプして、そのアンドロイドを一刀両断にする。
飛翔した彼女に隙を突くようにと1体のアンドロイドが襲い掛かると、

「非雲連刃（ひうんれんじん）」

刀で防がず、まるで雲の様な動きで滑らかに交わし、その瞬間にか超高速に連続に剣を振るいだし、アンドロイドはカウンターを受けてバラバラになる。
アリマはゆっくりと着地するが、

グサササササササ！！

無数のアンドロイドが一斉にアリマの体中を紅桜で突き刺す。
だがそのアリマが霧のように消える。

実はこれは彼女の得意とする幻想魔法であり、分身のアリマに飛びかかった数多くのアンドロイドの周りには幻想魔法で分身した１５人のアリマがいた。
そしてそれぞれ『フラガラハ』を構え、

「ファントム・ジェノサイド」

一斉に剣を振ってアンドロイドを一斉にバラバラに斬る。

その後、アリマの分身は消えて本体1人となる。
上級幻想魔法使いは幻想の影響時間を自在的に操れる。
そして残りのアンドロイドがアリマを襲い掛かる。
するとアリマは表情を変えずに、

「ブロッサム・ソードブレイカー」

そう言って魔力を込めた『フラガラハ』を振って黒紫色の巨大な斬撃が現れる。
すると花火のようにバラバラとなって無数の黒紫色の鎌鼬が放たれて全てのアンドロイドの胴体を間っ二つに斬る。
全てのアンドロイドが全滅すると、アリマは右脇に身に付けている漆黒の鞘を右手でつかみ出して『フラガラハ』を鞘に納める。

《ミッション終了、目標タイム1時間で100体のアンドロイド壊滅。タイム15分、SSSランク!!》

終了を確信すると、アリマは黒く光りだして通常の衣装に戻る。
赤いネクタイをかけていて学生服の様な漆黒の衣装に金色に輝くボタン。
そして真紅のミニスカートが目立っていて、学生美少女とも思わせる魅力を持つ。
そしてアリマが左手の人差し指に挿してある紫色に輝く宝玉の指輪

が『フラガラハ』の待機フォルムである。

「お疲れ、フラガラハ」

≪By the skill that is wonderful without the master turning into meeting（マスターもあいも変わらず見事な腕前で）≫

優しい笑顔で『フラガラハ』に声をかけるアリマ。

『フラガラハ』もアリマの事を思っていて、かなり信頼しあえる関係のようだ。

一方、その様子を高みの見物として高杉、万斉、剣煉がその様子を眼に焼き付けていた。

「ははは、これはまたずいぶんと心強い仲間ではないか！！春雨でもあれほどの腕を持つ者は存在するか知らぬぐらいにのう！！」

剣煉は愉快そうに大笑いする。

アリマが入れば１０００人分の戦力となる事は間違いないであろう。

「万斉、鬼兵隊にも意気の良い者が入ってきたな！！」

「まったくでござる。あれほどの手誰を持った剣士が魔法と言う妖術が無ければまったく無能なこの世界でも存在するとは、奇跡と言ってもおかしくなかろう」

魔法無しじゃまったく無能であると考える万斉は正直言ってアリマほどの剣の腕を誇るものがまだこの世界にいたことに感心した。

「魔剣士と言うのは恐ろしいものだ。剣の腕だけじゃなく魔法とや

らの妖術も使える上、その妖術の性能を魔法無しでは何にも出来ぬ無能な魔導士をはるかに上回る。伊達に侍としての試みを持っているだけはある」

その中でも、アリマは間違いなく最強であろうと思う。
剣の腕も魔法の才能もまさに超一流であり、天人をも瞬殺しそうなぐらいの実力はある。

「優れた剣に強力な妖術、それを使い合わせなれた戦いぶり。そして2つの力が共存しあうリズムの波長……例えるなら、激しく心を躍らすロックバンドにバイオリンの美しいメロリーで斬新的な人々を魅力する名曲」
「ははは、なるほど!!確かに侍の魂を持つ魔導士……魔剣士は優れていると言う訳か!!そう思わないか、晋介!!」

アリマに高い評価をする万斉に魔剣士の戦闘力がどれ程なまでに優れているか確信した剣煉。
そして2人の後ろで煙管を加えて愉快そうに笑う晋介は、アリマの様子を見ていた。

「フゥー……我ながら強力な部下を手に入れたもんだ。あの女が入ってきてから、鬼兵隊も協力になっていく一方で、この調子じゃ春雨と対等に渡りあえそうでなァ」

もし、春雨と戦って勝てばどんな破壊の喜びを感覚できるか想像するだけで不気味な笑顔をする晋介。
だが彼の最大の目的はあくまで世界の破壊。

「あの女がァ、鬼兵隊に入ってきたのも……今日のように…こんな豪雨が降ってた天気だった」

ガラスに映っている外の天気。
荒ぶるように振ってくる豪雨。
闇が染まったかのような暗い雲。

全ては、あの日が『鬼兵隊』の始まりであった。

＊

それは、まだ『鬼兵隊』が剣煉率いる組織と同盟に結んで異世界に行く企画を立てていない頃であった。
『鬼兵隊』の戦艦の前で、傘を差している晋介と万斉が何やら攘夷志士の噂話の内容を話していた。
それは高杉が以前にある攘夷志士で噂話になっていた桂がアニメの世界に行った話しである。

「桂小太郎がアニメの世界に？」
「あァ、胡散臭ェ話だけどよォ、ヅラならやりかねねェだろうよォ」
「しかし晋介…たとえそれが本当だとしても、どうすればそんな事が可能に？」

とても信じられない万斉はどうやってアニメの世界と言う異世界に行けたのか謎が多くて分からない。
晋介もその真意を確かめようと考えた中、

「それは、私が詳しく話してあげる」

突如の1人の少女が2人に声をかけてきた。
2人はそれほど驚かずにその声が聞こえた方向に振り向く。
そこには1人の少女、アリマがいた。

「おめェは……」

意外そうな人物に高杉は唖然とする。
可憐なる美少女がこんな所にやってくるなどまずありえないに近い。
しかし高杉と万斉はその眼に移った少女の内心を見抜いた。

自分と同じく世界を憎む憎悪と憤怒。

おそらくはこっち側の人間じゃないのかと考える。

「アリマ・ヴァンミリオ。貴方達がこの世界で有名な犯罪組織『鬼兵隊』であるとお見受けする」

アリマは高杉達が『鬼兵隊』であると確信し、決意した事を言い出す。

「この世界を本当に壊すなら、私を雇って！桂小太郎がどうやってアニメと言う異世界に行けたかをすべて話すから！」
「…どうやらお主は、桂小太郎が言ったアニメの世界に関わる人物のようでござる」

アリマが桂が行った世界に関わる人物だと確信する万斉は、アリマの仲間入りを認める。
その情報を知りたいようだ。

「そして…この世界を壊すのなら……私と一緒にやってほしい事があるの！」

「……ククク…何が望みだ、嬢ちゃん」

アリマを『鬼兵隊』に入れれば面白い祭りが出来そうだと高杉は確信して不気味に笑い出す。

そしてアリマが口に出した言葉こそが、『鬼兵隊』のミッドチルダ破壊計画の開幕である。

「私のいた世界を……私の全てを奪った世界を、全て残さず壊して欲しい！！」

＊

「可憐なる花のようなお嬢ちゃんだと最初は思っちまったがァ……俺等と同じ立派な牙を持っていやがったなァ」

最初に彼女が自ら『鬼兵隊』に入った事に内心に驚く高杉。

その後、彼女から全ての真実を聞かされた。

桂が行った世界はアニメの架空の世界ではなく、アニメの内容とまったく同じの実際に存在する異世界である。

さらに魔法の存在や、管理局の存在など、アリマがいた憎むべき世界の事をすべて高杉は聞かされた。

その後、『春雨』の裏切り者である剣煉と出会って同盟関係になる。

さらにはその異世界に来て、管理局に不安を抱き、憎み、絶望した魔導士はもちろん、魔法が使えないと言う理由でミッドチルダから

見くびられて捨てられた者も『鬼兵隊』に誘う。
そしてミッドチルダの技術をありったけアリマから聞かされ、さらにはアルハザードの存在も聞かされ、死者を蘇らせる秘宝も手に入れた。

そしてアリマは江戸の世界に移動したのも、『第666魔闘機関』が作り上げた瞬間移動装置で坂田銀時と桂小太郎がいた世界に瞬間移動したからだ。
銀時達がどうやって高町なのはの世界に来たのかは、『第666魔闘機関』の総大将サナダ・シンゲンから聞かされた事である。
源外と言う異世界の発明家が作り上げた瞬間移動装置でなのはのいた世界に移動してしまった事を知った彼女は、いつか憧れの銀時のいる世界に生きたいとサナダ・シンゲンが作り上げた瞬間移動装置を使って、自分も江戸の世界に来たのだ。
その世界で、数多くの天人と言う異種生命体にも出会ったが、幕府側から『鬼兵隊』と言う攘夷浪士が集団した義勇軍に注意したほうが良いと聞かされ、自分と同じ目的を持っているかもしれないと知り、高杉の元に来た。

それが高杉とアリマの始まりであった。

「晋介様」

と、高杉の後ろから1人の侍が現れた。
被り笠をはいており、黒い着物を身に付けている侍こと大威四鍬死楼が現れた。

「面白い情報を持ってきてやったぜェ。紅桜をさらに強化できる情報が」
「ほぉ」

＊

「あぁー、何か今思い出しても腹立たしいっすぅ！！！！」

と扉を何度も何度も蹴りまくる1人の少女、来島(きじま)また子(こ)。

高杉に強い忠誠心を抱き、『紅い弾丸』の異名を持っている拳銃使いである。

そんな彼女がどうしてこんなにも怒り出しているのかと言うと、全てはミッドチルダにあった。

「魔法が使えなきゃ何にも役に立てない無能な奴だって、舐めてやがんのかあのクソ野郎共がぁ！！！！」

そう、彼女は思いっきり管理局の傲慢な態度に怒り出していた。

魔法こそが全てな管理局にとって、魔法が使えない者には容赦なく見下す。

逆に魔法が無ければ自分達は無力である事をまったく知ろうとはしない。

「そんな愚か者共にはこの手で抹殺してやったから良いんじゃないのかい？」

そう言い出すのは、『鬼兵隊』の一員でかつては紅桜事件で死んでしまったが高杉がアルハザードの秘宝によって生還された攘夷浪士、岡田似蔵(おかだにぞう)が呆れながらも言い出す。

同時に今持っている刀を見とれるように眺めている。

刀身は炎のような乱れ刃で、良く見ると間を空けて小さな真紅の宝

玉が埋められていて、柄は漆黒に染まっている。
そして鞘も黒く、紅葉の葉っぱの絵柄が無数に描かれている。

「あの一戦で魔導士は侍に劣る存在だと思い知らせたから良しと使用じゃないかい……まぁあんな連中でも試し切りになれた事は変わりないしねェ……この俺の断太秘明（たったひめ）の斬り台としてはねェ」
「アンタのその名刀、手に入れる為にどれだけ苦労したか知らないんすか？つぅか、良くもまぁ生き返りやがったすね？」

また子も最初は似蔵が生還した事には信じられない程驚いている。
しかも生還した似蔵の強さは以前よりはるかに上回って、彼が刀を振るうと何故か刀が付いていけずに自然に折れてしまう。
その為、名刀の中の名刀とも言える『断太秘冥（たったひめ）』で、似蔵が思う存分に戦えるようにしたのであった。

「そういやぁ、あの男はどこにいるんだい？さっきから見当たらないけどねェ」

似蔵がそう言うと、また子は何故か呆れて頭を抱える。

＊

「ムフゥゥゥゥゥ！！なのはたん、フェイトたん、サイコォォーーーーーーーー！！！！！」

と、テレビに映っている『リリカルなのは』の第一期のＤＶＤを見て、海パン一丁で興奮しながら尻を振っている変態ロリコン男……もとい変人謀略者の武市変平太（たけちへんぺいだ）が興奮していた。

両手には少女時代のなのはとフェイトのフィギュアを持っている。

「Ａ・Ｏ・ＮＡＮＯＳＡ・ムフムフムフ！！！」

と鼻息を噴射するように出して、気色悪いほどに興奮してなのはのフィギュアを頭にこするようにする。

「Ａ・Ｏ・ＦＹＥＩＴＯ・ムフムフムフ！！！」

今度はフェイトのフィギュアを頭にこすって興奮する。

「うァあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ズパァーン！

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

と、突如異常なまでに青ざめている似蔵が脅威の神速居合を無差別に炸裂し、変平太は危機感を感じて超ギリギリにかわしだす。

しかしなのはとフェイトのフィギュアは真っ二つに斬られた。

「ちょぉ！！何するんですか岡田さん！！私の大切なコレクションがぁ！！」

「あ……あはははは……いやぁ、すまないねェ…これまで見た事が無いほど気持ち悪い色が見えてきちゃったから、ついやっちまったさぁ」

変平太のロリコンぶりに、あまりにも気持ち悪かったか似蔵もこれ

ばかりは我慢できずに暴走した。
変平太の部屋には、何故かなのはシリーズのフィギュアだけじゃなく、ＤＶＤ、春本、ゲーム、ポスターが張っている。
完全にロリコンと化してしまった。

「いやいや、むしろぶった斬ってくれたほうが嬉しいっスよ」

予想通りだと、また子は呆れて口に出す。
似蔵は変平太がどれだけロリコンであるのかまだ知らないのであった。

「似蔵、アンタも良く覚えておくと良いっスよ…先輩は薄気味悪いロリコンである事を」
「また子さん、だから私は言っているでしょ。ロリコンじゃなく子供好きのフェミニストですてばぁ。岡田さんに誤解されるような言い方は止めてもらえませんですか？」
「てそのフェミ何たらのやっている事は、海パン一丁で裸踊りしながら少女の人形を握りながらの興奮だけじゃいスか！！それを証拠に、どこをどう見てもロリコン以外ありえねぇっスよ！！」

変平太はこれでもかと言い訳し、また子は激怒してツッコミだす。
『赤い弾丸』だけじゃなく『攘夷浪士一のツッコミ使い』の異名を持ってもおかしくは無いぐらいにツッコミのキレが良くなっている。

「何か、すんごくいらねぇ称号を頂いた気がすんすけど？」

とまた子は嫌そうな表情をする。

「とにかくまぁ、お邪魔しちゃ不味いから……俺はここでェ」
「待ってください岡田さん！！貴方には是非ともその剣で斬って欲

しい男がいます……フェミニストの敵、坂田銀時を！！」

いつもながら真剣な表情をし、変平太は似蔵に言い出す。
その言葉に似蔵はピクリと止まって、変平太を見る。

「おやまァ、あまりあの男と遭遇していないのに…何か強い因縁の色が見えるんだけど…何かあったかい？」

少し興味深そうに聞いてみる。
すると変平太がその理由を聞くと……

「あの男はねぇ……天然パーマの分際で数多くの美少女を虜にしていやがるんですよこんチクショーーーー！！世界一美少女を愛するこの私を差し置いてフェミニストでないあんな天然パーマが何で美少女にもモテているんだよ！！これは明らかにロリコンに対する敵対宣言と同じです！！必ず、ロリコンの敵、坂田銀時にこの世の全ての苦痛を味あわせなきゃいけません！！ちなみにもう一度言いますが私はロリコンではなくフェミニストで…」

興奮してアホな理由で怒り出している変平太に対し、気持ち悪くなった似蔵は青ざめて、

「うぉあああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

スパパパパパパパパパパパパパパパァァァァァァァァァァーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！

と、暴走するかのように、神速居合斬りを連続に炸裂する。
するとその居合が、次々とフィギュア・ＤＶＤ・ゲーム・ポスターなどバラバラに斬る。

「イヤァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！止めてエェ、岡田サァァァン！！！！」
「俺にウス気味悪い色を見せるなァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！」

大泣きして必死に止めるのを願う変平太に対し、似蔵はあまりにも気持ち悪い光景に暴走して次々と変平太の大切なコレクションを斬りまくる。

「……何スか、このカオス？」

また子は、最早混沌とも言うべきこの状況をどうすれば良いのか分からなくなってきた。

＊

一方、晋介、アリマ、万斉、鍬死楼、剣煉は重大な話し合いをしていた。
それはゴスモスでの『キザラキ』の壊滅と、桂の魔導士として覚醒した事。
そして『紅桜』のパワーアップ情報である。

「ほう……人を侵食するだけじゃなく、あの兵器はその魔力をも吸い込むって訳かい……文字通り魔剣化って訳だァ」
「もしそれが本当であれば、オクティンに知らせとくべきね。彼ならその強化方法を知っているはずだから」

興味深そうに聞き出す高杉は愉快そうに笑い、アリマはすぐにこの事をオクティンに紅桜の強化計画を立てるべきだと言い出す。

オクティン・ストォン

『銀園祭事件』を起こした張本人キクナエ・ストォンの父親であり、同時にミッドチルダ随一の天才発明家でもあった。
しかし管理局の強力な兵器を作る計画を断ったばかりか、一度は管理局の陰謀で殺されてしまった。
犯罪者と言う汚名を着せられて。
だが高杉のアルハザードの秘宝によって生還を果たした彼は、管理局に対する怒りを増幅させる。
その為、管理局をつぶす為に新兵器を作り上げている。

万斉、鍬死楼、そして剣煉は『紅桜』の強化の話をオクティンに知らせる為に彼の研究場に向かう。
残った高杉とアリマは何もする事が無いから話し合っていた。

「晋介、今の貴方は…今の私と一緒だ」
「ほぉ」
「幕府と言う連中に恩師を奪われ、仲間も殺された憎しみが…貴方

から体に伝わっている……。私も同じだ」

スバルやカウェイン、サナダなどかつての仲間である『第666魔闘機関』の仲間を思い出し、それを奪った管理局に対する憎しみを持つ。

「私の第666魔闘機関の居場所を奪った管理局だけは絶対に許せない……幕府もそんな事を平然とする場所なら、私の手で破壊する！」

「そうかい……だがもったいないなァ、お前」

憎しみを抱くアリマを見て高杉はアリマの存在がもったいないと言い出す。

「こんなにも可憐な姿なのに、将来別嬪さんになれるかも知れねェんだぜェ？なのにそんなお前さんが、女としての幸せよりも俺等と同じ世界に踏みいれっちまったんだからさァ」

「女としての幸せはもうないよ……第666魔闘機関が無くなって、スバルも裏切ってしまったから」

「くくく……で、そんなお前さんでも覚悟はあるのかァ？」

高杉は確かめるようにとアリマにある一言を言い出す。

「ミッドチルダを潰すっとなれば、お前が憧れていた坂田銀時と戦わなきゃなられェ事になっても」

そう、ミッドチルダに敵対するとなるのは銀時とも戦わなきゃいけない。

アリマにとっても、スバルとカウェイン同様に銀時は偉大なる尊敬する剣士である。

そして彼女の頭の中から過去の思い出が思い浮かぶ。

＊

そこは大きな時計塔。
その屋上で夕日に見上げているのはまだ『第(だい)６６６魔闘機関(まとうきかん)』に所属していた頃のスバルである。
彼女はいつものとおり、任務が終わると時計塔の屋上で夕日を見つめていた。

とそこに1人の少年、スバルのかつての相棒であるカウェイン・ナインブレイカと『第６６６魔闘機関』に所属していた頃のアリマがやってきた。

「よぉスバル、お疲れさん」
「……カウェイン、アリマ…」

カウェインとアリマの存在を知ったスバルは少し驚きの表情をする。

「どうしたの、…いつもみたいに明るい笑顔がなきゃ貴女らしくないでしょ」

笑いながらアリマはスバルを励ます。
この頃のアリマは、今とは別人であるほど笑顔満載である。
しかしそんなアリマの言葉が届いていないのか、スバルは少しスル

ーな表情で夕焼けを見ている。

「……時々、感じるんだ」

「え、何を感じるって？」

「私が……私達が任務の為だからって今まで奪ってきた犯罪者達の命を」

そのスバルの一言に、カウェインとアリマは少し深刻な表情をする。

自分達『第(だい)６６６魔闘機関(まとうきかん)』は他の部隊とは違い、より多くの人々の命を救う為に殺戮部隊として数多くの犯罪集団を斬り殺している。

その中でも、スバル、カウェイン、アリマは『魔剣七勇士』と言う最強の７人の魔剣士の内の３人であり誰よりも多くの犯罪者を殺めなければならない。

殺られる前に殺り、仲間や多くの人を護る為になら、一刻も早く敵を討たねばならない。

それが『第(だい)６６６魔闘機関(まとうきかん)』に入った者の宿命だからだ。

「最初に化け物と化した人を殺めたときでも、この手で人を殺しちゃったんだなぁっと思ったら凄く苦しい気分だったよ。それでも、私達は護りたいものを護る為ならっと多くの犯罪者を殺めてきた……自分の大切なものを護るだけじゃなく自分自身を護る為に」

今、ここにスバルは人の重さを改めて知る。

どんな卑劣な悪人でも、自分達と同じ人間である事は変わりは無い。

確かに戦場では迷えば自分自身が死んでしまうだけでなく、自分の大切なものも消えてしまう。

それを護る為なら仕方が無いことだが、まだ１５未満のスバルにとっては人を殺めるには重すぎた。

するとスバルは日本刀のネックレスを握ると、蒼い光があふれ出る。
その光の中から、愛刀『ティルヴィングエア』が現れ、スバルはその刀の柄を掴み、ゆっくりと鞘から抜き出す。
その刀身から輝きだすサファイアの様な青くて美しい宝石の様な剣を見つめている。

「刀は所詮人斬り包丁、そして剣術は人斬り技術……どんな名刀でも、どんなに鍛え上げられた技でもこればかりは変わらない……私達はそれを知ってても、刀を持って剣術を極めようとした……人の重さを知らずに」

本当にこれで正しいのか疑いだすスバル。
自分はただ、坂田銀時のような大切なものを護れる侍になりたかっただけ。
確かに剣の腕は上がり、仲間も出来て大切なものも護れている。
しかし、だからって人を殺めてまですることなのか？

スバルはそんな自分自身に疑いだしている。

「……確かに、スバルの言うとおりに剣術は人斬り技術かも知れねェ……でもそんな技術でもスバルはより多くの人を救ったんじゃねぇか今も前も、そしてこれからもな」
「カウェイン…」

改めて開き直ったかのように言い出すカウェインにスバルは唖然とする。

「それに、俺達はスバルの言うとおり数え切れないほどの犯罪者を殺めてしまった。けどだからって今更恐れちゃ逃げてしまう事にな

るだろ？」
「そ……それは」

恐れる事は逃げる事と同じ。
もし、今ここで逃げれば自分達が今まで殺めてきた人達の命を背負う事を拒否してしまう事になる。
確かにそれは楽かもしれないが、侍の心意気を継ぐ魔剣士になったのならその命を背負わなければならない。

「スバルの気持ち、分かるよ」
「アリマ」
「でも私達は、その命も背負って生きていかなきゃ行けない。あの伝説の英雄　坂田銀時もおそらくは数多くの命を奪っていったから今もその命の重さを知って、生きているんだ」
「銀時さんが？」

小さい頃に助けられた大英雄・坂田銀時の名を聞いてスバルは開き直るような眼をする。
確かに銀時が侍であれば、自分達と同じように数多くの命を奪ってまで戦場で護りたいものを護る為に戦っていたのやもしれない。

「だから私達もその覚悟を持って戦場に立たなきゃ行けない。たとえこれから先、人を斬ってでも自分の護りたいものを護って、坂田銀時の様な侍になる為に」
「ああ、俺だって憧れの英雄に会うまでには絶対に死なねぇ、あの人のように自分の大切なものを護り通しながら」

アリマとカウェインも、人を斬った時から覚悟を決めていた。
魔剣士として、そして侍の信念を胸に護るべきものを守り抜く侍としての屈強な魂を持って。

「……2人の言うとおりだね」

そんな2人を見て立ち直るスバル。
そして『ティルヴィングエア』は光出すと、元の日本刀のネックレスとなる。

「私ももう恐れない。大切なものを、より多くの人の命を護る為なら戦い続ける。カウェインとアリマ、それにサナダ隊長達がいれば…私は戦える！！」

取り戻した勇気と笑顔。
そんなスバルの姿を見た2人は安心し笑う。
そしてアリマはある物を出した。
それは愛子喜屋武呈（あいすきゃんてぃ）と呼ばれるアイスキャンディーであり、水色であった。

「はい、いつもの愛子喜屋武呈（あいすきゃんてぃ）。今日はソーダ味だよ」
「おほぉー！俺好きなんだよソーダ味！！」

大喜びに受け取るカウェイン。
彼は愛子喜屋武呈（あいすきゃんてぃ）の中でもソーダ味が好きである。
3人はアイスを舐めながら夕日を眺めていた。
いつものように、3人は任務が終わるとここでアイスを食べでお互いの事を話し合う。

「なぁスバル。もし今回みたいな事があっても…」
「？」
「俺達がその背中を押してやるから安心しな」

飛びきりの笑顔でカウェインは答える。
スバルの相棒として、仲間としてカウェインはスバルを支える事を決意する。

「それにスバルはもう1人じゃない」

アリマもスバルの肩を乗せてはっきりと言い出す。

「私達が一緒についているよ」

自分達がついている。
そうアリマはスバルにはっきりと言い出す。
するとスバルは涙を流しだす。

こんな自分に、こんなにも良い仲間が出来た事に嬉しくて嬉しくて、たまらないのである。

「……うん…ありがとう……2人とも、ありがとう……」

＊

「……戦う。たとえかつて憧れた英雄が相手でも、私はミッドチルダを破壊する為なら誰であろうと戦う」
「フゥー…そうかい、ならもう心配ないって訳だな」

煙管を取り出して、煙を吐く高杉はアリマに迷いは無いと見抜く。

「それでも、私の中には今でもスバルとの思い出が残っている。どんなに消そうとしてでも、思い出のほうから浮かび上がってくる…貴方にもそんな事があるでしょ。坂田銀時と桂小太郎との思い出が勝手に思い浮かべてしまう事を」

アリマのその言葉に晋介は笑いの表情を止める。
だがアリマの言う事は一理ある。

自分はアリマと同じだ。
寺小屋で松陽の元で学問・剣術を共に学びだした銀時と桂との思い出。
そして攘夷戦争で辰馬を加えて仲間達と天人と戦っていた頃を。
思い出したくなくても、人の記憶は勝手に開くように思い浮かべてしまう。

高杉は幼い頃と攘夷戦争の頃を思い出し、深刻そうな表情をする。

「……ああ、そうだな」

銀八
「教えて」

生徒全員
『『銀八先生』』

銀八
「はい、と言う訳で銀八先生コーナーを始めます。今回のアシスタントはかぶき町四天王の1人、お登勢でぇす」

お登勢
「なんだい、ようやく出番かと思いきやいきなりアシスタントかい。まぁ良い、私が出るからにはちゃんとした形で終わらせるよ」

銀八
「お願もしい！！マジでお願いしますよ姉さん」

お登勢
「誰が姉さんだ？」

銀八に呆れてしまうお登勢は溜息を吐く。

銀八
「ええ、まずはこの人ペンネーム『黒龍』さん『黒龍「はぁ～。もう収集つかないし質問いくか。
リリカル勢に質問ですが、原作で愛無限空間（ラブチョリスホール）と言う現実の二次元の狭間にある空間に逝ってしまい廃人化した新八（メガネ）をどう思いますか？」

アリス「私もいきなり登場して質問だ。
お前達は前に私を怖いと言ったな。だが、私にも良い所はたくさんあるぞ。だ・か・ら、私の良い所を言ってみろ。言えなければ分かっているな？（黒笑）」

黒龍「黒神さんに質問です。新八に彼女ができる予定はありますか

？」』……あれ、何でだろう。１つ目の質問を見て涙が出てくるのって？何これ、俺悲しんでいるの」

お登勢
「かぁ、まったく情け無いねぇ！でもまぁ、１３股かけてるどっかの天然パーマよりはまだマシだけど？」

銀八
「何その言い方？止めてくんない……アリスの質問は……そのドＳぷりが美しいです」

お登勢
「それ褒め言葉かい……？まぁいい、３つ目は馬鹿作者にだね」

黒神
「そうですねぇ、気分次第ですが…今は新八のへたれオタクぶりを排除して本物の侍にへと成長させたいですね。まぁ難しいですけど」

銀八
「と言う訳で『黒龍』さん、ぱっつぁんの成長を見届けてください。んで次ィ、ペンネーム『白騎士君』さん『レナード「今回は俺の質問だ。シャマル鍋ってどんな味だ？できれば食べたいのでそっちに一つ下さい」』……早まるなレナードォォォ！！！！」

銀八はありえないばかりの質問に青ざめる。
お登勢もシャマルの異常なまでの料理の下手さには嫌と知っている。

お登勢
「と言う訳で『白騎士君』さん、無謀な挑戦は控えときな」

銀八
「まったくだ!!んで次ィ!!ペンネーム『桜』さん『質問です
銀さんがもし超サイヤ人になれたとしたらなどんな技を使いたいで
すか?

二つ目の質問です
もし銀さんがポタラで他の女キャラと合体して女になってしまって
戻れなくなったらなのは達はどう思いますか?やっぱり諦めますか
?それとも諦めませんか?』」

銀時
「かめはめ破が撃ちたい!!」

銀八
「やっぱりだよな!!」

銀時の答えに、銀八は呆れて叫ぶ。
そして2つ目の答えは……

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リィン
フォース・チンク・セイン・セッテ・ウィンディ・ディード・猿飛
『『もちろん、諦めない（の）（ません）（っす）』』

お登勢
「……マジでかよ?」

銀八
「と言う訳で『桜』さん、廊下に立っていなさい」

お登勢
「じゃあ次行くよ、ペンネーム『鳴神　ソラ』さんの質問『
質問『銀時は桂が魔剣士になった時のバリアジャケットを見てどう思う?』」
はやてに質問『銀時のバリアジャケット見た時どうだった?』」
』」
銀時
「マジで●フィロスのコスプレかと思った!!」
お登勢
「おめぇだって●グナ・ザ・ブラッドエッジとか言うゲームキャラのコスプレじゃねぇか!」
銀時
「うっせェェェ婆ァ!!!マジで恥ずかしいんだよこれがァ!!俺だって好きでコスプレしてるわけねぇっつぅの!!」
お登勢の一言に怒鳴り返す銀時。
はやて
「いやぁ、ほんま本物の●グナ・ザ・ブラッドエッジかと思ったわぁ」
とはやては答える。

銀八
「と言う訳で『鳴神　ソラ』さん、廊下に立っていなさい。んで次ィ、ペンネーム『レイガン』さん『銀八先生に質問です。
1．桂さんに質問です。
「ウルトラマンメビウス」の歌を聴いてどう思いましたか？
2．はやてさんに質問です。
はやてさんにはリインのツッコミ集をあげますので、りいんのツッコミのダメだしをしてくだ。
』……ずばり答えます」

桂
「まさに宇宙の平和を込められた子供達の為の歌だった！！」
と潔く答えだす。

はやて
「いやぁ、怒っているリィンが可愛らしいから最近ではどうしようかと思って……」

リィン
「ほぉ、はやてちゃんはリィンの事をそんな風に思ってたですか」
（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！
後ろから怒気を放つリィンに気づき、はやては土下座して『ごめんなさァァァァァァい！！』と謝罪する。
お登勢

「はぁ、と言う訳で『レイガン』さん……この狸娘をマシにする方法を考えてやってくれないかい？」

銀八
「無理だろ？次ィ行くぞォ、ペンネーム『烈火竜』さん『エリオに質問です。
銀さんが月詠と（＋他の女性達）同棲を始めたと知ったら、どうしますか？

ギンガに質問です。
光翔竜
「現在のフェイト様と幼いフェイト様、どちらが愛らしいでしょうか？」

なのはに質問です。
光翔竜をどうしたいんですか？』」

エリオ
「もちろん、一緒に仲良く暮らします！！」

お登勢
「坊主、あの嬢ちゃんに殺されても知らないよ」

はっきりと答えるエリオであった。
お登勢は間違えてもキャロに殺されるんじゃないのかと心配する。

ギンガ
「もちろん、どっちのフェイトちゃまが愛しい！！」

お登勢

「お前は病院行ってこい！！」

ギンガの質問に呆れてツッコムお登勢。

なのは

「……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！

とてつもない殺気を放つなのは。

相当なまでにボコボコニしたようだ。

お登勢

「なんだい、この天人をも凌駕する殺気？」

銀八

「と言う訳で『烈火竜』さん、廊下に立っていなさい！！次ィ、最後ですので！！」

青ざめて強引に終わらせた銀八。

銀八

「最後はペンネーム『支配者』さんの質問です！！『フェイトに質問です。もし高杉がアリシアを生き返らせて襲わせようとして来たら皆さんはどうしますか？』」

フェイト

「……」

フェイトは必死に悩む。

そして決意した答えは…

フェイト

「その時は全力でアリシアを止めます。高杉に悪用される訳には行かないから」

強い決意を持った眼ではっきりと言い出すフェイト。

そんなフェイトにお登勢は感心した。

お登勢

「良い眼をしてるじゃないかい…あの天然パーマにはもったいないぐらいに」

銀八

「まったくですなぁ。と言う訳で『支配者』さん、廊下に立っていなさい」

お登勢

「んで今回の『銀八コーナー』は終了だね。次回はあのチャイナ娘にアシスタントをやらせておきなァ」

銀八

「へぇーい……じゃあ、次回もお楽しみ!!」

第百十八訓：悪の日常もたまには知っておくべし（後書き）

突然ですが、ここで長編シリアスの人気募集をします。
後半に入って、序盤から中盤まで続いたシリアスの中で、貴方が最も気に入ったシリアスを１人五票まで登録し、１つのシリアスには３票までお願いします。

応募はメールでお願いします。

締め切りは次のシリアス終了時まで。

投票するのは如何のシリアスです。

Ｏｗｅｅ編

モンキーハンターオンライン・マスカーク編

高町家編

魔導競技大会編

スバル編

人気争奪戦

アイドル編

烈火編

銀園祭編

ランスター編

狂乱編

黒神
「と言う訳で今回はアリマ中心の短編でした」

また子
「……あのう、何か先輩が原作以上に変な方向に進んでいるンすけど？」

黒神
「いやぁ、この小説キャラ崩壊ありだからあの変態ロリコン野郎をさらに気持ち悪くしてやろうかと思って」

また子
「私が言うのも何スけど、マジ最悪な性格してやがるなおい！！」

黒神
「と言う訳で、次回「見た目が怖そうでも心が優しい人もいる」テイクオフ！！」

また子
「駄目だこいつ、マジでペースを乱しているっス」

第百十九訓：見た目が怖そうでも心が優しい人もいる（前書き）

黒神
「……ついに来ました」

銀時
「へ？何が？」

黒神
「史上最強とも言える銀魂キャラがついにやってきたんです」

銀時
「誰だよそいつ！？つうかマジで気になるんですけど！？」

黒神
「『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！！！！」

銀時
「聞けやァァァァァァァァ！！！！！（怒）」

第百十九訓：見た目が怖そうでも心が優しい人もいる

それはとある日の事。

銀時、神楽、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、フリードの6人と1匹はスカリエッティに何か重要な事を頼まれてアジトに来た。
そしてスカリエッティの部屋で6人はスカリエッティの以上に青ざめている表情に不思議に思っていた。

「んで、どうしたんだスカリエッティ？また厄介な事を頼み込んできたってのか？」
「……あ……ああ」

珍しくも弱気なスカリエッティに銀時も流石に不思議がる。
一体何があったかのかと気になる。

「今日は、君達にある人物と会わせたくてね。それも銀時君と神楽君の知り合いで、2人に会いたがっていたようで」
「え、マジで！？そいつって……」
「ぱっつぁんアルか！？」

銀時と神楽はスカリエッティのある人物とは誰なのかを気づく。
それは自分と同じ世界どころが、同じ万事屋の重要メンバーの1人、志村新八であった。
アイドルオタクである事が致命的欠点だが、影が薄くても侍としての思いは本物であってツッコミの切れも一流。
『江戸一番のツッコミ使い』と銀時から呼ばれるほどである。

新八がくれば、後は定春とそろえて元祖万事屋が再結成する。

2人はそう期待込めて新八だと思うが……

「いや、そんな名の人物ではなく……何か花屋であるようで」

『『花屋？』』

スバル、ティアナ、エリオ、キャロの４人は花屋である事に意外そうな表情をする。

銀時と神楽もそうであるが、花屋であり自分達の知り合いであると聞くと、急激に青ざめる。

その人物は嫌と知っている。

かぶき町に住む天人であり、その中でも最凶であるあの緑の魔人が。

『『……』』

2人は青ざめて、体をブルブルと震えている。

花屋であるならあの男に違いないと嫌と思う。

「ぎ……銀さん、神楽さん！？」

「お兄ちゃん！？一体どうしたの！？」

「神楽さん、しっかりしてください！！」

スバル、ティアナ、エリオの3人は一体2人は何に怯えているのか分かんなかった。

しかしその恐れる理由がすぐに分かる、

何故なら、その2人でさえも恐れる最凶の人物が今部屋に入ってきた。

「おやぁ、坂田さんに神楽ちゃんじゃないですかぁ！！」

愉快そうに現れて笑いながら現れたその男は、文字通り人間ではなく天人であった。
頭に花が生えていて可愛らしいが、それを除けば他全体は鬼の様な顔つきと体制であった。
緑色の体色にとてつもない威圧感を放つ魔眼とも言える瞳。

そして何でも砕きそうな歯。

それはまさしく鬼である。

その男を見たスバル、ティアナ、エリオ、キャロは青ざめて時が止まったかのように固まってしまった。

「あ……あはははは、へ…屁怒絽さん、いや屁怒絽様…まさか貴方もいらしてたなんて思いもよりませんでしたァ……あはははは」
「はぁい。何か志村君から事情を聞かされて、私も店を閉めて貴方達を探していたんですよ。そしたら変な光に包まれてしまい、気がついたらみっどちるだって言う異世界に飛ばされてしまったんですよ。まさかここが、以前金髪のお嬢ちゃん達が言っていた異世界ですかねぇ」
「そ……そうなんですよぉ！さすがの屁怒絽様も突如の瞬間移動に驚いたでしょ！」
「いやぁ……ま……まさかお前もこの世界に飛ばされたんてなぁ、私すっかり新八だと思ったヨォ……あ…あはははは！」

屁怒絽が銀時と神楽の再会のあまりに嬉しそうに喋りだす。
一方の銀時と神楽は屁怒絽の圧倒的怖さに固まってしまい、とにかく怒らせないように喋っていた。
そして屁怒絽は、見慣れていないフォワード万事屋の４人に気づい

て、自己紹介をする。

「あ、どうもすみません。挨拶を遅れました……私、坂田さんと同じ世界で花屋をやっています……屁怒絽（ヘドロ）です」

自己紹介の名を聞くと、４人は急激に汗を流す。

「放屁の『屁』に怒りの『怒』、絽便マスクの『絽』と書いて……屁怒絽（ヘドロ）です」

彼がそう言うと、４人は青ざめていた。

スバルは顔中に汗を流して、苦笑しながらも恐怖を感じていた。
ティアナは体中が震えていて、今でも泣き出しそうな表情をしている。
エリオとキャロにいたっては体中が震えて涙を流していた。
屁怒絽が相当なまでに怖いのである。

何せ、屁怒絽の姿だけじゃなくその威圧感は並大抵な者ではない。
そのあまりの怖さに生命型ロストロギアしか見えず、ゾーマよりも強そうである。

屁怒絽はあの宇宙三大傭兵部族の一角、茶吉尼族である。
その戦闘力は半端じゃないほど高く、屁怒絽はその上位に入りそうな雰囲気である。

「あのう、是非ともお礼がしたいのでもし良かったらこの当たりで僕が立てた家をご招待したいので…是非皆さんも遊びに来てください」

何か無駄に威圧感を放っているのか、フォワード万事屋は青ざめて汗だらけである。

「では、お待ちしております」

屈怒絽は丁寧に挨拶してこの場を去る。

屈怒絽が去ってから数分後、彼女達の止まっていた時がようやく動き出す。

「怖ァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！」

「怖いよぉ！！てか何あれェェェ！！生命型ロストロギア的な人物が来ちゃったよ！！」

スバルとティアナがようやく恐怖の感情を表して言い出す。

自分達も散々『鬼兵隊』のえいりあんや『紅桜』などで銀時の世界の異常な存在には見慣れても、屈怒絽の存在はそれが生易しいように見えた。

「神楽さん、銀さん、一体何なんですかあの人ォ！？」

エリオも屈怒絽の存在には恐怖しか見えていない。

一方のキャロは、フリードが失神して倒れている為必死に叫んでいる。

「フリード！！しっかりして、フリードォォォォ！！」

「キュ～」

あまりに怖いのか、フリードは屁怒絞を見ただけで倒れて気絶した。

「……あ……あはは、あの人は屁怒絞って言って、俺達と同じ世界に住むかぶき町の花屋さんをやっている人物で、ほら……『ヘドロの森』っと言う花屋の店を立てている天人なんですよ」

「花屋の顔じゃないでしょあんなのォォォォォ！！間違いなく花を利用して花粉を撒き散らして世界を征服しようと企む存在しか見えないわよォォォ！！」

ティアナは屁怒絞がそんな存在である事に見える。

実際の銀時達も最初は屁怒絞のあまりの怖さにそう思ってしまった。

「ちょっと待ってくれ！」

そこでスカリエッティが勇気を振り絞って聞き出す。

「もし、屁怒絞君の誘いを断ったらどうなるのかね？」

その言葉を聞いた銀時と神楽は、無言になる。

何もしゃべらないところが体を異常なまでに震わせる。

もし、断れば間違いなく殺される様な感じである。

何も喋らない2人に、スバル達は絶対に行かなければならないと確信する。

＊

ここは、屁怒絞が立てた樹で作られた花屋『ヘドロの森』である。
場所はほぼスカリエッティのアジトの隣で、屁怒絞がここで店を経てる許可をスカリエッティにお願いした。
スカリエッティは断れば何されるか知らない為、一発で許可した。
ナンバーズ達もスカリエッティの判断に賛成する。

何せ屁怒絞の怖さは最凶とも言うべき存在であり、間違いなく自分達より強い。

逆らえば殺されるからだ。

屁怒絞から放たれる威圧感は、間違いなくSSSランクは達成する。
下手すれば生命型ロストロギアをも瞬殺出来そうなほどの強さを秘めている。

そんな屁怒絞の店の中に、銀時、神楽、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの6人はいた。
フリードは失神で気絶している為、シャマルに治療中である。

6人は今だに、屁怒絞の圧倒的な恐怖に怯えて震えていた。

「それにしても不思議ですね。あの金髪のお嬢ちゃん、フェイトちゃんでしたっけ。まさか私も、坂田さん達と同じくあの子の世界に飛ばされるなんて思いもよりませんでした」
「そ……そうですねぇ、フェイトが屁怒絞様が来たって知りゃ驚きますよ」

屁怒絞の存在に今だ慣れていない銀時はビビりまくっている。

何せ屁怒絽はゾーマをも倒せそうな強さを持っていそうであり、如何に英雄である銀時でも屁怒絽だけには敵に回したくない。
スバル達も同じである。
ＳＳＳランクの戦闘力がありそうな屁怒絽に敵に回しただけでも恐怖しだす。

「それに、スバルちゃん、ティアナちゃん、エリオ君、キャロちゃんだったっけ？」
『『は…はい！！』』

思わずビクッとして返事するフォワード万事屋。
屁怒絽は頭を下げてお礼を言い出す。

「坂田さん達が色々と世話になって、ご近所としてお礼を言います。本当にありがとうございます」
『『いえいえ、とんでもございません！！』』

礼儀正しい屁怒絽の礼儀正しい返事に、スバル達は苦笑しながらも言い出す。

「そう言えば皆さんは、僕が花屋やっている事が変だと思っていますか？」
「いえいえ、そんな事は！！」
「ははは、良いんですよ。こんな見てくれじゃねぇ」

屁怒絽の質問にティアナが汗だらけに答える。
しかし、屁怒絽は愉快に笑い出す。

「僕はねぇ、花になりたいんです」
『『？』』

「昔からこんな外見の為に他人に怖がられた者でね、せめて心だけでも花のように綺麗になりたいと…だから少しでも花と一緒にいられる仕事がしたくて…最初はやっぱり向いていないみたいだっと思いましたよ。お客様も1人も来なかったから」

前の屁怒絞は孤独であった。
孤独のあまりに悲しい思いもたくさんした。
しかし銀時と出会ってからは少し心が晴れた感じでいる。

「でも坂田さん達は違いますよ。私を怖がらずに接してくれたのは坂田さん達が初めてですから」
（（すみません、あの時もメッチャ怖がっていましたけど!!））

屁怒絞にとってはそう思うが、銀時と神楽は単に勢い任せになって接触してしまっただけである。
そして今だに屁怒絞の事を怖がっている。

「あのう、銀さん…屁怒絞さんって外見よりも内心は良い人ですね」
「ああ、屁怒絞様は心が綺麗だけど単に外見が怖いだけの人なんだぜぇ……あははははは」

スバルを初め、フォワード万事屋達も屁怒絞の本心を理解できた。

「あ…そう言えば坂田さん達は今、機動六課と言う場所でお世話になっているんですね。でしたら、後で私が渾身込めて育て上げた花を機動六課の皆さんに渡してください」
『『は…はい、喜んでぇ!!』』

屁怒絞からの差し入れを、青ざめながらも受け取ろうとする銀時達。
そして屁怒絞はある事を思い出すようにポンっと頭を叩く。

「そうだ。せっかく坂田さん達と会えたことですし……私の一族に伝わる伝統的な遊びをしましょうか」
「伝統的な遊び？」
そんなのがあるのかと銀時は少し興味を持つ。
それは屁怒絽が子供頃に良く遊んでいた遊びで、屁怒絽が最も好きだった遊技。
だが銀時達はまだ知らなかった。
その伝統的な遊びが、どれだけ恐怖するのかを。
「『茶吉尼（だきみ）ごっこ』と言う、1人が鬼となって逃げる相手を追いかけてタッチするゲームなんですよ。そしてタッチした相手が鬼となって他の相手を追いかけるんですよ」
（いや、それ思いっきりただの『鬼ごっこ』じゃない！！って言ったら殺されルゥゥゥゥ！！）
ツッコミたくてもツッコめないティアナ。
それほどまでに屁怒絽の怒りを触れたくないからだ。
「じゃあ、とりあえずジャンケンで鬼を決めますか？」
「ははは、ワザワザ付き合ってくれている皆さんにそんな悪役はさせませんよ」
キャロがジャンケンで決めようとするのかと聞いた屁怒絽は、銀時達に鬼役はさせないで置くと言い出す。
「ここは、言いだしっぺの僕が鬼役をしますので」
「いやぁ、そうですかぁ。屁怒絽様が……え？」

今、とんでもない事を聞いてしまったような気がする銀時。
それはスバル、ティアナ、神楽、エリオ、キャロも一緒である。
屁怒絽が鬼をやる事についてだ。

「私、『茶吉尼(だきみ)ごっこ』では鬼となって追いかける側が苦手なんですが、皆さんを楽しませる為ならあえて鬼になります」
「ならなくて良いですゥゥゥゥゥ!!実は俺、こう見えても鬼役はなれているんで是非とも俺ガァァァ!!」
「そうね!!いくら鬼みたいだからってワザワザやる必要はないアル!!」

銀時と神楽は必死に屁怒絽が鬼にならないようにと自分達が鬼をやる事をアピールする。
屁怒絽に追いかけられる事がどれだけ怖いのか嫌と創造する2人。
だがそんな2人の願いも叶わず…

「では、皆さん準備良いですか?」
(人の話を聞けェェェェ!!)

心の奥底で銀時と神楽がツッコム。

「それでは……始まりじゃあああああああああああああああああああ!!!!」
『『鬼だァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ!!!!』』

気合入れて鬼のように叫びだす屁怒絽。

実はあくまで演技でやっているが、銀時達にとってはとてつもないほどの恐怖である。
そのあまりの怖さに、銀時達は大急ぎで逃げ出し、屁怒絽も追いかける。

かくして、銀魂史上最大の恐怖のゲームが始まったのであった。

銀八先生
「教えて」

生徒全員
「銀八先生」

神楽
「おっス、おら神楽。皆元気してっか？アシスタントするのもずいぶんと久しぶりアルヨ」

銀八
「おぉい……何かどっかのキャラの喋り方パクっていねぇか？」

神楽
「気のせいネ」

ご機嫌斜めに言い出す神楽に、銀時は『まいっか』と言って課題に入る。

銀八

「では、今回も質問を答えます。まずはこの人…ペンネーム『ウッソ・エヴィン』さん『？銀魂最新話で銀時さんはピン子さんとラブホに入る羽目になったけど・・・銀時さんとピン子さんってそういう関係？（かがみ）

？なのはさんの現在のスリーサイズはいくら？（こなた）

？キャロの消息が分かりませんが生きていますか？（ウッソ）

』……てウッソとこなた全然懲りていねぇ！！駄目だこいつら反省の色ないな」

神楽

「本当ネ、わざと2人を怒らせているのを狙っているアル」

銀八と神楽はウッソとこなたの質問に呆れていた。

銀八

「ずばり答えます、あれはあくまでゴリラに無理矢理頼まれた銀さんが童貞（しんはち）をオタクから開放する為にやっている事なのでまったく関係ありません」

神楽

「銀ちゃんも好きでもないゲームを無理矢理やらされて大変だったネ。たく、だから童貞（しんはち）は新一じゃなく新八ある。何だよ八って？」

銀八

「まぁ気にすんな…どうせ懲りずにオタク化しねぇ事を祈るだけで良いじゃねぇか」

呆れて答える神楽に銀八が言い出す。

銀八
「でもまぁ、最近の馬鹿作者も同じ事してんだし……とりあえず答えるか。？は流石にセクハラなので、本人が聞いたら殺されるので自分で調べるように」

神楽
「そうアル。そんで？はキャロはちゃんといるネ……出番少ないアルけど？」

銀八
「おぉーい、それ本人が聞いたらマジで殺されんぞ？と言う訳で、『ウッソ・エヴィン』さん次からはちゃんとした質問をするように」

神楽
「次行くアルヨ。ペンネーム『天破』さん『1つだけですが…レイジングハートやバルディッシュなどのデバイス達は、暗黒面に堕ちた自分の主のことをどう思ってますか？」』」

銀八
「本人に聞かせてもらいます」

と、銀八は『レイジングハート』と『バルディッシュ』に聞き出す。

《Ｔｏ　ｂｅ　ｆｒａｎｋ，　Ｉ　ａｍ　ｆｉｅｒｃｅ（正直言って怖いです）》

《Ｂｕｔ　ｂｅｃａｕｓｅ　Ｉ　ｄｏ　ｎｏｔ　ｋｎｏｗ　ｗｈａｔ　ｉｔ　ｉｓ　ｄｏｎｅ　ｉｆ　Ｉ　ｔａｌｋ　ｂａｃｋ…（でも口答えすれば何されるか知りませんので…）》

などと正直に答える『レイジングハート』と『バルディッシュ』。
銀時と神楽はいやと言うほど理解する。

銀八
「と言う訳で『天破』さん、これからも質問よろしくお願いします。んで次ィ、ペンネーム『エターナル』さん『質問。皆さんに。この曲を聴いた感想をください！

・スカイクラッドの観測者／いとうかなこ
・ＡＮＯＴＨＥＲ　ＨＥＶＥＮ／いとうかなこ

』どっちとも良い曲だけど、俺的には『スカイクラッドの観測者』だな」

神楽
「私『ＡＮＯＴＨＥＲ　ＨＥＶＥＮ』の方が好きアル」

銀八
「と言う訳で『エターナル』さん、曲の趣味は人それぞれです」

神楽
「次行くアル、ペンネーム『月光閃火』さん『１．作者に質問…スバキのモデルって誰なんだ？

2．クアットロに質問…というかアドバイス。クアットロ…お前、髪下ろしてメガネをコンタクトレンズにしたらもっと可愛いぜ？いやホント。

』……ずばり答えます。名前のモデルは『ブレイブルー』のツバキ・ヤオイであり、外見は『夢食いメリー』のメリーだと思います」

神楽
「そして2の答えは……」

クアットロ
「いやぁ～ん、そんな事を言われると嬉しい♪」

などとクアットロは嬉しがっていた。

銀八
「と言う訳で『月光閃火』さん、クアットロの髪おろしのコンタクト姿は次のシリアスまで待っててください。んで次ィ、ペンネーム『私にいい考えがある』さん』　1：銀さんに質問。
もしもフェイトとなのはが巫女服（霊夢と同じ衣装）をコスプレしたら色っぽいと思いませんか？　ｂｙゆっくりれいむ
　2：なのは、スバル、フェイト、はやてに質問　ｂｙゆっくりまりさ
戸棚か冷蔵庫の中におまんじゅうとかアイスなどの和菓子やお菓子をしまっていませんか？
三日以内に食べてないのであれば、ゆっくりれいむとゆっくりまりさのように自分の顔をしたゆっくりになっていませんか？。
　3：銀さん好きの皆さまに質問
もしも銀さんが「俺、実はポニーテール派なんだ」っと言われたらどうしますか？、1人1人答えてください。

『……メッチャムカつくけど、銀さんに答えさせてもらいます」

銀時
「……まぁ、色っぽいと言っちゃ色っぽいけど？／／／」

神楽
「け……銀ちゃんもぱっつぁん程じゃないけどオタク化しているネ」

銀時
「おぉぉぉぉぉい！！何かすんごく嫌な言われ方なんですけどォォォォ！？」

神楽の毒舌台詞に、銀時は大きくツッコミだす。

銀八
「んで２つ目の答えですか……」

スバル
「あ、それでしたら全部私が食べちゃいました♪」

銀八・なのは・フェイト・はやて
「食べちゃったんかい！！」

質問を答える暇もなく、スバルはなのは、フェイト、はやてに気づかれずに食べたったのである。

銀八

「まぁ3人組は顔がゆっくりになるかもな。んで3の答えは」

フェイト
「私、絶対になる！」

スバル
「ギン姉に髪を伸ばすコツを教えてもらう！」

なのは
「私も絶対なるの！」

ティアナ
「お兄ちゃんが望むなら！」

アルフ
「私だって！」

シグナム
「ポニーテールなら私が有利！！」

リィンフォース
「私だってなるですぅ！！」

チンク
「私なんかゴスロリポニーテールで！！」

セイン
「髪仮名が良けりゃポニーテールじゃないんだよ！！この髪でもやってやる！！」

セッテ
「私もポニーテールに似合う女性に！！」

ウィンディ
「私もなるっす！！」

ディード
「私だって！！」

猿飛
「銀さんのポニーテールな女性は私よぉ！！」

などと、全員なる気であった。
神楽は銀時の為に必死に答える女性がこんなにもいる事に驚きだした。

銀八
「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていなさい」

神楽
「こりゃぱっつぁんの恋は無理アルな…次はペンネーム『真王』さんの質問ネ『真王「シリアスに質問ですが『出番ない組は今なにをやってるんですか？』』」

勇斗「俺も質問だ。『俺の超最強技を伝授するがどれがいい？

拳技：魔拳ビッグバン（撃ち込まれた増大な魔力でビッグバンを引き起こす）
剣技：超魔大次元斬（次元ごとぶった切る最強技。星ごとタタっ切

ることも出来る）
槍技：メテオランサー（一突きで隕石を落とす。ちょっと槍とは関係なさそうな技）
斧（ハンマー可）技：ゴッドギラブレイク（一歩間違えれば星までやっちゃうすごい技）
銃技：絶滅魔砲弾（撃たれた標的はこの世から消滅するといわれる禁断の技）

好きな物を選んでくれ』

奏「それもはや銀河級ね。全員に質問。『相棒にしてみたいモンスターがいるならどんなのがいい？』」『」

銀八
「ずばり答えます。出番がない人はとりあえず出番を求めています」

神楽
「まぁ、『狂乱編』で散々とヅラに出番を奪われたからみんなの気持ちもわかるネ……でもう1つの質問は、ここはぱっつぁんのオタク癖を直す技があるならそっちを希望したいヨ。それ以外は全部良いネ」

銀八
「安心しろ神楽、馬鹿作者も新八の成長を企画している長編シリアスを考えているから、そっちを期待しようや」

神楽
「マジアルカ！！」

銀八

「後、奏へ…モンスターといってもどんなモンスターなのか特定を言ってもらったほうが分かりやすいです。ですので、今回はその質問はパス！

神楽
「と言う訳で『真王』さん、ぱっつぁんの成長を期待してください！！あ、ちなみに私は『魔拳ビッグバン』が良いアル」

銀八
「はいはい…んじゃ次で最後な、ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『銀さん達に質問です。僕の書く『万事屋奇譚幕』の自分達と、三人の主人公&ｐ;ヒロインをどう思っていますか？』

主人公
1．上条当麻
2．奴良リクオ
3．鑢七花

ヒロイン
1．インデックス
2．神裂火織
3．とがめ

銀八
「ずばり答えます。それは『亀鳥虎龍』さんが考えた主人公とヒロインの考えですのでそれで良いんじゃないかと思います」

神楽

「私は何でヒロインに入っていないか納得いかないアルゥゥゥ！！後、それ以前に何であっちの変態オタクと化した新八が彼女で来たのかも納得できないアルゥ！！あっちの新八はなのはちゃんに汚い手を使ってまで汚そうとした正真正銘変態オタクアルヨ！！なのになんで彼女できる必要アルカァァ！！」

銀八
「それは俺も同感だけど、いつまでもぱっつぁんをヘタレ扱いできないと言う『亀鳥虎龍』さんの優しさがあるって訳だな……と言う訳で『亀鳥虎龍』さん、廊下に立っていなさい」

神楽
「最後は納得行かないアルけど……仕方がないネ。以上もって今日の『銀八先生コーナー』終了アル」

銀八
「次回はエリオがアシスタントしますので、お楽しみ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいくださいお願いします。

第百十九訓：見た目が怖そうでも心が優しい人もいる（後書き）

黒神
「はい、屁怒絽がきました」

銀時
「へへへへへ……屁怒絽様が来たってわけか……へぇ、そうなんだ……マジ知らなかったんですけど？」

黒神
「僕だって怒らせたくないから。だって最凶だから屁怒絽さんは！！」

銀時
「じじじじ…次回、「怖い人から本気で追いかけられると鬼ごっことは思えないほどのリアルな恐怖が出る」テイクオフ……てか何か次回が怖いなんだけどォォォォォ！？」

第百二十訓：怖い人から本気で追いかけられると鬼ごっことは思えないほどの

茶吉尼ごっこ

ルール：1人が鬼役となって残りのメンバーを追いかけて捕まえる
シンプルなゲーム。
捕まえられた者は鬼役と一緒に、鬼役として残りのメンバーを捕まえる。
屁怒絽の一族に伝わる伝統的な遊戯である。

名前のモデルは『鬼ごっこ』。

黒神
「と言う訳で『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります」

第百二十訓：怖い人から本気で追いかけられると鬼ごっことは思えないほどの恐怖

前回のあらすじ

ミッドチルダに飛ばされてから数ヶ月が経ち、いまだに行方不明扱いされながらものんびりとミッドチルダで過ごしていた銀時達。
そんな銀時達に、かぶき町…いや、世界最凶の花屋である万事屋のご近所・茶吉尼族の屁怒絽がやってきた。
彼は新八達から行方不明に銀時達を一緒に探していたが、ある日突如現れた光に飲み込まれてこの世界にやってきたのだ。
その後、ミッドチルダのスカリエッティのアジトに飛ばされ、スカリエッティに怖がられながらも拾われる。

そして彼はついに銀時と再会して、その記念にと一族に伝わる『茶吉尼(きみ)ごっこ(だ)』をしているのだ。

『『ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!』』
「逃げろォォォォォォォォォォォォォ!!!!!絶対に捕まるなァァァァァァァァァァ!!!!!」

恐怖のゲームに強制参加されてしまった銀時、スバル、ティアナの3人は背後から襲ってくる屁怒絽から必死に逃げている。
銀時が2人に絶対に逃げ切るようにと言い出し、2人はその言葉を

聞き出す。

「お兄ちゃん！！あの人本当に心が優しい人ォォォォ！？メッチャ外見も中身も鬼っぽいけどォォォォォォォォォォォ！！！」

「落ち着けティアァァ！！屈怒絽さんはなぁ、確かに怖ェけどメッチャ良い人何だよォォォォ！！！！」

「本当なの！？じゃあこの大きな恐怖は一体何ィィィィィ！？」

「俺にも分からねェェェェェェェェ！！」

屈怒絽は本当は良い人だと、銀時だって分かっている。

だが何故か分からない圧倒的な恐怖が、銀時達をビビらせている。

何せ、屈怒絽の外見ってメッチャ怖いもん！！

「いや、それよりも走る事に集中したほうが良いよォォォォ！！！！何か足音が徐々に大きく聞こえてくるんだけどォォォォ！！」

スバルが先ほどから怖いほど気になっている少しずつ聞こえてくる背後の足音。

それは徐々に屈怒絽がこっちに追いついてきている証である。

「オイィィィィィィィィィィィィ！！何か凄く早くねぇ！？あの人メッチャ早いんだけどォォォォォォ！！」

「と言うか本当に鬼になりかけていませんか！？屈怒絽さんって見た目鬼っぽいから鬼の心が芽生えたとかァァ！！」

「大丈夫だよスバルゥゥ！！あの人本当はただ外見が怖いだけで、心まで鬼じゃねぇから気楽に逃げりゃ良いんだぁ！！」

そう言い出す銀時は、嫌な汗を流しながらもスバルを安心させようとする。

しかし…

「気楽に出来るかァァァァ！！後ろに鬼がいるわよォォォォォォォ！！！！」

『『！？』』

ティアナが涙を流して叫びだすと、銀時とスバルが後ろを振り向く。

すると…

「逃がしませんよ皆さぁ～ん！！！！」

とてつもない威圧感を放ちながら凄まじい勢いで追いかける屁怒絽。

その瞳は赤く光だし、全てを恐怖と言う金縛りを駆ける眼である。

『『鬼だァァァァ

＊＊＊

銀時の想像

「さぁ～って、獲物もさっそく3匹も捕まえた事だし……残りの獲物を探す前にと、そろそろ良い具合に煮込んだ頃だろうねぇ」

と愉快そうに笑い出す屁怒絽は、巨大土鍋の蓋を開けようとする。後ろには、神楽、エリオ、キャロの破けた衣装がボロボロになっている。

そして蓋を開けた瞬間に見えたのは、

「うわぁ、美味しそうに煮込んでいる煮込んでいる♪」

鍋の中で紫色の汁でブクブクと煮込まれていた3人分の骨であった。その3人分の骨こそ、神楽、エリオ、キャロの肉体が溶けた姿であった。

＊＊＊

『『イヤアアア

その場所は、なにやら祭壇みたいな雰囲気だった。
何かの儀式をするんじゃないかと思うが、実はそこは単なる屁怒絽の寝室であった。

そんなベットの後ろにと、神楽、エリオ、キャロの3人は隠れていた。

「ここにずっと隠れれば、後は何とかなるネ」
「はい……にしてもここって何ですか?明らかに何かの生贄をささげる儀式を行う場みたいですが…」
「……何かおっかない場所に来ちゃったヨ」

エリオのその一言に、神楽は青ざめる。
するとキャロがある事に気づいて喋りだす。

「あれ、銀さんにスバルさん、それにティアナさんがいません!!」
「本当ネ!!まさかはぐれちゃったアルカ!?もし捕まってたらヤバイネ!!」
「な…何がやばいんですか?」

神楽の言うヤバイ言葉にエリオも聞く。

「優しそうな性格でもあの外見での鬼ごっこアル!!もし捕まってたら……」

そう言って神楽は青ざめる。
銀時達が屁怒絽に捕まれば、それが彼等の最後であるからだ…

＊＊＊

神楽の想像

「さぁ～って、獲物もさっそく3匹も捕まえた事だし……残りの獲物を探す前にと、そろそろ良い具合に煮込んだ頃だろうねぇ」

と愉快そうに笑い出す屁怒絽は、巨大土鍋の蓋を開けようとする。

後ろには、銀時、スバル、ティアナの破けた衣装がボロボロになっている。

そして蓋を開けた瞬間に見えたのは、

「うわぁ、美味しそうに煮込んでいる煮込んでいる♪」

鍋の中で紫色の汁でブクブクと煮込まれていた3人分の骨であった。

その3人分の骨こそ、銀時、スバル、ティアナの肉体が溶けた姿であった。

＊＊＊

『『ヒィイイイ

神楽の創造を見てエリオとキャロは涙を流しながら抱き合って恐怖する。

「もし3人が捕まってたら、さっきの創造のようにもうあの世行きアル」

「嫌だァァァァァァァァァ！！！！フェイトさん助けてェェェェェェ！！！！」

もう恐怖のあまりに涙を流すキャロはフェイトに助けを求める。

しかしあのフェイトでさえ屁怒絽には恐れている。

「銀ちゃァァァァァァァァァ

コム。
しかし無事にこうして全員再会できた事は喜ばしい。

「そう言えば、銀さん達はどうしてここに？」
「どうしてって……てそれどころじゃねぇ！！」
「屁怒絽が、緑の魔人がもうすぐ来るわよォォォォォォ！！」
『『エエエエエエエエエエエエエエエエ！！』』

もうすぐ屁怒絽が来ると青ざめて言い出す銀時とティアナ。
それを聞いた神楽、エリオ、キャロは恐怖の瞬間が来そうなほど絶叫していた。

「皆、早くあの草むらに隠れるよ！！」

スバルが素早く判断して近くの草むらに指を刺すと、全員その中に身を潜める。
その後、緑の魔人こと屁怒絽がやって来た。

「坂田さぁ～ん！！…おかしいなァ、ここに入ったのを見かけたのに、どこにもいない…見間違えかなぁ」

屁怒絽が周りを見回ると、そこには誰もいないように見える。
しかし草むらの中には、銀時達が屁怒絽に怯えながらも隠れていた。

（早く行ってエエエエ、屁怒絽様アアアアアアア！！）
（このまま何事もないように退避をォォォォォォォォォ！！）
（怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖いよ怖……（如何同文））
（（ガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガクガク！！！！））

「ここじゃなかったのかぁ？」

銀時とスバルは早く屁怒絽が遠く行って欲しい事を願い、ティアナは銀時にしがみ付いて怖がっていた。
神楽、エリオ、キャロはもはや心の中でも言葉が出ずに、ただ震えていた。
屁怒絽はここにはいないと確信し、この部屋から出ようとする。

すると……

「ふぁ……ふぁあ――――――」
『『！？』』

神楽がクシャミしそうなところを、銀時とティアナが必死に止める。
何とか彼女のクシャミは阻止できた。

だが……屁怒絽の動きが止まり、ゆっくりとこちらに振り向くと……

「……見つけましたよ」

その悪魔の様な瞳でゆっくりとこちらを振り向く。
それに更なる恐怖を感じた銀時達は思わず驚愕し、

「逃げろォォォォォォォォォォォォ！！！！！」
『『ギャアアアアアアアアアアアア！！！！！』』

寝室を出て、素早く逃げ出す。
涙を流しながらも捕まらないように必死に走り出す。

「いやだァァァァァァァァァ！！！このまま死ぬの嫌だァァァァァァァァァ！！！！」
「ティアァァァァァァァァァァァァァァァ！！！お前が犠牲になれば丸く収まるネェ！！」
「何それェェェ！？それ私が死ねって事ォ！？」
『『ティアナさんの分まで生きて行きます！！』』
「ふざけるなァァァァァァァ！！そんなの絶対嫌だァァァァァァァ！！……て？」

何やかんやと話をしながら逃げ出すと、ティアナはある異変に気づく。
それは何か徐々に上に上がってきているように感じ出す事だ。
下を良く見ると、いつの間にか自分達は階段に登っていた。

「ちょっとォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！上行っちゃっているよォォォォォォォォ！！昇っちゃっているよォォォォォ！！！！」
「ティアァ！！だったら降りてみたらァァァァァァァ！！」
「スバルゥゥゥゥゥゥ！！アンタは鬼かァァァァァァァァァァァァ！！！！」

スバルのボケな質問にティアナが盛大にツッコム。

「鬼はあれじゃあァァァァァァァ！！！！」

銀時が後ろを振り向いて叫びだす。
そこには鬼のように必死に追いかけてきている屁怒絽がいた。

「待ってくだぁぁぁぁぁいい！！」
『『鬼だァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！』』

屁怒絽に追い込まれる事が最大の恐怖である銀時達はさらに加速する。
そして屋上まで近づくと、その先に扉が見える。

「あれ見ろォォォォ！！出口だァァァァァァァァァ！！！！」

最後の力を振り絞るように走り出す銀時達。
出口に駆け抜けると、全員一斉に扉を蹴り出して入り込む。
そしてようやく屁怒絽の屋敷から脱出できた……と喜んだ一瞬の間、周りを良く見てみる。
そこはミッドチルダの町全体の景色が見えるほどに高い屋上であった。

「な……何これェェェェェ！！」
「しまったァァァァ！！ここ屋上だったァァァァァァ！！」

以前、屁怒絽に追い込まれてきた時に屋上らしきところがあった事を忘れていた銀時。

「え……えっとう、こんなに高かったんですか屁怒絽の家って？」

スバルが苦笑して銀時達に聞きだす。
銀時と神楽は忘れてしまって青ざめ、スバル達は絶望まで追い込まれてしまった。

「みなさぁ～ん！！」

会談の奥底から響きだす屁怒絽の声。
その声を聞いた銀時達はビクッとして左側に逃げ込む。

そして扉の中からゆっくりと屁怒絽が現れた。

「いやぁぁ、やっと追いつきました」

もはや絶体絶命の危機。

無事に生き残るには屁怒絽を討つしかないと誰もが確信する。

そして銀時はスバル達に真剣な目線で見つめる。

「良いか、俺達全員でアイツに飛び込むぜ。犠牲者は出るかも知れネェがこのままじゃ全滅だ」

「全員全滅するよりも、より多くの仲間が生き残るのが私達の望みネ」

「……はい」

「わかったわ」

「このままじゃフェイトさん達も危ないし」

「私達の手で屁怒絽さんを」

覚悟を決めて全員が一斉に飛び込むを決意する。

ミッドチルダの平和の為に、自分達が屁怒絽を止めなければと。

「よっしゃ！！行くぜてめェ等ァァァァァ！！」

『『おおォォォォォォォォ！！』』

そして決死の最終戦等へと、銀時、スバル、ティアナ、神楽、エリオ、キャロの６人は屁怒絽に飛び込む。

そんな６人に屁怒絽は、

「あ、カメムシ」

と６人よりも自分の真下にいるカメムシを気にしてしゃがむ。

しかもタイミング良く6人の突撃を交わしだし、6人はついには足場がない宙の中へと勢い良く飛び込んでしまった。

「え？」

『『ア……』』

いつの間に自分の後ろに、それも空に宙を一瞬だけ浮いている銀時、スバル、ティアナ、神楽、エリオ、キャロを見て唖然とする屁怒絽。

そして……

『『ああアアア

＊＊＊

「と言う訳で、しばらくはスカリエッティさん所の隣に住むことになりました…屁怒絽です」

その後、屁怒絽は銀時達に機動六課のみんなに挨拶したいと案内されて、機動六課部隊長オフィスではやて達に挨拶する。
そして屁怒絽の間近でみるはやては青ざめて大量の汗を流していた。
なのは、フェイト、辰馬は苦笑して青ざめながら震えていて、桂、エリザベス、月詠、九兵衛、シグナム、ザフィーラはただ震えていてヴィータ、リィンフォース、リィンにいたっては涙を流していた。
外道丸とお登勢にいたっては平然としていた。
お登勢は『まったく最近の若いもんはなっていないねぇ』と呆れて、外道丸は式神の様な存在としてか、屁怒絽はそんなに怖くなかった。

「うわぁ…あの人の頭に咲いてある花って綺麗だよ、パパァ♪」
「あ…ああ、そうだね」

と屁怒絽に全然恐怖しないヴィヴィオは、屁怒絽の頭に咲いてある花にウキウキと笑っていた。
どうして屁怒絽が怖くないかは、あえて聞かないでおく。

「あのう、お近付きにとこれどうぞ。僕が渾身込めて育てた花ですので」
「ありがたく受け取りましたァァァァァ！！！！」

と頭を下げながら受け取るはやて。
もしちゃんとしなければ殺されるからっと思った。

こうしてかぶき町からまた1人、原因不明の現象によってミッドチルダに舞い降りた。
世界最凶の花屋、屁怒絽。
外見が恐怖の存在でも花のように優しき純粋な心を持つ天人は、ミッドチルダでも敵に回してはいけない人物と認定されるであろう。

＊＊＊

その後の夜、マンションの屋上で銀時と神楽は夜空を眺めていた。
2人は夜空を見て、1人の少年と飼い犬を思い浮かべている。

その少年こそが志村新八で、飼い犬は定春であった。

ミッドチルダに呼ばされてから数ヶ月も達、流石に元いたかぶき町の事を思うであろう。
他のみんなは如何しているのか少し寂しくなってきた。

「銀ちゃん、新八達元気しているアルかな?私達の事、心配しているアルか?」
「さぁな……少なくてもぱっつぁんの場合は誰よりも心配してんじゃねぇ?まぁ元あといやぁ俺達がこの世界に飛ばされる前はアイツはライブに行ってたからしなぁ」

と平然と言い出す銀時。
だが彼も新八の事を仲間として心配していた。

どんなに地味でも、どんなにオタクでも、侍としての成長を確かに銀時と神楽はこのミッドチルダに来てから数多くの仲間が出来た。
しかし、新八の存在はたとえ地味だとしても、2人にとっては大切な仲間である。

「源外の爺さんから聞いても瞬間移動装置を作るにはまだ時間がかかるそうだしよォ、早い所完成してもらわねぇとなぁ…」
「そうネ。元あと言やぁあの老いぼれが余計な装置を作ったのがいけないネ。重大責任アルヨ!!」
絶対に元の世界に戻って、新八達を安心させる為にも。

銀八
「教えて」

生徒全員
「銀八先生!!」

銀八
「ええ、今回も『銀八コーナー』を始めたいと思います。今回のアシスタントはこの人です」

エリオ

「ど…どうも、エリオ・モンディアル」

ゆっくりと登場し、テレながらも自己紹介するエリオ。

銀八
「ええ、まだアシスタントとして呼ばれていない人を差し置いてでの久しぶりのエリオ君の登場です」

エリオ
「ちょっとォォォォォォ！！？？何とんでもない事を言っていますかァ！？」

エリオは青ざめてツッコミだす。
銀八の言葉が冗談とは言え、言いすぎだからだ。

銀八
「では、質問をさっそく始めます。まずはペンネーム『ケン』さん
『統夜「え～っと・・・銀八先生に質問だ。一つは樹と言う変態眼鏡と新八をコンビとして組ませたらどうなるか」

遊輔「二つ目はこちら側のリリカルメンバーに質問だ。ＨＥＲＯ'ｓ　ＥＰＩＳＯＤＥで管理局を止めてしまったなのは達を見てどう思う？」
『……ずばり答えます。新八が樹のツッコミ役として新八のツッコミを中心とした笑いが成立するコンビとなるです。ちなみに作者と俺はそれを希望します」

エリオ

「そうですね。逆に新八さんが変態と化すのは見たくないですし…」

1人のツッコミ役として成立して欲しいと銀八とエリオは願う。

銀八
「2はなのはを代表として答えさせてもらいます」

なのは
「それはそれで良いよ。数多くの小説の私は管理局の事を信じすぎちゃっているけど、私自身は銀さん達から管理局の裏の存在を聞かされたから…むしろ管理局を信じすぎないでいるの‥

銀八
「などとこっちのなのは言っています。と言う訳で『ケン』さん、廊下に立っていなさい」

エリオ
「次はペンネーム『夜叉龍』さんの質問です。『スバルに質問だ。アラガミ、ハンニバル、ハンニバル浸食種、カリギュラに勝てる自信はあるか?。攻撃は効くようにしてある。堅いけど。』」

スバル
「えっとう、私はそれはどう言う存在なのか分からないよ……いくら私でも存在の知らない敵に勝てるって自信はないと思う。完全に勝つ見込みがある戦いがこの世にないから」

銀八
「はい、と言う訳で『夜叉龍』さん・・・スバルの答えは勝つ自信

はないと言うことです。んで次ィ、ペンネーム『壊れた現実』さん『始めまして、“壊れた現実（ブロークン・リアリティ）”と申します。
いつも楽しく読ませて貰っています。
少し質問なのですが、ぱっつぁんはどうなるのでしょうか？後半に入ると言ってましたし、もしやこのまま出番無し、なんてことに・・・？』……ずばり答えます。ぱっつぁんの出番は次の次のシリアスに出る予定です」

エリオ
「ああ、神楽さんと銀さんが言っていた万事屋の1人で江戸一番のツッコミ使いと呼ばれている……」

銀八
「そのとおり、…ここで言うとネタ晴らしだけどこの際言っておくか。新八を中心としたシリアスは、原作の『リリカルなのはｓｔｒｉｋｅｒｓ』のティアナが暴走している話を参考にした新八暴走シーンです」

エリオ
「えぇぇ!?何それ、てかバラして良いんですか!!」

銀八
「何か最近、作者が原作の新八のゲームオタクに悪く見すぎて扱いが悪くなってんだろ?だから読者に勘違いされねぇようにと説明していくんだよ。その暴走原因は新八が自分が本当に役に立つのかと疑って、誰の耳も貸さずに自分だって役立てると証明する為にとまさかの暴走で、しかし己のその愚かさを知って本来の新八と言う侍の成長を進む少年へと呼び覚ます事です」

エリオ

「なるほど、作者はただ新八さんが嫌いじゃない訳なんですか」

銀八
「そう、あえて読者に誤解されそうな厳しい扱いをしながらも新八を侍として一気に成長させるところを狙ってんだよ」

銀八の説明にエリオは納得する

銀八
「と言う訳で『壊れた現実』さん、新八の活躍はちゃんとありますので楽しみにしてください。後、読者の皆さんに新八の事で不安させて申し訳ございません」

馬鹿作者の変わりに謝罪する銀八。
銀八も新八の扱いが悪い作者の存在を不安げに持っていたらしい。

エリオ
「では次行きます。ペンネーム『烈火竜』さん『レジアスに質問です。
『3年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組　銀八先生』で校長先生になって、銀八先生に翻弄されたり、ツッコミ役になっている自分を見て、どう思いますか？』」

レジアス
「こ…これが私だとぉぉぉぉぉぉ！？」

などと、信じられない程に驚愕名表情をするレジアス。
こんなにもギャグ的な風景になっている自分の姿が信じられないからだ。

銀八
「はい、と言う訳で『烈火竜』さん…レジアスはこの様に驚いています」

エリオ
「では、次はペンネーム『白米』さんの質問『銀魂組より、銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠。リリカル組より、なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、シグナム、ヴィータに質問。

1.
武「もし、スパロボシリーズや特撮、ジャンプのどれかの作品の技・武器を習得できるとしたら、何を使いたいか？」

白米「ちなみに、特撮は『仮面ライダー』や『ウルトラマン』、『スーパー戦隊シリーズ』の事を指します。
知ってるものだけでいいので、是非お答えください」

2.
刃「対戦カードを作ってみたが、対戦相手を見てどう思う？　勝てる自信はあるか？」

銀時ＶＳバルバトス（テイルズオブディスティニー２より）

桂ＶＳセフィロス（ファイナルファンタジー７より）

神楽ＶＳジェクト（ファイナルファンタジー１０より）

エリザベスＶＳギルガメッシュ（ファイナルファンタジー５より）

月詠ＶＳバルタン（ウルトラマンより）

なのはＶＳエクスデス（ファイナルファンタジー５より）

フェイトＶＳケフカ（ファイナルファンタジー６より）

はやてＶＳメフィラス（ウルトラマンより）

スバルＶＳ七英雄（ロマンシングサガ２より）

ティアナＶＳギーグ（Ｍｏｔｈｅｒ２より）

ヴィータＶＳガノンドロフ（ゼルダの伝説より）

シグナムＶＳエスターク（ドラゴンクエスト４より）

白米「知らないキャラは、お手数ですがｇｏｏｇｌｅなどでお調べください」』」

銀時
「俺は、当然かめはめ波だな」

桂
「仮面ライダー電王の『エクストリームスラッシュ』で」

神楽
「私はウルトラマンの何かビームが出てくる奴が良いアル」

エリザベス
『『ぬらりひょんの孫』の黒田坊の『暗器黒演舞』』

月詠
「……わっちは特に思い付かぬ」

なのは
「うーん、特に思いつかないの」

フェイト
「『ＮＡＲＵＴＯ』の『千鳥』」

はやて
「私は『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の『雷光槍（サンダーランス）＝テンポ』や！」

スバル
「『るろうに剣心』の倭刀術全てが良いです」

ティアナ
「『ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ』の『電磁銃（レールガン）』がいい」

シグナム
「『るろうに剣心』の『火産霊？』だな」

ヴィータ
「ハンマーも良いけど『るろうに剣心』の佐之助が使っていた斬馬刀も使ってみてぇなぁ」

以上が１の答え。

2は以下の答えである。

銀時
「上等だごるぁ。こっちはアイテムなんか使わなくたっててめェを倒してやりゃ！！」

桂
「流石に本物に勝てる気がしないような……」

神楽
「肉弾戦なら負けないアル！！」

エリザベス
『勝てるって言うより勝ちたい！！』

月詠
「すまぬ、勝てる気がせぬ」

なのは
「『ディシディア　ファイナルファンタジー』で見たんだけど、そんなに強そうじゃなかったから勝てそうな気がする」

フェイト
「ムカつくから負けたくない」

はやて
「大きさが全然ちゃうから無理やァァァァァ！！」

スバル

「……戦えば命がけになりそうな……あ…あはははははは」

ティアナ
「何故だろう、勝てそうな気がしない」

ヴィータ
「どんな野郎でも負けてたまるかぁ！！」

シグナム
「剣使いならば負ける訳には行かない！！」

以上、そんな感じですね。

銀八
「はい、と言う訳で『白米』さん、次の質問もお楽しみに待ってます」

エリオ
「次はペンネーム『夜叉龍』さんからです。『カイト「走り去った！。ふう、しかたねえな。黒神に質問。新八はあそこまで堕ちてないよな。最後に似蔵ＧＪ。では更新頑張ってください。・・・・・そうそう、あとアリマに一つ。結構強そうだけど今のお前じゃ俺には一生勝てねえよ。たとえ神の力を持ってもな。それじゃあ。」
』

銀八
「ずばり答えます。確かに原作ではギャルゲーオタクまで堕ちましたが、作者は少なくとも新八の成長の為にあの変態ロリコンのよう

には堕としませんのでご安心を。ちなみにアリマに聞いてみましょう」

とすると、黒板からモニターが映し出された。
そこにはアリマがいた。

アリマ
《関係ない者には興味はない。私の目的は裏切り者を斬る事と、管理局を潰す事だけ》

ピィーン！！

と速効に答えるアリマであり、モニターは切れた。

銀八
「……という訳で『夜叉龍』さんに、カイト君……マジで気にしないでね！！」

エリオ
「えっとう、次が最後の質問です。ペンネーム『鳴神　ソラ』さん『マリオ「似蔵に質問『第百十八訓で切りまくった際に何が見えたんだ？』」

ネス「たま子さんに質問『ロリコンさんがグッズを切りまくられた際はどうでした？』」

リュカ「なのはさんに質問『今の所新しい技はどれ位あるんですか？』；」』」

銀八
「てか今度は鬼兵隊からかよ!!……まぁ良い、質問答えさせてもらいます」

と、モニターから今度は鬼兵隊の戦艦内を映し出す。
すると

似蔵
《オボボボ

銀八
「何それ？つうかなんかあったの！？」

また子
《世の中には知らない方が幸せにあるっス。後、似蔵は良くやったと思うっスよ…以上》

ピィーン

また子が全て答え、銀八とエリオはただ単に唖然としているだけであった。

エリオ
「……じゃあ……次はなのはさんに答えを……」

なのは
「うーん、『デスペレード・デモンブレイカー』と『デスライト・スタージャッチメント』かなぁ？」

ニコニコと笑うなのは。
２つの技も、とてつもなく恐ろしいのだと銀時とエリオは確信する。

銀八
「と……という訳で『鳴神　ソラ』さん、なのはの怒りを触れないようにご注意を……」

銀八は青ざめながら最後に忠告して言い出す。

エリオ
「とまぁ、以上もって今回の『銀八先生コーナー』は終了ですね」

銀八
「ああ、次回はヴィヴィオをアシスタントさせますので、お楽しみ
ィ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいください。
お願いします。

第百二十訓：怖い人から本気で追いかけられると鬼ごっことは思えないほどの

キャロ
「死神太夫・月詠……エリオ君を惑わす悪女！！」

フェイト
「え、あのう……キャロ？」

キャロ
「あのチャイナ娘同様……その存在を打ち消してやるぅ！！」

フェイト
「えええ！？キャロ、如何したのぉ！？」

キャロ
「次回「相手の弱点を知る為に情報を集める」……悪女狩りじゃァアアアアアアアアアア！！！！」

フェイト
「キャロォオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！（青ざめ）」

第百二十一訓：相手の弱点を知る為に情報を集める（前書き）

黒神
「今回はあるリクエストと一緒にキャロの暴走を中心に書きます」

銀八
「マジでか？まぁ、最近のキャロはおっかねぇから…」

黒神
「後、今回は異常なまでに長くしましたので……銀八先生コーナーはお休みします」

銀八
「なぁぁぁぁぁ！！」（ガァーン！！）

黒神
「それでは『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ』始まります！！」

第百二十一訓：相手の弱点を知る為に情報を集める

「毎度ォ、クリームパン２０個とフルーツ牛乳４０本！！」
「はぁ～い、ありがとうございます♪」

ミッドチルダのとあるパン屋『虚夢戯黄（こむぎこ）』。
そこでキャロは大量のクリームパンとフルーツ牛乳を買っていた。

そして店を出てしばらく達、シグナムが呼び込む。

「キャロ、またクリームパンとフルーツ牛乳を」
「シグナムさん」

シグナムが声をかけられた事で、キャロは振り向く。
シグナムはなにやら心配しているような表情をしている。
それもそのはず……こんだけクリームパンやフルーツ牛乳を大量に買うなんておかしすぎる。

「最近、良くそのクリームパンとフルーツ牛乳を買うようになったが……あまり食べ過ぎると体に良くないぞ？」

いくらなんでもこれは買いすぎだとシグナムは言い出す。

「大丈夫です、ちゃんと栄養も補給していますし♪」

にこっと答えだすキャロ。

「それに……私、大好きなんですよクリームパンとフルーツ牛乳♪」
「そうか……だが程々にな」

苦笑しながら部下に忠告するシグナムはこのまま去っていく。
そんなシグナムにキャロはニコニコと手を振るう。

＊

～キャロＳＩＤＥ～

パク！

「……好きじゃないんですけどね」

そう良いながら、私はクリームパンとフルーツ牛乳をパクパクゴクゴクと口に入れてる。
実は木の中に隠れながら食べているんです。
そう……その原因は、ある張り込みをしていたからだ。

あ、自己紹介遅れました。

私はキャロ・ル・ルシエ。

機動六課フォワード万事屋のライトニングの部隊に入っている美少女召喚魔導士。

相方のフリードこと使役竜フリードリヒは、以前の屁怒絽さんのあまりの恐怖に精神的に病んでいてシャマルさん所の保健室で入院中。
私だって怖かったぁ……（涙）。

いけないいけない、私とした事が……。

私は今、恋の事で活動しています。
それは、私の眼に映っている恋する王子様。

「ふぅ、今日も良い天気だ」

エリオ・モンディアル。

私と同じ機動六課フォワード万事屋のライトニングの部隊に入っている美少年魔導士。
私が恋する愛しい王子様。
最初に出会った時から運命だと確信し、エリオ君と一緒ならどんな敵でもへっちゃらです！！

だけど、そう思っていたのは私だけだったと思い知らされた。

あの悪女共が現れるまでは！！（怒）

「今日も良い天気ですね、神楽さん、月詠さん」

「そうアル。こんな天気だからこそ散歩するもんネ♪」
「同感じゃ」

そう、輪が愛しきエリオ君に身にまとう害虫共。
神楽と月詠です！！

銀さんと同じく『ジュエルシード事件』と『闇の書・ゾーマ事件』を解決した大英雄の1人。
魔法無しでもその驚異的な身体能力と少女とは思えない力強さ。
さらに特殊な傘を扱うチャイナ女。

たった2歳年上の女無勢が、私のエリオ君に良く一緒にいるのが納得できない！！

納得できないと言えば、2年後の姿があんな美少女で胸に脂肪がたまっているクソ生意気な姿ですよ！
詐欺だ、出任せだ、これは完全に別人と言っても良い！！

そんなまがい物の姿で銀園祭の時に……私の、私のエリオ君を惑わしやがってエエエエエエ！！！！

憎い、憎しみだけならあのチャイナ娘の首を今すぐに切断したい！！
この『雷切』であのチャイナ娘をォォォォォォォォォ！！！！

いや、だがもう1人排除しなければならない害虫がいた！！
それがあの傷付きの小娘だ！！

月詠、チャイナ娘とは違い過去の事件には出ていないが、ミッドチルダ内では『月下に舞う死神太夫』と呼ばれて『満月の輝きのよう

に美しい女』と呼ばれていやがる。
だが、本人は何かを護る為に女を捨てたと言う。

じゃあ、女を捨てたのにその美貌と胸の脂肪は何！？
訳わかんない！！

そんなんで……そんなんで私のエリオ君を惑わしやがってェェェェェェェェ！！

憎い、憎しみだけならあの小娘の首を今すぐに切断したい！！
『雷切』よぉ！！我憎しみを吸い、あの害虫どもを断末魔の悲鳴を上げさせる裁きぉおおおおおおおおお！！！

憎しみのあまりに、私は思わず素手で木を抉り捻る。
折れなかったけど、その後には人間の素手でとは思えないほどの捻られた後があった。

「神楽さん、月詠さん、実は面白い場所を見つけたので一緒に行きますか？」
「きゃっほー！！だったら出発アルゥゥゥゥ！！」
「はいぃ！」
「ちょ、何も引っ張らなくたって……」

ブチィ！！

害虫共がァァァァァァァァァァァ！！！
何私のエリオ君の純粋な手を、その薄汚ねぇ手で握っていやがんじゃァァァァァァァァァ！！！

潰したい！！潰したいけど，いま下手に出て行ったらエリオ君に嫌われるこんチクショおおおおおおおおおおおお！！
だけど、いつか時が来れば……この手であの害虫共をエリオ君から削除してみせる！！

機動六課　ライトニング分隊フルバック　三等陸士　キャロ・ル・ルシエに名にかけて！！

そう誓った私は、クリームパンをさらにもう1つ食べた。

＊

クリームパン生活8日目

あれから、チャンスは出ずにひたすら害虫共はエリオ君に引っ付きする。
私は憎しみながらもその光景を見ているしかなかった。

「きゃはははははは！」
「ははははははははは！」
「……ふっ」

楽しそうに笑い出すエリオ君とチャイナ娘。
小娘にいたってはクールな笑い方。

『ふっ』て何？
何それ、カッコつけているつもり？
マジでムカつくんだけど……何これ、殺して良い！？

一体何が面白くて笑っているのかを気にできずに、怒りくるった私は今日もクリームパンを食べる。

＊

クリームパン生活１２日目

今日もクリームパンを食べながらも、私はエリオ君にひっつく害虫共を見張っていた。
あの害虫共がエリオ君にどんな惑わし方をするのか、考えるだけでムカついて来た。
すると、エリオ君とチャイナ娘は小娘に対して、とんでもない事をしやがったぁ！！

「エリィ、行くアル！！」！！」
「はいィィィ！！」
「ん？」

ガコォ×２

「んなぁ！？」

そう、それは２人同時に小娘に抱きついてきたのだ。
チャイナ娘は右側、エリオ君は左側を。
そして小娘の胸の脂肪が２人の顔に近く移っている。

「にゃはぁ～、やっぱツッチィの抱き心地は気持ちいアルゥ」
「そうですねぇ／／／／（ああ、月詠さんの胸がメッチャ近くにィ／／／）」
「ふふ、まったく２人は相変わらずじゃな」

ブチィ！！

キィィィ

だが、

「グォボロロロ

私は怒り任せにクリームパンを、隣の木に向かって思いっきり投げた。
そしてクリームパンはぐちゃぐちゃである。

＊

クリームパン生活　２２日目

合いも変わらずエリオ君は害虫二匹と一緒にいた。
どうしてこうも長く一緒にいられるのかと理解できない私は思わず何度も頭を木にぶつける。
どうしてこうもエリオ君があんな害虫ばっかり関わって、私には関わろうとしないのかっと納得できない。
嫉妬心と憎しみの増幅のあまりに私は今日もクリームパンを……

天空にむけてスパーキングゥ！！

＊

クリームパン生活　２３日目

シグナム副隊長にむけてスパーキングゥ！！

「うぎゅあああああああ！！」

＊

クリームパン生活　２４日目

ゴリラとキャラかぶれ娘にむけてスパーキングゥ！！

「ぎゃあああああああああ！！」
「ルゥウゥウゥウゥウゥウゥ！！」

＊

クリームパン生活　２５日目

白い悪魔にむけてスパーキングゥ！！

「デスライト・スタージャッチメントォォォォォォォォ！！！！（怒）」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァン！！！

＊

クリームパン生活　２８日目

気がつくといつの間にか体中が血だらけになっていました。
何か怖い夢を見たような気が……考えても切りがないから考えるの止めた。
しかし私の体の異変とは裏腹に、あいも変わらず害虫共はエリオ君と一緒にいた。

いつものように、私は害虫こと神楽に死をっと頭の中で浮かびながらもチャイナを睨みつける。
当然のように月詠に死をっと頭の中で浮かびながらも小娘も警戒する。

そんな神楽に死をとエリオ君が月詠に死をと抱き突き出す。

神楽に死をと月詠に死をと思い出すほど憎しみがさらに倍増して、そんな感じで神楽に死をと『雷斬』を構え月詠に死をと木を斬りまくる。
そんな感じで神楽に死をと月詠に死をと日常が続くのであった。

神楽に死を月詠に死をと考えるのは神楽に死を月詠に死をの様に禁断の考えである。
とは言え、神楽に死を月詠に死をと思うのは神楽に死を月詠に死をの如く神楽に死を月詠に死をな嫉妬が神楽に死を月詠に死を原因であって、神楽に死を月詠に死をは別に神楽に死を月詠に死をではなく神楽に死を月詠に死を神楽に死を月詠に死をは神楽に死を月詠に死を神楽に死を月詠に死をであって神楽に死を月詠に死を神楽に死を月詠に死を神楽に死を月詠に死を

＊

クリームパン生活　３０日目

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ

＊

～キャロＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

クリームパン生活　３１日目

「ムギィーーーーーーーーーーーー！！！！ムキムキィィィィィィィィィィ！！！！」

キャロは怒り任せでクリームパンを食いだし、ジェイソンの仮面をかけながら『雷斬』で岩を切りまくる。
とても少女とは思えない力強さ。

キャロはその怒りの鬱憤を全てぶつけていた。

「ゼェ、ゼェ、ゼェ、ゼェ、ゼェ、ゼェ！！」

息を荒くして、キャロはどこかに『雷斬』をしまってこの場を去る。

一体如何すれば良いのかと、何か対策を考えるのであった。

＊

機動六株隊長オフィス

「ツッキーにお酒は飲ませるなぁ？」

と、自分の目の前で真剣な表情をする銀時の言葉に唖然とするはやて。

一体如何してなのかを聞き出す。

「ああ、今更言うのも何だが…月詠はああ見えても酒にメッチャ弱ぇんだ。しかも飲ませたらとんでもねぇ程に大暴れしちまう性質で……」

言い出すとたんで銀時は青ざめて震えている。

そんなにも酔っ払った月詠は怖いからである。

そんな銀時を見て、はやては確信した。

あの月詠に酒を飲ませたら、絶対にろくな事が起こらないっと。

「わかったわ、ツッキーには一切お酒を飲ませないように今度言っとくな」

「マジで頼むわ。もうあんなおっかねぇ思いはごめんだから」

「私も、ツッキーのおっぱいを気持ちよく揉みやすくしたいからなぁ、暴走されたら揉みにくいわ」

「おい、何かセクハラ発言になってるぞ狸女」

最後のはやての部隊長とは思えないセクハラに銀時はシド眼で見ながらツッコミだす。

銀時は月詠のアルコール暴走を防ぐ為にと、月詠に報告をしたのだ。

だが彼は知らない。

暴走を止める為のその警告が、思わぬ悲劇を生み出す事に。

（うふふふ……良い事聞いちゃったァァ～～～～♪）

●ェイソン仮面を被ったまま不気味に笑うキャロ。

銀時とはやての話を盗み聞きし、重要な情報を聞き取った。

そして彼女は素早く走り出す。

今こそ、悪女に天誅をと。

＊

そこは機動六課の給食室。
そこにフェイト、月詠、神楽の3人は何かを話し合っていた。

「へぇ、神楽のお父さんって第一級危険生物の駆除をしてまわる宇宙最強の掃除屋なんだ」
「ああ、その戦闘力は紛れもなく最強で生命型ロストロギアをも倒せるほどじゃ」
「パピーが入れば、間違いなく機動六課は最強アル！！」
「ふふ、頼もしいお父さんだね」

3人が話しているのは神楽の父、星海坊主であった。
最初は神楽を連れて買える為に地球にやってきたが、銀時達に出会ってからも彼は変わった。

「パピーは夜兎族としての血を恐れて、変わることも恐れてしまったネ……でも、銀ちゃん達のおかげでパピーも以前より明るくなった気がするアル」
「父親の変化は娘の喜びと言う訳じゃな」

嬉しそうに笑う神楽に、月詠も思わず笑い出す。
そんな明るい話が続く事もなく、一気に絶望に満ちてしまう事を、このときの3人はまだ知らない。

「月詠さぁ～ん♪」

と、扉からさっきまでとは違う笑顔で笑い出すキャロが何かを抱えながら月詠に近づく。

「ん、どうしたんじゃキャロ？」
「いやぁ、どうしても月…」

ドサァ！

「よさぁぁぁ！！」

突如、キャロは足を躓いてこけてしまい、そのまま抱えていた者は中に回転しながら蓋が開き、中身の液体が月詠にかかる。

「ぐぁあ！？」
「月詠！」

何か得体の知れない液体にかかって驚く月詠と、ビックリして思わず彼女を呼ぶフェイト。

「ああ！！ごめんなさい！！（シャアァァァ！！）」

謝罪するが心の奥底ではガッツポーズを取っているキャロ。
すると堕ちてきたビンが神楽が落ちる前にキャッチする。

「ん、何あるかコレ？」

神楽は自分がキャッチしたビンを見る。
するとそれはワインと書かれていた。

「わいん？……フェイト、わいんって何アルカ？」
「え？何ってお酒の事だよ」
「ああ、なるほど酒……」

ドカァァァ

クナイが神楽の頬をかする様に通り、壁に突き刺さって神楽の頬から血が少したらぁっと出た。
突如のクナイにフェイト・神楽・キャロの3人は驚きだした。
最悪な事が起こってしまったと、神楽はゆっくりと振り向くと……

「……ヒック！」

速効に酔ってしまった月詠がいた。

「いんやあああああああああああああああ！！最悪アルゥウゥウゥウ！！！」
（ぎゃはははははははは！！！やったぞォォォォォォォ！！ついに小娘の禁断表情を暴いてやったぞォォォォォォ！！！！）

勝利の喜びに興奮するキャロ。
後はエリオを呼んで彼女の本性を見せ、失望させるのみ。
そう勝利を確信した時だった。

「ん、何だ？……珍しい組み合わせな連中だなおい？」
「ほんまや……あ、フェイトちゃんにキャロや。ちょうど2人に……」

「銀ちゃん、はやて、逃げるとヨロシィィーーーーーーーーーーーーーー！！」
『『へ？』』

ガシィ！！

神楽が大叫びするが、その直後に月詠が無言で銀時の着物を掴む。
銀時はいったい如何したのかと思う中、分かっている事はただ1つ。

ものすごく嫌な予感しかしないことであった。

「……って来い……」

「え？」

「買って来い！」

「えぇ？」

突如の一言に唖然とする銀時。

そして…

「酒を買って来いと言ってんだァァァァァ！！！」

「エェェェェェェェェェェェェェェェェェェェ！？」

ドコォ！！

「樽ごと持ってこんかいワリャアアアアアアアアアアアア！！！」

と、いつの間にか神楽が持っていたワイン瓶で銀時の頭を大きく叩く。

瓶は割れて、銀時はなすがままに気絶してしまった。

突如の衝撃に、フェイト達は今一体何が起こったのか把握できないほど驚愕な表情をする。

……え……え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛え゛！？

「誰エエエエエ！？」

別人のように変わり果てた月詠にフェイトは思わず叫びだす。
すると、キャロがゆっくりと近づく。

「まぁまぁそうカッカせずに…お酒はここにありますよ♪この最高級のワインが……」

ガシィ！！

「ぁあ！？」

突如、顔面を捕まれるキャロ。
そんな彼女を信じられない程の圧力で握りだす月詠はとてつもない殺気を放つ。

「おい、餓鬼が軽々しく酒を持って良い訳ないだろうに？」
「えぇ！？」
「半殺し死刑じゃァァァァァァァ！！！」

ドカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！

「うぎゃあああああああ

血がたらたらと出てボコボコニされるだけであった。

「イヤァァァァァァァァァァァ！！！月詠止めてェェェェェェ！！」

「最悪アルゥゥゥゥゥ！！ツッキーの禁断の扉が開いたアルゥゥゥゥ！！」

大泣きして止めて貰うことを願うフェイトに月詠の暴走に青ざめる神楽。

「な……何やあれぇ！？思いっきり別人になっとるやん！！」

はやても月詠の変貌振りに驚きを隠せなかった。

いくら月詠がお酒弱いからってコレは予想外である。

人がこうも簡単に変われるのかと疑うような。

「お願いィィィ！！それ以上やったらキャロが死ぬからァァァ！！」

「ああ！！泣いてお願いすればおさまるっと思ったら大間違いだぞ小娘？大体サァ……前から思ったんだけどこの際言っておくわ」

月詠はキャロを手放してフェイトを見る。

「アンタさァ、ひょっとして変態だろ？」

「なぁ！？」

突如、変態呼ばわりされて驚くフェイト。

「バリアジャケットとかいったっけぇ？あんな露出度が高い衣装を兵器で来ていつも戦っているでしょ？あれ下着みたいな感じだった

しぃ」
「真・ソニックフォームは下着じゃないよ！！立派な衣装です！！／／／」
「でもさぁ、そんなエロい体であんな変態衣装を着ちゃ駄目でしょ？それ自分は変態女ですって言ってる様なもんだし？」
「なな……／／／」

容赦ないセクハラ発言をする酔っ払いの月詠に、フェイトは顔を真っ赤して動揺する。
そして止めの一言が…

「つうかさぁ……やっぱアンタって……露出痴女でしょ？」

ブチィィィ！！

何かがブチキレタ音が聞こえ、突如フェイトは金色の光に包まれる。
その光が消えると、両手に『バルディッシュ（ライオットザンバー・セイバー形態）』と『ライキリ』を持って、とてつもない殺気を放つフェイトがいた。

「ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ！！？？」
「フェイトちゃんがキレたぁぁ！？」

神楽もはやてもコレは不味いと確信し、逃げようと走り出す。

「月詠ォォォォォォォォォォ！！！！！」
「やる気、露出恥女……返り討ちしてやるよォ！！」

月詠も勢いあまってクナイを無数に取り出す。
今ここに、２人の死神が激突する。

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「てえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

２人が一斉に飛びかかると、衝撃の瞬間に給食室が大爆発に包まれる。

『『いぎゃあああ！！！！』』

その爆発に巻き込まれた銀時、神楽、はやて、キャロは哀れに吹き飛ばされるのであった。

～キャロＳＩＤＥ～

入院生活　１０日目

私は今、ミッドチルダ病院の外にいます。
あれ以来、機動六課の給食室は完全崩壊し作り直すにも時間かかるようですって。
その時私は２人の死神による大暴走により、銀さん・チャイナ娘、

はやてさんと一緒に入院生活をしています。
特に銀さんとチャイナ娘は小娘の暴走に恐れながら何かぶつぶつ言っていたような……。

だけど私は、クリームパンやフルーツ牛乳を飲んだだけで急激に回復し、私だけ十日退院。
少し怖い目にあったけど、チャイナ娘は地獄の退院生活で小娘は給食室を破壊した罰としてお始末書地獄。
凄く良い気味♪

「あ、エリオ君♪」
「キャロ？……もう入院？」
「うん♪…神楽さん達も順調に回復してもうすぐ退院だって♪」

私が？の事を言うと、エリオ君はチャイナ娘がもうすぐ退院だと聞くと安心した顔をしてる。
何かムカつく。

「あ、そうだ♪エリオ君、これから暇？」
「ええ……特にやる事は……」
「じゃあ、一緒にどっか行こうっか♪」
「…そうだね」

私は愛らしくエリオ君の腕を抱きつき、一緒に散歩した。
だけど、あの2人は油断できないからいつかまた返り討ちにしなきゃ。

悪女共からエリオ君を護る為に。

～キャロＳＩＤＥ　ＯＵＴ～

今回はあまりにも長いので『銀八コーナー』休日します。

次回はちゃんとやります。

次回のお楽しみ。

第百二十一訓：相手の弱点を知る為に情報を集める（後書き）

ついに後半のシリアスが開始される！

メインは他の小説から特別ゲストとして来てくれた皆さん達！！

次回、ついに究極爆笑大会が開始される！！

勝者以外にはそれ相当の罰ゲームが送られる！

生き残るには、優勝するしかない。

政宗

「Ｈｕｈ！？罰ゲームだぁ！？……上等だ……ようは勝ち続けりゃ良いんだろ？」

『恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語』の伊達政宗！

ゆり

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！あのトラウマが蘇るゥゥゥゥゥ！！！」

『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　銀の侍と４人の女神』のゆり！

凛
「ちょっとおおおおおお！？どうやったらこんなもんが作れるって訳ぇぇ！？」

『銀魂ｘＦＡＴＥｘリリカルなのはｘ禁書目録？とある侍とサーヴァントと魔法少女～』の凛

左之助
「いやじゃあああああああああ！！何であんなもんを飲まなきゃいけねぇんだァァァ！？」

『リリカル剣魂スペシャル　侍たちと魔法少女』の左之助

家康
「絆の力の元……徳川の名にけて、この大会を制覇する！！」

『異世界合戦記録　リリカルＢＡＳＡＲＡ　ＳｔｒｉｋｅｒＳ～天下分け目の魔法戦記～』の家康

他にも続々登場！！

数多くのゲストは、どんな手を使ってでも生き残るために、優勝と言う唯一生き残れる方法を我が物にする為、彼等は大会に参加する。

果たして、優勝の栄冠をとるのは誰なのか！？

次回、『リリカル銀魂』シリーズ歴代爆笑大会が幕を開ける！！

究極爆笑大会長編

『リリカル銀魂ゲスト杯編』

黒神

「次回「ゲストを呼ぶって言うネタも立派な長編ネタとして使える事がある」テイクオフ！！」

突然ですが、この小説の最新が出来なくなりましたので、後半は『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～　後編』で進めますので、これからも宜しくお願いします。

後編へ

黒神
「と言う訳で、『リリカル銀魂ｓｔｒｉｋｅｒｓ～攘夷戦争鎮魂歌～』は次回から後編と言う形になりますのでここでの『攘夷戦争鎮魂歌』は終了します」

銀時
「なぁ、作者……この小説って確か『リリカル銀魂シリーズ』の最終章の一角だったよな」

黒神
「そうだけど？」

銀時
「最終章を前編と後編に分けるってドンだけなげぇんだよ！！」

黒神
「しょうがないですよ！！何か突然、最新登録できなくなっちゃったんだし！！」

と銀時は呆れてツッコミ、黒神にいたっては泣き出す。

フェイト
「まぁまぁ」

スバル
「しょうがないですよ。もう決まっちゃった事ですし」

と、苦笑しながらもフェイトとスバルは落ち着かせる。
ここまでは銀時、フェイト、スバルの3人を中心とした物語が進んでいる中で、主人公とヒロイン2人と言う形で進んでいた。

黒神
「まぁ、この小説は大抵侍魂のイメージと銀時の過去の因縁、魔導士として今も生きて行くフェイト、侍の魂を持つ魔剣士として成長していくスバルを中心としてストーリーが進んでいるって訳ですよ」

銀時
「たしかになぁ……俺を除いてよく出ているといやァ…フェイトとスバルなもんだ」

フェイト
「そうね……それは嬉しいんだけど、それ以上にメインヒロインとして大活躍しているスバルには時々ムカついているけど？」（ゴゴゴゴ

スバル
「フェイトさぁん…怖いですよォォォ」

とフェイトに鋭い目線で睨めつけられて怯えるスバル。
銀時はその光景を見て呆れだす。

黒神
「何はともあれ、今回で前編は終了します。今後の続きは『リリカル銀魂～攘夷戦争鎮魂歌～　後編』で」

銀時・フェイト・スバル
『『今後も宜しくお願いします』』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2958i/

『リリカル銀魂　ＳｔｒｉｋｅｒＳ』～攘夷戦争鎮魂歌～　前編

2011年9月25日10時39分発行